

軌跡～ひとりからみんなへ～

チモシー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本編

がつこうぐらしのメンバー達とオリ主の五人がメインの話です。時系列は原作のキャンピングカー入手後で大学到着前となり、そこをオリジナルの話を展開していきます。

〵オリ主の名前に関して〵

主人公君に決まった名前はなく、シナリオ中では君(きみ)や君(くくん)などで進行する為〵の部分に好きな名前を当てはめる特殊な仕様になっております。読者様の好きな名前を付けてお楽しみ下さい。

〵〵〵〵〵

〵『外伝』〵

本編とは別の視点で展開するもう一つのシナリオ。

感染者への抗体、そして超人的な身体能力を持った三人がメインの話となっています。

〵『短編』〵

ifストーリーがメインの短編集。

本編とは一味違う様々なシナリオを展開していきます。

〵『いせかいぐらし!』〵

学園生活部とオリジナルキャラクター達が剣や魔法の世界で冒険している話。

↳ 『どんな世界でも好きな人』↳

”かれら”のいない平和な世界を舞台にした、主人公である”彼”とヒロイン達の恋愛をメインとしたIFストーリーです。

また各話タイトルの後：キャラの名前が○内に入っている話はそのヒロインとのイベントが主という事を示しています。

↳ 『アフターストーリー』↳

『どんな世界でも好きな人』のヒロイン個別ルートであり、主人公が↳と付き合ったらどうなるか、というのを書いた作品です。(ルートは順次増やしていく予定です)

新たに更新したタイトルの頭には《New!》と記載されます

(☆)と記されている回にはイラストが載せてあります

『短編』『どんな世界でも好きな人』に関しては活動報告にてリクエストを受け付けておりますので、見てみたいイベントがある方はお気軽にどうぞ。

目次

第一章・であい

一話『一人の世界』	1
二話『しゃない』	6
三話『たんさく』	11
四話『ぼうし』	17
五話『馬鹿な行動が起こした奇跡』	23
六話『探索』	28
七話『最後にもう一度…』	42
八話『笑顔』	61
九話『いままで』	76
十話『目的』	87
十一話『楽しい毎日』	98
十二話『いきのこり』	109
十三話『”人間”』	124
十四話『守るといふ事。』	135

第二章・しょうねん

十五話『日記』	146
十六話『少年』	159
十七話『生きていけば』	173
十八話『悠里と少年』	186
十九話『怒り』	200
二十話『しんぱい』	217

第三章・きゆうそく

短編―それぞれの休息『彼の場合』	230
------------------	-----

短編―それぞれの休息『胡桃の場合』	237
短編―それぞれの休息『美紀の場合』	252
短編―それぞれの休息『悠里の場合』	259
短編―それぞれの休息『由紀の場合』	268
二十一話『こうえん』	276
二十二話『加速する不安』	293
二十三話『いぬ』	313
二十四話『優しい嘘』	321
二十五話『りよかん』	337
二十六話『おんせん』	372
二十七話『つり』	419
二十八話『たいけつ』	448
二十九話『午後8時の激戦(ババ抜き)』	473

第四章・ぜつぼう

三十話『くすり』	487
三十一話『独占する者達』	504
三十二話『胡桃の選択』	523
三十三話『待ち構える絶望』	534
三十四話『そこに迫る影二つ』	549
三十五話『かえりみち』	573
異編『ごめんなさい』	601
三十六話『かんちがい』	609
三十七話『おやこ』	633
三十八話『変態紳士』	651

第五章・くさり

三十九話『くさり』

666

四十話『ごかい』

690

四十一話『つかいかた』

711

四十二話『きもち』

731

四十三話『しんらい』

747

四十四話『わかれ』

772

四十五話『おくりもの』

783

第六章・げーむ

四十六話『ゲーム』

804

四十七話『美紀と彼の散歩風景』

812

四十八話『せつめい』

826

四十九話『新たな扉』

842

五十話『静かに…ひっそりと』

869

五十一話『妹と兄』

891

五十二話『一日の終わり』

915

五十三話『ふくしゅう—その1—』

935

五十四話『ふくしゅう—その2—』

958

五十五話『ふくしゅう—その3—』

987

五十六話『ふくしゅう—その4—』

1011

五十七話『ふくしゅう—おわり—』

1040

第七章・やしき

五十八話『雨とひつじ』

1075

五十九話『ついていない日』

1083

六十話『二度あることは…』

1098

六十一話『雨降る中で…』

1104

六十二話 『豪邸の中へ』	115
六十三話 『ヒメ』	129
六十四話 『一ヶ月の努力』	136
六十五話 『今日はベッドで…』	145
六十六話 『先輩・後輩』	150
六十七話 『ねがお』	163
六十八話 『かなしむ』	168
六十九話 『しつと』	176
七十話 『みまちがい…』	187
七十一話 『せんたく』	193
七十二話 『だれかが』	203
七十三話 『くみあわせ』	211
七十四話 『そうこ』	222
七十五話 『もしも』	234
七十六話 『そうだったら…』	248
七十七話 『ほんね』	256
七十八話 『にせもの』	270
七十九話 『しゅっぱつ』	283
八十話 『びょういん』	292
八十一話 『うちあける』	298
八十二話 『迫る危機』	307
八十三話 『てがみ』	318
八十四話 『みかた』	328
八十五話 『ひとりきり』	338
八十六話 『わたさない』	351

八十七話『予感』

八十八話『どちらか一人』

八十九話『最期にもう一度』

九十話『今日、この場で…』

九十一話『逆転』

九十二話『悩み』

九十三話『ただいま』

九十四話『あたしだけは絶対に』

九十五話『けいかい』

九十六話『みんなで』

九十七話『それぞれの道』

九十八話『胡桃と白雪』

異編―前編―『もつと別の終わり方』

異編―中編―『希望の終わり』

異編―後編―『おやすみなさい』

第八章・たんさく

九十九話『二つの変化』

百話『いつしよに』

百一話『事故』

百二話『そばにいたい』

百三話『ぎわく』

百四話『ささやき』

百五話『まだ諦めない』

百六話『頼れる後輩』

第九章・りようけん

16791670165516431633161716041593

157115551540153215091494147614521434141714021389138213751364

百七話『みつけた』

百八話『後輩二人』

百九話『夢みる時間はもう終わり』

百十話『想い』

百十一話『約束』

百十二話『決意』

百十三話『窮地』

百十四話『対立』

百十五話『もう平気』

百十六話『守ってあげてね』

百十七話『覚悟』

百十八話『ともだち』

百十九話『きぼう』

百二十話『みらいへ』

第十章・ともだち

百二十一話『ここから』

百二十二話『ひっこし』

百二十三話『ずっといつしよに』

百二十四話『べんきよう』

『厄介な物を…』

『私だけを…』

『気のせいだろう…』

百二十五話『ゆめ』

特別編『どんな時もみんなの元へ』

特別編『みんなの笑顔のために』

1998199219781961195219441934192419111897

18731846182718161800178917761761175317401729171717061696

百二十六話『そばにいて…』	226
百二十七話『がいしゆつ』	225
百二十八話『それぞれ』	224
百二十九話『ふあん』	223
百三十話『げんきになあれ』	222
百三十一話『あくむ』	221
百三十二話『アノトキ』	220
百三十三話『ハジマリ』	219
百三十四話『ダイキライ』	218
百三十五話『オワリ』	217
百三十六話『ダイスキ』	216
『二人目の被害者』	215
『ヒーロー』	214
『犯人』	213
『大変な一日』	212
『いつもの二人に』	211
百三十七話『いきぬき』	210
百三十八話『ごえい』	209
百三十九話『とうちやく』	208
百四十話『さくせん』	207
百四十一話『うかぶ』	206
百四十二話『つらいこと』	205
百四十三話『おわかれよりも』(☆)	204
百四十四話『へんか』	203
クリスマス回『くるみのおしごと』(☆)	202

百四十五話『まげずぎらい』	_____
百四十六話『つみき—1—』	_____
百四十七話『つみき—2—』	_____
百四十八話『むかしの』(☆)	_____
『くるみバースデー』(☆)	_____
百四十九話『しごと—1—』	_____
百五十話『しごと—2—』	_____
百五十一話『しごと—3—』	_____
百五十二話『しごと—4—』	_____
百五十三話『しごと—5—』	_____
百五十四話『しごと—6—』	_____
百五十五話『このくらいしか』	_____
百五十六話『つたえるから』	_____
百五十七話『おはよう』	_____
クリスマス回(2020)(☆)	_____
百五十八話『これからのこと』	_____
百五十九話『なやみごと』	_____
百六十話『なかよくなりたいたい』	_____
百六十一話『これからも』	_____
百六十二話『こいびと』	_____
百六十三話『たよられたい』	_____
百六十四話『いじわる』	_____
百六十五話『すき』	_____
百六十六話『たんじょうび』	_____
百六十七話『こいばな』	_____

《New!!》『未来』

2442

外伝

一話『動き出す者達』

—————

二話『初仕事』

—————

三話『慣れ始めた世界で』

—————

四話『新たな目標』

—————

五話『力試し』

—————

六話『図書館の中へ』

—————

七話『開戦』

—————

八話『狭山の戦い』

—————

九話『影に咲く花』

—————

短編

まほうぐらし！

—————

かぞく

—————

体育祭をもう一度！〜じゅんび〜

—————

体育祭をもう一度！〜いつしよに〜

—————

体育祭をもう一度！〜はじまり〜

—————

体育祭をもう一度！〜つなひき〜

—————

体育祭をもう一度！〜なかま〜

—————

体育祭をもう一度！〜パンくい〜

—————

形あるモノ

—————

さばくぐらし(1)

—————

さばくぐらし(2)

—————

さばくぐらし(3)

—————

いせかいぐらし！

274227232711269226792666265726442633262526112594

257325522537252725152503248824642447

第一話『めざめ』

第二話『ちから』

第三話『あれから』

第四話『しゅっぱつ』

第五話『りゆう』

第六話『とうちやく』

第七話『ほむら』

第八話『ようこそ』

《New!!》第九話『ウインター／狭山真冬』

《New!!》第十話『彼・胡桃』

どんな世界でも好きな人

第一話『であい』（前編）

第二話『であい』（後編）

第三話『デートではない。これは遊びだ!』（くるみ）

第四話『どこの世界に』（くるみ）

第五話『明るい未来』（くるみ）

第六話『また一緒に:』（くるみ）

第七話『互いを知るために』（ゆうり）

第八話『どこか無防備な勉強会』（ゆうり）

第九話『おままごと』（ゆうり）

第十話『大人っぽい同級生』（ゆうり）

第十一話『ぐうぜん』（ゆき）

第十二話『けいかく』（ゆき）

第十三話『いっしょ』（ゆき）

第十四話『かくにん』（ゆき）

- 第十五話『止まない雨』(みき) |
第十六話『大切な友達』(みき) |
第十七話『またいつか』(みき) |
第十八話『見ているだけで…』 |
第十九話『色々な人たち』 |
第二十話『プール(前編)』 |
第二十一話『プール(後編)』 |
第二十二話『おそうじ』(ゆき) |
第二十三話『むじやき』(ゆき) |
外伝『夏と冬の戯れ』 |
第二十四話『あなたの慌てた顔が好き』(みき) |
第二十五話『分かって欲しい気持ち』(ゆうり) |
第二十六話『先生として』(めぐみ) |
第二十七話『おみまい』(めぐみ) |
第二十八話『近づく夏…』『新しい友達』 |
第二十九話『ゆめ』(みき) |
第三十話『三度目のときめき』(みき) |
第三十一話『みんなで』 |
第三十二話『あつい』 |
第三十三話『さかみち』 |
第三十四話『ひとやすみ』 |
第三十五話『つり』 |
第三十六話『みんなと』 |
第三十七話『いっしょにいたい』 |
第三十八話『楽しい一日』 |

- 第三十九話『うみ』
- 第四十話『みずぎ』(☆)
- 第四十一話『すなはま』
- 第四十二話『うみのいえ』
- 第四十三話『にゆうよく』
- 第四十四話『おやすみ』
- 第四十五話『はなし』
- 第四十六話『さんぽ』
- 第四十七話『おみやげ』(☆)
- 第四十八話『ただいま』
- 第四十九話『ひるやすみ』
- 第五十話『あめのなか』
- 第五十一話『おくりもの』
- 第五十二話『たからもの』
- 特別編『みんなと過ごすクリスマス』
- 特別編『ばれんたいん (前編)』
- 特別編『ばれんたいん (後編)』
- 第五十三話『おさそい』
- 第五十四話『しゅっぱつ』
- 第五十五話『つよがり』
- 第五十六話『きょうふ』
- 第五十七話『しやしん』
- 第五十八話『かつぶ』
- 第五十九話『めまい』

第六十話『おもいで』	36536
第六十一話『ひさびさ』	35513
第六十二話『なかよく』	35513
第六十三話『しんちように』	35513
第六十四話『たいけつ』	35663
第六十五話『けつちやく』	35753
第六十六話『だしもの』(☆)	35843
第六十七話『さくせん』	35913
第六十八話『めいど』(☆)	35973
第六十九話『れんしゅう』	36063
第七十話『ぶんかさい』	36133
第七十一話『ぶんかさい—2』	36233
番外編『ピツキーデー』	36303
ゆきアフター	
第一話『たのしい』	36443
第二話『いろんなこと』	36573
第三話『もう子供じゃない』	36663
第四話『うつつしていいよ』	36803
くるみアフター	
第一話『気づいたキモチ』	36893
第二話『追いつきたいのはその背中で…』	36993
第三話『がんばってよかった』	37163
第四話『今なら素直に…』	37283
第五話『お前のために』	37403
ゆうりアフター	

第一話『仲良くなりたい』

第二話『ごほうび』

第三話『次こそは…』

みきアフター

第一話『ただ：伝えたかっただけです』

第二話『大切な先輩』

第三話『一緒ならどこでも…』

第四話『初デート（前編）』

第五話『初デート（後編）』

第六話『友達』

めぐみアフター

第一話『二人だけの秘密』

第二話『特別な呼び方』

第三話『幸せな気持ち』

まふゆアフター

第一話『気付いた気持ちと一つの不安…』

第二話『あなたの事なら何だって…』

第三話『しっかり伝わるように…』

第四話『もう、お嫁に行けない…』（☆）

3883387538663858

385338443836

382738203812380537953779

377337623746

第一章・であい 一話『一人の世界』

ガラガラッ！

「……はあ……」

外の世界から帰ってきた彼は大きなシャッターを上げて中に入り、一息ついてからそのシャッターを閉じた。そこは真つ暗なガレージの中……そして今現在は彼の住み家でもある。

「……よいしょつと」

ガラガラガラガラガシヤン！

「まあ今日はこんなもんかな？これだけあればとりあえず1週間は大丈夫でしょ」

彼はガレージの中央に置かれた机の隅に電気ランタンを置き、一人言を言いながら持っていた大きめのカバンから缶詰やペットボトルを取りだして机の上に転げた。

「今週も生き延びられそうですかな……」

彼の住んでいる世界……ここに”かれら”が現れてから数カ月たった。

”かれら”というのは外にいる者達……

映画やゲームでいうところの”ゾンビ”みたいなものだろう。

腐って傷だらけの格好をしているのそのそ歩き回り、生きた人間を見つけると襲いかかってくる。少しでも噛まれたり引つ搔かれたらその人間も奴らと同じになって、生きた人間を襲う。数は多いし殺すには頭を潰すか首を切り落とさなくてはならない、かなり面倒な奴ら

でこの数カ月で殆どの人間は“かれら”になった。

「…さてと」

彼は持っていたカバンをその辺に投げ、壁にかけたやや大きめのダーツ盤を5 m程離れて見据え、そして懐に手を入れると…そこに着けた手製のベルトから小さめのナイフを取りだし、狙いを定め…そして投げた。

ガツ！

真ん中とは言わないまでもわりといい位置にナイフが刺さる。

「おお。上手くなつたもんですねあ…」

ナイフ投げは彼が1カ月前から始めた趣味、最初の頃は的に刺さらなかったり持ち手の部分が当たったりしたがナイフを変えたらやり易いのが見つかり、それからはほぼ毎日練習している。

（上手くいけば遠距離から奴らを倒せる武器になるかもしれない…：イヤ…無理かな？あくまでも暇潰しの一環だし…）

そんなナイフはというと以前に立ち寄った大きな工具店のような場所で大量に仕入れた。あそこに行つてからはこの投げナイフ（まだ奴らに投げて使つたことはない）数本とこの腰に着けたナイフ…と言つて良いのだろうか、恐らくは山で道を遮る邪魔な枝などを切る為であろう大きめの刃物を装備して外に出ている。ここがアメリカならば銃で戦うのだろうが、日本では銃など簡単には手に入らない。

「警官の感染者とかなら持つてるのかな？…：ま、銃の撃ち方分からないから手に入れても意味ないか…」

そんな事を呟きながら彼はナイフを数本投げては回収し、また投げる。

幸い装備は充実しているし、食料等は近くの個人経営スーパーにま

だストックがあった。

ここに来たのは2週間前。

世界がこうなってから彼は外を出歩き、住み家を転々としていた。

ここはどうやらここは車両整備店のようでガレージに物を沢山置く事が出来るし、更にシャッターは中々に頑丈。そしてガレージの中の薄暗い雰囲気が入ったらしく、彼は現在はここに住んでいる。

…カンツ!

「……ハズした」

ダーツ盤横のコンクリート壁に当たり弾き帰って地面に転がるナイフ、まだまだ正確さが足りない。ふと弾き帰ったナイフが自分に刺さって死んだらバカみたいだなあ：等と思い可笑しくなる。彼は手元のナイフを全て投げ終えると、それを回収せずに地面に引いたマツトに横になり：瞳を閉じて考え事をした。

(世界がこうなっていないければ僕はもうあの高校を卒業していたのだろうか：今となっては同級生みんなが生き延びているか、それすらどうでもいい……。一人が好きだ。)

こんな彼も、以前は生き残りを探したりもした、見付けた事もあった。若い男性4人と中年の男性が1人。お互いを励まし合い、奴らと一緒に戦い物資を確保して夜には彼達のアジトで喜びあった。中年の男性は彼の事を気にかけてくれたらしく、よく話しかけてくれた。若い男性達も下らない冗談等を言っ彼を笑わせた。こんな人達がまだ生き残っているんだ、本当に良かった。他人をここまで面白いと思っ事初めてだ：世界がこうなっても悪いことばかりではない。

彼は…そう思った。

翌朝起きると彼らはいなくなっていた…彼が元々の持っていた食料や当時武器に使っていた金属バットすらも奪いさつて。その日、彼は簡単に他人を信頼した自分を呪った。

数日後、彼はまた別の生存者に会った…しかし、その生存者は彼の物資を奪おうと殴りかかってきた、彼はその生存者に持っていたナイフで応戦したが、相手を殺す気は無く…適当にあしらって逃げようと考えていた。しかし、たまたま切りつけてしまった箇所が悪く…その相手は大量の血を流して死んでしまった。

“かれら”ではない人間を殺したのは初めてだが数々の“かれら”を殺してきたからかあまり動じなかったし後悔も無かった、僕を襲ったのだからコイツが悪い。死んで当然だ。）

「つまらないヤツ…」

彼は死体にそう呟いた。

やっぱりそうだ…この世の中にはろくなヤツがない。

そう感じてから彼は生存者探しをやめた。

それからというもの…ずっと彼は一人だった。

(一人でいい。その方が楽だ…)

二話『しやない』

由紀「ねえねえりーさんどこ行くのー?」

悠里「もう食べ物あまり無いから探しに行こうと思うんだけど…
中々良さそうないわね。」

胡桃「ゆきのせいだな、お前昨日も缶詰2個開けたろ?」

由紀「ううっ!昨日はたまたまお腹空いてたんだよお…あれ?胡
桃ちゃんも一昨日2個食べてなかった?」

美紀「食べてましたね。」

胡桃「おい美紀!言わなくて良いんだよ!」

由紀「もうくるみちゃんたら…太るよ?」

胡桃「お前にだけは言われたくない!本当に!」

悠里「ふふっ…まあお腹空いてるんじや仕方ないわよ。…といつて
もある程度は計画性持たないとね?」

由紀「ごめんなさ〜い!」

胡桃「ご、ごめん…」

美紀「食料、もう全然ないんですか?」

悠里「いいえ、まだ多少余裕はあるけれど早いうちに確保しとかな
いといざというとき大変な事になっちゃうでしょう?」

胡桃「ガソリンは?」

悠里「大丈夫。この間入れてからあまり走ってないし予備の燃料も
積んであるから。」

胡桃「んじや食料くらいかな?必要なのは。」

由紀「はいはい!!私新しい服が欲しく!」

胡桃「うおっ!いきなり耳元で大きな声だすなよ、びっくりするなあ。…けど服か、確かに新しいの欲しいかなー…学校の制服とジャージが基本装備になってるし。」

悠里「ん〜じゃあどつかデパートみたいなところが良いわよね?誰かこの辺にあるデパートわかる?」

胡桃「全然わかんないなあ…」

由紀「私も〜」

悠里「私もあまりこの辺は来たことないからわからないのよね…美紀さんわかる?」

美紀「うろ覚えになってしまいますが、多分このまま真っ直ぐ進めば大きな公園があるので、そしたら右の方曲がればすぐに『トータル』って名前のデパートがあると思います。」

胡桃「前に来た事があるのか?」

美紀「本当に随分と前です。しかも一回しか行ったことないので道違いかも知れないし、そもそもそのデパート自体潰れてるかも…」

胡桃「デパートはそうそう潰れないだろ、分からないけど。」

由紀「私ん家の近くのデパート潰れちゃったよ〜。」

胡桃「マジか…」

由紀「うん…中にあるレストランのポテト好きだったのに…。」

悠里「…そのトータルってデパートはまだある事を祈りましょ。」

美紀「そうですね、わりとデパートの中でも大きい方だったので食料も服もあると思いますよ。」

由紀「お菓子残ってるかなあ？」

胡桃「どうだろうな…食料ってわりと大きいところの方がもう漁られてるイメージなんだよなあ。」

由紀「ダメだなくくるみちゃんは！そんなネガティブな事言うところのおりになっちゃおうよ？」

胡桃「そいつは勘弁だな。」

美紀「前向きに行きましょう。」

悠里「そうね」

胡桃「まあ最低服くらいはあるだろ、行く意味はあるな。」

由紀「服くらいは…って。またくるみちゃんのネガティブ発言だよ」

胡桃「これもダメなの!？」

由紀「ダメだよ！どうせならデパートごと持って帰るくらいの気持ちじゃないと!!」

胡桃「もうそれデパートに住めよ。」

由紀「それも良いかも…」

悠里「ダメよ、他のお客さんの迷惑になっちゃうでしょ?」

由紀「そうだよくるみちゃん!」

胡桃「お前…殴るぞ?」

由紀「う…ごめん…」

悠里（実際デパートとかに住むのも考えなかった訳ではないけれど、あまり大きい建物だとかれらを処理しきれないし…物資を狙った他の生存者と争いになるかもしれない。あまりにもデメリットが多いからある程度の物資だけを確保してこのキャンピングカーを拠点にした方が安全ね。夜はかれらの少ない所に止めれば普通に眠れるし。）

美紀「…あ」

悠里「ん?…あああれがさつき言っていた公園?」

美紀「はい、あの交差点を右に行けばトータルがあるハズです。」

悠里「右ね…」

ソーツ

悠里・美紀・由紀・胡桃「……………ゴクツ…」

由紀「……………あ!!!」

胡桃「お!あつた!美紀あれだろ!」

美紀「はい!…良かった〜!しかも私が行った時より大きくなりました!」

悠里「改装したみたいね、とりあえずあつて良かった!」

立体駐車場の最上階、デパートの入り口近くにキャンピングカーを
停め私達は降りた。

そして物資が残っている事と、かれらがいない事を祈りながらデ
パートの探索を始めた……。

三話『たんさく』

当デパート「トータル」では今日の夕飯の材料を買うことも、店内の様々な飲食店で食べていく事も出来ます。

大型家電や様々なブランドの衣服、アクセサリーも取り揃えており。

園芸・DIY・キャンプ等の用品専門店まで、お客様の要望にお応え出来る多種多様なショップを揃えております、是非ご家族でご来店下さい！

新たに映画館「トータルシネマ」カラオケ「カラオケ合衆国」ゲームセンター「ラッキー」がオープンしました！

これからも新しくなったトータルをよろしくお願いいたします。

皆様のおかげで、大型デパート「トータル」全国に続々と店舗拡大中！

胡桃「……だって。家の近くにも出来るかな？」

美紀「無理でしょう……さすがにこんな世の中ではしばらくは。」

胡桃「わかってるよ、冗談だって」

由紀「大変だ……映画館が出来てる……」

悠里「外からみたとおり、かなり大きいデパートね……胡桃、その地図2つ取って。」

胡桃「ええつと……これか、ほい」

悠里「ありがとう、一つは美紀さんが持っていて。」

美紀「わかりました」

由紀「大変だ……カラオケが出来てる……」

悠里「食料品売場は1階で服屋さんはこの3階……私と由紀ちゃん、美紀さんと胡桃で別れて行きましよう。」

美紀「別れるなんて危なくありませんか？」

悠里「大人数だとかえってかれらに気付かれやすくなってしまし、別れて必要な物を集めた方が効率が良いわ。万一の時の為にかれの気をそらすためのサイリウムを持ってきたから、二人共少し持っていって。」

胡桃「了解。あたし達はどっちに行けばいい？」

由紀「大変だ……ゲームセンターが出来てる……」

悠里「ダメよ由紀ちゃん、今日は必要な物だけ見て帰りましよう。」

由紀「うう……まあいつか、じゃあ早く服見にいこく」

悠里「……そういう事だから私達は服を見てくるわ。食料品任せてもいい？」

胡桃「分かった。んじゃあたしの分の服もよろしく！」

悠里「分かったわ。美紀さんの分も見てくるわね」

美紀「すいません、頼みます。」

由紀「早くいこくよく」

悠里「はいはい……それじゃあ必要な物を手に入れたらキャンピングカーに集合ね？」

美紀・胡桃「了解」

悠里「それじゃあ……由紀ちゃん行きましよう」

由紀「はい！」

胡桃「……それじゃあたし達も行くか」

美紀「はい！」

胡桃「まず1階まで降りないとな……」

美紀「あつちにエスカレーターがあるのでそれでおりましよう、動いてはくれないでしようが。」

胡桃「エスカレーターもそうなたらただの階段だな……まあ降りれるだけ構わないけど。」

??????????

1階

胡桃「……さて、1階まで降りたけど1階のどの辺？」

美紀「えつと……そこが雑貨屋だから……真っ直ぐで大丈夫です。」

胡桃「了解。……この辺には奴らいないみたいだな。」

美紀「みたいですすね……私が先輩達と会ったシヨツピングモールにはやっぱそれなりにいたんですけど……」

胡桃「いたなあ……ん？けどあそこは広間が酷かったけどそれ以外はほとんど問題無かったな……あとは映画館か、あそこも沢山いた。」

美紀「ここの食料品売場も大丈夫だと良いですね」

胡桃「だな……まあ囲まれなければ逃げられるし少なければその場で処理も出来るけどね」

胡桃「そう考えるとあたし達が食料品担当で良かったな、万一奴らがいってもあたしがいれば戦うっていう選択肢が増える、前のシヨツピングモールの服屋には奴らはいなかった……ここも同じなら戦いが得意じゃないあの二人が服担当なのは正解だ。」

美紀「そうですね、ただその理論だとあの二人が服担当なのが正解なんじゃなくて胡桃先輩が食料担当なのが正解って方が正しいと思います。私も戦い得意じゃないですし……そもそも戦い得意なのは胡桃先輩だけです。」

胡桃「まるであたしだけ戦闘狂みたいな言い方だな……」

美紀「違いますか？」

胡桃「う……ちげーよ！」

美紀「ふふつ……すいません、冗談です。」

胡桃「やな冗談だな……まあ実際自信はあるけどな！3体くらいなら

同時に相手出来る!!…と思う。」

美紀「戦わないで済ませるに越したことはありませんけどね。」

胡桃「だな…おっと、あそこだな。」

美紀「はい」

胡桃「手っ取り早く缶詰とか保存食と水を確保して、リーさん達と合流しよう。」

美紀「あ…私由紀先輩にお菓子頼まりました。」

胡桃「んじや適当に菓子もみてくか、忘れたら由紀すねそうだし。」

??????????

1階・食品コーナー

胡桃「お!…良かった。缶詰は少しだけ置いてあった。レトルト食品もいくらか手に入ったし…ノルマは達成かな。」

美紀「先輩!…水も段ボール1箱。あつちに置いてありました!」

胡桃「マジかよ!意外とあるな、段ボール1箱か…カート必要だな。そこのやつ持ってこう」

美紀「はい。そのカート私が押しますから、先輩の缶詰とかも入れて下さい」

胡桃「悪い頼む」

美紀「この中です」

胡桃「これって普段はアイスとか冷凍食品が入ってるケースだよな？何でここに水があるんだ？」

美紀「どうしてかはわかりませんがたまたま目に入って見付けました。肝心の飲料コーナーの方は水無かったので助かりました」

胡桃「運が良かったな。よし！んじゃカートに乗せて車に戻ろう」

美紀「そうですね。由紀先輩はもう見終わったでしょうか？」

胡桃「ん〜どうだろうな？もしまだだったら荷物車に積んだ後で見に行こうぜ。二人がいる服屋駐車場から近いからすれ違いもないだろう。」

美紀「じゃあとりあえず駐車場まで戻りますか。カートがある分階段上がるの大変ですけど」

胡桃「二人で持ち上げながら上がれば何とかいけるだろ。」

美紀「ですね。行きましよう」

??????????

3階・駐車場 キャンピングカー

胡桃「今ので終わり？」

美紀「はい。終わりです全部積み終えました」

胡桃「よし…まだリーさん達戻ってないし、様子見に行こうぜ」

美紀「はい」

??????????????

3階・衣料品売場付近

美紀「変ですね……先輩達見当たりません。」

胡桃「おかしいな……この辺以外で衣料品売場つてあるか？」

美紀「えつと……いえ。衣料品売場はこの辺に集中していて他の階にはありません。」

胡桃「じゃあ二人はどこに……」

「キャー……ッ!!!」

胡桃「!?今の!」

美紀「由紀先輩の声です!!下の階……多分1階の方です!急ぎましよう!」

胡桃「ああ!!」

四話『ぼうし』

胡桃達と別れ、3階の衣料品売場へとやって来た悠里と由紀。

由紀「うわあ！みてみてりーさん！可愛い服沢山あるよ!!」

悠里「そうね。随分久しぶりにこんなお店に来た気がするわ…美紀さんと出会ったショッピングモール以来ね。」

由紀「おお、これも良いしあれも良いなあ、迷うよ…りーさんはこれとあれどっちが良いと思う？」

悠里「そっちのスカートは長すぎて動き辛そうだから、こっちの方が良いんじゃない？あんまり動き辛いのは大変だからオシャレも良いけどそれでいて動き易そうなのを選びましょ？」

由紀「うん！分かった〜！」

悠里「さて…私も胡桃や美紀さんの分を選ばないと…」

悠里「…あ、このマネキンの格好可愛くて良いわね。動き易さも問題無さそうだし」

悠里（胡桃に似合いそうだけどこういう服好きかしら？…まあとりあえず持って帰って皆で気に入った服を選べば良いわね。もらっていきましよう。）

由紀「あ!!」

悠里「!?!何?どうしたの由紀ちゃん？」

由紀「みて!りーさん!!この帽子!!」

悠里「あら。それ前よく由紀ちゃんが被ってた帽子ね？」

由紀「うん!…あの帽子、今は太郎丸が持ってるけどね。」

悠里「そうだったわね…」

由紀「…」

悠里「…」

悠里「それ…もらってく？」

由紀「…ん？ああ、うん！」

悠里「良いの見つかって良かったわね。」

由紀「うん！」

悠里（…それにしても、あの帽子って普通のお店に売ってたのね…初めて知ったわ。）

?????

20分後

悠里「さて…もうそろそろカバンに入らなくなっちゃうし、車に戻りましょうか？由紀ちゃん」

由紀「うん。くるみちゃん達もう戻ってるかな？」

悠里「どうかしら…荷物だけ置いたら1階の方に行って合流しても良いけど、すれ違いになったら怖いわね。」

悠里「食品売場は1階のどの辺りだったかしら…由紀ちゃん。ちよつと地図見るから待ってね。」

由紀「うん！」

悠里「ええと…食品売場はここで私達がいるのが3階のここだから…。」

由紀「…あれ？…何か聞こえる。」

悠里「ん？…そう？」

由紀「聞こえたよ！…子供の泣き声みたいな声だった！助けないと！！」

悠里「由紀ちゃん！待って！！」
??????

1階・通路裏 商品倉庫前

悠里「ハアハア……由紀ちゃん！ダメでしょ!!急に走ったら!!」

由紀「ほらここー！この中から聞こえるよー」

悠里（ここは……扉には倉庫と書いてあるわね。運ばれた商品を保管する場所みたいね……胡桃達のいる食品売場の真逆まできてしまったわ）

「ウワアーン……ウワアーン……ウアアーン」

悠里「本当だ！……子供の声！由紀ちゃんよく3階から聞こえたわね。」

由紀「開けるね？りーさん！」
ガタンッ!!

由紀達の後方……倉庫とは逆方向に位置する5 m程離れた部屋からそれは聞こえた。

由紀・悠里「!？」

由紀「今の……」

悠里「後ろの部屋の中から聞こえたみたい……私見てくるから、由紀ちゃんは子供をお願い！」

由紀「うん……気を付けてね？」

悠里「ええ……大丈夫よ」

悠里（子供の声に奴らが反応したのかも……用心しましょう……）
ギイイー

悠里（スタッフ用のロッカールームかしら……ロッカーが何列にも並べられてる……暗いからロッカーの死角から襲われないよう警戒しながら部屋の中をチエックしないと……）

……スタッスタツ……

悠里（このロッカーの列はない……あと3列ね……怖い……けど……注意して進めばきつと大丈夫！）

……スタッスタ

悠里（…？最後の列まで来たけれど、何もいないわね…ただこの列の奥から2番目のロッカーが倒れてる、さっきのはこれが倒れた音？自然に倒れたの？）

ガシヤン！

悠里「!?」

由紀が向かった倉庫の方角から大きな音が……更に…。

由紀「キヤーーーーー！」

悠里「由紀ちゃん!!」

由紀の悲鳴に気をとられその方角に目を向けロッカーの列から目を離れた…その直後。

バタン!!

悠里「えっ!？」

悠里の後方…倒れていたロッカーの更に奥…つまり一番奥のロッカーの扉が勢いよく開き…それは悠里の前に現れた。

悠里「!!!」

??????

1分程前

倉庫内

ギイー

「ウワァーンウワァーンウワァーン」

由紀（いた！あの机の上だ！）
スタスタツ

由紀「大丈夫？」

由紀（毛布にくるまれてる…小さいし赤ちゃんかも！）

「ウワァーンウワァーン」

由紀「もう大丈夫だよ！」

由紀は毛布にくるまれたその小さな身体を抱き上げ顔に位置するであろう部分の毛布をめくりその赤ん坊の顔を見た。

由紀「え？」

「ウワァーンウワァーン」

由紀「これ…人形だ！」

それは幼い女の子が遊ぶ為の赤ん坊の姿をした音声機能付の人形だった、そしてそれを確認した直後。

ガシャン!!ガシャン!!

由紀「うわ!?!…あ!ああ…あ…あ…」

先ほど由紀がこの倉庫に入る為に使った扉…つまり今の由紀の10m程後方、その扉を挟むようにして配置してあったのはフェンスによって作られた囲いのようなもの二つ、先ほどの音はその一辺が倒れて開いた音だった。

そしてその中からは“かれら”が現れ、皆一斉に由紀に顔を向けた。

由紀「あ…あ…あ…」

由紀「キヤーーーーー」
「!!!!」

五話 『馬鹿な行動が起こした奇跡』

とある場所にある車両整備店、そのガレージで彼は今日もナイフ投げの練習をしていた。

ガッ！

ガッ！

ガッ！

「……………」

……………スタスタツ

ダーツ盤に近付き刺さったナイフを回収し、また投げる位置につく。

「……………」

ガッ！

ガッ！

ガッ！

(……………大変だ……………。)

ガッ！

(めちやくちや上達してきてる!!!)

「今日はもう50本は投げてるけど、6本しか外してない!!! ヤバいよこれは!.....うわあ〜! 世界がこんなじゃなきゃ、サーカス団とかに入れたなあ。」

「.....よし.....あれを出すか.....」

そうやって彼が荷物の山から取り出したのはゾンビの形に切り抜かれたダンボールだった。

(これを的にした方が実戦に近い雰囲気が出せる...)

ダーツ盤にそのダンボールを重ね...頭の一部がダーツ盤の中央になるようにして、一本ナイフを刺し倒れないように固定する。

(...出来た!)

(距離約5m...三投で頭に当てなきゃ殺されると思って投げよう...!)

(三投……いける…倒せる!!)

「はッ!!」

彼が投げたナイフは勢い良くダンボールゾンビに向かって行ったものの……僅かに右にそれゾンビの頭…その10cm横のコンクリート壁にぶつかり…先端部分が欠けてしまった…

そして…その弾きかえったナイフ片は……

容赦なく彼の右足の太股に突き刺さった。

「……ぐわあっ!!!」

「な!?!…ナイフの破片が刺さったのか!?!」

(そんなに深くはないと思うけど……血はそれなりに出てきているなあ)

(……ガーゼとかあったかな?)

ナイフ片を足から抜き、足を引きずりながら近くの棚に向かう。

ガサゴソ……ガサゴソ……

(しまった……無い!!)

(近くのスーパーはもう医療品は無かつたし…この辺には薬局も無かつた気が…)

(そう言えば…確か近所のモールの中に薬局があつたはず…。少し遠いけど、医療品無いのは困るし…行ってみようか)

(…投げナイフ…持っていた方が良いのかな…)

彼はまだ折れていない自分のトラウマと化したナイフ達を見つめた…。

(一応持っていこう…別に投げなくても普通に使えるし…)

彼は手製のナイフベルトに投げナイフ数本と大型ナイフを装備するとその上から上着を着て出発の準備を整えた。

(なんたる醜態だ。…まさかこの間想像した事が現実になるなんて。情けないったらありやしない)

(軽いケガで済んだからいいものの…これで死んだら本当にバカだ……サーカスに入れるとか思ってた自分やダンボールを”かれら”の形にくりぬいてた自分を殴りたい…)

(…足のケガはとりあえずタオルで縛っておこう)

太股をタオルで縛ると彼はデパート「トータル」を目指して出発した。

彼は気付いていないが……彼は動かないダンボールのゾンビに三投で勝つと宣言し、驚く事に一投目で敗北するという前人未到の伝説を作りあげていた。

スタスタスタスタ

(……………足痛い……)

六話 『探索』

「……………はあ。」

住み家から出発して1時間…彼はデパート「トータル」にたどり着いた。

（遠かった…前に来た時より遠く感じた…走れなかったからだろうな、何にせよ道中奴らに囲まれずに済んだのは幸いだった。）

「さて…入るか。」

そう呟くと彼はデパート一階の正面入口へと足を運んだ。

「邪魔だなあ…」

正面入口には車が何台も止めてあり道を塞いでいた。

（前来た時は無かったのに…しかも大きな車ばかり…ジャンプして登っていくしかないか。）

「よっ！」

少年は車の屋根に手をかけるとドアの取っ手に足をかけ車の上に登り、入口の方へと飛び降りた。

ダンッ！

「うっ!!」

（傷に響く〜!）

少年はその場で軽く悶えると、息を整え店内へと入っていった。

スタスタスタスタ

（確か薬局は入ってすぐだったよね…ああ…あつたあつた。）

(さてさて……ガーゼと包帯………あつたな。それと…絆創膏か…
貰っておこう…お！消毒液もある…頂きますか。)

持ってきたバツクに医療品を詰め終わると彼は薬局を後にした。

(さて…次は食品売場でも見ていくか…食品はこの間補充してばかり
だけど…あるに越したことはない。)

スタスタ

????????

(何て事だ……)

(水が一ケース残っていた！……これは是非頂いてこう！)
「…よいしょつと」

スタスタスタスタ

(ん…中々重いな……ふと思ったけど僕はこれを持って来た道戻る
んだよね………)

ピタツ……

(……………やっぱいららないかな)

(そのアイスケースに入れておこう…元の場所に戻すのも面倒だし。)

「ほいっと」

ガコンツ!

(これでいつか!……さすがに一ケースは重いから仕方ない)

少年は熟考に熟考を重ね水を捨てるという暴挙を選んだ。

重いなら箱を開けて数本だけでも持って帰るという選択肢は…彼には無かった。

(あー………そういえばナイフ一本壊したんだよな………住み家に沢山あるけど…少し見てくかな。)

少年は近くの壁に張り付いていた店内の地図を見つめた。

(どこならあるかな……ん？アウトドアショップ？……ありそうだな…
2階か……。)

?????????

2階・アウトドアショップ内

「おおー何だこれは!？」

少年の目の先にはガラスのケースに保管された大きな刃物があつた

(…僕の持っているナイフよりも少し大きいな、刃も凄くキレイだし頑丈そう……こりや良く切れるだろうな……)

「な!？」

(結構な値段だな……。よし、貰っていいこう)

少年はガラスケースの隅が割れている事に気付くと、その隙間から手を伸ばしそのナイフを回収した。

(さて帰ってこのナイフをベルトに付けられるようにしないと、古いのを外してそこに付けるか。)

（そうと決まれば帰るか…見るもの見たし。…バック重いなあ）
??????

1階

少年は1階に降り、ある場所をみて立ち止まっていた。

（あつちつて普通は従業員しか立ち入り禁止の通路だよね…少し興味がある。行ってみようかな？）

そんな事を考えているとその通路の奥から……

「ウワァーンウワァーン」

「!?子供の泣き声?」

タツタツタツ

少年はその声の聞こえる場所へと走った。

（……倉庫か。）

ギー

少年が扉を開け室内を見回すと奥に机が不自然に置かれていて、その上には何やら毛布にくるまれたものが…するとその毛布から泣き

声が聞こえ、少年はその泣き声を発する物体に近付いた。
スタスタッ

「ウワアーンウワアーン」

「ん？……」

……ピタッ

少年は足を止めた、先程は気が付かなかった違和感に気付いたから。

（あの子供……いや赤ん坊か？……あんなに泣いている割にはピクリとも動かない……）

「ウワアーンウワアーン」

（!?……泣き声も良く聞けばさつきから全部同じだ!!……てことは人形かなんかか？）

「ウワアーンウワアーン」

（やっぱり……同じ泣き声だ……一体誰が何の為に……）

「ウワアーンウワアーン」

（思えばこのデパート……奴らもないし死体も無かった……誰かが住んでるのか？）

「ウワアーンウワアーン」

（そういえば入口の車ももしかしたら奴らが入らないようにするためのバリケードだったのかも……だとすれば待つていれば誰か来るかも知れないけど……もう人とは関わりたくないし……とつとと帰るか……）

「ウワァーンウワァーン」

(……………うるさい！)

少年は人形を黙らそうと手を伸ばした…しかし毛布に何かが付いていることに気付き手を止める。

(!?……………ワイヤー?)

(毛布から壁に伸びてる…………)

その糸は少々太めの釣糸のようなもので、良く見ればはっきり分かるが、この薄暗い倉庫では視認するのは難しく、少年が気付いたのは偶然だった。

少年は持っていたバックからあらかじめ入れておいたライトを取り出すと、その糸に明かりを当て、反射する光を頼りに何処に繋がっているのか確かめた。

糸は机の横の壁に向かっていきそのまま更に横の壁へと伸びていた。良く見ると糸が壁に沿えるようU字型の釘のような物が定期的に壁に刺してあった。

糸はその釘達の間を通っていき、少年が入って来た扉の横にあるカーテンのかけられた大きな四角い箱のような物へと続いていた。

(こんなものがあつたのか…泣き声に気をとられて気が付かなかつた。何だろう？これ…扉を挟んで2つあるな。中見てみるか)

少年はカーテンに手をかけ、ゆっくりと捲り中を覗く。

(何だこれ？ 囲いか？ 暗くて何を閉まってるかわからないな。)

少年は左手でカーテンを捲りながら右手のライトでそれを照らした。

「…なっ!!?!」

中を照らすと明かりに反射した無数の目が少年を睨んだ

バツ!

少年はカーテンをかけ直すと距離を開け、腰のナイフに手を掛けた。

(今の……人間じゃなかった!!奴らだ!あの囲いに奴らを閉まってるのか!?)

ガシャン!ガシャン!

カーテン越しにフェンスを叩くような音と唸り声が聞こえる、どうやら何物かがフェンスのような物で囲いを作り奴らを集めて閉じ込めたようだ…

ガシャン!ガシャン!

室内に鳴り響くフェンスを叩く音…唸り声…そして人形の泣き声…

ナイフに手を掛けたまま、じつと動かない少年の額から汗が流れ落ちる。

しばらくすると奴らはフェンスを叩くのを止め、少年がこの部屋に入って来た時のように大人しくなった。

「…………ふう」

(あのワイヤーが繋がっていた先は奴らの閉じ込められている囲いみたいだ……ってことはあのワイヤーの付いた人形を引っ張ると奴らを閉じ込めているあの囲いが何らかの仕組みで開く……そういった罠の可能性がある。)

(ワイヤーが途中でカーテンに隠れていて詳しい仕組みは分からないけど…あのカーテンの中にワイヤーが入っていつて事はこのワイヤーはあの囲いに関係しているとみてまず間違いない…試しに人形を引っ張れば答えが分かるけど、そんなことする必要はない。)

(奴らも大人しくなったし…出てくか。)

少年は念のため物音をたてないように静かに歩きながら、先ほど入つて来た扉を開け倉庫を後にした。

パタン

(…誰があんな手の込んだ罠を…かなり狂った人間に間違いない。)

(そんな人間ばかりだ…この世界になつてから…)

「ウワアーンウワアーン」

(あの人形…まだ泣いてる……そういえば奴らはカーテンで視界を遮れば一度獲物を見付けても少しすれば大人しくなるんだな…人形の泣き声に反応しないのは何故だろう？あまりにもずっと聞こえるからもう環境音として認識しているのかな？)

スタスタ

(ん？…あつちは…スタッフルームか何かか？せつかくだから漁らせで貰うか。)

ギー

少年が扉を開けると中には沢山のロッカーが並べられていた。

(スタップ用のロッカールームかな…何かあるといいけど。)

少年はロッカーを一つずつ開けていったがほとんど鍵が掛かっており、運良く開いてもシヨップの制服らしき物や、汚れたタオルなどが閉まってあるだけだった。

(もう見てないロッカーも2つだけ……ここまで来たなら全部開けてみるけど、まあ無駄かな……)

ガチャガチャ

(ん……これも鍵が掛かっているのか……いや……隙間が空いているから何か引つ掛かっているだけみたいだ……強く引けば開きそうだな。)

「ほっ!!」

ガチャン!!

グラツ……

「へ?……」

ガタンツ!

少年が強く引きすぎたためロッカーは倒れてしまった。

(やってしまった……。まあいいか、最後のロッカーを開けよう)

少年が最後のロッカーに手を伸ばした瞬間、入口から物音がする

ギー

(!?……何か入って来た!……仕方ない……ロッカーに隠れよう!)

少年は最後のロッカーに鍵が掛かっていないことを確認すると中に隠れた

(鍵が掛かってないのは良かったけど、バックが邪魔でかなり狭い! 元々このロッカーは空だったみたいだけど、それにしても狭い……)

スタツ……スタツ……

(奴らか？それともここの住人か？…どつちだ!?)

スタツ…スタツ…

(あれは…奴らじゃない…人間の…)

ロッカーの隙間から外を覗いていた少年の目に入ったのは、制服を着た学生らしき女の人だった。

(学生？…高校生かな？彼女がこのデパートの主か…つまりあの罍を仕掛けた張本人！…綺麗な顔してとんだサイコパスガールだ…！)
(…ずいぶん注意深く見ているな……さっきロッカーを倒したのがま
ずかった！サイコパスが相手じゃ見付かったら話し合いはまず無理
だろう……何だか少し怯えているようにも見えるけど……それは
本当に怯えている僕の見せる幻！そうであつて欲しいと思う心が生
んだ幻影ツ！あれだけの奴らを閉じ込めて、しかもそれを罍にするよ
うな人間が僕如きに怯える訳がないツ！)

(……怖い！震えが止まらない！今まで何人かの凶暴な生存者と出
会ってきたけど……コイツは桁違いだ！奇襲をかけるか!?)

少年はロッカーの中でナイフに手を掛け…ごく普通の女の子に怯
え、更にはナイフで奇襲すらかけようか…という考えをわりと本気で
考えていた。

端からみれば彼の方がサイコパスだった。

(やるか!?)

ガシヤン!

(!?)

女子学生「!?’

て
部屋の外…恐らくは先ほどの倉庫から大きな音が聞こえた…そして

女の子の声「キヤーーーーー!」

女子学生「由紀ちゃん!!?’

(……マズイ!)

バタン!!

少年は少し考えた後ロッカーの扉を開け、そこから飛び出した。

女子学生「えっ!？」

少年と女子学生の目が合うが少年はさつきとは違い彼女に対して怯えはしなかった。

女子学生「あなたは……?!」

「失礼します!」

少年は女子学生に一声かけるとロッカールームを飛び出し倉庫へと走った。

タツタツタツ!

バタン!!

「っ!!」

扉を開けると外に放たれた奴らの群れと隅に追いやられている少女の姿があった。

女子学生「由紀ちゃん!………なっ………どうしてこんなに奴らが!!？」

少年に続いて女子学生が倉庫に入りその光景に驚く。

(やっぱり……この人は……この住人じゃない……あの少女と知り合いつて事はこの人が……この住人だった場合あの少女もこの人の仲間……つまりはこの住人だということになる、なら自分達が仕掛けた罠にかかると訳はないし、何よりさつきこの人は奴らがここにこれだけいる事に

驚いていた。)

(その時点でこの住人という可能性はほぼ無くなる！恐らくは物資目当てにここにやって来た生存者！……だったらあんな娘に目の前で死なれても気分が悪い！)

女子学生「由紀ちゃん!!」

女子学生が少女の元へ向かおうとするが、少年が左手でそれを遮る。

女子学生「ツ!!」

女子学生が少年を睨む

「落ち着いて…下がっててください。」

少年は腰のナイフに手を掛け女子学生にそう声をかける。

「僕が行きます」

少年はそう言い放つとベルトからナイフを抜き、奴らを見据えた。

七話 『最後にもう一度…』

「僕が行きます」

彼は髪の長い少女にそう言つて”かれら”の元に向かつていく。

”かれら”はそのほとんどが囲まれている一人の少女の方に意識を向けている、つまりほとんどが少年に背を向けていて、奴らは少年の存在にまだ気付いてすらいなかった。

(こつちに気付いてない内に何匹か仕留められれば…！)

少年は右手に持ったナイフを勢いよく、群れの内の一体の頭へと突き刺した。ズシャツ！という音を発しながら頭を突かれたそれは動かなくなり、少年は突き刺したナイフを抜く…。その直後その左右にいた二体が少年の方を向く。

少年は左手を懐に伸ばし…小型ナイフを取り出すと、左のゾンビの頭に突き刺し…右手のナイフで右のゾンビの首を切り裂いた。左のゾンビはナイフを抜くと倒れて動かなくなったが、右のゾンビは倒れはしたがまだ動いていた。

(一発じゃ切り落とすきれない…けどさすがに首を狙えばダメージがあるみたいだ…あれで十分でしょ)

(……それより)

辺りを見ると群れの約3割が少年に気づき…標的としていた。

(かなり多い。10……いや…15はいるか)

(3体倒せたのは良いけど不意打ちだったからだ、奴らが僕に気が付

いた以上さつきみたくはいかない……少しでも動き方を間違えればすぐに殺される)

そう考えている間に群れの一体が少年に襲いかかる。

「……っ！」

掴みかかろうとしたその腕を何とか避け……そのまま右手のナイフをそのゾンビの顔面に降り下ろしその顔面を切り裂くと更に腹部に蹴りを入れる……よろめいたゾンビは群れに突っ込み、それにぶつかられた数体のゾンビがその勢いにより倒れた。

(距離を開けようと思って蹴ったんだけど……いい感じに巻き込めた！……だけど早くしないとあの娘が……！)

少女を見るともうあと4 m程の所まで奴らが迫っていた。
残された時間はそう多くはない。

(……!!このままじゃ！)

直後更に二体のゾンビが少年に襲いかかる。

ザシユツ！

少年は素早くその内の一体の頭にナイフを降り下ろし、もう一体に対応しようとする……しかし。

ガツ！

「なっ!!？」

対応が間に合わず左手をその一体に掴まれてしまう。

それは両手で彼を左手を口に運ぼうとするが、彼は右手でその頭を押し……左手から口を遠ざけさせる。

(くそっ……頭を押ししている暇があったならナイフで突き刺すべき

だったな)

少年は必死に抵抗するが…その力が強く、左手は振りほどけず…持っていたナイフも振りほどこうとする内に地面に落としてしまっていた。右手で抑えているその頭も徐々にその口を彼の左手に近づけていく…。更には先ほど頭を切りつけた一体も、体勢を整えると少年の方へと向かってきていた。

(浅かったか…。まだ生きてるた。いつもなら頭を狙えば一発で倒せるのに…動きのキレが悪い。やっぱり数が多すぎて軽くパニックになってる…)

(やばいな…。…本当にミスった…。せつかく助けに出てきたのに、大した役にも立てず終わるかも知れない…)

掴まれた手も振りほどけず、辺りを囲まれ始めている…。

この状況を一人で打破するのはかなり厳しく、彼は心のどこかで諦めかけてしまうが、その時だった…。

グサツ!

後ろで様子を見ていた髪の長い少女が彼の足元に落ちていたナイフを拾いあげ、彼の左手を掴んでいるその側頭部に突き刺した。頭を突かれたそれは彼の左手を離し、床に崩れ落ちる。

女子学生「大丈夫!?!」

「…ありがとうございます。助かりました!」

彼は少女に礼を言うと、自らに向かってきていたもう一体の頭に右手のナイフをもう一度降り下ろした。

ザシユツ!

二撃目の攻撃はしっかりとダメージを与える事ができ、それはもう

動かなくなつた。更に一体仕留めた彼は先程囲まれていたあの少女が心配になり、今一度状況を確認する…。

「あの娘は!？」

少女の方を見ると今まさに一体が彼女に襲いかかろうとしていた。

(こつとなつたら……!)

彼は懐からナイフを取り出すと、右手のナイフと持ち変えた……。

まだまだ命中させる保証はないが、この距離では走つても間に合わない…。となれば、一か八かナイフを投げてみるしかない。

(……頼むから当たれ!)

シュツ!

彼は少女に襲いかかっている一体目掛けてそのナイフを投げ飛ばす。勢い良く投げられたナイフは狙っていた一体の首に突き刺さり、それはよろけた。倒すまではいかなかったものの、十分に時間は稼げそうだ。

(よしっ、ヤツがよろめいている内につ!)

彼は覚悟を決めると目の前に立ち塞がる数体の間を縫うようにして駆け抜ける。そばを駆ける彼目掛けて無数の手が掴みかかってきたが、彼はそれをギリギリの所でかわしながら少女の元にたどり着いた。

そこにたどり着いた彼は少女の目の前に立っている一体の後頭部へナイフを突き刺し、確実に倒してから彼女を背中に隠すようにして前に立つ。

「さて、大丈夫?」

少女「う…うん!大丈夫!」

どうにかして少女の元にはたどり着いたが、辺りにはまだまだ“かれら”がいる…。彼だけで彼女を逃がすのはまだ厳しい…。

(さて…ここからどうするか…)

?????? 「由紀!!」

?????? 「由紀先輩!!」

彼がここからの脱出法を考えていると、入り口から二人の少女がここへとやって来た。一人は短髪の少女…。もう一人はシャベルを持ったツインテールの少女だった。

女子学生「胡桃っ！美紀さん！」

シャベル女子「なんだよ、こりゃ!!」

短髪の学生「すごい数…!」

今、この場にいる人間は彼を含めて五人…。

もしかしたら全員で力を合わせればどうにかなるかもと彼は考え、現れた少女達目掛けて声をかけた。

「すみません!!少し手伝って頂けますか!」

シャベル女子「ああっ!任せろっ!!」

シャベルを持った少女はそう言って返事を返すとシャベルを大きく振りかぶり、“かれら”の群れへと突っ込んでいく。一見するとなり危険な行為だったが少女は戦いなれているらしく、瞬く間に三体の頭を砕いていた。

「おお…凄いな…!」

その少女が一体ずつ確実に仕留めていく様を見て思わず彼が呟く。一人でこの状況を打破するのは厳しいが、あの少女と一緒にならどうにかなるかも知れない。彼は背後にいるピンク色の髪の少女に声をかけ、自分も戦うことにした。

「少し下がっててくださいいね」

少女「う、うんっ！気を付けてね!？」

今度はミスをしないよう慎重に、そして冷静に：彼はゆっくりと”かれら”に近付き、掴みかかられる前に素早くナイフを頭に突き刺していく。倉庫内の人数が増えて”かれら”の目線がそれぞれに向いて隙が出来ているのもあり、今度は比較的楽に”かれら”を仕留めていく事が出来た…。

???????

シャベル女子「ラストお!!!」

ガシユツ!!

シャベルを持つ少女が一体目掛けてシャベルを振り下ろす…。振り下ろされたシャベルはその頭を砕き、見事に仕留めた。そして、それが最後の一体…。この場にいた全ての”かれら”を打ち倒した事で皆は安堵のため息をつく。

シャベル女子「ふいっ…疲れたあ…」

短髪の学生「由紀先輩!!大丈夫ですか!？」

少女「うん！なんとか大丈夫…!」

女子学生「もう…本当に心配したわ…もうダメかと…」

髪の長い少女が目を潤ませながらそう言い、少女を抱きしめる。

その光景を見るだけで、彼女にとってこのピンク髪の少女がいかに

大切な存在なのかが分かった。

女子学生「本当に…無事で良かった…!!」

少女「リーさん…心配かけてごめん…」

シヤベル女子「何があつたんだ？由紀、リーさん。」

女子学生「私が悪かつたわ…一緒に部屋を確認していれば…」

少女「あのね…」

少女は皆にどうしてこうなったかを話した、子供の泣き声のことやそれが人形だったこと…その直後急に奴らが現れたこと。

シヤベル女子「人形？」

少女「うん…あれ。」

少女は床に転がった人形を指さした。

女子学生「誰が置いたのかしら？」

「それ…多分罨です。」

女子学生「罨？」

「はい、その人形には糸が繋がっていて…誰かが引っ張るとそこにあつた奴ら入りの罨が開く仕掛けになっているみたいです。」

そう言いながら彼は倒れたフェンスを観察する。

「…やっぱり、この部分に小さなかんぬきのような物がついています…多分引っ張るとこの部分の留め具が外れ、フェンスが倒れて奴らが

外に出されるみたいですね。」

女子学生「誰がこんな罫を?!」

「僕はあなたかと……」

女子学生「何言ってるの?」

髪の長い少女が彼を睨む…。

ほんの冗談のつもりだったが、伝わらなかったらしい。

「冗談です…:すいません。」

短髪の学生「…:ところで、あなたは?」

短髪の少女に尋ねられた彼は自らの名を名乗り、それから彼女達の事を尋ねる。すると彼女達は一人ずつ、彼に向けて自己紹介を始めた。

美紀「直樹美紀です」

胡桃「えっと、恵飛須沢胡桃」

悠里「若狭悠里です」

由紀「丈槍由紀。さっきはありがとね…:」

「あなた達も物資を?」

悠里「ええ…:そうよ。」

「やっぱそうでしたか…:ここ…:どうやら危ない人が住んでいるみたいですよ、帰ってくる前に離れた方が良いでしょう。」

悠里「…:そうね、——さんは?」

「僕はもうここから出ます。少し疲れましたし…:」

悠里「その…由紀ちゃんを助けてくれてありがとうね？」

「いえ…全然役にたてませんでしたから。」

由紀「そんな事ないよ！——さんがいなかったら…私きつと…。」

悠里「ええ…あなたは由紀ちゃんの恩人なんだから、出来ればお礼がしたいのだけど…」

「お礼って…いいですよ…！…というか僕も若狭さんに命助けてもらってますし！」

悠里「確かにそうだけど、でも由紀ちゃんを助けたのはあなたよ。」

「でもそれも恵飛須沢さんがいなきや無理だったような…」

悠里「ああもう！…それじゃあなたの命の恩人としてお願いするわ、軽く食事だけ付き合ってもらえる？」

胡桃「面倒な人だな…そのくらい付き合えよ、せっかくのお礼なんだから。」

由紀「…ダメかな？」

「……わかりました、じゃあご馳走になります。」

悠里「ふふっ…じゃあついてきて？駐車場に車止めてあるから。」

「車持ってるんですか…。」

胡桃「おう！しかも凄いのをな！」

?????????

3階・駐車場

「おお！キャンピングカーですか!？」

悠里「ええ。この間見付けて、貸してもらっているの」

由紀「入って入って！」

由紀に背中を押され車内に入る彼。

「凄いですね。」

中のテーブルや椅子、奥にあるベッドを見て彼はそう言った。

「キャンピングカーって初めて乗りました。」

美紀「ですよね、私達もそうでした。」

由紀「ほらほら！トイレもあるんだよ！しかも水洗！」

「マジですか。」

悠里「由紀ちゃん…相手は男の人なんだからもう少し恥じらいを…」

胡桃「無駄だよ、コイツに言っても…。」

美紀「見てるこっちが恥ずかしいです…」

「荷物どっかに置いて良いですか？」

悠里「ええ、適当に置いておいて良いわよ。」

「じゃあ失礼します。」

ドサツ

彼は近くの床に物資を詰めたバッグを置いた。

由紀「何入ってるの〜?」

「医療品がほとんどです、足ケガしちやって…」

彼は足を彼女達にみせた。

胡桃「うわ…本当だ、どうしたのこれ?」

「……………へ?」

胡桃「いやだから…なんでケガしたの?」

「いや……………それは…………。」

美紀「…!まさか奴らに!」

「いやー……違います、これは…。」

悠里「……もし奴らにやられたケガだとしても、私達は何かもしないから…正直に話して？」

悠里が優しく…しかし焦ったような表情で彼に言う。

(恥ずかしいけど……黙っていたらあらぬ誤解を生む…正直に言う。)

「…実は……。」

????????

胡桃「あはははははっ!!」

「くうー……」

美紀「胡桃先輩…わ…悪いですよ…そんな笑ったら……ぷふっ!」

悠里「美紀さんまで…失礼でしょ……ぷふっ!」

「……………」

「……………降ります。」

胡桃「おっとつと…冗談だよ、怒るなつて！」

「怒っていません、恥ずかしいのです。」

由紀「でも——さん私を助ける時、遠くから投げて当ててたよね！
カツコ良かったよあれ！」

由紀が彼に近付き笑顔でそう言った。

(天使のような笑顔だ……………皆に辱しめられた心が救われた気がする。)

由紀「忍者みたいたつた！」

胡桃「…由紀、忍者は自分の投げた手裏剣でケガはしないぞ？」

「……………さよなら。」

由紀「くるみちゃん！」

胡桃「悪い悪い、——さんからかうの楽しくて。」

悠里「それじゃ、とりあえず安全そうな場所まで移動するわね。」
そう言つて悠里は運転席に座り、車は動き始めた。

悠里「この辺りで良いわね…それじゃあ、夕飯にしましょ！」

悠里がそう言うのと美紀や胡桃が棚から何かを取り出し、準備を進める。

悠里「さあ遠慮しないで食べてね！」

テーブルの上には色々な料理に加え、白米まで用意されていた。

「これ…お米ですよね？ライスですよね？」

胡桃「凄いだろ？白米の缶詰から出したんだぜ？」

「そんなのがあるんですか…知らなかった。」

悠里「他のもお皿に開けただけで、ほとんど缶詰なの…こんなので悪いわね。」

「いえ！十分です！頂きます！」

彼は用意された箸を手に取り並べられた料理を食べた。

「…うん、美味しいです！」

悠里「そう！…良かった！それじゃあ私達も頂きましょう。」

そうしてこの日、彼は久しぶりに大勢で食事をした。

「ご馳走様でした！」

悠里「はい、どういたしまして。」

胡桃「旨かった〜缶詰の進化を感じたよ。」

美紀「本当に缶詰とかレトルトの保存食と違って、意外と侮れませんよね。」

由紀「食後のデザートにお菓子たべよう、みーくん取ってきてくれた？」

美紀「はい、いくつか見つけましたよ。」

由紀「やった〜！みーくん大好き〜！」

胡桃「あたしにも感謝しろよう。」

由紀「ふんふんふ〜ん♪」

胡桃「聞いてねえし…」

「……………」

(やて…………)

彼は席を立ち、荷物に手をかける。

悠里「?……どうしたの?」

「食事」馳走になったので、そろそろ失礼します。」

悠里「え?」

胡桃「さすがに外も暗くなるし……泊まれば?」

美紀「私もその方が良いと思います。——さん一人で暮らしてるんですよね?」

「まあ……はい。」

美紀「誰か待たしているなら別ですが、一人でこの時間に出歩くのは少し危ないと思いますよ」

悠里「そうね……泊まっていく?」

「いや……僕は……」

以前の事を思い出した……親しくなれたと思った人達に裏切られたあの時の事を。

もしかしたら彼女達も僕を騙しているのかも……そう考えると怖かった。

「帰ります……食事、ありがとうございました。美味しかったです。」

美紀「そんな……、」

悠里「……………」

胡桃「……………」

彼が席を立ちドアに手をかけようとしたその時。

ガシツ…

「?…丈檜さん？」

由紀が彼の服を掴んでいた。

由紀「いやだよ……」

由紀「…私…——さんに助けってもらって、本当に良かったと思ってるんだ。」

由紀「そのおかげで私またこうして皆で一緒にごはん食べる事ができたし…——さんと皆が話すの見てるのも凄く楽しかった。……出会うまでまだ間もないけど、大切な友達になれたって私は思ってるんだ……だから……」

由紀「行かないで欲しい……もしよければ、私達と一緒にいて欲しいー!……………ダメ?」

「いや……でも、悠里さん達は迷惑なんじゃ……。」

彼はゆっくりと悠里達の方に目を向ける。

悠里「…いえ。私も出来ればそうしたいと思っていたわ、男手があると助かるしね。」

につこりと笑いながら悠里が言う。

美紀「先輩達が良いなら、私もそれで良いと思います。——さん、悪い人じゃなさそうですし。」

胡桃「そうだな！まあ一人でナイフ投げてケガするくらいだから少し頭はあれだけだな。」

胡桃がそう言い美紀が笑う。

由紀「ね？…どう？」

由紀がじつとこちらを見つめる。

『久しぶりだった。この人達と過ごして、短い間だけど本当に久しぶりに心から楽しい時間を過ごせた。もしこの人達にまで裏切られたらもう完璧に立ち直れない。けど本当に楽しかったから…：僕はまだこの人達といたい…。最後に…：最後にもう一度、誰かを信じてみよう…：この人達なら、きっと大丈夫。そんな気がする…』

「それじゃあ…：お世話になりますね」

彼がそう言うのと彼女達は笑顔で答えてくれた。この時から彼は一

人ではなくなり、彼女達と共に同じ時を過ごしていく事になった…。

八話 『笑顔』

悠里「…よし、これでいいわよ」

怪我していた彼の足にガーゼを貼り、応急手当を済ませた悠里が笑顔を見せる。彼にとつてそれはありがたいことだったが、会つてばかりなのにここまで世話になるのは申し訳なくもあつた。

「すみません、軽い応急処置は自分でしたんですけど…」

悠里「良いのよ気にしないで、私達はもう仲間同士なんだしね。」

「…そう…ですね」

(会つて間もないのに…なんで僕はこの人達をこんなに信頼しているのだろう。あれだけ一人で生きていこうと決めていたのに…何だかんだで人を信じやすい性格だったのか…)

由紀「みーくんにはこの服をあげよう！」

美紀「その服…アニメキャラがプリントしてあるじゃないですか。着ませんよ、そんなの」

由紀「ええ〜！絶対似合うのに〜！」

探索によつて見つけた一枚の派手な服を美紀へ手渡す由紀だったが、それは拒否されてしまう。直接由紀が残念そうに肩を落とすのを見て、彼は微かに微笑んだ。

(もしかしたら…この人達の雰囲気のお陰かも知れないな)

「……………ははっ」

悠里「?…ああ、由紀ちゃん?面白いでしょう?」

「ええ、面白い人達ですね」

悠里「皆救われてるの……由紀ちゃんの笑顔に……」

美紀とじゃれあう由紀を見つめて悠里が呟く。『皆が彼女の笑顔に救われている…』まだ彼は彼女らと会ってばかりだが、その言葉の意味は分かる気がした。

悠里「あの…」

「はい？」

悠里「治療するのにあなたの持ってた消毒液を少しだけ使わせてもらったわ、ごめんなさい。使っていいか確認しないで…」

「ああ、別に良いですよ。僕の治療で使ったんだし、それに仲間になった以上、物資は全部渡しておきます」

悠里「えっ？本当にいいの？」

「はい、持って消えたりしないなら」

悠里「そんな事しないわ…。それじゃあ私が管理させてもらうけど…あなたも必要な物があつたら言ってるね？」

「はい、そうします」

胡桃「おい、こつちで合ってるか？」

運転席の胡桃が彼の方へ顔を振り向けて尋ねる。彼は彼女のそばへと歩みより、運転席に手をかけながら外の道路…その曲がり角を指さした。

「そこを右に…そうしたらもうすぐそこなんで」

胡桃「はいよ…………ここか？」

「んん、ここですな」

外に見えた自分の住み家を確認し、彼は車を降りようとする。必要

な荷物をパパッと回収してこなくてはならないからだ。

「それじゃあ、少し待ってて下さい」

胡桃 「あたしも行く。一人じゃ危ないだろ」

「そうですね…多分荷物もそれなりに多いし、頼みますかね」

由紀 「私達もいこうか？」

「いいえ、すぐに戻るので…二人で大丈夫です」

由紀 「ほんと？じゃあ、わかった」

美紀 「二人とも気をつけて下さいね」

「はい」

胡桃 「んじや、行ってくるわ」

悠里 「何かあつたらすぐに呼んでね」

胡桃 「はいよ」

皆を車内に待機させ、彼と胡桃は外へと降りる。

彼の住み家である車両整備店の大きなガレージを目の当たりにした胡桃はそれをゆっくりと見回し、シャッターに鍵穴を発見した。

胡桃 「…鍵は？」

「ああ、開いてますよ」

胡桃 「無用心だな…」

「鍵が見当たらなくてね…。帰って来ている時は中から閉めれますけど、外からはかけられないんです」

胡桃 「ん？ここ…」——さんの家族が働いていた店とかじゃないの？
「全くの他人の店です。裏口の鍵が開いていたので利用させてもらいました」

胡桃 「へえ…そうか」

そんな会話をかわしながら、彼はガレージのシャッターに手をかける。少し重そうにも見えたシャッターは彼が力を込めるとガラガラ音をたてながら上へと上がっていき、内部へ入れるようになった。

ガラガラガラ…！

胡桃「ガレージに入るのか？」

「ええ、僕は店内ではなくこちらのガレージの中で暮らしていました」

胡桃「へえ…なんで？」

「店の中はちよつと狭いんですよ。こっちのガレージの方が広くて落ち着くんです。地面がコンクリートなので少し冷えますけど」

胡桃「ふうん……」

彼がスタスタと中に入っていったので、胡桃もそれに続く。彼は胡桃も中に入ったのを確認すると、もう一度入り口のシャッターを閉めた。

ガラガラガラガシヤン！

胡桃「ん…？すぐに戻るんだから別に閉めなくても良いんじゃないか？また開けるのもめんどくさいだろ？」

言われてからそれもそうだと気付く…。彼が今このシャッターを閉めたのは、完全にいつもの癖だった。

「そうだった…？ついつい…」

胡桃「つく…あははっ」

彼の少し間拔けな部分を見た胡桃は可笑しそうに笑う。彼はそれを見て自分が恥ずかしくなり、少しお返ししようと思った。

「……信じて良いんですか？」

胡桃「は？何を？」

「恵飛須沢さんは今、会って間もない男とシャッター閉めたガレージの中に二人きりなんです……もしかしたらそういう事をされてしまいかもですよ？」

ニヤリと笑いながら、彼は胡桃にそう告げる。

こう言えば胡桃も多少は戸惑うかと思っていたのだが、その考えは甘かったようで……。

胡桃「………ぶっ飛ばすぞ…マジで。」

「………すみません……冗談です」

胡桃はシャベルを構え、鋭い目付きを見せる。その凄まじい気迫に圧倒された彼は、ちよつとした遊び心を見せた事を後悔した。しかし胡桃も本気ではなかったらしく、すぐにシャベルを下ろして笑いだす。

胡桃「ははっ！分かってるって。あたしも冗談、怒ってないから安心しろ」

「はあ………そですか」

胡桃「いやあ、本当に——さんをからかうのは面白いなあ。……ただせつかくからかうなら、怒るんじゃないやなくてまんざらじゃない顔した方が良かったかな？」

「止めて下さい。ドキドキしてしまいます」

胡桃「へへ…そりやどーも♪」

こんな冗談を言い合いながら、二人は彼がここに置いていた食糧などの物資をバックに詰める。作業はわりとスムーズに進んでいった。

「食糧はその机に置いてある分で全部です。あとはその下に水が少しあるんで、それも持つてって下さい」

胡桃「分かった。……ところでこれはいらわないのか？」

「え……？」

振り返り、胡桃の方を見る。背後に立つ胡桃が笑顔を見せながら持っていたのは、“かれら”を模した段ボールの的……つまりは彼のトラウマだった。

「それはいらないっ！はやくどつかにやって下さい！」

胡桃「あはは、悪い悪い……。でもまあ、思えば——さんがこれにナイフ投げなんて馬鹿な事してケガしたから、結果としてあたし達はアンタに会えたんだよな」

(…そう言えばそうだ…あれにナイフを投げて、失敗してケガをして、ガーゼや包帯がなかったから物資を探しにあそこに行ったんだ…)

胡桃「アンタがこれにナイフを投げなかったら…それか投げてもケガしてなかったら…アンタは今日あそこに行く予定はなかったんだろ？アンタがあそこにいなかったら由紀はあの場所で奴らに殺されてたかも知れない…そう考えると凄い奇跡だよな」

「…はい…そうですね」

そう言われると、あの失敗も良い経験だったと思える。

彼がその的を見つめながらしみじみ思っていると、胡桃が意地悪な笑みを浮かべてその的を突き出した。

胡桃「てな訳で…お守りにどうだ？」

「いいませんっての……。もしかして、まだ馬鹿にしています？」

胡桃「ああ、少しな？」

「イヤな人……」

胡桃「ふふくん♪」

「はあ……持つもの持ったし……戻りましょ」

この胡桃という少女に散々イジられた彼は深くため息をつきながらバツクを持ち上げ、シャッターに手をかける。その時、胡桃が彼に声をかけた。

胡桃「……あのさ」

「…は…?」

胡桃「——さんの事からかってばっかで、まだ言っでなかったな」と思っで…」

「…何をですか?」

何の事なのか分からず彼が問う。すると胡桃は真剣な表情をこちらへと向け、軽く頭を下げながら言った…。

胡桃「由紀の事を助けてくれて、本当にありがとう…」

「いえ…恵飛須沢さん達がいなきや助けられなかった。それに、結局あの場にいた奴らも恵飛須沢さんの方が多く倒してましたし…」

胡桃「いや、あんたもかなり倒してただろ?それに倒した数の話じゃない。あたし達が駆け付けるまで由紀を守ってしてくれた事が大切なんだよ。ハツキリ言っであの状況、リーさん一人じゃ奴らから由紀を守れなかったと思う。それを——さんが守ってくれた。本当にあんたには感謝してるんだ……。由紀もリーさんも美紀も…そしてあたしも」

胡桃「だから素直に礼を言わせてくれ…ほんとにありがとう」

「じゃあ………どういたしまして?」

胡桃「ははっ、なんで疑問系だよ。変な人だな…」

真面目な表情から一変し、胡桃はまた楽しげに微笑む。彼女の笑顔

を見たのはここに来てからもう何回目だろうか？

「…恵飛須沢さんはよく笑う人ですね」

胡桃「そうか？だとすれば、それはアンタが面白いからだな」

「そーですか…」

このまま彼女と会話をしても良いが、外の車に待たせている人がいる。彼は外に出るべくシャツターに手をかけるが…。

胡桃「……あとさ」

「まだ何か？」

その時、またしても胡桃に話しかけられて彼は先程のように振り返る。すると胡桃は少しだけ照れたような表情を浮かべ、彼にあることを告げた。

胡桃「あたしの呼び方、胡桃でいいよ…。名字で呼ばれるとなんか落ち着かないからさ…」

「……………ふむ」

彼はシャツターに視線を戻し、腕に力を入れてシャツターを上げる。ガラガラと音を立てるそのシャツターを完全に開き終えた後、彼は胡桃の方を見つめて微笑んだ。

「分かったよ…。胡桃ちゃん」

胡桃「…んんん」

言われたとおりの名前前で呼んだのだが、胡桃はなにやら目線を地面に下ろし、唸りはじめる。何か納得のいかない点があったのだろうか？

「どうしました？」

胡桃「ああ…分かった。あれだな、男の人に言われるとなんか照れる…」

「胡桃ちゃんが胡桃って呼べって言ったのに、わがままだな…」

胡桃「分かっているよ！ただ…あたしの周りは女しかいなかったから、男に名前で呼ばれるのは初めてだったこと忘れてて…！」

ムキになって答える胡桃の顔がみるみる赤くなる。ならば名前前で呼ぶのはよした方が良いのか…彼はそれだけ確認しておく事にした。

「じゃあ、やっぱり名字呼びに戻します？」

胡桃「…いや…そのままが良い…多分すぐ慣れる」

「じゃあ戻ろう…。胡桃ちゃん」

胡桃「…んんん」

「胡桃ちゃん、何してるんです？ほら行くよ！胡桃ちゃん！」

名前を呼ぶ度、胡桃が頬を赤くして唸る。その様がやたらと面白くて、彼はここぞと言わんばかりに彼女の名を呼ぶ。ただ、胡桃も自分がそうして小バカにされている事に気づいたらしい。

胡桃「…わざとやってるだろ。」

「ああ、さつきからかったお返し」

胡桃「はあ…悪かったよ」

??????

胡桃「ただいま」

「ただいま」

悠里「お帰りなさい。少し遅かったわね?」

胡桃「んん、まあね……。ほい、これ」

胡桃が食糧等を詰めたバックを悠里に渡す。この中にある物資は彼の物だった為、悠里は改めて礼を言うことにした。

悠里「じゃあ——さん。ありがたく貰うわね」

「はいどうぞ……。あの、服と違って置く場所あります?」

悠里「ああ、後でしまっけて置くからその辺に置いてもらえろ?」

「はい、分かりました」

彼は服の入ったバックを適当な場所に置くとそばの席に座り、一息つく。そんな時、美紀が彼のもとへと寄ってきた。

美紀「特に問題はありませんでしたか?」

「大丈夫でしたよ。荷物集めも胡桃ちゃんが手伝ってくれたお陰で思っていたより早く終わりました」

由紀「!!……胡桃………ちゃん!!?」

後方にいた由紀が彼の発言を聞いた直後、慌ただしく車内を駆けながら胡桃に近づく。明らかに彼と胡桃の距離が縮まっているような気がしたからだ。

由紀「短い時間に……何があったのくるみちゃん!」

胡桃「な!?!…何がだよ!」

由紀「——さんがくるみちゃんの事くるみちゃんって呼ぶようになってるよ!!」

美紀「あ：言われればそうですね」

胡桃「何もねえよ!!ただ、名字呼びは落ち着かないから名前で呼べって言っただけで…」

由紀「ほんとかなく？あやしいなあ〜？くるみちゃん顔赤いよ〜？」

言葉の後半、胡桃の顔が微かに赤くなったのを由紀は決して見逃さない。由紀はそれをネタに胡桃を煽り、ニヤニヤと笑った。由紀のそんな小バカにしたような表情に胡桃は苛立ち、車内の隅に立て掛けておいたシヤベルを指さす。

胡桃「美紀……そのシヤベル取ってくれ」

美紀「あ……はい」

由紀「うわあ〜！ごみん！ごみん！みーくんも取らないでいいよお!!」

由紀が慌てながら美紀の腕を掴み、彼女が胡桃にシヤベルを渡すのを阻止する。胡桃はそんな由紀を見て呆れたような表情を見せ、そのまま席へとついた。

胡桃「……ったく」

由紀「冗談通じないな〜くるみちゃんは。……でも良いな〜！私も……さんに名前で呼んでほし〜♪」

悠里「そうね。私も名字だと少し落ち着かないわ。」

由紀「みーくんも名前が良いよね!？」

美紀「私ですか？……ん〜、そうですね。先輩達が皆名前で呼んでもらうなら、一人だけ名字は少し嫌かもです」

由紀の一言から始まり、遂には全員が似たような事を言い出す。しかし彼女達はこの先も世話になるかも知れない人達だ……確かに変に距離を開けるより、親しみをもって接した方が良いのかも知れない。

彼はそう考え、それぞれの呼び名を改めた。

「ああ、分かりました。由紀ちゃん、美紀ちゃん、リーさん。」

悠里「あら？私は悠里ちゃんじゃないの？」

「まだ会って間もないですが、リーさんって頼れるお姉さんのイメージがあるんです。…だからちゃん付けは難しくって…皆さんがリーさんって呼んでるので真似させてもらいました。…イヤですか？」

悠里「ふふっ…いいえ。私もその呼ばれ方が一番落ち着くわ」

「良かったです。…いや、少し待って下さい…美紀さんすいません、美紀ちゃんじゃなくてやっぱ美紀さんでも良いですか？」

美紀「構いませんけど…どうしてです？」

「美紀さんって雰囲気落ち着いているから先輩感があって、ちゃんよりも、さんのイメージなんです」

美紀「はあ…ん？あなたって何歳ですか？」

「十八です」

美紀「じゃあ由紀先輩達と同年…私より——さんの方が先輩じゃないですか!!」

「あれ？じゃあ美紀さんって二年生なんですか？」

美紀「はい…いや、進級して三年生ですかね？」

由紀「違うよ！私がみーくんは頭良いから飛び級だって言ったでしよー！」

美紀「あ…そうでした」

胡桃「つていうか美紀はあたし達の事なんたら先輩って呼んでるだろ？…その時点で気付けよ」

(ああ、言われればそうだ…ん？それってつまり…)

「由紀ちゃんって、胡桃ちゃんやリーさんと同年？」

由紀「え？そうだよ？」

由紀がなに食わぬ顔で答える。しかしそれは彼にとって衝撃的な台詞であり、思わず言葉を失った。

「……………」

胡桃「ああ…言いたい事は分かる。由紀って子供っぽいからな」

由紀「失礼だよくるみちゃん！私だって充分大人オーラ出てるよ！」

胡桃「んじやあ聞いてみる、何歳だと思ってた？ってさ」

由紀「何歳だと思ってた?!」

由紀が声を荒げて尋ねてきたので、彼はそつと答えを返す。本人がシヨックを受けたら申し訳ないと思いつつ、静かに…丁寧に…。

「あ〜…一年かなって思っていました……………」

由紀「それじゃ私、一番後輩じゃん!!」

胡桃「ああ、そうだな。しかも頭も悪いから美紀のような飛び級も無理だ…一人だけ高校に残る事になるな」

由紀「違うよ！私は三年生でこの前卒業したんだから!!もう高校生を越えるりっぱな大人だよ！」

悠里「大丈夫よ由紀ちゃん。あなたはきつと、これから大人っぽくなるわ」

由紀「うう〜…」

美紀「りーさん…それだと今は子供っぽいって言ってるようなものじゃ……………」

悠里「あら？確かにそうね…」

由紀「うぐっ!!」

悪意のない悠里の言葉にショックを受けた由紀はその場にぺたんとしやがみ、力なく顔をうつむける…。そんな中、彼はあることを訂正したくて一同の顔を見た。由紀にこれ以上の追いうちを仕掛けるのは申し訳ないが、それでも言わずにはいられない。

「あの……違くて……」

胡桃「ん？何が違うんだ？」

「中学生だと……中学一年生かと思ってた。なんで同じ制服着てるのかずつと気になってたんだけど、由紀ちゃんも高校生だったのか……」彼の言葉を聞いた直後、一瞬だけこの場に静寂が訪れる……。

しかしそれは長くは続かず、胡桃・悠里・美紀の笑い声によって破られた。

胡桃「あははっ！そうかそうか……！まあ分からなくもないっ……！」

悠里「ふふっ！くるみつ、失礼でしょ……由紀ちゃんだって、立派な……っふふ！」

美紀「つく……りーさんも笑ってるじゃないですか……！」

由紀「う…………」

由紀「う……！！！！」

しやがみこんでいた由紀はその体勢のまま頭を抱え、大声で呻く。彼に子供っぽいと言われる事は只でさえ屈辱なのに、悠里達すらもそれらに同意して笑い始めてしまったからだ。

??????

そうして一同の笑いも止まり、しばらくしてから胡桃が言った。

胡桃「そう言えばあんた、あたし達と同一年なんだな？」

「そうですね」

胡桃「じゃあ敬語も止めなよ。なんかむず痒い」

「ん〜……わかった…」

胡桃「よし！」

彼が敬語を止め、胡桃に笑顔を見せる。すると胡桃はそれに満足し
たらしく、にっこりと笑顔を返した。

由紀「これで——くんもすぐわたし達に馴染めるね！」

「……その——くんっていうのは？」

由紀「ん？ああ君は名前が——だから——くん!!」

美紀「私と同じような呼ばれ方ですね」

彼が自分と似たように呼ばれているのを見て、美紀はこっそりと笑
う。自分が初めて由紀にこう呼ばれた時、彼と同じようなりアクシヨ
ンをしたのを思い出したからだ。

由紀「こうやって呼んでも良いでしょ？」

「……まあ構いませんけど。」

由紀「へへへ〜♪」

「……………」

悠里『皆救われてるの……由紀ちゃんの笑顔に……。』

目の前で笑う由紀の顔を見ている最中、悠里がそう言っていたのを
不意に思い出す。子供っぽい彼女の笑顔は見ているだけでこちらも
頬が緩み、温かい気持ちになった。

(確かに、なんか癒されるな……)

九話 『いままで』

(数時間前、僕は悠里さん達に頼んで元の住み家に寄ってもらうと、置いてきた必要な物資を回収し…住み家を後にした…、いや…もうこの人達と暮らすこのキャンピングカーが僕の新しい住み家な訳だけど。)

(そして今、…夜になり辺りは真っ暗、適当なところに車を停め…眠る準備をしている時に事件は起きた。)

美紀「…どうします?」

悠里「…そう言えば考えてなかったわ…。」

(そう…皆、今さら気付いたんだ…。僕の眠るベッドが無いことに…)

(このキャンピングカーは後部にベッドがあり、今まではそこで皆眠っていたらしい。)

(だがそれも4人分でいっぱい…僕の分など無い。…だけど…)

「うん…まあ大丈夫。僕は椅子で寝ます。」

胡桃「いいのか?椅子で寝るの疲れるぞ?」

「大丈夫だよ。寝る場所があるだけで充分。」

彼は胡桃に笑顔を見せ、気を使わせないようにそう答えた。

彼のその答えに胡桃は頭を少しだけ悩ませたが、本人がそう言うならと納得した。

胡桃「まあ他に方法もないか：じゃあそうしてもらおうぜ。」

悠里「…そうね、ごめんなさいね？不便な思いをさせて。」

悠里が申し訳なさそうに言うのと、その後ろから由紀がひよこつと現れ、彼に満面の笑みを浮かべながら告げる。

由紀「大丈夫だよ！——くん！どのベッドも詰めればもう一人くらい入れるよ!!」

美紀「ゆっ！由紀先輩！」

由紀「んく？なあに？みーくん？」

美紀「何じゃないですよ！先輩こそ何言ってるんですか!？」

由紀「あれ？詰めても無理かな？」

美紀「いや…そう言う事じゃなくてっ！」

さすがに出会って間もない少年と同じベッドで眠るのは無理がある。

そう思った美紀は由紀を必死に説得し、止めようとした。

「あの人…もしかして本気で言ってる？」

頬をわずかに赤くしながら説得する美紀と、不思議そうにそれを聞く由紀。

二人のその光景を見ながら、彼は胡桃にそつと尋ねた。

胡桃「由紀か？ああ、ありやあマジで言ってる。アイツ相手が男とかそういうの関係ないんだよ。…いや、まだそういう事の意味を理解してないだけかも…。」

「人が人なら勘違いするね。」

胡桃「だな…お前は大丈夫か？」

「うん、ああいう人だと理解した。」

胡桃「それは良かった。その調子で慣れてくれ。」

「…了解です。」

結局その夜：彼は椅子に座って寝る事にした。

悠里「それじゃあ、お休みなさい。」

美紀「お休みなさいです。」

胡桃「お休み。」

由紀「ほんとにいいの？？なんだったら胡桃ちゃんのベッドでも……」

胡桃「ほっ!!」

ベシツ!

危うい台詞を言いかけた由紀の頭を胡桃が叩き、無理矢理ベッドに引きずっていく。

由紀「痛いよ〜くるみちゃん！自分で歩くから離して〜!」

胡桃「ダメだ。」

由紀「うう〜…じゃあ——くんお休み〜。」

「はい、お休みなさいです。」

胡桃に引きずられながら由紀は彼に言う。

彼は軽く手を振りながらそれに答え、ベッドに向かう彼女達を見送った。

「…ふう」

彼は一人椅子に座り、テーブルに顔を伏せながら溜め息をつく。

(…なんていうか……濃い1日だったな。)

そんな事を考えながら彼は目を閉じ、眠ろうとする。

しかし慣れない場所だからか中々眠れず、気がつけば2時間程の時間が経過していた。

(……眠れない！)

彼以外は皆眠ったらしく、耳をすませばベッドの方からいくつかの寝息が聞こえる。

(……この女の人達の寝息も眠れない原因の1つだな。…なんか落ち着かない。)

彼はそつと席を立つと、物音をたてないよう気を付けながら扉を開け外に出る。

「……少し寒いな。」

車内も少し肌寒かったが、当然外は更に寒かった。

「奴らは…いなそうだな。」

車を停めた場所は住宅街から少し離れた所にある、広い公園のまん中だった。

彼は近くにベンチを見付け、それに腰かける。

「…良い天気だな。…星が良く見える。」

空を見上げると雲1つ無く、沢山の星を眺める事が出来た。

星達のお陰で、深夜にもかかわらず周囲も僅かに明るい

「少ししたら戻ろ……。」

星を見ながら呟くと、車の扉がゆっくりと開き、中から胡桃が顔を出し、こちらに向かって来た。

胡桃「ずいぶん夜更かしだな？何してるんだ？」

ベンチに座る彼の横に腰かけて、胡桃が言う。

「眠れなくて、少しだけ外の空気をとってね…胡桃ちゃんは？」

胡桃「ん？眠ってたらなんか急に目覚めちゃって…そしたらお前が外に出るの見たから気になってな。」

「ああ…ごめん。心配かけたね。」

胡桃「気にすんなって…やっぱり椅子だと寝にくいか？」

「ううん、ただ慣れない場所で落ち着かないだけだと思うから…すぐに慣れるよ。」

胡桃「…そっか。」

胡桃が空を見上げながら言う。

胡桃「おお！星が綺麗だな！」

「ですね。」

胡桃は空をみて少しだけはしゃぐと、落ち着いた雰囲気で彼に尋ねた。

胡桃「お前ってさ…今までどうやって生きてきた？」

「…そうだなあ、…世界がこうなり始めの頃はただひたすら奴らから逃げ回りながら他に無事な人を探して回った。…だけどどこに行っ

ても皆奴らに殺されてて、…本当に焦ったよ」

胡桃「…家族は？」

「さあ、どうなんでしょうね…分からないよ」

胡桃「…そっか。無事だといいな…」

胡桃がそう言うと、彼はニコツと微笑んだ。

しかしその表情はすぐに一変し、嫌な事を思い出すかのようなものへと変わる。

「一人の時は大変だった…：会う人会う人、皆おかしい人ばかりで…」

胡桃「おかしい人？」

「聞いて下さいよ、本当に大変だったんだ！」

それから彼は自分が一組の生存者グループに騙された事や、物資を求めていた見ず知らずの人間に襲われた事を胡桃へと話した。自分達はそんな酷い目にあつたことが無かったので、胡桃はそれにとっても驚いた。

胡桃「おいおい…：マジで大変だったんだな。」

「大変だったよ…：」

胡桃「てことは…：もしかしてさ…：」

「ん？」

胡桃「いや、これは聞くべきなのか？…：」

「どうした？」

胡桃「…：あのさ」

胡桃がおそろるおそろる尋ねる…。

聞かない方が良いような気もしたが、やはりこれはちゃんと聞いておくべきだと思った。

胡桃「もしかしてお前……普通の人間も殺したりしてる？」

「胡桃ちゃん、いいかい？ 奴等は酷い悪人だったんだ…何をされても文句は——」

胡桃「いいから、イエスカノーで……」

「……………じゃあイエスで……」

胡桃「……………マジか……」

彼を見る胡桃の目が露骨に変わる。

いくら仕方がなかったとはいえ、人を殺めた経験があると知れると少しばかり壁が出来そうになってしまう。

「……………胡桃ちゃんは？」

胡桃「ノーだよ！ あたしは”かれら”になった人しか殺してない！！」

当たり前だろ！と言わんばかりの表情で胡桃がそう言う。

胡桃「…何とも思わないのか？ 普通の人間殺して……」

「さっきも言ったけど…、僕が殺してきた人達は普通の人間じゃなかった。他人を殺してでも自分が生き残ってやる……そんな考え方の人達だった。そんな人間を殺すのも”かれら”を殺すのも、同じだよ。」

胡桃「そんなもんかな……じゃあ本当に普通の人間は殺してないん

だよな？…そういう危険な人達だけで…」

「当たり前でしょう!!それじゃただの殺人鬼じゃないですか!!」

心外だと言わんばかりに彼が言うが、胡桃は冷めた目をしながらこう言った。

胡桃「いや…少しの間そう思ってたけど」

「……やっぱり嫌かな?そんな人間と暮らすのは……。」

胡桃「……驚きはしたけど、そうしなきゃ逆にお前がそういう人達に殺されてたかもしれないんだよな?…いつちまえば正当防衛みたいなもんなんだろう?」

「まあ、多分……。こっちから相手に襲いかかった事は一度もないから……」

胡桃「…じゃあ仕方ないよ、そういう世界になっちまったんだから……どうしてもって時は自分の身は守らなきゃな。」

彼が気を悪くしないように気を使ってるのか、明るい声で胡桃が言った。

胡桃「あたし達は運が良かったな、そういう危ない人達にあつたことないから。」

「…そっか」

胡桃「ってかそもそも生存者自体、美紀とお前以外には会った事無い!」

「へえ、美紀さんとは始めから一緒だったんじゃないんだ?」

胡桃「ああ。遠足と称してショッピングモールに皆で出掛けた時に初めて会ったんだ。…因みにリーさんや由紀とは始めから一緒だ

ぞ。」

「クラスメートだったの？」

胡桃「いや…二人とも学年が同じだけでほとんど面識はなかった。…奴らが現れた時、あたし達は皆学校にいて、生き残ったのはあたしと由紀とりーさん、…それにめぐねえだけだった…。」

「めぐねえ？」

胡桃「ああ、佐倉慈先生…あたし達はめぐねえって呼んでた。あたし達3人…学園生活部の顧問で…、本当に優しくて良い先生だったんだ…けど…。」

「…そっか…。もう分かったから…言わないで大丈夫だよ。」

胡桃「…うん。」

「学園生活部…学校で暮らしてたの？」

胡桃「ああ…うちの学校、設備がかなり整っててさ、暮らすにはもってこいだっただ。だから当時落ち込んでいた由紀を元氣付ける為に、めぐねえがあたし達3人を部員にして、部活動って事で暮らしてた。…色々あって卒業したから、もう戻らないけど。」

胡桃「ああ…そう言えばお前にも一応教えておかなきゃな…由紀の事だけど…。」

「由紀ちゃん？」

胡桃「ああ、最近は落ち着いたから大丈夫だと思うけど一応伝えておく。…由紀はこの間まで普通の世界で生きてたんだ…。」

胡桃の発言の意味が理解出来ず、彼は聞き返す。

「…どういう意味？」

胡桃「さつき察してくれたみたいだけど、めぐねえはもういないんだ。…あたし達を守って奴らに…：…由紀はその現実を受け入れられなかった。」

胡桃「めぐねえが死んでから由紀の様子がおかしくなった、…：…いないハズのめぐねえと話したり、他のクラスメートと話したりして…：…由紀は…：…。」

「世界がこうなる前…：…つまり普通の世界、普通の学園生活の幻覚のような物を見てたと…。」

胡桃「簡単に説明するならそういう事だと思う。奴らの事も、以前は今ほど認識していなかった。」

「普通の人間だと？」

そう彼が尋ねると胡桃は頷いた。

胡桃「そう思っていたみたいだ。…今はまだマシになったから安心してくれよ？…：…ただ前程酷くないがめぐねえの幻覚は、今も時々見えるみたいだから…何かあっても話を合わせてやってくれ。」

「…うん、よく分かったよ。」

胡桃「悪い、頼むな。」

「そつちはそつちで…大変だったんだね。」

胡桃「大変だった。……まあそんな訳で！これから頼むぜ！新入り！！」

ベンチから立ち上がった胡桃が、彼の方を見て言った。

「ええ…了解しましたよ、先輩！」

胡桃「へへへ…じゃあ戻るぞ？早く寝ないと、体が休まらないからな。」

彼もベンチから立ち上がり、胡桃と共に車内に戻った。

胡桃「…んじゃ！今度こそお休み！」

皆が起きないよう、小声で胡桃が彼に言った。

「お休みなさい。」

彼は答えると椅子に座って、毛布にくるまり、眠る体制に入った。

胡桃もそれを見て、自分のベッドに潜る。

長かった彼の1日は、こうして終わった。

十話『目的』

胡桃「……………せば……………じゃ……………か？」

悠里「ダメよ……………たい……………だし……………しよう。」

半分眠りの中にいる彼の耳に、悠里達の声が入ってくる。

「……………何かあったんですか？」

目を擦りながら、悠里達に尋ねる。

悠里「あら？ごめんなさい、起こしちやったわね。」

胡桃「まあこれで丁度良いじゃん。」

「……………何が？」

悠里「朝ごはんの前になちよつと着替えをと思ったのだけど……………寝てるのに起こすのも悪いから、……………さんが自然に起きるのを待ってたの。昨日は疲れただろうから。」

「ああ……………そう言えば昨日はいつの間にか皆パジャマに着替えてましたね。」

美紀「私達は胡桃先輩と……………さんが物資の回収に行っている間に、胡桃先輩は……………さんがトイレに行っている間に着替えたんです。」

「そうだったんだ…分かりました。少し外に出てるので、終わったら教えて下さい。」

悠里「悪いわね。」

「いえいえ…それじゃ。」

胡桃「覗くなよ!」

「はいはい。」

胡桃に適当な返事をしながら、彼は車の外へ出た。

「……ふわあ〜!」

彼は外に出ると、大きくあくびをした。

(昨日は外から胡桃ちゃんと戻ってからは、わりとすぐに眠れたな。)

(…よかったよかった。あのまま一睡も出来ないかと思った。)

そんな事を考えながら、彼は周囲を見回す。

(…今何時くらいだろう?…7時くらいかな?)

(…だとしたら久しぶりの早起きだな。一人の時は起きるの大体12時前後だったから。)

(……………)

(……………まだかな？もう4〜5分外にいるけど……………)

(まあ呼ばれるまで待たないとな……………勝手に開けたら絶対胡桃ちゃんに殺されるし。)

ボタン！

車の扉が開き、中から由紀が顔を出して言った。

由紀「——くんもういいよ〜！」

「はい。」

彼はそう由紀に返事をして、車内に戻る。

胡桃「覗かなかったみたいだな、えらいえらい。」

胡桃が戻った彼にそう言った。

「どうして覗いてないと思う？」

美紀「…実は着替え終わった後に窓からこっそり——さんの事見てください。」

胡桃「こっそりと覗きなんかする奴と一緒に暮らすのはイヤだからな！ちよつとしたテストみたいなものだよ。」

「はあ、…んで、僕はそのテスト合格かな？」

胡桃「ああ！合格だ！良かったな。」

悠里「ごめんなさい…私は止めたんだけど…。」

胡桃「けどりーさんも結局最後は一緒には窓から——を見ながら笑ってたじゃん。」

「…そうなんですか？」

悠里「あのく、多分覗きなんかしないとは信じてたけど…一応ね？」

「……………」

美紀「…怒らせちゃいました？」

悠里「ああっ…その…ごめんなさい！悪気はないのよ？」

由紀「あーあ。だからやめようって言ったのに！くるみちゃんのせいでよ！」

胡桃「な!?!一番始めにお前が『もしかしたら——くんこっそり覗くかもよ?窓から様子見てみない?』…って言ったんだろ!!」

胡桃が由紀を捕まえて頬をつねる。

由紀「いたたた！だつて面白そうだったからあく！」

悠里「あの……さん？」

彼は悠里に近くで話しかけられ、ハッと我にかえる。

「あ、大丈夫。怒ってなんかいませんよ？……ただもし覗いてたら大変だったなって考えてました。…実は少しだけ覗いてみようかな？なんて思ってたんですけど、良かった！止めといて。あははは！」

彼は場を和ませようと、冗談をいって笑う。

悠里「そうね……私も、もしあなたが覗きを働いてたらさすがに庇いきれなかつたわ。」

悠里の雰囲気は少し変わる。

悠里「……だから……」。

(？…なんだろうこの雰囲気は、……)

悠里「覗きなんかして、私達を失望させないようにしてね？」

そう言った悠里の表情は笑ってはいたものの、恐ろしいオーラのような物を纏っていた。

「あ、あの……はい……分かりました!!」

それに言葉に出来ない恐怖を感じた彼は、戸惑いつつもそう返事を返した。

悠里「本当に？さつき少しだけ覗いてみようかな？とか思ったって言ってた気がするけど、信じていいの？」

悠里がニツコリと笑いながら言った。

「あの……その……あれは、……冗談です。すいません。」
冷や汗をかきながら、彼は悠里に言った。

悠里「そう。冗談だったのね？良かった！」

その瞬間に、悠里の雰囲気はいつものそれに戻った。

(ムチャクチャ怖かった！何だったんだ？今のは!?)

悠里は彼の肩をポンと叩くと、その場を離れ、朝食の準備を始めた。

胡桃「リーさん、ああ見えて結構怖いところあるから……あんま怒らせ
るなよ？」

胡桃が彼にそつと耳打ちした。

「うん。……よく分かった。」

その後、皆で朝食を済ませると、胡桃が運転席に、そして悠里が助手席に座り、車を動かし始めた。

由紀「トイレ行ってくる〜。」

由紀が言う。

美紀「いちいち言わずに、黙って行ってくださいよ。」

由紀「みーくん冷たい。」

由紀はそう言って、トイレに入る。

「…ところで、これからは何処に向かうんですか？」
彼が助手席の悠里に尋ねる。

悠里「目的としている場所は特にないの、ただ適当に車を走らせて物資のありそうな場所を探したり、生存者を探したりつてところね。」

悠里がそう答えると胡桃がそれに続けて話した。

胡桃「まあでも一応は目的候補みたいな場所はあるんだよ。」

「そうなの？」

胡桃「ああ。昨日、あたし達の先生の事は話したろ？」

「うん。」

悠里「あら？いつの間に話したの？」

胡桃「昨日の夜中にちよつとな。」

胡桃「んで、その先生…めぐねえがさ、あたし達に目的地を、進路を与えてくれたんだ。」

そう言つて胡桃が運転席に置いていた地図を取り、彼に渡す。
その地図には何ヶ所かに熊のようなキャラのマークが付けられていた。

「んん…このマークが付いてる場所…：聖イシドロス大学、それに…：ランダルコーポレーションか。」

胡桃「ああ。多分めぐねえがあたし達の為に避難所になる場所を教

えてくれたんだと思う。」

「……だったらこのどちらかに向かえばいいんじゃないの？」

彼が地図を見ながら胡桃に言う。

胡桃「どちらかに行こうか決めかねてるんだよ。…それにもしかしたら、先に避難していた人達に受け入れてもらえない可能性もある…昨日のお前の話を聞いたら余計にな。」

美紀「話って？」

胡桃「こいつ、今まで何度か生存者に襲われてるんだと。」

悠里・美紀「!!？」

美紀「本当ですか!？」

美紀が彼に尋ねる。

「はい。寝てる間に物資を取られた事もあるし…殺されそうになった事もありました。」

悠里「大変だったのね…。」

「はい…だから僕は今まで他の人間を信用せずに一人で生きてきたんです。…ただ、あなた達は信頼出来るような…そんな気がしたので仲間になりましたけど。」

胡桃「女しかいないからか？」

「それもあるかも、今まで僕が会ったのは男だけだったし。…でも

それだけじゃない……皆を見てると、普通の世界に生きている感じがして……この化け物だらけの世界でも楽しい日常がおくれるんじゃないかって、そんな気がしたんです。」

悠里「…そう。なら良かったわ……」——さんを仲間に誘って。」

悠里がそう言つて微笑むと美紀と胡桃も笑つた。

バタン！

突然トイレの扉が開き、中から由紀が飛び出して言った。

由紀「リーさん!!——くん誘つたのは私だよ!？」

悠里「あら聞いてたの?もちろん、分かつてるわよ。」

悠里が由紀に微笑む。

美紀「こういう騒がしい人がいるから、——さんも私達に害は無いと判断してくれたんですよね?」

美紀が彼に笑いながら言った。

「ええ……楽しそうな人達だなんて、そう思いました。」

由紀「騒がしいって……ちよつと失礼じゃない?」

美紀「そんな事はないですよ?」

「うん。誉め言葉だよ。…ね?美紀さん?」

美紀「はい。誉め言葉です!」

由紀「うゝ、なんか納得いかないよゝ。」

少しの間、彼は美紀と一緒に由紀をからかうと、地図を胡桃に帰して話を続けた。

「話を戻すけど、つまりは危険な生存者がいたら心配だと…、そういう事だよな?」

胡桃「ああ、そういう事だ。……だからとりあえずは避難所は保留にして、卒業旅行って事で、各地を転々とすることにしたんだ。」

「なるほどね……。」

彼は少し考えた後、悠里にこう言った。

「リーさん、今なら僕もいますし、女の人しかいなかった時よりはリスクが減ると思います。さっきの避難所のどちらかに向かうなら、力を貸しますよ? 危険な生存者には慣れていきますし。」

悠里「…ありがとう。けど大丈夫よ、出来るだけ皆を危険な目にあわせたくないから、ゆつくりと情報を集めてからでも良いと思うの。」

悠里「奴ら相手なら、まだ何とか生き延びられるけど……危険な考えを持った生存者達相手じゃ分からないから……。」

「…そうですね、分かりました。」

美紀「…生き残っている人……どのくらいいるんでしょうね…。」

「さて……いる所にはいるんでしょうが、それがまともな人間かどうかというのが、面倒な所ですね。」

美紀「……まったくです。」

美紀が椅子に座り、窓の外をみながらそう呟いた。

十一話『楽しい毎日』

僕が彼女達と出会って早2週間。

…とある日の昼、僕と由紀ちゃんは車中二人で過ごしていた。

「……………コマ。」

由紀「……………丸太！」

「んー……………たい焼き。」

由紀「キツツキ!!」

「待ってましたと言わんばかりの即答だったね。」

由紀「へへーん♪これこの間胡桃ちゃんにやられたんだ。」

「……………キ…き…き……………何があつたかなあ。」

そんな事をしていると、車の扉が開き、美紀が慌てて中に入って言った。

美紀「……………さん！出番みたいです！」

「了解……………んじや由紀ちゃん、ちよつとまってて。」

由紀「ラジャー！」

由紀が敬礼して彼を見送る。

彼が車外に出ると遠方には大きな工場、そして目前にはその作業員達が使っていたのであろう広大な駐車場が広がっている、彼はその中にいる胡桃達に聞こえるよう大声で叫ぶ。

「おーい！手伝いますか〜!?」

すると直後に胡桃の声が聞こえた。胡桃と悠里は車の予備の燃料がなくなってきたため、駐車場にある他の車から燃料を抜き取りに向かっていたのだ。

胡桃「わりー頼む！けっこーいたわ!!」

駐車場に停めてある車の群れに隠れて姿は見えないが、割りと近くの方から聞こえた。

「じゃあ行ってくるので美紀さんは由紀ちゃんを頼みますね。」

美紀「分かりました、気をつけて!」

美紀にそう告げ、彼は駐車場入り口のポールをくぐり駐車場に入ると、声の方へと向かう。

そしていくつかの車の列を越えると重そうなポリタンクを抱えて走る胡桃と悠里を見つけ、声をかける。

「出口、こっちですよ〜!」

彼は手を振りながら大声で胡桃達を呼ぶ。

胡桃達は声に気付くと彼の方へと駆け寄り、すれ違い様に言った。

胡桃 「タンクで手が塞がってて処理しきれなかった！5人くらい追って来てるから足止め頼む！」

悠里 「無理はしないでね！」

「了解です。」

それだけ伝えると、二人はキャンピングカーの方へと向かっていった。

少しすると、胡桃の言っていた通り、奴らが姿を現した。

「3. 4. 5……本当に5人だ、追われてるのに胡桃ちゃんよく見るなあ。」

胡桃の冷静な部分に感心しながら彼は腰のナイフを抜く。

「出来るだけ大人しくしててくれよ。すぐに済むから」

そう言つて、彼は素早く奴らに近付き、掴みかかろうとする隙も与えずに3体の頭を切り裂いた。その他の2体も、掴みかかつてはきたが冷静に回避し、同じく頭を狙って仕留めた。

胡桃達と別れた後、大した時間もかけず、彼は5体のゾンビを仕留めた。

「。ひい……」

(いくら短期決戦とはいえ、命懸けの戦い……ほんの数秒でも凄く精神的に疲れるけど……あの人達を守る為だ、もう一々臆してられない。)

彼はナイフを納め、胡桃達の元へと向かった。

「どうも〜。」

手をパタパタさせながらキャンピングカーの外に集まっている胡桃達の元に駆け寄る。

胡桃「どうもって…奴らは？」

タンクを車に積みながら胡桃が尋ねた。

「全員倒したよ。」

胡桃「マジかよ!?!はえーな!」

悠里「怪我は無い？」

「大丈夫です。」

悠里「なら良いけど…頼んだのは足止めなんだから、そんな無理しちゃダメでしょ?」

悠里がそう言う。…困みに、少し怒っているようだ。

「ああ…その…落ち着いて見れば奴らの動きは単調なのでこのくらいは平気ですよ。」

説教される前に慌てて言い訳する。

悠里「…そう？まあ足止めを頼んだ私達に責任があるのだけど…あまり無理はしないでね？」

今度は優しい声でそう言った。

(良かった！説教は回避出来た!!!危なかった…：5体の奴らと戦うより、りーさんの説教の方が怖いからな…。)

内心そんな事を思う。

「…て言うかあれですよ？僕は始めに胡桃ちゃんに付いていくって言ったんですよ？二人だけじゃ危ないだろうって。けれど胡桃ちゃんが『ちよつと燃料取ってくるだけだから二人で良い』って…。」
彼が言いながら胡桃を睨む。

悠里「あら？そうだったの？」

胡桃「い…いやあ、絶対5分もかからないと思ったんだけど…驚く事にとの車もホースが燃料タンクに上手く入らなくてさ…：入る車を見付けたと思ったら燃料抜いてる時に奴らに見付かって…えつと、どのくらいかかった？」

美紀「少なくとも先輩達が燃料を探しにその駐車場に入ってから20分は経ってますね。」

胡桃「…：で、でも大丈夫！燃料は充分に手に入ったから！な！りーさん!!」

悠里「うくん…：まあそうね。」

胡桃「良かった良かった！……ところで——！お前なんか強くなったか？5人瞬殺だろ？」

「うーん、5人くらいなら前からやられたよ。ただ始めて皆に会ったあの倉庫は狭いわりに数が異常に多かったからそれに焦って上手く動けなかったのが痛かったかな……足も怪我してたし。……ああ、あとナイフを新しいのに変えたのが大きいかも、皆と会ったデパートで見付けたやつんだけど切れ味が異様に良くて使いやすんだ。」

彼は腰に下げた大きなナイフをポンポンと叩いて言った。

胡桃「ふーん……あたしはなんてったってこのシャベルがあるからな！これがあればあたしも5人くらい瞬殺出来る!!燃料抜き取るのをりーさんに任せてる間、あたしも奴らを4体倒してるしな！」

胡桃が血に濡れたシャベルを構えて誇らしげに言った。

美紀「何張り合ってるんですか。」

悠里「まったく……。」

美紀と悠里が呆れる。

「……とりあえず燃料は積んだんですよね？じゃあ行きますか？」

悠里「そうね、移動しましょうか。」

由紀「……!!皆!後ろ!」

車内にいた由紀が窓から顔を出し、胡桃達の後方を指さす。

「……おっと。」

由紀に言われ後ろを見ると10m程離れた先程の駐車場の中から

1体のゾンビがよたよたとこちらへ向かって来ていた。

悠里「まだ1体遅れて私達を追いかけていたのね。」

美紀「どうします?」

胡桃「いよし!あたしに任せろ!見てろよ!——!」

「はいはい。」

胡桃がシャベルを構えて奴の元へと駆けていく。

胡桃「そりやあ!!」

胡桃が大きくシャベルを振りかぶったところで彼は思った。

(とつとと車に乗って逃げてても良いのに、まだ張り合ってるんだな。そんな事しなくても胡桃ちゃんが強いのは分かってるんだけどね：普通にやり合ったら僕は負けそうな気すらするし。)

(そういえば胡桃ちゃんが戦ってるのは始めて会った時も見ているし、この数日でも何度か見ているけどここ(こ)までマジマジと見るのは始めてだなあ……)

(シャベルって変わってるよなあ、もっとそれっぽい鈍器とかあっただろうに：：そういう僕も鈍器使ってた事あるけど鈍器で頭とか狙うとグロいから嫌なんだよなあ……)

視線を胡桃へと向けると、彼女の持つシャベルが既にゾンビの頭を砕いていた。

ズシャツ！という音が響き、道路の上に感染者の脳みそのような物が飛び散る…。

胡桃「いつちよあがり！」

胡桃が誇らしげに彼を見るが、彼は倒れた感染者をじっと見つめていた。

「……………」

胡桃「…？どした？」

「……………」

彼は返事をせず、道路の死体と脳みそを交互に見ていた。改めて見ると、かなりグロテスクな光景…ほんの少しだけ気分が悪くなる…。

「…酷い世界だなあ」

胡桃「ん？どうした？」

「いや、なんでも…」

こんな可愛らしい女の子が武器を振り回し、化け物じみた者達と戦わなくてはいけないこの世界を嘆きつつ、彼は車へと戻った。

????????????

胡桃「…顔色悪くない？」

車内へと戻ってから、彼の顔色が優れない。

胡桃がそれを気にして彼の前へと立つと、彼は彼女を見てからそば

にいた悠里達へと視線を移した。

「あの、リーさんや美紀さんはああいった死体…とかは平気なんですか？」

悠里「そりやあ始めは怖かったというか…気持ち悪くなっちゃったりもしたわ…。ただこう何回もそういう場面を見てるとさすがに慣れるっていうか…慣れなきややっていけないっていうか。」

美紀「…同じくです。」

「…それもそうか」

胡桃「なに？お前、ああいうのダメなの？」

「いや、もう慣れた…」

胡桃「んん…だよな」

そんな事を言いながら胡桃が彼のそばを離れると、入れ代わるようにして笑顔の由紀が彼の隣へと座る。

由紀「ほらほら——くん！そんな事より、さっきのしりとり続きしよっ。」

「…ああ、うん…どこまでいったっけ？」

由紀「私がキツツキって言ったところ。」

「ああそうか…えっと。」

彼はすぐに言葉を放つが、半分上の空だったので結果、しりとりは由紀の勝利に終わってしまった。

由紀「やった〜！勝った〜！」

由紀はまだしりどりの勝利の余韻を楽しんでいた。

胡桃「由紀、しりとり相当に弱いんだけどな、…やっぱ——って

少し頭がアレだな。」

「…それは僕にも由紀ちゃんにも失礼な発言だぞ。」

胡桃「まさか由紀に負けるなんて…あく面白かった!」

「…くそっ。」

(…この人達と出会ってもう2週間か…)

(バカにされる事は多いけど、世界がこうなる前にも味わった事がない程楽しい毎日を過ごしている。)

(この人達を信じて良かった。…これから何があっても、この人達だけは…)

悠里が運転席につき、走り出したキャンピングカーのその車内…彼はいつの間にか、眠りについていた。

悠里「…!!今のって!!!」

突然悠里が声をあげて車を停める。それにより彼は目を覚ました。

「…どうかしました?」

悠里「…今、そのビルの窓に人が見えたの。」

胡桃「本当か!? 奴らじゃないよな?」

悠里「多分違うわ、走っていたもの。」

美紀「生存者ですか!?!」

由紀「大変だ! 助けようよ!」

悠里「そうね、行ってみましょう。」

ビルの目の前に車を止め、彼女達は車外に出た。

その5階建てビルは廃ビルだったのか、外には何の会社名も書かれていなかった。

「…りーさん、何階だったか分かりますか?」

外からビルの窓を見回しながら彼が尋ねた。

悠里「あの窓だったから…3階ね。」

悠里がひとつの窓を指さして言った。

胡桃「じゃあ、行こうぜ!」

由紀「うん!」 美紀「はい。」

(生存者か…僕が会ってきたヤツらみたいいな人じゃないと良いけど…。)

5人は生存者を探して、ビルの中へ入っていった。

十二話『いきのこり』

生存者らしき影を追ってビルに侵入する5人。

ビルの入り口のガラス戸は何者かに破壊されており、中には誰でも容易に入れるようになっていた。

美紀「：奴らに壊されたのでしょうか？」
壊されたガラス戸をみて美紀が言った。

胡桃「さて、どうだろうな？何にしても入り口がこんなんじや立て籠るには向かないのに。：何でこんなところに人がいるんだろうな？」

悠里「：そうね、見たところ廃ビルだったみたい：物が何も無いわ。」

悠里の言った通り、そのビルの入り口を抜け中に入った彼女達の間に入ったのは、椅子一つも無い殺風景な空間だった。

「：とりあえず3階へ向かいましょう。」

悠里「ええ。急ぎましょう！」

殺風景なその空間の左に位置する通路を進むとすぐに階段を見つけ、彼女達は3階へと上っていった。

胡桃「：：：！皆静かに！」

2階と3階の間の階段で、先頭を進んでいた胡桃が皆に小声で言った。

「…どうした?」

胡桃「見ろ…あそこ。」

胡桃は目の前の3階通路を指さす。

そこには階段から上がってくる者を拒むように木材を組み合わせたバリケードが建てられており、3体のゾンビがそのバリケードをガリガリと引っ掻いていた。

美紀「なるほど、立て籠るには不用心な場所だと思っ
ていますが…3階への通路にだけバリケードを建てていたんですね。」

美紀が辺りを見て言う。確かにバリケードが建てられているのは3階通路だけで、4階へ続く階段は今まで通り開ききっていた。

胡桃「おい——、手伝ってくれ。」

胡桃がシャベルを構えて彼に言う。

「了解、どうやる?」

胡桃「あたしが近くの2人をやる…お前は余ったもう1人を頼む。」
そう伝えて胡桃が奴らの背後に忍び寄る。

胡桃「……………はっ!!…ほっ!!」

ドガツ!!

ガスツ!!

胡桃が手際良く2体始末する。それに気付いた最後の1体が胡桃に襲い掛かろうとするが…一歩足を進めたところで彼のナイフがその頭部を両断していた。

ベチヨツ!

切り裂かれた頭部の切れ端が音をたてて床に落ちる。

胡桃「うおっ!ぐ、グロいんだけど…」

切り裂かれて落ちた頭部を見て胡桃が言う。

「お互いさままでしょ…それより早くこのバリケードを乗り越えて進もう」

胡桃「ほいほい。」

由紀「うわあ、これどうやって越えるの?」

バリケードを見ながら由紀が言った。

そのバリケードは木材を幾重にも重ねた物を釘で合わせた物で、3階内部への道を塞いでいたが、上部には隙間があり乗り越えて進む事が出来そうだった。

悠里「…どうしようかしら?」

美紀「肩車すれば何とか届きそうですね。」

「誰が誰を肩車するんですか?」

胡桃「うーん…。」

「…よし、僕が行ってみる…胡桃ちゃん!肩車!」

胡桃「女に肩車させる男がいるかよ!持ち上がらねーよ!」

「僕そんなに重くないから胡桃ちゃんならいけると思うけど…じゃあ

僕が胡桃ちゃんを肩車するから、乗って？」
彼がしゃがみこんで言った。

胡桃「うう、それも無理……スカートで来ちゃった……。」
胡桃が顔を赤らめて言う。

「……なるほど、それを言ったら皆スカートですけどね。……僕以外。」

美紀「……………」

悠里「……………」

由紀「私行こうか？」

由紀が言った。

「スカート女子を肩車出来るのは嬉しいけど……さすがに由紀ちゃんだけじゃ危ないかな。……りーさんか美紀さん、由紀ちゃんでも良いけど、胡桃ちゃんを肩車出来ますか？胡桃ちゃんなら一人でも大丈夫でしよー！」

胡桃「おい!!」

胡桃が彼の肩を小突く。

悠里「どうかしら？」

美紀「……ちよっとキツイかもです。」

由紀「くるみちゃんって体重何キロ？」

胡桃「言わねーよ！ってかりーさんと美紀も出来るって言ってよ！あたしが傷付くだろ!？」

「はあ…仕方ない、胡桃ちゃん…このバリケード壊すか。」

胡桃「…大丈夫かなあ、もし中の人が無事だったら怒られそうだけど。」

悠里「確かに…これだけ丈夫そうなバリケードだったら中に奴らは入っていないとは思うけど…。」

コンコン!

一同「!?!」

突然、バリケードの内側から音が鳴る。

美紀「今のって…。」

???「…あなた達、誰ですか?」

バリケードの中から女の人の声がした。

悠里「!?!…生存者さんですか?! 私達は巡ヶ丘学院高校の生存者です!」

悠里がバリケードの向こうの女性に応える。

???「…学生さん?…少し待ってね。」

声の主がそう言って少しすると、バリケードの下部の板が時計回りにずれて隙間が空き、その隙間の中から女性が顔を出した。

???「ここから入って。」

彼女達は女性の開けた隙間を通り中へ入った。

美紀「これって…。」

美紀が先程のバリケードの隙間を見て言う。

???「ああこれですか？このバリケード、下のこの一枚の板だけ片側しか釘で止めてないから、ずらして扉の代わりに使えるよう作ったんです。…あのゾンビ達はこんな簡単な仕掛けでも気付かずにくれるし。」

女性がしゃがみながらバリケードの仕掛けをパカパカさせながら言った。

悠里「ここにはあなた1人ですか？」

悠里が女性に尋ねた。

???「はい、私は中村杏子なかむらぎょうこです。よろしくね。」

肩まで伸ばした黒髪と眼鏡が印象的な女性だった。

彼女達は自分達も杏子に自己紹介すると、杏子にいくつかの質問をしました。

美紀「杏子さんはずっと1人だったんですか？」

杏子「いいえ…一週間前まで弟とここに暮らしてました…でも弟は奴らに…。」

美紀「あ……すみません。」

杏子「気にしないで、私が悪いの……しっかりあの子に目をつけてなかったから…。」

胡桃「どうしてここに暮らしてたんですか？」

杏子「家はもう中がボロボロになっちゃって……ここは廃ビルで誰も使ってなかったみたいだから、迷惑もかからないと思って弟と必要な物だけでもって、この3階を使わせてもらっていました。」

杏子「バリケードもしつかり作って……大丈夫だと思っただのに……」

「…弟さんはどうして奴らに？」

杏子「…少し目を離れた間に、1人でバリケードから外に出てしまっていたんです……まだ10才になったばかりで……好奇心旺盛だったんですね。…もつと強くバリケードから出ちゃダメって…言っておけば良かった……」

杏子が顔を伏せる。

杏子「…でも他にも生きている人に会えて良かった。…誰か来たのは分かっていたけどなんか怖くて……だから最初はバリケードの近くで皆さんの会話を少し盗み聞きしてたんです。そしたら面白そうな人達だったから、思わず声掛けてしまいました。」

伏せた顔を上げて笑顔で言った。

「良かったね胡桃ちゃん、君のおかげだよ。」

彼がそう言っただけで胡桃の背中を叩く。

胡桃「あたしか!？」

由紀「そだよ、胡桃ちゃんが面白いことばっか言ってたおかげだよ!」

胡桃「…言ってたか？」

杏子「あはは!ごめんね胡桃ちゃん、肩車のくだり…面白かったで

す！」

杏子が笑いながら言う。

胡桃「ぐぬぬ……フクザツなんだけど……。」

悠里「良いじゃない胡桃、杏子さんを楽しませたんだから。」
納得のいっていない胡桃を悠里がなだめる。

杏子「そうだ！皆さんお昼は食べました？もしよければ食べていつて下さい！こんなご時世なんで缶詰めくらいしかありませんが……量はたくさんありますから！」

由紀「良いの!?!」

悠里「由紀ちゃん、少しは遠慮を……。」

杏子「いえいえ！本当にたくさんありますから是非どうぞ。」

杏子が由紀の頭を撫でながら言った。どうやら由紀がお気に入り
のようだ。

由紀「えへへ……だつてりーさん！良いよね？」

悠里「そこまで言うなら……皆、ご馳走になりましょうか？」

——・胡桃・美紀「はい！」

杏子に案内され、一つの部屋へ入る。

そこには折り畳み式のテーブルといくつかのパイプ椅子が置かれていた。

杏子「じゃあ食べ物持ってきますから、それまで座って適当に待つ

ていて下さい。」

悠里「私も手伝います。」

杏子「大丈夫！あなた達はお客さまですから、待っていて下さい！」
杏子は笑顔でそう言うのと、彼女達を部屋に残し他の部屋に食料を取りに向かった。

由紀「優しい人だね！」

悠里「そうね。」

美紀「ただもう少し早く来れば弟さんも助けてあげられたかもと思うと…。」

胡桃「そうだな…けど済んだ事はしかたねーよ。かわりにあたし達で杏子さんを支えてやろうぜ？」

「だね…杏子さん、仲間に誘う？」

由紀「誘おうよ！杏子さん優しいから好き。」

悠里「あの人、由紀ちゃんのこと好きみたいだね。」

胡桃「由紀ってなんか妹感あるから、姉としての本能が疼くのかも…。」

悠里「なるほどね…良くわかるわ…。」

そう言った悠里の表情は、心なしか暗く見えた。

由紀「そうかなあ…私って妹っぽい？」

由紀が胡桃に言う。

胡桃「ああ…しかも手のかかる妹だな。」

由紀「ひどい！」

由紀と胡桃が言い合っていると、部屋の扉が開き、杏子が缶詰めを抱えて戻って来た。

杏子「お待たせしました。どれでも好きな食べて下さいね！
大量の缶詰めをテーブルの上にはらまいて杏子が言った。

それぞれが好みの缶詰めを手に取り、それらを皿の上にあけて食べ始める。

杏子「ごめんなさい、この間までは缶詰め以外にもレトルトの食料とかもあつただけど…全部食べてしまつたうえにカセットコンロのガスも切れちゃつて。…缶詰めしか食べ物がないの。」

杏子が申し訳なさそうに言った。

胡桃「カセットコンロ用のガスってまだ車にあつたよね、リーさん？」

悠里「ええ、いくつか分けますよ？」

杏子「いえいえ、そこまでしてくれなくて大丈夫です。ただこうして一緒に食事してくれるだけで十分！」

「…言ってるわりに杏子さんは食べてないですね？」

一つも缶詰めを開けてない杏子を見て彼が言った。

杏子「あはは…実はついさっきお昼済ませちゃつて…お腹いっぱい

なんです。」

「そうだったんですか。悪いですね、わざわざまた食事の準備させちゃって。」

杏子「いいえ、準備ついても缶詰めとお皿と割りばしを用意しただけですから…。それに私は食べてませんが、こうして皆さんが食事してるのを見ていられるだけでも楽しいんです！他の人と会うの凄く久しぶりだったから…。」

杏子が皆を見回して言う。

由紀「だったら杏子さん！私達と一緒に暮らさない？そうすれば毎日一緒に食事とか出来るよ！」

由紀が椅子から立ち上がって言った。

杏子「…え？」

杏子が驚く。

悠里「どうでしょうか？私達キャンピングカーで暮らしているんですけど…：多分もう1人くらいなら寝るスペースも誰かと一緒に寝る事でどうにかなると思います。」

由紀「うん！だったら私と一緒にベッドで寝よ！」

悠里「少しだけ狭いかもしれないですけど…：いかがですか？」

悠里が杏子に尋ねた。

杏子「……………」

杏子「……ありがとうございます……凄く嬉しいです！」
杏子が涙を流しながら答えた。

美紀「……あっ。」

胡桃「そこまで喜ばれると誘った方も嬉しいな！」
涙を拭う杏子を見て胡桃が言った。

杏子「……けど、返事は少しだけ考えていいですか？ちよつと心の整理をつけたくて……。」

悠里「もちろんですよ。」

杏子「ありがとうございます！……では少し他の部屋で考えますね？
一時間以内には答えを出しますので、待っていて下さい！」
そう言つて杏子は部屋から出ていった。

胡桃「以外だな……即答で一緒に来るつて言うかと思つただけど。」
杏子が出ていった扉を見ながら胡桃が言った。

美紀「やつぱ今まで弟さんと暮らしていた場所を離れたくないとか
……私達を完全に信じて良いか分からないとか、色々あるんじゃないで
すか？」

悠里「うーん、そうかも知れないわね。」

由紀「きつと来るつて言つてくれるよ！杏子さんは！」
由紀が嬉しそうに言った。

悠里「そうなれば良いけど…若い女性1人じゃ厳しい世界だから…」

「……………ちよつとトイレ行ってきますね。」

彼が席をたち言う。

胡桃「トイレって…場所分らないだろ？」

「うん、杏子さんに聞く。」

そう言つて彼は部屋から出た。

(……………あの人なんか気になる…)

彼は通路を歩き、一つ一つ扉を開けて杏子を探した。

3つ目の扉を確認しようとした時、通路奥の部屋から物音が聞こえたので彼はそこへ向かった。

バタン

扉を開けると中には杏子がいた、杏子は彼に気付くと慌てて何かを隠した。

杏子「あ…あれ?…どうしました——さん?何かご用ですか?」
笑顔でそう言う杏子だったが、どこかぎこちなかった。

「ええ…少し杏子さんに聞きたい事が。」

杏子「聞きたい事?…なんででしょう?」

「言いたくはないですが…ちよつとだけあなたの事が怪しいと思っ

たので。」

彼が杏子の目をまっすぐ見つめて言った。

杏子「……………怪しい?」

「ええ、缶詰め…杏子さん一つも食べなかつたですよね?」

杏子「はい、さっき言ったようにお腹いっぱいでしたから…。」

「…僕はついこの間彼女達の仲間になってばかりで、それまでは一人で生きてきました。…正確には仲間がいた事もありますが、実はそいつらは僕の物資目当てで仲間のふりをしていただけで、裏切られました。」

杏子「…。」

「その他にも、イヤな生存者達とばかり出会ってきました。…だから生存者を見るとどこか疑ってしまう癖がついてしまつて…杏子さんが出した缶詰めもなんか危ない薬でも入ってるんじゃないかって少しだけ疑つてました。」

杏子「!!…そんな!…何も入れてませんよ!」

杏子が声を張り上げて言った。

「でしようね、僕も最初はそんなことを考えていました…由紀ちゃんのを頭を撫でてる時や僕達と一緒に暮らさないかと聞かれた時の杏子さんの顔を思い出して…この人は本当に優しい人なんだろうと…僕の中で結局そういう結論になりました。」

彼が杏子に笑顔で言う。

杏子「…ありがとうございます。……じゃあ聞きたい事っていうのは？」

「はい、缶詰めの話に戻りますが…確かに、普通に考えれば杏子さんはお腹いっぱいだっただけかも知れませんが…。…ただ杏子さんを見ていて気付いたんです、たまに辛そうな顔をしている事に…。」

杏子「……………」

「もしかしたら、何かの病気で気分が悪くて食欲が無いのではと…そう思っていました。……だけどさつきこの部屋に入った時に見てしまいました…。」

杏子「……………そうですか。」

杏子が顔を伏せる。

彼がこの部屋に入った時に見たもの…それは腹部に巻いた血まみれの包帯を新しい包帯に巻き直す杏子の姿だった。

「杏子さん……………奴らに噛まれてますね？」

彼の問いかけに、杏子は静かに頷いた。

十三話 『人間』

「杏子さん……奴らに噛まれてますね？」

杏子は静かに頷いた。

「……いつですか？」

杏子「3時間くらい前……外の空気を吸いたくて屋上に行った時に、物影に隠れてて気が付きませんでした……。」

杏子「わざわざ屋上に行かなくても窓から空気吸ったり、バリケードをもっと有効な場所に作ったりしとけばこんな事にならなかつたのに……私、もう助かりませんよね？」

杏子が彼に尋ねる。

「多分……。今まで何人か奴らに怪我を負わされた人を見てきました。が……長くて半日、早ければ1時間しない間に奴らになります。」

杏子「じゃあ……私もそろそろかなあ？」

「個人差はあるでしょうが、怪我の具合が酷ければそれだけ早く奴らになるようです。……見たところ杏子さんの怪我は決して軽くはないようですから……もうそろそろかとも知れません。」

杏子の腹部の傷を見て彼が言った。

杏子「……ですよ、分かってました。……さつきから傷が凄く痛むし、なんだか視界も歪むんです。」

杏子「…あの子が死んでしまつて、私も後を追おうと…この間まで思つてたんです。けどそれじゃ…なんかダメな気がして…一人でもしっかり生きていこうと、つい昨日決意したばかりなんです。」

「……………」

杏子「なのに…間抜けですね私、次の日に死んじゃうなんて…しかもその日に他の生存者さん達に会えたのに…こんな優しい人達に会えたのにつ！」

話してる内に、杏子の目には涙が溢れていた。

杏子「…なんて運が無いんだろう！馬鹿だ私は…！…本当はあなた達の事も無視する予定だったんです、あなた達がどんな人達だろうと…私は今日死ぬんだから会う意味なんか無いだろうって…なのに…」

杏子「…さん達の面白い会話を聞いていたら…私も交ざりたくなっちゃったんです。…最期に他の人達と楽しく過ごして…そして終わろうって。」

杏子「そしたら皆さん私を仲間に誘つてくれて…本当に嬉しかったんです。…けど嬉しい気持ちの分だけ後悔しました…今日奴らに噛まれた事…あなた達を中に招き入れた事…。」

杏子「ただ少しだけ食事をして、すぐに別れて…それから一人で死ぬはずだったのに…仲間に誘われるなんて…しかも私はそれを断るべきなのに、嬉しさのあまり返事を返せなかった…本当にダメ人間です。」

杏子「…さんはさつき奴らに怪我を負わされた人を何人か見たと言いましたよね？…それは大切な人ですか？」

「…いえ、殆どは赤の他人です。噛まれた人を遠くから観察して得た情報ですから。」

杏子「…そうですか…良かったです。大切な人を失うのは本当に辛いですから…。」

杏子「…私、皆さんとは行けません。…これが答え…っというかこれしか選択肢がないですしね。」

「…とても残念です。由紀ちゃんはもう杏子さんの事が大好きみたいですから。」

彼がそう告げた瞬間に、杏子は一層多くの涙を流した。

杏子「っ…そうですか、由紀ちゃんまだ会って間もない私にそんなになついてくれたんだ…!」

「杏子さんが由紀ちゃんに優しく接していたのが伝わってたんですね。」

杏子「あはは…由紀ちゃんて、少しだけ弟に似てたんです。常に笑顔で明るいところが…だからでしょうか、あの娘が可愛くて仕方がなかった。…妹がいたらこんな感じなんだろうなって…そう思っていました。」

杏子「…由紀ちゃんは悲しむでしょうか?」

涙を拭いながら杏子が言った。

「はい…悲しむと思います。…由紀ちゃんだけでなく皆。」

杏子「そっかあ…どうしよう、私のせいで…皆さんにイヤな思いをさせてしまいますね。」

杏子「——さん、私はやっぱり行けないと…皆さんに伝えてもらえますか?」

「…はい、でも多分納得しないと思いますよ。特に由紀ちゃんが。」

杏子「ですよね…ではこう伝えてくれますか?実家にこのビルにいらって置き手紙を両親宛に残してしまったから、ここを離れられないと。」

「それ、本当ですか?」

杏子「もちろん嘘ですよ。置き手紙も残してないし、両親は奴らに殺されてしまいました。」

杏子「こう伝えればさすがに無理強いはしないでしよう?もしそれでも納得しなかったら、そこからは——さんに任せて良いですか?」

杏子が笑顔で言った。

「…はい、分かりました。」

杏子「すいません、それからもうひとつ……。」

杏子「私を殺してくれませんか?」

杏子が彼の目を見つめて言った。

「……言われると思いました。」

彼が溜め息混じりに言う。

杏子「あは…勘が鋭いですね。………本当にすいません、辛い事ばかり頼んで。…でも私そろそろ本当にキツくて…身体中が凄く痛くて辛いんです…それに、奴らみたいになりたくはないんです。」

杏子「…私、弟があなる前に殺したんです。………酷く心苦しかったけど、後悔はしてません。…大切なあの子を守れなかった上に、ゾンビにさせるなんて嫌だったから…。」

汗を流し、息を切らしながら杏子が言う。

「…分かりました。」

そう言って彼はナイフを手取る。

「…心臓を刺した後、頭を刺しておきます…それで良いですか？」

杏子「はい…私も弟にそうしました…生きている時に頭を狙うのは嫌だったから。」

「分かりました…ではいきますね。」

彼はそう言って杏子の胸にナイフを当てる。

杏子「はい…お願いします。」

杏子が目を閉じる。

「……………」

(もう杏子さんは助からない、この調子ではあと数十分と持たないだろう…だから僕が終わらせてあげなくてはいけないんだ…。)

(なのに……………手が震えて動かない…。)

彼のナイフを持つ手は震え、杏子の心臓を貫けずにいた。

(今まで何人も生きた人間を殺してきた……あいつらを殺すのは簡単だったのに! どうしてこの人を殺す事は出来ないんだ!? もう助からない人間なのに!!)

手の震えは止まる気配をみせなかった。

杏子「…あのく…」

杏子が閉じていた目をゆっくりと開け、苦笑いしながら言った。

杏子「急かす訳では無いですが…あまり長引くと由紀ちゃん達が来ちゃうかも…」

「……ああ、そうですね、すいません…。」

そう言う彼の震えている手を杏子はそつと握った。

「……う？」

杏子「…ごめんなさい…本当にごめんなさいっ! 私が皆さんに話しかけたから…一人で大人しく死ねば良かったのに! …そうすれば…」
「さんにこんな思いはさせなかったのにつ!!」

杏子の目からはまたしても涙が流れていた。

「いいえ…気にしないで下さい、杏子さんは…寂しかったんですよね? 一人で死ぬのが嫌だったんですよ? …だから最期に誰かといたくて、僕達に話しかけた…」

杏子「…はい、ごめんなさい。」

「謝らないで下さい…それで良かったんです。杏子さんみたいな優し

い人が、そんな辛い最期なんて酷すぎますから。」

(そうだ…僕が今まで殺してきた人間達は、他人を潰してでも自分が生き残る事しか考えていないクズばかりだった。…だけど杏子さんは違う、ただ寂しくて…最期に誰かと一緒にいたかっただけ。それだけなのに皆を巻き込んで辛い思いをさせてしまったと…：自分一人で死ねば良かったと…そう嘆いてる。)

(杏子さんと出会った事で僕達が味わう辛さなんか…一人で寂しく死んでいく辛さには到底及ばないだろうに。…この人は本当に優しい人だ、だから僕はこの人を殺す事を躊躇ためらっていたんだ。今まで殺した奴らはどうしようもないクズばかりで、僕が奴らを人間として認識してなかったから…ゾンビと同じように何も感じずに殺せた。)

(でも杏子さんは違う…この人は本当に”人間”だから…。)

(でも…あまり躊躇していると益々杏子さんを追い詰めてしまう…だから…。)

(もう迷わない。)

彼は呼吸を整えて、杏子に言った。

「杏子さん…最期に会った人間が僕達で良かったのですか？」

杏子「はい…それは自信を持って言えます、由紀ちゃん…美紀さん…悠里さんに胡桃さん…それに、最期に私の側にいてくれるのが…私にとどめをさしてくれるのが…」
「さんで本当に良かったと、心からそう思います。…変ですよ？出会って1時間程なのに…私、皆さんの事が大好きでした！」

涙を流しながら、けれども笑顔で杏子が言った。

「…僕も杏子さんの事好きです…会えて良かった。」
彼はそう言つてナイフを構え直す。

杏子「あ！待つて下さい！」

杏子が慌てて言う。

「…どうしました？」

杏子「ひとつだけ…出会って間もない私みたいな人間を好きだと
言つてくれた優しい——さんをお願いです。」

涙を拭い、傷の痛みや苦しみを必死に堪えて、普通の健康な人間の
ような笑顔で杏子が言った。

「何ですか？」

杏子「——さんは今までイヤな生存者とばかり会つてきて、生存者
を見ると疑う癖があると言つていましたよね？その——さんが、由紀
ちゃん達といる時は本当に楽しそうにしました。…悠里さんから
聞きましたが…まだ会つて2週間なんですよね？」

「…はい。」

杏子「私、最初から顔見知りなのかと思つてましたよ。…本当に仲
良かったから、イヤな生存者ばかりと出会つて辛い経験をしてきた
ハズのの——さんがそこまでリラックス出来るって事は、あの娘達は本
当に優しい人達なんですわね。」

「…はい、あの人達に出会えたのは僕の人生の中でも最大級に幸運な
出来事でした。あの人達と会つてからは、毎日が楽しくなった…。」

杏子「よくわかります……不思議な人達です。あの人達といると、世の中がこんなだつて忘れそうになりました。」

「そうですね……僕もよく忘れます。」

杏子「……守つてあげて下さい、出会つて間もないけど……それでも私が大好きになったあの娘達を……私みたいにならないように、……それが私のお願いです。」

「……はい、絶対に守ります……守り抜いてみせます！」

杏子「……はい！頼みましたよ？」

そう言つて、杏子は最期に涙も流さず、綺麗な顔で笑つた。

杏子「最期にあなた達に会えて……本当に良かった。」

??????

由紀「——くん遅いね〜？」

由紀が次に食べる缶詰めを選びながら言った。

悠里「…そうねえ、トイレの場所が分からないのかしら？」

胡桃「まあほつといて大丈夫だろ、帰ってくる前に全部食べちゃおうぜ！」

美紀「それはさすがに………というか、缶詰めもそもそも杏子さんのなんですから…少しは遠慮しないと。」

胡桃「分かってるよ、冗談冗談！由紀じゃないんだから、そのくらいは分かってるって。」

由紀「失礼だなく、胡桃ちゃんは！私だって遠慮してるよ！」
「そう言いながら由紀は次の缶詰めを開け始めた。」

胡桃「どこがだよ!？」

缶詰めを開ける由紀をみて、胡桃がツツコミを入れる。

由紀「だって杏子さんが遠慮しなくて良いって〜。」

胡桃「確かに言ってたけどさあ…。」

由紀「…杏子さん、一緒に来てくれるかな？」

悠里「…どうかしら…でも、来てくれると良いわね！」

由紀「うん!!」

その日僕は、始めて”人間”を殺した。

十四話『守るといふ事。』

美紀「うわっ!! 由紀先輩来て下さい! 水冷たくて気持ちいいですよ!」

川の中に足を入れて美紀が由紀に言った。

由紀「…あ、うん!」

少し遅い反応で由紀が返事を返し、美紀の方へ駆け寄る。

胡桃「……由紀…少しだけ元気ないな。やっぱ杏子さんの件があるからかな?」

悠里「…いえ、多分違うわ。確かに残念がつてはいたけど、家族を待っているなら仕方ないってちゃんと納得していたから。」

川の側の道路に停めたキャンピングカーに寄りかかり、由紀と美紀を見守りながら胡桃と悠里が会話をする。

胡桃「…んー、じゃあアイツのせいか。」

胡桃が視線を移して言った。

悠里「……かもしれないわね。」

悠里も同じ方向へ視線を移す、そこには由紀達から少し離れた川の下流の方で一人、ナイフの血を洗い流している彼がいた。

悠里「ビルを離れてから元気が無いわね…杏子さんが来なかったのがショックだったのかしら?」

胡桃「…さて、どうだろうな。そんな事であそこまでへこむようなヤツじゃないと思うんだけど…。」

悠里「……………」。

胡桃「…………少し話してくるわ！私もシャベル洗わないといけないし。」

悠里「ええ、頼むわね。」

胡桃は悠里にそう言つて、シャベルを持ちながら彼の方へと歩いていった。

「……………」。

ゴシゴシゴシゴシ。

川辺に座り、手元を真つ直ぐに見つめながら、彼はナイフを磨いていた。

「…………ふう……」

胡桃「どーした？溜め息なんかついてさ。」

いつの間にか、彼の背後には胡桃が立っていた。

「ああ…胡桃ちゃん、どうした？」

心なしか暗い声で彼が言った。

胡桃「あたしもシャベル洗おうと思つてさ……」

そう言つて胡桃も彼の隣に座ると川にシャベルを浸けた、それと同じ時に彼の洗うナイフに視線を落とす。

ゴシゴシ…

胡桃「…あのさ、もう十分綺麗だと思うよ？」

磨かれたナイフをみて胡桃が言う。

「…………ん？」

胡桃「いや、ナイフ…もう綺麗になってない？」

「…ああ、そうだね、気付かなかった。」

胡桃「気付かなかったって…：あんなにガン見しながら洗ってたのに、なんで気付かないんだよ。」

「ちよつと考え事をね…。」

胡桃「…なんかあったのか？杏子さんと別れてビルを出てから…なんか様子がおかしいぜ？」

シヤベルを軽く磨くと、それを横に置き、彼を見つめながら胡桃が言った。

「……………うん。大丈夫。」

彼が胡桃に目線も合わせずに言った。

胡桃「そう見えないから言ってるんだけどな…………。」

そう言いながら、視線を彼から空に移す胡桃。

(あの後、部屋に戻り皆に杏子さんは一緒に来れないと伝えた。…実家に両親宛の書き置きを残してしまっているから、両親をここで待ち続けたいといけないらしいと…：由紀ちゃんは残念そうにしていたが…：思っていたよりもあっさりとな納得してくれた。)

(更にその後、顔を見ると別れが辛いからそのまま挨拶等は無しで出

ていつて欲しがっていると伝えた。これは僕が考えた言い訳だけど……だけどさすがにこれはキツかったのか、由紀ちゃんは悲しんだ。）
（そんな由紀ちゃんを見て胡桃ちゃんが『挨拶くらいはしていつでも良いんじゃないか?』と言ってきたが、僕が黙り込んでいるのを見たリーさんと美紀さんが何かを察してくれたのか、二人を説得してくれて大人しくビルから立ち去る事が出来た。）

（恐らく、リーさんと美紀さんは杏子さんが噛まれていた事までは気付いていないと思う。……だけど僕が暗い表情だったのを見て助け船を出してくれた、本当に助かったよ。）

彼は悠里と美紀に改めて感謝した。

（…そして胡桃ちゃんに言われて気付いた、僕はあれから自分の知らぬ間に落ち込んでいたのか。）

彼がそんな事を考えていると不意に胡桃が言った。

胡桃「由紀が心配してる。」

「!」

そう告げられ、彼は驚く。

胡桃「気が付いて無かったんだな。…あいつ、自分も杏子さんが一緒に来れなくて寂しいハズなのに、それよりもお前の心配をしているんだ。…そのせいであいつも少し元気がない、まあ今は美紀があいつが元気になるように上手く頑張ってくれてるけどな。」

彼が視界を川の上流に向けるとそこでは美紀と楽しそうに水遊びをしている由紀の姿があった。

胡桃「な?…美紀って普段はあんなにはしゃぐヤツじゃないんだ。なのに今は由紀を元氣付ける為に、ああやって頑張ってくれてる。」

「ああ…：僕が由紀ちゃんに心配をかけたせいで、美紀さんには迷惑をかけてしまった訳だね。」

胡桃「そういう事だな。…それと、一応言っとくけどさ…。」

「何?..」

胡桃「お前の事を心配してるのは由紀だけじゃない。リーさんも美紀も、それにあたしも…：心配してるんだ。」

胡桃が彼の目を見つめて言った。

「……………」

(そうか…：僕は杏子さんにこの人達を守ると誓ったのに、もうこの人達を苦しめていたのか…。)

(守るっていうのはただ生かしておく事じゃない。あの人の…：杏子さんの好きだったこの人達の笑顔を守るといふ事。…：僕は杏子さんと別れた後でもこの人達がそれを悲しまず、しっかりと笑顔で過ごせるよう努力をするべきなのに…：その僕が一番落ち込んでいたなんて、全く情けない。)

彼は磨いていたナイフをしまい、気合いを入れる為に自らの頬をパツ！と叩くと、立ち上がってまだ横に座っている胡桃に言った。

「胡桃ちゃん、あなた達は僕が必ず守ります、どんな事があっても必ず

！胡桃ちゃん達がずつと笑顔でいられるように！胡桃ちゃん達が笑って暮らせる日常を……」

言ってる途中で止める、なんだか恥ずかしい事を言ってる気がしたのと、胡桃の顔が異様に赤くなっていく事に気付いたから。

胡桃「あ、あ……その………うん。」

胡桃が恥ずかしそうに下を向く。

「……」応言っておくけど…君達だよ？胡桃ちゃん達だよ？…君個人に宛てた言葉じゃないからね？」

素のテンションで言ってる。

胡桃「はあ!?分かってるよそんなの！何？あたしが個人的に言われて照れてると思ったの!?ちげーよ！元氣ないと思っただら急に意味不明な台詞吐いたから聞いてて恥ずかしくなっただよ！」

胡桃が立ち上がって怒鳴る。

「意味不明…確かにそうだね、急に言われても意味分らないよね。」
彼がもつと恥ずかしくない言い回しをすれば良かったと考えていると由紀が駆け寄って来て、彼に言った。

由紀「——くんが胡桃ちゃんにプロポーズした!!」

—— 胡桃「はあ!?!」

思わずシンクロする。

胡桃「何言ってるんだよお前！」

胡桃が由紀に怒鳴る。

由紀「だつて聞こえたよ！——くんが胡桃ちゃんを守るとか、胡桃ちゃんの笑顔を守るとか、子供は3人欲しいとか言ってるの！」
怒鳴る胡桃に動じる事なく、顔を赤く染めながら由紀が言った。

胡桃「達、だよ！胡桃ちゃん」達!!あと最後のは何だ！ただの幻聴じゃねえか！」

言いながら由紀の首を絞める胡桃。

由紀「ううう！ごみんく！やつぱみーくんの言った通りだく、大切な話だから聞こえなかつたフリしなきゃダメだつたんだく！」
首を絞められながら由紀が言う。

胡桃「何!?!」

胡桃が美紀を見る。…そこには耳を自分の手で塞いで、聞いていない…とジェスチャーする美紀がいた。

胡桃「美紀まで!?!違うつてのに!」

悠里「あのく、ああいう話はもう少し人目の無い所を選んだ方が…
聞いちやつた方も気まずいし…。」

悠里が彼に歩み寄りながら言う。

胡桃「りーさんまで!!勘弁してくれよ!!…ほら！お前も違うつて言わないと!」

胡桃が由紀の首を絞めながら彼に言った。

「あのく…。」

彼が言いかけた所で、美紀が駆け寄って来て言った。

美紀「大丈夫、冗談ですよ！」

由紀「ダメだよみーくん！もう少しからかわないと!!」

由紀を絞めていた胡桃の手により一層の力がかかる。

由紀「うぐぐっ！ごみんごみん！」

ようやく胡桃が手を離す。

胡桃「まったく！」

悠里「ごめんね？面白そうだったから悪乗りしちゃったわ。」

謝っているわりに反省の無さそうな笑顔でりーさんが言う。

由紀「面白かった〜！…ねえ、——くん。元気出た？」

由紀が彼を見て言う。

「あ、……うん！元気出たよ、ありがとう皆。心配かけました。」

彼はそう言って皆を見回す。

悠里「良かった！元気になって。」

美紀「ええ、本当に。」

胡桃「男のクセに世話のかかるやつめ。」

由紀「えへへ。」

「由紀ちゃん、ありがとう。」

そう言っつて彼は由紀の頭に手をおいた。

「心配かけてごめんね。あと、恥ずかしいけどもう一度……、皆は僕が絶対に守ります。」

手をおいたまま、由紀の目を真っ直ぐに見つめて彼が言った。

由紀「お……おおう……。」

由紀の顔が赤くなっている。

由紀「分かったよ胡桃ちゃん！これは”達”って付いても何かキウンキウンする!!」

胡桃に向けて由紀が言う。

胡桃「分かったから…別に報告しなくていいって。」

そんな由紀を見て呆れる胡桃。

悠里「ふつつ、守ってくれるのはとても嬉しいけど……さん無理しないでね？」

悠里が優しく彼に言った。

「はい。」

「…それから美紀さん。」

彼が美紀を呼ぶ。

美紀「はい？」

美紀が近付いてくると彼は周り（主に由紀）に聞こえぬように美紀の耳元で囁いた。

「由紀ちゃん元気付けてくれていて、ありがとうございました。…手間かけさせちゃいましたね。」

彼にそう言われると今度は美紀が彼の耳元で囁いた。

美紀「いいえ？私が川で遊びたかったからついでに由紀先輩を誘っただけです。手間なんかじゃありませんよ？でも……………貸し一つにしておきますね。」

美紀はそう言つて耳元から離れると、彼を見て笑った。

(……………本当にいい人達だな。)

悠里「それじゃ、あと30分だけ遊んだら車に戻つて適当な所まで移動して今日は休みましょうか。」

一同「はい！」

美紀「じゃあ由紀先輩、続きといきますか？」

由紀「うん！」

そう言つて美紀と由紀は川に戻る。

悠里「二人とも楽しそうね。」

胡桃「混ざれば良いじゃん？」

悠里「どうしようかしら？」

悠里と胡桃がそんなやり取りをしていると川から由紀が呼ぶ声が聞こえた。

由紀「皆もおいでよ〜！」

由紀が川で手を振りながら言う。

悠里「呼ばれたからには混ざろうかな！」

胡桃「じゃああたしも行こー。」

悠里と胡桃も川に向かおうとする。

悠里「……行きましょ？」

「へ？」

悠里が立ち止まり彼に話しかける。

胡桃「へ？じゃなくて、…皆って由紀が言ってただろ。お前もその”皆”に入ってるんだから。」

胡桃も振り返って彼に言った。

「……うん！分かった！」

彼も一緒に川へ向かう。

(杏子さん…やっぱり僕もこの人達が大好きみたいです。)

(だからこれからは、しっかりこの人達を守ってみせます。)

第二章・しようねん

十五話『日記』

川で遊んだあの日から、2日たった今日。彼らは予備の物資を補充する為に街を探索していた。

しばらく車で探索していると物資のありそうなスーパーを見付けたため、道路に車を停めて全員車外へ出た。

悠里「じゃあ、そっちは任せたわね。」

「はい。リーさん達も気をつけて。」

美紀「では、行きましようか——さん。」

「はい。」

彼らが車を停めた場所は、全国チェーンの大型スーパーと個人経営の小さなスーパーが道路を挟んで向かい合っており。

彼らは同時に二つのスーパーを探索する為に悠里・胡桃・由紀のチームと彼と美紀のチームの二手ふたてに別れる方法を取った。

美紀「…にしても嫌な配置ですよね。」

美紀がこれから探索する小さなスーパーを見て言った。

美紀「このスーパー…個人経営ですよね？すぐ目の前に大型スーパーがあつたら経営が大変そうですが…。」

そう言いながら二つのスーパーを交互に見る。

「確かに大変そうですね、もつとも世の中がゾンビだらけになった以上、どちらのスーパーももう終わりですけど。」

美紀「…それもそうですね。」

そんな会話をしながら二人はスーパーに入っていった。

スーパーの中は入口や窓際に僅かな外の光が射し込んでいる以外は、薄暗く不気味だった。

「暗いですね。…電気がついてないから当たり前なんですけど。」

美紀「あ…ちょっと待って下さいね。」

美紀がそう言っただけで背中に背負ったリュックをおろして、中から懐中電灯を二つ取り出した。

美紀「はい、どうぞ。」

その一つを彼に渡す。

「どうも。」

彼はそれを受け取るとスイッチを入れ、周囲を照らして確認した。

「見たところ奴らはいないようですが…商品棚の後ろの死角とかに潜んでいるかもしれません。小さなスーパーですから慎重に立ち回ってもすぐに終わります、僕が前を歩きますから、ゆっくりいきましよう。」

美紀「分かりました。」

美紀も懐中電灯のスイッチを入れて、彼の後に続いた。

そして半分程探索するが、物資はキレイに取られた後だった。

「ダメだ…全然無い、この調子ではどうやらハズレみたいですわね。」

美紀「ええ、もう誰かに取られた後だったようですね、使えそうな物は何一つ見当たりません。」

二人が落ち込み始めたその時、店内の奥から物音が聞こえた。
ガタンツ!!

美紀「!?今のは?」

「この先から聞こえましたね、行ってみましょう。」

二人が音の聞こえた方へ向かうとそこには一つの扉があった。

「従業員以外立ち入り禁止…この先から聞こえましたよね?」

彼が美紀にそう言っている傍から扉の中でまた『ガタツ…』と物音が聞こえた。

美紀「…はい、間違いありませんこの中ですね。従業員用の休憩室
でしょうか?」

美紀が扉を眺めて言う。

「少し下がって下さい。」

彼は美紀にそう言って、扉のドアノブに手をかけた。

ガチャガチャガチャツ…

「……開かない、鍵が掛かっていますね。」

美紀「そうですか…鍵どこですかね？」

「……もしかしたら壊せるかもしれませんが、やってみます。」
そうやって彼は扉から距離をとった。

美紀「え？扉を壊すんですか!？」

美紀が驚きながら彼に言った。

「はい！そんな丈夫そうな扉ではないので…いけるはず！」
彼が自身たっぷりに答える。確かにその扉はあまり頑丈そうにはみえない木製の物で、かなり年季の入っているのか所々キズが付いていた。

「ほっ!!」

彼が扉にタツクルをくらわすと一発目から目に見えて扉が歪み始めた。

美紀「あ…本当にけっこういけそうですね！次で開きそうですが…
気をつけて下さいね、開いた瞬間に中に奴らが…なんて事にならないように。」

「分かりました！…まあ物音が聞こえた段階で奴らがいる可能性が高いですからね。」

そうやって彼は二発目のタツクルを扉にくらわした。

ドンツ!!

大きな音と同時に扉が壊れ、その中が明らかになる。

「おっとつとー!」

彼がタツクルの勢いで転びそうになるのを美紀が彼の衣服の背中部分を掴んで引き戻す。

美紀「うわっ!……ほら、気を付けて下さいって!」

「すいません、思ったよりあっさり壊れたのでびっくりしました。」

そんなやり取りをしながら、二人は壊れた扉の中へ目を向ける。

その部屋はやはり従業員用の休憩室のようで、小さな部屋にテレビや毛布、机などが置かれていた。

そして更に、ゆらゆらと部屋の中を歩く一体のゾンビがそこにはいなかった。

美紀「——さん!!」

「任せて下さい!」

彼がナイフを手に持ってゾンビに接近する。

ゾンビは彼に噛みつきこうとするが彼はそれを落ち着いてかわしてからゾンビの頭にナイフを突き刺した。

ドサツ…

倒れたゾンビを見て、二人はそれに気付く。

美紀「あ!この人…足を縛ってますね。」

そのゾンビは短距離しか移動が出来ないように片足が頑丈な縄で

傍の机と結ばれていた。

「奴らに噛まれた後にここに立て籠って、発症後もなるべく迷惑がからないように対処したのか……」

彼が倒れたゾンビを見下ろす。かなり皮膚が腐敗していて、顔を見ても男性という事くらいしか分からず、年齢は全く分からなかった。

美紀「——さん、見てください、これ。」

美紀がゾンビの足と縄で繋がっていた机の上を見て言った。

そこには沢山の業務用の書類とみられる物に紛れて、一つの日記が置いてあった。

美紀「……この人が書いた物でしょうか？」

美紀が日記を手に取り、ページをめくり中に目を通す。

「……なんか書いてありますか？」

美紀「……はい、やはりこれはこの人が書いた物みたいです。」

美紀が日記を手に倒れたゾンビを見る。

美紀「日付を見ると……この人は三週間前に噛まれたみたいです。」

そう言つて美紀はその日記の内容を彼に読み聞かせた。

『×月×日　しくじった……例の少年を探し向かう途中でゾンビ共の群れに出くわしちまった！生きて逃げ切る事は出来たけど、何カ所か噛まれた……噛まれたらどうなるかは分かっている　これじゃ死んだも同然、自殺する勇気は無いが……せめて他人に迷惑はかけないようにこの部屋に閉じ籠もって更に足を縄で縛っておく事にした。』

『もしこの日記を読んでいる人間がいるなら、あんたは俺を殺したんだろう。…だけど悪く思う事はない、その時俺はもう俺ではないんだから。』

美紀「……………」

美紀は日記を閉じるとそれを机に戻した。

「迷惑をかけないように…か、中々出来た人間だったんですねこの人は。」

美紀「そうですね…優しい人だったんでしょう。自分を処理した人に対してもフォローをしてくれていますし。」

「…安らかに眠って下さいね。」

彼はそう言うと、近くにあった毛布をその死体に被せた。

美紀「…ところで——さん、この日記にある例の少年ってなんでしようか？」

美紀が彼に尋ねる。

「分かりません…どこかに関連のありそうな物は無いでしょうか？」
そうやって彼は美紀とその部屋を調べた。

「仕事の書類ばかりだなあ…。」

美紀「日記にはさっきのしか書いてないですし……………」

彼が机の引き出しを開ける。

「…あー…これみたいですな。」

彼が机の中から一枚の地図を引っ張り出す。それにはいくつかの

付箋ふせんが貼られていた。

美紀「地図に付箋が貼ってありますね…。」

美紀が横から地図を覗きこむ。

「はい、どうやら付箋はその場所で起きた事を記しているみたいで
す。」

「さっきの少年は…これですね…『このアパートで少年らしき影を
見かける』って書いた付箋が貼ってあります。」

彼が一つの付箋を指差して言った。

美紀「このスーパ―はここですね、付箋が貼ってあります。…って
事は…車ならわりとすぐに行けますね。」

美紀がスーパ―を示す付箋から少年を見かけたアパートの付箋ま
でを指でなぞって言った。

「行きますか?」

美紀「とりあえずはリーさんに相談しましょう。」

「そうですね。…じゃあもう出ましょう、物資は無いようです。あ
…これしまってもらって良いですか?」

美紀「はい、どうぞ。」

そう言って美紀は彼に背を向け、リュックを彼に近付ける。

彼は美紀のそのリュックに地図を入れた。

美紀「しまいましたね?じゃあ出ましょう。」

「はっ。」

こうして二人は地図だけを手に入れ、スーパーを後にした。

????????????

美紀「結局、役立ちそうなのはこの付箋が貼られた地図しか見付けられなかったですね。」

車内に戻り、荷物を置いて椅子に座ってから美紀が言った。

「そうですね、思ったよりもずっと早く帰ってきてしまいましたね、りーさん達もまだ戻ってませんし…少し他の付箋も見てみましょうか。」

美紀「ですね。」

美紀が地図テーブルに広げると、彼も椅子に座り地図を眺める。

付箋は全部で五つ貼られていた。

先程のスーパーの位置に『スーパー』と書かれた付箋。

少し離れた所に『このアパートで少年らしき影を見かける』と書かれた付箋。

そして離れた別々の位置に二つ、どちらも『もう物資が無かった』と書かれた付箋。

そして最後、これも離れた位置に『注意！悪魔を見かけた！近付く

な!』と書かれた付箋。

「……悪魔?」

彼が五つ目の付箋を見て首を傾^{かし}げる。

美紀「奴らの事ではないでしょうか?」

美紀が彼に言う。

「うーん……でも奴らはこの付箋が貼られた場所じゃなくてもどこでも見かけますよ?」

美紀「確かにそうですね……じゃあ群れがいたとか?」

「んー、どうでしょうね……。」

悠里「なんの話?」

車の扉が開き、車内に入ってきた悠里が言った。

美紀「あ……お帰りなさい。……実は……」

美紀は悠里達に地図の事を話した。

悠里「……なるほど、じゃあもしかしたらこの場所に向かえばこの少年に会えるかもしれないって事ね。」

由紀「ねえ胡桃ちゃん!少年って何歳くらいの人?」

胡桃「少年としか書いてねーから分からないよ。小さな子供だって少年っていうし、こいつだって少年の部類に入るし。」

胡桃が彼を指さして言う。

「こいつ呼ばわりは冷たいな、まったく…出会って間もないあの頃、僕を——さんって呼んでいた可愛い胡桃ちゃんは何処に行ったのか…。」

彼がため息をついて言った。

胡桃「後からお前はさん呼びしてやるようなタイプのヤツじゃないって気付いたんだよ！同い年だったし……ってかお前もあたし達……ってかあたしに対する扱いが変わってるだろ!!」

悠里「多分慣れてきたのよ、皆で過ごす事にね。…違う？」

悠里が彼に尋ねる。

すると彼はほんの少しだけ間を開け、笑顔で答えた。

「そうですね、かなり慣れてきました」

胡桃「…だったら良いけどさあ…。で、その少年の所に行くの？」

胡桃が悠里に尋ねる。

悠里「ええ、さすがに少年一人は放っておけないでしょ？…ただ美紀さんが言ってた日記の人の言ってたとおりならこの少年をその人が見かけたのは三週間以上前…まだ無事だと良いのだけど。」

由紀「きつと大丈夫だよ、行こうりーさん！新入部員を探しに!!」

由紀が元気いっぱい言う。

悠里「ええ、車ならそう遠くはないわね……今から向かいましょうか。」

そう言って悠里は運転席に座り、車を走らせた。

「……時に由紀ちゃん、そちらは何か物資見つけた？」

彼が目の前に座った由紀に尋ねる。

由紀「ちよつとだけ食料とあとは電池とか見付けたよ！」

胡桃「そつちは？」

由紀の隣に座った胡桃が尋ね返す。

「……美紀さん。」

彼がその問いを美紀に投げる。

美紀「……。」ペラペラ

美紀が無言で地図を手に取り、そして振る。

胡桃「……つまりその地図だけか？」

そんな美紀を見て胡桃が言う。

「……まあ、そうですね。」

美紀「けどこの地図のおかげでこれから生存者を見付ける事が出来るかも知れないですよ？」

胡桃「まあそうか……ま！物資の見付からない事なんて日常茶飯事だからな。気にすんな。」

地図を美紀から受け取りながら胡桃が言った。

由紀「私も見るく！……今から行くのここ？」

胡桃が開いた地図を横から覗きこみ、一つの付箋を指さして由紀が尋ねた。

胡桃 「ああ、このアパートだな。」

由紀 「ふくん…少年君、いるといいね！」

胡桃 「少年君って…、またコイツは安易な呼び名を。」

胡桃 は由紀に呆れながら地図を見続けた。

胡桃 「……ん？なあ、この悪魔を見かけたってのは何？」

美紀 「ああ、それですか？私達も分からないんです。」

「なんにせよ、近付くなど書いてある以上は一応近寄らないようにしようか。」

胡桃 「…そだな。」

そう言つて胡桃は地図をテーブルに置いた。

『悪魔を見かけた…近付くな』

その付箋は『ビット』という製菓会社の工場に貼られていた。

十六話『少年』

スーパーで見つけた地図から、生存者らしき情報を得た彼女達は、地図の元の持ち主によって少年を見かけたと記されたアパートに向かっていた。

胡桃「…あ！あのアパートだな。」

助手席の胡桃が外に見えるアパートを指さして言った。

悠里「みたいね、地図に書いてあるその人…まだ無事だと良いけど。」

悠里はそう言いながら車をアパートへと走らせ、その目の前の駐車場に車を停めた。

「…先に降りてますね。」

外に出る為の装備の準備をしている悠里達にそう告げて彼はいち早く車を降りて外に出た。

外に出た彼はアパートとその周囲を確認した。

（アパートの外は何体か奴らが徘徊してるな…けれど数はそこまで多くはない、僕と胡桃ちゃんがいれば余裕で突破出来るだろう。）

（ただアパートの中が問題だな…このアパート、5階建てで…見たところ一つの階に部屋が約10室くらいか。全部で約50部屋…これをしらみ潰しに探さないとならないと…難関だな。）

そんな事を考えながら頭を抱えていると、悠里達も準備を終えて車から降りてくる。

由紀「ダメだよ——くん！先に行っちゃー！」

由紀が怒る。

「ああすいません。…少し安全確認をしてただけですよ。」

美紀「ちらほら奴らがいますね…。」

美紀がアパートの外を見て言う。

悠里「そうね…あのくらいの数なら、走れば問題無く中に入れそうだけど…。」

「いえ、アパートの中まで追いかけられたら面倒です。開けた屋外の方が楽に処理出来るので、そうしても良いですか？」

彼が悠里に尋ねる。

悠里「うーん…分かったわ。胡桃も手伝ってあげて。」

胡桃「はいよー！」

彼と胡桃はそれぞれナイフとシャベルを構えてアパートの外を徘徊する奴らを仕留めていった。

約4分後、二人で外を徘徊する奴ら、全部で12体を倒した。

胡桃「どうだ？もういないよな？」

最後の1体とみられる奴を倒して、胡桃が言った。

「多分それで最後だと、あとはアパートの中ですね。」

胡桃「そつか、とりあえずはお疲れさん。」

胡桃が彼に言う。

「はい、お疲れさま。」

悠里「二人共お疲れ。じゃあ中に入りましょうか。」

胡桃を先頭に、全員入り口からアパートの中へ入る。

中へ入るとそこは全部屋分の郵便受けとエレベーターのある広いフロアだった。

由紀「で…どこいく?」

由紀が大量の郵便受けを眺めながら言う。

「そこが問題なんだよなあ…あの地図にはアパートのどの部屋とまでは書いて無かった。もしかしたらその少年もその時たまたまこのアパートに立ち寄っただけで、もういないって可能性も十分あり得る。」

美紀「けどいる可能性がある以上は探した方がいいですよね?」

悠里「ええそうね、一部屋ずつ調べていきましようか?」

胡桃「うげえ、さすがにそれは面倒だな。」

胡桃が嫌そうな顔で言う。

「…確かに、全ての部屋をまわるのは時間もかかりますし…奴らがいる部屋もあると思います。…となるとその方法はちよつと危険ですね。」

美紀「…ではどうしますか?」

由紀「外から大声で呼ぶ？」

胡桃「それも良いけどさ、絶対奴らも寄ってくるよなあ。」

悠里「……さんはどちらが良いと思う？」

悠里が彼に尋ねる。

「……うしましょう、車のエンジンをかけていつでも動けるようにしてからその少年を大声で呼び、返事も返ってこずに奴らだけが集まってきたら大急ぎで逃げる。」

「もし返事が聞こえたら僕が助けに行くのでリーさん達は車で待機していて下さい。」

胡桃「あたしは？」

胡桃が尋ねる。

「胡桃ちゃんは僕がその少年を助けに行っている間、皆と車を守っていてもらえるかな？」

胡桃「分かった。」

美紀「なんにしても、一度車まで戻りますか。」
準備を始めるため、彼女達はアパートを出て車に戻る。

車に戻ると、悠里がエンジンをかけて彼に合図する。
悠里「準備は出来たわ！呼んでみて！」

「分かりました。」

車外で待機していた彼は悠里のその言葉を聞いた後、アパートの方に向けて大声で叫んだ。

「おーい!!誰かいますかー!!!」

すると暫くした後、アパート3階のベランダから男が顔を出し、叫んだ。

男「ここだー!来てくれ!」

男がそう言った後、それを確認して彼は再びアパートの中へ向かった。

胡桃「気を付けろよ!」

胡桃が彼の後ろ姿に声をかける。

「大丈夫!分かってるよ、皆も気を付けて!」

彼は一瞬だけ振り返って皆にそう言った。

(…さて、3階か…少しだけ遠いな、奴らが声に反応して寄ってくる前に戻らないとな。)

彼はアパートの中に入り、エレベーターの横に階段を見つけるとそれを一気に駆け上がった。

そして3階に上がると先程男が顔を出していた部屋へ向かう…するとその部屋の扉の前には1体のゾンビがいて、うめき声をあげながら扉をバンバン!と叩いていた。

(やっぱりアパートの中にもいたか!さっきの男の声に反応してきたみ

たいだな。」

扉の中からは先程の男の助けを求める声が聞こえる、どうやらゾンビのせいで外に出れずにいるようだ。

彼はナイフを抜き、扉に気をとられている隙にゾンビの頭を一突きして仕留める。

「もう開けていいですよ。」

ゾンビが動かなくなつたのを確認して、扉の中の男に声をかける。

すると扉がガチャリと音をたてて開き、中から男が現れる。

男は細い目付きと少し長めの髪をして黒色のシャツとジーンズを身に付けた微妙に冴えない少年だった、恐らくは彼と同一年くらいだろう。

少年「あんたが助けてくれたの？」

少年が彼に尋ねる。

「そうだけどとりあえずは早く逃げるぞ！外に仲間を待たせてる！」
彼は少年にそう告げて足早に駆ける。

少年「おい！待ってくれって！」

少年はそんな彼を追いかける。

(微妙に苦手なタイプが出てきたな…反射的にタメ口になってしまった。)

彼はそんな事を考えながら、少年を連れて悠里達の元へ急いだ。

アパートから出ると、既に数体の奴らが集まっていた。

胡桃「いたか!?!なら急げ！」

胡桃が近付こうとするゾンビの頭をシャベルで叩きながら言った。

少年「おいおい…凄いやないか…。」
集まった奴らを見て少年が怯む。

「この程度の数なら問題ないから、しっかりと僕の後ろについてきて下さいよ！」

彼はそう少年に言ってナイフを構えると、車への道を塞ぐ邪魔な奴らを数体倒して道を作った。

「良し…いける、走れ！」

道を確認してから彼は少年に言う。

少年は彼のその言葉通りに走り、車内に駆け込む。

胡桃「入ったな!？」

「うん！」

外の彼と胡桃は少年が車に乗ったのを確認してから車に乗り込んだ。
だ。

胡桃「いいぞりーさん!!」

車内に入った胡桃が、運転席の悠里に合図する。

その合図を受けて悠里は車を走らせた。

車は奴らの隙間を上手く縫って抜け出し、無事危険区域から出てくることが出来た。

少年「助かった〜!まさか他の生存者に会えるなんて!」
溜め息混じりに少年が言った。

悠里「…あれ？あなた穂村君!？」

運転席の悠里がバックミラー越しに言った。

少年「あれ!？若狭さんじゃん!」

少年が言った。

胡桃「ん？知り合い?」

胡桃が尋ねる。

悠里「え、ええ…以前私のクラスに転校してきた穂村空彦君よ。」
ほむらそらひこ

胡桃「ああ、転校生か…だからあたしは知らなかったのか。」

胡桃が空彦を見て言う。

空彦「若狭さんも生き残ってたんだ…あれ？丈槍ちゃんもいるじゃん!」

空彦が由紀を見て言った。

胡桃「え？由紀も知り合いなの?」

由紀「ん〜?ごめん、分からないや。…喋った事とかあったっけ?」

由紀が空彦に尋ねる。

空彦「いや、話すのは今日が始めてだけど…丈槍さんちよつとした
有名人だったから、一方的に知ってたんだ。」

胡桃「ん〜?由紀ってそんな有名だったっけ?あたしは知らなかったけど。」

空彦「ああ、有名だったよ……ところであなたは誰？」
空彦が胡桃に言う。

由紀「ぷぷー！胡桃ちゃんは有名人じゃ無かったみたいだね！」
有名人と言われてはしゃいだ由紀が胡桃を挑発する。

胡桃「ほつとけよ！……あたしは恵飛須沢胡桃、あんたと同じ高校の
3年だよ。クラスは違ったけどな。」

胡桃が自己紹介する。

空彦「ふーん、よろしく。」

愛想無く空彦が言う。それを見た彼は、胡桃が少しムツとしたのに
気付いた。

(多分胡桃ちゃんもこいつの事苦手だな……)
彼がそんな事を考える。

美紀「直樹美紀です。私も空彦さんと同じ高校の2年です。」
美紀も自己紹介する。

空彦「2年なんだ？後輩じゃん！よろしく美紀！」
馴れ馴れしく空彦が美紀の肩を叩きながら言う。すると美紀も胡
桃と同じく、少しムツとした。

(……美紀さんも苦手なんだな。となると最後は由紀ちゃんだけど
……)

由紀「えっと、丈槍由紀です！よろしくね空彦君！」

空彦「よろしくー！」

そう言つて空彦は由紀に握手を求めた。勿論由紀はそれに応えて握手した。

(まあ由紀ちゃんは大丈夫そうだな。…この人に苦手な人種は存在しないのかな?…つてか空彦も由紀ちゃんとだけ握手するのか。)

彼がそんな事を考えていると、握手を終えた空彦が悠里に改めて挨拶する。

空彦「若狭さんもよろしく!」

空彦が運転中の悠里に声をかける。

悠里「…あ、うん!よろしくね。」

悠里がそれに返事を返す。

(こりゃあ反応をみるに、リーさんもこいつが苦手なんだな。)

空彦「…で、あんたは?」

空彦が彼に尋ねる。

「…は?」

一瞬何の事か理解出来ずに彼がそう返事を返す。

空彦「は?じゃなくて…名前だよ名前!…つてかあんたも巡ヶ丘高校の生徒なの?」

空彦が彼に言う。

「違う、僕は他の高校の3年だ。名前は――。」

彼が空彦に目も合わせずに適当に自己紹介する。

空彦「ふーん…なんか態度悪いね。」

空彦が呟く。

「……………」イラッ

「悪かった、…よろしく。」

彼はそう言つて愛想笑いを浮かべながら、空彦に握手を求めた。

空彦「まあよろしく。」

空彦は握手はせずにそのまま椅子に座った。

「……………」イラッ

彼は苛立ちを抑えながら空彦とは逆方向の椅子に座り、テーブルに顔を伏せた。

(……………一応僕は命の恩人なんだが?)

美紀「落ち着いて下さいね?」

そんな彼の向かいに美紀が座り、耳元で呟いた。

「ええ…必死に我慢してます。…アイツ、今まで会ったことないタイプの嫌な生存者です。」

彼も小声でふてくされながら言った。

美紀「…分かります。私も苦手です…多分胡桃先輩も…。」

美紀が助手席に座った胡桃を見て言った。

「でしようね、胡桃ちゃん、自己紹介の時かなりイラッとしてましたもん。美紀さんですけど…。」

美紀「あの人…なんか馴れ馴れしいんですよ!いきなり肩とか叩く

し、握手も由紀先輩としかしてないですしね。」

「僕なんか手を出したのに無視されたよ。」

美紀「されてましたね……ところで由紀先輩は本当にどんな人にも優しいですね。」

彼らとは反対方向の椅子に座り、空彦と向かい合って会話している由紀をみて美紀が言った。

「……まさかだけどさ、アイツもこれから一緒に暮らすの?」
彼が美紀にそう尋ねる。

美紀「分かりませんが、ただ助けてしまった以上は空彦さんにその気があればそうなるかも……。」
美紀が嫌そうな顔で言う。

「降りるって言うてくれないかな……悪いけどさ。」
彼がそう呟く。……その時。

空彦「若狭さん!俺もここに住んでも良いですか??」
空彦が悠里に尋ねる。

悠里「えっと……そうね……。」

(断れ!)

美紀(断って!)

胡桃「断れ。」ボソツ

由紀「えく？別に良いよねりーさん？」

由紀が言った。

——・美紀・胡桃（余計な事を!!）

悠里「まあ…そうね？構わないわよ？…どうしてもならだけど。」
悠里が歯切れ悪く言う。

空彦「マジ!?やった!」

空彦が喜ぶ。

「…チッ!」

美紀「……。」

彼と美紀が頭を抱える。

チラツと彼が助手席に目をやると胡桃も頭を抱えていた。

「助けなきや良かった。」ボソツ

美紀「まあそう言わずに…頑張って慣れましょ?」

美紀が彼を慰める。

「…美紀さん、僕とアイツ…付き合うならどっちが良いですか?」

彼がテーブルに顔を伏せたまま美紀に尋ねる。

美紀「え!?!…あの誤解はしないで欲しいですけど…さすがにダントツで——さんです。」

美紀が顔を赤くしながら彼に囁く。

「…ありがとうございます。…まあ相手がアレじゃ当たり前な気もしますけど…とりあえずは元気が出ました。」

美紀「はあ…良かったです。」

そんな訳で新たなメンバーを乗せて走り出す車。

だがその車中の一部の空気は、とても重苦しかった。

(本当に助けなきや良かったなあ…。)

十七話『生きていれば』

新たなメンバー「穂村空彦」を加え、街を車で移動する彼女達。

「……………」。

美紀「……………」。

宛もなく移動する車の中、彼と美紀は横の席で会話している由紀と空彦を見ていた。

由紀「…でね、そこで始めてみーくと会ったの！」

空彦相手に楽しそうに会話する由紀。

空彦「へえ、じゃあ美紀は俺と同じでずっと一人で過ごしてたんだ？そのショツピングモールで。」

由紀の話を聞いて、空彦が美紀に言った。

美紀「いや…ずっと一人だった訳じゃ…。」

美紀が口ごもる。

空彦「何？誰か他の生存者と一緒だったの？」

美紀「いえ…由紀先輩達と会った時は私一人でした。」

空彦「会った時はって…じゃあその前までは誰かといいたの？」
しつこく質問する空彦。

美紀「…あの…えっと…。」

答え辛そうにする美紀。

(………鬱陶うつとうしいヤツだな。)

美紀を質問責めにし、辛そうな顔をさせる空彦に彼は嫌悪感を抱く。

(あ…、あれは…。)

その時、窓の外の建物を見て彼は運転中の悠里に声を掛ける。

「すみませんリーさん、少し停めてもらって良いですか?」

悠里「ええ、良いわよ。どうかした?」

車をその場に停めて悠里が彼に言う。

「そこに本屋があったので、少し暇潰し用の本探してきても良いですかね?」

悠里「うん、かまわないわよ。じゃあ私はその間地図の確認でもしておくわ。…胡桃は?」

悠里が助手席の胡桃に尋ねる。

胡桃「うくんどうしようかな…、由紀は?」

胡桃は悩んでいるようで、由紀へ会話を繋ぐ。

由紀「行く〜!マンガ探す!」

即答する由紀。

空彦「俺はいかない、アイツらがいそうで怖いし…丈檜さんも危ないから一緒にいようぜ!」

席を立った由紀を引き留める空彦。

由紀「え?…くん、一緒に行っちゃダメかな?」

由紀が困った顔で彼に言う。

「もちろん良いですよ。傍を離れないようにして下さいね？」
彼が笑顔で答える。

由紀「えへへ…うん！分かった！」

由紀もそれに笑顔で答える。

空彦「危なくないかなあ…本当にキミ一人で大丈夫なの？」

挑発的な口調で空彦が彼に言う。

「……………」イラッ

胡桃「大丈夫大丈夫。そいつ、今までずっと一人で奴らと戦って生き延びてきたんだから…お前もそうだろう？」

胡桃が空彦に尋ねる。

空彦「俺はアイツらとは戦った事は殆ど無い。…動き遅いんだから、無駄に戦う必要ないし。」

空彦が彼を見ながら言う。

(なんだ、その目は…僕が無駄に奴らと戦っているとでも言うのか?)
彼が心の声を口に出そうとした時、胡桃が空彦に言った。

胡桃「まあ確かに動きは遅いけどさ、囲まれたりとか道を塞がれたりして戦いを避けられなかった事とか無いの？」

空彦「…え？無いけど。」

胡桃「へえ…運の良いヤツだな、あんた。」

胡桃はそう言っつて空彦との会話を終える。

胡桃「あ……、あたしも車に残るからなんか面白そうな本あったらお土産に持ってきてくれ。」

胡桃が彼を見て言う。

「了解。」

由紀「じゃあ行く?」

「あ……ちよつと待って下さいね。」

外に出ようとする由紀を待たせて、彼は美紀に言う。

「美紀さんも行きましょう?」

美紀「あ……はい!」

嬉しそうに返事をする美紀。

「それじゃあ、ちよつと見てきますね〜!」

彼は悠里達にそう言うのと美紀達を連れ車を降り、近くの書店に入る。

その書店は2階建てで平均的な書店よりも少し広く、1階に本、2階にDVDなどを置いているようだった。

美紀「思っていたより広いですね。」

美紀が書店の中を見回して言う。

「それじゃあ安全確認をするので、少しだけ待っていて下さい。」
彼が由紀と美紀の二人に言う。

由紀「うん、ラジャー！」

美紀「気を付けて下さいね。」

二人に見送られながら、彼は書店の1階部分をぐるりと一周して、二人の待つ場に戻る。

「お待たせしました、1階はどうやら安全なようですから好きに見て良いですよ。けれど念のためあまり僕から離れないで下さいね。」

彼が探索から戻って二人に言う。

由紀「わくわく！マンガみてこよ〜！」

そう言つて漫画コーナーに向かう由紀。

「…さて、僕も探すかな。…美紀さんは？」

美紀「私は小説見えてきて良いですか？」

美紀が彼に尋ねる。

「小説コーナーは…漫画コーナーのすぐ近くか、はい！問題ありませんよ。」

彼は小説コーナーの位置を目視で確認してから美紀に言う。

美紀「ありがとうございます！じゃあ少し行ってきますね！」

そう言つて嬉しそうに美紀は小説コーナーに向かった。

(嬉しそうだったな…小説とか好きなのかな?)

そんな事を思いながら彼は漫画コーナーに向かった。

その途中、一つの本が目に入る。

(これは!?…素晴らしい、胡桃ちゃんへの手土産にしよう。)

彼はその本を手に取り、改めて漫画コーナーに向かう。

彼が漫画コーナーに着くと既に由紀は数冊の漫画を抱えていた。

「はやっ!!もうそんなに選んだんですか!?!」

そんな由紀を見て驚く彼。

由紀「えへ、面白そうな本沢山あつて。」

漫画を抱えて笑う由紀。

「それは良かったです。」

そう言つて彼も本を選び始める。

(ん?…なんだこれ?)

彼は巨大な目玉のようなキャラクターが表紙に描かれた漫画本を手に取る。

由紀「おおっ!!ダリオマンを選ぶとは!——くん良いセンスしてるね!」

由紀が目を輝かせて言う。

「ダリオマン?…これ?」

彼が表紙のキャラを指さして言う。

由紀「それは違うよ!それは目玉壊すマン!ダリオマンの敵だよ!……けど敵といっても実は目玉壊すマンにも色々な訳があつて…」
語りだした由紀を尻目に彼はそつとダリオマンを置く。

由紀「見ないの!!?」

由紀が予想外だとしても言いたげな表情で彼をみる。

「表紙が面白かったから手に取っただけで、別にそこまで興味は……。」

由紀「なツ……!!」ガーン

「……ごめんごめん、また今度見てみます！今回は保留という事で……。落ち込む由紀を見て彼はそうなだめた。

「というか、由紀ちゃんはこれ持ってかないの？」

彼がダリオマンを今一度手に取り、由紀に尋ねる。

由紀「私はもう最新刊まで読破しちゃったから。……また——くんが読み始めたらその時一緒に読み直して良い？」

「もちろん、では次回どこかの書店に寄るまでのお楽しみにしときますか……このダリオマン結構間あいだが抜けてますし……。」

飛び飛びの巻が並ぶダリオマンを見て彼が言う。

由紀「そうだね！……問題は次の最新刊はいつでるのか……。」

由紀が不意に言う。

「次？……ああそうか!!」

その言葉で、彼は重大な事実に気付く。

(漫画の事、全然考えてなかった!!世界がこんなになっていたら続刊なんて出ないじゃないか!!)

(いや……この世界が平和になればあるいは……。しかしそれもその時

まで作者さんが無事なのが条件…！)

(……………ショックだ。)

「漫画家のみなさん……………どうかご無事で……………」ボソツ

由紀「ん？なんか言った？」

「……………いいえ、……………ところで由紀ちゃん。もう完結している漫画でおすすめってあります？」

由紀「あ！それならね……………」

彼はその後、由紀おすすめの本を数冊手に入れ、美紀の様子を確認に向かった。

「……………良いのありました？」

本を立ち読みしている美紀に彼が後ろから声を掛ける。

美紀「あ……………はい！いくつか面白そうな本を選びました。」

そう言う美紀の足元をよく見ると、6冊の本が置かれていた。

「全部小説ですか？」

屈んでそれらを眺めながら彼が尋ねる。

美紀「はい。私、本とか…主に小説ですが、わりと好きなんです！」
手に持っていた本をその6冊の上に重ねて、美紀が言う。

「それは良かった。」

美紀「——さんは？」

彼が手に持つ本を見ながら美紀が尋ねる。

「ああ…由紀ちゃんおすすめの漫画をいくつか。」

美紀「先輩のおすすめですか。——さん自体が探してる漫画とか無かったんですか？」

「んー。探してるのとかは特に無かったんですよ、ただ暇潰し探してただけで。」

彼が手に持った漫画を見ながら言った。

美紀「あの…もしかして気を使わせてくれたんですか？」

美紀が彼に言う。

「…どういう事ですか？」

美紀「私が空彦さんにしつこく質問されてたから…——さん、気を使って私を本屋に誘って無理矢理会話を終わらせてくれたのかと…違いますか？」

「…以前の借りはこれで返した事にして良いですか？」
彼がそう言つて笑う。

美紀「…あははっ！ええ、それで構いませんよ？あれは本当に助
かった…ありがとうございました。」

美紀が軽く頭を下げる。

「いえいえ。」

美紀「…私、先輩達と会う少し前までは…友達と一緒にそこに暮ら
していたんです。」

頭を上げた美紀が言う。

「……そうでしたか。」

美紀「空彦さんには言いたくありませんでしたけど、——さんにな
ら話せます。その友達…圭って言うんですが、先輩達と会う数日前に
一人で外に出ていってしまつたんです。ただ閉じ籠つて生きていく
なんて嫌だつて…。」

「……。」

美紀「私は外に出るのが怖くて、圭を追えませんでした。…そんな
私に圭は言つたんです『生きていればそれでいいの？』って。」

「……。」

美紀「その通りですよね。…いくらこんな世界だからって、ただ生
き延びるだけではそれはただ辛いだけなんです。だから私は先輩達
の声が聞こえた時、怖さを押し殺して外に飛び出しました、…そして

それがあつたから、私は先輩達の仲間入りを果たす事が出来ました。」

美紀「あの時、本当に先輩達を追って良かったと…心からそう思っています。先輩達と出会えたおかげで私は、圭に胸を張って生きていて良かったと言える日常を手に入れたんです。」

「……………その圭って子は、今どこにいるんでしょうね…。」
彼が言う。

美紀「……………私達が暮らしていた学校を卒業して出ていった時、見かけました…。」

「無事だったんですか？」

美紀「いえ……………もう既に……………。けれど、もしかしたら似ていただけで別人かも知れません！はつきり見た訳ではないので！」

美紀がそう言って笑う。彼にはその笑顔は強がっているように見えた。

「そうですか……………無事だと良いですね！」

彼が美紀に笑顔で言う。

美紀「……………はい！そう祈ってます！」

彼の笑顔に答えた美紀の笑顔は、先程までの笑顔より明るい物になっていた。

「…にしても生きていればそれでいいのかっていうのは、なるほど心に響く言葉ですね。…僕も今なら分かる気がします。」

美紀「……………さんはずっと一人で生き延びていたんですもんね。」

「はい、あの時は何とも思っていなかったけど…ふとあの日々を思い返すと酷くつまらない毎日だったなと思いますよ。」

「けれど僕も美紀さんと同じように、皆と出会ってこうして楽しい日常を手に入れた…あの日あのデパートに行って良かったと…そう思います。」

彼は一人で過ごしてきた日々を思い返しながら言う。

(本当に…むなしい毎日だったなあ…。)

「あなた達のような人に会えて、本当に良かったです。」
彼は美紀を見つめて言った。

美紀「ふふっ…なんか照れますよ?」

美紀が笑いながら言った。

「あはは、すみません。…じゃあ由紀ちゃん呼んで戻りましょうか。」
彼はそう言っつて由紀を呼ぶ。

美紀「私も——さんに会えて、良かったと思ってますよ。」
由紀を呼ぶ彼の後ろで美紀がそう呟く。

「…ありがとうございます。」

彼が振り返る。

美紀「…聞こえてたんですね。」

美紀はそう言つて、微笑んだ。

十八話 『悠里と少年』

書店に立ち寄った彼等が車に戻ってから少しの距離移動し、安全そうな場所に悠里が車を停めてそこを本日の宿泊地点と決める。

物語はその日の夜：食事を済ませ就寝の準備を始めたところから始まる。

胡桃 「んじや着替えるからさ、空彦連れて外に出ててよ。」

胡桃が彼に頼む。

「ああ、そうだね。分かった。」

彼はそう言っつて空彦に声をかける。

「あゝ、空彦君。今から女性陣は皆着替えるから外に出よう。」

空彦 「ん？ああ：分かったよ。」

彼は空彦を連れて車外に出る。

今回車を停めた場所は河川敷に建てられた元はサッカーグラウンドなどとして使われていたであろう広場だった。

空彦 「夜は冷えるなく！川が近いと余計に寒く感じるよ！」

空彦が震えながら言った。

「…そうだね。」

空彦「あの人達、いつもどんくらいで着替え終わるの？」

「5分かかるかからないかくらいだよ。すぐに終わる。」
彼が川を眺めながら言う。

空彦「へえ…てかき、こんな化け物だらけの世の中なのに、たかだか着替えくらいで外に出ろって酷いと思わない？」

空彦が彼に同意を求めぬ。

「女の人なんだから当然だろ。…それにリーさんは毎回なるべく奴らのいない場所を選んで車を停めている、少しくらい外に出ている問題は無いらが一奴らがいなくても僕なら戦える。」

空彦「あつそう。」

空彦が適当な返事を返す。

「……………」

(移動中に聞いた話では空彦は奴らとは極力戦わず、逃げて過ごしていたらしい。確かに奴らは動きが遅いから数体なら走って逃げる事は可能だが…空彦は一人で物資の確保に向かった事もあるそうだ。)

(そんな時に奴らの群れに出くわしたら、少し走ったくらいでは到底逃げ切れない。…ということ、空彦は今までそうだった群れに出くわしてこなかったって事だ。…コイツがこの世界で生き残ってこれたのは、完全に運が良かっただけだな。)

胡桃「おい！もう良いぞ〜！」

車の窓から胡桃が顔を出して言う。

「了解、ほら…もどるぞ。」

空彦「ああ。」

彼と空彦が車中に戻ると彼女達はパジャマ姿になっていた。

空彦「そう言えばあんたは着替えないの？」

空彦が彼に尋ねる。

「いや…あまり着替え持つてないから基本的に寝るときは上着だけ脱ぐだけだね…。空彦は？」

空彦「俺そもそも急いで来たから着替えどころか荷物一つ持つてきてないし…：…なんか適当な服貸してよ。」

空彦が彼に言う。

「言ったでしょう？着替えはほとんど持つてないし、その数少ない服も外出用ばかりだからパジャマ代わりになるような着心地の良いものは一つも無い。我慢しろ。」

空彦「あゝ、…仕方ないか。…で、俺はどこで寝るの？」

「その椅子が空いてるからそこだね。」

彼がいつもの椅子に座り眠る準備をしながらもう一方にある椅子を指さす。

空彦「マジかよ…まったく…。」

不満そうに椅子に座る空彦。

胡桃「んじゃあ、おやすみ！」

美紀「おやすみなさい。」

由紀「おやすみ〜！」

悠里「おやすみなさい。」

彼女達が椅子に座った二人に挨拶していき、それぞれのベッドへ向かった。

空彦「俺もベッドが良かったなあ…。」

「だったらあのアパートに戻るか？送るぞ。」

空彦「そりゃ勘弁だ。」

「…だろうね。」

そんな会話をしながら二人も眠りにつく。

因みに彼は空彦が眠りにつくまでこっそりと見張っていた、空彦の事を今一つ信用していなかったから。

朝になり彼らは胡桃に起こされた。

皆で軽い朝食を済ませた後、彼と美紀、悠里の三人で近くの川に洗い物に出ていた。

美紀「あ、——さんそのフォーク取って下さい。」
美紀が地面に落としてしまったフォークを指さして彼に言った。

「はい。」
彼はそれを拾い美紀に渡す。

美紀「ありがとうございます、……ところでりーさん、昨夜はすぐ寝れましたか？」

美紀が食器類を洗いながら悠里に尋ねる。

悠里「んー、いつもよりは落ち着かなかったけど……大丈夫よ。」

美紀と同じく、洗い物をしながら悠里が言う。

美紀「私は中々眠れなかったです……——さんは平気なんですけど、空彦さんがいるとなんか落ち着きません。」

「大丈夫ですよ、僕あいつが眠るまで見張ってましたから。」

彼が洗い物をする二人の周囲を警戒しながら言う。

美紀「そうだったんですか？お疲れさまです。」

悠里「彼、仲間に加えたのは良いけどあまり信用されてないわね……。」

美紀「なんか嫌な雰囲気か漂ってるんですあの人……。ってすいません！りーさんのクラスメイトなのに。」

美紀が申し訳なさそうに悠里にあやまる。

悠里「いえ、いいのよ。あの人とはあまり親しくなかったし、それに……一応これも言っておいた方が良いわね……あの人は……」

悠里がそこまで言ったところで胡桃が話に割り込む。

胡桃「美紀、洗い物一つ忘れてたぞ？」

いくつかの食器の入ったケースを持って胡桃が言った。

美紀「あ、すいません忘れてました。」

美紀が胡桃からそれを受け取る。

悠里「由紀ちゃんは空彦君と一緒に？」

悠里が胡桃に尋ねる。

胡桃「ああ、由紀なら問題無いだろう？あたし空彦苦手でさ……。」

胡桃が頭を掻きながら言う。

美紀「…私もです。」

美紀も小声で言う。

「えげつない程嫌われてるな、あいつ。」

彼がそう言ったあと、車の方から由紀の声が聞こえた。

由紀「キャツ!!!」

「今の!？」

悠里「由紀ちゃん!？」

美紀「戻りましょう!」

胡桃「ああ!」

洗っている途中の食器もそのままに、彼らは車へ走った。

ボタン!

「由紀ちゃん!!」

彼が勢い良く車の扉を開けて車中に入り、中の由紀が無事かどうかを確認する。

由紀「…あ、——くん…。」

何かに怯えたような目をした由紀が彼を見る。

胡桃「おい由紀!大丈夫か!」

その直後に胡桃達も車中に戻ってくる。

由紀「あの…その…。」

由紀の言動がはつきりしない。

すると車中にいた空彦が横から会話に割り込んで言った。

空彦「ゴキブリがいたんだよ。大きいのが、それで丈槍さんが驚いちゃって…皆そんなに慌てなくても大丈夫だよ、…ね?丈槍さん?」

空彦が由紀に言う。

由紀「あ…うん…そうゴキブリ、驚いちゃった!ごめんね?皆!」

由紀がぎこちない笑顔で言った。

胡桃「本当か?由紀?」

胡桃が由紀に尋ねる。

由紀「ほんとくだよく。くるみちゃんは疑り深いなあ。」

美紀「ゴキブリなんて、この車で見かけた事ありません!なるべく清潔を保つよう心掛けてますから、由紀先輩!正直に言って下さい

「！」
美紀が少しキツイ口調で言った。

由紀「え？…その…本当だよみーくん！やっぱゴキブリさんはどれだけ綺麗にしても何処からかやって来るんだよ！」
それでも由紀はゴキブリを見たからだと言い張った。

悠里「——さん！ちよつと良いかしら？…胡桃！美紀さん！由紀ちゃんを頼むわね。」
突然悠里が彼の手を掴むと、そのまま車外へ連れ出した。

悠里は彼の手を引いたまま、先程洗い物をしていた場所まで連れ出し、ようやく手を離れた。

「どうしました!？」

悠里「彼の…穂村さんの事で話が…、あの人はクラスメイトではあったけど実際は1カ月程しか一緒にいた事がないの。」

「どうしてです?..」

悠里「穂村君は途中から学校には来ていない、不登校の生徒だったの。」

「…なるほど、つまり実際はあまり彼の事は知らないと。」

彼は悠里にそう言ったが、悠里はその言葉に対して首を横に振った。

悠里「いいえ逆よ。確かに一緒にいた期間は短いけれど、それでも

彼の事は良く知っているわ。…彼はたったの1カ月で問題を二つも起こした生徒だから。」

「問題を…二つ？」

「彼が悠里に聞き返す。」

悠里「ええ、まずは一つ目…ある日彼はクラスメイトの男子と会話中に口論になってクラスで大喧嘩したの。すぐに先生が止めてくれたから良かったけれど…その喧嘩も始めたのは彼からだし、内容もそこまで怒る程の物では無かった…つまり、彼は少し普通の人よりも短気みたいなの。」

「…なるほど。」

悠里「それで…二つ目なんだけど、これがかなり問題でその…彼、クラスの女子にセクハラ紛いな行動を何度か取っているの。」

「本当ですか？」

悠里「ええ、私の友達だった子もあの人に何度か体を触られた事があるって…かなり悩んでいたの、私とその事を先生に言おうとしたら仕返しが怖いから別に良いって言われてしまったけれどね。」

「リーさんは大丈夫だったんですか？」

彼は空彦と同じクラスだった悠里が心配になり尋ねた。

悠里「大丈夫よ、彼がセクハラした生徒には共通点があつて…皆彼によく話しかけてあげていたの。…私は彼が苦手で避けていたから、標的から外れていたみたいね。」

「つまり女性に話しかけられるとその人が自分に好意を抱いていると

勘違いしてセクハラに及ぶって事でしようかね？」

悠里「多分そうだと思う……それでなんだけど、私の言いたい事分かる？」

悠里が彼に言う。

「言いたい事？……あー……由紀ちゃんですか。」

彼は思い付いたようにそう言った。

悠里「そう、皆が彼との距離を置くなか、由紀ちゃんだけは彼に普通に話しかけていたわ。由紀ちゃんはそういう性格だから。」

「さっきの由紀ちゃんの様子……まさかアイツ！」

彼は先程の由紀の様子がおかしかった理由を今の悠里の情報から考察して、一つの結論を出した。

悠里「もしかするとそうかもしれない……それに私のその友達ね、彼に脅されていたの、誰かに話したらただじゃおかないって。……後日聞いた話では、彼はセクハラした女子全員をそうやって脅していたみたい。」

悠里「でも結局一人の生徒が先生にその事を話したわ。……彼はその時呼び出しを受けて嚴重注意された、二度とこんな事しないようにと……彼は周りの視線に耐えられなくなったのかその日から学校にはこなかった。」

悠里「……でね、彼なんだけど学校に来なくなる数日前に、一人の生徒に異様に執着し始めたの。」

悠里の表情が曇っていく。

「その生徒って……。」

由紀「ええ…由紀ちゃんよ。」

「!!」

彼がその言葉に驚く。

「由紀ちゃんと空彦はクラスは違ってたんですよね!？」

悠里「ええ、クラスは違ったわ。ただ由紀ちゃんて幼くて可愛らしい見た目だから同学年の男子のファンが何人かいたみたいなの。」

悠里の言葉を聞いて、昨日空彦が由紀を見て言った発言がよみがえる。

『丈檜さんちよつとした有名人だったから、一方的に知ってたんだ。』

「有名人…そういう事でしたか。」

悠里「そういう事。ただ有名なのは男子生徒の間だけ…だから胡桃は知らなかったのね。」

「そうか…：…ん？男子生徒の間だけならリーさんはどこで由紀ちゃんの話を？」

疑問に思った彼が悠里に尋ねる。

悠里「さつき話した私の友達から聞いたの、穂村君が他のクラスの女子に目をつけたみたいって。」

「そうでしたか…。」

悠里「彼は学校に来なくなるまでの数日間、休み時間になると教室を抜け出して由紀ちゃんを見に行ってたの。…彼が学校に来なく

なって、私の友達は喜んだし私もどこかホッとしていたの、これであの子も：由紀ちゃんも安心だと思って。」

悠里「それから世界がこんなふうになって、私は由紀ちゃんと知り合い：そして生き延びる事が出来た。：なのになんの運命か知らないけどそこに彼も加わってしまった。」

悠里「昨日——さんが助けた生存者が穂村君だと気付いた時、ハッキリ言つて鳥肌が立った。：私は穂村君が私や由紀ちゃんの事を忘れてるように祈つたわ。けれど彼は覚えていた：由紀ちゃんに対する反応を見てまだ彼が由紀ちゃんに執着している事も分かった。」

「すいません：余計な事をしてしまいましたね。」

空彦を助けた事を後悔する彼。

悠里「いいえ、助けに行く事は私も賛成したんだから気にしないで？あなたや美紀さんは……というか私以外は彼の事は知らなかったんだし。」

悠里が彼に言う。

悠里「でね……実は私は彼をすぐに降ろそうと思っていたの、けれど由紀ちゃんが彼を誘ってしまった。……それもそうよね、由紀ちゃんは優しい子だし、それに穂村君が自分をどんな目で見ていたかって事にあの子は気付いている訳がないもの。」

悠里「それで私もいきなり追い返すのはかわいそうだし、数日間様子をみようと思ったの。もしかしたら彼も前程酷い人間ではなくなっているかも知れないし。」

悠里「……けれどさっきの由紀ちゃんの反応は確実に穂村君に何か

されている…一緒に暮らしてたった1日で由紀ちゃんを！………もう許せない！」

悠里の表情が次第に怒りに染まっていく。

「僕も許せません…どうしますか？」

悠里「まずは由紀ちゃんに何をしたのか聞き出すわ！——さん呼び出したのはそれを手伝ってもらいたかったからなんだけど、良いかしら？」

「もちろんです。」

彼は即答する。

悠里「ありがとう！私と——さんと穂村君の3人だけで話したいから、その間胡桃達には由紀ちゃんを見ていてもらいましょう。」

「はい、じゃあ戻ってあの変質者を呼び出しますか？」

悠里「そうね、さっき話した通り彼は短気だからもしかすると話し合いだけじゃ済まないかもしれないけど…——さん平気？」

悠里が彼に尋ねる。

「問題ありません。今まで何度か生存者と戦ってきましたから…真つ向勝負で今更あの程度のヤツに遅れはとりません。」
彼が自信たっぷりに答える。

悠里「頼もしいわね。…じゃあ戻りましょう。」

「ええー！」

話し合いを終えた二人は空彦を呼び出す為に車へと戻った。

十九話 『怒り』

「空彦、ちょっと来てくれ」

車に戻って来た彼の第一声がそれだった。

空彦「なんで？」

車内で一人だけ離れた場所にいた（というよりは胡桃達が離れたらしい）空彦が機嫌の悪そうな顔で彼に言う。

「…いいから、とりあえず付いて来い」

彼がそう言うのと空彦は渋々ながらも車から降りた、車外に出た彼と空彦を待っていたのは悠里だった。

悠里「ありがとう——さん。…とりあえず少し移動しましょう？」

悠里は彼に空彦を連れて来た事に対して礼を言うのと一瞬だけ空彦を睨み、車から離れる事を提案した。

空彦「若狭さんまで何？ここじやダメなの？歩くのメンドクサ…」
空彦がわざとらしくダルそうな顔をしてそこまで言ったところで、悠里がさつきよりもキツく空彦を睨む。この男の内面を知っているからか、空彦に対する悠里の当たりはかなりキツい

悠里「いいから………黙ってついてきて」

空彦「……わ、分かったよ。」

こんな悠里を見たのが始めてなのか、空彦が戸惑ったような表情を見せる。だが悠里のそれを見たのは空彦だけでなく彼も同じ事で、微かに恐怖を感じていた。

（怖いな……あれが胡桃ちゃんの言っていた怒ってる時のりーさんか、さすがの空彦もこれには大人しく従ったな。まあ無理もないか……僕もあれには逆らえない。）

悠里と彼は空彦を連れて、車から100mほど離れたところにある小さな公園に移動した。見たところ辺りに”かれら”の姿はないし、話し合うには良い場所だ。

悠里「…ここで良いわね」

空彦「…それで、なんの用？」

悠里「少しだけ穂村君に聞きたい事があるの」

空彦「…聞きたい事？何？」

今度は落ち着いた様子で言う悠里に対し、話す事など何もないと言いたげな顔を見せる空彦…。悠里はそんな態度に腹がたったのか、またしてもキツイ目付きをして空彦を睨んだ。

悠里「あなた…さっき由紀ちゃんに何をしたの？」

空彦「何って…丈槍さんが自分で言ってたじゃん！ゴキブリがいたんだよ！」

悠里「私は短い間ではあつたけど、あなたと同じクラスで過ごしていたのよ？あなたがどういう人間かっていうのはよく分かっている…。下らない嘘は止めてくれる？」

空彦「嘘って何？あの時丈槍さんが自分からゴキブリを見たって言ってたじゃん！俺じゃなくてあの人に聞けよ!!」

悠里の言葉に引くどころか、逆に声を張り上げる空彦。それを見た彼は冷静な様子で空彦の発言を訂正し、少しずつ追い詰めていった。

「正確には由紀ちゃんが自分からゴキブリを見たと言ったんじゃない。由紀ちゃんが僕達の問いかけに口ごもっていた時にお前が横から割り込んでそう言ったんだ」

空彦「はあ？…そうだったか？」

言われて少し焦ったのか、空彦がほんの少し大人しくなる…。

「ああそうだ、それにあの時の由紀ちゃん表情はただゴキブリを見たとかそんな感じの怯えかたじゃなかった」

空彦「何それ？お前あの人と別の高校だったんだろ？そんなお前にあの人表情がどうたらとか分かんのか？」

(…なるほど、どうやら自分が一番由紀ちゃんの事を見ていたつもりなのに、よそ者の僕に知った顔されたのが気に入らないようだね。……なら)

空彦の表情や声の感じからその気持ちを感じ取る。確かに彼はまだ由紀との付き合いは長くないが、彼も彼で空彦のような男に由紀の事を知った顔をされるのは少々腹が立つ。

「少なくともお前よりは良く知っているよ。この数週間ずっと一緒に暮らしてたんだから、大体…お前はクラス違ったんでしょ？なら同じ高校だろうと大して由紀ちゃんの事知らないでしょ…転校生だったみたいだし」

腹が立つので、少し挑発するかのようにして言葉を放ってやった。すると空彦はそれに見事に引つ掛かり自らストーカーじみた発言を彼と悠里の前で告げる。

空彦「ふざけるなよ！俺は誰よりもあの人を見てきた！俺が誰よりも丈槍さんの事を分かっているに決まっている…！ぽつと出のよそ者風情が!!他の高校の生徒が偉そうに混ざってんじゃねえよ！」

悠里「いいえ、あなたは由紀ちゃんの事を何一つ知らないわ。私達はおろか、あなたの言うところよそ者の——さんにすら劣る程にね。」
空彦に彼を悪く言われたのが癪かんに触ったのか、悠里が会話に割り込む。彼と空彦…悠里がどちらをより評価しているかは言うまでもなかった。

空彦「俺がこんなよそ者よりも丈槍さんの事を知らない?!」

悠里「ええ…なんなら由紀ちゃんについて知っている事を言ってみなさい?…由紀ちゃんの表面だけを遠くから一人で覗いていたあな

たに分かっている事があるわけもないと思うけど」

空彦「…な！……………」

あまりにストレートな言葉を放つ悠里に驚いたのか、はたまた本当に由紀の表面しか見ていなかったのか：空彦は黙りこんでしまふ。悠里はそんな空彦をキツと睨み付け、追いつめるようにして言った。

悠里「ほら、…あなたは由紀ちゃんの事を何一つ知らないわ。」

空彦「コイツだつて！…コイツだつて何も知らないさ！」

逃げ場を無くした空彦が彼を指差す。そんな空彦を見て、悠里は言つてやれと言わんばかりに彼を見つめた。由紀との付き合いはそこまで長くないが、それでも彼女の良いところは知っている…。彼は自信ありげな表情を浮かべ、それを語った。

「あの人は優しい人だ。どんな人に対してもね。だから僕達が苦手なお前と距離をあけている中、由紀ちゃんだけはお前に普通に接していたんだ。あとは…ほのぼのしているようで以外と強い部分もある。本人はあまり自覚してないけど…彼女がいてくれるだけでみんなが笑顔になれるんだ…」

「それと、ダリオマンが好きとか言つてたつて…。とりあえずはこんなもんでしようか？」

悠里「十分よじゅうぶん…ありがとうね♪」

につこりと微笑んで彼に向けて礼を言う悠里。

やはり、彼と空彦とでは比べ物にならないと悠里は確信した。

悠里「…分かったかしら？あなたは由紀ちゃんの事を何も知らない」

空彦「…ちっ!!分かったよ！」

あからさまに不機嫌そうな顔の空彦…。

あとはこの男があの時、由紀に何をしたのか聞き出すだけだった。

「…で。お前は由紀ちゃんに何をしたんだ？」

空彦「…少し手に触っただけだよ！」

空彦はそう答えたが、まだ信じられない…。

悠里はその目をじっと見つめ、改めて尋ねた。

悠里「…本当に？」

空彦「本当だよ!!」

悠里「……………そう」

「りーさん、もう良いんですか？」

悠里があつさりとした態度を見せ、その場をあとにしようとする。彼はまだ空彦の事を問い詰めた方が良いと感じていたので、悠里を引き止めるようにして声をかけた。

悠里「あとは由紀ちゃんにも話を聞いて終わりにするわ。……………それから…」

ゆっくりと歩き出した悠里だが彼女はそつと振り向き…空彦を睨む。直後、彼女が告げた言葉に空彦は驚愕した。

悠里「穂村くんはもう、あの車から降りて」

空彦「な!?!ふざけるなよ!!ちよつと手を触っただけで追い出されるのかよ!」

悠里「ちよつと?…由紀ちゃんにあんな顔させてちよつとですつて?」

降りろと言われて怒声を飛ばす空彦だが、悠里も悠里で由紀の事を少しでも傷付けた空彦に対してかなり腹を立てていた。空彦はそんな悠里の覇気に気持ちで押され、少し身を引いてからまた言葉を放つ。

空彦「…っ!大体俺は頼んでもいないのにお前達に勝手に助けられ

たんだぞ!?なのに次の日に見知らぬ地で降ろされるのか? いい加減にしてくれ!」

悠里「……それもそうね」

確かにそう言われるとこちらにも非がある…。

悠里は顎に手をあてて考え込み、一つ提案した。

悠里「あなたのいたアパートまでは送るわ。このくらいはしてあげる」

空彦「な!?…俺は降りるのは確定なのか?」

驚いたように言う空彦だが、もう悠里の意思は覆らない。

少し酷なようだが、彼女はキツパリと告げた。

悠里「ええ私達全員、もうあなたとは暮らせない」

空彦「……クソっ!もういい!!送ってもらわなくても結構だ!ここから一人で帰る!!」

自分なりのプライドがあるのか、空彦はあの場に送ってもらう事を断ると、明らかに不満そうな顔をして歩いていく…。

空彦「車に置いてきた俺の荷物だけ回収させてもらうからな!」

悠里「ええ、勝手にして」

彼と悠里をその場に残し、空彦は一人先に車へと戻っていった。奴がいなくなった直後、悠里は深くため息をつく…。かなり気を張っていたので、少し気疲れしてしまったようだ。

悠里「……ふう、どうにか降ろせたわ」

「そうですね。……僕はりーさんを怒らせないよう気を付けますよ」

悠里「?…どういう意味?」

「いえ、なんでも」

悠里「まあ、とりあえず彼が降りてくれるなら安心ね。とつと荷物だけ渡して別れましょ」

「そうですね…」

そう言ったところで彼は違和感を感じる…。

(ん?…あいつ、自分の荷物なんて…。)

自分の荷物なぞ持っていただろうか?

思い返してみても、奴が荷物を持っていた覚えはない…。

それに気付いた瞬間、彼の背筋がゾクツとした…。

「…!!りーさん!空彦を追いまししょう!」

悠里「えっ?どうしたの?」

「あいつ…自分の荷物なんて持っていないませんでした!」

悠里「え!?それって…まさかっ!」

その発言を聞いて、悠里は彼とともに車へ走り出す…。

彼と悠里が車にたどり着くと、ここでは車外に降りた胡桃と美紀が同じ一ヶ所を睨んで立っていた。

悠里「胡桃!美紀さん!」

悠里と彼はその場に駆け寄ると、胡桃達が何を睨んでいたかを理解した。

二人の視線の先には由紀の背後に回って左手でその肩を掴み、右手でフォークを由紀の首に突き付けている空彦の姿があった。

「お前…!!」

空彦「近寄るなよ?少しでも近寄ったらこれ刺してやるからな!!」
そう言って首筋に突き付けたフォークに力を入れる空彦。それを突き付けられた由紀は目をギュツと瞑りながら、怯えたように震えていた。

由紀「うう…！」

悠里「由紀ちゃんを離して！」

悠里が言うが、空彦は全く応じる気配を見せない…。

奴は由紀の怯えた表情を背後から覗きこみ、ニヤリと笑った。

空彦「嫌だよ。さっき言ったろ…『俺の荷物を回収する』って」

「荷物…だと…？」

胡桃「お前っ！ふざけるなよ…！」

その発言に彼と胡桃が反応して、それぞれ武器を構える。

だが当然、空彦はそれを許しはしなかった…。

空彦「おいおい！わからねえ奴らだなあ!!そんなもん捨てる！丈槍さんが死んでも良いの？」

胡桃「…っ！クソツ!!」

「…ちっ！」

胡桃が怒鳴りながらシャベルを投げ捨てる…。それを見て彼も手に持っていたナイフを地面に置き、二人はただじつと奴を睨んだ。

空彦「そうそう、イチイチ面倒な事をするなよ！イライラする奴らだなあ…」

美紀「あなたがそれを言いますか？」

武器を置いた二人を見て言う空彦に対し、美紀が言葉を放つ…。空彦はそんな彼女にも腹を立てたのか、舌打ちをしながら美紀を睨んでいた。

空彦「ちっ！生意気な後輩だなあ…両手が塞がってなきやぶん殴ってやったのに。」

美紀「…それは残念でしたね」

悠里「何が望みなのか？食糧とかなら…」

空彦「違うって！若狭さんなら気付いてるんじゃない？」

悠里の発言を遮るようにして言葉を放ち、空彦はニヤニヤと笑いながら由紀の事を見つめる…。その表情を恐ろしく感じた悠里は今まで以上に感情を込めて怒声をあげ、一步前に踏み出した。

悠里「ふざけないでっ!!由紀ちゃんには手を出させない!!」

空彦「偉そうに…。お前らに与えられた選択肢は二つ、俺を怒らせて丈槍さんを殺すか…大人しく俺に丈槍さんを渡すか。…どつちかだけだから？」

悠里達全員を見回して空彦が言う。由紀は閉じていた目を開けて皆を見つめながら震えており、それを見た全員が焦り始める…。

「由紀ちゃんを殺しなんかしたら、その瞬間お前を殺してやるからな…」

空彦「やれるもんならやってみろよ。…たださっきから言ってるだろ？丈槍さんが死ぬ時はお前らが俺を怒らせた時だ。つまりお前らが大人しくしてればこの人もお前らも無事で終われるんだよ。…だからさ…」

そう言っただけ空彦はフォークを突き付けた右手はそのままに肩を掴んでいた左手だけを離す。そしてその左手を由紀の制服のスカート上のシャツの隙間に入れて由紀の腹部をそつと触り始めた。

由紀「!!イヤだ…!!」

由紀が自らの両手で空彦の手を押さえる。

当然、その場にいた全員も由紀を救おうと咄嗟に身体を前に出した。

悠里「あなた…!!いい加減にっ!!」

胡桃「てめえっ!!」

美紀「くっっ!」

「お前…っ!」

空彦「動くなっって言ってるだろ!!!こいつ殺すか!!?ああ!」

全員が空彦との距離を微かに詰めたものの、その声でまた動けなくなる…。もしこれ以上動けば、本当に由紀の身が危ないからだ。

空彦「…:丈槍さんもさあ、イチイチ手で邪魔しないで?さっきもちよっと手を握っただけで大声あげるし…。大人しくしててよ、まったく。…分かった?」

由紀の耳元で囁くが、由紀はその手を押さえたまま動かない…。

由紀「…:…:…:」

空彦「分かったかかって聞いてんだよ!!」

そんな由紀を見て空彦は怒鳴り、フォークを持つ手に力を入れた。首に突き付けられたそれと怒鳴り声…:それらは由紀の心を追いつめ、彼女の事を無理矢理に従わせた。

由紀「うう!…:…:うんっ…:…:わ、分かった…:…:」

空彦「最初からそうすれば良いんだよ!」

由紀が静かに手を下げると、空彦は左手で由紀の腹部を撫でまわす…:。

その手つきはやたらといやらしく由紀のへそ周りやわき腹を這い、空彦は満足そうに微笑んでいた。

由紀「う……つく……」

空彦「俺、学校にいた時ずっと丈檜さんの事見てたんだよ？いつか話せたら良いなーってずっと思ってた。それが今じゃこんななって丈檜さんの体に触れるなんて……化け物だらけの世界で生きてて本当に良かったよ」

由紀「うっ……うう……うっ……」

空彦「丈檜さんのお腹、柔らかくてスベスベで凄く触り心地良いね。……もつと上触つても良い？」

空彦が耳元で囁く……。

さすがの由紀もそれを聞いた途端に驚いた表情を見せ、だんだんと胸元に上がってくるその手を必死に押さええた。

由紀「やつ……やだ……やだ……やだ……!!」

空彦「邪魔だからどけろって!!」

暴れる由紀を抑えようとフォークを今一度強く首筋に突き付ける……。

少し力を入れすぎたのか、由紀の首筋からほんの少し血が流れていた……。

由紀「いつ……!!」

空彦「だから言っただろう？大人しくしろって、また暴れたらもつと強くするからね？」

あまりに恐ろしい状況を前に……由紀は従わざるを得なくなる。

由紀は再び両手を下げ、空彦の手を自由にしてからすすり泣いた。

由紀「ぐすっ……ううっ……うう……!!」

空彦「何？泣いちゃったの？……うわ何その顔！丈檜さん泣き顔も可愛いね！マジでたまらないんだけど!!」

あろうことか、空彦は由紀の泣き顔すらにも興奮して笑みを浮かべる…。

もう、彼と胡桃の我慢も限界に達してきていた…。

「…殺してやる、絶対に殺してやる!」

胡桃「覚悟…しとけよ…!」

空彦「俺に言ってるの?無理に決まってるじゃん!?別に殺しに来ても良いけど、その瞬間丈槍さん殺すからな?」

由紀の首筋にフォークをツンツンと突き付ける。由紀はフォークの先が触れる度にビクツと身体を震わせ、涙を溢れさせていた。

空彦「…そうだ!そんな無力な君に良いもの見せてやるよ。」

そう言つて空彦は左手を由紀の肩に戻して由紀の体を自らの方へと向ける…。首筋にフォークを突き付けられたまま、ほんの10cm程の距離しか空けずに、空彦と向かい合わされる由紀…。もう、嫌な予感しかしなかった。

空彦「丈槍さん、自分から俺にキスしてよ?」

由紀「…え…?」

悠里「…どこまでふざけたら気が済むの!!」

あまりにふざけた言葉を聞き、悠里が怒鳴る。

だが由紀という人質を得た空彦は彼女に怯えた様子もなく、余裕に満ちた表情を浮かべていた。

空彦「黙っててよ、若狭さん」

「…っ!由紀ちゃん!!」

焦った彼が由紀を呼ぶ…。すると由紀はそつと彼の方へと振り返り、穏やかな声で言った。

由紀「…大丈夫だよ——くん。…見ててね?」

由紀は涙を流しながらそう言って…空彦の方を向きなおす。

(くそっ…最悪だ!!あの人が泣いているのに、僕はあの人を助ける事も出来ない…!!守るって約束したのに!!!)

由紀は静かに空彦の顔に自らの顔を近づけると、そつと唇を寄せていく…。だが、由紀はその寸前で顔の位置を大きくずらし、空彦の右手に噛みついた。

空彦「つつて!!」

噛まれた痛みで空彦は持っていたフォークを落とす。当然、胡桃はその隙を見逃さなかった。

胡桃「由紀!!!どけっ!!」

胡桃は足下のシャベルを拾って空彦の元に駆ける。

空彦「!?!」

胡桃に言われた瞬間に由紀は噛みつくのを止めて急いでその場を離れ、悠里の元に駆け寄る。悠里は目の前に寄った由紀を強く抱きしめ、胡桃の方を見た。

胡桃「はあっ!!」

ドゴンツ!!と激しい音が鳴り、胡桃のシャベルが空彦の顔面を激しく打つ…。空彦は堪らず地面に倒れ込み、打たれた顔を押しさえていた。

空彦「うぐっ!!くそっ!!いてえっ…!」

胡桃「ふざけやがって!…ふざけやがって!!」

シヤベルを構え直し、再び空彦の前に立つ胡桃。

このままもう一撃くらわしてやろうか…そんなことすら考えてしまうほどにこの男の事が許せなかった。

空彦「ふざけてんのはお前だろ!…くそっ!鼻が折れてるみたいだ…!」

空彦の鼻は不自然に曲がり、大量の血が流れていた。

胡桃「この程度で何言ってるんだ!!さっきのはまだ手加減してやったんだぞ!!」

「……………」

彼は空彦が胡桃に追い詰められたのを確認してから由紀を見た。由紀の傍には悠里と美紀がいて、二人共泣きながら由紀を抱きしめていた。

悠里「ごめんね由紀ちゃん…!」

美紀「すいませんっ…!先輩!」

由紀「えへへ…もう大丈夫だから、謝らないでよ二人共。」

そんな三人を見届けた後、彼は足下のナイフを拾い上げて空彦の元に歩み寄る。

空彦「くそっ!なんだよお前まで!!」

空彦が地面に転がりながら彼を見上げる。そばにいた胡桃はこの男をどうするべきか決めかねていた為、彼の意見を尋ねた。

胡桃「…こいつ、どうする?」

空彦「殺すつもりだろ!? やれるもんならやってみろよ!! 重傷を負った武器も持たない一般人を殺せるならな!!」

胡桃「ちっ! ムカつくヤツだけど……確かにこれじゃ殺りにくいなあ。…由紀も助けられたしとりあえずは……」

胡桃はそこまで言ったところで、目の前の光景に驚いて声を止める……。

空彦「がつ……ごほっ!……!」

そこには胡桃が喋っている途中に動き出して、空彦の首にナイフを突き刺している彼の姿があった……。ナイフは深々と空彦の首に突き刺されており、どうみても助からない……。

胡桃「なっ!!」

美紀・悠里・由紀「!!」

胡桃の声に反応して彼の方を見た悠里達も言葉を失う。彼はあまりにも冷たい目で

空彦を刺していたから、それに驚く事しか出来なかった。

空彦「ごっ!……ごほっ!!」

彼がナイフを抜くと、そこからは大量の血が流れてくる……。空彦は言葉にならない声をあげながら両手でその傷口を抑えた。

「殺れないと思ってたのか? お前のようなクズを僕が?」

彼が小刻みに震える空彦を見下して言う。その目はかつてない程に冷たく、空彦の事を人間として見ていないといった感じだ……。

「殺すに決まってるだろう…。お前はあの人を傷付けた…。あの人を泣かせた…。それだけで十分過ぎる理由ができた…」

彼はそう言っつてナイフを逆手に持つて空彦の頭の上で振り上げる。

空彦「…!!!」

胡桃「あっ!?お…。おいつ!!」

由紀「!——くん!!?」

胡桃と由紀が止めに入ろうとしたが彼のナイフは既に空彦の額を貫いていた。

「……………」ズボツ!

彼が空彦からナイフを抜く…。

空彦の身体はピクピクと動いていたが、すぐに全く動かなくなつた…。

胡桃「あ……………」

悠里「……………」

美紀「……………」

由紀「……………」

「…………頭を潰しておかないとこいつも奴らになるかも知れないでしょ?…だから刺したんですよ。」

全員が無言で彼を見つめる中、ナイフをしまつて彼が言う。

なんと言つたらいいのか分からず、とりあえず胡桃は無表情のまま話を合わせた。

胡桃「…ああ…。そ、そうだな。」

由紀「——くん……。」

由紀が彼のそばに駆け寄る。

「由紀ちゃん……ごめん。……危険な目に遭わせてしまつて」

由紀に謝る彼。

由紀「ううん……もう大丈夫だから。……それより——くん……平気？」

「……何がですか？」

由紀「あの……その……。」

「すみません、先に車の中にいます。」

彼はそう言つて車に戻つた。

悠里「……とりあえず私達も戻りましょ？」

悠里がそう言うと、少し遅れて皆車に戻り、胡桃の運転でその場を後にした。まるで……空彦の死体から逃げるように。

二十話『しんぱい』

ついこの前まで、毎日一人で生き抜いてきた。

一人で奴らと戦ったり、時には逃げたり……更には他の生存者として戦った事すらあった。

そしてその戦いの結果、相手を殺めた事も何度かあった……だけでもそれを後悔した事は一度も無かった……相手は僕を殺してでも生き延びようとするような奴らだったから。

殺されても文句は言えない。当然の報いだ。……そう思ってきた。

……けれども僕は今、空彦を殺した事を後悔している。

……いや、違う。

空彦をあの人達の前で殺した事を後悔しているんだ。

僕の中では自らに襲いかかる生存者を殺すのは当たり前前の事だったけど、あの人達は違う。

奴らのようなゾンビが人を殺すのを見た事があっても、僕のような普通の人間が他の人間を殺すのは見た事は無いはずだ。

分かっていた……目の前で人間を殺せばあの人達にショックを与えてしまう事は……あの人達は皆優しい人だから。

……なのに、手を止める事が出来なかった。

僕が傷付くならまだ良い、だけど空彦のヤツは由紀ちゃんを傷付け

た。

思えば空彦が由紀ちゃんを泣かせたあの瞬間から……僕はどうあってもアイツを殺す事を決めていたんだな。

大切な人を傷付けられるのがああも腹が立つ事だとは知らなかった。

だから由紀ちゃんの無事を確認した瞬間に、後先考えず怒りの感情だけでヤツを殺した。……あの瞬間は今までで一番躊躇い無くナイフを降り下ろした瞬間だった。

けれど僕はすぐにその後の事を考えていなかった自分の浅はかさを恨んだ。

空彦にナイフを突き刺した瞬間の僕を見るあの人達の目が辛かったからだ。

躊躇い無く、人間にナイフを突き刺す僕を見て、あの人達はどう思ったのだろうか……もしかしたら、僕も車から降りるようにと告げられてしまうだろうか。

……そうなってしまうかも知れない、仕方の無い事だけど……でも……嫌だなあ……。

………もつと上手く殺れば良かったな……。

ドツ！

「イタッ!!」

いきなり脳天に衝撃を感じ、彼は目を開ける、横には胡桃が立っていた。

「……………なに?」

頭を両手で抑えながら彼が言う。

胡桃 「…なに?じゃねえよ!もう夕方だぞ!!いつまで寝てんだよ!!」

椅子に座る彼の横で胡桃が言った。彼はどうやら車に戻った後椅子に座って休み、そのまま眠ってしまっていたらしい。

「あら?もう夕方ですか?…ツ!頭痛い…………。」

胡桃 「何度声かけてもお前中々起きないからさ、思いっきりぶん殴ってみたんだ!」

楽しそうに拳を振り上げて胡桃が言う。

「もう少し優しく起こして欲しい……毎日こんな風に起こされたら死んでしまう。」

頭を両手で撫でながら彼が言った。

胡桃「だったら毎日ちゃんと良い時間に起きるんだな。…でなきやあたしの拳が毎日お前の脳天に飛ぶぞ!!」

そう言って笑みを浮かべながら、胡桃はテーブルを挟んだ彼の正面に座った。

「こんな僕でも……毎日起こしてくれるなら、それでも良いです。」
彼はそう言ってテーブルに顔を伏せた。

胡桃「……………」

「……………」

胡桃「気にすんなよ?」

「!？」

数秒黙り込んだ後、胡桃がそう言った。

胡桃「お前、空彦を殺した事を後悔してるんだろ? そんな必要ない……って言うのと少し人間としてアレな発言になっちゃうけど……でもあんなクズを殺したせいでお前がそんな顔をする必要はないよ。」

「…そんなに変な顔してた?」

伏せた顔を少しだけ上げて、胡桃を見ながら彼が言った。

胡桃「なんていうのかなあ……元氣無さそうな顔してたよ、杏子さんと別れた時とはまた違う感じのさ。」

「そっか……っっていうかそう言われると僕、しよっちゆう元氣無くしてるような気がするんだけど。」

胡桃「ああ、わりと短い感覚で元氣無くなるな……鬱病なの？」

胡桃がニヤニヤしながら言う。

「……そーかも。」

彼はそう言っそむて目を背ける。

胡桃「冗談だよ！へこむなって!!……ったく。」

胡桃「まあ真面目な話さ……いつもあたし達の負担を背負ってくれてるからじゃない？」

胡桃が今度は真剣な顔をして言う。

「負担？」

胡桃「そ！負担。……杏子さんの時もさ……あたし達に言えないような辛い事があつたんだろ？」

「……。」

彼は目を背けたまま黙る。

胡桃「んで……今朝の空彦もそうだ。あたし達の誰かがアイツを殺したら後々罪悪感で悩むとか思ったから、代わりに殺つたんだろ？」

胡桃が彼の顔を手で無理やり動かして、自らの目を見つめさせる。

「…それは少し違うかな、僕はただアイツが憎くて仕方がなかっただけ……。で、気が付いたらアイツにナイフを刺していた。」

胡桃「なんだ、違ったのか…。」

少しだけ残念そうな顔をする胡桃。

胡桃「けどさ、それでもあたし達の代わりに殺った事に違いはないだろ？…お前が殺らなくても、多分空彦はあたし達の誰かに殺されたよ。」

「そう？。」

胡桃「ああ、多分な。」

「実はさ…空彦を殺した事を後悔して元気が無かった訳じゃないんだ。」

彼が座る姿勢を直しながら言う。

胡桃「ん？じゃあなんで…。」

「皆の前で殺した事を後悔したんだ。…あんな風に皆の前で殺したら皆にショックを与えてしまうし…それに…。」

胡桃「…それに？」

「……………」

彼は黙り込む。

胡桃「当ててやろうか…。皆の前であんななって人殺しをしちまったら、怯えた皆にここを追い出されると思ったんだろ？」

「！あ…。」
驚く彼。

胡桃「やっぱりそうか、…何考えてんだか。あんなクズ殺しただけで追い出す訳ないだろ。」

胡桃が鼻で笑いながら言った。

胡桃「さつきも言ったけど、お前が殺らなくてもアイツはどのみちあたし達の誰かに殺されてたよ。」

「…本当に？」

胡桃「ああ。お前寝てて知らないだろうけど、あの後リーさんが言ったんだよ。『穂村くんは殺されても仕方のない人だったから、誰も——さんを責めないように』って。」

「マジっすか…。」

胡桃「ああ、しかもその後、皆で当たり前だって言ったんだ。——
を責める訳無いって。」

「……………」

胡桃「あたしもだけどリーさんも美紀も凄く空彦に対して怒っていた。…いや、あれはもはや殺意にすらなってたな。」

胡桃「マジでアイツだけは許せなかった…！思い返すだけでイライラする程に。…あの時はただ一発殴っただけで、さすがに殺しまではしないでいいか…とか一瞬思ったけど、それは間違いだったよ。」

胡桃が拳に力を入れて言った。

胡桃「――の判断は正しかった。由紀にあんな事をしたんだ、アイツは死んで当然だ。あたし達全員そう思っている。」

胡桃「…だからつまらない事気にすんなよ？由紀もお前がそんななって悩んでるせいでまた元気無いんだ。…お前と由紀の元気は連動してんのか？」

胡桃が笑いながら言った。

「そう言えば、皆は？」

二人きりの車内を見回して彼は言った。

胡桃「外の川で水浴びしてる、残念ながら水着着用だぞ？」

「何が残念なのか…：水着上等じゃないですか！」

彼がそう言って立ち上がる。

胡桃「そんな目されると…水着しててもなんか嫌だな。」

胡桃が苦笑いしながら言う。

「胡桃ちゃんは!?!」

目をキラキラさせながら彼が尋ねる。

胡桃「あたしは一足先に終えたよ。」

「残念。」

胡桃「ああ残念だったな…：ところでその時にお前のナイフも洗っていたから。」

そう言って胡桃が指差した小さな棚の上には彼のナイフが置かれていた。

「お…、ありがとう。」

胡桃「他の小さいナイフは汚れて無かったから放置したけど、あの大きいナイフは汚れてたからな…。」

それもそのはず、そのナイフは空彦を殺す時に使った物だったから。

「あのナイフに付いていた血には触れませんでしたか？触れたなら大変！胡桃ちゃんもクズになってしまう！」

胡桃「布で拭いたから直接触れはしてないけど…：…奴らを仕留めた後のシャベルとは違ったイヤな感じはしたよ。」

胡桃が苦い顔をして言った。

「クズブラッド空彦の血が付いてますから。」

彼が笑って言った。

胡桃「変な名前付けてやるな…：。まあそんな冗談が言えるくらいに元気になって良かったよ。」

胡桃が顔を見て笑う。

「…いつも心配かけて悪いね。」

胡桃「気にすんな。お互い様だ。」

二人が会話を終えた瞬間、車の扉が開き、由紀、悠里、美紀の三人が戻ってきた。

悠里「あら？——さんおはよう。」

美紀「いえ、リーさん…夕方まで寝ていた人におはようは少し違う気が…。」

由紀「——くん起きたんだ？」

由紀がそう言つて彼に近づく。

由紀「あの…今朝は心配かけてゴメンね、私どこも怪我してないし大丈夫だよ！変な事もされる前に胡桃ちゃんと——くんが助けてくれたし…、ありがとね！」

ニツコリと笑つて由紀が言う。

「いや、助けたのは胡桃ちゃん僕はとどめをさしただけっていうか…。」

彼が目を伏せて言う。

美紀「ついでに言わせてもらうと、首に少しだけ怪我してますから、どこも怪我してないとは言えません。」

由紀の首に付いた絆創膏を突つつきながら美紀が言った。

由紀「いててっ！も…細かいことは良いの！——くんも助けてくれたの！あとみーくん突つつかないで！」

由紀は少しムツとした表情をして言った。

「…んじゃ、ありがたくそういう事にしておきます。」

由紀「うん!!」

彼がそう言うと由紀は嬉しそうに笑った。

「……とっろで。」

彼が由紀達を見回して言う。

由紀「ん?。」

「…水着は!。」

車内に戻ってきた由紀達がパジャマ姿になっているのを見て彼が
吼える。

由紀「あ…もう外で着替えちゃった。そろそろ暗くなるしそのまま
パジャマに。」

「チイっ!!」

悔しがる彼。

美紀「え…——さんもしかして私達の水着姿が見たかったですか
?。」

ちよつと引いた目で美紀が言う。

「……………ん?。」

美紀「いや聞こえてたでしょう。」

悠里「あらあら——さん……………いや——君。一緒に暮らす女の子を
そういう目で見るのはあまり感心しないわよ?。」

悠里が笑みを浮かべながらも、不吉なオーラを纏って言った。

「す、すいません。」

悠里「いえ…分ければ良いのよ?」

そう言うのと悠里の纏っていたオーラが消えていく。

(危なかった…!!) ……ってかなんかオーラみたいなの見えてたんだが
冷や汗をかく彼。

胡桃「お前…水着とか見たがるようなキャラだったっけ?」

胡桃が尋ねる。

「まあ人並みに…相手によりますけど、こここの人は皆可愛いので水着なんて着られたらそりゃ見たいに…。」

そこまで言ったところで彼は発言を止める。

背後に悠里のあのオーラを感じたから。

「…胡桃ちゃん、僕は助かるのかな?」

背後にオーラを感じながらも、彼は振り返らずに目の前の胡桃に尋ねた。

胡桃「…まあ説教三十分コースかな?」

「そうか…じゃあ行きましようか、リーさん。」

振り返って彼が言った。

悠里「素直でよろしい…行きましようか。」

彼はそのまま悠里に外に連行されて言った。

由紀「——くんかわいそうに。」

美紀「自業自得だと。」

胡桃「…だな。」

そう言つて胡桃は窓から外で悠里の説教を受ける彼を見る。

胡桃（お前は間違つた事はしてないよ……あいつを殺したからつて、あたし達がお前を追い出す訳がない。どのみち誰かが殺していた。）

胡桃（…ただ。）

胡桃（あの時のお前のあいつを殺す時の躊躇いの無さ……殺すと決意してから実行に移すまでの異常なスピード……。）

胡桃（それにあの目は……少しだけ心配だ……。）

第三章・きゆうそく

短編―それぞれの休息『彼の場合』

「……………」ペラッ

「……………」へへっ。」

「……………」ペラッ

「……………」えへへっ。」

胡桃 「……………」。

「……………」ペラッ

「……………」へへへっ。」

胡桃 「気持ちわりーよ!!」

「うわっ！胡桃ちゃん!?!いつの間に戻ったの?」

胡桃 「2分くらい前からな、…てかさつきも一回来たぞ? 気付け
「よ。」

「いやゝ。少し夢中になりすぎたね。」

胡桃 「…それ、この間寄った本屋で見付けた漫画?」

「うん、由紀ちゃんにオススメを選んでもらったんだけど…中々面白いね。」

胡桃 「ふーん…ギャグ漫画？」

「そう。胡桃ちゃんも見る？」

胡桃 「あ…今は由紀と遊んでる途中だから、また後で見せてよ。」

「うん。…ちな因みに何して遊んでるの？」

胡桃 「野球。」

「二人で？」

胡桃 「つて言ってもお互いバッターとピッチャーを交代でやっていって多く打てた方の勝ちってやつだけだな。」

「はあ、なるほど。…胡桃ちゃんはなんで途中で車に戻ったの？」

胡桃 「くく…トイレだよ!!」

「ああ…これは失礼。」

胡桃 「マジで……だいぶ失礼だぞ。」

「悪かったって…で、野球はどっちが勝ってるの？」

胡桃 「どっちだと思う？」

「…胡桃ちゃんでしょ？」

胡桃「ふふん♪内緒だ！じゃあたしは由紀の所に戻るな。」スタスタ

バタン！

「…………あの顔見せられたら内緒にする意味無い気がするけど…………まあいつか。」ペラッ

十分後。

「…………。」パタン

「読み終えてしまった…………面白い漫画だったな。」

「さて、片付けておくか…………。」ガサゴソ

「…………ん？この本は…………あ！そういうえばあの時胡桃ちゃんに渡そうと思って取ってきたんだっ！忘れてた！」

「後で渡すか…………。」

「さてさて…………何をしようか。」

（車に一人残っていても暇だなあ……………そういうえば車内でこんな長い時間一人で過ごしたの始めてかもな、今までの最長は5分くらいか？）

(今回はもう1時間は一人(途中で胡桃ちゃんが来たけど)でいるな。)

(まったく…警戒心の無い人達だ。……残っているのが僕だから良いものの、人が人なら今の内にあの人達の下着探したりするぞ、きっと……。)

(本当に僕で良かったよ…。)

(……………。)

(……………。)

(……………。)

(……………。あの人達って着替え何処にしまってたっけ?) ス
タスタ

(この引き出しだっけ?) ガラツ

(違うか……ここは医療品しかない。) パタン

(えっと…僕の着替えはいつも洗濯後にリーさんが手渡しで渡してく
れるんだよな。そしてその後、僕自身の手で僕のカバンにしまわれる
…。)

(ならば皆もそれぞれ自分のカバンに!?) スタスタ

(いや…。) ピタッ

(それは無いな、皆結構服持ってるみたいだし、カバンにしまっておく
なんて僕のように少ない数しか服を持っていない人間しか出来な

い。

(……手当たり次第に棚開けるか。) スタスタ

ボタン!

「!!」ビクッ!

美紀「?」——さん何してるんですか?食品棚なんか開けて…お腹空いたんですか?」

(…そういうばこは食品棚だったな、いつもリーさんが開けるの見てるのに何で忘れてたんだろ…楽園を前に判断が鈍ったようだ。) パタン

「ううん、ちよつとその…在庫チェックしました!」

美紀「ああ、そうですか。…まだ十分食糧ありますよね?」

「はい大丈夫!まったく問題無しです!!」

美紀「良かったです。」スタスタ

「リーさんは?」

美紀「洗濯物を干した後で由紀先輩達の所に行くみたいです。…私はこの本の続きを読みに戻ってきました。」ペラッ

「ああ、この間の…それホラー小説ですか?」

美紀「はい、よくわかりましたね?」

「表紙の感じで何となく……美紀さんホラー好きなんですか？それとも小説だけ？」

美紀「ホラーはわりと好きですよ、映画とかもよく見ました。」

「気が合いますね。…実は僕もホラー好きなんですよ、主に映画ですが。」

美紀「本当ですか？じゃああれ見ました？あの……」

(…今更ながら、僕はもう一人じゃないんだよな。)

(前までは一人が楽だと思ってた…一人なら誰に裏切られる事もない…あの時の僕はまた誰かに裏切られる事を心の底から恐れていた。)

(……のわりには、この人達の誘いは簡単にうけてしまったな。…雰囲気が良かったからか？)

(なににせよ、今はこの人達の事を心から信頼している。……あ、もしかして皆も僕を信頼してるから車に一人残してたのかな？…でなきや車盗まれるかも知れないもんな、キー置きっぱなしだし。)

(まったく、下着を探していたさっきの自分が恥ずかしいよ。もう二度としない…バレたらまたリーさんに説教されるし。)

(……美紀さんの声が心地良い……眠くなってきた。)

(…本当に…幸せな毎日だ。)

短編―それぞれの休息 『胡桃の場合』

胡桃 「んく…暇だなあ。」

由紀 「なんかする？」

胡桃 「…お前と？」

由紀 「それ以外誰がいるの？――くんは今車で漫画読んでるし、りーさんとみーくんは洗濯中だし。」

胡桃 「そうだよな…何する？」

由紀 「――くんは山へ漫画を読みに。りーさんとみーくんは川へ洗濯に。」

胡桃 「なんで童話風に言い直すんだよ。まあ、りーさんと美紀は本当に川へ洗濯に行ってるから良いとして…。なんで――はわざわざ漫画読みに山へ行ってるんだ…山にしか漫画は無い設定か？」

由紀 「漫画好きな親戚が山に住んでるのかも。」

胡桃 「で…あいつはその親戚の漫画だけが目当てで山へ行ったのか？」

由紀 「そ！漫画だけ読んだら帰るの。」

胡桃 「クズじゃねーか。」

由紀 「――くんはクズじゃないよ！」

胡桃「お前のその童話(?)の中の話だよ！」

由紀「ああ、ごめん。」

胡桃「……で?何する?」

由紀「ん〜…。キャッチボールでもしよう?たしかボールあったよね?」

胡桃「ああ、それなら野球でもしようぜ。バットもあるし。」

由紀「いいよ!沢山打った方の勝ちね!」

胡桃「よし!じゃあちよつと取ってくる。」スタスタ…

バタン。

胡桃(…あいつ漫画に夢中であたしに気付いてねえ。)

胡桃(ま、さすがにバットとボール見付ける前に気付くだろ)スタスタ…ゴソゴソ

胡桃(ええつと…あ!あつたあつた。両方ともセットでしまつてあつたけど…ここにしまったの誰だ?…野球する気満々だな。)

胡桃(良し…由紀のところに戻るか…)スタスタ…

バタン

胡桃(マジか…あいつ、結局あたしに気付かなかつた。どんだけ漫画に夢中なんだよ、そりや山にも行くわな。)スタスタ

由紀「お帰り〜！早かったね？」

胡桃「両方ともセツトでしまつてあつたからすぐに見付かつた。…あたし達の中に野球する気満々なヤツがいるみたいだ。」

由紀「あ！それ私。」

胡桃「お前かよ！」

由紀「えへへ、ボールとバットはセツトでしまつた方が良いかな〜つて思つて。」

胡桃「まあ良いけどさ……。んじゃあ三球交代の…えつと……。十セツトで良いか。…どつちから投げる？」

由紀「私から投げる！」

胡桃「りよーかい。じゃあほれ…。ボール。…んでバットはそのままあたしが持つと。」

由紀「シャベルじゃなくて良いの？」

胡桃「野球の時までシャベルは使わねーよ！」

由紀「へえ〜。…じゃあ投げるよ〜！」

胡桃「よし！来い！！」

十五分後。

胡桃「そりゃ!!」カキンツ!!

由紀「わわ!!また打たれた!!!」

胡桃「止まって見えるぜ!!」

由紀「もう16点目だよ!」

胡桃「今ちようど7ゲーム終えて…あたしが16点、由紀が4点。」

由紀「もう勝つの無理じゃん!!それに21球中16球も打たれると嫌になるよ!」

胡桃「まあヒット性の当たりは点になるルールにしたからな、そんなくらいいくだろ。」

由紀「もうボール拾い行くの疲れた!!」

胡桃「打たれるお前が悪いんだから、取ってこい!!」

由紀「もうやめようよ!」

胡桃「つたく…。分かった、次あたしが投げる3球の内1球でも打てたらそのままお前の勝ちにしてやるよ。…だから探して来い!」

由紀「ほんとに？じゃあ探してくる！」スタスタ

胡桃「あ！あたしちよつとトイレだけ行ってくるな？」

由紀「うん分かった！」

胡桃（今のところ奴らもないし、見通しも良いから少しの間なら
由紀一人でも大丈夫だろ。）スタスタ：

バタン

胡桃（…まだ漫画読んでる。）スタスタ

バタン

…ジャーツ

バタン

胡桃（…トイレに入ったのも気付いてねえ。）

「……………えへへっ。」

胡桃（笑ってる…。）

「……………。」ペラッ

「……………へへへっ。」

胡桃「気持ちわりーよ!!」

「うわっ! 胡桃ちゃん?! いつの間に戻ったの?」

胡桃「2分くらい前からな、…てかさつきも一回来たぞ? 気付けどよ。」

「いや〜。少し夢中になりすぎたね。」

胡桃（なりすぎだろ!）

胡桃「…それ、この間寄った本屋で見付けた漫画?」

「うん、由紀ちゃんにオススメを選んでもらったんだけど…中々面白いね。」

胡桃「ふーん…ギャグ漫画?」

「そう。胡桃ちゃんも見る?」

胡桃「あ〜…今は由紀と遊んでる途中だから、また後で見せてよ。」

「うん。…因みに何して遊んでるの?」

胡桃「野球。」

「二人で?」

胡桃「って言ってもお互いバッターとピッチャーを交代でやっていって多く打てた方の勝ちってやつだけだな。」

「はあ、なるほど。…胡桃ちゃんはなんで途中で車に戻ったの?」

胡桃「くく！トイレだよ!!」

「ああ…これは失礼。」

胡桃「マジで…：…だいふ失礼だぞ。」

「悪かったって…で、野球はどっちが勝ってるの?」

胡桃「どっちだと思う?」

「…胡桃ちゃんでしょ?」

胡桃（ま！当然そう思うよな!）

胡桃「ふふん♪内緒だ！じゃああたしは由紀の所に戻るな。」スタスタ

バタン！

スタスタ…

由紀「遅いよ！胡桃ちゃん!!」

胡桃「わりーわりー！ボールあつた?」

由紀「ありましたとも!!さあ、三球投げて！一回でも打てたら私の勝ちだからね!」

胡桃「分かった分かった。…：…いくぞ?」

由紀「うん！」

胡桃「ほっ！」シュツ！

由紀「そりゃ！」スカッ！

胡桃「まず一球〜！」

由紀「く〜！次で打つから！！ほらボール！」ポイツ！

胡桃「ん。」パシッ！

胡桃「じゃ、二球目いくぞ〜。」

由紀「来い！」

胡桃「ほっ！！」シュツ！！

由紀「えいつ！」カキンツ！！

胡桃「…あ！！」

由紀「お！…今の…打てた内に入るよね？」

胡桃「ああ、ホームランとまでは言わないけど、十分なヒットだよ。」

由紀「やった〜〜！」

由紀「じゃあ、私の勝ちだよね!？」

胡桃「そーだな。由紀の勝ちだ。」

由紀「ううく……勝ったく!胡桃ちゃんに勝ったく!」

胡桃（お情けルールで勝つてよくここまでではしゃげるな……。）

由紀「……とりあえずここからだね。」

胡桃「……?……何が?」

由紀「今は野球で勝っただけだけど、その内もつと運動神経とかも良くなって強くなって……胡桃ちゃん達に守られてばかりの私じゃない、……少しでも胡桃ちゃん達を守る私になるの!」

胡桃「え?……。」

由紀「皆にはいつも迷惑かけてるから……私、もつと皆の役にたきたいの。」

胡桃「由紀……。」

由紀「この間もそう……皆があの人から私を助けてくれた。」

胡桃（あの人……空彦か。）

由紀「だから私も皆を!!」

胡桃「……。スタスタ……ギョツ!

由紀「うわっ！胡桃ちゃん？ど、どうしたの？いきなり抱き付いて…。」

胡桃「由紀…。」ギユウ…

胡桃「…………。」

胡桃（お前は十分あたし達の支えになってるんだから…無理しないで良いのに…。）

胡桃（なのにお前は…それでもあたし達の事を…。）

由紀「…………胡桃ちゃん？」

胡桃「…由紀」

胡桃「お前は十分強くなってるよ、この間も空彦の隙をみて噛み付いたじゃん！凄かったぞ、あれ。」

由紀「ほんとに？…えへへ、あの時は私のファーストチツスが懸かってたので…。」

胡桃「チツスって何だよ。…てかファーストなのな？」

由紀「…胡桃ちゃんは？」

胡桃「…………どうかな？」

由紀「お、お父さんとかは無しだよ!!」

胡桃（そういうのはむしろお前が言うかと思っただけ……変な所で大人だなコイツ。）

由紀「んで!? んで!？」

胡桃（うわ! グイグイくるな!）

胡桃「…無いよ。」

由紀「ほっ……良かった、胡桃ちゃんが私の知らぬ間に大人の階段を上ってしまったかと…。」

胡桃「今となつては本当に相手がないからな。」

胡桃（生存者的な意味で。）

由紀「——くんがいるじゃん。」

胡桃「あいつ!? …あいつか…、ん〜!」

由紀「おお…まさかの満更でもない反応!」

胡桃「いや…ちげーよ!! 大体まだアイツとは知り合ってばっかだろ!」

由紀「おお…ゆっくりと愛を育むスタイル?」

胡桃「ちげーよ!!」

由紀「でももう——くんと会って三週間は経ってるよ? 十分じゃない? 毎日一緒に寝泊まりしてるんだし。」

胡桃「じゃあ由紀付き合えば?」

由紀「私!?…私が——くんと……。」

胡桃「…あれ?こいつもしかして…。」

由紀「うん!」

胡桃「マジか!?!」

由紀「まだ早いね!胡桃ちゃんの言う通りだ!」

胡桃「あ、ああ。そうだろ?…もう少しお互いの事知らないとな?」

胡桃「ビックリした〜!告白しに行くのかと思った!」

由紀「でも——くん良い人だね!私は好きだよ?…胡桃ちゃんは?」

胡桃「え?」

胡桃「(友達的な意味でだよな?…なら…)」

胡桃「そうだな、あたしも好きだよ。」

悠里「…何の話をしているの?」

胡桃「なっ!りーさん!?!いつから?!」

悠里「今来たところだけど…何?三角関係なの?…しかも由紀ちゃんまで加えて。」

胡桃「違うって!——の事友達として良いヤツだって話してたん

だよ!!」

悠里「あらそう?…:そうよね…:良かった、三角関係のまま同じ車で一緒に寝泊まりするのは少し気まずいと思ってたから。」

胡桃「昼ドラかよ。」

由紀「多分そんな昼ドラ無いよ?」

胡桃「例えだよ。」

由紀「りーさんも——くんの事好きだよね?」

悠里「え?友達としてよね?…:ええ。好きよ?」

由紀「だよね!良し!後でみーくんにも聞こく。」

胡桃「聞くのか?」

由紀「うん!しかも——くんの前で!」

胡桃「やめてやれ。」

由紀「しょうがない…:一応いない所で聞こう。」

悠里「けど…:多分美紀さんも好きって言おうと思うわよ?」

由紀「本当に?」

胡桃「じゃなきや一緒に暮らせないだろ。今更嫌いとか言われたらなんかあたし達が気まずくなるわ。」

由紀「うっ！それもそうだね。…じゃあ多分みーくんも——くんの事好きなんだ。」

胡桃「友達として…な？」

悠里「ふふっ、じゃあそろそろお昼だし、そんな——君の待つ車に戻りましょうか？美紀さんも先に戻ってるハズだし。」

由紀「うん！」

胡桃（始めて会った時はこの女だらけの中に男を入れるのはどうかと思っただけ。…今となっては余計な心配だったな。）

胡桃（皆と良く馴染めてる。もちろんあたしも…。）

胡桃（それにアイツ戦うの得意だから、元は一人きりの戦闘要員だったあたしは本当に助かってる。…他の皆はあまり戦うの得意じゃないから。）

胡桃（あとアイツ、わりとあたし達が嫌がる事を代わりに背負ってくれるからな…。）

胡桃（もしこれからこの前のようにアイツが悩む事があれば…あたしが…。あたし達が支えてあげれば良い。）

胡桃（——。お前はもうあたし達の大切な仲間なんだよ。）

由紀「胡桃ちゃん？戻ろ？」

胡桃「……うん！」

短編―それぞれの休息 『美紀の場合』

美紀「……。」ジャブジャブ

悠里「悪いわね、洗濯手伝ってもらっちゃって。」ジャブジャブ

美紀「いえ、大丈夫ですよ。」ジャブジャブ

悠里「大して量はないから…二人ならすぐに終わると思うわ。」ジャブジャブ

十分後。

美紀「よし！これで最後ですね？」

悠里「ええ、お疲れさま！」

美紀「リーさんもお疲れさまです。」

悠里「今日は一日移動もしないでそのままここでゆっくりとする予定だから、美紀さんももう好きな事してて良いわよ？」

美紀「なるほど、今日は休日って訳ですね。」

悠里「ええ、もう胡桃は由紀ちゃんと遊んでるし、——君も車で漫画を読んでるハズよ。」

美紀「へえ……りーさんはこれからどうしますか？」

悠里「私はこの洗濯物を干した後で、由紀ちゃん達の所に行きましようかしら？」

美紀「あ……じゃあ洗濯物干すのも手伝いますよ。」

悠里「大丈夫！もう十分に手伝ってもらったから。……休んでちょうだい？」

美紀「んー、ではお言葉に甘えて。……私は一足先に——さんの所に戻って途中まで読んだ小説の続きでも読んで過ごします。」

悠里「ええ、それが良いわ。じゃあ、また後でね！」

美紀「はい！」

スタスタ……

ボタン！

「!!」ビクッ！

美紀「？——さん何してるんですか？食品棚なんか開けて……お腹空いたんですか？」

「ううん、ちよつとその……在庫チェックしてました！」

美紀「ああ、そうですか。……まだ十分食糧ありますよね？」

美紀（ちよつと怪しい……）

「はい大丈夫！まったく問題無しです!!」

美紀「良かったです。」スタスタ

美紀（……まあ良いか。）

「りーさんは？」

美紀「洗濯物を干した後で由紀先輩達の所に行くみたいです。……私はこの本の続きを読みに戻ってきました。」ペラッ

「ああ、この間の……それホラー小説ですか？」

美紀「はい、よくわかりましたね？」

「表紙の感じで何となく……美紀さんホラー好きなんですか？それとも小説だけ？」

美紀「ホラーはわりと好きですよ、映画とかもよく見ました。」

「気が合いますね。……実は僕もホラー好きなんですよ、主に映画ですが。」

美紀「本当ですか？じゃああれ見ました？あの最新映画！」

「最新映画？」

美紀「ああつと……言い方が悪いですね。……世界がこうなる直前に話題だったあの映画の事です。」

「ああ……見たかったですけど……一緒に見に行く人がいなくて、さすがに一人映画はちよつとね……。」

美紀「え?。」

「え?。」

美紀「私……一人で見に行きました……。」

「……………」

美紀「なんですか?その目は。」

「いえ、何も……話変わりますが美紀さんて友達いました?」

美紀「変わったよう微妙に関連性のある話題ですね。……というか失礼な!いましたよ!」

「ああ、そうですか。この間の……圭さんでしたっけ、その人以外ですよ?」

美紀「いました!……一番仲が良いのは圭でしたけど。」

「じゃあなんで一人で?」

美紀「ああいうの好きな子が周りにいなくて……やっぱ女子高生っていうのはホラーなんかよりも恋愛物が好きな生き物なんですかね

…。」

「さあ？どうなんでしょう。…それが男友達は？いませんでした？」

美紀「男友達ですか…あまり親しい人はいなかったです。クラスの男子、私の苦手なタイプ多くて…。」

「空彦みたいなの？」

美紀「アレほどでは無いです!!」

「ついに『アレ』呼ばわりか…。」

美紀「アレほどでは無いですが…：やたらおしゃべりだったり、下らない話ばかりするような男子ばかりでした。」

「へえ。…もし僕が美紀さんのクラスメイトだったら映画に誘ってくれました?」

美紀「学年が違います。」

「細かい事は抜きで!」

美紀「んく、そうですね。——さんの事を今ほど理解してたら誘ってますね。」

「ああ、初対面の体ていだったら誘われないと…。」

美紀「そうですね。…私自身自分から男子に話し掛けるタイプではなかったの、——さんがクラスにいても——さんの事を今ほど知ることにはなかったと思います。」

美紀「今はこの世界の状況や由紀先輩達が一緒にいるって事のおかげで——さんの事を深くまで知る事が出来ましたけどね。」

「そんなに僕という人間の事知ってましたっけ？」

美紀「少なくとも私の一番仲の良い男子です。…クラスの男子とはここまで話せませんでした。」

「それは光栄ですね。」

美紀「ふふっ、…にしても久々に映画とか見たいです。」

「……ですね……。」

美紀「今となつては難しいですよね。…どっかに自家発電機を搭載した映画館でもあれば良いんですが……。」

「………そうですね……。」

美紀「あ、別に映画館ではなくても自家発電機を使っている建物にテレビとDVDプレイヤーがあれば見れますね？探せばどっかにありそうです、希望が出てきましたよー！」

「………。」 Z Z Z

美紀「あ、寝ちやいましたか。」

美紀（…もし——さんがクラスメイトだったら…か。）

美紀（そんな世界があつたら…きつと凄く楽しいだろうな。）

美紀（圭も入れて三人で遊びに行ったり、買い物したり、それに……。）

美紀（一緒に映画……見に行ったり出来るかな？）

美紀（……………。）

美紀（妄想ばかりしても仕方ないか……………。）

美紀（だったら妄想なんかじゃなく……いつかさつき言った自家発
電機のある建物を見付けたらテレビとプレイヤー、それに私のお勧め
映画のDVDを用意してその時に……………。）

美紀「一緒に映画……………見ましょうね？」

短編―それぞれの休息 『悠里の場合』

悠里「おはよう、皆。」

由紀「おはよう。」

胡桃「おはよう。」

美紀「――」 「おはようございます。」

悠里「少し待ってね、今朝ごはんの準備するから。」

由紀「はい！」

「今日の予定は？」

悠里「今日はこのまま移動もしないで、ゆっくり一日休みましょうか？」

「良いですね、……じゃあ朝食も食べたし、僕はゆっくりと漫画でも読

んでいようかな。」

由紀「じゃあ胡桃ちゃんは私と外で遊ぼう。」

胡桃「んー、そうだな…いいぞ。」

悠里「それが良いわ。けどあまり遠くまで行っちゃダメよ?」

胡桃「わかってる、すぐ近くで遊んでるよ。」

由紀「じゃあ行こう!」

胡桃「ほいほい。」

スタスタ…

バタン

美紀「食器洗い終わりましたー。今由紀先輩達が出てきましたけど、どこ行っただんですか?」

悠里「ありがとう、由紀ちゃん達は外で遊ぶって。…私は服の洗濯でもしようかしら。」

美紀「あ、じゃあ私も手伝います。」

悠里「いいの?じゃあお願いするわ。…君、少し留守番頼むわね?…といっても皆すぐ近くにいますけど。」スタスタ

「了解しました!」

バタン

美紀「……。」ジャブジャブ

悠里「悪いわね、洗濯手伝ってもらっちゃって。」ジャブジャブ

美紀「いえ、大丈夫ですよ。」ジャブジャブ

悠里「大して量はないから…二人ならすぐに終わると思うわ。」ジャブジャブ

十分後。

美紀「よし！これで最後ですね？」

悠里「ええ、お疲れさま！」

美紀「リーさんもお疲れさまです。」

悠里「今日は一日移動もしないでそのままここでゆっくりとする予定だから、美紀さんももう好きな事してて良いわよ？」

美紀「なるほど、今日は休日って訳ですね。」

悠里「ええ、もう胡桃は由紀ちゃんと遊んでるし、——君も車で漫画を読んでるハズよ。」

美紀「へえ……りーさんはこれからどうしますか？」

悠里「私はこの洗濯物を干した後で、由紀ちゃん達の所に行きましようかしら？」

美紀「あ……じゃあ洗濯物干すのも手伝いますよ。」

悠里「大丈夫！もう十分に手伝ってもらったから。……休んでちようだい？」

美紀「んー、ではお言葉に甘えて。……私は一足先に——さんの所に戻って途中まで読んだ小説の続きでも読んで過ごします。」

悠里「ええ、それが良いわ。じゃあ、また後でね！」

美紀「はい！」スタスタ

悠里（……さて、どこに干そうかしら？車の近くで良いわね。なら美紀さんと……あ、もう行っちゃったか。）

悠里（まあ、とりあえず私も行きましょ。）スタスタ……

バサッ!

悠里「…ふう。」

悠里（全部干し終えた。…ここだと――君の目に付くけど、今回は下着類はないから別に良いか…。）

悠里（さすがに下着は男の子の前じゃ干せない…。良い人なんだけど、――君も男の子だからそういうの見たかったりするわよね？この前も水着見たかったみたいだし…。）

悠里（…水着くらいなら良いけどね。…今度は水浴び、誘ってあげようかしら。――君、良く頑張ってくれてるし。）

悠里（穂村君の件も、――君が終わらせてくれたものね…。――君が穂村君を殺してなかったら、多分私が穂村君を殺してた…。）

悠里（そうしたら私は罪悪感を感じていたのかしら…。…あんな酷い人相手でも…。）

悠里（いえ、きつと大丈夫。あんな人を相手に罪悪感なんか感じる必要は無い。…あの人は…由紀ちゃんにあんな酷い事を…。…。）

悠里「…っ！」ギッ

悠里（由紀ちゃんは…私の大切な…。大切な仲間…。）

悠里（…妹のような。）

悠里「…………るーちゃん。」ボソッ

悠里「…………。」

カキンッ!!

悠里「!」ハッ

悠里「今の…野球みたいな音ね?…………由紀ちゃん達かしら?」

悠里「…行ってこよ。」

悠里（あ、いたいた…。）

由紀「でも——くん良い人だよね!私は好きだよ?…胡桃ちゃんは?」

悠里（!!?…好き!?由紀ちゃんが…——君の事を!?)

胡桃「え?」

胡桃「そうだな、あたしも好きだよ。」

悠里（胡桃まで!?何?修羅場なの!?…これは放っておいたらマズイわよね?）

悠里「…何の話をしているの?」

胡桃「なっ!リーさん!?いつから?!」

悠里「今来たところだけど…何?三角関係なの?…しかも由紀ちゃんまで加えて。」

胡桃（そんなの、気まず過ぎるわ!）

胡桃「違うって!」——の事友達として良いヤツだって話をしてたんだよ!!」

悠里（ああ、…そういう事か。）

悠里「あらそう?…そうよね…良かった、三角関係のまま同じ車で一緒に寝泊まりするのは少し気まずいと思ってたから。」

胡桃「昼ドラかよ。」

由紀「多分そんな昼ドラ無いよ?」

胡桃「例えだよ。」

由紀「リーさんも——くんの事好きだよね?」

悠里「え？友達としてよね？…ええ。好きよ？」

悠里（…良い人だもの。）

由紀「だよね！良し！後でみーくんにも聞こう。」

胡桃「聞くのか？」

由紀「うん！しかも——くんの前で！」

胡桃「やめてやれ。」

由紀「しょうがない…一応いない所で聞こう。」

悠里「けど…多分美紀さんも好きって言うと思うわよ？」

悠里（嫌いだったら本も二人きりの空間じゃなく外で読むでしょうし。）

由紀「本当に？」

胡桃「じゃなきゃ一緒に暮らせないだろ。今更嫌いとか言われたらなんかあたし達が気まずくなるわ。」

由紀「うっ！それもそうだね。…じゃあ多分みーくんも——くんの事好きなんだ。」

胡桃「友達として…な？」

悠里「ふふっ、じゃあそろそろお昼だし、そんな——君の待つ車に戻りましょうか？美紀さんも先に戻ってるハズだし。」

由紀「うん！」

悠里（るーちゃん……お姉ちゃんは今、毎日幸せよ。）

悠里（ここに……いつか、るーちゃんも……。）

短編―それぞれの休息 『由紀の場合』

胡桃「……で？何する？」

由紀「んゝ……。キャッチボールでもしよう？たしかボールあったよね？」

胡桃「ああ、それなら野球でもしようぜ。バットもあるし。」

由紀「いいよ！沢山打った方の勝ちね！」

胡桃「よし！じゃあちよつと取ってくる。」スタスタ：

由紀「…そういえばこの間の掃除の時にボールとバットセットにして移動させちゃったけど。胡桃ちゃん見付けられるかな？…でもそんな見付けにくい場所じゃないから、まあ大丈夫か！」

由紀「…お！帰ってきた!!」

由紀「お帰り〜！早かったね？」

胡桃「両方ともセットでしまつてあつたからすぐに見付かった。…あたし達の中に野球する気満々なヤツがいるみたいだ。」

由紀「あ！それ私。」

胡桃「お前かよ！」

由紀「えへへ、ボールとバットはセットでしまった方が良いかな
〜って思ってる。」

胡桃「まあ良いけどさ……。んじゃあ三球交代の…えつと……。十
セットで良いか。…どっちから投げる？」

由紀「私から投げる！」

胡桃「りよーかい。じゃあほれ…。ボール。…んでバットはそのまま
あたしが持つと。」

由紀「シャベルじゃなくて良いの？」

胡桃「野球の時までシャベルは使わねーよ！」

由紀「へえ〜。…じゃあ投げるよ〜！」

胡桃「よし！来い！！」

由紀「えいつ！」シュツ！

胡桃「よっ！」カンツ！

由紀「うっ！いきなり〜？」

胡桃「ああいきなりだ。まずあたし1点な？」

由紀「うーん…まあまだまだこれからだよ！」

—
—

由紀「とうっ！」シュツ！

胡桃「ほっ！」カキンツ！

由紀「あく！結局3球全部打たれたあ！」

胡桃「まあまあ、まだ始まってばかりなんだから…そんな落ち込むなよ。」

由紀「うーん、そうだね。とりあえずは攻守交代だよ！…バット貸して？」

胡桃「その前にボール拾ってこいよ。バットはそれからだ。」

由紀「ちえっ！ごまかせると思ったのに…、もうボール拾い3回目だよ。」

胡桃「そりやあ3回打たれてるからな。」

由紀「胡桃ちゃんのいじわる！」スタスタツ…

由紀 「さあ！拾ってきたよ！バットちようだい!!」

胡桃 「オツケー。」

由紀 「ふっふっふ…胡桃ちゃんにもボール拾いの辛さを味あわせてあげるよ。」

胡桃 「やれるもんならな！いくぞ?」

由紀 「うん！」

胡桃 「そりゃ！」シュツ！

由紀 「やつ！」ブンツ！ スカツ…

胡桃 「いよし!!」

由紀 「何今の！速すぎだよ!!打てるわけ無いじゃん！」

胡桃 「お前とは出来が違うのだよ！」

由紀 「うく！次だよ！次！」

十五分後。

胡桃「そりゃ!!」カキンツ!!

由紀「わわ!!また打たれた!!!」

胡桃「止まって見えるぜ!!」

由紀「もう16点目だよ!」

胡桃「今ちようど7ゲーム終えて…あたしが16点、由紀が4点。」

由紀「もう勝つの無理じゃん!!それに21球中16球も打たれると嫌になるよ!」

胡桃「まあヒット性の当たりは点になるルールにしたからな、そんなくらいいくだろ。」

由紀「もうボール拾い行くの疲れた!!」

胡桃「打たれるお前が悪いんだから、取ってこい!!」

由紀「もうやめようよ!」

胡桃「つたく…。分かった、次あたしが投げる3球の内1球でも打てたらそのままお前の勝ちにしてやるよ。…だから探して来い！」

由紀「ほんとに？じゃあ探してくる！」スタスタ

胡桃「あ！あたしちよつとトイレだけ行ってくるな？」

由紀「うん分かった！」

由紀「さて…さっきの結構飛んでたから、探すの大変だよ…。」スタスタ：

由紀「ボールやーい！」スタスタ

由紀「どこだろ…、もしかしてその草むらの中かな？…だとしたらメンドーだなあ。…でももうこの辺しかないよね…。…仕方ない、探そ。」

由紀「うゝ。」ゴソゴソ

由紀「無いよおゝ。」ゴソゴソ

由紀「胡桃ちゃんが容赦しないからゝ。まったく！少しは手加減して欲しいよ!!」ゴソゴソ

由紀「……。」「ゴソゴソ…ピタッ。

由紀「…胡桃ちゃん。本当に運動神経良いよね…。」

由紀「——くんも胡桃ちゃんと同じくらい強いし……。リーさんとみーくんは私達の身の回りの事全部やってくれる。」

由紀「私は……。」

由紀「何も出来ない…。この間も私、空彦君に捕まって皆に迷惑か
けたし。……そのせいで——くんも少しの間元気無くなっちゃった
…。」

由紀「………迷惑かけてばかりだ」

由紀「………落ち込んでても…強くなれないよね。」

由紀「がんばろう…いつか皆の役にたてるように」

由紀「そうと決まれば、まずは運動神経を良くしないと！」

由紀「その為の一步として、私は胡桃ちゃんに勝つ！……野球でだ
けど。」

由紀「あ…そっか。ボール探してる途中だったね。」

由紀「ん？そこ？…。ゴソゴソ…あ！あつた〜！」

由紀「ちよつと遅くなっちゃった。胡桃ちゃんもう待ってるよね

？」スタスタ：

由紀「あれ？まだいない。長いトイレだなあ。」

由紀「……。」

由紀（少しずつでも…皆の役にたてる私になっていこう。）

由紀（これからも…ずっと皆といれるように。）

由紀「……あ、胡桃ちゃんやつと戻ってきた。」

由紀「まったく！人を待たせてるのに歩いてるよあの人は！」

スタスタ：

由紀「遅いよ！胡桃ちゃん!!」

二十一話『こうえん』

悠里「胡桃、ちょっと地図取ってきてくれる？」

胡桃「はいよ。」

走らせていた車を道路の真ん中で止めると悠里は胡桃から地図を受け取り、それを開いて考える。

悠里（こうして地図を見直すとまだまだ探索していない地域がまだまだあるわね。…それでもかなりの色々な場所を探索したはずだけど…未だに確認した生存者は――君を入れても3人だけ…、これは多いのか少ないのか…どっちかしらね。）

悠里「…ねえ――君。あなた今までどんな場所で生存者と会ってきた？」

悠里が運転席から後部座席に座っている彼に尋ねる。

「生存者ですか？…そうですね、生き延びている人は大体シヨツピングモールやホームセンターなどの元からある程度の物資が揃っている場所を拠点に立て籠っている人が多いですね。…あくまで僕が会ってきた人達は、ですけど。」

悠里「そう、この辺にもいるのかしら？」

「どうでしょうね、もう奴らが現れてからかなり経っていますから…そういった場所を探しても中々いないと思いますよ？その証拠に最近探索した施設はどれも無人でした。」

美紀「確かにそうですね…。しかし毎回人はいなくても物資はそこ

そこ補給出来ているのがせめてもの救いですね。」

美紀が会話に入る。

悠里「そうね。これでどの建物を探しても物資すら見付けられなくなったら…かなりマズイわね。」

「そうですね…。ところで何で急に生存者の話を？」

悠里「いえ、深い意味は無いの。…ただ毎日これだけ色々な場所をみてるのに、全然他の人に会わないから…もう生き残っている人はいないのか…って、不安になっちゃって。」

胡桃「…まあいるところにはいるだろ。大丈夫、あたし達すら生き延びてるんだ。皆もどっかで生き延びてるって！」

助手席の胡桃が悠里を励ます。

悠里「…そうね。」

表情を明るくする悠里。

「生き残りが気になるなら…ランダルか、あの大学にでも向かったらどうでしょうか？わざわざ皆の先生が印を付けていたくらいです、生き残りがいる可能性は高いと思いますよ？」

彼が提案する。

悠里「いいえ。別に生存者の人と会いたい訳ではないの。…ただもうこの世に私達しかいないんじゃない？…って思ってしまっただけ。それに他の生存者に会ってもそれが善人とは限らないでしょ？」

「そうですね、それが一番の課題です。…はつきり言ってしまうと、こちらからわざわざ他の生存者を探すのは危険だと僕は思います。」

美紀「ですね。私もとりあえずしばらくは物資を探索しながらの現状維持が妥当だと思います。」

胡桃「そうだなあ。」

胡桃「——は元から他の生存者には襲われまくってて良い印象を持ってない訳だけど、皆も空彦アイツの件があったてからは徐々に同じ気持ちになってきてる。」

胡桃「やっぱこんな世界になるとそういう危険な人間が増えてくるからなあ。空彦アイツは一人だったし、戦うのは苦手だったらしいから由紀を放した後は楽に抑えれたけど…。」

胡桃「もしあれが集団で、しかも戦いが得意な奴らだったら…：…いくら——とあたしがいても一発でアウトだ。」

胡桃「そんな奴らがないとも言い切れないのは、——の話聞いて思い知っちゃってるしなあ…：…ヤベ、不安になってきた。」

胡桃「せつかく情報を残してくれたためぐねえには悪いけど、やっぱランドルや大学はもう少し様子を見た方が良いな。」

胡桃「…：…。」スッ

悠里「?どうしたの胡桃?」

席を立つ胡桃に悠里が尋ねる。

胡桃「ちよいと後ろで休憩してようかなって、良い?」

悠里「ええ、構わないわ。」

胡桃「サンキュー。じゃあそう言う事で…由紀、代わり頼める？」
タスタ…

由紀「ラジャー！」
タスタ

そう言つて後部の椅子に座つていた由紀が胡桃と席を代わる。

胡桃「ふう…。」

「胡桃ちゃん、お疲れかな？」

腰掛けた胡桃に彼が言う。

胡桃「いや、そこまでは疲れてないんだけどね。」

「そつか…じゃあこれあげる。」
ポイツ

そう言つて彼は一冊の本を胡桃に投げ渡した。

パシッ

胡桃「ん？何これ…。」
『世界のシャベル大図鑑』…。」

本のタイトルを見て、胡桃は彼の顔を見る。

胡桃「…バカにしてる？」

「…胡桃ちゃんなら喜ぶかと思つてこの間本屋から取つてきた。」

胡桃「喜ばねーよ！」
ペラッ

美紀「でも読むんですね。」

美紀がつつこむ。

胡桃「せつかくだから読まないともつたないかなって……。お！
このシヤベル使いやすそう。」ペラッ

美紀「…シヤベルって世界のつて言うほど種類あるんですか？」
美紀が彼に言う。

胡桃「…………。」ペラッ

「…さて…………どうなんでしょう？」

一人ページをめくり続ける胡桃を眺めながら、彼は言った。

悠里「迷っていても仕方ないか…。由紀ちゃん、とりあえず今日は
この辺りを目標に移動するから、案内頼むわね？」

悠里は地図の一カ所を指差して由紀に目的地を伝えたと、そのまま
地図を渡した。

由紀「うん！…えつと、今私達はどこかな？」

地図を渡された由紀が悠里に尋ねる。

悠里「ああ、今はここよ。」

悠里が地図を指差して現在地を教える。

由紀「あゝ。うん、分かった！…ならここまで行くには…………。」

胡桃「頼むぞ？由紀。」

本を読みながら胡桃が言う。

由紀「うん！任せて胡桃ちゃん。…じゃありーさん行こ！まずはしばらく真っ直ぐ進んで！」

由紀のナビゲートを頼りに、車は再び動き始めた。

「どのくらいかかりますか？」

彼が悠里に尋ねる。

悠里「うーん…大した距離ではないから、30〜40分くらいかしら？」

「そうですね。では少しお昼寝でもしますかね。」

彼はそう言っつてテーブルに顔を伏せた。

美紀「よく寝る人ですね。」

胡桃「まったくだ。」

「用があつたら起こしてね。」

彼は顔を伏せたままそう言っつて、そのまま眠りについた。

由紀「えつと…そこ右だよ。」

悠里「ここを右ね？」

由紀の案内の中、順調に車は移動していき、30分後には目的地に到着した。

美紀「——さん、起きて下さい。着きましたよ。」
眠っている彼の肩を美紀が揺さぶって起こす。

「…ん。ああ、どうも美紀さん。」

起こされた彼は美紀と共に車を降りる。他の皆は既に外に出ているようだった。

胡桃「やっと起きたか。」

外で待っていた胡桃が彼に言う。

「…わりとすぐに起きたつもりだったけど。」

胡桃「最初はあたしがお前を起こそうとしてたけど、全然起きないから美紀と交代したんだよ！」

美紀「そんな私も起こすまで3分くらいかかりましたけど。」

胡桃と美紀が呆れた顔で言う。

「…それはすいませんでした。」

美紀「良いですよ、別に。」

由紀「次からは私が起こすね！」

由紀が言う。

「悪いですね、頼みます。」

胡桃「いや…こいつの場合は由紀よりもりーさんに頼んだ方が効果

あるだろ。」

悠里「あらそう？じゃあ次は私がやってみようかしら？」
そう言つて不敵な笑みを浮かべる悠里。

「これからはすぐに起きます…。」

悠里「そうね、それが良いわ。」

美紀「ところで今日はこのままここを拠点にするんですよね？」

悠里「ええ、とりあえずはそうね。」

今回車を停めた場所は街中の広い自然公園。辺りには池や今は動いていない噴水があつた。

胡桃「これからどうする？まだ午後1時ちよいだろ？夕飯までは時間があるし…。」

悠里「そうね…皆夕飯まで適当に時間を潰してちようだい。」

由紀「じゃあこの公園散歩してきて良い？」

悠里「構わないけど一人じゃダメよ。誰かと一緒にね。」

由紀「分かつた〜！…胡桃ちゃん！」

由紀が胡桃に着いてきてと目でアピールする。

胡桃「え〜！あたしは少し休みたいんだけど…。」
胡桃が面倒そうに言う。

由紀「も〜！せつかくこんな広い公園に来たのに〜。」

胡桃「じゃあそいつ連れてけ。」

そう言つて胡桃は彼を指差す。

「…僕ですか？」

由紀「…一緒に来てくれる？」

由紀が彼を見つめて言う。

「はい、もちろんです。」

由紀「やった〜！じゃあいこ〜。」

そう言つて嬉しそうに駆けていく由紀の後を彼がついていく。

胡桃「由紀を頼んだぞ〜。」

悠里「あまり遠くまでは行かないようにね〜！」

胡桃と悠里が彼に言う。

「了解です〜！」

彼は振り返つてそれに返事をする。

悠里「…さて、由紀ちゃんは彼に任せて、私は少し休もうかしら。」

胡桃「あたしも〜。美紀は？」

美紀「私はここで本読みながらあの二人を待っています。」
美紀はそう言って車から折り畳み式の椅子を持ってきてそれを車の傍に置き、そして座って本を読み始める。

胡桃「中で読めば良いのに。」

美紀「たまには日の光の下で読むのも良いかと思ひまして。」

胡桃「ふくん。」

悠里「車の周りにあれを仕掛けてあるから奴らが来たら気が付くと思うけど…一応気を付けてね？」

悠里の言うあれとは、地面に突き刺したいくつかのポール…それぞれを車を囲むように紐で繋げた罫であり、何か紐に引っ掛かると端に仕掛けられた防犯ブザーが鳴るように仕組んである物だった。

美紀「はい、気を付けます。」

美紀がそう言うとき悠里と胡桃は車内に戻っていった。

由紀「広い公園だね。」

公園の中を彼と二人で歩きながら、由紀が言う。

「そうですね。池は少し汚いですが…。

道の横に広がる濁った池を見て彼が言った。

由紀「魚とかいる？」

由紀が池を覗く。

「どうでしょうか…見たところはいませんね。」

由紀「ん〜残念。」

そう言って再び歩き出す由紀。

由紀「…誰もいないね。」

歩きながら由紀が言う。

「…ですね。」

由紀「あ！あれなんだろう？」

そう言って由紀は道の横に建てられた掲示板を見る。

由紀「……………」

「……………」

その掲示板は様々な人が家族に宛てたのであろう書き置きがいくつも重ねて貼り付けてあった。

「行こう、由紀ちゃん。」

掲示板を見た由紀の表情が曇ったのに気付いた彼は由紀の手を引いてその場を離れた。

由紀「…今のさ、今はここに避難してるよー…みたいな書き置きもあつたけどさ。そこを探したら今もいるかな？」

手を引かれながら由紀が言う。

「気が付きませんでしたか？あの書き置きの場所…いくつか最近僕達
が立ち寄った施設の名前がありました。」

「でも僕達が行ったときは、既に生存者はいなかった…。」

由紀「…皆もう死んじやったって事？」

「多分大半は…運が良ければまだ生き延びている人も中にはいるかも
ですが。」

由紀「…そっか。」

そんな話をしながら歩いていけると前に一体のゾンビが現れる。

「…ちよつと下がっててください。」

彼は由紀から手を離し、ナイフを構えゾンビに近付く。

彼は掴みかかろうとするゾンビを避けるとそのまま足を引っかけ
てゾンビをうつ伏せに転ばし、その上にまたがってゾンビの後頭部を
突き刺した。

「…もう大丈夫ですよ」

彼は立ち上がりナイフをしまう。

「…行きましょうっ。」

由紀「うん。」

彼は再び由紀を連れて歩き始める。

「どうかしましたか？」

大人しい由紀に彼が尋ねる。

由紀「えっとね……その……。」

由紀「……ちよつとそのベンチ座ってお話しよ？」

由紀が10m程先にあるベンチを指差して言った。

「良いですよ。」

二人はベンチの側まで歩くと、そのベンチに腰掛けた。

由紀「あのさ……。」

彼の隣に座って由紀が言う。

由紀「——くんは皆の事好き？」

「皆って……。」

由紀「リーさんやみーくん、胡桃ちゃん、それに私の事だよ？」

「ええ、好きですよ。…じゃなかったらこんな一緒にいませんよ。」

由紀「そっか！良かった!!」

そう言っつて由紀は嬉しそうに笑う。

由紀「私ね…この前——くんが空彦君を刺した後、——くんしばらく元気がなかったでしょ？それを見て私のせいだって思っつてたんだ。」

由紀「私が——くんを無理やり仲間に誘つたせいで、こんな苦しい思いばかりさせてしまつてるんじゃないかって。」

由紀「…ごめんね？」

由紀が顔を伏せて言う。

「僕があの時元気なかつたのは、皆に嫌われたと思つたからです。皆の前で空彦を殺した事で…皆にショックを与え、そして怖がられたと…そう思つたから。」

「けれどこの前胡桃ちゃんが言つてくれました。そんなつまらない事は気にするなつて…おかげでだいぶ楽になりましたよ。」

由紀「うん…そう。私達は皆——くんが好きなんだから、嫌いになつたりとか怖がつたりとかしないよ。」

由紀が顔を上げて言う。

「ありがとうございます。」

由紀「まあこの間は私が空彦君に捕まつたせいでああなつちやつた訳だから…あんまり偉そうな事は言えないけど…。」

そう言つて座りながら目の前の池を見つめる由紀に彼は言った。

「僕が空彦を殺したのは、由紀ちゃんを泣かせたからです。」

由紀「…え？」

由紀が彼を見る。

「由紀ちゃんを傷付けて、そして泣かせたアイツが許せなかった。」

「僕は…いや、僕達は皆由紀ちゃん的笑顔が大好きですから。だからそれを奪つたアイツへの殺意が止められなかった。」

由紀「笑顔が？」

「はい。」

由紀「そつか…。えへへ、なんか照れるね。」

由紀はそう言つてベンチから立ち上がる。

由紀「そろそろ戻ろつか？」

「はい。」

彼も立ち上がり、そして二人は車の方に歩きだす。

由紀「そういえば——くん！これはあれだね、公園デートだね！」
由紀が歩きながら彼を見て言う。

「そ、そうなんですか？」

由紀「だって公園で男女二人で散歩だよ？…それとも、私とじゃイヤ？」

そう言って表情を暗くする由紀。

「全然オーケーです！むしろ僕の方からお願いしたいくらいですよ！」

由紀の表情が暗くなるのを見て、彼は焦ってそう言った。

由紀「そう？…えへへ！やった〜！」

一変して嬉しそうな表情をする由紀。

由紀「空彦君にキスするのは少しイヤだったけど…——くんになったらしても良いかな…。」

「…なに？」

突然の発言に立ち止まる彼。

由紀「…ぷぷぷ！冗談だよ！少しはときめいてくれた？」

「…かなりときめきました。」

由紀「それは良かった！」

そう言って笑い出す由紀。

「…由紀ちゃん意外と意地悪ですね。」

由紀「えへへ、ごめんね？——くんは好きだけど、やっぱり口にするのは恥ずかしいよ。…せめて頬っぺたかな？」

（十分ですー今すぐして下さい!!）

彼はそう言おうと思ったが、もう悠里達の待つ車に着いたので止めた。

由紀「とーちやく！」

由紀はそう言って紐の罨に触れぬようにして車の中に入っていった。

「……………」

それに彼も続く。

(…椅子出しっぱなしだな、誰が出したんだろ?)

車の側に置かれた誰も座っていない椅子を見て彼は思った。

二十二話 『加速する不安』

ボタン！

由紀「ただいま。」

「戻りました。」

散歩から戻った二人が中にいた悠里と胡桃に声を掛ける。

胡桃「おかえりー、何かあったか？」

「特には何も、奴らも途中一体いただけだったからわりと安全な場所なんですかね。」

悠里「…といつても木の陰とかに隠れているかも知れないから、油断はしちやダメよ?」

「はい、了解です。」

彼はそう言つて椅子に座る。

由紀「…あれ? みーくんはトイレ?」

由紀が車内を見回して言う。

胡桃「は? 外にいただろ?」

由紀「外つて?」

胡桃「車のすぐ側に椅子置いてそこで本読んでただろ?」

「椅子は確かにあったけど…誰もいなかったよ。」

胡桃・悠里「え?!」

バタン!!

慌てて外に飛び出す悠里と胡桃、彼と由紀もそれに続いた。

胡桃「…いない…!!さつきまでこの椅子にいたんだぞ!」

確かに美紀はさつきまではここにいたらしく、椅子の上には本が置いてあった。

悠里「どこに行ったの!」

慌てる胡桃と悠里。

「車内にいて何か物音は聞こえなかったんですか?」

胡桃「聞こえなかった…大体奴らなら罠にかかるはずだし、……まさか、他の生存者がここにいたのか!」

悠里「どうかしら…、こうなれば皆で探しましょう!」

「二人一組で分かれていきましょう!その方が効率が良い。」

悠里「分かったわ、胡桃!行くわよ!!」

胡桃「ああ!」

由紀「二人共気を付けてね!」

胡桃「そつちもな!」

悠里と胡桃は公園の中心部に駆けていった。

由紀「私達はどこを探すの？」

「とりあえず中心部はリーさん達が探しているので、僕達はこの公園を外側に沿って一週してみましよう！」

由紀「わかった！」

彼と由紀は美紀を探して公園を一週し始めた。

道に沿って探し始めてすぐに、自動販売機と公衆トイレ、それとわずかな遊具が設置されている小さい広場に出た。

由紀「みーくん…トイレにいたりしないかな？」

由紀が公衆トイレを見て言う。

「トイレだったら車の中のを使うと思いますが…一応調べましょう。」
彼と由紀はトイレに入っていく。

彼が由紀の先に立ち、女子トイレ内の閉まっている個室一つ一つ開けて調べる。

由紀「…いそう？」

「これが最後のトイレです…。」ボタン！

最後の個室の中にも美紀はいなかった。

「ダメです…いません。」

由紀「…みーくん、どこにいったんだろ…。」

二人は公衆トイレを後にして再び駆け足で探索を始める。

駆け足で公園内の歩道を進む二人の目に、不安を加速させる光景が飛び込む。

「あれは…!」

由紀「あ…!」

二人がそれを見て固まる。

二人の視線の先には、三体のゾンビがいた。

だがその三体は二人には気付かずに、地面に膝をつけて何かを一心不乱に貪^{むさぼ}っていた。

由紀「——くん…あれって…。」

由紀が小刻みに震えて言う。

(…嘘だ…そんなハズはない…。落ち着け!…きつと美紀さんじゃない!)

「由紀ちゃん…きつと大丈夫です。」

彼はナイフを構え、三体のもとへ駆け寄る。

「ふっ!!」ザシユッ!

まず一体目…食事に夢中で彼に気付いてなかった為、楽に首を撥ね飛ばせた。

(大丈夫だ…あの人な訳がない!!)

「っ!!」グサッ!

二体目…これは彼に気付いたが一体目と同じく食事中だった為、反応が遅く、容易に頭を突き刺せた。

(さっきまで普通に会話してたんだ!こんなあっさり終わってたまるか!!)

ドシユッ!

最後のゾンビ、三体目…彼に気づき、飛び掛かろうとするが彼に触れるその前に頭部を両断される。

「はあ…はあ…。」

(…クソ！自分の心臓の音がうるさい!!)

ゾンビが貪っていたそれには三体目のゾンビの死体が覆い被さるように倒れてしまつて確認が出来ない為、彼はゾンビを手で押してどける。

ググツ……ドサツ！

彼が押した方向にゾンビは転がり、覆い被さっていた物が消えたそれが確認できるようになる。

「……………」

由紀「……………くん？」

その正体を確認する彼に由紀が声を掛ける。

「…………ふう、大丈夫。美紀さんじゃないです。」
ゾンビが貪っていた死体から離れて彼が言う。

由紀「ほんと!?!…………よかったあ〜。」
由紀がそう言ってその場にしゃがみこむ。

「全くの別人でした。…………これがさつきまで生きていた他の生存者なのか、それとも空腹に堪えられなくなった奴らが共食いでもしたのかは分かりませんが。」

美紀「奴らって共食いとかするんですか?。」

彼の背後から美紀が尋ねる。

「どうでしょうか…………ただあの死体、奴らに食われていない部分が残っています、肌色が奴らと同じように見えるんです。」
そう言って彼はゾンビ達が貪っていた死体を指差す。

美紀「ん?…………本当だ!じゃあ奴らはあんまり空腹になると共食いするんでしょうか?。」

「…………!美紀さん!!?。」

由紀「みーくん!!」
彼が美紀を見て驚き、由紀は抱き付く。

美紀「うわっ!どうしました二人共?。」

由紀「どうしたじやないよ!!散歩から戻ったらみーくんだけいないんだもん!私達凄く心配したんだよ!」

由紀が涙目で言う。

「本当に凄く心配しました!どこ行ってたんですか!」

彼も美紀に言う。

美紀「あ……そうでしたか。……すみません、本当に心配かけました。」

美紀は二人に謝り話を続ける。

美紀「最初は二人を待ちながら外で本を読んでいたんです。……そして近くの草むらから音が聞こえて……そこに視線を向けたら犬がいたんです。」

「犬?」

美紀「はい……といつてもすぐに逃げてしまったのでどんな犬なのかは分かりません。」

美紀「それで、少しだけ追いかけてようと思って席を離れてしまいました。……すぐに戻るつもりだったのでリーさん達にも声を掛けずに……。」

「……で、結局夢中になってしまったと。」

美紀「はい……本当に申し訳ないです。」

そう言って頭を下げる美紀。

由紀「そのわんちゃんは?」

美紀「…見失いました。」

「…とりあえず車に戻りましょう。リーさん達も心配しています。」

美紀「はい、分かりました。」

彼と由紀は無事美紀を見付ける事ができ、三人で車に戻った。

由紀「リーさん達はまだ帰ってないね。」

由紀が車内に入って言った。

「まだ美紀さんを探してるみたいですね。」

美紀「本当に申し訳ない……。」

由紀「へへ…みーくん絶対リーさんに怒られるね。」

由紀がへらへらしながら言う。

美紀「ううー…先輩に言われなくても分かっていますよ!」

「…とりあえず僕がリーさん達を探してきますね。」

由紀「——くんがいない時にリーさん達が戻ってきたらどうする？」

今度は私が——くんを探しに行けば良い?」

美紀「それ無限ループしそうです…。」

「そうですね。…とりあえず十分間探しても見つからなかったら一度

戻ります。」

パタン

彼はそう言って外に出た。

美紀「……………自業自得なんですけど、これから説教されると分かっていてそれを待ち続けるのは中々怖いものがありますね。」

美紀が椅子に座り、ため息をついてから言った。

由紀「みーくんがこんな勝手な行動するの珍しいね？」

由紀が美紀の隣に座って言う。

美紀「……………太郎丸を思い出しました。」

由紀「……………」

美紀「私が見掛けた犬、犬種はもしかしたら同じだったかも知れませんが、少し大きめだったのでそこまで太郎丸に似ている訳ではなかったんですけど……………犬を見るとどうしても頭をよぎってしまいます……………」

由紀「……………みーくん。」

美紀「ダメですね……………どうも私はあれから犬に甘くなっちゃったみたいです……………前はここまで犬好きではなかったんですけど……………」

美紀「ついつい後先考えずに追いかけてしまいました……………おかげ

で今は説教待機中です。」

美紀はそう言つて由紀に笑顔を見せた。

由紀「へへっ……大丈夫！あんまりキツく怒られたら私が庇^{かば}つてあげる!!」

由紀はそう言つて笑顔を返した。

一方そのころ彼は未だに悠里達を探して公園内をさまよっていた。

(……りーさん達いないなあ。この公園無駄に広いから探すのも一苦勞だ。)

そんな事を考えていると道が左右に分かれている分かれ道に入る。

(……右か左……どっちに行つたのかなあ?……いや、そもそもりーさん達はこの道を通っていない可能性もあるな。)

「……ん〜。」

分かれ道の真ん中で一人たたずむ。

(……大声で呼ぶのも危ないし、それにそろそろ十分たつ……。一度戻

るか。)

そう考えた彼が来た道の方に振り返る。

ガサガサツ!

すると突然背後の茂みから音がする。

「……?」

改めて振り返る彼。

(りーさん達?……あんな茂みの中まで美紀さんを探しに行ってたのか?……それとも。)

彼は念のためナイフを構える。

「……りーさん?胡桃ちゃん?」

茂みに届く程度の声量で彼が言う。

ガサツ!!

すると茂みから一つの影が飛び出して彼の前に姿を現す。

(…!!…犬!?)

それは全身の皮膚が爛れた、明らかに奴らのウイルスに感染している犬だった。

(柴犬……大きいな……。よりによって大人か！子供の犬やもともと小さな小型犬ならもう少し安心できるんだけどな……。)

犬「ググググウ!!」

彼に対して明らかに敵意を示すゾンビ犬。

(…奴らはまだ戦えるけどゾンビ犬、しかもここまで大きいサイズだと近寄って戦かうのはキツいな。)

成犬の柴犬は他の大型犬と比べると決してそこまで大きいサイズではない。…しかし奴らのウイルスに感染しているとするとその大きさは十分に脅威的だった。

(……………久しぶりにアレを使うか。)

彼は右手にナイフを構えて犬との距離を保ったまま、左手を懐ふところに入れて、上着の下に隠していた小型ナイフを取り出す。

(…距離は約5m…目標はあの小さな頭…しかも使うのは左手、構え直す間に飛び掛られたらアウトだからこのまま投げるしかないか。)

シュツ!!

彼は左手でそのナイフを投げる。

(当たれ!!)

…ドツ!

投げたナイフは頭ではなく、僅かに逸れてその犬の肩に刺さる。

犬「ウウツ!!!」

それを合図としたかのように犬が彼の元に駆け出す。

「くっ!!」

飛び掛かってくる犬を紙一重で避けながら彼はナイフを降り下ろした。

ザシユツ!

避けながら降り下ろしたナイフは正確さを失っていて、首を狙ったはずなのに実際は犬の左の後ろ足を切りつけていた。

しかし、飛び掛かった犬は後ろ足を切りつけられた事で着地時に僅かにふらつく。彼はその隙を突いて犬の頭を狙う。

「……っ!!」

ドシユツ!!

振り抜いたナイフは今度は完璧に犬の頭を切り裂いていた。

「…………ふう。」

ため息をついてから、動かなくなった犬の肩に刺さったままのナイフを抜き、そしてそれをしまう。

「まったく……………犬はわりと好きなのに…。」

倒れた犬を見て彼は呟く。

(…多分これが美紀さんの見掛けた犬だと思うけど…。もし何体かいたら大変だな、早いところりーさん達と合流しないと。)

彼は一度、悠里達が車に戻っていないか確認するために車に戻る事にした。

「…………お！」

その途中で、前方にいた悠里と胡桃を見付ける。

「りーさん！胡桃ちゃん！」

二人に駆け寄り声を掛ける。

胡桃「——か、美紀は見付かったか!？」

胡桃が尋ねる。

「見付かりました！今は由紀ちゃんと車にいたので戻りましょう。」

悠里「本当!?!良かった…!」

胡桃「焦った〜!…んじゃあ、早いところ戻ろうぜ!」

彼は二人と合流を果たし、車へと戻る。

バタン!

胡桃「美紀!!」 悠里「美紀さん!!」

車内に戻った二人が由紀と椅子に座る美紀を見て同時に声を掛ける。

美紀「あ、お帰りなさいです二人共…。あの……………本当に心配かけました、すいませんでした!」

椅子から立ち上がり二人に頭を下げる美紀。

胡桃「マジで焦ったんだぞ!」

悠里「どうしていなくなったのかはここに戻る途中で——君に聞いたわ。…まったく!美紀さんがそんな勝手な真似するなんて!!」

胡桃と悠里が二人で怒鳴り声をあげる。

美紀「…はい、本当にすいませんでした。」
頭を下げ続ける美紀。

由紀「あ、あのく、みーくんももう謝ってるしさ？…許してあげよ？ほ…ほら!!みーくんって普段は優等生だからたまのワガママだと思っでさ！」

頭を下げる美紀の肩を撫でながら由紀が割って入る。

「そ…そうですね！無事見付かったんだからオーケーって事で！それにあまり大声で怒って外の奴らに聞こえるとまずいし…。…ね！お二人さん！」

「気まずい雰囲気を感じ取った彼が由紀に続く。」

胡桃「…はあ。分かったよ！」

胡桃はそう言っで美紀に近付く。

胡桃「…本当に無事で良かった。」

「そう言いながら胡桃は美紀の頭を撫でた。」

美紀「…。」

悠里「…怪我とかはしてないのよね？…ふう。もう心配かけないでね？」

悠里もそう言っで美紀の頬に触れる。

美紀「…ごめんなさい、迷惑をかけてしまっで…。」

胡桃「へへ…何回謝あやまんだよ…もう良いって、無事だったんだからさ。」

そう言つて胡桃が美紀の顔を上げさせる。

悠里「そうね…無事だったならなにより…もう良いわよ。」

美紀「…はい。」

美紀が顔を上げて二人を見つめる…その目は少しだけ涙ぐんでいた。

胡桃「……さーて！美紀も無事だった事だし、あたしは改めて休もつと！」

そう言つて椅子に座り込む胡桃。

悠里「そうね……それと、——君が外で感染した犬に襲われたらしいわ。…多分それが美紀さんの見た犬だと思うけど……他にもいたら危険だから皆もう外には出ないでね。」

悠里が車内の全員に言った。

胡桃「分かった。」

由紀「りよーかい。」

美紀「……分かりました。」

「はい。」

全員返事を返す。

美紀「……私が見た犬……感染してたんですね。犬も感染するって

すっかり忘れてました。」

美紀が彼の隣にきて言う。

「はい。」

美紀「大丈夫でしたか？怪我とかは……」

「大丈夫ですよ、少しキツかったですけど。」

美紀「私のせいで——さんを危険な目にあわせてしまいましたね……すいません。」

「ふふっ……。胡桃ちゃんにも言われてたでしょう？何回謝るんですか。」

彼が笑いながら言う。

美紀「確かに言われましたけど……でも私のせいで——さんに何かあったらと思うと、謝らずにはいられないです。」

「んー。……では謝る代わりに感謝して下さい。謝罪の言葉より感謝の言葉の方が癒されます。」

美紀「……癒される……っていうのが何の事かわかりませんが……あの、心配してくれてありがとう……ございました。」

美紀が彼を見つめて言う。

「おお……やっぱこっちの方が良い。」

美紀「……なんかその言い方変態っぽい……。」

「美紀さん…男は皆すべからく変態な生き物なんです…それを認めるか認めないかでその男の器が決まると親戚のおじさんが言っていました…。」

彼はそう言つて美紀の肩をポンと叩くと美紀の横を抜けて椅子に座った。

美紀「変な親戚ですね…なんの哲学ですかそれは。」

美紀はそう言つて静かに笑つた。

二十三話『いぬ』

「……………じゃあ、ちよつと見てきます。」

彼はそう言つて部屋のドアノブに手を掛ける。

美紀「——さん！私達、そばにいますから…!!」

胡桃「ああ！もし中に奴らがいたりしたら呼べよ？すぐに行く！」
扉を開けようとする彼に二人が声を掛ける。

「…はい。」

胡桃「それから…キツイ事があつた時も呼べよ。力になるからさ…。」

「……………ありがとう。」

ガチャ……………。

彼はそう言つて静かに扉を開けた。

三十分前

悠里「動物病院？」

胡桃の運転で移動する車内で、悠里が彼に聞き返す。

「はい。……この近くに僕の飼っていた犬が入院していた動物病院があるんです。もし良ければ寄ってもらえますか？勿論着いてからは一人で行くので。」

彼が悠里と向かい合って座って言う。

悠里「…どの辺り？」

悠里が地図をテーブルに開いて尋ねる。

彼はその地図を少し眺めてから、一つの場所を指差す。

「…この辺りです。」

悠里「ちよつと待ってね。」

悠里はそう言って席を立つと運転中の胡桃に近付いていき、地図の一カ所を指差しながら胡桃と少し会話をした後、助手席の由紀に地図を渡して再び彼の前に戻る。

悠里「寄ってもらおうように言ってきたわ。」

そう言ってにっこりと微笑む悠里。

「ありがとうございます！」

彼が席に座りながら頭を下げる。

悠里「いいのよ、急ぎの用事も無いしね？」

悠里「……ただ奴らが現れてかなり経ってるし……その子がまだそこにいるとは限らないわよ？ 仮にいたとしても……。」
そこまで言っただけ悠里は口を閉じる。

「……分かっています。いなかっただらそれで諦めます。ただもしもまだいた場合……しっかりと終わらせてあげたいんです。」

悠里「……そう。」

二人の会話に、横にいた美紀が入る。

美紀「あの……私もついていきましようか？」

「……いや、危険なんで僕一人で行きます。」

彼が答える。

美紀「……でも、昨日私が犬を見掛けたって言った事がきっかけでその子の事思い出したんですよね？」

「……まあ。」

実際その通りだった。彼は昨日美紀が犬を見掛けたと言う話を聞き、更にその犬を目の当たりにするまで自分が犬を飼っていた事を忘

れていた。…いや、思い出さないようにしていた。

美紀「だったら思い出させた張本人としてご一緒します！」

美紀が彼の前にヌツ…と顔を突き出して言った。

「りっくさくん!!美紀さんがしつこくい！」

彼は悠里に助けを求めた。

美紀はそれを見て顔をしかめた。

悠里「…そうね、美紀さんを守りながら進むのは大変よね。」

悠里が手に顎を乗せながら言う。

「そういう事です！」

美紀「…んん。」

悠里の言葉を聞いてどや顔をする彼とますます顔をしかめる美紀。

悠里「…なら美紀さんを守る人がもう一人いれば良いのよね?…胡

桃!頼める?」

そう言つて運転中の胡桃に尋ねる悠里。

胡桃「オツケー!任せとけ。」

ハンドルから左手だけ離し、グツ!と親指を立てて悠里に返事をす

る胡桃。

「…はい？」

悠里「…って訳だから、ついていっていいわよ美紀さん。」

美紀「！…ありがとうございます！」

悠里「胡桃もついていくなら構わないでしょ？それに美紀さんだつて——君が思っている程足手まといでは無いハズよ？」

悠里がそう言つて彼を見る。

「…：…分かりました。」

彼は渋々了承した。

悠里「よろしい。」

悠里（一人で行くつもりだったみたいだけど、それも危険だからね。

胡桃が一緒に行つてくれれば私も安心出来るわ。）

悠里（…：…にしても美紀さんがここまでついて行きたがるなんて…何か理由があるのかしら？まあおかげで胡桃を連れていかせる口実が出来たけど。）

悠里が考えていると助手席の由紀が座りながら振り返つて美紀に言つた。

由紀「みーくんばかりずるーい!! 私も行く!」

悠里「だーめ! 由紀ちゃんは私とお留守番よ。」

由紀「うー!…さてはみーくん…——くんのワンちゃんといち早く仲良しになるつもりだな!」

(…んなバカな…。)

彼は美紀の方を見る。

美紀「…………。」

由紀からそつと目を逸らす美紀。

(マジか!)

由紀「ずるーい!…:まあ良いよ。その代わりその子が車に来たら私が独り占めするからね!」

由紀はそう言って再び前を向く。

車はほんの二十分程で目的の動物病院に着いた。

「んじゃあ…:行きましようか。美紀さん、胡桃ちゃん。」

胡桃「おう。」

美紀「はい!」

準備を整え席を立つ三人。

悠里「気を付けて行ってきてね？」

悠里が声を掛ける。

胡桃「へいへい。」

胡桃が返事を返し、車のドアを開けて美紀と共に外に出る。

バタン。

「…狭い病院なので、すぐに済むと思います。」

悠里「ええ、分かったわ。」

彼は悠里にそう言うってから車を降り、ドアを閉めた。

バタン。

「…さて、動物病院って事でもしかしたら中に感染した犬がいるかも知れません。奴らは素早い分感染した人間よりも危険なので、一体だけでも十分に注意をして下さい。」

病院を前に彼が二人に警告する。

胡桃 「ああ、分かった。」

美紀 「注意します。」

「…それじゃあ、入りますかね。」

そう言っただけは、その動物病院の扉を開き、二人と共に中に入った。

二十四話 『優しい嘘』

バタン…。

扉を開き、三人は動物病院の中に入る。

入ってすぐに目に入ったのは受付所と、訪れた客が座って待つように置かれた多数の椅子だった。

美紀「…静かですね。」

美紀が言う。

胡桃「そうだな。で…どの部屋だ？」

胡桃が彼に尋ねる。

「僕はこの受付所と診察室にしか行ったことがないから、正直わからないけど…広い建物でもないし、適当に探せばすぐに見つかるよ。」

彼はそう言って奥に進む。

すると幾つかの扉のある廊下に出た。

胡桃「この部屋のどれかだろ？…本当にすぐに終わりそうだな。」

美紀「ええ、ちゃんと扉の上に何の部屋か記された札も付いていますから、これを見れば……」

ウウゝ…。

美紀がそう言った瞬間に、一つの部屋から奴らの呻き声が聞こえる。

美紀「!!」

「今のは…。」

胡桃「ここから聞こえたな。」

そうやって胡桃がその部屋の扉の前に立つ。

胡桃「トイレみたいだな…。」

上の札を見て確認してから扉に手を掛ける胡桃。

「胡桃ちゃん!」

胡桃「大丈夫だよ。さっきの声は犬じゃなかったろ? 奴らがたまたまここに迷いこんだんだよ。奴らが一、二体いるくらいじゃあたしは大丈夫だからここは任せてお前達は目的の部屋を探しといてくれ。」

胡桃はそうやって一人そのトイレの中に入って行く、その直後に中から胡桃がシャベルを降り下ろす音が聞こえた。

「胡桃ちゃんなら大丈夫だったか…。」

彼はその場は胡桃に任せて、美紀と共にペットの入院している部屋を探した。

美紀「あ…。——さん！ありました！ここじゃないですか？」
美紀がそう言って一つの部屋を指差す。その部屋には『入院室』と書かれた札が付いていた。

「ええ、ここみたいですわね。」

胡桃「おう。あつたか？」

胡桃がそう言って血に濡れたシャベルを持ってトイレから出てくる。

「あつたよ。胡桃ちゃんは大丈夫だった？」

胡桃「ああ、いつもの奴が一体いただけだった。」

美紀「入りますか？」

美紀が彼に尋ねる。

「…まず僕が先に一人で入っても良いですか？」

胡桃「良いけどさ…何で？」

「安全確認の為っていうのと…。あともし感染したマルが襲い掛かってきても僕が止めれるようにです。」
彼が言った。

美紀「…：分かりました。」

胡桃「分かったよ。」

「……………じゃあ、ちょっと見てきます。」

彼はそう言って部屋のドアノブに手を掛ける。

美紀「——さん！私達、そばにいますから…!!」

胡桃「ああ！もし中に奴らがいたりしたら呼べよ？すぐに行く！」
扉を開けようとする彼に二人が声を掛ける。

「…はい。」

胡桃「それから…キツイ事があった時も呼べよ。力になるからさ…。」

「……………ありがとう。」

ガチャ……………。

彼はそう言って静かに扉を開けた。

そして部屋に入り、静かに扉を閉める。

美紀「……………大丈夫でしょうか？」

胡桃「…アイツなら大丈夫だと思うけどな。」

二人が扉の前で彼を待つて2分程経過した時、胡桃が扉の外から彼に声を掛ける。

胡桃「……。どうだ？いたか？」

美紀「……………」

返事がない。

胡桃「!…………おい——！入るからな!!」

不安に思った胡桃が扉を開けて美紀と共に部屋の中に入る。

バタン！

胡桃「無事か!?!」

中に入るとその部屋には入院中の動物を入れておく為であろうケージが幾つも並んでいて、彼はその一つの前でたたずんでいた。

「……………」

胡桃「おい大丈夫かよ…………」

胡桃は彼にそう言いながら近付く、すると彼の見ていたケージが視界に入り胡桃も言葉を失う。

胡桃「…！」

美紀「…どうしたんですか？」

美紀もそのケージを確認する。

美紀「…っ!!」

そのケージの中にいたのは前足が一本無く、寝転んだまま彼を見て唸る感染した犬だった。

美紀「——さん…もしかしてこの子が…。」

美紀が言うのと彼が口を開いた。

「…散歩中に事故にあつて左前足を失ってしまいました。右の後ろ足も酷く骨折していて動かなかった…。」

静かな口調で彼が言う。

「…やっぱ感染していてもそのままなんです。この子はずっと動く事も出来ずにここに一人でいたんだ…。」

その犬は確かにずっとそこにいたらしく、何も食べていないからか酷く痩せていた。

「元は少し太めの子だったんです…。なのに…こんなに痩せてる…。感染していると空腹で死ぬ事も出来ないんですね…。」

彼がその犬を見て目を伏せる。

胡桃「……………」

「長い間寂しい思いをさせたけど……………今終わらせるから……………」
そう言つて彼はケージを開けた。

『グググウ……い!』

動かない足の代わりに頭を動かして威嚇する犬。
彼はその犬を見てそつとナイフを構えた。

「悪かったな……………本当に長い間待たせた。……………もつと早く来てあげるべきだったのに……………」

……………
彼は噛まれないように後ろに回り込み、その犬の体を撫でながら

「ダメな飼い主でごめんな……………」
静かにそう呟き、そつと犬の後頭部にナイフを突き刺した。

胡桃「……………」

美紀「……………」

完全に動かなくなった犬をしゃがんで撫でる彼を、二人はただ見守っていた。

「……………本当は一人で来たかった。」
彼が撫でるのを止め、立ち上がったから言った。

「もし感染したコイツがいたら僕は確実にシヨックを受けて落ち込んでしまうと思ったから…。そんな弱い僕を皆に見せたくなかったから……………」

「…けれどやっぱ二人がいてくれて良かった。ただ傍にいてくれるだけで強くいられました。」

そう言っただけは笑顔を見せる。だが二人にはその笑顔が無理をしているようにしか見えなかった。

胡桃 「いいよ別に…無理してまで強くないなくてさ。」

美紀 「はい…少し頼りないかも知れませんが、辛い時や悲しい時は…仲間の私達が傍にいます。だから……無理はしないで下さい。」

胡桃と美紀が彼に言う。

「……………無理…ですか。」

そう言っただけはもう一度犬を見てから、そっと視線を彼女達に戻す。

「……………はあ」

無理をしなくていい。傍にいる。そう彼女達に言われただけで彼は安心して……そして安心したら、ほんの少しだけだが涙が出てきた。胡桃と美紀はそんな彼の側にそつと立ち、静かにその背へと手を当てる。

よく見れば、彼女達の方が沢山の涙を流していた。

彼はその光景に驚き、微かに流れていた自身の涙を拭ってから声をあげる。

「……僕はともかく、なんで二人まで泣くんですか？」

胡桃「……なんとなく止まらなくなっただよ」

美紀「ええ、もらい泣きってやつです。」

「ははっ……訳がわからない。」

胡桃「へへ……」

美紀「ふふっ」

彼は泣きながら微笑む二人を見て、自分は本当にいい人達と出会えたんだと実感した……。

美紀「この子……どこか綺麗な場所に埋めてあげましょう。」

美紀が持っていたタオルに犬を包んで言った。

胡桃「……そうだな。置きっぱなしはかわいそうだ。」

「二人共……本当にありがとう。」

彼は二人に礼を言って、美紀から犬をくるんだタオルを受け取る。

美紀「——さん。」

タオルを渡した後に美紀が彼を呼ぶ。

「はい？」

美紀「さつき——さんがこの子を撫でた時、この子、一瞬だけ尻尾を振ってました」

「…本当ですか？」

美紀「ええ、きつとこんなになっても心のどこかで——さんを待っていたんだと思います。…この子も、最期に会えて喜んでいてと思いますよ。」

美紀が彼に笑顔で言う。

「…そうですね。…：：：なら、ここに来て良かった。」

彼はそう言っつて車に戻っていった。

胡桃「よく見てるな美紀は、あたしは尻尾振ったの気付かなかったよ。」

胡桃が美紀に言う。

美紀「でしょうね。…嘘ですから。」
しれつと言う美紀。

胡桃「嘘かよ！」

美紀「ええ、そうだったら素敵だなんて思ってた……これは必要な嘘です。」

そう言って美紀はいたずらな笑みを浮かべる。

美紀「……でも、あの子は最期に——さんに会えて本当に嬉しかったハズですよ。私はそう信じたいです。」

胡桃「ああ……そうだな。」

美紀と胡桃も会話を終えて車に戻る。

バタン。

由紀「お帰りみんな!!」

笑顔で全員を迎える由紀だが、彼が手に何かをくるんだタオルを持っているのを見て表情を変える。

「由紀ちゃん、リーさん、ただいまです。」

彼はそう言ってそれを抱えたまま席に座る。

悠里「それって……」

悠里が言いかけたところで胡桃が悠里と由紀へ彼に代わり事情を説明をした。

由紀「……そっか。」

悠里「じゃあどこか埋めるのに良い場所を考えないとね。」

事情を聞いた二人が言う。

美紀「少しだけ遠いですが、山間部の方に行ってみませんか？私、前に行って綺麗だと思った場所があるんです。」

美紀がそう言って地図を開く。

美紀「…地図でいうところら辺です。一〜二時間程で到着すると思いますよ。」

悠里「…そうね。山間部の方にはまだ行ったことがないし、ついでに探索するのも良いわね。」

悠里がそう言って運転席に座り、車を動かし始める。

一時間と二十分程で車は山間部の木々に囲まれた田舎町に入り、更に二十分程で美紀の言っていた場所に到着した。

ボタン。

車を停めてその地に降りる一行。

美紀「…どうですかね？」

美紀がその場所の景観の感想を求める。

その場所は周囲を木々に囲まれた広場で、中央部には一本の大きな木があった。

「良い場所です。…埋めるならあの木の下辺りとかがよさそうですね。」

彼がその一本の木を指差して言った。

由紀「うん！私もあそこが良いと思うよ。」

悠里「じゃあ胡桃の出番かしら？」

胡桃「そうだな、んじゃ！そこはあたしに任せろ!!」

そう言っただけで胡桃はその木の根元の辺りをシャベルで掘り始めた。

彼はその様子を近くで犬を抱えながらしゃがんで見ていた。

「……………」

胡桃「……………」

視線を感じた胡桃が彼に言う。

「いや……………穴を掘るためにシャベルを使うなんて斬新だなんて。彼がニヤツと笑いながら言った。」

胡桃「……バカにしてるな！じゃあお前のいうシャベル本来の使い方を見せてやろうか!？」

そう言つて胡桃はシャベルを彼の前で振り上げる。

「うおっ！すいませんんって!!ジョークジョーク！」

胡桃「……ったく。…ほら！掘れたぞ。」

胡桃はそう言つてその穴から離れて彼の横に立つ。

「……さて。」

彼はそう呟いて立ち上がり、穴に近付き、そしてその穴の中にそつとタオルごと犬を置く。

由紀「あ！ちよつといいかな？」

由紀がそう言つてそこに近付く。

悠里「どうしたの由紀ちゃん？」

悠里が声を掛ける。

由紀「この子が天国で遊べるように、一緒にこのボールも埋めてもいいかな？」

そう言つて由紀は一つのゴムボールを彼に見せる。

由紀「もしかして、ボールとかじゃ遊ばない子だった？」

「いいえ、ボールで遊ぶのが大好きな子だったので、喜ぶと思います。」
彼が笑顔で言う。由紀は嬉しそうにボールを犬の横に添えた。

(…本当はあまりボールで遊ぶ子じゃなかったけど、ここは嘘をつい

ても良いだろう。由紀ちゃんの優しさが嬉しいから……。きつとコイツにも、その優しさがこのボールを通して伝わるはずだ。」

彼の許可を取り、胡桃が犬とボールに土をかけて完全に埋める。埋め終えた後、皆はその場所の前で手を合わせてその犬の冥福を祈った。

「……そろそろ行きますか。」

合わせていた手を離して、彼が言う。

悠里「…そうね、もう大丈夫？」

悠里が彼に尋ねる。

「はい。皆が一緒に弔ってくれたおかげで、なんか気持ちが軽くなりました。」

悠里「…そう。じゃあ皆戻りましょうか。」

胡桃「ああ。」

美紀「はい。」

由紀「うん。」

一行はその場を離れて、車に戻り始める。

(…お前を守れなかった分、この人達を守ると誓うから…見守って)

てくれ。)

彼は戻る途中で一度だけ振り返り、そう心で呟いた。

二十五話 『りよかん』

胡桃「田舎町ならもしかして……って思ったけど。やっぱりダメか。」
走る車の中、窓から外を徘徊する奴らを見て胡桃が言った。

美紀「そうみたいですな。」

「……大体これってどのくらいの規模の事件なんですかね？日本中？それとも世界中？」

悠里「分からないけど……世界中では無いことを祈るわ。」
「運転しながら悠里が言う。」

由紀「ところでさ、これからどこ行くの？」

由紀が悠里に尋ねる。

悠里「そうね……物資には今のところ困ってないし、せっかく遠出したんだからこの辺りの色んな場所見てまわりましょうか？」

由紀「おおっ！旅行だね！」

由紀が興奮する。

胡桃「旅行か……。せっかくなら楽しみたいけど、楽しめるような物あんのかなあ。」

由紀「大丈夫！皆一緒ならどこでも楽しいよ！」
そう言って由紀は胡桃の隣に座る。

胡桃「……そうだな。」

胡桃はそう言って由紀の頭を撫でた。

美紀「この辺りをもう少し進めば、ちよつとした旅館街があったはずですよ。」

美紀が皆に言う。

悠里「…確かにそうみたいね。」

道路横に現れた旅館の案内看板を見て悠里が言う。

悠里「あの看板通りなら、このまま後10kmくらい進めば着くみたい。」

悠里「山中の旅館街……中々素敵ね。」

ふふつ、と笑う悠里。

胡桃「お！あたし地味にそういう所に旅行に行ってみたかったんだよな。良かった、ただの田舎じゃなくて。ちよつと楽しみになったわ。」

胡桃もニコツと笑った。

由紀「私も楽しみ！——くんはそういう所好き？」

彼に尋ねる由紀。

「嫌いではないですよ、皆と一緒になら尚更ね。」

由紀「良かった！……みーくんも？」

美紀「ええ、前は家族と出掛けたときに通りがかっただけだったんですけど、素敵な場所だなあと思ってたので。」

由紀「りーさん！皆ノリノリだよ！」

由紀が嬉しそうに悠里に言う。

悠里「そうみたいね！皆、たまにはのんびりと楽しみましょう？」

一同「はい！」

一同を乗せた車は暫くしてその旅館街に入る。

由紀「うわあ…！凄いよ胡桃ちゃん！本当に旅館ばかりある!!」

窓から外を見て興奮する由紀。

胡桃「当たり前前だろ、旅館街って言うくらいなんだから。」

クールにつっこむ胡桃。

悠里「今まで何も無い田舎道だったから道を間違えたかと少し不安だったんだけど、気付けば急に旅館だらけね。」

車のスピードを落としてキョロキョロしながら運転する悠里。

(…：街中と比べるとさすがに奴らが少ないみたいだな、…：これなら本当にゆっくり出来そうだ。…：まあそれでも数体は見掛けたから油断は出来ないけど。)

外を見ながら彼が思う。

悠里「あそこで良いか…。」

悠里はそう呟くと車を一つの旅館の駐車場に停めた。

悠里「さ、降りましょうか？」

その発言をきっかけに、由紀が車外に出る。

由紀「わーい！」

バタン！

胡桃「まったく…由紀く！一人で行くなって！」

そう言って胡桃も外に出る。

それから少しだけ遅れて他の三人も外に出た。

美紀「ふう…。なんていうか、いつもの街中とは空気が違いますね。」

外に降りて美紀が言った。

悠里「言われればそうね、自然に囲まれた所にある場所だから空気が綺麗なのかも。」

深呼吸一つしてから悠里が言う。

胡桃「…でさ、今日はもしかしてこの旅館に泊まったりする？」
車を停めた駐車場の横にある旅館を見て胡桃が悠里に尋ねる。

悠里「う〜ん……中が安全ならそれも良いけど……」
旅館を見ながら考える悠里。

「……二十分下さい！安全確認してきますから！」
彼が悠里に言う。

悠里「そう？それなら泊まっても良いけど、手間をかけて悪いわね？」

「いえいえ！任せて下さい!!」
強く答える彼。

胡桃「……なんでそんな率先してんの？」
彼に少しだけ違和感を感じた胡桃が尋ねる。

「普段椅子で眠っている僕が、久しぶりに布団で眠れる大チャンスだから！」
目をキラキラさせて言う彼。

胡桃「あ〜……。そう言えばお前あたし達と一緒に暮らしてからずっと椅子で寝てたな。」

胡桃が思い出したように言う。

美紀「でしたね……。なんか申し訳なくなってきました。旅館の安全確認私も手伝いますよ。」

「お！良いですか？……じゃあ頼みます。」
そう言って彼と美紀は旅館の入口に向かう。

胡桃「あ……。おーい！あたしも手伝うか？」
歩いていく二人に胡桃が言った。

「とりあえず大丈夫！胡桃ちゃん達は適当にその辺を観光してて下さい。」

彼が振り返ってそう告げる。

胡桃「ん〜…だつてさ、リーさん。適当にぶらぶらしようぜ！」

悠里「じゃあそうしますか。…行きましょ由紀ちゃん！」

由紀「はい！」

三人は近くの土産みやげを置いている店などを見てまわる事にした。

由紀「あ、見てー！リーさん、胡桃ちゃん！ここお饅頭まんじゅう置いてるみた
い！！」

店の前に置かれた旗を見て由紀が言う。

胡桃「ああ、置いてるみたいだけどさ……。」

由紀「…だけど？」

胡桃「…絶対もう賞味期限きれてるだろ。」

由紀「はぐっ！！」

由紀は慌てて店の中に入る。

悠里と胡桃もそれに続く。

店内はそこまで荒れてなく、殆ど以前のままのようだった。

悠里「…どう？お饅頭はあった？」

一応尋ねる悠里。

由紀「あったけど…：りーさんこれ賞味期限どこに書いてある？」
そう言っって持っていた小箱を由紀が悠里に渡す。

悠里「うーん、…：あ！あったあった。…ええつと…：。」

小箱の裏面を見ながら何やら計算する悠里。

由紀「…どうだった!？」

悠里「…ちよつと食べられないわね。賞味期限からけつこう経つちやつてるから。」

そう告げて小箱を由紀に返す悠里。

胡桃「な？だから言つたろ。」

由紀「うぐう…。」

由紀はそう言っって静かに小箱を元の場所に置く。

由紀「…：じゃあ他のお土産だよ！」

そう言っって店内を駆け回る由紀。

悠里「胡桃も一緒になんか探しましょ？」

胡桃「そだな。」

のんびりと店内を見回す三人。

胡桃（うーん…。）

胡桃が店の一角で立ち止まる。

そこにはよく分からないご当地キャラのような物のストラップやキーホルダーが大量に置かれていた。

胡桃（こういうのってよく見掛けるよな……。あたしは全然欲しくないけど…。売れるのか？）

由紀「胡桃ちゃん！胡桃ちゃん！」

胡桃がそんなストラップを眺めていると、横から由紀が声を掛けてきた。

胡桃「ん？なんかあったか？」

由紀「これ！車に置いとこうか!？」

そう言って妙な木彫りの置物を胡桃に見せる由紀。

胡桃「……………」

由紀「……………」

胡桃「…戻してこい。」

胡桃はそう言って目を逸らした。

由紀「え〜！車に置こーよ！」

胡桃「置かねーよ！邪魔だろ!?…大体それ何をイメージして彫ったんだよ！」

得体の知れない木彫りを見て胡桃が言った。

由紀「ん〜…。私もよくわかんないけどね…、これ値札に八千円つて書いてあった。」

胡桃「高っ!!絶対売れないだろそれ…。」

由紀「高級品つて知ると置きたくならない？」

胡桃「ならない。…返してこい！」

由紀「ちえ〜。分かったよ〜！」

そう言つて由紀は木彫りを元の場所に返しにいった。

胡桃「…結局あれは何の木彫りだったんだ。」

胡桃がそう呟くと今度は悠里がやってきた。

悠里「胡桃〜。」

胡桃「ん？何、りーさん？」

悠里「これなんてどうかしら？」

そう言つて悠里は一枚の手拭いてぬぐを広げた。

胡桃「手拭いか…。良いんじゃない？最近ハンカチとか洗濯しても洗濯してもすぐに汚れるから少し余分に欲しいと思つてたし。」

悠里「そう！じゃあいくつかもらってくるわね。」

胡桃「他には何かあった？」

悠里「んゝゝ、あんまりゝゝ。」

そう言っただけで苦笑いする悠里。

胡桃「だよな。…食べ物のだらみが賞味期限切れなのが痛い。」

悠里「お土産物だとあまり日持ちするのはないからね…。あ！さっきよく分からないぐ当地レトルトカレーみたいのは置いてあったわね。あれももらっていきましょ。」

悠里はそう言っただけでまた店内を歩き始めた。

胡桃「…物資は十分にあるのに、なんだかんだで色々探してしまふな。これは土産物屋の魔力か？」

そう呟いてから胡桃も再び店内を見てまわる。

由紀「りーさん！他のお店も見てみよ？」

暫くしてから由紀が言った。

悠里「ああ、そうね。他にもお店は沢山あるものね。」

胡桃「そうだな。」

三人は一度、その店を出た。外は日が暮れ始めていた。

胡桃「あ、もう夕方だったんだな？」

悠里「そうみたいね。じゃあ観光の続きは明日かしらね？」

由紀「みーくん達はまだかな？」

美紀「今終わりましたよ。」

由紀が言ったそばから彼と美紀が旅館から出てきた。

由紀「お疲れ〜！」

悠里「お疲れ様。どうだった？」

悠里が二人に尋ねる。

「奴らが二体いましたが外に誘き寄せてから処理しました。その後はそんな広い旅館ではなかったので楽に確認出来ました。もう安全ですよ。」

胡桃「マジか。…じゃあ今日はそこで一泊だな！」

由紀「おおっ！旅行っぽい!!」

胡桃と由紀がそう言っつて旅館に向かう。

悠里「じゃあ私は夕飯分の食糧と皆の着替えを車から取ってきてから行くわね。」

美紀「私も手伝います。」

「では、僕も。」

悠里「ありがとうね。一人じゃ少し大変だと思ってたから助かるわ。」

そう言つて悠里達は駐車場に向かい、車の中から必要な物を持ち出してから旅館に入つていった。

悠里「思つていたよりも綺麗ね。」

旅館の中に入つてから悠里が言った。

その旅館は二階建てで外観は小汚なかつたが、内装は意外と整つていて、見た目には激しく荒らされた様子も無く、悪くなかつた。

美紀「はい。個室もいくつかは荒れてしまつていましたが…、二階に綺麗な部屋もあつたので私達はそこに泊まれば良いかと。」

悠里「そう、じゃあ胡桃達は二階かしら？」

悠里がそう言う通路の奥から由紀と胡桃がドタバタと掛けてきた。

由紀「大変だよ皆！ここ安全なのは良いけど部屋が汚い！！」

胡桃「ああ！床が傷付いてたり、ふすまに穴が空いてたり…掃除とか以前の問題だぜ？」

二人が大事おおいしのように言う。

美紀「分かつてますよ。ちゃんと二階に綺麗な部屋があつたから落

ち着いて下さい。」

二人を見た美紀が呆れながら言った。

胡桃「あ…、なんだ〜！二階があつたのか〜！」

そう言いながら恥ずかしそうに顔を逸らす胡桃。

由紀「まったく〜！胡桃ちゃんはあわてんぼうだから〜。」

笑いながら言う由紀。

胡桃「なっ?!?あたしはもう少し落ち着いて綺麗な部屋がないか見てまわろうと思ったのに、お前が『早く皆に教えないと!!』って言って飛び出したんだろ〜！」

そう言って由紀の頭を叩く胡桃。

由紀「イタっ!!」

胡桃に叩かれ頭を抱える由紀。

「大体、安全確認が終わったって事は個室も含めて全ての部屋を見てまわったって事です。汚い部屋があるのは僕達も知ってるに決まってるでしょ。」

ため息をつきながら彼が言う。

由紀「だよね〜…えへへ。」

胡桃「確かに…よく考えればそうだよな。」

悠里「まったく〜！二人共少しはしやぎ過ぎね。」

そう言って階段を見付けて上がっていく悠里。

悠里「……で、二階のどの部屋？」

階段を上がる途中で振り返って、ニコニコしながら悠里は言った。

胡桃「……りーさんも少しはしやいでるだろ……。」

悠里「ふふっ！そうね、皆と旅行してるって考えたら楽しくなっちゃって。」

そう言って再び階段を上がる悠里。

美紀「私達の場合いつも旅行してるようなものですけどね。」

美紀が悠里と共に階段を上がりながら言う。

悠里「それもそうだけど……気分の問題よ。こうして旅館とかに泊まるのは初めてでしょ？」

美紀「ですね。……実は私も少しワクワクしてます。」

美紀はそう言って先頭に立ち、皆を二階の綺麗な部屋に案内した。

美紀「ここですね。」

美紀は一つのふすまの前に立ち、それを開けた。

そこにあるのは床一面が畳の和風な個室だった。

悠里「あら本当に綺麗な部屋ね。」

由紀「良かった〜！綺麗な部屋があつて！」

胡桃「外観通り部屋も和風なつくりなんだな。」

各々が感想を言いながら部屋に入り、荷物を置いてくつろぎ始める。

由紀「テレビ見ようよ！」

胡桃「いや…つかねーだろ。」

由紀「あ…そつか。」

胡桃「……………」

由紀「……………」

美紀「……………」

悠里「……………」。

「……………」。

由紀「……………なんかする事ないの〜?」
沈黙を破って由紀が言う。

悠里「旅館って言えば皆で一緒にお風呂……………というか温泉に入った
りするけどね。」
手に顎を乗せながら悠里が言った。

「それは良いイベントですね。」

胡桃「もちろんお前は皆の内に入ってないぞ?別行動だからな?さ
すがに…。」

冷めた目で彼に言う胡桃。

悠里「そうね。さすがに…。」

美紀「ええ。さすがに…。」

由紀「う、うん。…さすがに…?」

そう言っただけで彼女達は彼を見る。

「はいはい、わざわざ全員で言わなくても理解してますよ。」
彼はそう言っただけでふてくされたようにその場で横になる。

悠里「…けれどそんなお風呂もさすがに無理よね。この旅館も電気止まつてるみたいだし…。」

「……。」ピクツ

悠里がそう言った瞬間に、横になっていた彼が反応し、起き上がって言った。

「……それが、無理じゃないっていったらどうします?」

悠里「え?」

胡桃「どういう事だよ?」

「ふっふっふ……美紀さん、あれを。」
彼が言うのと美紀がスカートのポケットから一枚の紙切れを取り出した。

由紀「みーくん、何それ?」

由紀が尋ねる。

美紀「さつき——さんとこの旅館の確認した時に見つけたんです。ここら辺の観光名所みたいないない場合がいくつか記された観光案内みたいな物なんですけど……。」

悠里「へえ、そんな物があったの。」

胡桃「んで…、それが？」

美紀「これに書いてあったんですけど、ここから少しだけ離れた場所に天然の温泉があるみたいなんです。歩いて行ける距離…というか山の中にあるらしいので車では進めないようですが。」
観光案内書を読みながら美紀が言った。

由紀「おおっ！」

胡桃「マジか!？」

悠里「ちよつと見せてくれる？」

そう言っつて悠里は美紀から観光案内書を受け取り、それに目を通す。

悠里「……本当ね、わりと近いわ。」

由紀「じゃあ今からいこうよ！」

立ち上がって由紀が言う。

悠里「確かに魅力的だけど、そろそろ外が暗くなるから行くなら明

日の朝ね。」

案内書を部屋の中央のテーブルに置いて悠里が言った。

胡桃「まあ暗い中、屋外の温泉に入っても奴らが気になって気が休まらないからな。」

由紀「うくん、そっか。」

再びその場に座る由紀。

悠里「ま！明日の楽しみが出来たから良しとしましょ？」

美紀「ですね。とりあえず少し早めの夕飯にしますか？」

胡桃「そうしようぜ、腹へった。」

由紀「私もく！」

五人は少し早めの夕食を取り、就寝の準備を始めた。

「入り口も裏口も鍵を掛けておきましたから、奴らが入ってくる事もないと思いますよ。」

旅館内を見回りに行っていた彼が部屋に戻ってきて言った。

胡桃「お疲れ〜。」

彼が部屋に戻るといつの間にか全員。パジャマに着替えていて、五枚の布団も敷かれていた。

「僕が見回りに行ってる間に着替えたんですか？」

美紀「はい。さすがに五分から十分くらいは戻らないだろうと思つて。」

美紀が答える。

「…リスキーな事をする人達ですね。」

そう言いながら部屋の隅に座る彼。

「……明日の朝は早めに戻ってきてみるか。」ボソツ

悠里「ん？何か言ったかしら？」

悠里が威圧的な笑顔で彼の横に座る。

「いえー！明日の朝もしっかりと見回りをしてきますー！」

悠里「ふふっ、頼むわね？」

(僕は完全にこの人の尻に敷かれてるな。)
彼はそう思った。

由紀「そういえば部屋って——くんも一緒だよな？」

悠里「そうよ、五人だと少し寝るのに狭いかもだけど。」

胡桃「……。」

美紀「……。」

無言で彼を見つめる美紀と胡桃。

「……なんですか、その目は。」

美紀「いえね…、——さんなら大丈夫だと思いますけど男性と近い距離で眠るのは少し緊張します。」

胡桃「…あたしは少し大丈夫じゃないんじゃないかとすら思ってるぞ。」

「いつも車で一緒に寝てるじゃん！」

彼は立ち上がって心外だと訴える。

美紀「そうですね…。今日は——さんも椅子ではなく布団に、しかも私達の真横で眠るんですよ？」

胡桃「ああ、いつもとは訳が違う。」

「……。」

そう言われると変に意識しちゃうなく。…彼はそう思った。

美紀「まあ——さんがどの位置の布団で眠るかで話が変わってきてますけど。」

美紀が敷かれた布団を眺める。

部屋があまり広くはない為、布団は横一直線に五枚敷かれていた。因みに布団はタンスの中から見付けた、少しだけ埃ほこりっぽかったがその埃は悠里が軽く払ってくれた。

胡桃「…一応良心で聞いてやるよ、どこが良い?」

彼の横に立ち尋ねる胡桃。

「もちろん真んな…」

胡桃「ほっ!!」

ドカツ!!

言っている途中で胡桃が彼の頭にチョップを放つ。

「いった!!」

頭を抱えてうづくまる彼。

胡桃「バカかお前は!!」

「もちろん真ん中はダメだよね? って言おうと思ったの!」

美紀「…本当ですか?」

「嘘です!!」

胡桃「はっ!!」

バキツ!!

「うがっ!!」

今度はうずくまる彼に蹴りをくらわす胡桃。

胡桃「良いか？お前は端っこの布団だ！分かったら領け!!」

胡桃が倒れている彼に言う。

「……。」コクツ、コクツ。

彼は無言で静かに頷いた。

胡桃「よし!…問題は誰がこいつの横で寝るかだな。」

由紀「じゃあ私が横で寝てあげる!」

由紀が倒れている彼の横に駆け寄り、しゃがんで言った。

胡桃「じゃあそいつの横は由紀に任せるか。」

美紀「ですね。」

悠里「――君、一応言っておくけど由紀ちゃんに変な事しないでね？」

悠里が彼に言う。

「しませんよ。…こんな近くでしたら皆起きるでしょ？」
彼が体を起こしながら言う。

美紀「まるで起きなかったらするみたいな言い方だと思ったのは私
だけですか？」

胡桃「いや…あたしもだ。」 悠里「いいえ…私もよ。」
美紀の問いかけに同時に答える二人。

「……………」

胡桃、悠里、美紀の三人に無言で見つめられる彼。

「もう嫌!!誰も信じられない!」
そう言って頭を抱えて彼はうずくまった。

胡桃「いや……お前が信じられてないんだよ……。」
そう言つて彼を冷たい目で彼を見下す胡桃。

由紀「私も信じられない？」
彼と視線を合わせて由紀が言う。

「いえー由紀ちゃんだけは心の底から信じてます!!」

由紀「えへへ！良かった！」
笑顔になる由紀。

「僕が信じられないのはそこにいる暴力を振るう女ですよ。名前なんてつけたっけな……みくるちゃん？」
彼が胡桃を見ながらニヤツと笑つて言う。

胡桃「ふーん……。分かった！お前はあたしと殺し合いがしたいんだな？」

そう言つて胡桃は部屋の隅に置いていたシャベルを手にとって構える。

「タンマタンマ!!冗談です！胡桃ちゃんも信じてる！信じてるから！」
必死に胡桃を落ち着かせる彼。

胡桃「……本当か？」

まだシャベルを構えながら胡桃が尋ねる。

美紀「なんだかんだでこの二人仲良いですよね。」

悠里「ふふっ、そうね。」

彼と胡桃のじゃれ合いを見て、美紀と悠里がこっそり言った。

「本当本当！胡桃ちゃんを信頼し過ぎてもう愛しちやってるレベルです！」

胡桃「な!!」

ピクツ、っと動いて顔を真っ赤にする胡桃。

美紀「あく。」

悠里「あらあら。」

由紀「おおく。」

「……ん？」

皆の様子に異変を感じて自分が何を言ったのか思い返す彼。

(……………)

(…あく、胡桃ちゃんをおだてて落ち着けようとしたのが間違いだったな。愛しちやってるとか言っちゃってましたわ、…まいったねこりゃ。)

胡桃「……………」

彼がそんな事を考えている中、未だに真っ赤な顔でシャベルを構えたまま固まる胡桃。

「…胡桃ちゃん？」

胡桃「…はあ。別に愛してくれるレベルまでいなくて良いよ。」
そう言つてシャベルを再び壁に寄り掛かせて置く胡桃。

(良かった…さすがに冗談として受け取ってくれたみたいだね。)
彼も一安心する。

悠里「はい！おふざけはそのくらいにして、そろそろ寝ましようっ！」

悠里の言葉を受けて、それぞれが布団に入る。

由紀「皆おやすみ。」

悠里「おやすみなさい。」

胡桃「おやすみ。」

美紀「おやすみなさいです。」

「おやすみ。」

持ってきた電気ランタンの灯りも消して、暗くなった室内が静かになる。

胡桃（…くそっ！冗談だっけ分かってるのに、アイツに愛してるって言われて一瞬ドキドキした自分が悔しい！アイツごときに!!）
布団に入りながら胡桃はそんな事を考えていた。

「……………」

（…ヤバい、久しぶりの布団が気持ちいい。）

彼は布団に横になって眠れる事に喜びを抱いていた。

(…由紀ちゃんはもう寝たかな?)
そつと横の由紀を見る彼。

由紀は彼の方を向いて眠っていた。

「……………」ジーツ

(…本当に、わりと近めですね。)ジーツ

(…………ああ、はいはい…わかってきたよ……)ジーツ

(これはあれだね……………)ジーツ

(…わりとドキドキするね。) ジーツ

由紀の寝顔を真っ直ぐに見つめる彼。

由紀「ふふっ…眠れない？」

「!!」

由紀が不意に目を開いて彼に小声で言う。

「お、起きてたんですか。」

(あ、危なかった！びっくりして心臓止まるかと思った！)

由紀「うん…、ワクワクして眠れなくて…。——くんも？」

笑顔でそう言う由紀。

「ええ、まあそんなところです。」

(あなたとは別の意味でワクワクしてました、なんて言えない。)

由紀「明日は朝から温泉に行くから、早く寝ないとなんだけどね。」

「ですね。」

彼はそう言って由紀から目を逸らし、天井を見る。

由紀「……………」。

「……………」。

「……………ん？」

由紀が静かになったのが気になり再び由紀の方を見る彼。

その瞬間、由紀と目が合う。

由紀は黙ったまま彼を見つめていたからだ。

「……………！」

(なんで黙ってこっちを見てるんだろ!?)

由紀「……………。」ジーツ

(今更目線を外せない……！)ジーツ

彼は由紀に張り合う。

由紀「……。」「ジーツ

(…早く何か言ってくれよ！暗い部屋でそんなに見つめられると心臓がヤバい!!!) ジーツ

由紀「……。」「ジーツ

由紀は大きく開いていた目を、少しだけ閉じた。

(…何ですかその目は?!微妙に色っぽくなってるんですけど!!)
ジーツ

彼と由紀が無言で見つめ合ってから一分は過ぎた。

由紀「……………」ジーツ

(…か、可愛い!!今までは由紀ちゃんの事『わりと可愛いかな』くらいに思っていたけど違う!!…………この人本当に可愛い!!!) スツ…
彼は照れが頂点に達して目を逸らす。

由紀「えへへ、勝ち〜!」

由紀が言う。

「…何がですか?」

チラツと横目で由紀を見ながら言う。

由紀「眠れないから暇潰しに——くんを黙って見てたらどっちが先に目を逸らすかってゲームをしたの!」

「…ゲームの始まりもルールも知らない僕がめっちゃめっちゃ不利じゃないですか。」

由紀「えへへ…そうだね。でもわりと健闘してたよ!上出来上出来!」

嬉しそうに言う由紀。

「……もう寝ますよ。」

彼がそう言っただけで目を閉じる。

由紀「うん……そだね。」

由紀も目を閉じる。

すると少ししてから、由紀の寝息が聞こえ始めた。

(…やっと寝たみたい。…まったく、気まぐれで変な遊びしないでほしいな。おかげで眠気が吹っ飛んでしまった……。)

彼は三時間程経ってようやく眠る事が出来た。

(明日の温泉……覗くべきか、わりと本気で悩む。)

そんな事を考えながら。

二十六話『おんせん』

悠里「あ！見えてきたわ！あれが温泉じゃない？」

山道を抜けた先に僅かに見えた湯気のような煙を見て悠里が言った。

由紀「わーい！」

胡桃「イエー!!」

由紀・胡桃の二人がそれに向かって嬉しそうに駆けていく。

美紀「先輩達、大はしやぎですね。」

ふふっ、と笑ってから美紀が言う。

悠里「久しぶりのお風呂：しかも温泉だからね、はしやぐのも無理ないわ。」

美紀「確かに、学校を出てからはずっと川の水浴びがお風呂代わりでしたからね。」

「冷たい川だと頭に洗うのも大変です、…本当に凍えそうになる。」

そんな会話をしながら三人はのんびり歩き、由紀達に追い付く。

由紀「凄いよ皆!!」

胡桃「見ろよコレ！」

悠里「わあ！」

美紀「凄い……！」

「おお〜！」

三人が見た物は想像していたよりも広く、円を描くように置かれた岩に囲まれた温泉だった。

胡桃「これ温泉だよな!？」

目をキラキラと光らせながら胡桃が言った。

美紀「ええ、近くに立て札もあつたので間違いないと思います。」

由紀「あつたか〜いい!!」

由紀が屈み、温泉に手を浸けて言う。

それを聞いた悠里もその横に屈み、手を浸ける。

悠里「本当!思ったよりも熱くて気持ちいいわ。」

胡桃「早く入ろうぜ！」

美紀「えええ！」

「んじゃ……僕は少し戻った所で待っているの、何かあつた時や温泉から出た時は呼んでくださいね?」

彼がくるつと振り返り、来た道へ引き返しながら言った。

悠里「ちよつと待って。」

「はい、なんでしよっ?」

悠里に声を掛けられ、足を止める。

悠里「順番に入るのも面倒だから――君も一緒に入りましょ。」

「……………はい??」

悠里が言った言葉を理解できずに、思わず間拔けな声をあげる。

(……………今、りーさんは何て言ったんだ?)

頭の中で悠里のセリフを思い返してみる。

『順番に入るのも面倒だから――君も一緒に入りましょ。』

『面倒だから――君も一緒に入りましょ。』

『――君も一緒に入りましょ。』

『一緒に入りましょ。』

「……………」

「な!?!?」

悠里のセリフを思い返し、彼は衝撃を受ける。

「いやいやいや!!良いんですか!?!」

少々裏返った声で悠里に尋ねる。

悠里「ええ、良いわよ。」

笑顔で答える悠里。

「胡桃ちゃん達は!?!僕がいても良いの!?!」

悠里の気がおかしくなっただけだと思っただけだと思っただけだ、彼は、胡桃達にも尋ねる。

胡桃「え?別に良いよ。」

美紀「私も平気です。」

由紀「一緒に入ろう!」

胡桃と美紀もあっさり了承、由紀に至^{いた}っては彼の左手を両手で引きながら招き入れる程だった。

「…良いの？」

念の為もう一度確認。

胡桃 「しつこい！良いって言ってるだろ！」

「……………じゃお言葉に甘えて!!」

彼は歡喜する。

そんな中、彼女達は持ってきたリュックからシャンプーや石鹸などを取り出して入浴の準備を始めていた。

(おおっとー！そうだった、僕も準備をしないと！)

彼もリュックを下ろして必要な道具を取り出し、準備を終える。

(準備完了!!…さて、皆様は一体どんな格好で入浴するんですかね?!)
準備を終えたにも関わらず、リュックを探る振りをしながら横目で彼女達を盗み見る。

(…妥当な所では水着かな…その場合は多分既に服の下に着ているとみられる。)

(……………だが願望としては！一枚のタオルを体に巻いただけ!!それだけの格好が見たい!!!)

(…さあ!!どっちだ!!)

彼が血走った目で彼女達を見つめる、もはやリュックを探る振りをしていた手も止めていた。

由紀「…うんしょ…。」

由紀が彼の目の前で着ていた制服に手をかける。

その行動を一瞬見ただけで、彼は落胆する。

(僕の目の前で服を脱ぐ…見られても問題ない物を下に着ているから…つまり既に水着着用。)

(水着だったか…。良いんだけどねそれでも…。タオル一枚とかあり得ないって分かってたし…。…というか僕は水着なんて着てないからタオルを巻いて入るんだけど、良いのかな?)

(…とりあえず一旦離れて着替えてきた方が良いよね?目の前で僕が全裸になり始めたらさすがに引かれるだろうし…。)

そう思った彼は立ち上がり、「僕は水着とか着てないからその木陰で着替えるね?」…そう彼女達に告げようとするが、目の前の光景に驚き、固まる。

由紀「…つと。」

「…あ…あつ…。」

上半身の制服を脱いだ由紀が着ていたピンク色のそれは水着ではなく、普通の下着のような気がしたからだ。

由紀「……」

困惑する彼を尻目に、由紀はスカートに手を掛ける。

「ちよつと待ったあ!!!」

そう叫んだ直後に、スカートに掛けられた手を掴んで止める。

由紀「うん? どうしたの——くん?」

上半身の下着らしき物を見られているのも気にもせず、由紀が不思議そうな顔で言う。

「あのく……由紀ちゃん、それって……水着?」

そつと由紀の胸元を指差して尋ねる。

由紀「え? ううん、普通の下着だよ?」

いつもの表情のまま答える由紀。

「やっぱ下着なの!?!…てか良いの!?!」

由紀の両肩を掴んで正面から彼がわりと大声で言った。

由紀「…え? これから温泉に入るから…下着姿くらいは……それにこの下着だって今から脱ぐんだよ?」

さらつと言う由紀。

「…は？僕の見てる前で?」

何かの間違いだろうと思い、確認する。

由紀「あ…う、うん。……でもわざわざずっと見てなくても良いんだよ?…私もあんまり見られると恥ずかしいし……」

由紀が恥じらいながら言う。

「ああそうですか……………」

「皆！由紀ちゃんの様子が変です!!」

彼は慌ててそう言って胡桃達の方を見る。

「……………」

胡桃達もまた、当たり前のように下着姿になっていた。

胡桃「由紀がどうした?」

悠里「——君、あまり大声ばかり出さないでね? 奴らが寄ってくるかもしれないから。」

美紀「——さんまだ全然準備してないじゃないですか。もう訳が分からなかった。」

「……りーさん、いくつか確認して良いですか？」
彼が落ち着いた声で悠里に言った。

悠里「なに？」

上半身下着姿の悠里が不思議そうに言う。

「僕は一緒に温泉に入って良いんですよね？」

悠里「??…ええ。」

「それは水着ではないんですよ？」

由紀の時と同じように悠里の胸元を指差して尋ねる。

悠里「違うわよ？」

「ふむ……りーさん達温泉にはタオルでも巻いて入るつもりですか？」

悠里「え？…タオルは体を拭く分しか持ってきてないから、巻いた
りしないわ。」

「……どうやって入るつもりですか？」
もう分かってきたけど念の為尋ねる。

悠里「裸でだけど……ダメかしら？」

「……胡桃ちゃんと美紀さんも？」
二人にも尋ねる。

胡桃「そうだよ？」

美紀「ええ、まあ。」
あっさりと答える二人。

(…そうか。)

(皆は僕に気を使ってくれているんだ……。)

(これは普段激務をこなしている僕へ、彼女達からのご褒美なのだろう。)

(ありがた過ぎて涙が溢れてくる…)

胡桃「何泣いてんの？…変なやつ。」
そう言っつて胡桃が側に駆けよってくる。

(昨夜はあんなに僕に暴力を振るっていたのに…胡桃ちゃんも素直じゃないな……。どれ、一つ調子にのっつてみるか。)

「胡桃ちゃん。」

胡桃「ん？何？」

そう言つて彼の顔を見る胡桃、彼女は既に上下とも下着姿だった。

「…脱ぐの手伝つてあげるから、後ろ向いて。」

もう殴られるの覚悟で言つてみる。

胡桃「え？…あ、うん…頼むよ。」

そう言つて胡桃は少し頬を赤く染めると後ろを向いた。

(…………マジか。)

胡桃「……………」

(…………じゃあ…お言葉に甘えて…。)

彼は一度深呼吸をしてから胡桃の下着の背中部分にあるホックを外そうと手を伸ばす。

そしてその下着に触れる寸前に、由紀が彼の横に来て言った。

由紀「ねえねえ、——くん。」

「ん？なんですか？」

手を止めて由紀に言う。

由紀「……て。」

「…はい？」

由紀の声ははっきりと聞き取れない。

由紀「………きて」

「来てっ…どこにですか？」

由紀「はあ…違うよ。」

由紀が呆れた顔で手招きをして耳を貸せ、とジエスチャーをする。

「…っ…」

その通りにして、そつと由紀の口に耳を近付けて目を閉じ、耳を澄
ます。

すると由紀が息を深く吸い込んでから言った。

由紀「起きて
!!!!」

「のわっ!!」

驚いて目を開けると目の前にはパジャマ姿の由紀、そして呆れた顔で僕を見下ろす胡桃達の姿があった。

そして何より、僕のいる場所は旅館の部屋……その布団の上だった。

「……温泉は？」

由紀に尋ねる。

由紀「これから行くよ、だから——くんを起こしたんだよ？」
ニコツと笑って由紀は言った。

(起こした??僕は眠っていたのか……じゃあさっきのは夢……)

「クソツ！変だと思ったんだよ!!」

彼はそう言っって頭を抱える。

由紀「わわ!!ゴメンね!まだ寝てたかったかな??」

慌てて申し訳なさそうに由紀が謝る。

「いいえ違うんです……起こされたから怒鳴った訳ではなくて……起こされて失った物が大きかったからショックを受けたというか……」

彼が布団に入ったままぶつぶつと一人言を言い始めた。

胡桃「こいつ…今日は寝起き悪いな。」

悠里「そうねえ。」

美紀「ですね。」

第31話『おんせん』

美紀「さて…——さん、今朝も見回り頼んで良いですか？」
彼が自分の布団を片付け終わったのを見てから美紀が言った。

「ああ…分かりました。」

そう言っただけで彼は大人しく部屋を出てふすまを閉める。

しかし、彼は見回りに出る事なく部屋の前にたたずんでいた。

(…多分皆着替えるよね。ちよつとだけふすまを開けて見てみようかな…)

そつとふすまに手を掛ける。

「……………」

…だが、不意に嫌な予感が頭を過り、彼は手を引つ込めてから階段の方に身を隠して部屋の様子を窺う。

「……………」

バタン!!!

急に部屋のふすまが大きな音をたてて開かれた。

胡桃「……大丈夫、ちゃんと見回りに行つたみたい。」

胡桃が部屋から廊下を覗きこんでそう言うと、また静かにふすまを閉める。

どうやら彼が覗いていないか、抜き打ちチェックをしたようだ。

「あ、危なかつた〜!」

階段に身を隠しながら彼が小声で言った。

(あのまま覗いていたら僕は間違いなく皆に殺されていた!…やつぱ

覗きはダメだね。()
彼は諦めて見回りに向かうことにした。

十五分後。

由紀「——くん遅いねえ？」

美紀「何かあつたんですかね？」

胡桃「うーん…変な物音もしてないし、多分あいつなら大丈夫だろ。」

悠里「無事だと良いけど…。」

パジャマからいつもの制服に着替え終えて、部屋の中で彼を待つ彼女達。

パタン…

「戻りましたあ〜。」

悠里「少し遅かったわね、大丈夫だった？」
帰ってきた彼に尋ねる悠里。

「ええ問題ないですよ。ただ皆さんの着替え中に帰ってしまったわぬように、のんびりと見回りしてたら遅くなってしまいました…すいません。」

部屋の壁に寄りかかるように座って答える。

悠里「そうだったの、悪いわね気を使わせてしまって…。」

胡桃「着替え終わったら呼んでやれば良かったな、わりい…。」

二人が申し訳なさそうにそう言うのを見て、彼は彼女達に見えないように手で顔を隠しながらニヤリと笑った。

(この行動で僕に対する彼女達の好感度が大きく上がったハズ！もしかしたら彼女達はこの罪悪感から僕が共に温泉に入る事を許すかもしれない!!)

(僕はあの夢を正夢にしてみせる!!)

彼はそう決意してから立ち上がり、爽やかな表情で彼女達に言った。

「気にしないで下さい。着替えの時に部屋から出るのは当然の事なんですから…温泉でも皆さんが入浴してる間は僕が『一人で』辺りを見

張っていますから、安心して下さいね?」

(どうだ!?一人での部分を強調して言ってるぞ!これはさすがにかわいそうに見えてくるだろ!?)

美紀「……なんか裏のありそうな顔ですね。」

美紀がボソツと呟く。

「!?」

(鋭い人だな!直樹美紀……彼女は手強い!!)

「裏なんかありませんよ?」

美紀の目を真っ直ぐに見て答えたつもりだったが、僅かに目が泳いでしまった。

美紀「へえ……じゃあ間違っても私達の入浴を覗いたりしませんよね?」

疑惑の目を向けてくる美紀。

(…前から思っていたが、この人は少し僕の事が嫌いなんじゃないだろうか?)

「……美紀さんは僕の事嫌いですか?」

何の脈絡もなく彼はそう言った。

(しまった!不意に心の声が漏れてしまった……今のはかなりのミステク!!しかも会話不成立とききた!)

美紀「なんで急にそんな事を聞くのか訳が分からないんですが？」
美紀が冷たい目で言い放つ。

由紀「みーくん目が怖いよ？ほら、——くんはただみーくんが自分の事を好きでいてくれてるか気になったんだよ。」
思いもよらぬ由紀のフォローに、彼は少し安心する。

美紀「このタイミングで急にですか？」

由紀「いいからほらほら!!質問に答えてあげなよ。…ハイ!あなたは——さんの事が好きですか?」

美紀にマイクを向けるかのようなジェスチャーをしながら由紀が尋ねた。

美紀「まあ…好きには好きです。……もちろん人として、友達としてですよ?」
念を押しながら答える美紀。

由紀「…だそうですね!!良かったね——くん!」

「はい…とても嬉しいです!」
とりあえずその場は大げさに喜んで無理矢理に美紀との会話を終わらせた。

悠里「さて：じゃあ温泉に行きましようか？」
少ししてから悠里が言った。

彼女達は旅館を出ると、一度車に寄りシャンプーや石鹸、そして風呂桶などだけをリュックに詰める、そして温泉を目指して観光案内の地図を持った悠里の案内の中、歩いて旅館街の外れにある木々に囲まれた山道を十分程進んでいく。

胡桃「：なんか凄い山道だけどこっちであってるよな？」

胡桃が辺りを見回しながら言う。

悠里「ええ、多分あってるはずよ？：そろそろだと思っけど。」

胡桃に言われて不安になったのか、繰り返し地図を指でなぞって確認し始める悠里。

美紀「あ！：あってるみたいですよ？」

道の先にある一本の立て札を指差して美紀が言った。

その立て札には、目的の温泉があと50 m先にあると記されていた。

由紀「良かった、迷子になったのかと思っちゃった。」

悠里「私もさすがに不安になっちゃったわ、道も大分荒れてるから間違えた所を進んでしまってるかと：今思えば道の整備をする人がいなくなったから荒れ放題になっていただけなのね。」

ほっと胸を撫で下ろす悠里。

そのままのんびりと歩いていき、そしてついに……

悠里「あ！見えてきたわ！あれが温泉じゃない？」

山道を抜けた先に僅かに見えた湯気のような煙を見て悠里が言った。

由紀「わくわく！」

胡桃「イエー！！」

由紀・胡桃の二人がそれに向かって嬉しそうに駆けていく。

美紀「先輩達、大はしやぎですね。」

ふふっ、と笑ってから美紀が言う。

悠里「久しぶりのお風呂：しかも温泉だからね、はしやぐのも無理ないわ。」

美紀「確かに、学校を出てからはずっと川の水浴びがお風呂代わりでしたからね。」

「冷たい川だと頭に洗うのも大変です、…本当に凍えそうになる。」
川での水浴びを思い出しながら彼は言った。

「……………ん？」

(この会話どこかで……………)

そんな会話をしながら三人はのんびり歩き、由紀達に追い付く。

由紀「凄いよ皆!!」

胡桃「見ろよコレ！」

悠里「わあ！」

美紀「凄い……！」

「おお……ん……ん？」

三人が見た物は想像していたよりも広く、円を描くように置かれた岩に囲まれた温泉だった。

(……あれ？この温泉も見覚えが……………)

訂正、約一名想像通りの温泉だった人間がいた。

胡桃「これ温泉だよな!？」

目をキラキラと光らせながら胡桃が言った。

美紀「ええ、近くに立て札もあつたので間違いないと思います。」

由紀「あつたか……い!!」

由紀が屈み、温泉に手を浸けて言う。

「……………」

(僕の予想では……ここでりーさんも温泉に手を浸けるはず……………)

彼の予想通り、悠里もその横に屈み、手を浸ける。
悠里「本当！思ったよりも熱くて気持ちいいわ。」

「!？」

(これは!?!あの夢のまんまだ!!)

衝撃の事実気付いた彼は小刻みに震え始めた。

胡桃「早く入ろうぜ！」

美紀「えええ！」

(動じるな!!あの夢の通りのセリフを言って、役を演じるんだ!!)

「じ、じゃあ…僕は…その…あっちの方で待ってるので、何かあった時とか温泉から出た時とか一緒に入っても良い時は呼んでくださいかね？」

彼がくるつと振り返り、来た道へ引き返しながら言った。

(さあ!!ここぞでりーさんに呼び止められるはずだ!!!)

胡桃「頼むなく。」

悠里「悪いわね、あまり時間はかけないようにするから。」

美紀「お願いします。」

由紀「また後でね。」

「……………」スタスタ…

彼は誰にも呼び止められる事なく、来た道を引き返していた。

「……………」スタスタスタスタ…

「……………」ピタッ

「なんでそこだけ夢の通りにいかないんだよ!!!?」
彼は山道の中、一人で叫びながらその場に崩れ落ちた。

由紀「今——くんの声聞こえなかった？」

温泉に浸かりながら由紀が言う。

美紀「いえ？私は何も聞こえなかったですけど…。」

胡桃「もしかしてアイツ！覗きに来た訳じゃないよな!？」

悠里「嘘でしょ!？」

由紀「あ…ううん、聞こえたって言っても遠くの方からみたいだから覗きには来てないと思うよ?。」

胡桃「そっか、なら良かった。」

美紀「そういえば——さん私達と別れる時変なことと言ってませんでした?。」

悠里「変なこと?。」

美紀「ええ、温泉から出た時や一緒に入っても良い時は呼んでくれ…みたいな事を言っていた気がするんですが…空耳ですかね?。」

胡桃「空耳だろ、あたし達が入って良いなんて言うわけないってアイツも分かってるだろうし。」

由紀「私がさつき聞いた声も空耳かも…。」

悠里「かもね…とりあえず覗きには来ていないみたいで良かったわ。」

胡桃「いくらアイツでも、やって良い事とダメな事の区別くらいはついてるだろ？」

美紀「ですよね。」

一同「あははは!!」

そう言つて笑いながら温泉を堪能する彼女達。

一方そのころ彼は……

(…正面突破は当然無理だ……だとすると有効なのは別の山道を迂回しての隠密行動!!)

(道なき道を進み、彼女達の死角からじつくりと偵察させてもらう!!)
やって良い事とダメな事の区別がついていない人間がここにいた。

「ほっ!!」スタタタ…

彼は温泉に向かった時とは別の獣道を勢い良く、それでいて静かに駆けていった。

(温泉まで100mも離れていないはずだ、猛ダツシユで行けば確実に入浴姿を拝める!!)

道を遮る木々の枝をナイフで切り裂きながら、もの凄い速度で駆けていく。

由紀「気持ちいいね。」

「!?」

由紀の声が聞こえた事で温泉にたどり着いたと気付いた彼はその場に伏せ、草木にまぎれ身を隠す。

(危なかった……もう温泉だったか!!由紀ちゃんの声が聞こえなかったらそのまま気付かずに勢い良く飛び出していつてしまうところだった!)

温泉を視界にいれようと、地面をゆつくりと這いながら進んでいく。

(僕は以前まで一人で生きてきた、時には奴らの群れと出くわし、いなくなるまでじつと身を隠した事もある!!そんな僕の実戦で鍛え抜いた隠密技術をみせてやる!!!)

ゆつくりと、ゆつくりと這っていく。

由紀「んく……りーさん相変わらず大きいね。触っていい?」
そんな言葉が彼の耳に入る。

「……………」

這うのを一度止めて耳を澄ます。

悠里「あうっ!!…こっ、こら由紀ちゃん!急に触らないで!!」
恥じらうような悠里の声が聞こえる。

「……………」

彼はまだ死んだようにピタリと止まっている。

美紀「…でも本当にりーさんのつて凄いですよね……………」

胡桃「なんだ?自分の胸と見比べてたりして、美紀もそういうの気になるのか?美紀くらいあれば大丈夫だよ、それよりも小さいのがあるから!」

由紀「!…私の事!?失礼だよ胡桃ちゃん!!」

「ああ失礼だ…………貧乳は貧乳で需要がある。…かくいう僕も貧乳は好きだ。」

彼はボソツと横を這うアリに性癖を話していた。

胡桃「失礼く?こんな胸のヤツが生意気にく!どうだ?少しは大きくなつたのか??」

由紀「はうっ!!くっ…胡桃ちゃん!イヤだ…っ!!そんなに触らない

「でよお……！」

（こんな光景が実在したとは……!!地獄と化した世界で、僕は天国を見つけたんだ!!!）

一応言っておくが、彼はまだ彼女達の会話を耳で聞いているだけで、その光景を見てはいない。

悠里「由紀ちゃん……さつき私もそんな気持ちだったのよ？……ね？無理矢理触られるのは嫌でしょ？」

由紀「う、うん！分かったから……！あやまる……だから……んっ！……りーさんまで触らないでっ……！」

「……ドエスモードになったりーさんに異様な興奮を覚えているのは僕だけかな？」

横を這うダンゴムシに小声で尋ねる。

由紀「さっ……！触らないでっ！」

（声だけでも抜群の破壊力……）

（由紀ちゃん……胸……無理矢理……触られる……）

頭の中で四つのワードを繋げてから、その光景を脳内で想像する。

「…ブツ!!!」

その光景を想像しただけで、彼は漫画のキャラのように鼻血を噴き出す。

胡桃「!!なんの音だ!?!」

胡桃がその音に気付く。

(…しまった!!!)

地面に伏せながら一生懸命に鼻を抑える。気がつけば目の前には鼻血の血溜まりが出来ていた。

美紀「…誰かいるんですか?」

胡桃「わかんねえ…皆、注意しろ。」

由紀「う、うん。」

悠里「胡桃、シヤベルは?」

胡桃「あそこの岩に立て掛けてある…ヤバそうだったら急いで取りに行く…!」

その場が静まりかえる。

(気のせいだよ!!…大丈夫だから警戒をといてくれ!!)
彼が必死に祈る。

胡桃「今の内に取ってくる…。」バシヤツ…
胡桃が湯から出てシャベルを取りに向かう。

(……………)ドクン!ドクン!!
心臓の鼓動が大きくなっていく。

胡桃「……………」カランツ…
シャベルを取ったような音が彼の耳に入る。

胡桃「……………」ペタ…ペタ…
足音が彼に近付く。

(殺される!殺されるツ!!)ドクン!!ドクン!!ドクン!!

ガサガサツ!

彼が伏せている場所とは別の方向で草木を踏みしめる音が聞こえた。

胡桃「なっ!!」

悠里「っ!」

由紀「うわっ!」

美紀「!」

『ウウ〜ツ……アア……』

ゾンビの呻き声が温泉に鳴り響く。

それは由紀達背後の木々の間から現れた。

胡桃「ちい!!」

胡桃がそいつの所へ向かおうとするが、

バサツ!!

胡桃「……なっ!??」

それよりも速く、彼が木々の間から飛び出してゾンビの前に立つ。

『ウアー…アアツ…』

ゾンビが彼を前に呻く。

「黙れ、覗き野郎!!」

彼はゾンビにそう言っただけでナイフを降り下ろし、ゾンビが動かなくなつたのを確認してから振り返る。

「ふうっ…危なかつたですね？」

一同「…キャー…ッ!!」

彼女達の叫び声が鳴り響く。

「あつ…すつ!!すいません!」

彼はとつさに謝る!

だが視線はしっかりと彼女達を捉えようとする!!

しかし湯気でよく見えない!!

胡桃「危なかつた…だと?」

左手に薄いタオルを持ってそれで前半身を隠す胡桃、右手には相変わらずシャベルを持っていたが、彼はそれを気にせず…

(タオルの隙間からちらちら見える隠しきれない太ももとか見えそうで見えない胸とかお尻がエロ過ぎるんですが…。)

などと思っていた。

胡桃「一番危ないのはお前だろ!!!」ブンツ!!

「ツ!!」

気がつけば彼の目の前にはシャベルが迫っていた。

(…ヤバ……。)

ガンツ!!!

彼は胡桃のシャベルで強く殴られ、もうそのまま目を覚ます事はなかった。

これは、一人の愚かな男の話

四人の少女と出逢い、旅先の温泉で覗きを働いたが為にその四人の内の一人の少女に殴り殺されるまでを描いた……

切なくも美しい……愛と欲望の物語

胡桃「……ってな感じでお前の人生が終わっちゃうくらいに強く殴ったはずだけど……しぶといのな、お前。」

目を覚ました彼に胡桃が言った。

「…そんなに本気で殴ったんですか……少しショックです。」
温泉の側の木に両手を縛り付けられた状態で彼が言う。

悠里「私達はそれよりもショックだったけど？」
彼の側に来てから、悠里が冷たい目で見下して言った。

「言い訳を……！言い訳をさせて下さい!!」

悠里「言い訳?…何?言ってみて。」

「見張りをしている途中でさっきのゾンビを見掛けて……慌てて追い掛けたんですが、追い付いた時にはもうそこは温泉だったんです!!」
殆ど作り話の酷い言い訳だった。

悠里「……本当ね?」

しやがんで目線を合わせてから尋ねる悠里。

「……はい。」

僅かに目が泳ぐ。

悠里「…ふうん。」

美紀「ま、まあ——さんがあれを倒してくれたのは事実なんですし……許してあげましょう?」

悠里の横に駆け寄ってから美紀が言った。

一時は美紀は自分の事が嫌いなのかとまで思っていた彼だが、なんだかんだでやはり優しい美紀に心の中で感謝した。

由紀「そ、そうだよ…ね?胡桃ちゃんも怒ってないよね?」

胡桃「まあ……とりあえず十分な罰は受けたからな。」
胡桃が彼の頭のシャベルで殴った時の傷を見て言う。

「そういえば……何気に頭痛い……。」

悠里「……………」

悠里「はあ……。分かったわ、——君には普段頑張ってもらってるし、一応その話を信じてあげる。……絶対嘘だと思うけど。」

「……………あの……………」

立ち上がった悠里に彼が声を掛ける。

悠里「何?」

「あはは………すいません、あのゾンビを追ってたってのは嘘で、本当は覗きに来てました。……申し訳ない。」

両手を縛られたまま、頭を深々と下げて謝る。

悠里「……そう、正直に言ったから……今回は許してあげるわ。」
そう言うのと彼の手を縛っていた縄をほどく悠里。

「ど、どうも…。」

悠里「…これも正直に答えてね?…私達誰かの裸……見た?」
悠里がちよつとだけ睨みながら尋ねる。

「いえー湯気で見えませんでした!!」

彼は軍人のようにハッキリと答えた。

悠里「…そう、胡桃のも?」

「ん?…ええ、でもちよつとだけ太もも見ちやいました。」

胡桃「本当に正直に言うな……。」
少しだけ顔が赤くなる胡桃。

悠里「太ももだけ?…上半身は?」

「タオルで隠れてましたから、見てませんよ。」

悠里「タオルだけじゃ隠しきれない部分とかあるでしょ?…本当に何も見てない?」

悠里のしつこさに、彼は少し違和感を感じた。

胡桃「…りーさん、見てないってさ。もう良いよ、あんまり聞かれるとあたしがハズいし。」

照れた顔で胡桃がそう言ったが、その表情にも違和感を感じた。

悠里「……………そうね。」

悠里「ま！——君も男の子だものね？女子四人に囲まれて、なんていうか……………色々と苦労するのよね？」

いつも通りの笑顔、それに僅かな照れを加えた表情で悠里が言った。

「まあ……………とりあえずすいません。」
もう一度謝っておく。

美紀「あ！……—さんもとりあえずは温泉に入ってみたらどうですか？」

思い出したように美紀が言う。

悠里「そうね、……………あ！頭は洗わない方が良いわ。…まだ傷が痛むだろうから。」

「では、そうさせてもらいます。」
彼がそう言って入浴の準備をする。

悠里「ゆつくりね、私と胡桃はその辺を見張ってるから、由紀ちゃん和美紀さんはここにいてあげて。」

「!？」

思わぬ悠里の発言に驚く。

由紀「らじゃ!!」

美紀「ん?…あ、ああ…分かりました。」

(分かっちゃうのかよ…。)

悠里と胡桃を見送り、彼は服を脱ぎ始める。

美紀「うわっ!!なに目の前で脱いでるんですか!?! 私達の見えない所で脱いできて下さいよ!」

美紀が目を覆いながら言った。

「ああ、ですよね。」

由紀「いやいや、みーくん、私達が後ろ向いてれば良いんだよ!」
そう言ってくるつと彼に背を向ける由紀。

美紀「あ、ああ…そうですね。」

美紀もそれに続く。

「……………じゃあ。」

二人が後ろを向いたのを確認して、彼は服を脱ぐ。

そして全て脱ぎ終わると、腰にタオルを巻いてから温泉に浸かり、

二人を呼ぶ。

「もう良いですよ。」

由紀「……。」クルッ

由紀は振り返ると彼の側に駆け寄り、しゃがんで足だけを温泉に浸ける。

由紀「えへへ、きもちー。」

笑顔で足をバタバタする由紀。

美紀「あわわっ……」——さんちやんと腰にタオル巻きました!?

美紀はまだ後ろを向いていた。

「巻きましたよ、大丈夫です。」

彼がそう言うとうまく美紀も彼の方を向く。

美紀も彼の側にくると、地面に置かれた彼のナイフを一本だけ手に持ち、近くの大きな岩に寄りかかった。

「何故ナイフを？」

美紀「——さんも裸のままじゃとっさに戦えないだろうから……あなたが入浴している間に何かあれば私が代わりに戦えるようにと思つて、……あ、借りますね？」

少し遅れてからナイフを借りた事を報告する美紀。

「はい、どうぞご自由に。……まあもし奴らが来たら僕も戦いますけど。」

美紀「いいえ、敵が一体なら私に任せてのんびりして下さい。」

「ん?…うくん、分かりました。」

由紀「私は!?!」

美紀「先輩ものんびりして下さい。」

由紀「うぐつ!私、頼りにされてない!?!」

由紀が落ち込む。

美紀「いいえ、先輩には——さんの話し相手っていう重大な役割があります。」

由紀「おおつ!任せてよ!!——くん!温泉気持ちいい?」

「気持ちいいです!」

美紀「そういえば頭の傷は平気ですか?」

「はい、目覚めた直後は痛みましたが、もう平気です。」

美紀「まあ少しタンコブになっているだけですからね。…それでも——さんが気絶したもんだから胡桃先輩が大慌てして大変だったんですよ?」

美紀がふふつと笑って言った。

「そうだったんですか?」

由紀「うん！強く殴ったつもりはないのに〜！…って泣きそうな顔で言ってたよ。」

美紀「私達は血も出てないから大丈夫だと思いつて言ったんですけどね…殴った本人として責任を感じていたみたいです。」

「…へえ。」

『お前の人生が終わっちゃうくらいに強く殴ったはずだけど…』

「あれは強がりだったのかな…」

美紀「…にしても大して強く殴ってないのになんで気絶したんですかね？」

「さあ？」

（多分周りの光景が衝撃的だったからだな…。結局見えなかったけど）

由紀「胡桃ちゃんて何気に———くん優しいから、許してあげて？」

「もちろん、…ていうかそもそも悪いのは僕ですし。」

胡桃「さつきは随分しつこく聞いてたね？」
適当なところをぶらぶらとうろつきながら、胡桃が悠里に言った。

悠里「あの事……まだ彼には話していないのよね？」

胡桃「…やっぱこれを見たのか気にしてたからあんなにしつこく聞いてたんだ。」

胡桃が自分の右肩を触りながら言う。

悠里「あんな形で知られるのは嫌でしょ？」

胡桃「…まあね。」

悠里「私もね…覗き自体にはそこまで怒っていないの。あれが穂村君なら本気で怒るけど…——君が相手だとそこまで憎めなくて、あれはあれで一つのイベントみたいで正直言うとなし楽しかったわ。」
ニコツと笑って悠里が言った。

悠里「それに飛び出したら私達にバレるって分かっているにも関わらず、あれが現れた瞬間すぐに駆け付けてくれたし……結局は私達の事を大切に思ってくれているのよね。」

胡桃「……だな。」

悠里「……いつまでその傷の事黙っているつもり？」

胡桃「……わかんない」

悠里「……まあわざわざ言う事でもないと思うけどね、薬は打ったから平気な訳だし。」

胡桃「……うん」

悠里「けど……先に言っておいた方がもし彼にその傷を見られた場合、誤解をされないですむと思うのも事実ね。」

胡桃「……うん」

悠里「――君なら、言っても普通に受け入れてくれると思うわよ？」

胡桃「わかってるよ！そんなの!!」

不意に胡桃が怒鳴る。

悠里「……胡桃。」

胡桃「……ごめん。」

胡桃「他の皆はさ……あたしがめぐねえに噛まれた時の事も知ってるし、その後薬を打った事も知ってる。だから大丈夫なだけどさ……」

胡桃「……その事を何も知らないあいつに話すのは……少しだけ怖いんだ。」

胡桃「大丈夫って信じてくれるかなとか……薬の事とか信じてくれるかなとか……。必要以上に考えすぎちゃって……」

胡桃「あたしだって……隠し事なんかしたくない、あいつは大切な友達だから……。こういう事は隠さずに伝えておきたいよ……」

胡桃「わかつてるよ……あいつならなに食わぬ顔で受け入れてくれるって……だって……あいつ優しいもん……」

胡桃「……なのに……絶対大丈夫だってわかつてるのに……」

胡桃「この事を話した瞬間、あいつのあたしへの扱いが少しでも変わってしまったらと……」

胡桃「……そう思うだけで怖いんだよ……」

胡桃「……もし感染者だと思われて、あいつにナイフを向けられた

らどうしよう…友達なんかじゃないって言われたらどうしよう……」

胡桃「あいつは絶対そんな事するわけないのに…もしもって考えるだけで……口が震えて喋れなくなる……」

胡桃「りーさん……あたし……あいつを信じてるはずなのに……あいつも、あたしを信じてくれてるのに……」

胡桃「怖くて言えないよ……どうしたら良いんだろう……」
そう言って胡桃は悠里の隣で項垂れた。うなだ

悠里「……大丈夫よ、胡桃……無理せずにゆっくりとタイミングをみてれば……きつといつかは言えるから。」

悠里は胡桃の頭を優しく撫でた。

二十七話『つり』

「……で、この後の予定は？」

温泉から旅館に戻った後、部屋の中でしばらくただらしてから彼が口を開いた。

悠里「…どうしましょ？温泉に気を取られてあまり考えていなかったわ。」

胡桃「また車で移動する？」

悩む悠里に胡桃が尋ねた。

悠里「そうね……」

由紀「すどくつぷ!!後一泊だけしてこうよ、せつかくの旅行なんだから！」

胡桃の顔を手で押し退けて由紀が言う。

胡桃「んがっ！おい由紀!!手えどけろ!!」

由紀「ああ…ごみんごみん。」

由紀が胡桃の顔からそつと手を離す。

「一泊つてのは僕も賛成です。ここは街と比べると奴らの数が少なくて過ごしやすいですから、もちろん残りの物資に余裕があれば…ですけどね。」

悠里「ええ、物資の方は大分蓄えがあるからしばらくは大丈夫よ。」

美紀「ではもう少しだけここに泊まっていきますか？」

悠里「そうね、もう一泊くらいはしていきましようか。」

悠里はそう言ってニコツと笑った。

由紀「やった〜！…じゃあさっそく遊びに行こう!!」

由紀が立ち上がって言う。

胡桃「遊びにつて…どこへ？」

由紀「ん〜…考えてないけど……とりあえず外に出ようよ！」

美紀「あ、そういうえば先輩達は昨日その辺り見てまわったそうですが、私と——さんは旅館の安全確認中だったので…温泉に行く途中でらつと見ただけなんですよね。…しっかり見てきたいです。」

美紀が部屋の窓から外を眺めて言った。

悠里「そうだったわね。じゃあとりあえずは皆でゆつくりと外を見て回りましたよか？」

胡桃「まあ、あたし達もまだ少ししか見てないし…それも良いな。」

一同は軽い支度だけをして、外に出る。

それぞれ離れ過ぎないようにしながら辺りの店を見て回ることに約一時間、美紀があることに気付く。

美紀「…もしかしてですけど……あまり見るもの無かったりします

？」

その台詞を聞いた由紀以外の全員が、ピクツと反応する。

胡桃「……気付いてしまったな、その事実には。」

悠里「私達も薄々気付いてはいたんだけどね……」

「食べ物は賞味期限切ればかり……しかも冷蔵機器も止まってるから目に見えて腐ってる物もちらほら……」

由紀「みてみて〜可愛いぬいぐるみがあつた〜!」

可愛いのかよくわからないご当地キャラのぬいぐるみを持った由紀だけがはしゃぐ中、黙りこむ四人。

胡桃「……ちよつと外に出てるわ。」

「……じゃあ僕も。」

美紀「私とりーさんももう少ししたら由紀先輩連れて出ますんで……先に待っててください。」

胡桃「りょーかい。」

退屈が頂点に達した二人は店の外に出る。

胡桃「ふあく…」
外に出た瞬間に胡桃が大きく欠伸あくびをした。

「眠いの？」

胡桃「いや、退屈過ぎてね…なくんか楽しいものないかなあ。」

胡桃はそう言って辺りをキョロキョロと見回す。

「楽しいものね……」

彼も辺りを見回す、すると一つの文字が目に入り胡桃に尋ねる。

「胡桃ちゃん。」

胡桃「ん？」

「君…釣りは好きかな？」

悠里「由紀ちゃん…そろそろ……」
飽きずに店内を見て回る由紀を呼び戻そうとしたその時、胡桃が戻ってきて悠里に話し掛ける。

胡桃「リーさん!!」

悠里「胡桃、どうしたの？」

胡桃「釣り行ってきたいい?」

悠里「釣り?」

胡桃「うん!あいつが近くに釣具屋あるの見つけてさ…道具もちやんとそろってるみたいだし、良いかな?もし良ければリーさん達も一緒に。」

ウキウキ顔で胡桃が尋ねる。

美紀「どこでやるんですか?」

胡桃「やるとしたら今朝温泉行く途中に見掛けた川かな。」

美紀「ああ…あの川ですか。」

今朝、彼女達は温泉に向かう道中で一つの川を見掛けていた、ぱつと見た限りでは綺麗で確かに中々釣りに向いていそうではあった。

悠里「釣りねえ、上手くいけば昼食はお魚になるかも。…いいわよ、じゃあ私達は胡桃達が釣った魚を調理出来るように包丁とか軽い調味料とか用意してから行くから。二人で先に行っててくれる?」

由紀「私も!私も先に行っても良い?」

悠里の横で由紀がピョンピョンと跳ねながら尋ねる。

悠里「だくめ!由紀ちゃんと美紀さんは私を手伝ってちようだい。」

美紀「はい。」

由紀「うゝ、分かった。」

胡桃「あれ？そんなに人手必要？」

由紀と美紀を連れていこうとする悠里に尋ねる。

悠里「ええ、必要なの。」

意味ありげな笑顔でそう答えると悠里は胡桃に近づいてそつと耳打ちした。

悠里「私達は少し遅めにそつちに向かうわ……無理にあの事を言えつて事ではないからね？」

胡桃「ああ……気を使ってくれたのか、ありがとう。……なるべく言えるよう頑張るよ。」

悠里「言えなかつたら言えなかつたで、二人きりでのんびりとお喋りでも楽しんで。」

悠里はそう言つてニコツと笑うと由紀と美紀を連れて店から出ていく。

胡桃も遅れて店から出ると外で待つ彼に悠里が許可をくれた事を告げ、二本の釣竿と餌をもって二人で川に向かった。

「さて……ここで良いかな？」

川にたどり着いてから彼が言った。

胡桃「ああ、ここでいい。あまり奥に移動しちゃうとりーさん達が

分からなくなっちゃうし。」

「それもそうか。」

二人は山中の川辺に荷物を下ろし、釣りの準備を始める。

胡桃 「…なんかこれ気持ち悪いな…。」

釣り具屋から持ってきたミミズのような人工餌を手にして胡桃が言う。

「うん…やたらリアルだね。作り物って分かってても素手で触るのがだな。」

彼が触るのを躊躇ためらっている中、既に胡桃はそれを釣り針に付けていち早く釣りを始めた。

「よく触れたね?。」

胡桃 「気持ち悪いけど…別に我慢は出来るレベルだよ。」
竿を川に垂らしながら言う胡桃。

「へえ。」

彼もそう言いながらその餌を針に付け、竿を川に垂らして胡桃に続いた。

「女の子はそういうのいつまでも触れない程苦手かと…。」

胡桃 「まるであたしが女の子らしくないみたいな言い方だな。」
竿を垂らしながら彼を睨む胡桃。

「はははっ！確かに僕のイメージしてた一般的な女の子とは違うね。」
笑いながら彼が言った。

胡桃 「なに？……」はそういう女の子が好きなの？」

「ん、いや……そういうのより僕は胡桃ちゃんみたいの方が好きかな。
キヤー！触れなくい！……なんていつまでもやられてたらイライラす
るし。」

胡桃 「ああ、そう。」

そう言っつて胡桃は川に目を向ける。

胡桃 「……………」

「……………」

二人して無言で釣りをする事、約五分……再び胡桃が口を開く。

胡桃 「……誰を比較に、とかじゃなくてさ。」

「うん？」

彼が胡桃の方を見る。

胡桃 「……ただ一人の女の子としてさ……………」

胡桃「…あたしの事…好き？」
そう言って胡桃も彼を見つめる。

「…あ〜〜。」

胡桃「……………」ハッ!!

胡桃「友達としてだぞ!!友達として!!!彼女にしたいとか結婚したいとかそういうのは違うからな!?!」
慌てて言葉を付け足す胡桃。

「ああ!ですよね〜。」

彼がへらへらと笑う。

胡桃「当たり前だろ!!」

「だって女の子としてとか言うんだもん!そりゃそっちの好きを連想しちゃうよ〜。」

胡桃「へ?…女の子としてとか言ってた?」
胡桃が真顔で尋ねる。

「ん?言ってたよ。」

胡桃「…聞き間違いじゃない？多分言ってるよ。」

「ん〜？そっかな、…まあいいや。」

胡桃「んで、どうよ？あたしは友達としてオツケー？」
改めて尋ねる胡桃。

「勿論オツケー。大切な友達だよ。」
彼が胡桃を見て笑顔で答える。

胡桃「…何があっても？」
伏し目がちに尋ねる胡桃。

「まあいきなり僕の後頭部をシャベルで殴ったりしなきゃ。」

胡桃「……」スタスタ
釣竿を置いて彼の側に胡桃が駆け寄る。

「…ん？」

胡桃「そんな事しない…。そういえば今朝はゴメン……痛かった？」

彼の頭のタンコブを手で撫でながら胡桃が言う。

「あ、ああ…もう痛くないし、元はといえば僕の自業自得なんだから気にしなくても……。く…胡桃ちゃん？」
いつもと違う胡桃の態度に戸惑う彼。

胡桃「……ずっと友達でいてくれる？……どんなあたしでも。」

「……………」

胡桃の顔を見て真面目な話だと察した彼は、茶化さずに言った。

「うん……ずっと友達でいる。」

胡桃「……そっか。」

胡桃（やっぱりこいつは優しい……傷の事……伝えよう。）

胡桃「あのな……あたし実は……」

ゴロゴロツ!!

胡桃が口を開いた直後、二人の後ろの斜面から何かが転がり落ちてきた。

『ヴヴウ〜…アア…ア』

転がってきたそれはやはりゾンビだった。

「はぁ……ちょっと待ってて。」

胡桃「あ……うん。」

彼は自分の持っていた竿を胡桃に渡してそう言うと、ナイフを手にゾンビに近づいていった。

「わざわざ転がって来てまで……」くろうさんでした。「グサツ!!」

彼はそう言つてゾンビの頭にナイフを突き刺す。

その動きは手慣れたもので、たった一体ならばなんの危なげもなく、見ている方も安心だった。

胡桃「……………!」

だが胡桃はそのゾンビをよく見てある事に気付く、彼が刺したそのゾンビは皮膚が爛れているので断定は出来ないが、恐らく胡桃達と年齢が近いであろう少女だった。

胡桃「……………」

彼がそのゾンビを躊躇いなく突き刺すのを目の当たりにして、先程の決意が揺らく胡桃。

胡桃（いや……そりゃ躊躇わないに決まってるだろ……大体あたしだって学校にいた時にあんなった同級生達を何人も殺したじゃないか……もう普通の事なんだ、この世界じゃ……いちいち躊躇う方がおかしいんだ……。）

胡桃（……………なのに…………）

胡桃（……………また怖くなつて言えなくなつちやつた……………。）

「胡桃ちゃん?」

急に声を掛けられて胡桃は驚く。

胡桃「おおっ!!…なに?」

「お待たせ、釣竿返して?」

胡桃「あ…、はい。」

自分が釣竿を持っていたのを思い出してそれを彼に渡す胡桃。

「どうも」

彼はそう言つて再び釣りを始めた。

胡桃（会話の途中だったのを忘れてるみたいだしちようど良いか……………
今回はあきらめよ……………。）

そう思い、自分も釣りを再開しようと胡桃が動いたその時…

「…で、さっきの続きは？」
彼がそう言った。

胡桃 「…え？」

「さっきなんか言おうとしてたでしょ？よくあるラブコメ漫画の主人公ならこのままうやむやにするんだらうけど…僕はしっかりと胡桃ちゃんが『実は…』って言うのを聞いてたからね!!」
釣りをしながら言っていてドヤ顔を見せる彼。

胡桃 「あ…あれは…。」

胡桃（人の話結構ちゃんと聞いているやつだな…どうしよ……まかす？でもどうやって…。）

「ほらほら…なんでも言っただらん？」
彼が耳を向けて胡桃の言葉を待つ。

胡桃 「はあ…。」 スタスタツ

胡桃 （こうなれば仕方ない…）

駆け寄った胡桃は再び彼の横に立ち、そして

…チユツ

耳を向けて待つ彼の頬にキスをした。

胡桃「…んっ。」

口を離して彼の顔を見る胡桃。

「……………」

そっつと、彼が胡桃の方を向き、そして目が合う。

胡桃（うわあく…バカかあたしは！…ごまかす為とはいえなんて事してんだ！キスすんのはさすがにやり過ぎだろ!!）

自分がした事を思い返して顔を赤くする胡桃。

胡桃（…てか落ち着いて考えたら傷の事を言うよりもこっちの方が勇気いるんじゃないか??）

「……………」

彼が無言で胡桃を見詰める。

胡桃（ど、どうしよう……今のであたしがこいつに惚れてるとか勘違いされてそのまま告白とかされたら…。）

「……………」

胡桃（…なんかずつとあたしの事見てるけど……まさか頬のキス一

つで興奮して襲ってきたりしないよな？性的な意味で!!：一応シャベルを……あ！ダメだ、釣竿と一緒にあつちに置きっぱなしだ：！)

シャベルは胡桃が先程まで釣りをしていた場所、つまり4 m程後方に置いてあった。

胡桃(どうしよう！男のこいつに力づくで抑えつけられたら多分あたし振りほどけないよな……ヤバい！もしこいつが本当に襲ってきたらあたしはそのままこいつにく〜！)

彼の視線を受け、顔を真っ赤にして胡桃は身構える。

「……胡桃ちゃん。」

彼がようやく口を開く。

胡桃「はっ、はい！」

ビクつきながら返事をする胡桃。

「……………」

胡桃「……………」ドクン！ドクン！

「今のは立派なセクハラじゃないかな？」

胡桃「は?……」

まさかの一言に言葉を失う胡桃。

「だってそうでしょう? いきなり人の頬にキスをするなんて、例えば僕がいきなり由紀ちゃんの頬にキスしたらどうですか? 一発で事案でしょ。」

胡桃「言っても良い?」

手を挙げながら胡桃が尋ねる。

「どうぞ、胡桃さん。」

どっかの先生らしく彼は言う。

胡桃「今朝覗きをしたお前が偉そうに言うな!!!」

そう言つて胡桃はシャベルの元に駆けていき、それを手に持ち構える。

「ストップストップ! 冗談冗談!! ちょっと驚いたから変な事言っちゃっただけだよ!」

彼が慌てて胡桃を落ち着かせる。

胡桃「…本当に？」

「うん…いきなりキスされたもんだから、…僕も少し驚いちやっ
ね。」

胡桃「…ゴメン。」

シャベルを下ろす胡桃。

「ううん、驚きはしたけど…嬉しかった。」

彼が笑顔で言う。

胡桃「……………」

「…なんでいきなり？」

彼が尋ねてくる。

胡桃「今朝わざわざ覗きに来たのに何も見れなかったお前への残念
賞だよ。」

胡桃（少し無理矢理な気のする言い訳だけど、まあ良いか。）
釣竿をいじりながら胡桃は言った。

「…覗きをして成功すれば皆の裸を見る事ができ…失敗に終わって
も胡桃ちゃんがキスしてくれる…あれ？これ負けがくない？」
手に顎を乗せて考えながら彼が言う。

胡桃「いや…今回ただぞ。次からは成功しても失敗してもお前を

待つのは死だ。」

彼を睨みながら言う胡桃。

「…分かりました。」

胡桃の気迫に負けて大人しく返事をする彼。

そして二人は再び釣りに戻る。

「…で、結局言おうとしてたのは何ですか？」

胡桃（ごまかせてないのかよ!!!
!!!）

『あたし…実は…』からのキスだと繋がらないからね。…いや、…
もしかして実は僕の事が好きって事?…だとすればキスをしたのも
領けるし話も繋がる!!」

興奮しながら彼が言う。

胡桃「あの時は、あたし…実はお前にプレゼントが…って言ってキ
スするつもりだったの!どうだ、ロマンチックだろ。」

胡桃（何言ってるんだろ…あたし。）

自分で言って顔を赤くする胡桃。

「ちよつとベタだね。…四十点。」

彼がさらつと言った。

胡桃（ムカつく!!!）

「……………」。

胡桃「……………」。

「釣れないね。」

胡桃「そうだな。」

「……………」。「カチャ…」

胡桃「……………?」

彼が釣竿を置いて他の釣具を眺め始める。

胡桃「どした？なんか変えるの？」

「いやね…ふと思つたんだ。胡桃ちゃんはこの人工餌は平気だった…けどそれはこれが人工物って分かつていたから…違うかい？」
彼が人工餌を指で持ちながらしやがんで尋ねる。

胡桃「まあそうだな。人工って分かつてるだけで大分違う。」

「人工物って知らなかったら？」

胡桃「ただのミミズにしか見えないから引く。」

「でしょ？」

胡桃「…何が言いたいの？」

胡桃がそう尋ねた瞬間、彼はニヤツと笑って答えた。

「後でリーさん達が来たらいきなりこれ投げてみよつか。」

胡桃「いやいや…やめてやれって。」

「誰に投げようかな？」

胡桃「やる気まんまんかよ…。」

「おすすめは誰？」

胡桃「ん〜由紀はミミズとか苦手かな？よく分からん、美紀も分からないし…リーさんは…園芸とかしてたくらいだからもしかしたら平気かもね。」

深く考えずに思いついたまま話す胡桃。

「そっかあ!!じゃありーさんにしよう!苦手過ぎる人に投げて嫌われるのもイヤだしね。」

結局彼は悠里をターゲットにした。

今思えば止めるべきだった。

胡桃（結局…傷の事は言えなかった……。）

胡桃「……あのさ。」

嬉しそうに人工餌を眺める彼に声を掛ける胡桃。

「ん?」

胡桃「…もしあたしが奴らと同じ様になったら……お前があたしを殺してくれるか?」

「……不謹慎だな。」

真剣な顔をして彼が言った。

胡桃「いいから…答えて。」

「……………」

「…分かった…殺してあげるよ。ただそのかわり僕がそうだった時は胡桃ちゃんが僕を殺してね？」

胡桃「…任せとけ。…ばっちし仕留めてやる。」

「だったら……僕達は最期まで一緒にいないとね。」
彼がボソツと言う。

胡桃「え?」

「だって離れちゃったらどっちかがそうだった時に仕留めてやれないでしょ?」

胡桃「はは…そっか…じゃあずっと一緒にいなきゃな……………」

「まあこの世界が元通り平和になったら話は別だけどね。」

胡桃「……あたしは……元通りになっても皆と一緒にが良い……一応お前ともな。」

胡桃が彼を見ながら笑顔で言った。

「うん……。……ま！僕が側にいる限り君達を奴らの仲間にはさせないけどね！」

彼も笑顔でそう言った。

胡桃「……守ってくれるんだっけ？」

「うん……守ってあげるよ。」

胡桃「……………」

胡桃「……そっか……ありがとう。」

胡桃はそう言って顔を伏せた。

胡桃「……………」

(……………ん？胡桃ちゃん……泣いてる?)
顔を伏せているのでハッキリ見えないが、僅かに見えた目が潤んでいた気がした。

「胡桃ちゃん……」

胡桃「あ……ほら、りーさん達が来たぞ。」
彼に後頭部を見せて胡桃が言った。

由紀「お二人さくん！釣れてますかな〜!?」
胡桃の言ったとおり、悠里達がこちらに向かってきていた。

胡桃「…ほら……りーさんにミミズ…投げてくるんだろ？」
胡桃は相変わらず後頭部を彼に見せながら言う。わざと顔を見せないようにしているように見えたとし、声も僅かに震えている気がした。

「ああ…うん。」
彼は胡桃が気になったが、わざわざ顔を覗きこむのも悪いのでとりあえずは悠里に投げる為の人工餌を手を持った。

悠里「あら？一匹も釣れてないの？」
二人の横に置かれたバケツを見て言う悠里。

「りーさん。」
そんな悠里に彼が声を掛ける。ミミズを投げる為に。

悠里「ん？なに？」

彼の方を見る悠里。

「ほれ。」ポイツ!

悠里目掛けて飛ぶミミズ(人工)

悠里「ん？」パシッ!

悠里は反射的にそれをキャッチし、そして静かに手を開いてそれを確認する。

悠里「……………?……………ひっ!!キヤーー!!!」

慌てて人工餌を地面に叩きつける悠里。

由紀「?……………ああ…。あはははっ!!」

叩きつけられた人工餌を見て全てを察し、由紀がケラケラと笑う。

美紀「……………うわあ…。」

美紀は目に僅かながらも涙を浮かべる悠里に気づき、由紀とは違う物を察して怯える。

「はははははっ!!」

一方彼は大笑。

悠里「……………」。

「あんなりーさん初めて見ました！あれ本物じゃなくて人工の餌なのに！あはははっ!!」

まだまだ大爆笑する彼。

由紀「あははっ……………あゝ…ヤバ…。」

由紀も遅れて何かに気付く。

悠里「……………」スタスタ

悠里が無言で彼の前に立つ。

「?…どうしましたりーさ…」

バシッ!!

悠里渾身のビンタが彼の頬に炸裂。

「うぐっ!!」

(速い！全く見えなかった!!)

悠里「——君!!そこに正座しなさい!!!」

珍しく怒鳴る悠里、よっぽど頭にきたようだ。

「あゝ…地面…石ばかりで正座すると痛いと思うんですが……………」。
彼が小声で言う。

悠里「そのくらいでちょうど良いでしょ！ほら早く正座!!」

「はっ…はい!!」

大人しく正座する彼、脛すねに石がめり込んでかなり痛い。

悠里「まったく！いったい何を考えてるの!?今朝は覗き！そして今はこの下らないドツキリ!!そろそろ私も怒るわよ!?!」

「お言葉ですが…既に怒っているのでは…」
彼がそつと言う。

胡桃「ぶっ…!…!…!あはははっ!!」
それを見て胡桃が笑う。

由紀「えへへ…!…!あはははっ!!」

美紀「…!…!ふふっ!」

それにつられるように由紀と美紀も笑う。

悠里「…!…!ふふっ!…!まったくもう!!」
思わず悠里も笑ってしまう。

「……………」

胡桃 「あはははっ!!」

彼は胡桃の顔を見た。

彼女はやはり泣いていたが、それが元々流れていた涙なのか、今笑った事で出た涙なのかはもう分からなかったが…今はとても楽しそうに笑っているのでとりあえず良しとした。

胡桃（今日は言えなかったけど…まだ機会はある、のんびりいこう。あたしとこいつはこれからも一緒なんだから。）

二十八話『たいけつ』

胡桃と彼が二人で釣りを始めて、しばらくしてから悠里達も合流した。

それから一時間：

由紀「みてみて！また釣れた〜！」

由紀も胡桃と共に釣りを始めた。するとどういった訳か由紀は胡桃と彼がいくらやっても魚を釣れなかったこの川ですぐに魚を釣り上げてみせた。

それも一匹ではない、先程のを入れてもう五匹目になる。

胡桃「くっそ〜！何で由紀ばかり釣れるんだよ!?!」

由紀の横で釣糸を垂らしている胡桃がぼやく。

胡桃もあれから全く釣れていない訳ではないのだが、彼女が釣り上げたのは二匹…まだ由紀には及ばない。

由紀「胡桃ちゃんの釣竿から出てるくれくれオーラに魚さん達も気付いてるんだよ！」

由紀がへらへらしながら言う。

胡桃「くれくれオーラってなんだよ!？」
胡桃が尋ねる。

由紀「くれくれオーラってのはね、なんていうか…釣るぞ〜! っ
のが釣竿からにじみ出ちゃってるく…みたいなやつ。」

胡桃「そりゃ釣りしてたら誰でも釣るぞ〜! っってなるだろ!？」

由紀「私くらいになるとそういう雑念を捨ててるんだよ! ええつと
……無我むがのきよういの驚異きょういってやつ?」

首を傾げながら由紀が言った。

美紀「いえ、無我むがのきようちの境地きょうちですよ。」

由紀の横にある小さな岩を椅子の代わりにしてしゃがんでいる美
紀が言う。

胡桃「ようするに何も考えてない……って事か、由紀の得意分野だ
な。あたしには無理だ。」

そう言つてニヤツと笑う胡桃。

由紀「な!…失礼だよ胡桃ちゃん!!」

美紀「ええ、由紀先輩だけがたどり着ける領域です。」

由紀「みーくんまで!？」

美紀の発言に驚いているそばから由紀の釣竿がまたしてもピクピ
クと動いた。

由紀「おおっ! またきた!!」

釣竿を引き上げてまた魚を釣り上げる由紀…これで六匹目。

胡桃「……。」

胡桃「由紀……釣竿と場所変えようぜ。」

胡桃はそう言うって半ば強引に由紀と釣竿を取り換えると、由紀の肩を押して先程まで自分が釣りをしていた場所に誘導し、自分は由紀が釣りをしていた位置に立った。

胡桃「……よし。これであたしもバンバン釣れるはずだ。」

満足そうな顔をして釣糸を川に垂らす胡桃。

由紀「胡桃ちゃんひどいよ。」

釣竿と位置を換えられた由紀が不満げに言う。

胡桃「ひどくない！」

由紀「うー。…ま、いいや。これでまた私が先に釣ったら胡桃ちゃんも私が釣竿や位置のおかげで釣れてた訳じゃないって認めるでしょ？」

そう言いながら由紀も川に釣糸を垂らす。

胡桃「ああ、釣れたらな？…だけど思い上がるなよ！お前があれだけバンバン釣ってたのはお前の実力ではなく、この釣竿とこの位置の…」

美紀「あ…。」

美紀は気付く。胡桃が由紀を相手に一生懸命喋っているその時、既に由紀の竿が何かに引かれてピクピクと動いている事に…

由紀「おおっ!!」

由紀もそれに気付いて引き上げる、そうしてまた釣り上げられる魚……これで遂に七匹目。

胡桃「……………」

啞然とする胡桃。

由紀「へへーん！」

釣り上げた魚を片手に由紀が胡桃に不敵な笑みを向ける。

胡桃「…美紀…パス…。」

胡桃は何もかかっていない釣竿を引き上げるとその竿をしゃがんでいた美紀に渡して適当な位置に立たせると、入れ換わるようにして美紀のいた場所にしゃがんだ。

美紀「…………胡桃先輩は？もう釣らないんですか？」

川に釣糸を垂らしてから美紀が胡桃に言う。

胡桃「もういい…………ツマンナイ…。」

そう言つて膝を抱える胡桃。

由紀「ぷぷっく！胡桃ちゃんたら、子供みたいだよ〜？」

胡桃「…………。」イラッ

胡桃（由紀つてたまにちよつとしたゲームとかで勝つとすげえ調子にのるんだよなあ…。）

胡桃は自分を落ち着けようと川をまっすぐに見つめる。

胡桃「…………ふう。」

胡桃「山の中って静かだよなあ……。」「
川の流れる音や風の音に耳を澄ます胡桃。

美紀「……………そうですかね。」「

胡桃「ああ、落ち着いたら後で耳を澄ましてみるよ…きつとすげえ静かだぜ。」「

胡桃「……………今はこれのせいでちよつと騒がしいけど……………」
そう言つて胡桃は後ろを振り返る。

悠里「私達に馴染めた事は良い事だけどそれでもやって良い事と悪い事があるの!!あなたは少しさういうところの区別の付け方を……………」

「はい……………。おっしやる通りです。」「

小石の散らばる川辺で正座する彼……………それに説教をする悠里……………
合流して一時間経つた今もこの光景は続いていた。

美紀「…あと何分続くんでしょうか?」「

胡桃に尋ねる美紀。

胡桃「もう一時間は説教されてるよ……………、リーさんにあそこまで長く説教されてるのはあいつが始めてなんじゃないかな?あたしの最長記録でも二十分くらいなの。」「

美紀「由紀先輩は？ありますか、一時間説教された事。」

由紀「うくん：一番長かった説教でも多分、三十分か四十分くらいかな？」

「首を傾げながら由紀が言う。」

胡桃「じゃああいつが最長記録保持者だな。」

美紀「りーさんも珍しくかなり怒ってますからね。」

胡桃「…きつとあいつのイタズラにまんまとはまって大声出して驚いたのが恥ずかしかったんだよ。普段あんな可愛い声出さないから…」

悠里「胡桃：なんか言った？」

顔を胡桃の方に向けて悠里が言う。

胡桃「い、いや？なんにも…」

胡桃は顔を逸らして言った。

悠里「…：…そう。」

悠里は再び顔を彼の方へ向け、説教を再開した。

胡桃（あつぶねく！かなり機嫌わるいな…。）

そんな事を思いながら胡桃は川に視線を戻し、静かに由紀と美紀の釣りを見守った。

それから十五分後……ようやく悠里の説教は終わり、彼は解放された。

悠里「さて……もうこんな事はしないようにね？」

悠里が両手を合わせながら笑顔で彼に言う。

「ええ……もちろんです。……すいませんでした。」

彼はそう言っただけで立ち上がると由紀の横に立つ、彼は生気を失った廃人のような目をしていた。

由紀「……大丈夫？」

心配になった由紀が彼に声を掛ける。

「……足が……足が……。」

やはり長い間正座していたのは辛かったらしい。

美紀「あらら。」

胡桃「約一時間半かよ……すげえな……。」

彼の説教されていた時間の長さに感動にも似た感情を覚える胡桃。

悠里「あら、そんなに経ってたの？」

胡桃の一時間半という発言に驚く悠里。

美紀「はい。もう途中から——さんが気の毒に思える程でしたよ……。」

「だったら助けられれば良かったのに……」
彼が死んだ目をしながら呟く。

美紀「無理です。」

美紀、即答。

悠里「…にしても随分たくさん釣ったわね。」

悠里が由紀と美紀のバケツの中を覗いて言った。

胡桃「あたしが二匹、美紀も二匹、…んで由紀が…」

由紀「九匹!!」

由紀が誇らしげに言う。

悠里「あらあら…由紀ちゃん大活躍ね。」

そう言つて由紀の頭を撫でる悠里。

由紀「えへへ。」

美紀「今更ですけど、この魚って食べられますよね?」

少し不安そうに美紀が言った。

悠里「ん…ええ大丈夫よ、この魚はちゃんと食べられるわ。」

じつと魚を観察して悠里が言う。

胡桃「良かった。こんだけやつて食べられない魚だったらあたし本気で泣くよ。」

悠里「よしっ!じゃあ少し遅くなったけど昼食の準備しましょう

か。」

悠里達は持つてきた炭に火をつけてから、釣った魚を串に刺してその火の回りに並べて焼き始めた。

胡桃「超ベタな川魚の食べ方だな。」

火の回りに並ぶ魚を見て胡桃が言った。

悠里「王道と言つてほしいわ、ちゃんと焼けてから食べてね。」

胡桃「生焼けの食べて腹壊したらシャレにならんしな。」

悠里「そういう事、分かった由紀ちゃん？」

目を輝かせて魚を見る由紀に悠里が言う。

由紀「分かってるよ！いくら私でも生のヤツ食べたりしないって！」

頬を膨らましてそう言う由紀。

「まあのおんびり待ちましょう。…ちゃんと火を通せば問題無いですから。」

彼が言う。

美紀「この魚にウイルスが潜んでいて食べた瞬間私達も感染して彼らみたいに……なんて事はないですよね？」

美紀の一言で辺りが凍りつく。

胡桃「大丈夫だろ……なあ、リーさん？」

冷や汗をかきながら悠里に尋ねる胡桃。

悠里「ええ……多分……としか言えないけど……。」

悠里も少し不安になる。

「まあのおんびり待ちましよう。…ちゃんと火を通せば問題無いですから。」

彼が言う。

胡桃「そうなのか？あのウイルスも火で殺せるのかよ!？」
驚きながら胡桃が言った。

美紀「あと心配なのはこの煙とか匂いに反応して彼らが近寄って来ないかって事ですね…。」

胡桃「まあそれは確かに心配だけど…大丈夫だよ。もし寄って来てもあたしと———でどうにかするから…、な？」

胡桃はそう言っ彼に視線を向ける。

「まあのおんびり待ちましよう。…ちゃんと火を通せば問題無いですから。」

彼が火を見つめながら抑揚の無い声で言う。

胡桃「……………」

美紀「……………」

悠里「……………」

由紀「……………」

彼女達はある事に気付きそれぞれ目配せをする。

美紀「あのく——さん？今日はいい天気ですよね？」
代表して美紀が彼に恐る恐る声を掛ける。

「まあのおんびり待ちましょう。：ちゃんと火を通せば問題無いですか
ら。」

彼は相変わらずの死んだ目をしながら、抑揚の無い声で言う。

彼女達は気付く、彼が先程から壊れたレコードのように同じ言葉を
繰り返している事に。

美紀「…………。」

美紀はそつと悠里を見つめる。

悠里「もしかして…………ちよつとお説教が長すぎたかしら？」
気まずそうな顔で悠里が言った。

胡桃「だな…………マズイ…、完全に廃人の目になってる。」
彼の顔を覗きこんでから胡桃が言う。

悠里「えっ!?ちよつと胡桃!どうにかして!!」
思わず取り乱す悠里。

胡桃「どうにか…つて、どうすりゃ良いのかね?」

美紀「…叩いてみますか!」

彼の横で手を振り上げて美紀が言った。

由紀「あつ!なら私がやりたい!!男の人にビンタするとかドラマみ
たいで楽しそう!」

由紀が無邪気な笑顔をみせながら手を上げて彼の横に立つ。

由紀「そつと？おもいつきり？」
手を振り上げたまま由紀が尋ねる。

胡桃「そつとやつても仕方ないからな…、一思いにやってやれ。」

由紀「おもいつきりって事だね？…いよおし!!」

由紀が振り上げた手を勢いよく彼に向けて降り下ろす。

由紀「この浮気男!!」ブンツ!!

バチイン!!!

「んがっ!!」

由紀のビンタをまともに受けて、彼が地面に倒れる。

胡桃（おおく！由紀にしちや中々良い一撃…。）

美紀「浮気男？…なんですかそれ。」

由紀「ただ叩くのもつまんないから、なんかそれっぽいセリフがあつた方が力が入るかな？…って思つて！」

グツと拳を握りながら満足そうに言う由紀。

悠里「——君、大丈夫？」

倒れた彼を起こしながら悠里が無事を確認する。

「あ…ああ、一体なにが…。」

赤く腫れた頬を抑えながら彼が言った。

美紀「良かった、意識戻りましたね。」

「意識……っ？」

涙目で彼が呟く。

胡桃「まああれだ……気にすんな！それよりホラ！魚焼けたから食べようぜ。」

胡桃はいち早く焼けた魚を取ると、それを美味しそうに食べた。

皆もそれに続いて魚を食べる、悠里も美紀も由紀も美味しいと言いながら食べたが……彼だけは自分の頬が赤く腫れて痛む理由……それと悠里に説教をされた後の空白の時間が思い出せず、味に集中できなかった。

途中でゾンビ達に乱入される事もなく、全て食べ終えた彼女達は片付けをして、その場を後にし、旅館へと戻った。

胡桃「いや〜！旨かった旨かった!!」

部屋に戻って早々、ごろんと寝転びながら胡桃が言う。

美紀「たまにはああいうのも良いですよね。」

由紀「キャンプとかみたいで楽しかった〜！」

満足そうに由紀と美紀が笑う。

悠里「ふふつ、——君が釣りを提案してくれて良かったわ。皆とても楽しかったみたい。」

悠里が笑顔で彼に言う。

「それは良いんですけど……なんか僕記憶が飛んでるんですよ……。」
彼が手に顎をのせながら必死に考える。

悠里「え？きつと気のせいよ、まああまり気にしないで？」
不自然な笑みをみせる悠里。

胡桃（りーさんの説教を一時間以上くろうと少しの間廃人になるんだな……今まで以上にりーさんを怒らせないように気をつけよ。）
彼を見て胡桃はそう決意した。

「…今何時くらいですか？」

彼が悠里に尋ねる。

悠里「ん？…ええっと、多分2時半くらいかしら。」

「そうですか…では僕は少し遅めのお昼寝タイムにします。」
彼はそう言つてその場に寝転んだ。

彼は直ぐに眠りに就いたが、少しして目を覚まし辺りを見る。
疲れていたのか、いつの間にか悠里と美紀も部屋の隅で眠っていた。

由紀と胡桃は相変わらず楽しそうにお喋りをしている。

（…あの二人は本当に元気だな……。）

二人が喋る様子を見て僅かに笑うと、彼は再び眠りに就いた。

その後、彼が起きたのが午後5時、その時既に悠里と美紀は起きていた。

そのまま各自7時半程まで会話をしたりしながら暇を潰し、8時には夕食を終えた。

そして彼が夜の見廻りに行っている間に彼女達はパジャマに着替え、彼が戻ったのが8時半。

「そろそろ寝ましようか?」…悠里のその発言の後、由紀が発した言葉を発端にそれは始まった。

由紀「まだまだあゝ!!!せつかくの旅行…二日連続ですぐに寝るのはもったいないよ!!」

胡桃「つつてももう布団も敷いて皆寝る気まんまんなのに…。」

美紀「何するっていうんです?まさか…枕投げとか言わないですよね?」

既に半身を布団に入れながら美紀が言う。

由紀「あ、それ楽しそう…。けどそんな子供っぽい事じゃないよ!!」

枕投げで一瞬心が揺らぐ由紀。

悠里「何?騒がしいのはダメよ。」

由紀「大丈夫!これをやろう!!」

そう言っで由紀が自分のリュックから取り出したのは一組のトラップだった。

胡桃「はあ?…トランプ?」

由紀「うん! 今日お土産屋さんで見つけたの!! やろ!」
トランプ片手にはしゃぐ由紀。

美紀「枕投げと大して変わらないじゃないですか。やりませんよ?」

それを見て呆れる美紀。

胡桃「あたしもパス。」

布団に潜りながら胡桃が言う。

由紀「うゝ… ——くんはやってくれるよね?」

さすがのような目で彼を見る由紀。

しかし彼は既に完全に布団に入っており、眠る一歩手前だった。

「え…つと…、明日…やりますか…。」

そう言って彼は顔も布団で覆ってしまった。

由紀「んゝ! じゃあ、りーさん!!」

バツと悠里の方を向く由紀。

悠里「Z z z ……」

由紀「うっ!!」

悠里はいつの間にか寝ていた。

由紀「ノリが悪いよゝ! つまらない! つまらない!!」

由紀が駄々をこねる。

胡桃「うるさいぞ！大人しく寝ろって!!」

布団に潜った胡桃が由紀の方を見ないまま言う。

由紀「うー……せっかく皆と楽しくやろうと思ったのに……。」

由紀の声が小さくなる。

胡桃「……。」

美紀「……。」

「……。」

悠里「Z z z z …」

由紀「勝った人はビリの人に何でも命令できる!……みたいなドキドキなゲームにしようと思ったのに……。」

「!!」バツ!

先程まで寝かけていたにも関わらず、彼はその一言で完全に目覚める。

「マジですか!?!」

起き上がって由紀に尋ねる。

由紀「うん……そういうのあった方が盛り上がるでしょ？」
由紀が答える。

「起きろオ!!みんなあ!!!」

彼は突如大声をあげると、野獣のような強引さで皆の布団をひっぺがしていった。

バサツ!

美紀「うわあつ!!何してんですか!?!」

美紀が驚く。

バサツ!!

胡桃「んおっ!……おい!!布団返せよ!!」

胡桃が怒る。

バサツ!!!

悠里「Z z z z z…」

悠里は寝る！

(……この状況でも起きないのか。)

悠里「Z z z z z…」

(普段は綺麗な顔なのに寝てる時は少し間拔けな顔だな……。)

横で文句を言っている美紀と胡桃を無視しながら、目の前で未だに鼻ちようちんを出しながら気持ち良さそうに眠る怪物をどうやって起こそうかと彼は考える。

悠里「Z z z z z…」

(……ギャップ萌えだわ。)

悠里の普段の顔と寝顔、その表情の違いに彼は萌える。

悠里「Z z z z z…」

(……さて、どうやって起こそう。)

胡桃「おい布団返せよー!」

彼が左手に持った布団を取り返そうと掴みかかる胡桃。

「今考え中だから少し待ってて!!」
彼はそんな胡桃を一喝する。

胡桃「んな!?…あたしが悪いの?」

胡桃は思わず美紀に尋ねる。

美紀「いえ、そんな事はないです。——さん、私の布団も返して下さい。」

のそのそと這いながら美紀は彼の足元に落ちた布団を取ろうとする。

「……………」

彼はその布団を足で抑えて美紀が取り戻すのを阻止しながら悠里を目覚めさせる方法を考える。

美紀「足……邪魔なんですけど!」グッ……グッ!
必死に布団を引っ張る美紀。

「りーさん、どうやって起こそう?」

胡桃と美紀が布団を引っ張るのを無視しながら尋ねる。

胡桃「知るかよ!胸でもつついたらどうだ!」グッグッ!

「……いいの?」パッ……

その発言に驚いた彼は胡桃が引っ張っていた布団を離しながら尋ねる。

一方胡桃は急に手を離された事で自分の引っ張っていた勢いにや

られ、後ろに転がってしまふ。

ドカツ!!

胡桃「痛って!!急に離すなよ!」

胡桃はすぐに起き上がって文句を言う。

「ああ、ごめん。」

胡桃「ちっ!まあ実際はそんなに痛くはなかったから良いけどさ
…。」

「んで…いいの?」

胡桃「…何が?」

「リーさん、胸つついて起こしていい?」
彼が真顔で尋ねる。

胡桃「ああ…やってみれば?…多分殺されると思うけど。」

「だよね…分かってる、冗談だよ。」
そう言つて笑う彼の足元では、美紀が一生懸命踏まれた布団を引っ張っていた。

美紀「返して下さいよ。」グツグツ…

「ん…由紀ちゃん、リーさんは任せていい?」

由紀「らじや〜！」

由紀は眠っている悠里の横に座り、悠里の頬をペシペシと叩いて声を掛ける。

由紀「り〜くさ〜ん…起きて〜！」ペシペシ！

悠里「う…うう…何？由紀ちゃん…。」

悠里が目を覚まして上半身を起こす。

(思ったよりあつさりと起きたな……これで起きるならさつき僕が布団はがしたときに起きて下さいよ。)

由紀「りーさん！トランプやろ!!」

悠里「……………え？」

真横で笑顔の由紀がトランプをかざすのを見て悠里は固まる。

悠里「あの…由紀ちゃん…その為に起こしたの？」

胡桃(そりやそうなるよな、せつかく寝に入ったのにそれを邪魔されてまで言われる事がトランプやろう！だもんな…。)

悠里に同情の視線を送る胡桃。

由紀「うん！——くんも胡桃ちゃんもみーくんもやるからやろ？」

胡桃「あたしも!?!」美紀「私もですか!?!」

同時に驚く二人。

「当たり前でしょ！皆でやった方が盛り上がりますから！」

由紀「——くん分かってる〜！」

パンツ！

ハイタッチする彼と由紀。

胡桃「はあ…分かったよ、一回だけだぞ？」

美紀「胡桃先輩がそういうなら…私も一回だけ付き合います。」
諦めてトランプをする事にした二人。

由紀「やったあ！…りーさんは？」

悠里「……ええ、せつかく起きたから私もやるわ。」

悠里もそれに加わる。

由紀「いよし!!じゃあ第一回学園生活部、大ババ抜き対決を始めるよ!!!」

由紀がハイテンションで言う。

胡桃「もう卒業したのに、まだ学園生活部は続いてんのか。

………つてかババ抜きかよ!」

少しだけ遅れて胡桃がツツコむ。

由紀「いいじゃん。ババ抜き楽しいよ？」

胡桃「はいはい…、んじやあとつと始めようぜ…」

由紀「ほいほい♪」

ノリノリで皆にカードを配る由紀。

由紀「あ！このゲームで勝った人はビリの人に何でも命令できるってルールだからね？皆がんばって!!」

配っている途中でさらっと由紀が言う。

悠里「え？」 胡桃「は？」 美紀「はい？」 「……。」

彼以外の全員がその発言に驚く。

由紀「だってただ勝負するだけじゃつまんないもくん！」
カードを全て配り終えてから由紀は言った。

胡桃「…だからお前やたら乗り気だったのか。」

胡桃が彼を見ながら言う。

「ふっふっふ…いいかい…何でもだからね!!」

配られたカードを手にとって言う彼。

美紀「…まったく。」

ため息をつきながら美紀もカードを手を持つ。

胡桃「まあいい、…その代わりお前も負けた時は覚悟しとけよ！」

カードを手に、にやけ顔をして胡桃が彼に言う。

悠里「……………」。

悠里はまだ眠いのか何も言わずにカードを拾う。

由紀「じゃあ……………はじめよっか！」

時刻は午後8時45分

絶対に負けられないババ抜きが始まった。

二十九話 『午後8時の激戦（ババ抜き）』

時刻：午後8時45分。

丈槍由紀発案の大ババ抜き対決が始まる。

参加者 丈槍由紀

恵飛須沢胡桃

若狭悠里

直樹美紀

そして彼の五名。

ルール 通常のババ抜きと同じ。

優勝報酬 最も早くあがった人物は優勝者となり、その後決まる最下位の人物に一つだけ命令が出来る。

最下位の人物は優勝者が出したのがいかなる命令であろうと拒んではいけない……絶対に…!!

悠里「……ちよつと待って……あんまり度が過ぎた命令はダメよ。」

「あ……ハイ……。」

悠里に注意され、彼は手書きの誓約書を書き直す。

最下位の人物は優勝者が出したのがいかなる命令であろうと拒んではいけない……絶対に……!!（あんまり度が過ぎたのはダメ!）

「……なんか文面矛盾してませんか？」

美紀「いかなる命令であろうと……って言ってるのに、（度が過ぎたのはダメ!）ですからね。」

胡桃「拒んではいけない……の後に絶対に!!って念押ししてそれだから……ははっ!もう笑えてきたわ。」

誓約書を手に持って胡桃が笑う。

「やっぱりこれじゃ締まりませんよ……何でもありにしません？」

彼が悠里に言う。

悠里「……じゃあ参考までに聞くけど、——君は優勝したら最下位の人に何を命令するの？」

「……そこまで酷い事は頼みませんよ……。」

悠里「うん、だから何を頼むの？」

まっすぐに彼を見つめて悠里が問う。

「……………」

「…………うんーやっぱり度が過ぎたのはナシにしましょう!!自分が負けた時怖いですしね。」

彼は冷や汗をかきながら悠里から目を逸らした。

悠里「そうね!それが良いわ。」

笑顔で悠里が言った。

由紀「もう良いでしょ?はじめよ!!」

カードを手に持った由紀が彼を急かす。

「ああ、分かりました。…さて、最下位が言い訳して逃げない為の誓約書も書いたし、始めますかね。」

美紀「誰からですか?」

胡桃「ジャンケンして勝ったやつから時計回りで良いだろ。」

由紀「よおし、最初はグー!ジャ〜ンケ〜ン…………」

全員「ぼん!」

胡桃と悠里はパー。由紀と美紀はチョキ。そして彼はグー。

悠里「…あいこね。」

由紀「じゃあもう一回…。あ〜いこ〜で…。」

全員「しよ!!」

由紀、胡桃、悠里はグー。そして彼と美紀がパー。

由紀「まけちゃった。」

胡桃「――と美紀で勝負だな。」

美紀「いきますよ。じゃーんけーん…。」

――、美紀「ぽん!!」

美紀はパー。

彼はグー。

「美紀さんからですね。」

美紀「分かりました。」

ジャンケンに勝った美紀が一番最初にカードを引かれる事になり、その後は美紀から時計回り。

つまり順番は美紀↓由紀↓彼↓胡桃↓悠里↓一週してまた美紀、となった。

ゲームを始める前にまずは各自、自分の手札から既にペアになっているカードを捨てていく。

(ジョーカーは無し…けど6枚も残った…少し多いな。)

彼の手札は他の皆より僅かに多い6枚…微妙に不利な状況。

辺りにライト幾つかを置いて明るくした部屋で、全員がペアを捨て終えたのを確認してから美紀が動く。

美紀「じゃあ、どうぞ先輩。」

美紀はそう言って由紀に自分のカードを突き出す。

由紀は美紀カードの中から1枚を選んで抜き取り、自分の手札に入れる。

由紀「……………」

特に動きを見せない、どうやらペアは成立しなかったらしい。

由紀「引いて〜。」

由紀が彼にカードを突き出す。

「……ほっ……と。」

彼は由紀の手札から1枚のカードを引くが、ペアは不成立……そのまま胡桃に手札を突き出す。

胡桃「ほいつ。」

胡桃はカードを1枚取ると、手札の1枚と合わせて重ねると、中央のペアカードの山に捨てた。

(くそッ……ペアが成立してしまったか！)

胡桃のカードが減るのを目の当たりにして、彼は僅かに焦る。

胡桃「ほい。」

悠里「……。」スツ

「……。」

彼は悠里がカードを引くのを固唾を飲んで見守る。

悠里「…はい。」

悠里はカードを捨てずにそのまま美紀に引くように促す、とりあえずペアは成立しなかったようだ。

その後、美紀、由紀と順番を終える、二人共ペアが成立してしまい残りカードはどちらも3枚に。

(まずい……まずい……)

半分自棄になりながら彼は由紀のカードを引く。

「……。」スツ

彼が胡桃から引いたカードは7…手札にも7がある、ペア成立だ。

彼はその7のカード2枚を捨てる。これで残りは4枚になった。

(よし、まずは一安心だな。)

しかし、彼が安心出来たのはほんの一瞬だった。

その後順番は更に二週回っていき、そして彼の引く番になった時、それぞれの残りカードは…

彼は4枚、由紀は3枚、美紀と胡桃と悠里は2枚だった。

(……厳しいな。)

彼はそんな事を考えながらそつと由紀のカードを引く。

その時由紀の顔が僅かににやけた事に彼は気付けなかった。

「……………!?!」

彼が由紀から引いたカードはジョーカー…ババ抜きにおいて最も

不要な魔のカードを彼は引き当ててしまった。

(落ち着け……まだ大丈夫だ……まだゲームは続く……このジョーカーが最後まで僕の所にいるわけがない!きつとすぐに胡桃ちゃんが引くさ……!!)

彼は冷や汗をかきながらジョーカーの入った自分の手札をシャツフルし始める……それもかなり念入りに。

だがその行動のせいで胡桃は気付く「ジョーカーを持っているのはこいつだ!」……と。

「……………」バツ!

彼はシャツフルし終えたカードを胡桃に突き出す。

胡桃「……………」スツ

胡桃は彼のカードを引く、それはジョーカーではないカードだった。

「ちっ!!」

思わず声が漏れる、ただジョーカーは引かれなかったものの、胡桃はそのカードではペア不成立だったようなのでまだマシだった。

(……………まずいな)

彼は手元のジョーカーを見て焦る、優勝したらどんな命令を下そうか……当初思い描いていたそんなポジティブな妄想は彼の頭には既に残っていないかった。

今の彼の頭にあるのは、どうやったら最下位を避けられるか……そん

なネガティブな考え、最初とは真逆だった。

その後、悠里が胡桃のカードを引くが動きは無し。

その次、美紀が悠里のカードを引いた時…その瞬間はやって来た。

美紀「……………」スツ

美紀「……………あ。」

美紀は悠里のカードを引いた直後、そのカードでペアが成立したらしく、2枚のカードを捨てた。

この時点で美紀のカードは残り1枚……しかも次は由紀が美紀のカードを引く番だから……

美紀「はい由紀先輩。」

そう言つて美紀は由紀に残りの1枚を引かせる。

美紀「あがりです。私の勝ち。」

美紀、わりとあっさり優勝。

(しまったー……………こうなればただ最下位だけを避けなくては！)

そんな祈りも空しく、その後順番が回っていくと悠里、そして由紀もあがる。

残ったのはカード2枚を持つ彼と1枚の胡桃……勿論、ジョーカーは依然として彼が持っている。

胡桃「……………」スッ

彼と真つ正面に向き合った胡桃が、真剣な表情で彼のカードに手を伸ばす…………だがまだどちらを引くか決めかねているのか、その手が空中で止まる。

胡桃「むくく。」

「……………」

悩む胡桃の表情…………その後ろを見て彼は気付く。

胡桃の背後の窓、外にはただただ真つ暗な旅館街が広がっている、だが彼が見ているのは窓の外ではなく窓自身！

そう…彼は反射した窓に胡桃の手札が映っている事に気がついた！

(良し…ここで胡桃ちゃんがジョーカーを引きさえすれば、僕は窓の反射を見て胡桃ちゃんの手札からジョーカーを避ける事が出来る!!)

(つまりここでジョーカーを引かせられなかったら僕の負けだが…引かせる事が出来れば必ず勝ちだ!!)

胡桃「ほいつ！」

「あつ…。」

そんな汚い真似を彼が思い浮かべていると、不意に胡桃がカードを引いた。

「……………」

彼は自分の残った1枚の手札を見る……………残っていたのはジョーカーだった。

胡桃「イエーイ！勝ちいく!!」

そう言って胡桃は自分の最後のカード2枚を捨てた。

「くそっ……………くそっ……………」

自身の最下位が決まって、彼はその場に倒れ込む。

由紀「さあ、みーくん！最下位の——くん好きな命令をしよう!!」

由紀が美紀の横に並んで言った。

美紀「え?……………うーん……………命令っていつでも……………」
悩む美紀。

「…負けた以上、逃げはしません…いかなる命令でも従います、お嬢様。」

彼が美紀の前で頭を下げて言う。

美紀「お嬢様って…」

美紀が少し照れる。

由紀「おおく…前にテレビで見た執事喫茶みたい!!」
はしやぐ由紀。

美紀「うーん……じゃあその執事さんに命令しますね。」
彼の目を見て美紀が言う。

「どうぞ。」

美紀「……とりあえず寝ましようか。」

「……はい？」

彼が聞き返す。

美紀「いや……もう眠いので、大人しく寝ましよう。」
目を擦りながら言う美紀。

「大人しく寝る……つてのが命令ですか？」

美紀「はい。命令です……ただ大人しく寝てください。」
美紀はそう言つて布団に潜つた。

「……………」

啞然とする彼。

胡桃「だつてさ、楽な命令で良かったじゃん。」

由紀「私も寝よう。」

悠里「お休み、皆。」

胡桃、由紀も布団に潜る、悠里は部屋のライトを全て消してから布

団に潜った。

一同（彼以外）「お休みなさい。」

悠里「Z z z …」

美紀「Z z z …」

由紀「Z z z …」

胡桃「……。」

「……（；。∩）」

暗い部屋に一人立ち尽くす彼。

胡桃「ほら、早く寝ろよ。」

胡桃が声を掛ける。

「…どんな命令でもOKなのに……その命令がただ大人しく寝ろって

のは、負けた僕があまりにも惨めじゃないですか？」

胡桃「……………まあな。」

「……………」

彼は大人しく布団に入る。

胡桃「…結局寝るんだ？」

「…これが命令だから……………お休みなさい…」

消えそうな声で彼が言う。

胡桃「うん、お休み。」

彼は布団に潜りながら少し泣きそうになったが、グツと我慢してそのまま眠りについた。

只今の時刻は午後9時。

ババ抜き対決 優勝者は直木美紀

最下位は彼

最下位に下された命令

『ただ大人しく眠れ』

第四章・ぜつぼう 三十話『くすり』

美紀「おはようございます。昨日はぐっすりと眠れましたか?」
誰に起こされた訳でもなく、ひとりでに目覚めた彼に美紀が言った。

「……まあ……おかげさまで……。」
目を合わせずに彼が答えた。

美紀「あれ?もしかしてまだ昨日の罰ゲームの事気にしています?」
「……いいえ。」

美紀「なら良いんですが……悪く思わないで下さいよ。」

「思ってますよ。」
彼は布団から出て、それをたたみながら言った。

美紀「確かに拍子抜けだったかも知れませんが…私の罰ゲームなんて先輩達のと比べたら簡単だけマシに思えるはずですよ。」
気になる一言を呟く美紀。

「皆の命令?」

彼が尋ねる。

美紀「あ、さつき先輩達と布団を片付けていたら昨晚の話になって…その時みんなに聞いたんです。もし先輩達が勝ってたら最下位の…というか——さんに何を命令しましたか？って」

「へえ〜。…そういえば皆は？」

部屋の中には自分と美紀しかいないことに気づき、彼は尋ねた。

美紀「朝の散歩だそうですよ。」

「そうですか、美紀さんは残ったんですね。」

美紀「朝起きて誰もいなかったら——さん、心配になりますよね？だから私は残りました。」

美紀は笑顔で言った。

「それは悪かったですね…ありがとうございます。」

布団を片付けて終えた彼が座りながらペコツと頭を下げる。

美紀「いえいえ…それで、先輩達の命令ですが…聞きたいですか？」

「……まあ。」

美紀「まず由紀先輩の予定してた命令ですが、まあこれはまだ楽な方ですね…『物資の調達に出掛けた時にお菓子を見付けた場合、——さんは自分の分のお菓子を由紀先輩に献上しなければならぬ』…だそうです。」

「あらかわいい。」

美紀「そうですね、由紀先輩らしい命令です。」
そう言つて美紀はくすつと笑う。

美紀「……けど次からは少し怖いですよ。」
表情を一変させ、今度は恐ろしい物を思い出したような顔をする美紀。

「……。」

美紀「まずは、リーさんのから…『運転を覚えてもらう』それが——さんに下したかった命令らしいです。」

「あれ、そんなに怖くはない気が……」

美紀「…すいません、これは——さんが怖い…じゃなくて、私達が怖い…ですね。」

「……酷いな。」

美紀がそう言うのには訳があつた、以前胡桃が彼に車の運転を教え

ようとした時：彼は胡桃の教えを受けながら運転していたにも関わらず、ものの20秒で車を壁にぶつけそうになった。

その後も胡桃は彼に根気強く教えたが、結局進歩はみられなかった。

それからというものの、彼女等は彼を二度と運転席に座らせていない。

美紀「けれどこの命令は多分リーさんの冗談だと思います。——さんに運転をされる事の恐怖はリーさんもよく知っていますし……。」

苦笑いして美紀が言う。

「……まあこれからも運転は大人しくリーさん達に任せますよ。……それで、胡桃ちゃんの命令は？」

美紀「胡桃先輩のは間違いなく——さんが恐れる命令ですね。」

「どんなです？」

美紀『目の前で本物の白刃取りを見せてもらう……そう言っていました。』

「……どういう事でしよう？」

美紀「つまりですね、胡桃先輩がシャベルを座って待機する——さんに降り下ろすので、——さんはそれを両手で受け止めて防ぐ……。それを成功するまで繰り返し返すと言っていました。」

「成功する前に僕が死ぬやつじゃないですか。」
彼はそれを想像して、顔を青くする。

美紀「ね？私の命令が一番まともな気がしません？」
美紀が顔を近づけて言う。

「確かに……そうかもですね。」
彼がそう言った瞬間、部屋のふすまが開き、散歩から帰った胡桃達が部屋に入ってきて来る。

由紀「ただいま」

美紀「お帰りなさい」

胡桃「あ、起きたんだな。」
彼を見て、胡桃は言った。

「ついさっきね、散歩は楽しかった？」

胡桃「まあ気晴らしにはなったな。」

悠里「…ふう」

彼と胡桃が喋る後方で、悠里が溜め息をつきながら座りこむ。

美紀「どうしました？」

美紀が悠里の隣に座って声をかける。

悠里「…ううん、ちよつと疲れただけよ」

笑顔で答える悠里。

胡桃「あ、悪かったな、朝から付き合わせちゃって…」

悠里「大丈夫よ、私も運動ついでに行きたかったから。」

由紀「ごめんね、りーさん、胡桃ちゃんのワガママのせいで…」

由紀が悠里の横に駆け寄って言う。

胡桃「朝、散歩行きたいって言ったのはお前だけだな」

由紀「でも、りーさんを誘ったのは胡桃ちゃんだよ。」

胡桃「あたし一人じゃお前の面倒見きれないと思ったからな」

由紀「胡桃ちゃんひどい！りーさんもなんか言ってあげてよ！」

由紀はそう言って悠里に視線を向ける。

悠里「…え？…ああ、ごめんね由紀ちゃん、ちよつと聞いてなかったわ。」

「…りーさん少し顔赤くないですか？」

悠里の顔色を見て、彼が言った。

胡桃「そういえば……」

悠里「ん〜…少しだけ具合が悪くて……」

美紀「ちよつと失礼します。」

美紀はそう言つて悠里の額に手を当てた。

悠里「……。」

美紀「…凄い熱じゃないですか!?!」

胡桃「マジかよ!?!」

胡桃も悠里の額に手を当てる。

胡桃「……ほんとだ……!いつから!?!」

悠里の顔を見て胡桃が尋ねる。

悠里「…散歩に行き始めたばかりの時は大丈夫だったんだけど……」

ここに戻る途中から少しだけ調子悪くて……」

赤い顔で悠里は答えた。

由紀「だったら早く言ってくれれば……」

悠里「ごめんね、あとは帰るだけだから大丈夫だと思ったの……」

「薬はあるっ……」

彼が胡桃に尋ねる。

胡桃「どうだったかな……ちよつと車見てくるついてきて。」

「わかった、美紀さん、由紀ちゃん、りーさんを頼むね。」

そう言つて彼と胡桃は二人でキャンピングカーに薬があるか確認に向かった。

バタン！

胡桃「あたしはこっちの箱を確認するから、お前はこれを頼むよ。」

胡桃は車内の戸棚から二つの救急箱を取り出すと、その片方を彼に渡した。

「了解」

胡桃「……こっちは包帯とかだけだな……多分飲み薬はそっちだ、あるか？」

「……おー！これかな？」

彼はそう言つて解熱剤の箱を取り出す。

胡桃「それだ！よかった〜もしかしたらもうなかったかもつて……」

「あ!!」

胡桃が喋っている途中で彼が何かに気づく。

胡桃「なんだよ?」

「……これ、空箱だ」

彼が解熱剤の箱を開いてからひっくり返してみせる。

胡桃「ちっ!マジかよ……誰だ、空箱のまま入れたやつは!」

「……どうする、薬を探しに行く?」

胡桃「…そうだな、この辺りで薬局は見かけてないから……また街に戻るか、旅行は終わりだ。」

「わかった、皆を呼んでくる。少し待ってて」

胡桃「頼む。」

胡桃を車内に残し、彼は由紀達を呼び戻しに行く。

少ししてから彼が由紀達を連れて旅館から出てきた。

美紀「薬、無かったんですね」

車内に入ってから美紀が胡桃に言う。

胡桃「ああ、これから街に戻りながら探す。」

全員車内にいるのを確認してから胡桃は運転席に座り、エンジンを掛けると、車を動かした。

悠里「…ただの熱なんだから…まだここで休んでも良かったのに…ごめんね、私のせいで…」

美紀「どうせあまり長居も出来ませんし、ついでに他の物資も探せます。気にしないで下さい。」

美紀が悠里に優しく言った。

由紀「そうだよ、気にしないでね、リーさん。」

悠里「…うん、ありがとう。」

悠里は二人に礼を言うと、車内のベッドに横たわった。

胡桃「…薬、すぐに見つかるの良いけど…。」
「運転をしながら胡桃が呟く。」

「…もしかしたらだけど、すぐには見つからないかも。」
助手席に座っている彼が言った。

胡桃「どうして?。」

「そういえば今まで何度も物資の調達には行っていたのに、解熱剤は手に入れた事がないな…。」と、思って。」

胡桃「…確かにそうだな。」

彼に言われて胡桃もそれに気づく。

胡桃「どうしてだろ。」

「……………」

彼は少しだけ考えてから、口を開いた。

「もしかしたら、奴らに噛まれた人間が関係しているのかも…」

胡桃「……………どういふ事だよ？」

運転しながら尋ねる胡桃。

「奴らに噛まれて怪我を負った人間が奴らになるまでを見たことは？」

胡桃「……………」

そう言われて胡桃は思わず自分の右肩を見る。

胡桃「……………いや、直接はない…」

「そっか……………、奴らに噛まれた人間は、噛まれた直後からかなりの苦痛に襲われるみたいだね…」

胡桃「……………」

「んで、その苦痛は時間が経つ毎に強くなって…最終的にはそのまま奴らになる。」

「それもほんの数時間でね、…たまに丸一日くらい大丈夫な人もいるから、個人差があるみたいだね。」

自分が今まで見てきた経験を元に、彼は言った。

胡桃「…それで、それと解熱剤が見つからない事となんの関係が?」

「噛まれた直後の症状、それに発熱も含まれてる。」

「だからこの騒動が起きてからその症状を解熱剤で抑えられるかも…
と思った人達が一齐に漁ったのかも、…当然、奴らに噛まれたら解
熱剤なんかじゃ抑えられないけど。」

「まあ…あくまで僕の考えた一つの説だから、違いかもだけどね。」

胡桃「…なるほどね、確かにあり得そうな話だと思うよ。」

胡桃（奴らに噛まれた直後の苦しみも、凄い熱が出るのも、この身
で味わってるから知ってるけどな…）

彼と胡桃がそんな会話をしてしばらくすると、街の外れに差し掛か
り、一つの薬局を見付ける。

車を止め、胡桃と由紀がその薬局の探索に向かい、彼と美紀は悠里
の側にいる為に車に残った。

由紀「じゃあ、りーさん、薬取ってくるから…待っててね?」

由紀が横たわる悠里の手を握って言った。

悠里「…気を付けてね」

悠里はそう言って由紀の手を握り返した。

胡桃「すぐ戻るから。」

由紀と悠里、握り合う二人の手に自分の手を重ねて胡桃が言う。

美紀「気を付けて下さい。」

「何かあったら大声で呼んで、すぐに駆けつけるから」

車のドアを開け、外に出る由紀と胡桃に美紀と彼が声をかける。

由紀「うん！」 胡桃「はいよ」

二人は同時に返事をする、ドアを閉め、薬局に入っていた。

「……辛くないですか？」

ベッドで横になる悠里に彼が尋ねた。

悠里「うーん……頭が少し痛くて、ぼーっとするだけ……あとは大丈夫よ」

そう言う、悠里は彼と美紀に笑顔を見せた。

美紀「それって……大丈夫なんですか？」

そう言つて美紀も悠里に笑顔を返す。

悠里「ふふっ…ええ、大丈夫…。」

「…無理せず、ちゃんと休んでくださいね。」

悠里「うん、ありがとう」

悠里はそう言つて布団をかけ直して眠りについた。

美紀「……すぐに良くなるといいんですが。」

悠里の眠るベッドから離れ、彼と向かい合う形で椅子に座ってから美紀は呟いた。

「…そうですね」

彼が美紀に相づちを打つ。

10分程して、胡桃達が戻つて来るのに窓の外を見ていた彼が気づくが…二人表情で探索の結果が良くはない事がわかった。

…ボタン

由紀「ただいま」

美紀「お帰りなさい」

胡桃「…ダメだ、ここには薬無かった」
それだけ言うと、胡桃は運転席に勢い良くもたれ掛かった。

「…まだ一軒目だよ、そう落ち込みなさんな。」
助手席に移動して、彼が胡桃に言う。

胡桃「へへっ、分かってるよ!」

胡桃は少しだけ笑うと、また車を走らせた。

胡桃「リーさんはどう?」

車を走らせた直後、彼に悠里の調子を尋ねる胡桃。

「今は寝てるよ、調子は旅館から出た時より少しだけ悪くなってるかも…」

胡桃「…そっか、早く薬みつけてあげなきゃな。」

「そうだね…。」

それから更に車を走らせる事、約20分…彼女達は二日ぶりに街へ戻ってきた。

そしてまた一軒の薬局を見つけ、車を停めると、今度は彼と美紀が探索に向かう。

…しかし結局その薬局にも解熱剤は無く、また車を走らせる…

薬を見つけないまま、気が付けば日も暮れてきて、彼女達は六軒の薬局を回っていた。

…そして七軒目、ここには彼と胡桃が探索に向かった。

胡桃「…どう？ありそう？」
自分の担当範囲の探索を終えた胡桃が、彼の所に駆け寄って尋ねる。

「…いや、ダメだ…ここにも無い。」
見ていた空の棚から目を離して彼は言った。

胡桃「ちっ！…くそっ!!!」
ドンッ!!

胡桃はそう怒鳴って目の前の棚を蹴った。

「…落ちついて、もう辺りも暗くなってきたから…今日はこの辺で諦めて、また明日探そう。」
彼が胡桃をなだめる。

胡桃「でも早く見つけないと…リーさん苦しいだろ…」

「うん…分かってるよ、でも夜の探索は危ない…リーさんも幸いだの熱みたいだから、薬なんか無くても明日良くなるかもよ？」

胡桃「…だと良いけどな…」

そう言つて胡桃は薬局から出ていく。

「……ん〜」

(胡桃ちゃん…少しばかりイライラしてるな、まあ七軒も回つてただ一つの解熱剤も見つけられないんじゃ…イライラもするか。)

彼も胡桃に続き、車に戻った。

三十一話 『独占する者達』

熱を出した悠里の為に解熱剤を探す彼女達：

だが結局は見付からないまま夜になり、辺りも完全に暗くなった、胡桃は車を近くにあった広場に停めて、そこで一夜を過ごすことにした。

車を停めてからすぐに食事にしたが、食欲が無いのか：悠里は気持ち程度しか食べなかった。

美紀「——さん、すいません：着替えるので、少しの間出てもらって良いですか？」

食事を終えた後、美紀が彼に言った。

「はい、分かりました。」

彼はそう言うと、一人外に出た。

外に出て、近くにベンチを見つけると、そこに腰かけて彼は考えた。

(りーさん……時間が経つ毎に調子が悪そうになっている。)

(この調子じゃ、きつと明日も治らないな……早いところ薬を見つけてあげたいけど……)

「……はあく」

ベンチに座りながら彼はため息をついた。

(……りーさん、本当にただの熱だよな……)

不意に、一つの不安な考えが彼の頭を過る。よぎ

もしかしたら朝、散歩していた時……由紀と胡桃が見ていないところで奴らに襲われていたのではないか……

そしてその時に噛まれたのではないか……

あれはただの熱ではなく、噛まれた事によるものではないか……

……彼はどんどん不安になる。

「……………」

胡桃「おい！」

車から胡桃が出てきて、彼に声をかける。

胡桃「もう皆、着替え終わったよ」
そう言つて彼の横に座る胡桃。

「そう。」

胡桃「……あと一応言つておくよ、リーさん自分で着替えるのも大変そうだったから、あたしと美紀で着替え手伝つただけだよ……」

胡桃「奴らに噛まれた傷とかは無かつたから、……安心しろよ。」
彼が感じていた不安が、胡桃のその発言のおかげで消えていく。

「そうか……良かった」

彼は心の底から安堵した。

胡桃「……やっぱ噛まれたかもつて心配してたんだな」

「ついさつきから、急にただの熱じゃないのかもと不安になつちやつて……もしかしたらつてね。」

胡桃「大丈夫……噛まれてはないから多分ただの熱だよ」
そこで二人は会話を終え、車に戻つた。

「あ〜〜……」
車に戻り、皆が就寝の準備をする中、彼がそれに気づいて声をあげる。

美紀「どうしました？」

「ここ二日、旅館に泊まっていたから忘れてた……僕は寝る場所が椅子でしたね……」

そう言つて車中の椅子を見つめる彼。

美紀「ああ……そうでしたね」

「……まあ……仕方ないか」

胡桃「……なんなら今日からあたしと交代でベッドに寝るか？」
諦めて椅子にもたれている彼に、胡桃が言った。

「え？」

座ったまま、胡桃の方に振り返る彼。

胡桃「毎日座りながら寝るのも大変だろ、……だから今日はあたしのベッド使つていいよ。……でも明日は交代してあたしがベッド使うからな？」

胡桃はそう言つて、少しだけ笑顔をみせる。

美紀「良いんですか先輩？」

胡桃「交代なら別にいいかな……あたし、椅子でも寝れるし。」

美紀「いや……そういう事ではなく……」

「ありがとう胡桃ちゃん、けど大丈夫だよ、椅子で寝るの慣れてるから。」

彼はそう言うのと座ったまま、毛布にくるまった。

胡桃「ん……、遠慮しなくても良いぞ？」

「大丈夫……あんまりキツかったらその時に頼むよ。」

美紀「うくん……じゃあ、もしあまり眠れないようなら、昼間に私のベッド使って昼寝して良いですから。」

顔を伏せて眠ろうとする彼に、美紀がそう声をかける。

「どうも……、じゃあ、もし眠れなかったら使わせてもらいます。」

美紀「はい……じゃあ先輩、私達も寝ましょう。」

胡桃「そうだな……ってか由紀のヤツ、いつの間にか寝てるし。」

自分のベッドで寝息をたてる由紀に視線を向ける胡桃。
悠里も先程までは苦しそうだったが、眠れたようだ。

美紀「お休みなさい」 胡桃「お休み」

二人が彼に言う。

「うん、お休みなさい」

彼はそう言ってベッドに向かう二人を見送り、自身も眠りについた。

次の日の朝。

やはり悠里の熱は下がらなかった。

由紀「リーさん、昨日よりつらそうだよ……」
寝込む悠里を見て、由紀は言った。

美紀「朝食もほとんど食べませんでしたね」

胡桃「……気を取り直して、今日も薬探しに行くか！」

胡桃は運転席に座り、車を走らせた。

「いきなり一軒目で見つかったら嬉しいけどね」

助手席に座ってから、彼が言う。

胡桃「だな、あつさりと見つければ良いけど……。」

「もし今日も見つけられなかったら、その辺の民家でも漁る？……以外とその方が見つかるかもよ。」

彼が提案する。

胡桃「他人の家を漁るのか……確かに見つかるかも知れないけど……、来るとこまで来たなあ。」

そう言っただけ息を吐く胡桃。

「こんな世の中だからね、仕方ないよ。……そもそも店とか漁ってる時点で来るとこまで来てるし……。」

彼はそう言っただけ笑顔を見せる。

胡桃「へへ…それもそうだな！」

胡桃も笑顔を返す。

「ま…あくまで今日も見つからなかったらって事にしようか」

胡桃「だな。」

そうしてたどり着いた一軒目の薬局…今までで一番大きい場所だったので、ここには胡桃、美紀、そして彼の三人で向かう事にした。

胡桃「んじや由紀、リーさんを頼んだぞ。」

由紀「うん！皆も気を付けて！」

悠里「本当に面倒かけてごめんね…。」

寝ていた悠里が体を起こして言った。

美紀「私達は大丈夫ですから、ちゃんと休んでいて下さいね。」

「…では、行ってきます。」

ボタン

車から降りて、薬局へ入る三人。

美紀「…胡桃先輩、——さん。」
中に入つて早々、ある事に気がついた美紀が二人に声をかける。

胡桃「ああ、ここ…：今までの薬局とは様子が違うな。」

「うん…：今までのところよりも荒れた様子がない。」
ここは今までの中で最も広い薬局にも関わらず、荒れた形跡が少なく、棚等も倒れておらず、わりと綺麗に並べられたまま…：彼と胡桃もそれに気がついていた。

胡桃「けど肝心の薬は一つもないな…：もつと奥の方探すか。」
並べられた棚に何もないのを確認してから店の奥へと進む三人。

胡桃「…うわっ!!」
店の突き当たりまで進み、曲がり角を曲がったところで、胡桃が何かにつまずく。

それは膝ひざくらいの高さにでピンと張られた縄…：それを胡桃の足が引つ張つた事で、縄に繋がっていた大きめの缶が両サイドの棚から落ちて、大きな音をたてた。

ガラガラガラッ!!

その缶は床に落ちると転がりながらその中身をばらまく……中に詰められていたのは沢山の石だった。

美紀「…これは？」

美紀がしゃがんでその缶を見る。

胡桃「やば……もしかしてこれ……」

嫌な予感が胡桃の脳裏を過る。よぎ

「……!」

彼が身構える。

その視線の先には一人の男が立ち塞がっていた。

？「君達は誰かな？」

後方から声が聞こえて美紀と胡桃が振り返る、そこには更に二人の男が立っていた。

狭い通路の前方に一人、後方に二人……彼女達は囲まれていた。

男達は皆、二十代前半くらいに見える、前方の男は見たところ丸腰……後方の男二人はそれぞれナイフとバットを持っている。

「…僕達は見ての通りただの生存者ですよ。仲間が一人熱を出したので、解熱剤を探してここに来たんですけど…。」

彼が道の前方に一人で立つ男に言った。

？「へえ…解熱剤をねえ…悪いけど、ここ俺達の住み家なんだよね。」

男が笑みを浮かべながら言う。

美紀「…もし持っているならば分けてもらえませんか？」

彼の後ろから美紀がその男へ向けて言った。

？「いやいや…その前にせつかく会えた君達生存者の名前を知りたいんだけど…良いかな？」

胡桃「…そっちから言えよ。」

胡桃がシャベルを握り直して言った。

岡「わかったわかった…、俺は岡宏樹おかひろき…ほらお前達も自分でこのシャベルの嬢ちゃんに自己紹介しろよ。」

一見すると好青年に見える黒髪の男、岡が後方の二人に言う、彼はこの三人の中のリーダーらしい。

安田「安田翔やすだしろう。」

ナイフを持った金髪の男が名乗る。

川崎「川崎祐……ほら、嬢ちゃんはなんて名前？」

肩にかかる程の長めの黒髪をした男、川崎がバットをちらつかせながら胡桃に言う。

胡桃「……恵飛須沢胡桃。」

小声で答える胡桃。

岡「なるほど……胡桃ちゃんね……二人は？」

岡が彼と美紀に尋ねる。

美紀「直樹美紀です。」

美紀が名乗り、その後にも名乗る。

胡桃「……これはあんたらが仕掛けたのか？」

床に転がった缶と、それを結ぶ縄を指差して胡桃が言った。

川崎「ああ……俺が仕掛けた、あのゾンビ達が入ってきたら分かるよ
うにな。」

川崎「それに今日は嬢ちゃんが掛かった……まあ嬢ちゃんがそれに
掛からなくても、誰か来た事は最初から分かってたけどな……車の音
で。」

胡桃「こんなの仕掛けるくらいならちゃんと入り口を塞いだ方がいい

いぜ。」

川崎「いつもは塞いでるさ、俺達もついさっき外の探索から戻ったばかりだったんでね、後で塞ぐつもりだったんだよ。」

岡「まあいい…よくわかったよ、えつと…解熱剤だったな。安田！
まだあったっけ？」

岡が安田に尋ねる。

安田「ああ…山程あるぞ。」

安田がそう答える。

美紀「!!…じゃあ少しだけ…」

岡「分けてもいいが…：代わりがなきゃな。」

美紀の言葉を遮って、岡は言った。

「代わり…：食料ですか。」

彼が呟く。

川崎「ふぎけんな、食料なんかまだ腐るほど持つてるし、いざとなれば種から野菜でも育てられる。薬はそう簡単にはいかねえだろ？」

「……じゃあ武器は？」

川崎「それもいらねえ。」

胡桃「ちっ……じゃあ、なんなら良いんだよ！」

苛立った胡桃が声をあげる。

川崎「…例えば嬢ちゃんの内のどつちかが少しだけ俺達と遊んでくれるなら……解熱剤くらい分けてやってもいいぜ？…なあ宏樹？」
ニヤツと笑ってから岡に尋ねる川崎。

岡「そうだな、長いこと生きて女なんて見掛けてなかったし……君らの努力次第では解熱剤の一つや二つ、くれてやってもいいぞ。」
そう言ってから岡も笑う。

美紀「それって……つまり……」

美紀が話を聞いて後退る。あとずさ

胡桃「…クズ共。」

胡桃が呟く。

安田「…で？どうする？解熱剤がいるなら女のどつちか、少しの間

だけでいいから残れよ。」

安田が美紀と胡桃を交互に見て言った。

美紀「……」

胡桃「……」

「あまりふざけないでもらいたい……こっちは真剣なんだ。」

岡の目を強く睨みながら、彼は言った。

岡「失礼だな……こっちも真剣だ、食料も武器もあるからいらない、だが女は無いから欲しい……そう言っているだけだ、ほら……何もふざけてないだろ?」

岡はそう言つて、鼻で笑った。

「この人達を物と同列に扱っている事がふざけていると言っているんだよ。」

彼の口調から苛立ちが伝わってくるのを美紀と胡桃は感じていた。

川崎「坊やは良いよなく、自分だけこんな可愛い嬢ちゃん達連れて……毎日良い事させてもらってるんだろ?……そりゃあ独り占めしたいよなあ。」

品の無い笑みを浮かべながら川崎が彼に言う。

「……なんだと?」

岡から川崎へ視線を移して彼は睨む。

美紀「!?……私達とこの人はそんな関係じゃありません!!」

胡桃「ああ、こいつはあたし達にそんな事求めたらぶん殴られるって分かってるからな。」

二人が川崎を睨みながら言った。

(……微妙なフォローだな)

少し彼は落ち込む。

川崎「なんだ…何もさせてもらってないのか、そりやかわいいそうなのヤツだな……ホラ坊や!落ち込むなよ!」

そう言っただけでゲラゲラと川崎は笑う、岡と安田もそれにつられて笑った。

(ほらみる、胡桃ちゃん達のフォローが微妙だったから…僕は笑いだ。)

胡桃「ゲラゲラうるせえよ……お前らに、あたし達とこいつの関係

を笑われる筋合いはねえ…。」

美紀「ええ、この人は私達のとて大切な友達なんです……だから、あなた達なんかには、この人を笑われると腹が立ちます……。」

「……………」

胡桃と美紀の思わぬ発言に、彼は嬉しくなる。

岡「へえ……愛されてるねえ……」

三人は笑うのを止めて、会話を続ける。

川崎「嬢ちゃん達……どつちも気が強いねえ、気に入ったよ……解熱剤とセツトでもう一つ好きな物持っていて良いからさ……俺の相手してくれよお。」

言ってから胡桃達に一步近付く川崎。

ドンッ！

「話は終わり……薬はいらない。」

彼が川崎を手で押し退けてから言った。

川崎「……。」

押し退けられ、無言で川崎は彼を睨む。

「胡桃ちゃん、美紀さん……戻りましょう。」

彼が二人を呼ぶ。

美紀「は、はい！」

胡桃「うん。」

彼に続く二人。

岡「いいのか？」

岡が彼女達を呼び止める。

「また別の薬局を探す。」

彼のその言葉を聞いて、岡は笑う。

岡「はははっ！……無駄だと思うぞ？今時綺麗に薬が揃ってる店なんて、かなりレアだからな。」

岡の声を無視して、三人は薬局を出て車に戻る。

胡桃「……………」：ギロツ

岡「……へっ」

安田「どうした？」

岡「……今日は夜中も起きてた方がいいかもな。」

バタン

由紀「おかえり！……どうだった？」
戻ってきた三人に由紀が声をかける。

胡桃「なんつーか……まあ結果的にはダメだった。」

由紀「そっかく……残念だなあ。」

胡桃「よし！……次行くか！」

気持ちを切り替えて車を走らせる胡桃、だがその後夜まで車を走らせ、八軒もの薬局を回ったが、解熱剤は見つからなかった。

三十二話 『胡桃の選択』

夜まで車を走らせ探索するも、解熱剤は見つからず…

結局、その日の探索は終わり、胡桃は公園に車を停めた。

胡桃「…ごめん、リーさん、今日も薬見つけられなかった。」
車を停めてから悠里の側に立ち、胡桃が謝る。

悠里「大丈夫よ、謝らないで？明日には治りそうだから。」

悠里はそう言つて笑つたが…顔も未だに真っ赤で、どうみても明日治るような体調ではなかった。

夕食の時間、今回も悠里はほとんど食べなかった。

そんな夕食の片付けも終え、彼が一人外に出たところで着替えも終え、彼女達は眠りにつく準備をした。

「明日は適当にその辺の家でも漁ろう？」

彼が今一つ元気のない胡桃に言った。

胡桃「……………うん」

「んじゃ、とりあえず寝ようか。」
そう言つて椅子に向かう彼を胡桃が呼び止める。

胡桃「あの…寝る前にちよつとだけ付き合つてよ。」
胡桃はそれだけ言つて外に出る。

「??」

美紀「どうしたんでしようね…先輩。」
美紀が彼に言う。

由紀「寝る前の散歩かも！私も…」
由紀がそこまで言ったところで美紀が由紀を止める。

美紀「はいはい、由紀先輩はもう寝て下さい。よい子は寝る時間で
すよ」

由紀「うゝ。…じゃあ——くんと胡桃ちゃんは悪い子だ！」
そう言つて由紀が笑う。

「…先に寝ててください。」
彼はとりあえず胡桃の後を追つて外に出た。

バタン…

悠里「……美紀さん、今日…何かあった？」
彼が外に出て、そのドアが閉まった後に、悠里が美紀に尋ねた。

美紀「え？……どうしてですか？」

美紀はそう言葉を返す。

悠里「：なんか今日、あの薬局から帰ってきた時から：胡桃の様子がおかしい気がするの……だから、あそこで何かあったんじゃないか
と
思
っ
て。」

由紀「あ……私も思った。胡桃ちゃん、なんか元気ないなって……」

美紀（リーさんはともかく、由紀先輩まで……けれど由紀先輩も意外と鋭いところあるからなあ……）

美紀（でも、確かに胡桃先輩……あれからずつと落ち込んでるのが顔に出たから、気付かれない方がおかしいかも……、私と——さんはあれから上手く表情に出さずにごまかせてるのに……まさか胡桃先輩が一番怪しまれるなんて……珍しいな。）

美紀「……いえ、大丈夫……何もなかったですよ。」

悠里の言うあの薬局とは、間違いなく岡達と出会ったあの薬局の事を指すのだろう。

今の悠里に余計な心配をかける訳にはいかない……そう考えた美紀は何もなかったと嘘をついた。

悠里「そう?…なら良いけど、もし私もせいであなた達に何かあったら…：私は立ち直れないから…：…無理してまで薬探ししないでね。」

美紀が「分かりました」と返事をすると、悠里は微笑んでからベッドに潜り、眠りについた。

美紀「…ほら、私達も寝ますよ!」

そう言つて美紀は由紀をベッドに押していく。

由紀「はくい。」

押されながら返事を返す由紀。

美紀(胡桃先輩…：ダメじゃないですか。…：りーさんに心配かけちゃ…)

「…何?」

外に出た彼が、車から少し離れたところにたたずむ胡桃に言う。

胡桃 「リーさん、良くならないな…」

「……そうだね」

胡桃 「今朝のアイツらからさ、こっそり奪えないかな？」
地面を見つめながら胡桃が尋ねる。

「…難しいね、何よりバレたら危ない。」

彼は答えた。

胡桃 「…でもあたしとお前の二人なら。」

胡桃が彼を見る。

「……相手は三人だし、どうだろうね。」

胡桃 「けどお前今まで色んな生存者と戦ってきたんだろ!?!……なら
アイツらくらい……!」

「アイツらくらい……殺せって?」

彼は胡桃の目を見てそう言った。

胡桃「あ……………いや…違うよ…」

胡桃は自分の発言が彼を傷付けたと思い、後悔する。

「……………僕はそう言われると思ったけど…」

胡桃から目を逸らして彼は言う。

胡桃「…ごめん」

「僕が今まで殺したのは皆、向こうから殺しにかかってきたりするよ
うな奴等だけ……………今日の奴等はクズにはクズだけど、出ていく僕等を
無理矢理に引き止めたりはしなかった。」

「そんな奴等の持ち物をこっそりと奪って、バレたら殺すなんて…そ
れこそこつちが悪者だよね。」

彼がため息をついてから言った。

胡桃「……………そうだな…本当にごめん。」

胡桃が再び謝る。

「いいよ別に……………にしても胡桃ちゃん少し焦り過ぎだよ。リーさんは
ただの熱なんだからそこまで躍起になって薬を取りにいかなくても
……………」

胡桃「心配なんだから…躍起にもなるに決まってるだろ!!」
胡桃が彼に怒鳴る。

大声を聞いて美紀が車の窓から顔を覗かせるが、彼が大丈夫…と手を振って知らせると、少しだけ考えてから美紀はその顔を引っ込めた。

「胡桃ちゃん…大声はダメだよ、あいつらが寄ってくるかも。」

興奮気味の胡桃を、彼は落ち着かせる。

それから周囲を警戒するが、寄ってくるゾンビの姿は無い…近くにはいなかったようだ。

胡桃「…あたし達の誰かが苦しんでるのを見ると、不安になるんだよ…そのまま死んじゃうかもって…。」

目を潤ませながら胡桃は言う。

「りーさんはただの熱だよ、大丈夫…すぐに良くなる。」

胡桃の肩に手を置いて彼は言った。

胡桃「分かっているよ…だからそれならそれで早く薬をあげて、元気にしてあげたい…頭では大丈夫だって分かっているのに、元気なりーさんを見るまで安心できない…」

「だからって、危険を犯してまで薬を取りに行くのはダメだよ。…僕は今日、胡桃ちゃん達が危ない目に遭うのが嫌だったから、面倒な事になる前に君達を連れてアイツ等のところから出ていったんだ。」

彼は今にも泣きそうな胡桃の目を見ながら言った。

胡桃「……うん」

「こっさり薬を取りになんて行って…もしバレたら胡桃ちゃん、今度こそアイツ等に何をされるか分からないよ。」

胡桃「…わかった。」

目を伏せたまま、胡桃は答えた。

「…じゃあもう寝よう？明日こそきつと見つかると思うから、あまり落ち込まないで！」

彼は胡桃を元気付けながら二人で車に戻った。

車に戻ると由紀と悠里は眠っていた。

美紀は起きているようだったが、気まずい雰囲気を感じとったのか、布団を被って寝たふりをしていた。

「…じゃあおやすみ、胡桃ちゃん。」

彼が胡桃の背に声をかける。

胡桃「うん…おやすみ」

そう言っただけで胡桃はベッドに潜る。

それを見届けた後で、彼は美紀のベッドの前にしゃがみこむと、顔を布団で覆っている美紀に、そっと声をかける。

「…美紀さんもおやすみなさい」

美紀「…おやすみなさい」

顔を覆っていた布団が少しだけ隙間を開けると、その隙間から美紀が目だけをチラッと覗かせて小声で答えた。

それを見た彼は少しだけ笑うと、自分の寝床の椅子に向かい、そのまま眠った。

(胡桃ちゃん…かなりまいてるね…)

(この世界の環境のせいと…後は今朝、薬がある場所を見つけたのに取ってこれなかった歯がゆさがあるんだろうな…。)

(りーさんがダウンしてる今……僕と美紀さんと由紀ちゃんまで、胡桃ちゃんをしつかり支えてあげよう。)

そして深夜1時頃。

皆が寝静まった頃に胡桃は起き上がり、音をたてないようにドアを開け外に出る。

胡桃(ここからアイツ等のいた薬局は近い……この時間ならバレーズに取ってこれるはずだ。)

胡桃「…………ごめんな、」

胡桃は一言、車内で眠る彼に謝ると、一人で…あの薬局へ向かった。

三十三話 『待ち構える絶望』

深夜…一人で車を抜け出して、岡宏樹達がいた薬局へと向かう胡桃。

胡桃（ここからあの薬局は1〜2 Kmしか離れてない、走ればすぐに着く!!）

胡桃は始めからあの薬局へ忍び込む事を決めており、その為にわざと薬局から近いこの公園を宿泊場に決めたのだった。

胡桃「……」

少ししてその薬局に辿り着いた胡桃は、小さめの懐中電灯を点けると、中で眠っているであろう岡達を起こさぬように静かに…毘も警戒しながら中へと入って行く。

胡桃（今日見た限り、普通の商品棚には何も置いてなかった……だったらもつと奥に隠してるのか？）

胡桃は考えを巡らせながらゆっくりと歩いていく…。そして店の奥にバックヤードへ続くであろうドアを見つけると、それをそっと開く。

胡桃「……」

ドアを開くと細い通路に出て、更にそこには三つのドアがあった。

胡桃（ちっ！……どれだよ!?!）

どのドアを開けるべきか分からず焦る胡桃……。しかしその内の一つ……通路の一番奥のドアは位置的に外へ出る裏口だと気付いた。

胡桃（あれは違うとして、あと二つ……）

片方に葉がしまつてあるとして……もう片方は恐らく奴等の居住区だろう……胡桃はそう考えて悩む。

胡桃（ドアはどっちも似たようなもんだし、小窓も付いてないから中の様子も見れない……）

胡桃（しかたないな……ゆっくりと開けよう。二分の一で当りだし、もし奴等の寝床でもそつと閉めればバレないだろう）
そう考えて、胡桃は片方のドアをゆっくりと、慎重に開ける。

胡桃「………。」キィ〜……

僅かにドアが音をたててしまい、焦った胡桃は手を止める。

胡桃「………」

胡桃（……大丈夫だよな?）

誰も起きて来ないのを確認してから、僅かに開いたドアの隙間から中の様子を窺う…。そうして見た光景は胡桃の望んでいたもので、思わず頬がゆるんだ。

胡桃（……………よしっ！）

胡桃の視線の先の部屋の中には、いくつか並べられた棚…その上に置かれた大量の医療品、そして床には無数のダンボール箱があった。

胡桃（当たり前だな…）

そう確信して慎重にドアを開け、中に入る胡桃。

胡桃（すげえ数の医療品だな…アイツ等早い内からここに立って籠って独占してたのか？…それにしても多い気がするけど。）

中に入り棚の医療品を確認するが、目当ての物はない…。続いてそばに置かれていたダンボールの中も確認すると、その中にも様々な医療品が無分別に詰め込まれていた。

胡桃（本当にすげえな…これなら解熱剤くらい…）

そう思いつつ、ダンボールの中に手を入れて漁る…。

直後、背後から大きな音が鳴り響いた。

バタン!!

胡桃「っ!!」

不意に胡桃が通ってきた半開きのドアが完全に開かれ、三人の男が入ってくる。そのの三人を見た胡桃は冷や汗を流し、拳をギュツと握りしめた。

川崎「宏樹の言った通り、やっぱり盗みにきたな？」

岡「この女だけ諦めきつていない目をしていたからな…真夜中にも忍び込むと思ってたよ。」

棚の上にライトを置き、部屋を明るくしてから岡が言う。

置かれたライトは比較的強力なものもあり、部屋全体をかなり明るくした。

安田「凶々しいヤツ…」

そう言つて安田はドアを閉める。

逃げ道を完全に塞がれてしまい、胡桃はただひたすらに焦った。

胡桃「悪い事をしたと思つてる…。でも一つだけ解熱剤が欲しいだけだ!!それ以外は何も取らないから…!」

黙つて忍び込んだ自分も悪い…。胡桃はそれを自覚しているからこそ、申し訳なさそうに三人へと告げる。

岡「まあわざわざ来たんだ…もし土下座して頼むってんなら、解熱剤くらいやるよ」

ニヤツと微笑み、岡が胡桃に提案した。

本当ならば絶対に嫌な提案だったが、全ては友達のため…。自分の土下座一つで救えるならと思ひ、胡桃は勇気を振り絞る。

胡桃「……………本当だな？」

岡「ああ」

岡の言葉を信じた胡桃はシャベルを横に置くと、そつと床に頭をつける…。そうして土下座した彼女は、すがるようにして言葉を放った…。

胡桃「頼むよ……………大切な友達が熱で苦しんでる…一つで良いから、薬を分けてくれ…」

川崎「あ…？分けてくれ？」

何かを正せと言わんばかりに川崎が胡桃を睨む…。

胡桃はそれが何を示しているのかを察すると、その言葉を正した…。

胡桃「…っ」

胡桃「……………」

胡桃「……………分けて…下さい……………お願い…します…」

川崎の発言に少々は苛立ったが、これも悠里の為…胡桃は必死に堪えた。

岡「ほら…川崎。この子…ちゃんと頼んだぞ。」

川崎「だな…嬢ちゃん、もう顔上げていいぞ。」

胡桃「!!…じゃあ薬を…」

胡桃は少し安心して顔を上げる、頭を下げ、必死に頼んだのは無駄ではなかったと思ったから……。しかし、次の瞬間に川崎の発した言葉で、胡桃からその安心は消えた。

川崎「土下座したくらいじゃやらないに決まってんじゃん…」

胡桃「え?…:…だつて…:さつき…」

そう言つて胡桃は岡を見る。しかし奴のその顔もニヤニヤと微笑んでおり、胡桃の顔は青ざめた。

岡「ん? ああ、悪いね、嘘だよ。…川崎の奴が、もし本当に君が来たら土下座の一つでもさせたやつて言つてたからさ。」

川崎「嬢ちゃん、気が強そうだからね。そんな嬢ちゃんが頭下げて必死に頼む姿が見たかつたんだよ…いや、中々興奮したよ!」

全く悪びれる様子の無い岡と、床に手をつく胡桃を見てニヤニヤと笑う川崎…そんな二人を見て、胡桃はシャベルを拾うと、立ち上がつて言つた。

胡桃「ふざけるな!! 約束が違う! なんの為に…あたしは土下座まで…」

さつきまでの自分の姿を思い返して、思わず泣きそうになる…。

必死に堪えたのに…心から頼んだのに…。

川崎「なんの為？…俺を興奮させる為じゃない？」

安田「良い趣味してるな…ほんと」

胡桃「っ!!ふぎけやがって！結局渡す気がなかったんだろ!!」

川崎「いやいや…今朝会った時言っただろ？薬が欲しければ俺達と遊べって…遊んでくれるの？なら薬くらいあげるよ？」

胡桃に近付きながら川崎が言うが、そればかりは難しい…。

胡桃は思わず目を逸らし、顔を俯ける。

胡桃「っ！……それは…さすがに…」

岡「まあ良いさ、一人でここに来て俺達の物資を漁ってたんだ…そんなくらい覚悟はしてたろ？」

その一言で胡桃の顔がますます青ざめる…。このままでは薬を取れないばかりか、自分の身すら…。

胡桃「…たつた解熱剤一つだぞ?!こんなに頼んでるんだから…良いだろ！それくらい!!」

岡「はあ…」

岡は呆れたような表情をしてため息をつき、胡桃の目を睨む…。

岡「無理矢理するのは嫌だったけど…そっちがそういう態度ならしかたないよな…。」

川崎「楽しみに待ってたんだぞ、嬢ちゃんがここにくるの…。」

川崎一歩ずつ胡桃に近付き、ニヤニヤと笑う…。

その表情がとても怖くて、胡桃はそっと身構えた。

胡桃「……！」

岡「お前ら…好きにしていゝぞ」

川崎「ほいほい！」

胡桃「…くっ!!」ブンツ!!

ドツ!

川崎「いてっ!!!」

近付く川崎の横っ腹にシャベルを振る胡桃。だが相手がただの間という事で少し躊躇ってしまい、力が入らなかった。

安田「大人しくしろ!!!」

胡桃「…うっ!!」

一瞬の隙を突かれて、安田に床へ押さえつけられる胡桃、その際にシャベルを落としてしまい、それを岡が拾い上げて奪う。

岡「あらら…大丈夫か？川崎」

川崎「ツ〜！いてえけど我慢できる範囲だ…この嬢ちゃん…マジでやってくれたな！」

川崎はそう言つて安田が押さえつけている胡桃に近づく。

川崎「おい翔！お前は腕だけ押さえといてくれ。」

そう言つて安田に胡桃の腕を押さえさせると、川崎は胡桃の太ももの上にまたがり馬乗りになつて、胡桃の顔を見つめた。

川崎「ふう……かなり痛かつたぞ……嬢ちゃん」

胡桃「……もつと強く振れば良かった……お前みたいなクズ相手に……躊躇う必要なんかなかったのに……」

弱々しい声で胡桃が呟く……。

どうにかしてこの場から逃げ出したいが、ここまで押さえられると身動き一つ出来なかつた……。

川崎「……俺が一番先で良いよな？ じやなきや殴られ損だし」

安田「じゃあ俺は二番な」

岡「……好きにしてくれ」

川崎「だつてさ嬢ちゃん……、胡桃ちゃんだっけ？ 本当に来てくれて良かったよ……もし来なかつたら、俺は一生後悔したね……今朝の段階で襲えば良かったって！」

胡桃「うっ……どけよ!!」

胡桃は抵抗するが手は安田に、足は川崎が乗っているせいで完全に押さえつけられて振りほどけない。そんな状況に胡桃が焦る中、手を押さえていた安田があることに気付く……。

安田「……さつきから気になつてたんだけど、君……手冷たいな。」

胡桃「……くっ！」

川崎「冷え性なんじゃないか？大丈夫だよ。俺が温めてやるからさ」

川崎はそう言ってから胡桃の着ていたシャツを力任せに破く…。

乱暴に破かれたシャツはビリビリと音を発てていき、胡桃の肌を露出させていった…。

胡桃「や…っ…!!」

シャツは首もとから、へその辺りまで乱暴に裂かれ、胡桃の青色の下着が露あらわになる。自分の身体がこんな男の視界に晒されたと気付いた胡桃は焦り、必死に抵抗した。

胡桃「やだっ…!!やめ…ろっ…!!」

自身がいかに危機的状況にあるのかを実感した胡桃は顔を赤らめながらも一度もがいて抵抗するが…やはり抜け出せない。このままでは、この連中の思うように身体を弄ばれてしまう…。

川崎「恥ずかしながら良いよ…優しくしてやるからさ」

顔を真っ赤に染め、目をギュッと閉じる胡桃の仕草を見て川崎が笑う…。

川崎「ま、恥ずかしがるなって言われても無理かなあ…。クズ扱いたした相手が、これから自分の体を隅々まで触るってんだから…」

動けない胡桃の頭をガシガシと撫でながら言う。

ただ頭を撫でられるだけでも、胡桃は深い嫌悪感を感じた。

胡桃「触るなっ！離せっ!!」

涙を浮かべながら胡桃は必死に抵抗するが、川崎はそんな抵抗を気にも留めずににやけながら胡桃の肌に触れる。その手が腹部に触れた途端、胡桃は顔を真っ赤にしながら顔を逸らした。

胡桃「…っ」

川崎「ん？……本当に随分冷たいな。」

安田「だろ？まるで死人みたいだ…。」

胡桃「……………」

川崎「まあ別にいいや、始めちまえば気にならないだろう……このシャツ邪魔だな。」

そう言つて川崎は胡桃の破けたシャツを捲り上げて、それを脱がそうとした。捲り上げられたシャツは胡桃の首を抜け、手首の方まで上げられてしまう……。破れてはいたものの微かに肌を隠していたシャツを脱がされ、上半身の下着姿をものに見られてしまった胡桃の顔はますます赤みを帯びた…。

胡桃「う…うっ……………」

川崎「ん？」

その時、胡桃の右肩に包帯が巻かれている事に川崎は気付く。

川崎「…何これ？怪我してんの？」

岡「!?…おい！ちよつと見せろ！」

今までは大人しく後ろで様子を見ていただけの岡が、顔色を変えて胡桃に近寄り、包帯に手を伸ばす。

胡桃「おいっ！……触るなっ！」

動けない胡桃はあっさりと包帯を剥がされ、三人に肩の傷を見られた…。

岡「この傷…！コイツ、噛まれてるな。」

剥ぎ取った包帯を投げ捨てて岡は言う。すると川崎は焦ったような表情を見せ、改めて胡桃の事を見つめた。

川崎「マジかよ!?…じゃあ直じきに奴らみたいになるって事か？」

岡「だろうな、肌が冷たいのもその影響だろう」

(けど、傷は昨日今日の物ではなく…少し古い物みたいだな…噛み傷って事に間違いはないはずだが……どういう事だ?)

安田「…どうする？」

川崎「…仕方ないな、人間の内に触るだけ触って、もしゾンビになったら殺せば良いだろ。…どうだ？さすがに触るだけなら感染しないよな?…」

岡「さあな…どうしてもってなら好きにしろ、俺はもういい……そんなゾンビ女に興味は無い。」

胡桃「!!」

岡のその一言が胡桃の耳に突き刺さる…。

これだけ辱しめられても堪えていたのに、その言葉だけはやけに胡桃の心を抉った。

胡桃（…こんな奴等に何を言われても、気にする必要なんて…無いのに……）

胡桃（くそっ……くそっ……くそっ……!）

川崎「……ん？」

胡桃「うっ……うう……ぐすっ……っ」

土下座させられた事も、服を破かれた事も、胡桃はどうか我慢した…。だが、ゾンビ女と言われた事…それにはもう堪えられなかった…。押さえられてるせいで両手で涙を拭う事も、隠す事も出来ず、ただその泣き顔を奴らに少しでも見られないように……顔を横に向けて泣いた。

川崎「あくあ…ほら、お前がゾンビ女とか言うから泣いちゃったぞ。」

岡「はあ？違うと思うぞ、お前が襲ってるから泣いてるんだろ。」
二人が罪を擦り付け合う、安田は胡桃の手を押さえながら、その二人の様子を見て笑った。

川崎「安心しろよ嬢ちゃん、俺も感染しちまうかも知れないから…本番は勘弁してやる。…その分、嬢ちゃんの色んなところ弄りまくるけどな。まったく…始める前にキスの一つでもしてやりたかったが、念の為それもやめとくか」

胡桃「ううっ……いやだ……やだっ……」
迫る川崎から目を逸らし、涙を流す胡桃…。

こんなところで、こんな連中にいいようにされてしまうんだ…。
そんな事を思いながら、胡桃は友達の顔を頭に思い浮かべた。

胡桃（リーさん……由紀……美紀……それに……）
胡桃（あたし……もうダメだ……）

胡桃（ごめん……みんな……）

つい先日まで、毎日大切な仲間達の笑い声を聞いていた胡桃……。今その耳には……。目の前で不気味に笑う男の声だけが響いていた

三十四話『そこに迫る影二つ』

川崎「じゃあ、再開するかね。」

川崎はそう言つて胡桃の下着を外そうと胸元に手をかける。

胡桃は顔を真っ赤にして：ただ泣くだけ、もう抵抗すらしなかつた。

バタン!!

ふと部屋の入り口のドアが大きな音をたてて開く。

驚いた岡達が視線を向けるとそこには一つの影…。三人はもちろん、胡桃のよく知る人物がそこにはいた。

岡「お前は……」

胡桃「!?!」

一瞬見間違いかとすら思った…。だが見間違いなどではなく、確かにその人は……彼はそこにいた。

「見つけた……!」

胡桃「……お前……どうして……!」

押さえつけられたまま胡桃は驚く。彼は今あの車の中で寝ているハ

ズ、こんなところにいる訳はないと思っていたからだ。

「目が覚めたら胡桃ちゃんがいなくなってたから探しに来た……。車をあの公園に停めたのはここが近いからだっただね」

「それに気づいた瞬間：胡桃ちゃんがどこかに行くとしたらここしかないだろうって思って走って来た、まさか一人で行くなんて：まったく……」

ここまで走って来たのだろう……。僅かに呼吸を乱しながら彼は言った。

岡「おい：俺達は好きでこの子を襲ってる訳じゃないんだ。コイツが俺達の物資を盗もうとしたから、その罰みたいなものだよ。」

彼の横に立って、自分達に落ち度はないと言いたげに岡は言う。

「…ああ…そう」

岡「そうだ、だから今更お前が来て代わりに謝ったとしても遅いんだよ。大人しく、川崎のヤツが満足するまで待っててくれ。そしたらあの女を薬とセットで返してやるから…」

岡（こいつは後で隙を見つけて殺せば良い……あの女は川崎のお気に入りのようなだし、ゾンビになるまではここに置いておくか：そう長くはないだろうけど。）

口で彼にそう言いながら、内面では彼をどうやって、いつ殺そうかと計画を練る岡……。ここまでやってしまったら、彼も胡桃も無事に帰すつもりなどなかった。

「……………」

彼は何も言わず、じつとその場に立ち尽くす…。川崎は彼の沈黙を許可と捉え、嬉しそうに笑ってから再び胡桃の顔に視線を向けた。

川崎「ははっ！嬢ちゃんのボーイフレンドの許可も出たし…とつとと済ますか!!」

胡桃（そっか……だよな…三人相手に一人じゃキツイだろうし……こんなバカ、わざわざ助けるのも面倒だよな……）

こちらを真顔で見つめる彼の目を見て、胡桃はそう思った。

もう仕方ない…悪いのは自分なのだから、助けてくれなどとは言えない…。

川崎「そうだ……おい！お前も嬢ちゃんの体触つてくか？お前、嬢ちゃんの見た事も触った事もないんだろ？俺が許可するから、こっちにこいよ！」

突如、川崎がそんな事を提案する。そうすると彼は無言のまま胡桃の上にまたがっている川崎の横に立ち、じつと胡桃を見つめた。

「……………」

川崎「ノリが良いな…。ほら、お前が嬢ちゃんの服脱がしてやれよ！仲間の男にやられる女とか、めっちゃめっちゃ興奮するな!!」

胡桃「……………っ…ん…」

胡桃は彼が助けに来てくれない事には驚かず、目を逸らして、ただ静かにすすり泣いた。彼が何をしようと責められない…悪いのは全部自分だ…。そう考えていたから…。

「……」

胡桃（そうなるよな……まあ温泉の時も覗きに來たくらいだし……こんな機会があれば……こいつもそういう事するか……）

胡桃（肩の傷は……良かった、まだ上手くシャツで隠れてる。でもこのままじゃすぐに見られるよな……。まあ……もういいか……）

胡桃（悪いのはあたしだし……もうどうなつてもいいや……凄く恥ずかしいけど……コイツになら……何をされても……別にいい……）
覚悟を決めて胡桃はギュツと目を閉じる。

これから彼に裸を見られ、触れられると思うと恥ずかしくて死にそうになるが……それも仕方のない事だ……。

胡桃（けど……どうせなら……こいつだけがよかった……。他の男に見られたり触られたりするのには……嫌だなあ……）

「……」 スツ……

ピトツ……

胡桃「……んっ」

彼が横に屈んで、そつと胡桃の頬に手をあてる……。覚悟を決めたものの、実際彼に触れられると驚いてしまい……胡桃は小さく震えながら、思わず声を漏らす。

「……………した?」

胡桃「…え?」

彼が何か呟いたような気がして、胡桃は目を開ける。

川崎「なんか言ったか?」

川崎も彼に尋ねる、やはり聞き間違いではなかったようだ。

「お前には何も言っていない…」

川崎「…は?」

彼が胡桃の頬に触れたまま、川崎に冷たく言い放つ。

胡桃「……………」

「…反省した?」

胡桃「……………は?」

目を丸くして、胡桃が聞き返す。

「はあ…聞こえたでしょ、反省したかって言ったの。」

胡桃「…反省?」

「そう、一人でバカな真似して……………今はこんな目にあってる。」

「…反省した？」

胡桃「いや……その……」

急に会話をふられて、胡桃は口ごもる。

「は・ん・せ・い・し・ま・し・た・かあ〜？」

その言葉のリズムに合わせてながら、彼は胡桃の頬をペチペチと叩く。

胡桃「イタっ……！イタ！痛いって!!分かったよ！反省したから叩くな!!」

安田に手を押さえられてる事も……川崎に馬乗りになられている事も忘れて……胡桃はいつも彼と話す時の調子で言った。そんな中、彼は胡桃の目が赤く腫れている事に気が付く。

「……………胡桃ちゃん……泣いた？」

胡桃「……………」

胡桃は恥ずかしくて……情けなくて、答える事が出来なかった。

川崎「おい……何言ってるんだお前は？やらないなら下がって見てろよ……」

そう言っって胡桃の胸元に川崎は手を伸ばす。

胡桃「っ!!」

パシツ!

川崎「…あ?」

その手が胡桃に触れる前に、彼がその手を掴んで止め、川崎を睨んで言った。

「お前に胡桃ちゃんは触らせない」

川崎「てめえ…」

彼の発言で、眉間にシワをよせる川崎。

胡桃「……………」

そんな彼の横顔を、胡桃はじっと見つめていた。

「触っていいのは僕だけだ」

川崎「……………」

胡桃「…いや…それも違うと思うけど…」

全てを台無しにした彼の発言に、胡桃は小声で言う。

「よし!!」

そして、彼はさっと立ち上がる。

そうして立ち上がった彼は胡桃の顔を見つめ、ニコツと微笑んだ。

「…………じゃあ」

「一緒に帰ろう…………胡桃ちゃん」

一瞬だった…………。

彼はその言葉を放った後、その場にいた全員が反応する事も出来ない速さで川崎の首をナイフで切り裂いていた。

川崎「…がっ!!?」

川崎が胡桃の方に倒れそうになるが、その前に彼が横から蹴りを入れ…川崎を奥に倒す。彼はそのまま倒れた川崎の上にまたがるとナイフを振り上げて…

「…一人目」

グザツ!!

そう呟き、容赦なくナイフを川崎の心臓に突き刺す…一連の動きはとても素早く…首を切り裂いてからここまで、まだ5秒と経過していなかった。

「……あ、……こいつ主犯だったっぽいのに楽に殺し過ぎたな。ミスった……」

動かなくなった川崎を見て彼は言う。

今人を殺した事などまるで気にもしていないようなその表情を見て、胡桃やあとの二人は驚いた。

胡桃「…!?!?」

安田「なっ!」

岡「お前…!?!?何を…!!」

岡「殺したのか!?!?…ふざけやがって!」

岡がそう言つて、胡桃から奪つたシヤベルで彼に殴りかかる。だが彼はそれをかわし、岡の腹に蹴りを入れて突き飛ばした。

岡「ぐっ……！」

安田「逆ギレもいいとこだな……薬を渡さなかっただけで殺すなんてな」

胡桃から手を離し……彼と距離をあけながらナイフを構えて安田が言う。

「……確かに今回はこつちが先に手を出してしまったからね。」

胡桃「………」

「元々の非はこつちにあるかも知れないけど……」

岡「かもじゃなくて……その女が悪いんだよ。」

シヤベルを構え直して岡は言った。

「だとしても……お前らの言い分なんか知った事じゃない……」

「僕にとってはこの人達だけが全て……」

「それに……」

彼がじつと胡桃を見つめる。

胡桃「………」

「この人は強い人なんだ……誰かの為にならともかく、自分が多少追い込まれたくらいじゃ泣かない………」

「だけど……お前らは泣かせた……あんなに強い胡桃ちゃんを……！」

そう言ってから彼は岡を睨む。

ナイフを握るその彼の手に、力が込もっていくのをその場の全員が感じていた。

「胡桃ちゃんを襲って、泣かせた時点で……お前らは絶対に殺す」

鋭く……それでいて冷たい目をして彼が二人に告げる。

岡はその表情にどこか恐怖を感じた気がしたが、気のせいだと決め付けて再び彼に殴りかかった。

岡「へっ……こんな女を庇^{かば}うなんて……イカれたヤツだな!!」

「こんな女……!?!」

岡は胡桃を感染者だと思っっているからそういった発言をしたが、それを知らない彼はそれをただの挑発ととらえる、それが更に強い怒りを引き出した。

ダツ!!

彼は一瞬で岡との距離を詰めると、岡の持つシヤベルを左手で掴み、そのまま顔を睨んで言った。

「胡桃ちゃんはとても良い人……『こんな女』なんてお前のようなクズに言う資格はない……それに……」

彼が右手に持ったナイフを振り上げる。

静かに振り上げられたそのナイフは部屋を照らすライトに反射し、キラツと輝いていた…。

「このシャベル…：彼女のだ…」

ブンツ!!

そう言つて、ナイフを勢い良く、シャベルを持った岡の右手へと振り下ろす。

岡 「ツ!!?」

岡は咄嗟にシャベルから手を離して、彼から離れるが…

ブシャツ!!

岡 「ぐうっ…！くそっ!!」

一瞬反応が遅れた岡は、完全にナイフを避けきる事が出来ず、右手に深い切り傷を負う。

「…切り落とそうと思つたのに…：シャベルじゃなく、直接手を掴めば良かったな…。」

ポタポタと血を流す岡の右手を見て、彼は言った。

岡 (コイツ…本気で手を切り落とそうとしやがった!!)

彼の躊躇いの無い攻撃に、岡は恐怖を抱く。

安田「くっ……!!」

その様子を見ていた安田も同じだった。

目の前の彼は安田には背を向けている、なのに……攻撃出来ない。下手すれば、反撃を受け、自分が殺されると思っていたからだ。

胡桃「……」

胡桃は彼の名を小さく呟く。

胡桃（あの時の……空彦を殺した時と同じ目だ……）

胡桃（いつものあいつとは……違う目……）

胡桃（……あたしのせいだ……）

目の前で彼が戦う様子を見た胡桃は、次第に意識が遠退くのを感じた……

なので……その後何があったのか、胡桃は覚えていない……

気がついた時には部屋中が血だらけになっていて、岡達の死体が転がる中、彼が血まみれのナイフを持って胡桃の名を呼んでいた。

胡桃「…あ。」

「大丈夫、胡桃ちゃん？」

彼が胡桃の肩を揺さぶって言う。

胡桃「……………うん。」

「先に外で待ってて……………薬を見付けたらすぐに行くから。」

胡桃「……………わかった。」

「気を付けてね、ほら……………これ持つて。」

胡桃は彼からシャベルを受け取ると、部屋から出ていった。

「やて……………どこにあるのか……………」

彼は岡達の死体を跨ぎながら、一つのダンボールの中を探った。

(ごちやごちやしてて分からないな……整頓しておけよ……)

? 「……何探してるの?」

「!?」
不意に何者かに話しかれられ、彼は振り返る。

? 「……?」

そこにはいつの間にか、黒いチョーカーのような物を首に着けた、彼と同じ年くらいと思われる黒髪の少女が立っていた。

「…コイツらの仲間?」
ナイフを構えたまま、彼がその少女に尋ねる。
すると少女はぶんぶんっ!と首を横に振った。

「…じゃあ誰?」

狭山 「えつと……狭山真冬^{さやままふゆ}」

「……そうですか」

狭山 「…で、何探してるの?」
狭山が再び彼に尋ねる。

彼女の纏う独特な雰囲気戸惑いながらも、彼はそつと答えた。

「……解熱剤です」

狭山「……」ゴソゴソ

彼が答えた後、狭山は置かれていたダンボールの内の一つを開くと、中を漁り始める……。彼は不思議そうな顔をしながらただそれをじつと見つめていた。

「……？」

狭山「……はい。」

そう言つて狭山は彼に手渡したもの……それは彼が探していた解熱剤だった。

「……よくある場所が分かったね？」

狭山「……勘」

「勘……う？そ、そうですか……」

狭山「……あ、ちょっと待って」

狭山はそう言つて背負っていたリュックからビニール袋を取り出すと、辺りにあつたいくつかの薬を詰めて、彼に渡した。

狭山「……他では手に入りにくい物を詰めておいた」

「……ありがとうございます」

不思議な感情を抱きながら、彼はそのビニール袋を受け取った。

狭山「……気にしないで、どうせ持ち主は死んだんだから……誰かが使

わないと勿体ない。」

部屋の死体を見回してからそう言つて、狭山も自分のリュックに薬を詰める。

「……………」

彼は無言でそれを眺めていた。

狭山「…………行かなくて良いの？」

薬を詰めながら彼と目を合わせて、狭山は言った。

「あ、うん…………あなたはどうします？」

狭山「…ボクの事？」

「ん…？ボクつて…狭山さん男の人ですか？」

狭山の一人称に疑問を抱いた彼は尋ねた。

狭山の事を最初は女だと思っていたが…その顔付きは綺麗に整つた中性的な物なので、男女どちらともとれる顔だった。

(声は女の人っぽいけどな…………。それにどこことなく美紀さんに似てる…………胸はないけど)

視線を少し下にずらし、狭山の平らな胸元を見て彼は思った。

狭山「失礼だね…。ボクは女の子だよ」

「ああ…そりやしません」

狭山「ボクっ娘ってやつ……」

「……へえ」

狭山「……一部の人に需要がある」

どや顔で告げる狭山……

彼はその不思議な少女を真顔で見つめていた。

狭山「……冗談はさておき、ボクは一人で平気だよ……もう少ししたら仲間が迎えに来てくれるから……」

そう言って狭山はニコツと笑う。

どうやら、彼女にも仲間がいるらしい。

「仲間？……分かりました、なら平気ですね」

狭山「……けどね」

「なんです？」

狭山「……ボクの仲間が来たら……君と彼女が平気じゃなくなるから……はやく出ていった方が良いよ？」

彼にそう言ってから、再びニコツと笑う狭山、だがその笑顔はさっきのとはまるで違い……恐ろしい物を感じさせた。

「……彼女？」

その笑顔を見て、彼は僅かに怯えたが……狭山の『彼女』という言葉

が気になり、聞き返した。

狭山「…さっきシャベルを持った女の子がこの部屋から出てくのを見た、彼女はボクに気づかなかったみたいだけどね……君の友達でしょ?」

不気味な笑顔のまま狭山は答える。

「……はい、そうです。」

狭山「……じゃあ」

狭山の表情がさっきまでの普通の物に戻る。

狭山「……はやく行ってあげなよ…一人じゃ危ないよ」
薬を詰め終えた狭山が、リュックを背負って言った。

「そうですね…では。」

彼はそう言って部屋から出ようとドアを開ける。

狭山「……」パタパタ

狭山が彼に手を振る。

彼も一応手を振り返すと、狭山を部屋に残し、ドアを閉めた。

狭山「……またね……」君

ドアが閉まる直前に、狭山が彼の名を呼んだ気がしたが、彼は気のせいだと思って無視した。

狭山「……」
彼が出て行った後、狭山はじっと岡の死体を見つめる。

ドツ！

岡「ぐっ!!」

狭山が蹴りをいれると、岡は呻き声をあげた。

狭山「…やっぱ生きてた。」

岡「気付いてたのかよ……ツてえ……！くそが……」
彼にやられた腹部の傷を押さえながら、岡は上半身を起こす。

狭山「……。」

岡「どこの誰か知らないが、その辺の医療品を使って俺を手当てしてくれ……そしたら、さつきあんたがそのリュックに詰めてた分の医療品は、黙ってくれてやるよ。」

狭山「……。」

岡「あの野郎……必ず殺してやる!!」

狭山「…彼の事？」

岡「あんたは……あの野郎の仲間じゃないよな……？」
岡が狭山に尋ねた。

狭山「…違うよ」

岡「だったらとつと俺を手当てしてくれとありがたいんだけど？」

狭山「…はあ…、彼…詰めが甘いなあ…」

狭山はため息をついて岡に近付き、しやがんで目線を合わせた。

岡「?…おい、何を…」

ガッ!

岡が言いきる前に、狭山はその首を片手で絞めた。

狭山「…彼の仲間じゃないけど…キミの仲間でもないんだよ?ボクは。」

岡「うっ!？」

岡はその手を剥がそうと、左手を使う。

岡の右手は、彼に切られた傷が深く、今は動かせない。

そのため、残った左手だけを使うしかない訳だが、目の前の少女も片手しか使っていない…同じ片手という条件ならば、華奢な少女の手一つ…男の岡が振りほどけない訳がない。

グググッ…

その筈なのに……いくら岡が力を込めても少女の手はびくともしない。

岡（この女……なんつー馬鹿力だよ!!）

岡は思った、たとえ今、右手が使えたとしても……それでも彼女の片手一つ、自分の力では振りほどけないのではないかと……と。

狭山「……キミ……死んだフリしてる時から……心臓の音うるさかったんだよね……」グググッ……

徐々に力を強めていく狭山。

岡「お前………いつ………たい……!？」

首を締められながら、狭山に尋ねる。

狭山「……ボク?……ふふっ……」

一度不気味に笑ってから、狭山は答えた。

狭山「………猟犬だよ………ワンワンッ……」

そう言って犬の鳴き真似をした直後、狭山は急激に力を強める。

岡「…ぐ……つ!!!」

狭山「……バイバイ…」

三十五話 『かえりみち』

「胡桃ちゃん!」

薬局の外、一人待っていた胡桃に彼が声をかけて近寄る。

胡桃「……」

「薬、あつたよ!…帰ろう?」

彼はそう言っただけでゆっくりと歩き出し、胡桃もそれに続いていった。

最初の5分程は二人共無言で歩いていたが、胡桃がその沈黙を破った。

胡桃「あたしの事……怒ってるよな……」

小さな声で彼に尋ねる。

「……少しだけね、けどもう良いよ……胡桃ちゃんが無事なら。」

胡桃「あたしは…別に…」

「怖い思いさせたね…もっと早く来れば良かった、ごめんね…胡桃ちゃん。」

彼が立ち止まり、胡桃を見て言った。

胡桃「……………ううっ…ぐすっ」

その一言を聞いた胡桃の心に、安心と後悔…二つの感情が溢れてきて、我慢出来ずに再び泣き出してしまふ。

「胡桃ちゃん!?ごめんね?部屋に入った瞬間助ければ良かったのに、不安にさせちゃったよね?!三人相手に真っ向勝負はキツイから、まずは油断させて一人減らそうと思って…」

胡桃の涙を見て彼が焦る。

胡桃（バカだ、あたしは！自分勝手な行動をしたせいで……こいつに無駄な殺しをさせた!!）

胡桃（リーさんの熱も、すぐに治ったかも知れないのに！わざわざ危険な真似をして……こいつに心配をかけて……）

胡桃（あたしはこいつを支えていこうと思ってた、もう空彦を殺した時にしたような……あんな怖い目をしなくてもいいようになって……なのに……）

胡桃（支えるどころか……あたしがそのきっかけを作ったんだ!!）

胡桃「ううっ……ごめん……危険を犯してまでやる必要はないって……お前に言われてたのに……あたし……あたしっ……！」
大量の涙を流しながら、胡桃は彼に謝り続けた。

「胡桃ちゃん……もう怒ってないから……」

そう言う彼の顔を、胡桃は静かに顔を上げて見つめる。

月明かりに照らされた彼の顔……そこに流れる血を見て、胡桃は気づく……最初にその血を見た時は、奴等の返り血を浴びてしまったのだろうと思っただ。

確かに、返り血も少なからず浴びてはいるのだろうが……よく見ればその頭には小さいながらも切り傷があり……そこからは彼自身の血が

流れていた。

胡桃「あ……！あつ……！！」

よく見ると彼は頭だけでなく体にもいくつかの怪我を負っているようだった。

胡桃「その怪我……!?」

「ああ……そんなにひどくないよ。……さすがに二人相手に無傷はムリだったね……最初に一人殺つといて本当に良かった……三人のままだったら僕が死んでたかも。」

そう言つて彼は笑う。

胡桃「あたしのせいで………」

彼の怪我を見て、胡桃はまた泣いてしまいそうになる。

「……………」

そんな胡桃の頭を、彼は優しく撫でる。

胡桃「……………ぐすつ……」

それだけで、胡桃の心は不思議と落ち着いていった。

「さあ……もう大丈夫かな？」

彼が胡桃の顔を覗きこんで尋ねる。

胡桃「うん……ありがとう」

胡桃（さつき川崎あいつに無理やり頭を撫でられた時は……すごく嫌な気分だったのに……こいつに撫でられても嫌な気分にはならない……）

胡桃（……それどころか……）

「傷……後で手当てしてくれるかな？それで全部ちやらにするから……」

胡桃「……うん……わかった」

そう言つて胡桃は彼に笑顔を見せる。

「……よかった。」

そして、二人は再び車へ向けてゆつくりと歩きだした。

胡桃「……。」

「……………」チラツ…チラツ…

胡桃「えつと…なに？」

歩きながら横目でチラチラと自分を見てくる彼に胡桃が言った。

「いやね…目のやり場に困る…けれども見てしまう自分もいるんだ…」

彼が顔を赤くして言う。

胡桃「??:…あ!」

胡桃は今更気づく、自分の着ているシャツは酷く破れていて、その箇所から下着が見えてしまっている事に。

胡桃「うわっ!」

慌てて隠そうとするが、破れ方が酷くて上手く隠せない。

胡桃（どうしよう!シャツが破け過ぎててどうしても見える!!）
顔を真っ赤にしながら、一生懸命それを隠そうとがんばる胡桃。

「…はあ」

パサッ

それを見かねた彼が、自分の上着を脱いで、胡桃の肩にかけた。

胡桃「あ…ありがとう。」

上着に袖を通してしつかりとそれを着る胡桃。

「寒いでしょう？外に出るなら上着くらい着てから行きなよ。」

呆れ顔で彼は言った。

胡桃「悪かったな…：てかお前も温泉で裸を覗きに來たくせに…：今更ちよつとブラ見えたくらいで目のやり場に困るってなんだよ。」

「あれは覚悟を持って自分から行ってるからいいんだよ…：けど今みたいなの不意打ちはちよつと…：いくら見えてるのがただの下着でもダメージが大きくて…」

彼がよくわからない話をぶつぶつと呟く。

「…：…ってか僕間に合ってた!?もしかしたらあの時、既に変な事された後だったんじゃない…：」

そう言っただけは、胡桃の顔をそっと覗く。

胡桃（…せっかくだ…ちよつとからかつてみるか。）

胡桃「えつと…少しキスとかされたのと…後はその…聞かないでくれるとありがたいな…」
言いながら胡桃は俯く。

「……………」

ちらつと彼の顔を覗き込んでみる…

すると彼の顔がみるみる青ざめていくのが見えた。

胡桃（ヤバ…やり過ぎた！）

胡桃「ウソウソ冗談！まだ何もされてなかったよ!!…ってかあたしまだ服着てたんだから分かるだろ!!」

「…でも服着てもキスは出来るし、胸とかも下着の中に手を潜り込ませれば脱がせなくても触れるよ?」
彼が青ざめた顔のまま言った。

胡桃「う…確かにそうだけど……。大丈夫!!キスもされてないし、変なところ触られてもないから!」

「……本当に?」

胡桃「本当に!!」

「僕を傷付けないように嘘ついてない?」

胡桃「ついてない!もしそんな事されてたらあたしだって女なんだからもつと落ち込んでるって!」

「…それもそうか、なら良かったけどさ……。あんな事があった後じゃ、冗談に聞こえないって。」

安心したのか、彼の顔色が戻っていく。

胡桃「へへ…わりい…。」

そう言っつて胡桃はニコツと笑った。

「あの…それと…もう一つ、聞きたい事があるんだけど…」
彼が小さな声で言う。

胡桃「ん？なに？」

胡桃がそう言った直後、彼は立ち止まり…ナイフを抜く。一瞬それに驚く胡桃だが、すぐにその行動の意味を理解する。

「…少し待ってて。」

二人の道の先に、かれらが三体立っていた…

ナイフを構え、進もうとする彼を胡桃がそつと手で遮る。

胡桃「お前は怪我もしてるし、疲れてるだろ？いいよ、あたしがやる。」

シヤベルを構えて胡桃は言った。

「本当に？…じゃあ頼むよ、気を付けて。」

彼はナイフを仕舞う。

胡桃「…任せとけ!!」

勢いよく駆け出した胡桃は、瞬く間にその三体を仕留めた。

「見事なもんで…なんでアイツらに押さえ込まれてたのか不思議なくらいだよ」

胡桃が倒した死体を見ながら彼は呟いた。

胡桃「…やっぱ人間は殺したくなかった…それで躊躇って、隙をつかれた。」

「……………胡桃ちゃんはそれで良いよ、僕のように平気で人を殺す人間にはならないようにね。」

彼が笑顔で言う。

胡桃「けど……………それじゃ…お前だけつらい思いを……………」

「さつき、それを言おうと思ったんだ。」

胡桃「さつき？ああ…そういえば聞きたい事があるとか言ってたっけ。」

かれらが現れたせいで中断していた会話を思い出す。

「うん、胡桃ちゃんは、僕が目の前でアイツらを殺したのを見て……………僕に対して嫌悪感とか…恐怖感とかを感じた？」

彼がそう尋ねた、胡桃は思い返す……………あの時、感じた感情を。

そこに、彼に対する嫌悪感や恐怖感は存在していなかった…あつたのは、あんな状況を生み出した自分への嫌悪感…そして激しい後悔の念ばかりだった。

胡桃「ううん…お前に悪い感情は抱いてないよ。」
そう答える胡桃。

「やつぱり…胡桃ちゃんならそう言うってくれるって思った。あんな僕でも、見放さずにいてくれるって…」

じつと、胡桃の目を見つめながら彼は言った。

胡桃「お前の中で、あたしは随分信頼されてるようで…」

「うん…今は胡桃ちゃんにしか、あんな姿…安心して見せられない。由紀ちゃんはある僕を見たら傷付きそうだし…美紀さんは引いちやいそう…、リーさんには…説教されそうかな？」

彼はそう言って笑う。

胡桃「ははっ…でも考えすぎだよ。由紀も美紀もリーさんも、きつとどんなお前でも受け入れてくれる。」

ポンっと、彼の肩に手を置いて、胡桃は言った。

「そっか……そうだよね…ありがとう、胡桃ちゃん。」

彼はそう言うてから、まっすぐと胡桃の目を見つめる。

「あんな奴らを殺してしまったくらいじゃ、僕は落ち込まない……だから胡桃ちゃんは気にしないで欲しいって事を伝えたかった…。僕は君達に嫌われさえしなければそれで良いから」

胡桃「…うん…嫌いになんかならないよ…あたしも、もちろん…
他のみんなもな。」

強く彼の目を見つめ返して、胡桃は答えた。

「…本当にありがとう…胡桃ちゃん。」

彼はポンッと胡桃の頭に手を置くと、もう一度その頭を撫でた。

胡桃「う…」

「…ああゴメン、頭…なれなれしく撫ですぎだね。」

そう言ってから、その手を胡桃の頭から離す。

胡桃「だな…同期年代の…しかも付き合ってもいない女の子の頭
とか、普通は撫でないだろ。」

胡桃が彼に冷たい視線を送る。

「まったくその通り…いや…反省反省。」

彼はそう言ってからゆっくりと歩きだす。

胡桃「…」

胡桃は立ち止まったまま…その背中を、静かに見つめていた。

そっか……

今……気づいた……

あたし………やっぱり………

………

胡桃「……へへっ！」

少し遅れてから、胡桃は彼の後を追う。

胡桃「ほら！急ぐぞ！！」

彼の手を握ると、それを引いて駆け出す胡桃。

「うわっ!!走るの!?!」

胡桃「走る!!」

「僕、来るときも走って来たから疲れてるんですけど!？」

胡桃 「大丈夫!がんばれ!!」

「それに怪我してる!!」

胡桃 「ぎつき自分で、そんなにひどくないって言ってただろ!」

「…まったく………つてか手冷たいよ!ちゃんと上着着てる?」

胡桃 「着てる着てる!あたしは手足が冷えやすいの!!」

「うーん…じゃあまた今度、手袋でも探そうか?」

胡桃「……うん!!」

二人は手を繋いだまま、車まで走って帰った。

胡桃「……ふう」

「ぜえ…ぜえ!ゴホツ!!ゴホツ!!」

車まで戻った時には、彼は息があがって虫の息になっていた。

胡桃「だらしないな……救急箱取ってくるから待ってろ、中だと皆起きちゃうかも知れないから…手当ては外ですけど、それで良いだろ?」

「ハア…ハア…う、うん」

胡桃は一度車内に入ると、すぐに救急箱を持ち出して、ベンチで座って待つ彼の元に戻る。

「皆は寝てた？」

胡桃「ばつちし寝てた。」

そう言っただけで胡桃は彼の横に座り、救急箱を開けると彼のシャツを脱がし、怪我を一つずつ手当てしていく。

胡桃（けっこう怪我してるな……）

彼は頭や胸や手足に、全部で六つの傷を負っていた。

その一つ一つに、胡桃は手当てを施していく。

胡桃「…終わり、お疲れ！…もうシャツ着て良いよ。」

最後の傷の手当てを終えた胡桃が、彼の背中を叩いて言った。

「どうも……ところでこの傷…皆にはなんて言おう…殆どの傷は服で隠れるから良いけど、額にあるこの傷だけは隠せないし…」

シャツを着て…額に貼られた大きめの絆創膏を触りながら、彼は言う。

胡桃「あく……そっか、どうしよ。」

「まあいいや…朝の散歩に出掛けて転んだとでも言うよ。…で、散歩ついでに近くの薬局に行ったら薬もあった！ってな感じで…。」

胡桃「すっげー無理がある！」

胡桃はそう言って笑う。

「かな？」

彼もそれにつられて笑った。

真夜中の公園、ベンチの上で笑い合う二人…

美紀「…」

それを車の窓から覗き見る美紀。

美紀（うわ!!どうしよう…胡桃先輩が棚を開ける音で起きちゃったから、どうしたのかと様子を見てみたら…）

美紀（あの二人…いつからそういう関係に…!?!）

美紀が見たのは、真夜中の公園のベンチの上、ボロボロの服を着て笑う彼と…

その彼の上着を着て笑う胡桃、それだけではない…胡桃の着ている上着、たまにその隙間から彼女の下着が見え隠れするのを美紀の目は見逃さなかった。

美紀（胡桃先輩…確か今日、寝る時はシャツ着てたよね!?!なんでそのシャツ脱いで、ブラの上そのまま…さんの上着を!?!それに…さんの服もかなり乱れてる…それってつまり…!?!）
勝手な勘違いをして、一人で顔を赤くする美紀。

美紀（だからあんなに仲良さそうなのか!?!あの二人…私達にバレないように外で…あ!戻って来た!!）

二人が車に戻ってくるのを見て、慌ててベッドに潜る美紀。

…ボタン

胡桃「あ…シャツ破かれたから別のに着替えないと…。」
車内に戻った胡桃が小声で言った。

美紀（破かれた!?!——さん…どれだけ激しくしてたんですか!!?!）
寝た振りをしながら聞き耳をたてる美紀。

胡桃「…ちよつと着替えるから後ろ向いてて。」

「分かった」

美紀（胡桃先輩、——さんと凄い事してきたハズなのに、着替えを見られるのは恥ずかしいんですね…私にはわからない世界です。）

胡桃「…もういいよ、上着…ありがとな。」

「ほいほい。」

美紀（やつぱあの上着——さんのだったんだ!…気まずい事知っちゃった!これでもう、明日からどうやって二人と話せば良いかもわからなくなった!）

胡桃「お前は着替えないの?」

「着替えるよ、だからあっち向いててよ。」

彼が冗談のつもりで言う。

胡桃「男のくせに何言ってるんだよ…大体お前、さっきあたしに裸見られてるだろ…」

この胡桃の言う裸とは、先程手当てするのにあたり、邪魔な上半身の服を脱いだ時の彼の事を言っている。

勿論、それに下半身は含まれていない。

美紀(裸を!?!…決定的な言葉を聞いてしまった! 恥ずかしくて…もう私は明日から二人の顔を見れませんよ!!)

胡桃「んじや、おやすみ。」

「おやすみ」

彼と胡桃は、一つの問題を片付けた事で安心して眠りにつく。

また一つの新たな問題が、美紀の中で生まれた事も知らずに……

美紀(…まさかあの二人が……気まずいなあ。)

同時刻…岡達のいた薬局

狭山「…あ、遅かったね。」

薬局の裏口で待っていた狭山が、目の前に現れた二人の男に言う。

???? 「途中で道に迷った…」
男が言った。

?? 「ってかこんな夜中に呼び出すなよ…眠いつての。」
もう一人の男が愚痴を漏らす。

狭山「…ごめん、この辺りの医療品を独占してた奴らを見つけたんだけど…本当にたくさん溜め込んでね…せつかくだから二人にも手伝ってもらおうかなあと思って」

?? 「お!?! そっか、やつと見付けたか!」

????? 「辺り一帯の薬局を漁って回っている奴等がいるのには気付いたが…まさかそいつらが薬局に住んでいる奴らとはな…本当に間違いないのか?」

男の一人が狭山に尋ねる。

狭山「…うん、中にある段ボール…それは別の薬局のシールが貼られていたから、まず間違いないと思うよ。」

????? 「一件ならともかく…何故辺り一帯の薬局を漁っていたんだ? そんなに医療品ばかり要らないだろうに。」

?? 「独占して、他の生存者と会った時の取引材料にでもしようと思ってたんだろ…おかげで俺達も困らされたぜ、どこのドラッグストアに行ってもほとんど空…漁られた後だったからな。」

????? 「で…相手は何人だ?」

狭山「…もういないよ」

?? 「なんだ…もう殺したのか。」

狭山「…ボクじゃなくて、別の人が。」

???? 「別の人？」

狭山「…うん。元は三人の男がいたけど、
——が来て殺していった。」

狭山が二人に彼の名を告げる。

?? 「!?」
???? 「!!」
その名を聞いて、二人の男は驚く。

?? 「あの男がここにいたのか？」

狭山「…うん」

???? 「一人だったか？」

狭山「…恵飛須沢胡桃もいたよ、多分…あれからずっと一緒にいるんじゃないかな。」

?? 「恵飛須沢胡桃…ああ、シャベル使ってた中々強い娘か。あとの奴らは?…えっと、なんて言っただけな…」

???? 「若狭悠里、丈槍由紀、直樹美紀…ちゃんと覚えておけ。」

?? 「顔は覚えてるから大丈夫だよ。」

狭山「…その三人はいなかったけど、多分一緒に行動してると思うよ。必死に解熱剤を探してたから…その中の誰かが熱でも出したんじゃないかな。」

狭山「…それであの二人がここに薬を探しに来たんだと思う。」

???? 「解熱剤を探してたなんて、よく分かるな。」

狭山「…本人から聞いた。」

?? 「話したのか!？」

狭山「…うん、——とだけね。」

???? 「なんで逃がした？」

狭山「…——は怪我してたし、恵飛須沢胡桃は見たところ精神的に弱ってた…そんな二人を相手にするのはイヤだよ。」

?? 「狭山ってそういうところあるんだよなあ…」

狭山「…あと恵飛須沢胡桃については、二人にもう一つだけ言っておこうかと思っただ事があるけど…まあいいや…次に会った時のお楽しみにしておこう、二人も多分気づくだらうし…」

?? 「ん？なんだよそれ…」

???? 「まあいいさ…まだ生きてるって分かっただけマシだ。」

?? 「そうだね、正直もう死んでるだろうって思ってたよ。」

狭山「…でも今日はもう探さないよ、ここにある医療品…ボク達三人で持てるだけ持ってたかなきゃいけないから。」

??? 「分かってる、とつとと運び出すぞ。」

三人は会話を終え、薬局の中に消えていった……

異編『ごめんなさい』

色々あったが、胡桃、そして彼は悠里の為の解熱剤を確保し、キャンプングカーの停めてある公園へとどうにか戻ってきた。このまますぐにでも眠りたいが、今の彼は少し怪我をしている…。胡桃はそれの手当てをするため、一旦自分だけが車内へと戻るが…。

バタンツ…

悠里「お帰りなさい…。こんな夜遅くに、どこへ行つてたのかしら？」

胡桃「っ!?!お、起きてたのか…?」

悠里「ついさつき、ね。さて、ちゃんと説明してくれる?」

こっそり救急箱だけを取りに来たつもりだったのだが、予想外の事が起きた。眠っていたはずの悠里、美紀、そして由紀が起きてしまっていたのだ。

胡桃「え…つと…その」

美紀「先輩…怪我してるんですか?」

目を覚ました悠里と出会い、焦りに顔色を青く染める胡桃…。そんな彼女の髪は微かに乱れており、着ているシャツもボロボロに破けていた。

胡桃「いや、あたしは大丈夫だけど…でも…」

悠里「…彼もここに呼んで」

胡桃「…ああ」

観念したように首を振り、胡桃は外で待たせておいた彼を車内へと呼び戻す。戻ってきた彼はその身にいくらか怪我を負っており、腕や頬についた傷から血を流している…。

悠里「っ……！本当に…何があったの!？」

由紀「だ、大丈夫…？」

「ああ、大丈夫…。心配いらないよ」

負った怪我は大したものではないし、何より”かれら”にやられたものではない。なので感染の心配はないと…彼は微笑むが、悠里達の表情はちつとも明るくならない。

美紀「二人とも、何をしてたんですか…？」

胡桃「いや…こいつは悪くないんだ…。全部、あたしが…。」

彼が責められる事のないよう、胡桃は彼女達に説明を始める。どうか悠里の為の解熱剤を確保するべく、自分の独断であの生存者達の元へ忍び込んだ事。そしてそれは失敗に終わり、自分が襲われそうになった時…彼が駆け付けて自分を助けてくれた事…。全てを説明した。

胡桃「……そういうことだから、本当に全部あたしの——」

悠里「胡桃っ…！あなた、自分が何をしたのか分かってるの…!!」

事情を知った悠里は胡桃のすぐ目の前まで寄り、その目を睨む。しかし、悠里もまだ本調子ではないらしく、立っているだけでもふらふらと揺れ、目にもかなりの疲れが見える。

胡桃「…………ごめん」

悠里「そんな言葉で…許せるわけっ…!!」

目を逸らしながら応えた胡桃に対し、悠里の声色が少しずつつくたつていく。いくら自分の為とはいえ、一人で勝手な行動をしたこと…。そのせいで危険な目に遭い、それに彼を巻き込んだ事が許せなかった…。

悠里「こんなの、ほっとけばすぐに治るっ!!なのになんで、そんな

危ないことをしたのっ!?分かってるの!?もし彼が来てくれなかったら、胡桃は今頃——」

胡桃「わかってるよ……。だから……。ごめんって……」

悠里「他の生存者と無駄に争って、無駄に危険な目にあって、無駄に彼を傷付けたのよ!?それだけの事をして……。ごめんで済むと思ってるの!？」

胡桃「……っ」

何か言い返そうとしたのか、胡桃の目が一瞬だけ鋭くなる。しかしすぐ、自分が言い返せるような言葉などないと気付いたのか、胡桃はまたその顔を伏せた……。

「……りーさん。胡桃ちゃんだって、悪気があったわけじゃ——」

悠里「そんなのは当たり前よ……。もし悪気があってやってたのなら、そんな人とはもう一緒にいたくないわ……」

由紀「り、りーさんっ……」

悠里「……美紀さん、この人の手当てを頼める?」

美紀「あっ……はい……」

深いため息をつき、悠里は彼の事を美紀に任せる。美紀はすぐに救急箱を取り出し、彼を席へと座らせながら手当てをしていった。この際もまだ、胡桃と悠里は立ったまま向かい合っている……。

悠里「……反省して」

胡桃「……ああ」

消え入りそうな声で応え、胡桃は車両の後方へとトボトボと歩いていく。その後、彼女は車内に彼がいるのも気にせず破けた服を脱ぎ、着替えを始めた。誰かが着替える際、いつもなら彼を車外へと出すのだが、今回は誰もそうしようとしめない……。しかし彼もまた、今の場の空気が分かっている為……胡桃の着替えが終わるまでは目を背けていた。

悠里「怪我、大丈夫…?」

「あ……はい。大丈夫です」

美紀に手当てしてもらっている彼の向かいにある席へとつき、悠里はまたしてもため息をつく…。胡桃はもう着替えを終え、シーツにくるまり無言のまま寢床に横たわっていた…。

悠里「……ごめんなさいね。胡桃が迷惑をかけちゃって…」

「いや…別に」

悠里「あの娘、前からそうなの…。何かあると一人でムチャして、心配ばかりかけて……。ほんと、頭が痛くなっちゃう…」

それは熱のせいじゃないだろうか…などと言いたくなる彼だったが、グツと堪えて口を塞ぐ。しかし、悠里の言いたいことも理解は出来る。彼女は彼女で本当に胡桃の事が大事だからこそ、あれだけ怒っていたのだろう。

由紀「あの…胡桃ちゃん達が取ってきてくれたお薬、飲む?」

悠里「…いらないわ。せつかくだけど、そんなの使う気になれないの」

由紀「あ…う……」

「りーさんも意地っ張りですね」

悠里「ええ、そうよ。私は意地っ張りで頑固で性悪で——」

熱のせいなのか、はたまた機嫌が悪いのか…悠里は自虐的な言葉をペラペラと口に出し続ける。たった一言『意地っ張り』と言っただけでこんなになるとは思わず彼は焦り、美紀と由紀も苦笑いしていた…。

「そこまで言っていないでしょ…」

悠里「……そうね、ごめんなさい。少し、イライラしちゃって…」

そう答えた直後、悠里は目の前のテーブルにガクツと顔を伏せる。具合が悪い時に色々な事が起きてしまい、まだ落ち着いて状況の整理が出来ていないようだ。

悠里「…あなたは…胡桃にガツカリしなかった？」

「まあ…少し勝手が過ぎるかなとは思いましたが、ガツカリとまでは…」

悠里「そう…優しいのね」

彼はテーブルに顔を伏せたままの悠里と会話をしつつ、寝床にいる胡桃の事を見つめる。確かに今回の胡桃は少しばかり自分勝手な行動をしてしまったが、それが悠里の為なのだと思うと怒る気になれない…。

美紀「…はい、終わりましたよ」

「ああ、どうもです…」

彼への手当てが済み、美紀は救急箱を片付ける。夜中に起きたからだろう…彼女と由紀の目はまだ眠たげだ。

悠里「二人とも、もう寝てていいわよ…。ごめんなさいね、付き合わせちゃって。私ももう少ししたら寝るから」

美紀「はい…お休みなさいです」

由紀「…おやすみ」

あくび混じりに返事を返し、二人も寝床へと向かう。そんな中で悠里は彼と向かい合って席についたまま、そつと目を見つめあった…。

悠里「私…胡桃に言い過ぎたと思う？」

「どうでしょう…。なんとも言えないですね」

悠里「…私は、もう少しキツク言っても良かったと思ってるくらいだわ。だって、本当にそれだけの間違いを冒おかしたのだから」

「……………」

悠里「でも、矛盾むじはんしてるけど…言い過ぎたかなあとも思っている

の。あなたが言ったとおり、胡桃だって悪気があったわけじゃない。全部、私の為にと思つての行動だもの…。そう思うと、なんか胸が苦しくなっちゃって…」

伏せていた顔を静かに動かし、悠里は寢床にいる胡桃の事を見つめる…。その目は説教していた時のように鋭いものではなく、微かに涙ぐんでいるものだった。

悠里「私が体調を崩さなければ、胡桃はこんな嫌な思いをしなかったのに…。ダメね…体調管理はしっかりしないと…」

「いくらしっかりしようと、崩れるときは崩れますよ」

悠里「ふふっ…そうね…。さて、私たちも寝ましようか？」

「はい、そうですね」

車内の明かりを消し、二人もそれぞれの寢床へとつく。と言つても、彼の寢床はテーブル前の座席なので移動する必要はなく、そのまま顔を伏せるだけなのだ…。

(はあ……疲れた)

そばにあったシートを羽織り、テーブルに顔を伏せて眠りの姿勢に入る。この短時間の間に結構な事をしてきた為、彼も疲れていたのだろう…。伏せて数分の間に、眠りについてしまった。しかしその一方、悠里は中々寝付ける事が出来なかった。恐らく、胸の内がモヤモヤとしているからなのだろう…。

悠里「……はあ」

このままだと朝まで寝付けないかも知れない。仕方ないと思つた悠里はそつと寢床から起き上がると、自分の抱えるモヤモヤとした気持ちを晴らすべく、胡桃の寢床へと寄る…。

悠里「…胡桃、起きてる？」

そつと身を屈め、シート越しに彼女の身を揺らす。するとそのシーツの一部が捲れ、胡桃は振り向いてこちらへ視線を向けた。どうやら、胡桃も寝付けずにいたらしい。

胡桃「……起きてるよ」

悠里「そう…よかった」

悠里はニツコリと微笑んだ後、横たわる胡桃と視線を合わせるようにしてその場に座る。胡桃はまださっきの説教を気にしているらしく、悠里の事をチラチラと見つめていた…。

悠里「胡桃があんな事をしたのは…私のせいよね…。ごめんなさい」

胡桃「っ…違うよ…。あたしが勝手にやった事だ…」

悠里「うん。でも、それって私の為にしてくれた事なんですよ？なら、やっぱり私の責任よ。私が、体調を崩さなければ…」

胡桃「そんな…りーさんは悪くないよ…。全部、あたしのせいだから…」

胡桃は慌てて起き上がり、首を横に振る。全部自分の責任なのに、何も悪くない悠里が責任を感じているのが嫌だった…。

悠里「なら、もう心配かけたりしないで…。今回は彼がいたからどうにかあったけど、もし…胡桃の身に何かあったら…皆が悲しむの。彼も、美紀さんも由紀ちゃんも…もちろん、私もね？」

胡桃「…うん」

悠里「だからもう、こんな事は二度としないで…。私なら大丈夫。こんなのすぐに治るから…。だから…」

優しい笑顔を浮かべ、悠里は胡桃の肩に両手を回す。そうして静かに彼女を引き寄せると、そのままギュツ…と抱き付き、相手の肩に顔を埋めた…。

悠里「心配かけて…ごめんなさいね」

胡桃「そ…んな…。あたしの方こそ…ごめん…」

胡桃の方からも手を回し、悠里を抱き締める。自分はひたすら責められてもおかしくない事をしてしまったのに、こうして自分の事を優しく抱き締めてくれた悠里の気持ちがとても嬉しくて…暖かった。

悠里「また、彼にも謝っておきなさいね…。彼がいなかったら、本当に危なかったんでしょ？」

胡桃「うん…。また明日、謝っておく…」

悠里「…よろしい。じゃ、今度こそ寝ましようか。おやすみ、胡桃」

胡桃「…うん。リーさん、ありがとう」

悠里「…ふふっ」

優しく微笑み、悠里は自分の寢床へと戻る。互いに話し合った事で胸のモヤモヤは消えたらしく、悠里も胡桃も、その後すぐに眠る事が出来た。そして翌朝…悠里の体調がいくらか良くなっていたので安心する一同だったが、他に嬉しいことがもう一つ…。悠里と胡桃がまた、仲良く会話するようになっていた事だ…。

三十六話『かんちがい』

翌朝の車内：まだ悠里達は眠っている中、彼はそつと目を開き、静かに立ち上がった。窓の外は少しだけ明るくなり始めている：恐らく、時間は5〜6時前後だろう。

(よし：まだ皆は寝てるな)

彼は辺りを見回して皆が眠っている事を確認すると、椅子から立ち上がり：静かに胡桃のベッドの前に移動する。そうした後、彼は眠る胡桃の肩をそつと叩いた。

…トントン

胡桃「……ん、…どした？」

「散歩行ってくる、胡桃ちゃんには言っておこうと思って…」

胡桃「散歩…？」

普段、彼は朝の散歩などには行かない。

そんな彼が何故急に散歩などに出かけるのかと胡桃は不思議に思うが、すぐにそれが深夜の戦いで負った傷の言い訳作りの為だと気付いた。

胡桃「ああ：なるほどね、ほんとに行くんだ」

胡桃(そう言えば夜中、どうやってこの傷をこまかそうかという話になった時：『散歩に行つて転んだ事にする』…とか言ってたっけ)

「うん、すぐ戻るよ」

胡桃「夜中にあれだけ動いたんだから疲れてるだろ？だから、行つ

たふりで良いんじゃない？あたしが話合わせるからさ……」
「ううん……もう眠気も覚めちゃったから、運動ついでに行ってくるよ。」

胡桃「そつか……分かった、あたしもついてこうか？」

ベッドから上半身を起こし、彼に同行しようとする。しかし彼はニツコリと微笑み、その首を横へと振る。

「大丈夫、胡桃ちゃんは休んでよ」

胡桃「……じゃあそうする、気を付けろよ」

彼は胡桃のその言葉に微笑みを返し、静かに車を降りていった。

胡桃「……ふう」

彼が出て行つてのを見届けてから、胡桃は布団をかけ直して寝直そうとする。……しかし、横になって目を閉じたところでちっとも眠くならない……。どうやら、眠気が覚めてしまったらしい。

胡桃（ダメだ……あたしも眠気が覚めた）

バツ！

胡桃はベッドから起き上がり、テーブルについて彼の帰りと皆の目覚めを待つ。実はこの時、既にもう一人起きていたのだが……胡桃も彼も気付いていなかった。

美紀「……」

美紀（——さんと胡桃先輩の事を考えていたら、いつの間にか朝になつたみたい…）

窓の外が明るくなっている事を布団の中から美紀は確認する、驚く事に彼女はあれからずっと起きていた。

美紀（あの二人…さつきも何か喋ってたなあ、——さんは散歩がどうとか言ってたから、朝の散歩にでも行つたのかな？で…それを胡桃先輩にだけ報告した。）

美紀（それよりも私が気になるのは胡桃先輩の『夜中にあれだけ動いたんだから』ってセリフ…これで夜中のアレは私の見た夢って可能性は無くなつた…。やっぱりあれは現実なんだ）

美紀（『あれだけ動いた』って…つまり…：そういう事だよ…：うわあ〜！）

その様子を想像した美紀は枕に顔を埋めて、一人で顔を赤くさせながらバタバタと足を動かす。無意識に動かしてしまったその足の動きはかなり目立ち、彼女が起きていることはあっさりと胡桃にバレた。

胡桃「…美紀、起きてるのか？」

美紀「うっ!?!…あ…：はいっ」

胡桃「うなされてたぞ、大丈夫か？」

別にうなされていた訳ではないのだが、まああれだけ足をばたつかせていたらそうも見えるだろう…。美紀は心配そうな表情をしてこちらへと駆け寄る胡桃の顔を直視出来ず、そっと目を逸らした…。

美紀「あの…：大丈夫です…：ちよつと悪い夢を見ちゃって」

胡桃「…そっか」

美紀「…：夢だったら良かったんですが」ボソツ

胡桃「なんか言った？」

美紀「いえ：何も」

何だか気まずいが、起きているとバレたからには仕方ない。美紀はそつとベッドから起き上がり、胡桃と共に席へとつくことにした。

美紀「……………」

胡桃「……………」

美紀「……………」

謎の沈黙が続く中、胡桃が口を開く。

胡桃「…そろそろ由紀のヤツも起こすか」

美紀「!!：はい！そうですね！起こしてきます!!」

由紀ならこの気まずい状況を打破出来ると思った美紀はその提案に食い付く。

胡桃「?：ああ、じゃあ頼むよ。」

美紀「由紀先輩！朝ですよ！起きてください!!」

やはり、胡桃と二人だけなのは気まずい。しかし由紀がいれば…由紀がいればこの気まずさも少しはマシになる。一刻も早く彼女が起きるよう、美紀は必要以上に強く由紀の肩を揺さぶった。

由紀「…わわっ!!：みーくん何？」

美紀「朝ですよ!!」

由紀「え?…うん、朝だね」

やたらと必死な美紀に疑問を抱きつつも、由紀は起きる事にした。

美紀「はあ…」

美紀（とりあえず由紀先輩がいれば会話には困らないはず…）
ため息をついてから安堵する美紀。

由紀「あれ、——くんはトイレ？」

美紀「散歩に出掛けましたよ」

由紀「へえ、珍しいね」

胡桃「ん?あたし、あいつが散歩に行ったこと美紀に言ったっけ?」
この瞬間、美紀は自分がミスを犯した事に気が付く…。起きたタイミング的に、美紀は彼が散歩に行った事など知るはずがないのだ。

美紀（しまったあ!!!）

美紀「いや…あの…:寝てる時に——さんの声だけ夢の中で聞いて
て…それで…」

冷や汗をかきながら美紀は答える。

胡桃「ああ、そう。」

だが、胡桃はそれで納得してくれたようだ。

美紀（危ない危ない…あの時自分が寝たふりしていた事を忘れてた
…）

美紀は自分の高まった鼓動を抑える為に、二人に気づかれぬように

そつと深呼吸をした。

由紀「私も散歩行きたかったなあ……」——くん、声かけてくれれば良かったのに。」

テーブルに突っ伏しながらそう言つて、由紀は深いため息をつく。彼が車のドアを開き、散歩から戻ってきたのはその直後だった。

「お……皆さん起きてますね。」

そう言いながら彼は胡桃の隣に座る、勿論ただ空いていたから座つただけで深い意味は無い

……だが美紀だけはそう思つてはいなかった。

美紀（隣に！隣につ!!）

目をキョロキョロと泳がせる美紀……そんな彼女を気にせずに、由紀は彼の頭の絆創膏を見て言った。

由紀「——くん頭のそれどうしたの？」

「散歩中に転んじやつて……たまたま近くにあつた薬局で絆創膏を見付けたので貼りました。しかも………ホラ!!」

彼は自慢気にポケットから解熱剤を取り出す、夜中の内に予めしまつておいた物だ。

由紀「すごいすごい！見付けたんだく!!」

由紀はそれを手に取り、笑顔を見せる。

胡桃「お……散歩に行つて良かったなあ。」

胡桃もそれを見つめながら言う、その発言が僅かに棒読みな事には誰も気付いていない。

美紀「良かった！これでリーさんも元気になりますね!!」
さすがの美紀も彼の思いもよらぬ土産には喜び、思わず彼の顔を見る。

美紀「う!!」

だがその顔を見た瞬間、深夜に見たあの光景を思い返ししまい…堪えきれずに目を逸らす。

「どうかしましたか、美紀さん?」

違和感を感じた彼が尋ねる。

美紀「いえ…何も…。」

美紀はそれに下を向いたまま答えた。

由紀「これ、リーさんに飲ませて良い?」

「食後に飲むタイプなので、朝食を済ませてからにしましょう…まずはそのリーさんを起こしてきてくれますか?」

彼が由紀に言う。

由紀「は〜い!」

元気の良い返事をしてから由紀は悠里の眠るベッドへと駆け寄り、悠里を起こすと彼が薬を見つけてきた事を嬉しそうに話した。

悠里「おはよう、みんな」

悠里が皆のもとにゆつくりと歩み寄って挨拶をする。
全員が挨拶を返した後、彼が立ち上がって悠里を胡桃の隣に座らせた。

悠里「――君ありがとう…薬も見つけてきてくれたらしいわね、散歩中に見つけたって本当？」

「ええ、運が良かったです。」

由紀「けどね、これ食後なんだって。…だから胡桃ちゃん！早くごはんを!!」

キツと強く胡桃を見つめながら由紀は言った。

胡桃「偉そうに…って言いたいところだが、りーさんの為に準備するか！」

美紀「私も手伝います。」

胡桃と美紀は手早く朝食の準備を終え、皆でその朝食を食べる…悠里は相変わらず体調は良くないようだが、食事は前日よりもしっかりと食べていた。

その朝食を終えた後で由紀が悠里に薬を渡し、飲んだ後…悠里は由紀にベッドまで強引に押されて行って横になった。

悠里「起きてばっかなんだから、まだ眠れないわよ。」

悠里がそう言うのを気にもせず、由紀は悠里の体に布団をかける。

由紀「ダメだよ、ちゃんと横になってないと！別に無理して寝なくても良いから、とりあえず横になって!!」

由紀はぴつたりと悠里に付き添う。

そんな由紀を、悠里はにこやかな表情で眺めていた。

美紀「あれ……さん、いませんね？」

食事の片付けを胡桃と二人で終えた後、車内を見回してから美紀は言った。

胡桃「ほんとだな……美紀、外にいるか見てきてくれるか？」

美紀「あ………はい。」

胡桃にそう言われた美紀は、ドアを開けて外に出る。

「うおっ！どうしました？」

外に出た直後、そのドアの真横……車に寄りかかっていた彼を見つけた。

不意に美紀が現れた事に対してやけに慌てており、服をただして何かを隠したようにも見えた。

美紀「中にいなかったから外にいるのかと思って………何してるんですか？」

「何にも？」

口ではそう言っている彼だが、美紀はそれを不審に思う……彼が先程服を捲って何かを確認していたような気がしたからだ。

美紀「なんでシャツ捲ってたんですか？」

直球でそれを問う美紀。

「え!?!…いや、そんな事してませんよ?」
あきらかに彼は動揺している。
そんな彼を見た美紀の中で一つの疑惑が生まれる。

美紀（まさか…：散歩中に噛まれたんじゃない?）
そう思った美紀は、彼のシャツを捲ろうと手を伸ばす。

「っ!!」
彼はその手を後ろに飛び退いてかわした。

美紀「なんで避けるんですか!?!」
手を避けられた事でますます怪しいと思う美紀。

「いきなり服を捲られそうになったらそりや避けるでしょ!美紀さんは僕がいきなり服を捲ろうとしてきても避けないんですか!!」
彼が必死な顔で言う。

美紀「避けるに決まってるでしょう!?!そういう事は胡桃先輩にだけやって下さい!!」
感情が高まったせいで、美紀は余計な事を口走る。

「胡桃ちゃん?出来ないですよ!怖いもん!!」
一瞬『やってしまった!』…と美紀は思ったが…もう少しそれを掘り下げてみる事にした。

美紀「胡桃先輩ですよ？シャツ…捲ってみたいなあ〜とか思いませんか？」

「いやいや…思わなくはないけど、出来ませんって！」

美紀「思わなくはないんですね!？」

「そりゃ男ですからね!!」

美紀「胡桃先輩が相手だからでしょう!!？」

「あなたは何を言ってるんですか!？」

「こんなに必死な…かつ、意味不明な言動をする美紀は見たことがない。さすがの彼も普段とはまるで様子の違う美紀にはかなり戸惑ってしまい、額に嫌な汗をかいてしまう…。」

美紀「気まずい気持ちを押し殺してまで聞いたのに…、まだシラを切りますか…!」

「因みに言わせてもらうと…シャツも年がら年中、捲りたいなくとか思ってる訳じゃありませんからね!それじゃ完全に危ない人だ」

彼は先程の自分の発言のフォローに走る。美紀は気付いていなかった…自分が探っているのがいつの間にか、彼がシャツの下に何を隠しているのか?ではなく…彼と胡桃はそういう関係なのか?に変わっている事に…。

美紀「…：…：…：そういえば——さんはシャツを捲る派ではなく…：破る派でしたね。」

「あの〜…：本当にどうしたんですか?訳の分からない事ばかり言ってます。」

訳の分からない言動ばかり…。彼は一周回って美紀の事が心配に

なっていた。

バタン！

胡桃「おいおい……中まで声が聞こえてきたぜ？何話してんだよ？」
二人の声を聞きつけ、胡桃が車から降りてくる。彼はすかさず彼女の元へ歩み寄り、再び美紀の方を見つめた。

「胡桃ちゃん、美紀さんが意味不明な……」

美紀「昨晚……二人の事、見ちゃったんです……二人はその……したんですよね？」

胡桃「……したって……何を？」

まだ何を見られたのかは分からないが、もしかしたら……。嫌な予感を感じた胡桃は真剣そうな表情を浮かべ、美紀の目を真っ直ぐに見つめる。

美紀「言葉にするのとはばかられる行為です……私に言わせる気ですか？」

(もしかして……あいつらを殺したのを見られてたのか？あの時、美紀さんはいなかったと思っていたのに……胡桃ちゃんを追ってあそこに行ったのは、僕だけじゃなかった、美紀さんも来ていたのか)
彼は美紀の言う『行為』を、岡達を殺した事だと勘違いした。

胡桃(あたし達が車に戻った時は普通に寝ていたはず……だから恐ら

くこいつの後に美紀も遅れてあたしを助けに来た…だけどちようどこいつがあいつらを殺すのを見て…それがショックで引き返した…あまり考えたくはないけど、多分そういう事か…)

同じく、胡桃も勘違い。

「…見てたんですね」

彼が真剣な表情で言う。

美紀「…はい」

胡桃「美紀、こいつは悪くない…。悪いのは、あたしなんだ…」

美紀「別に…悪い事とは思っていません。ただリーさんが苦しんでいるのに、隠れてこそそそとそんな事をしているなんて…少し二人を見損ないました。」

そう言つて美紀は二人に背を向ける。

胡桃「ごめん…でもあたしだって、リーさんの事が心配で仕方なかったからやったんだ。」

美紀「リーさんの事を心配してなんでそれになるんですか!!」

二人の方に振り返つて、美紀は頬を赤くしながら怒鳴る。それもそうだ。美紀の方からすれば、この二人は夜中に外に出てイチャイチャとしていた…と宣言したようなものなのだから。

胡桃「??…ご、ごめん」

会話に違和感を感じながらも、美紀の迫力が凄いのでとりあえず胡桃は謝る。

美紀「……いつからですか？」
僅かな沈黙の後、美紀が二人に尋ねる。

——・胡桃「え??」

二人共その質問の意味が理解できずに、同時に聞き返した。

美紀「っ!…:ですから、二人はいつからそういう事をしているのかと聞いているんです!!」

胡桃「そういう事って?」ボソツ
小さい声で彼に耳打ちする胡桃。

「多分、隠れて二人だけで行動した事かな…:」ボソツ
彼が胡桃にそう言葉を返すと、胡桃はなるほど…:というような表情をしてから美紀に言った。

胡桃「いつからもなにも…:夜中にお前が見たあの一回だけだよ」

美紀「そうですか…:」

美紀「まあ正確に言えば私も二人のを全て見た訳ではないんですが…:」ボソツ
美紀がうつむきながら呟く。

胡桃「さつきも言ったけど…:全部あたしが悪いんだ、こいつはあたしのわがままに巻き込まれただけなんだよ。」

胡桃はそう言つて彼を庇^{かば}う。

美紀（つまり…胡桃先輩の方から誘つたんだ。先輩…中々積極的だな）

そんな事を頭で考え、美紀はまた頬を赤く染める。

「すいません…やっぱりショックでしたか？」

自分が人殺しをしたところを美紀に見られたと思つた彼は尋ねた。

美紀「いや…ある意味ショックでしたけど、もう受け入れましたよ」
美紀は深くため息をついてから言つた。

「そうですか…」

その言葉を聞いた彼は安心する。

胡桃「ほら…言つたら、みんな受け入れてくれるって」
そんな彼を見て、笑顔になる胡桃。

美紀「…まあ今はりーさんの体調が悪いですし、それに加えてこんな世界…私達には様々な問題がこれからも降りかかってくるはずです。」

場の空気を変えるように美紀は言つた。

胡桃「まあ…そうだろうな。」

「おっしやる通りで…」

美紀「ですから二人とも仲良くするのは良いですが…その…その…気を付けて下さいね？」

美紀はもじもじと落ち着かない様子で二人に言う。

「え？」

胡桃「何を？」

美紀「ですからっ！……その…先輩達二人にそういう事をするな、とまでは言いませんが……んだけは…」ボソツ

胡桃「なんだよ、ハッキリ言ってくれていいぞ？」

小声でボソボソと喋る美紀に胡桃がそう言う。胡桃のその言葉を聞いた美紀は一度深呼吸をすると、より一層顔を真っ赤にして一つの言葉を発する…美紀のその言葉に彼と胡桃は耳を疑った。

美紀「だから！……妊娠だけはしないように注意して下さい!!!」

「ん？」

胡桃「へ？」

またしても同時に聞き返す二人。

美紀「当たり前でしょう！今子供を作られても面倒をみきれません

し、大体私達だけでは出産や子育てに対する知識が…」

胡桃「お前……マジで何言ってるの??」

そう言って赤い顔でペラペラと喋る美紀を止める胡桃。

美紀「何って…妊娠しないようにと注意を…」

胡桃「ごめん……妊娠って、誰が誰の子供を??」

胡桃は嫌な予感がしていたが、一応確認をする為に美紀に問いかけた。

美紀「だから…胡桃先輩が——さんとの子供を妊娠しないようにと

!!」

美紀は半分怒りながら言った。

胡桃「はあ!!!??」

とてつもない!大声を出す胡桃。

バタン!

由紀「胡桃ちゃん声大きいよ!!これじゃあ、りーさんが眠れないよ

!!」

車のドアを勢いよく開いて現れた由紀が胡桃に文句を言う。

胡桃「……………」

だが胡桃は顔を真っ赤にしたまま、ピクリとも動かない。

由紀「んん〜?」

由紀はそんな胡桃を不思議そうに見つめる。

「ごめんね由紀ちゃん、こっちは大丈夫だからりーさんのところに戻ってて?」

彼がそう言つて由紀を車内に戻そうとする。

由紀「??う〜ん…わかった…、胡桃ちゃん!もう大声出さないですよ!!」

由紀は胡桃にそれだけを言つて車内に戻つていった。

「ふう…」

胡桃「いやいや!!なんでお前はそんなに落ち着いてんだよ!?!」

胡桃が彼に言った。

「途中から少しおかしいとは思つてたんだよな…:美紀さんなんか勘

違いしてませんか？」

美紀「え？」

胡桃「何がどうなってあたしがこいつの子供を妊娠すんだよ!!!」
彼を指差しながら言う胡桃。

美紀「だって…私見ましたよ？夜中外で仲良さそうにしてる二人を！…しかも胡桃先輩は——さんの上着を着てましたし!!」

胡桃「あれは…!!」

誤解を解こうとする胡桃を遮るように美紀は喋り続ける。

美紀「しかもその上着の下はブラでした!!それってシャツは——さんに破かれたからですよね!?それに車の中に戻った時に胡桃先輩も——さんの裸を見たとかなんとか言ってるの聞きましたし!」

「あ〜〜…」

美紀の発言を聞き、彼の中で全てが繋がった。

胡桃「ううっ!!」

胡桃は反論するのも忘れ、顔を真っ赤にしながら黙りこんでいる。

「仕方ない…美紀さん、説明します。」

落ち着いて喋れなさそうな胡桃に代わり、彼があその夜に起こった全てを説明した。

胡桃が一人で奴等の所に忍び込み薬を取ってこようとしたが失敗した事：

間一髪の中で彼が胡桃も元へ駆け付け、奴等を殺した事：

美紀が見たのは、その際に彼が負った傷を胡桃が手当てしていた光景だったという事：

美紀「くくくつ!!」

事情を説明された美紀の顔がまたしても赤くなっていく…その赤さは過去最高レベルだった。

美紀「ちよつと待って下さい！じゃあさつきシャツを捲って見てたのって…」

思い付いたように、美紀は彼に尋ねる。

「はい、夜中に負った傷の調子を確認してただけです。」

そう言って彼は自分のシャツを捲り腹部に貼られたガーゼを見せる、夜中に胡桃が手当てをした時の物だろう。

美紀「てつきり噛まれたのかと……
それを見ながら美紀は眩く。」

「すいません……この傷見られたら夜中の事がバレてしまうので、こそ
こそと外で確認していました。」

彼が捲った服を正しながら言う。

美紀「私……一人で馬鹿みたいな勘違いを……！恥ずかしい……！！」
美紀は顔を手で覆ってその場に座り込む。

胡桃「まったく……どんな勘違いだよ。」

少し落ち着いた胡桃が美紀に言った。

「理解してくれました？」

美紀「はい……お二人共大変だったんですね……と言いたいところで
すが、私はさつきまでの自分が恥ずかし過ぎてそれどころではありま
せん……」

そつと立ち上がる美紀。

美紀「あ……りーさんと由紀先輩には黙っておきますね。」

胡桃「うん、ありがとな。」

美紀「…では、先に戻ってます」

勘違いした事がよほど恥ずかしかったのか、美紀は足早に戻っていった。

胡桃「……………」

「……………」

その背中を見送った後、残った二人は黙りこむ。

胡桃「…ま！とりあえずは正直に話しても怒られなくてよかったよ。」

胸を撫で下ろす胡桃。

「そうだね、僕も安心した。」

胡桃「にしても…お前とあたしがそんな関係じゃない事くらい、すぐに気付きそうだけどな?」

彼にそう言う胡桃。

「そうかな? 僕達、結構仲良くしてるから…見ようによつてはカップルに見えるかもよ」

胡桃「え!? マジか…」

彼の発言に胡桃は動揺する。

「まあ、胡桃ちゃんは僕が彼氏じゃ嫌だよね」

笑いながら彼が胡桃に尋ねる。

胡桃「…ああ、嫌だ。」

その問いにキツパリと答える胡桃。

「そこまでハッキリと言うとは…嘘でも良いから、そんな事ないって言っただけよ。」

彼が僅かに落ち込む。

胡桃「わかったわかった…そんな事ない、そんな事ない…ほらこれで満足だろ？あたし達も中に戻るぞ。」

そう言っつて彼の背中をポンツと叩き、胡桃は車内に戻る。

「感情が全然込もってなかったけど…まあ良いか。」

彼も胡桃に続く。

胡桃（本当は嫌じゃないけど……そんな事…恥ずかしくて言えないし、言ったら言ったで…コイツ調子に乗るからな…）

チラツと彼の顔を覗きながら、胡桃は思った。

三十七話『おやく』

美紀の誤解を解いた後、彼と胡桃も車内に戻った。

彼女は薬を飲んだ悠里と、そして連日薬を探して疲労していた自分達を休ませる為に、その日は移動せず同じ場所にとどまって一夜を明かした。

そして翌日の車内。彼女達四人が見つめるのは…倒れたままピクリとも動かない彼の姿だった…。

美紀「こんな事になるなんて…」

悠里「もし…起き上がった時にまた正気を失ってたら…」

胡桃「そうなってたら…殺すしかないな…」

由紀「そんな…」

何故こんな悲劇が起きたのか…時は十分程^{さかのぼ}遡る…。

由紀「起きて〜！朝ですよ〜！」ブンブン！

耳元で大声をあげ、由紀は容赦無く彼の肩を揺さぶる。そこまでされて起きないはずもなく、彼は目を覚ますやいなや迷惑そうな顔を見せた。

「うおっ！…起きました！起きたからそれ止めてっ！脳まで揺さぶられる！」

由紀「えへへ、ごめんね。——くんはこんくらいやらないと起きないって言うから…」

彼は「誰が言った？」と尋ねようと思ったが、笑顔で謝る由紀の後ろで胡桃がニヤニヤしてるのを見てすぐに気付く。

「犯人はあんたか…」

胡桃「ああ、だってお前…普通に叩いたりしたくらいじゃ全然起きないんだもん。」

「…由紀ちゃん、次からは別の方法で起こして」

由紀「良いけど…どうやって起こせば良いの？」

少なくとも、今のような起こされ方はもう経験したくない。出来るならもつと静かで…それでいて目の覚めるやつ…。彼は十数秒考え、一つの答えを出した。

「キスで起こして下さい。これなら一発で起きる自信があります！」

由紀「えっ?!私が？」

少し興奮気味な様子で放たれた彼の言葉に由紀は戸惑い、その頬を赤らめる。その表情がまた可愛らしく見えてしまい、彼は更なる発言を重ねる。

「そうです。勿論…口にお願いしますよ」

由紀の後ろで冷やかな軽蔑の表情を送る胡桃を物ともせずには彼は言い続けた。

由紀「えつと…：…がんばってみるけど…無理そうだったら他の人に代わってもらうかも、それでも良い？」

少し考えてから由紀が答える。彼自身もこの発言には引かれると思っていたので、由紀の見せた反応は予想外だった。

「いやいや…ダメだろ、こんなムチャなお願いはハッキリと断らないと！まったく、由紀は人に嫌と言えない性格だからなあ…お父さんは心配だよ!!」

彼が突然父親キャラになる、これには由紀は勿論…胡桃も苦笑いだ。

由紀「ご、ごめん…：パパ」

彼に合わせ、とりあえず娘を演じる由紀。彼女の娘っぷりときたら咄嗟の演技とは思えないほど様になっており、彼はその衝撃に頭を伏せた。

「っっ!!？」

由紀「パっ、パパ！どうしたの!？」

彼の背に手を当てながら、由紀は心配する演技をする。彼は伏せた顔を静かに上げてから彼女の顔を見つめ、弱々しい声で囁いた。

「…大丈夫、なんでもないよ。ただ由紀にパパと呼ばれて少し興奮しただけさ。」

胡桃「変態オヤジじゃねえか」

冷たい目をしたまま彼を見つめ、胡桃が言う。その発言を聞いた彼はその目線を一瞬だけ由紀から胡桃へと移し、小さな声で呟いた。

「…可愛い気の無い不良娘め」ボソツ

胡桃「ぐっ！コイツ…」

呟いた彼は相変わらず由紀にのみデレデレとしており、その様子がやけに腹ただしい。胡桃は怒りに任せて彼を殴ろうかと思っただが、それよりも良い方法を思いつき、それを実行する事にした。

胡桃「……」トコトコ

「??」

胡桃「由紀、ちょっと代わって。」

由紀「うん…？わかった」

胡桃は彼の横に立つ由紀と位置を代わってもらうと、じつと椅子に座ったままの彼を見つめる。

「???

そしてその場に膝をつき彼を見上げる姿勢になると、そつと彼の左手を自らの両手で握り…目を潤ませ、上目遣いで言った。

胡桃「パパ…ごめんね、胡桃…これからはちゃんと良い子にするから…：キライにならないで？」

「!? ～ツ!!!」

そもそも、胡桃の甘えるような上目づかい自体がかなり珍しい。それに加えてこの台詞だ。今の彼がそれに耐えられる訳もなく、彼は奇声をあげながらテーブルに倒れこみ、ピクピクと震えていた。

由紀「おおくっ！胡桃ちゃんスゴい!!今のスゴく可愛かったよ!!」
目をキラキラさせながら由紀は興奮する。

胡桃「そう?へへへ…自分の事を『あたし』じゃなく『胡桃』って言うのがポイントだな!…少しだけハズかったけど、コイツに一泡吹かせたし、まあ良しとすつか!!」

満足気な胡桃の後ろで、そつとドアが開く。

悠里「……………」

美紀「先輩達…何してるんですか？」

胡桃「へ？」

振り返る胡桃、そこには悠里と美紀が呆れた表情をしながら立っていた。

早朝、調子が良くなつた悠里が久々に外に出たいと言つたので、美紀が付き添って少しだけ散歩に出ていたが、ちょうど今帰つたようだ。

胡桃「あ…いや、その…これは違くて！」

悠里「由紀ちゃん、説明できる？」

由紀の側に歩み寄り、ニツコリ笑顔で優しく尋ねる悠里。さすがの由紀も、これは気まずそうに答えた。

由紀「えつと…そのく、少しだけ父娘おやこごっこしてたの…。」

美紀「父娘ごっこって…なんかいかかわしい響きですね。」

そう呟き、美紀は苦笑いする。一方で悠里はテーブルの上に顔を伏せる彼の方へと寄り、心配そうな表情を向けた。

悠里「…君、大丈夫？」

「可愛い娘に囲まれて…パパは幸せだよ」

その言葉は悠里に向けられたものではない…。よく見ると彼はとても虚ろな目をしており、半分気を失っているようだった。

悠里「胡桃…」

胡桃「そのく…ちよつとばかり調子に乗っちゃって…可愛い娘の演技を…」

悠里と目を合わせず、恥ずかしそうに胡桃は答えた。それに対し、悠里は呆れたようにため息をつく。

悠里「はあ…：まったく、バカな事して」

美紀「驚きましたよ、散歩から戻ったら胡桃先輩が——さんの手を握ってパパとか言ってるんですもん」

胡桃「…そこ見られてたのかよ」

悠里「ええ、見てたわ、胡桃…：意外と演技力あるのね、とても可愛かったわよ」

美紀「可愛かったですね、特に自分の事を胡桃って言う辺りが最高です…：女の私もときめきました」

悠里と美紀は口ではそう言っていたが、その顔は胡桃を見ながらニヤニヤと小バカにするような笑みを浮かべている。彼女達の冷やかかすような言動を聞いていたら自分の行動がやけに恥ずかしく思えてしまい、胡桃は顔を真っ赤に染めた。

胡桃「うう、もうヤダ…：死にたい…」

二人に冷やかされた胡桃はその場でしゃがみ、顔を両手で覆って隠す。すると胡桃の『死にたい』に反応して正気(?)を取り戻したのか、相変わらずの父親キャラで彼が胡桃に言った。

「…ハッ！胡桃…：死にたいとか言っちゃダメだ！悩みがあるならパパに相談しろ！」

胡桃「うるせえ！元はといえば急に父親キャラになったお前のせいだろ!!」

そう涙目で怒鳴る胡桃。

「胡桃、暴力はいかんぞ」

胡桃「コイツ…！ホントにつ…!!」

美紀「まあまあ、落ち着いて下さい…」

美紀が手をふるふると震わせる胡桃を落ち着かせ…直後に一言

美紀「…お姉ちゃん」

そう言いながら、美紀はニヤニヤと笑った。

由紀「お！みーくんが私と胡桃ちゃんの妹に!!娘が増えたよパパ
!」

「ムスメ…フエル…パパ…シアワセ…」

由紀からの報告を受け、彼は何故か原始人口調でそれに答える。

胡桃「美紀まで…！もうこのくだりは良いっての！やめやめ!!」

悠里「美紀さんまで、どうしたの？」

美紀「いや、なんか少し楽しそうだなって思って…悪のりしちやい
ました」

胡桃「ぜってーあたしをバカにしてるだけだろ…」

悠里「ふふっ、そうね…じゃあ私も…」

直後、悠里は彼を見つめて言った。

悠里「お父さん…私、熱治ったわよ」

「おおそうですかーそりや良かったですー!」

彼は父親キャラを捨て、普通に返事を返す。それは悠里の望んでいたリアクションではなかった為、彼女は少し不満げな表情を見せた。

悠里「あら?」

「え?」

悠里「え?じゃなくて…なんで私の時だけ普通なの?」

「あ、すいません。リーさんが治ったのが嬉しくて素に戻っちゃいました…もう一度頼めます?」

彼は今一度、悠里に娘キャラを催促する。

悠里「改めてやるのは恥ずかしいんだけど…」

「大丈夫大丈夫!リーさんはやれる人ですよ!!」

悠里「じゃあ、もう一度だけ…コホン!」

悠里は咳をして、娘キャラを演じる準備をする。

悠里「お父さん！今日はとても良い天気ね!!」

「そうなんですか？僕はまだ外に出てないから分かりませんが…」

悠里「…バカにしてるの？」

彼の二度目のノーマルリアクションに少し苛立つ悠里。

「すいません違うんです！僕、お父さん呼びよりもパパ呼びの方が好きなんです!!」

必死に釈明する彼、それを見た美紀と胡桃が『変態』と呟いたが、彼はそれに気付いてはいなかった。

悠里「――君をパパって呼ぶのはさすがに……美紀さん出来る？」

美紀「は!？」

急に自分にふられて驚く美紀。

美紀「いやいや…出来ませんよ!」

首を横に振りながら拒否する美紀、だが胡桃はそれを許さなかった。

胡桃「あんだだけあたしをバカにしといて、自分だけ逃げられる訳がないだろ…観念しろ！ホラ…目の前の変態男をパパと呼ぶんだ!!」

背後から美紀を羽交い締めにし、彼の目の前へと連れていく胡桃。さりげなく自分が変態男呼ばわりされていた事には気付かず、彼は美紀にパパと呼ばれるのを待っていた。

美紀「ううっ…」

困り果てる美紀をみかねた由紀は彼女に近づき、そっと何かを耳打ちした。

美紀「…ええっ！そんな事言わなきゃダメなんですか？」

由紀に何かを言われて顔を真っ赤にする美紀。

由紀「それを言えば——くんきつと一発で満足するよ！」

美紀「無理です無理です!!」

由紀「大丈夫だよ！頑張って！」

由紀はそう言っただけで美紀を励ます、直後に「私も、みーくんがこのセリフ言うの见たいし…」と由紀が呟くのを彼は聞いていた。

(一体…どんなセリフなのだろう?)

彼は期待に胸を躍らせる。

そんな中、美紀は胡桃に羽交い締めにされたまま大きく深呼吸をしてから、遂に覚悟を決め…涙目で彼に言った。

美紀「パパ……一人だと怖くて眠れないから………一緒に寝て？」
そう言った後、美紀の顔はゆでダコのように赤くなった。

由紀「おお〜」パチパチ

由紀は静かに拍手を送る。

胡桃「うっ…！ヤバい…これは可愛い!!」

悠里「普段どちらかと言えばクールな美紀さんが言うのと破壊力が凄いわね！」

胡桃は思わず美紀を縛る手を離して感動…悠里は頬を赤くして感動する。

美紀「二人まで何バカな事言ってるんですか!？」

羽交い締めが解けた美紀は、振り返って胡桃と悠里に言った。

「……………」

そんな中…彼は無言で立ち上がると、じつと美紀を見つめる。

美紀「……なんですか？」

美紀はそつと彼に声をかける。

ガッ!!

美紀「うわっ!」

突如彼が美紀の手を掴み、そのままベッドの方へと歩みを進めた。

美紀「な、なっ!何してるんですか!？」

驚いた美紀は彼に問いかけたが…

「一緒に寝てあげる…一緒に寝てあげる…一緒に寝てあげる…一緒に寝てあげる…一緒に寝てあげる…」

彼は何かに取り憑かれたようにそう呟いていた。

美紀「ひっ!!胡桃先輩助けて!!——さん正気を失ってます!」

彼の様子に恐怖を感じた美紀は、慌てて胡桃に助けを求める。

由紀「胡桃ちゃん!」 悠里「胡桃!」

さすがに慌てる由紀と悠里。

胡桃「いくらなんでもこれはマズイよな。」

これ以上は美紀が危ないと思った胡桃は美紀の手を掴み、彼の手から剥がそうとする。

胡桃「ぐうつ！」グググ：

必死に美紀を剥がそうとする胡桃だが、彼の手の力が強力で剥がせない。

美紀「イタタつ！先輩！手が痛いです!!」

美紀が手を胡桃に引つ張られた事で痛そうにする。

胡桃「あ、わりい！…手がダメなら…!!」

胡桃は美紀から手を離すと、彼の前に回り込んだ。

「イツシヨニネテアゲル：イツシヨニネテアゲル：イツシヨニネテアゲル：イツシヨニネテアゲル：イツシヨニネテアゲル：イツシヨニネテアゲル」

胡桃「っ!?!怖えよっ!!」

同じ言葉を呟く彼に胡桃は一言ツツコむと、右手を振り上げてその拳を彼の顔に叩き込んだ。

ドツ!!

その拳を受けた彼は美紀の手を離し、その場に倒れた。

美紀「あ、ありがとうございます。」

美紀が胡桃に礼を言う。

胡桃「気にすんな。」

由紀「——くん：元に戻ったかな？」

倒れた彼を心配そうに見つめながら由紀は言った。

胡桃「…どうだろうな」

遡った時間はここで追い付き：現在に至る。

美紀「こんな事になるなんて…」

悠里「もし：起き上がった時にまた正気を失ってたら…」

悠里はそう言っつて胡桃の顔を見る。

胡桃「そうなつてたら…：殺すしかないな…」

胡桃はギツと奥歯を噛み締めてから言った。

由紀「そんな……」

泣きそうな顔をする由紀。しかしその直後、目の前で倒れていた彼が勢いよく起き上がった。

「いや、殺すなよっ!?!」バツ!

胡桃「良かった…正気に戻ったみたいだな」

彼が勢い良く起き上がるのを見て、一安心する一同。

「本気か?本気で殺す気でいたのか!?!」

立ち上がって胡桃に尋ねる。

胡桃「心苦しいけど仕方ない…あのままのお前を放っておいたら美紀の身…更にはあたし達全員の身が危なかった」

真剣な顔で答える胡桃。

「許して下さい、あれは仕方ないんだ…あまりに美紀さんが可愛すぎて…僕の中の父性本能ふせいほんのうが疼いてしまい…止められなくなった。」

胡桃「美紀を無理矢理ベッドに連れてく姿は確実に父親じゃなくて変質者のそれだったけどな」

「そうか…すみません美紀さん。」

彼が美紀に頭を下げる。

美紀「もう暴走しないで下さいよ？私…わりと本気で怖かったんですから。」

まだ少し警戒しているのか、胡桃の後ろに隠れながら美紀は言った。

悠里「さ！遊ぶのはこれくらいにして、朝食の準備をしましょうか！」

悠里に言われてから、今朝はまだ朝食すらとっていないなかった事に気づく一同。

由紀「そっか、まだだったね。」

胡桃「朝っぱらから何てムダな時間を過ごしたんだろ…。」

「ムダ？僕は楽しかったけどな…。」

美紀「もう二度とこんな遊びはしませんからね！」

各々が言葉を口に出しながら朝食の準備をする。

今回の事で、彼の中での胡桃と美紀の評価が上がったらしい。
胡桃は自ら考えたセリフで彼をときめかした演技力の高さを…
美紀はギャップによる無限の可能性を…
それぞれ高く評価されたそうなの…

三十八話 『変態紳士』

父娘ごつこを終えた後、朝食を済ませた一同は悠里に運転を任せのんびりとしていた。(助手席には由紀が座る事に)

最初は病み上がりの悠里の身を案じた胡桃が運転すると言ったが、悠里は「ここ数日は全部皆に任せて、私は寝たきりだったでしょ?…だからこのくらいは任せて。」そう言って聞かなかったので結局は任すことになった。その光景を見た彼は、意外と頑固な人だなあ…と思いつつも、元気そうに笑う悠里を見てほっとしていた。

そして現在…

「りーさん…元気になったみたいで良かったね。」

運転しながら助手席の由紀と話す悠里を彼は椅子に座りながら見つめて、胡桃と美紀に言った。

胡桃「だな…あれだけ元気ならもう心配ないだろ。」

美紀「ええ、本当に良かったです。」

テーブルを挟んで彼の正面に座っている胡桃と、その横に座っている美紀が答える。

美紀「あの日…二人が薬を取ってきたおかげですよ」

運転席の悠里と助手席に座る由紀に聞こえないように声を小さくして美紀が言うが…胡桃はあの時の自身の行動を恥じていた。

胡桃「いや…もしかしたら薬なんか無くても、そろそろ自然に治ってたかもしれない。ほんと、バカな事したよなあ…あたし」

美紀「……………」

美紀はそんな胡桃をただ黙って見つめる。

こんな時、どう声をかければ良いのかが分からない…。

「済んだことは気にしない、ほら笑って!!パパは胡桃の笑顔が好きなんだぞお?」

再び父親キャラに戻り、彼が告げる。

間抜けな行動にも見えるが、その行動を見た胡桃は笑顔を取り戻した。

胡桃「…ははっ、本当にバカだよなあ…お前は」

美紀「あなたのバカげた父親キャラも役に立つんですね」

笑顔に戻った胡桃を見て、美紀は呟く。

「ああ…、そういえば胡桃ちゃんに聞きたい事があって…」

胡桃「なに?」

薬の話をした事で、彼はあの時会った少女の事を思い出す。

「あの時胡桃ちゃん、一人で先に薬局から出たでしょ？その時に女の子に会わなかった？」

胡桃「え？…いや、会ってないよ。」

胡桃は思い出すように目を瞑ると、少ししてから答えた。

「胡桃ちゃんが出ていった後、いつの間にか僕の後ろに女の子がいたんだよね。」

胡桃「マジ？」

「マジ。…その子は胡桃ちゃんを見たって言ってたけど。」

胡桃「ほんとに？…あの時ぼくとしながら歩いてたから気付かなかったのかもしれない…」

美紀「どんな子でした？」

「多分僕らと同じ年くらいのこと…変わった子だったな。」

あの狭山という少女を思い出しながら、彼は答える。

胡桃「同じ年くらいって…そんな子が一人で？」

「その時は一人だったけど、一応仲間はあるみたいだったよ。少し待てば来るとか言ってたし…」

美紀「ですよ、さすがに女の子が一人きりで生きていくのは厳しいでしょう。」

「そういえば…その子少しだけ美紀さんに似てました。」

彼は美紀の顔をじっと見つめて言う。

あの時見た彼女の顔立ちはそれとなく美紀に似ていたような…そんな気がしていた。

美紀「え？私にですか？」

「はい、まあ違う所といったら胸は小さかったって事…ですかね。」

言いながら美紀の胸へと視線を移す。

当然、視線を向けられた美紀は顔を赤くしながら腕で自分の胸を隠した。

美紀「なっ…!」

胡桃「そんなんばっか見てるな…お前」

「違うって！ただ美紀さんとその子の違う所をあげただけだよ!!」

由紀「みーくんと…だれの違い？」

彼の大声に反応し、助手席の由紀が振り向いて尋ねる。

「あつ…いえ、なんでもありませんよ？お気になさらず」

彼がそう言うのと由紀は少しだけ不思議そうな顔をしつつもとりあえずは納得してくれたらしく、視線を前方に戻して悠里との会話に戻った。

美紀「……胸以外にもあるでしょう!？」
由紀が前を向いたのを確認してから、美紀は小声で会話を再開した。

「後、その子は美紀さんよりほんの少し長めの黒髪で……自分の事を『ボク』って言ってたな……」

美紀「胸じゃなくそつちを先にあげてくださいよ。」
美紀が少しだけ怒りながら彼に言うが、彼はそれでも胸の話が続けた。

「だって……本当に胸が無かったから……」

胡桃「美紀だってそこまで大きい訳じゃないぞ?どつちかつつと小さいくらいで……」

胡桃がそう言った後、美紀が無言で胡桃を睨む……。
胡桃はすぐそれに気づき、笑いながら頭を下げた。

胡桃「あ、わりいわりい……ほら、リーさんクラスと比べるなら分かるのになあ……って思ってたさ」

「だって、僕はあの子の事一瞬男かと思ったくらいだし……」
それを聞いた二人は静かに驚く。

美紀「本当ですか？それほど小さい胸って…。っていうかその子、男顔なんですか？」

「いえ、そういうわけじゃいですがけど綺麗な顔してて…。ああいうのを中性的って言うのかな？そんな感じでした」

胡桃「まあ確かに美紀もしつかりと男装すれば男に見えそうだな…」

胡桃が美紀の顔を見つめながら言う。

美紀「それって…喜んで良いんですか？」
複雑な表情をする美紀。

胡桃「ああ、だってお前男装したら絶対イケメン男子になるぞ！
…女がキヤーキヤー言うタイプだな」

美紀「…え？ほんとですか？」
美紀はそう言いながらまんざらでもなさそうにやける。

胡桃「つまりさ…その貧乳ちゃんもそんなタイプの顔つきだったんだろ？」

美紀「貧乳ちゃんって…先輩、もう少し言い方が…」

胡桃「だって名前知らないし…」

胡桃がそう言った直後、そういえば名前言ってたなく…と彼は思い出す。

「名前は…：狭山真冬とか言ってたな。」

胡桃 「名前聞いてたのかよ！」

「へへ…忘れてたよ。」

胡桃にツッコまれた彼は笑ってごまかす。

美紀「名前よりも先に胸の大きさを思い出されるなんて…：その狭山さんって人…：かわいそう」

「一応聞くけど、聞いた事のある名前ですか？」

胡桃 「いや」

美紀 「いいえ」

「そっか…：まあそうだよな。」

胡桃「その狭山って子…：どのくらい胸小さいの？由紀よりも小さい？」

美紀「まだその話を…：」

思わず呆れる美紀。

「由紀ちゃんよりも更に少し小さかったな、本当に胸元をよく見れば膨らみがあるなあ〜くらいの………つてさすがにもういいよ胸の話は!!」

美紀「珍しいですね……—さんからそういう話を止めるなんて。」

「僕はどれだけ変態だと思われてるのか……」

美紀「そこそこの変態だと思われてますよ。」

彼に美紀が言い放つ。

「ぐっ!!……僕が年頃の男子である以上、あなた達みたいな女の子達に囲まれて生活していると、時折どうしても正気を保てなくなるんですよ……それよりも僕が狭山さんについて気にしてるのは……」

胡桃「今、何気にすげえ事言わなかったか？」

胡桃が彼の話を遮る。

「ん?何が?」

胡桃「お前……たまに正気を保てなくなるの?」

ちよつと引き気味に尋ねる胡桃。

美紀「何言ってるんですか先輩、——さんが今朝私をベッドまで引っ張っていった事を忘れましたか。」

胡桃「なるほど…ああいうのがそうなのか。」
それを聞いた胡桃はなるほどなるほどと納得する。

「あと他には温泉の時ですかね…あの時はどうかしてた…」
彼が呟く。

美紀「ほら、やっぱ変態じゃないですか。」

胡桃「だな。」

そう言う二人に、彼は反論する。

「いやいや！言わせてもらうけど僕だからその程度で済んでるんですよ？僕以外の一般的な男子だったら、確実にあなた達に笑えないレベルのセクハラをしてるはずですよ！」

美紀「そうなんですか？」ボソツ

美紀はそつと胡桃に耳打ちする。

胡桃「さあ…わかんねえ…」ボソツ

二人はしばらくの間、こそこそと話していた。

「……………」

美紀「…結論が出ました。」

美紀と胡桃がこそこそ話を止めて、彼に向き合う。

美紀「まあ確かに——さんは私達が下着を干している時や着替えの時は一人で大人しく待っててくれる紳士的な面もあるので…変態の称号は取り下げてあげましょう。」

「おお、ありがとうございます！」

彼は喜び、頭を軽く下げる。

胡桃「代わりに変態紳士の称号を授けてやる。」

胡桃はそう言っつて微笑んだ。

「結局は変態のままなのか……」

逃げられない変態のレッテルに、彼は頭を抱えて落ち込む。

「言い方は悪いですけど…あなた達が不美人ならば僕も楽だったのに

……」

胡桃「不美人って……やたら丁寧な言い方だな……」
目の前で頭を抱えて呟く彼を見ながら苦笑いする胡桃。

美紀「それって……」——さんから見て、私達は美人寄りの部類に入るって事ですか？」

「自覚無しですか？あなた達……みなさん総じてレベルの高い顔してますよ。」

美紀と胡桃の顔を交互に見ながら彼は言った。

美紀「みなさんって……私もですか？」

「ええ、断言します。」

戸惑う美紀に、彼は速答する。

胡桃「あの……あたしも？」

チラチラと彼の目を見ながら尋ねる胡桃。

「みんなって言ったでしょ？当然、胡桃ちゃんもだよ。」

胡桃「へえ〜……そっか」

胡桃はそう言うと、少しだけ嬉しそうに微笑む。

「いや冗談抜きに……皆何回か告白とかされた事ありますよね？」

美紀「ないですよ……先輩は？」

胡桃「あたしも。」

「マジですか……クラスメイトの男子達の目は節穴だったのか？」

真剣な表情で彼が呟く。

胡桃「お前が思ってる程あたし達は美人じゃないのかもよ？てかさ
…あたし達よりも可愛い娘はお前のいた学校とか近所とかにいな
かったの？…思い返してみろよ、多分普通にいたはずだぜ。」

「いやーいなかった!!」

彼がキツパリと断言する。

胡桃「そう?……でもそんなに自分が可愛いとは、あまり思えないんだよねあ〜」

美紀「それで良いんじゃないですか?……自分の見た目に自信がありすぎる女性って私苦手ですし。」

胡桃「まあ、それもそうだな」

胡桃はそう言うと、座りながら両手を頭上高く上げて体を伸ばした。

美紀「で…狭山とかって人の話が途中ででしたが?」

美紀の一言でようやく話が本筋に戻る。

「ん?……ああそうそう…その狭山さん、変な事言ってたんですよ。」

胡桃「変な事?」

「さっき言ったように、狭山さんは待っていれば仲間が来るみたいだったから…僕は安心して彼女を一人にさせて出ていったんですけど……その直前に言ったんです。」

『ボクの友達が来たら……君と彼女が平気じゃなくなるから……はやく出ていった方が良いよ』

彼は狭山のその言葉を思い返し、二人に伝えた。

胡桃「はあ？……どういう意味だよ」

美紀「狭山さんが待っていたその仲間の人は、少し危険な人……という事でしょうか？」

「どうでしょう……狭山さん自体は悪い人には見えなかったんですけどね。」

胡桃「良い人か悪い人かなんて……ちよつと見ただけじゃわかんねえだろ」

彼の言葉を聞いた胡桃が呟く。

「まあ……そうだね」

彼はそう言いながら、あの時少しだけ怖く感じた狭山の笑顔を思い出した。

胡桃 「…またその内会うかもな。」

「…だね。」

美紀 「まずはお互い…毎日がんばって生き延びる事からですね。」
美紀はそう呟いて、窓の外を眺めた。

(変態紳士ねえ……そういえば僕って…こんなに女の子と喋ったり、可愛いとか言うキャラじゃなかったんだけどなあ…。この人達に会って、僕は知らない間に随分と変わったって事かね)

第五章・くさり 三十九話『くさり』

悠里「少し早いけど、今日はここで休みましょう。」

悠里はそう言って街外れのショッピングモールに隣接した広い駐車場に車を停める。この駐車場は出入り口以外はフェンスに囲まれているし、周囲に奴らの姿も見えないから安全だろうと判断したようだ。

胡桃「あれ…本当に早いね、まだ昼をちよい過ぎたくらいでしょ？」

悠里「ええ、安全そうな場所を見つけたから早い内に入るところと
思っ。…特に予定や必要な物資も今のところ無いから、無駄に移動
する意味も無いしね。」

運転席を離れ、車内を歩きながら悠里は言った。

胡桃「まあそれもそうか…」

美紀「じゃあ…ちよつと外に出て来ますね。」

由紀「私も。」

席を立ち、外へ出る美紀に由紀がついてゆく。

「んじゃ、僕も」

彼もそう言っつて外へ出る、その後には胡桃と悠里も続いた。

美紀「結局全員出て来たんですね。」

一足先に車外に降りていた美紀が、後から降りてきた悠里達を見て言った。

胡桃「とりあえず一度、辺りを見回しておかなきゃな。」

胡桃は駐車場内に停められていた車の中や、その陰に奴らが潜んでいないかを確認して回った。

悠里「…大丈夫そう?」

胡桃「ああ、とりあえずこの中にはいないよ。」

悠里「じゃあ安全確認もした事だし、皆休んで良いわよ。」

胡桃「りよ〜かい。」

そう言っつてから胡桃は一足先に車内へと戻る。一方、悠里はまだ外をうろつく由紀・美紀・彼へと声をかけた。

悠里「…あなた達は戻らないの?」

美紀「あ、戻ります。」

由紀「…くんも戻ろ?」

彼の背を叩きながら由紀は告げたが、彼は目の前にあるショッピングモールが気になるらしく、そこを指さしながら悠里へ尋ねる。

「すみません…ちよつとあそこ見てきても良いですか?」

悠里「え?今から?」

「はい、退屈しのぎにちよつと見てごようかと…」

悠里「近いから別に構わないけど…行くなら誰かと一緒にね。」

「分かりました…由紀ちゃん、美紀さん。一緒に行きます?」

由紀「うん!行く行く!!みーくんも行くでしょ?」

美紀「じゃあ…はい、行きます。」

彼に誘われ、由紀はノリノリで…。美紀は由紀が行くならといった感じで彼に同行する事を決めた。

悠里「私は胡桃と待ってるわ、あまり長くないようにね?」
「了解です。」

悠里「ふふっ、じゃあ気を付けて行ってきてね」

美紀「はい。」

由紀「はーい!」

見送る悠里に手をふりながら、三人はそのショッピングモールへと向かう。

バタン

胡桃「ん?…あいつらは?」

車内に戻ったのが悠里一人なのを見て、胡桃が尋ねた。

悠里「目の前のショッピングモール見てくるって。胡桃も行ってくる?」

胡桃「ん…いや、とりあえずはいいかな。」

胡桃はそう言って椅子に座った。

悠里「そう、まあたまにはのんびりと休んでね。胡桃はいつも働いてて疲れてるだろうから…」

胡桃「ううん…そんな事ないって。リーさんの方が大変だろ。」

悠里「私は大丈夫よ。胡桃達は戦ったり…って言って良いのか分からないけど、いつも彼らを倒してくれてるからね。」

胡桃「でも実際…あいつが仲間になってくれたおかげでだいぶ楽になったんだ。それこそ、あたしがサボってても問題ないくらいにね。」

胡桃はそう言っただけで笑う、悠里もそれを見て笑いながら言った。

悠里「ふふっ…そうね、でも胡桃はサボったりしないでしょ？」

胡桃「まあそりゃあ…任せっぱなしはさすがに悪いからな…ってかあいつらは何をしにショッピングモールにいったの？」

悠里「何をするとかじゃなく、ただの暇潰しみたいよ？」

胡桃「へえ…そっか。」

一方、三人は…

美紀「で…どこが見たいんですか？」

シヨピングモールに入っつてすぐに見付けた案内図を眺めながら、美紀は彼に尋ねた。

「そうですね…胡桃ちゃんに手袋でも、と思ったんですけど。」

由紀「手袋？」

「胡桃ちゃん、手足が冷えやすいんだってさ。」

由紀「あ！…そう言えば前に触った時冷たかったっけ。」
思い出したように由紀が言う。

美紀（それって…もしかして……）

「てな訳で…サプライズでプレゼントでもしてやろうと思った訳ですわ。」

彼がニコツと微笑んで言った。

由紀「良いね〜！胡桃ちゃん、絶対に喜ぶよ！みーくんもそう思うでしょ？」

由紀が目を輝かせながら騒ぐ。

美紀「え？…ああ、そうですね。喜ぶと思いますよ。」

美紀は一瞬だけ遅れて答えた。

「ええっと…手袋とかってどこにあるんですかね？」

案内図を眺めながら彼が言う。

美紀「ファッション用品店ならあるんじゃないでしょうか？ありそうなお店を見て回りましたよ。」

彼等は一階のファッション用品店を見て回り、そしてそれが置かれている店を見付ける事が出来た。

しかし…

「見付けたは良いんですけど…沢山あつて選べない。」

彼はそういった物を的確に選ぶ事が出来ず、悩んでいた。

美紀「…何をそんなに悩んでいるんですか？」

みかねた美紀が声をかけると、彼は商品を眺めながらブツブツと呟く。眉間にシワを寄せながら冷や汗を流すその表情を見れば、彼がいかに悩んでいるかが分かる。

「……色はどれが良いかとか、指先は出るタイプか指先まで覆ってるタイプのどちらが良いかとか……色々考えてしまう……。……でもたしか指先が出るタイプのは似たようなのを胡桃ちゃんよく着けてるから違うタイプの方が良いのか？それとも……」

由紀「でも胡桃ちゃんの着けてるやつよりこつちの方が暖かいと思うよ。」

目の前の指無し手袋を一つ取って由紀が言った。

「本当ですか？」

由紀「うん、これ中がモコモコしてて暖かい。」

美紀「そうですね……胡桃先輩が普段してるあれは寒さ対策と言うよりはどちらかと言うとおしゃれ重視のタイプですから、暖かさでいえばこちらの方が上だと思いますよ。」

美紀が由紀の持つ手袋に触れながら言う。軽く触れただけでもその暖かさを体感出来た。

「そうですね……じゃあそれにしましょう。」

結局彼が選んだのは、肘辺りまで覆える指無しタイプの黒い手袋だった。

由紀「なんならあるだけ持っていつちやえば？」

並べられた他の手袋を眺めながら、少しだけ悪い表情で由紀が呟く。

「二つだけの方がプレゼントとしてなんか良くないですか？沢山持つていくとありがたみが無くなる気がして……」

美紀「そうですね……私も二つだけの方が喜ばれると思いますよ。」

そう言って美紀が微笑むと彼も嬉しそうに微笑んだ。しかし由紀

はまだ少しだけ納得してないようで、並ぶ商品を見つめながら目を細めていた。

由紀「んく…私は沢山貰えた方が嬉しいけどなあ」

美紀「先輩、欲張りはダメですよ」

由紀「うっ…。は、はい…」

「じゃあ美紀さんすいません、これしまっておいてもらえますか？」

美紀「分かりました。」

美紀は彼から手袋を受け取ると、背負っていたリュックを下ろしてその中へとしまう。彼は彼女がそれをしまっている間にその店のレジに近寄り、財布を取り出して手袋の代金をそつとそこに置いた。

「…僕の用事はこれで終わりですが…二人は何か見たいものありません？」

美紀「私は特に…由紀先輩は？」

由紀「ええ？どうしようかな。」

「…とりあえず適当にぶらぶらしますか？」

「悩む由紀に彼が言う。」

由紀「あ！そうだね、そうしょ！」

そう言っではしゃぐ由紀についていきながら、彼等はモール内を探索した。

美紀「ここ…チラツと見た感じ食料とかは残っていないようですね。まあ食料目当てで来た訳ではないので構いませんが…」
店内を歩いていると美紀がそう呟いた。

「でも、せっかくなら多少持つて帰りたいんですけどね。食料はいくらあっても困りませんし。」

美紀「それもそうですね。」

由紀「!…:…ねえあれって。」
彼と美紀が話していると突如、由紀が声をあげて何かを指さした。

美紀「あれは…」

由紀が指さす方向には、一人の男が倒れていた。

由紀「人…だよな？」

美紀「人には人ですが…でももう…」

「…二人は下がっていて下さい。起きてくる前に処理してきますので。」

そう言っ彼はナイフを手にそれへと近付いた。

「……」

彼はその倒れている人間の目の前に立ち、少しだけ観察する。

(…年は30ちよいくらいかな。肩に巻いてるのは…鎖？なんで鎖なんか持つてるんだろう？…見た目がきれいだから死んで間もない…いや、もしかしたらそもそも死んでないんじゃない？)

トツ…トツ！

彼は念の為足元に転がるその男を軽く蹴った。

(…反応無し、まあそうだよね…とりあえずは止めだけさしておきますか。奴らになって襲いかかられても困るし。)

彼はしゃがんでからその男の頭上でナイフを構え、それを振り下ろした。

だが……

パシツ!!

彼のその手を…倒れている男の手が掴んで止める。

「!?」

驚いた彼はその男の顔を見る、さっきまで閉じていた男の目はいつ

の間にか開いて彼を睨んでいた。

男は彼の手を掴んだまま、体制を変えて彼の腹に蹴りをいれる。

ドツ!!

「っ!!」

不意に蹴りを受けた彼は少し転がってから体を起こし、体制を立て直す。

彼が体制を立て直しナイフを構えた頃にはさつきまで倒れていた男も起き上がり、彼に向き合っていた。

由紀「——くん!!」

美紀「大丈夫ですか!？」

由紀と美紀が彼の元に駆け寄る。

「…大丈夫です。危ないので少しの間だけ下がっていて下さい。」

彼はそう返事を返す、その間も目の前の男から目を離さなかった。

ジャラジャラジャラ…

「!!」

男は肩に巻いていた鎖をゆつくりと外し、それを手に持って構えた。

「その鎖…まさか武器なんですか？………変わってるな」
彼がそれを見て呟く。

由紀「——くん……」

美紀「………」

由紀と美紀は彼の少し後ろからその様子を見守った。

男「………うつ……」

ドサツ!!

「えっ？」

男は鎖を構えたかと思うと、突如倒れた。

美紀「……生きてます?」
美紀が小声で尋ねる。

「えっと……」

「……はい、気絶しているだけだと思います。」
彼がその男に近付き、慎重に様子を見て言った。

由紀「その人……どうする?」

美紀「どうしましょう……」一応、連れていきますか?」
美紀が彼に尋ねる。

「うーん……」

由紀「放っておいたらかわいそうだよ!」
悩む彼に由紀は言った。

「そうですかね……僕はこの男に蹴りをくらわされた訳ですが……」

由紀「そうだけど……何か理由があったのかも、話も聞かないで放つ

ておくのはやっぱダメだよ！」

「……分かりました。僕がこの人担いで行くので、由紀ちゃんは鎖を
持ってて下さい。」

由紀「わかった！」

由紀はそう返事をして男の持っていた鎖を拾いあげる。

ジャラジャラ…

由紀「ぬく!!地味に重いよ！」

苦しそうな声をあげる由紀。

鎖は約3〜4 m程の長さ…少し太めだったので由紀には重すぎた
ようだった。

679

美紀「…代わります、貸して下さい。」

由紀に代わり、美紀がその鎖を持つ。

美紀「…うっ!重い！」

美紀も重そうに声をあげる。

美紀「その人、これを武器として使ってるんですよね?なんでこん
な使いづらそうな物使ってるんでしょうか。もつと普通の武器にす
れば良いのに…」

男を見ながら文句を言う美紀。

「あ…普通にナイフも持っていますね。これは由紀ちゃんが持っていて下さい。」

彼は男のポケットに折りたたみ式の小型ナイフを見付けると、それを奪って由紀に預けた。

由紀「小さいナイフだね、これなら軽いから持てるよ！」

「…ほっ！」

由紀にナイフを渡した後、彼はその男の手を肩に回して持ち上げ、ゆっくりと歩き出した。

「重っ!!」

彼は美紀同様苦しそうな声をあげながら、一歩ずつ歩いていく。

男は彼よりも僅かに背が高い事もあって、その足を地面にズルズルと引きずられながら運ばれていった。

のんびりと時間をかけ、彼等は悠里達の待つ車内にたどり着いた。

美紀「由紀先輩、ドア開けて下さい。」

由紀「りょうかい！」
バタン！

胡桃「お帰り〜…つておい！誰だよそりや!？」

悠里「どうしたの!？」

彼が見知らぬ男を引きずっているのを見て胡桃と悠里が驚く。

「まずは…ちよつと手伝って下さい。」

胡桃と悠里の手を借りてその男を椅子に座らせる。

胡桃「んで…この人誰?」

男を椅子につかせた後に胡桃が尋ねる。

「さあ?…目が覚めた時に暴れられないように動きを止めておきたいんですが、何か縛れる物とかありますか?」

胡桃「さあ?つて…まあいいよ、ほら。」

胡桃は呆れた顔をしながら、二つの手錠を彼に渡す。

「手錠?凄いな、こんなの持ってたんだ。」

胡桃「本物じゃないよ、玩具みたいなもんだから。」

男の両手両足に手錠を掛ける彼に胡桃はそう言った。

悠里「美紀さん…説明できる？」

美紀「はい、この人は……」

美紀は悠里と胡桃にこの男の事を説明した。

胡桃「お前…よく自分を蹴り飛ばした相手を運んできたな。
事情を聞いた胡桃が彼に向かって言う。

「由紀ちゃんが放っておいたらかわいそうだって言うから。」

由紀「だって…もしかしたらその人、目が覚めた時目の前にナイフを構えた——くんがいたから驚いて暴れただけだったかも知れないんだよ？」

胡桃「なるほどな、てかお前…生きてるか確認しなかったの？」

「軽く二、三回蹴ったけど反応無かったから…もう死んでるかなって…まさか生存者とは思ってもよらず……」
少しだけ気まずそうに彼が答える。

胡桃「うわあ…なんて雑な生存確認」
呆れ顔になる胡桃。

「……返す言葉も無い」

悠里「正直…分からなくもないけどね。こんな世の中で倒れている人っていったら、殆どがもう生きてはいない人だから…あまり近付いて確認して噛まれても大変だし…」

胡桃「…それもそうだけどね。」

悠里「…この人、噛まれたりしてないわよね？」

美紀「どうでしょうか、分からないですね。」

悠里「……………」

悠里が無言で彼を見つめる。

「なんですか…その目は…」

胡桃「女が男の体を詳しく調べる訳にいかないだろ！あたし達は外に出てるからさ、お前に任すわ。」

「はあ!?!」

悠里「ごめんね、任せて良いかしら？」
両手を合わせながら悠里が彼に頼む。

「嫌ですよ！何が悲しくて自分を蹴り飛ばしたオッサンの体を調べなくちやならんのですか!？」

美紀「もしこの人が噛まれていたとしたら大変でしょう？」

「目が覚めた時に直接聞けば…」

美紀「嘘をつかれるかも知れません。」

「ぐっ…!!」

胡桃「大丈夫だよ、ほら…このオッサンわりとガツチリした体つきしてるし、顔もワイルド系でカッコ良さげだから…まだダメージが少ないだろ？」

「相手がカッコ良いオッサンだろうと汚ないオッサンだろうと…自ら進んで裸を見たいなんて思わないよ…。」

胡桃「だろうな。」

そう言つてニヤニヤする胡桃、確実に彼をバカにしている。

悠里「胡桃…バカにしないの！ごめんね——君、頼んでも良い？」
そう言つて悠里は彼を真つ直ぐに見つめる、こういつた視線に彼は弱かった。

「う〜ん…う〜ん…」

だが…彼はそれでも悩んだ。

由紀「——くんがどうしても嫌なら私がやるよ。そもそもこの人を放つておけないつて言つたの私だし…。」

悩む彼を見て由紀が言う。

「いや！大丈夫です！僕がやります!!」

今まで散々悩んでいた彼が急にそう答えた。

由紀「いいの?」

「はい、大丈夫です!」

美紀「じゃあここは——さんに任せて、私達は外に出てみましょう。」
美紀の言葉をきっかけに、続々と外に出ていく女性陣。

悠里「ごめんね、引き受けてくれてありがとう。」

「気にしないで下さい、大丈夫ですよ。」

胡桃 「なんかあつたら呼べよ？近くにいるからさ…」

「ん、わかった。」

バタン…

(…由紀ちゃんにこんなオツサンの体を見せる訳にはいかないからね。)

彼女達が車外に出た後、彼は深呼吸してから男の体を調べる。

(…上半身は噛まれたりしてなさそうだな。…にしても本当に中々鍛えられた体だな、重い鎖を武器にしてる程だから当たり前と言え当たり前だけど…)

男の上着を軽く脱がし、シャツを捲って上半身の確認を終えた彼は…手を止めて頭を抱える。

(うわあ〜!!下半身は調べたくない〜!!)

彼はしばらく考えて、一つのアイデアを生み出す。

(…何も全部脱がす必要はないよな？ズボンだけ脱がして足を見て終わりでもいいでしょ。…：さすがに尻とかあそこを噛まれてるなんてないだろうし…：そんな場所をピンポイントで噛む器用なゾンビもないだろ。)

「……………」

(良し！足だけ見て終わりにしよう!!)

そう考えた彼はその場に屈んで男のズボンを脱がせようとベルトに手を伸ばす。

ガチャガチャ…

(…オッサンのベルトを外すのとか…：拷問みたいなんです。)

ガチャガチャ…

(しかも中々外れないし！)

ガチャガチャ…

「…やっと外れた。」

苦勞の末に男のベルトを外した彼がそう呟いたその時…

男「なんて事だ……………」

不意に彼の耳に聞きなれない声が届く。

「……………」

彼はそっと声のした方に顔を向ける。

男「……………」

男は目を覚まし、彼を見つめていた。

男である自分を手錠で縛った上で、ベルトを一生懸命外そうとして
いるその少年を…

男「君のような少年が、俺のようなオヤジの体を求めて拉致すると
は……………この世界もくるところまでできてしまったようだな。」

男はそう言って彼を哀れみの目で見つめる。

「……………」

男「……………」

「…最悪のタイミングだ」
彼は涙目でそう呟いた。

四十話『づかい』

男「全く…嘆かわしい世界だな。」

男は手錠をされて身動きが出来ない自分のベルトを外しているその少年…つまり彼を見つめながら呟く。

「…あなたは何か誤解をしてると思います。」

彼は冷や汗をかきながら自分を見下している男に言った。

男「いや…言い訳などいいさ、君もこんな世界で辛い目にあつてきたのだろうか？そんな中、自分の欲望を受け止めてくれる体…つまり俺を見付けて拉致した…そういう事だろう。」

「いや…ちが……」

男「出来れば女が良かったのだが見付からず、仕方ないからまあ男でも良つか…みたいな軽いノリだろ？」

「いや、だから違うって言ってるんですが…」

男「違う?…まさか…元から男狙いだっただのか?」

「違う、男なんて求めてないです。」

男「じゃあ何故俺のベルトを外している?」

「…おはようございます。」

彼は今さらながら、とりあえず挨拶をした。

男「ああ、おはよう。」

「……………」

男「……………」

男「で…何故俺のベルトを？」

「あなたが奴らに噛まれていないか確認する為ですよ。」

男「ほう……………」

彼がそう答えると男はしばらく考えてからこう言った。

男「ちなみに言っておくと噛まれてないぞ。」

「本当に？…僕としても出来ればあなたの言葉を信じてそれで終わりにしたいんだけど…」

男「真実を知りたいならば好きに脱がして確認してくれて良いぞ、
だが…して良いのは確認だけだ。男に襲われるのは遠慮したいから
…」

「襲わない、襲いたくもない。」

男「本当か？」

「本当に。」

男「……………男が好きなんじゃないのか？」
少し間を開けてから男は彼に尋ねた。

「好きじゃない、僕はちゃんと女の人が好きです。」

男「じゃあ俺を拉致したのはやはり妥協してか？」

(おかしい……………話が先に進まない!?)

彼は無言のまま頭を抱えた。

男「どうした？」

「……妥協とかじゃない、そもそも僕は女の人に囲まれて暮らしているから、襲うならあなたみたいなおじさんではなく彼女達の内の誰かを襲うと思いますが……」

男「女の人達と暮らしているのか……その人達はどこに？」

男が辺りを見回しながら尋ねる。

「外に出ています、おじさんの裸を見るのは嫌だからってね。」

男「なるほど……」

「……」

男「で……今まで何回その人達を襲った？」

「な!？」

男のとんでもない発言に、彼は言葉を失う。

男「だって君は男より女の方が好きなんだろう？」

「そうだけど…だからって仲間を襲ったりする訳ないでしょ。」

男「どうだか…本当は男が好きだから、女の人を襲えないんだろう？」

男がそう言っつてニヤツと笑った。

「ふざけるな…僕は本当に女の人が好きだ。間違っても男なんぞに興味は示さない！」

彼は男を力強く睨みつける。

男「なら証明してみせろ。」

「証明？」

男「ああ、今からその女の人の内一人を選んで、ポンつと胸でも尻

でも触ってこい。そしたらお前は女が好きなのだと信じてやる。」

「……………」

「…………無理だと思う、多分殺される。」

彼は顔を伏せながら呟いた。

男「仲間なんだろう？なら大丈夫だ。…………それともやっぱり男の方が良いのか？」

「っ…………分かったよ、やってやる！少しの間そこで待っている!!」

バタン！

彼はあっさりと男の挑発にのり、外に出て行った。

男「…………ふう、どうにか追い出せたが…………手足に手錠をされている上にすぐ外にはあの少年の仲間がいる…………逃げ出すのは無理かな、まあ悪

いやつではなさそうだし……それに少し面白そうだ……ここは大人しく待っているか。」

男は大人しく彼の帰りを待つ事にした。

胡桃「おっ！どうした？」

突然車から降りてきた彼に胡桃が声をかける。

「……………」

(胡桃ちゃんはダメだ、少しでも触ったら殺される。)

悠里「——君、どうしたの？あの男の人は？」

(りーさんもダメ……なら美紀さんは……)

彼は美紀をじっと見つめた。

美紀「……なんですか？」

(いや……無理だな。)

(だったら残るは一人!!) スタスタ…

由紀「ん?」

彼は無言のまま、不思議そうな顔をする由紀の背後に回り込み…そして

スツ…

由紀「ひゃっ!!」

そつと由紀の尻を触った。

由紀「ちよっ!!」——「くん!」

彼の行動に由紀は驚く。

胡桃「お前っ!!」

美紀「あなたって人は…」

悠里「——君!!」

鬼の形相で三人が彼に少しずつ近づいてくる。

(あ…、いくら由紀ちゃん本人が怒らなくてもそれをこの人達に見られてたらどのみち僕は殺されるんじゃないやあ…)

「ち、違うんです！あの男が…あの男が悪いんです！僕はただ奴の口車にのってしまっただけで…」

胡桃 「はあ？訳のわからない事言ってるじゃねえ!!」

彼が必死に言い訳する声は車内の男の耳にも届いていた。

男「もしかして…本当に触ったのか？あの少年…思ったよりも間抜けみたいだな。いや…その行動力は評価するべきなのかも…」
男がそんな事を呟いていると車のドアが開き、全員が車内に戻ってきた。

胡桃「ほんとだ、目…覚ましてるな。」
胡桃が男を見ながら言う。

悠里「自己紹介くらいは出来ますか？」
男の目を見ながら尋ねる悠里。

「リーさん、気を付けて下さい…この男は巧みな話術で人を操ります。まるで魔法のようですね!!」
彼が悠里に向けて言う、その彼の頬は真っ赤に腫れ上がっているが…先程胡桃にでも殴られたのだろう。

胡桃「この人の話術どうこうじゃなくてお前がバカだっただけだろ。」
そう冷たく言い放つ胡桃。

男「ん？…話術？なんの事かさっぱり…」
男は首を傾げた。

美紀「え？——さんはあなたにそそのかされたから由紀先輩のお尻を触ったって言っていましたけど…」

男「ん？……俺は何も言っていないけどな。」

「はあ!？」

彼は驚きの声をあげながら男を睨んだ。

胡桃「お前まさか…初対面の人間のせいにして由紀にセクハラしたんじゃあ…」

胡桃がそう言いながら恐る恐る彼の顔を覗く。

「違う違う！おいあんた!!本当の事を言っておいて!このままじゃ僕の立場が危ない！」

美紀「どんな立場ですか。」

ぼそつと呟く美紀。

男「ははっ…悪かった。君達、この少年の言うとおりだよ…俺がそそのかしたんだ。」

焦る彼がかわいそうに思えた男は全てを白状した。

「ほらーだから言ったでしょ?」

悠里「…なんでそんな事言ったんですか?」

悠里が男に尋ねた。

男「目を覚ましたら彼が俺のベルトを外してたんでね、多分噛み傷がないか確認しているんだろうと気付いてはいたけれど……面白そうだったんでからかわせてもらった。」

男はニヤつきながらそう答えた。

男「…まあこんな冗談真に受けて本当にセクハラしてくるとは思いもよらなかったけどね……」

美紀「……………」 悠里「……………」 胡桃「……………」

男がそう呟いた瞬間、三人は彼を冷たい目で見つめる。

「許して下さい……この人に男好きのレッテルを貼られて、それを取り払う為に仕方なくやったんです……僕だってやりたくて由紀ちゃんにあんな事をした訳では……」

彼は弱々しい声で三人に言った。

胡桃「あたし達じゃなくて……ちゃんと由紀に謝れ。」

胡桃にそう言われた彼は、由紀の前に立ち、謝罪をした。

「由紀ちゃん…本当にすいませんでした。どうかしてたんだ…僕は。」

胡桃「お前すぐにその『どうかしちやつてるモード』に入るから…本当に気を付けてくれよ。」

「…善処します。」

彼が胡桃の言葉に答えた後に、由紀は口を開いた。

由紀「別に怒ったりしてないから大丈夫だよ。——くんはただ自分は男の子じゃなくて女の子が好きなんだって、この人に信じてもらう為にやっただけなんだよね？」

「…はい」

由紀「なら許してあげる！そんなに思いつきり触られたわけでもないから。」

由紀はそう言ってニコツと微笑んだ。

「ううっ…」

彼はその笑顔を見て、彼女にあんな事をした自分が酷く嫌になっ

男「いい子じゃないか……こんないい子にセクハラするなんて、信じられない男だな…君は。」

男が彼を見ながら言う。

「ぐっ!!」

男のそんな発言に、彼は言葉を返せなかった。

(お前がやらせたんだろ…って言いたいけど、僕が何て言おうと言
い訳にしかならない…ここは黙っておこう。)

男「きつと彼はもつと思いつきり触れば良かったとすら思っているぞ。」

黙る彼に男が追い打ちを仕掛ける。

胡桃「うわあ…」 美紀「そうなんですか?——さん…」 悠里「まさか…」

再び彼を見つめる三人。

由紀「だあゝっ!!もうこの話は終わりだよみんな!——くんは仕方なくやっただけなんだから、そんなこと思っていないよ!…ねえ——く

ん？」

そう言つて由紀も彼を見つめる。

「いえ！少しだけ思つてました！」

…なんて情けない本音はこんな状況で言える訳もなく、彼は由紀にこう返す。

「ええ、もちろん思つていません！」

由紀「ほらね？だからこの話はおしまい！今はこの人が誰かつて事が先でしょ？」

由紀が男を指差して言った。

美紀「それもそうですね、まさか由紀先輩がまともな事を言うとは…」

胡桃「まったくだ…」

由紀「二人とも失礼だよ！」

悠里「で…あなたは誰ですか？」
悠里が男に尋ねる。

男「誰って…俺からしたら目を覚ました時にいきなり現れた君達こそ誰だ？ って話なんだけどな…」

悠里「あなたはこの近くのショッピングモールの中で倒れていたんです。彼とも少しだけ争ったみたいですけど…覚えてませんか？」

悠里に言われた直後、男はしばらく黙りこんでから思い出したように答える。

男「ああ！ そういえばお前…俺を刺そうとしたヤツか!？」
彼を見ながら言った。

「それはあんたがゾンビかと思ったからで…」

男「ちゃんと確認しろ、もう少しで普通の人間を殺すところだったんだぞ?。」

「…すいません」

胡桃「由紀の言ったとおりだったな…この人は目を覚ました時、目の前にいきなりナイフを構えたこいつがいたから慌てて反撃しただけみたいだ。」

美紀「あなたはどうしてあそこに倒れていたんですか？」
美紀が男に尋ねる。

男「腹が減って動けなくなった…あのモールにも食料を探しに行つたのに、一つとして残っていなかったし」

悠里「…そうでしたか。」

男「こんな事を頼むのはどうかと思うけど、余裕があるなら何か食べ物をくれないかな？今も腹ペコで死にそうだ…」

由紀「じゃあ…なんかあげようか？」

由紀が男を見ながら言った。

悠里「待って、由紀ちゃん。」

由紀「ん？」

悠里「いくつか質問します。それに全て答えてくれたら、食料を差し上げて良いです。」

男「…手短に頼むよ。」

悠里「まず…噛まれてはいないんですね？」

男「噛まれていない…なんなら改めてチェックしてもらっても構わないよ。」

男は嘘をついている様子もなく、堂々と答えた。

悠里「いえ、信じます。次の質問…：あなたは一人ですか？仲間とかは…？」

男「いない。」

その質問に、男は食い気味に答える。

悠里「そうですか…：ずっと一人で？」

男「いや…：世の中がこうなつてばかりの時は他に二人いた…：でも…：もう言わなくても分かるだろ？」

少しだけ悲しげな目をして、男は言った。

悠里「はい…：すみません、もう結構です。胡桃…：手錠の鍵は？」

胡桃「ここにあるけど…：外しても良いの？」

胡桃は鍵を手に握りながら悠里に言った。

悠里「…手錠を取ったら私達を襲いますか？」
悠里が男に尋ねる。

男「襲わないよ、約束する。」

悠里「こう言ってるし…外してあげましょ？」

美紀「リーさん…そんな事正直に答える訳が…」

美紀がそう言うと、悠里は胡桃から鍵を受け取って言った。

悠里「確かにそうだけど…だからって人を疑ってばかりいるのも嫌なの。この人は大丈夫そうな気がするし、万が一の時は——君と胡桃がいるから…」

悠里「由紀ちゃんもそう思うでしょ？」

そう言つて由紀を見つめる悠里。

由紀「うん！そだね♪」

由紀は笑顔で答えた。

美紀「…分かりました」

悠里「じゃあ、少しじつとしていて下さいね。」
そう言って悠里は男の手錠を外し始めた。

胡桃「本当に暴れるなよ、おっさん。」

男「おっさんとはなんだ。」

男は悠里に手錠を外されながら不満そうに言った。

「まだあんたの名前を知らないからでしょ。」

男「ああ、そうだった。」

悠里「はい、もう良いですよ。」ガチャ

悠里が手錠を外し終わると男は皆に自分の名を告げる。

誠「俺は朝倉誠あさくらまこと…君達は？」
自由になった腕を二、三回振って、その男…朝倉誠はニヤリと笑った。

四十一話 『つかいかた』

『朝倉誠』…男は名前を尋ねられてそう答えた。

悠里「朝倉さんね、私は若狭悠里です。ほら…みんなも自己紹介して。」

悠里が両手をパンツと叩いて皆を見回す。

美紀「直樹美紀です。」

胡桃「…恵飛須沢胡桃」

美紀、胡桃に続いて彼も自己紹介をし、最後に由紀が自己紹介する。

由紀「丈槍由紀です！よろしくね朝倉さん！」

笑顔で誠に近づく由紀を見て、思わず彼と胡桃は身構える。

誠「大丈夫だよ、お二人さん。暴れたりしないって言ったろ？」
それに気付いた誠は、笑いながらそう言つて二人を落ち着かせた。

「すいませんね…今まで嫌な生存者にばかり会ってきたもんで、僕は特に。」

胡桃「今一つ、あんたの事…信用しきれなくてな。」

誠「まあこんな世の中じゃあ正しい判断だとは思うけどね、でもそんなに気を張っていても疲れるだろ？…なんなら武器も君達に預けるから……あ!？」

誠が自分の身を探ってから驚いたような声をあげる。

誠「無い!…落としたのか!？」

美紀「ナイフと鎖なら…既に私達が預かってますよ。」

美紀がそう告げた。

誠「ああそう…良かった。落としたかと…ならそのまま預かってもらっていて構わないよ。」

美紀「そうさせてもらいます。ところで…ナイフはともかくあの鎖も武器として使っていたんですか？凄く重くて持つてくるの大変だったんですけど…」

半分愚痴りながら美紀は尋ねる。

誠「もちろんあの鎖は武器だよ。確かに重いけど…それにさえ慣れ

れば、色々便利なもんでね。」

胡桃「マジか、どうやって使うんだよ。」

誠「そちらさえ良ければ後で使い方を教えてやるよ。だから…まずは食べ物」

誠が悠里に視線を移して催促する。

悠里「ああ、そうだったわね…少し待っていて下さい。」

悠里はそう言つて準備をすると、10分程待たせてからインスタントラーメンと適当な缶詰…それと水の入ったペットボトルを誠に差し出した。

悠里「はいどうぞ、食べて下さい。」

誠「ラーメン?まさかこんな物を食べる事が出来るなんて……」

誠はただのラーメンを見つめて瞳を潤ませる。

胡桃「いやいや…そんな珍しい物でも……」

半分引きながらそう呟やく胡桃に、誠は反論する。

誠「ラーメンだぞ?!俺は今まで様々な場所を巡ってきたけどあるのは大体が腐った食料…運が良くて缶詰だった。ラーメンなんて夢の

また夢だと…しかもちゃんと調理済み…完成してるなんて！」

悠里「一応…コンロもあるから、お湯くらいは沸かせるんです。問題は…水が限られていることですね。」

誠「そうなのか？そんな貴重な水を見ず知らずの俺なんか…悪いな。」

誠はそう言って頭を下げた。

悠里「気にしないで下さい。確かに限られてはいますけど…まだ余裕がありますから。」

笑顔を見せながらそう告げる悠里。

誠「そうか…じゃあ遠慮せずにいただくよ。」

余程空腹だったのか…その後、誠は一言も喋らず、差し出された食料を夢中で食べた。

彼女達は、誠がその食事を終えるのを見守りながら待つ…少ししてから誠は食事を終え、改めて彼女達に礼を言う。

誠「ふう…ごちそうさま。本当にうまかったよ。」

由紀「夢中で食べてたね。そんなに腹ペコだったんだ？どんくらい食べてなかったの？」

気になった由紀が尋ねる。

誠「三日程だね……毎日どこを探しても食料が見付からず、少ない水だけで過ごしてきた……。」

美紀「三日!？」

胡桃「それは大変だったな……てかさんなに食料が見付けられないって、運悪すぎだろ。」

美紀と胡桃が驚く。

誠「かもしれない……どうした訳か、俺の立ち寄る場所はいつも漁り尽くされた後なんだ。君達は違うのか？」

「まあ……食料くらいは少なからず確保出来ますよ。」

「尋ねる誠に彼が答えた。」

誠「……本当に？」

信じられない誠が悠里に尋ねる。

悠里「まあ日に数件の場所を回りますから……全く何も手に入らないって事は今のところ無いですね。」

誠「なんて強運な人達だ……俺なんて一日に十数件の店を回って手

に入れたのはポケットティッシュ一つの日とかもあつたのに……。
虚ろな目をしながらそう呟く誠。

胡桃「ポケットティッシュって……。逆になんでそれが手に入るんだよ。」

誠「お返しにあげるよ。いるかい？」

誠が上着のポケットからそれを取り出して胡桃に差し出す。

胡桃「いらない……。とっておきなよ。」

胡桃にそう言われて、誠はそれを再びポケットにしまった。

誠「……にしても君達は凄いな。俺は今まで何人かの生存者に会ってきたけど……。その中でも一番安定した生活をしているみたいだ。……こんな若い子達だけで」

車内の様子を見ながら誠は彼女達に言う。

胡桃「あたし達はあたし達で……。色々と苦労してんだけどね。」

由紀「朝倉さんって何歳なの？」

唐突に誠の年齢を尋ねる由紀。

誠「……29だよ。」

美紀「え…本当ですか？」

美紀が変な声をあげながら聞き返す。

誠「嘘ついてもしかたないだろ。」

美紀「へえ…」

胡桃「ギリギリ二十代かよ!?…って思ったんだろ？心配すんな、あたしも思った。」

胡桃が美紀の肩を叩いて呟く。

誠「なんだよ…俺って老け顔か？」

不満そうに誠は言った。

美紀「ん…多分ですけど、その無精髭が原因ですかね。それが無ければもう少し若く見えると思いますよ。」

美紀が誠の顎に生えた髭を指差して言う。

誠「ああ…これか。」

髭を手で撫でながら呟く誠。

「なんなら剃刀カミソリあげますけど。」

誠「…いや、大丈夫。それよりも鎖の使い方だけど…見たい？」

由紀「見たい見たい！見せて!!」

「えらく興味深々ですね？」

目を輝かせる由紀に彼が言った。

由紀「だって鎖だよ？どうやって戦うのか気になるじゃん！」

胡桃「どうやっても何も…振り回すんだろ。」

誠「甘いな…鎖は振り回すだけではない。様々な使い方が出来る武器なのだよ！」

誠が誇らしげに言う。

美紀「やるなら外に出て下さいね。あの鎖も外に置きっぱなしですし」

誠「もちろん、車内じゃ狭くて全力で使えないからね…広い外で見せてあげよう。」

そうして全員が車を降りて外に出る、誠は降りてすぐのところに置かれていた自分の鎖を手にとると、彼女達に言った。

誠「誰か相手をしてほしいんだけど…君達の中で戦い担当は君かな？」

誠が彼を指差す。

「まあ…はい。」

胡桃「あたしもだけど。」

それを見て胡桃が名乗り出る。

誠「君もか、女の子なのに凄いな。…なら二人とも、俺に襲いかかって良いぞ。」

ジャラジャラと手元の鎖を鳴らしながら、誠は二人を見て言った。

「二人で？」

誠「ああ、二人で…もちろん怪我はさせないから安心して良い。」

悠里「危なくないかしら…」

胡桃「大丈夫だよ、りーさん。おい——…いくぞ、面白そうだ。」

「ほいほい。」

そう言っつて胡桃はニヤつきながらシヤベルを、彼はナイフを鞘に納めたまま構える。

誠「ナイフと……シヤベル？それが武器だったのか、なんでずつと手に持つてるのかと疑問だったけど……胡桃ちゃんだっけ？君も大概に変わった武器だな。」

胡桃「そうか？鎖の方がよっぽど変わってると思うけど、まあ良いや……峰打ちでいくから安心しろよ。」

「……シヤベルの峰打ちって何？平らな部分で殴るって事？」

彼のツツこみを気にもとめず、胡桃はニヤリと笑うと誠に向かつて突っ込んで行った。

誠「……」……ジャラジャラ

胡桃「ほっ!!」ブンツ!

胡桃は誠目掛けてシヤベルを縦に降り下ろすが……誠はそれを冷静にかわす。

ジャラジャラッ!

胡桃「なっ!?!」

かわした直後、誠は降り下ろされた胡桃の手にうまく鎖を巻き付け、胡桃の両手を封じる。

由紀「おおっ！」

「……………」ダッ！

由紀が誠の見事な動きに歓声を送る中、彼は胡桃に気を取られている誠を横から襲うが…

誠「よっ！」「ドツ！！

「痛っ！」

鎖で胡桃の手を縛ったままの誠に鋭い蹴りをくらわされ、あっさりと押し退けられる。

ジャラジャラジャラツ…

胡桃「おお？おおっ！？」

更にその後、誠はくるつと回りながら胡桃の背後につき、両手を封じた胡桃を盾の様にして彼の方に向けた。

「……むう」

彼は先程受けた蹴りの衝撃から体制を立て直すと、その光景を見て唸る。

美紀「大人の方とはいえ凄いですね…二人相手に余裕顔ですよ、あの人の。」

悠里「ええ、本当に凄いわね。」

頬を緩めながら余裕の表情で胡桃と彼の二人を相手にする誠を見て、美紀と悠里も思わず驚く。

悠里「ところで…さっきの蹴りは痛そうだったけど、——君大丈夫かしら？」

悠里が心配そうに彼を見つめると、彼は笑顔で悠里に手を振った。どうやら怪我はしていないらしい。

美紀「大丈夫そうですね。」

悠里「そうね、良かった…」

胡桃「あんた強いんだな…これが実戦だったら、あたし少しヤバイ？」

両手を縛られたままの胡桃が顔を振り向かせ、背後に立つ誠に言った。

誠「そうだな…実戦だったらこのまま更に鎖を首に巻き付けて絞め

る事も出来るし、片方の手でナイフを取り出して突き刺す事も出来る。もちろん：今はお遊びだからやらないけどね。：でも、君も僕の足を踏みつけるかなんかすれば抜け出せるかもよ？」

胡桃「なるほど：でもいいや：：あいつが助けてくれるの待つ。」
そう言うてから彼を見据え、胡桃は一切の抵抗をせずに大人しくした。

彼女は彼女なりに彼を信頼している。いくらこれが練習試合だとしても、彼ならば助けてくれると信じていた。

誠「随分信頼してるな：：：そう言えば君がさっき降り下ろしたシャベル：：まともに受けていたら俺は結構な怪我をしていたと思うけど。」

胡桃「ああく：：悪いね、つい癖で：：。」

胡桃はそう言うて気まずそうに笑う。

誠「まあ良いけど：：さて、彼はどうでるかな？」

誠は胡桃を盾にしながら、前方に立つ彼を見つめた。

胡桃「あいつそこそこ運動神経良いから、油断してるとおっさん負けるぞ。」

誠「それはそれは、やれるものなら：：ってやつだな。」

「胡桃ちゃん：：簡単に捕まりすぎだよー！」

彼が不満そうな表情をしながら胡桃に文句を言う。

胡桃はヘラヘラと笑いながらも、ほんの少しだけ申し訳なさそうに

彼へと謝罪した。

胡桃「わりいわりい、油断しちゃって。」

「つたく……仲間を盾にされたらどうしてもこっちが不利じゃん。」

誠「どんな手を使っても良いけど……怪我させないでくれよ?」

距離をとったまま動く事なく、慎重に戦略を練る彼に誠が言うと、縛られている緊張感を微塵も感じさせない少女……胡桃が相変わらずヘラヘラしながら告げる。

胡桃「そうだぞ、これは練習試合みたいなものなんだから……お互い怪我させるのは無しだぞ。」

誠（だからそれをあんな風にシャベル振ってきた君が言うかって……）グツ……

そんな事を思いながら誠は少し緩んだ鎖に力を入れ、その後胡桃の首もとを軽く掴み自身の元へと引き寄せる。

胡桃「おい！変なところ触るなよ！セクハラだぞ！」

首もとを触られた胡桃が、眉間にしわを寄せながら言う。

誠「……ん?」

その時、誠はあることに気が付いた。

胡桃「……なに?どうしたの?」

誠「え?……いや……その……」

誠「……君……良い匂いだね。」

胡桃「ひっ!?!」

一定の間をあけてから、誠はぎこちない笑顔で胡桃にそう告げる。その瞬間胡桃は言い様のない恐怖を誠に抱き、本気の抵抗を見せる事にした。

胡桃「うわあ〜っ!〜さっきの無し!!この変態オヤジを一刻も早くぶちのめせ!怪我させても……なんなら殺しても良い!!!」

両手を縛られながらも胡桃はジタバタと暴れ、彼に大声でそう告げる。

「了解!!」ダツ!

誠「オイオイ!?!こっちには人質が……」

接近してくる彼に、誠は胡桃を突き出しながら言った。

「所詮これは練習試合!だからあんたはいくら僕が近付こうと胡桃ちゃんに手を出せない!」

誠「元も子もない事を……!!」ドツ!

焦った誠は胡桃に巻きつけた鎖をほどいて彼の方へ突き飛ばす。

胡桃「うわっ!!」

「っ!？」

ガシツ!!

突き飛ばされた際に体制を崩した胡桃は転びそうになるが…彼がそれをギリギリのところまでを受け止める。

しかし…

ドサツ!

突然の事で反応が僅かに遅れた彼は、それを受け止めきれず…胡桃の肩を掴んだままその場にしりもちをついてしまう。

「いてっ…」

胡桃「おい大丈夫か!?怪我とかは…」

胡桃は自分の体の下敷きになっている彼の身を心配し、その顔を覗きこむ。

「大丈夫だよ、胡桃ちゃんは？」

胡桃「あたしも大丈夫。」

彼に胡桃がそう言った直後、二人のすぐ側でジャラジャラと鎖を鳴らしながら誠が言った。

誠「これが実戦なら、今ここで倒れてるお二人さんに俺はおもいきりこの鎖を振り下ろす……そしたら君達はかなりダメージ受けると思うよ。」

端と端を合わせて折り畳み、長さを半分短くした鎖を振り上げる誠。

胡桃「あたし達の負けって言いたいわけ？」

誠「んく……そうだな、そっちの負け。」

胡桃「ちつ……くっそく！」

誠「どうだ？この鎖の凄さ……いや……俺の凄さが分かったろ？」
振り上げていたそれを自分の肩に乗せ、誠は目の前で倒れている二人に誇らしげな顔を見せる。

胡桃「分かったけどさ……どうせなら勝ちたかったなあ。二対一だったわけだし……お前もそう思うだろ？」

胡桃が悔しそうな顔をして彼に同意を求めた。

「うくん…そうだね。」

彼は別にそこまで勝ちに執着はなかったが、胡桃の顔を見て合わせる事にした。

（つてかこれはそもそもあの人がどうやって鎖を使うのかっていう話であつて…勝負なんかではないハズだったのに…まあいいか。）

誠「で…：…二人はいつまでそうしてイチャついてるの？」

誠が胡桃と彼を見つめて言う。

二人は体を向き合わせたまま地面に座り込んでおり、彼の右手は胡桃の肩に…左手は胡桃の背に当てられている。

彼は先程彼女を受け止めた時の姿勢をずっと無意識に維持していた。

超至近距離で…

由紀「おおっ!!」

悠里「あらあら…」

美紀（あの二人…やっぱり怪しく見えちゃうんだよね…本当にただの友達かな？）

由紀と悠里はにやにやしながら二人を見つめる。（冗談で）

美紀は再び二人の関係を疑う。（少し本気で）

胡桃 「ん?……うわっ!!」 ドツ!

「いてっ!!」

今更自分と彼の近すぎる距離とその姿勢に気付いた胡桃は慌てて彼の手を振り払い……ついでに突き飛ばしてから立ち上がる。

「いてて……なんで僕は突き飛ばされたの?」

彼は上半身だけを起こし、不思議そうな顔で胡桃に尋ねた。

胡桃 「あ、ごめん……つい。」

申し訳なさそうに謝る胡桃。

「まあいいよ……起きるから手かして?」

そう言っただけで彼は倒れたまま胡桃の方に右手を伸ばす。

胡桃 「……うん」

胡桃がそう呟き彼に手を差し伸べようとした直後……

誠 「ほら!」 スツ……

胡桃よりも早く誠が彼に手を差し伸べた。

(あんたには頼んでないよ!!!)

実際に声に出して言いたかったが…それは失礼かと思い、彼は心の中だけで叫ぶ。

「…どうも」

彼は礼を言いつつも少しだけ不満げな顔をして差し伸べられた誠の手を掴み、そして立ち上がった。

四十二話『きもち』

由紀「でね、みーくんと胡桃ちゃんはしょっちゅう私を子供扱いるんだよ!?! ひどくない?」

誠「ああ酷いな、由紀ちゃんは十分に大人だと思うぞ。」

車外での対決(?)を終えた一行は、再び車内へと戻った。

美紀「いやいや：誠さんも気付いてるでしょう? 由紀先輩は大人と呼ばれるにはまだ色々足りないよ。」

胡桃「そうだ! 気付いてるはずだ! 自分ばっか良い顔しようとすんな!」

由紀「ほらね!?! こうやって私を馬鹿にするの!」

美紀「馬鹿にしてるわけではありません。ただ由紀先輩はまだ大人と呼ばれるに相応しい女性にはなれていないと言ってるんです。」

胡桃「ああ、せいぜいマスコットキャラだな。」

由紀「…それってどうなの?」

「誠の顔を見て、由紀が尋ねる。」

誠「んん〜…良いんじゃないか?マスコットキャラは皆の癒しであり、大切な存在だ。」

由紀「そう?へへへ…大切な存在かあ……ありがとう!胡桃ちゃん!」

胡桃「お、おう。」

先程まで喧嘩寸前の言い合いをしていたにも関わらず、誠の言葉一つで胡桃に礼を言ってきた由紀…胡桃はその単純な性格に思わず苦笑いした。

胡桃(そういうところが子供っぽいと思うんだけど……ま、そこが由紀の可愛いところでもあるから……それでいいか。)

そんな事を胡桃が考えていると、由紀の顔がヌツと目前に現れて言った。

由紀「胡桃ちゃんにとって私は大切な存在だったんだね!」

胡桃「ん…まあ、それなりには…」

由紀「照れ屋さんだなあ〜胡桃ちゃんは〜！」

胡桃「ぐっ！」

由紀「ほらほら〜、照れないでハッキリ伝えてよ〜！」

由紀は目を閉じ、耳に手を当て目前で胡桃の言葉を待っていた。

胡桃「た、大切な存在だよ？」

確かに胡桃にとって由紀は大切な存在だが、改めて口に出せと言われると少しだけ照れてしまう…：台詞を言った後、胡桃は少しだけ頬を赤く染めた。

由紀「ちっが〜う!!」

胡桃「え!？」

胡桃渾身の台詞は、何故か由紀のお気に召さなかったらしい。

由紀「模範解答を見てて！」タッタッタツツ…

由紀はそう言って、車内の後方で立ちながら今までのやり取りを傍観していた彼と悠里の元に小走りで向かい…

由紀「あのね、二人にとって私はどんな存在？」
そして二人に尋ねた。

「天使のような存在です。僕のような愚か者…もうあなた無しでは生きられません。」

悠里「大切な存在よ、毎日その笑顔に癒されているわ。由紀ちゃんの笑顔を見てるだけで、私達も笑顔になれるの…ありがとうね由紀ちゃん。」

その台詞の後、由紀の頭を撫でる悠里。それを受けて由紀は「えへ」と笑うと、満足そうな顔をして胡桃の元に戻ってきた。

胡桃「……………」

由紀「胡桃ちゃん…あれが100点の解答だよ！」

胡桃「恥ずかしくて言えるか！ってかりーさんのはともかく、あいつの『あなた無しでは生きられません』って何だよ!?!もう宗教みたいになってるじゃんか！」

声を荒げながら胡桃は彼を指差す。

「宗教とはなんだ。ただ毎日、二時間毎に由紀ちゃんのいる方角にちよつと祈りを捧げたりするだけだ。」

胡桃 「宗教じゃねーか！」

「あとは…持つと幸せになれる由紀ちゃんグッズとかも売ってるぞ。」

胡桃 「だから宗教じゃねーか！しかもちよつとヤバい方！」

美紀 「グッズって何ですか？」

美紀が尋ねる。

胡桃 「食い付くなよ…」

「『由紀ちゃんの使ったストロー』(?25,000)とかかな?手に入れば宝くじが当たるとか病気が治るとかなんとか…」

胡桃 「だから宗教…ですらなくなつたな。もはや詐欺師…いや、ただの変態相手の商人だ。」

美紀 「二万五千円ってのは少し高いですが…五千円くらいならリアルに買う先輩ファンがいそうです…」

悠里 「そんなの持ってるの?」

背後から彼の肩をガシツと掴み、悠里は鋭い視線で尋ねる。

「持ってませんよ！冗談ですって!!」

彼は慌てて否定した。悠里に怒られるのが余程怖いらしい…

胡桃「リーさんに怒られなくなるブレスレット(？40,000)があつたらお前買う？」

「……………買う。」

悠里「胡桃ふざげない!!——君もそんな怪しい物買わないの!!」
両者に悠里の怒声が放たれる。

「すいません…つい」

胡桃「ごめんごめん。」

誠(つい…で四万払うあいつの財力がすげえな。それとも、余程悠里ちゃんが怖いのか?)

誠が悠里達のやり取りを見てそんな事を思う中、由紀が美紀に尋ねる。

由紀「ねえねえ！みーくんは私の事、大切に思ってる？」

美紀「え?…はい。とても大切な…大好きな先輩ですよ。」

胡桃が恥ずかしがって答えられずにいる難問を、美紀は騒ぎに乗じてクリアする。

由紀「えへへ〜！私もみーくん大好き！とても可愛い後輩だよ！」
そう言っただけ嬉しそうに、由紀は美紀を抱き締めた。

由紀「…さて！ラストは胡桃ちゃんだ!!」

由紀は美紀から手を離し、再び胡桃の前に立つ。

胡桃「?…なんだ、由紀。」

由紀「さっきの続き！もう答えてくれてないの胡桃ちゃんだけだよ！」

胡桃「はあ!?!美紀だつてまだ…」

胡桃がそう言うのを見て、美紀は微かに笑う。

由紀「みーくんはさっき答えたよ！大好きな先輩って言ってくれた！」

胡桃「んな!?!」

胡桃（美紀のヤツ…他の皆が下らない話してる隙に終わらせやがったな!?!）

由紀「ほらほら答えて〜?」

耳に手を当てて胡桃の目前で待つ由紀…ついさっきも見た光景だ。

胡桃(くっ!皆こっち見てる…これじゃ恥ずかしくて言えないだろ!なんでこんな目に…)

胡桃「えっと…その…」

由紀「ん〜?」

胡桃(…恥ずかしがる顔をせず…さらっと、自然体で答えるんだ!あたしが由紀を見て普段思ってる事を…自然に…それとなく!!)

胡桃は心の中で覚悟を決めると、目の前の由紀を見つめてから…その口を開いた。

胡桃「お前は…由紀はあたしにとっても…とても大切な存在だよ。」

胡桃「子供っぽいところもあるけど…でもその子供っぽい笑顔に何度も救われた…あたしだけじゃなく…皆だ…、皆いつも由紀の笑顔に救われてるんだ…」

由紀「……………」

胡桃（こんなもんで良いかな？…………いや、ここまで言ったならもう少しだけがんばるか…まだ言いたい事あるし…。）

一言目は口が重くて開けなかった胡桃、だがその最初の一言さえ言ってしまったら…後は楽に気持ちを伝える事が出来た。

胡桃「こんな世界だけど…由紀の笑顔がそれを忘れさせてくれる。

由紀の笑顔を見てる間は…普通の世界にいられる。」

胡桃「だからこれからもずっと…………ずっとあたし達の側で笑っててくれ。えっと…………その…」

胡桃「お前の事…大好きだからな？」

そう言って胡桃は、少し照れくさそうな顔をして…由紀の頭にポンと手を置いた。

由紀「……………」

胡桃（ヤバ…！最後のはちよつと余計だったな…思い返すと恥ずか

しい…)

由紀に言った『大好き』と言う台詞を思い出して顔を赤くする胡桃、だが直後…由紀の顔を見た彼女は驚く。

由紀「胡桃…ちゃん…」

由紀はまっすぐに胡桃のことを見つめながら…その目を潤ませていた。

胡桃「な!?!ご、ごめん!なんか酷い事言っただけ!?!」

慌てる胡桃…そんな彼女を見た由紀も慌てて、溢れそうになった涙を拭いながら言う。

由紀「ごっ、ごみん!酷い事なんて言っていないよ!ただ…胡桃ちゃんの言葉聞いてたら…なんか凄く嬉しくなつて…それで気付いたら、泣きそうになつちやつてた…」

涙を拭き、けろっとした顔になる由紀。

胡桃「そ、そっか。」

由紀「ありがとね…胡桃ちゃん。私も胡桃ちゃんの事大好き!!」

由紀はそう言って、力いっぱい胡桃を抱き締めた。

美紀「…胡桃先輩も、恥ずかしがっていたわりに良い事言えるじゃないですか。」

抱きつく由紀の頭を優しく撫でる胡桃に美紀が言う。

胡桃「…うっさい！」

照れながらそれに答える胡桃。

悠里「ほんと…一番気持ちが入もってたわね。——君もそう思うでしょ？」

悠里が隣の彼に尋ねる。…だが、彼は返事を返さない。

悠里「——君？」

不思議に思った悠里は彼の方を向く。

「んあ？…すいません…感動しちゃって…少し泣きそうになってました。」

彼がそう言っただけ目をぐしぐしと擦る。

悠里「あらあら…。」

胡桃「マジか…」

その光景に驚く悠里と胡桃。すると更に美紀が言った。

美紀「二人とも…あれを。」

どこかを指差す美紀、彼女の指差すその方向にあったのは…

誠「っ………!」「ゴシゴシ

彼と同じように目をごしごしと擦る誠の姿だった。

悠里「あら、誠さんも?」

誠「良いもの見せてもらったよ……」

目を真っ赤にしながら、誠は胡桃に言う。

胡桃「………そっか。」

美紀「男性陣は感動に弱いんですかね?」

「そういう訳でもないんだけど……」

誠「わかるぞ少年……この汚い物だらけの世界。そんな中で育まれる少女達の美しい友情……それが君の心を動かしたんだろ?」

「!?そう……そうなんですよ!!誠さん……あなたにも分かるんですね!」

誠「分かるとも…俺には分かる！」

「……………同志よ」

彼はそう呟いて誠に近付くと、固い握手を交わした。

由紀は胡桃に抱きつき、一方で彼は誠と握手を交わす……………そんなよくわからない光景の中、気がつけば外は暗くなり始めていた。

美紀「もうじき夜ですね。」

美紀が窓の外を見て呟く。

誠「ん？…ああ本当だ。長居すぎたな…俺はそろそろ行くよ。」
そう呟いて席を立つ誠。

由紀「え？行っちゃうの!？」

胡桃「せめて朝までは泊まってけば？夜は危ないって。」

美紀「ええ、少し狭いですけどね。それでも良いなら…」

悠里「…どうですか？誠さん。」

彼女達が誠を引き止める。

誠「ああ…どうするかな…君も構わないか？」
悩む誠が彼に尋ねる。

「ん？ああ、良いですよ。」

誠「んじや…一晩だけ世話になるよ。」
そう言つて、誠は再び席についた。

由紀「一晩だけじゃなくてずっといればいいのに…」
由紀が小さな声で呟く。

悠里「そうね…誠さんは良い人そうですね、よければどうですか？
私達と一緒に暮らしませんか？」

悠里が誠を誘う、美紀と胡桃…それに彼もそれには賛成だった。

誠「ありがとう。」

少しだけ微笑んだ後、誠は悠里に言う。

誠「…だけど遠慮しとくよ。」

悠里「うくん……………そうですか。」

由紀「どうして?」

誠「ちよつとやらなきやいけない事があるんでね。」

胡桃「なんだよ、それ?」

誠「悪いね、ナイショだ。」

尋ねる胡桃に、誠は笑いながら答えた。

胡桃「…ふうくん」

美紀「一人で行動するのは危ないですよ?そのやらなきやいけない事って私達と一緒にではダメなんですか?」

誠「ちよつとね…一人の方が都合が良いんだよ。大丈夫、一人で行動するのは慣れてるから。」

由紀「でも…」

胡桃「由紀、本人がああ言ってるんだ。無理やり引き止めるのは悪いだろ。」

今一つ納得のしていない由紀に、胡桃は言い聞かせる。

誠「悪いね、由紀ちゃん。せつかくのお誘いを断ってしまって……でもとりあえず今夜だけはそちらに甘えて一泊させてもらう事にするよ。」

由紀「ん〜…そっか。…残念だなあ」

悠里「…仕方ないわよ由紀ちゃん。でも誠さん…今夜だけはせつくなのでゆっくりしていつて下さいね？」

悠里が誠に微笑みを向けながら言った。

誠「そうさせてもらおうよ。…ありがとう」

その後、みんなは誠を加えて夕飯を食べ…そして少しだけ食後の会話をした。

彼女達は最初は学校に暮らしていた事、彼とは途中から出会った事…色々な話をした。

だが誠はいくら彼女達が尋ねても、殆ど自分の話をしなかった。

四十三話『しんらい』

夕食も終え、誠を加えて談笑した一同。

気が付けば辺りは完全暗くなり、夜になっていた。

美紀「——さん、そろそろなので…良いですか？」

美紀が彼に声をかける。

それを見ていた誠は何かと不思議そうな顔をしたが、彼はすぐにそれが着替えの合図だと察した。

「了解です。では…あなたもついてきて下さい。」

彼は席を立つと、目の前の誠にそう告げる。

誠「?…わかった。」

誠は半分訳の分からないまま、大人しく彼についていき車の外に降りた。

「いきなりすみませんね。彼女達の着替えの時間なので…終わるまで男の僕達は外で待機です。」

外の空気を吸った後、彼は誠に説明した。

誠「ああ、着替えか…なら仕方ないな。君はいつも着替えの時は外に？」

「はい。女の人の着替え中に中にいる訳にはいかないのね。」

誠「まあ、それもそうか……」

「……………」

誠「……………」

二人きりになると中々話題がなく、気まずい沈黙が続く…。先にその沈黙に堪えられなくなったのは彼の方だったらしく、時間を潰すつもりで誠に話かけた。

「誠さん…あまり自分の事は話しませんでしたね。」

誠「…………ちよいと訳ありなもんで」

「さっき言っていた『やらなきゃいけない事』と関係がありますか？」

誠「おお、ぐいぐいくるねえ！そんなに俺の事が気になるか？」

誠がニヤつきながら言う。

そんな誠に向けて、彼は言った。

「…あなたはみんなに気に入られたみたいですし、それに強い。僕らの仲間になってくれたら、彼女達をより安全に守れるなく…とか、僕は思ってた訳ですよ。」

「けれどあなたはその誘いを断った…もちろん、断るも受けるも自由ですから構いません。けど…やっぱり理由は気になります。」

誠「……………そうか」

誠は夜空をじっと眺めた後、口を開いた。

誠「さつきはあの娘達もいたから話すのは避けたけど…君一人にだけなら話してもいいか……………」

「あ…………、嫌なら構いませんよ？無理やり聞くのも悪いんで。」

誠「いいよ別に、気になるんだろ？」

「…わりとね」

誠「ははっ…」

彼の正直な発言に思わず笑ってしまふ誠、だがすぐにその笑みを引っ込め…真面目な表情で夜空を見つめながら話した。

誠「やらなきやいけない事ってのはな…まあ、復讐みたいなもんだ」

「……………」

その言葉を聞いた彼は、誠に向けていた視線を夜空に向ける。

誠「あれ？驚かないんだな。」

彼の微妙な反応に驚く誠。

「いや、驚きはしてますよ。…ただ本当にこの世界は色んな人がいるな、と思っちゃってね。」

誠「色んな人を見てきたから、今さら復讐くらいじゃ驚かないって事か…、お互い苦労してきたみたいだな。」

誠が苦笑いする。

「誰に、何故復讐するのか…つてのを聞くのはさすがにマズイですかね？」

誠「ん、そうだな…それは内緒だ。」

「そうですか…まあ良いですよ。」

誠「気になるだろうけど、我慢してくれ。」

「…でも、もしかしたらその相手、既に死んでるかも知れませんよ。この世界はただ毎日を生き延びるのも大変ですから。」

彼は誠に言った。

誠「かも知れないな…でも、俺は探すよ」

「……………」

誠「そういうわけだから…君達とは一緒にいけない。毎日を一生懸命に生きている君達の中に、復讐しか考えていない人間がいたんじゃないか。迷惑だからな。」

「そんな事はない……って言っちゃりたいですけど、彼女達が危険な目に遭うのは避けたいってのは事実ですね。」

誠「ああ、それで良い。」

「…一人で大丈夫ですか？」

誠「もちろん、一人で大丈夫だ。」

「それ、どうしてもやらなきゃダメなんですか？」

誠「ああ…絶対にな。」

そう答えた誠の目に、強い憎しみが宿っているのを彼は感じた。どちらかと言えば優しい雰囲気をもっている誠がこんな目をす

るほどの相手とは、いったい何者なのか…。

「僕もあなたは良い人だと思うから…出来れば危険な事はしてほしくないんですけど、その復讐…絶対にやめる訳にはいかないですよね？」

誠「絶対にやめない。…俺の気持ち但至少でも君にも分かるようにたとえ話をしてやろう。…君は見ず知らずの男達に目の前で彼女達の誰かを殺されたら…一体どうする？」

誠は真剣な顔で彼に尋ねた。

「それって…つまりあなたは…」

彼はその言葉で、誠の過去を少しだけ察する。

誠「さあ…どうする？」

「……そいつら全員、殺すまで追い続けます。」

誠「だろ？つまり…そういう事だ。」

「……分かりやすい例え、どうもです」

誠「ま、俺の事は大丈夫…心配は無用。それよりもそっちは大丈夫か？男一人だと大変だろう」

「それなりに…、でも、なんとか毎日楽しく過ごしてますよ。」
そう言って、彼は微笑んだ。

誠「そうか。ところで、お前は誰が好きなんだ？」

誠が唐突に尋ねる。

「あの人達の事ですか？みんな好きですよ。」

誠「みんなって……お前それ、友達としてだろ？」

彼の答えに、呆れ顔を見せる誠。

「はは、やっぱり……恋愛的な意味での質問でしたか？」

彼が笑いながら聞き返す。

誠「当たり前だ。同年代の少女四人に囲まれている一人の少年……好きな娘の一人や二人いるハズだ。みんな可愛らしい娘達だしな。」

「ん……う……ぬあ……ん。」

目を閉じ、腕を組ながら彼は唸る。

誠「……………」

誠は黙って彼を見つめ、返答を待つ。

「……ちよつとまだ分かりませんね。」

少ししてから、彼はそう答えた。

誠「分からない?…何がだよ?」

「確かに、あの人はみんな可愛くて、優しくて…素晴らしい人達です。」

彼が彼女達のいるキャピングカーを見つめる。

「でも…あの中に自分が愛している人がいるかと聞かれると、これが分からないですよね。」

誠「簡単な質問だと思うけどな…要するに、お前が彼女にしたい娘を選べば良いんだからさ」

「彼女…彼女ねえ。ん〜」

誠「あまり深く考えず、軽く考えろ!ただ好きな娘を答えれば良いんだ!」

「やけにグイグイきますね?」

微かなしつこさを感じた彼は誠に言った。

誠「気になるからな。それに、俺は自分の事をお前に聞かれて答えただ。このくらいはいいだろ。」

「はあ、そうですね。」

誠「当然だ。さあ、早く答えろ。」

「やっぱり僕は…、みんな好きです。これじゃダメですかね？」

誠「ダメだ、一人に絞れ！」

「むずかしいな…。今のところ、一人に絞るのは無理ですかね」

誠「今のところ？じゃあ…いつかは決められるって事か？」

「分かりませんよ、そんなの。…そもそも、あの人達が僕に対して好意を…あ、好意ってのは恋愛的な意味の方ですよ？それを抱いてくれない限りは、ただの僕の片思いになってしまいます。それは少しばかり辛いでしょ？」

誠「乙女か、お前は。」

「考えてもみて下さいよ。もし僕が、あの人達の誰かに告白でもしてフラれたら……」

誠「…どうなる？」

「誠さん、僕はね…あの狭い車内で彼女達と毎日暮らしているんです。毎日顔を合わせているのに…フラれなんかしたら気まずいでしょ？…拷問ですよ、そんなの」
彼が顔を青くして呟く。

誠「つまり…フラれて気まずくなるのが嫌だから、お前はあの娘達に恋愛感情を抱けないと。」

「せっかく仲良くなれて、毎日楽しいのに…台無しになっちゃいますからね。」

誠「でも告白して成功した時の事を考えてみる…それはそれで幸せじゃないか？」

「……………」
彼が目を閉じる、どうやらその光景を脳内でイメージしているようだ。

「……………ありですね」
目を開き、彼は呟く。

誠「だろ？」

誠が彼にそう言った瞬間、車の窓が開き、美紀がそこから顔を出して二人に言った。

美紀「お待たせしました。みんな着替え終わったので、もう入ってきて良いですよ。」

美紀はそれだけを告げると、顔を引っ込めて窓を閉めた。

「さ、戻りますか。」

誠「とつとと好きな娘つくって…告白すりや良いのに。」
車に向けて歩き出した彼の背に、誠は呟いた。

「なぜです？」

彼が立ち止まり、誠の方へ振り向く。

誠「若いんだから、ちゃんと青春しなきゃな。」

「僕にその気があっても、彼女達は僕に恋愛感情を微塵も抱いてないと思うんですね。」

誠「そうか？お前わりと整った顔してるし…何よりもただ一人の男だ。彼女達も少なからず意識してると思うけどな…」

「ないない」

誠「どうしてそう思う？」

誠の問いかけに対し、彼は自虐的に笑みを浮かべて答えた。

「以前彼女達が温泉に入っている時に、覗きを働かまして…そんな最低な男に、誰が恋心を抱くでしょうか？」

誠「安心した。君もちゃんと男だったんだな」

「そりゃあ…まあ」

誠「それ…バレたのか？」

「バレました。しかも目当ての物は湯気で見えなかったっていう、最低の終わり方でしたよ。」

誠「ひでえ話だな…一人の男として、俺はお前に同情するよ。」

「……どうも」

彼はそう言つて再び車に向けて歩き出す、そしてその車のドアに手をかけた瞬間に、誠が言った。

誠「…あ、ちよつと胡桃ちゃん呼んでくれる？別れる前に、あの娘とも話してみたいんだ。」

「ん、胡桃ちゃん？…分かりました。呼んできますね。」

彼が車の中に入って少しすると、胡桃が車から降りてきて、外で待つ誠に声をかけた。

胡桃「何？あたしになんか用？」

誠「用つて程のもんじゃないよ、少し聞きたい事があるだけだから」
誠はキャピングカーから少しだけ離れた所に移動すると、手招きをして胡桃を呼び寄せた。

胡桃「聞きたい事あんなら車の中で答えるけど、外じゃなきやダメなの？」

誠「まあね…胡桃ちゃんは、結構前から皆と一緒になんだよな？」

胡桃「うん？そうだよ。それがなに？」

誠の問いに、胡桃は不思議そうな顔をする。

誠「胡桃ちゃんさ……なんか隠してない？」

胡桃「……え？」

誠「今日君の首を触った時、異常に冷たかった……あれはどうしてだ？」

誠が言った直後、胡桃は一瞬だけ驚いたような表情をする。
それを誠は見逃さなかった。

胡桃「冷たかった？……勘違いじゃないかな。」

誠「じゃあ、もう一度触らせてくれる？首じゃなくても、手でもいいから。」

胡桃「イヤだよ。ほら……セクハラになっちゃうぜ？」

内心ではかなりの焦りを感じながらも、どうにかしてごまかしたい
胡桃は微笑みながら誠にそう言った。

誠「俺はどうせ明日には出てくんだ、誰にも言わないから……正直に
教えてくれないか？」

胡桃「……………」

誠「…ダメか？」

胡桃「…分かった、話すよ。」

『明日には出ていく』『誰にも言わない』その二つの言葉で少しだけ安心した胡桃は、誠に傷跡の事を話した。

誠「そうか…先生だった人に…、そりやツラかったな。」

胡桃「…うん」

誠「その事…知らないのは彼だけか？」

胡桃「うん、あいつだけ。」

誠「なんで彼に言わない？」

胡桃「怖くて言えない……今の関係でいられなくなる気がする。」
胡桃は顔を伏せながら答えた。

誠「今の関係ってのは？」

胡桃「友達同士の関係。…傷の事言ったら、あたし達の間で溝ができて…もう友達でいられなくなるかもとか思っちゃうんだよ。もしかしたら嫌われるかも…」

誠「いらない心配だろ、あいつは絶対にそんな人間じゃないって。会ってばかりの俺でも分かるぞ」

胡桃「あたしも分かってるよ……でも…その……」
俯きながら答える胡桃、その声の元気がだんだんと無くなっていく。

誠「……ま、薬打ってるならもう心配はないだろうし…わざわざ言う必要も無いかもな。」

胡桃の暗い顔を見た誠はこれ以上は悪いと思い、この会話を終える事にした。

胡桃「……うん」

誠「そんな暗い顔をするな。話を振った俺が気ますぐなる」

胡桃「あ…、ごめん」

誠「謝らなくていいよ。」

胡桃「あいつには黙っててね？…いつか、ちゃんと自分で伝えたいからさ…」

誠の目を見ながら、胡桃はそう言った。

誠「分かってるよ。…がんばれ」

胡桃「うん…ありがとう」

誠「とりあえず、あいつの事を信頼してないから隠してた…とかじゃないんだよな？」

胡桃「それだけはないよ、あいつの事…信頼してるから」

誠の問いに、胡桃は強く答える…だが後半は少しだけ、照れた様子を見せていた。

誠「へえ……」

そんな胡桃を見て、ニヤニヤしながら誠は呟く。

胡桃「…なに？」

誠「いや…なんでも？さて、中に戻るか」

胡桃「そだな」

車の方へと歩き出す誠…それに胡桃も続く。
二人が車内に戻ると、みんなが就寝の準備をしていた。

悠里「おかえりなさい。何話してたの？」

悠里が胡桃に尋ねる。

胡桃「ん？別に。大した話じゃないよ」

悠里「そう、ところで誠さん。あなたの寝る場所ですが…」

「そこですよ。」

椅子に座っている彼が、その向かいの席を指さす。

誠「…座って寝ろって事？」

悠里に尋ねる。

悠里「あつ、もしよければベッドで寝ます？私が椅子で寝ますから」

誠「いや、椅子で良い。信頼出来る人間に囲まれて、安全な場所で眠れる…それだけで十分。ありがとう」

悠里「いえいえ…そう言っていただけで助かります。」

誠「君は毎日そこで寝てるんだろ？」

毛布をかけて椅子に座っている彼に、誠は尋ねた。

「もちろんです。」

誠「ま、男ならそんなくらい我慢して当然だよな。」

「ですね」

悠里「——君にも申し訳なく思ってるわ。ごめんなさいね…毎日そんなところで。」

申し訳なさそうな声で彼に謝る悠里…そんな彼女に、彼は笑顔で言った。

「平気ですよ。慣れましたから」

由紀「いつも思うんだけど、——くん…体痛くならないの?」
由紀が尋ねる。

「最初は起きると痛かったですけど、今は平気…つまり慣れです!」

由紀「へえ〜」

美紀「——さん、椅子で寝るの好きなんですよね?」

美紀が彼の横に立ち、その肩を叩く。

「好きではないです!僕、そんな事言いましたか!?!」
彼はすかさず反論した。

美紀「ふふつ、冗談ですよ。前も言いましたが…もしキツかったら私のベッドを少しだけ使っても良いですからね?」

「…どうもです」

胡桃「美紀、やめとけ。布団の匂い嗅がれるぞ。」

胡桃が美紀に言う。

美紀「な?!変態じゃないですか!やっぱさっきの話は無しです!胡

桃先輩のベッドでも寝て下さい!!」

胡桃「イヤだよ！なんであたしが!!」

「お二人さん…僕は匂いを嗅ぐなんて一言も言っていないんですが」
悲しげな目をしながら、彼は呟いた。

美紀「でも、胡桃先輩が嗅ぐって言っていましたよ?」

胡桃「お前、絶対嗅ぐだろ?正直に言ってみろ」
じつと彼の答えを待つ美紀と胡桃。

「嗅ぎません!」

彼はそう強く答える。

胡桃「…本当か?」

美紀「…怪しいです」

「…りーさん!胡桃ちゃんと美紀さんが僕をイジめます!!」

悠里「二人とも、——君がかわいそうよ。」

美紀「冗談ですよ。…ね、胡桃先輩？」

胡桃「ああ、さすがにそんな事はしないって分かってるよ。」

美紀と胡桃は、微笑みながらそう言った。

「ならいいですが…冗談に聞こえなかったな…」

胡桃「日頃の行いが悪いからな。」

「…返す言葉もない」

彼がそう呟くと、胡桃は彼の頭に手を置き…ニツコリと笑いながら言った。

胡桃「でも、感謝もたくさんしてるからな。いつもありがと！」

「あ…、うん…どういたしまして」

そう言った後、彼は顔を赤くして胡桃から目を反らす。

由紀「——くん！私もだよ！」

美紀「あ、私もちゃんと感謝してますからね。」

悠里「良かったわね——君。もちろん、私もいつも感謝してるわ。」

胡桃に続き、由紀・美紀・悠里も彼に感謝の言葉を述べる。

誠「みんな…仲が良いんだな。」

由紀「うん…みんな仲よしだよ！」

誠の言葉に、由紀は笑顔でそう答えた。

誠「……………」

『彼女達は僕に恋愛感情を微塵も抱いてないと思うんですね』

誠（微塵も、つて事はなさそうだな…お前が自分に自信を持っていないだけだよ）

目の前で彼が彼女達と笑い合うのを見た誠は、彼が言っていた言葉を思い返し…そう思った。

「あ〜！もうやめやめ！急にそんななって言われると戸惑うつての！！」

頭にのせられた胡桃の手を払いながら、彼が言う。

胡桃「あ、照れてやんの。」

「照れてない！」

美紀「顔が赤いですが…」

「ぬう…もう寝ます！みなさんも寝なさい！夜更かしはダメですよ！！」

彼はそう言っつて、テーブルに顔を伏せた。

由紀「私も眠くなってきた…」

胡桃「そうだな…、んじや寝るか。」

美紀「ですね。」

悠里「じゃあ…——君、誠さん、おやすみなさい。」

「おやすみなさいです」

誠「ああ、おやすみ。」

彼女達がベッドに入り、車内の明かりが消される。

「……………」

誠「……………」

誠「…本当に良い娘達だな。」

暗い車内…目の前で顔を伏せ、眠ろうとしている彼に誠は小さな声で言った。

「…はい」

顔を伏せたまま、彼は答える。

誠「…ちゃんと守ってやれよ。俺は明日出ていくけど…もしまたいつか、運良く君達と会えた時に…誰かがいなくなっていたりしたらショックだからな。」

「もちろんです…ちゃんと守る。」

「あの人達の事…大好きですからね」

彼はそう言った後、静かに寝息をたてる。

それを見届けてから、少し遅れて誠も眠りについた。

四十四話『わかれ』

一晩だけながら、朝倉誠を車内に泊めた一行。
そしてその翌朝・朝食を済ませた後すぐに、誠を見送る準備が始まった。

由紀「ほんとは行っちゃうの？」

車の外、由紀が悲しげな表情で誠に尋ねる。

誠「そんな顔をするな、運がよけりや…その内また会えるよ」

「今、リーさんと美紀さんが車の中でいくつか食料と薬をバッグに詰めてます。多分もう来ると思うから、それを貰って行って下さい。」

誠「悪いね、貴重な物資を…」

申し訳なさそうに誠が呟く。

胡桃「気にすんなよ、こんくらいはしないと…あんた飢え死にしそうだからな。」

誠 「かもな…ありがとう。」

胡桃 「礼はリーさん達が来てからでいいよ。」

胡桃が言っているそばから、悠里と美紀がバッグを持ってやってきた。

悠里 「少し重いかもしれませんが、これ持って行って下さい。」

悠里が誠に物資の詰まったバッグを手渡す。

誠 「…一日だけだけど、久しぶりにとても楽しい時間を過ごせた。
…本当にありがとう」

美紀 「私達も楽しかったですよ。どうかお元気で…」

誠 「みんなもね…、じゃ…行くよ。」

誠はそう言っつてバッグを持ち直すと、彼の方を見て呟く。

誠 「…がんばれよ」

「あなたもね……またいつか会いましょう。」

誠「…ああ」

彼と言葉を交わした誠は、静かに外の世界へと歩き出す。

由紀「バイバイ…元気でね」

歩き出す誠に、由紀がそつと手を振る。

誠「じゃあな、由紀、胡桃、悠里、美紀……」

みんながこの世界でも楽しく生きれるように、どこかで祈ってるよ」

そう言つて一度だけ手を振り返すと、誠は前を向き…振り返る事なく街の中に消えていった。

胡桃「行つちやつたな…」

「だね」

美紀「あの人なら、きつと一人でも大丈夫ですよ。」

由紀「そうかな…やっぱ私は心配だよ…」

悠里「大丈夫よ由紀ちゃん…きつとまた会えるわ」

それぞれが誠の歩いていった方向を見つめて言葉を交わす中…ある事に気付いた胡桃が呟く。

胡桃「あの人…最後の最後であたし達を呼び捨てにしてったな。」

美紀「そういえば…そうですね。」

悠里「まあ私達よりも一回り年上だから、違和感はなかったわね。」

由紀「へへ…お父さんみたいだった」

「……………」

由紀「——くん？どうかした？」

無言でたたずむ彼を見て、由紀が声をかけた。

「ん？いや…なんでもありません。戻りましょうか」

由紀「うん、みんなも戻ろく」

いつかまた誠と会える事を祈りながら、彼女達は車に戻っていった。

美紀「まだお昼まで時間がありますが…どうしますか？移動ですか？」

車内に戻り早々に美紀が悠里に尋ねる。

悠里「んく…移動する前に、美紀さん達が誠さんと会ったそのこのシヨツピングモールを…今度は全員で見てくださいましょうか？」

近くのシヨツピングモールを車内から見つめながら、悠里はみんなに提案した。

美紀「かまいませんけど…チラツと見た感じでは食料とかかなり漁られていましたよ。」

胡桃「チラツと見た感じだろ？よく探せばなんかあるかもよ？」

美紀にそう言つて、胡桃は準備を始める。

悠里「ええ、行ってみましょ。美紀さん達も途中で誠さんを引きずつて帰つてきたから…全部は見えてないでしょ？」

由紀「うん、全然見てないよ」

悠里「じゃあ決まりね！行きましょ、みんな。」

美紀「わかりました。ちよつと準備しますね、りーさん達は先に外で待つて下さい。」

胡桃「了解、りーさん行こ。」

悠里「ええ」

準備を終えていた悠里と胡桃は、いち早く外に出る。

その後、由紀が彼に尋ねた。

由紀「——くんも準備出来てる？」

「はい、もう出来て…」

彼はそこまで言葉を発してから、美紀が何かを伝えたそうな目をしている事に気付き…慌てて言葉を付け加える。

「…あ、やっぱもう少し待ってて下さい。なんなら由紀ちゃんも先に出ていて良いですよ」

由紀「わかった！みーくんもはやくしてね〜！」

美紀「はい、すぐに終わりますから…待ってて下さい。」

…バタン

由紀が外に出てドアを閉めたその直後、彼は美紀に尋ねた。

「どうかしました？」

美紀「リュックの中を見て思い出しました。これ…いつ胡桃先輩に渡すんですか？」

そう言っつて美紀がリュックサックから取り出したのは、昨日彼が胡桃の為にとシヨッピングモールから持って帰ってきた手袋だった。

「あ、そういうえば美紀さんに預けてましたね。…後で渡そうと思います。預かってもらって助かりました、ありがとうございます。」

美紀から手袋を受け取りそれを上着のポケットにしまうと、彼は丁寧に頭を下げた。

美紀「どういたしまして。胡桃先輩…よろこんでくれるといいですね。」

「はい、まったくです。」

二人はそう言うってから笑い合っていると、みんなの待つ車外へと降りた。

由紀「お！きたきた、じゃ…行くく！」

笑顔で歩き出す由紀、それを追うように他のメンバーも歩き出した。

そして入った、ショッピングモール内…

胡桃「…どこ見るの？適当にまわる？」

壁に貼られたモール内の地図を眺めながら胡桃が悠里に尋ねる。

悠里「そうね…適当にまわしましょう。」

胡桃「りょーかい」

由紀「あ、昨日そつちから見たから：今日はこつちからにしよう？」
歩き出す胡桃の手を引いて、由紀は嬉しそうに店内を駆けていく。

胡桃「わわっ！おい由紀！走るなって!!」

美紀「ふふっ、由紀先輩は今日も元気ですね。」

走る由紀とそれに振り回される胡桃：その光景を見た美紀が笑いながら呟く。

悠里「そうね、元気が一番。でも…」

悠里はゆつくりと由紀の元に近寄り、手の届く距離になった瞬間に由紀の服の裾を掴む。

悠里「由紀ちゃん：元気なのは良いけど、あまり大声ではしゃいじゃダメ。：わかった？」

優しい言い方ながらも、どこか恐怖を感じさせる笑顔で：悠里は由紀に言った。

由紀「うっ！ごっ、ごめん！もう少し静かにします！」

由紀は連れ回していた胡桃から手を離し、悠里に謝る。

悠里「わかればいいわ。ちゃんと静かにね？」

由紀「らじや〜…」
頼りない敬礼をする由紀

「りーさんが怖いのはみんな一緒か…」

美紀「ええ…」

そんな由紀を見て、彼と美紀は呟いた。

由紀を落ち着かせたところで、一行はモール内をまわる。

モール内の物資はかなり漁られていたが…それでも、奴らと出くわさなかったのは不幸中の幸いだった。

美紀「昨日も思いましたが…ここって静かですよ。まだあれに会ってませんし…」

胡桃「だな…みんな外に出たのか？」

「なんにせよ、静かなのはありがたい。無駄に戦いたくはないからね」

三人が言葉を交わす中、由紀がモールの一角を指さして言った。

由紀「りーさん、あそこ食料品売り場だよ。見てく？」

悠里「そうね、一応見ておきましょうか…入り口付近の棚は空っぽだけど、奥まで見れば何かあるかもしれないしね。」

「けっこう広いスペースのようです…二手に別れて探索しませんか？」

食料品売り場のスペースは確かにかなりの広さだった。

彼は効率的な探索をする為に、二手に別れての探索を悠里に提案する。

悠里「うーん、まあわりと安全な場所みたいだし…それでいいわよ。どういう風にチーム分けしようかしら？」

悩む悠里…そんな彼女に、彼は言った。

「僕は胡桃ちゃんと探索して良いですかね？」

胡桃「え？あたし!？」

彼からの不意の指名に、胡桃は驚く。

悠里「ん？ええ…別に良いわよ？じゃあ、私は由紀ちゃんと美紀さんを連れてくわね。」

胡桃「でもさ、そっちのチームは大丈夫？もし奴らと出くわしたら…」

悠里「大丈夫よ、ちゃんとペンライトも持ってきてるし…いざとなればこれを使って逃げるから」

ニツコリと笑みを浮かべて、悠里は胡桃に答えた。

美紀「さつきも言いましたが、この辺はわりと安全っぽいですが……大丈夫じゃないですか？もちろん、気は抜けませんが……」

由紀「心配しないで！こっちは三人なんだから。」

胡桃「……わかったよ。んじゃ、行こうぜ——。」

悠里「無理して隅々までチェックしなくても良いからね、ある程度見たらまたここに集まりましょ。」

「了解しました。」

集合地点を決めた彼女達は、二手に別れての探索を開始した。

四十五話『おくりもの』

悠里達と別れて食品売り場内を探索する彼と胡桃：

食料はかなり漁られており：およそ十五分程たってフロアの奥まで探索した今も、彼等は何一つ得ていなかった。

「何も無いね。」

彼が一つの商品棚を隅から隅まで確認して、胡桃に言った。

胡桃「ちゃんとチェックしろく、棚と棚の隙間とか：そこの倒れる棚の下とかもな。」

「……………」

そう言われた直後、彼は無言で胡桃を睨む、何故なら：

胡桃「よっ！…ほっ！」ブンツ！…ブンツ！

彼に食料探しを任せて、胡桃本人は素振りをしていたからだ。

「胡桃さん……手伝ってはもらえませんか?」

胡桃「…ハッキリ言うぞ、ここに食料はない!」

自信満々に言い放つ胡桃…そんな彼女に、彼は反論する。

「あるかも知れないでしょう? ほら…この棚と棚の隙間とかに、誰かが見落とした缶詰めとかが!」

胡桃「いや…絶対ない! そもそもそこ…さつきあたしが確認したし」

棚と棚の僅かな隙間に手を伸ばす彼に、胡桃は素振りを止めてから言った。

「なら早く言ってよ! 無駄に探しちゃったじゃん!」

胡桃「だいたい場所探したはずだけど、何もナシ! 入り口の方に戻って、大人しくリーさん達待とうぜ?」

胡桃が彼にそう言った直後

ガタガタツ…

「?」 胡桃「ん?」

話す二人の近くで物音聞こえ、二人はその方向を見る。

ガタガタ……

その音はだんだんと近寄ると……目の前の商品棚の裏で止まった。

胡桃「リーさん達……じゃないよな？」

胡桃が小声で彼に尋ねる。

「多分違うかな……呼びかけてみる？」

彼の問いに、胡桃はシャベルを構えてから無言で頷く。

「……リーさんですか？」

彼が少しだけ大きめの声を出して、音のした方に言った。

………グアア

直後、そこから微かに聞こえた呻き声……それを聞いた瞬間
彼と胡桃は薄々気づいていた音の正体に確信を持つ。

胡桃「ちっ……やっぱりアイツらかよ。」

「やっぱここにもいたんだね」

二人が言葉を交わす中、それは呻き声をあげながら姿を現した。

『アア……ア……』

空の商品棚に手をつきながら、ゆっくりと彼と胡桃の方へ歩くゾンビ……

見たところ、数は一体のみようだ。

胡桃「さて……ここはあたしが……」

そうやって胡桃がシャベルを構えなおした直後……

彼がゾンビ目掛けて何かを投げる。

するとゾンビはドサツ……と音をたて、その場に倒れた。

胡桃「今……何投げたの？」

不思議そうな顔をして尋ねる胡桃

それに対し、彼は答えた。

「ナイフだよ。」

胡桃「ああ、そういえばそんな使い方もしてたね。」

思い出したように胡桃が呟く。

胡桃「6〜7mくらいの距離かな…よく一発で頭に当てたね。」
道の先で倒れているゾンビの頭に、先程彼が投げたナイフが刺さっているのを確認して言った。

「ちまちま練習してたんでね、もうこのくらいの距離なら楽勝ですよ。」

そう言つて、彼は少しだけ自慢げな表情を見せる。

胡桃「前はそれで怪我したつてのに…懲りずによくやるな。…ま、その調子で忍者でも目指してくれ。」

「なにそのあつさりした反応!?もうちよつとその…なんかないかな?」

胡桃「なんかつて?」

「ほら『カッコいく!』みたいなさ…そんな反応を少しばかり期待して投げたわけですよ。」

胡桃「あゝ…ハイハイ、カッコいいカッコいい。」

彼の期待していた台詞を吐く胡桃…

だがそれは棒読みで感情が無く、彼の期待した物とは大きく異なっていた。

「…ま、良いですけどね。胡桃ちゃんがそんな事言うわけないって分かってたし…：それよりも…」

想定範囲内だというような表情をして、彼は上着のポケットから何かを取り出し…：それを胡桃に手渡した。

「はい、これあげるよ。」

それは昨日、由紀達と共に見付けた一つの手袋だった。

胡桃「え？…なに…これ？」

突然の贈り物に、胡桃は戸惑う。

「前に手が冷えやすいとおっしゃっていたあなたに…私めからのプレゼントでございます。まあ由紀ちゃん、美紀さんにも選ぶのを手伝わってもらいましたけど…」

彼は丁寧な口調でそう告げると、それを彼女に手渡した。

胡桃「これ…いつ手に入れたの？」

それを受け取って少し眺めてから、胡桃は尋ねる。

「昨日だね、んで…その途中で誠さんを拾ったと…」

胡桃「あたしにくれるの？」

「ん？そう言ったでしょ？一緒に探索したいって言ったのも、胡桃ちゃんにこれを渡したかったからだしね」

目を丸くして尋ねる胡桃を少しだけ不思議に思いながらも、彼は答えた。

胡桃「……ふうん」

もう一度、改めてそれを眺める胡桃

「もしかして……あまりお気に召さない？ならこの近くにそれ見付けた店あるからさ……その中から胡桃ちゃんが好きなのを……」

胡桃「ううん、大丈夫。これで良い……」

そう呟きながら、胡桃は今着けている手袋を外す……そしてその代わりに、貰ったその手袋を身につけた。

「デザインはいつも胡桃ちゃんが着けてるのと殆ど一緒だけど、暖かい素材で出来てるとかなんとか……どうかな？」

両手にそれを着けた胡桃に、彼は感想を尋ねる。

胡桃「……あつたかい」

彼女はそう一言だけ、静かに呟いた。

「まあタダで手にいれた物なんでありがたみ半減だけどね……」

少しだけ気まずそうに、彼が言う。

胡桃「ははっ、お金払おうにも払う相手がないんだ……そこは気に

するなよ。」

「それもそうだけどね……」

そう彼が呟いた直後、胡桃は少しだけ顔を赤くして言った。

胡桃「プレゼントとかあんまり貰った事ないからさ……なんていうか……ちよつと照れるけど、でも……」

胡桃「……わりと嬉しい！ありがとう！」

胡桃は彼にそう言つて、ニツコリと嬉しそうな笑顔を見せる。

「いえいえ、喜んで貰えたなら何よりです。」
彼女のそんな笑顔を見た彼は、自身もとても満足そうに笑顔を返した。

「さて、見る物見て……渡す物渡したし、集合場所に戻りますかね。」

胡桃「だな。……あ、お前あのナイフは回収しないの？まだ刺さりっぱなしだぞ」

集合地点に戻ろうとする彼、そんな彼が先程投げたナイフを未回収な事に気付いた胡桃は彼にそれを教えた。

「おつと…忘れてた。」

彼が慌ててそれを回収しに向かう。

胡桃「……」

そんな彼を見つめてから、胡桃は視線を自分の手に移す。

胡桃（だんだん感覚が薄れてきて…。本当は…あつたかいのか、そうでもないのかも…あんまり分からないんだ…）

胡桃（せつかくあたしの為にプレゼントしてくれたのに……なんか悪いな）

感覚の薄れた自身の体…その手のひらを見つめながら、胡桃は暗い表情をする。

「…よつと」

背後に立つ胡桃のそんな心情には気付かずに、彼はゾンビからナイフを引き抜く。

「投げただけなのに、けっこうしっかり刺さるもんだな……ん？」

ナイフを引き抜く為に視線を低くしていた彼は、商品棚の下…その奥にある物を発見した。

「……………」ゴソゴソ

彼は手を伸ばし、それを手に取って確認する。

「……………んお!!?」

胡桃「なっ!!?なんだよ!どうした!?!」

突然の奇声に胡桃は驚くと、彼の元に駆け寄った。

彼は興奮しながら、一つの小箱に入った食品を胡桃に見せる。

「缶詰だ!しかも箱まで付いてる高級そうなやつ!!」

胡桃「なんだ缶詰かよ…んなもん、しょっちゅう…」

『しょっちゅう食べてる』…胡桃はそう言おうと思ったが、彼の持つその小箱に書かれた『高級缶詰シリーズ・激ウマコンビーフ』の文字に心を奪われる。

胡桃「おお!ちよつと旨そう!!」

「でしよ!?!」

二人はテンションを上げると念のためにもう一度、辺りをしっかりと見回した。

胡桃「ダメだ…それ一個だけみたいだな」

「まあ一個でも良いさ、そろそろリーさん達と合流しよう」

胡桃「ああ、そうしよう」

缶詰一個だけを手にして、二人は集合地点に戻る。

そこには既に悠里達が待っていた。

胡桃「ごめん、遅れた。」

美紀「いえ、私たちも今来たところですから。」

悠里「謝るのはこっちよ、何も見つけれなかったわ」

食料を一つも見つけられず、それを申し訳なさそうに詫げる悠里。

由紀「仕方ないよ、ここ…凄く漁られてたもん。それにほら！胡桃ちゃんちも何も持って帰ってきてないから大丈夫だよ。」

見たところ手ぶらの彼と胡桃…そんな二人を見て、由紀が言った。

胡桃「ふっふっふ…由紀、残念だったな…あたし達は収穫ゼロじゃないんだよ！」

怪しげに笑ってから、誇らしげな表情をする胡桃。

由紀「え！何見つけたの？」

「へへへ…缶詰です！」

尋ねる由紀に、彼もまた誇らしげな表情で答える。

美紀「缶詰…ですか。よく見つけましたね。」

美紀は言った。

美紀（そんな誇らしげな表情する程じゃないけど…まあ悪いから黙っておこう…）

そんな事を、心の中で思いながら…

由紀「なんだ缶詰か…なんか二人とも自信満々だったからもつと凄いやつか…」

不満そうに由紀が呟く。

美紀「ダメですよ先輩！私も思ったけど、あえて黙っていたんですから!!」

そんな由紀の口を慌てて手で塞ぐと、美紀は由紀の耳元で呟いた。

胡桃「お前ら…あたし達がただの缶詰一つではしゃいでると思って

るな?。」

由紀「ぷはっ!……違うの?」

口を塞ぐ美紀の手を振りほどき、由紀は胡桃に尋ねる。

胡桃「おい……見せてやれ。」

「<u>…」

胡桃の指示に彼は元気よく返事を返すとポケットからそれを取り出し：由紀達三人に見せつけた。

美紀「なんですかこれ、…高級缶詰シリーズ…」

悠里「激ウマコンビーフ…」

由紀「おおっ!こんな缶詰初めてみた!!」

高級と書かれたその箱を見て、由紀はテンションを上げる。

悠里「確かに美味しそうね、二人がそんな顔するのもわかるわ。」

悠里はそう言って彼と胡桃の顔を見ると、クスクスと笑った。

胡桃「な、なに?そんな変な顔してたか?」

美紀「変な顔ではないですけど…凄く誇らしげな顔をしてましたね。…：缶詰一つで。」

美紀の冷静な指摘で、いくら高級でもしよせんは缶詰だということに気付いた胡桃：彼女はとたんに恥ずかしくなり、その顔を赤くした。

胡桃「だつ…だつて凄く旨そうだったから…良いだろ別に！ちよつとくらいはしゃいでも！」

美紀「ええ、それはかまいませんけど…これ、五人で分けたらかなり少ないんじゃない？」

「!!」

美紀のその言葉にハツとした彼は、慌てて記載されている内容を確認する。

(この量を五人で…：となるとかなり…：)

内容を確認し、彼はみんなに言った。

「…かなり貧乏くさい光景になりそうですね。」

美紀「やっぱり…」

胡桃「想定外だ…はしゃいで分ける事を考えてなかったぜ…」
頭を抱えて胡桃は呟く。

悠里「私はいいから、みんなで食べて？四人なら少しはマシになるでしょ？」

美紀「私もいいです。由紀先輩達三人で食べて下さい。」
自分は良いと大人の対応をする悠里と美紀、そんな二人に由紀は言った。

由紀「それはダメだよ！りーさん達もこれ美味しそうだと思うでしょ？」

悠里「うくん、そうね…それなりには」

美紀「まあ、はい。」

由紀「なら…、ここは公平にゲームで勝った人が独り占め出来るようにしよう！」

胡桃「ゲームって…何すんの？」
興奮気味の由紀に胡桃は尋ねる。

由紀「……考えとく、それまでそれは私が…」

「りーさん預かつといて下さい。」

さりげなく缶詰を手にしようとする由紀

だが彼は、それをすかさず悠里に渡してしまう。

悠里「分かった、預かっておくわね。」

由紀「うう…私が預かろうと思ったのに…」

「すいません、由紀ちゃんには渡せない。」

彼が真顔で言い放つ。

由紀「なんで!?!どうして!?!」

胡桃「お前だと勝手に食いそうだからだろ…」

ボソツと胡桃が呟く。

由紀「失礼な!」

胡桃「聞こえてたのか、耳良いな。」

美紀「…私も、リーさんに預けたのは正解だと思いますよ。」
由紀が失礼だ、不満だと言つて暴れる中、美紀は彼にそつと伝えた。

「…ですよね。」

悠里「ほら由紀ちゃん、落ち着いて。…さあ、他のところ見て回りましょう。」

由紀「…はあゝい。」

まだ少し不満そうな由紀の手を引いて歩き出す悠里…胡桃達もそれに続く。

その後、他のフロアを見て回った一向だが…目ぼしい物を見つける事はなく、車へと戻った。

悠里は唯一の戦利品である缶詰を由紀に見つからぬよう、そつと車内の棚の奥へと隠すと…地図を確認してから適当な広場へと車を移動させ、夕飯を終える。

一日の終わり、彼を外に出して着替える彼女達。

全員が着替え終わると、悠里が彼を呼ぼうと席を立つ…その時

由紀「待って、リーさん！」

突然、由紀が悠里をひきとめる。

悠里「ん？何？」

由紀「私ね、面白そうなゲーム思いついたの！…これを参考にしよう！」

由紀はそう言って一冊の本をテーブルに置いた。

美紀「これって…」

悠里「こんなの…いつ拾ったの？」

その本を見て、悠里は尋ねる。

由紀「今日ショッピングモール行った時に拾った！」

美紀「いつの間に…」

胡桃「…てかこんなのを参考にするゲームって、お前…何する気だよ？」

由紀「えへへ…それはね…」

由紀は、自分が思い付いたそのゲームの内容を悠里達に説明した。

悠里「…それを…私達がやるの？あの缶詰を賭けて？」

美紀「私…やっぱ缶詰いりません。」

由紀「ダメ！これは強制参加だよ！」

青ざめた顔でベッドに向かおうとする美紀を、由紀は無理やりひきとめた。

胡桃「なあ…他のゲームにしようぜ？ほら、前みたくトランプとかで…」

由紀「ええ〜！せっかく面白そうなゲームだと思ったのに〜！」

胡桃「いや、面白そうかどうか微妙だけど…」

美紀「ええ、微妙ですね」

そう呟く胡桃と美紀を見た由紀は、眉をしかめて言った。

由紀「そんな事言つて…胡桃ちゃん達は負けるのが怖いから逃げるんでしょ〜？」

胡桃「へえ〜…言ってくれるな…」

美紀「さすがの私も…たぶん由紀先輩には勝てると思いますけど。」

由紀「ほんと？…じゃあこの勝負、二人ともやる？」

胡桃「あたしはやる…そして由紀の目の前であの缶詰を食いつくしてやるよ」

美紀「私もやります。缶詰はもうどうでもいいですが…由紀先輩に馬鹿にされたままでは引き下がれないので…」

胡桃と美紀、どちらも怖い目をしながら由紀を睨んで答えた。

由紀「よし、…りーさんは？やる？」

悠里「ん…そうね、一応やろうかしら？」

由紀「おおっ！やった〜！」

胡桃「りーさんもやるのか…手強そうだな。」

美紀「この勝負…いつやるんですか？まさか…今からですか？」

由紀「いや、もう眠いし…明日にしよう！どうかな？みんな、それでいい？」

胡桃「あたしはいいぞ」

美紀「私もです。」

悠里「私もそれで良いわよ。ふふっ…ちよつと楽しみ。」

こうして明日、由紀考案のゲームが開催される事となった。

そんな中、車外では…

(なんか、今日はみんな着替え遅くないかな…：…寒いんだけど)

彼が震えながら、車内へ呼び戻されるのを待っていた。

第六章・げーむ 四十六話『げーむ』

翌朝：朝食を終えた後に彼が尋ねる。

「そういえば由紀ちゃん：あの缶詰を賭けるゲームは決まりました？」

彼がその言葉を発した直後、彼女達全員がピクツと反応したが：寝起きの彼はそれに気が付かなかった。

由紀「んゝ、一応決まったよ。——くんにはまだ伝えてなかったね……」

「あれ？みなさんはもうゲーム内容をご存じで？」

それぞれの顔を見回して彼が尋ねるが：

みんなそれが聞こえなかったかのような表情をして答えない。

少ししてその空気に耐えきれなくなったのか、あいまいながらも美紀が答えた。

美紀「まあ：知ってるかといえば知っていますけど……」

「へえ、何やるんですか？」

美紀の言葉を聞いた彼は改めて由紀に尋ねる。

由紀「えつとね……あの……腕相撲……だったっけ？」
彼の問いに、由紀は何故か疑問系で答える。

「腕相撲？……それって男の僕が有利になっちゃいませんか？」
彼が言った直後、胡桃と美紀が慌てて由紀に近づき、彼女を車の隅まで引つ張っていくと……彼には聞こえぬよう小さな声で由紀に耳打ちした。

胡桃「バカっ！もつと他にあるだろ!?!そこはトランプとかって言つとけばいいんだよ!」

美紀「いえ……そもそも、まだ決まってるって答えれば良かったんですよ!」

由紀のそばでコソコソと何かを呟く二人を、彼は不思議そうな表情で見つめた。

由紀「ご、ごみん!……でももう腕相撲って言っちゃったから、どうにかそつちの方向で……」

胡桃「そつちの方向で……」

美紀「はあ……分かりました。私がフォローします。」

美紀は彼の方へ振り向くと、ゆっくりと歩き出し、彼の目の前で言った。

美紀「——さん知らないんですか？リーさんは腕相撲が強いんですよ！」

「へえ〜！リーさん…意外ですね。そんなに強いんですか？
彼が驚きながら悠里を見つめる。

悠里「えっ!?その…ちょっと美紀さん!こっち来て!」
今度は悠里が美紀を隅まで引っ張っていった。

「??？」

悠里「どういうつもり!？」

美紀「すみません!すみません!由紀先輩をフォローしようと思っ
て…」

悠里「私、腕相撲なんか得意じゃないわよ!？」

美紀「本当にすみません!今はとりあえず話だけ合わせて下さい
!」

悠里「うくん…」

悠里「…仕方ない、分かったわ…合わせてあげる。」

美紀「ありがとうございます！」

美紀は小さく頭を下げ、悠里と共に彼の前へと戻った。

「何を話していたんですか？」

美紀「いえ、別に…」

「?…まあいいか、話を戻しますが…リーさん腕相撲強いんですか？」

悠里「え、ええ…そこそこね、…別に凄く強いわけじゃないわよ？」

「へえ…意外です。リーさんみたいな人が力自慢とはね」

悠里「いや、だから…そこまで強くはないし、別に力自慢では…」

悠里は小さな声で力自慢ではないと否定するが…

彼は全くそれに気がつかなかった。

「リーさんはあんまり力があるように見えなかったです。本当に意外ですね！力自慢って言えば胡桃ちゃんのイメージでしたよ…」

彼がヘラヘラしながらそう言うと、ツカツカと胡桃が彼の元に歩み

寄り、その頭を背後から叩いた。

バシんツ!!

「イタっ!!何すんの!?!」

胡桃「うっさい!なんで力自慢って言えばあたしになるんだよ!?!」

「普段からあれだけシャベルをブンブン振り回してるんだ、それなりの力はあるでしょ!?!」

叩かれた頭を両手で抑えながら、彼は胡桃に言った。

胡桃「そりやそうだけど…でも、なんかムカつく!」

不機嫌そうな顔をする胡桃…

そんな彼女を見た由紀は慌てた様子でそこに駆け寄る。

由紀「胡桃ちゃん!暴力はダメって昨日言ったでしょ?」

胡桃「うっ!…でも、これはそういうのじゃなくて…単純にコイツがムカついたからって意味の暴力だぞ?」

由紀「んく、分かった。今回は見逃してあげる!」

胡桃「…そりやどーも」

由紀と会話を交わしてから、胡桃は静かに席につく

彼がそんな胡桃を目で追っていると…その視線に由紀が割り込んで言った。

由紀「…ところで——くん、その腕相撲だけど…やるのは夜だからそれまでは適当に外とか見ても良いって。」

「あれ？じゃあ今日は丸一日この広場に車停めっぱなしですか？」
彼が悠里に尋ねる。

悠里「ええ、今日は一日のんびりしましょう。一応安全そうな場所に停めたつもりだけど、危ないからあまり遠くまでは行かないでね。」
悠里は全員にそう言い聞かせた。

「了解です。んじゃ…ちよつとその辺散歩してきますかね。」
そう言つて彼は立ち上がり、車のドアに手をかける。
すると直後、その横に美紀が立って尋ねてきた。

美紀「お邪魔じゃなければ、私もついて行って良いですか？」

「もちろん良いですよ、行きましょうか。」

美紀「はい。…ではみなさん、行ってきますね。」
美紀は車内に残る由紀達に一言挨拶してから、彼と共に外へと降りた。

ボタン…

胡桃「はあ……」

ドアが閉まったのを見届けてから、深くため息をつく胡桃…

由紀「さてさて…今の内に予習を〜」ペラペラ

一方由紀は、昨晚彼女達に見せたあの本をどこからか取り出して読み始める。

胡桃「……………」ジーツ

由紀「…なに？胡桃ちゃん。」

胡桃に見つめられている事に気付いた由紀は、読書を一度中断して尋ねた。

胡桃「いや…あの…」

由紀「…ああ〜！大丈夫！わかってるよ〜。コレ…後で胡桃ちゃんにも貸してあげる！」

そう言っつて胡桃に微笑みを見せてから、由紀は再びその本を読み始める。

胡桃「あ〜…うん、頼むわ…」

少しだけ恥ずかしそうな表情をして胡桃は呟く。

由紀「りーさんも後で見る？」

悠里「そうね、ちよつとだけ見てみようかしら。」

由紀はそう答える悠里の顔をチラツと覗きこみ、につこりと笑った。

四十七話 『美紀と彼の散歩風景』

彼と美紀が散歩に出た車内では、由紀が読書をし…胡桃と悠里はそれを見守っている

一方その頃…散歩に出た彼と美紀は広場を抜け、その付近の車道の真ん中を二人で歩いてた。

「よく考えると凄いですよね…車道の真ん中をこんなに堂々と歩いていても、車にひかれる心配がないんですから。」

美紀「そうですね、けどもしかしたら他の生存者が運転してる車が急にその曲がり角から猛スピードでこちらに突っ込んでくるかも知れませんか？一応歩道歩きませんか？」

目の前の曲がり角を指差して美紀は彼に言った。
もちろん、その曲がり角から車が現れる気配はなかったが…

「心配性ですね。分かりました…歩道を歩きましょう。」

美紀「はい。それが良いと思います。」

彼は念のために、美紀を連れて歩道に戻る。

「歩道って物陰からあいつらが飛び出してきそうで少し落ちつかない

けど、ちゃんと警戒しとけば大丈夫か？」

歩道を歩く中、周囲の置き看板や自動販売機：

様々な物の陰に奴等が潜んでいないかと彼は警戒する。

美紀「あ…、だから車道の真ん中歩いてたんですか？」

彼に尋ねる美紀。

「ん？ああ…まあ、そうですね。」

美紀「確かに、今は車よりもあれが物陰から飛び出してくる事の方が多いですもんね。ちゃんと考えた上での行動だったんだ…」

美紀「…じゃあ」

美紀は少し考えてから彼の手首を掴み、そして車道の真ん中まで引っ張っていった。

彼は急に引っ張られた事に驚き、美紀に尋ねる。

「おおっ…どうしましたか？」

美紀「せっかくのんびりと散歩しているのに、警戒しっぱなしじゃ疲れてしまいます。」

美紀「——さんが少しでも楽にしていられるなら、こっちを歩きましよう」

車道の真ん中まで彼を引っ張り終わると、美紀は手を離して軽く微

笑む。

「気をつかってくれたんですか？嬉しいです。ありがとうございます。」

彼は嬉しそうにそう言って、またゆつくりと車道の上を歩き出す

美紀もその横に並び、彼と同じペースで歩を進めた。

美紀「気をつかってくれてるのは……さんじゃないですか？」
歩きながら彼に問いかける美紀。

彼はその問いの意味が理解できず、すぐに問い返した。

「えっと……どういう事ですかね？」

美紀「さつき歩道を少しだけ歩いた時、かなり警戒してました。……あれって私がいたからですよね？」

「いや……もし自分一人だけだったとしても、ちゃんと同じくらい警戒しますよ。」

美紀「……本当ですか？」

美紀は歩く彼の先に回り込み、その目をじっと見つめながら尋ねる。

「え〜つと……そうですね。自分一人の時より、少しだけ強く警戒していたかも知れません。」

彼は少し間を開けてからそう答えた。

美紀「……………」

「……………？」

彼の言葉を聞いた直線、美紀は下を向いたまま動かなくなってしま
う。

よく見ると下を向いたまま何かをブツブツと呟いていたが…

あまりに小さい声なので、何を言っているのかまでは分からなかつ
た。

彼がその呟きを聞き取ろうと耳をすましていると…

彼女は不意に顔を上げて彼に尋ねる。

美紀「…それは…どうしてですか？」

「え？」

美紀「だから…何故一人でいるときより警戒するのかと聞いている
んです！」

彼の目を真っ直ぐに見つめる美紀…

気のせいか、少しだけその顔が赤くなっているような気がした。

「どうしてといわれましても……………」

(なんか…様子おかしくないかな?)

彼は混乱し始めていた。

美紀「二人の時よりも、二人の時の方が安心できるハズです。

なのに…何故あなたは私といるとより強く警戒するんですか？」

そう言つて美紀は一步彼に近付く

それにより、元々近い距離にいた二人の間隔が更に縮まる。

「えっと…そうですね…それは……」

美紀「私は…頼りないですか？…足手まといですか？」
更に一步…美紀は彼に近付く。

「そんな事はないです…ただ…」

20〜30cm程の距離まで縮まった彼と美紀の顔の距離…
彼はそれに戸惑つてしまい、軽いパニックに陥っていた。

(美紀さんが変だ！美紀さんがなんか変だ!!助けてみんな!!)

心の中で…彼は由紀達に助けを求める。
もちろん、誰も助けになど来ないが…

美紀「ただ…なんです？ハッキリと言つて下さい？」
パニックに陥っている彼に美紀は追い打ちをかける。
彼は窮地の中、必死に言葉を捻り出す。

「ただ…その…心配で」

美紀「心配？」

「はい…美紀さんはちゃんとした人だから、僕が必要以上に警戒しなくても大丈夫だとは思っているんですが…もし万が一なにかあったらと思うと、耐えられないので…」

目前の美紀の顔を見つめる事が出来ず、彼はキョロキョロとしながら答える。

美紀「…耐えられない、というのは…その…」

美紀「…どういう事ですか？」

(なっ…!?)

美紀は再び彼を質問で追い詰める。

そしてやはり、彼女の顔はだんだん赤くなっているように見えた。

「え、えつとですね…耐えられないというのは、その……」

「何かが…美紀さんの身に起こったら、その…悲しいって、そういう事ですかね…」

一つ一つの言葉を、彼は必死に声に出す。

しかし…美紀の猛攻はまだまだ止まらなかった…

美紀「わ、私に何かあったら…なんで——さんは悲しくなるんですか？」

「なっ……!」

(嘘でしょ!?!本当に……今日の美紀さんは何なの!!?)

彼は追い詰められる、思わず一步後ろに下がって距離を開けるが……すぐに美紀がそれに合わせて一步詰め寄る。

離れる事無く、相変わらず彼の至近距離ある美紀の顔……彼は逃げ場をなくした。

(どうなってる!?!……どうなってる!?!助けてみんな!!)

彼は再び心の中で助けを求める。

もちろん、誰も助けに来ない。

美紀「こ、答えて下さい……なんで悲しくなるんですか?」

赤い顔で尋ねる美紀……

彼はいよいよ耐えきれなくなり、美紀の肩を軽く押して少しだけ距離を開いた。

「なっ、何か変ですよ?美紀さん……どうかしましたか?」

距離が少し開いた事で余裕が出来た彼は、にっこりとわざとらしい笑みを見せて美紀に尋ねた。

美紀「私は変じゃないです……変じゃないですから……ちゃんと答えて下さい」

彼は美紀を押しして距離を開いた……

にもかかわらず、彼女は再び彼に近付きその距離を縮める。

(なっ!!?なっ!!?どうなっている!!いったいどうなっている!?)
彼はまたしてもパニックに陥る。

だが…『質問に答えきればこのピンチを抜け出せるのではないか?』

そんな考えが、不意に彼の脳内によぎった。

(よ、よし!答えよう!…一つ一つ冷静に…的確に!)

「美紀さんに何かあったら悲しくなるのは…その…。…た」

美紀「た?」

「た、大切に思っているから…。美紀さんの事を…僕はとても大切に思っているから…だから…あなたに何かあって、そのまま死んでしまったらなんかしたら…とても悲しいな…って。」

彼はとても照れくさそうに目を逸らし、顔を赤くしながら美紀にそう言った。

美紀「!!?」

美紀「あつ…えつと…その…」

それを聞いた美紀は顔を真っ赤に染め…

大慌おあわてで三步下がって彼との距離を開ける。

「……………」

(しまった…なんか告白みたいになった…)。
彼はそんな事を考えて心の中で静かに慌てる。

美紀「…嬉しいです。」

「…え？」

美紀「そんなふうにも思ってもらえて、とても嬉しいです。ありがとうございます。」

そう言っつて美紀は彼に笑顔を見せる。

その顔は、少しだけ赤みがひいていた。

「あの…美紀さん？一応言っておきますが…大切に思っているってのはその…」

美紀「わかってます。友達として…ですよ？」

「え？あ、はい。」

美紀「それをふまえた上で…私は嬉しいんです。」

再び美紀がにっこりと笑う…

彼は彼女のそんな笑顔を見るだけで、さっきまでのパニックが嘘のように安心出来た。

「…そうですか、喜んでもらえて嬉しいです。」

「…じゃ、散歩の続きしましよー」

そう言つて彼は美紀とともに歩き出す。

思えば美紀に話しかけられてからはずっと立ち止まっていたので、まだろくに散歩出来ていなかった。

美紀「…——さん」

彼の横に並んで歩く美紀が、正面を向いて歩いたままで彼の名を呼ぶ。

「なんですか?」

彼はそんな彼女の横顔を歩きながら見つめた。

美紀「えっと…一つだけ、お願いしても良いですか?」

相変わらず正面を向いたままで、彼の顔を見ずに美紀は言う。

「ん?別にかまいませんよ。…何ですか?」

美紀「学校は違いますが…年齢的には、私は——さんの後輩なんです。」

「あ〜…まあそうですね。」

美紀「ええ、…なのに——さんは私の事を…その……さん付けで呼んでます。」

「大人っぽくて…しっかりしてるからですかね？全然後輩っぽくないんです。むしろ先輩って感じで…」

彼が笑いながらそう言う中…

美紀が小さく呟いた。

美紀「……………て下さい」

「…はい？」

美紀「だからその…後輩扱い…して下さい」

歩きながら、真っ赤に染まるその顔を隠すように顔を伏せて…

美紀は彼に向け言った。

「え？後輩扱いってのは…」

美紀「……………呼び方」

そう一言だけ美紀は呟く。

「……………ちゃん付けで…って事ですか？今更それは少し恥ずかしい気が…」

彼が照れながら言うと、美紀はすかさずそれを否定した。

美紀「ちっ、違います!!ちゃん付けじゃなくて……………!」

美紀は彼の目を見つめると、歩みを止め…息を深く吸い込む

(まさか…もしかして……………!)

美紀「美紀って……そう呼んで下さい。」
目を僅かに潤ませて、美紀は彼にそう言った。

(……なんてことだ)

美紀「ダメ……ですか？」
複雑な表情をしたままたたずむ彼に美紀は尋ねる。

「いえ……その……」

美紀「………」
彼は恥ずかしいのでさすがに断ろうかと思つたが……
真つ赤な顔でこちらを見つめる美紀の顔を見て、覚悟を決めた。

「……わかりました」

美紀「………」
彼が言うと、美紀は少しだけ頭を下げて礼をする。

「じゃあ……その……」

「……み、……み……み、み……」

覚悟を決めたハズなのに、これが全然言い出せない。

(なんだこれは!?全然口が動かない!!)

「みみ……み、……み」

(相手は年下!後輩だぞ!?その子をただ呼び捨てで呼ぶだけ!それだけ!簡単だろ!?)

美紀「……………」

(なんでそんな簡単な事が出来ない!?)

今日一番のパニックが彼を襲う。

そしてその直後に美紀が放った言葉が、彼を更に追い詰める。

美紀「みみみ……って、何ですかそれ……セミですか!?ハッキリ言っ
て下さい!」

「くっ……!!」

仮にも後輩の美紀に煽られる……

その事実が、彼の踏み出せなかった最後の一步の後押しをした。

「…美紀」

彼は静かに、しかししつかりと…

彼女の事を『美紀』と…そう呼び捨てで呼んだ。

美紀「くくっ／＼／」

それを聞いた美紀は顔を更に真っ赤に染め、何やらモジモジとして落ち着かない様子になる。

「あの…恥ずかしいですね…。やっぱ…これからも、さん付けで呼ぶ方向でも良いですかね？」

彼も美紀同様、真っ赤な顔で言った。

美紀「あ、ハイ！そうですね！私もそっちの方が落ち着きます！」
不自然な笑みを浮かべながら、美紀は答える。

その後、二人は十分程散歩したが…

(途中ゾンビ一体と遭遇するも、彼が倒した)

彼が美紀を呼び捨てで呼んでからは変な空気が二人を包み…
ほとんど会話のないまま、気づけば車に戻っていた。

四十八話『せつめい』

…ボタン

美紀「…戻りました」

「……………」

由紀「おかえり〜」 悠里「おかえりなさい」

由紀達に挨拶する美紀、そして無言で席に座ってテーブルに顔を伏せる彼…
そんな彼を見た胡桃は彼の向かいに座ると、ポンポンツと肩を叩いて彼に声をかける。

胡桃「どうした？なんか元気ないじゃん。」

「…………ちよつとね…疲れちゃって…。」

彼は顔を上げると、小さな声でそう呟いた。

彼のそんな呟きを聞いた胡桃は、少し慌てた様子で尋ねる。

胡桃「もしかして…散歩中に奴らと出くわしたりした？大丈夫？」

「いや…途中で一体倒したけど、一体だけだったから大丈夫。」

胡桃「そうか、そりや良かったけどさ…じゃあなんでお前はそんなに疲れてんの？」

「…いろいろありましてね、精神的に疲れました。」

そう言っつて彼は再び顔を伏せてしまう。

胡桃は彼が精神的に疲労した理由を美紀なら知っていると思…
彼女を車の外へと連れ出そうとした。

胡桃「美紀…ちよつといいか？」

美紀「え？…はい、なんででしょう？」

胡桃「ここじやなんだからさ…ちよつと外出てくれる？」

美紀「??…わかりました。」

バタン…

美紀「で…：…なんですか？」

胡桃「アイツ、散歩から戻ったらやたら疲れてんだけど…：…なんでか分かる？」

美紀は胡桃に問われると、顔を少しだけ赤く染め…

「恥ずかしそうに答えた。

美紀「それは多分……私が勝負に出たからだと思います。」

胡桃「なっ……!?!」

美紀の発言に胡桃は驚く、何故なら……

彼女は美紀の『勝負に出た』という言葉の意味を理解していたからだ。

胡桃「……てことは、お前が誰よりも早く”あのゲーム”を終えたわけか。」

美紀「そうですね……そういう事になります。」

胡桃「……手応えは？」

美紀「かなり期待出来ると思います。だって……私自身が恥ずかしくなるような事をたくさん言いましたから……」

胡桃「マジか、ってかさ……お前……そんなに勝ちたいの？」

彼との散歩を思い出して顔を赤くする美紀……

そんな美紀を見た胡桃は不思議そうに尋ねた。

美紀「そこまで勝ちたいわけでもありませんが、変に中途半端なもの嫌だ……。そんなとこですかね。」

胡桃「へえ……因みに、どんな事したのか聞いても良い？」

興味本意で胡桃が美紀に尋ねる。

すると、車のドアがバタン！と音をたてて開き……

その中から現れた人物が胡桃に言った。

由紀「ダメ〜っ!!」

胡桃「うわっ!?!なんだよ由紀!」

美紀「先輩…ダメって言うのは何がです?」

突然の由紀の登場に、驚く胡桃と冷静に質問をする美紀…

由紀はまず開いたドアをそっと閉じると、改めて二人の顔を見て言った。

由紀「まだゲームをしていない人はゲームを終えた人にゲーム内容についての質問をしちゃダメなの!ヒントになっちゃうからね!」

美紀「なるほど…」

胡桃「ところで…お前はいつからあたし達の会話を聞いてたの?」

由紀「二人が外に出たのを見て怪しく思ったから、ずっとその窓から聞いてた。…ね!リーさん!」

そう言っつて由紀は車の窓を指差す。

その窓は外の会話を聞くために少しだけ開けられており…
その向こうで悠里がにこにこしながら手を振っていた。

胡桃「リーさんも聞いてたのか…」

由紀「うん!で、胡桃ちゃんが不正をしそうになっていたのを見て…私が止めに来たの。」

胡桃 「不正もなにも…そんなルール、初耳だったの。」

由紀 「今言いました！もうこれからはこういう事はないように！わかった？」

胡桃 「あくハイハイ…分かった分かった。」

美紀 「あの…こんなぞろぞろ外に出たら——さんに気がつかれるんじゃない？」

悠里 「寝てるみたいだから大丈夫よ」

美紀の発言に悠里が窓の隙間から答えた。

美紀 「あ、そうですか…」

胡桃 「よっぼど疲れたんだな…」

由紀 「ね、みーくん…どんな事したのか私にだけそつと教えてくれないかな？」

由紀が自分の耳を美紀に傾けて静かに尋ねるが…

それを胡桃が引つ張って阻止する。

由紀 「わわっ…!!」

胡桃 「それは不正だってお前が言ったんだぞ？ついさつきな！」

由紀 「私はもう自分なりのやり方を決めてるもん！だからこれは本当に興味があるから聞いているだけで…」

胡桃「知るかそんなの！お前が聞くならあたしも聞くからな！」

由紀「う〜く〜…」

悠里「まあまあ…全員終わってから、それぞれの話をすれば良いんじゃない?」

再び悠里が窓の隙間から言葉を挟む。

胡桃「だとよ。」

由紀「う〜ん…わかった、そうしよう！」

美紀「いや…終わってから話すのも少しだけ恥ずかしいんですけど…」

胡桃「お前…本当になにしたの?」

由紀「み〜くんまさか…——くん相手にちよつと大人な事をしたんじゃない……」

胡桃「まつ、マジか!!」

頬を赤くしながら美紀の顔を見つめる由紀と胡桃…そして悠里（窓越し）

美紀「してませんよ！変な事言わないで下さいっ!!」

胡桃「だ、だよなく。まあもしそんな事されてたら…もうあたし達の勝ちがなくなつたようなもんだからな。」

由紀「だね。…にしてもみーくんが誰よりも早く”ゲーム”を終えるなんてね…これは予想外だったよ！」

由紀達のいう”ゲーム”その内容とは……

時は少しだけ遡り、昨晚

着替えのために車外に出した彼を呼び戻そうとする悠里を由紀が引き止めたところから始まる。

由紀「待って、りーさん！」

悠里「ん？何？」

由紀「私ね、面白そうなゲーム思いついたの！…これを参考にしよう！」

由紀はそう言って一冊の本をテーブルに置く…その本の表紙にはこう書かれていた。

『好きなあの人を落とす100の方法』

美紀「これって……」

悠里「こんなの……いつ拾ったの？」

由紀「今日ショッピングモール行った時に拾った！」

美紀「いつの間に……」

胡桃「……てかこんなのを参考にするゲームって、お前……何する気だよ？」

由紀「えへへ……それはね……」

由紀「——くんをみんなでドキドキさせて、女子力を高めよう！つてゲーム！」

元気に、かつ自信満々に由紀は言った。

だが、それを聞いた他のメンバーは少しずつ表情を曇らせる。

美紀「すいません…少し意味が理解できないんですけど…」

胡桃「…あたしも」

悠里「同じく」

由紀「仕方ないなあ…じゃあ簡単にルール説明をするね！」

由紀「みんなそれぞれ、明日一日の中で——くんになんかしてドキドキさせるの！」

由紀「方法はなんでも良いよ、ただ車の中で話すだけでもいいし…デートに誘うのもいいね。詳しい事はこの本を参考にすると分かりやすいかも！」

はしやいだ様子で本(好きなあの人を落とす100の方法)を掲げる由紀…

そんな由紀を、悠里達は真顔で見つめる。

由紀「順番はやりたい人からで良いかな？あ、チャンスは一回だけだよ？何度も——くんにアピールするのは反則！」

胡桃「へえ…としか言えねえ。」

由紀「あとアピールするのは一人ずつ！アピールしてる人の横から邪魔するのもダメ、その人のアピールタイムが終わるのを待っていて下さい。」

由紀「因みにアピールタイムは一人一時間までとします！胡桃ちや

ん分かった？何時間も——くんを独り占めしちやダメだよ？」

胡桃「なっ…!?そんな事しねーよ!!」

胡桃は頬を赤くすると、由紀の頭をバシン！と叩いた。

由紀「いたっ！そうだった…暴力も禁止！——くんを殴ってドキドキさせるのは無しだよ!!」

美紀「殴られてドキドキしてたらそれはただの変態じゃないですかね…」

由紀「…でもあれだよ…チューはありだからね。」

胡桃に叩かれた頭を撫でながら由紀が呟く…

その呟きを聞いた彼女達は、みな顔を真っ赤にした。

悠里「ゆ、由紀ちゃん…それはちよつと…」

由紀「りーさん大丈夫！したい人だけすれば良いんだから…：ね！胡桃ちゃん？」

胡桃「なんであたしに言うんだよ!!」

胡桃が真っ赤な顔で由紀を睨む…

すると由紀はすかさず悠里の背に隠れ、悩ましげな表情で言った。

由紀「でも確かに…チューはかなりの恥ずかしさだよ。ハイリス

ク・ノーリターンだよ…」

美紀「それ、ハイリスク・ハイリターンじゃないですかね？ハイリスクでノーリターンじゃ酷すぎでしょう。」

由紀「そうそれ！もしりーさんなんかがチューしたら、その時点で優勝が決まると思うんだけどね…」

悠里「しっ、しないわよ!?!」

悠里が真つ赤な顔で否定する。

その直後、美紀が由紀に尋ねた。

美紀「優勝って言いましたが…それどうやって決めるんですか？」

由紀「明日の夜寝る前に———くんにネタバラシして、それで聞くの。『誰が一番ドキドキさせられましたか？』って」

胡桃「なるほどね…」

美紀「ちよつと待って下さい。これで優勝した人があの缶詰を貰えるんですよね？」

由紀「うん、そだよ」

美紀「そのゲームだと、———さんはどうしても缶詰を貰えない

ですか？簡単な話…審査員のポジションにいるわけですから。」

悠里「…あら、そうね。」

胡桃「どうなんだ由紀？」

由紀「……………」

由紀は冷や汗をかきながら止まっていた…
そこまで考えていなかったようだ。

胡桃「…平等にチャンスがないんじゃないや、このゲームはないな。」

美紀「ですね。」

由紀「待つて！決めたから！誰にもときめかなかったら——くんの勝ちにしよう！」

美紀「……………」 胡桃「……………」

悠里「由紀ちゃん、ちよつと確認してもいい？」

由紀「ん？なあに？」

悠里「——君にはこのゲームの事は明日の夜まで内緒なのよね？」

由紀「うん！」

悠里「…で、——君が優勝する条件は『誰にもときめかない事』…

そうね?」

由紀「そ!」

悠里「…胡桃、美紀さん…どう思う?」

胡桃「あいつの優勝は間違いなくないな」

美紀「…さんの優勝は絶対ないですね」

悠里「やっぱり…そう思うわよね…私もそう思うもの」

同時に言った胡桃と美紀を見て悠里は呟く。

だが彼女…丈檜由紀だけはその意味を理解していなかった。

由紀「なんで?そんなのわかんないじゃん!」

胡桃「だってさ…あたし達四人が、最長で一時間もあいつをドキドキさせようとすんだろ?」

由紀「うん、そうだね。」

胡桃「そんな事されて『いや、誰にもドキドキしなかったわ!』とかアイツが言うと思うか?絶対ないだろ?」

由紀「う…うん?…まあ、そうかも…」

胡桃「だろ?つまり、このゲームが始まった段階であいつは異常に不利なんだよ。」

由紀「んく、でも私このゲームやりたいく!!」

悠里「そもそもこれ…ゲームとは言えないわよね。」

由紀「恋愛という名のゲームだよ!」

胡桃「やかましいわ!」

由紀「いっじゃん、やろーよ!みんなで——くんをドキドキさせて
女子力を高めようよ!」

胡桃「高められるのか?」

由紀「高められるよ!だって、男の子とお喋りしたりデートしたり
するんだよ?」

悠里「——君を相手に?」

由紀「うん!——くんを相手に!!」

悠里「…それを…私達がやるの?あの缶詰を賭けて?」

美紀「私…やっぱ缶詰いりません。」

由紀「ダメ！これは強制参加だよ！」

青ざめた顔でベッドに向かおうとする美紀を、由紀が無理やりひきとめたところ…

時間は再び現在に戻る。

由紀「あんな嫌がつてたみーくんが一番最初なんて…なんだかんだで楽しんでるでしょ？」

美紀「楽しんではいませんが……思ってた程嫌でもなかったですね。」

美紀（大切に思ってるって言ってもらえたのは、少し嬉しかったし…）

由紀「でしょ？始めると楽しめるもんなんだよ！」

胡桃「よく聞いてたか？別に美紀は楽しんでないぞ。」

腰に手を当てて誇らしげな顔をする由紀…

そんな彼女に、胡桃は冷静にツツコミをいれた。

由紀「細かい事はいいの！それより…次は誰にする？胡桃ちゃんいぐ？」

胡桃「あたし!?…あたしは…まだあの本も見えてないし…」

由紀「あ、そっか。でもみーくんもあの本まだ読んでないよね？」

美紀「いえ、少しだけですが読みましたよ。」

由紀「いつの間につ!？」

美紀「今朝、早起きしてしまったので参考にと…」

由紀「へえ〜!どうだった?参考になった?」

由紀が目を輝かせて美紀に尋ねる。

それに対し、美紀は少しだけ恥ずかしそうに答えた。

美紀「ん、まあ…それなりには…」

由紀「やっぱり!?…よし!私もちやんと読まないかね!!」

悠里(普段の勉強も、このくらい熱心に取り組んでくれたら良いんだけど…)

キラキラと目を輝かせる由紀を窓越しに見て、悠里はそう思った。

四十九話 『新たな扉』

胡桃「あたしも：一応読んどいた方が良いよな。やっぱ：」

由紀の持ってきたあの本を頭に浮かべながら、胡桃は呟く。

美紀「勝ちたいのなら、読んどいた方が良いかも知れませんね。」

胡桃「だよな…。そういえばこれ、最後あいつに誰が一番ドキドキしたか聞くんדרろ？」

由紀「うん、聞くよ。」

胡桃「一番以外にもさ：二番、三番とかも聞くの？」

由紀「え？…あゝ。どうしよつかな…」

胡桃の質問に顎に手を当てながら悩む由紀
彼女はしばらく考えてから胡桃に言った。

由紀「：一番だけ！じゃないとビリになっちゃった人がかわいそう
でしょ？」

胡桃「まあ、あいつにドキドキしなかったって言われたら：確かに
女としてのプライドが傷付くな…」

美紀「ですね…」

由紀「とりあえず中戻ろ？——くんが寝てる内にあの本読みたいから。」

そう言うってから由紀は車内に戻る。

胡桃と美紀もそれに続いて車内に戻り、テーブルに顔を伏せて眠る彼を見た。

「Zzzz…」

胡桃「こいつ…まだ起きて二時間も経ってないのに爆睡してるぞ。」

美紀「私との散歩で疲れさせちゃいましたかね？」

眠る彼を見ながら、二人は小声で会話する。

胡桃「…わりとドキドキさせた自信あるんだろ？」

美紀「…：それなりには」

胡桃「まあ普段は大人しい美紀が、二人きりの時に急にドキドキするような事をしてきたら…ビックリして、精神的に疲れるかもな…」

胡桃「…何をしたのか知らないけど。」

そう呟いて、胡桃は美紀をじっと見つめる。

美紀はその目線から逃げるようにして歩き出し…

誰もいない助手席に座った。

胡桃「…本当に何をしたんだろ」

美紀の態度を見た胡桃は彼女が彼に何をしたのかますます気になつたが…

それは一度忘れる事にして、窓際の席に腰かけている悠里の隣に座った。

悠里「次は誰が挑戦するのかしら…。胡桃やる？」

胡桃「いや…本読んでからにしたいかな。リーさんやってみれば？」

悠里「そうね…早い内に終わらせた方が楽だし、由紀ちゃんに少しだけ本貸してもらつて、その後で——君が起きたらチャレンジしてみることにするわ。」

そう言つて悠里は胡桃を残して席をたち、後方で隠れるように一人で本を読んでいる由紀の元へと向かった。

胡桃「早い内に終わらせた方が楽……。確かにそうだよな…」

胡桃「…でも、いざとなると緊張して動き出せないんだよな…」

胡桃「こうまで苦労して、手に入るのは缶詰一個…。…わりに合わないよな」

ため息をつきながら愚痴をこぼす胡桃…

一方で、美紀は助手席からそつと後ろを振り返り…悠里が由紀からあの本を受け取るのを見ていた。

美紀（急にあの本を借りてるって事は…次はリーさんがいくのかな？）

美紀（…リーさんはどうやって——さんにアピールするんだろう。ストリートに色仕掛けとか…）

美紀（…ダメだ、——さんに色仕掛けなんかしたらその場で襲われちゃう。）

美紀はそんな光景を脳内で想像して、一人で顔を赤くする。

美紀（…でも…）

美紀（でもあの人…私があんなに顔を近くに寄せても、照れるばかりで何もしてこなかったな…）

美紀（意外とちゃんとした人なのかな？）

美紀はそんな事を考える

だが…

美紀（ん？待って…）

彼女はもしかしたら起こっていたかもしれない一つの事実に気がつき、顔を青くした。

美紀（私、二人きりの時にあんな無警戒に顔を近づけて…更に自分を呼び捨てで呼んで欲しいとか言っちゃって…）

美紀（もしかして私…いつ襲われてもおかしくなかった!?）

美紀（バカだ私は…！無計画にも程がある!!）

美紀（今朝、あの本を見て…）

美紀（へえ…『思いきって相手との距離を詰めれば、相手はあなたを意識するハズ』…かあ。これ、試してみようかな…）

美紀（ん？『相手に普段は苗字などで呼ばれている人は下の名前で呼んでもらえば友好度アップ!』…）

美紀（苗字じゃなくて、さん付けで呼ばれているんだけど…私の場合は呼び捨てにでもしてもらえば良いのかな？…これもやってみよう）

美紀（…とかやってた自分を殴りたい!!!間抜け過ぎる!!）

美紀（相手はあの人だよ!?…私、よく無事だったな）

一人冷や汗をかく美紀は振り向き、眠っている彼を見つめた。

「ZZZZ……」

美紀（先輩達に注意した方が良いかな。あまり過激な事すると襲われるかも…って）

美紀（……………）

美紀（まあ…先輩達なら大丈夫か。今日のあの様子だと、——さんは思っていたよりも安全な人みたいだし…）

美紀（仮に襲いかかったとしても、胡桃先輩やりーさん相手なら返り討ちにされるかな？）

美紀（由紀先輩の場合は…あの人の事だから…）

美紀は目を閉じ、その光景を想像する。

由紀「ひっ、ひどいよ——くん!!なんでこんな事するの!？」

「えっ!?!いや…あの…由紀ちゃんがやたら積極的な気がしたから…」

由紀「…冗談だったのに…ぐすっ…ひどいよお…ううっ」

「すっ、すみません!!やめます!やめますから…泣き止んで下さい!スイマセン!スイマセン!!」

美紀（つていうような感じで：基本的に優しい人だから、由紀先輩が泣いたら止めてくれると思うけどね。……多分）

美紀（今思えば、——さんもゲームとはいえ気持ちもてあそを弄もてあそばれてる訳だから：かなりかわいそうだな。）

美紀（このゲーム：やっぱり人として止めた方が良いんじゃない？）
ゲームの中止を申し出ようと思った美紀だが：

悠里と共に本を見て楽しそうに笑う由紀を見ていたら、そんな事は言えなくなってしまうた。

美紀（あんなに楽しそうにされると：とても言えない…）

美紀（というか、一番先に始めた私がどの口で言ってるのか：つて思うよね。）

美紀（中止したらあの恥ずかしい努力も無駄になっちゃうし：仕方ない。）

美紀（——さんには後で謝るとして、今は騙されてもらおう。すいません：——さん）

美紀は両手を合わせ、彼に無言の謝罪をした。

それから一時間程たち：

悠里と由紀はあの本のめぼしい箇所をあらかじめ読み終え、今は胡桃の手に渡っていた。

そして胡桃がそれをこっそりと読んでいると、彼が呻き声をあげながら目を覚ました。

「……胡桃ちゃん、何読んでるの？」

胡桃「っ!! なっ、なんでもない！」

不意に声をかけられた胡桃は慌ててその本を背中に隠した。

「??」

悠里「あら、起きたのね? まったく…いくらなのんびりしていいって言ったとはいえ…寝てばかりいるのは不健康よ」

目を覚ました彼の元に悠里が歩みより、説教する口調で言った。

「すっ、すみません…ちょっと疲れてまして。」

顔を上げ、虚ろな目をしながら彼が呟く…

そんな彼の表情を見た悠里は何やら顎に手を当てて考え込んだ後、閃いたように自らの両手のひらをパンツ! と叩いて彼に言った。

悠里「よしっ! じゃあ——君…ちよつとこっちに来てくれる?」

悠里は手招きをして彼を車内の後部…ベッドの方へと引き寄せた

それを見た彼は当然驚き、由紀達の顔を見回すが…

彼女達は顔を逸らして見て見ぬふりをする。

今回のゲームルールの内の一つ…

『アピール中の人の邪魔をしてはいけない』

彼女達は全員、忠実にそのルールを守っていた。

(なぜ誰もこちらを見ない？僕は今リーさんに誘われてるんだよ？それも…ベッドに!!)

彼は必死にアイコンタクトを送るが、由紀達は当然無視…

悠里「ほら、こっち。はやくして？」

焦りを加速させるかのように悠里の声が耳に入る。

その声を聞いた彼は視線を由紀達から悠里に戻し、その光景に驚く。

そこに待つのは…ベッドに腰掛けながら、横に座れと催促する悠里だった。

「……………」

悠里「どうしたの？」

(…行っているのかな?)

確認するかのようになり、彼はもう一度だけ由紀達を見る。

由紀「……………」

美紀「……………」

胡桃「……………」

窓の外を眺めたり、意味なく自らの手のひらを見たりしながら…彼女達は彼を無視する

しかし…そんな彼女達も、内心ではかなり焦っていた。

由紀（りーさん…大胆すぎるよ!!これはあれかな…私達はここにいても良いのかな?）

美紀（確かに由紀先輩の言っていたルールには反していないけど…でも、飛躍しすぎじゃないかな。いきなりベッドに誘うなんて…）

胡桃（いや待て…まだりーさんがあいつにいかかわしい事をするよと決まったわけじゃない…ここは落ち着いて様子を…）

「あの…いったい何が始まるんですかね?」

彼が悠里の目の前に立ってから尋ねた。

胡桃（それだ!あたしもそれが聞きたかった!!）

胡桃は一人で小さく頷くと、こっそりと悠里に視線を向ける。

悠里「え?えつとね…」

悠里「――君疲れてるんでしょ？だから癒しっていうか…気持ちよくさせてあげようと思って。」

「……………」

とても無垢な笑顔で…ベッドに腰掛けながら、悠里はそう言った。

由紀（おおくっつ!!）

美紀（今…なんて??）

胡桃（終わった…完全に終わった…）

悠里の爆弾発言の直後、彼は黙り…

由紀は顔を赤くしながら目を輝かせ…

美紀は軽いパニックに…

そして胡桃は頭を抱えながらテーブルに顔を伏せた。

悠里「だからはやく…ね？」

美紀（いや、いくら――さんでもこんな怪しすぎる展開はさすがにのってこないんじゃない？）

「…じゃあお願いします。」

彼は覚悟を決めたのか、迷う事なく悠里の隣に腰掛けた。

美紀（ああ…そうですか）

胡桃「ちよつ！ちよつと待ってりーさん!!」

美紀が彼を呆れた目で見つめる中、突然胡桃が声をあげる。

悠里「ん？なあに？」

胡桃「なあに？…：じやないよ!!さすがにまずいだろ!?!」

悠里「あら？大丈夫よ、ちゃんと優しくするから。」

悠里の爆弾発言Part2に、胡桃は顔を真っ赤にした。

胡桃「やさっ…やさしくって…!!」

悠里「…：…」

混乱気味の胡桃を見た悠里はそっと立ち上がり、彼女の耳元で何かを呟く。

悠里「…：…」ボソボソ

胡桃「…：…!」

悠里「…：わかった？」

胡桃「まあそれはそれであれだけど…：…がんばって」

それだけ言って、胡桃は大人しく席につく

それを見届けてから悠里は再びベッドに腰掛け、隣の彼に言った。

悠里「……さて」

「……………」

悠里「ほら、ここに頭のせて」

自分の膝を叩いて、悠里は彼をそこに誘導しようとする。

「えつと……………」

悠里「ほら、はやく…耳掃除してあげるから。」

ニコニコしながらそう言って自分を待つ悠里を見て、彼は全てを悟った。

(あく耳掃除ね…、ハイハイ、まあそんな気はしてたけど…それにしてもベタな展開だな…)

そんな事を考えつつ…彼は黙って横たわり、悠里の足に頭をのせようとする。

直後、思い出したように悠里は彼に言った。

悠里「あ！顔はちゃんと外側に向けてね。私スカートだし…」

「ああ、分かりました。」

そう呟くと、彼は外側を向いたままの状態で悠里の膝に頭をのせ…自分の右耳を悠里に向けた。

すると悠里はどこからか取り出した耳かきを左手に持ち…それを彼の右耳の中に入れる。

「……………」

悠里「痛かったら言っただけ？」

「はっ。」

悠里「……………」

「……………」

悠里「……………」

「……………っ！」

悠里「あ、ごめんなさい。痛かったかしら？」

「…大丈夫です。ちょっとだけですから。」

悠里「そう…」

「……………」

由紀「……………」

美紀「……………」

胡桃「……………」

美紀・胡桃（私達は何を見せられているんだろう？）

由紀（りーさん…すごく積極的だよ！！）

「……………」

悠里「……………」

（最初は『耳掃除かあ〜』くらいに思っていたけど…）

悠里「……………」

（何気に…ドキドキするなあ…）

胡桃「…とか絶対に思ってるよな？」

美紀「思っているでしょうね…」

胡桃と美紀は悠里に耳掃除される彼を見て、その心の内を予想した。

悠里「……………」

(最初は『耳掃除かぁ』くらいに思っていたけど、これは…中々ドキドキする！)

その予想は見事に当たっていた。

(膝枕×耳掃除って地味に凄い事をされている気がするんですけど…)

そんな事を考えながら彼は耳掃除に支障の無い範囲で顔をずらし、悠里の顔を覗きこむ。

そこには、微笑みながらこちらを見つめる悠里がいた。

(なんていうか…これがそういう店なら、三十分で五千円とかでも余裕で人が入りそうだな)

悠里「……………」

悠里（とりあえず…作戦1はこれで良いかしら…）

悠里（あの本には『男の人は母性を感じさせる女性に惹かれる』って書いてあったから、とりあえず耳掃除してみたけど…）

悠里（耳掃除に母性って感じるかしら…感じるわよね？じやなきやこれ、本当にただの耳掃除で終わっちゃう…）

「……………」

全員無言のまま耳掃除を受ける事約十分…彼はその心地よさの響で再び眠気に襲われていた。

（さつき起きたばかりなのに…ダメだな。眠い…）

悠里（あら？なんか眠たそうにしてるわね…気持ち良かったのかしら？）

悠里はそんな彼の横顔を見てすぐに、眠気に襲われているのだと理解したが…

確認の為、声に出して尋ねた。

悠里「…眠たくなっちゃった？」

「え？ああ…はい。気持ちよくて…少し眠っても構いませんか？」

悠里「ええ、別にかまわ…」

そこまで言って悠里は思い出す。

あの本の中で見つけ、これは使えると思っていた一つの項目…

そして、それを元にたてていた二つ目の作戦を…

悠里（いつやろうかと思っていたけど…今がチャンスかもね。）

先程、『眠っても構いませんか?』と尋ねた彼に対し『別にかまわ
ない』と返しかけた悠里だったが…

悠里「…ダメよ。」

少し低いトーンでそう言って、第二の作戦を実行に移す。

「ん?ダメですか?リーさん耳掃除上手いから…眠たくなってきてし
まうんですが…」

彼が横を向いたまま笑顔で言った直後…

悠里は彼の耳に入れていた耳かきを”わざと”傾け…彼の耳に痛
みを走らせた。

「イタっ…!!」

彼があまりの痛みにビクツと体を震わせると、悠里はその肩に手を
強く当ててから…静かなトーンで言った。

悠里「あら…ごめんなさいね。」

悠里「でも…——君が悪いのよ?私がせつかくあなたの為に頑
張っているのに、自分は眠ってもいいか?なんて聞くから…」

「…り、りーさん？」

言いかげの無い恐怖を感じた彼は悠里の顔を覗き込もうとするが…

悠里の右手に肩を押さえられているのに加え、左手に握られた耳かきが中々に自分の耳の奥まで入って来ている為…身動きがとれなかつた。

悠里「ん？なあに？」

「りーさんて…左利きでしたっけ？」

悠里「…どうして？」

「いや…その…なんとなくですけど…」

悠里「ダメかしら？」

「耳の中ってデリケートなんで…もし右利きだったら、ちゃんと利き手でやってほしいな…とか思ってみたり…」

悠里「ふふっ、私は右利きなのか左利きなのか…正解分かる？」

冷や汗をかきながら尋ねる彼に、悠里は笑顔でクイズを出す。

「えっ…えっ…えっ…」

彼は少し戸惑いつつもそれに答えようとするが…

その直後発した悠里の発言が…彼を追いつめる。

悠里「もし間違えたら…利き手じゃない方の手で、雑にやるからね？」

「!!？」

悠里「うふふっ…」

「…冗談でしょう？」

悠里「さあ…どっち？はやく答えてね？」

「…………ええっと…」

悠里「十…九…八…七…」

(ヤバい…この人…多分本気だ！)

悠里が彼の耳元でカウントダウンを始める…

彼はそれに怯えながらも、必死になって彼女の利き手を思い出す。

(普段リーさんはどっちの手で物を持ったりしていた!?!右…いや左手か?)

悠里「さくん……にく……」

「左利きですー！りーさんは左利き!!」

悠里「……………」

(…どうだ!?)

彼は悠里の返答を待つ…

由紀達も固唾を飲んでそれを見守っていた。

悠里「うん！正解！良くできました♪」

とても爽やかな笑顔で、悠里は彼に言った。

そんな悠里の笑顔を身動きがとれない彼は見ることは出来なかつたが…

ひとまず、ほっと胸を撫で下ろした。

(よかった…本当によかった…!)

悠里「でも……残念だわ」

「え?」

ボソツと呟く悠里…

直後、続けて呟いた台詞に…彼は恐怖する。

悠里「痛がるあなたの顔……とても可愛かったから、もっと見たかったんだけど……」

「…!?!」ゾクッ!

由紀「!!」

美紀・胡桃「!?!」ゾクッ!

悠里の突然の発言に、由紀は単純に驚きを……そして彼、美紀、胡桃の三人はとてつもない恐怖を感じていた。

「……………りーさん」

悠里「ん?」

「あの……ありがとうございます。もう良いです。」

悠里「あら、そう?」

悠里は渋々彼を開放すると立ち上がり、笑顔で言った。

悠里「ちよつとトイレ行ってくるわね。」

「ハイ……自由にどうぞ……」

トコトコとトイレに駆けていく悠里

そんな彼女がトイレに入ったのを確認してから、彼はそつと立ち上がり……隣合つて席に座っている胡桃と美紀、そんな二人とテーブルを挟んだ向かいに座った。

「……………」

胡桃「……………」

美紀「……………」

「……………すごく怖かったよ」

彼が力無くテーブルに顔を伏せながら呟く。

美紀「ですよね……見ていただけの私達も怖かったです。」

胡桃「よしよし……もう怖いのはいなくなったからな」

胡桃は怯えた子犬のように震える彼に手を伸ばし、その頭を優しく撫でた。

「……………」

美紀（りーさん……あの本の何を見てあんな事をしたんだろう？）
そんな事を美紀が考えていた時、トイレ内の悠里は……

悠里（あんな感じで良かったのかしら……）

悠里（一部の男性はああいった系統の女子に対しての異常に興奮すると書かれていたけれど……）

悠里（…何系女子だったかしら？えっと……確か……）

悠里（ヤンデレ系女子……だったかしらね）

悠里（不安があるとすれば、よくわからないまま挑戦したから微妙に間違っているかも知れないって事と……あれが——君の好みじゃないかも知れないって事だけど……）

悠里「……………」

悠里（心なしか嬉しそうに見えたから……多分心配はいらないわね。）

悠里（…にしてもこのゲーム、やる前は恥ずかしいとか思っていたけど……）

悠里（…凄く楽しい！——君好みの人間を考えて、それを演じる…
まるで演劇かなんかみたい！）

悠里は先程の自分の言動や彼の反応を思い返し、脳内で復習しながら、ニコニコと満足気な笑みを浮かべていた。

「……………」ガタガタガタ

美紀「…震えています?」

「少しだけ…」ガタガタ

彼に軽いトラウマを植え付けてしまった事など…
全く知らずに……

「……………」ガタガタガタ

『痛がるあなたの顔…とても可愛かったから、もっと見たかったんだ

けど……』

「……………」ガタガタガタ！

『痛がるあなたの顔……とても可愛かったから』

(あの時は怯えてしまったけれど……) ガタガタ

『あなたの顔……とても可愛かったから』

『とても可愛かったから』

(落ち着いて思い返すと……あれはあれで……かなり興奮する!!!) ガタ
ガタ

……………

訂正……トラウマなど、微塵も植え付けていなかった。

若狭悠里：彼女は彼の中に眠っていた、新たな扉を開く事に成功：
今日この時より、彼の辞書に『ヤンデレ萌え』が追加されたのであつ
た。

五十話 『静かに…ひっそりと』

悠里が彼にアタックしてから三時間後…

昼食を終え、少ししてから彼女…直樹美紀は外に出る。

…ボタン

美紀「…何してるんですか？」

外に椅子を持ち出し、一人読書をしているその人物に彼女は声をかけた。

胡桃「見てわかるだろ…読書だよ読書」

一瞬だけちらつと美紀を見て…

胡桃は再び由紀に借りたあの本に視線を向けた。

美紀「まだ読み終わってなかったんですか。」

胡桃「いや、読み終わってるよ…」

美紀「じゃあ、早く挑戦してみたらどうですか？」

胡桃「ダメだ……」

美紀「どうしてです?」

美紀がそう尋ねると、胡桃は本を閉じ…顔を青くして呟いた。

胡桃「なにをしたら良いのか、全然わかんねえ……」

美紀「えっ?…だからその本に書いてあるやつをどれか実践してみれば」

胡桃「……」

美紀「…どうしました?」

胡桃「美紀…お前はどのくらいで方法を決めた?」

美紀「えっと、十五分くらいですね」

胡桃「はやいな…それとも、あたしが優柔不断なのか?」

そう言って胡桃は頭を抱え、顔を伏せる。

美紀「あ、さつき由紀先輩が私にこつそり言ったんですが…あの人は最後がいいみたいですよ。」

胡桃「なに?じゃあもうあたしの番じゃん!」

美紀「そうなりますね」

慌てる胡桃…

そんな彼女に、美紀は言った。

美紀「はやくしないと、由紀先輩が急かしてきますよ。」

胡桃「ぐっ！…わかった。すぐに作戦を考えるよ…」

由紀に急かされるのが嫌だった胡桃は本をめくり、使えそうなペー
ジを必死に探した。

美紀「まあ…がんばって下さい。私は中に戻りますね。」

胡桃「んゝ…」

美紀「……………」

美紀は車の中に戻ろうとしたが、本を読むのに夢中になっている胡
桃を一人にする事に多少の不安を抱き…

結局胡桃が作戦を決めるまでその場に残ることにした。

そして十分程たった頃、胡桃は本を閉じて立ち上がる。

胡桃「…いよし!!」

美紀「作戦、考えましたか？」

自信あり気な胡桃の表情を見て、美紀は尋ねた。

胡桃「ああ、美紀…悪いけど、この勝負はあたしがもらったぜ!!」

美紀「それはどうでしょうね?リーさんはあんなでしたが、私ばかりの評価を受けているハズ…いくら先輩でもそう簡単に越えられませんよ。」

同じく自信あり気な表情で答える美紀。

そして”リーさんはあんなでしたが”と言ったが、実はそんな悠里がかなりの高評価を得ていた事を、彼女は知らなかった。

胡桃「ふっ…、まあ見てろって…」

そう言つて胡桃は車内に戻る…

美紀もそれに続いた。

バタン!

戻つて早々、彼が席に座つてぼうっとしているのを胡桃は確認して…そこに歩み寄る。

胡桃「…座るから、つめてくれるかな?」

「ん?ああ、了解です。」

胡桃「ありがとう」

奥の方へと移る彼に胡桃は礼を言うと、その隣に座つた。

美紀は彼に気づかれないうちに少しだけ離れた所からその様子を伺う。

胡桃「……………」

「……………」

美紀（隣に座る…それが先輩の作戦なのかな？）

胡桃「今日は寒いな。」

隣の彼をちらつと見つめて胡桃が呟いた。

「うん。…ほんの少しだけね」

胡桃「だよな？由紀悪い…ちよつと毛布取ってきてくれ」

由紀「わかった〜」

胡桃はベッドの上でごろごろしていた由紀にそう頼む

由紀はすぐに起き上がるとそばの棚から毛布を一枚だけ取り出して胡桃に渡した。

胡桃「サンキュー」

美紀（隣に座る…毛布…はっ!?!先輩…もしかして!!）

由紀から毛布を笑顔で受け取る胡桃を見て…

美紀は一つの考えにいたる。

美紀（あの一枚の毛布を…——さんと一緒に!?!）

胡桃「ううく…さむくつ」パサツ

美紀（あれ？）

美紀の予想とは裏腹に、胡桃はその毛布を自分一人で羽織った。

美紀（なんだ、一緒に使うのかと思った。もしそれをやられたら、かなりドキドキすると思うんだけど。…先輩、本当にただ寒くて毛布を借りただけなのかな？）

由紀「ねえ胡桃ちゃん、今お喋りできる？」

毛布を渡した後、由紀が胡桃の横に立って尋ねる

普段の彼女ならばそんな事は尋ねずに話しかけてくるが…

今回わざわざ尋ねたのは、胡桃が今現在“ゲームの最中”だったら邪魔になってしまうと思ったからだだった。

胡桃「ん？別に構わないぞ。」

胡桃がそう答えると、由紀は嬉しそうにテーブルを挟んだ正面の席に座った。

由紀「よかった！胡桃ちゃん…今はちよつと忙しそうだったから、断られるかと思つたよ」

胡桃「全然大丈夫。ここでちよつと会話するくらいならな。」

由紀「あのね、なんか私…最近ちよつとだけ太ってきた気がするんだけど……」

深刻そうな顔で由紀は胡桃に言った。

それを胡桃の隣で聞いていた彼は、驚いたような表情で由紀に言う。

「全然じゃないですか!? そんなんで太ったとか言ったらきりないですよ!」

由紀「えっ?じゃあ——くんから見て私って細い方?」

「はい。細い方ですよ。」

由紀「そう?…えへへ。ならよかった!」

細いと言われてご機嫌な表情になった由紀

そんな彼女に、胡桃は忠告する。

胡桃「でもお前、ストックに余裕があるとすぐにお菓子とか食べるだろ?あれ…気を付けないと太るぞ。ただでさえ由紀はあまり運動とかする方じゃないんだからな。」

由紀「うぐっ!?!…気を付けます。」

胡桃「そうだな。女子ならそういうのに気を使えよ?」

由紀「……………」
軽く説教をされている中、由紀はじつと胡桃を見つめる。

胡桃「ん？なんだよ」

由紀「いや、そういえばさ…胡桃ちゃん最近痩せたよね。」

胡桃「…そうか？」

由紀「うん。ほんの少し」

胡桃「ん…どうだろ。自分じゃそんなに分からないな…お前はど
う思う？」

毛布を羽織ったまま、胡桃は隣に座る彼の顔を見つめて尋ねた。

「…あまり分かんないかな？」

胡桃「だよな？」

由紀「まあ胡桃ちゃんはよく動くから…とりあえず太る事はなさそ
うだよね。」

胡桃「ふふん。そういう事だ」

由紀「私も運動とかしないとなあ〜…」

由紀がテーブルに顎を乗せて呟く

胡桃「話変わるけど、由紀はさ…、どんな男の人が好き？」

由紀「おお！そういうのガールズトークっぽくて良いね！」

胡桃「みたいじゃなくて、ガールズトークだけだな。」

由紀「ん〜…やっぱり、優しい人かな。」

胡桃「なるほどな。」

由紀「胡桃ちゃんは？」

胡桃「あたしか…ん〜、そうだなあ…」

視線を上に向けて考える胡桃…

そんな彼女を、美紀はじっと見ていた。

美紀（あれ？先輩、私に見てるとか言ってたのに…ただお喋りして

るだけじゃないですか。」

美紀（しかもガールズトーク…あれじゃ隣に座る男性の——さんは
気まずいんじゃない？）

悠里「どうしたの？」

美紀「あつ、いえ…」

突然悠里に声をかけられ、少しだけ驚く美紀…

美紀は悠里に小声で事情を説明した。

美紀「胡桃先輩——さんをドキドキさせる作戦を考えたと言っ
たのに、それを実行に移す気配が無いんです。」

悠里「あら、そうなの。…タイミングをみてるんじゃない？」

美紀「どうでしょうね…」

そう呟き、美紀は再び胡桃に視線を向ける。

胡桃「あたしは…いざって時に頼りになる人が良いな。」

「っ!？」

由紀「あ！そういうのも良いよね〜！」

胡桃「だろ？」

「……………」

胡桃「お前は好きな女の子のタイプってどんなの？」

「…………え？僕に言ってる？」

胡桃からの突然の質問に彼は戸惑う。

胡桃「うん。お前に聞いている」

「えっと…………そうだな…」

彼はじっくりと考えながら、横に座る胡桃の顔を彼は見つめた。
胡桃もまた彼を見つめながら、その返答を待っている。

胡桃「……………」

「……………」

由紀「なに〜？——くんどうかした？」

何やら様子のおかしい彼に由紀が尋ねる。

「い、いえ…………なんでも。」

「えつと…好きなタイプか…なんでしようね？」

由紀「好きなタイプだよ？ほら…優しい子が良いとか、可愛い子が良いとか。」

「じゃあ…優しくくて可愛い子で。」

由紀「あははっ！欲張りだね。」

「あは…ですよね…」

彼の返答を聞いて由紀は大笑いしたが…
彼はそれどころではなかった。

なぜなら…

胡桃「……………」ギユツ

「……………」

『あたしは…頼りになる人が良いな。』そう答えた直後から…

胡桃はずつと、テーブルの下で…なおかつ毛布で隠して見えないようにしながら…

彼の左手を、自らの右手でギユツと握っていた。

胡桃「……………」ギユツ

(この人は…なんでさっきからずっと僕の手を…。)

最初は指先がほんの少し触れているだけだった…

彼もその時はたまたま触れてしまったのだと思い、気まぎれになって手を離そうとした。

だが胡桃は離れようとする彼のその手を上から強く握り、そのまま離そうとしなかった。

(相変わらず冷たい手だけど…それがなんか気持ちいい気が…)

そんな事を彼が考える中…

胡桃は何事も無いように由紀と会話を続けていた。

その会話は五分程続いたが、由紀がトイレに行った事で中断される。

「胡桃ちゃん…その、これは」

由紀がいなくなった瞬間、彼が小声で尋ねる。

胡桃「しーっ…」

胡桃は左手の人差し指を立てて自らの口に当てると、少しだけ微笑みながらそう言った。

「!?…」

その仕草が、彼の心にとつともない衝撃を与える。

(これは…なかなかのもんですな…)

彼は顔を真っ赤にして…胡桃から目を逸らす。

そんな彼に追い打ちをかけるように、胡桃は彼の耳元に顔を寄せて
呟く。

胡桃「手…イヤだ？」

「!?」

驚いて彼女の方に顔を向ける…

とてつもなく近い距離にその顔があつたが、さすがの胡桃もこれに
は照れたのか…

すぐに顔を離した。

胡桃「ごつ、ごめん」ボソツ

「い、いや…大丈夫です…。」ボソツ

ほんの数秒間だけ、二人は無言になる…

だがすぐに胡桃から口を開いた。

胡桃「あの…それでさ、手…このままで良いかな？」ボソツ

顔を赤く染めながら、上目使いで彼に尋ねる。

彼はそれに、ただ無言で頷き、了承した。

胡桃「…よかった。」ボソツ

胡桃はそう呟いて微笑むと、彼の手の甲の上から指を絡めた。

(つゝ／＼／＼なんだこれは!?なんだこれはあつ!?)

胡桃は目線を下げて微笑みながら、彼の手を強く握る。

そして彼はその影響で顔を赤くしながら、どこか挙動不審に…

そんな二人の横を悠里と美紀が通り、声をかける。

悠里「あら？——君、顔赤くない？」

美紀「本当ですね…熱でもあるんじゃないですか？」

そう言って美紀は彼の様子を見ようとテーブルに手を置いてその顔を近づけるが…

胡桃が慌てながら左手でそれを遮った。

胡桃「だっ、大丈夫!!熱じゃないから！」

美紀「ん、そうですか？」

美紀がそんな胡桃の行動に違和感を感じた時…

美紀「……ん？」

胡桃が声には出さずに、口をパクパクとしている事に気がついた。

美紀（じゃ…じゃます…るな?…ああ、『邪魔するな』って言ってるんですね）

その発言で彼女が密かに作戦を実行していた事に美紀は気づき、悠里…更にトイレから出てきた由紀の二人を連れて外に出ようとした。

美紀「りーさん、由紀先輩も…ちよつと良いですか？」

悠里「うん？なに？」

由紀「ん？」

美紀「いいからいいから…ほら、来てください。」
半ば強引に二人の手を引き、美紀は外に出る。

…ボタン

悠里「で、何かしら？」

美紀「胡桃先輩がいつの間にか作戦を実行していたみたいです。
| さんに近づこうとしたら邪魔するなって言われました。」

由紀「ほんと!?!じゃあ…いつからだろ？」

美紀「私と車の中に戻った時は既にやる気があったので…その時から始めたとしたら十分くらい前からですかね。」

悠里「全然気づかなかったわ…」

美紀「私もです。」

いつからだと考える悠里と美紀…
そんな中、由紀は大きく体を伸ばしながら言った。

由紀「ん、とりあえず…私達はあと五十分くらい外で時間つぶそうか？邪魔するのはルール違反だし。」

美紀「そうですね。胡桃先輩の場合…どんな作戦なのかも分かりませんから、私達の行動の何が邪魔になってしまうかも分かりませんし」

悠里「少なくとも外にいれば、邪魔にはならないものね。」

美紀「そういう事ですね」

由紀「じゃああと五十分…なににする？」

悠里「あまり離れても危ないから、ここで適当にお話しでもしてましょ。」

悠里はそう言っつて車にもたれてしゃがみこむ。

悠里（胡桃の作戦って…なんなのかしら？）

そんな事を考えながら…彼女はそつと車の方を向いた。

胡桃（みんな…外行つたな。）

「……………」

胡桃（……………会話がない）

二人きりの空間で手を握りっぱなし…
そんな状況に、胡桃は気まずさを感じていた。

「胡桃ちゃん…」

そんな彼女に突如、彼が声をかける。

胡桃「うん？」

「みんないなくなったから聞くけど、この手は…何かな？」
彼が握られた左手を、ほんの少しだけ動かして尋ねた。

胡桃「…聞きたい？」

「それなりには…」

胡桃「ダメ…内緒。」

胡桃は笑いながらそう言って彼との距離を更に詰め…
そしてその肩に頭を寄せ…彼に寄りかかる。

「っ…胡桃ちゃん!？」

その行動に彼はますます顔を赤くし、彼女を見つめる。
彼の肩に頭を寄せたまま、胡桃はチラツと彼の顔を覗き込むと…微
笑みながら言った。

胡桃「あたし、少しだけ寝るから」

「えっ!?!う、うん。分かった…」

胡桃「…おやすみ」

「おやすみ…」

相変わらず手を握ったままで自分の体に寄りかかり、目を閉じた胡桃の横顔を…

彼は、じっと見つめていた。

(彼氏でもない僕の手を握りながら寝るとか…もしかして、胡桃ちゃんって意外と甘えんぼだったりするのかな?)

胡桃「……………」

(いや、普通甘えんぼなくらいじゃ男の人の手とか握らないはず…。
なら、まさか…)

彼が一つの可能性を感じていた時…

胡桃は寝たふりをしながら考えていた。

胡桃(どうだ!?!かなり手応えは感じたけど…)

胡桃(結局あの本はどこを参考にしたら良いか分からなくて、終始アドリブでやってしまった…)

胡桃（でもまあ…それっぽかったよな？少しは…ドキドキしてくれ
たよな？）

胡桃（てかこれ……）

胡桃（あたしも凄く恥ずかしいんだけど!!なんで手を握ったまま寝
たふりなんてしちゃったんだろう?!もう離せないじゃん!）
目を閉じて寝たふりをしたまま、胡桃は一人で焦っていた。

胡桃（肩に頭を乗せて、こんな警戒心のない姿で寝たふりとか…も
し何かされそうになったら…どうしよ？）

胡桃（ま、まあその時はその時だ…起き上がって驚かせてやろう!）

胡桃（そうだ!この手も、寝返りうつふりしてさりげなく離せばい
いじゃん!もうやるだけやったし…これ以上握ってる必要はないも
んな。）

胡桃がそんな事を考えて、それを実行に移そうとする。

胡桃（よ、よし!適当に寝返りうって、手を離し…そして頭も肩か
ら離そう!）

胡桃（まず、手を……）

胡桃（……………）

胡桃（でも…どうせ寝たふりしてるだけだし、このままでも……）

胡桃「……………」ギユツ

胡桃（うん。いいや…もう少しだけこのままでもいいよう。）

胡桃（もう少し…もう少しだけ、このままです）

結局、胡桃はその数十分後に車内に戻ってきた由紀に起こされるその時まで彼の手を握っていた。

由紀に起こされた彼女は静かに彼の手を離して起き上がり、チャレンジを終えた。

由紀が提案した制限時間（一時間）をフルに使用して…

彼女は寝たふりをしてる間、自らもドキドキしてしまうという捨て身の作戦を実行。

思わず彼が『もしかして自分に気があるのでは？』と勝手にしまう程の高評価を得た。

由紀「ねえねえ、胡桃ちゃん…もう終わったんだよね？」ボソツ
寝たふりをしていた胡桃を起こして少ししてから…
由紀は小声で尋ねる。

胡桃「終わった。後はお前だけだな…」ボソツ

由紀「ふっふっふ…りーさんはともかく、みーくんと胡桃ちゃんが
どんな手を使ったかは知らないけど…私の作戦の敵じゃないね」ボ
ソツ

胡桃「言うじゃねえか。じゃあ、結果を楽しみにしてるよ。」ボソツ

由紀「うん。じゃあ…行ってくるね！」
そう言っただけで由紀は彼のもとに歩み寄り、その肩を叩いて呼び掛け
る。

学園生活部最後の挑戦者

丈槍由紀が…遂に動き出した。

五十一話『妹と兄』

トントン…

胡桃に握られていた左手の余韻に浸り…

半ば放心状態で席に座る彼の肩を由紀が叩く。

由紀「——くん。ちよつと外で遊ぼう！」

「今から…ですか？」

由紀「うん！はやくしないと、外暗くなっちゃうもん！」

「ん、分かりました。…で、他には誰がいます？」

由紀「私と——くん…二人つきりだよ。たまには良いでしょ？」

彼にそう言つて由紀は微笑む。

こういった場所で車を停めた時、由紀はかなりの確率で外で遊びたがったが…

今回のように彼と二人きりで、というのは珍しかった。

(いつもだと胡桃ちゃん辺りを誘つてるのにな…まあ、ちよつど暇だったからいいんですけど。)

そんな事を思いながら、彼は一応悠里に遊びに行くと伝えておき…

由紀と共に外に出る。

ボタン

「…で、何して遊びますか？」

由紀「んん、とりあえずついてきて。」

車を停めている広場…

由紀はキョロキョロと辺りを見回し、15m程先にあるベンチを見つけるとそこへ向け歩き出した。

そのベンチに由紀はドサツと腰を下ろすと、その隣のスペースを叩いて彼を呼ぶ。

由紀「ほら！こっち座って！」

「あれ？遊ばないんですか？」

座りながらペシペシとベンチを叩く由紀を見て、彼は尋ねる。

由紀「座りながら出来る遊びだってあるんだよ。」

「へえ…それをやるって事ですか？」

由紀「ううん。やんない。」

「……………」

きつぱりと断言する由紀…

彼は思わず、彼女を真顔で見つめていた。

由紀「ううつ?!怖い顔しないでよ〜!」

「…ただ真顔でいるだけです。怖い顔などしていません。」

由紀「ごめんごめん!あのね、車の中だとみんながいるから遊びにいこって誘ったけど…ほんととは違う用事があつて——くんを誘ったんだ。」

「違う用事…、何ですかそれ?」

彼が隣に座ってから尋ねると、由紀は顔を赤らめて恥ずかしそうに口を開く

由紀「あのね…私、ずっとね……」

「……………」

俯いて地面を見つめながら、由紀はゆっくりと一言ずつ言葉を紡ぐ。

由紀「夢ってというか…憧れってというか…」

由紀「そういうのがあつてね…つまり…その…
モジモジとして呟く由紀…次の瞬間

彼女は覚悟を決め、彼の顔をまっすぐに見つめた。

由紀「だから…!その…ちゃんが…て…」

「??…なんですか？」

後半が聞き取れず、彼は聞き返す…
すると由紀は、強く彼の目を見つめて尋ねた。

由紀「…子供っぽいって笑わない？」

「え？笑いませんよ。…多分」

由紀「多分じゃダメだよ！絶対笑わないって約束して!!」

「じゃあ…絶対に笑いません。」

由紀「ほんと？…じゃあ言うね、私…」

由紀「ずっと…お兄ちゃんが欲しかったんだ。」

赤い顔で恥ずかしそうに…由紀は彼を見つめて言った。

「…そうだったんですか。」

由紀「…うん。それでね、もしよかったら…」

由紀「…少しの間だけ——くんの事をお兄ちゃんだと思ってても…良
い…かな？」

「僕ですか？」

由紀「うん。…良いでしょ？」

頼み込む由紀。

これを承諾したらまたしても新たな扉を開いてしまう…
そう思っ彼は返事を躊躇っていた。

…だが

由紀「ダメ…かな？」

由紀「…お兄ちゃん？」

「…ッ!!？」

隣に座るその少女の上目使いで発したその一言が…
その破壊力が…
彼の新たな扉を…音速で開かせた。

「分かりました。いや…」

「分かった。妹よ…」

謎の兄キャラで由紀と接する彼…

由紀はそんな彼を見ると、笑顔を浮かべて喜んだ。

由紀「ほんとに!? わくわく! 頼んでみてよかった〜!」

「この程度ならばお安いご用。代わりにしっかりと僕の事を『お兄ちゃん』って呼んでね。」

由紀「断られるかと思つてヒヤヒヤしてたんだ〜」

「断らない断らない。だから代わりに『お兄ちゃん』って呼んでね?」

由紀「こんな事…胡桃ちゃん達に聞かれたら、また子供みたいって笑われちゃう…。だから二人だけの秘密だよ?」

「僕もこんな事…胡桃ちゃん達に知られたら、また変態さげすみたいって蔑まれちゃう…。だからもちろん秘密にするよ、代わりに『お兄ちゃん』って…」

由紀「えへへ、そんなに催促しなくても大丈夫だよ? おにくちゃん!」

隙あらば『お兄ちゃん』を催促する彼に、由紀は満面の笑みで答えた。

(あれ…？そう言えば前に…)

彼は思い出す…世界がこうなる前にテレビで見ていたその光景を。

『今回は…街で人気の妹カフェに来ています！さっそく、お客様の声を聞いてみますね』

『どうですか？このカフェは？』

その男性リポーターは、店内に入ると客とみられる一人の中年男性にインタビューをした。

『最高ですね！仕事でたまった疲れを、可愛い妹達に癒してもらってます！』

『そうですか！因みに、ここにはよく来られるんですか？』

『ええ！週に三回は来てますね！』

笑顔でそう答えたその男をモニター越しに見て、彼は呟く。

「週に三回…。こんな下らない店に通いつめるなんて、どうかしてるな…」

そして……現在。

由紀「おにいちゃん♪」

(八回だ……)

(これが店なら、僕は週に八回は通う……)

以前見下していたあの男を遥かに越える勢いで……

彼は『妹』という物に魅了されていた。

由紀「えへへ♪」

「それでその……お兄ちゃんってのは何をしたら良いのかな？」

いざ兄になつたらなつたで何をしたら良いのか分からず、彼は由紀に尋ねる。

由紀「えっと……じゃあ、頭を撫でて？」

そうやって由紀は猫耳のような形をしたその帽子をした頭を彼に向け、そのまま目を閉じた。

「……、こうですか？」 ナデナデ
彼は恐る恐るその頭を撫でる。

由紀「ですか？とかはダメ！お兄ちゃんは妹に敬語を使わないの
!!」

頬を膨らませて怒る由紀…

世の中には妹に敬語を使う兄もいるかも知れないが、それは彼女の
好みではないらしい。

「す、すいま…じゃない！…ごめん…」 ナデナデ

由紀「んふふ♪」

彼に頭を撫でられ、満足そうに由紀は笑う。

「由紀ちゃん…いつまで撫でれば良い？」 ナデナデ
そう彼が尋ねると由紀は再び頬を膨らませて怒り、言った。

由紀「それもダメ！ちゃんと由紀って呼んでね！」

「!!……由紀」 ナデナデ

由紀「ん？ごみん、聞こえなかった…。もういつかい呼んで？」

「…由紀」 ナデナデ

由紀「…えへへ♪頭…好きナだけ撫でてて良いよ〜」

「好きナだけっ!?!」ナデナデッ!

(そんな事言ったら…このまま5時間は撫でてているぞ!?!)

由紀「ん〜♪」

(ダメだ…あまり長引かせると戻れなくなる。)

「と、とりあえず一旦中断ね?」

彼は由紀の頭からそつと手を離し、心を落ち着ける。

(…あれ以上撫でていたら、僕は何らかの化け物になってしまう。人間でいる内に止めておこう…)

彼は気づいていないが、既にこの時点で由紀の頭を5分以上撫でていた。

由紀「いや〜、よかつた〜。———くんは頭をこんなに撫でられたのって私が初めてだよね?」

笑顔で尋ねる由紀…

だが彼には一人だけ心当たりがあり、焦りを顔に浮かべる。

(あの人の…胡桃ちゃんの頭を撫でた事は何度かある。…でもどれも一瞬しか撫でてないし、ノーカンでも構わないかな…)

由紀「むっ!?怪しい…正直に答えてねお兄ちゃん!!」

「あの…胡桃ちゃんの頭を少しだけ…。…ほんの少しね?」

由紀「く!!お兄ちゃんのバカッ!浮気者!!」

由紀は怒りながら彼の肩を小突く。

彼はそれを受けて少しよろめくと必死に弁明をした。

「少しだけ!本当に少し撫でただけだから!!」

由紀「そんな事言って…他の女の子も撫でてるんでしょ!?!」

「撫でてない!そしてその言い方止めて!?!なんかいかがわしく聞こえるから!」

由紀「もういいよ!なら私はこれから…」

ベンチから立ち上がり、そばにあった少し大きめの石を取ると…

由紀は重そうに手をプルプルと震わせ、彼に言った。

由紀「…純粹なお兄ちゃんを惑わすその胡桃って女を…こっつ、この岩で！」プルプル

「止めなさいって！」

彼は由紀から石を取り上げ、離れた場所に投げ捨てた。

由紀「あ〜ん！私の武器が〜」

由紀「……………」

由紀「…まあ冗談だったんだけどね？」

彼を見て、由紀はえへへと笑う。

（あれって、こんななのかな？リーさんに聞いたら『デレデレした後で怖い事を言えば良いのよ』って言ってたけど…）

（結局私にはよく分かんなかったなあ…。やっぱ私はこの『妹作戦』だけでやっていこう）

彼女も密かにヤンデレ系女子に目をつけていたが、結局やり方が今一つ分からずに終わった。

「…本気で胡桃ちゃんを殺しに行ったらドン引きだからね？」

由紀「そんな事しないよ。だいたい、私じゃ胡桃ちゃんに返り討ちにされちゃうもん」

「まあ…そうだね。」

そんな会話をしながら、彼と由紀は再びベンチに座る…
すると由紀は腕を組みながら呟いた。

由紀「でも…胡桃ちゃんに先を越されてたのは少しくやしいなあ」

「……………」

由紀「よし！じゃあ…胡桃ちゃんともまだしてない事をしよう！」

「はいっ…」

由紀「ねえ、何があるかな？」

ぐつと彼との距離をつめて、由紀は尋ねた。

「何って…、少なくとも妹になったのは由紀ちゃんが初めてだけど…」

由紀「それはダメ！もつと他の事で！」

「他の事ね…、ん〜」

彼は手に顎を乗せ、必死に考える。

由紀「なんかないの？なんでもするよ〜！」

「由紀ちゃん…なんでもするとか、あまり言わない方が良いよ。それ

は魔法の言葉だからね。」

由紀「由紀ちゃんじゃなくて、由紀だよお兄ちゃん！」

「ああ…ごめんね由紀。」

由紀「…で、なんで言わない方が良いの？魔法の言葉ならどんどん使っても良さそうだけど…」

「正確には…言った人にとって魔法の言葉なんじゃなくて、言われた人にとって魔法の言葉なんだよ」

由紀「う…ん??…どういう事かな?ちょっとむつかしいね。」

「だから…たとえば、たとえばだよ?なんでもするって言った由紀に対して、僕が『じゃあ、いやらしい事させて』って言ったなら…由紀はどう思う?」

由紀「変態さんだと思う!!」

元氣よく挙手しながら由紀は答えた。

「でしょ?でもね、どれだけ嫌な事を頼まれても由紀は断れないの。何故なら『なんでもする』って言っちゃったから」

由紀「ああ、そういう事か。すごく分かりやすかった!また一つ

賢くなったね！」

「…そうだね」

由紀「じゃあ…なんでもとはいかないけど、大抵の事はする。なにしたら良い?」

「別に…何もなくていいよ」

由紀「それだと私が胡桃ちゃんに負けちゃうから嫌なの！胡桃ちゃんもみーくんもりーさんもした事ないような事をするくらいじゃないと、この勝負に…」

「勝負?」

思わず口を滑らせた由紀…

彼はすかさずそれを聞き返した。

由紀「あっ!?!…いや、なんでもないよ?」

冷や汗をかきながら手を振り回して由紀はごまかそうとするが、彼は違和感を感じ、疑いの目を向けていた。

「なんか…隠してます?」

由紀「えへへへ…その…」

由紀「えっと…ね…」

由紀「…ちゅー…した事ある？」

「……なに？」

由紀のその突然の問い。

彼は聞き間違いかと思い…もう一度聞き返した。

由紀「ちゅーだよ。した事ないなら…私がしてあげる。」

ほんの少し頬を赤くして、由紀は答える。

彼はそんな彼女を見て戸惑った。

「えっ?!いや、それは…」

由紀「私じゃイヤ? やっぱ、リーさんとかの方が良いのかな?」

「そうじゃなくて…ほら、今は妹として由紀ちゃんを見てるからね?」

戸惑う彼はここで由紀を『妹』として扱う事でこの場をきり抜けようとするが…その程度のごまかしで由紀を退ける事はできなかった。

由紀「それはやめたの!今はもう妹とかじゃなくて…いつもの――

くんと、いつもの私だよ。」

「うっ!?…そ、そうですか…。」

彼は何時にもなく真剣な表情の由紀に焦り、目を逸らす。すると由紀はすかさず彼の手を握り、顔を近付けて呟く。

由紀「これは私がしたいからするの。もし——くんが私じゃ嫌なら…私を突き飛ばしてね、じゃなきゃ私…やめないから…」

「…本気ですか?」

彼の問いを無視して、彼女は自分に言い聞かせるようにブツブツと呟いていた。

由紀「私だってもう子供じゃないもん…このくらい、平気で…」

「……………」

彼はただその様子に圧倒され、大人しく彼女を見つめる。

由紀「ふう…。目…つむって?」

由紀にそう言われ、彼はそつと目を閉じた。

由紀「あ、開けちゃダメよ?ちゃんと閉じててね?」

「…はい。」

由紀「…：…すぐに済むから。」

そう言った直後、由紀は彼の顔に自らの顔を寄せ：

10秒程動きを止めてから…：そつと彼の耳元で呟いた。

由紀「…お兄ちゃんのえっち」ボソツ

「のわっ!?!」

予想外の一言に彼は飛び退き、由紀を見る…

すると彼女はケラケラと笑いながら、彼を指差していた。

由紀「あははっ！ダメだよ——くん。さつきまで妹だった私に変な事期待しちゃ〜。」

「え？だって妹とかはやめたって言って…：…」

由紀「ああ言ったらドキドキするかなって。前にそういう漫画読ん

だことがあって、——くんはそのセリフを試してみたかったんだ」
♪

「そ、そういう漫画？」

半分放心状態になっている彼が笑顔の由紀に尋ねる。

由紀「うん！妹がお兄ちゃんに恋するやつでね、読んでて凄くドキドキしたからそのドキドキを——くんにも分けてあげようと……」

「へえ〜……。じゃあ急に妹キャラになったりしたのは……」

由紀「役づくりだね!!」

グツ！と立てた親指を彼に向けて、由紀は嬉しそうに笑った。

「……………そう」

由紀「ドキドキした？ねえドキドキした？」

「まあ……………そうですね。」

見るからにテンションの下がった彼に由紀は目を輝かせながら尋ねる。

由紀「そっかあ！よかったあ〜♪」

由紀（きつと私が優勝だ〜！）

「……………」

由紀「あれ？元氣ないね…どしたの？」

「あの…僕に言ってきたセリフとか行動とかは、その漫画のですか？」

由紀「う〜ん。途中でアレンジしたりしちゃったけど…ほとんどそうだよ」

（そ、そんなものに…僕は一人でドキドキしてたって訳か…情けない。）

由紀「でも——くんの妹になるのは面白かったな〜♪他のみんなともやってみようよ！きつと楽しいよ。」

「止めて！絶対にみんなにはこの事言わないでね!？」

彼が妹と化した由紀に兄として接し、デレデレしていた事が知られれば、きつと悠里達は彼をゴミを見るような目で見るだろう…

彼はそれを心の底から恐れた。

由紀「ん？ん〜、わかった。私もみんなに知られたら少し恥ずかしいし。…えへへ」

「ふう…」

由紀「えっと…じゃあ帰ろっか？」

やるだけの事を終え、由紀は車に戻ろうとする。

(なんていうか…由紀ちゃんに遊ばれたただけだったな。) スタスタ
彼は死んだ目をしながらゆっくりと歩き出し、由紀はその背中にっ
いていった。

「……」 スタスタ

由紀「……」 スタスタ

由紀「……」 トントン
車まであと5 m程の距離になってから、由紀は彼の肩を叩く。

「なんです？」
彼が振り向いて尋ねると、由紀は照れくさそうに言った。

由紀「あのね…ちよつとだけ目をつむって？」

「…またですか」

由紀「あう……。いいから、はやく!」

「分かりましたよ」

また由紀の悪ふざけだろうと思いつつ、彼は目を閉じる。

由紀はそつと顔を寄せ…

由紀「……………」チュツ…

彼の頬にキスをした。

「っ!?!」

由紀「あ、ごめん!イヤだった!?!」

慌てた様子で由紀は彼と距離を開き、そして謝る。

「いや!全然大丈夫ですけど…ちよいと驚きました。」

由紀「えへへ…変なのに付き合わせたりしちゃったからね。お詫びだよ」

「お詫び…お詫びですか。」

由紀「うん！」

彼に笑顔で答えると、直後に由紀は小さく呟く。

由紀「知らない間にゲームに巻き込んだりして…」ボソツ

「なにか言いました？」

由紀「ううん。さあ戻ろ〜！」

バタン！

由紀「たっだいま〜♪」

元氣よくドアを開き車内へと帰る由紀…

彼はそんな由紀を見ながら、頬に残る唇の感覚の余韻に浸っていた。

(さつきまで妹として見てたのに…ああいう事されると一人の女の人として意識してしまう。)

(…可愛かったな)

彼女の笑顔や頬へのキスに心をときめかせながら…
彼もそっと車内に戻る。

一時は妹萌えの扉すら開きかけた彼だったが、それが由紀の作戦と知り落ち込む。

だが由紀が最後の最後でした頬へのキス…

これは彼女の作戦ではなくただの思いつきだったのだが、その思いつきの行動が彼の心を大きく揺さぶる。

結局のところ、由紀は必死に考えた作戦ではなく…

自然体で彼にとったあの行動が一番評価された。

五十二話 『一日の終わり』

最後の一人、由紀も彼と二人きりの間にゲームを終えた。

こうして彼女達は全員ゲームを終え、それぞれが満足気な気分で夜を迎え：そして夕食を済ます。

物語はその夕食の直後、美紀が着替えのために彼を外に出したところから始まる。

美紀「——さん。着替えの時間です。」

「ああ、はい。了解です。」

バタン

彼が外に出たのを確認して、彼女達は着替えながら会話をした。

胡桃「んで、もう由紀も終わったんだろ？」

由紀「うん！終わったよ。楽しかった〜♪」

美紀「私は疲れましたよ…。もうやりたくありません」

悠里「そうなの？私は楽しかったけど…」

美紀「リーさんまで!?!勘弁して下さい。ねえ、胡桃先輩？」

胡桃「んゝ…そうだなあ。楽しくもあつたけど、まあ疲れるわな」

美紀「楽しいって感覚はあつたんですね…。」

胡桃「少しだけっ！少しだけだぞ!?!」

美紀「…そうですね。少しだけ…ですね。」

由紀「よかつた〜！みんな楽しめたみたいで。」

美紀「着替え終わったら、——さんにネタバラシするんですよ？」

胡桃「そっか、いよいよだな…」

美紀「なんか…一日が長く感じましたよ。」

長かった一日を振り返りながら、美紀はしみじみとした表情で呟く。

だが…直後に由紀が放った一言で、彼女の表情は深く青ざめた。

由紀「あ！あれ、明日もやるよ？」

美紀「……………はい？」

由紀「さつき、リーさんと相談してね。もう一日だけ延長しようって事になったの！」

嬉しそうな笑みを浮かべて由紀はそう告げるが…

今日一日で終わりだと思っていた美紀はたまらず反論した。

美紀「ちよつ、待つてくださいいよ！私は今日一日だけだって言うから我慢してたんですよ!?!それを延長だなんて…」

由紀「ええ〜?……………リーさん、どうしよう?」

困った由紀は慌てて悠里に尋ねる。

悠里「ん〜…どうしようかしらね?」

胡桃「つてか…リーさんは本当にノリノリだな。」

悠里「ふふっ、だって…今日一日、なんかドキドキして楽しくなかった？」

美紀「改めて楽しかったかと聞かれると…はつきり言っただけです！」

にっこりと微笑みながらみんなに尋ねる悠里。

美紀はそれに対し、青い顔をしながらハツキリと答える。

悠里「それは残念…。胡桃は？」

胡桃「んん…：さつきも言っただけど、少しは楽しめたよ。だから…リーさん達がどうしてもってなら、あたしは明日も付き合おう…かな？」

美紀「本気ですか…」

胡桃「本気だけど…美紀、そんな嫌なの？」

美紀「嫌っていうか…恥ずかしいじゃないですか。またあんな事するの…」

顔を赤くしてそう眩き、美紀は俯いてしまう…
その瞬間に一同は美紀が何をしたのか気になり、彼女を囲んで質問責めにした。

悠里「ずっと気になってたんだけど…美紀さん、何したの？」

美紀「いやっ…あの、その…」

由紀「その恥ずかしがりよう…みーくん！もしかして口にちゅーでもしたの!？」

美紀「なっ!？」

悠里「うそ!?!美紀さん、そんなに大胆な事を…」

胡桃「マジかよ…すげえな。その行動力、尊敬するわ…」

美紀「してませんしてません!!そんな事出来る訳ないでしょう!？」

首をブンブンと横に振り、美紀は必死に否定する。

彼女のそんな行動を見て、悠里と胡桃は堪えきれずに笑った。

悠里「ふっ…うふふっ!」

胡桃「っ!…あはははっ!!」

由紀「?」

美紀「なっ！なんで笑うんです!？」

急に笑いだした二人を見て美紀は驚く…
すると、悠里が呼吸を整えてから答えた。

悠里「ふふ…ごめんなさいね？美紀さんたら…冗談でからかっただけなのに必死に否定するから、面白くて…」

胡桃「あたしたちだつてバカじゃないんだから…お前がアイツにキスなんてしてない事くらい分かってるよ。」

美紀「…まったく。冗談でも、ああいう冷やかしはやめてください！本当に怒りますよ？」

胡桃「わるいわるい…つてかもうちよつと怒つてない？」
微妙に不機嫌そうな美紀の顔を見て、恐る恐る胡桃は尋ねた。

美紀「…怒ってる？私が？今ですか？」

胡桃「うん…今。」

美紀「…よく分かりましたね。少し怒ってます。」

そう答えて、美紀は Pruitt とそっぽを向いた。

胡桃「わかるかったって！そんなに怒んなよ」

美紀の機嫌をとろうとする胡桃：

そんな中、突然由紀が美紀の肩をちよんと叩いてから言った。

由紀「でさ…結局ちゅーはしたの？してないの？」

胡桃「由紀！さんざん言ってたろ？美紀はアイツにキスなんてしてない…よな？」

美紀「なんで恐る恐る聞くんですか？」

胡桃「いや…もしかして、本当にしちゃったのかなって思ってた…。モジモジしながらそう呟く胡桃に、美紀は冷たい目をする。

美紀「…殴りますよ？ほんとに…」

胡桃「ごっ、ごめん！謝るよ！してないんだよな？」

美紀「してません！ただ名前を呼び捨てで呼んでもらっただけです！」

胡桃「…ん？」

悠里「…んん？」

由紀「おおく？」

美紀が不意にもらしたその一言を、彼女達は誰一人として聞き逃さない。

彼女達を見て、美紀は自らが口走ってしまった事に気づき…

そつとその場にしゃがみ込んで、両手で真つ赤に染まったその顔を覆った。

美紀「つくく／＼／＼／＼」

悠里「ええつと…それであんなに恥ずかしかつてたのね？」

美紀「……………」コクッ

両手で顔を覆ったまま、美紀は悠里の問いにそつと頷く。

悠里「そ、そう……………呼び捨て…。」

悠里「美紀さん……意外と乙女なのね。」ボソッ

悠里は小さな声で呟いたつもりだったが……

それは美紀の耳に届いていた。

美紀「つくく！／＼／＼／＼」

小さく震えながら、美紀はよく分からない声をあげる。

胡桃「美紀って呼んでもらったの？アイツに？」

美紀「…はい。」

胡桃「そ、それだけ？」

そう言つて少し呆れた顔を見せる胡桃……

それを見た美紀は立ち上がり、半分泣き顔で怒りながら言った。

美紀「それだけつて言うけど……頼むの凄く緊張したんですよ!!バカにするなら、先輩も明日——さんに頼んでみたらどうですか!?!」

胡桃「あ、あたしが？アイツに!?!いやだよ!!」

美紀「なにワガママ言ってるんですか!?! やって下さい! そして、ちやんと——さんに『胡桃』って呼んでもらって下さい!!」

胡桃「くっ、くるみ!?!」

胡桃は一人、脳内でその様子を想像し…顔を真っ赤にする。

美紀「わかりました。私も明日の延長戦に付き合います! 胡桃先輩はちやんと——さんに呼び捨てで呼んでもらって下さいね!」

胡桃「ぐううっ…!…!…! わかった。やってやる…! やってやるよ!」

美紀「絶対ですよ? 明日、終わってから——さんに確認しますからね?」

胡桃「上等だ…! 難なくクリアしてやるよ!」

美紀「どうでしょうね…! あれ、本当に頼むの恥ずかしいんですから…!」

胡桃（そ、そんなに恥ずかしいのか…。なんか…もう緊張してきた…）

胡桃が自らの発言を後悔していると、由紀が胡桃と美紀の間に割り込んで尋ねてきた。

由紀「とりあえず…みんな延長戦には参加してくれるんだよね？」

美紀「はい。」

胡桃「…とりあえずは」

由紀「やったよりーさん！全員参加だよ！」

悠里「ふふ、そうね。」

美紀「…ところで、胡桃先輩は何をしたんですか？」

胡桃「え？」

由紀「あ、そうだね。ついでにみんなの今日の作戦を教え合おうか
！」

由紀がにこにこしながら言った。

胡桃「えっ、ちよっ…！あたしは…」

美紀「私はさっき言ったとおり、呼び捨てで呼んでももらいました。
で…胡桃先輩は？」

胡桃「その…その…」
顔を真っ赤にして、胡桃は美紀から逃げるように少しづつ後ずさる。

由紀「ほら！胡桃ちゃんは何したの？」

胡桃「あ、明日もやるんだろ!?ならまだ作戦を明かし合うのは早いんじゃない…」

悠里「じゃあ明日はそれぞれの作戦がわかってる上でそれを見届けるっていうのはどうかしら？」

由紀「ああ！おもしろそーだね！」

胡桃「で、でもさ…二人きりでしか効果を発揮しない作戦とかもあるだろ？ほら…由紀も美紀も二人きりの時にやったみたいだし…」

悠里「それならそれで…ああ今頃あの作戦を実行中なのねって想像するから、構わないわよね？」

美紀「はい。とりあえずお互いの作戦だけ知つときたいですよね。」

胡桃「……うう……はああ」

作戦を明かさなくてはいけない雰囲気になり…

胡桃は深くため息をつく。

由紀「で、なにをしたの？」

胡桃「……………手」

由紀「手？」

胡桃「うん……………毛布の下で……………ずっと……………手を握ってた。」

顔を赤くして作戦を明かす胡桃：

それを聞いたとたん、由紀達は驚きの声をあげた。

由紀「おおく！それ凄くかわいく!!」

悠里「結構本気の作戦ね……………」

美紀「それは……………確かに凄いです。呼び捨てよりも難易度が高いかも……………握ってって……………——さんに頼んだんですか？」

胡桃「ううん。あたしから急に握って……………それで、そのまま離さなかつた。」

悠里「それ……………想像したらなんか凄くキュンキュンするわ……………」

美紀「先輩…すごいですね」

由紀「——くんどキドキしただろうなあ…」
全員がその光景を想像し、顔を赤くして呟く。

胡桃「つ／＼／あたしのはもういいからっ!!次…りーさん!…:は想像がつかない。目の前で見てたし」

こうして彼女達はお互いの作戦を明かし合った。

胡桃「んで…アイツはお前を妹扱いしてデレデレしてたの?」

由紀「うん!頭たくさん撫でてもらった。」
自らの作戦を明かしながら、由紀が無邪気に笑う。

悠里「由紀ちゃんの作戦…なんか危険な気がするわ」

胡桃「いや、りーさんの作戦もある意味では危ないぜ?」

美紀「今の話が本当なら…:由紀先輩も何気に呼び捨てされてるじゃないですか…」

由紀「私は妹として呼び捨てにされてただけだから、みーくんとは少し違うよ。」

美紀「…ですかね。」

悠里「とりあえず…由紀ちゃんを妹扱いしてデレデレしたのはいいわ。明日、私の作戦を利用してお仕置きね…」

そう呟き、悠里は不敵な笑みを浮かべる。

胡桃「こわっ…」

美紀「…さん。明日は今日以上に疲れるでしょうね…」

由紀「…くんへのネタバラシは明日の夜にして…その後で優勝者に缶詰めをあげよう！」

胡桃「そういや、これ缶詰め賭けての勝負だったな…」

美紀「私も忘れてました…」

悠里「じゃあ、はやく着替えて寝ないとね。」

由紀「そうだった！私、お喋りに夢中で全然着替えてなかったよ！」
未だに着替えを終えてなかった由紀は服を脱いでパジャマを手に取り、そして元気に言った。

由紀「明日が楽しみだなあ♪」

その言葉に、悠里はもちろん…胡桃と美紀もなんだかんだで共感する。

明日は明日で楽しくなる。

彼女達はそう思っていた……

その会話を…彼に聞かれているとは知らずに。

「……なんてことだ」

彼は彼女達の着替えがあまりに長いので、途中から車の窓の真下に張り付き、会話を盗み聞きしていた。

「今日一日、みんななんかおかしいと思ったら……そういう事だったのか。」

「あれだけドキドキした僕の気持ちは……全部ゲームの為だったと……」

彼はゆっくりと歩き出し、車から離れ……そして笑った。

「ふっ……はははっ!!」

「みんな……やってくれたな」

「これはチャンスだ……彼女達はまだ、僕にゲームの事がバレていない

と思っている。」

「僕はそれを逆手にとり……存分に楽しむ。」

夜空の下…拳を握りしめて、彼は微笑む。

バタン！

美紀「すいません！お待たせしました。もう良いですよ！」

彼女達は着替えを終え、そんな彼を…一人の悪魔を車内に招く。

「ふうっ……」

彼は駆け足で車内に戻り、彼女達を見回した。

胡桃「わるいな、長い間待たせて…由紀がタラタラしてたもんで」

由紀「ごめんね！寒かったでしょ!？」

悠里「なんか温かいもの飲む？」

「ああ、お構い無く…」

そう言っただけは話しかける彼女等の横を通りすぎ、自分の寢床の席につく。

「僕はもう寝るので…。 あ！そういうえば…腕相撲は明日に延期できますか？」

彼は気づいていた、腕相撲など…元からやる予定はないのだと。何故なら、あの缶詰めを賭ける本当のゲームは…この自分をときめかせるという謎のゲームだと知っていたからだ

(そういうえば僕が勝つための条件がまだ分かってないけど…まあ今更缶詰めなんて、もうどうでも良いか)

由紀「腕相撲？」

胡桃「バカ！お前が今朝ごまかす為に言ったやつだよ！」ボソツ
胡桃がそつと由紀に耳打ちして伝える。

由紀「あ、ああ！うん！明日にしよう！」

「よかった…明日が楽しみです。」
そう言っただけはニヤリと笑うと、顔を伏せて眠る体制をとった。

胡桃 「んじゃ…あたし達も寝るか。」

美紀 「そうですね。」

彼女達もまた寢床につき、明かりを消した。

悠里 「おやすみなさい」

胡桃 「おやすみ」

美紀 「おやすみなさい」

由紀 「おやすみなさい」

こうして長かった一日が終わり、彼の反撃が始まった。

五十三話『ふくしゅう—その1—』

悠里「ん…んんっ」

車内…窓の隙間から外の朝日が漏れ、悠里は目を覚ます。

胡桃「おっ！りーさん、おはよー。」

彼女よりも先に、既に起きていた胡桃がベッドの上であぐらをかきながら挨拶をした。

悠里「おはよう…今朝は早いのね？」

胡桃「ん…、まあね」

悠里「他のみんなはまだ寝てるわね…。」

胡桃「ああ…今日もここで一日休むんだろ？」

悠里「ええ。物資のたくわえもまだ十分に足りてるし…たまにはまとまって何日か休むのも良いでしょう」

悠里「…延長戦もやらなきやだしね」

胡桃「あのゲーム…疲れんだよなあ……」

そう言ってからため息をつき、胡桃は座席に座って眠る彼を見つめる。

彼女達の仲間になったばかりの時は寝づらそうにしていた彼だが……

今は慣れたもので、毛布をかけながら気持ち良さそうに眠っていた。

同じ広場に滞在して二回目の朝、ゲームの延長戦が……

いや……延長戦という名の復讐劇が始まる。

その後、全員が起床し……

朝食を済ませた後に悠里が告げる。

悠里「ええつと……今日もここで一日休みましょう」

悠里「まだ物資に余裕もあるし……たまには二日間続けて休むのも良いと思わない？」

由紀「うん！いいと思うよ」

美紀「そうですね…また明日からがんばればいいですし、ゆっくりしますか。」

胡桃「あたしもそれが良いと思うよ。」

彼女達は一人残らず悠里の案に賛成する。

何故なら、今日は延長戦があるから…

そしてその事を知っている彼も当然それに賛成した

「僕も良いと思います。たまにはね…」

由紀「また今日ものんびりできる♪」

ご機嫌な表情を浮かべ、由紀は鼻歌を歌う。

胡桃「さてさて…じゃあ、あたしは少し休憩」

悠里「私も」

胡桃・悠里（作戦たてなきやいけないからね！）

二人はお互いアイコンタクトをし、脳内で同じことを考えた。

美紀（…昨日と同じ順番なら、私が一番手か。）

由紀・胡桃・悠里がのんびりし始めたのを見て、美紀は昨日と同様に彼を誘う。

美紀「あの…すみません」

「…なんですか?」

美紀「昨日も頼みましたが…散歩行きませんか?私と…」

(早くも動いたな…思えば昨日の散歩中の言動も、全てはゲームに勝つためだったって事か)

頭ではそんな事を考えつつも、彼は美紀に爽やかな笑顔を見せて答える。

「良いですよ。行きましょう♪」

美紀「良かったです。二日も続けてすみません…習慣付けたくて。」

胡桃「なに?出掛けんの?」

美紀「はい、二人で散歩行つてきます。」

胡桃「おお…気を付けてな〜」

悠里「気を付けて〜」

由紀「ごゆっくり〜」

三人は席に座りながら、パタパタと手を振って美紀と彼を見送った。

(全てを知った上で落ち着いて見ると…みんなの言動が不自然に見える。)

(由紀ちゃんとか普段なら絶対『私もついてく〜!』とかって言うだろうに…)

「じゃ、行きますか。」

美紀「はい!」

ボタン…

ドアを開け、二人は外に出た。

「コースは…昨日と同じでいいですか?」

美紀「はい!大丈夫ですよ。」

美紀はそう答え、彼ににっこりと笑顔を見せる。

(カワイイ笑顔だけど…この裏に隠された真実を知っているせいで素直に喜べない…)

美紀「どうしました？」

「いえ…、行きましょ。」

彼は美紀を連れ、昨日と同じコースをのんびりと歩いていく…

美紀は少しの間無言で歩きながら、昨日以上に彼をときめかせる手段を考えていた。

美紀（何をしたらこの人はドキドキするんだろ…。呼び捨て作戦は昨日使ったし…何よりあれは私も恥ずかしいからな…）

美紀（私が恥ずかしくなくて、——さんがドキドキする行動か…。むずかしいなあ…）

美紀（あ…。私をどう思ってるか聞くのはどうかな？…ダメだ、これも恥ずかしい。）

美紀（じゃあ…ええつと…ええつと…）

「美紀さん…どうしました？」

黙りっぱなしの美紀に彼が声をかける。

美紀は不意に話しかけられて少しだけ驚くが、すぐに笑顔で答えた。

美紀「なんでもありません。少し考え事してただけですから。」

「考え事。…何を考えてたんですか？」

美紀「えっ？いや…大した事じゃないですよ！」

「……そうですか」

美紀「散歩…付き合ってくれて本当にありがとうございます。私人だと危ないですが、あなたが一緒だと安心できますね。」

「遠慮なくお誘い下さいね。僕はいつでも大丈夫ですから」

美紀「ありがとうございます。それと…」

「はい？」

美紀「昨日は…変な事頼んじやいましたね…。すいません…」

「変な事？」

美紀「呼び捨てしてほしい…とか言ってしまった事です。本当に…困らせましたよね？」

道路の真ん中で歩みを止め、美紀は彼に謝る。

「全然困ってませんよ…平気です。」

彼は少しだけ微笑んでから優しい声で答える…

美紀はそんな彼を見て心を痛めた。

美紀（こんなに優しくしてくれるのに…私達はこの人の気持ちをもてあそんでしまってるんだ。）

美紀（本当にすみません…。終わったら謝るので、今は私達のゲーム相手になっていて下さい…。）

心の中で一度彼に謝ると、美紀は彼をときめかせようと照れたような笑みを浮かべて言った。

美紀「懂れてたんです…。男の人に…呼び捨てで呼ばれるの。」

美紀「もちろん、男の人なら誰でもいい訳ではありません。素敵な男性に呼ばれる事が…懂れでした。」

美紀（結局こんな恥ずかしい台詞になってしまった…。）

美紀（言ってしまった以上、恥ずかしがっていても仕方がない…勝ちにいきこう！）

「それ…僕で良かったんですか？」

美紀「確かに、あなたは少し変わってますが…。私は…とても素敵な男性だと思いますよ？」

彼をときめかせる為…

美紀は滅多に見せない満面の笑みを見せる。

だが…以外にも彼はそれに動じなかった。

「そうですか…ありがとうございます。」

美紀（ん？昨日はあれだけおどおどしてたのに…今日はリアクションがイマイチ…。私の台詞、ちよつとわざとらしくかったかな？）

「……………」

笑顔を引っ込め、美紀は少し不満そうな顔をする。

その後、散歩を再開し…

車の近くまできてもう散歩も終わりというところで…彼は再び歩みを止め、立ち止まる。

（そろそろ始めるか…）

美紀「…どうかしましたか？」

「昨日は恥ずかしがってしまいました…今日は言えます。」

美紀「え？…何をですか？」

「僕なんかを、素敵な男性って言ってくれて…」

「本当にありがとう…美紀」

彼は美紀の前に立ち、その顔を見つめて彼女を呼び捨てにした。昨日のように恥じらいながらではなく…ハッキリと…彼女の目を見つめながら。

美紀「ちよ、ちよっと…どうしたんですか!？」
頬を赤く染め、美紀は少しだけ後ずさりする。

「どうしたも何も…憧れなんでしょう?」

美紀「た、確かにさつきはああ言いましたけど…それは…」

「後輩にさん付けするのも、他人行儀で嫌だなあって思っていたところだし…」

静かに呟きながら、彼は後ずさりする美紀の方へと一歩一歩ゆつくりと歩み寄る。

美紀は彼に謎の違和感を抱き、一定の距離を保とうとするが…

ドツ…

美紀「っ!？」

後ずさりし過ぎてコンクリートの塀に背中をぶつけてしまい、彼女は逃げ場をなくした。

美紀「さん付けでも…ぜ、全然他人行儀じゃないですよ?わ、私はさん付けで呼ばれるのも気に入って…」

「美紀がなんて言おうと…僕はもう、さん付けはイヤだ…。」
彼はそう言つて、美紀の顔の真横…彼女の背後の壁に手をつけた。

美紀「ちよっ…!?!」

(これぞ奥義…壁ドン!!かなり恥ずかしい技だけど…ここで照れた様子を見せてはいけない!)

(これは復讐なんだ…僕をときめかせにくる彼女達を…逆にときめかせてやる!!)

彼の復讐…

それは、自分をときめかせに来る彼女達にことごとくカウンターを仕掛けていく事だった。

自分がゲームの真実を知っていると彼女達にバレていない以上…彼はどこまでも攻めに転じる事が出来る。

今の彼は…無敵だった。

美紀「ど、どいて下さい!」

片手で壁ドンする彼に対し…美紀は空いてる方から抜け出そうとする。

だが…

ドッ!

美紀「わっ…！」

逃げようとする彼女を見て彼はもう片方の手も壁ドンに使い…美紀の両サイドを塞いだ。

美紀「ど、どうしたんですか…なんか…おかしいですよ…」

胸の前で自らの両手をギュツと握りしめ、美紀は目の前の彼に尋ねる。

「おかしくない。ただ…美紀を逃がしたくないだけ」

美紀「なっ!?!」

恥ずかしい台詞を呟く彼を見て、美紀は顔を真っ赤にした。

美紀「おかしいですよ！普段の——さんは…そんな事、言ったりしません」

「……嫌?」

美紀「嫌…です。こんなの…冗談なら……は、はやく止めて下さい。」

顔を背けて美紀は呟く。

そんな彼女に顔を近づけ、彼は囁いた。

「冗談なんかじゃない。美紀だから…こうしてるんだよ。」

(本当は冗談なんだけど…あなた達も僕を冗談半分でときめかせているので、おあいこですよね。)

美紀「それって…つまり……」

「うん…そういう事だね。僕は…美紀の事が……」

美紀「そっ、そんなそぶり…今まで見せなかったじゃないですか!?
な、なのに…どうして……」

「美紀が鈍感なんだよ。僕は…ずっと美紀の事を思っていたよ」
(しっかりと人だなあ…ってね!)

美紀「そ、そんな…。どうしよう、私…私……」

彼が心の中で下らない事を言ってる事など知らずに、美紀は顔を赤くして戸惑う。

そして彼は美紀に更なる追い打ちをかけるように、そっと顔を寄せ
る。

「美紀…」

美紀「だっ、ダメですよ!これ以上は…ほんとにつ……!」

「大丈夫だよ。」

美紀「大丈夫じゃないです!私まだ突然の事で…どうすれば良いの
か……」

「見たところ周りに奴らはいないけど…。あまり大きな声出しちゃダメだよ?」

(この発言…かなり危ないな。)

美紀 (声出しちゃダメって…な、何をする気で…)

美紀「ダメです…。本当に恥ずかしいから…やめて下さいっ!怒りますよ!!」

美紀は身の危険を感じ、彼に強く言った。

だが彼は、怯まず美紀に迫ってゆく…

「怒ってもいいけど…静かにね」

美紀「あう…ダメ…ですよ…ダメっ…!」

肩を震わせながら、美紀はギョツと目を閉じる。

すると直後、彼は壁から手を離して美紀から離れた。

(とりあえずは…こんなところかな?もう十分だろう)

美紀「……………」

「今日は…このくらいにしておきます。なんかすいませんでした…。帰りましょう」

そう言って彼は車へと歩いていく、美紀はポカンとしながらも…彼の後を無言で追って、車へと戻った。

…ボタン

悠里「お帰りなさい」

由紀「おかえり〜！」

胡桃「散歩…楽しかったか？」

胡桃はあえて彼に尋ね、その反応で美紀にどの程度ドキドキさせられたのかを探ろうとしたが…

彼は以外にもあっさり笑顔で答えた。

「うん。楽しかったよ。今度は胡桃ちゃんも一緒にくる？」

胡桃「ん？…あ、ああ。そうしよう…かな。」

胡桃（あれ…なんか余裕のある反応だな。美紀…失敗したのか？なんか暗い顔してるし…）

美紀「……………」

俯いたまま、無言で隣に座る美紀に胡桃は小声で尋ねる。

胡桃「どうした？なんか元気ないじゃん。」

美紀「いつ、いえ！大丈夫です！」

胡桃「そっか…。ならいいけど…」
慌てたように答える美紀に違和感を抱きつつ、胡桃は顔をそむけた。

美紀（告白まがいな事された…なんて言えない。どうしよ…どうしよ…!!）

美紀（同じ車内にいるのも気まずい…。私はあの人の事をそんな風に見たことなかったのに…。）

胡桃（やっぱ、少し様子がおかしいよな…）

テーブルに顔を伏せたままで、ピクリとも動かない美紀…
そんな彼女を見て、胡桃は不思議そうな顔をした。

（昨日と同じ順番で攻めてくるなら…次はリーさんだよな。）

彼は昨日の出来事を順を追って思い返し、次のターゲットは悠里だと確信する。

そして彼が確信したまさにその瞬間…彼は悠里に声をかけられた。

悠里「――君。ちよつといいかしら？」

（リーさん…はやくも攻めてきたか）

「はい。なんででしょうか？」

悠里「散歩から帰ってきてばかりで悪いけど…洗濯手伝ってくれる？」

「洗濯？いいですけど…」

悠里「よかった！じゃあ先に外で待ってて。私は後から洗濯物持っていくから」

「先にですか？待ってますから一緒に…」

悠里「『先に』…外で待っててくれる？」

「わ、わかりましたあ…」

悠里の笑顔の奥に恐怖を感じ…
彼は大人しく従って一人先に外へ出た。

バタン

悠里「さて…じゃあ洗濯の準備をしないとね。」

由紀「私も手伝おうか？」

由紀は洗濯かごを取り出す悠里に歩み寄ってから言う
悠里はそれに対して笑顔を返し、由紀の頭を撫でながら答えた。

悠里「ありがとう由紀ちゃん。けど大丈夫よ。これも作戦の内だから…」

由紀「お！そうなの？…じゃあ邪魔しちゃ悪いね。」

胡桃「リーさんもう動くのかよ…じゃあ次はあたしか。」

由紀「順番変わってあげようか？」

胡桃「いいよべつに…最後は最後で緊張するし」

由紀「ええ？そんな事ないよ？」

胡桃「お前はいいよな、気楽に楽しめて…」

由紀「胡桃ちゃんも気楽に楽しめばいいんだよ！」

胡桃「気楽にたつて…難しいよ…。あいつ相手にこういう事するなんて…恥ずかしいわ、意識しちゃうわ…大変な事ばかりだ」

由紀はため息をつく胡桃の向かいに座り、ぐつと顔を寄せて微笑んだ。

由紀「胡桃ちゃん…意識しちゃうんだね。かわいく♪」

胡桃「しっ、しょうがないだろ!?男相手にとぎめくような事しなきゃいけないんだから、意識せずにやるのがまず無理なんだよ！」

胡桃「由紀だって昨日、多少は意識しただろ？」

由紀「ん〜？いつもどおりだったよ？」

胡桃「いつもどおり…？お前…昨日あいつに頭撫でてもらったり、妹扱いされたりしたんだよな？」

由紀「うん。」

胡桃「…なんとも思わなかった？」

由紀「やっぱ——くんで面白い人だなあ…って思った！」
無邪気な笑顔で答える由紀を見て、胡桃は頭を抱えて俯く。

胡桃「あ〜。そうか…まあお前はそういうやつだもんな。」

由紀「…どゆこと？」

胡桃「気にすんな。ただお前が誰かを好きになつたりする事は、しばらくなさそうだなって思っただけだ…」

由紀「てへへ…ちよつと出会いがなくて…」

胡桃「その発言はあいつがかわいそうだろ…」

悠里（由紀ちゃんにとって、——君は全く恋愛対象じゃないのかしら？）

悠里（いや、由紀ちゃんの場合は…まだ恋愛自体がよくわかっていないだけかしらね）

悠里（ま…、私もそこまで人の事いえないんだけど…）
洗濯物をまとめ、悠里はドアの前に立つ。

悠里「じゃ、行ってくるわね。すぐ戻るから」

由紀「がんばってね〜！」

悠里「えええ！がんばってくるわ〜♪」

バタン…

胡桃（リーさん、相変わらずノリノリだな…）

明るい笑顔で楽しそうに悠里は外へと出る。
彼女を見送った後、由紀は胡桃に話しかけた。

由紀「さっきの続きだけどさ…」

胡桃「ん？なに？」

由紀「ほら、相手が男の子だと意識しちゃうって話！」

胡桃「…ああ、それか」

由紀「みーくんも——くん相手だと意識しちゃうの？」

由紀は尋ねる。

散歩から戻ってからずっと黙ったまま、死体のようにピクリとも動かない美紀に…

美紀「なつ、なんで私が——さんを意識しなきゃいけないんですか！？」

胡桃「うおっ！ビックリしたあ〜!!」

バツ！と勢いよく顔を上げ、美紀は大声で言う

彼女のあまりの声の大きさに、隣の席に座る胡桃は驚いた。

由紀「あ、ごめんごめん。——くん相手っていうより…男の子相手っていった方が良くないかな？」

美紀「わ、私はあの人を意識なんてしたことありません！なのに…なのにつ!!」

由紀「あれ…みーくん？…みーくん？」

美紀「どうしてあの人は…私を…私をつ…」

由紀の声を無視して美紀は一人でブツブツと呟いていた。

由紀「みくくくん？聞こえてますか？」

胡桃（やっぱり…どうみても様子がおかしいよな）

胡桃「美紀、あいつと…なんかあった？」

どうしても気になってしまい、胡桃は美紀に尋ねる。

すると彼女は顔を真っ赤にして、大慌てで答えた。

美紀「な、なにも！なにもないです！」

胡桃「え？だ、だってなんか様子が…」

由紀「みくくん、顔真っ赤!!」

美紀「あつ！そうです！私ちよつと熱っばいので…少しだけ寝ます!!」

そう言つて美紀は立ち上がり…ベッドまで行くと、掛け布団を顔までかけて横になってしまった。

由紀「熱っばいなら薬とか飲んだ方が…」

胡桃「本当は熱っばいんじゃないやなくて、なんか聞かれない事情で

もあるんだろ：ほつといてやれ」
そう言つて胡桃は薬を取り出そうとする由紀を手で止めた。

美紀の不自然な態度を見て疑問を深める胡桃だったが：
悠里の次は自分の番なので作戦を練らなくてはと思い、美紀の事はあまり気にしないようにした。

この時、胡桃が美紀に何があつたのかをしつこく問い詰めていれば
：
いち早く彼の作戦に気づけたかも知れない。

だがもう手遅れ：

誰も：彼を止められない。

五十四話 『ふくしゅう—その2—』

「ん〜……」

（次はりーさんか…あの人は手強そうだからなあ。美紀さんのように簡単にはいかないだろうな…）

彼は一人車の外で待ちながら計画を練り、悠里を待つ。

5分ほど待つと車のドアが開き、中から洗濯かごを抱えた悠里が降りてきて彼の元に駆け寄る。

悠里「お待ちせ。」

「大丈夫ですよ、じゃあ…行きますか。」

車を停めている広場から出て、悠里と共に彼はのんびりと歩く。自分の前を歩く彼の後ろ姿を見て、悠里は突然くすくすと笑い出した。

悠里「うふっ…ふふっ…」

「ん？…どうかしましたか？」

悠里「あの、——君。先導してくれるのはいいけど…そっちじゃないわよ？」

そう言っただけで笑いながら、悠里は彼の進む道とは真逆の方向を指さ

す。

「そ、そうでしたか…。そういえば、どこに向かうんですか？」

悠里「あっちの方に少し進むと川があるの。そこで洗濯物を洗うわ」

「川ですか…分かりました。」

彼はくるつと振り返り、悠里の指さした方へと歩き出す…

今度は先程よりもゆつくり歩き、悠里に前を進んでもらった。

悠里「ふふっ。どこに行くのか分からないのに先導してたなんて…おかしな人」

「考え事しながら歩いてたんで…ほとんど無意識でした。」

悠里「あら、珍しいわね…何を考えてたの？」

「あ…別に大したことじゃありませんよ。」

悠里「そう？…ならいいけど…」

(どうやればあなたをドキドキさせられるか考えてました。…なんて言えないからね)

(そういえば…りーさんって僕の事をどう思ってたんだろう。)

(もし、ただの問題人物程度にしか思っていないなら…何をしても怒られて終わりそうなんだよな)

(それに加えて昨日のヤンデレモード…見事な演技力だった。中途半端な演技じゃ通用しないかも…)

(これは中々…厳しそうだな)

悠里を逆にときめかせる為の手段をじっくりと考えながら彼は歩く

道中、悠里に何度か話しかけられたが、考え事をしている彼はそれに適当な返事しか返さなかった。

しかし、考え事をしているのは彼だけではなく…

悠里(さて…二人で洗濯しに行つて。それからどうしようかしら?)

悠里もまた、彼をときめかせる為の作戦を考えていた。

考え事をしつつもしっかりと会話を振る…この時点では彼よりも彼女の方が上手^{うわて}だった。

二人が互いに作戦を考えながら歩いていると小さな川原にたどり着き、悠里は川のそばに洗濯かごを置く。

悠里「さて…今日の洗濯物は何かしら〜?」

「何かしら〜?って…それに洗濯物つめたのはリーさんでしよう?」

楽しそうに洗濯かごを漁る悠里を見て、彼は冷静にツッコむ。

悠里「ええ、実はそうなの…」

「実はも何も、普通に知ってますって…」

悠里「じゃあ問題！私がこれから取り出す洗濯物は…誰の何でしょうか？」

かごの中に手を入れて何かを掴むと、悠里は彼を見てニコニコしながら尋ねた。

「誰の…何かだって!？」

その彼女の問いに対し、彼は一つの結論を出す

現時点では誰のかまでは分からないが

彼女が今、掴んでいるのは…

(もしかして…いや、まさか…)

悠里「ヒントをあげるわね。色は…白よ」

「白…ですか」

(やっぱり…これ下着じゃない?)

普段彼女達の下着などを洗濯をしている時、彼はその洗濯が完全に終わるまで車内に監禁されている…

そんな彼の脳内に、もしかして今回からは自分も堂々と洗濯を手

伝っても良いと言われるのでは？

それを任せられる程までに信頼されるようになったのでは？

…というような考えが巡る。

「……………」

だが、彼は思考を研ぎ澄まし…

世の中そんなに甘いハズはないと悟った。

(これは…僕を試している？いや、違うな…。これはリーさんが練ったゲームの作戦…)

(忘れてた…僕は今、あのゲームのターゲットになっているんだっとな。)

(二人きりで洗濯に出かけ、更にその洗濯物の中身が何かのクイズを出す。それも…僕が下着だと答えるようなヒントを出して誘導をしてきている。)

(危なかった…。ゲームの真実を知っていなかったら、まんまと『下着ですか!』とか言うところだった…)

(ここは…適当に答えておくか。)

「ん…何でしょう？靴下とかですかね？」

彼はニコニコしながらとぼけて答える。

悠里は少しつまらなそうな顔をしてから、それを引っ張り出して答えた。

悠里 「正解は…みんなで使ってるタオルでした。」

「…そうですか。」

悠里 『誰の』…って聞いておいて答えが『みんなの』っていうのは少しイジワルだったわね…ごめんなさい。」

「いいですよ、別に…」

悠里 (ああいう言い方をすれば…——君なら、もしかして下着かな？とか言うと思ったけど…思っていたよりも真面目ね。よしよし！) 彼は思っていた程不純な思想の持ち主ではなかったのだと思い、悠里はこっそりと嬉しそうに笑う。

悠里 (でも、それだとこの作戦は失敗ね…。彼に中身は下着だと思わせてドキドキさせる作戦だったのに…どうしましょ。)

「で…、これを洗濯すれば良いんですか？」

彼が悠里の横に歩み寄り、かごを覗きながら尋ねる。

悠里 「え？あ、ああ…うん！頼める？」

「じゃ、はやく終らせちゃいますか！」

悠里 「ええ。でも手抜きはダメよ？しつかり丁寧ね」

「はい。もちろんです！」

悠里は彼に笑顔で答えると、川際に並んで二人でその洗濯物を洗い始めた。

悠里「そういえば…私が――君と二人きりになるのは久しぶりね」

「あゝ…そうですね。」

そんな会話を交わした直後、少しの間二人は無言で洗濯物を洗う。

悠里「……………」

「……………」

(さて…どう攻めたもんかな。りーさんも作戦を考え直しているのか…動きを見せない)

悠里「……………」

洗濯をする悠里を横目で見つめ、彼は作戦を練る…
そんな彼に突然、悠里は洗濯しながら話しかけてきた。

悠里「ねえ、――君…」

「は、はい！なんですか？」

悠里「えっと…そのね…」

(動き始めたな。さて…どうくる?)

彼は心の中で覚悟を決め、悠里の言葉を待つ。

悠里「私の事…どう思ってる?」

洗濯する手を止め、彼を見つめて悠里は尋ねた。

彼はこの発言に対しての正しい返答を脳内で必死に考える…

彼女を照れさせる返答を…

(どう思ってる…ときたか。これは難しいな…どう返すか…)

(ストレートに『愛してます』とか言ってみるか?)

(いや、ダメだ。相手はあのリーさんだ…こんな安易な作戦は効かないだろう)

(ここは…とりあえず普通に答えておくか)

返答を待つ悠里を笑顔で見つめ、彼は答えた。

「凄い人だなんて…そう思っています。」

悠里「凄い人?」

「ええ。僕と同じ年なのに信じられないくらいしっかりしていますし、頼りになる。こんな世界でもみんなをちゃんと守ってくれる…お姉

さんって感じですね！」

悠里「お姉さんか…。でも、私よりもあなたや胡桃の方がみんなを守っていると思うけど？」

「そういう意味の守るじゃなくてですね…。…そうだ」

「みんなが学校で暮らしていた時、物資等の管理はリーさんがしていたと聞きました。」

悠里「まあ…管理って言っても、簡単にだけどね。」

「いえ、誰かがそういうのをしつかりやつてくれていると…かなり助かりますよ。」

悠里「そう…かしらね…」

「それと…リーさんには言葉には出来ない、頼れるオーラが出てるんです！」

悠里「た、頼れるオーラ？」

彼の発言に、悠里は少し困惑したような笑みを浮かべる。

「そうです！なんていうか、悩みや相談があれば頼りたくなるような…そんなオーラです。」

「僕も相談事があれば、真っ先にリーさんを頼りますし…他のみんなも同じハズです。」

悠里「ふふっ！なにそれ？変なの〜」

自身をよく分からない方法で褒められ、悠里は思わず吹き出す。
彼は無邪気に笑う彼女を…ただじっと見つめていた。

(リーさんっていつもは大人っぽいのに、こうやって無邪気に笑っている…雰囲気はまだ違って見える。)

「ほんと…素敵な人です」

悠里「えっ？」

「あっ…」

目を大きく開き、彼を見つめる悠里…

彼はたった今放った自らの発言を恥じた。

その発言は悠里を照れさせようとして言った訳ではなく、無邪気に笑う彼女を見て…自然と出てしまった言葉だったからだ。

「えっ…と…」

悠里「……………」

「今のは…その…」

(ダメだ！変に恥じらうな!!平静を装えっ！)

彼は心の中で自らにそう言い聞かせ、照れてしまいそうになる表情をどうにか隠そうとした。

悠里「顔…赤いわよ。大丈夫？」

「えっ!？」

(しまった! 堪えようとしてたのに…顔に出てしまったのか!?)

焦った彼は悠里から顔を逸らす…

悠里は彼のそんな行動を見ると、再び笑い出した。

悠里「冗談よ、赤くなんかなってないわ。…ふふっ、おもしろい人」

「っ!？」

(やられた! なんてザマだ…これじゃあ完全にリーさんのペースじゃないか!!)

悠里「ごめんね、イジワルしちゃった。」

「だ、大丈夫です…このくらい。」

彼は全く動じてないかの様に悠里を見つめ平静を装う。

悠里はそんな彼をしばらくの間見つめ返すと、ニヤニヤしながら言った。

悠里「それで…さつきは私になんて言ったの？」

「…え？」

悠里「さっき私を見てなんか言ってたでしょ？なんて言ったの？」

「き、聞こえてたでしょ？」

悠里「ううん。ハッキリとは聞こえなかったの…」

悠里「だから、もう一度言ってくれると嬉しいんだけど」

そう言つて悠里はじつと彼を見つめ、彼が口を開くのを待つ。

一方彼は、緊張のあまり少し顔を青くしていた。

「え、えつと…大した事言つてないですよ？りーさんには関係の無い、ただの一人言なんで…」

悠里「私の方を見て言つてたのに？」

「ええ…ほんと、ただの一人言です。」

悠里「ふうくん…」

「……………」

悠里は彼をじろじろと見つめるが…

彼がこれ以上見つめていても何も言わないと思ったのか、悠里は視線をそばの川に移した。

悠里「本当はね……」
川を見つめながら、悠里がそつと呟く。

「……はっ」

悠里「あなたの言葉……ちゃんと聞こえてたの」

「えっ!？」

悠里「ちゃんと聞いていたけど……もう一度あなたの口から聞きたくて、それでとぼけちゃった……」

照れたような笑みを浮かべ、悠里はそつと彼を見る。

悠里「とぼけてダメなら……ストレートに言うわね？」

そうやって悠里は体を彼の方に向け、彼を正面から見つめると……ほんの少しだけ頬を染め、優しい口調で言った。

悠里「もう一度……さっきの言葉を、私に聞かせてくれますか？」

「……」

彼は激しく動揺する。

悠里は恐らく、彼をときめかせる為にわざとこんな台詞を言ってい

るのだろう

それは彼も分かっている。

分かっているのに…

目の前にいる悠里を見て、ときめかずにはいられなかった。

目の前の彼女は自分と同じ年と思えない程に大人びていて、微かに頬を染めたその表情が…とても美しかったからだ。

悠里「……ダメ？」

黙っている彼へ悠里は残念そうに声をかける。

彼が黙っていたのは何かを考えていたからではなく、ただ悠里の表情に見とれていたからだだった。

「えっ？あ…その」

悠里「もう一度…聞かせてくれる？」

(照れるな…照れなければいいんだ。照れずに正面から言って…逆にリーさんを照れさせてやろう。)

彼は覚悟を決め、口を開いた。

「リーさんは…とても素敵な人です。」

悠里「……………」

照れる事なく、彼は言い切る。

しかし悠里の表情を見てまだ攻めれると思った彼は、調子に乗って次から次へと言葉を付け足していった。

「さっきの無邪気な笑顔…凄く可愛かったです。」

悠里「かつ…かわいい？私が？」

「はい！とても可愛かったですよ？もちろん…普段の大人びた表情も綺麗で、とても素敵だと思いますが」

悠里「そ、そう…」

彼の言葉に悠里は照れて俯く。

それをチャンスと思い、彼は更に攻めた。

「それに同じ年なのに、僕なんかとは比べられない程にしっかりしていますし…優しいです。」

「たまに怖いなあと思う時もありますが、そんな一面も僕は好きです」

悠里「たまにでも、怖いなあとは思われてるのね…。まあ自覚はあつたけど…」

「それに…強い人だなあとも思います。」

悠里「……」

「こんな世界でみんなを支えて…凄く大変なハズなのに、それを表情に出さない…」

「思えば僕は…リーさんの弱気な面を見たことはありません」

「いや…それはリーさんだけじゃないですね。由紀ちゃんも美紀さんも…胡桃ちゃんもです…」

「でもみんながあそこまで強くいられるのは…リーさんの存在があったからこそではないでしょうか？」

悠里「私…？」

「はい。リーさんがいたから、みんなは今日も元気で過ごしていられるんだと…僕はそう思っています。」

「リーさんに会えて…本当によかったです。」

そう言つて満足そうな顔を見ると彼は口を閉じ、悠里の反応を見る。

悠里「…ありがとね。そう言ってもらえると…凄く嬉しいわ」

彼の台詞に恥じらう事なく…

本当にただ嬉しそうに悠里はにっこりと笑った。

全く照れない悠里を見て少しだけ彼は残念がったが…彼女が嬉しそうに笑うのを見ていたらどうでもよくなった。

悠里「私なんかにもそう言ってくれる——君に…1つお願いがあるの。」

「なんででしょう?」

彼が尋ねると、悠里は恥じらう演技をしながら答えた。

悠里「私の事…抱きしめてくれる?」

「んなっ!」

彼はそれが演技であると気づけず、本気にする。

顔を真っ赤にし、照れながら言う彼女のその表情がとても演技には見えなかったから…

悠里の演技力はずっと警戒していた彼を騙せる程に凄まじく、完成された物だった。

悠里「で、でも…軽く、かるくくよ?強く抱きしめたら怒るからね?」

さすがの悠里も本気で動揺する彼を見てやり過ぎたと思い、本気で抱きしめられない様に保険の言葉をかけておく。

「わ、わかりました…」

彼は悠里に近寄ると彼女の肩にそつと手を伸ばして自分の方へと引き寄せ、ほとんど力を入れず…本当に軽く抱きしめる。

悠里は彼の胸にそつと顔をうずめると、しばらくは無言でそうしていた。

悠里「……………」

「……………」

悠里(な、なんかこれ…——君をときめかせようとして頼んだのに、逆に私がドキドキしちゃってる気が…………)

「……………」

悠里(…でも、——君凄く顔が赤くなってる。よかった…ちゃんとドキドキしてくれているみたい…)

悠里はそつと彼の顔を覗き見て、その顔が赤く染まっているのを確認する。

それを見て悠里はとりあえず一安心し、再び顔を彼の胸にうずめた。

悠里(恥ずかしい気持ちもある、あるんだけど…………でも落ち着く。)

悠里(そういえば、こうして誰かに甘えた事とか…あまりなかった

なあ…)

悠里(もう十分彼をドキドキさせたと思うけど、もう少しだけ…もう少しだけこうしていても…いいよね。)

心地良くなってしまった悠里は彼に体を預けると、そつと目を閉じる。

一方彼は…目の前の彼女にドキドキし過ぎて、静かにパニックを起こしていた。

(まだなの!?!まだなの!?!いつまで僕はこうしていればいいのか!?!)

(もう5分くらいこうしてるよね!?!これ以上は…ヤバいんですが!)

そんな事を考える彼だったが、実際は悠里を抱きしめてから2分もたっていない…

混乱しているからか…彼の中で時間の感覚が狂い始めていた。

そして、これ以上は危険だと彼自信も自覚し始めたその時…

ちょうど良いタイミングで悠里は彼から離れた。

悠里「ふう…もう良いわ。…ありがとう」

「あ、…は、はい。」

悠里「無茶なお願いだったのに…嫌な顔一つしないでくれてありがとう。なんか…ドキドキしちゃった」

「そ、そうですか…」

悠里がわざと彼をドキドキさせる発言をする

彼は未だにその演技に騙され、その発言に素直にときめいた。

(ドキドキした…うーりーさんが…僕相手に?)

悠里(顔…ほんとに真っ赤ね。…もう一押しかしら?)

彼の表情を見た悠里はここがチャンスだと思い、一気にたたみかけ
る。

悠里「男の子に抱きしめてもらったの初めてだから…私…その
……」

「は、はい……」

悠里「やっぱり……私……」

直後、悠里は顔を真っ赤にして…彼にとどめの一言を放った。

悠里「君の事…好きみたい…」

「……………」

(なんて…言った?)

悠里「前からそんな気はしていたの…でも、今確信できた。」

「マジ…ですか？」

悠里「うん、あなたの事…大好きよ」

「えっと…ええっと…／＼」

悠里のこの発言に…

不覚にもゲームの存在を忘れていた彼は本気で照れる。

ゲームの事を知ってから彼女達を警戒し、その上でカウンターをくらわそうとしていた彼はどこに行ったのか……

悠里「返事は…また夜に聞くから…今はとりあえず、洗濯を終わらせましょ？」

本気で照れて顔を真っ赤にする彼をよそに、悠里は手際よく残りの洗濯物を洗っていく。

そして、10分程たった頃…

「……………」ジャバジャバジャバ…

悠里（「君…あれ以来ずっと同じタオルを洗い続けているわ……………」）

彼は悠里に告白されてからずっと、真顔で狂ったように同じタオルを洗い続けていた。

もちろんタオルの汚れはとっくに落ちている。

悠里（告白するのは…やり過ぎたかしら？）

「……………」ジャバジャバ…ジャバジャバ…

悠里（な、なんか……悪いことしちゃったわね…）

ひたすらタオルを洗い続ける彼を見て、悠里は先程の自分の言動を後悔した。

悠里「あの…——君？」

その肩をトントンツツと叩き、悠里は彼を呼び掛ける。

「あっ！な、なんでしょ!？」

悠里「それ…もう十分キレイになってるわ。貸して?」

「あ、ああ…はい。」

彼からタオルを受け取ると悠里はそれを軽く絞り、かごの中に入れる。

悠里はそこをかごを持って立ち上がると彼の方へ振り向き、にっこりと笑った。

悠里「とりあえずは終わり! さあ…後はこれを車のそばで干して、乾かすだけよ」

そう言っただけでゆっくりと歩き出す悠里を見て、彼は立ち上がると彼女の持つそのかごへ手を伸ばし、それを取り上げて彼女の前を歩いた。

「重いでしょう…僕が持ちます。」

悠里「それはありがたいけど、でもそれだと帰り道で”あれ”と遭遇した時に…」

「広い道路の真ん中を歩くようにしていれば、急に襲われる事は無いので大丈夫です。遭遇しても…このかごを置いて、ナイフを抜く時間くらいは十分にあります。」

悠里「そう…。じゃあ…お願いするわね」

彼にそう告げ、悠里は笑顔を見せる。

だがその笑顔を見た彼は照れたような表情をして、そつと目を逸らした。

共に車へと戻る道中、彼の頭の中にあるのは…そばにいる悠里の事ばかりだった。

(どうしよう……りーさんに告白されてしまった……)

(返事は夜で良いって言ってたけど……どうするべきか……)
そつと彼女の方を見て、深く考える……

悠里「……なあに？」

「い、いえ……なんでも……」

(ほんとに綺麗な人だな……)

(性格も良いし……スタイルも良い……)

悠里の事を改めて見て、彼はますます頭を悩ませる。

(返事……どうしよう)

(受ける理由は数あれど……)

(断る理由は……一つも無いんじゃないかな……)

(相手は…あのリーさんだし…)

少しの間考えを巡らせ、彼は結論を出す。

悠里のような女性に告白され、断る理由など自分には無いと…

(返事…オーケーにしようかな…)

(わざわざ断る事は無いし…こんなチャンス、もう無いだろう…)

(リーさんのような素敵な女の子が…僕なんかを好きなんて言ってくれたんだ。)

(こんな夢のような展開…見逃す訳が…)

ここで、彼は自分が心の中で放ったワードに何か違和感を感じる。

(こんな夢のような…)

(夢のような…)

(……………夢?)

(そうだ…忘れていた…！)

(こんな展開…昨日何度も味わっただろう！)

(美紀さんは僕に呼び捨てしてほしいと言い…。リーさんは耳掃除をしてくれ…。胡桃ちゃんは手を握ってきた…)

(そして由紀ちゃんは僕に妹の素晴らしさを教え、別れ際にキスをしてくれた…)

(そうだ…これは夢なんだよ！彼女達が僕をドキドキさせようと意図的に生み出した夢の空間なんだ!!)

ようやく…彼は本来の目的を思い出す。

自分の使命は彼女達の裏をかき、復讐する事だと…

「リーさん!!」

彼はかごを地面に置き、悠里の方へ振り返る。

思い出して早々…復讐を実行する為に。

悠里「ん?…どうしたの?」

「夜まで待つ必要はありません…今、返事を返します。」

悠里「えっ…?」

「僕も…りーさんの事が好きです。」

悠里「えっ！き、急にどうしたの？」

「りーさんの告白…受けます。僕たち…付き合いましょう。」

悠里「い、いや…その…あれは…」

彼の告白に顔を真っ赤に染め、悠里は戸惑う。

しかし、悠里は彼のその行動に違和感を覚えていた…

悠里(さつきまであんなだったのに…どうして急にこんな積極的に…)

悠里(そういえば…美紀さんも——君と帰ってきてから様子がおかしかった…)

悠里「——君、あなた…もしかして…」

「な、なんですか？」

彼は焦る…

悠里の目が突如、先ほどまでの照れたものではなく…鋭くこちらを睨む目に変わったからだ。

悠里「……………」

「……………」

(もしかして…この人!?)

悠里「ま、…別にいいわ。」

彼から目を離し、ニヤニヤしながら悠里は呟いた。

「……………」

悠里「ごめんなさい。自分から告白しておいて悪いけど…あなたとは付き合えない…」

「は、はあ…」

悠里「私がなんで急にあなたに告白したのか…理由を知っているんでしょう?」

「……………」

悠里「残るのは後、胡桃と由紀ちゃんね?ふふっ…私達は人の事言えないけど、あまりイジメないであげてね?」

そう言っつて悠里はにっこりと笑い、車へと戻る為に歩き始めた。

そんな彼女の後ろ姿を見て、彼は思う。

『この人には…敵わないな』と…

結局…彼は全てを知った上でも悠里には敵わなかった。

それどころか…彼の中の僅かな違和感を感じ取られ、もうゲームの事を知っているという事にすら気付かれたのだった。

少しして、二人は車のそばにたどり着き…持っていた洗濯物を干す。

全てを干し終わると、悠里は車のドアに手をかけ…それを開ける前に彼を見つめると、とても綺麗な笑顔で言った…

悠里「もう少し仲良くなったら…本当に付き合っても良いと思えるかも。…だからずっと、私達のそばにいてね？」

「…!?!」

彼の返事を待たず、悠里はドアを開けて中に入る。

今の台詞はゲームに勝つ為に言ったのか…

それとも本音なのか…彼には全く分からない。

だがそれでも…その言葉が今日一番、彼を心からドキドキさせた…

五十五話 『ふくしゅう—その3—』

ボタン…

彼は車内に戻り、ドアを閉めてから席に座ると、頭を抱えてうなだれた。

(完全にやられたなあ…りーさんはやっぱ手強かった…)

(全てを知ってる上でも、僕じゃあどうにも出来なかったか…。しかもあげくの果てに、こっちの復讐計画も見透かされたしなあ…)

(ほんと…完敗ですわ)

由紀「ねえねえ——君！」

彼が頭を抱えながら悠里との出来事を振り返っていると、突如由紀が彼の肩を叩いて声をかけてきた。

そんな由紀に対し、悠里にしてやられた事にショックを受けていた彼は少しだけ気だるそうに声を出す。

「…なんです？」

由紀「あのね、みーくんが調子悪いんだって…ちよつと見てきてあげて？」

「……………」 チラッ

由紀に言われ、彼は座ったまま体をひねり、ベッドに横たわる美紀の方を向く。

彼が視線を向けると、こつそりとこちらを見ていた美紀と目が合ったが…その直後に美紀は恥ずかしそうにして掛け布団でその顔を隠

した。

(あれは…たぶん調子が悪いんじゃないやなくて、僕にあんな事をされた事による後遺症みたいなもんだな。)

(ほつといても大丈夫だけど…こつちはりーさんにやられてショックを受けた直後だし、少し美紀さんをからかって憂さ晴らしするか…)

彼はそつと立ち上がり、美紀の方へと歩み寄る…

するとそんな彼の手を…いままで無言で車内に立ちつくしていた胡桃が掴んで止めた。

胡桃「あのさ、美紀のやつ…どうしたのか分かる？お前と散歩から帰ってきてから、ずっとこうなんだよ…」

「あ〜…ごめん、分かんないや。…ちよつと聞いてみるよ」

胡桃「…うん。…頼むわ」

彼の手を離し、胡桃は少し離れたところから見守る

由紀はそんな胡桃の隣に立ち、何故か少しだけニヤニヤしていた…

「美紀さん…大丈夫ですか？」

彼は美紀のベッドの横で膝をつき、小声で尋ねる

直後に美紀は掛け布団を少しだけ上げてその隙間から目だけを出し、彼と同じように小声で答えた

美紀「…大丈夫です。だから…ほつといして下さい…」

「大丈夫なら…なんでそんな風に布団にくるまってるんです？」

美紀「こ、これは…」

美紀は隙間から覗かせていた目をも掛け布団で隠し、震えた声で言

う。

美紀「は、はず…かしい…からです。」

彼はそんな彼女の頭に布団越しに顔を寄せると、胡桃達には聞こえないよう…そつと美紀に囁いた。

「美紀…そんな風に露骨な態度してちやダメ。…胡桃ちゃん達、怪しんでるよ？」

美紀「うぐっ…!？」

「美紀がそんな態度でいると、僕と君の事…みんなにバレちゃうよ？」

美紀「ば、バレるも何も…私達、まだ何もしてないじゃないですかあ…」

「うん。『まだ』…ね？」

美紀「い、いえ！間違えました…『これからも』です！」

「そっか……残念だな。美紀は僕の事…嫌いだったか…」

落ち込むような彼の声を聞き、美紀は慌てて言葉を足す。

美紀「あつ…そ、その…待って下さい…。私…まだよく分からなくて……だから…」

美紀「今週中には…あなたに返事をしますから…。だから今は…そつとしておいて下さい。」

「うん…分かった。」

そう告げると彼は立ち上がり、元いた席に戻る。

(美紀さんは良い反応してくれるから楽しい。やっぱり、リーさんは鋭すぎだよな…)

そんな事を思いながら席に座った直後、胡桃と由紀が彼の正面の席に座って尋ねてきた。

由紀「どうだった?」

胡桃「なんか分かったか?」

「いや…調子悪いとしか言いませんでした。」

胡桃「やっぱりそうか…」

「少し寝れば良くなると言ってたので、静かにしてあげましょう。」

由紀「うん、わかった」

胡桃「本当にわかってんのか?お前が一番やかましくしそうだけだな…」

由紀「大丈夫!私はちよつとの間、外にいるから!」

胡桃「外?一人でか?」

由紀「ううん。…ねえ、リーさん。一緒に外でお喋りしない?」

そばで大人しく地図を眺めていた悠里に由紀が言う

悠里はその言葉を聞いた後、不思議そうな顔をした。

悠里「外で？ここじゃダメなの？」

由紀「うん。外で！」

悠里「えつと…どうして？」

由紀は悠里に顔を寄せ、彼に聞こえぬよう小さな声でそつと耳うちする

由紀「胡桃ちゃんと——君の邪魔になつちやうから…私達は外にいよ〜」

悠里（ああ、なるほど…）

悠里「うん、わかったわ。」

悠里は地図をしまい、外へ向かう由紀の後に続いた。

胡桃「気をつけてな。まありーさんが一緒なら大丈夫だとは思うけど」

由紀「大丈夫だよ。外つていつでも、すぐ近くにいますから」
それだけを告げ、由紀は悠里を連れて外に出ていく。

ボタン…

胡桃「……………」

「……………」

胡桃（美紀は寝てるし、由紀達は外…。実質、こいつと二人きりか…）

席に座る彼を見て、胡桃は考える…

胡桃（あ！もしかして…由紀はこれを狙って外に出たのか？…まだろくに作戦もたててないのに急かしゃがって…。）

胡桃（…まあいいか、二人きりなら、勝ったも同然だし…）

胡桃（作戦も…基本的には昨日と同じようなもんでいっか。）

胡桃（そばで美紀が寝ていて、声を出せない状況……）

胡桃（これは使える…。この状況…）

・胡桃（利用しない手は無い!!）

胡桃と同時に…席に座る彼もまた、同じような事を思っていた。

胡桃（とつとと終わらすか…）

胡桃は昨日と同じく、彼の隣に座る。

違う事といえば、今日は毛布で手元を隠していない事…
それと、彼がゲームの全てを知っている事だった。

じわじわと…少しずつ胡桃は自分の右手を、席の上に置かれた彼の左手へと近寄せる…

昨日のようにその手の甲の上へ…自分の手を重ねようと…

胡桃（うつ…やっぱ少し緊張する。…でも、何も知らない分こいつの方がドキドキしてるだろうな。）

胡桃（昨日も思ったより効いてたし。やっぱ、いきなり女の子に手

を握られるのはドキドキするのかな…)

胡桃 (あたしの事…ちゃんと女の子として見てくれてるんだな…)
そつと彼の手の甲に指先で触れ、胡桃はそんな事を考える。
そして彼の手を握ろうとしたその瞬間…
彼が照れたような表情をしながら胡桃に話しかけてきた。

「く、胡桃ちゃん…その…手が」

胡桃「あ…、ごめん…イヤだ？」

「う、ううん…別に良いけど…」

胡桃は彼の反応を見て少しだけニヤつきながら、その手の上に自分の手を重ねる。

大人しい彼を相手に胡桃はだんだん調子づき始めた。

胡桃「あたしに手を握られると…ドキドキする？」

「く、胡桃ちゃん！」

少し怒ったような表情をする彼の前に手を出し、静かな声で胡桃は言う。

胡桃「大声だすなよ…美紀が起きちゃうからな？」

「っ…っ…っ…」

胡桃「お前…普段はあんななのに、いざって時は大人しいのな…」

「っ…」

いつになく大人しい彼を見て、胡桃は勝利を確信した。

胡桃（ドキドキし過ぎだろ…もしかしてあたし、結構こういう才能あんのかな…。そんな才能あっても…なんか計算高い嫌な女みたいで、あんま嬉しくないけど…）

胡桃（でも…ドキドキして大人しくしてるコイツを見てるのは楽しいな。ちようどいい機会だし、コイツに女の怖さを教えてやるか…）
普段は男勝りな彼女が、演技次第ではこんなにも化けるのだと彼に伝えるため…

胡桃は彼に囁いた。

胡桃「あたしって…可愛いかな？」

「えっ?」

胡桃「普段はあんなだけど…あたしだって、ちゃんと可愛いって…女の子らしいって…言ってもらいたんだよ。」

胡桃「お前にはそういうところ…見せた事ないから…あたし、不安で…」

胡桃「女の子らしくないって思われてたり…してないよね？」
涙ぐんだ瞳をして、胡桃は彼に尋ねた。

この台詞を言い切った後、照れる彼を見て…胡桃は思う
『アドリブでやったわりには完璧な作戦…完璧な演技だった!』と…

胡桃（照れてる照れてる…）

「う…うう／＼／＼」

胡桃「なんて答えるかな？まあこの様子じゃ…照れながら『思っていない』って言うてくれそうだな…」

彼女がそう考えていた直後、彼はそつと口を開いた。

「思っていない…。胡桃ちゃんは…ちゃんと女の子らしいところあるし…」

胡桃「えへへっ…ありがとう」

思った通りの彼の言葉に、にっこりと…満足そうに胡桃は笑う。

胡桃「急にごめんな、迷惑だったろ？」

「ううん…だ、大丈夫だよ…」

答える彼に…胡桃は止めの一言を放つ。

胡桃「ねえ…ドキドキしてる？」

「えっ…!?!」

胡桃「あたしに手を握られて、ドキドキ…してくれてる？嫌じゃない？」

「そ、その…えつと…」

胡桃（一応…してるって言うてくれるだろうな。コイツって、そう

いうやつだし…)

そう思う胡桃だったが、直後に放たれた彼の言葉は…意外なものだった。

「…………ドキドキなんて…してないし…、急にこんな事されても、迷惑だよ…」

胡桃「…えっ?」

さつきまでは戸惑っていたような様子をしていた彼が、突如落ち着いたような声を出し、はつきりと胡桃に言った。

「なんか…昨日から様子変だよ?もしかして…僕の事、からかっている?」

眉間にしわを寄せ、彼はじっと胡桃の顔を見つめる…

胡桃「あ…ご、ごめんっ!」

調子にのりすぎて、このままでは彼にバレると思った胡桃はその手から自分の手を離し、下を向いて黙りこんだ。

胡桃「……………」

胡桃（やば…ちょっと調子にのりすぎたな…）

胡桃（いくらコイツでも、さすがに違和感を感じ始めたか…）

胡桃（あたしのせいでゲームの事がバレたとなっちや、絶対由紀にバカにされる…それは避けたい）

胡桃（…どうする？どうする!?!）

胡桃は顔を伏せ、手にグツと力を入れて考える…

この後、どうやって彼をごまかそうか…

どうすれば怪しまれないか…

そうして思考を凝らしている中で彼に声をかけられ、胡桃は冷や汗をかく…

「あの…胡桃ちゃん…」

胡桃「な、なに…?」

胡桃（ヤ、ヤバい…！バレるかも…バレるかもっ!!）

「ゴメンね。嘘ついちゃった…」

胡桃「は？…嘘？」

それが何の事なのか…

何が嘘なのか…

彼の言葉の意味が理解出来ず、胡桃は聞き返した。

胡桃「えっと…何の事？」

そう尋ねる胡桃に、彼はにっこりと笑いながら告げる。

「胡桃ちゃんに手を握られて『ドキドキしてくれてるか？嫌じゃないか？』って質問に…してないし、迷惑だっつて答えた事だよ」

胡桃「あ、ああ…それね…」

「その答えは嘘で…本当は……」

「凄くドキドキしてたし…迷惑なんかじゃない…むしろ」

彼は胡桃の手をガツ！と勢いよく掴み、手のひらと手のひらを重ね…胡桃の手に自身の指を絡ませると、顔を寄せて囁いた。

「胡桃ちゃんなら、いつでもウエルカムだよ。」

唐突に放たれたその少し妙な発言に胡桃は頬を染め、自身の握られた手を見つめる…

その手は彼に力強く握られ、多少力を入れても離せなかった。

胡桃「ウ、ウエルカム？な、なんかお前…キャラが変じゃないか？」

「そうかな？…まあそんな事はどうでもいいよ。」

「それより、胡桃ちゃんはどうかかな？僕と手を握って…ドキドキしてる？」

胡桃「なっ…!?!」

手を握ったままでの突然のカウンター…

胡桃は中々その問い答えられず、必死に答えを探す。

胡桃（なんて答えよう…!?!い、いや…これはゲームなんだから、この場は恥ずかしがらずに『してるよ』って答えれば高評価に…!!）

あくまでこれはゲームだと自分に言い聞かせると、胡桃は彼を見つめて口を開く。

胡桃「ドキドキ…し、して…して…」

「……………」

胡桃（口が動かない、恥ずかしい…恥ずかしいっ!!なんであたしがコイツにこんな事聞かれなきゃならないんだよ!?!逆だろっ!!）

「もしかして…照れてるのかな?」

中々言葉を言いきれない胡桃…

そんな彼女を見て彼はニヤニヤしながら呟く。

追い込まれた胡桃はその表情と台詞に苛立ち、完全に開きなおって答えた。

胡桃「あゝ!わかったわかった!!してるしてる!ドキドキしてるよ!!」

「ちよっ…!」

胡桃「んぐっ!?!」

彼は慌てて大声で答える胡桃の口を手で塞ぐと、ベッドに横たわる美紀を指さし…

「静かにね?美紀さんが起きちゃうから…」

そう言い聞かせてから、その手を胡桃の口からそっと離れた。

胡桃「ご、ごめん…」

「気をつけてね。」

（こんな会話を今の美紀さんに聞かれたら、僕は彼女達を相手に口説き回ってる危ない男だと思われる。それはさすがに心外だ…）

「でも…ドキドキしてくれてるんだね。嬉しいよ」

手を握ったまま胡桃の顔を見つめ…彼は本当に嬉しそうな笑顔を見せる。

隣り合った席に座ったまま手で握られ、作戦を練り直すようにも逃げる事が出来ない。

胡桃は彼がこんな風に自分から手を握ってくる可能性など、微塵も考えていなかった…

自らの作戦の甘さを呪い、彼女は握られた手を震わせた。

「手…震えてるよ？大丈夫かな？」

胡桃「だ、大丈夫…少し、寒いだけだから…」

彼から目を逸らし、胡桃は小声で答える。

すると直後に彼はもう一方の手で胡桃の肩を引き寄せ、軽く抱きしめた。

胡桃「お、おいつ!？」

「静かに…。」

胡桃「つぐ…」

胡桃は突然抱きしめられた事に驚き声をあげるが…美紀を起こさぬようにと再び注意され、大人しくそれに従う。

「こうすれば…少しは暖かいでしょ。」

胡桃の肩を抱き、彼は囁く。

もういつそのこと美紀を起こしてでもその場から逃げようかと思う胡桃だったが…どうにか堪える事に成功し、彼の問いにそっと頷いた。

胡桃「…………うん」

「よかった…」

胡桃「……………」

「……………」

(さてと…………)

彼は抱き寄せた胡桃の表情を覗き見る…

胡桃の頬は真っ赤に染まり、気のせいかその瞳は潤んでいるようにも見えた。

そんな彼女の表情を見た彼はそつと目を閉じ、軽く息を吐くと…

(これからどうしよう!?)

大いに慌てた…。

もちろん表情には出さないが、彼は心の内では大慌て。

胡桃をドキドキさせようと抱き寄せたは良いが、その後の展開を全くと言っていいほど考えていなかったからだ…

(どうする!?!抱き寄せてばかりでもう離すのもアレだし…。かといってこのまま抱いてたら…僕の頭がおかしくなりそうだ…)

胡桃が思いの外抵抗しなかった事…それもまた計算外だった。

(いくら僕をドキドキさせようとしてるとはいえ、僕の方から抱き寄せたら絶対にもっと抵抗すると思ったのに…まああっさり…)

胡桃「……………」

(いや、抵抗はしてたな。してたのに…どつかのバカが美紀さんが起きるからって無理やりに抱いたんだった。)

「……………」

(つまり…そのバカは僕なわけだけど…)

彼はもう一度、胡桃の顔を見つめる。

彼女の顔は耳まで真っ赤に染まり、瞳はうるうる…

今にも涙がこぼれそうだったが、彼女は必死にそれを堪えているのだろう。

握った手も…少しだけ震えていた。

(ヤバい、可愛いつて感情を飛び越えて…可愛そうに見えてきた。)

(そんな泣きそうになってまで我慢する事ないのに…そこまでしてゲームに勝ちたいのか?)

「胡桃ちゃん…嫌なら我慢しないで、離れていいよ?」

彼は彼女の事が可愛そうになり(でも追い込んだのは彼)握っていた胡桃の肩と手を離す。

しかし…

胡桃「っ…嫌じゃない」

そう言つて胡桃は離されたそばから彼の手を握りなおし、その体にポスツと寄りかかると、そつと身を預けた。

「ほ、ほんとに…我慢しないで?」

相変わらず泣きそうな表情の胡桃を心配して、彼は声をかける。

だが胡桃は彼の言葉にブンブンと横に首を振り、うつむきながら呟いた。

胡桃「が、我慢なんか…してない。ドキドキ…するし。こうしてる
と…暖かいから…」

(う、嘘でしょ…?)

胡桃(はずかしい…はずかしい…はずかしい!!でも…もう退けな
いっ!ここまでできたら、徹底的にやっつけてやる!!)

恥ずかしさのあまりに目に涙を浮かべる胡桃…

彼女はもう…自棄やけになっていた。

自棄になる程に追い込まれた彼女は何よりも手強く、確実に彼を追
い込んでいった。

胡桃「お前の方こそ…我慢してないか?ほんとは…あたしなんて抱
きしめたくないか思ってた…」

「そ、それはないっ!」

胡桃「しっ!美紀が起きるだろ…」

立場がまた逆転し、今度は胡桃が彼を注意する。

「ごめん…」

胡桃「ほんとに我慢してないなら…もつと…」

「…ん?」

胡桃「もつと強く…抱いて…いいよ…」

「なっ!」

赤く染まった色っぽい表情で…胡桃は彼の目を見て呟いた。

その言葉を受けた彼は石像の如く固まり、顔を真っ赤にする。

「……………」

胡桃「ほら…。ほんとはイヤなんじゃん…」

少し待っても返事を返さない彼に胡桃が不満そうに言う。

彼は直後に正気を取り戻し、胡桃に張り合った。

「イヤじゃない…イヤじゃないっ！」

胡桃の発言、行動を振り返り…ゲームの事を知っている彼は思った。

こう言っておけばドキドキするだけして、結局は抱きしめにくいよ
うな腰抜け男だと思われているのでは…？

自分は胡桃に…見くびられているのでは？

甘い…見くびるな!!

そう言わんばかりに、彼は胡桃の事をガシツ!と強く…強く抱きしめた。

胡桃「う…わ／＼／ふあ…ああ／＼／」

座ったまま強く抱きしめられ、胡桃は変な声をあげる。

顔は限界なまでに赤く染まり…手はパタパタとしていた。

「ほ、ほらね…！全然抱けるから…／＼／」

彼もまた胡桃のように顔を真っ赤に染め、恥ずかしい気持ちを抑えて胡桃に囁く。

彼の言葉のニュアンスが少しいかがわしい物になっている事など、緊張しまくっている二人には気付ける訳もなかった。

胡桃「そ、そうみたい…だな／＼／」

胡桃（普通につ…！普通に抱きしめてきたんだけど!!?）

胡桃（今日のコイツおかしいっ!!なんでこんなに…積極的なんだよ!?!）

彼に宛てた先程の言葉…

胡桃は彼が抱きしめにはこないだろうと思っていた。

だからこそ放った捨て身の一撃だったのだが…そんな考えは外れ、

胡桃は今…彼に抱きしめられている。

強く…強く抱きしめられている。

そのせいでみるみると胡桃の思考は鈍っていくが、それは彼も同じ…そう、これは我慢比べ…。彼をドキドキさせるくらいいけないと思っている彼女、恵飛須沢胡桃と全てを知り、昨日皆に恥をかかされた事への復讐を心に誓う少年…。

その二人の…壮絶なまでの我慢比べなのだ。

胡桃（とりあえず…はずかしいから離してほしいっ！でも…あたしから『離して』なんて言えない…。あくまでコイツの方からあたしを離すように仕向けないと…）

因みにこの時の正しい対処法は…

『や、やっぱりはずかしいから…離して?』と…甘えた声、かつ上目遣いで彼に頼む事だ。

そうすれば彼は普段見せない胡桃の仕草にときめき、そして離してくれる…最強の手だったのだが、胡桃は違う方法をとる。

胡桃「むっ、胸…あたっちゃってるから…」

そつと彼に囁く。

こう言えば彼はドキドキし、照れて離す…

本当は胸などあたってないが、きつと彼は分からないだろう…

胡桃はそう思っていた…

「胸…?」

彼はチラッと彼女の胸を見る…

胡桃「へ？」

慌てる彼の顔を見て始めて胡桃は自身の胸に視線を移す。

その目に映るのは…彼の胸板にぶつかり、密着している自身の胸だった…

彼女は緊張のせいで気づいていなかったが、彼に抱きしめられた時から…それは本当に彼にあたっていたのだ。

胡桃「うわっ…!？」

「ごめんっ！」

慌てて胡桃を離し、彼は謝る。

彼は厚めの服を着ていたので胡桃の胸の感触などは感じていなかったが、当たっていたという事実…それに対して必死に謝った。

「ごめん…気づかなくて…本当にごめん！」

胡桃（ほんとにあたってたなんて…）

胡桃（最悪…最悪…最悪っ！由紀のせいだ…あいつがこんなゲームやろうなんて言うから…）

彼は当たっていた事にすら気づいていなかったのだが、パニック状態の胡桃はそんな事お構い無しにどんと悪い方向へと思い込んでいく…

胡桃（胸…あたっちゃってた。コイツ…あたしを抱きしめてる間ずっと、あの胸板で…あたしの胸の感触を確かめてたんだ…）

胡桃（最悪っ…最悪っ!!）

胡桃 「ぐすつ…うう…」

「えっ？」

遂に胡桃は少しだけ涙を流し、席から立ち上がって彼を睨む。

「ご、ごめんね？僕着てるの厚手の服だから…あたってたの分からなかった…」

胡桃 「う…うう…ほ、ほんとだな？」

「本当です！でも…」応謝る、ごめんなさい。」

彼はとりあえず胡桃に謝る。

申し訳なさそうな彼の顔を見て胡桃は自分にも少なからず非があると思ひ、涙を拭いて呟いた。

胡桃 「いいよ…。あたしにも悪いところあったし…」

「…すいません。ほんとに…」

胡桃 「一つだけ…聞きたいんだけど…」

「はい…なんでごいませうか…」

彼は胡桃に対して未だに低姿勢を貫き、丁寧に聞き返す。

それに対し胡桃は少し間をあげると、じつと彼の目を見つめて呟いた。

胡桃 「さっきまでの行動って…冗談だったりとか…面白半分でやったりした訳じゃないよな？」

「え？あ、ああ……………うん」

本当は復讐の為にやっていた行動なので、冗談と言えば冗談なのが…彼は胡桃が怖くて言えなかった。

胡桃「そ…つか。」

そんな彼の言葉を聞くと胡桃は頬を染め、どこか嬉しそうに微笑む。

胡桃のその表情を見て彼は一安心するが…その直後に彼女が放った台詞は、彼を心の底からドキドキ…いや…

心の底から…震え上がらせた。

胡桃「よかった…。もし冗談だったとか言ったら…」

胡桃「本気で殺そうと思ったから。」

「……………へ？」

胡桃「いや、お前今日は様子がおかしかったからさ…ひよつとしたら、あたしをからかっているのかなって…そう思ってたんだ…。」

「……………」ドクン…

胡桃「ほんと言うと…あたしは昨日からお前をからかっていたんだ…ごめんな。色々訳ありでさ…」

胡桃「でも、お前は冗談なんかじゃなく…本気であたしにああいう事をしてくれた。それに気づいたら、自分の行いが最低な物に思えてきて…」

「……………」ドクンッ！ドクン！

胡桃「だから…もう騙すのはやめた」

胡桃「あたしはお前の事…そこまで嫌いじゃないからな。抱きしめられた時も、少しだけドキドキしちゃったし…」

胡桃「あく…でも勘違いはするなよ？『嫌いじゃない』だからな？決して『大好き』なわけではないぞ？」

頬を染めて恥ずかしそうに胡桃は呟く、本来なら喜ぶべき台詞なのだが…彼は先程の言葉が気になって仕方がなかった。

「あ、あのさ…」

胡桃「うん？」

「もしさっきまでの僕の行いに…少しでも…ほんの少しでも冗談の気持ちがあつたとしたら……本当に殺す？」

震え声で尋ねる。

胡桃「うん…殺す。だってあたしはあんな恥ずかしい思いをしたのに、それを冗談だった…なんて言われたら…」

「ほ、本気で？」

胡桃「ん〜、さすがに本気で。でも大丈夫！冗談なんかじゃないんだろ？」

にっこりと可愛らしい笑顔を見せる彼女を見て、彼はタラタラと汗をかき始めた。

「も、もちろん！女の子の気持ちを弄ぶような最低の行動…するわけがないでしょ？」

胡桃「だよな？へへっ…よかった。」

「あはは……はは……」

「気分悪くなってきた…。僕…ちよつとりーさんとお話してくるよ。」
真っ青な顔に大量の汗をかき、彼は外へと出た。

ひよつとしたら…彼の命はそう長くないのかも知れない。

五十六話 『ふくしゅう—その4—』

バタン！

「リーさんっ！」

ドアを開け、外に出て早々…彼は少し離れたところで由紀と話していた悠里を見つけ、駆け寄った。

悠里「あら…どうしたの？そんな真っ青な顔して。」

「いや、その…：…ちよつと…マズイ事に」

悠里「マズイ事？」

由紀「なにになに〜？」

そう言つて彼はその真っ青な顔を悠里に見せる。

二人が話しているとすぐに由紀が不思議そうに割り込むが、彼女がそばにいるのは彼にとっては不都合だった。

(ああ、そうだ…：…リーさんのそばには由紀ちゃんがいたか。まだこの人には復讐を遂げていないのに、目の前でさっきの話をするわけにはいかないなあ…：)

(まあ、もうそれどころではない気もするけど…：思うにこのゲームの主権者(主犯)は由紀ちゃんだ。ならば、何を差し置いても絶対に復讐せねばならない…：)

(とりあえず今はごまかして…：車に戻つていてもらおうか。)

「由紀ちゃんすいません。リーさんと話があるので車に戻っていても
らえますかね?」

由紀「え? 私はいちやダメなの?」

「はい…大事な話なので。」

由紀「だっ、大事な話っ!?!」

彼と悠里を交互に見て、由紀は頬を赤くする。

彼女は確実になにか勘違いをしているが、今の彼にとっては好都合
だった。

「はい…大事な大事な話です。なにせ僕のこれからの人生を大きく左
右するような話ですから。」

由紀「人生をつ!?!」

「人生を…」

由紀「…えつと…えつと…」

由紀「わっ…私、車に戻ってるね!!——くんは頑張ってる!リーさん
は落ち着いてね!」

二人にそう告げて、由紀は慌ただしく車内に戻っていった。

バタンツ!

「まず、あなたが落ち着いてくださいよ…」

車内の由紀に向け、彼はそつと呟く。

そんな彼の肩をトントン…と悠里は叩き、頬を染めて言った。

悠里「そ、それで…大事な話っていうのは？いいわよ…覚悟は出来てるから／＼」

「……………」

悠里「……………」

「告白とか、そういう話じゃないって分かっててわざとやってません？」

悠里「あはは…バレちゃった？」

「もうりーさんの演技には騙されません。」

悠里「それは残念ね。で…、話っていうのは？」

「告白でこそありませんが…本当に大事な、僕のこれからの人生を大きく左右する話です…」

悠里「そんな大げさな…」

「大げさですかね？胡桃ちゃんに殺すって言われたんですが…。」

悠里「え？」

胡桃が…誰を殺すって？

どんな理由があつてそんな事を…

悠里には彼の言葉が理解できず、聞き返した。

悠里「えつとく…胡桃が…殺すって言ったの？」

「はい、言いました。」

悠里「…誰を？」

「僕です。」

悠里「…どうして？」

「僕は少しやり過ぎたようです…復讐の際に胡桃ちゃんに少しだけ恥ずかしい思いをさせてしまいました…、もし…彼女に恥をかかせたアレが冗談だったならば、殺すと言われました。」

悠里「聞いていい？」

「ええ。」

悠里「アレって言うのは…何をしたの？」

「……思いきり抱きしめました」

彼は少しだけ躊躇ためらったが、自分が死なないで済む方々を探す為に悠里には全てを伝えねばならないと思い、胡桃との事を話した。

悠里「抱きしめた…思いきり…」

「ええ…思いきり。あまりに思いきり過ぎて胸があたっていたらしく、胡桃ちゃんは少しだけ泣いてしまいました。」

悠里「あなた…思っていたよりも遥かにバカね。」
そう言っただけで悠里は頭を抱え、大きくため息をつく。

「言い訳はしません。自分でもバカなヤツだなあ…と思っていますから。」

悠里「自覚があれば結構……で、さっきの話を聞いた限りだと、胡桃は今はまだ、あなたに抱きしめられたのは冗談じゃなく……本気でだと思っっているのね？」

「ええ、僕が胡桃ちゃんに冗談なんかではないと伝えたので……」

悠里「……なんで本当の事を正直に言わなかったの？」

「だって……もし冗談だったって言ったたら殺す』って笑顔で言うんですよ!? あんなの前にしたら……怖くて言えませんって！」

悠里「胡桃がそんな事を言うなんて……よほど恥ずかしい思いをしたのね。」

「本気で胡桃ちゃんを抱きしめられたら良かったんですが……昨日自分の気持ちを弄んだこの人をドキドキさせてやろうっていう復讐心で抱きしめていたんですよ。このバカは……」

自傷的な笑みを浮かべ、彼は地面に膝をつけた。

悠里「……………」

「どうでしょう?」

悠里「あのね……思ったんだけど……」

「なんです?」

悠里は一つの答えを見だし……彼にそれを伝える。

悠里「いつそ……本気で抱きしめてた事にしちゃえば良いんじゃない」

かしら」

「本気で…ですか？」

彼はそれを聞いて立ち上がり、膝についた砂を払うのも忘れて悠里を見つめた。

悠里「ええ、そうすれば胡桃はあなたを殺さなくて済むでしょう？」

「むく…それもそうなんですけどねえ」

悠里「なんか不満なところがあるの？」

「その…胡桃ちゃん、僕が冗談とかでああいう事をした訳じゃないって言ったら…少しだけ嬉しそうに笑ったんです。」

「あの曇りのない笑顔を頭に思い浮かべると…罪悪感がひどくて、これ以上あの人には嘘をつけそうにありません」

悠里「…そう。」

「って言いつつ、また嘘をつける人間なんですけどね。僕は…」

悠里「…反省してる？」

「ええ、していますよ。」

「まあ、思えば僕は途中からわりと本気で胡桃ちゃんのことを抱きしめていたかもしれませんが…冗談だという気持ちで『ほんの少しでも』あればダメだと言っていましたし…」

悠里「ほんの少しでも殺されちゃうの？」

「そうみたいです。」

悠里「あらあら…それは困ったわね。」

「困りましたね…」

二人はその場に佇み、無言で考える。

どうすれば胡桃を怒らせずに済むか…

どうすれば彼は生き延びられるのか…

少しすると彼は大きく息を吐き、諦めたような悲しい笑顔を浮かべて言った。

「全部終わったら…正直に言って謝る事にします。胡桃ちゃんなんかんだで優しいから、正直に言えば許してくれますよね?」

悠里「…ふふっ、そうね。許してくれると思うわよ。」

「仮に許してもらえなかったとしても、それは仕方ない…。それだけの事をしましたからね…僕は」

悠里（ん?抱きしめただけなのよね?なんか、あっさりと死を受け入れちゃってるけど…それに）

悠里「――君、『全部終わったら』っていうのは…」

その発言が気になり、彼に尋ねる悠里。

彼はゆっくりと車に向けて歩き出すと、静かにそれに答えた。

「もちろん…復讐ですよ!残るは由紀ちゃんだけなんです…いまさら退けません!」

悠里「あの…懲りてないの?」

「懲りてはいますが…、ここで立ち止まっても仕方ありません。なら
いつそ…冥土の土産に由紀ちゃんと良い思い出を作って死にます。」

悠里「言っておくけど、もし由紀ちゃんに変な事したら私怒るから
…そこは理解してね。」

鋭い目で彼をギリツと睨み、悠里は告げる。
彼はその目に怯えつつ…しっかりと答えた。

「もちろん分かっています。ちよつとからかうだけです…変な事はし
ませんよ」

悠里「ちよつとよ？本当にちよつとだからね？」

「はい…」

ボタン…

元気よく返事を返し、彼は車内へと戻る。

そんな彼の後を追って悠里も車内へと戻り、席に座って由紀を見つ
めた。

彼が戻って早々に由紀は既に彼へのアピールをスタートしていた
ようで…

由紀「…ねえ——くん。少しだけ…少しだけでいいから外で話せる
？」

などという台詞をモジモジしながら彼に言っていた。

もちろん、彼はそれに了承する。

由紀に対する迎撃準備はもう整っているのだ。

「はいですよ。じゃ…行きますか」

由紀「うん！」

ボタン！

車内に戻ってまだ一分と経っていないのに、彼はまた外へと降りる。

ただ一言の文句も言わずに…

悠里（こんなに入れ替わりでみんなに誘われて…——君が本当はもうゲームの事を知っているからいいけど、もし知っていなかったらさすがに怪しむわよね…）

笑顔でドアを閉める彼を見て悠里はそんな事を考え、それから思い出したかのように車内を見回す。

そこで彼女が見たのは、ベッドに横たわりながらたまに何かをぶつぶつと呟く美紀と…何かを考えながらシャベルを磨く胡桃だった。

悠里（胡桃がシャベルを磨くのはわりと見慣れた光景なのだけど…、今は少しだけ怖く見えるわね。）

悠里（——君がちやんと謝れば許してくれるとは思うけど、不安だわ…）

深くため息をつき、悠里は彼が明日も無事であるようにと…そつと祈りを捧げた。

そして、その祈りを受けていた張本人は…

由紀「ねえねえ、りーさんに告白した!?!」

「いや…してませんけど」

車を出てほんの数メートルの地点で、由紀に質問責めにされていた。

由紀「ほんと？だってさつきりーさんに大事な話があるからって

…」

「世の中には…告白以外にも大事な話つてのはあるんですよ。覚えておいて下さい。」

由紀「なんだ…告白じゃなかったのかあ、じゃあ…なに話してたの？」

「由紀ちゃんはまだ知らないで良いことです。」

由紀「ええ、仲間はずれはやだよ！」

そう言つて由紀は頬をふくらませ、不満そうな顔をする。

彼はここで好機とばかりに由紀を見つめ、そして放つ…

悠里との本当の会話の内容をごまかす事ができ、なおかつ由紀をときめかせられるであろう言葉を。

「実は…最近由紀ちゃんが可愛いく見えて仕方ないって話してたんですよ。」

由紀「え？…私？」

「はい」

(開幕早々にこんな恥ずかしい台詞を吐いてしまった…。まあ、これで由紀ちゃんがドキドキしてくるなら我慢するけどね)

自身の発言に少しだけ恥ずかしさを感じた彼だったが、それも復讐の為だと堪えた。

だが…由紀の反応は彼の予想とは違い…

由紀「そんな風に言われたの…初めてだなあ。えへへ、ありがとう♪」

「…どういたしまして」

彼にドキドキしているような様子などまるで見せず、彼女はただ純粹に嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

(喜んではいるけど…ドキドキはしていないみたいだな。由紀ちゃんは純粹で子供っぽいから…ドキドキさせるのも一苦労だよ)

由紀「でも、欲をいうなら可愛いじゃなくて…綺麗とか美しいとかの方が嬉しいかな。」

(綺麗はともかく、美しいとか言わないでしょ…普通の人は)

由紀「で…、どうかな?——君から見て、私って綺麗とか…大人っぽい印象ってある?」

目をキラキラと輝かせ、期待のまなざしを彼へと向ける由紀。

それを向けられた彼は考える…

彼女に大人っぽい要素などあるのか?と…

(小さな体に…この性格。良く言えば元気な性格だけど、言い方を変えれば子どもっぽい性格でもある。)

(胸が大きいわけでもないし…大人びた服を着るイメージもない。)

(…ダメだ。由紀ちゃんのどこを見ても10対0で子供っぽいイメージが勝ってしまう、どうしても大人っぽさなど微塵も感じられない…)

由紀「その顔…なんかどうしても子供にしか見えないって言いたげだね……」

「そ、そんな顔してましたか?」

由紀「してた!私の事見て、残念そうな顔してたもん!」

(しまった…表情に出てたか…)

「…勘違いですよ。」

由紀「…ほんと?」

「本当に」

由紀「私…子どもっぽくない?」

「はい、由紀ちゃんは十分に大人びてますよ。」

由紀「そう?えへへ、やった〜♪」

(このチョロさ、まさに子供…いや、それ以上か。)

大人びているなど微塵も思っていない彼の嘘に由紀はまんまとハマリ、ニツコリと微笑んだ。

彼は由紀が大人っぽさに執着しているように感じ、気になって尋ねる。

「由紀ちゃんは大人っぽい女性になりたいんですか?」

由紀「う〜ん…どうだろ?ただあんまり子どもっぽって言われるのは嫌かも…」

「どうしてです?」

由紀「子どもっぽって言われてよろこぶ女の子はいないんだよ?

——くん、もっとレディーの事を勉強した方が良いよ!」

「でも…男の人は由紀ちゃんみたいな子どもっぽい女の子が好きな人

多いと思いますよ。」

由紀「ほら！やっぱ私の事子どもっぽいつて思ってた!!」
ビシツと彼を指さし、由紀は不機嫌そうな顔をした。

彼は一瞬なんの事かと思ったが…すぐに自分が口を滑らせた事を理解する。

(…しまった。つい子どもっぽいつて言ってしまった…)

由紀「あくあ！やっぱり…私つて子どもっぽいよね。リーさんが羨ましいな、あのキレイな髪…キレイな目…そしてなんていつても…」

由紀「あの胸!!」

(言うと思った)

由紀「わ、私ももう少しすれば…急にバインっ!と…なる…ハズ」

「……」

由紀「……あ!?!」

突如、由紀は何かを思い出したかのような声をあげ、彼をじっと見つめる。

彼はその視線に戸惑いつつ、恐る恐る尋ねた。

「な、なんでしょ?」

由紀「さつき…私みたいな子どもっぽい女の子が好きな人は多いと思いつて言ったよね?」

「言いましたね…それが?」

由紀「——くんは…好き？」

「…えっ？」

由紀「私みたいな…女の子」

由紀は少し恥ずかしそうに尋ねたが、すぐにブンブンと首を振り、その言葉を言い直した。

由紀「ううん、私みたいな女の子じゃなくて…私の事。好き…かな？」

そう尋ねる彼女を見て、彼はなんだか彼女を見つめるのが照れくさくなり…危うく目を逸らしそうになる。

彼女が自分をときめかせる為にこんな台詞を言っていると分かっている、ときめかずにはいられない…

それほどまでに今の由紀は可愛らしく、そして彼のツボを突いていた。

(さ、さすがに照れるな…でも、ここでドキドキしたら由紀ちゃんの思惑通りになってしまう…)

(僕の今の目的は自分がドキドキする事では無く、由紀ちゃんをドキドキさせる事だ。例えどんな手を使ってでも…僕はこの人を…必ずドキドキ地獄に突き落とす！)

彼は心の中で自分にそう言い聞かせると由紀の肩をガシツ！と掴み、まっすぐにその目を見つめ返し…そして答えた。

「僕は…好き。由紀ちゃんの事…凄く、凄く好きだよ。」

由紀「……………」

由紀は目を大きく開き、驚いたような表情を見せる。

彼は彼女のそんな表情を見て…勝利を確信した。

(この顔は…僕の思いもよらぬ発言に驚いている顔だな。いくら由紀ちゃんでも、これだけストレートに言われればドキドキせずには…) そう思った時…由紀は表情を変えて優しく微笑み、嬉しそうに彼へ告げる。

彼が全く予想していなかった、その言葉を…

由紀「…私も」

「…へ？」

由紀「私もキミの事、好きだよ」

「……………」

思いもよらぬその言葉を突然受け、彼は目の前が真っ白になる。だがすぐに一つの結論を見だし、正気に戻った。

(そうか…たぶんこの人は理解してないな。僕の言った好きという言葉を、友情的な意味でとらえているんだ…)

「由紀ちゃん…僕はあなたの事を『好き』だと言ったんです。」

由紀「うん、さっき聞いたよ？だから『私も好きだよ』って返したんだもん」

「…『好き』ですよ？」

由紀「うん、『好き』」

「僕の言った『好き』は『ライク』じゃなくて『ラヴ』ですよ。ちゃんと意味分かってますか？」

由紀「また私の事バカにして。そのくらい、ちゃんとわかっているよ」

ふざけたように笑い、由紀は答える。

『本当に理解してるのか？』彼は彼女を見てそんな気持ちを抑えきれなくなり、更に分かりやすく説明した。

「手を繋いだりとか、デートとかする関係になりたいなあ…って意味での『好き』ですよ!？」

由紀「うんうん、わかる、わかるよ。」

(本当に分かっているのか？ちゃんと分かっているとしたなら、どうしてこんなに反応が薄い?)

「もっと分かりやすく説明します…僕は由紀ちゃんに告白し、由紀ちゃんはそれに対して私も好きだと返事をしたんですよ。」

由紀「うん、したね。」

「したね…って…それだけですか？」

由紀「ん?。」

「もっと驚いたり…照れたりとかしないんですか？」

あまりに由紀の反応が薄いので、遂に彼は直接聞き出す。

由紀はそれに対して少しだけ間を空けると彼から少しだけ離れ、ニッコリと笑いながら答えた。

由紀「ん〜…あんまりしないかなあ？」

「…そう…ですか」

(何か変だ…もしかしてこの人は僕の告白が本気のものではないと思
い、それを利用して楽しんでるだけじゃないのか?)

彼はそう考える。

実際…その告白は本気のものではなく、ただ由紀をドキドキさせよう
と口走った物だったのだが、由紀がそれに気付き、利用している可能
性が無いわけではなかった。

(でも由紀ちゃんがりーさんのように僕の作戦に気づいたとは思えな
い。この人はそこまで鋭い人じゃないはず…。だとしたら考えられ
るのは…告白を冗談ととらえられてるって事くらいか…)

(もし本気の告白だと思っっているなら、あんなにあっさりと『私も好
き』なんて返せる訳がない。やっぱり…僕の告白を利用しているな)

「あの…今の告白、冗談だと思ってます？」

由紀「え?…違うの!?!」

(やっぱり…冗談だと思っっていたか…)

驚く由紀を見て彼は深いため息をつく、由紀をドキドキさせよう
と嘘の告白を続けた。

「冗談だと思われていたなんて、ショックです。けっこう勇気を振り
絞って言った台詞なんですよ?」

由紀「え、えつと…そう…だったんだ…」

由紀はだんだんと頬が赤くなり、目をキョロキョロとさせて落ちつ
きがなくなっていく。

(やっと理解してくれた…面倒な人だな…)

などと思いつつも、彼は無意識の内にニヤリと笑ってしまう。

あの由紀が…目の前でオドオドとし始めたからだ。

(このゲームの発案者であろう由紀ちゃんを遂に…遂に追いつめた。あと少し…あと少しで、僕の復讐も終わりだ!)

彼は由紀の手をギュツと握り、ラストスパートをかける。

由紀「ちよ、ちよつと!?ど、どうしたの?手なんか…握って…」

「言っただでしょう…由紀ちゃんの事が好きなんです。本当に…本当に好きなんです」

由紀「……………う／＼／」

「由紀ちゃんは…僕の事、どう思ってますか?」

由紀「……………」

由紀「……………好き…だよ」

(…えっ?)

真面目な告白だと分かった上で、由紀は先程と同じように答える。彼は一瞬その言葉に戸惑うが、直後に放った由紀の言葉でその意味を理解した。

由紀「好き…だけど、それは友達としてで…男の子としてとかは…よくわかんないよ…」

(だ、だよね…一瞬本当に告白が成功してしまったと思って、かなりドキドキしたよ…)

由紀「よくわかんない…よくわかんないけど…。——くんは…私を女の子として好きになってくれたんだよね…」

「…はい」

由紀「じ、じゃあ……」

由紀「キスしても…怒らない？」

またしても…彼の頭が真っ白になる。

由紀は…彼女は今、真っ赤な顔を彼に向け、その台詞を言ったのだ。ほかの誰でもない、目の前の彼に向けて…

「ど、どういう意味ですか…?」

由紀「あ、あのっ…もしかしたらね、私も——くんの事…心のどこかで大好きなのかも知れない…。だから…それを確かめる為に……」

由紀「一回だけ…——くんにキスしたいの…」

「え、っと…その…」

由紀「…ダメ…だよね」

俯く由紀を見て、彼は大量の汗を垂らして焦る…

(なんてこった…なんてこった!!)

(こんな展開は全く予想していなかった…!どうすれば…どうすればっ!?)

由紀「目だけ……くんは目だけ閉じてくれたら……そしたら、私からするよ……」

由紀「だから……もし嫌なら、私を突き飛ばしてね」
焦る彼に、由紀が追い打ちをかけるように呟く。

(突き飛ばして……そんな事、出来る訳が……)

由紀は彼の言葉を待たずに身を寄せ、顔を近付ける。

「ゆ、由紀ちゃん!」

由紀「目だけ、ちゃんと閉じてて……。お願い……だから」

「……っ／＼／＼」

由紀を突き飛ばして抗う事など彼には出来る訳もなく、目の前に迫る由紀を止めることが出来なかった。

その後、彼は至近距離で目が合った途端に顔を俯ける由紀を見て……遂にその目を自然と閉じてしまう。

由紀「そ、そのまま……そのまま置いてね? あ、開けたらダメだよ!? 絶対に閉じててね!」

由紀の言葉が目を閉じた彼の耳に入る。

声の感じから由紀は今、再び顔を上げたのだと彼は気づく。

そして静かな外の空気の中で、彼女のその息づかいがだんだんと自分に近寄る事も……彼は感じていた。

その息づかいはある一定の位置まで彼に近寄ると突然止まり……

そして……

ス……ッ……

静かに……柔らかく、あたたかい何か……彼の唇に触れた。

彼は見ずともそれが何かを理解する。

今の状況で唇に触れる物など、一つしかないのだから…

(なんて事だ…なんて事だ…復讐などという下らない冗談がきつかけで、こんな事になるなんて…!!)

(ドキドキし過ぎて心臓が…心臓が痛いっ!!)

(由紀ちゃんは…僕とキスをしていて、平気なのかな…) チラツ

悪いことだと思いつつ、彼はそつと目を開け…由紀の顔を覗き見る。

自分のすぐ目の前にあるであろう…その顔を…

「……………ん？」

由紀「…あっ!？」

目を開けた彼が見たのは、目の前には目の前だが…思ったよりも少しだけ遠くにいる由紀…

彼女は手を伸ばし、人差し指と中指をくつつけて、その二本の指の背を彼の唇に押し当てていた。

「な…なにしてんですか？」

彼は由紀の指から唇を離し、呆れ顔をして尋ねる。

由紀「え、えつとね…指でキスを…」

「……………」

由紀「…目、開けたらダメじゃん!!」

少し遅い反応で由紀は彼に怒りを向けるとその胸を軽く手で押し、突き飛ばす。

彼は少しよろめいてからすぐに体制を立て直すと、再び尋ねた。

「…なにをしてたんですか？」

由紀「え、えへへ…あの、その…」

由紀「……はあ」

由紀は軽いため息をつくとき、謎の行動をしていた理由…その全てを白状した。

それは…出だしから彼を驚かせる。

由紀「私ね…——くんがゲームの事に気づいてるって事…知ってるんだ」

「なっ!?!由紀ちゃんもですか!?!」

由紀「も…つてどゆこと?他にも誰か気づいてたの?」

「…りーさんです。」

由紀「へえ〜!そうなんだ〜」

「りーさんには、最後の最後でバレました…。由紀ちゃんは…いつから?」

彼が恐る恐る尋ねる。

由紀にはいつからバレていたのか…

悠里相手に失態を犯したばかりだったのに、また不自然な行動をしてしまったのか?

そんな考えを浮かべる彼に由紀が放った言葉は…またしても彼を驚かせた。

由紀「えつとね、昨日の夜!——くんが外に出てた時からだよ」

「んなっ!?それって…つまり!」

由紀「うん、——くんが私達の会話を聞いていた事…知ってたよ」

「ど、どうして…」

由紀「昨日の夜、話終わった後で着替えようとした時にね…見ちやっただよ」

「…何をですか?」

由紀「窓の外に、——くんがいるのをだよ」

「…つまり、由紀ちゃんは盗み聞きを終えて元の位置に戻ろうとしていた僕を…たまたま見かけたって訳ですか。」

由紀「たぶんそうかな…見たのは後ろ姿だったし、ちょうど戻る瞬間だったんだね!」

「じゃあ…最初からバレてたのか。…ん?」

由紀「どうかした?」

「いや…昨日の夜に僕の後ろ姿を見たとして、そこからどうしたらさっきの由紀ちゃんの行動につながるんですか?」

由紀「ああ。その時なただけど…一瞬、ほんの少しだけ——くんの横顔が見えてね。暗かったからハッキリとは分からなかったんだけど…笑ってた気がしたんだ。」

由紀「でね…思ったの。あれはよからぬ事を考えてる顔だなんて

！」

「……………うう」

由紀「まあ詳しく何を考えてるのかまではわからなかったんだけど、———くんの事だから…『自分をドキドキさせにくる皆に告白して、帝国をつくろ〜!』みたいな、そんなとこ…だよね?」

「そんな事は考えてない! って言いたいですが…あながち間違いでもないです」

「正確には、昨日僕の気持ちを弄んだ彼女達を返り討ちにして…逆にドキドキさせてやろうって考えてました。」

由紀「だからさつき私に告白したんだね? あれ…ほんとにドキドキしたんだよ? たぶん冗談だっと思ってたからまだ良かったけどね…。キスしてあげるフリをする余裕はギリギリありましたよ♪」

由紀はにつこりと笑い、先程キスするふりをして彼の唇に当てていた二本の指を嬉しそうに動かす。

「りーさんに続き、由紀ちゃんにまでバレていたなんて…最悪だ」

彼は表情を暗くして俯き、深くため息をついた。

由紀はそんな彼の肩をポンと叩き、明るい声で言う。

由紀「まあまあ、そんな落ち込まないで? 少なくともみーくんと胡桃ちゃんは騙しきれたわけだし…楽しかったでしょ?」

「……………それなりには」

由紀「なら良いじゃん! また一つ、私達の思い出が増えたね?」

「…あー」

由紀にまでバレた事にショックを受けていた彼だったが、目の前でニコニコと、かわいらしい笑顔を浮かべる彼女を見ていたら、これもこれで良い終わり方だなと思った。

復讐はほぼ失敗に終わったが：それでも由紀の言うとおり、思い出が増えたのだから。

由紀「さて、そんな——くんにお知らせ！」

彼が自らの復讐劇を振り返っていると、由紀が元気に話しかけてきた。

彼女のいう『お知らせ』とは：いったい何なのか？

そう考える彼だったが：何故か既に、とても嫌な予感がしていた。

由紀「さつき私が目を閉じててって言ったのに、あなたは目を開けましたね!？」

「…えっ？は、はい…」

由紀「だから：罰ゲームだよ♪」

「罰…ゲーム？」

首をかしげる彼の横を由紀はピョンっとスキップしながら横切り、車の方に向けて進む。

由紀「ふんふんふくん♪」

スキップで車の前まで進み、由紀はそのドアに手を伸ばす…

何故だろうか：彼はどうしても、由紀の行動を阻止しなくてはいけない気がして、慌てて彼女の元へと駆ける。

「…ちよ、ちよっと待ったあ!!」

駆け出す彼の叫びもむなしく、由紀は既に車の中に入っていた。

彼女は中で誰かと何か話をしているようだが…

その内容は焦る彼の耳には入らない。

彼はそのまま滑り込むように車内に戻るとドアを閉め、目の前にいた由紀の肩をガシツと掴むと、額に汗を浮かべて尋ねる。

「ゆっ、由紀ちゃん！罰ゲームって…罰ゲームってなんですか!？」

由紀「えへへ…それはね…」

焦る彼を見て、由紀は微笑む。

彼は由紀の口からその罰ゲームがなんなのか明かされるのを待ったが、それよりも先に…

ガシツ！　ガシツ!!

彼の両肩が…何者かに背後から掴まれた。

彼は由紀の肩からそつと手を離し、恐る恐る後ろを振り向く。

「……………」

そこには、彼の右肩を掴みながら鋭い目を向ける胡桃と…

彼の左肩を掴みながら極限にまで冷めた目を向ける美紀…

そしてその二人の後ろには、『かわいそうに…』というような哀れみの表情を彼へと向ける悠里がいた。

「え、えつと…どうしました?」

美紀「どうしたと…思いますか?」

ニヤリと笑いながら美紀が尋ねる。

しかし、彼女が笑っているのは口元だけで…目は全然笑っていないかった。

「わ、わかりません…」

美紀「由紀先輩…教えてあげて下さい？」

由紀「罰ゲームはね、——くんがしたことを…みんなにバラす事でした♪」

美紀に話をふられると、由紀は笑顔でそう言った。

「僕が…したこと？」

美紀「そうです…心当たり…ありますよね？」

「由紀ちゃん…この人達にあの一瞬で何を…何を言ったんですか!？」

由紀「昨日の夜から——くんはゲームの事を知ってたって事と…今日はそれを利用して私達に復讐してたって事…それだけだよ？」

由紀のいう『それだけ』の情報は…胡桃達を激怒させるには十分だった。

「……………」

冷や汗を流し、黙る彼の頬をペシツと軽く誰かが叩く。

胡桃だった…

胡桃はそのまま彼の頬を優しく撫で、笑顔で言った。

胡桃「えへへ…あたし言ったよな？もし、あれが冗談だったなら…お前を殺すつてさ、ちゃんと…言ったよな？」

「は、はい…言っていましたあ…」

胡桃「だよな？じゃあ…もういつかだけ聞くぞ、あたしにしたあの行動の中に…冗談って気持ちは、少しもなかったか？」

「……………」

胡桃「はやくしろ…」

最善の答えを考える彼だったが、胡桃に急かされてその時間は奪われる。

仕方がなく、彼は答えた…

彼女を怒らせぬよう、なるべくやんわりと…

「す、すみません…少しだけ…少しだけ冗談混じりでした…」

胡桃「……………」

胡桃「……そつかあ♪」

そう言つて胡桃はにっこりと笑うとシャベルを手に持ち、鼻唄を歌い始める。

彼はその光景に凄く恐ろしい物を感じ、そつと彼女に尋ねた。

「ぼ、僕は…殺されますかね？」

胡桃「あはっ♪…どうだと思おう？」

彼の前でシャベルを片手に…胡桃はにっこりと笑う。

彼女のその笑顔を見た彼は、こんな事を思っていた…

(さーっと血の気が引く気分つてのは…今のこの瞬間の事をいうんだらうね)

一人の男の復讐劇…

それは今、その男にとって最悪の終わりを迎えようとしていた…

五十七話 『ふくしゅう—おわり—』

あの時…由紀が罰ゲームと称して彼の復讐を胡桃達にバラし、彼は目の前でシャベルを持って立つ胡桃に震えた。

物語は…あれから数時間の時が流れた車内…

停まっているその車の助手席に座り、後方を見ないように頭を抱える由紀の心情から始まる。

由紀（こ、こんな事になるなんて…思ってたよ…）

由紀（ただ…ただちよつと——くんにイジワルしようと思って、それでみんなにバラしたただけだったのに…まさか、胡桃ちゃんともーくんがあんなに怒るなんて…）

彼女は目を閉じて、あの時の光景を思い出す。

彼に罰ゲームを与えるとだけ言い残し、車内へと戻ったあの時を…

バタンツ！

由紀『みんなく！延長戦も終わりを迎えたわけだけど、ここで重大なお知らせだよ！』

胡桃『なんだよいきなり…、また明日もやるとか言うなよ？もうやらないからな？』

悠里『そうね、明日はこの付近の探索に行きたいと思っていたから、さすがに今日で終わりよ？』

由紀『いくら私でも三日続けてこのゲームをやる自信はないよ…。
お知らせするのはね〜…』

車内の全員を見回し、由紀は言う…

胡桃と美紀の心を闇に染め、そして彼を追いつめさせる事になる…
あの言葉を

由紀『私達のゲームの事…昨日の夜から——くんはバレてたみたい。だから——くんはね、今日の延長戦を利用してみんなに復讐して
たんだって!』

胡桃『はあ!!?』

美紀『…っ!!』ガバツ!

由紀『うおっ! みーくん、おはよ〜』
今までは眠っていたのか、はたまた狸寝入りしていたのか…

美紀はピクリとも動かずにベッドに潜っていた。

だが今由紀がああの言葉を発した瞬間…彼女は布団を勢いよく捲り
上げ、そのまま起き上がって由紀に尋ねる。

美紀『今の…:…本当ですか?』

由紀『うん! ほんとだよ?』

美紀『…:…あの人は…:…あの人は今、どこにいますか?』

起き上がってばかりとは思えない鋭い目付きで車内を見回し、そこ
に彼がいないのを確認してから美紀は呟く。

すると直後、最悪のタイミング…いや、美紀にとっては最高のタイ
ミングで彼が車内に滑り込むようにして戻り、そのまま由紀の肩を掴
んだ。

『ゆっ、由紀ちゃん！罰ゲームって…罰ゲームってなんですか!？』
焦った様子で由紀に尋ねる彼…。

美紀はそつとその背後に忍び寄り、胡桃と共にその肩に手を伸ばす。

ガシッ！　　ガシッ!!

『え、えつと…どうしました?』

突如二人に肩を掴まれ、彼は驚いたように尋ねる…

美紀は鋭い目付きのまま口元だけをニヤリとさせると、静かに彼に聞き返した。

美紀『どうしたと…思いますか?』

『わ、わかりません…』

美紀『由紀先輩…教えてあげて下さい?』

美紀にそう言われ由紀は言う…

由紀『罰ゲームはね、——くんがしたことを…みんなにバラす事でした♪』

あの時…彼女は明るい声でそう言った…

何故なら、彼女にとってそれはほんの軽い冗談のつもりだったから。

自分が彼の復讐の事をみんなに話したとしても、仲の良いみんなの事だ…きつとこんな反応だろう…

由紀は彼が胡桃、美紀と会話を交わす間、脳内でこれからの光景を想像していた。

美紀『まったく…ゲームの事を知られていたんじゃないですか。』
頑張っても意味無いじゃないですか。』

胡桃『まったくだぜ、盗み聞きなんかしやがって…冗談じゃないの』

『えへへへ、マジごめ〜ん♪』

由紀の脳内では彼が実際よりも少し頭が悪そうに描かれているが、気にするべきはそこではない。

そう…彼女はこの事態が平和におさまるとしか考えていなかったのだ。

もし仮に、平和的ではない結果になるとしても、少しだけ口喧嘩する程度だろうと思っていた…

だが現実是由紀が思っていた程優しくは無く…

胡桃『…あたし言ったよな？もし、あれが冗談だったなら…お前を殺すってさ…』

由紀『へっ…？』

胡桃の発言に驚き、怯えたのは彼だけではない。

由紀もまた…その思いもよらぬ発言に驚き、こっそりと震えていた。

由紀（あ、あれっ？胡桃ちゃんとみーくん…本気で怒ってる？もしかして私、とんでもない事を…しちゃった？）

この事態は平和的に収まる…悪くても軽い口喧嘩だろう

そう思っていた由紀の考えは、早くも崩される。

目の前で始まろうとしていたのは口喧嘩などではなく…ましてや平和的な物などでは決していない。

それは…処刑だった。

胡桃『ほら、外行くぞ…ついてこい？』

シャベルを片手に、胡桃は彼の手を無理やりに引く…

彼は胡桃に引かれてない方の手でそばにあったテーブルを掴み、それに抵抗した。

『ま、待って…！謝るからっ！謝るからっ!!』

美紀『……………』

それを見た美紀は彼が掴むテーブルのそばに立ち、彼の手をじっと見つめる…

彼女は自らの右手をギュツと握ると固く拳を作り、それをそつと振り上げた。

『み、美紀さん…まさか…それ…………』

ブンツ!!

彼女はその拳を、少しの躊躇いも無くテーブルを掴む彼の手へと降り下ろす。

『うおっ!!?』

ギリギリのところでは彼はテーブルから手を離し、どうにかそれをかわす事が出来た。

彼がそれをかわした直後、降り下ろされた美紀の拳は勢いを衰えさせる事なく…そのまま目標の消えたテーブルを力強く叩いた。

テーブルを叩いた際に、バンツ!!という大きな音が車内に響く…

彼は美紀なら寸止めするのではないかと心のどこかで信じていたが、当たり前のようにテーブルへと降り下ろされた彼女の拳を見て…念のためにかわしといてよかったと心から安堵する。

(あ、あれ直撃したら…かなり痛かっただろうなあ…)

パシッ!

『お……?』

美紀は彼がテーブルから手を離れたのに気づくと、すかさずその手を掴み、胡桃と共に彼を引く。

悠里『ちよつと二人とも、平和的にね? 喧嘩したりしちやダメよ?』
今の悠里に出来る事は、こう言つて彼の安全を少しでも確保する事だった

そんな悠里の方へと胡桃は振り向き、ニコツと笑う。

胡桃『りーさん、大丈夫だよ。抵抗さえされなきゃ…流れる血はコイツの分だけで済むからさ…』

美紀『ほら…きびきび歩いて下さい。』

両手を引かれた彼は先程のように何か重い物を掴んで抵抗する事も出来ず…大人しく車外へと連行されていった。

……バタン

美紀と胡桃が彼を連れて外へと出て行ってしまった…

由紀は少しの間、閉まったドアを見つめ、悠里に声をかける。

由紀『も、もしかして…バラさないであげた方がよかった?』

悠里『う、う…ん……かも、しれないわね…』

困つたような表情で呟く悠里…

彼女のそんな表情を見て由紀は不安になる。

由紀『ほんとに殺しちやったり……しないよね?』

悠里『それは…さすがにないと思うわよ。…たぶん』

二人は落ちついて席に座り、胡桃達の帰りを待った。

しかし彼女達は中々帰ってこず…ようやく帰ってきたのは、辺りが暗くなり始めてからだだった。

ボタン…

胡桃『ただいま〜』

美紀『戻りました』

そう言つて車内に入る二人の背後を…由紀と悠里はじつと見つめる

三人で出ていった彼女達だが、もしかしたら二人になっているかも知れないと思つたからだ。

『……………』

由紀『…あつ!』

悠里『よかつた…』

二人の背後に彼がいたのを確認して、由紀と悠里は一安心する。彼はなにやら地獄を見てきたかのような目をしているが、見たところ怪我などはなく無事のようにだ…よかつたよかつた一安心。

胡桃『いや〜長引いたなあ…もうすぐ夜じゃん!』

由紀『ね、ねえ…りーさん。胡桃ちゃん達が——くんを連れて出ていったのって…』

悠里『ええ…お昼の少し前よ…』

由紀は戦慄を覚える…自分の何気ない発言のせいで、彼は約六時間も二人に何らかの罰を与えられていたのだ。

胡桃『リーさん、いらぬ紙とかあつたつけ？』

悠里『えっ？……これでも良い？』

悠里はそばの棚から新品のノートを取り出し、それを胡桃に手渡す。

胡桃『お、サンキュー』

それを受け取ると胡桃は一ページだけ破りとり、ノートを悠里に返す

破りとつた一ページはテーブルに置き、胡桃はその目の前へと彼を座らせた。

悠里『あの…何をするの？』

不思議に思った悠里は胡桃に尋ねる。

だが胡桃はそれに答えず、代わりに美紀が答えた。

美紀『誓約書ですよ』

悠里『誓約書？』

美紀『はい、今回の件で私達は気づきました。この人は…少し危険です。』

美紀『また今回のような悲劇を起こさぬよう、誓約書を書かせようと私と胡桃先輩は決意しました。』

悠里『そ、そう…』

由紀『あう……』

美紀が説明を終えた後、胡桃は彼にペンを渡す

悠里はただそれを同情の目で見守る事しかできなかつた。

由紀に限っては自分のせいで彼がこんな目に遭っているというの

もあり、もう見ている事すら出来ず…助手席へと逃げた。

こうして由紀の回想は終わり、物語は今現在の由紀へと繋がる…

由紀（―――くんにわるい事したなあ…。二人とも、すごく怒ってるよお…）

由紀（胡桃ちゃんもみーくんも…そんなにやな事されたのかなあ）

由紀はそつと静かに…後ろの様子を覗き見る。

そこでは未だに彼が席に座りながら誓約書を書かされていて、胡桃と美紀が横で立ちながらそれを見張り…そばでは悠里が気まずそうに座っていた。

由紀（―――くん…ご、ごめんね…）

胡桃「…よし、書けたか？」

「書けましたが…誓約書とか書いた経験ないんで、ちゃんと書けてるかどうか…」

胡桃「経験あったら逆に引くわ！まあ適当なのでいいから…見せろ」

胡桃は彼が書いた誓約書を取り、その内容に目を通す。

—誓約書—

わたくし―――は、今回の件で皆さんを深く傷つけてしまいました。直木美紀さんには冗談で告白をし…

さらに海老巢沢胡桃さんにも冗談で抱きついてしまいました。

これらの行為を深く反省し、もう二度としないと誓います。

もしこれらと同じような行為を再びした場合には、いかなる処罰もお受けいたします。

たとえばそれが、シヤベルを使うどこかのツイントールに数百の殴打を受ける事だとしても…

そしてその結果、私が命を落とす事になろうとも…

抵抗せずに、この身を捧げます。

願わくばこの先も…胡桃さんが無抵抗の人間を殴り殺す程の冷徹な人間にはならないと良いのですが…

P.s. 私に告白をされ、本気で照れていた美紀さんは本当に可愛かったです。

心に焼きつけました。あれは二度と忘れません。

胡桃「……………なに、これ？」

手をプルプルと震わせながら、胡桃はギツと彼を睨む。

美紀もまた彼を睨み、頬を染めながら尋ねた。

美紀「い、言いたい事はたくさんありますが…。まず、私達の名前…漢字が違うんですけど」

「ああ、それですか…あなた達の名前を耳で聞いたことはありませんが文字で見たことはなかったのですね…。適当に書きました。」

それを聞いた美紀は彼からペンを奪うと、誓約書に書かれた自分の名前の上に線を引いてそれを塗り潰し、その上のスペースに自らの名を書く。

美紀「名前の方はこれであってます。ただ名字の方は『直木』ではなく『直樹』です。覚えておいて下さいね」

彼に自らの名の漢字を丁寧に教える美紀。

彼女の横で胡桃は誓約書に書かれた自らの名前の部分を指さし、不満そうな顔をした。

胡桃「美紀はまだいいよ……ちよつとした間違いだもん。あたしの名前を見てみる……なんかめっちゃ海老が生息してる沢の名前みたいになってるぞ?」

悠里「海老巣沢……ふふっ!」

胡桃「……………」

そつとその誓約書を覗き見て、悠里は思わず吹き出す
それを見た胡桃は自分が笑われてるかのような気分になり、複雑そうな表情をした。

悠里「良いじゃない……海老巣沢。…改名したら?」

胡桃「なっ!?!しっ、しないよっ!!」

美紀「まあまあ、胡桃先輩。名前の件はこのくらいにしましょう…」

胡桃の肩をポンと叩き、美紀は真っ直ぐに彼を見つめる。

その直後に胡桃もまた目付きを鋭いものに変え、彼を睨んだ。

胡桃「そうだな…名前の間違いくらいは笑って許すさ。」

美紀「ええ、けれど…この誓約書には他にも気になる文章があります。それこそ…笑って許すことは出来ないような…」

「……………そうですか?…一生懸命書いたんですけど…」

彼女達にそう言われると彼は鼻で笑い、しらを切る

そんな彼を見た胡桃と美紀は眉間をピクリと動かし…イラツとし

たような表情をした。

悠里（な、なんか…雲行きが…）

彼女達の様子をそばでみている悠里は場を取り巻く嫌な雰囲気
に一人冷や汗を流す。

一方で由紀はというと、助手席の方からこっそりと彼女達を見つ
め、その様子をうかがっていた。

胡桃「オイ、シャベルを使うどこかのツインテールってのは…いつ
たい誰の事を言ってるんだ？」

「…さあ？」

胡桃「この誓約書によると、随分と恐い人みたいだな？シャベルで
人間を数百回も殴るなんて恐ろしい事…あたしは頼まれたって出来
ないぜ…」

「……………でしょうね」

胡桃「……………」

「……………」

美紀「……………」

悠里「……………」

由紀「……………」

車内に沈黙が訪れ…ピリピリとした空気だけが静かに流れる。

由紀と悠里はその空気に押し潰されそうになり、そつと彼を見て思
う…

『もう、おとなしく謝ればいいのに』…と。

二人がそんな事を思った直後、突如胡桃は笑いだし…彼の肩を掴んで言った。

胡桃 「つぶ…あはははっ！よくしよくし…わかったわかった。」

「……………」

胡桃 「外出ろ…：数百回もいらねえ、一振りで黙らせてやるよ！」
不気味な笑みを浮かべ、胡桃が彼を引つ張る
彼はそれに必死の抵抗をみせ、彼女に言った。

「暴力ですか!?また暴力なのですかあ!!?」

胡桃 「あんだだけ口で言っても…まだわかんないんだろ!?ならもう仕方ない!!あたしだって平和的に済ませたかったが…もう限界だっ!」

「じゃあ、こつちも言わせてもらう!元々の被害者は僕なんだ!良くわからないゲームで…先に人の気持ちをもてあそんだのはそつちじゃないか!」

「僕はそれに対してちよつと反撃しただけなのに…長い間説教されて、更には誓約書?それはおかしいでしょう!」

彼が胡桃に対して珍しく強気に反論する。

それは確かに正論であり、胡桃は反論出来ずにいた。

そんな胡桃に代わり、美紀が彼の前に立ち…反論する。

美紀「確かに、先に仕掛けたのは私達。…そこは謝ります。でも、その反撃の仕方が酷いです!抱きついたり、告白したり…私、本気で悩んだんですよ!」

「そんな事言ったら僕だって悩みました！胡桃ちゃんなんて、いきなり手を握ってきたんですよ!？」

胡桃「あ、あの…恥ずかしいからさ…あんま大声で言わないで…」
美紀と口論する彼にそつと胡桃が呟く。

「あんなの…ほとんど告白と同じじゃないですか!!」

美紀「手を握られたくらいで…勘違いしすぎですよ!」

胡桃「ああ…うう／＼／＼」

口論する二人…照れる胡桃…そして次第に激しくなる二人の口論を見て、気まづくなる由紀と悠里。

このままでは大喧嘩に発展してしまいそうなので、悠里は二人に割り込んでそつとそれを止めようと試みた。

悠里「まあまあ…今回はどっちも悪かったって事で。」

美紀「どっちも!?!悪人はこの人だけじゃないですか!!」

「はあ!?!そつちでしようが!!」

割り込む悠里を押し退け、二人は口論を続ける。

これには悠里もさすがに困り、そつと胡桃に助けを求めた。

悠里「ちよつと…止めてよ!喧嘩になっちゃうでしょ!？」

胡桃「ん?あ、ああ…わかった。」

そう言つて胡桃は美紀の隣に立ち、彼に向けて言い放つ

胡桃「いい加減謝れつて!全部お前が悪いんだから!!」

悠里（止めてって頼んだのに…なんでそうなるの…）
口論を進んで激しくさせる胡桃を見て、悠里は頭を抱えた。
彼女が頭を抱える今も、三人の口論は続いていく…

「本当に…付き合いきれませんか！」

胡桃「ちっ！…だったら出てけば良いだろ？」

美紀「ええ、文句があるなら出て行って下さい。私達も…あなたが嫌ですから。」

悠里「ちよつ！二人とも…そういう言い方は…」

二人の発言に悠里は驚き、慌てて止めに入る。

だが彼女が止めに入った直接、彼は衝撃的な言葉を放った。

「そうですね…そうさせてもらいます。」

悠里「…えっ？」

由紀「うそ…」

悠里と由紀は固まり、耳を疑う。

だが彼が放ったその言葉は…聞き間違いなどではなかった。

「やっぱり一人の方が楽です。前々から思っていました…今確信しましたよ。」

悠里「ちよつと！何言つて…!？」

そう言いかけたところで、悠里は気づいた。

彼の顔がにやつていること…いや、彼だけではない。

胡桃と美紀もまた…にやにやとした表情を浮かべ、由紀のいる助手席の方を横目でチラチラと見ていた。

悠里（この人達…もしかして…）

胡桃「あー、出てけ出てけ！こんな狭い空間に男がいられると、あたし達も色々と嫌だったんだよ。」

美紀「そうですね…女性だけでいた方が気が楽です。あたしも胡桃先輩も…りーさんも由紀先輩もそう思ってます。…そうですね、由紀先輩？」

助手席の由紀に向け、美紀が語りかける。

由紀はすぐにそこから出てきて彼の元に駆け寄り、涙目で言った。

由紀「イヤだ!!出てかないでっ!!!イヤ…イヤだよっ!なんで胡桃ちゃん達はそんな酷い事を言うの!?!今まで…ずっと——くんと仲良くしてたのにつ…なんでっ!?!」

由紀が震えた声で言う。

その瞳はうるうるとしていて、今にも泣き出してしまいそうだった。

彼はそんな由紀を見てオロオロと焦り、その頭をそっと撫でてから彼女に告げた。

「出てかない!出ていきませんよ!?!ほら…だから僕は嫌だって言ったのに!!」

由紀「…へっ?」

慌てる彼と、その発言を不思議に思い、由紀は顔を上げる。するとすぐに胡桃が由紀の方を見て、気まずそうに答えた。

胡桃「ご、ごめん由紀…ドツキリなんだけど…」

由紀「…ドツキリ?」

胡桃「うん…コイツを外に連れ出して美紀と二人で説教してる途中で、結局のところ…今回のゲームの発端は由紀だって事に気づいてさ…」

由紀「ほっ…たん？」

胡桃「ほら…、お前がこんなゲームをやるうとか言わなきゃ…あたし達もコイツもお互いに騙し合うような事はなかったわけじゃん？だから…ようするに…」

「全部由紀ちゃんが悪いって言ってるんです。…あ、僕じゃなくて胡桃ちゃんが言ってるんですよ？僕はそんな事思ってませんから」

胡桃「ち、ちがうよっ！あたしも思っていない、思っていないけど…ただまあ、少しだけ痛い目を見てもらおうかな？って思ってたさ…」

由紀「それで…——くんが出てくドツキリをしたの？」

胡桃「う、うん…あたし達三人で考えた…」

美紀「いえ…ほとんど胡桃先輩が考えた物です！私と——さんは無理やり付き合わされて…」

「はい…その通りです！」

あつさりと仲間を売る彼と美紀…そんな二人の発言に、胡桃は慌てる。

胡桃「お前らだってそこそこ乗り気だっただろ!?今さらズルいぞ！自分達だけ良い顔しようとしやがって!!」

由紀「えっと…じゃあさっきのは私にイジワルしようとした胡桃ちゃんのドツキリで…——くんは…まだ私達と一緒にいてくれるの

？」

「もちろん。これだけ騒がしく、楽しい毎日を覚えたら、もう一人には戻れないのでね……」

にっこりと微笑み、彼は答える。

由紀はその顔をみて一安心してから胡桃の方を向き、一言だけ呟いた。

由紀「…キレイっ!!」

胡桃「んなっ!?!」

そう言つてそっぽ向く由紀の手を胡桃は掴み、必死に謝る。

胡桃「ご、ごめんごめんっ!冗談だったの!本気にすんなよ!?!悪かったつて…怒るなよ〜!」

由紀「……………」

胡桃「ゆ、由紀さ〜くん?機嫌…:なおしてくれませんか?ほ、ほら!お菓子とか…あげるから…:なっ?」

「由紀ちゃんにあそこまでへこへこする胡桃ちゃん…:始めて見たんですが」ボソツ

美紀「…私もです」ボソツ

自分用にとつておいたお菓子を差し出してまで由紀の機嫌をとる胡桃を見て、二人はこつそりと笑った。

由紀「えへへ…:うそだよ、胡桃ちゃん。」

由紀はくるつと胡桃の方へと振り向きにっこりと笑つてそう告げる。

胡桃はホツとしたような表情をしてから、改めて尋ねた。

胡桃「ほんとに？怒ってない？」

由紀「うん。ちよつとイジワルしただけ！私、胡桃ちゃん大好きだもん♪」

胡桃「で、照れるな…まあ、とりあえずよかったわ…」

悠里「でも…ちよつとやり過ぎよ胡桃。私まで本気で信じちゃったじゃない！」

胡桃「わりい…リーさんに伝えるの忘れてたわ。」

由紀「にしても…今のドツキリはヒドイよ！やっていい事と悪い事の区別くらいつけなきゃ!!」

胡桃「それ…お前が言うのか。」

由紀「あのゲームはなんだかんだでみんな楽しんでたもん！胡桃ちゃんだって楽しかったでしょ？」

胡桃「…どうだろ、もうよくわかんないな。とりあえず、すごく疲れたよ…」

美紀「それは私も同感です。」

悠里「そうね…とりあえず夕飯の準備をして、今日は早めに寝ましょうか」

その後…

彼女達は全員で夕飯の準備をし、席につく。

そして…遂にその時がやって来た。

由紀「さて…いよいよだね。——くんが一番ドキドキした人に、この缶詰めを渡します！」

そう言っつて由紀はテーブルの中央に置かれた缶詰めを指差し、彼に尋ねた。

由紀「あなたが一番ドキドキしたのは…誰ですか!？」

「それって…二日間の中ですか?」

胡桃「いや、二日目はお前の復讐がメインになっちゃってたんだから無しだろ。初日だけで考えた方がよくないか?」

美紀「そうですね…私、二日目とかほぼ何も出来てませんでしたし、その方が助かります。」

悠里「じゃあそういう事で…——君、選んで?」

由紀「さあ…どうぞ!」

彼は考えた…

昨日、自分を最もドキドキさせたのは誰なのか。

じつくり…じつくりと、目を閉じて考える。

そして、丸々一分ほど経った時…彼は目を開けて答えた、自分を最もドキドキさせた、その女性の名を…

「…りーさんで!!」

由紀「おおっ！」パチパチパチ!

悠里「あら、ほんと?嬉しい…がんばって良かったわ!」

美紀「わたしもがんばったんですが…」

胡桃「…あたしもだよ」

選ばれて喜ぶ悠里とそれを拍手で祝福する由紀。

一方で胡桃と美紀は選ばれなかった事に落ち込む、死ぬほど恥ずかしい思いをしたのに…結局勝利を掴めない。

彼女達にとって、それはとても辛い事だった。

由紀「ねえねえ、りーさんのどこがポイントだったの?」

「そうですね…まず、耳掃除…これはヤバイです!忘れがちですが、僕とりーさんは同い年、その同い年の娘が…耳掃除してくれるんですよ?ヤバイですって!!!」

胡桃「おちつけ…お前のテンション以外、何がヤバイのか全然わからないから…」

立ち上がって熱弁する彼を隣に座る胡桃が冷静に押さえ、席に座らせる。

彼は胡桃によって落ち着きを取り戻し、静かな口調で言った。

「聞きますが…あなた達は同じクラスの男子に耳掃除をしてあげた事がありますか?」

由紀「んーん、ない。」

美紀「あるわけないでしょう…」

胡桃「お前…なにいつてんの？」

彼の問いに対して由紀は素直に答え、そして美紀と胡桃はあきれ顔で答えた。

「つまりはそういうことです…彼女でもない同い年の女子が耳掃除してくれる。このシチュエーションだけで…もう僕は萌え尽きました。」

胡桃「それがポイントだったなら、あたしのでも良くない？彼女でもない同い年の女子が手を握ってくるんだぞ？めちやくちやドキドキするじゃん！」

彼の感想を聞いてから、胡桃が不満げに呟く。

「確かに胡桃ちゃんのもかなりドキドキしました。でも、リーさんの耳掃除はただの耳掃除じゃなかったんです。」

美紀「なんです？上手だった…とかですか？」

「……はい。…そんなところですかね」

胡桃「上手な耳掃除は、手を握るのにも勝るのか…」

由紀「へえ…リーさん！また今度私もお願いしていいかな？」

悠里「ええ、いいわよ。」

由紀「えへへ〜！やったあ♪」

美紀「由紀先輩……りーさんの子どもみたいですわね」

「ま、そんなわけですので……この缶詰めはりーさんに渡して良いんですよね？」

テーブルに置かれた缶詰めに片手に、彼が由紀に尋ねる。

由紀がそれに笑顔で頷くと、彼はそれを悠里へと手渡した。

「どうぞです……。おめでとさん」

悠里「ふふっ、ありがと♪」

悠里がそれを受け取ってから、一同は手を合わせ……食事を始める。

ゲームに勝った悠里だけが……一品多い食事だった。

皆が注目する中で悠里はその缶詰を開け、そつと一口……それを食べる。

悠里「……………」モグモグ

由紀「どう……？美味い？」

胡桃「ただの缶詰めなら珍しくないけど……」

美紀「高級缶詰めって書いてありますからね……どうなんでしょうか」

「……………」

悠里「……うん、美味しいっ！普通の缶詰めとはなんか違う気がするわ。」

一口食べてから悠里はにっこりと笑い、その缶詰めを見つめた。

胡桃「マジか…やっぱり美味しいんだ。」

由紀「高級…だからね！」

美紀「この缶詰め…高級って書いてありますが、実際はいくらなんですか？」

強気に『高級』と書かれたそのラベルを見つめ、美紀はこれを見つけた彼に尋ねた。

「さあ？棚の下に転がってたんで、値段までは分からないです。」

美紀「そうですか…気になるなあ。」

悠里「本当に美味しいわよ…ほら、みんなも食べて？」

悠里はそう言って缶詰をテーブルの中央に置き、全員の顔を見回した。

胡桃「いや、ゲームで勝ったのはりーさんだし、一人で食べなよ。だいたい…これ量が少し少ないから、みんなで分けたらなくなっちゃうよ？」

悠里「いいの！一人で食べてもつまらないし…みんなで分けて食べましょー！」

美紀「でも、ゲームの意味が…」

悠里「あれはただ楽しむ為にやった…そう考えましょ？」

悠里は箸でその缶詰めの中身を一口分だけ取りだし、由紀の口へと運んだ。

悠里「由紀ちゃん、あくんして？」

由紀「…いいの？ほんとに？」

悠里「いいの！ほら…、はやく。」

由紀「…えへ、わかった！あくくん」

美紀（やっぱり由紀先輩…りーさんの子どもみたい）
少しだけ躊躇いつつも由紀はその口を開ける。

悠里はそこに箸を運び、由紀に缶詰めの中身を分け与えた。

由紀「おく！ほんとだ!!おいしく！」

悠里「でしょ？ほら…みんなも一口ずつ食べてね？」

胡桃「……いいの？」

美紀「なんか、悪い気がしますけど…」

悠里「ああもう！遠慮しないの！」

面倒そうに言う悠里を見てこれ以上断り続けるのも悪いと思い、胡桃達も渋々それに手をつけた。

胡桃「うわ…うまつ！何これ…」

美紀「缶詰めですが…缶詰めじゃないみたいです。美味しい…」

悠里「ふふつ、やっぱりみんなと分けた方が美味しいし…楽しいしわね。ほら、——君も食べてね？」

「…はい、いただきます。」

彼はその缶詰めに箸を伸ばしながら思った。

自分が誰を選ぼうと、きつと彼女達はこうして他の人にも分けていただろうと…

この光景を彼は最初から予想していた為、箸を伸ばしながら…予想通りのその光景に思わず笑ってしまふ。

胡桃 「ん？なに笑ってんの？」

「いや、なんでもないよ…」

(りーさんだったからって訳じゃない。由紀ちゃん、美紀さん、胡桃ちゃん…誰を選ぼうと、きつとこの人達はこの缶詰めを一人では食べず、分け与えたと思う。そういう…優しい人達だからな…)

カツン…カツン…

「…ん？」

カツン…カツンツッ！

彼は不思議に思った。

悠里が分け与えてくれたその高級缶詰め…その中をいくら箸で探っても、箸が缶に当たる音がするだけで一向にその中身を掴めない。

(…変だな)

彼はそれを手に取り、中身を覗き込む。

「……………っ!？」

悠里 「…どうかした？」

缶詰めを持って黙る彼を見て、悠里は声をかける。
彼はそつとその缶詰目をテーブルに置き、残念そうに言った。

「か、空っぽでしたあ…」

悠里「えっ!?!」

中身を覗き込む悠里、確かにその中にはもう具は入っておらず、わずかに残るのは底にたまった汁のみだった。

悠里「あ、あら…ご、ごめんね?ちゃんと量を確認すれば良かったわね、悪いことしちゃった…」

「いえ…大丈夫です…」

由紀「ほ、ほら!まだ少しだけスープが残ってるよ!?!これ飲みなよ!」

そう言って由紀は残念そうな顔をする彼に缶詰目を渡した。

彼は少しだけ間を開けてからそれを口につけ、底に残った汁だけを飲む。

「……………」

美紀「ど…どうですか?」

由紀「美味しい…よね?」

「……………しよっぽこ」

そう一言呟き、彼はその缶詰目をテーブルに置く。

カランカラン…と、むなしい音が車内に響いた。

悠里「ぎ、残念…だったわね」

「いえ…お気になさらず…」

由紀「また…見つかるかもよ？ほら、元気だして！」

美紀「そうですよ！ね、胡桃先輩？」

胡桃「ん、ん…そだなあ」モグモグ

先程もらった缶詰めの中身を味わうようにしてじつくりと噛みながら胡桃は答える。

そんな彼女を見た由紀は一つのアイデアを思いつき、立ち上がってそれを彼に伝えた。

由紀「——くん!!まだ諦めるのは早いよ！胡桃ちゃんがまだ食べるから…口移しでそれをもらえば…」

胡桃はそれに凄まじい速さで反応して立ち上がり、由紀が言い切る前にその頭を叩いた。

バシツ!!

由紀「イタあつ！」

胡桃「バカなこと言うな…怒るぞ！」

由紀「もう怒ってるよお。」

胡桃「つたく！」

由紀に呆れながら再び席に座る胡桃。

直後に胡桃は隣に座る彼に肩を叩かれ、そっとそちらを向いた。

胡桃「ん…？なに？」

「もう…飲み込んだじゃった？」

胡桃 「くっ／＼／＼お前…ほんつとにバカだな!!」

「冗談だよ冗談、やだなあ…本気にしちゃって〜」

顔を赤らめる胡桃を見て彼は小馬鹿にしたようにヘラヘラと笑い、食事を続ける。

「だいたい、僕が本気で口移しを求めるような人間だと思いま…」

胡桃 「思う」

目の前の食料を食べながら言った彼の言葉に胡桃は即座に答え、その目を睨んだ。

「いや…まあ確かに口移ししてくれるなら食べますけど。そんな食い気味に答えなくても…」

胡桃 「少なくとも、あたしは一生そんな事しないから…ちゃんと覚えとけよ。」

悠里 「私もね」

美紀 「同じく」

由紀 「私も〜」

「はいはい…まあ、元からそこまで期待はしてませんよ。」
そんな下らない会話をしながら彼女達は食事を終え、その片付けをしてから服を着替える為に彼を外に出す。

胡桃 「じゃ…終わったら呼ぶから、それまで大人しくな？」

「ねえ、思っただけだけど僕はわざわざ外に出なくても目だけ瞑ってれば……」

バタンツ!!

彼の意見は最後まで聞かれる事なく、ドアによって阻まれた。

「さすがにもうヤバいって分かってるから……覗いたりしないのになあ。信頼されてないな……」

夜の外：ライト片手にそう呟きながら、彼は車から少しだけ離れたところで彼女達に呼ばれるのを一人で待つ。

一方で彼女達は彼のいない車内で着替えを始めながら、途中で由紀に仕掛けたドツキリの話をしていた。

胡桃「どう？アイツが出てくって言った時……焦った？」

由紀「焦ったっていうか、悲しかったよ！今まで楽しく過ごしてたように見えてたのに、ほんとは一人の方が楽だったのかな……とか思っちゃったし」

悠里「私もビツクリしたわ……あんな心臓に悪いドツキリ、もうやめてね？」

胡桃「わるいわるい、もうしないよ。」

悠里「あれ……三人で外に出てる間に考えたのよね？二人とも最初は君を説教するために出て行ったのに、いつから標的を由紀ちゃんにしたの？」

美紀「……さんへの説教自体は一時間くらいで終わりました。本人がそれなりに反省していたのもありますし……何より元々仕掛けたのは私達ですからね。そんなに強くは怒れませんでした。」

胡桃「まあ、一時間説教してる時点で中々に効いただろうしな…」

悠里「あなた達、外に六時間くらいいたけど…じゃあ残りの五時間は何をしていたの？」

胡桃「由紀にやるドツキりの内容考えてた…」

悠里「五時間も？」

胡桃「ず、ずっとそればっか考えてた訳じゃないよ？ちまちま普通にお喋りしたりもしてたけど…まあ、ほとんどはそれかな？」

悠里「呆れた…あんまり長いから途中で探しに行こうかと思ったけど、みんな窓の外見たら普通に近くにいたのよね。だから…説教が長引いてるとばかり…」

美紀「離れると心配かけるでしょうから、ずっと近くにいました。」

胡桃「夢中になり過ぎて…昼飯食うの忘れたわ。」

美紀「ですね…おかげで夕食がいつも以上に美味しく感じました。」

由紀「私達は普通に食べたよ。ね、リーさん！」

胡桃「呼んでくれれば良かったのに…」

悠里「――君を外に連れ出す時の二人が怖くて…邪魔しちや悪いと思ってたの」

美紀「まあ、あの時は…かなり本気で怒ってましたからね」

胡桃「たぶんあたしよりも美紀の方が怒ってたよな？最初の説教も一時間くらいで終わったって言ったけど、あたしが五分…美紀が五十分くらいの割合だったし」

美紀「…前から気になってたんですが、胡桃先輩は——さんに対して少し甘くないですか？」

胡桃「えっ？そうかな…」

美紀「そうですよ！あの人が謝ると胡桃先輩はあっさりと許します。」

胡桃「まあ…アイツは普段よく頑張ってくれてるし、基本的にはいい奴だろ？だからさ…なんていうのかな、あんまり憎めないんだよね」

悠里「本当に胡桃は優しいのね…。私、胡桃が彼を外に連れ出した時はさすがに殺しちゃうかと思ったわ」

由紀「わ、わたしも…」

胡桃「失礼だな!?まあ、美紀は本当にアイツを殺しそうなくらい怒ってたけど…」

美紀「うっ…だって冗談半分で告白みたいな事をするとか…ひどくないですか？」

由紀「で…、その返事はどう返す気だったの？もしかして…オツケーしようと思ってた!?!」

美紀「…しません！お断りするつもりでした!!まだそこまで親しくはないですし。」

由紀「え〜？そうかなあ…仲良いじゃん」

美紀「友達としてはそうかもですが…恋愛的な意味ではまだ少し、ってところですかね。」

由紀「ほんとかなく？嘘…ついてない？」

美紀「…怒りますよ？」

由紀「ご、ごめん…」

由紀「ま、まあでも…結局——くんは私達の事好きだし、みんなもくくんが好きなんだよね？」

由紀「わたしは大好きだよ！もちろん…りーさんも胡桃ちゃんもみーくんもね!!」

胡桃「ま…、アイツが好きかどうかはさておき、嫌いなヤツはこの中にはいないだろ。」

由紀「あ！私それ知ってるよ！『ツンデレ』ってヤツでしょ？さっすが胡桃ちゃん!!」

胡桃「おい…本気で怒るぞっ！」

由紀「ご、ごめんなさい…。も〜！みーくんも胡桃ちゃんもすぐ怒る〜！」

美紀「ふざけた事ばかり言ってるからですよ。」

悠里「でも…よかった。一時は本気で喧嘩になるかと心配したけど…みんな仲良しみたいね、ひと安心だわ。」

悠里が肩を撫で下ろしてひと安心する。

そして彼女達は全員着替えを済ませ、美紀が彼を呼びに向かった。

美紀「お待ちせしました。もう良いですよ！」

美紀は少し離れたところで座って待機していた彼の元に駆け寄り、優しく声をかける。

彼は美紀に声をかけられるとすぐに立ち上がり、彼女を見つめた。

「了解です。じゃ、帰りますか」

美紀「はいっ。」

彼は車に近付き、そのドアに手をかける…

美紀「あのっ…」

「はいっ？」

美紀に声をかけられ、その手を止めた。

美紀「いえ、今日は…お疲れさまでした。楽しかったです！」

「…はい、楽しかったですね。」

美紀「ふふっ…それを伝えたかっただけです。…さっ、戻りましょ？」

そう言われて彼はドアを開き、彼女達の待つ車内へと入る。

また明日からは場所を少しだけ変え、探索を始めねばならない。

彼女達は疲れていたせいかもしれないもより早めに明かりを消し、そのまま眠りにつく。

この2日間かなり疲れはしたが、彼女達にとって…それは楽しい思い出になった。

第七章・やしき

五十八話『雨とひつじ』

ゲームを終えたその翌日…時刻は午後二時頃。

彼女達は前日まで滞在していた広場を離れ、今はそこから離れた場所に位置するコンビニ…その前に車を停めていた。

そして、本日の天気は雨…激しくもないが小降りでもない。

そんな雨が降り注ぐ外の様子を車内…窓際の席から見て、彼はボソッと呟いた。

「雨……ですねえ」

美紀「…ですね」

彼の正面の席に座りながら、その呟きに美紀が相づちを打つ。

今、車内にいるのはこの二人のみ。

悠里、由紀、胡桃の三人はというと、この二人に留守番を任せ、目の前のコンビニの中を探索している最中だった。

美紀「なんだか、暇そうですね？」

「…それなりに」

美紀「先輩達と一緒にに行けば良かったじゃないですか。」

「コンビニには特に用も無かったし、あの人達もすぐに戻ると思ってたんです。でも…」

彼は車内の窓のからコンビニの方を見る。

そこではあの三人が楽しそうに笑いながら、何かをバッグに詰めていた。

美紀「あの様子、何も収穫が無かった……ってことは無さそうですね。もう10分以上中にいますし……」

「さすがに暇だし、少し様子見てこようかな。美紀さんもどうですか？」

美紀「私は留守番してるので結構です。」

「そですか……じゃあ僕はちよつと様子見てきますので、何かあったら呼んでください」

美紀「はい、わかりました。」

ボタンッ!

彼はドアを開けると傘を持たずに外に降り、駆け足でコンビニの中に入っていった。

中に入っすぐ、彼はまず胡桃に声をかけられる。

胡桃「おっ、どうした?」

「いや、思ってたより少し遅いんでね……何か良いのあったのかなって」

由紀「うん!ジュースがたくさんあったよ!!」

胡桃の背後から由紀が現れ、嬉しそうにバッグを開けて彼に見せる。

その中にはジュースの入ったペットボトルが数本……そして、絆創膏や包帯等の医療品も入っていた。

「これ……この絆創膏とかもここにあったんですか?」

由紀「うん、他にも……りーさんがお菓子とか見つけたよ!」

そう告げる由紀の後ろでは悠里がしゃがみ、手に入れた物資をバッグに綺麗に詰め直している：悠里のバッグもまた、それなりに物が入っていた。

「凄いな、ここ…：大当たりですね。」

胡桃「ああ、コンビニなんて、大概漁られてるもんなんだけど…ここは違ったみたいだな。」

由紀「日頃の行いが良いからだね！」

胡桃「…誰の？」

由紀「えつと…：私？」

胡桃「…：はあ」

その発言にあえて胡桃はツツこまず、ため息だけついて下を向く。

由紀「な、なんか…：普通にバカにされるよりショックな反応だよ…」

悠里「でも、本当に当たりね。これが由紀ちゃんのおかげかどうかはさておき…：かなり助かるわ。」

「…ですね」

悠里「もう少しだけ必要な物を詰めたら戻るから、待っててね？」

「あの…：根こそぎ持っていくのはダメですか？」

悠里「ちゃんと必要な物だけを厳選しないと置き場に困ってしまうし…、それに万が一、私たち以外の人がここに来た時の為にいくつかとっておいてあげた方が良いでしょう？全部独り占めしちゃうと、他の人が困ってしまうから…」

「へえー…、優しいですね。」

悠里「こんな世の中でも、人を思いやる気持ちくらいは失わないようにしたいの。」

胡桃「自分たちが生き延びる為に他の人を蹴落とす…なんて事はしたくないからな。」

由紀「そうだよ！独り占めばかりしてちゃダメ!!」

胡桃「まあ、そんな由紀はここにあつたお菓子を根こそぎ持つていく気であるけどな？」

由紀「うぐつ!?!だ、だって…もう賞味期限近いし、それに数も元から多くはなかったから…」

胡桃「…冗談だよ。気にすんな、持つてけ。さすがに賞味期限が切れかけの物を置いてくのはもつたいたないからな」

由紀「そ、そう?じゃあお言葉に甘えて…」

そう言つて由紀は奥の棚から遠慮がちに袋入りのスナック菓子を取つてくる。

数はたったの二つ…。彼女はその二つのスナックを、嬉しそうにバッグへと詰めた。

胡桃「ん、なんだ…二つしかなかったのか？」

由紀「うん、お菓子はこれだけだった。」

胡桃「へえ、他の物資はそこそこあるのに…お菓子だけ異様に少ないな。」

悠里「由紀ちゃんみたいなのが来てたのかもね？」

胡桃「ははっ、そうだな。」

お菓子を詰める由紀を見て、悠里と胡桃が笑い合う。

目の前にあるそんな暖かい光景を…彼は見守っていた。

(生き延びてる人達がみんなこの人達みたいな人間なら、この世界もまだマシなんだけどね…。もしかして、今となつてはこの人達みたいな人間の方が少ないのかも…)

(自分が生き延びる為に他人を蹴落とす…そんな人間ならまだしも、ただ楽しむ為に他人に手を出す…そんな人間がいても、おかしくない…)

(それに加えて、外にはゾンビ達。数が多くてどこにでもいる分…こつちの方が問題か。悩みの種は尽きませんなあ…)

「……はあ」

胡桃「なんだよ、ため息なんてついてさ。悩み事か？」

「ううん…なんでもない。…そろそろ詰め終えました？」

悠里「ええ。お待たせ！」

そう言つて悠里と由紀は立ち上がり、物を詰めたバッグを抱えた。

胡桃「んじや、戻るか。」

由紀「おっと！傘…ちゃんとささないかね。」

悠里「そうね。雨、強くなつてるみたい…」

彼女達は店内の隅に置いておいた傘を持ち、外に出てそれをさす…彼が車から店内に来てまだ10分と経っていなかったが、雨は彼が外へ出た時よりもずっと激しくなっていた。

由紀「あれ？——くん傘は？」

外へ出ず、店内で一人苦い顔をする彼に由紀が尋ねる。

先ほどはまだ雨が弱めだったので、彼は傘など持ってきていなかった

た…

しかもコンビニの駐車場は放置された車両で埋まっていた為、彼女達がキャンピングカーを停めたのはそのコンビニの真正面、道路を挟んだ地点にある別の駐車場：距離は約20m、この雨の中でそれほど距離となれば…車にたどり着く前に、彼がびしょ濡れになるのは必至だった。

(少しの時間でここまで天候が悪くなるなんて…。この距離…ダツシュすればいけるか!?)

そう考えた彼はやけに遠く見えるキャンピングカーを見つめ、ダツシュの姿勢をとる。

悠里「ちよつとちよつとつ！雨の中走るのは危ないからダメよ!?!傘が無いならちゃんと言う!!」

悠里は駆け抜けようとする彼の前へと立ちはだかってそれを止め、そつと自分の傘を彼の頭上へと寄せた。

悠里「少しの距離だから…、一緒に入りましょ?」

「…りーさん、またあのゲームやってるんですか?」

悠里「なっ!?!違うわよ!これは真正銘…ただの善意なの!!ほら、入る入るっ!」

疑いの目を向ける彼の手を引き、悠里は彼と一つの傘を共有して雨の中を歩き出す。

すると当然のように、由紀が二人を見て興奮気味に声をあげた。

由紀「相合い傘だ〜!いいねえ〜、青春だね〜!」

悠里「由紀ちゃんっ!ちゃんと前見て歩く!滑って怪我するわよ!」

由紀「は〜い♪」

はしやぐ由紀を尻目に胡桃は冷静に辺りを見回し、ちらほら見える

人影に警戒し始める。

胡桃「ちようど詰め終えて良かったな…。少しだけだけど、奴らが集まって来てる…」

悠里「もう少し長引いたら危なかったかもね…。早く車に戻りましょう。」

由紀「胡桃ちゃん、足元気を付けてね？」

胡桃「わかってるよ、お前もな。」

奴らとは比較的安全な距離があったが、四人は念のため駆け足でキャンピングカーに戻り、そのドアの前にたどり着いた。

そして…四人はすぐ、それに気付く。

悠里「なに…これ？」

胡桃「オイ由紀…、お前だろ！」

由紀「違うよ！私もつと上手いもん！」

「ひっじ…ですかね？」

四人は中へと入らず、傘をさしたまま車のドアを見つめる…

雨に打たれた事で多少にじんでいたが、ドアには青い色のペンか何かで小さな羊のような絵が描かれていた。

悠里「こんなの…いつから…」

「さっきまでは、無かったと思いますが…」

由紀「……」

胡桃「…とりあえず中に入ろうぜ？アイツらも少しずつこっちに来てるから急がないと…」

悠里「そうね…入りましょう」

傘をたたみ、四人は車内へと戻る。

すぐに胡桃は運転席に座り、急いでその場から離れる事にした。

由紀「ねえみーくん、ドアに変な絵が描いてあったんだけど。」

美紀「変な絵？なんですか、それ…」

悠里「多分…羊かしらね。青いペンで描いたみたい」

美紀「えっ？由紀先輩がですか？」

由紀「だから私じゃないよ〜！」

美紀「じゃあ…誰が？」

悠里「私達がコンビニにいる間に誰かが来て描いていったのかも…。私達が出た時はあんな絵無かったと思うし、後から——君が出た時も無かったみたいだから。」

「美紀さん、誰か見かけましたか？」

美紀「すいません…座っていた席の窓から外の確認はしていましたが、反対の…ドアの方までは確認してませんでした。」

悠里「大丈夫よ。まあ…少し気持ち悪いけど、絵が描いてあっただけだしね。」

胡桃「でも美紀が一人の時に誰かが外でこっそりと描いてたって事だろ？…わりとマジで気持ちわりい…こんなの、ちよつとしたホラーじゃねえかよ…」

運転席の胡桃が車を走らせながらぼそつと呟く。

確かにかなり気味の悪い物だったが…あの場から離れれば大丈夫だろうと思い、みんなそれ以上の言葉は出さなかった。

悠里（雨の日ってただでさえ気が滅入るのに…、誰がこんないたずら…）

走る車…その中で悠里は激しい雨の降る外を見ながら、一人深いため息をついた。

五十九話 『ついていない日』

美紀「ん〜？無いじゃないですか…そんな絵」

あの後、少し離れた場所まで車を走らせ、適当な空き地を見つけてそこに一時的に車を停める事にした。

あの絵を見たがった美紀は由紀と共に傘をさしながら外に降り、ドアを見たが…もうあの絵は消えていた。

由紀「あれ？変だなあ〜。ほんとにあつたんだよ？ひつじさんの絵」

美紀「う〜ん、雨で消えちゃったのかも知れませんね。」

由紀「さんねんだね…み〜くんにも見せてあげたかったよ。…あつ！せつかくだから似たのを私が描いてあげようか!？」

美紀「いえ…けっこうです。ほら、戻りましょう」

ボタン…

胡桃「どうだった？あつたろ？」

美紀「いえ、もう綺麗に消えてました。雨で流れてしまったみたいですね」

悠里「あら、そう…。まあ、私達が見た時も少しにじんでたものね」
向かい合って席に座る胡桃と悠里。

戻った美紀と由紀はそれぞれの隣に座り、頭を悩ませる。

美紀「少しだけ気味が悪いですね。私達以外の生存者があの場にいる…、という事なのかな…」

悠里「そう…でしようね。」

由紀「じゃあさ、戻ってあげた方が良くない？一人ぼっちで困ってる人かもよ？」

胡桃「いやあ…困ってるなら普通に声をかけるだろ。なのに、そう

しないでわざわざバレないように絵だけ描いて逃げたんだぜ？」

由紀「うくん…人見知り？」

胡桃「いやいや…」

由紀「ベテランサバイバーの——さん！あなたはどうかお考えでしよーか？」

一人離れた席に座る彼にマイクを向けるような仕草をして、楽し気に由紀が尋ねた。

「えっ？んく…どうでしょうね。正直、まったく謎ですよ。…つていうかベテランサバイバーって何ですか…」

由紀「——くんも分からず、りーさん達も答えを出せない…。つまり…この事件は迷宮入りだね！」

悠里「いえ、もしかしたら…」

突如、悠里が思い付いたように呟く。

由紀はそんな彼女の方へと振り向き、彼にしたような仕草をして尋ねる。

由紀「さすがりーさん！分かりましたか？」

悠里「ふふっ…」

尋ねる由紀に対して悠里はニヤリと笑い、少しだけ低めの声で答えた。

悠里「幽霊…かもね？」

由紀「うぐっ!?ほ、ほんとに…?」

悠里「由紀ちゃんと友達になりたくて、それであんな絵を描いたのかもよ？」

由紀「わたしっ!?わ、悪いけど幽霊の友達はちよつと…：代わりに胡桃ちゃんをその人の友達に…」

胡桃「な!?!ふざけるなっ！あたしだっつてやだよ！」

由紀「私はやだとは言ってないよ!?!ただちよつと遠慮しただけだも

ん…！だから呪うなら胡桃ちゃんをく！！」

胡桃「あつさりと友達を売るなあ！！」

そう怒鳴りながら胡桃は由紀の胸ぐらを掴み、ぶんぶんと強く揺さぶる。

由紀はその手を振りほどこうとしながら、必死に謝り続けた。

由紀「ごみんごみんく！！冗談っ！冗談だよお！！」

胡桃「冗談でも…絶対にそういう事言うなよ！！」

由紀「うく、わかった…ごめんなさいく。」

胡桃は由紀から手を離して、ボソツと呟く。

胡桃「まったく…本当にあたしだけ呪われたらどうすんだっての…」

美紀（由紀先輩はともかく、胡桃先輩までリーさんの話を本気にしてる…。100%冗談なのに…）

「とりあえず今日はここで休みます？それとも、もう少し移動しますか？」

悠里「んく、そうね。もう少しだけ移動して、別の安全そうな場所で休みましようか。胡桃、運転頼める？」

胡桃「はいよく。」

悠里にそう返事を返してから胡桃は運転席に座り、車を走らせた。

その隣…助手席には悠里が座り、地図を見ながら彼女をサポートする。

悠里「えつと…この先だと、良さそうな公園があるわね。そこにする？」

胡桃「そこ、広いの？」

悠里「ええ、広いみたいよ。」

胡桃「んじや、そこにするか…ナビよろしく」

悠里のナビに従い、胡桃は車を走らせていく。

その間、由紀達は席に座りながら会話を交わした。

由紀「雨やまないねえ…」

「そうですね…」

美紀「勢いも増してますし、やむとしても明日ですかね。」

由紀「ええ〜！じゃあ外で遊んだりするのは無理ってこと？」

美紀「まあ、天気なんてよく分からないので、もしかしたら急にやんだりするかもですけどね…。」

由紀「あいまいだなあ。天気予報さえみれば…」

「これだけ地面が濡れてたらどのみち遊ぶのはムリでしょう。靴がぐちやぐちやになりますよ」

美紀「そうですね。先輩…諦めてください。」

由紀「仕方ないからそうするよ…。こうして皆とお喋りしてるだけでも、十分楽しいしね♪」

美紀「ふふっ、そうですね。」

三人がそんな会話を交わしていると、突如道路の真ん中で車が止まる。

彼は席から胡桃に声をかけ、どうしたのかと尋ねた。

「…どうしましたか？」

胡桃「目的地はこの先なんだけどな…ちよつと奴らが道塞いでて、通るのは厳しそうだなあ。」

「どかしてきましょうか？数によっては頑張ってくださいよ？」

その発言を聞き、胡桃は道の先にいるゾンビの数を大まかに数え、彼に伝えた。

胡桃「数は15〜20くらいかな…。いける？」

「もちろん無理です!!引き返して下さい。」

即答する彼だったが、その答えは正解だと胡桃と悠里は思った。

あの数を相手にするのは危険…

それに、他の道はまだいくつかある。
ここは引き返して、安全な道を探すだけだ。

胡桃「いい判断だな…。あの数相手にしようとしたら…さすがに止めるわ」

悠里「そうね、案内するから：他のルートから行きましようか。」

胡桃「そうするか、わざわざ轢いて通るのも嫌だし…：なによりもそんな事して車が壊れたらたまつたもんじゃない」

胡桃は奴らがこちらに気付いて接近される前に車をUターンさせ、来た道に戻る。

少し戻ったところで先程とは別の道を選択し、そのルートを進むことにした。

悠里「こつちからだと多少遠回りになるけど…：まあ、仕方ないわね」

胡桃「そういう事だな…。ま、遠回りになるつつつてもたかが5分〜10分の違いだろ？」

悠里「ええ、多分そんなものだと思う…」

胡桃「なら全然オツケー。問題なし！」

美紀「道が塞がれてるなんて…：珍しいですね」

「移動中の集団に偶然当たっちゃったんでしようね。運が悪かったかな…」

由紀「でもこつちの道からでもちゃんと目的の公園には行けるんでしょ？：ちよつと遅れちゃうだけで」

悠里「うん、ほんのちよつと遅れるだけ…。だからあなた達はのんびりしてて。遅れた分を入れても、20分以内には着くハズだから」

由紀「は〜い！」

美紀「着いたら着いたで、この雨ですから…：外には出れませんね。

夕飯の支度しようにもまだ時間がありますし…、やる事がないです。」
由紀「そこは上手く考えて車内での有意義な時間を過ごすんだよ！」

美紀「…例えば？」

由紀「うーん…どーしよーかなあ…」

「由紀ちゃんが作戦を考えてる間に僕は寝ますから…何かあつたら起こして下さい。」

由紀「寝ちやダメだよっ！一緒に考えるんだから！」

顎に手を当てて考えてる由紀を見て、彼はテーブルに顔を伏せて眠ろうとする。

由紀はそんな彼の肩を揺さぶり、無理やり眠りを妨げた。

「いやー、そこは由紀ちゃんと美紀さんに任せますよ…。僕はそういうの考えるの苦手ですから」

美紀「いや、私も苦手です！なので、ここは由紀先輩に全てを任せる形に…」

由紀「二人とも全然やる気が無い…!!このままじゃ目的地に着いても全員がダラダラして夜を迎える事になるよ！」

立ち上がって力説する由紀。

そんな彼女に向け、運転中の胡桃はボソツと呟いた。

胡桃「ダラダラするのはお前だけだろ。他の人はそれなりにやる事があるし…」

由紀「失礼なっ！私もやる事が……………」

胡桃「聞こえてたのか…。で、やる事ってのは？」

由紀「……………」

胡桃「……………」

由紀「りーさん…今日はいつも以上にお手伝いするからね」
悠里「あら、ありがとう♪」

胡桃（やる事…特に無かったんだろうな…）

由紀「私はともかく、——くんだってやる事ないでしょ？あまり手伝いとかしてるイメージないし」

「…僕を標的にしないで下さい。」

突然の由紀のその発言に対し、彼は相変わらずテーブルに顔を伏せたままですう呟く。

美紀「あれ？——さんって、わりと私達の手伝いしてくれますよね？」

「まあ…そこそこ…」

悠里「頼まれた事に対しては嫌な顔せず、何でもしてくれるイメージがあるけど…」

胡桃「だつてさ。由紀が思ってた以上に働き者だったな。コイツは…」

由紀「うう、いつの間にみんなからこれほどの信頼を…：恐ろしいよ」

美紀「先輩も遊んでばかりいると、——さんに人気を取られちゃいますよ？」

由紀「人気を…取られるっ!?わ、わかった！私…これからはすごくがんばるっ！みんなの為に！」

胡桃（人気を取られそうになって焦るって、お前はアイドルかなんかかよ…）

奮起する由紀をバックミラー越しに見て、苦笑いを浮かべる胡桃。だが同時に、微笑む由紀はとても可愛らしく見えていた。

胡桃（でも…由紀はある意味、あたし達のアイドルみたいなものなのかもな…。あいつの笑顔には何度も救われたし。）

胡桃（アイドル…アイドルねえ…）

『アイドル』というその単語が頭に引つ掛かり、胡桃は考える…
彼女達それぞれのアイドルとしての適正を。

胡桃（あたし達の中で、アイドルとかに一番向いてるのはやっぱり由紀だよな…。誰とも分け隔てなく接するし、いつもにこにこしてる…。それに、あの子どもっぽい性格も人気に繋がりそうだな）

胡桃（美紀はどうだろ…？短髪が似合う、クールな女の子…。んく、なんか…あれだな、女性人気が強イアイドルになりそうだな。でも、たまに見せる女の子らしい表情もフツーに可愛いから…そういうのを見せたら、男性ファンもたくさん付きそうだな）

胡桃（リーさんは…めっちゃめっちゃグラビア映^ばえするアイドルになるな。間違いない…。リーさんの水着姿、何度か見てるけど…やっぱりあたし達とは基本が違う…。リーさんがアイドルになつて写真集とか出したら…凄イ売れそーだなあ…）

胡桃（あたしは…ダメだ。我ながらまったく想像ができない…。あたしがフリフリの衣装着て歌ったり、踊ったりする。それって…どうなんだろうか…）

悠里「…るみ」

胡桃（アイドルっぽい衣装…どこかで探してみて、そのうち着てみようかな…）

悠里「…胡桃、聞ってる？」

胡桃「…あつ、ごめん。なに？」

悠里の呼び掛けに胡桃は少しだけ遅れてから気づき、返事を返した。

悠里「次の曲がり角を右よ。しっかり頼むわね。」

胡桃「あゝ、わりい。考え事してて…」

悠里「へえ…、何を考えてたの？」

胡桃「…別に。ただ、りーさんのスタイルって凄いなあと思ってたさ」

悠里「な、なんで急にそんな事を…」

胡桃「マジでさ、グラビアアイドルとか興味ない？」

悠里「なっ!?!ありませんっ!ほらっ、バカな事言っつてないで運転に集中してっ!!」

胡桃「はあゝい。」

頬を赤らめながらそう言っつて悠里は怒る。

胡桃はそんな彼女を見て、ニヤニヤしながらハンドルを切った。

胡桃「ここを曲がって…それから？」

悠里「この住宅街を道なりに進んで行けば途中でT字路に当たるはずだから…そしたら左に曲がってね。」

胡桃「左だな?よし、りよーかい」

胡桃が悠里の指示を受けてハンドルを切る中、その後ろで由紀は何かを思い付いたらしく、大きな声をあげていた。

由紀「よおし!目的地に着いても夕飯までかなり時間があるし、それまで『恋バナ』でもしよつか!!」

「恋バナって…由紀ちゃん、大丈夫ですか?」

由紀「ん〜?なにが?」

「いや…恋バナなんかしても、由紀ちゃんは語る程の経験が無さそうだから…」

美紀「それ、私も思いました」

はりきる由紀を相手に、彼と美紀は冷たく言い放つ…

由紀はそう言われてからほんの少しだけ考え、苦笑いしながら答えた。

由紀「えへへ、みんなの経験談をもとにして…それをこれからの自分に生かそうかなあゝってね。」

美紀「ようするに…、人にふるだけふって、先輩は何も話さないと…」

由紀「だ、だって…恋愛経験とかないんだもん」

美紀「まあ…、私もありませんけどね。」

何気ない美紀のその一言に、彼は反応を示し、大きめの声で彼女に尋ねた。

「っ！本当ですかっ!?!」

美紀「なんであなたが食い付くんですか?」

「由紀ちゃんが恋愛経験無しってのは分かります!でも…美紀さんはあるでしょう!?!あなたは高校生なのですよ!?!」

美紀「べ、別におかしい事はないでしょう!?!由紀先輩だって無いつて言ってるのに、どうして私にだけ食い付くんですかっ!由紀先輩にも食い付いて下さい!!」

「由紀ちゃんは脳内年齢が10才程度で止まっている特例ですので放置です!!」

由紀「うわあ…：本人を前にしてなんて失礼な言葉を…少しシヨツク」

美紀「そ、そう言われると返す言葉がありませんが…。」

由紀「返そうよ〜!ちゃんと『先輩はそこまで子どもじゃない!』って返そうよ〜」

「でも…美紀さんは脳内が幼い由紀ちゃんと違い、中身も大人です。そんな人が恋愛経験無しなんて…僕は信じない!いくらなんでも片思いした事くらいはあるハズっ!」

美紀「お言葉ですが…先輩が幼いのは脳内だけではないですよ。体もです!!」

「ぐっ!?!そうきましたか…!」

由紀「ねえねえりーさあん。——くんとみーくんが私をいじめる

」

悠里「二人とも、由紀ちゃんをいじめちゃダメ！それと——君。高校生でも恋愛経験が無い女の子くらい、普通にいるわよ。」

助手席に駆け寄ってきた由紀の頭を撫でつつ、悠里は彼に向けて告げた。

「ほ、本当ですか…？じゃあ、リーさんも…」

悠里「う〜ん…正直、気になる人は何人かいたんだけど、じっくり見ている内にその人の嫌な所に気づいちやつて…結局好きになる所までいかないのよね。」

美紀「あ、それちよつとわかります。少し外見が良くても、言動がキツかったりすると一気に気持ち冷めるんですよ。」

その発言を聞いた彼は美紀の方を見て、精一杯の丁寧語を使う。

「あなた方は外見ばかり着飾る男性をあまり好まない、という事でございいますか？」

美紀「かといつて…、異常に丁寧な言葉を急に使う人が好きかというところも違いますよ？」

「そうですか。そりゃ残念…」

由紀「でも大丈夫！まだ恋バナをする希望はあるよ！われらが学園生活部の秘密兵器…恋愛マスター胡桃ちゃんがいるもん!!」

胡桃「その肩書きはなんだよ?!言つとくけど、あたしもそんなに恋愛経験無いからな!？」

由紀「…『そんなに』?つまり…、少しは経験があるって事ですかな!？」

「なっ！本当ですか!？」

胡桃「っ…！間違えた！全然っ…全然無いからっ!!」

由紀「ほんとかなあ？」

胡桃「ほんとだよ！だいたい恋バナなんて、男の前で出来るわけな

いだろ!？」

由紀「あく、つまり——くんに聞かれるのが恥ずかしいと…。」

胡桃「あくもう!!そいつがどうこうじゃなくて!普通は女の子だけであるもんだって言ってんだよ!!」

赤い顔を真正面に向けてハンドルを切りながら、胡桃は由紀を相手に怒鳴る。

由紀はそんな胡桃の反応が面白くて、ついつい意地悪な発言を重ねていってしまう。

由紀「またまたく照れちゃって。乙女だなあく♪」

胡桃「うぐっ!お前いい加減にっ…!!」

悠里「由紀ちゃん、あまり胡桃を困らせちゃダメでしょ?」

由紀「…:…ダメ?」

悠里「ダメ!ほら…、ちゃんと謝って?」

胡桃「そうだそうだ!あやまれ〜!」

由紀「ううっ…!ご、ごめん…」

胡桃「分かればいい、特別に許してやろう!ほら、大人しく座つてろ。」

由紀はとぼとぼと歩き出し、彼と美紀の待つ席に座ってテーブルに顔を伏せた。

由紀「じゃあ恋バナは無しかあ…。どうやって時間つぶそ〜かなあ…」

美紀「…:怪談でもしますか?」

由紀「怪談ねえ…:どうせなら夜やろうよ。昼間にやっても楽しくないし…:」

胡桃「怪談なんていつやっても楽しいもんじゃねえだろ…。勘弁してくれよ…:」

由紀「あ…:、そういうえばさつきは聞き忘れたけど、——くんは恋愛

経験無いの？片思いとかでもいいよ。」

「特には…無いですねえ」

美紀「まったく…人の事言えないじゃないですか。」

「すいませんね…」

由紀「じゃあさ…、私達の中で誰が一番好きかな？」

「好き…ってのはつまり…」

由紀「うくん…お嫁さんにしたい人！ほら、選んで？」

美紀・悠里・胡桃（とんでもない事を聞く…!!）

突然の由紀の発言に三人は思わず言葉を失う。

しかし、何気に彼の答えが気になるのも事実で…皆さりげなく耳を傾けていた。

「お嫁さんですか？えらく飛躍した話ですね…。恋人どころか、いきなりお嫁さん…お嫁さん、お嫁さん…ん…」

彼はしばらく瞳を閉じて熟考する。

由紀・美紀・悠里・胡桃の中で誰を選ぶべきなのか…

誰とならより幸せになれるのか…

そして何より、誰が好きなのか…

全てをまとめて答えを出した彼は閉じていた瞳を開け、口を開く。

「そう…ですね。僕は…」

由紀「うんうん！僕は…？」

美紀「……………」

胡桃「……………」

悠里「……………」

「みんなの中で、お嫁さんにするなら…」

ギギギイツ!!

由紀「うわあっ!?!」

美紀「つく!なんですか!?!」

大きい音とともに、突然車内が大きく揺れる。

胡桃が急にブレーキをかけたようだ。

胡桃「ごめんっ!大丈夫か!?!」

由紀「びっくりしたあ…どしたの?」

胡桃「道にバリケードみたいなのが出来て、通れなくなってる…。」

美紀「バリケード?」

悠里「ここを通らなきゃダメなのに…、どうなってるの?」

「……………」

彼と美紀と由紀は運転席の方に歩み寄り、目の前の光景を確認する。

ここは目的地に続くT字路、ここを左に曲がらなくてはならないのだが…そこには大きな板やドラム缶など、さまざまな障害物が大量に置かれ、道を塞いでいた。

「あらま…。とりあえず、降りてみますかね。意外と簡単にどかせるかもですし…」

胡桃「だな…。よし、降りよう。」

美紀「——さん、傘忘れないで下さいよ?」

「はい、分かっています。」

一同は車を降りてから傘をさし、間近でそのバリケードを見て、退かせそうかどうかを確認する事にした。

胡桃「くそっ、行く道行く道塞がれてるなんて…今日はやたらとついでないな…」

勢いよく雨の降り注ぐ外へと降りてすぐ、胡桃は一人眩いた。

六十話 『二度あることは…』

本日の拠点として一つの公園を選び、そこへと向かう悠里達だったが、途中で道を“かれら”の群れに塞がれていた為、仕方なく別の道へと変更。

しかし、目的地へと通じるT字路まで来たところで、今度はガラクタで作られたバリケードによって道を阻まれてしまう。

目の前に現れたそのバリケードをどかせそうか確認する為、彼女達は激しい雨の降る外へと降り立った。

「……ダメだな。簡単には動かせない」

片手で傘をさしながら、もう一方の手でバリケードを押し、ぴくりとも動かないのを確認してから彼は皆に告げた。

胡桃「くそっ！また別のルートからやり直しかよ…!？」

美紀「逆方向も同じように塞いでありますね…。誰が道路にこんなものを…」

彼女達が目指すのはT字路の左側の道だったが、その反対…右側も同じように大量の物で塞がれていた。

そしてT字路の左右どちらでもなく、その中央…そこには高さ2m、横幅6m程の大きな横開き式の門があり、一軒の大きな家の庭へと続いていた。

由紀「この家、すごいね〜！学校の校門みたいな門がついてるよ！お金持ちなのかな？」

美紀「え？…こっつて図書館かなんかの施設じゃなくて個人の家なんですか？」

そう尋ねる美紀に対して由紀は門の横に付けられたある物を指さす。

それはこの家の表札らしく、三文字の漢字だけが書かれていた。

由紀「普通のお家みたいだよ。だってこれって表札でしょ？えっと…、みず…なし…」

美紀「『水無月』^{みなづき}だと思えますよ。ここはその『水無月』って人のお宅みたいですね。」

由紀「へえ、みなづきさんか!!オシヤレな名字だね?」

胡桃「広い庭だなあ…門から家まで10m以上離れてるぞ…絵に描いたような豪邸じゃねえか」

門の隙間からその広い庭を覗いて胡桃が言う。

手入れする人がいないのか芝生が僅かに荒れているが、それでも十分に綺麗な庭だった。

悠里「少なくともこの家の庭にかれらはいないみたい…もしかしたら、生き延びた人がいたりしないかしら?」

「どうでしょうね…確かめてみたいですか?」

由紀「じゃあ、私が門をよじのぼって見てこよつか?」

胡桃「由紀じゃ無理だろ…」

由紀「見くびつちやダメだよ!私だってこのくらい…」

そう言っつて由紀は目の前の門をよじ登ろうと手を伸ばすが、片方の手は傘をさしている為使うことが出来ない。

仕方なくもう一方の手で門を掴むが、雨に濡れているからか上手く掴む事が出来ず、少し力を込めると滑ってしまっていた。

由紀「これは…雨のせいだね。雨が降ってなければきつとのぼれたよ!」

胡桃「はいはい、わかったわかった…」

由紀「ちよつとだけ、バカにされてる気がする…」

胡桃「気のせい気のせい」

由紀「ううっ…胡桃ちゃんなら、雨降っててもこの門のぼれる?」

胡桃「もちろん、鍛え方が違うからな!」

由紀「さすがだね!やってみせてよ!」

悠里「ちよつと！危ないからやめなさいよ!？」

胡桃「大丈夫つ、へーきへーき！見とけよ由紀…あたしの身体能力をっ!!」ダッ!!

止めようとする悠里を気にもせず、胡桃は門から少しだけ離れてから一気に駆け出し、助走をつける。

後はその勢いのままジャンプし、門の上へと手を伸ばすだけだったが…

胡桃「…っ!!」

不意にある事に気がつき、胡桃は足を踏ん張らせてブレーキをかけ、ジャンプする事なく門の手前ギリギリで停止した。

胡桃「……………」

由紀「どしたの？やっぱりちよつと難しい?」

美紀「当然ですよ！雨の中この高さの門をよじ登ろうとするなんて危険過ぎます！」

胡桃「いや…その、それもあるけどさ…」

美紀に説教される中、胡桃はチラツと彼を見てから呟く。

今の彼女の格好は学校の制服姿に上着を重ねたもの、当然下はスカート…

高い門をよじ登ろうとしていた彼女が、彼を見てからそれを突然止めた理由は一つだった。

「チラチラこつち見てるけど、なにかな?」

胡桃「な、なんでもない…／／／」

悠里「まあ…でも、中を探したところで多分誰もいないでしょう。とりあえずは先を急ぎましようか」

胡桃「そうだな…。ってか本当に雨がすごいな…傘さしても少しずつ濡れるんだけど」

美紀「先輩の場合はさつき無駄にダッシュしたから余計に濡れてる

んですよ!」

胡桃「うっ…、反省する…」

由紀「私もさつき水溜まり踏んじやったから、靴の中がヒドイ事になってるよ…」

「結局バリケードも動かせなかつたですし、これ以上濡れる前に早いところ戻りましょうか」

胡桃「そうだな。よし、車に戻ろうぜ」

悠里「あつ、胡桃。今度は私が運転を…」

バタンツ!!バタン!!!

「ん?」

胡桃「…何の音だ?」

突如何かが倒れたような音が響き、彼女達は一斉に振り返る。

その音は彼女達の周辺、そう遠くはないところから聞こえてきた…その場にいた全員、嫌な予感がしていた。

胡桃「…りーさん、車…とつととUターンさせて離れよう」

悠里「そうね…みんな、中に入りましょう。」

車のドアを開け、悠里がそう言った直後…周辺に不気味なうめき声が響き、物陰から”かれら”姿を現し始めた…

ヴアアア…アアツ…

美紀「やっぱり…」

「来ましたね…早くここから離れた方が…」

アア…アア… グアアア… アア…!

ウアア…アア…

胡桃「なっ!?!いくらなんでも多すぎだろ…!!」

少し焦った表情をして、胡桃は呟く。

そこら中の物陰から姿を現す”かれら”の数は予想していたより

も多く、既に15体以上が後方の道を塞ぎつつ彼女達目掛けて歩み寄って来ていて…みるみる数を増していく。

左右の道はバリケードに塞がれ、後方は奴らが塞ぐ…。

彼女達は逃げ場を失い、追いつめられていた。

悠里「…！胡桃っ！どうする!？」

胡桃「多少車が傷むだろうけど仕方ない…この群れの中を無理やり突破するしか…！」

目の前に迫る群れを相手に無事突破できる事を祈りながら呟く胡桃、すると直後…由紀が先ほどまで見ていた豪邸の門に手をかけ、全員に大声で告げた。

由紀「みんなっ！この門、鍵がかかってないみたい！中に逃げられないかな!？」

胡桃「!!そうか…わかった!リーさんは門が開いたら車を中に!美紀は由紀を手伝って二人で門を開けてくれ!!」

この”かれら”の群れを無理やりに突破しようとして、途中で万が一にも車が死体に引っ掛かりでもして止まってしまったら、もう逃げ場はない。

そうなれば確実に全員死ぬ…そう考えた胡桃は一か八か、目の前の門の向こうに逃げ込む事にした。

美紀「は、はいっ！わかりました!」

美紀は由紀の元に駆け寄り、雨に濡れるのもお構い無しに持っていた傘をその辺に投げ捨て、由紀と二人でその門を横に開いていく…

だが、その門は予想していたよりも遥かに重く、全力で押しても少しずつしか開いていかなかった。

由紀「うぐう…！重いよお…！」

美紀「が、がんばって下さいっ！急がないと…このままじゃ…！」

彼と胡桃も二人に手を貸そうかと思つたが、すぐそばに迫る”かれら”が門を開ける二人に襲いかかる事の無いように足止めをしなくてはならなかつた。

胡桃（横開きの門、これならただ力任せに襲いかかる事しか出来ない奴らじゃ簡単には開けられないかも知れない…。頑丈そうな門だし、あたし達が入つた後ですぐに閉じる事が出来れば…どうにかしなげそうか…）

「今日は悪いことばかりおこる…。由紀ちゃんと美紀さんがあの門を開けるまで、この数を相手に時間稼ぎしなきゃダメか…」

胡桃「ほんの少しの間だけだ。本当に少しだけ堪えられればいい…。だから間違つても噛まれたり、死んだりするなよ」

「うん、胡桃ちゃんも…」

胡桃「ああ…。わかつてるっ!!」

二人は持っていた傘を投げ捨て、雨に打たれながら胡桃はシャベルを、そして彼はナイフを構え、”かれら”の群れの前に立ちふさがつた。

六十一話 『雨降る中で…』

グアアア…

胡桃 「はあっ!!」 ブンツ!

グシヤツ!!

「っ!!」グサツ!

激しい雨に打たれながら、必死に門を開けようとする由紀と美紀…
二人が門を開けている間、胡桃はシャベル…彼はナイフで、迫る”
かれら”の頭を潰し、刺していく。

そうして一体一体を確実に仕留める二人だったが、倒せど倒せど”
かれら”の数は一向に減らず…次々と新手が路地裏から姿を現し、彼
女達を襲おうと歩み寄ってくる。

…アアアツ

「胡桃ちゃんっ! まだ大丈夫かなっ?!」グサツ!

胡桃 「平気だっ! 今のところはな…」

由紀 「うう…うう…っ!!」

美紀 「ぐ…っ!! はやく…はやくっ!」

ギギギ…と鈍い音をたて、少しずつ…少しずつ門は開いていく…
だが、車が通るにはもう少しだけ開く必要がある。

二人はその門に向けて、必死に力を込めた。

グアアアツ!!

「うおっ!!?」

一体に掴まれそうになるのを彼はギリギリのところかわし、掴み
損ねてバランスを崩しているその頭を突き刺す。

ザクツ!!

「ああつ、数が多いなあ…!!はやく門を開く為に、胡桃ちゃんも由紀ちゃん達を手伝ってあげた方が…」

胡桃「バカ言うなっ!これだけの数、二人で相手しててもギリギリなんだ!!ここであたしが少しの間でも抜けたらお前が危ないだろ!!」
ブンツ!!

「シャベルで」かれら”をなぎ倒しながら、胡桃はチラツと一瞬だけ彼を見つめて言った。

「確かにね…でも、このままじゃ…」

…アアア!

胡桃「くっ…!!」ブンツ!
グシャツ!!

胡桃(こいつら、倒しても倒しても全然減らない…!それどころか、奥からどンドン出てきやがる!!それに…)

グアアアアツ!!

「…ぐうっ!!」
ドンツ!

迫る群れを一体ずつ仕留める中…掴みかかる一体への反応が遅れ、彼は両肩を掴まれる。

雨で足下が悪い事もあって踏ん張りが効かず、彼はそのままそばのキャンピングカーへと押さえつけられた。

胡桃「っ!?待ってろっ!!すぐに——」

彼の元へと駆け寄ろうとする胡桃だが、彼は押さえつけられながらも目の前の敵の顎から脳天へとナイフを突き刺し、危機を脱する…

仕留めたそれを押し退けて地面に転がし、彼は胡桃に告げた。

「大丈夫!!平気っ!」

胡桃「まったく：危なっかしいんだよ!!」

彼が無事な事に安堵しつつ、胡桃は一つの事実に気がつく

”かれら”を間近に見て、戦いながら感じていた一つの違和感：それが確信に変わり始めていた。

胡桃（まただ…！今あいつを押さえつけたヤツ：あたしを無視してまであいつを襲った！）

胡桃（いや、よく見ると…：どいつもこいつもあたしを：あたしだけを無視してる!?)

バンツ！バンツ！

悠里「きやつ!?!」

胡桃「チツ!!?」ブンツ!!

グシャツ！

胡桃のそばのキャンピングカー。

その運転席に悠里を見つけた一体が、彼女に襲いかかろうと車の窓を叩く。

悠里の声でそれに気付いた胡桃は慌ててシャベルを振り、その頭を砕いて仕留めた。

胡桃（コイツもだ…：そばのあたしを無視してまで、運転席にいる：リーさんを窓越しに狙いやがった!）

胡桃（あいつも、リーさんも、それに後ろの由紀も美紀も狙われているのに、あたしだけは狙われてない?）

胡桃（なんだよ…：あたしは、お前らと同類って事かよ…!）

胡桃「くそっ…：くそっ…：くそおっ!!!」

目の前の”かれら”が自分だけを無視し、他の人物を襲おうとするその光景に胡桃は苛立ち、自ら群れの中へと突っ込もうと駆け出す。

「なっ!?…ちよい!!何してんのっ!!」パシッ!

それを見た彼は慌てて胡桃の手首を掴み、無理やり動きを止めて声をかけた。

胡桃「奴らの注意を引かないと…このままじゃヤバいだろ!」

「だからって…!!」

…アアアツ!

彼が胡桃を止めていてもお構い無しに、”かれら”は背後から襲いかかる。

標的は当然のように…胡桃ではなく、彼だった。

胡桃「くっ!?どけっ!!」

「ッ!!」

彼のすぐ背後に”かれら”が迫るのを見た胡桃は彼を押し退け、シャベルを振るう。

そうしてそばまで来ていたそれを二体を倒し、それから胡桃は彼に向けて言った。

胡桃「ほらっ!あたしの事はほっといいて良いから、自分の身を守れ!!」

「なっ!?ほっとける訳がないでしょ!?バカな事を——」

そこまで言いかけた彼だが、今は彼女と争っている場合ではないと考え…周囲に気を張り巡らせつつ彼女をなだめた。

「…二人でどうにか持ちこたえよう。落ち着いてね?」

胡桃「……………」

胡桃「…………ああ、わかったよ」

胡桃はシャベルを構え直し、雨に濡れた前髪を手でかきあげてから迫る群れを真っ直ぐに見据える。

彼はそれを見てから由紀達の方に目を向け、自分の警戒をすり抜けて接近する者がいないかを確認する。

そして彼女達の周囲は安全なのをその目で確認してから胡桃同様に群れを見据え、ナイフを構えた。

…アアア!

「ふっ!!」ズバツ!!

彼は自分に接近する一体の首を目掛けて思いきりナイフを振り、首をはねて仕留める…。

頭を失い、崩れ落ちる体…だが一体だけ倒しても意味は無く、その後も間髪入れずに次々と”かれら”は襲いかかる…

彼と胡桃は門が開くまでの時間、それをしのぐのに必死になり、武器を振るった。

ウアア…アア

胡桃 「っ！」グシャツ!

グアアアツ!

「くっ!!」グサツ!

二人は慎重に、かつ正確に頭を狙い…”かれら”を一体ずつ、綺麗に一撃で仕留めていく。

だが”かれら”の数は減るところか増え続け、仕留められた同族の死体を踏みながら、彼女達をジリジリと…確実に追いつめていった。

「はあ…はあ…ああ、まったく…！減りやしない…!!」

胡桃（こいつらやっぱりあたしじゃなく、あいつを狙いやがる！早くしないと、このまま長引けば…ほんとに…）

二人でこの群れを相手にしてから、まだほんの二、三分しか経っていない。

しかし大雨の中で迫る”かれら”を相手に逃げる事も出来ず、連続で戦い続けるのはかなりの体力を使う…

徐々に体力を失い、動きの切れが鈍る彼を見て胡桃は焦った……だがその直後、悠里の乗ったキャンピングカーが突如動きだし……いつの間にか開かれていた門を通って中へと入っていった。

「おっ!?…よし、開いたみたいだ…!」

胡桃「や、やつとか…」

由紀「胡桃ちゃんっ!——くんっ!!二人もはやく中につ!!」

美紀「急いで下さいっ!!」

門の内側から、由紀と美紀が二人を大声で呼ぶ。

「…胡桃ちゃん!」

胡桃「ああ!行くぞ!!」

ここで二人は初めて”かれら”の群れに背を向け、門の中へと逃げ込む。

門までは10mと離れていなかったのですがすぐに逃げ込めたが、問題はその後…”かれら”が入らぬように今開いたばかりの門を閉じる事だった。

美紀「二人とも怪我は!」

胡桃「大丈夫だ!それより早く門を閉めるぞ!!」

彼女達は慌てて門を横に押し、閉じようとする…

悠里もすぐに車から降りてきてそれを手伝い、”かれら”がすぐそばまで迫る中…全員で門を押しした。

ギギギ…ギギツ…ガシャンツ!!

開くのは遅かった門だが、全員で押したのが効いたのか閉じる時はあっさりと閉まり、彼女達はそこから数歩離れる。

閉めた直後、すぐに”かれら”が門を掴み、ガシヤンガシヤンと揺らし始めた

閉めるのが後ほんの数秒でも遅かったら、侵入されていたかもしれない。

美紀「はあっ…はあっ…ギリギリ、でしたね？」

胡桃「…だな」

悠里「はあ…。この門…ロックとか掛けなくても大丈夫かしら？」

「奴らは門の開け方分かってないみたいだし、とりあえずは大丈夫でしょう。ロック掛けようと近づいた時に隙間から手でも掴まれて噛まれたら大変ですし…」

悠里「そうね…かなり丈夫そうだから、ああして揺らされてるだけなら簡単に壊れる事も無さそうだし」

由紀「ううっ、疲れたあ〜っ！」

豪邸の庭、雨でぐしゃぐしゃになっているその芝生の上に由紀は寝転ぶ。

悠里「あっ！由紀ちゃん、服汚れちゃうわよ!？」

由紀「だって疲れたんだもん…それにもうビショビショになっちゃってたし…」

悠里「それは…そうだけど」

美紀「あっ、傘…門の外に置きっぱなしにしちゃいました。」

雨に打たれ、ビショビショに濡れるそれぞれの姿を見て…美紀がボソッと呟く。

その直後、全員が同じ答えを返した。

「ああ…そういえば僕もだ」

胡桃「あたしも…」

悠里「…私も」

由紀「当然、わたしもっ！」

全員が雨に打たれながら”かれら”がいる門の外を見つめ、深くため息をつく。

悠里「まあ、傘くらいはすぐに見つかるだろうから気にしないようにしましょう…」

美紀「ええ、命が助かったなら傘くらいは仕方ないです。」

胡桃「あの門開くの、かなりギリギリだったな。後少しでも遅れたらヤバかった」

美紀「中々開いてくれなくて大変でした。途中、リーさんが車から降りて手伝ってくれたので良かったです。」

胡桃「リーさんも手伝ってたんだ、全然気づかなかった…」

悠里「と言っても…途中からだけどね。胡桃達は大変だったから、気づく余裕が無かったのよ。お疲れさま。」

「ああ…、本当に疲れた…」

胡桃「こんなにしんどいなら、無理やり車で轢いて突破した方が良かったかもな…」

美紀「ま、良いじゃないですか。無事逃げ込めた訳ですし、後はこの群れがどこかにいなくなるまでここで過ごしましょう。」

「こいつら…どんどん増えてる。いったいどこからわいてくるんだ？」

こちらを見つめ、門の隙間から必死に手を伸ばす”かれら”を見て彼が呟く。

その数は少しずつ増していき、今や30体近くが門に迫っていた。

美紀「私達が視界に入っていると興奮させてしまうかも知れませんが。とりあえず、車の中にも隠れましょうか？」

胡桃「いや、せっかく門をこじ開けてまで中に入ったんだし、この家の中を見ても良いんじゃないかな？」

悠里「うーん…、それもそうね。鍵とか掛かってないといいけど…」

胡桃「そしたら仕方ない。窓を割つてでも入る…」
そばにある豪邸を見ながら、中に入る事を決めた三人。

ふと視線をそのの玄関に向けると、すでに彼と由紀がそこに立っていた。

美紀「あの二人は…元から入る気満々だったみたいですね…」

胡桃「つたく…いつの間に」

由紀「どうかな？開いてる？」

由紀に尋ねられ、彼はその大きな扉の取手を引く…
ガチャガチャ…ガチャガチャ

「…ダメですね。鍵掛かっています。」

由紀「ぬく、残念だね…」

がっかりする由紀の背を背後から胡桃がバンツと叩き、声をかけた。

胡桃「どうした？鍵でも掛かってたか？」

由紀「…うん。これじゃ入れないね、どうする？」

胡桃「仕方ないか…。どつかの窓割って、そこから入ろうぜ」

由紀「ひ、人の家の窓を割るの?!?胡桃ちゃん悪^{わる}だ!!」

胡桃「なっ?!?だから仕方ないって言ってるだろ！このままあいつらがいなくなるまで雨の降る外で待つ訳にもいかないし、かといってそばにこんな家があるのにわざわざその庭に停めた車の中で過ごすのも馬鹿馬鹿しい。それに…もうここには誰もいないだろ？」

由紀「わかんないよ？ちよつとノックしてみよつか！」

由紀はそう言つてドアの前に立ち、右手でドアをノックした。
コンコンコンッ！

由紀「……………」

胡桃「……………」

由紀「反応なし…かな？」

胡桃「いや、そもそもお前のノックがダメなんだよ。こんなデカイ家にあんな気の抜けたノックしても気づかれる訳がない。よし、見てろ…」

由紀を押し退け、今度は胡桃がドアの前に立ち、右手で固く拳を作ってからそのドアを叩いた。

バンバンバンツ!!!

由紀「おお！豪快だね!?ドアを壊そうとしてるの？」

胡桃「ノックしてるんだよっ!!」

ドアの前で騒ぐ二人を見て、ある事に気づいた美紀が彼と悠里に囁く。

美紀「あの…二人に教えてあげた方が良いですかね？ドアの横に呼び鈴があるの…」

「いえ、面白いからいつになったら気付くか見てみましょう。」

悠里「はあ、まったく…」

由紀「胡桃ちゃんがあそこまで叩いたのに反応がないって事は…やっぱり留守かな？」

胡桃「ほら、だから言っただろ。どうせ誰も…」

ガチャ…ツ…

由紀と胡桃が諦め、ドアから目を離れたその瞬間に中で鍵を開けるような音が鳴り、そつとドアが開き始めた。

ギイツ…

胡桃「なっ!？」

由紀「あっ…」

?? 「えっと、どうか…しましたか？」

驚く彼女達の視線の先、開かれたドアの向こうから現れたのは…綺麗な長い黒髪の、彼女達と同年くらいであろう少女だった。

六十二話 『豪邸の中へ』

?? 「ええつと……」

ドアの向こうから現れた少女……

彼女は雨に濡れた由紀達、そして門の向こうにいる大量の”かれら”を見て、おろおろと慌て始めた。

?? 「あつ……!? えつと……えつと……つ！と、とりあえず中にどうぞっ!!」

胡桃 「いいのか？」

?? 「雨もすごいですし、かれらがそばにいるのに置いておけません！ はやくあがってください！」

悠里 「……ありがとうございます。みんな、入りましょう」

彼女に誘導され、悠里達はその家の中へと入る。

玄関で靴を脱ぎ、中に入ってすぐ目に入ったのは薄汚れた絨毯じゅうたんの敷かれた少し広めの廊下……

横には二階に上がる為の階段が一つ、そして他にはいくつかの扉があり、それぞれが別室に続いていた。

……ボタン

全員が入った後、彼女が扉を閉める……すると外の微かな光すら入らなくなった事でその廊下は暗くなり、1. 2 m先しか見えないようになる。

突如視界が悪くなった廊下にたちつくし、由紀はキョロキョロしながら眩く。

由紀 「うわあ……真っ暗……」

?? 「あつ……と、す……すいませんっ！ 今ライトつけますから……少しお待ちを……！」

カチツ：

暗かった廊下が少しだけ明るくなる：

彼女が手に持っていた懐中電灯をつけたからだ。

それを見た胡桃は少しだけがっかりしたような声を出す

『これだけの豪邸なら、もしかしたら自家発電機などを使っていたりするかも』と、心のどこかで少しだけ期待していたから。

胡桃「ライトって：懐中電灯か：」

??「す、すいませんっ！普通に灯りつけられればいいんですが：電気が止まってるみたいで：！」

彼女は胡桃に頭を下げ、そばにあったスイッチをひたすら連打する
どうやらそれはこの廊下の灯りをつける為のスイッチのようだが、
いくら連打しようと反応は無い。

カチカチカチカチカチカチカチツ！

??「ほらっ、ほらっ、ほらあっ！本当につかないんですう!!すいませんっ!!」

胡桃「い、いや：そんなに謝らなくても：。なんかあたしが悪いみたいになるから：」
カチカチカチツ！

涙目で一心不乱にスイッチを連打し、そのまま頭を下げるその少女を落ち着かせようと思ひ、胡桃は彼女の肩を軽く：ポンっと叩いた
だがその行動は裏目に出て、ますます彼女を焦らせてしまう

??「ひゃっ!?!:な、なんででしょう?私:何かあなたを怒らせるような事をしてしまいましたか:!?」

胡桃「ちっ、違う違うっ!とりあえず一度落ち着いてもらおうとしたいだけだよっ!」

??「お、落ち着きがなかったですか!?!すいませんっ!!」

胡桃「だ、だから：まず謝るのをやめてほしいんだけど：」

胡桃のそんな願いも空しく、彼女はひたすら謝り続ける

薄暗い廊下の真ん中、彼女が頭を下げる度にその手に持った懐中電灯が大きく揺れ、放たれる光が激しく上下した…。

「ダメだ…全然話を聞かない…」

美紀「せ、先輩っ！はやく落ち着かせてあげて下さいよ!!」

胡桃「あたしだつてそうしたいけど、どうすりゃいいんだよ!」

そう言つて頭を下げる彼女の背を優しく撫でる胡桃だが…特に効果は無い

すると由紀が彼女の前へと歩み寄り、手でそつと彼女の頭を上げた。

??「はう!?な、なんでしよう…?」

彼女は顔を上げ、目の前の由紀に恐る恐る尋ねる

由紀はにっこりと笑い、彼女の左手をギュツと両手で握ると、自らの名を名乗つて自己紹介をした。

??「ううっ!」

由紀「わたしは丈槍由紀つていいいます!お姉さんの名前は?」

??「えつ、丈槍…うえ、えつと…私は…未奈みなです…。水無月未奈みなづきみな…」

由紀「へく!苗字と名前が似てて可愛いですねっ!」

未奈「か、可愛い…かな?」

由紀「うんっ!すぐく可愛いと思います!みなちゃんつて呼んで良いですか?」

未奈「みなちゃん…?は、はい!良いですよ…!」

由紀「えへへ…よろしく、みなちゃん!」

未奈「うん…!えつと…由紀ちゃん、だっけ?」

由紀「はいっ!由紀ちゃんです!」

胡桃「自分でちゃん付けすんなよ…」

由紀は呟く胡桃の手を引っ張り、半ば無理やりに未奈の前に立たせる。

この突然の行動にも胡桃は特に抵抗せず、少し気まずそうに未奈の顔を覗き見る…

驚く事に彼女はもう涙目になっていて、胡桃は思わずショックを受けた。

由紀とは普通に話していた彼女だが、胡桃は苦手なようだ。

胡桃「う…うう…」

由紀「この娘は胡桃ちゃん！」

胡桃「よ、よろしく…」

未奈「く、胡桃…さん…?」

胡桃「『さん』…なんだ…。由紀は『ちゃん』だったのに…」

さん付けされた事実にはショックを受ける胡桃をよそに、悠里は未奈へ自己紹介を始め、その後には美紀と彼が続いた。

悠里「私は若狭悠里です。未奈さん、中に入れてくれてありがとうございます。ごぎいます。助かりました。」

未奈「は、はい!え、えつと…:悠里ちゃんで…良いですか?」

悠里「…はいつ!よろしくお願いします♪」

普段は『りーさん』と呼ばれている悠里…

彼女は未奈に『悠里ちゃん』と呼ばれ、嬉しそうにっこりと笑う。同年代の人間にちゃん付けされるのが久々だったからだ。

胡桃（りーさんまでちゃん付けかよ…。み、美紀はどうだ…?）

美紀「直樹美紀です。水無月さん、よろしくお願いします。」

未奈「あ…つ…、未奈…で良いですよ?よろしく、美紀ちゃん」

美紀「はい。…未奈さん」

丁寧に頭を下げる美紀を見て、未奈も同じように頭を下げる。

そんな礼儀正しい二人の自己紹介の後、最後に残るは彼だった…

胡桃（結局美紀もちやん付けしてもらってたけど…。未奈さんは基本的に人見知りみたいだから、男のこいつは苦手な部類に入るかも…。あたし一人さん付けはなんか嫌だからな、出来ればこいつも道連れにしたい…）

今のところただ一人だけさん付けされている胡桃は彼をじつと見つめ、そんな事を考えていた。

「……です。未奈さん…よろしくお願いします。」

彼は未奈の前に立つと名を名乗り、軽く笑顔を見せてから握手を求め…

未奈はそれに応えて彼と握手を交わし、にっこりと笑った。

未奈「……君ですね？よろしくお願いします」

胡桃（握手するの!?絶対断られると思ったのに!）

躊躇する事なく彼の手を握り、笑顔を見せる未奈…

そんな彼女の思いもよらぬ反応を見て胡桃は思わず絶句する。

未奈「じゃあ…、こちらへどうぞ」

彼との握手を終え、全員と自己紹介をした未奈は廊下の奥へと歩き出す。

みんながそれに続く中…彼は少し元気の無い胡桃の背を叩いた

「ほら、元気だして！胡桃”さん”!!」

胡桃「くっ…!バカにしてるだろ?」

「…少しだけね?」

胡桃「うう…。なあ…あたしって怖いかな?」

「いや、そんな事は無いけど…。」

胡桃「じゃあなんであたしだけさん付けなんだよ…。もうやだ…」

そう言っとうつつむきながら歩く胡桃…

少し歩くと未奈は一つの扉を開け、彼女達をそこへと招いた。

ガチャ：

未奈「少しだけ汚れていますが、くつろいで下さい。」

大きなテーブルと椅子が置かれたその広い部屋を見て申し訳なきようにそう言う未奈。

部屋はいくつかの電気ランプで明るく照らされていたが目立った汚れなどは無く、気になるのはテーブルに出しっぱなしにされていた数冊の本だけ：

彼女達は未奈とテーブルを挟んで正面に座り、これまでの経緯を話した。

悠里「お邪魔しちゃって、本当にすみません…。門の外にあるバリケードに足止めされている間にかれらに囲まれてしまつて…」

未奈「あっ！あのバリケードのせいでしたかっ!? すつ…すみませんっ!! あれ、私の友達が作ったやつで…」

由紀「友達つて?」

未奈「学校のクラスメイトだった子がいて、世の中がこんなになつてから、ずっと私を守ってくれてるの…。」

美紀「…その人…今は…?」

未奈「外へ探し物に出かけてるんですけど、雨が降っちゃつた…。傘…持つてつたのかなあ…。」

美紀「一人で外に? 危なくないですか?」

未奈「だ、大丈夫だと思います。けっこう強い人だし、一人じゃなく…二人だから…」

悠里「そうですか…。でも今、門のところにはかれらがたくさんいるけど…大丈夫でしょうか?」

未奈「はい、それは大丈夫です。裏の方の塀にハシゴがかけてあつて、二人は基本的にそこから出入りしてますから、門の方は全然使つてないんです。あの門少し錆びてて、開け閉めしにくいから……」

美紀「……どおりで」

由紀「大変だったよね……」

未奈のその発言に、つい先ほどまであの門を押していた由紀と美紀は大きく頷く。

あの門の開けにくさは身をもって経験済だからだ

未奈「かれらはあの門を開けるほど頭が良くないから、あれだけあれば十分にここは安全だって私は言ったのに……あの人がわざわざバリケードなんか作って道塞いじゃうから……そのせいでこの人達に迷惑を……」

うつむきながらブツブツと呟く未奈……

由紀は彼女に仲間の事を聞こうかと思つたが、それよりも先に、聞いておきたい事があつた。

由紀「未奈ちゃん、あの……この家も……電気止まつてるんだよね？」

未奈「うん……。発電機とか置いてなくて……ごめんね……」

由紀「う、ううん！ただ大きな家だからもしかして……思つただけだから……。そうだよね……さつきも懐中電灯使つてたもんね。」

美紀「この部屋を照らしてるこれは、電池式ですか？」

未奈「はい、そうですよ」

そばに置かれた電気ランプを指さして尋ねる美紀に答え、未奈は席を立つ。

彼女は部屋の隅に置かれたタンスを開けるとそこからタオルを取りだし、全員に一つずつそれを渡した。

未奈「みなさんビシヨビシヨですね……。とりあえずはこれで拭いて下さい。自家発電機でもあればお風呂に入れてあげたんですが、この

家にそんな物は無くて…。大きいだけで…。すごく不便な家ですよね…」

由紀「そんな事ないよ！私は良いお家だと思う!!…まだこの部屋と廊下しか見てないけど…」

未奈「ふふっ、じゃあ後で案内してあげるね?」

由紀「いいの?ありがとう!」

胡桃（なんかこの人…由紀と話す時は明るくなるなあ…）

美紀「服がビショビショですから…まずは着替えますか」

未奈「更衣室代わりに使っている空き部屋があるんですが、よければ使いますか?」

悠里「良いんですか?じゃあ、お言葉に甘えようかな…。本当にありがとうございます」

未奈「気にしないで下さい。久しぶりに他の人に会えたのが…すごく嬉しいんです。せっかくなので、急ぎでなければしばらくはゆっくりして行って下さいっ♪」

にっこりと笑う未奈に案内され、彼女達は未奈が更衣室代わりにしているという部屋を使わせてもらう事にする。

その部屋は更衣室代わりに使うだけにしては広く、立派な部屋で、多くの衣装棚のような物が置かれていた。

中には恐らく、彼女の着替えが入っているのだろう。

美紀と悠里と彼が全員の着替えを取りに一度車へと戻る間、由紀と胡桃はその部屋で待ち、未奈と会話をした。

未奈「みんなは同じ制服を着てるけど、学校が同じなんですか?」

由紀「うん、巡ヶ丘高校の三年生だよ!みーくんだけは二年生の後輩だけだね」

未奈「三年生…?じゃあ私と同じ年なんだあ!」

由紀「未奈ちゃんも三年生なの?」

未奈「うん!学校は違うけど、学年は同じだよ!」

胡桃「あ、そういや——もあたし達とは違う学校の生徒なんだよ。あいつは辺りを探索してる途中で会って、それからずっと一緒にいるんだ」

未奈「そ、そうなんですか…」

胡桃（ま、まだ微妙にあたしから距離をとってる気がする…）

由紀「未奈ちゃん大丈夫だよ。胡桃ちゃんすごく優しいから！」

未奈が胡桃に対して僅かに警戒心を抱いている事に気がつき、由紀が二人の間を取り持つ。

未奈「す、すみませんっ！胡桃さんが怖い訳じゃないんですけど…」

胡桃「と、とりあえず…：さん付けやめない？あたしはお前の事、未奈って呼ぶからさ…」

呼び捨てにする事で距離を縮めようと考えた胡桃

しかしそれは彼女に伝わらなかったようで…

未奈「さん付けが気に入りませんでしたか!?ごめんなさいっ！胡桃さまっ!!」

『さん』から『さま』へ…。事態は悪化した。

胡桃「どうしてそうなるんだよ!?普通に胡桃ちゃんとかで良いって!!」

未奈「そ、そうですか?…く、胡桃ちゃん?」

胡桃「そうそう、それで良い。よくできました」

由紀「胡桃ちゃん、一人だけさん付けされてたから嫌だったんだよね?」

未奈「そ、そうだったの?」

胡桃「ま…まあ…、それなりに…」

由紀「へへへ…思ってたよりも可愛いでしょ?」

未奈「…うん、イメージしてたのと違った。…可愛い」

胡桃「くっ／＼か、可愛いか言わなくていいっての!!!」

未奈「はぐっ!?す、すいませんくっ!」

由紀「あつ、ほらく!胡桃ちゃんが大きな声だすからく!!」

胡桃「うつ…ご、ごめんっ!」

胡桃に大声を出された事に驚き、未奈はまたペコペコと頭を下げる

…

そんな彼女の背を由紀が優しく撫でてあげると彼女はだんだんと落ち着きを取り戻し、胡桃と向かい合った。

未奈「ご、ごめん…私、人見知りで…。初対面の人が相手だととりあえず謝っちゃうんだよね…」

胡桃「へえ、でも…そのわりに由紀とは普通に話せてるじゃん」

未奈「うん。由紀ちゃん、すごく可愛くて…なんか安心できるんだ」

由紀「可愛い?えへへ、ありがとう♪」

ニコニコしながら由紀の頭を撫でる未奈…

そんな彼女に胡桃は『あたしは安心できないの?』とツツコミたくなつたが、すぐに思いとどまった。

人見知りでも、何故か由紀は安心できる…その気持ちが少し分かる気がしたから。

胡桃「そーいや、人見知りなのによくあいつと握手できたな。初対面の男と握手するのとかキツくないの?」

自己紹介の時、未奈は彼が差し出した手を躊躇いなく握っていた事を思いだし、胡桃は不思議に思った。

未奈「同年代の男の子とは普段も接してるから、わりと平気なんだ。胡桃ちゃん達みたいな同年代の女の子達と会うのは久々だったから…少し緊張しちゃったけど…」

胡桃「普段から…?ってことは、さっき未奈が言ってた一緒に暮らしてる友達って…」

胡桃が言いかけたところでどこかの扉が勢い良く開く音が聞こえ、ドタバタと走る足音が鳴り響く：

その足音はどこかの扉を開けては閉めるとまた走り出し、その後もそれを繰り返す：

それはまるで誰かを探しているかのようだった。

胡桃「な、なんだ!？」

由紀「りーさん達じゃないよね？今出ていったばかりだし…」

正体不明の音に慌てる二人をよそに、未奈はふふつと笑いだす。

彼女は部屋の扉を開けて廊下へと出ると、息を大きく吸ってから大声を出した。

未奈「更衣室のどこだよ〜っ!!」

突然大声を出す彼女に由紀と胡桃は驚き、思わずお互いの顔を見つめあう：

未奈は大声を出すだけ出したら満足そうに部屋の中へと戻り、互いの顔を見つめる二人の前に立つ。

未奈「ん？どうしたの？」

胡桃「いや、ちよつと今の大声に驚いただけ…。一応聞くけど…足音の正体が誰か分かって、その上で更衣室にいるって知らせたんだよね？」

未奈「うん、もちろんだよ。あんな慌ただしくドタバタするのは、一人だけだから…」

そう言ってから未奈は部屋の扉を見つめ、それが来るのを待つ。

先ほど遠くでドタバタと駆けていた足音はだんだんと彼女達にいる部屋へと近づき、遂にその扉が開いた。

バタンツ!!

??? 「お嬢っ！大変だあつ!!庭に変な車が——」

未奈「うん。知ってるよ」

勢い良く扉を開け、大慌てで未奈に話しかけてきたその人物……それは未奈と……つまり由紀や胡桃達とも同年代であろう少年だった。

少年は返事を返した未奈のそばに立つ由紀と胡桃を見つけると動きを止め、しばらく無言でたちつくしていた……

??? 「……………」

由紀「……………」

胡桃「お、お邪魔してまゝす……」

??? 「……………」

未奈「ほらっ、ちゃんと挨拶して!!」バシッ!

無言の少年の元に未奈が歩みより、その頭を叩く。

少年はその直後に正気を取り戻し、由紀達を指さした。

??? 「お嬢……。この娘達は誰だ?」

未奈「巡ヶ丘高校から来たお客さん達だよ。ゲンくんが作ったバリケードのせいであれらに追いつめられちゃったんだって。ほら、ちゃんと謝る!!」バシッ!

再び彼の頭を叩く未奈……

少年はそれに動じた様子を一切見せず、由紀達に尋ねた。

??? 「バリケード……あれが邪魔だったか?」

胡桃「まあ、それなりに。あれのせいで目的地に行くことも出来なかったし、更に奴らに追いつめられた。」

??? 「そーいや門の外にやたら群がってたもんな……。いや、本当に悪いことをした。謝るよ、ごめん……」

深々と頭を下げ、少年は由紀達に詫びる……

由紀達はそのまでの謝罪を望んでいなかった為、すぐに少年の頭を

上げさせた。

由紀「いいよ、結局助かったんだし…。この家に入れてもらったしね♪」

胡桃「うん。そういう事だからさ、頭上げろよ?」

???「…わかった。悪いな…本当に」

未奈「ゲンくん…、ヒメちゃんは?」

頭を上げた少年のそばを見回し、未奈が声をかける。

直後に少年は何かを思い出してから慌て始め、頭を抱えた。

???「し、しまったあ!!車が停めてあるのに驚いて、そのまま庭に置いてきてしまった!!」

未奈「えっ?!バカツ!!外に出ちゃったらどうするの!?!」バシッ!

またしても少年の頭を叩き、未奈は部屋の扉へと手を伸ばす。

だがそれは彼女が触れる前に勝手に開き…その向こうからは悠里達が顔を覗かせた。

未奈は部屋に入ってくる彼と美紀と悠里…そして悠里が手を引く幼い少女を見て、安心したような声をあげる。

未奈「…っ?!ヒメちゃん!!」

悠里「この子、私達が着替えを持って車から出たら外で待ってたんです。未奈さんの知り合いですか?」

未奈「はいっ!無事で良かったあ…。連れてきてくれて、本当にありがとうございますっ!!」

未奈は嬉しそうにその少女に抱きつき、悠里達に頭を下げた。

少女は抱きつく未奈を無言のまままで迷惑そうにグイグイと押し、振りほどこうとする…

胡桃「すげえ押ししてる…未奈の事嫌いなのかな?」

由紀「可愛い子だなあ…。私も抱きしめたいけど、いきなりは失礼

だよね？」

美紀「——さん、気づいてますよね？」

「…はい。見知らぬ男が一人増えてます」

そう呟く彼と美紀の元へと少年は歩みより、二人の顔…更に由紀、胡桃、悠里の顔を見つめて、深くため息をついた。

???「一人ならまだマシだと…。こっちは帰ってきたら五人も見知らぬ人間が増えてたので…」

美紀「すいません…。お邪魔してます」

???「いや…元はといえば自分の作ったバリケードが原因らしいし、気にすることはないです。ごゆつくり…」

少年は部屋の隅の壁へと寄りかかると見知らぬ間に増えた五人の少年少女…そして未奈と幼い少女の顔を見て、頭を軽く掻きながら一人呟いた。

???「一人二人ならまだしも五人とは…。こんなに賑やかなのは、えらい久々だな…」

六十三話『ヒメ』

この屋敷には水無月未奈の他、更に二人の生存者が暮らしており、それらの人物と顔を合わせた由紀達。

一人は少年、そしてもう一人は幼い少女という、少し変わった組み合わせだった。

屋敷組の三人と彼は由紀達を更衣室に残して彼女らの着替えが終わるのを待ち、それから一番始めに未奈に招かれた部屋へと戻る…

胡桃「やつとびしょびしょの服じゃなくなった…。あゝ、気持ち悪かった」

由紀「あれ？——くんはいつ着替えたの？」

「みんなを待つてる間にこっさり廊下で…」

未奈「気づいた時には着替え終えてたから驚きましたあ…」

テーブルの前に並べられた椅子に座り、それぞれが適当な会話を交わす

しばらくするとあの少年が一度咳払いをしてから由紀達の顔を見回し、そつと手をあげ、自らの名を名乗った。

弦次「えつと、自分の名前は丈槍たけやげんじ弦次です。…あなた達は？」

由紀「んんっ!?!丈槍っ!?!」

弦次「あつ?丈槍…だけど。それが何か?」

未奈「この娘の名字も丈槍なんだよ?わりと珍しい名字なのに、偶然ってスゴいね♪」

由紀に名字を聞き返され、不思議そうな顔をする弦次…

そんな彼に、未奈は二人が同じ名字だという事を告げる

直後に由紀、弦次の二人は顔を見合せ、少しすると由紀の方から恐

る恐る口を開いた。

由紀「お：お兄ちゃん？」

美紀・悠里「えっ？」

未奈「そつ、そうなのっ!？」

胡桃「いやいや…。ただの冗談だろ…」

未奈達は由紀の発言に反応して驚くが、胡桃と彼だけはそれが冗談だろうと思っていたので大した反応を見せなかった。

だが、その後に弦次が由紀に放った発言にはさすがに驚く事になり

…

弦次「久しぶりだな。元気だったか？」

胡桃「なっ!?!マジかっ!?!」

「本当に兄妹きょうだいだったのか!?!」

…
思わず胡桃達も未奈達に続いて由紀と弦次の顔を交互に見比べる

…
そこまで似ているようには見えないが、本当に血の繋がりがあ
るのだろうか?

…
胡桃がそんな疑いの目を由紀に向けながら、じっと彼女を見つめる

…
由紀は全くそれに気づかず弦次の顔を見て、嬉しそうな顔を
した。

由紀「おおっ！ゲンジさんノリが良い〜っ♪」

弦次「まあ、このくらいなら付き合いますよ」

胡桃「…へ？」

「ほへ。」

美紀「えつと…つまり…」

悠里「二人は別に…兄妹でもなんでもないのでね？」

由紀「うん。思いつきり初対面だよ！」

弦次「ええ、たまたま名字が同じってだけ」

胡桃「なんだ、一瞬本気で信じちまったぜ…」

未奈「ゲン君っ！悪ふざけしないっ!!」バシッ！

未奈が弦次の頭を強くひっぱたく…。

弦次は相変わらずそれに動じた様子を見せず、改めて由紀達五人に自己紹介を求めた。

弦次「とりあえず、あなたの名字は丈槍…名前は何？」

由紀「由紀だよ。丈槍由紀！」

弦次「よろしく。丈槍由紀さん。あとの人達は…」

自分達を見回す弦次に対し、悠里達は自己紹介をする。

悠里、彼、胡桃、美紀の順に弦次へ名を名乗って自己紹介を終え、今度は未奈が隣に座る少女の頭に手を置き、そつと囁く。

未奈「ほら、ヒメちゃん。みんなにお名前言える？」

??「…うん」

少女は頭に置かれた未奈の手をそつと払いのけ、由紀達全員の顔を見回すと自らの名前を丁寧の名乗り、ペコツと頭を下げる。

白雪「…八島白雪^{やしましらゆき}。よろしくお願ひします」

由紀「白雪って名前なの？かわいいっ♪」

未奈「そうなのっ！可愛い名前でしょ！？お姫さまみたいでしょ！？」

…
そう言って未奈は白雪の肩に手を回し、ギュッと力強く抱きしめる

白雪はそれを引き剥がそうと一生懸命に手をつきだして未奈の頬を押ししていた。

胡桃「お姫さまみたいな名前だから…それでヒメちゃんなの？」

未奈「そう！」

白雪「みなさんはどうか普通に白雪と呼んで下さい…」

迫る未奈の顔を小さな手で必死に押し退けながら白雪は由紀達に言い放つ。胡桃達はそれに了承して白雪の名を呼ぶが、由紀だけは彼女の呼び方に頭を悩ませていた…

胡桃「よろしく、白雪」

悠里「よろしくね、白雪ちゃん」

美紀「白雪…ちゃん、で良いかな？よろしくです」

「よろしく、白雪ちゃん」

白雪「はい。よろしくです。」

由紀「…むう…ぬう…ん…」

白雪「……………」

胡桃「ほら、由紀も早く挨拶してやれよ！白雪が待ってるぞ」

由紀「あっ！ごめんね？…どうせなら可愛い呼び方で呼びたいんだけど、思い浮かばなくて…」

胡桃「普通に白雪ちゃんとかで良いだろ」

由紀「それじゃつまんないよ！だから可愛いあだ名を考えてるんだけど、白雪だから……シラちゃん？……あんまり可愛くないなあ」

由紀「ユキちゃん……だとわたしと同じになっちゃうし……」

手にあごを乗せながら必死に頭を悩ませて白雪の呼び方を考える
由紀……

そんな由紀へ、テーブルの向こうの未奈がニヤニヤと嬉しそうな表情で手招きをし、彼女に告げた。

未奈「えへへ、そんな由紀ちゃんにオススメの呼び方があるよ♪」

白雪「だっ、だめっ！ヒメちゃんはずかしいからやだあつ！」

未奈「恥ずかしくなんてないと思うけど……、凄く可愛いよ？」

由紀「うん！わたしもできればヒメちゃんって呼びたいなあ……。だめ？」

白雪「だ……だってあれ、はずかしいし……」

由紀「わたしも可愛いと思うよ？……ね？良いでしょ？」

白雪「う……うう……」

美紀「せ、先輩……。白雪ちゃん困ってますから……」

由紀「だめかな？ほんとにだめかな？」

白雪「……わ、わかりましたあ。もう好きに呼んで下さいい……」

由紀「ほんとっ？ありがと〜！よろしくね、ヒメちゃん♪」

白雪「うう……よろしく……ですう。」

胡桃「そういえば、白雪はいくつなの？」

白雪「いくつ……？年としですか？10才です」

胡桃「10才っ!?うわあ……由紀よりも全然しっかりしてるじゃん

…」

美紀「…ですね」

胡桃達は目の前に座る丁寧な言葉遣いの少女の年齢に驚き、思わず由紀と彼女を比較する…。由紀はさらっと放たれた彼女達の発言を聞き逃す事なく、頬を膨らませて反論した。

由紀「うぐっ！さすがに今のは言い過ぎだよ。わたしの方がヒメちゃんよりもずっとお姉さんなんだよ？」

胡桃「本人が嫌がつてるのにヒメちゃんて呼びたいってワガママ言つて、まだ11才の白雪を困らせたのはどこの”お姉さん”だよ？」

由紀「うぐっ!!」

美紀「結局折れてくれた白雪ちゃんの方が…よほど大人な気がします…。」

由紀「はぐうつ!!」

由紀「……」

白雪「……」

由紀「し、白雪…ちゃん…」

白雪「あ…っ、無理…しないで良いです。ヒメちゃんでも…別に…」

由紀「そ、そう?じゃあ…遠慮なく…」

(白雪ちゃん…大人だな)

胡桃(大人の対応だ!)

美紀(先輩…)

悠里(由紀ちゃん、子どもっぽいとは分かってたけど…まさか本物の子どもに気をつかわれるほどだったなんて…)

10才の少女に気をつかわれる由紀を見て、悲しい気分になる悠里達：

由紀はそんな彼女達の気持ちなど知るわけもなく、ただただ嬉しそうに白雪へ：ヒメちゃん、ヒメちゃんと連呼していた。

六十四話 『一ヶ月の努力』

弦次「今、外を見てきたが…門のそばにいた奴らはいなくなってた。一応聞く、これからどうする?」

「まあ…お邪魔じゃなきや、何日かお世話になつても構いませんかね?」

外から戻った弦次は一人で広間の椅子に座る彼にこれからの予定を尋ねる…

あれから数時間の時が経ち、元から悪天候の影響で暗かった外は夜を迎えた事で本格的に真っ暗になっていた。

弦次「こつちとしては全然かまわない。お嬢も友達が出来て喜んでるしな」

「それはありがたい。本当はこの先にある公園に行こうと思つてたんだけど…ここに泊めてもらえるっていうならその方が全然良い」

弦次「公園?」

「そう。なんかこの先に大きめの公園があるって、リーさんが地図見ながら言つてたけど…」

当初の目的地はこの先にある公園…

彼からその話を聞いた弦次はハツとしたような表情を見せる

それを見た彼がどうしたのかと尋ねるその前に、弦次は自ら口を開いた。

弦次「あんた達…ここに来て本当に良かったな。あの公園は奴らがやたらといるんだ。宿泊地には向いてない」

「マジっすか…」

弦次「ああ、マジっす…」

「はあくつ、危ないところだった…」

ため息をついて安堵する彼の向かい…弦次はその席に座り、質問をする。

他のみんながいる時には出来なかった質問を、男二人だけの今この時に…

弦次「あの四人の女の子達…どういう関係なのか聞いていいか？」
「ん？それは何時間か前に教えたと思うけど…」

弦次「ああ。あの四人は元々同じ学校の生徒で、『学園生活部』とかいう部活のメンバー。お前とは偶然外で知り合い、それから行動を共にしてる…それは聞いた」

弦次「自分が聞きたいのはそういうことじゃなく、個人個人としての関係だ。例えば…お前はあの中の誰かと付き合っていたりしてるのか、とか…」

「残念ながら…誰ともそういう関係じゃないんだよね。そういうゲンジ君はミナさんと付き合っていたりするのかな？」

弦次「同じく…そういう関係にはなれていない。オレは言うなればお嬢と白雪のボディガードみたいなものだからな」

「僕とあの人達の関係もそんなもんかな。ただ、胡桃ちゃんなんかは僕なんて必要ないくらいに強いけどね」

弦次「いくらあの人が強くて、結局は女の子だ。ちゃんと守ってあげなきゃな…」

「そう…ですなぁ」

胡桃をちゃんと守れと言う弦次を見て、『この人、意外と女心とか理解してそうだな…』と彼は思った。

弦次は椅子に座りながら指を一本、二本と立てていき…最終的に四本の指を立てながら呟く。

弦次「でも四人か…。オレが守るのはお嬢と白雪の二人だからまだ守りきれているけど…、その倍の人数となると大変だな」

「まあ元々僕なんかいなくてもしつかりと生き延びてきた人達だし、そこまで大変じゃないよ。それよりもゲンジ君の方が大変じゃないかな？小さい子がいるわけだから…」

弦次「いや、白雪は年のわりには手がかからないから…そこまで苦労はしない。家の中にいる分はな…」

「家の中にいる分は？それはどういう事で？」

弦次「家の中だとおとなしいヤツなんだけど、外に連れ出すというも勝手にふらふらと出歩く。目を離れた隙にあの化け物どもに襲われないように、こつちが気を付けないといけないんだ」

弦次「まあそもそも外に連れ出さなきゃ良い話なんだが…、物資を探しに行こうとするとどうしてもついていきたがるし、ずっと家の中にこもりきりなのも悪いからな。仕方なく、たまに連れていく。今日もそうだ…」

弦次「白雪を連れて外に出て…戻ったら見知らぬ車がうちの庭に止まっていた。本当に驚いたぞ」

「なるほど。それで驚いたゲンジ君がみなさんに報告に行ってる間、僕達は庭に一人残された白雪ちゃんと遭遇したわけか。」

彼はそう言つて嫌味混じりな笑みを浮かべ、目の前の弦次を見る。そんな彼の視線を受けた弦次は頭を軽く掻きながら虚空を見つめ

…深くため息をついた。

弦次「あれは…今までで一番の失態だ…。」

弦次「もし、あんたらがどうしようもない悪人だったら…。もし、白雪が門のそばに近寄って奴らに噛まれたら…。」

弦次「どちらにせよ、白雪は大変な事になっていただろう…。オレが一瞬気を抜いたせいだな…。」

「そういえば、ゲンジ君とミナさんがクラスメートだったってのは聞いたけど。じゃあ白雪ちゃんは？あの子とはどういう関係？」

弦次「ああ、白雪はオレがこの屋敷に住まわせてもらう事になった時にはもういたな…。」

弦次「門のそばで一人ぼくつとしていたのを見て危ないと思い、お嬢が中に入れてあげてたそうさ。それからずっと一緒に暮らしているらしい」

「へえ。親とかは…。」

弦次「前にお嬢がそれを聞いたら、白雪は泣いた。どうやら両親が奴らに襲われるのを目の前で見てしまったらしくてな…。」

「それは…：かわいいそうに…。」

弦次「でも、オレ達と暮らしている間にあいつは強くなった。もう滅多な事では泣かなくなつたし、弱い面も見せない。」

「そっか…。本当に強い子だね。」

弦次「ああ、あいつは強い子だ。言葉遣いも丁寧で、大人っぽかっただろ？」

「うん。そうだね」

彼がそう答えると弦次は突然ニツコリと笑みを浮かべ、自慢気な表情を見せる。

それを彼が不思議そうに見つめていると、弦次は胸を張って誇らしそうに語り始めた。

弦次「実はな…普段は敬語とかを使って丁寧な言葉遣いの白雪だが、親しい者が相手だと敬語など使わず、年相応の子供らしく話すんだ。」

弦次「もちろん、あいつはオレに敬語を使わない。何故だと思う？」

「…仲が良いから？」

弦次「そう…仲が良いから！心を開いてるからだ!!」

椅子から立ち上がり、大きく手を振りながら語る弦次…

直後に弦次は鋭い視線を彼に向け、テーブルに手をつきながら尋ねた。

弦次「ちなみに…お前と話す時はどうだ？敬語か？」

「そりゃ…まあ、会ってばかりですし…」

弦次「そうかそうか！敬語か！…だろ？なあ…！」

(うわ…なんかウザいんですけど)

弦次の誇らし気な表情を見た彼はそれを無性に殴りたくなる。

だが、これから泊めてもらおうというのに初日からトラブルを起すわけにもいかない…。

彼はテーブルの下で震え始めた右手を左手で押さえ、必死に我慢した。

「なんか…やたらと嬉しそうだね？」

弦次「ああ、白雪が初めて敬語を止めてくれた時、オレは娘にパパと呼ばれる父親の気持ちを理解した…」

弦次「しかもな、呼び方も変わるんだ！白雪は普段人の事をなんとかさん…とかお兄さん…とかいう風に呼ぶんだが、親しくなるとそれが呼び捨てに変わる!!」

弦次「ここで問題だ！オレは白雪になんて呼ばれていると思う？」

「……ゲンジ…かなあ…」

弦次「そう、ゲンジと呼び捨てにされている！何故だと思う!？」

「仲が…良いから…?」

弦次「そう！仲が良いから！白雪の心を開くまで、一ヶ月はかかったな！」

「じゃあ…僕も呼び捨てで呼ばれるように努力しないとなあ…」

彼は震える右手を押さえ、精一杯の作り笑顔を見せる。

しかし……

弦次「難しいと思うぞ？白雪はけっこう掴みにくい性格だから、生半可な気持ちじゃ——」

まだ自慢話を続けようとする弦次の表情を前に…彼の我慢も限界がきていた…。

もうダメだ…コイツを殴ってしまう…。

彼がそう思ったその時、部屋の扉が開き、二人の救世主が現れた。

胡桃「おつ、いたいた。お二人さん、もうすぐ夕飯だぞ〜」
美紀「…何か話してたんですか？」

弦次「ああ、ちよつと白雪のはなしを——」

弦次がそこまで言いかけた時…胡桃と美紀の背後からひよつこりと白雪が現れる…

彼女は胡桃と美紀の間に割り込み、二人の手をギュツと握って笑顔を見せると…部屋をキョロキョロと見回してある言葉を放つ。
放たれたその言葉は、彼と弦次を驚かせた…

白雪「くるみ…ゆきいないね？」

「…!？」

弦次「なっ!？」

胡桃「ああ、あいつはトイレに行っただけだから、たぶんもうキッチンに戻ってるよ」

白雪「そっか、じゃあ戻る？」

美紀「この家広いから、キッチンに戻るにも迷っちゃいそう…。白雪ちゃん、また案内お願いしてもいい？」

白雪「うん。わかった〜」

「……………」

弦次「……………」

胡桃「ほら、お前らもこいよ。夕飯できるぞ?..」

白雪を見て固まる二人の男に胡桃が言う。

直後に弦次は白雪の元に歩みより、少し屈んで彼女と目線を合わせた。

弦次「白雪…さつきこの部屋を見回した後なんて言った？」

白雪「え?…ゆきがないって…」

弦次「やっぱり…。この人は?…さつきこの人の事をなんて呼んだ?」

白雪がすでに由紀の事を呼び捨てにしている事を確認した弦次。

弦次は次に、白雪と手を繋ぐ胡桃を指差して尋ねる…

彼女の呼び方を尋ねられた白雪は、じつと胡桃を見つめてその間に答えた。

白雪「…くるみ」

弦次「なっ!!」

「白雪ちゃん、胡桃ちゃんと仲良しになったの?」

胡桃の事を呼び捨てにする白雪を見て動揺する弦次…

そんな弦次を尻目に、彼は白雪に尋ねる。

白雪「あつ、はい!」

「そっか…」

(やっぱり、僕には敬語だ…)

胡桃「ちよつと遊んであげたらなつかれた。美紀の事も、りーさんの事も好きだよな?」

白雪「うん!みきも、ゆーりも好き♡」

美紀「ふふつ、ありがとね♪」

弦次「オレは…オレは一ヶ月かかったのに…」

弦次はゆっくりと立ち上がると部屋の隅にいき、激しく落ち込む。それに追い打ちをかけるように胡桃は白雪の肩を叩き、彼を指さしてからある事を頼んだ。

胡桃「白雪…このお兄ちゃんもそれなりにいい人だから、また遊んであげて？」

白雪「うん、わかった！」

胡桃「…だってよ。よかったな、お兄ちゃん？」

視線を彼に向け、胡桃はニツコリと微笑む。

彼は彼女のその表情、そして”お兄ちゃん”と呼ばれた事に少しだけドキドキしつつ…弦次へ言葉の追い打ちをかけた。

「うん。僕も白雪ちゃんと仲良くなりたいと…」

「まあたぶん…」一ヶ月”もかからないかなあ？」

彼はそれだけを言い残し、胡桃達とともに部屋を出る。

残された弦次は一人、自分の一ヶ月は何だったのかと考えていた…

六十五話 『今日はベッドで…』

由紀「ヒメちゃん！もしよければ今日、わたしと寝る？」

白雪「だめ。今日はゆーりと一緒に寝る約束したから。」

由紀「りーさんと？…いつの間につ!？」

キッチンにて、夕食を終えた由紀と白雪が会話を交わす。

そばでその光景を見ていた未奈は、にやにやしながらそれを見守っていた。

未奈「ふふふ、ヒメちゃん、もうみんなと仲良くなってるね？」

弦次「……ああ……」

未奈「ん〜？どうしたのゲンくん、なんか元気無いね？」

弦次「……ああ……」

丈槍弦次：彼は未だ、白雪が数時間で由紀達に心を開いた事にショックを受けていた……。

新しい友達ができて、楽しそうに笑う白雪：それはとても喜ぶべき事なのだが：弦次はそれを掴むのに一ヶ月かかったのだ。

しかもよく見ると、由紀達はすでにそんな弦次よりも白雪と仲が良
いように見える……。

白雪「ゆーり、後で部屋まで案内するから一緒に寝ようね？」

悠里「ちよつと待ってね？ちゃんと未奈さん達に確認しないと……。」

悠里「ごめんなさい：今日、この子と一緒に寝てもかまわないですか？」

白雪の肩に手を乗せながら、悠里が未奈と弦次に尋ねる。

知り合った初日から小さい子を預けるのは少し心配なところもあるが：既に未奈は悠里達を信頼していたし、何よりそれを楽しみに待つ白雪にダメだとは言えなかった。

未奈「はい。いいですよ。ヒメちゃん、悠里ちゃんに迷惑かけたりしないようにね？」

白雪「うん。わかってるよ♪」

未奈「ゲンくんもかまわないよね？」

弦次「あ：うん。悠里さんなら、白雪を安心して託せます。頼みますね」

悠里「はい。任せて下さい！」

軽く頭を下げ、白雪を悠里に託す弦次：（一晩だけだが）

弦次の少しだけ寂しげなその表情を覗きこんだ彼は、『離れる娘を見送る父親つてのはこんな感じなのかな：』などとのんきに考えていた。

弦次「お嬢、そういえばこの人達の部屋はどうした？」

未奈「二階にたくさん空き部屋があるでしょ？そこをそれぞれの個室として使ってもらうんだ。さつき美紀ちゃんと悠里ちゃんに手伝ってもらって、それぞれの部屋の掃除も済ましたから綺麗だよ」

弦次「そっか。今更ですけど、皆さんは個室でも大丈夫ですか？」

悠里「ええ。何かあっても部屋は近いから様子を見に行けるし、どの部屋のベッドも大きめで二人くらいは一緒に眠れそうでしたから、あんまり寂しかったら誰か呼びます。」

そう言つてにやにやと笑う悠里。

寂しかったら誰か呼ぶ：というのはさすがに冗談だったようだが、

ちゃんと全員に伝わったのだろうか…？

白雪「今日はわたしと一緒にだから寂しくない？」

悠里「うん。全然平気よ♪」

白雪「えへへ…よかった」

由紀「リーさんいいなあ…。仕方ない。胡桃ちゃん、みーくん…今日は寝るギリギリまでわたしの部屋でお喋りしよ？」

美紀「かまわないですけど、夜ふかしはダメですよ？」

胡桃「そうだな。遅くまで起きてると朝がつらいし…」

「今日はベッドで眠れる…。こんなに嬉しいことはない…」

普段は席に座りながら眠る彼がしみじみと呟く。

未奈はそんな彼を見てにつこりと微笑み、一行を二階にある部屋へと案内した。

廊下は真っ暗なので、未奈はライトを手に二階に上がる。

そうしてすぐに現れたいくつかの扉…その端を指さして、未奈は彼に尋ねた。

未奈「あなたの部屋はここですかいいませんか？まあ、どの部屋も基本的な内装はほとんど同じなんで、どこを選んでも変わりませんけど…」

「ええ。かまいません。ベッドがあるならどんなところでも…。さっそく中で寝ても良いですかね？今日はちよつと疲れちゃって…」

未奈「そうですか。じゃあ私はこのまま皆さんを部屋に案内します

ね。おやすみなさいです。」

由紀「おやすみ〜！」

美紀「おやすみなさいです」

悠里「おやすみなさい」

胡桃「…おつかれさん」

弦次「おやすみ」

白雪「おやすみなさい。ゆっくり休んでくださいね？」

白雪がまだ敬語で接してくるのは少しだけ気になったが、こればかりは仕方ない：ゆっくりとがんばろう。

7人に増えた仲間に見送られ、彼はその部屋に入る。

部屋にはあらかじめ小さな電気スタンドが用意されていて、室内を足元くらいは分かる明るさにしていた。

そして部屋の隅、そこには大きめのベッドが一つ：

彼はそのベッドを見るなりすぐに飛び込み、大きなため息をつく。

「はあ〜っ…つかれた…ほんとにつかれた…。」

それだけを呟くと、彼はよほど疲れていたのか…部屋を照らす電気スタンドを消すのも忘れて眠ってしまう。

久しぶりのベッドでぐっすりと、心地よさそうに眠る彼…

その隣の部屋には悠里、そして今日は白雪が…

更に奥へ続くにつれ由紀、美紀、胡桃の順に個別の部屋が与えられた。

それぞれの部屋へと案内を終えた未奈と弦次は一階に戻り、自分達それぞれの寝室へと向かう。

その寝室へと戻る道中、弦次は未奈に語りかけた。

弦次「まだあの人達の事を大して知れた訳じゃないのに、部屋を与え、おまけに白雪まで預けるなんてな。お嬢は…あの人達を信じて大丈夫だと思うか？」

未奈「みんな良い人そうだし…大丈夫だよ。だって、あのヒメちゃんがあんなすぐになついたらだもん。それってすごい事だよ？」

弦次「それもそうだな…。あの人達がもし悪人だったとしたら、白雪はあんな簡単になついたりはしないだろう…」

未奈「うん。そうそう」

弦次「明日…あの人達の何人か連れて外に物資探しに行こうかな。交流も兼ねてね」

未奈「今日も行ったばかりじゃん！そんなちよくちよく外行かなくても、まだ物資余裕あるよ？危ないからしばらくは家にいなよ」

弦次「今日は白雪が欲しがったお菓子で持ち物がいっぱいになったから、まともな食糧は取ってこれてない。」

未奈「でも、余裕あるんだよ？しばらくは大丈夫だよ」

弦次「物資はいくらあつても困らない。もしもの時の為に、出来るだけ多く集めておきたいんだよ」

未奈「まったく、ゲンくんは心配性だなあ…」

未奈はそう呟いてから自分の部屋に入り、弦次と別れる。

弦次もまたその向かいに位置する自分の部屋に入り、そのまま眠りについた。

六十六話 『先輩・後輩』

未奈にそれぞれが使用する個室を教えてもらった後…

まだ眠くない由紀と胡桃は美紀の部屋へと押しかけようとしていた。

由紀「リーさんとヒメちゃんも一緒にこない？お喋りしよ〜よ！」
薄暗い廊下の真ん中、美紀の部屋へと向かう途中で悠里と白雪に尋ねる由紀だったが…眠たそうに目を擦る白雪を見て、悠里はそれをする事にする。

悠里「ごめんね。白雪ちゃんもいるし、あまり夜ふかしはできないの。」

由紀「そっか…。それじゃあしかたないね。お休みなさい、また明日！」

胡桃「おやすみ〜」

美紀「おやすみなさい」

悠里「ええ、お休みなさい。みんなも…あまり夜ふかししちやダメよ？」

それだけ言ってから、悠里は白雪の手を引いて自身の部屋へと向かう。

由紀達は二人が部屋の中に入るのを見届けてると、眠くなるまで雑談を交わすべく、美紀の部屋へと向かった。

…ボタン

美紀「さて…、二人はまだ眠たくないんですよね？」

由紀「うん！なんかドキドキして眠れないの！」

胡桃「人ん家ちに泊めてもらってるからだろ？その気持ちはなんとなくわかるわ。」

電池式のランプにほんのりと照らされた室内…

由紀はこの豪邸に泊まれた事にうかれているのかやたらとテンションが高く、周囲をキョロキョロと見回す。

一方胡桃はというと、室内に敷かれていたカーペットの上にあぐらをかいて座りこんでいた。

美紀「じゃあ、少しの間だけお喋りでもしますか？まだ私も眠くないですから…」

美紀は持っていた荷物を部屋の隅に置いてからベッドの上に腰掛け、目の前の二人に向かい合う。

だが、いざお喋りというと何を話そうか悩む三人…

それぞれが無言のまま話題になりそうなネタを脳内で模索している中、まずは胡桃がその口を開いた。

胡桃「未奈とあのゲンジって人…いい人そうだな。」

美紀「ですね。初対面の私たちにこんなあつさり部屋を貸してくれるなんて…」

由紀「うん！ヒメちゃんも可愛いし、ほんとに会えてよかったよ♪」

美紀「ふふつ、妹が出来た感じ…ですか？」

由紀「えへへ♪そうかもね♪」

胡桃「どっちかつつーと白雪の方がお姉さんに見えたけどな？」

嬉しそうに笑う由紀…

胡桃はそんな由紀の肩を横から小突き、いじわるな発言を浴びせてからかった。

由紀「うぐつ!?!?で…でも！少ししたらヒメちゃんも子供っぽいところを見せてくれたでしょ!?!?あれを見た上でどう?わたしの方がお姉

さんじやないかな？」

美紀「たしかに…、なついてきてからは年相応な雰囲気になりましたね。」

胡桃「まあ、それでも由紀よりしつかりしてたけどな。夕飯の片付けも率先して手伝ってたし…」

美紀「食料の在庫確認とかも手伝ってました。本当に偉い子です。」

由紀「う…うう…」

容赦ない言葉に肩を落とす由紀…

胡桃はそんな彼女の頭の上に手を置き、優しく撫でた。

胡桃「あたしから言つといてあれなんだけどさ…そんな事で落ち込むなって」

由紀「落ち込むよ。いつもとは違うお姉さんっぽいわたしを、くるみちゃん達に見せたかったのに…」

胡桃「はあ、バカだなあ…。無理してお姉さんになんなくてもいいんだよ…。あたし達は…どこか抜けてるお前が好きなんだからさ」

由紀「くるみ…：…ちゃん…」

美紀（胡桃先輩…：…なんだかんだで由紀先輩の事が大好きなんだなあ…）

胡桃に頭を撫でられ、かすかに頬を赤く染める由紀…

美紀はニツコリと微笑みながら、目の前の二人を見守る。

由紀「わたし…：…抜けてる？」

胡桃「…：…は？」

由紀「いや、言うほど抜けてるかなあ？…：…って思っ…：…」

美紀「…：…」

由紀の思いもよらぬ発言に、胡桃は思わず手を離し、撫でるのを止める…

美紀もまた、由紀を見つめながら苦笑いをしていた。

美紀「先輩…自覚無しですか？」

胡桃「もし自覚無しだとしたら、少しヤバいな…。さすがに笑えなくなってくる…」

そう言っつて冷やかな視線を由紀に向ける二人…

由紀はその視線に耐えられなくなり、手をパタパタと振りながら先程の発言を撤回する。

由紀「じよ、冗談だよっ!?!ちよつとは自覚してるから!だからその目やめてっ!!」

胡桃「だ…だよな?よかった、ほんとに…」

美紀「安心しました…。」

由紀「そりやまあ…いつも迷惑かけてるし、わたし…みんなにはたくさん支えてもらってるもん。自覚…してないわけないよ」

申し訳なさそうに言いながら、由紀はそつと顔を伏せる。

胡桃はそんな由紀の額を手で押すと無理やり顔を上げさせ、両手で彼女の頬を引っ張った。

由紀「にや…にやにひゅんの？」

頬を引っ張られている由紀が喋りにくそうに口を動かす。

胡桃はその頬を引っ張ったまま、真つ正面から目を会わせた。

胡桃「あたし達はな…お前が抜けてるって事を自覚してるのかしてないのかって話をしてたんだ。迷惑かけてるとか…支えてもらつてるとか…そんな事は聞いてないし、思ってもない。」

由紀「……………」

美紀「そうですよ。先輩は少しおちよこちよいだったり…天然な

ところはありますが、迷惑なんかかけてません。」

胡桃「ああ。それと、こっちは本当に自覚がないかもだけど…」

由紀「……………」

胡桃は由紀の頬から手を離すと再びその頭を優しく撫で、じっと目を見つめながら、笑顔で告げた。

胡桃「お前の笑顔が、あたし達みんなを支えてくれた事は…何回もある。逆なんだよ…、あたし達がお前を支えてるんじゃないよ、お前があたし達を支えてくれてるんだ」

由紀「…うそ…でしょ？」

美紀「嘘じゃないですよ。ツライ時…苦しい時…どんな時でも、由紀先輩が笑っていれば…私達は元気になれるんです。」

由紀「……………」

胡桃「もちろん、限度はあるけどな？あまり厳しい状況でニコニコされてたら多少イライラするかもだし…」

美紀「あはは…、それは確かに…」

由紀「……………」

胡桃「つまり…あれだ、由紀の笑ってる顔見てりゃ、多少のツライ出来事くらいなら忘れられるんだよ。」

由紀から目線を逸らし、ほんの少しだけ顔を赤くする胡桃…

「どうやら自分で言っている内に、照れくさくなってしまったよ
うだ。」

赤く染まった胡桃の表情を見た美紀が、彼女を軽くからかう。

美紀「胡桃先輩…照れてます？」

胡桃「…うっさい！照れてないっ!!」

美紀「あははっ。そういうわけで、胡桃先輩も私も…もちろんりー
さんもあの人も、みんな、由紀先輩の笑顔が好きなんですよ…」

胡桃「まあ…、そゆこと…」

由紀「…へへ♪ありがと…。すぐくうれしい！」
顔を赤くして照れる胡桃と、優しい言葉をかけてくれた美紀を交互に見つめ、由紀はニツコリと微笑んだ。

自分の笑顔が好きと言ってくれた二人…由紀もまたこの二人が大好きだったし、今はこの場にはいない悠里や彼の事も大好きだった。

胡桃「未奈達の話をしてたのに、いつの間にか脱線したな…。」

美紀「いいじゃないですか。おかげで、由紀先輩に私達の思いを伝えられました。」

由紀「えへへ♪二人とも、大好きだからね？」

そう言っただけで目の前に座っていた胡桃に嬉しそうに抱きつく由紀…

胡桃はその行動に戸惑いつつ、そつと彼女の背中を撫でた。

胡桃「普段は照れくさくて…中々言えないからな…。今日だけ、特別だ。」

そんな事を呟いて、そのまま由紀の背中を撫で続ける胡桃。

由紀はそれが気持ちよかったのか、10分ほど経つと眠そうな表情をして二人の顔を見つめた。

由紀「うう…眠たくなってきたから、わたし寝るね。…胡桃ちゃんはどうする？」

胡桃「まだそこまで眠くないけど…とりあえず部屋に戻るかな。」

美紀「あつ…。胡桃先輩、ちよつと…」

胡桃はそう言っただけで立ち上がり、由紀と共に部屋を出ようとしたが…美紀が何かを言いたげにしているのを見て、踏みとどまる。

そんな中、一人眠気に襲われている由紀は彼女達に別れを告げ、部屋を出ていくことにした。

由紀「ん…じゃあ、また明日ね…おやすみ…」

美紀「…おやすみなさい」

胡桃「おやすみ…」

ボタン…

胡桃「…なんか用？」

由紀が部屋から出た直後、胡桃は美紀に尋ねる。

美紀は少し言いづらそうな表情をしながら、その口を開いた。

美紀「あの…今日、私と由紀先輩がああ門を開こうとしていた時。

胡桃先輩…あの人に怒鳴ってませんでした？」

胡桃「…あたしが、あいつに？」

言われてから胡桃は思い出す…

あの時、自棄になつて”かれら”の群れに突つ込もうとした自分を止めてくれた彼…そんな彼に対し、胡桃は声を張り上げてしまった。

胡桃（そういえば、少し怒鳴ったかも…。あたしをほつとけとか…自分の身だけ守ってる…とか）

美紀「やつぱり、怒鳴ってましたよね。…何を言ったんですか？」

胡桃「…あたしが、奴らの中に突つ込もうとしたらあいつが止めてきたから、『ほつとけ』って…そう、言つちやつた」

美紀「突つ込もうと…って。なんでそんな事を?! そりゃあの人も止めに入るに決まっているでしょう!!」

胡桃の発言に、目を大きく開きながら美紀は驚く。

その直後…胡桃が顔を伏せながら呟いた。

胡桃「ちよつと…イライラしちゃって…それで、つい…」

美紀「イライラ? よりによって、なんであの状況で…」

胡桃「それは…その…」

美紀のその問いに声を詰まらせる胡桃：

もし本当の事を告げたら、心配させてしまうのではないだろうか？
ただでさえ大変な日々なのに：また一つ、余計な考え事を増やして
しまうのではないか？

そんな事を考えていたら、胡桃は口を動かさなくなってしまった。

胡桃「……………」

美紀「……………」

静寂の中、こちらをじつと見つめる美紀：

仕方ない…ここは適当な嘘について誤魔化そう…。

胡桃がそう考えた直後、先に美紀の方から口を開いてきた。

美紀「一応言っておきますけど…。嘘はナシですよ。本当の事を
言っして下さいね？」

胡桃「……………」

全部見透かされてるのかなあ…。

なら、もうどうしようもないか…

仕方ない…美紀には、正直に言っておこう。

胡桃は鋭い視線を向ける美紀に向き合い、あの時苛立っていた理由
を告げる…

胡桃「あの時、どういうわけか：あたしだけ奴らに相手にされな
かったんだ…」

美紀「…どういう…ことですか？」

胡桃「さあ？あたしは同類…とでも思ってたのかな…」

その言葉に驚いた美紀は、自傷的に微笑む胡桃のそばに身を寄せて
から、その手を掴む…

その手は以前に触れた時よりも遥かに冷たくなっており、明らかに
人間の体温ではなかった。

美紀「先輩っ?!?あの薬、ちゃんと効いてるんですよ!!?」

胡桃「多分効いてる。…ハズ」

視線を横に逸らし、曖昧な答えを返す胡桃。

美紀はそんな彼女の手を強く握り、その身を案じた。

美紀「ハズじゃダメなんですよ!!間違いなく、確実に効いてくれな
いと!」

胡桃「…わかってるよ。あたしは大丈夫だから、あんま心配すんな」

胡桃は握られた手を振りほどき、この話題から逃げようとする。

だが直後に美紀が放った一つの問い…。

それは胡桃にとって今、最も触れたくない物であり、一番聞かれた
くない問いだった。

美紀「傷のこと…——さんに伝えましたか?」

胡桃「っ!?!」

美紀「前にリーさんから聞きました。胡桃先輩は…あの人に傷のこ
とを伝えていないって」

胡桃「……………」

美紀「その様子だと、まだ伝えていないみたいですね…」

胡桃「そのうち…話すよ」

美紀「自分から聞いといてこんなことを言うのもどうかと思います
が…私は別に、無理して話す必要はないと思います。」

胡桃「…えっ?」

思いもよらぬ美紀の発言…

それに驚いた胡桃は、目を真ん丸にして彼女を見つめる。

胡桃「話す必要…ないの？」

美紀「まあ、できれば伝えるべきだとは思いますがよ？でも、胡桃先輩が悩んでしまうくらいなら…隠し続けてもいいんじゃないかと思ってるんです。」

胡桃「……そっ…か」

美紀「先輩…、悩んでるんですよね？毎日…毎日…」
彼女の言うとおりだ。

実際、胡桃は毎日一度は彼に傷のことを告げようかと頭を悩ませていて、その度に勇気が出ず…結局、明日こそはと見送る。
そんな事を、日々繰り返し返していた。

胡桃「よく…わかったな。…すげえ」

美紀「私は私なりに、みんなの事を気にかけてますから。胡桃先輩、ここ最近は特に元気がなかったですよ？悩みすぎです。」

胡桃「マジ？自分じゃ普通に過ごしてるつもりだったんだけどなあ…」

少しだけ恥ずかしそうに胡桃が笑っていると、突然美紀は彼女の背中に両手を回し…ギュツ、と抱きしめる。

その突然の出来事に一瞬思考が止まった胡桃だが、我に帰った途端…その顔を真っ赤にした。

美紀「………」

胡桃「み、美紀／＼／ど…どうしたっ？」

美紀「胡桃先輩は…強い人です。」

胡桃「………」

美紀「でも、強いから…全部一人で背負い込もうとします。私は…」

それが嫌なんです。」

胡桃を抱きしめたまま：美紀は小さな声で呟く。

その声色からかなり真面目な事を話しているのだと思い、胡桃は黙ってそれを聞いていた。

美紀「ツライことがあれば、みんなを頼って下さい。」

美紀「それがもし、みんなに言えないような問題なら、私が力になります。だから…」

美紀「ずっと、そばにいてくださいね。絶対に…どこにも、行かないで下さい。」

胡桃「……………」

美紀「由紀先輩も、リーさんも、あの人も、もちろん胡桃先輩も…私にとって、憧れのような存在なんです。」

美紀「皆さんそれぞれがともかつこよくて、頼りになる。本当に…最高の先輩達なんです。」

美紀「私は…頼れる後輩かどうか分かりませんが、力になります。大好きな先輩の為に、精一杯がんばりますから…だから…」

胡桃「…どこにも行くな…だろ？」

美紀「…はい。みんな…ずっと一緒に良いです。」

自分を抱きしめてくれている美紀の背中を撫でながら、胡桃は瞳を潤ませる。

彼女はとても良くできた後輩なのに、それを差し置いてまで自分達を褒めてくれた…。それが嬉しくて、涙が出そうになる。

それなのに涙を堪えたのは、胡桃の先輩としての意地だった。

美紀が憧れる、かつこいい先輩でいる為の意地だ…。

胡桃「…わかった。他でもない、可愛い後輩の頼みだからな。ずっと、しつこいくらいに…そばにいてやるよ。」

美紀「…はい。いて…下さい」

二人でしばらく抱き合った後…美紀の方からそれを止める。

彼女は胡桃から少しだけ距離を空けると、ニツコリと…可愛らしい笑顔を見せた。

美紀「胡桃先輩、少しは楽になりましたか？」

胡桃「…そうだな。かなり気持ちが悪くなった。…ありがとな」

美紀「いえ…。少しでも役にたてたなら嬉しいです。」

胡桃「……さてっ！」

少しの間、美紀と見つめ合った後に胡桃は立ち上がり、気合いを入れるかのように自らの頬を両手でパシッと叩く。

美紀「ん？どうしました？」

胡桃「ちよつと…あいつに謝りに行こうと思ってさ。無茶しようとしたあたしを止めてくれたのに、怒鳴っちゃったから…」

頬を人差し指でかじりながら、気まずそうに笑う胡桃…

そんな胡桃を、美紀は笑顔で見つめていた。

美紀「そうですね。もしかしたらまだ起きてるかもですし…。」

胡桃「起きてると良いんだけどな…。気分がのってる内に謝りたいから…」

美紀「明日に持ち越すと言いつらくなっちゃいますからね。」

胡桃「まあ、寝てたら寝てたで仕方ない、明日がんばるよ。」

胡桃「んで…傷のこともいつか必ず話す。あいつに隠し事なんて…したくないからな…」

美紀「!!…はいっ！がんばって下さいね！」

胡桃「ああ。がんばるよ！」

扉を開け、廊下へと出る胡桃を笑顔で見送る美紀：

廊下に出た胡桃はその扉を閉める直前に満面の笑みを浮かべ、自分を見送ってくれる後輩へ：感謝の言葉を述べた。

胡桃「色々ありがとな！美紀は本当に：あたしの自慢の後輩だ♪」
：バタンツ

美紀の返事を待たず、胡桃はその扉を閉める。

恐らく、自分の発言に反応されるのが照れくさかったのだろう。

部屋の中、一人になった美紀：

彼女は部屋の明かりを消してからベッドに横たわると、胡桃が言ってくれた『自慢の後輩』という言葉を思いだし、嬉しそうに微笑んだ。

六十七話『ねがお』

胡桃「…はあ」

美紀の部屋から出た直後…。胡桃は彼の部屋の前に立ち、ため息をつく。

彼に会いに行く理由はただ一つ。あの時、怒鳴ってしまった事を謝る為だ。恐らく…彼はあの事を気にはしていない。わざわざ謝る必要も無いかも知れない。それでも彼に謝りに来たのは、胡桃自身が気にしていたからだ…。

胡桃（起きてるかなあ…）

ガチャツ…

ドアノブをひねり、扉を開ける。彼が眠っているなら、恐らく室内は暗くなっているはずだが、電気ランプの明かりは未だについており、室内をほんのり照らしていた。

胡桃（おっ？起きてるっぽい）

その明りを見た胡桃は少しだけ微笑み、ベッドの上で横になる彼の元に歩みよる。そしてそばに歩み寄ったところで顔を覗き込み…彼女はようやく彼が既に眠っている事に気がついた。

胡桃（…なんだ、もう寝てたか。）

胡桃（布団もかけてない…。おまけに明かりはつけっぱなし…まったく、すっかりしろっての…。）

「Zzzz…」

胡桃（ま、それだけ疲れてたんだろな…。）

風邪でもひいたら大変だ。そう思った胡桃は両手で布団を引つ張り、それをそつと彼の体にかける…。ずいぶんと気持ち良さそうな寝顔だ。よほど疲れていたのか、それとも…

胡桃（いつも椅子で寝てるからな。久し振りのベッドがすごく楽なのかも…。）

胡桃（あまり疲れるようならベッド貸してやるっていったんのに、一度も借りにきたことないよな、こいつ。遠慮してんのかなあ…？）

「Zzzz…」

胡桃（気持ち良さそうに寝てるなく…。仕方ない、自分の部屋に戻るか…。）

ぐっすりと寝ているのに、いちいち起こすのはかわいそうだ。彼に謝るのは明日に持ち越す事に決め、胡桃はこの部屋のランプを消そうと歩き出す。

胡桃「……………」

…だが、胡桃はその歩みをすぐに止め、改めて彼の寝顔を見つめた。思い返せば、ここまでハッキリと彼の寝顔を見たのは初めてかも知れない。それに気づいた瞬間、なんだか不思議な気分になり…。ベッドのそばにかがんで真横から彼の寝顔を凝視する。

胡桃（こうして見ると…わりと整った顔してる…）

胡桃（肌綺麗だし…まつ毛も長い。鼻もそこそこ高いよな？）

胡桃（鼻…鼻…鼻…鼻…鼻…）

胡桃「……………」

胡桃（…鼻塞いだら、苦しくて起きるかな…）
なんとなくそんな事を考えてしまい、思わず手が出そうになる。
だが、今は我慢だ。今日は本当に疲れたハズ…。そんな彼を下らな
い冗談なんかで起こしたら、さすがに罪悪感がヒドイだろう。

胡桃（我慢我慢…と。）

ウズウズする手を気持ちで抑え、立ち上がろうとする胡桃だったが
…最後にもう一度だけ、彼の顔を近くから見つめたくなる。
なんとなく興味がわいただけ…。だから、今よりもっと近くで
…。どうせ起きてはいないのだから…。

胡桃「……………」

胡桃は彼が起きないよう、そつとベッドの上に乗る。だがどんなに
慎重に、ゆっくりと乗っても多少の音はしてしまうようで、胡桃が体
を動かす度に『ギツ』という小さな音が鳴った…。

しかし、疲れている彼はその程度では起きる事なく、相変わらず
ぐっすりと眠っていた。

胡桃（な、なんでこんな事してんだろ…。もし起きちゃったら、あ
たしがおかしい奴になるじゃん…）

ベッドの上に乗った後、冷静になった胡桃は一人顔を赤く染めた。
このままそつとベッドを降り、つけっぱなしの明かりだけ消してあ
げてから部屋を去ればいい。頭ではそう考えているのに、無意識の内
に体が動き…自身の顔を彼の顔へと寄せていってしまう。

もう、二人の顔の距離は20cm程度しか離れていないだろう。胡
桃は縛っている髪が彼の顔に当たらぬよう、それを自身の肩にかけて
おく。

胡桃（全然…起きないな。）

「Z Z Z…」

胡桃（ま、今起きられたらあたしがすごく困るから…起きなくていいけどさ…）

「Z Z Z…」

寢息をたてて眠る彼の顔を上から静かに見つめっていると、不意に目が潤んできた…。何故だろうか？いつも面倒をかけてしまっているからだろうか…。それとも、今日…怒鳴ってしまったからだろうか…。理由は分からないが、何だか胸が痛い。

胡桃「……………」

胡桃（そういえばあたし…いつもこいつにキツく当たってる気がするな…）

胡桃（今日なんか、あたしの事を思っ止めてくれたのに怒鳴っちゃったし…）

胡桃（文句一つ言わずにあたし達を守ってくれてんの…。あたしってやつは…）

明日、絶対彼に謝る。でも、それよりも先に…眠っいてもいいから…、とりあえず一度謝っておこう。そうでもしないと、胸が痛くて潰れそうになる。

胡桃「今日は…ごめん…」

胡桃「いつも…ありがとう。…お休み」

耳をよくすまさないと聞こえないほど小さな声で胡桃は囁き、そつとその場を去ろうとする。

だが…

胡桃「……っ！」パサッ

動いた拍子に肩にかけていた髪がスルツとベッドの方へと流れ、眠る彼の顔を直撃した。

胡桃（ヤバっ!?!髪どかさないと…!!）

慌てて髪を肩にかけなおす胡桃だが、既に手遅れ…

彼の目はパチツと開き、目の前の胡桃を眠そうな目で見つめていた。

胡桃「あ…あう／＼／＼そ、そのっ…／＼／＼あたしは…／＼／＼」

彼が目を覚ました事に気づいた胡桃は顔を真っ赤にして慌て始め、両手をパタパタと振りながら一生懸命にこの状況を切り抜けられる言い訳を考えた。

六十八話 『かなしむ』

胡桃「……………」

「…はろ〜」

胡桃「は、ハロ〜…」

とりあえず彼に挨拶を返し、どうしたものかと胡桃は考える。

彼の視点で考えると…今の状況はかなりマズイ。

自分が眠っていたら突然くすぐったい物が顔にかかり、そのせいで目を覚ましたらベッド上に胡桃がいた…。

ただ部屋にいただけならば、『暇だからきた』『夜ふかししてないか確認にきた』などと言い訳が出来る。

だが、今胡桃がいるのはベッドの上。これは言い訳が難しい…。

胡桃（ど、どうしようっ?! マズった! 最後の最後でマズったあ!!）
うまい言い訳も思い付かず…。今の胡桃は顔を真っ赤にしながらかキョロキョロと目を泳がせる事しか出来ない。

一方…起きて間もない彼は目を擦りながらアクビをし、そつと胡桃に声をかけた。

「…眠れないの?」

胡桃「えっ?」

「いや、全然眠くなさそうな顔してるから…遊びにでも来たのかなって…」

その発言に、胡桃はホッと胸を撫で下ろす。彼がそう解釈してくれたなら、その方が都合が良い。一安心した彼女はニツコリと微笑み、

そのまま大きくうなずいた。

胡桃「うん！全然眠れなくて♪」

「…そですか。」

彼はそう呟くと自分にかかっていた布団を軽く捲り、横のスペースをポンポンつと叩いた。

「んじゃ…一緒に寝る？」

胡桃「っ／＼寝るわけないだろっ!？」

「でしようね。…残念だなあ」

彼はそんな冗談を言いながら、冷えぬように足にだけ布団をかける。

(あれ…：布団、自分でかけたっけな?)

目を覚ました時、布団がしっかりと自分の肩までかかっていた事を思いだし、疑問に思う。記憶では、ベッドに飛び乗ってすぐ眠ってしまったような気がする。布団はかけ忘れたはずだが…。

胡桃「あのさ…」

「…ん？」

いつの間に布団が…などという疑問は胡桃に声をかけられた事でそのまま忘れる事になるが…彼女のその発言もまた彼の頭を悩ませた。

胡桃「今日…ごめんな」

「へっ？」

(今日?んく…なんかされたっけな。全然わかんない…。)

胡桃「あの時、ちよつとイライラしちゃってさ。それであんなふうに…、ほんと…どうかしてたよな…」

(いやいや…。なんの事だ？全然わからん…)

『なんの事？』と素直に聞けば済む話なのに、そうせずに頭を悩ませる。聞いたら負けな気がする…。！という訳のわからない考え方をしていたからだ。

(胡桃ちゃんの顔色から察するに…僕は相当な事をされたみたいだな。なら、少しずつ今日1日を振り返れば分かるはずだ…。よみがえれっ!!我が記憶!!!)

「……………」

「……………」

(今朝の朝食すら思い出せない (泣))

自らの頼りにならない記憶力にショックを受け、両手で顔を覆う。因みに今朝の朝食は悠里が握ってくれた『おにぎり』だったが、それ

を思い出したところで特に意味はない。

胡桃が言っているのはそれよりも数時間後の出来事なのだから。

「ギブアップ！」

胡桃「…はっ？」

「胡桃ちゃんが何の事で謝ってるのか全然わかんない。だからギブアップ！」

「答え、教えてください。」

胡桃「あっ…そう。やっぱ気にしてなかったのかな…」

気にしていたのは、自分だけか。胡桃はそう思いつつ、何故謝っていたのかを彼に教えた。

胡桃「この家の門開けてるとき、お前はあたしが奴らの中に突っ込もうとするの見て止めてくれたろ？あたしその時、自分を助けてくれたお前に怒鳴っちゃったからさ…。悪かったなって思っ…」

「…ああ…そういえばそんな事もあったね！」

胡桃「忘れてたのかよ…。つたく」

「あの時は焦ったよ。急に突っ込もうとするんだもんなあ…。」

胡桃「…ごめん」

ようやく思い出した彼にそつと頭を下げ、胡桃は謝る。

「僕がもつと強ければ…、胡桃ちゃんも楽でいられるのになあ。ごめんね…弱くてさ…」

へらへらと笑いながら、彼もまた胡桃に謝る。冗談で言っているのか…本気で言っているのかは分からない。だがどちらにせよ、胡桃はその発言を聞き流せなかった。

胡桃「違うだろ…。今はあたしが謝ってんだ…」

胡桃「お前が…お前が謝る必要なんてないっ！お前は何も悪くないし…弱くもない!!」

「確かに…弱くはないかもね…。でも、強くない」

胡桃「…強いの。十分に…」

ただ謝りに来ただけなのに…無駄に彼を苦しめている気がする。

あの時、自分が余計な事をして…そして今、それを謝りに来た…。でもそのせいで、彼は自身を過小評価してしまった。

十分…強い人間なのに…。

「いや、やっぱりさ…奴らが10体や20体いてもナイフ一本で瞬殺できるほどに強くなりたいわけよ？いくら頑張ればそのレベルになれんかなあ…」

胡桃「…あ？」

違った…。彼は自身を過小評価していた訳ではない。ただ、強い基準を間違えていたのだ。彼のいう『強い人間』は”かれら”が20体いようと瞬殺出来るレベルだというが…それはどんな人間でも無理だ。もしいたとすればそれはただの『強い人間』ではなく、人智を超えた『超人』だろう。

胡桃「お前…マジでバカだな。」

「おお…失礼じゃない？」

胡桃「もういいよ。とりあえず、あの時の事を謝りたかっただけだから。…あたし、部屋に帰るよ」

ベッドから降り、胡桃は彼にそう告げる。

ついでにランプを消した方がいいかと尋ねたら、後で自分で消すと

彼が答えたので真つ直ぐ扉へと歩き、ドアノブに手をかけながら振り向く。

胡桃 「んじゃあ…おやすみ。起こして悪かったな」

「べつにいいよ。…あつ、胡桃ちゃん」

胡桃 「ん、なに？」

「あの時みたいなさ、もう二度としないようにね。もし君が、僕よりも先に死ぬような事があれば……」

胡桃 「……あれば？」

「……すつごく悲しむ。だから、もし困が必要な時が来てもそれは僕がやる。君達は…絶対に死んだらダメな人達だから」

ドアノブに手をかけたまま振り向く胡桃に、彼がいつになく真面目な表情を見せる。胡桃は手に入力して扉を開くと廊下に一歩踏み出し、もう一度彼の方へと振り向いて笑顔で答えた。

胡桃 「わかったよ…もうしない。」

「…それはよかった」

胡桃 「…だけど、それはお前も一緒だ。」

「………」

胡桃 「あたし達の代わりにお前が困なんてやるのは、絶対に許さない。それでもし死んだら…あたしも”すつごく悲しむ”からな？」

「……了解」

胡桃 「よしっ！じゃあ改めて…おやすみ♪」

「…おやすみ」

…バタン

胡桃はニツコリと笑いながら彼に手を振り、その扉を閉める。

彼女がいなくなった瞬間、彼は立ち上がってから部屋の明かりを消すと再びベッドに横たわり、そして布団をかける。

「……………」

「すつごく悲しむ…?」

「そうか…あの娘^こ達が死んだら、僕は悲しむのか…」

布団を鼻先までかけ、暗くなった事でうっすらとしか見えなくなった部屋の天井を睨みながら彼は一人呟く…。

「…あれだけ仲良くしていたら、当然そうなるよな。」

一人で暮らしていた時、彼は自分の命をそれほど重要視していなかった。

自分もいつか近い内に”かれら”辺りに襲われ、そして死ぬものと常に覚悟を決めていたから、死に対する恐怖感が和らいでいた。

もちろん、それでも多少の怖さはあったが…いつか訪れるであろう自らの死を受け入れる準備は出来ていた。

だが彼女達と出会い、共に暮らした事で…いつの間にか自分の命よりも遥かに大切な物を四つも抱えていた。

由紀の命…美紀の命…悠里の命…胡桃の命…。

そのどれもが自分の命よりも大切で…失いたくない。

自分はいつ死んでもいい…。

別に…そこまで怖くもないのだから。でも…彼女達は…

彼は彼女達と出会った事で、この世界が明るく…楽しいものに変

わったと思っていた。…それは間違っていない。実際、彼女達のおかげで彼は随分と明るくなった。

しかし、その幸せと同時に増えたものがもう一つ…

それは…彼女達を失う事に対しての激しい恐怖だった。

自分が死ぬのはかまわない。

だが、もし…彼女達の内の誰かが死んでしまったら？

そう考えると言い様のない恐怖を感じてしまい、彼は中々寝つけなかつた。

六十九話『しつと』

翌朝：

目覚めた由紀は部屋を出て、他の皆の部屋を確認する。

しかし、由紀以外は既に目覚めていたらしく、どの部屋も誰もいなかった。なら、みんなは昨日話をした広間辺りにいるのか…。そう考えた由紀は一階に下り、そこに向かう。

：ガチャツ

広間に入る為の扉を開き、そつと中を覗く。

そこには彼と弦次：そして悠里がいて、何やら話をしていた。

悠里「私は物資の管理とか：あとは食事の準備とかの担当です。例えるなら、未奈さんと似たようなものですかね」

弦次「なるほど、分かりやすい例えですね」

悠里「美紀さんはそれらを手伝ってくれます。そして胡桃と彼は、この人体を動かす仕事：つまり：」

弦次「奴らとの戦いに慣れてる、と…。自分と同じですね。残るのは：」

悠里「由紀ちゃんですね」

由紀（これ：もしかしてみんなの役割を教えてあげてるのかなあ。……あれ？そうだとするとわたしって何担当になるんだろ？）
扉の隙間から中を覗き見て、由紀は頭を悩ませる。
自分の担当分野は何なのか：と。

悠里「由紀ちゃんは：」

由紀「……………」

悠里「癒し担当です♪」

弦次「…癒し？」

悠里「はいっ！」

弦次「……………」

悠里の発言を受け、弦次は少しの間沈黙する。

だが少しの沈黙の後、突然弦次はハツとしたような表情を浮かべた。

弦次「…ああ、白雪と同じって事ですか。」

悠里「ふふっ、そうですね♪」

「ある意味、一番重要な存在ですね。彼女達みたいな人がいると、心から元気になれる。」

弦次「奴らから逃げる…。飢えないように食糧を口に…。それだけじゃ、生きていても味気無いですからね。アイツらみたいなタイプは本当に大切です。お互い…良い人間に恵まれましたね」

悠里「はい、由紀ちゃんがいてくれて…本当によかった」

由紀（昨日の夜、みーくんと胡桃ちゃんに言われたとおりで。わたし、ほんとにみんなを支えてあげられてるんだ…。）

こつそりと話を盗み聞きしていた由紀だったが、聞いていた話の内容があまりにも嬉しくて、笑顔で悠里達の元に飛び出していった。

由紀「…おっはよ〜っ♪」

「おはよう〜ございます。朝から元気ですね？」

悠里「おはよう、由紀ちゃん」

弦次「おはようです」

由紀「みんなでなんの話してたの？」

悠里「ゲンジさんが私達それぞれの得意分野を聞きたいっていうから、分かりやすく教えてあげてたの」

由紀「ふうくん…そっかあ♪」

につこりと満面の笑みを浮かべながら椅子に座る由紀。

彼女は椅子に座ってからも、足をパタパタと振ってご機嫌な表情を浮かべ続けた。

(この人たぶん…さっきの会話聞いてたな)

やけに上機嫌な由紀を見た彼はそれに気がつき、こつそりと微笑む。

子供のように足をパタパタとさせてにやにやと笑う彼女がとても可愛らしかったからだ。

由紀「そういえば、ゲンくんはどうしてそんな事を急に聞いたの？」

弦次「後で外に出掛けようと思うんですけど、その時あなた達の内の何人かに手伝ってもらおうと思って…親睦を深める為の交流も兼ねてね。…だもんで、皆さんそれぞれがどんな人か理解しとけば無駄の無い人選ができると思ったんですけど…」

「人選…、決まったかな？」

弦次「まあ…大体は」

そして30分後…

外へ探索へ向かうべく…、四人の人物が庭に集まる。

30分かかったのは軽い朝食をとっていたのと、出発の準備を整えていたからだ。

弦次「わるいですね。自分のわがままに付き合わせちゃって…」

悠里「いえ。こんな良い場所に泊めてもらってるんですから、このくらいならいつでも。」

由紀「そうそう！いつでも手伝うからねっ♪」

「結局、あの場にいたメンバーになりましたね…。」

その後、弦次はその場にいた彼と由紀と悠里をメンバーに選んだ。

この三人を選んだ理由は、戦闘担当が一人（彼）とより多くの物資を持ち帰る為の荷物持ちが二人ほど（由紀、悠里）欲しかったかららしい。

弦次「向かうのはそう遠くない場所にあるスーパーです。この前行った時にいくつか食糧を見つけたんですが、一人では持ち帰りきれなくて…。でも、四人なら確実にすべて回収出来るはずですよ。」

由紀「じくじくっ…」

弦次「…な、なにか？」

由紀「それ、なに？」

由紀がそう尋ねながら指差すのは、弦次が右手に握っている長い棒：2m近いその棒の先には、テープでガッチリと固定された刃物が光っていた。

弦次「これですか？自分の武器です。手製の槍みたいなものですかね」

由紀「おっつ、カッコいい〜！」

悠里「すごく頑丈そう…。器用ですね」

弦次「…そうですか？ありがとうございます。因みに、あんたの武

器は…」

晴れた空を見上げる彼に武器を尋ねる弦次…。

彼は少し遅れてからそれに反応し、上着を捲って腰に携えたナイフを見せた。

弦次「ナイフか…。王道ですな…」

「まあ、そうですねあ」

由紀「因みに、胡桃ちゃんはシヤベルだよ。」

弦次「シヤベル？それはちよつと珍しい…」

「めっちゃめっちゃ強いですよ…。たぶん、僕よりも」

弦次「…冗談？それとも事実？」

「…僕と胡桃ちゃん、どっちが強いと思いますか？」

横に立つ由紀と悠里に、彼は尋ねた。

改めてどちらが…と聞かれると難しく、二人は頭を悩ませるが…答えは案外すぐに出た。

由紀「ああ…ギリギリ胡桃ちゃん、かなあ」

悠里「そう…ね。私も胡桃の方が…」

「……」

弦次「……」

「ねっ？男としてのプライドがズタズタですよ」

弦次『「ねっ？」とか言われても、返す言葉がないが…。まあ、あまり落ち込まないように」

悠里「ち、違うわよ？ほら、はやさ的な意味でね？胡桃って一振りでも何人も倒したりするけど、——君のナイフじゃそうはいかないでしょ？でもほら、確実に倒すって意味では——君の方が上だと思う

しっ…！」

「さて、目的地はスーパーだったわけ。はやく行きましよう？」

彼のプライドを傷つけないようにと一生懸命にフオローしてくれた悠里だったが、今の彼にとってはそれすらも痛い言葉と変わりなかった。

悠里「あ、う…うん。車…使いましようか？」

弦次「あつ…そこに停めてあるやつですよね。」

庭の一角に停めてあるキャンピングカーを指差しながら、弦次はそつとうつむき…何故か突然気まずそうな表情をする。

由紀「…どうかした？」

弦次「…もしかして、昨日あの車に落書きとかされませんでしたか？…なんか微妙な絵なんかか？」

悠里「えっ？…なんで知ってるんですか!？」

弦次「やつぱりそうだったか…。キャンピングカーとか…珍しいもんなあ」

驚く悠里達と車を交互に見つめて弦次は頭を抱えると、何故落書きされた事を知っていたのか…その理由を告げた。

弦次「昨日白雪と外に出た時、ちよつと目を離したらアイツいつの間にかそばの車に落書きしてまして…。最初はまあ落書きくらいと思っただんですが、よく見たらその車、明かりがついてるじゃないですか…。自分はもうその瞬間大慌て…白雪を連れて一心不乱に逃げました。つまりその…何が言いたいかという…」

由紀「昨日の落書き、ヒメちゃんが描いたってこと？」

弦次「…はいっ。申し訳ない！ちゃんと綺麗に拭き取って消しますんで!!許してやって下さい！」

たらりと冷や汗を流しながら頭を下げる弦次……。そんな彼を見た悠里はニヤニヤと笑いながら弦次を車のそばに招き寄せ、昨日落書きのあったドアを見せた。

悠里「白雪ちゃん、落ちやすいペンを使っていたみたいですよ。落書きはあの後、雨で流れてすぐ消えちゃいました。」

弦次「本当ですか!?!……はあ、よかつたあ。皆さんが乗ってきた車と、昨日見た車が似てるもんだから、もしかしてと思つてずっと焦つてたんですけど……。そうかそうか……流れて消えましたか……」

悠里「まあ、もし消えてなくても怒ったりしませんよ。子供のした事ですから♪」

そう言つて微笑む悠里をみて、弦次は胸を撫で下ろす。

かなり気にしていたようだが、彼女の笑顔を見て安心できたようだ。

弦次「……ありがとうございます。本当に、すいませんでした。」

由紀「あの時、そばにいたなら声かけてくれればよかつたのに」

弦次「あの車の持ち主があなた達みたいな人だと分かつていたらそうしましたが……。もし危険な人物達だった場合、白雪が危ないです。車に落書きしただけでも殺されたりしてしまうかも……」

悠里「……そういう人達に出会つた経験でも?」

弦次「ええ、まあ……。危険な人間つてのは、奴らよりも恐ろしい。奴らはただこちらめがけてのんびりと歩きながら、噛みつきこうとするだけ……」

弦次「でも人間は違う。頭が良い分、様々な方法でこちらを追いつめてきます……。」

そう呟き、弦次は暗い表情をする。直後、慰めるように誰かの手が背中に触れたことで、弦次はそつと振り返る……。そこにいたのは由紀

だった。

由紀「…でもさ、いい人だっただくさん生き残ってるはずだよ。」

弦次「そうですね…。あなた達と出会って、それに気づきました」

「まだ丸一日もたつてないのに、そこまで信用してくれてるとは…」

弦次「もちろん最初は警戒してたけど、由紀さんの笑顔見てたらいちいち疑うのが馬鹿馬鹿しくなった」

「…わかる。すぐくわかる。」

悠里「だって、私たちの”癒し”ですから♪」

由紀「えへへ♡」

彼女の笑顔を見たことで、弦次は警戒をやめた。

こんな純粋な笑顔を見せる娘が悪だとはどうしても思えなかったから…

そして、その笑顔を見て嬉しそうに笑う彼女の仲間達もまた…いい人達なのだろう。弦次は一片の疑いも抱かず、彼女達全員を信用し、共に車に乗り込んだ。

悠里「さて、目的地はどの辺ですか？」

弦次「あなた達が昨日ここまできた道のり、まずはそれに沿って行って下さい。近くになったらまた教えますんで」

悠里「わかりました。じゃ…」

車のエンジンをかける悠里だが、すぐに後部座席の方へ振り向き、男二人に申し訳なさそうな顔を見せた。

悠里「ごめんなさい…。門…開けてきてくれるかしら？」

「ああ…そっか」

弦次「…忘れてた。少し待っていて下さい。」

由紀「わたしも手伝おっか？」

「いいえ、大丈夫ですよ。すぐに戻りますから」

男二人は車から降り、あの重い門を開く…。

いくら男といつてもさすがにあの門は強敵らしく、車が通れるほどに開くまで1分弱かかった。

ある程度門が開いたのを見計らってから悠里は車を外まで動かし、二人が戻るのを待つ…。だが二人はすぐには戻らない。今開けたばかりの門を、今度は閉めねばならなかったからだ。

悠里はそんな二人を車のサイドミラー越しに見守り、待ち続ける。二人とも門を閉め終えて車内に戻った頃には、激しく息をきらしていた…。

「お…おまたせ…しました…」

弦次「はあっ…はあっ…！」

悠里「二人とも…出発して間もないのにそんなに息をきらしちゃって…」

由紀「帰りは四人で開けようね？」

弦次「そう…ですね…。頼み…ます…」

はやくも体力を失った二人を休ませながら、悠里は車を走らせる。体力がある程度回復した段階から弦次は彼女の隣に座り、目的地までの道のりを教えた。

弦次「そこ、右ですね」

悠里「右？はい、わかりました…。」

弦次「…悠里さん」

悠里「はい？」

弦次「さつきは由紀さんの笑顔ばかり褒めましたけど…。あなたの笑顔も優しくくて、すごく素敵だと思います」

悠里「えっ？あっ…はい、ありがとうございます…。」

「……………」ギツ……

由紀「——くん、目が怖いよ。どうしたの？」

「イエ、ナンデモナイデス……」

弦次は特に意識せずに本音を言ったただけなのだが……彼はそれに対して謎の敵対心を抱いた。弦次という同年代の男子が悠里と話し、彼女を照れさせた事に、嫉妬にも似た何かを……いや、ストレートに嫉妬していた。

悠里が自分以外の男子と話し……顔を赤くしている。それだけで言い様のない気持ちに胸を刺激し、頭が熱くなってきた。

（帰ったら僕も……リーさんの笑顔を褒めよう。これでもかかってくらい褒めよう……）

彼がそんな決意を胸に刻んでいると、前に座る由紀が顔を寄せるようにと手招きをしてくる。彼はそれに従い彼女に顔を寄せると、由紀は彼の耳に口を寄せ、にやにやししながら囁いた。

由紀「……ヤキモチ、必要ないと思うよ？」ボソツ

「っ!?なんでですかっ?」ボソツ

由紀「えへへ……だってね……」ボソツ

由紀「たぶん——は——だもん」ボソツ

「……マジですか?」

由紀「うん。絶対そうだよ♪」

「由紀ちゃん……意外とよく見てますね?」

由紀「えへへっ♡」

彼女が言った言葉を信じた彼は突如芽生えた嫉妬心を落ちつかせる事に成功し、走る車から窓の外を見る。由紀もまた同じように外を

見つめながら、目的地への到着を待った。

七十話『みまちがい…』

弦次「…ここですね」

弦次の案内の元、車はスーパーにたどり着く。

そこまで大きくはない建物だが、中は薄暗い…。奥まで行くならうイトが欲しいところだろう。

バタン…

四人は車から降りるとすぐに辺りを見回し、安全を確認する。

とりあえず、すぐそばに”かれら”の姿はない

弦次「ここは奴らの数が少ないですので、比較的安全なはずですよ。もちろん…大きな音をたてたりしたら寄ってくるでしょうから、警戒は緩めないで下さいね」

「了解。それで、物資はどこら辺に？」

弦次「この中の奥…そこにある棚の一角にありました。前にここに来た時から1週間程度しかたつてないから、まだあるはず…」

由紀「じゃあそれを取りにいけば良いんだね？ちゃんとカバンも持ってきたし、行こっか！」

悠里「由紀ちゃん、ちゃんとカバンを持つ前にちゃんとライトを持ってね。足下が見えないかも知れないですよ？」

弦次「ええ、この建物…中がけっこう暗いです。明かりは持つという方が良くないか…」

由紀「じゃあ、わたしとリーさんで照らしといてあげよっか。二人は手ぶらの方が良いもんね？」

悠里「そうね。そうすればいざって時に二人はすぐ動けるし…」

弦次「ありがとうございます。すごいな…、お嬢はそこまで気を使

えないんだが…」

由紀達の細かい気配りに驚いたところで、弦次達は中へと入る。入口付近は綺麗に漁られているが、奥にあるという物資はまだ残っているのだろうか？そんな考えを胸に、彼らは奥へと進んでいく…。

悠里「足下…気をつけてね」

「…はい」

建物内は窓が少なく、外からの光をほとんど取り込んでいない。

奥に進めば進むほど、辺りは暗くなっていく。悠里達が照らしてくれていなかったら、1m先が見えるか見えないかといったところだ。

由紀「静かだね…」

中はとても静かで、唯一聞こえるのといえれば彼女達の足音くらいのものであった。今のところ…”かれら”の気配はない。

弦次「…あった、あそこです」

奥にあった棚の一つを弦次が指差す。由紀がそこをライトで照らすと、いくつかの水や食料などが置かれている棚があった。

悠里「来たかいがあつてよかったですね。」

弦次「ええ、まったくです」

物資の量は中々のもので、確かに一人では全てを持ち帰る事は出来ない量だ。それらを見た悠里は自分達の手元を照らせる場所にライトを置くと、持ってきたカバンを広げ…その中に必要な物資を詰め始める。由紀もそれを手伝い、その間彼と弦次は周囲を警戒していた。

由紀「…これ、お茶かな？」

悠里「お茶にはお茶でしょうけど…ダメになってるわね。その辺に置いてきなさい」

由紀「は…い…あつ、これは？」

悠里「ん？それは——」

一つ一つチェックしながら物資を詰める悠里と由紀…。

弦次はそんな二人を一瞬だけチラツと横目で覗き、微かに微笑む。

弦次「…仲間が多いと楽だな」

「未奈さんに探索を手伝ってもらった事は？」

弦次「あるにはある…。でもお嬢はのほほんとしててなんか危なつかしい…。白雪は白雪で連れていっても疲れるだけだし…。こんなに安心感のある探索は初めてかも…」

「苦勞しているようで…」

弦次「ま、こんなのは苦勞の内に入らないよ。それより…さつき物音が聞こえたな…。」

「…聞こえたかな？僕は気づかなかったけど」

悠里「どうかした？」

「物音が聞こえたみたいです」

悠里「物音？気づかなかった…由紀ちゃんは？」

由紀「わたしも気づかなかった。どんな音？」

弦次「…：缶が転がるような音です。気になるから、少し見てくる…。」

悠里「危なくない？」

弦次「慣れてるんで平気です。ライトだけ借りていっていいですか？」

悠里「ええ、かまわないけど…」

弦次「ありがとうございます。すぐに戻りますんで…」

そばに置いてあったライトを手に取り、弦次は一人歩き出す。

一時的とはいえ、弦次がいなくなった分より強い警戒を心がけなくてはならない…。由紀と悠里が物資を詰める間、彼は一人で周囲を警

戒したが：特に何も現れず、何の物音も聞こえなかった。

聞こえた音といえば、弦次がどこかに向かつていった時の足音と、悠里達の小さな話し声くらいのもの……。それ以外は何も聞こえない、本当に静かな場所だった……。

悠里「さて、こんなものかしらね……。ゲンジさんはまだ？」

由紀と共に物資を詰め終えた悠里がカバンを閉じ、ライトを手にして辺りを見回す。あれから5分ほど経ったが：弦次は戻らない。

「まだ、戻ってきませんね……」

由紀「大丈夫だよ？ちよつと心配……」

悠里「争ったような感じの音は聞こえてこなかったからたぶん無事だとは思うけど、どこまで行ったのかしら……」

念のため、その場でもう2分ほど待つてみるが、それでも弦次は戻らない……。彼は少し嫌な予感がして、一度由紀達だけを外に送り出す事にした。

「……一度外に出しましょう。二人を車のそばに戻したあと、僕はここに戻ってあのを探します」

悠里「……わかった。由紀ちゃん、戻りましょう」

由紀「う、うん……」

彼は由紀と悠里を連れ、足早にスーパーから外へと出る。外に出るや否や、彼は二人を車のそばに残し、再び中に戻ろうとした……

悠里「念のため、車のエンジンはかけておくから……」

由紀「気をつけてね、すぐ……戻ってきてよ？」

「はい、すぐに——」

弦次「あつ、やっぱり外に出てたんですね。」

悠里「えっ?」

由紀「お?」

「…あ?」

由紀達を外に届けた彼が振り返ると、ちょうどスーパーの中から弦次が出てくるところだった。見た感じでは怪我一つなく、無事のようにだ…。弦次は悠里から預かったライトを彼女に返すと軽く頭を下げ、申し訳なきような顔をした。

弦次「すいません…思いのほか手こずってしまつて」

「手こずつた? やっぱり、なんかいましたか?」

弦次「奴らが2体…やっぱり、暗いと戦いづらいなあ」

悠里「はあ…気をつけて下さいよ?ほんとに心配したんですから…」

弦次「ええ、これからは気をつけます」

悠里は弦次の言葉を聞いてから車に乗り込み、エンジンをかける。

弦次「……………」

エンジン音を響かせながら微かに震える車を見つめ、弦次がボーっとしていると、背後から誰かがその肩を叩く。

驚いた弦次がゆっくりと振り向くと、そこには微笑む彼がいた。

「まあ、とりあえず無事でよかつたですよ」

弦次「わるいね。いろいろと…」

「いえ…、お気になさらず」

弦次は車に乗り込む彼を見送った後、自らもそれに続こうと足を動かす。

だが乗り込む直前、少し後方でどこかを見つめながら動かない由紀

に気がつき、そつと声をかけた。

弦次「由紀さん…どうしましたか？」

由紀「んー。あのね、さつきあそこに誰かいて、こつちを見てたよ
うな気がしたんだけど…」

弦次「……………」

由紀の指さす方向へと視線を動かす弦次…そこにあつたのはスー
パーの向かいにある三階建ての小さなビルであり、由紀はその2階
部分…窓際を指さしていた。

弦次「……………」

由紀「見間違い…かな？誰もいないね」

弦次「…ええ、そうだと思いますよ。さあ、はやく車に乗りましよ
う」

由紀「あつ、うん！」

じつくりとそこを見て、誰もいない事を確認してから二人も車に乗
り込む。その直後に車は悠里の手によって走り出し、その場所をあと
にした…。

七十一話『せんたく』

白雪「みき、次は何してあそぶ？」

美紀「えつと…絵でも描こっか？」

白雪「うん。みきは絵、得意？」

美紀「ん、特別得意なわけでもないかなあ…」

白雪「じゃあ勝負しよう？後でミナに見せて、どっちが上手いか聞
くの」

美紀「わかった。じゃあ紙とペン貸してくれる？」

白雪「えつと…はい、これ」

美紀「ありがとう。じゃあ…ワンちゃんでも描こうか？」

白雪「ワンちゃん…？うん、いいよ」

広間の隅…美紀と白雪は床に寝転びながらペンを片手に持ち、真っ
白な紙に『犬』を描いていく。そんな二人の様子を、席に座りながら
見守る未奈と胡桃…。未奈はそばの胡桃の顔をチラツと覗きこむと、
申し訳なさそうに言った。

未奈「あのお…ごめんなさい。ヒメちゃんの遊びに付き合っても
らっちゃって…」

胡桃「ん？気にしないでよ。好きでやってる部分あるし…。」

未奈「…ありがとう。胡桃ちゃんは…子ども、好き？」

胡桃「まあ…少なくとも嫌いじゃないよ。シラユキ可愛いし…」

未奈「さつきまでは胡桃ちゃんがあの子と遊んでくれてたんだよね
？ありがとう…二人がヒメちゃんと遊んでる間に、私は家の仕事を片
付けられたよ♪」

胡桃「仕事？」

未奈「うん♪みんなの部屋の掃除とか…あと洗濯！みんなの服も

ちやんと洗っておいたからね♪」

そういえば、彼女達が昨日：濡れた服から綺麗な服への着替えを終えた後、未奈は気づけば彼女達が脱いだ服を集めてどこかに持っていった。洗濯の準備をするために、わざわざ運んでいってくれたのか…。そう思った胡桃は未奈に礼を言おうとするが、直前のところで一つ、気になる事が出来てしまった。

胡桃「あの：下着も？」

未奈「うん！洗っておいて、今は外に干してあるよ♪」

胡桃「ちよいつ!!?どこ!?それってどこに干してあんの!?!」

未奈「ごっつ、ごめんなさい!?!庭ですっ！庭ですからっ！」

突如大声を発する胡桃に対し、凄まじい早さで頭を下げる未奈。

彼女は目に涙を浮かべながら、必死に頭を下げ続ける…。

そういえば彼女はこういう性格だったと思い出した胡桃だが時すでに遅し：室内にはなりやまぬ『ごめんなさい』の雨が響いていた。

未奈「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!?!」

胡桃「い、いや：わかったから！もういいからっ!!」

未奈「ごめんなさいくっ!!」

美紀「ちよつと先輩っ！なにしてるんですか!?!」

胡桃「あたしが悪いのか!?!」

突然の連続『ごめんなさい』に驚いた美紀がそばまで駆け寄り、胡桃と共にそれを抑えようとするが：止め方がまるで分からない。都合の悪いことに、昨日これを止める事が出来た唯一の人間である”丈檜由紀”は今、外に出てしまっているのだ。

未奈「ごめんなさい!?!ごめんなさい!?!」

美紀「み、未奈さん！落ちついてっ!!」

未奈「ごめんなさいごめんなさい!!何で謝ってるかも分かりませんが、ごめんなさい!!」

胡桃「何で謝ってるかも分からないのに頭を下げるなよっ!!!」

未奈「ひいっ!?!ごっ、ごめんなさいっ!!!」

反射的にツツコミを入れてしまう胡桃…。

未奈はそんな彼女の大きな声に再び驚き、より強く謝罪をしていた。

額を床に擦り付け、涙をぼろぼろとこぼしながら…未奈は謝り続ける。

美紀「ほらっ!先輩がまた大きな声を出すからっ!!」

胡桃「ご、ごめんっ!!ほら未奈っ!もう、ごめんなさいは無しにしよう?」

未奈「すいませんっ!!すいませんっ!!」

美紀「……………」

胡桃「ま、まあ…『ごめんなさい』ではなくなったよな?」

気まずそうに苦笑いしながら、胡桃はそつと横目で隣の美紀を覗き見る…。覗きこんだその表情は恐ろしいほどに冷たい目をしており、真っ直ぐに胡桃のことを睨み付けていた。

胡桃「くっ!わかったよ!ちゃんとあたしがどうにかするからっ!!」

美紀「先輩一人に任せておけません…。私もどうにかして——」

白雪「ミナ…大丈夫だよ。おちついて?」

慌てる二人の間をそつと通り抜け、土下座する未奈の背中を優しく撫でる白雪…。すると未奈はあれだけ連発していた謝罪をやめ…そつと白雪の顔を覗きこんだ。

未奈「…ヒメ…ちゃん？」

白雪「その呼び方は…やめてほしい…」

未奈「えへへ♪かつわいっ♡」

そつと目線を逸らして照れる白雪の顔を見た未奈は正気を取り戻し、彼女にギョツと抱きついた。

あれだけ錯乱していた未奈を、あんな一瞬で静めるなんて…。

突然の出来事に胡桃と美紀は思わず言葉を失いつつも、今は満面の笑みを浮かべる未奈、そして嫌そうな表情を浮かべながら彼女を突き離そうとする白雪…その二人をじっと見つめていた。

美紀（シラユキちゃん…すごい…）

胡桃（あんな簡単に…未奈のヤツを抑えこむなんて…!）

未奈「ぎゅうっ♡」

白雪「見てないで…助けて、くれたら…うれしい…」

未奈に力いっぱい抱きしめられ、白雪はだんだんと顔を青くしていく。

どうやら呼吸するのもやっとならしい…。

美紀「未奈さんっ！シラユキちゃん苦しそうですから！」

未奈「…はっ！ヒメちゃんごめんねっ!」

白雪「…ギリギリ…大丈夫…」

抱きしめ攻撃から白雪を解放した未奈は彼女の頭を撫でながら謝る。それは先程のような連発式の謝罪ではなく、本当の意味でも謝罪だった。だんだんと顔色が戻っていく白雪を見た胡桃と美紀は一安心するとそつと扉を開けてから廊下に出て、聞こえないようにコソコソと言葉を交わした。

胡桃「あのさ…あたし、未奈って何かの病気だと思っただよね…。だって普通じゃないだろ？あんななって謝るなんてさ…」

美紀「まあ…確かに少しおかしいですが、そうと決めつけるのは早いですよ？ああいう性格ってだけかも…」

胡桃「性格ってだけであんなに土下座したりするか？もしかしたらさ、ほら…昔のトラウマとかで謝る癖がくみたいな、そんなんじゃないのか？」

弦次「あれは昔っからの”性格”ですよ。病気でもなんでもなく、お嬢はずっと前からああです…」

美紀「あ…」

胡桃「うっ！」

廊下で話す二人の会話にどこから現れた弦次が割り込み、ニツコリと微笑む。その背後には彼、由紀、悠里もおり、不思議そうに二人を見つめていた。ちょうど今、探索から戻ってきたらしい。

胡桃「お…おかえり」

由紀「たっだいま〜！…：…どして廊下にいるの？」

美紀「ちよつとナイショの会話を…」

弦次「ははっ！気にしなくてもいいんですよ？自分だって初めてお嬢のアレを見た時は、なんかの病気かと思いましたが…」

そう言っつて弦次は楽しそうに笑う。弦次の言う”アレ”とは、間違いなくあの連発式謝罪の事を言っているのだろう…。

悠里「胡桃…なんかしたの？」

胡桃「いや…ちよつと洗濯ものの話を…」

胡桃「…っ!？」

言いかけたところで胡桃は何かを思い出したように焦りだし、再び部屋の中へと戻って未奈に尋ねた。今度は慎重に…大声を出さないように…。

そうしなければ、未奈はまた大声で謝り始めてしまうから…。

胡桃「あ、あのさ…さつき下着とか庭に干したって言ってたけど…」

未奈「ん？ああ。庭って言っても裏の方だから、——君に見られたりはしないよ♪」

そう告げて微笑む未奈を見て、胡桃は心から安堵する。

先程未奈は『庭に干した』と言っていたが、それが彼にも普通に見につく場所なのではないかと心配したからだ。

胡桃「よ、よかった…」

未奈「今朝、悠里ちゃんと一緒に場所を考えてね。ここなら大丈夫！つて所に、隠すように干しといたよ！」

胡桃「りーさんも場所決めを手伝ったんだ…なら安心」

未奈「でも、胡桃ちゃん達のやつ全然変な下着じゃないのに…なんで隠すの？」

胡桃「……………」

未奈「……………」

ガチャツツ…

一瞬、二人の間の時間が止まったが…それは部屋の扉が開き、弦次達が室内に入ってきて来たことで再び動きだす。

弦次「お嬢、白雪、ただいま…って、どうした？」

未奈「いやあ…あのね、胡桃ちゃんが——」

胡桃「未奈、ちよつと部屋移ろうぜ…」

未奈「へっ? ちよ…胡桃ちゃん?」

胡桃は未奈の手を引き、他の部屋へと半ば強引に連れていく。

そうして早足で部屋から出ていく胡桃達を見て、不思議そうな顔をする彼…。彼は彼女とともに留守番していた美紀ならば何か知っているのではと考えた。

「胡桃ちゃん、どうしたんです?」

美紀「さあ…私もよくわかりません」

事実、美紀は彼女が未奈を連れ出したその理由については何も知らなかった。ただ、先程胡桃と未奈のそばにいた白雪…、彼女はずっと二人の会話を聞いていた為、大体の事を把握していた。

白雪「あの…大したことじゃないとおもいますから、心配しないでください? 全部…ミナがわるいんです」

「…?」

白雪「ミナ…女の子として少しおかしいところがあるから」

彼が白雪の発言に首をかしげている頃…。

胡桃は階段を駆け上がり、未奈を自分の部屋へと連れ込んでいた。

未奈「えつと…えつと…!ど、どうしたの…?まさか、また私…何かマズいことを!」

胡桃「それはないっ!!だから謝るのはやめてくれよ!」

未奈の謝罪が始まる前に、それを阻止しておく胡桃…。

アレは一度始まれば止められないが、始まる前に止める事は出来るようだ。

未奈「じゃ、じゃあいったい…」

胡桃「さつきあたしにさ…』なんで下着を隠すの?』って言わなかった?」

未奈「うん、言った…と思う。それが？」

胡桃「じゃあ逆に聞くけどさ…、なんで隠さなくていいと思ったの？」

未奈「えっ？だって…、干してるやつだし…」

胡桃「はっ？」

未奈「履いてるのを見られるのは恥ずかしいと思うけど、干してるのはべつに隠さなくてもよくないかな？」

胡桃「はあっ？」

未奈「だって干してるやつだよ？柄とかをデザインしたのが自分って訳でもないし…見られても困ることなんて…」

胡桃「はあっ!？」

未奈「ひいっ!?!？」

『もうダメだ…。コイツとは物事の捉え方そのものの次元が違う。』胡桃はそう思い、深く考えるのを止めた。恐らく…未奈の中での下着の扱いは普通の衣服とそう変わりが無いのだ。強いていうなら『履いてるのを見られるのは恥ずかしい』…その程度だ。干してるものは、いくら見られたところで全く恥ずかしくないらしい。

胡桃「そういうけどさ…ほら、いくら干してある…今は履いてない下着だとしても、ゲンジさんに見られたら恥ずかしいだろ？なっ？」

未奈「?!…全然だよ？私…たまにゲンくんに洗濯頼んでるくらいだし…」

胡桃「っ!?!…いやまて、あれだろ？洗濯っていつでもタオルとかだろ？」

未奈「タオルもだけど…普通に服とか下着もやってもらうよ?…」

胡桃「…下…着?…」

未奈「ほら、ブラジャーとかパンツとか…」

胡桃「そんなくらいわかってるよ!!マジかよ!?お前、同じ年の男子に下着洗濯させてんのかっ!!」

未奈「ひいっ!?ごめんな——」

胡桃「謝るのはやめろっ!!」

未奈が暴走する前に胡桃は手でその口を塞ぎ、そのまま潤み始めた彼女の目を真っ直ぐに見つめた。

胡桃「一応先に言つとくけど…あたし達の服をゲンジさんに洗濯させたりとかすんなよ!?近づけるのも、見せるのもダメだからな!」

未奈「んぐっ!んぐっ!」コクツ!コクツ!

口を塞がれて声を出せない未奈は必死にうなづ頷き、それに答える。

目にはじんわりと涙が浮かんできていて、端から見たら胡桃が彼女を脅迫しているかのようにだった。

胡桃「てかもう、全部あたし達が洗濯するよ…。未奈に任せんの心配だわ…」

そつと彼女の口から手を離し、胡桃は頭を抱える。

一方で未奈は溢れていた涙を手で拭いながら、乱れかけていた呼吸を少しずつ整えていた。

未奈「わ、私も洗濯くらいはやる…。みんなの役に立ちたいし…」

胡桃「…男の手は借りんなよ?お前は少し特別だけど、普通の女の子は男の子に下着を見られるのが恥ずかしいんだ。たとえば、干してあるやつでもな」

未奈「ど、どうして?」

胡桃「どうしてつて聞かれるとムズいけど…、まあ…『へえ、こんな履いてるんだあ』…とか思われたりするからじゃないかな?」

未奈「ゲンくん…そんな変態じゃないもん…」

胡桃「だとしても!!男に下着を洗濯させたり、干してあるのを見られても恥ずかしくないとかいう女子は珍しいんだっ!!普通は違うっ

！かなり恥ずかしい！！少なくとも、あたしはアイツに下着を洗われたら死にたくなる！！／／／

未奈「……覚えとく」

顔を真っ赤にしながら熱弁する胡桃の迫力に押され、渋々引き下がる未奈だが…本当は何が恥ずかしいのかを未だに理解していなかった。

女子としての常識であろう知識を未奈に授けたところで、胡桃は彼女を連れて広間へと戻っていく。広間へと戻る道中に胡桃は思った…『ゲンジさん、どんな気持ちで未奈の下着を洗濯してたんだろう…』と。

七十二話『だれかが』

悠里「…これも、ここに置いていいですか？」

未奈「うん！食料は全部そこでいいよ。生活用品だけ、あっちの方に置いてくれるかな？」

悠里「はい、わかりました！」

屋敷内の部屋の一つ…。未奈が倉庫代わりに使っている段ボールだらけの部屋に、先ほどスーパから持ち帰った物資を集めて保管していた。最初は未奈が一人でそれをやろうとしていたが、悠里が彼女一人では大変だと気を使い、手伝う事となった。

未奈「けっこう持ち帰ってこれたね？今回持ち帰ってきてくれただけでもかなりのものだよ」

悠里「役に立てたなら良かったですけど…、元からけっこう余分に物資はありましたね…」

部屋に積まれた段ボールの山…悠里はその内の一つをそつと開く。中には沢山の保存食がびつしりと詰まっており、周りにはそれと同じ大きさの段ボールが十数個置かれている。恐らくその全てが、今開けた段ボールのように大量の物資を詰めているのだろう。

未奈はそれを見ながら、ノートに何かを記す。

恐らく、物資の細かな内容を記録しているのだろう。

未奈「うん…やっぱりそう思うよね…。最近私もこれ以上集めて来なくていいよって言ってるんだけど、ゲン君は『余分にあつた方がいい』って言って聞かないの」

悠里「へえ…ゲンジさんって、けっこう心配性なんですか？」

未奈「ん、そうかもね。この山と積まれた段ボール…悠里ちゃん達と一緒にならともかく、私達三人じゃいつまでたつてもなくならそ

うだよ…。」

悠里「あはは、良いんじゃないですか？物資は多いに越したことはないですから」

未奈「うくん…そうだね。でも、やっぱり少し多すぎる気が…：悠里ちゃん達、これいくつかいる？」

悠里「いえいえ、悪いから良いですよ。私たちも、物資には特別困ってはいませんか」

未奈「そつかく、まあ私達の家にいる間は遠慮しないでこの食料食べてつていいからね？…というか、ずつと家にいる？…うん♪そうしなよ！」

ニツコリと楽しそうに微笑みながらそう言つて、未奈は部屋の奥の段ボールをチエックする。一方で悠里はと言うと、ずつとこの家に…未奈達に世話になるべきか、それを決めかねていた。

悠里「…えつと、そう…ですね。未奈さんの方から、いても良いと言つてくれるのはありがたいです…」

未奈「みんながいればヒメちゃんも喜ぶし、私も嬉しい！もちろん、ゲン君も喜ぶと思うよ♪」

辺りに置かれた段ボールを一つずつ開け、その中身をチエックしながら悠里へと告げる未奈…。「確かにここなら安全だし、それぞれの部屋もある。それに、彼女達もとても良い人だ…」そう思った悠里は少しずつ、この場所にいたいと思ひ始めた。

悠里「まだみんなと話して決めてないので、私一人では何とも言えないです。でも…たぶん、みんなもここにいたいと思う…。だからもし、そうなった時は…ここに…未奈さん達と一緒に暮らしても——」

未奈「…えつ?!?まただ!!」

悠里が話をしている中…一つの段ボールを開けた未奈が突如驚きの声をあげる。それに驚いた悠里は彼女の元に歩み寄り、その段ボールの中を覗き見た。その段ボールには沢山の保存食が詰まっていたが…先ほど見たのとは微妙に様子が違う。僅かだが、所々抜き取られ

たように隙間が空いているのだ。

悠里「…これは」

未奈「この箱にもびっしりと詰めたから、隙間なんか空いてるはずないんだけど…。えっと…：…12番か」

段ボールの側面にマジックで書かれた『12』という数字を確認すると、未奈は手に持っていたノートを開き、あるページを凝視した。

未奈「悠里ちゃん、ごめん。今からこれの中身が減ってないかチェックするから、手伝ってくれるかな？」

悠里「ええ、良いですよ。私はどうしたら良いですか？」

未奈「この段ボールに入ってる食料を一つずつ取り出して、私に見せてくれればいいよ。そしたら私がノートにチェック入れてって、確認していくから」

悠里「わかりました。じゃあ…まずは——」

悠里は段ボールの中に手を伸ばし、一つの食料をとって未奈へと見せる。未奈はすぐにそれを確認するとノートにチェックを入れ、また悠里に次を頼む。その作業を一つずつ、丁寧に繰り返していった。いくら減っている気がするといっても元々が大きな段ボールだった為、チェックを終えるのには中々の時間を費やした。

悠里「…これで最後です」

未奈「…ありがとう。…えっと、どれどれ…」

全てのチェックを終え、未奈はノートを見て確認する。だが、その表情はだんだんと雲っていった…。

未奈「うう…インスタント食品に缶詰め、レトルト食品まで…全部で14個無くなってる…」

悠里「14!?!それってかなり無くなってんじゃないですか!」

未奈「おつかしーなあ…。食べ物を持っていく時はしつかりこのノートにチェックしてるし、何よりこの段ボールは予備の分だから、まだしばらく手をつけない予定だったんだけど…」

悠里「じゃあ…誰かが盗ってるんでしょか？」

未奈「でも、ゲン君もヒメちゃんもここから物取る時は私にちゃんと教えてくれるんだよ？」

悠里「私たちの中にも、そんな事する人はいないと思うし…」

未奈「あ！悠里ちゃん達じゃないとは思ってるから大丈夫だよ？みんなが来る前から、ちよくちよくこういう事あったから…」

悠里「こういう事って、物資が減る事…ですか？」

未奈「うん。といつても、確信を持って減ってるって言えるようになったのはつい最近…、記録をつけ始めてからだけだね。その前まではノートに記録とかがしてなかったから…『もしかしたら減ってるかなあ』って感覚だったけど…」

悠里「記録をつけていなかったからわからないだけで、かなり前から定期的に物資を抜き取られていた可能性があるって事ですか…」

未奈「うん…：そだね…」

未奈はノートと段ボールを交互に見ると、その場に腰を落として暗い表情をする。白雪か弦次…：そのどちらかが、自分に隠れて物資を持ち出している可能性があるからだ。

未奈「前…：ゲン君にこの事を言ったら、『俺じゃない、白雪じゃないか？』って言ってた…」

未奈「だから私、ヒメちゃんにも確認したんだけど…：ヒメちゃんも知らないって言ってた…」

未奈「どっちも嘘なんてついてないと思いたいんだけどなあ…。」
そう呟きながら静かに頭を抱える未奈…。その際にノートは彼女の手から離れ、パサツと音をたてながら床に落ちる。落ちた拍子に開いたページ…：そこに書かれた文章を、そばに立つ悠里はじつと見つめた。

『どんな世界でも元気に、しあわせに生きていく!!』

『大好きなヒメちゃんとゲンくんと…ずっとずっといつまでも!』

悠里「……………」

未奈「あつ…このノートね、最初は日記代わりに使ってたものなの。まあこのページに書いたこれは、ただ自分を元気にする為に書いたおまじないみたいなものなだけで…」

悠里「日記ですか…、いいですね」

悠里は床に落ちたノートを屈んで拾い、未奈へと手渡す。未奈はそれを微笑みながら受け取ると、後から気まずそうな顔をした。

未奈「えへへ…実はね、最近は日記書くのサボってたの…。昨日は色んな事があったから、久しぶりに書いたけどね♪」

悠里「…見てもいいですか?」

未奈「だつ、だめだよ!?人に日記見られるのはなんか恥ずかしいし…、それに、最初の方はだいぶ暗いことばかり書いてたから…」

悠里「そうですねか…残念」

少しだけ意地悪な笑みを浮かべる悠里。未奈はそんな彼女の表情を見てニツコリと笑うと、ノートをまた落としたりしないよう、大切にそうに両手で抱きしめた。

未奈「もしかしたら、ヒメちゃんが持ち出してるのかな…。ほら、よくあるでしょ?子どもが親に内緒で猫とか飼ってて、その子に餌を持っていったあげる、みたいなやつ…」

未奈「でも、それにしても食料持ってきてすぎだよ…。前には生活用品が消える事もあったし…やっぱり、内緒のペット説はないかなあ

…」

悠里「とりあえず、今回無くなっていたのは食料だけですか？」

未奈「うん、他の段ボール箱の中身は減ってなさそうだった。それに、無くなる時はだいたい一つの物に集中してるみたい。今回は飲料水が…次は生活用品が…そのまた次は食料が…っていう感じで、一つずつ無くなってくの」

悠里「…そうなんですか」

未奈「無くなった分を差し引いてもまだまだ余裕があるから良いけど…、かといってほっとけないよね…」

部屋を見回して困った顔をする未奈…。白雪も弦次も知らないと言いが、どちらかが嘘をついているのだろうか？それとも、ひよつとしたら…

悠里（もしかして…）

悠里は白雪か弦次のどちらかが犯人という事以外の可能性を見いだし、それを未奈に告げる事にした。かなり少ない確率だとは思いますが、決してあり得なくもないその可能性を…

悠里「…あの」

未奈「ん？なにかな？」

悠里「もしかしたら、この家の中に誰かが忍び込んでる…ってことはないですか？」

未奈「え…っ？誰かって…」

悠里「ほんとに全く知らない人が…この家にこっそりと忍び込み、定期的に物資を持ち出す…。ほら、この家広いですし、未奈さんが全く使っていない部屋もいくつもあるでしょ？だから…もしかしたら…」

未奈「こっ、怖いこと言わないでよっ!!」

悠里「す、すいません…」

未奈「……………」

悠里「……………」

少しの間二人は無言で見つめ合い、冷や汗を垂らす。

もしかしたら、この家には彼女達以外の人間が…？そう考えると、だんだんと怖くなってきた。

未奈「ありえなくは…ない、よね…。」

悠里「本当…ほんの少しの可能性の話ですけどね…」

未奈「私達が使つてない部屋はたくさんある…。誰かさんはそのどこかに隠れながら定期的に物資を持ち出して、またそこに隠れる…。うわあ…ホラーだよお…」

見知らぬ人間がそうやってこの家で暮らしている光景を想像し、未奈は体を震わせながら目をうるうるさせるとさせる。悠里はそんな彼女を見て、なんだか余計な事を言ってしまったと思った。

未奈「悠里ちゃん、どうしよう!!?私、もう落ちついて眠ることもできないうつ!!」

悠里「そこまで気にしなくても大丈夫ですよ…。ほんとに少し、あるか無いかくらいの確率でしょうから…」

未奈「でも少しはあるんでしょ!?!この家に誰かが隠れてる可能性がっ!」

未奈「だめだあ…!怖くてもう一人で寝れないよお!!」

悠里「えつと…えつと…じゃ、じゃあ!こうしましょう!!」

悠里「これから——するというのは?」

未奈「お、おおっ!!それ良いね!!」

悠里は未奈に一つのアイデアを提案する…。それを聞いた未奈は顔をパアツと明るくすると、すぐ悠里と共に部屋を出て、それを実行

に移す準備を始めた。

部屋を飛び出した彼女達はまず自室で休んでいた彼を捕まえ、その計画の内容を告げてから協力を頼む事に……。もちろん、彼はあっさり
とそれに了承してくれた。

それから30分後：

悠里達は何も知らぬ他のメンバーを広間に集め、その計画を始動させる……。

七十三話 『くみあわせ』

未奈、悠里、彼の三人によって広間に呼び出された胡桃・美紀・由紀・白雪・弦次…。

彼女達は大きなテーブルの前に座りながら、これから何をするのかも知らず、ただテーブル横にたちつくしている悠里達三人を見ていた。

胡桃「……」

美紀「胡桃先輩、これはなんの集まりですか？」

胡桃「さあ？なんかここに来るようになって、リーさんに言われたから来たんだけど…」

美紀「リーさんにですか？私と由紀先輩は、——さんに呼ばれてここに…」

胡桃「つてことは、あつちの二人は…：ミナに呼ばれたのか」

そつとテーブルを挟んだ向かいの席、そこに座る弦次と白雪を覗き見る。胡桃達同様、二人もまた何をするのか知らないようで、そわそわと落ちつかないような雰囲気をしていた。

「リーさん、未奈さん。全員集まったようです…」

未奈「ですな…」

悠里「じゃあ——くん、みんなに事情を説明してあげてくれる？」
「はっ！了解しました!!」

彼は悠里の言葉に軍人のような返事を返すと、席についている胡桃達に向けて語りだす。その口調もまた、先ほどと同じく軍人風だった…。

「よく聞けっ！以前からこの屋敷では、保管している物資が無くなるという事件が度々起きている!!今回貴様ら呼び出したのは他でもない!その事件を解決させる為だ!!」

白雪「……………」

美紀「なんですかその喋り方…」

弦次「内容が全然頭に入ってこなかった…」

胡桃「急に変な事やりだすからな、こいつ…」

由紀「あれ？そっか？ええ、前に胡桃ちゃんも似たような喋り方してたよね？ほら、プールの時…」

胡桃「あ、あれはちよつとテンションが上がっただけだっ！／／／こいつと一緒にすんなっ！」

胡桃は顔を真っ赤にして大声で由紀に答える。それを見ていた彼はそばにあつた手頃な紙を手に取ると、丸めて筒状にしてから胡桃の背後に立ち……

バシンツ！！

それで彼女の頭を叩いた。

突然叩かれた胡桃は驚いてすぐに振り返り、叩かれた頭を片手で押さえながら背後に立つ彼を見上げた。

胡桃「なっ！なにすんだっ!!」

「ツイインテール！私語は慎めツ!!」

胡桃「つつ、ついんで…？…はあっ!!?何をえらそうに!」

バシンツ!!

胡桃「うっ!!?てめっ、怒るぞっ!!?」

由紀「胡桃ちゃん、もう怒ってるよお…」ボソツ

短時間で二度も叩かれた胡桃はどうとう席から立ち上がり、顔を真っ赤にして彼を睨み付ける。だが軍人モードの彼はそれに動じはせず、冷静にその目を睨み返した。

「上官に対する口の聞き方がなっていないな？今度舐めた態度をとった

ら、罰としてそのツインテールをほどいてやるからな!」

胡桃「……はあ?」

美紀(それは罰に入るんですか?…とか言ったら私も絡まれそうだから黙っておこう)

目の前の彼を見てそんな事を思う美紀…。他の者かというと、皆冷やかな目で彼を見つめていた。あの白雪や、由紀すらもだ…。

「因みに、私はお前の髪をほどいた姿は中々好きだぞ?あれはかなりドキドキするものが——」

そこまで言いかけた軍人さんだったが、胡桃の顔がますます赤くなっているのに気がついたので、そつと口を閉じるのだった…。

「……ほんつー!さあ、もういい。席につけ……」

胡桃「……う、うん／＼／」

胡桃を席につけた後に彼は足早に弦次の元へと駆け寄り、その肩をつんつんと叩く。それを受けた弦次がゆっくりと振り返ると、彼は恐る恐る尋ねた。

「あのさ…普段髪結んでる娘が髪おろしてるのとか見ると、なんかドキキしたりしない?…しますよね?男なら——」

弦次「変態軍曹殿…はやく作戦の方を…」

弦次は彼とすぐに目を逸らし、正面を見つめ直しながら呟く。

今の彼に絡まれるのは、いくらか面倒だと思ったからだ。

「あつ…そ、そうだな…。では……」

彼は弦次の席から離れてテーブル横に移動すると、全員の顔を見回す。それぞれが微妙に冷たい目をしている気がするが…たぶん気の

せいだ。頭の中でそう結論付けてから、本題に戻る。

「先ほど言ったように、この屋敷内では以前から物資が無くなるという事件が起きている。ミナさんが最初に疑ったのはゲンジくんかシラユキちゃんのどちらかが持ち出しているという可能性だったが、それは本人達が否定している…」

「二応、改めて確認しよう…。ゲンジくん、君は物資を持ち出したりしていないか？」

弦次の顔をじつと見つめ、問いつめる…。だが弦次は当然だと言わんばかりに首を横にふり、それを否定した。

弦次「そんな事はしていない。必要な物がある時はお嬢に必ず伝えるし、お嬢もそれにあっさりと答えてくれる。わざわざ内緒で持ち出す必要がないだろう？」

未奈「…だよねえ」

「ふむ、おっしゃるとおりだ。わざわざ内緒にする必要はないな…。」

彼はそう呟いて弦次から目線を外すと、今度はそれを弦次の隣に座る白雪へと移す…。彼は白雪の目をじつと見つめて、先ほど弦次にしたのと同じように尋ねた。

「じゃあ、今度はシラユキちゃん。君は物資をミナさんに内緒で――」

白雪「持ちだしたりしてません。」

「…ほんとに？」

白雪「ほんとです。お菓子はミナがたくさんくれるし、食べものにも困ってないですもん…」

「みんなに内緒でネコとか――」

白雪「飼ってません」

「…嘘ついてない?」

白雪「ついてないです」

「…そうか」

彼はまだ今一つ納得していなかったが、これ以上問いつめると白雪に嫌われそうな気配がしたので、ひとまず断念する事にした。だが断念したのが少し遅れたのか…白雪は正面に座る美紀へと小さな声で、彼に聞こえぬように囁いた。

白雪「わたし…あのお兄ちゃん苦手…」

美紀「あは…は…。まあ、今はあんなんだけど、普段はいい人なんだよ?」

白雪「…ふうん」

白雪の彼に対する好感度が10下がった!!

「まあそんなわけで、二人の仕業ではないらしい。…とすれば、考えられる答えは一つ…」

白雪の好感度が下がった事など知るよしもなく、彼は話を進める。弦次や白雪ではないなら、誰の仕業なのか…それを皆に伝え、そして解決する為に…。

「この屋敷内に私達以外の人間がいて、その人間が物資を盗んでいる可能性があるっ!!」

胡桃「なっ!?!」

由紀「ええっ!?!」

美紀「えっ?」

弦次「……」

白雪「んん?」

その言葉に驚いたのは胡桃と由紀のみ…。あとの全員は、揃いも揃って『なにを言ってるんだ、こいつは…』というような表情をしていた。

「…」応言つとくけど、これを言い出したのは私じゃないぞ？リーさんだからな？」

皆の冷たい目線に耐えきれず、彼は責任を悠里に擦り付ける。まあ悠里が言い出したというのは事実なのだが…。

美紀「…どうしてそう思ったんですか？」

悠里「ゲンジさんもシラユキちゃんも取ってない…。だとしたら、可能性はそれくらいしかないでしょう？」

美紀「そう…:でしょうか？」

悠里「この屋敷はかなり広いし、それに誰も使っていない部屋がいくつもある。だからそのどこかに誰かが隠れているとしても、おかしくはないんじゃないかしら？」

悠里「もちろん、それはごく僅かな可能性でしょうけどね」

言葉の最後に『ごく僅かな可能性』と付け足したのは、悠里自身がこの説はほぼあり得ないと思っていたから…。

にも関わらず、美紀達の力を借りようとしていたのは何故か…、その理由は、ただ一つ…:未奈が不安で寝付けなくなりそうだと、悠里に泣きついてきたからだ。

悠里（私が言い出したことだから、どうにかしてあげなきゃね…。みんなで一通り探して隠れてる人なんかいないって分かれば、みなさんも安心できるでしょう…:）

「…:そういうわけで、我々はこれよりチームを結成し、その人物の捜索にあたる!!」

由紀「チーム？」

「ああ、この屋敷は広い…:一人二人で探していたら日が暮れてしまう。なので、諸君ら全員の力を借り、二人一組のチームを四つ作る事とした！」

由紀「二人一組…。それって、誰と組んでもいいの？」

「……………」

「……………りーさん？」ボソツ

悠里「組み合わせはもう決めてあるって伝えてくれる？」ボソツ

「了解です…」ボソツ

「…組み合わせは既にこちらの方で決めてある！変更は不可だ!!」

さりげなく振り返り、小声で悠里に尋ねてその答えを聞いてからは声を張り上げる。恐らく、彼自身もその辺についてはあまり知らなかったのだろう…。

胡桃（もう、りーさんが説明すりやいいのに…。なんでこいつにやらせてんだろ…）

由紀「決めちゃつてあるのかあ、わたし、ヒメちゃんと組みたかつたな…」

弦次「…で、その組み合わせってというのは？」

「……………」

彼は弦次の問いに対し、沈黙を返す…。この時点で、胡桃たちは気づいた。『彼はただノリで進行役をしているだけで、細かい内容は知らないんだろ』という事実…。

そしてそれは見事的中したようで、彼は皆に聞こえないほど小さな声で悠里に耳打ちし、組み合わせについて尋ねていた。

「…組み合わせってどうなってますか？」ボソツ

悠里「えっとね……………」ボソツ

美紀「……………」

胡桃「……」

美紀と胡桃は冷たい視線でそれを見つめる…。

悠里から組み合わせを聞いた彼はあたかも元から知っていたかのように堂々とその組み合わせを全員に告げた。

「では発表するっ！一度しか言わないからよく聞いておけよ!!」

由紀「はくい！」

美紀「……」

返事は由紀しか返さなかった…。

だが彼は特にそれを気にしたりはせず、話を続ける。

「まず…りーさん、シラユキ組！」

「そして次…胡桃、ミナ組！」

「その次が……」

「……………」

「…なんでしたっけ？」ボソツ

悠里「由紀ちゃんとゲンジさん…あと、あなたと美紀さん」ボソツ

胡桃「一度しか言わないっていった本人が忘れたのかよ…話になんねえな…」

「うぐっ…！」

組み合わせを忘れてしまい、悠里に聞き直す彼を見た胡桃は呆れ、頭を抱える。それに気づいた彼は先ほどのように胡桃を叩いてやろうかと思っただが、今のはさすがに自分の非しかないという事に気づいたため、思いとどまった。

その後、彼女達は彼が告げたその組み合わせのペアをそれぞれ組み
：“もしかしかたいるかも知れない侵入者”を探すこととなった。
搜索範囲は彼と美紀のみが庭の担当であり、残りのメンバーは屋敷内
を念入りに調べる事に…。

彼は準備を終えてから美紀と共に屋敷の外に広がる庭へと出て、二
人でのんびりと歩きながら辺りを調べ始めた。

美紀「——さんはいると思いますか？隠れてる人」

「…どうでしょうね、なんとも言えないです」

美紀「あれ、あの軍人キヤラはやめたんですか？」

いつも通りの口調で話す彼に尋ねる。

それに対して彼は頬を微かに赤くし、照れながら…気はずかしそう
に答えた。

「あれね…、意外と疲れるんですよ…」

美紀「じゃあなんでやったんですか…」

「…おもしろいかと思って…」

美紀「そ、そうですか…」

「……………」

美紀「……………ところで、この組み合わせはリーさんが考えたんですか
？」

「えっ？あ、ああ……そうですよ。ミナさんと相談しながら決めていま
した」

美紀「そうですか…。なんで、私と——さんの組み合わせなんで
しょうね？」

深い意味はなく、ただ疑問に思ったからという理由で美紀はそう呟
いた。

「…いい、嫌でしたか？僕と組むのは…」

美紀「そんなわけ無いに決まってるじゃないですか。ただなんとなく、何でだろって思っただけですよ」

あつさりと、一切の恥じらいも見せずに『そんなわけ無い』と答える美紀…。

彼は彼女のそんな何気ない発言が嬉しくて、にっこりと微笑んだ。

「美紀さんって…意外と優しいですよね」

美紀「意外と…ってというのは余計です」

「へへ…すみません」

そんな会話を交わして、二人は庭を探索する。

木の裏や茂みの奥…さすがにこんな場所には誰も潜んでいないだろうと思いつつも、念入りに周囲に目を配っていた。

「…いませんよね。薄々気づいてましたけど…」

美紀「そうですね。やっぱり、隠れてる人なんていないんですよ」

「…まあ、一応最後まで探しておきましょう。そうしないとミナさんが安心できないみたいなので…」

美紀「わかりました…。手早く済ませましょうか」

彼は美紀の発言にうなずき、その直後に奥にある一つの小屋のような建物をじっと見つめた…。未奈に聞いた話では、あれは庭の手入れ用の用具などかしまつてある倉庫らしい。

「庭の探索を任された僕らの最大の難所は、あそこにある倉庫でしょうね…。」

美紀「…ですね。中は物で散らかったままで、ほとんど放置しているとかが言っていましたし…やだなあ」

「…もし庭のどこかに身を潜めている人間がいるとしたら、間違いないくあそこですよね」

美紀「万が一という可能性もあります。一応、警戒しましょう…」

二人は倉庫の前に立ち、そつとその扉を開いた…。

七十四話『そうこ』

ギイ…イイ…ツ

「ははっ…放置していたとは聞いてましたけど、相当前から放置して
たみたいですね」

庭の一角にある、少し大きめの倉庫。その中へと続く扉は彼に開か
れたことで耳障りな音を辺りに響かせ、彼と美紀の二人を出迎えた。

美紀「うわ…中真っ暗…、しかもすごくほこりっぽいです」

「世の中がこんなになってから放置してるのかと思ったけど、その前
から放置してたみたいですね…」

彼は持ってきたライトを片手に中を照らしながら、倉庫内を確認す
る。

中には草を刈る為の小さな鎌からよく分からない大きな機械まで
様々な物が置かれていたが、それらの大半が床に散乱していた。

「散らかってるなあ…あまり入りたくない」

美紀「そうして人が避ける場所だからこそ、誰かがひっそりと潜め
るのかもしれない。さあ、入りましょう」

「たぶん大丈夫だとは思いますが…一応、僕が先に入りますよ。美紀
さんは周りを見回しながら、僕と離れないようにして下さいね」

美紀「わかりました。一応…気をつけて下さいね」

「はい。一応…ね」

ライトで足元を照らしながら、彼はゆっくりと中へと入る…。

一歩一歩進む度に床にたまっていたほこりが宙を舞い、ライトの放
つ光に反射していた。彼から二、三步遅れて美紀も中に入るとライト
を手に周囲を照らし、辺りを見回す…。

美紀（高枝切りバサミにノコギリに鎌…全部錆び付いてて、使えそうにはないなあ）

辺りに散乱するそれらの道具は長いこと手入れ一つされていらないようで、武器としてはおろか、本来の使い方すらも出来なそうだった。二人はそれらに足をとられないよう、慎重に歩みを進め、奥の方や、棚の裏などをくまなく調べる。

「……………」

美紀「…どうですか？」ボソツ

「…誰もいません。強いて言うなら、ネズミさんが死んでいます」

美紀「ね、ネズミですか…」

「ネズミです。見ますか？」

美紀「見ませんよっ!!…もう、そこで終わりですか、探せる場所は…」

ため息をつきながら美紀は尋ねる。

彼は静かに首を横に振ると倉庫の一角を指さし、めんどくさそうに答えた。

「あそこ、ハシゴが降りています。つまり、何が言いたいかというところ…」

美紀「屋根裏があるんですか…。まあ、外から見てもわりと大きめの倉庫でしたから、もしかしたらあるかもとは思ってましたよ…」

二人はそのハシゴのそばまで歩み寄り、ライトでその先を照らした。そうしたこと目に入るのは、ボロボロの木材がむき出しになっている天井…見たところ、屋根裏は天井が低めのようなだ。ハシゴを上りきったらすぐに中腰にならないと、頭をぶつけてしまう。

美紀「…たぶんですが、ここには人はいないと思いますよ」

「ええ、僕もそう思います。けど、念のため確認しないと…」

美紀「立派ですね…。では、気をつけて下さいね」

美紀は彼が上りやすいライトでハシゴを照らしてあげながら、もう一方の手をパタパタと振り、彼を見送る。その仕草はどうみても、上る気の無い人間の行動だった。

それもそのはず…美紀は上に行く気が無い。先ほどまで見た倉庫の様子から察するに屋根裏は更に汚いだろうし、何よりも上に上がる為のそのハシゴ自体がボロボロで、手をかけたらそれだけで壊れそうだったから。

「…美紀さん、僕だつて行きたくはありませんよ。この上には、何がいるのか分からないんですから…」

美紀「大丈夫です…こんな場所に人間が暮らしているはずはありません」

「いや…僕がこの上にいると思つてゐるのは人間ではなくて、ネズミとか…ゴキブリとか…そんな感じの奴らなんです」

美紀「…いや、そんなのいませんよ？だからほら、はやく見てきて下さいよ！」

美紀は彼の肩を軽く小突き、ハシゴを上るように促す…。

「さつきネズミの死体があつたのに、この上にはいないって？おかしなことをおつしやる方だ…」

美紀「でも、もし私が先に行つて、それでそこに潜んでる人に襲われたらどうします？」

「潜んでる人？そんなのいませんよ…」

「……………たぶんね」ボソツ

美紀「たぶんでしょう？ほら、可能性はゼロではありません！だから私が先に行つてもお役には…」

「でもですね…このハシゴかなりボロボロでしょう？たぶん、僕の体重じゃ上つてゐる途中で壊れちゃうと思うんですよね」

美紀「…だから私に上れと？」

「いや、僕はフェアな人間です。じゃんけんで決めましょ？」

美紀「……はあ、わかりましたよ」

渋々それを了承し、美紀は腕を振り上げる……。

美紀「じゃんけんけん……」

「ぽんっ……」

美紀「……………」

「…………」ニヤツ

絶句する美紀と微笑む彼……。じゃんけん勝負の結果は二人の様子から察せるだろうが、一応言っておくと彼が『チョコキ』で美紀が『パー』……つまり、彼の勝ちに終わった。

美紀「……うそ、ほんとに私が行かないやダメですか？」

「ええ、行って下さい！」

美紀「でも……その……」

「ん？……何ですか？」

ハシゴを前にモジモジとした様子を見せる美紀……。

彼女は僅かに頬を赤くして、履いているスカートを見つめた。

美紀「私……スカートで来ちゃいました……／＼／＼」

「……だから？」

美紀「だから……って、つまりその……スカートだと上るときに……」

「……上るときに？」

美紀「み、見えちゃうと思うんですけど……／＼／＼」

「……何が？」

美紀「……………」

「……何が見えるんですか？明日への希望ですか？……良いじゃないですか、じつくりとこの目に焼き付けてやりますよ!!」

瞳をキラキラと輝かせながら語る彼を見て、美紀は気づく。彼がハシゴを上らないのはこのハシゴが壊れるかもしれないからとか、上にいるかも知れないネズミやゴキブリが怖いからではない。全てはこの時の為…スカートの中を下から覗く為の計画だったのだと…。

美紀「あの…覗く気満々ですよね？」

「いえ、僕はスカートの中なんて覗いたりしません！さあ、安心して上がりなさい！」

美紀「…本当に信じて良いですか？大丈夫ですか？」

「ええ、神に誓って、僕はスカートの中を覗いたりはしません！」

美紀「…じゃあ、上りますけど…」

美紀はそう呟き、ハシゴに手をかける。それは軽く手を当てただけでも軋む音を響かせ、不安定にグラグラと揺れた。

美紀「やっぱり怖い…。あのっ、本当に私が行かなきゃダメですか？」

「はい。でも大丈夫！途中で落ちそうになったら僕が受け止めますから!!」

美紀「そ、それも怖いんですよ…。なんか目が本気ですし…」

人氣が無く、薄暗い倉庫…。二人きり…。なぜか目が本気の彼…。

その三つの状況は、美紀の心を強い不安で蝕んだ。

「大丈夫ですよ。スカートの中なんて覗かないですし、更に落ちたら受け止めてあげるといふサポート付き…こんな安心な事はありません！」

そんな事を笑顔で口走りながらも、彼は心の中ではこんな事を思っていた…

(そう、スカートの中は覗かない…。しかしパンツを見ないとは、一度たりとも言っていないっ!!)

(僕はスカートの中を覗くのではなく、直接パンツを見るのだっ!!)

「さあ、安心して上りなさい!!」

詐欺師のような手口で美紀を罠にはめて、彼はニツコリと笑う。

このままいけば、彼女の下着を覗く事が出来る! そう思っていたから…。

普段の彼ならこんな直接的な作戦は立てないのだが、彼は彼なりに生活の中で少しずつストレスを溜めていて、それを解消する方法を探していた。だからこれは、人気の無い場所で美紀と二人きりになった事で自然と思いついてしまった、彼流のしようもないストレス解消法なのだと思う…。

美紀「ほ…ほんとに覗かないで下さいよ? さつきからずとつとつちみてるから不安なんです…」

「大丈夫、スカートの中は覗きませんから!」

美紀「……あ、あの……」

美紀「まさかとは思いますが……、後で私の下着を覗くだけ覗いて、『パンツを見ないとは言ってない!』とか、子供みたいな事を言うつもりじゃないですよね?」

「……………」

美紀「……………」

彼は何も答えなかった。いや、答える事が出来なかった。美紀の言っている事が、恐ろしいほどに当たっていたから…。

「さ、さあ……上りなさい……上るのです……」

美紀「…最低です」

彼に激しい軽蔑の眼差しを向けると、美紀はハシゴにかけていた手を離し、一人で倉庫を出ようとする。

彼はそんな彼女を慌てて引き止めると、冷や汗を流しながら説得を試みた。

「み、見ませんよっ!?だからほら、安心してハシゴへ…!」

美紀「もし少しでも覗いたりしたら、胡桃先輩に言いつけますよ? それでもいいなら上ります」

「ど、どうしてそこで胡桃ちゃんが出てくるんです?」

美紀「胡桃先輩なら、——さんを手早く罰してくれるからです」

そう答えた美紀の目はとても真剣で、冗談めいた物ではなかった。

もし彼女の下着を覗こうものなら、それは胡桃に報告される。もし胡桃にそれを知られたら何をされるか分からない…命があればまだ良い方だろう…。

「…ぼ、僕ちよつとハシゴの上見てきます。美紀さんは…先に外に出てゆっくりしてて下さい…」

美紀「そうですか?じゃ、お言葉に甘えますけど…」

結局彼は美紀の言葉に屈してしまい、自ら屋根裏を確認する事となった。

美紀はその間、一足先に外へ出て彼を待つ。ほんの5分ほどで屋根裏の確認を終え、美紀の元へと戻った彼が放った言葉は、『異常なし』という一言だけだった。

美紀「ね?やっぱり誰もいなかったでしょ?」

「ええ…。この家に潜んでる人なんていうのは、最初からいないんでしょね…」

美紀「まあ、まだ先輩たちが屋敷内を調べてる途中でしょうから、それが済むまでは完全にいないとは言い切れませんがね…」

「…ですね」

倉庫の中も含め、庭の大部分を調べつくした二人は予定よりもかなりはやくやるべき事を済ませてしまったため、庭先に置かれていた一

つのベンチに腰かけていた。

美紀「どうします？今から中に戻って、皆さんの手伝いますか？」
「うーん…それもありませんよね…」

美紀「…じゃ、戻りますか？」
「そうですね。中に戻って適当に歩き回ってれば、すぐ誰かに会えるでしょうし」

彼はベンチから立ち上がるとググつと身体を伸ばし、屋敷内に戻るために歩き出そうとした…。だがその時一瞬…目の前にある木や茂みの奥に何かが見えた気がして、彼はそこを凝視する…。

「……………」

美紀「？…どうしました？」

ただ一点を見つめたまま、じつと動かない彼に美紀は声をかける。彼は美紀と目を合わさず、そこを見つめたままの状態で、そつと答えた。

「一瞬…あそこに誰かの影が見えました。もしかしたら、本当に…」

美紀「ほ、ほんとですか!？」

「…下がっててください。見てきます…」

美紀「…気をつけてください」

「はい…」

彼は持っていたナイフを右手に構えると、ジリジリとその木々の方へと歩み寄る…。美紀は元いた位置から二、三步後退して、それを心配そうに見守った。

「……………」

美紀（まさか…本当に誰かがいたの？——さんなら多分大丈夫だと思っただけ、もしもの時は…急いでみんなを呼ばないと…）

影を見たというその木の裏まで、あと5 m程の距離に近づくと彼…。

彼と美紀が今いる場所は屋敷の裏の方に位置していて、普段はあまり人が寄らない。しかも彼の向かうそこは、奥に隠れば木や茂みによって周囲からの視線を遮ることができる。隠れるのには適しているかも知れない…

だが、この場所…なんか見たことが…

そんな事をふと思った美紀は、彼を見守りながらその場所をじっと見つめて、いつここを見たのか思い出そうとする…。

美紀（たぶん今日…ここをどこか違う場所から見たんだけど…いつ、なんで見たんだろう…）

美紀（今日はまず朝起きて…それから——さんがゲンジさんと出かけるとか言い出したから私と胡桃先輩は留守番しながらシラユキちゃんと遊んで…）

美紀（それで——さん達が帰ってきてからは胡桃先輩と色んな話を……ん？）

美紀（もしかして、胡桃先輩と話してる時に…私はここを…）

彼女は思い返す…その時の胡桃との会話を…どこからここを見たのかを…。

美紀『そういえば胡桃先輩、さつきはなにをしてミナさんをあんな風にさせたんですか？』

胡桃『あ、ああ…。ミナのヤツが洗濯物を庭に干してるとかいいうから…』

美紀『…当たり前じゃないですか。晴れてる日にわざわざ部屋干しなんてするわけ——』

胡桃『そうだけど、あたし達の下着も…だぜ?』

美紀『…なるほど、言いたいことは分かりました』

美紀『つまり胡桃先輩は、ミナさんが下着を庭に干してると知って、それを——さんに見られることを不安に思ったがゆえに大声を出してしまい…ミナさんを怯えさせてしまったと』

胡桃『そゆこと、美紀だってあいつに下着見られんのは嫌だろ?』

美紀『それは…まあ、嫌ですけど』

胡桃『でも大丈夫。あたし達の下着、普通に過ごしてる分には目に入らないとこに干してくれてあるみたいだからさ…』

美紀『…どこですか?』

胡桃『ん〜と、どこだっけな…確か庭の裏の方で…ちよつと来てくれ、直接見た方がはやいし』

胡桃は美紀を連れて部屋から出ると、廊下奥の窓の前に立つ…。その窓からはちょうどその裏庭を見ることができた。

胡桃『ほら、あそこだつてさ…あの木の裏のあたり。まあ、ここからじゃ角度が悪くて干してる物は見えないけど…』

美紀『へえ…木の後ろに隠して干してるんですね。でもそれって、陽は当たるんですか?』

胡桃『あたしもそれ聞いたんだけど、ミナが大丈夫だつて。あの木の奥は開けてて、陽当たりも良いんだとさ』

美紀『手前にだけ壁のように木を植えてあるつてことですか。たしかにこれなら、——さんには見つかりませんね。庭の探検でもされない限りは…』

胡桃『この庭で見るものなんかなくてミナたちに言われてたし、んなことはしないだろ。…多分な』

美紀「ああっ…！思い出したあっ!!!」
「うわっ!!?びっくりした…美紀さん、なんですか?」

突如大声を出した美紀の方へと彼は振り返り、ナイフを構えたまま
で尋ねる。恐らく、木の裏に隠れているその影が飛び出してくるかも
しれないと警戒しているのだろう。

だがその影は美紀が大声を発したところで、絶対に飛び出して来た
りはしない。

その影の正体に気づいた美紀は、冷や汗を流しながら彼の肩に手を
かけた。

美紀「あ、あのっ！大丈夫です！あそこには誰もいませんっ!!」

「え?いや、だけど僕は影を…」

美紀「見間違いです!!そういうことにしてください!!!」

「はあっ?」

おかしな事を言う美紀に対して不思議そうな表情を見せる彼…。

しかしどんな表情をされようとも、なんと思われようとも、美紀は
絶対に退けなかった…。彼が見た影というのは、間違いなく洗濯物の
シャツか何かだ…。

もし彼がそこを覗きに行けば、それらと一緒に干してある自分達の
下着も確実に見られる。それだけは、絶対に避けねばならない…。

美紀（この木の壁も、洗濯物を完全には隠しきれてなかったんだ！

…というか、この人と一緒に庭の探索をすることになった段階でキチンと警戒しとくべきだったのに！甘かった！！」

美紀「お、お腹が痛いんです…。部屋まで一緒に…来てくれませんか？」

「わ、わかりました！でも…あの影の確認だけ——」

美紀「うううっ！！いた…痛いっ！！すごく痛いですう…！！」

腹を抱えてながらその場に屈み、美紀は顔を真っ青にした。

どうみても…彼女は本当に苦しんでいる。

そう思わせるほど見事な演技だった。

「うう…し、仕方がないっ！ほらっ！肩貸しますから、掴まって！！」

美紀「す…すいません…」

かなり具合の悪そうな美紀を案じた彼はナイフをしまってから美紀に肩を貸し、その場所を警戒しつつ離れる。

そうして屋敷内へと戻り広間についた瞬間、彼の肩から離れた美紀が言ったセリフは…

美紀「あ、治りました。もう平気です」

…という、なんともあっさりとした言葉だった。

七十五話『もしも』

未奈「結局…だれもいなかったね…」

弦次「当たり前だよお嬢…。俺は最初から誰もいないと思っていたし」

それぞれが担当した地点を調べ終え、広間へと集合した。

全員見るべきところはあらかじめ調べたが、結局潜んでいる人間など見つける事は無く…弦次らによって、そんな人物はいないと結論付けられる。

未奈「でも…じゃあなんで物が…」

弦次「勘違いかなんかだろう。あまり気にしない方が良い」

未奈「ちゃんとノートに記録してあるんだよ？勘違いはありえないんじゃないかな？」

悠里「私もそう思います。みなさんは物資の残量をかなり細かく記録してましたから、それを間違ったり…ましてや勘違いなんてありえないと…」

弦次「…じゃあ、いったいなんだと思いますか？」

悠里「それはちよつと…わかりませんが…」

軽くうつむき、そう答える悠里…。

他の者もそれぞれ、なぜ物資が無くなるのか考えたが…誰一人としてその答えは出せなかった。

美紀「あれだけ調べたんです…誰かが潜んでいる、という可能性はほぼ無いでしょう」

胡桃「だな…まずありえねえ…」

由紀「ぜんっぜんわかんないね…、ヒメちゃんはなんでだと思う？」

椅子に座りながら、足をパタパタとさせる由紀。

彼女は突如それをピタツと止めると、そばに座る白雪の顔を覗き込み、意見を求めた。

白雪「えっ?…んっ…と、なんだろ…:…ごめん、わかんない」

由紀「だよね〜!わかんないよね〜」

由紀はそう言って椅子の背もたれに強く寄りかかり、天井に顔を向けながら必死に頭を悩ませる…。しかし由紀がいくら考えたところで、答えなど出るわけがなく…。

由紀「…とりあえずさ、また次もなくなるかどうか、様子みてみたら?」

彼女では、そう提案するのがいいいっぱいだった。

弦次「俺も、そう思います…」

未奈「ん〜…:…」

胡桃「ま…:、もし誰かが盗っていたとしてもさ、今回はあたしたちもいる…:人目が増えた分、やりづらくなっただろ」

悠里「たしかに、それもそうね。ミナさん…:あまり悩まなくても大丈夫だと思いますよ?」

未奈「…:わかったよ。とりあえず、様子みてみるね?」

弦次「それがいい…:、あんまり悩んでお嬢が倒れでもしたら、どうしようも…:」

そこまで言葉を出したところで、弦次は辺りを見回す…:。

弦次は席についている由紀、白雪、美紀、胡桃、悠里、そして彼の顔を見ると、未奈から目を逸らして呟いた。

弦次「いや…:どうにかなりそうだな」

未奈「な、なにそれ?!?もし私が倒れても、今は悠里ちゃん達がいるから平気ってこと!?!」

目を大きく開きながら弦次へと怒声を飛ばす未奈…。
弦次はそんな彼女の方へ振り向くとニツコリと微笑み、優しい声で答えた。

弦次「冗談だよ。まあ確かにこの人たちの力を借りればある程度の事はこなしていけると思うけど…お嬢に何かあったら困る」

未奈「なにが…困るの？」

弦次「二日一回、お嬢の笑顔を見ないと寝れないんだよ。俺は…」

未奈「え…っ？う、ううっ…／＼／＼」

そのセリフを聞き、顔を真っ赤にする未奈…。

だが顔を赤くしているのは彼女だけでなく…それをそばで見ている悠里達も、もれなく同じような表情をしていた。

悠里「……」

由紀「おおく……」

美紀（この二人…）

胡桃（よくもまあ人前で…）

「……」

彼は弦次と未奈のやりとりを見て顔を赤くする彼女らを静かに…じつと見つめる…。

『この手段…使えるかも…』そう考えた彼はそばにいた悠里の肩を叩くと、彼女が自分の方へと振り向いた瞬間、真面目な表情で囁いた。

「りーさん…僕は二日一回、あなたの笑顔を見ないと寝れないんです…」

悠里「そう……。た、大変ね…」

「……」

なんか違う…。弦次とまったく同じセリフを言ったのに、顔を赤くしない…。それどころか、何故か気の毒そうな表情をされた…。一体、どこを間違えたのだろうか…。

もしかして、あまりに丸パクリだったのがいけないのだろうか？
そう考えた彼はこのセリフを別の言い回し方に変えようと思い、それを即座に…今度は美紀へ試す事にした。

「美紀さん…」

美紀「ん？なんですか？」

「美紀さん…あなたは一日一回、僕の笑顔を見ないと寝れないんです…」

美紀「は？…いや、全然眠れてますけど…」

「……………」

…これもなんか違う。そもそも、言葉の意味が先程のとはまるで違う。

今のはただ、『お前、俺の笑顔を見ないと寝れないんだろ？』というのを柔らかな言い回しで言っただけ…、ただの勘違い男だ。

それと、美紀の返答が冷たかったのが何気にツライ…。

(…少し泣きそう…。だが、これしきではめげない…。彼女達と
きめかせるセリフくらい…僕だって…)

そして迎えた三回目のチャレンジ…今度のターゲットは胡桃だ。

「…胡桃ちゃん」

胡桃「…なに？」

「僕は一日一回君の寝顔を見て、笑顔になってる…」

胡桃「は、はあ？？お前…いつもあたしの寝顔を見てんのか？」

「……………うんっ？」

胡桃「や、やめてくれるかな…？マジで怒るぞ…」
「……………」

引かれてしまった…。

まあ、それも納得できる。今は少し気持ち悪かった。

彼は頭の中で、彼女の寝顔をそばで見つめながら微笑む自分を想像する…。それは中々に強烈な光景で、完全に変態のそれだった。

(でもまあ…また今度隙をみてやってみよう…)

そんな気持ちを胸に、第四チャレンジ…最後は由紀。

「由紀ちゃん…」

由紀「んっ？なあに？」

「あの…僕は…」

由紀「うんうん…」

彼の言葉を待つ由紀…。

だが今回彼は、中々言葉を出せずにいた…。彼女になんて言うのかを、まったく考えていなかったからだ。

「……………えっと…一日一回は…寝…寝…」

彼はどうしても弦次のセリフをベースにしたかったようで…『一日一回』『寝る』という言葉を繰り返していき続ける。

由紀「…なに？はやくしてよ」

「だからその…一日一回…」

中々言葉を出さない彼に待ち疲れたのか、急かす由紀。

彼は由紀に急かされた事でついに言葉を絞り出したが、慌てて出し

たそのセリフは、この上なく酷いものだった…。

「僕は一日一回…由紀ちゃんと寝たいっ！」

由紀「……へっ?」

…一瞬、その場の空気が凍った気がした。

悠里「ちよ、ちよつと!?!」

美紀「由紀先輩になんてことを…!」

胡桃「お前…さすがにそれは引くぞ…」

彼の発言を責める三人…その一方で由紀は、彼に優しい笑顔を見せていた。

由紀「あははっ、甘えんぼさんだね♪一日一回になるかはわからないけど、お昼寝くらいなら付き合うよ?」

「……………」

『違う、彼の言う“寝たい”とは、恐らくそういう意味じゃない…』悠里達はそんなことを頭の中で思いながら、無言で彼を睨みつけた。そうして三人にキツイ視線を向けられた彼は、慌てたように答える…。

「…いや、いかがわしい意味ではなく、そういう意味で言いましたからね?」

胡桃「おい、心を読むなよ…」

「やっぱり、僕が由紀ちゃんに下ネタを言ったと思ってたのか…」

美紀「…違うんですか?」

「……………」

まあ、違うとも言い切れない…。

確かにこの言葉を発してしまった時、彼は自分でもかなり焦った。一緒に寝たい…彼にとつてそのセリフは、いかがわしい意味しか持たない言葉。由紀のような純粋な解釈は出来なかつたので…あの純粋な由紀に対していきなり下ネタを言ってしまったと、恐ろしく焦った。

悠里「由紀ちゃん…いくらお昼寝だけって言われても、彼とは一緒に寝たらだめよ？」

由紀「えっ、どうして？」

悠里「それは…えつと…」

悠里「…胡桃、説明代わって…」

胡桃「ええっ!?!や、やだよ!!」

「…あのく、別に何もしませんよ?ただの冗談ですから…」
自分から由紀を遠ざけようとする三人に、彼は恐る恐る声をかける。

美紀「あ、あんまり信じられません…」

胡桃「あたしの予想だと、お前は由紀と同じベッドで寝たらただじゃ終わらない…。確実に何らかの事件を起こす…」

悠里「ふ、二人とも…言い過ぎはだめだからね?」

そう言つて胡桃と美紀をなだめる悠里だったが、彼女はしっかりと由紀を彼から離していた…。

「……………」

それを見た彼はそれとなく切なくなり…弦次、未奈、白雪のそばに歩み寄る。

「もう…この家の子になっていいですか？」

未奈「わ、私がかまわないけど…」

弦次「あんた、彼女たちから信用されてないのか？酷い言われようだったが…」

「…過去にちよろつとやらかしてますので」

温泉覗き…そして彼女らの考えたゲームを利用しての暴走…この二つだけでも、それなりの信用を失ったかも知れない。

だがこれは、男として仕方のないこと…。彼は目の前の弦次にその同意を求めることにした。

「もしミナさんが温泉に入っていると、それを覗くチャンスがあなたにはあります。覗きますか？」

弦次「…はあ？」

「覗くでしょ？健全な男子ならば…」

弦次「覗かないよ、怒られるだろ？」

未奈「ゲンくん、私が川で水浴びしてる時はいつもそばで待っててくれるけど…覗かれた事は一回もないよ？」

「…はい？」

彼の思考が停止する…。

今、未奈はなんと言ったのだろうか？

『そばで待っててくれる』…そう言ったような…。

「ゲンジくん、君はミナさんが水浴びしてる時はどうしてるのかな？」

弦次「いや、何かあれば駆けつけられるくらいのところまで待ってるだけだけど…。で、でも覗いたりはした事は一度もないからな!？」

「…覗こうと思えば、いつでも覗けるよね？」

弦次「確かに覗けるが…、人聞きの悪いこと言うなよ…」

白雪「ゲンジは、絶対にのぞいたりしません…」

未奈「うん♪信じてるもんね〜！」

「……………」

おかしい…、何故、弦次はこんなにも信頼されているのだ？

彼は必死に頭を悩ませ、弦次と自分の違いを探した…。

弦次「でも、あんただってあの人達と一緒に暮らしてたんだ。彼女らが水浴びだのをしている時、辺りの警戒を任されたりしたろ？」

「……………」

彼は答えられない…。

何故なら、彼女らが水浴びしている時…彼は周囲の警戒を任されるどころか、いつも車内に閉じ込められていたからだ。それも、常に一人の見張りを付けられて…。

彼女らが外で水浴びする時の編成は…

水浴びするのが二人…

その周囲を警戒するのが一人…

彼を車内で見張るのが一人という、一部の隙もないフォーメーション。

水浴びしている二人がそれを終えたらメンバーを交代して、また水浴び…そんな二度手間な毎日を送っていたが、彼女らはそんな手間をかけてでも、彼を見張らねばならない気がしていたのだ。

「…信頼が…ないんだな…」

彼は少しばかりショックを受けたようで、悲しげな表情をしながら一人で部屋を出ていってしまふ…。

由紀「…ん？」

彼の暗い表情を離れたところから見ていた由紀は弦次のそばまで歩み寄ると、弦次らに彼が出ていった理由を尋ねた。

由紀「ねえ、——くんどしたの？」

弦次「な…なんかみんなに信頼されてない気がしているみたいで…シヨック受けたみたいですよ」

由紀「…ほら！胡桃ちゃんたちがいじめるからっ!!」

胡桃達の方へと振り返り、そう言い放つ由紀…。

さすがの胡桃達も彼が出ていった事は予想外だったらしく、反省の色を見せた。

胡桃「う〜ん…言い過ぎたか…」

美紀「冗談だったんですけど…今日の——さんは少しネガティブな日ですね」

悠里「確かに、いつもなら気にしないのにねえ…」

未奈「みんな、実際は彼を信頼してるの？」

本当の気持ちになり、彼女らに尋ねる未奈。

それを聞かれた彼女らは全員、同じ答えを返した。

由紀「うん！あたりまえだよ!!」

胡桃「そりやまあ…うん…」

美紀「信頼してなかったら、一緒に暮らしたりしません」

悠里「ええ、少し変わった人だけど…私達は全員、あの人を信頼してますよ♪」

未奈「…そっか、仲良しさんだね…」

その答えを聞き、安心したように未奈は微笑む。

そうして皆でひとしきり笑いあつた後、悠里は立ち上がり、部屋をあとにしようとした。

由紀「リーさん、どこいくの？」

悠里「ちよつと、彼を慰めにね…」

胡桃「あいつ…今日ちよつと元気なかつたもんな…」

由紀「おっ？胡桃ちゃん、——くんのことよく見てるね？」

胡桃「そ、そういうわけじゃ…」

美紀「大勢で行くのもなんですので、あの人の事はリーさんにお任せしていいですか？」

悠里「ええ、任せて」

悠里は皆に笑顔でそう答えると扉を開き、彼の部屋へと向かった…。

のだが…悠里は途中の廊下で彼と遭遇…。
てつきり自室に戻っていると思っていたため、不意に現れた彼を見た悠里は驚いた。

悠里「あら？部屋に戻ってたんじゃ…」

「？いえ…トイレ行ってただけですけど…」

悠里「そ、そう…」

特にやましい事があるわけでもないのに、二人は何故か…廊下で無言のままたちつくし、互いの顔を見つめあっていた。

そうして三十秒以上は無言でいた二人だが、悠里が彼の肩をぽんつと叩きながら声をかけた事で、その沈黙は破られる。

悠里「これからもよろしくね?」

「ん?…急にどうしました?」

悠里「別に、ただみんな…ちゃんとあなたの事が気に入ってるって教えてあげたくて♪」

「それは嬉しいです。できれば『気に入ってる』ではなくて、『好き』って言ってくれた方が嬉しいんですがね…」

悠里「私は…あなたのこと好きよ。もちろん、友達としてだけど」

「…僕もリーさんのこと、好きですよ」

悠里「ふふっ♪ありがと♡」

「…さて、戻りますか」

悠里「そうね、みんな待ってるから…」

二人は横に並びながら廊下を歩き、皆のいる広間へと向かう。

その道中、悠里の頭の中に一つの思いが浮かんだ…。

それは、もしこの世界が平和なまま彼と出会っていたらどうなっていたのかという疑問…。

今のように仲良く出来ていたのか、それともこのような危機的な世界で出会ったからこそ、ここまで仲良くなったのか…。

あるいは…もっと親しい間柄になっていたのだろうか…。

例えば…恋人のような関係に…。

悠里「…ねえ?」

「なんですか?」

悠里「もしあなたと平和なままの世界で出会っていたら、私達はどんなかんじの関係になっていたのかしら？」

「ん…どうでしょう、そもそも出会う事がなかったんじゃないですかね。違う学校でしたし…」

悠里「もしもの話よ。だからあなたも私達と学校が同じなの。それで出会っていたら、どうなっていたと思う？」

「…さて、どうなってたでしょう。まったく想像できませんね」

悠里「意外と…誰かと付き合ったりしてたかもよ？」

いたずらな笑みを浮かべながら呟く悠里…。

それを聞いた彼は、少しだけ心外そうな表情をした。

「いや、この世界でだってわかりませんよ？もしかしたらそのうち、僕はある私たちの誰かと付き合うことになるかも…」

悠里「…ええ、そうね♪」

悠里はニツコリと嬉しそうな笑顔を見せる。

彼は何故悠里が嬉しそうに笑ったのかわからず、すぐさま尋ねた。

「なんか…嬉しそうですね？」

悠里「だって、身近な友達同士が付き合うなんて…すごく素敵じゃない？そういう明るい話題って最近無いから、もしそれが現実になったら…とても嬉しいことだと思うの」

「……………」

悠里「だからそうなるためにも、これからもみんなと仲良くしてね？」

「…はい」

悠里「もちろん、私ともね♪」

「はい…当然です」

悠里「……ありがとうね」ボソツ

悠里は彼に聞こえないほど小さな声で呟く…。

二人は話している内にいつの間にか広間の前まで来ており、彼はその扉を開いた。

七十六話 『そうだったら…』

悠里「…あれ?…ごめんささい、胡桃がどこに行ったか知ってるかしら?」

時刻は午後三時くらいだろうか…。

今さっきまで未奈と美紀とでどこか別の部屋に行っていた悠里が、彼と由紀、そして弦次の雑談している最中の広間へと割り込む。

由紀「胡桃ちゃんなら…自分の部屋でヒメちゃんの勉強手伝ってあげてるみたいだよ?」

未奈「えっ?そこまでしてもらってるなんて…わるいなあ…」

悠里より少し遅れて、美紀とともに部屋に入ってきた未奈が申し訳なさそうな表情をして呟く。なんでも白雪の勉強とは、未奈が白雪用に作った宿題の事らしい。

『子供の勉強くらいなら軽く教えられるぜ!!』…って笑いながら去っていきました」

美紀「胡桃先輩も一応高校を卒業した身ですからね、そのくらいは楽勝でしょう。…で、由紀先輩は行かなかったんですか?シラユキちゃんのこと好きなのに…」

由紀「うっ…!そ、その…いくら子供の勉強でも…教えるのは苦手です…」

美紀の問いに対し、由紀は苦い笑みを浮かべた。

「胡桃ちゃんに用ですか?なんかの手伝いなら僕がやりますけど…」
そう尋ねた彼に対し、悠里はそつと横に首を振る…。

彼女は少しだけ会話の間を開けると、胡桃を探していた理由を告げた。

悠里「みんなですばの川に水浴びに行こうと思ったんだけど…勉強の邪魔しちゃ悪いわよね…」

「ちなみに、その”みんな”ってのに僕は入ってませんよね？」

美紀「当たり前でしょう…。——さんは後でゲンジさんと行ってきて下さい」

「男と二人はちよつと…」

弦次「キツイよな…」

そう言つて二人は顔を見合わせ、苦い顔をする…。

男二人がそろつて水浴び…それは中々に酷い絵だと思つたからだ。

美紀「じゃあ…お二人は後でそれぞれ別々に行きますか？」

弦次「…そうするか」

「…はい」

悠里「胡桃も今はシラユキちゃんの勉強見てるみたいだし、後でシラユキちゃんと二人で行つてもらえばいいかしら？」

未奈「うん。川はすぐそばだから、そこまで危なくもないしね。私もたまに一人で行つたりするくらいだもん」

弦次「お嬢…あまり一人で出歩くなよ？万が一ってこともあるから…」

未奈「ごめん…でも私はともかく、胡桃ちゃんなら後でヒメちゃんと二人で水浴びに行つても平気だよね…。胡桃ちゃん、強いんでしょ？」

美紀「ええ。先輩なら、とても頼りになりますよ」

未奈「じゃあ胡桃ちゃんには申し訳ないけど、今日は私達だけで行くっか」

悠里「そうですね…。じゃあ——君、もし私達のこと胡桃に聞かれたら、このことを伝えておいてくれるかしら？」

「了解です。気をつけて」

悠里「すぐ戻ると思うけど…よろしくね」

美紀「ほら、由紀先輩も行きましょう」

由紀「うん！じゃあ——くん、ゲンくん、またあとでっ！」

弦次「いってらっしやいませ…」

「いってらっしやい…」

笑顔で手を振る由紀達を見送り、広間には男二人だけが残った…。

「…その川つてのは、近いんですか？」

弦次「近い…けど覗きには行くなよ？」

「行かないよ、失敬な…」

そう呟いて、彼は部屋の天井を見上げる…。

…少々暇だ。できれば自室にいる胡桃と会話でもしたいところだが、それでは白雪との勉強の邪魔になる。そう考えた彼は目の前に座る弦次相手に何かしらのお話を振ろうと思ったのだが、話題が見あたらない…。

「……」

弦次「……」

「…にしても、広い家ですよね。……」

やっと見つけた話題、それはこの家についての事だった。

この屋敷は外から見てのとおり、広さをほこっていて、部屋数も多い…。

庭の広さも中々の物ときている。

弦次「ん〜…そうだな…」

「…ですよねえ…」

弦次「……………」

「……………」

その会話…5秒と持たずに終了…。

家の広さを話題に出したが、全く会話を広げる事はできなかった。しかし…だからと言って、このまま二人とも無言というのは少々気まずい。彼はどうかして弦次の食い付きそうな話題を模索したが、それを見つける事が出来ずにいた…。

(どうしたものかね…、何か話した方が空気が軽くなりそうなんだけど…なにを話したらいいやら…)

「……………」

そんなふうには頭を悩ますこと…気づけば30分経過。

結局弦次とは無言のまままで同じ空間を共有した彼の前へと、一人…いや、二人の救世主が現れる。

彼らのいる広間への扉をそつと開き、顔を出したのは…見慣れたツインテールを揺らす胡桃と、彼女のシャツの裾をギョツと掴みながら背後をくつつく白雪だった。

胡桃「…あれ、二人だけ？」

胡桃は白雪を引き連れて広間へと入るなり、彼と弦次の顔を交互に見てから呟いた。一方、彼は胡桃がこの空間の沈黙を破ってくれた事が嬉しくて、彼女の顔をキラキラとした表情で見つめた。

「くるみ…ちやあん…!!」

胡桃「ううっ!?なんだよ…気持ちわりい顔して…。ゲンジさん、りーさんたちは？」

胡桃は見慣れない表情をしている彼に言い様のない恐怖のようなものを感じた為、彼を避けるようにして弦次の前に立ち、悠里達の居場所を尋ねる。…もちろん、胡桃にスルーされた彼はそれなりのダメージを心に負った。

弦次「ああ、そばの川にみんなで水浴びに行きましたよ。胡桃さんのことも誘いたかったみたいですけど、シラユキの勉強を手伝っている最中だと知って遠慮したみたいで…」

胡桃「マジかつ!?!…ん、あたしも行きたかったなあ…。昨日あれだけ雨に打たれたのに、身体洗ってねえし…」

白雪「ご、ごめん…わたしの勉強を手伝ってもらってたから…そのせいで胡桃が置いてきぼりに…」

置いていかれた事にショックを受けた様子 of 胡桃を見た白雪は彼女に申し訳なさそうな顔を見せ、そつとうつ向く…。

胡桃はすぐにそんな白雪の頭を優しく撫でると、ニツコリと微笑んでから彼女にある事を提案した。

胡桃「気にすんな…。なんならさ、今からその川に二人で行こうぜ?…りーさんたちもまだいるかもだし…」

悠里達がここを出たのは約30分前…。既にいつ帰って来てもおかしくない時間が経過していたが、弦次は敢えてそれを口には出さなかった。

白雪「そつか…うん!じゃあ一緒にいこっ♪」

胡桃「よし、決まりだな!」

胡桃「…そういうわけだから、二人に留守番任せていいか?」

白雪の頭を撫でながら、胡桃は彼と弦次に尋ねた。

もちろん二人はそれを快く了承し、それから弦次は胡桃へ軽く頭を

下げる…彼女には、ずっと白雪の面倒を見てもらっているから。

弦次「勉強手伝ってくれた上に水浴びまで…、手間をかけます」

胡桃「いいって、どっちもあたしから進んでやってるんだからさ」

弦次「…もしお嬢達が先にここへ戻ってきてしまっても、そのまま二人で行ってきて問題ないと思います。あの川は近くですし奴らも少なく、比較的安全な場所ですから」

胡桃「ん、わかった。まあ多少の数ならあたし一人でどうにかなるから、安心してシラユキを任せてよ」

弦次「ありがとうございます…。もし良ければ、自分が見張りとして同行しますが…」

胡桃「はあっ?!いい、いやいやっ!そこまでしてもらわなくても平気だからっ!!」

弦次のそれを聞いた胡桃は少しだけ顔を赤くしてから右手を胸の前でパタパタと左右に振って、弦次の提案を断ることにした。

弦次「一応言っておきますが、覗いたりはしませんよ?」

胡桃「い、いや…大丈夫…。その気持ちだけで十分…」

まだ本当に僅かな間しか交流していないが、それでも弦次は安全な方の部類だと、既に胡桃は確信していた。きっと、この人は本当に覗いたりしない…。そう理解していても、自分が水浴びをしている間近くにいてもらうのはさすがに抵抗があった。

「そうだね、ゲンジくんがいい人なのは分かっているけど…さすがに胡桃ちゃんの裸がすぐそばにあるような場所には行かせられないよ」

胡桃「…それ、誰目線で言ってるの?」

真面目な顔をしながらまるで胡桃の彼氏であるような物言いをする彼に、思わず胡桃はツツコミを入れる。しかし、彼自身も誰目線の

発言かと聞かれると何て答えたらいいか分からないようで、一人頭を悩ませていた。

「ん〜…いやね、胡桃ちゃんが水浴びしてるそばに他の男を立たせるのは、なんかちよつと胸がモヤモヤと…」

胡桃「他の男って…お前はあたしの彼氏かなんかかよ？」

「…そうだったらいいね」

胡桃「…えっ？」

そう呟いて微笑む彼の顔はいつものような冗談めいた表情ではなく、どこか真面目さを含めたものだった…。胡桃はそんな表情を見た瞬間に一瞬だけ頭の中が真っ白になり、胸の鼓動がドキドキと大きくなる。

胡桃は思わず、隣に立つ白雪に手を掴まれるまで何一つ言葉を出せなかった。

白雪「くるみ、行こう？」

胡桃「…んっ？あ、ああ…そうだな…」

「じゃ、気を付けてね〜」

胡桃「う…うん。行ってくる…」

そう返事を返してから胡桃は白雪とともに広間を後にして、必要な物を持っていく為に一度自室へと戻る…。その途中、ちようど今戻つてばかりの悠里達と廊下で出くわしたが、軽い会話と…今から白雪を連れて川に行く事だけを告げてすぐに別れた。

胡桃は部屋でタオルや石鹸など、水浴びに使う物をカバンに詰めてからそれを背負い、外へと出た胡桃は白雪とその川へ向かう…。右手

には念のためシヤベルを持ち、左手では…白雪の小さな手をギュツと
手を握る…。

胡桃な結局、彼のあの発言に対してはツツコミすら返す事ができな
かった…。

七十七話『ほんね』

悠里「痛っ！あ、あまりキツくしないで？もう少しだけ…優しく…」

「すつ、すみませんっ！…えつと、こう…ですか？」

悠里「んっ…うん…気持ちいい…♡」

「…よかった」

夕食を済ませ、それから約2時間後…

悠里は自分の部屋にて、彼と二人きりで言葉を交わしていた。

他の皆は既に寝静まっているかも知れない…

でも、だからこそかも知れない。

彼と悠里が…こんなにそばにいるのは…

20分前…

「……………暇だな」

彼は自分の部屋のベッドの上に寝転んだまま、一人でポツリと呟く。

就寝するつもりで彼女達と別れたのだが、いざベッドにたどり着いた途端、まだ眠気が無いことに気がついたのだ。

(部屋に戻ってもう1時間以上たってるし…みんなは寝てるかも)

(でも、誰かと話でもしてたいなあ。そうでもしないと、このまま朝まで起きていることになりそうだ…。一人で寝よう寝ようと思うほど、眠れないんだよな…)

(適当に一人一人の部屋ノックして、起きてたら話し相手になってもらおうかな…。でも、もしノックの音で起こしちゃったらわるいか…)

彼は眉間にシワを寄せながら頭を悩ませる…。

話し相手がいないならば、他に何か眠気がくるまで時間を潰せる方法はないか…または、彼女らが起きているのかどうかを静かに確認出来る方法はないか。

…トツ…トツ…トツ…

「んっ?」

そんな最中、部屋の外…廊下から誰かの足音が聞こえた。

その足音は彼の部屋の前を通りすぎ、そのまま数メートル歩いていったところで聞こえなくなったが、また少しすると戻ってきて、再び彼の部屋の前を通っていった。

話し相手を探していた彼はその足音が聞こえている内に部屋から出て、その人物に声をかける。…薄暗い廊下の中、ライトを片手に歩いているその人影の正体は悠里だった。

「…りーさん?」

悠里「あら?どうかした?」

小さく首をかしげながら、彼の方へとライトを向ける悠里。

そのライトの明かりは確認ついでに彼の顔を照らしていたが、彼が眩しそうにしているのに気がついて悠里はすぐにそれを足下へと下げた。

「いや、中々寝付けなくて…リーさんはどうしたんです？」

悠里「…ちよつと…トイレにね…」

「ああ…」

悠里「……………」

「……………」

それから数秒間、二人は無言で見つめあう。

話し相手が欲しかった彼だったが、いざその相手を目の前にすると少々緊張するものがあつた。

何せ、こんな夜に『二人きりでお喋りでも…』などという台詞を女子に言わなければならぬのだから。

悠里「…じゃあ、おやすみなさいね」

悠里は一度ニツコリと微笑みを見せると、彼に背を向けて部屋へと戻ろうとする…彼は慌ててそんな彼女の左手首を掴むと彼女の振り向き様、その目を見つめながら尋ねた。

「あ、あのっ…」

悠里「うん？なに…？」

「リーさん、もう眠たいですか？」

悠里「…ううん。まだ、あんまり眠たくないかな」

「…じゃあ、これから部屋に行ってもいいですか？」

悠里「……………えっ？」

彼の言葉を聞いた直後、悠里は固まってしまふ。

薄暗い廊下の中でも、彼女の顔がじわじわと赤く染まっていくのがしつかりと確認出来た。

「僕、まだ全然眠たくないんです…。だから、リーさんと一緒に…」

悠里「……………」

悠里の手首を掴んだまま、真っ直ぐに彼女を見つめる。

悠里は段々自分の胸の鼓動が速くなるのを実感しつつ、その顔を見つめ返していた…。

「お喋りでも…と思ったんですけど…」

悠里「…お喋り。私と…二人きりで？」

「二人きりが嫌なら他の人を誘っても良いですし…そもそも断つてくられても結構です」

彼は悠里の手首から手を離し、返事を待つ。

悠里はそれに対して優しい笑みを見せながら、即座に返事を返してくれた。

悠里「ううん…二人きりでいいわよ。私も、あなたと二人だけで話したいこととかあったし…」

「そうなんですか？」

悠里「まあ、大したことじゃないけどね。じゃあ、とりあえず部屋まで行きましょ」

そう言つて部屋まで先導する悠里の後に続き、彼は歩み始める。

…といつても部屋はすぐそばにあった為、歩いたのはほんの数秒だった。

悠里「…それで、なんの話をする？」

部屋にたどり着き、彼を中へと入れた悠里はベッドに腰掛ける。

そうしてなんの話をするかと聞かれると、特に話題を用意していた訳でもない彼は頭を悩ませた。

「ん…あつ、リーさんは僕に話したいことがあるんですよね？それ

から聞きますよ。僕は特に話題が無かったんで…」

悠里「…そう…。じゃあちよつとだけ…」

悠里は自らの膝に手をおきながら、彼をじっと見つめる…。

その直後に軽く一呼吸挟み、真面目な表情で彼女は語り始めた。

悠里「あなたは…生き延びられる自信がある？」

「…どっぴいごうことですか？」

悠里「言葉のままの意味…。こんな世界で、あとどれだけ…生きていられるのかってこと…」

そう尋ねられた彼は考える…。こんな危険だらけの世界で、彼女達とともに、自分はどこまでやれるのかと…。

だがその直後、真剣に考える彼のそんな気持ちを読み取ったのか、悠里は少しおどけた表情をして笑った。

悠里「ごめんなさいね。ちよつと暗い話になっちゃった…話題、変えましょうか？」

「…構いません」

悠里「そう…。じゃあ、もう少しだけ続けてもいい？」

「ええ、どうぞ…」

彼が答えると悠里は表情をほんの少しだけ暗くして、その話の続きを彼に話していく…。しかしその口は重たいようで、中々言葉を出しきれなかった。

悠里「わたし…その、ね…」

「…」

悠里「…えつと…」

悠里「……………怖いの」

目を微かに潤ませて、悠里は彼にそう告げる…。

彼はそんな悠里の言葉を、今はただ黙って聞いていた。

悠里「あと何年…何カ月…ううん、あと何日も…みんなといられないかも知れない…」

悠里「もしかしたら明日にでも、誰かがかれらに傷付けられて…いなくなったりするかも…」

悠里「それがわたしならまだいいの…。でも、それは胡桃かも知れないし、美紀さん…由紀ちゃんかも知れない…」

悠里「ミナさんやゲンジさん、シラユキちゃんも…もう大切な友達だから…失いたくない…」

悠里「もちろん、あなたがなくなるのも…絶対にイヤ…」

悠里「元の世界に戻って欲しいとまでの贅沢は言わないから…わたしは……………」

悠里「みんなと…ただ毎日笑っていたい…」

悠里「もう、誰も…死んでほしくない…」

悠里「今度誰か一人でも欠けたら…もう立ち直れないから…」

うつむいて語る悠里…。いつからか彼女の目には涙が溢れていて、それは自らの太ももへとポタポタこぼれ落ちていた。

「…大丈夫、僕が…みんなを守りますから」

強がって放った言葉で、本当は自信が無かった。彼自信もいつ、誰

が欠けてもおかしくはない世界だと実感していたから……。この世界はいつまでもみんなをいられるほど甘くはないし、いつまでも……。どんな危機からもみんなを守るほど、自分は強くない。それは自分が一番理解していた。

それでも、目の前で泣く悠里を安心させてあげたかった……。

だから彼は：『みんなを守る』と彼女に言った。

悠里「……君っ、あなた……それ、ちゃんと自分を含めてるの？」
「えっ……」

悠里の言葉の意味が理解できず、彼は少しだけ間の抜けた声を出す。

悠里「あなたのその台詞、私には……『自分がどうなってもみんなを守る』ってように聞こえるのよ……」

「……それは……その……」

悠里「いくらみんなを守っても……あなたが死んじゃったらなんの意味も無いのよ？わかってるの!？」

頬を伝う涙を両手で拭いながら彼に告げる悠里。

涙はまだいくら拭いても溢れてきて止まる様子を見せないが、それでも悠里は一生懸命に拭っていた。

悠里「わたしはっ……誰も死んでほしくない!……だから、あなたが欠けてもダメなのっ!いくらあなたがみんなを守っても……その最後であなたが死んだら……」

悠里「もう……わたしはっ……」

涙を拭っていた両手はいつしか目を覆い隠していて、悠里はどうとう肩を震わせながら泣き始める。ここまで弱気の悠里を見たのが初めてのはそれはそれに戸惑い、どうすれば良いのかわからない……

…はずだったのだが、彼は自然と悠里の隣に腰掛けると…目を覆うその手をどかした。

悠里「ぐすつ…！ちよ、ちよつと…!?」

手をどかされて驚く悠里の表情…。その目は泣き過ぎたせいで赤く腫れているにも関わらず、まだ涙が溢れてきていた。

彼の手は自然とその目に伸び、親指でそつと、優しくその涙を拭う…。

悠里「っ…あ……」

少しだけ戸惑いつつ、悠里はそれを受け入れた。

彼はただじつと顔を見つめて、優しく丁寧に涙を拭い続けてくれる…。

頬や脛に触れるその指の感触がなんだか心地よくて…悠里は目を閉じた。

「…僕も」

目を閉じ、真つ暗になった悠里の視界。

そこに突如、彼の声が聞こえた。

悠里は相変わらず目を閉じたままで、その声に耳をすませる…。

「僕も…怖いんです。いつ、誰が死んでもおかしくないから…」

「ちようど昨日、ふと夜にそんなことを思いました…寝付けませんでした」

「二人の時はもつと気楽だった…、守るのは自分の身だけですし、最悪それだつて諦めがつく…でも、今は違う。自分の命よりも大切な人がたくさん増えて…その人達を守らないとならない」

悠里「……っ…」

「もつとも、誰かに守れと頼まれた訳ではないです。…自分でそうしたいと思ったから、僕はみんなを守っているんです…」

「みんなにはずっと…僕のそばにいて欲しいですから…」

悠里はうつすらと目を開けてみる。

そこには優しく笑う彼がいて、まだ溢れてくる涙を拭ってくれていた。

「…僕は…あなた達が大好きです。由紀ちゃんも、美紀さんも、胡桃ちゃんも…もちろん、リーさんの事も大好きです」

「あなた達を失ったらと想像するだけで、とても怖くなります。でも…それでも僕はあなた達に会えてよかったと思っっています。あなた達に会えなかつたら、ここまで楽しい毎日は過ごせなかつたはずですから…」

彼は微笑みながら人差し指の背を悠里の頬にあて、彼女の涙を拭く。

だが悠里は彼の前で泣いているという事実が今になって恥ずかしくなってきたてしまい、彼の手をそつと振り払って自らの手で涙を拭き始めた。

悠里「ご、ごめんなさいっ！わたし…情けないところを…」

「…僕は平気ですよ。でも意外でした、リーさんでも弱気になる日があるんですね」

悠里「わたしは…いつだって弱気よ。ただ、みんなの前ではそれを出さないようにしてるだけ…」

「…そうなんですか？」

悠里「うん…。こんなわたしでも頼りにしてくれる人がいるから、弱気なところなんて見せてられないの」

悠里は彼にそう告げると、少しだけ恥ずかしそうに微笑む。

彼はそんな悠里を見て、彼女も普通の女の子なのだ…今更ながら確信する。誰よりもしっかりしていて、大人びている彼女だったが、その心は毎日不安だらけだった。

悠里「ほんとは――君にも、こんな話をするはずじゃなかったの。でも、こんな夜に二人きりだったからかしら…少し、情けないところを見せちゃったわね」

「いえ…情けなくなんてない、当たり前前の事ですよ」

悠里「…そうね、――君だって怖いんですもんね？みんなを失うのが…」

「ええ、そりやもう。怖くて怖くて仕方ないですよ」

少しだけうつむきながらそう語る彼の横顔を、じつと眺める悠里…彼女はそんな彼の手をそつと握ると、そのままニッコリと笑った。

悠里「意外…。あなたもそんな弱気な事を言うのね。普段は呆れるほど元気だから、あまりそういう事は考えないのかと思っていたわ」
「僕もあまり考えたくないんですけどね…。どうしても考えてしまう時があります」

悠里「…みんなと楽しく過ごしていると、不意に考えたりしちゃうでしょ？こんな毎日はいつまで続くのかな…って」

「…そうですね」

悠里「…：本音、言えてよかった。おかげで少し楽になったわ♪」
「起こるかどうかわからないことなんて…考えても仕方ないですから、とりあえず今は楽しい毎日を過ごしましょう？みんなと…一緒に…」

悠里「…うんっ♪」

握りしめていた彼の手を離し、悠里は微笑む。彼と本音を言い合った事で多少気持ちが楽になったらしく、その笑顔は本当に輝いていた。

「誰かに言わないと、心が段々と暗くなってしまいましたからね」
悠里「…うん。でも由紀ちゃん達には心配かけたくないから、こんな事は言えなくて…」

「ん？…まるで僕には心配かけてもいいみたいない方ですね？」

悠里「ふふっ♪そうね、あなたになら、甘えてもいいと思ったのかも…」

イタズラに笑いながら呟く悠里…。

薄暗い部屋で見る彼女のそんな笑顔がいつも以上に可愛らしく見えて、なんだか意識してしまう…。少し赤くなっているであろう自分の顔を悠里に見られるのが嫌で、彼は思わず目を逸らした。

悠里「？…どうかした？」

「いっ…いえっ／＼／」

悠里「…変なの」

「っ／＼／あ、あの…疲れてるでしょう??肩でも揉みましようか？」

照れ隠しの為、とっさにそう言つて彼は悠里の背に回り込む。

悠里はそれに戸惑ったが…言われれば少しだけ肩がこっていた為、それに甘える事にした。

悠里「…じゃ、お願いしてもいい？」

「はっ、ハイ喜んでっ!!!」

悠里（…居酒屋さん？）

彼の異常に高いテンションのスルーしつつ、悠里は前を向いたままで肩が揉まれるのを待つ。

少ししてから彼の手は悠里の肩に触れ…そこをゆっくりと揉み始めた。

しかしながらその力は強く、思わず悠里は声を漏らした。

悠里「痛っ！あ、あまりキツくしないで？もう少しだけ…優しく…」

「すっ、すいませんっ…えっと、こう…ですか？」

彼は力加減を弱めて、丁寧に肩を揉む。

今度のそれは悠里にとって心地の良いものだったらしく、彼女はリ

ラックスしていた。

悠里「んっ…うん…気持ちいい…♡」

「…よ、よかったです」

彼女の気に入る力加減が分かったところで、彼はそれを維持しながら肩を揉んでいく。ずっと無言のまま肩を揉み続け…そのまま10分は経過したであろう時、彼は一つの難題に頭を悩ませていた…。

「……………」ギユ…ギユツ…

悠里「…っ…んっ♡」

彼の抱えていた難題…それは眠気がここに来る前以上に無くなっていたという事。肩とはいえ、悠里の身体に触れ続けている事…そして肩を揉まれている悠里が時折漏らす甘い声に彼は何とも言えない興奮を感じてしまい、そのせいで全ての眠気が吹き飛んでしまっていた。

(ヤバい…このままでは、確実に朝までお目目パツチりだ…。しかも…それだけじゃない。こうして、リーさんの肩を揉んでいると…何か色々ヤバい…)

何がそんなにヤバいのかは彼のみぞ知るのだが…とにかく、彼は色々ヤバかった。どれほどヤバいかというと…『今このまま、リーさんの肩をグツと引っ張って…そのままベッドに押し倒したら怒られるかな…』などと真剣に考えてしまうくらいヤバかった。

悠里「…ありがとう、もういいわよ。だいぶ楽になったから」

「あっ!?は、はいっ…」

彼はその手を肩から離し、悠里との距離を開く…。

このまま彼女のそばにいるのは危険だと判断しての行動だった。

悠里「…気持ちよくて、なんだか眠たくなってきちゃった…」

「そ…そうですか…」

悠里「あなたは…まだ眠たくないの？」

「えっ…と…少し、眠たくなってきたかも…」

大嘘だった。彼はまだ全然眠たくない。悠里の肩を揉み続けた事で変なスイツチが入ってしまった、この部屋に来た時にあったほんの少しの眠気すら吹き飛んでしまっていたのだから。

悠里「…よかった。じゃあ、寝ましようか…お休みなさい」

そう言いながら悠里は彼に手を振る。

今の彼にとつてそれは、『早く出ていけ』という無言の脅迫のようなもの思えた。もちろん、悠里はそんなことを思っていないのだが…。

「…お休みなさいです」

彼はそう告げて立ち上がると足早に扉に向かい、真つ暗な廊下へと出る。ライトすら持たずに出てきた為、少し視界が悪いが…自室までの距離はかなり近い。暗闇に目を慣らしていけば問題はないだろう…。

そう考えた彼の目が少しずつ暗闇に慣れていった時、一階の方から足音が聞こえたような気がした…。

トツ…トツ…

…間違はなく、それは足音だ。

彼はその正体を確認するために、階段を下る…。

いくら暗闇に目が慣れたといつても、視界はまだ頼りない。

彼は足を踏み外したりしないよう、一段ずつ慎重に階段を下りた。

下りきった先では、ちようど誰かの明かりがチラチラとしており、それは彼の顔へと向けられる。

弦次「…なにしてんだ？こんな時間に」

ライトを彼に向けながら、弦次は尋ねる。

彼は顔に当たるその光が眩しくて、手をかかげてながらそれを遮つ

た。

「足音聞こえたんで…誰かなって思ってた…」

弦次「俺だよ。夜の見回りに出ていただけだから、安心して寝ろ」
そう答えてから弦次はそそくさと歩き出してしまい、彼の前から姿を消した。足音の正体が不審者などではなく弦次だと知った彼は一安心すると階段を上がり、自室へと戻る。

ベッドに横たわってはみるものの、彼は結局…朝日が昇るその時まで眠る事ができなかった…。

七十八話『にせもの』

胡桃「おはよっ!」
バシツ!!

「いてっ!」

朝の7時頃…皆が集まっている広間へと現れた彼を見るなりその背中を勢いよく叩く胡桃。

彼は痛そうな声を一言だけあげ、そのまま席へとつく。その目の下にはヒドい隈くまが出来ていて、何も言わずとも、いかに夜ふかししたかを物語っていた。

美紀「——さん…その目…」

由紀「すっごい眠そうだね!」

彼の隈、そしてその重たそうなまぶたを見て驚く美紀と由紀…、一方で昨晚、彼と話していた悠里は先に眠ってしまった事を少しだけ悪く感じてしまい、彼から思わず目を逸らした。

胡桃「夜ふかしとは感心しないぞ少年っ!遅くまで何をしていた!?!」

「何をつて…とくに何も…、ただ…眠れなくて…」

胡桃「ふうん…で、結局朝まで起きてたと?」

「いや、どうにか一時間くらいは眠れたよ…」

弦次「今日、頼みたい用事は特にない。朝食だけとって、寝直したらどうだ?」

あまりにも眠たそうな顔つきの彼を不憫ふびんに思い、弦次はそう提案する。彼はそれに無言で頷き、皆と共にキッチンへと向かった。よほど

眠たいのか…その足どりは危なっかしく、廊下で何度も転びかける。結局それを見かねた胡桃が彼に肩を貸し、どうにか彼はキッチンへとたどり着く事ができた。

しかし、せつかくたどり着いたにも関わらず彼は椅子に座るなり目を閉じてしまい、そのまま眠りについてしまう。それを見た全員が、ほぼ同時に呆れたようにため息をついた。

未奈「あ、あら…よっぽど眠たかったのかなあ…」

美紀「まったく、ここで寝るとか本気ですか…。ほら、起きてください！」

ペチペチツ!!

美紀が彼の頬を叩く音がキッチン内に鳴り響く…。

中々強い力で叩いていたにも関わらず、彼は起きる様子を見せなかった。

美紀「…ダメですね、起きません」

弦次「どうするお嬢?…このまま椅子に寝かせておくか?」

未奈「ん…できれば部屋に戻してあげたいけど、難しいかな?」

弦次「…仕方ない、俺が部屋まで運んでくるよ」

やれやれといったような表情で彼に近寄る弦次。

だがそんな弦次を胡桃は止め、眠る彼の頭をバシバシと叩いた。

胡桃「ゲンジさんは朝食を食べてていいよ、こいつはあたしが送ってくるから」

弦次「え?いや、遠慮しないで大丈夫ですよ?だいたい、あなた一人じゃそいつ担いで部屋まで行くのは大変でしょう?」

胡桃「平気平気!ちゃんと鍛えてるからさ!…つてな訳で、リーさん達も先に食べていいからね?」

そう告げてから胡桃は眠る彼を背中に背負い、ゆつくりと歩き出

す。

彼を背負いながら歩く胡桃を見た由紀は『おおっ！』と驚いたような声をあげ、パチパチと小さな拍手をした。

由紀「さつすが胡桃ちゃん！相変わらずパワータイプだね!!」

胡桃「それ：少しバカにしてるだろ？」

一度その場に立ち止まり、由紀を睨む胡桃：。

それに恐怖を感じた由紀は直後すぐに悠里の背中へと隠れ、そのまま胡桃へ手をパタパタと振った。

由紀「き、気を付けてねく：」

胡桃「：ああ」

弦次「あの、本当に大丈夫ですか？俺、代わりますけど：」

白雪「ゲンジ、くるみは平気だって言ってる。だから大丈夫だよ」

弦次「：そうか」

胡桃に気を使う弦次を白雪は引き止め、彼を送る仕事をそのまま胡桃へと任せる。弦次を止めた直後、白雪が胡桃へと微笑みを向けると胡桃もそれに微笑みを返し、笑顔のままキツチンをあとにした。

白雪「：えへへ」

弦次「？：シラユキ、どうした？」

白雪「ううん、なんでもないっ♪」

胡桃を見送ってからしばらくの間、白雪はニヤニヤとした笑みを浮かべながら朝食をとっていた。彼女のそんな表情は中々に珍しいもので、思わず弦次も頬が緩んでしまう。

未奈「ゲンくん、嬉しそうだね♪」

弦次「まあね：そう言えばお嬢、後で：：：少しだけ時間あるか？」

未奈「ん？大丈夫：だけど？」

弦次「そつか……じゃあ、後で二人で外に行こう」
それを聞いた後、未奈は少しだけ不思議そうな表情をした。
弦次の方から二人だけで外に行こうなどと誘ってきた事は今まで無かったからだ。

未奈「……どうして？特に必要な物もないでしょ？」

弦次「散歩みたいなもんだよ。黙って付き合ってくれ」

未奈「ヒメちゃんは……」

未奈はそつと白雪を見つめる、直後すぐに弦次はそばにいた悠里へと視線を向け、申し訳なさそうに告げた。

弦次「悠里さん……たぶんすぐに戻るから、その間だけシラユキを頼んでもいいですか？」

悠里「ええ、私達は構いませんよ」

弦次「シラユキも……この人達となら留守番できるだろ？」

白雪「うん、平気だけど……ゲンジとミナはどこにいくの？」

弦次「散歩だよ。すぐ戻るから、待っていてくれ」

白雪「……わかった」

少しだけ弦次に違和感を感じた白雪だったが、深く追及したりはせず、ただ目の前の朝食を食べる事に専念した。少しすると彼を部屋に届け終えた胡桃もキッチンに戻り、彼以外の全員が朝食を終えた。そのすぐ後：弦次は先ほどの発言どおりに未奈を連れ、外へと出ていった。

残された白雪は広間で由紀達と絵を描いたりして遊びながら、ふと思いついたように胡桃へと話しかける。

白雪「くるみ、あのお兄ちゃんは部屋にいる？」

胡桃「ん？あいつか？ああ、ちゃんと送ってきたからな…今は寝てると思うぞ」

白雪「そっか、あの人…途中で起きたりした？」

胡桃「いや、ずっと寝っぱなしだ。あたしが送ってやった事すら気づいてないと思う」

美紀「よほど眠たかったんですね、まったく起きないなんて…」

胡桃「まったく、どうしてあんなになるまで夜更かししてたんだか…」

悠里「……………」

美紀と胡桃の会話を聞いた悠里はそつと顔を伏せ、一人気まずそうな表情をする。彼女は彼が夜遅くまで起きていた事を知っていたし、彼がその後も眠れなかったのはもしかしたら自分に理由があるかもと思っていたからだ。

悠里（夜にあんな重たい話題を切り出しちゃったから、悩ませちゃったのかも…。悪いことしちゃった、起きたら謝っておきましょう…）

由紀「りーさんっ♪…………あれ、どしたの？考えごと？」

由紀が悠里の肩をパシツと叩き、その顔を覗き見る。

悠里のその表情は何か意味ありげなものに見えたので、由紀はその理由を尋ねた。だが『彼が寝てないのは自分のせいかも…』などとは言える訳もなく、悠里はそれをはぐらかす。

悠里「あつ…ううん！ゲンジさんはみなさん連れてどこに行ったのかなあ…って考えてたの」

由紀「ああ…どこ行つたんだらうね？」

二人の会話に白雪が入り込む、彼女は悠里の服の裾をぎゅつと握りながら、どこか不安そうに口を開いた。

白雪「ゲンジ…少し様子がおかしかった。今朝はなんだかいつもよ

り元気が無かったし…それに自分から進んでミナだけを外に連れてくなんて、そんなこと今まで一回もなかった」

由紀「そうなの？」

白雪「うん、今まで二人だけで出かけることはあったけど…それは全部ミナから『一緒に行きたい』って言ってきたから。ゲンジからミナを誘う事なんか、一度もなかった…」

美紀「…少し、心配ですか？」

胡桃「大丈夫だと思うけどな、あたしは…」

美紀と胡桃も会話に混ざり、弦次の行動の意味を考える。

誰しもが頭を悩ませる中、由紀だけは全てを知っているかのような笑みをニヤニヤと浮かべ、全員の視線を集めた。

美紀「由紀先輩…何か知ってるんですか？」

由紀「えへへ♪知ってるってわけじゃないんだけどね♪なんとなく予想は出来るかなあ〜」

胡桃「予想？」

白雪「なに？おしえてほしい」

最初はもつともつたいぶろうとしていた由紀だったが、白雪に尋ねられては無視出来なくなり、それを誇らしげに答えた。

由紀「ゲンくんてさ、多分…ミナちゃんのこと好きだよね？」

悠里「…シラユキちゃん、どう思う？」

白雪「たぶん…ゆきの考えはあってる。ゲンジはミナのが大好きだと思う」

由紀「でしょ！やっぱりなあ〜♪」

自分の考えは間違っていないという事を白雪に証明してもらい、由紀は嬉しそうに微笑む。そうして辺りをスキップしだす由紀の腕を胡桃が掴んで止め、まだ明らかになっていない部分を問う。

胡桃「あの人がミナの事を好きなのはあたしも薄々だけど気づいてたよ。それで、それが二人で出かけたこと……」

そこまで言ったところで胡桃は口を止め、掴んでいた由紀の手を離す。自分で言っている内に、ある事に気づいたからだ。

胡桃「まさか……告白……とか？」

由紀「うんっ！わたしはそうじゃないかなあつて思った！」

白雪「告白……ゲンジが……ミナに……／＼／＼」

今まで自分の面倒を見てくれた二人……その二人が恋人関係になった姿を想像し、白雪は顔を赤く染める。あの二人はとても仲が良い、もし本当に弦次が未奈に告白したならば、それは大方成功するだろう。

白雪はそんな未来を想像すると照れてしまったが……、どこか嬉しい気持ちもあつた。

白雪「えへ……へへっ♪」

悠里「シラユキちゃん二人が付き合ったら嬉しい？」

白雪「うん……、二人は……わたしにとつてお父さんとお母さんみたいな人だから、ほんとにそうになってくれたらうれしい♪」

につこりと、とても幸せそうに白雪は笑った。

その可愛らしい笑顔を見て悠里達も微笑む。

弦次が未奈を連れ出したのは告白する為だと決まった訳ではないが、そうであつてくれたらうれしい。そして、二人がそんな仲になつてくれたら……それはとても素敵な事だろう。その場にいた全員がそう考え、二人の帰りを待った。

~~~~~

未奈「あの…ゲンくん？本当は…私に何か用があるんでしょ？」

屋敷から約10分ほど歩いた所にある大きな倉庫…

弦次は未奈をその中へと招くと鉄で出来た錆びだらけの扉を閉め、彼女の事を見つめた。

その倉庫はボロボロで、屋根には数ヶ所穴があいている。だがそこから光が射し込んでいるおかげで中は比較的明るく、何かにつまづいたりする事もなければ、未奈のその表情を見逃す事もなかった。

彼女は頬を真っ赤に染め、両手を胸の前で合わせながらモジモジとしている。弦次に連れ出された時点で、ある一つの可能性を予期していたからだ。

未奈（二人きりで…わざわざこんな所まで…。ゲンくん…やっぱり、私に…）

高なる鼓動を抑え、未奈は弦次の言葉を待つ…。

もし彼が自分に告白してきてくれたら…どう返事を返せば良いのだろうか…

頭の中でそんな考えを巡らしてはいたが、実は既に未奈の気持ちは決まっていた。

毎日毎日、自分と白雪を守ってくれる弦次を見て…一つの気持

ちが芽生えていたから…。

弦次「…………お嬢」

弦次が一步ずつ未奈へと歩み寄りながら声をかける。

未奈はただ、それを黙って見つめていた。

未奈「……………」

弦次「いや…………ミナ…」

未奈「はっ、はいっ!!／／」

突如名前を呼ばれ、未奈はますます顔を赤く染める。

彼に名前を呼ばれたのは何時ぶりだろう…そんなことを思いながら弦次の瞳をじっと見つめる。彼とそんな仲になれたら…いつからかそう思っていたが、それが今日…現実になるんだ。ミナの鼓動はどんどん速くなる。

未奈「……………」

弦次「……………」

弦次はついに未奈の前へと立ち、一度倉庫の中を見回す。

それを終えた後、彼は深いため息をつき、ただ一言…未奈に言葉を放った。

弦次「……………ごめん」

未奈「…………えっ?」

未奈から目を逸らし、顔を伏せる弦次…。

その行動と予想していなかった言葉に未奈は驚いてしまい、思わず声が大きくなる。

未奈「ど、どういうこと!?!ごめんって…意味が分からないよ!何を謝ってるの!?!」

弦次「……………」

直後、倉庫内に笑い声が響く…。

それはもちろん未奈の声ではなく、更に言えば弦次のものでもない。

二人のどちらでもないその声は一人のものではなく、複数人のものだった…。

倉庫内に雑に置かれていたいくつかの大きな木箱や棚等の裏…そこに身を潜めていた数人の見知らぬ人達が隠れるのを止め、未奈の前に姿を現す。その内の数人はゲラゲラと大きな笑い声をあげながら、驚いた表情をしている未奈を見つめた。

???「あはははははっ!!ミナちゃん、こんにちはっ!こんなそばで見るのは初めてだよ」

未奈「!?!…あなたたち…誰ですかっ!?!」

不気味な笑みを浮かべるその男が怖くて未奈は一步後ろへと下がる。

すると今度はその男の隣に立っていた中年男性が彼女をギツと睨み、落ち着いたトーンで言葉を放った。

??「可愛そうなヤツだな…、お前は何も知らない。過ごしている毎日が本物の平和だと信じながらヘラヘラと生きてきたみたいだが…残念、それは全て偽物なんだなあ」



未奈「…なに言ってるんです？ゲンくんっ！早く逃げようっ!!」

弦次の手を掴み、未奈は出口へ向かおうとする。

しかし弦次はその場からぴくりとも動かず、ただうつむいたまま未奈へと謝罪の言葉を述べていた。

そんな弦次を見て未奈が頭を真っ白にしている間に、出口への道に金槌を持った男が立ち塞がり、未奈は退路を無くす。出口である扉にその男はよりかかり、金槌を手でパシパシと鳴らしながら未奈を見つめる。ガムでも口に行っているのだろうか…その男の口はモゴモゴと動き、クチャクチャと音を鳴らしていた。

未奈「ゲンくん…逃げないっ…はやく逃げないっ!!」

弦次の肩を揺さぶり、未奈は必死に呼び掛ける。

だがどんなに呼び掛けても弦次は顔を上げたりはせず、うつむいたままだった。

そんな未奈へ先程声をかけた中年の男性は歩み寄り、またしても落ち着いた声で彼女へと語りかける。

??「いつまでも平和でいられると思ったのか？弦次と八島白雪と三人で…ずっと楽しく過ごせるとでも？甘いんだよ水無月未奈…この世界に平和なんてのはありやしない。あんな豪華な屋敷にしようと、誰といようと、本物の平和なんてものは存在しない」

未奈「私とゲンくん…ヒメちゃんの事まで…!?なんであなたが私達の名前を知っているんですかっ!!」

自分達が屋敷に住んでいる事、更には名前すらも知られているという事実…未奈はそれに驚き、何故知っているのかを尋ねた。だがその男はそれに答えたりはせず、話を続けた。

??「平和ボケしているお前に、この世界の現実つてのを教えてやろう。もちろん、彼にもな…」

未奈「ゲンくんっ!!逃げないと、私達このままじゃ——」  
??「ああ、彼というのはゲンジの事じゃないから…そう慌てるな」

弦次の手を引いてどうにか逃げようとした未奈だったが、その言葉を聞いた途端、その男に言い様のない恐怖を感じた。この男の言う彼というのが弦次を指さないというならば…それは…

未奈（この人…どこまで知って…!）

未奈が冷や汗を流して男を見つめていると、その男はニヤリと笑い口を開く。直後に放たれたその言葉はやはり、未奈の想像していた人物を指しているものだった。

??「彼”もまた君と同じ…平和ボケしている人間の一人だからなあ?小娘共に囲まれて何が楽しいのか知らないが、彼はほんつつつとうにツマラナイ方向に成長してしまったなと俺は嘆いている!」

未奈「あなた…あの人達の事も…!!」

??「彼にはお前以上に強く現実を突きつけてやらなきゃな…。もちろん、彼を腐らせたその小娘達にも教えてやる…この世界に平和や幸せなんてないって事をな…」

一步、また一步と未奈に歩み寄りながら男は語る。

周囲を囲む数人の見知らぬ人間…そしてうつむいたまま動かない弦次を見ていた未奈の恐怖心はみるみる膨れ上がり、足が震えてきてしまう。

未奈「ゲンくんっ!ゲンくんてばあっ!!」

弦次「大丈夫…心配いらない…平気…だから…」

弦次は頼りない声で未奈にそう告げた。

相変わらずうつむいたまま…目も合わせてくれない。

初めて見る、弦次の頼りない姿…未奈はそれを見た瞬間、我慢が出来なくなり、涙をほろほろとこぼした。

未奈「にげ…ようよお…！ゲンくん…ゲンくんっ…！！」  
弦次「……………」

未奈「ゲン…ジくん……ゲンジくんっ…！！」

彼と由紀達、そして白雪の待つ屋敷からそう遠くはないその倉庫…  
未奈が泣き声まじりに弦次を呼ぶ声だけが、そこには響いていた…。

## 七十九話 『しゅっぱつ』

ガチャ：

広間の扉が開き、そこから顔を出した弦次は中へと入る。

彼がこの屋敷へと帰って来たのは、未奈と出かけてから2時間ほど過ぎた時の事だった。

白雪「ゲンジ、お帰り！」

悠里「思っていたより遅かったですね、みんな心配していましたよ？」

弦次「……ああ、すいません……」

見たところ弦次は一人、そしてその表情はどこか暗さを含んでいて、声をかけずらかった。胡桃は隣に座る由紀の肩を軽く小突き、こつそりと囁く。

胡桃「おい……まさかフラれたんじゃ……」ボソツ

由紀「ま、まだわかんないよっ……」ボソツ

胡桃にそう返事を返してから由紀は立ち上がり、弦次のそばへと歩み寄る。彼女は弦次へ優しい微笑みを見せると、それとなく未奈の事を尋ねた。

由紀「お、お帰り……あれっ？ミナちゃんはどうしたの？一緒にいたでしょ？」

弦次「お嬢は……少し疲れたから寝るって部屋に戻った……、起こさないであげて下さいね……」

どこか威圧するような声で由紀にそう告げると弦次は広間の中を

うろろうろと歩き回り、時おり立ち止まってはそつと頭を抱えてため息をつく：明らかに様子がおかしかった。

美紀「胡桃先輩：もしかして……」

胡桃「ああ、ありやフラれたな……。つかしーな：絶対成功すると思つてたんだけど……」

美紀「ミナさんはまだ、ゲンジさんを恋愛対象として見てなかったんですかね……」

胡桃「……かもなあ」

弦次に聞こえぬようにこつそりと会話を交わしながら、胡桃と美紀はそばにいた白雪を見つめる……。弦次と未奈の二人が仲良く戻ってこなかった事が残念なようで：白雪は表情を曇らせていた。

白雪「……………」

胡桃「……シラユキ、一緒に外で遊ぶか？」

白雪「……いい」

胡桃「そつ……か……」

少しでも白雪の表情を明るくさせてあげようと気を使い、胡桃は彼女を庭に連れ出そうとするが：それは拒否される。弦次の暗い表情が何故かとても悲しく見えて、白雪は遊びどころではなかった。

弦次「……………ここから」

悠里「……？」

室内にいる由紀達を一人一人見回し、弦次は突如口を開く。

その声はとても気だるげで、喋るのも面倒だと言わんばかりだった。

弦次「ここから数キロ先に……大きな病院があります……」

悠里「病院……ですか？」

弦次「…ええ、病院です。中々大きなところですから…まだ何かあるかも知れませんが…、悪いですけど…今から行ってきたくれますか？」

悠里「今から…ですか？」

弦次「早い方がいいので、お願いしたいです…」

突然の頼みに少し困惑する悠里だったが、こうして皆で屋敷に泊めてもらっている以上は断れないと思い、それを受ける事にした。

悠里「……わかりました。胡桃、行ける？」

胡桃「あたしはいいけどさ、あいつはどうすんの？まだ寝てるけど…」

悠里「うくん…起こしちゃ悪いし、今回は留守番して——」

弦次「アイツは連れていって下さい」

悠里の声をかき消す程の声を上から重ね、弦次は会話に割り込む。突然のそれに悠里は驚いていたが、それを横で聞いていた美紀は冷静なままでいた。

美紀「なんで連れていった方がいいんですか？その病院がよほど危ない場所ではない限り、あの人数でも問題はありません」

弦次「人数は多いに越したことはないでしょう…。万が一という事もありません…」

美紀「それだけ…ですか？」

弦次「それ以外に何があるっていうんです？」

美紀「……………」

弦次「……………」

美紀「わかりました、私…あの人を起こしてきます…」

悠里「あつ……じゃあ、頼むわね？」

美紀「はい、すぐに戻ります…」

美紀はゆつくりと歩き出し、彼を起こしに向かう。  
しかし弦次の言動にある違和感…それは少しだけ不安を感じさせるものだった。

くくくくく

美紀「——さんっ！起きてください!!」

彼の部屋にたどり着いた美紀はその中へと入り、ベッドに近寄る。そこでは彼が気持ち良さそうにスヤスヤと眠っていたが、起こさねばならなかった。美紀は彼の肩を激しく揺さぶり、目を覚まさせる。2時間ほど眠った事で多少は眠気が解消されたのか、彼は思っていたよりもあっさりと目を覚ました。

「…美紀さん、なんですか…？僕が寝てから、まだそこまで時間経ってませんよね…」

美紀「2時間くらいでしょうかね…それより、これから出かけるので、あなたもついてきて下さい」

「出かけるって…どこへ？」

美紀「近くに病院があるので、そこへ探索に行きます。なんか…ゲンジさんが行ってきてほしいみたいで…」

彼は身体を起こし、目を擦ってから美紀を見つめ、不思議そうに呟く。

「あの人…今日は頼みたい用事はないとか言ってたのに、なんでまた急に…」

美紀「さあ…ただ、少し様子がおかしかったです。由紀先輩が言うには、ゲンジさんはミナさんに告白してフラれたとか…」

「…マジですか。由紀ちゃんの言ってたとおりだ…やっぱり、あの人はミナさんが好きだったんだな…」

前日、弦次が悠里の笑顔を褒めた時…弦次の発言に彼は照れる悠里の顔を見て若干の嫉妬心を抱いた。その際、由紀に言われた発言を思い出す…。

~~~~~

由紀『…ヤキモチ、必要ないと思うよ?』

『?!?なんでですか?』

由紀『えへへ…だってね…』

由紀『たぶんゲンくんは…ミナちゃんの事が好きだもん♪』

~~~~~

「よく見てると思うよ…僕はまったく気づけなかった…」

思い出しながら感心するように微笑む彼だったが、美紀は少しだけ悩むような声をあげた。弦次の言動の一つ一つに、それとなく違和感を感じていたからだ。

美紀「私には…ゲンジさんがただフラれたってだけには見えなかったんですけど…。気のせいですかね…」

「…じゃないですかね。好きな人にフラれたら、それだけで様子がおかしくなるもんなんですよ。男っていうのはね」

美紀「フラれた事があるみたいない方ですね?」



「まさか…告白すらしたことの無い人間ですからね、僕は…」

冗談混じりな笑みを浮かべながら彼は立ち上がり、すぐに出かける為の準備を整え始めた。愛用のナイフを装備し、上着を羽織る…そんな中、彼は思い出したように一つの事を美紀へ尋ねた。

「そういうえば、僕は自分でこの部屋に戻ったんですかね？まったく覚えていないんですが…」

美紀「いえ、胡桃先輩ですよ。キッチンで眠り始めてしまった——  
——さんを、先輩がここまで運んでくれたんです」

「胡桃ちゃんか…、後でお礼言っておかないとな…」

美紀「ええ、そうしてあげて下さい。先輩、きつと喜ぶますから」

美紀は彼を連れて広間へと戻り、悠里達に声をかける。

彼女達も準備は済んでいるらしく、一同はすぐさま庭に出て、キャンピングカーへと乗り込んだ。

しかし彼はまだ車には乗らず、弦次と共に門を開ける役に回る。

弦次は白雪、未奈の二人と留守番するらしく、今回は同行しないらしい。

そばでたたずむ白雪に見守られながら彼と弦次は二人で少しずつその重い門を開け、会話を交わした。

「みなさん…見送りにも来なかったけど、具合悪いの？」

弦次「…いや、ただ疲れて眠っているだけだ。あんたらが戻る頃には起きてるだろう」

「…ふうん………」

ギギ…ギギイ……

門は耳障りな音を発しながら少しずつ開いていく…。

幸い、そばに“かれら”の姿はない。慌てなくても大丈夫そうだし…。

彼がそう思いながら門を押ししていると、弦次は意味ありげな問いを彼にぶつけた。

弦次「お前は…あの人達のことの大切か？」

「…まあ、そりゃあね。なんでまた急にそんなこと…」

弦次「もし…あの人達の誰かを失ったらどうする？…どうしても、誰かを失わざるを得ない状況へと追い込まれたら…」

「…自分の命と引き換えにしても、絶対に守る。僕は…あの人達の誰が欠けてもダメだと思っっているんでね」

ギギイ…イイツ…

「…よしつ、んじゃ…僕らが出ていった後の戸締まりは任せるからね」  
門は十分なだけ開いた。彼はそこから手を離すと後の事を弦次へと任せ、皆の待つ車へと歩みを進めた。

弦次「……………」ボソツ

「…？」

弦次が何かを言った気がして振り返るが、もう何も言っていない。  
気のせいかな…彼はそう結論付けて車に乗り込むが、確かに聞こえた気がしていた…。

く『…本当にすまない』く

そうやって彼の背に向けて謝る弦次の声が…確かに…。

悠里「みんな乗った？準備いい？」

弦次に手渡された、病院までのルートを記した地図を助手席の胡桃に持たせ、悠里はハンドルを握る。胡桃に美紀、そして由紀と彼…悠里はしつかり全員が乗った事を確認するとアクセルを踏み、門の外へと車を走らせた。

弦次「……………」

門の向こうへ走る車は曲がり角の向こうへと姿を消し、すぐに見えなくなった。弦次は白雪がちゃんと庭の中にいるのを確認すると、一人でその門を閉めていく。

一人では重く、すぐには閉まってくれないが…「かれら」がいないなら慌てる必要もない。

少しずつ動いていったその門が完全に閉まった時、弦次は白雪の方に歩み寄り、そつと声をかけた。

弦次「…中に戻るか？」

白雪「ううん、まだ少しだけ…外にいる…」

弦次「……………そうか」

一人にすると白雪は外に出てしまうかも知れない為、弦次は庭に置かれた一つのベンチに腰掛け、離れたところから彼女を見守っていた。何をするわけでもなく、ただ静かに門の外を見つめる白雪を見守りながら、弦次は彼の言葉を思い返した。

『自分の命と引き換えにしても、絶対に守る』

その台詞を思い返した弦次は一人うつむくと…ただ一人、ボソツと呟く。

とても暗い、諦めきったような悲しい声で…

弦次「自分の命と引き換えに大切なものを守れるなら、俺はとつくにそうしてるさ…」

弦次「アイツらが求めてくるのはお前や俺の命なんかじゃない…。アイツらが欲しがっているのは戦力か…あるいは貴重な物資だけだ…」

今まで晴れていた空が、気づけばだんだんと曇り始めていた…

## 八十話『びょういん』

弦次に頼まれ、近所のとある病院へと向かった悠里・美紀・胡桃・由紀・彼の五人……。悠里の運転のもと、五人を乗せた車はほんの十分ほどでそれらしき場所にたどり着いた。そこは中々に大きな建物で、かなり広そうだ……。

悠里「……ここね」

胡桃「そうだな……名前もあつてるし、何よりこんな大きい病院なんざ近くにいくつもないだろ」

弦次から受け取った地図……そこに書かれた病院の名前と先程見かけた標識の文字が同じことを確認し、胡桃はその地図を閉じる。一行を乗せた車はその病院の駐車スペースへと入るが、そこもまた広く……いくつもの車が乗り捨てられていた。

悠里「車……建物の入り口の近くに停めた方が良い？」

胡桃「その方がなんかあつて逃げてきた時、すぐに乗り込める……か。辺りにちらほらアイツらの影も見えるし……そうしようぜ」

窓から外を見回すと、駐車場に乗り捨てられた車のその先に”かれら”が数体徘徊しているのが見える……。距離がそれなりにある為、まだ気づかれてはいないが、念の為に車は入り口付近の方が良いだろう。胡桃に言葉で後押しされた事もあり、悠里は車を病院内への入り口から10mと離れていない場所に停めた。

由紀「大きな病院だよねえ……。病院……病院かあ……」

小さく呟きながら、由紀はその建物を窓越しにじっと見つめる。

その眉間には僅かにしわが寄っていて、どことなく怯えているかのようにも見えた。

胡桃「……なんだ？由紀は病院がキライか？」

ライトなどを入れたカバンを背負ってから胡桃は由紀に尋ねる、二

ヤニヤとしているその表情はあきらかに由紀を小馬鹿にしていた。胡桃のそんな表情を見た由紀は半ばムキになって返事を返したが、本心では病院という建物に恐怖心を抱いていた。

由紀「ちよ…ちよつと苦手なだけだもんっ!!」

胡桃「ふうくん…ま、病院が好きってヤツは珍しいよな」

美紀「胡桃先輩も病院は苦手ですか？」

胡桃「ん…まあ自分から進んで来たくはないわな」

病院の独特な雰囲気、匂い、夜間に見る謎の恐怖感…それらを頭の中でイメージした胡桃は自身も気が進まない事を皆に告げる。それに対し由紀はもちろん…悠里や美紀も賛同した。

悠里「怖いものね…夜に行行って言われたら絶対断ってたわ」

美紀「ですよ、なんか…雰囲気か怖いです。中が無人だと思つてもまた…」

「普通の人はいないと思いますけど、人だった人はいるでしょうね…」  
彼は”かれら”の事を遠回しに指し、冗談めいた笑みを浮かべる。

胡桃はため息をつきながら軽く頭を抱え、苦い表情をした。

胡桃「まったく…病院内を徘徊する死人とか、下手な肝だめしの比  
じやねえな…」

美紀「せ、先輩…そういう言い方すると由紀先輩が…」

胡桃「ん？」

美紀に肩を小突かれ、胡桃は由紀を見つめた。由紀は身体をプルプルと震わせながら目を泳がせ、冷や汗をかいている…。本気で病院が怖くなってきてしまったらしい。

胡桃「あつ…ご、ごめん…。な、なあくに！大丈夫だよ！あたしが  
バツチリ守ってやるからさ！」

由紀「う…うん、そだね…」

勇気付けるように笑う胡桃。由紀は彼女に返事を返したが、胡桃の

その瞳からは目を逸らして苦笑いする……。今さら言わずとも彼女は胡桃を信頼してはいたが、それでも病院は怖いらしい……。

「……なんなら、由紀ちゃんはりーさんか美紀さんところで留守番して構いませんよ。ここにどれだけ物資が残っているかは知りませんが、探索メンバーは三人いれば十分でしょう」

怖がり始めた由紀を気づかい、彼はそう提案した。

それを聞いた由紀は一安心してニツコリと笑ったが、すぐにその笑みを引っ込める。

由紀「……でもみんなが頑張ってるのに、わたしだけ楽するのは……」  
「気にしなくても大丈夫ですよ。病院のような入り組んだ場所をあまり大人数で行動しても、危ないだけですしね」

悠里「——君もこう言ってくれてる事だし、由紀ちゃんは私と留守電してましようか。美紀さん、そっちを任せてもいい？」

美紀「ええ、構いませんよ」

美紀が悠里の言葉に返事を返す。こうして探索組と留守電組のメンバーが決まったが、胡桃は微かに不満そうな顔をする……。由紀達の前ではその不満を口に出さなかった胡桃だったが、その後、彼や美紀と車から降りて外に出た瞬間……すぐに彼へと告げた。

胡桃「お前、さっき由紀に美紀かりーさんと留守電してれば良いって言ってたけどさ……、なんでそこにあたしの名前は無かったの？」

「ああ、胡桃ちゃんは僕の独断により、既に探索組にエントリーされてたんで……。何？留守電してたかった？」

胡桃「……まあ、そりやあたしだって多少は怖いし……出来れば……」  
目の前にそびえる病院を見つめ、胡桃はいつになく気弱な声を出す。

その病院入り口の自動扉は無惨に割れていて、辺りに破片が散乱している。

割れた扉の先を外から覗いて見るがそこには明かり一つ無く、本当

に遊園地のお化け屋敷のように見えた。

(確かに……これは怖いよな……。出来れば僕も入りたくない)

あの胡桃が怖がるのも当然だと、彼は一人静かに頷く。

そんな彼の目線は胡桃の横に立つ美紀へと不意に向いたが、驚く事に彼女は平気そうな顔をしていた。

「美紀さんは……平気ですか？」

美紀「ん？いえ……少しだけ怖いですよ。でもまあ、我慢出来る範囲です」

胡桃「……たくましいな」

美紀「ふふつ、その言葉……いつもの胡桃先輩にそのまま返します」  
そう言つて美紀が笑うと胡桃もつられて笑い始める。そうして少なからずでも元気が出たところで、一行はその病院の中へと歩みを進めていった。

入つてすぐ目に入ったのは受付だったが、そこには当然誰もおらず、書類のような物がただ散乱しているだけ……。

胡桃「何かあるとすれば……もうちよい奥の部屋だよな……」

受付を覗きながら胡桃が呟く。美紀は背負っていたカバンから懐中電灯を取り出すと、それを点けてから頷いた。

美紀「ええ、もう少し奥に進めば……どこかに医療品が残っているかも知れません。警戒しながら進みましょう」

美紀の持つライトが照らす明かりを頼りに進んでいき、細長い廊下を進む。そのまま一階にある部屋をいくつかを簡単に調べたが、目に入るのは何に使うのかすらも分からない大きな機械ばかり……結局使えそうな物資は見つけられず、彼らは二階を探索する事にした。

二階は一階と比べると病室が多く、それら全てを調べたら日が暮れてしまいそうになる。そんな中、胡桃は二人に一つのアイデアを提案した。



胡桃「病室は飛ばそうぜ、全部調べてたらきりないし…。それに：入院してる人」と出くわしたら面倒だろ？」

病室に潜んでいるかも知れない”かれら”の事を遠回しに指してそう言う胡桃。美紀と彼も全病室を調べるのはさすがに大変だと考えていた為、その提案を受ける事にした。

その後：胡桃達は病室を除く二階の部屋を全ての調べたが、その途中で”かれら”と出くわしてしまう。数が少なかったためその場はどうにか対処できたが、またしても何一つ成果は得られなかった。

美紀「：はあ。どうします？ここまで来たら、一応三階も調べますか？」

ため息を吐いてから美紀が尋ねる。この病院は三階建ての為、最後のフロアになるのだが、ここまで探しても何一つ見つけられないのなら三階を探しても無駄だろうという気持ちがあった。

「……一応調べましょう。せつかく来たんですし…」

そう言つて三階へと進もうとする彼に、突如胡桃が声をかける。

彼女は少しモジモジとしながら、そばにあるトイレを見つめていた。

胡桃「あ…あの…。少し…行ってきてもいい？」

美紀「ここに来る前に済ませなかつたんですか？」

胡桃「急に行きたくなつたんだもん！仕方ねえだろ！」

呆れた視線を美紀に向けられ、胡桃は顔を真っ赤にする。

「とりあえず…中に”かれら”がいないかだけ調べます。少しお待ちを…」

胡桃「そのくらい自分で出来るから大丈夫。二人は先に行つていいよ、すぐ追いつくから」

美紀「危ないですよ。ここで待つてますから、早めに済ませて——」

胡桃「心配すんなって！平気だから…、なっ？」

美紀「…：分かりました。先輩なら多分大丈夫だとは思いますが、何かあつたら大声で呼んで下さい。すぐに——さんと駆けつけますから」

トイレに入っている間、外で彼に待つていてもらうのが恥ずかしいのだと思い。美紀は気を回す。彼も胡桃を一人にするのは心配ではあつたが、そのままトイレへと入る彼女を見送り、美紀と共に三階へと向かつた。

「……………」

美紀「心配ですか？」

階段を上りながら背後をチラチラと振り向く彼を見て、美紀がそつと声をかける。その問い掛けに対して彼は僅かな間を開き、苦笑いしながら首を縦に振つた。

「心配には心配だけど…、本人がああ言つてますからね。下手に待つてたら怒られそうですし」

美紀「…：ですね。でも、すぐに追いつくつて言つてましたし、大丈夫です。私たちは一足先に上を調べて待つてみましょう？」

「…：はい。パパつと調べて、皆でとつと帰りましょう！」

美紀と笑顔を見せ合いながら彼は階段を上がり、三階へと足を踏み入れる。今この時、彼が心配していたのはこのフロアには少しでも物資はあるのか…：という事だつたが…、それはすぐにどうでもよくなる。

この後すぐ、いくつもの危機が訪れるのだから…

## 八十一話『うちあける』

胡桃「心配すんなって！平気だから…、なっ？」

美紀「……分かりました。先輩なら多分大丈夫だとは思いますが、何かあったら大声で呼んで下さい」

美紀の言葉に笑顔で頷き、胡桃はトイレの中へと向かう。

彼は少し心配そうな表情をしていたが、この場では黙って見送ってくれた。向かったのがトイレという事で、気を回してくれたのだろうか…。

…パタン……パタン……

入る前に、個室便所の扉を開けて“かれら”が潜んでいないか確認する。

入り口手前の二ヶ所には何もいなかったが、まだ後三つの個室が残っている為油断は出来ない…。

胡桃「……………」

…パタン…

三つ目の個室……ここも異常はない。これで残るは二つ…、僅かな物音や気配もしないから平気だと思うが、“かれら”が物音一つさせずに潜んでいる事も稀にある。胡桃は右手にシャベルを握りしめ、左手を次の個室の扉へと伸ばした。

胡桃（やっぱり…確認くらいは手伝ってもらえば良かった…）

トイレの隅には小さな窓が付いていて、そこから外の明かりが入ってきていた。その為視界は比較的安定していたが、『一人きり』そして『病院』というシチュエーションが彼女の恐怖心を煽っていた。

……………パタン

四つ目の個室：異常なし。胡桃はそれを確認してからすぐにその隣：最後の個室の前へと立ち、今までと同じように扉へと手を伸ばすと、誰にも聞こえないほど静かに息を吐き、その扉のドアノブを握る手に力を込めた。

…パタン！

胡桃「……………」

最後の個室：…ここも異常はなかった。胡桃はこうしてこのトイレ内が安全であると確信し、その最後の個室の中へと入って静かにその扉を閉める。

胡桃「……………はあ」

何か潜んでいるかも知れないという恐怖心を乗り越えた事で彼女は一安心し、その狭い個室内で胸を撫で下ろした。誰もいないとは思うが念の為にその鍵を閉め、彼女は周りを見回す。

目の前にある便器は薄汚れていたが気にする程では無いし、横を見ればトイレットペーパーもそれなりに余っている。十分快適に用を足せる環境だったが、彼女がここに来た理由は用を足す為ではなく、彼や美紀から離れて体を休ませる為だった…。

胡桃（くそっ……………なんか…おかしいな…）

鍵を閉めた事で簡単には開かないその扉へと背中を寄りかけ、そつと目を閉じる。彼や美紀との探索中、胡桃は不意に眠気とは別の…意識が朦朧とする感覚に襲われ、慌てて美紀達から離れた。もしかすると、前に噛まれた事が関係しているのではと思っただからだ。

胡桃（薬は効いてる…よな？だからあたしは、今もこうしてあいつらと…一緒に…）

体の異常を感じたのは今日に始まった事ではなかった。水無月の屋敷に入ろうとして”かれら”の群れと戦った時も…自分だけは”

かれら”に無視されていたし、痛みを含めた、様々な体の感覚が鈍くなってきたようにも感じている。でも今日は何時にも増して体の様子がおかしいような…そんな気がしていた。

胡桃「……………」

閉じていた目を開く。あまり長く閉じていると、このまま自分を失いそうに怖くなったから。

胡桃（…もし、あの薬が完璧に効いてなかったら…？そしたら…あたし…近い内に…）

一人になった途端、ネガティブな考えばかりしてしまう…。いや、現実的と言うべきなのだろうか。自分の身に起きている異常を前にして、このまま無事でいられると思う方がおかしいと胡桃は考えていた。

胡桃（この事、全部正直にあいつに言ったら…助けてくれるかな…）  
彼には未だ隠している、囁まれたという事実。それを打ち明ければ…この状況はどうかなるのだろうか？

胡桃（…バカ。あいつに言っただって何も変わらないだろ…。あいつはただの一般人、どうにかしてくれる訳なんかない。これをどうにかしてくれる程の力なんて、あいつには…）

脳内でそこまで考えたところで、胡桃は自分の思想に苛立つ。胡桃は今、一瞬とはいえ彼の事を無力だと思い、自分の事を救ってはくれないと考えてしまった。そしてそれを理由に、これからも傷の事を隠そうとすら考えたのだ。

胡桃「…ッ!!」

額に手を当て、自分の前髪を掴む。胡桃はその手に力を入れ、掴んだ髪の毛を引く。まるで前髪全てを手で引き抜こうとしているかの

ようにして、彼女は自分を責めた。

胡桃（本当の事を話してもいなくせに：！！あいつに何を期待してるんだよ：！！全部隠して：嫌な事から逃げてるのはあたしなのにつ！！）

胡桃（あいつは十分にあたしを救ってくれている：。なのに、あたしはまだあいつを頼ろうとしてて：そのくせ、それじゃ良い結果は期待出来ない！と決めつけた！！）

胡桃（全部正直に言えば助けてくれるかとか：助けてもらえないとか：嫌われるかもとか：結局、自分の事しか考えてないじゃんか……。あいつは、あたしの事を気にかけていてくれるのに：それこそ、自分の事以上にあたし達の事を思っていてくれるのにつ！！）

彼は日頃から胡桃達の事を気遣い、行動してくれる。

危ないかも知れない場所への探索は毎回先頭をきってくれるし、車内で暮らしている時はいつも椅子で眠っていてくれた。

胡桃（寝坊が多いってあいつに怒ったりしたことあったけど：あいつは毎日ベッドじゃなくて、椅子で寝てんだもんな……。そりゃ：疲れが取れなくて寝坊くらいするわな……）

いつも胡桃が起こす度、彼は眠たそうな表情をしていた事を思い出す。彼はその度に自分を起こしてくれた事に対しての礼を言っていたが、本当はもつと寝ていたい日もあっただろう。

胡桃（リーさんが具合を崩した時もそうだ……。あの時も、みんなに黙ってあたしが自分勝手な真似したせいで：あいつを危ない目に遭わせた……）

悠里が体調を崩して寝込んだ時：薬を持つ生存者達の元へと一人で真夜中に忍び込んだ……。だが、胡桃の潜入はその生存者達にあっさり気付かれ、そのまま襲われた。彼が助けに来てくれたから良かったものの、もし彼が来なかったら、胡桃はそのままあの男達の玩具に

なっていただろう…。

胡桃（あいつがあたしを助け出してくれたあの時…、怒られる事を覚悟してた。バカな事するなって怒られて…ビンタくらいされると…そう思ってた。でも…あいつがああ帰りで言った言葉は…）

『怖い思いさせたね…もつと早く来れば良かった…』

あの時、あの帰り道で彼がそう言っていた事を思い出す。

怒られる事を覚悟していた胡桃にとってあの言葉は辛かったが、同時に何より温かくもあった。あの時、あの言葉を聞いた直後に泣き出してしまったのは思い出すだけでも恥ずかしいが、これは胡桃にとってはとても大切な記憶。きつと、この先も忘れる事はないだろう…。

胡桃（あたしみたいなバカな女助けて…人を殺しちゃって…怪我もした…。怒って当然なのに、どうして怒らなかつたんだろう…）  
ふと頭を悩ませる胡桃だったが、その答えはすぐに出た。

胡桃（…優しいから、だよな。ほんと…バカみたいに、優しい）  
彼の事を見直して、改めてそれに気づく。

彼は胡桃達に対してはいつも優しく、そして頼りになる存在だった。

胡桃（……そうだよ。あいつ、本当に優しいじゃん…。なのに、傷の事を話したら嫌われるかもとか…何を考えてたんだろ…。あいつは、絶対にそんなヤツじゃないってのにな…）

すこし前までは、彼を信じていると思いつつも不安だった。

もしかしたら、傷の事を話した瞬間に自分は嫌われるのでは…という不安が拭えなかった。しかし、胡桃の彼に対する信頼は日に日に増していく。以前はダメでも、今ならば彼を心から信じられる。

胡桃「……よしっ」

扉に寄りかけていた体を起こし、両手で軽く頬を叩く。

一時は不調だった体の様子も休憩を挟んだ事で楽になったし、何よりも……ずっと悩んでいた一つの問題が解決しそうだ。彼女は振り向いてそつと扉を開き、彼と美紀の後を追う事にした。

胡桃（この探索が済んだら……あいつに傷の事を言おう。これを言ったらたぶん心配させちゃうけど、あいつに黙ったまま悪化して……そのまま死ぬのは嫌だ。隠し事なんか、もうしてはいたくない。だって……あたしはあいつを信じてるから。そして、あいつもあたしを信じさせてくれているから……）

胡桃（あいつにこの事を言つて、あたしの体がどうにかなる訳じゃないと思う。それでも、ずつとモヤモヤしていたこの心はかなり楽になるはずだ……）

トイレから出る前に、手洗い場の鏡を覗く。

そこに映る自分の顔は少し暗く見えたが、それは彼に隠し事をしてるから……。全てを彼に打ち明けられたら、この顔は明るくなるだろう。

胡桃（万が一、もうこの体は手遅れで……近い内にあたしは人間じゃなくなるとしても……あいつには全部言っておきたい）

胡桃（傷の事はもちろん……あたしがいなくなった後の由紀の事、りーさんの事、美紀の事、悪いけど全部任せてもいいかな？つて、あいつに伝えておきたい……。それに……）

病院の探索が終わった後で彼に告げるべき言葉を、一足先に脳内で決めておく。覚悟を決めたとは言つても、やはり凄く怖い。噛まれた事があるという事を告げるだけでも彼は驚いてしまうだろう……。心配させてしまうだろう……。

胡桃「……っ」



彼に心配をかけてしまうと、それだけで決意が揺らぎそうになる。ただでさえ大変な毎日なのに、この上自分の事を心配させていいのだろうか？もう少しだけ内緒にしても構わないのではないか？そんな考えがいくつも頭に浮かんできた。

胡桃（…いや、もう隠さない。たとえあいつを悩ませてしまっても、このまま黙って隠し事していくよりはマシだ。全部打ち明けて、正面から向き合おう。あいつはあたしの仲間で…大切な友達だから）  
決意を強固な物へとし、トイレから出ようと歩き出す。

打ち明けるのはどのタイミングにしようか…。この病院から出て、車に戻ったらすぐにも言おうか…、それとも屋敷に戻ってからにしようか。出来れば二人きりで話したい…屋敷に戻ってからにしよう。その為にも、まず彼と美紀に合流しなくては…。

胡桃「…？」ピタッ

トイレから廊下へと出る扉へと手をかけた瞬間、突如誰かの話し声が耳へと入る。男の人の声だが、彼とは違う…。彼よりも野太く、一回り大人といった感じの声だ…。胡桃は扉をそつと開き、僅かに開いた隙間から廊下を覗きこむ。廊下の中央…いや、上の階へ続く階段の方へと移動しながら、その男性は誰かと話していた。

「…ああ、いたよ。ついさつき三階に入った。エレベーターは止まっているし、他の階段は障害物で塞いである。帰りもここを通るだろうね」

胡桃（誰だろう？…あれは…、無線機か？）

後ろ姿しか見えないその男は右手に何やら大きめの携帯のような物を持っていて、それに向けて話している。恐らく無線機だろう。

「連れていた女の子だけど、その内の一人はトイレに——」

胡桃「!？」

その瞬間、こちらに振り向いたその男と目が合う。  
咄嗟に扉を閉めて中に逃げ込もうとした胡桃だったが、その男は彼女に優しく声をかけてきた。

「おっと…!!大丈夫だよ！怖がらないで!!」

持っていた無線機を身に付けていたウエストポーチへとしまいな  
がら、ゆつくりと胡桃へと近寄る。そのまま扉を閉めてトイレに逃げ  
込む事も出来たが、もしこの男が危険人物だった場合、トイレに逃げ  
込んでも意味はない。むしろ追い詰められるだけだ。胡桃は扉を開  
き、廊下へと出た。

3 m程先に立つ、茶色のレザージャケットを着たその男。年は二十  
代半ばだろうか。どちらかと言えばキツそうな顔つきをしているが、  
それを隠すかのようにヘラヘラとしている。その様子が余計に胡桃  
の警戒心を強めた。

胡桃「……誰？」

「えっと…俺はこの病院で働いてたんだけど、まだ安否を確認出来て  
いない同僚がいてさ、たまに様子を見に来てるんだ。ほら、もし奴等  
のようになっているなら…終わらせてやりたいしね？」

手をつ突っ込んでいるポーチがガサガサと音を鳴らす。

無線機が大きくてしまいににくいのだろうか…。胡桃は念のために  
距離を空け、シャベルを握り直す。

「君は…何をしにここへ？」

胡桃「…友達と、物資を探しに…」

「そうか…その友達は何人かな？」

やけにこちらの事を探ってくるような気がする。やはり怪しい。

胡桃はシャベルを胸の前まで上げ、その男を睨んだ。

「……」

胡桃「…あたしはもう友達のとこに行くから、あんたも気を付けろ

よ」

問いには答えず、ゆつくりと歩いてその男の隣を通り過ぎる。体は前に向けつつも視線はその男から外さず、警戒しながら三階へ上がろうと階段へ足を伸ばした。

「まったく…少しくらい相手してくれてもよくないかな…。恵飛須沢胡桃ちゃん」

胡桃「ッ!?!」

視線は男に向けていた。警戒もしていた。

だが初対面のハズの人物が自分の名を知っていた事…、胡桃はそれに動揺し、そのせいで反応が遅れた…。

これだけ警戒していたならば避けられたハズなのに、ほんの一瞬の動揺…男はそこを突き、ポーチに隠していた金槌を彼女へと振り下ろす。胡桃は慌てて後ろに飛び退き、それを避けようとしたが…。

ドツ!!

鈍い打撃音が響き、その廊下にポタポタと…真つ赤な血が滴り落ちた…。

## 八十二話 『迫る危機』

ポタツ…ポタツ…

胡桃「つう…!!」

男の振り下ろした金槌は一片の躊躇いも見せず、胡桃の頭を狙ってきた。

いつもの胡桃なら完璧にかわすか、シヤベルではじき返すくらいは出来ただろう。それを可能にする程の身体能力は備えていたし、それだけこの男を警戒してもいた。

だが男は突然、知っているハズのない自分の名を呼んだ…。それに動揺したせいで反応が遅れてしまい、後方へ飛び退くもその金槌を避けきれず、僅かに頭をかすめてしまった。直撃を避けられたのは幸いだったが、ダメージが無い訳ではない。胡桃の頭からは血が流れ、顔を伝い、そのまま顎先から地面へ…ポタポタと音を立てて滴り落ちていく。

「…反応良いな。一発で頭割ってやるつもりだったのに、かわされた…」

男は右手に持っている少し大きめの金槌で自分の肩を軽くポンポンと叩き、左手で髪をかきあげる。その目は胡桃を強く睨み付けていて、敵意を剥き出しにしていた。

胡桃「…なんだよ、あんた…。なんで、あたしの名前を…!?!」

廊下の壁に背をつけながら、胡桃は左手で頭を押さえる。

痛みはそれほどでもなかったが、当てていた左手を離してみると血がべつとりとついており、怪我が軽くない事を思い知らされた。

胡桃（ヤバい…どうにかして逃げないと…!）

上の階へ逃げてこの事を彼と美紀に知らせたいが、いつの間にか男が階段の前へと陣取っていた。この男がいる限り、上の階へは行けない。

「時間無いから、簡単にで良ければ説明してやるよ。君の名前を知っていたのはある人物から聞いたから。：因みに言つとくと、若狭悠里：直樹美紀：丈槍由紀の事も知っている」

胡桃「!?…どうして?!」

「だから…ある人から聞いたんだって。それが誰かはまだ教えるなつて言われてるけど、まあすぐに分かるでしょ。そいつには君らの名前と特徴しか教えてもらってなくて、顔までは知らなかったけど…、”武器がシヤベル””ツインテール””って特徴は分かりやすかったから、すぐに君が恵飛須沢胡桃だと分かった」

胡桃と一定の距離を空けたまま、男は語り続ける…。

胡桃は再び左手で頭を押さえ、流れ出る血を止めようとしながらそれに耳を傾けていた。

「あ…。先に言っておくけど、大声出すなよ?この辺りは奴等が多いから、大声なんか出したらすぐにやって来る。そうなれば君と俺はもちろん、上にいる——達もあつさりと餌になつちやうから」

男はさりげなく彼の名前すらも口にしながら：胡桃はそれほど驚かない。由紀達の事を知っていた以上、既に彼の事も知られているだろうと思っていたからだ。

「彼…元気にしてる?」

胡桃「…は?」

発言の意味が理解できない。この男は、胡桃とは初対面だった。にも関わらず胡桃の名前を知っていたのは、”ある人”を通して名前を聞いたから…。ならば彼もこの男とは面識が無く、その”ある人”を通してこの男に名前を教えられただけ…。そのハズなのに、この男の発言はまるで：元より彼を知っているかのような物言いだ。

胡桃「あいつと…知り合いなのか？」

「ああ。ちよつと前に一緒に行動した仲だ。まあ…一日だけ、だったけどな」

胡桃「……！」

その言葉でこの男の正体に気づく。彼が今まで誰かと行動したのは、胡桃の知る限りでは二回だけ…。その内の一つは胡桃達、学園生活部の面々。残る一つは……

胡桃「前…あいつに教えてもらった。偽善者ぶって自分に近寄り、寝てる間に物資を奪っていった人間達がいたって…。あんた…その内の一人か？」

「…お喋りな奴だな。話したのか…」

それだけを言つて、男は舌打ちする。その反応を見るに、胡桃の予想は間違つていなかったらしい。この男は以前、彼が話してくれたあの集団の内の一人だ。

胡桃「なんでそんなことをした…？下手したら、あんたらのせいであいつは死んでいた…！」

『馬鹿正直に他人を信頼するな』…この教訓を得てほしくてね。アイツはとても良い目をしていて、成長すれば戦力になる予感がしていた。でも…やっぱりまだまだ甘いところがある。それを消す為の試練みたいなもんだよ、アイツから全ての物資を奪い、そのまま姿を消したのは…」

胡桃「良い目だとか…戦力だとか…試練だとか、わけのわからねえことをペラペラとっ…！」

「ん？一緒に過ごしていながら、アイツの目を見たことがないのか？ほら、アイツの目つてき、俺に似てるだろ？邪魔な者がいれば躊躇いなく始末する、そんな人間の目だ」

男は左手で自分の目を指差し、誇らしげに語る…。その目はお世辞にも綺麗とは言えない、常に他人を見下しているような目だった。

胡桃（…似てる…だと？こんなヤツの目と、あいつの目が？…ぎげんな…ふぎげんなっ!!）

そんな目と彼の目が似てると言われた事に苛立った胡桃はその男の前へと距離を詰め、シヤベルを力強く振り下ろした。

胡桃「はあっ!!」ブンツ!

「ちっ!?!」

男は振り下ろされたシヤベルをギリギリのところかわし、バランスを崩した胡桃の腹部に鋭い蹴りを放つ。もろにそれを受けた胡桃はそのまま後ろへ吹き飛ぶが…すぐに体勢を立て直し、鋭い目で男を睨んだ。

胡桃「…あいつは…あいつの目は、あんたみたいな人間の目とは全然違うっ!」

「あらら。随分と失礼な事を言う女だな…。こんなのと一緒にいれるなんて、アイツはどんな神経してんだか…。君…アイツと仲悪いでしよ?性格とか合わないそうだし…」

男は鼻で笑いながら呟く。その笑い方は胡桃を小馬鹿にしたようなもので、見ているだけでも苛立ってきてしまうが、胡桃はぐつと堪えた。怒りに任せての攻撃は危ない。さっきは蹴りで済んだから良いものの、今度はあの金槌で頭を打たれるかも知れない…。あれが直撃したらかなりのダメージ…もしくは、そのまま死ぬ恐れもある。

胡桃「あいつとは…仲良くやってる。あたしの事もあいつの事もよく知らないくせに、知ったような口を聞くな」

「ちっ…。まるで自分はアイツの事を理解してるみたいな言い方だな。まあいいや…さっきも言ったけど、あまり時間ないから、とつとと終わらせる」

めんどくさそうにそう言ってから男は駆け出し、一瞬で胡桃の前へと距離を詰める。するとそのまま彼女の頭を目掛け、横から勢いよく

金槌を振る。

胡桃「っ!!」

その金槌が頭に当たる前に、胡桃はシャベルを男の手にぶつける。シャベルに大した勢いはなかったのでダメージは与えられていないが、それでも男の手を押さえ、攻撃を凌ぐ事は出来た。

「さっきかわされた時も思ったけど、反射神経良いな」

振り払った右手をシャベルに邪魔されながら、男は胡桃のすぐ目の前に顔を寄せて呟いた。シャベルを振り上げられない程近い距離にその男がいられる事と、その余裕そうな表情に戸惑い、胡桃は次の行動に移るのが遅れる。

「その気があるなら俺達の仲間にしてやってもいいけど…どうするっ!?」ガシッ!

胡桃「がっ…!?!」

どう動くべきか胡桃が悩んでいる間に男は左手で彼女の首を掴み、そのまま背後の壁へと押し付ける。片手とはいえってもその力は強く、首を絞められた胡桃は呼吸もままならない。

胡桃「う…ぐっ…!!」

「…!?!」

胡桃の首を絞めていた男はすぐに気づいた。体温が異常に冷たい…。つまり、彼女は「かれら」になりかけている人間なのだ…。ならば、仲間にするという選択肢はいらぬ。

「…やっぱり、さっきのは無しだ。役に立ちそうな人間を見つけても、感染してたら迷わず殺せって言われてるもんでね」

左手により強い力を込め…押さえ込む為でなく、殺す為に胡桃の首を絞める。



胡桃「あ…あつ…!!ぐ…あ…！」

殺意の込もったその手から逃れる為、胡桃は右足で男のつま先を踏みつけた。男はその痛みによって体勢を崩し、首を絞めていた左手の力が弱まる。胡桃はその一瞬を突いて体当たりをし、男との距離をとった。

胡桃「はあつ…はあつ…はあつ…！」

絞められていたせいで乱れている呼吸を整えようとする…。頭からは未だに血が流れていて、それは時折目に入りそうになるが、そうなる前に胡桃はジャージの袖でそれを拭った。

「つてて…。油断した、ほんつとに頑張るね…お前」

踏まれたつま先を軽く振りながら、男は再び胡桃を見つめる。

感染している事に気づいた以上、この男はこの場で胡桃を殺すことを決めていた…。

胡桃（もう少し…もう少しすれば…きつと…！）

”かれら”が寄るのを恐れている為、大声を出して助けを呼ぶことは出来ない。だが…もう少し時間を稼げば彼と美紀がここに戻るはず。そうすればきつと助かると信じ、胡桃はその男を真っ直ぐに見据えた。

「感染してるなら、もうどのみち死ぬだろ…。抵抗するなよ」

胡桃「…誰が…お前なんかにつ！」

「ふうん…。まったく、アイツは何を考えてんのかね。こんな女、身近に置いてても危ねえだけだつてのに、なんで処分しねえんだ？」

男が吐き捨てたその言葉に、胡桃は反応してしまう。未だ、彼にはこの事を知らせていないというその罪悪感からか、つい一瞬、眉をひそめてしまった。男はそれを見逃さず、そこからも簡単に胡桃の弱みを握った。

「あははっ。まさかとは思うけどさ…アイツはこれを知らないのか？」

胡桃「……………」

何も言い返せない…。嘘でもいいから『彼も知っている』と言えば、この男に大きな顔をされずに済むのに、それすらも出来ない…。

「…なあんだ。結局、君もアイツを信じてはいないんだな…」

胡桃「!?違うっ！あたしは…ただ…!」

『ただ、心配をかけたくないから…』だから彼には内緒にしていたのだと、胡桃は自分に言い聞かせる。そうでもしないと、この男に心を弄ばれるような気がした。

だが…男は胡桃のそんな気持ちをも見透かしたように笑い、ニヤツきながら言葉を放つ。

「心配をかけたくないからとか、つまらない綺麗事は言うなよ?」

胡桃「なっ…!?!」

今、まさに胡桃が言おうとしていた言葉を先に出される。

心を読まれたかのようなその発言に胡桃は戸惑う中、男は更に告げた。

『心配をかけたくない』…んなのはただの言い訳だ。お前はただ、アイツを信じていないから隠してるんだよ。まあ、それは正解だ。アイツにそんな事言ったら、お前…すぐに殺されるぞ?」

胡桃「っ…!?!あいつはっ…!そんな奴じゃない!!」

「…………何人殺した?」

胡桃「…なに?」

ため息をついてから男が放った言葉を、胡桃はすぐに聞き返す。

「だから…アイツは今まで何人殺した？お前らと行動してどれだけ経ってるのか知らねえけど、その間に何人かは殺してるだろ？…んで、お前はそれを間近で見たことがある。だからアイツを信じてないんだ。良い子の胡桃ちゃんは人殺しが嫌いってね」

胡桃「あいつは…人殺しなんかじゃ…!!」

「へえ…。じゃあアイツ、これまで一人も殺してないんだ？」

胡桃「っ…」

「…殺してるだろ？それも躊躇いなく」

囁くような声で…その言葉を胡桃へとぶつける。

確かに彼は今までに何人かの人間を殺めているが、それは全て彼女達を守る為…。決して好きでやった訳ではないと、胡桃は信じていた。

胡桃「こんな世界に生きていれば、仕方なくそうする事だってある…。あいつだって、好きで人を殺してきた訳じゃない…」

「いいや…アイツは好きで人を殺してる。お前は薄々それに気付いているからアイツを信頼できないんだ。口でなんて言おうとも、心ではアイツを嫌ってるんだよ」

胡桃「っ…！そんなわけないっ!!」

胡桃はシャベルを構え、男を睨む。自分の事を知ったように語るその言葉に激しく苛立ち、今すぐにでも思いきり殴ってやりたいとすら思っていた。しかし、ただ怒りに任せて飛び込むのは危険だと自身に言い聞かせ、少しずつ心を落ち着ける。

彼の事を嫌っているか？その答えは『いいえ』だ。彼に感謝の心や好意を向ける事はあっても、嫌う理由なんて物は無い。

胡桃「お前があいつの事をどんな風に思っているのか知らねえけど…、一日しか一緒にいなかったんだろ？そんなヤツにあいつの事を語られると…なんか、すげえイライラする」

胡桃は迷いの無い目を見せ、シャベルを突き出す。男はその目を見て言葉ではどうにもできないと勘弁したらしく、面倒くさそうに金槌を構えた。

「抵抗しなけりや楽に死ねたのに…。もういい、アイツが戻る前にお前を殺して、すぐに死体を片付ける。それでまた後日、アイツには首だけになったお前をプレゼントしてやるかな」

その台詞と殺意剥き出しの目…。胡桃は正直に言うとその怖くて仕方なかったが、それでも臆してはいられない。

胡桃「そんな事したらあいつ、きつと怒るぞ」

「どうだろうな？俺の見立てでは、アイツはお前らとはただの友情ごっこしてるだけだ。実際に誰かが死んだところで悲しんだりはないさ」

自分の意見が正しいと言わんばかりの自信を込めて、男はニヤリと不気味に笑う。一方で胡桃はそれを小馬鹿にしたように鼻で笑い、先日彼と交わした言葉を思い返してから男に告げた。

胡桃「あいつは…あたしが死んだらすぐ悲しむって、そう言ってくれた。お前の思っているような人間とはまったく違う…。あいつは本当に優しいやつだ」

「…ハイハイ。じゃあ、試してみるか」

胡桃「くっ!!」

そう言っただけで胡桃に迫ろうとした瞬間、男のポーチからノイズ音混じりの声が聞こえた。男は右手で金槌を構えて胡桃を警戒し、すぐに左手でトランシーバーを取り出す。

「悪い、聞こえなかった。もう一回言ってくれ」

男がそのトランシーバーへ向かって話しかける。その後少しの間があったものの、返事はすぐに返ってきた。

『さつき途中で通信切ったでしょ？あんたなら大丈夫だと思ったからそのままほっといたけど、さすがにもう終わったわよね？』

トランシーバーの向こうから、そう尋ねる女性の声が出た。

それを聞いた男は軽いため息をつき、恐る恐る返事を返す。

「一人で行動してる娘がいたからとりあえず殺そうと思ったけど、これが中々しぶとくて…あと二分待てる？」

またしても僅かな間が空き、男の問いに対しする返事が返ってくる。

その声から察するに、トランシーバーの向こうの女性は少し怒っているようだ。

『仕事が遅いなあ！これ以上は待てないっての！こっちで二人捕まえたから、もうアンタの仕事は終わり！とっとと戻ってきて!!』

「…了解。ちっ…しかたねえな。そういう訳だから、俺は帰る。また機会があればその時に殺してやるよ。いや…お前はそれまで持たねえか？」

胡桃「……………」

嫌味を含めた笑みを浮かべ、男は足早に去っていく…。

何故去っていったのかはよく分からないが、戦わずに済むならそれが一番良い。胡桃はひとまず安堵のため息を吐き、その場に膝をついた。

胡桃「…はあ」

胡桃（結局…あの男の目的は？どうしてこの病院に？）

胡桃「まあいいか…。とりあえず、あいつと美紀を——」

二人を呼びに行こうと立ち上がった瞬間にふと、トランシーバー越しに男と話していた女性の台詞が頭をよぎる。ハッキリと聞こえた訳では無いが、あの声は確かにこう言っていた…『二人捕まえたから…』と。

胡桃「…二人？それって…まさか…」

胡桃の額を流れていた血はいつの間にか止まっていたが、代わりに嫌な汗が出てくるのを感じた。

## 八十三話 『てがみ』

謎の男が姿を消し、どうにか危機から逃れる事の出来た胡桃は彼と美紀のいる上の階へと足を運ぶ…。階段を上り、たどり着いたその階でキョロキョロと辺りを見回すと、ちょうど探索を終えた二人と合流する事が出来た。

二人は胡桃に声をかけるが、すぐに異変に気づく…。

美紀「っ!?!…胡桃先輩!血が出てるじゃないですか!!?!」

「怪我したの!?!まさか…噛まれたんじゃない?!」

胡桃の怪我が”かれら”に負わされた物ではと彼は心配し、慌てた様子で彼女へ近寄る。胡桃は心配させないようにと彼へ軽く笑顔を返し、下で起きた事を告げる事にした。

胡桃「奴らにやられた訳じゃないから心配すんな。その…他にも生存者がいてさ…、そいつにやられた」

美紀「他の生存者?この病院にですか?」

胡桃「ああ…。身を潜めながら、あたしらの隙をうかがってたみたいだ」

「…そいつは今…どこにいる?」

憎しみを込めた声…そして冷たい目付きをして、彼は胡桃に尋ねる。彼は明らかに、胡桃に傷を負わせたその人物に対して強い怒りを抱いていた。

胡桃「たぶん…もう外に出ていったと思う。他にも仲間がいるみたいで、無線機で呼び出されてたから」

美紀「少しじつとして下さい…。応急手当てだけしておかないと…」

美紀は背負っていたカバンを下ろし、その中からガーゼ取り出して胡桃の頭へそつと押し当てる。

胡桃「あつ、大丈夫だよ。もう血は止まってるみたいだし」

美紀「それでも、念の為にです！」

「その生存者に怪我をさせられたのか…。それも…頭を…」

胡桃の顔には頭から流れていた血の跡が残っており、いくら血は止まったと言ってもその跡を見るだけで痛々しく見える。彼は美紀から応急手当を受ける胡桃の顔をじつと見つめ、深いため息をついた。

「こんな危ない目に遇ったっていうのに、なんで呼ばなかった？」

胡桃「…ごめん。大声でしたら奴らに気付かれて、お前らも危なくなると思ったから…」

「…いや、側にいなかった僕が悪い。辺りに感染者が潜んでいる以上どんな危ない状況でも大声を出せない事くらい分かっていたのに、胡桃ちゃんを一人にしてしまった…」

胡桃「いや、そもそもあたしが一人で良いって言ったんだ。お前が気にする事じゃない」

美紀「…その生存者の人、どうして胡桃先輩を襲ったんですか？」

胡桃の頭にガーゼを当てながら尋ねる美紀…。

彼の知り合いに襲われたというには多少の言い辛さを感じていたが、それでも胡桃は全てを話す事にした。

胡桃「その、あたしを襲ったそいつ…、どうも…お前の知り合いみたいで…」

気まずそうに彼の顔をチラツと見つめ、胡桃はそう告げた。

彼はその発言に驚き、目を丸くする。

「…僕の？」

美紀「えっ？」



胡桃「ほら、お前…前に言ってたろ？善人のふりして近寄ってきて、物資を全部盗んでいった連中がいたって…。あたしを襲ったのはたぶん、その内の一人だ。お前の事…知ってたから…」

胡桃「えつと…男の人で、年は見たところ20代くらいかな？それで、武器には金槌を使つてて——」

「金槌…。アイツかもな…」

美紀「心当たりがありますか？」

武器に使っていたのが金槌というのを聞いた途端、彼は頭をかきながら舌打ちを鳴らす。彼は美紀の問いを受け、静かに口を開いた。

「一人だけ思い当たる人間が…、そいつは確か金槌を使っていました。とはいっても金槌は武器としてはありふれてそうなので、まだ確証は持てませんが…」

美紀「では、胡桃先輩を襲ったのがその人だと仮定して…目的は？」

胡桃「…わかんねえ。でもそいつ…あたしら全員の名前を知ってたんだ」

美紀「えっ？」

「全員？僕だけじゃなく？」

胡桃「ああ。美紀に由紀にりーさん…全員の名前を知っていた」

美紀「……………」

「みんなの名前まで…どうして」

美紀「もしかすると…」

胡桃「とりあえずもう手当てはいいよ。由紀達が心配だし、一旦戻ろう」

手当てしてくれている美紀の手をそつと払い、胡桃は立ち上がる。一方で美紀は何か考え事をしながら、下ろしていたカバンを背負った。

美紀「そう…ですね。でも、まだその人が外にいるかも知れませんよ？」

「その時はその時です。胡桃ちゃんに手を出した以上、そいつだけは絶対に許しません」

三人は辺りを警戒しつつ、側の階段を下りていく。

静かな院内に三人の足音だけが微かに響く中、胡桃はそつと彼に声をかけた。

胡桃「…なあ」

「ん？」

胡桃「お前…あたしが死んだら悲しむか？」

「…は…？」

その突然の問いに対し、彼は眉をひそめる。

一瞬何かの冗談かとも思った彼だったが、先程襲われたばかりという事実…そして胡桃の真剣な表情を見たら、冗談などではないとすぐに分かった。

「当たり前だよ。この前そう言ったでしょ？」

胡桃「…あたしを襲った奴に言われたんだ。お前はあたし達と友情ごっこしてるだけだから、あたしらの内の誰が死んでも悲しんだりしないって…」

「はあ？そいつ…何知ったような事を…！」

そう言って苛立った表情を見せる彼を見て、胡桃は安心する。やはり彼の事はあの人物よりも自分達の方が理解している。彼は冷徹な人間などではない、優しい人だ…そう思えたから、彼女は本当に安心した。

胡桃「お前は…あたしが思っているままの人間だよな？」

「胡桃ちゃんの抱いているイメージによるけど、まあ…期待に背く事はないと思う」

胡桃「…うん。それならいい」

胡桃はチラッと彼の顔を見つめると嬉しそうに微笑み、少しだけ歩くペースを速める。三人はすぐに一階にたどり着き、病院の外へと出

た。

美紀「…車、どの辺りに停めましたっけ」

「えっと…どこだったかな…」

美紀が辺りを見回しながら彼と胡桃に尋ねる。彼はその場所を忘れたようで首を傾げていたが、その場所をハッキリと記憶していた胡桃はため息をつきながら二人の前に立った。

胡桃「——はともかく、美紀まで忘れたのかよ。しつかりしろつての」

美紀「いや…私はちゃんと覚えてたはずなんです。でも…その…」

胡桃「…っ!?!」

目の前に広がる駐車場…。ここを訪れた際、胡桃達は何かあればすぐ駆け込めるようにと入り口から近い距離に車を停めた。確かに…10mと離れていない地点に停めたはずだった…。

美紀「ないんです…車…どこにも…」

そう告げる美紀の声が、段々と震え始める。

一方で胡桃は目を見開きながら車を停めたハズの地点…更にはその周囲を調べるが、やはり…由紀と悠里を乗せたあの車は見当たらない。

胡桃「嘘だろ…!どこに…どこに行った!?!」

美紀「…まさか、胡桃先輩を襲った人に…!」

そう言えば、あの男を無線機越しに呼び出した声は確か『二人捕まえた』と言っていた。

突然襲われた事や、彼の知り合いという事に驚いたあまりつい忘れていた胡桃だったが、あの言葉を思い返してどんどん不安になる…。

胡桃「由紀…りーさん…。まさか…本当に…」

「停めた場所、ここで間違いないよね?」

胡桃「あ…ああ。絶対にここだ。この赤い車の隣に——」

言いながら側にあつた赤い軽自動車を目指した胡桃だったが、彼女は突然その腕を下げ、ゆつくりとその車へと歩み寄る。そしてその車のボンネットへと手を伸ばすと、そこに置かれていた一枚の紙を手にとった。

美紀「先輩…それは…？」

胡桃「……」

「……」

彼と美紀は黙つたままそれを見つめる胡桃の横に立ち、その内容を覗き見る。ノートをちぎつたようなその紙には、真つ黒な文字でこう記されていた…。

『二人もらった お前らは一度家に帰れ』

「二人…って事は…」

美紀「これって…!」

胡桃「由紀…りーさん……」

紙を見つめる胡桃の目が、段々と潤み始める。

彼女はその紙をグシャツと握り潰すと、その場に膝をついてうなだれた。

胡桃「くそっ……くそおっ!!」

「どうすればいい…。追いかけてようにも、二人がどこに連れていかれたかが分からないし…!」

焦つたあまり、胡桃と彼は声を荒げてしまう。

すると少し離れていた場所にいた“かれら”がこちらに振り向き、うめき声をあげながらのそのそと歩み寄ってくる。

美紀「っ!?!とりあえず、書いてあつた通りに一度家へ戻りましょう

！」

胡桃「帰るって…どこに…」

地面に座り込んだ胡桃が、美紀を見上げながら小さな声をあげる。

美紀「どこって…未奈さんの家ですよ！」

胡桃「でも…由紀達を探さないと！」

美紀「なんのヒントも無いまま探すより、一度あの家へ戻るべきです！」

「…確かにそうだな。このままじゃどのみち奴らに囲まれる。胡桃ちゃん、立って！」

胡桃「…ああ」

彼は胡桃の手を掴み、急いでその体を立たせる。

彼と胡桃と美紀は”かれら”に取り囲まれる前に駆け出し、その病院をあとにした。

悠里「……………」

「ねえ、そんな怖い目で睨まないでくれる？」

見知らぬ男が運転するキャンピングカーの中、後部座席に由紀と並んで座る悠里は目の前に座るその女を睨み付ける。だが悠里の視線を受けてもその女は全く気後れする事はなく、ニコニコとどこか不気味な笑みを浮かべた。

今現在、車内には悠里と由紀、そしてその女と運転席の男…更にもう1人、金槌を手に持った男が助手席に座っていた。

悠里「あなた達、いったい何が目的ですか？」

「ん〜。欲しい物は色々あるけど、今一番の目的は戦える人材を揃える事ね」

悠里「だったら私達を連れていくのは間違いです。私達が戦えるように見えますか？」

「いいえ。ちよつと刃物を突きつけられただけで抵抗しなくなった辺り、そういう事なんでしょうね」

右手に持つポケットナイフを弄りながら、その女は微笑む。

悠里「だったら…!」

「でも私の仲間がね、あんた達のお友達の子…彼は使えるはずだからって言ってる聞かないの」

由紀「そ、それって…」

「ええ。——君だっけ？私の仲間の何人かは彼と知り合いなの。…

あ、私は違うよ？例えばほら、ソイツとか…」

女はそう言って、助手席に座る男を指さす。

すると男は軽く顔を振り向かせ、悠里達を相手に語り始めた。

「あいつと会った事のある人間は元々は五人いたんだがな、その内の三人は奴らに食われちゃって、今俺達の仲間であいつを知る人間は俺を含めて二人だけだ」

男がそう言い放つと、悠里達の前に座る女は深いため息をつきながら愚痴をこぼした。

「その二人がどつちも」今の彼は使える”って言うから、仕方なく付き合ってたあげたの。本当なら私はもう自分のチームに戻ってる時間だったのに…余計な仕事を増やして…」

「ははっ、そんなに怒るなよ。この娘らをあそこに閉じ込めたらすぐに送るからさ」

「いいえ、自分で帰るわ。その代わり、物資は多目に分けてもらおうわよ

？」

「へいへい。りよーかいしましたよ」

由紀「……」

悠里「つまり、私達は彼を誘き寄せざる為の人質って事…？」

うつむいて不安そうな表情をする由紀の背をそつと撫で、悠里はその女に尋ねた。

「まあそうね。彼を直接連れてきてもよかつたけど、人質を取ってから自分達の領域に誘い込んだ方が色々と楽だし、試したい事もあるの」

由紀「——くんに：酷いことしないで。お願いだから…」

怯えているのか、消え入りそうな声で由紀が呟く。

すると女はふふつと笑い、由紀と悠里の顔を見た。

「彼に酷い事はしないわ。だって、私達は彼を必要としているんだもの。酷い事をされるとしたら、それはむしろあなた達ね」

女の笑顔とその言葉が恐ろしくて、由紀の顔は徐々に青ざめる。

悠里は由紀を不安にさせない為に平静を装っていたが、さすがにその発言を聞いたら手の震えを抑えられなかった。

その後、悠里はどうか隙をついてその場から逃れようと考えてもその女に隙はなく、車はある場所にある大きな倉庫の前へと停まった。

「さあ、到着よ。降りて降りて」

由紀「うっ！」

女は立ち上がった由紀の肩を掴むとその背にナイフを突き付け、悠里の顔を覗き見る。

「少しでも暴れたり、逃げようとしたらこの娘を苛めちゃうから。だ

から大人しくしててね？大丈夫、あんたらが大人しくしてればすぐに彼と会えるから♪」

悠里「わかり…ました」

悠里はグツと拳を握りしめ、車を降りる。

由紀を押さえられた以上は危険な真似は出来ない為、悠里は大人しくその女達に従い、由紀共々その薄暗い倉庫の中へと足を踏み入れていった…。



## 八十四話 『みかた』

「…さ、入って入って」

悠里「……」

二人の男の手により、目の前にある倉庫の扉がギギイツと音をたてながら開く。悠里・由紀の二人はその男達の仲間である女に背を押され、半ば無理やりにその中へと招き入れられた。

薄暗いその倉庫の中は広さの割に物がなく、あるのは雑に置かれた木箱や壁際にある錆びたロッカーだけ…。そしてその広い空間の真ん中で、一人の男が木箱に腰掛けながら彼女達に手を振っていた。

「やあ、待ってたよ。えつと…君達の名前は？」

三十代半ばくらいであろうその男性は一見すると人の良さそうな顔をしていたが、由紀の背中にナイフを突き付けているこの女と仲間という時点で善人では無いのだろう…。悠里はそんな考えを抱きながら、由紀よりも先に口を開いた。

悠里「若狭…悠里です」

「君が悠里ちゃんか…。で、君は？」

由紀「え…つと…そのつ…」

悠里に向けて少しだけ微笑んだ後、男は由紀の方へと視線を移す。だが背中にナイフを突き付けられている由紀は怯えていて、中々声が出せずにいた。

悠里「この娘は由紀…。丈槍由紀です」

怯える由紀に代わり、悠里は自己紹介をする。

すると男は腰かけていた木箱から立ち上がり、つかつかと悠里の前へ歩み寄っていった。

「お前には聞いていない。俺はこっちの小娘に聞いているんだよ」

先程までは柔らかい表情をしていた男だったが、突然人が変わったかのような鋭い目で悠里を睨み付ける。男は直後にたたずむ由紀の頬をペシペシと叩き、その顔を覗き込んだ。

「…ほら、タラタラすんな。お前の名前は？自己紹介出来ない程ガキじゃないだろ？」

由紀「ゆ…ゆきです…っ！」

瞳に涙を浮かべながら、由紀は震え声で答えた。

「……名字は？」

由紀「丈槍…丈槍由紀です…」

肩をプルプルと震わせながら呟く由紀。男はその名前を聞くと再び柔らかい表情に戻り、ニツコリと微笑んだ。

「よし、丈槍由紀ちゃんだね？…如月、もうナイフを下ろしてやれよ。怯えてるだろ？」

男がそう言うと、由紀の背後に立つ如月と呼ばれたその女は突き付けていたポケットナイフを折り畳み、それをポケットへしまった。

如月「こうでもしないと逃げられるかと思って…。ほら、その悠里って娘は抜け目なさそうだから、一応警戒しとかないと」

女は言いながら悠里を睨む。一方で男は彼女達の前を落ち着きなく歩き回ると、悠里と由紀、二人の顔を交互に見ながら口を開いた。

「まあいい。今度はこちらから自己紹介をしようか、俺は境野。一応このチームのリーダーをしていて、なおかつ彼の知り合いだ」

境野と名乗ったその男の言葉を聞いた直後、由紀達の後方から金槌を持った若い男がこちらへと歩み寄り、ヘラヘラと笑い始める。

「知り合いって言ってもただ一日行動を共にして、彼の寝ている隙に物を全部奪ってやっただけの仲だがな？」

悠里「っ!？」

胡桃同様、悠里も彼からその話を聞いた事があつた為、この言葉を聞いた途端即座にこの人物達と彼の関係を理解した。

境野「まあ悪気があつた訳じゃないんだ。俺達はただ彼に強くなつて欲しかった。それだけなんだよ」

申し訳無さそうな素振りを微塵も見せない境野。悠里はそんな発言に激しく苛立ってしまい、思わず声を荒げた。

悠里「ふざけないでっ!!寝込みに人の物資を奪って消えるなんて：どれだけ酷いことをしたか分かつてるの!?! 一歩間違えたら彼はそのまま寝込みを”かれら”に襲われて死んでいたかも知れないのよっ!!」

境野「そしたらそれまで。その程度の雑魚だったって事だよ。俺達が欲しいのは出来るだけ戦える人間であつて、雑魚はお呼びでないからね」

「ああ、戦える人間って言えば：君らの友達のシヤベルを持った女の子、中々に運動神経良かったな」

金槌を持った男が思い出したように呟く。

悠里「シヤベル!?!そ、それって：」

由紀「胡桃ちゃんに：何をしたのっ!?!」

男の呟きを聞いた由紀はハツとしたような表情を見せ、慌てた様子で尋ねる。男はニヤニヤして中々答えようとしなかったが、直後に隣でそれを見ていた境野が声を発した。

境野「三瀬<sup>みせ</sup>、その娘をどうしたのか早く言え。戦力になるようなら仲間に引き入れたい」

三瀬と呼ばれたその金槌男は鼻でため息をつき、渋々口を開く。

三瀬「いや、殺そうと思つただけだな、結構手強くて：結局時間

切れ。途中で逃げてきた」

境野「時間切れ？」

如月「コイツ、いつまでもタラタラしてるから私が呼び出したの。もうこの二人を捕まえた後だったしね」

如月は悠里と由紀を顎で指してから、ヘラヘラと笑う三瀬を睨み付ける。

そんな三人の会話を側で聞いていた由紀はホツとしたように胸を撫で下ろし、小さな声で呟いた。

由紀「よかった。胡桃ちゃん：無事なんだ：」

悠里「……………」

由紀は安心したように微笑んだが、悠里は気がではない。

胡桃が無事らしいという事は確かに喜ぶべき事だが、それでも今の自分達が危機的状況にある事には変わらないのだ。

境野「まあいい、とりあえず、彼がくるまでこの娘達は閉じ込めておけ」

如月「わかったわ。ほら、ついてきて…」

由紀の肩に手を当て、如月は悠里を見つめる。彼女はとことん悠里を警戒しているようだった。如月が由紀の側にいる以上悠里は下手に動けず、大人しく彼女の誘導する場所へと歩いていった。

如月は二人を連れて歩き、倉庫の奥にある扉を開ける。

すると真つ直ぐ進めば裏口に出るのである廊下があり、その途中にはいくつかの部屋への扉があった。あるのは恐らく、トイレや物置部屋だろう。如月はその内の一つの部屋へ悠里達を入れると少し遅れて自分も入り、そつと扉を閉めた。

その部屋は天井付近にある小さな窓から微かに明かりを取り入れているだけだったがかなり明るく、すぐに部屋中を見回せた。武器になりそうな物どころか何も無い部屋だったが、そこには二人の人物が待ち構えていた。

その内の一人は十代後半か二十代前半であろう見知らぬ女性だったが、もう一人には見覚えがある。悠里と由紀はその人物がいる事に驚きの声をあげた。

悠里「ミナさんっ!？」

未奈「悠里ちゃん…由紀ちゃんまで!？」

由紀「どうしてここにいるの!？」

悠里はそこにいた少女…、未奈の元に駆け寄り、由紀はその胸に飛び込む。

未奈はそんな由紀を受け止め頭を撫でながら如月を睨んだ。

未奈「この人達まで…!いい加減にしてくださいっ!」

如月「って言われてもね。彼を誘き寄せるにはこの娘達が必要でしょ?あなた一人だけを人質にしたって、彼は来ないもの」

未奈「彼って言うのは…」

如月「当然、この娘達の仲間であるあの彼よ。あなたのボーイフレンド…ゲンジ君だっけ?あの子な訳がないでしょう?だって…あの子は——」

未奈「わかってます!だから黙ってて下さいっ!!」

未奈は如月を睨んだまま、少しだけ声を荒くした。

その声には強い怒りのような思いが込められていて、彼女のそんな一面を見たことがない悠里と由紀は思わず驚く。

二人の知っている未奈は大人しく、他人に謝ってばかりいる少女だった。

だが今の未奈の目付きはキツく、じつと如月を睨み付けている。

由紀は未奈の胸からそつと離れて、恐る恐る声をかけた。

由紀「ミ、ミナちゃん?」

如月「あれ?あんた、わりと大人しい娘って聞いてたのに…。意外と怖い娘なのね?」

未奈「……」

如月「…まあ、いいわ。えつと…宮野<sup>みやの</sup>ちゃん。この娘、ちゃんと大人しくしてた？」

如月が宮野と呼んだのは、未奈と共に元からこの部屋にいたもう一人の女性。肩よりも少し先へと伸びた黒髪を揺らすその“宮野”という女性は部屋の入り口付近に置かれたパイプ椅子に座っており、じつと由紀達を見つめている…。彼女は如月達の仲間であり、ここで未奈の見張りを任されていた。

宮野「…ええ。大人しくしました」

如月「ふうん…。じゃあちよつと人数増えたけど、その調子で見張っててね。もし暴れたら誰か呼べばいいわ。すぐに誰かくるでしょう」

宮野「…ええ。そのつもりです」

話している間でも如月とは目を合わさず、宮野はじつと由紀達を見つめて目を離さない。そんな彼女を見た如月は満足そうに微笑むと、由紀達を見回して首をかしげる。

如月「…にしても、なんでこんな子供達が生き残れるのかしら？」

彼女が不思議そうな表情をしながら由紀達の前へと歩み寄ると、由紀達は警戒して一步後ろへと下がる。

如月「そんな警戒しなくても、別に何もしないわよ。確かにアンタらみたいな娘達は嫌いだけど、アイツよりはマシだからね」

未奈「…アイツ？」

如月「私はね、今回は物資や人手を分けてもらいに来ただけで、本来境野達とは別行動してるチームのメンバーなの。私のチームは今、他の生存者グループと揉めてる真っ最中なんだけどね、相手のグループにいる女の子がムカつくのよ…。たぶんアンタらと同じくらいの年なんだろうけど、本当に可愛げが無くて」

如月は何かを思い出すかのように目を閉じ、大きく舌打ちを鳴らした。

如月「…思い出しただけでもイライラしてくる。けどまあ、アイツらは今日殺す予定だからいいわ」

そう言つて、如月はニヤリと笑う。

そんな彼女の不気味な笑顔を見た由紀達はどんどん不安になり、そつと身を寄せ合つた。

如月「本当は噂の彼にもアイツらを殺す手伝いをしてもらいたかつたんだけど、来るまでもう少し時間がかかりそうだから私は帰るわ。アイツらを殺し終えた後またここに来る予定だから、その時に会いましょうね♪」

由紀「……………」

…バタン

それだけを言い残し、如月は部屋を出た。

彼女が出ていった事で胸を撫で下ろす由紀達だったが、まだこの部屋には奴等の仲間である宮野がいた。

悠里「…お願いです！私達を逃がして下さいっ！」

如月が部屋を出てすぐ、悠里が宮野へと懇願する。

この部屋は鍵を掛けられないようだし、廊下に出れば裏口へと続く扉もすぐ側にある為、宮野さえ説得すれば逃げ出す事は容易だと思つたからだ。

宮野「…ごめんね。それ無理。あなた達の仲間の子が来るまで見張るのが私の仕事だから、それまでは大人しくしててね」

悠里「そんなんっ…」

悠里は部屋の隅へと歩いていくと、頭を抱えてそのまましゃがみこんでしまった。由紀と未奈もまた彼女の側でしゃがみこみ、そのまま

じつと膝を抱える。

由紀「…ミナちゃんは、どうしてここに？」

先程は聞きそびれたが、由紀はそれが気になった。

未奈はあの屋敷にいたハズなのに、何故ここにいるのかと…。

未奈「…今日、ゲン君に誘われてここの倉庫に来たの。それで…そのままあの人達に捕まっちゃった…」

どこか虚ろな目をしながら、未奈は半分笑って答える。

その笑顔は自傷的で、とても苦しそうだった。

由紀「えっ？だつてゲンくんはあの後家に戻ってきて、ミナちゃん  
は部屋で寝てるって言ってたよ!？」

未奈「…それ嘘だよ。家に戻ったのはゲン君だけで、私はここに  
いた」

悠里「ゲンジさんは…どうしてそんな嘘を？」

静かに悠里が尋ねると未奈は自分の膝に顔をうずめ、少しの間を開  
けてから答える。彼女は泣いているのか、声が微かに震えていた。

未奈「ゲン君はね…私達の味方じゃなかったんだよ…」

由紀「えっ？」

悠里「っ…」

由紀と悠里はその発言に驚きながら、ただじつと未奈を見つめた。



一方、車を失った胡桃達は屋敷へと駆け足で戻りつつ、道を阻む「かれら」をかわす。そんな中、美紀が放った発言に胡桃と彼は驚いていた。

「……」

胡桃「…マジかよ」

美紀「ええ。私の考えが間違つてなければ、今回の出来事はゲンジさんに仕組まれた物だと思います」

ノソノソと動く「かれら」に追いつかれないように適度な速度で走りながら、美紀は自らが感じていた違和感を口にする。

美紀「思い返すとあの人の行動にはおかしい所がありました。まず、私達にあの病院へと行くように頼んできた事ですが、これもおかしいです」

胡桃「…そうか？」

美紀「だって、急にですよ？私達は大した準備もしていないのに、今すぐ行つてきてほしいと急かしてきました。出来るだけ早くに行つてきてほしいという気持ちは理解出来ますが、それにしたつて急すぎます」

胡桃「まあ、言われればそうだな…」

美紀「それにもう一つ…あの時——さんは寝ていましたが、ゲンジさんは起こして連れていけと言ってきました。本来ならそこまでする必要はないと思います」

「…どうでしょうね。考え過ぎかも知れませんよ？」

美紀「でも、そうだとすれば色々と納得がいきます。胡桃先輩を襲った人は私達全員の名前を知っていました。恐らく、誰かから私達の事を聞いていたんではないでしょうか」

その言葉を聞いた途端、胡桃は思い出す。

あの時襲いかかってきたあの男は確かに言っていた…。胡桃達の事を知っているのは、とある人物から聞いたからだ。

胡桃「…ああ、それで間違いない。あの男はそう言ってた」

美紀「だとすれば、それを教えたのはゲンジさんだと思います。あの人が私達の情報を流し、そしてこの病院へと足を運ばせ、そのまま罠に掛けたんです」

胡桃「…どう思う？」

美紀の考えを聞いた胡桃は、隣で黙ったままの彼に意見を聞く。彼は眉間にしわを寄せながら頭を悩ませているようだが…。

「…まあ、もうすぐ屋敷につく。答えは本人に聞いてみよう」

美紀「…ですね」

胡桃「…だな」

ゲンジの待つその屋敷へと近寄るにつれ、彼等の不安は増していった。

## 八十五話『ひとりきり』

…ボタン

弦次「…早かったな」

屋敷内の広間…。弦次は椅子に座ったままそう言って、彼と美紀と胡桃を順番に見つめる。するとすぐに由紀と悠里がいない事に気が付き、静かに呟いた。

弦次「由紀さんと悠里さんは…奴らに捕まってしまったか」  
「…ッ!!」

三人を見てから呟いた弦次のその言葉を聞いた直後彼は一気に駆け出し、椅子に座る弦次を地面へと押し倒す。椅子はその際に倒れ、ガタンと大きな音をたてた。

弦次「っ!?!」

「決まりだな。美紀さんの言ってた通りだ…」

弦次「……」

地面へとうつつ伏せに押さえつけられる中、弦次は視線を美紀へと向ける。すると美紀は側へと歩み寄り、その事実を確認する為に弦次へ問う。

美紀「ゲンジさん、やっぱり…あなたはあの人達の仲間ですね？」

弦次「…言い訳にしかならないと思いますが、俺はアイツらの仲間なんかじゃない。…ただ仕方なく協力しているだけです」

胡桃「仕方なく？」

弦次「ええ、アイツらはここを襲わないのを条件に物資を要求してきていて、俺はそれに応じてただけ…それだけだった…」

「もう少し分かりやすく説明してくれると助かるんだけどな」

彼がそう言い放つと、弦次はその顔を覗いて恐る恐る答えた。

弦次「とりあえず離してくるか？ 暴れたりしないから……」

胡桃「…離してやれよ。どうせ逃げられないしな」

胡桃の言葉を聞いた彼はそつと弦次から離れ、そのまま美紀達の横に立つ。その後弦次は立ち上がり彼等と真つ直ぐに向かい合うと、あの連中と自らの繋がりを語り始めた。

弦次「…俺がイツらと出会ったのは二週間前。一人で外出してる時に出くわしてしまった。…イツらはこのデカイ屋敷に住んでいる俺達に前から目を付けてたらしく、外で待ち伏せされてたんだ」

弦次「相手は五人もいたし、争う前に結果は分かっていた。俺は間違ひなく殺されると思ったが、物資を定期的に渡すなら見逃してやるとイツらは提案してきた。もちろん、俺はその提案に乗った。物資を分けてさえいればこれからもこの屋敷で暮らせるし、お嬢や白雪を守る事が出来るからな」

美紀「じゃあ、この屋敷の物資が少しずつ無くなっていったのはゲンジさんがその人達に渡していたからなんですね」

美紀が話に割り込むようにして尋ねる。  
予備の物資が少しずつ無くなっていく事を未奈は不気味に思っていたが、それは弦次の手によるものだった。

弦次「ええ。予備の物資ならバレないと思ったから盗っていたのに…、お嬢はしっかりと管理用の記録をとっていた。あれには驚いた」  
胡桃「その言い方から察すると、ミナやシラユキは何も知らないのか？」

弦次「もちろん何も知りません。あの二人はここにいれば平和だと思つて暮らしているのに、余計な心配はかけたくなかった…」

胡桃「……………」

事情を知った胡桃は何も言えずに口を閉じる。

一方で弦次はというと、何か言いたげに彼をじっと見つめていた。

「…何か？」

弦次「…俺は皆が寝静まった夜中に門の前で奴らと待ち合わせして物資を渡していたんだが、その時に聞かれたんだ：『住人が増えたのか？』つてな。たぶん、外に停めてあったあのキャンピングカーを見られたんだろう」

胡桃「もしかして、その時にあたしらの名前を教えたのか？」

弦次「…ええ。正直に言わなきゃ何されるか分からないし、それに言ったって問題はないと思っていた…。でも、一つだけ思いもよらない誤算があった…」

「……………」

弦次「あんた…奴らと知り合いだったんだな」

弦次は彼を見つめ、ため息混じりに呟く。

「知り合いつて言えるほど深い仲じゃない。ほとんど他人だよ」

弦次「けどアイツらの方はそう思っていない。今のあんたにとっても興味があるみたいで仲間にしたがっている。おかげで…お嬢はアイツらの手の中だ」

ポツリと呟かれたその言葉に対し、胡桃達三人は驚く。

「なっ!?!」

美紀「ミナさんまで!?!」

胡桃「どうしてっ!?!ミナはあんたと一緒にいたんだろう!?!」

弦次「俺みずか自ら、お嬢をアイツらの元へと連れていった。一時とはいえ、お嬢をアイツらの手に渡すのは嫌だったが、そうしないと力づくでここに攻め込むと脅された。そうなれば俺達は恐らく全滅…：運が良くても誰かが必ず死ぬだろう。それだけは絶対に避けたかった」

胡桃「お前…アイツらにミナを渡して、無事に帰ってくると思ってるのか!?!」

弦次「そう信じるしかない。逆らえばどのみち殺されるんだ。なら、奴らが約束を守る可能性にかけるしかない。あんたを奴らの隠れ家に届ければ、お嬢は返してくれる約束になっている」

弦次は彼を見つめてそう告げる。

つまり、彼がああの連中の元にさえ行けば未奈は戻って来れるという事だ。

胡桃「――を…アイツらの所に届けるだど？」

弦次「ええ。そうすればお嬢は戻って来れるし、俺達はまた平和に過ごせる。まあ、今回の事でお嬢にはかなり嫌われただろうけど…」  
「あんたは…奴らの隠れ家の場所を知っているんだな？」

弦次「知っている。ここからそう遠くはないから、徒歩でも簡単にたどり着けるはずだ」

「そこには、由紀ちゃんとりーさんもいるよな？」

弦次「ああ。絶対にいる」

「…よし。その場所は？」

彼は淡々とした様子で弦次と会話を進め、弦次からその場所を聞き出す。そんな彼を見ていた美紀と胡桃は不安を感じ始めていた。  
「もしかしたら、彼は一人でそこへ向かうつもりでは…」そう思ったからだ。

胡桃「…おい、一人で行くつもりじゃないよな？」

「……………」

弦次「奴らは俺が彼を届けるにあたり条件をつけました。”隠れ家には彼一人だけで向かわせる事”…。もしこれを破って仲間を連れしてきた場合、人質の誰かが殺されてしまう可能性があります」

美紀「ッ！」

胡桃「一人でだど…？そんなの…危険過ぎるだろ!!」

胡桃は弦次の胸ぐらを掴み、大きな怒声を飛ばす。

美紀も彼を一人で向かわせるのには大きな不安があったが、それでもどうにか平静を保っていた。

胡桃「一人でなんて絶対にダメだ！バレないようにして、あたしも一緒に……！」

「大丈夫だよ。上手くやるから……」

胡桃「な……っ……！」

穏やかな表情を見せて、彼は胡桃を弦次から引き剥がす。

だが胡桃は彼を一人で向かわせるのには賛成できず、大きな声で反論した。

胡桃「上手くなんて……無理だろ!!そんなのっ!!相手は人質までとつていて、更にお前が一人で来ることを知ってるんだぞ!!そんな状況でどう上手くやるんだよ!!」

「……………」

美紀「……先輩」

美紀はそつと胡桃の背後に歩み寄り、その様子をうかがう。

その拳はプルプルと震えていて、かなり興奮している事が分かった。

胡桃はそのまま囁くような小さい声で、後ろに立つ美紀へと尋ねる。

胡桃「美紀は……それで良いと思ってるのか？」

美紀「えっ？」

胡桃「こいつを一人で向かわせるのは……正しい判断だと思うのか？」

美紀「……えつと……」

正直に言うと、どうすれば良いのかまだ分からない。

彼だけを敵地へと向かわせるのは確かに危険だが、他に良いアイディアも、それを考えるだけの時間もない。このままダラダラと選択を先伸ばしにしても由紀達に危険が及ぶだけ……。やはり、彼を向かわせるしかないのかも知れない。

美紀は頭の中でそう結論付け、静かに口を開いた。

美紀「…はい。ここは、——さんに任せるしかないと思います…」

胡桃「ツ!!」

胡桃は勢い良く振り返り、美紀をギリツと睨んだ。

美紀ならば、絶対に自分の意見に賛同してくれると信じていたからだ。

胡桃「一人で行かせて…戻って来なかったらどうする!？」

美紀「それでも…信じるしかありません」

胡桃「一人で皆を助けてそのまま戻ってくるなんて、絶対に無理だつて分かるだろ…？」

美紀「それでもっ…信じるしか…」

胡桃「おんなじ事しか言えねえのかよ…!!ふぎけやがって!!」  
ガタンツ!!!

怒鳴り声をあげ、胡桃はそばに転がっていた椅子を蹴飛ばす。

彼女のそんな様子を見た美紀は肩を震わせながらも、退く事なく声を張り上げた。

美紀「だつて…それしかないじゃないですかっ!!奴らの言い付けを破つて——さんについていったとして、もしそれがバレたらどうするんですっ!？」

胡桃「そ、それはっ…」

美紀「そんな真似をしてバレたら、その瞬間に由紀先輩かりーさんが殺されてしまうんですよ!?!それでもいいんですかっ!?!」

胡桃「良いわけねえだろっ!!!あたしはこいつが一人で行くのは危険だつて言っただよ!!!」

美紀「だとしてもっ、今はそれしか方法が無いんですっ!!」

胡桃「ツ…!!お前はこいつが戻って来なくても良いと思っただよ!!?」



側で立ち尽くす彼を指さしてから美紀の肩を掴み、胡桃は怒鳴り声で問う。美紀はそれに対して涙目になりながらも、強く答えを返した。

美紀「私だつて嫌ですよ!!でも…でもっ…!そうするしかないからっ…!」

そう言い終えた時、美紀の瞳から一筋の涙がこぼれた。

美紀は慌ててそれを右手で拭い、顔をうつむける。胡桃はそれを見た途端に虚しい気持ちになり、美紀の前から離れて広間の壁に背中を寄りかけた。

胡桃「…くそっ!」

…ガチャツ

部屋の扉がそつと開き、そこから白雪が顔を覗かせる。

騒がしかつた為様子を見に来たらしく、彼女はトコトコと胡桃の元へ歩み寄つた。

白雪「…くるみ。どうかしたの?」

胡桃「…なんでもねえ。部屋に戻つてろ」

白雪「?」

俯いたまま呟く胡桃を不思議そうに見つめ、白雪は首を傾げる。そんな彼女を見た彼は弦次へしか聞こえぬよう、小さな声を出した。

「あの子はまだ何も知らないんだよな?」

弦次「…ああ。何も知らない。シラユキは今も、お嬢が部屋で眠っていると思つているハズだ」

「…そつか。じゃあ、あの子の為にもみなさんを連れ戻さなきゃな」

弦次「お前…俺の事怒つてないのか?」

「そりゃあ怒つてるよ。アンタにハメられたせいで胡桃ちゃんは怪我

したし、由紀ちゃんとりーさんはさらわれた。怒ってない訳がない  
…」

弦次「…：だよな」

「…でも」

実際、彼は心の内で弦次に対してかなり強い怒りを抱いていた。

弦次が自分達をハメたせいで胡桃は傷を負い、更に由紀と悠里はさらわれたのだから…。しかし彼がその怒りを出来る限り抑えているのは、弦次は脅されていたただけだと知ったから…そして、奴らの狙いが自分だと知ったからだだった。

「…奴らは僕を狙っているからこんな事をし始めた。だとすれば不本意ながら僕にも多少の責任がある。それに巻き込まれた彼女達は、絶対に助けなきやな…」

弦次「…：…」

「とりあえず今は時間が無いし、アンタとの話は全部終わってからにする。それまで胡桃ちゃん達をここに置いて行くけど、手を出すなよ？」

弦次「…：ああ。それは約束する」

彼は弦次のその言葉を聞くと、ゆっくり扉へ歩み寄っていきそのドアノブを捻る。扉を開ける前に一度胡桃と美紀の方へと視線を移したが、二人は俯いたままで顔を合わせてはくれなかった。彼はそれを少しだけ残念に思いながら、静かにその部屋をあとにして廊下へと出た。

…バタン

胡桃「…：ゲンジ。シラユキを見ててくれ」

弦次「ん？あ、ああ…：シラユキ、こつちこい」

白雪「…：うん」

彼が部屋から出た直後、胡桃は側にいた白雪を弦次に任せ、駆け足で彼のいる廊下へと向かう。そしてそれは胡桃だけでなく、美紀も同じだった。

美紀「…っ」

~~~~~

胡桃「おいっ！」

「…なに？」

背後から駆け寄って来た胡桃に答える為に彼は一度足を止め、くるっと振り返る。声こそあげていなかったが、美紀もまた彼を追ってきていた。

胡桃「そのっ…ほんとに、行くんだよな？」

「うん。ついてきちゃダメだよ？」

胡桃「分かってるよ…。もう仕方がないから、全部お前に任せる」
「……………」

美紀「絶対に戻ってきて下さい。由紀先輩とリーさんとみなさん…みんなと一緒に…」

潤んだ瞳を彼に向けながら美紀は彼の元へ歩み寄り、そつとその手を握る。彼は一瞬その行動にドキツとしたが、状況が状況だからか素直に喜べなかった。

美紀「絶対…無事に帰ってきて下さいね…。待ってますから…」

「…分かりました。みんなを連れてすぐに戻りますから、美紀さんはしっかりと留守番していて下さいね？」

美紀「…はいっ」

彼は握られていない方の手で彼女の頭を優しく撫でて、にっこりと微笑む。美紀はその笑顔に答えるように微笑み、握っていた手を静かに離れた。

胡桃「あのつ…えつと…」

美紀が彼から離れた直後、入れ代わるようにして胡桃は彼の前へと歩み寄った。しかし彼女は中々伝えたい言葉を言えず、ただあたふたとしていた。

「…胡桃ちゃん？」

胡桃「あ…あたしつ…お前に伝えなきゃいけない事があるんだ…」

「伝えなきゃいけない事？」

胡桃が意を決して放った言葉は意味深なもので、彼はなんとも言えない表情をする。胡桃は彼のそんな顔を見つめながら、続けて言葉を放っていった。

胡桃「…そ。伝えなきゃいけない事…。今は言えないけど、帰ってきてきたら絶対に言うよ。だからさ…必ず戻ってこいよ…」

プイツと顔を逸らし、胡桃はそのまま彼に背を向ける。

そんな彼女がおかしく感じた彼は少しだけ笑うと、返事を返しながらその肩を手で引いて彼女の顔を覗き見た。

「ははっ…うん、絶対に戻っ——」

胡桃「…っ」

覗き見た胡桃の表情を見た途端、思わず言葉が途切れてしまう。こんな表情をしているとは、微塵も予想していなかったからだ。

「…胡桃ちゃん」

胡桃「っ…み、見るなよっ！」

”その表情”を彼に見られた胡桃はすぐに顔を背け、そのままくると背中を向ける。その後、胡桃はもう彼に顔を見せる事をせず、背を向けたままで語りかけた。

胡桃「みんな連れて帰ってきてよ。誰か一人でも欠けるのは…絶対にイヤだからさ」

「…了解。がんばってくるよ」

彼は背を向けたままの胡桃に言葉を返してから、こちらをじつと見つめている美紀へと軽く手を振る。それに応えて美紀がパタパタと手を振るのを見届けてから、彼は一人…屋敷の外へと向かって歩き出していく。

美紀は彼が廊下の先を曲がり、姿が見えなくなるまで見送ったが…胡桃は結局、最後まで彼に背を向けたままだった…。

美紀「……先輩…」

彼がいなくなった後でも胡桃はピクリとも動かず、ただ顔をうつむけていた。そんな彼女を美紀が気にかけて、そつと声をかけると、胡桃は静かにその場にしゃがみこんだ。

胡桃「なあ…、あいつ、帰ってくるよな？」

自らの膝に顔をうずめながら、胡桃は弱々しい声を出す。

美紀「…ええ、絶対に帰ってきますよ。由紀先輩にりーさん、それにミナさんも連れて…絶対に…」

ただ胡桃を元気付ける為だからではなく、本当にそうなる信じているから…。美紀は僅かに微笑みを浮かべながら囁くように答え、少し屈んでから一人うずくまる胡桃の背に手を当てた。

胡桃「………だよな」

膝にうずめていた顔を上げ、その顔を背後にいる美紀へと向ける。胡桃は彼女のその笑顔に応えるように、自らもにっこりと笑った。

胡桃「美紀…さつきはゴメンな。あたし、怒鳴ったりしちゃって…」
美紀「…いえ。気にしてませんよ」

そう答えてくれた美紀の優しさに感謝しながら、胡桃はそつと立ち上がる。そうして顔を合わせた途端、美紀は一瞬だけ胡桃から目を逸らし、冗談混じりな笑みを浮かべた。

美紀「…まあ、ちよつと怖かったですけどね」

胡桃「ううっ…、ほ…ほんとにゴメン…」

美紀「……いいですよ。こんな状況ですからね、それだけ不安にもなります」

胡桃が申し訳なさそうに頭を下げ、謝ると、美紀は返事を返しながら彼が歩いていった廊下の先へと視線を移す。

美紀「あの人なら…絶対に大丈夫です。私たちは、ただ無事を信じて待っていますよ」

胡桃「…お前、意外とあいつの事を信頼してんだな？」

美紀がここまで彼を信頼していたという事が意外で、胡桃は思わず目を丸くする。そうして驚いている胡桃の表情を横目でチラツと覗き込み、美紀はポツリと呟いた。

美紀「そう…ですね。自分でもびっくりです」

ふふつと可笑しそうに笑うと、胡桃もそれにつられて笑う。

二人は少しの間笑い合うと、弦次と白雪のいる部屋へと戻っていった。

くくく

…スタツ!

二人が部屋へと戻った頃、彼は屋敷の門をよじ登り、そのまま外へと出たところだった。

「…ふう」

外へと出てから一度振り向いてその屋敷を見つめると、先程別れ際に見てしまった胡桃の表情を思い出す。

あの時、彼が胡桃の肩を引いて見てしまったその表情は…普段はあまり見せない”泣き顔”だった。彼は弦次から聞いた連中の隠れ家へと駆け足で向かいながら、胡桃は何故泣いていたのかを考えた。

(あれは…由紀ちゃん達が心配なあまりの涙だったのかな。それとも、どんだん話を進めて一人で行くのを決めた僕に呆れての涙だったり…。いや、もしかしたら僕を心配して泣いてくれたのかもな。だとしたら、どれだけ嬉しいか…)

「……………」

(なににせよ、最後に見た胡桃ちゃんの顔が泣き顔ってのは嫌だからな。絶対に、みんなを連れて無事に帰ってこよう…。そうすれば、今度は笑ってくれるよね?)

八十六話 『わたさない』

彼の知り合いだという人物らにさらわれ、とある場所にある大きな倉庫：その裏手にある一室へと閉じ込められていた由紀・悠里・未奈の三人。彼女達が閉じ込められている部屋には宮野という一人の女性が見張りとして存在しており、逃げる事が出来ぬまま、彼女達は彼を待ち続けていた。

…ガチャツ

境野「予定通りに事が進んでいるなら、そろそろ彼がここに来る頃だろう。君達にも彼を出迎えてもらうが、念の為に手を縛らせてもらう」

三人が無言のまま部屋で待っていると突如その部屋の扉が開き、このグループのリーダー的存在である男：境野が現れ、彼女達に告げる。境野は扉の側にいた見張りの宮野にガムテープを手渡すと、由紀達を顎で指して無言の指示をした。宮野はその指示を受けると静かに由紀の元に歩み寄り、ベリベリと音を立てながらガムテープを引つ張り出した。

由紀「…！」

宮野「縛るから、両手を後ろで組んで」

由紀「…：うん」

由紀は大人しく宮野の指示に従い、両手をそつと後ろで組む。宮野は彼女の細い腕をガムテープでぐるつと巻いていき、力を入れても動かす事の出来ぬように縛る。

由紀「……」

宮野「…はい、終わり。次は君ね」

悠里「……………」

一瞬だけ宮野を睨む悠里だったが、状況が状況な為に従うしかない。彼女もまた大人しく手を組み、それを宮野に縛られる。そうして悠里の手を縛り終えた後、未奈もまた大人しく手を縛られた。

宮野「境野さん、全員縛り終えました。移動させておきますか？この娘達」

境野「ああ、そうしてくれ。皆で彼を出迎えよう」

そう言っつて境野は何やら楽しげに微笑むが、由紀達の表情は暗いままだった。三人は境野と宮野に連れられて部屋を出ると、そのまま倉庫のメインフロアへと歩いていった。

~~~~~

メインフロアへと足を踏み入れると、そこには相変わらず金槌を手きんすいにしている三瀬みせ、そして背後に十人近い人数の仲間を従えた如月きんぎょがいた。  
た。

如月「あら、この娘らと一緒に彼を待つ事にしたの？」

境野「ああ。彼女達がいた方が盛り上がるからな」

境野達の側に由紀達を見るや否や、そこにいた如月が境野へと声をかける。

倉庫内のメインフロア…本来ならこの広い空間には様々な物が置かれているのだろうが、今となつてはボロボロの木箱やゴミが散乱しているだけ…。よく見ると部屋の間には幾つかのカバンやダンボールが置かれているが、あれはきっと境野らの持ち物なのだろう。

境野「もうじき彼が来ると思うが…お前はもう帰るのか？これから面白くなるのに…」

大きなカバンを手に持ち、数人の人物を従えている如月を見た境野がそう尋ねると、如月は残念そうな表情をして答える。

如月「ええ、噂の彼をこの目で見られなかったのは残念だけど、早く帰らないとあの人が困るだろうから……。必要な物と人手を借りたらずぐ戻るって約束したのに……。もうかなり経っちゃってるもの。ところで、本当にこんな人数を貸してもらっていいの?」

側に立つその十人近い仲間達をチラッと見つめ、如月は境野に確認する。この人物らは本来、境野の仲間であった連中のようだ。

境野「ああ、かまわない。ここには俺と三瀬、それに宮野だけいれば今日のところは十分だ。人質だっている訳だし、彼も不用意に暴れたりはしないだろう。お前らも……。それで良いな?」

如月に貸した仲間らを見つめ、境野は尋ねる。  
その問いに対して全員が頷き、更にその内の一人の男はこう言った。

「如月さんについていけば暴れられるんだろ? なら当然行きますよ。俺は例の少年には興味ないですし」

男が笑い混じりにそう告げると、その隣の男もつられて口を開く。

「だな。まあ、その娘達と遊べなかったのは残念ですがね?」

悠里「ツ……!」

男は彼女達をじろりと見つめ、ケラケラと笑う。それを見た悠里達が男達を警戒して身を引くと、その間に如月が割り込んで不満そうな顔をする。

如月「一時的とはいえ、この私の仲間にしてあげるってのに……。こんな娘達が欲しいの?」

「いや、如月さんも魅力的ですが、俺達の相手はしてくれないでしょ? なら、この若い娘達を相手に無理やりするってのも捨てがたくて

…」

如月「いちいち”若い娘”とか言う辺りが少しムカつくけど…まあいいわ。確かに、私はあんたらの相手するつもりないしね。それにそんなに若い娘が好みなら、これから私達が争うグループにも若い娘がいるの。私あの娘大嫌いだし、あんたらの好きにして良いわよ」

「へえ。その娘、可愛いんですか？」

如月「まあ、ムカつく小娘だけど顔はわりと綺麗よ？あんたらもきつと気に入るわ」

ニヤリと不気味に笑いながら如月が男達へと告げると、男達の士気が目に見えて上がる。おかげで悠里達は男らの視線から逃れる事が出来たが、それでもその場にいるのは怖かった。

由紀「……………」

未奈「大丈夫だよ。あの人達はどっかに行くみたいだから…」

由紀「…うん、そうだね」

未奈「そう。だから大丈夫…。きつと、すぐに皆のところに戻るから」

そつと由紀の側に寄り、未奈は声をかける。

出来るならその頭を撫でて安心させてあげたいと考えた未奈だったが、手を縛られている為それは叶わない。だがそれでも、由紀は大分安心できたようだ。

境野「彼女らの乗っていたあのキャンピングカーはどうする？持つていくか？」

如月「…いえ、自分の車があるからいいわ。まあ、キャンピングカーの中身…つまりしまつてあつた薬とか食べ物全部貰っちゃったけどね。許してちょうだい？」

衣服こそ未奈の屋敷へと移したが、悠里達のキャンピングカーにはまだ薬や食料等の物資が残されていた。如月はそれらを全て取り出していったらしく、言葉とは裏腹に全く悪気の無さそうな笑みを浮か

べてポンポンつと悠里の頭を叩く。

悠里「……………」

悠里はあえて返事を返さず、ただじつと如月を睨んだ。もう、この女とは会話すらしたくなかったからだ。

如月「さて、あとは物と一緒にあなた達を私のトラックの荷台に積んで帰るだけね」

「おいおい、俺達はあるたの荷物同然ですか？」

物資と同様に荷台へ乗せると聞き、男達は口々に不満を漏らす。如月はニヤニヤと微笑みながら、その場の連中を静めた。

如月「大丈夫大丈夫。あのトラックの荷台つてけっこう広いし、それに目的地までは20分とかからないハズだから♪」

「つつてもなあ…。まあ、観念するしかねえか…」

何を言っても無駄だと思ひ始めたのか、男達はため息をついて観念した。

そうして男達が無口になった中、境野はその男達を見ながら如月へ言葉を放つ。

境野「…なんでもいいが、そっちの仕事が終わったらそいつらは返せよ？」

如月「ええ、この人達はあくまで少し借りるだけだもの。アイツらとの争いが済んだらすぐに返すわ。もちろん、戦利品も分けてあげるからね♪」

境野「それはありがたいが…ちゃんと勝てるんだろうな？ わざわざ貴重な人員と物を分けてやったのに、返り討ちにあつたら笑い事じゃ済まないぞ」

如月「平気よ。あんたに借りた人員を合わせれば、私達は30人近いグループになるもの。相手との戦力差は歴然…負けようがないわ。」

境野「…ならいい。じゃあ、戦利品とやらを楽しみに待っているよ」  
如月「ええ、任せて。…じゃあ行くわね。バイバイ、お嬢さん方：  
また後日会いましょうね♪」  
未奈「……………」

由紀・悠里・未奈の三人へ向けて手を振りながら陽気に倉庫を出ていく如月。男達は境野に軽く頭を下げてから如月のあとに続き、彼女と共にその倉庫を出ていった。

くくく

三瀬「…：…やかましいのがやっといなくなったな」

倉庫の外から聞こえる、如月が乗ってきたトラックのものと思われる大きなエンジン音。それがのっそりと移動してどこかへ消えていったのを耳で確認すると、三瀬は口を開く。

境野「まあ、予定通りにいけばまた明日にでもここへくるだろう。

人員の返却と戦利品の受け渡しがあるからね」

三瀬「戦利品…：ねえ。あんま期待せずに待ってますか…」

手に持った金槌を肩にのせ、三瀬はダルそうに隅へと歩いていく。そしてそのまま壁に背を預け、スツと床に腰を下ろした。

悠里「…：あなた達は、しよつちゆう他の生存者を襲っているの？」

悠里がポツリと呟く。すると境野はそばにあった木箱の上に腰を下ろし、彼女の顔を見ながらそれに答え始めた。

境野「襲うのはあくまでも最終手段であつて、いきなり襲つたりはしない。人間きの悪いことを言うな」

悠里「…：最終手段？」

境野「ああ。俺達は他の生存者グループを見つけた場合、まず交渉をする。いや…：脅しと言った方が正しいかな。そいつらを見張りな

がら付きまとい、殺されたくなければ物資を分け与えろと告げるんだ。すると大抵の奴はこれに従う。人数が多いからなあ：俺達のグループは」

境野のその言葉を聞いた途端、未奈はふと気になった。

この連中が今までそうやって他の生存者を脅してきたと言うのなら、もしや弦次もその犠牲者なのではないかと…。

未奈「あなた達もしかして…：ゲン君を脅してたんですか!？」

境野「…まあな。あの少年は賢いぞ、俺達と自分の戦力差を見て、すぐに言うことを聞いてくれた」

未奈「そんな…：じゃあ…：ゲン君はずっと私達に内緒で」

弦次が根っからこの連中の仲間ではなかったと知り、一安心はした。だが、脅されていた事を自分達に隠していたのは許せない気もする。頼りない事は分かっているが、それでも相談くらいはしてくれてもよかったのに…。未奈の心はそんな思いでぐちゃぐちゃになり始めていた。

由紀「ミナちゃん…：大丈夫?」

未奈「…：うん、平気だよ。心配しないで」

声をかけてくれた由紀に心配させぬよう、強がって笑顔を見せる。だがその力ない笑顔を見た由紀は未奈の心境を見抜いてしまい、切なそうな表情をした。

由紀「……………」

未奈（こんな笑顔じゃ…：ごまかせないか…）

境野「…話を続けるが、困ったことに今現在俺達に従っている生存者はあの弦次とかいう少年だけだ。あとの奴らは最初こそ従っていたものの途中から逃げようとしたり、歯向かってきたりした。まあ…：そういう忠誠心の無い連中には用がないので殆ど殺してやったがな」

悠里「……」

木箱に腰かけたまま、境野は彼女らを相手に語り続ける…。

話を聞く限りこの男は…いや、この連中は逆らう人間に対して容赦がない。悠里達を助ける為に彼が来てくれたとして、この男に対抗できるのだろうか…。

悠里は頭を悩ませる…。彼がここへ来て何をやるにしても、自分達が人質になっている以上はどうしても不利になるだろう。

悠里（あの如月とかつて女の人仲間を引き連れて出ていったおかげで…今ここには三人しかいない。どうにか…逃げることは…）

悠里はじつくりと倉庫を見回し、逃走できないか考える。

今邪魔なのは三人…。3mほど先にある木箱に腰かける境野と、壁に寄りかかって座っている三瀬…この男は10mくらいは離れている場所にいる。あとは宮野という女性だが、彼女はずっと悠里達のすぐ後ろで何も言わずにたたずんでいて、離れようとしなない。

宮野「……」

悠里（…ダメね。この女の人は私達を警戒しているようで、全く目を離してくれない…。そもそも手を縛られた状態で逃げきるっていうのには無理があるし、リスクだらけね…。）

手を縛られた状態で由紀・未奈・悠里がこの三人から逃げ切る。それはとても難しい事だった。もし誰か一人でも捕まればその瞬間に足を止めねばならぬし、下手な真似をした罰として誰かが傷付く…もしくは殺される可能性すらある。それを頭で想像した途端、悠里の脳内から逃走という選択肢が消えた。

悠里（もう、——君に…任せるしかないのね…。でも、こんな状況…彼一人じゃ…）

三人の敵と三人の人質…。それらに対して彼はたった一人で、どうする事が出来るのだろうか…。どう考えても良い終わり方が想像できずに悠里は一人うなだれ、心を不安に押し潰された。

境野「俺達のグループは、別行動中の如月のチームを入れれば30人を越す大きさだ。ただでさえ化け物が外をうろつく世の中だったので、更に俺達を敵にまわそうなんて連中はただの馬鹿だよな？」  
そう言いながら境野がヘラヘラと笑うと、離れた所に座る三瀬もつられて笑い出す。だが悠里らの背後に立つ宮野という女性だけは、それを黙って見ていた。

境野「だいぶ人数が集まったが、もうちつといっても構わないからな。彼には：俺達の仲間になってもらう」

彼女らを眺めながら境野がそう告げた途端、由紀と悠里はハツと顔をあげる。それを聞いた悠里はすぐに言葉を放とうとしたが、そんな彼女よりも早く、由紀は口を開いていた。

由紀「——くんは私達の友達だよっ!!ヒドイことばかりしてるあなた達の仲間になんて、絶対にさせないっ!!」

悠里「：由紀ちゃん」

珍しく大声を張り上げ、由紀は境野を睨み付ける。人を睨み慣れていない瞳では大した迫力が出せないが、彼を奪おうとする人間を前にして、こうせずにはいられなかった。

境野「……………」

由紀「——くんは…私達の事が好きって言ってくれた!皆の事が好きだから…だから一緒にいるんだって言ってた!!」

境野「……………何が言いたい?」

身をのりだし、大きな声をあげる由紀。

境野は腰かけていた木箱から降りると彼女の前へと歩み寄り、脅すように冷たい視線を向ける。その視線を受けた由紀は肩をビクツと震わせ、一瞬だけ言葉を詰まらせたが、またすぐに声を張り上げた。

由紀「あなた達の事、——くんきつと大キライだよ!!他の人達を脅



してヒドイことばかりしてるような人達だもん!!そんな人達のところにいるも——くんは楽しく笑えないから……だからっ……絶対にあなた達の仲間なんてっ……!」

話している間もずっと冷たい視線を続ける境野が怖くて、由紀の瞳はうるうると涙ぐむ。そんな由紀を追い詰めるように、その冷たい眼差しを向けたまま境野は低い声を発した。

境野「彼が俺達を嫌いかなんて分からない。全部お前の想像だろ？」

悠里「…想像でもいいじゃない……。一日で彼を捨てて、今の彼がどんな人か想像すら出来ないあなた達よりずっとマシでしょう!」

涙ぐむ由紀に代わり、横に立つ悠里が声をあげる。すると境野は少しの間を空けてからニヤリと笑いだした。

境野「…ああ、そうだな。俺には今の彼がどんな人間なのか想像も出来ない。いや、想像する必要がないんだよ。どうせ無理やり仲間にして、俺好みの武器に染めるんだからな」

悠里「ツ……!!」

悠里は思わず言葉を詰まらせた。この境野という男はもはや彼を人として見ておらず、ただ自分の力に……武器にしようとしているのだ。ここまで腹がたつたのは初めてかも知れない。悠里はそれほど怒っていた。だが、怒っていたのは悠里だけではなく、その隣にいる由紀も同じだったようで……

由紀「……つたいに……ささない……」

境野「……あ?」

ボソボソ呟くその言葉が聞き取れず、境野は威圧混じりに聞き返す。すると由紀は再び境野を睨み、声を大きくした。

由紀「やっぱり、あなたには絶対に——くんを渡さないっ!!わたしっ……あなたみたいな人、大キライっ!!」

境野「へえ、そう…」

由紀「わたし達はみんな……くんが好き……。だからっ、そんなくんをあなたなんかは渡したりしないからっ!!」

由紀は瞳を潤ませながら、顔を真っ赤にして怒鳴る。

普段は人に怒鳴ったりしない彼女だったが、彼を無理にでも仲間にしようとする境野がどうしても許せず、思わず声を荒くしてしまう。そんな彼女の隣に立つ悠里と未奈はその珍しい光景に驚き、言葉を失っていた。

境野「…うるさい娘だな。おい三瀬、こいつ裏に連れてって適当に痛めつけておけ。少ししつけといた方がよさそうだ」

由紀「っ!?!」

三瀬「ほいほい…了解しましたよと」

倉庫の隅にしゃがんでいた三瀬は立ち上がり、ゆっくりと由紀の前へと歩み寄る。悠里と未奈は由紀を庇おうと身をのりだったが、背後に立つ宮野の手によってそれは止められた。

悠里「ちよつと!」

未奈「離してっ!!」

宮野「大丈夫。由紀この娘に手を出させたりしないから」

悠里「…えっ?」

そう告げた後に宮野は悠里と未奈…そして由紀を自らの背後に隠し、迫る三瀬の前へと立ち塞がる。その行動に悠里達はもちろん、三瀬や境野も驚いていた。

三瀬「…なに? 邪魔なんだけど」

境野「宮野、どいてやれ。その女の子には少し俺達の怖さってヤツを——」

宮野「今彼女を傷つけるのはマズイと思いますよ。待っていた人…

来たみたいですから」

境野「…なに？」

倉庫入り口の扉…。その扉は先程出ていった如月がしっかりと閉めなかった事で僅かな隙間が開いており、その隙間の向こうには一人の人影があった。境野と三瀬…そして悠里達はそれに気付いていなかったが、定期的に扉を気にしていた宮野だけはそれに気付いていた。

悠里「……」

由紀「あ…っ」

ギギ…ギギイツ…

その人物はその扉の隙間に手をかけ、少しずつそれを開けてゆく。鉄で出来たスライド式の扉は滑車が錆びているのか、ギギツと耳障りな音を発てていた。

境野「…やつときたか。じゃあ、その娘にお仕置きするのはまた後でだな。まずは彼をお出迎えするでしょう」

境野の言葉を聞いた三瀬は悠里達から離れ、じつとその扉へと視線を向ける。扉がある程度開くと一人の少年が中へと入ってきて、半開きになったその扉を今度は丁寧に閉めていく。

「開けっぱなしだと」かれら”が入ってくるかも知れませんかね」

境野「…ああ、すっかり閉めておいてくれ。余計な邪魔者は勘弁だ」

境野はそう言葉を付け足し、入ってきた少年を笑顔で見つめる。その少年はすぐに扉を閉め直すと、くるっと振り返って倉庫奥にいる由紀達へ向けて微笑んだ。

「お待ちせしました。リーさん、由紀ちゃん、未奈さん」

振り向いて名前を呼ぶ少年のその顔を見た途端、由紀達の表情が少しだけ明るくなる。”彼”が来て、自分達の名を呼んでくれる…。手

を縛られて見知らぬ人間達に囲まれている由紀達にとって、それはとても安心できるものだった。

由紀「——くんっ!!」

彼は名を呼ぶ由紀に笑顔を返すと彼女側に立つ境野：そして三瀬と宮野へと静かに視線を移し、一步前へと…その足を踏み出していた。

## 八十七話『予感』

由紀「——くんっ!!」

「……」

その倉庫の中へと足を踏み入れた彼は自らの名を呼ぶ由紀に笑顔を見せてから一步…また一步とそこに近寄っていく。彼はゆっくり歩を進めながら由紀達の側にいる境野・三瀬・宮野を見つめると、腰につけていたナイフをそっと右手に持つ。もちろんそこまで敵意剥き出しの彼を境野がこれ以上近寄せる訳もなく、声をかけてそれを止めにでた。

境野「おっと、それ以上は寄らないでくれるかな?」

「…久しぶりに会ったつてのに、随分と冷たいじゃないですか」

彼はその場にピタリと足を止め、鼻で笑いながら境野を見つめる。最初に数歩進んだとはいえ、倉庫奥で膝をつき、手を後ろで縛られている由紀達との距離はまだ10m近くあった。

(こんな遠くで止められちゃ、隙もろくに突けない。もう少しだけ近づきたいけど…厳しいか)

境野「俺の態度が冷たく感じたなら謝ろう。でも分かってくれ、いくら君とはいえ、ナイフを構えた相手を近づけてあげるのは勇気がいるんだ」

「じゃあ、これをしまったら近づけてくれますか?」

持っていたナイフをしまつて境野に尋ねた。これで今、彼の手に武器はない訳だが、境野はそれでも彼を近寄せはしない。

境野「出来ればしまっくんじゃなくて捨ててほしいところだが…まあ

いい。正直に言うと、君がナイフを持っていようがまいが、これ以上近寄せる気はまだない。そのままここにいてくれ。一歩もこちらに寄るなよ?」

「…はいはい」

彼がため息混じりに返事を返す。境野はそんな彼を見て満足そうに笑うと、由紀達の周りを回るようにしてゆっくりと歩きながら彼に語りかけた。

境野「元気だったかい?」

「そりやまあ…おかげさまで」

境野「そうか、そりや良かった。ええつと、今の仲間…つまり彼女達との生活はどんなだった? 教えてくれよ」

「…楽しいですよ。みんな優しく可愛いし、見ていて飽きない。それに何より、人が寝ても物盗んで消えたりしないってのはポイントが高い」

過去に自分の物資を盗んで消えた境野達への皮肉を込めた台詞を吐き、彼はニヤリと笑った。するとそれにつられるようにして境野、そして三瀬もニヤリと微笑む。

三瀬「はははっ! この状況でそんな事が言えるなんて、随分とたくましくなったなあ」

境野「まったくだ。こりやあ、ますます仲間にしたくなってしまうな」

「仲間って…僕があんたらなの?」

境野「ああ、なつてくれるとありがたいな。人員不足って訳ではないが、優秀な人材はいつでも大歓迎だからな」

「…いや、人員不足でしょ。三人しかいないじゃないですか?」

彼は言いながら境野・三瀬・宮野を順に指さし、不思議そうに首を傾げた。

境野「ああ、今この場にいるのは三人だけだ。他にも仲間はあるが、

ちよつとした用事があつてね、今は別行動中だ。」  
「へえ、そうですねか…」

(敵は三人…境野の言葉を馬鹿正直に信じてやるとするならどうにかなるかもしれないけど…嘘ついて仲間を隠してる可能性もあるな。だとしたらちよつと厳しい。さて、どうしたもんか…)

この場にいるのは三人だけだと言う境野の言葉を信じるべきか…。信じたとしても、ここからどう隙を突くか。彼は静かに頭を悩ませ、由紀達を見つめる。すると由紀達はどこか不安混じりな表情をして、彼に視線を返した。

(…胡桃ちゃんや美紀さんと約束したからな、絶対に失敗出来ない)

絶対に由紀達を連れ帰るという胡桃や美紀との約束を思い返し、覚悟を決める。彼は境野達に会話を振りつつ、その隙を窺う事にした。

「…僕に仲間になつてほしいみたいですけど、大して役に立ちませんよ？ 他をあたつて下さい」

境野「それはどうだろうね…。思うに、君はかなり俺達の役に立つと思うよ？ 俺達はあの感染者達との戦いもそうだが、他の生存者と争う事も少なくない。そういった時、君のように躊躇いなく人を殺せる人間は重宝するんだが…」

まるで彼が人を殺した瞬間をその目で見たかのように境野は言った。

「僕が、躊躇いなく…？ 殺せませんよ。あんたらの思い違いです」

三瀬「バカ言え。さつき俺達を相手にあれだけ殺意剥き出しの目でナイフ構えてたヤツが、人を殺せない訳ねえだろ」

「あんたらは例外…。借りがありますから」

境野と彼の会話に三瀬が横から割り込むと、彼はそんな三瀬をギリッと睨み付けた。だが三瀬はその視線をもともせず、ヘラヘラと笑いだす。

三瀬「ほら…超良い目すんじゃない。俺そっくり♪」

(どこがだ…。一度鏡見てこい)

ヘラヘラと笑う三瀬を見た彼は心の中でそう思った。彼の予想では胡桃に怪我を負わせたのは三瀬…。もしその予想があっているならば、この男を許す訳にはいかない。

境野「君のいう”借り” ってのは…以前君の物資を奪った時の事か？」

境野がそう尋ねると彼は可笑しそうに鼻で笑い、その問いに答える。

「いや…、あれについては水に流してあげます。そもそもあれがなければ、僕は彼女らと出会えませんでしたし…」

境野「そうか…じゃあ”借り”とはなんだ？」

改めて境野が尋ねると彼は由紀達を静かに見つめ、その視線を三瀬…そして境野へと移して口を開く。

「彼女達に手を出した事…これは少し頭にきた」

境野「…ああ、そっちな」

「まあ…彼女達は見たところ怪我してないみたいだからまだいい。問題は三瀬、あんただ…。あんた、胡桃ちゃんを殴っただろ？」

由紀「…えっ？」

悠里「胡桃…怪我したの!？」

その発言を聞いた由紀と悠里は身を前に乗り出し、慌てた様子で彼に尋ねる。三瀬と胡桃が争ったのは聞いていたが、三瀬は途中で逃げてきたと言っていたので、てっきり無事かと思っていた。

「深い傷を負った訳じゃないです。本人は元気ですから、安心して下さい」



悠里「…そ、そう」

乗り出していた身を下げで一安心する悠里と由紀だったが、やはり仲間が傷付けられたと聞けば不安になるし、更に言えば目の前の三瀬が憎くなつていく。

三瀬「あく、胡桃ちゃん、ねえ…。うん、あの娘殴つたのは俺だよ。本当は殺してやろうと思つただけで中々手強くてね、結局殺し損ねちやつたよ」

悠里「ツ!!」

嬉しそうに語る三瀬を悠里が睨み付ける中、彼は無言のまま三瀬を見ていた。その表情は特別怒っているようではなく、あくまでも平静を保っているようだったが、由紀はそんな彼に違和感を感じていた。

由紀「——くん…いつもと雰囲気違う…。きつと、すぐく怒ってるんだ…」

「……………やつぱりあんたか」

三瀬「そ。でもまあ、あの娘は俺がどうこうせずとも、近い内に死ぬでしょ」

「…どういう意味だ」

三瀬「ああ、お前は知らないんだっけね？まあいいんじゃない、知らなくても。どうせお前はあの娘と二度と会うことないだろうし」

「さつきから意味の分からない事をペラペラと…さすがにイライラしてきた」

度重なる三瀬の発言に表情を隠しきれなくなってきたのか、彼は苛立ったように舌打ちをして静かに頭をかきむしった。

三瀬「まあ落ち着けよ。あの娘と二度と会えないってのは、お前はこれから俺達の仲間になるからだ。…簡単だろ？」

「…なる気はない。僕は由紀ちゃんとりーさん、それとミナさんを連れてここから出ていく。出来れば三瀬は殺してやりたいけど、大人し

く僕達を返してくれるってなら見逃してやってもいい…」

三瀬「…まったく、人質とつといて良かったよ。じやなきやこいつ、絶対に俺達の言うこと聞かないもん」

境野「だな。彼女達がいて良かった…」

三瀬と境野がそんな会話を交わす中、彼は未だ一言も言葉を発していない女性へと視線を向ける。見つめた女性：宮野の事だけは知らず、彼女とは完全に初対面だった。

「…その人、あんたもこの人達の仲間ですよね？」

宮野「…ん？私？」

「ええ、あんたですよ。境野さんや三瀬は知ってますけど、あんたは知りません」

宮野「私が境野さんの仲間になったのは…つい最近だから」

「へえ…こんなに仲間ばかり集めて、どうするんですか？」

宮野に向けていた視線を境野へと移し、彼は尋ねる。

境野「使えない人間は食料やら何やらを無駄に消費するだけだから  
いらぬが、使える人間ならばいくらでも歓迎だと言っただろ？彼女  
…宮野はちよつとした怪我を治療する技術を持っている。この世界  
では貴重な医者枠の人間。宮野には由紀<sup>彼女</sup>達の見張りを担当しても  
らっていたので、そのままここに残ってもらったんだ」

「医者枠ね…それはそれは」

境野「まあ感染者に噛まれた人間だけはいくら宮野でも治療出来ないが、それでも十分に必要な人材って訳だ。…さて、質問だけど君の仲間のこの娘達…彼女らは何が出来る？」

境野はそつと由紀、そして悠里を指さし、彼に尋ねる。彼はそれに大した間も開かず、堂々と答えた。

「そつちの髪の毛の長い女の子…リーさんは僕達の物資を丁寧に管理してくれながら、みんなをまとめあげてくれる、お姉さんの存在。僕達にとって、欠かすことの出来ない大事な人だ」

悠里「……」

「それで、もう一人の女の子…由紀ちゃんはいつも元気で、見ているこっちまで明るくなれる。そっちの宮野さんが身体の傷を治せる人間だつて言うなら、由紀ちゃんは心の傷を癒してくれる人。この娘も僕達にとつて欠かすことの出来ない大事な人だ」

由紀「うっ…／＼／」

こんな状況なのに、改めて大事な人だと言われるとどこか照れくさくなってしまう…。悠里と由紀は彼の顔を見つめると、少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

境野「まとめ役に…心のケアをする人間か……」

悠里と由紀を順に見て、境野は何やら頭を悩ませる。三瀬はというと相変わらず金槌を手にしたまま彼をじつと見つめ、宮野は由紀達を背後から見つめていた。

「改めて言うけど僕はあんたらの仲間にはならないし、もちろん彼女達もやらない。さあ、とつと返してください？」

彼がそう言葉を放つと境野は突如口元をゆるめ、必死に笑い声を堪え始める。

境野「…つくく！つくふ…！」

「…何が面白くて笑ってんですか？」

境野「つくく…いや、悪いな。さっき三瀬と話していた時の君はあんなに良い目をしていたのに、今彼女達を見ていた時の君の目ときたら只の腑抜けだ。その変わりようがあまりにも可笑しくてね。いやあ、そんな目をされたら俺達の仲間にする気も失せるよ」

「ならちようど良い、僕はもとよりあんたらの仲間になる気はないんで」

境野「…でも、俺には良い作戦があるんだな。君を俺達の仲間にしつつ、その腑抜けた目を止めさせる事が出来る。そんな作戦が…」

まだ口元を僅かにゆるめたまま…境野は彼を見つめる。その表情

はどこか不気味で、彼も嫌な予感がし始めていた。

「……そんなのはどうでもいい。とつとと彼女達を——」

境野「君はさつき、躊躇いなく人を殺す事は出来ないと言った。だけれど一人でいいから……自分にとつて大事な人間をその手で殺したらどうだろう？それを乗り越えた後はどんな人間でも躊躇わずに殺せるようになると思わないか？」

話す彼の声を無理やりに遮り、境野はニヤけた表情でそう言った。彼の感じていた嫌な予感はその言葉を聞いた直後により確実な物へと変わっていき、それによつて額から冷や汗が溢れてくる……。

境野「そもそも俺は君がここに来た時、正面から堂々と来た事にガツカリしたんだ。君がまだ俺達を恨んでいて殺したいと考えていたなら、裏口からでも忍び込んで奇襲をかけるべきだった。……にも関わらず馬鹿正直に正面から来たのは、彼女達を助ける事を最優先に考えたからだろ？」

「……………」

彼は返事を返さなかったが、境野の言った通りだった。ここへたどり着いた時、一時は裏口を探して忍び込もうかと思つたが、それだと万一見つかった場合に由紀達に危害が及ぶかも知れない……。それならば堂々と正面から入っていき、話し合いながら隙を窺つた方が可能性があると思つてしまった。

境野「君にはこの娘達の事などお構いなしに暴れて欲しかったけど、仕方ない。その平和ボケした考え方を矯正してやろう」

「……必要ない。僕はただ彼女達を返してほしただけだ」

境野「おい宮野、さつき使ったテープでその娘らの口を塞げ」

呟く彼の声を無視して、境野は宮野に指示を出す。それを聞いた宮野はコクリと頷き、ガムテープを手にして彼女達の前へと回り込む。宮野が一番最初に手を伸ばしたのは由紀だった。

由紀「っ…く！」

悠里「っ!?!由紀ちゃんに触らないでっ!!」

宮野「口を塞ぐだけだから心配しないで。……これでよし」

宮野は怒声を飛ばす悠里に応えながらガムテープを程よい長さに千切り、それを無理やりに由紀の口へと貼り付けようとする。由紀は首を動かして抵抗するが大して時間を稼げず、あっさりと口を塞がれてしまった。

宮野「…次は君。大人しくしててね」

悠里「…っ…っ…」

再びテープを千切る宮野の前に、悠里は一切抵抗しなかった。もしここで暴れたりすれば、由紀に手を出されてしまう気がしていたからだ。

宮野「…よし。こっちの娘の口も塞ぎますか?」

悠里の口を塞ぎ終えた宮野は未奈を指さして境野へと尋ねる。それに対して境野が無言で頷くと、彼女は静かに未奈の前へと立った。そうして由紀・悠里・未奈の口が塞がれていくのを見た彼は、額に冷や汗を流しながら境野を睨む。

「…止めさせろ」

境野「ただ口を塞いでるだけだ。怪我を負わせてるわけじゃない。それでも止めたいなら、君が宮野を殺して止めればいい。まあ…そんな事したら君が宮野を殺すよりも先に、俺と三瀬とで彼女達を殺すけどな」

それは決して脅しではない。境野と三瀬…この二人は相手が由紀達のような少女であろうと、必要ならば躊躇いなく殺すだろう…。そんな二人が由紀達の側に立ち、ニヤリと笑いながら彼を見つめている。彼は今すぐにも駆け出して奴等を殺してやりたいと思っただが、それを実行するには距離がありすぎた…。彼と奴等との距離はほん

の10m程だが、彼がそこへたどり着く前に由紀達が境野らに殺される可能性は十分にある。そう考えたら彼は足を動かさなかった…。

「…くそっ」

彼が小さく呟いた時、宮野が由紀達三人の口を塞ぎ終えた。それを確認した境野は改めて彼に視線を移し、少し大きめの声で言葉を発した。

境野「さて、さつき君はこの二人は欠かせない人間だと言ったが、それはあくまで君にとって…、俺達にとっては全く必要ない人間だ。まあ彼女達を人質にとっておけばそれだけで君を思い通りに動かせるだろうが…さすがに二人もいらぬ。一人で十分だ」

「……………」

彼にはもう、境野が何を言いたいのかが薄々分かり始めていた…。由紀と悠里の二人が境野の手中にある限り彼は境野に抗えないが、それは由紀か悠里…どちらか一人だけでも同じ事。だとすれば境野達にとつては監視などの手間が楽になる分、二人よりも一人の方が良いのだ。

境野「元から人質は一人でよかった…。なのに二人連れてきたのは、これをやりたかったからなんだよ…」

ニヤリと不気味に微笑み、たまらなく嬉しそうな表情をする境野…。だが彼が見ているのは境野のそんな顔ではなく、その横で不安そうな目をした由紀と悠里。どうにかして彼女達を助けたいのに、それが出来ずにいる自分が情けなかった…。

(胡桃ちゃん…美紀さん…)

由紀達を連れ帰ってくると約束し、それを信じて待っている二人の顔が脳裏をよぎる。彼の胸の鼓動が不安によって早くなり、溢れだした汗が顎先から落ちた時、境野は彼にそれを告げた。それは彼が予想していた最低の展開への幕開けとなる言葉であり、その言葉を聞いた

彼の脳内は真っ白になった……。

境野「丈槍由紀か若狭悠里、どちらか一人でいい。君の手で殺せ……」

## 八十八話『どちらか一人』

境野「丈槍由紀か若狭悠里、どちらか一人でいい。君の手で殺せ…」

「…ッ！」

由紀「ん…っ!？」

悠里「!?!？」

境野が放ったその言葉を聞き、彼の思考は一瞬停止する…。

激しい焦りと、どんどん早くなる胸の鼓動に戸惑う中、彼はふと由紀達を見つめた。口をガムテープで塞がれているので声を出せずにいたが、大きく見開き、キョロキョロと落ちつきなく動くその目を見れば由紀達が困惑しているのが一目で分かった。

(…焦るな。…落ち着け。ここで諦めたら二人の内、どちらかが死ぬ。それは…それだけは絶対に避ける！)

彼は自らの額から流れる汗を手でそっと拭い、小さく深呼吸する。ここで境野達に自分の焦りを気取られればペースをつかまれる為、彼はあくまで平静を装おって境野へと語りかける。

「…何の冗談ですか？僕は彼女らを助ける為にここに来たんです。なのに…その彼女らを殺せる訳がないでしょう」

境野「ああ、だから二人の内どちらか一人だけと言ったんだ。お前が彼女達の内のどちらかを選べば、残された一人は救えるぞ？」

喜べ…とでも言わんばかりに微笑んで告げる境野。当然、彼がその台詞に喜ぶ訳などない。彼が救いたいのは由紀と悠里…そして未奈の三人だ。誰か一人でも失う訳にはいかない。



「…一人だけじゃ意味がない。僕は全員を助けに来たんだ」

境野「それは無理だ。お前が救えるのは最大でも一人だけ…これは決まっている事だ。さあ、早く選べ。お前が殺すのはこつちか？<sup>由紀</sup>それともこつちか？<sup>悠里</sup>」

由紀と悠里…その二人を交互に指さし、境野は彼の返事を待つ。

それに対して彼が放った言葉は境野の問いに対する”答え”ではなく、怒りの感情が込められた時間稼ぎの為の言葉だった。一秒でも時間を稼ぎ、彼女達を助け出す作戦を考え出す為の…。

「…ふざけるな。僕はどちらも殺さない。大体、仮にどちらかを選んで殺したとしても、残された一人をあんたらが返してくれる保証がない」

境野「まあ…返すのは無理だ。残された一人はお前が逆らわないようにする為の人質として、俺達が引き続き管理しなきゃいけないからな」

「な…っ!?!」

三瀬「何を驚いてんだか…当たり前だろ。お前がすっかり一人殺つたとして、それと引き換えに残った人質を渡したら意味がない。こつちに人質がいなきやお前は俺達に従わないどころか、一人失った恨みから俺達を襲い、殺そうとしかねないからな」

境野「残った人質を返すのは無理だが、危害を与えずに生かしておくというのは約束してやるし、定期的にお前と会わせてもやる。もちろん、その際は厳重に見張りをつけるがな」

三瀬はプラプラと金槌を振りながら、境野と同様に由紀達の側に立つ。彼は脳内でこの連中の話を繋ぎ合わせ、そして絶望する…。

このまま連中の思い通りに事が進んでしまえば彼は由紀か悠里を殺さねばならない。しかも残された一人はそれで自由の身になる訳ではなく、引き続き境野達に捕まったまま…。一人でも人質がいる以上、彼は奴らに逆らえない。彼は強制的に奴らの操り人形となり、胡桃達の元にすら帰れないのだ…。

「……」

境野「考えてるところ悪いが、水無月未奈……彼女を選択肢に入れるのは無し。お前が殺すのはあくまでも丈槍由紀か若狭悠里、この二人のどちらかだ。彼女とは付き合いが浅いから選びやすいだろうし、何より彼女は弦次用の人質だからな」

彼は返事を返さず、俯いたままギョツと拳を握りしめる……。

今までの会話の流れから未奈が選択肢に入っていないのは分かっていたし、仮に入っていたとしても簡単に選んだりは出来ない……。由紀達と比べると確かに未奈との付き合いは浅いが、それでも少なからず仲良くしていたのだ。見捨てたりは出来ない……。

境野「さあ、三分だけ待ってやる。とつとと選べ……」

「………っ、くそっ……い……」

ここにきて三分という時間制限を課せられ、彼の焦りはより激しいものとなる。三分などと言う時間で作戦などたてられる訳もなく、彼は一つの決意をした。それは彼女達の誰かを見捨てるものではなく、自らを犠牲にしようとしたものだったが……。

「……わかった、あんたらの仲間になるよ。どんな危険な命令でも、絶対に逆らったりしない……。だから……この人達だけは……」

こうする他ないと思い、彼は境野達の仲間になる事を決意する。その光景を目にした由紀と悠里が彼に向けて何を言っているのかは、口を塞ぐテープのせいで分からない……。

由紀「んっっ!!んんんっ!!」

由紀は彼の方へ身を乗り出そうとしていたが、それは背後に立つ宮野の手によって押さえられていた。悠里はというと、微かに潤んだ目をして、首をそつと横に振っている。

「……これで良いだろう？僕が仲間になると言ってるんだ。これであんた

らの目的は達成…彼女達は必要ない…」

力ない声で告げる彼だったが、薄々気付いていた…。この提案に境野達があっさり首を縦に振る訳がない事を…。

境野「仲間になつてくれる…それは結構、良い返事だ。だけど彼女達は返せない。分かっているだろ？彼女達を返したら、お前が俺達に従う理由が無くなるんだ。返す訳がない。何度でも言うが、お前がこの場でどちらか一人を殺す事は決まっているんだ」

「だからっ…！それは無理だ!!」

彼はついに声を荒くして答えるが、境野はあくまでも由紀か悠里を殺す事を彼に強要する。境野は側でひざまづく由紀と悠里、それぞれの頭を手を乗せ、声を大にして告げた。

境野「無理ならそれもいいさ！お前が殺す相手を選ばない場合、俺達がどちらも殺してやる！一人殺して一人救うか、どちらも見殺しにするかだ！簡単だろっ!!」

そう言つて境野は由紀が頭に被っていた猫耳型の帽子を剥ぎ取り、それを床へと叩きつける。由紀は肩を震わせながら目をギュツと閉じていたが、その閉じた目からは涙が流れ始めていた。

「っ?!人質なんかいなくても僕は逆らわれない!!ずっとあんたらに従つてやるっ!!そう約束するから——」

境野「あと二分！早く決めろ!!!」

境野はもう、彼が由紀か悠里のどちらを殺すか以外の答えを受け付けなかった。境野はただひたすら左手につけた腕時計を眺めて定期的にカウントダウンし、彼をどんどん追い詰めていく…。

境野「一分半！もう半分以上過ぎたぞ？どうした？二人とも見殺しにするのか!？」

「ち…っ!!」

(どうする!?!どうすればいい!?!二人とも…二人とも助けるにはっ…)

どうしたらっ…!!」

涙を流す由紀と震える悠里…彼は答えを出せぬまま、じつと二人を見つめていた…。一方で未奈は力なく顔を伏せ、ポタポタと涙を流しながら啜り泣く。そうして残された時間が一分を切った頃、境野は一度深いため息をつき、ポケットからカッターナイフを取り出す。それはカチカチと音をたてながら2cmほど刃を伸ばし、ピタツと由紀の頬へと当てられた。

由紀「っ…っっ!!」

境野「あと四十秒。それを過ぎたら俺はこの娘の首を切り裂く。こんな中途半端な切れ味の物で切られたらすぐには死ねないかも知れないが、それも込みで全てお前が招いた結果。三瀬…お前はそっちの娘の頭を叩き割る準備をしとけ」

三瀬「了解っ」

悠里の背後、三瀬はそこに立ち、金槌を振り上げる。直後、悠里は一度だけチラツと由紀の方を見つめてから、彼に向けて必死に何かを伝えようとしていた…。

悠里「んんっ!んんっ!!」

三瀬「あと二十秒と少し…。そしたらこの娘の頭を碎かなきゃやなんないのか…。美人さんなのに、もったいないなあ…」

三瀬は右手に金槌を構え、左手で悠里の頬を撫でる。悠里は首を振ってそれを払いのけながら、彼だけをじつと見つめ続けた。何故なら、彼にどうしても伝えたい事があったから…。そして、それは彼に伝わり始めていた。

(由紀ちゃんも…リーさんも…大好きなのに…。絶対に…失いたくないのに…)

こんな時になって、彼女達と過ごした日々を思い出してしまう。思い出せば思い出す程、こんなにも二人の事が好きだったのだと彼は

実感するが、残された時間はもう殆どなかった…。

境野「…あと十秒。九、八、七——」  
「……………くそ」

遂に残りが十秒を切った。境野が残された時間を一秒ずつカウントダウンしていくと、不意に彼が呟く…。

「…めた」

境野「…ん？」

「…決めた。…決めたから、カウントダウンはもう必要ない…」

境野「やつとか。ギリギリだな…」

由紀「つつ!!」

悠里「……………」

未奈「つ…うつつ…」

彼の言葉に各々が反応する中、境野はそれを改めて尋ねる。由紀か悠里…そのどちらを殺めるのかを。

境野「さあ、どっちにする？」

「……………」

答えを問われ、彼はその口を重たそうに開く…。

「…りーさ……………悠里だ…。若狭悠里の方を…選ぶ…」

言い慣れたその呼び方を途中で止め、彼は悠里の名をそのまま告げた。これを聞いた由紀は目を見開きながらピタツと動きを止め、じつと彼を見つめる。悠里はというと、肩を震わせながら俯いていた…。

境野「若狭悠里…彼女をどうする？丈槍由紀と引き換えに助けるのか？それとも殺すのか？」

その答えをより確かなものにする為、境野はそう尋ねる。彼は虚ろ

な目をして悠里を見つめると、消え入りそうな声で答えた。

「僕は……若狭悠里を……殺す……」

彼がそう告げると、辺りは数秒間だけ静まり返る……。

その僅かな間の静寂を破ったのは、嬉しそうに笑う境野の笑い声……そして由紀の悲痛そうな声……。一方、これから彼に殺されると決まった悠里はというと、顔を伏たままじっとしていた……。

由紀「んんくっ!!?んんく!!!」

境野「あはははっ!若狭悠里……彼女を殺すんだな?よし分かった、ほらっ!」

悠里「……っ!」

境野は跪く悠里の腕を掴んで立ち上がらせると、その背をバンツと押して彼の元へ向かうように促す……。悠里は力なく俯いたまま、彼の元へ一歩ずつ……その足を踏み出していった……。

## 八十九話 『最期にもう一度』

彼と一緒に暮らすと決めた時、正直不安を感じていた。

だって今までは女の子しかいない空間だったのに、そこに一人の男の子が増えるんだもの。優しそうな人だけど、もしそれが勘違いだったらとか：色々な心配があった…。

みんなとは上手くやれるかしら？ちゃんと会話に交ざれるかしら？

本当に色々考えていたけれど、それはいらない心配だとすぐに気付いた。彼と話す由紀ちゃんや胡桃：美紀さんも、とても楽しそうに笑っていたから…。

そして私も：彼と話すのは嫌ではなかった。

彼は明るくて、優しく、そして時には頼もしくもある。

たまに暴走して、私達を相手にいやらしい事を企てる日もあった。

そういった時は毎回彼が私か胡桃に説教されて終わるのだけ…

彼は中々懲りたりしなくて、呆れたりもした。

呆れたりもしたんだけど…それでも楽しかった…。

彼やみんなとふざけあっていると時間があっという間に過ぎていって、その間はまるで普通の世界での日常を送っているかのように思えた。

でも、それはあくまで一時だけ…。この世界は、やっぱり普通じゃない…。

「……すいません」

ゆつくりと、一歩ずつ彼の元へと歩み寄っていく悠里。彼女はすぐに彼の前へとたどり着き、そつとその顔を見つめる。彼はそんな悠里の顔を見るやいなや、一言謝罪の言葉を告げ、悠里の口を塞ぐテープを剥がそうと手を伸ばす。すると後方からそれを見ていた境野がピクツと反応した。

境野「ダメだ、剥がすな。お前はただ、そいつにナイフを突き刺すだけでいい」

「つ……分かった」

境野は彼を徹底的に追いつめる為、悠里と最後の会話をする事さえも許してはくれない。彼は伸ばしかけた手を残念そうに引つ込め、ただじつと悠里を見つめた。

由紀「んんっく!!! ううくっ!!!」

境野に押さえられながらも、由紀は必死に暴れた。このままでは：彼が悠里を殺してしまう。そう思ったらいてもたつてもいられず、由紀は大粒の涙を流しながら暴れたが、由紀は元々大して力が無い上に、今は手を縛られている。彼女がどれ程暴れようと、境野はいとも容易くそれを押さえていた。

由紀「んうくっ!!! んくっ!!!」

口をテープで塞がれている由紀の声は叫び声にも、泣き声にも似たもので、聞いているだけでも胸が苦しくなってくる……。そんな声を聞



いた悠里は彼女から目を逸らしながら体を震わせ、ポロポロと涙を流し始めた。

悠里「っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

彼は目の前で涙を流す悠里を見つめながら、自分の無力さを実感する……。自分は彼女の涙を止める事が出来ないどころか、そんな彼女を……。今から殺さねばならないのだ。

由紀「ううっ!!んんっ!!」

境野「ちっ！よく暴れるヤツだな……。おい宮野！コイツ押さえとけ」

宮野「：わかりました」

暴れる由紀を押さえるのがとうとう面倒になったらしく、境野はその役を側にいた宮野へと任せる。宮野はすぐに由紀：そしてついでに未奈の腕を掴み、二人を隅の方へと無理やり引っ張っていった。もちろん由紀はそれに抵抗したが：やはり簡単に押さえられる。一方、未奈は大した抵抗もせず、ただ宮野の腕に引かれていく……。周りで起きている事があまりにショックで、身体に力が入らないようだ。もう、今の由紀達には、彼と悠里をただ見ている事しか出来なかった……。

境野「さて：出来るだけ早い方がいいな。今から一分：それまでに悠里を殺せ。時間以内に出来なかつたら俺達でそいつと：それにその女あっち由紀も殺す」

由紀を押さえていた手が空くと、境野はまたしても時間を指定して彼を追いつめる。”あと一分”：その僅かな時間が過ぎるまでに悠里を殺さねば、由紀も殺されてしまう……。彼はそっとナイフを右手に持ち、目の前ですすり泣く悠里を見つめた。

悠里「っぐ……!!ひぐっ……!!」

「……………」

悠里の体はガタガタと震え、目からは涙が溢れている…。先程の選択で彼が由紀を選ばずに悠里を選んだのは、悠里自身がそれを望んでいると思っただけだからだ。悠里は目の前で由紀を失うくらいなら、自らが犠牲になる事を望むと…そう思っただけから。けれど今、目の前で震えながら涙を流す彼女を見ていると、それが間違いだった気がしてならない…。

（僕は…失敗したのか…。リーさんではなく、由紀ちゃんを選べよかったのか…？）

彼が悠里を選んだ理由は結局、悠里自身がそれを望んでいるという予想をしたから。しかしそれは、根拠のない思い込みでしかない…。だとすれば悠里は今、彼女を指名した自分を恨んでいるのかも知れない…。彼がそう思いかけたその時、悠里の表情が少しだけ変化する。

彼女は涙をポロポロと流しながらも…必死に微笑もうとしていた…。

（どうして今、そんな顔をするんだ…。僕は、今からあなたを殺そうとしてるのに。恨まれて当然の…最低な人間なのに…）

悠里は相変わらず震え、涙を流していた。死の恐怖を前にしてしまつたら、こればかりは中々止められない。しかしそんな状況の中でも…悠里は笑った。こうやって笑顔を見せれば、彼が少しは楽になれると思っただけからだ。

（リーさん…あなたは、こんな時でも僕の事を気づかってくれているのか…。あなたを守れなかった僕を…恨んでくれていいのに。僕なんかの為に…無理して笑う必要なんてないのに…）

胸をギュツと締め付けられるような感覚に襲われ、彼の視界が狭くなる。狭くなった彼の視界には悠里しか映っていない…由紀の叫

ぶような声もとても遠くの物に思えた。

境野「あと三十秒……」

カウントダウンする境野の声が彼の耳へと入る。出来れば聞きたくないのに、何故かこれはハッキリと聞こえてしまう……。残された三十秒という時間の中、彼は時間を巻き戻せたらという、決して起こることの無い出来事を想像して現実逃避した……。

(昨日に戻れたらどんなにいいだろう。いや、今朝でもいい……。頼むから……。戻ってくれないか……。そうしたら、僕はまた……。みんなと一緒に……)

悠里と由紀、そして美紀や胡桃と過ごす風景を思い浮かべる。それはとても楽しく、幸せな風景だ。しかし、彼は不意に思う……。時間を巻き戻せるとするならば今朝や昨日ではなく、もっとふさわしい時があるのではと……。

(……。ああ、そうか。どうせ戻れるなら、彼女達と初めて会ったあの日に戻ろう。そして、今度は彼女達の仲間にならずにあの日を終える……。そうすれば、こんな辛い思いをしなくて済む……。僕は……。彼女達と一緒にいるべきじゃなかった。誰とも関わらず一人で暮らしながら、勝手に野垂れ死ねばよかった……)

この状況を招いたのは全て自分のせいだ……。彼はそう思い、彼女達の仲間になった事を後悔した。自分が仲間なってさえいなければ、彼女達はきつと違う未来を歩んでいただろう……。少なくとも、境野達に捕まる事はなかったはずだ。彼はそんな後悔の念を抱きながら、ナイフを悠里へと向ける。残された時間が、遂に十秒を切ったからだ……。

「悠里さん……。本当に……。ごめんなさい」

彼は悠里の事をいつものように『リーさん』とは呼ばず『悠里さん』と、どこか他人行儀にその名を呼ぶ。今の無力な自分には、彼女を馴

れ馴れしく呼ぶ資格など無いと思ったからだ…。

よかった。由紀ちゃんじゃなく、私を選んでくれて…。

もし由紀ちゃんを選んで、そのまま殺したら、私はきつと彼を恨んでしまったと思う…。彼に非はないと分かっているも…仕方のない事だと分かっているも…きつと恨んでしまう…。だって…私にとって由紀ちゃんは本当に大切な娘こだもの。

彼は、私のそんな思いに気づいてくれたみたい…。

本当に…本当によかった。死ぬのはとても怖いけれど、由紀ちゃんを失わないで済むのなら、私はどうなってもいい…。

彼ならいつか、由紀ちゃんを助けてくれる。

今は無理でも…いつか…きつと…。

私は…そう信じてる。

だから、最期まで笑っていよう…。

彼の罪悪感を、少しでも無くせるように…笑っていよう…。

でも…出来る事なら…

「最期にもう一度…」  
「りーさん」  
「って呼んでほしかったなあ…」。

九十話 『今日、この場で…』

境野 「九…八…七…」

境野のカウントダウンが残り十秒を切り、彼は悠里へナイフを向ける…。首を切ればいいのか…胸を貫けばいいのか…。そんな事しか考えられない自分が嫌になる…。彼が今考えているのは悠里が出来るだけ楽に死ねる方法であつて、彼女を助ける方法ではないからだ。

「境野…三瀬。お前達だけは必ず殺すからな…。今は無理でも…いつか必ず」

残された短い時間の中、彼はカウントダウンし続ける境野へ向けて告げた。その声はいつもよりも低く、強い憎しみが込められている事が分かる。境野は僅かな間だけカウントダウンを止めると一度彼に返事を返し、すぐにカウントダウンを再開した。

境野 「ああ…、殺れるものならな？五…四…」

「…っ…」

”殺す”と告げたのに、境野は平気な顔をしている。

それが馬鹿にされているようで…ナメられているようで…彼は苛立った。

胸がギリギリと痛み、息をするのも煩わしい…。

今すぐ境野の前へと駆け出し、殺してやったらどれだけ楽になれるだろうか…。そんな事を考えたが、実行はできない…。そんなことをする前に、奴の側にいる由紀が殺されてしまう…。

境野 「三…二…」

由紀 「っ…っ…っ…!!」

由紀ら宮野に押さえられながら涙を流し、そして目を背ける…。

彼が悠里を殺すところなど、絶対に見たくはなかったから…。

「……………」

残り二秒…。彼はナイフを悠里の胸に突き付け、その手に力を込めた。あとはグツと押し込むだけで、ナイフは悠里の心臓を貫く…。そうなれば悠里は死に、彼はきつと…。今までに彼女達と作り上げた自分を失う。彼女達と出会った事で明るく、陽気になった自分とは…。今日でお別れだろう…。

悠里「つ…………う…」

彼の事を気づかない、悠里は未だ必死に笑顔を作っていた…。肩が震えているのに…。涙が溢れているのに…。彼女は微笑んでいた。彼女のこんな笑顔を見ているのは辛い、目を背けてはいけない。彼は手に持つナイフの刃先をその胸元へと向け、覚悟を決めた…。

(本当に…………ごめんなさい…)

心の中でそう呟き、ナイフをスツとその胸へと向ける…。

片手だと震えがひどいので、彼は両手で押し込む事にした。

しっかりと心臓を貫かれるだろうか…。外したらかわいそうだ…。

そんな事を思いながら向けたナイフ…。その刃先が悠里の制服に触れ、悠里の胸…。その奥にある心臓を貫こうとする…。迫るその刃を前に、思わず悠里の笑顔が崩れかけた…。どれだけ覚悟を決めたところでもやはり、死ぬのは怖いから…。

もう…お別れだ…。

彼と悠里はもちろん…。離れたところでそれを見ていた由紀と未奈もそう思い、涙の止まらない瞳をギュツと閉じる。彼が悠里を殺すところなど、見たくはなかったから…。

宮野「もう…よくないですか？」

「…っ？」

境野「なに…？」

由紀の悲痛な呻き声と未奈のすすり泣く声だけが響いていた空間で、宮野が突然そう告げた。彼女は由紀と未奈を連れて境野や三瀬から離れ、端の方で境野を見つめている…。

その様子から察するに今放った言葉は彼にではなく、仲間であるはずの境野にあてたものらしい。境野は彼女の方に振り向きながら首を傾げていて、彼はというと境野らの注目が宮野に集まっているのいいことに、悠里へ向けていたナイフをギリギリのところまで止めた。



境野「…何が…もういいんだ？」

宮野「その人はもう、境野さんの仲間になるって言ったんですよ？  
なら…仲間の娘を殺させるなんて事させなくても…」

少し焦った様子を見せながら宮野は境野にそう告げる。

彼女は由紀と未奈を自分の背後に隠しており、庇っているようにも見えるが…。

境野「はあ…。宮野…お前、何馬鹿な事を言っているんだ？」

境野がため息混じりにそう呟き、呆れたような表情を見せる。すると宮野はキツと目を鋭くし、大きな声をあげながら境野を睨み付けた。

宮野「馬鹿な事を言っているのはあなたでしょう!?!こんな若い娘達にまで酷い事をして…普通じゃないっ！」

境野「…お前、この前俺らが他の生存者を殺した時は何も言わなかっただろう？今さら何をムキになってるんだよ？」

宮野「前は…黙っているしかなかった。私は弱いし、逆らえば何されるか分からない。だから黙っていたけど…今回はさすがに無理。彼女達みたいな娘が殺されるのは、いくらなんでも見ていられない！」

三瀬「へえ…宮野ちゃんは正義に目覚めたわけだ？」

それまで黙っていた三瀬が宮野を睨み、そのまま彼女の所へと歩み寄ろうとする…。すると宮野はすぐそばにあった裏口へ続く扉…そのドアノブに手をかけ、迫ろうとする三瀬を睨み返した。

宮野「三瀬…近寄らないで」

三瀬「…あ??」

三瀬はそんな彼女を不思議そうに見つめ、ピタッと足を止める。そのドアノブに手をかける事にどんな意味があるのかを考えようとし

たからだ。だがあの扉はただ裏口へと続く廊下に出るだけの物で、他に大した物は無い。となれば…わざわざ警戒する理由も無いのだが…。

三瀬「そのドア開けて、それでどうすんの？その二人を連れて裏から逃げるってか？」

宮野「…それは無理。絶対に追いつかれるから…」

三瀬「ああ…だろうな」

宮野「あなた達がもつと常識のある人ならこの計画は見送ろうと思っただけ…やっぱ無理。境野さん、あなた達はただの異常者。なら…ここで止めなきやいけない」

境野「止める…？お前一人でか？」

宮野「…一人じゃない。私と…」

「そこまで言っただけで宮野が言いよんどんでいると、彼女が手をかけていた扉が開いていく…。だがそれを開いたのは彼女ではなく、その扉の向こう…そこにいた人物だった…」

??? 「宮野、話が長い…」

宮野「わ…っ…!!？」

境野「…ん？」

三瀬「あ？」

扉を開いたその人物は中へと足を踏み入れ、横に立つ宮野へ呆れた視線を向ける。宮野はその人物がこのタイミングで入ってきた事に驚いたように目を丸くしていたが、驚いていたのは彼女一人だけではない。彼に悠里…そして由紀もまた、その見覚えのある人物の登場に驚く。その人物は宮野より一回り大きい身体をした男性で、顎周りに無精髭を生やしていた。

宮野「もう少し待っててもよかったのに…！あなたが出てきたら、もう戦うしかなくなっちゃうじゃないですかっ!？」

??? 「いいんだよ、それで。このクズ共に話なんかどうせ通じない。言うだけ無駄、体で分からせるしかないって事」

宮野 「それは…そうですね…」

宮野はそつと顔を伏せ、何かを言いたそうにする。するとその男性は宮野の考えを見抜き、小馬鹿にしたように鼻で笑った。

??? 「ああ…わかった。こうなったからには俺達が死ぬか、あのクズ共が死ぬかするまで終わらないもんな。お前はアレだ…俺達が負けて、アイツらに殺されるんじゃないかと不安なわけだ」

宮野 「……はい」

??? 「まあ大丈夫だろ。敵は見たところ二人だけみたいだし…俺はこう見えてけっこう戦える。わざわざこんな重いもんを武器にして、ずっと鍛えてきたからな」

その男性は辺りを見回し、敵が境野…そして三瀬だけという事を確認すると、巻き付けるようにして肩にかけていた鎖をジャラジャラと鳴らしながら手に持ち、そして構える。彼・悠里・由紀はその見知った人物を前にして、ただ驚き、目を丸くする事しか出来なかった。

??? 「…少年。また会ったな」

「………」

なんでこの人がここにいいのか…。彼はそれを考えるあまり返事を返せない。彼がそうして無言でいると、その男性は自分の側にいる由紀に気付き、その口を塞ぐテープを剥がした。

??? 「…つと。由紀、大丈夫か？」

ペリペリツという音がなり、テープが由紀の口から剥がされる。由紀はそれが剥がれるとすぐにその男性を見つめ直し、半泣きでその名前を呼んだ。

由紀 「まつ、マコト……さん？」

その男性…アサクラマコト朝倉誠は数日前に由紀達が出会った人物だった。あの

時別れた誠とこんなところで出会うとは思ってもおらず、由紀達は本当に驚いていた。

由紀達が誠の登場に驚く中、当の本人は境野…そして三瀬を見つめながら、由紀から剥がしたテープをポイっとその辺に投げ捨てる。

誠「こんなもん貼られてかわいそうに…随分と乱暴だな？」

境野「どこの誰だか知らんが、勝手に剥がすなよ」

境野が苛立ったような表情を浮かべてそう答えると、誠はピクツと眉を動かす…。『どこの誰だか知らんが…』その言葉に反応したらしい。

誠「…んん？お前、俺を忘れてるのか？」

境野「初対面の人間を覚えておく方法があるっていうなら、是非教えてほしいな」

誠「マジか…。おい宮野、コイツ本格的にクズだぞ」

宮野「えつと…本当に会ったことあるんですよね？」

境野に”初対面”と言われて呆れたような表情を見せる誠に対し、宮野が恐る恐る尋ねる。

誠「俺が嘘ついていると思うか？宮野はあのクズと俺…どっちを信じる？」

宮野「私、まだあなたの事よく知らないです…」

顔を下に向け、宮野は誠から視線を逸らす。二人の距離感から察するに、どうやら彼女が誠とは出会ったのは最近らしい。

誠「…ま、それでもアイツらよりは信頼してるんだろ？自分から進んで扉を開けて俺を呼ぼうとしたわけだし。まあお前が開けなくても、俺はもう出てくつもりだったがね。悠里を助けなきゃなんない…」

宮野「ええ、いてくれてよかったです。もしかしたら、扉を開けてもないんじゃないかと思いました…」

誠「ああ、着いたのはついさつきだけだな。まだそれなりの人数がいると思っていたから慎重に…ゆつくりと忍び込んでただけど、残る敵は二人だけだったのか。ダメだぞ、もう少し人員を残しておかないと…。俺みたいな奴が潜り込むからな」

誠は鼻で笑いながら境野、そして三瀬を見つめる。境野はそれを無言のまま見返していたが、三瀬は誠の余裕そうな表情に苛立ち始めていた。

三瀬「ようするに宮野は俺達を裏切り、その男の仲間になったと…そういう事か？」

宮野「いや…私はまだ誠この人の事をそこまで信頼してない。けど…この人は彼女達を助ける為にここへ来た。その時点で、あなた達みたいな人間なんかよりずっとマシな人なんだと思ってる」

三瀬「…へえ」

誠「まあ、今はそれで十分だ。ところで、アンタらは今の状況を理解しているか？人質としてとっていた由紀と未奈この娘は俺と宮野の後ろ。更に悠里も少年のそばだ。つまりアンタらは今、彼女達に手を出せない」

誠は一步前に踏み出し、由紀と未奈を背後に隠す。そして先程まで悠里を殺さねばならない状況にいた彼もまた、悠里を自分の後ろに隠していた。

誠「宮野に対して警戒心が薄かったのと、わざわざ少年に悠里を殺させようとした趣味の悪さが仇あだになったな」

三瀬「ちっ！宮野…お前ぶっ殺すからな!？」

宮野「っ…」

自分らを裏切った宮野へと、三瀬が怒声を飛ばす。

宮野は少し怯えた表情を浮かべながらも、隠し持っていた小さなナイフで由紀と未奈の手を縛るテープを切っていた。そうして二人の両手が自由になると、宮野はそっと誠へと声をかける。

宮野「あとは…：任せていいんですよね？」

誠「もちろん。宮野は由紀と未奈その娘を見といてくれ」

宮野のその問いに、誠は正面の境野らを見つめたままで答える。

宮野は側に立つ由紀と未奈の事をほんの一瞬だけ見つけ、静かに頷いた。

宮野「…：わかりました。お願いします」

三瀬「…：境野さん。この状況、少し面倒じゃないか？」

後方の誠…：そして前方に立つ彼を交互に見てから三瀬が呟く。

先程まで追いつめていたハズの彼は悠里を背後に隠し、ナイフを境野らに向けて構えている…。それはそうだ、彼が境野らに従っていたのは人質がいたからだ、今はその人質の全員が境野らの手を離れている。彼が境野に従う理由はもう無い。

三瀬「あくあ、もう少しでアイツが仲間の娘を殺すところが見られたのに…：とんだ邪魔が入った。こんなことになるなら、もう少しだけ人員を残しておけばよかったなあ…」

境野「…：…」

境野は無言のまま、彼と誠を交互に見る。三瀬はこの状況に多少は焦っているようだったが、境野の表情にはまだ余裕があった。

境野「…：マコトとか言ったな。お前、俺達に勝つつもりか？」

誠「ん、もちろんそうだ。人質さえどうにかすれば少年も自由に動ける。これで二対二…：だいぶ良い状況だろ？」

境野「二対二ね…。どうだろうな…」

そう呟いた境野は目線を彼へと移すと、ニヤリと微笑んで声をかける。

境野「君は…俺達の仲間になってくれるんだよな？」

全く悪びれる様子もなく境野は彼に尋ねたが、当然、そんな図々しい台詞に彼が頷く訳はなかった。

「…ふざけるな。人質がいなくなった以上お前には従わないし、もちろん仲間にもならない」

悠里を背後に隠し、彼は境野へ敵意に満ちた視線とナイフを向ける。だが境野はまだ表情を変えず、落ち着いた様子で言った。

境野「よし、君が俺達の仲間になり、あのマコトって男を三瀬と協力して殺してくれたら丈槍由紀はもちろん、もう若狭悠里も殺さなくていい。二人の身の安全を保証しよう」  
「……………」

境野「…だが、このまま俺達を敵に回すようなら俺達はマコトを殺し、お前も半殺しにする。そして動けないお前の前で若狭悠里…そして丈槍由紀を殺す。出来るだけ残酷に…時間をかけてな」  
「……………」

境野「二対二の状況にはなったが、お前がマコトと組んだところで俺達に勝てると決まった訳じゃない。まあ、腕に自信があるならそのまま俺達とやり合えばいいさ。だがもし俺達に負けたら…若狭悠里、丈槍由紀…。あ、そう言えばあと二人いるんだよな？ 恵飛須沢胡桃と、直樹美紀だったか？ そいつらも連れてきて、お前の前で殺してやろう」

誠（…考えたな。全く、趣味の悪い奴だ）

ニヤリと笑いながらそう告げる境野を前にして、誠は微かに戸惑う…。確かに自分と彼が組んでも勝率は100%ではない。ここで勝てれば悠里も由紀も未奈も救えるが、もし負ければその先に待つものは地獄だ…。もしかしたら彼は自分ではなく、境野らと手を組むかも

しれないと誠は考えた。

誠（そうなたらマズいな…三対一か）

内心では少し焦る誠だが、決して表情には出さない。もし表情に出したら、それをきっかけに彼が境野らと手を組んでしまうかもと考えたからだ。

「……………」

彼は境野達とある程度の距離がある事を確認してから、悠里の口を塞いでいたテープを外す。すると悠里は呼吸を整え、不安そうに彼の名前を呼んだ。

悠里「……………君」

先程まで泣いていたからだろう。悠里の目は真っ赤に腫れ、声もまだ震えている…。彼はそんな彼女の頭にそつと手を置き、そのまま遠方の誠へと視線を向けた。

誠「少年！どうする？俺と一緒にコイツらをぶつ倒すか？それとも、コイツらと一緒に俺を殺すか？」

彼の視線をうけ、誠はそう尋ねた。彼は静かに悠里の頭から手を離すと、ナイフを片手に答える。

「……………答えは決まってる」

誠や境野はもちろん…悠里も由紀も未奈も、彼の答えに耳を澄ました。

境野達と手を組み、誠を殺す事によって悠里達を守るか。それとも…一か八か誠と組んで全員を救う事に賭けるか。既に、彼の気持ちは決まっていた。

「…境野。さつきお前に言ったよな？今は無理でも…いつか必ず殺



すって…」

境野「…三瀬」

三瀬「ちっ！面倒だなあ…！」

彼の雰囲気から答えを先読みし、境野と三瀬は警戒を強める。彼は一歩ずつ境野の方へと歩みよりながら、ナイフを持つ手に力を込めた。

「訂正するよ。いつかじゃない…今、実行してやる」

誠「…よし、やるか」

彼が境野達と距離を詰めるのと同じ間隔で誠も境野達との距離を詰め、境野達を彼と挟むようにして歩み寄る。境野は誠を…そして三瀬は彼を警戒しながら、カッターナイフと金槌をそれぞれが構えた。

「…ッ!!」

境野達との距離があと5mほどになったその時…彼は突如駆け出し、その距離を一気に詰める…。それを見た誠は多少驚いたが、すぐに自分もそれに合わせて駆け出す。

三瀬「バカが…後悔させてやるよ!!」

迫る彼を迎撃するべく、三瀬は金槌を振り上げてそう言った。

だが、彼の耳にその声は届いていない。今、彼の心の内は境野と三瀬への殺意でいっぱい、三瀬の言葉などは耳に入らなかった…。

くもつと先になると思ってたのに…今から殺せる。

今日、この場で…コイツらを殺せるく

彼は降り下ろされた三瀬の金槌をギリギリのタイミングで横に避けると、素早くナイフを振り払う……。放った攻撃をかわされ、体勢を崩しかけている三瀬目掛けてナイフを振るう彼の目はとても冷たく、目の合った三瀬に一瞬恐怖を感じさせるほどだった……。

## 九十一話『逆転』

三瀬「…っツ!!」

迫る彼を倒すべく、三瀬は金槌を振り下ろした。

頭に当てて一発で…とはいかずとも、肩くらいには当たり、いきなり彼を弱らせられるハズだった…。

しかし、その攻撃を彼はかわした。三瀬が想定していたよりもずつと素早い動きで攻撃をかわした後、彼は目の前の三瀬へとナイフを振り払ってきた…。

三瀬「ツ!? つぶねえっ!!」

咄嗟に後ろに飛び退き、三瀬はそれをかわす。

振り払われた彼のナイフは先程の三瀬の金槌同様に空を切り、二人は僅かな距離をとった。

「……………」

三瀬「今のはマジで危なかった…。お前、本気で俺を殺す気なのか…」

今振り払われた彼のナイフ…それを避ける事が出来なかったら三瀬は確実に死んでいた。彼のナイフは、三瀬の首目掛けて振り払われていたからだ。

「この期に及んでずいぶんと分かりきった事を聞くんだな? 勿論、殺す気だよ。境野とお前は色々やり過ぎたからな…。もう、謝っても許す気はない。ここで…確実に終わらせる」

そう告げると彼はまた一気に距離を詰め、三瀬を切り裂くべくナイフを振るう。攻撃を覚悟していた三瀬はそれを冷静に見切りかわしたが、彼はまたすぐにナイフを振り払い、素早く二撃目…三撃目を放

つ。そのせいで三瀬は自身が攻撃を放つ事が出来ず、ギリギリでかわし続けるのが精一杯だった。

三瀬「っ…！」

三瀬（コイツっ…！思っていたよりもずっと厄介だな…!!）

攻撃をかわしながら、三瀬はほんの一瞬だけ自分の仲間…境野の様子を覗き見る。出来るものなら手を貸して欲しかったが、境野の方もマコトを相手にしている為、手助けは期待できそうになかった。

三瀬（あつちはあつちで面倒って訳か…!）

反撃したい三瀬だったが武器にしている金槌は少し大きく、重さもある。一撃の攻撃力こそ高いが、振り払う前後に隙が出来るのが弱点だ…。彼の攻撃をかわしつつ自分の愛用してきた武器に苛立っていると、三瀬は突如何かに背をぶつけた。

三瀬（壁っ!?クソっ!!）

彼の攻撃を避けるべく、三瀬は後方に飛び退き続けた。その結果、壁へと背中をつけてしまい、遂に逃げ場を無くした。

当然、彼はこの期を逃さない。彼は右手に持ったナイフの先を逃げ場の無い三瀬の胸へと向けると、それを突き刺す為に腕を振った。

三瀬「チツ!!」

自らの胸目掛けて放たれた突き。それをどうにかかわしたい三瀬だったが、背後には壁がある為、飛び退いてかわす事はできない…。横に避ければ可能性はあるが、恐らく完全にはかわせないだろう。一か八か、三瀬は彼のナイフを持つ右手そのものを掴むことを試みた。

ガシツ!!

「…!?!」

突きを放った彼の右手、その手首は三瀬の左手に掴まれ、突き刺す寸前のところで動きが止まってしまふ…。三瀬は彼の攻撃を防げた

事でニヤリと微笑むと、彼の手を左手で掴んだまま、金槌を持つ右手を振り上げた。

三瀬「惜しかったな!!」

一言そう言い放ち、三瀬は彼の頭へ金槌を振り下ろす…。

本当は生け捕りにして彼の仲間を目の前で殺してやりたいと考えていたが、思っていたよりも彼は手強い。殺れる時に殺っておこう。そう考えて行動に移す三瀬だったが…。

…ズキツ…。

三瀬「…っ…ぐ?!」

突如、三瀬は腹部に違和感を感じる。

なんだか熱いような、痛いような…初めて感じる感覚。

三瀬は不思議に思い、自らの腹部にそつと視線を向けた…。

「……………」

三瀬「あ…っ…ぐ…っ!」

自らの目が捉えた光景、それは信じられないものだった…。

ナイフを持っている彼の右手を三瀬は掴んでいたのに、その手からナイフはいつの間にか消えていて、彼はそれを自由に動かせる左手に持っていた。しかもその左手に持つナイフ、それは三瀬の腹部に深く突き刺されている…。彼は三瀬に右手を掴まれた直後にナイフを手離し、それを左手でキャッチして持ち替えていたのだ。

三瀬「マジ…かよ…」

刺された箇所を目視した途端、三瀬は激しい痛みを襲われる。

三瀬があまりの痛みを持っていた金槌を床へと落とすのと同様に、彼は突き刺していたそのナイフを三瀬の腹部から引き抜いた。

三瀬「っ…ぐっ…」

立っている事すらままたならず、三瀬はその場に倒れこむ。三瀬は倒れたまま刺された箇所を手で押さえたが、溢れ出る血は止まる気配をまるで見せない。

「お前…胡桃ちゃんを襲ったんだよな？」

倒れた三瀬の前にしゃがみ、その目を見つめながら彼は尋ねる。

三瀬は額に汗をかきながら刺された箇所を必死に押さえ、苦しそうな声で答えた。

三瀬「ああ…。言っ…たろ？殺して…やろうとしたけど、失敗…したんだ…」

「……………」

改めてそれだけを確認して、彼はナイフを握り直す。

すると三瀬は彼に止めを刺される事を雰囲気を感じ取ったのか、開き直るようにして笑い出した。

三瀬「っ…はは…ははっ…！」

「…何がおかしい？」

三瀬「いや…失敗こそしたが、あの胡桃って娘は…どのみち死ぬ。近い内に…な。まあ、お前には…分からない話だろう。なんてったって、お前は信頼されてないんだからな…」

後方で戦う誠を手助けしなくてはいけない為、本当はすぐに三瀬に止めを刺すつもりだった。しかし、奴の放った言葉の意味が理解できず、彼の手は止まってしまう…。

三瀬「今回の事で…お前は…更に信頼を失っただろうなあ…。あの悠里って娘を…殺そうとしたんだもんなあ…？」

「っ…!!」

三瀬「どちらか一人を殺せと言われて…お前は悠里あの娘を選んだ…。あの娘、きつとすげえ…シヨックだっただろうぜ？助けに来てくれたハ

ズのお前が、あつさりと諦める瞬間を見たんだからな…。ははっ…ぎまみろ…」

口から血を垂らしながら、三瀬は不気味に笑う。

彼はそんな奴から目を離し、振り向いて悠里を探した。

悠里はいつの間にか隙を見つけて由紀達の元に駆けていったらしく、由紀・未奈・そして宮野と共に隅で固まり、こちらを不安そうに見つめていた…。

「……………」

三瀬「あんな普通の女の子達の前で…俺を殺せるか？ははっ…殺せるだろうなあ…。お前は俺達同様、ただのクズ野郎だ…。殺しくらい平気な顔です…最低の——」

「…黙れ」

ドスツ！

三瀬「っ……………ご…はっ…!!」

三瀬が言いきる前に、彼はナイフを奴の胸へと深く突き刺さす。

三瀬は刺された胸、そして口から大量の血を溢れさせ、少しするとそのまま動かなくなった…。

「……………」

彼は三瀬の胸にナイフを突き刺さしたまま、微動だにしない…。

自分達の脅威になる敵を一人片付けられたのは喜ぶべき事だが、やはり、一時的とはいえ悠里を見捨ててしまったという事実が悔しかった…。

(いや…悩むのは後だ。まだ…境野がいる…)

彼は突き刺したナイフを引き抜き、ゆっくりと立ち上がると、境野

の元へと歩み寄っていく。三瀬だけではなく、奴も仕留めなくては完全に安心など出来ないからだ…。

くくく

誠「ほっ!!」ブンツ!

彼が三瀬を倒した一方、誠・境野の二人は未だ戦い続けていた。

誠はカッターナイフを持っている境野を近寄せないように距離をとりながら鎖を振り続けたが、境野を遠ざける事は出来ても、ダメーヂを与える事が出来ずにいる。

境野「…っ!にしても武器が鎖とは、随分と変わってるな…」

ジャラジャラと音を発しながら自分目掛けて振られるその鎖を後ろに飛び退いて避ける境野。勢いよく振られるその鎖にはかなりの重みがありそうだ。直撃しようものならそれなりのダメージを負うだろう…。誠は振り払った鎖をグツと勢いよく引いてから自分の元に手繰り寄せ、余裕そうに微笑む。

誠「ああ、変わってるだろ?とところで、この鎖に見覚えは?」

そう言いながら誠は鎖を軽く掲げ、境野にそれを見せつける。

境野は何の事かと思いいながらそれを凝視するが、いくら見たところでそれはただの鎖…。特別何かを思う事はなかった。

境野「?…いや、見覚えもなにも…あるところにはある、ごく普通の鎖だろうか?」

誠「んん…。まあ、それもそうか…。とところで、お前の負けはほぼ確定した訳だが…降参とかするか?」



境野「はあ？何を言ってるんだ？」

誠「後ろ、見てみろって」

不敵な笑みを浮かべながら、誠は境野の後ろを指さす。

一瞬、後ろを向いた途端に襲いかかられるのではと境野は考えた  
が、誠との距離は十分にある…。なら警戒さえ怠らなければ大丈夫だ  
ろうと思ひ、境野はそつと振り向いた…。

境野「……なるほど。確かに、これはマズいな」

振り向いた境野が見たのは血だらけになって倒れている三瀬と、血  
のついたナイフを片手にこちらを見つめている彼の姿だった…。彼  
は境野の元に歩み寄り、少しずつ距離を詰めてきていた。

境野（三瀬は…死んでるみたいだな。まったく、使えないヤツだ…。  
こんなにあっさり殺されるなんてな）

血だまりに倒れて動かない三瀬を見て、境野は舌打ちをする。

予定では三瀬がすぐに彼を負かし、自分に手を貸してくれるはず  
だったのだが、その作戦は泡と消えた。こうなった以上…彼と誠を一  
人で相手にせねばならないが、それは少々難しい…。

境野「さすがにこの状況は良くないな…。二対一ってのは少しばか  
り卑怯だろう？」

誠「二対一？…バカ言え、これは二対二の戦いだ。もつとも、お前  
の相方はあいつに負けて今はダウンしてるみたいだがな」

境野「ああ、だから現状は二対一だろ？これじゃあいくらなんでも  
俺に勝ち目が無さ過ぎる。せめて一人ずつ順に戦わせてくれ。同時  
に相手するのは無理だ」

境野は彼と誠に挟み撃ちにされそうになり、自虐的な笑みを浮かべ  
る。

彼は境野のそんな表情に苛立っているようだったが、誠は一人おか  
しそうに笑っていた。

誠「はははっ!!次から次へと、よく言葉の出る奴だ。もし逆の立場だったらお前はあの三瀬って奴と二人で遠慮なく俺を襲っただろうとか、人質までとつていたお前に卑怯者呼ばわりされたくねえとか…色々ツツコミたい事はあるが、まあいい…」

誠はそう言うってから微笑みを引つ込め、境野へ鋭い目付きを向ける。

その直後、誠は素早く境野の前へと駆け出した…。

境野「つつ!?!」

突然距離を詰めてきた誠に驚きながらも境野はカッターナイフを構え、それを迫る誠の顔目掛けて突く。誠は容易い様子でそれを横に避けると端と端を合わせて短く持ち直した鎖を至近距離でブンツと振り払い、境野の顔面を勢いよく打った。

境野「がッ!!く…そっ!」

振り払われた重たい鎖をまともに受け、境野は後方に吹き飛ぶ。

一瞬の間の攻撃に上手く受け身をとることも出来ず、床に思い切り背中をぶつけるも、武器であるカッターナイフは決して手離さなかった。次に誠が迫った瞬間を狙い、突き刺してやろうと考えていたからだ。するとタイミング良く、倒れている境野のそばへと誠が駆け寄ってくる…。

境野「くっ!!」

倒れていた境野はその状態のまま、ナイフを持った右手を目の前にいる誠目掛けて振り払おうとした。だが…。

ガシッ!!

境野「なっ!?!」

誠「んん、残念」

誠は境野の右手が上がるよりも先に、その手首を足で踏みつけて押さえ込む。踏みつけられた右手はピクリとも動かせず、更に誠は懐に隠し持っていた小さなナイフを取り出した。誠は境野の手首を踏みつけたまま素早く屈むと、そのナイフを右手で構え、境野の首へと突きつけてそのまま床から起き上がらせないようにした。

境野「っ…、くそが…。」

誠「せっかくなんで少し様子見をしてたが、まあこんなもんか。ほら、お望み通り一対一の戦いでお前を負かしてやったぞ。これで満足だろ？」

多少の呼吸の乱れはあったものの、誠はまだまだ余裕だと言わんばかりの表情を境野へ向けて笑った。自らを見下すその男を相手に境野は苛立ち始めたが、右手は動かせない上に、先程あの鎖で殴られた顔が激しく痛む…。鼻からは血が止まらないし、前歯も折れてしまったようだ…。視界もボンヤリとして、今すぐには立ち上がれそうもない…。

「…終わりました？」

誠のそばに歩み寄り、彼が小さな声で尋ねる。その表情は以前誠が見た彼の表情よりも遥かに暗く、荒んだものに見えた…。誠は右手で境野の首へとナイフを突きつけたまま、左手に持っていた鎖を床にそつと置き、辺りを見回す。

誠「とりあえずな。あつちのやつは生きてるのか？」

境野の右手を強く踏みつけたまま、誠は奥で転がっている三瀬を指さす。

すると彼は誠の足に押さえつけられている境野の右手の前に屈み、持っていたカッターナイフを取り上げながら答えた。

「…死んでると思いますよ」

境野から取り上げたナイフを隅の方に投げ捨てながら答え、彼もま

た床に倒れる境野を見下す…。

誠「…そうか。まあこんな世の中だし、コイツらは正真正銘のクズだ。生け捕りにして反省させろ、なんて甘い事は言わないさ。殺せる時に殺した方が良い…」

誠はそう言いながら辺りを見回し、左手で手招きをするようにして宮野を呼ぶ。それを見た宮野はすぐに誠の所へと駆け寄っていき、彼女のそばにいた由紀達も少し遅れてそれに続いた。

誠「宮野、なんか縛れる物あるか？」

もう武器を持っていない境野の右手を強く踏みつけたまま、誠は駆けつけた宮野に尋ねる。すると宮野は腰に着けていたポーチからガムテープを取りだし、それを誠に手渡した。

宮野「これでいいですか？」

誠「十分だ。…これって由紀達の口とか手につけられてたヤツか？」

手渡されたガムテープ…それをついさつきどこかで見た気がした誠だったが、すぐにどこで見たのか思い出した。それは誠にここに現れた時、由紀や悠里達の口と手の自由を奪っていた物だ。

宮野「は、はい…。境野さんに指示されて、私が……」

申し訳なさそうな顔をして宮野が答えると、誠はベリベリと音をたてながらそのテープを伸ばし、目の前に転がる境野…その血に汚れた顔を見つめる。

誠「…なるほどね。にしてもお前、普段から誰かに指示してばかりで、自分からは動かねえんだろ？そんなんだからあんなにあっさり俺に負けるんだよ」

境野「ちっ…！黙れ、お前ら全員すぐに——」

ガッ!!

境野「ぐッ!!?」

誠の言葉を聞いた境野がそこまで言ったその瞬間、そばにいた彼が境野の顔を踏みつけた。それに対して誠は大した反応をしなかったが、悠里と由紀は彼の突然の行動にかなり驚いていたようだ…。その後、彼が足を顔から退けると境野は鼻からより一層の血を溢れさせ、苦痛そうな表情で呻いた。

境野「あ…がつ…：…ううつ…!」

「…お前が黙れ」

一言そう呟き、彼は冷たい目で境野を見下す…。

そばでそれを見ていた由紀は彼から目を背け、静かに俯いた。

誠「容赦ないな…。まあコイツらにはかなりの恨みがあるだろうし、当然か」

「……………」

誠「とりあえず、このテープで一度コイツを縛る。少しだけ手伝ってもらっていいか?」

「縛る…?…どうして?」

誠「コイツとは少しだけ話したい事がある。その間ずっとこうしてるのは面倒だろ?」

「…わかりました」

彼が頷くと、誠は境野の右手を押さえていた自らの足をそつと退ける。

彼はすぐに境野の両手を押さえ、それを誠がテープで縛るのを補助した。

くくく

境野「……」

誠「……………よし、こんなもんだろ」

境野の両手を縛り終え、誠は満足そうな顔をする。

それを手伝っていた彼は境野は途中で暴れだすと思い警戒していたが、誠から受けた一撃のダメージが思っていたよりも大きいらしく、境野は終始ぐったりとしていた。

宮野「これで、終わりですか？」

誠「ああ、終わりだ。ほら、簡単だったろ？」

恐る恐る尋ねる宮野を相手に、にっこりと微笑みながら答える誠。

一方で悠里は未奈と共に彼のそばに歩み寄り、そつと肩に手をあてながら声をかけた。

悠里「…怪我、してない？」

「僕は……………大丈夫です」

悠里「そう…よかった…」

微かに瞳を潤ませながら、悠里は安心したように呟いた。

彼女は彼の背中を優しく撫でると、少しだけ離れた所からその様子を見ていた由紀を手招きして呼び寄せる。

由紀「……………ん」

由紀はトコトコとその場に歩み寄ると彼の顔を覗いたり、かと思つたらすぐにそれを逸らしたりして視線を落ちつきなく動かす…。彼と由紀の間には、微かに気まずい雰囲気漂っていた…。

悠里「由紀ちゃん…」

二人が無言でいるのを見て、悠里もどこか気まずそうに顔を俯ける…。

悠里は彼に殺されかけた事を恨んではいなかった。ああする他ない状況だと理解していたし、何より彼は悠里を選ぶ事で由紀を助けよ

うとしてくれた。だがそれが悠里にとっては納得のいく選択だったとしても、由紀にとつては嬉しくない選択だったらしい…。

「…みんなも、怪我はないですか？」

彼は悠里と由紀、そして未奈を順に見つめて尋ねる。

悠里はそれに無言で頷いて返事をし、怪我していない事を伝える。そのすぐ後、悠里に続くように未奈が口を開いた。

未奈「あのつ…ごめんなさい…。私たちのせいで、由紀ちゃん達を危ない目にあわせちゃった…！」

未奈は自分の仲間である弦次が境野達と繋がっていたせいで、由紀達を巻き込んでしまったと思っていた…。未奈は目の前の彼に必死に頭を下げながら、肩を震わせて泣いていた。

「いや、あなた達のせいじゃない。どちらかと言えば…これは…」

境野「はは…はははつ…。ああ、どちらかと言えばこれは君のせいだな。君が彼女達のいる屋敷に訪れなければ、俺もこんな事はしなかった。君がああ屋敷に現れたと聞き、つい会いたくなつたからこそこんな事をしかしてしまつたのさ…」

地面に膝をつき、両手を後ろで縛られた境野が彼をじつと見つめながらヘラヘラと笑う。

境野「だから、全部君のせいだ。君さえいなければ、今回のような出来事は——」

誠「それ以上つまらない事を言うようなら、今この場で殺すからな…」

鋭い視線を境野へと向け、誠はいつもより低い声で告げる…。  
すると境野は鼻でため息をつき、そのまま口を閉じた。

誠「俺もそこまで事情を理解している訳じゃないが、まあ全部このクズ野郎が引き起こしたって事には違いないだろ」

そう呟いてから、誠はそばに立ち尽くしていた彼を少しでも元気づけようとその背をバシツと叩く。

誠「お前は必死に悠里達を救おうとした。それで十分だ。お疲れさん」

「……………」

彼は返事を返さない。

誠の言葉はともありがたかったが、悠里に刃を向けてしまった時の光景が今も頭から離れない…。

誠「それとそこの娘…えつと…………名前は何？」

俯きながら一人啜り泣いている未奈へと尋ねる。

未奈は少しずつ呼吸を整えながら、ゆっくりとその顔をあげた。

未奈「ぐすつ…………ミナ…です」

誠「よし、ミナ…お前も気にするな。お前らがそうやってウジウジ悩んでいると、このクズが喜ぶ」

そばにいる境野をちらつと見て、誠はそう呟いた。

だがそれでもまだ泣き止まぬ未奈を見て、誠はため息をつきながらその頭をガシガシと撫でる。

誠「泣くなつての。いや、さっきまでの状況を考えたら無理もないか…」

未奈「っ…。ご、ごめんなさい…」

誠に頭を撫でられた未奈はようやくやく泣き止み、ほんの少しだけ笑った。

それはとても弱々しい笑顔だったが、心配する誠を安心させるには十分だった。

誠「それでいい。さて…待たせたな」

未奈の頭から手を離し、誠は境野の方へと振り返る。



床に膝をついている境野は血の垂れている顔をゆっくりと上げ、目の前に迫る誠を見上げた。

境野「俺を……殺すのか？」

誠「さつきも言ったろ、お前とは話したい事がある。もつとも、その後どうするかはまだ内緒だ。せいぜい楽しみに待ってる……」

そう告げて誠はニヤリと微笑む……。

その笑顔はどこことなく恐怖を感じさせるもので、境野はタラリと冷や汗を流した。

つい先ほどまでは悠里と由紀を人質にし、それを手札にこれ以上なく彼を追い詰めていた境野……。しかし突如宮野が裏切り、誠が現れた。ただそれだけの事で10分としない間に立場が一変し、今度は自らが絶体絶命の状況へと追い詰められたのだった……。

## 九十二話 『悩み』

誠「さあ、お話しの間だ」

彼と由紀と悠里…そして未奈と宮野が見守る中、両手を縛られ、膝をついている境野の前に誠は座る…。

境野「…なにを話すって？」

誠「そうだな…。お前にはまず、俺の事を思い出してもらわなきゃな。お前は俺の事を思いつきり忘れてるみたいだが、俺達は一度会ってるんだよ」

目線を合わせる為に座った誠は目の前にいる境野の目をじっと見つめ、ニヤリと笑う。一見するとヘラヘラしているようにも見える誠の表情だったが、その奥に何か黒い感情が込められている気がした…。

境野「…勘違いだろ。お前みたいな奴は知らない」

世界がこうなつてからの記憶を重点的に思い返し、いつ誠と会ったのかを考える境野。しかし、いくら記憶を辿っても目の前にいる誠と出会った時の記憶は思い出せなかった。

誠「一応言っておくが、俺がお前と会ったのは世の中がこんな状況になった後のことだ…。ほら、せっかくヒントをやったんだ、思い出させて」

境野「……………」

誠「言い忘れてたが、思い出せないようならこの場で俺がお前を殺す。だから頑張れ」

改めて『殺す』と言われ、境野は必死に記憶をよみがえらせる。

だがいくら必死になったところで、やはり誠の事は思い出せない

…。

境野「…ダメだ、わからない。やはり俺達は初対面じゃないか？」  
誠「ヒント2…。以前にお前と会った時、俺はあと二人の仲間を連れていた。一人は俺よりも少し年のいった男。もう一人はここにいる嬢ちゃん達と同じ年くらいの女の子だ」

そばに立つ由紀達を指さし、誠は告げる。

境野「……………」

そのヒントを聞き、境野の中で何かがざわつく…。

あと一歩の所まで来ている気がするが、まだそれを思い出せない…。

中々答えを出さない境野に対し、誠は更にヒントを出した。

誠「ヒント3…。これは以前、お前が俺達との別れ際に言った台詞だ。一言一句、聞き逃すなよ…」

境野「……………」

誠は一度深く息を吸い、その台詞を告げる…。

境野はもちろん、そばに立つ由紀達もそれを静かに聞いていた。

誠『俺達はお前達を殺したりはしない…。ただ、あまりのんびりしてるとあの化け物共に食われるから気を付けるんだな』

境野「…………!!」

この瞬間、境野は完全に思い出す…。

境野は目の前にいる誠の顔を改めてじっと見つめると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

境野「…思い出した。お前、あの時会った三人組の内の一人か…。  
あの時とは雰囲気が変わっていたから分からなかった…」

誠「ん…変わったか？自分ではあまり分からないけどな」

境野「あの時はもつと…弱そうな人間だった。だから俺も興味を示

さずに”あんな事”をしたんだろう…”

誠「もしあの時の俺に興味があつたら、ああなつてはいなかつたと？」

境野「ああ…あの時の君がもし、今の君のような人間だったなら、仲間引き入れようとしたらどうな…」

誠「それはそれは…惜しい人材を逃したな」

小馬鹿にしたように笑いながらそう告げ、誠はすつと立ち上がる。するとすぐ、境野が誠に尋ねた。

境野「そういえば…一緒にいた二人はどうした？」

誠「……………」

その問いを聞いた途端、誠の表情が険しい物になる。

だがそれはほんの一瞬だけで、すぐに今までのようなにやけ顔に戻った。

しかし誠がそんな表情で放った言葉はとても笑えるような物ではなく、そばでそれを聞いていた彼や由紀達の顔色は変わった。

誠「…助からなかった。あの日以来、俺はずつと一人でお前達を探していた」

悠里「…マコトさん…どういふ事ですか？」

いてもたってもいられず、悠里は尋ねた。

誠はそんな彼女と目を合わさず、目の前で跪く境野を見ながら答える。

誠「外にいる化け物共が出始めて間もない頃、俺は二人の生存者と一緒に暮らしていた。一人はオッサン、もう一人はお前達と同じくらしい年の女の子だ」

悠里「……………」

誠「あの二人とはたまたま会っただけで、元々の接点なんざ無い。けどまあ、お互い帰る場所も行くべき場所も無いし…。三人であの化け物共を避けながら、毎日を必死に生き抜いていた訳だ」

明るめのトーンで語りながらも、誠はじつと境野を見つめていた…。

誠「そんなある日、コイツが大勢の仲間と一緒に俺達の前に現れて…そこからはあつという間だ。俺達はコイツらによつて身動きが取れない状態にされ、持っていた物資を全て奪われた」

「アンタら、ずっとそんな事ばかりしていたのか…」

彼は境野を睨み付け、呆れたように呟く。

しかし当の本人は反省した様子を見せず、薄ら笑いを浮かべていた。

境野「弱そうな奴らがいたら貰える物だけ貰い、役に立ちそうな人間がいたら仲間に引き入れる…。この世界で生き残るのには中々良い方法だと思うけどな？」

悠里「ツ！あなたって人は…！」

身勝手な言葉をぬけぬけと放つ境野が許せなくて、一步前に足を踏み出す悠里…。誠はそんな彼女を手で制し、落ち着いた様子で話を続けた。

誠「ただ物資を奪われたくらいならまだいい…。問題はその後…：コイツは…俺達を縛りつけたままそこを出ていった…。しかも、周辺にいた化け物共をわざと誘き寄せてからな…」

由紀「えっ!？」

悠里「…：酷い」

境野「…：…」

誠「確かに、お前は直接手を下していない…。だが身動き出来ない状態で放置され、奴らまで呼ばれたら…」

ほんの少しだけ、誠の表情が曇る。

境野は誠のそんな表情を見て、嬉しそうに笑った。

境野「…なるほど、あの二人は助からなかったかあ…」

誠「あの時、お前達は落ちていた鎖で俺達を縛った。だけど俺のだけは縛りが甘く、奴らに食われるギリギリのところで解けた…」

境野の挑発的な発言を無視して、誠は床に置いていた鎖を拾う…。

誠「これはその時の鎖な訳だが…お前は覚えていなかったか。まあ、普通の鎖だしな…」

境野「記念として大切に取っておいたのか…？そんなに喜ばれるとは、くれてやった甲斐があるってもんだ」

可笑しそうに笑う境野を気にせず、誠はじっとしている…。

だがその話を聞いていた彼女達は我慢の限界だった…。

悠里は境野を再び睨み付け、声を震わせる。

悠里「マコトさんっ！この人は…この人はっ…!!」

誠「気にすんな…言わせておけ」

境野「お前、目の前で自分の仲間が食われるの見たか？どんなだった？そういえばあの時いた女の子は、俺達に縛られてからずっと泣いてたっけなあ…。食われる時も泣いてたか？見たかったなあ…」

「このっ…!!」

悠里同様、彼も我慢の限界に達し、境野の胸ぐらを掴む。

彼はそのまま境野を床に押しさえつけるとしまっていたナイフを取りだし、それを振り上げた…。

境野「ぐっ！」

境野の視界に映る彼の目は怒りに満ちており、そのナイフを勢いよく境野の頭へ振り下ろそうとしていた。このままいけば境野は彼に殺されていたのだろうが、誠が彼のナイフを持つ手を掴んだ事でそれは止められた…。

「っ!？」

彼はマコトの行動に驚きながら、目で訴える。

『こんな奴は殺すべきだ』と…。

誠は彼のそんな思いに気づき、そつと口を開いた。

誠「…もうちつとだけ待っててくれ」

「……………」

そう告げられた彼は境野を離し、悠里達のそばへと戻る…。  
そんな彼の背を見ながら、誠はずつと気になっていた事を尋ねた。

誠「おい、胡桃と美紀は？」

「…未奈この人の屋敷にいる。無事だよ」

誠「…そうか、そりやよかつた。一安心だ…」

未奈に視線を向けながら答える彼を見て、誠は安堵のため息をつく。

この場に来て由紀達と再会してからずっと、あの二人がいないのが気がかりだったからだ。

境野「どうだかな…。もし俺が、あの屋敷に仲間を送ったって言うたらどうする？」

由紀「えっ…うそっ!？」

誠「…宮野、どうなんだ？」

驚きの声をあげながら戸惑う由紀を見て、誠はすぐさま宮野に尋ねる。元々境野の仲間だった彼女ならば、何か知っていると聞いたからだ。

宮野「まず嘘だと思います…。ここにいた人員の殆どは如月きんづきさんっていう…別行動中の仲間の元に送りましたから。あの屋敷に送るよな人員はいません」

誠「…だだよ。安心しろ由紀、嘘みたいだからさ」

由紀「ほ、ほんとだよね？」

まだ安心出来ないらしく、由紀は宮野に尋ねる。

宮野は彼女の目をじっと見つめ、優しい声で答えた。

宮野「うん、本当だよ。だから安心してね…。その…私の事なんか、

信じられないと思うけど」

由紀「…うん。わかった…、信じるね？」

宮野「…うん」

信じると答えてくれた由紀を見て、宮野はどこか嬉しそうに微笑む。

由紀は彼女のそんな笑顔を見れた事で信じてても大丈夫だと確信し、自らも微かに微笑んだ。

境野「宮野：お前、いつから誠コイと手を組んでいた？」

宮野「…一昨日からです」

宮野が小さな声で答えると、誠がその会話に割って入る。

誠「一昨日、俺はようやくお前がこの隠れ家を見つけた。でもお前は相変わらずぞろぞろと仲間を引き連れていたからな…かなりまいったよ」

誠「いくら俺でも、大勢の仲間がいるお前の前に堂々と出ていく程間抜けじゃない。だから、少人数で行動しているタイミングを見計らい、お前の仲間を少しずつ減らしていこうと考えた。ちようどその矢先だ：外でここを見張っていたら、三人だけで外に出ていく奴らが出た。しかもその内の一人は気の弱そうな女ときた」

そばに立つ宮野の事を見つめ、誠はニヤリと微笑む。

どうやらその一人というのが宮野らしい…。

誠「あとの二人はガラの悪そうな兄ちゃん達だったから、容赦なく不意打ちした。殺さずに済ませたいところだったが、よく見れば以前俺達を襲った時にいた奴らだったんでな…。かなり凶暴だったし、処分した」

誠「そうして二人を仕止めた後、最後に残った女：宮野を見た。宮野はその場から逃げる事も出来ず、震えながら怯えていた。自分も殺されると思ったんだろうな…。でも、俺はそんな女を手にかける程クズじゃない：俺は宮野をどうにか落ち着かせ、自分と手を組んでくれ



と頼んだ。そうすりゃ、お前に会うのがいくらか楽になるからな」

境野「なるほど…じゃあ一昨日宮野が報告してきた『感染者による被害で二人死亡』ってのは嘘で…本当はお前が殺ったのか」

境野が誠を見てから呟くと、誠はニヤニヤしながら宮野の肩を叩く。

誠「そんな風に誤魔化してくれたのか？ ナイスだ宮野」

宮野「は…はい」

肩を力強く叩かれ、少し迷惑そうに返事を返す宮野。

彼女は叩かれた肩を自らの手で撫でながら、誠と組むことにした理由を境野に語り始めた。

宮野「私も最初は悩みました…。マコトさんと手を組んだところであなた達をどうにか出来るとは思えないし、それに裏切りがバレたら私はきつと殺されてしまいます…。でも、あなた達が他の生存者達を相手に暴れるのを見ているのにももう堪えられないし…本当に悩んで…悩んで…そんな時、あなた達はこの娘達に手を出そうとし始めた」

彼と由紀、悠里、そして未奈を見つめてから、宮野は顔を俯ける。

彼女はすぐにその顔を上げ、今度は境野をじつと見つめた。

宮野「相手は若い娘達なのに、それでもあなた達は容赦無い作戦をたて始めた。私はそれが信じられなくて…一人でこつそりとマコトさんに会いました。マコトさんを頼らなければ、彼女達の誰かが殺されてしまうと思ったから…」

誠「危険を承知で宮野には俺のいる場所を教えておいたんだが…正解だったよ。お前達が狙っている娘達つてのが由紀達だつてんだからな。これにはさすがに驚いた…」

宮野「マコトさんと彼女達が知り合いだと知り、手を組むことを決意しました。私は境野さんが如月さんに人員を分ける事も知っていたので、狙うなら今日だこの人に告げたいんです。もっとも、私と三

瀬以外の全員を送るとまでは思っていないませんでしたけど…」

誠「人質までとつての作戦だったんだ、ボディーガード用の三瀬と、万が一怪我した時の為にお前だけいれば十分だと思っただらう。かなり甘い考えだったけどな」

境野「……………」

語る二人を前にして無言の境野…。

自らがおかれている状況をようやく理解して黙っていたのかと思っただ誠達だったが、そうではなかった…。

境野「そうか…じゃあ、お前は宮野と組んでここまで来れた訳だが、目的は何だ？俺に復讐することか？」

誠「まあ…そうかもな。さて、お前も俺の事を思い出した訳だし、話は終わりにするか…」

誠がそう告げた途端、境野は一人、笑い声を堪えていた。

最初は堪えていたその声は段々と大きくなり、最後には普通に笑い出す。

境野「っ…ははっ！あははっ…！」

誠「…なんだ？」

境野「いや…悪いな。お前の復讐は上手くいかないと思うぞ」

誠「それはないだろ。俺が今ここでお前にナイフでも突き刺せば、もうそれで終わりだ」

境野「俺を殺したとして、その後はどうする？さつき話に出たとおり、俺は今人員を他のチームに分けている。貸したそいつらは早ければ今夜…遅くても明日の朝にはここに帰ってくる。連中が帰ってきた時、ここに俺がいなきやおかしいだろ？」

誠「…宮野、コイツの貸した人員つてのは全部で何人くらいだ？」

宮野「十人ほどです…。でも、もしかしたら少し減っているかも知れません。彼等は他の生存者グループとの戦いの為に連れていかれましたから。怪我…もしくは死亡した人もいるかも」

もし大勢で帰ってこられると面倒な為、宮野は期待を込めてそう

言った。

しかし、境野はそんな微かな期待すらも打ち砕こうとするかのようにして言葉を放った。

境野「俺の貸した仲間の何人が今回の戦いで死んだとして、俺達に戦利品を分る為に如月は自分達の仲間も引き連れてここにくるハズだ。奴のとこの仲間と俺の貸した仲間とを合わせりゃ、まだ最低でも二十人近い数は残っているハズ：それがお前達に止められるか？」

誠「：なるほど、そりゃ難しいだろうな。」

境野「もしアイツらが帰ってきた時に俺が死んでたり、もしくはいなくなったりしたら：真っ先に疑われるのは彼やミナだ。そうなれば連中はすぐにでもあの屋敷に攻め込むだろうな」

そばで黙っていた彼や未奈を見て境野が微笑み、誠は頭を悩ませる。

今ここで境野を殺したとしても、まだ終わりではないのだ。

奴の仲間である全員から完全に逃れる事が出来なければ、自分とはもかく：未奈達はいつまでも安心出来ないだろう。

未奈「：どうすれば……」

誠「：その屋敷捨てて：全員で逃げてみるか？」

誠は仕方なくそう提案するが、未奈はそれに賛同しない……。

彼女には賛同出来ない理由があったからだ……。

未奈「でも：私達の家には小さな子供がいるんです。一時的にならともかく、長い間外に出るといのは：少し気が進みません」

誠「：そうか」

境野「シラユキの事、心配だよなあ……？あの屋敷ならあの娘を守り続けていられるかも知れないが、外に出たらそうはいかない。ずっと見張っていないと、いつあの化け物達に襲われるかも知れないからな。寝る間もないだろうさ……」

「……じゃあどうしろってっ？」

彼が境野の前に立ち、その顔を睨む。  
すると境野は嬉しそうに笑い、彼等に提案した。

境野「君とマコトが俺の仲間になるというのなら、俺達は二度とあの屋敷に近寄らない。彼女達全員の安全を保障してやろう」

誠「…宮野は？」

境野「君達二人が手に入るなら、もうソイツはどうでもいい…好きにしろ」

境野は宮野を軽く睨み、吐き捨てるように告げる。

それに対して俯く宮野を見た後、誠は隅で倒れている三瀬を指さした。

誠「こつちは一人殺したつてのに、仲間になればそれもチャラなのか？」

境野「ああ…アイツは殺されるべくして殺されたんだ、構わないさ。あんな役立たずと引き換えにして君達のような人材が手に入るなら、こつちとしては満足だ。君達二人は以前よりも遥かに成長していた…本当に素晴らしい…」

誠「ふうん…」

不気味に笑う境野を前にして、誠は顎に手をあてる。

誠はそのまま考え事をするようにして呻きながら、彼のそばに歩み寄った。

誠「どうする？仲間になれば彼女達は救えるかもだぞ？」

「さて…どうだろう…」

二人がそんな会話を交わしていると、それを聞いていた悠里達がそれに割り込む。彼女達は焦ったような表情を浮かべ、二人の事を止めようとした。

悠里「そんなのダメよ!!」

未奈「そうですっ！大体、この人が約束を守る保障だつてないんで

すよ！」

誠「わかってるよ、ほんの冗談だ。本気にすんなって」  
迫る彼女達を目前にして誠はそう告げ、彼と共に境野を見下す…。  
ここまで来た以上、もう退く事は出来ないと思っていた。

境野「それで…そっちの返答は？」

誠「悪いが却下だ。お前の仲間にはならない…。」

誠がそう答えると、彼もまた小さく頷く。

そうして二人に睨まれた途端、ようやく境野から笑みが消えた。

境野「二人とも…ここまで成長したのは俺のおかげだろう？少しは感謝してほしいな」

誠「俺はしてるぜ。あの時お前達に襲われたおかげで、この世界で注意すべきは化け物達だけじゃない…人間も危険だって学んだからな」

「……………」

境野「だが、あくまで復讐はするつもりか…まいったな」

誠「いや、かなり悩んださ。お前なんかを探すのは止めて、自分の身を守る事だけに集中しようかとも思った…。お前を殺したって、あの二人は生き返らないしな」

目の前で失った二人の仲間を思い出しながらそう言って、誠はゆっくりと歩き出す。進んだ場所は境野の元ではなく、由紀達の方だった。誠は由紀と悠里の前に立ち、二人を交互に見つめる…。

誠「でも…コイツらにまで手を出したってんじゃ、さすがに我慢の限界だ。お前は俺に優しくしてくれた人間を…また殺そうとした」

誠の声が低くなり、ふざけた雰囲気が無くなっていく…。

誠はそのまま境野の元に歩み寄り、背後から首に鎖を巻き付けた。

境野「つぐ…!!あ…が…!!」

鎖を掴む手に力を入れ、そのまま境野を引きずっていく。

誠はそうして外へ通じる扉に手をかけると、彼に確認をとった。

誠「悪いが、コイツは俺に任せてくれるか？由紀達に酷い事をしたのも許せないが、俺はコイツに仲間を殺されてるからな」

「……自由こ」

誠「どうも……。じゃあ、車の準備だけしておいてくれ」

悠里「わ……わかりました」

誠は微かに微笑み、境野を引きずって外へと出る。

そうして外の道路に出るやいなや、誠は少し離れた所にあるフェンスに目をつけた。

誠「……あれでいいか」

首を絞められて呻く境野の声にこそせず、誠はそこに歩いていく。

たどり着いた頃、境野の顔は青ざめかけていたが、まだ息はあった。誠は境野の首に鎖を巻き付けたまま、その端をフェンスの隙間に通して絡めていく……。

長い鎖がゆるまぬようにしてフェンスに絡ませた後、誠は端を雑に結んだ。鎖を結ぶのは難しかったが、やってしまえば案外がっしりと絡まり、多少引っ張ったくらいでは外れなかった。今や境野は頭をフェンスに固定され、更には両手も縛られたまま……。どうにか動かせるのは両足だけだった。誠はそれを満足そうに見つめると、鎖から手を離して数歩下がる。

境野「な、なにをする気だ……」

誠の手が離れた事によって首が少し楽になり、境野はどうか声を出せるようになる。境野の前にいる誠は、足元に落ちていた大きめの石を拾いあげていた。

誠「俺……結構根に持つタイプだったんだな……。ずっと、これをやつ

てやりたかった…」

そう言つてニヤリと微笑むと誠は大きく振りかぶり、その石をそばにあつた建物…その窓に向けて投げつけた。ガシヤァン!という大きな音が辺りに響き渡り、窓ガラスの破片がパラパラと地に落ちる。

境野「なっ…!?!」

周囲に響く大きな音…そして身動きの取れない自分…。

境野は嫌でも自らの状況を理解せずにはいられなかった。

少しするとどこからか物音や呻き声が聞こえ始め、境野は必死に体を動かす。

境野「っ…!くそ…くそっ!」

いくら身を振らせてもフェンスに固定された頭は動かせず、代わりにガシヤンガシヤンとフェンスが揺れて音を鳴らす…。両手を縛っているガムテープもまるで外れず、境野は次第に焦り始めた。

誠「その鎖は返す…。縁があつたらまた会おう」

誠はそつと背中を見せ、由紀達の待つ倉庫へ向けて歩き出す。

だが誠は数歩歩いたところでピタツと立ち止まり、くるつと振り向いて境野に言つた…。

誠「ああ…そうだ…。」

誠「あまりのんびりしていると…化け物達に食われるぞ?」

境野「ぐ…うっ!!」

それだけを告げると、再び背中を向けて歩き出す…。

ある程度誠がそこから離れた後、ガシヤンガシヤンという大きな音

…そして境野の苦しむような叫び声が聞こえた。

境野「つぐあ!!あ…!!ああッ…!!く…そがあ…!!」

振り返って見ると、大勢の”かれら”が境野のいた場所に密集していた。

境野の声はしばらくすると聞こえなくなり、誠は再び歩を進める…。

誠「これで少しは他人の痛みを知っただろ…。おっさん…嬢ちゃん…とりあえず仇は討ったからな…。ちよいと時間かかったが、許してくれ」

一人歩きながら、ボソツと小さく呟く。

そして倉庫へたどり着くとちょうど由紀達のキャンピングカーが動き始めており、中から宮野が降りてきた。

宮野「とりあえず、一度ミナちゃんの屋敷に向かいます。えつと…

境野さんは？」

誠「アイツらの餌にしてきた。さあ、行こうか」

誠のその言葉は開かれていたドアから車内に入り、境野の死を全員が知った。直後に誠は宮野と共に車へ乗り込み、そのドアを閉める。運転席には悠里がいたが、彼女はかなり疲れていそうだったので交代する事を提案した。

誠「俺が運転する。悠里は休んでろ」

悠里「でも…目的地…」

誠「ミナ、お前の家だろ？ナビ頼めるか？」

未奈「はっ、ハイっ!!」

半ば無理やりに悠里を運転席から引き剥がし、誠はそこに座る。直後に未奈はその隣の助手席に座り、一同を乗せた車は発進した…。



悠里「……ふう」

ため息を一つつき、悠里は彼が座っている席の真正面にある席へと腰を下ろす。実際かなり疲れていた為、誠が運転を代わってくれたのはありがたかった。

「……………」

彼は悠里の真正面、そこでそばにある窓の外をじつと眺めていた…。

由紀は悠里達の横にある席…そこで宮野と向かい合っている。

悠里は由紀達には聞こえぬよう、小さな声で彼を呼んだ。

悠里「……ねえ」

「…はぐ」

彼が返事を返し、チラツとこちらを見つめる。

悠里はそれに対してニコツと微笑み、小さく囁いた。

悠里「由紀ちゃんを守ろうとしてくれて…本当にありがとう…。私

の事は気にしないでいいから、あなたも元気だして？」

「……………」

何も言わず、彼はそのまま顔を伏せてしまう…。

悠里はそれ以上彼に声をかけなかったが、とても心配だった。

彼はまだ、由紀とろくに会話をしていない…。

それになにより…。

由紀「……………」

由紀が彼を避けているような…そんな気がした。

悠里「……はあ」

由紀と彼の事…それに近い内に帰ってくるであろう境野の仲間達

…。

悩みが尽きず、悠里はまたため息をつく。

席に背中を預けそっと目を閉じると、疲れのせいもあり、悠里はあつという間に眠りについてしまった…。

## 九十三話『ただいま』

胡桃「……………」

美紀「……………」

未奈の屋敷…その中にある二階の広間にて、胡桃と美紀は彼や由紀達の帰りを待っていた…。二人は大きなテーブル前にある席に並んで座っていたが何か会話を交わす訳でもなく、互いに無言のまま…。彼女達その他、弦次もその部屋にいたが彼女達とは離れた席に腰かけており、こちらも無言のままだった。

美紀「…遅い、ですね…」

少し気まずい雰囲気はどうにかしようと思ひ、美紀は隣にいる胡桃へと語りかける。彼女の言う『遅い』とは彼達の帰りを指していた。由紀達を助ける為にここから彼が出ていつてから既に2時間近く経過…。いくら彼を信じているとはいえ、時が経てば経つほど嫌でも心配になってくる…。

胡桃「ああ…そうだな……………」

両手で頭を抱えながらテーブルに顔を伏せ、力なく呟いて返事する胡桃…。美紀はそんな胡桃の肩にそつと手をあて、彼女を慰めるようにしながら弦次へと視線を向ける。

美紀「…さんが向かったその人達の住み家っていうのは…わりと近場なんですよね？」

弦次「…歩きでも、20分とかからない距離です」

美紀と目を合わさず、俯いたままで弦次は答えた。

その答えを聞いた美紀は視線を再び胡桃に戻し、頭を悩ませた。

美紀「じゃあ…もう戻ってもいい頃ですよね…。途中で”かれら”に襲われたりして、怪我とかしてなければいいですけど」

胡桃「それは大丈夫だろ……。あいつは、そんな簡単にやられたりしない……」

美紀「……そうですね」

俯いていた顔を少しだけ上げて言った胡桃を見て、美紀は安心したように微笑む。ほんの少しだけ、胡桃に元気が戻った気がしたからだ。直後に胡桃は顔を完全に上げ、辺りを見回す。

胡桃「……そういや、白雪は？」

弦次「自分の部屋に戻って、大人しくしてるように伝えました」

いつの間にかいなくなっていた白雪の居場所を尋ねると、すぐそれに弦次が答えた。それを聞いた胡桃は席からそっと立ち上がり、その場で体を伸ばした。

胡桃「……じゃ、少しだけ白雪と遊んでくるかな……。そうやって待ってりゃ、きつとすぐに——」

美紀「……あれ？」

胡桃「ん、どうした？」

美紀は何かを感じたのか、突如席から立ち上がる。

胡桃はそんな彼女を横目に見て、不思議そうな顔をした。

美紀「音……しませんでした？」

胡桃「音？なんの？」

テーブルに両手をつき、美紀が言う。

胡桃は彼女の言う『音』には全く気づけず、首を傾げた。

美紀「いや……気のせいかもしれませんが、入り口の扉を開けるような音が……」

弦次「……」

胡桃「……少し見てくる」

二階にあるこの広間から一階にある入り口はそう離れていない為、周りの静けさや、扉の開け方によつては微かに音が聞こえる。今回そ

の微かな音に気づいたのは美紀だけ、しかしそれも気のせいかも知れない。だがもし本当に誰かが扉を開けたのなら、それは……。

バタン…

胡桃は広間の扉を開け、廊下へと出る。

そしてすぐ先にある階段へと向かおうとした瞬間、誰かがそこを上がってくる足音が聞こえた…。

胡桃（やっぱり…誰か来た！）

聞こえる足音は一人だけの物ではなく、複数人の物…。

もしかしたら彼が失敗し、敵が来たのかも知れない…。

しかし胡桃はそういつた考えを捨て、自らそこへと歩み寄った。

この足音は絶対に仲間達の物だと、そう信じたから。

…ドツ！

胡桃「うわっ！」

そこへと向かった瞬間、ちょうど曲がり角から現れた誰かとぶつかる。

胡桃がぶつかったその人物もまた、フラフラとよろめきながらこちらを見ていた。

由紀「いたた……。あれ？くつ…くるみちやくんっ!!」

胡桃「由紀っ!？」

由紀は最初こそ胡桃とぶつかった際の痛みに顔をゆがめていたものの、その相手が彼女だと気づいた途端嬉しそうに笑い、そして抱きついてきた。胡桃はそんな彼女の背に手をまわし、その感触を確かめる…。

由紀「胡桃…ちゃん…胡桃ちゃんっ!!」

由紀は笑っていたかと思えば、急に泣き出して胡桃の胸に顔を埋める。胡桃は彼女の背を撫でて本物の由紀だと実感しながら、彼女をよ

り強く抱きしめた。

胡桃「由紀…よかった…怪我とかしてないか!？」

由紀「大丈夫…元気だよ」

胡桃がその返答を聞いて一安心すると、由紀以外の人物もぞろぞろと姿を現す。その人物らに顔を向ける胡桃を見て、由紀はにっこりと微笑んだ。

胡桃「…!」

由紀「みんな…無事だよ」

由紀が小さく呟くと、その人物達の内の一人が由紀もろとも胡桃に抱きついた。抱きついたその人は胡桃の首もとに顔を埋め、泣きそうな声で呟く…。

悠里「…ただいま」

胡桃「…おかえり。リーさん…」

由紀と共に自らに抱きつくその少女…悠里にそう言って、胡桃は彼女の背にも手をまわす。そうして抱き合う彼女達のそば、ある人物が呟いた。

誠「ああ…良い光景だな…。天国つてのはこんななのかも知れない」

未奈「はい…ほんとに良い光景です…」

胡桃「ミナっ!…それと、マコトさん?…なんでいんの…?」

連中に捕らえられた未奈はともかく、何故誠までいるのか…それがまるで理解できず、胡桃は首を傾げる。誠はそんな彼女を見るとおかしそうに笑い、彼女の横を通りすぎた。

誠「まあ、説明すると長いんでな。後でのんびりと話してやる。とりあえず休みたい」

未奈「あ、ちよつと待って下さいね。後で部屋用意しますから、今

はとりあえず広間にでも…」

誠と未奈という見慣れない組み合わせに戸惑っていると、更に二人の人物が胡桃の横を通る…。一人は見知らぬ女性だったが、もう一人はよく知る少年だった。

胡桃「…おかえりっ」

「……ただいま」

抱きしめていた由紀と悠里からそつと離れ、胡桃は彼に声をかける。

彼はその声を聞くとピタツと立ち止まって返事をしたが、何故か胡桃と目を合わせなかった。

胡桃「ありがと…みんな、助けてくれて」

「……部屋で少し休む。何かあれば呼んで…」

それだけ言って、彼は一人廊下の奥へと歩いていく。

胡桃はそんな彼に違和感を感じ、悠里達を見つめた。

悠里「その……色々あってね…」

誠「それもまた説明すると長いんだな。まあ、とりあえずその広間に行こう」

胡桃「あ…そうだな」

未奈「じゃあ…こっちです」

屋敷の中を知らない誠や宮野の為に、未奈が先導してそこへと連れていく。未奈は少し歩いた所にあった扉を開け、その中へと全員を招き入れた。

…ガチャツ

未奈「どうぞ、適当に休んで下さい」

一人自室へと戻った彼を除く全員を広間へと招き入れ、未奈はその扉を閉める。当然、元より中にいた美紀、そして弦次はそれに驚いていた。

美紀「リーさん…由紀先輩っ!!」

由紀「みーくんっ、ただいま!」

すぐさま美紀に抱きつく由紀と、それを微笑みながら見つめる悠里と胡桃。そんな微笑ましい彼女達とは対称的に、未奈と弦次はどこかギスギスとしていた。

弦次「お嬢…その…無事みたいでよかった」

未奈「…」さんが助けに来てくれたからね。それより、ヒメちゃんは?」

辺りを見回して広間にいない白雪を探し、彼女がいない事に気づく。

未奈は少しだけ冷たい口調で弦次に尋ね、白雪がどこにいるかを知った。

弦次「部屋で…大人しくしてる」

未奈「…そう。じゃ、少し会ってくる」

弦次「あっ…白雪には、お嬢がいなくなってた事隠してたから…」  
未奈「……わかった」

目を合わせる事もせずそう言って、未奈は広間を出ていく。

弦次は一人ため息をつき、再会を喜ぶ由紀達の嬉しそうな顔を見ていた…。しかしよく見ると、彼の姿が見当たらない…。

弦次「あの…アイツは…?」

悠里「少し色々あって…疲れちゃったから部屋で休んでるみたい」  
弦次「…じゃあ、奴等から全員を取り戻して帰ってきたのか…。す

げえ…俺なんて…ずっと何も出来なかったのに…」

誠「まあ、まだ完璧に終わったとは言えないがな…」

そばでそう呟く誠を見て、弦次は不思議そうな顔をする。

弦次「…誰?」



美紀「あつ…マコトさん？どうしてここにいますか!?それに…  
そっちの人は…？」

宮野「えっと…私は……」

以前出会った誠と、見知らぬ女性…。ようやくその存在に気づいた美紀は驚き、目を丸くする。宮野はどう説明すべきか戸惑っていたが…誠はというと、先程の胡桃と同じような顔をしている美紀を見てまたおかしそうに笑った。

誠「まあ、当然のリアクションだよな。簡単に説明するから聞いてくれ」

悠里「そうね…私からも説明するから、聞いてちょうだい」

悠里と誠はそう告げて、美紀と胡桃…弦次に全ての出来事を話す。

あの場所で何があったか…。何故誠がいるのか…。

そうして大体の事情を聞いた胡桃は、何故か彼の元気が無かった理由を理解する…。彼は境界野という人間に追い込まれ、悠里か由紀を殺さねばならない状況に立たされていたのだ。

美紀「…そんなことが……」

胡桃「最低の人間だな…そいつ……」

誠「ああ、最低だ」

美紀「そこにいるゲンジさんも…その人達に脅されて物資を分け続けていたんです」

誠「らしいな…。ここに来る途中、宮野からそっちの事情は聞いた」  
誠はこの屋敷に来る途中、車内で弦次達の話が宮野から聞いていた。

宮野は隅の席に座る弦次の元に歩み寄り、深々と頭を下げる。

宮野「本当に…ごめんなさい…。あなたがどれだけ追い詰められていたかは知っていたけど、私だけじゃどうにもできなくて…」

心底申し訳なきように告げる宮野に対し、弦次も頭を下げる。

彼女が仕方なく境野に従っていたというならば、責める事など出来ない。それに最終的に、彼女は未奈達を救おうとしてくれたのだから。

弦次「何も出来なかったのは…俺も同じです。むしろありがとうございます。ございました…。最高のタイミングで、奴等を裏切ってくれて…」

そう言ってくれた弦次に対して宮野は微かに微笑み、今度は胡桃達へと頭を下げる。

宮野「…あなた達もごめんなさい。由紀ちゃんと悠里ちゃんの二人を…危ない目に遭わせてしまつて…。由紀ちゃん、悠里ちゃん、ごめんね…怖かつたよね…」

胡桃「そんな…わざわざ謝らなくてもいいつて…」

由紀「そ、そうだよ！確かにあの人は怖かつたけど…宮野さんは優しくかつたから…」

悠里「ええ、気にしないで下さい…。あの状況で自らの危険を顧みずに立ち向かつてくれたんですから、それだけで十分です」

美紀「とりあえずは…信じてもいいんですよ？」

頭を下げる宮野を見つめ、美紀が誠に尋ねる。

誠は宮野の横に立ち、その顔を上げるように言つてから答えた。

誠「ああ、こいつは信じてでも大丈夫だ。俺が保証するよ」

美紀「…そうですか、わかりました」

美紀は念の為に宮野を警戒しているようだったが、誠にそう言われて安心したように彼女を見つめた。

美紀「では信じます。宮野さん、先輩達を守ってくれて…ありがとうございます。うございました」

宮野「いや、そんな…私は何も…。彼とマコトさんがいなければ、きつと何も出来なかつた…」

美紀「そんな——さんとマコトさんも、あなたがいなければ自由に

動けませんでした」

誠「だろうな。ほら、もつと胸を張ってイバれって。『私がコイツらを助けてやった!』くらいに思ってもバチは当たらねえぞ?」

宮野「!!? いやっ! それは絶対に無理っ! そんなポジティブな考え方は出来ませんっ!!」

両手を顔の前でバタバタ振りながらあたふたとする宮野を見て、誠と美紀はにっこりと微笑む。美紀は改めて、彼女なら信じて大丈夫だと思っただ…。

誠「その謙虚なところを見て、益々お前を信じられるようになったよ」  
美紀「ふふっ、私もです」

宮野「は、はあ…そんなものですかね…」

宮野は照れたような顔を俯け、皆に見られないようにして微笑む。最近まで境野達のような人間と過ごしていた彼女にとって、こんな温かい空間は久しぶりだった。

胡桃「…でも、問題はまだ解決してないんだよな」

緊張したような声で胡桃が呟く。

境野達こそ倒しはしたが、まだその仲間が大勢いて、ここに攻めてくる可能性があるからだ。

誠「ああ、早ければ今夜…遅くても明日の早朝には来るらしい」

答えながら誠は広間の窓際に近付き、外を眺める。

いつの間にか辺りは夕焼けに染まり始めており、夜が迫る事を知らせていた…。

美紀「じゃあ…そろそろ警戒しなきゃですね…」

由紀「た、戦うの…?」

そばにいる胡桃の袖をギュツと握り、由紀は不安そうに皆を見つめる…。すると誠はニヤリと笑い、広間の中をゆっくりと歩き回った。

誠「逃げるのもありだが、子供がいるとなるとそれは厳しいな。それに中に入って実感したが、ここは良い家だ。奴等なんぞに渡すのは惜しい…。家主であるミナの為に、どうにか守りきってやるさ」

胡桃「…だな」

言いながら胡桃が立ち上がるが、誠はそんな彼女の肩に手を置いて告げる。

誠「戦うのは俺とあの少年…それとゲンジだけだ。女性陣はどっかに隠れてろ」

胡桃「なっ?!?ふざけるな!三人だけじゃ無理だろうが!!相手は二十人以上いるかも知れないんだぞ!」

肩に置かれた手を振り払い、胡桃は怒りを露にする。

誠はそんな彼女に気圧されつつ、どうにか彼女を落ち着かせようとした。

誠「じやあ聞くが、三人のメンバーにお前が入って四人になったとして…それでどうなる?大して変わらんだろ。ならお前は由紀達と一緒に隠れて、無理そうな時はどうにか逃げればいい。それが一番まともな作戦だ。無駄な犠牲者が出なくて済む」

あくまで冷静に告げる誠だが、それは胡桃の神経を逆なでしただけだった。

胡桃「あんたら全員殺られたら…あたし達だけで逃げろって言うんのか?そんな事…出来るわけねえだろ!!」

怒声をあげる胡桃に誠が困ったような表情をすると、彼女の横に由紀が並んで切なそうに告げた。

由紀「わたしも…胡桃ちゃんと同じだよ。マコトさん達が戦ってるのに自分だけ隠れてるなんて…絶対にイヤだよ」

胡桃「由紀はダメだ!隠れてろ!!女で戦うのはあたしだけでいい!」

そんな主張を胡桃がすると、由紀は顔を真っ赤にして声を張り上げる。

誠は二人の言い争いに巻き込まれ、両手で耳を塞いでいた。

由紀「それ意味わかんないよ!!なんで胡桃ちゃんだけ戦うのっ!？」

胡桃「あたしは戦えるからだよ!由紀は戦えねえだろ!？」

由紀「うっ……た、戦うもんっ!!」

胡桃「無理だっ!絶対無理っ!!」

由紀「くっつ!!」

美紀「せつ、先輩っ!落ち着いて下さいっ!」

胡桃・由紀「どっちの先輩のことっ!？」

美紀「二人ともですっ!!」

美紀は言い争う二人の間に入り、その手で二人を引き離す。

悠里はその様子を見ながらため息をつき、頭を抱えていた。色々考える事がありすぎて、少し頭痛がするらしい…。

宮野「えっ…と…。胡桃ちゃん…だっけ?」

胡桃「…なに?」

突然宮野に名を呼ばれ、胡桃は不機嫌そうに返事を返す。

不機嫌そうに返事を返したのは彼女が嫌いだからとかではなく、単純にタイムミングが悪かったからだ。

宮野「あの、三瀬に……金槌持った男に殴られたんでしょ?私、怪

我とか手当てしてあげられるから、見てあげるよ。ほら、別の部屋行く?」

胡桃「…平気。」

宮野「一応だから…ね?」

胡桃「……」

宮野の説得に負け、胡桃はその首を縦に振る。

彼女を由紀から引き離れた方が良さそうだから提案したのだが、怪我が気になっているのも事実だった。

弦次「なら、隣の部屋使つて下さい。ほとんど空き部屋みたいなも  
んなんで」

宮野「うん、ありがとう」

弦次に礼を言い、宮野は広間を出ようとする。

胡桃は渋々彼女についていき、隣の部屋へと向かった。

…バタン

誠「おつかねえ娘だな…。もう戦闘メンバーに加えた方が楽な気が  
してきたぜ」

胡桃が広間から出たのを見計らい、誠はボソツと呟いた…。

くくく

隣の部屋へと移った直後、宮野は胡桃に質問をする。

宮野「えつと…どこを殴られたの？」

胡桃「…頭」

宮野「頭っ!?だ、大丈夫？」

胡桃「かすつただけだし…たぶん平気。少しだけ血が出ちゃったけ  
ど…」

宮野は部屋の中から椅子を見つけると、それに胡桃を座らせて彼女  
の前髪を上げる。自分に手を伸ばす宮野に対して胡桃は一瞬身をか  
わしそうになったが、観念して受け入れる事にした…。

胡桃「……………」

宮野「…ここかな、少し切れちゃってるね。でも、問題は無さそう  
かな…。まだ痛んだりする？」

胡桃の髪をかき上げて傷口を覗き、宮野は尋ねる。

実際は殴られた当初も痛みは感じなかったのだが、それには触れずに答えることにした。

胡桃「…今はもう平気」

宮野「…そつか。じゃ、軽い手当でだけしておくね。あつ…今は使えるものが無いや…。ごめん、また後でミナちゃんに医療品借りてみるから、それまで待てる?」

胡桃「あ…うん。大丈夫…」

宮野「あつ…!あと…その…少し気になった事があるんだけど、聞いてもいい?」

胡桃（…やっぱり…バレルよな…）

「恐る恐る尋ねる宮野に対し、胡桃は首を縦に振る。

隠してばかりいるのにも疲れてきたから…」

宮野「ちよつとだけ…いや、かなりかな…。胡桃ちゃん、体温が低いみたい。心当たりある?」

胡桃「…:…:うん」

宮野「あまりに冷たいから、”かれら”に噛まれたりしたのかなとも思ったんだ。でも…私が見てきた限りでは”かれら”に噛まれた人つてすつごく苦しむから、ちよつと違うのかな?まあ…その辺りにも個人差が色々あるけど…:」

胡桃「…:…:薬」

宮野「えつ?」

胡桃「前に噛まれたけど、薬を打ったんだ。それのおかげで…あたしは今もこうして生きてる」

宮野「薬って…なんの?」

胡桃「奴等のウイルスに対してのワクチン…みたいな物だと思う。あたしらが前に住んでた学校にあったんだ」

それを聞いた途端、宮野は目を丸くして驚く。

噛まれたら終わりだと思っていた”かれら”に対してのワクチンがあるなんて、全く知らなかったからだ。

宮野「それって…他にあったりする？」

胡桃「えっ？えっと…あたしらの車の中にまだいくつか…」

宮野「車って…あのキャンピングカー？」

胡桃「うん…」

ワクチンがキャンピングカーの中だと聞き、宮野は顔をしかめる。あの車にあつた物資は一つ残らず、如月が持っていてしまったからだ。

宮野「じゃあダメか…。ごめん、あの車の中身、全部境野の仲間の人に持っていていかれちゃった…」

胡桃「っ…：…そうか…」

少しだけシヨックを受けたような顔をして、胡桃は顔を俯ける。

宮野はそんな彼女の手を握り、改めてその体温の低さを実感した。

宮野「その薬っていうのは…ちゃんと効いてるの？」

胡桃「…わかんない。でも…少し怪しいかも…。最近…急に意識が薄れる事があるんだ…。ほんと…勘弁してほしいよ」

表情をドンヨリとさせ、俯けていた顔を益々下げる胡桃…。

宮野はそんな彼女の顔をクイツと上げ、優しく微笑みながら告げた。

宮野「…：…気持ちだけでも前向きにね？暗い顔、あまり似合わないよ。せつかく可愛いんだから…」

胡桃「なっ!?!かつ、かわ…：…いい…：…／／／」

突然の台詞に驚き、胡桃の顔が徐々に赤く染まっていく。

宮野はそれを見てニヤリと笑い、先程までかき上げていた彼女の前髪を整えた。

宮野「髪、ちゃんとなおしておくね…」

胡桃「…あんだ、本当にあの金槌男達の仲間だったのか？」



胡桃の前髪をなおす宮野は優しく、どう考えてもあの男達のそばにいたとは思えない。胡桃はそう思った…。

宮野「うん…。裏切ったからもう違うけどね」

胡桃「ああ…そうだったな…」

彼女は弱くて、一人では生きていけなかった。だから本当に仕方なく、あの連中と共に行動していたのだろう…。奴等と共にいれば”かれら”に襲われる恐怖に怯える事も、食料などの心配もいらなかった。だがそれと引き換えに、宮野は地獄のような日々を過ごしてきた。命乞いする生存者を殺す三瀬や…無理矢理に物資を奪う境野…そんな光景を何度も見えてきて、心が限界にきていた。

宮野「これからどうなるかは分からないけど、あの人達を裏切った事は…絶対後悔しないよ」

胡桃「…大丈夫、どうにかなるって」

奴等の仲間が攻めてくる事を不安に思わなくはないが、それでも宮野は後悔しない。とりあえず、あの場で死ぬはずだった由紀か悠里を救えたのだから…。

くく

悠里「…由紀ちゃん、——君の様子見てきてくれる？」

広間の中、隣に座る由紀へと悠里は頼む。

しかし由紀は立ち上がり、顔を俯けながら呟いた。

由紀「…ちよつと…やだ」

悠里「どうして？」

由紀「だって…——くんはリーさんを……」

そう呟く由紀を見て、悠里は確信する…。  
彼女は…彼に対して悪い感情を抱き始めていた。

悠里「…あれは仕方なかったの。由紀ちゃんだって、あの場にいたんだから分かるでしょ？」

由紀「わかってるよ…わかってるけど…ならわたしを殺してほしかった…。なんで、リーさんを殺そうとしたんだろ…。リーさんと引き換えにわたしなんか助けたって…なんの役にもたたないのに…」

悠里「そんなことっ…」

由紀「わたしも…少し休むね…」

ガタツと音を鳴らしながら椅子を引き、由紀は立ち上がる。

そしてそのまま悠里達の顔を見ずに真っ直ぐ扉へと向かい、廊下へと出ていってしまった…。

美紀「先輩っ!!」

悠里「美紀さん…大丈夫よ」

美紀が立ち上がり彼女を追おうとするが、悠里がそれを引き止める。

美紀は少ししてから渋々席につき、悩ましげな表情をした…。

美紀「あんな由紀先輩…初めて見ました…」

悠里「…ええ、そうね。私も初めて見た…。それだけ、あの出来事がショックだったのよ…」

暗い顔をしながら二人が言葉を交わしていると、誠がそのそばへと歩み寄り、深いため息をつきながら壁に背を預けた。

誠「由紀のやつは…自分が全くの役立たずだと思ってるんだろう。さつき胡桃を相手に退かなかったのも、皆の役に立ちたい一心だったのかもな」

美紀「…ですかね」

誠「さあ？女心つてのは複雑だから…あくまで仮説だ」

悠里「……………」

美紀「……………」

ニヤリと笑いながら答える誠を相手に、美紀は冷やかな視線を送る…。

しかしながら、誠の言っていることはわりと当たっているのかも知れないとも思った。

美紀「どうにか仲直りしてほしいです…。せつかく無事に帰ってこれたのに…こんなのは嫌ですよ」

誠「…だな。下手すりや、もうじき境野の仲間が来る。それまでに形くらいは整えておくか…」

そう言つて誠は壁から背を離し、美紀に尋ねた。

誠「由紀と一番仲が良いのは？」

美紀「えっ？だ、誰でしょう…。由紀先輩つて…誰とも分け隔てなく接する人ですから、誰が一番とかつていうのは…特にないと思いません」

悠里「ええ…そうね」

誠「ん、そんじやアイツが一番仲良いのは？」

美紀「アイツ？」

誠「ほら…今ここにいない、あの少年だよ」

美紀は少し頭を悩ませたが、『ここにいない』という言葉のおかげでそれは弦次ではなく、“彼”の事を指しているのだと気づく。その彼が一番親しい人間といえば…

美紀「ああ…あの人はですか…。あの人が一番親しいのは…」  
ボタンツ…

胡桃「ただいま」

扉を開き、胡桃が宮野とともに広間へと戻る…。

そのままトコトコと歩いて席につく彼女を、美紀と悠里はじつと見つめていた。

胡桃「……なに？」

美紀「…胡桃先輩ですかね」

悠里「ふふっ…そうね」

胡桃「は？な、なにが…？」

微かに微笑みながら呟く二人を見て、胡桃はどこか不安になる。そんな彼女の気持ちなどちつとも知らず、誠はニヤリと笑った。

誠「よし、じゃあアイツの事は胡桃に任せるとして…俺はミナの機嫌でも直しに行くかね…。おいゲンジ、お前も来い」

弦次「え？いや…俺は…」

誠「早くしろっての…時間ねえんだから。ギスギスした空気のまま連中との戦いに入りたくねえだろ？」

無理矢理に弦次を連れ出し、誠は広間を後にした。去り際、意味ありげに胡桃へと手を振って…。

バタン…

胡桃「えっと…あたしはいったい…何を任されたの？」

宮野「さ、さあ…？」

何一つ理解する事が出来ず、宮野の隣でオロオロとする胡桃を見て、悠里と美紀はおかしそうに笑った。

## 九十四話 『あたしだけは絶対に』

誠「よし、ここだな？」

屋敷内の廊下を歩いていった誠は弦次の案内の下、一階にある一つの扉の前に立つ。

弦次「はい。ここが白雪の部屋で…たぶん、今はお嬢も一緒に…」

誠「…さつきから気になってたんだが、『お嬢』つてのはミナの事か？」

弦次「え？まあ…そうですね…」

誠「へえ…変わった呼び方だな…」

弦次「まあ……」

改めてそれを『変わった呼び方』だと言われると何だか恥ずかしくなり、弦次は誠から目を背ける…。誠はそんな弦次を見てニヤリと微笑み、目の前の扉を右手でノックした。

ドンドンッ！

誠「ミナ、いるか？入るぞく？」

未奈「あつ！はい、どうぞです」

中から未奈が返事を返したが、誠はそれを聞き終えるよりも先にドアノブを捻る…。扉を開けた先にあるその部屋には動物を模した可愛らしいぬいぐるみがいくつも転がっており、その中心には床に腰を下ろしながら向かい合う未奈と白雪がいた…。

未奈「どうしまし…たか？」

振り向きながら誠へと尋ねる未奈だったが、誠の後ろにいる弦次を見て一瞬だけ言葉を詰まらせる…。一方、白雪は誠とは初対面だった為、未奈の肩に顔を埋めながら誠に対しての警戒心を露あらわにしていた。

白雪「だ……だれ？」

未奈「…あつ、大丈夫だよヒメちゃん。この人は誠さんっていつて……」

白雪「……いつて？」

誠の事をどう説明するべきかをまだ決めていなかった未奈は言葉の途中で固まってしまい、そんな彼女を見て白雪は首を傾げる…。少し待っても未奈は口を開かなかつた為、みかねた誠は自ら白雪へ自己紹介した。

誠「俺は朝倉誠…。ミナとは昔からの知り合いだ。よろしくな、白雪」

当然嘘だが、こう言っておけば間違いないと誠は考える。

白雪「よ、よろしく…お願いします…」

誠「へえ、中々できた娘だ」

未奈の肩に隠れたままとはいえ、丁寧に挨拶をする白雪に誠は感心する。誠はそのまま室内に足を踏み入れ、白雪の頭を撫でようと手を伸ばした。

白雪「ふ!?!うぐっ!!」

白雪はその手から逃れるかのようにして未奈の胸に顔を埋め、チラチラと誠を見る。警戒心丸出しの白雪を見た誠は伸ばしていた手を引つ込め、おかしそうに笑った。

誠「ははっ、まあ…こんくらい警戒心は持っていた方がいいだろう。色々危ない世界だしな…」

未奈「すつ、すいませんっ！ヒメちゃん…普段ここまで人見知りはないんですけど…なんで誠さんのこと、こんなに警戒するのかなあ？たしかに…顔は少しだけ怖いけど…」

誠「何気にシヨツクな発言を…それがお前の俺に対する本音か」

ほんの少しだけ顔をしかめ、誠はため息をつく。  
すると突然…未奈の様子に変化が起きた。

未奈「すつ、すいませんっ!!つい口が滑って…私ったら失礼な事を…ほんとすいませんっ!!」

誠の方へと体を向かせた直後に大粒の涙を溢れさせ、未奈は土下座をし始める。それがあまりに突然の出来事だった為に誠は驚き、ただそれを見つめていた…。

誠「お、おい…コイツは急にどうしたんだ？」

弦次「誰かにちよつと追いつめられると、こうやって泣きながら謝り続けるんです…」

誠「追いつめ…つて、俺は別に追いつめたりなんざ…」

未奈「顔がすぐく怖かったから怒ってるんだと思いましたがあゝ!!ご、ごめんなさいいゝ!!」

誠と弦次の会話に泣きながら割り込み、未奈は土下座を続ける…。  
彼女が言うには、先程ほんの一瞬だけ見せた誠のしかめっ面が死ぬほど怖かったらしい…。

誠(さつきまでもつと怖い状況に置かれてただろうが!!つて言いたいが、この白雪って娘にはあの事を内緒にしてるんだったな…)

彼女が境野達に捕らわれていた時の事を思い返しながら、誠は不思議に思う。そういえば未奈はあの時も泣いてはいたが、今ほど激しく泣いていたりはしなかった…。

誠(今はこんなんだけど、いざつて時には強い娘なのかね…。まあ、今はそんな事より…)

誠「…おい、俺の顔ってそんなに怖いかな？」

土下座する未奈を放置して、堪らず弦次に尋ねる。

弦次「いやあ、確かにちよつとだけ怖いかもですが…本当にちよつ

とだけですよ？」

誠「土下座しながら号泣する程ではないよな？」

弦次「ええ、まあ」

誠「……………」

自らの顔がそこまでは怖くない事を確認し、誠は未奈へと視線を移す。すると白雪が彼女の背中を撫で、それを落ち着かせようとしていた。

白雪「ミナ、大丈夫だから落ちついて…。ほら…：ゲンジと…………」

誠を見つめながら、白雪が言葉を詰まらせる。どうやら、先程の自己紹介の時に誠の名をしつかりと聞いていなかったらしい。誠は困っている白雪の目を見ながら、改めて名前を名乗る。

誠「マコト」

白雪「マコト…：さんが困ってるから。ね、泣き止もう？」

未奈「つぐ…：！お、怒ってないか…：聞いてみてるか？」

白雪「…：えつと、すいません。マコトさん、ミナのこと——」

誠「怒ってない。だから泣き止めて伝えてくれるか？」

呆れた顔をしながら誠が答えると未奈は涙を拭い、そばにいた白雪を抱き寄せる。白雪は迷惑そうな顔をしていたが、決して未奈を突き放したりはしなかった。

未奈「お見苦しいところをお見せしました…………」

誠「まったくだ…」

未奈「……………」

ようやく落ち着きを取り戻した未奈だが、それならそれで今度は弦次の事を意識し始める。やはり、まだ弦次の事を許してはいないようだ。

弦次「…：お嬢、その…………」

弦次は意を決して未奈に声をかけるが、彼女は白雪の手を掴みなが



ら立ち上がって部屋を後にしようとする。弦次の言葉を無視して立ち上がる未奈を前にして、白雪は驚いているようだった。

未奈「ヒメちゃん、別のところで遊ぼ？」

白雪「えっ？」

誠「…ちよつと待て」

未奈「は、はい…なんですか？」

部屋を出ようとした未奈だったが、誠の横を通りすぎようとしたその時に腕を掴まれる。未奈はそれに驚き、また泣き出しそうになるが、今度はなんとか堪えられた。誠はそんな彼女の耳元へと顔を寄せ、そつと耳打ちをする。

誠「…ゲンジを許せない気持ちも分かるが、今はギスギスしてる場合じゃない。お前だつて分かつてるだろ？」

未奈「…でも…でも…」

白雪「ミナ…大丈夫？」

未奈が俯きながら小声で呟くと、白雪が心配そうな顔をして彼女の顔を覗きこむ。未奈は白雪を不安にさせぬようににっこりと微笑み、その手をギュツと握った。

未奈「…大丈夫だよ」

白雪の顔を見つめながらそう答える未奈だったが白雪は相変わらず彼女の事を心配そうに見つめ、強く手を握り返した…。

白雪「大丈夫じゃないでしょ…。なんで…うそつくの？」

未奈「えっ？」

白雪が放った思いもよらぬ言葉に驚き、未奈は目を丸くする…。笑顔で誤魔化せばどうにかなると思っていたが、そう簡単ではないらしい。

白雪「ミナ、さつきからずっと元気ない。それに…ゲンジもなんか

変。二人とも、ケンカしてるの？」

弦次「……」

未奈「えっ…とね…その……」

白雪「してるの？してないの？」

問い詰めるようにして未奈を見つめる白雪。

幼いながらもしつかりとした彼女を見て誠はケラケラと笑い、未奈と弦次の肩を叩いた。

誠「はははっ！大した娘だ。ミナ、ちゃんと答えてやれ」

未奈「…ケンカ、してるよ…。でもね、これはゲン君が悪くて——」

白雪「じゃあ…ゲンジ、ちゃんと謝った？」

未奈の手を離し、今度は弦次の前に立つ白雪…。

弦次は彼女の鋭い視線を受け、未奈の顔を見つめた。

思えばまだ、未奈に謝罪していない…。

弦次「…まだ」

白雪「じゃあ謝ってあげて」

それだけ言って白雪は弦次の腕を引き、未奈のすぐ目の前に立たせる。未奈はそれにあたふたとしていたが、弦次は落ち着いた様子で彼女の目を見つめていた。

弦次「お嬢…ごめん。謝って済むことじゃないって分かってるけど…本当にごめん。全部、二人を守るためにやってた事なんだよ…」

弦次は深々と頭を下げ、未奈の返事を待つ…。

しかし返ってきた未奈の言葉は弦次を許すという答えではなく、弦次を更に責めた。

未奈「私とヒメちゃんを守るため…？ふざけないでよ…ゲン君のせいで、由紀ちゃん達がどんな目にあったと思ってるの？私達を守るためなら、彼女達はどんなつてもよかつたの!？」

弦次「いや…違う…そんなつもりは…!」

未奈「私、ずっと信じてたのに…！」

弦次「…ごめん」

未奈「謝ったって…許せるわけ…」

弦次から目を逸らし、溢れてきた涙を拭う未奈…。

すると白雪が彼女の服の裾をギュツと掴み、その顔を覗く。

突然裾を引かれた事を不思議に思った未奈が自分の方へと顔を向けたその時、白雪は言った。

白雪「ミナ…ゲンジは謝ったよ？」

未奈「う…」

白雪「なのに、ミナは許してあげないの？」

未奈「だって…本当にヒドイ事をしたんだよ?!簡単に許したり出来るわけ…」

白雪「じゃあどうするの?ずっとこうしてるの?」

未奈「そ、それは…」

白雪「わたしはなんでミナがそんなに怒ってるのかも知らないし、ゲンジが何をしたのかも知らない。でも…二人には仲良しでいてほしい…。もしこのままケンカしてるつもりなら、わたしはここから出てく…」

未奈「それはダメだよ!!危ないでしょ!」

慌てた未奈がそう言い放つと、白雪はため息をつきながら答えた。

白雪「だって…ケンカしてる二人を見てるのイヤだもん…」

未奈「う…」

弦次「…」

その言葉を聞き、未奈と弦次は黙ってしまふ。

白雪は微かに瞳を潤ませ、二人の手を握った。

白雪「仲直り…してくれる?」

未奈「…でも…」

白雪「しなきや出てく……」

白雪が脅しのように告げる。

すると未奈は慌てたような表情をし、弦次の手を強く握った。

未奈「わあっ!? す、するする!! 仲直りするからっ! 間違っても一人で出てつちやダメだよっ!」

白雪「…うん、それでいい♪」

誠（おお：あっさりと終らせやがった）

につこりと微笑む白雪を見て、誠は驚く。

大した娘だとは思っていたが、ここまでとは思っていなかったからだ。

弦次「…お嬢、本当に…ごめんな…」

未奈「…あゝつ、もういいよ!! まだ気持ちモヤモヤするけど、私達がケンカしているとヒメちゃんが出てつちやうもん…」

弦次「……ありがとう。白雪も…ありがとう」

どうにか距離を縮めてくれた事を未奈に感謝し、そして白雪にも礼を告げる弦次。白雪はそんな弦次に笑顔を返し、満足そうに床へと座りこんだ。

白雪「もうケンカしちやダメだよ?」

未奈「…わかった」

弦次「ああ、わかったよ」

仲直りした二人を見つめた後、誠は白雪の隣に腰を下ろす。

誠に対してはまだ警戒心を見せる白雪だったが、誠は気にしなかった。

誠「…白雪、お前スゴいな」

白雪「いえ…そんなことないです…」

誠「いや、大したもんだ。ついでに、由紀とあの少年の仲も元に戻

してほしいもんだぜ…」

白雪「ゆき…あのお兄ちゃんとケンカしてるんですか？」

誠「ああ、してる。」

白雪「…ケンカばっか、ですネ…」

誠「ああ、ケンカばっかだ」

誠と白雪…二人は同時にため息をつき、この状況を面倒に思う。

しかし、白雪のおかげで未奈と弦次の仲は修復出来た…。

これでは、由紀と彼の仲を直すだけだが……

誠「まあとりあえず、あの少年の事は胡桃に…由紀の事は悠里と美紀に任せたがな」

白雪「くるみが…あのお兄ちゃんのとこに？」

少し驚いたような反応をして、白雪は誠を見つめる。

その反応を見た誠は何かやらかしてしまったのかと思い、白雪に尋ね返した。

誠「ああ、そうだが…マズイのか？」

白雪「…いえ、相手があのお兄ちゃんなら…くるみでよかったと思います」

誠「それは…どうして？」

白雪「内緒です。言ったらくるみが死んでしまいますから」

意味の分からない答えを返し、白雪は鼻唄を歌い出す。

誠は何一つ理解できず、ただじつとその鼻唄を聴いていた…。

くくく

胡桃「はあ……なんであたしが……」

美紀「すみません……。私達是由紀先輩の方をどうにかしますので、そちらは任せます」

廊下を歩きながら悩ましい顔をする胡桃へとそう告げて、美紀と悠里は由紀のいる部屋の前へと立つ。彼女達は彼女達で、由紀と彼を元の関係に戻そうとしていた。

悠里「――君もかなり落ち込んじゃってると思うから、優しくしてあげてね」

胡桃「そう思うなら、リーさんが……」

悠里「そうしても良いけど……多分、胡桃が話してあげた方が良いわ。だって、私が『元気出して』って言ってもダメだったもの……」

少しだけ切なそうな表情をして悠里は俯く……。

そんな表情を見せられたらもう断れず、胡桃は覚悟を決めた。

胡桃「……わかったよ、アイツはあたしがどうにかする。その代わりに、由紀の事は任せただぞ？」

悠里「うん、ありがとう……」

美紀「宮野さん、あなたはどうしますか？」

胡桃が彼の部屋に……そして悠里と美紀が由紀の部屋へ向かうと決めた一方、彼女達についてきた宮野だけは向かう先を決めておらず、頭を悩ませていた……。

宮野「……私は念のため、そこにある窓から外を見張ってるよ。そろそろ如月さん達が来るかも知れないからね」

廊下の突き当たりにある窓……そこからはちようど屋敷の入り口の門が見えるので、宮野はそこに立って監視する事を決める。悠里達はそれを聞いた後、それぞれの部屋の中へと向かった。

悠里「わかりました。もし誰かが来た場合、急いで教えて下さい」  
宮野「うん、任せて」

胡桃「…じゃ、少し行ってくる」

宮野は窓際に…悠里と美紀は由紀のいる部屋の扉を開けてその中に…そして、胡桃は彼の部屋へと向かう。悠里達と別れた胡桃は一人廊下を歩いていってその部屋の前に立ち、扉をノックした。

コンコン…

胡桃「今…ちよつといいか？」

ノックしてから室内の彼へと呼び掛けるが、少し待っても返事がない。

胡桃は深くため息をつき、ドアノブを捻った。

胡桃「入るぞ？」

ガチャツという音をたてながら扉を開き、中へと足を踏み入れる。外が暗くなり始めているというのに明かりをつけておらず、部屋の中は真つ暗だった…。

胡桃「…つたく」

薄暗いそこを慎重に歩いていき、ベッドの横…そこにあるタンスの上に置かれていた電池式のランプに手を伸ばす。それを掴んだ後はスイッチを入れて明かりをつけるだけなのだが、暗くてスイッチがどこなのか分からない…。胡桃はランプを隅々まで撫でて手探りでスイッチを探し、それらしき物を指先で押し込む。するとカチツという音と共に明かりがつき、その周囲を照らした。

胡桃「よし…」

ランプを元の場所に戻し、少し明るくなった室内を改めて見回す。目的の彼はベッドに横たわりながら天井をじっと見つめていて、気だるそうに声をかけてきた。

「…どうかした？」

胡桃「まあ、ちよつとな」

答えながら彼の横たわるベッドに腰を下ろし、その顔を覗く。

相当疲れているのか、彼はかなり弱りきった表情をしていた…。

胡桃「何があったのか、リーさん達から聞いたよ。本当に…大変だったな」

「……………」

彼は返事を返さずに胡桃からそつと顔を背け、そのまま背を向けてしまう。だが胡桃はそれを気にせず、彼に言葉をかけ続けた。

胡桃「元氣出せ。つて言つても難しいと思うけどさ…せつかく皆無事に帰つてこれたんだ、少しは喜ぼうよ…」

「……………」

またしても返事がない…。

彼の態度に、さすがの胡桃も少しだけ落ち込みそうになる。

胡桃「……………」

「……………」

お互いが口を閉ざし、重苦しい空気に包まれる。

胡桃は横たわる彼の背を見つめたまま小さくため息をつき、もう一度声をかけた。

胡桃「リーさん、気にしてないってさ…。だから、そんなに落ち込まなくても…」

そこまで言ったその時、彼が顔を胡桃の方へと向ける。

彼がようやく反応した事に喜びかけた胡桃だったが、直後に放たれた彼の言葉は予想していないものだった…。

「もういいから…自分の部屋に戻りなよ…」

胡桃「え…っ…」

それだけ言つて、彼はまた背中を向ける…。

思いもよらぬその言葉に胡桃はショックをうけ、放心状態になっていた…。



胡桃「……………」

「……………」

無言のまま、一分ほど彼の背中を見つめた…。

彼の寂しげな背中を見れば見るほど胸が締め付けられるが、何故か目を逸らせない…。

胡桃（あたし、邪魔だったかな…。余計なお世話…だったかな…）  
そんな事を考えてしまうと自分まで落ち込んでしまい、今すぐにもここから出ていきたくなる。ここから抜け出し、悠里達に謝ろう…。ただ一言『あたしには無理だった』と言い、そのまま広間に戻ればいい…。そう思っ、胡桃は立ち上がろうとするが…。

胡桃「ほんとに…大変だったよな…。疲れた…よな…」

無意識の内にそう言っ、気づけば彼の頭に手を伸ばしていた。

胡桃は背中を向けながら横たわる彼の頭にそつと手を置き、優しく…ゆつくりと撫でた…。

「……………」

胡桃「全部任せちゃっ、ごめん…。お前はこんなになるまで頑張ったのに、あたしは何もしてやれなかった…」

「それこそ気にしなくていい…。僕一人で来るようになって言われてたから、仕方なかった…」

背中を胡桃に向けたまま、彼が返事を返す。

胡桃は彼の頭を優しく撫でながら、静かにその声を聞いていた。

「悠里さんには…本当に悪いことをした。凄く…怖かったと思う…」

胡桃「……………気にしてないっさ」

「そんなわけないよ…。だって、あと少しで僕に殺されるところだったんだから…。口では『助ける』なんて言っ、たクセに、実際は…何も出来なかった…。もしあそこにマコトさんが来なかったら、僕は

由紀ちゃんの目の前で、りーさんを殺していた…」

胡桃「……………」

「僕がここから出ていく前に、胡桃ちゃん言ったよね…『一人で上手くやるのなんか無理だ』って…本当にそのとおりだったよ…僕一人じゃ、みんなを助ける事なんか出来なかった」

小さな声でそう言う彼を見ているのが苦しくて、胡桃は何も言えない…。

ただ、どれだけ苦しくてもその頭だけは撫で続けていた。こうしていれば、彼が少しでも楽になるのではと思ったから。

「みんなと…会わなければよかった…。そうすれば、境野は由紀ちゃんと悠里さんに手を出したりしなかったのに…」

胡桃「会わなければよかった…か。それ、何気にショックだぞ」

冗談混じりに笑いながら告げる胡桃だったが、本当にショックだった。

一言『会わなければよかった』と言われるだけで、自分達と一緒にいた時間は退屈だったのだろうかとか、一人の方が気楽だったのだろうかとか、色々な事を考えてしまう…。

「由紀ちゃんも…僕なんかと会わなければよかったって思ってるはずだよ…」

胡桃「そんなわけないだろ…」

「由紀ちゃん、僕と目を合わさないんだ…。それもそうだよね、僕は彼女の目の前で…大好きな悠里さんを殺そうとした人間だから…」

胡桃「今はまだ気持ちの整理が出来てなくて、色々戸惑ってるんだと思う…。だから、落ち着いたらまた由紀とも仲良くできるよ」

「…無理だよ。今回の事で、由紀ちゃんを完全に失望させた…。悠里さんも美紀さんも…それに胡桃ちゃんだって、僕にはガツカリしたはずだよ」

胡桃「そんなことない…。大丈夫だよ…」

「なにも…大丈夫じゃない……………」

思っていたよりも彼の落ち込み具合は酷く、どうにも上手くないかな  
い。

弱気な彼を前にして思わず泣きそうになる胡桃だったが、どうにか  
堪えて頭を撫で続けた…。

胡桃「本当に辛いなら…あたし達から離れていってもいいよ…」

「…うん、本当に…ごめん…」

謝る彼の背中がいつもより小さく見える…。

彼はきつと、今すぐにはいなくならない。ここに来るであろう境野  
の仲間達、それをどうにかした後で、一人ここから出ていくつもりな  
のだろう…。

胡桃「リーさんも美紀も、それに由紀だって…お前と会えてよかつ  
たって思ってるハズだよ。…でも、いくらあたしがそう言ったって、  
今のお前はそれを信じられないよな…」

「……………」

彼は返事を返さなかったが、恐らくそれは当たっている。

いくら胡桃が言ったところで、自棄になっっている彼はそれを信じら  
れない…。

しかし、胡桃もまだ諦めてはいなかった。

彼女は一度彼の頭を撫でるのを止めてから自らの頭をそつと彼の  
背に埋め、小さな声で囁く…。

胡桃「実際、由紀や皆がお前の事をどう思ってるかなんて…あたし  
にだって分からない。多分そこまで悪いイメージは無いと思うけど、  
ハッキリと断言は出来ない。あたしは…皆の心を覗ける超能力者  
じゃないから…」

「……………」

彼はただ、胡桃の声に耳をすます…。

胡桃は彼の背に頭を埋めたまま、自らも彼の横に寝そべった。  
同じベッドに二人で寝そべる…。

いつもの彼ならこれに驚くだろうし、胡桃も顔を真っ赤にするだろう。

それほどの事をしているハズなのに、二人の心は不思議と落ち着いていた…。

胡桃「由紀達がどう思ってるかは分からないから、あたしに分かる範囲の事を教えてあげる…」

「……………」

胡桃は彼の背中に額をつけたまま、その肩に手を乗せる。

そうして頭と手で彼に触れながら、彼女は小さく…けれども彼にはしっかりと聞こえるように囁いた…。

胡桃「あたしは…お前に会えて本当によかったって思ってるよ…」  
「……………」

胡桃「これは嘘やお世辞じゃなく、本心だから…。もし仮に由紀達がお前を信じられなくなったとしても…あたしは…あたしだけは絶対に、お前を信じ続けるから…」

彼はそつと振り返り、横に寝そべる胡桃の顔を見つめる。

胡桃はニツコリと微笑みながら、静かに起き上がった…。

胡桃「だからさ、出来れば…お前にはずっとそばにいてほしい。最期の時が来るまで…ずっと…」

「胡桃…ちゃん」

胡桃「お前がどうしてもあたし達から離れたいって言うなら、止めたりしないよ。お前が自分で決めたことなら、無理やりに止めたり出来ないから…。でもね、これだけはちゃんと伝えておく…。あたしはずっと…お前と一緒にいたい…」

彼もそつと起き上がり、胡桃と見つめ合う。

すると胡桃は突然彼の手を握り、その表情を曇らせた…。

胡桃「っ……あたしの手、ほんとに冷たいよね……？」

「……うん、そうだね……」

その体温が彼に伝わるようにしてから、静かに顔を俯ける……。

このタイミングで”あれ”を告げるべきか、胡桃は頭を悩ませた。

胡桃（今言うべき事じゃない気もする……。でも、ここで言わなきゃまた先伸ばしになって……余計に言い出せなくなる……）

一瞬乱れかけた呼吸を深呼吸して整え、胡桃は彼の目を見つめる。

右手は彼の左手を掴み、少しだけ震えていた……。

どんな反応をされるか怖くて仕方ないが、もう……隠してはいられなかった。

胡桃「……お前が由紀達を助けに行こうとした時、伝えなきゃいけない事があるってあたしが言ったの覚えてる？」

「……覚えてるよ」

胡桃「それ……今から言うから……。できるだけ、落ちついて聞いていてほしい……」

手はビクビクと震え、胸の鼓動がはやくなる……。

だがここまで言ったら退くわけにもいかず、胡桃は意を決した。

胡桃「あたし……噛まれてるんだ……」

「……えっ？」

握っている彼の手がピクツと反応し、その表情がみるみる青ざめて

いく…。胡桃は彼が少しでも安心してくれるように、急いで薬の事を告げた。

胡桃「でもっ、あたしらのいた学校に薬があつてき…。あたし、ちゃんとそれ使つたんだよ」

「薬…？」

胡桃「そう、ワクチンみたいなヤツ…なのかな？それ使つて、どうにか死なずに済んだんだ」

「…いつ、噛まれたの？」

胡桃「あたしらが学校にいた時だから、そこそこ前…」

「じゃあ、僕と会つた時にはもう…」

少しずつ空気が重くなり、胡桃は不安になる。

隠していた事を怒られるかも知れない…。

また余計な心配をかけてしまうかも知れない…。

どんどん不安になり、早くも言い出さなければよかつたと後悔しかけていた。

胡桃「内緒にしててごめんっ…。怖くて、中々言い出さなかつた…。」

胡桃「これを言つたら、またお前に心配をかけちゃうし…。それに、薬の事なんか信じてもらえないかもつて…。ずっと不安で…」

「手が冷たいのは、そういう事だったのか…」

胡桃「ごめん…。本当にごめんっ！」

瞳を潤ませながら、胡桃は頭を下げる。

彼の手を握る胡桃の手はビクビクと不安そうに震えていて、とても冷たかつた…。

「なんで、言おうと思つたの…？」

胡桃「…言わなきゃダメだと思つた…。いつまでも…隠し事してちゃダメだつて…そう思つて…」

「…そっか。でも、薬は効いてるんでしょ？」

胡桃「えっ…と……」

今の胡桃にとつて、一番聞かれたくない質問だった…。

しかし同時に、一番伝えておかなくてはいけない事でもある。

胡桃自身もそれを理解していた…。

胡桃「最近、意識が薄れる時がある…。もしかしたらもう、ダメかも知れない……」

「……」

胡桃「だから…しっかりと伝えておきたかった…。あたしに何かあっても、お前になら由紀、リーさん、美紀…みんな任せられる。多分、あたしはもうダメだから…。だからお前に全部…任せてもいいかな？ 大変だつて分かつてるけど、お前になら…」

「……無理だよ」

彼が突き放すようにして答える。

胡桃は彼の手をギュツと握りながら、力なく顔を俯けた…。

胡桃「そっ…か……。ごめん……」

俯けた胡桃の顔から、涙がポタポタと落ちていく…。

落ちた涙はシーツに染みをつくっていき、胡桃は肩を震わせていた。

胡桃「無理に止めたりしないよ…しないけどき…。出来れば、あたしが死ぬまでも良いから、一緒にいてほしい…。そんな先の事じゃないと思うから…お願いっ…」

「……」

胡桃「あたしがあんなつたら、お前に終わらせて欲しい…。だから、そばに……」

泣きながらそう言う胡桃を見た彼は深くため息をつき、彼女から離れてベッドから降りる…。胡桃は一人俯いたままベッドに座り、止めることの出来ない涙を流していた。

「もう、十分無理に引き止められてる気がする…」

胡桃「…ごめん」

「はあ……いいよ、別に」

胡桃「……………」

「まあ、もし胡桃ちゃんが”かれら”と同じになったとして、それを放っておくのも…知らない人に仕止められるのも、なんか嫌だな…」

胡桃「！…じゃあ……！」

胡桃が期待を込めた眼差しで彼を見つめる。すると彼は少しの沈黙の後、観念したかのように答えた。

「……ああ、そばにいるよ…」

胡桃「っ……ありがとう…。ほんとに、ありがとう…」

より一層の涙を流しながら、胡桃はベッドに顔を埋める…。

彼はポケットから一枚のハンカチを取り出し、それを彼女へと手渡した。

「あんまり泣かれると気まずいんですが…」

胡桃「っ……ご、ごめん…。あたし、こんなに泣いたりしないタイプだったのに…」

ハンカチを受け取り、必死に涙を拭う。

彼が残ってくれるという事に安心したら涙も少しずつおさまり、胡桃はすぐに平常心を取り戻した。それに彼もまた、胡桃が部屋に訪れた当初よりも明るくなっている…。

「胡桃ちゃんが大変だつて事も分かったし、一人で落ち込んでる場合じゃないか…。連中が攻めてくる前に由紀ちゃんと仲直りしたいけど、許してくれるかな…」

胡桃「多分、大丈夫だよ…。由紀は優しいヤツだから、きっと仲直りできる」



「…上手くいくと良いんですがね」

彼は扉の前へと歩みより、部屋をあとにしようとする。

それを見た胡桃もベッドから降り、彼の後ろへと立った。

彼はゆつくりとドアノブを捻りながら、背後に立つ胡桃へと声をかける…。

「胡桃ちゃん…ありがとね」

胡桃「…どういたしまして」

「もし君が”かれら”のようになつたら、その時は僕が終わらせる。これは約束しておくけど、君がそうなるのをただ見ているつもりはない」

胡桃「えっ?」

「連中をどうにかしたら、僕も色々と探ってみるよ…。出来るなら、君の事を助きたい」

真面目な表情で言いながら、彼はそつと胡桃の事を見つめる。

思いもよらぬ発言を受けた胡桃は目を丸くし、彼の事を見つめ返した。

彼の言う『助きたい』とは、どういう事なのだろう…。

胡桃は思わず、彼にそれを尋ねた。

胡桃「それって、どう…すんの?」

「とりあえずは外に出て…。」

胡桃「出て…?」

「…まあ、その…え〜…。」

捻ったドアノブから手を離し、彼は頭を悩ませる…。

言ったはいいものの、どうすればいいのかは分かっていないらしい…。

胡桃「…特に作戦はナシと」

「…ごめん」

胡桃「いや、助けようとしてくれるその気持ちだけで十分だよ」

「……………」

胡桃「もしかしたら、このまま悪化しないでいる可能性だってあるかもだし…」

彼の背をバシツと叩き、暗くなってきた空気を吹き飛ばすかのようにして胡桃は微笑む。しかし、そんな彼女を見つめる彼はどこか不安そうな表情をしていた…。

「先に言っておくけど…もし君がいなくなったら僕はまたさつきまでのダメな人間に戻れると思う。今の僕が落ち込まずに動けるのは…胡桃ちゃんがいるおかげだからね」

胡桃「あたしの…おかげ？」

「そ…。だからどうにか持ちこたえてよ。もし胡桃ちゃんが死んでしまったら…本当にどうすればいいのか分からなくなる…」

胡桃「…わかった、出来るだけ頑張るよ…。だからもう…『皆と会わなきゃよかった』なんて言うなよ。りーさん達が聞いたらシヨック受けるぞ…」

「…………ごめん、もう言わないよ」

彼は申し訳なきように笑い、再びドアノブを捻る。

そうして胡桃と共に廊下へと出て、横に並びながら由紀の部屋へと向かっていった。

「…にしても…胡桃ちゃんの『伝えたいこと』ってのはかなりの衝撃だった…。シヨック過ぎて死ぬかと思ったよ…」

胡桃「…………ごめん…」

やはりかなりのシヨックだったらしく、彼は歩きながらまたため息をつく。それに対して胡桃が謝ると、彼はおかしそうに笑って言った。

「まったく…もしかしたら告白かなとか期待してたのに、残念残念…」

胡桃「ずっと隠しててあんなタイミングで言ったあたしも悪いとは

思うけど、あまり調子にのるなよ…。マジで怒るぞ…」

「ごめんごめん…冗談ですよ」

鋭い目付きで睨む胡桃を見て、彼が冷や汗をかきながら謝る。

でも…よく考えたら彼とこうしてふざけるのは久しぶりな気がして、胡桃はなんだか嬉しくなった。

胡桃（元気出してくれたみたいで…本当によかった…）

…そんな事を思いながら彼を追い抜くと、その際に彼が小さく囁く…。

「絶対に…死なせないから…」

胡桃「ん？なに？」

ハッキリとそれを聞き取れず、振り返りながら聞き返す。

しかし彼はニヤリと笑っていて、それに答えてはくれなかった。

「…なんでもないよ」

胡桃「…そう」

そんなやり取りをして、二人はまた歩き出す…。

よく見れば廊下の奥…その突き当たりの窓際には宮野が立っており、こちらにそつと手を振っていた。

「あつ…、あの人は…」

胡桃「ああ、宮野さんか。あの人はあそこでああして、外を見張ってくれてんだよ。下手すりゃ、もうじき境野ってヤツの仲間が来るかもしれないからな」

「…そうだね。まずそれを切り抜けなきゃ、どうにもなんないか…」  
歩きながら呟き、彼は由紀の部屋を目指す。

由紀との事に境野の仲間…どちらもとても不安なことだが、今の彼が最も頭を悩ませていたのは…胡桃の体の事だった…。

## 九十五話 『けいかい』

彼が由紀との仲を修復するために彼女の部屋を目指し始めたその数分前。

悠里と美紀：この二人は由紀の部屋に入り、いつもとは比べられない程に元気の無い彼女と話しをしていた。

美紀「由紀先輩：——さんの事、まだ怒っているんですか？」

由紀「怒ってるわけじゃ…ないよ…。ただ、すごくショックで……。だって、——くんならどうにかして、リーさんを助けてくれると思っただのに：」

悠里達に背中を向けたまま膝を抱えて床に座りこみ、由紀は小さな声でそう言った：。悠里と美紀はそんな彼女のそばへと歩み寄り、自分達も床にそつと膝について彼女と目線の高さを合わせる。

悠里「彼は彼なりに一生懸命助けてくれようとしてくれたわ：結果的にああなつてしまっただけ：。どれだけ頑張つても：どれだけ私達の事を助けたくても：あの時は私か由紀ちゃん、どちらかを選ばなければいけなかった：。そうしなければ二人とも：あの境野つて人に殺されてしまつていたはずよ」

由紀「う：それはわかつてるよ：。でも、さつきも言ったでしょ？あんな状況だったからこそ：わたしの事を殺して、リーさんを助けてあげて欲しかった：」

抱えた膝に顔を埋め、小さくなる由紀：。

由紀は自分の命と引き換えにしても悠里を救ってほしかったようだが、それは悠里自身も同じことだった。

悠里「：あの時の私もね、由紀ちゃんとまったく同じ事を思つたの：」

由紀「…同じ？」

由紀は視線を悠里の方へと目線を移し、その言葉の意味を尋ねる。悠里はそれに対して優しく…それでいてどこか切なそうな顔をしながら、につこりと微笑む。

悠里「そう…同じ…。私か由紀ちゃん…そのどちらかを殺せて彼が言われた時、何度も何度も…心の中で彼に言ったの。『私はどうなってもいい…だから由紀ちゃんを助けて…』ってね…」

由紀「リー…さん…」

悠里「あの時は口をテープで塞がれてて、声は出せなかった…。だから心の中で何度も何度も…必死に念じた。本当にそれが届いたのかは分からないけど…彼は殺す相手を私に決め、それと引き換えに由紀ちゃんを助けようとしてくれた…」

彼が殺す対象に自分を選んだその時、悠里は恐怖よりも先に安堵を感じた。もちろん、死ぬことに対する恐怖も後からじわじわと沸いてきたが、それでもその結果を恨むことはなかった…。

悠里「あの時、彼が私じゃなく由紀ちゃんを殺そうとしていたら…私はきつと、彼の事をすつごく恨んでしまったと思う。それこそ、どれだけ謝っても許してあげない程にね…」

由紀「そこまで言うなら、リーさんだって…今のわたしの気持ち分かるでしょ？」

悠里「…うん、分かっているつもりよ。でもね、由紀ちゃんは私よりもずっと優しい娘だから彼の事を許してあげられるって…私はそう信じてるの」

悠里はにつこりと微笑みながら、目の前に座る由紀の頭を優しく撫でる。

由紀はただ、それを受け入れながら瞳を潤ませていた…。

由紀「……………」

美紀「…由紀先輩、先輩はもし…私が胡桃先輩とケンカして、お互

いに一言も口を聞かないまま過ごしていたらどう思いますか？」  
そつと由紀の顔を覗きこみながら美紀が尋ねる…。  
由紀はすぐに彼女を見つめ返して、それに答えた。

由紀「そんなの…イヤだ…。みんなには仲よくして…：…ほし…」

言っている途中で何かに気づいたのか…：由紀は言葉を詰まらせる。  
彼女のそんな様子を見て、悠里と美紀は微かに微笑む。

美紀「…わかりましたか？ 私たちも同じなんです。たしかに今回の出来事はとても辛いものだったと思います。でも、由紀先輩はいつだって元気いっぱい、みんなの太陽なんです。その先輩がそんな顔ばかりしていたら、みんなが落ち込んでしまいます…」

由紀「…みーくん」

悠里「危ないところだったけど、私達はこうして無事に戻ってこれた。ならもうそれで良いじゃない。いつまでもくよくよしてたら、この先一緒にいる事すらも難しくなっちゃうわ」

由紀「そう…かな」

悠里「——君はあれでいて、結構繊細な部分もあるからね。今回の出来事で一番ショックを受けたのは、きつと彼じゃないかしら…。  
『自分一人じゃ助けられなかった』とか…『リーさんを殺そうとしちゃった』とか…そんな事ばかり考えて悩んでると思う…。由紀ちゃんにも悪いことをしたって、そう思っているハズよ…」

由紀「……………」

悠里「ただでさえ辛い状況なのに由紀ちゃんにまで冷たくされたら、彼は本当に出ていっちゃうかも知れない…。由紀ちゃんは彼が…」

君がいなくなっても平気？」

そう尋ねられ、由紀は思い返す…。

彼と出会ってから今日この日まで、一緒に過ごした毎日を…。

辛い事はあったが、楽しい事もいっぱいあった…。一緒に笑った事だって、何回もあった…。その全てを思い返し、由紀は静かに答える

…。

由紀「…イヤ…だよ…。——くんとは、この先も一緒にいたい…」

悠里「…ええ、私もそう思ってる」

美紀「…ですわね」

由紀は瞳から溢れかけた涙を手で拭い、スツと立ち上がる。

くよくよと落ち込むのは止めて、彼女は前を向くことを決めた。

由紀「——くんが本当に出ていっちゃったら大変だから、謝ってくる！」

悠里「そうね、今彼のところには胡桃が行って話をしているとと思うけど、由紀ちゃんも行ってあげて。そうすれば、彼もきつと元気に——」

ボタン…

悠里が彼の元に向かおうとする由紀へと言葉を放っていると、突然部屋の扉が開く…。その向こうから現れたのは胡桃…、そして彼だった。まさか彼がここに来ると思っていなかったため悠里と美紀は驚いたが、由紀はそんな二人よりも更に驚いていた。

「…由紀ちゃん」

由紀「あ…っ…」

予想していなかったタイミングで彼と出くわし、思わず由紀の体が固まる。悠里と美紀、そして胡桃の三人は…ただその様子を見守った。

「その…悪かった…。怖い思いさせて…本当にごめん…」

彼が先に口を開き、由紀に頭を下げる…。

それを見た由紀は慌てて彼の前に駆け寄り、彼の両肩を手で押し上げて無理矢理に顔を上げさせた。

由紀「…大丈夫だから、謝ったりしないで…。——くんは一生懸命



がんばってくれたんだから、もう…謝ったりしなくていいの」  
「…でも…」

由紀「それより、わたしの方こそごめんね…。助けにきてもらったのにありがとも言わないで…冷たくしちゃった…」

彼の肩に手をあてたまま少しずつ顔を俯け、由紀はそのまま彼の胸へと顔を埋める…。彼は少しだけそれに戸惑いながらも、彼女の背中にそつと手を回した。

由紀「助けてくれて、ありがとね…」

「…どう…いたしまして」

二人はそんなやり取りをしてから互いに顔を見つめ合い、ニツコリと微笑む。その光景を見ていた悠里・美紀・胡桃もまた満足そうに微笑み、二人のそばへと歩み寄った。

悠里「とりあえず、これである程度は元通りになったかしら？」  
そう言いながら二人のそばに寄る悠里。

由紀との仲もどうか元に戻り、改めて彼は悠里に頭を下げた。

「あの、悠里さん…あの時は、本当にすいま——」

悠里「気にしてないって言ったでしょ？あんまり何度も謝れると逆に気になっちゃうわ…」

謝罪している途中に右手を伸ばし、彼の額をペシッと叩く。

そうやって彼の謝罪を中断させてから、悠里は微かに頬を膨らませた。

悠里「あと、その呼び方は何かイヤよ…。他人行儀ってわけじゃないけど…妙に慣れなくて…。やっぱり、いつもみたいに呼んでほしい」

「……………ごめんなさい、”リーさん”」

悠里「…うんっ、許してあげる♪」

悠里が嬉しそうな笑顔を浮かべ、機嫌を良くする。

彼はそんな悠里を見て微妙に微笑んだ後、美紀の方へと視線を移した。

「美紀さんにも心配かけましたね…。留守番、ありがとうございます  
た」

美紀「…いえ、結構ですよ。それよりも…おかえりなさい」

優しい笑顔を見せる美紀…。

彼は彼女に…いや、彼女達皆に…感謝を込めながら言った…。

「…ただいま」

くくく

それから数分後…。

彼と彼女達…そして誠は広間に集まり、今後どうするかを話し合っていた。

誠「とりあえず、仲直りは終わったみたいだな？」

悠里「はい、どうにか…。えっと、ミナちゃん達は…？」

今この場にいるのは彼と悠里・由紀・胡桃・美紀…そして誠のみ…。

弦次・未奈・白雪の姿はない。

宮野に関しては、廊下から外の見張りをしていると知っていた。

誠「ああ、アイツらは白雪の面倒見てるから、とりあえず置いてきた。あつちもあつちで仲直りは終わったんで、心配は無用だ…」

美紀「よかったです…。マコトさんもお疲れですか？」

誠「いや、アイツらの仲を直すのは白雪がやってくれたんで、これに関してはかなり楽できたな」

胡桃「白雪が？」

誠「ああ、あの娘はかなり出来た娘だな。見ていて感心したぞ」

美紀「たしかに、しっかりした娘ですよね…」

それぞれが白雪の事を語っていると、誠は不意に視線を彼へと移す…。

彼はさつきまでかなり落ち込んでいたように見えたが、今はほとんど元通りな様子だ。元気を取り戻したのは由紀と仲直り出来たからなのか、はたまたその前に胡桃が何かをしたのか…誠はそれが気になっっていた。

誠「お前、だいぶ調子を取り戻したな…」

「えっ？ああ…おかげさまで、もう大丈夫です」

誠「…胡桃、上手くやったな？」

胡桃「ん…、それなりに…」

チラツと視線を向ける誠から、胡桃は咄嗟に目を逸らす。

後ろめたい事をした訳ではないが、何故か目を逸らしてしまった…。

そんな様子の彼女を見た誠はニヤリと笑い、一先ず話を進めることにする。

胡桃「……………」

誠「…まあいい。それより、境野の仲間がここへやってくる可能性がある。下手すりゃそろそろ来る頃だ…。遅くても明日の朝にはやってくるようだから、常に何人かは起きて朝まで警戒してなきゃな

んねえ…」

美紀「やつてくる時間が正確に分からないというのは、かなり精神的な負担がかかりますね…」

誠「まったくだ。幸いこの屋敷は高い塀に囲まれてるから、来るなら正面の門からだと思う…。宮野がそこを見張っている以上、不意を突かれはしないと思うが…念の為、一人でうろついたりはしないようにしろ」

それを聞いた彼女達は小さく頷き、緊張したような表情をする…。もしかしたら今この時にも、連中がこの屋敷に忍び込んでいるのではと想像したからだ。

由紀「あの…もし戦いになったらどうするの？相手の人達、たくさんいるんでしょ？」

誠「とりあえず門には鍵をかけておいたから、多少の時間は稼げる。そうなれば連中が外にいる化け物達とぶつかる可能性もあるからな…もしかすれば、少しは敵の人数を減らせるかも知れない」

美紀「でも、下手したら」かれら「もここに入ってきてしまうんじゃないか…」

誠「そこは運頼みだな…。お互いが良い感じに潰しあってくれれば一番楽なんだが…」

胡桃「話し合い…なんて絶対に無理な人種だろうしな。そうする他ないか…」

境野という人間がどれだけ危険な人物だったかを話に聞いていた為、その仲間達との話し合いなどは無理だろうと胡桃は考える。誠もそれには同意見であり、悠里達も同じ気持ちだった。

誠「ああ、連中と話し合うのは無理だろう。そういう考えは最初っから捨てて、真っ向勝負するしかない…」

「相手の数は10〜20ちょっとでしたっけ…かなり、厳しいですね」

由紀「やっぱり…怖いね……」

不安そうな声で呟き、由紀は顔を俯ける…。

よく見れば彼女だけでなく、悠里も美紀も胡桃も…そして彼も不安  
そうな表情をしていた…。

誠（当然の反応だよな…これから10人以上の敵に襲われるって分  
かってんだから、そりや怖くもなる。さて、どうしたもんかね…。恐  
らく、今この屋敷内で最も戦えるのは俺だろう…その俺でさえ、そん  
な人数を一人で相手になんか出来るわけねえし…）

広間をくるくると歩き回り、誠は頭を悩ませる…。

”かれら”と連中が上手く潰しあってくれば可能性はあるが、あ  
まり期待し過ぎてもいけないだろう…。

誠（良いアイデアの一つでも浮かべば良いんだけどな…）

浮かぶ作戦はどれも期待できるものではなく、誠はため息をつく  
…。

気がつけば、全員が無言のまま数分が経過していた。

皆それぞれ落ち着きなく広間をうろつき、心が休まらない…。

胡桃「はあ…まいったな…」

部屋の隅に椅子を寄せてじっとしている彼へと、胡桃は声をかけ  
る。

不意に声をかけられた彼はハツとした表情をして、ゆっくり彼女に  
顔を向けた。

「…だね」

胡桃「みんな落ち着きがないな…。まあ、あたしもだけど…」  
「いつ敵が来るか分からない状況だからね、仕方ない…」

胡桃「…せっかく元気取り戻してあげて、由紀とも仲直りさせてあ  
げたんだ。こんなところで死ぬなよ…」

「…わかってる」

そう答える彼の顔から、だんだん明るさが無くなっていく…。  
彼も不安で仕方がないのだろう…。

胡桃「やっぱり、タイミングが悪かったよな…。ごめん、こんな時に…余計な心配事を増やしちゃって…」

傷の事を告白したせいで彼を余計に追いつめてしまったと思い、胡桃は顔を俯ける…。彼はそんな彼女に向け、そつと言葉を放った…。

「大丈夫だよ。胡桃ちゃんだって、好きで隠してた訳じゃないんだし…」

胡桃「…でも」

「隠し続けるのだから、辛かったと思う…。それをようやく打ち明けられたんだから、もつと楽になったような顔をしてみなよ」

胡桃「楽になったような…顔…」

「とりあえず、笑つとけば良いってこと…」

そう言われても、すぐに笑うことなど出来ない…。

確かに言い出せた事で心が多少は楽になったが、その代わりに彼を辛くさせてしまっている気がした。

胡桃「……」

「たしかに心配には心配だけど、嬉しくもあつたんだよ…。なんていうか、胡桃ちゃんが僕の事を…しっかりと信じてくれた気がして…」

胡桃「……そっか」

やっぱり、彼は胡桃が思っていた通りの人だった…。

傷の事を打ち明けても、それを隠していた事や、それ自体を責めたりはしない…。それどころか、『打ち明けてくれた事が嬉しかった』と言つて笑い出すのだ…。

胡桃「…変なヤツ」

「いきなり失礼な…」

変なヤツだと突然言われて、彼は心外そうな顔をする。

一方、言った張本人である胡桃はニツコリと微笑んでいた。

胡桃「でも、ありがと。そう言ってくれれば、かなり楽になる…」  
「いえいえ。こちろこそ…今日は本当に助かりましたよ。胡桃ちゃん  
のあの言葉が無ければ、こんなすぐには立ち直れなかつたと思う」

胡桃「どの言葉…？」

「ほら、あの…」

彼は心に響いた言葉がいくつかあつたため…

胡桃は無我夢中で言葉を放つていたため…具体的にはどの言葉を  
指しているのかと言われると分からなくなる…。

二人はあの時の事を思い返し始め、その言葉を探った…。

『あたしは…お前に会えて本当によかつたって思ってるよ…』

『お前にはずっと…そばにいてほしい…』

『あたしだけは絶対に、お前を信じ続けるから…』

そうして思い返される言葉の数々…。

そのどれもが思い返すと気恥ずかしいもので、二人は顔を真っ赤に  
した。

(僕は…)

胡桃(あたしは…)

(かなり恥ずかしい事を言われてたんじゃ…!?)

胡桃(かなり恥ずかしい事を言っちゃったんじゃ…!?)

ほぼ同時にそんな考えにいたり、互いの顔を見ることすら出来ない  
…。

あの時、彼がこの言葉の数々に救われたのは事実だが…その言葉の  
数々は今、放った本人である胡桃をその恥ずかしさで殺そうとしてい  
た…。

胡桃（う…うわあ…！やり過ぎたっ…言い過ぎたっ…！聞き方によつちや、ただの告白じゃんか…!!）

顔を俯けたまま体を小刻みに震わせ、胡桃はどんどん赤くなっている…。

今すぐにも逃げ出したい…出来ることならやり直したい…そんな事すら思っていた。

「く…胡桃ちゃん…」

胡桃「なっ、なにっ!？」

ビクツと体を震わせ、そっと彼の方を見る…。

彼もまた顔を赤くしており、照れているようだった。

「えっと…『信じ続ける』って言ってもらえたのが、一番嬉しかったかな…」

胡桃「そ…そっか…」

先程胡桃が言った『どの言葉?』という問いに律儀に答える彼だが、胡桃はそれどころではない…。恥ずかしさで死にそうなのだから。彼は彼女のそんな思いを察したのか、気まずそうに笑って尋ねてきた。

「わ、忘れた方が…良いですか…?」

胡桃「出来る…なら…」

願ってもない…忘れられるならば忘れてもらおう!

そう思っただけ口を開く胡桃だが、いざとなると…それは嫌な気もした…。

胡桃「…出来るなら…ずっと覚えてて…」



「…えっ?」

確かに死ぬほど恥ずかしい言葉を書いてしまったが、忘れられるのも嫌だ。あの時放った言葉は全て嘘やお世辞ではなく、本心を告げたものなのだから…。

胡桃「だからっ…ずっと、覚えてて…。お前が嬉しいって感じた言葉なら…無理に忘れる必要も…ないし…」

後半少し小声になりながらも、しっかりと彼に告げておく。

自分の言った言葉で彼が元気にいられるならば、いつまでも記憶していて欲しいと思った。

「…わかった。ずっと忘れないようにするよ」

嬉しそうに笑いながら彼が言う…。

その表情を見ていたら、いちいち照れるのもバカらしい気がした。

胡桃もまた嬉しそうにニッコリと微笑み、人差し指で彼の額をツンと小突く。

胡桃「うん…二度は言わない言葉ばかりだから、しっかりと記憶しておけよ?」

「了解…」

由紀「なにになに?胡桃ちゃん、——くんは何て言ったの?」

横から由紀が割り込み、彼に尋ねる。

彼はニヤニヤしながら由紀の耳に口を寄せ、静かに口を開いた。

「ええつとね…」

胡桃「わあっ…!?そういうのナシっ!!言いふらすの禁止っ!!」

胡桃は二人を引き剥がし、焦ったようにそう告げる。

するとそれを見ていた悠里と美紀もそばへと寄ってきて、不思議そうな顔をした。

悠里「言いふらすって…何を？」

美紀「胡桃先輩…顔真つ赤ですね…」

胡桃「くっ！うっさい！解散解散っ！！ほら、帰った帰った！」

胡桃は両手をバタバタと振り回し、寄つてきた悠里達を追い払おうとする…。しかし、悠里達も中々引き下がらない。よく見れば、胡桃を相手にしてじゃれ合っているようだった。

誠「…まったく、緊張感のない奴等だ」

誠は椅子の上に腰を下ろし、騒ぐ彼女達を眺めながら呟く。

悠里「あつ、そう言えばどうやって——君をここまで元気付けたの

かまだ聞いてなかったわね？胡桃っ、教えて♪」

由紀「わたしも聞きたーい♡」

胡桃「ぐうっ…！由紀はともかく、りーさんまでそんな事を…！美紀っ、助けてくれ！」

美紀「えつと…じゃあ、私も聞きたいです！」

胡桃「はあっ!?バカ言うなつての…！つてか『じゃあ』つてなんだよ！」

誠（まあ、沈んだ空気のままよりかは…今みたく騒がしい方が俺の好みだな）

誠は静かに目を閉じて、彼女達の騒ぎ声を聴いていた…。

騒がしいのに鬱陶うっとうしさは感じず、どこか安らげるような、不思議な騒ぎ声…。

誠がそれに耳をすましていた時、広間の扉がバタンと音をたてながら開いていった。突然開いたそれに全員が驚き、一斉に目を向ける…。

未奈「ふあっ!?お、お邪魔でしたか…?」

扉の向こうにいたのは未奈、そして白雪と弦次だった。

それが分かった途端、広間にいた者達は安心したかのようにため息をつき、ニツコリと微笑む。

由紀「ううん、邪魔なんかじゃないよ」

美紀「だいたいこの屋敷はみなさんの物なのに、邪魔とか言うわけないじゃないですか…」

未奈「そ、そっかあ〜」

未奈は白雪の手を引きながら由紀達の元へと駆け寄り、ただ会話を混ざる。弦次はというと、誠の方へと歩み寄って声をかけていた。

弦次「念の為、一緒にいた方が良いかと思って…」

誠「そうかもな…。よし、俺は少しだけ宮野の様子を見てくる」

弦次「わかりました…」

誠は立ち上がり、そつと広間を出ていく。

かなり日が落ちてきたからか廊下も暗くなっているが、定期的に置かれていたランプが足元を照らしていた…。誠は廊下の突き当たりへと向かい、一人でそこにいた宮野へと声をかける。

誠「お疲れ、様子はどうか?」

宮野「かれら」がたまに横切るだけで、後は問題ないです。早ければそろそろ来るはずなんです…」

外はすでに暗くなっていたが、月明かりのおかげでかろうじて門の前の前の様子を確認出来た。

誠「すっかり夜だな。そういや、夕飯がまだだったっけな」

宮野「これからミナちゃんが用意してくれるそうですよ。手伝ってきてあげて下さい」

誠「いや…ただ立ってるだけってのも退屈だろう。ここは俺が見ておくから、宮野が手伝ってきてやってくれ。気分転換にもなるだろうしな」

宮野「…わかりました。じゃあ、ここはお任せしますね」  
ペコツと頭を下げてから、宮野は広間へと向かっていく。

誠はそんな彼女を見送った後、真つ暗になった外を見張りながら呟いた。

誠「せめて夕飯くらいはのんびりと食わせてくれよ…。食事中に攻めこまれるのだけは勘弁だ」

そこから目を離さず、警戒を続ける誠…。

少ししたら宮野がそこに現れ、缶詰などがメインの食料を誠へと渡した。今回は事情が事情なので、調理がいららず手早く食べられる物だけにしたらしい…。誠が食事をとる間はまた宮野が見張りを代わってくれて、宮野が食事をとる時は再び誠がそこを見張る…。

しかしただそこを見張るだけでも中々に疲れてきてしまい、見張りを始めてから二〜三時間が過ぎた頃、誠は睡魔に襲われる…。だがちようど良いタイミングで宮野と由紀がそこに現れ、誠に見張りを代わると告げた。

誠「じゃあ一時間…いや、三十分だけ任せる」

由紀「マコトさん、三十分って意外とあつという間だよ？まあ…勉強しているときは長く感じるけど…」

宮野「そうですね、もう少しだけ休んでいて下さい」

誠「…じゃあ一時間だ。それだけ経ったら起こしに來い。また代わる…」

由紀「らじゃー！」

宮野「ちゃんと休んで下さいね…」

誠はゆつくり歩き出し、背中を向けながら二人に手を振る。

由紀と宮野はそれを見送った後、会話を交わしながら見張りを始めた。

宮野「由紀ちゃんも…休んでていいんだよ？」

由紀「えつとね…あんまり眠くなくて…」

宮野「…そっか」

今、広間では誠が仮眠している他にも未奈が白雪と共に眠っており、弦次がそばでそれを見ている。後のメンバーは全員が起きており、それぞれがいつ来るか分からない敵を警戒していた…。

由紀「今…何時くらいなんだろう」

宮野「たぶん、11時くらいかな…」

由紀「…そっか。夜中でも…来るよね？」

宮野「うん…来ると思う。だからしっかり見張ってないとね」

由紀「せつかくだからさ、おしゃべりしながら見てようよ。ただし…と見張つても疲れちゃうし…」

宮野「…良いよ、なに話そっか？」

由紀「ええ…つとね…じゃあ…」

由紀は宮野とそこを見張りながら会話を交わす。

今までどんな事があつたとか、何をしてきたとかを互いに話している内に一時間が経ち、由紀は誠を起こしに向かった…。

誠「…異常なし、か？」

宮野「ええ」

やって来た誠に宮野は答える。

彼女のその表情がどこか明るく見えたため、誠は不思議に思った。

誠「なんか、嬉しそうだな？」

宮野「ふふ…由紀ちゃんが本当に面白い娘で、話してて楽しくなっちゃいました」

誠「ふうん…なら、また話してこいよ。由紀のヤツ、広間でお前を

待ってるぜ」

宮野「じゃあ、後はお任せします」

宮野を押し退けるようにして窓際に立ち、誠が見張りを代わる。

宮野はかるく頭を下げてからそこを離れ、広間へと戻っていった…。

それから役一時間後、彼が誠の元にやってきて見張りを代わると言った為、まだ完全に疲れの取れていなかった誠はそれに甘えることにした。

その後も弦次…胡桃と美紀…悠里と未奈などが見張りを交代していき、警戒を続ける…。だがいつまで経っても連中が現れる事のないまま朝日が昇り…気が付けば昼を過ぎようとしていた……。

## 九十六話 『みんなで』

誠「……おかしいな。いくらなんでも、そろそろ来るはずだろ」

境野の仲間達は遅くても朝には来ると言われていたが、やって来ないまま昼をむかえた……。念の為にと思いつつ窓際に立ち、外を見張っていた誠だが、いつまで待っても敵は現れない……。『もしかしたら、連中はこのまま来ないのではないだろうか？』そんな考えが誠の頭に浮かぶ。

誠が一人窓際に立ちつつ考えていると広間の扉が開く音がして、そこから現れた宮野がこちらへと歩み寄る。

宮野「お疲れ様です……。もうお昼ですが、現れませんね」

誠「……なあ、境野や三瀬が殺されている事に戻った仲間連中が気付いたとして、それでもここに来ない理由はあるか？」

宮野「ない……と思います。私以外のほぼ全員が二人を信頼していたので、殺されたと分かれば仕返しを考えるはず……。そして、それをすべき相手はこの屋敷にいるという事も彼等は知っています。だから来ない理由なんて……ないはずなんですが」

誠「念入りに準備をしてから……って事は考えられるか？」

宮野「どうでしょう……なんとも言えません……」

元々連中と組んでいた宮野といえどその行動を完璧に読むことは出来ず、頭を悩ませる……。誠は彼女が悩んでいるのを見て、ある決意をした。

誠「……少しだけ見張り代わってくれ」

宮野「構いませんよ。疲れました？」

誠「少しな。でも休むわけじゃない……ちよつと広間に戻って、それ

から出かける」

宮野「出かける？どこにです？」

誠「境野達がいた、あの倉庫だ。あそこに行つて、境野の仲間達が何をしているのか直接確かめてくる」

宮野「えっ!?あ、危なくないですか？」

誠「バレないように行動するから問題ない。これはあくまで偵察：戦いにいくわけじゃないからな。すぐに戻るから、そんな心配するな」

宮野「は：はい。気を付けて下さいね」

誠は軽く手を振つてそれに応え、一度広間に向かう。

一応、他の皆にも言つておいた方が良さだろーうと思つたからだ。

：バタン

広間に入つて早々、誠は周囲を見回す…。

夜遅くまで見張りを手伝つたからだろう：由紀、そして美紀は床に毛布を敷いて眠っている。

他の者は起きているが、ずっと警戒し続けている影響で顔に疲れが出ていた。誠はその様子を見て小さなため息をつき、そばの椅子に座つて休んでいる彼の元へと歩み寄る。

誠「：よお」

「ん、どうしました？」

声をかけた誠の方へと顔をあげる彼もまた、僅かに疲れた表情をしていた。昨日の事もあつて彼が心配になり、誠は尋ねる。

誠「お前：少しでも寝たか？」

「一応、少しは寝ましたよ。それより宮野さん：あの人の方がヤバイ」

誠「宮野？どうして？」

「皆それぞれ少しずつ休んでましたけど、あの人はずっと寝てませんよ」



誠「…そうか」

そう言われれば、彼女の目の下にはくまが出来ていた。彼女が一睡もせずに警戒を続けているのは恐らく、連中と仲間だったという事への罪悪感のようなものだろう…。

誠（一時的とはいえ、境野達と一緒に由紀達を追い詰めた事を気にしてんのかもな。まったく、それで自分が倒れたらどうすんだか…）

誠「じゃあ悪いけど、宮野と見張り代わつといてくれるか？俺は今から境野達がいた倉庫に行つて、少し状況を確認してくる」

近くで休んでいる悠里、胡桃達には聞こえぬよう、小さな声で彼にだけ伝える。彼は驚いたような表情をしたが、その首を縦に振つて廊下へと出てくれた。誠もそのあとに続き、静かに廊下へと出る。

バタン…

「もう昼だつてのに来る気配がありませんからね。僕もですけど、りーさん達も考え始めてます。もしかしたら、敵なんて来ないんじゃないかって…」

誠「まだ油断出来るほどの時間は経っていないが、このまま何の情報も無しに警戒してたら倒れちゃうからな。パパッと探ってくる」

二人会話を交わしながら廊下を進み、見張りをしていた宮野の元に着く。

じつと外を見つめて動かない彼女の肩を、誠はパシッと叩いた。

誠「おい、見張りはコイツに任せて、お前は少し休め」

宮野「えっ？いや、まだ大丈夫ですから…」

誠「いいから、ほら！」

誠が半ば強制的に宮野をそこから離し、すかさず代わりとして彼がそこに立つ。宮野はそんな二人に後押しされ、澁々広間へと向かつて

いった。

宮野「じゃあ…頼むね？」

「了解です」

誠「じゃ、俺も行くか…。もし連中を見かけたらすぐに戻るから、それまでは頼むぞ」

「了解、気を付けて」

彼がそう答えると、誠はそばにある階段を足早に下っていく。

その後彼が窓から外を見張っていると、誠が門をしんどそうによじ上って外へと出ていくのが見えた。

誠が外に出た直後、どこからともなく「ゾロゾロと」かれらが現れて誠を襲おうとしたが、誠は「かれら」に囲まれるよりも先に目的の場所を目指して駆けていった。

(あのペースなら、20分としない間に帰ってくるかな…)

誠の走りを見た彼のその考えは的中し、約15分後…誠は屋敷に戻る。屋敷に入り、二階へと戻った誠は不思議そうな顔をして、見張りをしていた彼へと言った。

「…どうでした？」

誠「それが…誰もいなかった」

「一人も、ですか？」

誠「ああ…あの倉庫は昨日俺達が出ていった時のままで、誰かが来た形跡がねえ」

「……………」

予想外の答えだった…。連中がここに来ないのはまだ準備をしているか、もしかしたら境野達を殺された事による仕返しなどするつもり無いからだと思っていた。だがそれはどちらも違って、連中はまだ

あの倉庫にすら帰ってきていなかったのだ…。

誠「…宮野を呼んできてくれ」

彼は無言で頷き、宮野を呼びに広間へと向かう。

宮野はすぐ彼と共にそこに現れ、偵察に出ていた誠の結果を尋ねる。

宮野「どうでした？なにか分かりましたか？」

誠「えつとな、まだ…誰もあの倉庫に戻ってなかったんだが…」

宮野「っ!?!誰も？一人もですかっ!?!」

驚いたような声を出し、宮野は誠の目をじっと見つめる。

誠はすぐに頷き、見てきたままを彼女に知らせた。

誠「一人もだ。あの倉庫には、まだ誰も戻ってきてない。…ああ、三

瀬はあの化け物になって中をうろついていたから、仕留めておいたぞ」  
彼に視線を移し、それを教える。彼は誠に感謝するかのよう  
にペコツと頭を下げ、引き続き横でその話を聞いていた。

宮野「誰も…戻ってない…?それって…」

誠「あれ以来連中は出かけたままって事だが…これをどう捉える  
?」

そう誠に問われると宮野は自らの額に右手をあて、可能性として考  
えられる出来事を思い浮かべる…。その結果、彼女は二つの答えを導  
き出した。

宮野「考えられるのは二つ…。まず一つ目ですが、何らかの事情に  
より動けなくなっただ…というものです」

誠「何らかの事情…具体的には何だ？」

宮野「あの人は他のグループと戦いに行きましたが、その周辺を  
”かれら”の大部隊に囲まれた…とか」

誠「…なるほどな」

「納得したように呟く誠だが、言った本人である宮野は何やら唸り声をあげており、自分の考えに今一つ納得のいっていないようだった。

宮野「…でも、如月さんのところの人員と境野さんの貸した人員を合わせたらその人数は約30人…。いくらなんでも、それだけ人数がいて一人も脱け出せないような”かれら”の大群なんて…見たことないですよね…」

誠「じゃあもう一つの可能性、そっちはどうだ？」

宮野「こっちは…一つ目以上にあり得ないかも知れません…」

誠「いいから、言うだけ言ってみろ」

自信がなくて発言を躊躇う宮野だったが、渋々その口を開いた…。

宮野「相手のグループを倒す事が出来ず…全滅…とか…」

誠「…約30人規模のグループが全滅か…なるほど、無くはないかもな」

宮野「無くはない…ですか？私は絶対にないと思いますけど…」

誠「お前は どう思う？」

絶対にないと考える宮野の横…そこで無言のまま立ちつくす彼へと尋ねる。彼は少し考えるようにして目を閉じた後、ポツリと呟きながらその目をゆっくり開けた。

「その相手のグループがかなりの人数ならとは思うけど、30人を相手に出来るだけの人数を揃えてるグループなんて…中々ないですよね」

宮野「ないと思うよ…。だいたい、如月さんが30人集めたのだったけどほとんど奇跡みたいなものだと思うもの」

誠「連中は戦いが終わったなら、すぐに戻ってくるはずだよな？」

宮野「はい、それは間違いありません。境野さんに借りていた分の人員も出来るだけ早く返さなくてはなりませんし、相手から奪った物

資も分ける約束をしていましたから…」

誠「じゃあ、どうなつてんだ…なんでまだ戻つてすらいない…」  
最早見張る意味があるのかも分からないまま、誠は窓際に身をよりかける。門の外は相変わらず“かれら”が数人うろついているばかりで、生きている人間などいかなかった…。

誠「…もう一日だけ様子を見て、また明日あの倉庫に行つてみる。もし明日も戻つてきていなかったら、連中は戦った相手に負けたものと考えよう」

「そうですね…。無駄に警戒ばかりしていたら、こっちの身がもたない…」

宮野「…：…わかりました」

とりあえず、今日一日は警戒を続ける事にした。

誠は窓からの見張りを引き続き彼に任せて広間へと戻るが、その前に彼に一つ頼み事をされる。

「あの、すみません」

誠「あつ？…なんだ？」

「広間に戻つたら、胡桃ちゃんをここに呼んでくれますか？」

誠「胡桃？…なんだ…一人じゃ寂しいからイチヤイチヤすんのか？」

「それ、胡桃ちゃんが聞いたら怒りますよ」

誠「ははっ、冗談だ。分かった、呼んどくよ」

ヘラヘラしながら彼に手を振り、誠は広間へと戻っていく。

その後すぐ、胡桃は廊下へと出てきて彼のいるそこへとやってきた。約束通り、誠が呼んでくれたようだ…。

胡桃「呼ばれたから来たけど、なに？」

胡桃は窓から外を見張る彼の横に立ち、自分も外の様子を覗きながら尋ねる。彼はそつと彼女の方へと視線を移し、真剣な表情を向けた

…。

「あの…いきなりだけど……」

胡桃「…ん？」

思ってもない表情をされたために少し戸惑う胡桃だったが、真つ直ぐに彼を見つめ続ける。わざわざ呼び出すくらいなのだから、よほど大事な話なのだろうと思った…。

「もし、明日になっても連中が来なかったら……僕はここを出ていく」

胡桃「……えっ？」

彼の発言の意味が分からず、胡桃は目を丸くする…。

聞き間違いでなければ、彼は出ていくと言ったのだ…。

胡桃は思わず声を荒げてしまいそうになるが、彼は昨日『そばにいる』と約束してくれた。ならば何か意味があつての発言だろうと思ひ、落ち着いた状態のまま、静かに尋ねる…。

胡桃「…どうして？」

「胡桃ちゃん…完璧に治つてはいないんだよね？」

胡桃「……」

言われてすぐ、胡桃は理解した…。

彼はここから外に出て、彼女を完全に治す方法を探る気ではないのだ。

胡桃「…バカだなあ、平気だつての！」

ふざけたようにニヤリと笑い、彼にそつと背を向ける。

こうすれば、なんとかごまかせると思つての行動だった。

「昨日言つてたじゃん…。意識が薄れる時がある…もうダメかも知れないって」

胡桃「それは……その……」

「もう、隠し事はしないんでしょ？」

彼は背中を向けた胡桃の前に回り込み、顔を覗きこむ。

確かに、彼にはもう隠し事をしたくない。そう考えた胡桃は目を伏せながら静かに頷き、制服の上に着ていた上着へと手をかける。一度、彼にあの傷跡を見せておこうと思ったからだ……

胡桃「……………」

羽織っていた上着を脱ぎ、そつと床に置く。そうしてから胡桃は制服の右袖を捲り、そこに巻き付けていた包帯を外していった……。彼は無言のままそばに立ち、それを見守る……。胡桃が包帯を外し終えるとそこには痛々しい傷跡が残っており、彼は顔を悲しげな表情をした……。

胡桃「……うん……ダメだと思う。たぶん、もうじきかな……」

傷跡を見つめながら胡桃は呟き、ため息をついて壁に背をもたれる。

彼もまた彼女の隣に背をもたれ、右手で頭を抱えていた……。

「助かる方法を……どうにかして見つける……。外に出て必死に探れば、手がかりがあるかも知れない……」

胡桃「……一人で行くの？」

「うん。外は危ないし、皆はここに待たせておく」

彼がそう告げた途端、胡桃は彼の肩を力強くバシツと叩く。

その勢いに負けた彼が身をよろけさせて驚いたような顔を向けると、胡桃は呆れたようにため息をついていた。

胡桃「はあ……バカだなあ……」

「失礼な……っちは皆の事を思っ……」

胡桃「まず第一に、お前があたしを治す手がかりを見付けたとする！でもその時そばにあたしがいなきゃ、なんの意味もないだろ？」

「…急いで帰ってくる」

胡桃「その僅かな時間のムダであたしが死んだら、お前どうすんの？」

「うっ…」

何も言い返せず、彼は胡桃から目を逸らす…。

胡桃はそんな彼を見て満足そうに微笑み、包帯を巻き直し始めた。

胡桃「そういうわけだから…あたしはついてくよ？」

「…わかった」

観念して首を縦に振る…。

胡桃はすぐに包帯を巻き終え、床に置いていた上着を再び羽織った。

胡桃「でも、みんなは…」

切なそうな顔をして胡桃は俯く…。

由紀達はどうすべきか…これには彼もかなり頭を悩ませたが、すぐに一つの案が浮かんだ。

「事情を話して、ついてきたいって答えた人は連れていこう」

胡桃「…それで良いのかな…」

「だって、黙っていなくなったら皆怒るよ？皆の気持ちも考えるなら、これが一番良い」

胡桃「…さつきは一人で出ていく、とか言ってたクセに…」

「あはは…」

胡桃「…へへっ」

気まずそうに笑ってごまかす彼を見て、思わず微笑む胡桃。

確かに彼の言う通りだ…もし黙って出ていったら、由紀も悠里も美紀も…凄く怒るだろう…。

胡桃「…わかった、みんなに話してみるよ」

「いや、僕も一緒に話すよ。そういうえば、皆は傷の事知ってる？」



胡桃「傷の事は知ってる…。ただ薬がしつかり効いてると思ってるから、あたしが危ない状態なのは知らない…」

「…了解」

彼はそれだけを聞き、再び外を見張る…。

胡桃はそんな彼を後ろから引つ張り、窓際から引き離れた。

胡桃「見張りは代わつとく。だから…みんなに話していくくれるか？」

「ああ、分かった…」

胡桃「あつ！昼ごはんまだだったから、なんか持ってきてよ」

「はいはい…」

彼はそこを胡桃に任せ、広間へと戻る。

するとタイミングよく悠里達が昼食を出してくれていたのでも胡桃の元を持っていき、それから自分も広間で食事をとった。

彼は食事を終えた後、由紀・悠里・美紀を廊下へと呼び出す…。

呼び出された三人は不思議そうな顔をしており、そのまま彼に連れられて見張り中の胡桃の元へと歩いていった。

悠里「…急にどうしたの？」

胡桃のそばに立ち、悠里が尋ねる。

美紀と由紀も彼女と同じ気持ちだったようで、彼や胡桃の事をじつと見つめている…。彼はすぐに彼女達全員を見回していき、静かに告げた。

「実は……」

胡桃の状態の事、それをどうにかする為に明日出ていくという事、この屋敷に残っていたいなら残っていて欲しいという事…彼はその全てを彼女達に告げる…。それを聞き終えて真っ先に口を開いたのは、由紀だった…。

由紀「胡桃ちゃん…治ってなかったの…?」  
悲しげな表情をしながら尋ねる由紀の顔を直視できず、胡桃は静かに目を逸らす…。

胡桃「……ああ」

由紀「……どうして——」

悠里「どうして黙ってたの?」

由紀の声を遮るようにして、胡桃のことを見つめる悠里。

彼女はいつになく鋭い目付きを向けており、怒っているようだった…。

胡桃「心配…かけるし……」

悠里「まったく、そんな下らない理由で…!」

胡桃「ツ!下らないって…そんな言い方しなくても…!」

悠里を強く睨み返し、声を荒げる。

それを見ていた由紀と美紀は慌てて二人の間に割って入り、どうか落ち着かせようとした。

美紀「胡桃先輩っ!りーさんも…落ちついて下さい!」

由紀「そ、そうだよ…!」

悠里「だって、本当に下らないんだもの…」

胡桃「あたしはっ…!ただ…迷惑になると思っ…それが嫌で…」

呆れたように放った悠里の言葉を聞き、胡桃が顔を伏せる。

悠里は落ち込んだ様子を見せる胡桃の前に立ち、自らも顔を伏せながら呟いた。

悠里「そんな下らない理由のせいで黙って…それで死んだらどう

するの？残された私達は…何も知らないままあなたとお別れしなきゃならないのよ？」

泣きそうになるのを堪えているのか、徐々に悠里の声が震えていく…。胡桃はそつと顔を上げ、目の前で語る悠里を静かに見ていた…。

悠里「もう嫌なのに…誰かが死んだりするのは…嫌なのにつ…どうして…どうしてこんな事ばかりっ…!!」

グツと拳を握り、肩を震わせる悠里…。

チラツと覗いたその表情はとても辛そうで、見ているだけでも胡桃は辛い気持ちになった。

胡桃「そういう顔されるのが…嫌だった…」

悠里「…：…：ばか」

胡桃「…：ごめん」

溢れてきた涙を手で拭いながらボソツと呟く悠里に対し、胡桃は一言そう返す。直後に悠里は表情を一変させ、微笑みながら彼に告げた。

悠里「こんなどうしようもない娘だから、私がそばで見なきゃね…。私も二人についていくけど、構わない？」

「…もちろんです」

外は危険なので残っていて欲しいという思いも少なからずあったが、自分と二人きりよりかは慣れ親しんだ友達がいた方が胡桃も幸せだろう…。そんな事を考え、彼はニツコリと微笑んだ。

由紀「私もついてくよ！どんな時も、胡桃ちゃんのそばにいる!!」  
そう言うってから由紀は胡桃に抱きつき、彼女を離さない。

胡桃は戸惑いながらその顔を真っ赤にし、由紀の顔を間近で見つめた。

胡桃「わ、わかったからっ！離せって！」

由紀「はなさないっ！ずっとこうしてる!!」

胡桃「くうう……／＼／＼」

両手でぎゅくつと抱きしめながら、由紀はその顔を胡桃の胸へと埋める。悠里と美紀はそんな光景を前にして楽しげに笑っていた。

悠里「ふふっ…美紀さんはどうするの？」

美紀「もちろん私もいきますよ。先輩達が頑張ってるのに、後輩の私一人だけ楽は出来ませんから」

美紀の答えを聞き、悠里は微笑む。

胡桃もすっかりとその答えを聞いており、抱きつく由紀を引き剥がそうとしながら悠里と美紀を見つめていた。

胡桃「…ほんとに…いいの？」

悠里「もちろん、当たり前でしょ」

美紀「胡桃先輩を——さんと二人きりにするのは色々と不安ですからね…」

横目でそつと彼を見て美紀が呟く。

彼は心外そうな表情をして、美紀の顔を見返した。

「それってどういう事ですかね…」

美紀「どういう事だと思えます？」

「……………」

聞きはしたが彼は薄々気づいていた…。

つまり美紀は、胡桃と二人きりになった瞬間に彼が色々な意味で暴走すると考えているのだ。無論、今の彼にそんなやましい気持ちは無いが、胡桃と二人きりの生活が長く続くとなれば話は別…なんとも言えなくなる…。結局彼は美紀に何も言葉を返せず、逃げるように視線を胡桃の方へと向けた…。

胡桃「由紀もいいのか？外、危ないぞ？」

由紀「大丈夫っ！ずっと一緒だよ♡」

即答する由紀を見て胡桃は嬉しそうに微笑み、彼女の頭を撫でる。頭に被っていた帽子越しに撫でられながら由紀は目をギュツと閉じ、ニツコリと微笑んだ。

胡桃「…んじゃあ、これからも頼むな…」

小さく囁き、由紀・美紀・悠里・そして彼を見つめる…。

結局、元々一緒にいた全員が胡桃についてきてくれる事になった。

あとは今日も敵が来ないのを祈るばかりなのだが、やはり…今日も連中は現れなかった…。

## 九十七話 『それぞれの道』

胡桃を治す手がかりを探すべく、由紀達が再び外に出ることを決意したその翌日の昼過ぎ…彼女達の待つ広間へと誠が現れる。誠は連中が戻るはずの倉庫へと今日も偵察に出掛けており、それから戻ったところだった。

誠「やっぱり、今日も戻ってきてないな」

宮野「じゃあ…本当に…」

宮野はそつと顔を上げ、誠の顔を見つめる。

誠は広間をゆつくりと歩き、そばにあつた椅子へと腰かけた。

誠「さすがに二日も帰ってこないのはおかしいからな…。こりゃ、本当に全滅したのかもな」

誠のそんな呟きを聞いても、宮野は驚かない。宮野自身もそう思い始めていたからだ。二人の他、その広間にいた彼、由紀、悠里、胡桃、美紀はそれぞれが安心したような表情をする。

悠里「もしそうなら、やっつと安心できますね」

胡桃「ああ…、攻めてこられたら危なかったしな」

誠「人数が人数だったからな。それだけに、その連中が全滅したつてのは驚きだが…」

宮野「まだ決まったわけじゃないですけど…」

不安げに呟く宮野…。

だが、連中が二日もあの倉庫に戻っていないというのはかなりの異常事態。連中の身に何かがあったというのはまず間違いないだろう…。

「…ヤッッ」

席につきながら話を聞いていた彼はそつと立ち上がり、誠のそばへ

と歩み寄る。もし連中が来ないというのなら、他にやらなくてはならない事があるからだ。

誠「あ？どうした？」

「マコトさん…それと宮野さんも、聞いて下さい」

宮野「ん？」

悠里達が見守る中、彼は昨日彼女達と立てた計画を二人へと告げる。

その話を聞いた二人は驚いたような表情を見せるも、外に出ていくという事に対して反対はしなかった。

何故なら、胡桃の為だと聞かされたからだ…。

誠「なるほど、胡桃を助ける為ね…。」

宮野「やつぱり、完璧に治ってたわけじゃないんだね…。」

胡桃「…。」

誠と宮野は静かに胡桃を見つめる…。

目の前で気まずそうに目を逸らしている彼女はどう見ても普通に見えて、危ない状態だと言われても実感がもてない…。だが、本当に危ない状態ならばこのままここで様子を見ていても仕方ないと思っ

た。

誠「…わかった。なら、俺も——」

悠里「いえ、マコトさんと宮野さんはここに残っていて下さい」

彼女達の事が心配なのか、誠も彼女達についていこうと立ち上がる。

だが悠里はそんな誠の発言を遮り、ここに残るようにと告げた。

誠は悠里の目をじっと見つめ返し、呆れたように言う。

誠「おいおい…本気で言ってるのか？」

宮野「危ないよ。私もついてくから、みんなと一緒に——」

悠里「私達なら平気です。だから、二人はここでミナさん達の事を守ってあげていて下さい」

ニツコリと微笑み、悠里は二人に告げる。

美紀や由紀も誠と宮野を見つめてそつと頷いているが、それでもやはり納得がいかなかった。

誠「……………つってもなあ」

宮野「だいたい、私もある程度落ちついたらここから出ていくつもりだったのに……………」

誠「そうなのか？」

宮野「そうですね！いつまでもミナちゃん達のお世話になるのは悪いじゃないですか……」

宮野は攻めてきた敵をどうにかした後、一人でここから出ていこうとしていた。裏切ったとはいえ元々は敵だったというのもあり、居辛かったからだ。もつとも、未奈たちは彼女が敵だったということを微塵も気にせずに優しく接していたが、宮野にとってはそれも辛かった……。

宮野が俯きながら黙っていると広間の扉が開き、白雪と弦次を引き連れてきた未奈が彼女の元へと歩み寄る。

未奈「……………」

宮野「え、えつと……………」

未奈は宮野の前に立ち、悲しげな目をしながら彼女をじつと見つめる……。それがなんだか気まずくて、宮野はキョロキョロと目を泳がせた。

未奈「宮野さん……出ていっちゃうんですか？」

宮野「へっ？」

未奈「今、外から聞いちゃったんです……。『ここから出ていくつもりだ』って……そう言ってるの」



未奈達は誠に言われ、少しの間席を外していた。何も知らない白雪の前で連中の話をするわけにはいかないと思つていたからだ。だが少し時間が経ち、様子を見に広間へと戻つてきたところ、宮野がそう言つていたのを聞いてしまったらしい…。

宮野「えつと…うん。そろそろ…ね」

連中も攻めては来なそうだし、もうそろそろ出ていくべきだろう。そう思い、微笑みながら答える宮野。

未奈はそんな彼女を悲しそうに見つめ、そつと尋ねた。

未奈「ここに居るの…嫌ですか？」

宮野「…ううん、嫌じゃないよ。ただ、迷惑かけちゃうからね」

未奈「そんなことないです！私もヒメちゃんも、宮野さんの事好きですから…。出来れば一緒に…いてほしいです」

宮野「……………」

その瞬間、宮野は境野のところに行った時には感じることもなかった温かい気持ちに包まれ、未奈の事を見つめる…。あの時、彼女には怖い思いをさせたハズなのに、彼女は戻つてからずっと優しく接してくれていた…。

白雪もそうだ…。初めこそ少し警戒していたが、彼女はすぐに自分から話し掛けに来てくれた。それからは定期的に目の前に現れてくれて、まるで可愛い妹が出来た気分だった。

宮野「…白雪ちゃんも、迷惑じゃない？私が…ここにいても」

見つめながら尋ねると白雪はそこにヒョコヒョコと歩み寄り、ニッコリと微笑んだ。

白雪「…はい。一緒に…いてほしいです…」

照れているのか、少し顔を赤くして答える白雪。

そんな白雪がとても可愛くて、宮野はその頭を撫でた。

宮野「そっか…ありがとうね」

彼女の頭をほんの少し撫でた後、そつと手を離す。

もし本当に迷惑ではないのなら、宮野はここにいたかった…。

彼女は最後に弦次を見つめ、その思いを告げる。

宮野「ゲンジくんも…平気かな？私なんかが、ここにいても…」

弦次「ええ、全然構いません。当然、マコトさんも残りますよね？」

宮野に答えた後、弦次はそばで椅子に腰かけていた誠へと尋ねる。

誠は腰かけた椅子をグラグラと揺らしながら、ニヤリと笑った。

誠「なんだ？寂しいのか？」

弦次「違うつての！男女の比率がアレだから…一人でも多くの男に居てもらわないとなんか気まずくて…」

照れたように顔を背けて、弦次は声を小さくする…。

思いもよらぬ本音を聞いた誠はおかしそうに笑い、他の者もつられて笑った。

宮野「ふふっ…そうだよね。大変だよね」

誠「はははっ！安心しろ、俺は残ってやる」

弦次「…どうも」

そう答える誠を見てどこか安心したような顔をする弦次だったが、直後に誠が放った言葉には驚くことになる。

誠「まあ、コイツらは出てくけどな」

彼、由紀、悠里、胡桃、美紀を順に指さしていつて告げる。

弦次はもちろん、未奈と白雪もそれには驚いていた。

弦次「なっ…!!？」

未奈「なっ、なんで!?!どうして!?!」

「その…色々あります…」

申し訳なさそうな表情を見せる彼の横を白雪は通り過ぎ、後ろにい

た美紀達の元へと駆け寄っていった。何も言わずにたたずむ彼女達を見た白雪は悲しそうな顔をして、静かに尋ねる…。

白雪「みき…本当に出てくの？」

美紀「…うん、ごめんね」

由紀「で、でもねっ！また遊びにくるから！」

白雪の悲しげな表情を見た由紀は彼女の肩を掴み、安心させるように告げた。白雪は目を潤ませながら由紀の目を見つめ、それから悠里と胡桃を見つめる…。

白雪「ゆうり…くるみ…」

悠里「ごめんね、どうしてもやらなきゃいけない事があるの…」

胡桃「わるい…。また近いうちに顔見せにくるからさ、それまで待つてられるか？」

悠里と胡桃は彼女の頭を撫で、優しく微笑む…。

白雪は二人の顔を見つめ、静かに頷いた。

白雪「…うん、まってる…」

美紀「良い子にしてるんだよ。まあ、白雪ちゃんには言わなくても大丈夫か…」

白雪「また…遊びにきてね？」

由紀「うんっ、約束する！」

美紀…そして由紀も彼女の頭を撫で、今度は未奈達の方へと向く。白雪とのやり取りを見ていて冗談などではないと実感したのか、未奈はかなり悲しそうな表情をしていた。

未奈「いつ…出ていくの…？」

悠里「出来るだけ早い方が良いので、今すぐにも…」

未奈「…急だね…」

胡桃「その…ごめん、ミナ…」

泣き出しそうな未奈を見ていたら彼女達が自分の為に出ていくと

は言い出せず、胡桃は申し訳なさそうに頭を下げる。すると未奈は顔をバツと勢いよく上げ、悠里に告げた。

未奈「……わかった！じゃあ、一時間だけ待って？」

悠里「一時間、ですか？構いませんけど…何を？」

未奈「みんなの車に乗つけてた物資、全部盗られちゃったでしょ？だから家にあるやつを乗るだけ分けてあげる!!」

未奈は強がっているかのようにニッコリと微笑み、元気よく言った。

しかしさすがに申し訳無い気がするので、悠里達は慌てた様子で答える。

悠里「いいですって！貴重な物資なんですから！」

胡桃「そうだよ！大丈夫っ、あたし達はまた外で探すから！」

未奈「家にはまだまだたくさんあるから良いのっ!!ほら、マコトさん達も手伝って下さいっ!!」

止めようとする悠里達を振り払い、未奈は広間を出ていった。

手伝えと言われた誠は渋々立ち上がり、弦次や白雪、宮野も未奈に続いた。

誠「本人がああ言ってるんだ、受け取っておけ」

弦次「減ってきたらまた集めに行くから、気にしないでオツケーですよ」

美紀「…ありがとうございます」

由紀「ヒメちゃんもありがとうね」

白雪「ううん、大丈夫だよ」

白雪は由紀に笑顔を見せ、未奈達の手伝いに向かう。

彼女達だけに任せるのも申し訳無いので悠里達も手伝おうとするが…。

悠里「あの…私達も手伝いを…」

未奈「私達だけで大丈夫だよ。それより、みんなは部屋に置いてある荷物を取ってきた方が良いんじゃない？」

胡桃「あつ、そうだ。荷物忘れてた……」

美紀「危うく、着替えすら置いてくところでしたね」

由紀「じゃあ、取りに戻ろつか」

悠里「そうね……じゃあすいません。そちらは任せます」

未奈「うん、オツケー♪」

そういえば、それぞれの部屋に自分の着替えなどの荷物を置きっぱなしにしていた……。未奈に言われたことでそれを思い出した悠里達は慌ててそれぞれの自室だった部屋へと戻り、荷物を回収しに戻る。彼女達がそうしている間に、未奈達は車へ物資を運んだ。

そして役1時間が経ち……彼女達は屋敷の庭に停めていたキャンピングカーの前に立つ……。未奈達はまだ少しだけ悲しげな表情を見せ、これから出ていく彼女達を見つめていた。

未奈「えつと……食べ物とか薬とか……他にも必要になりそうな物は乗せといたから……遠慮なく使つてね？」

悠里「本当に何てお礼を言ったらいいのか……すごく助かります」

急に出ていくなどというワガママを受け入れてくれただけでなく、物資まで分けてもらってしまった。それがとても申し訳なくて、悠里は深々と頭を下げる。すると由紀達もそれに続き、未奈達へ向けて頭を下げた。

胡桃「みんな……ありがとな」

未奈「いやいやっ！そんなのいいから顔あげてっ！だいたい、私とゲン君はこの程度じゃ返せないくらいの借りをみんなに——」

白雪「……？」

危うく何も知らない白雪の前であの出来事の話をしてしまいそうになり、未奈は慌てて口を塞ぐ。そんな未奈を見た白雪は不思議そうな顔をしていたが、深く探ってきたりはしなかった。

弦次「…おい」

白雪の目線が未奈へと移っている内に弦次は彼のそばにより、小声で耳打ちする。先程未奈が言ったとおり、弦次は彼に大きな借りが出来たからだ。

弦次「迷惑かけて、本当に悪かった…。それとお嬢を…いや、俺達を救ってくれてありがとう。お前がここに来なかつたら、奴等を倒してくれなかつたら…俺は一生、奴等の言いなりだった…」  
「…いや、こつちこそ、このタイミングで悪いね。まだまだ油断出来な  
いってのに」

弦次「二日も経ったんだ、連中が来る可能性はかなり低い。どうにかなるよ…」

「やる事やったらまた様子を見に来る。それまで無事で…」

弦次「ああ、そつちも生き延びてくれよ」

彼と弦次はそんな会話を交わし、互いに微笑む。

一方、白雪は由紀の腰に抱きつきながら顔を埋め、泣き出しような表情をしながら別れを惜しんでいた…。

白雪「ゆき…みき…ゆうり…くるみ…絶対、また遊びにきてね？」

由紀「うん、絶対に来るよ♪」

悠里「少しの間だけだから、良い子にしててね？」

美紀「また、遊びにくるよ…」

胡桃「勝手に外出たりするなよ〜？」

白雪「…うん……うんっ…」

かけられた言葉の全てに頷きながら、白雪はそつと由紀から離れる…。そうしてから最後に彼の事を見つめ、白雪は言った。

白雪「みんなのこと…しっかり守ってあげて下さいっ！お願いしま  
すっ!!」

「……………うん、もちろんだよ」

白雪は深々と頭を下げながら彼に告げる。

それは白雪にしては大きな声だったため、そばで聞いていた未奈や弦次はとても驚いたような表情をしていた…。だが、二人はすぐに微笑む。これだけ大きな声を白雪が出したのは、それだけ彼女達の事が大好きだからなのだ。と気付いたからだ。

彼は目の前で頭を下げる少女の頭をそつと撫でると、振り返って車のドアを開ける。もう、出発の時だった…。

由紀「じゃあ…またね」

白雪に未奈、それから弦次、誠、宮野へと手を振りながら、由紀達は車へと乗り込む。それぞれが最後の挨拶をしながら車へと乗り込む中、最後に乗る胡桃へ誠と宮野が言った。

誠「どうにかなる…。だから、また元気な姿を見せてくれよ」

宮野「大変だと思うけど、諦めたりしないようにね？絶対、また会おうね…」

胡桃「……………うん、ありがとう…。また来るよ!」

最後に笑顔を見せてから、胡桃は車へ乗り込む。

ドアは閉まり、エンジンのかかった車体が音をたてながら小刻みに揺れ始めた。誠は弦次と共に屋敷の門を開き、彼女達の出発を見送る…。

悠里「じゃあ、行ってきます!」

運転席の窓から悠里が顔を出し、誠達へと告げる。

由紀達も座席の窓から顔を出し、白雪達へ手を振っていた。

白雪達は自分達も大きく手を振り返し、門の外へと出ていく車を見

つめる…。

白雪「絶対、またきてね〜!!」

大声で叫んだその言葉はしっかりと届き、由紀が走る車体から身を乗り出す。彼女は少しだけ泣きそうな顔をしながらも、ニッコリと微笑んでいた。

由紀「ばいば〜いっ!またね〜っ!!」

走っていく車はどんどん遠くなり、曲がり角を曲がって未奈達の視界から姿を消した…。それを見送った誠と弦次は門を閉め、未奈達のそばへと戻る…。

誠「さて…行っちゃまったな」

宮野「少し…寂しいですね」

未奈「絶対にまた会えます…ね、ヒメちゃん?」

白雪「うんっ、また来てくれるよ」

弦次「…だな。あの人達なら大丈夫だ」

そんな言葉を交わしてからもう一度だけ、彼女達の走っていった道を見つめる…。またいつか会える事を心の底から祈りつつ、五人は屋敷の中へと戻っていった。



くくくくく

由紀「……………はあ…」

屋敷を離れ、どこに向かえば良いのかも分からないまま走っていくキャンピングカー…。その車内、後部の座席に座る由紀が悲しげにため息をつく。やはり、未奈や白雪と別れるのが辛かったようだ。

胡桃は由紀とテーブルを挟んだ真正面の席へ座り、窓の外をじっと見つめている彼女へと語りかける。

胡桃「わるいな…面倒なのに付き合わせちゃって…」

由紀「ん？嫌だなあ、全然平気だよ！何て言っても、愛する胡桃ちゃんの為だもんねっ！」

胡桃「愛するって、お前な…」

照れる胡桃の方へと視線を向けて微笑み、由紀は席の前にあるテーブルの上に身を乗り出す。そして正面に座る胡桃の右手を掴みあげてからガツシリと両手で握り締め、そこにそつと額をつけた…。

胡桃「……………」

由紀「…ほんつとに冷たいねー」

由紀は両手と額とでその体温の冷たさを感じとり、ニヤケながら胡桃の顔を見つめる。直後に胡桃は掴まれている右手を軽く振り回し、由紀の手から逃れようとした。

胡桃「文句あるなら離せくく」

真顔の胡桃が適当に手を振り回す。

由紀はニヤニヤしたまま両手を離さず、楽しげな表情をしていた。

由紀「えへへくつ♡離さなあ〜い♡」

胡桃「…ぷっ！あははっ♪」

ずつとしがみついてくる由紀が面白かったのもある…。

でも、胡桃が笑った理由はそれだけではない…。

隠し続けていたものを大切な友達に打ち明けられた上に、みんながそれを受け入れてくれた。しかも、自分なんかの為にまた危険な外へと出てくれたのだ…。

胡桃（全部打ち明けると、こんなに楽になるんだな…。みんなに言えて…みんなが優しい奴等で…本当によかった…）

改めて、この仲間達の大切さを実感する。

出来ればここにいる全員に言っておきたい言葉があった胡桃だが、全員に言うのは少々照れくさいので、とりあえず…目の前にいる由紀にだけ告げる事にした。

胡桃「…由紀」

由紀「んっ？」

相変わらず、胡桃の右手を両手で握り締めている由紀…。

これから告げる言葉が恥ずかしいものなので、首を傾げてこちらを見つめる由紀を胡桃は直視出来ない。なので仕方なく、そつと顔を伏せてから小声で告げた…。

胡桃「……………大好き」

言った瞬間、胡桃は自分の顔が真っ赤になるのがわかった。

恥ずかしくて由紀の顔を見れない…。ひよつとしたら、今は普通の人間以上の体温になっているのでは？実際のところ胡桃の体温は低いままだったのだが、自分ではそう思う程に体が熱くなってきた気がした。そんなふうに胡桃が照れていると…。

由紀「…あたしも大好きだよ」

由紀が小さく…それでいて優しい声で囁く…。

それを聞いた途端、照れていた自分が馬鹿らしく思えてきてしまい、胡桃は顔をあげて微笑んだ。

由紀「…絶対に治してあげるから…これからも一緒にいようね」

胡桃「…ああ…わかったよ…」

由紀の言葉が本当に嬉しくて思わず涙ぐみそうになるが、胡桃はそれを堪えて笑顔を保つ。由紀も胡桃が笑っているのが嬉しくて、二人でしばらく笑いあっていた。そして、少し離れた席からそれを見ていた彼もまた…嬉しそうに微笑んでいた。

くく

由紀『この日から、胡桃ちゃんはよく笑うようになった。きっと、キミのおかげだね…。結果がどうなるかは分からないけど…幸せそうに笑う胡桃ちゃんが見れて、本当によかった…』

くく

そして、時刻は二日前…。

ちようど由紀達が境野達の手から無事に生還し、未奈の屋敷へと戻ったのと同時刻へと遡る…。

午後の五時を過ぎ、辺りが夕焼け色に染まる頃…一台の大きなトラックが町の中心部から少しだけ外れた道路を走る。そのトラックを運転しているのは、境野の仲間である如月という女性だった…。

如月「…よし、着いた」

境野から人員を借りた如月は自らの住み家へと戻る途中、ある場所に寄り道をしていた。ドアを開けて乗っていたトラックから降り、荷台を叩きながらそこに乗せていた境野の仲間達に降りるよう指示を出す。

バンバンツ！

如月「ほら、とつとと降りて！」

「あれ、ここが如月さん達の住んでるところですか？めっちゃ豪華じゃないですか！」

荷台から降りる十人の男達…その内の一人が目の前にあるその屋敷を見て目を輝かせる。しかし、如月はすぐに首を横に振ってそれを否定した。

如月「残念だけど、ここには先客がいるの」

高い塀と頑丈そうな門。

その向こうにそびえ立つ屋敷はとても大きく、男達は各々驚きの声をあげる。

「持ち主はよっぽど金持ちだったんだろうな…」

「境野さんが目をつけてるあの女の子、ミナ…とか言っただけ？あの娘の屋敷も中々豪華な造りしてそうだったけど、この方が上かな…」

未奈の屋敷を見たことのある者はそう呟き、如月を見つめる。

如月は門の前にスタスタと歩み寄り、それに寄りかかりながら中の庭を覗き見ていた。

如月「…いないのかしら？前はすぐに来たのに」

誰もいないその庭を見て、ボソツと呟く。

他の仲間も庭を見たが確かに誰もいない上に、屋敷から誰かが来る様子もなかった。

「ここ…誰が住んでるんです？…」

気になった一人が尋ねる。

すると如月は門によりかけていた体を起こし、それに答えた。

如月「私達の敵…」

「敵？…って言うことは、ここに住んでるのが例のグループって事ですか？」

如月「そ。前に交渉してここを渡すように言ったんだけど、全く聞いてくれなかったの」

「確かに…ここを住み家に出来ればかなり良いですね」

如月「ええ、この門と塀があれば奴等が入ってこれないし、自家発電機まであるみたいよ？」

「おっ、そりゃスゲエ…。んじゃ、とつとと奪っちゃいますか？力づくで奪う為に俺達を連れてきたんでしょ？」

如月「…いえ、今はちよつと挨拶に来ただけ。ここにいる連中と殺

り合うのはもう少し後…私達の住み家に戻って、全員と合流してからね」

「今ここにいるメンバーだけじゃ足りませんか？相手、何人です？」

如月「前に会った時のままなら…三人よ」

「な…っ!？」

如月が不敵に微笑むのを見て、その場にいた男達は一瞬言葉を失う…。

たった三人なら今すぐにも攻めてしまえば良いと、誰もが思った。

「たった三人…？なら、わざわざ合流するまでもないでしょ？俺達だけで十分！」

如月「私もそう思うけどね、あの人が言ってたの…『アイツらを甘く見るな』って…本当に怖い顔してね。だから、今は念の為に戦わないでおきましょう？」

「あの人ってのは…」

如月「ええ、ウチのボスね。あの人があんな顔するの見た事ないから、凄く驚いたわ。今回、境野から人手を借りてくるようにって提案したのもあの人の」

自らのグループのリーダーの顔を思い浮かべながら、如月はその門に背を向ける。中の住人が不在のようなのでトラックに戻ろうとしたその時、一人が尋ねた。

「大体…どんな奴らなんです？ここに居るその三人ってのは」

如月「そうね…まず男が一人。彼はなんていうかヤンキーっぽくて…あと少しバカそう…そんな青年よ」

如月の毒舌な発言を聞いた男達がニヤニヤとする。中には声を出して笑う者すらいた。

如月「男はもう一人いるみたいだけど、その人については知らない

わ、会ったことないから。問題は最後の一人：若い女の子なんだけど、スツゴくム力つくの…」

「あーそれがさつき言ってた女の子か。可愛いんですよね？」

如月「まあ：顔だけならそれなりにね。私あの娘大っ嫌いだから、戦いが始まったら好きに苛めて良いわよ。見知らぬ男達連中に無理やり襲われれば、あの娘も泣き喚くでしょ」

「へへ…よっしーやってやろうぜ!!」

男達はやる気を上げ、それぞれ顔をにやけさせる。

如月はそんな男達を見ながらため息をつき、トラックのドアに手をかけた…。

??? 「如月さん…今日は随分と友達連れてるね」

如月「…あら、いたの？」

ドアに伸ばした手を下げ、そつと声の方へと向く。

その声はトラックの向こう側から発せられていて、その主はトコトコと歩きながら自分から姿を現す。

如月「久しぶりね、狭山ちゃん」

狭山「…どうも。にしても…まだ生き延びてたんだ」

如月「それはお互いさま…」

”狭山”と呼ばれたその中髪黒髪の少女は一度如月を見つめ、すぐにその後ろに控える男達を見る。そんな狭山を見た男達は思っていたよりも少し幼い子だという印象を彼女に感じたが、十分に興奮できるくらいの可愛さも兼ね備えていた。

「お〜…わりと可愛いじゃん!!」

「お嬢ちゃん!もうちよつとこつちおいでっ」

男達は次から次へと彼女へ語りかけ、鼻息を荒くする。

狭山はそんな連中を見て、引き気味に口を開いた。

狭山「…：如月さん、どこに行ったらこんな珍獣達を捕まえてこれ

るの?」

「はあ…?珍獣?」

如月「…ね?ムカつく娘でしょ?」

「ちよつと口が悪いな…説教してやるか?」

「まあまあ、照れてるだけだって。可愛いじゃん」

狭山の発言に苛立つ者もいたが、何人かは彼女の発言を冗談として捉えたらしく笑いながら苛立つ者をなだめていた。

如月「狭山ちゃん、どうかな?この屋敷、私達に渡してくれない?」

狭山「…ボクはただ住まわせてもらってるだけだから、渡したりするような権限ない」

如月「じゃ、その権限持つてる人に伝えてよ。『渡さないなら全員殺して奪っちゃうよ』ってね」

狭山「…えつとね、多分返事は決まってる。『やってみろ』って言われるよ?」

かなり物騒な事を言った如月の発言に表情一つ変えず、狭山は首をかくく傾げながら答える。如月はそんな彼女を見て微かに眉間にシワを寄せ、不気味に笑った。

如月「…じゃあ、後一時間したらまたここに戻ってくるから、せいぜい楽しみに——」

狭山「ううん…:ボク達の方から行くから良いよ。如月さんは自分達の住み家で待ってて」

言葉を遮るようにして告げる狭山に一瞬戸惑う如月だったが、それならそれで好都合だとも思った…。

如月「へえ…わざわざ来てくれるの?」

狭山「…うん。だって、ここで戦ったら柳さんの家が汚れちゃう。

如月さん達もどうせここを手に入れるなら、綺麗な方が良いでしょ?」



如月「……………そうね」

狭山「…じゃあ一時間くらいしたら行くから、準備して待つててね」

如月「ええ…わかった…」

如月はそう答え、トラックのドアに手を伸ばす…。

狭山はそんな如月へ向け、無表情のまま手をパタパタと振つていた。

如月「……………ねえ、今一人なの？」

狭山「…え？」

如月「一人…よね？なら…アンタだけ…先に…………」

ぼかんとした表情のままたたずむ狭山に気取られぬよう、如月は腰に隠していたナイフに手をあてる…。彼女一人ならば、このまま仕留められると思ったからだ。しかし、ここにいるのは彼女だけではなく…。

??? 「残念！一人じゃないんだなこれが!!」

如月「!？」

突如聞こえたその声の主はいつの間にかトラックの荷台に乗っていたらしく、ニヤニヤしながらそこから飛び降り、目の如月とその仲間を見つめた。

如月「…穂村君、いたのね」

穂村「どうも如月さん。ダメじゃん、この家は渡さないって前に言っただろ？」

”穂村”と呼ばれた青年は肩まで伸びた茶髪が印象的で、かなり鋭い目付きをしていた。一見するとヤンキーのように見えるその風貌に引き気味の者もいたが、如月は動じずに穂村と睨み合っている…。

如月「いつからいたの？」

穂村「最初から狭山と一緒にいたけど、あんたら全員狭山に夢中みたいだからこっそりと荷台に乗って隠れてみた!!」

如月「…そう」

穂村「あんたらの会話聞いてたけどさ、本当にウケるわ。狭山お前、地味にイライラしてきてただろ？」

穂村は狭山の横に歩み寄り、その肩をバシバシ叩きながらケラケラと笑う。狭山は自らの肩を叩いてくる穂村の手をガシツと掴み、呆れたような顔をした。

狭山「…今の穂村の方がよっぽどイラつく」

穂村「そんなにイライラしてばかりいるとモテねーぞ？お前、ちよつとしたことでもすぐにキレるからなあ」

狭山「…ボクが怒る原因の120%は穂村のせいだから、キミが死ねばイライラもなくなるよ」

穂村「まったく…俺を見習つてもつと我慢強くなれつての」

狭山「…：そういうえばさっき、如月さんが穂村の事バカそうって言つてたよ」

穂村「んだとババア!!」

如月「ちよつ!?!」

狭山の発言を聞いた穂村は如月に殴りかかろうとしたが、狭山が背後から穂村の服の腕を掴んでそれを押さえていた。暴走しかけている穂村を押さえている狭山はニヤニヤしながら如月を見ており、その表情がまた如月にとっては不快だった。

狭山「まったく…ダメだよ穂村…。女の人にババアなんて言っちゃ。ほら、あのババア気にしてるよ」

如月「っ!!」

「ぶっ!!」

さらつと毒のある発言をする狭山と、それを聞いて狭山を睨む如月。

その光景が面白かったのか、男達の数人が声を押し殺して笑い始めた。

如月はそんな笑い声に気付き、男達をギロツと睨む。

如月「あんたら…ふざけてんの？」

「あははっ…いや、すんません。おかしくって…」

如月「ッ！もういい…帰るわよ！」

如月はかなり機嫌を悪くしてしまい、トラックに乗り込んでいく。必要以上に強く閉められたドアはバンツ！と大きな音を鳴らし、いかに彼女が不機嫌かを知らしめた。男達はそんな彼女に遅れぬよう、慌てて荷台に乗り込む。

如月「…ちゃんと来なさいよ？来なかつたらこっちから行くから」

狭山「…大丈夫、絶対行くから」

如月「楽しみにしてるから…あんたが泣きわめくの…」

運転席の窓から顔を出し、それだけを告げて如月は去っていく…。

狭山は穂村と二人でそれを見送り、直後に顔を見合わせた。

穂村「お前、泣きわめくの？」

狭山「…そんな予定はない。そういえばボク、前も別の人に似たような事言われたんだよね…」

穂村「狭山つて泣かせたい系女子なんじゃねえの？少しわかる。ほら、普段表情のレパートリーがないからさ、貴重な泣き顔見たら萌える…みたいなの？」

狭山「…如月さんはただボクが嫌いだから泣かせたいだけでしょ。まあ、絶対泣かないけど。…それより、穂村はボクの泣き顔に萌えるの？」

穂村「お前がいかにも表情の無い人間かを知った今なら、かなり萌えると思うぜ。ほら、泣いてみて？」

狭山「……本当に死んでほしい。今回の戦いで名誉ある死を遂げてくれないかな…」

ボソツと呟きながらその門の鍵を使い、狭山は中へと入っていく。

穂村は自らも中に入ってから門を閉め、彼女の後に続いた。

穂村「あの調子だと、かなりの人数を集めてそうだな。狭山、大丈夫か？」

狭山「…大丈夫だよ。今はボクと穂村の他にあの人もいるし、少し人数集めただけの連中には負けない」

穂村「だといいいがな…。一時間くらいで行くとか言っちゃったし、ろくな準備も出来ねえか」

狭山「穂村…いつも戦う前に準備とかするっけ？」

穂村「しねえ」

狭山「じゃあ…問題ないじゃん」

穂村「ああ、問題ねえ」

穂村とその屋敷の大きな扉の前に立ち、それを開けていく。

狭山と共に屋敷の中に入った穂村がそれから手を離すと、木製の扉はギギツと軋むような音を響かせながら勝手に閉まっていった。

…バタン！

狭山「…今日はもう休む予定だったけど、仕方ないね」

一人呟き、狭山は穂村と共に歩を進める。

迫る戦いを他の仲間に伝え、準備をしなくてはならないからだ。

穂村「さあて、気合い入れていくか」

狭山「…うん」

## 九十八話 『胡桃と白雪』

白雪と共に屋敷付近にある川へと水浴びにやってきた胡桃。

彼女は川辺に立ち、一つ一つ服を脱いでいく…。

一方で白雪は一足先に服を脱ぎ終え、川にゆつくりと足をつけた。

白雪「つめたっ…」

川の水は少し冷たかったが、この日はかなり暑い日だった為ある意味ちょうど良い冷たいさでもある。普段未奈とくる時、日によってはあまりの冷たさに我慢できない時もあった白雪だが、今日のは平気だ。

胡桃「あつ、もう少し待てよ。あたしももう脱ぎ終わるからさ」

白雪「うん、はやくしてね」

白雪は川から胡桃へと視線を移し、服を脱ぎ終えた彼女の体を見つめる。

裸になった彼女の身体…その右肩には何やら傷痕のようなものがあった…。

白雪「くるみ…それ…」

胡桃「ん、ああ…これね。前にちよつとな…」

嫌な事を思い出したのか、一瞬だけ胡桃は辛そうな表情をした気がした。

直後に胡桃は川にゆつくりと入り、持ってきたタオルを少しだけ川につけて濡らす。そうして濡らしたそのタオルに石鹸を擦り付けて泡立てると、胡桃はそれで白雪の体を拭き始めた。

白雪「…噛まれちゃったの？」

胡桃「えっ?…あ、ああ。…心配しないで大丈夫だぞ? 見つけた薬を使ってどうにかなったからさ…」

白雪「へえ…、良かったね」

胡桃「ああ、ほんとに良かった…」

胡桃「…ハズなんだけどなあ」ボソツ

白雪の体を拭きながら、彼女には聞こえないほど小さな声で胡桃は  
呟く。

彼女の髪、体を綺麗にし終えた胡桃はそばを離れないようにと言  
聞かせ、今度は自分の体を拭き始めた。

胡桃「白雪、あたしが体洗ってる間だけ、ちよつと周りを見とい  
てくれるか?」

白雪「うん、アレがそばに来ないようにだよね?」

そう言つて白雪は辺りをキョロキョロと見回す。

彼女のいう”アレ”とは、”かれら”の事を指すのだろう。

胡桃はもちろんそれも心配していたが、更に言えばもう一つ警戒し  
ているものがあつた…。

胡桃「それもあるけど、もしかしたら…あのお兄ちゃんが覗きに来  
るかもしれないからな…」

仲間である彼の事を思い浮かべ、引きつった笑みを見せる…。  
いくら彼でもわざわざこんなところまで覗きに来るだろうか?  
たぶん大丈夫だとは思ふが…油断は出来ない。

白雪「それって…わたしの体を覗きに?」

胡桃「あゝ…そこはさすがにあたしを覗きに来ると思う。もし白雪  
目当てで来たら、冗談抜きにぶつ殺すわ…」

胡桃（白雪目当てでとか…ロリコンもいいところだからな）

白雪「ふうん…。あの人、くるみが好きなの？」

胡桃「へっ？いやっ…そのっ…」

その突然の言葉に胡桃は慌て、思わずタオルを川に落としてしま  
う。

胡桃はそれが流れてしまう前に拾い上げ、そのままじつと…水面に  
映る自分を見つめた。

胡桃（あいつが…あたしの事を好き？…どう…なのかな…。あたし  
…いつもあいつにキツくあたっっちゃってるし…）

白雪「…くるみ？」

胡桃「あ？ああ…違うよ。あいつはあたしが好きだから覗きに来る  
んじゃないくて、あたしが女の子だから来るの。男の子つてのはそうい  
うもんだからな」

白雪「ゲンジは白雪とミナが川に来た時に覗きに来たこと、一回も  
無いよ？大声出せばすぐ来れる所で待つててくれるだけで」

胡桃「あゝ、あの人はしっかりしてそうだもんなあ…」

白雪「あのお兄ちゃんはしっかりしてないの？」

胡桃「んん、前に一回、みんな温泉に行ったんだけどな。その時  
あいつ…こっそりとあたし達の裸覗きに来たんだよ」

白雪「…ヘンタイ？」

胡桃「ああ、ちよつとヘンタイだな」

そんな話をしている間に胡桃は体を洗い終え、川から上がるとその  
辺に置いておいたバッグから乾いたタオルを二枚取り出す。

その一枚を白雪に手渡し、二人は濡れた体を拭き始める。

胡桃「風邪ひいたら大変だからな、ちゃんと拭けよ？」

白雪「うん。あつ…背中、うまく拭けない…」

胡桃「ほら、こっちに背中向けろ。拭いてやるから」

白雪「…ありがと、後でわたしも胡桃の背中拭いてあげる♪」

胡桃「ん、そうか？じゃあ頼むよ。」

白雪は胡桃に背中を拭いてもらおうと、今度は約束どおり胡桃の背を拭く。

拭き残しが無いようにと、小さい手で一生懸命に…

胡桃（妹って…こんな感じなのかなあ）

胡桃は白雪に背中を拭いてもらっている間、ふとそんなことを思った。

二人は濡れた体を拭き終え、脱ぎ捨てていた服を着る。

胡桃は持つてきたバッグを背負ってからシャベルを右手に持ち、忘れ物がないことを確認した。

胡桃「…よし、大丈夫そうだな。帰るか？」

白雪「うんっ！」

差し伸べられた胡桃の左手を白雪は嬉しそうに握り、ゆっくりと歩きます。夕焼け空の下…手を繋いで歩く二人はまるで姉妹のようだった。

白雪「帰ったらあのお兄ちゃんのこと…ヘンタイって呼んじやいそう」

胡桃「あはは…、シヨック受けるからやめてやれよっ！」

白雪「だって、ヘンタイなんでしょ？」

胡桃「まあ、多少は……」



胡桃「……でもな」

白雪の手を握りながら胡桃は語る。

以前、彼に助けられた時の話を…

あれは、悠里が病に倒れた時の事だ。彼女を一日でも早く治すため、胡桃が夜中にある場所へと単身潜り込んだ際の話になる。

胡桃「前に…みんなには内緒で夜中に外を出歩いた事があったんだけど…」

白雪「くるみが？」

胡桃「そ、あたしが。どうしても一人で行かなきゃならない所があつて…自分勝手な事をしたんだ」

胡桃「そしたらあたし…ちよつと怖い三人の男の人達に捕まっちゃつてね。ひどい事されそうになつたんだ」

白雪「ヒドイこと？」

胡桃「うん、ひどい事。動けないように押さえつけられて…ちよつとキツイ言葉も言われた。まあ元はと言えばあたしが悪いってのもあるんだけど…。それであたし…泣いちゃつてさ…」

白雪「……………」

胡桃「…そしたらね、あいつが来てくれた。大人三人が相手なのに…あいつは逃げたりしないで、あたしの為に怒って…その人達と戦つてくれた」

白雪「大丈夫だったの？」

胡桃「ああ！あいつはあたしが思ってたよりもずつと強くて、その人達をやつつけてくれた。まあ、さすがに怪我しちやつてたけどね」

胡桃「傷だらけになったあいつを見て、あたしはまた泣いた…。助かったって安心したからってのもあるけど、何よりもあたしのせいであいつに怪我させた…。それが情けなくて…」

胡桃「あいつはこんなあたしを一度も怒らず、それどころか心配までしてくれた。怒鳴られたり…。ちよつと殴られたりするくらいは覚悟してたんだけどね」

胡桃「えつと…。何が言いたいかっていうと、あいつはただ変態っただけじゃなくて、優しく…。そういうカツコいい一面もあるってこと。わかった？」

白雪「…うんっ！」

につこりと微笑み、どこか嬉しそうな顔で彼の事を語った胡桃…

白雪は彼女の冷たい手を握り直し、笑顔を返す

直後、胡桃は何かを思い出したような声をあげて…。白雪へある事を告げた。

胡桃「あつ！そういうえげさ、あたしの腕の傷…。あのお兄ちゃんには内緒な？」

白雪「えっ、どうして？」

胡桃「あいつがこれの事知ったら、たぶん凄く心配してくれると思う。でもな、あたしはもう、あいつに余計な心配をかけたくないんだ…」

先ほどまでの嬉しそうな顔から一変し、今度は物悲しそうな表情を見せる胡桃。白雪はそんな彼女を見て、一つの疑問を抱いた。

それは何となく抱いた疑問で、確証など一切ない…。ただ、ちよつと気になる。だから…。本人に尋ねてみた。

白雪「くるみは…。あのお兄ちゃんが好きなの？」

胡桃「はあっ?! いやっ…あたしは、べつにつ…!!」

白雪のその発言に胡桃はあたふたと慌てて、顔を真っ赤にする。歩みを止め、その場で足踏みをしながらキョロキョロとする胡桃…そんな胡桃はともおかしくて、白雪は失礼だと思いつつも笑うのを我慢できなかった。

白雪「…つぶ、あははっ! くるみ、おつかしいく!!」

胡桃「くう…バカにされてる…」

白雪「えへへ、ごめんなさいっ! ほら、はやく帰ろ?」

笑った事が出てきた涙を指先で拭い、白雪は胡桃の手を引いて歩き出そうとする。

だが、胡桃はそこにたちつくしたまま夕焼け空を眺めてぼうっとしており、動こうとはしなかった…

白雪は彼女の手をグイグイと引っ張りつつ、声をかける。

白雪「…くるみ?」

胡桃「……………」

白雪「ねえ、くるみつてば!」

胡桃「…よしっ! 白雪、お前にだけ特別に教えてやる…」

白雪「うん?…何を?」

胡桃「あたし……あのお兄ちゃんの事が好きだ」

わずかに赤く染まった頬をして、どこか幸せそうに微笑みながら……胡桃は白雪にそれを告げた。白雪はその笑顔につられてにっこりと笑うと、胡桃と手を繋ぎ……仲良く並んで歩いた。

白雪「……そっかぁ♡」

胡桃「好きって言ってもちよつとだぞっ！ちよつとだけだからな！？」

白雪「はいはい。わかってるよ♪」

胡桃「念押ししとくけど、これは本当に内緒だぞ……？それこそ傷の事以上に内緒だ!!もしこれがあいつにバレたら、あたしは恥ずかしくて死んでしまう……」

白雪「うん！内緒ね♪」

胡桃「ああ。内緒だ♪」

夕焼け空の下……仲良く手を繋ぎながら二人は帰る。

大切な仲間と……”ちよつとだけ”好きな彼が待つ場所へ……

異編―前編―『もつと別の終わり方』

胡桃 「本当にツライなら…あたし達から離れていってもいいよ…」

胡桃 『境野つて奴等から由紀とりーさんを連れ戻す事が出来たのは良かったけど、帰ってきたアイツの心は見るからにボロボロだった…。だから、この時のあたしはアイツにこう言っつてやる事が一番の選択なんだつて…そう…思っつてた…』

~~~~~

誠まことや宮野の協力もあり、彼が由紀と悠里を連れ戻す事が出来た日の夜…。胡桃は暗い顔をしながら未奈の屋敷内を歩き、みんながいるであろう広間へと入る。中に入った胡桃はそこにある程度の人が集まっつているのを確認するとその中の一人…悠里へと視線を向け、そばに歩み寄つた。

大きなテーブルの前にずらつと並べられている沢山の椅子…その内の一つに腰かけていた悠里は胡桃の存在に気付いた瞬間、彼の様子を胡桃に尋ねる。

悠里 「胡桃…どうだった？」

あの事があってから彼はずっと元気がない……。それを心配した悠里達は胡桃なら彼を元気付けられるのではと思いい、彼女を説得に向かわせた……。だが、胡桃の暗い顔を見れば結果は何となく想像がつく……。

胡桃「ごめん……。だめだった……。もう少しだけ、ほっといてやろう……」

その言葉を聞いた悠里は残念そうな表情をしたが、こうなつては仕方がない……。彼が自力で立ち直るのを待つだけ……。胡桃は悠里の隣の席に座ると頭を抱え、テーブルの上に顔を伏せてしまった……。

誠「胡桃でもダメとなると……。かなり重症だな」

そばの壁に寄りかかっていた誠が呟く。

胡桃は伏せていた顔をほんの少しだけ上げてから誠、そしてそばにいた美紀・由紀の顔を順に見つめていった。

胡桃「みんな……。ごめん……」

由紀「そんなつ……。胡桃ちゃんが謝らないでよ！悪いのは……。全部わたしなのに……!!」

あの時……。境界は由紀か悠里を殺せと彼に迫り、彼は悠里を選んだ。

由紀はその選択に納得が出来ず、無事に戻れてからも彼に冷たくしてしまっていた……。それが彼を一層追い詰めてしまったと思いい、由紀は責任を感じていた。

由紀「わたし……。やっぱり謝ってくるっ!!」

彼に謝る為、扉へと向かう由紀……。

だが、今の彼の元に彼女が行ってもどうにもならない気がしたの

で、胡桃はそれを止めさせようとした。

胡桃「由紀っ!!……いいから、ほっといてやれ……」

由紀「でもっ!わたしのせいで……!!」

胡桃「お前のせいじゃない……。これは……ここにいる誰のせいでもないんだよ……。強いて言うなら、お前らを捕まえてた境界って奴のせいだ……」

由紀「でも……でもっ……」

美紀「由紀先輩……もう少しだけ様子を見ていきましょう?あの人もきつと、すぐに元気になりますから……ね?」

いてもたってもいられず、泣きそうな顔をする由紀……。美紀はそんな彼女の背中を撫でながらそばの椅子へと誘導し、そつと席につかせる。由紀は大人しく座っていたが、その表情はどこかツラそうだった。

悠里「また……みんな一緒になれたのに……。どうしてこんな……」

胡桃「……」

眩く悠里になにも言えず、胡桃は顔をそむける。

『あたし達から離れていってもいい……あの時、胡桃は彼にそう言っつてその場を去ったが、出来ることならずつと一緒にいたいと思っつていたし……彼も何だかんだでそれに答えてくれると、心のどこかでそう思っつていた……』

~~~~~

翌日の夜、胡桃は部屋に閉じこもったままの彼の様子を窺いに向かっていた。本当なら今日の朝、境界の仲間達がこの屋敷に来るはずだったらしいが結局やって来なかったし、良い展開になってきているのかも知れない……。あとは彼が元気を取り戻すだけだ。

コンコンツ：

希望を見出だした胡桃は彼の部屋のドアをノックして返事を待つ。昨日はすぐに部屋を出ていってしまったが、今日はもつと話してみよう……。そうすれば、彼を救えるかも知れない。

胡桃「……………」

：彼からの返事がない。胡桃はもう一度手を上げ、ドアを三度ノックした。

コンコンコンツ：

廊下に響くノック音が何故か嫌な音に聞こえだす……。彼からの返事はまたしても返ってこなくて、胡桃は不安を感じ始めた。

胡桃「…………おい、開けてもいいか……？」

中にいるなら聞こえるであろう声量で廊下から尋ねる。

だが、やはり返事はない……。焦った胡桃はドアノブを捻り、部屋の中へと足を踏み入れた。

バタンツ!!

焦ったあまり力を入れすぎてしまい、ドアを開ける音が必要以上に大きく響く……。中に彼がいるなら迷惑そうな顔をされたら……。だがそれでもいい……。どんな顔をされても、彼がそこにいてくれるなら…………。



胡桃「あ……はは……っ……マジ……かよ……」

片手で髪をガシガシと掻き、力ない声で胡桃は呟く……。

部屋の中にはもう、誰の姿もなかったからだ……。

よく見れば彼の寝ていたベッドの上……そこに一枚の紙切れが置かれており、何かが書かれている。胡桃はそのベッドに腰掛けてその紙切れを手に取り、勇気を出してそれに視線を向けた。

その紙切れにはただ一言……『今までありがとう』とだけ書かれていた……。

一瞬その言葉の意味が理解できずにいた胡桃だが、すぐにそれを理解し……ドサツとベッドに倒れ込む……。

胡桃「ほんとに……いなくなっちゃうのかよ………。一言くらい……言ってくれてもよかったのに……っ……」

今すぐ由紀達にこの事を伝えなきゃいけないのに、胡桃はショックで動けずにいた……。自分からああ言った以上、こうなる事も覚悟していたハズなのに……いざそれが現実になると涙が止まらなくなる。

胡桃「ううっ………！っぐ……！うっっ……！！」

暗い部屋の中……胡桃は一人すすり泣いた……。

涙が止まり、落ち着くのを待っていたら予想よりも時間がかかり……由紀達に彼がいなくなった事を伝えたのは彼の部屋を訪れてから三十分以上経ってからだった……。

くくく

悠里「うそ…でしょ…!?!」

美紀「いつ…いつここを出ていったんですかっ?!?!」

広間の中…。胡桃の口から知らされた事実には驚き、二人は彼女のそばに寄っていく。由紀はというと、彼がいなくなっただという事実にか  
なりのショックを受けたようで放心状態になっていた。

胡桃「夕方の時にはいたから…その直後だと思う…」

美紀の問いに対し、胡桃は消え入りそうな声で答える。

胡桃の目は真っ赤に腫れており、さっきまで泣いていたのだろうかという事に美紀は気付いた。

美紀「胡桃先輩…大丈夫…ですか？」

胡桃「…うん。もう…仕方ないよ…」

彼の事を諦めた胡桃はニコツと微笑んで告げるが、どうみても強  
がっているのが分かる…。彼女は何事も無いかのようにして席につ  
いたが、悠里は彼女の肩を掴んだ。

悠里「はやくっ…はやく探しに行かないと!!外を一人で歩くのは危  
ないって分かってるでしょう!?!」

胡桃「…分かってるよ。分かってるけど…アイツはもう、あたし  
達と一緒にいけないんだよ…。あたし達と一緒にいると、苦しくなっ  
ちやうから……」

悠里「なっ…!?!なに訳の分からないこと言ってるのっ!!しっかりし  
てよ!!!」

胡桃の肩を激しく揺さぶる悠里だが、胡桃はもう答えない……。これ以上放っておくとケンカになりかねないので、そばにいた誠は堪らず悠里を止めに入った。

誠「落ち着けて……。話を聞いてると、ここを出ていったのはアイツ自身の判断だ。そうだろ、胡桃？」

誠は悠里の手を掴み、胡桃から離す……。

胡桃は悠里に掴まれた事によって微かに乱れた自分の衣服を整えながら、静かに誠の問いに答えた。

胡桃「……うん。アイツ自身がもうここに……。あたし達のそばにいられなくなっただよ……。一人の方が気楽だし……。誰かが傷付くのを見なくてもいいから……」

誠「……そうか、分かった。とりあえず、俺はこの事をミナとゲンジ……。それと宮野に伝えてくる。少ししたら戻る、後の事はそれから考えよう」

そう告げてから誠は部屋を出ていき、広間に残ったのは胡桃・由紀・美紀・悠里だけになる。誠が出ていった直後こそ広間は静まり返ったが、悠里が再び胡桃に声をかけた事によってその静けさは消えた。

悠里「マコトさんが戻ったら、すぐ彼を探しに行くわよ」

胡桃の肩を背後からそっと叩く悠里……。だが胡桃はその手を静かに払いのけ、バカにしたように笑いながら彼女の目を見つめた。

胡桃「だからさ……。話聞いてなかったの？ アイツはもう、あたし達とは一緒にいけないんだよ……」

悠里「ちよっと……。その言い方は何!?! 胡桃は彼の事が心配じゃないのっ!?!」

美紀「二人ともっ……! 落ちついて下さいっ!!」

悠里の声が荒くなる……。焦った美紀が二人の間に入るが、二人の熱は瞬く間に美紀一人では止めるのが難しいところまで上がっていった。

胡桃「心配だとか心配じゃないとかって話じゃないんだよ!! こうして別々の道を行った方がアイツ自身のためなんだ!! あたし達と一緒にだ、アイツはこれから何度も苦しむ事になるんだよ!!」

悠里「だからっ……言ってる意味が分からないっ!! つまり、胡桃は何を言いたいのか!？」

胡桃「今回だつてそうだ……りーさんと由紀が捕まって、相手の連中はアイツ一人だけを呼び出した……。その結果どうだ? アイツは半端なくツライ選択を迫られて……どうにかそれを切り抜けたかと思えば今度は由紀がっ……!」

感情に任せて言葉を放ち続けた胡桃だが、それだけは言ってはダメだと口を閉じる。しかしそれは少々遅かったようで、由紀は肩を震わせながらテーブルに顔を伏せていた。

由紀「ご……めんっ……ごめんっ……! わたしの……せいだよ……っ! わたしが冷たくしちやったから……!! 一生懸命……助けようとしてくれたの……!! なの……!! どうしよう……どうしよう……!!」

テーブルに顔を伏せたまま、由紀は大声で泣き始めてしまった……。それを見た悠里もその場に崩れ落ちてから両手で顔を覆い、泣き声を漏らす。胡桃は泣いている由紀を背後から抱きしめ、何度も頭を撫でた。

胡桃「ごめんっ……! 違うよ……由紀のせいなんかじゃない……絶対に違うからっ!!」

胡桃（あたし最低だ……! 今、アイツが出ていったのを由紀のせいにしてしまった……!! そんなこと無いのに……絶対に違うの……!!）

肩を震わせながら泣いている由紀の頭を撫で、胡桃は何度も謝る。だが今の由紀にはその言葉が聞こえていないらしく、由紀は涙を流しながら『ごめん…ごめん』と繰り返す言葉を放っていた。

少しすると誠が部屋に戻ったが、誠は広間の状況を見渡して困ったような表情をする…。胡桃は大泣きする由紀を落ち着かせるのに必死であり、美紀もまた床に崩れ落ちて泣いている悠里をなだめていたからだ。

誠「みんな大丈夫…じゃないよな…」

美紀「すみません…。かなり、キツイ状況です…」

悠里の背を撫でながら美紀が答える。一見すると彼女は冷静に振る舞っているように見えるが実際はかなりショックな状態らしく、今にも泣き出しそうな瞳をしていた。

由紀「探しに…行かないと…っ!!」

溢れる涙を拭いながら立ち上がり、由紀が言う。

しかし今はもう夜…。外は真っ暗であり、かなり危険だ。そんな状況の外に出るのを許す訳にもいかず、誠は扉の前に立ち塞がった。

誠「夜は危険だ。せめて朝になるまで待て」

由紀「でもっ！そんな危ない外に一人で行っちゃったんだよ!?はやく探しに行つてあげないと…あの人に何かあつたら…わたしっ！」

彼に万が一の事があれば、由紀はまた自分を責める…。そうと分かっているが、それでも危険な夜間外出は避けなければならない。出ていった彼を探そうとして由紀に何か起きてしまったら元も子もないのだ。

誠「由紀、落ち着け…。アイツは長いこと一人で生きてきた人間だ。そう簡単に死んだりほしくない」

由紀「でも…。でもっ…！」

誠「良いから、今日はもう眠れ。朝になったら俺がすぐ探しに行くから…」

いくら言っても由紀は中々納得しなかったが、一時間後には泣き疲れて眠っていた…。由紀は眠り、悠里は目を腫らしている…。美紀・胡桃は比較的落ち着いているようだが、実際のところは分からない…。

誠「胡桃、ちよつといいか？」

胡桃「えっ…。うん」

その場を一旦美紀に任せ、誠は胡桃を廊下へと呼び出す。わざわざ胡桃だけを呼び出した理由…それは彼が出ていった理由を深く聞き出す為だった。

誠「アイツはお前達のそばにいたくなくて出ていったのか？」

胡桃「…うん。これ以上一緒にいても、傷つくばかりだから…」

誠「胡桃、お前はそのままアイツがいなくなっても構わないのか？」

胡桃「ああ、アイツが自分の意思で出ていったんだ…。無理言っつて止めるなんて出来っこない…。このまま別々の道を行った方が良いでしょう…」

微笑みながら答える胡桃だがその笑顔はあまりに弱々しく、もはや強がる事すらまともに出ていない…。胡桃は誠との話を切り上げて広間に戻ろうとするが、誠は彼女の左手を掴んで引き止める。

誠「お前が必要ないと思うなら、俺は明日アイツを探しに行くのをやめる…。それでもいいか？」

胡桃「うん…そうした方が良い…。由紀にはあたしから言っておくよ…」

誠「本心からそう思っているならいい。だが、強がっているだけならもう止めろ。こんな世界で我慢ばかりしていても良いことなんて何もない…」

掴んだ胡桃の手が誠の言葉に反応するようにピクツと動く。

その後、二人はしばらく無言だったが、誠が手を離すと胡桃はそばの壁に背を寄りかけ、頭を抱えながら言った。

胡桃「…ごめん…アイツのこと…探してもらってもいいかな…？  
まだ…一緒にいたいんだ…。まだ…別れたくないんだ…」

泣きそうになりながらも、それを堪えて胡桃が告げる。

彼がツラくて仕方ないなら自由にさせてあげたいとも思っていたが、本心ではまだまだ一緒にいたい…。彼女のそんな本音を聞いた誠は優しく微笑み、首を縦に振った。

くくく

一方…同時刻の屋外……。

彼女達に黙って出ていった彼は明かりも持たずに歩道を歩いていった。

ヨロヨロと歩く様子は今にも倒れてしまいそうで危なっかしいが、今の彼のそばにはそれを心配する仲間もない……。

(みんな…怒ってるかもな…)

自分から出ていったんだ…。もう気持ちを切り替えなければいけないのに、彼は彼女達の事ばかり考えてしまう。また一人になったのだから、これからは自分の事だけを考えていけば良い…。自分一人だけで生きていけば、誰かが傷付く事に怯えたり…誰かを失う事を考える心配もない。ただひたすらに…自分の事だけを考えれば……。

『ア……アア……ッ……』

ブーツとしながら歩いていると、前方に”かれら”の姿があった。

数はほんの四〜五体……。走れば余裕でかわせる相手だが彼は走ろうとはせず、そつとナイフを手を取った。

「……………」

”かれら”との距離は10m弱しかなく、彼に気付いてこちらに向かってきていた。たった数体だからと侮あなどっているのか…彼は自分から”かれら”の方へと歩いていく……。

『グ……アア……ッ……!!』

そばまで寄った瞬間…”かれら”の内の一体が彼に掴みかかろうと手を伸ばす…。彼はその手をかわし、反撃としてそいつの頭にナイ



フを突き刺した。

ザシユツ!

振り抜いたナイフは頭を狙ったはずだったが…狙いは微かにずれ  
てその一体の額を切るだけで終わる。仕留められなかったその一体  
はまたしても彼に手を伸ばし、肩をガシツと掴んだ。

「ちっ…!!」

一体が彼の肩を掴んで顔を寄せる…。彼はすかさずその一体の腹  
部を蹴り飛ばし、慌てて距離を空けた。

(くそ…動きが雑になってる…)

自分が必死に戦わねばその脅威が彼女達に向いてしまう…。みん  
など一緒にいる時はそのプレッシャーがあつたので彼は実力以上に  
戦えていたが、自分一人だけになるとそのプレッシャーから解放さ  
れ、戦い方が雑になる…。

(たった四体くらい…胡桃と一緒にならあつという間だろうな…)

不意にそんな事を考えてしまい、彼は首をブンブンと横に振る…。

もう彼女達の事は考えるな…。これからは一人で生きていくんだ  
…。

そう思つて前を見た瞬間、彼は目を丸くした…。

(…ほんと…雑になってるどころじゃないな…)

彼女達から離れ、自分の戦い方が雑になってる事を思い知った。

しかし雑になっていたのは戦い方だけでなく、集中力もそれに含ま  
れていたらしい…。たった四く五体だと思っていた”かれら”は  
いつの間にか数を増し、彼を取り囲んでいた…。辺りがこんな状況に  
なっているのに、彼は全くそれに気が付けなかった…。

(十体とちよつと……。ヤバい…キツいか……)

自分の周囲を取り囲む十体以上の”かれら”を前にして彼はため息をつく…。その気になればその隙間を無理矢理に突破したり、そばの塀をどうにかして飛び越える事も出来たかもしれない……。だが、彼女達と別れて心身共に疲れきっていた今の彼にそんな選択肢はなかった……。

「どれだけ逃げてても…結局は同じだもんな…」

以前は一人で生きていた…。

その後たまたま彼女達と出会い、少ししてそれがまた元の一人に戻っただけ…。それなのに、異常なくらいの虚無感えぐが彼の心を抉る…。自らのそばに”かれら”が歩み寄ってくる中、彼は一つの事に気が付いた…。

自分のようにずっと一人だった人間でも、一度誰かと幸せな時を過ごしてしまったらもう二度と以前のようにには戻れない…。彼女達から離れれば元の自分に戻れると思っていたが、それは間違いだった……。

「そっか……どれだけ辛くても、一緒にいるべきだったんだな……」

もう少しだけ早くそれに気づければ良かった……。

辛い事ばかりじゃない…彼女達と一緒にいたからこそ味わえた楽しい事や幸せな事だって山ほどある…。それに気付いていれば…

もっと別の終わり方が……

異編―中編―『希望の終わり』

いなくなつた彼を探すために誠は一度自室へと戻り、外に出る準備をしてから屋敷の庭へと出る。本当は明日の朝から探す事にしようと思つていたのだが、胡桃の本音を聞いた以上は早く安心させてあげたいので、夜遅いが外へと向かう事にした。そして屋敷から出た誠が庭から門へ歩みを進めていると、一足先に庭で待ち構えていた人物が歩み寄ってくる…。

誠「…胡桃、どうした？」

手にしていたライトを歩み寄ってきた少女…胡桃の方へと向ける。彼女はそつと誠の顔を見つめ返すと、手に持っていたシャベルを強くギョツと握り締めた。

胡桃「任せっぱなしも悪いからさ、あたしも行くよ」

誠「はあ…それを言いたくて待ってたのか？」

胡桃「へへ…。ほんとは先に一人で行つてようかと思つただけどさ、あとでバレたら怒られるじゃん？」

誠「ま、そりやそうだろうな…。」

胡桃「つてわけで！あたしも一緒に――」

誠「ダメだ。お前は待つてろ」

食い気味に誠が告げる。胡桃はそれに対して明らかに不満そうな顔を見せ、尚も誠に言った。

胡桃「でもっ！一人じゃ危ないだろ!!」

誠「大丈夫だつて、俺は元々一人で生きてきた人間だし…」

胡桃「それでもっ…あたしも…アイツを…」

少しずつ、胡桃が顔を俯けていく…。

彼女がついてくるのをこれ以上断っていると気まづくなってしまうそうだったが、それでも彼女を連れていけない理由が誠にはあった。

誠「俺が出ている間に境野の仲間がここにくる可能性もなくなる。そうなった時、お前には俺が戻るまでの時間稼ぎをしておいてほしいんだよ」

胡桃「…朝来なかったんだ。もう、来ないだろ……」

誠「万が一って事もある。頼むから、待っていてくれ」

胡桃の肩をポンツと叩き、出来るだけ優しい声で頼む誠……。

胡桃は深いため息をつきながら顔を俯けていたが、どうにか納得してくれたようだった。

胡桃「…わかった。じゃあ……アイツを頼むよ……」

誠「ああ、見つけてきてやるよ」

暗い表情の胡桃を屋敷の中へと戻し、誠は庭から門を飛び越えて外に出る。左：右：正面……どの道を行こうか悩むところだが、一先ずは真っ直ぐ正面の道に行くことにした。

誠（わざわざ待っていてくれたのに……悪いことをしたかもな）

屋敷に戻る際、胡桃は顔を俯けながらトボトボとした足取りだった……。彼女は彼女なりに彼の事を心配しているのだから、彼女の気持ちを思えば連れていってやるべきだった。しかし、誠には彼女を連れていけない理由が境野達の事とは別にもう一つあった……。

誠（大丈夫だとは思うが、万が一って事がある…。万が一：アイツに何かあったとしたら。きつと…今の胡桃じゃ…）

正直にいうと、彼女を連れてこれない理由はそれにある。

一人で出ていった彼が”かれら”に襲われ、そして何らかの良くない事があった場合…。胡桃がそれを知ればシヨックを受けるだろう。

誠（もし、奴らと同じになっちゃってしまっているアイツと出会うでもしたら…俺はともかく、今まで一緒にいた胡桃にはキツすぎるだろう。まあ、アイツがそんななっちゃたらなんだかんだ俺もキツいがな…）

もしも彼が噛まれ、”かれら”と同じになっちゃいたら…。

そしてそれを胡桃が見てしまったら…。

考えるだけでも嫌な光景だが、決してあり得なくはない。

その万が一の可能性を避ける為、誠は胡桃をおいてきた。もし彼がそうなっちゃってしまっても、自分一人だけならある程度は落ち着いて処理できる。

誠（アイツに限ってそんなヘマはしないと…用心に越したことはない。一番ベストなのは無事にアイツを見つけ、あの屋敷に連れ帰る事なんだがな）

屋敷の事も心配だ…。出来るだけ早く彼を見つけて一緒に帰りた。誠は駆け足で道路を進み、彼を探す。途中の路地裏やすぐに入れる建物などにも目を通していくが、出てくるのは”かれら”ばかり。誠は出くわした”かれら”を避け、時に戦いながら道を進んでいったが…目当ての彼は見つからない。

誠「くそっ、もう遠くに行っちゃったのか…？」

それともただ単に見落としているだけか……。いずれにせよ、夜になつたこの広い町中で一人の人間を見つけるのはかなりの難易度だ。大声で呼び掛けても寄ってくるのは「かれら」だけなのでその手段もとれないし、やはり地道に探すしかないのだ。

そうして必死に彼を探すこと約二時間……。その間ずっと早足で動いていた誠はさすがに疲れだし、路上の塀に背中を預ける。既に深夜の十二時を回つただろうか……。空に月が出ているおかげで、辺りはほんの少しだけ明るかつた。

誠（：一旦戻るか。いや……。もう少しだけ探した方が……）

屋敷の事も心配だが、由紀や胡桃の為に一秒でも早く彼を見つけておきたい。誠は塀から背を離し、ゆつくりと歩き出す。すると目の前にあつた曲がり角の先から幾つかの呻き声が聞こえてきた為、誠は今一度足を止めた。

『ア……。アア……』

持つてきていたナイフを構えて曲がり角の先へと進む……

進んだ先では「かれら」が十体近く群がっており、これから誠が進もうと思つていた進行方向を塞いでいた。

誠（ここを通りたいんだが、さすがに数が多いな……。仕方ない、誘き寄せて一体ずつ仕留めるか……）

そばにある電柱にライトを軽く叩きつけ、カツンカツンと音を鳴らす……。するとそれに気づいたそれが一体ずつ、列をバラバラに乱して誠の方へと向かってきた。

誠（よし、これなら…）  
距離を空けて一体ずつ迫る”かれら”…。誠はその先頭、一番初めにそばへと迫った一体の前へと歩み寄り、ナイフで頭を突き刺す。そうして一体仕留めたあとはまた同じことを繰返し、一体ずつ慎重に：確実に数を減らしていった。

…ドサツ！

誠「はあ…」

最後の一体を仕留め、誠は息を漏らす。

今日はやけに”かれら”に出くわす回数が多く、嫌な予感を感じていた…。

『グアア……ツ…』

誠「おいおい、またかよ……」

たった今仕留め終えたばかりなのに、その騒ぎに引き寄せられたのかまた新たに”かれら”が現れる。だが、今度の数はほんの三体ほどなので大した事はない…。一気に横を駆け抜けてしまおう。

誠「っ…！」

誠は勢いよくダッシュして三体の横を通り過ぎる。

三体の内、二体は誠を捕らえようとして手を伸ばしたが、その鈍い動きでは素早く動く誠を捕らえられなかった。

誠（よし、コイツらはこのまま放置して…）

”かれら”の横を通り過ぎ、少し距離に余裕が出来たところで振り向く。手を伸ばしてきた二体はトロトロとした動きで誠を追ってきたが、あとの一体は背中を向けたままどこかへと歩いていった。



よく見るとその背中には見覚えがあり、それに気づいた誠の背筋がゾクツとした感覚に襲われる…。

誠「…っ!?!おい嘘だろ…!」

思わず声に出しながら誠は目の前にいた邪魔な二体を突き飛ばし、起き上がるよりも先に頭をナイフで突き刺す…。こうして後ろで騒いでいるにも関わらず、残った一体は誠の事を気にもとめていなかった…。

誠「……………ぐ」

静かに…慎重にその一体の前へと回り込む…。

そうしてある程度距離をとったところに来たが、その顔を確認するのにはとてつもない勇気が必要だった…。もしこの感染者が見覚えのある人物だったら…：自分はどんな顔をして帰ればいい…。様々な思いが頭を過る中、誠は意を決してその顔を覗き込み、ライトで照らす。明かりに照らし出されたその顔を見て…誠は悔しさから拳を強く握りしめた…。

誠「……………バカヤロウが…」

くくくく

誠「…よお」

あれから少しして、誠は無事屋敷へと戻った。

だが広間へと戻ったのは誠一人だけであり、本人も何やら浮かぬ表情をしている…。悠里達と共に広間にいた由紀は誠の前へと駆け寄り聞きたかった事を尋ねるが、由紀本人も結果は分かっているようだった…。

由紀「マコトさん…どう…でした？」

誠「…わりい。見つからなかった。また明日探しに行くから…あまり落ち込むなよ…」

由紀「っ…はい…」

残念そうな顔をして由紀が席へと戻る…。いつもなら寝ている時間なのに起きているのは、それだけ彼の事を心配しているからなのだろう。由紀の隣の席に座っていた悠里はただただ、慰めるようにして彼女の頭を撫でていた…。そんな二人を見ながらただずんできると、美紀・胡桃の二人が席から立ち上がって誠のそばに寄る。

美紀「あの…お疲れ様でした」

胡桃「こっちは異常なかったからさ、ゆっくり休んでよ…」

二人が告げる…。どうやら、境野の仲間達も今のところやって来ていないらしい…。これで彼さえいてくれれば、全ては順調に進んでいたのに…。

誠「…：あぁ、少し部屋で休む。お前達もしっかり休め」

そうとだけ言って誠は広間を出ていき、自室へと向かう…。

思った以上に疲れてしまったが、何もそれは彼を探すために走り回っていたからというだけの話ではない…。あの後の出来事さえなければ…ここまで心身ともに疲労する事はなかっただろう…。

…バタン

誠「…：…くそっ」

吐き捨てるように呟き、部屋にあった椅子へと座る。

あれは彼女達に教えておくべき事なのだろうが、いざ彼女達と顔を合わせると全く言い出せなかった。

誠（少なくとも…由紀には言えない。伝えるとするなら美紀のヤツか…。いや、アイツはアイツでかなり大変なはず…。これ以上の負担はかけられない）

ただ黙っているのも問題なので伝えねばいけないのだが…誰に伝えてもきつとショックを受ける。いつそ、このまま自分の胸にだけしまっておいても良いのではないのだろうか…。

コンコンツ…

そんなことを考えていると、部屋の扉がノックされた。誠はその場から動くことなく、ただ返事だけを返す。

誠「鍵はかかってない。勝手に入っていないぞ」

…ガチャツ

返事を返すと、胡桃が扉を開けて中へと入ってきた…。

彼女のどこか重苦しい表情…そして訪れたタイミングから、誠はその用件を察してしまう。

胡桃「あの…ごめんな？休んでるときに…」

誠「……かまわない」

胡桃「あつ、あのっ…！アイツのこと…何かわかったか？」

誠「…言ったら、見つからなかったって。また明日探しに行くから、あまり心配するな…」

やはり言えない…。伝えねばならない事なのに…彼女を前にしているとしても適当な事を言っでごまかしてしまう。思わずため息をつきながら視線を逸らすと、胡桃はそんな誠を見て何かを察したらしく…小さく呟いた。

胡桃「やっぱり……なにかあったんだな……」

誠「……」

少し悲しげで、微かに震えている声だった…。

ここまで気づかれていたならばと、誠は意を決して彼女の目を見つめる。少し酷だが、最初に伝えるのは彼女にしようと思った。

誠「…ああ。正直にいうと、もうしばらく黙っているつもりだった」  
胡桃「……………」

誠がそう言った時点で、胡桃は二つの可能性を頭に思い浮かべた。  
一つ：誠は彼に会えたが、彼はどうしても帰る気がなく、誠を振り切ってどこかへと消えたのではということ…。そしてもう一つ：こちらは絶対にあつてほしくない可能性だった…。

胡桃「会えたには…会えたんだよな…？」

誠「…一応な」

胡桃「……………そっか」

そうして、互いが無言になる…。

誠は言い出すのが辛いから。胡桃は真実を知るのが怖いから。だからお互い、少しの間何も言えずにいた…。

胡桃「…じゃ、話してくれる？」

勇気を振り絞り、誠の目を見つめる。しかしそれはあまりに辛い出来事…。中途半端な意思ならこのまま知らない方がいい…。誠は最後に一度だけ、胡桃の意思を確認した。

誠「本当にいいのか？きつと…お前にとって辛い話だ」

胡桃「……………うん。がんばるから…言つて…」

目に力を入れながら胡桃は答える。

その目はうるうるしていて今にも泣き出しそうな顔だったが、彼女は下唇を噛んで必死に誠の事を見つめていた。

誠「…わかった」

誠は座っていた椅子を胡桃の方へと向け、真っ直ぐに向かい合う…。

胡桃は自分の鼓動が速まるのを感じながら、ただじっとしていた。

誠「……………はあ」

深いため息をつく誠…。

誠は直後に深く息を吸い込むと胡桃の目を真っ直ぐに見つめ、申し訳なさそうに…弱々しい声で言った…。

誠「アイツは…もう二度と帰ってこない…。いや、帰ってこれない…。

ここまで言えば、大体の事はわかるよな…？」

胡桃「…っ……………あ……………」

誠「……………」

伝えられるなら伝えてしまおう…。そう思っていたのに、誠は自分の発言を後悔しかけた…。言った瞬間、胡桃が声を押し殺しながら泣き始めてしまったからだ…。

胡桃「っ…ぐ……………ひっ……………ぐ…！うう……………っ！」

誠「いつものアイツならそう簡単にドジしたりしないはずなのにな…。夜に出ていったのがマズかったのか…それとも生きる事を諦めたのかは分からない。ただ、アイツはもうダメだった…。本当に…すまないな…」

胡桃「う…ううう…!!っ…ぐすっ…!!」

膝をついてうずくまり、胡桃は泣いた…。

誠が謝罪の言葉を述べていると胡桃は俯けたまま首を横に振り、た

だ自分だけを責めていた…。

胡桃「あたしがっ…もつと…もつと素直になればよかった…!!行かないでっつて、そばにいてっつて…!それだけ口に出してれば…っ!!あいつはきつと…そばにいてくれたのにつ…っ…!!あたしが…強がっつてばかりいたからっ…!!」

誠「胡桃……」

胡桃「や…だ…!やだ…っ!なんで…なんであいつばかり…!あいつはっ…ずつとがんばったのに……なんで…なんでっ!!」

誠の中で、胡桃は強い娘だというイメージがあった。

しかし、こうして目の前で泣きじやくる彼女を見てそのイメージは覆くつがえされる。どれだけ強く見えても、結局…彼女は普通の少女だったのだ。

くくくくく

丸々三十分ほどして…ようやく胡桃が落ち着いてくる。

彼女は床にぺたつとしやがみながら、真っ赤に腫れた目を誠に向けた。

胡桃「あ…いつ…もう…楽になれた…?」

声を押し殺しながらずつと泣いていたせいなのか、胡桃の声は少しおかしくなっていた。彼女の言う『楽になれた?』というのは、“かれら”として動いていた彼を止めてくれたのかという問いなのだろう

う。

誠「…ああ。しつかり終わらせてきた」

胡桃「…ありが…とう…。…。たぶん…あたしじゃ出来なかった…。」

かなり落ち着いたように見えるがまだまだ動揺しているのか、真つ赤に腫れた目から溢れる涙は止まっていない…。胡桃は着ていたジャージの袖でそれをゆつくりと拭っていた…。

誠「それと…これは俺の勘違いかも知れないんだが…」

胡桃「……なに？」

涙を拭いながら、誠の顔を見上げる…。

これから告げる事は誠自身も勘違いかもと感じていたのだが、それでも胡桃には伝えておいた方が良いと思った。

誠「アイツな…あんなになつてたのに、前に立つまで俺の事を襲つてこなかった。それまではずっとどこかに向かおうとしていたようだし、もしかしたら…ここに帰ろうとしてたのかもって思ってたな…」

胡桃「…つ……そ…つか…。」

その事実を聞いて、また涙が溢れてくる…。

もし本当にここに帰ろうとしていたのなら…「かれら」のようになつてもまだ自分達の事を思っていてくれたのなら…。胡桃にとつてこんなに嬉しい事はなかった。

胡桃「会えてよかつたつて…そう思ってくれたのかな…？アイツの心の…ほんの片隅にでもあたし達は…。あたしはいられたのかな…？」

誠「ああ。片隅どころか、心の真ん中にいるような大きな存在だと思うぞ…。だからこそ、アイツはあんな状態になつてもここに帰ろう



としてたんだ。色々あったが、結局はお前達の事を愛していたんだろうな」

そうなら嬉しい…。でも、そうなら生きている時に言葉でそれを伝えて欲しかった…。そうすれば、自分ももつと素直になれたのに……。胡桃は悲しみに押し潰され、再び大粒の涙を流した。

胡桃「あたしもっ…。好きだよって…。愛してるって……。アイツに言っただけじゃよかった。!!そうすれば…。アイツのこと、助けられたかもしれないのに……。もつと…。しあわせになれたかもしれない……。!!」

誠「……………」

胡桃が彼の事をここまで想っていたとは知らず、誠は言葉を失う……。こんな時、少女になんて言葉をかけたらいいのか全く分からなかった……。

胡桃「…あいつ……。今つ……。どこにいるの……?」

誠「さすがに連れては帰れなかったからな、ここから数キロ先の道路の隅……。そこに寝かせておいたよ……」

胡桃「そう……。だよな……。連れては……。帰れないよな」

出来ることならしっかりと葬ってやりたい……。

だが、そうしようにもいい場所がない……。この屋敷の庭に墓を作つてやるのも良いが、ただでさえ大勢で世話になっている未奈にこれ以上の面倒はかけられない……。第一、それをするには皆に事実を伝える必要がある。でも、自分一人で受け入れるのだけで精一杯……。この上、由紀達が悲しむ顔まで見たくはなかった……。

胡桃「由紀には……。まだ言わないで……。絶対、ショックうけるから……」

誠「…ああ」

胡桃「リーさんと美紀には…またそのうち伝えるよ…。ゲンジとミナにも…そのうち……」

誠「宮野には俺から伝えておく…。白雪は…まだ知らなくていいな」

胡桃「うん…しっかりしてるけどあいつはまだ子供だからな…。こんなこと…知らなくていい……」

ゆつくりと立ち上がる胡桃だが、上手く立ち上がれずによろめき、そのまま倒れてしまいそうになる。誠は咄嗟に手を伸ばし、彼女の身体を支えた。

誠「おい…本当に大丈夫か？」

胡桃「大…丈夫。少しずつ…向き合っていくから……」

誠の手をそつと離し、胡桃は部屋をあとにした。

胡桃はそのまま自室へと向かい、扉に鍵をかけてベッドに潜る…。そうした胡桃の頭に思い浮かぶのは、やはり彼の事ばかりだった。

胡桃（もう…会えないんだ…。嫌だなあ……）

さつきあれだけ泣いたのに、また涙が溢れてくる…。会えないとなると、改めて彼に対する自分の想いに気付かされて辛かった。

胡桃（こんなことになるなら、伝えておけばよかった…。どれだけ言いづらくても、恥ずかしくても…言って…おけば……）

彼とずっと一緒にいれると思っていたからこそ、強がって伝えられなかった…。いつ別れの時が来てもおかしくない世界なのに、甘く見えていた事を胡桃は激しく後悔した…。

胡桃「あたしの…せいだ……。ごめん…ごめんね…」

あの時、自分の気持ちに正直になっていれば…。ただ一言『一緒にいてほしい』と言えれば…。もっと別の結果になっていたはずなのに…。自分の無意味な強がりや彼を殺した…そんな事ばかりを考えてしまい、胡桃の心に大きな穴が空いた…。

胡桃「もう…いやだ…。」

くくく

胡桃『この日から何日かして、あたしの身体は少しずつおかしくなっていた…。ほんとなら誰かに伝えるべきなんだろうけど、あたしはまた強がって誰にも言えずにいる。今、もしお前がいたら…あたしはちゃんと相談できたのかな…？』

くくく

異編―後編―『おやすみなさい』

彼がいなくなつて数日が経つた…。

結局境界の仲間達も現れることなく、全員が比較的平穏な日常を過ごしている。にも関わらず皆が暗い顔をしているのは、やはり彼がいなくなつてしまつたからだろう…。

胡桃「……はあ」

キッチンに全員が集まつて夕食を囲んでいると、胡桃がため息をつく…。食事が始まつてかなり時間が経っているのに、彼女の前に出された食べ物はほとんど減つていなかった。

由紀「胡桃ちゃん…具合悪いの？」

胡桃「ん…いや、ちよつとな。大丈夫、寝れば元に戻るから」

悠里「それにしたつて全然食べてないじゃない。もう少しだけでもいいから食べた方が良くわよ？」

胡桃「あく…わりい、ちよつとキツイわ…。誰か代わりに食べていいよ」

ガガツと音をたてながら椅子を引いて立ち上がり、胡桃はキッチンから出ていこうとする…。由紀・悠里・美紀はもちろん、弦次ゲンジと未奈…白雪もそれを心配そうに見つめていた。その直後、胡桃は何もない場合でバランスを崩して倒れそうになる。

胡桃「………うおつ…！」ガタツ！

美紀「くっ！」

そばにいた美紀が咄嗟に手を伸ばし、胡桃の手を掴んで倒れるのを防ぐ。どうにか体勢を立て直す事が出来た胡桃だが、やけにぼんやり

とした表情でいたので美紀は不安げに声をかけた。

美紀「先輩…本当に大丈夫ですか？」

胡桃「あはは…：ごめん、なんかやたらと眠くてさ」

美紀「…部屋まで送ります」

本人はただ眠いだけと言っているが、美紀はそれを疑っていた。

美紀は胡桃の手を自らの肩にかけ、彼女を部屋に送ろうとするが…。

胡桃「おいおい、そこまでしなくても大丈夫だつて…。これじゃ重病人みたいじゃん」

胡桃は彼女の手をそつと振りほどき、ニコツと笑顔を浮かべる。

仕方なく手を離す美紀だったが、やはりどこか不安だった…。

美紀「…しつかり休んでくださいよ？」

胡桃「わかつてるつて…おやすみっ」

胡桃はそばにあつた扉を開けてそこを出ていき、廊下を進む…。

由紀や悠里が『おやすみ』と言いかけていたのに、彼女はそれすら聞かずに出て行ってしまった。

悠里「大丈夫…かしら」

由紀「…：心配だね」

二人だけではない…美紀や未奈達も彼女の事を心配に思っていた。

その中でも誠・宮野の二人は彼についての事も全て知っていたので、余計に胡桃の事が心配だった。

くくく

胡桃「…う…：…んん…：…やっぱり、キツいなあ…：…」

自室を目指して一人廊下を進む胡桃だったが、どうにも真つ直ぐ立つことが出来ない…。彼女は廊下の壁に手をつけて一步一步進んでいくが、時おり倒れそうになってしまう…。

胡桃「…危なっ…：…また転ぶとこだった…：…」

身体に異変が起きたのは昨日から…。時間が経つにつれて歩くことすらままならなくなってきたおり、実を言うと夕食をとるためキッチンに向かうまでにこの廊下で二度転んだ…。因みに、悠里達に言うとはまた心配するので言っていない…。まだ彼の事も言えていないのだ…：自分の身体の事など言える訳もない…。

胡桃（もう…：…だめなのかな…：…）

ほんの10数メートル先の部屋に戻るのにもこれだけ苦勞する…。胡桃は自らの身体の異変を実感し、もしかしたら終わりが近付いているのではと考えた…。

胡桃（あたし、また強がってばかりいるんだ…。みんながあんな心配そうな顔してくれてるのに…：嘘ばかりついて…：…。もし、今お前がいたら…：あたしはちやんと相談出来ていたのかな…：？）

ノソノソと歩きながら彼の顔を思いだす…。

あの時素直になつてさえいれば彼も…：自分の運命も変わっていたのだろうか…。ふとそんな事を考える胡桃だったが、虚むなしいだけなのですぐに止めた…。

胡桃（…やっとなつた）

苦勞してたどり着いた自室の扉を開き、ゆつくりと歩きながらベツ

ドに向かう。たった数歩でたどり着けるはずのベッドさえやけに遠く感じて、胡桃は苦笑いした。

ポフツ！

たどり着いたベッドの上に倒れこみ、モゾモゾと動きながら布団をかける…。肩からつま先までかけて全身を覆っているハズなのに、まるで温かいと思えない…。

胡桃（時間が経つごとに酷くなっていった…。これ、ごまかし続けるのも無理だよな……）

昨日は……いや、今朝ですらここまで酷くはなかった。

確かに少し身体が不自由になってはいたものの、走ろうと思えばきつと走れただろう…。だが、今はとてもじゃないが走ったりできない…。

ここ数日、外の探索は誠と弦次が担当してくれていたので胡桃は部屋にとじ込もっていたのだが、もしかしたら誘われる時が来るかも知れない…。そうなれば、一発で身体の不調に気づかれてしまうだろう。

胡桃（わるいけど、そうになったら断ってやり過ぎすか…）

そうすれば、まだしばらくは隠し通せるだろう…。

他の者との接触も出来る限り避け、必要な時以外は部屋にいればいい…。

胡桃（…でも、そんなに隠して何がしたいんだ？内緒にしていたってこの調子じゃいつかはバレる…。いや、それならまだ良い…。一番最悪なのは……）

最悪な光景として、自分が“かれら”と同じになるのを想像する

…。

皆に内緒にしていたままこの屋敷内でそうなってしまうたら、それはとても迷惑な事ではないのだろうか…？

胡桃（死んでまで…迷惑はかけたくないな…）

きつともう自分は助からない…。このまま皆と一緒にいてもボロが出るだろうし、自分の身体に異変が起きていることを由紀達が知れば更に余計な心配をかける…。胡桃はその計画の実行を真夜中に決め、ベッドの中で時間が過ぎるのを待った…。

くくくくく

胡桃（…そろそろかな。みんな、もう寝ただろ）

ベッドに潜って数時間が経った…。真っ暗な部屋の中、胡桃はベッドからそつと降りて立ち上がる…。やはり、少しだけクラクラした…。

胡桃（っ…：…こんな状態で…いけるかな…）

ベッドの横に置いていたシャベルを手に取り、それを杖のようにしながら部屋を出る…。辺りは静まり返っており、誰の話し声も聞こえない…。胡桃は暗い廊下を少しずつ、少しずつ歩いていった…。

カンツ…：…カンツ…：



杖代わりに使っているシャベルが廊下を突く度に音を鳴らす……。その音で誰か起きてしまわないかと不安だったが、杖無しで歩いて転ぶよりは静かに動ける……。

胡桃「……………」

誰もいない…一人きりの廊下…。

誰かが気付かないよう慎重に歩いていき、遂に玄関にたどり着く。ここで音をたてないようにそつとそれを開けると、胡桃は庭へと足を踏み入れた…。

胡桃「…はあ」

ここまで来ればあとは楽だ…。胡桃は空に浮かんだ月を眺めながらため息をつく…。眺めている大きな月もそうだが、今日はやたらと星が綺麗に輝いている…。おかげで辺りはわりと明るく、ライト無しでもどうにかかなりそうだった。

胡桃（よし、いくか…）

ノソノソとした足取りで庭を歩き、大きな門の前に立つ…。この門は結構錆び付いている為、今の弱っている胡桃一人で開けるのは厳しい…。仕方なく、彼女はそれをよじ登った…。

胡桃「つぐ…………う…っ…」

出来るだけ背伸びをしてから門の上に手をかけ、必死に登ろうとする…。普段の胡桃ならあつさりと登れるはずなのだが、やはり弱っている今の状態では体が上がっていかない…。

胡桃「もう…少しだから…っ！」

片手じゃ上手く上がれない…。胡桃は両手でそこを登る為にシャ

ベルを捨て、二本の腕でその門をよじ登っていく。両手を使うと少しずつ体が上がっていき、遂に門の上に登る事が出来た。

胡桃「はあっ……はあっ……きつつ…」

門の上にしがみつきなから、一度乱れた息を整える。

そうして少し休んでから今度は外の方に足を伸ばして一気に飛び降りようと思っていたが…。

ズルツ!!

胡桃「やっ…!?!」

手が滑ってしまい、胡桃は門の外側の方へと頭から落ちていつてしまふ…。門の高さは約2mほど…。その上から落ちていく胡桃は咄嗟に地面へ手を伸ばしたが、それだけでは衝撃を逃しきれずに額を地面に打ち付けてしまった…。

ガツ!!

胡桃「ツ…っ…ぐう…!」

感覚が死んでいるのか、痛み自体は感じない…。だがコンクリートの地面に額を擦った際、ガリガリツという嫌な音が頭の骨へ直に響いた気がした…。

胡桃「……………」

どうにか立ち上がって額に手を伸ばすと、どろつとした血液がその指先にまとわりつく…。かなり深く切ってしまったのか、その血は目にまで入って少しだけ鬱陶しい…。

胡桃（初っぱなから大怪我しちゃったな…。ははっ…バカみたい…）

ジャージの袖で額を流れる血を拭い、くるっと振り向いて門の向こうの屋敷を見つめる…。由紀達は今、あの中でぐつすと眠っているのだろう…。

胡桃「……さよなら」

自分がいれば、また心配や迷惑をかけてしまう…。なら、いつそのことこの場所から出ていってしまおう。そうすれば、いつか”かれら”のようになっても皆を襲わずに済む…。胡桃は屋敷にいる皆に向けて一言別れを告げると、そんな考えを胸に道の端を歩いていった…。

胡桃「はあっ……はあっ……」

転ばぬよう、扉に体を寄せながら歩いていく…。

やはり先ほどの怪我はかなり深いのか、俯きながら歩いていると血が額からポタポタと滴り落ちていった。

胡桃（うわ……全然止まんない……。これ、血の痕であたしのこと追えるんじゃないか……？）

一定の間隔で地面へ落ちていく血を見てそんな事を考える。

直後、何かの気配を感じて顔を上げると、数体の”かれら”が胡桃の真正面からこちらへと歩み寄ってきていた。

胡桃「……………」

『ア……アア……』

互いの距離が縮まっていき、遂には手を伸ばせば胡桃に届く距離になる。しかし”かれら”は胡桃がそばを通ろうが、肩がぶつかろう

が、まるでお構いなしに通り過ぎていった。

胡桃（もう、全然興味もないんだな……）

”かれら”は胡桃を完全に無視して、どこかへと移動していく…。その様子を少し見てから、胡桃もまた歩きだしていった。どこへ向かうというあてもなく、ただ…一歩ずつ…。

そうやって歩いてしばらく経った時、なんだか体がダルくなってきて…胡桃は歩みを止めた。一度歩みを止めると今度は立っているのも辛くなり、そのまま地面に寝転んだ…。

胡桃（あれ……やっぱり…もう限界だったのかな……）

地面に寝そべり、仰向けになって星空を見上げる。頭の怪我は相変わらず全く痛くないのに、全身が凍えるように寒くなっていく感覚だけはハッキリと分かった…。

胡桃（いよいよ…本格的にヤバいな……まあ、一人だからいつか…。ここでなら、誰にも迷惑かからないだろ…）

もう少しだけ星空を見たいが、まぶたが重くなってきて開け続けるのが難しい…。だが、ここまで来ればもう頑張る必要もないだろ…。胡桃は瞳を静かに閉じて、彼の事を思い浮かべた。

胡桃（そつちで会えたら、今度はあたしの気持ちをしつかり伝えるよ…。だから、すぐ迎えに来てくれよ？めぐねえ、太郎丸と一緒にさ

……)

こんな状況にも関わらず、胡桃は少しだけ笑顔になる……。失った人達とまた会えるなら、死ぬのも怖くないような気がしたから……。しかし、心残りが無いわけでもない……。ふと頭を過るよきのは……大切な友達の事だった……。

胡桃（由紀……りーさん……美紀……みんな怒るだろうな……）

明日の朝、部屋を見て自分が消えた事に気付いたら由紀達は大騒ぎするだろう……。もしかしたら外に探しにくるかも知れない……。かなりの迷惑をかけてしまうな……。そんな事を思った瞬間、胡桃はある事に気が付いた……。

胡桃（あつ……どのみち迷惑かけちゃうんだな……）

彼女達に迷惑をかけたくないから出ていったのに、出ていった事で生まれる迷惑もあった……。なら、自分は何のために出ていったのだろう……。その答えは……意外とすぐに出た。

胡桃（……わかった。結局……あたしは……）

その答えが分かった瞬間……激しい眠気にも似た感覚に襲われてしまい、いつしか彼女は意識を失ってしまっていた……。全身が深い闇に包まれていくようなふわふわとした感覚……。このまま眠り続けられればもう戻れない気がしたが、自分一人の意思ではもう目を開けられなかった……。

『——やんっ！——るみ——ちゃんっ!!』

誰かの声が聞こえる…。

その声は胡桃もよく知っている声で、よく聞けば一人のものではない…複数人が彼女に呼び掛けていた。それらの声を聞いているとだんだん意識が戻っていき、少しずつ目が開けられるようになる…。

胡桃「う…っ…ん…」

由紀「胡桃ちゃんっ!!」

目を開けた瞬間、そばにいた由紀が思いきり抱き付いてきた。

何故彼女がここにいいのか、そもそもこれは現実なのか…状況がまるで理解出来ず、胡桃は無言で辺りを見回す…。辺りには由紀の他、美紀・悠里がいた。

悠里「胡桃っ！よかった…よかったあ…！」

悠里は涙を流しながら胡桃の元に寄り、由紀と一緒に抱きしめる…。未だこの状況を胡桃が理解出来ずにいると、美紀が三人のそばに

寄って胡桃の顔を見つめて言った。

美紀「先輩っ…なに考えてるんですか!? 一人で勝手に出ていくなんて!」

胡桃「えっと…そのっ…」

まだ僅かに視界がぼんやりとしているが、それでも美紀が涙を流しているのは分かった…。つまり、彼女達はこんな夜中に胡桃を探すべく外に出てきたのだろう…。そっと出ていったハズなのに、バレてしまっていたようだ…。

胡桃「みんな…どうして…」

悠里「由紀ちゃんがね…胡桃がいないって言ってみんなを起こしたの…。ほんと…すごく慌てたんだから…!」

胡桃「でも…どうやってここまで…?」

外には”かれら”がいる…。なのによくここまで来れたなと思っていると、そばにあった電柱の裏から気まずそうな顔をして誠が現れた。

誠「…ま、俺が護衛してやったからな」

胡桃「…なんで隠れてんの?」

誠「感動の再会だろ? 邪魔しちや悪いと思って」

冗談で言っているのか、本気なのかは分からない。誠はそんな事をヘラヘラした様子で告げると、そっと歩み寄って彼女の肩を叩いた。

誠「とりあえず無事で良かった…。さあ、早いところ戻るぞ」

いつまでもここに留まってはいられない…。誠の言葉をきっかけに由紀は立ち上がり、座り込んでいた胡桃の手をグイッと引いた。

由紀「ほら、乗っていいよ?」

手を引いて胡桃を立たせた直後、由紀は彼女に背中を向けて軽く屈む…。ようするに背中に乗れと言っているようだが、由紀の小さな背中を見て胡桃は苦い顔をした。

胡桃「いや…由紀じゃ無理だろ…。いいよ、頑張って歩くから…」

由紀「うくくつ!!りーさんっ!!」

悠里「ええ、よいしょつと…!」

由紀が呼び掛けた瞬間、悠里は胡桃の背後に回り込んでその背を押す。バランスを崩した胡桃は由紀の背に倒れてしまい、気付けば彼女の背中におぶさっていた。

由紀「うう…お…もい…っ!!」

胡桃「ぐつ…失礼なヤツだな…」

由紀は胡桃を背中に担ぎ進んでいくが、由紀の力はあまり強くないので進みが遅い…。のそのそ歩く由紀の背に乗った胡桃は深いため息をつき、彼女の頭を軽くポンポンつと叩いた。

胡桃「ほら、キツイだろ…?もう降ろせつて」

由紀「で…でもっ…胡桃ちゃん…身体の調子悪いんでしょ…?」

胡桃「…まあな」

もう隠す必要もないと思い、そつと呟いて答える。すると由紀は小さな体をプルプルと震わせながら、苦しそうな声を出した。

由紀「胡桃ちゃん…すぐに無理ばかりするからっ…だから…家まで送るくらいわたしがするのが…!我慢ばかりしちや、だめだからね!」



胡桃を背負ながら歩くのはかなり疲れるらしく、由紀は早くも息が切れている…。胡桃はそんな由紀の背中から無理やりに離れると、代わりに右手をそつと彼女の肩にかけた。

胡桃「じゃあさ、肩だけ貸してよ…」

由紀「…：うんっ♪」

肩に回された胡桃の右手をしつかりと掴み、由紀は少しずつ歩いていく。すると胡桃の左側…そこから悠里が顔を出し、胡桃の左手を自ら肩にかけてニツコリと笑った。

悠里「じゃあ、私はこっちなね♪」

胡桃「うわっ…!? な、なんかはずいな…」

二人に挟まれて肩を貸してもらった胡桃が照れたような表情を見ると、そばにいた美紀が微笑む…。美紀はライトを片手に進行方向を照らしながら、チラツと胡桃の顔を見つめた。

美紀「額…：怪我しちゃってますね…」

胡桃「んん…：ドジっちゃって…」

美紀「…：胡桃先輩が出ていった理由ですが、大体想像がついてます…。やっぱり、身体に関することですよね？」

胡桃「…：うん」

ごまかしていたつもりでいたが、やっぱりバレていたのか…。だからこそ、出ていった自分をこんなすぐに追ってこれたのだろう…。

胡桃「みんなに迷惑かけたくなくて出ていったんだけどな…」

悠里「その行動自体が一番迷惑よ…：まったく」

胡桃「あはは…：やっぱりそうだな。あたしもね…：さつきそれに気づいたんだ。みんなのそばにいても、いなくても…：結局は迷惑をか

ける。なら、何で出ていったのか……。その理由がわかったよ……」

美紀「……………」

胡桃「結局……あたしは辛い事から逃げてただけなんだ……。迷惑かけたくないって言葉を言い訳にして全ての事から逃げた……。みんなに言わなきゃいけない事もあるのに……。それも言わないまま逃げようとした……………」

由紀と悠里に肩を貸してもらって歩きながら、胡桃はそつと顔を俯ける……。ここまで自分を追ってきてくれた彼女達としつかり向かい合う為にも、彼の事を話そうと思った……。

胡桃「あのね……。アイツの……。ことだけ……。その……。えっ……と」  
言わなきゃいけないのに、怖くて口が上手く動かない……。彼がどうなったかを知れば由紀は泣くだろう……。悠里は悲しむだろう……。美紀は落ち込むだろう……。みんなの辛い顔を見るのが怖くて、唇が震えた……………」

胡桃「……アイツは……。アイツ……は……………」

言い出せずにいると、誠がチラチラ胡桃を見て心配そうな顔をする。どうしても言い出せないなら自分がその役を代わってあげようかと誠が考え始めたその時……由紀がボソツと呟いた。

由紀「実はね……胡桃ちゃんがない事に気づけたの、——くんのおかげなんだ」

胡桃「えっ……?」

右隣にいる由紀の発言に驚き、胡桃はそちらに顔を向ける。すると由紀はそんな胡桃と目を合わせてニツコリと微笑み、穏やかな声で

言った。

由紀「わたしが寝てたら夢に出てきてね、わたしに頼み事してきたの…。胡桃ちゃん心配だから、自分の代わりにそばで見えてあげてくつて。そのあとすぐに起きて胡桃ちゃんの部屋にいったら、もういなくなっちゃってるんだもん…。ほんつとにビックリだよ…」

胡桃「アイツが…夢に…」

由紀「うん…胡桃ちゃんのこと、すごく心配してたよ。色んな人に心配されて、胡桃ちゃんは幸せものだね♪」

ニヤニヤして告げる由紀だったが、胡桃はその顔を直視出来なかった…。由紀の夢に出てくるほど彼に心配をかけてしまっている自分が情けなくて…涙が溢れてきたからだ。

悠里「っ…う…！ううっ…！」

胡桃「由紀っ…ごめんっ…！アイツはもう…もうっ…！」  
涙が溢れて止まらないが、言わなければならぬ事だ…。胡桃は必死に息を整えながら、由紀や皆にそれを伝えようとする…。その様子をみて良くない事を察したらしく、悠里と美紀が静かにすすり泣きだした…。

悠里「っ…う…！ううっ…！」

美紀「…っ…っ…っ…」

二人が泣いているのを見てしまうと、胸が苦しくなつて益々言い出しづらくなる…。二人から目を逸らして由紀の顔を覗き込むと、彼女の頬にも涙が流れていた…。

由紀「くる…みちゃん…。大丈夫だよ…。無理して…言わなくてもいいの…。胡桃ちゃんが言おうとしてることが大切なことだっていうのはわかるけど…でも、胡桃ちゃんが苦しそうにする顔は見た

くないから……」

由紀は涙を流しながらも精一杯の笑顔を浮かべ、胡桃の目から溢れていた涙をゴシゴシと拭っていく。その涙がある程度拭った後、由紀は右手で彼女の頭を優しく撫でた……。

由紀「一人で……よくがんばったね……。もう、無理しなくていいよ。ずっと……どんな時でも、わたし達がそばにいるからね……？」

胡桃「ゆ……き……っ……」

弱いと思っていた由紀が遠くに見える……。

由紀にだけは彼の事を言えない……言えば絶対に壊れてしまうと思っていたのに、いつの間にかこんなに強くなっていたのだろう……。せつかく拭ってもらった涙が、また溢れてきた……。結局、一番弱いのは胡桃自身だったのかも知れない……。

胡桃「みんなっ……ごめん……ごめんっ！勝手なことばかりして……ほんとにごめんっ……!!あたし……みんなに心配ばかりかけて……っ！」

美紀「心配事くらい構いませんよ……。それだけみんな、先輩の事が大好きなんですから……」

悠里「……そうよ。どれだけ心配かけてもいいの……。だから、もう一人を抱え込まないで？何かあれば、みんなで力になるから」

由紀「ほらね？みんな、胡桃ちゃんが大好きなんだよ。胡桃ちゃんは……わたし達の事好き？」

泣いている胡桃の顔を覗きながら由紀が尋ねる……。

もちろん、胡桃の答えは決まっていた……。

胡桃「うんっ…！由紀も…りーさんも…美紀も…大好きっ…！！ほんとに…ほんとに大好きっ！」

もう強がらない…。伝えたい気持ちはハッキリと言葉にして、大切な人達に届けよう。そんな教訓を得た胡桃は皆と無事屋敷に戻ると、その庭で宮野がホツとしたような表情を浮かべて胡桃の元へと駆け寄ってきた。

宮野「よかった！無事だったんだね…！」

悠里「はい、家出ムスメは無事確保しました」

胡桃「家出ムスメ…！」

何だか嫌な響きだが、本当の事なので否定できない…。悠里・由紀に肩を貸してもらって立っている胡桃が苦い顔をしていると、宮野はその顔を真っ青にして胡桃の前髪を上げた。彼女が見ているのは、深く切れた額の傷…。

宮野「わ…わわっ…！無事じゃない…全然無事じゃないっ！！」

胡桃「あはは…門から落ちちゃって…」

宮野「ヘラヘラしないっ！！由紀ちゃん、悠里ちゃん！ちよつとその娘貸してっ！！」

由紀「えっ!？」

悠里「はっ、はいっ!!」

大きな声をあげる宮野に驚き、二人は咄嗟に胡桃から手を離す。支えが急に無くなった胡桃はバランスを崩しかけるが、倒れるよりも先に宮野が彼女を背中に背負った。

胡桃「うおっ…!?」

宮野「とりあえず手当てっ！それからお説教だからね!!」

胡桃「ちよっ…!?あんたそんなキヤラだっけ!」

胡桃を背負ったまま屋敷の中へ駆けていく宮野…。胡桃を背負った時、由紀は歩くのがやっとなったのだが…。宮野は由紀よりも力が強いらしい…。

そんな宮野に無理やり連れていかれたのは彼女の部屋…。宮野は胡桃をベッドに座らせると部屋に置かれていたタンスから救急箱を取り出し、額の手当てをした。

宮野「くっ…かなり深いね…」

胡桃「思いつきり打ちやっつたんで…」

宮野「終わるまで時間かかるかも…。傷痕もちよつと残っちゃうかな…」

胡桃「…別にいいよ」

宮野「まったく…女の子なんだからもつと顔に気を使うっ!!」

傷痕に無関心な胡桃の頬をペシツと叩く。直後、宮野はその頬をそつと撫でながら彼女を抱きしめた…。正面からギュツと抱きしめられると彼女の胸が自分の胸にあたり、顔が真っ赤になる…。

胡桃「な…っ…」

宮野「彼のこと、マコトさんから聞いたよ…。残念だったね…」

胡桃「…うん」

宮野「でも、まだ終わりじゃない…。胡桃ちゃんにはまだ友達が残ってるし…私だっている。自分一人の体じゃないんだから、勝手に諦めちゃだめだよ?」

胡桃「…うん。ごめんなさい…」

その返事を聞いてからそつと身体を離し…手当てを再開する。

そして、宮野はあることを提案した。

宮野「今日はみんなと一緒に寝なよ。そうすれば心も落ち着くハズだから」

胡桃「いや…それは……」

それは出来ない…。一度眠ったら、次に目を覚ました時の自分自分じゃないかも知れないからだ。”かれら”のように変わってしまった、由紀達を襲ってしまう可能性がある…。

宮野「…大丈夫だよ。私が朝までそばにいるから」

胡桃「……………」

もしもの際は彼女がどうにかしてくれるつもりなのだろう…。そう言われたらハッキリ断る事が出来ず、気づけば宮野の部屋で由紀・悠里・美紀と布団を並べていた…。きつと心のどこかでこれを望んでいたから…だから断れなかったのかもしれない。みんなが床に布団を並べるのを見て、胡桃の頬が微かにゆるんだ。

由紀「わたし胡桃ちゃんの隣ねっ！」

悠里「あら、美紀さんはどうする？」

美紀「えつと…じゃあ…私も胡桃先輩の隣がいいです…」

悠里「ん、じゃあ私は胡桃の頭の上側にしましょう♪」

胡桃「……………」

胡桃の意見などお構い無しに布団が敷かれていく…。由紀は胡桃の右隣…美紀は左隣…悠里は胡桃の頭上方向に布団を敷いていた。皆それぞれが敷き終えた布団に潜り、そばの椅子に座る宮野がそれを見守る…。

悠里「もう夜遅いからね…。早く寝ないと」

由紀「胡桃ちゃん、手…繋ぐ？」

胡桃「えっ…？いいよ、子供じゃないんだから…」

由紀「大人は家出なんてしませんっ！ほら、手かして！」

胡桃「いや、大人だって家出くらい…」

ぶつぶつ呟く胡桃の手を無理やりに掴むと、由紀は満足そうに微笑む。胡桃は照れくさそうにしていたが、どこか嬉しそうにもみえた…。

宮野「じゃあ、みんなお休みなさい…」

そばに座り、皆を見守りながら宮野が言う…。彼女達はそんな宮野に『おやすみなさい』と返事を返した後、静かに目を閉じた…。

胡桃（…あれ、変だな。なんか…あつたかいかも…）

みんなに囲まれ、由紀と手を繋ぎながら目を閉じる。すると、久しぶりに身体がぽかぽかしていくような感覚を感じた…。布団をかけた身体も、由紀と握る手も…全てが温かくて気持ちがいい…。

美紀「……先輩」

悠里「……胡桃」

由紀「……くるみちゃん」

由紀・美紀・悠里『おやすみなさい…』

目を閉じた直後、みんなが胡桃に囁く…。

友達の『おやすみ』と言う声がここまで安心出来るとは知らなかった…。

胡桃は瞳を閉じたままニツコリと微笑み、静かに答える…。



胡桃「うん……おやすみ……なさい」

## 第八章・たんさく

### 九十九話『二つの変化』

由紀『ミナちゃんたちとお別れしてから二日……。わたしたちは外に出て胡桃ちゃんを治す手がかりを探してるけど、まだそれは見つかってない。でもね、胡桃ちゃんは毎日明るくて……。ひよつとしたら、ずっとこのまま何事もなくいられるかも……。とか思っちゃったり……』

由紀達五人を乗せたキャンピングカーは行くあてなく道路を走り、胡桃を救う手がかりを探していた。だが、それはそう簡単に見つかるものではなく、由紀は心のどこかで不安を感じていた。そうして一人ポーツとしながら席についている由紀へ、目の前に座っていた胡桃が声をかける。

胡桃「由紀、どした？考えごとか？」

由紀「へっ？う、ううんっ！なんでもないよ!!」

胡桃「？……そっか？やけに大人しかったからさ、なんかあったのかとおもって……」

由紀「えっと……その……今日の夕飯なにかあったって考えて……」

胡桃「おいおい……昼飯食ったばかりなのに、もう夕飯の事考えてんのかよ」

由紀「……………」

『夕飯の事を考えてた』というのは咄嗟に口から出た言い訳だったので、先ほど昼食を済ませたばかりだという事まで頭が回らなかった……。由紀は自分が食い気ばかりの人間だと思われてると感じて気恥ずかしくなり、胡桃からスツと顔をそむける。

胡桃「まあ……食事も立派な楽しみの一つだし。理解できなくはない

けどさ…食い過ぎには注意しろよ？」

由紀「ら、らじゃく…」

小さく返事を返し、胡桃の顔を見る…。

そうして目が合った途端に少しだけ微笑む彼女はいつもと何も変わってなくて、健康そのものに見える。

由紀（でも…身体の調子、悪いんだよね。はやく治してあげないと…胡桃ちゃんも…）

席に座りながら、そばにある窓から外へと視線を向ける。

今は街中を走っているため見えるのは建物ばかりだが、由紀が見ているのは、その付近の歩道をのっそりと歩き回る”かれら”だった…。

由紀（胡桃ちゃんも…あんなふうには…？）

外を歩く”かれら”を見て、由紀は静かに拳を握る。

大切な友達である胡桃を”かれら”のようにしたくはない。絶対に絶対に彼女を助けると、由紀は改めて決意した。

由紀（みんなで力を合わせれば…大丈夫だよね！）  
顔を上げ、辺りを見回す。

悠里と美紀はそれぞれ運転席と助手席に…。

彼はというと、由紀と胡桃のいる席とは反対側に位置する席に座り、窓から景色を眺めていた。

由紀『…そういえば、ミナちゃんの屋敷を出たあの日から変わったことが二つあった。一つは彼…——くんなんだけど、気のせいかな？前より大人しくなった気がするよーな……しないよーな……』

前の彼はどちらかと言えば騒がしい性格で、幾度か悠里の頭を悩ませていた。しかし未奈の屋敷を出てからというもの、彼は何一つ問題を起こしていない。そして今現在もそうなのだが、時おり外を眺めな

がら考え事をしているようだ…。

胡桃「なあ…最近のあいつ、なんかキャラ変わったよな？」

胡桃もまたそれに気付いていたらしく、そつと由紀に耳打ちする。

それを聞いた由紀は自分一人の勘違いではなかったのだと思い、素早く二回頷いてから返事をした。

由紀「やっぱりそう思うよね？なんか違うよね？」

胡桃「ああ…なんつーか…：…やたらクールなキャラになってる。どうしたんだろうな…」

由紀「悩みごとな？」

胡桃「なんにせよ、はやく元に戻ってほしいぜ…。あいつがあんなだと調子狂うんだよなあ…」

由紀「そうだねえ…」

二人がそんな会話をしていると、車が少しずつ速度を落としてどこかに停まる…。窓から外を眺めると、そばに川が流れていた。それを見た由紀と胡桃は、今日がその日なのだと理解する。

由紀「冷たくないといいなあ…。はやく普通のお風呂に入りたいよお」

胡桃「だな。まあ、しばらくは我慢だ」

悠里が川のそばに車を停めるのは洗濯物のたまった時か、体の汚れを落とした時…もしくはその両方だ。今日は洗濯物もそこそこあるし、全員が体を洗いたいと考え始めていたので、両方ともするつもりだろう。

車を停めた悠里は運転席から立ち上がり、全員に笑顔で告げた。

悠里「さあ、今日はここに車を停めるとして…水浴びと洗濯をしちやいましょうか？」

由紀「りょーかい。洗濯はあとで？」

悠里「そうね、水浴びしてから洗濯して…少ししたら夕飯の準備し

ちやいましょう。——君、先に水浴び行ってくる?」

これまで水浴びする時は基本的に男女別々:というか、彼とは別にきていた。水浴びの際、女性陣は水着を着用しているので一緒にもいいのだが、水着姿を彼に晒すのはそれとなく危険な気がして:避けてきていた。

「あゝ:後でいいです。お先にどうぞ」

言いながら彼は立ち上がり、車内のトイレへと入って扉を閉める。こうすることで、彼女達が車内で水着に着替えられるのだ。

美紀「なんか:今日はあっさりしてますね」

悠里「そうねえ、どうしたのかしら?」

今回は進んでトイレへと入っていった彼だが、普段はこうではない。いつもなら誰かに言われるまでは然り気無くその場にとどまろうとして気配を殺していたし、酷い時では彼女達が着替えてる時にそつと扉を開けた事もあつた:。

しかしその時、扉の隙間から彼が見たのは彼女達の着替えではなく黒いオーラののような物を発しながら至近距離でニツコリと微笑む悠里だった。彼女と目が合った彼はその後、悠里によってトイレから引きずり出され、丸々二時間以上の説教をされたのだが:。

胡桃「:また覗く気じゃねえよな?」

悠里「私が見張っておくから、みんなは隅で着替えちゃって」

悠里は彼のいるトイレのそばに立ち、その扉をじつと見つめる。

もしこれが少しでも開こうものなら、また数時間の説教をせねばならないだろう:。

そうして悠里がそこを見張っている内に由紀達は隅の方でささつと水着に着替え、悠里のそばへと戻る。以外にも、扉は最後まで開くことがなかった。美紀はトイレの中にいる彼に聞こえぬよう、そつと

悠里に耳打ちする。

美紀「…覗きませんでしたね？」

悠里「そうね…。扉の前に私がいるのが分かっちゃったのかしら？」

胡桃（そもそも覗く気がなかったって思われてない辺り…マジで信頼されてねえな、あいつ）

こっそり交わされる二人の会話を聞いた胡桃はそんな事を思い、彼のいるトイレの扉へと同情の視線を向ける…。彼が彼女らと共に行動してからそれなりに経ったが、こういった面においての信頼はまだ掴めていないようだ。

美紀「リーさんも着替えちゃって下さい。ここは私が見張っておきますから」

水着姿の美紀がそつと告げる…。

すると悠里は自らの顎に人差し指をあてて何やら唸り、彼の潜むその扉をじつと見つめた。

悠里「ん…：…先に外、行つていいわよ」

美紀「えっ？でも…それだと覗かれた時に見られちゃいますよ!？」

悠里「そうだけど、まあ大丈夫でしょ。彼には色々助けられたし、このくらいの信頼はしてあげなきやね？」

胡桃「ほ、ほんとにいいのか…？それはさすがにあぶねー気がするけど…」

悠里「大丈夫大丈夫、ほら、先に行つて♪」

半ば無理矢理にして美紀達を外へと出し、悠里は今一度そこを見つめる…。彼はまるで死んでいるかのように静かで、その扉は開く気配を見せない。悠里は扉へと近づき、右手で二回ノックした。

コンコンツ…

悠里「…大丈夫？」

「…何がです？」

中からすぐに返事が返ってきた。一応、生きてはいららしい。

それは当たり前前の事なのだが、あまりに彼が静かなので心配していた悠里はほっと胸を撫で下ろす

悠里「ふふつ、なんでもないわ。あと少ししたら着替え終わるから、もうちよつとだけ待っててね？」

「了解です」

返事を聞いてから、悠里は制服のシャツへと手を伸ばし、胸元からボタンを一つずつ外してゆく…。そうしてシャツを脱ぎ終えた後はそのまま下着へと手をかけるが、その際にチラツと彼のいるトイレを確認しておく。

悠里「……………」

扉はしっかりと閉まっており、覗かれている気配はない。

とりあえずは一安心する悠里だが、少し開けられてしまったら見られる位置で着替えているので、どこか恥ずかしかった。

悠里（マコトさんと一緒だったとはいえ、私は彼に命を助けてもらったんだし…見られたら見られたで仕方ないと思ってあげるつもりだけど、やっぱり恥ずかしいわね）

胸を覆う下着へと手をかけ、それを外す…。

念のためにトイレには背を向けて着替えているので万が一の時は見られるよりも先に手で隠せると思うが、やはり落ち着かない。

悠里（や、やっぱり…美紀さんに見張っておいてもらえばよかったかしら…）

見られてる訳ではないが、左手で胸を隠しながら用意してた水着を右手で取ると、少しだけ急いでそれを着ける。とりあえず胸を隠すことが出来て一安心するが、問題は次だった…。

悠里（下…：下も…着替えなきゃいけないのよね…）

そつとスカートに手をかけ、もう一度トイレへと視線を向ける。その扉はやはり閉まったまま…覗かれてはいなかった。

悠里（大丈夫…大丈夫…彼なら大丈夫だから、信じてあげないと…）  
言い聞かせるようにして心で呟き、スカートを脱ぐ。

悠里はまたトイレへと振り向きかけるが、その時間が惜しいので、ここまできたら先に着替えることにした。

脱いだスカートを一度席にかけ、今度は下着に手をかける。

あとはこれを脱いで水着を着ればいいだけなのだが、この下着が中々脱げない…。緊張して、手が止まってしまっているからだ。

悠里（大丈夫っ…大丈夫っ！見られて…ないからっ!!）

意を決し、下着をずり下ろしていく…。

彼は扉を隔てた先にいるので見られてはいないのだが、逆に言えば自分は今、扉一枚しか隔てていないところで下着をずり下ろしている。もし…万一にも今、彼が覗きを働き扉を開けたら、裸状態の下半身を見られてしまう…。そう思ってしまうと悠里の鼓動は激しくなり、みるみる顔が真っ赤になっていった。

悠里（一人で着替えてるだけなのに…なんでこんなにドキドキしてるの？バカみたいじゃないっ…!）

下着を足元へとずり下ろし、足先から抜いていく。



脱いだその下着を隠すのは後回しにして、まずは水着を着ようと思  
い、それに手を伸ばした…その瞬間

ガタツ…!

悠里「っ!?!」

彼のいるトイレの扉から、物音が鳴った…。

悠里は即座に何も着ていない下半身を左手で出来るだけ隠し、右手  
でその扉を力強く押さえた。

悠里「なっ、なにしてるのっ!?!」

ガシツと扉を押さえ、開かないようにしながら尋ねる。

状況が状況なので余裕がなく、悠里は声を荒げてしまった…。

「すいません、足を扉にぶつけちゃいました」

落ちついた様子で彼が答える。

どうやら、嘘ではなさそうだ…。

悠里「そ、そう…。」

「もう、着替え終わりますか?」

悠里「あっ、あとちよつとだから…もう少し待ってて!」

悠里は右手を扉から離し、慌てて水着を着る…。

その後は脱いだ服をたたみ、それが彼の視界に入らないよう、運転  
席に置いてあったバッグの奥へとしまつて隠した。

悠里「終わったわ。待たせてごめんなさいね」

扉を軽く叩いて、彼に着替えが終わったことを報告する。

彼はこの報告がきて一分ほど経ち、女性陣が外に出てからトイレを

出るのがいつもの決まりだった。それは今回も例外ではなく、彼はトイレに身を潜めたままの状態で返事を返す。

「わかりました。じゃ、気をつけて行ってきて下さいね」

悠里「うん：済んだら外から声かけるから、お願いね？」

「は〜い」

返事を聞いてから、悠里は外へと出る。

一足先に外へと出ていた由紀達は既に川に足をつけたりしながら、持っていったタオルや石鹸を使つて体を洗つていた。

悠里「：お待たせ」

美紀「お先です。：つて、何かありました？」

車内で何かあったのか：遅れてそこに現れた悠里の顔は先ほどよりも疲れているように見えた。実際は特に何もなく、ただ一人で着替えただけなのだが：扉一枚先に彼がいることからのプレッシャーが悠里を精神的に疲れさせたのだろう。

悠里「いえ：大丈夫よ……」

力なく答え、悠里は川辺に歩み寄つていく…。

今日は比較的暖かい日だからか、水もそこまで冷たく感じなかった。

由紀「胡桃ちゃん、シャンプー取つて〜」

川につけた足をバタバタと動かして水しぶきをあげながら、由紀はそばにいた胡桃へと手を伸ばす。それを見た胡桃は持つてきたバツグから一本のシャンプーボトルを取りだし、それを由紀に手渡した。

胡桃「ほれ、次からは自分でとれよ」

由紀「わたし、ついつい甘えちゃう年頃で…許してね」

胡桃「いや…あたしはお前と同じ年だけど、別に甘えたい年頃じゃねえぞ」

そんなツツコミをいれながら、胡桃も川に足をつける。

するとそのそばに悠里と美紀も寄ってきて、四人並んでの会話をした。

美紀「今日はわりと暖かいですね」

悠里「ええ、これなら洗濯物もすぐに乾きそう」

胡桃「りーさん、あいつはどうしてる？ 覗かれたりしなかったか？」

悠里「うん。大人しく待つててくれたわよ。前にあれだけ説教したから、もう覗いたりする気はないのかしらね」

美紀「いや…まだわかりませんよ」

由紀「みーくんはキビシイなあ。そんなふうには警戒しなくても大丈夫だよ。——くん、とつてもいい人だもん」

美紀「それは分かっていますが…それとこれと話は別というか…」

胡桃「……………ん〜」

それぞれが体や髪を洗いながら話をしていると、胡桃が悩ましげな表情をして俯く。次の瞬間…彼女は顔を上げ、三人へある提案をした。

胡桃「そんなこと話してる時に言いづらいんだけどさ…その……」  
申し訳なきように、少しずつ言葉を放つ胡桃…。そんな彼女を見て、由紀は少しだけ嬉しそうにニッコリと微笑んだ。

由紀『ミナちゃんの屋敷を出てから変わった二つのこと……一つはさつき言ったとおり、——くんが大人しくなった。それで、あと一つ

は……』

胡桃「あいつも……ここに呼んでやっていいかな？」

由紀『胡桃ちゃんが、前より———くんに優しくなった』

百話『いっしょに』

胡桃「あいつも……ここに呼んでやっていいかな？」

申し訳なさそうに、悠里・美紀・由紀の三人へと告げる胡桃。

それを聞いた悠里と美紀は驚いた表情をして、胡桃の顔を見た。

悠里「彼を……ここに？」

美紀「つまり、私達と一緒に水浴びを……ってことですか？」

胡桃「……うん。あいつとの生活も長いし、そろそろ、そんなくらいは一緒でもいいかなって……。ほら、あたしら水着着てるし、裸見られるわけじゃないだろ？」

美紀「それはそうですね……先輩は良いんですか？そもそも、こうして別々に水浴びを済ませてるのって最初の頃に先輩があの人に水着姿を見せるのが嫌だって言ったからだったような……」

思い出すようにして目を閉じ、美紀が胡桃に言う。

実際それは合っていて、彼と出会ってばかりの頃……水浴びの際に胡桃がそう言って彼を隔離したのだ。

胡桃「そ、そうだったっけ……？まあ、あの頃のあいつは危ないヤツに見える事が何度かあったからな……当時のあたしはきつとそれを恐れたんだろう……」

悠里「で……今は大丈夫なの？彼を呼んだら、水着姿をジロジロ見られちゃうと思うけど」

胡桃「ジロジロって……そんなふうには見ねえだろ。なあ、美紀もそう思うだろ？」

胡桃はニコニコと微笑み、美紀の肩に手をあてながら尋ねた。

しかし美紀は目を逸らして黙るだけで、いつまで待っても返事を返してくれなかった……。

美紀「……………」

胡桃「…ああ、あたしだってバカじゃない。本当はそんなくらい分かってるよ。きつと、あいつはジロジロ見てくるだろう…。でも、それでもさ…たかが水着姿だし、ちよつとくらい見られたって——」

美紀「ちよつとじゃなくて、ジロジロです…」

間違いを正すようにして美紀が横やりを入れる。

胡桃は咳払い一つしてから、それを訂正した。

胡桃「えつと…たかが水着姿だし、ジロジロ見られたって平気だろ？」

由紀「えへへ、そうだね♪わたしは全然いいよ〜！」

ただ一人、当初から水着姿を見せる事に抵抗のなかった由紀はノリでそう答える。その言葉を聞いた胡桃は嬉しそうに微笑み、美紀と悠里の答えを待った。

胡桃「お二人さんは…どうですか？」

悠里「…うん、私も平気♪せっかくの水着だもの、ちゃんと似合ってるか…男の人の意見を聞いてみたいわ♡」

胡桃の提案があまりに突然なので驚いていたものの、悠里も由紀同様に笑顔で答えた。するとそれにつられるようにして、美紀も渋々ながらその首を縦に振った。

美紀「はあ…私も平気です。まあ…あんまりジロジロ見てきたらちよつと怒りますけど…」

胡桃「あははっ、うん！それでいい！じゃあ、あたし…あいつ呼んでくるっ！」

みんなの同意を得られたのが嬉しいのか、胡桃は楽しげに笑う。

そうしてから彼女は立ち上がり、彼のいる車へと駆けていった。

美紀「先輩、どうして急にあの人もまぜてあげる気になったんでしょう？」

走る胡桃の背を眺めながら、美紀が尋ねる。

それに対し、悠里は川に足をつけながら答えた。

悠里「あれから、彼の元気が少しだけなかったでしょう？だから胡桃は、一緒に水浴びとかを楽しむ事で彼を元氣付けてあげる気なんじゃないかしら」

美紀「そういうことですか……。確かに、元氣のないあの人はどこか物足りないですね」

由紀「胡桃ちゃん、あんなにニコニコしちゃって……」

美紀「そんなに水着姿を見せたかったんでしょか？私には分からない気持ちです……」

これから来るであろう彼になるべく肌を見られぬよう、美紀は持ってきていた半袖のラッシュパーカーを羽織る。本当は体も髪も洗い終えていたので帰りたいが、そうしないのは彼女なりの優しさだった。

由紀「みーくん、そんなの着て暑くない？」

美紀「半袖だし、足も川につけてるので平気です……」

悠里「ふふっ、恥ずかしがり屋さんなのね？」

美紀「っ……別に、そんなんじゃない……／／／」

パーカーで出来るだけ胸元を隠そうとしている美紀がなんだかお

かしくて、悠里が笑う。そうして笑われた美紀は恥ずかしそうに頬を赤らめ、顔を俯けてしまった。

一方、胡桃は車の扉を開けて彼へと視線を向ける。

彼は一人寂しく席についていたが、突如現れた水着姿の胡桃を見て驚いたような声をあげた。

「…うおっ!?!どうしたのっ!?!」

胡桃「おお…いいリアクションしてくれるなあ」

目を丸くして、ポカンと口を開けている…彼のこんな表情を久しぶりに見た胡桃は嬉しくなり、彼のすぐそばへと寄って水浴びに誘った。

胡桃「水浴び、一緒にしない?」

「えっ?…一緒に?マジっすか…?」

胡桃「マジだよ。どう…?する?しない?」

「えっと…そうか…どうするかな…」

尋ねる胡桃が水着姿なので目のやり場に困っているのか、彼はキョロキョロと視線を動かして落ち着かない…。胡桃はそんな彼の顔を両手でガシツと掴み、真っ正面から尋ねた。

胡桃「ほら、はやく決めろって!」

「うがっ…!?!」

すぐそばに顔を寄せられ、彼はドキツとする。

更に、その視線を少し下に逸らせば普段は見れない彼女の胸元…その谷間が目に入り、さすがの彼も顔を赤らめずにはいられなかった。



「わ、わかったわかった！行きますから！ちよつと待って!!」

胡桃「はやくしろよ。みんなも待ってくれてんだから」

「みんなも？まったく、なんで急に……」

ブツブツ言いながら支度を進める彼…。

胡桃は彼が支度を終えるのを席に座って待ちながら、その経緯を話した。

胡桃「もう、お前との生活も長いしな…水着姿くらいなら見せてやってもいいって、そんな判断になったわけだ」

「逆に言えば、今日までは水着姿すら見せられない信頼度だったわけだね」

胡桃「そりやそうだ。あたしらの水着姿は安くないからな！ありがたく思えよ〜？」

「…はいはい」

笑顔の胡桃をチラッと見つめ、彼は支度を進める。

それから一、二分の時間が経ち、もう少してそれが終わるというタイミングで胡桃は笑顔を引っ込め、本当のことを彼に伝えた…。

胡桃「あの屋敷から出ていってからさ、お前…元気ないだろ」

「…えっ？」

言われた彼は手を止め、胡桃の方へ振り向く…。

胡桃の表情は少しだけ不安げで、彼を心配しているのが分かった。

胡桃「どうしたのかと思ってたけど、さつき分かったよ。お前…あたしの心配してるだろ？」

「……………」

胡桃「違うなら違うつて言えよ？まあ…そうだったらそうだったで、あたしが自意識過剰みたいになるからめっちゃ恥ずかしいけど…」

胡桃はスツと目を逸らし、俯きながら彼の答えを待つ…。すると彼は胡桃のそばへと歩みより、小さな声で言った。

「体の調子は…どうかな？」

胡桃「ん…いつも通り、かな」

「本当だね…。嘘はダメだよ？」

胡桃「…わかってる。少しでも調子悪くなってきたら、無理しないでお前に伝えるからさ…そんなに心配すんな」

じつと胡桃を見つめる彼のその目に力は無く、いつもの彼とは別人のようだった。やはり自分の事で悩んでいたんだと思うと申し訳なくて、胡桃は彼の手をギュツと握る…。彼は異常なまでに冷たいその手をそつと握り返し、顔を俯けた。

胡桃「…あのさ、病は気から…つて言うだろ？」

「あつ？う、うん…そうだね？」

急に言われたその言葉の意味が理解できず、彼は間の抜けた声を出す。

直後、そんな彼に胡桃はこう告げた。

胡桃「元気がないお前見てると、こつちまで気が滅入めいって体調が悪くなってくるんだよ。そのせいでほら、あたしの手がいつもより二割増しで冷たくなっちゃまってるだろ！」

「んっ？んっ…」

握る彼女の手は確かに冷たいが、前もこのくらいだった気がする…。そう思った彼だが、あえてそれを言葉にはしなかった。

胡桃「そうだよ！まったく、これはお前のせいだからな？」

「えっと…それは申し訳ない…」

胡桃「だから、あたしを出来るだけ長く元気でいさせる為にも、いつもみたくヘラヘラしてるよ。クールキャラになったお前なんか見てても何にも楽しくない！」

「別に…クールキャラになったわけでは…」

胡桃「いつものお前なら、水着姿のあたしを見るだけでハアハア言っただろうに…」

「それじゃただのド変態じゃないですか…」

胡桃「だって、それがお前だろ？」

「心外だな」

そんなやり取りをした後、彼は胡桃の手から自分の手を離して支度を再開する。あとは自分も水着に着替えるだけなのだが、思えば、彼は自分の水着を持っていなかった。

「そうだ…水着がない。どうしたもんかね…」

胡桃「はあ？じゃあお前、いつも水浴びの時なに着てんの？」

「普通に下着か…もしくは何も…」

胡桃「ちよつとまで、お前、たまに由紀にそばにいてもらって見張り任せてたよな？」

「うん」

彼は軽い気持ちで答えたが、胡桃の顔は青ざめていく…。

水浴びの時、彼は基本的に一人だが、“かれら”の気配が少しばかり強い所では誰か一人を見張りにつけていた。それは彼の指名で決まるのだが、思えばその指名は由紀の比率が高かったような…。

胡桃「由紀に…変なモン見せてねえだろうな…？」  
「変なモンとは…なんのことですかね？」

胡桃「いいから…真面目に答えろ」

「……………」

少しばかりふざけてみようかと思つた彼だったが、胡桃の目が笑つていないのでそれは止めた。

「…見せてないよ。誰かが見張りにいる時はちゃんと下着着用だからね。だいたい、胡桃ちゃんも見張りに立つたことあつたでしょ…」

胡桃「そうだっけか…覚えてねえ…」

「つていうか、そもそも変なモンなんかじゃない！」

胡桃「そこはどうでもいいわ!!」

思い出したかのようにして怒る彼に向け、胡桃はそばにあつたタオルを投げる。それは彼の顔に命中し、ペシッと軽い音がした。彼が顔にかかったそのタオルをどけてから、胡桃は立ち上がったある戸棚を開く。

胡桃「つと…たしかこの辺に…」

「…なに探してんの？」

胡桃「いや…ほら…お、あつたあつた！」

胡桃が笑顔で取り出したそれは一見するとただのトランクスのようだが、彼の物ではない。見覚えのないそれを見た彼は首をかしげ、不思議そうな顔をした。

「それ、なに？」

胡桃「なにとって…水着だよ」

「いや、それ僕のじゃないし…」

胡桃「ミナのくれた荷物の中にあっただ。お前にくれるってさ」  
笑顔でそう告げる胡桃だったが、彼は素直に喜べない…。

一つだけ、不安な事があったからだ。

「それ、新品だろうな…。ゲンジ君のお古は嫌なんだが」

胡桃「タグ付いてたし、新品だろ。」

「それなら良いけど…ミナさんはなんでこんなのを持ってたのか  
ねえ」

投げ渡されたそれを受け取り、彼は着替え始める。

胡桃は彼に背を向け、着替え終わるのを待った。

着替えは胡桃が思っていたよりもはやく終わり、彼が彼女の肩を後  
ろから叩く。

「…終わりました」

胡桃「ん、はやいな」

そつと振り向き、彼を見る…。

彼はさきほど渡したトランクスタイルの黒い水着を着けており、一  
枚のパーカーを羽織っていた。

胡桃「ミナにもらってよかったな。下着姿じゃ、一緒に水浴び出来  
ないからな」

「…同じようなもんだと思うけど」

自らの水着を見て彼が呟く中、胡桃は外へ出ようとする。

しかし彼女は突如立ち止まり、少しだけ照れたようにして彼に尋ね  
た。

胡桃「あのさ…あたしの水着…ヘンじゃない?」

「……………」

それに答える為、彼は改めてその水着姿を眺める…。

彼女が着ているのは青と白のストライプ模様のシンプルなビキニだが、そのシンプルさが彼女のスタイルを引き立てていた。

普段は制服などの下に隠れていて分からないが、やはり鍛えているからなのだろう、無駄のない綺麗な体をしているのが分かる。こうしてみると胸もわりと大きめで、ついジツと見つめてしまいそうになる…。

彼はそんな衝動を堪え、胡桃の目を見つめて答えた。

「うん…よく似合ってるよ」

胡桃「そう？へへ…よかった」

照れながらも、嬉しそうに胡桃が微笑む。

胡桃は彼を後ろに連れ、車の外へと出た。

…ボタン

「おっ…今日は暑いね」

一歩外に出た途端、強い日差しが降り注ぐ。

彼はそれが眩しかったのか、右手で日差しを遮っていた。

胡桃（とりあえず、元気になったみたいでよかった。水着姿見せるのは少し恥ずかしかったけど…似合うって言ってもらえたし、我慢した甲斐はあったな）

似合うと言われた事を思い出し、胡桃はひっそりと微笑む。

そうして二人で川辺へと向かい、みんなと合流した瞬間、彼が突如大きな声を発した。

「なっ!!？」

胡桃「っ!!?どうしたっ!!？」

彼は何を見たのか…もしま、”かれら”がそばまで来ていたのだろうか…?

そう思っって胡桃は辺りを見回すが、”かれら”の気配はない…。

胡桃「…ほんとにどうした？」

「……………」

彼は震えながら一点を見つめるばかりで、返事を返さない…。恐る恐るその視線を辿る胡桃だが、なんだか嫌な予感がした。

悠里「あっ…来たわね」

由紀「——くん、こっちだよ！」

美紀「?…なんか、様子が変ですね？」

胡桃「……………おい」

胡桃はあることに気付いてしまう…。

彼が震えながら見つめているものを探るべくその視線を辿ると、そこには悠里がいたからだ。つまり…この男は悠里の水着姿を見て、言葉を失っているのだろう…。

胡桃「……………おい」

彼の顔の前で手をパタパタとさせ、注意を引くが、彼はまだ動かない。

どうやってコイツを正気に戻そうか…胡桃がそう考えたその瞬間、それは起こった。突如、彼が奇声をあげたのである。

「むっはくくっ!!」

胡桃「むっ…!?」

由紀「むっ?」

美紀「むっ?」

悠里「むっは?」

それぞれが彼の奇声に首を傾げ、なんとも言えぬ表情をする。

奇声をあげた本人はというと、水着姿の悠里を見て目を丸くしていた。

「あれは女神かなんかかっ?!最高なんですけど!!」

悠里「そっ、そんなに言われると照れるわ…」

「いやいや、リーさん…スツゴい綺麗です!!天使みたいです!!」

ズカズカとそばに駆け寄り、彼は悠里の横につく。

悠里は先ほどの胡桃と同様のシンプルな水着を着ていたが、胡桃の水着とは色が違い、悠里のは緑色一色。そして最大の違いは…そのサイズだ。悠里の水着は、胡桃のよりも一回りか二回り大きかった…。彼はその大きな水着をもってしか隠せぬ胸の谷間に釘付けになり、息を荒げる。

「似合ってます…!ほんとに似合ってます!!」

悠里「そう…?ふふっ、ありがと♡」

胡桃「……………」ブチッ

自分の時とは全く別次元の反応を悠里に見せる彼を見ていたら、胡桃の中の何かが音を発して切れた…。



胡桃（…シヤベル、どこだっけ）

辺りを見回し、地面に置いていたシヤベルを見つける…。

胡桃はそれを手に取ると、ニタニタした表情の彼の背後へと忍び寄った…。

## 百一話『事故』

彼は胡桃の提案により、遂に由紀たちと共に水浴びする事が出来た。

ここのところ元気のなかった彼がそれによつて元の調子を取り戻した事に一時は安堵した胡桃だったが、今…彼女は心底呆れた表情をして、水着姿の悠里と楽しげに話す彼を見つめていた。

「似合ってます…！ほんとに似合ってます!!」

悠里「そう…？ふふっ、ありがと♡」

胡桃「……………」ブチッ

水着姿の悠里…彼はそんな彼女の胸の谷間をチラチラと覗き見て、鼻の下を伸ばす。彼が元のような人間に戻ったのは喜ばしいと思つていた胡桃だが、いくらなんでもここまで露骨に態度が違ふと腹が立つ…。胡桃の水着姿を見た時は、もつと普通のリアクションだったからだ。

胡桃（…シャベル、どこだっけ）

にやにやと笑う彼に苛立ってしまった、胡桃はシャベルを手を持つ。そうしてから胡桃は川際に座る悠里と話す彼の背後に立ち、彼に狙いを定めてから静かにそれを振り上げた。

「……………んっ。」

背後に殺気のような気配を感じ…彼は振り向く…。

そつと顔を後ろに向けた彼が見たのは、異様に冷めた目をしてシャベルを振り上げる、水着姿の胡桃だった。

胡桃「…言い残すことは？」

胡桃が呟く…。

彼は何のことか分からず、不思議そうに首を傾げた。

「えっ…とっ？」

胡桃「……………」

ただじつとこちらを見つめる胡桃…。その表情から察するに、彼は胡桃の機嫌を損ねたらしい。このままでは、彼女は本当にシャベルを振り下ろしかねない…。彼は自らの脳を最大限に稼働させ、自分の行動の何が彼女の機嫌を損ねさせたのかを考えた。

「……………」

(……………あつ)

約10秒程考えたのち、彼は察する。

悠里の水着姿が魅力的過ぎたのでつい浮かれてしまったが、胡桃はそれを良く思っていないのだろう。

(まあ、リーさんを見た時のリアクションは自分でも少し気持ち悪かったって自覚はある。けど、それほどにリーさんの水着姿が魅力的過ぎてっ…!!)

胡桃の水着姿も十分に魅力的で、今こうしてシャベルを振り上げて

いる彼女の体をつい見てしまう……。だが、彼女の胸よりも一回り大きい悠里の胸……その破壊力は彼が思っていた以上のものだったのだ。

悠里「えつと……胡桃？」

悠里は何故胡桃がシャベルを振り上げているのか分からず、そつと声をかける。胡桃はそんな悠里を横目でチラツと見つめると、ため息をつきながらシャベルを下ろした。

胡桃「……はあ。やつぱ、りーさんの胸はお前に見せちゃダメだったな」

「なっ……!？」

悠里「……………」

胡桃の呟きを聞いた悠里は彼に胸を見られているのが恥ずかしくなったのか、両腕でそつと胸元を隠す。彼は自分が胸ばかり見ていた人間だと思われたくなかったので（実際見えていたが）慌てて言い訳をした。

「りーさんっ、違います！僕はりーさんの胸だけじゃなく、カラダ全体を見た上で素敵だと言ったんです!!」

悠里「ほ、ほんと……？」

「もちろんっ！」

彼の言葉を聞き、胸元を隠していた両腕をそつと下ろす悠里……。その腕が完全に下りかけた瞬間、またしても胡桃が呟く。

胡桃「胸のほかにはどこを見てたんだろーなあ……やらしーなあ……」

「っ!？」

悠里「……………」

彼がそつと悠里の顔を覗き見ると、その目が笑っていないのが分

かった。

どうにか言い訳してこの場を逃れようとする彼だったが……

「み、見てもいいでしょ！せつかくの水着姿なんだ…普段見れないところ見ないと意味がないっ!!」

考えるよりも先に、本音が漏れてしまった。

これはさすがに引かれると思って彼は焦るが、直後に彼女達が見せた反応は意外なものだった。

胡桃「…つく、あははっ！」

悠里「う…ふふっ！」

「……………へ？」

引かれる、もしくは怒られると思っていたのに、彼女達は笑いだした。何がおかしかったのか分からずに彼がそれを見ていると、胡桃が笑顔で言った。

胡桃「なんか…こういうの久々な気がするな！」

悠里「ええ、ここ最近色々大変だったからね…」

「……………」

言われればそうだなと、彼も思う。

自分が胡桃に怒られ、悠里に叱られ、美紀に呆れられ、それを見て由紀が笑う…。何度か経験してきた事だったが、最近色々あってそういう事が減っていた。

「えっと…とりあえず、二人とも今は怒ってないですか？」

悠里「まあ、あなたをここに呼んだ時点である程度見られる事は分

かっただもの。今さら気にしないわ」

胡桃「だそうだ。リーさんの寛大きさに感謝しろ」

胡桃はそう言つて川へと向かつていき、すれ違いざまに彼の肩をパシツと叩く。それを受けた彼は少しだけ微笑み、まだ挨拶をしてなかつた由紀と美紀の元に歩み寄る。

「おお…由紀ちゃんの水着姿も素敵ですなあ」

由紀「そう？えへへ♪」

由紀の着ている水着は上下ともにピンクで、なんとも彼女らしい色だった。そんな水着を着ている彼女の体はほっそりとしているがそれでも胸はしっかりと膨らんでいて、彼女を子供だと思っていた彼は複雑そうな顔をする。

「ちゃんと…大人の女性になっていくんですね」

由紀「ん？どーゆーこと？」

美紀「先輩にヘンなこと言わないで下さい…」

無邪気に笑いながら由紀が首を傾げていると、その後方に座っている美紀が彼に言い放つ…。その表情からかなり呆れていることが分かるが、彼はそんなことよりも彼女の羽織っているパーカーが気になって仕方なかつた。

「美紀さんの着てるそれは…」

美紀「……なんですか」

川辺に座る美紀は女性陣の中で一人だけパーカーを羽織っており、どんな水着を着ているのか分からない…。自分もパーカーを羽織っている彼だが、彼女にはそれを脱いで欲しいと心から思った。

由紀「ほら、みーくんも水着姿ほめてもらおうよ！」

『せつかくなら、なんの邪魔もなく彼女の水着を眺めたい』

彼がそんな事を思った瞬間、まるで祈りが通じたかのように由紀がそれを脱がした。着ていたパーカーをいきなり脱がされ、美紀の胸元が露になる…。彼女は顔を真っ赤にし、驚きの声をあげた。

美紀「せつ、先輩っ!?なにしてるんですかっ!!」

由紀「だつて、せつかく——くんが来たのに一人だけこんなを着てるんだもん!これじゃ水着が見れないよ!!」

美紀「見れなくする為に着てたんですっ!!」

由紀の手によつて乱れたパーカーを着直そうとする美紀だが、今回は由紀の方が上手<sup>うわて</sup>だった。由紀は美紀の着ていたパーカーを完全に剥ぎ取り、ニコニコと微笑む。

由紀「大丈夫っ!みーくんスタイルいいから♡」

美紀「そ、そういう問題じゃなくっ…!恥ずかしいから…っ…」

着ていたパーカーが無くなり、美紀の水着姿が彼の目に入る…。色は胡桃の着ている水色の水着よりも少し濃い、紫がかつた色をしていて、それがどこことなく彼女の雰囲気似合っていた。そんな美紀の太ももや胸に目を向けると、彼女は顔を真っ赤にして彼を睨む。

美紀「…どこ見てるんですか」

「えっ?いや…その…」

美紀「もう…帰ろうかな…」

彼に水着姿を見られた美紀は恥ずかしくなり、車内に戻ろうと立ち上がる。だが、それを引き止める人間が二人いた…。

悠里「だくめ♡彼を交えて初の水浴びだもの。もう少しだけ、のん

びりしましょ？」

由紀「そうだよ！もうちよつとだけ、このままお喋りでもしてようよ」

悠里と由紀の二人は美紀を挟むようにして彼女の左右に立ち、その肩を押さえる。美紀はそれに観念したのか、ため息をついてからまたその場にそつとしゃがんだ。

美紀「……わかりましたよ。少しだけですからね」

悠里「ええ、少しだけ♪」

由紀「えへへ♪」

そうやって楽しそうに笑う三人を眺める彼…。

するとそんな彼の横に胡桃が歩み寄り、そつと耳打ちをした。

胡桃「ほら…美紀の水着も褒めてやれよ」ボソツ

「あ…ああ…」

さつきあんな反応をされた手前、多少の言いづらさはあるものの…彼は美紀のそばに寄る。

「……美紀さん」

美紀「…なんですか？」

まだ彼の事を警戒しているのか、少しだけ不安そうな目をしている美紀…。だが彼はそんな目を見ても引くことなく、ハッキリとした声で言った。

「水着、似合ってますよ。可愛いです」

美紀「かわっ…!!?」

突然”可愛い”と言われ、美紀の顔が真っ赤に染まる。

だが彼のことだ、特に深い意味は無いと理解したらしく、美紀はす



ぐに落ち着きを取り戻した。

美紀「その……ありがとうございます」

小さな声で礼を言ったのち、彼女達は彼を交えて水浴びをしていく。

彼は彼女達から少し離れた所で髪を洗い流し、ぱぱっと体を洗う……。

その後はただ川辺に座りながら彼女達と会話を交わし、気づけば小一時間経っていた……。

由紀「ほいつ！」バシヤツ！

胡桃「ぬおっ!？」

川に入った由紀が川辺に座る胡桃へと水をかける。

突然の事に驚く胡桃を見た由紀は満足そうに笑うが、それが胡桃の闘争心を煽った。

胡桃「このっ……!」

バシヤバシヤと音を発てながら川に入り、由紀の元に向かう胡桃。由紀は彼女を迎撃するかのようにして水をかけたが、その程度の事で止まる胡桃ではない。

由紀「ていつ！ていつ!!」バシヤツ！バシヤツ！

胡桃「そんなもの……効くかあっ!」

かかる水をものともせず歩み寄り、胡桃はニヤリと微笑む。

その笑顔に言い様のない恐怖を感じた由紀は必死に水をかけるが、結局胡桃には効かずに接近をゆるしてしまい、由紀は肩を掴まれる。

由紀「ひっ!」

胡桃「ほいつ!!」

胡桃は由紀のその肩をグイッと引つ張り、彼女を川に投げ倒した。大きな音、大きな水しぶきがたち、川に倒れる由紀だったが、彼女はすぐに起き上がり、ムスツとした表情を胡桃に向けた。

由紀「うゝ：胡桃ちゃん、ヒドイよゝ」

胡桃「あはは、わりいわりい。ついつい力が入っちゃまって」

胡桃は由紀に手をさし伸べ、ニコツと笑う。

由紀はそんな彼女の手を掴み、立ち上がったから同じように笑った。

由紀「次はもうちよつと優しくしてね♡」

胡桃「はいはい、わかりましたよ」

「…………イチャイチャしてる」

川の中央で笑い合いながら手を握りあう由紀と胡桃を見つめ、川辺に座る彼がボソツと呟く。彼の横にいた美紀はその呟きを聞いてから由紀と胡桃を見つめ、少しだけ微笑んだ。

美紀「イチャイチャ：という誤解がありますが、仲が良いのは事実ですね。二人とも、ほんとに楽しそうです」

最初は彼に水着姿を晒すのを恥ずかしかっていた美紀だったが、少ししたら慣れたらしく、今は普通に彼のそばにいた。目の前ではしゃぐ由紀と胡桃：そしてそばにいる美紀と悠里：その全員が水着姿という幸せを彼が心に刻んでいると、横に座っていた悠里がスツと立ち上がる。

悠里「今洗えるものだけ、先に洗っちゃおうかな…」

美紀「あつ、手伝いますよ」

悠里「大丈夫。美紀さん達はのんびりしてて♪」

彼や美紀、遊ぶ由紀と胡桃を残し、悠里は一人車へと戻る。

”今洗えるもの”というのは彼の前でも洗えるもの…。つまり、下着などを除いた衣服やタオルなどの事だろう。悠里はすぐにそれらを詰めたカゴを手に川辺へと戻ってきて、一つずつ丁寧に洗い始めた。

(ほんと…みんなの母親みたいな人だな)

少し離れた場所で洗濯をする悠里をじっと見つめてそんな事を思っている、誰かが彼の肩をトントンとつつく。肩をつついたのは、隣に座る美紀だった。彼がそちへと目線を向けると、彼女は座ったまま顔を俯け、静かに口を開く。

美紀「…楽しんでますか？」

「ええ、そりやもちろん。すごく楽しいですよ」

ハッキリ答え、彼は笑う。

彼の答えを聞いた美紀は俯けていた顔を上げ、嬉しそうに微笑んだ。

美紀「なら、よかったです。たぶんこれは内緒にしておいた方が良いでしょうが…やっぱり教えておきます。今回、あなたをここに誘おうって最初に提案したのは…胡桃先輩なんです」

美紀の言葉を聞いた彼は少しだけ驚き、その視線を川で由紀とともに遊んでいる胡桃へと向ける…。

胡桃『もう、お前との生活も長いしな…水着姿くらいなら見せてやってもいいって、そんな判断になったわけだ』

車内にいた彼を誘う時、胡桃はこう言っていた。

彼女がそれほどに自分を信頼していてくれるなら嬉しいと思うのだが、胡桃が彼を誘ったのには他にも理由があったらしい…。

美紀「先輩は、最近のあなたが元気なかったのを気にしていたようです。だからこうして一緒に水浴びをして、少しでも元気付けられたら…今回の行動は、そう考えてのことらしいですよ」

「……………」

あの屋敷から出発してからの二日間…胡桃を治す為の手がかりがまるで掴めず、彼は自分でも無意識の内に焦り、怯えていた。このまま胡桃を助けられなかったら…失ってしまったら…心のどこかでそう考えてしまい、気持ちが落ち込む。

胡桃は彼のそんな変化に気づき、今回の事を提案してくれたのだ。水着姿を見せるのは恥ずかしかっただろうに、彼のため…彼女は笑顔でいてくれた。それが申し訳無くて、彼はじつと胡桃を見つめる…。

由紀と川で遊ぶ彼女はとても楽しげに笑っているが、本当はそんな余裕が無いくらいに怖いハズだ。自分がいつ”かれら”のようになってしまっても…おかしくないのだから。

「一番大変なのは自分だったのに…なんで僕の心配なんか…」

美紀「ああ見えて、本当に優しい人なんです。だから自分がどれだけ大変な状況にあっても…あなたの事が心配だったみたいです」

ありがたいとか、嬉しいとか、彼がそんな気持ちを抱いたのはほんの一瞬だけの事…。あとはただ申し訳無いという気持ちと、情けないという気持ちのみが残る。

(屋敷にいた時もそうだ…。あの娘には何度も助けられてる。助けなきやいけないのはこっちの方だつてのに……)

胡桃を助けるどころか、自分が彼女に助けられている。

本当に情けなくて落ち込みそうになるが、ここで落ち込んでしまつたら彼女の努力が無駄になる…。彼は深く息を吸つてから自分の気持ちを落ち着かせ、改めて胡桃を見つめた。

「ここまでされたら、絶対に助けなきやいけないな…」

美紀「はい。私も精一杯がんばりますから、一緒にあの人を…胡桃先輩を助けましょう。あなたなら……私たちなら…絶対に上手いきます」

彼は視線を美紀に向ける…。

こちらに向けられた美紀の瞳には強い意思が宿っており、それを見ているだけで不思議と力が湧いた。

「正直一人じゃ厳しいけど、美紀さんと……みんなと一緒になら、胡桃ちゃんを助けてあげられそうな気がする」

美紀「気がする…じゃダメです。絶対、絶対に助けるんです。あなたと…私と…由紀先輩と…リーさんの四人で」

「ああ、そうですね…絶対に助けましょう。…にしても」

横に座る美紀の顔をじつと見つめ、彼は笑う。

美紀は彼が何故笑っているのか分からず、ただ眉を寄せた。

「美紀さんは…世界一頼りになる後輩ですね。あなたがそばにいてくれるだけで、何でも出来そうな気がしてきます」

美紀「何でもって…それは言い過ぎです」

少し大げさにも聞こえる彼の言葉だったが、美紀にとっては嬉しい言葉だった。時おり良からぬ事を企む彼に対して未だ多少の警戒心

を抱いている美紀だが、それをチャラにするくらい信頼しているのもまた事実……。そんな彼に頼りにしてもらえたのが嬉しくて、美紀は頬をゆるめた。

美紀「私も：あなたのことを頼りにしてますよ」

由紀「ていつ！」バシヤツ!!

呟いたその言葉は由紀が鳴らした川の音にかき消され、彼の耳には届かなかった。だが、美紀はそれでいいと思いい顔を俯ける。正直に言う、少しだけ恥ずかしかったから……。

「んじゃ、僕も少し遊んでくるかな……。美紀さんはどうします?」

彼はそつと立ち上がり、美紀に尋ねる。

それに対して美紀は座ったまま首を横に振り、ニツコリと微笑んだ。

美紀「私は大丈夫です。楽しんできて下さいね?」

「…はいっ!」

美紀に向けて笑顔を見せ、彼は由紀達の元に向かおうとする……。

その瞬間だった：由紀達の方へと彼が振り向くよりも先に、由紀が彼の背に突進した。

由紀「とくうっ!!」バシツ!

「な……っ!?!」

それは美紀と話してばかりいる彼へのちよつかいのつもりだったのだが、あまりにタイミングが悪かった……。由紀の不意打ちを背に受けた彼はバランスを崩し、そのまま川辺に座る美紀を巻き込むようにして倒れてしまったのだ。

美紀「うわっ!!？」

「っ!!」

地面に倒れる寸前、彼は美紀を押しつぶしてしまわぬように両手を地面に伸ばす。伸ばした両手の内、左手が地面につき、自らの体を支えた事によって美紀の上に体を重ねてしまう事だけは避けられた。…だが、右手を伸ばした場所が悪かった…。

フニツ…

美紀「っ!!？」

彼の右手のひらに伝わる柔らかかな感触…。よくある漫画の主人公ならここで『あれ？柔らかいものが…』などと言うのだろうか、彼はそんな事を言う間もなく、すぐさまその感触の正体に気付いた。

(やつ…ちやつたな…)

スーっと血の気の引く音が聞こえてきそうな程、彼の顔が青ざめていく。

何故なら、押し倒されたようにして目の前にいる美紀の顔は真っ赤に染まり、じっとこちらを見つめている。

美紀「っ…／／うう…っ!!」

念のために確認しようと、自分の右手へ視線を向ける。

そこにあつたのがあまりに予想通りの光景で少し笑いそうになる彼だが、洒落にならないのでそれは抑えた。

伸ばされた自分の右手は美紀の左胸を水着越しにガツシリと握っていて、その柔らかな胸に指先が少し沈んでいるのが分かる…。一刻も早く手をどけるべきなのだろうが、惜しい気がして動けない…。

(ヤバい……何がヤバいって、柔らかすぎてヤバい……!)

自分がぶつかつたせいで彼に押し倒された美紀……。その光景を目の当たりにして由紀が驚く中、彼は全神経を右手に集中させていた……。この感触を記憶に刻み込む為である。ほんの数秒前は焦りで血の気の引いていた彼だったが、そんなものは美紀の胸に触れているという事実と向き合つた途端、ただの興奮に変わった。

美紀「いつ、いやっ!!」ドンツ!

「うおっ!」

美紀は堪らず彼を突飛ばし、その場から逃れる。

彼の手から離れた美紀は両手で胸を隠すような仕草をして、彼の事を睨みつけた。

美紀『『何でも出来そうな気がする』って言って、その直後がこれですか……!!? まったく、あなたって人はっ……!!』

「いや……そのっ……!」

美紀の目が段々と潤んでいき、今にも泣き出しそうな顔になる……。異変に気付いた胡桃や悠里もその場に駆け寄ってきて、彼の焦りはピークに達した。

胡桃「どした〜?」

悠里「……大丈夫?」

寄ってくる胡桃と悠里……。もしこの二人が今の出来事を知ろうものなら、彼はどうなるのだろうか……。

(……良くてもサヨナラ。最悪、死刑執行だろうな)

彼の額にはじわりと汗が浮かび、体が震える……。

その焦りは相当のものだったが、少し離れた位置ならそれを見ていた由紀の焦りもかなりのものだった。



由紀（わ、わたしのせいで……大変なことにつ……!!!）

## 百二話 『そばにいたい』

美紀「まったく、あなたって人はっ…!!」

ちよつとした事故により、美紀の胸に触ってしまった彼…。

美紀は彼の手を振り払い…両手で胸元を隠しながら瞳を潤ませる。

胡桃「どした〜?」

悠里「…大丈夫?」

騒ぎに気付いた胡桃、悠里がそばに歩み寄り、たたずむ彼と美紀の顔を交互に見つめた。彼は何やら冷や汗を流して目をキョロキョロさせており、美紀は顔を真っ赤に染めて泣きそうな目をしている…。二人から少し離れた場所では今回の事故を引き起こした本人である由紀が気まずそうな表情をしていたのだが、胡桃と悠里はそれに気がつかない。

悠里「美紀さん、泣いてるの?」

胡桃「…おい、なにした?」

涙目の美紀を見てただ事ではないと感じたのか、胡桃が少し威圧するような声で彼に尋ねる。しかし、胡桃の鋭い目を見た彼は震えるだけで何一つ言葉を発しなかった。

「……………」

胡桃「…美紀、なにされた?」

彼が黙ったままなので、尋ねる相手を美紀に変更する胡桃…。

直後に美紀がそつと口を開くのを見て、彼は思う…。

『僕の命も…ここまでか。短い人生だったけど…みんなと出会ってからは楽しい日を過ごせてよかった』と…。ついでに言えば、『最後の最後で美紀さんの胸に触れてよかった…』などとも思っていた。彼がそうして自分の死期を悟った中、美紀がついに言葉を放つ…。

美紀「だ、大丈夫です…。変な虫がいて、それで驚いちゃって…」  
胡桃「虫…?」

美紀「はい…虫です…。それはそれはもう、スツゴク気持ち悪い虫で…」

「……………」

何だか遠回しに自分の事を言われている気がした彼だが、とりあえず、美紀は彼の事を庇ってくれたらしい…。胡桃と悠里もそれに納得したのか、少しずつその場を離れていった。二人が離れたのを見計らい、彼は美紀の前に歩み寄る。

「あの……すみませんでした」

美紀「……………」

チラツと目を合わせてはくれたものの、美紀は言葉を返さない…。するとその場に由紀が駆け寄り、申し訳なさそうに頭を下げた。

由紀「あ、あのね…わたしが——くんを押しちゃったから……悪いのはわたしなの…。だからね…あまり怒らないであげてくれるかな…?」

美紀「……………」

美紀は恐る恐る言葉を放つ由紀をただじっと見つめ、微動だにしない。

彼と由紀…二人は同じように冷や汗を流し、美紀の返答を待ち続けた。

美紀「…わざとじゃないんですよね？なら、許します」

彼にそう言っただけ息をつき、美紀は再び川辺に座り込む。

一先ず安堵する由紀と彼の二人だったが、直後に彼女は二人に背を  
ままの状態で言った。

美紀「由紀先輩は落ち着きがなさすぎです…。気をつけて下さい」

由紀「ご…ごめんなさい…」

美紀「…よろしい」

とりあえずは許された由紀と彼…。二人は美紀を挟むようにして  
その左右に座り、そつと彼女の顔を覗き見た。

美紀「……………」

彼女の表情は怒っているわけでも、泣いているわけでもなく…無表  
情のまま川を見つめていた。時と場合によっては、こういった表情が  
一番怖い…。

「本当に…悪かったです」

改めて彼女に謝り、関係の修復を試みる。

美紀はそんな彼の顔を横目でチラツと覗くと、小さな声で呟いた。

美紀「もう気にしないで下さい。私も少し、ムキになりました。  
男の人に触られたのが初めてだったので…驚いてしまっただけ…」

頬を微かに赤くして、美紀が告げる。

男に触られたのが初めてだと聞いた彼は何故かそれに喜び、安心し  
たような表情を見せた。

「大丈夫です。僕も初めて触りましたから……」

美紀「な……っ……!? そ、そういう問題じゃなくてっ……!」

訳の分からない主張をする彼に怒声をとばしかけた美紀だったが、場の空気を悪くしたくなかったのでグツと堪える……。本当によくできた後輩である。(一方、彼は少しバカである)

美紀「さっきの事……忘れて下さいよ?」

「……………もちろんです」

口ではそう言う彼だが、本心ではない……。

先ほどの体験は彼にとつて、過去最大級の思い出になったのだ。

そう簡単に忘れたりなど出来るわけがない。

美紀「まあ、言っただって忘れないんでしょうけど……」

「……………」

彼の事がある程度理解している美紀には彼の考えなどお見通しだったらしく、彼女が諦めたように呟く。彼は言い様のない罪悪感を感じながら、もう一度静かに頭を下げた。

美紀「でも……相手が私で良かったですね」

「えっ?」

美紀「だって、リーさん相手だったら間違いなく怒られますよ。三  
〜四時間……下手したら夜中まで説教です」

「……………」

美紀「あとは胡桃先輩……あの人を相手にあんなことしたら……」

「……………」

美紀に言われて彼は想像する……。自分が不慮の事故によってバランスを崩し、そのまま胡桃を押し倒す。受け身をとる為に地面に伸ば

した自らの右手は彼女の胸を掴んでしまい、彼女の顔が徐々に赤く染まる……。ここまではまだ良い。問題はその後だ……。

胡桃は自分に覆い被さる彼を蹴りあげてどかした後、素早くシヤベルを手にする……。それは容赦なく何度も彼に振り下ろされ、彼は抵抗する間もなく挽き肉に……。

そんな光景を想像した彼は青ざめた表情をして、事故の相手が美紀で良かったと神に感謝した。

美紀「あとは由紀先輩ですが……」

美紀は言いながら顔を横に向け、隣に座る由紀を見る。

すると、由紀は少しだけ照れたようにして笑った。

由紀「わ、わたしは……相手が——くんなら、べつにいいかな……?」

美紀「ちよっ!先輩っ……!?!」

「ま、まじですか……」

えへへと笑いながら右手で頭をかき、頬を赤くする由紀……。

捉え方によつては問題のあるその発言を前にして、美紀と彼は驚きを隠せなかった。すると由紀は自分の発言に誤解があつたことに気付いたらしく、慌てた様子を見せる。

由紀「ちつ、ちがうよ!?!わざとじゃなかった場合だけ!わたしだつて、わざと触られたらちゃんと怒るもん!!」

美紀「で、ですよね……安心しました」

「ちなみに……どうやって怒るんですか?」

胸を触られて怒る由紀……。その光景に興味があり、彼が尋ねる。

すると由紀は隣に座る美紀の手をガシツと掴みあげ、彼女の目をキツと見つめる。どうやら、美紀は相手役にされたらしい……。

由紀「こういうことしちやダメだよっ！」

ビシツと告げる由紀だが、今一つ迫力がない…。

それどころか、眉をしかめたその顔の可愛らしさに彼が興奮していた。

(いや、由紀ちゃんにこんな顔されたら悪い男は益々止まらなくなるだろう…。まあ、僕もその”悪い男”に含まれるんだけど…)

この瞬間、彼は確信する。

万一痴漢に出くわした場合、由紀は上手く追い払う事が出来ない…。

それどころか、痴漢のテンションを高めてしまいそうだ。

美紀「あはは…。」

由紀の演技を間近で見た美紀もそれに近い事を思ったのか、乾いた笑い声をあげていた。

「由紀ちゃん…そんなんじや悪い男は追っ払えませんか。もう一回やってみましょう」

このままではいけないと思った彼は由紀をたくましい女性にするべく、今一度やり直しを求める。すると由紀はまた美紀の手を掴み直し、先程と同様に眉をしかめた。

由紀「わるいことしちやダメっ!!」

(さっきとほとんど一緒じゃないか…。可愛いから良いけど…)

由紀の精一杯の怒り顔を見た彼は満足げに微笑み、やはり彼女には悪漢を追い払うのは無理だという結論を出す。これで一連の演技は終わりかと思う彼だが、まさかの出来事が起こった…。

美紀「なぜダメなんですか？」

美紀がアドリブを放ち、演技を続行したのだ。  
何がダメなのかと尋ねられ、由紀はオロオロしながら美紀の瞳を見つめていた。

由紀「だ、だって…いきなり女の子の胸を触るのは…」

美紀「じゃあ、いきなりじゃなかったら良いんですか？」

由紀「そっ、それは…」

まさかの追撃をする美紀…。由紀は中々それに答える事が出来ずにいたが、少ししたら恥ずかしそうに口を開いた。

由紀「す、好きな人とじゃないと…そういう事しちゃダメなんだよ!?」

何とも可愛らしい…精一杯の反論をする由紀…

この時点で彼の鼻息はかなり荒くなっており、その興奮っぷりが窺えた。

美紀「私は先輩のこと好きですよ。これなら良いですか？」

由紀「え…っ…!?!」

(美紀さん…い…あなたはなんて人だ…!!素晴らしいっ!!)

容赦なく由紀を追い詰めていく美紀…

美紀の手を掴んでいたハズの由紀の手はいつの間にか離されており、逆にその手を美紀に掴まれていた。焦る由紀…そして興奮する彼…。由紀は顔を真っ赤にしてその瞳を潤ませた後、静かにそっと俯いた。

由紀「え、えつと…なら…いい…のかな…?」



美紀「…そうですか」

(マジかつ!?)

美紀は掴んでいた由紀の手をそつと離してから、その手を彼女の胸へと伸ばしていく…。由紀は真っ赤に染まった顔を俯けたまま瞳をギュツと閉じ、美紀に身を任せた。

由紀「つく……………うう…」

美紀「……………」

(み、美紀さん…本当に触る気にいるのか…!?)

由紀の胸へと徐々に近寄るその手を見た彼は驚き、目を丸くする。しかしその手は胸に触れる寸前のところで動きを止め、由紀の頭を小突いた。

美紀「…とまあ、このくらいにしておきますが、由紀先輩…ちよろ過ぎです。気をつけて下さいね」

由紀「えっ? あ……………、うんっ!」

驚く由紀の顔を見た美紀はふふつと笑い、満足そうな表情を見せる。

一方、それが途中で終わってしまった事にショックを受けた彼は心底ガツカリした表情をしていた。

(なんだ……………最後までしないのか……………)

彼のいう『最後まで』という言葉の意味は分からないが、恐らくまともなものではないだろう…。由紀の為に行われたそれは結局そのまま終わってしまい、彼は落胆した。

その後、由紀・悠里・胡桃・美紀の四人は彼を外に残したままで車内に戻り、普段着へと着替える。一人外に残った彼は美紀と由紀のそれを『最後まで』見れなかった事だとか、楽しかった水浴びが終わっ

てしまう事を惜しみ、ただじつと川を眺めていた……。

(…まあ、良い思い出がいっぱい出来たし、良しとするか)

なんだかんだ言っても、総合的にみればとても楽しかった…。

そう思つて彼が一人微笑んでいると、車の方から声が聞こえた。

胡桃「着替え終わったぞ〜」

体操服の上にジャージを羽織つた胡桃が彼を呼ぶ。

彼は彼女のそばに歩み寄り、その格好を見て残念そうに言った。

「あくあ、貴重な水着姿は終わりか…。もうちよつと目に焼き付けておけば良かった…。」

胡桃「次の水浴びの時にまた見せてやるよ」

彼の発言に呆れた様子も見せず、胡桃は笑顔で答える。

いつもより優しい気がする彼女に戸惑う彼だったが、にっこりと微笑む彼女を見てすぐに気付く。

(ああ…そっか、この娘は…ずっと優しくかったな)

時おりする少し乱暴な言葉使いや男勝りな性格に隠れていたが…彼女は最初からそうだった…。胡桃はいつだって優しくて、自分はその優しさに何度か支えられてきた…。それに気付いた彼はふふつと笑い、彼女の顔を見る。

「じゃあ、次の水浴びを楽しみにしておくよ。また、一緒に楽しもうね」

胡桃「……うん」

彼女の水着姿がまた見たいから…そういつた気持ちも当然あったものの、今の彼の本当の望みは他にあった。

次の水浴びが明日になるか、明後日あさってになるかは分からない…。

ただ：その時も彼女、恵飛須沢胡桃のそばにいたいと思つた。  
そばにいたいし、いてほしい……。明日も明後日も明明後日しあさつても：出来れば一年後、十年後も：彼女の笑顔を見ていたいと、心からそう思う……。その為には、彼女を救う手がかりを見付けねばならない……。

彼は改めて、彼女を救う決意をした。

その後：彼が車内に戻ると、着替えの邪魔にならないよう入れ代わるようにして由紀達が車外に出ていく。彼はすぐに着替えを済ませると外に出ていた彼女達の中に呼び寄せ、何でもない：平和な午後を過ごす。水浴びでは色々あったが、まともに身体を休めたのは久しぶりな気がした彼であった。

## 百三話『ぎわく』

彼は今まで、彼女達と共に水浴びをすることはできなかつた…。

しかし今日…胡桃の提案によつて彼は初めて彼女達と一緒に水浴びをし、その水着姿を目に焼き付け、楽しい時間を過ごした。

そんな時間が終わり、車内の席についてのんびりとした午後を過ごしていた彼だったが…そんなまったりとした時間は突如として終わりを告げる…。

事の始まりは、悠里が呟いた一言だつた…。

〃

「今…なんて？」

悠里「だからその…私の下着が…一つ無くなつてるんだけど…」

水浴びを終えて一時間ほど経つたその時、悠里が頬を微かに赤く染めながら彼に尋ねる。着替えの整理をしていたところ、下着が足りないことに気づいたらしい…。

「いや…知らないですけど、なんで僕に聞くんです？」

悠里「………深い意味はないわ」

そつと目を反らし、口ではそう答える悠里だが、本当は彼を疑っていた。…というか、突然下着が消えたとあれば彼以外に疑うものがないのだ。下着が独りでに消える事など、絶対にあり得ない…。だが本人が『知らない』と答える以上はどうしようもなく、悠里は頭を悩ませた。

悠里「さて…どうしようかしら…」

下着もそこまでたくさん持っている訳ではないので、たとえ一つだけでも失うのは痛い…。どうにかして取り戻したいが、唯一の容疑者である彼が知らないならもう思い当たる節がない。少し考えた後、仕方なく諦めることにした悠里だが…そんな彼女へと胡桃が耳打ちをする。

胡桃「…絶対に盗られたろ」

小さな声で放つ『盗られた』という言葉…しかしこの世界には滅多に人がいないので、下着泥棒などもそうはいないハズだ…。

悠里「盗られたって…誰によ？」

胡桃の耳に口を寄せ、そう尋ねる。

だが、聞かずとも本当はそれが誰を指しているのか分かっていた。

胡桃が疑っているのは自分達五人組…その中にいる唯一の男性、『彼』のことだろう。

胡桃「アイツだよ…」

悠里の予想は当たり、胡桃がチラツと彼を見つめながら呟く。

容疑者である彼はそばの席に座りながら、落ち着き無く彼女ら二人をチラチラと覗き見ていた。胡桃と悠里の会話が聞こえていたからだ。

(…思いつきり疑われてるじゃん。本気で心当たりがないってのに、

どうしてこんな目に…)

はあ…とため息をついてからテーブルにコツンと額をつけ、身に覚えのない罪を与えられそうな自らの悲運を嘆く。どうして自分が疑われるのか…：そう悩む彼だったが、その答えはわりとすぐに出た。

(…：前科があるからだな)

以前訪れた温泉での覗き行為が一回…。

水浴び前、車内で着替える彼女らへの覗きが二回…。

一人で留守番している時、こつそりと彼女らの下着を探した回数二回…。

美紀の胸に触った回数一回…。(New!)

美紀の胸に触った事以外の全ては悠里・または胡桃に捕まってしまいい未遂に終わっているが、未遂でも罪は罪…：決して消える事などない。だが、彼はこうも思った…：これだけ色々やらかしてきたのに、よくもまあまだここにいさせてもらえているな…と。

そんな事を考える彼の前に、胡桃と悠里が迫る。

胡桃は彼と目が合った瞬間、躊躇うこともなくハッキリと言った。

胡桃「おい、お前やったろ？」

「…：なにを？」

大体の話の流れは掴んでいるのに、ここで知らばつくれてしまうのが彼の悪いところである…。ハッキリ『知らない』と答えれば良いものを…。そんな彼の態度が気に入らなかつたのか、胡桃の声色が少しばかりキツくなっていく。

胡桃「だから…：りーさんの下着、盗っただろ？」

「盗ってない。」

胡桃「ほんとに？」

「ほんとに」

悠里「本当に？」

「ほんとに」

じつとこちらを見つめる二人に答え終えてから、彼はスツと目を反らす…。盗みなど本当にやっていないのだが、こうジロジロ見つめられると、自然と目を反らしまうのだ。

咄嗟に目を反らしてしまった彼のそれは胡桃と悠里により一層の疑心を与えてしまい、益々疑いが深まっていく…。

胡桃「…正直に言ってみろ？」

につこりと微笑みながら胡桃が尋ねる。

パツと見では可愛いだけの笑顔に見えるが、その裏には彼を責め立てるオーラののような物を感じた。

「だ、だから…本当に盗ってないよ？」

迫る胡桃に怯えてしまい、つつい声が震えてしまう。

胡桃：悠里の無言のプレッシャーによって冷や汗も流れてきてしまい、彼はまた目を反らす。真実を知らぬ者からしたら彼はどう見ても『本当は盗ったけど必死にごまかしてるヤツ』だった。

胡桃「なんで目をそらす？」

「…二人が可愛いから…」

『怖いから直視出来ない』などとは言えず、咄嗟にこう言った。

その言葉は胡桃には多少の効果があったようで、彼女は頬を微かに赤く染めながら目を泳がせている。

さあ、問題は悠里：彼女はどうかだろうか？

上手くごまかせただろうか？

バンツ!!

悠里「…真面目に答えて」

「す、すいません…」

悠里がテーブルを叩き、彼の肩がビクツと震える…。

彼女に先程の言葉が効いたかどうか…それはこの様子を見れば分かるだろう。答えは『効果ナシ』だ。むしろ逆効果だった可能性すらある。

「あの…本当に盗ってないんですが……」

悠里「本当に？絶対か？」

「ええ…本当に…絶対に……」

悠里「……………」

胡桃「……………」

「……………」

無言の時間が続く……。

責めるような二人の目を見つめるのは辛かったが、ここで目を反らしてしまうとまた疑いが深まる。彼は必死にその視線に耐えた。

彼を責める無言の時間は三十秒ほどで終わりを迎え、悠里がため息をつく。どうやら、彼の事を信じることにしたらしい。

悠里「じゃあ…信じるわね」

「は、はい……」



胡桃「もっかい聞くけどさ、ほんとに盗ってないのか?」

胡桃が念の為に尋ねる。

気疲れした彼は頭をテーブルに伏せながら、ダルそうに答えた。

「そう言ってるじゃん…。大体、その盗みは僕にメリットがあるの?」

本心ではメリットだらけだと分かっているクセに、ここでも知らばつくれるようにして言葉を放つ。すると胡桃は彼を見下したような目で見つめ、ボソツと呟いた。

胡桃「それはほら…頭にかぶんだろ…」

「かぶんないよ!!」

胡桃にどれだけ変態だと思われるんだと思う彼だったが、『ちよつとやってみたい』とも思ってしまった。だがそんなことは当然言えないので、口では常識人を装っておく。

悠里「人の下着を変なことに使わないでっ!!」

自分の下着を頭にかぶる彼を想像したのか、悠里の顔が赤く染まっていた。言い出したのは胡桃なのにここで彼が責められているのは、やはり普段の行いのせいだろう。

「だから…かぶりませんって…」

悠里「絶対よ!?!絶対にかぶらないでね!?!」

やたら不安そうな表情の悠里…。それは、彼ならやりかねないと本気で思っている人間の顔だった。彼はその表情に多少のショックを受けながらも、彼女に返事を返す。

「はいはい…」

胡桃「一応言っとくけど、あたしのもダメだぞ?」

「わかってますよ…」

悠里「美紀さんのも…由紀ちゃんのもだめよっ!？」

「わかってるってのに……」

さすがの彼もここまで必死に言われるとさすがに落ち込む…。

二人はそんな彼の気持ちに気づき、言い過ぎたと思っただのか、態度を一変させて彼をなだめた。

胡桃「ま、まあ…いくらお前でもそんなことしないもんなあ?」

「…うん」

悠里「そ、そうよね…」

胡桃「当たり前じゃん!人の下着かぶるなんて…そんなのドがつくほどの変態じゃなきゃやらねえって!」

悠里「そう…よね!あなたはそんな人じゃないものね?」

胡桃「ああ、お前はドのつかない、ただの変態だもんな?」

バシツと彼の肩を叩きながらフオローする胡桃だが、あくまでも彼のことを変態だと言ってしまった…。彼自身も自覚はあったものの、他人に言われると多少のショックがあった。

「……………」

悠里「くるみっ!!」

胡桃の言葉を受けた彼の肩が力なく落ちていくのを見て焦る悠里…。胡桃も自分の言葉に原因があった事に遅れて気づき、彼を慰める。

胡桃「わ、わりい!大丈夫っ!!あたしはちゃんと信じてるぞ!!」

「……………」

彼は頭をテーブルに伏せたまま、脱力しきっている…。

胡桃は彼を元氣付けるべく、その頭を撫でた。

胡桃「ほ、ほらく頭なでなでしてやるぞく？」

悠里「わ…わあく…良いわねく…」

胡桃「なでなでくなでなでく♪」ガシガシ

「……………」

ガシガシと乱暴に頭を撫でる胡桃と、それを見守りながら彼に言葉をかける悠里…。それはまるで子供をあやすかのような行動で、とてもじゃないが同じ年の少年にやる事ではなかった…。

「……………ありがとう」

だが、彼は単純な男だった…。彼女達のこんな雑な作戦でもあつさり元気を取り戻し、嬉しそうに顔をあげたのだ。

悠里「にしても…結局わたしの下着はどこに…」

彼が元気を取り戻したのは良いのだが、悠里の下着の行方は未だに不明。もう諦めるしかないのかと思つたその時、洗濯に出ていた美紀と由紀の二人が車内へと帰ってきた。

バタン…

由紀「たっだいまく♪」

悠里「お帰りなさい。残つた洗濯物、任せちゃってごめんなさいね」  
美紀「いえ、全然構いませんよ。リーさんには色々助けてもらつてますか、このくらいの仕事ならわたしたちだけで片付けます」

由紀と美紀は抱えていた空の洗濯かごを車内の隅に置き、席につく。

そうして一呼吸ついた後、由紀が放つた言葉に彼は耳を疑つた。

由紀「あつ、そう言えばわたしの荷物にりーさんの下着が混じつてた！わたし、間違えてしまっちゃったみたいで…ついでに洗っておいだから、乾いたら返すね♪」

悠里「えっ!? あ…そ、そう? 由紀ちゃんの…荷物に…」

「……………」

胡桃「…りーさん」

由紀の言葉に焦る悠里と胡桃…。

二人がそつと彼を見てみると、とても穏やかな表情をしていた。

悠里「あの…疑ってごめんなさい…」

胡桃「ま、まあ! あたしは最初からお前を信じてたけどな!」

悠里「くるみ!? それは卑怯じゃ——」

冷や汗をかきながらその場を逃れようとする胡桃の肩を掴み、悠里は彼女を睨む。すると今まで席についていた彼が突如立ち上がり、二人の肩がビクツと震えた。

「さて……………さて……………」

胡桃「ど、どした?」

悠里「顔…少しだけ怖いわよ?」

どこか裏がありそうに微笑む彼と、それに怯える胡桃と悠里。

その珍しい光景を目の当たりにした由紀と美紀は不思議そうな表情をしてそれを見守った。

「せっかくだ、今日は僕が授業をしようかな?」

由紀「うっ…!?!」

『授業』という言葉聞いた由紀が咄嗟に顔を反らす。

普段は悠里に勉強を教えてもらっていたのだが、今日は彼が担当す

るのか？これからまったりとした午後を過ごそうとしていた為、出来ることなら勉強は避けたかった由紀だが、そんな彼女へと彼が告げる。

「ああ…由紀ちゃんと美紀さんは自由にしてていいよ」

由紀「ほんとっ!？」

「うん、今回はこの二人だけ…」

言いながら彼は胡桃・悠里を見つめる。

二人はじつと身を固め、すぎるような視線を美紀に送った。

美紀「…なにやっただんですか？」

胡桃「ちよつと…な」

悠里「ええ…ちよつと」

「胡桃、悠里…席について」

教師モードに入ったのか、彼が二人を呼び捨てにする…。

立ち上がった彼は先程まで自分が座っていた席に二人を座らせるべく、席を指さしながらそつと告げる。二人が渋々並んで座ると、彼はその正面に座った。

「二人にはとつても大切な授業をしようか…。この世には『冤罪』って言葉があつてだね…無実の罪にも関わらず追い詰められてしまう人間がいるんだ。ん？…どこか親近感がわくな」

胡桃「でも…お前には前科もあるし…」

悠里「たしかに、疑ったのは悪かったけど…」

「キメツケ…ヨクナイ…」

悠里「…ごめんなさい…」

胡桃「うっ…ぜえ…」

思わず胡桃が呟く。

もちろん、彼はそれを聞き逃さなかった。

「くるみ、言葉遣いになってないよ」

胡桃「…ウザいでございますわ。これでよろしくて?」

言葉遣いが悪いと言われた胡桃はどこかの貴婦人のように、口に右手を添えながらわざとらしく大げさに答える。それがツボに入ったのか、悠里は顔を伏せながら肩を震わせていた。笑いを堪えているようだ。

悠里「っ…ふふっ…!くるみったら…やだ…」

胡桃「あら?悠里さんも言っておやりなさい。普段から疑われるような事をしまくってるアンタさんが悪いんだって」

悠里「つくく…!その喋り方…やめてっ…!!」

悠里の笑いにつられたのか、そばで様子を見ていた由紀も笑い出す。

それに気をよくした胡桃は次から次へと言葉を放ち、二人を笑わせていった。その間、彼は無言である…。

由紀「あははっ♪胡桃ちゃん、お嬢様みたい!」

胡桃「うん?レデーならこのくらいは当然でございませう?」

美紀「先輩…レデーって…:…つくく!」

ついに美紀も笑い出す…。

みんなが笑った事が嬉しかったのか、胡桃自身も声を出して笑い出した。

胡桃「つく…あははっ!」

悠里「もうっ、笑わせないでよっ…!」

由紀「あははっ!おもしろくっ!」

美紀「まったく、胡桃先輩がお嬢様なんてイメージが…ふふっ!」

胡桃「なっ?!おい美紀っ!その発言は失礼だぞっ!!」

美紀「あはつ、すみません。良いんじゃないですか？似合ってると思いますよ、お嬢様……………つくく！」

胡桃「そこで笑うなっ！」

美紀が胡桃をからかった事で、またみんなが笑い出した。

楽しげにわらう彼女達を見た彼もまたそれにつられ、いつしか共に笑っていた。彼は胡桃と悠里に仕返しをしようと考えていたのに、その気すらとつくに失せていた。

(まったく…本当に面白い人達だな)

彼女達と出会う前まで彼はずっと一人で過ごし、お世辞にも楽しいとは言えない毎日を過ごしていた。だがあの日、彼女達と出会った時から…こんな世界でも心から笑える事を知った。

丈槍由紀・恵飛須沢胡桃・若狭悠里・直樹美紀…

この先、どんな事が起きても彼女達と一緒に乗り越えられる気がする。これからずっと笑っているためにも、彼女達だけは守らねばならない。

ずっと全員一緒に…欠けることなく…

『…む……………づい……………う？』

「…？」

彼女達を見つめていると、誰かが彼に語りかけた気がした…。

その声は彼女達の笑い声でハッキリとは聞こえなかったが、少なくとも彼女達の声ではなかった。

(…気のせいか)

彼はそう自分を納得させ、あまり深くは考えない事にした。

百四話『やんやき』

日が沈み、夜を迎え…夕食も済ませた由紀達一行。

今日は彼が初めて彼女達とともに水浴びを済まし、その後は下着ドロボウだと疑われるという中々に濃い一日だったが、それも終わろうとしていた…。

(平和といえれば平和な一日だったけど、疲れたな…)

彼は自らの寢床である席につき、テーブルに伏せながら一日を振り返る。誤って美紀の胸に触れてしまったり、下着ドロボウに疑われたり…ただの平和な日とは少し違う気もするが、それでもとても楽しい一日だった…。

由紀「そういえば、寢床がまた椅子に戻っちゃったね…」

通り際、毛布にくるまりながら席につく彼を見て由紀が呟く。

未奈の屋敷から外に出て二日経っているのだから彼は昨日もここで寝ていたのだが、昨日の由紀は早く寝てしまったので気づいてなかったらしい。

「…仕方ないです。空いてるベッド無いし、一緒に寝るわけにもいかないし。まあ、慣れてるから大丈夫！」

彼は微笑みながら答えるが、一方で由紀は表情を曇らせる。

いくら慣れていと言っても、座ったまま寝るとベッドで寝るのとではかなり違うはずだ。由紀のそばにいた悠里もそう思ったのか、心配そうに声をかける。



悠里「つらかったら言つてよ？しつかり休むことが出来ないまま外に出て、何かあつたら大変なもの」

「気持ちは嬉しいですけど、どのみち寝る場所が…」

車内の後方…そこにあるベッドを覗き見ながら呟く。

ベッドの上では寝間着代わりの体操服に着替えた胡桃と美紀が笑顔で何やら話しており、楽しげな雰囲気だった。

悠里「どうしてもつて時は私がそこで寝るから、あなたはあつちで…」

「いや…それはさすがに…」

言ってくれるのは嬉しいが、それだと彼女達とかなり近い距離で眠る事になる…。それは少し問題がある気がするし、変に興奮して逆に眠れなくなりそうな気もする。

悠里「ふふっ、そうね…。さすがにちよつとマズいかもね」

「でしよ？」

悠里「じゃあ、昼間とかに休みたい時にはあのベッドを好きにだけ使つていいからね。これも前から言つてるのに、まだ一回も使つてないでしょう？遠慮しなくていいのよ」

「はい…わかりました」

悠里「うん、じゃ…おやすみなさい」

由紀「おやすみ」

就寝前の挨拶を済ませた悠里と由紀は彼のもとを離れ、ベッドへと向かう。するとそこにいた胡桃と美紀も彼の方をチラツと見つめ、就寝前の挨拶を告げた。

胡桃「おやすみ」

美紀「おやすみなさい」

「うん…おやすみ」

彼が二人に答えた直後、悠里が車内の明かりを消す…。

彼女達はそれを合図にベッドに潜り、瞳を閉じた。

席に座る彼もまた毛布にくるまり、そつと瞳を閉じる。

（今日は久々に楽しい一日だった…。また、こんな日を過ごせたらいいけどな。由紀ちゃん、美紀さん、りーさん、それと…胡桃ちゃんと一緒に）

昼間の水浴びを思い出しながら、につこりと微笑む。

彼女達と出会い、楽しいことも苦しいこともあったが、一人でいた時よりもずっと幸せだという事だけは間違いない。出来る事なら…ずつと一緒に…そんなことを思った彼の耳に、誰かの声が入ってくる…。

『む……だ……て……ろう？』

「…ん？」

俯けていた顔をあげ、辺りを見回す…。

明かりの消えた車内は視界が悪いが、それでもそばに誰かがいれば分かる。だがそばには誰もいないし、由紀達もベッドに横たわっている。彼に語りかけてきた様子はない。

（また、勘違いか？でも…）

勘違いにしてはハッキリと聞こえた気がした。

内容までは正確に聞き取れなかったが、それでも…誰かが彼に語りかけてきたのは間違いない。聞こえた声は低かったので男性だろう

…。彼はその声にどこか聞き覚えがあった……。

万が一、不審者が忍び込んでいたらマズイのもう一度辺りを見回すが、この狭い車内…自分達の目から隠れる場所などない。では車外から聞こえた声なのではとも考えたが、その可能性もない。声はそれほど彼のそばから聞こえたのだ…。

(今の声……まさか……)

聞き覚えのあるその声の主が分かりかけたが、それはあり得ない…。

彼はやはり聞き間違いだと結論付け、テーブルに顔を伏せる。

(そんなこと、絶対にあるわけない…。僕はただ、胡桃ちゃんを助ける手段の手がかりを探してれば良いんだ…。余計なことを気にするな…)

一刻も早く彼女を助ける事こそが今の自分にとって最大の目的。それを達成する為にも、下らない幻聴などで悩んでいる暇はない。きつと疲れが原因だ。そう考える彼に、またしても誰かが語りかける。その声は今までとは比べ物にならない程に鮮明で、不本意ながらも聞き間違いではなかったと確信してしまうほどだった……。

『何度も言わせるな。あの娘を救うのなんぎ、無理だと気づいているだろう?』

くくくく

明かりが消え、暗くなつた車内…。

それぞれが就寝に入つて一時間は経つた頃、未だ寝付けずにいる二人の少女がいた。胡桃…そして美紀である。

美紀はただ寝付けないだけだったのだが、胡桃の方は違った。

いくら寝ようと思つて目を閉じても、一向に眠くならないのだ…。

普通の人間ならただ不眠症なのかとも考えられるが、胡桃の場合はあの傷がある…。恐らくはそれと関係しているのだろう。眠くならない自分の身体が少しずつ人間とは違う存在になつている気がして…胡桃は毎日言い様のない不安を感じながら夜を明かしていた。

胡桃（今日も…寝れそうにないな…）

モゾモゾと動きながら、胡桃は天井を見る…。

この事も彼に相談すべきだろうか？今日も何度かそう思ったが、あの彼のことだ…。もし胡桃が眠れないと知れば、朝まで一緒に起きてるなどと言いかねない。そうしてもらつたらこの不安や恐怖も和らぐだろうが、夜くらいは彼を休ませてあげたかった。

胡桃（あいつを巻き込む必要はない。あたしが朝まで我慢すればいいだけの話だ…）

眠れるとは思っていないが、そつと目を閉じる。

時を同じくして美紀も起きていたのだが、胡桃はそれに気付かなかつた。そして美紀もまた胡桃が起きている事に気付いておらず、天井を見ながら一人瞬きを繰り返していた。

美紀（なんか…全然寝れないな。どうしてだろ…）

いくら目を閉じても眠る事が出来ず、結局目を開けてしまう…。

みんなが寝静まった車内は昼間とは比べ物にならない程に静かで、少し心細くなる。美紀はそんな心細さをごまかす為に昼間の出来事を思い返すが、そのほとんどは彼に関する事だった。

美紀（あの人、一緒に水浴び出来て嬉しそうだったな…。どうせなら、もっと前からしてあげればよかったかな？）

自分達の水着姿を見た彼が嬉しそうに微笑んでいたのを思い出す…。最初こそ、彼に水着姿を晒すのが恥ずかしかった美紀だが、慣れてきてからは彼と一緒に水浴びも悪くないと思っていた。

美紀（なんだかんだで楽しかったし、次もまた一緒に…。先輩たちも、きつとそのつもりだよな？でも…胸触られたのはさすがに恥ずかしかったなあ…。）  
よりによって水着の時に触られるなんて…。ああ、思い出すだけで恥ずかしいっ…！）

当時の事を思い返しながら、一人顔を赤く染める美紀…。

そんな時、車内の前方…：彼のいる席から声が聞こえた。

「

内容までは聞き取れないが、抑えた声で彼が喋っている…。

寝言を言っているのかと思つた美紀は静かに視線を向けるが、彼はテーブルに手をつけながら顔を上げている。どう見ても普通に起きているようなので寝言ではないと思うのだが…：おかしい点が一つ。

」

美紀「……………」

彼は顔を上げて言っていたが、その方向にあるのは誰もいない席……。

にも関わらず、彼は誰かと話しているかのような様子だった。

美紀（独り言……？にしては、相手がいるみたい……）

目だけをそこに向け、不思議に思う美紀……。

同じくその時に起きていたもう一人の少女……胡桃もまた、どこかおかしい彼の様子をそつと覗き見ていた。

胡桃（どうしたんだろ……。夢見てるわけでもなさそうだし……）

美紀、そして胡桃は彼の事が心配になり、起き上がって声をかけようかと考えた。だがちょうどその時、彼はパタツとテーブルに顔を伏せ、それっきり独り言を呟かなくなった。

美紀（寝た……のかな……）

胡桃（……なんだったんだろ）

彼が眠りに入ったようなので、二人は起き上がるのをやめ、そのままベッドに寝そべる事にする。その後、美紀は10分ほどしたら自然と眠りに落ちていたが……胡桃は結局朝まで起きていた。少し様子のおかしかった彼の事を、不安に思いながら……。

~~~~~

悠里「おはよう。今日もいい天気みたいね」

早朝：車内の窓を覆うカーテンを開け、外が晴天だという事を確認する悠里。そのそばにいた彼は窓から入る日差しに目を細め、あくびをしていた。

「ふあ……ほんと、いい天気ですね」

悠里「あら、まだ眠いの？なら、もう少しだけ休んでも良いわよ？」

どこか疲れているような彼を見て告げる。

だが彼は首を横に振り、席から立ち上がって身体を伸ばした。

「大丈夫、十分休めました」

悠里「そう？じゃあ、他の娘たちを起こしてもらえるかしら？わたしは朝ごはんの準備しちゃうから」

「オツケー……って、夫婦みたいなやりとりだな」

おかしそうに笑いながら彼が言う。

すると悠里は顎に人差し指をあてながら自分の発言を思い返し、ふつと笑った。

悠里「そうね……。じゃあ頼んだわよ、アナタ♡」

ニコツと微笑み、彼の肩にポンツと手をあてる。

悠里に『あなた』と呼ばれる事は何度もあったが、この雰囲気と言われると今までのとは意味合いが違ってくる。冗談だと分かっている、悠里に旦那として呼ばれるのは悪い気がしない。

「凄まじい破壊力だ……」

思わずそう呟いてしまう……。

すると悠里は頬を膨らませ、不満そうに言った。

悠里「違うでしょ？わたしが『頼んだわよ、あなた』って言ったんだから、あなたは『わかったよ。悠里』くらい言わないと！」

眉を寄せながら彼の胸を人差し指でつつく…。

珍しく、朝からかなりテンションが高い悠里だが、機嫌でも良いのだろうか？そんな事を思いながら、彼は悠里の目を見つめた。

「わかったよ…。任せてくれ、悠里」

見つめながら言うだけでなく、オプシオンとして悠里の頬に手をあてる…。さすがの悠里もそれには驚いたらしく、目を見開きながら彼の事をじつと見つめた。手を添えたその頬が次第に赤く染まってい…。そんな彼女の表情はとても艶やかあでかで、手を出した彼の方も思わず目を逸らしてしまいそうになる。

(こうして見ると…りーさんって本当に美人だな)

悠里「…っ…ん…」

頬にあてた手を静かに動かし、二回、三回と頬を撫でる。

悠里が黙ってそれを受け入れていたのもあり、おふざけで始めたこの行為が引き返せないところまでいきそうになってしまおうが…。

胡桃「おい…なにを朝からイチャついてる…」

「なっ?!胡桃ちゃんっ?!」

悠里「ち、違うのっ!ただ、ちよつとふざけてただけで…!」

突如、悠里の頬を撫でる彼の背後から胡桃が声をかける。

背を向けていた彼はともかく、悠里は位置的に胡桃の存在に気付いてもよかったのだが、目の前の彼を凝視するあまり、声をかけられるまで気付けなかった。

朝からとんでもないものを見せられた胡桃はどこか不機嫌そうな表情をしており、二人は慌てた様子を見せる。

胡桃「コイツはともかく、リーさんもそんななつてふざける事あるんだな…。ちよつと意外だわ…」

悠里「ちよ…ちよつとね？たまにはいいかなあゝつて…」

胡桃「ふうん…ま、いいけどさ」

そう言つて胡桃は二人の間を通り過ぎ、席につく。

誰も見ていないと思つたからこそその行動にも関わらず、思いきり胡桃に見られてしまった…。それがよほど恥ずかしかつたのか、二人の顔は真つ赤に染まつていった。

悠里「く、くるみ…。わたしと彼は、そういう仲じゃないからね？」

胡桃「そんなこと…なんでわざわざあたしに言うの？」

悠里「勘違いさせちゃつたら…まずいと思つて……」

両の手を腹部の前で合わせながらモジモジとして、悠里が胡桃に告げる。胡桃は悠里のその焦つた顔を見た瞬間、不機嫌そうだった表情を一変させた。

胡桃「つくく！んなこと、言われなくてもわかつてるって!!」

悠里「…ほんと？」

楽しげに笑う胡桃を前にして悠里の緊張が解かれる。

もしかしたら勘違いさせてしまったのではと、本気で悩みかけたからだ。

胡桃「そもそも、二人の会話最初から見てたからな。リーさん、めっちゃノリノリだったなあ♪」

少しだけ馬鹿にするかのように胡桃が笑う。

悠里は自分と彼とのやり取りを思い返し、両手で顔を覆つた。冷静

になってみると、きつきは何をしていたのだろうと恥ずかしくなる…。

悠里「寝起きで変なテンションになっちゃっただけなの…きつと正気じゃなかったんだわ」

「それ、僕が傷つくんですけど…」

正気じゃない状態でないと自分とは触れ合えない…間接的にそう言われた気がして彼が肩を落とす。悠里はそんな彼をフォローするべく、慌てた様子で言葉を放った。

悠里「ううん、あなたのことがイヤってわけじゃないの。ただ…調子にのって『あなた♡』とか言う必要はなかったなって…」

「ふむ…まあ、おかげで朝からテンション上がったんで良いですけど」
こそつと呟きながらベッドの方へと向かい、未だ寝ている由紀・美紀のもとに歩み寄る。すうすうと寝息をたてる二人の内、まずは美紀のそばへと歩みより、布団から出ていたその肩に手を伸ばして揺らした。

「美紀さーん、朝だよー」

揺らしながら言う。すると美紀は少しずつ目蓋を開き、そつと起き上がったから目の前にいる彼に答える。

美紀「……おはようございます」

その声はどこかダルそうで、まだ寝足りないようにも思えた。
そんな美紀の事を、彼が物珍しそうに見つめる。

「あれ、まだ眠いですか?」

美紀「……まあ」

「これは珍しい…。夜更かしでもしてました?」

美紀「するつもりはなかったんですが、中々寝つけなくて…」

美紀は布団を捲り、ベッドから降りる。

そうしてから、彼に昨夜は一人で何を喋っていたのかを尋ねるつもりだったのだが、彼が由紀の方へと向かってしまい、そのタイミングを逃した。

美紀（まあ…また後でもいいか）

そう思いながらベッドを離れ、美紀は悠里達の方へと向かう。彼はというと、先程美紀にやったように、今度は由紀の肩を揺すっていた。

「朝ですよ〜」

由紀「う……………うん……………も…ちよつと……………ねる」

かけていた布団に潜り込み、モゾモゾ動きながら由紀は答える。

このまま寝かせても良いのか？無理やりに起こした方が良いのか？それを確認する為に彼がチラツと悠里に視線を向ける。すると悠里はため息一つついてからその場に歩みより、由紀の布団を力任せに剥ぎ取った。

ガバツ!!

悠里「由紀ちゃん、起きてっ!」

由紀「さ、さむいよお……………」

両手をバタつかせ、由紀は奪われた布団を取り戻そうとする。

だが悠里がそれを返すわけもなく、彼女はその場から降ろされた。

悠里「ほら、もうすぐ朝ごはんだから。それまでにしっかりと目を覚まして」

由紀「ん……………ん……………」

ベッドから降ろされ床に転がった由紀は静かに立ち上がり、フラフ

ラと歩き出す。どう見てもまだ寝ぼけており、悠里はもう一度ため息をつく。

悠里「はあ……外の川で顔を洗ってきましようか」

寝ぼける由紀の手を掴み、悠里は外に向かおうとする。だが由紀はその首を横に振り、ぼんやりした様子で告げた。

由紀「めぐねえと一緒に行くから……大丈夫だよお……」

「……………」

悠里の手をそっと払い、のそのそ歩き出す。

由紀は“めぐねえ”と一緒に行くと言っているが、その人物は彼女にしか見えておらず、実際には存在しない……。寝ぼけている彼女を一人で外に向かわせる訳にはいかない為、悠里は彼女の後をそっとつけていった。

…ボタン

寝ぼけている由紀と悠里が外に出て、彼と美紀と胡桃が取り残される。

すると美紀は柵からタオルを取り出し、彼と胡桃に告げた。

美紀「タオル持っていかなかったから、届けてあげないと。そのついでに私も顔を洗ってきますが、二人はどうします？」

「ああ、んじゃ僕も……」

彼がそこまで答えた瞬間、胡桃が彼の手を背後から掴む……。胡桃はその手をグツと引いて彼を後ろに下げ、その代わりかのように答えた。

胡桃「あたし達はもう少ししてから行くから、先に行っていていいぜ」

美紀「?…そうですか?」

不思議そうな表情をしながらも、美紀は彼と胡桃を残して悠里達のあとを追う。彼女が車から降り、そのドアがボタンと音を発して閉まると、彼は自分の手を引く胡桃の顔を無言で見つめる。わざわざこんな事をしたからには、何か伝えたい事があるのではと思ったからだ。

胡桃「…あのさ」

彼の手を離し、胡桃が静かに口を開く。

もしや、体の具合が悪化してしまったのか…そんな考えが頭をよぎり、少し不安そうな顔をする彼だったが、胡桃が告げたのは意外にも彼自身に関する事だった。

胡桃「昨日の夜…誰と話してた?」

「…えっ?」

恐る恐る尋ねると、彼はどこか間の抜けた声を出す。

胡桃がじつところらを見つめる中、彼は右手で頭をかきながら答えた。

「昨日の夜…?いや、誰とも話してないけど?」

胡桃「話してたよ。確かに相手はいないみたいだったけど、それでも誰かと話してるみたいにさ」

「マジか…もしかして、寝ぼけてたのかな?」

照れたように笑い、胡桃から顔を逸らす。

本当に寝ぼけていたならそれで良いのだが、昨日のあれはどう見ても寝ぼけていたようには見えなかった。彼が何かを隠しているような気がして、胡桃は心配そうな表情をする。

胡桃「だっいたらいいけどさ…何かあつたら言えよ?こんなんでも

一応、お前のこと心配してんだから…」

「…ありがと。平気だよ」

ゆっくりと歩き出し、そのすれ違い際に彼女の肩を叩く。

そうしてから二人も外に出て、悠里達とともに顔を洗ってから朝食を済ませた。その間、美紀と胡桃は密かに彼の事を観察していたが、特別変わった様子はなかった。

百五話 『まだ諦めない』

悠里「さて…今日はどこに行ってみる？」

朝食を終えた後、悠里がテーブルに地図を広げ、そばにいる全員顔を見回す…。彼女達の目指すのは胡桃を治すための手がかり…。分かつてはいたが、やはりそう簡単に見つかるものではなかった…。

美紀「この数日でいくつかの施設はまわりましたが、結局手がかりはなし…。さて、どこを目指せばいいのか…。」

胡桃「……………」

由紀「ど、どつか…どつかあるでしょ!?ほらっ、おつきな病院とかは!?!」

微かに曇った胡桃の表情を見てしまい、由紀が慌てて告げる。だが、普通の病院などに行っても無駄な事はその場にいた全員が理解していた。

美紀「いくら大きくても普通の病院じゃ意味がないでしょう?病院で治せるなら、ここまでの被害は出ていないでしょうから…」

少しだけ冷たい口調で美紀が答える。

役に立ちたい一心で言葉を放った由紀だったが、それが原因で彼女を苛立たせてしまったと思い、そつと顔を俯けた。

由紀「……………そ、そだね……………ごめん」

小さな声で由紀が呟く。つい厳しい言い方をしてしまった…。美紀は言い過ぎたと焦り、目を泳がせながら彼女に謝る。

美紀「…いえ、私も少しキツク言ってしまいました。ごめんなさい…」

由紀「ううん…平気だよ…。それよりも胡桃ちゃん、体調はどう?」
由紀は隣に座る胡桃の肩にそっと手をあて、心配そうな顔をする。
胡桃はテーブルに広げられた地図をじっと見つめたのち、それに答えた。

胡桃「……………んっ?あ、ああ…問題ないぜ?」

「…本当に?無理はしてない?」
そばに立つ彼が尋ねる。

胡桃は由紀から彼に視線を移し、ニツコリと微笑んだ。

胡桃「してない。大丈夫だよ」

「…そう」

彼は胡桃・由紀・悠里が座っているのとは別の席へと座り、窓の外を眺める…。胡桃を治すためにはどうすれば良いのか…そんな事を思っていると、また彼の耳にあの音が響く。

『さて…今日はどうする?もう時間はないぞ?』

(……………またか…)

自分にしか聞こえないその耳障りな声を遮ろうと両耳に手をあてる…。だが、それでもその声は決して遮れなかった。

『あの女…体調を聞かれて答えるまでに微かな間があつたな…。本当に大丈夫なのか?強がっているようにも見えたが?』

耳を塞いでいても、普通に横から話しかけられているかのように声が響く…。声に言われた事は彼も感じていた…。胡桃はどこかぼーっとする事がたまにあり、見ていると心配になる…。

『心配なら本人にしつこく聞けばいい…。何故そうしないんだ？』

「……………」

『…まあ、何故かは分かっているんだけどな。…怖いからだろ？あの女が目に見えて弱っていくのが怖い。それを認めるのが怖い。』

「……………」

『あの女を助ける計画なんざないのに外に連れ出したのだから、ただの自己満足の為だ。助けてやるって気配だけ見せて、恩を感じさせる。どうせ死なれるなら、恩をきせるだけきせて死んでもらった方がお互いに幸せだからな』

「っ…!!」

そんな事は思っていない…。思っていないのに、声はまるで彼の考えを代弁するかのようにしてベラベラと言葉を放つ。彼はそれに耐えきれず、右手でテーブルを叩いた。

バンツ!!!

大きな音が車内に響き、彼の耳に響いていたあの声が止まる…。

だが止まったのはあの声だけでなく、由紀達の話し声もだった。彼がそつと辺りを見回すと由紀・悠里・美紀…そして胡桃がこちらを見ている…。

悠里「…どう…したの？」

悠里が心配な表情をしてを尋ねた。焦った彼は愛想笑いを浮かべながらそれに答え、この場を乗り切ろうとする。

「いやっ…なんでも…」

由紀「び、ビックリしたあ…」

「ごめん…手が滑っちゃって」

誤魔化すようにして彼が笑うと、由紀と悠里はそれに納得したのか笑顔を返す。美紀・胡桃はまだ彼の事を心配そうに眺めていたのだが、彼はそれに気が付かなかった…。

胡桃「…とりあえずさ、今日は適当に辺りを見て回って食料でも探さない？あたしはまだ平気だから、な？」

広げていた地図をたたみ、胡桃が告げる。

悠里はたたまれたその地図を胡桃から受け取り、首を横に振った。

悠里「だめよ。食料にはまだ余裕があるし、わざわざ探す必要ないわ。それより、今は胡桃の事の方が——」

胡桃「大丈夫だって！それにほら、あてなく適当にやったら案外何か見つかるかも知れないだろ？」

悠里「そんなことあるわけ……」

胡桃「とにかく、あたしの事はついで程度で良いよ。どこに行けばいいのかも分かってないんだしさ」

悠里「……」

本人がそこまで言うのなら…そう思った悠里だが、確認の為彼に視線を向ける。彼もそれに賛成するならば、今日のところは胡桃の言った通りにしようと思った。

「……」

悠里の視線に気づき、彼が固まる。胡桃はそんな彼のことを見つめるとニツコリと笑い、小さな声で言った。

胡桃「まだ大丈夫だから……なっ？」

「……わかった。それでいい」

胡桃「よしっ！決定っ!!あたし、何か甘いもん食べたいなあ…。どっかに落ちてねえかなあ？」

胡桃は八重歯を見せて笑いながら立ち上がり、助手席へと座る。直後に悠里が運転席に座り、車を発進させた。

走り出した事によって車内が小さく揺れる中、彼は後ろの席から胡桃の顔を覗き込む…。彼女はニコニコと笑いながら悠里と話していたが、その笑顔が強がっているように見えて仕方なかった…。

くくくくく

少し時間が経ち、彼女達は道中みかけた一つのスーパーへと立ち寄った。そこまで大きな建物ではなかったが、まだ食料が残っているかも知れない。そんな期待を込めて車を駐車場に止め、一行は外に降りる。

…ボタン！

胡桃「さて、何かあると良いけどな」

悠里「あくまで少し寄っただけだから、手早く終わらせるわよ」

一行はそのスーパーの中へと足を踏み入れ、辺りを見回す。やはり中は漁り尽くされた後のようだったが、奥まで行ってみたらまた違うかも知れない。

由紀「何もないのかな？」

美紀「由紀先輩、足元とか気を付けて下さいよ？」

由紀「大丈夫だよ。まったく、みーくんは心配性だなあ」

ニヤニヤしながら美紀を見つめる由紀…。

五人は慎重に、少しずつ奥へと進むが、目ぼしい物は無い。

そうして内部の奥に近づくと、進行方向の先に何かの気配があった…。

「みんな、止まって…」

彼が小さく呟き、全員が立ち止まる…。

彼女達の目線の先には二つの人影がゆらゆらとしており、こちらを見て呻き声をあげていた。

『ア……グア……ア……』

二つの影が声をあげながらのんびりとこちらに歩み寄る。すると胡桃が一步前に足を進め、シヤベルを構えた。

胡桃「あたしがやるから、みんなはそこに——」

その瞬間、胡桃の横にいた彼が勢い良く駆け出す…。

”かれら”に向けて駆け出した彼はナイフを構えるとその内の一体の頭にそれを突き刺し、素早く引き抜いてから掴まれるよりも先にもう一体の頭にもそれを突き刺した。

ドサツ！

頭を刺された二体が倒れ、彼がナイフをしまう。

彼が”かれら”を処理するのは何度も見えてきたので、そう簡単に失敗しないと分かっている…。なので悠里達は今の行動を特に気にとめてはいなかったが、胡桃だけは違った。彼女は彼の元にズカズカと歩み寄り、その肩を手で寄せて耳元で囁く。

胡桃「あたしは奴らに狙われない。だからあたしがやるべきだった。なのに…何でわざわざ飛び出していった？」

少し怒ったようにして言う胡桃…。彼女は自分が”かれら”に狙われない事を事前に教えていたのに、彼は何故か前に出た。胡桃と違って”かれら”に狙われてしまうのの前に出た理由が分からず、胡桃は彼を睨む。

胡桃「お前まで怪我したら大変だろ？今度からは全部あたしがやる

から、お前は休んでろって」

「いくら狙われないって分かってても、胡桃ちゃんを奴等に近付けたくない…。万が一ってこともあるでしょ？」

そう言っただけは奥へと進む。

今一つ納得のいかない胡桃だったが、ほんの少し…彼の気遣いが嬉しいとも感じていた。

胡桃「……………バカ」

悠里「ああいう人なのよ。分かってたでしょ？」

胡桃「まあ、そうだな……………」

悠里がニヤリと笑ってから胡桃の背を撫でる。

胡桃はため息をついてから前を向き、ゆっくりと歩き出した。

美紀「見たところ…何もありませんね」

由紀「そうだね……………おっ!？」

何かを見つけたのか、由紀がそばにあった棚の奥へと手を入れる。そうして手に取ったものを見た彼女は嬉しそうに微笑み、胡桃の肩を叩いた。

由紀「胡桃ちゃんっ！みてみて！お菓子を見つけたよ！」

笑顔を浮かべる由紀の手には10cm程の長さのチョコレートバーとみられる菓子が握られていた。それを見た胡桃は少し驚いたような表情を見せたのち、由紀に許可を得てそれを貸してもらった。

胡桃「…まだ食べれそうだな。やったじゃん♪」

菓子の袋の裏面を見て賞味期限を確認し、胡桃は由紀にそれを返す。由紀は持ってきていたカバンにそれを詰めてから胡桃に告げた。

由紀「あとで一緒に食べようね♡」

胡桃「マジ？サンキューっ♪」

胡桃がニッコリと笑ってから由紀の頭を撫でる。

相変わらず、この二人は仲が良い…。

悠里「何もないよりはマシだけど、ちよつと寂しい結果になりそうね…」

一通り見て回ったものの、手に入れたのは一つの菓子だけ…。

食料に困っている訳ではないのだが、せつかくの探索の結果がこんなだと少しばかり落ち込んでしまう。こればかりは何度経験しても慣れず、悠里がため息をつくとき、美紀が笑い合う由紀と胡桃を見つめながら言った。

美紀「良いんじゃないですか？胡桃先輩も由紀先輩も楽しそうですし」

悠里「……………そうね。よし、じゃあ戻りましょうか」

二人の笑顔を見た悠里は気持ちを切り替え、皆をつれて外へと戻る…。その途中、彼が床の隅に落ちていた手帳を見つけ、それを手に取った。

胡桃「なにそれ？」

彼がそれを拾ったことにただ一人気づいた胡桃がそばにより、彼に尋ねる。彼は悠里達から離れすぎないように歩きながら、横にいる胡桃にも見えるようにしてそれを開いた。

〈幸せ・希望…そんなものはどこにもない…。今、この世界にあるのは苦痛と絶望だけ…。どうあがいても意味などない。私達は徐々に追いつめられ、苦しめられる。誰かがこれを見ているなら、悪いことは

言わない…もう諦めてしまえ。君がいくらあがこうが、世界に弄ばれて終わるのだから」

ある種の遺書なのかどうかは分からないが、その手帳にはこう書かれていた…。それを見た彼は眉をしかめ、そつとため息をつく…。

胡桃「嫌なこと書く人だな…。こっちは毎日必死に頑張ってるつてのに…」

胡桃が呟く。彼は横にあった棚の上にその手帳を置くと、悠里達に遅れないよう歩きながら胡桃の顔を見つめた。

「支えてくれる人がそばにいないとああなるのかもね…。もし皆と会えなかったら、僕が今の人みたいになってたのかも知れない」

胡桃「質問なんだけど…今のお前は一人でいた時より幸せか？」
「もちろん。あの時よりもずっとずっと幸せだよ」

胡桃「ふむ、ならよかったな！こっちも出会ってやった甲斐があったよ♪」

満足そうに微笑み、胡桃はトコトコと歩いていく…。

彼はそんな彼女のあとについてゆき、皆で外へと出た。

まだまだ、諦める訳にはいかない……。

百六話 『頼れる後輩』

由紀達が未奈の屋敷を出て三日経った……。安全だったあの屋敷を出て再び危険な外へと繰り出した理由はただ一つ：胡桃を悩ませている感染症状の悪化を止める、その手がかりを掴むため。しかしそれは簡単に見つかる訳もなく、彼女達を焦らせていった……。

特に：外に出ると最初に言い出した彼の焦りは一際強いものだった。時間が経つ毎に焦りが増す事によって彼の精神力は弱っていつてしまい、そこにつけ入るようにして”それ”は現れた……。

~~~~~

悠里「今日のところは……この辺で休む事にしましょうか」

町外れの広い公園の真ん中に車を停め、悠里が全員に告げる。運転席から後ろへと振り向いた彼女の表情がどこか暗いのは、今日もまた何一つ手がかりを見つけれずに終わってしまったからなのだろう。

美紀「……そうですね」

出来ればもう少しだけ辺りを調べたいが、既に日が暮れてしまった。夜は視界が悪くなり危険性が増すため、いくら体力が余っていても外には出られない……。これもまた彼女らをもどかしくする要因であり、彼がため息をつきながら席を立った。



由紀「どこいくの？」

立ち上がった彼はドアの方へ向かい、そこに手をかける。その行動を見た由紀に声をかけられると、彼はドアを開けて外へと降りながら答えた。

「みんな着替えるでしょ？外で待ってるから、終わったら呼んで下さい」

悠里「外は危ないからトイレの中で――」

バタンツ!!

夕方辺りなら外でも構わないが、辺りは既に真っ暗……。さすがにそんな場所で待たせるのは危険だと思った悠里が先日と同じく着替えが済むまでトイレの中にいてと提案するが、彼はそれを聞かずに外へと出てドアを閉めてしまった。

悠里「まったく、人の話も聞かないで……」

呆れたように頭をうなだれて悠里が呟く……。彼女はスタスタと歩き出して外の彼を呼びに行こうとしたが、それよりも速く由紀がドアに手をかける。

由紀「わたしが外で一緒に待ってるよ。二人なら心配ないでしょ？」

悠里「でも、外は危ないから……」

由紀「ライトも持ったし、へーきだよ♪みんな速く着替えてね〜!」

バタンツ!

由紀もまた悠里の話を最後まで聞かず、ライトを片手に外へと降りていってしまう。

胡桃「ま…、二人一緒なら大丈夫だろ。ほんの少しの間だし」

悠里「でも…」

胡桃「いいから、とつとつ着替えちゃおうぜ。着替えが終われば中に戻せるんだから…」

悠里「…：…：そうね」

美紀「そんな心配しなくても大丈夫ですよ。見たところ、辺りに”かれら”はいませんでしたから」

ため息をつく悠里を安心させようと美紀が声をかける。

そうして三人が着替えを始めたちようどその時、由紀は外で待っていた彼と合流していた。

くくくく

由紀「ううくつ…寒いね」

車を停めた場所の近くにあったベンチに彼と共に座っていた由紀がその小さな身体をガタガタと震わせる…。日中はどうでもなかったが、夜は少々冷えるようだ。

「無理して一緒にいなくてもいいよ？」

由紀「だめだよ。一人で外にいるのは危ないんだから！」

「でも、由紀ちゃんは着替えなくていいの？もしかして、由紀ちゃんは僕の目の前で着替えてくれるつもりじゃ…」

真つ暗な外を照らすのはそばにある車の中から漏れる光と、由紀の持つライトのみで少し心もとない…。その暗さで気分が落ち込まぬよう、彼は冗談を言つて由紀を見つめた。

由紀「ええっ!?!はずかしいからやだよっ!!」  
「…でしようね」

冗談が通じなかったのか、それとも通じた上でなのか…由紀が首を横に振って答える。よく見ればその顔がほんの少し赤く染まっていたので、彼の冗談は通じていなかったらしい…。

由紀「…でも安心した。なんだか今日、元気ないように見えたから…」

「元気ないようにつて…：…僕が？」

由紀「うん…。あれ？わたしの気のせいだった？」

ベンチに座る由紀が手に持っているライトをピコピコ動かしながら彼の顔を覗きこむ。実際、由紀の感じていたそれは気のせいではない…。今日の彼は胡桃の事…：…してもう一つ、ある事に頭を悩ませている真っ最中だったからだ。

「確かに少し疲れてはいたけど…：…もう大丈夫」

悩んでいる事を正直に打ち明ける訳にもいかず、彼は笑顔でごまかす。しかしその直後、由紀は普段とは違う真剣な目を彼に向けた。

由紀「…：…ほんとに？」

瞬きすらせず、真っ直ぐに彼を見つめるその目は彼の事を疑っているかのようだった…。いつもの子供っぽい由紀のとはどこか違う…大人びたようにも見える表情…。彼は咄嗟に目を逸らし、その目から逃れた。

(ああ、この人はたまに鋭いんだよな…：…)

普段は子供っぽく、おどけたような表情をよくしている彼女だが…

時にこうした表情を見せる事もあった。苦しい気持ちをいくら隠していようと、彼女はそれを意外と見抜いたりする…。

「…本当に大丈夫。だから、あまり心配しないで下さい」

由紀「…なにかあつたら言つてね？困った時はみんなで支え合わないと」

由紀が彼の肩をポンと叩く…。

彼はそれに笑顔で答えると、一つ質問をした。

「あの…由紀ちゃんにとって、めぐねえってどんな人ですか？」

由紀「んっ？めぐねえ？…えへへ、大切な人だよ♪みんなの先生だけどそれだけじゃなくて…頼れるおねーさんっていうか…おかーさんっていうか…言葉にするのは難しいけど、とにかくすごい大事なひとっ！」

地面から浮いた足をパタパタと揺らし、笑顔で語る由紀…。その顔を見ているだけでも、その人物が彼女にとってどれだけ重要な人間なのか伝わってきた。

「……そうですか」

由紀「でも、どうして急にそんなこと聞くの？」

「いや…別に」

由紀「あつ！わかった！ヤキモチでしょ♪大丈夫だよ、——く  
んもわたしにとっての大切な人だから♡」

由紀がニヤニヤと微笑みながら彼の肩を小突く…。別にヤキモチなど妬いていなかったのだが、自分も大切な人だと言ってくれたことは彼にとって嬉しい事だった。

その数分後、着替えを終えた悠里たちが車から顔を出し、まだ着替えていない由紀を車内へと呼ぶ。彼は由紀の着替えが終わるまで引き続き待機していたが、今度は美紀と胡桃が一緒に外で待っていてくれた…。

そして由紀の着替えもすぐに終わり、彼も車内へと戻る…。その後みんなで少し遅めの夕食をとると、明日に備えるべくそのまま眠る事にした。

悠里「じゃあ、明かり消すわね？」

胡桃「はいよー」

車内の明かりが悠里の手によって消され、辺りが真っ暗になる…。就寝前の挨拶を終えた彼女達はベッドに…彼は相変わらず席に座って…それぞれがそつと瞳を閉じた。

くくくく

「……………」

一時間ほど経った時…未だ眠りについていなかった彼は一人席を立つ。彼は真っ暗な車内をゆっくりと歩いて彼女達のそばへと歩み寄り、そつと耳を澄ませた…。そうしてそれぞれの寝息が聞こえているのを確認すると、彼は出来るだけ音をたてないように気をつけながらドアを開け、そのまま外へと降りていく…。

…ボタンッ

いくら気をつけていても、閉まる際には多少の音が鳴ってしまう。彼はその音にヒヤヒヤしながら、先程由紀と共に座っていたベンチへと歩いてそこに腰をおろした。

「…はあ」

座ってから大きいため息をつく。こんな深夜にも関わらず、一人で外に出たのには理由があった…。こうして外に出なければ、それをまた誰かに聞かれてしまうかとも思ったからだ。

胡桃『昨日の夜…誰と話してた?』

今朝、胡桃に言われた言葉を思い出す…。誰と話していたのか…。そんなこと、いくら彼女にでも言えるわけではない…。言えば余計な心配をかけてしまうだろうから…。そんな事を考える彼の耳へ、またあの声が囁く…。

『まあ、いいんじゃないか?あの女もお前に傷の事を隠していたんだ。あれに比べたらお前の隠し事なんて可愛いものだろう…。』  
「……………」

『さて…あの女はあと何日もつかかな?来週か?それとも三日後くらい…いや、明日にはもうダメかも知れないぞ?まったく可哀想にな…お前が下手に希望を与えたせいで、いつもニコニコしてるじゃないか…。どうせ助かりっこないってのに…。』

「今日は…やけに喋るな…。」

”それ”の姿も見えているが、あえて目は合わさない…。

彼は彼女達の眠る車を真っ直ぐに見つめながら”それ”に返事を返した。

『そりや喋るとも。ここまでハッキリと認識してもらえるようになったんだ、君との会話を楽しまずしてどうする?』

「お前みたいなのと会話してもこっちには楽しくない…。目障りだから姿を見せるな…。耳障りだから声を出すな」

彼が冷たくあしらうと”それ”はニヤリと微笑む…。

あっさり消えてくれれば楽なのだが…そう簡単にはいかない。中々消えないそれに彼が頭を悩ませていると、車のドアがゆつくりと開いた…。

…バタン

先程の彼同様、その人物も慎重にドアを閉める。

その人物…直樹美紀は外の寒さに耐えられるよう肩に毛布をかけており、ベンチに一人で座る彼をじつと見つめた。

美紀「…なにしてるんですか?」

「えっ…と…」

彼のそばに歩み寄り、目を見ながら尋ねる。

その目が少し怒っているようにも見えたのでどう答えるべきか悩んでいると、またあの声が彼に囁いた。

『ほら、お得意の嘘でごまかせ』

「…うるさい」

顔を俯け、その声に言葉を返す。

かなり小さな声で呟いたのだが美紀はそれを聞き逃さなかつたらしく、彼の隣に腰をおろしてため息をついた。

美紀「うるさいって…私ですか?」

「いや、ちがつ…!」

咄嗟に出てしまった言葉は美紀に向けられたものではなく、彼を悩ませる声の主に向けたものだ。ただそれを正直に伝えられずに口ごもると、美紀は鋭い目を彼へと向けた。

美紀「なら、誰に言ったんです？」

「誰って…その…」

『あははっ、だいぶ追い詰められてるな？ほらほら…どうやって切り抜ける？この女を上手くやり過ごすのは難しそうだぞ？』

声が真横から彼を煽る…。その一言一言が鬱陶しく、彼は眉をピクピクと動かしながら心を苛立てていった。

(次から次へと…本当に耳障りだ…)

美紀「……………」

「…大丈夫。美紀さんが心配するほどの事じゃありません」

自分の事をじっと見つめる美紀に対し、逃れるように顔をそむけて言葉を返す…。しかし、美紀はそれだけでは納得しない…。

美紀「心配するかどうかは私が決めることです…。一人で勝手に決めて、自己解決しないで下さい」

「…でも、本当に大した事じゃ——」

美紀「昨日も誰かと話してましたよね？私、見てたんですよ」

「…ッ」

胡桃だけでなく、彼女にも見られていた…。

今朝、胡桃に同じことを尋ねられた時はどうにかごまかせたが…この美紀という少女をごまかすのは難しい…。



「…本当に大した事じゃないんです。だから、気にしないで下さい」  
美紀「……………」

出来るだけ自然に笑っていいようと思った彼だったが、横にいる声の主がニヤニヤしているのが視界に入って気が散る…。気が散ったせいで不自然な表情になってしまったのか、そもそも笑顔だけじゃごまかせない相手だったのか…美紀は尚も彼が何か隠していると疑っていた。

美紀「私のこと…信じられませんか…？」

「えっ…？」

隣に座る美紀がボソツと呟く…。その声があまりに悲しげだったので美紀の方を覗きこむと、彼女は力なく顔を俯けていた。

美紀「水浴びの時、私の事を『世界一頼りになる後輩だ』って言うてくれたのに…あれは嘘だったんですか…？」

「……………」

美紀「無理して皆に話せとは言いません…。でも、それでも…私にくらい相談してくれませんか？あなたに頼りになるって言われた時、本当はすごく嬉しかったんです…。だから、私はしっかりとそれに応えられる後輩になりたいって…そう思ってた…」

普段はそこまで口数の多くない彼女がいつになく喋る…。

それほど彼の事が心配であり、そして自らが彼にとって頼れる後輩でありたいと思っていたからだ。

美紀「聞いたところで、私にはどうにも出来ない事かも知れませんが…。でも…最初から全く頼りにされないのは…少し寂しいです」

「美紀さん……………」

（黙っているのがみんなの為だと思ってた…。自分一人の問題なんだ

から、一人で耐えてればいいとばかり…。でも、違ってたのか……。自分だけが耐えれば問題ない…。そうすれば彼女達は余計な心配をせずにいられると彼は思っていたが、それは間違いだつたようだ…。少なくとも、美紀は彼の力になりたいと願っている。そんな彼女に対して隠し事をするのは、あまりに失礼な気がした…。

「……わかりました。冗談言ってると思うかもですけど、僕の身に本当に起こってることですからね？」

美紀「…はい。話してください」

ベンチに座ったまま美紀と顔を向かい合わせ、その目を真つ直ぐに見つめる。他の皆はともかく、彼女くらいには相談しておこうと彼は考えた。

『おおっ？話す気か？』

(ああ、話すとも…。お前は黙ってそこにいろ…)

口には出さず、心の中で声に返事を返す。そうしてから彼は足元に落ちていた小石を手にとると、それを正面の方へそつと投げた…。

コロんコロんツ…

何も無い空間に投げられた石は緩やかな弧を描いて地面に落ち、コロコロと転がる…。それを不思議そうに眺めていた美紀に対し、彼は尋ねた。

「今、石は何にも当たりませんでしたよね…？」

美紀「えっ？ええ…何にも…」

「でも僕は今、目の前にいる奴に対して石を投げたんです…」

美紀「目の前に…って……」

石が転がった方を改めて見つめるが、そこには誰もいない…。そもそも石はほんの2〜3メートル先に転がっているのだ。いく

ら深夜だろうと、そんな至近距離にいる人物に気づけないほど暗くはない。だが、彼には確かに誰かが見えている…。となれば、美紀の答えは一つだった…。

美紀「まさか…あなたも由紀先輩みたいに…。」

「ええ、つい昨日から…あいつの事が見えています」

何も無い空間を鋭い目で睨み、美紀に告げる。彼の目にだけ映る人物…それが誰なのかまでは、美紀にも見当がつかなかった。

美紀「あいつって…誰ですか？」

「…先日争った、境野さかのって男です」

彼が目の前にハッキリと見える人物の名を告げると、美紀は目を丸くしながら彼の見ている方へともう一度視線を向ける。だが、やはりそこには誰もいなかった…。

美紀「境野って…相手のリーダーだった人ですよね!？」

「ええ、僕達が争った敵のリーダーです…」

境野『おおつ、本当に言うとはな…。ずっと隠し通すものかと思っていたから意外だったよ』

彼にだけ見えているその男…境野が彼を見つめながらニヤニヤと笑う。その笑顔を見ているだけで腹がたつてきてしまい、彼は顔を俯けた。境野は先日争った際、誠まことによって殺されたはずだし、彼にしか見えていないのだから間違いなく幻だ。だがその声と姿は幻とは思えないほどハッキリしたもので、一つ一つの言動が彼を悩ませた。

「本当にうるさい…。どうして見えてしまうんだろう…。」

美紀「その境野って人、もう生きてはいないんですよね？」

「マコトさんが殺しました…。確実に死んでいます」

境野『本人を前にしてハッキリ言ってくれるな…。面と向かって『お前は死人だ』と言われるのは中々ツライんだぞ?』

頬を緩め、辛さなど微塵も感じない表情を向ける境野の幻。

その表情…声…どれももう二度と見たり聞いたりしたくないものだったのに、この幻は昨日から彼のそばをくっついていた…。

「話を聞いた限りだと、由紀ちゃんはめぐねえって人の死を受け入れる事が出来なかった…。それほどに大切な人だったんだろう……。でも、僕にとつて境野は大切な人なんかじゃないし…その死をハッキリと認識している。なのに、どうして……」

境野『自覚してないだけで、意外と大切な存在だったんじゃないか?』

「そんなわけないだろ……!」

誰もいないのに、彼は確かに誰かと会話をしていた。

彼には本当に境野という男が見えていて、そしてその言動に心を擦り潰されてしまったっている…。美紀は自分などが彼を支えられるのか不安になったが、今さら後には退けなかった。

美紀「…目を…閉じて下さい…」

「…目?」

美紀「そう、目です…」

見えない人物と会話を交わす彼の肩をそっと叩き、美紀がそう告げる。確信などないのだが、上手くいけば彼を救う事が出来るかも知れない…。彼がそっと目を閉じると、美紀は穏やかな声で言った。

美紀「私が思うに、そんな幻が見えるのはあなたの心がまいってきちゃっているからだと思います…。その境界って人たちと争った先日の事もありますし…今は胡桃先輩の事もある…。色んな事で頭を悩ませ過ぎたせいで、少し心がおかしくなっちゃったのかも知れませんが…」

「そう…なのかな…」

美紀「たぶん、ですけどね…。でも大丈夫ですよ」

その言葉を聞いた直後、目を閉じている彼の頭に何かが触れる。それは美紀の手であり、彼女は彼の頭をそつと撫でていた…。

「っ……………」

美紀「もう境界って人達との問題は片付きました…。悩むことはありません。胡桃先輩の事だって、きつとどうにかかります…。あなただけじゃない…私達みんながいるんですからきつと…いや、絶対に大丈夫です」

「でも…まだ手がかりも見つけられてない……………」

美紀「慌てなくても大丈夫ですよ。胡桃先輩は強いんですから、そんな簡単になくなってはしません…。あなただって、先輩の強さは知ってますよね？」

「……………ああ」

美紀「手がかりが見つからなくて焦る気持ちはとてもよく分かります…。私も同じでしたから。でも、みんなが焦ってばかりいると胡桃先輩が辛そうな顔をするんです…。『自分のせいでみんなが悩んでる』って、そう思うんでしょうね…」

「……………」

美紀「先輩を助ける為に外へ出たのに、あんな顔をさせてしまっていたら意味がありません…。だから、私達は出来るだけ笑っていま

しよう？うわべだけでなく、心から…」

(心からなんて…笑っていられるわけが…)

境野の幻や胡桃のこれからを思うと、上辺うわべだけの笑顔すら保つのが辛かった…。心からなんて笑えるわけない…。彼が目を閉じたままそんな事を思ったその時、美紀が呟く。まるで、彼の心を読んだかのようにだった…。

美紀「つらかったら私が支えます…。なんていったって、私はあなた  
が世界で一番頼りにしている後輩ですから♪」

「…ッ…」

頭を撫でるのをそこで止め、美紀は彼の頬を軽く叩く…。

美紀「さて…目を開けてください」

そう言われて彼はそつと目を開く。そうして彼の視界に映ったのは、にっこりと微笑む美紀の笑顔だった。

美紀「今…この場には誰がいますか？」

「え…つと…」

彼は辺りを静かに見回す…。いつの間にか境野の幻は消えており、前後左右を見回しても辺りには誰もいない…。いや、正確には一人だけいる。彼の真横で優しく微笑む、一人の少女が…。

「美紀さん…ただけですね…」

美紀「そうですね。わたしと…あなただけです」

ふふつと笑いながら彼に告げると、美紀は辺りを軽く見回してから立ち上がる。何故境野の幻が消えたのかと彼が考えていると、立ち上がった美紀が彼の方へ顔を向けて言った。

美紀「たぶん、気持ちの問題です。あなたが落ち込んだり：不安を感じた時、その弱った心につけ込むようにして幻が現れるんだと思います。だから、気持ちを前向きにしていれば大丈夫。少しでも気分が滅入<sup>めい</sup>ってしまいそうになったらまた私に相談してください。元気付けてあげますから」

自分でも言っていて恥ずかしいと感じているのだろう。美紀は落ちつきなく目線をキョロキョロさせながら、微かに頬を染めている。だが、そんな恥ずかしい思いをしてまでこんな事を言ったのには理由があった。

美紀「胡桃先輩を救うにはあなたの力が必要です…。そんなあなたが力を失いそうになった時は、後輩の私があなを支えます。そうする事が胡桃先輩の…：みんなの為ですから」

照れたように微笑みながら、美紀は車に戻ろうとする…。彼はそんな美紀の横に並ぶようにして歩きながら、その肩に手をあてた。

美紀「…なんですか？」

「あの…：少しだけ、偉そうな口を聞いてもいいですか…？」

美紀「？…：…どうぞ？」

「じゃ…：…お言葉に甘えて…：…」

境界の幻が消えたのは彼女が自分を支えると言ってくれたおかげなのだろう…。あの言葉のおかげでかなり心が軽くなり、前向きな考えを持てるようになった…。彼は感謝の思いを伝えるため、彼女の目をじっと見つめる…。

「こんなダメな人間のことを支えるって言ってくれて、本当にありがとう…。これからも頼りにしてるよ……………美紀」

美紀「っ……………はいっ！」

冗談やおふぎけではなく、彼が真剣に彼女の事を呼び捨てにしたのはこれが初めてだった。美紀はそれに少しだけ照れてしまいそうになるが、それよりも自分が本当に頼られているのだと実感出来た事が嬉しかった。

美紀「私もあなたのことを頼りにしてますからね？みんなで一緒にがんばっていきましよう」

「…ああ」

恐らく、境野の幻は完全に消えた訳ではない…。だが、彼には美紀という頼れる相談相手が出来た。それだけで彼を悩ませていた状況はかなり好転した…。あとは胡桃を救う手がかりを掴むのみだが、それも美紀となら…みんなとなら可能だと思える。ようやく、本当に前に進むことができそうだ…。

「さて、戻りましょうか…。美紀さん」

美紀「あれ？美紀って呼び捨てにするのはやめたんですか？」

「少し慣れない上に照れてしまうので、またその内に……………」

美紀「…ふふっ、はいはい。わかりました」

どこか頼りない人だが、彼ならきつとどうにかしてくれる…。

美紀はそう信じて、彼のあとをゆっくりと歩いていった。



## 第九章・りょうけん 百七話『みつけた』

彼はある声に悩まされており、その正体が死んだ境野の幻だという事を美紀に打ち明けた翌朝……。美紀の言葉に力をもらつたことで幻が消えたことその他、誰かに相談出来た事で心が軽くなったのか：彼は他の全員が起きてなお一人眠り続けていた。

由紀「ほんとによく寝てるね。そろそろ起こす？」

席に座り、テーブルに顔を伏せて寝息をたてる彼……。

つい先程悠里がかかる声をかけたのだが、彼はそれでも起きる事がなく未だ眠り続けている。由紀はそんな彼の正面の席に座り、その頭を指先でツンツンと突いた。

悠里「朝食の準備もまだだし、もう少しだけ寝かせておいてあげましょう」

由紀「…そだね」

指先で小突くのをやめ、由紀はニッコリと笑う。彼がここまで深い眠りにについているのを見るのは随分と久しい気がする……。

美紀「この人にはこれからいっぱい頑張ってもらわなきゃですか  
ら、朝くらいはのんびりとさせてあげましょう……」

彼に悩みを相談され、少しでもその力になれた気がした美紀は一人誇らしげに微笑む。すると胡桃がそんな彼女を横からじっと見つめ、何故かニヤニヤとしていた。

美紀「な、なんですか…」

胡桃「…いゝや？ただ、コイツは良い後輩に恵まれたなあと思つて」

美紀「……………」

眠る彼へと視線を移す胡桃を見て、美紀は口ごもる。

胡桃の口振り、そして表情は何かを知っているかのようだ…。

もしかしたら昨夜の事を見られていたのかも…。そんな事を思つて美紀が微かに頬を染めると、由紀が突然彼女に抱きつく。

ガシツ!!

美紀「うわっ!?な、なんですかっ!?!」

由紀「胡桃ちゃんっ!心配しなくても大丈夫!みーくんは皆の後輩だよ!」

胡桃「あはは…わーつてるよ、そんなこと。つまり、あたし達も良い後輩に恵まれたつてわけだ」

由紀「そういうことっ!みーくんはほんとに最高の後輩だよ!」  
美紀「…:はいはい。由紀先輩も最高の先輩ですよ」

抱きつく由紀の頭を撫で、優しく微笑む美紀…。その光景を見ているとどちらが先輩か分からなくなりそうになり、悠里と胡桃は頬を緩めた。

胡桃「…色々ありがとな」

美紀「えっ?」

由紀の相手をしていたのでハッキリとは聞こえなかったが…胡桃が美紀にそう呟いた気がした。美紀が目線を向けても彼女はごまかすように目線を逸らしたので確信はないが…恐らく…。

美紀（やっぱり、胡桃先輩は昨日の夜のことを…）

~~~~~

「すみません…寝過ぎました…」

数十分経ち、彼が目覚める。朝食の準備が出来たので悠里が起こしたのだが、ぼんやりしているその表情はまだ寝足りなそうにも見えなかった。

悠里「朝ごはん、食べられる？」

「もちろん…。でもその前に顔だけ洗ってきます…」

寝ぼけている頭を覚ましてくるべく、彼は外へと向かう。しかし今車を停めている公園から最寄りの川までは多少の距離があるため、寝起きの彼一人では少し不安だ。

悠里「ここから川までは遠いわよ。車の水使ったら？」

「いや…目覚ましの散歩ついでに行つてきます…」

眠そうな声で彼が答える…。

それを見た美紀はため息をつき、彼の背を叩いた。

美紀「はあ…仕方ないですね。私がこの人についていきますから、先輩たちは先に食べちゃって下さい」

悠里「そう？ちゃんと気を付けてね」

美紀「もちろん。さあ、行きましょ…先輩」

「んん、美紀…ありがとう…」

彼が美紀の事を呼び捨てにした…。

それを目の当たりにした由紀・悠里・胡桃はハツとした表情をしていたが、当の本人は眠たげに目を擦っている。

悠里「あら、いつの間にそんな間柄に…」

由紀「おおうっ……！」

胡桃「寝ぼけてるから…なのか？」

美紀「っ…！ど、どうでもいいでしょう!?呼び方なんてっ!!先輩っ!
!さっさと行きますよっ!!!」

「…んん」

まだ意識がハッキリとしない彼の手をガシツと掴み、美紀は外へと飛び出す。車内に取り残された三人は不思議そうに顔を見合わせ、それからニヤニヤと微笑んだ。

悠里「ああいう美紀さん、なんだか新鮮ね」

由紀「だねっ!胡桃ちゃんもそう思うでしょ?」

胡桃「ははっ、そうだな♪」

くくくく

一方こちらでは、彼と美紀が川を目指して道路を歩いていた。

日の光を浴びながら歩いていたらだんだん目が覚めてきた彼だったが、その隣を歩く美紀は顔を俯けながら何やらブツブツと呟いてい

る…。

「えっと……美紀さん？」

美紀「……なんですか」

眉にシワを寄せていて、明らかに不機嫌そうな美紀…。

たった今意識がハッキリ始めたばかりの彼は彼女が何故こんな表情をしているのか理解できず、額に冷や汗を流した。

「何か…怒らせるようなことしましたっけ？」

美紀「いえ…大したことじゃないです…。ただ、皆が見ている前で私の事を呼び捨てにしました」

「ああ、それは無意識ですね……。嫌でしたか？」

美紀「…あなたの方が先輩ですし、本来なら構いません。でもあなたは私の事をずっと”さん付け”で呼んでいたのです、それが急に呼び捨てに変わると変な誤解を招きそうというかなんというか……」

「いや…皆はそこまで深く考えないと思いますよ？」

美紀「……それもそうですね。私が一人で気にし過ぎただけかも…」

そんな会話を交わしながら歩いていくと、ようやく川が見え始める。着く頃にはとづくに彼の目も粗方覚めていたが、せつかなので顔を洗っていく事にした。

バシヤツ…！

「……ふう」

川辺に寄った彼は両手でその水を掬い、それを自らの顔にかける。冷たい川の水は気分をスッキリとさせたが、彼は何やら困った表情を隣に立つ美紀へと向けていた…。

「……………」

美紀「なんです…その顔は」

彼は顎先から水をポタポタ垂らし、濡れた手をその場で振っている。美紀は彼が伝えたい事を察し、ため息をつきながら持っていたハンカチを差し出した。

美紀「自分で出ていったのに、拭く物の一つも持ってこなかったんですか…。しっかりとしてくださいよ…」

「すいませんね、ほんと……………」

美紀からそのハンカチを受け取り、濡れた顔と手を拭く…。拭き終えた後でそれをそっと返すと、美紀はそれを手に取って微かに微笑んだ。

美紀「まったく、先輩は本当にダメな人ですね」

「んなつ!? ハツキリ言われるときすがに傷付くっていうか…。まあ、自覚はありますけど…」

美紀「ふふつ、冗談ですよ。さあ、みんな待ってますから…はやく帰——」

??? 「……………仲いいね」

二人が笑い合っていると、誰かがその背後から声をかける。気配なく寄ってきたその人物に驚いた二人は咄嗟に振り向き、警戒心を露にした。

「!?!」

美紀「っ! 誰ですか!?!」

??? 「……………」

振り向いた先にいたのは一人の少女……。少女は二人を見たま無表情で固まっていたが、彼はその黒髪中髪の少女に見覚えがあった……。

「あなたは……たしか……」

??? 「ボクの事……覚えててくれたの？じゃあ、自己紹介はもう少しだけおあずけ。頑張っと思って思い出してみよう……」

少女は無表情のまま小さく手拍子を鳴らし、彼が自らの事を思い出そう催促しだす。薄茶色のコート……そして紺色の短パンに身を包んだその少女が真顔で手拍子する様を美紀は横から不思議そうに見つめていた……。

「……思い出した。狭山真冬……でしたよね？」

彼が静かに答える……。

すると少女は微かに微笑み、パチパチと拍手を鳴らした。

狭山「……正解。よくできました」

美紀「狭山真冬……たしか、以前あなたが会ったって……」

以前、悠里が病に倒れた時の事だ……。

それを治す為の薬を所持していた生存者の隠れ家へ胡桃が単身潜入してしまった時、胡桃を助けに向かった彼が帰り際に出会った少女の名こそ……この狭山真冬という少女。美紀も彼から話だけは聞いていたので、その名前は知っていた。

「まだ無事だったんですね。よかったよかった」

狭山「……そっちなね」

彼に返事を返した後、狭山は美紀の方をじっと見つめる……。その視線があまりに強いので、美紀は言葉を失ってしまっていた。

狭山「……………」ジーツ

美紀（な、なんでこんなに見てくるんだろう…？まだ、ちゃんと挨拶してないからかな…………）」

狭山「……………こんにちは」

美紀「へっ？あ、ああ……………こ、こんにちは……………」

やはり、挨拶をしていなかったのが原因なのだろうか…？

美紀は戸惑いながらも返事を返すと、直ぐ様自己紹介を始めた。

美紀「私は直樹美紀です…。えっと…真冬…さんは、何をしにここへ？」

狭山「……………それは後々話すよ。それより確認したい事があるんだけど。君たち…今は二人だけで行動してるの？」

美紀「いえ…他にもあと三人います」

狭山「へえ…三人か…。みんな元気？」

美紀「そ、それなりには……………」

美紀の言葉を聞くと狭山は「ふくん」と言いながら川辺に座り、その水に手をつけてパシャパシャと音を鳴らす…。彼女が何を考えているのか今一つ分からず、彼と美紀は何とも言えない表情をした。

「狭山さん……………今は一人ですか？」

狭山「一応仲間はいるけど…訳わけあつて一人で外に出たの」

美紀「訳わけつていうのは？」

狭山「…今は内緒。また後で教えてあげるね」

そう答えて狭山は立ち上がり、濡れた手をプルプルと振る。その後、彼女が遠くの方を見たまま何かを言いたげにしていたので彼と美紀もそちらに視線を向けると…「かれら」がのんびりとこちらに向

かつて歩いてきていた。

美紀「先輩、これ以上寄ってこられる前に戻りましょう」

「そうですね…。狭山さんはどうします?」

狭山「…もしよかったらだけど、少しだけお邪魔してもいいかな?

本当によかったら話だから…無理なら断ってね?」

彼と美紀の顔を交互に見て狭山が告げる…。

本人は「無理ならいい」と言っているが…「かれら」が寄ってきている状況でこんな少女を一人残してはいけなかった。

美紀「先輩、別に構いませんよね?」

「んん、そうですね…。じゃあ、ついてきて下さい」

狭山「…うん。ごめんね…」

少し駆け足で車へと戻る彼と美紀のあとを狭山もついていく…。車への距離は数百メートルほどあったが、その間狭山はほとんど喋らなかつた…。

美紀「えっと、あれですね。あの車です」

少しして公園にたどり着き、美紀がそこに停めてあるキャンピングカーを指さす。狭山は二人と一緒にそれに歩み寄り、小さく呟いた。

狭山「こんなのに乗ってたんだ…。知らなかつた…」

美紀「人数が人数なので少し狭いかもですが、のんびりしていつて下さいね」

ボタンとドアを開け、美紀が狭山を中へと招く…。その向こうにもう三人の少女がいるのを確認すると、狭山は怪しげに微笑んだ。

狭山「よかった…ボクが一番乗り…。やっと見つけた…」

百八話 『後輩二人』

バタンツ……!

彼と共に川へと向かっていた美紀が車内へと戻る。

悠里は戻ってきた二人に声をかけようとしたが、美紀と彼の間……そこに隠れるようにしていたもう一人の見知らぬ少女に気づく。

悠里「おかえり……つて、その娘は？」

美紀「ああ……その、二人で川に行ったら会ったんです。名前は――」

狭山「……狭山真冬。よろしく」

悠里にじっと見つめられたその瞬間、真冬は美紀の横に立って自己紹介をした。彼女を見つめているのは悠里だけではなく、由紀・胡桃もだ。

胡桃「狭山真冬って……たしか……」

美紀同様、胡桃も彼から狭山の話は聞いていた。ただこうして実際に見るのは初めてなので、やはりどこか物珍しげな目線を送ってしまう……。そんな中、狭山の前へと嬉しそうに歩み寄る少女が一人……言うまでもないが、それは由紀だった。

由紀「真冬ちゃんだね♪わたしは丈槍由紀っ！よろしくね？」

狭山「えっと……うん、よろしく……」

由紀にそつと手を差し伸べられ、少し戸惑いながらも狭山は彼女と握手を交わした。狭山の手を掴んだ由紀は笑顔のままその手をブン

ブンと振り、満足げな表情で握手を終える。

悠里「私は若狭悠里。えっと、狭山さんは…一人なの？」

狭山「ううん…。一応仲間はいるんだけど、やりたい事があるから一人で外に出てたの」

悠里「やりたいこと？一人で外に出てまで？」

狭山「…うん」

そこまで話を聞き、悠里の表情が固くなる…。見たところ狭山は自分たちと同じ年か…少し下くらいだろう。その年齢なら一人で外に出る事の危険性も分かっているだろうに、彼女はまるで警戒してないように見えた。

悠里「一人でなんて危ないわ…。外には”かれら”がいるのに…」

狭山「……………」

狭山は答えず、そつと俯く…。そんな彼女を席につきながら見ている胡桃は静かに悠里の背に手を伸ばし、そこを指先でトントンと叩いた。

悠里「ん？なに？」

胡桃「とりあえず座らせてやんなよ。そいつにも色々事情があるだろ。なっ？」

狭山「…うん」

狭山を見つめ、ニコツと微笑みながら胡桃が言う。狭山は彼女の顔を見つめ返して静かに頷き、その真正面の席に座った。

悠里「お節介に聞こえるかも知れないけど、あなたみたいな女の子が一人で外に出るのは危ないわ。あなたの『やりたいこと』というの

が何かは知らないけど、出来るだけ仲間の人と行動した方が良いんじゃない？」

狭山「そう…だね。気を付ける、ごめんなさい……」

悠里がその返事を聞いて微笑む。直後、彼女は席についた狭山の顔を今一度見つめ…プレート皿に乗った料理をその前に差し出した。

狭山「これは…?」

悠里「朝ごはんとかまだなら、食べていってちょうだい。食料にはまだ余裕があるから、遠慮しないで」

プレート皿に乗っている料理は缶詰やレトルト食品を合わせたもの…。料理といっても温めるくらいしかすることがない食材ばかりだったが、この世の中においては中々の貴重品だろう…。

狭山「会ってばかりの他人に…ここまでしていいの?」

悠里「そもそも人と会う事自体が少ない世の中なもの。会ったからには、他人であろうと助け合わなくちゃ」

由紀「そういうことっ!だから真冬ちゃん、遠慮なく食べてね♪」

悠里「あなたと美紀さんも席について食べてね」

たたずむ彼と美紀を席につかせ、二つの皿をその前に並べる悠里…。悠里達もまだ食べてはいなかったらしく、同じように料理の乗った皿があと二皿残っていた。しかし突然現れた狭山に一皿差し出してしまったからだろう…人数に対し、あと一皿足りない。

悠里「私はまた後で食べるから、由紀ちゃん、胡桃、先に食べちゃって?」

胡桃「いいのか?」

悠里「うん、すぐに用意できるから大丈夫よ」

由紀「じゃあ遠慮なく……………こつちのを…」

胡桃「おい由紀、お前ちよつと量が多いやつ選んだだろ…」

狭山（……………変わった人達）

ガヤガヤと騒がしい人達だが、不思議と居心地は悪くない…。

出された料理に手をつけながら、狭山はそんな事を思っていた。

それぞれが会話を交わしながら料理に手をつけ、少ししてから悠里も自分の分の用意を終える…。そうしてその場にいた六人全員が席につきながら食事をとっていたのだが、狭山はあることが気になっていた。それは自分の向かいに座るツインテールの少女『胡桃』についての事だ…。

胡桃「……………なに？」

ついじつと見つめ過ぎてしまい、彼女に気づかれる。

だが狭山は大して動じなかった。こうなったらこうなつたで、ごまかす為の台詞を用意していたからだ。

狭山「…キミ、自己紹介がまだ…」

胡桃「ああ、そういやそうだったな…。恵飛須沢胡桃、よろしく」

狭山「うん…よろしく」

喋りながら、じつと胡桃を見つめる…………。

以前見かけた時も感じたのだが、やはり胡桃は普通の人間とどこかが違う…。外見的にはいたって普通なのだが…何故か嫌な気配のよ
うな、黒いものを感じた。

狭山（この感じ……………この娘、やっぱり…………）

予想していた事だったが、改めて彼女を間近に見て確信する。
彼女：恵飛須沢胡桃に感じるこの気配……。それは狭山自身や、今はここにいない二人の仲間達から漂っているものに近いものだった。

狭山（そろそろ厳しいだろうに……。よく持ちこたえてるな）

十数分の時が経ち……。全員が朝食を食べ終わる。

悠里が空いた皿を片付ける中、彼女らは狭山の周りに座って気になっっている事を問う。一番グイグイ来たのは、やはり由紀だった……。

由紀「ねーねー。真冬ちゃん、普段はどこかに暮らしてるの？」

狭山「えつと……。ボクを拾ってくれた人が大きな屋敷に住んでる人で、そこに住ませてもらってる」

由紀「なっ……。!?」

狭山の言葉に由紀が反応を示し、目を見開いて驚いたような表情を見せる。そんな彼女を気にもせず、美紀と胡桃は口を開いた。

胡桃「屋敷か……。ミナの家を思い出すな。でっかい屋敷を持つてるヤツなんて今はミナくらいだと思ってたけど、いるところにはいるんだなあ……」

美紀「じゃあ、真冬さんはその人と二人で暮らしているんですか？
というか……。『拾ってくれた』っていうのはどういう意味です？」

狭山「順に答えていくと……。今は四人で暮らしてる。拾ってくれたっ

て言葉の意味は……そのまんまだよ。世の中がこんなになつてばかりの頃……怪我して死にかけていたボクをあの人拾ってくれたの……」

胡桃「死にかけてたって……何があつたんだよ……」

彼女の発言の一つ一つが気になり、質問が止まらない。一方、由紀はまだ目を見開いて口をパクパクと動かしている……。

狭山「……色々あつたんだ。この世界は腐ってるから……仕方ないことだと思ってるけど……」

胡桃「腐ってる……か。……わりい、ちよつと待ってくれ……。おい由紀、さつきから何ビツクリしてるんだよ？お前のその顔が気になつて話どころじゃねえ」

驚いたように目を見開き、口をパクパクとする由紀……。彼女は胡桃に声をかけられた途端、隣に座っていた狭山の肩をバシツと掴んだ。

由紀「ボクって言った!!真冬ちゃん……自分の事をボクって言ったよね!?!」

狭山「うぐっ!?!い、言ったけど……だからなに……?」

自分の両肩を掴む由紀の手をそつと振り払い、狭山は戸惑つたように答える。由紀は何故か狭山の『ボク』という言葉に興奮していた。

由紀「女の子なのにボクって……どういふことなの!?!あれ?そもそも、真冬ちゃんって女の子なんだよね!?!」

狭山「……見ればわかるでしょ」

言われた由紀は改めて狭山の顔や体を見回す……。

彼女の体は長めのコートで覆われていて体型はあまり分からないが、少なくとも悠里のような胸は持っていない……。顔つきは中性的といえそう見えるが、長めのまつ毛や……ぷるつとした唇……それらは女性特有の物に思えた。

由紀「やっぱり女の子だよね……。じゃあ、何で自分の事をボクって言うの!?ボクって…女の子も言うの?」

胡桃「まあ…人によっちゃボクって言う娘もいるだろ……。現に今、目の前にいるわけだし…」

由紀「うわあああ〜♪かわいく〜っ♡」

顔を真っ赤にして目を輝かせ、由紀は狭山をじっと見つめる…。その視線に耐えられない狭山は顔を俯け、深くため息をついた。

狭山（思ってたよりもヘンな娘だな…）

由紀「ねえねえっ!いつからボクって言うてるの?」

狭山「…物心ついた時から」

由紀「へえ〜…。ボクって言う女の子って良いなあ…♪——くんもそう思うでしょ!?!」

「えっ?…あ…ああ…そうですね」

朝食後、助手席で一息ついていた彼に由紀が尋ねた。ボクっ娘が良いかどうか…その辺はわりとなんでも良いと思っていた彼だったが、空気を読んで由紀に合わせる。

由紀「よしっ!胡桃ちゃん!ボクって言うってみて!!」

胡桃「はあ?なんであたしが——」

由紀「あたしじゃないでしょ!ボクだよボクっ!!ハイやり直しっ!」

由紀が両手をパンパン鳴らし、胡桃に告げる。かなり面倒だが、胡桃も彼同様に空気を読んで由紀に合わせた。

胡桃「…ボク、恵飛須沢胡桃。よろしくな」

由紀「……………」

美紀「……………」

狭山「……………」

悠里「……………」

「……………ぷっ」

僅かな静寂の後、助手席から彼の吹き出す声が聞こえる。胡桃は顔を真っ赤にしてその場に歩みより、背後から彼の頭をバシツと叩いた。

「いてっ!」

胡桃「うるさいっ!!」

一言怒鳴り、胡桃は席へと戻る。彼が叩かれた頭を自分で撫でて痛みを癒す中、席に戻った胡桃を見て由紀が呟く。

由紀「ボクっていう言葉は人を選ぶんだね。胡桃ちゃんには全然似合ってなかったよ」

胡桃「じゃあ…由紀がやってみろよ」

由紀「ん〜…多分わたしも似合わないかな…。リーさんもイメージ違うし…でも、みーくんなら…」

美紀「由紀先輩、そういった事をボクに振らないで下さい」

由紀「おおっ?」

自然な流れでその言葉を口にする美紀…。それは先程の胡桃の時とは違い何の違和感もなく、由紀が目を輝かせる。

由紀「みーくんいいねえ!!すっごく似合う!!」

美紀「……もう言いませんよ?一回きりです」

一回きりだという台詞を聞き、惜しそうな表情を見せる由紀だが：彼女だけではなく助手席の彼、そして胡桃もどこか落ち着きのない雰囲気だ。

「一回きりか…もつとよく聞いておけばよかった…」

胡桃「まあ、たしかに…美紀が自分の事をボクって言うのはあまり違和感なかったな…。ちよつとドキツとしたし…もつかい聞きたいかも…」

頬を少し赤く染め、胡桃が照れたように微笑む。美紀はそんな彼女を見つめながら、助手席に座る彼を指差して言った。

美紀「あの人はともかく、胡桃先輩まで変なこと言わないで下さいよ…」

胡桃「あはは…わりい…」

悠里「でも、本当に似合ってたわね。美紀さん、これから一人称をボクに変えたら?」

美紀「りーさんまでそんな事を…もう、怒りますよ?」

悠里「ふふっ、冗談よ。美紀さんは今のままが一番なもの」

胡桃「…ま、そうだな」

空いた食器を片付け終えた悠里が席に戻り、会話に交ざる。

その時、狭山が美紀を見ていて疑問に思っていた事を尋ねた。

狭山「美紀は…みんなの後輩なの？」

美紀「えっ？」

狭山「みんなのこと先輩って呼んでるから…そうなのかなって」

美紀「…ええ、そうです。先輩たちはみんな三年生ですが、私だけ二年生なので…一つだけ後輩です」

由紀「違うよみーくんっ！わたしたちはもう卒業したんだから、三年とか二年とかはなしっ！これから進学か就職のどっちを選ぶかっていう、立派な大人だよ！」

美紀「あはは…そうでしたね。でも、皆さんが私の先輩だって事はいつまでも変わらないです。進学しても就職しても…先輩たちは先輩のまままでいてください」

美紀の発言に対し、由紀・悠里・胡桃は笑顔で応える。

進学か就職か…彼女達が何を言っているのか今一つ理解できていない狭山だったが、確かな事が一つだけあった。

狭山「じゃあ…美紀はボクと同年だね。ボクも二年生だったから…」

美紀「へえ、そうなんですか？」

由紀「おおっ、後輩が増えた…！」

狭山が一つ下だという事実を知り、由紀はまた一人後輩が増えたとはしゃぐ。しかし狭山本人はそんな由紀を放置して、美紀との会話を続けていた。

狭山「同い年の人…：久しぶりに会ったよ」

美紀「私もです…。会う人会う人、みんな年上ばかりだったから…」

狭山「じゃ、敬語じゃなくてもいいよ。同い年なんだし、もっと普通に接してね…」

美紀「……………うん。わかったよ、真冬ちゃん」

先輩ではない同い年の女の子と会えたのが嬉しかったのか、美紀が嬉しそうに微笑む。彼女がこうして砕けた口調で話すのはかなり珍しい光景なので、思わず由紀達の頬が少しだけゆるむ…。

由紀「あ、ああいうみーくん…すつごく新鮮だね」

胡桃「ああ…なんつーか…後輩同士の会話ってほっこりするな…」

悠里「胡桃…ニヤニヤしすぎよ…。美紀さんに気づかれちゃう…」
胡桃「……………りーさんもニヤニヤしてんじゃん」

目の前で語り合う二人の後輩を見て、三人の少女はニヤニヤと微笑む。二人に気づかれぬように声こそ抑えていたが、ジロジロとした視線…そしてその表情は二人の後輩にとくに気づかれていた。

美紀「…こんなだけど、みんな良い人達だから。ゆつくりしていつてね、真冬ちゃん」

狭山「真冬って、呼び捨てにしてもいいよ」

美紀「それは…ごめん、ちよつと照れちゃって…」

狭山「…美紀は変なコだね」

美紀「そうかな…。言ったら悪いけど、真冬ちゃんも変わってるよ」
狭山「……………うん、自覚してる」

狭山はあまり表情を見えない少女だが、美紀と話している時はどこか楽しげにも見える。このまま後輩がもう一人増えるのも良いかも知れない…。そう思う者もいたが、この狭山という少女と出会ったことにより、事態は思わぬ方向に向かっていった…。

百九話 『夢みる時間はもう終わり』

悠里「さて、今日の予定を考えないとね…」

朝食を終え、空いた食器の片付けも終えた。これからはまた先日同様、胡桃を治す為の手がかりを目当てに探索するのだが…。

悠里（彼女はどうかしら…）

外に出た美紀と彼が出会った少女…『狭山真冬』を眺めながら悠里は頭を悩ませる。彼女は何らかの目的を持って行動していた最中、少しここに立ち寄っただけのようだが…今は席で由紀や美紀らと会話をしていた。

悠里（胡桃の為に急ぎたいけど…今すぐ降りてって言うのは酷いわよね…。かといって、仲間の人がいるっていったから連れていく訳にもいかないし）

様々な事を思う悠里だが、このまま悩んでいてもキリがない…。彼女は思いきって、狭山に声をかけることにした。

悠里「あの…狭山さん？」

狭山「うん？なに…？」

悠里「私たちはこれから移動するつもりなのだけど…あなたはどうする？仲間の人のところまで送りましょうか？」

狭山「…：…ううん。そこまで世話にはならない。もう降りるよ」

言いながら立ち上がり、席を離れようとする狭山だが…そばにいた由紀が彼女の右手を掴み、悲しげな表情を見せる。

由紀「一人で平気なの…？危ないから送っていつでもらおうよ…」

狭山「…大丈夫。ボク、結構強いから。心配してくれてありがと…由紀」

狭山は由紀の手を振りほどくと、ドアの方へと歩き出す…。しかし彼女はすぐに立ち止まり、思い出したかのようにして悠里に尋ねた。

狭山「そういえば…君達にはなにか目的があるの？」

悠里「えっ…？」

狭山「さっきの悠里の表情、なんか急いでるみたいだったから…」

悠里「ああ…その…えっと…」

彼女達の目的は『感染症状に悩む胡桃を救うこと』だが、すぐに返事を返せないのは狭山にこの事を告げていいのか分からないから…。彼女にこの事を教えても解決の糸口は掴めないだろうし、それにもし彼女が感染している者に対して良くない印象を持っていたらと思うと…どうしても正直には答えられなかった。

悠里「…安全な場所を探してるの。”かれら”に悩まされず暮らせる場所があったらいいなと思ってて…」

咄嗟にそれっぽい出任せを言う。そばにいた彼や胡桃達も悠里の考えを理解しているらしく、口を出さなかった。一方…狭山は未だに悠里の目だけをじっと見つめており、静かにこう言った…。

狭山「嘘をつくのは…ボクが信用できないから？」

悠里「っ…嘘なんて…」

狭山が言った途端、悠里の胸の鼓動が速くなる…。

完璧とは言えなくとも、決して分かりやすい嘘ではなかったはずなのに…それをいとも簡単に見抜かれるとは思っていなかったからだ。

狭山「じゃあ聞くけど、ミナって娘の屋敷は安全じゃなかったの？」

悠里「えっ…？」

狭山「ボクが屋敷に暮らしてると答えた時、胡桃はミナって娘の家を思い出すって言った。そのあと…『大きな屋敷を持つてる人なんて』今”はミナくらいしかいないと思ってた』とも言ってたから…その娘は今も生きてて、その屋敷にいる」

胡桃「ん…」

その発言を聞いて、胡桃はやってしまったというような表情を浮かべる…。あの時は思った事をボソツと口に出したただだったので狭山も大して聞いてないと思っていたし、何より発言一つでここまで深読みされるとも思ってた…。

狭山「ミナって娘がまだ生きてるって事はその屋敷はそれなりに安全な場所だと思うけど、なんでその娘とそこに一緒にいないの？追いつ出された…って訳でもないよね？」

悠里「それは…えつと…」

美紀「はい、そこまで…。真冬ちゃん、私達にも色々事情があるの」

戸惑う悠里に代わり、美紀が狭山の肩を叩きながら答える。すると狭山は少し間を空けた後、悠里にそつと頭を下げた。

狭山「…ごめんね。必要以上に突っかかっちゃった…。ボクだつて、まだ自分の事を君達に話してないのにね…」

狭山がそう告げると悠里は微笑みながら首を横に振り、気にしていない事を示す。それを見た狭山は安心したようにため息をつき、そばに立つ美紀の顔を見つめた

狭山「美紀：最後にちよつとだけ、ボクと外に出てくれる？」

美紀「外？今から：だよな？」

狭山「うん：少しだけ話がしたくて…。でも、無理ならいい」

狭山が美紀を指命したのは彼女が一番接しやすいと思っただけから…。しかし外に二人だけ：というのはやはり心配なのか、胡桃が席から立ち上がった。

胡桃「外で話すならあたしもついてく：オツケーか？」

狭山「…：うん、別にいいよ」

由紀「ええ！つ！じゃあわたしも一緒に行きたい！！」

狭山「…：ごめん。ちよつとだから待ってて？」

美紀「後輩同士の時間ですから、先輩は留守番してて下さい」

由紀が立ち上がると狭山が困った顔をしていたので、美紀がさかさずフオローする。由紀は不満そうな顔をしながらまた席へとつき、勢いよく胡桃の事を指さした。

由紀「でも、胡桃ちゃんは二人についてくって言うてるよ！」

胡桃「あたしは可愛い後輩たちの護衛役だ！なんなら代わってやるけど、由紀は怖い連中に立ち向かえるか？」

由紀「だ、大丈夫…：だとは思うけど、やっぱ胡桃ちゃんに任せよっかな…」

『怖い連中』という言葉が恐怖心を煽り、由紀を大人しくさせる。

胡桃「それがいい、あたしに任せとけ。つてなわけで、ちよつとから行ってくる。すぐに戻るみたいだから大丈夫だとは思うけど、その間ここは任せたぞ？」

立てかけてあったシャベルを手に取り、胡桃は彼に告げた。

すると彼はドアのそばに立っている美紀：そして狭山をじつと見

つめ、静かに胡桃へ返事を返す。

「…何かあれば呼ぶように。すぐ駆けつける」

胡桃「うん…。そこそこ頼りにしておくよ」

ニツコリと微笑みながら答え、胡桃は美紀…そして狭山と共に外へと降りる。わざわざ外に出て欲しいと言うくらいだ…もしかしたら、何か大切な話があるのかも知れない。

…ボタンツ！

胡桃「…で、どうする？少し歩くか？」

狭山「そう…だね。歩きながら話したい」

胡桃「オツケー。でも、あまり遠くには行かないぞ？天気も悪くなってきたるしな…」

狭山「うん…わざわざありがとう」

空が少しずつ曇っていく中、美紀、胡桃、狭山の三人はゆつくりと歩きだして車の停めである公園を出ていく…。出来るだけ”かれら”のいない方…いない方へと歩いて二、三分経った頃、狭山は静かに口を開いた。

狭山「はあ…これからどうしようかな…」

美紀「どうしようかな…って、何かやらなきゃいけない事があるんじゃないかった？」

横を歩く美紀が彼女に尋ねる…。胡桃はというと、後輩二人の邪魔にならないよう…少しだけ距離を空けて後ろを歩いていた。

狭山「それ…やっぱりやめた…。なんか…やる気なくなっちゃって…」

美紀「へえ…。それ、やめても平気なやつなの？」

狭山「ただの暇潰しだったからね…別に問題は無いんだけど…」

美紀「暇潰しって…それが何なのか聞いてもいい？」

狭山「いや…聞いても良いことないよ…」

狭山のいう暇潰し…それは美紀達を見つけ出す事だった。

見つけた後はどうするか…そこまでは深く考えていなかったものの、結局は今まで出会った他の生存者達同様軽い気持ちで処理するのだろうかと思っていたのだが…

狭山（なんか…やりづらいもんね。朝ごはんまでもらっちゃったし…。それにこうして接して分かったけど、彼女達は本当に普通の人…ここまで生き延びてきたのもただ運が良いだけだろうから、ボクらがやらなくてもどのみちすぐに…）

これまで生き延びてきたほどの人間なのだから…彼女達にも何らかの強さがあると思っていた。だが恐らく、実際の彼女達はただ運が良かっただけ…。そう思うと興味が一気に削がれた。それこそ、手を出す気すら起きない程に…。

狭山（でも、美紀と話すのはちよつと楽しい…。だから…もう少しだけ…）

狭山がこれまで出会ってきた人間はこの世界に染まりきった大人ばかりで、自分に近い歳の人などいなかった。しかし彼女達はみんな自分と近い年齢であり、美紀に限っては同い年…。こうして話すだけで、時の流れが速く感じる。

美紀「そういえば、真冬ちゃんの仲間ってどんな人？」

狭山「一人は渋いっていうか…大人って感じの男の人。もう一人は…うん、こっちも大人って感じの男の人」

美紀「男の人ばかりだね…」

狭山「最後の一人は…生ゴミとヘドロを混ぜたみたいな性格した…とにかく腐った男」

二人の背後で胡桃が『あはは』と笑う。どうやら、狭山が言った言葉が可笑しくて笑ってしまったらしい。

美紀「生ゴミとヘドロって…どんな性格か分からないよ…。っていうか、真冬ちゃん以外はみんな男の人なんだね」

狭山「…うん」

美紀「そんな環境だと、色々苦労しない？」

狭山「もう慣れたから、何とも思わない…」

男三人の中に少女一人…。自分なら少し居心地悪く思ってしまうかもと美紀は考えたが、狭山は言葉通りそれに慣れている様子だった。

狭山（帰ったらあの二人に、この娘達探すの止めようって伝えないと…）

美紀「でも…仲間とかって大切だね。私も先輩たちに会えてなかったらどうなったか…」

狭山「最初から皆と一緒にだったんじゃないの？」

美紀「あつ、うん…。私が先輩たちと会ったのは途中から…。それで、たった一人の男の人である彼はそれよりも更に後で出会ったんだ」

たった一人の男というのは彼の事…。

狭山は彼女達の事を少しずつ知ってきたが、美紀が後から仲間になった人物だという事は知らなかった。

美紀「色々あつたけど…先輩たちに会えて良かった…。先輩たちに会えたおかげで、私は幸せな日々を過ごしていられるから…」

狭山「……………」

美紀は言いながら振り向き、胡桃に笑顔を見せる。その時、隣に立つ狭山が眉をピクツと動いたのだが……美紀はそれに気付かなかつた。

美紀「本当に…先輩たちのおかげです」

胡桃「そ、そうゆーの照れるって……。まあ、あたしもお前やあいつに会えて…良かったって思っではいるけどさ……」

狭山「……………」

頬を人差し指で掻きながら、胡桃は照れたように微笑む。そうして美紀、胡桃が笑いあっていると、狭山はそつと胡桃に目線を向けた…。

狭山「胡桃も……幸せ？」

尋ねる彼女の目が少し冷たく見える…。

しかし、それは空が曇ってきて辺りが暗くなっているからそう見えただけだ…。胡桃は心の中で自分にそう言い聞かせ、返事を返す。
偽りない…本心からの答えを…。

胡桃「…うん。幸せだ…」

狭山「……………」

真剣な表情を見せる胡桃の答えを聞くと、狭山は顔を俯ける…。次の瞬間、美紀の鼻先に冷たい物がピトリと落ちた。

美紀「っ…………あつ、雨降ってきちゃいました…」

胡桃「うわ…ほんとだ…。真冬、お前も雨が止むまで車にいたらどうだ？こんな中、一人で動くのは危ないだろ」

狭山「……………」

狭山は返事を返さない…………。

天気の良いでまだ朝早い時間なのに辺りは暗くなり、空から落ちる雨粒は時間が経つにつれ激しくなっていた。

美紀「…………真冬ちゃん？」

一粒一粒…ゆっくりと降っていた雨はあつという間に絶え間無く降り注ぐようになり、外に立つ三人の体を濡らす…。美紀はそんな状況になっても動かない狭山の顔を覗きこむが、彼女は俯いたままじつと地面を見つめていた。

狭山（しあわ…………せ…？美紀と胡桃は…………幸せ…なの…？）

雨に濡れた前髪の前から、ポタポタと雨粒が滴り落ちる…。

その向こうから心配そうにこちらを見つめる美紀…。狭山は顔を俯けたまま目だけを動かして彼女を見つめるが…………。

狭山（…………痛い…。美紀と胡桃が幸せだつて分かったら…………胸が死ぬほど痛い…………。なんでだろ…）

ズキツ…

ズキツ…

今まで感じた事の無い痛みに襲われ、狭山は戸惑う…。

目の前にいる二人の少女が幸せだと分かった途端、胸がズキズキ痛み…頭がくらくらする。そして…すぐ目の前から自分の名を呼ぶ少女…直樹美紀を見ていると…

美紀「真冬ちゃん？どうしたの？大丈夫？」

狭山「……………」

ズキツ…！！

何故か…無性に腹が立った…。

狭山（…ああ…わかった…何で胸が痛いのか…）
ズキツ…ズキツ…

狭山（何でこんなに…イライラするのか…）

ズキツ…！ズキツ…！！

美紀「胡桃先輩…真冬ちゃんが…」

胡桃「おいおいっ…どうした真冬？雨酷くなってるから早く戻るぞ？」

雨が徐々に強さを増す中…狭山はそつと顔を上げる…。それを見た美紀と胡桃は安心したような表情を見せたが、それはまたすぐに不安な表情へと変わる…。顔を上げた狭山が…不気味に目を光らせて二人をじつと、睨むようにして見つめていたからだ…。

胡桃「…おい」

美紀「大…丈夫…？」

狭山の少し長い黒髪…その先からポタポタと雨粒が滴り落ちていく…。一時不気味さを感じてしまいはしたが、胡桃と美紀はやはり彼女の事が心配だった…。胡桃は狭山の肩にそつと手をかけようとしたが、それは狭山自身の手によってパシッと弾かれた。

胡桃「ッ…!？」

美紀「ど、どうしたのっ？」

狭山「美紀…ごめんね…」

雨の音にかき消されてしまいそうな程の声で囁く…。どうにかそれを聞き取った美紀が目を丸くしていると、狭山はニツ…と怪しく微笑んだ。

狭山「ボクのやらなきやいけないこと……。さつきやめるって言ったけど……。やっぱそれ無し……。やる気出てきちやったから……。今からやるね……」

美紀「真冬ちゃん：何を言ってる——」

美紀が言い切るのを待たず、狭山は自らのコートの中に右手を潜らせ、腰につけていたポーチを探る。そこから取り出した物はほんの二十センチほどの長さをした棒状の物体だったが、狭山がそれを勢いよく振るとカシュッ！という音を鳴らし：五十センチ程まで長さを伸ばした。

美紀「：えっ？」

狭山「夢みる時間はもう終わり……。これからは：現実を見てね……」

胡桃「ツ!?美紀っ!!」

警棒か何かだろうか……。伸びたその棒を振り上げた狭山は目の前の美紀をじつと見つめ、それをブンツ！と強く振り下ろす。胡桃は慌ててシャベルを構え、そこに割って入ろうとした……。

百十話『想い』

狭山「夢みる時間はもう終わり……。これからは…現実を見てね…」

胡桃「ッ!?美紀っ!!」

雨が音をたてて降り注ぐ中、先程まで普通に会話していた狭山が突如持つていた警棒を取り出し、それを目の前にいる美紀目掛けて振り下ろす…。あまりに突然の事だったので美紀は身動き一つとれずにいたが……

ガキンッ!!

間一髪のところ、胡桃が美紀と狭山の間を割って入り、シャベルを横に構えたことで狭山の警棒を防ぐ事が出来た。

狭山「……………っ」

胡桃「真冬っ!!お前なんのつもりだ!?!」

胡桃は右手でシャベルの持ち手を持ち、左手ではシャベルの先端よりも少し下の方を掴む。そうしてシャベルを横に構え、そのちょうど真ん中辺りで振り下ろされた警棒を下から受け止めたが、狭山は尚も警棒を持つ右手に力を入れ続けた。

狭山「なんのつもりだって聞かれると困るけど…。強いていうなら暇潰しかな」

胡桃「っ…暇潰しだっ?」

胡桃は両手でシャベルを構えて警棒を押さえているのに、何故かその両手がプルプルと震え出す…。狭山は右手だけしか使っていないのに、力負けして徐々に押されてきているのだ。

胡桃（なんだよコイツっ…思ってたより力が…!?)

警棒をシャベルで押さえている両手が少しずつ下がっていく…。狭山の力はその細腕からは考えられない程に強く、このまま力比べをしていたら先にシャベルの方が折れてしまいそうだ。

美紀「まつ、真冬ちゃんっ!!何してるの!?!」

突然の事に戸惑っていた為動けずにいた美紀が胡桃の背後から狭山へと語りかける。狭山は彼女と目を合わせる事もせず、ただ胡桃だけを見つめて右手に力を込め続けた。

狭山「だから暇潰しだよ…。あとついでに、現実を知らない美紀と

胡桃にこの世界の厳しさを教えてあげようと思って」

胡桃「なにを急に…訳の分からねえことをっ…!!」

力に押されてシャベルを構える両手が下がり、狭山の警棒の先端が胡桃の額に軽く触れる…。その瞬間、狭山は微かに口角を上げて微笑んだ。

狭山「今ボクが使ってるのが警棒でよかったね…。これがもしナイフだったら、このままグツと力を入れて胡桃のおでこを思いっきり切ってあげたのに…。」

胡桃「なっ…!?!」

美紀「真冬ちゃんっ!!冗談ならもうやめてっ!!!」

狭山「ん…？冗談だと思ってるの…？じゃあ、本気だつて分かるようにしてあげよっか…」

胡桃「っ!!」

元より強かった狭山の力が更に強まり、警棒をシヤベルで防ぐ胡桃の両手が下がる…。それによって胡桃の額に触れていた警棒の先端は額から少しずつ下がっていき、右目のまぶたに触れた…。

狭山「綺麗な目だけど…ごめんね」

胡桃「な…っ…!!?」

次の瞬間、狭山は今まで下へと加えていた力を真正面に向け、突くようにして胡桃の目へと警棒を振った…。

胡桃「ツっ!!」

胡桃は咄嗟に首を捻ってそれをかわし、そのままシヤベルを使って狭山を突き飛ばす。狭山は二、三步下がっただけですぐに体勢を立て直したが、胡桃はその間に美紀の身を引いて狭山から五メートル以上離れる事が出来た。

狭山「つと…外しちやった」

胡桃「はあっ…はあっ…はあっ…!」

距離を開いた胡桃は右手でシヤベルを構え、左手で自分の右目が無事かどうかを確認する。右目はしっかりと見えているので無事なようだが、まぶたよりも少し上の方が微かに切れてしまったらしく、そこに触れた左手の指先には血がついていた。

美紀「本気で胡桃先輩のことをっ…!」

狭山「うん。潰すの失敗しちゃったけどね…」

美紀「なっ：!？」

しれつとした表情で告げる狭山が信じられず、美紀はギリツと歯をくいしばる。一発ビンタでもして彼女の目を覚まさせよう…。そう考えて一歩前に踏み出す美紀だったが、胡桃が彼女の手を掴んでそれを止める。

胡桃「真冬は…アイツはきつと本気だ。近寄ったらお前も怪我するぞ…」

狭山「怪我…とか言ってる時点で甘い。ボクは君達を怪我させたい訳じゃなくて、殺すつもりなんだから」

美紀「本当に…：どうしちゃったの…？」

ついさっきまで一緒に何気ない会話を交わしていたのに…それがほんの少しの間にこんなやり取りに変わってしまった…。降る雨が激しさを増す中、美紀は悲しげな表情を浮かべ狭山を見つめるが…彼女は何も答えない。

胡桃「美紀…急いで車に戻って、あいつを呼んできてくれ…」

シャベルを狭山に向けて構え、胡桃が告げる。

自分らの事を殺す気にいる狭山を相手にして二人同時に逃げるのは難しそうだし、かといって一人で完全に押さえるのも難しいかも知れない…。もう、彼に来てもらう他なかった。

美紀「でも、胡桃先輩はっ…」

胡桃「真冬もあたしらを黙って見送ってくれはしないだろ…。だから、あいつがここに来るまであたしが真冬の相手をしておく…」

美紀「……………」

まだ朝を少し過ぎたくらいの時間なのに…：天気の良いで辺りが異様に暗い。雨に打たれて全身びしょ濡れの美紀は、狭山をじつと睨む

胡桃の横顔を不安そうに見つめていた…。

胡桃「……大丈夫。あたしは死なないし、真冬のことを殺すつもりはないからさ」

不安そうな美紀の目線に気づいたのか、胡桃は彼女の顔をチラッと見つめてニツコリと微笑む。この笑顔も晴れた空の下で見たらきつと安心できたのだろうが…雨に濡れた胡桃の顔は何故か弱々しく見えてしまった…。

美紀「すぐですから…。たぶん、五分もかかりません。私はすぐにあの人を連れてここに戻ってきましたから、それまで無事でいてください…。怪我也…しないでください…。」

胡桃「……ああ、任せとけ」

雨音がザーザーと響く中、その音に負けなくらいの声でハツキリと胡桃は答える。それを聞いた美紀は微かに微笑むと、胡桃の向こう…数メートル先に立つ真冬の顔をそつと見つめた…。

美紀「胡桃先輩に何かしたら…絶対許さないから…！」

狭山「戻ってきた時、胡桃が死体になっててもビックリしないでね。この世界じゃ、わりと当たり前前の光景なんだから…。」

美紀「ツ!!」

胡桃「あたしは大丈夫だから…行け」

美紀が狭山の言葉に反応し、目を鋭くさせていると胡桃がそつと咳く。自分がこのままここにおいても足を引つ張るだけ…今の自分に出ることは、一刻も速く彼をこの場に呼ぶことだ。美紀は狭山への怒りを抑えて背中を向けると、彼や由紀の待つ車を停めた公園へと駆けていった。

美紀（少し前まで普通に話してたのにつ……。同い年の娘……。久しぶりに会えて嬉しかったのに……。真冬ちゃん……。どうしてつ……）

雨に打たれながら、美紀は一人で道を駆けていく……。濡れた服が肌に張り付いて気持ちが悪いが、そんな事はどうでもいい……。それよりも何故真冬はあんなふうになったのか……。彼女とは当たり前のように友達になれると思っていたのに、どうしてこんなことに……。

美紀「な……。んでつ……。なんでつ……！」

まだ狭山とは出会って間もない美紀だが、何故か彼女の事は気に入っていた……。車内で一緒に過ごした時、自由な由紀に振り回されて戸惑う彼女が……。どことなく自分と重なって見えたからかも知れない。

狭山『敬語じゃなくてもいいよ。同い年なんだし、もつと普通に接してね……』

車内で彼女にこう言われた時、あまり表情には出さなかったがとても嬉しかった……。同い年の娘と話すのは以前別れた親友の『圭』以来だったから……。また、同じ目線で話せる友達が出来たと思っていたのに……。

美紀「つぐ……。真冬……。ちゃんつ……」

走っている途中でそんな事ばかりを考えてしまい、つい泣きそうになってしまう……。どうして真冬があんなったのかも分からないし、胡桃の事も心配で……。頭の中が真っ白になってしまいそうだが、美紀は微かに流れた涙を拭いながら雨の中を駆ける。涙を拭う服の袖も雨

に濡れているので拭った気はしないのだが、手が自然と動いてしま
う。

美紀（急がないと……胡桃先輩が……!）

雨に濡れた地面は気を付けないと滑ってしまいそうで走り辛く、体
も冷えてきた……。それらの条件のせいで、行きと同じ道に戻っている
にも関わらず体力を多く消費してしまう。美紀は息を切らしながら、
必死に道を駆けた。

くくくく

所変わってこちらは胡桃と狭山の立つ道路……。二人は美紀がその
場を去ってからも、少しの間は互いに見つめあっていた。

胡桃「意外だな……。美紀を逃がすの邪魔するかと思ってた」

狭山「まあ、どのみち後で殺すと思うし……。ここでは見逃しても大丈
夫かなくて。それに、今は胡桃がボクの相手をしてくれるんでしょ
?」

胡桃「ああ……。あいつがここに来るまでの間……。な」

狭山「でも、美紀は一人で呼びに戻ったからね。もしかしたら、途
中で感染者に襲われてるかも……。雨で視界も悪いし……」

確かに……雨は今も激しさを増している。視界の悪さはそこまで問
題にはならないと胡桃は考えていたが、雨音で”かれら”の気配が感
じずらくなる事は少し不安だった。

胡桃「美紀だって今まで必死に頑張ってきたんだ…。今さらこんならしいの雨でへマしたりしないさ」

狭山「…だといいいね」

胡桃「なあ、二人つきりなんだし教えてくれよ。なんで急にこんなことを？」

狭山「だから…ただの暇潰しだって」

狭山はそう答えてから前髪を右手でかき上げ、胡桃の元へと一気に駆け寄る。そしてそのまま、持っていた警棒を胡桃の肩目掛けて振り下ろした。

胡桃「ちっ！」

胡桃は狭山が振り下ろした警棒へ向けてシヤベルを振り、彼女の攻撃をしのぐ。だが狭山の攻撃は一発で止まらず、繰り返し胡桃目掛けて警棒を振り続けてきた…。

ガッ！

ガンッ!!

ガンッ!!

胡桃「ッ！っぐ!!」

二発…三発…四発と放たれた狭山の攻撃をシヤベルで弾くようにしてしのぎ、隙を見て胡桃はバックステップで距離を開ける…。狭山は黙ってそれを見逃すと、雨に濡れた前髪を再びかき上げた。それを見た胡桃は今のやり取りで微かに乱れた息を調えつつ、狭山へと声をかける。

胡桃「…へへっ、前髪が邪魔か？」

狭山「うん…。また切らないと…。」

胡桃「りーさんに頼めば切ってくれると思うぞ。だからこんなこと…やめにしないか？」

狭山「…：…胡桃は…どんな風に幸せなの？」

警棒を持つ右手をそつと下げ、狭山はそう尋ねた。この問いになんの意味があるのか…胡桃にそれを理解する術すべはないが、少しでも時間が稼げるならばと思い、シャベルを下げて答える。

胡桃「幸せっていつでも…本当に普通のことだ。仲の良い友達が周りにいて、一緒にご飯食べたり…何でもない話をする。それで毎日『おはよう』とか…『おやすみ』って言い合う…。つまりこの先どうだろうと、あいつらがそばにいてくれればあたしはそれだけで幸せなんだ…。」

雨に打たれながら、真剣な表情で胡桃は語る…。狭山はそれを眉ひとつ動かす事なく聞いていたが、胡桃が語り終えた後にそつと口を開いた。

狭山「…やっぱり、君達は現実を見ていない」

胡桃「現実？」

狭山「とりあえず美紀は最後まで残しておく…。でも、胡桃も悠里も由紀もそして彼も…みんなを今日、ここで殺す」

胡桃「…：…なんでそうなるんだよ。おかしいだろ…。」

狭山「おかしいことなんて何も無い…。この世界では自然なこと」

狭山は再び警棒を構え、真っ直ぐに胡桃の目を見つめる…。

出来ることなら話し合って解決したい…そう思っていた胡桃は悲しげな目をしながら狭山の目を見つめ返し、覚悟を決めた。

胡桃「あたしは…さつきまでお前のことも可愛い後輩だと思い始めてたからな。出来れば手荒なマネはせずに終わりたいけど…仕方ねえか…」

狭山「ボクを…殺す気になった？」

胡桃「バカ言うな…。いくら敵意剥き出しだってもお前みたいな女の子を殺せるかよ。ちよつとだけ痛い目みせて…目を覚ませるだけだ」

シャベルの先を狭山の方へと向け、胡桃は彼女にそう告げる。すると狭山はため息をつき、降る雨に濡れているその前髪を再びかき上げた。

狭山「こっちは殺すって言うてるんだから、胡桃も殺す気でこなきやだめだよ…」

胡桃「だから…あたしはお前みたいな女の子を殺すのは嫌なんだって…。それに少しの間とはいえ一緒にいたんだ…万が一お前が死んだら、由紀が悲しむ」

狭山「そんなことない。みんなと一緒にいたのは本当にちよつとの間だけでもん…。あんなちよつとの間に情なんか移らないよ」

胡桃「たしかにちよつとの間だったけど、少なくとも由紀に気に入られるには十分な時間だ。それに…あたしもお前の事は嫌いじゃなかったぜ？」

狭山「……………」

嫌いじゃなかったと言われて何かを思ったのか、狭山はまたしてもため息をつく。こうして本音をぶつけなければ彼女が止まるかもとも胡桃は期待したが、やはりそんな事はなかった…。

狭山「…すぐに終わらせようか」

胡桃「簡単に終わるかよ…。あたしを舐めるな」

狭山「……………」

シャベルを構える胡桃…。狭山は今まで色々な生存者に会ってきたが、今日の前にいるシャベルを持つ少女…何故か彼女が、やけに手強そうに見えた…。

百十一話『約束』

狭山「世界がこんなふうになってから色んな人に出会った……。そのほとんどがどうしようもない人間で、ボクは何度も殺されそうになった……」

狭山「でもボクはあの人に出会ったおかげで前のボクとは違うものになったから、ある程度の危機的状況は切り抜ける事が出来た。あの人が何者かは未だによく分かってないけど、そんな事はどうでも良い……。大事なのは、ボクは前の弱かった『狭山真冬』とは別人になれたってこと……」

狭山「まあ強くなったと言っても限度があるから、何度か危ない場面はあったけど……。でもね、そんなふうに強くなったボクがたった一人の人間……。しかも女の子相手にこんな苦労するなんて思ってもみなかった。だから、褒めてあげる」

狭山「……よくがんばったね。胡桃」

激しく降り注ぐ雨に打たれながら、狭山は二つの武器をそれぞれの手を持って目の前にいる胡桃を見下すようにして見つめる……。狭山の右手には警棒……。そして左手には、彼女から奪い取ったシャベルを手にしていた。

胡桃「はあっ……。はあっ……。……！」

胡桃は息をきらしながら地面に膝をつく。出来ることなら今すぐ

に起き上がらないといけなのだが、どうにも体が動かない…。狭山と争った際、何度か攻撃を受けてしまったのがその原因かも知れなかった。

狭山「ほんと、胡桃は強い娘だよ…。ボクに殴られても何度も立ち上がってきたし、すっかり反撃もしてきた。まあ、今一つ力が込めてなかったのは気になるけど…」

胡桃「だから…言っただろ…。あたしはお前を殺す気なんかない…本気でなんか殴れるかよ…」

両膝、そして右手を地面について狭山を見つめる胡桃…。

激しい雨の中で狭山と争った彼女の全身はかなり汚れてしまっており、体操着の上に羽織っているジャージは泥に汚れ、所々破れている。更に髪を止めていた二つのリボンも片方が解けてしまい、髪型が僅かに乱れていた。

狭山「もし本気でやってたら、ボクを殺せたかも知れないのに…」

胡桃「本気でやらなくても平気だと思っただけだなあ…。お前…見た目よりずっとタフな奴だな…」

狭山「ボクはちよつと特別な身体カラダだからね…。もし胡桃がボクと同じ状態だったら、きつとボクなんか相手にもならない…。キミはそれほどに強かった」

胡桃「特別な…：身体？」

狭山の発言を不思議に思い、そのまま彼女を見つめる。

するとその後方から一体の感染者が現れ、静かに狭山の方へと歩いていく。胡桃と狭山が争う音を聞き付けたのか、はたまた偶然現れたのかは分からないが、狭山は背後から寄るその感染者に気付いていないようだった。

胡桃「おいっ!!後ろに——」

狭山「……………」

『グアア…ッ!!』

降り注ぐ雨の音が激しく、忍び寄る感染者に気づけていない。そう思つて狭山に声をかけた胡桃だが、その必要はなかった…。何故なら狭山は直後感染者の方へ振り向き、左手に持っていたシャベルをそれ目掛けて振り払ったからだ…。

グシャツ!!

胡桃「…っ……………」

狭山が振つたシャベルは感染者の首へと当たり、その首を体から切り離す。感染者は狭山の横にドサツと倒れ、はね飛ばされた首は胡桃の横をゴロゴロと転がっていった。

狭山「この感染者の事は言われなくても気づいてたけど、一応聞いておくね。ボクは君達の敵なのに、どうして後ろにコレがいるのを教えようとしたの？胡桃が黙っていれば、ボクはコレに噛まれて死んだかもしれないのに」

胡桃「…聞かなくても分かるだろ？」

狭山「殺したくないから……………か。まったく……………」

答えながら微かに微笑む胡桃を見た狭山は呆れたようにため息をつくと、左手に持っていたシャベルを胡桃の前へと投げる。カラントゥ！と音をたてて目の前に転がったシャベルを胡桃は手に取り、それを杖のようにして体をゆっくりと起こした。

胡桃「わざわざ返してくれるあたり、お前も甘いと思うけどな…」

狭山「……………」

体を起こしてからそつとシヤベルを構え、狭山を警戒する……。だが狭山は胡桃から視線を逸らし、横に倒れた感染者を見つめていた。

狭山「ボクと胡桃だったら…ボクを選ぶんだね」

胡桃「…なんのことだ？」

狭山「この感染者だよ。目の前に二人獲物がいたのに、ボクの事を襲おうとしたでしょ」

胡桃「お前の方が近かったからだろ……」

狭山「確かにそうだけど、理由はそれだけじゃない。君達には言つてなかつたけど、ボクつて少し感染者に狙われにくいんだ。なのにこの感染者は胡桃じゃなく、ボクを襲つた……」

狭山が何故感染者に狙われにくいのかという理由は胡桃には全く理解できない。しかし、彼女のその口ぶりから言いたいことは予想できた。

胡桃「……………」

狭山「胡桃…だいぶ”かれら”に近付いてるね。ボクなんかより、キミの方がよっぽど化け物だ」

胡桃「…う!!」

狭山の言葉、そしてその嫌味な笑みを見て胡桃は言葉を失う…。彼女が自分の身体に起きている異変を見抜いた事には驚いたが、それよりも面と向かって『化け物』と言われた事がショックで…頭が真っ白になった。しかし……

バシヤバシヤツ…

狭山の発言を受けて胡桃が呆然としていると、背後から音が聞こえた……。水溜まりの上を駆けるようなそんな音が耳に入った直後、胡桃の横を勢いよく通り過ぎたその人物は真っ直ぐに狭山の方へと向かい、彼女目掛けてナイフを振り払った。

ガチイツ…!!

狭山「おっ……早かったね？」

その人物に振り払われたナイフを持っていた警棒で受け止め、狭山は微笑む。しかし彼女の目の前にいるその人物は真剣な表情のまま、真っ直ぐに狭山の事を睨んでいた。

「誰が化け物だっけ？」

狭山の警棒からナイフを離し、距離をあけてその人物……彼が尋ねる。狭山がその問いに答えないと彼は狭山を警戒したまま下がり、後方にいた胡桃の元へと寄った。

「……怪我は？」

胡桃「大丈夫……だと思う」

何度か狭山に殴られはしたが、強い痛みは感じない……。それが怪我をしてないからではなく、ただ感覚が無くなってきているだけだと思うと少し不安になるが……彼を心配させない為に胡桃は平気そうな顔をして答えた。

美紀「胡桃先輩っ！無事でよかった……」

胡桃「美紀、お前も来たのか？」

背後から聞こえた後輩の声に振り向く……。するとそこにいたのは美紀だけでなく、由紀と悠里も心配そうな表情をして立っていた。

胡桃「みんな来たのか……」
危険なので彼だけ来てくれれば良かったのだが、美紀・由紀・悠里……全員胡桃の事が心配だったのだろう。みんなは未だ寝間着に上着を羽織っただけの状態、傘すら持つてきていなかった……。

由紀「胡桃ちゃんっ……わたし……胡桃ちゃんの事が心配で……！」

胡桃「……ああ、わかってる。由紀、ありがとな」

雨に濡れているせいでよく分からないが、由紀の目が微かに潤んでいる気がする……。胡桃はそんな彼女の頭にポンツと手をおき、そっと撫でた。

「状況を整理したいんだけど……どうなってる？」

数メートル先に立つ狭山を警戒したまま、彼が胡桃に尋ねる。ここへ向かう道中に美紀から事情は聞いたものの、それが断片的に感じて理解しきれずにいた。

胡桃「説明したいけど、あたしと美紀にもよく分からない……。真冬が急に美紀を襲って、あたしがそれを止めた。でもアイツはまだ止まる気がないみたいで……あたしら全員を殺そうとしてる」

自分が知っている限りの情報のうち、真つ先に狭山へ声をかけたのを聞いた全員が険しい表情をする中、真つ先に狭山へ声をかけたのは由紀だった。

由紀「真冬ちゃん、どうしたの……？何か理由があるなら話して？わたし、みんなが真冬ちゃんとケンカするのなんか見たくないよ……」

狭山「……由紀。ボクらがするのはケンカじゃなくて、殺し合いだよ」

由紀「そんなのっ、わたし見たくないっ!!」

狭山「じゃあ、君達は大人しく立ってればいい……。そうすればこれ

は殺し合いじゃなく、ボクの一方的な殺しになるから」

由紀の言葉を全く気にせず、狭山は手にしている警棒を見つめている。彼女のそんな様子を見た由紀はどうしたらいいのか分からずに悠里や美紀を見つめるが、二人もどうすればいいのか分かっていなかった…。

悠里「狭山さん…あなた、本気で私達を殺すつもりなの？」

狭山「うん…そうだよ」

悠里「どうして…？もしかして食料とか、物資に困ってたりするの？」

狭山「いや、違う…」

悠里「じゃあなんで!?争う理由が無いじゃないっ!」

もし狭山が食料などに困っているというならば、分けてあげようとも考えた…。しかし彼女は物資には困ってないと答え、相変わらずこちらへ敵意を向ける。何故彼女がこんなことをしているのか理解できず、悠里は声を荒げた。

狭山「ボクが…君達を襲う理由…」

由紀「さつきまで、真冬ちゃんはわたしたちと普通に話してたんだよ…。なのにこんなのおかしいよ…急にどうして…」

こうなった理由を悠里に問われた狭山はボーツとした様子で彼女達を見つめ、雨に濡れた前髪をかきあげる。狭山は少しの間黙っていたが、由紀達を見て思い出したように告げた。

狭山「そういえば、皆でここに来たんだね。誰か一人だけ車に残し

たりしたら大変だったから、ある意味運がいい…」

「…どういふことだ？」

胡桃「…あつ」

狭山の発言に彼が不思議そうな表情を見せる中、胡桃はあることを思い出す。狭山は先程自分と争っていた際、あることをしていたのだ。

胡桃「さっきあたしと争ってる途中、無線機みたいな使って誰かに連絡してたな…。もしかして、あたしらの車が停めてある公園に仲間を呼んだのか…？」

狭山「正解。ボク一人だと誰か逃がしちゃうかも知れないから、仲間に連絡したんだ。ちようどこの近くをうろついてみたいだから、もうあの公園についてるかもね」

「出来ることならその仲間にあんたの事を話して説教でもしてもらいたいけど、そうはいかないか…」

狭山「うん…。ボクの仲間はあまり優しい人じゃないからね。言えば助けてもらえる…とか期待しないほうがいいよ」

「…そうかい」

胡桃「わりい…あたしが連絡させなきやよかったのに、止められないくて…」

「仕方ないさ、謝らなくていい。それよりあの人をどうにかしないと」
今、急いであの公園に戻れば狭山の仲間はまだいないかも知れない。しかし狭山はそれを黙って見送りはしないだろう…。なら、彼の取る行動は一つだった。

「…時間を稼ぐ。みんなは急いであの公園に戻って車で逃げて」

胡桃「なっ!？」

悠里「それで…あなたはどうするの？」

由紀「そうだよ！キミだけおいて逃げるなんてっ…!」

分かっていた事だが、由紀達は彼の案に反対する。
しかし、彼にも考えがあつた。

「僕もある程度時間を稼いだら逃げる。お互い逃げたあとは……昨日立ち寄ったスーパーマーケットにでも集合しましょう」

悠里「……わかつたわ」

悠里が返事を返す。しかし、まだ他のメンバーは納得していない。
由紀は焦つたように悠里の方を向き、その手を掴んだ。

由紀「ダメだよりーさんっ！——くんだけおいていくなんてっ……！」

悠里「でも、私達がここにいっても何も出来ない……。早く戻らなきゃ狭山さんの仲間に車をおさえられて、身動きすることすら出来なくなる。そうなれば私達全員の身が危ないわ……」

由紀「でも……でもっ……！」

胡桃「……一人で平気か？」

由紀が慌てる中、胡桃は彼に尋ねる。

すると彼は微かに微笑み、胡桃へ返事を返した。

「問題ない。またすぐ会える」

胡桃「……そっか」

胡桃は彼の事を強く信じている……。そんな彼がそう答えるなら、もうこれ以上時間をかける必要はない。胡桃は由紀達と共に一度車へ向かう事を決める。

胡桃「由紀、行くぞ……」

由紀「胡桃ちゃんっ！」

胡桃「こいつなら大丈夫だ。由紀はこいつが信じられないのか？」

由紀「信じているけど…でも心配で……」

由紀の言いたい事は胡桃もよく分かっていた。胡桃だって彼を心から信じてはいるが、全く不安がない訳ではないのだ。だがそれでもここは先に進まねば、全員が危険な目にあってしまう。

「由紀ちゃん、こつちは大丈夫だから…気にしないで」

由紀「……………怪我しちやダメだよ？絶対だからね？」

彼に言われ、由紀は渋々ながらもその場を離れる決意をする。これで彼は気兼ねなく狭山に集中できるかと思いきや…今度は美紀が彼のそばへと寄り、静かに口を開いた。

美紀「あの…………先輩……」

「…なんでしよう？」

美紀「本当に…出来ればいいんです。真冬ちゃんのこと…あまり傷付けないであげて下さい」

とても言いづらそうな表情をしながら、弱々しい声で美紀は告げる。彼がその言葉に軽く戸惑っていると、美紀は先に立つ真冬をそっ
と見つめた。

美紀「彼女を見ると…なんかモヤモヤするんです…。もちろん、彼女が私達に敵意を向けているのは分かっています…。でも…それでも私は…何故か真冬ちゃんのことを放ほうっておけなくて…」

「……………了解。僕も時間だけ稼いで逃げるつもりだから、心配いらないよ」

美紀「…ありがとうございます。先輩もどうか、無事でいてくださ

いね」

美紀はペコツと頭を下げ、彼に礼を言う。そんな彼女が少し安心したように微笑んでいたの、彼もつられてニヤリと微笑んだ。

悠里「じゃあ、昨日のスーパーで会いましょうね。もし既に狭山さんの仲間が公園にいた場合…私達も走ってあそこに向かうから」
「……そうですね。どうしても車に乗れそうになかったら戦いは避けたい方がいい」

あの車はかなり惜しいが狭山の仲間が待ち構えていた場合、それに構わず無理に乗り込もうとして誰かが犠牲になったら最悪だ…。狭山の仲間がどんな者かは分からないが、簡単に押し通れるなどと期待してはいけなだろう。

胡桃「みんなはあたしが守るから、お前も死んだりするなよ。お前は……あたしを救うって約束したんだから」

「もちろん約束は守りますよ。おヒメさま」

胡桃「おヒメって……まあいい、約束…ちゃんと守れよ？」

そう言つて胡桃は悠里達と共にその場を離れ、公園へと駆けていく。彼とした約束とは『胡桃を感染症状から救う』という事だが、胡桃自身…彼がそれを果たせなくても良いと思っていた。にも関わらずこの事を持ち出したのは、こう言っておけば彼が自分の前に無事戻ってきてくれると思つたからだ…。

狭山「さて…これで二人きりだね」

悠里達がその場を去った後、狭山が彼へと視線を向ける。周囲に降り注ぐ雨の勢いは未だ衰える事なく、道路に立つ二人の体を濡らした。

「そっちの仲間…まだ公園に来てないといいけど」

狭山「どうかな…。のんびり歩いてたらまだついてないかも知れないけど、全力で走ったならもうついてるかも。もしそうだったら、彼女達が危ないね？」

「そうなたらそうなたでどうにか逃げるさ…。彼女達も伊達に生き延びてきた訳じゃない」

狭山「…：…：…：どうか」

足元の水溜まりをパシャパシャと鳴らすように踏み、狭山は呟く。彼はそんな彼女を見つめると、ナイフを持った手に力を込めた。

狭山「美紀は甘いよね…。ここまでしたのに、まだボクを殺してほしくないって言うんだもん」

「…聞いてたんだ？」

狭山「ボクは少し耳が良いから、全部聞こえてた。彼女はなんでボクを気にかけるんだらうね？」

「さあ…：…：…：なんでだらう」

狭山「まったく、甘い娘だなあ…。自分に襲いかかってきた相手なんだから、死んだって構わないだらうに…」

「まあ、こっちの会話が終わるまで待ってたあんたも大概に甘いと僕は思うけどね…。そんなに彼女達を殺したいなら見逃したのは間違いないじゃない？」

彼は小馬鹿にするように微笑み、狭山へそう告げた。確かに、狭山は彼が由紀達と話している間は静かにたたずんでいるだけだった…。

狭山「別に…会話とか遮るのが苦手なだけだよ。ボクが甘いと思っ
ているなら、それはただの勘違いだから」

「そうか…それは残念」

狭山「君の方こそ、ボクをあまり傷付けないようにするって美紀と
約束するなんて…かなり甘い人だよ」

先程の発言のお返しと言わんばかりに狭山が言う。

しかし彼はとぼけるようにして首を傾げ、狭山を見つめ返した。

「…それはどうかな」

狭山「…？」

「確かにあんたみたいなのを傷つけるのは気が引ける。でもあん
たは美紀さんを襲おうとした上に、胡桃ちゃんを傷付けた…。となれ
ば、こつちもあまり優しくは出来ない」

ナイフを持ち直し、彼は狭山を真っ直ぐに見つめる…。

その表情から察するに彼は本気らしく、狭山はふふっと笑った。

狭山「…キミは彼女達と違うね。彼女達ほど甘くない…殺すべき人
間はきちんと殺せるんだ」

「出来ることなら美紀さんとの約束は破らずに終わりたいけど、そつ
ちもやる気満々みたいだし…こればかりは仕方ない」

狭山「うん…仕方ないね」

狭山の事を気にかけていた美紀の為にも、出来ることなら彼女とは
和解したい。しかし相手にその気が無い以上、無駄に放っておく訳に
はいかなかった。もし彼女をここで見逃せば、また美紀達を襲うかも
知れないからだ。

百十二話『決意』

狭山真冬を相手に一人戦っていた胡桃の元にたどり着いた彼は彼女を由紀達と共にその場から逃がし、今度は自分は狭山を相手に時間稼ぎをしていた。狭山は彼女達の車が停めてあるあの公園に自分の仲間を呼んだようだが、運が良ければその連中がたどり着くよりも先に由紀達はあの車に乗ってここから逃れられるだろう…。

(…さて、みんな無事だといいいけどな)

彼もある程度時間を稼ぎ終えたらその場から逃げ、彼女達と決まった場所で落ち合う約束をしたのだが…彼女達がここから離れていつてまだ五分ほどしか経っていない。念のためにもう少しだけ時間を稼ごうと思い、彼は狭山へナイフを振り下ろした。

ブンツ!!

狭山「つと…危ない危ない」

彼の振り下ろしたナイフを飛び退いて避けると、狭山は右手に持っている警棒を握り直す。先程まで胡桃の相手をしていたので体力が消耗しているのか、はたまた雨のせいで動きにくいのかは分からないが…狭山の攻撃は彼に一度も当たっていないかった。もともと、攻撃を当てられていないのは彼も同じなのだが…。

狭山(服がビショビショで動きにくいからかな…?いや、服が濡れているのは彼も一緒だし大して関係ないか…。やっぱり、彼は思っていたより強いみたい)

攻撃を当てられない理由は彼が思いの外強く、反射神経が良いから

だと狭山は気づく。これまで様々な人間と戦ってきたが、ここまで攻撃をかわされる事は滅多に無かった。

狭山「キミ、結構強いね…」

「どうも。あんたも小さい女の子のわりには強いね」

狭山「…小さいって…セクハラ?」

狭山は目線を下げ、自らの胸元を見つめてから彼の事を睨む。彼女はどうかやら胸の事を言われたと思ったようだが、彼にそんなつもりはない。

「いや違うって!体が小さい…きやしや華奢な女の子なのにつつまりで言っただよ!

狭山「…ならいい。よかった、こんな状況で敵にセクハラするような危ない人なのかと思ったよ」

「心外にも程があるな…」

狭山「ボクの仲間の一人がそういうヤツだから、キミも同じタイプなのかと…」

「僕はわりと紳士…のハズだ。そんな人間と一緒にしてほしくない」

狭山「ふふつ、ごめんね?でも”そんな人間”がああ公園で美紀達を待ち構えてるかも知れないわけだけど…それでもキミは平気かな?」

狭山はニヤニヤとした表情を彼に向け、首を傾げる。彼女達は急いであの公園に戻ったので恐らくその人間よりも先に公園へたどり着いていると思うが、こうして言われると不安になってしまう…。

「…万が一あんたの仲間が待ち構えていたとしても、彼女達ならきつと逃げきる。あの胡桃ちゃんだっているんだ、そう簡単には…」

狭山「でもボクが呼んだその仲間はボクと同じか…それより強い人だよ?ボク相手にあんな苦労した胡桃じゃ、きつと止められない」

「……………」

狭山「そういえば、キミのナイフはボクに当たってないね…。やっぱり女の子相手だと躊躇ためらっちゃう？」

彼は何度か狭山にナイフを振っている…。しかしその全てがかすってすらおらず、狭山は不思議そうな表情をした。

「どうかな…自分ではそんなつもりないんだけど」

狭山は美紀と胡桃を襲い、自分達の事を殺すと言っている敵だ…。しかし彼女が由紀や美紀らと同じ年の少女だからなのだろうか……。彼は無意識の内に攻撃を躊躇ためらってしまった。

狭山「やる気が今一つ足りてない…かな。じゃあ、キミのやる気出るようにいくつか面白い事を教えてあげる」

「へえ…何か？」

面白い事を教える…。狭山はそう告げたが、彼女のその不敵な笑みを見て彼はそれが面白い事では無いことを察した。実際、直後狭山が放った言葉は面白いどころか、これまで余裕を持って彼女に接していた彼を一気に不快にさせるものだった…。

狭山「言いたい事は二つあるけど、まず一つめ…。恵飛須沢胡桃はボクが殺そうが殺さなからうが、どうせもうすぐ死ぬよ…」

「……………」

彼は一瞬、自分の頭がジリツと熱くなるのを感じた…。これはきつと、目の前にいるあの少女に対しての怒りによるものだろう。ある程度の挑発なら耐えようと思ったが、胡桃の事を言われると我慢など出来なかった。

「お前に…あの娘の何が分かる」

狭山「ボクも少しだけ似たようなものだからね。彼女が感染して、しかもそれはかなり進行してるって事が見るだけでなんとなく分かるの。もしかして…彼女が感染してるって知らなかった？」

「…知っている」

狭山「知ってるのに彼女をそばに置いてたの？次の日の朝、彼女が周りにいる感染者みたくなって由紀や悠里…美紀を襲うって考えなかったの？」

「そんなこと……」

想像するのも嫌な事だが、考えていない訳がない…。胡桃から傷の事を知らされた彼は真っ先にその事を考えたし、それはきつと由紀や悠里に美紀…そして胡桃自身も考えている事だろう。

狭山「あんな生きる爆弾みたいな娘と一緒にいるなんて本当に物好きだね…。噛まれてるって知ってるならとつと殺せば良い。それが出来ないなら、胡桃一人だけ外に追い出せばいいんだ」

「…そんなことは絶対にしない。あの娘は絶対に助ける」

狭山「助けるって…どうするの？」

「治療する方法を探す。見殺しにする気なんて微塵も無い」

狭山「四人もいるんだから、一人くらい死んでもいいのに……」

狭山はボソツと呟き、彼の目を見つめる…。彼女はそのまま彼の目を見つめ、うろちよると辺りを歩き始めた。

狭山「由紀に美紀に悠里…。ほら、胡桃だけ見殺しにしてもあと三人も女の子が残るよ。これだけいれば十分でしょう？」

「…ダメだ。あの娘達は四人揃ってないと意味がない」

狭山「…わがまま、そして贅沢。キミはあの四人全員を守りながら、この世界でのほほんと過ごせると思ってる…。そんなの無理に決まってるのに……」

「無理かどうかなんて最後まで分からない」

狭山「そういう事言われると…分かせてあげたくなるなあ…。自分がいくら守ろうとしても、大切な人なんてあつさり死んじゃうんだって…」

「……………」

狭山「…そうだ。ボクは優しいから、キミだけは逃がしてあげる。彼女達を見捨てて一人で逃げて生き延びなよ。少しの間は一人ぼっちになっちゃうけど、彼女達の代わりも意外とあつさり見つか——」

ガキーンツ!!!

瞬間、雨音の中に激しい金属音のような音が混じる…。それは彼が振り下ろしたナイフを狭山が警棒で受けた音だった。彼は狭山の言葉をこれ以上聞いている事が出来なくなり、一気に接近して攻撃をしたのだ。

「彼女達の代わりなんて、どこを探してもいない」

狭山「ふうん…怒った?」

「……………少し」

会話の途中に攻撃された狭山は彼の顔色を窺いながら尋ねるが、本当は聞かずとも答えは分かっていた。何故なら、彼の今の一撃は防がなかったらかなり危なかったと思わせるほどに殺意が込められていたからだ。

狭山「じゃあそんなキミにもう一つ…良いことを教えてあげる」
ナイフを警棒で防いだまま、彼の目を近くで見つめて告げる。彼はもう十分に戦う気のようなのだが、狭山はあえてこれを告げた。

狭山「実を言うとね、ボクらは前からキミ達の事を探してた。だからキミ達がどこにいるのか探る為に色んな所を調べたりもしてて…つい最近、キミらが境野^{さかの}って人の率いるグループと一悶着^{ひともんちやく}あった事を知った」

「……………」

狭山が何故自分達を探していたのか、どうやって境野との事を知ったのか…その理由は分からない。だがやはり彼女は危険な存在なのだろうと思い、彼は警棒からナイフを離して少しだけ狭山との距離をひらく。

狭山「調べている内に境野さんの隠れ家の場所は分かったけど、何かあそこにはもう誰もいなくてね。でも、中を探ってみて色んな事が分かった…。境野さんが目につけていた一つの屋敷があって、キミ達も少しの間そこにいたってこととか……………」

(こいつ……………まさか…)

境野が目をつけていて、少しの間彼等がいた屋敷と言えば一つしかない…。狭山の口からあの屋敷の話題が出た瞬間、彼の表情が不安げな物へと変わっていく。

狭山「車の中で聞いた時は知らないフリしてたけど、ボクはあの未奈^{みな}って人の屋敷を知ってたんだ。だって…キミ達に会えるかと思っ

て昨日行ってきたばかりだもん」

「あの人達に……………何かしたのか？」
考えたくないが、最悪の光景を想像してしまう…。つい先日別れて

ばかりなのに、また会うと約束したのに……。彼がそんな事を思う中、狭山は微かに微笑んだ……。

狭山「ふふっ……。どうかな？　そう言えば、あの屋敷にいた男の人は強かったなあ……。たしか朝倉あさくらさん……。だったっけ？」

狭山の言う『朝倉』とは、彼等が世話になったあの朝倉誠まことの事で間違いないだろう……。その名前を聞いた彼は再び狭山を切りつけようとナイフを振るうが、それはまたしても警棒で防がれた。

キーンツ!!

ナイフと警棒がぶつかり合い、激しい音が鳴る。彼はナイフに力を込めたまま、目の前にいる少女の事を力強く睨んだ。

「強かった……。つてことは、戦ったって事だよな？」

狭山「ちよつと挨拶しただけだって……。そう言ったら信じる？」
「どうかな……」

狭山「……そうだよな」

次の瞬間、狭山は警棒を振って彼のナイフを逸らし、体勢を崩しかけた彼の腹部へと蹴りを放つ。それを受けた彼は後ろの方へ下がりよろめいたが、それでもすぐにナイフを構え直して狭山を警戒した。

狭山「まあそういう訳だから……。キミがボクを殺す理由は出来たね。ほら、もう躊躇ちゅうちゆつたりしないで本気でやっても良いよ……」

余裕のある表情を向ける狭山に対し、彼も覚悟を決める……。その時、雨音に紛れてまたあの声が彼の耳に入った。

境野『あの様子だと、この女は屋敷にいた連中を殺したかもな。小さい子もいたのに、可哀想な事をするもんだ……』

「…また出てきたのか」

美紀に勇気をもらい、一時は消えていた境野の幻がまた彼の前に姿を現す。恐らく、狭山がああ屋敷に行つて何かをしたと知つた事で自身の心が弱つたのが原因だろう。

境野『さてさて、これはさすがの君も許せないだろう？俺としてはこの女をここで殺す事をオススメする』

降り注ぐ雨が境野の身をすり抜けるのを見て、やはりこいつは幻なのだと確信する。彼はそんな境野を一瞬だけ見つめてから狭山へ向けてナイフを構えると、呟くようにして返事を返した。

「わざわざお前に言われなくても…そのつもりだ」

百十三話 『窮地』

境野 『俺としては…この女をここで殺す事をオススメする』

「わざわざお前に言われなくても、そのつもりだ」

彼は境野の幻にそう答えた後、目の前にたたずむ狭山へ攻撃を始めた。『少し本気になって躊躇いを無くしただけでは自分に勝てる訳がない…』狭山はそう考えていたからこそ彼が本気になるよう挑発したのだが、彼と数分戦った後にその考えは甘かったと後悔する…。本気になった彼は思っていた以上に手強く、徐々に追い詰められてしまっていたからだ。

「っ!!」

彼が狭山へ向けナイフを振る…。勢いよく振られたそのナイフを警棒で防ごうとする狭山だが、その守りは僅かに間に合わずナイフが脇腹に届いてしまう。

狭山 「い…っ!」

ナイフが狭山の肌を切り、脇腹に痛みが走る。思わず声を出してしまふ狭山だが、これを痛がつている暇などない。目の前にいる彼がまた、ギラリと光るナイフを振り上げていたからだ。

狭山 「ぐっ…う」

次の瞬間に振り下ろされたそれを避けるべく、狭山は左方向へ転がるようにして攻撃をかわす。雨で濡れた道路に転がったせいで服はかなり汚れてしまったが、そんなことを気にしている場合ではない。

「まったく、今のは当たると思ったけどな…」

転がって距離をとった狭山を追うことはせず、彼がその場で眩く。彼もここまで連続で攻撃していたのがキツかったらしく、乱れてきた息を整えていた。

狭山（…痛い…。彼の攻撃を受けたのは今ので三度目か…）

狭山は彼の攻撃を防ぎきれず、少し前に右手の甲、そして左足の太ももを切られていた。それらは大して深く切られてはいないよう痛みも少なく、出血も僅かだけ…。しかし今脇腹に受けたものは少しばかり深く、切られた部分の服は綺麗に裂けていた。裂けた衣服の間からは狭山の白い肌が見えているがその一部は直線的に切られ、黒い血がじわっと溢れてきている。

狭山（面白いと思つて挑発したけど、彼の事見くびりすぎてたな…。このままじゃ、ちよつと危ないかも…）

脇腹の傷口を右手で撫で、その手についた血を見つめる…。血は狭山の手のひらを赤く染めていたが、降り注ぐ雨によつてすぐに流れていった。

「さて…もう一頑張りだな」

狭山「凄いな。ほんとに手加減なしだ…」

ナイフを握り直し、彼が少しずつ歩み寄る…。狭山は警棒を構えて迎え撃つ準備をするが、このままでは少々危ないと思ひ始めていた。

境野『順調順調。中々に良い感じだな。さあ、もつと深く切れ。深く突き刺せ。そうすればこの女を殺せるぞ』

境野の幻が彼に向けて囁く。彼が本気で狭山を相手にしているの

が嬉しいのか、その幻はニヤニヤと頬を緩めている。

(こいつの声に従っているみたいで気分が悪いけど…今回ばかりは仕方ない。この女をこれ以上ほっとけば、皆がまた危険な目にあうかも知れないから…)

目の前にいる警棒を持った少女は雨や泥に汚れ、息も微かに乱れていた。長めの前髪からチラチラ見える目も少し力が無くなっているようにも思え、どこか痛々しい。普段の彼ならこんな少女にこれ以上ナイフを向ける事など出来ないが、今回は違う…。この少女、狭山真冬は由紀達にとって危険な存在なのだ。

(美紀さんに怒られるかも…)

『出来るなら真冬を傷付けないでほしい…』美紀にそう言われた事を思い出しながら、彼はナイフを持つ手にグツと力を込める。それで狭山を突き刺そうとし、彼はこの争いを終わりにしようとしたのだが……。次の瞬間、彼は突如強い衝撃を受けて横へと吹き飛んだ。

ドッ!!!

「ぐっ…!!?」

雨に濡れた道路の上に倒れた彼は慌てて立ち上がり、その衝撃の原因を見つめる…。そうして彼が見た先には、一人の見知らぬ男が立っていた。どうやら、先ほどの衝撃はこの男の蹴りによるものようだ。男はスタスタ歩いて狭山の方へと寄り、ボロボロになった彼女をじっと見つめた。どうやらこの男、彼女の仲間のようなのだ。

??? 「危ないところだった…。まさか、お前がたった一人にここまで追い詰められるなんてな」

狭山「圭一けいちさん、ごめんね。ちよつと油断しちゃってて…」

圭一と呼ばれた黒髪のその男：外見から察するに年齢は25〜30ほどだろう。男は深いため息をついたと思うと、今度は彼の事をじつと見つめた。男の目は一見すると気だるそうにも見える目だが、どこか鋭さを感じさせる目だった…。

圭一「この前怪我した左手もまだ治ってないだろ…。そんな状態で無茶するからこうなるんだよ」

狭山「うん…反省する。ところで穂村は？」

圭一「さあな…。アイツと俺は別行動してたから居場所までは知らない。アイツにも連絡したんだろ？」

狭山「一応ね。じゃあ…もしかしたら穂村は先に公園についてるかな」

圭一「かもしれないし、まだ道に迷ってるかもな…」

圭一はそう呟き、横に立つ狭山の事を横目で見つめる。それはほんの一瞬の間だけだったが、彼はその隙を見逃さなかった。

(…今ならっ！)

狭山だけを相手にするのも一苦労なのに、この上更に増援などたまったものではない…。彼は圭一が自分から目を逸らした一瞬の隙を突き、一気に接近してナイフを圭一の首へと振り払った。

…が、そのナイフは圭一の首には届かない。彼はかなり良いタイミングで攻撃したのだが、ナイフは圭一の首まであと二十センチほどというところでその動きを止めていた。圭一の左手が、彼のナイフを持つ手を寸前のところで受け止めていたからだ。

「ちっ…！」

圭一「つたく…。こつちはまだ話している途中なんだがな…」

呆れたように呟きながら圭一は彼の胸に手のひらをあて、力をグツと込めて彼を押し…。それはただ押しただけとは思えないような衝撃を生み、彼を数メートル向こうまで突き飛ばした。

「ぐ…っ!!」

彼は道路の上を何回か転がった後に受け身をととり、直ぐ様立ち上がる。狭山もかなり手強い人間だが、この圭一という男もかなり手強いという事が今のやり取りで理解できた。

(これは…ちよつとマズイな…)

狭山だけならギリギリどうにか出来たかも知れないが、今は彼女の仲間である圭一がいる…。さすがに二対二では分が悪いが今のままでは大した打開策もなく、彼は頭を悩ませた。

狭山「…圭一さん、ごめん。ここは任せてもいい？ボク、さつき逃げた彼女の方が気になっちゃって…」

圭一「構わないが、追い付けるのか？」

狭山「急げば大丈夫だと思う。もし穂村が間に合わなかったらこのまま逃げられちゃうからね」

圭一「…じゃあ好きにしろ。俺はこの少年の相手をしてればいいんだな？」

狭山「うん。ありがとう」

そう言つて狭山は彼女達が向かった方へ体をクルリと回すが、彼はそれを無視できない。ここで彼女を向かわせてしまったら、由紀達の身がまたしても危なくなる…。

「おい待てっ!!」

彼は狭山を止めるべく向かっていくが、圭一が立ちふさがってその行くてを阻む。

圭一「おい狭山、コイツを相手にすれば良いのは分かったが…」

狭山「どこまでやればいい…って聞きたいんでしょ？まあ、彼はもう殺しちゃっていいよ。彼が死ねば、さすがに美紀達も現実を見るようになるだろうし」

圭一「……………わかった」

狭山「じゃ、任せたよ」

そう言い残し、狭山はパシヤパシヤと音を発てながら水溜まりの上を駆けていく。彼はどうにか狭山を止めたかったが目の前に立つ圭一に隙が出来ず、結局狭山の姿が見えなくなっても動けなかった…。

圭一「あいつ、いつもと雰囲気が違うな…。お前、狭山に何かしたか？」

「何かしたかつて？冗談言うな…被害者はこっちの方だ。訳も分からないまま急に襲われてかなり焦ってるよ」

圭一「…だろうな、俺も驚いてる。狭山はお前らを見つけてもそこまで手荒な事はしないと置いていたからな」

先程不意を突かれたからなのか、今度の圭一は彼から一瞬たりとも目を離さない。その表情を見ていた彼には分かるのだが、圭一は狭山の行動には本気で驚いているようだった。

「出来ればあんたにはアイツを止めるか、僕を見逃すかしてほしいんだが…」

圭一「悪いがそれは無理だ。そんな事したら後で狭山のヤツに何を

言われるか分かったもんじやない」

「…じゃあいい。すぐにあんたを退かして、アイツを止める」

圭一「いい返事だ。やれるだけやってみろ」

彼がナイフを手に一歩ずつ迫る。雨に打たれながら徐々に迫る彼を見て、圭一は拳にグツと力を入れた。

~~~~~

一方、キャンピングカーを停めた公園内。

そこにたどり着いた彼女達が辺りを警戒しながら車へと進む中、由紀が道の先を指差した。

由紀「…?!みんなっ、あっちにいるのって…」

美紀「人…ですね」

由紀の指差した方角…そこに立つ人影はどうやら“かれら”とは違うようだが、今このタイミングでここにいる人間という…。

胡桃「くそっ、真冬の仲間か…」

悠里「車はあの先…どうする?」

キャンピングカーまであと少し…。傘すら持っていない人影の立つ場所は十数メートル先だが、まだこちらには気づいていないようだ。雨のせいで視界も悪くなり、周囲の音が聞こえづらいのが幸이었다。一足先に由紀が気付いたのも偶然だろう。



美紀「回り込んでも良いですが、どうしてもあの人には接近してしまえますね…。運が良ければ気付かれないかもですが…」

悠里「万が一気づかれればただじや済まないかも知れない。運に任せて行動するにはリスクが高すぎるわね…」

由紀「……………」

胡桃「…仕方ない。あたしが注意を引くから、みんなはその隙に車へ急げ」

このまま徒歩で逃げる事も出来るが、やはりあの車はこれからも必要になる。胡桃は一人である人影の注意を引くことを提案するが……。

美紀「…何言ってるんですか」

由紀「そんなのだめだよ！」

胡桃「まあ、そう言われると思ってたよ…」

やはり由紀達は賛成しなかった…。こうなるだろうと想像していた胡桃はため息をついて髪を結ぶ一本のリボンを解き、それを羽織っていた上着のポケットにしまう。

由紀「髪…なんで下ろしたの？」

胡桃「ん？ああ…さつき真冬と争った時に片っぱ解けちゃったからな…。片っぱだけ縛ってるとかえって邪魔なんだよ」

一方は狭山と戦っていた際にほどけてしまったので、胡桃は残っていた一方の髪も自分でほどく。そうして完全に下ろした黒髪は長くて少しばかり動きづらいが、片方だけ縛っておくのは落ち着かなかった。

悠里「最悪の場合はあの車を捨てて逃げると彼にも伝えたいし、そうした方が良くしら…」

胡桃「けどあの車には食料から着替えまで全部あるんだ。置いてつたら厳しいだろ」

悠里「確かにそうだけど、無理してあの車に向かって何かあったら…」

あの人影が狭山の仲間だというならば、きっと自分達の敵となる存在だ。そんな人物に捕まろうものなら何が起きてもおかしくない。少なくとも、狭山は自分達を殺そうとしているのだ。四人が雨の中でこれからどうするべきか頭を悩ませていると、辺りから「かれら」がチラホラ姿を現し始めた。

美紀「決めるなら早くした方が良さそうですね…」

胡桃「……分かった。あの車は捨ててこのまま——」

『このままみんな逃げよう…』胡桃がそう言おうとした時だった。彼女達の前方：恐らくはあの人影が彼女ら目掛け、雨音に負けない大きな声で呼び掛ける。声から察するに、あの人影の人物は男のようだ。こちらに現れ始めた”かれら”を警戒しようとしたところ、彼女達の存在に気付いたらしい。

???「おいっ!!その奴等!!!」

由紀「ひっ!?!」

胡桃「くそっ!気付かれた!!」

男の声に反応し、辺りに潜んでいた”かれら”もこちらへと向かってくる。四人は急ぎその場を離れようとしたが、先にいる男は彼女らに歩み寄りながら続いてこう言った。

???「逃げるなって!とりあえず周りの感染者を処分するだけだからさ」

四人のそばに歩み寄ってきたその男は肩まで伸びた長い茶髪が印象的で目付きもキツく、お世辞にも柄が良いようには見えない。ただ辺りにいる感染者をかわしながらこの男の追撃もしのぐのはかなり厳しい為、彼女達は男の言う通りにして仕方なくその場にとどまる。

美紀「辺りの感染者を倒して…そのあとはどうするんですか？」

???「あ？どうするって何が？」

美紀「あなたは真冬ちゃんの仲間なんですよね？なら、私達を殺す事が目的なんじゃ…」

???「真冬ちゃん…ああ狭山先生か。そうだな、俺はあいつの仲間だけど…。なに？お前らあいつに殺されそうなの？」

胡桃「……ああ」

その男を警戒しつつ胡桃は答える。するとその男は辺りにいる数体の感染者を警戒しつつ、どこか驚いたような表情を見せていた。

???「『彼女達を見つけたから手伝え』とは言われけど、もしかして殺しを手伝えって事だったのか…？あの狭山が殺る気満々つてのはちよつと珍しいな」

由紀「お兄さんも…わたしたちのことを…？」

辺りには”かれら”…。そしてすぐそばにはあの狭山の仲間だという男…。それらに囲まれている状況の由紀は微かに声を震わせ怯えたように尋ねるが、男は彼女ではなく”かれら”の事を見つめていた。

???「あ…考え中!!とりあえずコイツら片付けるまで待つとけ!

途中で逃げようとしたらさすがに追うからな？」

悠里「く……っ」

油断は出来ない…。しかし『考え中』だと答えた以上この男は狭山より話し合いが出来る人間かも知れない…。そう思い四人が動きを止めていると男は所持していたナイフを右手に構え、辺りにいる”かれら”の処理を始めた。

由紀「今の内に逃げたりしたら…ダメだよ…?」

美紀「…はい。この状況で全員が逃げ切るのは厳しいですので、ここは大人しくしていた方が良いと思います…。この人はまだ話し合う余地がありそうですし」

四人が緊張して待つ中、男はナイフを片手に”かれら”の頭を突き刺していく。しかしその途中、胡桃がシャベルを手に男の方へと駆け出した。

由紀「ちよっ…!?!」

悠里「胡桃っ!?!」

駆け出した胡桃を見て彼女達が慌てたのは、胡桃がああ男の不意を突いて攻撃をする気なのだと思っただけ…。しかし実際はそうではなく、胡桃は男の背後に迫っていた一体の感染者の頭をシャベルで砕いた。男がその感染者の存在に気づいていないようだったので手を貸したのだ。

??? 「へえ…サンキューな」

胡桃「…目の前で人に死なれるのは嫌だからな」

??? 「お優しい事で。マジで狭山にも見習ってほしいわ…」

仲間である狭山への愚痴をブツブツと呟きながら、男は残った感染者を処理していく。胡桃ももう少し手を貸そうかと考えたが、その必要はないほどに早くそれは終わった…。

??? 「はい、終わりっ！」

最後の一体を倒し、男はニヤリと笑う。辺りに感染者の死体が転がる中、男はその屍を踏まないようにピョンと飛び越えつつ彼女達の前へ歩み寄った。

穂村「普段は初対面のヤツに自己紹介とかあまりしねえんだけどな……。まあアンタらはずっと探してきたターゲットだし特別ってことで……。俺は穂村竜也<sup>ほむらたつや</sup>。狭山の仲間であんたらの敵……。になるのかな？」

悠里「ターゲットってどういう事ですか？」

自らを穂村竜也と名乗ったその男に悠里が尋ねる。この男と出会ったことなどないハズなのに、ずっと探してきたと言われるのは納得がいかなかった。

穂村「ああそれ……。なんつーか……。話すと長いんだよね。だから簡単にまとめると、俺らがあるところに仕掛けたカメラにアンタらが映ったもんで、それきつかけで興味を持って暇潰し感覚でアンタらを探してた。つまりファンみたいなもんだ」

美紀「……ファン？」

穂村の発言はよく分からないが、要約するとこの連中の仕掛けたカメラに自分達が映ってしまい、それからターゲットにされたという事だろう。しかしそのターゲットというのがどうにも嫌な響きで、四人の表情が不安を示す。穂村はそんな四人の顔を順に眺めると、嬉しそうな顔をしてニヤニヤと微笑んだ。

穂村「いやあ……。こうして生で見ると四人ともレベルたけえな……。こんなに可愛い娘ばかりとは思わなかったわ……」

美紀「穂村さんは…私達の敵なんですよね？なら真冬ちゃんと同様、私達を殺すのが目的ですか？」

穂村「…どうかな。敵には違いないけど俺は可愛い娘に弱いし…」頭をかきながらその場でぐるぐると歩き回り、穂村は唸り声をあげて頭を悩ませる。敵だと分かっているが、やはりこの男は狭山より話し合いが出来そうだと思う悠里達だったが…。

穂村「コイツら殺したって何も良いことねえよな…。せっかくの美少女をわざわざ殺す事にメリットはない…：狭山のヤツは何もさせてくれないから、俺も癒しが欲しいしな…：」

歩き回る穂村から嫌な言葉が聞こえ、由紀を除く三人の表情がみるみる青くなっていく。次の瞬間、穂村はピタツと立ち止まって悠里の体をじっ…と見つめた。

穂村「…：スゲエな」

悠里「…っ！」

穂村の視線が自らの胸にいつてると気付いた瞬間、悠里は穂村に背中を向けるように体をそらす。そんな彼女の頬が微かに赤くなっている事に気付いた穂村はまた嬉しそうにニヤニヤと微笑み、手にしていたナイフをしまった。

穂村「あははっ！ヤベエ、アンタらマジで可愛いな！身近な女が狭山しかいなかったから、すっげえ新鮮な気持ちだわ」

一人笑う穂村だが、四人は以前として生きた心地がしない…。命の危機だけでなく、身体の心配すら必要になってきたような気がしたからだ。

穂村「狭山も見た目は良いんだが、無愛想過ぎてからかっても楽しくねえんだよ。良いねえ、楽しい楽しい！」

美紀「こつちには楽しんでる余裕なんてないんです！結局、穂村さん達は私達をどうしたいんですか？」

彼が時間を稼いでいてくれるのに、こんなところで無駄話している暇などない。美紀が少し苛つきながら尋ねると、穂村はまたしても頭を悩ませているようだった。

穂村「ああ……そこだよなあ……。どうすつかなあ……」

雨降る空を見上げながら、穂村は彼女達をどうするべきかと悩む。

そんな中、由紀は不意にある事が気になり声をあげた。

由紀「穂村って……どこかで……」

この男の穂村という名字、これをどこかで聞いた事がある気がする……。由紀がそれをどこで聞いたか思い出そうとすると、悠里が横からその答えを教えた。

悠里「空彦そらひこくんと名字が同じね……」

由紀「あつ、そつか……だから聞いた事があつたんだ」

一時は行動を共にしたあの少年、空彦の名字も穂村だった。由紀がそれを思い出したその時、由紀と悠里の会話を聞いていた穂村がハツとした表情を向ける。

穂村「そーいやあいつのいる学校は巡ヶ丘の高校だったか……。たしかアンタらも同じだったよな……。アンタら、あいつの事知ってるのか？」

美紀「えっ？」

胡桃「あんた、あいつとどうい関係だよ…」  
薄々気づき始めていたが、念のために尋ねる。

次に穂村が返した答えは胡桃達が想像していた通りのものであり、  
四人の表情がまたしてもひきつり始めた…。

穂村「あいつは…俺の弟だ」



## 百十四話『対立』

穂村「あいつは…俺の弟だ」

立ちはだかるその男の発言を聞いた瞬間、悠里達は驚いたように目を見開く。目の前にいるこの男は自らの名を『穂村竜也』ほむらたつやと名乗った…。確かに名字は以前彼女らが行動を共にした少年…『穂村空彦』と同じだが…。

悠里（この人はタイプが彼とはまるで違う…。顔もそこまで似ているようにには思わないけど、本人がそうだというのならそうなんでしょうね…）

空彦の兄だと言うこの男の目は弟とは比べ物にならない程に鋭く、身に纏う雰囲気すらも弟とはまるで違う。しかし本人がそうだと云う以上、二人は兄弟とみて間違いない。…だとすると、今の状況は悠里達にとってかなりマズイ。

美紀（空彦あの人はもうこの世にいない…。それを正直に言えば私達から手を出したと勘違いされて、この人に襲われる可能性もある…。嘘をついてごまかすにしても…どう言えば…）

この男は狭山と違い、自分達を問答無用で襲ってくる事は無さそうだった。だが自分の弟が死んだと聞けば、その態度が一変する可能性がある。雨に打たれる中、それぞれがどうするべきかと頭を悩ませていると、悠里が目の前の男…穂村に向き合った。

悠里「たしかに私達は彼…空彦君と同じ学校に通ってましたが、彼が今どうしているかは知りません。世の中がこんなになってからは会ってませんから…」

こう言うのが妥当であり、皆を守る唯一の答えだと悠里は思った。しかし穂村は彼女が想像していたよりも勘が鋭いのか…強い目線を悠里の目に向け続ける。

穂村「へえ…ほんとに？」

悠里「はい、本当です…」

真っ直ぐこちらを見つめる穂村の目線…それから目を逸らせば怪しまれると分かっている。分かっているが、嘘をついているとどうしても目が泳ぎそうになった。由紀達が黙ってそれを見守る中で悠里がそれを必死に耐えていると、穂村は彼女らの前を歩き回りながら口を開く。

穂村「…あのさ、何か知ってんなら一応教えといてくれない？大丈夫大丈夫、どんな答えでもキレたりしねえからさ」

悠里「……………」

ヘラヘラとした表情で告げる穂村だったが、悠里はそれを信じられず口を閉ざす。馬鹿正直に信じて本当の事を告げた途端、この男は自分達に襲いかかってくる気がしてならないのだ。

穂村「…だんまりっすか」

スツ……

悠里「っ!？」

黙る悠里を見てボソツと呟き、穂村は彼女にそっと手を伸ばす。自

分の方へ伸びてくる手に気付いた悠里がハツとした表情を浮かべ肩をビクツと震わせたその瞬間、そばにいた美紀は我慢できずに声を発した。

美紀「待つて下さいっ!!あなたの弟さんは…っ!!もうっ…」

穂村「……………死んだか?」

美紀「…っ…」

コクリと頷き、美紀は目をギュツと閉じる…。この後どうなるだろうか…。自分が本当の事を告げたせいで男は暴れてしまうだろうか…。冷や汗なのか、雨粒なのか分からないものが美紀の額を伝う。悠里、由紀も美紀同様に焦りのような緊張感を抱く中、胡桃はいざと言う時の為にとシャベルを握り直す。

…だが、そうして警戒する四人が直後目の当たりにした穂村の反応は全く想像していないものだった。

穂村「あららく…。まあアイツじゃこんな世界で生きてけねえだろーなどは思ってたけど、やっぱしダメだったわけか」

自分の弟が死んだと知ったにも関わらず、穂村はヘラヘラした表情を四人に向ける。何故そこまで平然としていられるのか…胡桃はたまらず穂村に尋ねた。

胡桃「平気なのか?弟が死んだんだぞ…」

穂村「俺はアイツと…っ…っか家族と仲悪かったからな。家も別のところ借りて一人で暮らしてたくらいだし、最後に顔見たのだったって何年か前だし。…ってわけだから、大したダメージはないわけ」

胡桃「……………」

悠里「……………」

穂村「ついでに、なんで死んだか聞いてもいいか？ちよこつと気になるんで……………」

由紀「……………」

胡桃「そ…それは……………」

ただ”かれら”にやられただけなら話すことも出来るが、空彦の都合は違う。奴は由紀に手を出したがために、今はここにいない彼に殺されたのだから…。

穂村「気をつかうなって。大丈夫っ！仮にあんたらがアイツを殺したとしても怒ったりしないから！」

ニタニタとしたその表情は嘘をついているようには見えないが、その発言は兄として、人としていかなものか……。そんな事を思う悠里達だったが、下手に嘘をつくよりは正直に言った方が良い…。この男に対してはそれが正解な気がした。

悠里「……………実は…」

胡桃に代わり、悠里が口を開いてあの時の出来事を説明する。かなり簡単に話したためその説明はほんの1〜二分で終わり、穂村は悠里が話し終えるまで口を閉ざしていた。

穂村「…なるほどなるほど。つまりアイツは由紀…あなたに手を出そうとして、それにキレたあんたらの仲間の少年、そいつに殺されたと…」

胡桃「あいつだつて、あんたの弟を殺したくて殺したわけじゃないんだ……。そこだけは誤解しないでほしい」

穂村「ああ分かつて……。にしても空彦もやるなあ……。そんな度胸なんてない奴だと思つてたけど、まさか女の子を襲おうとするなんてな」

まるで笑い話でも聞いたかのように笑う穂村と、それを何とも言えぬ表情で見つめる悠里達……。次の瞬間、穂村はあることに気がついた。

穂村「ん？そんで、アイツを殺つたその少年は？」

美紀「私達を逃がすために、一人で真冬ちゃんの足止めを……」

穂村「一人で？ははっ！そりやまたスゲエ事をする奴だな！狭山相手に一人でとなると、かなりキツイだろ」

悠里「あなたはまだ話し合う余地のある人だと思つています……。だからお願いです……。狭山さんを止めて、彼を助けてくれませんか？……」  
ここまで話してみた感じだと、穂村は狭山ほど自分達に敵意を向けはしていない。この男なら彼女を止めてくれるかも知れないと思い、弱々しい声で懇願する悠里だったが……。

穂村「……わりいな。俺はアンタらの味方じゃない。わざわざ狭山の怒りを買つてまで少年一人助けるのはごめんだ」

悠里「……………く……っ」

こう言葉を返される事も覚悟していたつもりだったが、いざそれが現実になると一気に焦つてしまい、これからどうすれば良いのか分からなくなつてしまう……。それは悠里だけでなく他の者も同じで、それが表情を曇らせた。

悠里（せつかく彼が時間を稼いでくれたのに……。私はそれすらも活かせないの……？このままじゃ、みんな……この人につ……）

自分だけでは由紀、胡桃、美紀を守ることが出来ないのか……。そんな事を思った悠里はその場で顔を俯けたまま、瞳を涙で潤ませる。もうダメかも知れない……。そう感じた瞬間、誰かが悠里の手を握った。

ギョツ……

悠里「……由紀……ちゃん……？」

諦めかけた悠里の手を握ったのは、隣に立っていた由紀だった。彼女は悠里が顔をあげた途端にニッコリと微笑む。しかし彼女も心に余裕がある訳ではないらしく、その笑顔は不安げで弱々しかった。

由紀「大丈夫だよ……。絶対……。どうにかなるから……」

由紀のその言葉は悠里だけでなく、美紀も胡桃も……穂村さえも聞いていた。由紀のその言葉で一瞬だけ心の安らぎかけた悠里だったが、やはり今の状況はかなり悪い……。穂村は狭山を止めて彼を救う気も、自分達を見逃す気も無いと思っていたからだ。

悠里「でも……。どうすれば……っ……」

由紀「……う……」

悠里を安心させたい一心で言った言葉だが、由紀もどうすれば良いかまでは考えていなかったのだろう。彼女はその後何事も言うことが出来ず、苦しそうな表情を浮かべる。その直後だった……穂村が深いため息をつき、自分達のいる公園の奥の方を指さした。

穂村「…あつちに車あったけど、あれアンタらの？」

美紀「はい…そうです」

車を停めた場所は穂村の指さした方向の辺り、まだここから見えないが、恐らく間違つてはいないだろう。穂村は自分が見た車が彼女達の物だと知ると意外な言葉を放ち、それを聞いた悠里達は驚いたように目を丸くした。

穂村「…あの車だけもらつとく。だからとつとと失せろ」

美紀「えっ…？」

穂村「なんだよ…車も奪わないでほしい、とか言わないよな？」

美紀「いえ…。確かに車を失うのは痛いですが…」

それで命が助かるなら、車くらいは仕方ない。美紀達四人は顔を見合わせてから頷き、穂村の顔を見つめる。

胡桃「あんたはそれで良いのか？」

穂村「見たところ結構立派なキャンピングカーだったしな、戦利品としては十分だろ」

胡桃「けど、あんたらの目的はあたし達を殺す事じゃ…」

穂村「それも考えてたけどな…。いざアンタらを目の前にしたらちよつとキツイわ。俺は基本他人に厳しいけど、可愛い娘には甘いんで…」

穂村はそう告げて笑い、驚いている四人の顔を見回す。狭山には後々色々と言われるだろうが、車という大きな戦利品を得たのだ。これまで彼女達を探してきたのも無駄にはならないはずだ。

穂村「つーわけで、とつと逃げろ。じゃないと——」

???「じゃないと……なに？」

彼女らを見逃すべく、厄介者を払うかのようにして手をパタパタと振る穂村だったが、次の瞬間目の前にいる四人の少女：その後方から声が聞こえた。その聞き覚えのある声はいつにも増して不機嫌そうなもので、穂村は深いため息をつく。

穂村「…ちっ……タイミング悪いな……」

本人に聞こえるか微妙な声で愚痴をこぼし、そちらへ視線を向ける。自分が逃がそうとした四人の少女：その後方数メートル先、そこに立っていたのは狭山だった。

悠里「…っ!？」

胡桃「なっ…！お前っ…!!」

美紀「なんで…ここに…」

由紀「うそ…もしかして…」

彼女は彼が足止めしていたはずなのに、今この場にいる…。もしかして彼の身に何かあったのだろうか…：由紀達全員がそう考えて顔を青くしたが、狭山はそれを察して言葉を放った。

狭山「…ああ、彼ならまだ生きてるよ。ボクのもう一人の仲間には手を代わってもらっただけ」

その言葉を聞き一安心する四人だったが、彼女の言う『もう一人の仲間』が誰かを知る穂村からすればそれは全く安心できる言葉ではなかった。

穂村（あらら、圭一さんも来てんのか…。となると、コイツらの仲



間の少年はもう無理そうだな)

狭山「…さて、穂村。なんで彼女らを逃がそうとしたの?」

穂村「タダで逃がす訳ねえだろ。コイツらからは車をもらった。中には色々と物資があるだろうし、十分な戦利品だろ?」

ニヤリと微笑みながら、穂村は然り気無く四人を自分の後方に回す。何故そんな事をしたかというと、狭山の雰囲気がいつもとまるで違ったからだ。彼女は普段からわりと不機嫌そうだが、今はそれと比べ物にならないくらいに不機嫌そう…というより、怒っているようだった。

狭山「…戦利品?なに言ってるの…?ボクらの目的は彼女らを殺す事であつて、彼女らから物資を奪うことじゃない」

穂村「そう言うけどさ、コイツらは全くの無害だぜ?俺達がかれまで殺ってきた奴等と違い、必要以上の抵抗はしない…。なら、適当に物資だけ奪えばオツケーだろ?そりゃ物資一つよこさねえなら殺すけどさ…」

狭山「穂村…キミは何を今さら善人ぶってるの?ボクの知る限りだと、これまでキミは相手が物資を手渡そうが手渡さなろうが殺してきた。なのに…彼女達だけは見逃すつもり?」

穂村「なんだよ…今回はやけに殺る気満々じゃん。お前、いつもはメンドくさがって逃げる奴を追ったりしなかつただろ?なんでコイツらにだけは殺意むき出しなの?」

狭山「…穂村の知ったことじゃない」

穂村と狭山…二人は仲間であるはずだが、由紀達を逃がすか逃がさないかを言い合う内に段々と険悪なムードになっていく。向き合う二人に口を出す事など出来ず、由紀達はその様子を静かに見守っていた。

穂村「…ともかく、俺はコイツらを殺すつもりはない。俺が殺すのはムカつく野郎…それから感染者だけだ」

由紀達を背後に立たせたまま、穂村は狭山へ向けてそう告げる。しかしその言葉を聞いた瞬間、狭山は一度鼻で笑ってから穂村の背後…そこに立つ少女四人の内の一人を指さした。

狭山「じゃあちようどいいや…。その娘…恵飛須沢胡桃は感染してるよ？」

胡桃「……………」

穂村「…マジか？」

狭山に指さされた胡桃はそつと俯き、こちらを覗く穂村の問いには答えない…。そんな彼女を庇うようにして由紀、悠里、美紀は穂村の前に立ちはだかり、事情を説明した。

悠里「確かに胡桃は感染してるけど、噛まれたのは結構前の事で…ワクチンを打っているの！」

穂村「…ワクチン」

美紀「そうですっ！だから先輩は今もこうして私達と一緒にいるんです！普通の感染者とは違いますから…だからっ…」

由紀「お願い…胡桃ちゃんにヒドイことしないで…！」

胡桃「……………」

最悪の場合自分だけを差し出せば、皆はこの場から逃げられるかも知れない。にも関わらずみんなはこうして自分の事を庇ってくれる…。胡桃はそれが嬉しかったが、同時に申し訳なくもあった…。

穂村「……………」

狭山「ほら、感染者は殺すんでしょ？なら…その娘を殺してよ」

水溜まりをパシヤつと踏み、狭山が一步こちらへ迫る…。このままだと胡桃が殺されてしまう…。そう思った由紀は胡桃の腕につかまりながら穂村の目を見つめ、瞳を潤ませながら呟いた。

由紀「お願いだから…………やめて……………」

穂村「……………」

穂村は由紀から視線を外し、悠里・美紀を見つめる。二人もまた穂村を真っ直ぐに見つめたまま、胡桃を守ろうとしていた。

穂村「…はあ、分かった分かった」

由紀「そ、それって…!」

狭山「…なにが分かったの？」

穂村の言葉の意味…狭山はそれを少し苛立ったような声色で尋ねる。すると穂村は狭山の方を向き、真面目な表情を見せながら口を開いた。

穂村「胡桃が感染してるってのは分かった。でもワクチンを打ってるってんなら今すぐに変わったりはしない…。つまり、今ここで殺す必要はねえ」

狭山「…今すぐ変わらなくても、その内変わるでしょ。なら…今ここで殺せばいい」

穂村「そういうのは俺じゃなく、仲間であるコイツらの仕事だ。…それに、ワクチンを打って感染症状を抑えてる人間ってのは珍しい。

百歩譲ってここで見逃すのは止めにするとしても、捕まえて柳さんの実験材料にっるのが正解じゃね？殺すのはナシだろ」

狭山「生け捕りにしてあの人に渡すつもりなんてない…。彼女達は今、ここで殺す。何度も言わせないで…！」

狭山は微かに声を荒げ、穂村…そして彼女らの方へと迫る。すると穂村は呆れたようにため息をついた後、由紀の背をバンっ！と叩いて告げた。

穂村「メンドクせえけど少しだけ時間稼いでやるよ。だからとつと逃げろ。今日の狭山はメチャクチャに機嫌が悪そうだ…」

由紀「っ…ありがとうっ!!」

穂村「いやいや、俺はあの車さえ貰えれば十分だからな。それに…弟がちつとばかり面倒かけたみたいだし？その詫びって事で！」

そう言って微笑む穂村の右手には、彼女達の乗ってきた車のキーが握られていた。どうやら彼女達と会う少し前にあの車へと入り、キーだけを先に手に入れて来たらしい。キーが穂村の手にある以上、あの車は本格的に諦めるしかなかったが…この場から逃れられるだけ良いだろう。

美紀「じゃあ、急ぎましようっ!!」

悠里「ええっ…！」

胡桃「わるい…任せた」

一行は穂村にその場を任せ、足早にそこを去る。当然狭山は彼女らを追おうとしたが、穂村は笑顔のまま立ちはだかつてそれを阻止した。

穂村「カッカすんなって。車と物資をゲットしたんだから良いじゃ

ん！」

狭山「そういう問題じゃ……ないんだよっ!!」

ブンツ!!

穂村に邪魔された狭山はポーチから警棒を取り出し、それを穂村目掛けて振る。穂村はそれを間一髪のところでかわしたものの、見つめた彼女の目がいつになく本気の怒りが込められたものだったので少しばかり苦笑いして焦った。

穂村「おいおい……ほんとにどうしちゃったわけ？いつもクールな狭山先生らしからぬ表情でらっしやるけど……」

狭山「……もういい。こんなタイミングで邪魔するなら、今日こそ……本気でキミを殺すから……!!」

穂村（チツ……厄介だな。マジギレかよ……）

本気の殺意を向ける狭山の前に、嫌な汗が穂村の額を伝う。弟が面倒をかけたせめてもの罪滅ぼしにと思いい由紀達を見逃した穂村だったが、狭山がここまで怒るなら止めればよかったかも……と後悔しかけていた。

## 百十五話 『もう平気』

狭山「っ…!!」ブンツ!

穂村「うおっ!…つぶねえ!」

穂村は狭山が振り払う警棒をかわし、そのまま後ろへと下がって距離をとろうと試みる。しかし一発かわしただけでは狭山の攻撃は止まらず、彼女は続けて二発…三発とその警棒を穂村目掛けて振った。穂村はそれを再びかわしつつ、武器を持つ彼女の右手首を掴む。

…ガシツ!

穂村「どうにかかわせてるから良いものの、そんな攻撃が当たったらすすがの俺もマジで危ねえんだけど…」

狭山「殺す気でやってるんだから当然でしょ。嫌なら早くどいて、彼女達を追えなくなる…!」

穂村「どうして今日はそんなムキになってるのかねえ…まったく…」

狭山の右手を掴み、彼女の動きを止めている穂村は呆れたようにため息をつく。普段、穂村が他の生存者を追おうとすると狭山は『わざわざ追わなくても…』と面倒がるのに、今日はそれが逆転していた。

穂村「ほら狭山先生、一旦深呼吸でもして落ち着こうぜ?仲間同士でいがみ合っても良いことねえし、一応得た物はあつたんだからさ」

辺りに降る雨もまだ止みそうにない…。これ以上服が濡れると気持ち悪いので穂村はとっと家に帰りたいのだが狭山にその気はないらしく、彼女は掴まれた右手に力を入れて振りほどこうとした

がら穂村の事を睨み付けていた。

穂村「暴れるなつて！言うこと聞きなさいっ!!」

狭山「…っ!!いちいちウザイツ!!」

自分は本気で怒っているのに、目の前にいる穂村はまだ冗談混じりな対応を続けている…。それにより一層の怒りを覚えた狭山は掴まれていない左手で自らの腰に着けていたポーチ：そこから一本の小型ナイフを取りだし、それを穂村の下顎へ突き刺そうと振り抜くが…。

パシツ!!

狭山「ちっ…!」

穂村はナイフが届くよりも速く狭山のその左手をあつかりと掴み、また呆れたようにため息をつく…。直後に穂村は掴んでいる狭山の両手の内、警棒を持つ右手の方を離れたかと思うと、空いた手で狭山の首を掴み…

ガシツ：

狭山「う…っ…!!」

穂村「ほんと…いい加減にしろつての…!」

狭山「つぐ…!!」

ドツ!!

穂村は狭山の首、そして左手を掴んだまま彼女をそばにあつた一本の木へと勢いよく押し付けた。首を掴まれたまま一気にそこへと押し付けられた狭山はその木に後頭部を打ち付けてしまい微かに苦しそうな声を漏らす、穂村は首にかけた手を離さない。

狭山「う……うう……」

穂村「このまま思いつきり首絞めてそのまま殺すことだって出来る。だからこの勝負は俺の勝ち。どう？大人しくする気になった？」

狭山の細い首を掴むその手に少しずつ力を加え、ゆっくりと絞めていく……。首と同時に左手を掴まれている狭山は自由に動かせる右手を使い穂村の事を警棒で叩いていたが穂村との距離が近くて十分にそれを振り上げられない事……。そして首を絞められていて力が出ない事が重なり、狭山の右手が放つそれは攻撃とは呼べないほど弱々しいものになっていた。

狭山「う……つぐ……！ん……んっ……！」

穂村「……………」

木に頭を押し付けられ、そして首を絞められながらも狭山は必死に右手を動かす。狭山は少しすると持っていた警棒は邪魔だと思っただのか、はたまた自分の意思とは関係なく手離してしまったのか……。彼女は警棒を雨にぬかるむ地面へと落とし、目の前にいる穂村の体を素手でペシペシと力なく叩いた。

狭山「つぐ……つ……うう……」ペシ……ペシ

穂村「……はあ。なんで諦めてくれないかねえ……」

狭山「だ……つて……」

いつもならこんなにしつこく他の生存者を狙ったりしないのに……狭山は何故彼女達に対してだけここまで執念深いのか。穂村がそんな事を思いながら狭山の事を押さえ付けていると、彼女は途切れ途切れに言葉を発した。穂村は彼女の首を掴むその手の力を微かに弱め、何を言っているのかと耳をすます。



穂村「何だつて？言いたいことがあるなら言ってみろ」

狭山「……彼女達……笑ってたんだもん……。この世界は地獄なのに……”幸せ”だつて言つて……笑つてたんだもん……」

穂村「……それが気に入らねえつて？」

狭山「気に入らないとか……そういう事じゃなくて……ただ、分からせてあげなきゃつて思つた……。この世界に……そんな幸せなんかないつて……」

穂村「……だからつて、そこまであいつらに執着しなくても——」

狭山「穂村に……ボクを止める権利があるの？キミは……ボクの幸せを奪つた張本人のクセに……。ボクが他人の幸せを奪うのは止めるの……？」

力なく目を伏せ、狭山がポツリと呟く……。その言葉は穂村にとつてはかなり苦しい物であり、彼女に握られている弱味でもあつた。

穂村「はあ……まだそれを言うかよ……。つたく……」

仕方なく狭山を掴んでいた手を離し、彼女にそつと背を向ける。狭山は掴まれていた首を自らの右手で軽く撫でながら、そんな穂村の背中を見つめた。

穂村「狭山……さつきお前の首を絞めてこのまま殺すことも出来るつて言つたけど、あれ嘘な。俺はお前を殺せない……一応仲間だからな……」

穂村が背を向けたままの状態で言葉を放つ。狭山はそんな穂村の横をゆつくりと歩き、その通り際に答える。

狭山「穂村がなんと言おうとあの事はずっと忘れないし、許すつもりもない……。圭一さんが加わつたからここ最近は控えてたけど、これからはまた……キミを殺しにかかるから……」

穂村「じゃあ、今やれば？」

狭山「今はダメ：彼女達の方が先…」

狭山はそう告げて由紀達が逃げていった方角へと視線を向け、そのまま勢いよく駆けていく…。一人その場に残された穂村は雨の降る空を見上げながら、そつと目を閉じた。

穂村「稼げた時間は二〜三分程度か…。やば…全然足止めにならないかったな」

由紀達を逃がすべく狭山を足止めた穂村だが、その時間は短かった…。狭山なら逃げた彼女らにすぐ追い付いてしまうかも知れないが……。

穂村（珍しく他人の為に働いてやったんだ…。二〜三分でも十分な仕事だろ。あとはもう知らん……とか思いつつ、気にはなるんだよなあ…）

くくくく

狭山が穂村の元を離れ、逃げた由紀達を追う一方…圭一はその仲間である少年、彼を相手に戦い続けていた。彼は圭一を倒すべく幾度も攻撃を仕掛けてきたが圭一はその全てをかわし、反撃する…。しかし彼もその攻撃をギリギリのところでもかわし続けていき、今は距離をとって互いに息を整えているところだった。

圭一「……ふう。思ったよりしぶといな、お前」

「そつちこそ……」

二人は約5メートルほどの距離を開き、互いの動きを警戒する。両者共、雨に濡れた服で動いているのでいつもより体力の減りが僅かに早い。それでもまだ余力を残していた。

「……聞きたいんだけど、あんたらは一体何者だ？」

圭一「ん？別に……よくいる略奪者のようなものだと思ってくれていい。この世界じゃ珍しくもないだろう？」

「……」

確かに、こうなってしまった世界においてそんな連中は珍しくないのかも知れない。思い返してみればあの境界も略奪者のようなものだ……。しかし今彼の目の前にいるこの男……圭一は少しそれと違う。彼がそう思う理由は圭一の右足にあった。

「略奪者は珍しくないかも知れないけど、足にナイフを刺されて反応しない人間は珍しいな……」

圭一「……？」

彼の言葉を聞いた圭一は自らの右足にそつと目線移す。言われるまで気がつかなかったが、自分の右足の太ももには彼が今手にしている大きめのナイフ……それよりも一回り小さなポケットナイフが突き刺さっていた。

圭一「つ……いつの間に……」

「さっきあなたの攻撃を避けた直後に刺したんだけど、まさかのノーリアクションだから驚いたよ。結構深く刺したつもりだけど痛くない

いのか？」

圭一「いや、刺されたと分かったらジワジワと痛みだした…。まあ大した痛みじゃないが」

圭一はそう答えながら足に刺さっているナイフの柄を掴み、一気にそれを引き抜く。そのナイフは十センチ程の刃渡りだったが、根元までそれを突き刺されていた傷口からは血がダラダラと流れ出ていた。

圭一「面倒だが後で手当てしなきゃな。…にしても痛いじゃないか。言われるまで全く気付かなかった」

「痛いのはあんたの体だろ。普通気付くつての…」

圭一「ああ、違う違う。俺にこんな物を刺した事…それ自体が凄いつて言ったんだよ」

抜いたナイフをそばにある民家の塀の向こうへと投げ捨て、彼がそれを使えないようにする。彼が予備のナイフを幾つ持っているか圭一は知らないが、こうしていけば彼はいずれ丸腰になるだろうと考えた。

圭一（念のため、そのくらいの警戒しておいた方が良さそうだ…。コイツは中々に危なそうだからな…）

これまで色々な生存者を相手にしてきた圭一だが、ナイフを刺されたのは初めての事だった。刺されたのが足だから良かったものの、急所を刺されたらさすがに危ない…。圭一は彼の若さに油断するのをやめ、相応の警戒をすることにした。

「さっきの娘…狭山真冬もそうだ。見た目は普通の女の子なのに、身体能力がやたらと高かった。んで、あんたは足にナイフが刺さっていても動じなかった…。なんだ、変な薬でもやってるのか？」

圭一「…ははっ」

彼は冗談半分で言ったつもりなのだろうが、その発言は当たらずと

も遠からずといった物……思わず圭一は笑い声を漏らし、その問いに答える。

圭一「そうだな…あながち間違いじゃない」

「…マジか」

圭一「これが中々に面白い話でな……俺は一度感染者に噛まれて死にかけていたんだが妙な男に拾われて、命を救われた……。その男が言うには俺はもう感染者に噛まれても平気だそうだし、更に——」

「ちよつと待て！噛まれてたのに、命を救われたって…!」

圭一の放った思いもよらぬ発言に彼は驚き、目を丸くする。ここ男の言葉が嘘や狂言でなければ……。そう考える彼だが、圭一は話を続けた。

圭一「ああ、まあ落ち着いて聞けつて……面白いのはここからだ。俺はもう噛まれても平気だし、更に……」

……ダツ!!

「っ…!!?」

直後、圭一が彼の目の前へと一瞬で間合いを詰める……。あまりに一瞬の出来事、そして直前の発言に驚き、戸惑っていた事もあり、彼はそれに反応しきれなかった……。

圭一「身体能力が…かなり高くなっている」

辛うじて聞き取れたその発言の直後、彼は腹部に激しい衝撃を受けて吹き飛び、後方にあつた塀へそのまま背をぶつける。そうして地面に膝をついてしまった彼は直ぐ様起き上がろうとするが……。

「っ!!ゴホッ……ゲホッ……!!」

起き上がろうとしても上手く息が出来ず、腹部が激しく痛む。どうしたのかと様子を見ても出血はしてないので刺されたりした訳ではない……。ただ、思いきり殴られただけのようだ……。

圭一「今のでもまだ本気で殴った訳じゃない。なのにこのザマだ……」

「ぐ……っ……ゲホッゲホッ……!!」

ただ一発攻撃を受けただけだが、息は整わないし視界も歪む……。起き上がろうと地面に手をつけてみても力が入らず、彼は雨に濡れた地面へ音をたてながら倒れた。

バシヤツ……!!

「………っ……が」

圭一「終わりか。ま、それなりには楽しめたな……」

ポツリと呟き、倒れた彼の方へと歩み寄る。彼がもう限界なようならとつとと止めを刺し、狭山達の元へ戻ろうと思う圭一だったが……付近に気配を感じたのでその足を止めた。

圭一「……そこそこ騒いでたからな、そりや寄ってくるか」

向けた目線の先にはこちらへと歩み寄る感染者が二体……。楽に倒せる数だが、圭一はあえてそうせずに倒れている彼へ背中を向けた。

圭一「お前への止めは奴等に任せよう……。死ぬのが嫌なら、起きて奴等を殺せばいい。もしそれが出来たら……また第二ラウンドという」

「っ……あ……」

言葉ではそんな事を言っている圭一だが、本心では彼が起き上がるのは無理だと思っっているのだろう…。圭一は彼をその場に残し、感染者から逃れるようにスタスタと歩いていってしまった…。

『グア…アア…ッ…！』

倒れている彼を視界に捉え、感染者はそこへと歩み寄る。急いで起き上がろうと体に力を込める彼だったが、どうにも上手くいかない…。

「く…そ…！くそつ…！！」

このままでは死ぬ…急いで立ち上がらねば…。頭では分かっているけど体が思うように動かない。彼はそれでも必死に手を動かし、体を起こそうと試みた。

(あと…少しなんだ…あと少しで…)

彼は目線を地面に向けているが…“かれら”がだんだんと寄ってきている事はその唸り声で分かる。自らの身が窮地にある今…ふと、彼の脳裏に由紀達の顔が浮かんだ。

(…みんなは…逃げられたらどうか…。もし逃げられたなら…もう…)

地面に頬をつけながら、チラツと横の方を見る…。のんびりとこちら目掛けて歩み寄る“かれら”は、あと10メートルもない所まで迫っていた。

(もう……大丈夫かな……。出会う前はあの娘達だけで生きてきたんだ……。元々いなかった人間一人いなくなっても……たぶん……平気だろう……。彼女達なら……きつと……)

そつと目を閉じ、そんな事を思う……。彼は起き上がるために動かしていた手の動きすらも止め、静かに微笑んだ。降り注ぐ雨が地面に落ちる音……”かれら”の唸り声……そして境野の幻が楽しげに笑う声だけ、彼の耳に響いた。



## 百十六話 『守ってあげてね』

『グアアア…アアツ…!!』

「…っ…………ぐ…………」

地面に倒れ、目を閉じた彼の耳に入るのは徐々に近くなる”かれらの唸り声…。そしてもう一つ、雨音に紛れ、聞きたくないあの声が聞こえていた。

境野『おいおい、なんだよ…。たった一撃で終わりか？情けない奴だな。お前はもつとやれる奴だと信じていたつてのに、あんなどこの馬の骨とも分らない男にやられやがって…………』

(くそ…………境野の奴、幻になつてもうるさいな…………)

境野『…まあ、これはこれで面白い展開だな。お前が死ぬところを特等席で見えられるんだから…………』

(…なんともも言え。もう…どうでもいいから…………)

境野『しかし欲を言うなら、あの女達が死ぬところも見えたかったな…………』

(いや、彼女達は大丈夫だ…………みんな強い娘だから…………)

境野『強い娘ねえ…。何言つてんだか…無事に逃げ切るなんて無理に決まつてるだろ。アイツらは所詮ただのガキ…全員すぐに死ぬさ』

「……………」  
彼女達だけは大丈夫…そう信じたまま逝きたいのに、境野の幻が彼の心を寸前の所で不安にしていく。本当に大丈夫だろうか？今も全

員無事だろうか…？色々考える内に怖くなり、彼の体が微かに震えた。

(大丈夫…きつと大丈夫…：胡桃ちゃんだっているんだ…：そう簡単には…)

境野『その胡桃が…狭山真冬とかいうガキと戦ってどうなったか思い出せ。…な？かなり危ないところまで追い詰められてただろう？その狭山真冬が本気で奴等を狙ってるんだ。どんなに頑張つても一人くらいは殺されるだろうな』

(…：大丈夫…平気だ…：彼女達なら…：絶対に…!!)

境野『なら、そう信じたまま死ねばいい…。お前はあの世で誰と会うかな？丈槍由紀か…恵飛須沢胡桃か…若狭悠里か…直樹美紀か…。もしくは全員かもな。もしそうなつたら、俺もそばに行つてお前らをあざ笑つてやるよ…』

耳元でケラケラと不愉快な笑い声をあげる境野。奴に言いたい放題言われているのは腹が立つが、彼は体を動かさない…。

(最後の最後に嫌な事言いやがって…!!くそつ…不安になってきた…)

『アアアツ…!!』

”かれら”もすぐそばに迫る中、目を開いた彼は今一度手を地面につけて起き上がろうと試みる。大丈夫だと信じて目を閉じたのに、境野のせいで由紀達の事が心配になってきたからだ。

「ぐう…っ…!!」

起き上がり、”かれら”を倒してから圭一を止め、そして由紀達を

助けねば……。彼はその手に力を込めるが、やはり上手く起き上がれない……。そんな彼のそばでは姿勢を低くした境野の幻がニヤニヤとした表情で彼を馬鹿にするかのように笑っていた。

境野『さあ、不安に襲われたまま死ね！自分ではアイツらを守れなかったと、後悔したまま死ね!!俺の手を逃れておいて、お前ばかり楽しく生きてられると思うな!!お前も、その仲間も！全員が今日ここで

』

~~~~~

「……………」

騒いでいた境野の声が突如ピタツと止む。いや、境野の声だけでなく、”かれら”の呻き声や降り注ぐ雨の音すらも止んでいた。彼は不思議に思っただけを見回し、その光景に驚く。

「なんだ……………」

先程まで、彼は住宅街の道路の端に倒れていた……。彼が見ていた物は民家の塀や、歩道の端に植えてある幾つかの木、乗り捨てられた誰かの車、そんな物ばかりだったのに……。今はその全てが消えてなくなり、真っ白な世界になっていた。

「やばい、もしかして……死んだのか……？」

何もない真っ白な世界……そして先程よりも軽い自分の体……もしやここは死後の世界か何かなのかと彼が思い込み、そして落ち込んでみると、背後で誰かが呟いた。

??? 「さっきの男の人……嫌な感じの人ね。でも、あなたが自分に自信を持ってればあんなのは見えないはずよ？」

「……？」

声に驚き、彼は振り向く。

そこにいたのは紫色の長い髪を揺らし、その髪よりも少し濃い紫色のワンピースを着た一人の女性。彼女は彼と目が合った瞬間にふつと笑い、目を丸くしている彼の頭に手を置いた。

女性 「警戒しなくて大丈夫。今はあなたとわたししかいないから」

「………」

女性 「あつ、因みにだけど……あなたはまだ生きてるから安心してね。たぶん、まだ……きつと生きてる……ハズだけど……」

「………」

『生きてる』と彼に告げたは良いが、それが確実な情報ではないのか女性はまだだと不安そうな顔を見せる。あたふたとする彼女を間近に見て、彼も呆れた表情を見せた。

「あの……結局僕は生きてるんですかね？」

女性 「たぶん大丈夫っ！でもものんびりしてるのも不安だから急いで話すわねっ!!ええっと、何を言おうと思ってたんだっけ……ああもうっ！時間ないのに……！」

「………」

女性は彼の頭から置いた手を離さず、ただただ一人で慌てていた。女性は少しの間そうした後、自分の伝えたい事を思い出したのか、ハツとした表情を見せて彼の目を見つめた。

女性「あつ、そうそうっ！まず最初に…キミっ！もう死んでもいいやって思っつて諦めたでしょ!？」

「……………まあ」

女性「諦めちゃダメっ！キミはもう、あの娘達に必要な人になっちやっつてるんだから!!」

「あの娘達…?」

女性「そう、あの娘達。言わなくたって分かるでしょう?」

確かに言われなくたって誰の事を指しているのかは分かる。彼が深く関わった人間など、由紀達以外にはいないのだから…。

「由紀ちゃん達か…………。でも、彼女達はもう僕がいなくても…」

女性「そんな事ないわよ…。少なくとも、恵飛須沢さんはあなたにそばにいてほしいって…そう言っつてたでしょう?」

「……………」

彼女の言う通り、胡桃は彼にそう言っつてくれた…。彼はそれを忘れて生きる事を諦めたが、今…彼女のおかげでそれを思い出すことが出来た。しかし、何故彼女はここまで自分達の事を知っているのか…。それだけが分からない。

女性「恵飛須沢さんだけじゃない。丈檜さんも若狭さんも…。それにもう一人の後輩さんだっつて、みんなあなたの事を大切に思っつてる」

「……………あなたは、いったい…」

女性「もう一度がなばれる?彼女達の為に…そして自分の為に…生

きる事を諦めずに立ち上がれる?」

彼の頭を撫でながら彼女は呟く…。その声はとても優しく、聞いているだけで彼の心が落ち着いていった。

「……ああ、まだやれます。あの娘達の為なら命を懸けてでも…」

女性「だからっ、そういうのはダメなのっ!!自分の命も大切にっ!!」
ペシッ!

頭を撫でていたその手で彼の額をペシリと叩き、彼女はムツとした表情で彼の事を睨む。怒っているつもりなのだろうがその表情はあまりに迫力がなく、彼は思わず吹き出しそうになった。

「いてて……分かりましたよ…。これからは自分の命も大切にしつつ、彼女達の事を守っていくことにします」

女性「よろしいっ!……じゃあ、もう諦めちゃだめよ?」

そう言つて彼の頭をもう一度だけ撫でると彼女はその姿をぼんやりさせ、次第にこの空間ごと消えていく…。彼はそんな彼女に手を伸ばして腕を掴もうとするが、それは霧のように消えてしまう。

彼女は腕から体…そして頭が徐々に消えていき、全てが消える瞬間…彼に一番伝えたかった、その言葉を伝えた……。

『ちゃんと守ってあげてね……私の大切な教え子たちだから…』

~~~~~

ドサツ！ドサツ！！

圭一「……？」

自分の一撃を受けた彼はもうこのまま起き上がれない。そう思った圭一は歩み寄ってきた感染者に彼の止めを任せてその場を去ろうとしたのだが、背後から響いた何かの倒れたような音……それに気づいてそっと振り向く。次の瞬間目にしたその光景に、圭一は頬を弛めた。

圭一「……まったく、本当に大した奴だよ」

圭一が見たのは地面に倒れた二体の感染者……そしてその頭に突き刺したナイフを抜きつつ、こちらを見つめる彼の姿だった。彼は感染者の頭からナイフを抜くとニヤリと笑い、一歩ずつ圭一の元へと歩み寄る。

圭一（さつきまでは死にかけに見えたのに、まだ余力を残してたか？……いや、この感じだとそんな事もなさそうだ）

迫る彼の足どりはおぼつかないが、それでも確かに歩いていた。彼は数歩歩いてからピタリと立ち止まると、5メートル程先から圭一に告げた。

「さて、第二ラウンドをする約束だったよな…？」

圭一「正直に言うと言談半分だったんだけどな…まあ約束は約束だ。さて、今度はどちらかが死ぬまでやらなきゃならんそうだな…」

「悪いけど…こっちは死ぬ気ないぞ」

圭一「だろうな…俺もだ」

「……約束は守らないとな」

ポツリと呟くその言葉が何を意味するのか…圭一にはそれが理解できなかった。もつと言えば、立ち上がった彼が何故ここから逃げようとせず、自分に立ち向かうのかも分からない…。

圭一「俺に勝てると思ってるのか？」

「んん、どうだろ……。でも、こうしなきゃあの娘らを救えない」

答えながら彼はニコリと微笑む。なんだか彼の雰囲気は少し変わったような…そんな違和感を圭一は感じた。

圭一「少し雰囲気が変わったな…面白くなりそうだな」

「ははっ、由紀も…胡桃も…悠里も…美紀も…みんなが俺の大切な人で、守っていかなきゃならない人達だ。彼女達を守るためならどんな人間にだって変わる。これからはもう諦めず、彼女達を守ると約束したからな…」

「見知らぬ、綺麗なお姉さんと…」

夢だったのかも知れないし、幻だったのかと知れない…。しかしあ



の女性の後押しがあつたからこそ自分は立ち上がったし、こうしてまた圭一に立ち向かえる。あの女性と会った事で少しだけ強くなれた気がして、彼はこんな状況にも関わらず微笑んだ…。

くくく

一方その頃、逃げ場を求めて進む由紀・胡桃・悠里・美紀の四人。こちらもちらでまだまだ油断の出来ない状況が続いていた。

胡桃「っ…！由紀っ！どけっ!!」

由紀「ひゃっ…!?!」

ザンツ!!

胡桃は由紀の手を引いて後方へ下げた後、現れた”かれら”の頭目掛けてシャベルを振るう。勢いよく振られたシャベルによって一撃でそれを仕留める事は出来たものの、辺りにはまだ”かれら”の姿があつた…。

由紀「ご、ごめんね…」

胡桃「気にすんな。それより、しっかりあたしの後ろにいろよ…：絶対を守ってやるから…!」

雨のせいで微かに視界も悪く、雨音のせいで潜む”かれら”の気配にも気付きづらい…。あの穂村という男に狭山の足止めを任せてからまだ数分といったところだろうが、彼女らは既に数回”かれら”に不意を突かれていた。

悠里「胡桃っ、あまり無理は——」

胡桃「無理でもしなきや生き残れないって!!」

悠里「そうかも知れないけど…でもっ…!」

『アア……ッ!!』

胡桃「くそっ……!」

言い争っている間に、またしても”かれら”がこちらへと向かい歩を進めてくる。これではさすがにキリがないし、何より胡桃の体力が持たない…。美紀はキョロキョロと辺りを見回し、すぐに入れそうな建物を探した。

美紀（……!!あそこならっ……!）

美紀の視界に入ったのは遠方にある一つの建物…。その建物のガラス扉は半開きになっており今すぐ中に逃げ込む事が可能だったため、美紀は先頭に立つ胡桃の背を叩き、全員にそれを伝えた。

美紀「あそこならすぐに逃げ込めそうです!」

由紀「…でも、入り口が開いてるんじや中にもいるんじや…」

美紀「それでも、外で延々と相手をしているよりはマシですっ!」

悠里「……そうね。胡桃、走れる?」

胡桃「もちろんっ!みんな、離れずにいくぞ!!」

一行は胡桃を先頭にそこへと向かい、勢いよく駆け出す。その建物までの距離は数十メートルあったが、胡桃のおかげで行く手を拒む”かれら”もある程度は撃退する事ができ、四人は無事…その建物の中へと逃げ込む事が出来た。

悠里「っ…う!!」  
バタンツ!!

全員が中に入って早々、悠里は開いていたそのガラス扉を閉める。しかしいくら戸を閉めてもこうして入り口付近にいる以上、外からガラス扉越しに自分らの姿が見られてしまう為、出来るだけ奥の方へと進みたいが…。

胡桃「暗いな。誰かライトを…：…：…持ってるわけないか…」

狭山が暴れたのは突然の事だった。なので全員が何も用意せず、慌てて外に出てきてしまっていた。ライトなど持ってるわけもない。当然中も明かりはなく、更に外も雨雲がかかっているせいで薄暗くて光など入ってこない。四人は仕方なく少しの間だけその場に止まり、目を暗闇に慣らしてから慎重に足を動かした。

悠里「そろそろ行けるかしら？」

胡桃「ああ…何かがあったら気付く程度には目も慣れたよ」

美紀「由紀先輩も…大丈夫ですか？」

由紀「ご、ごめん…まだ少し見えないから、手握ってもらってもいい…?」

美紀「…はい、もちろんです」

まだ今一つ目の慣れていない由紀の手を握り、美紀は胡桃と悠里に続いて奥へと進む。彼女自身もそこまで目が慣れた訳ではないのだが、それでもこの建物…というより、今いるこの空間が広いという事は分かった。歩きながら目を凝らして遠くを見ても、奥に壁が見えないのだ。

胡桃「……ここは」

その広さに気付いたのは美紀だけではなく、胡桃と悠里も同じだった。不思議に思った胡桃がピタツと立ち止まった後、悠里はそばにあったテーブル：その上にあつたチラシを手に取る。辺りが薄暗いせいでその全てを読むことは出来ないが、一際大きく書かれていた文字からここが何の施設なのかを知ることが出来た。

悠里「ボーリング場、みたいね……。世の中がこんなじゃなきゃ、沢山の人があつちの方で遊んでたんでしようけど……」

ボーリング場だと言われてから目を凝らすと、確かにレーンのような物がいくつも見える。

美紀「視界を遮るような物があまりない……。運が良かったですね。ここなら、少なくとも”かれら”に不意を突かれる事は無さそうです」

薄暗い空間だが、それでも視界を遮る物の少ないボーリング場に逃げ込めたのは運が良かった。見たところ”かれら”はいないようだし、暫くはここに身を潜められるだろう。ただ、全ての不安が消えたわけではなかった……。

由紀「——くん……大丈夫かな……」

レーンの数メートル手前：本来はボールを投げる順番が来るまで休む為に置かれていたのであろう座席に由紀は座り、そのまま顔を伏せる。他の者もそつと座席に座り込み、由紀と同じことを考えた……。

胡桃「アイツなら…きつと大丈夫だ…」

悠里「だと良いけど…でも、少しだけ…」

『少しだけ不安だ』…そう言いかける悠里だが、彼女は言いきる事なく口を閉ざす。今この状況でみんなをこれ以上不安にさせてはならないと…そう思ったからだ。

美紀「どうしても心配なら、助けに戻るのもありだと思います…」

由紀「っ!!じゃあさ、今から——」

胡桃「助けに行っただとして、あたしらに何が出来る…? アイツがせっかく稼いでくれた時間なのに、それをわざわざ無駄にするような事出来るかよ……」

由紀「う……っ…」

美紀の提案に乗りかけた由紀だが、直後に胡桃が放った言葉を聞いてまた顔を伏せてしまう。少々冷たい言い方をしてしまったかと胡桃は後悔したが、みんなを守るためには仕方がないと思った…。

美紀「…由紀先輩、あの人なら大丈夫ですよ」

落ち込んでしまっている由紀を慰めようと、美紀は彼女の背を撫でる。由紀は少しずつ顔を上げて美紀の目を覗き込み、弱々しいながらも笑顔を見せた。

由紀「そうだよね……みーくん、ありがとう」

美紀「…いえいえ」

由紀の笑顔を見た美紀は応えるようにして笑顔を返す。すると直後、美紀は自らの手が温かくなるのを感じた。何かと思つて目線をそこに移すと、由紀が優しく…彼女の右手を握っていた。

由紀「わたしの方が先輩なのに…情けなくてごめんね」

美紀「そんなこと…ないです」

力なく呟く由紀の手を握り返す。すると由紀もその手に込められていた力を強め、二人は互いの手を強く握り合う。こうしていると少しだけ、不安が紛れる気がした…。

悠里「とりあえず少しの間はここに身を潜めて、ある程度の時間が経ったら昨日寄ったマーケットに向かいましょう。彼も無事ならそこに向かっているはずだから」

胡桃「ああ…そうだな…」

美紀「分かりました…」

悠里「……………」

何にせよ、少しの間はここで時間を潰さなくてはならない。悠里はここでどう過ごそうかと考えながら、そばに座る胡桃の事を見つめた。少しの間とはいえあの狭山真冬と戦った彼女はいつものツインテールがほけてしまっており、羽織っているジャージも酷く泥に汚れている。更によく見れば、腕や太ももにいくつかの擦り傷が出来ていた。

悠里「胡桃…怪我してるじゃない」

胡桃「…ああ、平気だよ。痛く……ないし」

悠里「だとしても…私…」

顔を俯けたまま、どこか自棄になっているかのよう呟く胡桃…。体中に傷や汚れをつけたまま答える彼女を見ているだけで、悠里の胸がズキズキと痛んだ…。『彼女はいつもこうして戦ってくれるのに、自分は何も出来ない…』そんな事ばかりを考えてしまい、胸の痛みがどんどん増していく。

悠里「ごめん…なさいっ…」

胡桃「なんで謝るのさ…」

悠里「だって、私がつと強ければ…」

胡桃「…いいんだよ、りーさんはりーさんのままで」

状況が状況だからだろう…。悠里もかなり精神的に弱っているらしく、声が震えていた。胡桃はそんな彼女の頭にポンツと手を乗せ、ニッコリと微笑む。悠里はその笑顔を見て少しは安心したのか、微笑かに笑っていた。

悠里「ありがとね…胡桃。私達…これからもみんな一緒に——」

悠里が笑顔のまま言葉を放とうとした、その時だった…。

彼女らがつい先程入ってきた入り口…そのガラス扉が開かれたような、ギギイツ…という音……それがその場にいた全員の耳に届いた。

胡桃「っ!？」

由紀「な、なにっ?」

悠里「…かれら」が入ってきたのかしら…」

もしかしたら外にいた”かれら”の内の数体が偶然にここへと入り込んで来たのかも知れない…。入ってきたのが仮に二〜三体程度なら胡桃一人で対処出来るだろう。

美紀「……………」

美紀はグツと目を凝らし、そちらの方を見つめる。入ってきた影は一つだけ…これならどうにか出来ると安堵しかけたが、その影の正体に気付いた途端…美紀は冷や汗を流した。

美紀「うそ……どうして……？」

悠里「っ……………」

胡桃「マジかよ……………くそっ……！」

由紀「……………」

このまま身を潜めていようかとも思ったが四人は現れたその人物と即座に目が合ってしまった、隠れるのを諦める……。その人物は四人の方へツカツカと歩み寄り、それぞれに冷たい視線を浴びせた……。

狭山「もう、逃がさないから……………」



## 百十七話『覚悟』

狭山「もう…逃がさないから」

薄暗いボーリング場へと逃げ込んだ由紀達…。ここにいれば少しの間”かれら”から逃れる事が出来ると思っていたが、狭山が来るのは想定外だった…。何故なら、彼女はあの穂村という男に邪魔され、足止めをくらっていたはずなのだ。

美紀「どうしてここに…あの男の人、穂村さんは…？」

狭山「…道を開けてくれたよ。一応、穂村はボクの事を仲間だと思ってるからね…。ボクと殺し合ってまで君らを逃がす必要はないって思ったんじゃないかな」

美紀「それにしたって早すぎる！この短い間に、私たちは結構遠くへ逃げたつもりなのに…」

美紀はもちろん、胡桃や悠里も自分達の目の前に狭山がいるということが未だに信じられない。自分達は穂村が稼いだ数分間ずっと、狭山から逃げるべく雨降る外を全力で駆けてきたのだ。だということに何故狭山はこうもあつさりとその場所にたどり着いたのか…それだけが理解できない。

狭山「ボク、隠れた人を見つけるの得意なんだ…。それにほら、君らを通った道には…感染者の死体が倒れてたしね…。ダメだよ胡桃…みんなを守るためだっていうのは分かるけど、倒しすぎるとただの道しるべになっちゃうから…」

胡桃「っ…！」

ここに来るまで、胡桃は自分達に襲いかかってきた”かれら”を倒してきた。しかしそれは必要最低限の数を倒しただけでほんの数体のはず……それを辿られて自分達の居場所がバレるなど考えもしなかった。

狭山「ま…運が良かったっていうのもあるけどね。途中の道を一つ間違えてもすれば、そのまま君らのこと見失っちゃただろうから」  
狭山からすれば彼女らに追いつけた事は幸運だろうが、由紀達からすればそれは不運以外の何物でもない…。またこうして、自分達のことを殺そうとする人間に追いつめられたのだから。

由紀「みんな……どうしよう…」

悠里「どうにかして逃げましょう…。きっと隙が……」

狭山「ボクに隙があったとして、もう全員で逃げるのはムリだよ。全員が全力で逃げようと努力したところで走る早さとか体力の多さとか、色々なところでそれぞれの差が出る。つまり…逃げ遅れてボクに捕まる人が絶対に一人はでるってこと」

狭山がその気になれば彼女らとの距離を一瞬で詰めて即座に襲えるが、今はあえて一歩しか距離を詰めずにニヤリと笑う…。確かにこの薄暗い空間の中、全員が全員逃げ切るのは不可能に近いだろう。

狭山「胡桃は運動神経いいから、逃げ切れるかもね。見たところ危ないのは由紀かな？走るのが得意そうには見えないし」

由紀「………」

薄暗い空間の中にも、狭山がこちらをじっと見つめているのが由紀には分かった。その視線に恐怖を感じた由紀が微かに肩を震わせると、誰かが彼女の背をそつと撫でる…。由紀を安心させるべくその背を撫でていたのは、強がっているように微笑む美紀だった。

美紀「誰も逃げない…。誰も死なせない…。私達は、みんな一緒にあなたから逃げきる。逃げきってみせる…！」

狭山「……………」

悠里「ええ…そうね…」

悠里は美紀の発言に賛同し、少しだけ微笑む。それを見た由紀も力がないながらも笑顔をつくり、美紀の手をギュツと握った。しかしそんな中、未だ緊張の面持ちを微塵も解かない者が一人…。狭山はそれにいち早く気が付き、不気味にクスクスと笑う。

狭山「…ふふふつ、美紀たちは状況の悪さが分かってないみたいだけど、胡桃は分かっているみたいだね」

胡桃「……………」

胡桃は返事を返さない…。僅かな時間とはいえ、狭山と直に争った彼女だけが狭山の実力を分かっていた。『いくら隙を作って逃げようとしたところで、全員が逃げきるのは絶対に無理だ…。きつと、誰かが犠牲になる』そんな考えが胡桃の頭にこべりつき、離れようとしな

悠里「……………胡桃」

胡桃「リーさん……………どうしよう……………このままじゃ、きつとムリだ…」

悠里「っ…！」

怯えたように震えている胡桃の声…。彼女のこんな声を今まで聞いたことがなかった悠里は、それだけでこの状況がどれだけ最悪なのかを悟る。いつもは率先してみんなを引っ張る彼女がこんな状態になってしまうとは…本当にマズイのかも知れない。

悠里（どうにかして狭山さんを止めなきゃ……本当に誰かが……）  
きつかけは何でもいい、自分がどうにかして狭山を止めなければと  
焦った悠里が口を開こうとする。しかしそんな彼女よりも一瞬速く、  
美紀が口を開いた。

美紀「なんで私達のことを追うの？私達があなたに……真冬ちゃんに  
何かした……？」

狭山「いや……何もしてないよ。でもね、今はたとえ何もしてなくて  
も襲われたり、誰かが殺されたりするのが普通の世界なんだよ。知ら  
なかったでしょ……？」

美紀「じゃあ……真冬ちゃんは特に理由もなく私達のことを……」

狭山「そこはちょっと違う……理由ならあるよ。ボクは君達に現  
実つてものを教えてあげようとしてるだけ」

美紀「現実？」

狭山「そう……。君達は世の中がこんなになってもみんなヘラヘラ  
と笑いあって、仲良しごっこを続けてる。『幸せだ』なんてバカなこと  
を平気な顔して言えるほどにね……」

狭山の発言の意味が今一つ理解できぬまま、時間だけがのんびりと  
過ぎていく。『幸せだ』と言うことの何が間違っているのか……美紀  
を初め、由紀や悠里も狭山が何故ここまで自分らに迫るのかと必死に  
頭を悩ませたが、その答えは分からなかった。

悠里「あなたが何故私達にこだわるのか、まるで理解できないわ……。  
私達はあなたに言われなくなっただってこの世界の厳しさは知っているし、  
現実だつて見てるつもりよ」

狭山「見てない……理解してない……。だから教えるって言ってるの  
………一番、効果的な方法で……」

狭山の声色が冷たいものへと変わり、更に一步……こちらへと近寄

る。そんな彼女の足音に由紀達が警戒した次の瞬間、彼女は右腕を真つ直ぐこちらへと伸ばし、その人差し指で胡桃の事を指さした。

狭山「一か八か全員で一斉に逃げるか……胡桃一人だけを差し出して見逃してもらうか……。選ばせてあげる……」

放たれた狭山の言葉……。彼女が言うには胡桃さえ差し出せば他の者は見逃すそうだが、そんな提案をあつさり受けられる訳もない。

悠里「なっ……！ふざけないで!!」

由紀「胡桃ちゃんだけを見捨てるなんて、そんなの出来るわけ——」  
狭山「じゃあみんなで逃げてみる？ボク、最低でも二人くらい殺せる自信があるよ。二人殺されるより、胡桃一人だけ見殺しにした方が良いでしょ？あとの三人は生きのびられるんだから……」

美紀「真冬ちゃん……いい加減にっ……!!」

美紀にとつて大切な先輩であり、友達でもある胡桃を見捨てると告げる狭山が信じられなくて、美紀は彼女の事を睨み付けた……。しかし狭山はその睨みに動じるところか、逆に美紀の事を冷たく睨み返す。

狭山「キミ達は胡桃が感染してるって知ってるんだよね？なら、胡桃はもうすぐ死ぬって事も分かってるでしょ……。それとも、美紀達は平和ボケし過ぎてそんな簡単な事も分からないのかな？」

美紀「ッ!!」

悠里「あなた、なんでそんなっ……!!」

美紀だけでなく、悠里もその発言には腹を立てた。二人は強く狭山の事を睨み付け、そのまま彼女の前へ足を運ぼうとすらししたが、そんな時……誰かが啜り泣くような声が聞こえた……。ハッと我に帰った

美紀、悠里が振り向くと、由紀が顔を俯けて泣いていた…。

由紀「っ…………ぐ…………う…………うっ…」

美紀「…………」

悠里「…………」

二人が声をかける事すら躊躇ってしまふほど、由紀は悲しそうに泣いている。由紀は溢れる涙を両手で必死に拭いつつ、その顔を上げて狭山の目を見つめた。

由紀「もうイヤだよ…………殺すとか…死ぬとか…………これ以上言わないで…………。わたしはこれからも胡桃ちゃんと…………みんなといたいよ…」

狭山「……………」

泣いている由紀を見ても狭山は表情を変えず、ただ無言のまま立っている。美紀と悠里は由紀の背をさすって落ち着けようとしていたが、胡桃は狭山同様無言のまま立っているだけ…。自分の背後で涙を流す由紀の方へ振り向くことすらせず、ただじつと立っていた。

狭山「…胡桃はどう思うの？キミはこれからもずっと、彼女達と一緒にいられると思ってる…？」

胡桃「あ…たしは……………」

小さく呟き、胡桃はそつと由紀の方へと顔を振り向ける…。彼女はそうしてから由紀の頭をそつと撫でると、ゆつくりと深呼吸してから狭山へ尋ねた。

胡桃「ほんとに…みんなは見逃してくれるのか？」

美紀「!?胡桃先輩っ!!」

悠里「胡桃っ！何を言っつて——」

胡桃「こうするしかないからっ…………！あたし一人で済むなら…それが

一番だろ…？なあ真冬、あたしさえ殺せれば、あとのみんなは見逃してくれるんだな？」

胡桃はその言葉に驚く美紀と悠里を突きだした手で制し、もう一度狭山に尋ねる。由紀はそんな胡桃の背中を見て、ただ呆然ぼうぜんとしていた…。

狭山「うん。キミが率先して犠牲になつてくれるのなら、あとの娘は見逃してあげる…。とりあえず一人でも失えば、この世界の厳しさが多少は理解できると思うから」

胡桃「わかつた…。それと、見逃すのはここにいる奴だけじゃなくて…アイツも入れてほしい」

狭山「アイツ…？ああ、圭一さんが相手してる彼だね。分かつた、キミが死んだあとで圭一さんに連絡して、彼を見逃すように言つてあげる。まあ…その時まで彼が生きてれば、だけどね」

じゃあ、彼の為にも早いところ済ませなければ…。胡桃は持っていたシャベルを美紀にそつと渡すと、そのまま彼女の頭を撫でてにっこりと笑つた。

胡桃「みんなの事とか…アイツの事とか…全部頼むな？」

美紀「な…？…」

諦めきつたかのような胡桃の笑顔…その力ない表情を見てしまった美紀の目には涙が浮かび、胡桃からシャベルを受け取った手が震える…。そばでその様子を見ていた悠里は胡桃の手をガシツと掴み、離そうとしなかつた。

悠里「くるみっ!!ダメだから…そんなの絶対許さないからっ!!」

胡桃「…ごめん、こうするしかないんだ」

悠里「そんなっ…!だって…彼も、私達も…あなたを助けるため

につ……」

ここ数日：胡桃の感染症状を治す手掛かりを見つかるべく外をまわった。彼女を助けるためにそうしてきたのに、ここで彼女が犠牲になるなど許せるわけもない。悠里はそれを涙声でうったえるが、胡桃の気持ちは決まっていた…。

胡桃「ほんとはさ、もうどうあがいてもムリだつて分かってたんだ…。でも、だからといってそのまま死ぬのも怖くて…：そんな時、アイツがあたしを助けるために外に出るって言うってくれたから…：あたし、それに甘えちゃったんだ…」

悠里「つ………」

胡桃「アイツだけじゃない…：結局みんなまでついてきてくれる事になつてさ、あたし…：すごく嬉しかったよ。由紀も、美紀も、リーさんも…：本当にありがとう…」

胡桃は悠里に掴まれていた腕をそつと振りほどき、直後にそれぞれの肩を撫でていく…。悠里、美紀…：そして由紀の肩に手を当てていった胡桃はまたニツコリと微笑み、狭山の方へと体を向けた。

胡桃「アイツにも伝えといて…：『助けるって言うてくれてありがとう。本当に嬉しかったよ』って…」

悠里「く…：るみいつ…」

由紀「やだ…：やだあつ…：！」

悠里と由紀…：二人は狭山の方へ向かう胡桃を掴み止めようとするが、彼女はそれを避けて進んでいく。胡桃の進む先では、狭山がどこからか取り出したナイフを手にして待ち構えていた。

狭山「大丈夫、痛くしない…：一瞬だから」



胡桃「…そうかよ」

狭山と胡桃の距離はみるみる縮まり、あと5メートル程しかない。進む胡桃を止めなければと理解しているのに、悠里と由紀は金縛りにあったかのように動けなかった。

胡桃（これで良いんだよな……仕方ないもんな……）

心の中で自分に言い聞かせながら一歩ずつ進む。確かに死ぬのは怖い、みんなの為だと思ふと不思議とその恐怖も和らぐ。こうすることがベストな選択なんだ……。そう信じて進む胡桃の手を……誰かが力強く掴んだ。

ガシツ!!

胡桃「っ……美紀、離せよ……」

胡桃の腕を右手で強く掴む人物……それは美紀だった。美紀は胡桃が先ほど手渡したシャベルを左手に持ったまま、じつと彼女を見つめていた。

美紀「ワガママばかり……ふざけないで……!!」

胡桃「…えっ?」

美紀の言葉が自分に向けられたものだと思い、驚いた胡桃は一瞬目を丸くする。しかしその言葉は胡桃ではなく、狭山へ向けられたものだった。

美紀「現実を見てないからだとか、この世界の厳しさを教えるためだとか……そんなふざけた理由で胡桃先輩は殺させない……」

狭山「なら他の誰かが死ぬだけだよ……それでもいいの?」

美紀「誰も殺させる気はないよ……。でもどうしてもって言うなら、

その時は私を殺せばいい！」

胡桃「!?お前つ、なに言っただよ!!」

美紀の発言に驚いた胡桃は彼女の肩を掴み、由紀達の方へ押し退けようとする。しかし美紀はそれに負けじと胡桃の手首を掴み、持っていたシャベルを彼女に無理矢理返すかのようにして押し付けた。

美紀「真冬ちゃんだけじゃない、胡桃先輩もふざけた事を言い過ぎですっ!!自分の事を簡単に諦めたり、かと思えば私にみんなの事をまかせるとか言ったり……冗談じゃありません!!」

胡桃「っ……!お前つ、あたしが自分のことを簡単に諦めたと思ってるのか?そんなわけねえだろっ!!すごく……すごく悩んだけど、もうこれしかみんなを助ける方法がないんだよ!!」

美紀「そんなのまだ分からないっ!!あとこのシャベル、私には重くて使えませんから……!先輩にお返ししますっ!!ほら、はやく受け取って下さい!」

胡桃「なっ……!?!」

何か言い返さないといけないのに、胡桃は美紀の気迫に押されて言葉が出ない……。彼女がここまで自分に強く言葉を放つことなど今までなかったから戸惑ってしまったのだろう。気づけば胡桃はシャベルを受け取り、何も言えずに立ちつくしていた。

狭山「つまり……美紀は胡桃の代わりに死んでくれるの?」

美紀「最悪の場合は、そうなると思う……。でも、私だってただ殺されるつもりはない……。だから由紀先輩もりーさんも、そして胡桃先輩も……静かに見守っていて下さい」

由紀「……みーくん」

心配そうにこちらを見つめる三人へ笑顔を返し、美紀は狭山のそばへ歩み寄る。彼女は狭山の間合いへ臆おくする事なく進んでいくと、そのまま正面に立ち止まった。

狭山「じゃあ、覚悟はいい…？」

美紀「…少し待つて。私、真冬ちゃんに…：ううん、真冬に言いたい事があるんだ。大した時間はとらせないから、ちよつといいかな？」

狭山「……………」

この時、狭山は有無を言わず美紀の事を刺すことも出来た。なに何故そうしなかったのか…。もしかすると、美紀とは学年も同じだし、雰囲気もどことなく自分と似ているから甘さが出たのかも知れない。

狭山「…ちよつとだけだよ」

狭山が答えると美紀はこんな状況にも関わらずペコリと頭を下げ、それから静かに口を開いた…。

## 百十八話『ともだち』

「はあっ…はあっ…ああ、さすがにしんどい…」

圭一「もうギブアップか…。いや、よくやった方だな」

雨降る中、目の前で息を整える彼を相手に圭一は眩く。彼は一度ダウンしてからも起き上がり、この数分間粘ってきたのだ。とつくに体力の限界が来ていてもおかしくないだろう。

「まだギブアップじゃない…。もう少し、アンタには付き合ってもらおう」

圭一「…本当によく粘る。お前ほどしぶとい奴は見たことがない」  
「それはお互い様だ」

ナイフを構え直し、彼はニヤリと笑う。圭一もそれにつられて笑顔を見せたその時、突如圭一がピクリと眉を動かした。どうやら持っていた無線機に連絡が入ったらしい。

圭一「ああ、わるい…ちよつといいか？」

「……………自由だ」

この戦いは出来るだけ早く終わらせたいが、この男が相手では無闇に襲い掛かっても返り討ちにされるだけ…。ならば今ここで微かな時間を与え、自分もその間は休み、息を整えた方が良く。彼はそう考え、圭一がその無線機に応答するのを静かに見ていた…。

圭一「…なんだ？」

圭一は一方の耳にはめていたイヤホンを指先で押さえ、連絡相手の

声を聴く。マイクのような物は見られなかったが、圭一の首についている黒いチョーカーのような物：それをよく見ると、何やら細いコードのような物が繋がっていた。もしかするとあの中にマイクが内蔵されているのかも知れない。

圭一「……………ああ…それで？」

「……………」

圭一「……………わかった、それでいいんだな？」

圭一の連絡相手の声は彼に聞こえないため、どんな会話を交わしているのかが今一つ掴めない。もしかして、由紀達の身に良くないことが起きてしまったのでは…そんな考えが浮かび始めた時、圭一が彼に向けて言った。

圭一「…決着がついたそうだ」

「な……………決着…？」

圭一「ああ。狭山はお前の仲間達との戦いを終えたそうだ」

(終わったって……………まさか)

圭一が通信していた相手は恐らくあの少女：狭山真冬だろう。なら、彼女は今も確実に生きている事になる。その彼女が『決着』などという言葉を出したということは……………由紀達は？それを考えた途端、彼の頭は真っ白になった…。

~~~~~

場面は変わり、圭一が彼に決着を告げた十数分前……。廃墟同然のボーリング場内にいる由紀一行、そして彼女らを追いつめた狭山へと移る。

美紀「私、真冬ちゃんに……ううん、真冬に言いたい事があるんだ。大した時間はとらせないから、ちよつといいかな？」

狭山「……ちよつとだけだよ」

胡桃の命だけ差し出せば他の全員を見逃すと狭山は言い、胡桃はその提案に乗ろうとした。しかし美紀はそんな胡桃を手で制し、自らが狭山の前へと立つ。狭山にとって美紀を殺すのは容易いことだったが、最期に彼女の“言いたい事”というものだけ聞いておこうと思った。

狭山「ただの時間稼ぎだったら怒るからね」

美紀「違うよ。だいたい、時間稼ぎなんてしても意味ないし……」

狭山「……そうだね」

もう追い詰めるところまで追い詰めたのだ。いくら中身の無い会話で時間を稼ごうとも意味など無い。それは狭山だけでなく、美紀も理解しているようだった。

美紀「じゃあ、さっそく言わせてもらおうね…」

狭山「…どうぞ」

すぐ目の前まで迫った美紀…。狭山は念のために彼女の動きを警戒したが、おかしなところは見られない。どうやら彼女は本当に話が見たいだけらしい。

美紀「真冬は…私たちが現実を見てないって言ったよね」

狭山「うん、言ったよ…。君達は現実を見てない。嫌な事、辛いことから逃げて…現実から目を逸らしてる。だから幸せだ、なんて事が言えるんだよ」

狭山は彼女らと出会ってばかりの時に見たその笑顔…そして美紀と胡桃が言った”幸せ”という言葉を思い返す。もし彼女達がこの世界の過酷な現状と向き合っているならあんな顔で笑える訳がない…幸せだなんて言える訳がない。狭山はそう思っていたのだが、美紀は彼女の顔を真っ直ぐに見つめて言った…。

美紀「たぶん…現実を見てないのは真冬の方だと思う」

狭山「え…っ…?」

一瞬、彼女の言葉の意味が理解できなかつた…。自分はこの世界と真っ向から向き合っている。現在と向き合っている。現在を見てないのはどう考えても彼女達の方なのに…。そんな思いが狭山の頭を駆け巡り、彼女は目を丸くした。

狭山「どういう…意味？」

美紀「言葉のままだよ…。現実を見てないのは私たちじゃなく、真

冬の方だと思いつて言ったの」

狭山「……………」

グツ…ツ……………」

その言葉に戸惑う狭山に対し、美紀は冷静な口調で告げる。その態度が腹ただしくて、狭山のナイフを持つ右手に力が入った。

狭山「あは…は……………話…聞かなきゃよかつたなあ…。イライラしちゃった…」

左手で前髪をガシガシとかきむしり、狭山はナイフを持つその右手をゆらつと動かす…。このままでは美紀が危ないと思い、胡桃たちが動こうとしたその時…美紀が更に言葉を放った。

美紀「私だつてイライラしたよ…。毎日毎日、必死に頑張つて…あがいて…そうして生き延びてきたのに、現実を見てないなんて言われたんだから」

狭山「だつて…!! 本当の事でしょ!!」

怒鳴るようにして答える狭山。これまでクールな印象だった彼女の怒鳴り声を聞いた事により由紀達は驚いたが、美紀だけは一步も退かなかつた。

美紀「私たちの何を見てそう思ったの!!? ただ笑つてたから!? 幸せだつて言ったから!? それだけで…それだけの事で…私たちが現実を見てないと思つたの!?!」

狭山「ツ…!!」

悠里「……………美紀さん」

狭山が怒鳴つた直後、美紀はそれに応えるように怒鳴り返す。これほどに美紀が怒つているところ…怒鳴つているところを見たのは、仲

間である由紀達ですら初めてだった。

美紀「嫌な事や辛いことから逃げてるって…本当にそう思ってるの…？逃げられるなら、逃げたいよ…。周りの事とか、胡桃先輩の傷の事とか…全部から逃げたいよ…。逃げて何も考えず、一人でいられたら…すごく楽だと思うよ」

胡桃「……………」

弱音にも似た美紀の言葉を聞き、胡桃は唇を噛みしめる。自分の身体が彼女にも負担を与えてしまい、悩ませてしまっていると思っただからだ…。

美紀「でも、逃げてもただ楽になるだけなんだよ…。何の負担もなく、毎日を生き延びさえすれば良い…。でもそれじゃだめなんだよ。どれだけ辛くても、大変でも…みんなと一緒にいなきゃ…」

狭山「一人になりたければなればいい…！ボクに言わせれば、今こうして彼女達と群れて、ヘラヘラと笑い合っていることの方がよっぽど逃げてるように見える!!」

美紀「それは違うよ…私がみんなと一緒にいるのは逃げてるからじゃない…。前を向いているからだよ」

真っ直ぐな視線を向けながら美紀が言う。しかし狭山には彼女の言葉の意味がまるで理解できず、頭の奥がズキズキと痛んだ…。

狭山「ペラペラと…意味が分からないっ…」

美紀「…真冬は、もうこの世界に幸せなんてないって…そう思ってるの？」

美紀の言葉を聞き苛立っていく狭山…そんな彼女に対し、美紀は宥めるような口調で尋ねる。すると狭山は美紀の目を真っ直ぐ、睨むような目付きで見つめ返した。

狭山「当たり前でしょ……！幸せなんてこの世界には無い！ある訳がないっ！！そんなのがあるなら……ボクは……ボクはっ……！！」

美紀「じゃあ聞くけど、真冬は世の中がこうなってるから……幸せになるうとした？幸せになれるきっかけを探そうとした？たぶん毎日毎日……今私たちにしてるみたく、誰かに八つ当たりしてただけなんじゃない……？」

狭山「だつたらなに……？美紀は……何を言いたいの……？」

少しだけ、狭山の声から覇気が消えた。その目もさつきほどの力が無く、濁ったようにも見える。

美紀「私たちは現実を見てないんじゃない……前を見て生きてるだけ……。そして真冬は現実を見てるんじゃない、後ろを見て生きてるだけだつて……私はそう思うよ」

狭山「……ああ……そう……」

躊躇いなど一切見せず、美紀はキツパリと告げた……。狭山はその言葉をただの挑発と捉え、ナイフをギュツと握る。

狭山（ボクは現実を見てる……。見てないのは美紀達の方だ……）

心の中で何度も呟き、美紀を睨む。そうして見つめた彼女の目は自分とは間違っていないとでも思っているかのように真っ直ぐで、見るだけで狭山は苛立ってしまう。

狭山「美紀はただ……一人になるのが怖いだけでしょ……。一人になれたら楽だなんていうのは口だけ……本当は、一人になる気なんて無いくせに……」

美紀「そうかもしれない……でも、一人になれたら楽だろうなっていうのは本当に思ってる事だよ。一人なら、考えるのは自分の事だけで良いから……」

狭山「じゃあそうやって生きていけば良いでしょ!?!胡桃の事も、他の皆の事も見捨てて!一人だけで生きていけばっ…!」

狭山が感情をむき出しにしながらそう告げると、美紀は顔だけをそつと後ろに振り向けて後方に立つ由紀達を見つめていた…。彼女達は美紀の事を心配そうに見つめているが、当の本人はニツコリと微笑み、その目線を再び狭山へと向ける。

美紀「たしかに…先輩達といると大変な事もある。けどね、あの人達と一緒にいるとその大変さがどうでもいいと思えるくらい、幸せな気持ちになれるの。だから私は…これからもずっと先輩達のそばにいる」

また、美紀が幸せそうに笑った…。本当に現実を見ているならばこんな顔で笑えるはずがない…。狭山は左手で彼女の着ていた服の胸ぐらを掴み、そばにグツと引き寄せる。それに反応して胡桃が動こうとした時、狭山は彼女を冷たい目で見つめて言った…。

狭山「胡桃、言ってたよね…『仲の良い友達が周りにいて、一緒にご飯食べたり…毎日おはようやおやすみを言い合う』そんな普通の事が幸せなんだって…言ってたよね」

胡桃「…ああ」

胡桃が答えると、狭山は顔を俯ける。彼女はそうして顔を俯けたまま美紀の胸ぐらを掴み続け、弱々しい声を出した…。

狭山「そんな普通の事って、何が普通なの…?全然、普通なんかじゃないよ…。大切な友達がそばにいて…毎日お話しできることがどれだけ贅沢な事なのか…みんな、分かってない…っ…」

美紀「…真冬」

狭山は顔を俯けたままなので、どんな表情をしているのかは分から

ない。ただ、彼女の声は微かに震えていて、とても悲しげだった。恐らく、彼女も大変な目に遭つてきたのだろう…。美紀は彼女の声からそれを感じ取り、自分の胸ぐらを掴むその手をそつと握った。

狭山「っ……………」

美紀「私たちも分かつてるよ…。今朝みたくみんなでご飯食べて、なんでもない話で笑い合う事がどれだけ贅沢な事なのか…」

狭山「分かつてないよ……………だつて、君達は何も失つてない…。大切な人を失つていたら、あんなふうには笑えない…」

相変わらず顔を伏せたまま、狭山は美紀に告げる。だが、美紀も黙つてはいなかった…。彼女はここまで、何も失わずに來た訳ではないのだから。

美紀「真冬、動物は好き？ほら…犬とか」

どうして急にそんな事を聞くのか…。不思議に思つた狭山は伏せていた顔を上げ、美紀の目を見る。彼女は微かに微笑んだまま答えを待っているようなので、狭山はそつと口を開いた…。

狭山「…ワンワンは好き。変な人間なんかより、よつぽど」

美紀「そつか…。あのね、私達、この前まで学校に暮らしてたんだ」

狭山「…巡ヶ丘の高校でしょ」

美紀「…よく分かつたね？」

狭山「君達の制服から割り出して、この前一人で見に行った…」

つい先日、あの学校に一人向かつた事を思い返す。行けば彼女達に会えると思つたのだが、彼女達は既に出ていった後だった。

美紀「そうなんだ…。でね、あの学校にいた時、先輩達と一緒に犬を飼つてたの。太郎丸つて名前だね…元々は私と一緒にいた子なん

「だけど、私にずっとなついてくれなくて……」

「まいったように苦笑いしつつ、美紀はその事を語る。彼女はその間もずっと、狭山の手を握っていた。」

美紀「でも、私はあの子にたくさん助けてもらった……。先輩たちと出会えたのだから、あの子のおかげだから……」

狭山「……………」

美紀「本当にたくさん、たくさん助けてもらった。だから、お別れの時は凄く悲しくて……頭が真っ白になって……涙が止まらなかつたよ」
「そう言っている今も、美紀の目が涙ぐんでいる事に狭山は気付いた。きつと、その時の事を思い返しているのだろう。」

美紀「大切な人……じゃなくて犬だけだね、太郎丸は私にとって本当に大切な子だった。それと、先輩たちは大好きだった先生とお別れしてる……。みんな、それぞれが大切な人を失っているの……」

狭山「……………そう」

目の前にいる狭山にだけ聞こえるよう、小さな声で美紀が言う。彼女は何も失っていないと思っていた……だからこそ、あんな顔で笑えているのだと。しかし実際はそうでなく、彼女達も大切な人を失っていたのだ。

狭山「じゃあ、なんで美紀達は笑えるの？大切な人を失う辛さを知っているのに……なんで笑えるの？」

彼女の胸ぐらから手を離し、目を見て尋ねる。美紀は胸ぐらから離された狭山の手を変わず握ったまま、そつと後ろを振り向いた。

美紀「先輩達と一緒にだから……かな。大変な事や辛いこと、色々ある

けど：それでも、先輩達と一緒に乗り越えていけるの。また明日もがんばろうって：前を向いていられるんだよ」

美紀達はしっかりと現実を見ていて、大切な人を失う辛さも知っている。そう分かった瞬間、狭山は自分はどうなのかと今さらながら考えた：。「明日もがんばろう」『前を向こう』そんなふうに思った事が一度でもあつただろうかと：。

美紀「私達は大切な人を失う辛さを知ってる。だからこそ：もう誰も失いたくないの。だから、私は真冬に誰も殺させない：」

狭山「……………」

真つ直ぐにこちらを見つめるその目はとても強い気持ちに満ちていて、狭山は一瞬ながらもそれに見とれた。こんなにも綺麗で真つ直ぐな瞳を持っているなんて、自分とは大違いだ：。

狭山「似てるって、思ってた：……美紀は少しだけボクに似てるって、会ったばかりの時はそう思った：。でも、全然違うね：」

美紀「ううん、真冬は私と同じだよ：」

狭山の手を一層強く握り、美紀は彼女の目を見つめる。美紀の綺麗な目と：濁った自分の瞳：これのどこが同じなのか、狭山には理解出来なかった。

狭山「：やっぱり、全然違うよ？」

美紀「それはきつと、ここに来るまでの道が違ってたからだよ。もし私が先輩達と出会わずにいたら、きつと今の真冬みたくなつてたと思う。こんな地獄みたいな世界に幸せなんて無い：。にも関わらず幸せだなんて言う人がいるなら、それを真つ向から否定してやろうって：そう思ってたかも」

狭山「……………」

美紀「そう思うほど大変な毎日だったよ…辛い毎日だったよ…。でも、そんな地獄みたいな世界を変えてくれたのが由紀先輩と胡桃先輩、そしてリーさんなんだ…」

由紀達をチラツツと見つめ、美紀はまたニツコリと笑う。由紀達はまだ狭山の事を警戒しているのか油断のない表情をしていたが、美紀だけは狭山の事をまるで警戒していないようだった。

美紀「だから、その逆も同じ…。もし真冬が先に先輩達と出会っていたら、きつと今の私みたくなっていたと思うよ。辛いこと、悲しいこと…全部乗り越えて、笑えるような人になれてたんじゃないかな」

狭山「そんなの…絶対にあり得ない…」

そう答えて美紀の手を振りほどこうとする。しかし美紀はその手を決して離さず、狭山の目を見つめ続けた。

美紀「きつき、車の中で先輩達と話してる時の真冬はもつと良い顔してたよ。あの時、ほんの少しだけでも温かい気持ちにならなかった？」

狭山「…：…」

彼女達の持つ車の中で共に朝食をとり、会話を交わしたあの時、確かによく分からない感情を抱いたような気がした…。でも、あの感情はどこか懐かしくもあつて…：…少し戸惑いもした。

美紀「…ね？みんなと一緒になら、真冬もきつと笑えるようになる。一人でいるのが苦しいなら、私たちと一緒にいよう…。友達と一緒になら、こんな世界でも笑っていられるから…」

狭山「友達なんて…ボクには一人も…：…」

美紀「少なくとも、私は車の中で話した時から真冬の事を友達だと思ってるよ。先輩達もきつと…：…」

そんなハズはない…。あれだけ殺意を向けてきたのに、その相手を

友達だなどと思える訳がない……。こんな能天気な考えをしているのは美紀だけだ。狭山がそう思った時、由紀がスタスタと駆け寄って狭山と美紀、二人の間に割って入った。

由紀「わたしも真冬ちゃんの事、友達だと思ってるよ」

狭山「……うそ」

由紀「うそじゃない、本当にそう思ってる。真冬ちゃんもみーくんも、わたしの友達で……可愛い後輩だもん！」

微かに胸を張り、由紀は誇らしげに語る。狭山は彼女の思いもよらぬ言葉に目を丸くし、ポカンと口を開けた……。

狭山「意味分からない……。そもそも学校だって違うのに、そんなふうに先輩面ヅラされても……」

由紀「学校は関係ないの！ええつと……つまり人生の先輩だよ！」

狭山「人生の先輩……？」

由紀「うん！わたしは真冬ちゃんよりも長く生きてるからね！」

言っても学年が一つ離れているだけではないか。狭山がそれを声に出して指摘しようとしたその時、胡桃と悠里もそばへと歩み寄ってきた。

胡桃「長く生きてるって言っても、真冬と大して変わらんだろ……」

由紀「それでも先輩は先輩だもんっ！」

悠里「……そうね。由紀ちゃんは立派な先輩よ」

美紀の隣に立って呆れた顔を見せる胡桃と、由紀の隣に立ってその頭を撫でる悠里……。揃いも揃って狭山の間合いに入っているのに、全員が笑顔を見せていた……。

狭山「みんな…もう少し警戒しなよ。ボクはナイフを持っていて、君達を殺すって言ってるんだから……」

由紀「もう…大丈夫だって信じてる。真冬ちゃん、本当は優しい娘だもん」

狭山「っ…!?!」

由紀が狭山の肩を撫でながら、優しい声で呟く。狭山は酷い事をしただけで優しきなど微塵も見せなかったと言うのに……。由紀はそんな彼女を信じると…優しい娘だと言ったのだ。

『真冬ちゃんは優しいもんね』

狭山「あ…っ…:…:…:ぐ…:」

以前、自分にそう言ってくれた娘がいたのを思い出す。自分は昔から無愛想で冷たいのに、そのどこを見て優しいと思ったのだろうか…。例えば、彼女は由紀に少しだけ似ていた…。やたらと明るくて子供っぽい。その有り余った元気さは少し鬱陶しくもあったが、狭山は彼女のあの笑顔に…その眩しさに何度も救われた…。

狭山（そっか…:ボクは、強くなってなんかいない。あの娘がいなくなっ…:一人になって…:弱くなったんだ）

美紀「真冬、もうやめよう?」

美紀はナイフを持つ狭山の右手をそっと掴み、それを離させようとする。これを離すか、もしくはそのまま彼女を突き刺すか…:どちらにせよ、この戦いはもうじき終わりだ。

狭山（それでも、ボクは一人で構わない…:…。どう足掻いたって、もう幸せになんかなれないんだ…:。美紀も…:他のみんなも…:…:全部壊

して、また…いつものボクに戻ればいい…)

ズキツ…ズキツ…

また、狭山の胸の奥が痛み始める…。美紀が『幸せ』だと言った時にも感じたこの痛みは、現実を見ていない彼女達への苛立ちによるものだ…：

狭山（美紀を殺して、いつもの狭山真冬に…）

苛立ちによるものだと、そう思っていたが本当は違う…。狭山はもう、自分でそれに気付いていた。きつとこれは、未だ幸せを掴めぬまま、ただ無意味に暴れる自分自身に苛立っていただけ。本当はただ、幸せそうに笑う彼女達の事が羨ましかっただけなんだ…。

狭山「…ううっ…ぐすっ…！」

美紀「……………」

狭山「つぐ…！…っう…！」

頭の中でそれを認めたら、涙が止まらなくなった…。狭山は右手に持っていたナイフを美紀にあっさりと奪われ、空いたその手で必死に涙を拭う。

美紀「……………」

狭山「胡桃のこと殴っちゃった…酷いこともいっぱい言った…。悠里と由紀も…怖がらせちゃって…美紀にも嫌なことばかりしたの…！」

美紀「少なくとも、私は真冬を許してあげるよ。真冬も色々大変だったって、その顔を見て分かったから…」

美紀は狭山から取ったナイフをそばの床へと置き、それから泣きじやくる彼女の頭を撫でる。確かに彼女には散々な目に遇わされたが、その全てを許してあげようと思った。そしてそれは美紀だけな

く、胡桃も同じだったようで…

胡桃「もう二度とあたしらを殺そうとしないって約束すんなら、あたしもお前の事を許してやる」

狭山「ボク：胡桃のこと殴っちゃったのにな…」

胡桃「…ま、ケンカみたいなもんだ。もつとも、殴り合いのケンカなんてりーさんともしたことないけどな」

悠里「今のところは…：ね？」

胡桃「いやっ！これからも勘弁っ！！りーさん相手じゃ分が悪いつて！」

悠里「どういう意味かしら？私、胡桃ほど腕つぶしに自信ないわよ？」

胡桃「あたしだって、そこまで自信ないっての…」

胡桃は少しふてくされたような顔をして、持っていたシヤベルを肩にかける。そんな彼女を見て由紀と悠里、そして美紀も笑い、最後には胡桃も笑った。

狭山（ああ…：本当に楽しそうだな…：）

彼女達が笑い合うのを見ていたら、狭山も少しだけ笑うことが出来た。しかし、流れていた涙はまだ止まらない。きつと、久しぶりに泣いたからだろう…。

美紀「真冬、大丈夫？」

狭山「あつ…：ごめん、すぐに…：とめるから…」

狭山の涙が止まらない事に気づき、美紀は彼女の背を撫でる。彼女達の前でこれ以上泣くのはみつももない。早く止めなければ。狭山が必死に両手で涙を拭くと、美紀がそっと呟いた。

美紀「我慢しなくていいんだよ…。辛いことや悲しいことってね、我慢しすぎると大切な事を忘れちゃうんだって…」

おっとりとした、美紀の優しい声…。狭山はそれを聞き、ふと思った。

狭山（そういえばボク、あの時から泣いてなかった…。全部我慢して、その結果色んな事を間違えて…。そして、あの娘の温かさを忘れてたんだ…）

狭山「バカだなあ…。ボク、ほんとにバカだなあ…。」

その後、狭山は我慢することを止めて思いきり涙を流し続けた。声も我慢せず、子供のように…。その間…由紀、胡桃、悠里は彼女の事をそばで見守り、美紀はその背中を撫で続けていた。目の前で泣くその少女が、さつきまで自分達を殺そうとしていたのを忘れて…。

くくく

狭山「もう…大丈夫…。美紀、ありがとう」

美紀「…どういたしまして」

返事を返す美紀が笑っていたので、それにつられて狭山も微笑む。まだぎこちない笑顔かも知れないが、これから少しずつ…上手く笑えるようになっていこう。狭山がそう決意したその時、彼女達のいるボーリング場の入口から一人の人物が現れた。

穂村「……ああ、やっぱり狭山に見つかったのか」

由紀「あっ！」

狭山「穂村：何しに来たの？」

現れたその男、穂村へ冷たい視線を向ける狭山。しかし穂村はその視線が冷たい事には気付かず、ただ由紀達の事を見つめていた。彼女達は狭山に見つかってしまったのでこれから殺される：事情を何も知らぬ穂村はそう思い込んでいるのだろう。

穂村「あれから狭山の事をこつそりつけてきて、んで：お前がこのボーリング場に入った途端に思ったわけよ。あっ、狭山のやつ：^{アンタ}由紀達の事を見つけたなって。俺もすぐ中に入ろうかと思っただけど、少ししてからじゃないと狭山に怒られるかなあって思ってたて：」

狭山「：ワケわからない」

穂村「おつ：狭山先生、泣きました？なんか声がいつもと違うような：」

狭山「つ!?そんなのどうでもいいから、穂村は外に出て圭一さんに連絡して!!もうこの戦いは終わり：彼の事も見逃してあげるようにって」

穂村「は？いやいや、その展開の方がワケわからないんだけど：」

狭山「いいから！ほらダッシュっ!!」

穂村「あっ？わ、分かったよ：！ちよつと待ってる!!」

狭山に急かされ、穂村はまた外へと出ていく。狭山が穂村の事を外に追いやった理由は二つ。まず、ここのような屋内だと無線の電波が届かない可能性があったから。そしてもう一つ：^{あの男}穂村にだけは、自分が泣いていた事を絶対に知られたくないからだ。

狭山「これで彼も助かると思う…。でも、もしかしたら圭一さんが既に…」

胡桃「それは大丈夫だと思う。アイツ、ああ見えて結構強いヤツだからさ」

狭山「…うん、そうだね」

口ではそう言う狭山だが、内心不安でいっぱいだった。今、彼と戦っている圭一の強さはよく知っている。並の人間ではもう殺されてしまっているだろう。もしそうなってしまったら、自分は彼女達に顔向け出来ない…。彼を殺すよう、圭一に言ったのは自分なのだから…。

穂村「つたく、雨はまだ止まねえし…感染者に襲われるし、嫌なことばかりだ」

不安を感じつつ待っていると、意外に早く穂村が戻った。狭山は直ぐ様彼の安否を穂村に問い、由紀達もその答えに耳を澄ませる。

狭山「圭一さん、なんて言ってた？まだ…彼は無事？」

穂村「ああ、まだ殺れてなかったみたいだな」

狭山「…そう、よかった」

その答えを聞き、彼女達は安心して胸を撫で下ろす。

これで、ようやく落ち着くことが出来そうだ…。

百十九話『きぼう』

穂村「んで、これからどうすんの？とりあえず一旦、あの公園に集合しようって圭一さんに言っちゃったけど…」

狭山「あの公園？」

穂村「ほら、アンタらの車…いや、今は俺の車か。あのキャンピングカーが停めてある公園だよ」

狭山「ああ、そっか……」

狭山はある事を思い出すとスタスタと歩き、穂村の前に立つ。直後、彼女は右手のひらをそつと穂村の前に突き出した。

穂村「…？なに？握手？」

狭山「違う。彼女達から奪ったあの車のキー、返してってこと。あれはやっぱ彼女達の物であって、穂村の物じゃない」

穂村「はあ!? どうしてさ!!？」

狭山「いいからほら、とつとと返して…」

その言葉に戸惑う穂村は狭山の背後…そこに立つ由紀達の事を睨むように見つめる。それに気づいた狭山は直ぐ様穂村の頬をパシッと叩き、再びそれを催促さいそくした。

パシツ!!

穂村「つてえ!!」

狭山「みんなを睨まないの…。ほら、はやく出して」

穂村「つぐ…：わかつたよ！ほらっ！」

穂村は半ば自棄になったように車のキーを差し出し、あからさまに不機嫌そうな顔をする。あの時に由紀達を見逃したのはこのキーがあつたからだと言うのに、これではもう彼女らを見逃す理由すらない。

穂村「殺しもダメ、物資もダメ：なら、コイツらを襲った意味って何さ!? 納得できねえ…。よし、決めたっ!!」

何を決めたのかは知らないが、穂村は狭山の隣を抜けて由紀達の方へと歩み寄る。なににせよ、穂村が決めたことなら良いことではないだろう。狭山は隣を抜ける穂村の手をすれ違い様に掴み、その動きを止めた。

狭山「…なににするつもり?」

穂村「いいこと…としか答えられない…」

胡桃「っ!?!」

悠里「由紀ちゃん、美紀さん、下がってて…」

胡桃、悠里、美紀が今日一番の警戒心を穂村へ向ける中、狭山は呆れたようにため息をつく。

狭山「まったくコイツは…いや、さっきまでのボクは…コイツ以上にダメな人間だったか」

狭山「穂村、今日はおしまいだよ。殺すのも、物資を奪うのも…全部終わり」

穂村「お触りはっ!?!」

狭山「…それも無しだよ」

やっぱりそれが狙いだったのかと呆れつつ、穂村を彼女達から離す。一見すると冗談にも思えるだろうが、穂村なら本当に彼女達をこの場で襲いかねない。

穂村「ちよつとぐらい…触りたかった……」

胡桃「うわ…泣いてんの？」

鼻をすするような声でしたので、胡桃が引き気味になる。すると穂村は彼女達に背中を向け、その場に屈んでから悔しき溢れる声で言った。

穂村「泣きたくもなるだろっ！生き残ってる人間はどこもかしこも野郎か、好みじゃない女ばかりで…もう限界だったんだよ!!ようやくお前らみたいな可愛い系の女子に会えたつてのに…お預けなんて…！」

由紀「でも、真冬ちゃんも可愛いのに……」

穂村「狭山はダメ……ペツタンだから……」

狭山「このっ…!!」

バシツ!!

穂村「つてえ!!」

屈んでいた穂村へ寄り、狭山はその後頭部を思いきり叩く。彼女らのある薄暗いボーリング場に気持ちいい程見事な音が響くと、直後…穂村はその場にうずくまり、狭山に叩かれた後頭部を両手で押さえた。

美紀「すごい音…」

由紀「今の…痛そうだよ？大丈夫なの？」

狭山「穂村は頑丈だから、このくらいじゃ平気…」

穂村「平気じゃ…ねえ……マジいてえ…」

叩かれた穂村を見て由紀が心配そうな顔をする一方、狭山は冷たい視線を穂村へと向ける。叩かれた本人はかなりのダメージを負ったようで、その後も少しの間、痛みに悶え続けていた。

穂村「せつかく手に入れた車は取られるし…狭山には殴られるし…厄日かよ」

ようやくダメージから立ち直った穂村は不満げに呟き、そつと立ち上がる。それを見た狭山はその隣をスタスタと通り過ぎ、雨降る外の様子を観察した。

狭山「…今なら感染者も少ない。みんな、車まではボクと穂村で送っていくから、ボクらの後ろを着いてきてね」

穂村「は？送る？なんで？」

美紀「じゃあ…お言葉に甘えて。先輩達もそれで良いですよね？」

由紀「うんっ！」

胡桃「まあ、今はそうするしかねえだろ」

悠里「あとは…彼と合流するだけね」

穂村「ちよつと待ってって。マジでどうなってんの？」

彼女らの車のキー返せと言ったり、送ると言ったり、後から来た穂村は何が何やら分からない。少なくとも、狭山はついさっきまで彼女達の事を殺そうとしていたのだから…。穂村は疑問だらけのまま場の雰囲気にも飲まれ、気づけば狭山と並び、雨の中彼女達を守るようにして進んでいた…。

穂村「あの…狭山先生？どうなってるんでしょー？」

狭山「ん？何が…？」

穂村「何が？じゃなくて…。お前、さっきまでこの娘達の事を殺す殺すってめちゃくちゃになってたじゃん。それがどうしてこんな状況に…」

彼女達四人をすぐ後方につけ、辺りを警戒する狭山。穂村が抱いていた疑問を狭山へぶつけると、彼女はそれに答えるべくボソツと呟いた。

狭山「…色々あったんだよ。また、のんびりと説明するね」

狭山はそう呟いてから視線を一瞬だけ隣に立つ穂村へと向け、照れたように微笑む。彼女のその笑顔を見て、穂村は思わず目を丸くした。これまで結構な間、彼女と行動してきたが…こんな顔を見たのは初めての事だったのだ。

穂村「じゃ、またのんびりと頼むよ…」

狭山「あつ…それとね……………」

ゆっくり、慎重に進みながら、狭山は言葉を放つ。彼女の視線は正面を向いていたが、その言葉は穂村に向けられたものだった。

狭山「今まで…ごめんなさい…」

穂村「……………」

降る雨の音に負けそうなほど小さく、力の無い声が穂村の耳に届く。これまで穂村には冷たく接し続けていた彼女がこんな事を言うのも初めてで、穂村はまたしても驚く事になった。

狭山「ボク、本当にどうしようも無いバカだった…。出会った時のあの事だって、穂村は当然の事をしただけ…：悪い事なんかじゃなかったのに、ボクはいつまでもそれを恨んで、穂村に冷たくしてきた…：……………」

穂村「まあ…あれは俺も悪かったよ。もう少しだけ、マシなやり方もあったはずだったからな」

狭山の言う『あの事』というのは、彼女と初めて出会った時に穂村がしたある行為を指している。彼女はその事を恨み続けていたから、仲間であつてもこの穂村とだけは距離を開き続けていた。しかし、美紀達と出会い…狭山は穂村のあの行いも許してあげたいと思つたのだ。

狭山「穂村が謝ることなんてないよ…。全部、ボクが悪いんだから…」

穂村「ははっ、お前がこんなふうには謝るなんてな」

狭山「これから少しづつ、変わっていききたいんだ…これは、その第一歩ってこと」

そう言つて狭山はまたニコリと笑うと、振り向いて由紀達の顔を確認する。何があつたのかは分からないが、彼女達が狭山を変えたのだろう…。穂村にとって狭山の謝罪はさつきまで持っていた車のキーよりも珍しい物だった為、穂村はいつしか機嫌を直していた。そんな中、あることが気になつた胡桃が狭山へと声をかける。

胡桃「ところでさ、あいつも公園に来るよな？」

狭山「あつ…どうだろ」

悠里「まだ無事なのよね？なら、彼も来るんじゃないかしら」

穂村「無事ついてもどの程度無事なのかは知らねえけどな。もしかしたら、死にかけかも知れないし…」

なんと言つても、彼を相手していたのはあの圭一だ…。まだ生きてると言うだけでもかなり幸運なのだから、そうなつていてもおかしくはない。

由紀「っ!？」

狭山「穂村…怒るよ」

穂村「わりいわりい…でも、可能性の一つだ」

胡桃「……………」

美紀「きつと、大丈夫ですよ」

穂村の言葉を聞き不安げな顔をする胡桃……。それを見た美紀は彼女の手をそつと握り、優しく微笑みかけた。

胡桃「…だな。あいつなら大丈夫だ」

美紀の笑顔、言葉に安心したのか、胡桃の表情が少しだけ明るくなる。目標とする公園まで、あと少しだ…。

~~~~~

数分後、一行は無事に公園へとたどり着く事が出来た。

「幸いな事に帰り道を」かれら」に襲われる事もなく、更に公園に停めておいた車…その付近にも」かれら」の姿は今のところ見られない。

穂村「よし、到着っ」

狭山「まだ…彼と圭一さんは来てないのかな？」

美紀「いや、来てるかも…」

車のそばには誰の姿も無いが、車内に明かりが灯っている。確か、出てくる時は明かりなどつけていなかったはずだが…。

胡桃「…確かめるか」

狭山「ボクが見る。他の生存者が入り込んだ可能性も無くはないか

ら」

胡桃「じゃ：頼む。気を付けろよ」

胡桃が言うのと狭山はニツコリと微笑み、そのドアに手をかける…。

ガチャツ…：バタンツ！

音を発てて開くドア：狭山はその先へ視線を向け、ほつとため息をついた。そしてその様子を後ろから覗いていた由紀、胡桃、悠里、美紀もまた…。

美紀「っ…先輩っ！」

開かれたドアの先、そこにある座席に彼の姿を見つけ、美紀は真つ直ぐそこへと駆ける。狭山は彼女の邪魔にならぬよう横へと身を退け、その様子を見守った。

「美紀…それにみんなも、無事なようで何より」

美紀が車内に上がり込み、そばに寄ってきたのを見ると彼はそつと立ち上がる。その後も由紀、胡桃、悠里が車内に上がり、彼の事を見つめた。彼の服は泥に汚れ、所々怪我をしているようだが、それでも元気そうだ。

胡桃「美紀にだけ反応しやがって…あたしらはついですか？」

「あははっ、そんな事ないよ。みんな大事な人だからね」

由紀「ほんと…無事でよかったあ」

悠里「ええ、そうね…」

美紀「先輩…先輩っ…！」

それぞれが彼との再会を喜ぶ中、美紀は彼の胸に飛び込んで顔を埋めていた。その声は震え、涙混じりのような声になっており、彼は彼女の背中を撫でながら気まずそうに辺りを見回す。

「…どうした？」

悠里「美紀さん、最後までがんばったから…あなたに会えて肩の力が抜けたんじゃないかしら」

由紀「みーくん、もう大丈夫だからね…」

由紀、悠里も美紀のそばに寄り、その背中を撫でる…。一方、胡桃は未だドアの外に立つ狭山の方を見つめていた。

狭山「ボクのせい…だよね…」

胡桃「…ああ、こればかりはそうだな」

狭山「……ごめんなさい…」

彼の胸に顔を埋めて体を震わせる美紀を見て、狭山は自分が彼女達を怖がらせたのが原因だと考える。ここに来るまでは冷静だったあの美紀も、本当はとても怖がっていたのだ…。そう考えると申し訳なく、狭山は雨にぬかるむ地面へ膝をつけながら胡桃に謝った。

胡桃「あたしに言っても仕方ないだろ…。中に入って、しっかり美紀に伝えてやれ。それと、あいつにも謝っておけよ…」

狭山「う…んっ…」

微かに溢れた涙を両手で拭い、狭山はゆっくり車内へと上がる。彼女はそうして彼と美紀のそばに歩み寄ると、瞳を潤ませたままの状態で頭を下げた。

狭山「みんな…本当にごめんなさい……ボクのせいで怖い思いを…不安な思いを…迷惑ばかりかけちゃった…」

美紀「っ…私達はもういいの…。それより、先輩に謝ってあげて…？」

美紀は狭山の方へと顔を向け、彼に謝るようにと告げる。そう告げた美紀の目は真っ赤に腫れていて、やはり彼女も怖がっていたんだと、狭山は深く反省した。

狭山「…ごめんなさい…ほんとにごめんなさいっ…!」  
狭山は彼に向け深々と頭を下げ、謝罪の言葉を放ち続ける…。頭を下げた彼女の瞳からはポタポタと涙がこぼれ落ち、車のカーペットに染みを作っていた…。

「……………」

美紀「先輩、彼女にも色々あつたんです…。難しいことかも知れな  
いですけど、彼女を許してあげてくれませんか…? 私からもお願いし  
ますから…」

中々言葉を返さない彼を前にして、美紀は不安そうな表情を見せ  
る。確かに狭山のしたことはそう簡単に許せる事ではないと思うが、  
それでも…美紀らどうか彼女を許してあげてほしかった。

「…わかった。でも、一つ条件がある」

狭山「条…件…?」

静かに顔を上げ、その内容を尋ねる。

しかし後にその内容を告げたのは彼ではなく、いつからか車内の助  
手席、そこに座っていたもう一人の人物だった。

圭一「こいつ、俺達の屋敷に来たいんだと」

狭山「っ、圭一さん…?」

助手席にいた圭一は立ち上がり、車内をのんびりと歩く。由紀達は  
圭一の顔を見たことがなかった為少しだけ戸惑いを見せたが、会話を  
交わしているのを見てすぐに狭山の仲間なのだと理解した。

圭一「おい穂村、お前も中に入ってこい。いつまで雨に打たれてる  
つもりだ?」



窓から顔を出し、未だ車外にいる穂村の事を呼ぶ。しかし穂村は車内へ入る事なく、ふてくされたように立っていた。

穂村「だってこの車…もう俺のじゃねえし…」

圭一「じゃあ、お前は走って帰るんだな…」

圭一はそう言つてドアの方へと向かい、それを閉じようとする。それを見てさすがに慌てたのか、穂村は足早に車内へ足を踏み入れた。

穂村「乗るから！乗りますからっ!!っーか本人達に許可もらわねえと…えつと、乗ってつていいツスカ!？」

悠里「えつ?ええ…でも、ちよつと待つて下さいね…まだ、私も話の流れがよく分かつていなくて…」

同乗の許可を求める穂村に戸惑った後、悠里は彼の顔を見つめる。話を聞いていると彼は狭山達のいる屋敷へと行きたいらしいが、何故なのだろうか…。

悠里「ねえ、どうということなの?」

「まだ確信は無いんで、詳しい事は言えません。ただ、この人達の屋敷にいる人物…そいつに会えば、事態が良い方向へ向かうかも知れない」

悠里「…そう、分かったわ」

正直に言えば何も分かつていないが、彼が言うなら何かしらの考えがあるのだろう…悠里はそう思い笑顔を返す。彼女は由紀達みんなを席につかせると、最後に狭山の方を見つめた。

悠里「という事みたいだけど、お邪魔しても構わないかしら?」

狭山「あつ…ボクは良いけど…その…」

狭山は圭一、そして穂村へ視線を向ける。仲間以外の誰かをあの屋敷に招いた事などなかった為、どうすれば良いのか分からないらしい

い。

圭一「俺はどっちでも構わない。だから狭山、お前が決める」

穂村「…だつてよ。どうする？」

狭山「じゃあ…うん、分かった。みんなをあそこに連れていく」

圭一と穂村へそう告げてから、狭山は彼の顔を覗き見る。最初は何故、自分達の屋敷に来たいのかと思つたが、少し考えたらその理由は予想できた。

狭山（確かにあそこなら、あの人なら、どうにか出来るかも知れない）

向けていた目線を彼から胡桃へと移す…。直後、狭山は運転席に座る悠里に道案内を頼まれ、助手席へと腰を下ろした。

くくくく

悠里「…で、ここを…」

狭山「右だね…うん、そうしたらすぐに見えてくるから…」

由紀「あつ、あれじゃないっ!？」

運転席の横から顔を覗かせ、由紀が大きな声をあげる。彼女が興奮するのも無理はない…曲がり角を曲がった先に見えたその屋敷はやたらと大きく、それを取り囲む門も異様に立派だった。

悠里「あそこ…なの？」

狭山「うん…穂村、門を開けて」

穂村「はいよ」

穂村はポケットから小さなリモコンのような物を取り出すと、開いた窓から手を出してそれを門へと向ける。直後に穂村がそれを押すとピツという電子音が鳴り、目の前の大きな門が自動的に開き始めた。

ガガ：ガガツ……

胡桃「うおっ!? すごい! そのスイッチで開けたり閉めたり出来るのか!？」

穂村「すごいだろ? どれ、閉めるのやってみるか?」

穂村は自慢気にニヤリと笑い、そのリモコンを胡桃の方へと投げ渡す。彼女はそれを受け取ると先ほどの穂村同様窓から手を出し、車が門の内側に入ってからその手を向けた。

胡桃「えつと…二つあるけどどっち押すの?」

穂村「ああ、下の方のボタンだ」

胡桃「…こっちか」

ピツ…

言われた方のスイッチを押すと、開いた門が今度はゆっくりと閉まりだす…。胡桃はそれに言い様のない感動をして、大きな瞳をキラキラと輝かせた。

胡桃「すっげえ〜!」

由紀「なっ!?! 胡桃ちゃんばかりズルいよ! わたしもやりたかった!!」

胡桃「あはは、わりいわりい…ほら、返すよ」

穂村「どーも」

胡桃から投げ渡されたそのリモコンを再びポケットへとしまい、穂村は思った。彼女達は今、大して知りもしない連中の住み家へと来て

いる…だというのに、あまり警戒しているようには見えない。警戒する必要などないと思うほどに自分達を…狭山を信頼しているのだろうか？

穂村(狭山のヤツもいつの間にかコイツらの事を気に入つたみたいだしなあ…。ついちよつと前まではあんなに殺す気満々だったのに…)

悠里「えつと、どこに停めればいいかしら？」

狭山「適当でいいよ。必要なら、またあとで動かしておくから」

門の中へと入り、たどり着いた大きな屋敷…悠里はその前に広がる庭の上に車を停め、後部座席の方へと振り向いた。

悠里「じゃあ…降りましようか」

美紀「はい」

由紀「うんっ！」

美紀と由紀が返事を返し、悠里は笑顔を見せる。彼と胡桃も無言のまま頷き、そつと席を立っていた。そうして一行は車から降りると、目の前にそびえ立つその豪邸を見上げ、そして目を丸くした…。

由紀「おつきいね〜！」

美紀「ほんと、未奈さんの家よりも更に大きい…」

つい先日まで世話になった少女、水無月未奈<sup>ミナ</sup>の住む家もかなりの大ききだったが、この屋敷は更にその上をいつている…。外から窓を見た感じだと、恐らく三階建てだろうか？それだけでも驚くというのに、横の広さも尋常ではない。それぞれの階に部屋が十や二十あつてもよさそうだ。

悠里「これだけの豪邸、家主さんは…どんな人なんですか？」  
気になった悠里がそばにいた圭一に尋ねる。すると圭一は首をか  
しげ、その屋敷や辺りを取り囲む高い壁を見回した。

圭一「…さあな、俺も良く分かってない」

悠里「そう…なんですか…」

実際、圭一もこの家の主であるあの男の事を深くは知らない。ただ  
あの男が自分達にした事や、この建物の備えを見るに…あの男は普通  
の者ではないということだけは分かる。

圭一「いい機会だ…問い詰めてみるか」

悠里「えっ？」

圭一「いや、何でもない…ほら、中に入るんだろ？突っ立つてると  
雨に濡れるぞ」

圭一はそう言ってスタスタと歩き、屋敷の扉を開く。悠里達も雨に  
濡れる前にとそこへかけ込み、中に入ってまた驚く。中の造りが立派  
な事もそうだが、何より明かりがついている事に驚いた。

美紀「この家って…もしかして…」

狭山「うん、電気が通ってるよ」

穂村「自家発電気だの浄水器だの、やたら揃ってるからな…」

由紀「おおく、わたし達のいた学校みたいだね！」

悠里「そうね…でも、この家の家主さんは個人で何故これだけの備  
えを…」

穂村「さあ、心配性なんじゃねえのかな？よく知らんけど…」

適当な事を言ってから穂村は靴を脱ぐと、そばに置いてあったス  
リッパを履いてスタスタと先へ進む。彼女達もそれにならつて靴を

脱ぎ、先へと進んだ。

狭山「…ねえ」

「ん？」

広く、明るい廊下を進む途中、狭山が彼へと声をかける。一つだけ、どうして伝えておくべき事があったからだ。

狭山「キミと争った時、ボク言ったよね…昨日、ミナって娘の屋敷に行つたって…」

「…ああ」

答える彼の表情が微かにキツくなる…。あの時、狭山は未奈達全員を手にかけたと言うような発言をした。もしそれが本当なら、彼女を許すのは難しくなる。そう思ったが…

狭山「あの屋敷に行つたのは本当の事だけど、ボクは誰も殺してない…。入ってすぐに朝倉って男の人にバレて、その人と少し争つただけ…そしてあの男の人との争いもすぐ切り上げて帰ったから、みんな無事だよ…」

「…本当に？」

狭山「信じられない…よね。でも、本当のことだよ。どうしても気になるなら、あの屋敷まで送ってあげる」

そつと見つめた狭山の目は真剣なもので、嘘を言っているようにも見えない。なのにあの時意味深な言い方をしたのは恐らく、相手である自分を怒らせる為だったのだろう。彼はそう考える事にして先を進んだ。

「…分かった。一先ず信じる」

狭山「…ありがとう」

…バタンツ

圭一「とりあえずここで待っている。今、この主と話してくる」  
大きなソファアールやテーブルの並べられている客間のような場所に由紀達を招き、圭一はそう告げる。由紀達は大人しくそれに従おうとしたが、そんな中で彼だけが圭一らの前に立ち、待つ事を拒んだ。

「悪いけど、僕と彼女だけは一目先にその人に会わせてもらいたい」  
彼はそう言いつて胡桃の事を指さし、圭一の目を見つめる。だが、大人しくそこで待っていていようと思ひ、席につきかけていた胡桃は突然の事に戸惑っているようだ。

胡桃「あ、あたしも…?」

「ああ、じやなきや話が進まない…」

圭一「…:分かった、ついてこい」

彼の提案を了承し、圭一は二人を連れていく。その場に残された由紀や悠里、そして美紀が不安げな目を向けると、それに気づいた狭山が彼女らに言った。

狭山「大丈夫。ボクもそばで二人を見てるから…:危ない目にはあわせないよ」

美紀「…うん、ありがとう」

悠里「じゃあ、二人の事おねがいね?」

狭山「うん、すぐに戻るから…:ゆっくりしてて」

…バタンツ

扉が閉まり、三人は訳も分からぬままその場に残される。ゆっくり

しててと言われたものの、この広い空間には慣れなかった。

由紀「——くん、なんで胡桃ちゃんだけ連れてったんだろ…」

悠里「さあ、でも…そうしないと話が進まないって言ってたわね」

美紀「あの人の事です、何か考えがあるんでしょう。でなきや、胡桃先輩だけを連れていたりはしないでしょから」

悠里「…そうね。とりあえずは待ちましょから」

ただ彼の事を信じ、今はじつと待つことにする。それが彼女達の想いだった。今日は今朝から大変な目にあつたが、これから少しずつ良くなつていく…そう信じながら、ただじつと待つ事にした…。

~~~~~

圭一「…なあ狭山。お前、なんで急にコイツらとの戦いを止めた？」
屋敷の主であるあの男の元へ向かう道中、圭一は気になっていた事を尋ねる。狭山は圭一と目を合わせずに顔をうつむけると、穂村の時間と同じように返事を返した。

狭山「また、ゆつくり話すよ…。ちよつと長くなりそうだから」

圭一「ふうん…そうか」

狭山は突如彼女達との戦いを止めたが、どうもそれだけではないようだ。先程から、彼女が見せる表情がこれまでに比べ豊かになっているような気がしてならない。狭山は彼女達と出会い、何かが変わつたのだろうか…。

穂村「まあそれについてはまた後日ってことで、今はコレだな…。急に人連れてきちゃったけど、怒るかな…」

階段を上がって二階へと進み、そしてたどり着いた一つの扉…。穂村はそのドアノブに手をかけ、心配そうな表情を見せた。

圭一「その程度でキレるようなヤツじゃないだろ…」

狭山「万が一怒られそうになったら、ボクのせいにしていいよ。彼女達をここに連れてくって最終的な決断をしたのはボクだし…」

…ガチャツ

狭山は扉を開けるのを躊躇う穂村を退かし、自らが代わりにそれを開く。そうして彼と胡桃を招いたその部屋には何が入っているのか分からない棚がいくつもあつたが、一同が目を向けたのはそこではなく…部屋の隅にあるコンピューターが置かれた机、その前の席に腰かける一人の男だった。

狭山「柳さん、ただいま…。そして急だけど、会わせたい人が…」

柳と呼ばれたその男は狭山の声を聞いてから椅子ごとクルリと振り向き、彼と胡桃の存在に気付く。その男は顔だけ見れば若くも見え、短い黒髪の中に白髪が混じっており、今一つ年齢が掴めない。

柳「会わせたい人？珍しいな…この二人がそうかい？」

狭山「そう…」

柳「へえ…それはそれは…」

男は席から立ち上がり、彼と胡桃の前にスタスタと歩み寄る。狭山はその間に入って少しだけ不安そうな顔をしていたが、男は首をかし

げていた。

柳「なんで、私とこの二人を会わせなかったのかな？」

狭山「えっと…簡単に説明すると…」

まず、狭山は柳にこうなるまでの経緯をざつと説明した。彼女らは元々自分達が追っていた人物だったが、色々あつて彼女らを殺すのは止めにした事。そして、その中の一人である彼が柳に会いたいと言つた為、狭山自身がここに招いた事…。その全てを聞き終えると、柳は意味深な笑顔を見せた。

柳「んん、なるほどね…大体わかった」

柳は納得したように頷き、狭山の目を見つめる。その目は以前とは違う雰囲気が変わっており、彼女の言った事が全て真実だと確信した。

柳「…で、その君か？私に会いたがってたのは…。何の用かな？」

視線を狭山から彼へと移し、ニヤリと笑ったまま尋ねる。すると彼は真剣な表情を柳へと見せ、そばに立つ圭一の事を指さす。そうしてから…ここに訪れた目的を告げた。

「アンタは感染していたこの人を助けたと聞いた。なら、もう一人くらい救えるな？」

胡桃「っ!？」

柳「…圭一君、話したのか？」

圭一「冥土の土産にと思って話したんだがな、コイツが中々にしぶとくて…結局タイムオーバーになった」

参ったように笑いながら、圭一は部屋の壁へ体を寄りかける。圭一の発言を聞いた柳はため息をつき、そしてまた彼の事を見つめた。圭

一が全て話したのなら、ごまかしても意味がないだろう。なら、彼の目的を聞いておこうと思った。

柳「：誰を助けてほしい？」

「ここにいる、恵飛須沢胡桃だ：。アンタには彼女を助けてもらう」

胡桃「……………」

彼は胡桃の肩を引き、自分のそばへと寄せる。彼の目的が自分を助けること：そして目の前にいるこの男がそれを可能にするかもしれないと知った胡桃は無言のままたずみ、その目を真っ直ぐ目の前の男：柳へと向けた。

柳「君、感染しているのか？」

胡桃「えつと……………うん」

柳「：わかった。とりあえず話を聞こう」

柳はそう言ってから部屋の中にあつた椅子を二つ引つ張り、彼と胡桃をそこに座らせる。そうして胡桃は自分に起きたこれまでの事を柳へ事細かに話し、狭山、穂村、圭一はそれを立ったまま聞いていた。

……………

胡桃「つてわけで：もう、あとが無いかなって：」

柳「ああ、だろうね」

胡桃「…つ……………」

全てを話終えた後、柳は彼女の目を見つめたままそう答える。この柳という男が信頼できるかどうかは分からないが、もしもこの男がダメだったらどうすれば良いのか…。彼は胡桃の不安そうな横顔を見つめてから、柳にそれを直接聞いてみる事にした。

「…治せるか？」

柳「ある程度検査しなくては何とも言えんが、まるつきり希望が無
いわけでもない…。にしても、その話が全て本当なら中々に面白いな
…」

胡桃「……………」

「じゃあ…いけるかも知れないんだな…？」

柳の言葉を聞き、彼と胡桃に少しだけ希望が湧く。だが、直後に柳
が見せた笑顔はどこか裏があるような…そんな笑顔だった。

柳「ああ、私がこの気になれば…の話だが」

「それは…どういう…」

柳「言葉のままの意味だ。ここで彼女を治したとして、私には利益
がない。だが…彼女の身体は面白そうだ。ただ治すだけなんて物足
りない…彼女がいれば、もっと面白い事が出来る」

「胡桃ちゃん…下がって…」

胡桃「あ、ああっ…！」

異様な雰囲気を感じ、彼と胡桃は立ち上がる。そうして柳から距離
を開く二人だったが、柳はまだ笑顔を見せていた。

柳「さて、神崎圭一…穂村竜也…狭山真冬…」

圭一「……………」

穂村「あん？」

狭山「……………」

柳「その女、恵飛須沢胡桃を捕まえろ。これは命令だ」
告げた瞬間、三人の眉がピクリと動く…。

柳はそれぞれの顔を見回すと、また頬をゆるめた…。

柳「なんて、ただの冗談だがな……」

「……はあ？」

胡桃「!……??」

ふふつと笑ってから、柳はそのまま一人席へと戻る。彼と胡桃はその背中を呆然としたまま見つめていたが、戸惑っていたのは彼等だけではなかった。

穂村「ビビった……マジで命令されたかと……」

圭一「なんだ？柳が本気だったらやらなかったのか？」

穂村「えっ？いや……どうしようかな……胡桃はわりと良い娘みたいだし……」

圭一「お前まで狭山みたくなっただな……」

狭山「ボクみたくなって……どういうこと？」

圭一「甘くなっただって事だよ……」

狭山「……そう」

少し冷たい圭一の視線……狭山はそれから目を逸らす。しかし甘いと言われるとそれもどこか気に入らず、狭山は頬を膨らませた。

狭山「……………」

圭一「お前、本当に変わったな…」

不機嫌そうにむくれる狭山の顔を見て、思わずそう言葉を放つ。彼女は言葉こそキツイ人間だったが、ここまで表情を出すことはしてこなかったはずだ。

柳「ふふつ、楽しそうだね？」

狭山「柳さんも…悪ふざけが過ぎる。さっきのは冗談に聞こえなかった」

柳「ん、そうかい？まあ…本音も混じらせていたからね」

胡桃「混じらせたのかよ……………」

不安そうな声を漏らし、柳から目を逸らす胡桃…。柳は自分の座っている椅子を彼女の方へ向けると、またニヤリと微笑んだ。

柳「ああ…君は貴重な人間だ。君のような実験体がいれば私の目標としていた物が出来るかも知れないのだが……………」

狭山「ダメ。彼女はただ、治すだけにして…。もし胡桃に何かしやうとしたら、いくらあなたであっても殺すから……………」

柳「!?……………良い目だ、本当に変わったんだね」

自分の仲間に殺すと言われたにも関わらず、柳はどこか嬉しそうに笑う。その笑顔が何を意味しているものなのかは誰にも分からなかったが、柳は一つだけ約束をした。それは胡桃にとって、そして彼や狭山にとっても希望となる約束だった。

柳「信頼する仲間にまでこう言われたら退けないな…。わかった、できる限りの事はしてやろう。結構特別だぞ…？狭山君に感謝しな

さい」

「っ!?それはよかつた…!本当に頼む!!」

胡桃「……ありがとう」

彼は柳に頭を下げ、もしかしたら胡桃を救えるという事実に関心から喜んだ。一方で胡桃は少しだけ気まずそうに…しかし嬉しそうに、狭山へ礼の言葉をのべた。

狭山「ボクはなにも…体、治るといいね」

胡桃「…うんっ」

柳「…と、仲良くしているところすまない」

胡桃「んっ?」

狭山「…なに?」

柳は部屋の中を歩き回り、かと思えば扉を開けて廊下の方を覗き、何かを言いたげにして頭を抱える。そんな柳の視線の先を見て、その場にいた全員がハツとした表情を浮かべた。今現在、一同がいる柳の部屋…そしてこれまで歩いてきた廊下…そのカーペットが、グツシヨリと泥に汚れていたのだ。

柳「もしかして…今日は雨が降っているのか?」

穂村「降ってる降ってる!そりやもうドシャ降りだぜ!!って、柳さん雨降ってるの知らなかったの?おいおい、引きこもりかよ…たまには外に出ろって!!」

満面の笑みを浮かべつつ、穂村は柳の背中をバシバシと叩く。目の前にいる男は自分の家を汚されて困っているというのに、穂村は本当に空気の読めない男だなと…全員が思った…。

柳「家に招待したのは…この二人だけか？」

狭山「ううん、あと三人いるよ…」

柳「そうか、じゃあ全員風呂に入れて着替えさせてくれ…。自己紹介はそのあとだ。それと穂村君、君は汚れた部屋と廊下…その全てを掃除しろ。これは冗談ではなく、本気の命令だ」

穂村「はあっ!?!なんで俺が!!?」

柳「いいから…やれ」

穂村「っ…了解ツス…」

柳から圧力を感じ、穂村は首を縦に振る。狭山は穂村が掃除している間に彼女達を風呂に入れてしまおうと考え、そばにいた胡桃を呼んだ。

狭山「胡桃も来て。君たち全員、一度に入ってもらおうから」

胡桃「あ、ああ…」

穂村「全員一度に…?やったな少年、ハーレムが出来るぞ…」

「なっ…!?!」

狭山の言葉を聞いた穂村が彼にボソツと呟き、ニヤリと笑う。もちろん『全員一度に』というのは女性陣だけの話であって彼はカウントされていないのだが、穂村に言われてその光景を想像した彼は目をこれでもかというほどに見開いていた。

狭山「…キミは違うからね?覗きとかもやつちやダメだよ」

胡桃「だって、残念だったな?」

「ぐう…っ!」

ニヤニヤ微笑む胡桃が狭山と共に出ていくのを見送り、彼はグツと拳を握り締める。一瞬とはいえ、もしかしたらの可能性を期待した自分がいからだ。

「まあ…そうだよな…くそっ」

穂村「…なんかお前、結構俺と話が合いそうな気がするぞ」

「…バカな。そんなわけない」

穂村「じゃあ、この家の風呂に覗きポイントがあるかどうかとも興味ねえな？」

悪魔が囁くように、小さく耳打ちする穂村…。彼は握った拳をプルプルと震えさせ、途切れ途切れに言葉を放った。

「その…正直に言うと…興味あるかも」

穂村「ほら、やっぱり俺と同じ人種だ。ようこそマイブラザー！因みに言つとくと、この家の風呂に覗きポイントなんかねえ。あつたらまず、俺が覗きに行つてゐるっての…」

「ぐっ…！騙しやがったな…」

そんな会話を交わす二人を見て、柳は呆れた表情を見せる…。穂村がこういう人間なのは知っていたが、似たようなのがもう一人となると少しキツいかもしれない。

柳「はあ…」

圭「…どうした、寝不足か？」

柳「いや…やっぱり追い払うべきだったかなと…今さら遅いかね」

狭山の前で約束してしまつた以上、やることはやらねばならない。柳は未だ目の前で何やら話し合う二人を見つめ、また深いため息をついた…。

百二十話『みらいへ』

美紀「うそ…」

胡桃「…マジかよ」

悠里「まさか、こんな場所があるなんてね…」

狭山に案内され、屋敷内のある場所へとたどり着いた彼女達。そこに広がっていた光景は世界がこんなふうになってから…いや、その前からも見ることがなかったかも知れない。だからこそ、彼女達は全員揃って驚きの声をあげたのだ。

由紀「うわああつ…すつごく広いお風呂だね!!」

狭山に案内されて入ったこの屋敷の浴場。そこに敷き詰められているのは灰色のタイル…ではなく、高級な石か何かなのだろうか？由紀は天井の明かりに反射するその上にペシペシと足音を鳴らし、興奮した様子で辺りを見て回っていた。裸のまま辺りを駆ける彼女を見て、悠里は慌てた様子を見せる。

悠里「あつ、由紀ちゃんっ！走ったら危ないわよ！」

胡桃「まあ…そりや由紀のテンションも上がるよな…。まともな風呂ですら久しぶりだったのに、こんなものちよつとした銭湯じゃん」

美紀「というより、高級ホテルとかの大浴場…って感じですね。こんなの、私も雑誌とかでしか見たことないです…」

かなり広々とした空間の奥、そこには個人の家の物とは思えぬ程に大きな浴槽がある。しっかりと湯のはられたそれからは湯気が立ち上っており、一行は驚きに目を見開いていた。

由紀「胡桃ちゃん、すごいよっ！このお風呂、プールみたい！」

胡桃「だからって泳ぐなよ？つーか、まず体洗うのが先だろ」

悠里「そうね、由紀ちゃん、こつちおいで」

由紀「は〜い♪」

目の前にある浴槽に一刻も早く浸かりたい気持ちを抑え、彼女達はすぐそば：そこにあつた蛇口やシャワーヘッドの方へと向かう。これらは合計で六つ、同じものが横並びに設置されており、それぞれの前に大きな鏡：そしてその鏡の前にはシャンプーや石鹸等も置かれていた。

悠里「お湯、出るのよね？」

胡桃「ああ：たぶん」

シャワーヘッドの前に腰を下ろし、左手でそれを持ってから悠里は恐る恐るハンドルを捻る。するとシャワーヘッドから程よい勢いの湯が放たれ、悠里はその温度を右手で確認した。

悠里「：あつたかい」

思わずにやけてしまうほど、その湯は温かかった。温度が丁度良いのを確認し終えた悠里がそのシャワーを頭からかぶると、他の全員も同じようにそれぞれシャワーを浴びた。

美紀「ほんと、気持ちいい：」

胡桃「ずっと水浴びとかばっかだったからなあ：マジでありがたい」

由紀「うわっ!?!りーさんっ、わたしのだけ水が出てるっ!!」

悠里「えっ?ああ、由紀ちゃん、そつちじゃなくて：この赤い方のハンドルを回すのよ。由紀ちゃんが今回した青いのは水を出す方だから」

由紀「んっ?：あ、ほんとだ!お湯が出たっ!みーくんっ、お湯が出たよ!!」

美紀「ええ、そうですね：」

回すハンドルを間違えた由紀が色々と騒ぐ中、美紀は穏やかな声を返し続けた。それほどこのシャワーから浴びる湯が心地よく、落ち着

くのだ。彼女達はシャワーを浴びてある程度体や髪を濡らした後、一旦それを止めて髪を洗ったり、体を洗ったりした。

由紀「リーさん、背中洗ってくれる?」

悠里「ええ、いいわよ」

ここに入る前、狭山に渡してもらったボディタオルを悠里へと渡し、由紀は背を向ける。由紀にそれを頼まれた悠里は自分の髪の泡をシャワーで洗い流した後、彼女の背中へ手をつけた。

悠里「…どう? 痛くない?」

由紀の背中を洗うその力が強すぎてないか、悠里はそれを不安に思って尋ねる。しかしそれはいらぬ不安だったようで、由紀は直後に顔を振り向けてにっこりと笑った。

由紀「えへへ、気持ちいいよ。リーさん、お母さんみたい…」

悠里「ふふつ、由紀ちゃんみたいな子なら…ずっと可愛がつてあげる♪」

胡桃「うわ…親バカだ…」

自分の長い黒髪を両手でガシガシと洗いながらその光景を横目に見て、胡桃がボソツと呟く。声に出すつもりはなかったのだが思わずそう言ってしまう程、悠里が由紀を見て幸せそうに笑っていたのだ。

悠里「あら? 親バカはダメかしら?」

美紀「甘やかし過ぎるのは良くないかと…」

胡桃の向こう、一番奥に腰かけている美紀が体を洗いながら告げる。すると由紀はその言葉を聞いてある事を思ってしまった、一人クスクスと笑い出した。

由紀「ふふっ、みーくんは親離れするのが早そうだよね」

美紀「…そうですか?」

悠里「まあ、しつかりしてるものね」

由紀「うん。…で、胡桃ちゃんは何だかんだでママやパパに甘える
チヨイ不良ムスメっ!」

胡桃「おいっ!なんだよそれっ!!?」

その顔を由紀の方へグルツと向け、胡桃はそのまま彼女を睨もうとする。しかし顔を向けた時の勢いによって自分の髪が目当たり、ついていた泡が目に入ってしまった。

胡桃「んぐっ!!美紀っ!シャワー取ってくれ!目が痛いっ!!」

美紀「まったく…何してるんですか…」

隣でジタバタ足を動かす胡桃を見て呆れた表情をした後、美紀は持っていたシャワーヘッドを彼女の方へと向ける。そうして彼女の髪、顔を洗い流すと、胡桃は泡の入った目を必死に両手で擦って危機を脱した。

胡桃「ふう…サンキュー」

美紀「髪洗ってる時にふざけるからですよ…」

胡桃「だって、由紀のヤツがさあ…」

由紀「ふむふむ…やつぱり、みーくんは胡桃ちゃんのお姉ちゃんっ
て感じだね。で、りーさんはみんなのお母さんでしょ。わたしは
やつぱ、長女だよね…」

百歩譲って、美紀が胡桃の姉に…というのは納得できる。悠里がみんなの母親というのもだ。しかし、その悠里に背中を洗ってもらい、そして今は髪も洗ってもらっている一人の少女…まあ由紀なのだが、彼女が長女というのだけは違和感があり、彼女の発言を聞いた三人は眉をピクツと動かした。

美紀「由紀先輩が…長女……?」

胡桃「由紀、鏡を見てみる。一人で髪も洗えない長女の姿が見えるぜ」

由紀「なっ?!?ちっ…ちがうもんっ!!りーさんが『髪も洗ってあげようか?』って聞いてくれたから、ついそれに甘えちゃっただけでっ!一人でだって洗えるよ!!」

胡桃「ははっ、そうかそうか♪」

小馬鹿にしたように笑った後、胡桃は体を洗い始める。さっきの由紀の言い方だと胡桃は末っ子に選ばれた事になるのだが、由紀が長女…という違和感満載の発言にツツこむあまりそこには気付いていないようだ。

美紀(というか…りーさんの言葉に甘えちゃう時点で由紀先輩は子供なんじゃ、とか言ったらまた本人が傷つくから黙ってよう…)。体を洗いながら、チラッと由紀の方を見る…。彼女は目をギョツと閉じたまま悠里に身を任せ、その髪を洗ってもらっていた。その姿はどう見ても幼い子供のようであり、長女の貫禄はない。

胡桃「っーか、由紀から見てアイツはどのポジションに入るんだ?

やっぱり末っ子?」

美紀「あいつ?…ああ、先輩ですか」

由紀「末っ子は胡桃ちゃんでしょ?——くんはパパだもん」

胡桃「なっ…!?!」

由紀の中では自分が末っ子認定されていた事…そして彼が父親認定されていた事…そのどちらも納得できず、胡桃はボディタオルを持つその手をギョツと握る。急に力の込められたタオルはその勢いによつてついていた泡を飛ばし、それはまたしても胡桃の目へと入った。

胡桃「つぐ!!美紀っ!」

美紀「あつ、はい…シャワーですね」

ついさつきやったのと同じようにシャワーを放ち、胡桃についた泡を流す。二度目だからなのか、それともこうなる予感がしていたのか、美紀の動きはとてもスムーズだった。

胡桃「っ…助かった…」

美紀「まったく、さつきもやったばかりじゃないですか…」

胡桃「うっ…ごめん…お詫びつて訳じゃないけどさ、背中流してやろうか?」

美紀「いえ、もう終わりましたから結構です」

胡桃に向けていたシャワーを自分の体に向け、美紀は体に纏っていた泡を洗い流す。彼女は既に髪も洗い終えていたのでそのまま浴槽に向かつて良いのだが、やはり全員一緒に入りたいのだろうか…。彼女は何をするわけでもなく、その場に腰を下ろしたままだった。

悠里「由紀ちゃんの言い分だと、私と彼は夫婦になるのね?」

由紀「おお、そうだね♪」

悠里「あらあら、それは幸せそうね…」

由紀の背後に腰を下ろし、彼女の髪を両手で洗う悠里。その嬉しそうな表情を横目に見て、胡桃もにっこりと笑った。

胡桃「あいつにリーさんは勿体ない気がするなあ…」

悠里「あら、そうかしら?彼、結構素敵な男の子だと思うわよ?」

胡桃「ん、んん…」

悠里「…ふふっ」

シャワーで自分の体を洗いながら、胡桃は曖昧な返事を返す。彼女のそんな反応を見て悠里が意味ありげに笑うと、彼女に髪を洗われている由紀が不思議そうに声をあげた。

由紀「んく？誰かわたしの背中に触ってる？」

胡桃「んなわけないだろ…今、お前の後ろにはリーさんしかいなくて、そのリーさんは両手でお前の髪を洗ってたんだから」

胡桃が冷静に答える。しかしそれでも背中に何かの感触を感じている由紀はその目を閉じたまま少し考え、そして一つの答えにたどり着いた。

由紀「あつ、リーさんのおっぱいが当たってるんだ」

悠里「あら、ごめんね」

自分でも気づいていなかった悠里は由紀から少しだけ距離をとり、彼女の背中に触れてしまっていた自らの胸を離す。悠里はそうして何事もなかったようにシャワーを取り、由紀の髪を洗い流し始めた。

胡桃「大きいと、背中に寄るだけで当たるんだな…」

ボソツと呟き、胡桃は自身の胸を見つめる。自分の胸も決して小さくはない方だと思うが、恐らくよほど密着しない限りは相手の背中に触れたりなどしないだろう…。

悠里「さて、私もパパッと済ませちゃうから…みんなは先に入っていいわよ」

胡桃「…そうか？」

由紀「じゃあお先に〜♪」

胡桃「あつ！走んなって！」

由紀の面倒を見ていた事で、悠里は他の者より遅めに体を洗い出

す。由紀、胡桃は一足先に浴槽の方へと向かったが、美紀は悠里の隣へと場所を移して待っていた。

悠里「どうしたの？」

美紀「いえ、背中くらいなら流してあげようかと…」

悠里「ほんと？じゃ…お願いしようかしら♪」

美紀「はい、任せて下さい」

悠里は石鹸で泡をつけたボディタオルを美紀へと手渡し、そつと背中を向ける。そんな中、横の方からは浴槽に入った由紀、胡桃の心地よさそうな声が聞こえてきた。

由紀「はあく…きもちいくねえ…」

胡桃「んん、だな…」

美紀「温かいですか？」

由紀「うんっ、温かいよ〜！」

美紀「…だそうです。楽しみですね」

悠里「ええ、ほんとに…」

由紀の言葉を聞き、美紀と悠里の期待も高まる。そうして二人は待ち遠しそうに浴槽を見つめ、あることに気づいて同時に笑う。この浴槽はかなり広いというのに、由紀と胡桃は離れもせず肩を寄せ合いながら真ん中に浸かっていたのだ。

悠里「仲良しねえ」

美紀「ええ、ですね」

ふふつと笑い合い、美紀は悠里の背を洗う。タオルを擦り、上手く泡立てながら、弱すぎず、強すぎずの力で…。

悠里「…美紀さん、今日はありがとう。あなたがいたから、狭山さんは自分を見つめ直してくれたんだと思う。結局私は…何もできなかった」

美紀「そんなことないです…。リーさん達が私を仲間に加えてくれて、一緒にいることの暖かさを教えてくれたからこそ、私は彼女を説得できたんですから」

悠里「今さらだけど、あなたに会えてよかったわ…これからもよろしくね？」

美紀「はい、こちらこそ…」

目の前の鏡越しに悠里と目を合わせて答えると、彼女はにっこりと微笑む。悠里は美紀と出会えてよかったと言ったが、それは美紀も同じだった。美紀も彼女達に出会えて本当によかったと…この時改めて思った。

美紀（圭…キミもこの場にいてくれたら、もっと良かったのに…）
今はいない友の事を思いだし、微かに瞳が潤む。すると、悠里が思い出したように口を開いた。

悠里「そう言えば、狭山さんは入らないのかしら？」

美紀「ああ…なんか、いつの間にかいなくなっちゃってましたね」

悠里「彼女も泥だらけだから、てっきり一緒にいるんだとばかり…」

美紀「…どうしたんだろ。やっぱり、まだそこまでの関係にはなれないんでしょうか…」

悠里「……どうかしらね」

美紀はもう、彼女を完全に許すつもりでいる。しかし彼女の方はまだ、気まずさがあるのかも知れない。だから自分達を案内するだけでここには入らず、どこかへと行ってしまったのかも…。美紀はそう考え、少し寂しげな表情を見せた。

悠里「…ありがと。さあ、私たちも行きましようか?」

美紀「はいっ」

少しして、悠里も体と髪を洗い終える。彼女はこれまで待っていてくれた美紀に礼を言った後、二人で由紀と胡桃の待つ浴槽へと向かった。

悠里「…っ、ほんとに温かい」

ゆっくりとつま先を浸けただけでも、その心地よさに頬が緩む。悠里と美紀は少しずつ体を沈め、肩まで浸かった後に深く息を吐いた。

美紀「はああ……気持ちいい」

悠里「お風呂なんて、いつぶりかしら」

胡桃「温かいお湯に浸かんのは…前に行った温泉以来か?それからはずっと、冷たい水で済ませてきたから…」

由紀「そう言えば、温泉の時は——くんが覗きに来たよね?今日も来るのかな?」

その時の事を思いだし、由紀が冗談混じりに言う。いくら彼でも、今回は大丈夫だろう。

胡桃「さすがに二度目はないだろ?」

美紀「そもそも、温泉の時と違って覗けるポイントが限られていますからね」

悠里「ええ、ここに覗きに来るには一つしかない入口を開けるしか

浴場の入口である、大きな磨りガラスの扉。ここに覗きに来るにはあれを開けるしかないのだが、いくらなんでもそこまではしないだろう。そう思った時、その扉がゆっくりと開いた……。

ガラガラガラツ…

悠里「っ!？」

胡桃「マジかよっ!？」

目線の先にある扉がゆっくりと開くのを見て、彼女達は浴槽に沈めた体を両手で隠すように身構える。彼が来たかと思っただからだ。しかしその扉から顔を覗かせたのは彼ではなく、姿を消していた狭山真冬だった。

美紀「…なんだ、真冬か」

由紀「真冬ちゃんも入るの？」

真冬「あ…っ…うん…。いいかな…？」

真冬は大きなバスタオルを体に纏い、どこか申し訳なさそうに声を出す。一瞬彼が来たのかと警戒した一同だったが、真冬なら問題ないと一安心した。

悠里「ここはあなたの住む家で、私たちは少しお邪魔してるだけ…。断る事なんか出来るわけないわ。だから気にせず入って？」

真冬「…うん、ありがと」

ペコリと頭を下げた後、真冬はバスタオルが落ちぬよう胸元に当てた両手で押さえつつ、ペシペシと小走りしてシャワーの前へと向かう。そうしてそこに腰かけた彼女はチラチラと浴槽にいる彼女達を横目で覗き込み、彼女らに背中を向けてからそつとバスタオルを下ろ

した。

シャアアツ…

真冬「……………」

彼女はシャワーをつけながら、無言でその黒髪…そして体を洗っていく。彼女はそれらを手早く済ませると先程のバスタオルをまた手に取り、それを体に巻いてから浴槽の方へと向かった。

真冬「じゃあ…その…お邪魔します」

胡桃「いや、お邪魔してるのはあたしらなんだけど…」

胡桃が言うと彼女は照れたように目を逸らしてから浴槽に足を浸け、そのまま少しづつ体を沈めていく。途中、纏っていたバスタオルがプカリと浮かび真っ白な太もも辺りまで捲れてしまったが、彼女は慌ててそれを手で押さえた。

真冬「っ…………ふう」

胡桃「……………」

悠里「……………」

由紀「……………」

美紀「え…つと…」

この広い浴槽…そのどこに身を浸けようと問題はないのだが、彼女は一人その隅に身を寄せていた。一方で由紀達は中央に纏まって身を浸けていたので、真冬だけが除け者のようになり少し気まずい…。声をかけようかとも思ったが、改めて話すとなるとこれも中々難しく…。

美紀「…由紀先輩、真冬を呼んであげて下さいっ」

由紀「えっ? うん、分かった。真冬ちゃん、こっちは来ない?」

こういう時、誰とも分け隔てなく接する事の出来る由紀は本当に凄
いと思う。真冬も由紀に呼ばれると少し戸惑ったような雰囲気を感じ
させたものの、ゆっくりこちらへと寄ってきてくれた。

真冬「じゃあ……うん」

由紀「えへへ、お風呂、温かいね？」

真冬「……うん」

由紀が笑顔で語りかけるが、真冬の反応はまだぎこちない。このま
ま気まずい入浴時間を過ぎさねばならぬのかと由紀以外の誰もが
思った時、真冬の方から口を開いた。

真冬「改めて……今日はごめんね……。胡桃も怪我……しちゃってるね」

胡桃「……なんだ、まだ気にしてたのかよ。こんな怪我大丈夫だつて
の。それに、お前だつて怪我してるじゃん」

言いながら彼女のそばに寄り、胡桃は彼女のバスタオルを太ももの
辺りまで捲る。湯に反射して少し見辛いが、彼女の太ももには大きめ
の切り傷のようなものがあった。

真冬「あつ……！」

胡桃「んっ？ああ、わりいわりい」

真冬は慌てた様子で胡桃の手を退かし、捲られたバスタオルをしつ
かりと膝辺りまで纏うように直す。傷口を見られたくないのだろう
か？そんな事を胡桃が思うと、真冬はボソツと呟いた。

真冬「これは……その……彼と戦った時に……」

胡桃「ああ、そうか……アイツも容赦ねえなあ」

真冬「仕方ないよ…彼、みんなを傷付けようとするボクに凄く苛立ってみたいだから。全部、ボク自身のせい…」

美紀「…でも、先輩も真冬も、どっちも無事のままでよかった…」

真冬「…美紀は、本当に優しい娘だね。ううん、優しいのは皆もか」

由紀「真冬ちゃんも、だよ♪」

由紀の言葉を聞いてにつこりと微笑みながら、真冬はその場にいた全員の顔を見回す。最初こそ少し気まずかったが、一度話し出すと楽に会話が出来た。

悠里「あの、その傷は…彼にやられた訳じゃないわよね？結構大きな怪我だけど」

真冬の左肩部分…そこに残る二十センチほどの大きさの傷痕を見た悠里が心配そうな声を出す。尋ねられた真冬は自らの右手でその傷痕を撫で、そつと首を横に振った。

真冬「これは違うよ…。これは、初めて噛まれた時の傷…」

美紀「え…っ?」

悠里「…噛ま…れた?」

美紀に悠里…そして由紀と胡桃も、真冬の発言に目を丸くする。次の瞬間、真冬はハツとした表情を浮かべ、その事を説明した。

真冬「そう言えばまだ言っていなかったね…。ボクと穂村、そして圭一さんの三人は元々感染者にやられた人間だったんだけど、柳さん…つまりこの家の家主さんに助けられたの」

美紀「それ、ほんとなの?」

真冬「うん…。といっても元の状態に治してもらった訳じゃなく、今はちよつと特殊な体になってるけどね…。彼が胡桃を連れてここ

に来たのも、柳さんに力を借りるためだよ」

悠里「っ！だからさつき、彼は胡桃だけを連れて…。で、話はどうなったの？治してもらえそう？」

胡桃「あっ…うん…。出来るだけの事はしてくれるみたい…」

とは言っても、まだまだ油断は出来ない。胡桃はまだ不安の残る表情で彼女達にそれを告げたのだが、そばにいた皆は安心したような顔をしていた。中でも、由紀にとってその報告はかなり嬉しかったように…

由紀「っ…胡桃ちゃんっ、よかった…よかったあ…！」

胡桃「わっ…!?!ちよっ、くつつくなよ…」

由紀「だって…嬉しいんだもん！心配だったんだもんっ!!」

由紀は両手を大きく広げ、そのまま胡桃のことを強く抱きしめる。胡桃はそれに戸惑い、そして恥ずかしそうな顔をしていたが、どこか幸せそうでもあった。

美紀「本当によかった…」

悠里「ええ、だいぶ安心したわ…胡桃、よかったわね」

胡桃「ん、まあ…ね」

由紀「むう…素直じゃないなあ…！もっと大はしやぎしても良いんだよ？」

胡桃「ったく、しないっての…」

抱きつく由紀の額を小突き、胡桃はニコリと笑う。確かにまだ不安は残るが、それでも彼女達と一緒になら…彼と一緒になら…どうにかなる気がした。

由紀「…ところでさ」

由紀は胡桃から離れ、話題を変える。実を言うと、由紀は先程からあることが気になって仕方なかったのだ。

由紀「真冬ちゃん、なんでタオル巻いてるの?」

真冬「っ…!べ、別に…深い意味は…」

身に纏う大きく、真っ白なバスタオル…思えば彼女はここに入ってきてから、体を洗う時以外はずっとそれで体を隠していた。

胡桃「そういや、体洗う時もこっちに背中を向けてたな…」

真冬「そ…そんなことは……」

真冬はキョロキョロと目を泳がし、あからさまに慌てた様子を見せる。その様を見た胡桃は全てを察し、ニヤリと笑った…。

真冬「ボク…もう出るね…?」

ガシツ!

胡桃「おいおいっ、まだ入ったばかりだろ?」

胡桃は浴槽から出ようとする真冬の手を掴み、彼女を元の場所へと半ば無理矢理に引き戻す。すると、真冬は両手を胸元に当ててバスタオルをギュツと掴み、胡桃に対する警戒心をむき出しにした。

真冬「や、やだ…もう出たいっ…!」

胡桃「おかしいと思っただんだよなあ。あたしらはみんな裸なのに、一人だけそんなの巻いちやってさ…」

真冬「おかしいのは君たちだよっ!他の人に裸見せて…恥ずかしくないのっ?」

みるみる真っ赤になる真冬の顔…。悠里はそれを見て微笑むと、顎に手を当てながら答えた。

悠里「だって、女の子同士だしねえ…」

真冬「みつ、美紀も平気なの…？」

美紀「まあ…うん。最初はちよつと恥ずかしかったけど、慣れかな？」

由紀「真冬ちゃん、裸になるの恥ずかしいの？」

由紀が首を傾げながら尋ねる。すると真冬はその首をそつと縦に振り、恥ずかしそうに目を伏せた…。

真冬「だって…誰にも見せたことない…。」

胡桃「じゃ、今日が初だな…由紀っ、手伝え！」

由紀「えっ？ら、らじやくっ！」

由紀は胡桃の言葉にあつさりと従い、真冬のバスタオルに手をかける。当然真冬は抵抗したが、胡桃もそれに加わり守るのが厳しくなってしまう。バシャバシャと水しぶきが立つほどに抵抗しつつ、真冬は困惑の目を美紀と悠里に向けるが…

美紀「あはは…まあ、諦めてよ…。」

悠里「女の子同士なんだから、そんなに恥ずかしがらなくても…。」

真冬「なっ…!?や、やだっ…！助けっ——」

彼女の願いは届かず、美紀と悠里は諦めたような目をしていた。この二人には、由紀と胡桃を止めるだけの力が無かったのだ。次の瞬間、胡桃の手には真冬の纏っていたバスタオルが握られており、それを奪われた真冬は浴槽の中で体を丸くした。

真冬「くっ、胡桃っ！ほんとに返して…恥ずかしいからっ…！」

胡桃「気にすんなって！ほら、これでお前はあたしらの仲間だ。やっぱり裸の付き合いって大事だよなあ〜」

言いながらそのバスタオルを浴槽の外へ投げ捨てる胡桃を前に、真冬は顔を真っ赤に染める。

真冬「裸の付き合いとか…意味わかんないっ…!!」

悠里「まあまあ、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのに…」

真冬「だって…ボクっ…その」

体を丸めたまま、真冬は何かを言いかける。彼女は結局その言葉を言わずに顔を伏せたのだが、直後に美紀がボソツと呟いた。

美紀「もしかして、胸が小さいの気にしてるの…?」

真冬「っ!?!…っ…っ!!」

真冬は顔を更に真っ赤に染め、美紀に背中を向ける。どうやら、美紀の予想は当たっていたらしい。

胡桃「な、なんだ…意外と可愛いやつだな…」

悠里「胸の大ききなんて、気にしなくても良いのに…」

真冬「っ!!悠里がそれを言うと、嫌みにしか聞こえないっ!!」

バシヤツと音をたてながら振り向き、真冬は悠里の胸をじつと見つめる…。悠里の胸は真冬のそれとは比べ物にならないほどに大きく、よく見ると湯に浮かんでいるのが分かった。

悠里「そ、そんなにジロジロ見られると…」

じつくり見られるときすがの悠里も恥ずかしいらしく、両手をそつと胸元に当ててそれを隠す。しかしそれでもまだ隠しきれず、悠里の細腕からはみ出すその胸を見て、真冬は毒を吐くように呟いた。

真冬「…おっぱいオバケ」

悠里「なっ!それは失礼じゃないっ!?!」

真冬「ほんとの事を言っただけ。悠里は大きすぎる…それだと歩くのも大変」

悠里「そこまでじゃないわよっ!」

真冬はそつと悠里に背を向け、ボソボソと呟きを放つ。その時の真冬の目はほとんど生気を感じられないほどに濁っていた。恐らく、自分でもこれが負け惜しみだと分かっていたのだろう…。

真冬「やつぱり由紀…うん、美紀くらいの胸が丁度いい。胡桃もちよつと大きすぎだし、悠里に限っては論外…」

悠里「ろ、論外っ…」

胡桃「あたし…そんなに大きいか…？」

真冬「…嫌み？」

真冬に大きいと言われ、胡桃は自分のその大きさを両手で確認する。その胸は彼女自身の手でもギリギリ収まっておらず、真冬の肩がピクツと動いた。

真冬「まず、片手に収まらない時点で大きすぎ…。その点、ボクのは片手に収まる。たぶん美紀のもね…。由紀のは…うん、ギリギリおつけーかな？」

由紀「おお…それは、よろこんで良いのかな？」

美紀「いや、どうでしょうね…」

美紀は自分の胸を見つめ、複雑そうに苦笑いする。美紀はそこまで自分の胸に思うことはなかったが、改めてそう言われると傷付かないこともない。何故なら彼女の胸は、学園生活部の中では一番控え目かも知れないからだ。もつとも、真冬よりは大きいが…。

悠里「…わかった。胡桃、ちよつと狭山さんを押さえて？」

胡桃「っ…？わ、わかった…」

真冬「えっ？な…なに…？」

戸惑う真冬の肩をガシツと掴み、出来るだけ動かないように胡桃は腕をまわす。すると悠里は明らかに裏のある笑みを浮かべながら真

冬の前へと寄り、小さな声で囁いた。

悠里「狭山さん、知ってる…？胸ってね、触ると大きくなるかも知れないんですって……」

真冬「っ!?!ちよっ…悠…里?」

悠里「…ふふっ、試してみましようか?」

胡桃（うっ…りーさん、目が怖ええ……）

胡桃は真冬の腕をガシツと掴み、目の前にいる悠里からは目を逸らす。これまで悠里が怒るのは何度か見たことがあったが、彼女の目を見るに今回はこれまでと比べても最大級に怒っているようだ。

真冬「胡桃っ、離してっ…!」

胡桃「わ、わりい…今のりーさんには逆らえねえ…」

真冬「そんなっ…!」

ならば美紀と由紀だ。そう思つて視線を向ける真冬だが、二人はいつの間にか浴槽の隅へと逃げていた。どうやらあの二人も、悠里から放たれるオーラに気づいたらしい。

真冬「ほ、ほんとにつ…んっ!」

次の瞬間、悠里の手が真冬の胸に触れる…。初めて他人にそこを触られた真冬は体をビクツと震わせ、微かに声を漏らした。

悠里「ほら、こうして揉んであげれば…少しは大きくなるかもね?」

真冬「ゆう…りっ…やめっ…やめ…て…っ!」

悠里はどこか怖くも見える笑みを浮かべつつ、両手で真冬の胸…その両方を同時に揉んでいく。真冬の胸は確かにあまり大きくはなく、悠里の手にしっかりと収まっていた。悠里はその胸を指先でふにふにと撫で回し、またニコリと笑う…。

悠里「確かにちよつと小さいけど、気にしなくて良いのに…。狭山さんの、ちゃんと柔らかくて可愛いわよ…?」

真冬「お願いだからっ…:…んっ!あやまる…:からあっ…:!!」

悠里の手の動きに合わせ、真冬の体はビクビクと震える…。胡桃はそんな彼女の腕を押さえながら、かつて見たことのない悠里の雰囲気
に圧倒されていた。

胡桃（な、なんか…:やつちやダメな事をしてる気になるんだけど…:）

そう感じているのは胡桃だけでなく、隅へと移動した由紀と美紀も同じようだ。二人はこちらの方…:正確には悠里と真冬の事を見つめ、顔を真っ赤に染めていた。

由紀「みつ、みーくんっ…:!止めた方がよくないっ…:?」

美紀「そう思うなら先輩がやってくださいよっ…:!」

由紀「無理だよっ…:!今のりーさん、すごく怖いもんっ…:」

小声でそんな会話を交わしつつ、二人はもう一度悠里の方を見る…:。彼女は相変わらず真冬の胸を揉みながら、その小さな体が震えるのを見てニヤニヤと微笑んでいた。

悠里「顔…:こんな真っ赤にしちゃって…:」

首まで真っ赤に染まる真冬をの顔を見て眩きながら、悠里は両手の指先をそつと彼女の胸に沈める…。すると真冬はまたしても体を震わせ、まるで全力疾走した後かのように息を荒くしていた。彼女の体からは力が抜け、その手を後ろで掴む胡桃の存在もほとんど意味がない。胡桃がその手を掴まずとも、今の真冬に抵抗するだけの力はないのだ。

真冬「はあっ…はあっ…！ほんとにつ、ダメだからっ…っ！もう…ダメだからあ…」

悠里「ふふっ、もうちよつとだけ我慢…できるでしょ？しつかり揉んで、大きくしないと…ね？」

真冬「うっ…っ…っ…っ！！」

くくくくく

それから約二十分後…。

元からこの屋敷にいた人間、そして由紀達全員が屋敷内の一階にある広間へと集まる。そこにはこの家の家主である男、柳もおり、軽い自己紹介を始めようとしていた。…のだが

柳「ええつと、まずは…すまない、ちよつと待ってくれ。狭山君、顔色が悪いぞ？どうかしたのか？」

広間に置かれたソファ…真冬はそこに座りながら顔を俯けており、どこか具合が悪そうにも見える。柳がそれを尋ねると真冬はその青い顔をそつと上げ、消えそうなほどに小さな声を発した。

真冬「ボク……もう……お嫁にいけなくなりました……」

圭一「はあ？」

柳「……ん？なんだって？」

穂村「よくわかんねえけど、お嫁にいけなくなつたつてさ。大丈夫だよ狭山。どうしてもつてなら俺がお前を貰つてやるから！」

真冬「いらぬ……こつちから願ひ下げ……」

かなり弱つてゐるように見えるが、それでも穂村に対する扱いは変わつてゐないようだ。それを確認した柳はこれなら大丈夫さうだと一安心するが、一方で悠里の落ち着きがなかつた。

悠里「あ、あのつ……調子悪いなら……無理しなくても……」

真冬「……悠里こわい」

心配そうに駆け寄る悠里から目を逸らし、真冬は頬を染めて小さく呟く。その反応を見た悠里は先程の自分の暴走を激しく後悔し、頭を深々と下げた。

悠里「ご、ごめんなさいね……おふぎけのつもりが、なんか止まらなくなつちやつて……」

真冬「……別にいーよ」

彼女達にはもつと迷惑をかけたのだから、このくらいの事は許してあげよう……。そう考えた真冬が返事を返してからチラツと悠里の顔を見ると、彼女はホツとしたように微笑んでいた。

悠里「ほんと……あんな事はもう二度と無いようにします」

真冬「はい……是非ともそうしてください……」

その会話を聞いた女性陣は楽しげに笑い合つていたが、男性陣は何一つ会話の内容についていけない……。それぞれが不思議そうに首を傾げる中、柳は場の流れを変えるようにしてそれを告げた。

柳「では自己紹介をしよう。私は柳恭介やなぎきょうすけ…既に話は聞いているかも知れないが、念のために伝えておく。その少年と狭山君に頼まれ、感染している恵飛須沢胡桃を治す役目を任された。確実に成功するとは言えないが、どのみち時間がかかる…」

柳は胡桃を見つめてからそう言い放ち、そして由紀達の事を順に見つめていく。これから先、全てが上手くいくという保証はない…。しかし少なくとも、彼等は望む未来への第一歩を踏み出した。

柳「丈槍由紀、直樹美紀、若狭悠里、恵飛須沢胡桃…そして君も、全員この屋敷に住む許可を出そう。部屋はもちろん、必要な物はある程度揃っている。恵飛須沢君を治すまでの間だが、のんびりしていくといい」

由紀に始まり、最後は彼の顔を見て…柳はニヤリと笑う。今朝はあれだけ大変だったのに、状況は一変した…。由紀はこの瞬間、大きな希望のような物を心に感じ、笑顔のまま胡桃に抱きついた。

第十章・ともだち
百二十一話『ここから』

柳「では、少しじっとしていてくれ」

胡桃「ん、んん……」

置かれた椅子に座ったまま横に目を逸らし、胡桃はキツと目を細める。その直後、柳の持つていた注射器の針が彼女の右腕にそつと突き刺さり、彼女の真つ赤な血液がシリンジ内に少しずつ抜かれていった…。

柳「注射は苦手かな？」

胡桃「んく…得意な奴の方が珍しいと思うんだけど」

柳「ははっ、それもそうだね…」

そんなやり取りをしている間に、柳は胡桃の腕から注射器を抜く。どうやら必要な分の血液は取れたらしい。

柳「……………」

シリンジ内に溜まった血液をじつと眺めると、柳はそれを手にしたまま部屋の奥へと消えていく。部屋の奥にはカーテンで遮られた空間があり、柳はその向こうへと消えたのだが、大した時間もかけず胡桃の元へと戻ってきた。

胡桃「ええつと……………」検査 ったのは…もう……」

柳「ん？…ああ、これで終わりだよ。ごくろうさま」

コンピュータ端末だの見慣れぬ資料だのが置いてあるデスクの前に置かれた椅子にもたれ、”検査”の終わりを告げる。真冬達と風呂に入ってから一時間程後：『検査をしたい』と柳に言われ、単身の部屋に来た胡桃だったが、その検査は彼女が思っていたよりも簡単に終わった。

胡桃（なんか、普通の健康診断みたいだったな…）

検査と言われた時はどんな事をされるのかと内心怯えていたが、いざやってみたら体温を測られたり、何やら目をじっと見つめられたり、かとおもえば肩の傷を見せて欲しいと頼まれたりと、意外と楽なものばかりだった。もつとも、簡単に済むならそれで良いのだが……。

柳「もう戻っていいんだが…まだ私に用が？」

胡桃「えっ？い、いや…ただ、こんな簡単な検査で何か分かるのかなあと思つて…」

柳「まあ、分かるところまではね…。検査内容が気に入らなかつたならやり直すよ？そうだな…：少しだけ、身体を開いたりするか？」

胡桃「いつ、いやっ！それは勘弁ですっ!!」

ニヤリとした笑みと共に放たれた柳の言葉は冗談なのか、はたまた本気なのか分からない…。いくら自分の身体を治すためとは言え、出会って間もない人間に解剖まが紛いの事をされるのは避けたかった。もつとも、どうしても必要だとあれば話は別だが…。

柳「だろう？なら大人しく待っていることだ。やれるだけの事はやってやる」

胡桃「…：あんだから見て、あたしってどうですか？」

柳「…：さて、どうだろうな。ただ、君は一度深刻な状態からの回復

に成功している。それに今も……………」

胡桃「……………今も？」

柳「…今も、いくつかの異変はあれど基本的には普通の人間だ。外を彷徨^{うろつ}いている感染者達とは違う。まあなんだ…あまり深く考えすぎない事だね…。と言つても、難しいだろうが」

デスクの上に置いてあったペンを指先でコロコロと転がしつつ、胡桃にそういった言葉を伝えていく。真冬や穂村…そしてあの圭一という男も感染して死にかけていたところをこの男、柳に救われたと聞いていた胡桃だが、実はまだ半信半疑だった。

胡桃「真冬や…あの男の人達もあんたが…柳さんが助けたんですよね？」

柳「結果的にはそうだが、私はただの人助けとして彼等を助けた訳じゃない。この世界で…自由に動き回れるだけの力が欲しかったんだ」

胡桃「…力？」

柳「ああ…。あんなのが外を彷徨^{うろつ}いているんじゃない、まともな調査も出来やしない。だから、私の手足のような存在になつてもらおうべく彼等を助けたんだよ。結果は上々…あの三人はよくやっている」

椅子に背中をよりかけ満足そうな笑みを浮かべる柳だが、直後にその笑みを引っ込める。笑みを無くした柳はそのまま胡桃の顔をじつと見つめると、めんどくさそうにため息を吐き出した。

柳「だが…狭山君の気まぐれで余計な仕事の一つ増えてしまった」

胡桃「……………」

柳の言う”余計な仕事”とは、胡桃を治す事なのだろう。まさか、真冬が胡桃達のような人間を連れてくるとは思つてもなかったようだ。

胡桃「面倒だよな…。すいません…」

柳「……いや、余計な仕事とは言ったが、これはこれで良い暇潰しになる。それに、この状況ってあれに似てないか？ほら、よくある……」

胡桃「……？なんですか？」

もたれていた背中を椅子から離し、それを思い出そうと目を閉じて唸る柳。胡桃は彼が何を言いたいのかまるで理解出来ていなかったが、その答えはすぐ、それを思い出した本人の口から告げられた。

柳「あれだよ…」 娘が拾ってきた捨て猫をどうするべきか悩む親”
…今日の私はまさにそれだ」

ちようど良い例え話を思い出した柳はスッキリした表情だが、それを前にした胡桃は苦笑いしか出来ない…。

胡桃「あたしらは捨て猫か…」

柳「ははっ、まあ気を悪くしないでくれ。狭山君にもああ言っってしまったしね、元の場所に戻してこいなどとは言わないさ」

胡桃「やっぱり、完全に猫扱いされてる…」

柳「狭山君にも言われたし、彼にもあれだけ頼まれたんだ……。ここで君の治療を断れば、私はただの悪役に成り下がる…。善人でいたいなどと思っている訳でもないが、小物じみた悪役になるのは勘弁だ」

ははっと笑いながら告げられた柳の言葉…。胡桃はその中の一部分が気になってしまい、恐る恐るそれを尋ねる。

胡桃「彼って…あいつですよね？」

柳「ああ、君を治すようにと私に言ったあの少年だよ。彼は君達が風呂に入っている時も私のそばにいてね…その間、何度も何度も、繰り返しそれを頼んできたんだ。私は『分かった、任せておけ』と答えているのにね…。その言葉が信じられなかったのか、それとも…それだけ君の事が大切なのか…」

胡桃「……………」

その話を聞き、頭がジリジリと熱くなるのを感じた…。自分が風呂に入り、のんびりとしてる間も…彼は柳への説得を続けてくれていたのだ。

柳「あと、もう一つ面白い話をしてやろう」

胡桃「えっ…?」

それを思い出したのか、柳はニヤリと笑みを浮かべ…彼女にそれを語る。胡桃は目を丸くしたまま、黙ってそれを聞くことにした。

柳「もし恵飛須君を治せたとして、その後はどうするのかと彼に尋ねたんだ…。恵飛須沢君…キミは分かっているかと思うが、彼がキミをここに連れてきた事…これはこの世界の状況を一変しかねない行動だ」

胡桃「なんで、ですか…?」

柳「キミは一度とはいえ、感染の症状を抑える事に成功している。今後どうなるかは分からずとも、一度…たった一度でも、それを抑えたというのは凄い事だ」

胡桃の目を真っ直ぐに見つめて柳は告げるが、胡桃にはその言葉の意味が分からない…。そもそも、この屋敷には自分よりもっと凄い人間がいるのだから。

胡桃「でも、それをいうなら真冬たちだってそうじゃないですか？ あいつらだって、あんたの作った薬のおかげで感染した状態から立ち

直ったって…」

柳「彼女達はウイルスを”抑えた”訳ではない。どちらかというところ”共存”している、という言い方の方が正しい」

胡桃「…共存？」

柳「ああ。まあ、こここの辺りの説明は難しくくてね…。それに触れるのはまたの機会にしよう。話を戻すが、つまり…キミの事を調べていけば完全なワクチンを作れる可能性があるかもってことだ」

さらっと放たれたその発言は胡桃にとって衝撃的で、思わず目を丸くしてしまう…。もし完全なワクチンを作る事が出来たのなら、それはこの世界に生きる人にとって大変喜ばしい事だろう。

胡桃「そんなことが…本当に…」

柳「ワクチンのヒントになる人間、つまりキミと…それを読み解ける人間、これは私だな…。こんな二人が出会えたことは奇跡に近い。完全なワクチンなど作ろうものなら、この世界を救うことすら可能になるかも知れないからな…」

胡桃「……………」

柳の言う話は可能性の話だと、しつかり理解している。理解しているからこそ、その可能性が少しでもあることに胡桃は驚いていた。自分だけでなく、世界そのものを救えるなんて、そんなこと思ってもみなかった…。

柳「私の言いたかった面白い話ってのはここからでね…。これと全く同じ事を彼にも説明したんだが…彼はキミみたく驚いた表情は見せてくれなかった。彼はただ、『世界がどうかかって言われても、そんなのに興味はない。ただ、彼女さえ治ってくればそれで良い』と…表情一つ変えずに言っていたよ」

胡桃「…なっ!?あいつ…そんな事言ったんですか!？」

柳「ああ、今の言葉は一言一句違わず、彼の放った言葉だよ」

胡桃「あたしさえ治れば…それでいい…」

彼がそんな言葉を言う様を想像し、胡桃は微かに頬を染める。彼が自分を治そうと必死になっていてくれてるのは痛いほど理解していたが、まさかそこまで思っていてくれたとは…。なんだか嬉しいような、照れるような気持ちを抱えて胡桃が微笑む中、二人の人物が部屋の扉を開けた。

ガチャツツ：

胡桃「んっ…?」

柳「穂村君と狭山君か…どうした、何か用かな?」

部屋に入ってきた人物は穂村と真冬の二名…。二人は柳と胡桃のそばへツカツカと歩み寄り、場の雰囲気から彼女の検査が終わっている事を察する。

真冬「胡桃の検査、終わったんだ…」

柳「ああ、一先ずね…」

真冬「じゃ、彼女を連れていってもいい?中々帰ってこないから、由紀たちが不安になっちゃってて…」

柳「もちろん構わないよ。ああそうだ…狭山君、ついでに彼女達に適当な部屋を与えてやってくれ」

真冬「うん…わかった」

真冬はそのまま胡桃を連れ、部屋をあとにしようとする。胡桃もそれに応じて彼女についていこうとしたのだが、その時穂村がニヤニヤとした笑みを浮かべる。

穂村「よかったな。アイツにとって、お前は世界より大事な存在みたいだぞ」

胡桃「なっ…!?さっきの話、この人も聞いてたんですかっ!?!」

柳「ん?ああ、あの時は穂村君もそばにいたからね…」

それを聞いた胡桃が顔を真っ赤に染めると、穂村は彼女の肩をつつきながらヘラヘラと笑う。彼女の反応が面白くて、ついからかってしまうようだ。

穂村「愛されてるね〜！愛されてるね〜！」

胡桃「つぐ…！あいつとはそういうのじゃないからっ！ほらっ、行こうぜ真冬っ！」

ぷいっと背を向け、胡桃は真冬と共に部屋をあとにする。彼女が部屋の扉を開けて廊下へと出ようとした時、真冬は不思議そうに首を傾げた。

真冬「胡桃と彼って…ただの友達なの？」

胡桃「お前までそんなっ…！見てれば分かるだろ!？」

『いや、見たたからこそ疑問に思ったんだけど…』そう言いかける真冬だったが、これを言ったら胡桃に怒られそうな…そんな気がしたので止めた。

バタンツ…!!

穂村「はあ…元気なヤツだなあ。ほんとに感染してんの？」

柳「ああ、そこは間違いない」

彼女達が出ていったのを見送ってから、柳はデスクの上にあった紙に先程の検査結果を記していく。それは専門的な単語が多く、横から盗み見た穂村には何一つ理解ができない。

穂村「…ってかき、治せって頼まれたなら、俺らに使ったのと同じ薬を使ってやりや良いんじゃない？ダメなの？」

柳「ダメだな…。あれは投薬直後の反応が強すぎる。前にも言った

だろう？私はあれを何人もの人間を相手に試してきたが、生き残ったのは結局君達三人だけだ」

穂村「ああ、そっか…」

柳「それに、恵飛須沢君にはあの薬は使わないようにと狭山君に言われている」

穂村「胡桃が死ぬかもしれないからか？」

柳「いや、そうではなく…」

自分達に使った薬を胡桃に使っても、彼女が無事に生きていられる可能性は少ない。だからこそ、真冬は『彼女にそれを使うな』と柳に言った…。そう考えた穂村だったが、柳が真冬本人から聞いた理由はそれと別のものだったようだ。

柳「恵飛須沢君には”普通の女の子”のまま置いてほしいそうだ」

穂村「普通の女の子？なにそれ？」

柳「仮にだ、あの薬を恵飛須沢君に使って、運よく生き延びたとする。だがその結果：彼女は自分達と同じような、人間とも感染者とも違う存在になる。狭山君はそれが嫌なんだそうだ」

穂村「人間とも感染者とも違うって…狭山のやつ、自分の事をそんなふうに思ってるの？俺は自分のこと、わりとノーマルな人間だと思ってるけどね」

胸を張って言い切る穂村。柳はそんな彼を見て、はははと苦笑いする。狭山、圭一、穂村…この三人の中で、穂村が最も普通じゃないからだ。

柳（最もおかしいのは穂村君なんだがね…内面的な意味で）

本気で怒ると手がつけられない程に暴れ、かと思えば女である狭山の事を変な目で見たり、からかったりする。そんな人間が自分の事を普通だと言う光景はどこか不自然にも思えるが、柳はそれを口には出さない。

穂村「まああれか、ある程度寄らなきや感染者に気付かれなかったり、噛まれても平気だったり、力が異様に強かったり：そういうったところが普通じゃないと、狭山はそう思ってるんだろ？」

柳「ああ、だろうね」

穂村「普通の女の子のまままでいてほしい、か：」

柳「やつと出来た大切な友達だからこそ、そう思っているのかもね：」

そう呟いてから、柳は一人思い返す。狭山と出会ったばかりの頃、とても冷たく、感情など無くしたかのような冷たい目で彼女が言っていた言葉を……

~~~~~

『ボクは優しくなんてない。だからもう二度と友達なんて出来ないし、作るつもりもない：』

~~~~~

柳（ああは言っている、変わる時は変わるものだな：）

当時の狭山に起こった境遇を思えば、彼女が友達などいらないう言っていた事は納得出来る。しかし、由紀達はそんな彼女の心すら晴れさせたのだ。本当に面白い娘達だ：。柳がそう思った時、穂村が首を傾げながら呟いた。

穂村「つかしいな：柳さんの言い方だと、狭山は俺を友達だと思っ
てないんだよな……。ってことはもしかして、狭山：俺の事を彼氏かな
んかだと思ったりしてるのか？」

柳「……………」

やはり、この男は普通じゃない。今の発言も冗談ならまだ良いのだが、どうやらこの男は本気でそう考えているようだ：。うくと唸りながら首を傾げ、悩むような穂村を見て、柳は深いため息をつく：。真冬と圭一もクセはあるが、まだ常識的な面もある。しかし、この穂

村という男にはそれが無いような気がした。

くくくくくく

一方その頃、真冬は由紀達の上に胡桃を送り届け、そのまま二階の廊下へ彼女達を連れ出していた。今日からしばらく彼女達と共に暮らすことになったので、今からそれぞれに部屋を与えるところだ。

真冬「えつと…。ここから突き当たりまでの部屋は全部空き部屋だから、みんなで好きな部屋を好きなように使つてね…。一応、どの部屋にもベッドくらいは置いてあつたハズだから、すぐに寝れるよ」

そう言われて由紀達はその廊下の突き当たりへ目線を向けるが、彼女らが今立っているところから突き当たりまでは十数メートル以上あるように見える。そこまでの間にある扉の中、その全てが空き部屋というのは驚きだ。

悠里「ええつと…本当にいいのかしら？」

真冬「うん…。柳さんが良いつて言つてたから大丈夫。あと、地下の倉庫に適当な家具家電とかもあるから、明日にでも好きなやつを部屋に運んでね…」

美紀「なんか、暮らしが一変しそうですね…」

ついさつきは風呂に入れてもらい、今度はそれぞれが部屋をもらう…。しかも真冬が言うには、地下の倉庫にはテレビや冷蔵庫などの家電はもちろん、カーテンやタンスなども色々とあるらしい。

胡桃「ていうか、地下室まであんのかよ……」

「まったく、凄い家だな」

電気や水が使えるだけでなく、物資にもかなり余裕があるようだ。彼と胡桃は顔を見合わせ、この屋敷の凄さに驚く。

真冬「トイレも各部屋にあったと思うから、それもご自由に。あとの事は……また明日説明するね？」

悠里「ええ。本当にありがとうございまして、柳さんに伝えておいて」

真冬「……うん、わかったよ。じゃあ、おやすみなさい……」

由紀「うん！おやすみなさ〜い」

部屋割りは彼女達自身に任せ、真冬はその場を去ろうと背を向ける。しかし由紀を始め、その場にいた全員が言ってくれた『おやすみ』という言葉聞き、真冬は顔を振り向ける……。

真冬「あのっ……今日は、本当にごめんなさい……」

美紀「真冬……。もう、謝らなくていいよ。その代わりに、明日からしばらくみんなでお世話になるから……これからよろしくね」

真冬「……うん。こちらこそ……よろしく……」

少し照れたように微笑み、真冬はそのまま、下の階へ続く階段へ急ぎ足で消えていく……。それを見送った後、廊下に残った彼女らはそれぞれの部屋の割り決めを始めた。

由紀「う〜ん……どの部屋も広さとか同じっぽいね」

胡桃「じゃあ適当でいいだろ……。あたしはここにする」

一番手前にあつた部屋を選び、胡桃はその扉に背を寄りかける。他のメンバーもそれぞれ目に入った部屋を選び、最終的に手前から胡桃、美紀、悠里、由紀……そして一番奥の部屋が彼の部屋となった。

「結構広い部屋みたいだな……。胡桃ちゃん、僕とルームシェアする？」

胡桃「バカ……。しないに決まってるだろ……」

「そりゃ残念……」

その言葉が本気なのか冗談なのか分からなくて、胡桃はため息をつ

く。しかし、この言葉を聞いた由紀があることを思い付く。

由紀「あつ、そうだ！今日はさ、みんなと一緒に寝ない？」

美紀「今日は」って…いつも一緒に寝てたじゃないですか」

由紀「そうじゃなくてっ！広いお部屋の、広いベッドと一緒に寝ることが大事なのっ!!みーくんわかってないっ！」

扉を開けて見たところ、どの空き部屋にもかなり大きめのベッドが置かれている。確かにあのベッドなら、四人一緒に寝ることも可能だろう。

由紀「ねえねえっ、だめかな…？」

悠里「…そうね。私は良いと思うわよ。今日は色々あったから、一人だと寂しいし…」

由紀「だよねっ!?ほら、みーちゃんと胡桃ちゃんも一緒に寝ようよ！」

然り気無く、彼が仲間はずれになる事は確定していた。まあ、さすがに女子四人と身を並べて眠るわけにもいかないし、仕方ない事だが…。

美紀「…じゃあ、はい。私もそうします」

由紀「えへへくさあ、あとは胡桃ちゃんだけだよ！」

胡桃「えく…どうすっかな…」

「因みに言っておくと、胡桃ちゃんに与えられた選択肢は由紀ちゃん達と一緒に寝るか、僕と二人で寝るかの二つだから」

胡桃が悩んでいるようだったので、彼がその選択肢を二択に変える。すると胡桃はスタスタと歩き、由紀達と肩を並べた。どうやら答えは決まったらしい。

胡桃「じゃあこつちだ…」

「残念……。もし胡桃ちゃんとベッドに入った場合、二人で熱い夜を迎える事になったかも知れな——」

バタンツ……

まだ喋っている最中だというのに、胡桃は由紀達と共に部屋の中へと消えてしまう。廊下に一人残された彼は鼻でため息をつき、先程決めた自身の部屋の方へ身を向ける。

「まあ、今夜は女の子達だけでゆっくり休むといい。みんな、ここまで本当によく頑張ってきたからな……」

ボソツと呟き、彼は自分の部屋へと向かう。彼女達もそうだが、自分もゆっくりと休まなくては……。今日は本当に疲れたので、はやく横になりたい……。扉を開けた彼は広さのわりに殺風景なその部屋をぐるりと見回し、そのままベッドへ倒れこむ。自分で思っていたよりもずっと疲れていたのか……。彼は数分としない間に眠りについた。

百二十二話『ひっこし』

由紀「おおうっ！ほんとにいろんなのがあるね!!」

真冬「どれでも、好きなものを持って行って…。使わないやつばかりだから」

真冬に案内され、やって来た地下の倉庫。真つ暗だったそこは壁にあつたスイッチを真冬が押した事でパツと明るくなり、由紀達は目を輝かせる。ここは思っていたよりもずっと広く、幾つもの棚が列を作るように置かっていたのだが…。それらの上には家電からインテリア用品まで、様々な物が並べられている。

悠里「これ、最初からここに？」

真冬「いや…。元々は外にあつたやつがほとんどだよ。使えそうだと思つて回収してきたやつなんだけど、実際持ち帰ると置き場に困っちゃつて…。それでこの倉庫にしまつてあるの」

美紀「そういえば、食料とかもたくさんあつたね。ああいうのつて、全部真冬達が集めてくるの？」

真冬「うん…。そうだよ…」

先程、朝食をご馳走になつた時に見たのだが、食料のストックもかなりの量だつた。あれらを真冬達だけで集めるのは、相当大変だつただろう。

胡桃「おつ、ゲーム機まである」

真冬「ああ、欲しいなら持つて行っていいよ…。テレビと繋げるのも手伝つてあげるから」

胡桃「マジ？じゃあ頼むわ」

由紀「あゝっ！良いなあゝ…」

棚に置かれていたゲーム機を手に抱える胡桃を見て、由紀は羨ましそうな目線を向ける。同じものがあれば由紀もそれを持ち帰ったのだが、どうやらこのゲーム機はここと真冬の部屋、穂村の部屋、それぞれに一つずつ…計三つしかないらしい。

「仕方ないね。やりたい時は胡桃ちゃんの部屋に行けばいいんじゃない？」

由紀「あつ、そつか。よし！そうしよう！」

「僕もそうさせてもらおうとしよう」

胡桃「当たり前のように遊びに来ようとしてるけど、お前ら…あたしの意思とかは無視か？」

彼や由紀のことだ。きつとほぼ毎日遊びに来るだろう。それが容易に想像できた為、胡桃はため息をつく。個々の部屋を貰っても、一人の時間が増えることは無さそうだ。

胡桃（ま、それはそれでいいけどな…）

それぞれの部屋はたった一枚の壁を隔てているだけだが、やはり何となく寂しい。だから彼でも由紀でも、遊びに来てくれるなら温かく迎えようと、そんな事を思って胡桃は微笑む。

由紀「真冬ちゃんの部屋にも同じのがあるんだよね？たまに遊びにいつてもいい？」

真冬「あつ…：…うん…。由紀が来たいなら…いつでも…」

由紀「えへへ、ありがと♪」

ニタニタと嬉しそうに笑う由紀から目をそらし、真冬は照れたような表情をする。どうやらまだ、友達が出来たという状況に慣れていないらしい。

真冬「じゃ、じゃあつ…：みんな必要な物、欲しい物を適当に持っていつて…。運ぶの、手伝うから…」

一同は真冬の言葉に甘え、それぞれが必要な物：気になった物を手に取る。それぞれの部屋は二階にあるが、軽い物ならまだ楽に運べた。しかし、苦労したのがテレビや本棚など、重くて運びにくい物だ。胡桃はゲームをする為、美紀は映画等を観る為：一台ずつテレビを貰ったが、それを地下から二階まで運ぶのは楽ではない。真冬の手を借りた事である程度楽になったものの、朝から始めた部屋の模様替えは結局昼過ぎまでかかってしまった…。いや、これでもかなり早く終わった方だろう。真冬の手がなかったら、夕方：もしくは夜までかかっていたかも知れない。

くくくくく

悠里「ふうっ…。さて、みんなの部屋も終わった？」

美紀「どうにか終わったみたいです。先輩の部屋はかなり質素ですけど、あれで良いみたいですし…」

「ま、あまり必要な物も無かったんでね…。とりあえず、ベッドさえあればそれでいいや」

由紀「ゲームしたいときは、胡桃ちゃんか真冬ちゃんの部屋にいけばいいもんね」

「そういうこと」

最初はベッドくらいしかなかったそれぞれの部屋は半日で大分変わり、生活感のあるものとなった。まあ、彼の部屋だけはまだ少し飾りっ気がないような気もするが、それでも最初と比べれば良くなった方だろう。

一同はその後、一階リビングにて少し遅めの昼食をとる事にした。

広々としている綺麗な造りのリビングには左右に二つのテーブルがあり、どちらも六つの椅子に囲まれている。由紀達はそそくさと左のテーブルに座ったのだが、もう一方：リビングの右側にあるテーブルには穂村、圭一が座っていた。

穂村「おう、お前らも昼飯か？」

悠里「ええ…まあ…」

穂村「そつかそつか。まあ、遠慮なくやってくれや」

椅子に座ったままこちらを見つめ、穂村は笑顔を見せる。それは一見すると爽やかな物に見えるが何か裏があるようで、悠里達はもちろん、真冬や圭一すらも眉をしかめた。

圭一「ただ機嫌が良い…って訳じゃないよな。何を考えてる？」

真冬「ほんと、嫌な予感しかない…」

穂村「いやいや、変な事は何も考えてねえつて。ただ、コイツらには弟が随分と迷惑かけたみてえだし…その詫びみたいなものだよ」

悠里達はその言葉を信じ、胸を撫で下ろす。しかしその一方、彼と真冬…そして圭一の三人だけは不思議そうに首を傾げ、穂村をじっと見つめた。あの時、悠里達は穂村からそれを聞いていたが、その場になかった彼や真冬達からすれば訳のわからない台詞だ。

「…弟って？」

穂村「ん？ああ、お前にはまだ言っていなかったっけ…。一時期、お前らと一緒に行動した空彦って野郎がいたろ？あれ、俺の弟な」

「…なるほど。マジか…」

穂村「ああ、マジだ」

そつと悠里達に視線を向けると、彼女達は無言のまま頷く。それを見た彼は穂村の言葉が真実だと知り、なんとも気まずそうな表情を浮かべる。訳があったとはいえ、この男の弟を殺したのは自分なのだから。

「…謝罪の一つでもしようか？心の込もってないもので良ければだけど」

穂村「ははっ。いらねえよ、そんなの。お前がアイツを殺した理由もその嬢さん方から聞いたしな。ま、こんな世界だ。誰だって死ぬ

ときや死ぬさ」

「……………」

穂村「弟の仇かたきくっ!!とかやるキャラでもないんで…。気まずさとかは感じなくてオツケーだぞ。ぶっちゃけた話、俺もアイツは嫌いだったし」

ヘラヘラと語るその表情は強がっているわけでも、嘘をついているわけでもなさそうだ。この男は本当に弟の事が嫌い…というより、興味がなかったのだろう。

「まあ、あれを好きになる人間はいないだろ……」

穂村「おお！言うねえ!!昨日の段階で薄々気づいてたけど、お前とは仲良くなれそうだ」

「それはそれは……」

穂村が彼の事を気に入っているのには理由がある。昨日、由紀達が風呂に向かった際、覗きの話に食い付いたからだ。屋敷の風呂には良い感じのポイントが無いので、隠しカメラでも使わぬ限り覗きは不可能なのだが、それを知らない彼は穂村の言葉に反応した。穂村はそれを見て、柳や圭一とは今一つ気が合わない自分も、彼となら仲良く出来るのではと考えたのだ。

穂村（圭一さんも柳さんも、話が合わなくてつまんねえんだよな。けど、この少年となら上手くやっていけそうだ。二人で力を合わせれば、ここにいる女達の下着をこっそりと盗むことすら出来るかもしれないねえ……!）

一人の変態では不可能な事も、二人の変態でなら可能になる。無限に広がる未来の可能性を想像して穂村がにやけていると、圭一が口を開いた。

圭一「お前、弟とかいたんだな」

穂村「あれ？圭一さん達には言っていなかったっけ？」

真冬「言っていない…初耳…」

穂村「そうだったっけか。ああ、一応いたよ。これがまた：顔は俺と違ってダメダメだし、性格も根暗な変態だしで、何にも良いところがないやつでさー。この俺と本当に血の繋がりがあったのか怪しいところだぜ」

真冬「ああ：穂村は明るい変態だもんね」

真冬が無表情のまま言った後、一同は何とも言えぬ表情で穂村を見つめる。暗いというか、陰湿な雰囲気を持っていた空彦とは違い、こちらの穂村は明るい。長めの茶髪やヘラヘラした雰囲気は、元氣な不良：といったイメージだ。

胡桃「たしかに、弟とは雰囲気がるで違うな」

穂村「だろっ？俺の方が百倍カッコいいだろ??」

真冬「穂村……ゼロの百倍はゼロのままなんだよ……」

穂村「なっ!?!狭山は俺の弟の顔知らねえだろっ!!」

確かに知らないが、この穂村があれだけボロクソに言っていたのだ。その弟というのは余程の人間なのだろう。真冬はそう決めつけ、ニヤリと微笑む。一同はそんな雑談を交わしたりしつつ、昼食を始めていった。

圭一「そう言えばお前、体は平気か？結構痛めつけたつもりだが……」

「昨日、あの柳って人にみてもらった。特に問題はないってさ」

圭一「へえ、頑丈なヤツだ……」

「まあ問題ないとはいえ、今も痛むんだけど……」

昨日、圭一と戦った際の傷は完全に癒えてなどおらず、動こうとすると腹の辺りがズキズキとする。彼はその痛みに耐えながら昼食を済ませ、由紀や真冬達と共にリビングを出た。すると、廊下にいた柳と出くわす。この男もまた昼食をとりに来たのかと思う一同だったが、どうも違うようだ。

柳「昼食は済んだかな？」

悠里「ええ。ごちそうになりました」

柳「ああ…。ところで、君らもこれから少しの間ここで暮らすんだ。少し案内でもしようかと思うんだが…」

真冬「それはボクがやっておくから、柳さんはお昼食べててよ。どうせまだでしょう…？」

柳「まあ、そうだが…。じゃあ、お言葉に甘えるところかな。案内の方も狭山君に任せるよ」

真冬「うん…任せておいて」

真冬が頷き返事を返すと、柳はふふつと微笑みリビングへの扉を開く。真冬はその言葉通りに由紀達に屋敷内から庭まで、様々なところを案内していった。とはいえ、この屋敷は三階建て…かつ部屋の数も多い。わざわざ全ての部屋を回るのは時間の無駄になるので、今回案内したのは洗濯場や団らん室など…生活していく上で需要のある場所だけだ。

真冬「まあ…こんなところかな…」

悠里「とりあえず、大体の構造は分かったわ。案内ありがとうね」「助かったよ。さて…僕はそろそろ部屋に戻るよ。少し疲れた…」

胡桃「おいおい…。昨日はしっかり寝たのか？」

「寝た……つもりなだけだな。どうにも体がダルい」

恐らく、昨日の疲れが完全にとれていないのだろう。彼は胡桃達に見送られながら、部屋へと戻っていった。そうして彼がいなくなり、女子五人だけになった後、真冬が思い出したように口を開く。

真冬「そう言えば、みんなは服とかの予備ある？ボクの部屋に色々あるから、もし良ければ好きなのを持って行ってほしいんだけど…」

由紀「えっ？いいのっ!？」

真冬「うん…。じゃ、ついてきて」

キャンピングカーの中に置いてきた衣類等は既にそれぞれの部屋へと移したが、それらだけだと少し心もとない気もする……。ここまで来たならとことん真冬に甘えてしまおうと思ひ、一同は僅かな申し訳なさを感じつつ……。彼女の部屋へと向かう。

ガチャツツ……

真冬「ええつと……。この棚の中にあるやつ、全部いらぬ……。どれでも好きなやつ持ってたて」

部屋に入ってから、真冬は一つの棚を開く。その棚の中には様々なスタイルの衣服がギュウギュウに詰められているのだが、彼女にとってこれらは不要品らしい。

胡桃「服が貰えんのはありがたいんだけどさ……。ほんとにいいのかわ？」

真冬「うん。ボクが持ってたても着ることないし……」

美紀「ああ、サイズが合わないの？」

と思ひ、美紀は棚にある服を一着取る。手にしたのはチェックの柄が可愛らしい半袖のシャツなのだが、恐らく、真冬でも問題なく着れるサイズだ。にも関わらず何故着ないのかと思つたら……。これらの服は全て、穂村が真冬に着せようと外から取ってきた物らしい。

真冬「ボクは服にこだわりとか無いし……。おしやれとか興味ないのに……。穂村はしょっちゅう持ってくるんだよね……。めんどくさいから適当に受け取ってしまったておいたんだけど、もう棚に入らなくて……」

悠里「じゃあ、私達に気をつかつてるとかかっていう事じゃなく……。本当にいらぬ物なのね？」

真冬「そういうこと……。なんか、ごめんね……」

悠里「ふふつ、大丈夫よ。私達、女の子だもの。おしやれな服はい

くつあつても困らないわ♪」

由紀「そゆこと！じゃ、えんりよなくもらつてくね！」

真冬「うん。どれでも好きなの持って行って…」

悠里、胡桃に続き、美紀と胡桃もその棚の中にある衣服を品定めしていく。そうして見ている内に気付いたのだが、ここにある服はどれもわりと可愛らしい…センスの良いものばかりだ。これらを選んできたのがあの穂村だと思つと、なんだか複雑な気持ちになる…。

真冬「あつ。下着も使つてないやつがいっぱいあるから、良ければ持って行って…」

それぞれがいくつかの服を選び終えた後、真冬がそばにあつたもう一つの棚を開く。その中には綺麗に畳まれた様々な下着がしまつてあつたのだが…それを見た瞬間…悠里、胡桃、美紀の頭に不気味な考えが浮かぶ…。

悠里「まさかとは思うけど…これも、穂村さんが？」

真冬「いや、さすがにこれは違う…。下着はボクが自分で探して、取つてきたやつだけだよ」

胡桃「だ、だよなっ？いや、一瞬ビビつたぜ…」

美紀「穂村さんが下着なんて渡してきたら…真冬も怒るでしょ？」

真冬「…まあ、とりあえず殺しとくかな」

着ないとはいえ、服ならまだ受け取つておいてやる。しかし、穂村が『これを着ろ』と下着なんて渡してきたら、それはもう完全なセクハラだ。

悠里「じゃ、こつちもいくつか貰つていくわね？」

真冬「うん。どうぞどうぞ…」

胡桃「…………あれ…？」

ふと思う……。真冬が集めた物なら、下着のサイズは彼女に合わせた物のハズだ。だとすると、他のメンバーが身に付けるのは無理があるかも知れない。ショーツならある程度はいけるかもしれないが、問題は上：ブラの方だ。大変失礼な話になるが、真冬の胸に合わせたサイズのブラなど、キツくて着けられないだろう。

胡桃（特にリーさんは絶対に無理だ……）

などと思う胡桃だったが、彼女は直後に驚く。棚を見ていた悠里が一つの下着を手にしたのだが、それはどう見ても真冬のサイズではないのだ。

悠里「これ、貰ってくわね？」

真冬「うん」

胡桃「いやいやっ！ちよつと待て!!真冬……お前、何でこんなサイズの下着を持つてるんだ？絶対にブカブカだろ!？」

真冬「胡桃……恐ろしいくらい失礼……」

胡桃は悠里が手にしたブラを奪いとり、真冬の眼前に突きだす。可愛らしいリボンが付けられている水色のそれはとても大きく、どう見ても悠里のような人間の為の物だ。真冬が持っている意味はない。

悠里「言われてみれば、確かにそうね……。これ、狭山さんじゃサイズが……」

由紀「うん、ブカブカだね」

真冬「……ぐ……う」

胡桃が手にしたそれを今度は由紀が持ち、真冬の胸へと当てる。服の上からだとはほとんど膨らみのない真冬の胸にそれが合う訳もなく、由紀の言葉通りブカブカだ。

真冬「せ……ちよ……か……」

美紀「うん？なに？」

ボソツと呟かれた言葉が聞き取れず、一同は耳を澄ます。俯けられ

た真冬の顔は、耳まで真っ赤に染まっていた。

真冬「成長…するかと思ったの…。ボクだっただけから成長して、一年後…二年後には、悠里みたいな胸に…。」

胡桃「お…おう…。」

美紀「真冬…さすがにそこまでは無理だよ…。」

悠里「でもね、大きくなったって良いことないわよ?」

これからの目標を恥ずかしそうに語る真冬。そんな彼女の頭を撫でていく悠里だが、その言葉は決して慰めにならない。むしろ、真冬の表情をドンヨリと暗くしてしまった。彼女は諦めたようにため息をつき、静かに顔を上げる。

真冬「うん…そだね…。もう…あきらめるよ…。」

恐らく、自分の胸はこれからも大した成長を見せないのだろう。未来を完全に捨てた真冬は半ば自棄やけになり、これからの為にととっておいた大きめなサイズの下着を皆に配った。

そんな事をしている内に夜になり、一同は夕食を済ませる。真冬以外の人間とはまだ距離があり、少し気まずい食事ではあったものの、多少の会話を交わしながらそれを終えることが出来た。そうしているくらかの時間を過ごした後、それぞれが自分の部屋へと戻る。昨日は由紀の部屋に集まって眠った学園生活部一行も、今日は一人で寝ることにしたようだ。

胡桃「…ほっ」

ボスッ!

自室の中、縛っていた髪を解き、真冬に貰ったパジャマに着替え、胡桃は背中からベッドへ飛び込む。まだ眠気はないので誰かと話でも

していたかったが、他の皆は既に眠たそうだったので仕方ない…。

胡桃（久々に、ダラダラ出来た一日だったなあ……）

今日一日を振り返っていると、部屋の明かりを消し忘れた事に気が付く。ただでさえ眠気がないのに、明かりをつけっぱなしにしては余計にダメだろう。仕方なくベッドから起き上がり、壁にあるスイッチを押し明かりを消そうとした、その時だった…

コンコンツ

続けて二度、部屋のドアがノックされる。一体、誰が来たのだろうか…。由紀達や真冬なら良いのだが、穂村…圭一辺りだったら少し気まづい。いや、もしかしたら、柳が検査の結果を言いに来たのかも…。

胡桃（やっぱ治せない…とか言われたらキツイな…）

そんな不吉な事を考えつつ、そつとドアを開く。ドアの外…廊下に立っていたのは由紀や真冬、柳ではなく…彼だった。彼は胡桃と目が合うと微かに微笑み、口を開く。

「…寝るところだった？」

胡桃「まあな」

「あ…じゃあいいや。おやすみ」

胡桃「へっ？いや、何か用があるなら別にいいぞ？あたし、まだ眠くないし」

彼がそのまま帰ろうとしたので、肩を掴み引き留める。彼が何の用で来たのかは知らないが、せつかく来てくれたのに追い返すのは心苦しい。

「そう？じゃあ、少し入っていい？その…話したいことがあって」

胡桃「おう、別にいいぞ」

ニコツと微笑み、彼を部屋の中へと招く。胡桃は今日、部屋へと運んできたばかりの椅子をベッドの前まで引きずり、彼をそこに座らせ

た後、自分はベッドの上へと腰掛ける。

胡桃「…で、話つてなに？」

真正面からその目を見つめ、彼に尋ねる。しかし彼はそれに答えず、『ん〜』と唸るだけ…。そんな時間が丸々一分ほど続き、二人の間に気まずい空気が流れた。

百二十三話『ずっといつしよに』

胡桃「……で、話つてなに？」

彼はベッドの上に腰掛ける胡桃にそう尋ねられ、彼女の目の前に置かれた椅子……その上で顔を俯ける。そこに座った彼は落ち着きなくキョロキョロしてみたり、人差し指で頬を搔いてみたり……意味のない時間が過ぎていく。

「あ……その……えつと……」

胡桃「……………」

もう、五分は経ったかもしれない。思えば、こんなに落ち着きのない彼を見たのは初めてかも……。そんな事を思った胡桃が気まずそうに微笑んだ時……彼がようやく口を開いた。

「柳さんから聞いたと思うけど、胡桃ちゃんは世界を救うきっかけになるかも知れない。まあ……僕としてはキミさえ治ってくれば、あとはどうでも良いんだけど……」

胡桃「どうでも良いってことはないだろ……。この世界が平和になるなら、それに越したことはない」

自分さえ治ってくればそれでいい……。彼が恥ずかしげもなくそんな事を言ってきた為に胡桃は照れてしまい、目線を逸らす。彼は本当に世界よりも自分の事を気にかけてくれるんだ……。そう思うとなんだか嬉しくて、つい口元がゆるむ。

「ま、確かにそうだ……。平和になるならなつてくれた方がいい……。でも、そうなった後のことを考えると、少しだけ不安でね……」

胡桃「不安って……何が？」

「いやあ……まあ、色々」と

彼はニヤニヤと笑って答えたが、その笑顔には力がないような気が

した…。恐らく、笑顔でごまかそうとしているのだろう。

胡桃「…あの…さ」

「…うん？」

このままその笑顔にごまかされてやる事も出来るが、それは違う気がする。何かに不安を感じているなら、正直に話して欲しい。その一心で、胡桃は彼の目をじっと見つめる…。

胡桃「偉そうにこんな事を言える立場じゃないけどさ、あたしには…全部話してよ…。言いくい事でも、下らない事でも…何でもいいから…。お前が今から何を言おうとあたしは笑ったりしないし、怒ったりもしないから…」

「…じゃあ、お言葉に甘えて」

少し悩んだが、彼は胡桃の目を見てそれを話す覚悟を決めた。元より、これを伝える為に来たのだが、本人を前にするとどうにも言いづらい。しかし、悩んでばかりいても仕方がないのも事実だった…。

「胡桃ちゃんが治るのは当然として…更に物事が上手くいったとする。柳さんがワクチン作って、それが世界中に広まって…全ての感染者が消えるハッピーエンド。それを迎えた後、みんなはどうするのかなあと思ってる…」

胡桃「どうするって…うん…どうすんだらうな？」

「僕らは今、世界がこんなだから一緒にいるだけだ。けれどもし、平和な世界に戻ったら…その時はどうなる？」

彼の表情が、たまに見る真面目なものになっている。恐らく真剣にそれを考えているのだろう。確かに、言われてみるとそうだ…。今はこうして毎日一緒にいるが、世界に平和が戻った後はどうなのだろう…。

胡桃「どう…だろうな。まだ、よく分かんないよ…。世界に平和が戻るとか、ハッキリ言って想像も出来ねえし…」

柳はああ言っていたが、実際そこまで上手くいく保証はない。それに万が一上手くいったとしても、もうこの世には自分達以外の生存者がろくに残っていない可能性だってあるのだ。

胡桃「全てが上手く進んだら、その時はその時だ。ゆっくり考えていくよ」

「ま…そうだよな。じゃあ一つだけ…伝えておくよ」

胡桃「ん？」

不思議そうに首を傾げ、胡桃は彼の言葉を待つ。彼はまた少し言いづらそうに顔をそむけるが、今度はすぐにその顔を上げ、口を開いた。微妙に恥ずかしく、言いづらい…その言葉を伝える為に。

「もし世界が平和になって、一緒にいる必要がなくなったとしても…僕は胡桃ちゃんのそばにいたい。出来るだけ長く…出来るだけ一緒に…」

胡桃「……………えっ？」

胡桃は大きく目を開き、今、彼が言った言葉を脳内で繰り返す。頭の中でそれを繰り返す度に胸がドキドキと高鳴り、頭がジリジリ熱くなる…。彼は今、自分になんと言ったのだろうか？言葉自体は理解できているのに、その言葉の持つ意味が理解できず、胡桃は軽い混乱を起こす。

胡桃「お前が…あたしと一緒に…？」

「嫌？」

胡桃「い、いやじゃない…けどさ……」

「まあそういう事だ。んじゃ、おやすみ。夜更かしはダメだぞ」

胡桃「お、おいっ…!!」

ボタンツ…

彼はそのまま席を立ち、ニコニコと笑ったまま部屋をあとにする。彼が扉の向こうに消え、部屋に一人残された胡桃はただ、目を見開いたまま口をパクパクと動かしていた。

胡桃「あたしと…一緒にいたい？ど、どういう意味だ…？どういう意味だ…？くそっ…なんかもう、意味分かんねえ…」

バフツ！と勢いよくベッドに倒れ、頭からつま先まで、全身を覆うように布団を被る。彼はあんな事を言う為に、わざわざ部屋まで来たのだろうか？あの言葉は自分にしか伝えてないのだろうか？色々考えていると、眠気が益々なくなっていく。

胡桃（アイツ、あたしと一緒にいたいんだ…。あたしなんかと…）
もしかしたら、あの言葉に深い意味は無いのかも知れない。少し言いかたを間違えてしまっただけで、本当は『胡桃ちゃん』達”のそばにいたい』と伝えようとしていた可能性もある。

胡桃（たぶん…そうだよな？わざわざ、あたし一人だけを選ぶわけ無いよな？…うん。きつとそうだ。アイツ、由紀やりーさん、美紀の事も大好きみたいだもんな。きつと、これからも皆と一緒にいたい…そう伝えようとしてたんだ）

そうに違いない。そうに決まってる。頭の中で何度も自分に言い聞かせ、胡桃は部屋の明かりを消した。

胡桃「っ…ふふっ」

彼の言葉を思い返すだけで、ついニヤニヤしてしまう。実際のところ、彼がどんな気持ちであの言葉を伝えに来たのかは分からない。ただ…改めてあんな言葉を聞いた事により、胡桃自身が彼と…そして皆とこれからも一緒にいたいと、より強く思えるようになった。

胡桃「ずっと、ずっと一緒にいような。あたしも…がんばるからさ」

部屋には自分だけ。誰かがこの台詞を聞いているわけでもない。それが分かつていながら、胡桃は笑顔で囁く。この身体を治して、これからもずっと皆と一緒にいたい……。そう強く願う内、彼女はいつしか眠りにおちていた。

くくくくくくく

そうして迎えた翌朝、胡桃は起きてすぐ、部屋の奥にあるチェック柄のカーテンを開く。カーテンに覆われていた大きな窓の向こうでは朝日が昇っており、目線を下げると屋敷の広い庭を見下ろすことができた。

胡桃（まるで、どっかのお嬢様の朝みたいだな）

そんな事を思い、微かに微笑んでから部屋の隅にある洗面所へと向かう。一方その頃、既に起床していた彼は一階にある団らん室……。そこで、ある人物と二人きりでいた。

「……おはよう」

真冬「おはよう。昨日は……よく眠れた？」

「ああ、おかげさまで」

真冬「……ならよかった」

部屋の中央、向かい合うように置かれている二つの大きなソファ……。その一つに座る真冬と言葉を交わしつつ、彼は彼女の向かいにあるソファへへと腰かける。この二人はまだ、互いの距離を縮められずにいたため、由紀達抜きで話すとなると少しだけ気まずいが……。

真冬「昨日の夜、胡桃の部屋に行ったよね？」

「よくご存じで……。見られてたかな？」

真冬「まあ……ね」

「……言っておくけど、少し話ただけだよ？別にやましいことは——」

真冬「分かつてるよ、そんなこと……」

「……ならいっ」

食いぎみに言葉を返され、彼は苦笑いしながら背中をソファへもたれかける。胡桃の部屋に行ったのを見られた事で万が一にも変な誤解をされたらと思ったのだが、真冬相手にはいらぬ心配だったようだ。

真冬「胡桃は……たぶん、一人で色々抱え込む娘だと思う。だから、本人に多少おせっかいだと思われてもめげないで、しつこいくらいに支えてあげてね」

真つ直ぐな目線を向け、真冬が真剣な表情で呟く。まさか彼女にこんな事を言われると思っていなかった彼は目を丸くし、そのあとで『ふふっ』と笑った。

「この前、自分達を襲ってきた女の子にそんな事を言われるなんて……全く予想してなかったな」

真冬「あっ………ごめんささい……」

「……いや、別にいい。それに、キミの思う胡桃ちゃんのイメージも間違っていないと思う。あの娘は……一人でがんばり過ぎるところがある」
申し訳なさそうな表情を浮かべる真冬に微笑みを返し、そつとため息をつく……。困った時は困ったと……怖い時は怖いと……辛い時は辛いと言ってくれば楽なのに、胡桃という少女はそれらを可能だけ自分一人で抱え込もうとする。彼もそれに気付いてはいたが、まだ出会って間もない真冬すらもそれに気付いていたのには驚く。

「人の内面を見抜くのが得意なのかな？」

真冬「えっ、ボク？……うん、どうだろ……」

「よし、じゃあテストだ。僕はどんな人間に見える？」

真冬の目を真つ直ぐ見つめ、ニヤリと微笑む。胡桃の内面を見抜いた彼女が自分をどのような人間だと思うのか、興味があったからだ。

真冬「えつと…キミは…たぶん、ウチの穂村に負けずとも劣らない変態」

「……………」

彼は思わず、言葉を失う…。あの穂村（兄）からは、確かに変態の波動を感じた。しかし、自分がそれと同等の変態と言われると何だか嫌な気持ちになる。それに自分が少しだけ変態だという事を否定はしないが、少なくとも真冬の前でその片鱗へんりんを見せたことはないはずだ。

「…なんでそう思った？」

真冬「穂村が言ってた…キミとは仲良くなれそうだって。穂村が仲良くなれそうだなんて言う人間は、恐らく穂村自身と同じような変態しかない…」

「類は友を呼ぶ…的な事か」

真冬「少し意味が違うけど、まあ…その解釈で問題ない。どう？当たってる？」

「……………それなりに」

思い当たる節が無いわけでもないので否定はしない。苦い表情で答える彼を見た真冬は楽しげ頬を緩め、ソファから立ち上がった。

真冬「でも、ただの変態ってわけじゃない…。何かあれば彼女達を全力で守ろうとするようなカッコいい面もあるってこと、ボクは身をもって思い知らされたから…」

「かっこいい…ねえ」

真冬「少なくとも穂村よりは…っていう意味だけどね」

「ああ、そっか…」

いきなりカッコいいと言われて少しドキッともしたが、『穂村よりは』という補足発言が付け足されたのが残念だ。彼はそんな事を思っ
て残念そうに微笑みつつ、自分もソファから立ち上がった。そろそろ由紀達も起きてきて、朝食が始まるであろう時間だからだ。

「まあなんにせよ、ただの変態じゃないと分かってもらえてるなら結構。さあ、そろそろ皆も起きた頃だろうし：朝食にしよう。真冬ちゃんも一緒に行くでしょ？」

真冬「うん：ボクも行く。……あつ、それとね」

「ん？どうした？」

真冬「真冬……でいいよ」

彼がリビングへ向かうべく部屋を出ようとする、真冬が上目づかいでそう告げる。微かに赤く染まったその表情は少し照れているように見えたが、本人が言っているのだし、彼は遠慮なく呼ばせてもらう事にした。

「分かったよ、真冬…。さあ行くぞ」

真冬「……うん」

彼は部屋の扉をガチャツと開き、廊下へと出る。廊下から、皆がいるであろうリビングへと向かうまでの間、真冬は彼の後ろをトコトコとついていった。

~~~~~

「みんな、おはよう」

真冬「おはよう…」

由紀「おはよ〜!」

胡桃「おう、おはよう」

思っていたとおり、リビングには既に席についている由紀と胡桃の姿が。また、悠里と美紀も起きているらしく、リビング奥にあるキッチンの方から二人の話し声が聞こえる。

「朝食の準備、リーさんと美紀がやってくれてるのか」

由紀「うん！あと少しで出来ると思うから、お話して待つてよろよ」

「そうだね」

由紀、胡桃と同じく、彼と真冬も席について悠里と美紀を待つ。そんな中、胡桃はテーブルの上に肘をつけたままじーつと彼の事を見つめていた。

胡桃「お前、美紀の事を普通に『美紀』って呼ぶようになったよな…」

「え？」

由紀「あつ、そうだね。この前まではずっと、さん付けしてたよね？」

「…何か問題でも？」

胡桃「いいや。ただなんとなくく気になっただけだ」

悠里「あら、二人も起きたのね」

美紀「先輩、真冬、おはようございます」

胡桃がイタズラな笑みを浮かべた時、タイミングよく美紀と悠里が現れる。二人はさつきまでここにいなかった彼と真冬に挨拶をした後、共に準備してきた朝食をテーブルへと並べていった。

真冬「そういえば、圭一さん達は？」

悠里「あの人達なら、もう朝食を済ませて外に行つたみたい。柳さんは自分の部屋にいるみたいだけどね」

真冬「…そう」

思うに、柳は胡桃を治す為の薬を作ろうとしているのだろう。そして圭一、穂村の二人は物資集めにでも出掛けたのだろうか…真冬に声をかけていかなかったのは、由紀達と一緒にいさせてあげようと気がつかってくれたからなのだろうか…。

真冬（…いや、あの二人はそんなキャラじゃないか）

これまでにも別々に出掛ける事はあつたし、深い理由はないだろう。ただ、せつかく家にいるなら今日も彼女達との仲を深めたいと：真冬はそんな事を思った。

百二十四話『べんきょう』

悠里「さて、朝食も済んだ事だし…。屋上の方に行つてこようかしら」

皆が朝食に使つた皿やフオークなど、それらを洗いを終えた悠里が流し台の前で呟く。ニコニコとしているその表情は、やたら上機嫌に見えるが…

胡桃「屋上つて…この屋敷のか？何しに行くの？」

悠里「あそこには巡ヶ丘の学校と同じような菜園スペースがあつてね、柳さんに聞いたら使つてもいいって言われたのよ」

胡桃「へへ、そんなもんまであんのか…」

悠里「昨日、狭山さんに手伝つてもらつて手入れとかの下準備は終えたから、あとは種をまいて世話していただけね♪」

真冬「たしか…種とかも地下にしまつてあつたと思うよ」

胡桃（あるのかよ…）

本当に色々な物がある屋敷だなあと胡桃らが感心する中、悠里は真冬の頭をポンポンと軽く撫でる。どうやら昨日、菜園場の手入れを共に行つた事でいくらか親しくなつたようだ。

悠里「じゃ、行きましようか？」

真冬「…うんっ」

そうして悠里は真冬を連れ、リビングをあとにする。彼女らの仕事が上手くいけば、近い内にそこで取れた野菜を口にする事が出来るかも知れない。

「菜園場があつたなんて、全く知らなかつた…」

美紀「まあ、本當にちよつとしたスペースでしたけどね。たぶん、巡ヶ丘の学校にあつたのより少し狭いかと…」

「……まず、巡ヶ丘の学校を知らないからなあ」

美紀「あつ、そうでしたね……。すいません」

その気まずそうな表情の見て、あの時は彼がいなかったという事を思い出す。ここ最近はずっと一緒にいたので、てっきりあの時もあったものだ。美紀はつい記憶違いをしてしまったのだ。

由紀「リーさん、嬉しそうだったね♪」

胡桃「ああ、そうだな。ようやく落ち着いた暮らしが出来そうになつて、心に余裕ができたのかもな」

由紀「えへへ……。屋上、わたしもあとで見てこよ〜つと♪」

その言葉の通り、由紀はその後いくらかダラダラしてから屋上へと向かっていった。美紀、胡桃もそれに同行する中、彼は一人のんびりしようと部屋に戻つたのだが……。

コンコンツ……

「あく、はいはい。どちら様？」

戻つて一時間弱たつた後、部屋のドアがノックされる。ベッドの上で半分眠りに落ちていた彼が起き上がり、そのドアを開くと、そこには浮かない顔をした由紀が立ちつくしていた。

「……どうしたの？」

由紀「あ、あのね……。これから、みんなでお勉強することになつちやつて……。それで、リーさんが——くんも呼んできてって……」

「な……。僕も勉強するの？」

由紀「……うん」

『勉強することになつちやつて』と言っている辺り、由紀は勉強が得意ではないのだろう。しかし彼も彼で勉強はあまり得意……。とか好きではなかった為、目の前の由紀と同じく、どこかドンヨリした表情を浮かべる。

「……二人で逃げようか？」



由紀「だめだよ！そんな事したらあとでりーさんに怒られちゃうもん！」

「じゃあ、観念するしかないのか……」

今までもキャンピングカーの中で彼女らが勉強しているのは何度か見たことがあるが、彼はそれに巻き込まれずに済んできた。それがここにきて巻き込まれたのは、さつき胡桃が言ったように悠里の心に余裕が出来てきたからなのかも知れない……。

「はあ……わかった。僕も行くよ」

由紀「うん、一緒にがんばろう……」

仕方なく部屋をあとにし、彼は由紀の案内のもと、悠里達の待つ団らん室へと向かう。訪れたその部屋はどこから取ってきたのか……横長のデスクが準備されており、悠里達はそれの前に椅子を置いて二人を待っていた。

「お待ちせしました……」

悠里「よしっ、ちゃんと来たわね。じゃあ、始めましょうか？」

胡桃「はあ……」

その大きな溜め息から察するに、どうやら胡桃も勉強が得意ではないらしい。そんな中で悠里は一冊の教科書を手に持ち、まるで教師かのようにいくつかの問題文を呼んでいく……。席についた彼や由紀、胡桃は用意されていたノートやペンを用いてそれを解こうとしていくが……

「……りーさん、ここはいったいどうやれば？」

悠里「あら、そこでつまづいたの？そこはまだ簡単なレベルの問いだから、もう少しだけ自力で頑張ってみなさい」

「……はい」

思いの外、問題の難易度が高い……。いや、以前から真面目に勉強をしていれば簡単なのだろうが、以前から勉強が苦手であり、その上ここ最近はそのから離れていた彼にすればかなりの難問だ。

胡桃「…いくつ目の問いでつまずいた？」

「…二つ目」

胡桃「あゝ……同じく、こつちもつまずいてるわ」

どうやら、胡桃も同じところで頭を悩ませているらしい。彼女は隣の席に座る彼に小声で話しかけた後、ペンを片手に苦い表情をして頭をガリガリと搔いていた。

由紀「ううゝ……」

悠里「由紀ちゃん、そこ間違えてるわよ」

由紀「あうう……」

悠里が由紀のノートを覗いて指摘すると、由紀は苦しげな呻き声をあげながら消しゴムを手に取り、間違いだと言われた場所をゴシゴシと擦っていく。そんな由紀の横…その席に並んで座っている美紀と真冬のペンは、ほぼ迷いなく一定のペースで動いていた。

真冬「……よし、終わった」

美紀「あつ、私も終わりました」

悠里「どれどれ……。うんっ、二人とも正解してるわ。じゃあ、二人はまたこつちの問いをやっててね」

美紀「はい」

真冬「わかった…」

悠里は二人に教科書を見せ、新たな問いの記してあるページを指さす。二人がそれを見て頷きを返すと、悠里は自らも席についてから別に用意してあった教科書で勉強を始めた。

美紀「勉強、得意なの？」

真冬「うん。そこそこに……」

ノートにペンを走らせつつ、美紀は真冬にこつそりと話しかける。横目に見ていて気付いたのだが、真冬は美紀が頭を悩ませるような問

いもスラスラと解いているようだった。

真冬「……カンニングはダメ」

美紀「ごめんごめん。そういうつもりじゃなかったんだけど……」

真冬「ふふっ……分かってるよ。ほんの冗談……」

美紀は頭が良さそうだから、そういう事はしないだろう……。真冬は微かに口元を弛めて微笑んだ後、目にかかりそうだった前髪をかき上げてまた問いを解いていく。なんだか機嫌が良さそうだ。

美紀「なんか、楽しそうだね……?」

真冬「……こうしてまた誰かと並んで勉強したりするなんて、想像もしてなかったんだ。勉強なんて、前はただ何となくこなしていくだけだったけど……こうしてみんなと一緒にやると……ちよつと楽しい」

真冬はそう答えてから美紀を見つめ、ニツコリと微笑む。世界が今のようになるより以前……通っていた学校で勉強していた時ですら、こんなふうに楽しい気持ちになる事はなかった。

美紀「友達と一緒にだと、色んなことが楽しく思えるのかもね」

真冬「……美紀はもう……ボクの友達……?」

美紀「そのつもりだけど……嫌?」

少しだけペンを止め、美紀は真冬の顔を覗く。すると彼女は照れたように小さく首を横に振り……

真冬「ううん………すごく嬉しい」

小さな声で、そう呟きを返す。それを聞いた美紀はニコリと微笑み、止めていたペンを再び動かしていく。

美紀「私だけじゃなく、先輩達も真冬の友達だからね……。これはもう、忘れちゃダメだよ?真冬はもう、一人じゃないんだから……」

真冬「うん………ありがとう」

美紀の言ってくれた言葉を聞き、真冬は自らの胸が温かくなってい

くような感覚を感じる……。自分のようなダメ人間にこんな言葉をかけてくれる彼女を……。その友人達を……。これからは全力で守ろうと真冬は決意した。

くくくくくくくく

そうして二時間程経過し、長かった勉強時間が終わる……。彼や由紀はノートを勢いよく閉じると、二人して同じように顔をデスクへ伏せた。

「……………マジで疲れた」

由紀「お疲れさま……」

胡桃「お疲れさん……。ほら、机片付けるぞ」

ぐったりしている二人とは違い、胡桃は少しだけ体力を残しているようだ。胡桃や美紀、真冬、そして悠里がそれぞれのデスクや椅子を部屋の隅へと片付ける中、彼と由紀だけはいつまでもダラダラとしている……。

由紀「ええくっ……机も自分で片付けるの……?」

「本当にめんどくさい……。次からは辞退させていただく」

悠里「だーめ!どんな世の中でもちゃんと勉強しないと、将来立派な人になれないわよ?それでもいいの?」

「うぐっ……分かりましたよ」

悠里が説教モードに入りかけていた為、彼と由紀は仕方なく机を片付けていく。しかしまた定期的にこの勉強会があると思うと、憂鬱な気持ちにならざるを得ない……。片付けを終えた彼は一旦その部屋を出て、トイレへ向かおうとした。

穂村「っ……いたいた!おい少年っ!お前に良い仕事があるぞ!!」

「ああ、穂村兄か……。いつの間に帰ってきたんだ……」

廊下に出てから出くわしたその人物……穂村はやけに興奮気味だ。たしか外へと出ていたハズだが、いつの間にか帰ってきていたらしい。

「……で、仕事とは何の事で？」

穂村「お前、あの娘らとは仲がいいよな？」

「まあ、それなりに……」

穂村「なら、誰かの部屋に行ったりするのなんて楽勝だよな？」

彼の返事を聞いた穂村は興奮して息を乱し、肩まで伸びた茶髪を揺らす。やはり、この男はまともじゃなさそうだ……。彼はそんな事を思いつつも、その話には付き合ってあげていた。

「行くこうと思えば行けるだろうけど……それがなにか？」

穂村「完璧だ……！お前なら、俺の計画の手助けになるっ!!」

などと訳の分からぬ事を言い、穂村は彼の前に手を出す。そつと開かれたその手には、小さな黒いブロックのような物が握られていた。

「……これは？」

穂村「小型のカメラ……いわゆる隠しカメラってやつだ！前に立ち寄った建物で運良く見付けたんだが、その時はぶつ壊れててな……。でもつい先日、狭山のやつが直してくれたんだよ!!」

やたらと嬉しそうにニヤニヤと微笑み、穂村はその隠しカメラを大切そうに見つめる。この時の彼はまだ、穂村の野望に気づいていない……。

「で、その隠しカメラがなんなの……。盗撮でもする気で？」

穂村「察しが良いな……。やはり、お前は俺と同じ天才だ……!!」  
「……………」

『盗撮』というのは冗談で言ったのだが、当たってしまったらしい……。直後、彼は……ここまで穂村が言ってきた発言の全てを思い返し、自分がやるべき事をすぐに理解した。

「つまりこういうことか…。彼女らの内、誰か一人の部屋に侵入し、それを仕掛けてくれば良いと…」

穂村「ああ…。察しが良くて助かるっ！頼めるか?!?みんな部屋には鍵をかけてるから、俺じや入れねえんだよ」

「なるほど…。確かに、僕なら『遊びにきた』とかなんとか言つて中に入れるな…。でも、それを部屋に仕掛けて何の意味が?」

穂村「分からないのか?部屋に仕掛けておきや、その娘の着替えくらは覗けるだろう?それつて最高じやないか!?!」

「はあ…。あんたつて人は…」

鼻息を荒げる変態を前にして彼は深い溜め息をつき、呆れたような目を向ける。穂村のその計画が、とても浅はかだからだ。

「部屋に仕掛けても、結局は誰か一人の着替えを見れるだけだ…。なら、浴場前の脱衣所に仕掛けた方がいい。あそこなら一人といわず、数人の着替え…。というか裸が見られる」

穂村「うおおっ?!お前、天才かよ!!?」

「いや…。盗撮と聞いたらまず最初にそれが浮かぶでしょうよ…」

穂村「浮かばない浮かばない!!そんな発想出来るのお前だけだつて!」

ウキウキとした穂村の表情を見るにそれは褒め言葉のつもりらしいが、彼は何となく複雑な気持ちになる…。自分がこの男以上の変態なような、そんな気がしたから…。

「…何はともあれ、その仕事には乗る。さあ、カメラ貸して」

穂村「おう!ベストなポジションに頼むぜ!!」

右手を伸ばす彼へカメラを手渡し、穂村はニヤニヤと微笑む。彼に任せておけば、女子達の裸体を拝めると確信したからだ。しかし、穂村と違って彼はニヤリとも微笑まず、カメラを持つ右手を振り上げ…

「ほっ……」

ガシヤツ!!

勢いよく、廊下の壁に叩き付けた。

穂村「んなああっ!!?何やってんだよ!!?」

壁に叩き付けられ、床に転がる隠しカメラ……。穂村はそれを急ぎ拾いあげるが、レンズどころか本体そのものがひどく割れてしまっていた。もう、使い物にならないだろう……。

穂村「どうして……どうしてっ!!?」

「いや……なんというか……。由紀ちゃんに胡桃ちゃん、リーさんに美紀……あの娘らの裸を、あんたに見せるの嫌だなんて……」

実際、穂村に話を持ち出された際はかなり悩んだ。しかし、この盗撮が成功すれば彼女らの裸体がこの男にも見られてしまう……そう思うと何か嫌だった。

「自分だけで眺める分には良いんだけどね……。あんたとシエアはちよつと……」

穂村「つぐ……!偉そうな事を……!!なんだ!?!あの娘らはみんなお前の女か!?!違うだろうが!!」

「いや、まあそれはそうだけでも……」

穂村「くそっ!このムツツリスケベ!!変態野郎!!」

「……自分に言ってるのか?」

穂村「俺はムツツリじゃねえ!!オープンな変態だ!!」

ハツキリと言いきり、穂村は砕けたカメラを両手に包む。彼に裏切られたショックからか、それともカメラが壊れたからなのか……その目は涙ぐんでいるように見えた。

穂村「ばーかばーか!!お前にはもう何も頼まんっ!これから先、この隠しカメラみたいなヤツをゲットしても、お前には内緒にしてやるよ!!ざまあみろ!!」

「……………」

穂村は子供のように喚きながら走り去り、彼の前から消える。少し変わった人間だとは思っていたが、これほどとは予想していなかった。あんな人間とこれからもいくらか生活を共にすると思うと、少しだけ頭が痛くなる。

(まあ、面白い人ではあるけど…………)

以前会った弟の方と違い、兄はオープンな性格をしているだけまだ笑って見ていられる。これから少しずつこちらから会話を振れば、打ち解けることも出来るだろう…。彼はそんなふうに思い、自室に戻ったのだが…。

「…何だよ、これは」

戻った時、彼の部屋の扉には一枚の紙が貼られていた…。上の端をテープで止められていたその白い紙には真っ赤な色の文字で大きく『変態ヤロウの巣』…とだけ、やたら下手な文字で書いてある。犯人は言うまでもなく、穂村だろう…。この紙を見た彼はあの男とは仲良くなれない……というより、なりたくない…強くそう思った。



『厄介な物を…』

誰にでも、忘れたい出来事の一つや二つはあるだろう…。

怖いこと…辛いこと…恥ずかしいこと…。それは人によつて違いますが、“彼女”が今日の記憶を自分の脳内から消し去りたいと思つてい  
る理由はどれに当てはまるのだろうか…。

事の発端は昼過ぎ、由紀が柳の部屋にて、美紀…そして圭一と何気  
ない会話を交わしていた時の事だった。

~~~~~

由紀「そういえば、圭一さんの事ってなんて呼べばいいんですか？」

圭一「なんてつて言われても…好きに呼べ、としか言えないな」

由紀「じゃあ、ケイさんでいいですか？」

美紀「……………」

圭一「…いや、悪いがさつき言葉は取り消す。普通に名前で呼ぶ
ようにしてくれ。アダ名とか、そういった呼ばれ方はむず痒い」

ため息一つつき、圭一は壁に背中をもたれる。好きに呼べと言つた
は良いが、直後に由紀が放つたケイさんと言う呼び名にはどうも慣れ
る気がしない。

由紀「えく…。穂村さんは、ほむさんつて呼んでも笑つてくれたの
に…」

圭一「俺をあいつと一緒にするな…」

更にもう一度ため息をつき、圭一は柳が戻るのを待つ。『頼みたい
事がある…』圭一は柳にそう言われてこの部屋へとやつて来たのだ
が、呼び出した本人はどこか他の部屋に行っているらしい。なので柳
が部屋に戻るまで待とうとしていたのだが…偶然通りかかった由紀
に絡まれてしまったのだ。

圭一（こいつと比べて、美紀のやつは大人しいな）

目の前でニコニコしながら話しかけてくる由紀の後方…そこでチョココンと立ちながらこちらをチラチラ見つめているのは、今の由紀と同じく元いた学校の制服に身を包んでいる直樹美紀だ。彼女はここに来てからあまり圭一と話してはおらず、どうにも気まずそうな顔だけを見せている。

圭一「そういえばお前ら、なんで学校の制服なんか着てるんだ？替えの服、狭山のやつから貰ったんだろ？」

由紀「それはそうだけど…うくん。みーくん、何でだろう？」

美紀「癖で着ちやうのかもしれないですね…。やはり、他の服よりも着なれていますから」

圭一「…そういうものなのか」

そんな他愛ない会話をかわしつつ柳を待つが、まだ現れる気配はない。こちらから探しに行った方が早いのか…圭一がそんな事を考え出した時、由紀が大きく口を開いてあくびをした。

由紀「ふ…ああ…ん、少しだけお昼寝してこよっかなあ…」

美紀「午前中に運動しましたから、疲れましたよね…。ゆつくり休んで下さい。私も、もう少ししたら休もうと思いますので…」

由紀「ん…じゃ、わたしは自分のお部屋で寝てくる〜」

そう言つて由紀は部屋をあとにしたが、美紀はまだそこに残っていた。彼女も柳に用があるのかと思つたが、そうではないらしい…。美紀は由紀が部屋から出た後、圭一を見つめて微かに微笑む。

圭一「…なんだ？」

美紀「あつ、すいません…。さっきの由紀先輩と圭一さんのやり取りを見てたら、友達の事を思い出しちゃって…」

圭一「友達？」

美紀「はい…。その娘の名前…圭つていうんです」

圭一「…そうか」

ついさつき由紀が圭一の事を『ケイさん』と呼んだ際、美紀はほんの一瞬だけ切なげな顔をしていた。由紀が放った圭一の呼び名が、友達の名と同じものだったからだろう。

圭一「んで…その友達は今、どうしてる？」

美紀「……………」

言葉を詰まらせる美紀の表情はさつきよりも切なげで、弱々しい雰囲気だ。その様子を前にした圭一は自分がマズイ部分に触れてしまったと察し、またしても深いため息をつく…。

圭一「…悪い。そんなつもりじゃなかった。今、この場にいる時点で察するべきだったな」

美紀「…いえ。気を使わせちゃってすみません」

ほんの少し、美紀の表情に明るさが戻る。しかしその表情は強がっているようにも見えてしまい、何とも気まずい…。

圭一「…お前も柳に用があるのか？」

美紀「えっ？あ、いえ…。特には…」

圭一「じゃあなんでここにいるんだよ。他の奴の所に行けばいいだろう？」

美紀「は、はい…。じゃあその…失礼しました」

圭一「……………」

くるつと振り向き、美紀は部屋の扉へと向かう。これは圭一の思い過ごしかも知れないのだが、彼女の背中が少しでも弱々しく見えた気がした。彼女らは午前中に屋敷の庭で運動していたようなので、その疲れがあるのかも知れない。

圭一「…おい、待て」

美紀「っ？はい、何ですか…？」

彼女を呼び止めた後、圭一は柳の部屋にあった冷蔵庫の前に立つ。

二つ並べられていた冷蔵庫の内、右側の方を開き、圭一はそのまま中に入れられていた飲み物を物色していった。

圭一「なんか疲れてそうだからな…ほら、これでも飲んでけ」

冷蔵庫の中…並べられていた茶色い瓶の内、一本を美紀へと渡す。恐らく、これは栄養ドリンクか何かだろう。

美紀「あ…いいんですか？」

圭一「俺のじゃなくて柳のだから…。一本くらいなら別にいいだろ」

美紀「…ふふっ。ありがとうございます」

渡されたドリンクをじつと眺めた後、美紀はニツコリと微笑んでその場をあとにする。廊下へと出た直後、美紀はすぐにそのドリンクのキャップを外し、ゴクゴク喉を鳴らした。

美紀「……………なんか、少し変な味」

……………

美紀が去ってから約十分後…

圭一はようやく部屋へと戻ってきた柳を前にして呆れたような表情を見せる。自分の方から『頼み事がある』と声をかけてきたクセに、随分とのんびりしていたからだ。

圭一「おい…何してやがった？」

柳「ああ、すまないすまない。ちよつとした興味本意で屋上の菜園スペースを見に行ったら、思いの外しつかりと手入れされていたんでね。つい、若狭くんと話し込んでしまった。いやあ…収穫の時間が楽しみだよ」

呑気に微笑む柳を見て、圭一はため息をつく…。この短時間の間に、何度ため息をついただろうか。真冬が由紀達を連れてきたからと

いうもの屋敷は騒がしくなり…穂村も裏で何かを考えているのか、行動が活発化している。そして、この柳という人間もどこか気が抜けたような表情をする事が多くなったような気が…。

圭一「…まあいい。それで、用件は？」

柳「そうだったね。ええっとだね…少し必要な備品とかがあるの
で、もし外で見かけたら取ってきてもらいたいなど…」

二つ並んでいる冷蔵庫の内、柳は左側の方を開けて中にあったペツトボトルを手に取る。見た感じ、その中身は水か何かだろう…。ゴクゴクそれを飲む柳を見た圭一は、あることが気になった。

圭一「お前、何で冷蔵庫を二つも持つてるんだ？一つでいいだろ」

柳「ああ、左の方が飲料用。右の方は薬品を保管する為の物だ」

圭一「へえ…：…：…んっ？」

と、納得したようにその冷蔵庫らを見つめ…後に圭一は気が付く。先程美紀に手渡したドリンク…あれはどちらの冷蔵庫から取り出しただろうか…。

圭一「…：…：…ちよつといいか？」

柳「ん？なんだい？」

…ガチャツ

圭一「この冷蔵庫の…ここにあつたヤツつてのは薬なのか？」

右側の…薬品保管用だと言われた冷蔵庫を開き、美紀に渡したドリンクのあつたスペースを指さす。すると柳は驚いたように目を見開き、圭一に尋ねた。

柳「…：…どこにやつた？」

圭一「いや…：その…栄養ドリンクか何かだと思って、美紀に…」

柳「それは…：…まずいな」

右手で額を押さえ、柳は辺りをうろろと歩き出す。その様子から、あれが栄養ドリンクなどではなかったという事だけはハッキリとわかった。

圭一「飲ませちゃまずいヤツだったか…。命に関わるのか？」

柳「いや、そこまでの物ではない…。ただ、なんと言ったらいいか…」

圭一「…簡単にまとめてくれ」

柳「…あれは俗に言う、惚れ薬…媚薬というような薬に近い物だ。あれを使うとおよそ五分程で効果があらわれ、飲んだ者はその際、目の前にいた一人の人間に無条件で好意を寄せるようになる。異性はもちろん、同姓でもな…」

圭一「…マジかよ」

その話が本当ならば、かなりマズイ。圭一が美紀にあれを渡したのは十分以上も前…。もしあの後、彼女がすぐにあれを飲んでしまっていたらもう手遅れだ。

圭一「まず、何でそんな物を作ったんだ？」

柳「私だつて意識して作った訳じゃない…偶然の産物だ」

圭一「厄介な物を…。でもまあ、美紀なら大丈夫じゃないか？見た感じ、あいつはかなり真面目なヤツだ。いくらそんな薬を飲んだからつて、そうおかしな事を起こしたりは…」

柳「偶然とはいえ、私が作った薬だ。その効果を嘗^なめるな。直樹君がいくら真面目な娘だとしても、あれを飲んだ以上は自制心が効かなくなる。もしもその際、彼女の目の前にいたのが寄りによつて穂村君だつたらどうする…？」

柳が真面目な表情で尋ねてきたので、圭一も真剣にそれを考えてみる…。あの薬の効果が出てきた際、彼女の目の前にいたのが穂村だったら…。美紀がああ男に身を寄せ、少しでも手を握ったりしたら…。

圭一「…それはまずいな」

柳「ああ、私もそう思う…。薬の効果はそう長くはないから、ほんの数十分程で少しずつ薄れてくるハズなのだが…」

圭一「なら穂村の手に渡るより先に俺らで美紀を捕まえ、薬の効果が切れるまでは隔離しておこう。理性を取り戻した時、隣にいたのが穂村とかただの悪夢だろ…」

柳「だな…。年頃の女の子にとってはトラウマ物だろう…」

美紀の様子が明らかにならぬままとも違ふものだったが、自分にチャンスがあるならそれをものにする…。穂村というのはそういう男だ。そんな男の手に彼女が渡るくらいなら、自分達で彼女を捕まえ、保護していた方がよい…。そう考えた圭一・柳は彼女を探して屋敷内を探索するのだが…………

柳「直樹君は…ここにもいないか」

三階、二階、一階…更には地下も探したが、美紀の姿はない。ならば外の庭だろうか…。一階の団らん室に立つ二人がそう思い始めた時、ソファアに腰かけていた胡桃と悠里が口を開いた。

胡桃「美紀なら、あいつと一緒にどこか行つたぜ」

柳「あいつというのは…あの少年か？」

悠里「ええ。今は多分、どちらかの部屋にいるんじゃないかしら？」

圭一「ああ…そうか…」

二人から情報を聞き、圭一と柳はため息をつく…。恐らく、自室には鍵がかけられてあるだろうから、外からは開けられない。それでも中に入るなら、扉を壊すしかないだろう。

圭一「…どうする？」

柳「どうすると言われても…ねえ」

圭一「……………」

胡桃「…??なんの話してんだ？」

柳はもう半分諦めたらしく、自らも呑気にソファアールへと腰かけてしまった。胡桃と悠里が二人の会話を聞き、不思議そうに首を傾げるその一方…美紀に薬を与えてしまった張本人である圭一は、少しだけ罪悪感を感じていた。

『私だけを…』

美紀「先輩…。少し、いいですか？」

昼を過ぎた頃の事だ。暇していた彼は一階の団らん室へと訪れ、誰かと会話でもしようと考えた。彼が訪れた時、そこにはちょうど良いことに美紀の姿があったのだが、彼女は部屋に入ってきた彼を見るや否や目を大きく見開き、そばへ歩み寄ってそう言ってきたのだ。

「ん？別に…いいけど？」

美紀「よかった…。じゃあ先輩の部屋…行きましょう？」

「僕の部屋？」

美紀「ここだと言いつらい事があるんです…。だから先輩の部屋か、もしくは私の部屋…そのどちらかでお話したいんです…」

美紀は目の前に立つと彼の服の袖を指先でギュツと掴み、上目づかいの目線を見せる。彼の気のせいかも知れないのだが…美紀の顔は熱があるかのように真っ赤で、目も潤んでいるような気がした。

「顔赤いけど、体調とか悪くない？」

美紀「いえ…元氣ですよ。だからほら…はやく…。」

「あ、ああ…。じゃあ行こうか…」

どこか変だなど思いつつも、彼は彼女を連れて団らん室をあとにする。そうして廊下に出た際、ちょうど胡桃とすれ違いになった。

胡桃「おつ、どっか行くのか？」

「いや…ちよつと僕の部屋で話を…」

胡桃「話？二人でか？」

美紀「…いけませんか？」

立ち止まった彼の背を手で押しながら、美紀は胡桃の事をギリツと

睨む。彼女にこんな目を向けられた事のない胡桃は一瞬それに戸惑いつつも、どうにか明るい表情を保った。

胡桃「あはは……。いや……。いけないことはないけどさ……」

ぎこちない笑みを浮かべつつ、胡桃は二人を見送る。美紀は何故、あんな目をしたのだろうか……。知らぬ間に彼女のとっておいたお菓子か何かでも食べてしまったか……。もしくは無意識の内に何か気に入らない発言をしてしまったのか……。様々な可能性を考える胡桃だが、やはり彼女を怒らせてしまうような事に身に覚えがない。

胡桃（まあ……美紀もたまには、訳もなくイライラしたりするのもかな……）

そう思うことにして、胡桃は団らん室へと入る。圭一、柳の両名が美紀を探してここに訪れたのは、これから五分後の事だった……。

くくくくくく

バタンツ！

「……で、どういったご用件かな？」

自室へと入った彼はベッドの上に腰かけ、美紀に用を問う。しかし美紀は彼に背を向けたまま扉の前に立ったつきり、ちっとも返事を返さない……。

美紀「……………」

…ガチャツ

（鍵を閉めたのか……？）

扉から鳴るその音を聞き、美紀が部屋の鍵を閉めたのだと気付く。彼女は何故、わざわざ鍵を閉めたのだろうか……。彼がそんな事を考えていると彼女はクルツと振り向き、ニツコリと微笑んだままこちらへ

と歩み寄ってきた…。

美紀「先輩……先輩……」

「美紀……？だからその……用つてのは……？」

彼女はブツブツ呟くだけで答えず、彼の事を見つめたまま少しずつ距離を詰めてくる。うっすらと開かれたその目はやはり潤んでおり、顔も真っ赤なように見える。……いや、確実に真っ赤だ。

美紀「先輩は……横になっていいですよ」

「は……いや……ちよつとその……ワケがわからな——」

と、そこまで言った時だった……。目の前まで迫っていた美紀は彼に飛びかかるように抱きつき、彼のことをそのままベッドへと押し倒した。

バフツ！

「み、美紀っ？本当にどうした……？」

突然押し倒され、彼は慌てたように尋ねる。美紀はそんな彼の上に馬乗りになったままじつと顔を見つめ、戸惑う彼の頬をそつと撫でた……。

美紀「どうしたって聞かれても……私にも分からないんです……。ただ、先輩を見ていたら胸が……体が熱くなっちゃって……：……すごく苦しんです……」

彼の頬を細い指で撫でながら、美紀は一気に顔を寄せる。垂れる前髪が彼の鼻先に触れるくらいまで顔を寄せた彼女は熱のこもったような吐息を吐き出しつつ、細めていた瞳を潤めていった。

美紀「先輩は……私が嫌いですか……？」

「いや、もちろん嫌いじゃないけど……」

美紀「なら……いいですよね？」

彼女はそう言ってニヤリと微笑み、彼の首に顔を埋める……。それだけならまだよかつたのだが、問題はその後だ。彼女は埋めていた顔をモゾモゾ動かしたかと思うと、そのまま彼の左耳を甘噛みした。

美紀「あ……むっ」パクッ

「のわっ!?!おいおいっ!?!」

美紀「んん……んんっ……」

彼が驚いても口を離さず、美紀は耳の端をくわえる。美紀の唇の柔らかさ、口内の熱さ、ヌルツとした唾液に濡れる感覚、耳元に響く甘い声……それらを一度に味わった彼は激しく戸惑うが、美紀は一向に止まらない。

美紀「んむっ……あ……むっ……♡せん……ぱいっ……」

「う……ぐ……うっ……」

いつにない甘えたような声で囁かれてしまうと、体の力が抜けていくのが分かる……。彼が抵抗する事なく目を見開く中、美紀は甘噛みしていた耳に鼻を押し当て、満足そうに微笑んだ。

美紀「ふふっ……すごく、幸せです……」

そつと囁いてから、その耳に舌先を這わせていく……。それを受けた彼がピクツと反応する最中も、美紀は耳たぶから耳の先端へ……ゆっくり舌を這わせていた。

「ぬ……ううーみ、美紀……やっぱり、なんか変じゃない?」

美紀「少しだけ熱っぽいですが……あとはいつもどおりですよ。先輩は、私に変に見えるんですか……?」

「す、少し……ね」

いや、本当の事を言うなら『少し』ではなく『かなり』変だ。美紀は今も彼の耳に唇をつけ、はむはむと甘噛みを続けている。いつもの美紀なら、こんな事をするはずがない。

(絶対におかしい……とは思ってるんだけどな)

頭では分かっているが、それでも彼女を突き放せない……。こうして美紀とベッドの上で身を寄せ合い、耳を甘噛みされていると、どうにも心地よくなってしまふからだ。ただ耳を噛まれているだけなのに、それがやたらと気持ちよく感じてしまふ。

美紀「……先輩、嬉しそうですね」

「そりやまあ……可愛い後輩にこんなことされたらね……」

美紀「ふふっ……よかった……」

美紀の顔は未だ真っ赤に染まっている。彼女は甘噛みを一旦止め、顔を上げてから『ふうっ』と一息つくくと、彼の上に乗ったまま部屋の中をそつと見回す。

美紀「この部屋、暑くないですか?」

「そう?普通だと思っただけ……」

室温はいたって普通……。それでも暑く感じるのなら、それは互いの身を寄せ合っているからだろう。美紀の真っ赤な顔、その額には汗が溢れており、前髪がペタツと貼り付いていた。

美紀「やつぱり……暑いです……」

「……なっ!?美紀っ?」

額の汗を手で拭った後、美紀は着ていた制服に手をかける。首もとのリボンをシユルツと外し、それを彼の上に置いたかと思えば、今度はスカートの中へしまっていたシャツの裾を引つ張りだす。もちろん彼はそれに驚いたが、美紀はまるで気にしていないような表情を浮かべ、肩にかけていたサスペンダーを外した。

美紀「よい……しよつと」

パサツ……

「……」

遂に制服すらも脱ぎ、美紀は乱れた髪をガシガシ整える…。それでもまだ中に黒いインナーシャツを着ていたから良いのだが、その姿はいつもの制服姿よりも体のシルエツトが分かる。彼は思わず、ノドをゴクリ鳴らした…。

美紀「これでも、まだ暑いかな…」

驚く彼の丸い目を見てニヤリと微笑み、今度はインナーシャツにすら手をかける。彼の上で馬乗りになったまま、それを両手でゆっくり捲つていく…。するとすぐに美紀の肌…綺麗なヘソが彼の視界に映る。

(これは止めたほうが良いのか!?!いや…しかしっ…)

今の美紀は明らかにおかしい。彼もそれには気付いているのだが、彼女のような可愛い娘が自分の上に乗ったまま服を脱いでいると思うと…あと少いで、そのインナーシャツの下が見られると思うと…止めるための声も出せず、手も出せない。

美紀「ん…っつと」

パサッ

あれこれ考えている間に美紀はインナーシャツを首から抜き、完全に脱ぎ終えてしまう。インナーシャツを脱いだことによつて彼の視界には美紀の肌…そして胸を覆う白い下着が晒された…。彼女の胸は悠里や胡桃と比べると小さいと思うが、だからと言つて魅力が無いわけではなく…

(これは…さすがにヤバイかも…)

それを間近に見た瞬間、彼は自分の体が熱くなるのをハッキリと感じた。美紀はそんな彼に自分の下着姿を凝視されているというのに恥ずかしがる素振りを見せず、まだニヤニヤと笑っている。

美紀「やつと、少しだけ涼しくなりました…」

「それはよかつたけど……その……」

美紀「どうしたんですか？ なにか……言いたそうですね……」

「そりゃまあ、言いたいことは色々あるけども……」

彼が目線を落ち着きなく動かす中、美紀は彼の胸にポスツと顔を埋める……。顔のそばに添えられている両の手はグツと丸められており、まるで甘える猫のようだ。

美紀「言いたいことがあるなら……ハッキリ言えばいいのに……」

「ハッキリ……ねえ……」

埋めた顔をこちらへと向け、上目遣いで呟く美紀に彼は言葉を返せない。ハッキリといつても、どう言えば良いのか……そんな事を考えてしまうからだ。

（今日のアんたは明らかに変ですよ……とても言えば良いのかね。でも、本気でこんな事をできてきているならそんな言い方は失礼な気がするし……）

色々と悩んでいる内、左手が自然と美紀の頭に伸びる……。自分に甘えるように身を寄せる彼女が可愛らしくて、彼はほとんど無意識の内に美紀の頭を撫でていた。

美紀「言葉をハッキリと伝えるお手本……見せてあげましょうか？」

「……えっ？」

相変わらず彼の上に馬乗りになったまま、美紀は埋めていた顔を静かに上げる……。彼女はそのまま自分の顔を彼の顔の前へと寄せ、瞳を潤ませながらそつと口を開いた……。

美紀「私、先輩のことが好きです……。どうしようもないくらい……私以外の誰にもあげたくないくらい……。すつごく、すつごく大好きです……」

「な……っ……」

寄せられた顔はとても真っ赤で、やたらと熱い彼女の吐息が肌で感

じられる程に近い…。彼は眼前に寄せられていた彼女の真つ赤な顔を、ただ驚いたように見つめていた。あの美紀が…自分に告白してきた…。その事実が信じられずに…。

「…本当に？」

美紀「本当に…ですよ…。私、先輩のことが大好きです。だから先輩も私の事を…私の事だけを、大好きになって下さい…」

「っ…………ぐ…」

美紀はそうして言いたい事を言った後、彼の首もとに顔を寄せてキスをし始める…。一回…二回…三回…。美紀は繰り返し彼の首にキスをして、反応を楽しんでいるようだ。

美紀「ちゅ…っ…………ちゅっ…♡先輩…返事はまだですか…？」

「いや…そんな事されてたら落ち着いて返事なんか…」

美紀「本当は今すぐ口にしたいけど、口にキスされてたら返事出来ないだろうと思ってわざと首にしてるんですよ？だからほら、早く言ってください…。美紀の事、大好きだよって…。そしたら私、先輩のしたいこと全部してあげます…」

「なッ…!？」

この発言を聞き、彼は確信する…。『今の美紀は明らかにおかしい』…。しかしそれでも美紀の事を押し退けられないのは、彼の中にある男としての本能が暴走しかけているからなのだろう。

(あぁっ…………どうするっ!?どうするっ!?)

美少女である美紀が上半身下着姿のまま自分に馬乗りになり、今も首にキスを繰り返し返している。それだけでももう限界なのに…『したいこと、全部してあげる』というこの言葉が、彼の理性をより奪おうとする。

美紀「っむ…………ちゅっ…♡せんぱいはやく言ってください…。美紀の事が好きだって…。たまらなく愛してるって…。先輩の口から

その言葉を聞いたら、私はどれだけめちやくちやにされたって構いませんから…」

「むう…っ…」

また甘い言葉を囁かれてしまい、両手が自然と彼女の肩を掴む。触れた美紀の肩はとも火照っていて、異様なほどに熱かった…。このまま彼女を押し倒し、今度は自分が馬乗りになって、その体がどれだけ熱いのかをしっかりと確かめたい。遂に、そんな考えが止まらなくなってきた…。

美紀「鍵かけましたから…誰も来ませんよ…。もし来たって、無視しちやえば良いんです。先輩はただ私だけをじつと見つめて…隅々まで触れて下さい…」

まだ昼過ぎだが、部屋の中は薄暗い…。窓際のカーテンを閉めていくのに、明かりをつけていないからだろう。そんな薄暗い空間の中、美紀はベッドの上に押し倒した彼を惑わすように耳元で囁いた…。

『気のせいだろう…』

美紀「先輩…どうしたんです？さあ、美紀の事が好きだって…はやくそう言つて下さい…。それさえ言つてくれれば、私に好きな事が出来るんですよ…？」

「あ…その…まいったな…」

美紀「…私のこと、嫌いなんですか？」

ベッドに仰向けのまま倒れている彼…美紀は相変わらずその上へ馬乗りになっており、瞳を涙で潤ませる。彼が中々良い返事を返してくれないので、不安になってしまったらしい。

「いや、美紀のことは…好き、だけど…」

美紀「本当ですか…？なら、嬉しいです…」

彼が少し言葉を返しただけで美紀は涙を引つ込ませ、その胸へ嬉しそうに顔を埋める。上半身下着姿の彼女にこうして馬乗りになられ、胸へ顔を埋められる…それは彼にとってかなり魅力的な状況であり、今すぐにも美紀を襲ってしまいたい、本当はそう思っていた…。

(けど、どうにもおかしい…。あの美紀が、こんな事をしてくるなんて…)

彼女に告白され、こうして身を寄せあつているというのは正直かなり幸せだ…。しかし、今日の美紀は何かがおかしい…。その疑念があつたからこそ、彼はギリギリで理性を保っている事が出来たのだが…。

美紀「先輩…大好きですよ…。ほんとに、ほんとに大好きです…。今日はずっと一緒にいて…私と色んなことしましょうね…♡」

「あ…ぐ…っ…」

(そろそろ…我慢の限界かも…)

美紀の真っ赤な頬、額に浮かぶ汗、そして少しだけ荒めの吐息…それらがやたらと色っぽくてただでさえ我慢の限界なのに、彼はもう一つ、あることに気が付いてしまう…。美紀の胸を覆う白い下着の肩紐が左右ともにずり落ちてしまっており、その胸は緩みかけた下着から今にも溢れてしまいそうになっていた…。

美紀「先輩…せんぱいつ…♡」

それを知ってか知らずか、美紀は彼に密着させたその身を樂しげに揺らす。彼女の下着はその度に少しずつずり落ちていき、1ミリ…また1ミリ、その胸を彼の視界に晒していく。

「あ、あの…美紀、胸が…」

美紀「胸？胸が何ですか？あつ…見たい…ですか？」

「いや、そりや見たくないわけではないけど…けど…ね…」

見たくないと言えば嘘になるが、こんな様子の美紀が相手だと見てはいけない気もする…。しかし、美紀はそんな彼を見てイタズラに微笑み…

美紀「…ふふつ、仕方ないですね♡じゃあこれも脱ぎますから…少し待って下さい」

「…………マジか」

横たわる彼に寄せていた身を起こすと、美紀はその両腕を自身の背中へと回した。どうやら、下着のホックに手をかけているらしい…。

(ああ…まったく、どうしたもんかね…)

今はどうにか保てている理性も、美紀の胸を見てしまったらあっさり消え失せるだろう…。そうなってしまえばもう歯止めは効かない。このまま美紀とそういう関係になってしまうべきか…それとも、彼女を押し退けてでも止めた方が良いのか…。

ドンドンツ!!

美紀「……………」

「っ……っ」

悩みに悩んでいる最中、部屋の扉がノックされる。その力はわりと強めであり、慌てているようにも思えた。下着に手をかけていた美紀も思わずそれを中断し、背中に回していた両腕を下ろす。

「美紀…誰か来たから、出ないと…」

美紀「…無視していれば大丈夫ですよ。どのみち入ってこれませんから。鍵、かけたって言いましたよね？」

「…そうだったな」

二人はベッドの上で身を寄せたまま沈黙し、気配を殺す。しかしその後も数回ノック音が響き、それでも反応が無いとみるやドアノブがガチャガチャと回された。

ガチャツ…!ガチャツガチャツ!!

美紀「先輩…声出しちゃダメですよ…?外が静かになったら、すぐに続きをしてあげますから…ちよつとの我慢です」

「……………」

どう動けば良いのか悩みもしたが、今はとりあえず美紀の言葉に従う事にしよう…。彼はそう考え、ドアの外にあるその気配が消えるのを待った。

~~~~~

ガチャガチャツ!!

圭一「…………ちつ、反応無しか」

彼と美紀が身を潜める部屋の外…その扉の前に立っていた圭一は

苛立ったように舌打ちをする。美紀が彼と共にこの部屋に向かったと胡桃達から聞き、二人の間に間違いが起きないように止めておこうと思ったのだが、やはり部屋には鍵がかけられていた。

柳「居留守かい？」

圭一「だろうな……」

柳「ふむ…困ったものだな」

廊下の壁に背中を寄せ、柳は右手でまいったように頭を搔く。事故のような事とはいえ、自分の作り出した薬で美紀が過ちを犯してしまったのは少しばかり申し訳ない気がしていた…。

圭一「…どうする？この扉をぶっ壊して中に入るか？」

柳「いやあ…それはそれで勘弁してほしいな…。君があとで元通りにしてくれると言うのなら構わないが、無理だろう？」

圭一「ま、無理だな……」

ならばもう打つ手などない…。このままこの場を立ち去り、美紀がどうなってしまうかは天に…というよりは彼に任せるしかないだろう。そう思った圭一と柳が諦めたようにため息をついた、その時だった……

真冬「二人とも、何してるの…？」

真冬が廊下の向こうから現れ、彼の部屋の前に立つ二人を不思議そうに見つめる。しかし、彼女がやって来たからといって状況が改善される訳でもない。この時、圭一と柳はそう思っていた。

圭一「ああ、狭山か…。いや、別に大した事じゃないんだが……」

柳「彼に少しだけ用事があつてね。それでこうして部屋を訪れたんだが、寝てしまっているらしくて返事をしてくれないんだ。入ってみようにも鍵がかかっているようだし、本当にまいったよ……」

真冬「ふうん…。その用事って急ぎなの？」

柳「まあ…緊急といえば緊急…かな」

自分が作った惚れ薬を圭一が美紀に渡してしまい、そのまま彼と共に部屋へ消えた……などと真冬に言えるわけもなく、二人はただ冷や汗を流す。事故とはいえ、責任は自分達にあるのだ。本当の事など言えたものではない。

真冬「…急ぎなら鍵を使って開ければ？」

真冬がしれつと言いつが、それは無理な話だ。この部屋の鍵はもう彼に渡してしまっていて、その彼は室内にいるのだから。

柳「鍵はもう彼に渡してあるから、それはムリだと——」

真冬「いや、だからもう一本の鍵を使えばいいんじゃない…？」

柳「…もう一本の鍵？」

真冬「うん…。屋敷内にある全ての部屋の鍵は念のために二本ずつ用意されてるって、前に柳さん自身がボクに教えてくれた…：忘れたの？」

柳「…：ああ、そういえばそうだったな…」

言われてハッキリと思いついた…：この屋敷にある部屋の鍵は万が一紛失した時用に、二本ずつ用意してあった事を。スペアの鍵の保管場所はたしか…：…

柳「ええつと、どこだったかな…：私の部屋の奥にある棚にしまったかも知れないが…」

圭一「部屋奥にある棚か？よし、ちよつと待っている…！！」  
ダツ!!!

真冬「わつ…：圭一さん、すごく急いでるね…？」

柳「あ、ああ…：そうだね」

圭一が突然廊下を駆けていったため、真冬は目を丸くする。あんなにも焦ったような圭一の表情など、これまで一度も見たことがなかつ

た。

柳（直樹君にあの薬を渡してしまったこと、圭一君は圭一君なりに申し訳無く思っているのだろうか……）

あの圭一が美紀のような少女相手に罪悪感を抱いているのだと思うと、なんとなく面白い。柳は静かに『ふふっ』と笑い、真冬は訳も分からぬままその場に立ち尽くす……。圭一が鍵を手に入れてそこへ戻って来るまで、数分とかからなかった。

圭一「あったぞ！どれがどの部屋の鍵なのか分からなかったから、全部持ってきたが……」

圭一は柳の部屋の奥の棚、そこに入っていた工具箱のような物を床の上へ置く。蓋を開いてみると沢山のスペアキーが雑にしまわれており、柳は眉間にシワを寄せた。それぞれの鍵にはタグがついており、それに番号が記されているが……何番がどの部屋の鍵なのか今一つ分からない。

柳「むう……どれがこの部屋の鍵だったかな……」

圭一「おいおい、しつかりしろよ……。お前の家の鍵だぞ、見りゃわかるだろ？」

柳「ああ分かる……分かるとも……。ええつと、これが地下室の鍵で……これが私の部屋の鍵……そしてこれが……何の鍵だったかな……？」

真冬「それは食料庫の鍵……」

柳「おお、そうだったそうだった……。で、お目当ての鍵はどれかな……」

柳は床に座り込み、箱の中をガチャガチャと漁る……。しかしどれがどの部屋の鍵なのかハッキリと把握していないらしく、動作がいちいちノロマだ。

圭一「まったく……狭山に代わってもらえ」

柳「そうするとしよう…。狭山君、この部屋の鍵がどれか分かるかい？」

真冬「えっと……………あつた。多分これ」

真冬は柳の隣へ座り込み箱の中を漁ると、ものの十数秒で一本の鍵を取り出す。どうやら、それが彼の部屋のスペアキーらしい。

柳「じゃあ…悪いが部屋を開けてくれるかな？もしかすると、部屋の中では我々が見てはいけない事が行われているかも知れないんでね…………」

真冬「??…：…わかった」

柳の発言に首を傾げながら、真冬は扉の前へと立つ。そうして手にしていた鍵を扉の鍵穴へと差し込み、クルリと回した…。

…ガチャツ

どうやら、鍵は合っていたらしい。部屋の鍵が開いた事を音で確認した後、真冬はそつとドアノブを回し、扉を開いて中にいるであろう彼へと声をかける。

ギイイツ…

真冬「ねえ、キミに用事があるって柳さんが——」

美紀「あ…っ……………」

「……………」

バタンツ  
!!!!!!

目に映ったその光景があまりにも衝撃的で、真冬は開いたばかりのその扉を勢いよく、それはもう勢いよく閉めた。開いた扉の先に広がる室内は明かりもついておらず薄暗かったが、真冬はその目でハッキリと見たのだ。部屋の奥に置かれていたベッド…そこには彼が仰向けに寝そべっていて、その上に…上半身下着姿の美紀が馬乗りになっ



ているのを…。

真冬「エツ…エツチしてた…!!!」

いつになく声を張り上げ、真冬はその顔を真っ赤に染める。そんな報告を受けた柳と圭一は互いに顔を見合せ、何とも気まずそうに辺りをうろつきだす。

柳「しまった…遅かったか」

圭一「…やっちゃまったな」

『いや…まだそこまでやってないから!!ギリギリだからっ!!』

柳、圭一が冷や汗をかき、真冬が顔を真っ赤にしたままボーツとしていると、扉の向こうから彼が大声で言う。どうやら、真冬が放った先程の発言が聞こえていたらしい。彼の言葉を聞いた真冬は柳、圭一の顔を一度見つめた後、再び部屋の扉を開く…。

ギイイツ…

真冬「…ほんとに?ほんとに…してないの…?」

ほんの十センチばかり開けた扉の隙間から目だけを覗かせ、恐る恐る尋ねる。しかし彼と美紀を見つめる勇気は出ず、真冬は部屋の入り口辺りの床を見つめていた…。

「してないっ…まだしてない!!」

部屋の奥…ベッドが置かれているであろう位置から彼の声があった。真冬はそーっと目線を上げ、そちらを見つめる…。そこではやはり、彼がベッドの上で美紀に乗られていて…

真冬「わ…っ…!!やっぱりしてるじゃん!!!」

真冬はその光景に耐えられず、またしても目線を逸らす。

「してないって！真冬にとってはこれでもうアウトなのか!？」

真冬「だ、だって……！男の子と女の子が同じベッドの上で寝て……！しかもっ……美紀……ブラジャーが見えちゃってる……！は、はずかしくないのっ……？」

美紀「うん……別に平気だよ。下着を見られたって、その下を見られたって……触られたって……私は平気。先輩のこと……大好きなんだから」

真冬「あわ……わわっ……!!？」

堂々と言い放たれた美紀の言葉を聞き、真冬の顔は益々真っ赤に染まる。彼女は軽いパニック状態に陥ったのか、視線を扉の中から背後に立つ柳、圭一へと移して目を潤ませた。

真冬「やつ、柳さん……！どうすればっ……!？」

柳「……………」

圭一「狭山……悪いな、頼れるのはお前だけだ」

真冬「へ……っ?」

次の瞬間に圭一は部屋の扉を勢いよく開くと、真冬の背中をグツと押す。そうして突き飛ばした真冬がそのまま部屋の中へと入ったのを確認すると、圭一は外から扉を押さえつけた。

ドンドンドンッ!!!

真冬「ちよつと！開けてよ!!ボクにどうしろって言うの!？」

圭一「美紀とアイツがヤバイ関係になる前にどうか止めてくれ!」

真冬「つぐ……！無理だよお……」

圭一「狭山ならやれるっ!!だから頑張れ！言葉ででも、何なら力づくでも良い！そいつらに過ちを犯させるな!!」

ドンドンドンッ!!!

部屋の扉は内側から繰り返し叩かれるが、圭一は動じることなくそれを押さえつけていく……。いくら叩いても無駄だと分かったのか、中

にいる真冬はやがて大人しくなった。

圭一「……………」

柳「圭一君…結構酷いことするね」

圭一「…こうでもして止めないと、美紀は無意識の内にアイツとそういう関係になっちまうだろ。そうなっちまった場合、少しばかり気分が悪い…。俺にも…ほんの少しは責任があるからな」

柳「結果はどうあれ…どのみち狭山君には恨まれそうだね」

確かに…その通りだ…。圭一は柳に言われてようやくそれに気が付き、額に冷や汗を流す。静かになった扉の向こうから、真冬のすすり泣くような声が聞こえた気がした…。

圭一「狭山…すまない。がんばってくれ…」

……………

圭一に突き飛ばされた真冬は部屋の中に閉じ込められ、扉へすがるように身を寄せていた。しかし、扉は外から押さえられていて開く気配がない…。真冬は仕方なく振り返り、ベッドの方へ視線を向ける。

真冬「つ……………」

美紀「真冬…なんで入ってきたの？」

目が合った瞬間、美紀が冷たい声で言う。彼女に馬乗りになられ、下に敷かれている彼は気まずそうに視線を横へと逸らしていた。

真冬「ボクは…そのつ……………」

美紀「…まざりたいの？」

真冬「まざっ…!!？」

思いがけない言葉をかけられ、真冬は再び顔を赤く染める。美紀はそんな彼女を冷めた目で見つめていたかと思うと、自身の下にいる彼を抱きしめるように覆い被さった。

ギユツ…

「っ……」

美紀「ダメだよ…。先輩は私だけのものだから…真冬にもあげない…。りーさんにも、由紀先輩にも、もちろん胡桃先輩にだって…絶対に渡さない…」

ギユ…ウツ…

(うわ…胸、やわらか…)

美紀は言いながら真冬を睨み、彼に覆い被さりながらその身を抱く…。真つ白な下着に覆われた胸の間…美紀の腕に抱かれた彼の頭はそこに埋まっており、困ったような…それでいてどこか幸せそうな顔をしている。

真冬「み、美紀は…彼の事がそんなに好きだったの…？」

美紀「うん…大好きだよ…。先輩の事を見ると…こうして身を寄せていると…胸がドキドキしてたまらないの…」

真冬「そう…なんだ…」

真冬は色恋沙汰いろこいざたに疎うとかった為、そんな言葉しか返せない…。女の子というのは、大好きな男の子の前だとこんなに変わるんだ…。一時期、美紀は自分と似ていると思っていたが…やはり彼女と自分は全く違う。自分なら、いくら大好きな人が相手だとしても下着姿など見られたくない…。真冬はそんな事を思った。

美紀「邪魔しないならそこにいてもいいよ…。私と先輩がするの、

見てていいからね……」

真冬「あ……うう……」

「あ、あの……本当にやる気？真冬の前で……？」

美紀「先輩だつて……本当はしたいんですね？言葉に出さなくたって、私にはバレバレです……。ふふっ、恥ずかしがらなくても大丈夫ですよ……♡」

耳元で囁くように告げた後、美紀はニツコリと微笑む……。そんな中、彼は真冬の事を一瞬だけ見つめてため息をついていた。

「やっぱり……今日の美紀はなんかおかしいだろ……」

美紀「いいえ……それは先輩の思い過ごしです……。私はいつだって先輩の事が大好きで……大……好きで……」

「……？」

突如、美紀の様子がおかしくなっていく……。彼女は上に覆い被さったまま彼の事をじっと見つめているのだが……その息が少しずつ乱れ始めた。

美紀「はあっ……はあ……っ……っ……ん……んっ……い！」

「おいおい……大丈夫？」

美紀「は、はい……。ちよつと、頭がふらふらしちゃつて……。ごめんなさい、心配かけちゃいましたね……もう大丈夫です……から……」

彼が肩に手を添えると、美紀は自分の顔を右手で押さえながらプルプルと首を振る。その後、彼女は彼に笑顔を見せたのだが、直後に辺りを見回してからハツとした表情を浮かべていき……

美紀「え……っ……？私……何を……??」

「……美紀？」

美紀（部屋の中で……先輩の上に乗って……って、私、下着のままっ……!?)

薄れていた正気を取り戻し、美紀は今の自分がおかれている状況に

顔を赤く染める。自分はベッドに横たわる彼の上へ馬乗りになっており、上の服を脱いでしまっていた。また、下着の肩紐もずり落ちていて今にも胸が溢れこぼれそうになっており……………

美紀「ひ…っ…！きやあぁっ!!!」

自分でも驚くくらいの声で叫び、美紀は彼の上から…そしてベッドの上から降りる。しかし薄暗い部屋の中のどこへ行ったらいいのかわからず、美紀は一先ず隅の方へと駆けた。

美紀「どういふことですかっ!!?なんで…なんで私っ…!!!」

部屋の隅でしゃがみこみ、彼に背を向けたまま両腕で胸元を隠す。なんでこんなことになっているのか、自分でも訳がわからない…。

美紀「せ、先輩っ…私に何かしましたっ!!?」

「いや、してないって…。むしろ、美紀がしてこようとしてただろ？」

美紀「私がそんな事…っ…!」

『そんな事をするハズがない…』彼にそう言おうとする美紀だったが、徐々に思い出していく…。彼をベッドに押し倒した事…彼の耳や首筋にキスした事…大好きだと告白した事…自分から進んで服を脱いでいった事…。

美紀「や、やだ…私っ…なんで……………」

全てを思い出していき、美紀はこれ以上なく真っ赤に顔を染める。彼に告白しただけでなく、もつと凄惨な事をしようとしてしまった…。それがとてつもなく恥ずかしくて、思わず涙が溢れる。

美紀「…っ…ぐすっ…!っツ…!!!」

美紀はベッドの横に落ちていた制服…そしてインナーシャツを手に取り、それを抱えて部屋を飛び出す。先程までの彼女とはまるで違

うその雰囲気を目の当たりにした彼、そして真冬はただ呆然としていた。

「どうしたんだろう…？」

真冬「さ、さあ……ボクにもさっぱり……」

二人が訳も分からず顔を見合せると、廊下にいた柳、圭一が部屋の中へ訪れる。その瞬間、彼と真冬は同時に同じ事を思った……。

真冬「もしかして、二人は美紀の様子がおかしかった理由を……」

「……知ってるのか」

圭一「……」

柳「そ、それは……とりあえず、ついてきてくれ……。ここまで来たのならもう、直樹君にも全てを話した方が良いだろうから……」

圭一は無言のまま目を逸らしていたが、柳は観念したように口を開いた。彼と真冬は柳の言葉に従い、そのあとをついていく……。柳は彼と真冬、そして美紀の三名へ同時に事情を説明したいらしく、二人と圭一を連れただまま美紀の部屋を訪れた。

コンコンツ……

柳「直樹君、ちよつといいかい？」

……

ノックして呼び掛けるが、中から返事はない……。しかし、扉の鍵はかかっているようだ。柳は仕方なくドアノブに手をかけ、扉を開く。

柳「……入るよ？」

念のため一言告げてから少しずつ扉を開き、部屋の中へと入る……。美紀はしつかりと部屋の中にいたが、隅に置かれていた椅子に座ったままボーツとしていた。

美紀「柳さんに圭一さん…それに真冬と…先輩まで…何の用ですか…」

柳「あ、あのだね…少し…言っておかないとならないことが…」  
重苦しい空気の中、柳は全てを打ち明けた…。以前、偶然にも惚れ薬を作り出してしまった事…。そしてその惚れ薬を圭一が誤って美紀へと手渡してしまった事…。全てを話した…。

柳「…と、言うわけで…何と言うかその…すまない…」

圭一「今回は…さすがに俺も謝る…。美紀、すまなかった…」

いつからだろう…事情を説明する内、二人は気付けば床へと正座していた。事情が明らかになっていくにつれ、みるみる冷たくなっていく美紀と真冬の目線に耐えきれなかったからかも知れない…。

美紀「…事情は分かりました。なら、私が先輩にあんな事をしたのは全て薬のせい…という事ですね」

柳「そ、そういう事になるね…」

「つてことはつまり、美紀が言ってきた『大好き』つて言葉は…」

美紀「薬のせいに決まってるじゃないですか…。私、先輩の事なんて大嫌いでもん…」

「あ…それはちよつとキツイな…」

全てを知った事で美紀はかなり機嫌を悪くしてしまっただらしく、彼に冷たく言い放つ。しかし、彼女が怒りの矛先を向けたのは何も彼だけではなく…

美紀「ついでに言うと、圭一さんの事も見損ないました…。私に…あんな物を飲ませるなんて…」

圭一「なっ!?!どうしてそうなる!?!あれはわざとじゃないって言ったし…それにもう謝っただろう!?!」



真冬「うん……ボクも圭一さんと柳さんの事を見損なつた……。二人は真面目な人かと思つてたけど、結局は穂村と同じ……ただの変態」

柳「私が……穂村君と同じだとっ……!?!」

真冬「うん……同じ。もう二度と、ボクに検査とかしないで……」

圭一「穂村と……」

柳「同じ……」

そう言われた事があまりにもショックで、二人はその後の記憶が少しばかり抜け落ちてしまう……。気付いた時には二人揃つて柳の部屋へと戻つており、事の発端となつた薬品保管用の冷蔵庫をボーッと見つめていた。

圭一「……穂村と同じ……か……」

柳「言わないでくれ……鬱うつになつてしまう……」

あの穂村と同じレベル……それは二人にとつて最大級の侮辱であり、屈辱であつた……。あんな人間と同レベルだと思われるのはとても辛く、力すら湧かない……。

圭一「……とりあえず、残つてる惚れ薬は全て処分しておけ……。今回のような事件は……もう二度とごめんだからな……」

柳「ああ……そう……だね」

ガチャツ……

柳「……ええつと、もう残つてないな……。直樹君が飲んでしまったヤツが最後の一本……だったか？」

圭一「あ？……どうだろうな……覚えてねえ……。似たようなのが何本かあつたような気もするし、無かつたような気もするし……」

柳「……私も記憶が曖昧だ……」

『穂村と同じレベル』……その言葉がひたすらにショックだったからだろう。二人揃って記憶力が低下している……。

圭一（穂村といえば……今日、アイツは静かだな……）

柳が冷蔵庫を閉めた後、圭一はそんな事を思う……。

そう言えば、柳が美紀達に事情を説明していた際……部屋の外に誰かの気配があつたような気がしたが、気のせいだろうか……。『穂村と同じ変態』だと真冬に言われてショックを受け、放心状態で廊下を歩いている途中……穂村とすれ違ったような気がしたが、気のせいだろうか……。

圭一（……まあ、気のせいだろう）

すれ違った穂村が見覚えのある茶色い小瓶をいくつか抱えていたような気がしたが……それもきつと気のせいだ……。あまり深く考えないようにしよう……。圭一は疲れきった頭を休ませるために自室へと戻り、夕飯の時間まで眠る事にした……。

百二十五話『ゆめ』

由紀「でね、今日はちよつと多めにお昼寝しちやつてまだ全然眠た  
くないから、このあと胡桃ちゃんのお部屋に行ってもいい？」

胡桃「んん？ま、別にいいぜ」

由紀「やつたく♪なら、今日は徹夜でゲームだね！」

夜：屋敷内のキッチンにて、夕食を食べ終えた由紀は椅子に座った  
ままルンルンとご機嫌に足を揺らす。すると彼女の右隣：そこに  
座っていた悠里がムツとした表情を浮かべた。

悠里「あまり遅くまで夜ふかししちやだめよ。明日、またみんなで  
勉強するんだから」

由紀「ま、また：なの：？」

悠里「ええ。お昼前に始めるから、遅れないようにね」

由紀「…へーい……………」

悠里「胡桃も分かったわね？」

胡桃「…へっ？あ、ああ、わかったよ…」

悠里の問いかけに対し、胡桃の反応が微かに遅れる。何故かとい  
うと、由紀の左隣に座っている二人の少女：美紀と真冬を見ていたから  
だ。このキッチンで合流してからというもの、二人はいつも以上に大  
人しい。いや、それどころか少し不機嫌なようにも見える…。

真冬「……………」

美紀「……………」

空になった食器を見つめたまま、二人は眉一つ動かさない。すると  
どうした事か：特に頼まれた訳でもないのに、離れた場所にある席に  
ついていた圭一と柳の二人がスツと立ち上がり、彼女らの食器を無言  
のまま片付けていった。

悠里「あつ、そのままで大丈夫ですよ。片付けなら私が――」

真冬「悠里：今日は二人にやらせて：」

美紀「ええ、リーさんは休んでいて下さい：」

悠里「えつと：：じゃあ、そうさせてもらおうかな：？」

美紀と真冬：この二人から同時に向けられた視線は鋭く、ちよつとした恐怖すら感じるものだった。そんな視線を受けた悠里は苦笑いし、浮かしかけた腰を再び席へと戻す事にした。

柳「まあ：：そういうわけだ：。若狭君はのんびりしていてくれ」

悠里「は、はあ：：ありがとうございます：」

穂村「おつと、圭一さん、ついでにこの皿も下げてください」

腰かけている席へ偉そうに背中をよりかけ、穂村は空になった皿を圭一へ渡そうとする。しかし圭一はそれを受け取ったりはせず、穂村の目を睨み付けた。

圭一「ふぎけるな、それはお前が使った皿だろ。何故、俺が片付けなきゃならない：。てめえでやれ」

穂村「おやおや：：狭山と美紀達の分は片付けてやんのに、俺のは片付けてくんないの？：どうしてかなあ？」

圭一「おい：：なんだそのムカつくニヤケ面は：：？」

穂村「えく？：俺、今ニヤケてつかなあく？」

と言っている今ですら、穂村はニヤニヤと笑っている。圭一はその表情を挑発ととらえたらしく、美紀・真冬の前から回収した食器を右手に持ったまま、穂村の方へと一歩踏み込む：。

「ああ、はいはい：：圭一さんは早いところそれを流しに運んで。このニヤケ男の分はこっちで片付けておくから」

圭一「：：ああ、頼む」

穂村「ニヤケ男？：それって俺の事か？」

「他に誰がいる…。今、ここにいる男の中で不気味にニヤケてるのはアンタだけだったの」

呆れたように言いながら手を伸ばし、彼は穂村の使っていた食器を片付ける。こうして自分が割って入らねば、圭一は怒りを抑えられなかっただろう。それほどに穂村のニヤケ顔は挑発的であり、彼もその顔をチラツと見ただけで軽くイラツとしてしまった。

柳「……さて、これで片付けは終わったな？なら、私は自分の部屋に戻らせてもらうよ。では、また明日」

圭一「…俺も戻る…。今日はもう寝たい…」

悠里「あつ、片付けありがとうございました。おやすみなさい」  
数分が経ち、食器の片付けを終えた二人はキッチンをあとにする。二人は悠里の言葉に対して頷きを返していたが、その表情はどこか疲れているようにも見えた。

悠里「二人とも、どうしたのかしら…」

由紀「元気なかったね」

世話になつている人達の様子があんなだと、さすがに少し心配になる。しかし、未だキッチンに残っている穂村は疲れているどころかいつも以上に元気なようであり、あの二人とは正反対だ。

胡桃「……あんたはやけに上機嫌だな？」

穂村「んっ？ははっ、そう見えるか？」

胡桃「まあ…一人ですつとニヤケてるからな……」

鼻歌混じりにニヤニヤ微笑む穂村を見て、胡桃は思った…。この男に恨みは無いが、なんとなく一発だけ殴っておきたい…。と。

胡桃（この人のニヤケ顔、なんかイライラすんだよな…）

今日の穂村は何でこんなにも上機嫌なのだろう…。何で、美紀と真

冬は不機嫌そうなのだろう…。何で、圭一と柳は疲れきった顔をしていたのだろう…。考えれば考えるほどに謎が深まり、胡桃は結局…それらを深く考えないようにした。

穂村「んじやあ、俺も部屋に帰るかな…。お嬢さん方、また明日な  
〜♪」

悠里「はい、おやすみなさい」

由紀「おやすみ〜」

最後までニヤケていた穂村がキッチンから出るのを見送り、悠里達も席を立つ。もうすっかり夜だ…。このまま眠るにしろ、もう少しみんなで会話を楽しむにしろ、まずはキッチンを出て、自分達の部屋に向かわねば。みんながのんびりとした足どりでそこを出た後、悠里はキッチンを照らしていた明かりを消して廊下へと出る。

…バタンツ

「さて、みんなはこれからどうする？…もう寝るの？」

胡桃「いや、あたしは少しだけ由紀とゲームでもしながら時間をつぶすつもりだ。お前も来るか？」

「ああ…そうしようかな」

まだ眠たくないし、それも良いだろう。彼は由紀と共に胡桃の部屋へ行くことを決め、そのまま彼女の部屋の前へとたどり着く。胡桃は持っていた鍵でその部屋を開けると、ドアノブを掴んだまま悠里達に尋ねた。

胡桃「リーさん達はどうか？少し遊んでかない？」

悠里「えっ…？うーん…そうね、じゃあ少しだけ♪」

美紀「じゃあ、私も少しだけ…。真冬も来るでしょ？」

真冬「ボクが来て、胡桃が迷惑じゃないなら…。」

胡桃「迷惑なわけないだろ。じゃ、これで決まりだな」

胡桃はニツコリと微笑み、みんなを部屋の中へと招く。柳から与えられた彼女らの部屋はどれも同じような構造、広さだったが、地下から運んできた家具などのインテリアによって、それぞれがまるで違う部屋のように見えた。

「胡桃ちゃんの部屋、少し狭くないか？」

胡桃「貸してもらった部屋の広さはどれも同じだろ？」

「いや…僕の部屋と比べるといくら狭いような気が…」

美紀「先輩の部屋、家具がほとんど無いからじゃないですか？胡桃先輩の部屋と比べて家具が無い分、スペースが広く感じるんだと思いますよ」

美紀にそう言われ、納得する。言われてみると、彼の部屋にはほとんど家具が無い。あるのといえば、衣類をしまっておく為のタンス…ちよつとした物を置いておく為の小さなテーブル…あとは……

「まあ、ベッドくらいか……」

美紀「…!!!」

部屋にある家具を思い返して小さく呟くと、隣に立っていた美紀がビクツ！と震える。何事かと思つて彼が視線を向けると、彼女は顔を真っ赤に染めてこちらを睨んでいた。

「……どうした？」

美紀「先輩っ、ちよつとこっち来て…!!」

「わ、わかったよ」

胡桃達が会話を交わす中、美紀は彼を連れてこっそり洗面所の方に入る。洗面所は扉一枚隔<sup>へだて</sup>た場所にあるため、小声で話しさえすれば室内にいる胡桃達に会話を聞かれる心配はないだろう。

「で、急にどうしたの？」

美紀「先輩がベッドとか言うから、その…昼間のことを…」  
「…なるほど」

ベッド…昼間…そして、真っ赤に染まった美紀の顔を見れば、大体の察しがつく。彼は今日の昼、いつもと様子の違う美紀によってベッドへと押し倒され、そのままいくところまでいってしまいそうになったのだ。

美紀「あの事、他の先輩達には内緒ですからね…！」  
「わかってる。わざわざ言いふらさないって…」

そもそもあれは美紀の意思ではなく、柳の作り出した薬によって起きてしまった事件だ。そんなどうしようもない事をわざわざ他の皆に言いふらす理由がない。

美紀「ならいいんですけど…」

美紀はホツとしたように胸を撫で下ろし、そのまま彼の顔を見つめなおす。彼女の顔はまだ、ほんのりと赤い。

美紀「先輩も…あの事はやく忘れて下さいよう？」  
「…努力します」

けど、すぐに忘れられる自信はない…。あの時、美紀に押し倒されて耳を甘噛みされた瞬間の興奮…彼女の真っ白な下着や、そこから溢れそうになっていた胸の柔らかさ…そのどれもハッキリと記憶してしまっており、すぐに忘れる事など…

(まあ…もう数日くらい覚えていても構わないだろ)

薬のせいでおかしくなっていたとはいえ、あれほどに積極的な美紀を見れたのはかなり貴重な経験だ。これから先、もし美紀に彼氏が出来たとしたら、その男は彼女のあんな面を見ることが出来るのだろうか…。

(だとしたら、かなり羨ましいな)



美紀「…先輩？」

「んっ？あぁ…なに？」

美紀がどこかの男と仲良くする様を想像して羨んでいると、不意に声をかけられる。美紀は未だほんのり赤い顔を俯けたまま、彼の事をチラチラと見つめていた。

美紀「あの…昼間はごめんなさい…。先輩は何も悪くないのに、私、一人で機嫌悪くして…。大嫌い…なんて、酷いことを言っちゃいました…」

「あゝ…言われたね」

美紀「あれは場の勢いで言っちゃっただけですから、気にしないで下さいね…。昼間の時みたく、愛してる…とまでは言えませんが、普通に…一人の先輩として、私はあなたの事が好きですよ」

美紀は彼の目を真っ直ぐ見つめてそう告げると、照れたように微笑む。昼間とは違い、愛を告白されたわけではないが、彼にとってこれはこれで嬉しいものだった。

「…ありがとう」

美紀「いいえ、どういたしまして…」

そうして互いに笑い合った後、彼は美紀と共に室内へと戻る。洗面所へと抜け出した時間は短かった為、二人がいなくなっていた事に気付いた者はいないようだ。

由紀「ねえねえ、何のゲームやるの？」

胡桃「んゝ、そうだなあ…」

少しの間悩ましげな表情を浮かべた後、胡桃は適当なテレビゲームをつけていく。こうしてテレビゲームで遊べる事すら、今となってはかなり凄いことだ。みんなと共にそれで遊ぶ中、胡桃はこの屋敷に自

分らを招いてくれた真冬達…そして、部屋を与えてくれた柳に改めて感謝の気持ちを抱く。

胡桃「…そう言えばさ、柳さんって元は何してた人なんだ？」

ふと気になり、胡桃はゲームのコントローラーを握ったまま一緒にゲームを楽しんでいる真冬に問う。しかし…

真冬「…さあ、ボクも知らない。何してた人なんだろうね？」

真冬は不思議そうに首を傾げ、そう言うだけだった。どうやら、その辺については彼女も知らないらしい。

悠里「たしか、圭一さんも知らないって言ってたわね…。でも自分が作った薬で狭山さん達を救ったり、今も胡桃の事を治そうとしてくれているわけだから…少なくともそういう、薬品関係の仕事をしたのかしら？」

真冬「かもね…。今も役立つ薬から、役に立たない薬まで…色々な物を作っているみたいだし…」

美紀「ほんと…変な薬は処分しておいてほしいよ…」  
「ははは…」

薬のせいであんな恥をかくのはもう二度とごめん。そんな思いを胸に宿す美紀が小声で呟くのを見て、彼は苦笑いすることしか出来ない…。

由紀「でも、自分で色々なお薬を作れるなんてすごいよね！なんか楽しそう♪」

悠里「由紀ちゃんも今から一生懸命に勉強すれば、いつかは柳さんみたくなれるかも知れないわよ」

由紀「うっ…！ち、ちがうよ？自分で好きなお薬を作れたら楽しそうだからと思っただけで、勉強してまであなりたいわけじゃ…」

「わざわざ苦手な勉強を重ねてまで、薬品に関する知識を身に付けた  
いわけじゃない。由紀は苦い顔を浮かべながら両手を振り、それを必  
死に否定した。

胡桃「じゃ、由紀は将来どうなりたいんだ？」

由紀「うくん…えへへ、聞きたい？」

胡桃「…ま、気にはなるかな」

微笑みながら告げると由紀はテへへと笑い、自らの髪を右手で撫で  
る。どうやら少しだけ照れているようだ。

胡桃「…で、何になりたいんだよ？」

由紀「えへへ…まだナイショっ！」

胡桃「はあ…そうかよ」

結局、返ってきた答えはそんなものだった。胡桃は呆れたようにた  
め息をつき、再びゲームに集中しようとするが…

由紀「人に聞く前にまずは自分から、だよ！っていうわけ…将来の  
夢は何ですかっ？」

胡桃「へっ？あ、あたしの夢…？」

由紀がマイクを握る真似をしながら胡桃の隣へと座りこみ、実際は  
何も握られていないその手を胡桃の口元へ寄せる。急に尋ねられた  
胡桃はゲームを一度中断し、その顔を俯けた。

胡桃「あたしの…夢………」

由紀「うん！どんなのでもいいよ♪」

横を見てみれば、由紀が満面の笑みでそう告げている。彼女の笑顔  
を見た胡桃はそれにつられて自らも微笑み、少し照れたように目線を  
天井へと逸らした。

胡桃「じゃ…あ……可愛いお嫁さんになりたい…かな？」

由紀「お〜♪」

悠里「ふふっ、意外に可愛らしい夢ね」

胡桃「う…ううっ…」

ニヤニヤと微笑む由紀や悠里を見て、自分の発言を後悔しかける…。ただ純粹に憧れていたからそう答えただけなのだが、やはり自分には似合わなかっただろうか…。

悠里「そんなに恥ずかしがらなくてもいいわよ。胡桃だって女の子ですもの。そういうのに憧れる気持ちはよく分かるわ」

胡桃「で、でもやっぱり…あたしの柄がらじゃないよな…」

悠里「そんなことないわ。胡桃ならきつと、可愛いお嫁さんにだってなれるわよ…。ね、美紀さんもそう思うでしょ?」

背後から胡桃の肩をポンと叩き、悠里はそのまま美紀へ尋ねる。話を振られた美紀は一瞬だけ間を空けたものの、すぐにニツコリと微笑んだ。

美紀「…ええ、思いますよ。胡桃先輩なら、きつとなれます」

胡桃「そ、そうかな…?えへへ…」

美紀「先輩もそう思いますよね?」

胡桃が止めていたゲームを再開するべく手を動かしたその時、美紀が彼へと尋ねる。その瞬間、胡桃は額にじわっと汗を浮かべた。由紀達に明かす分なら問題ないと柄にもなく可愛らしい夢を語ってしまったが、ここには彼もいたのだ。

胡桃（う、うわあああつ…!!やっちゃった…!!!）

ドサツ!

真冬「わっ…!く、胡桃…大丈夫…?」

彼に恥ずかしいところを見られた…。胡桃は堪らず前のめりに倒れ、膝に顔を埋める。あんな事を、彼の前で言ってしまうなんて…。

絶対笑われる…絶対バカにされる…。そう思うだけで顔が燃えるように熱くなつた。しかし、彼は何やら目を大きく見開いたまま震えており……

「真冬…この辺の地図とかがつてあるかな…?」

真冬「えっ? うん、探せばあると思うけど…どうするの?」

「式場を探す…。胡桃ちゃんの夢を、今すぐ叶えるために…!」

拳をグツと握りしめ、興奮したように鼻息を荒げながら彼が言う。冗談なのか本気なのか…いや、八割方冗談だとは分かっているのだが、彼の言葉を聞いた胡桃の顔はみるみる真っ赤に染まっていった。

胡桃「なっ…!? なっツ…!!?」

「今のはヤバイ…ギャップにやられたっ…!! 可愛いお嫁さんって…! 可愛いお嫁さんって…!!」

目を見開いたまま体を震わせ、彼は一人悶える。式場を探す…というのが冗談なのだとしても、胡桃の発言に興奮しているのは事実らしい。

真冬「…よかつたね胡桃。思ったよりも早く夢が叶いそうだよ」

胡桃「い、いやっ…! 相手がいないだろ!」

「そんなの僕がなつてやるよ!! 可愛いお嫁さんになった胡桃ちゃんを見れるのなら…この身を捧げる覚悟はいくらでもっ…!」

胡桃「ちよ、ちよつと待てっ! 身を捧げる覚悟とか、そんなこと急に言われてもっ…!!」

由紀「よかつたね、胡桃ちゃん!」

悠里「式には私達も呼んでね♪」

美紀「お幸せに…」

なんて事を言つて胡桃をからかうと、彼女はおもしろいくらいに顔を赤く染めて怒りだす。由紀達は彼女のそんな反応を見てより一層に笑い、最初は戸惑っていた真冬も、今は少しだけ笑っていた。

胡桃「あんまりふざけるとマジで…マジで怒るからな!？」

悠里「ふふふっ、ごめんなさい。楽しくてつい…ね♡」

胡桃「『ね♡』じゃないっ!!」

胡桃は悠里の頬を指先につまみ、ムニムニとつねる。思えば、彼女が悠里にこんな事をするのはかなり珍しいことだ。

悠里「いた〜い!」

胡桃「たいして力込めてない!そんなに痛くないだろ!」

実際、悠里も口で言っているだけで未だにニヤニヤと余裕の表情だ。ふざけあう二人を見て由紀や美紀が笑い、そのままいくらか時が過ぎた頃…彼と真冬がそつと静かに立ち上がる。

「じゃ、そろそろ寝ますかね…。胡桃ちゃんの可愛い面も見られたし、今日はいい夢が見られそうだ」

胡桃「うぐ…ううっ…」

ニヤリと微笑む彼から目を逸らし、胡桃はその顔を再び赤に染めた。

美紀「真冬も寝るの?」

真冬「うん…そろそろ眠くなってきたから…」

美紀「そっか、じゃあお休みなさい。また明日ね」

真冬「…また明日」

美紀や由紀、そして胡桃に手を振りながら部屋をあとにする。どうやら悠里と由紀はもう少しだけ胡桃の部屋で遊んでいくようだ。

真冬「みんな本当に仲良しだね…」

「ああ、まったくだ」

廊下に出た直後に真冬がそう言うと、彼が何やら楽しげにニッコリ微笑む。どうやら、先程の胡桃の発言を思い返しているらしい。

「可愛いお嫁さんか…いいねえ…」

真冬「……………」

胡桃の口から出た女の子らしい発言…未だ、そのギャップにかなりやられていたようだ。何ともいえぬその笑顔を見た真冬が呆れ顔をしていると、彼はハツとした表情を浮かべて真冬に問う。

「そういえば、真冬には夢ってある？」

真冬「えっ？ボク…？」

「ああ、何かない？可愛いお嫁さんっていうのもありだよ」

真冬「いや…ボクは別に……………」

“こんな自分が”可愛いお嫁さんになりたい”なんて、それこそ柄じゃない。真冬は首を横に振って応えるが、だからと言って夢が無いのかと言われるとそうではなかった。

真冬「ボクは…ボク自身は将来的にどうなってもいいんだ…。けど、出来るのならあの娘たちの夢が叶うその日まで…しっかりと守ってあげたい…。だから、ボクの夢はあの娘たちが夢を叶えて、笑顔で過ごせるようになるのを見届ける事かな」

「…そうか」

夢…とは少し違うかも知れない。けれど、真冬は彼女らにそんな日が来ることを心から願う。自分のような人間を友達だと言ってくれた優しい彼女らが夢を叶える事こそが、真冬にとっての夢だ。

真冬「…そういうキミの夢は？」

「まあ、真冬と同じかな。彼女達さえ幸せになってくれれば、それだけで十分」

真冬「…ふくん」

さっきまでの表情とは一変して彼が真面目な表情を見せたので、真冬は思わずニヤけてしまう…。彼は彼女のそんな表情に気付くと少し照れたように顔を逸らし、それから鼻で『ふふっ』と笑った。

「真冬が言うのならともかく、僕が言うには少し恥ずかしい台詞だったかもな…。みんなには内緒だよ？」

真冬「うん、わかってるよ…」

微かに照れた様子を見せた彼の背を真冬がポンと叩くと、彼はまいったようにため息をついていた。が、別に恥じるような事ではないと思った。こんな世の中で誰かの事を想えるというのは、とても素敵な事なのだから。

真冬「やっぱり、キミは穂村よりもずっとカッコいい男の子だよ…。ボクが保証してあげる」

「いや、だからあの人と比べられても大してありがたいが…。はあ、まあいい。ありがとう」

真冬「ふふっ、お休みなさい」

ガツクリ肩を落とす彼をその場に残し、真冬は自分の部屋へと向かう。ストレートに伝えるのが少し恥ずかしいから「穂村より」という言葉を付け足したが、ああまで彼女らの事を想える彼は本当にカッコいいと…。真冬は心からそう思っていた。



## 特別編 『どんな時もみんなの元へ』

とある日の事…由紀、胡桃、悠里、そして美紀の四人は広間に集まり、雑談を交わしていた。最初は何でもない会話をしていただけだったのだが、ほんの一時だけ広間に顔を出してきた穂村を会話に交ぜた事により、彼女達は二つの事に気が付かされた。一つ目は…今日が12月24日、クリスマススイブであり『明日はクリスマス』だということ。そして、二つ目は……

由紀「はああ……」

胡桃「由紀のやつ…さつきからずっとあの調子だな」

美紀「まあ、クリスマスの楽しみを一つ失ったわけですからね…仕方ないかも知れません」

悠里「にしても、由紀ちゃんがまだサンタを信じていたなんて…」  
広間の隅、その窓際で外を眺めながらため息をつく由紀を、三人はただ静かに見守る…。皆、明日がクリスマスだという事すら忘れていたのだが、由紀だけはそれを覚えていた。彼女は未だにサンタクロースの存在を信じており、この日が来るのを楽しみにしていたらしい。しかし、“かれら”が溢れる今の世界ではサンタクロースも大変なため、今年は来ないかも知れない…由紀はそんな考えに至り、一人落ち込んでいるのだ。

胡桃「どうにか元気付けてやりたい気もするけど、どうしたもんかな…」

悠里「胡桃、今日の夜サンタの格好して由紀ちゃんの部屋に忍び込めない？」

胡桃「無茶言うなよ。サンタ服なんて持ってないし、そもそもプレ

ゼントを用意してない。それに、部屋に忍び込むのだって簡単じゃないだろ」

悠里「まあ……それもそうね」

普段あれだけ元気な由紀が落ち込んでいるのを見ると、こちらまで気分が沈む。どうにかして彼女を元気付けてあげたいと思う三人だったが、その方法が見付からない。

悠里「とりあえず、明日は少しだけ夕食を豪華にしたり、部屋を少しだけ飾ったりして、簡易的でも良いからクリスマスパーティーをしましょう……。みんなで明るくすれば、由紀ちゃんも元気になるかも……」

美紀「そうですね……やっぱり、先輩には笑ってほしいです」

胡桃「……だな」

雰囲気だけでもクリスマス感を出していけば、サンタクロースを諦めた由紀の悲しみも少しくらいは癒えるかも知れない。明日のパーティーは可能なだけ豪華に、明るくいこう……。三人がそう決めた時、広間の戸が開いて真冬が入ってきた。

バタンツ

真冬「みんな揃ってるね……」

胡桃「まあ、まだアイツがいないけどな」

悠里「そう言えば、今日は彼が静かね？何してるのかしら？」

真冬「彼なら、さつき穂村や圭一さんと外に出掛けていったよ」

悠里「ほんと？何しに行ったのかしら……」

胡桃「物資集めか？あたしにも声をかけてくれれば良かったのに」  
彼が出掛けた事を皆に知らせた直後、真冬は気が付く……。由紀が窓の外を眺めたまま、ピクリとも動かない事に。

真冬「……由紀はどうしたの？」

美紀「ちよつと……ね」

広間に入ってきた真冬は三人のそばに寄り、由紀を見つめる。いつもなら皆の輪の中にいる由紀が一人だけ窓際に立ち、ため息をついているその光景は真冬にとっても珍しいものだった。

悠里「今年はサンタさんが来ないかもって、落ち込んでるのよ」

真冬「サンタさん…？ああ、なるほど…。そういえば、明日はクリスマスだったね」

胡桃「…まさかとは思うけど、真冬もサンタを信じてたりしないよな？」

真冬「絶対にいない…とは言いきれないよ」

そばにあつた椅子へ座り、真冬はニツコリと微笑む。彼女はどちらかといえば現在主義なタイプだと思っていたため、胡桃は目を丸くして驚いた。

胡桃「お、おう…」

真冬「…でも、ボクだってそこまで子供じゃないから、世にいうサンタクロースの正体…的なものには気付いてる。ただ、もしかしたらこの世のどこかには本物のサンタクロースもいるのかも知れないって…そういう話だよ」

胡桃「じゃあ、由紀みたく完全に信じきってるってわけじゃないのか？」

真冬「うん、そうだね…」

答える真冬を前にして、胡桃は安堵したようにため息をつく。由紀はさておき、真冬までそんな事を言い出したら、サンタの真実を知っている自分が汚れた心の持ち主のように錯覚してしまうところだ。

悠里「にしても『どこかに本物がいるかも』なんて…真冬さんって意外とロマンチックな娘なのね♪」

真冬「まあ、いたとしてもボクの所には来ないと思うけど…」

美紀「ん？どうして？」

真冬「ボクは良い子じゃないからね…。サンタさんっていうのは、良い子の所にしか来ないんでしょ？」

美紀の目を見つめたまま、真冬は『ふふっ』と微笑む。冗談で言っているのか、本気で言っているのか、その表情からは今一つ読み取れない。

美紀「確かに、前は色々あつたかも知れないけど…それでも、私達と出会ってから真冬は頑張ってると思う。サンタだって、真冬の頑張りはしっかり見てくれてるよ」

真冬「…そうかな」

悠里「ええ、真冬さんに美紀さん…それに由紀ちゃんと胡桃…そして彼、みんなとっても良い子ども♪」

真冬「悠里は…みんなのママみたいだね」

悠里「ふふっ、よく言われるわ」

優しい笑みを浮かべ、悠里は真冬の頭を撫でる。彼女のこういうところが母親っぽく、とても温かい。

由紀「あつ、真冬ちゃんも来てたんだ。みんな、楽しそうだね？」  
彼女らが楽しげに話している声が耳に入り、これまで窓際にいた由紀もそこへ歩み寄る。明日はクリスマス…だが、今年ばかりはサンタクロースも休みかも知れない。それに、パーティーだって決して豪華なものにはならないだろう。しかし、それでもいい。皆と一緒に笑って過ごせるなら、どんなクリスマスだって…。

と、あれだけクリスマスを…サンタクロースを楽しみにしていた由紀ですら気持ち切り替え、高望みし過ぎないようにとその日を…クリスマスを迎えたわけなのだが…

~~~~~

バタンツ!!

由紀「みんなっ！見て見てっ!!プレゼントが来てたよ!!」

翌朝、由紀は寝癖も直さぬまま広間へと駆け、既に集まっていた悠里らにそれを見せる。由紀の手にあったのは、リボン等で綺麗にラッピングされたピンク色のカバン……。由紀好みの可愛らしいデザインをしたそのカバンには飾りとして付けられていたリボンの他、『由紀へ』と書かれたカードが付いていた。

美紀「やつぱり、由紀先輩も来てましたか……」

由紀「あれっ？みんなの分も来てたんだ〜♪」

そばに駆け寄り、皆のプレゼントを確認する。見たところ美紀は新しい音楽プレイヤーを、悠里はデジタルカメラを、真冬は真っ赤なマフラーを、そして胡桃は犬のぬいぐるみを貰ったようだ。しかし、嬉しそうな表情を浮かべているのは由紀だけ……他の皆は険しい表情を浮かべている。

由紀「みんな嬉しくないの？サンタさんが来てくれたんだよ？」

悠里「えっ……？も、もちろん嬉しいわよ♪」

由紀「えへへ〜、そうだよね〜♪嬉しいよね〜♪」

由紀の夢を壊さぬよう喜ぶフリをした悠里だが、本当はそんな気分ではない……。それぞれの部屋にプレゼントがあったということは、誰かが忍び込んできたということだからだ。

悠里（外から不審者が来た……なんて事はないわよね？だとすれば、考えられるのは彼が皆を喜ばせる為にやってくれたって事かしら？けど、昨日も部屋には鍵をかけて眠ったから、忍び込むなんて無理なはずだし……）

美紀「…胡桃先輩はどう思います?」

胡桃「うくん…:そうだなあ…:。ところでさ、この字、見たことないか?」

自分宛に贈られた犬のぬいぐるみ…:それに付いていた『胡桃へ』と書かれたカードを手に取り、美紀へ見せる。しかし、美紀は首を傾げるだけだった。

美紀「…どうでしょう。私には普通の字…:としか」

胡桃「ああ、そっか…:ならいい。あたしの勘違いだ」

恐らくは、ボールペンか何かで書いたのであろう文字…:。胡桃はその筆跡に心当たりがあったのだが、深く考えるのは止めにした。

真冬「ボクにまでくれるなんて、サンタさんって心が広い…:」

美紀「嬉しそうだね?」

真冬「由紀ほどりアクション出来ないけど…:うん、嬉しい」

真つ赤なマフラート、それに付けられていた『真冬へ』と書かれたカード…:それらを交互に見つめ、真冬は微笑む。仮に本物のサンタがいたとして、自分の所には絶対に来ないと思っていたからだ。サンタの正体が分からぬ以上、悠里と美紀は未だに何ともいえぬ表情だが、由紀は貰ったカバンを背負ってニコニコと笑っている。

胡桃（ま、本物のサンタが来た…:って事にしておくか）

貰ったぬいぐるみを腕に抱きつつ、カードに書かれた文字を見つめる。その筆跡が手掛かりとなり、胡桃はサンタの正体に気付いたようだが、あえて皆には言わない事にした。

特別編 『みんなの笑顔のために』

これは、とある日の出来事…。

その日、穂村は何ともつまらなそうに柳の部屋の中をうろつき、ため息ばかりついていた。穂村はそのまま部屋の隅、デスクの前に座つてよく分からない書類を見つめる柳へ視線を向ける。

穂村「はあ…柳さん、何か楽しい事とかない?」

柳「楽しい事?...特に思い浮かばんが、暇なら外にでも行ってきたらどうだい?ちようど探してきて欲しい物が——」

穂村「それ、どうしても必要な物?」

柳「いや…出来れば手に入れておきたい程度の物だが…ダメかい?」

穂村「ああ、ダメ」

柳「暇なんだろう?」

穂村「暇だ。けどダメ。柳さんのお使いをする気分じゃねえんで…」

ハッキリ言われたら強要する事も出来ず、柳は穂村に向けていた視線をデスク上の書類に戻す。仕事を手伝つてくれる訳でもないのなら出て行って欲しいところだが、穂村はまだそこに居座っていた。

穂村「なあ、柳さん。明日が何の日か知ってる?」

柳「明日?...:すまない、そもそも今日は何日だったかな?」

世の中がこうなつて以降、まともに日付を意識した事がない。しかし穂村は未だに日付管理だけはしっかりしているようで、柳に対し呆れた目をしていた。

穂村「はああ…ほんつとにつまんねくなあ……。まあいいや、由紀でもからかって遊んでくる」

柳「ああ、そうすると良い」

穂村は廊下へと出ていき、ため息をつきながらその扉を閉める。直後、穂村が完全に立ち去ったのを見計らって柳も深くため息をついた。

柳「はあ、最初からそうしてくれ。まったく、穂村君の相手は疲れ
るな」

くくくくくくくく

穂村「よお由紀、今日も元気か？」

由紀「うん、元気だよ！ほむさんも元気〜？」

柳の部屋から出て数分後、穂村は広間にいた由紀を見つけて声をかける。彼女はここで他の娘らと団らんしていたらしく、そばには美紀や胡桃、そして悠里の姿があった。

穂村「俺か……俺はまあ、ちよつと元気じゃないかも……」

胡桃「珍しいな？いつもは呆れる程元気なのに」

穂村「そりや元気も無くなるさ……。だってよ、明日はホラ…あの日
だろ？」

美紀「………どの日ですか……」

穂村の発言に対し、一同が冷たい目を向ける。しかしそんな中、由紀だけは瞳をキラキラと輝かせていた。

由紀「うんっ!!明日はクリスマスだね♪」

穂村「おっ!?!正解っ!!由紀、100点!!」

由紀「やった〜♪」

胡桃「いやいや、何の点数だよ……」

胡桃が呆れた表情をする一方、由紀は穂村に謎の点数を貰って嬉しそうに微笑む。そう、明日は12月25日の”クリスマス”…そして、今日は”クリスマスイブ”だ。

悠里「そう言えばそうだったわね…。すっかり忘れてたわ」

穂村「忘れちゃダメっすよ!! 大事なイベントなんすから!!」

悠里「まあ、それもそうですね。こんな時だからこそ、クリスマスをお祝いして明るい気持ちになった方が良いのかも……」

顎に手を当て、悠里が呟く。すると穂村の表情がパアアッと明るくなり、さつきまでとは様子が一変した。

穂村「さすがリーさんだ!! よし、そうと来ればパーティーの準備を…」

美紀「意外ですね、クリスマスが好きなんですか?」

穂村「というより、パーティーが好きなのさ。世界がこんなになる前だって、仲間達と数々のパーティーを——」

と、穂村が過去の思い出を語りだした時、由紀が満面の笑みを浮かべてその場に立ち上がる。

由紀「ってことは、今日の夜、サンタさんが来てくれるね〜♪」

胡桃「あっ?」

美紀「え?」

悠里「…んっ?」

勢いよく立ち上がった由紀は今も満面の笑みを浮かべ、鼻歌まで歌い出している…。その様は子供のようでも愛らしいが、彼女はもう高校三年生…。にも関わらず、サンタを楽しみにしているらしい。

胡桃「ゆ、由紀は…サンタを信じてるのか?」

由紀「信じてる？信じてるってどういうこと??……あつーそっか、今はサンタさんも大変だろうから、今年は来れるか分からないって事だね……」

由紀は窓の方に歩み寄ってから外を見つめ、残念そうにため息をつく。どうやら、今の世の中の惨状をどうかしな限りはサンタが来ないと思ったようだ。もっとも、胡桃が言いたかったのはそういう事ではなく……

胡桃「由紀、まだサンタを信じてるんだな……」

美紀「みたいですね。胡桃先輩、本当の事を教えてあげたらどうです?」

胡桃「えく……やだよ、そんなの」

悠里「まあまあ、あのままで良いじゃない。由紀ちゃんは由紀ちゃんのまま、純粹でいてくれれば……」

三人はそつと身を寄せ合い、由紀に聞こえぬよう小声で会話をする。由紀は三人が話している事すら知らず、残念そうに窓の外を眺めていた。悠里の言う通り、彼女の夢をわざわざ壊すことは無いかも知れない。

胡桃「……ま、いずれ気づく時が来るか」

美紀「いや、由紀先輩の事です、一生気付かないままかも……」

確かにそれはありそうだ。三人はクスクスと笑い、窓辺に立つ由紀を見つめる。そう言えば、さつきから穂村が大人しい……

穂村「……」

胡桃「……どうかしたのか?」

穂村は三人のそばに立ったまま、無言で由紀を見つめていた。しかし胡桃が声をかけるとハツとしたような表情を浮かべ、彼女と目を合わせる。

穂村「あつ？いや、何でもない…。いや、何でもない事はないな
……。よし！ちよつと出掛けてくるわ」

美紀「出掛けるつて、外にですか？」

穂村「ああ。ちよつくら用事が出来たんかね」

それだけ言い残し、穂村は広間をあとにする。直後、穂村は廊下で
バツタリ出会した彼の肩を叩いた。

穂村「よう、少年！」

「ん？何か用でも？」

穂村「ああ！外行くぞ、外!!」

「外？今から？」

穂村「そうだとも!!とつと支度してこい！庭で待ってるからよ」

穂村はそう言つて廊下を駆けていき、彼の前から姿を消す。彼はこ
れから広間にいき、由紀達と何でもない時間を過ごす予定だったのだ
が…仕方なく自室へと戻つて外に向かう支度を整えた。

~~~~~

「…で、支度は終えたわけだけど」

穂村「ならよし！ほら、乗った乗った！」

庭に停めてあつた灰色のワゴン車を指差し、穂村は彼をその中へと  
招く。何時もの事ながら、この男のテンションに付き合うのは疲れる  
…彼はそんな事を思いながら車のドアを開け、後部座席に足を踏み入  
れたのだが、そこにはもう一人とある人物が乗っていた。

圭一「…なんだ、お前も穂村に付き合わされたのか」

「まあそういう事です…。そちらも？」

圭一「ああ、これから昼寝でもしようかと思つていた矢先だ…」

断つても良かったんだが、後でネチネチとうるせえからな…」

後部座席にいた圭一はため息をつき、座席にもたれる。そんな圭一を見た彼は自分以外にも穂村の被害者がいた事にどこか安堵し、その隣の席へ座った。すると車のエンジンがかかり、穂村が運転席から顔を覗かせる。

穂村「よろし！じゃあ行きますぞ!!」

「今日は何時にも増してテンションが高いな……」

圭一「ああ、鬱陶しい事この上ない……」

後部座席の二人が吐く愚痴も、今の穂村には聞こえない。

ついさつき、由紀の発言を聞いて思い浮かんだとある計画を実行するのが楽しみでならないからだ。穂村は車を走らせて外へ向かい、その計画に必要な物を探す…。二人の同行者と共に。

~~~~~

…ボタンツ!

穂村「よし、ここならどうにかなるだろ!ほら、二人も降りた降りた!!」

「はいはい、分かってるって…」

圭一「なんだ、もう着いたのか。昼寝も出来やしねえ……」

一足先に降りていた穂村に続き、後部座席の二人も外へと降りる。車が停まっていたのはわりと広めの駐車場であり、その先には大きなデパートが建っていた。

「ええっと、ここでも何か物資を探すって事?」

穂村「いんや!物資は十分あるハズだからいらん!」

圭一「じゃあ何しに来た……」

穂村「それは今から言うつての！落ち着け落ち着け」

両手を向け、穂村は『まあまあ』と言いなながら二人を落ち着けようとする。しかし薄ら笑いを浮かべたままそんな動作をする穂村を見て落ち着ける訳もなく、二人はほぼ同時に舌打ちを鳴らした。

穂村「ほら、イライラしないの!!俺の素晴らしい計画を知れば二人とも…特にお前は感心すると思うぜ!」

穂村は彼の肩をバシツと叩きながらニヤリと笑い、二人にその計画を打ち明ける。その計画の全てを知った二人は…というより、彼は目を丸くして驚いた。

「…:…おお、アンタにしちや良い計画だ」

穂村「だろ!?!だろっ!?!」

圭一「まあ穂村にしては珍しくまともな計画だが、だとしても何で俺まで手伝いを…:…」

穂村「まあまあ、この借りはいつか返すからさ」

圭一「つて言つて、返つてきた試しがねえ…:…」

圭一だけじゃない、真冬も穂村のワガママに何度か付き合つてやっていた気がするが、借りは返してもらっていないだろう…。まあ、返してもらったとしてもこの男が相手だと大した物は期待できないが…:。

穂村「さてさて、まずは通り道の確保からだな!」

穂村は駐車場の中央へ向かい、そこに停めてあつた誰かの車の上へと乗る。辺りには”かれら”の姿が多々あつた為、まずはそれをどうにかしようと思つたようだ。穂村は車の屋根をガシガシと踏みつけて音を鳴らし、”かれら”の注目を集める。

ガンツ!!ガンツ!!!

穂村「…よし、結構寄ってきたな。あとは適当に相手をしつつ、隙を突いて横から抜ければいいだけだ。二人とも準備は………つて、いねえし!!?」

車の上に乗っていた穂村は背後を見るが、そこに彼と圭一の姿はない…。慌てて辺りを見回すと、駐車場の隅からデパートの中へ移動をしていく二人を確認出来た。”かれら”の注目はほとんど穂村に集まっている為、二人は楽々移動できたようだ。

「あれ、大丈夫かね…」

圭一「穂村の事か？まあ無駄にしぶといヤツだからな…大丈夫だろう。そんな事より、俺達はとつとと目的の物だけ回収するぞ」

「…了解」

”かれら”に包囲された穂村の喚き声が聞こえるが、二人はそれを無視して建物内へ侵入する。あんな場所に置いていくのは普通の人間なら厳しい状況かも知れないが、穂村なら大丈夫だと確信していた。

圭一「よし、中は比較的安全っぽいな…。おい、ライトあるか？」

「ああ、はいはい」

彼はカバンから二本の懐中電灯を取り出し、その内の一つを圭一へと渡す。明かりをつけて中を見回した感じ、外ほど”かれら”の気配はしない。

「さてさて、良いのが見つかるといいけど…」

圭一「だな。そのためにも二手に分かれて行動しようと思うが、お前は一人でも平気か？」

「まあ、みんなと会う前はずっと一人だったし…少しの間、その時に戻ったと思えばなんて事ないかと…」

圭一「そうか…ならここで分かれよう。お前は”アイツらに渡す物

”を…俺は”あの服”を…それぞれ目当ての物を回収したら連絡をして、とつとと引き上げよう」

「了解」

圭一は彼にトランシーバーを渡すと、そのまま奥の方へと消えていく…。それを見送った後に彼も動き出し、このデパートの中…”目当ての物”がありそうな店を見て回った。

くくくくく

「ええつと…よし、由紀ちゃんにはこれで良いかな。と、これで全員分揃ったか。圭一さんに連絡しないと…」

見つけたそれをカバンの中へしまい、圭一に目的の達成を知らせるべくトランシーバーを手取る。すると、彼が声を放つよりも先に圭一の声がこちらに届いた。

圭一『そっちの調子はどうだ?』

「ちようどこつちから連絡しようと思ってたところ。目当ての物も確保したんで」

圭一『そうか。こつちも使えそうな物を見つけた。とりあえず、最初に分かれた場所で合流するか…』

「んん、了解です」

通話を終え、彼はその合流地点へと向かう…。

デパート内にも”かれら”の姿はあったものの、大した数ではなかった。慎重に動けばどうという事はなかった。

くくくくく

「お待たせ」

圭一「よし、特に問題なかったか？」

「見ての通り、無事ですよ。あとはあの人が無事かどうか……」

圭一「……まあ、死んでたら死んでたで置いてけばいいだろ……」

なんて会話をしながら二人は外へ出て、駐車場内を見回す。二人がデパート内に入って約20分……穂村は無事だろうか……。

「……静かだな」

圭一「ああ、こりや本当に死んだかもしれん」

「マジか……。あの人は人一倍クリスマスを楽しみにしていたみたいだから、その前に死んだとなると少しかわいそうな気もするようない……」

辺りは静まりかえっていて、穂村の姿も「かれら」の姿もない。だが……二人は穂村の安否を確認するよりも先、まずは手に入れた物を車へ移す事にした。

圭一「停めたの、この辺だよな……お、あつたあつた」

「一先ず、荷物だけ積んでおきますかね……」

圭一「だな」

車のバックドアを開き、そこに荷物をのせていく。大した量ではなかったのに簡単なのにせる事が出来たまでは良かったのだが……未だに穂村が現れない事だけ気掛かりだ。

「……どうしますか？」

圭一「こういう時、狭山なら『置いていこう』って言うんだろうな……」

「……………」

圭一「……………」

二人はパタツと無言になり、何とも言えぬ表情で互いを見つめ合う。どちらも直接的な言葉は避けていたが、もう半分くらいは穂村を置いていく気でいた。が、その時…

穂村「ちよ〜いつ!!二人とも、よくも俺を置いていってくれたな!」
「あ、生きてた…」

圭一「みたいだな…さて、帰るか」

他に停めてあった車の陰から現れた穂村を軽く受け流し、二人は車の後部座席に乗る。 ”かれら” に囲まれてるにも関わらず置いていった事…リアクションがイマイチな事…言いたいことは幾つもあったが、穂村はそれを諦めて運転席へとついた。

穂村「…ところで、目当ての物はちゃんと確保した?」

圭一「ああ、それなら問題ない。だから運転に集中しろ」

穂村「…へいへい。つたく、アンタらに見捨てられたせいで怪我しちゃまったぜ」

圭一「なんだ、噛まれたのか?」

穂村「いや、完全に囲まれないよう逃げつつ戦ってたらすつ転んで足を擦りむいた」

よく見ると、車のハンドルを握っている腕にも擦り傷がある…。相当派手に転んだようだ。

「おお、地味に痛そうだ」

圭一「転んで怪我するとは、間抜けなヤツだな」

穂村「っ…アンタらに置いていかれたからこうなったのに…。まあいい。それより、今回の計画を考えたのはこの俺だという事を忘れずにな!!」

「はいはい…」

圭一「分かったから、運転に集中——」

穂村「へいへい。分かりましたよ…と」

三人を乗せた車は来た道を戻っていき、その後無事に屋敷へ戻る事が出来た。三人は手に入れた物を車から降ろし、それを中へと運んでいく。

穂村「よし、あとは俺に任せといてくれ。その時が来るまで、ちやんとした場所にしまっておくからさ」

圭一「ああ、任せた」

「ほい、どうぞ」

穂村「よしよし！じゃあ、またあとでなく♪」

圭一と彼から荷物を受け取り、穂村は廊下の奥へと消えていく…。やたらと上機嫌にその場を去っていく穂村を見届けた後、残った二人は静かに顔を見合せた。

圭一「んじゃ、俺は少し寝てくる…」

「ああ、お疲れさんです」

あくびをしたまま自室へ戻る圭一と別れ、彼は広間へ向かう。わりと早く帰ってこれた事もあり、由紀達もまだそこにいた。彼はその後しばらく由紀達と団らんを楽しみ、夕方には夕飯を済ませ、そして夜…

由紀「じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

夕飯後、会話をしたりして時間をつぶしていたら結構な時が過ぎ、

皆が就寝する時間がやって来た…。彼は廊下で由紀、胡桃、悠里、美紀、そして真冬達と別れた後、また広間へと戻る。

……ボタンツ

「お待たせ。みんな部屋に帰ったよ」

広間で待ち構えていた人物、穂村へ向けてそう告げる。広間には彼と穂村の他、奥の方に圭一もいるのだが、もう半分寝かけているようだ。

穂村「よし、ご苦労だったな。……おい圭一さん、起きてるか？」

圭一「……んん？ああ、起きてる起きてる……。話を続ける……」

穂村「ま、続ける程の話も無いんだけどな。あとはアイツらが寝るのを見計らって、行動に移すのみだ……!!」

そう言つて、穂村は広間の壁にかけられていた時計を見つめる。今の時刻は、午後10時過ぎだ。

穂村「さて、お嬢さん方はどのくらいで眠るかな？」

「由紀ちゃんと美紀、それにリーさんは部屋に戻ってからすぐ眠るはず……。胡桃ちゃんは……だろう、難しいな。ここところは良く眠れるって言っていたけど……」

穂村「狭山のヤツも難しいな……。アイツだけは完全な寝込みを狙わねえと、こつちの命が危ない……」

圭一「けど最優先は由紀だろ？なら、あと30分くらいしたら動いていいんじゃないか？」

穂村「……それもそうだな。よし！とりあえず30分待ってみよう！」

広間に集まった三人はそれぞれ席につき、ダラダラとした時間を過ごす……。そうして30分の時が過ぎた頃、穂村が勢い良く立ち上がった。

穂村「よくし！あのお子様はもう寝ただろう！というわけで、さつそく準備だ!!」

穂村は広間の隅へ駆け寄り、そこにあつた棚の下の方を開けていく。その中には今日、彼と圭一が確保してきた物がしまつてあり、穂村はそれを手に取つた。上下共に真っ赤で、所々に白いファーがついているその服を……

穂村「へへへっ！これを着てりや、どこからどう見てもサンタだ!」

圭一「……今になって言うのもなんだが、本当にやるのか?」

穂村「当たり前だろ!? サンタ服を着てお嬢さん方の部屋に忍び込み、それっぽいプレゼントを置いて帰る……翌朝、目を覚ました由紀はサンタが来たと思つて大喜び! みんな大好きハッピーエンドだ!」

圭一「ハッピーなのはお前の頭だけな気がしてならないんだよな……」

嬉々として計画を語る穂村を見て、圭一は頭を抱える。昼間はめんどくさくて適当に手伝つてやったが、いざその時が来ると嫌な予感しかしない。

穂村「このご時世、由紀みたく純粋な娘は貴重だ! だから俺らでサンタを演じ、由紀の夢を叶えてやろう!! そして、そのついでに狭山達にも教えてやるんだ……サンタクロースは本当にいるってな!」

「んん、やっぱり素晴らしい計画だ。今日のアンタはいつもと違うな」
穂村「そうだろうそうだろう!! というわけで、さつそく着替えるかね。それぞれの部屋のスペアキーも用意してあるから、わりと楽に忍び込め——」

圭一「ん? ちよつと待て、サンタ役つてのはお前がやるのか?」

当たり前のようにサンタ服を手に取る穂村を見て、圭一は尋ねる。そう言えば、誰がサンタ役をやるのかという話は一切聞いていなかった。

穂村「え？そりやそうだろ。俺が考えた計画なんだから、最後は俺が締めないと……」

圭一「……なるほど、お前の本当の目的がようやく分かった」

「ああ、そうだよな……この人がただ良い事をする訳がなかった」

穂村「な、なんだよその目は……！俺はただ、由紀達にクリスマスプレゼントをあげたい一心で……！！」

穂村がサンタ役をやると知った瞬間、彼と圭一はこの計画の影に隠されていた本当の目的を知る。もつとも、本人はまだしらを切るつもりらしいが……。

圭一「正直に言え。お前、アイツらの部屋に忍び込んだ後、プレゼントだけ置いてすぐに帰って来られるか？」

穂村「も……もちろん……！」

「寄り道無しだぞ？寝顔を見たり、写真を撮ったり、そのまま部屋を漁ったりするのも当然無しだぞ？」

穂村「ぐ……う……！！」

彼の言葉に答えることなく、穂村は後退りしていく……。どうやら、この男の真の目的は彼女らの部屋に忍び込む事にあつたらしい。サンタ役をするという面目で彼女らの部屋に忍び込んだ後、いくらか悪行を働くつもりでいたのだろう……。

「……ほら、サンタ服をこっちに渡しなさい」

穂村「く、くそが……あと少しだったのに……」

「何があと少しだよ……。まったく……」

手に持っていたサンタ服を奪い取り彼は呆れた表情を見せる。穂村はそんな彼の顔を見つめると、悔しそうな声を発した。

穂村「もし俺がサンタになれたなら、胡桃や美紀の寝顔を撮ってきて

てやろうと思っただのに……」

「……」ピクッ

穂村「はあ…残念だよ…。ラフな格好で眠る胡桃、可愛いだろかなあ…。リーさんなんか、寝相のせいで際どい格好になってるかも知れないし……。はあ…俺ならそれを写真に収めて、誰か欲しい人にプレゼントしてやるんだけどなあ……」

「……………」

悪魔のような囁きを聞き、彼の動きが止まる…。穂村にサンタ役を任せれば、自分の手を汚すことなく彼女らの寝顔を収めた写真が手に入る……そう思うと、思考が鈍ってしまうようだ。

「ぐ……う……う……」

穂村「万が一ミスっても、捕まるのは俺だ。お前にリスクは無い…良い話だと思うがな」

「むうう……」

悩む彼を見て、穂村がこごぞとばかりに言葉を放つ。それらの言葉は彼の心を一層に誘惑していったが、そんな二人のやり取りを見ていた圭一が呆れたように告げた。

圭一「はあ…もういいから、とつとと行ってこい」

「あ、ああ……」

穂村「ちっ！あと少しだったのに……！」

彼は悔しげな穂村を無視することにして、手元のサンタ服に着替えていく。真っ赤な服、帽子を被った彼は由紀達へのプレゼントが詰められた真っ白な袋…そしてそれぞれの部屋のスペアキーを手に持った。

「よし、じゃあ出来るだけ早く戻る……」

穂村「起こさないように気を付けろよ。バレちゃったらせつかくの

計画が台無しだからな」

「もちろん、そこはしっかりと気を付けるさ」

そう言っただけは広間をあとにし、それぞれの部屋へと向かう。一番最初に向かったのは由紀の部屋だ。彼女は未だにサンタを信じているらしいので、ここだけは絶対に失敗出来ない。彼はスペアキーを取り出し、部屋の鍵を開いてその中へ足を踏み込む。

…パタンツ

(……………よし、寝てるみたいだ)

明かりのついていない部屋の中、彼は小さな懐中電灯を手にくつきりと進む。部屋の奥まで行くと、横にあるベッドの上から小さな寝息が聞こえた。

由紀「すう……………すう……………」

(……………可愛い寝顔だな)

プレゼントだけを置いて速やかに次の部屋へ向かわねばならないのに、無意識の内に明かりを由紀の方へ向けてしまう。由紀の顔立ちは元々幼いものだが、寝顔は更に幼く見え、とても可愛らしい…。

「……………」

由紀「すう……………すう……………」

(…っ、危ない危ない。寝顔を見るのに夢中で目的を見失いかけた)

ハッと我に帰り、由紀の寝顔から視線を逸らす。彼は担いでいた袋から彼女の為に用意したプレゼントを取り出すと、それだけを置いてそそくさと部屋を出ていった。

ボタンツ

「…よし、多分バレてないはず。残りもこの調子で終わらせるか」
少しだけ軽くなった袋を担ぎ直し、美紀の部屋、胡桃の部屋、悠里の部屋を回っていく。いずれもぐっすりと眠っており、彼が多少の物音を発てたり、ほんの少しだけ頭を撫でたりしても起きたりはしなかった。

(さてさて、最後は真冬だけど……。真冬の部屋は三階だったな)

由紀達の部屋は二階にあるが、真冬の部屋は三階だ。彼は軽い足取りで三階にある彼女の部屋へと潜り込み、無事に最後のプレゼントを贈り終える事に成功した。しかし、その直後…真冬の部屋をあとにして、廊下へ出た時だった……

…ボタンツ

柳「おやつ？」

「あ……」

たまたまそこを出歩いていた柳と会ってしまい、彼の額に冷や汗が浮かぶ…。全員にプレゼントを贈り終えたまでは良かったのだが、これは計算外の出来事だ。

柳「……ああ、そうか、クリスマスだからそんな格好をしているんだね？」

「へっ？あ、ああ…まあ、そうですね」

柳は真つ赤な服に身を纏う彼を見つめ、おかしそうに笑う。こんな格好を他人に見られていると少しばかり恥ずかしい気持ちになるが、彼はそんな気持ちをごまかすようにして、空になった袋を肩に担いだ。

柳「眠っている間に、プレゼントか何かを贈ってあげたのかな？」
「ええ、真冬や下の娘らにね」

柳「ほう…それは良い事をしたね。君一人の計画かい？」

「いや、穂村兄と圭一さん…三人で協力しました」

柳「へえ、そうかそうか…。うん、よく分かったよ。当然、彼女らには内緒にしておくから安心してくれ」

彼の話聞き、柳は微笑む。どうやら、彼女達にはこの事を内緒にしておいてくれるようだ。彼は柳へペコリと頭を下げ、そのまま広間へと戻っていった。

~~~~~

…バタンツ

穂村「お、もう戻ってきたのか？」

「ああ、どうにか配り終えたよ…」

広間へ戻った彼は素早く元の服へと着替えると、ソファ―に座つて一息つく。その後、今回の計画の証拠となるサンタ服や袋等の道具を穂村が片付け出したのだが、それを見ていた圭一があることに気付いた。

圭一「ん？帽子がなくなっていないか？」

「へっ？いや、その辺にあるでしょっ…」

圭一「いや、無い。そう言えばお前、ここに戻ってきた時にはもう帽子をしていなかったような気がするぞ」

穂村「ん、確かにそうかもな…。でもまあ、もうやる事やったしあんなのどうでも良いだろ。それより、俺もそろそろ寝ることにするわ」

穂村は今回使った道具を回収し、それを手に広間を出ていく。それらは彼女達の目の届かない所に封印するらしい。とは言え、帽子だけ

消えてしまったのが心残りだったりもするが……あまり気にしていても仕方ない。その後、彼と圭一も広間をあとにしてそれぞれの自室へと帰っていった。

くくくくくくく

そして翌朝、目を覚ました彼が広間へ向かうと、そこに集まっていた皆が何やら騒いでいた。柳を除いた全員がそこに集まる中、一番に騒いでいたのは由紀だ。彼女は現れた彼を見るなり満面の笑みを浮かべ、そばに駆け寄ってきた。

由紀「おはよう！ねえねえ、これ見てっ!!今朝起きたら、枕元に置いてあったの！えへへ、すごいよねえ♪」

彼女の手に握られているのは、ピンクを基調にした大きめのカバン。可愛らしさも中々な上、結構たくさんの物を詰められそうな大きさだ。このカバンは昨日、圭一達とデパートに行った際に彼が手に入れた物なのだが、由紀はそれを知らない。

由紀「やつぱり、こんな時でもサンタさんは来てくれるんだね!!」

悠里「ほんと、どうなっているのかしら……不思議だわ」

美紀「ですね……私はちよつとした怖さすら感じています……」

悠里はデジタルカメラを、美紀は最新の音楽プレイヤーを手にしたまま、何とも言えぬ表情をしている。サンタを信じている由紀はともかく、彼女達からすれば枕元にプレゼントが置いてあった事が本当に不思議なようだ。もつとも、それを置いていったのは彼なのだが……

美紀「柳さんに言って、調べてもらった方が——」

胡桃「いや、そこまでする必要ないだろ。こんな時に屋敷に忍び込んで、ただプレゼントを置いていくだけの不審者がいるとも思えないし……」

美紀「それは……確かにそうかも知れないですけど……」

真冬「もしかして、本物のサンタさんが来てくれたのかも…？」

胡桃「ま、そうかもな」

真冬は真つ赤なマフラーを、そして胡桃は可愛らしい犬のぬいぐるみを手に持ち、微かに微笑んでいる。どちらもわりと満足しているのかと思いきや、胡桃がその表情をコロツと変え、不満げな顔でぬいぐるみを見つめた。

胡桃「にしても、なんでぬいぐるみなんだろうな…。あたしはそこまで子供じゃないんだから、もつと色々あっただろうに」

悠里「あら、ぬいぐるみは嫌だったの？」

由紀「せっかくサンタさんがくれたんだから、ワガママはダメだよ!!」

胡桃「別に嫌だとは言つてねえよ。ただ、あたしっぽくないな…つて思っただけ」

掲げたぬいぐるみを見つめ、胡桃は『ふふっ』と微笑む。彼女ならきつと喜ぶと思つてこれをプレゼントに選んだ人物…すなわち彼はその表情を見てホツと一安心した。

「ええつと、つまりそこそこ嬉しいってことかな？」

胡桃「…ま、そうなるな。よし！コイツの名前は『ローマル』にしよう！少し、太郎丸に似てるしな」

美紀「ほんとだ、似てますね。ふふっ」

互いのプレゼントを見せ合いながらニコニコと笑い合う皆を見て、彼は思った…。真の目的は別にあつたとはいえ、今回穂村が考えたこの計画は本当に良いものだったと…。

「みんな嬉しそうだ…。とりあえず、今回は素直にありがとう…と言わせてもらおうかな」

穂村「ふふん、俺の事を少しは見直したか？」

「まあ、少しは…。圭一さんもありがとう。おかげで良いクリスマス

になりそうだ」

圭「別に…俺は道具集めを手伝っただけだ。礼を言われる程の事はしていない。アイツらに贈るプレゼントだって、選んだのはお前だしな」

「適当にパパッと選んだ物だけど、喜んでもらえたようで良かった…」  
穂村「中々良いところを選んだみたいだな…狭山のヤツまで嬉しうだ」

真冬は席についたまま悠里にマフラーを巻いてもらい、嬉しそうに微笑んでいる。以前の真冬なら決して見せることの無かった表情だが、彼女は由紀達と会って変わった…。少しずつ、普通の女の子らしくなってきた。

穂村「……まあ、たまにはこういうのもいいか」

彼女らの部屋に忍び込めなかったのは残念だが、これまで中々見ることの出来なかった真冬の笑顔を見ていたらそんな事はどうでも良くなった。穂村は広間の隅にあるソファへ腰掛け、一人微笑む。

由紀「あつ！ねえこれも見て!!わたし、スツゴい物拾ったんだ♪」  
「へえ、一体何を……って、これは……!!」

プレゼント以外に”ある物”を手に入れた由紀は彼の元に駆け寄り、それを見せる。彼女の手握られたそれを見た彼は驚き、目を丸くした。

「そ、そいつは……」

由紀「うん！サンタさんの帽子だよ！落としていっちゃったみたい。サンタさんって慌てんぼうさんなんだね♪」  
「……………」

穂村「ぶっ…!!」

ニコニコとした表情と、サンタ帽を向ける由紀…。そして、それを見て唾然とする彼…。それらを交互に見つめ、穂村は思わず笑い声を漏らす。昨夜どこかに消えた帽子は、由紀の部屋に落ちていたようだ。

穂村「いや、サンタってのは本当に慌てんぼうだなあ。プレゼントどころか帽子まで残していくなんて、わざとじゃないとしたらただの間抜けだぜ。な、圭一さんもそう思うだろ？」

圭一「…まあ、そうかもな」

「ぐっ…!!」

由紀の部屋に帽子を落としていくというミスをした彼を見つめ、穂村と圭一は小馬鹿にしたように笑う。彼は二人の顔を見て悔しげな表情をしており、何ともおかしかった。圭一はそんな彼を見てある程度楽しんだ後、ソファーにもたれる穂村の方へ視線を移す。

圭一「そう言えばお前、今回は珍しく借りを返したな」

穂村「へっ？何の事で？」

圭一「いや、今朝俺の部屋の前に酒が置いてあったんだが…あれはお前だろう？ボトルに巻いてあるリボンは余計だったが、あれは中々良さそうな酒だ」

穂村「……ん？酒？」

今朝、圭一の部屋の前には酒が置かれていた…。それが誰から贈られた物なのかは圭一にも分からなかったが、もしかしたら、穂村が昨日の協力のお礼に贈ったのだと思った。しかし、それは勘違いだったらしい…。圭一の言葉に対し、穂村は終始目を丸くしていたのだ。

穂村「あの…マジで知らねえんだけど…」

圭一「じゃあ…あれを置いたのはお前か？」

「いや、心当たり無し。そもそも、圭一さんが酒好きなのも知らなかったくらいだし……」

圭一「そこまで好きってわけでもないが、たまに飲むんだよ……。つて、そんな話はいい。大事なものは、あれを置いたのは誰だって話だ」  
三人は広間の隅でコソコソと語り合い、その謎に迫る。すると、穂村が思い出したように二人へ告げた。

穂村「そう言えば、俺の部屋の前にも菓子が置いてあったな……」

圭一「…菓子？」

穂村「ああ。いくつかのスナック菓子が、ご丁寧な事にバスケットかごに入れられたまま放置してあった……」

「……………」

その話を聞き、三人はピタリと黙り込む……。

ここにいる三人の他、同じようにサンタの真似事をしている人物がこの屋敷内にいるのかも知れない……。

圭一「…お前はどうか？何か貰ってたか？」

「いや、今朝は起きてからすぐにここへ来たから、辺りの確認をしてなくて……。少なくとも、部屋の前には何も無かったと思うけど……」

穂村「…よし、確認に行くぞ」

圭一「だな、何か手掛かりがあるかも知れん」

話し合いを終え、三人はそつと立ち上がる。そうして広間から出ていこうとした際、由紀が彼へ問い掛けた。

由紀「ねえねえ、キミは何を貰ったの？」

「あ〜…今から確認に……」

胡桃「由紀、サンタってのはな、いい子のところにしか来ないんだよ」

由紀の隣にいた胡桃がニヤニヤと笑い、彼の肩を叩く。放たれたそ

の発言に彼がムツとした表情を浮かべると、胡桃は彼の耳の方へそつと顔を寄せ、静かに耳打ちをした。

胡桃「プレゼント用意したの、お前だろ？」

「えっ？いや…何の事かさっぱり……………」

胡桃「この字、どっかで見覚えがあるな」と思ったんだよ。これ、お前の字だよな？」

胡桃の手には、プレゼントに貼り付けていた一枚の紙が握られていた。それに書かれていた『胡桃へ』というたった三文字の言葉…彼女は、この三文字だけで、彼がこれを書いた事に気付いたようだ。

「あの…みんなには内緒にしてもらえると——」

胡桃「んん、もちろんだ。由紀の夢を壊しちゃ悪いしな。プレゼントありがとうな。サンタさん♪」

最後にもう一度彼の肩を叩き、胡桃はニツコリと笑う。それを前にした彼が少しだけ照れたように顔をそむけていると、穂村が声をかけてくる。

穂村「おい、何してんだ。はやく行くぞ」

「ああ、ごめんごめん」

彼は穂村・圭一と共に広間を出て、自室へと向かう。

ただ、見たところ部屋の前に何かが置かれているということはない。

圭一「…何も無いな」

穂村「部屋の中はどうだ？何かあったりしないか？」

「いや、やっぱり何も無いと思うんだけど……………」

と言いつつ、念のため部屋へと入ろうと扉を開く。

その時だった……

パサツ

「ん？」

圭一「おい、何か落ちたぞ」

足元を見てみると、何やら真つ赤な封筒が落ちていた……。どうやら、扉の隙間に挟んであった物が落ちたらしい。

穂村「……………」

「さっきまで無かったはずなのに……とりあえず、開けてみるか」

彼はその封筒を手に取り、中を開く。封筒の中に入っていたのは一枚の紙切れ……手紙のようだ。彼は他の二人にも内容が伝わるように、そこに書かれていた文字を読み上げていく……。

『キミには何を贈れば良いか分からなかったので、プレゼントの代わりに感謝の手紙を送らせてもらう事にした。今回は私の代わりに仕事をしてくれてありがとう。また来年のクリスマスまで、無事に良い時が過ごせるよう祈っている。くSよりく』

穂村「……………は？」

圭一「おいおい、冗談だろ」

「これは、まさか……………」

手紙を読み上げた彼も、それを聞いた二人も、目を丸くしたまま動かない。この手紙に書かれていたのは彼が読み上げた文章のみで、送り主の名前は『S』としか書かれていない。……が、その一字から正体を察する事は出来る。しかし、その人物から手紙が送られるなどあり得ない事だ……。



穂村「最後に書かれてる『S』ってのはアレか？SとかMとか、そういう意味合いでの…」

圭一「そうだったら、ただの変質者で済むんだがな…」

「ああ、これは…：凄いの物を貰ってしまったのかも知れない」

彼は手紙を封筒へしまい、額に浮かんでいた冷や汗を拭く。世の中には不思議な事がたくさんあると知ってはいたが、今日ほど不思議な出来事は後にも先にもないだろうと思った…。

くくくくくくくくくく

所変わって屋敷内の一室…。

柳は三階にある自室の窓から外を見つめながら、大きく体を伸ばす。今日は早くから起きてやるべき事を色々と済ましていた為、だいぶ疲れが溜まっていた。

柳「…さて、さすがに疲れたし、一眠りした方がいいか」

窓の外をじつと見つめ、一人呟く。するとその時、外に白い物がフワリと舞うのが見えた。今日はかなり冷える為、雪が降り始めたらしい。

柳「おお、クリスマスらしくなってきたね…」

窓を開け、雪を見つめながら耳を澄ます。すると、下の階から賑やかな声が聞こえた。由紀や真冬…穂村達が騒いでいるらしい。

柳（この街は…いや、この世界はすっかり人気ひとけが無くなって静かになったというのに、私の家だけは前よりもずっと賑やかになったな。何ともおかしな話だ）

聞こえてくる明るい声に『ふふっ』と笑い、柳は窓を閉める。この

後はそのまま一眠りしようかと思っていたが、気が変わった。柳は部屋を出て、下の階へと向かう。騒がしい住人らと共に、クリスマスという時を過ごす為に…。

## 百二十六話 『そばにいて…』

由紀「むく。退屈だねえ…」

昼食を済ませて少しした後、由紀はリビングでつまらなそうな表情を浮かべる。確かにこの屋敷に住まわせてもらっている間はこれと違ってやるべき事もなく、少々退屈かもしれないが…平和な時間が過ぎるのは良いことだ。

由紀「ねえねえ胡桃ちゃん。一緒に庭で遊ばない？鬼ごっこしよう！」

胡桃「鬼ごっこねえ…」

由紀「あ、やつぱ鬼ごっこはナシ！胡桃ちゃんとやつてもすぐに終わっちゃうそうでつまらないもん」

胡桃「まあ、そもそも二人でやるもんじゃないしな…」

由紀と同じく、胡桃もまた退屈そうな表情を浮かべて席につく。このリビングには二人の他、奥の方に悠里がいた。

由紀「みーくんは真冬ちゃんと二人でどこかのお部屋に行っちゃったし、——くんはまたお昼寝してるし…」

胡桃「ほんとによく寝るやつだよな。ちよつと起こしてきてやろうか？」

由紀「あはっ、いいね♪やってみよっか？」

胡桃「よし！んじやあまあ、奇襲をかけてやるか！」

二人してニヤリと微笑み、席を立つ。するとその時、二人の前を悠里が横切った。彼女は木製の丸いプレートを手にとっており、その上にはコーヒーの入ったカップが乗っている。

胡桃「あれ？そんなの持ってどっか行くの？」

悠里「柳さんに差し入れでもしようと思つて…。私達をこの屋敷に住まわせてくれたり、胡桃の事を考えてもらったり、あの人にはかなりお世話になってるから」

胡桃「……そっか」

思えば最初の日に検査をした時以来、胡桃はあの人とろくに会っていない……。世話になってる人なのだからそう距離をおかなくても良いと分かっているのだが、会えば恐らく自分の身体の話が出る……。そうなった時、もしも良くない報告をされたらと思うと……どうしても気軽に会う事が出来ない。

胡桃（あたしも……行った方がいいのかな……）

悠里「……胡桃は由紀ちゃんと遊んであげて。あの人には、私の方から改めてお礼を言っておくから」

胡桃の思いを察したのか、悠里は優しく微笑んで部屋をあとにする。彼女が部屋を出た後、胡桃はしばらくの間、重苦しい表情をしていた……。

由紀「……胡桃ちゃん、大丈夫だよ。ほら、一緒に——くんを起こしにいこ？」

由紀もまた、胡桃の思いを察して明るく振る舞う。彼女にそつと手を握られた胡桃は少しづつ明るさを取り戻し、ニコリと笑ってから由紀と共に彼の部屋へ向かった。気持ちしが沈んだ時、由紀がそばにいれば……彼に会えば、また元気になれると思った。

~~~~~

コンコンツ……

悠里「失礼します……。入りますよ?」

柳「ああ、どうぞ」

ガチャツ……

片手でドアノブを捻り、悠里は柳のいる部屋へと足を踏み入れる。この部屋は冷房が効いているらしく、一歩踏み入れただけでもヒンヤリとした空気を感じられた。

悠里「コーヒーを入れてきましたから、よかつたらどうぞ」

柳「えっ？ああ、わざわざすまないね……ありがとう」

デスクについていた柳は一瞬、驚いたような表情を浮かべて悠里を見つめる。これまで共に暮らしてきた穂村、真冬、圭一らは間違っても差し入れなどしてくれなかった為、悠里が差し入れてきてくれた事に驚いたのだ。

柳「んん……美味しい。まるでメイドを雇った気分だな」

悠里「ふふっ、喜んでもらえたならよかったです」

コーヒーカップを渡した後、悠里はそれが乗っていたプレートを両手で胸の前に抱える。そしてそのまま、柳の前にあるデスク……その上にある紙やら、コンピューターの画面やらを覗き見た。

悠里「……………」

柳「……なにか気になるものでも？」

悠里「……胡桃の事については……進んできますか？」

催促のようになってしまい悪いと思っっているが、それでも聞かずにいられない……。悠里はそつと顔を俯けつつ、柳の返事を待つ……。

柳「正直、まだそこまで進んではない……。だが、この件については可能なだけ早く片をつけるつもりだよ。不安を煽るわけじゃないが、早くしないと恵飛須沢君が危険だし……それに、私達だって……」

悠里「…………？」

柳「……とにかく、やることは全力でやる。だから君らは安心していいと良い。コーヒー、本当にありがとう」

何かを言いかけた柳だが、不思議そうにこちらを見つめる悠里の表情を見てその言葉を濁す。気になる事はいくつかあるものの、とりあえず胡桃の事には真剣に取り組んでくれているようだ。

悠里「お望みなら、また定期的に入れてきますよ？柳さんにはお世

話になりっぱなしですから、こんなのじゃお礼にもならないですけど…」

柳「いや、かなり助かる。是非頼むよ」

悠里「ええ。では、私はこれで失礼しますね」

ペコリと頭を下げ、その部屋を去ろうとする…。すると柳は何かを思い出したかのように声をあげ、また悠里の方へ目線を向けた。

柳「ああ…そう言えば、狭山君がとても明るくなったね。前はあんなふうに笑ったりする娘じゃなかったんだが…」

コーヒーをまた一口啜り、柳は微笑む。真冬といえば、悠里は彼女についても気になることがあった…。

悠里「…あの、良ければですけど、狭山さんの事を聞いてもいいですか?」

柳「ん?彼女の…何をだい?」

悠里「あの娘が元々はどんな娘だったのか…。何故、最初に会った時に私達の事をあそこまで敵対視したのか…。その辺がまだ、私には分からないんです」

本人に聞いても良いのだが、いざ前になると悪い気がして聞き出せない。なので悠里は自分達よりもずっと彼女の事を知っているであろう、柳にそれを尋ねる事にしたが…。

柳「ん…:…悪いね、私の口から言える事はほとんど無いよ。私だって、彼女の事を細かく理解している訳じゃないからね」

悠里「そうでしたか…。すみません、急にこんなこと…」

柳「いや、構わないよ。ただ、一つだけ確かな事がある…」

悠里「…なんですか?」

柳は悠里の目線を受け、しばしの間沈黙する…。およそ十秒弱の沈黙の後、柳はデスクに置かれていた一本のペンを手に取り、それを片手でクルクル回しながら口を開いた。

柳「私が仲間にしたあの三人……。穂村君、狭山君、圭一君は、それぞれが一度死にかけている。全員色々あって、感染者に噛まれてしまった訳だからね」

悠里「……………」

そこまでは彼や、真冬自身の口からも聞いていた。ここにいる三名はそれぞれが”かれら”によって傷を負い、死にかけていたところを柳に助けられたのだと……。

柳「だが……そこに至るまでの経緯はまるで違う……。私もそれぞれが感染してしまったまでの経緯を事細かに教えてもらった訳ではないが、それでも……………」

柳は回していたペンを止め、それをデスクの上に戻す。コロコロと転がるペンは置かれていた書物にぶつかり、ピタリと動きを止めた……。

柳「彼女の……狭山真冬の通ってきた道は、他の二人とは比べ物にならないくらいに残酷なものだということだけは分かる。彼女が経験してきたのはただのアクシデントだとか、ちよつとした不注意だとか……そんな優しいものじゃない」

悠里「……………あの娘は、どうして感染を？」

柳「彼女は感染者に左肩を噛まれ、感染した。しかしその時の彼女は自身が感染した事などどうでも良いと思えるくらい、絶望的な状況にいたようだ」

悠里「……………それがあの時、私達を襲った事に関係があるんですか？」

柳「恐らくね……。私が知っているのは大まかな話だけだ。また機会があれば本人から聞くことが出来るかも知れないし……もう一生、そのことについては話さないかも知れない」

悠里「辛いことなら……胸にしまったままでもいいんです。でももしそれを誰かに話して、少しでもあの娘の気持ちが軽くなるのなら、私達はそれを聞いてあげたいと思います」

柳「……そうか」

悠里にとつてもう、真冬は大切な友達だ。そんな友達が胸に悩みを抱えているのなら、それを少しでも楽にしてあげたい……。そう思う気持ちに揺らぎはなかった。

くくくくく

胡桃「由紀…準備はいいか？」

由紀「うん…いつでもオツケーだよ…！」

胡桃「よし！では、いけえくつ!!」

由紀「らじやくつ!!」

パンツ!!パンパンツ!!

「っ?!なんだっ?!」

突如、室内に響く大きな音…。ベッドで昼寝していた彼はそれを聞いて飛び上がり、羽織っていたシーツをはねのけた。

胡桃「おっ、いい反応だ」

由紀「起きた起きたく♪」

目覚めた彼が見たのは、ベッドのそばに立つ由紀と胡桃の姿…。二人はそれぞれが手に紙製の筒…クラッカーを持っており、爆音と共にそれから出たのであろう紙テープが部屋に散乱していた。

「…何の真似だ」

胡桃「いや、暇だったからさ。お前をからかって遊ぼうかなくつて」

由紀「これも地下の倉庫にあったんだよ♪」

鳴らし終えたクラツカーを彼に見せびらかし、由紀は楽しげに…そして胡桃は彼の迷惑そうな顔を見て嬉しそうに、ニヤニヤと笑っている。この二人がここにいるという事は、部屋の鍵が開けっぱなしになっただろう。

胡桃「部屋の鍵、ちゃんと閉めなきゃだめだぞ？」

由紀「そうだよ！泥棒がくるかも！」

「…次からは気を付ける」

昼寝を始めてから、まだほんの二十分ほどしか経っていない…。まだ寝足りない彼は不機嫌そうに目を細め、二人の事をジロリと見つめた。

「クラツカーのせいで耳が痛い…」

胡桃「ちゃんと離れた場所から鳴らしたぞ？大げさじゃないか？」
「寝込みをクラツカーで襲われた事がないからそんな事が言えるんだ…。明日の朝、二人にも同じことをしてやる。だから部屋の鍵は開けておいてよ。サンタクロスが入れないからね…」

由紀「サンタさんは扉からじゃなくて、煙突から来るんだよ？」

「細かいことはいい…とにかく、部屋の鍵は開けておくこと」

キーンという耳鳴りに悩まされつつ、彼は二人の顔を睨む。しかし二人はそれを全く気にしていないらしく、余裕の笑みを浮かべていた。

胡桃「由紀、今日の戸締まりはキッチンとしないとな！」

由紀「えへへ、そうだね♪」

言うだけ言って、二人は部屋を出ていく…。ただの悪ふざけに付き合わされた彼は面倒そうに起き上がり、洗面所で顔を洗うことにした。

「…………イタズラ娘達め」

冷たい水をバシャバシャと顔にかけ、それをタオルで拭う…。そうしてから部屋へと戻ると、出ていったはずの由紀と胡桃が室内でしゃがみ、何かをしていた…。どうやら、先程自分達が撒き散らした紙テープを片付けているらしい。

「…何してんの？」

胡桃「部屋を汚しちまったからな。片づけしてんだよ」

由紀「一人で片づけるのは大変だからね」

ただのイタズラっ娘かと思えば、こういうところはキチンとしていく。彼は二人のそんな所に感心しつつ、自らもそれを手伝う事にした。

「二人で一発ずつしか鳴らしてないわりに、結構飛び散ってるな」

胡桃「だな…。こんなのを大人数で一斉に鳴らしたら後片づけが大変だ」

由紀「でも、パーティーっぽくて楽しいよね♪また鳴らしたいなあ…」

「鳴らすのはいいけど、寝込みは勘弁してよ…。本気で驚くから」

さっきの爆音を思い出しながら彼が言うのと、由紀は申し訳なさそうに笑う。寝起きから彼女達の顔を見られるのは嬉しい事だが、あの爆音だけはいただけない。

「どうせなら、今度は別の意味で寝込みを襲ってほしいね…」

由紀「んん？どういうこと？」

胡桃「ははあくん、息の根を止めてほしいって事か？」

「…そういう意味じゃない」

彼の言う『襲ってほしい』とは、寝てる間にいきなり抱き付いてきたり、同じベッドに潜ってきたりと、そういったような意味だ。恐らく、胡桃はそれを理解した上でわざとこんな事を言っているのだろうが、由紀の方は本当に彼の言葉が理解できていない。それどころか、胡桃の言葉を真に受けてすらいる。

由紀「——くん、わたし達にそんな事をしてほしいの？」

「いや、さすがにそんな趣味はない……」

呆れたように彼が答えると、由紀は次に胡桃の事を見つめる。彼女は部屋に散乱していた紙テープを集め終え、隅にあるゴミ箱の方へ向かっていた。

由紀「よかった。わたし、頼まれたってそんな酷いこと出来ないもん。胡桃ちゃんだって、大好きな人にそんな事出来ないよね？」

胡桃「ま、そうだな……」

手に持っていた紙テープをパラパラとゴミ箱に落とし、胡桃は不意に飛んできた由紀の言葉に返事を返す。しかし今、由紀は何と言っただろう……？そして自分は、それに何と答えただろう……？全てが脳内で繋がった際、胡桃は顔を真っ赤に染めた……。

胡桃「……違うぞ。今のはその……そういう意味じゃなく……！」
「……………」

咄嗟に見つめた彼の表情が気まずそうだったので、今の発言を聞かれていた事は間違いない。それを確信した事で胡桃の脳内は真っ白になり、同時に嫌な汗が吹き出してきた。

胡桃「ほ、ほらっ！あたしらってもう結構な間一緒にいるしき！友達として、お前の事が大好きだよ〜って、そういうことだ!!なあ由紀っ、そうだよな!？」

由紀「うん！そうだよ♪」

「それはそれは……とても光栄だ」

誤魔化しがきいたのか、はたまたきいているフリをしているだけか……彼は幸せそうにニヤニヤと微笑む。その笑みを見ていたら恥ずかしさでそばにはいられず、胡桃は耳の先まで真っ赤に染めて部屋を出

ていこうとする。

胡桃「あ、あたしは他にやる事があるから……！またあとでっ！」

「ああ、またあとでね」

由紀「やる事？やる事ってなに？」

由紀が首を傾げて尋ねたが、胡桃はそれに答えぬまま部屋を出て行ってしまった……。部屋に残った由紀と彼は不思議そうに顔を見合わせた後、同時に笑いだす。

由紀「ふふっ！へんな胡桃ちゃんだね♪」

「まったたく、面白い娘だ」

由紀「ね〜♡」

いくらか笑い合った後、二人は笑いで乱れた息を整える。さすがに今からまた昼寝をする気にはなれずに彼が立ち上がると由紀は突然、そんな彼の手をギュツと握った。

「……どうしたの？」

由紀「……あのね、キミには……ありがとうって言いたい……。胡桃ちゃんの身体の事を知っても冷たくしたりしないで、いつも通りやさしいままでいてくれたから……」

「まあ、胡桃ちゃんは大切な友達だから……」

こんなことを改めて口にするのは恥ずかしいが、由紀がいつになる真剣そうな表情だったので、彼はそれに応える。彼女が感染していると知った時は確かに驚いたが、見捨てるつもりなどなかった……。

由紀「胡桃ちゃんね……これまでずっと、無理して笑ってばかりいたの……。でもあの日……キミが胡桃ちゃんを治す方法を探すって言って、みんなと一緒に未奈ちゃんの屋敷から出ていった日かな……。この日から、胡桃ちゃんはよく笑うようになった……。きつと、キミのおかげだね……」

彼の手をより強く握り、由紀はニツコリと微笑む。あの日を境に胡

桃の笑顔は無理のない、本当に楽しそうな…幸せそうなものへと変化したのだ。

由紀「結果がどうなるかは分からないけど…幸せそうに笑う胡桃ちゃんが見れて本当によかった…。わたし、これからもずっと…胡桃ちゃんが幸せそうに笑うのを見ていたい…」

「…大丈夫だよ。あの娘はすぐに治って、これからもずっとそばにいてくれるさ。学園生活部ってのは四人いなきや意味がないんでしょ？」

由紀「…うん。だけどそれだけじゃなくて、キミもずっとそばにいてね？キミがいなくなったらわたしも…胡桃ちゃんも…みんなが悲しむから」

「ああ、分かってるよ…」

彼の方からも強く由紀の手を握り返し、そばにいてほしいというその気持ちに応える。すると由紀は手を握ったまま彼の肩に顔を埋め、ポツリと呟いた。

由紀「約束だよ…」

「…約束する」

そつと答えると、由紀は優しく微笑んだ…。

彼はその後、胡桃を追って部屋を出る事にした由紀をその場で見送り、一人で部屋の天井を見上げる。

「大丈夫…胡桃は絶対に治る。一人だって欠けさせやしない」

この先どんな事が起ころうと、学園生活部の”四人”だけは守ってみせる…。真冬達だって、ある程度は力になってくれるはずだ。彼女らが笑って暮らせる未来を作る為なら、どんな事だってする…。約束までした由紀には悪いが、たとえ自分の命と引き換えにだって…それを掴み取ってみせる。彼はそう決意して、ニッコリと笑った。

百二十七話 『がいしゆつ』

由紀「そういえば、未奈ちゃん達は元気かなあ…」

昼を少し過ぎた頃、由紀は広間のソファ―に座りながら窓の外を眺めてポツリと呟く…。ここへ来る数日前まで世話になっていた少女…水無月未奈^{みなづきみな}。由紀達が今世話になっている柳の屋敷には少し劣るが、彼女も広い屋敷に暮らしていた…。

悠里「たぶん大丈夫だとは思うけど、少し心配ね…。よし、ちよつと様子を見に行つてみましょうか？」

由紀の隣に座つていた悠里もまた未奈達の事が心配だった為、そつと立ち上がつてから由紀の事を見つめる。すると由紀は嬉しように微笑みを浮かべ、勢いよく立ち上がった。

由紀「じゃあ支度しないとねっ！」

悠里「ちよつと待つてね。一応、柳さんに許可をもらつてくるわ。何も言わずになくなつたら驚かせちやうかも知れないから」

由紀「あつ、そつか。じゃあ、わたしはここで待つてるね」
笑顔の由紀に見送られ、悠里は広間から廊下へと出る…。

柳が今どこで何をしているか知らないが、恐らく自分の部屋にいるはずだ。悠里がそう思つた通り柳は自室にいて、デスクについたまま何らかの作業をしているようだったが、それを中断して悠里の話聞いてくれた。

柳「ん？どうした？」

悠里「忙しいところをすみません…。あの、少し話が…」

頭を軽く下げてから柳のそばへ寄ると、悠里は未奈達の事がある程度話してから外出の許可を求める…。悠里は未奈達の名前は伏せ、『ここから遠くない所に屋敷があつて、そこに暮らす少女達にお世話

になった』と話したただけなのだが…その話を聞き終えた時、柳は驚いたように目を丸くしていた。

柳「この辺りにある他の屋敷というと、水無月の所か…」

悠里「知ってるんですか？」

柳「近い所に似たような屋敷を持っていると、自然と交流があったりするものなのさ…。まあ、交流といっても本当に些細ささいなものだったか…」

鼻で『ふふっ』と笑い声をあげた後、柳はそつと立ち上がる…。

そうしてから部屋の隅にかけていた茶色のコートを上着として羽織ると、柳は悠里の方へ顔を向けた。

柳「わざわざ私の許可なんか取らなくても、外出に関しては好きにしてくれていいよ。ただ、今回だけ私も同行していいかな？」

悠里「ええ、構いませんよ」

話によると、柳は水無月家の人間に挨拶したいらしい…。とは言え、今あの場所で生き残っている人間の中で水無月の名を持つ者は未奈だけなのだが、柳はそれでも構わないとの事だった…。

~~~~~

「あれ、出掛けるんですか？」

柳から外出の許可を貰ったので一旦自室に戻り、外出の支度を終えた悠里が廊下を歩いていると、その向かいから彼が現れる。彼は悠里がその背中にカバンを背負っている事に気が付き、不思議そうな顔を浮かべていた。

悠里「ええ、少し未奈さんの所に行つて様子を見てこようと思つて。ちようどあなたにも声をかけに行こうとしていたところなの。どう？一緒に行く？」

「じゃあ、ついていきましようかね」

悠里「そう。じゃあ少し頼みたいんだけど…胡桃にも声をかけてきてくれるかしら？ たぶん、自分の部屋で休んでいると思うから」

「はいはい、了解です」

申し訳なさそうに両手を合わせて頭を下げる悠里とその場で別れ、彼は胡桃の部屋へとたどり着く。彼女の部屋の扉に手をかけてみると鍵がかかっていないようであり、あっさりと中に入る事が出来た。

「お〜い、胡桃さ〜ん」

入ってすぐの所で立ち止まり、部屋の奥へ向けて声を放つ…が、返事は無い。その後二度、三度と彼女の事を呼んでみたが何の反応も無かった為、彼は部屋の奥へ足を踏み入れる…。しかし部屋の奥にも胡桃はおらず、ベッドの上にもその姿は無い…。

(どこに行ったんだ?)

部屋にいないとなると、他に考えられるのは広間か庭だろうか…。仕方なくその場を立ち去ろうと彼が動いた時、部屋の入り口付近にある一つの扉の向こうから物音がした…。柳がくれた部屋は全て同じ間取りの為、そこが何の空間なのかは彼にも分かる。恐らく、バスルームだろう。

(ここに入るのはさすがに…いや、リーさんに頼まれてるし…。)  
これも仕事の内、仕方ない…！)

心の中でそう言い聞かせ、そこへ通じる扉に手をかける…。ここにも鍵はかかっておらず、彼の口角は自然と上がった…。

ガチャ…ツ…

扉の向こうには洗面所と脱衣場が合わさった広めの空間があり、その奥には更にもう一つ…磨りガラスで出来た扉があった。ここまできると物音もハッキリ聞こえるようになり、磨りガラスの向こうから



シャワーを流す音や、湯桶ゆおけを動かす音が聞こえる……。また、ガラス扉の横の方には大きなカゴが置かれていて、中には綺麗に畳まれた巡ヶ丘学院高校の制服があつた……。

胡桃「……誰かいる？」

磨りガラス越しに気配を感じたのか、扉の向こうにいた胡桃がシャワーを止めて声を出す。カゴの中をそくつと覗いていた彼は一瞬ドキツとしたが、すぐに落ち着いた雰囲気で返事を返した。

「あ、ああ……僕だよ」

胡桃「っ……!?何でそんなところにいんだよ?」

「いや、リーさんから頼まれてさ……。これから未奈ちゃんの家へ行くみたいだけど、胡桃ちゃんも行くかい?」

胡桃「未奈の家?ああ……そっか……。うん、いこつかな……」

「分かった。じゃあ、そう伝えておくよ」

止まっていたシャワー音が再び響く中、やるべき事を終えた彼はそのまま立ち去ろうとするが……まだ気になる事があつた。胡桃が何故、こんな時間にシャワーを浴びているのかという事だ。今の時刻は昼を少し過ぎた辺り……。昼にシャワーを浴びる事などそう珍しくもないかも知れないが、ただ何となく気になった。

「何でこの時間にシャワー浴びてんの?」

胡桃「えっ?なんだよ……昼にシャワー浴びたらダメなのか?」

「いや、そうじゃないけど……。なんとなく気になってね」

磨りガラスの向こうで動く影を見つめつつ、彼はゴクリと喉を鳴らす……。この薄っぺらい扉の向こうにいる胡桃は今、一糸纏わぬ姿に違いない。そう思うとついドキドキしてしまう……。

胡桃「……さつきまで庭で走り込みしててな。その途中、小石につまづいて思い切り転んで、体が汚れた。だからシャワーを浴びてる。こ

れで答えになってるか？」

「はあ、なるほど…。怪我とかしてない？」

胡桃「うん、それは大丈夫。心配してくれてありがとな」

ならば良かったと一安心して、彼はもう一度だけカゴの中に視線を移す。ここにしまつてある服は綺麗な物なので着替えの為に用意したのだろうか、たたまれている制服の下には下着もあるのではないだろうか…。いや、間違いなくあるはずだ。

(…ちよいと覗いてみるか)

カゴの前に腰を下ろし、中に入っていた制服に手をかける…。これを捲れば、その下にある物が拝める。扉の向こうでシャワーを浴びている胡桃に気取られぬよう、そつと静かに手を動かす彼だったが…

…ガチャツ

「っ!!？」

そばにあつた扉がゆつくりと開き、彼は慌てて腕を引っ込める。更にその場からピョンと飛び退いて数歩分の距離を離れ、カゴなど全く見ていないかのように目を逸らした。

胡桃「…：りーさんのとこ、戻らないのか？」

「い、いや…：これから戻るけど…：」

開かれた扉の隙間、肩から先だけを出した状態の胡桃が彼の事を怪しむような目で見つめる…。何かを疑うような目で見られている事に彼は冷や汗を浮かべるが、目線は胡桃を捉えて離さない。扉の隙間からこちらを覗いている彼女の湯に濡れた髪や肩が色っぽく、つい見つめてしまうのだ。

胡桃「…一緒に入るか？」

怪しげな笑みをニツ…と浮かべ、胡桃は尋ねる…。

その言葉を聞いた瞬間、彼は自分の耳を疑ったが、彼女は確かにそう言った…。しかし、間違いないと分かつても方が一という事が

ある。彼は扉の方へ一方歩み寄ると、彼女の目を見つめ返した…。

「…入っていいのかい？」

胡桃「んん、ダメだな。今のは冗談だし」

怪しげな笑みから一変…。今度はやたらと楽しそうに満面の笑みを浮かべ、胡桃は笑い声を漏らす。彼女が楽しそうなのは良い事だが、少し悔しいという気持ちもある…。なのでその仕返しとして、彼は扉の隙間から出ていた胡桃の手首を掴んだ。湯に濡れているせい、ほんのりとだけ温かなその手を…

胡桃「お、おいっ！」

「このまま、こっちへ引つ張り出してやろうか……」

ニヤリと微笑み、彼女の手首を握る力を強める。この腕をグイッと引つ張れば彼女はこちらへ倒れ込み、磨りガラスの向こうに隠していた一糸纏わぬその姿を晒す事となるだろう…。

胡桃「引つ張ってもいいけど、やるなら覚悟しろよ…。もし本当に引つ張りなんかしたら、その瞬間大激怒するからな……」

「……………」

鋭く、そして冷たい眼差しを向けられ、彼の表情が曇っていく。微かに赤くなっている頬を見るに胡桃もある程度の恥ずかしさは感じているようだが、その状況でもこんなに鋭い目が出るのはさすがだと思っただけ…。

「…今回はやめておく」

胡桃「ああ、それがいい…。ついでに言っとくけど、着替えの入ったカゴと洗濯カゴの中も覗くなよ？」

彼はコクリと頷き、胡桃の手を離す…。しかし、彼女はそれでもまだこちらを覗いていた。どうやら、彼がここを去るのを見届けるつもりらしい。

胡桃「ほら、早く帰れって」

「はいはい、分かりましたよ…」

磨りガラスの横に置かれていたカゴ…そして脱衣場の隅にあった洗濯カゴを観察したかったが、胡桃の目がある以上それは叶わない…。彼は渋々その場を立ち去ると、広間で待っていた悠里、由紀、そして美紀の元に向かった。

悠里「胡桃はどうするって?」

「行くらしいですよ。でも今はシャワー中なんで、もう少しかかるかも…」

悠里「そう。じゃ、胡桃が来るまで待ちましょうか」

悠里はもちろん、由紀と美紀も既に支度を終えているらしく、腰掛けているソファアの横にはそれぞれのカバンが置かれていた。彼自身も胡桃の部屋からここに来る途中に自室へ戻って軽い準備を終えた為、あとは胡桃の到着を待つのみだ。

美紀「柳さんと真冬も来るんですよね?支度が長引いてるのかな…」

悠里「どうかしら?準備が済んだら、先に私達だけで行っても良いって言われてるけど…」

悠里の話だと柳の他、真冬も今回の外出に同行するようだが、この広間に二人の姿は無い…。それから十数分後、準備を終えた胡桃が広間へと現れた為、彼等は柳・真冬より一足先に外へ出る事とした…。

## 百二十八話 『それぞれ』

胡桃「そろそろ着く頃か？」

悠里「ええ、もう見えてきたわ」

一行を乗せたキャンピングカーの先……。そこに大きな屋敷が見え始め、車を運転していた悠里は速度を落としていく。あの屋敷に暮らしている少女、水無月未奈に世話になっていたのはつい数日前の事なのだが、ここ最近は色々な事があったのでかなり前の事のようにも思えた。

胡桃「よし、じゃあ門あけてくる。おい、行くぞ」

「ああ」

彼と胡桃は車を降り、屋敷前にある門を開きに向かう。幸いな事にそばに”かれら”の気配は無く、手早く済ませれば何の問題も無しに中へ入れそうだったのだが…。

ギツ…ギツ…

胡桃「っ…相変わらず開けづらいな」

横開きタイプの門はどこか錆びているらしく、一人でなら開けるのにかかなりの時間を使っていただろう。しかし二人がかりでなら比較的早めに開く事ができ、彼と胡桃は悠里達の乗る車を屋敷の敷地内へと誘導した。

悠里「二人ともお疲れ様」

車を敷地内へ停め、悠里達も外へ降りる。彼と胡桃は今開いたばかりの門をしっかりと閉めなおし、悠里達と共に屋敷の玄関前へと立った。

由紀「みんな元気にしてるかな？」

悠里「ええ、たぶん大丈夫でしょう」

などと言う言葉を由紀と交わし、悠里が玄関へ手を伸ばした時…その扉は内側からゆつくりと開かれていく。次の瞬間、そこから小さな影が飛び出して由紀の元へと一直線に飛び付いた。

由紀「わっ!?!おっ、ヒメちゃんだっ♪」

飛び付いてきた幼い少女、白雪の頭を撫で、由紀は満面の笑みを浮かべる。長くて綺麗な銀髪を揺らすこの人形のような少女は未奈と暮らしている人間の一人であり、幼さのわりにしっかりとした子だ。

白雪「みんな、元気そうよかった…」

美紀「白雪ちゃんもね。未奈さん達も元気？」

未奈「えへへ…元気ですよ」

白雪が答えるよりも先に玄関から本人が顔を出し、美紀達の顔を見回して微笑む。長い黒髪、そして黒いワンピースと黒づくしの格好が印象的なこの少女こそ、この屋敷に元から暮らしている人物…水無月未奈だ。彼女は外に出ていた美紀達が元気そうだと分かると子供のような笑みをニヤニヤと浮かべ、全員を屋敷内へと招いた。

誠「なんだ、全員元気そうだな」

宮野「ええ、本当によかった」

未奈と白雪に招かれて屋敷へ踏み入れた後、二人の男女が笑顔で一行を迎える。二人の内の一人…無精髭を生やし、パツと見では少し怖そうに見える男性は浅倉誠<sup>マコト</sup>。そして、その隣に立つ黒髪の女性、宮野。どちらも今はこの屋敷に暮らしている人物だ。

悠里「そちらも元気そうで良かったです」

未奈「色々話したい事はあるけど、とりあえず部屋まで移動しましょうか。ゲン君も待っていますから♪」

「んん、そうしようか」

未奈に先導を任せ、一行は薄暗い廊下を進んでいく。そうしていくらか進んだ先にある一つの扉の向こうはリビングとなっており、未奈と仲の良い少年…弦次げんじの姿がそこにあつた。

弦次「どうも。みんな無事だったみたいで一安心だ」

「そっちもね」

彼は弦次と軽い言葉を交わした後、部屋の隅にあつた椅子へと腰掛ける。由紀や未奈達もそれに続くようにして適当な場所に腰を下ろし、それぞれが近況報告を始めた。

誠「…で、急に戻ってきたって事は何かあつたのか？」

「いや、ただお互いの無事を確認する為に戻ってきただけですよ」

誠「なるほど…。そう言えば、胡桃の調子はどうだ？」

彼のそばへ歩み寄り、誠は小声でそれを尋ねる。弦次と未奈には胡桃が感染している事を伝えていない為、大きな声では尋ねられないのだ。

「…まあ、今はそう悪くないと思う。それに、あの子を治療出来るかも知れない人と会えたんで、とりあえずは一段落した感じですかね…」

誠「治療？へえ…この短期間でそんなヤツまで見付けて来たのか…」

「……どうにかね」

あとはあの男…柳が胡桃の事を治せれば大きな問題が一つ片付く。彼にとつての胡桃は絶対に失ってはならない…大切な仲間だ。

彼女が治る日が一日でも早く訪れるよう祈り、彼はため息を放つた…。

誠「…おっと、俺からもお前に言っておく事があつたぞ。結局、あれからも境界さかのの仲間のは現れなかつたが…一人、変なヤツが来た」  
「変なヤツ？」

誠「ああ、数日前にな…。たぶんお前達とそう変わらない年の子だ  
と思うんだが…一人の女の子がここにやってきてな。いや、やってき  
たというより、忍び込んで来たって感じだったが…」

誠は壁に背を寄りかけながら顎に手をあて、これまた彼にしか聴こ  
えぬよう小声で話す…。どうやら、これも未奈達には話してはいないよ  
うだ。

誠「二階から外を見張ってた俺はその子が忍び込んで来たのに気付  
き、入り口に先回りして声をかけたんだが…どういふ訳か襲われち  
まってるな」

「襲われたって…その子に？」

誠「ああ。話してる途中で急に殴りかかってきた。けど偶然通りか  
かった白雪を見た途端大人しくなって、そのまま何事も無かったみた  
く出ていったよ」

「へえ……」

一人で来たというのなら境界の仲間ではないと思うが、自分達と近  
い年の子だというのが少し気になる…。彼が頭の片隅で嫌な予感を  
感じたその時、屋敷の外から車のエンジン音が聞こえた…。

未奈「だ、誰だろう…？」

悠里「たぶん、私達が今お世話になってる人だと思います。支度に  
手間取っていたみたいだけど、後から追いついて言っていたので…」

誠「なんだ、お前らの知り合いか。危ないヤツじゃないってなら、門  
を開けるの手伝ってくるかね…」

弦次「ああ、俺も行きます」

外から響くエンジン音はきつと、柳達が乗っている車のものだろ  
う。

その車がすぐ敷地内へ入れるようにと誠、弦次の二人は外へ向か  
い、それからすぐにリビングへ戻ってきた。新たにやって来た来客、  
柳と…もう一人の少女を引き連れて…。



柳「いやあ、ここに来るのも久々だね…」

未奈「ひっ…!!？」

誠達が連れてきた二人の来客の内の一人である柳を見た瞬間、未奈はよく分からない声をあげながら目の前にあつたテーブルへ顔を伏せる。何やらかなり慌てているようであり、彼女の隣に座っていた由紀と美紀は心配そうな眼差しを向けた。

美紀「大丈夫ですか？」

由紀「どうしたの？具合悪いの？」

未奈「い、いや…その…」

未奈は額に冷や汗を浮かべ、由紀と美紀に苦い表情を見せ続ける…。また、そんな彼女と同じ様に冷や汗を浮かべ、苦い表情を見せている少女がもう一人いた。部屋に入ってきた柳の背後、そこに隠れるように身を小さくしている狭山真冬だ。

胡桃「真冬、顔色悪いぞ…」

真冬「…そんなことはない」

小声でボソツと答えた後、真冬は胡桃の横へそくさと移動する。どこか様子のおかしい真冬を見て胡桃達が首を傾げる中、誠は彼女の事をじくつと見つめていた。

誠「……………」

真冬「っ…!？」

誠「……………どっかで見た顔だな」

真冬「き、きつと気のせい…」

胡桃を盾にするかのようにして誠の視線から逃れ、真冬は冷や汗を流す…。直後、誠は彼のそばへと戻り、小さな声で呟いた。

誠「この前忍び込んで来た女の子、あの子だな…間違いない」

「…マジか」

誠「ああ、マジだ」

その後、彼は手招きして真冬の事を呼び、誠と三人で廊下へと出る。誠が言っている事に間違いは無いか…。もしそうなら、真冬は何が目的でここへとやって来たのか…それを本人の口から聞く為だ。廊下へ出て由紀達の目から離れた事により、真冬は正直にそれを話してくれた。

真冬「あの時ここに来たのは…由紀達を見つけ出すためだった…。少し前まで、ボク達と敵対していた如月さんきつきって人達がいたんだけど…その人達の隠れ家にこの屋敷の事や由紀達の情報があつて、それを手掛かりにやって来たの…」

誠「如月つてのは境野の仲間だな…前に宮野から聞いたよ。つまりお前はその如月つてヤツの隠れ家から得た情報でこの屋敷の事を知り、由紀達を探しにきた訳か…」

境野は弦次を脅して物資を得ていた人間であり、この屋敷の事もよく知っていた。そんな境野の仲間である以上、如月にこの屋敷の情報が伝わっていてもおかしくは無い。

誠「けどあの時俺を襲った理由や、由紀達を探していた理由は何だ？」

真冬「あの時のボクは少し危ない考え方をするヤツだったから…。だから話すよりも先にキミを黙らせて、早いところ由紀達を見付けようと思っていた…。由紀達を探していた訳は…その…」

「…まあ、その辺はまた今度でいいだろ。とりあえず今はそれなりにいい子になってるはずなんで、一つ許してやってはくれませんかね？」

真冬は元々、由紀達を見つけ出し、場合によっては殺す事すらも考えていたような子だ。しかし本人はあの時の事を深く反省しており、今は由紀達と共に前を向いて生きていきたいと心から願っている…。

彼が真冬の背をポンと叩くと、彼女はペコリと頭を下げた…。

真冬「ご…ごめんなさい…」

誠「…まあ、別に怪我した訳でもないから構わないけどな。けど、まだ気になる事があってよ…。お前、その如月ってヤツらの隠れ家に行つてよく無事だったな？敵対してたんだろ？」

真冬「それはその、如月さん達を全員…大人しくさせたから…」

誠「大人しくさせたって…どういう意味だ？」

真冬「え、えつと…」

真冬は慌てたようにバタバタと手を動かし、それから彼へ耳打ちをする…。真冬から何かを聞いた彼は苦笑し、彼女の代わりに返事を返した。

「とりあえず、もう如月って人達がこの辺に現れる事は無いかと…」

誠「…ちよつと待て、宮野を呼んでくる」

境野の事、如月の事…どちらも深くは知らない為、誠は元々その仲間だった宮野を呼ぶ事にした。誠に呼ばれて廊下へと現れた宮野は真冬から細かな話を聞くと、目を丸くして驚いた。

宮野「君が…如月さん達を？」

真冬「うん…。ボクと、あと二人の男の人とで、あの人達と戦った…」

宮野「それで、勝つたの…？あの時、如月さんは境野さんから人手を借りていたから、相当な人数だったはずだけど…」

真冬「うん…。手こずったけど全滅させた…」

その言葉を聞いた宮野と誠は無言のまま真冬の事を見つめた後、互いの顔を見合わせる。たった三人で如月達を倒したというのは信じられない話だが、真冬の顔は嘘をついているようなものではない…。また、それならそれで納得のいく事もあった。

宮野「じゃあ境野さんの仲間が…如月さんがここに攻めて来なかつ

たのは、君達と戦って負けたからなんだ…。そう言えば、この屋敷に来るのは今争っている人達を処分してからだって、如月さんが言つたなあ…」

誠「結局、処分されたのは自分達だった訳だ。にしても、それは良い報せしらせだな。これからは必要以上に警戒する必要もないって事だ。窓にくつついて外を見張るのもそろそろ飽きてきたとこだしな…」

宮野「そう…ですね。あの人達がもういないのならある程度は安心して暮らす事が出来そうです。まあ、油断し過ぎるのもどうかと思いませんけど…」

心配していた事が意外な形で片付き、誠はお気楽な笑みを浮かべてリビングへと戻る。彼や真冬、宮野もそれに続いてリビングに戻ると、ちょうど未奈と柳が話しているところだった。

柳「今までよく無事だったね。未奈くんは大人しくて弱々しい子だったから、こんな世界ではもうダメだろうなと思つていたよ」

未奈「は、はあ…そうですか…。私は…柳さんは今も生き延びてるんだらうなあと思つてましたよ…」

弦次「…そんなに凄い人なのか？」

未奈「どうか、この人が簡単に死んじやうとこがイメージ出来ないの…。かなり前、何度か家に来てた事や、逆に私達の方からも柳さんの家に行った事があったけど、その頃からこの人苦手…」

顔を伏せ、隣にいる弦次にしか聴こえぬよう小さな声で未奈は呟く。

未奈の両親と柳は知人関係にあり何度か顔を合わせる事があったものの、柳の冷たい目や雰囲気は昔から苦手だった…。

胡桃「そーいや、家を留守にして良かったのか？」

柳「ああ。穂村君と圭一君に留守を任せてきたし、あまり長居するつもりでもないしね」

胡桃と柳の会話を聞き、未奈はホッと一安心する。胡桃達は何時ま

でいてもらっても構わない、むしろずっと一緒にいたいくらいだが、柳にはあまり長居して欲しくなかった。

…が、その後。

皆で様々な雑談を交わしていく内、未奈は考えを改めていく。

記憶の中での柳は冷たい人、怖い人…そんなイメージがあつたのだが、こうして話しているとそんな事も無いような気がした。いや、今でもどこか冷たいような、怖い雰囲気は確かにある。けど、前ほど酷くないような…そんな気がした。

白雪「お姉さん、この前ここに来てましたよね？」

真冬「えっ…あ、うん…」

それぞれが雑談を交わす中、白雪は部屋の隅にいた真冬のそばへ寄るとその顔を見つめて尋ねる。あの時、誠と対峙していた真冬は白雪の顔を見るなりそれを止めたのだが…それには理由があつた。当時の真冬は他人の事などどうとも思わない冷酷な人間だったが、それも…白雪のような幼い子供だけは好きだった。

真冬「ボクは狭山真冬…。キミは？」

白雪「あつ、八島白雪です。真冬さんの事は由紀達から聞きました。普段は大人しくて静かだけど本当は優しくして…自分の事をボクっていう可愛い人だって♪」

真冬「う…うっ…」

チラツと顔を背けると、目線の先にはこちらを見つめてニコニコと微笑む由紀と美紀がいた。恐らく、白雪に色々と教えたのはあの二人だろう…。物心ついた頃から自分の事を“ボク”と言い続けてきた真冬だが、白雪のような子にそれを“可愛い”と言われると言い様の無い恥ずかしさに襲われた…。

真冬（これからは…一人称を“私”に変えていこうかな…）

思わずそんな事を考えてしまったが、これまで続けてきたものを今

さら変えるなんて多分無理だろう…。真冬は深くため息をつき、とり  
あえず…白雪の頭を撫でることにした。やはり、小さな子は好きだ  
…。

百二十九話 『ふあん』

柳「さて、ではそろそろ帰ることにしようかな…」

未奈の屋敷にある広間にて雑談を交わしていくこと三〇四時間…。

柳は窓の外がうつすらと暗くなっている事に気が付くと腰掛けていた椅子から立ち上がり、未奈へそう告げる。

未奈「あつ…もうお帰りですか？」

柳「ああ、あんまり長居しても悪いからね。それに、私の方は私の方で自分の家でやらなくてはならない事もある。まあ、また近い内にお邪魔させてもらうさ」

未奈「……そうですか」

悠里「じゃあ、私達も帰りましょうか。別々のタイミングで帰ると門の開け閉めが大変でしょうし」

柳が立ち上がると悠里も立ち上がり、帰る準備を始めていく。由紀や未奈、白雪はまだまだお互いに話したい事がありそうな様子だったが、ワガママを言つて相手を困らせるのも悪いと思つたのだろう…：どちらも大人しくそれを受け入れ、静かに席を立つ。

由紀「また来るからね」

未奈「ええ、何時だつてお待ちしてますよ♪」

由紀と未奈が別れの挨拶を交わしていく中、彼や美紀、胡桃や悠里達も弦次や誠、宮野や白雪達と挨拶を交わしていく。そんな中、柳が未奈のそばへと静かに歩み寄つていった。

柳「未奈くん、ちよつといいかな？」

未奈「はい？なんでしょうか…？」

柳「君さえ、君達さえ良ければだが…家へ来るかい？」

未奈「…えっ?」

柳の発言を聞いた未奈は目をまん丸にして驚き、思わず返事を返せなくなる…。そんな未奈の反応を見た柳は『ふふっ』と鼻で笑った後、更に言葉を放っていく。

柳「自分の家に人を招くのはあまり気乗りしないのだが、未奈くんとは顔見知りだしね。ここで声をかけないのも失礼だろう?どうかな…君達さえよければ全員を家に招待するが…」

未奈「…いえ、私は大丈夫です。確かに柳さんのお宅なら今以上の暮らしが出来るでしょうし、悠里ちゃん達とも一緒にいられる…。けど…それでも…」

未奈はほんの少しだけ言葉を詰まらせ、数秒間沈黙する…。

その後、彼女は広間内をクルツと見回していったと思うと、どこか弱々しくも見えるような微笑みを浮かべた。

未奈「それでも、ここが私の家だから…。お父さんやお母さんとの思い出のある、大切な場所だから…。だから、私はここに残ります。お誘い、ありがとうございます」

ペコリと丁寧なお辞儀を見せ、未奈は微笑む。

柳「…そうか」

未奈「…あっ!!でもゲン君やヒメちゃん達はそっちに行きたがるかもっ…!ちよっ…ちよっと待っててもらっていいですかっ!?!み、みんなの意見も聞かないとっ!!」

柳「ああ、構わないよ」

未奈はあたふたとした様子で広間を駆け回り、柳に持ち掛けられた話を自分の屋敷に住む全員へと告げていく。しかし皆今の生活で十分満足しているらしく、未奈がここに残りたいというのなら自分達もそれに付き合おうと言ってくれた。

未奈「えつと、みんなももうしばらくはここにいてくれるみたいで



す」

柳「そうか。まあ、それならそれで良いさ。これからは定期的に狭山君をここへ寄越すようにし、そちらにもある程度の物資を分けるようにしよう」

未奈「えっ?! い、いや、そこまでしてもらうのは悪いですよ…」

真冬「気にしないで良い…。ほんの散歩ついだから」

真冬は未奈の背後から小さく呟き、こちらへ振り向く彼女の驚いたような表情を見てニコツと微笑む。未奈はまだ遠慮しているかのようにはビクビクとしていたが、柳と真冬にそう言われては断る事も出来ずに小さく頷いた。

未奈「ほ、本当にたまにでいいよ? 家に来る途中に真冬ちゃんが怪我でもしちやったら大変だし…」

真冬「ボクの心配ならしなくていい…。こういう事、慣れてるから」  
未奈「…強いんだね。私も真冬ちゃん達くらい強い女の子になりたいなあ。そうすればゲン君やマコトさんの役にも立てるのに…」

真冬はもちろん、由紀達の行動力にも憧れていた未奈は落ち込んだように肩を落としてため息をつく…。自分も彼女らのように臆する事なく外に出ていけたらどれだけ皆の役に立てるだろうかとか、ついそんな事を考えてしまう。

柳「未奈くんはそんな事を気にしなくて良いと思うがね。人にはそれぞれ、得意不得意があるものだ。君にも何か…君にしか出来ない事があるんじゃないか?」

未奈「……………何も無いと思いますう。私なんてただの役立たずで、ボーツとしたままそこにいる事しか出来ない無能な存在としか…」

真冬「随分とネガティブな子…前からこんななの?」

柳「どうだったかな…確かに少し変わった子ではあったが…」

深いため息をつきながら辺りをトボトボと歩く未奈を眺め、柳は苦い笑みを浮かべる。未奈も色々と苦労しているようだが、何にせよ元

気なようで少し安心もした。由紀達は屋敷から庭へ出ると乗つてきた車の前に立ち、帰宅の準備をしていく。

悠里「じゃあ、また近い内に顔を見せに来ますね」

未奈「うんっ！それまで元気だね」

誠「お嬢ちゃんも元気だな」

真冬「う、うん……また来る」

未だ気まずそうに顔を俯げる真冬を見て誠はヘラヘラと笑い、彼女の頭を撫で回す。まるで親戚のおじさんか何かのようだ……。

弦次「お前も元気だな」

「ん、ああ……そっちも……」

宮野「……何か辛そうね？どこか具合悪いの？」

「いや、大丈夫……だと思っ」

彼は曖昧な返事を返すと微笑みを浮かべ、いち早くキャンピングカーへと乗り込んでいく。その足取りはどこかフラフラしているように見え、顔色も優れないように見えたが……。

白雪「……そう言えば、くるみ、あのお兄ちゃんとは何かあった？」

車に乗り込んでいく彼を見た白雪は手招きして胡桃を呼ぶと、周りには聞こえないような小さな声で囁く。当然、胡桃はその言葉に頬を赤く染めた。

胡桃「な、何かってなんだよ……。特になにも無いって……！」

白雪「へえ、そうなんだ」

胡桃が彼の事をどう思っているのか……。白雪は以前にそれを本人から教えられていた為、ニヤニヤとした表情で彼女の事を見る。この事は胡桃と白雪……二人だけの秘密であり、白雪はこれを未奈達にも教える事なく過ごしてきた。

白雪「早くしないとあのお兄ちゃん、他の人と付き合っちゃうかもよ」

胡桃「まあ…それならそれで良い。あたしから出来る事なんて、今は何にもないからな…」

白雪「今は…ってどういうこと？」

胡桃「……………ま、色々あんだよ。大人の事情ってのはフクザツなんだ。それよりもほら、そっちはどうなんだ。ミナとゲンジは今、付き合ったりしてるのか？」

白雪「う〜ん……………よくわかんない。あの二人、前から仲良しだから」  
胡桃「あ〜…それもそうだな」

二人は今も近い距離に立っており、時折楽しげな会話を交わしては微笑んでいる…。恋人関係にあるのかどうかは不明だが、少なくとも友人以上の関係であるのは間違いないのだろう。

胡桃はそんな未奈と弦次を見て少しだけ羨ましいと思いつつ、由紀達と共に車へと乗り込んで未奈の屋敷をあとにした…。柳も真冬と共に自身の持つ車へと乗り込み、彼女らのあとに続いていく。

美紀「みんな元気そうで良かったです」

由紀「そうだね。なんか安心したよ」

悠里「また遊びにでも行きましょう。私達が顔を見せれば未奈さん達も安心するでしょうから」

運転席から放たれた悠里の言葉を聞き、後部の座席についていた由紀達は頷く。しかし彼だけは座席前のテーブルに顔を伏せたままぐったりとしており、反応が鈍い…。

美紀「先輩？大丈夫ですか？」

「……………ああ…多分」

ゆつくりと上げられたその顔は微かに赤くなっており、息も絶え絶

えになっている。心配になった美紀はハツとした様子で彼の隣へと移動すると、その額に掌を当てて温度を確認した。

美紀「あつ…ちよつと熱いかも知れないですね」

胡桃「マジ？風邪か？」

「かも知れない…。とりあえず、美紀の手が冷たくて気持ちいい…。彼は微かに苦しそうだが、それでも額に当てられた美紀の手の感触を楽しんでいるかのように笑う。具合が悪いと言っても最低限の力は残っているらしい…。」

美紀「ニヤニヤ出来る余裕があるなら大丈夫そうですね…」

悠里「けど、帰ったらお菓飲んで休んでなきやだめよ。今は余裕があつても、ほうつておいたら酷くなつちやうかも知れないから」

「はいはい……」

再び机に突っ伏し、そのまま窓の外に流れる景色を眺める。

一行に乗せた車はすぐに柳の屋敷へと辿り着き、降りて早々に中へと入ると、広間で留守番していた穂村…そして圭一のそばに寄る。

悠里「あの、風邪薬とかってありますか？」

圭一「風邪薬？」

穂村「…つていうと、誰か風邪引いたんスか？」

悠里「ええ、彼がちよつとね…」

悠里が穂村達と話す中、彼は後方にあるソファアールへ座つてダルそうに顔を伏せていた。そばでは由紀や美紀が心配そうな表情をして付き添っている。

穂村「薬ねえ…どうだったかな。無いって事はないと思うけど、俺らはそういうのの場所把握してないんで…」

悠里「そう。じゃ、真冬さんか柳さんに聞けば良いかしら？」

穂村「そういう事つスね。ところで少年、本当に風邪なのか？実はどっかで嘔まれて感染した、とかじゃないか？」

息を乱しながら顔を伏せる彼を見て穂村がヘラヘラと言う。それはほんの冗談であり、穂村自身本気でそう思っている訳ではない。しかしその言葉を聞いた瞬間、由紀達の表情が苦い物に変わっていく。

美紀「バカ言わないで下さいっ！先輩はずっと私達と一緒にいたし、今日は」かれらと戦う事ありませんでした。感染するようなきっかけがありません！」

穂村「分かっているって、ほんの冗談だよ。何もそんな怖え顔しなくても…」

圭一「少しは考えてから物を言え。そこまで空気の読めていない冗談、俺だって言わないぞ…」

美紀の顔が思いの外不機嫌な物になってしまった為、さすがの穂村も少しだけ気まずそうに顔を逸らす。そうこうしている内に柳と真冬も広間へと現れ、悠里は二人に彼の事を話した。

柳「風邪薬か…。狭山くん、しまつてある場所は分かるかい？」

真冬「うん…持つてくるから少し待つてて」

柳「ああ、ゆつくりでいいよ。その間、私は念のために彼が本当に問題なさそうか検査をしておく」

美紀「けど、先輩は本当に嘔まれたりは——」

柳「分かっているとも。けれど感染や風邪とはまた別の病気にかかっている可能性もあるだろう？だから”念のため”だ。…さて、私の部屋まで歩けるかな？」

「ああ…そこまで弱つてはいないんでね」

彼は検査を受けるべく柳の部屋へ…。そして真冬は他の部屋にあるという風邪薬を取りに。それぞれが広間を出ていった…。きつとただの風邪だ…だから大丈夫だとは思うが、広間に残った由紀達は彼の事が少し心配になる。

しかしそれから十数分後、そんな心配は無用だったと知る事になる。柳が彼を連れて広間へと戻り『ただの風邪だ』と告げたからだ。

柳「ま、何にしてもゆっくりと休む事だね」

「んー、そうさせてもらいますかね…」

真冬「薬を渡しておくから、これを飲んで少し寝てるといい」

「ありがとう…。じゃあ少し寝てくる」

由紀「ゆっくり休むんだよ？ムリしちゃだめだよ？」

由紀が言うと彼はニヤツと微笑み、片手を振ってそれに応える。ただの風邪だと判明して安心はしたが、彼の体調はだんだんと悪くなっているようだ…。広間から出る際のふらふらとした足取りを見ていたら何だか心配になり、結局は悠里が彼を部屋まで送り届けていた。

胡桃「どうだった？」

悠里「薬を飲ませてからベッドへ横にさせたから、このまま休んでいればすぐに治る…と思うけど、どうかしらね」

彼を部屋へ送り届けた後、悠里は広間へ戻って席につく。

彼には出来るだけ早く元気になって欲しいものだが…。

美紀「…とりあえず、しばらくは安静にさせてあげましょうか」

悠里「そうね…。夕飯も部屋まで運んであげた方が良いかしら？」

少しでもゆっくりさせてあげた方が治りも早くなるかも知れない。今日のところは夕飯も部屋まで持って行ってあげよう…。そう決めて悠里が頷く中、穂村は何とも言えぬ表情を浮かべていた。

真冬「穂村、どうしたの？何時にも増してヘンな顔してるけど…」

穂村「いや…熱を出せばりーさんが部屋に来てくれるんだ。羨ましいなあ…と思つてさ。俺も風邪引きたいねえ…」

真冬「…バカじゃないの？」

圭「コイツがバカなのは分かりきっていた事だろう。今さら反応するな…。…そうだ、どっかの川にでも飛び込んでしばらく泳いできたらどうだ？濡れた体のまま外をブラブラしてりや風邪くらい引け

るかも知れないぜ？」

穂村「マジかつ!? よしっ! ちよつくら行つてくる!!」

穂村は瞳をキラキラと輝かせて広間をあとにし、そのまま外へと飛び出していく…。 ”かれら” という危険な存在がいるにも関わらず、風邪を引く為にと外へと飛び出すようなバカはあの男だけだろう…。

真冬「このまま帰って来なければ良いのに…」

圭一「同感だ。…が、残念ながらああいうヤツはしぶといと決まってるんだよな。夕飯までには生きて帰ってくるだろう…。 しかも、目当ての風邪すら引くことなくな…」

圭一の読み通り、穂村は夕飯の時間ギリギリになって屋敷へと戻ってきた。本当にどこかの川で泳いで来たらしく全身ずぶ濡れだったが、ただ一度のくしゃみやみすらしない程に元気なまま…。

穂村は『風邪を引けなかったからりーさんに夕飯を運んでもらえないっ!』と悔しがっていたが、実際のところ穂村のような男が風邪を引いたところで悠里はおろか、誰一人として夕飯を運んだりはしないだろう…。

百三十話 『げんきになあれ』

美紀「では、おやすみなさいです」

胡桃「ああ、おやすみ。また明日な」

少し遅めの夕飯を終えていくらかの時間が経ち、就寝の時間がやって来る。胡桃はそれぞれの部屋へと入る由紀、悠里、そして美紀を見送った後、自身も部屋へ戻ろうとしたが…

胡桃（あいつ、もう寝たかな…）

ふと、そんな事が気になって足が自然と彼の部屋の前へ向く。風邪を引いてしまった彼の夕飯を運ぶのも片付けるのも悠里がやってくれた為、彼が夕飯をしっかりと取ったのは分かっているがその後はどうなのか。大人しく眠れているだろうか…。

…ガチャツ

一度気になったらどうしようもなくなってしまう、胡桃は彼の部屋の扉を開く…。鍵は掛かっていなかったが、部屋の中は明かり一つ点いておらず薄暗い。胡桃は転んだりしないよう注意深く歩きながら部屋の奥…ベッドがある位置まで進んだ。

「…ああ…胡桃ちゃんか」

胡桃「なんだ、まだ起きてたのか…」

ベッドの横まで辿り着くと彼がその気配を感じて身を起こし、そばにあった小さな明かりを灯していく…。その明かりによって照らし出された人物が胡桃であると分かると、彼は不思議そうに小さく首を傾げてみせた。

「こんな時間にどうした？」

胡桃「しっかり眠れているか心配になって…少し寄ってみた」



近くにあつた椅子を手で引き寄せ、ベッドの真横に置いて腰かける。彼の顔は未だに気だるさが抜けていないようであり、呼吸も苦しうなままだ…。

「ご覧の通り、どうにも眠れなくてね。寝よう寝ようとは思ってるんだけど、頭が痛くて…」

胡桃「そっか、大変だな…」

寝ようにも寝れない…それは中々に辛い事だろう。

眠る事の出来ない彼をこのまま一人にしておくのも何か可哀想な気がする…。胡桃は仕方ないと言わんばかりにため息一つつくと、腰掛けていた椅子に背中を寄りかけた。

胡桃「じゃ、お前が眠るまでそばにいてやるよ」

「それはありがたいな…。けど、胡桃ちゃんだってもう眠いだろうし付き合わせちゃ悪い。気にしなくて良いから戻りなよ」

胡桃「あたしもまだ眠くない。だからそっちこそ気にすんな。ほら、どうして欲しい？子守唄でも歌ってやろうか？」

寝転ぶ彼を見つめてニヤニヤしながら冗談を言う…。すると彼もまたニヤニヤとした笑みを浮かべて寝返りを打ち、体ごと胡桃の方へ向いた。

「子守唄か…いいね。じゃあ頼む」

胡桃「えっ？マジっ？ほんの冗談だったんだけど…ま、いっか」

胡桃はスツと目を瞑り、小さく鼻歌を歌う…。本当は鼻歌ではなく、しっかりとした子守唄を歌ってあげるべきだったのかも知れないが、それは少しだけ恥ずかしかった。

「……………」

彼は目を瞑ったまま鼻歌を歌う胡桃の顔を見つめ、ニツコリと微笑む。普段は少しキツイ言動を取る彼女だが、こうして夜中に様子を見に来てくれたり…更には子守唄まで歌ってくれたり、本当は凄く優し

い子だ。彼は彼女の子守唄を聴きながら仰向けに寝転ぶと、掛け布団の中にしまっていた腕を外へと伸ばす。

胡桃「っ…？あっ…」

胡桃は鼻歌を中断し、閉じていた目を開く。ピトリと、謎の感触を足に感じたからだ…。目を開けてそれを確認するとベッドに横たわる彼の右手が膝へと触れ、そのまま太ももへ上がって来ているところだった。

胡桃「ん…っ」

彼は目を瞑ったまま右手を動かさず、ベッドの隣に椅子を置いて座っている胡桃の太ももを撫でる…。まるで何かを探しているかのよう。に這うその手の感触に胡桃は耳の先まで顔を赤らめたが、強い抵抗はせず、ただ優しくその手を握った…。

すると目を閉じていた彼は嬉しそうに微笑み、動かしていた右手の力を抜いていく。どうやら、彼女と手を繋ぐ事が目的だったらしい…。

胡桃「…甘えん坊め」

呆れたように…しかし優しく微笑みを浮かべ、彼の手を握り返す。こうして手を繋ぐなんて、普段なら恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になってしまいうだろうが、この時…胡桃の心は不思議なくらい落ち着いていた。

「手、冷たくて気持ちいいな…」

胡桃「ふふっ、そうだろそうだろ。今日のあたしは優しいからな、手ぐらいは握らせておいてやろう。だからほら、はやくお前も…」

『元気になあれ』

『元気になあれ』

胡桃は握っている彼の手をもう一方の手で撫でながら何度も囁き、

その体調が一刻も早く良くなるよう祈った。

「その言葉…胡桃ちゃんに言われるとは思ってなかったな」

胡桃「…だな。あたしも思ってたよ」

”かれら”のウイルスに感染している自分が、ただの風邪に倒れている彼へ向け『元気になれ』などと言うのは少し笑ってしまう。胡桃は彼に言葉を返してヘラヘラと笑うが、彼は笑ってくれなかった…。

胡桃「お互い、早く治るといいな…」

「…ああ、そうだね」

胡桃は顔を俯けると、また静かに鼻歌を歌う…。

彼が早く眠れるように出来るだけ穏やかな、心地よい鼻歌を歌おう…。

胡桃は目を瞑って静かに歌いながら彼の手を握り、いつしか自分自身が強い眠気を感じてしまっていた…。

## 百三十一話『あくむ』

胡桃「……………つく！」  
椅子に座ったままガクツ！と前のめりになった拍子に目が開き、自分がほんの少しだけ眠っていた事を知る。

胡桃（やば…どのくらい寝てたんだろ）  
部屋の奥にある窓の外へ視線を向けてみる…。  
窓の外はまだまだ真っ暗であり、夜が明けていない事が分かった。  
やはり、眠っていたのはほんの十数分程度だろう。

その後、胡桃は自身の手が未だに彼の手を握っていた事、そしてそんな彼がいつの間にかやらスヤスヤと寝息をたてている事に気付き、安堵の微笑みを浮かべた…。

胡桃「眠れたんだな…。ふふつ、あたしの子守唄のおかげか？」  
ニヤニヤと微笑みながら彼の手をベッドの上へ戻し、胡桃は椅子から立ち上がる。彼も大人しく眠りにつけた事だし、もう自分の部屋へ戻ろう…。そう思ったのだが…。

胡桃「……………」  
彼の寝顔を見ていたら様々な思いが浮かび、その身が自然とベッドの上に向かう…。気付いた時、胡桃は眠りについていてる彼の上に跨がるようにしてその寝顔をじっと見下ろしていた…。

そうしている内、少し前に彼が言ってくれた『もし世界が平和になつて、一緒にいる必要がなくなったとしても、僕は胡桃ちゃんのそばにいたい』という言葉を思い出す。

胡桃（あたしと……一緒に……）

彼は何故、こんな自分と一緒にいたいと言ってくれたのだろうか……。言動もキツくて、可愛いげなど全く無いこんな自分と一緒にいて楽しいのだろうか……。お世辞とかではなく、本心から一緒にいたいと思っ  
てくれているのだろうか……。

胡桃「あたしは……」

彼がそう思ってくれているとして、自分はどのようなだろう……。世界が平和になり、みんなと年がら年中一緒にいる必要が無くなったとして、それでも彼と共にいたいのだろうか……。その答えはすぐに出た。

胡桃「……いた……い……。ずっと……一緒にいいなあ……」

覆い被さるようにして体を傾け、眠っている彼の上に身を寄せる……。

もし世界が平和になっても……ならなくても……ずっと彼のそばにいたい。

ずっとそばにいて、誰よりも近いところで彼を”感じていたい”。

胡桃「ん……っ……」

そんな未来を掴む為にはどうしたら良いのだろう。

胡桃はボンヤリとし始めた脳でそれを考えつつ、眠る彼の頬に唇を寄せる……。上に跨がったままそっと身を寄せ、彼の頭に両手を添えながらその頬へ唇をつける。

胡桃「っ……あ……」

みんなと……彼と……これから一緒にいたい……。

そんな願望を叶えていくには、どうしたら良いのだろうか……。

胡桃「あ……あ……っ」

その唇を頬から離し、胡桃は彼の寝顔をすぐそばから見つめていく。

このままずっと彼のそばにいたい…。もう、一瞬だって離れたくない…。

そのために…自分は何を、どうしたら良いのだろう…。

胡桃（…ああ、わかった…）

一つの答を導き出し、胡桃はニヤリと笑う…。

しかし笑うと言っても微かに口角が上がっているだけで目は微塵も笑っておらず、暗闇の中で赤く光るだけ…。胡桃は鋭い八重歯がチラリと覗いている口を再び彼の顔へ寄せていくと…。

胡桃（こうしたら…いいんだ…）

彼の首筋に向けて大きく口を開き、そのまま躊躇ためらいなく噛み付いた…。それはただふぎけているだけとか、じやれるような甘噛みだとか、そんなものではない。全ての歯を容赦なく立てたまま顎に力を込めて深く噛み付き、彼の首に食らい付く…。

胡桃「あぐ…っ…んア…ッ…」

突然走った痛みには彼は目を覚まし、覆い被さっている胡桃の身を腕で押し退けようとする…。しかし胡桃は爪が食い込むほど強く彼の両肩を掴んで離そうとせず、ただ必死にその首筋を噛み続けた。ガブリと食らい付いたまま顔を横や上へと動かしてその肉を引っ張り、口に収まる大きさになるよう切り裂く…。

彼の肉が千切れるブチブチという音が耳へ響き、その首筋から吹き出た赤黒い液体がベッドに広がっていく…。彼は自分の首筋に食らい付いたまま離れない胡桃を見て悲しそうにしていたが、その一方で胡桃はとても満たされていた…。

胡桃（こう…すれば……よかったんだ…）

肌を濡らしている血液…口内に転がる肉片……そのどちらも彼の

モノだ。

そして自分はそんな彼のモノを口へと運び、念入りに咀嚼<sup>そしゃく</sup>しては飲み込んで胃に落としている…。つまり、自分は彼と一つになれているのだ…。

しかし、これではまだ足りない…。

もつと、もつと、もつと、もつと、もつとと…彼と一つになりたい…。

胡桃はその一心で口を動かし、彼の身に食らい付いていく…。

彼はもうピクピクとしか動かなくなっていたが、胡桃はちつとも気にしない。彼は今、少しずつ自分と一つになり、ずつと一緒にいられるようになったのだから…。

もう決して離れない…。

いつまでも…いつまでも…ずつと一緒だ…。

この時、胡桃はこれが自分にとっての幸せなのだ信じて疑わなかった。

どう考えてもおかしいのに…これこそが本当の幸せだと思えた…。

くくくくくくくくくくくくくくくく

胡桃「っ…うわあっツ!!?!」

反射的に大きな声をあげながら胡桃は辺りを…目の前にあるベッドの上に眠る彼を見る。ついさっきこの口で食らいついてしまったハズの彼は寝息を立てながら穏やかな顔で眠っており、その体に噛み傷も無ければシーツに血が広がったりもしていない…。どうやら、先程のは夢だったらしい。

胡桃「はあっ…!はあっ…!!」

酷い悪夢を見てしまった…。

彼の眠るベッドの横…そこに置いた椅子の上に座っている胡桃は

肩が上下するくらいに呼吸を乱しており、額には嫌な汗を浮かばせている。

胡桃は彼が無事な事を改めて確認すると握っていた手を静かに離し、大慌てで部屋をあとにする…。あんな夢を見てしまうなんて…。なんの躊躇いもなく彼に食らいついてしまうなんて…。

胡桃（くそ…くそっ！どう…なってるんだよ…）

彼の部屋を出てすぐ廊下の壁に寄りかかり、頭を抱えてうずくまる…。

自らの口で彼に食らいつく感覚…：血や肉の味…：最後に見た悲しげな顔…：それらはただの夢とは思えないくらい鮮明で、生々しいものだった。

もしかすると、あれは近い未来の自分の姿なのかも知れない…。

そう思うと一気に怖く…：そして悲しくなってしまう、胡桃はそのままズルズルと腰を下げて遂には両膝を抱えて丸くなる。そんな時、誰かが彼女の方へと寄ってきた。

穂村「おう、そんなとこで何やってんだ？」

胡桃「…：ああ、あんたか…」

ふと聞こえた声に顔を上げ、廊下の先に立っていた穂村に言葉を返す胡桃だが、その顔は穂村でも分かるくらいに真っ青だ。何かおかしいと思った穂村は眉をしかめてから彼女のそばへと歩み寄り、廊下の壁に背をつけたまま膝を抱えるその身を見下す。

穂村「やけに元気ないな…：ははっ、彼氏とケンカでもしたか？」

胡桃「…：…：…：…」

よく見ると、彼女の座っている場所の真横にある扉は彼の部屋へ続く物だ。それに気付いた穂村はニヤニヤした表情で冗談を言ってみたが、胡桃は大した反応を見せない…。彼女のことだ…：てつきり顔を真っ赤にして怒ってくると思っていたのだが、今はそんな元気すら無いらしい。



穂村「…あく、マジでどうした？」

予想外のリアクションをされた事により何だか気まづくなってしまい、穂村は人差し指で頬を掻きながら尋ねる。すると、胡桃は微かに上げていた顔を抱えていた両膝へと埋めた。

胡桃「あのさ……もしも柳さんが間に合わなくて、あたしが外の奴らみたくなったらさ……あんた、あたしを殺してくれるか？」

穂村「…はあ？」

両膝に埋められていく顔から放たれたその声は微かに震えており、泣くのを堪えているようにも思える。穂村の知る限り、胡桃は今日一日ずっと元気で明るかった。それが何故、今になってこんな事になっているのか……穂村は訳の分からぬまま首を傾げる。

穂村「何で俺が……。そういうのは他のヤツに……そうだな、あの少年にでも頼め」

胡桃「アイツにはもう、前から頼んでる……」

穂村「なら俺に頼む必要なんざ……」

胡桃「けど、多分アイツには無理だ……。最近になってようやく分かった……アイツさ、あたしが思ってたよりもずっと優しいヤツなんだよ。だから多分、アイツはあたしがあたしじゃ無くなっても殺せないような気がするんだ……」

もし殺せたとしても、彼はその事をずっと後悔しながら……自分を責めながら生きていく事になるだろう。だからからこそ、胡桃は深く悩む……。いなくなつてまで、彼に迷惑はかけたくないから……。

穂村「はあ………つてかさ、その言い方だとアイツはともかく、俺は優しく無い人間だつて言われてるように聞こえんだけど……」

胡桃「……ごめん」

穂村「そんな顔で謝られてもなあ……。まあ何にせよ、俺はお前を殺す気は無い。もちろん、奴らみたくなつたお前が直接俺に襲いかかっ

てきたら話は別だけど……そういうよっぽどの状況じゃない限りはあの少年か……もしくは美紀か、その辺に始末させる」

穂村は冷たく言い放ち、その場を離れようと背を向ける。しかし、まだ話は終わってない……。胡桃は慌てて立ち上がり、穂村に向けて口を開いた。

胡桃「みんなにはもう迷惑かけたくないんだよ……。今でさえ、毎日毎日余計な気を使わせちゃってるのに……。この上、死んでからも迷惑なんて……かけたくない……」

穂村「……それでも、いざって時は仲間の手でやってもらった方が良。お前だって、最期は俺にやられるより仲の良いヤツにやられる方が良いだろ？」

胡桃「そんなの……どうでもいいよ……」

とは言え、確かに最期の時は大切な友達の手で送ってもらいたいと心の隅で願っているのも事実だ……。が、それだとまた由紀達に苦労をかけてしまう。それだけは絶対に嫌だ。

胡桃「頼む……お願いだから……」

泣きそうな目で穂村を見つめて頼み込む……。が、穂村は未だにどこか能天気な表情をしているというか……真面目に話を聞いている気がしない。

穂村「あのねえ、俺だって別に意地悪で言ってるんじゃないぞ？」

胡桃「……………」

穂村「はいはい、じゃあもし仮にだ……。明日、お前が外の奴らと同じようになっちまったとしよう！それで由紀やあの少年が変わり果てたお前を見てショックを受けてる中、俺が横から割って入ってお前の事を殺したらどうなると思う？」

穂村は呆れたような表情をズイツと胡桃に寄せ、その答えを尋ねる。胡桃は少し顔を俯けてからその答えを考えてみたが、結局分から

ずに首を横に振った。

穂村「じゃあ正解発表！正解は……俺一人だけが由紀に美紀、狭山やあの少年、そしてりーさんからメチャクチャに恨まれて終わる……でした！」

胡桃「いや、そうはならないだろ……。みんなだって、全部分かってくれると——」

穂村「それが分からないんだよなあ……。いいか、人間ってのは……特別にお前らみたいなタイプの奴等はな、目の前で仲間が殺されたらこっちの都合なんてお構い無しにブチギレるんだよ……。どう見てももう助からない状況だった。殺してやるのが最善の手だった。いくらそう言ったって聞きやしない」

参ったように頭を抱えたかと思えば今度は深いため息をつき、穂村は胡桃の目を見つめる……。穂村の言い方だとそれはただの予想ではなく、過去に実体験があるかのような雰囲気だ。

穂村「まあ、それはさておきだ……。どうして急に『殺してくれ』なんて言い始めた？」

胡桃「その……夢を見たんだ……。……あたしが、アイツの事を襲う夢を……」

上げていた顔を静かに俯け、穂村にその夢の事を語っていく……。

あれはただの夢にしてはやけにリアルであり、彼の首筋に噛み付いた時の感触から血の味までハッキリと伝わってきた。なので、あれは普通の夢とはまた違うものかと思えて酷く不安だったのだが、その全てを話し終えた時、穂村は呆れた表情を浮かべていた……。

穂村「どうしたのかと思えば……ようするにただ怖い夢を見ちゃった……って事かよ？おいおい……もうガキじゃねえんだから、そんなの見たくらいでクヨクヨすんなって」

小さく鼻息を漏らし、穂村はまたヘラヘラと笑う……。

穂村からすると胡桃が見たのはよくある普通の悪夢であり、深く気にする必要は無いと思っているのだろう。

しかし、胡桃にはあの夢がもつと悪いものに思えて仕方ない…。彼女は俯けていた顔を勢い良くバツと上げると、鋭い目で穂村を睨む。

胡桃「ツ…！だからっ、ただの夢とは違うって言うてるだろ!!あれはもつと生々しくて…その時の感覚だってあたしはハッキリと——」

穂村「はいはい、じゃあその部屋開けてアイツの様子を見てきたらどうだ？それでもしアイツが首から血を流してくたばってたら、その時は思い切り悩め。けど、アイツが変わった様子なくスヤスヤ寝てるままだったらお前が見たのはただの夢だ。だからもう悩むのは止める」

胡桃「っ……」  
実際、彼は今も部屋の中でスヤスヤと眠っており、胡桃もその寝顔を確認している。なので胡桃が見たものはただの夢なのだろうが、どうにも不安が拭いきれない…。

胡桃「けど…あたしは……もう……」

穂村「……いいか、俺、狭山、そして圭一さんは奴らに噛まれて死にかけていた状態から復活して今も生きてる。俺らを助けたのは柳さんで、その柳さんがお前を治してやるって約束してんだ。お前は何も考えず、ヘラヘラ過ごしながら薬が出来るのを待ってれば良いんだよ」

胡桃「………」  
恐らく、穂村は穂村なりに胡桃を元気付けようとしているのだろう。

しかし、胡桃の表情は中々明るくならない…。

穂村「ったく、ただの夢一つでそこまでへこむかね…。いいか？ど

れだけリアルだろうと夢は夢だ！俺だって昨日、リーさんを部屋に入れてそのまま朝までご褒美タイム：つてな感じの夢を見たが、実際のところはどうか？俺はリーさんとイチヤイチャ出来てるか？」

胡桃「いや…全く…」

穂村「だろ？つまりそういう事だ。夢の中でどれだけ嫌な事があるうと、幸せな事があるうと、一度目ひとたびが覚めちまえば全部無しになる。現実とは全く関係ないんだよ」

胡桃「……………そう…かな」

穂村「当然だろ。…ほら、分かったら気持ち切り替えて現実を見ろ。お前はアイツを食ってなんかいいえし、今はまだ可愛い可愛い女の子のままだ。何なら鏡のある場所まで連れてってやろうか？」

胡桃「…あははっ…いや、大丈夫」

元気付けるかのような手付きで肩をバシツと叩かれ、胡桃の顔に笑みが戻る。この男…穂村の事はただの危ないヤツ、変態だと思っていたのだが、穂村が放つ言葉の一つ一つを聞いていると不思議と前向きな気分になれた。

胡桃「……………ありがとう、少し元気になれたよ」

穂村「ありがとう…ねえ…。狭山のヤツもそうやって礼が言えるくらい素直なヤツなら、少しは可愛げがあるのにな」

胡桃「ふふっ、そうかもな」

ペコリと小さく頭を下げ、穂村に感謝の気持ちを伝える。

胡桃はそのまま穂村の横を通り過ぎ、自分の部屋へ戻ろうとした。

穂村「狭山のヤツ、お前らの前だとどんな感じだ？」

胡桃「えっ？」

そこを去ろうとした途端に尋ねられ、胡桃はくるりと振り向く。

穂村は横の方に視線を逸らして落ち着きなく爪先を上下に揺らしており、少し気まずそうな雰囲気だ。

胡桃「どんなって……まあ、普通？」

穂村「いや、だからその普通ってのがどんなかって聞いてんだよ」

胡桃「つて言われても…普通は普通だ。普通に話して、普通に勉強して、普通に騒いで、普通に笑ってるよ」

最初の頃は少しばかり距離があつたが、由紀や美紀が積極的に話していったおかげで真冬も変わった…。朝になれば皆と一緒に朝食を食べるし、時間のある時は誰かの部屋に集まって何でもない話をしてりするし、勉強したりもする。

今の真冬は、みんなと仲良く普通の日々を過ごしている…。

胡桃がそう伝えると、穂村は小さく頷いた。

その表情はほんの少しだけ、ホッと安堵したようなものに見えた。

穂村「ああ…そっか…」

胡桃「…なんだよ、真冬の事が気になるのか？」

穂村「俺があこのペツタン娘の事を気にしてるって？ははっ、ご冗談を…。俺が気にしてるのは、リーさんのような巨乳美人さんの事だけだ」

穂村はヘラヘラと笑い、そのまま一人歩き出す。その背中を無言のまま見送ろうとも思ったが、胡桃には気になる事があつた。

胡桃「あんたさ、つい最近まで他の人を襲ったりして物資を奪ったりしてたんだよな？」

穂村「ふふん、今だつて当てがあればやってやるぞ。なんだ、何か欲しい物でもあるのか？」

胡桃「そうじゃなくて…その、あたしらへの対応を見てると…そこまで悪い人には見えないのになあと思つてさ」

最初に出会つた頃…いや、今でもその鋭い目付きやチャラチャラとした茶髪に少しばかり身構えてしまうが、さつきは悪夢を見て落ち込んでいた自分の事を元氣付けてくれた。もしかすると、そこまで悪いヤツでもないのかも知れない…。

穂村「お前らへの対応が甘いのは、お前らが狭山のお気に入りだからだよ。お前らに冷たくしたり、ましてや傷付けたりしたら狭山のヤツに殺されるからな」

胡桃「ああ：そういう事か」

穂村「ま、可愛い女の子が好きだから甘くしてる：つてのもあるけどな。リーさんは言わずもがな美人だし、美紀も悪くは無い：。由紀のヤツは少しガキっぽいが、まああれはあれで可愛いな：。それにお前も結構可愛いと思うぞ」

胡桃「なっ!?!気持ち悪いこと言うなよっ!」

ニツコリと微笑む穂村に『可愛い』と言われ、胡桃は半歩下がってから顔を青くする：。褒め言葉だと分かってはいるが、相手が穂村だと何故か素直に喜べない。

穂村「おいおい、何だよその顔は!?!同じことをアイツに言われたら真っ赤な顔してニヤニヤするクセに!!」

胡桃「に、ニヤニヤなんてっ：!」

胡桃は拳を固め、穂村を睨む。しかし穂村はその視線を全く気にせず、突如何かを思い出したかのようにハッとした表情を浮かべた。

穂村「そうだっ!胡桃、俺の部屋に良い栄養ドリンクがあつてだな：：：お前も毎日色々と考えて心身ともに疲れてるだろうし、少しお裾分けを：：：」

胡桃「栄養ドリンク?」

突拍子の無い発言を受け、胡桃は首を傾げる。

一方、穂村は言葉を途中まで放ったところでピタリと口を閉じ、軽いため息をついてから胡桃に背を向けて歩き出した。

穂村「：やつぱいいや。今のお前にアレをやるのはさすがの俺も少し気が引ける。また今度飲ませてやるよ」

胡桃「は：はあ：：：」

よく分からない事を言つてその場を立ち去る穂村を見送った後、胡

桃も自分の部屋へと戻る事にした。眠ったらまた妙な夢を見るのはと不安だったが、この日はあれ以上夢を見ることなく眠る事が出来た。



百三十二話『アノトキ』

穂村「……さてさて、仕事の催促でもしてやりますかね」

胡桃と別れた直後、穂村はそのまま階段を上り柳の部屋を目指した。胡桃が悪夢を見てしまう程に追い詰められていたと知ったので、ここは一つ柳に『早いところ薬を作れ』と応援の言葉……というより野次を飛ばそうと考えていたのだ。

穂村は鼻歌混じりに階段をスタスタと上り、そのままの勢いで柳の部屋の前に立つと、ノック一つせずにその扉を開けていく。

穂村「おつす、まだ起きて……んっ？」

柳「……なんだ、穂村君か。こんな時間にどうした？」

穂村「いや……そのお……」

扉を開けた後、穂村は不思議そうな目線を柳に向けたまま部屋の中へと入る……。何故不思議そうな目線を向けているのかというと、柳が部屋の奥にあるテーブルの上に置かれている無線機の前に立ち、マイクを握っていたように見えたから……。そして、こちらの存在に気付いた途端に慌ててそれを元の位置に戻した気がしたからだ。

穂村「……今、誰かと話してたのか？」

柳「いや？今は圭一君も狭山君も外に出てはいないしね」

念のため尋ねてみたが、やはり違ったらしい……。

この無線機は真冬が柳の為にと用意した物であり、穂村・真冬・圭一の三人……もしくはその内の誰かが外に出ている際の連絡手段として使う為の物なのだ。この無線機を使って連絡を取る相手が全員屋内敷内にいる今、誰かと会話していたという事はまず無いだろう。

となれば、柳は何をしていたのか……穂村はそれを尋ねようとしたが、聞くよりも先に本人がそれに答えた。

柳「メンテナンスをしていただけだよ。いざ連絡するっていう時に動かなかつたりしたら面倒だからね。正常に動作するかどうかのチェックを定期的にするように狭山君から言われていたんだ。ま、今日も問題は無かったがね」

穂村「ほう、そりや何より」

柳「：そんな事より、こんな時間に何か用かな？」

穂村「おおつ、そうだったそうだった……実はな……」

穂村は近場にあつた椅子を引つ張り、その上に腰掛けて胡桃の事を話していく……。ついさつき彼女と会つた際、様子がおかしかつた事……。その理由が悪夢にあつた事……。そしてその悪夢の内容……。穂村は全てを語り終えた後、ビシツと言ひ放つ。

穂村「あんた、自分の事を天才だの何だのつて言つてたろ？なら、とつと薬を作つて胡桃の事を治してやれよ。アイツ、結構参まつてきてるぞ」

柳「なるほど、彼を襲う夢を見たのか……。話を聞いた限りだと確かに相当参つているようだが、私だつて全力を尽くしているよ。ただ、今回の仕事は中々に大変だね。少しばかり時間がかかるのは仕方ない事だと思つてほしいな」

穂村「完成する前に胡桃が死んじまわなきやいいがな……」

そうなつてしまつたら何の意味もない……。

穂村は椅子の背もたれにグイツと寄りかかり、天井を見上げながら呟く。

その直後、穂村は目の前にいる柳が目を見開いてこちらをじつと見つめている事に気が付いた。

穂村「：なんだよ」

柳「いや、ただ少し気になつてね。仮に私が薬を作れなかつたとして、恵飛須沢君が助からなかつたとする……。そうなつたとして、君キミに不都合な事があるのか？今さっきの言い方だと、君は恵飛須沢に助かつて欲しいと思つているようだが……」

穂村「あ？逆に聞くけど、胡桃が死ぬ事に対して俺が不都合を感じていたらアンタに何か不都合な事でもあるのか？」

柳「いや、何も無いよ。しかし面白いな……狭山君だけじゃなく、君まで変わってきたか……。彼女らは思っていた以上に影響力のある子達だな」

由紀達と出会い、真冬は大きく変わった。しかしそれは何も真冬に限った事では無く、この穂村も変わり始めているのかも知れない……。柳がニヤニヤと微笑みながら興味深そうな視線を向けると、穂村は小さく鼻で笑う。

穂村「はっ…別に俺は変わってねえよ。元々こういう人間だからな」

柳「そうかい？私の知っている君は他人に対してもっと冷たいというか…乱暴というか……そういったイメージがあったんだけどね」

少なくとも、他人の心配をするようなタイプだとは思わなかった…。

だからこそ先程、胡桃の為に早く薬を作るようにと言ってきたのは柳もかなり驚いたのだが……

穂村「まあ他人に対してはな……。気に入らないヤツが相手なら遠慮なく殺らせてもらうし、物資だつて奪う。けど、アイツらは今や狭山の友達であつて全くの他人って訳でもねえし…それに俺は可愛い女の子には甘いんだよ。しっかり覚えておいてくれ」

柳「ははっ…ああ、覚えておくよ」

そう言えば、穂村には少々女好きな面があつた。

柳がそれを思い出して小さく笑うと穂村は椅子から立ち上がり、そのまま柳の部屋をあとにしていった…。

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

翌朝……。

由紀「はあっ…はあっ…うゝ、ちよつと休憩…」

由紀は悠里達と共に運動として屋敷の庭を走っていたが、塀の内側を沿うようにして二週ばかりしたところで日陰にしゃがみ込む。勉強だけでなくしつかりと運動もしなくてはならないという事で今日は走り込みをしていたのだが、柳の屋敷は庭すらも広く、由紀の体力では塀の内側を沿うようにして二〜三週走るのが限界だった。しかも今日はよく晴れており、陽射しが暑くて体力の消耗が余計に速い。

胡桃「なんだよ由紀、もうダウンか？」

庭にあった木の下で休んでいると、後ろから走ってきた胡桃がこちらへと寄って声をかける。見た感じ、彼女はまだ余裕のある感じだ。

由紀「もう疲れたよお…。胡桃ちゃんは本当に体力あるねえ…」

胡桃「あたしは普段からしつかりと鍛えてるからな。けどほら、見てみるよ。美紀と真冬だつてかなり頑張ってるぞ」

胡桃は由紀の隣に腰を下ろし、一息つきながら前の方を指差す。

そこでは体操服に身を包んだ美紀と、動きやすそうな服に着替えた真冬が並んで走っていた。二人は由紀よりも更にもう二週は走っているハズだが、休憩する気配は無い。

由紀「二人とも体力あるんだね、若いって良いなあ…」

ただ一つ学年が違うだけで由紀は大袈裟な事を言い、深くため息をつく。ちようどその時、木陰で休む由紀と胡桃の前を悠里が通った。

悠里「はあっ…！はあっ…！」

彼女は胡桃や美紀、真冬とは違ってかなり体力を失っているようであり、ふらふらとした足取りで走っている。…いや、走っているというよりはもう早歩きに近い。顔は真っ赤に染まって汗が溢れ出ており、息も激しく乱れていた。彼女も由紀と同様、あまり運動は得意な方じゃないらしい。

由紀「りーさくん、がんばれ〜」

胡桃「人の事ばかり言ってるで、お前もがんばれよ」

由紀「うっ…：…わかってるよ〜」

胡桃は由紀の額を小突いてから立ち上がり、再び走り出そうとする。

しかし彼女はそのままグラツと姿勢を崩し、地面に膝をついた。

胡桃「おっ…とつと…」

由紀「わっ!?!だ、大丈夫?ケガとかしてないっ?」

胡桃「大丈夫大丈夫。ちよつと足がもつれただけだからさ」

由紀が心配そうに尋ねると胡桃はニツコリと微笑み、膝についた土を手で払ってから再び立ち上がる。そう言えば、胡桃は既に美紀や真冬以上の距離を走っていた。あれだけ走ったのならもう満足して終わりにしても良さそうなものだが、まだ走り続けようとしているのは流石さすがとしか言えない。

由紀「あんまり無理しちゃだめだよ?」

胡桃「分かってる。あと二〜三周したらやめにするよ。ふふっ、由紀はあと四周くらい走らないとな?」

由紀「そ、それはさすがに無理だよ…」

しかし、ある程度の体力を付けた方が良いのも事実…。

由紀は胡桃がそこを離れてから数分休んだ後にゆっくりと立ち上がり、庭の中をもう二週だけ走った。

由紀「ううっ…：…く、くるし〜…」

悠里「お疲れ様、よくがんばったわね」

一同は走るのを止め、木陰の下に集まり休憩する…。

悠里は額に汗を浮かべながら息を整えている由紀の頭を優しく撫でたが、彼女自身もまた汗を流し息を乱していた。

そして美紀もまたある程度の疲れを感じているようであり、然程息さほどを乱していないのは胡桃と真冬くらいだ。

由紀「胡桃ちゃんはともかく、真冬ちゃんも体力あるんだね…。わたしよりも多く走ったのに、全然疲れてなさそう…」

真冬「ああ、ボクの体は柳さんの薬で強化されてるから、あのくらいじゃ疲れないかな…」

由紀「薬で強くなったの？…：…なんかカッコいいね！ヒーローみたい」

”ヒーローみたい”…：…そう言われると聞こえが良いなと思い、真冬はそつと微笑む。一時期、柳の薬によって変化した自分は”人”でも”かれら”でも無い化け物のような存在なのではと思う事もあったが、由紀の言葉を聞いて考え方が少し変わった。

真冬「…由紀は面白いね」

由紀「えへへ…」

照れたように笑う由紀を見て、その場にいた全員が笑い出す。

悠里にとって、胡桃にとって、美紀にとって、そして彼にとって…由紀は太陽のような存在なのだろう。こんな世界においても明るい心を忘れずにいさせてくれる、とても眩しい太陽のような…

真冬「そう言えば、彼の調子はどうだった？」

悠里「うーん…：昨日より元気そうではあったけど、まだ安静にしていた方が良さそうね」

由紀「はやく治ると良いね」

今もしつかりと休んでいるだろうか…。

由紀は庭の木陰から上を見つめ、彼のいる部屋の辺りへ視線を向ける。

ただの風邪ならそこまでの心配はいらないと思うが、彼がいなくて何となく退屈を感じてしまう部分がある。

美紀「もう少ししたらお昼ですし、昼食を届けるついでに様子を見に行きますか？」

由紀「あつ、そうだね。みんなで行こうっ！」

悠里「それだとちよつと騒がしくなつちやうかも知れないから、お昼は私と由紀ちゃんで…。夜は胡桃と美紀さんが行くつて事にしない？」

悠里が提案し、皆がそれを受け入れる。

その後、悠里は真冬の事を見つめてから更にもう一つ提案した。

悠里「でね、もしよかつたらなんだけど…今日の夜は女の子達だけで私の部屋に集まってお話でもしない？私達がこれまでどんな暮らしをしてきたのか狭山さんには知ってもらいたいし、私達も狭山さんの事を知りたいから…」

真冬「えっ…？うん…：別にいいよ」

由紀「はっ!?それって女子会つてヤツ!!？」

悠里の提案を聞き、由紀の瞳がキラキラと輝き出す。

普段から子供っぽい彼女だが、そういうのには興味があるらしい。

由紀「じゃああれだねっ！お菓子とか持つてかないと!!」

胡桃「お菓子はともかく、互いの事をより深く知るのには良いかもな」

美紀「ですね。では今日の夜…夕食の後にしますか」

由紀「うんっ！」

相当期待しているのか、由紀の目が更に輝きを増す。

そして時は過ぎ、夜が訪れ、一同は約束通り悠里の部屋へと集う…。

いや、約一名…：まだ来ていないものがいた。

美紀「あれ、由紀先輩はまだですか？」

この集いを最も楽しみにしていた由紀がまだ来ていないとは、何かあったのだろうか…。美紀はほんの少し不安になるが、後に真冬が

言った言葉を聞いてその不安はあっさり消し飛ぶ。

真冬「由紀ならキッチンだよ。お菓子を取りに行ってるみたい」

美紀「ああ：そう：」

少しでも心配して損をした：。

美紀は『はあっ』とため息をつき、室内に敷かれていた絨毯じゅうたんの上に座る。

悠里「じゃあその：由紀ちゃんが来るまでの間に話しちゃうわね。私達がこれまで、どうやってこの世界を生き延びてきたのか：」

悠里はベッドの上に腰掛けながら真冬の方を向き、静かに口を開く：。

あまり明るい話では無い為、由紀がいないのは都合が良い。もつとも、今の由紀なら変に心配しなくても大丈夫だとは思おうが：。

世界が一変した時の事：。

巡ヶ丘学院高校で過ごした時の事：。

美紀と出会った時の事：。

めぐねえと呼ばれていた先生や、太郎丸という犬の事：。

学校を出て、彼と出会った時の事：。

悠里はそれらを簡潔にまとめて真冬へと語り、そつと息をついた。

悠里「と、こんな感じね：。何か言い忘れた事はあったかしら？」

胡桃「いや、上手くまとめられてたよ：お疲れさん」

全てを語り終えた後、悠里も胡桃も美紀もどこか重苦しい表情になる：。

それだけ大変な事、辛い事があったのだろう。

真冬は悠里の語りや皆の表情からそれを知り、顔を俯ける。

彼女達と出会った当初はその笑顔や雰囲気の前に”なんの苦労も知らなそうな娘達だ”と思って苛立ちもしたが、そうでは無かった：。



真冬「やっぱり、みんなも大変だったんだね……」

悠里「ええ、本当に大変な事ばかりだったわ……。けど、私達はそれでも毎日を出来るだけ前向きに……明るく生きていこうと努力し続けているの。そうでもしないと、不安や恐怖に押し潰されてしまいそうになるから……」

真冬「……うん、悠里の……みんなの事はよく分かった。辛い事があってもそれに負けることなく明るく、元気に生きていく努力をし続けてきたっていうのは凄い事だと思う……。ボクには……出来なかった事だから」

自分はただ目的も無く街中を駆け回り、”かれら”や生存者を相手に力を振るう事ばかりしてきた。それらの相手に対して八つ当たりのようにぶつかっている時だけは嫌な事を全て忘れられたから、柳に助けられてからはずっとそうしてきたのだ……。

美紀「私達だって、だいぶギリギリでしたよね」

胡桃「そうだな。多分、由紀がいなかったらこんな明るくいられなかった」

悠里「ええ、由紀ちゃんの写真には助けられてばかりね」

この三人だけじゃない……。きっと彼も由紀の笑顔に元気を貰ってきたはずだ。彼女の笑顔や雰囲気には周りを明るくするだけの力がある。出会ってまだ数日しか経っていないが、真冬もそれを感じていた。

……と、皆がそのような由紀の事を話題にしていた時、部屋の扉が開いて本人が現れる。彼女は両手にお菓子を抱え、満面の笑みを浮かべながら悠里達のそばへと歩み寄った。

由紀「えへへ♪お菓子たくさん持ってきちゃった♪」

胡桃「また随分な量を持ってきたな……。それ、真冬達が集めたヤツだろ。少しは遠慮しろよ」

真冬「ううん、ボクが由紀に遠慮しないで好きだけ取ってきて良いよって言ったの。集めたは良いけど柳さんも圭一さんもお菓子と

か食べないし、ボクもそんなに沢山は食べないから…」

そのスナック菓子やらチョコレート菓子やらは真冬達が外から持ってきた物だが、バクバクと食べる人間がいないので増える一方だった。このままだといつまでも放置し続けてしまい無駄になってしまう可能性もあったので、由紀が食べてくれるというのなら好都合でもある。

由紀「で、どんなお話しよつか？」

キラキラと輝くその瞳を見るだけで、由紀が明るく楽しい会話を期待しているのが分かる。なので真冬は申し訳なさそうに苦笑いして由紀の方を見た。これからするの話は、彼女が期待しているような明るいものではないから…。

真冬「ごめんね。今から話すのはボクがみんなと会う前の話だから、由紀は少し退屈になっちゃうかも…」

由紀「あつ、そつか、お互いの事を話すって言ってたもんね。ううん、全然退屈じゃないよ！わたしも真冬ちゃんがどんなふうに頑張ってきたのか知りたいもん」

真冬「…………あの、少し暗い話になったりもしちゃうけど、大丈夫？」

真冬は悠里の方を見て、不安そうな表情で問う。

これからする話の中にはいくらか暗い場面もある為、由紀がいる中でそれを話しても大丈夫なのかと心配になったのだが…

悠里「ええ、大丈夫よ」

今の由紀なら大丈夫だろう…。

悠里はそう信じてゆっくりと頷いたが、彼女にも心配な事があった。

悠里「それより、狭山さんは平気？話し合いを提案しておいてこんな事を言うのもアレなんだけど、思い出したりして辛くなっちゃうよ

うな事があるなら無理に話さなくても良いのよ？」

”真冬の通ってきた道は穂村、圭一とは比べ物にならないくらいに残酷なものだった……”

以前、真冬について細かな事を聞こうとした際に柳がこう言っていた事を思い出す……。だから悠里は最後の最後で確認したのだが、真冬はニツコリと笑っていた。

真冬「大丈夫……。みんなには、ボクがどうやって生きてきたのか知っておいてもらいたいから」

悠里、由紀、美紀、そして胡桃を順に見つめ、真冬はそつと息を吐く……。

もうあの時の事を誰かに話す事なんて絶対に無いと思っていたが、由紀達には話しておきたい……。全てを知ってもらった上で、改めて友達になってもらいたい……。

真冬「あの日の事は今でもしつかり覚えてる……。良く晴れた日で、ボクはその日：友達の子と一緒に帰ったんだ……」

だから真冬は前を向き、彼女らに向けて語り出す……。

自分がどうやって生きてきたのか……。

そして、”あの娘”がどんな人間だったのか……。

真冬「女の子の名前は紗<sup>す</sup>巴<sup>は</sup>果<sup>か</sup>夏<sup>な</sup>。人付き合いが苦手だったボクの唯一の友達で、とても明るい、太陽のような娘だった……」

## 百三十三話 『ハジマリ』

『女の子の名前は紗巴果夏。人付き合いが苦手だったボクの唯一の友達で、とても明るい、太陽のような娘だった……』

真冬はそつと瞳を閉じ、あの時の事を思い返す……。

自分が由紀達と……いや、それどころか柳達とすら出会う前、まだ当たり前だと思っていた日常を送っていた時の事を……。無愛想で可愛いげの無い自分の事を親友として大事にしてくれた、一人の女の子の事を……。

~~~~~

あの日、真冬は通っていた学校から家へと帰る途中だった。

最初は一人で帰る予定だったのだが、とある女の子に声をかけられて結局一緒に帰る事となった……。学校から外へと出ると空が良く晴れているのが分かり、真冬はその太陽の眩しさに目を細める。

真冬「……今日、天気が良いね」

ポツリと呟くと隣にいた少女は空を見上げ、ニコリと微笑む。

少女は降り注ぐ陽射しを全身に浴びるかのようにして楽しげにクルクルと回り、真つ白いシユシユで縛りあげている茶色のポニーテールを揺らながら笑っていた。

真冬「……カナ、あまりふざけてると転ぶよ」

果夏「えへへ♪ごめんごめんっ。ほら、最近は予定が合わなくて一緒に帰れなかったでしょ？けど今日は大好きな真冬ちゃんとうしぶりに下校出来て、しかもこんなに天気が良いんだもんっ！そりゃあテンションも上がっちゃうよ〜」

その少女……紗巴果夏は真冬の前に歩み寄り、子供のような穢れの無

い笑みを浮かべる。綺麗な茶色をした髪の毛とポニーテールが印象的な彼女は真冬にとつて唯一の友人だったが、人付き合いが苦手な暗い性格の真冬とは違い彼女は底無しに明るく前向きな性格の持ち主であり、真冬以外にも大勢の友人がいた。

クラスメートは勿論、他のクラスや先輩、後輩にすら多くの友人を持つている果夏だが、そんな彼女が一番大切に思っているのはどうも真冬らしい…。彼女は隙あらば真冬のそばへと寄って人目も気にせず抱き付いたりして、それを真冬本人に呆れた顔で拒絶されるのが日常の風景だった…。

果夏「ねえねえ、今日はこのままどっかに寄らない？せつかく学校が早く終わったんだし、それに天気も良いし…少しデートしようよ」

真冬「えく…ボク、今日は真つ直ぐ家に帰って休みたかったんだけど…」

めんどくさそうに答えると果夏の瞳がうるうるると潤み、今にも泣き出しそうな顔をする…。辺りにはまだ他の生徒の姿も多くあるため、ここで果夏に泣かれたら注目的になってしまうだろう…。

真冬「…：…そうだね、せつかくだしどこかで遊んでいこうか」

果夏「っ…!!うんっ♪」

果夏は瞳に溢れてきていた涙を一瞬にして引っ込ませ、またニヤニヤと微笑む。いつもそうだ…。彼女はそれまでにどれだけ泣きそうな顔をしていても、はたまた泣いていても、直後に嬉しい事があるとすぐ笑顔になる。

”ほんと、子供みたい…”

真冬は笑顔の果夏を見てそんな事を思い、小さなため息を放つ…。こんなにも騒がしい子と一緒にいるのはとても疲れるが、不思議と悪い気はしない。真冬自身、普段からめんどくさそうに接してはいるが、果夏の事だけは気に入っていた。

果夏「えへへ、今日は良いことありそうだなあ〜♪」

真冬が誘いに付き合ってくれたからなのか、はたまた天気が良いからなのか、果夏はいつも以上に上機嫌な様子でいる。鼻歌混じりにルンロンと歩く果夏…。そんな彼女の横顔を見つめ、真冬は静かに微笑んだ。

……今でも思う。この日、果夏の言う通り”良いこと”があったらどれだけ良かっただろうと。いや、別に”良いこと”なんて無くてもいい…。ただ、この何でもない日常さえ続いてくれれば…それだけでよかつたんだ…。

~~~~~

果夏「で、どこ遊びに行くっ?」

真冬「……お任せで良いよ」

街の中を歩きつつ、果夏に向け適当な返事を返す。

果夏への対応はいつもこんな感じだが、今の返事が適当なものになったのにはちゃんとした理由があった…。

果夏「…どしたの? やたらキョロキョロしてるけど」

真冬「さっきから、よく救急車が通るね…。今のもう四台目だよ」  
そばの車道を走っていくその救急車はサイレンをけたたましく響かせており、そのまま街の奥へと消えていく…。一台や二台見掛けたくらいでは特に気にもしないが、この短い間に四台も見たとなれば少し不安になる。

真冬「…何かあったのかな」

街の中で大きな事件でもあったのだろうか…。

真冬はその場に足を止め、果夏の方を向く。すると今度はパトカーがサイレンを鳴らしながら二人の横を勢い良く通り過ぎていき、街の奥へ消えていった。

果夏「あはは……今日はやっぱり帰ろっか？何か怖いし……」  
流石の果夏も嫌な予感を感じたらしく、その表情が曇っていく……。せつかくここまで来ておいて引き返すのも惜しいが、それが妥当な判断だろう。

真冬「……また次のお休みの日、二人で遊びに来ようか？」

果夏「えっ！いいのっ!?やった〜♪」

曇りかけていた表情を一気に笑顔に変え、果夏は道の上で跳ねまわる。

こんなにも無愛想な自分と共に出掛けられるのがそんなにも嬉しい事なのだろうか……。真冬は満面の笑みを浮かべる果夏を連れ、来た道を引き返していく。

そうして振り返った直後、真冬の肩に”ドンツ”と衝撃が走る……。すぐ後ろに立っていたスーツ姿の男性に気が付かず、肩をぶつけてしまったようだ。

真冬「あっ……すいません」

反射的にペコツと頭を下げるが、相手の男性は何も言わずそこに立ち尽くしている。自分なりにしつかりと謝ったのに、それが雑なものだと思われたのだろうか……。というか、広い歩道の上でこんな女の背後にわざわざびったりと付いていたそっちにも非があると思う。

真冬は下を向いたままの状態で少しだけ眉をしかめ、不機嫌そうな顔をした。すると突如、その男は真冬の肩をガシツと掴み……

「ア……アアアツ……！」

真冬「な……っ……!!?」

そのまま大口を開け、真冬の肩に頭を寄せていく。

その時初めて気付いたのだが、男は明らかに普通ではない顔色をしており、だらしなく唾液を垂らしているその口からはまるで獣のような呻き声を発していた。

果夏「ちよっ…！おじさんっ！何してんのっ!!」

その口が真冬の肩に触れかけた時、果夏が持っていたカバンを勢い良く振って男の頭を打つ。教科書やら何やらがパンパンに詰められたカバンをまともに受けた男は”バシッ!”という音と共に後方へ退け反って数歩後退し、真冬から手を離れた。

果夏「真冬ちゃんっ、大丈夫!？」

真冬「う、うん…：ボクは平気…だけど」

それより、相手の男が気になる…。

咄嗟に助けてくれた果夏には感謝しているが、あれだけ勢い良く振られたカバンを頭へ受けてしまつてあの男は大丈夫なのだろうか。

「ツア…：ア…アアッ…：…」

果夏「ご、ごめんなさいっ！つい本気で殴っちゃった…。けどっ、真冬ちゃんに手を出そうとしたおじさんも悪いんだよ!？」

「グア…アアアッ…：…」

果夏があれこれ言うが、男はそれを無視するかのように呻き声をあげながらヨロヨロとした足取りでこちらへと寄る…。異常に青ざめている顔色もそうだが、この呻き声…：…明らかに普通ではない。そばにいる果夏もすぐにそれを感じ取った。

果夏「ま、真冬ちゃん…：。私の中にある”真冬ちゃんレーダー”がここにいちやいけないうって言ってる気がするの…：。このままここにいと、真冬ちゃんが危ない目に遭うって…：そう言っている気がする」

真冬「…：そうだね」

果夏の言う”真冬ちゃんレーダー”が何なのか分からないし知りたくもないが、この男から嫌な雰囲気か漂っているのは事実だ。だから真冬は果夏の肩を叩いて合図を出し、そのまま二人同時に素早く駆けっていく…。あの男から離れるべく全力で走り、いくらかの距離を駆



けた時だった。

真冬「……嘘っ!？」

果夏「何…これ…?」

思わず足を止め、その場に立ち尽くす…。

二人して向けた視線の先では先程の男とはまた別の男がそばにいた男性を襲い、地面に押し倒していた…。しかも襲いかかっている方の男はその人物の首を噛み、そして肩を噛み、まるで食事中かのようにモグモグと咀嚼そじやくし始める…。押し倒された男性は噛まれた箇所から血を吹き出しながらピクピクと震えており、果夏も…そして真冬も顔を青く染めた。

果夏「た、助けないとっ!!」

真冬「待つて…!」

少ししてから果夏がハツとした表情をして動き出そうとしたが、真冬はその肩を掴んで動きを止めさせる様子を見るに襲われているあの人物を救うのはもう難しそうだし、下手に動けば果夏の身が危ないからだ。

果夏「けどっ!早く助けてあげないと…!!」

真冬「どうせもう助からないっ!!それより、ボク達も逃げ——」

言いながら辺りを見回し、そして恐ろしい事を知る…。

よく見ると、遠くの方でもまた別の誰かが誰かを襲っていた。あつちでも…そつちでも…：…年齢、性別に関係無く、多くの人が正気を失ったようになって人々を襲っている…。

真冬「どう…なってるの…」

つい一時間前まではいつもの日常だったのに…今、目の前に広がっている光景はまるで地獄のようであり、この目で見ていてもこれが現実なのだと思えない…認められない。きつとこれは夢だ…趣味の悪い夢だ。

真冬は戸惑う自分自身に向けて心の中で何度も必死にそう言い聞かせたが、そんなのは虚しいだけだとすぐに悟った。

果夏「っ…!!真冬ちゃん、こっち来てっ!!」

真冬「く…っ…」

半ば放心状態で立ち尽くしていると”普通ではない人間達”に辺りを囲まれ、果夏は大慌てで駆け出す。彼女は真冬の手を掴んだまま駆け出すと、その人間達の間を上手くすり抜けてそばにあった建物の中へと入り、細長い廊下の先にあった複数の扉の内の一つへ手をかける。

果夏「あ、開かないっ…!!まったくもうっ!!!」

最初に手をかけた扉には鍵がかかっており、手をかけたドアノブは”ガチャガチャ”と耳障りな音を響かせるだけ…。こうしている間にもあの連中がノロノロと迫って来ており、果夏はまた別のドアノブに手をかけた。

果夏「早くっ…早くっ!!どこでも良いからっ!!!」

二つ目の扉…三つ目の扉も鍵がかかっており、ドアノブをいくら回しても開きはしない。果夏の瞳にじわりと涙が浮かび始め、ドアノブを回す手と声が震えているのがハッキリと分かった…。

果夏「大丈夫、大丈夫っ…!絶対に大丈夫っ…!!」

自分に言い聞かせているのか、それとも真冬に言い聞かせているのか、果夏はその言葉を呪文のように繰り返しながら四つ目の扉に手をかける。ここもダメだったらもう後が無い…。必死の願いを込めてそのドアノブを回すと扉はゆっくりと開き、果夏は真冬を連れてその部屋の中へと素早く入っていった。

果夏「…っ!よしっ!!!」

入ってからすぐに鍵をかけ、念のためにそばにあったやたらと重い

段ボールを扉の前に置く……。こんな物がバリケードになってくれるかどうか分からないが、少しでも動いて不安を減らしたかったのだから。

果夏は段ボールをいくつか積み重ねるように置いてから真冬を連れ、その部屋の隅で身を寄せ合う……。すぐ外にあの連中がいるのだから……。鍵を閉めたその扉は外からバシバシと叩かれ、不安を煽るような音を響かせながら何度も振動した。

果夏「大丈夫だよ……。私がいるから……。そばにいるからっ……」

真冬「……………うん」

外から扉を叩く”バシッ！バシッ！”という音が鳴る度、真冬の肩がビクビクと震える……。表情には出ていないが、きつと恐怖を感じているのだろう。そんな恐怖が少しでも和らぐよう、果夏は真冬の事を強く抱き締め、何度も何度も呟いた……。

『大丈夫だよ……大丈夫だよ……』

何回も、何十回も呟き、真冬を安心させてあげようとする。

呟いた回数が百に届きかけた時には連中の気配も消えており、扉が叩かれる事もなくなっていた。どうやら連中は諦め、別の所へ向かったらしい。

果夏「どこか行ったのかな……」

真冬「そうみたい……だね」

落ち着いてきたので辺りを見回し、この部屋がどういう場所なのかを確認する。咄嗟に入ったのでこの建物自体が何なのかは分からなかったが、二人が飛び込んだこの部屋は恐らく資料室か何かだろう……。辺りには幾つもの棚があり、そこにはファイル詰めされた紙等が色々としまつてあつた。

真冬「これからどうしよう……」

果夏「……だ、大丈夫っ！外の事は警察の人とかがきつとどうにかして、すぐに助けが来てくれるよ！だからそれまではここでじつとして

よう?」

扉を叩く音こそ消えたが、耳を澄ますとあちこちで人の叫び声が聴こえる…。こんなのは嫌だ…。早く助けて欲しい…。真冬は果夏の肩に身を預けながら両手で耳を塞ぎ、時が過ぎるのを待つ…。

気付けば部屋の隅にあつた小さな窓の外が真つ暗になり夜がやって来ていたが、助けは一向に現れてはくれなかった…。

## 百三十四話 『ダイキライ』

”普通ではない人間達”に追い詰められた果夏達は咄嗟に付近の建物内へと逃げ込み、一つの部屋に立てこむ。果夏は奴らが入ってこないよう扉にしっかりと鍵をかけると真冬の事をそっと抱き、狭い部屋の隅で身を寄せ合いながら助けが来るのを待った…。

果夏「…真冬ちゃん、少し寝てていいよ」

真冬「うん…大丈夫」

部屋にある小さな窓の外はついさつきまで真っ暗だったが、気付けばまた明るくなり始めている。辺りから漂う嫌な気配や人々の叫び声に怯えて過ごしている内、夜が明けたらしい。

果夏は隣にいる真冬の<sup>まぶた</sup>瞼が重たくなっていている事に気が付いて声をかけたが、真冬は一向に眠ろうとはしない…。確かに凄く眠たいのは事実なのだが、耳を澄ますと未だにどこからともなく奴らの呻き声が聴こえてしまい、それが怖くて眠れない…。

真冬「カナこそ、寝てていいよ…。ボク、一人で起きてるから」

果夏「えへ…大丈夫。真冬ちゃんが起きてるなら、わたしも起きてるよ」

自分だって昨日から一睡もしてなくて眠いだろうに、果夏はそれを感じさせぬ笑顔を浮かべる。しかしこの恐ろしい状況に流石の彼女も参っているのか、その笑顔はいつものとは違って少しぎこちない…。

果夏「あつ、そうだ。わたしね、お菓子持ってたんだ」

床の上に投げ捨ててあったカバンを手に取り、果夏はその中から板チョコレートを取り出す。よく見ると彼女のカバンの中には教科書や筆記用具に隠れ、細々としたお菓子が幾つか紛れ込んでいた。

真冬「こんなのを学校に持ってきてたの…？」

果夏「えへへ、ほら、お昼が来るまでの間に小腹が空いちやう事つて結構あるじゃん？だから賢い果夏ちゃんはそれに備えての非常食を常に持ち歩いていたのだよ…！というわけで、真冬ちゃんも遠慮せず好きなの食べてね？」

真冬「……………ありがとう」

自慢気な表情で差し出されたそのカバンに手を伸ばし、真冬は適当な菓子を貰う。そう言えば昨日の昼以降何も食べていなかった…。一度それを意識してしまうとやたらとお腹が空いてしまい、真冬は果夏から貰った菓子を少しずつ、のんびりと食べていく。

そうしてほんの少しだけ菓子を食べていくと果夏は扉の方を見つめ、何やら考えているかのように黙ってしまった…。

真冬「…どうしたの？」

果夏「あ、いや…：今なら外に出ても大丈夫そうだなあって…」

彼女の言う通り、扉のすぐそばに奴らの気配は無い…。

あの扉を開けて廊下に出たとして、すぐに襲われるという事は無いだろう。しかし、どこかそう遠くない所では未だに奴らの気配を感じとる事ができ、真冬はその身を動かせない…。

扉のすぐそばにはいないにしても、そう遠くない所に奴らはいら…。

そう思うと恐怖で動けず、いつまでもここに立てこもっていたくなる…。もちろん、それが出来ない事くらい分かっているのだが。

果夏「…大丈夫！怖いなら私一人で見てくるからっ！」

真冬「えっ…？で、でもっ…………」

果夏「平気だよ♪あまり遠くには行かないようにするし、ちよつと様子見てくるだけだから、ね？」

確かに、外の様子は確認した方が良さだろう…。

もしかすると救助に来た人や他の生存者がいるかも知れないし、それにこの部屋には果夏が持っていた菓子以外に食料が無い。なので

一旦外に出てそれらの確保をするだけでもかなり状況が良くなると思いが…。

真冬「だめ：行っちゃだめっ！カナ一人でなんて：危ないよ」

あんな奴らのいる外へ一人で出ていくなんて危険だ。

何度もそう言って説得したが、果夏はニコニコと微笑んだまま『大丈夫』と言い続ける…。いくら言っても諦めない果夏を前にとうとう真冬は折れ、扉の外へと出て行く彼女を見送った…。

果夏「じゃ、すぐに鍵かけるんだよ？おかしな人が来たら絶対に開けちゃダメだからね？」

真冬はコクリと頷き、果夏が出た直後にその扉の鍵を閉める…。

果夏は『すぐに戻るから』と言っていたが、もしも戻って来なかったらどうしよう…。果夏の身に何かあったらどうしよう…。

狭い部屋の中、一人で膝を抱えながら色々と考えている内、真冬は自分の事が嫌になった…。どうして果夏を一人で行かせてしまったんだろう。どうして、自分も一緒に行くという言葉が言えなかったのだろう…。

真冬「本当に情けない…：ボクは…：どうしようもない弱虫だ…」

いや、弱虫というよりはただの卑怯者かも知れない…。

外に出て奴らに会うのが怖いからといっていつまでも動こうとせず、果夏一人に危険な事を任せてしまった。

もしもこれで本当に果夏の身に何かあったら、自分で自分の事を許せなくなるだろう…。真冬は薄暗い部屋の中で一人悩み続け、果夏の帰りを待つ。色々と不安な事はあったが、果夏は10分程してからその扉の前へと戻ってきた。

果夏「真冬ちゃん、戻ったよ」

真冬「っ！ま、待ってて、今開けるから…」

閉めていた鍵を開き、そこにいた果夏の事を隅々まで見回す。彼女

は見たところ怪我一つしていないようであり、元氣そうなままだった。

果夏「外にはおかしな人達がウロウロしてたからあまり遠くには行けなかったけど、この建物の二階にこれがあつたから持つてきちゃった」

果夏は手に持つていたペットボトルを床に置き、ニコツと笑う。  
ペットボトルの中身は水であり、まだキャップが開かれていなかった。これは二階にある休憩所のような場所に置かれていたとの事なので、誰かが自動販売機から買った直後、騒ぎに巻き込まれて置き忘れたのだろう。

果夏「あとね、トイレも二階にあつたよ！ここから二階まではすぐに行けるけど、万が一って事もあるから行く時は一緒に行こうね」

真冬「…うん。それでその…この建物の中には他に誰もいなかったの？」

果夏「あ…：…うん。みんな、どっか行っちゃつたのかな…。変になっちゃつてる人達なら、何人も外をウロウロしてるんだけどね…」  
真冬「…そっか」

自分達が知らないだけで、どこかに緊急避難所のような物が出来たのだろうか。だとすれば、多くの人々はそこに集まっているのかも知れない。

真冬「外に出るのって…難しそう？」

果夏「どうかな…。私、さつき物陰からあの変な人達をじゅつと観察してみたんだけど、あの人達って動きはノロノロしてるんだよね。だから全力で走っちゃえばそう簡単には捕まらないと思うけど…」

真冬「じゃあ、後でボクも出ていってみる…。そうすれば他の誰か…外の奴らとは違うまともな人に会えるかも知れないし、それにこのままだと食べる物に困っちゃうから、せめて何か手に入れて来ないと…」



果夏「だね。じゃあまた後で一緒に行こっか」

果夏にはついさつき頑張ってもらったので本当は『一人で行く』と言いたかったが、真冬はその言葉に甘える事にした…。そして約束通り、二人はある程度休憩してから建物の外へと出る。果夏の言っていた通り外には奴らがウロウロとしており、こちらを見るなりのっそりと歩み寄ってくる…。

果夏「真冬ちゃん、走れる？」

真冬「うんっ…！」

怖いという気持ちを抑えて足を動かさず、奴らに捕まらないよう駆け抜けていく。やはり奴らは動きが遅く、しつかりと走ってさえいけばまず捕まる事は無さそうだった。果夏と真冬は奴らを上手くすり抜けながら街の中を進み、自分達以外に無事な人…そして念の為の食料、水を探す。

いくらか辺りを探し回っても結局他の生存者は見付けられなかったが、すつかり無人になつていたコンビニの中から多少の食料、水を確保する事ができ、二人は手に入れた物資の代金をカウンターに置いてから再び元いた建物のあの部屋へと戻る事にした。この部屋は少し狭いが二人でいる分には充分だし、扉もわりと頑丈そうなので内側から鍵がかけられるので過ごしやすい。

本当は外に出た勢いのままそれぞれの自宅を見に行こうとしたのだが、その道中には奴らが多く待ち構えていたので仕方無く引き返す事にした…。

果夏「ま、しばらくはここでサバイバルだね！色々不安はあるけど、私と真冬ちゃんなら大丈夫でしょ!!」

真冬「その自信…どこからくるの？」

果夏「えへへ♪」

真冬の言葉を聞き、果夏は嬉しそうに笑っていた。

今の言葉は誉め言葉ではなかったのだが、果夏が嬉しそうに笑ってくれるならそれで良い…。真冬は顔を俯けてそっと微笑み、その狭い

部屋の中で彼女と共に時間を過ごした。

しかし事態が好転しないまま時間だけが過ぎ、気付けばもう数日：いや、数週間は経つただろう…。それだけの時が過ぎていくと少しずつ心の余裕が無くなり、元々暗かった真冬の表情が更に暗くなっていく…。しかし果夏はいつまで経っても元気いっぱいいで明るい笑顔を真冬へと向け、彼女の事を元気付けた。

果夏「まつふゆちやくんっ♪えへへ、あのね、昨日雨降ったでしょ？私ね、昨日この建物の屋上に空っぽの缶とか色々置いて雨水を貯めたんだ。だからね、今日はこれを使って体を拭こう？」

真冬「……うん」

果夏「ぬへへ♪じゃあ脱いで脱いでっ！私が拭いてあげる♡」  
果夏は屋上に置いておいたという幾つかの器を部屋の床に置き、その内の一つにタオルを沈める。そうしてタオルに多少の水気を吸わせると外で手に入れた石鹸を泡立たせ、その泡をタオルに纏わせた。

真冬は果夏に背中を向けたまま制服を脱ぎ、下着姿になる…。  
特別飾りつ気がある訳でもない、シンプルな水色の下着。

人よりも少しだけ羞恥心の強い真冬はこれまで同姓の前で着替える事すらも恥ずかしがっていたのだが、今はもうそんな恥ずかしさすらどうでも良いと思えるくらいに心が疲弊していた。

果夏「うふふ、じゃあ拭いてあげるねっ！」

真冬「……うん」

下着姿のままペタリと座る真冬の背後に寄り、果夏はその背中をタオルで拭いていく…。途中、邪魔だったブラジャーのホックを外してからしつかりと背中を拭きつつ、果夏は真冬の肌の白さに目を輝かせた。

果夏「真冬ちゃんって本当に綺麗な肌してるね！お人形さんみたいで可愛いよぉ♡あつ、あとで私の体拭くのも手伝ってくれるかな？」

真冬「……………うん」

とりあえず返事を返し、最低限の会話だけする…。

いつになったら助けが来るんだろう…。いつになったら自分達以外の人間に会えるのだろうか…。もしかしたらもう、生き残っているのは自分達だけなのだろうか…。また食料が足りなくなってきた…。またあの危険な外に出て物資を調達してこなくてはいけないのか…。考えれば考えるだけ嫌になり、泣きたくなった…。

果夏「でも、こうして真冬ちゃんと二人つきりで何日も一緒にいられて、体の洗いつこも出来るなんて、案外悪いことばかりじゃないね♪」

背後から果夏の笑い声が聞こえ、思わず眉がピクリと動く…。

真冬「……………は？」

果夏の事は気に入っているし、果夏の笑顔も、笑い声だって好きだけれど、今の真冬にはそれを明るく受け流す余裕が無かった…。

真冬「悪いことばかりじゃない…？バカじゃないの…。悪いことしかない…良いことなんて何も無いじゃんっ!!本気で言ってるのっ!!」

果夏「あつ……………そ、そのっ…」

背後に座る果夏を見て大声で怒鳴り、彼女の持っていたタオルを奪ってから壁へと叩き付ける。果夏はビクツと肩を震わせてから瞳を細め、申し訳なさそうに笑みを浮かべた。

果夏「ご、ごめんね…？そうだよね…大変なこと、ばかりだよね…」

真冬「それが分かってるならっ……………そうやってヘラヘラしないでっ!!何でいつまでもヘラヘラしてるのっ!!もう何日もずっと、誰にも会えてないんだよ!!ボクの家族もカナの家族も…もうみんな死んでるかも知れないんだよっ!!」

果夏「……………そう…だね」

果夏の瞳がウルウルと潤んでいき、”言い過ぎてしまった…”と後

悔する…。何日か前、果夏は外に出るついでに自宅の方にも行ったよ  
うなのだが、そこにはもう誰もいなかったらしい…。せめて書き置き  
の一つでもあれば安心出来たのに、それすら無かったようだ。

果夏「でもね、私は真冬ちゃんさえ無事でいてくれれば…それだけ  
で…」

真冬「っ…ボクが無事だったら何なの…？ボクがいて、カナに何か  
良いことがあったのっ!？」

果夏「あつたよ!! いっぱい、いっぱいあつたよ!!」

果夏の声にも勢いが増し、それに対抗するようにして真冬もまた怒  
鳴る。

真冬「適当なこと言わないでっ! そうやって適当なこと言つてヘラ  
ヘラ笑えば、ボクが喜ぶって思ってるんでしよう!!」

八つ当たりだと分かっている…。

果夏はそんな事を考えるような子ではない…。

彼女は彼女なりに自分といて何か良い思いをしており、それが嬉し  
くて…:…いや、きつと暗くなってきた自分の事を元氣付ける為に精  
一杯笑つてくれていたのだ。それはしっかりと分かっているのに、口  
が勝手に動いて止まらない…。

真冬「いつもいつもっ…一人でヘラヘラしてっ…!! それに付き合わ  
されるボクの身にもなつてよ!! ずっと…ずっと迷惑してたんだか  
らっ!!」

違う…迷惑なんてしてない…。

果夏の笑顔は気に入っている…大好きだ…。

だけど今日は少しイライラしていて、その笑顔を楽しむ余裕が無い  
だけ…:…それなのに、心にも無い言葉が溢れて止まらない。

真冬「もう…嫌いっ…:…! カナの事なんて大っ嫌い!!!」

果夏「…:…:…」

本当に伝えるべき言葉は……伝えたい言葉はそれと真逆なのに、  
昂たかぶった感情に煽られて酷い言葉を放つてしまう……。真つ向からその  
言葉を聴いてしまった果夏は何か言いたげに口をパクパクと動かし  
た後……

果夏「……………ごめんね」

一言だけ、力なく微笑んでそう言った……。

いつもの果夏なら、子供のよう大号泣して真冬にすがり付いてき  
ただろう……。『そんなこと言わないで』と泣いただろう……。しかし、今  
の彼女はただ弱々しい笑みを浮かべ、一滴の涙も流さずに顔を俯け  
た。

真冬「つ……」

果夏は泣いてこそいないが、その表情はこれまでに見たどの表情よ  
りも深く悲しみ、絶望しているのが分かる……。この時、優しい言葉を  
かけて謝れば良かったのに、当時の真冬はそれが出来ず、ただ一人  
服を着直して部屋の隅でふて寝した……。

一方、果夏はその場にしゃがみ込んだまま特に何をするわけでも無  
く、数時間ほど床を見つめ続けていた……。

それから更に数時間後、真冬は夜中にふと目を覚ます……。

自分が眠っていたのとは真逆の方向……。そこから声が聞こえたから  
だ。

果夏「つ……………ううつ……………ぐすつ……………」

そちらに目線に向け、暗闇の中で響くその声が果夏の声だったと知  
る。彼女は部屋の隅で膝を抱えたまま、一人で啜り泣いていた……。

果夏「ママ……………パパ……………」

真冬「……………」

そう言えば、果夏は家族ととても仲が良くていつも両親に甘えていた…。

両親もまた彼女の事を溺愛しており、彼女の家へと遊びに行く度その甘やかしっぷりを見せ付けられていた真冬は常に呆れ顔だった。

今日、自分はそれだけ家族を愛している彼女に『家族はもう死んでいるかも知れない』…なんて、酷い言葉を言ってしまった。彼女はそんな自分なんかに向けて『それでも、真冬ちゃんさえ無事なら』と温かい言葉をかけてくれたのに…自分は酷い言葉ばかり言ってしまった…。

果夏「ううっ…！ひぐっ…ぐすっ！」

果夏の泣き声を聴いている内、真冬の瞳からも涙が溢れ出す…。

今すぐ彼女に謝りたい…。謝って、『カナの家族はきつと大丈夫だよ』と言ってあげたい…。けど、彼女の泣き声を聴いていると涙が止まらなくなつて動けない…。

結局、果夏に何の言葉もかけられないまま再び眠りに落ちてしまい、翌朝…二人の間に気まずい空気だけが流れた。

## 百三十五話 『オワリ』

果夏と喧嘩してしまった翌朝、真冬は重たい瞼まぶたを開けてゆつくりと起き上がる…。辺りを見回してみると果夏は既に起きており、こちらを見てニコリと笑った。

果夏「おはよう…」

真冬「…うん、おはよう…」

向けられた笑顔にはいつもの眩しさが無く、とても弱々しい…。その笑顔を見た瞬間、真冬は昨日の喧嘩が夢ではなく現実に起きた事なのだと確信した。

ただの夢だったのなら良かったのに…。

何度もそう思ったが、果夏の弱々しい笑みを見る度に昨日自分が言ってしまった心無い言葉の数々を嫌でも思い出してしまう。

真冬（…：ボク、最低な人間だな）

こうしている今ですら、果夏とまともに目を合わせられない自分が嫌になる。本当なら果夏の目を真っ直ぐに見つめ、『昨日はごめん』と謝るべきなのに…。

その後、真冬は果夏と共に朝食を食べていったが、互いに必要以上の言葉を交わさぬまま何とも居心地の悪い時間が過ぎていく。昨日まではもつと色々な会話をして、共に笑い合う事も少なくは無かったのに…。

果夏「…あ、真冬ちゃん…そのね、今日、このあと一緒に…」

真冬「……ん？」

朝食を食べている最中、果夏は真冬の方を見て何かを言いたげな表情を浮かべたが、その後すぐに口を閉じて下を向いてしまう。やはり、昨日の事があつたせいで話かけにくいのだろう。

真冬「……なに？」

果夏「あつ……あの、もう食べる物少なくなつて来たから外に出て何か探しに行こうと思つたんだけど……やっぱいいや。私一人で行くから……」

真冬「……ボクも行くよ。一人じゃ危ないでしょ……」

果夏「……ありがとね」

昨日の事があつて気まずいとはいえ、物資の調達を果夏一人に任せるのは悪い。なので真冬は朝食を終えるとすぐに支度を整え、果夏と共に外の世界へと出た……。建物から一歩外に出ると相変わらず奴らだけがうろうろとしており、空はどんよりと曇っていた……。

真冬（せめて晴れてれば、気持ちも前向きになつたかも知れないのに……）

今は夜かと錯覚してしまいそうなくらいに薄暗い外を歩き、空を覆い尽くす灰色の雲を見つめる……。すると真冬の横で果夏も同じ様に空を見上げ、ポツリと呟いた。

果夏「雨……降ってきそうだね。出来るだけ早めに戻つて来よつか……」

真冬「……うん」

真冬は果夏の意見に賛成し、彼女と共に歩みを進める……。

歩道はもちろん車道の上にすらノロノロと歩いている奴らを避けるようにして道を進み、近くにあつたスノーパーマーケットに足を踏み入れた。

店内は明かりがついておらず暗かったが、少しずつ目を慣らして奥へと進む。残っていた食料を見つけては持っていたカバンに詰めながら、奴らを警戒して進んでいった……。

果夏「えつと……こんなもんで良いかな？」

真冬「……うん、とりあえずは大丈夫だと思う」



マーケットの中に入って数十分……どうにか数日分の食料は確保出来た。

見たところまだ食料はあったが、これ以上はカバンに入らないのでまた次回訪れた時に頂くとしよう。

真冬はパンパンになったカバンを手に持ち、果夏と共に外へ出た。外ではポツリポツリと雨が降り始めており、二人は顔を見合わせた。

果夏「あちやく、もう降ってきちゃったね」

真冬「…仕方ない。小走りで帰ろう」

あまり体や服を濡らすと風邪を引くかも知れないので、少し駆け足で道を進む。行きに通って来た道を二人並んで進み、奴らを避けるようにして駆けていく…。

二人はポツポツ降りだした雨に打たれながらも順調に道を進み、住み家としてあるあの場所までもう少しの所まで来た…。しかし、その時だった……。

「おっ!?!お姉ちゃん達!!」

横の方から男性の声が聞こえ、真冬も果夏も一気にそちらを向く。

そこでは灰色のレインコートに身を包んだ二十代半ばと思われる男が一人で立っており、彼女らの事を見て手を振っていた。

果夏「うそっ…!?!人だっ!」

真冬「うん、人……だね」

ここ数日間、奴ら以外のまともな人間を見れていなかった…。

なのでもしかしたら自分達以外の人間は全て死に絶えたのかとも思ったが、やはりそんな事は無かった。

二人は久々に見る他の人間を前にして思わず笑顔になり、その場へ歩み寄る。男は歩み寄ってきた彼女達を見て一度はニコリと微笑んだものの、すぐに苦い表情を浮かべた。

「えつと……君ら、二人だけなの？」

果夏「あつ、はい……」

「ああ……そっか……」

この地獄のような世界で1日でも長く生き延びる為にもつと大人数の仲間が……もしくはこんな女子校生ではなく、男手が欲しかったのだろう。男は少し残念そうにしていたが、それでも再び笑みを浮かべた。

「ま、二人でも良いや！せつかく会えたんだし、生存者同士仲良くしない？実は俺以外にも何人か仲間がいてさ……もし良ければ、君達も俺らの仲間に加わって欲しいんだけど」

果夏「えつ!?他にも生き延びてる人がいるんですか!？」

「ああ、そう遠くない場所にあるデカイ倉庫の中で雨宿りしてるよ」

男の言葉を聞いた瞬間、二人は目を丸くして驚く。自分達以外にも数人の生存者がいるという事実……それが嬉しくて、果夏はすぐに口を開いた。

果夏「ま、真冬ちゃんっ！せつかくだし、良いよね……?」

” 良いよね ” ……というのはつまり、この男を含めたその生存者達の仲間に自分達も加わって良いのかという確認だろう。

真冬「うん……良い、んじゃないかな……」

このまま二人だけで行動しているより、他の生存者と合流した方が安全だ。そう考えた真冬はすぐに頷いたものの、不安な点もあった……。目の前にいるこの男から、少しだけ嫌な気配を感じたのだ。

けど、それは自分が物事を何でもネガティブな方に捉えてしまっているというだけ……ただの考え過ぎだ。真冬はそう思い、果夏と共にその男のあとをついていった……。

「ほら、あそこだよ」

少しして町外れに出た時、男が道路横にある一つの倉庫を指差す。

男が言っていた通りその倉庫はやたらと大きかったものの、トタンで出来ている外壁は錆びきっていて所々に空いている穴が目立つ…。

真冬「あなた達は…ここで暮らしているの？」

「この二日くらいの間はね。けど、拠点にするにはあまり良い場所でも無いからそろそろ他の場所に移動しようって相談しあっていたところだ」

真冬「……………そう」

男は倉庫内へ続く扉を開き、二人をその中へと招く…。

真冬と果夏は特に警戒する素振りも見せぬままその中へ足を踏み入れ、そして中で待っていた数人の男女と目を合わせていった…。

大人の男が三人…。女が二人…。

女の内の一人は真冬達とほぼ同じ年くらいであろう雰囲気だ。

「んっ？その娘達、どうしたの？」

中にいた生存者の一人である女性が男へ尋ねる…。

年齢は二十代前半くらいであろうその女性は背中まで伸びている黒髪を揺らしながら真冬と果夏を交互に見つめ、どこか不気味にニヤリと微笑む。

「ああ、外で見付けてきた。最初は無視しようかとも思ったけどどうやら多少の物資は持つてるようだし……………」

と、男が言った直後だった…。

突如”ガンツ!!”と嫌な音が響き、果夏が床へと崩れ落ちた…。

果夏「っ…!!? いっ…たあ……………!」

真冬「カナっ!!」

果夏はうつ伏せになって倒れ、頭を抱える…。よく見ると彼女の後頭部からは血が溢れ出てきており、彼女の茶色い頭髪や真っ白いシユシユを赤く染めていた。

真冬「この…っ!!何するのっ!!?」

真冬は果夏の横に膝をつき、痛みに悶える彼女に手を添えながら辺りを見回す。するとすぐ近く、二人をここまで招いた男がいつの間にかその手に鉄パイプを握っている事に気が付き、ギリツと鋭い視線を向けた。

理由は分からないが、この男が背後から果夏の事を殴ったのだから。

「わりい。下手に暴れられたり逃げられると面倒だからさ、まずは一人黙らせておいた方が良いと思って…。まあそういう訳だから、君も大人しくしてよ」

真冬と果夏はその場にいた男女達に取り囲まれ、あつという間に逃げ場を失う。真冬は床へと倒れた果夏の手を握ってその身を案じつつ、連中を睨み付けた。…が、連中は真冬の睨みなど気にもしない。

連中の狙いはどうやら真冬達の持っていた物資のようであり、彼女らが持っていたカバンを無理やり奪うとその中身を取り出した。今さっき取ってきたばかりの食料や水…学校に持っていたカバンに収まっていたくらいだから大した量ではないが、その全てをこんな奴らに奪われると思うと腹が立つ。…いや、今はそんな事よりも果夏の事が心配だ。

真冬「カナ…大丈夫…?」

果夏「あう…っ…えへ、大丈夫…」

彼女はゆっくりと身を起こし、地面に座ったまま後頭部に手を添える。

そこからは未だドクドクと血が溢れ出ており、中々止まってはくれない。それでも果夏は大丈夫だと言っているが、本当はかなり痛むに違いないだろう…。

「どう?良い物はあった?」

「…まあ、これってという物は無いな。中に入ってた食料も大した量

じやない…俺達で分けたら一日で無くなるかも」

「ふうん…。ま、無いよりはマシでしょう」

真冬と果夏の持っていた物資は連中の持っていた大きなバッグの中へとしまわれてしまい、空からになったカバンが二人の目の前へと投げ捨てられる…。せつかく取ってきた物を奪われたのは悔しいが……

果夏「…また、一緒に集めよ…？」

真冬「……………うん」

果夏の言う通り、こんな物はまた集めてくれば良い。

それよりも今は早くこの連中の元を離れ、元いたあの場所に帰らなくては。あの場所には多少の薬や包帯を置いておいたから、あそこに戻りさえすれば果夏の治療をしてあげられる。

「じゃ、キミ達の持っていた物は貰っていくから。ごめんね」

連中の仲間であろう一人の少女が二人へ向けて言葉を放つ。

果夏よりも一段階暗い色の茶髪をしたその少女は見た目から察するに真冬達と近い年齢なのだろうがその視線はとても冷たく、ごめんとする言葉も形だけで何の感情も込められていないのが伝わってくる…。

真冬「つ……………」

久しぶりに会った人間がこんなゴミみたいな奴らだなんて、本当に運が無かった…。連中は奪った物資を詰めたバッグを持って外へ出ていこうとしていたが、真冬にはその背中を悔しそうに見つめる事しか出来ない…。

けど、これで良いんだ…。

このまま連中が立ち去った後で例の場所に戻り、果夏の傷の手当てをしてあげよう。それから、昨日の事もしっかりと謝ろう…。真冬はそう決意し、果夏の横顔を見つめていく。

その一方、連中は倉庫の扉を少し開けるなり動きを止め、何やら面倒臭そうにため息をついた…。どうやら倉庫の外に嫌なものを見た

らしい。

「奴らが集まって来てる…少しだがな」

「どれ…ああ、本当ね。さて、どうしようかしら…。あのくらいの数なら、無理やりに押しきつても良いのだけど…」

黒髪の女はポツリと眩き、うぐんと唸りながら倉庫内を落ち着きなく歩く…。女は足音をヒタヒタと鳴らしながら真冬と果夏の周りを歩き、少ししてからその歩みを止めてニヤツと微笑んだ…。

「…あなた達に一つ、大切な事を選ばせてあげるわね」

静かな倉庫内にその声が響き、真冬と果夏はこちらを見下すように見ている女の目を見つめ返す。女は右手をそつと伸ばすと真冬と果夏の頭を順に撫で、また静かに口を開けた…。

「あなた達の…どちらか一人でいいの。ほら、あつちの壁に少しだけ穴が空いてるでしょう？あそこから手を出して、外の連中を誘き寄せてくれないかしら？」

果夏「え…？」

真冬「は…っ？」

思わず二人して変な声をあげてしまい、同時に目が丸くなる。

この女の言う通り、倉庫の壁には一部小さな穴が空いて外が見えていた。片腕くらいなら出せるだろう、小さな穴が…。

「なに、簡単よ。あの穴からちよつと片手を伸ばして、外の連中を誘き寄せてくれるだけで良いの。私達は奴らがそこに夢中になっている内に出ていくから、ね？お願い出来ないかしら？」

真冬「な…っ?!バカじゃないのっ?!外に腕を伸ばすなんて…そんな事したら怪我するかも知れないっ!」

「大丈夫、運が良ければ無傷で済むわ。だから…ね?良いでしょ?」

女は持っていたナイフを取り出すとそれを真冬の額に突きつけ、ま

たニヤリと笑う…。つまり、この女はこう言いたいのだろう…。こちらの提案を断るつもりなら、二人ともこの場で殺してやる…と。

真冬「でも…っ…もし噛まれてもしたら…」

「そうなれば奴らの仲間入りね…」

その言葉を聞いた途端、真冬の額に汗が流れる。

薄々気付いてはいたが、やはりあの連中に噛まれたりするとそこから得体の知れないウイルスのようなものに感染し、その人物は奴らと同じになってしまうようだ。となれば、ただ一つのかすり傷すら負えない…。

にも関わらず、この女は壁の穴から手を伸ばせと言っている…。

奴らを誘き寄せると言っている…。

真冬「そんな…：ボクは…：ボクは…っ…」

運が悪ければ死ぬ事になる…。

そんな危険な事、絶対にやりたくはない。

真冬は力なく顔を俯けて声を震わせたが…：果夏は違った…。

果夏「私がやる。あなた達が出ていく為に、外の人達を誘き寄せただけで良いんでしょ？」

真冬「っ!?!カナっ!な、何を言ってる…!」

真冬が声を荒げるながらその肩を掴むと、果夏は何も言わずにニコツと微笑む。その笑顔はとても眩しくて、これからする事がどれだけ危険な事なのか…まるで分かっていないかのような笑顔だった。

「私達は隙を見て出ていくから、それまで頼むわね」

果夏「…うん、分かった」

女は果夏が返事を返すと仲間である男達に耳打ちをして指示を出し、果夏をそこへと誘導させる…。男達に身を引かれながら一歩一歩進んでいく果夏の背中を見て、真冬は瞳を潤ませながら声をあげた。

真冬「だめっ！そんなのっ…絶対っ…!!」  
そこまで言ったところで、真冬は声を出せなくなる。  
一人の男に背後から押さえつけられ、口元を塞がれたからだ…。

「黙って見てろって」

真冬「んんっ…!っっ!!」

いくらか身を振らせてみたが、非力な真冬では背後の男を振り払う事など出来るはずも無い…。男は真冬の口を手で塞ぎながら、その細い身を背後から抱くようにしながら力を込めていく。男の力はとても強く、まるで太い鎖で身を縛るかのように真冬の動きを封じた。

果夏「真冬ちゃん…」

「ほら、君はこっちだって」

果夏の身を引いていた男達は彼女の左腕を掴み、それを目の前にある壁の穴へと入れていく…。左腕が肩まで深々と入ったのを見ると男達は果夏の身をしっかりと押しえつけて逃れられないようにし、付近の壁を叩いて外の奴らを誘き寄せていく。

ガンツ！ガンツ…!!

トタンの壁が何度となく叩かれ、耳障りな音が鳴る…。

すると少し遅れて外の方で奴らの呻き声が響き、それがじわじわと移動を始めたのが分かった。

「ウ…ア…アア…ツ…」

恐らくは三〜四人…いや、もう少しいるだろうか…。

外から聞こえる幾つもの呻き声は纏まって移動を始め、少しずつ果夏の方へと…外に伸ばされている左腕の方へと寄る…。

真冬「んんっ!!っっ!!」

聞こえてくる呻き声の位置からするに、もう誘導は充分なはずだ。今なら何の邪魔もなく倉庫の扉から出ていけるだろう。…が、男達は



果夏の身を押しさえつけながら壁を叩き続ける。嫌な予感がした…。

果夏「う…つつ…!!」

「少し痛いかも知れないけど、我慢出来るわよね？」

黒髪の女は壁に押しさえられている果夏の頬を撫で、不気味に微笑む。

まるで悪魔のようなその笑みを見た瞬間、果夏は全て察した…。この女は…この連中は…自分を無傷で帰してくれたりはしない。外の奴らは良い感じに誘き寄せられた、今ならもう扉の外へ楽々出ていけるだろうに、そうしないのが何よりの証拠だ…。恐らく、自分はこのまま……………

果夏「真冬ちゃん…ごめんね…」

真冬「…………」

果夏は真冬の日を見つめてそう告げると、ニコツと微笑んでからすぐに唇を噛み締めて瞳をギュツと閉じ、そして…

果夏「んっ…ツ!!つつ…く…ツツ!!」

押しえられている壁の向こう…すぐそこから聞こえる呻き声の持ち主達に左腕を掴まれ、そこが噛まれていく痛みに悶えた…。何人も感染者から同時に与えられていくその痛みは想像していたよりもずっと激しいものだったが、それでも真冬を心配させないよう…唇を噛み締めて声を抑える…。

「グアア…ッ…アアッ…!!」

果夏「んんつつ!!つつ…ツつつ!!」

ブチツ…ブチツ…!と肉の千切れる音が壁越しに届き、それと同時に左腕のあちこちが熱くなる。まるで熱湯をかけられているような熱さと激しい痛みが左腕を走って気を失いそうになるが、果夏は意識を保ったまま声を堪え続ける…。ほんの少しだけ瞳を開けて真冬の

方を見つめると、彼女がポロポロと泣いているのが分かった…。

真冬「つつ…！…つつ!!」

背後から押さえつけられながらも必死に身を振らせ、瞳から大粒の涙を流し続けている。真冬の付き合いはそれなりに長いが、あんなにも泣く彼女は初めて見た…。その泣き顔はとても悲しいものであり、果夏は子供のように涙を流し続ける真冬を見つめたまま、自分の瞳からも涙を溢れさせる。

果夏「うつつ…ツ!…つつ!!」

涙は一度溢れると止まることなく頬を伝い、地面へと落ちる。

腕に走る痛みがあまりに凄まじくて泣いているというのも当然あるが、一番の原因は悲しみだった。奴らに噛まれた以上、自分は真冬とお別れしなきゃならない…。大好きなああの娘だけをこんな世界に残して、自分は…。

「…よし、そろそろ良いわよ」

果夏「つ…：うあ…ああつ…：ツ!!」

黒髪女が指示を出すと男達は果夏の身を引っ張り、壁から手を抜かせていく。外では何人もの感染者が果夏の腕を離してたまるかと爪や歯を立てていたが、男達はそれに構う事なく彼女の身を力任せに引いた…。

真冬「つ…：カナあつ!!」

ミチミチと嫌な音を立てながら腕を引き抜いた直後、果夏はそのままだ地面へと倒れこんでしまう。直後に男の手から解放された真冬は直ぐ様果夏のそばに駆け寄ったが、地面に伏した果夏の顔には今まで見たことが無いくらいに汗が浮かんでおり、うっすらと開かれています。瞳は今にも気を失ってしまいそうなくらい虚ろだった。

果夏「まふ…ゆ…：ちや…」

真冬「う…あぁっ…!!どうすれば…どうすればっ…!」

倒れている果夏の横に膝をつきながら困惑する内、熱い感触が膝に伝わる。果夏の左腕から溢れ出た血は水溜まりのように広がり、真冬の膝を汚していた…。彼女の左腕は指先から肩の方まで何カ所も噛み千切られており、ドクドクと溢れ出る血によつて真つ赤に染まっている…。その様はあまりに酷くて、もう直視なんて出来ない…。

真冬「そんなっ…こんな嫌だ…嫌だ…っ…!」

「さて、じゃあ私達はもう行くから、あなたはこれから…一人で頑張つてね。その女の子があなたにとつてどれだけ大切な友達なのか知らないけど、残念ね…もう絶対に助からないから、早く見捨てた方が身の為よ?」

もう絶対に助からない…。

黒髪女は果夏の前で涙を流す真冬へ冷たく言い放つが、真冬はただ身を震わせながら泣くばかり…。果夏をこんな目に遭わせたこの連中は許せない…それこそ、今すぐに殺してやりたいとすら思ったが…体が思うように動いてくれない。

真冬「カナっ…カナあっ…!」

果夏「ああ…ああ…っ…」

女達は真冬の背中を見て鼻で笑い、倉庫の扉から外へと出ていく。

その際、連中は『久しぶりに面白いものが見れた』とか『あの調子だと真冬もすぐに死ぬだろう』とか…好き勝手な事を言つて楽しげに笑っていた…。連中はただ、暇潰しとして果夏の事を傷付けたんだ…。

真冬「っ…ボク達も…逃げないと…っ!」

果夏「うっ…っ…っ…」

いつまでもこの場にいたら、外の奴らが中へと入ってきてしまう。

真冬は溢れ出る涙を拭つてから果夏の右腕を自身の肩へ回すと、その身を支えるようにしながらゆっくりと外へ出ていった。

降り注いでいた雨は勢いを増しており、二人の体は瞬く間にびしょ濡れになる……。あの連中はもうどこか遠くへいったようだが、辺りにはまだ奴らが……。感染者がいる。真冬は感染者がこちらに気付いていない内に歩を進め、果夏に肩を貸しながら雨の降り注ぐ町を彷徨った……。

真冬「カナッ……すぐに……すぐに助けるからっ……！だから頑張っ  
！お願いだから……死んだりしないで……」

果夏「もう……いいんだよ……わたしは……もう……」

今にも消えてしまいそうなくらいか細い声で果夏は言うが、真冬はその言葉を無視して前を向き続ける、彼女の身を引いて歩き続ける……。こんな弱々しい声ではなく、いつもの元気な声が聞きたい。だから果夏を助ける方法を見付けるべく、涙目のまま町を歩いた……。

百三十六話 『ダイスキ』

激しい雨が降り注ぐ中、真冬は果夏に肩を貸したまま必死に歩き続ける…。視線の先に感染者が立っていればそれを避けるようにして別の道を進み、何処へ向かうべきかも分からないまま果夏に言葉を放っていった。深い傷を負ってしまった果夏が、少しでも元気になるようにと願って…。

真冬「カナつ、絶対に大丈夫だからね…。カナは…こんなところで死んじゃうような娘じゃないっ！今は具合悪くても、きつと…すぐに良くなる…！左腕の怪我だって…手当てすればすぐにつ…」

と言いながら、果夏の左腕を覗き見る…。

そして、すぐに後悔した…。

見るんじやなかった…と。

真冬「う…ううっ…：…ボクの…せいだ…：…」

あちこち食い千切られたその左腕は未だドクドクと出血しており、骨が見えてしまう程に深い傷もある。ハッキリと直視出来ずすぐに目を逸らしてしまっただが、指も何本か足りないように見えた…。果夏の腕は…手は…とても綺麗で柔らかくて、これまでに何度となく頭を撫でてもらった。真冬はその度に鬱陶しそうな顔をしてきたが、本当は…：彼女に頭を撫でられるのが大好きだった…。それなのに…：その手は残酷なくらいにボロボロで…：

真冬「やだ…：…こんなの嫌だっ…！誰か、助けて…っ…：…」

誰でも良いから、彼女を助けてやって欲しい。自分は助からなくても良いから…：だからこの娘だけは、果夏だけは助けて欲しい…。涙で視界が歪む中、真冬は必死に歩き続けた。どこを目指す訳でもなく、ただ感染者を避けるようにしながら…。

果夏「まふゆ…ちゃん…：もう、いいんだよ…」  
行くあての無いまま彷徨い続けてどこかの公園へと出た時、果夏がポツリと呟く。しかし真冬はそれでも歩みを止めはしないし、果夏の事を離したりもしない。

真冬「何も良くないっ!!カナがいないとボクは…：ボクはっ…」  
自分一人では…もう何も出来ない。

世界がこうなる前からそうだ。ろくに友人のいない自分が学校生活を楽しんでいられたのも、毎日を楽しく過ごせたのも、果夏がいたからだ。もしも果夏がいてくれなかったら、生きる事すら嫌になっただろう…。

真冬「お願いだから…そばにいて…っ…：ボクを…独りにしないで…」

涙が溢れて止まらなくなり、前がボンヤリとしか見えなくなる。果夏はもう自分の足で歩くのすら辛いらしく、彼女に肩を貸している真冬の足取りも自然と重たくなっていった…。

果夏「もうね…何となく…：分かるの…。私はもうすぐ、私じやなくなるんだと思う…：頭がね、ぼんやりするの…：体のあちこちが、苦しいの…。だからもう、ここで…お別れしよう…？私、大好きな真冬ちゃんを…：傷付けたくないよ…：」

真冬「カナがボクを傷付けるわけないっ…!!絶対に大丈夫だからっ、もうそんな事…言わないで…：」

どんな時でも元気で明るいのが取り柄の果夏が、みるみる弱つていくのが分かる。弱々しい果夏を見ていたら胸が痛くなってしまい、真冬はもう歩く事が出来なくなった…。彼女に肩を貸したままその場にガクツと膝をつくと、足元に出来ていた水溜まりがピシヤツと鳴って服や体に泥が跳ねる…。

真冬「ボクは…独りじゃ生きていけないよ…カナがいてくれないと、何も出来ない…。カナがいてくれないと…もう、笑うことも出来ないよ…」

果夏「…大丈夫、真冬ちゃんは優しく可愛いい子だから…友達くらいすぐにできるよ…」

真冬「ボクは可愛くないし…それに…優しくなんて…っ…」

果夏「ううん…真冬ちゃんはすっごく可愛いし…優しいよ…。私にどれだけしつこくしても、ず…っ…友達でいてくれたもん…」

果夏はそう言って真冬の肩に頭を寄りかけ、ニコリと微笑む…

あちこち食い千切られた左腕はとてつもないくらい、それこそ気絶してしまいそうな程に痛むだろうに、そんなのは微塵も感じさせぬ笑顔を見せてくれた…

果夏「こんなに優しく可愛い女の子、私じゃなくても絶対に好きになる…。真冬ちゃんならきつとすぐ、こんな世界でも…新しいお友達が出る…。だからもう、私なんかいらなの…。もう…すぐさよならだと思っけど…私の事なんか忘れて…元気でいるんだよ…？」

真冬「い…やだっ…お別れなんて…言わないで…っ！」

果夏の笑顔は大好きなはずなのに、今だけはそれを直視出来ない…

真冬が顔をうつ向けたまま体を震わせて泣いていると、果夏は自らの頬を真冬の頬へと押し当て、また嬉しそうに笑った…

果夏「えへへ…だ…いすき…」

じやれるかのようにして、ふにふにと柔らかな頬を数回擦り付ける。

思い返してみれば、こうして果夏にスキンシップをとられたのは久しぶりだ…。溢れていた涙をそのままに、真冬はそっと微笑みかける……が、隣にいる果夏を見つめて再び涙を溢れさせた…

果夏は真冬の肩へ寄り添うようにぐったりと首を傾けたまま、眠っているかのように瞳を閉じていた…。ただ眠っているだけなら良かったのだが、彼女はもうピクリとも動かない…。そして、息もしていない…。それに気付いてしまった途端、真冬は自身の脳内が真っ白になっていくのを感じた…。

真冬「う……あ……ああつつ……!!カナ……ボク、今言おうとしたんだよ……ボクもカナの事が好きだよ……昨日は、酷いこと言つてごめんって……そう言おうと……したのに……ちやんと……謝りたかったのに……っ！ちやんと……好きって伝えなかったのに……!!ずっと……一緒にいたかったのに……」

肩に寄りかかったまま動かない果夏へ向け、涙声で語りかけ続ける。足元に広がっている水溜まりへと落ちていくのが自分の涙なのか、それとも空から降り注いでいる雨なのか分からなくなるくらい大粒の涙を流し、大声で泣いた…。

真冬「ぐすつ……！うああ……あああつつ!!うう……つつ!!」

公園の中心で膝をついたまま子供のよう大声で泣き喚き、水溜まりに涙を落とし続ける。辺りには泣き声を聞き付けた感染者達が集まりだしていたが、真冬は構うことなく泣き続ける…。果夏を失った今、もう逃げる気力なんて無い…。

果夏「ツ……あ……あ」

真冬「……っ……ううっ……」

肩に寄りかかっている果夏の口が動き、声が漏れているのが聞こえる。しかし、真冬はちつとも喜んだりせず顔に顔を俯けていた…。すぐ横で声をあげているのはもう、今までの果夏じゃないと分かっていたから…。

果夏「ツツ……！ア……アツ……!!」



果夏の右手に左肩を掴まれたが、それでも真冬は動かない。ただ顔を俯けたまま涙を流し、肩を震わせて静かに声を放つ…。

真冬「カナ……ごめんなさい……ごめん……なさいっ……」

次の瞬間、真冬の左肩に激しい痛みが走る。

果夏がそこへ顔を寄せ、肉を食い千切っていた…。

果夏は真冬が着ていた学校の制服ごと肩へ食らいつき、その肉を裂く……。グチツ……！ブチツ！と嫌な音が響き、真冬の肩から血液がドクドクと溢れ出た…。

真冬「っあ……！ああアツ……！！」

果夏は真冬の肩を一噛みすると食い千切った肉を咀嚼し、すぐにゴクリと喉を鳴らす……。そのままもう一噛みされるかとも思ったが、次の瞬間、果夏は真冬のことを強く押し退けた。

真冬「うぐっ！っ……っ……」

肩をグツと押された真冬はそのまま地面へと倒れてしまい、全身が泥だらけになる……。一方で果夏は小さな呻き声をあげながらゆっくりと立ち上がっており、水溜まりの上に倒れた真冬のことをじっと見下ろしていた。

真冬「ぐ……っっ……もう……いいよ……。カナになら……何をされたっ……」

このまま一人で生きていても……果夏のいない世界で生きていても仕方がない……。真冬はそつと瞳を閉じ、果夏が動くのを待つ。どうせ死ぬのなら、大好きな彼女に身を任せて死のうと思つた…。

果夏「ご……め……んね……まふ……ちや……」

呻き声ではない、いつもの果夏の声が聞こえる…。

思わず目を開いて前を見てみると、果夏がこちらを見下ろしたまま涙を流して震えていた……。左腕は直視出来ないくらいにボロボロで、

顔も真っ青になっている。口元は真冬を噛んだ際に付着した血に濡れており、瞳には少しの光も宿っていない。その表情はいつもの果夏と比べると別人のように冷たいものに思えたが、そこから涙が溢れているのを見ていたら胸がキュツと締め付けられた…。

真冬「カナは…謝らないでいいんだよ…」

小さな声で呟き、真冬は再び目を閉じる…。

果夏も今の一瞬だけ自我を取り戻すのが精一杯だったらしく、またすぐに呻き声をあげながら真冬の方へジリジリと身を寄せる。

もし、死後の世界なんてものがあるのなら、そこで果夏に謝ろう…。しっかりと謝って…大好きだと告げて…また仲良くしたい…。

果夏に食い殺される事を覚悟した真冬がそんな事を考えた時、遠くからパシヤパシヤツ…と音が聞こえた。誰かが雨に濡れた地面の上を駆けているらしい…。その音は凄まじい速さで真冬の方へと寄り、直後…真冬の前で”ガンツ!!”と鈍い音が鳴り響いた…。

真冬「…え…:…つ」

音に驚き目を開くと、ついさっきまで自分の前にいたはずの果夏が…数メートルずれた位置で倒れていた。彼女のそばには見慣れない茶髪男が立っており、その手には血に濡れた金属バットが握られている…。

真冬「つ…!ま…つ…:…て…!!」

男は倒れている果夏を見下ろしたまま、金属バットを振り上げた。

真冬はそれを止めさせようと声を出したが、それは男の耳に届かない。いや、届いていたが無視されたのかも知れない…。男は一瞬、横目で真冬の事を見つめた後、何の躊躇いも無くそのバットを振り下ろし、嫌な音を辺り一面に響かせながら…果夏の頭を打ち砕いた…。

真冬「あ…:…あつ…:…あつ…:…!」

「…なんだよ、助けてやったんだから礼くらい言えつての」

金属バットを肩にかけ、男はゆっくりと歩き出す…。

どうやら辺りに集まってきていた数体の感染者を始末するつもりらしい。

その男がバットを振って感染者を一体一体倒していく最中、真冬は地面に倒れたまま、視線の先に倒れている果夏を見つめて泣き続けた…。果夏がもう、他の感染者と同じになっていたのは分かっている…。分かつているが、それでも、大好きな友人が殺されるのを目の前で見てしまったのがショックだった…。

真冬 「つあ…あああつ…!!カナつ…：カナ…あつ…：…！」

「よし…：…：どうにか片付いたな…！」

辺りにいた感染者の始末を終え、男が真冬の前へと戻る。

男は地面に倒れたままの真冬に手を差し伸べようとしたが、彼女の肩に傷があるのを見てその手を引つ込めた。

「んだよ…お前、もう噛まれてんのか。じゃあ助けるだけ無駄だったな…：…：つたく、余計な体力使っちゃった」

真冬 「なんで…：…：カナを…：…：どうして…：…：どうして…：…：!!」

「カナ?…：…：ああ、この娘の事か。残念だけどどう見ても手遅れだったんで、遠慮なくぶっ倒させてもらった。お前ももうかなり厳しそうだし…：…：楽にしてやろうか?」

金属バットを思い切り振り上げた後、男は冷めた目で真冬を見下ろす…。

その時、二人の前にまた別の男が現れて声を放った。真冬の前にいる茶髪男は二十代前半くらいの年齢だろうが、新たに現れた男は恐らくもう一回り上…：三十代前半くらいといった感じだ。

「穂村君、いきなり走らないでくれ…。私はろくに戦えないのだから、護衛役の君がいなくなったらあつさりと死ぬぞ?」

穂村…というのは真冬の目の前にいる茶髪男の事だろう。ここまで走ってきたその男は真冬の事を見つめた後、穂村の方へ視線を移す。

「…この娘は？」

穂村「もう噛まれた後だった。このまま放ほうっておいても苦しむだけだし、楽にしてやろうかと思ってさ」

「へえ……」

男は真冬の前へ屈み、その顔をじつと覗きこむ。

友人を目の前で殺されたショック…そして感染が始まっている事で真冬の顔はすっかり青ざめており、瞳も虚ろになっていた。呼吸もかなり乱れている…。

真冬「っ…ぐう…っ………！」

「……面白い目をしているね」

真冬の顎をクイツと掴んで間近で呟くと、男は彼女の肩の傷を確認する。真新しいその傷口をいくらか観察した後、男は真冬の日を真っ直ぐに見つめて言った。

「君は…まだ生きていたいかい？」

真冬「ぐ…っ…っ…っ…っ…」

果夏のいない、こんな地獄のような世界でこれ以上生きていたくはない…。その問いを聞いた真冬は口をパクパクと動かすが、もう声が出ない。

穂村「柳さん、まさかとは思うけど……」

柳「ああ、そのまさかだ。この娘に試してみる」

柳と呼ばれたその男はゆっくりと立ち上がり、穂村の目を見てニツと微笑む。柳は何かを期待しているような笑みを浮かべていたが、穂村はムツとした表情を真冬へ向けた。

柳「どうして不満そうな顔をしている？もしかすると、この娘は君に次ぐ第二の成功例となるかも知れないんだよ」

穂村「いやいや、今さらこんな女で試して成功する訳ないだろ…。もつとこう…俺みたいに強そうな人間で試そうぜ」

柳「いくら体が強くても相性が悪かったらそこまでだ。けれど一目見て思った…この娘なら上手くいきそうな気がする。これ以上感染が進む前に屋敷へ連れていこう」

穂村「…柳さんがそう言うのならやってみればいいさ。ま、俺は絶対に無駄だと思っただけね」

地面に倒れている真冬をひよいつと抱きあげ、穂村は柳と共に歩き出す。その後、真冬は近くに停めてあった車の後部座席に乗せられ、そのまま意識を失った…。

~~~~~

真冬「ん…うっ…うっ」

閉じていた瞳をそっと開き、真冬はそのまま何度か瞬まばたきをする。ぼんやりとしていた視界をそうして少しずつハッキリさせていくと、自分分はカーテンで仕切られた空間にあるベッドの上に寝そべっている事が分かった。

真冬「っ…ううっ…」

どれだけの時間眠っていたのか…そしてここはどこなのか…。

それらを確かめようと思いきや起きこしかけた時、ガチャツ…という音が鳴り、真冬はそれに気付く。ベッドの上に横たわる真冬の右手首…そして左足首には手錠のような物あってベッドのパイプ部分と繋がっており、身動きがとれない…。

真冬「なに…これっ…」

右手をグイッと引いてみたり、左手の方でその手錠を弄ったりして

みる……が、手錠は耳障りな音を鳴らすだけでびくともしない。……にしても、本当に耳障りでうるさい音だ。

真冬「っ……まったく……もう……」

どう足掻いても外せそうに無いので、一旦諦めて天井を見上げる……。

ここは一体どこなのだろうか……自分は今、夢でも見ているのだろうか……。

色々な事を考えている内、真冬は自身の服装が通っていた学校の制服ではなく、ダボツとしたシャツと短パンになっている事に気が付く……。見覚えのない服だし、当然着替えた覚えもない……。そうして自身の体を見回す内、左腕の肩に包帯が巻かれている事にも気が付いた。

真冬「……こんなところ、いつ怪我したっけ……」

包帯が巻かれているという事は、その下に何らかの傷痕があるということになる。しかし、そこを怪我した覚えは……。

真冬「……あ……っ」

……一つだけ、心当たりがある。

外にいる感染者と同じになってしまった果夏に、そこを噛まれたような気がした。しかし、真冬は首を横へと振って目を閉じる。自分は彼女に噛まれてなどいないから……。そもそも、果夏だって感染者に噛まれてはいない……。というか、あんな感染者なんて者自体、この世に存在していない。あれは……全部夢だ。

そう思う事にした真冬だが、それらは現実だったとすぐに思い知らされる……。ベッド横にあったカーテンが音を立てて開き、そこから見覚えのある男が現れたからだ。この男は確か……自分が意識を失う前に現れた、柳とかいう男だ。

柳「おはよう。気分はどうかな？」

柳はカーテンを開くなりそばにあったパイプ椅子を引っ張り、ベツ

ドの横へそれを置いて腰掛ける。気分はどうだ…と聞かれても、特に良くも悪くもない…。

「真冬「別に…普通…。」

柳「ふふつ、そうかそうか…。まあ、悪くないのならそれで良い」視線をプイツと逸らしながら答えると柳はニコツと微笑み、着ていた白衣のポケットに手を入れる。そこから取り出したのは小さな鍵であり、柳はそれで真冬の手足にかかっている手錠を外していった。

柳「さて、お腹が空いているようならキッチンに案内するし、シャワーでも浴びたいと言うのなら浴室に案内するよ。どうする？」

：確かに少し空腹だし、シャワーを浴びて体をすつきりとさせたい気もする…。しかしそれらは一旦差し置くとして、真冬には他に気になる事があった。まず…。

真冬「ボク…いつ着替えたんだろう…。」

柳「ああ、それは私がやった。元々着ていた制服は泥や血に汚れていたし、肩の他にも傷が無いか確認しておく必要があったからね」

真冬「な…っ…!!？」

柳の言葉を聞いた真冬はその目を真っ直ぐに見つめ、顔を真っ赤に染める。自分が気を失っている間にこの男に服を脱がされ、体を見られたと知り…。顔が一気に熱くなる。

柳「…怒らないでくれよ？別にやましい気持ちは無かったし、体が必要以上に見てはいない。下着の中までは見ていないから、気にしないで大丈夫だ。穂村君も近寄せなかつたしね」

真冬「…穂村」

その名を聞き、一人の男が思い浮かぶ…。

茶髪の…少しチャラチャラとした男…。奴は確か、果夏を…。

真冬「…ボクの他にもう一人、女の子がいたでしょ…。」

柳「女の子……ああ、いたね」

真冬「その娘は今……どこにいるの……？」

答えを聞くのは少し……いや、かなり怖いけど、それでも勇気を振り絞って尋ねていく。もしかすると果夏もこの柳という男に助けられていて、他の部屋で眠っているかも知れない。いや、果夏の事だ……もうすっかり元気になっていて、すぐここにやって来るかも……。そう、思ったかったのだが……

柳「見たところ彼女は感染が進みすぎていたし、そもそも傷が酷かった」

真冬「………どういう……こと……」

柳「助からなかった、という事だ。彼女は穂村君が処理したが、あれは仕方がない事だった。それより、君の体についてだが——」

真冬「っ……っツツ!!」

柳はまだ何か言おうとしていたが真冬はそれを無視して両手で顔を覆っていく……。そしてそのまま全てをハッキリと思い出し、ベッドに横たわったまま大粒の涙を流した。

真冬「う……ううっ………うあああっつ!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!」

ボクが……ボクが死ねばよかったの………どうしてっ………!!」

あの時、外に出てあの連中と出会わなければ……

あの時、果夏よりも先に自分が感染者を誘き寄せた役をかって出れば……。考えれば考えるだけ後悔してしまい、涙が止まらなくなる。もう果夏の声は聞けない……あの笑顔は見られないのだと思うと、胸がズキズキと痛む……

真冬「やだ……っ………こんな……っ……やだ……っ……やだよ……っ!!」

これでもかというくらいボロボロと泣き続け、枕をびっしょりと濡らしていく……。涙はいくら流しても止まらず、真冬は呼吸を乱しながら横目で柳の事を見つめた。

真冬「あの男……あのっ……穂村って奴はどこ……っ……」

柳「……それを知ってどうするつもりだい？」

真冬「あいつが……あいつがカナを殺したからっ……!! だから……あいつは……絶対に殺してやるっ……!! 絶対っ……絶対ゆるさないっ……っ!」

相変わらず涙を流したまま、真冬はゆっくりと身を起こす。すると柳は椅子からそっと立ち上がり、見下すようにして真冬の事を見つめた。

柳「さつきも言ったが、あの少女はもう助けられなかった。君はただ感染したばかりで傷も浅かったから助けられたが、彼女は違う……あれはもう殺す他無かったんだよ。君だって分かっているだろう？」

真冬「うる……さいっ……! うるさいうるさいうるさいッ!! あの男がカナを殺したっ……! だからボクはっ……あの男を絶対に許さない……!! 誰が何と言おうと……ボクは……ボクはっ……」

本当は、柳の言う通りだと分かっている…。

果夏はもう助けられなかった……だからあの穂村という男の行動に間違いは無かったのだ。本当に責めるべきは果夏をあんな目に遭わせたあの連中……いや、果夏を守れなかった自分自身だ…。

真冬「くそ……っ……くそっ……!! うわあああああつつツ!!!」

何もかも無かった事にしたくて、大声で叫ぶ…。

けど、現実が変わらない。外にはまだあの感染者共がうようよいいるし、自分は変わらずベッドの上……そして、果夏はもういない…。

真冬「こ……ろして……ボクを……殺して……」

柳「悪いがそれは出来ない。君は私の薬を使って生き延びた二人目の人間であり、とても貴重な存在だからね」

真冬「じゃあ……いい……自分で死ぬから……」

ポツリと呟き、ベッドから離れようとする…。

すると柳は座っていた椅子にグツと寄りかかり、呆れた表情を見せた。

柳「穂村君から聞いた話と、あの時の状況から大体の察しはつく。君はあの女の子に…友人に噛まれて感染したのだろうか？」

真冬「……………」

真冬は何も答えなかったが、柳はそれを”yes”と解釈し、話を続ける。

柳「せっかく助かった友達がすぐに自殺したとあっては、彼女も傷付くだろうな…。かわいそうに……………」

真冬「つ…………じゃあ…ボクにどうしろって言うのっ?!?ボクにはあの娘しか…カナしかいなかった…!カナのいないこんな地獄で生きていたって、良いことなんか何も無いっ!!!」

柳「本当に何も無いかどうか…………自殺するのはそれを確認してからでも遅くないんじゃないか?もしかするとまた生きる希望が見付かるかも知れない。新しい友人だって出来るかも知れないよ」

貴重な存在をみすみす死なせたくはなくて説得をしていく柳だが、真冬は顔を俯けたまま動かない…。この時、真冬は柳の口から出た『友人』という言葉聞き、果夏が言った台詞を思い返していた。

『大丈夫、真冬ちゃんは優しく可愛いい子だから…友達くらいすぐに出るよ…』

あの時、彼女はそう言って微笑みを浮かべていたが…それは違う。

自分は可愛くもなければ、優しくも無い。

だから真冬はそつと柳の目を見つめ、力なく呟く…。

真冬「ボクは優しくなんてない。だからもう二度と友達なんて出来ないし、作るつもりもない…」

柳「…そうか。とはいえ、このまま死なれると少し困るんだが…」

真冬「…………分かった…助けられたお礼として少しだけ、あなたに付き合っただけ…。どうせこんな世界で暮らしていたら、自殺なん

てせずともすぐに死ぬだろうし……もう……どうでもいい……」
半ば自棄になりながらの答えだったが、柳は満足そうに微笑んでい
る。

今一つ何を考えているのか分からないその微笑みを見てから真冬
は涙を拭い、ベッドから降り立った……。

~~~~~

真冬「ボクはそれから、柳さんに色んな事を説明してもらった……  
もう感染に怯えなくて良いって事や……体が前よりもずっと強くなっ  
ているという事……。最初は信じられなかったけど、外に出てすぐ分  
かった……。柳さんの言う通りボクは前よりもずっと強くなっていた  
し、奴らに噛まれても平気だった。だからボクはすぐに穂村を殺そう  
と思つて襲いかかったんだけど……いくら強くなつても元々が体力  
の無い女だったからね、同じ薬を使つている穂村には手も足も出せ  
ず、適当に受け流されちゃった……」

当時の事を思い出し、ヘラヘラと笑う。しかしそれを聞いている胡  
桃、美紀、悠里はとても真剣な表情をしており、笑いそうな様子は無  
い。由紀に限つては体育座りしたまま膝に顔を埋め、微かに泣いてい  
るようだった……。

真冬「……今思うと、ボクも心の奥底で気付いてたんだと思う。穂村  
は悪くない、これはただの八つ当たりだ……。だつて本気で殺した  
いのなら後ろから刺すとか、寝込みを襲うとか……いくらでもやりよう  
はあつたもん……。けど、ボクにはそれが出来なかつた……。ただの八つ  
当たりだつて気付いていたから……本気で殺すような事は出来なかつ  
たんだ」

この屋敷にやつて来た当初は毎日のように穂村を殺そうとしたが、  
それらは全て失敗した……。穂村からすると、本当に迷惑だつただろ

う。

真冬「ボクが八つ当たりしてきた相手は穂村だけじゃない…外にいる感染者や、生意気な生存者達…全部思い切り殴って、殺して、奪って、そうやって現実逃避してきた。思い切り戦っている時だけは嫌な事を…カナの事を忘れられたから…」

お別れする前、果夏は言った…。

『私の事なんか忘れて…元気にいるんだよ…?』…と。

…忘れる訳がない。忘れられる訳がない。

そう思っていたのに…様々な者達を相手に八つ当たりし続けていく内、真冬は果夏の事を忘れていった…。果夏の笑顔も、声も、言葉も…全て忘れていた。

真冬「けど、みんなと会って…お話して…またカナの事を思い出した…。で、ボクは思ったの…ボクはカナっていう大切な友達を失って苦しんできたのに、何でこの娘達は何も失ってないんだろう…。何で、こんな世界でヘラヘラ笑っていられるんだろうって…。」

世界がこんなになっても仲の良い友達同士で楽しく過ごしている由紀達がとても羨ましくて、そして妬ましかった…。だから真冬はそれを壊してやろうと…自分と同じ目に遭わせてやろうと思った。

真冬「だからボクはみんなの事を襲って、そして言った…。」胡桃「一人だけを差し出せば他の娘は見逃してあげる」って…。大切な友達が目の前で殺される事の辛さはよく分かっているのに…最低な事をしたよね。胡桃、本当にごめんなさい…。」

胡桃「もういいって…それについては前にも謝ってもらったからさ」

真冬「…ありがとう。あと…由紀もごめんね?つまらない話しちゃって…」。長くて退屈だったよね?」

由紀「う、ううん…っ…私は大丈夫だから…大丈夫だからっ」

膝へと埋めていた由紀は顔を上げ、真冬の目を真っ直ぐに見る。由

紀は瞳から涙を溢れさせており、それをパジャマの袖で拭うと真冬にそつと抱き付いた…。

真冬「あは…っ…どうしたの？何で…泣いてるの？」

抱き付く彼女に応えるようにして、真冬もその背に手を回す。抱き締めた由紀の体はとても柔らかく、温かい…。桃色の髪の毛からは甘い香りがして、抱き締めるだけで癒される。彼女は何故、泣いているのだろう…。真冬がそれを尋ねると、由紀は真冬の首に顔を埋めながら肩を震わせた。

由紀「大変…だったよね…嫌なことだらけだったよね…。独りになつて…寂しかったよね…」

真冬「…うん…寂しかった…。由紀は、本当に優しい子だね。実を言うとな、由紀つて少しだけ…カナに似てるんだ。どんな時でも明るいとことか、子供っぽいとことか…」

由紀の身を抱きながら片手で頭を撫で、果夏の事を思い出す…。彼女の事を思い出すと辛くなってしまふから、これまでは出来るだけそれを避けてきた。しかし、それももう終わりだ。どれだけ辛くとも、あの娘の事はもう二度と忘れてはいけない…。

真冬「あと…笑顔が可愛いところも似てる…。ふふっ、ボクね…カナには内緒にしてたけど、あの子の笑った顔が大好きで…それだ…」

大好きなその笑顔を思い返していく内、胸がズキズキと痛む。どれだけ強く願っても、もうあの笑顔は見られない…。

そう思うと一気に切なくなり、悲しくなり、言葉が詰まってしまふ…。

美紀「…真冬、平気？」

真冬「あ…うん、平気だよ…。前だったらともかく、今はみんながいてくれるから…ボクはもう…もう…っ…」

みんながいるからもう大丈夫だ。カナがいなくても平気だ。心の中で何度も何度も呟き：自分に言い聞かせる。しかし、胸の痛みは止まらない。

悠里「：真冬さん、我慢しないで良いのよ。言いたいことがあるなら：吐き出したい気持ちがあるなら、私達が受け止めてあげるから」優しい眼差しを向け、悠里が言った…。

彼女はきつと、真冬が無理している事に気付いていたのだろう。

真冬「ボクは……我慢なんて……」

悠里「はいはい、ほら、こっちおいで」

真冬「わ：っ……!?!」

悠里は室内に敷かれているカーペットの上に座ったまま両手を広げ、真冬を招く。真冬はそれを拒もうとしたが、抱き付く由紀に身を突き飛ばされ、思わず悠里の胸へと飛び込んでしまった…。悠里は真冬がそこに来るなりその背中に片手を回し、そして頭を優しく撫でる。その手付きは優しさに満ち溢れており、真冬目はじわじわと潤んでいった…。

真冬「その…ね……ボクは…みんなと会えて変わったけど、でもっ……」

悠里「うん……」

真冬「やつぱり…ね……あの子が……カナがないのは…寂しい…っ……すごく、すごく寂しいよ…」

出来るのなら隠していたいと思っていた気持ちが、どんどん溢れ出す。果夏に会えないのが辛い…。果夏とお喋り出来ないのが辛い…。真冬は悠里の胸に顔を埋めながらそれらを口に出し、子供のように泣いた…。あまりに大泣きし過ぎてみともないかと思っただが、由紀も美紀も胡桃も…温かい視線を向けるだけで何も言わない。悠里もまた、優しく頭を撫で続けたまま話を聞いてくれている…。本当に優しい人達だと、真冬はそう思った…。

真冬（カナ……ボクね、新しい友達が出来たよ……）  
心の中で呟き、涙を流しながらもニコリと笑う……。

この世界は大きく変わってしまったし、もう果夏もない……。

しかし、それでも生きる希望を見付ける事が出来た。これから先は彼女達と共に楽しく、明るく生きていこう……。真冬は……そう決意した。

胡桃「……寝ちやったのか？」

悠里「ええ、泣き疲れたのかもね……」

しばらく泣き続けた後、真冬は悠里の膝を枕にしながら眠ってしまい、心地よさそうに寝息を放つ……。悠里は彼女の目から溢れている涙をパジャマの袖でそっと拭うと、その頭を優しく撫でながら呟いた。

悠里「この娘も大変な目に遭ってきたのね」

胡桃「……ああ、本当にしんどかったんだろうな」

胡桃は悠里の隣へと身を移し、その膝で眠っている真冬の頭を撫でながら切ない表情を見せる……。美紀もまた真冬の寝顔を見つめたまま瞳を細め、深いため息を放ってから口を開く。

美紀「大切な友達が目の前で……なんて、酷すぎる……。私が真冬の立場なら、そのカナって娘を殺した連中をいつまでも探し続けると思います。もしかすると、真冬は今もその連中を探していたり……」

悠里「……どうなのかしらね」

由紀「けど、もし真冬ちゃんがその人達を探してたとして……もうやめたら？なんて言えないよ……。同じ事をされたら、私だってその人達を……」

由紀は真冬の寝顔を見つめたまま、自身の膝の上に置いた拳に力を込める。真冬をそんな目に遭わせた連中に対し、強い怒りを感じているのだろう……。あの由紀がこんな風に怒るところはあまり見たこと

が無かった為、悠里と美紀は目を丸くし、胡桃は小さく鼻で笑う。

胡桃「お前でも、そんななって怒る時があるんだな」

由紀「そりゃ怒るよっ!!だって…もしも目の前で胡桃ちゃんが酷い目に遭わされちゃったら…：りーさんや、みーくん…それに彼や真冬ちゃんが酷い目に遭わされたら…：私だって怒るよ…：。相手の人を絶対に許さない…許せないよ」

胡桃「…：そうだな、あたしも許せない」

もしも自分の目の前で大切な友達を殺されたら、どれだけ時間をかけてもその相手に復讐しようと誓うだろう…。猫のように体を丸めながら眠る真冬を…泣き続けた事で真っ赤に腫れたその瞼を見つめた後、胡桃は悠里の方を見る。

胡桃「起こすのも悪いよな…：どうする？部屋に持っていこうか？」

悠里「…：いいえ、今日は私の部屋で寝かせておいてあげるわ。ベッドも広いから、二人くらいなら一緒に寝られると思うし」

胡桃「…：そっか」

膝の上で眠る真冬を撫でながら微笑む悠里はまるで母親か何かのように見えてしまい、思わず胡桃の頬が緩む。するとその横では由紀が小さく頬を膨らませ、どこか羨ましげな視線を向けていた。

由紀「いいなあ…：私もりーさんと一緒に寝たいよ。一人の部屋って落ち着かないんだもん」

美紀「あはは、確かにそうですね。これまではみんな一緒に寝てきましたから、一人だどことなく落ち着かないんですよね」

悠里「じゃあ…：今日はみんな一緒に寝ましょうか？ベッドは…：さすがに入りきらないけど、床に布団を敷けばどうかなると思うわよ」

悠里が言うと由紀はすぐに『うんっ！そうしよう♪』と言い、満面の笑みを見せる。確かに、たまには女子だけで寝るのも良いだろう。その後、悠里は真冬をベッドの上に移してからそばの床に由紀、胡桃、



美紀の寢床となる場所を用意し、みんなと共に一日を終えた。

## 『二人目の被害者』

真冬「うう……えつと……これは……」

朝、ベッドの上で目を覚ました真冬は自身のすぐ隣にパジャマ姿の悠里が眠っているのを見て冷や汗を流す。いったい、これはどういう状況なのだろう……。少し焦りながら考える真冬だが、その答えはすぐに出た。昨夜この部屋で……悠里の部屋でみんなを相手に自身の過去を打ち明けた直後、自分はそのまま眠ってしまったのだろう。真冬は昨夜の事を思い出し、顔を真っ赤に染めていく。

真冬「みんなの前で、いっぱい泣いちゃった……。恥ずかしい……」  
悠里と共に使っているベッドのすぐそば、室内の床では由紀達が布団を敷いて眠っている。みんなはあの後、また別の話でもしたのだろうか……それともすぐに寝たのだろうか。真冬は眠っているみんなを起こさないようにゆっくり起き上がろうとするが、その前に……

真冬「少しだけ……少しだけ……」

起こしてしまわぬように気を付けつつ、悠里の方へ身を寄せる……。昨夜、悠里に抱き締められて分かった。彼女に身を寄せていると安心することができ、とても心地よい。だからその感覚を再び味わおうと身を寄せていったのだが、昨夜は気にもしなかった一つの事が今になつてやたらと気になる……

真冬（……悠里って、本当に胸が大きいな……）

身を寄せてみる度、彼女の大きな胸が自身の体へふにふにと当たる。年齢は一つしか違わないのに、この絶望的なまでの体の違いは何なのだろう……。真冬は自身の胸を両手で揉みつつ、その手の一方を悠里の胸へと添える……。薄手のパジャマ越しに触れる悠里の胸は恐ろしいくらいに柔らかく、真冬は戦慄した……

真冬（す、すつごく柔らかい……！）  
いいな……。羨ましいな……。

なんて事を思いつつ、真冬は悠里の胸を触り続ける。

大きい胸なんて邪魔なだけだ……。なんて言った事もあるが、それはただの強がり……。本当は悠里のように立派な胸が欲しかった……。いや、そこまで高望みはしない。せめて、美紀くらいの胸が欲しい。

真冬は自身の”少くしだけ膨らみがある程度の胸”が嫌だった。

もっと女性らしく、魅力的な胸が欲しい……。それさえあれば、穂村にだってバカにされないだろう。

その後、真冬は暫しの間悠里の胸の大きさ、柔らかさを味わってから良いタイミングでみんなを起こし、朝食を済ませ、リビングで雑談を始めた。

真冬「あ……。そう言えば、彼の調子はどうだった？」

胡桃「ああ、だいぶ良さそうだったよ。あの調子なら多分、明日か明後日くらいには復活するかな」

部屋まで朝食を届けに行った胡桃曰く、彼の風邪も回復してきているらしい。それが関係あるのかは分からないが、今日の胡桃は何時にも増して上機嫌に見える。

真冬「やっぱり、彼が元気無いと寂しい？」

胡桃「まあ……。張り合いは無いよな……。あいつ、どつちかって言う騒がしいタイプの人間だからさ、それが静かになつたとすると落ち着かなくて……」

真冬「へえ……。けど、ボクはある日突然穂村が無口になつても何とも思わないよ。……むしろ嬉しくなるかな？」

美紀「それはまあ……。相手が相手だし……」

美紀が苦笑いしながら言う。胡桃も苦い笑みを浮かべ、悠里も同じように笑う。穂村はついさっき圭一と共に外へ出掛けたのだが、その前にわざわざ悠里へそれを報告しに来た。悠里の口から『いつてらっ

しやい』という言葉聞きたくてやって来たらしい…。

由紀「リーさんが挨拶してくれると、ほむさんすっごく喜ぶよね」  
悠里「ええ…そうね」

真冬「悠里は優しいね…。たまには、『そのまま帰ってくるな』くらい言っても良いんだよ？」

悠里「もう、そんな酷いこと言ったらかわいそうでしょう」

真冬「いいんだよ、相手は穂村なんだから…」

とことん穂村の扱いが雑だなあと思い、一同苦笑みを浮かべる…。まあ、確かに穂村のようなタイプはこういう扱いで良いのかも…  
と思わない事も無いが。

悠里「でも、由紀ちゃんも穂村さんには優しくしてるわよね？」

由紀「うん！ほむさん、そんなに悪い人じゃないと思うよ」

真冬「……………そうだね、それは分かってるよ」

リビングにあるソファアに座った真冬は顔を俯け、微かに微笑む。色々と酷い扱いをしてきてはいたものの、真冬も本心では穂村の事を信頼しているのだろう…。と、思ったりもしたのだが……………

真冬「ボクの事を見て『ペツタン娘だ』って言ったり、悠里の胸を見てニヤニヤしたり、みんなが大浴場に入る度に覗こうとしてくるけど……………それでも悪い人じゃないんだよね…。分かってるよ」

由紀「え、えつと……………ほむさん、覗きしようとしたの？」

真冬「うん。みんなが一緒にあの浴場を使う時、穂村はどこからともなくその情報を聞き付けてやって来る…。ま、その度にボクが邪魔してるから、今のところ全ての覗きは未遂で終わっているけどね……………。だからあの浴場を使うのは穂村がいない時だけにして、普段はそれぞれの部屋にある浴室を使った方が色々安全…」

真冬の口からその事実を聞き、さすがの由紀も苦笑いしか出来ない…。

お人好しな由紀は穂村が善人だと信じていたようだが、真冬は容赦

なく事実を突き付けていく。それが終わった後はまた他愛の無い雑談を始めていったのだが、真冬はその時ふと、ある事が気になった…。

真冬「今さらだけど、由紀と悠里は同じ年なんだよね？」

悠里「ええ、そうよ。それがどうかした？」

真冬「…悠里はどうして由紀の事だけ、ちゃん付けで呼んでいるの？胡桃の事は呼び捨てにしているのに…」

悠里「えっ？それは…うん…」

確かに由紀の事は「ずっと」由紀ちゃん」と呼んできた…。

ただ何でそう呼ぶのかと聞かれるとどう答えたら良いのか分からず、悠里は上の方に顔を向けながら唸り声をあげる。

真冬「せっかくだし、別の呼び方も試した方が良い…。ほら、由紀の事を呼び捨てで呼んでみて」

由紀「えへへ、何かドキドキするね」

由紀は真冬の提案に乗り気らしく、悠里の顔を見つめたままニコニコと微笑む。それを見た悠里は微かに頬を赤く染めながら顔を俯け、目の前に立つ由紀を上目で見つめた…。

悠里「じゃあ…その…ゆ、由紀…？」

由紀「はーい！悠里ちゃん、どうしたの？」

悠里「っ…悠里ちゃん!?も、もうっ！由紀ちゃんったら、すぐにぶざけるんだからっ!!」

由紀「えへへ、ごみんごみん。せっかくだから私もりーさんの事、いつもとは別の呼び方で呼んでみようと思っただ。けどやっぱりーさんはりーさんって呼ぶのが一番しっくりくるね」

悠里「まったく…もうっ」

由紀に初めて「ちゃん付け」で呼ばれた悠里は真っ赤な顔で怒ったものの、その後はソファアに座ってニヤニヤしたまま余韻に浸っているかのように見えた…。何時もとはまた違う呼ばれ方というのも新鮮で楽しかったのだろう。

その後、真冬は悠里達と共に何気ない話をして共に笑い合い、共に騒いだ。何て事無い、普通のお喋りをしながら友達と共に過ごす時間……それはとても心地が良くて、温かくて、幸せで……

真冬（カナ：キミもここにいてくれたら、もつと楽しかったんだらうね…）

ふとそんな事を考えてしまい目頭が熱くなる…。

真冬はそつと顔を俯けて涙溢れるその瞳を隠したが、彼女の隣…そこに座っていた美紀に顔を覗き込まれてしまう。

美紀「……………」

真冬「あ……………うっ…」

美紀は涙ぐむ真冬を見ても何も言わず、ただ優しい笑みを浮かべてその手を握った…。どうして真冬が涙ぐんでいたのか、それを察してくれたのだろうか。少しだけ照れくさいが、真冬もその手をそつと握り返して涙を拭った…。

これから先、何があっても彼女達の事を守っていこう…。

真冬はニツコリと微笑み、そう決意したが……その日の夜、人知れずとんでもない事件が起きてしまった。そして真冬はその事件から……あの娘を守りきることが出来なかった…。

~~~~~

事の発端はその日の夜、皆との夕食を終えた悠里がリビングで一人休んでいる時の事だった…。食後のお茶を楽しみながらこの屋敷に残っている食料、薬品類等の在庫状況を使い古しの家計簿に書き記していた時、リビングの扉がバタンツ！と開く…。何かかと思い悠里が振り向くと、そこには妙なニヤケ顔をする穂村が立っていた。

悠里「どうかしました？」

穂村「いえ……別に何も……。ただ、寝る前にリーさんの顔を見ておきたいなあと思ってね」

悠里「……ふふっ、私の顔なんて見ても面白くないでしょ」

穂村「いやいや、リーさんはマジで綺麗なんで、かなり癒される！……と、それは何してんスカ？」

悠里「この屋敷の物資がどれだけ残っているか：分かりやすく記していたんです。柳さんがね、どういう物資がどれだけあるのか全く把握できてないって言って困っていたから、少しお手伝いしようと思つて……」

本来なら柳が自分でその状況確認をしようとしていたようだが、柳は柳で色々と忙しいらしい……。なら代わりに自分が……と悠里が言うと、柳は喜んでその役を任せてくれた。家計簿をつけるのは巡ヶ丘学院高校にいた時からやっていたし、わりと慣れている。悠里は開いていたその家計簿をパタリと閉じ、ニツコリと微笑む。

穂村「……そ、そんな面倒な仕事をしてるってことは……リーさんも少しばかり疲れてんじゃない？これでも飲んで休んだ方が良いでしょう！」

悠里「んっ？」

穂村は右手に持っていたペットボトルを悠里の前へと置き、側にあったソファへ勢いよく腰かける。目の前に置かれた透明のペットボトルには何のラベルも無く、中に入っている液体も綺麗に澄みきっていた……。

穂村「あ、ああっ……それ、水つすよ？本当に本当に……ただの水つすよ！」

悠里「お水……？」

穂村「はいっ！水つす!!」

悠里「へえ……ありがとうございます。また後で飲ませてもらいますね」

今はまだお茶を飲んでいる途中なので、正直言って水なんていらな

い……。しかしせっかくの好意を無下にも出来ない為、悠里は穂村に向けて優しい笑みを見せた。するとその瞬間、穂村の目が落ち着き無く泳ぎだす……。

穂村「えつと……今は飲まないんで？」

悠里「え、ええ……もう少ししたら飲ませてもらおうかな……」

穂村「……そうっすか……」

穂村はそう呟き、ソファアの上に座ったまま十分以上……悠里の事だけをじつと見つめる。まるで、”お前がそれを飲むまでここを動かない”というような覇気が伝わってきた。

悠里（い、今飲まなきやダメなの……？）

無言のまま視線を浴びさせられて居心地が悪くなってしまい、悠里は苦笑いする。あまり見つめられても困るので、早くどっか行って欲しい……。そんな思いが通じたのか、穂村はスツと立ち上がって歩き出し、廊下へ続く扉に手をかけた。

穂村「……ちよつとトイレ行ってきます」

悠里「ええ、ごゆっくり……」

かなり限界が近かったのか、穂村は額に冷や汗を浮かべてその場を立ち去り、廊下を駆けていく。そんなになるまで我慢せず、早く行けば良かったのに……。それとも、多少の我慢をしてもこの場にいたい理由が……いなくてはならない理由があったのだろうか……。

悠里「……ふう」

お茶を飲み終え、悠里は一息つく……。

家計簿もつけ終えたし、このあとは由紀達と共にお喋りでもしよう……。

そう思っただけでゆっくり席から立ち上がると、リビングの扉がゆっくりと開く。現れたのは、黒のタンクトップに赤色の短パンというラフな格好をした胡桃だった。

胡桃「何だ、まだここにいたのか？」

悠里「ちょうど今、皆のところに行こうと思っていたわ」

笑顔で答えると胡桃は『そっか』と返事を返し、リビング奥に置かれていた風邪薬を手取る。体調の悪い彼に飲ませるべく、予め置いておいた物だ。

胡桃「あたしもアイツに薬を飲ませて、少し様子を見てからそっちに行くかも知れない。ところで……これって水か？」

悠里「あっ……うん、水よ。必要なら持って行っていいわ」

胡桃「サンキュー。薬飲ませるのに必要だったからちようど良かったぜ」

胡桃は右手に薬ビン……そして左手にそのペットボトルを持ち、リビングを後にした。あの水は穂村から貰った物だが……正直必要の無い物だったし、胡桃に……というより彼にあげても問題無いだろう。そう思ったのだが……

穂村「あの水……飲まなかったんすか!？」

胡桃から少し遅れてリビングを後にした際、廊下で出会った穂村に驚いたような顔をされてしまった。

悠里「ええ、ごめんなさいね。彼が薬を飲むのに水が必要だったから、胡桃に渡しちゃった……」

穂村「……マジかよ、そりゃ……色々とヤベエな……」

穂村はその場にガクツと崩れた後、またゆっくりと起き上がってその場を立ち去る。貰った物をすぐ別の人にあげたのは確かに申し訳ないと思うが、あれはただの水だ……そこまで落ち込むような物でも無いはずなのに……

悠里（私があの水を飲まなかったのがそんなにショックなのかしら？うん……何を考えているのか、よく分からない人ね）

立ち去る穂村の背中を見つめながら首を傾げ、悠里は由紀の部屋へと向かう。その一方、彼の部屋に行っていた胡桃はベッドの端に腰を下ろし、そこで横たわっていた彼に風邪薬と水の入っているペットボトルを手渡していた…。

胡桃「ほら、しっかりと飲めよ」

「どうも……………んっ…っ?!?…この水…変な味するんだけど…」

胡桃「はあっ？マジ？」

彼からそのペットボトルを受け取り、中身を見てみる…。

見た限りでは何て事無い、普通の水のようにだ。変な匂いもしない…。

胡桃「勘違いじゃないか？薬の方が不味かったとか…」

「いや、そんな事は無いと思うけど……………一口飲んでみ？」

胡桃「えく…やだよ」

そんな事をしたら、間接キスになってしまう…。

胡桃は微かに頬を染めながら、そのペットボトルと薬ビンをそばにあった小さなテーブルの上へと置く。水の味がどうという事はさておき、彼は薬をしっかりと飲み終えたようだ。

胡桃「…具合はどうだ？」

「おかげさまで、かなり良い…。明日には復活出来そうだ」

胡桃「そうか、なら良かった」

確かに、彼の顔色はかなり良くなっている。この調子ならもう大丈夫だろう…。彼の風邪が治った事に安堵する胡桃だったが、それから数分後……………突如彼の顔が真っ赤になっていった…。体温もかなり高くなっているようだ。

胡桃「お、おいっ！大丈夫か？顔真っ赤だぞっ!？」

「…わかんない…。ヤバイ…かも……………頭、クラクラする……………」

彼はベッドの上に座ったまま、両手で頭を抱えて呼吸を乱す…。

ついさつきまでは普通だったのに、胡桃と少しお喋りをしていたら一気に顔が…体が熱くなってきた。しまった。

「くそ…っ……………」

「視界が霞み、息をするのも苦しくなる…。」

これは風邪がどうかさという感覚では無い…もつと別のものだ…。

胡桃「ちよ、ちよつと待ってろ!!柳さんを呼んでくるっ!」

明らかに普通ではないその様子を見た胡桃が、大慌てでベッドを降りようとした……………が、彼は彼女の右手を掴み、静かに口を開く。

「…いいから…………くるみちゃんは…………ここに…」

胡桃「バカっ!良くないだろう!!あたしだけがここにいたって仕方ねえんだから、柳さんに診てもらった方が——」

「いいからっ、少し大人しくっ…!!」

胡桃「っ…………!?!」

彼女の手を掴んだまま大声を出し、乱れかけていた呼吸を整える…。

胡桃は驚いたように目を丸くしていたが、この時…彼自身も自分の行動に驚いていた。自分は何故、彼女の手を掴んだのだろう…何故、彼女をここにどめようとして大声を出してしまったのだろう…。

(もう、何も分からない…………ただ今日は…今は…………この娘が…凄く…………)

胡桃の事が、この上無いくらい愛しく思える…。

前々から可愛い娘だと思っていたが、こんなにも可愛いとは思わなかった。胡桃の顔も、髪も、体も、声も…………全てが異常なくらい魅力的なものに思える。

「…くるみ…っ…」

虚ろな目をしながらその名前を囁き、彼女の首筋に顔を埋める。その直後、彼は胡桃の体を無理やりベッドの上へと押し倒した…。当然、胡桃は顔を真っ赤にして抵抗を始める。

胡桃「ちよ…っ…!!? な、何すんだよっ! 離せって!!」

突然の事に驚いた胡桃は手足をバタつかせるが、彼は微かに赤い顔のまま表情一つ変えること無く胡桃の抵抗を押さえつけていく…。まるでロボットか何かのように淡々とした手付きで胡桃の右手…そして左手を一纏まりにして片手で掴み、それを彼女の頭上に押さえつける。直後、彼はその両手を押さえたまま胡桃の腹部へと跨がり、彼女の事をじつと見下ろした。

胡桃「あっ…っ…っ…や、やめろよ…っ…」

こちらを見下ろす彼の目はどこか冷たく、まるで別人のようだ…。これがただの悪ふざけならまだ良いのだが、彼の目を見るにそうは思えない。この後…彼は何をしてくるつもりなのだろう…。

胡桃は最悪のパターンまでも想像し、顔を真っ赤にして震えた…。

『ヒーロー』

胡桃「んっ…っつ!!」

ベッドの上でジタバタと抵抗する胡桃の手足をしっかりと押さえ込んだ後に腰の上へ跨がり、彼はその顔を見下ろす…。どうしてこうなったのか…どうしてこんなことをしてしまっているのか…自分でも理解出来ない。何だか胡桃の事がやけに魅力的に思えてしまい、気付けば彼女の事をベッドの上へと押し倒していた…。

胡桃「おい、ほんとに…どうしたんだよ」

「さあ…どうしたんだろうな」

何でこうなったのか…自分でも分からずに彼は苦笑いする…。

本当なら今すぐにでも胡桃から離れて謝るべきなのだろうが、体が全く思い通りにならない。じわじわと赤く染まっっていく胡桃の顔を見れば見るだけ愛しさが増してしまい、その身にもっと触れたくなってしまう…。彼の右手は考えるよりも早く動き、胡桃の着ている黒のタンクトップへと伸びた。

胡桃「うおっ!?!お、おいっ!!」

服の裾を掴まれた胡桃は大慌てで抵抗を試みる…。が、両手は彼の左手によつてしっかりと押さえつけられていて動かせない。彼の力がこんなにも強いなんて知らなかった…。両手が動かせない胡桃はせめてもの抵抗として身を揺らす、大した効果は無い。彼は体に跨がったままそのタンクトップを一気に捲り上げ、無理やりに脱がしていく…。

胡桃「っ!!やめ…っ…!」

スルツと捲り上げられていったタンクトップはそのまま胡桃の頭や両手から抜けていき、ベッド横へと投げ捨てられる…。その際、胡

桃は一瞬の隙を突いて彼の手を振りほどいて自らの両手を自由にし、その手で胸元を覆い隠した。身の上に跨がったままこちらを見下ろす彼の視線から、少しでもそこを隠せるようにと……

胡桃「お前っ……これ以上おかしな真似したら……本気で……!!」

本気で怒るぞ……と言うつもりだったが、緊張のあまり口が動かなくなってしまう。ベッドの上で彼に跨がられ、服を脱がされてしまい、顔がジリジリと熱くなる……。いや、顔どころか頭の中まで熱くなっているような気がして、胡桃は落ち着きなく瞳を泳がせた。

「……今日の胡桃は、何時にも増して可愛いな」

胡桃「な……!!? な、何を言ってる……」

突然の言葉に耳まで熱くなる感覚を覚える胡桃だが、彼は彼女が戸惑うのもお構い無しに顔を寄せると、今度は耳元で言葉を放つ……

「こんなに可愛い女の子……誰にも渡したくない。だからさ……胡桃はずっと僕の……俺の側にいてよ。いっぱい、いっぱい愛してやるから……」

胡桃「な……?! な……っ?!?」

耳に寄せられた唇が触れてしまうくらいの距離で囁かれ、胡桃の顔はタコのように赤くなる。何時もとは明らかに違う彼の様子に戸惑う胡桃だが、彼はそんな胡桃を見て満足げに微笑んでいた。

「手……どかさうか」

胡桃「やっ……やだっ……」

胸元を隠していた胡桃の両手は彼の手に掴まれ、無理やりに胸元から離されていく……。胡桃も抵抗はしたが、やはり彼の力には敵わない。彼女の両手は胸元から完全に離され、隠していた胸元を彼の視界へと晒す……。小さなフリルが付いた緑色のブラジャーと、それに包まれている胸の谷間……。只でさえ胡桃に夢中になっている彼がこの光景を見て興奮しない訳が無い。その証拠に、彼の吐息は少しずつ荒く

なっぺいった。

胡桃「っあ……っ……うう」

彼が胸元を凝視している間、胡桃は瞳をギュツと閉じて震えた…。

胡桃の呼吸は彼以上に荒くなっぺいったおり、閉じている瞳からは涙が溢れかけている。いつの間にか両手も自由になっぺいったが、緊張と恥ずかしさのあまり動けない。

胡桃が小さく震え続ける一方、彼はその胸元を眺めたまま右手をスツと伸ばし、彼女の腹部を手のひらで撫でた…。ヒンヤリと冷たくてスベスベした肌に触れた瞬間、胡桃の体がピクツと跳ねる。

胡桃「っ…！」

「…冷たい」

腹部を撫でた勢いそのまま右手を動かし、胡桃の太ももや首筋、頬を撫でてみたが…そのどれもがヒンヤリと冷たかった。恥ずかしさのあまり真っ赤に染まっぺいった肌はとて熱そうなのに、触れてみると驚くくらいに冷たい…。

いくらか触れていたら熱くなるのだろうか…。熱くなっぺいった所は無いのだろうか…。胡桃の事をもっぺいった深くまで知りたくなり、彼女は彼女の履いていた短パンに手をかける。

胡桃「っ!!も、もうやめようぜ?ほんの冗談…なんだよな?」

短パンに伸びていた手をガシツと掴み、胡桃は額に汗を浮かべながら力無い笑みを浮かべる。冗談なんかじゃないと分かってはいるが、こうやっぺいった言えれば彼もやめるタイミングを見付けられると思っぺいったが、やはり止まっぺいったはくれない。

「…冗談なんかじゃない。胡桃の事が…本当に好きだ」

胡桃「……そ、そんな……」

彼は短パンにかけた手に力を入れ、それを脱がしていく…。太ももから膝へと下ろしたところで短パンの下に履いていたショーツが露

となり、胡桃は真つ赤な顔を横へと背けた…。ブラジャーと同じ緑色をした可愛らしいショーツを見てゴクリと喉を鳴らしたところで、彼は彼女の短パンを爪先から抜いてまたベッドの横へと放り投げる。

「…くるみ」

胡桃を下着姿にしたところでその頬に手を伸ばし、もう一方の手で頭を撫でる…。そうしたまま彼女の上に覆い被さり顔を寄せると、胡桃は横を向いたまま小さく口を動かした。

胡桃「ほ…んとに…好きなのか…？あたしなんかの…事が…」
その口から出た声は震えており、胡桃はそれだけを言ってから視線を彼の方へと向ける…。彼は胡桃の頬に添えていた手に力を込めてその顔をこちらへ向かせると、彼女の前髪を捲つてから互いの額を触れ合わせる…。これまで無いくらいに顔が近くなり、胡桃の瞳が大きく開く。

「…好きだよ。誰よりも愛してる…」

胡桃「っ…そんなこと言われても…あたし、どうすれば…」
彼からの告白を聞き、頭が真つ白になるようなボンヤリとした感覚が胡桃を襲う。どう答えるのが正解なのだろう…。あれこれ考えていると、眼前にいる彼が小さく眩く。

「胡桃は俺の事が嫌い…？」

目の前にいる彼の雰囲気や口調がいつもと違うのは、それだけ本気になってくれているからという事なのだろうか…。胡桃は少し戸惑いつつ、彼と自分の額を触れ合わせたまま微かに首を動かした。

胡桃「嫌いってことは…無い…。お前はさ…あたしらにとってヒーローみたいな存在なんだよ…」

「…ヒーロー？」

胡桃「…ああ。お前って変なヤツだし、どうしようもないなあつて

呆れる時もあるけど…それでもわりと頼りにしてるし、信頼だつてしてるんだ。だからお前はみんなにとつて…少なくとも、あたしにとつてはヒーローみたいな存在で…」

自分でも何を言っているのか分からず、視線が落ち着きなく泳ぐ…。しかし、彼の事を信頼しているというのは胡桃にとつて紛れも無い本心だった。

胡桃「だからさ、上手く言えないけど…あたしも、お前の事が…」
そこまで言った後、胡桃は彼の目を見つめたまま震えるだけで口を動かさなくなってしまう…。続きの言葉が出せず、困惑しているのだろう。胡桃の瞳はまた涙に潤み、それが溢れかけた時だった…。

彼がそつと顔を動かし、自身の唇と胡桃の唇を重ねた…。

胡桃「んっ…!?!」

互いの唇が重なった瞬間、胡桃の瞳が大きく開く。

彼とキスをしてしまった…彼とキスをしてしまった…。

それを実感した胡桃の顔はまた一層に濃い赤に染まり、大きく見開かれた瞳から涙が溢れる。しかし彼はそこから離れようとせず、胡桃の唇の感触を味わっていた…。ふにっとしていて柔らかな唇は先程触れた頬や腹部と同様にヒンヤリとしている。…が、興奮して体が火照っている彼にとつてはその冷たさがかえって心地よい。

「っ…くるみ…」

胡桃「だ…だめっ…だめ、だつて…っ…!」

一回目のキスは大人しく受けてしまった胡桃だが、続いて放たれたキスに関しては抵抗を見せる。彼の胸を両手で押しながら、顔を横へと背けていくが…

胡桃「ん…!んっ…っ…」

結局は二度、三度とキスされてしまい、小さく肩を震わせる…。

彼とキスするのが嫌だ…という訳ではないのだが、自分にはこれ

を拒まなくてはならない理由がある気がした。しかし、頭がボーッと
してしまつてそれが何なのか分からない…。

胡桃「っ…あ…。」

幾度目かのキスの途中、彼の右手が胡桃のショーツに引つ掛かる。
彼は右手の親指だけをショーツの端へと引つ掛け、それをゆつくり
と下げていこうとした…。当然胡桃はそれに気付いたが、決して抵抗
はしない。彼とキスしていく内にビリビリと痺れるような感覚が全
身を走り、思考が鈍くなつていく…。

胡桃「ん…う…っ…。」

重なつていた唇を離し、胡桃は視線を下げる…。

彼の手によつて少しずり下ろされていく緑色のショーツを見
つめながら、胡桃は吐息を荒くした。

ただ風邪薬を渡しにきただけだったのに、自分はこのまま彼とそう
いう関係になつてしまふのだろうか…。

胡桃（いや…もう、それでもいつか…。）

思い返してみれば、これまで色んな事で悩んできた。

だから今日くらいは難しい事など考えず、流れに身を任せても良い
かも知れない…。胡桃は静かに瞳を閉じ、全てを受け入れる覚悟を決
めた…。

と…その時、二人のいる部屋の入り口から”コンコンツ”とノック
音が響き、続いて”ガチャツ”と扉の開く音がして、そこから一人の
人物が顔を覗かせる。

美紀「あの、すいません、ここに胡桃せんぱ——」

扉の向こうから顔を覗かせていたのは美紀だった。

彼女は胡桃を探してこの部屋へとやつて来たらしく、彼へ向けた言
葉を放ちながら部屋の中へと上がり込む…。美紀が予想していた通

り、胡桃はこの部屋にいたのだが……

胡桃「っ……あ……」

その胡桃が下着姿のままベッドに横たわり、彼とキスをしている最中……というのは流石に予想していなかったのだろう。ベッド上の彼と胡桃を見た美紀は最初の数秒間、何も言わずに佇んでいた……。しかし、その顔は段々と赤くなっていき……

美紀「ご、ごめんなさいっ!!」

と、一言だけ謝ってからすぐにクルツと振り返り、美紀はそのまま部屋を出ていった。凄まじい勢いで部屋を出ていった彼女を見た後、胡桃は彼と見つめ合う……

胡桃「……?!? や、やばっ……!!」

少しの間彼と見つめ合った後にゆっくりと思考が働き始め、とんでもない光景を美紀に見られてしまった……と胡桃は焦る。胡桃は大慌てで彼の身を押し退け、ベッド横に投げ捨てられていた衣服を着直していった。

胡桃「おい、大丈夫か？」

「ん、ん……」

たった今押し退けた直後から、彼の様子がどうにもおかしい……

彼は右手で頭を抱えたまま静かに悶えており、どこか具合が悪そうだ。

胡桃「……っ！ちよつと来いっ!!」

少しずつ冷静な判断が出来るようになってきた頃、胡桃の脳裏に嫌な事が思い浮かぶ。彼女はそのまま彼の腕を掴むと勢いよく部屋を飛び出し、柳の部屋へと真っ直ぐに向かっていた。

胡桃「柳さん！ちよつといいか!？」

扉を開けてすぐに言葉を放ち、奥にいた柳の返答を待たずにズカズカと上がり込む。そうして部屋の隅にあつた椅子を引つ張ると連れてきた彼をそこへと座らせ、胡桃は柳の方へと進む。柳は部屋の奥にあるデスクの前で椅子にもたれ、くつろいでいたようだった。

柳「おお、こんな夜にどうしたのかな？」

胡桃「そのっ…アイツの様子がおかしくて…。それで、もしかしたらあたし…アイツにウイルスを移しちゃったかも知れなくて…」

柳「移した？ええつと…どういう事かな？」

座っていた椅子を動かして身をこちらへと向けた柳を前にして、胡桃は少しだけ言葉を詰まらせる…。しかし、彼の為には全て言っておかなくてはダメだろう。胡桃は柳の顔を真つ直ぐに見つめると、小さな声で呟いていく。

胡桃「キスしちゃった…。だから、それがきつかけで…。」

彼とキスした時に感じた不安の正体はこれだった…。

あの時は思考が鈍くなつていて忘れていたが、自分はウイルスに感染している。だからそんな自分とキスなんかしてしまつたら彼にもそれが移ってしまうのでは…という不安。胡桃が静かに口を開くと、柳は小さく頷いて立ち上がる。

柳「…なるほどね。よし、じゃあ恵飛須沢君はあつちで待っていてくれ。彼に異常が無いかどうか、調べておくよ」

胡桃「うん…頼む」

恥ずかしそうに…それでいて申し訳なきように頭を下げる胡桃を部屋の隅に座らせた後、柳は彼を連れて部屋の奥へと行く。カーテンで仕切られた空間にある椅子の上に彼を座らせていくらか調べた後、柳は苦い表情を浮かべる…。

柳「これは…まさか…」

「…ヤバイですか」

この部屋に連れてこられた当初はぐったりとしていた彼も今は落ち着きを取り戻し、柳と同じ様な苦い表情を浮かべていた。

柳「まず安心して欲しいんだが、君は恵飛須沢君にウイルスを移されてはいない…。しかしだね…その…：…さっきまでの君の様子を見て、少し嫌な予感がしたんだ…。もしかして君、突如としてどうしようもない衝動に駆られてしまい、そのまま恵飛須沢君を襲ったんじゃないか？いくらダメだダメだと分かっている、体が勝手に動いてしまうような…そんな感じで」

「…ああ、あんなことするつもりは無かったのに、まるで抑えがきかなくて」

柳「ん…やはりそうだったか」

その後も彼から事情を聞き、柳は確信する…。

今回、彼が暴走して胡桃を襲ったのには、ある薬が関係している。

柳「間違いない、君は私の作った惚れ薬を飲んだな？」

「惚れ薬…前に美紀が飲んだアレか。いや、そんなの飲んだ覚えは…」
彼には身に覚えが無いようなので、柳は部屋の隅に待たせていた胡桃を呼んで事情を説明する事にした。全ての事情を知らされた胡桃は微かに頬を赤らめ、そっと顔を俯ける。

胡桃「惚れ…薬…」

柳「ああ、彼に飲ませたか？」

胡桃「ぼっ…!? バカ言うなって！あたしがコイツにそんなのを飲ませるわけ無いだろっ!!」

柳「…だろうね。だとすると、考えられるのは…」

柳の言葉を真つ向から否定した胡桃はその直後、彼に視線を向ける…。何ともいえぬ、ジトーツとした視線を浴びせながら彼の側へと座り、柳には聞こえぬよう小さな声でボソツと呟いた。

胡桃「そんな薬に負けて、あたしを襲ったのか……」

「…申し訳ない」

素直に謝り、頭を下げる。

あの薬の効果は実際に体験した人間じゃないと分らないと思うくらいに強烈であり、抗う事など無理なのだが…彼は素直に謝った。薬のせいとはいえ、あんな事を…胡桃の唇を奪うような事をしてしまったのだから、いくら謝っても足りない。

「これはもう…死んで詫びるしか…」

胡桃「バカ、そんな事されても困るって。あたしは大して気にしてないから、お前も気にすんな」

「は…う…えつと…気にしてない?」

胡桃「………まあ、思ったよりはな」

胡桃はそつと立ち上がり、彼に背を向けたまま前を見る。

彼には”気にしてない”と言ったものの、実際は違った…。

自分は彼に押し倒され、服を脱がされて下着姿を見られ、その上キスをされた…。それら全てを気にしないなんて胡桃には到底無理な話であり、彼女は今…彼に背を向けたまま顔を真っ赤に染めていた。

胡桃「と、とりあえずつ…!あたしは部屋に戻る!柳さん、また何か分かったら教えてくれよ」

柳「ああ、分かった」

真っ赤に染まってしまった顔を彼に見られぬよう部屋を出ていき、自室へと戻る…。胡桃はそのまますぐにベッドの上に飛び込むとシーツを被り、身を丸めながらあの時の事を思い出した。

胡桃（くそ…めちやくちや恥ずい…!どうしよう…つ）

このままだと、明日から彼の顔をまともに見れないかも知れない。彼の顔を見る度にあの時の事を…服を脱がされ、キスされた時の事を思い出してしまいそうで顔が熱くなる。胡桃はベッドの上で涙目になり、それから……

胡桃「…っ…ふふっ」

ほんの少し、幸せそうな笑みを溢した。

彼からの告白もキスも、その惚れ薬という物のせいで起きた事…明日になればまた、彼とは友人関係になると分かっている、…が、それでも笑みが溢れてしまう。彼に告白をされてキスをされるなんて…夢の中だけの事だと思っていた。現実にはあり得ない事だと思っていた。

胡桃「へへ…えへへっ…」

だから胡桃はシートの中、自らの唇に指先を添えながらニヤニヤと笑い続ける。きつともう、彼とキスする事なんて二度と無い。だからあの時の感触を忘れぬようにと思いつながらニヤニヤと笑い、それからまた恥ずかしさにジタバタと悶え…それらを交互に繰り返していった。

『犯人』

胡桃「と、とりあえず…！あたしは部屋に戻る！柳さん、また何か分かったら教えてくれよ」

そう言つて部屋を飛び出していった胡桃を見送つた後、柳はある二人の人物をこの部屋へと呼び出す。そうして集まつたその二人と、元よりここに来ていた彼へ向け、柳はそつと静かに口を開いた。

柳「たつた今、この屋敷の中でちよつとした事件が起きた…」

その事件というのはもちろん、彼がどこからかやつて来た惚れ葉を誤つて飲んでしまった…という事だ。柳の口から「事件」という単語が出た瞬間、柳の前にいた二人が同時に眉をしかめる。

真冬「…事件？」

圭一「大げさな物言いだな。どうせ大したことじゃないんだろ？」

真冬は小さく首を傾げ、圭一は鼻で笑う。

まだ何も知らされていない二人は柳の言葉を軽視しているようだが、彼だけは柳の側で椅子に座つたまま力なく項垂うなだれていた。

圭一「……何があつた？」

その様子を見て少しだけ危機感を感じたのか、圭一は彼の元へと寄り尋ねる。すると彼は俯けていた顔をそつと上げ、小さく呟いた。よく耳をすまさねば聴こえないくらいに小さな声だ。

「…胡桃ちゃんを襲つてしまった…」

真冬「えっ？」

圭一よりも遠くにいた真冬が先に反応し、彼の事を驚きの目で見つめる。一方で圭一は彼の事を見つめながら「こいつは何を言つてるんだ…」と言いたげな、呆れた眼差しを向けていた。

柳「という訳だ。彼はつい先程、自室にて恵飛須沢君を襲った……」
圭一「へえ……それはそれは……。もう帰っていいか？」
どうせ大した事件ではないと思っていたが、こんな話だとは思わなかったのだろう。圭一はまた呆れたような表情を浮かべて柳の前に立つが、柳の表情は真剣そのものだ。

柳「話にはまだ続きがあるよ。彼はその時、恵飛須沢君の事が魅力的に見えてどうしようもなくなったそうだ」

真冬「え……君って、胡桃の事がそんなに好きだったの？」

「いや、あれはもう好きとかそういうレベルじゃなかった……。もう胡桃ちゃんの事しか見えなくなつて、あの娘のことを……他の誰にも渡したくなくて……」

圭一「ほう……そりや凄い。じゃあお幸せに」

彼の言葉を聞いた真冬は顔を真っ赤に染め、圭一は相変わらずの呆れ顔を見せる。……が、その後も引き続き彼や柳の口から話を聞いていく内、圭一の顔色が悪くなつていく。柳が“それ”の存在に気付いたように、圭一もまた、今回の話の影に嫌な気配を感じていた……。

圭一「……おい、まさかとは思うが……」

柳「ああ、彼は例の惚れ薬を飲んだ。惚れ薬は恵飛須沢君が持っていたようだが、本人はただの水だと思っていたらしい。恐らく、何らかのアクシデントがあつて彼女の手に渡つたんだろう……」

柳は圭一が尋ねるより先にそれを答えると、側にあつた椅子に座りため息をつく。そうして少しの間黙つた後……

柳「圭一君、こういう事はあまり言いたくないんだが……またやつたのか？ほら、前回直樹君にやつたように今回もまた悪気なく、恵飛須沢君に惚れ薬を渡してしまつたんじゃない？」

真冬「え……またやつたの？一度だけならともかく、二度目はさすがにわざとなんじやないかつて疑つちやうよ……」

圭一「はあ？俺が二度もそんなバカな事をするわけがない。大体、

その惚れ薬つてのはもう残ってなかったはずだろ?」

柳「ああ、少なくとも私の手元には残っていない」

なら、今回の事件に惚れ薬は関わっていないだろう。

圭一はそう考えて鼻で笑ったが、その横にいた真冬は顎に手をあてながら何かを考えるように俯いていた。

真冬「柳さんの手元には……………だよな」

柳「ああ、私の手元には……………だ」

圭一「あ?それってどういう……………いや、なんとなく分かってきたぞ」

あの惚れ薬はもう残っていないと思われたが、あくまでも柳の持つ薬品保管庫には無いというだけ…。この屋敷内に一つも存在していない…というわけではない。

真冬「誰かに盗まれた…?」

柳「その可能性は十分にある。私自身、あの薬が幾つ残っていたかを細かに覚えていた訳では無いのだが、少なくともあと二つか三つくらいは残っていた気がしていたんだ…。となると、誰が盗んだのかという話になるわけだが…」

圭一「……………まあ、穂村だろうな」

真冬、柳、そして彼もその発言を聞いて静かに頷き、そしてため息を放つ…。恐らく前回、美紀を相手に惚れ薬を飲ませてしまっただけこれ騒いでいた時、穂村は柳達の会話を盗み聞きでもしてその薬の存在を知り、残っていた分を全て盗んだのだろう…。

圭一「さて、どうする?今すぐにあの野郎を捕まえるか?」

柳「それでも良いが……………私が思うに穂村君は知らんぷりをするんじゃないかな?何の証拠も無しに捕まえてもきつと、”薬なんて知らない”と言うと思うよ」

真冬「あゝ……………言いそう。そのまま上手く言い逃れされても困るし…どうしようか。……………もう殺しちゃおう?」

柳「いやあ……あんなのでも一応そこそこ役には立っているし、これから頼みたい仕事だってある。だから今ここで死なれると色々面倒なんだが……」

真冬「分かつてる。ちよつとした冗談……」

そう言つて真冬は“ふふっ”と笑つたが、穂村と仲の悪い彼女が言うど冗談には聞こえない……。彼と柳が真冬の冗談を聞いて苦笑いする中、圭一はめんどくさそうに頭を掻きながら辺りを歩き回る。

圭一「じゃあどうする？例の薬がもう残つて無いのなら良いが、もしもまだ奴の手の中にあつたら面倒だぞ。アイツの事だから悠里辺りにあの薬を飲ませて自分に惚れさせた後、そのまま面倒事を起こしそうだ……」

真冬「そうなつたら悠里がかわいそう……」

柳「ああ、望まぬ相手とそういう事をさせられるなんて、年頃の女の子からしたらトラウマものだろうな……」

もしも穂村を相手に関係を持つてしまつたら、流石の悠里もショックを受けるに違いない……。そう考えた時、柳はふと思つた。

柳「そう言えば、恵飛須沢君はわりと落ち着いていたね？君に無理やりに襲われたというのに、君を恨んでる様子も、あの薬を作つた私を恨んでる様子も無かつた」

「そう言われれば……そんな感じでしたね」

真冬「あ、あの……襲つちやつたつていうけど、具体的にはどこまでやつちやつたの……？まさかとは思うけど……最後まで……？」

「いや、そこまでは……。まあ、結構ヤバいところまではいつてしまったけど」

胡桃の服を脱がしてしまい、下着姿にまで追い込んでしまった事……。

柔らかく冷たい唇にキスしてしまった事……。

それらを思い出して彼が顔を青くする一方、真冬は真っ赤に染まつた顔を隠すようにして俯く。最後までいかなかつたとはいえ、二人は

そこそこの関係になったのでは…と思ったのだろう。

圭一「胡桃は結構サバサバしたタイプのようだからな…柳やお前に対して恨むような様子を見せなかったことは、気にしてないって事じゃないか？少し襲われたくらいで動じるようなヤツには思えないし…」

真冬「…：本気で言ってるの？」

圭一「ああ、本気だが？」

圭一は胡桃に対して”どんな事に対しても怯まない、男勝りな性格をした女”というイメージを持っていた。だからこそ彼女は今回の事件も大して気にしてないのだろうと思っていたのだが、真冬から言わせるとそれは違うらしい。

真冬「圭一さんはダメだね…女の子というものを分かってない。確かにサバサバしたタイプに見えるけど、胡桃って意外と乙女だと思うよ」

圭一「乙女？…：そうなのか？」

真冬「うん。ボクが思うに、今回の事で胡桃が怒らなかつたのはきつと——」

乙女心の分かっている圭一にその答えを教えてやろう…。

真冬はそう思っていたが、言葉を放っている途中でその口をギュツと閉じる。今ここで、彼や圭一や柳のいる前でそれを言うのは胡桃に悪い気がした…。

真冬「…ともかく、胡桃はああ見えて結構繊細な部分もあると思うから、変なことを言ったりして傷付けちゃダメだよ？」

圭一「そういうのは俺じゃなく穂村に言え…。アイツが一番危ないからな」

真冬「それもそうだね…。で、その穂村が問題なんだけど…：どうする？」

もしも穂村が今回の事件の黒幕であり、まだ惚れ薬を隠し持っている？

るとしたら面倒な事になる。それは間違いないだろう。

柳「…とりあえず明日、恵飛須沢君にも詳しい話を聞こう。そうすれば惚れ薬の出所も分かるだろうからね。しっかりした証拠を見付けるまで、穂村君を捕まえるのは我慢だ」

現時点では決定的な証拠こそないが、今回の事件は穂村のせいので起きた事だといここにいる全員が確信していた。残っていた惚れ薬をこっそりと盗むような人間など奴しかいない…。なのでまた明日、胡桃にも話を聞くこととして穂村を追い詰めていこうと思ったのだが、彼は幾つかの不安を抱いていた。

「そう言えば胡桃ちゃんのことを襲っている途中、美紀に見られたんだよな…。なんと説明するべきかね…。」

あの時、美紀は真っ赤な顔をしてすぐに部屋を出ていった…。

まあ、ベッドの上で身を重ねながらキスしている二人の先輩を見てしまったのだからあの反応は当然なのかも知れないが、明日から顔を合わせるのが気まずくて仕方ない。しっかりと説明すれば分かってくれるかも知れないが…。

「はああ……………」

穂村が変な真似をしたからこんな面倒な事になったんだ…。

もし奴を捕まえたらしっかりと文句を言ってやろう。

…と、恐らく今回の黒幕であろう穂村に対して彼は恨みを向けたが、それと同時に少しだけ…。

(胡桃ちゃんとキスしてしまったな…)

少しだけ、感謝の心を向けたりもしていた…。

あの惚れ薬を飲んでいなかったら胡桃とキスする事も、下着姿を間近に拝む事も無かっただろう。こう言っては悪いが、彼女のような美少女を相手にそういう経験が出来たのは結構嬉しい…。彼は椅子に座ったまま顔を俯け、胡桃の唇の感触や手で触れた肌の感触、そして

彼女が身に纏っていた緑色の下着を思い出す。それらを少し思い出していくだけで胸がドキドキと高鳴り、頬が緩んだ。また、思い出していくのは何もそれだけでは無く……

（「ヒーローみたいな存在」って言ってたよな）

あの時、彼に告白された後で胡桃はこう言っていた……

”お前はみんなにとって……少なくとも、あたしにとってはヒーローみたいな存在で……”と。あれは下手なお世辞や嘘ではなく、本心からの言葉だったのだろう。言葉を放つ胡桃の顔がいつにも増して真っ赤だったのを、彼はしっかりと覚えていた。

（…信頼してくれてるんだな）

胡桃に信頼されている……

その事実が嬉しくて、また頬が緩む。

柳「ともかく、みんな穂村君の動きには注意しておいてくれ」

圭一「まあ、怪しまれない範囲で警戒しておくさ」

話し合いが終わり、圭一、真冬、そして彼が柳の部屋を出る……

穂村が惚れ薬を隠し持っているという証拠を掴むべく、明日から多少の警戒をしておく必要があるだろう。

「実際のところ、ヤツが関わっている可能性はどれくらいだろう……」

真冬「ほぼ100%だと思うよ……」

圭一「同じく…俺も100%穂村が怪しいと思っている」

尋ねはしたが、彼も真冬や圭一と同じく穂村が怪しいと思っていた。惚れ薬などという便利な物をあの男が放っておく訳がない。

真冬「あとは穂村がいつ、どのタイミングでボロを出すかだけ……」

三人はあれこれ計画を練りながら階段を下り、三階から二階へと足を踏み入れる。とりあえずのところ、今日はもう眠ろう……。そう思っ

た彼が二階奥にある自室へ足を向けながら、真冬達に別れを告げようとした時のことだった…。

圭一「…おい、あれを見る」

真冬「えっ?…:…:…うわあ…」

圭一が廊下の先を顎で指し、直後に真冬が苦い表情を浮かべる。

少し遅れた後に彼もそちらへ視線を向けてみると、一人の男がとある一室の前でソワソワした様子を見せていた…。男というのはもちろん穂村だ。

「あの部屋は…りーさんの部屋だな」

穂村は彼等に見られているのにも気付かず、ニヤニヤと微笑みながらその部屋のドアの前に立ち続けている。その様子はまるで何かを待っているようにも思え、また…ヤツの右手には中身が半分ほど減っているペットボトルが握られていた。

真冬「あのペットボトルの中身…まさか…」

「…そう言えば、あの時胡桃ちゃんがくれた水もあんな感じのボトルに入っていたな」

圭一「その水っていうのは例の惚れ薬だったんだろう?…:…:…:ということは、あのボトルの中身も同じものか」

真冬「悠里に飲ませるつもりで待ち構えてるのかも…」

もしも動くとすればまた明日以降だと思っていたが、そんな事は無かった…。あの男は…穂村は意地でも悠里をものにするつもりでいるらしい。

圭一「どうする?もう少し待つか?それとも…:今捕まえるか?」

三人は廊下の陰に隠れたまま穂村を見張り、どう動くべきかと話し合う。このまま待ち続け、部屋から出てきた悠里にそれを飲ませようとした瞬間を捕らえても良いのだが…:…:。

真冬「…うん、今すぐに捕まえよう。今から柳さんのもとに連行してあのボトルの中身を調べてもらえば全てハッキリする。圭一さん、やって…」

圭一「俺がやるのか…：面倒だな」

と言いつつ、圭一はしつかりと動いてくれた。

今の時刻は夜の10時くらいだろう…。

音もなく忍び寄る圭一に背後から肩を叩かれた瞬間、これまでニヤニヤと微笑んでいた穂村は冷や汗をダラダラと流して露骨に焦りはじめた…。

『大変な一日』

彼と真冬、圭一の三人は悠里の部屋の前にいた穂村を捕らえ、そのまま柳の部屋へと向かう。今回、彼が胡桃に襲いかかった事の原因が穂村にあるのか…そして、穂村が今手にしているボトルの中身が例の惚れ薬なのかを確かめるのが目的なのだが、やはり穂村は暴れに暴れた…。

穂村「離せっ！俺は何もしてない！まだ何も出来てないっ!!」

真冬「まだ…：…ね。はあ…これ以上面倒な事が起こるよりも先に捕まえられて良かったよ」

バタバタと暴れる穂村を圭一が背後から押さえつけながら連行し、真冬は奴が持っていたボトルをヒョイツと奪って中身を覗く。透明のボトルに半分程入っている液体はただの水にしか見えないが、柳に見せれば全て明らかになるだろう。

三人は穂村を連行して柳の部屋へと戻るなり、すぐにそのボトルを柳へと手渡してこれが例の惚れ薬かどうかをチェックしてもらった。

穂村「た、ただの水だよ!!怪しい物なんかじゃねえって!」

圭一「あれが中身はともかく、お前自身はかなり怪しいぞ」

穂村は三人に捕まった時から額に汗を溢れさせ、目をキョロキョロと落ち着きなく泳がせている…。どう見ても怪しい。

「で、あのボトルの中身は?」

柳「ああ、やはり惚れ薬だったよ。思っていた通り…だね」

ボトルの中身を調べ終えた柳は苦笑いしながら椅子を引っ張り、床に膝をつけた状態で待機させていた穂村の真正面へと座る。そして穂村が持っていたそのボトルの中身を右手でシャカシャカと振りな

がら、また苦い表情を浮かべた。

柳「この薬はこんなボトルではなくて茶色の小瓶に入れておいたハズなんだが…わざわざ入れ替えたのかい？」

真冬「たぶん、柳さんに見られても怪しまれないようにと思っただけ入れ替えたんでしょ…。こういう普通のペットボトルなら怪しまれずに持ち歩けるし、目当ての娘に『ただの水だ』とか言っただけで飲ませる事も出来る…」

穂村「……………」

穂村は何も言わないで黙っていたが、柳と真冬の責めるような視線を受けた途端にまた冷や汗が吹き出していた。その態度から、真冬の言っている事が凶星なのだと一目で分かる。

柳「…やれやれ。あまり感心しないな」

穂村「感心してくれなくても良いんで、とりあえず一旦帰してくれ…。俺にはやる事が…やらない事がない事がある…」

圭一に背後から見張られていなければ、穂村はすぐにでも立ち上がってそのまま逃げ出そうとしただろう…。それくらいの覇気がヒシヒシと伝わってきた。

真冬「コイツ……………まあいい。まずは色々と話しよう。ボクは胡桃を呼んでくるから、みんなはこのバカを見張っておいて。ええつと……………美紀も呼んだ方が良いかな？」

柳「んん、そうだね。彼女も少し誤解している点があると思うから、早い内にそれを解いておいた方が良いでしょう」

彼が胡桃を襲っている際にその現場を目撃した美紀は今回の事情を知らない為、ただ彼と胡桃がそういう関係にあったのだと誤解しているに違いない。真冬はその誤解を解く為に美紀と胡桃を呼び、再び柳達の前へと戻ると、すぐに細かな事情を美紀へと説明した。

真冬「…と言うわけで、今回の事は全部穂村のせい。美紀は何か誤

解をしちやつてるようだけど、それもこれも全ては穂村のせいなの。
元もとはと言えば、穂村が胡桃に惚れ薬を渡して――」

穂村「俺は…そんなの渡してねえよ…」

真冬「またそんな嘘を…」

胡桃「いや、確かに渡されてないぜ」

：なら、胡桃が彼に飲ませてしまった惚れ薬はどこからやって来たのだろう。真実を明らかにするべく話を辿っていく内、一同はある事を知る。どうやら、胡桃が彼に飲ませた水（惚れ薬）は悠里から貰った物らしい。

柳「…なるほど、大体分かったよ。たぶん、穂村君は若狭君に飲んでもらおうと思つて惚れ薬を渡したんだ。『ただの水だ』…とか言つてね。しかし若狭君はそれを一口も飲まぬまま恵飛須沢君に渡してしまい、恵飛須沢君はとうとうそのまま彼の看病に……結果、彼が惚れ薬を飲んでしまったんだ」

あくまでも憶測でしか無かったが、柳はそれが正解なのだとすぐに確信した。目の前にいる穂村がまた、大量の冷や汗をかきながら目を泳がせたからだ。

美紀「当たり前…みたいですね。じゃあ私が見た時の先輩は穂村さんが隠し持っていた惚れ薬を誤って飲んでしまつていて、それで胡桃先輩のことを……」

「ん、んん…そういうこと…」

胡桃「えつと、誤解だつて分かつてくれたか？」

美紀「ええ、なんか…ホツとしました。二人のあんなところを見ちやつた時、かなり焦つたので…。明日からどんな顔をして接すれば良いんだらうとか、色々考えちやつてましたよ」

もしも二人が本当に付き合っていたとして…あんな関係にあったとして…それを自分だけが知ってしまったというのはかなり気まずい。美紀はつい先程までかなり頭を悩ませていたようだが、全てを知つて気持ちが楽になつたようだ。

穂村「あんなところ…ねえ…。美紀は何を見たんだ？そいつと胡桃がイチャイチャしちやつてるところでも見ちやつたのか？」

美紀の発言を聞いた穂村はニヤニヤと微笑み、彼と胡桃を交互に見つめる。その瞬間、彼は青白く染まった顔を気まずそうに俯け、胡桃は真つ赤な顔でギリツと穂村を睨みつけた。

胡桃「イチャ…!?イチャイチャなんてしてないっ!!!」

穂村「あら、顔真つ赤にしちやつて…:…:こりや結構な事をやっちゃったみたいだな」

胡桃の顔はみるみる赤く染まり、もう耳の先まで真つ赤だ…。穂村はそれを見てまた楽しいげに笑ったが、真冬がその横に立って冷たい視線を浴びせていく。

真冬「穂村、これ以上おかしな事を言うとお本当に…:…」

穂村「けどよ、胡桃だつて楽しんでたんじやないのか？薬でおかしくなつてたとはいえ、そいつに迫られて大声の一つもあげなかつたんだろ？」

胡桃「それは…:その…:…」

確かに大声は出さなかつたし、抵抗も長くは続けなかつた…。

彼の事を本気で拒むつもりなら最後まで抵抗を続けたり、大声を発して誰かを呼ぶことも出来たが、あの時の胡桃はそうしなかつた…。

胡桃「あ、あなたには関係ないだろうっ!!真冬っ!もうそいつをどこかに…:外にでも放り投げておいてくれっ!!」

真冬「いえっさー」

真つ赤な顔をした胡桃が激怒して指示を出すと真冬は穂村の腕を掴み、立ち上がらせようとする。しかし穂村はすぐに立ち上がらず、膝立ちのまま身を捻って抵抗した。

穂村「ちよっ?!?な、なんだよ?!?痛いところ突かれて怒つたのか?!?どう

せ彼に甘い言葉でも囁かれてコロツと落ちたんだろ!! まったく、チヨロイ女だ……。お前なんかもうチヨロミちゃんでもいい! 今日から恵飛須沢チヨロミに改名しろっ!!」

胡桃「なっ!!? ちよ……チヨロミだとっ……!!? ふぎけんなっ! あたしはチヨロイ女なんかじゃねえっ!!」

このまま外に放り出されては堪らない……。

穂村は真冬の手を振り払って抵抗しつつ、胡桃への口撃を放つ。

穂村の言葉を聞いた胡桃は元々赤かった顔を更に赤く染めて激怒し、美紀と真冬は慌て、柳と圭一は呆れたようにため息をつき、彼はひたすら気まずそうに頭を抱えていた……。

胡桃「真冬っ! もういいっ! あたしがやる!!」

穂村「や、やる……? 何をだよっ!!? まさか……殺すっていう意味じゃないだろうな!!?」

美紀「胡桃先輩っ! お、落ち着いてっ!!」

真冬「穂村はボクと圭一さんが外に放り出しておくから安心して……」

穂村「はなっ……離せっ!! 離せえっ!!」

激怒した胡桃を美紀が押さえている間に真冬、圭一が穂村を外へと連行していく……。穂村が喚く声は少しの間聞こえ続けたが、距離が遠くなるにつれてそれは段々と小さくなっていった。

柳「……さて、とりあえずは一段落かな?」

美紀「そ、そうですね……」

胡桃もようやく落ち着いてきたようだし、今日のところはもう休みたい……。そう考えていた美紀の気持ちを察したのか、柳はすぐに部屋の扉を開けた。

柳「もう夜も遅いし、君達は部屋に戻って休むといい」

胡桃「……そうする」

美紀「では、お休みなさい」

「じゃあ…また…」

柳「ああ、また明日」

胡桃、美紀、彼の三人を見送った後、柳は部屋の奥へと戻って椅子に座りため息を放つ…。すると少しして、真冬と圭一がそこへと戻ってきた。穂村の姿は無い…。

柳「…ええつと…その…まさかとは思うけど、本当に外へ？」

真冬「それも考えたけど、今回は庭に放り出すだけで勘弁してあげる事にした…。感染者が入ってくる事は無いからその辺は大丈夫だと思うけど、今日一日は寒空の下で眠ってもらおう…」

柳「なら良かった。狭山君の事だから、本気で外へ放り投げたかと思っただよ」

この屋敷は大きな塀や門に守られているので、庭に出されただけなら感染者に襲われる事も無いだろう。柳はホッと一安心したが、真冬と圭一の表情は何やら雲っている。

柳「どうかしたのかい？」

圭一「その…あの馬鹿、何か気になる事を呟いていてな。『あと少しで効果が出てたのに、コイツらに捕まったせいで側にいれなかった』…とか何とか」

柳「…何の事だ？」

圭一「俺達も最初は訳が分からなかったが、穂村のヤツを外に放り出した後で気付いた…。さっきあの野郎から取り上げたボトル、中途半端に中身が減っていただろ？」

柳は穂村から取り上げたあのボトルをすぐに確認し、そして静かに頷く…。中身の惚れ薬はボトルに半分くらいしか入っておらず、まるで“誰かが一度口を付けた後”のようにも思えた。

圭一「まあ、ただの勘違いなら良い…。元々それくらいしか惚れ薬を注がなかったのかも知れないからな」

真冬「けど、そうじゃなかったら…？ボクらに捕まったあの時、穂

村は既にそれを悠里に飲ませていたとしたら？」

柳「……………」

三人の間に沈黙が訪れ、柳は思考を巡らせていく…。

聞いた話だと穂村は悠里の部屋の前で捕まったそうだが、その際、穂村は何かを待っているかのようにソワソワとしていたらしい…。もしかすると穂村はその直前、悠里に惚れ薬を飲ませる事自体には成功したものの、そのまま部屋に入られてしまったのではないだろうか…。そして、効果が現れる頃合いを部屋の前で待っている時、真冬達に捕まってしまったのではないか…。

柳「何だろう…嫌な予感がするね」

真冬「うん…。あと、これはさつき美紀から聞いたんだけど、今日は由紀が悠里の部屋に遊びに行ってるらしい…」

圭一「……………」

柳「……………」

三人の間に再び沈黙が訪れ、柳の額に嫌な汗が浮かんでいく…。穂村から惚れ薬を飲まされた後、悠里は部屋に戻った…。その時、部屋の中に誰もいなかったのならそれが一番良い。それなら数分の時が経って惚れ薬の効果が出てきても悠里は少し違和感を覚えるだけで、誰かを襲ったりはしないのだから…。しかし、もしもそこに由紀がいたら…。

圭一「一応聞いておきたいんだが、あの薬というのは同性相手にも効果はあるのか？」

柳「…ある…と思う。いやあ、参ったね…」

真冬「参ったね…。じゃないよ。ほら、早く確認に行こう」

かなり長いこと穂村に説教していたので、もしも悠里が惚れ薬を飲んでおり、そこに由紀がいたとすれば多分手遅れだ…。それでも一応…という事で、三人は悠里の部屋へと向かう。そうして柳の部屋のある三階から悠里達の部屋のある二階へと下りた時、廊下の奥から声が聞こえた…。由紀と悠里の声だ。

悠里「本当に……ごめんね……。私、あんな事するつもりじゃなかったの……。何故か突然、由紀ちゃんの事がすごくすごく大切に思えて……それで……」

由紀「あ、あはは……ううんっ！別に平気だよ！ほ、ほらっ！どつかの国だと挨拶代わりにチューしたりするって聞いた事あるしっ！」

悠里「でも……私はもっと酷いことを……」

由紀「……えーと……その……友情チェック……みたいな……？わたしとリーさんの強いキズナを再確認っ！！みたいな……そんな感じで……え……えへへ……」

二人は悠里の部屋の前で話していたが、どうにも様子がおかしい……

悠里はひたすら顔を俯けたまま由紀に謝り続けているし、由紀もどこか気まずそうに苦笑いしている。しかも、二人の着ている寝間着や髪の毛がどこか乱れているようにも見えるのだが……

柳「……」

廊下の片隅からその様子を覗き見て、柳は苦い笑みを浮かべる……

悪い予感は的中した……。穂村は最後の最後で悠里にあの惚れ薬を飲ませており、そしてその効果はたまたま遊びに来ていた由紀へと向けられたのだ。

悠里「本当にごめんね……私、どうすれば……」

由紀「だ、大丈夫だよ……？わたしも……リーさんの事大好きだから……あっ！そうだっ！！これはもうっ、リーさんのお嫁さんになるしかないね！！……いや、リーさんがわたしのお嫁さんになるのかな……？そ、その辺はよく分からないけど……」

由紀は悠里との間に流れる重苦しい空気をどうにかしようとする。明るく振る舞っているようだが、それがかえって痛々しい……。ここで悠里も冗談に乗ってくれば多少はマシになるのだろうが、彼女はずっと顔を俯けている……

悠里「私、もうお嫁さんになんかなれない……」

由紀「そんな事ないよっ!!りーさんは凄く綺麗で優しいから、みんなにモテモテだよっ!それに万が一の時はわたしがお嫁さんにもらってあげるっ!!だから元氣出して、ね?」

悠里「……うん、ありがとうね……」

悠里は少しだけ明るさを取り戻したようにニコツと微笑んだ後にノソノソと部屋へ戻り、由紀はそんな彼女を見送ってから自分の部屋へと戻っていく……。そして廊下の上に誰もいなくなった時、圭一が一つ提案をした。

圭一「……見なかった事にしよう」

それが一番良い……と思う。

二人の間に何があったのかは知らない(まあ、大体の察しは付く)が、由紀はそこまで気にしていないようだし、悠里も最後は笑っていた。だからここで本当の事を……惚れ葉の事を二人に明かすより、もう見てみぬフリをした方が良いと思った。……というか、そうするのが一番楽だった……。

柳「そう……だね……。うん、そうしよう……」

真冬「ボ、ボク……穂村の部屋を探ってくる……。他にも惚れ葉が隠してあったら大変だし……」

柳「ああ、頼んだよ……」

三人はその場で解散し、今日という日を終えていく……。

ここ数日の間で最も忙しく、大変な一日になったような気がした……。

『いつもの二人に』

真冬「…反省した？」

惚れ葉騒動が一段落した翌朝、真冬は屋敷から庭へ出るなり降り注ぐ陽の光を全身に浴び、グツと体を伸ばしてから問い掛ける。問い掛けの相手は昨日の夜からずっと庭にいた例の男…穂村だ。

穂村「ああ、今回ばかりは流石に反省——」

真冬「するわけないよね？穂村はそういうヤツだもん」

言葉を遮るようにしてニコリと微笑んだ瞬間、穂村は芝の上に座りながら参ったように顔を俯ける。ここ最近は夜になるとやたらと寒く、室内にいても肌寒さを感じる事がある。そんな夜の寒さを一晩中、直に味わっていたらいくらなんでも反省しそうなものだが…。

穂村「さすが、狭山先生は俺という男の事をよくご存知で」

真冬が思っていた通り、穂村はこれくらいの事で反省するような男ではなかったらしい。

穂村「ま、一晩外で過ごすのは結構キツかったけどな。夜中はヤバいくらいに寒いし、門の向こうにいる感染者の呻き声や動きが気になって中々眠れないし…」

真冬「あの門も、壁も、ヤツらが越えられるような物ではない。だからそんなに気にする必要はないと思う…」

穂村「俺だつてそのくらい分かってるさ。けどよ、やっぱり少しでも呻き声が聞こえると反射的に警戒するだろ？いくら安全だつて分かっているけど、体が勝手に反応すんだよ」

こうして話している今も時折、屋敷を囲む塀の向こうから”かれらの呻き声が聞こえる。かなり遠くにいるようだし、こちらの存在には気付いていないと思う。…というか、気付かれたところで屋敷を囲む塀や門は越えられないのだから何の問題も無いのだが、確かに少々落ち着かない。

真冬「…あ、そうだ。隠し持っている惚れ薬がまだあるのなら大人しく渡して。全部処分するから」

穂村「もうねえよ。昨日、お前らに取られたヤツが最後の一つだ」

真冬「そう…。ならよかった」

没収したボトルに残っていた惚れ薬は柳が処分したし、穂村の部屋を探った時にはもうそれらしき物は残っていなかった。これでもう、あの惚れ薬は一つも残っていないハズ…。まあ、”もう無い”という穂村の言葉が嘘であり、真冬の目の届かない場所に幾つかの惚れ薬を上手く隠している…なんて可能性もゼロでは無いが。

真冬（一応、警戒はしておかないと…）

でない、この男はまた悠里を狙うだろう…。真冬は疑いの眼差しを向けてからゆっくりと背中を向け、屋敷の扉を開く。

真冬「もう中に入っているよ。穂村が反省するのを待っていたら切りがないから、今回は特別に許してあげる」

穂村「おつ、そいつはありがたい。ちょうど腹減ってきたところなんだけど、朝メシはこれからか？」

真冬「…いや、ボクらはもう朝ごはんを食べ終えた後。だから穂村は一人で寂しく、適当なものを食べてなよ」

昨夜あれだけの事をしておいて、何事も無かったかのように胡桃や美紀と共に朝食を食べれると思っているコイツが信じられない…。特に胡桃の方は穂村に”チヨロミちゃん”と呼ばれた事をかなり怒っているようだから、まだ顔を合わせるのには早いだろう。

真冬は穂村を屋敷内へと戻し、誰もいないキッチンまで同行した後、朝食として食べるものを物色しはじめたその背中へ語りかける。

真冬「ボクは用事があるから、穂村はここで大人しく朝ごはんを食べててね。昨日みたいな事、もうやっちゃダメだよ」

穂村「はいはい、分かりましたよ」と…」

キッチンにある保存食の数々から適当な物を選び、穂村は一人でそれを食べて空腹を満たしていく。その時、穂村が屋敷内に戻ったのに入れ替わるように由紀達が体操着等の動きやすい格好に着替えて庭へと出ていた。走り込み等の運動をして、体を鍛える為だ。

由紀「準備体操はしたし、とりあえずはお屋敷の周りを二周くらい？」

胡桃「いや、由紀はもつと鍛えた方が良い！二周と言わず、四周は回ってみろ。ゆつくりとで良いから」

由紀「え〜っ!!いきなりそんなに走ったら動けなくなっちゃうよ〜！今日は陽射しも強いし、四周走るよりも先にミイラになっちゃう〜」

胡桃「ミイラか…ふっつ、それも面白そうだな。安心しろ、もしも由紀がミイラになったらしつかりと水をかけて、乾いた体をもとに戻してやる！」

イタズラな笑みを浮かべる胡桃にからかわれ、由紀は苦い表情を浮かべて後退る。こういう時、由紀が頼るのは一人だ。

由紀「りーさあん！胡桃ちゃんがいじわるする〜!!」

何時ものように悠里の方へと駆け寄り、その体に抱き付く。

こうすれば悠里はムスツとした表情で胡桃を叱ってくれるハズなのだが、今日は少し様子が違った。

悠里「えっ？えっ…と…その…」

抱き付かれた直後、悠里はただただ顔を赤くして視線を泳がし続ける。

右手を口元へと添えながらどうすれば良いのかと戸惑っている悠里を暫し見つめた後、由紀は思い出した…。昨夜、彼女の部屋で、彼女を相手に経験してしまった事を……。

由紀「あっ…ご…ごめんっ」

何に對しての謝罪かは自分でも分かつていないが、とりあえず一言だけ謝って彼女から離れていく…。ついさつきまで昨夜の事は夢かと思っていたが、悠里の気まずそうな反応を見るに現実だったらしい。

胡桃「??：あの二人、なんか様子が変わだな」

美紀「そうですね：何かあったんでしようか？」

まるで喧嘩をしまい気まづくなっているような…。いや、それとはまた違う気がするが、二人とも顔を赤らめたまま背を向けあつてしまつていて様子がおかしい。

美紀「：まあ、とりあえず走りますか？」

胡桃「だな…。美紀はどれくらい走る？」

美紀「いきなり頑張りすぎても後が辛いですから、とりあえず三周くらいですかね…。胡桃先輩はどのくらいですか？」

胡桃「あたしは…。そうだな…。」

美紀と同じく三周…。いや、もう一周多めに回つて四周にしようか…。

顎に手をあてながら空を見上げてあれこれ考えていると、まだ屋敷内にいた彼と真冬が庭へと現れる。二人は屋敷の扉を閉めるとスタスタと歩き、美紀と胡桃の側へと寄るが…。

胡桃「っ！み、美紀っ！とりあえず走るぞっ!!」

美紀「えっ？は：はいっ!!」

二人が歩み寄つた途端、胡桃はその場から逃げ出すようにして駆け出していった。そんな彼女を見てこれまた気まづそうな顔をする彼と真冬をチラリと見た美紀は少し遅れて胡桃の後に続き、その横を並走していく。

美紀（胡桃先輩：もしかして…）

由紀と悠里がどうしてあんな感じになっているのかは分からない

が、彼を見た途端、胡桃が逃げ出すように走り出した理由はそれなく想像がつく…。胡桃のペースはかなり速いが、美紀はどうにかして彼女と並走しつつ、庭を半周して屋敷の裏へと来た時に人目の付かない木陰で足を止めた。

美紀「胡桃先輩、ちよつといいですか？」

胡桃「な、なんだよ…！」

胡桃の手を引いてそこへと進んだ後、美紀はそつと手を離す。今日は天気が良いので陽射しも強いが、屋敷裏にある木々の下は涼しくて心地が良い…。その涼しさを少しだけ集中して味わった後、美紀は胡桃と目を合わせていった。

美紀「もしかして胡桃先輩…あの人の事を避けてるんですか？朝食の時もそうでしたが、結構露骨に逃げてますよね？」

胡桃「別に…逃げてなんか…！」

側にあつた木へと背中を預け、胡桃は静かに顔を俯ける。

その顔はほんのり赤く染まっており、美紀は「やっぱりな…」と言うような感じのため息をつく。朝食の時、胡桃は遅れてやって来た彼と顔を合わせるなりすぐに席を立てて離れた所へと移動した。そして今さつきもまた、彼を避けるように駆け出した…。

美紀「その…こんな事を聞くのはどうかと思うんですが、胡桃先輩があの人を避けているのって昨夜の事があつたからですか？…もしかしてあの時、あの人と最後までしちやつたんですか…？」

胡桃「さつ、最後までっ!!最後までって…どこまでだよっ!!？」

美紀「っ…!!?そんなの知りませんっ!!変なこと言わせないで下さいよ！」

少なくとも昨夜、美紀があ部屋の部屋に入った時、胡桃は彼にキスをされながら下着に手をかけられていた…。もしかするとあの後、胡桃は下着すらも脱がされてそのままやる事やってしまったのかも知れない。だからこそ、彼を見る度に顔を赤くして逃げているのではない

だろうか……。美紀にそれを指摘された胡桃は落ち着きなく目線を泳がせ、両手で頭を抱えながらブツブツと呟く。

胡桃「そうだった……。惚れ薬が関わってる事は説明したけど、どこまでされたのかとかは話してなかったんだっけ……」

話がこれ以上ややこしくなるより先にといい、胡桃は昨夜、彼にされた事を説明していく……。なんで後輩にこんな事を説明しなくちゃいけないんだ……。なんて思いながら必死になって恥を押し殺し、美紀に全てを説明した。

胡桃「……つてわけだから、あの時、美紀が見た以上の事はしてない」
ただ服を脱がされ、下着姿を見られ、肌を撫で回され、ちよつとキスをされただけだ……。美紀を心配させぬよう少しだけ強がって語る胡桃だったが、やはりあの時の事を思い出すと顔が赤くなってしまう。

美紀「その……大変でしたね……」

胡桃「……まあな」

どうつてことない……。とても言いたげに答える胡桃だったが、実際は違う。彼に告白された時は心臓が弾けてしまいそうなくらいドキドキしたし、服を脱がされた時は全身が燃えるように熱くなった。そして、キスをされた時に感じた頭が溶けていくような感覚を……。あの時の事を思い出すだけでまた、胸がドキドキとして瞳が潤む。

美紀「……えつと、胡桃先輩がああ先輩を避けているのは、あの時の事を許していないからですか？」

胡桃「えっ？ いや……別に、そんなじゃない……」

美紀「キスされた事を怒ってる、とかでは？」

胡桃「怒ってないよ。だってあれは薬のせい、あいつ自身は別に悪くないし……」

胡桃には言っていないが、美紀もあの惚れ薬を飲んでしまった事が

あり、その効力には抗えない事を知っている。だからこそ、彼は悪くないというのがしつかりと理解出来た。

美紀「…じゃあ、変に避けてないでいつも通りに接しましょうよ。薬のせいとはいえ、そういう関係になりかけた相手と何気なく接するのは大変かも知れませんが、先輩達がいつまでもこんな様子だと私まで気まづくなります…」

胡桃「…そう…だな…」

昨夜、真冬達が穂村を捕らえた後はまだ普通に顔を合わせられたのに、今朝になったら彼の顔を見るのがやたらと大変になっていった…。ほんの少し時間が経った事で、余計に意識するようになってしまったのかも知れない。しかし美紀の言う通り、いつまでもこんな様子ではいけないだろう。

美紀「出来るだけ早く仲直り…とは違いかもですが、元の二人に戻って下さいね。あつ…なんなら私、今からあの人を呼んできましょうか？」

胡桃「え…今から？」

美紀「はい、今からです」

ニコリと微笑んだ美紀は戸惑いを見せる胡桃の返答も待たず、そのまま彼の元へと駆け出してしまった…。屋敷裏の木陰に一人置いていかれた胡桃は呆然とした表情のまま、ポツリと佇む事しか出来ない。

胡桃「美紀のやつ、何かお節介な性格になったな…」

しかし、早い内に彼との距離を元に戻せるのなら…この気まづい空気を無くせるのなら是非ともそうしたい。胡桃がその背中を木に預けたまま待ち続けていると、すぐに彼がその場へと現れた。見たところ、美紀はいない…。彼女は彼だけをここに向かわせてくれたようだ。

「ええっと、美紀に言われて来たけど…どういったご用で？」

胡桃「用とかじゃないけどさ…今朝から冷たくしてた事を謝っておきたくて…。その、悪かったな…。昨日の思い出したらさ、少し気まずくて…」

木陰の下で小さく頭を下げる胡桃を前にして、彼は安堵の表情を浮かべる。今朝から彼女に避けられているのをヒシヒシと感じていた為、”もしかしたら昨夜の事が切っ掛けで嫌われたのでは”と不安になっていたのである。

「いや、わざわざ謝る必要なんてない。昨夜、胡桃ちゃんにした事を考えたら避けられても当然だし」

胡桃「…ああ、いきなりベッドに押し倒されたかと思えば、そのまま告白とかされちゃうんだもん…。本当に焦ったぜ」

「あく…本当に申し訳ない」

一言謝ったら気持ちが悪くなったらしく、胡桃はイタズラな笑みを返す。昨夜は本当に恥ずかしいこと、緊張してしまう事の連続だったが、少なくとも胡桃にとっては決して嫌な思い出ではない。

胡桃「お前にあんな事されて焦ったし、少くしだけ泣きそうにもなったけど…でも、ああやって誰かから告白されたりすんの初めてだったからさ…結構ドキドキしたよ」

胡桃は比較的可愛い見えた目をしているし、性格だって悪くない。

世界が平和だった頃に何度か告白されていそうなものだが、彼女にとっては昨夜、彼から受けたものが初めての告白だったらしい。彼が意外そうに目を丸くすると、胡桃はニコツと微笑んで右隣へと身を移し、彼の右手を左手でそつと握る…。

「…胡桃ちゃん？」

ヒンヤリとした手の感触に…何よりもその行動に戸惑う彼だが、胡桃は顔を俯けてしまつて動かない…。どうして隣にやつて来たのか

……どうして手を握ってきたのか……胡桃の行動理由が何一つ理解出来ぬまま、彼はその手を握り返す。すると胡桃は肩をピクリと震わせ、ゆつくりと顔を上げた。向けられた顔は赤く染まっており、瞳は微かに潤んでいる……。

胡桃「昨日のお前は惚れ薬でおかしくなってたから、あの告白が本物じゃない事くらい分かってる……。あたしみたいな女の子、全然好きじゃないもんな……？」

「いや、そんな事は……」

確かに昨夜は惚れ薬の効力で変になっていたが、まともな状態である今見ても胡桃は充分に魅力的な娘だ。彼はそれを伝えようとしたが、胡桃は『気を使わなくていい』と言って言葉を遮っていく。

胡桃「お前があたしみたいな娘はタイプじゃないって分かってるけど、でもあたしは……あたしはっ……」

胡桃に握られていた手により強い力が込められ、それと同時に視線も強くなる……。彼女は潤んだ瞳で彼の事をじっと見つめたまま、深く息を吸ってから口を開いた。

胡桃「あたしは……お前のことが大好きだ……」

……静かな声で、しかし彼にはハッキリと聞こえるくらいの声でそう告げると、胡桃は上げていた顔をまた俯けていく……。彼はただ手を握り返したまま、横に立つ彼女の事を見つめていた。突然の告白に驚きが隠せず、少しずつ口が開く……。しかし、突然過ぎて何と言えば良いのか中々分からない……。

二人して無言のまま数秒の時間が過ぎると強い風が吹き、側にあつた木々の葉を揺らしていく……。また、木の葉だけでなく胡桃の前髪やツインテールもその風になびいてゆらゆらと揺れ、彼女はそれと同時に声を漏らした。くすくすと……イタズラな笑い声を。

胡桃「っ……く……あははっ、何だよその顔？本気にしたのか？」

「……あつ？」

胡桃「へへつ、今のはほんの冗談：昨日の仕返しだよ。告白された時のドキドキとか焦りをお前にも味あわせてやろうと思つてな。ふん、その様子だとかかなり効いたみたいだな？あたしも捨てたもんじやないってことか？」

「ん……ん……」

ハッキリ言わせてもらうと、効いたなんてものじやない。

告白時の彼女の潤んだ瞳、紅潮した頬、桃色の唇、微かに震えた声の破壊力は凄まじく、今も胸の高鳴りが抑えられない……。胡桃のネタばらしがあと数秒遅れていようものなら、彼はそのまま『付き合つてくれ』と返事を返していたかも知れなかった。

胡桃「よしよし、これでおあいこだ。昨日の事は綺麗さっぱり水に流そうぜ。もう全部忘れて無かつた事にしよう」

胡桃は眩しい笑みを浮かべてその場を去り、中断していた走り込みを再開していく。彼女はああ言っていたが、昨日の事を全て忘れるなど彼には出来ない……。昨夜に感じた彼女の唇の感触や下着姿はそう簡単には忘れられない。むしろ、忘れてたまるか……とすら思っていた。

そして、それは胡桃自身も同じだった……。

彼女もまた、彼と過ごした昨夜の出来事を忘れるつもりなど無く、走り込みをしながらもそれを思い返しては顔を赤らめ、そしてニヤニヤと頬を緩めるのであった。

百三十七話 『いきぬき』

夜、皆との夕飯を終えた後で悠里は三階へと上がり、そのまま柳の部屋へ入ると『ごほんっ』と咳払いする。悠里がここへとやって来た理由は二つ…。一つは、自分達をこの屋敷に住まわせてくれている事へのささやかなお礼として、柳にコーヒーを差し入れする事。そして、もう一つは柳の仕事の進展状況を確認する為だ…。

悠里「あの…：胡桃を治す方法、見付かりましたか？」

ただでさえ色々世話になっているのだから、こうして急かすように尋ねるのは少々気が引ける…。しかし、悠里はそれが気になって仕方なかった。出来るのなら、良い返事を返して欲しい…：そう願いながら目線を向ける彼女に対し、柳は苦い表情を返していく。

柳「そうだな…：もう少々時間が必要だ。色々なパターンを試し、完全なワクチンを作ろうと試みてはいるのだが…：どうにも上手くいかない」

悠里「……………」

柳「が、全く進んでいない訳でもないよ。ある程度、ここをこうすれば良いという目処めどは立ってきた。だから大丈夫だよ」

悠里を安心させるべくそう告げると、柳はデスク前の席についたままグツ…と伸びをして体を解す。

柳「彼にも散々言われてるし、こればかりは成功させないとね。恵飛須沢君に何かあれば狭山君も、それに穂村君も悲しむだろうし…」

悠里「真冬さんはともかく、穂村さんも？」

柳「ああ、あれは可愛い女の子に目が無いからね。以前ここには狭山君しか女子がいなかったが、今は君達がいる。そのせいか知らないが、最近の穂村君はやたらと元気だ」

それは良いこと…：なのだろうか。

普通の人なら元気が一番なのだが、穂村の場合は少しだけ落ち着い

た方が良いようなそんな気がして、悠里は苦笑する。

柳「そう言えば、君達は元々四人だけで巡ヶ丘にある学校に暮らしていたんだよね？そして、その学校を出た後に彼と出会ったと……」

悠里「ええ、色々あつて、あの学校に暮らし続けるのが少しだけ難しくなりましたから……。ふふっ、卒業旅行みたいなものです」

柳「卒業旅行か。君達がどんな生活をしてきたか……そしてどんな経験をしてきたかは恵飛須沢君や直樹君から少しだけ聞いていたが、君達はこんな世界でも可能なだけ楽しく生きようと努力してきたようだね」

悠里「：はい、後ろばかり見ている仕方ないですから、少しでも楽しく、幸せに生きていかないと……」

毎日楽しい：毎日幸せだ……

そう思っていないと、心が一気に砕けてしまいそうになる……

自分を保てなくなりそうになる……

悠里はほんの少しだけ顔を俯けた後、またニコリと笑って前を向く。

悠里「けど、最近は本当に楽しい毎日を過ごしてます！前は四人だけだったけど、今は彼もいるし、真冬さん達もいますから」

胡桃の事について少し話をするだけで終えるはずだったのに、悠里はそのまま口を開いてこれまでの事を語っていった。彼と出会う前の事から、出会った後の事……その中でも一際楽しかった日々についての事など、色々な事を語っていく……。中でも柳が興味を示したのは、以前に立ち寄った温泉の話題だった。

柳「天然温泉か……なるほど、そういうのも楽しそうだね」

悠里「ええ、この家のお風呂もとても気持ちいいですけど、あの時浸かった温泉も凄く気持ち良かったですよ」

まあ、屋外にある温泉なので”かれら”はもちろん、一人待機してもらっていた彼の覗きに警戒するのが大変だったが、それでも心地よ

い思いが出来た。当時の事を思い出した悠里がニコニコ微笑むと、柳は天井の方をジーツと見つめながら顎に手を添える。

柳「ふむ、たまには外で息抜きするのも良いだろう。もしよければ明日にでも行ってきたらどうだい？」

悠里「えっ？行くって……あの温泉にですか？」

柳「ああ、君達はここ数日は敷地外に出ていないし、たまには息抜きしたいだろう？まあ、感染者達の事を考えると油断は出来ないかも知れないが、しつかりと警戒しつつ楽しんできたらどうかな？必要ならば人手を貸すし」

確かにこの屋敷に来て以降、庭よりも外へは出ていない。

たまには皆と共に外へ出掛けるのも良さそうだ。

悠里「うくん……そう、ですね……。最近は無勉強ばかりしてたからみんなも息抜きが必要かも知れないし……ちよつとだけ出掛けるのも悪くないのかも……」

柳「ま、皆と相談して決めてくれ。それともしよければ、狭山君の事も誘ってあげて欲しい」

悠里「はい、元からそのつもりでしたよ」

悠里は『ふふつ』と笑つてからペコリと頭を下げ、柳の部屋を後にする。その後、彼女は由紀や胡桃、美紀や真冬、彼の部屋を回り、その事を話していった。結果……全員がその旅に賛成したので、悠里は自室へと戻ると明日へ備えて身支度を整えていった……。

そして、柳もまた自室へ圭一と穂村を呼び出し、事情を説明する。

悠里達が明日、外へ出掛けるかも知れないという事と……もし彼女達が必要とするならば、その旅に同行して外の脅威から守ってやって欲しいという事……そして、なんなら自分達もその温泉とやらを楽しんでくれば良いという事を。

圭一「温泉？わざわざそんな所に行かなくとも、風呂ならあるだろう」

柳「それもそうだが、風呂と温泉はまた違うと思うよ?」

圭一「…そうか? 大した違いは無いと思うが」

やはりというか、思った通りというか、圭一の方はあまり乗り気では無いらしい。…が、その一方で穂村の方はかなりテンションが上がつているようだ。

穂村「おい! それって混浴か!? 混浴オーケーか!」

柳「いや、流石にダメだろうね。狭山君が許さないだろう」

穂村「ぐつ!! まあ、そこは仕方ないか…。けど、屋外にある温泉なんだよな!? 露天温泉なんだよな!? ならよし!! 準備してくる!!」

凄いい勢いで駆け抜け、穂村はそのまま部屋を出ていった…。

柳「…: 準備?」

穂村の言っていた言葉が少し引つ掛かったものの、あまり深くは考えないようにする。準備とだけ聞けばなんて事ない、きつと替えの服やタオルを用意しておくつもりだろうと考えられるが、あの男のことだ…: きつと、余計な物まで準備してくるつもりだろう。

圭一「…間違はなく面倒な事になるぞ、穂村は置いていった方が良い」

柳「うくん…君の言いたい事は良く分かるが、あれだけ張り切ってるのに留守番というのは少しかわいそうじゃないか?」

圭一「お前、人に対して”かわいそう”とか思うようなヤツだったか? もつとこう…: 他人を見下すタイプかと思っていたが」

柳「まあ、使えない人間は嫌いだね。そういうヤツが相手なら思い切り見下しもするだろうが、穂村君は中々使えるやつだ。どこか憎めないしね」

チャラチャラとしていて落ち着きなく、いつでも騒がしい穂村だが、心の底から嫌いにはなれない。だからこそ、柳はほんの少しだけ甘さを見せた。

柳「連れて行ってやれ。面倒な事をしそうになっても大丈夫、狭山君がどうかしてくれるさ」

圭一「人任せなヤツだな…」

しかし、柳の考えはそう間違ってもいない。

確かに真冬なら、穂村が何かをしでかそうとも阻止するだろう。

柳「そう長い旅にもならないだろうから、ここは私一人だけで大丈夫だ。だから君も行ってくるといい。…というか、行ってきてくれ。今回の旅のついでで良いから、その目的地の辺りを軽く調査してきて欲しいんだ」

圭一「…はあ、分かった。適当に付き合ってやるよ」

戦力なら穂村、真冬だけでも充分過ぎるくらいだと思うし、それに彼に胡桃だって比較的良く動ける方だ。わざわざ自分まで行かなくとも……なんて事を思う圭一だったが、ここは仕方なく、柳に従う事にした。

百三十八話 『ぶこえい』

柳の提案により、悠里は皆と共に以前行ったことのある温泉へ向かう事にした。全員の賛同を得て一夜明かしたその日の翌朝、皆が出発の準備を整えて庭に停めていた車の前へと立っていたのだが…。

真冬「え…穂村達も来るの？」

いよいよ出発だという時、彼女達の乗るキャンピングカーの横で穂村もまた自身が使っているボロボロのワゴン車に荷物を積み込んでいた。よく見ると助手席には既に圭一が乗り込んでいたが、眠たげに目を閉じている。

穂村「なんだ、俺達が来ちゃいけないのか？」

真冬「圭一さんはまだ良いとして…穂村はちよつと…。今回は留守番してたら？ほら、柳さん一人だと危ないし」

穂村「あの人は一人で大丈夫だよ。それより、外に出ていくお前らの方がよっぽど危ないだろ？何かあった時、狭山一人でコイツら全員守れるのか？」

穂村がキャンピングカーに乗り込もうとしていた由紀達をそつと指差し尋ねると、真冬はムツとしたような表情を見せる。いや、ムツとした表情をしたのは彼女だけでなく胡桃と美紀もだ。

美紀「そこまで心配してもらわなくても、自分の身くらい守れます」

胡桃「ああ、そうじゃなきゃここまで生き延びてないっての」

美紀達だつて多少の危機管理能力はあるし、胡桃と彼は”かれら”と戦い慣れている。なので護衛が絶対に必要…という事も無いとは思うが、穂村はもう留守番する気など無いらしい。

穂村「まあ、万が一ってこともある！そうなたらお前達の事をあ

る程度は守ってやるから、そこそこ安心しとけ」

と言った後、穂村は目を輝かせながら『リーさんだけは死ぬ気で守るんで絶対に大丈夫！心の底から安心して下さいね！』と本人に告げる。その言葉を聞いた悠里は苦笑しながらも礼を告げると、そそくさと車に乗り込んでいった。

真冬「…はあ、まあ仕方ないか…。ところで穂村、凄い荷物だね？」

穂村「そ、そうか？そういう狭山も随分と大荷物に見えるけどな…」

真冬「別に、そんな事はない…」

穂村も真冬もやたらと大きなリュックやカバンを二〜三つ持っており、それを各自の車両へと積み込む。他の者は多くてもリュック一つ程度の荷物で済ませている中、この二人だけは異様なくらいの大荷物を所持しているが、中身は何なのだろうか…。

穂村「俺達は目的地がどこにあるか知らないんで、そっちの車に後からついていく形になる。つてわけで先導よろしく」

全ての荷物を積み終えた穂村が車に乗った後、真冬達もキャンピングカーへと乗り込む。そして屋敷の門がゆっくり開いたところで車を発進させていくと、そのまま街の中へと進んでいった。定期的に外へ出ている真冬達とは違い、悠里達にとっては久しぶりの外出だ。

胡桃「もし疲れたら言ってくれよ。運転代わるからさ」

悠里「ええ、ありがとう」

運転中の悠里に一声かけた胡桃はそのまま車内を歩き、テーブル前の席に座っていく。するとすぐ隣に由紀がやって来てニコリと微笑み、真正面に美紀が座る。みんな久々の外ということ浮かれているのか、少しテンションが高いように思えた。

由紀「ふふ〜♪久しぶりのお出かけだね〜」

胡桃「…だな。けど、あんま氣い抜くなよ？」

由紀「うん！もちろん分かってるよ〜」

ニコツ！と微笑みながら答える由紀を見た胡桃と美紀は、その笑顔につられて微笑む。外は未だに危険だらけと分かつてはいるが、やはり皆と出掛けるのはすごく楽しい。

美紀「由紀先輩は少し目を離すとどこかへ行ってしまいそうですからね。しっかり見張っておかないと…」

胡桃「ああ、頼んだぞ」

由紀「もう！わたしはそんなに子供じゃないもん！みーくんも胡桃ちゃんも失礼だよ!!」

二人で由紀をからかって楽しげに笑うと、頬を膨らませて怒っていた由紀もすぐに笑い出す。その笑い声を聞いた悠里も嬉しそうに頬を緩ませていたが、胡桃達とはまた別の席にいる彼だけは違った。

真冬「…具合でも悪いの？もしかしてまだ風邪が治ってなかった？」

「えっ？いや…別に…」

先日まで引いてしまっていた風邪はもう治ったようだが、彼の様子はどことなくおかしい。まるで何かを企んでいるのではと思うくらい、緊張した様子でいるのが分かる。そんな状態の彼を真正面の席から見ていた真冬が首を傾げると、美紀達がジロリと視線を向けた…。

美紀「先輩、まさかとは思うけど、また覗きとかしませんよね？」

「……しない」

胡桃「おい、こっちを見ろ。あたしの目を見て言え」

窓の外を見ていた彼はその目線をゆっくり、少しずつ胡桃の方へ向けると、彼女の目をしっかりと見つめる。しかしそれを数秒保った途端に彼の額からは冷や汗が流れ落ち、目線も落ちつきなく泳ぎ始めた。

真冬「……もしかして、前の時にやったの？」

胡桃「ああ。まあ、裸を見られる前に捕まえられたから良かったけ

どな。こいつは本当に油断も隙もないヤツだから、今回もどうせ覗くつもりで——」

「違う違うっ！今回は大人しくしてるつもりだって！」

胡桃「じゃ、なんでそんなに冷や汗かいてんだよ？」

鋭い視線を受けた途端、彼はまた落ちつきなく目線を泳がせる。あからさまに怪しいように見えるが、彼は少ししてから胡桃達の目を見つめた。

「あの時は…悪いことしたなあつて反省してたんだよ」

美紀「…本当ですか？嘘ついてません？」

「本当だって。もちろん、今回は絶対に覗きなんてしないよ。もう一度やったところで、どうせバレるだろうし…」

胡桃「まるで、バレないならやるとでも言いたげだな…」

そりやバレないならやるさ、当たり前だろう。

…そう言ってしまうようになった彼は慌てて口を閉ざすとその後『覗きはしない！』と言い続け、どうにか胡桃達の信用を得る。とはいえ、彼女達は少なからず警戒しているようだが…。

「はあ………まったく…」

ため息をついてから窓の外を見つめ、今回は無理そうだな…と心の中で呟く。実のところ、彼女達が警戒していないようなら今回も覗きを試してみようと思っていたのだが、この調子だと挑むだけ無駄に終わりそうだ。

晴々とした空の下、彼がひっそりと夢を諦めた中…：彼女達の乗るキャンピングカーと穂村達の乗る車はその温泉へと向けて車道の上を走っていった。

百三十九話 『とうちやく』

穂村「ふっふっふ、そろそろか〜?」

悠里達のキャンピングカーに続いて車道を走り続けてかなり経った頃、穂村は自分の車を運転しながらポツリと呟きニヤリと微笑む。辺りはすっかりと木々だらけになってきており、目的地である山中の温泉とやらが近付いているのを感じた。

圭一「…お前、ほんとに楽しそうだな」

穂村「そりや楽しいさ! あんな可愛い娘らと温泉だぞ? 楽しくない訳がない。柳さんも来りやよかったのになあ〜」

助手席に座っている圭一はその言葉を聞いて呆れたようなため息をつき、そのまま静かに窓を開く。そうして通ってきた風がいつもより少しだけ心地よいものに思えたのは、街と山とで空気が違うからだろうか…。

圭一「柳には柳の仕事があるみたいだからな、遊んでる暇なんてないんだらう。それに、俺達だっただだ遊びに来たわけじゃない。俺はこれから行く目的地に使えそうな物資はあるか…生存者はいるか…それらを調べるのが仕事だし、お前は胡桃の護衛をするのが仕事だ」

穂村「おいおい、もっと気い抜いても良いんじゃないのか? 物資なんてまだまだ余裕があるんだから適当に集めりゃ良いし、他の生存者なんていようがいまいがどうでも良いと思うけどなあ?」

もつとも、その生存者がとてつもない美人だったりしたら話は別だ…なんて事を言いながら穂村はまた笑い声をあげ、そしてそれをピタリと止める。物資の事も生存者の事も正直どうでも良いが、もう一つの事は少々気になった。

穂村「…それと、護衛すべきは胡桃だけじゃないだろう？」

圭一「いや、胡桃だけだ…。アイツに何かあると柳の仕事に支障が出るが、他の奴らは違う。柳がアイツらを屋敷に住まわせているのは感染を抑えている胡桃に興味があるからってだけで、あとの奴らはオマケだ。わざわざ護衛してやる必要は無い」

穂村「つまり…胡桃以外はどんなつても構わねえって？それ、柳さんが言ったのか？」

圭一「そういう訳じゃないが、アイツならそう考えてるだろうと思つた。自分の研究、というか仕事の糧になる胡桃はともかく、あとの奴らはどうでも良いと考えてるだろう…」

確かに柳ならそう考えていてもおかしくは無い…。

おかしくは無いが、その柳も最近…彼女達がやって来てからは少しだけ優しい雰囲気が出てきたような気がしている。

穂村「つたく、圭一さんはひねくれた考えしか出来ないヤツだなあ…。確かに胡桃の治療が目的でアイツら全員を屋敷に住ませる事にした訳だけどき、何もそれだけじゃないだろ？ほら、アイツらつて今はもう狭山の友達だし？」

圭一「…それが何だ？」

穂村「だから、柳さんがアイツら全員を住まわせているのは何も胡桃だけが目当てって訳じゃなく、あの狭山に出来た友達を守ろうとしてるつてのもあると思うわけよ」

人付き合いが苦手そうだったあの真冬が、今は彼女達と楽しげな日々を過ごして笑っている。氷のように冷たい印象だった真冬が年相応の少女のように笑うのはこれまでに一度も見ることが無かったのに、彼女達が来てからは本当によく笑っている…。

穂村「ほら、柳さんつて前から狭山に甘いところあるじゃん？まあ、アイツが女の子だからつてのもあると思うけど、もしかしたら娘を見るような感覚なんじゃないかな…つて思うわけよ」

まあ柳は結婚なんてしていなかったようだし子供もいなかったよ

うだから、あくまでも感覚的な問題だと思う。狭山を助けてある程度の面倒を見ていく内、ちよつとした愛着が沸いたのだろう。だからこそ、そんな真冬に出来た友達を守ってやろうと考えているのではないだろうか…。

圭一「…どうだろうな。俺が思うに、柳はそこまで優しいヤツでも無いと思うが」

穂村「ま、俺もそう思ってたけどさ…最近は少し雰囲気変わってきたと思わないか？前よりも少くしだけ優しくなったような、そんな気がさ」

…確かに、それは圭一も感じていた。

以前の柳は笑顔の内に何を隠しているのか分からないような奴だったが、由紀達がやって来てからは少しだけ落ち着いた雰囲気になっていく…。もつとも、そんな柳以上に変化した人物を圭一は知っていた。

圭一「変わったといえば、お前と狭山はもつと変わったな。特に狭山のヤツは…」

穂村「だな、ああしてみると狭山も普通の女の子なんだなあって思うよ。…そして、俺も普通に優しいお兄さんだったんだなあって…」

圭一「狭山が普通の女の子っていうのはある程度同感するが…お前は普通でもなければ優しくもないだろう」

ボソツと呟いてやると穂村はヘラヘラと笑い、圭一は呆れたようにため息をつく…。真冬と同様、穂村も由紀達がやって来てから多少は変わったが…根底は変わっていない。今も変人のままだ。

穂村「…ま、何はともあれ楽しもうぜ。守るのは胡桃だけとかつまらない事言わないで、全員守ってやれば良い。仲間は大切にしないとかな？」

圭一「お前にとって、アイツらはもう全員仲間なのか？」

穂村「ふふつ、当たり前前だろ？可愛い娘はいつでも歓迎だ」

まあ穂村は彼女達に甘いし、悠里に対してはまるで女神のような扱いをしている。元々が女好きな性格のようだから、この反応も当然と言えば当然か…。

その後、また暫くすると車が山奥にある温泉街へとたどり着き、辺りある旅館や土産物屋が視界へと入る。もしも世の中がこんな事にさえなっていなければ、観光や旅行に来た人で賑わっていたのだろう。

穂村「んっ？到着か？」

圭一「…みたいだな、降りるぞ」

前を進んでいたキャンピングカーがピタリと停まり、由紀達が嬉しそうな笑みを浮かべて降りてくる。それを見た穂村も適当な位置に車を止めるとエンジンを切り、外へ降り立った。今のところ、周囲に”かれら”はいない。

穂村「ええつと、目当ての場所はここで？」

悠里「正確に言うと、ここから更に進んだ場所にある温泉が目的地ですね。歩きでしか行けないような場所にあるから、車はここに置いていかないといけなくて…」

穂村「へえ…」

悠里は由紀と美紀と胡桃、そして彼と一ヶ所に集まって辺りを見回し、話し合いを始めた。恐らく、その温泉がどの辺りにあるのかを思い出そうとしているのだろう…。

圭一「…とりあえず、俺は物資でも探しながらこの辺を見て回る。お互い、やる事が終わったらここに集合しよう」

穂村「え？圭一さんは温泉行かないのか？」

圭一「屋敷に帰ったら風呂に入る。それで充分だ」

しかし、慣れていない土地で一人になるのは危険ではないだろうか。

悠里達は少し心配そうな目を向けるが、圭一の事を以前から知って

いる真冬と穂村は全く心配などしていないらしい。

真冬「心配しないで、圭一さんなら一人でも大丈夫だよ」

悠里「…そう。じゃあ、その…気をつけて下さいね？」

圭一「…ああ」

一言呟き、圭一は街の奥へと消えていく。

その後、悠里達は温泉の場所をしつかりと思い出したらしく、一同は温泉街から外れた所にある山道を進み始めた。進む山道はそばにある木々の大きな枝や、斜面から転がってきたのであろう岩等があつて少々歩きづらい…。元々はもつと綺麗な道だったのだろうか、今は整備する人もいないので荒れ放題なのだろう。

胡桃「おい由紀、足もとはは気を付けて進めよ。転んで怪我でもしたら大変だからな」

由紀「うん、わかつてるよ。…つていうかそれ、他のみんなにも言いなよ！なんでわたしにだけ言うのっ？」

胡桃「そりやまあ…この中だとお前が一番危なっかしいからっつか、何と言うか…とにかく！気を付けて進めよ」

悠里と美紀は言わずとも慎重に歩いているようだし、彼や穂村、真冬も心配なさそうだが、由紀だけはこの先の温泉を楽しみにし過ぎているあまり少しだけ早足でいる。だからこそ胡桃は彼女にだけ注意をしたのだが…その矢先の事だった。

胡桃「うわっ!?!」

爪先でも引つ掛けたのか、胡桃はそのまま地面に膝と両手をつく。

そばを歩いていた悠里は心配そうに手を差し出してくれたが、由紀は地面に膝をつく胡桃の方を振り向いてニヤニヤと笑っていた。きつと、”今わたしに注意したばかりなのに…”とでも思っていたのだろう。

胡桃「くっ…な、なんだよ、その顔っ」

由紀「ふっふっふ…胡桃ちゃん！足もとには気を付けて進まないとだめなんだよ♪転んで怪我でもしたら大変っ！」

胡桃「っ…ぐうううっ！」

ついさつき聞いたような台詞を告げ、由紀はニヤニヤと笑いつつ胡桃の肩に手を添える。すると胡桃の顔が悔しさと恥ずかしさの混じったような表情になり、彼女は由紀から顔を背けながら立ち上がった。

美紀「けど、本当に気を付けて下さいよ？怪我とかしてないですか？」

胡桃「あ、ああ…平気」

真冬「……………」

見たところ、膝を擦りむいたりもしていないようだ。

美紀や悠里が安堵の表情を浮かべて胡桃や由紀と共に歩を進めていく中、真冬は大きなカバン二つを背負った状態で胡桃が転んだ位置を暫く眺めていく。見たところ、爪先が引つ掛りそうな小石や枝などは見当たらないが…。

穂村「おい、先に進まなくていいのか？」

真冬「あ…うん、進むよ」

真冬は再び動き始め、少し先まで行っていた悠里達と合流していく。

彼女達から一步遅れで進んでいた彼もそれに追い付こうとしたが、その時穂村が声をかけた。この男も真冬と同様、やけに大きなカバンを肩に背負っている。

穂村「ちよいと待て、少しだけアイツらから距離を空けるぞ」

「どうして？」

穂村「お前にだけ言っておきたい事がある。これはとてつもなく重要な話であり、アイツらには絶対に聞かれちゃいけない話だ…。狭山のヤツは無駄に耳が良いから、出来るだけ慎重にな…。」

いつに無く真面目な表情をする穂村を見て、彼は歩く速度を落とすていく…。数メートル前に行く彼女達は何気ない雑談を交わして歩くのに夢中らしく、彼等との距離が空いている事には気付いていない。

「…で、重要な話って?」

しっかりと小声で尋ねていくと、穂村は先に行く彼女達との距離を確認し、一人頷く。これだけの距離があればもう大丈夫と思ったのだろう。穂村はのんびりと歩きながら彼の方を見つめ、その口を開いた…。

百四十話『さくせん』

「…で、話つてのは？」

由紀達と温泉に向かう道中、穂村が言ってきた事の内容を確かめる。

辺りに木々が立ち並び、足元の悪い山道をのそのそと歩く中、穂村は前方に行く彼女達から一定の距離を開いてそつと口を開けた…。

穂村「なに、大したことじゃない…。このあと、無事温泉に辿り着いたらアイツらが湯に浸かっている間、俺は辺りの警戒をしておこうと思つてな。その仕事が一人だと少しばかりキツいんで、お前にも協力を頼みたくてね…」

「…辺りの警戒？」

穂村「こんな世の中だ…見張りでもいなきや一瞬も気を抜けないだろう？」

穂村の話を簡単に纏めるところなる…。

女性陣が仲良く温泉を楽しんでいる間、自分達は少し離れた所から周囲を見張つて”かれら”…もしくは危険な生存者の存在を警戒し、無防備な彼女らを守つてやろう…という事だ。それ自体はとても立派な心構えだと思うし、彼女達が心から安心して湯を楽しむように是非ともそうしてあげたいところだが…。

「ええつと…言いたいことはそれだけ？」

穂村「ん？まあ…そうだな。以上だ」

「そういう事なら手伝うけどさ、なんだ…：…てつきり、覗きの手伝いをしろとか言われるのかと思つてたよ」

穂村「おいおい、随分と失礼なヤツだな？」

穂村はそう言つて楽しげに笑うと、肩に背負っていた大きなカバンを背負いなおす…。ずつと気になっていたが、随分と大荷物だ。

「それ、中には何が入ってる？」

穂村「えっ？ああ…ドローンだ。これさえあれば、辺りからやってくる脅威に対してすぐに反応出来るだろう？本体にカメラが付いているから、空から辺り一面を見張れるんだよ」

「へえ…そりゃ結構な物を…」

「いったい、どこで手に入れた物なのだろう…」

色々と気になる点はあるが、確かにそれがあれば空高くから地上を見下ろし、広範囲を見張れる。とても便利な物だという事には間違いない。

……が、穂村の言葉に含まれていた一文がそれとなく気になる。

「……………カメラ？」

そう、穂村の持つドローンにはカメラが付いているようだ…。

もつとも、それ自体に大した問題は無い。周囲を警戒する為に飛ばすのだから、カメラくらい付いてもらわないと見張りの役に立たないだろう。しかし、もしかするとそのカメラは周囲の警戒をしつつもつと別のものまで撮ってしまうのではないだろうか…。

穂村「…なんだよ、その目は」

「一つ気になるんだけど、そいつはあんたが操縦するのか？」

穂村「そりゃまあ…そうだろ。お前に飛ばせるのか？」

「……………いや、無理だけどさ」

女性陣が温泉に浸かる中……穂村がカメラの付いた物体を空高く飛ばす…。口では周囲の警戒の為と言っているが、もう嫌な予感しかない。

「まさかとは思うけど、それで温泉を覗くわけじゃないよな…」

穂村「はあ？いやいや！そんな事するわけねえだろ？この神聖なドローンはあくまでも見張りの為に飛ぶんであり、アイツらを守る為に飛ぶんだ。アイツらの裸体を映し、傷付ける為じゃない」

そう語る穂村の表情は嘘を言っているようには見えないが、やはり

怪しい気もする…。前に行く彼女らと一定の距離を保ちつつ彼が疑いの眼差しを向け続けていると、穂村は額に汗を垂らし、そつと顔を背けた…。

穂村「まあ…なんだ…見張りの途中、”誤って”温泉の真上にドローンが飛ぶ…なんて事はあるかもな？ほら、風に流されたりして…」

…やはり、それが狙いだったようだ。穂村は顔を背けたまま口笛を鳴らし始めたが、不意にその顔をこちらへと向ける。

穂村「おっとー！仮にそうなたとしてもわざとじゃねえぞ？あくまでもアクシデントだ！決してわざとじゃないっ!!」

「……………」

いや、この男はわざと温泉の真上にドローンを飛ばすだろう…。ただの決め付けと言われればそうなのだが、相手はこの穂村だ。まづ間違いなく、彼女らの裸体をそのカメラに映そうとするハズだ。

穂村「…なあ、手伝ってくれるよな？」

「というか、そもそも何を手伝って欲しいんだ？よく分からないけど、そいつを飛ばして周囲を見張るだけなら一人でも出来るんじゃないのか？」

穂村「いや、俺がおんせ……………どつか適当な位置にドローンを飛ばしてモニターを見てる時、不意に感染者とか来たら困るだろ？両手はコントローラーで塞がってるし、感染者に気を取られていたら良いシーンを逃すかも知れない」

『おんせ…………』とか『良いシーンを逃す』とか、明らかに怪しい言葉が飛ぶ。やはり、この男はそのドローンを使って温泉を盗撮する気であるようだ…。そしてその間、隙だらけになる自分を感染者から守って欲しいと提案しているのだろう。

「うゝむ…………覗きの共犯するのはちよつとなあ…………」

穂村「覗き？何の事だろうな…？」

あくまでもしらを切るつもりなのか、穂村は誤魔化すように辺りを見回す…。彼自身も女性陣の入浴シーンに興味が無い訳ではない…：むしろ興味津々しんしんなくらいなのだ、穂村と覗き映像を共有するのは気が引けるし、何よりもまたここで覗きをしてそれがバレたら皆からの信頼が地に落ちる…。それだけは避けたい。

「…悪い、今回は手伝えな——」

穂村「もしこの覗きがアイツらにバレたとしても、お前は”関わってなかった”事に出来るぞ？」

と、悪魔が静かに囁く…。

関わってなかった事に出来るとは…：どういう事なのだろう。

彼は思わず聞き返す。

「どういう事だ？」

穂村「簡単な話だ…。このドローンは前に狭山から貰った物で、コイツの存在を知ってるのは俺と狭山だけ。万が一、コイツを使って覗きをしてることがバレたとしても狭山に疑われる容疑者は俺だけだ。もしも狭山達に覗きがバレた時、お前だけは一足先に逃げて本当に見張りをしたフリでもすれば良い」

そうすれば、彼女らに捕まるのは穂村だけで済むだろう…。

彼は適当な場所に逃げ、後で彼女らに何かを聞かれても『自分はこのでずつと見張りをしていた』と言えば良いのだから。しかし、そんな上手くいくだろうか…。

穂村「もちろん、俺はアイツらに捕まってもお前の事は話さない！全部一人でやったって事にする!!…：ってわけで、どうだ？失敗したつてお前には何のリスクも無いんだから、かなり良い話だと思うぞ？」

「……………」

こんな男と協力なんて出来ない…。

覗きなんて、もう二度としない…。

ついさつきまではそう決意していたのに、彼の意思はグラグラと揺らぐ。

「…本当に何も言わないんだな？捕まった時、絶対に僕の事を話さないと約束出来るか？」

穂村「ああ、男に二言は無い…！少年、力を貸してくれ」

穂村はそつと右手を差し出し、握手を求め…。

この手を握ったその時、自分は悪の道に堕ちてしまう。それでも良いのだろうか…。後悔したりしないだろうか…。彼は微かな間だけ沈黙し、答えを見出だす。

「…仕方ない、今回だけはあんたに付き合つてやる」

差し出されていた手を強く握り、ニヤリと微笑む。

この男の計画に付き合えばノーリスクで彼女らの裸体が拝めるというのだ…。これを断るなんて出来ない。出来るハズがない。

穂村「やつぱり、お前は見込みがある！よろしく頼むぜ相棒。…

因みに聞きたいんだが、お前は誰の裸が見たいんだ？」

「えっ？あゝ…そうだな…。美紀…いや、胡桃ちゃん…？いや、リーさんも見たいし、由紀ちゃんや真冬の身体も気になるな…」

つまり、全員の裸が見たい…。

穂村という悪魔と契約した瞬間、彼の欲望はみるみる膨れ上がる。

穂村「ふふつ、欲張りなヤツめ!!だが、男は欲張りなくらいがちょうど良い!!因みに俺は、リーさんの身体が気になるな…。服の上からでもあれだけ立派なんだ…脱いだらヤバいだろうな…」

今はまだ想像することしか出来ないが、あと少しすればそれを眺められる…。二人の男は隠しきれない笑みを浮かべながらも道を進み、そしてとうとうその時が来た。

悠里「えつと、ここまで来ればもうすぐそこね」

真冬「そう…。じゃあ穂村、あと君も……どつか適当な場所で待っててくれる？」

目的地である温泉は、もうすぐそこだ…。彼と穂村は女性陣に気取られぬようにそっと目配せすると、作戦通り真冬に向けて返事を返す。

「ああ、じゃ…その辺で見張りでもしてるよ」

穂村「俺もそうするか…。狭山達も警戒しておけよ？外は俺らが見張っておくけど、温泉の中に感染者がいる可能性だつてゼロじゃないからな」

真冬「うん、分かってる…。えっと、出来るだけすぐに戻るから――」

穂村「せっかく来たんだ、のんびり浸かってこい。俺らは周りの風景を眺めつつ、一時間でも二時間でも見張りをしておいてやるからよ」

普段街中で過ごしている分、こういった木々の生い茂る山中の空気は美味しい…ような気がする。穂村は辺りを見回しながらわざとらしく深呼吸して笑顔を見せ、そして彼もまた由紀達へ向け小さく手を振る。

「ごゆっくり～……」

由紀「じゃあ、また後でね！」

その場に立つ二人を残し、女性陣は更に山道を進む…。

他愛ない会話を交わしながら山道を進む彼女らはこれから、先にある温泉へと入る。年頃の美少女達が、恐らくはバスタオルも水着も無しで、警備も厳しくない露天の天然温泉へと…。

穂村「……………さて、やるぞ、少年」

「了解…」

すぐそばにそんな楽園がある以上、この二人が動かないはずが無い。

彼と穂村はそのまま山道を横へと逸れ、道無き道を進みだす…。生い茂る木々の間を素早く通り抜け、微かに開けた場所へと出る。

穂村「よし、ここらで良いだろう…。少年、温泉の位置はどっちだ？」

「ここからだ、ちようどあつちの方角だな」

前に来た時の記憶を遡って温泉の位置を思い出し、彼はその方角を指差す。穂村はその方角をしっかりと確認するとその場に腰を下ろし、持っていたカバンを開くと何やら忙しそうに手を動かしていく…。どうやら例のドローンとやらは組み立て式らしい。

穂村「少しだけ時間がかかる。その間だけ周り見といてくれ」

「ん？ああ、わかったよ…」

彼は辺りを見回して警戒をしていくが、特に異変は無い…。

気持ちいい程に晴れた空から降り注ぐ陽射しは木々の間を通り抜けて二人を照らしており、耳を澄ませば木の葉が風に揺れる音と穂村がドローンを組み立てるガチャガチャという音だけが聴こえる…。

「…この辺りは感染者が少ないな」

穂村「ああ、田舎の方だからか？まあ、何にせよ安全で良いじゃないの。これだけ穏やかな場所なら、アイツらものんびりと温泉を楽しめるだろうさ…」

もし感染者の多い場所だったのなら温泉になんて浸かる余裕は無いし、彼等も覗きなんてしてられない。しかしこの辺りは巡ヶ丘ほど感染者はおらず、比較的安全だ。これなら彼女らもそこまで気を張る事なく、リラックスして温泉を楽しめるだろう。

穂村「感染者が来たたら来たで狭山のヤツがぶつ倒すだろうし…。それに胡桃だっている。アイツら結構強いから、元々見張りなんて不要だったんだよ」

「ん、んん…」

確かに、見張りなどせずとも彼女達なら平気だと思う。

万が一感染者が来ても誰かがすぐに気付くだろうし、真冬と胡桃さえいれば数体くらいまでは余裕で対処可能なはずだ。

穂村「……よし、出来た！」

位置について数分経った頃、穂村はそれを組み立て終えて立ち上がる。

小さなプロペラが複数あるそれは想像していたよりも一回り大きく、下部にある立派なレンズは光を反射して輝きを放っていた……。恐らく、これが例のカメラなのだろう。彼がそれを興味深そうに見つめていると、穂村が『ふふん』誇らしげにと笑みを溢す。

穂村「このドローンは以前、狭山に無理を言っただけで用意してもらったヤツでな……。ここに付けられている高性能カメラはあらゆる物を鮮明に捉え、そのまま動画保存も可能だ！しかもこっちには小さいながらもアームが付いてて、1〜2キロ程度の重さの物なら回収可能！！」

穂村の言う通りドローンの下部……そこにある高性能カメラとやらを挟むようにして、二本のアームが伸びていた。その歪な風貌はドローンというより、UFOキャッチャーのクレーンに近い。

「これを……真冬が？」

穂村「ああ。高いところから辺りを見回したいとか、手に届かない場所にある物資を安全に回収したいとか、適当な事言ったら用意してくれたよ。ふふっ、アイツもバカだよな……俺にこんな渡すなんて、盗撮してくれて言ってるようなもんじゃねえか」

この物体は真冬がどこからか手に入れた物なのか、それとも彼女の手によって一から造られた物なのか、はたまた既存の物に少し手を加えた物なのかは分からない。分からないが、カメラの付いている飛行物体を穂村に渡したのは狭山真冬の人生における最大級のミスだ。

穂村「さてさて……では、早速飛行させまして〜」

穂村はドローンを地面へと置き、今度はその手にリモコンを持つ。大きめのリモコンの中央にはモニターが付いており、ドローンのカメラとリンクしているのがすぐに分かった。ドローンは穂村が操作するとゆっくりと上昇し、あつという間に木々の上へと位置取る。飛び立つ際の音も思っていたより静かだ。

穂村「ふふふ……じゃあ思う存分お宝映像を撮らせてもらいまして、そのついでに誰かの下着でも盗んでくるか？せつかくアームがあるんだし」

「えっ？あ、ああ……」

あのアームはその為の物だったんだ…。

彼は思わず苦笑いするが、穂村は笑顔でリモコンを握っている。

その笑顔はまるで、初めてラジコンを操作する少年が見せるような眩しい笑顔だが、この男が飛ばしているのはただのラジコンではなくドローンという名の盗撮飛行物体だ…。

そんな物体が空高く舞い始めた時、女性陣はもう例の温泉へと辿り着いていた。そこは以前来た時と同様に湯が溢れており、辺りにモクモクと湯気が立つ…。近くに立っているだけで汗が出そうなくらいの熱気を感じつつ、一人…また一人と衣服を脱ぎ出す。しかし、真冬だけはその場に立ち尽くしたままピクリとも動かない…。

由紀「…真冬ちゃん、大丈夫？」

真冬「あ、ああ……ごめん、大丈夫だよ」

真冬の言葉を聞いた由紀は安心したようにニツコリ微笑むと下着から靴下まで全てを脱ぎ、それらを岩場の陰にたたみ置く。久しぶりの温泉という事ではしゃいでいるのか、由紀は幸せそうな笑みを浮かべて胡桃達と共に湯の方へと向かっていった…。

真冬「……はああ」

胡桃達は持ってきた石鹸等を使い、身体を洗い始めている。

真冬もそこに合流すべく、大きな岩陰に隠れながら上着を脱いでシャツと短パン…下着を脱ぎ、その場にペタリと屈む。そして真っ白いシャツの皺を出来るだけ綺麗に伸ばしながらゆっくりと畳み、茶色の短パンもじっくりと畳む…。その後も緑色のブラジャー、ショーツを丁寧に畳み、全てを畳み終えた時…もう一度深いため息を放つ。

真冬「はああ………やっぱり、女の子同士でも恥ずかしい…」

全裸のまま白いバスタオルと石鹸類だけを手にした真冬は空を見上げ、覚悟を決める。真冬は人一倍羞恥心が強く、これまで同性相手にも裸体を見せてこなかった。しかし、由紀達とは一度だけ…勇気を出して共に入浴をしている。だから今回はもう平気かと思っただが、やはり誰かに裸を見られるのは恥ずかしい…。とはいえ、彼女らと楽しい時間を共有したいのも事実なので、真冬は再び勇気を奮い立たせる。

真冬「…カナ、ボクがんばるよ」

今はいない友に向けて決意の言葉を放ち、真冬は立つ…。

そして楽しそうに笑い合っている少女達と彼女が合流した時、その近辺の上空では妙な飛行物体が温泉目指して真っ直ぐに移動を開始していた…。

百四十一話『うかぶ』

気持ち良い程によく晴れた空の下、由紀達は山中にある天然温泉にて楽しいげな声をあげながら湯浴みゆあびを満喫していく…。こんな世の中だからこそ、友達と共に温泉に浸かるといふこの時間を楽しみたい。一行は温かな湯に肩まで浸かりながらまた深く息をつき、その心地よさに頬を緩める。

美紀「はああ…気持ちいい…」

由紀「柳さんの家のお風呂も気持ちいいけど、これはこれで良いよねえ。気持ち良すぎてこのまま溶けちゃいそうだよ」

肩どころか頬までを湯に浸け始めた由紀の”ほへっ”とした表情はあまりにだらしなくて見ているだけでも力が抜けるが、そんな表情になってしまう気持ちも良く分かる。木々に囲まれた岩場の中で皆と共に温かな湯に浸かり、晴れた空をそっと見上げる…。これは露天温泉ならではの心地よさだ。

悠里「彼と穂村さん、大丈夫かしら？」

胡桃「ま、大丈夫だろ。ここまで歩いて思ったけど、この辺は奴らの数も少ない。あの二人に限って、こんなところでやられたりは——」

と、そこまで口を開いた時…胡桃の目の前を妙な物体が通り過ぎる。

黄色いアヒルのオモチャだ…。手のひらの上に乗ってしまいそうなくらい小さなそれは水掻きのある二本の足をバタバタと動かして湯の上をバシヤバシヤと進み、そのまま目の前を通過していく…。

胡桃「…な、なんだ、これ」

由紀「わあ〜っ！かわい〜っ!!」

由紀は堪らずそれを掴み、顔の前へ掲げて目を輝かせた。

それは湯からあげられても由紀の手の中で両足をバタつかせてい

たが、その動きは少ししてピタツと止まる…。どうやら、背中にあるゼンマイが切れたらしい。由紀はすぐにゼンマイを巻き直すとそのオモチャを再び湯に戻し、バタバタと泳ぐ様を笑顔で見送る。

由紀「ふふふつ、この子、どこから来たのかな？」

真冬「あつ…。その…。ボクが持ってきた…」

湯に沈んでいた右手を恥ずかしそうにあげ、真冬は顔を俯ける。

どうやら、このオモチャの持ち主は真冬だったらしい。

胡桃「…。どういう理由があつてこれを？」

真冬「べ、別に…。なんとなく…。としか…」

皆の前を一周したアヒルのオモチャは再び真冬の前へと戻り、彼女にそのクチバシを突つかれて湯に浮き沈みする。真冬自身、どうしてこれを持ってきたのか自分でも分かっていない…。ただ、みんなと温泉に行くこと決まったその時、無意識の内にこのオモチャをカバンへと入れていたのだ。

悠里「ふふつ、可愛くて良いじゃない。私にも見せてくれる？」

真冬「あ…。うん…。…」

悠里は手渡されたオモチャを穏やかな表情で見つめ、また『ふふつ』と笑い声を漏らす…。そうして彼女の視線がアヒルのオモチャに向いている間、真冬は湯の上にプカプカと浮かぶ彼女の胸をじろつと凝視していた…。彼女が動く度、湯に小さな波がたつ度、その豊満な胸は湯の上で揺れる。

真冬（大きいと…。本当に浮くんだ…）

ただの噂話かと思っていたが、事実だった…。

ほんのりと赤く色付いてきた悠里の胸は汗とも湯とも分からぬ水滴を谷間へと落とし、何時までもプカプカと浮いている…。それを見た真冬はゴクリとノドを鳴らしてそれとなく自分の胸に目を向けるが、こちらはちつとも浮いていない…。浮くほどのモノが無い…。真

冬がそつと静かに絶望する一方、悠里は彼女にオモチャを返すべく手を伸ばす。

悠里「はい、返すわね。……あっ」

湯に濡れていた手がツルツと滑り、アヒルのオモチャは真冬の手に渡る前に落下する……。落下位置にはちょうど悠里の胸があり、そこに落ちたアヒルはまるでトランポリンの上にも落ちたかのようにピョンツと跳ねて真冬の前へと落ちる。ポチャンという音とともに湯の飛沫があがり、それをまともに受けた真冬の顔はびしょ濡れになっていった……。

悠里「ごめんなさいっ、大丈夫？」

真冬「……え？ああ、大丈夫……だよ」

見ての通り、体に怪我は無い……。

ただ、一連の流れを見た事で悠里の胸の立派さを改めて思い知らされてしまい、心には深めの怪我を負った……。真冬は現実から目を逸らすようにして悠里から視線を外し、胡桃の方を見るが……彼女の胸もまた湯の上に浮きかけており、とうとう自分の顔を両手で覆う。

真冬「あ……もうやだ……」

さつきチラツと見たが、由紀の胸も結構大きい……。

湯に浮いてこそいないものの、決して小さくは無いサイズだ。

そして、美紀の胸も自分のと比べると微かに大きい……。

つまり、自分はこのメンバーの中で一番の貧乳だ……。

真冬が静かに絶望していったその時、付近の上空では妙な物体が空を舞っていた。複数のプロペラを回転させながら飛行するそれを動かす人物は、離れた場所でリモコンを手にしたままニタニタと笑う。

穂村「あ……つと！風に流されてるなあ……！こりやダメだ、操作が効かない……。俺の意思とは関係なく変な方向へ飛んでいく……！」

飛行物体を操作するその男……穂村は誰に聞かせる訳でも無く言葉

を放つが、操作している物体は風の影響などほぼ受けていない。この男の操作する通り正確に飛び、ある場所を目指して速度を上げる。

「さて、そろそろかな？」

そばで付近の見張りをしていた彼も頬を緩め、穂村の手中にあるリモコンを覗き込む。リモコンの中央には大きめのモニターがあり、ドローンの映像をリアルタイムで映し出していたが、まだ例の場所は映らない。

穂村「こつちであつてるよな？」

「ああ、多分…」

方向は間違っていないはずだが、モニターに映るのは木々を上から見下ろした映像ばかり…。未だに温泉は映らない。二人の笑顔も次第に曇り始めた頃、遂にはそばからガサガサと物音が鳴り、嫌な呻き声が聞こえてくる。感染者だ。

穂村「チツ……おい、任せたぞ」

「…はいはい」

リモコンから手が離せない穂村に代わり、彼はナイフを手に感染者の前へと寄る。感染者はこちらに気付いていたが、彼はその側面へ回ると慣れた手付きでそれを仕留め、血に濡れたナイフを腰のベルトにあるホルダーへと収めた。その一体が地面に倒れた後で念のために周囲を警戒するが……特に気配は無い。やって来たのはこの一体だけようだ。

「こつちは終わった。で、そつちは？」

穂村「いや、こつちはまだだ…。飛ばす方向を間違えたか？」

「んく…どうかな…」

間違っていないとは思いが、これだけ辿り着けないと少し不安になる…。

穂村はモニターを見つめながら必死になってドローンを動かし、彼

はその様子を真横から見守る。すると少しして、木々の開けた場所がモニターへと映った。

「おっ?」

穂村「お：おおおっ!!」

モニターに映るのは、光に反射してキラキラと輝く湯…。

それはモクモクと湯気をあげていて、遠目に見てもその熱が伝わってくるようだ。よく見るとその中に数人の人影が見えるが、湯気が濃すぎると、距離が離れているのが原因でハッキリとは確認出来ない。

「もう少し寄れるか?」

穂村「ああっ！任せろ!!」

あの湯気の中にいるのは、彼女達に違いない。

そう確信した彼と穂村は同じ様に鼻息を荒げ、その視線をモニターに釘付けにする。ドローンは穂村の操縦によってその湯気の方へゆっくりと下降し、人影へと接近していくが…。

真冬「……ん?」

美紀「真冬、どうかしたの?」

真冬「いや…変な音が……」

少々接近し過ぎたのか、真冬がドローンの飛行音を察知する。

由紀や胡桃達が楽しげに会話をする声に紛れ、耳に届く妙な音…。

真冬は冷や汗一つ浮かべるとまずは前後左右を見回し、何も無いのを確認してから今度は上空を見上げる…。

真冬「……っ！やっぱり…!!」

視界に映るのは、青空に舞う飛行物体…。

そんじよそこらの虫や鳥よりも大きなそれは複数のプロペラを回転させながらゆっくりと下降しており、キラッと光るレンズと目が合

う。

真冬「穂村のヤツっ…！みんな、肩までお湯に浸かって隠れて！」

由紀「えっ？」

胡桃「ん？うおっ!?何だよあれっ!!？」

真冬からの警告を受けた後、皆は彼女の視線の先に妙な飛行物体が存在している事を知る。あの物体が何なのかは分からないが、下方にある大きなレンズを見た瞬間に由紀以外の全員が大体の事を察した。

悠里「あれを飛ばしてるの、穂村さんよね…？」

真冬「うん、たぶん…いや、絶対そう！あれ、前にボクがあげたヤツだもん」

美紀「っ！本当にどうしようもない人っ!!」

この温泉は濁りが濃いので、肩まで浸かっていたら体を見られる事は無い。それは不幸中の幸いだったが、かといって何時までもこうしてはいられないだろう…。真冬は湯の中をのんびりと進みながらこつそりと岩場へ上がり、置いていたカバンを開く…。その中には穂村が覗きをしてくる事を想定して用意しておいた罫の数々が入っていたが、その多くは穂村が”地上から”やって来る事を想定した物ばかりで今は役に立ちそうにない…。

真冬「っ…：…どうしよっ…！」

ドローンはゆっくり、ゆっくりと下降しており、かなり接近してきている…。このままだと自分の裸体を撮されてしまうため、真冬は再び湯に戻って対策を練る。

美紀「何かあった？」

真冬「ご、ごめん…：…ちよつと準備不足だった…」

真冬なら何らかの対応策を用意してくれていると期待する美紀達だったが、今回は穂村が上手だ…。一行は近寄ってくるそのドローンを焦りの目で見つめながら湯に浸かり、顔を赤らめる。

悠里「どう…するの？」

真冬「どうしよ…どうしようっ…!!」

穂村に裸を見られる…穂村に裸を見られる…。

真冬の頭はその事でいっぱいになり、一行の中でも断トツに赤い顔へと染まる。同性である由紀達の前ですら裸になるのを躊躇ったのに、それを穂村なんかに見られたらもう生きてはいけない。あのレンズに自分の体が映ったその時は、恥ずかし過ぎて死んでしまうだろう…。

真冬「あ、頭が…クラクラしてきた…」

焦るあまり、のぼせた訳でもないのに視界が歪みだす。

この状況を打破するには…あのドローンを止めるには、どうすれば良いのだろう…。あれこれ思考を巡らせる真冬だが、窮地に追いやられているせいでまともな考えが浮かばない。

真冬「あああ…うううっ…」

美紀「裸見られるの、相当嫌なんだね…」

穂村に裸体を晒すのは自分だって嫌だが、美紀は真冬ほど慌てずに辺りを見回す…。そして、目の前を泳いでいたアヒルのオモチャを手にとった。これは使えるかも知れない。

美紀「胡桃先輩、このオモチャ、あれにぶつけられますか？」

胡桃「んっ？ああ、多分やれるかな…」

美紀「よかった…。真冬、あれ壊しちゃっても平気？」

真冬「平気平気っ！やれるならやっちゃって!!」

あのドローンはどうせ穂村の物だ。壊れたところでどうってことない。

真冬はかつてないくらい慌てた様子でドローンの撃墜を胡桃に頼み、胡桃はアヒルのオモチャを受け取って狙いを定める…。

胡桃「…結構遠いな」

ドローンは10メートル程上を飛んでいたが、少しずつ下降している。

向こうはまだこちらにバレていないと思っっているのか、やけに慎重な様子でゆつくりと下降していた。恐らく、空から見ると湯気が濃くて彼女達に警戒されている事に気付いていないのだろう。

胡桃「悪いな、アヒル……………それっ!!」

弾丸代わりに飛ばされるアヒルのオモチャに一言謝罪し、胡桃は右手を勢い良く振る。そうして投げ飛ばされたアヒルは宙を舞い、そのまま……………

胡桃「……………あれっ?」

弧を描き、ゆつくりと下降して近くの岩場へと落ちていった…。

胡桃はそれを思い切り投げたつもりだったが、アヒルはほんの4〜5メートル程しか舞い上がらず、ドローンには擦りもしなかった。

悠里「あらあら…」

美紀「……………どこ投げてるんですか……………」

胡桃「わ、わりい……………あはは…変だなあ……………」

真冬「……………笑い事じゃないっ…このままじゃ、ボクらは……………!」
全員、穂村に裸体を撮られてしまう…。

真冬の焦りは最高潮に達し、美紀と胡桃は苦い笑みを浮かべ、悠里は参ったようにため息をつく…。そんな中、由紀だけはボーっとした表情でそのドローンを見つめ続け、そして何気ない雰囲気ですばにあった手のひらサイズの石をポンツと放り投げた。

由紀「えいっ!」

可愛い声と共に放り投げられた石は空高く舞い、接近していたドローンを飛び越す…。それから勢いを失った石は重力に引かれて

下降し始め、ちようどドローンのプロペラへと命中した。響いた音は”カンツ!!”と軽いものだったが、プロペラにダメージを負ったドローンはコントロールを失って空をフラフラと漂い、とうとう森の中へと墜落していった…。

胡桃「おおっ！墜ちたぞ！やるな、由紀」

由紀「えへへ♪」

本人としては適当に投げただけだったが、運良く命中して撃墜出来た。由紀は胡桃に褒められて嬉しそうに微笑み、それから『えっへん!』と胸を張る。悠里と美紀も穂村に裸体を撮られずに済んだ事を喜び由紀を褒め称え、真冬は鬼の様な形相で湯から出る。

美紀「真冬、どこ行くの？」

真冬「穂村のそこっ!!あのバカっ…今日こそ殺すっ!!」

ザバツ!!と勢いよく湯から出るなり手早く体を拭き、服を着て、持ってきていた警棒やナイフを確認して真冬は旅立つ。あの様子だと、本当に穂村の事を殺してしまいそうで少し心配だ…。悠里は深いため息をつくとゆっくりと立ち上がり、体を拭き始める。

悠里「ちよつと心配だから、真冬さんについていくわね」

『そういう事なら私も』と、美紀が立ち上がる。

覗きは許されない行為であり、真冬がああして怒るのも分かるが、だからといって殺しは良くない…。

胡桃「よし、じゃああたしらも……」

悠里「私と美紀さんだけいれば大丈夫よ。せつかくの温泉なんだから、胡桃と由紀ちゃんはまだ少しだけのんびりしてて？」

胡桃「ん……そうか?じゃ、お言葉に甘えて……」

由紀「もう少しだけ浸かったら追いかけるからね」

笑顔で手を振る由紀に手を振り返し、悠里と美紀は温泉から立ち去る。

何だか騒がしい展開になったが、一先ずこの湯を楽しもう…。由紀と胡桃は湯に浸かりながらチラツと目を合わせると、ほぼ同時に笑い声をあげた。

……その一方、森の中へと撃墜されたドローンの持ち主……つまり穂村は……

穂村「……ヤベエぞ、ヤツが来る……」

手の中にあるリモコンのモニターを見つめ、ダラダラと汗を流していた。リモコンのモニターはどこかの茂みだけを画面いっぱい撮しており、幾ら操作してもピクピクと動くだけでドローンは上手く飛び上がらない……。完全に壊れている。モニターを横から覗いていた彼もそれを察し、頭を抱えた……。

「……真冬か？」

穂村「ああ、少し大胆に接近しすぎたな。このポンコツめ、何をされたか分からねえがあっさり墜ちやがった……。まだ何も見れてねえぞ……」

あともう少しだけ接近出来れば彼女らの裸体を撮せただろうに、結局は失敗に終わってしまった……。自棄になったようにリモコンを放り投げ、その場で顔を真っ青にする穂村はダメな大人のお手本のようであり、彼は今になってようやくやく気付く。やはり、この男の誘いに乗るべきではなかったと……。

百四十二話『つらいこと』

覗きはバレてしまい、ドローンは撃墜された…。

もうじき真冬がやって来る…。お目当ての物を…彼女らの裸体を撮す事が出来なかった穂村は木に寄り掛かりながら残念そうに項垂うなだれていたが、計画の失敗を残念に思っているのは彼も同じだ。

「…じゃ、お疲れ様。僕はこの辺で失礼するんで」

穂村「はあっ？おい、俺だけ置いていくつもりか？」

「もちろん。最初からそういう契約だったでしょうが」

彼が穂村の覗きをサポートすると約束したように、穂村もまた彼に約束をしていた…。『もし覗きがバレたとしても、お前は関わっていなかった事にしてやる』と。覗きがバレて真冬が迫っている今、彼は一刻も早くこの場から立ち去って穂村との繋がりを断ちたいのだが……

穂村「…わりい、やっぱあれ無し。一緒に怒られてくんねえかな？」
「嫌だ。死ぬなら一人で死んでくれ」

彼女らにバレても自分だけは逃がしてくれと聞いていたからこの誘いに乗ったのに、穂村はここにきて約束を破ろうとする。一人で怒られるより、二人で怒られた方が気が楽だと甘えているのだろう。

穂村「ここで俺を置いていったら、俺は狭山達に言うぞ？『あの少年も一緒に覗きをしてたけど、ドローンが壊された途端に逃げた』ってな…。下手に逃げて罪を重ねるより、ここで大人しく罰を受けておこうぜ？」

「ぐっ…い」

なんて卑怯な奴だ…。

なんなら、今ここでこの男を殺し、口封じしてやろうか…。

腰に下げたナイフに手を伸ばしかける彼だが、グツと堪えてため息

を放つ。ここでこの男を殺しても、何の解決にもならない。

「……わかった、あんたと一緒に待っていてやる」

穂村「おおっ！流石だな!!」

「…けど、大人しく罰を受けるつもりもない。僕に良い考えがある」
真冬の手によって、この男と共に葬られるのはごめんだ…。

彼は堂々とした様子で歩き出し、彼女達と出会すように山道へと向かう。それは一見するとただ死期を早めているだけに思えたが、目の前を歩く彼の背中があまりにも自信ありげに見えた為、穂村は嬉々とした様子であとに続く。

これまで身を潜めながらドローンを飛ばしていた場所から、行きに彼女らと通った山道へと戻るとすぐ、上の方から数人の人影がやって来た…。その先頭にいる黒髪の少女は顔を真っ赤にしていかに激怒しているといった感じだが、彼と穂村は平静を保つ。

真冬「穂村っ…!!」

やって来た少女：狭山真冬はあまり感情を出さない娘だが、今その顔は怒りに満ちている…。覗きをされたのが余程嫌だったのだろう。彼女の背後には悠里と美紀もついており、全員湯上がりの直後で髪の毛が湿っているのが分かる。髪を濡らしている美少女というのは中々にドキっとくるものがあるが、今の穂村はそれどころではない。焦りを隠しつつ彼の背を小突き、この場の対応を任せる。

「あく、真冬と…りーさんに美紀まで、いったいどうした?」

真冬「どうもこうもない…。穂村と一緒にいるって事は、キミも共犯者って事だよな?なら、ボクがこんなにも怒っている理由は分かるはず…」

真冬の背後に立つ悠里と美紀は驚いたような視線を彼へと向けたが、その視線は少しずつ呆れたようなものへと変わる…。まさか、彼が関わっていたとは思っていなかったのだろう…。しかし、彼は素直にそれを認めはしない。

「…うんなんの事だ？僕とこの人は今の今までここにいて、ずっと見張りをしていた。真冬が怒っている理由なんて見当もつかない」

真冬「…よく、そんな嘘がつけるね。穂村がどうしようも無い変態だっていうのは知ってたけど、キミもそうなんだ…」

「あはは…いやいや、僕をこの人と一緒にしてもらっちゃ困る。」

ほら、美紀やりーさんから何か言っちゃってくれるかな？」

悠里「う、うん…」

悠里は味方でいてくれるかと期待したが、そう上手くはいかない…。

彼女はもう彼の事を完全に疑っており、苦い笑みを浮かべた。美紀の方もまた冷や汗を浮かべながら彼の事を凝視しており、静かに口を開く。

美紀「さつき、温泉の方に妙な物が飛んできたんです…。大きなレズが付いた飛行物体でしたが、真冬が言うにはあれは穂村さんのだと…。つまり、穂村さんはそれを使って覗きをして、先輩もそれに協力したんですね？」

「飛行物体？ええつと、そんなの持ってきてた？」

穂村「えっ？い、いや…持ってきてない…」

咄嗟に尋ねられて慌てかけたが、穂村はどうにか話を合わせる。

しかし、当然ながら疑いは晴れない。

真冬「あれは間違いなく、ボクが前にあげたドローンだった…。つまり、まらない嘘なんかやめて、早く認めた方が良い…。今なら楽に殺してあげる」

「あはは…」

この状況でも笑顔を崩さない辺り、彼は相当な自信を持っているのだと分かる。これだけ追い詰められた状況でも上手く言い逃れ出来るようなとっておきの作戦があるのだと、穂村はそう確信して彼に全てを任せていくが…。

「真冬、今は死人も歩くような世の中だ……。こんなぐ時世だからこそ、何が起こつても不思議じゃない。それこそ、野良ドローンだっているさ。真冬が見たのは穂村のドローンなんかじゃなく、もっと別の誰かが飛ばしたドローンだったんだよ」

と、どうしようもない事だけを言つて彼は『はははっ』と笑い、真冬の肩を叩く。こう言えば真冬が納得すると、そう信じて疑わないような様子だった……。しかし、真冬はそんな事で騙されたりはしない……。彼女のそばに立つ悠里と美紀も彼を見て再度呆れた目を向けているし、穂村も同じ様な目を彼に向けていた……。まさかとは思うが、彼の”良い考え”というのはこれで終わりなのだろうか。

穂村「少年……。ここからが本番なんだろう？」

「あ〜……。いや、終わりだ。真冬は思つていたよりも賢い娘だな」

真冬「キミは……。穂村と同じくらいバカだね……」

あんな馬鹿げた言葉で上手く言い逃れ出来ると思われていたなんて、心外としか言えない……。またしても怒りを覚えた真冬は眉をひくつかせながら彼の右手を掴み、徐々に力を込めていく……。華奢な細腕からは想像出来ないくらいのが彼の手首を掴み、じわりじわりと痛みを与えた。もう、下手な言い逃れなんてさせない。

「いつ、いたた……」

真冬「で、ボクの裸……。見た？もし見たのなら、ここで殺す……」

「見てない。誰の裸も見えてないよ。湯気が酷くて見えなかった」

最後に『残念ながらね……』と言いかけるが、慌てて口を閉ざす。

ここでそんな事を言えば真冬はもちろん、悠里達からも失望の眼差しを向けられるだろう……。いや、もう既に向けられる気もするが……。

真冬「……ほんと？ほんとに見てないっ？穂村も見えてないの？」

「本当に見てない」

穂村「あ、ああ。俺も見えてないぞ！……。残念ながらな」

ボソツと呟かれた言葉を聞いた真冬は彼の手を離すと穂村の前へと寄り、その腹部を肘で打つ。ドスツ!!と鈍い音が鳴り、穂村は苦しげに悶えながら地に伏した…。

穂村「うお…っ…ぐううっ…!!」

真冬「今回はこれで許すけど、またやったら殺すからね…」

地面の上で悶える穂村を見て、彼はホツと安堵する。

さっきの言葉の最後に『残念ながらね』なんて台詞を加えていたら、自分も今の穂村のようになって痛みを悶えていただろう…。

美紀「先輩、本当にどうしようもないですね…。前に来た時も似たような事をして胡桃先輩達に怒られたのに、懲りてなかったんですか？」

「懲りてはいたけど、誘惑には勝てなくて…」

悠里「…とりあえず、あとでお説教ね？わかったかしら？」

薄っすらとした笑みを浮かべている悠里の背後には黒々としたオーラの様なものが見える…：：：ような気がした。こういう雰囲気の時彼女はわりと本気で怒っているため、下手な言い訳はかえってマズイ。

「…はい、了解です」

恐らく、一時間以上のお説教は確定だ…。

彼がそれに対しての覚悟を決めた時、山道の向こうにある温泉では由紀と胡桃が二人きりの湯を満喫している最中だった…。

~~~~~

由紀「ふふふっ、覗きするなんて、ほむさんは仕方ないね〜」

胡桃「んん、そうだな…」

温かな湯の中に沈めていた右手をそっと上げ、由紀は自分の手の甲から二の腕までをジーツと見つめる…。湯に濡れた肌は太陽から降り注ぐ光に反射しており、入浴前よりも肌がプルツとしたように見え

た。これが温泉の効果かと思うと、ついニヤニヤしてしまう。

由紀「うふふ、これで全身スベスベだ♪」

胡桃「んん、そうだな……」

由紀が今やってみせたように、胡桃もそつと右手を上げる…。

湯をかき分けて上げられた右腕は、入浴前と比べると確かに綺麗でプルプルな肌になったような気もするが……胡桃はそれを喜んだりしない。

胡桃「……………」

ただ、上げた右腕をゆっくり動かしたり、手のひらを閉じたり開いたりを繰り返す…。一回、二回、三回……連続で繰り返す内、その違和感をハッキリと感じた。やはり、腕に力が入りにくくなっている…。いや、腕だけじゃなく、全身が少しずつ不自由になっているようだ。

胡桃（やば……………これは…少しへこむなあ……………）

自分の身体の異変には気付いていたが、ここまでハッキリしてくると流石に心が沈む…。隣で明るく笑う由紀のように温泉を楽しむ余裕なんてもうすっかり無いが、だからといって暗い顔ばかりするのも悪い…。胡桃は由紀に合わせて微笑みを浮かべるが、直後…由紀の表情が真剣なものへと変わる。

由紀「胡桃ちゃん……………どうかしたの？」

胡桃「…えっ？」

由紀「その、ね……………さつきから、なんか様子がおかしいから…」

右手で頬を掻きながら『勘違いだったらごめんねー』と言って由紀が気まずそうに笑う中、胡桃は目を丸くして驚く…。身体の不調を上手く誤魔化していたつもりなのに、出来るだけ悟さとられないようにしていたつもりなのに、由紀には気付かれていたのだろうか？

胡桃「様子がおかしい…?」

由紀「…うん。さつきからずっとボーっとしてるし、笑った顔もちよつとだけ不自然…。上手く言えないんだけどね、なんか…いつもの胡桃ちゃんっぽくない…」

胡桃「あたしっぽくない…」

そう言われた途端、心臓の鼓動が早さを増す…。

由紀に気付かれるとは思っていなかったからだろうか…それとも、『胡桃ちゃんっぽくない』という言葉に嫌なものを感じてしまったからだろうか…。由紀の言葉に悪意など無いと分かっているのに、表情が自然と暗くなる。

由紀「あつ、ごめんね、変な意味じゃないんだよ?ほんと、わたしの勘違いならそれで良いんだけど…胡桃ちゃん、さつきから無理してない?」

胡桃「…無理なんてしてない。由紀の勘違いだろ」

由紀がせつかく気遣ってくれているのに、つい突き放すような言葉を吐いてしまう…。せつかく遠出してまで遊びに来たのに、余計な心配をかけたたくない…。胡桃は一刻も早くこの話題を切り上げようとしたが…。

由紀「そっか…うん、わたしの勘違いだよな?えへへ、ごめんね…」

由紀の笑みがだんだんと弱々しいものに変わっていき、もうどうすれば良いのか分からなくなる…。余計な心配をかけたくない”と自分に言い聞かせ、由紀を突き放すのが正解なのか…それとも、多少の心配をかけてでも全てを話すべきなのか…。あれこれ悩んでいると、由紀が真横へと寄ってぴったりと肩を寄せてきた。

由紀「もし辛いことがあったら、すぐに言ってね?わたしじゃ大した役には立てないと思うけど、でも…何も言わないまま一人で悩む胡桃ちゃんを見てるのは、凄く辛いから…」

由紀は優しい声でそう言うと、頭を傾けて胡桃に寄り添う…。胡桃はその行動に多少戸惑いを見せたものの、すぐにニコツと微笑み前を向く。

胡桃「…ああ、わかったよ」

由紀「約束だよ？胡桃ちゃんは色んなことをすぐに一人で抱え込むから、わたしはとても心配なのですっ!!」

言い終わってから見せたその表情はムスツとしていて怒っているようだったが、多分「心配している」という気持ちを表現しているつもりなのだろう…。真横にある由紀の顔を見た胡桃は思わず声をあげ、心からの笑みを見せた。由紀のそばにいと、沈んでいた心すら明るくなっていくから不思議だ。

胡桃「っふ…あははっ！わかったわかった、約束するよ」

右手を上げ、由紀の頭をガシガシと撫でる。

本当はこうして腕を上げるのも、その桃色の髪を撫でるのも少しだけ辛い…。しかししたった今約束したばかりなのだから、すっかり相談すべきなのだろうか。先日から少しずつ、身体が不自由になってきている事を……。

由紀「約束だよ？何かあったらちゃんと言ってね？これからもずっと、ずっと一緒にいてね…？急にお別れとか、そんなの絶対に嫌だよ…」

由紀は頭を撫でていた右手を掴み、胡桃の目を真っ直ぐに見つめる。

その眼差しはとても真剣なものであり、何時もの由紀とは別人のようだった…。胡桃は彼女の手を握り返すと繋ぎあったままの状態で湯に沈め、ため息を放つ…。

胡桃「ああ、お別れは…あたしも嫌だなあ……」

由紀「…うん、だから、ずっと一緒…」

由紀や皆とお別れするなんて、想像しただけでも辛い。だから、これからもずっと一緒にいたいと願う。

しかし…それは可能なのだろうか…。

胡桃「…実はさ、少一だけ、体がおかしいんだ。なんかこう、上手く力が入らなくて…。」

ここで隠すのも申し訳ないので、胡桃は自身の体が不調である事を打ち明ける。出来るだけ心配をかけないよう、明るい声と表情で語るが、それを聞いた由紀の表情は少しだけ苦しそうだっ…。

由紀「じゃ、帰ったらすぐ柳さんに言わないとね…。悪いところ、全部治してもらおう」

胡桃「ん、んん…：治るかなあ…」

由紀「治るよ。絶対に大丈夫…。胡桃ちゃん、強いもん…」

湯に浸かりながら肩を寄せ、強く手を握り合う…。

正直、今の胡桃はこうして浸かっている湯の温かさすらよく分かっていなかった。温度を感じる感覚すら、麻痺してきているのだろう…。

しかしそんな状態でも由紀の手だけはやけに温かく感じる事が出来て、胡桃はそれを強く握り続けた…。彼女と、みんなと…何時までも一緒にいたいと願いながら。



百四十三話 『おわかれよりも』（☆）

真冬と悠里と美紀が穂村を捕らえに向かい、10分は経過しただろうか…。未だ温泉に残っていた由紀は肩まで湯に浸かりながら、隣にいる胡桃の事をそつと見つめる。

由紀「そろそろあがるっか？」

胡桃「ああ、そうだな…」

もうすつかり、身体の芯まで温まった。

これ以上長湯するとのぼせてしまうかも知れない。

二人は静かに湯から出るとそばの岩場に置いていた衣服を着て荷物を背負い、真冬達との合流を目指す。

胡桃「よし、じゃあ行くか」

由紀「うんっ」

どこに”かれら”が潜んでいるか分からないので、胡桃は右手にしつかりとシャベルを持つ。万が一、みんなと合流する前に”かれら”と出会したらいつものようにこのシャベルを振るい、由紀を守ろう…。

そう思っ手て手に力を込めた矢先、また違和感を感じた。

やはり、上手く力が入らない。この感じだと恐らく、シャベルを振ったところで好調時の半分の力も出せないだろう…。

由紀「胡桃ちゃん、大丈夫…？」

胡桃「…えっ？あ、ああ、大丈夫だ」

こんな調子で戦えるのだろうか…。

由紀を守るのだろうか…。

みんなを守るのだろうか…。

様々な不安が顔に出てしまっていたらしく、由紀が心配そうに問

う。

胡桃はすぐに笑顔で答えたが、正直なところ”大丈夫”ではない…。

胡桃（あたし、どうなるのかな…）

急に意識が遠のいたり、何でもないとこで躓つまずいたり…身体の調子がおかしいのは今に始まった事ではない。が、今朝になってからは特に酷い…。シャベルを持つ手にいくら力を込めようと手応えを感じられないし、なんだか歩くのすら…立っているのすら辛くなってきた。

胡桃（もう、だめなのか…？）

身体の具合は明らかに良くない方向へと向かっている…。

最低でもあと数ヶ月は…いや、数週間くらいはみんなと一緒にいられると思っていたが、このままではたったの数日すら持ちそうになり…。気付けば頭の中はまたしても嫌なイメージでいっぱいになり、胡桃の顔は少しずつ青ざめていく。

由紀「ねえ、本当に大丈夫なの？ 顔色悪いよ…」

胡桃「…わるい、心配かけたな。大丈夫…大丈夫だ…」

気遣ってくれた由紀に精一杯の笑顔を返すが、由紀は意外と鋭い娘だ…。

きつと、この笑顔がただの強がりだとバレているだろう。胡桃はそんな笑顔を浮かべたままゆつくりと歩き出して山道を進むが、ほんの数歩進んだだけで足がもつれて転びそうになる。

胡桃（つ…：…うわ、ほんとにヤバいかも…）

すぐに体勢を立て直し、隣を歩く由紀に悟られないように上手く歩を進めていくが、足が度々もつれてしまう…。ただゆつくりと歩いていくだけなのに、それが辛くて仕方ない。

今の自分ではもう、前のように走ることなんて出来ないだろう…。

胡桃がそれを悟って顔を俯けたその時、こちらへと迎えに来ていた悠里達と合流する事が出来た。見たところ、彼や穂村も一緒だ。

悠里「あら、ちょうど出てきたところだった？」

由紀「うんっ！のんびり温まってきたよ」

悠里「ふふっ、なら良かったわ」

悠里と言葉を交わした由紀はそのままトコトコと歩き、穂村の前に立つ。そうしてから大きな瞳を細めてニヤニヤと笑い、穂村の肩を指先でツンツンと小突いた。

由紀「ほむさくん、覗きしようとしたでしょ？そういう事しちゃダメなんだよ」

穂村「あー、分かった分かった。もうしないって」

真冬「ウソだ……絶対にまたやる……穂村はそういうヤツ……」

ジトーツとした真冬の視線を受けた途端、穂村は慌てて目線を空へと向ける。よく見るとその額からは冷や汗が流れており、この男がどれだけ反省していないかがよく分かった。

美紀「あの……少しでも長生きしたいのなら、もうそういうのはやめるべきかと……。このままだと、次は本当に殺されちゃいますよ？その……真冬に……」

穂村「……ああ、そうだな。その可能性は高いよなあ……」

真冬「大丈夫、痛くない……。一瞬で楽にしてあげる……」

ニヤニヤと微笑みながら放たれたその言葉は、真冬なりの冗談なのだろうか……。恐らくそうだとは思うが、彼女が穂村に対してそういう事を言うとなかなからず本気にも思えてしまう。真冬の笑みから逃げないように目線を逸らし続ける穂村と、そんな穂村をイタズラに見つめ続ける真冬……。それを見ていた一行は楽しげに笑みを浮かべたが、胡桃だけは顔を俯けたまま、そっと彼の手を掴んだ。

胡桃「あつ……忘れ物した……。おい、ちよつとついてきてくれるか？」

「えっ？ああ、別にいいけど…」

その返事を聞いた途端、胡桃は彼を連れて来た道を引き返そうとする。

悠里「忘れ物って…温泉に？」

胡桃「…：うん」

美紀「なら、私達も一緒に——」

胡桃「大丈夫、すぐ済むから…。コイツだけいてくれれば良い。みんなは先に行つてくれよ、すぐに追いつくから」

まだ温泉からは全然離れていないので全員で向かうのも容易なのだが、胡桃はそれを拒み続ける…。彼の手を掴んだまま背を向け、悠里達には『大丈夫』『すぐに済むから…』とだけ言い続けた。

悠里「じゃあ、先に行つてるわよ？」

胡桃「…うん、そうしてくれると助かる」

渋々ながらもそれを了承した悠里に背を向けたまま礼を告げ、胡桃は進む…。しかしその直前にチラツとだけ由紀の方を見つめると、そのままニコツと笑みを浮かべて口を開く。

胡桃「由紀、さつきはありがとな」

由紀「…えっ？」

放たれた言葉はとても小さな声で、由紀はそれを聞き取れない…。

胡桃はその言葉を改めて告げ直す事はせずに再び背を向けてしまい、そのまま彼と二人きりで温泉方向へと戻っていく…。ついさつき由紀と二人で歩いたばかりの山道をのんびりと歩き、幾らか経ったあとで後ろを振り向くと、もう悠里達の姿は見えなくなっていた。その瞬間、胡桃は歩みを止めて彼と向かい合う…。

「ん？どうした？」

急に歩みを止めた事を疑問に思い、彼は胡桃の顔を見る。

彼女の表情はやけに暗く、何か良くない事があったのはすぐに分

かったが、直後…胡桃は彼が更に戸惑い、驚くような発言をしていく。

胡桃「なあ…今、ここであたしを殺してほしいって言ったら…困るか？」

弱々しい笑みを浮かべながら、ハッキリそう告げた…。

彼の目を真っ直ぐに見つめ、その目が驚きに染まるのをしつかりと感じながら、胡桃は更に言葉を放ち続ける。

胡桃「身体の様子がおかしい…。力が上手く入らないし、歩くのも辛いんだ…。ついこの前までは平気だったのに、ここ最近になって一気に悪くなってきた。このままだと多分もうすぐ、あたしは…。」

そう言えば、悠里達と別れてここに来るまでの間、胡桃はやけにのんびりと歩いていた。あれはわざとのんびり歩いていたのではなく、そのくらいのペースじゃないと辛かったからなのだろう…。彼女がそうして弱っていく様を…辛そうな表情を見ているのは異様な程に苦しいが、彼は微笑みを浮かべて彼女を元氣付けていく。

「大丈夫、そうなる前に治るよ」

胡桃「…本当に…そう思うか…？」

「ああ、絶対に大丈夫」

正直、その言葉には何の保証も無い。

柳が薬を作るよりも先に、胡桃の身が持たなくなってしまう可能性だってある。…が、彼は胡桃が無事に治る事を信じた。『絶対に大丈夫』という言葉は彼女に…そして自分に言い聞かせるように放つて。

胡桃「身体の調子が悪いって事はさつき、由紀にも言ったんだ…。そしたら、由紀もお前と同じことを言ってくれた。あたしなら、絶対に大丈夫だって…。あたしだって、その言葉を信じてずっとお前達のそばにいたいって思ってる。お別れなんて、辛いから…。」

胡桃の声が、だんだんと小さな震え声に変わる…。

皆とお別れする事を…自分一人だけがいなくなる事を想像すると辛くて、寂しくて、悲しくて、怖いのだろう…。

胡桃「けどさ、さつき気付いた…。お別れすることよりも辛い事があるんだよ…。このままみんなと一緒にいたとして、あたしは前ほど役には立てない。それどころか、ただの足手まといになると思う…。あたしのせいでみんなを危険に晒す事だってあるかも知れないし、もしかしたら…あたし自身がみんなを傷付ける事だってあるかも知れない…」

この調子だと数日後にはゆっくり歩く事すらままならなくなり、当然ながら戦う事すら出来なくなる…。そうして皆の足を引つ張るのも心苦しいが、一番心配なのは自分がその内”かれら”のようになり、大切な誰かを傷付けてしまうのでは、という事だ。それは胡桃にとって、お別れよりも辛い事…。

胡桃「由紀を…みんなを傷付けてしまうくらいなら、ここでお別れした方がずっと良い…。大切な誰かを巻き込むくらいなら、あたし一人で死んだ方がずっと良いと思う…。だから、さ…もう、ここであたしを殺すか、置いていくつてのも一つの手じゃないか？みんなには…何か適当に言い訳してさ…。」

胡桃は”かれら”に襲われてしまった…。山道を転げ落ちてしまった…。

『そんな事を言つて誤魔化せば良い』と胡桃は笑うが、彼は首を横に振る。胡桃をここで殺すつもりなんて無いし、置いていくつもりも全くと言つて良いほどに無い。大体、そんな事を言つたところで由紀達は納得しないだろう。

「…バカな事を言つてないで、もう戻ろう」

忘れ物をした…というのはこれを伝える為の嘘だったに違いない。彼は胡桃の手を掴んで皆の元へ戻ろうとするが、その手はそつと振り払われた。

胡桃「これ以上、みんなと一緒にいいのかわからない…。無事に治ってくれたら良いけど、もし治らなかつたら…あたしはただ、お前らに迷惑をかけるだけだぞ？」

自分の身体に起きている異変にかなり焦っているのか、胡桃の視線は落ち着きなく泳ぎ、涙が溜まってきている…。それだけ悩み、苦しんでいるのだろう…。

彼女の辛そうな顔を見ていると胸がズキズキとして、こっちまで苦しくなる…。彼はそれを抑えるべく、胡桃の気持ちを少しでも楽にするべく、そばへと寄って声をかける。

「迷惑なんかじゃない…。胡桃ちゃんがどうなろうと、それを迷惑だなんて思わないから、だから…ずっと一緒にいよう」

胡桃「っ…………あ…………」

どんな事になろうと、ずっとそばにいて欲しい…。

言葉だけじゃその思いを伝えきれない気がして、彼は胡桃を抱き締める。

両手をしっかりと背に回し、ギュツと抱き締めた彼女の身体はヒンヤリとして冷たくもあつたが、こうすると心が落ち着いた。

「辛いと思うけど、怖いと思うけど、もう少しだけ頑張ろう…。胡桃ちゃんなら…………胡桃なら、絶対に大丈夫だよ…」

胡桃「……………」

胡桃は何も言わないでいたが、少しすると静かに腕を上げ、彼の事を抱き返す…。そしてその胸に顔を埋めると微かな間だけ肩を震わせ、それが終わるとゆっくりと顔を上げた。

胡桃「…分かった、もう少しがんばるよ…」

向けられた微笑みは弱々しく、瞳からは涙が溢れかけている…。

出来ることなら、胡桃にこんな顔をさせたくはない…。彼女には何時だって笑っていて欲しいが、今はこれが精一杯だ…。

胡桃「…じゃ、戻るか？」

「ああ、そうしよう…」

胡桃の頭をそつと撫で、皆の元へと向かう…。

彼女は今にも泣き出してしまいそうな顔をしていたが、それも少しずつ落ち着いていくのが分かった。…ただ、山道を歩くその足取りは少しおぼつかない。やはり、身体の調子が悪いのだろう。彼は胡桃の前に身を置くと、その場に屈んで背中を差し出す。

「…よし、乗って」

胡桃「えっ？い、いや…そこまでしてもらわなくても良いって！確かに少しだけ辛いけどさ、一応、歩けない訳ではないし…。」

「転んだりしたら危ないだろ。大丈夫だから、ほら」

胡桃「ん、んん…じゃあ、乗せてもらおうかな…」

人に背負ってもらうなんて、何時ぶりだろう…。

しかも彼のような若い年の男の子に背負られるとあつては少しばかり恥ずかしいが、胡桃はゆっくりとその背中に身を寄せ、肩に両手を回していく。

「よし、行くか…」

胡桃「あの…重かったら降ろして良いからな？」

「平気だよ」

彼は胡桃の太ももに両手を添えてその身をしっかりと背負い、静かに立ち上がってから歩き出す…。不安定な山道で、シヤベルやら荷物やらを持った女の子を背負うのは色々大変だろうが、彼は嫌な顔一つしない。ここで『重い』なんて言われたら少し傷付くが、逆に『平気だ』と言われると何だか嬉しくなってしまう、胡桃は背に身を寄せたまま頬を緩める。

胡桃「…あ、そう言えば、お前や穂村さんは温泉入んないのか？」

「ああ、今回はいいや。あの人も覗きに失敗して落ち込んで、それど



ころじやないみたいだし…僕もそんな気分じやない。…あ、胡桃ちゃんが一緒に入ってくれるなら、喜んで入るけど？」

胡桃「…ばーか、無理に決まってるだろ、そんなの」

彼は前を向きながら歩いているので胡桃がどんな表情をしているのか分からなかったが、耳元から聞こえたクスクスという笑い声で彼女が楽しんでくれているのは分かった。さっきまではかなり辛そうだったが、今は冗談を楽しむ余裕が出来たらしい。

胡桃「でも、そうだな…。裸で入るのは無理だけど、水着とか着た状態なら一緒に入ってやっても良いぞ」

「おおっ、本当？それは楽しみだ」

胡桃「ま、今度ここに来るのが何時になるか分からないけど…せいぜい楽しみにしてくれ。あつ…水着といえば、またみんなと一緒に川遊びとかしたいなあ」

「良いね。…そう言えば、胡桃ちゃん知ってた？柳さんの屋敷、裏の方にプールがあるんだってさ」

胡桃「マジ？じゃあわざわざ川なんて行かなくても、そこで安全に遊べるじゃん」

「まあ、全然使っていないからかなり汚れてるらしいし、先に掃除する必要があるけどね…。また今度、みんなで掃除しようか？」

胡桃「んん、そうだな。しっかり掃除して、綺麗にして、みんなで遊ぼう…。んん、となると、また新しい水着が欲しいな。探しに行かないと…」

「そうだね。出来るなら、セクシーなヤツを着て欲しいかな」

胡桃「悪いな、リクエストは受け付けてないんだ」

胡桃は彼の頬をペシツと叩き、また楽しげに笑う。

やはり、彼女は暗い顔をしているよりも笑顔の方が良い…。

これから先も、彼女には笑顔でいてもらいたい…。

「たしか胡桃ちゃんは…可愛いお嫁さんになるのが夢だったよね…。なら、少なくともその夢を叶えるまでは頑張ろう」

胡桃「ま、まあ……そういうのに憧れはあるけど、少し難しくないか？その……こんな世界だと、中々相手がないし……」

「……ま、どうにかなるでしょ。胡桃ちゃんなら、その内良い相手を見付けられるよ」

胡桃「……………んん」

またほんの少しだけ、胡桃の表情が暗くなる……。

この時、胡桃は心のどこかである言葉を期待していた……。

冗談でも良いから、彼が自分の相手に名乗り出てくれたら嬉しいのにな……と、ほんのちよっぴりだけ期待を……。

胡桃「はああ……なんか、色々大変な世界だよなあ……」

「……ああ。これが映画やゲームの世界ならもう少し楽に進むんだろうけど、現実……この世界はそこまで甘くない」

胡桃はもちろん、由紀達全員とはこれからもずっと一緒にいたい。

その気持ちは確かなものだが、彼らの生きるこの世界はとても過酷な世界だ。一日一日をただ生き延びるだけでも苦勞する、先の見えない世界……。例えば一年後、皆の内の誰かを失っても不思議ではないし、明日……誰かを失う可能性だってある。ここは、そういう世界……むしろ、これまで生き延びてこられただけでも幸運なくらいだ。

「けど、精一杯頑張ろう……」

胡桃「……うん、がんばるか」

胡桃は……彼女達は、みんな良い娘だ……。

だからこそ、全員幸せになって欲しい……。

彼女達が幸せになる為なら、どんな事だってする。必要なら、自身の命だって捨ててみせよう……。これから先も皆を守り抜こうと彼が改めて決意した時、その背に乗っていた胡桃は彼の頬を指先でツンと小突く。

胡桃「そう言えば、お前には夢とかあるのか？」

「夢……あ……そうだな……まあ、みんなが幸せになってくれれば良

「い」  
彼女達が幸せになる事こそ、自分の夢だ……。それ以外は特に夢という夢は無いのだが、胡桃はその答えに納得せずため息を放つ。

胡桃 「つまらないヤツだなあ……」

「ああ、はいはい。じゃ、みんなのヒーローになるのを夢にしよう」

胡桃 「あははっ、それは良い夢だな」

冗談混じりにそう言うと、胡桃が楽しそうに笑った。

適当に考えた夢だが、これもそう悪くないのかも知れない……。

彼と胡桃は夢の事やこれからの事を語り合いながら山道を下り、町へと向かう……。幸いな事に”かれら”と会わずに由紀達と合流する事が出来たが、胡桃を背負いながら現れた彼に対して皆が何の反応も示さないハズも無く……

美紀 「せ、先輩達……何してるんですか？」

胡桃 「これは……その……おいつ、もう降ろせっ！」

「あ、ああ……分かったよ」

彼はただ、胡桃の身体を気遣って背負っていたのだが、この場にいる皆はそれを知らない……。皆からするとただ、彼と胡桃がイチヤイチャしていただけに見えたらしく、美紀は何とも言えない気まずそうな表情を……。悠里はニヤニヤとした笑みを……。由紀と真冬はそれとなく事情を察してくれていたようだが、穂村はやはり大人しくしてきてくれない。

穂村 「おいおい、やけに仲良しだな？忘れ物したとか言ってたけど、あれはコイツとイチヤイチャする為の口実だったのか？」

胡桃 「っ！ち、違うっ！！そんなわけないだろっ！」

穂村 「どうかな……。胡桃、顔真っ赤だぞ？」

胡桃 「くっくっ！！あたしっ、アンタのこと嫌いだっ！！」

彼の背から降りた胡桃は真っ赤な顔をして穂村を突き飛ばそうとするが、その手はあっさり避けられてしまう。この時、然り気無く

真冬も『ボクも穂村が嫌い…』と呟いていたが、その言葉を聞いていたのは彼女のすぐ隣にいた美紀だけだ…。

穂村はその後も胡桃の手をヘラヘラした表情のまま避け続けるが、丁度良いタイミングで合流してきた圭一が横に現れ、邪魔だと言わんばかりにその身を突き飛ばす…。穂村はそのまま体勢を崩して地面に倒れたが、圭一は穂村の恨めしそうな視線を気にもせず胡桃を見つめた。

圭一「お前、動きがおかしいぞ」

胡桃「えっ？あ、ああ…その…ちよつと調子悪くて…」

圭一「…そうか、じゃあこのまま屋敷へと戻ろう。ここには大した物は何も無いようだし、長居は無用だ」

本当はもう少しだけのんびりとする予定だったが、胡桃の身体に異変が起きているのなら仕方がない…。胡桃の不調を知った悠里達は慌てた様子で彼女に手を貸し、自分達の車へと乗り込んだ。

## 百四十四話『へんか』

久しぶりに外へと出て、温泉へと向かった一行。

ただ楽しい時間を過ごし、笑顔で帰ってくるはずだったが、帰りの車内はどこか暗い雰囲気が出る…。胡桃の体調が少しずつ悪い方向へ向かっているのがその原因だ。彼女に何かあったらと思うと、皆心配でつい表情が暗くなる。

美紀「胡桃先輩、もうすぐ屋敷に着きますからね」

胡桃「ああ。…つたく、そんな顔すんなよ。確かに少しだけアレだけど、流石に屋敷に着くまでは平気だった」

多分、今日や明日くらいはまだ大丈夫だろう…。

しかし、来週辺りになるともつと酷くなっている可能性がある。それこそ、“かれら”と同じ様になっていてもおかしくはない。色々な事を考えて苦笑いする胡桃を横目に見て、真冬は静かに拳を握り締める…。

真冬（柳さんは…間に合わないのかな…。早いところ薬を作つてくれないと、このままじゃ胡桃が…）

大切な友達を失うのなんて、もう二度とごめんだ…。

真冬は席についたままテーブルに顔を伏せ、繰り返したため息を放つ。運転中の悠里も彼女と同様に何度もため息をついているようにだし、由紀の表情もどこか暗い…。そんな中で彼だけはまだ明るい表情を保っていたが、明らかに強がりだということが分かるような表情だ。

胡桃「…：はいはいっ!!暗いのやめっ!!みんながそんな調子だと、あたしまで暗くなってくるだろ?」

由紀「あはは…うん、そうだね」

胡桃「そうそう。あたしはまだまだみんなと一緒にいて、これからも学園生活部の一員として大活躍する予定だ。…いや、もう学校で暮

らしてはいないけど、まあ細かい事はどうでもいいか」

美紀「…ふふつ、そうですね。私達はどこにいたつて、学園生活部です。これからもずっと、学園生活部として頑張りましょう」

胡桃が声を張ると由紀と美紀に笑顔が戻り、運転席に座る悠里もクスクスと笑った。この四人はこれまでも、これからも、学園生活部の部員として生きていくのだろう…。

「…そろそろか」

悠里「ええ、もうすぐ着くわ」

温泉のある山から、見慣れた街へと戻ってきた…。

長いこと車に揺られ続け、気付けば辺りも薄暗くなり始めた頃、一行を乗せるキャンピングカーと穂村、圭一の乗る車は巡ヶ丘へ…：…柳の屋敷へと戻る。

「さて、胡桃ちゃん、歩ける？」

胡桃「ああ、まだ大丈夫。サンキューな」

少しだけおぼつかない足取りで歩く胡桃を心配そうに見つめながら、一行は車を降りて屋敷内へと戻る。そしてそれぞれの部屋へ戻るよりも先に階段を上り続け、三階にある柳の部屋へと向かった…。ふらふらと歩く胡桃を気遣うようにして彼や由紀達が進む中、穂村はその扉を開けて中に柳がいる事を確認する。

柳「やあ、お帰り。温泉はどうだったかな？」

穂村「んん、覗きに失敗したから微妙つてとこだな…。それより、ちよつといいか？胡桃が少しだけヤバそうだ」

土産話を語るのの後にして、穂村は部屋の壁へと寄り掛かる。

柳は穂村の言葉を聞くとそばから椅子を持ち出し、胡桃をそこへと座らせてから身体の調子を尋ねていった。そしてその身体に異変が起き始めている事を本人の口から聞き、『なるほど…』と小声で呟きながら柵を漁る。

胡桃「あ、あの…やっぱりマズイ状態…だよな？」

柳「まあ、良い状態でない事だけは確かだね。今はまだ自力で歩いたり出来ているようだが、このままいけばもつと不自由な身体になるだろうし、最悪の場合そのまま自我を無くす可能性もある」

つまり、”かれら”と同じ様になるという事だろう…。

胡桃は険しい顔をして冷や汗を流し、由紀は戸惑ったように大きく目を見開く。美紀と悠里、真冬はそつと顔を俯け、胸が締め付けられるような痛みを感じていた。

「あまり時間が無いのなら、治療を急いで欲しい。もしも必要な物資が足りていないのならすぐに言ってくれ。何だろうと取ってきてみせる」

胡桃を治す為なら、どんな事だつてする。どんな物でも回収してくる。

彼の目には強い覚悟が宿っており、胡桃の事をどれだけ大切に思っているのが伝わってきた。

柳「ふふつ、それは心強いね。では、またその内頼む事があるかも知れない。…が、今のところは大丈夫だ。恵飛須沢君、腕を出してくれるかな？」

胡桃「えっ？あ、ああ……」

胡桃は椅子に座りながら柳の方へと右手を伸ばし、じっと待つ。

その間、柳は棚の中から小さな瓶と注射器を取り、瓶の中にある液体を注射器内に吸い上げていく…。そしてこちらへと伸ばされていた胡桃の右手を掴むと制服の袖を捲り、露出した肩にその注射器を突き刺して中にある液体を少しずつ注入した。

真冬「…柳さん、それは……」

柳「ちよつとした栄養剤みたいなものだ。少しでも楽になればと思つてね…」

胡桃「……………」

柳がその薬を注入した時、”治療薬が出来た”と期待してしまったのは胡桃や真冬だけじゃない…。彼や由紀達もそれを期待していたらしく、注射器内の液体が少しずつ胡桃に注入されていくのを残念そうな目で見つめる。

柳「：よし、とりあえずはこれで様子を見よう。また何か異変があったらすぐに教えてくれ。ちよつとした違和感でも何でも良いから、報告してくれると助かる」

胡桃「：んん、わかりました」

こんな物を打たれても、きつと気休めにしかならない…。

捲られていた袖を直した胡桃は静かに立ち上がり、由紀達と共に部屋を後にする。しかし真冬と穂村、そして圭一の三名はそこに残り、彼女らがいなくなったのを見計らってから柳へ向けて口を開いた。

真冬「さつき胡桃に使った薬…栄養剤なんかじゃないよね…」

柳「んん？どうしてそう思うんだい？」

真冬「ここにきて、柳さんが今さらそんな物を使うと思えない…。まあ、ボクの勝手な思い込みかも知れないけど…」

もしもあれがただの栄養剤ではなく、もつと違うものだったら…。それこそ、胡桃を治す為の治療薬だったらどれだけ嬉しいだろう。真冬が期待混じりの目で柳の目をジ―つと見つめ続けると、柳は観念したように顔を上げて『ふふっ』と笑いだす。

柳「そうだね…あれはただの栄養剤ではないよ」

真冬「っ!?!やっぱり…!」

穂村「マジか!?!じゃあもしかして…治療薬か!?!」

柳「いや、治療薬ではない…。が、それに近い物だ」

治療薬ではないが、それに近い…。

三人はその言葉の意味に疑問を抱いていたが、柳は尋ねられるよりも先にそれを説明していく。



柳「あれは……そうだな、試薬みたいな物だ。幾つかのパターンから見出だした結果の一つで、恵飛須沢君を治すかも知れない……ウイルスに対抗出来るかも知れない方法の一つだよ」

圭一「……いつ出来た物だ？」

柳「今日、君達が温泉へ行ってる間に……」

穂村「おお、ちょうど良いタイミングだったな……。ってか、それならそうと言ってやれば良かっただろ？胡桃のヤツ、あんたが打ったのがただの栄養剤って聞いてガツカリしてたぞ？」

柳「確かに少し悪いとは思ったが、正直に『これは試薬だ』と言ったとして、それが効かなかったらどうする？その時、彼女はもつとガツカリするだろう……。なら、最初から大した期待をさせない方が良い」

元からただの栄養剤だと思い込んでいれば、大した効果が出なかったところでまあこんなものだろうと諦められるだろう。しかしようやく出来た試薬が全く効かなかったとあれば、胡桃の不安は更に大きくなってしまふハズだ。

真冬「もしあの薬が全然効かなかったら、他の薬を試すの？」

柳「ああ、そうなるね。……しかし、私はあの薬が今一番正解に近い物だと思っている。だからもし、あの薬がちつとも効かなかったら、正直頭を抱えるな……」

穂村「……効果はいつ出る？」

柳「恐らく、明日の朝には……」

つまり、明日の朝になつてもまだ胡桃に変化が無かったら、正直なところかなりマズイという事だ……。時間があればのんびりと他のパターンを試せるのだろうが、胡桃に残されている時間はそう多くない。

圭一「じゃあ明日の朝、胡桃に話を聞こう……。それで効果無し、試薬が失敗していたようなら、アイツはもう終わりだ」

柳の反応から察するに、次の試薬が完成するのを待つ時間は無い。

他の試薬を試すよりも先に、胡桃の身が持たなくなるだろう。  
今回のチャンスを逃せばもう、胡桃は助からない…。

圭一「もし失敗に終わったその時は…もう諦めて見捨てた方が  
いい。外にいる感染者と同じになりかけてるヤツと共に暮らすなんて、  
爆発寸前の爆弾を抱えて過ごすようなものだ」

助かる希望があるのなら待つてやつても良いが、その希望が消え失  
せた時はもう仕方がない…。圭一が冷たく言い放ったその時、隣にい  
た真冬の目がギリツと鋭いものへと変わる。

真冬「見捨てるって…何？」

圭一「言葉のままの意味だ。外へと追い出すなり、殺すなりする必  
要がある。じゃないと、発症した時にいきなり襲われる可能性もある  
からな」

今は大丈夫でも、胡桃はその内”かれら”のようになる…。

そうなったら最後…彼女はそばにいる人間を見境なく襲うだろう。  
それに巻き込まれるのはごめんなので、早々に見捨てるべきだと圭一  
は告げるが、真冬は納得しない。何時になく声を荒げ、圭一を睨み付  
ける。

真冬「胡桃なら大丈夫だもん…絶対、絶対大丈夫だもんっ!!」

圭一「大丈夫じゃないから、今ああして弱ってきてるんだろう」

真冬「っ…それでも、それでも見捨てない…。見捨てたくない…。  
もし明日の朝になって薬が効いてなくても、ボクは…胡桃と一緒にい  
たい…」

圭一「……………」

彼女達がやって来て、真冬は大きく変わった…。

前の真冬はどんな時でも冷静で無表情を保っていたのに、今の彼女は『胡桃と一緒にいたい』と言いながら顔を俯けて肩を震わせてい  
…。きつと、これが本来の真冬の姿なのだろうが、それを見慣れてい  
ない圭一と柳は微かに戸惑い口を閉ざす。しかしそんな中、穂村だけ

は真冬の頭をポンポンと撫でて明るい声を発した。

穂村「明日になってみなきや何も分かんないんだから、今ケンカする必要は無いだろ？まあ、薬が効かなかつたら確かに色々焦るけど…その時はその時だ。狭山がアイツと一緒にいたいって言うなら、好きだけそばにいてやれば良い」

真冬「……………」

穂村「だからまあ…そんな暗い顔すんな。大丈夫だって、俺も胡桃の事は結構好きだし、見捨てたりなんかしねえよ。圭一さんが何かしようとしたら俺が止めておいてやるから、狭山は何の心配もすんな」

真冬「…うん……………穂村、ありがとう……………」

穂村「どういたしまして」

真冬は潤んだ瞳を向けてニコリと微笑み、そのまま部屋を出ていく…。それを見送った穂村は満足げに笑みを浮かべていたが、一方で圭一はため息をつく。

圭一「まるで俺が悪者みたいだな…」

穂村「ははっ、わるいわるい。けどさ、圭一さんもムキになり過ぎだって。狭山はあんなでも女の子なんだから、もっと優しくしてやらないと」

何時でもどんな時でもヘラヘラとしている穂村はわりと鬱陶しいタイプの人間だが、さっきのようなピリピリとした空気を上手く抑え込んだのは素直に凄いと思える…。だからこそ、柳はニヤリと笑ってその肩を叩く。

柳「ほんと、穂村君は気に入った女の子に対して優しいねえ」

穂村「ふふん。柳さんも圭一さんも、少しは俺を見習って女の子に對しての接し方ってヤツを覚えた方が良いぜ」

穂村は調子に乗ってニヤニヤと微笑み、圭一はそれを見て舌打ちをする…。穂村の勝ち誇ったような顔は見ていただけでイライラするが、圭一は苛立つ気持ちをグツと堪えて部屋を後にした…。

そして翌朝、朝食の支度すらも始まっていない時だった…。まだ目を覚ましてばかりの柳が自室の洗面所で顔を洗っていると、部屋の扉が”ドンドンッ!”とノックされる…。こんな早朝から誰かがやって来るのは珍しい。柳は手早く顔を拭くとその扉を開け、廊下にいた人物を前に首を傾げる。廊下に立っていた人物は胡桃だったが、彼女はまだ髪すら結んでおらず、寝癖をつけたまま慌てたように言った。

胡桃「あ、朝早くからごめんなさいっ…！そのっ…！目が覚めてから、身体がおかしくて…流石に報告した方が良いかなくて…」

柳「…ほう、どうおかしいのかな？」

その異変の具合によって、彼女の今後が変わる…。胡桃は参ったように頭を掻くと、頬を引きつらせて困惑の笑みを浮かべた。

胡桃「昨日と違って、手足に力が入る…。つていうか、全体的に絶好調な気がして…ここ、これって…逆にヤバいのかな？」

この変化が良い事なのか、それともマズイ事なのか…自分では判断が出来ないのだろう。胡桃は苦笑みを浮かべたり、かと思えば焦つたように視線を泳がせていたが、柳は彼女の元気そうな姿を見て安堵のため息をついた…。

クリスマス回 『くるみのおしごと』(☆)

すっかり寒い日が続くようになり、日によっては雪が降るようになってきた……。しかしどれだけ雪が降り積もり、外が歩き辛くなってきたとしても”かれら”は消えない。世界はまだまだ不安定なままだが、それでも…騒げる時には騒ぐべきだ。

穂村 「つてな訳で、明日は思い切りパーティーしようぜ!!」

空から雪が降り、それが街を白く染め始めた頃…いつもの屋敷の談話室で穂村が騒ぐ。今に始まった事ではないが、この男のテンションに付き合うのはどうにも疲れる…。皆はソファアに座りながら冷ややかな視線を向けていたが、やはり由紀だけはそれに賛同した。

由紀 「うんっ！明日は特別な日だもんね〜」

穂村 「おおよ！明日騒がなくていつ騒ぐってんだ！」

『お前はいつも騒いでるだろ…』と圭一が呟くが、興奮しきった様子の穂村にその言葉は聞こえない…。が、確かに明日はいつもより少しだけ特別な日ではある。これまで色々大変な出来事の連続だったので忘れかけていたが、明日は12月25日…クリスマスだ。

由紀 「ねえリーさん、せっかくだからお祝いとかしようよ？」

悠里 「ん〜…：…そうね、せっかくだし、ちよつとしたパーティーくらいはやってみましようか？」

あまり派手には出来ないが、それでも部屋を軽く飾り付けたり、食事に一工夫二工夫加えてほんの少しだけ豪華にするくらいは可能だろう。悠里が笑顔で答えると由紀が嬉しそうに跳ね回ったが、喜んでいるのは彼女だけではない。胡桃や美紀、真冬や彼も少しだけ嬉しそうに微笑んでいる。

「クリスマスパーティーね……七面鳥の丸焼きとかあるイメージだな」

胡桃「おお、いいなそれ。…けど、このご時世じゃ中々味わえそうにないなあ…」

こんがりと焼けた丸焼きを頭の中でイメージすると、それだけでお腹がすいてくる…。この屋敷にはある程度の食糧が揃ってはいるものの、流石に七面鳥までは用意出来ない。少なくとも今年のクリスマスにそれを味わうのは無理だろう。また来年に期待だ。

美紀「あとは…ケーキとかですかね。クリスマスケーキ」

由紀「おー！大きい苺いちじくが乗ってるのが食べたいなあ」

悠里「苺…ね……」

以前まで暮らしていた巡ヶ丘学院高校と同様、この屋敷の屋上でも菜園をしていた悠里だが、苺は育てていなかった…。苺たっぷりのクリスマスケーキ…というのも、今年はお預けになるだろう。こちらもまた、来年に期待。

「……なるほど、あまり贅沢は出来そうにないな」

悠里「そうね…残念だけど、チキンやケーキはまた今度」

圭一「いや、その気になれば肉はどうにかなるだろう。穂村、今からお前がどこかの山奥にでも行って、食べそうな鳥を捕まえてくれば良い」

圭一が鼻で笑いながらそう告げると真冬もそれに賛同し、小さく頷いてニヤニヤと笑う。もうクリスマスはすぐそこまで迫っているが、穂村の頑張り次第では食事が豪華になる……かも知れない。

穂村「冗談よせて。こんな寒い日に外に出る気にはならねえ」

真冬「残念…大きな鳥を捕まえてきてくれたら悠里が喜んだのに…」

小さな声で呟いた途端、穂村の耳がピクツと動く…。

やはり、この男は悠里に弱い。

穂村「ま、まあ……りーさんがどうしてもって言うのなら……」

悠里「どうしても……なんて言いませんよ。鳥なんて無くたってパーティーは出来ますから、気にしないで下さい」

平和だった頃と比べると、食事もそこまで豪華には出来ない……。

……が、それでも良い。大切な人達と共に笑顔で過ごせるのなら、それだけで充分だ……。その後、悠里は由紀達と共に部屋を軽く飾り付け、そして夜を迎えた。

夕食を終え、それぞれ就寝するために部屋へと戻る……。

その後、穂村は談話室に呼んだ“ある人物”にこれでもかというくらい頭を下げて“ある事”をお願いしていた。

穂村「頼むっ！これはお前にしか出来ない事だっ……!!」

これまで、こんな必死になって頭を下げた事など無い。

このままだと土下座すら始めてしまいそうなくらいに頭を下げ続けていると、目の前にいた少女……恵飛須沢胡桃は呆れた表情を向けてツインテールを揺らす。

胡桃「そう言われてもなあ……んん……」

穂村「頼む!!マジで頼むっ!!!」

そう言っつて胡桃に突き付けるのは、一つの袋……。

穂村が言うにはこの袋の中にはサンタ風の衣装が入っているらしく、それを胡桃に着て欲しいらしい。

胡桃「なんであたしなんだよ……そういうのはりーさんに頼めつて。あんだ、りーさんみたいな人が好みなんだろ？」

穂村「それはそうだが……その……手に入れられたのはこの一着だけだな……。多分、りーさんじゃサイズが合わねえ。俺の見た感じ、この服のサイズが合うのは胡桃なんだよ」

胡桃「え〜……」

やはり、乗り気になれない…。

胡桃は瞳を閉じたまま『う〜ん…』と唸ってどうすべきかと考えていたが、穂村は更にこう告げる。

穂村「明日はクリスマスだ。みんなの部屋の前にプレゼントを置いて驚かせたくないか？」

胡桃「プレゼント？」

穂村「この計画、実を言うと少くし前から準備を進めてたんだよ。でだ、リーさんもその手伝いをしてくれて…ほれ、これを見ろ！」

穂村はそばにあつた棚の中からまた一つの袋を取り出し、それを開く。

中にはプレゼント用にラッピングされた大小様々な箱が詰められており、胡桃は目を丸くした…。

胡桃「えっ、これ…リーさんと用意したのか？」

穂村「ああ、リーさんは由紀の喜ぶ顔が見たいんだとき」

箱の中身が何かは知らないが、朝起きてこんな物が枕元にあつたりしたら由紀は大喜びするに違いない。悠里はその反応を見て癒され、ニヤニヤするつもりなのだろう。

穂村「当然、プレゼントは由紀以外の分もある。どうだ、届けてくれるか？」

胡桃「……まあ、リーさんまで関わってるなら仕方ないな」

ここで断るのは悪い気がするし、それに正直言うと…少しだけサンタ風の衣装という物に興味があつた。だからこそ胡桃はその衣装の入っている袋を穂村から受け取り、そして…中を見て驚く。

胡桃「なっ…!?こ、これ…思ってたのと違うんだけど…」

穂村「へえ、そう……」



プイツと横を向き、白々しく口笛を鳴らす穂村を見て胡桃は確信する…。

悠里は由紀の笑顔が見たくてこの計画を立てたのだろうか、この男は…穂村はこの衣装を自分に着せたかっただけだ。それでも無ければ、皆にただプレゼントを配る…なんて計画にこの男が関わる訳が無い。

胡桃「…プレゼントは配る。けど、この服は着ない」

穂村「それは無し!!」

穂村はプレゼントの入った袋を勢い良く掴み上げるとそれを背後へ隠し、ニヤニヤと微笑む…。胡桃がその服を着ない限り、皆に配るプレゼントを渡さないつもりなのだろう。

胡桃「あくもうっ!!わかったよ!着れば良いんだろ、着ればっ」

この男の企みの通りに動くのは少し嫌だが、もう仕方ない。

胡桃は衣装の入った袋を持って隣の空き部屋へ一人で移動し、その服に着替えていく…。最初はもつと普通のサンタっぽい服を期待していた。いや、これも色合い的にはサンタっぽいのだが、何というか…少しだけ露出が多い気がする。

着替えを終えた胡桃はそのまま隣の談話室へと戻り、穂村の前に立つ…。

そして顔を微かに赤く染めながらギリツと強い視線を向けると、右手を前へと伸ばしてプレゼントの入っている袋を要求した。

胡桃「ほら!着てきたぞ!!とつとそれよこせ!」

穂村「ふふふっ…:…よろしい!持ってけ!!」

袋を手渡した穂村は満足げに微笑んだ後、改めてその姿を眺めている…。

胡桃は今、上半身に真っ赤なチューブトップ…:そして下半身に真っ赤なミニスカートを纏った状態だ。サンタと言えば赤い衣装…:という事で彼女にも赤の衣装を纏わせてみたが、それは思っていた以上

によく似合っている。

穂村「いや、いいねえ……」

胡桃「うっ…ジロジロ見んな！」

いやらしい目でこちらを見てくる穂村の足を軽く蹴った後、胡桃はプレゼント入りの袋を持って廊下へと逃げる。あのままあそこに残っていたら、穂村に襲われそうな気がした…。まあ、相手が穂村なら襲いかかってきたところで抵抗するし、大声だつて出す。そうすれば誰かしら助けに来てくれるだろうから最悪の展開にはならないだろう。

胡桃「つてか…寒っ……」

チユーブトップとミニスカートのみという格好で肌が思い切り出ている状態だからか、何時にも増して肌寒い。屋内とはいえ、この時期にこんな格好をするなんて自殺行為だ。もう夜も深い時間だし、由紀達は部屋で寝ているだろうから、早いところプレゼントを配り終えて元の服に着替え、そしてゆつくりと眠ろう…。なんて事を考えながら廊下を進んでいると、前方から話し声が聞こえてくる。

柳「で、また余裕のある時で構わないのだが、調べてきて欲しい場所があつてね…」

圭一「ああ、分かった」

胡桃「っ…!？」

今いる一階から、皆の部屋のある二階へ上がろうとした矢先、柳と圭一の声がした。二人は仕事に関する話をしているらしく、その話声は胡桃の立つ階段の先から聞こえてくる…。そしてそれは段々と近付いてきて、とうとう二人が階段の上から現れた。それはあまりに突然の事で胡桃はその場から逃げる事が出来ず、ただプレゼント入りの袋を肩に担いだまま顔を俯けてその場をやり過ぐそうとするが……

圭一「…………お前、何をやっているんだ」

おかしな格好をしたまま階段のど真ん中に立っている胡桃を無視するのは流石に難しい事であり、圭一は何とも言えぬ表情を浮かべる。柳もまた、恥ずかしそうに顔を俯ける胡桃を見て苦笑いしている状態だ。

胡桃「いや…これは…そのっ…」

柳「…圭一君、これはそつとしておいてあげた方が良くと思うよ」

圭一「ん、ああ…それもそうだな…」

胡桃が何の意味もなくこんな真夜中に、こんな格好をして出歩く訳がない。柳は彼女の格好を見て大体の事情を察し、その場から立ち去ろうとする。しかし、胡桃は何かを思い出したかのように声をあげてから二人を待たせると、担いでいた袋を床へと下ろして中身を漁り始めた。

胡桃「あつ…ちよつと待つてて…ええつと、柳さんは…紫の箱…。圭一さんは…黄色の箱か…」

プレゼントと同じく袋の中に入っていたメモには誰にどの色の箱を渡すのが記されており、胡桃はそれを頼りにして二人へプレゼントを手渡す。二人とも何も言わずにそれを受け取り、胡桃が袋を担ぎなおすのを見守った…。

再び袋を担いだ胡桃は二人の視線を受けながら気まずそうに微笑み、そつと口を開く。本当なら一刻も早くこの場を立ち去りたいのだが、やはり挨拶くらいはしておくべきだろう。

胡桃「あ…え…え…つと…メリークリスマス…」

柳「えっ？あ、ああ…メリークリスマス」

圭一「…どうでも良いが、寒くないのか、その格好」

胡桃「まあ…かなり寒いけど、すぐに終わらせて着替えるから…」

圭一「…お前も苦労してるんだな」

珍しく、圭一が同情の眼差しを向ける…。

こんな真夜中にこんな格好をしてプレゼントを配り歩く胡桃の姿が、それだけ痛々しく見えたのだろう。胡桃はまた気まずそうに微笑み、二人の前から立ち去っていく。そうして二階へと上がった胡桃はメモに書いてある通り、各自の部屋の前へプレゼントを置いていった…。

胡桃（さて、あと一つ……）

由紀達の部屋の前にはプレゼントを置いたので、残るは彼の部屋の前のみ。そこにプレゼントを置きさえすれば、仕事は終わり…。元の服に着替え、そのまま寝るだけだ。

そう思っていたのだが、思いもよらぬ事が起きてしまう…。

彼の部屋の前に立ち、プレゼントを置こうとしたその瞬間……  
ガチャツ……

胡桃「…あ」

目の前の扉が開き、彼が現れてしまった…。

「うおっ!? な、何してんの…?」

部屋から出た瞬間、そこにいた妙な格好をしている胡桃と目が合い、彼は驚いたように声をあげる。そして彼女の格好をジロジロと見てから先程の柳と同様に大体の事情を察し、苦笑した。

「……………それ、自分の意思で着てるの?」

胡桃「んな訳ないだろ、頼まれてんだよ……」

こんな格好、彼にだけは見られなくなかった…。

恥ずかしさのあまり頬を真っ赤に染めた胡桃は全ての事情を明かしながら袋を漁り、彼へプレゼントを手渡す。

「ああ、どうも……」

胡桃「お礼ならりーさんに言えよ」

これらのプレゼントを用意したのは悠里であって、自分ではない。

自分はただ、サンタっぽい格好をしながらその配達をしているだけ……。視線を逸らしながらそう告げる胡桃だが、ふとこんな事を思った……。もうじき日付が変わり、クリスマスになる。彼には色々世話になってきたのだから、自分からもちよつとしたプレゼントを贈りたい……。

胡桃「……………」

せつかくのクリスマス、少しくらい思いきってみても良いだろう……。

胡桃は無言で手招きをして彼をそばへと寄せていくと、瞳を閉じてから頬へとキスを放った……。真つ赤な顔をしたまま彼の頬へ唇をつけ、5秒……10秒と経過する……。心臓の鼓動がドクンドクンと激しくなり、火が出てしまいそうなくらいに顔が熱くなった頃、胡桃はようやくその唇を離してニコリと笑った。

胡桃「今のはあたしからのプレゼントだ。……あと、口止め料でもあるな。プレゼントを配ったのがあたしだって、由紀達には言うなよ？ 今日見た事は全部内緒だ」

「ん、んん……了解……」

キスをされた事に驚いたのか、彼は少し戸惑いの表情を浮かべている。

しかしその表情はすぐに喜びの表情へと変わり、ニコニコと笑いはじめた。こうして喜んでもらえるのは嬉しい事なのだが、今になって自分のした事が恥ずかしくなる……。年に一度のクリスマスという事で少し浮かれてしまったが、流石にやり過ぎだったかも知れない。胡桃はまた一層に顔を赤く染めると、彼の視線から逃れるように背を向ける。

胡桃「来年はお前がこの役をやれよ！あたしはもうやらないからな！」

「まあ、考えておくよ」

胡桃「……………メリークリスマス……………」

「ああ、メリークリスマス」

長かったようであつという間だった仕事が終わり、胡桃は元の服へと着替えていく。途中で柳達に会ってしまったり、彼と出会ってしまったというトラブルはあつたものの、何だかんだ楽しい時間だった。

着替えを終え、自分の部屋へと戻った胡桃は直ぐ様ベッドへと潜り、静かに笑みを浮かべながら眠りに落ちる…。また来年もみんなと…彼と共に笑顔で過ごしていきたいと願いながら。

百四十五話『まけずぎらい』

柳「次……少しだけ口を開けてくれ。……よし、もう良いぞ」

胡桃「ん、んん……」

今朝起きてみたら、やけに体の調子が良かった……。

それが良くない事の前触れなのではと思つた胡桃は起床後すぐに柳の部屋へと向かい、様々な検査を受けていく事となった。昨日までは歩くのも苦に感じるくらいだったのに、今はそれが嘘のように体が軽い。手足にも十分な力が込められる……。こんなにも好調なのは久しぶりなくらいだ。

幾つかの検査を終えた後、柳は部屋の奥へ向かつて何かを調べ始めたようだったが、それは数分で終わり、椅子に腰掛けていた胡桃の前へと戻る。この時、柳は『ふふっ』と声をあげながら満足そうな笑みを浮かべていた。

柳「よかつた、昨日の試薬が無事に効いたようだね」

胡桃「はあつ……？試薬……？」

そんな物、全く身に覚えが無い……。

しかし首を傾げながら昨日の記憶を辿る内、ある事が思い浮かぶ。そう言えば昨日、検査が終わった後で妙な物を注射された。あの時、柳はあれを『ただの栄養剤のような物』と言っていたが……。

胡桃「もしかして、昨日のヤツが……」

柳「ああ、あれは栄養剤なんかではなくワクチンの試薬だ。

嘘について悪かったね。変に期待させないようにと気を使つたつもりだったんだが……まあ、無事に効いたのなら良かった」

ニコニコと微笑みを浮かべる柳の前に、胡桃はただ啞然とする……。

昨日のはワクチンの試薬だった……。そして、それは無事に効いた……。

その結果、自分の身体は以前の調子を取り戻している…。これはつまり、もうあのウイルスに悩まされなくて良いという事なのだろうか？そう考えた途端、胡桃の胸は希望によって高鳴っていく。

胡桃「あつ、あのつ…じゃあ、あたし…治ったの？」

柳「完全にという訳ではないと思う。だが、これで暫くは安全だ。これでもう、あのウイルスに対する解決法は九割方掴んだ。再び発症してくる頃には完全な治療法を確立出来ていると思うから心配はいらない」

胡桃「つ……………つ……………！」

完全に治った訳ではない…。

それは少しばかり残念だが、柳が言うにはこれで暫くの時間稼ぎは出来た上、今の自分は健康体そのものらしい…。もうじき皆とお別れしなくてはならないかもと覚悟を決めていた胡桃にとってはそれだけでも凄く喜ばしい事なのだが、更に完全なワクチンの完成も近いという。嬉しい知らせが多すぎて、何から喜べば良いのかすらも分からない。

胡桃「あ、ありがとうございます……………」

今はとりあえず、この人に礼を告げるのが先だろう。

胡桃は椅子から立ち上がるなりすぐに深々と頭を下げたが、柳は鼻で笑いながら『礼なんていい』と言うだけだった。

柳「おつ、そうだ。彼を呼んできてくれるかな？これからの事について少し頼みたい事が出来たんでね…。そのついでに、身体の事も報告してくると良い」

胡桃「…うん、分かった！柳さん、ほんとにありがとう」

柳「いいえ、どういたしまして……………」

嬉々とした様子で部屋を出ていく胡桃を見送り、一息つく…。

当初はちよつとした暇潰し、実験感覚で胡桃の治療を引き受けたのだが、ああして元気になった胡桃の姿を見て安堵している自分がある



のは何故だろうか。

柳（少し情が移ったかな…？）

彼女達がやって来てからというものの、真冬の雰囲気が変わった。自分達と過ごしていた時は殆ど笑ったりしなかつた彼女がよく笑うようになり、感情が豊かになった。また、穂村も前より柔らかかな雰囲気になったような気もする…。まあ、圭一だけはわりと変化無い気がするが、自分は真冬や穂村と同様、彼女達と過ごす内に少しばかり甘い人間になってきたらしい。

柳（まあ、それはそれで悪くはないか…）

胡桃が部屋を出て数分が経ち、扉がノックされる。

彼がやって来たようだ…。

柳「ああ、入ってくれ」

言葉を放つて招き入れると、彼が扉を開けて中へとやって来る。最初こそ無表情の彼だったが、そのまま柳のそばへ寄ると小さな笑い声を漏らして微笑み、先程まで胡桃が座っていた椅子へ腰を下ろした。

「…お疲れ様です」

胡桃から全てを聞いたのだろうか…。

その笑みからは喜びが溢れており、柳も自慢気に笑みを返す。

柳「まあ、少しばかり苦勞はしたが…これで暫くは安全だ。…が、まだ全てが終わった訳ではない。また近い内、君にも力を貸してもらおう事になるかもね」

「柳さんには世話になっっているから、そのくらいは構わない」

柳「ふふふつ、ありがとう。圭一君や穂村君、狭山君にも協力を頼むつもりでいるんだが、効率を考えるとあともう一人くらいは人手が欲しくてね…。君が手伝ってくれるというのなら本当に助かる」

だが、その仕事を頼むのはもう少し先の事となるらしい……。つまり、これから少しの間は特に予定無し……。自由な時間を過ごして欲しいとの事だが、胡桃を救ってもらった手前、ある程度の恩返しはしておきたい。

「何もせずにダラダラしてるのもどうかと思うし、物資集めでもして来ましようか？」

柳「いや…物資には困っていなかったはずだから大丈夫だ。

それに、君だつて毎日何もせずにダラダラしてるだけでは無いだろう？若狭君と勉強をしたり、恵飛須沢君と庭でランニングしたりするのをよく見かけた気がするが…」

「まあ……はい……」

確かに柳の言う通り、皆と共に勉強したり、身体を鍛えたりしている。

だが、そうして普通の学生らしい生活が出来ているのはこの屋敷が安全な場所だからだ……。こんなにも良い場所に住まわせてもらっている恩を少しでも返したいところだが、柳は気遣い無用と言わんばかりに微笑むだけだった。

柳「ふむ…：どうしても何かしたいと言うのなら、また今度穂村君達と共に外の探索にでも出掛けければ良い。多少の危険は伴うだろうが、君も彼女らもそんなのは慣れっこだろう？」

「探索…：そうですね、また皆と一緒に試してみるか…」

自分一人で行つても良いくらいだが、恐らく由紀達も来たがるだろう。

何か必要な物を探したり、服を探したりしたいハズだ。

柳との会話を終えた彼は椅子から離れてその場から立ち去ろうとするが、最後に改めて礼を告げる事にした。

「胡桃ちゃんの事、本当に感謝してますよ。

もしもあの娘がいなくなったら、僕は………」

彼女がいなくなるなんて、想像もしたくない…。

だが、それが現実になる可能性は大いにあった…。胡桃がいなくなったら、悠里は絶望するだろう…。美紀は落ち込むだろう…。由紀は悲しむだろう…。そして、自分はきつと——。

「…：まあ、とりあえず元気になったようで良かった。

柳さん、どうもありがとう」

柳「ふふん、どういたしまして…」

部屋から出ていく彼を見送り、柳はまた小さく微笑む。

先程の胡桃といい、今の彼といい、今日はやけに感謝される日だ…。

くくくくくくくくくく

胡桃の調子が良くなったという事は本人の口から告げられ、由紀や美紀、悠里達はとても喜んだ。昨日までの彼女はかなり辛そうな状態だった為、心から心配していたのだろう…。特に由紀なんかは元気になった胡桃を前にして瞳を潤ませたりもしていたが、すぐにそれを拭うと眩し笑みを浮かべて談話室の中を飛び跳ねる。

由紀「えへへっ、ほんとによかったあ〜♪よしっ！今日はお祝いだね！

せっかくだし、みんな同じ部屋で寝ようよ。わたしの部屋で良いよね？」

胡桃「…：そうだな、今日くらいは一緒に寝るか」

胡桃がそう答えると由紀は笑顔のまま抱き付き、胸元に頬を擦り付ける。胡桃はそんな彼女の事を優しく抱き返しながら頬を摘まんだりしていたのだが、それと同時に由紀はハツとしたような表情を浮かべた。

由紀「お〜っ…：胡桃ちゃん、手も凄く温かくなってる!!」

悠里「どれどれ…：あら、本当ね」

由紀の言葉を確かめるようにして悠里は胡桃の横に立ち、彼女の手……ではなく、頬をむにむにと引つ張る。柔らかな頬は指で摘まむとぷにと伸び、確かな温もりを感じられた。もつとも、当の本人は眉をしかめて少しばかり痛そうな顔をしているが…。

胡桃「リーさん……ほっぺ取れる…」

悠里「ふふっ、ごめんなさい」

美紀「あっ、私も触りたいです」

漸く悠里が手を離れたかと思えば、今度は美紀がそばへと立って胡桃の頬を撫でていく…。胡桃と向かい合い、両手を頬へと添えながら、美紀はただジーツと胡桃の顔を見つめた。

美紀「……………」

胡桃「あ、あの……美紀、あまり正面から見つめられると…その……」

美紀「えっ？あ、ああ…ごめんなさい」

いくら女の子同士とはいえ、真正面から見つめ合い続けていると流石に照れがくる。胡桃が小さく目を横に逸らすと美紀は申し訳なさそうに言いながら両手を離し、笑い声を漏らす。

美紀「本当に温かいですね…」

胡桃「そう…かな…？自分だとあまり分かんないんだけどな…」

ただ身体の調子が良くなっているだけではなく、体温も通常に戻りつつある。やはり、柳の言っていた事は本当らしい。自分は、健康な状態になってきているんだ…。皆の反応からそれを実感したら嬉しくなり、胡桃もまた笑みを浮かべる。

穂村「どれ、俺も少し触ってみるかね」

真冬「穂村はダメ…」

ニヤニヤと微笑みながら立ち上がった穂村を手で制し、真冬は冷たい視線を送る。まるで虫けらを見ているかのような視線を受

けた穂村は仕方なくソファに腰を下ろし、そばにいた彼の方へ視線を移す。

穂村「お前は胡桃に触らせてもらったか？」

「いや、触ってないよ」

穂村「へく、そっか。ま、お前も俺と同じようなタイプの人間だからな…。そう易々と触らせてもらえる訳が——」

と、そこまで言いかけて頬を緩めた時だった——。

これまで部屋の隅で由紀達と戯れていた胡桃がこちらの方へスタスタと歩みより、穂村や彼の腰掛けているソファの後ろへと回り込む。そして、そのまま彼の背後を取ると両手を彼の頬へと押し当てた。

胡桃「ほっ！どうだ？温かいか？」

どこか不安げな表情をしつつ、背後から伸ばした手で頬を撫でる。

真正面を向いていた彼は背後から伸びてきたその掌の感触を感じながら瞳を閉じ、『うくん』と唸り声をあげてから頷いた。

「……そうだね、温かいよ」

胡桃「マジ？へえく……そっかそっかつ♪」

満足そうな笑みを浮かべ、胡桃はその場を去る。

由紀達の会話を聞いていて分かっていた事だが、胡桃の手は本当に温かくなっていた。ほんのりと柔らかかで、それでいて温かだった掌の感触をしっかりと感じた彼がそつと微笑みを浮かべる中、穂村は驚きの表情を浮かべたまま石像のように動かなくなる…。

「ん？…どうした？」

穂村「どうした？じゃねえよ。くそつ、俺とお前の違いは何なんだ？」

彼も自分も同じ変態なのに、こんなのは不公平だ…。

穂村がブツブツ文句を溢す中で彼は苦笑し、真冬は呆れたようにた

め息を放つ。

真冬「穂村はもっと自分を見つめ直した方が良い……」

穂村「見つめ直すって……俺、わりとイケメンだと思うぞ？」

真冬「見た目ではなくて中身の問題……。穂村は中身が酷すぎる。バカだし、クズだし、変態だし……変態だし……変態だし……あと、髪の毛が少し長い。見てるだけでも鬱陶しいから切った方が良い」

中身の問題と言いつつ、然り気無く外見に関してダメ出しをしていくと、穂村はムツとしたように眉をしかめて自身の茶色い髪の毛を弄る。確かに、少しばかり長くてチャラチャラしているようにも見える……。

穂村「自分で切っても良いが、上手くやる自信がねえ……」

狭山先生、切ってくれるか？」

真冬「え……嫌だよ……。ボクも髪の毛とか上手く切る自信無いし……」

穂村「だよな……。じゃ、もう暫くはこのスタイルでいくわ」

それより、真冬の口から『変態だし』という言葉が三回連続で出た事には触れないのだろうか……？穂村と真冬の会話を聞いていた彼はひっそりと苦笑し、そのまま何気ない一時を過ごす。

そうして夜がやって来て、皆と共に夕食を終えた後……

穂村「おい、このあと暇か？」

と、穂村が廊下を歩いてきた彼に声をかける。

夕食を終え、その片付けも終え、もう特にやる事は無い……。

彼がそう答えると、穂村はニヤニヤと微笑む。

穂村「そりや良かった！じゃあさ、これから少しだけ遊ぼうぜ？」

「遊ぶ……何をして？」

この後は部屋に戻ってもう寝ようと思っていたところだが、遊びの内容によつては付き合つてやらない事もない。彼がその内容を尋ね

ると、穂村は後ろ手に隠し持っていたそれを見せ付けた。半透明の入れ物に詰め込まれている積み木のような物……タワーのように積み重なっているそれは、”ジエンガ”と呼ばれる物だった。

「おお、これはまた珍しい物を……」

穂村「ふふん、そうだろ？前、外に出た時に見付けたんだ。今から俺とお前……それから圭一さんも誘ってさ、三人でやろうぜ？」

「僕は構わないけど、圭一さんは来ないだろ……」

穂村「さくて、それはどうかな？あの人、ああ見えて結構単純なことあるからな……。『俺に負けるのが怖いのか？』とか何とか言って煽れば簡単に乗ってくるさ」

「ん……そんな簡単にいくかね……」

疑いの眼差しを穂村へと向けつつ、彼は一足先に談話室へと向かう。

穂村はああ言っていたが、本当に圭一は来るだろうか……？

テーブル前のソファーに腰掛けながら待機する事数分……部屋の扉が開き、穂村がそこへと訪れる。

穂村「お待たせ。じゃ、始めようぜ！」

満面の笑みでそう告げる穂村の後方には、冷めた表情をして立ち尽くす圭一がいた……。一見するとただ冷めているだけの表情に見えたが、その瞳の中には『穂村にだけは負けたくない』と言わんばかりの闘志が宿っているのが分かる。

（なるほど……穂村の言う通り、結構単純というか……負けず嫌いなんだな）

穂村の煽りくらい難なく受け流すくらいに冷静な男だと思っていたが、案外そうでもないらしい……。いや、どれだけ冷静な人間であろうとそう簡単には受け流せないくらい、穂村の煽りが鬱陶しいものなのかも知れないが……。

圭一はテーブルを挟んで向かいにあるもう一つのソファーへ腰掛

けると、向かいに座る彼の方を見て呟く。

圭一「なんだ、お前もいたのか…」

「まあ、暇潰しくらいになれば良いと思って」

ほんの少し言葉を交わした直後、穂村が彼の横へと座り、目の前のテーブルにジエンガを置く。そしてその横に何十枚か積み重なったカードのような物を置き、ニヤニヤと不敵な笑みを浮かべる。

「カード…?」

圭一「おい、それは何だ?」

穂村「ふふん…いやあ、普通にジエンガだけやっても盛り上がりないだろ?だから少しでも展開を盛り上げようと思って、罰ゲームカードを用意した。負けたヤツはこのカードを引いて、その罰ゲームを受ける!どんな罰ゲームだろうと拒否とか出来ねえから、逃げるなら今の内だぞ?」

圭一「馬鹿言え…。お前こそ、負ける覚悟は出来てるだろうな?」

穂村の作戦通りというべきか…圭一はかなりやる気に満ちている。

彼はその様子を見て苦笑したが、彼自信もまた少しだけやる気を出していた…。穂村が用意した罰ゲームにどんなものがあるのか知らないが、そういったリスクがあると少なからずドキドキしてくる。絶対に負けてたまるものかと言うような気持ちだが、胸の奥から溢れてくる…。

穂村「よしよし、全員乗り気なようで何よりだ…。んじゃ、始めようか。絶対に負けられない、男同士の戦いつてヤツをな…!」

時刻は午後の8時を過ぎた頃だろうか…。

外はすっかり暗くなり、女性陣達がそれぞれの部屋へと戻り始めた頃、屋敷の一室にて…男達の戦いが始まった。



百四十六話 『つみき——』

圭一「…で、これはどういうルールなんだ？」

穂村「は？圭一さん、ジエンガも知らねえのかよ？」

談話室にあるテーブルの上へと塔のように立っているジエンガ：圭一はソファアーなや腰掛けながらそれを見つめると、小首を傾げて遊び方を問う。穂村と彼はともかく、圭一だけはこのジエンガという物の遊び方を知らないようだ。

穂村「え〜つと、何て言えば良いかな…。一人ずつ順に積み木を抜いていって、崩したヤツが負け……………って感じか？」

「まあ、そんな感じかな」

圭一「…なるほど、大体理解した」

要するに、この積み木で出来た塔を崩さないようにすれば良い。

圭一にルールを教えたところで、三人は積み木を抜いていく順番を決めていく…。順番を決める際、穂村は『ジャンケンで決めるか？』と言ったが圭一がそれを面倒そうにしていた為——

「最初に穂村、その次が僕で最後が圭一さん…それで良いだろ」

と、彼が簡単に順番を決めていく。

穂村も圭一もそれに頷き、そして初手…穂村がジエンガにそつと手を伸ばした。選んだ場所は下から四番目の中央に位置する積み木だ。

穂村「まあ最初は全然大丈夫だろ……」

選んだ積み木を人差し指でツンと小突き、突き出た所を引き抜く。

序盤も序盤なのでタワーはまだまだ安定しており、穂村は狙っていた箇所ので積み木をあつさり引き抜いて頂上に乗せた。

圭一「なんだ、抜いたヤツは上に置くのか？」

穂村「ああ、そうしないとタワーが穴だらけになって、ゲームがす

ぐに終わっちゃうだろう?」

圭一「……………なるほどな」

圭一がルールを完璧に理解したところで、今度は彼が手を伸ばす…。彼は穂村が抜いた所の一つ下の段…その中央の積み木を慣れた手付きで抜き取り、手早く頂上へと置いてから圭一に順番を回していく。

「次、どうぞ」

圭一「…ああ」

察するに、圭一はジエンガで遊んだ事なんて無いようだが、ゲームは始まったばかり。タワーもしっかりと安定しているし、いきなり崩したりはしないだろう。

穂村「あつ、圭一さんって酒飲むよな?」

圭一「時々な……………それがどうした?」

穂村「このゲーム、酒飲むヤツは一度に二本抜かなきゃならないってルールがあるんだよ。だから圭一さんは二本抜いてくれ」

圭一「そう…なのか? 変なルールだな……………」

圭一は疑うこと無くそのルールを鵜呑みにし、積み木に手を伸ばす。穂村は腕組みしながらその様子を眺めてニヤニヤと笑みを浮かべていた為、彼は呆れたようにため息をつきながら圭一に告げた。

「嘘だ、そんなルールは無い…」

穂村「おいおい、バラすなよ。上手く騙せてたつてのに」

圭一「チツ! 穂村、お前つ……………!!」

ヘラヘラと笑う穂村を睨み、舌打ちする圭一…。

言葉は途中で止まったが、きつとあと少しで『ふざけるな』とか『殺すぞ』といった台詞が飛ぶだろう…。

分かっているが、この二人とゲームするのはかなり疲れそうだな。彼はまた小さくため息をつきながらジエンガのタワーを見つめ、そして気付く…。偽ルールに騙された事で苛立っている圭一の視線は

穂村へと向いており、注意力が散漫になっていた…。途中まで伸ばされていた右手はゆらゆらと揺れ動きながら手の甲でタワーを押してしまっており、そして――

ガシヤアアンツツ!!

と、音を立てながら崩れていく……………。

圭一「なっ……………」

穂村「あくあ、倒したな?はいっ!あんたの負け♪」

テーブルの上に散り散りになった積み木達を呆然と見つめる圭一と、それを嘲笑う穂村…。穂村は両手を叩きながら心底楽しそうに笑っているが、その笑い声は圭一の苛立ちを煽るだけだ。

圭一「…よし、今すぐ殺してやる」

”…まあ、そうなるだろうな……………”と、彼は思った。

そもそも、圭一がタワーを崩してしまったのは穂村の偽ルールに惑わされて注意力を欠いていたから…。穂村が大人しくしていれば、こうはならなかっただろう。…それに、穂村の笑い声というのはどうにも人のイライラを煽る効果がある。圭一が殺意を向けるのも仕方の無い事だと思えるくらいだ。

穂村「まあまあ、怒んなって!ただのゲームなんだから、なっ?それよりもほら、早いとこ罰ゲームのカードを引いてくれよ」

穂村は笑みを崩さずにそう言っつて、カードの束を置く…。

ジェンガと共に用意していた罰ゲームカード……………それは二組用意されていた。青いカードが数十枚と…赤いカードが五枚……………どちらも裏返しに置かれている。

穂村「負けは負けなんだから素直に認めようぜ?それとも、圭一さんはウダウダと言いつつするような女々しい男だったのか?」

圭一「この…っ…!!くそっ……………分かった、これを引けば良いんだな

？」

こう言えば、圭一が従うと分かっていたのだろう…。

穂村はニヤニヤと笑いながら赤のカード五枚を圭一の前へと差し出し、その内の一枚を引くようにと告げる。

圭一「一枚だな……」

言われた通り一枚のカードを手早く引き抜いた圭一はそのカードをじつと見つめると、その表面を彼や穂村に見せながら不機嫌そうに口を開いた。

圭一「おい、これはどういう意味だ？」

クルリと向けられたカードの表面には、黒いサインペンか何かでこう書かれていた…。【直樹美紀】…と。

「ええつと……どういう事？」

そこに美紀の名が書かれている理由が分からず、彼も穂村に尋ねる。

すると穂村は自慢気な笑みを浮かべ、その理由を説明し始めた。

穂村「今引いてもらった赤のカードには“ターゲットの名前”が……そしてこれから引いてもらう青のカードには“任務内容”が書かれている。つまり圭一さんにはこれから、美紀をターゲットにした何らかのミッションをやってもらうってわけ」

圭一「ミッションだと？罰ゲームじゃないのか？」

穂村「ああ、罰ゲームだぜ」

彼は美紀の名が書かれているカードを圭一から借り、それを観察する…。見たところ、このカードの表面は元々白紙だったようだ。その上から書かれている少し下手な文字は恐らく、穂村が書いたものだろう。

穂村が曰く、この“罰ゲームカード”は自分で好きなように内容を

書いていく物だったようだ…。つまり、圭一がこれから引いていく青のカードに記載されている罰ゲーム内容は全て穂村作という事になる…。もう、嫌な予感しかない。

穂村「ほいほい、次はこつちを引いてくれ」

圭一「っ……………」

渋々…といった様子で手を伸ばした圭一は何十枚とある青のカードの内一枚を手に取り、そこに書かれている文字を見る…。

圭一「なっ…!?…………俺が…………これをやるのか…………？」

穂村「罰ゲームは絶対だからな！逃げるとか無しだぞ？」

「…………見せてもらっても良いですか？」

穂村が考えた罰ゲームなんてどれもロクなものではないだろう…。分かってはいるが、やはり気になってしまいカードを借りる。

「どうも」

彼は圭一から借りたカードに書かれている文字を読み、そして何とも言えぬ表情を浮かべた…。一方、隣からその文字を覗き見た穂村はまた嬉しそうに両手を叩き、ケラケラと笑い出す。

カードには…【下着を見せてもらう】とだけ書かれていた…。

「これはこれは、ハードな罰ゲームだな…………」

圭一「ハードなんてもんじゃない…………達成不可能だ…………」

右手で頭を抱え、珍しく困惑する圭一…。

しかし穂村はそんな圭一を見つめながらニヤニヤと笑い、『それでもやるだけやってもらう。それとも…逃げんの？』と、挑発的な発言をする。こうやって煽るように言えば、圭一も逃げられないと思っっているのだろう。実際、圭一は舌打ちしながらも立ち上がり、扉へと向かった。

「あ、あの……本当にやる気？」

圭一「…負けは負けだからな。大人しく……従ってやる……」

穂村「さっすが〜♪圭一さんのそういうとこ、大好きだぜ〜」

ケタケタと笑う穂村に対し、圭一は鋭い視線を向けて睨んでからまた舌打ちを鳴らす。そして談話室から廊下へと出ていくと階段を上がった一階から二階へと移動し、一つの扉の前へと立つ。

その扉には、“みーくんの部屋”と書かれたプレートが下がっていた…。

これはきつと、由紀が書いた物だろう…。いったい、いつの間にかんな物を用意したのだろうか？下手とまで言わないが、中々に個性的な文字だな…。他の者達の部屋にも、同じようなプレートが下がっているのだろうか？

圭一はそのプレートを見つめたまま、どうでも良い事を思考して時間を稼ぐ…。が、このままこうしていたって埒らちが明かない。潔きよく、目的を果たそう…。

コンコンツ……

軽く扉をノックして、部屋の中にいるであろう美紀を呼ぶ。

もしここで美紀が現れなければ…既に眠ってしまったていれば、この罰ゲームも無しになるかも知れない。頼む、眠っていてくれ……。

静かに願う圭一だが、現実是非情だった…。

ノックをして十数秒後…扉はゆっくりと開き、体操着らしき物に身を包んだ美紀が姿を現す。

美紀「あれ？圭一さん…？珍しいですね、どうかしました？」

美紀は扉を大きく開くと、廊下に立っている圭一を見て不思議そうに尋ねる。圭一はそれに対してすぐには答えず、視線を横へと反らし

圭一「その…だな………」

ただ、気まずそうにしながら冷や汗を流す…。

目の前にいる少女は今、自分に対して警戒心を抱いていない……。当然だ……。自分はあの男のような、穂村のような変態ではない。こうして夜に部屋を訪れたところで、警戒されるような事はしてこなかった。

…だが、それも今日で終わりだ。

圭一は静かに覚悟を決めると、反らしていた視線を美紀の方へしっかりと向け、言葉を放つ。

圭一「美紀……悪いんだが、下着を見せてくれないか……」

事が穏便に進むよう、出来るだけ申し訳なさそうに言葉を紡ぐ……。

しかし、美紀はそれで『はい、分かりました』と言うような女ではない……。彼女は圭一の言葉を聞いた直後、驚いたように目を見開き――

美紀「……は、はい……？」

とだけ言つて、軽く首を傾げる……。

彼女は今の言葉を聞き間違いか何かだと思っっているようなので、圭一は再び言葉を発した。

圭一「だから、下着だ……。上でも下でも、どっちでも良い……。今ここで、とつとと服を脱いで見せてくれ。少しだけ……少しだけ見せてくれれば良いんだ……。ほら、早くっ！」

美紀「な……っ……！なっ……！！？」

こんな嫌な時間、とつとと終わらせよう……。

引くに引けなくなった圭一はもうハッキリと美紀に告げる。

ブラジャーでも、パンツでも、どっちでも良い。

だから早く下着を見せてくれ。今、ここで見せてくれ。

廊下に立ったまま告げていくと美紀の顔がどんどん赤く染まり……

そして――

くくくくくくくくくくくくくくくく

穂村「…で、どんな下着だった？」

崩れたジェンガを組み直しながら、穂村は問う。

談話室に戻った圭一はソファーに深々と座りながら、大きくため息をついてそれに答えた。

圭一「知るか、そんな事……」

穂村「はあっ？おいおい、見せてもらわなかったのか？」

圭一「出来る限りの事はしたんだ……勘弁してくれ」

よく見ると、圭一の頬には綺麗な手形が浮かんでいる。

アニメやマンガで見るような、綺麗な手形がクツキリと……。

「それ、美紀に……？」

彼が恐る恐る尋ねると、圭一は静かに頷く。

どうやら交渉が上手く行かず、美紀にビンタされたらしい……。

まあ、当然の結果だとは思うが……。

圭一「思い返してみれば、これまで色んな奴と戦ってきた……。感染者はもちろん、生意気で気に入らない生存者達ともな……。感染者には噛まれたり引っ搔かれたりしたし、生存者には鈍器で頭を殴られたり、刃物で斬られたりもした……。けど、不思議なものでな……。そのどれよりも、美紀のビンタが一番効いた気がする……」

真っ赤に染まる頬の手形を軽く一撫でした後、圭一は鼻で笑う。

その姿は何時に無く痛々しいものに見えてしまい、彼はもちろん、穂村すらも同情の眼差しを向けた。

穂村「美紀に下着を見せてもらえなかったんじゃ罰ゲーム達成とは言えねえが……ま、圭一さんにしちゃ出来だろ。よし、次いくぞ次っ」



「いやあ、こんな罰ゲームばかり続くんなら僕はやめたいんだけども…」

穂村「もう少しだけ！もう少しだけやってこうぜ！」

あと少しだけ…あと少しだけ…。

穂村は何度もそう言い放ち、彼と圭一はそれに付き合っていく。

正直に言えばもうこんなゲームは止めにしたいのだが、どうせなら一度でも穂村を負かして痛い目を見せてやりたい。

彼と圭一は同じ事を思っただけゲームを続けていったが、次もまた圭一がジエングを崩してしまい、穂村の笑い声が部屋に響いた…。

百四十七話 『つみきー2ー』

圭一「ぐっ…!!!」

抜き取った積み木を上へと重ねた瞬間、テーブル上にあるジエンガの塔は音を立てて崩れ落ちる…。目の前で崩れる積み木の塔…圭一はそれをただ見つめていく事しか出来ない。

穂村「はははっ！二連敗かよ、こりや良い！

さてさて、次の罰ゲームはくく……」

崩れ落ちた塔がバラバラの積み木となつてテーブルに広がった時、穂村は喜々とした様子で例の「罰ゲームカード」を取り出す。勝ち誇つたような穂村の表情は見るだけで腹が立つが、ルールはルール……圭一は前回と同様に二枚のカードを抜き取り、その内容を確認すると――

圭一「…おい、冗談だろう…」

そう呟き、頭を抱えた…。

引き抜いた二枚のカードの内、一枚には「罰ゲームを実行するターゲット(女性)の名前」が…そして、もう一枚の方には「そのターゲットに対し実行する罰ゲーム内容」が書かれている。前回引いた時、圭一は【美紀に下着を見せてもらう】という内容の罰ゲームを実行し、美紀にビンタをされた。

そして今度の罰ゲーム内容は…【今身に着けている下着の色を聞く】というもの。実行するターゲットは…またしても【直樹美紀】だった…。

「あちやく……」

穂村「二回連続で美紀を引き当てるなんて、面白くなってきたな！ほれほれ、とつとつ行って来い!!しっぴかり遂行してくれよ〜♪」

圭一「このつつ……!!」

カードをオープンした後に見せてきた穂村のリアクションに苛立つ圭一だが、ここで怒って器の小さい男だと思われるのも気に入らない。圭一は渋々立ち上がると彼と穂村を残して部屋を去り、そのまま美紀の部屋へ直行する。

…コンコンツ

辿り着いた美紀の部屋…圭一はそのトビラを少し強めにノックして、中にいるであろう美紀の応答を待つ。先程、彼女に『下着を見せてくれ』と頼み、そのままビンタされてからそう時間も経っていない…。恐らくまだ、起きているだろう。

そう考えていた圭一の読み通り美紀はまだ起きていたらしく、部屋の扉がガチャリと開き、僅かに開いた隙間から顔を覗かせてきた…。

美紀「……………今度は何の用ですか…?」

美紀は見た感じ、かなり警戒している。

まあ、ついさつきあんな事を言われたのだから、このくらいの警戒は当たり前だろう。ここでまた変な事を言えば、今度は大声を出されるかも…。

圭一（…が、ここで逃げたら穂村あのパカに何て言われるか分からん。美紀には悪いが、ここは…遠慮なくいかせてもらう!）

心の中で決意をして、開いた扉の隙間からこちらを見つめる美紀の瞳を見つめ返す。そしてそのまま、圭一はハッキリと…開き直ったようにその言葉を告げた。

圭一「美紀…今履いてる下着、どんな色だ?」

美紀「なっツ…!!」

とりあえず、聞くだけ聞きはした…。

あとはもうどうにでもなれだ。

さつきみたくビンタしてくれても良いし、大声を出したって構わな

い。

覚悟を決めてその場に立ち尽くす圭一だったが、次の瞬間に美紀が取った行動は全く予想していないものだった…。

美紀「…はあ……まったく、もう……」

美紀は呆れたようにため息を吐き、扉を完全に開けて廊下へ出ると、圭一の前に立つ。彼女は廊下に出るなり辺りを見回し、最後に圭一の顔を見上げた。

美紀「穂村さんですか？それとも先輩ですか？」

圭一「………どういう意味だ？」

美紀「だから……圭一さんはあの二人のどちらかとゲームでもしてるんですよね？…で、それに負けたか何かして、罰ゲームでもやらされてるんでしょう？」

圭一「!!」

事情なんて知らぬハズなのに、美紀は全てを知っているかのように言葉を放つ。これには流石の圭一も驚きを隠せず、目を丸くする。

圭一「…どうして分かった？」

美紀「さつきあなたをビンタして部屋に戻った後、考えてみたんです。圭一さんってあんな事を言ったりするような人じゃなさそうなのに、急にどうしたのかなって…。で、考えた結果、あれは何かの罰ゲームなんじゃないかなって思ったんですよ」

圭一「………なるほど」

美紀「…で、圭一さんが付き合わされてるのは誰です？穂村さん？先輩？」

圭一「…二人ともだ。穂村のバカと、あの男………その二人とジエングアッというゲームをして負けたから、罰ゲームとしてお前の所に来た」

ここまで気付かれているのなら無理に隠す必要も無い。

圭一が全ての事情を順に明かしていくと、美紀はまた呆れたように

ため息を吐いた。

美紀「あの二人は……本当に仕方無いですね……」

圭一「まあ、バカなのは主に穂村の方だが……。ジエンガをやるうって言い出したのも、変な罰ゲームを考えたのも、全部あの野郎だし」

美紀「そう……なんですね……」

穂村はバカで変態だから気を付けろ。

真冬がよく言っていた言葉を思い返し、美紀は右手で頭を抱える……。

美紀「……穿<sup>は</sup>いてない……」

突如、美紀が顔を俯けながら呟く。

側にいる圭一でも聞き取れないくらい、小さな声で。

圭一「ん？なんて言った？」

美紀「：下着の色です。あの二人に何か聞かれたら、私は下着を穿いてないって言っていたと答えておいて下さい。あの二人はどうしようもない人達ですから、この答えを聞いたらきつと大はしやぎしますよ」

その光景を想像したのだろう……。

美紀はそう言って、クスクスと笑いだす。

圭一「：確かに、アイツらなら大興奮間違い無しの情報だな」

美紀「でしよう？……あつ、これはあくまでもあの二人用に用意した嘘ですからね？私、ちゃんと下着穿いてますから、変な誤解はしないで下さいよ？」

圭一「ああ、言われなくても分かってる」

静かに答えると美紀は少しだけ微笑んでからペコリと頭を下げ、『では、おやすみなさい』と言い放つ。圭一はそつと頷いてそれに応え、るとあの二人が待つ部屋へと戻り、結果を聞かれるや否や直ぐに答える

た。『美紀は下着を穿いていない。だから、下着の色自体を聞く事は出来なかった』…と。

「なっ…!!?穿いてないっ!!?」

穂村「マジかよ!!美紀ってそんな大胆な娘なのかっ!?

ま、まさかとは思うけど…圭一さん、見せてもらったのか!!?」

圭一「いや、穿いてない…という情報を聞いただけだ」

やはりと言うべきか…：目の前にいる二人の男は美紀が就寝時に下着を身に着け無いタイプの女性だと知り、かなり興奮している。これだけ綺麗に嘘情報に踊らされてくれるのなら、美紀も満足だろう。

二人は暫しの間興奮していたがやがて落ち着きを取り戻し、ゲームが再開されていく…。

穂村「美紀はノーブラ…：美紀はノーパン…っ…：…」

…いや、穂村だけはまだ、落ち着きを取り戻してはいなかった。

穂村は同じ言葉を何度も何度も、呪文のように呟きながらジエンガを積み重ねているが、その手は興奮のあまりプルプルと震えている。これではまともにゲームを続けられないだろう。

圭一（これは勝ったな…）

勝ちを確信した圭一が鼻で笑うのと同時、ジエンガが音を立てて崩れ落ちる。この瞬間、穂村の負けが決定した訳だが…：…

穂村「はいはい、罰ゲームね…：分かった分かった…：…」

美紀の件が衝撃的過ぎてうわの空になっているのか、穂村はあっさり負けを認め、自ら率先して罰ゲームカードを引く。罰ゲームの内容は【本気で告白をする】…：対象となる女性は【狭山真冬】だ。

「穂村が真冬に告白って…：絶対振られるじゃん」

穂村「ふふふっ、まあ見てろって。大人の超絶告白テクニックって

ヤツで、あの女をメロメロにしてくるからよ！」

その自信がどこから湧くのか知らないが、結果は見えている。

意気揚々と部屋を出て真冬のもとへ向かう穂村を見送った彼と圭一は暫しの間、休憩する事とした……。

圭一「……そう言えば、胡桃の体調は良くなったようだな」

「ああ、柳さんのおかげでどうにか……」

圭一「柳のおかげ……か……」

どんな手を使ったのか知らないが、柳は胡桃の体調を良い方へと導いてくれた。もしかするともうダメなのかも知れない……お別れの時が来るのかも知れない……一時、彼は心の奥底でそんな事を考えたりもしていたのだが、今朝、元気いっぱい笑みを浮かべている胡桃を見てネガティブな気持ちは消え去った。

胡桃の身に何かあればきつと、自分は立ち直れない……。

なので、彼女を救ってくれた柳には本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。

彼が胡桃の笑顔を思い返して静かに微笑む一方、

圭一は部屋の天井を見上げながら口を開く。

圭一「今こんな事を言うのはどうかと思うが、あまりアイツを……柳を信用し過ぎない方が良くと思うぞ。アイツは少し怪しいからな」

「確かに、ミステリアスな人ではあるね……」

どうしてこんな立派な屋敷を持っているのか……。

世界がこうなる前は何をしていたのか……。

気になる事は多々あるが、そこまで悪い人では無いと思う。

圭一「……ま、別にどうでも良いけどな……」

部屋の壁に掛けられていた時計がカチコチと鳴る音が響き、二人は無言のまま時を過ごす。その後少しして穂村が部屋へと戻ってきたが、不機嫌そうな顔をしているのを見るに……。

圭一「遅かったな……大人の超絶告白テクニクとやらは成功したか？」

穂村「うっさい……ほっとけ。大体、狭山みたいなペタン娘は俺の趣味じゃねえし、こつちから願い下げだつての……」

「どうやら穂村の告白は失敗したらしい……」

まあ、やる前から分かりきっていた事だが……。

狭山に振られた事で不機嫌になった穂村は部屋に戻ってくるなりジエンガを片付けるとそのままゲーム終了を宣言し、三人はそれぞれの自室へ戻っていく……。自室に戻る途中、彼は残りの罰ゲームカードの内容がどんなものなのかと気になったが……まあ、また機会があればその内、明かされる時が来るだろう。

（何にせよ、負けなくて良かった……）

圭一がやらされたような罰ゲームを自分が、それも悠里を相手にやる事となつたらもう大変。一時間や二時間では済まないくらいに長くて辛いお説教をされる筈……。今日、一度も負ける事が無くて本当に良かった……。

彼は安堵の表情を浮かべて自室へ戻り、ベッドの中へと潜り込んだ。



百四十八話『むかしの』(☆)

胡桃「ああ……あつづく……」

「んん、暑いねえ……」

眩しいくらいに輝く太陽…雲一つ無い青空…。

よく晴れた日の午後、彼は胡桃と共に屋敷の屋上にある菜園場にて、悠里が育てている野菜達の手入れをしていた。普段この手入れは基本的に悠里任せなのだが、今、彼女は美紀と真冬の勉強に付き合っている。なので今日は代わりに彼と胡桃、そしてもう一人が菜園の手入れを始めたのだが――

胡桃「由紀のやつ、帰ってこねえ……」

「……逃げた？」

胡桃「そんな事するヤツじゃないと思うけどトイレにしちや長いし……」

さすがに怪しくなってきたな……

少し前まで一緒にいた由紀が、『少しトイレ』と言って出て行ったきり戻って来ない。外が思ったよりも暑かったので逃げた……という可能性も大いに考えられる。

胡桃「くっ……アイツがいない間に、やる事殆ど終わったぞ」

「ああ、後は道具の片付けくらいか」

胡桃「由紀のヤツ、あとで会ったら説教してやる……」

悠里が誰かに説教するのは何度か見た事があるが、胡桃が説教するのは見た事が無い。これは珍しいものが見れそうだ……。彼はそんな事を思いながら水撒き用に使ったジョウロ等の道具を屋上の隅にある道具置き場へと片付け、改めて菜園場を見つめる。

「そう言えば、学校に暮らしてた時も屋上菜園やってたんだっけ？」

胡桃「ああ、ここと同じくらいのスペースだったかな……」

正直、あたしはこういうのの育て方とかあんまり分かんなかったからさ、園芸部のリーさんがいてくれて助かったよ」

菜園場の隅、胡桃は順調に育ち始めている作物を見つめながら小さなスコップを片手に土を掘ったかとおもえば、すぐにその穴を埋めたりして土を遊びをする。育てている作物に影響が無いように端っこの方の土を、掘ったり…埋めたり…。

胡桃「この野菜、いつ頃採れるかな……」

「さて、いつ頃だろうね」

作物達はまだそこまで大きく育ってはいないので、収穫するのはもう少しだけ先になりそうだ。彼と胡桃は隅に座りながら、菜園場を見回していく…。

屋敷の主である柳はこの施設を長い事放置し続けていたらしいが、悠里の手が加わった事で今は立派な菜園場だ。道具置き場も綺麗に整頓されているし、土の状態も良い。屋上という事もあり、陽当りも良好だ。

胡桃「ううう……あつつく……」

ただ、今日はあまりにも晴れ過ぎていて蒸し暑い…。

これだけ暑いと、人間の方は参ってきてしまう…。

彼は額にじわりと汗を浮かばせているし、胡桃も同じ様に汗をかいている。

額に浮かんだ汗は顎先まで流れて滴り落ちたり、前髪の前からポタリと垂れて地面や土に落ちていくが、それらの場所に落ちていった汗はあつという間に蒸発した…。

「じゃ、戻ろうか？もうやる事やったし」

胡桃「んん……そうだな」

熱中症にでもなる前に屋内へ戻り、水分補給をしよう。

彼はさつと立ち上がって中に戻ろうとするが、胡桃はそこに座ったまま動かない…。菜園場の隅に座ったままスコップを使い、まだ土遊

びをしている。

「…それ、楽しい?」

胡桃「んっ?あ、ああ……わりいわりい。

なんか、昔の事とか思い出しちゃって……。

ずっと昔、まだ小さかった頃にさ、お母さんやお父さんと一緒にどこだかの公園行って、砂場でこうして遊んでたなあ……」

「へえ………お母さん、お父さん……ねえ」

胡桃の言葉を聞いた彼は空を見上げ、不思議そうに首を傾げる。

今、自分は何かおかしい事を言っただろうか?

胡桃は彼の横顔を見つめながら静かに尋ねる。

胡桃「あたし、何か変な事言っただか?」

「…いや、ただ凄く個人的なイメージだけど、胡桃ちゃんって両親の事をママ・パパって呼ぶと思っただんだよね。……本当はお母さん・お父さんじゃなく、そっちの呼び方を使っただんじゃない?」

胡桃「なっ!?!バ、バカにするなっ!!」

あたし……そんな子供っぽい女じゃないし……」

「別に子供っぽい事は無いでしょ。」

親の事をパパママ呼びする女の子、可愛いじゃん」

胡桃「う、ううう………」

言葉にならぬ声をあげ、胡桃は顔を俯ける……。

彼が自分に対して抱いていたイメージ……それは当たっている。

彼の前では少し気取って両親の事を『お母さん・お父さん』と言ったが、本当は『ママ・パパ』と呼ぶ事が殆どだった……。

胡桃（パパとママ……最後に会ったの、何時だっけ……）

ぼんやりとしか思い出せないくらい、曖昧な記憶……。

昔遊びに行った公園の場所も、当時の両親の顔も、殆ど思い出せない……。

胡桃「二人とも……元気かな……」

「……………」

正直に言ってしまうと、当時の両親の顔は疎か、最近までの……世界がこうなってしまうより以前に見た筈の両親の顔すら思い出せない……。もう長い事会っていないからだろうか……。

彼が見守る中、胡桃は切ない気持ちになって表情を暗くするが、両親の全てを忘れた訳ではない。こうやって土遊びをしている最中に、ふと思いついた事がある。

胡桃「そう言えば、スコップ片手に砂遊びするあたしを見てパパが言ってたな……。『くるみはシャベル使うのが上手だね』……って。あたしに言わせれば、この小さいのはシャベルじゃなくてスコップなんだから……ま、いいか」

「実際、シャベルを使うのは上手いけどね」

胡桃「ははっ、そうだな。」

砂遊びは勿論、奴らを押し退ける事だって出来るぞ！」

今も自分の側に置いてあるシャベル……これまで、これを使って自分を……そして皆を守ってきた。胡桃は手にしていたスコップを道具置き場へ戻すと地面に置いていた愛用のシャベルを持ち上げ、軽く掲げる。

胡桃「パパやママがどうしてるかは分からない……。

けど、あたしは今日も生きてる。今日も元気だ……。

柳さんのおかげで、体の調子もかなり良いしな」

先日までは歩くのも困難なくらいに体が不調だったが、柳に試薬を使ってもらったからは好調そのものだ。

「……胡桃ちゃん、無理はしてないね？」

体の事はもう大丈夫だと思う……。

けれど心の方が心配になり、彼は声をかける。

家族の事を思い出した事でかなり辛くなっているのではないか……。

今はニツコリと微笑んでいるが、それはただ強がっているだけなのではないか…。

胡桃「……………あたしは……………さ……………」

自分の事を心配してくれる彼と向き合ってから、胡桃は静かに顔を俯ける…。確かに、家族の事を思い出して少しだけ胸を痛めた。それは紛れも無い事実だが、両親だつてきつと、クヨクヨしている自分よりも前を見てる自分を望むハズ…。

そして何より、自分は一人じゃない…………。

由紀や悠里という友達がいて、美紀や真冬という後輩がいる。

その他にも、色々な人に支えられている…。

それに…………目の前には…………

胡桃「…お前が側にいてくれれば、それだけで良い…………」

彼という、大切な人がいる。

友達であり、仲間であり……………とにかく、大切な人…。

この人の側でなら今日も明日も、明後日も幸せでいられる。

彼の事を見つめながら優しい笑みを浮かべる胡桃だったが、すぐ、自分がとんでもない事を言ってしまった事に気が付き、激しい焦りや戸惑いを感じて顔を真っ赤に染めた。

胡桃「ま、間違えたっ!! 『お前』じゃなくて 『お前達』だ!!」

由紀とか、りーさんとかっ…………美紀とかっ! 皆がいてくれれば良いって、そう言おうとしたんだよ!

「なんだ、残念…。僕一人だけ特別扱いしてくれてるのかと…」

胡桃「つつ…………そんな事はない! 残念だったな」

「ああ、残念だった」

炎天下、二人はじゃれ合うように笑い合いながら歩を進め、屋内へ戻っていく…。と、次の瞬間…………彼の手が触れるよりも先に中へ続く扉が勢い良く開き、何かが入ったビニール袋を片手に持つ由紀が現れた。

胡桃「お前っ…！今までサボってたな!!?

何時まで経っても帰ってこないから、

あたしとコイツとで仕事終わらせたんぞぞ！」

由紀「べ、別にサボってた訳じゃないもんっ!!」

胡桃「じゃあ何してた？言ってみろよ！」

胡桃が強めの口調で言うと、由紀は手にしていたビニール袋を胡桃に突き出す。その中に入っていたのは、数本の缶ジュースだった。どれもよく冷えている…。誰かが外から持ってきた物を、冷蔵庫にしまっておいたのだろう。

由紀「二人とも喉乾いただろうなあって思ったから、ジュース取りに行つてただけなのに！サボってたなんて言われると心外だよっ!!」

胡桃「ぐっ…!!まあ、これはありがたいけどさ…」

けど、それにしたって時間掛かり過ぎだろ？

ジュース取り行くのに何十分掛けてんだよ！」

由紀「今日は凄く暑いから、麦わら帽子か何か被ろうかな〜って思つて…部屋に探しに行つてたらこんな遅く…」

胡桃「麦わら帽子？そんなの…被つてねえじゃん」

由紀の頭には麦わら帽子はおろか、普段愛用している猫耳帽子すらない。

胡桃がその事を指摘すると、由紀はおどけたように口を開く。

由紀「えへへ…結局、見付からなかったんだあ」

胡桃「なんだよ、それ…。まったく、由紀は何時まで経つても由紀というか、どこか間抜けっていうか…」

けど、こんな風に愛嬌のあるところが由紀の魅力の一つでもある。出来る事なら、何時までもその”由紀らしさ”を失わないで欲しい…。

胡桃は心の中でそんな事を思いながら、受け取ったビニール袋を開いてジュースを取り出す。そしてその内の一本を彼に手渡し、もう一

本を自分の手に……。残りの分は、ビニール袋の中へと戻してそのまま左手にかけた。

由紀「ねえ、私にも一本ちょうだいよ！」

胡桃「ふふん、サボってたからダメ」

由紀「むうっ！サボってた訳じゃないのにつ！！

胡桃ちゃん、何時からそんなケチな子になったの！」

頬を膨らませてフグのようになる由紀を尻目に、胡桃は缶ジュースを飲んでいく。時折、由紀が左手にあるビニール袋目掛けて手を伸ばしてくるものの、胡桃はそれをヒラリとかわしてニヤニヤと笑う。

由紀「むくくっ！！！」

「まあまあ、そんな怒らないの。

ほら、僕のやつあげるから」

由紀「えっ……いいの？ありがとうっ♪」

胡桃「なっ!?!」

彼は自分の分の缶ジュースを由紀に手渡し、由紀はそれを受け取る。

共に炎天下で仕事をしていた彼に水分を与えないのは流石にマズイので胡桃はビニールから一本のジュースを取ると、それを渡してから呆れた様のため息を放つ。

胡桃「お前、由紀に甘いよな……」

あれだ……自分に娘とか出来たらとことん甘やかすタイプだな。

絶対そうなる………間違いない」

「んん……どうかな……」

娘が出来たら……なんて話をされてもよく分からないが、少なくとも由紀には甘やかしたくなるような魅力がある……。困っている由紀を前にして手を差し伸べないなんて、今の彼には出来ないのだ。

「さして、そんな事より中に戻ろう。」

外は暑い暑い……」

胡桃「だな……。部屋戻って、シャワーでも浴びるか」

由紀「じゃあさ、その後には胡桃ちゃんの部屋行って良い？」

また一緒にゲームやろうよ」

胡桃「ん、ああ、別に良いぞ」

大切な友達と過ごす、何気無い時間の大切さ……。

変わり果てた世界の中でもそれをしっかりと感じながら、

彼女達は今日を生きていく……。

これから先、どんな事があつたとしても……後悔の無いように。



『くるみバースデー』（☆）

とある日の事……特にする事も無かった彼は由紀らと共に談話室でのんびりしていたのだが、その時、由紀が大きな声で……

由紀「わあっ！それはお祝いしなきゃだね!!」

と、満面の笑みを浮かべながら騒ぎ始めた。

由紀、そして美紀と悠里、真冬と胡桃が集まっているその場所から少し離れた場所で休んでいた彼は何事かと思つて彼女らの側へ寄ると、まず由紀に声をかける。

「お祝いって聞こえたけど……なんかめでたい事でもあつた？」

胡桃「い、いや……別に大した事じゃ——」

由紀「胡桃ちゃんね、今日がお誕生日なんだって〜♪」

一瞬、胡桃が気まずそうに口を開けたが、由紀が彼女の言葉を遮る様にして騒ぐ。どうやら皆で雑談をしていく内、今日が胡桃の誕生日だと知つたらしい。

「へ〜…誕生日だね…。そりやめでたいけど……」

…ええつと、そもそも今日って何日だっけ？」

胡桃「……8月7日……」

「ああ、7日ね……」

世の中がこんな風になってからというもの、日付けの感覚が無くなりかけていた彼だが、胡桃の言葉を聞いて今日の日付けを知る。今日は8月7日……胡桃の誕生日。

悠里「材料があつたらケーキの一つでも作りたかつたけど……」

…今は難しいかしらね」

胡桃「いや…あまり気い使わなくていいって」

真冬「ケーキは難しいけど、バースデーキャンドルならある……」

今日の夕飯に立てておく…?」

胡桃「ん、んん…遠慮しとく…」

バスデーキャンドルはケーキに立つてるから良いのであって、普通の夕飯に突き立てられても何か違う気がする…。胡桃が苦笑してそれを断ると、真冬は顔を俯けてから『そう…残念…』と呟いた。

胡桃「りーさんから今日の日付けを聞いて、あく、そう言えば今日誕生日だったなあって思っただけだ。プレゼントが欲しいとか、ケーキ食べたいとか言ってる訳じゃないんで、何にもしなくて平気だぞ?」

美紀「…でも、せっかくだしお祝いくらいしましよようよ。

何にも無しなんて、ちよつとつまらないですし…」

美紀にとつて、胡桃は大切な先輩の一人…。

そんな彼女が誕生日を迎えたのなら少しでもお祝いしたい!

そう思ったからこそこう言ったのだが、美紀の言葉を聞いた胡桃は意味ありげにニヤニヤと笑い…

胡桃「…美紀、変わったよな。

あくまで他人の誕生日なのに、『何も無しなんてつまらない』とか言うようになったか…」

美紀「なつ、なんですかその言い方?!まるで…この前までの私が他の人の誕生日をちつとも楽しんだり出来ない冷血人間みたいな言い方してっ!!」

胡桃「うわっ?!そ、そこまで言っただろっ!!」

バンツ!!と大きな音が鳴るくらいにテーブルを叩き顔を真っ赤にする美紀に対し、胡桃が慌てて言葉を放つ。美紀は少ししてからハツとしたような表情を浮かべるとほんのちよつと照れたようにして『コホン…』と咳払いをし、椅子に腰掛けた。

悠里「けど、美紀さんの言う通り…プレゼントとかは無しだとしても、お祝い自体はしたいわよね。そこまで派手には出来ないと思うけ

ど……例えば……」

由紀「…はっ!!?帽子っ!!ほらっ、誕生日の人が着けるような……尖った帽子!!今日一日、あれを胡桃ちゃんに——」

胡桃「いらない…!着けない…!!」

あんなの着けて過ごすなんて恥ずかしいからな」

由紀が言ってるのは多分、パーティー帽子の事だろう…。

確かにあれを着けていれば誕生日感が一気に高まるが、当の本人…胡桃がそれを拒絶したので、由紀はシヨボンと肩を落とす。

由紀「じゃあ…せめてタスキだけでも…!!」

胡桃「やだ!絶対着けないっ!!」

由紀「んんっ!胡桃ちゃん、ノリが悪いっ」

由紀はパーティー帽だけではなく、〃本日の主役〃とか書いてあるよ  
うなタスキを胡桃に着けさせたかったらしいが、上手いかないもの  
だ…。由紀がテーブルの上に顎を乗せながら頬を膨らませて抗議す  
る中で話し合いはどんどん進み、今日は夕飯をちよつとだけ豪華にす  
るという事…。そして夜には胡桃の部屋に集まり、お祝いを兼ねて遊  
ぶという事が決まった。

悠里「じゃ、今日は少くしだけ夜更しして騒ぎましょうか♪」

胡桃「その…ほんと、気とか使わなくて良いんだぞ?」

こうして友達に祝ってもらう事に慣れていないのか、胡桃は先程か  
らほんの少しだけ落ち着きが無い…。けど、時折頬が緩んでニヤけか  
けている事もあるため、決して嫌な気分ではないようだ。

その後少しして、悠里達があれこれと楽しそうに雑談を始める…。

彼はみんなが会話に夢中になっている隙きにこっそりと胡桃の横  
へ身を移し、彼女にしか聞こえないくらいの声で呟いた。

「プレゼントとか……本当にいらない?」

何か欲しいのがあるなら遠慮しないでよ」

せつかくの誕生日…。もしも胡桃が望む物があるのなら、外で見つけ

出して取ってきてやる。今日中には無理だと思うが、それでも、絶対に……………」

彼はそう告げたが、胡桃は小さく鼻で笑ってから答えた。

胡桃「別に、欲しいのなんて無いよ。

さつきから散々言ってるけど、気い使うなって」

「……………本当に？ 本当に何もいらない？！」

胡桃「あゝ……………じゃああれだ、ちゃんと『おめでとう』って言え。

由紀達はすぐに言ってくれたけど、お前はまだまだぞ？」

言われてみれば……………確かにまだだった……………」

彼は申し訳無さそうに苦笑してから胡桃の顔を見つめ……………」

「胡桃ちゃん、誕生日おめでとう……………」

と、祝いの言葉を告げていく。

なんて事ない普通の台詞だが、それでも満足してくれたのか、胡桃は嬉しそうにニコニコと笑った。

胡桃「ふふふつ、それでよしっ♪」

椅子に座りながら両足をパタパタと揺らす胡桃は何時になくはしゃいでいるように見えるというか、本当に……………本当に嬉しそうだ。彼女はその満足げな笑みを数秒間続けてからふと何かを思い付いたらしく、改めて彼の事を見つめだす。

胡桃「あつ……………プレゼント……………とは少し違うけどさ……………」

その……………なんつーか……………ええつと……………出来るなら……………」

彼は胡桃を待ったが、彼女は視線をチラチラとそらして齒切れの悪い言葉を放つだけ……………もどかしくなって『何か欲しい物があつた？』と尋ねても、『いや……………物とかじゃなくて……………』と……………訳の分からない事しか言わない。

胡桃「あ、あゝ……………やっぱいいっ！ 何でもないっ」

「……………何だよ、気になるなあ。何かあるなら、遠慮しなくて良いのに」

胡桃「うう……本当にいいから、気にしないでくれ」  
いてもたってもいられなくなり、胡桃は彼の前から立ち去って部屋の隅に移る。そして窓の外へ視線を移し、そのまま空を見上げた……。今の時刻は昼を過ぎた辺りだろう、今日の空はとても綺麗に晴れている。

胡桃（流石に……言えないよな……）

そういうの柄がらじゃないし……）

誕生日という力を借り、勢いのまま言おうか悩んだ……。けど、やっぱり言えない……。

胡桃は空を見上げながらため息をつき、由紀達を……その後に彼の事を横目で見つめ、またもう一度ため息をつくど、心の中でだけそれを告げた……。さつき言えなかった、本当の望みを……。

胡桃（プレゼントとかどうでも良いから、出来るなら来年も……『誕生日おめでとう』って言って欲しいなあ……）

百四十九話 『しごと——1——』

何時もと変わらぬ、何気ない一日…。

朝起きて、みんなと共に朝食を食べて、歯を磨いて…そのあとは勉強したり、運動したり、はたまた悠里の手伝いとして屋上の菜園を手入れしたり、真冬達と適当な会話をしたり…今日もまた、そんな一日になると思っていた。

…しかし、今日は少しだけ違った。

事の始まりは朝食の時…彼や真冬、由紀達は勿論、珍しく穂村や圭一、柳と…屋敷の全員でキッチンに集まっていた際の事だ。それぞれが何気なく朝食を食べ進めていると、柳が悠里に向けてこう言った。

柳「…そう言えば、君らは元々、二つの場所を目的地にして移動していたのだろうか？」

悠里「そうですね、〃ランダルコーポレーション〃か〃聖イシドロス大学〃…そのどちらかに向かうつもりでした。…まあ、色々と寄り道をしてる内に先延ばしになっちゃいましたけど…」

けど、その寄り道があつたからこそ〃彼〃と出会えたし、真冬達と仲良くなる事も出来た…。だからあながち、あれらの寄り道も無駄ではなかったのかも知れない。

柳「…ふむ、では…君らに一つ、仕事を頼んでも良いか？」

悠里「仕事ですか？はい、構いませんよ」

柳には世話になってるし、多少の仕事くらいなら喜んで引き受ける。

悠里は勿論、その話を近くで聞いていた由紀達も同じ考えだ。

美紀「それで、どんな仕事を？」

柳「イシドロス大学の方に行って、ある程度の情報を集めて来て欲しい」

胡桃「えっ？大学に??いつから??」

柳「可能なら、このあとすぐにでも……」

突然の事に戸惑う一行だが、悠里がすぐに『分かりました』と返事をする。すぐにでもという言葉には驚いたが、元々行く予定だった場所だし、断る理由も無い。彼女らは朝食を食べ終わるとすぐにキツチンを出て、自室で準備を整えようとする。当然、彼もそれに続こうとしたが……

柳「ああ、君には別の仕事を頼みたい。だから残ってくれるか？」

「別の仕事……?」

胡桃「コイツだけにか?」

柳「いや、彼には狭山君をつける」

彼は別行動という事を知り、足を止める一行……。また、真冬自身もその仕事の事は初耳だったのか、眉をピクツと動かして首を傾げていた。

真冬「柳さん……ボクの書いたレポート、ちゃんと読んだよね？」

柳「ああ、分かってる……。若狭君、イシドロスには数名の生存者がいる事が確認されている。こんな世界だ……。もしかすると、危険な目に遭わされる可能性もある。だから彼の代わりに、穂村君を連れていけ」

定期的以外の偵察に出て、各地を回っている真冬の記したレポートには、聖イシドロス大学の名前もあった……。真冬曰く、あそこには数名の生存者がいるらしい。なので念の為、柳は護衛代わりに穂村を同行させる事にしたようだ。

真冬「えく……穂村に美紀達が守れるかなあ……」

穂村「はあ？楽勝だつての！リーさん、任せてくれ。どんな野郎が襲って来ようと、あんたには指一本触れさせねえ」

真冬「悠里だけじゃなく、みんなを守るんだよ……このバカ……」

穂村「あく、分かってる分かってる!!任せろつて!」

二人のやり取りを見た悠里は苦笑いし、穂村に向け『よろしくお願  
いしますね』と丁寧な言葉を放つ。少し不安だが、穂村がいれば多分  
大丈夫なハズだ…。

由紀「じゃあ、とりあえず支度して来よつか？」

美紀「そうですね…。」

由紀達がキッチンを去り、自室に向かう…。

彼女らが出て行ったのを見計らい、穂村は柳に尋ねた。

穂村「んで、具体的には何したら良いんだ？」

柳「大学に着いたら、まず中に入って…そこにいる生存者らと会っ  
てくれ。で、その人物達が協力的な連中のようだったら、適当に情報  
集めをして欲しい。これまでどうやって生き延びてきたのか…：今  
回の出来事について知ってる事はないか…：ここ最近、身の回りでお  
かしな事はおきてないか…：そんな感じで、適当に会話をしつつ交  
流してくれば良い」

穂村「分かったけどさ…：それ、何か役に立つの？大学にいる連中  
の話を聞いたところで、役に立つ情報なんか無いだろ？」

柳「まあ、何も無かったら無かったで別に良いさ…。」

おっと、そうだった。大学の連中に何かを聞かれても、自分達はた  
だの生存者だと…：適当に移動していたらここに辿り着いたと、そう  
伝えてくれ。この屋敷の事は間違っても口にしないでくれよ？」

穂村は無言で頷き、それを了承する…。これについては後で由紀達  
にもしつかり言っておく必要があるようだ。

穂村「んで、もう一つ質問なんだけど…：もし、大学の連中が協力  
的じゃなかったら？コッチに…：っていうかアイツらに襲いかかって  
来たらどうすれば良い？」

柳「その時は…：これまで通りやってくれれば良い。

彼女らが襲われたとあれば、多少の暴力も仕方無いだろう？」

柳は穂村から彼へと視線を移し、そう尋ねる。



その大学にいるのがどんな人間かは予想もつかないが、由紀達に危害を加えるような事があれば、遠慮する必要も無いだろう。

「ああ、そうですね…。その時は遠慮なくやってくれて良い…。みんなが無事なら、それだけで良いから」

穂村「了解つ。んで、いつ頃帰ってくれば良い？」

柳「そうだな…。状況にもよるが、数日間は向こうで過ごしてくれて構わない。一応無線を持って行って、夜にそれぞれの状況を報告しておこう」

柳の言葉を聞き、彼は思わず『数日か…。』と声を漏らす。

どんな連中がいるかも分からぬ場所に彼女らを置いておくという事への不安もあるが、これまでずっと一緒にいた彼女らと、ほんの少しだけとはいえ別行動をすることになってどこか寂しくもあつた。

穂村「さうて、お嬢さん方の支度が終わる前に、俺もパパッと準備してくるかね」

それから数十分経過し、由紀達学園生活部の面々：そして穂村が支度を終え、屋敷の庭へと出る。一行はキャンピングカーで大学へ向かう事にしたらしく、中へと荷物を運び終えてから、見送りに来ていた彼や柳に向け挨拶をしていく。

悠里「じゃあ、行ってきますね」

柳「ああ、何かあれば遠慮なく穂村君を使ってくれ」

真冬「みんな、気を付けてね…」

穂村は…：まあ、そのまま帰って来なくても良いよ…：…」

真冬が何時ものように冷たい発言を吐き、穂村がムツとした表情を向ける…。その間に美紀が割り込んで二人を宥<sup>なだ</sup>めていく中、胡桃はさり気無く彼の側へと寄り、そつと顔を俯けた…。チラツとしか確認出来なかったが、ほんの少しだけ…不安げな顔をしていたように見える。

胡桃「あのさ……こんな事言ったら、笑われるかもだけど……」  
「ん？どうした？」

彼が尋ねると、胡桃はそつと顔を上げる……。

こちらに向けられたその顔はやはりどこか不安そうだったが、彼女はすぐにニコツとした表情で言った。

胡桃「あく……やっぱり何でもない。

大丈夫だとは思うけど、お互い気を付けような。

じゃあまた、何日か後でな」

「ああ、また」

胡桃「おうっ」

元気に手を振り、胡桃は由紀達と共にキャンピングカーへと乗り込む。

車は悠里の運転によってゆっくりと動き出し、開かれたゲートを通って庭から出て行った……。彼や真冬達が庭からこちらを見送る中、車両の後部に座っていた胡桃は段々と遠くなっていく彼の顔を窓から見つめ……

胡桃（なんか、嫌な予感すんだよな……）

そう、心の中で呟いた……。

「……さて、僕らはどんな仕事を？」

出て行った車が見えなくなってから、彼はクルリと振り返る。そして柳らと共に屋敷の中へと向かいながら、その仕事の内容を聞いていった。

柳「君と狭山君には、学校に行ってもらおうと思う」

「学校？ええっと、それってどこの？」

柳「巡ヶ丘学院高等学校……名前くらいは知っているだろう？」

彼はその校名を聞き、一瞬だけ考える…。

確かにその学校の名前は知っている。

けど、どこでその名を聞いたのだろうか……。

答えはすぐに出た。

「…あの娘らを通つてた学校か」

柳「ああ、彼女らを通い、そして暮らしていた学校だね。君と狭山君にはまた明日か明後日にでもそちらに向かつてもらいたい」

「それは構わないけど……その学校に用があるなら、僕よりも胡桃ちゃん達の方が適任だったんじゃないかな？建物の構造とか理解してるわけだし……」

柳「いや、君らに頼む仕事はそこまで複雑なものでもないからね。あの学校に詳しい人間の手を借りる程ではないよ……」

『学校の構造なんて、そこまで入り組んだものでもないだろう？』

柳はそう言つて微笑んだ後、詳しい事はまた明日にでも話すと言つて歩を進める。由紀らが暮らしていたという学校……そこには今はまだ誰もいないし、特に何も無いハズだが、柳はそこに何を求めているのだろうか？

彼が疑問に思いながらもとりあえず自室へと戻った一方、柳も真冬・圭一を連れて自分の部屋へと戻つていった。

真冬「大学に向かつて情報収集つていうのはまだ分かるけど、今更由紀達の学校に行く意味つてあるの……？」

柳の部屋に入つてまず、真冬が口を開く。

彼と同様、真冬もそれを疑問に思つていた。

柳「正直、大学の方よりも巡ヶ丘高校の方が優先度が高いよ。

あの学校には、私達のこれからを大きく左右するであろう物がある」

真冬「……まあ、柳さんが言うならそれに従うけどさ」

柳「ふふつ、ありがとう……」

あの場所には感染者も多いだろうから、当日はしっかりと気を付け

てくれ」

『何なら由紀達のように今からでも出発出来る…』

真冬はそう告げたが、柳は『出発は少し待ってくれ』と答えた。

柳「ほんの少しだけ確認したい事があるからね…。

出発はその確認が済んでからだ。

それが済み次第、こちらから声をかける。

早ければ明日、遅くても明後日には出発だ」

真冬「……………分かったよ」

釈然としないが、それでも柳には従っておこう…。

真冬はその場から数歩下がり、部屋の壁に背中を預ける。

圭一「で、俺はどうする？留守番でもしてようか？」

柳「圭一君は…私と一緒にランダルだ」

圭一「ランダル……………さつき悠里が言ってた場所か？」

柳「ああ、そこで色々調べ物をしたんだけど、もしかすると色々危険かも知れない…。だから、君に同行してもらおう。もしもの時は私をしっかりと守ってくれよ？」

柳が冗談混じりに笑うと、圭一は舌打ちを鳴らしてから『分かった…』と答える。ランダルコーポレーション……………圭一はその場所についての知識をほぼ持っていなかったが、とりあえず面倒そうな予感だけはしていた。

その後、圭一や真冬は部屋をあとにし、柳だけがそこに残る…。自室に一人でいる柳は軽いため息をついてから、誰に聞かせる訳でもなく独り言を呟いた。

柳「さて、ここからどうなるかな…」

百五十話『しごと—2—』

由紀達が大学へと出発したその日の夜、彼と真冬、柳と圭一は四人で簡単な夕食を済ませていた。普段は少し騒がしいこの時間も由紀達がいなくて一気に静かになってどこか物足りないと感じる彼だったが、少しの間の辛抱だと思つて我慢する。あと数日もすれば：それぞれが自分の仕事を無事に終えられれば、またいつも通りの毎日がやつて来るのだ。

柳「そう言えば、さつき穂村君から連絡が入ったよ」

夕食を終えて一息ついていると、柳がそんな報告をする。

穂村は真冬に渡された無線機を持つていった為、それで柳に連絡をしたのだろう…。彼も真冬も、柳の言葉に耳を傾けた。皆は無事だろうか…。怪我などしていないだろうか…。

柳「そんな心配そんな顔をしなくても大丈夫、みんな無事だそうだ」  
「…そりゃ良かった。で、その大学には何かあったんですかね？」

柳「狭山君が言っていた通り、数名の生存者がいたらしい。が、その生存者らの間にはちよつとした派閥があるらしく、大学に入って早々片方のグループに襲われたらしいが…：…まあ、穂村君もいたし、そこはどうかならない。彼女らはその後、襲つてきたグループから逃れてもう一方のグループ…：…比較的協力的な方のグループと合流して多少は仲良くやっているようだ」

「怪我とか…：…してないですよね？」

柳「ああ、穂村君はみんな無事だと言っていたよ」

生存者がいるらしいというのは聞いていたが、いきなり襲われてしまうのは少し予想外だった…。何はともあれ、皆が無事と聞いて一安心した彼は改めて柳と向き合う。

「みんなが合流したグループの人らは信頼出来るんですかね…」

真冬「その連中について、穂村は何か言つてた？」

柳「とりあえず、彼女らが合流した穩健派のグループには女性しかないそうさ。『リーさん程じゃないにせよ、そこそこ可愛い女の子もいるぜ!』…と、穂村君ははしゃいでいたよ」

そんな情報は、別にいらぬのだが…。

彼と真冬はほぼ同時に呆れた表情を浮かべ、不安げにため息を放つ。

柳「まあまあ、穂村君だつてただのバカじゃない。穩健派の中に怪しい動きをしてる者がいたら気付くだろうし、仮にもう一方のグループが襲撃してきてもみんなを守りきれる筈だ」

「だと良いんだけど……」

真冬「どうにも不安なんだよね…」

圭一「…なら、穂村に命令してやれば良い。

最初に襲いかかってきた方のグループの連中全員を始末しろとな」  
ここまで黙っていた圭一が静かにそう告げる。実際にそうしたら由紀達の身の安全はより確かなものになるだろうが…

柳「それは…少し難しいかも知れないね。最初に襲われた際、穂村君はすぐに反撃して相手を仕留めようとしたらしいが丈槍君や若狭君に制止されて踏みとどまったらしい。彼女らはあまり争い事を好まないようだから、当然と言えば当然だね…」

圭一「…つまり、向こうから余程の攻撃をされない限りは守りに徹するつもりでいるって事か」

柳「そういう事になるね。まあ、彼女らの命に関わるような事態になれば穂村君も本気になってくれるだろう。あまりにも危険そうな雰囲気になってきたら帰ってくるようにと伝えてある。だからきつと大丈夫さ」

何にせよ、今はみんなが無事でいられる事を祈るしかない…。

不安な気持ちを抱える彼と真冬…二人に出発の命令が出たのは、由紀達が出発してから二日後の昼を過ぎた辺りの事だった。

柳「さて、待たせたね。色々確認が出来たので可能ならあの学校に行ってきた欲しいのだが、大丈夫かな？」

「ああ、大丈夫ですよ」

真冬「…で、ボクらは何してくれば良いの？」

真冬が尋ねると、柳は用意していたカバンを彼女に渡す。

「小さ過ぎず大き過ぎない、普通のカバンだ。」

柳「その中にメモが入ってるから、そこに書かれている物を取ってきてくれれば良い。君らにとっては簡単な仕事だと思うし、すぐに終わると思う。けど、油断はしないようにね」

真冬「…分かった。行ってくる」

彼と真冬は軽い支度だけをしてから庭へと出ていくと、柳と圭一も同じ様に庭へと出てくる。どうやらこの二人も今から外へ出掛けるつもりらしい。

「ええっと、お二人さんが向かうのはランドルだったっけ？」

真冬「そうだね…。で、ボクらが向かうのは巡ヶ丘学院高等学校…つまり、由紀達が過ごしていた学校…」

由紀達を通い、そして暮らしていた学校…。

話には聞いていたが、実際に向かうのは初めてだ。

彼と真冬は庭先にあるガレージへ向かうと穂村が使っていたポロポロの車へと乗り込み、そして柳と圭一は柳が所有していた車へと乗り込む。穂村が使っていた車は所々へこんでいたり傷があつたりしてみずぼらしいが、柳の車には目立つ傷も無く、いかにも高級車という感じがした。

真冬「…あ、キミって車の運転出来る？」

「いや、そういうのはどうにも苦手で…。」

もし出来るのなら、真冬がやってくれると有り難いかな」

真冬「そう…分かった。別に良いよ」

運転が苦手な彼は助手席に座り、真冬は運転席へと座る。  
彼と真冬を乗せた車、そして柳と圭一を乗せた車はほぼ同時に屋敷  
を出ていくと、それぞれの目的地を目指して街の中を走り出した…。



百五十一話『しごと—3—』

真冬「……さ、着いたよ」

屋敷を出発して少しした頃、走り続けていた車がエンジンを止める。

窓の外に視線をやって辺りを見てみると、今は使われていない車が綺麗に数台並んでいた。どうやら、ここは巡ヶ丘学院高等学校の駐車場のようだ。

「じゃ、手早く終わらせてきますかね」

ドアを開けて車を降り、そばにある校舎を見上げる…。

当然だが、外見だけ見るとただの学校だ。…が、前までここに皆が通っていたと思うと、ここに暮らしていたのだと思うと、不思議とこの校舎が特別な物に見えてくる。

「周り、注意しないとな…」

辺りには数体、“かれら”がいる…。どれも大人ではない、彼や真冬と同じくらいの年齢であろう者達だ。

真冬「制服、由紀達と同じだね。この学校の生徒達かな」

「そうだろうね…」

囲まれたら面倒だし、とつと走り抜けようか」

真冬「…賛成」

こちらの存在に気付いている者はまだほんの僅か…。二人は早いにこの場から去ろうと走り出し、駐車場から校内へと侵入する。校舎の中は明かりがついていないせいではんの少しだけ薄暗く、足元にはガラスの破片などが散乱している箇所もあった。

「さて、柳さんは何をお探しだったのかな？」

真冬「ええつと……」

真冬は背負っていたカバンを下ろし、その中にあるメモを確認しようとする。…が、その寸前で何かを思い付いたかのようにそつと微笑むと、中のメモを確認する事なくカバンを背負い直してしまった。

真冬「…せつかくだし、のんびりしながら色々見ていこうよ。

みんなが暮らしてた学校、興味あるでしょ？

柳さんから頼まれた物はまた後で探せば良いし……」

そう言われた彼は苦笑しながら辺りを見回す。

由紀、悠里、胡桃、美紀……彼女らが暮らしてきたこの場所がどんな所なのか、興味が無いと言えば嘘になる。時間があるのならのんびり見ていききたいと、心のどこかでそう思っていた。

「まあ、確かに興味はあるかな」

真冬「だと思った…。急ぎの仕事じゃないし、好きなだけ見ていきなよ。夜になるまでに帰れば柳さんも文句は言わないだろうし…」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

ゆっくり奥へと進み、廊下を歩く…。

今はまだ日が昇っている時間なので廊下横の窓から日が差し込み、薄暗い屋内をいくらか明るくしてくれている。しかし、夜になったらこの辺りはもう完全に真っ暗だろう。彼は所々割れてしまっている窓の外に視線を向けて校庭を眺めながら、静かに歩を進める…。

「みんなは…どの辺を部屋にしてたんだろう？」

真冬「本人達から聞いてないの？」

「ああ、この学校で生活してたとは聞いてたけど、主にどの部屋で過ごしてたとかまでは聞いてない…」

恐らく、毎日決まった部屋で寝たり、食事をとったりしていたはずだ。

元々は教室として使われていた空間を幾つか回っていくその道中、彼と真冬は廊下をノソノソと歩んでいた一体の感染者と出会<sup>でくわ</sup>す。外にいたのと同様、この学校の制服を着た女の感染者だ…。

（あの娘らと同じ制服を着た相手だと…少しやりづらいな）

その感染者はこちらに気付くなり両手を前に出して掴みかかって

きたが、彼はそれを横に避ける。直後、彼はその感染者の肩をドンツと押して近くにあった教室の中へと突き飛ばすと、すぐさま扉を閉めて中に閉じ込めた。鍵を閉めたりした訳ではなく簡単に閉じ込めただけだが、十分な時間稼ぎになるだろう。

「さ、行こう行こう」

真冬「…うん」

教室の中に閉じ込めた感染者から逃げる様にして、足早に廊下を進んでいく。たった一体の感染者が相手ならその場で仕留める事も容易なのだが、その相手が由紀らと同じ制服を着ているというだけでどうにもやりにくい…。やはり、心のどこかでそれを由紀達と重ねてしまっているのだろうか。

廊下の奥、部屋の中、窓の外：様々な場所で彼女らと同じ制服を着た女子生徒の感染者を見る度、彼は言い様のない気持ちを抱いていく。

真冬「ん、これは……」

少し進んだところで、妙な物が二人の前に現れた。

それは、廊下の上に積み重なる様にして置かれている机の山。恐らく、感染者の進行を止める為のバリケードとして使われていたのだろう。

「こういうのも、みんなで作ったんだろうな」

真冬「…そうだね」

多分、これを作ったのは由紀達だ…。

バリケードの一部は既に崩れ落ちていた為、二人はそこを通って先へと進む。学校内は荒れ果てているし感染者もいるので大変だが、今のバリケードのように、所々に由紀達がいた痕跡が残されていた。じっくり、のんびりと歩を進めながら、校内を探索していく…。

そしてとうとう、彼と真冬はその部屋に辿り着いた。

「……………これは…」

足を踏み入れた部屋、元は教室だったと思われるその場所はこれまでに見てきた所と比べるとまだあまり荒れてはいなかった…。感染者の姿も、その残骸も無い。それを確認した後に彼の目がまず捉えたのは、部屋の壁にある大きな黒板。黒板自体はこれまで回ってきた部屋にもあったが、そこに書かれていた大きな文字に彼は釘付けとなる。

【巡ヶ丘学院高校卒業式】

特別上手くも下手でもないその文字の横には一回り小さな文字で【卒業生】と書かれており、更にその横には四つの見慣れた名前が並んでいた…。みんなの名前だ。

「やっぱり、みんなはここにいたんだな……」

真冬「卒業式とかやってたんだ……ふっ、楽しそう」

彼も真冬も、在学中に世界が変わったので卒業式はやっていない…。

しかし、由紀達は違った。こんな世界になってからもみんなで一生懸命生きて、生き抜いて、そして自分達で卒業式を開いたんだ。

「……………」

黒板の文字を眺めながら、彼は立ち尽くす…。

辛い事、悲しい事、苦しい事……色々あっただろうに、彼女らはそれを乗り越えて卒業までした。この文字を見るだけで、何故か胸が熱くなってくる。少し上から目線な感じになってしまいが、みんなに向けて『よく頑張ったね』と声をかけたくなる…。

「今更だけど、あの娘達って本当に凄いよね。上手く言えないけど、あの娘達に会えて本当に良かったなって思うよ」

真冬「……そうだね。ボクもそう思う」

彼女らが特に何をした訳でもない。

だが、この黒板の文字を見ると……これまでの彼女らの言動をあれこれ思い出していくと、自分達は本当に凄い女の子達と出会えたんだ

など、不思議とそう思えた。

真冬「……………さて、ボクは今の内に仕事済ませてくるよ」

「ああ、じゃあ僕も——」

真冬「大丈夫。どうせ大した仕事じゃないだろうから、キミはここにいてのんびりしてて良いよ。すぐ終わらせてくるから…」

彼はもう少しこの場にいたいのではと思って、気を使ってくれたのだろう。真冬はクルリと背を向けて、一人で部屋を出て行こうとする。ここまで来て彼女一人に仕事を任せるのも悪いし、何より単独で行動させるなんて出来ない…。彼はついていこうとしたが、何を言っても真冬は微笑みを浮かべながら手を横に振り、『いいから任せて』と言うばかりだった。

真冬「ボクなら心配いらないよ。胡桃に負けなくらいには動けるし、万が一噛まれたって大丈夫だから」

「…そこまで言うなら任せようかな」

そもそも、真冬は彼等と出会う前からよく一人で外に出ていたような娘だ。今更こんな場所で少し仕事してくるくらい朝飯前なのだろう。真冬はニコツと微笑んでから彼と別れ、廊下に出て少ししてからカバンを下ろす。そしてその中であつたメモを開き、柳に任せられた仕事の内容を確認したのだが……………

真冬「え……………何これ……………」

「こんな物が本当に必要なの…?」

今回の仕事はこの学校から「ある物」を取ってくる事だったが、その「ある物」の内容があまりにも予想外だった…。カバンにはそのメモの他、目的の物を持って帰る為の入れ物が複数ある。頼まれたからにはしっかりとやり遂げるが、やはり柳の考えてる事はさっぱり分からないなど、真冬はため息をついた。

その後、真冬は校内を歩き回って目的の物の回収をしていく…。

『簡単な仕事だ』と言っていた柳の言葉に嘘は無く、本当に簡単な仕事だった。…が、それを回収する度にやはり思う。『こんな物が本当に必要なのか…』と…。

真冬「…：さて、とりあえずこれだけ回収すれば充分——」

独り言をポツリと呟いていた途中、真冬は目を見開いて固まる…。

何か、妙な音がした…：…。そう遠くはない場所…：恐らく、自分達が車を停めたのとはほぼ同じ辺りの位置。そこに他の車がやって来たような、そんな音が聴こえたのだ。

真冬「何か…：来た…：…」

…：真冬が何かの気配を感じ取ったのと同刻。

彼もまた、それに気付いていた。彼は教室の窓際に立つと静かに顔を出し、下を見る…：。彼のいる場所からはほんの少しだけ遠くてハッキリと確認は出来なかったものの、やはりそこに車が来ていたのだけは分かった。

(…：こんな時に、…：こんな場所に…：他の生存者…：?)

やって来た車は二台。

それらの車のドアが開き、中からゾロゾロと人が降りてくる。

見慣れない男が四く五人…：女が一人。車のエンジン音を聴いた感染者がその場へ歩みを進め始めたのが分かったが、その連中は感染者が集まってくるのよりも早く、校内へと侵入してきた。

何か嫌な予感がする…：。

彼は教室から廊下へと出て、真冬を探しに行く事にした。

百五十二話 『しごと—4—』

柳から頼まれていた仕事を終え、あとは帰るだけという時……。突如として何者かが校内に侵入してきた。その連中が何者なのか、何の為にここに来たのか：それらは全く分からない。何はともあれ、ここは彼と合流してとつと帰るのが正解だろう。

真冬は目的の物を詰めたカバンを背負い直し、彼の元へ向かおうとする。

……が、カバンを背負って振り向いた先、廊下の奥からゾロゾロと人影が現れて、真冬の前へと立ち塞がった。

「おつと、これは予想外だ。こんな所に誰かいたぞ？」

「随分と若い娘だな……。お前、一人か？」

目の前に現れたのは三人の男……。いずれも二十代後半といったところだろう。男らは既に鉄パイプやナイフ等の武器を握っていたが、それが感染者に対してだけ使う武器なのか、はたまた他の生存者にも使うつもり武器なのかは分からない。

真冬「……キミ達、誰？何しに来たの？」

「先に質問したのはこっちだ。お前は一人なのか、それとも他に仲間がいるのか、まずはそれに答えろ」

一人の男が冷めた眼差しをして、手に持っていたナイフの向ける。

この瞬間、真冬はこの連中は自分の敵なのだ判断した。

真冬「刃物向けながら話すような、失礼な男と会話するつもりはない……。相手するのも面倒だから、とつと帰ってきてくれるかな？」

「……そのカバンとポーチ、中身は何だ？」

男は真冬の背負っているカバンと腰に巻かれていたポーチをナイフの先端で交互に指し、その中身を問う。直後、真冬は面倒そうにため息をつけてからポーチに手を潜らせると、短く収納していた警棒を伸ばしてから右手に持ち、男らに視線を向けた。

真冬「帰れって言ったのに……しつこい……」

「……そうか。そっちがその気なら仕方ない。ある程度痛い目にあわせて大人しくさせてから、持ち物を調べさせてもらおうとしよう」

「もう少し協力的にしてくれば優しくしてやったのに、

気の強い子だなあ」

男らは武器を構える真冬を見て鼻で笑い、ゆっくりと歩み寄る。

一人だけだから、若い女だから、小さな身体の子だから簡単に押さえられると思っっているのだろう……。その油断を突き、キツイ一撃をくれてやる。

そう決意した真冬は警棒を握り直したのだが、その男らの背後に隠れるようにして立っていた一人の女の存在に気が付き、思わず目を丸くした。

真冬「キミは……」

肩まで伸びた茶髪と黒縁のメガネ……。真冬程ではないにせよ小さな体格をしたその若い女は、大人しげな雰囲気を纏っていた……。

この女、どこかで見覚えがある……。

真冬と目が合った瞬間、女は気まずそうに目を逸して苦笑した。

「……知花<sup>ちばな</sup>、知り合いか？」

一人の男がその女に尋ねた時、真冬は思い出す。

この女の名前は知花咲<sup>ちばなさき</sup>。

以前、真冬と穂村と圭一の三人で他の生存者グループと争った際、最後に残ったのがこの女だった。あの時、真冬達は相手のグループに勝ちましたものの、最後まで本性を隠し続けたこの女だけは逃してしまっただけ……。

知花「……いえ、知らない娘ですよ」

反応を見た感じ、知花も真冬の事を覚えている。

しかしそれを周りの仲間に教えるつもりはないらしく、あくまでも



『知らない』と嘘をついていた。

真冬（この人、また別のグループ見つけてたのかな……）

前のグループは完全に崩壊させたのに、そこからまた新たな仲間を見付けて生き延びていたとは……何とも世渡り上手な女だ。見たところ、このグループでも気弱な女を演じているのだろうか……。しかし、他の男らが知らなくとも真冬は知っている。この知花咲という女は気弱な女を演じてるだけで、本当は躊躇いなく人を殺せるような人物である事を……。また、どこから手に入れてきたのか、拳銃を所持したりしている事を……。

真冬（見たところ……今日は持つてない……？）

今ここで拳銃を抜かれ、撃たれでもしたら流石の真冬でもどうしようもない。だが、今日の知花はパツと見たところ拳銃を持つてはいないようだ。勿論、どこかに隠し持っている可能性はあるので油断は出来ないが……。

「まあ、知り合いでもないのなら遠慮はいらないな」

知花「は、はい……」

けど、見たところ普通の女の子みたいですから……あまり乱暴は……」  
「それはこの娘次第だなあ。この娘が大人しくしてくれるなら無駄に痛い目にはあわせないと思うけど、めちやくちや抵抗する様ならこつちだって本気でやるしか無いし……。っても、どのみち持ち物くらいは奪うつもりだけど」

真冬を庇う様な発言をした知花だが、きつとその発言すらも演技の一環に過ぎないのだろうか。こうやって真冬の身を案じる事で、自分は女子供には優しい気弱な女だと仲間にアピールしているのだ。

知花「わ、私……先に行ってますね？」

「ああ、リーダーに会ったら報告だけしておいてくれ」

知花「はい、分かりました……」

知花は廊下横の階段を駆け上がり、その場から離れていく……。

その際、彼女は他の連中に気付かれぬようにもう一度だけ真冬と視線を合わせると、ほんの一瞬だけニヤリと笑った。

真冬（あの女、腹黒そうだからキライ……………）

真冬はムツとした表情を返して警棒を握り直し、前にいる男らと向き合う。由紀達と出会ってからというもの、比較的平和な毎日を送っていた真冬。こうして他の生存者と争うのも久々だし、無事に乗り切れるかという不安もある…。けど、相手が自分に敵意を向けてる連中なら…由紀達のように優しくはない人間が相手なら、手加減や躊躇いなど不要だと…そう自分に言い聞かせた。

目の前の男らを倒す為に真冬が動き出した一方、一人になった知花は軽い足取りで校内を進む。物陰にいるかも知れない感染者に警戒しつつも、安全だと分かった途端に小さく鼻歌を歌ったりしてご機嫌に…。

知花「……………んっ？」

そうこうしてる内、知花は一人の少年と出会った。

以前、真冬達と争った時にいた二人の男…圭一や穂村とはまた違う。あの二人よりも若い少年…。知花は一目見て彼も真冬の仲間なのだろうと察し、笑みを浮かべる。実際、その読みは当たっていた。

知花「ふふっ、どうも〜」

「……………」

知花とは初対面である彼は思わず言葉を失い、ただ唾然とする。

世が世ならこちらからも挨拶を返すが、生き延びている人がそう多くはないこの世界でいきなり挨拶されてもどういう反応を返せば良いのか分かったものではない。そもそも、彼はこの女が…知花が安全な人間か危険な人間かも知らないのだ。

知花「…あつ、急にごめんなさい…」

他の生存者さんに会うの久しぶりで、嬉しくなっちゃって。

私、お友達と一緒に物資を探しに来てるだけなの。

「けどやっぱ、こんな学校に来てても大した物は見つけられなさそうだね…」

純粹な笑みを浮かべて『えへへ』と笑い、知花は彼に近付いていく。

自分は無害な女だと、君の敵ではないとでも言いたげなオーラを全面に出し、柔らかな笑みを浮かべ続ける。普通の人間なら、ましてや彼の様な少年なら知花の演技に騙されてあっさり警戒を解くだろう…。しかし次の瞬間、彼は警戒を解くどころか、一步後ろに下がって知花から距離をとった。

知花「……………あれっ？どうしたのかな？」

「いや、何か嫌な予感がして…」

悪いけど、これ以上は近寄らないでもらえるかな」

目の前にいるこの女の笑顔に、僅かな違和感を感じる。

この女の笑顔は確かに可愛らしかったが、由紀のような笑顔とは何かが違う…。心からの笑みではないというか、その裏に何か不気味なものを隠しているような…そんな違和感がある。

彼が警戒を解かずにいると、知花は一緒だけポカンとした表情を浮かべた後、また笑い出す。しかし今度のは先程のような柔らかい笑みではなく、やたらと楽しげな笑みだ。

知花「あははっ。あゝ……………そっか…」

一発でコロツと騙せないなんて、私もまだまだかなあ…」

…じゃあ良いや、お芝居は終わりですっ!!」

女は両手をパンツと合わせて叩き、ニヤリと笑った…」

百五十三話 『しづと—5—』

知花「じゃあいいや、お芝居は終わり！」

「…………お芝居？」

物静かな校内の廊下の上…………彼は目の前にいる女からある一定の距離を開き警戒しつつ、女が言った『お芝居』という言葉の意味を問う。女はそう問われてすぐにコクリと頷くと、やたらと楽しげにニコニコと微笑み口を開けた。

知花「そう、お芝居。私は昔からそういうのが大好きで普段から演技をしているの。気弱で大人しい人間を演じてた方が周りの人も警戒しないし、何かと便利なので」

女は：知花咲はそうやって大人しい人間を演じて、様々な生存者達に受け入れられてきた。大人しくて弱い女を演じてれば、周りの者が自分を守ってくれる。それに、色んな調査もスムーズに進む事が多かった。

知花「…けど、キミは騙せなかったね。」

これまで色んな人と出会ってきたけど、会ってすぐに怪しまれたのは初めてだったから結構ショックです」

知花が言葉を放ちながら一歩寄ってきたが、彼はそれに合わせて一歩下がる…。見たところ武器は持っていないようだが、上着の内等に隠している可能性はある。…とはいえ、相手は女性一人。少し警戒し過ぎる気がするが、この女からはやたらと嫌な雰囲気は漂っている。警戒し過ぎるくらいで丁度良さそうだ。

知花「…………そんな警戒しなくても大丈夫。」

今ここでキミに危害を加えたりするつもりは無いから…。

ただね、せっかく会えたんだし…一つお願いしても良いかな？」

「お願い？」

警戒は解かずに聞き返す。

知花はすぐ、それに答えた。

知花「私のボスがね、 “記念品” が欲しいって言ってるの」

「は、はあ……？？記念品……？」

知花「そう、記念品。」

…まあ、いきなりこんなこと言われてもなんの事だっと思おうよね。けど、その “記念品” っていうのはキミもよく知ってるモノだと思うの。私のボスって結構変わっててね、偶に変な物を欲しがったりするんだけど、そういうところも面白くて…」

その “ボス” とやらの事を思い浮かべているのだろう……知花はニヤニヤとだらしなく笑い、その場で小さく足踏みをする。先程までの笑顔には何か裏があるような気がしたが、今のこの笑顔にはそういったものを感じない…。

彼は額に冷や汗を浮かべ、なんとも言えぬ目線を向ける。知花はそれに気付くなりハツとした表情を浮かべて咳払い一つすると、改めて話を進めた。

知花「えつと……とりあえず聞きたいんだけど、今日、ここに来てるのはキミと狭山真冬ちゃんだけ？」

「…なんで真冬の名前を？」

この女が真冬の名前を知ってるのもそうだが、真冬がここに来てい  
る事を知っているのもおかしい…。もしかすると、この女はここで自  
分と会う前に真冬と会っていたのだろうか？だとしたら、真冬は無事  
だろうか？この女に何かされてはいないだろうか？

彼がそう考えて胸に不安を募らせる中、知花は答える。

知花「あの子の名前を知ってる理由なんてどうでも良い。

で、どうかな？今日は二人だけです？他の人は？」

「いや…今日は二人だけだよ」

嘘を吐こうかとも思ったが、そんなのは意味が無さそうだ…。

彼は知花の問いに対し、正直に答える事にした。

知花「あ……………二人だけなんだ……………」

一緒に来てると思っただけ、運が悪かったですね……………じゃあ、ここで言い合っても仕方ないか…。うん、ごめんなさい。さっきのお話は忘れて。『記念品』はまた今度貰う事にするから。いやあ…せっかく来たのに運が無かったなあ…」

ここに来ているのは彼と真冬だけ…。

それを知った瞬間、知花は彼に背を向けてその場を去ろうとする。…が、彼女は数歩進んでからまた振り返り、彼の目を見つめた。

知花「そう言えば、一階の方で私の連れと真冬ちゃんが争ってますよ。…まあ、あの人らじゃ多分、真冬ちゃんには敵わないだろうけど」  
口振りから察するに、この女は真冬の名前だけでなく、真冬がある程度の力を持っている事も知っている…。とことん怪しい女だが、今の話が本当なら早く一階へと向かい、真冬に力を貸した方が良いだろう。

知花「じゃあ、また会いましょうね」

知花からは少しの敵意も感じなくなった為、彼は彼女の横を通り過ぎて廊下を進む…。途中、後ろをチラツツと見てみると、知花がニコニコと微笑みながらこちらに手を振っているのが見えた。

(ほんと、何なんだ?)

おかしい人だな……………)

絶対に危ない人だとも言えないが、絶対に安全な人だとも言えない…。

あんな人間は初めて見た。

(まあ……………今はそれよりも真冬のところへ————)

真冬の元に向かわねば……………。

廊下を進み、階段を降りるべく横へと曲がる。

その時……………彼の視界に銀色の物体が映った…。

細長い銀色のそれはブツツ、という音を立てて空を切りながら凄まじい速さで顔に寄ってきて……………

「!!？」

危うく顔面にぶつかりそうになったが、咄嗟に姿勢を低くして避ける。視界に飛び込んできたその正体は鉄パイプのような棒。そしてそれを持つていたのは、目付きの悪い見知らぬ男だった。どうやら、曲がり角で待ち伏せをして彼を殴り倒すつもりでいたらしい。

だが、初撃の不意打ちは避けられた。

あれをまともに受けていたら、怪我どころでは済まなかったかも知れない。…と、安心する暇すら彼には無い。男はもう一度、その鉄棒を横に振るう…。彼は横へと飛んでそれを躲そうとしたが、ほんの少しだけタイミングが遅かった。

「ぐっ…!!」

ガンツ！という音が鳴り、側頭部に痛みが走る…。

避けようとして飛んだ事でまともな直撃は免れたが、それでもあんな鉄の棒を頭に向け振払われて痛くない訳がない。

(ああまったく…面倒くさい…！)

殴られた反動でよろけつつ、腰に下げていたナイフを取り出して戦おうとする。しかし目の前の男は彼がナイフを取るよりも先に右足で蹴りを放ち、彼はそれをまともに受けてしまった…。男の蹴りを受けた彼はバランスを崩し、側の階段を転げ落ちる。

知花「あつ……」

少し離れていた所からそれを見ていた知花はその場に駆け寄り、彼を蹴飛ばした男の横に立つ。男は彼が下の階に続く踊り場まで転げ落ちたのを見届けると知花の方に視線を移し、小さく鼻で笑ってから口を開けた。

「こんな場所に来たところで何も無いと思っていたが、そんな事もなかったな…。知花の意見を聞いておいて良かったよ」

知花「偶には、こういう学校の中を調べるのもありかな」と思って」

知花は会話をしながら視線を移し、階段下を眺める…。

視線の先、階段の踊り場では彼が横向きに倒れていた。しかも、下の階からは二体の感染者がやって来ている…。

「丁度良いタイミングだ。とどめを刺す必要もなくなるな」

横たわる彼に感染者が寄るのを見て、男は手にしていた鉄の棒を下ろす。

必要ならこのまま彼のところまで降りてとどめを刺すつもりでいたようだが、都合の良いタイミングで感染者がやって来たのでこれ以上自分が手を下す必要は無いと考えたらしい。

「ところで、あの男は何か使えそうな物を持っていただろうか…。

もし持っていたようなら、死体になった後で貰っておきたいが…」

知花「うくん…：…どうでしょうね…」

「…まあいい、後で調べる」

という会話をしてる内、感染者が踊り場へと上がる。

当然、感染者らはそこに倒れている彼の存在をしつかりと確認していた。二体の感染者は呻き声をあげながら彼の側へ、ノソノソと歩み寄る…。

彼はそれに気付いて仰向けになると、覆い被さるようにして襲い掛かってきた感染者らを腕で押して必死の抵抗をした。襲い掛かってきた感染者はどちらも、この学校の女子生徒だった子のようだ。ボロボロだが、由紀達と同じ制服を着ている…。

「ぐっ…ううっ…!!」

二体の【感染者】 彼に襲いかかっている感染者はどちらも元々、この学校に通う二年生だった。一方は内気で読書好きな女の子。そしてもう一方は美紀と親しくしていた女の子だったのだが、彼はそれを知らない。感染者が大口を開け、顔や首、腕や肩に噛みつこうとしてくる。彼は感染者の胸元を左腕で押して抵抗しながら右手にナイフを取り、どうにかこの二体を倒そうとした…。が、さつき殴られた頭が痛い。階段から転げ落ちた時に打った体が痛い。

(これは…マズイかも…)



背中が痛い。肩が痛い…。

体を感じる鈍い痛みや、焼ける様な痛み…。

それらに苦痛の声をあげつつ、彼は抵抗する。

そして……………彼は立ち上がった。

自分に襲い掛かってきた二体の感染者の頭をナイフでしつかりと突き、二度と動かぬようにして…。

「はあっ……………はあっ……………」

右手にナイフを持ったまま踊り場に立ち、上にいる男と知花を見る。

あの状況でも彼を仕留められなかった事を面倒に思ったのか、男の方は面倒そうにため息をついていた。一方、知花の方はパツと見た限り無表情だったが、ほんの一瞬だけ…彼と目が合った瞬間に微笑みを浮かべていたようだ。

「いきなり殴りがかってくるなんて、少し卑怯じゃないかな…」

彼は息を整えつつ、自分を殴った男に向けてそう言い放つ。

感染者の返り血を浴びたのか、彼の顔と上半身は血に濡れていた。

「悪いが、そうするのが一番楽なんだよ。」

他の生存者を見付けたら隙すきを突いて殴り殺して、適当に所持品を奪う。それが一番楽で良い。けど、今でも仕留めきれなかった辺り、お前は使えそうだ。仲間にしてやろうか？」

「お断り…。」

まったく、やられた方は堪たまったもんじやないんだけどね」

が、こうして明らかな敵意を向けてくる相手の方がやりやすい。

少しの遠慮も、躊躇ちゅうちゆいもいらぬから…………。

彼はナイフをギュツと握り直し、上にいる男を睨む。

頭を殴られ、身体を蹴られ、階段から転げ落ち、何箇所か怪我をした…。この状況でどこまでやれるか分からないが、それでも——

(少し面倒だけど、やれるだけやってやる…)

彼は階段を一步上がる…。

男の方も彼を迎え撃つ気でいるらしく、手にしていた鉄棒を構えていた。

知花「…もう、ここも終わりでいいですかね」

彼と男が向かい合うその最中、知花がポツリと囁く…。

次の瞬間：彼はしつかりとそれを見た。

男の後ろに立っていた知花が上着の内から小さな刃物を取り出し、それを使って目の前にいる男の首を、背後から切り裂く瞬間を…。

「っ!？」

彼は思わず足を止め、驚きの声を漏らす。

知花に首を切られた男は彼のように驚き、裂かれた喉を手で押さえている。が、かなり深くまで切られたのか、出血が止まらない…。結局、男は喉を押さえたまま独りでに倒れ、階段を転げ落た。ゴロゴロと音を立てながら転げ落ちた男は階段を上りかけていた彼の横を通り過ぎ、踊り場に倒れる…。まだ痛みに悶え、苦しんでいたが、この様子では助からないだろう。

知花「ごめんね、リーダー」

「リーダーって…この男が？」

知花の動きを警戒しつつ尋ねる…。

彼女は彼の問い掛けに対し、ニコリと笑って頷いた。

知花「そう、私が今いるグループのリーダー」

「…何でこんな事を？大体、あんたさつき、嬉しそうにこのリーダーの事を話してたでしょ…。記念品がどうかかって…」

知花「えっ？いやいや、違いますよ。さつき私が話したのはリーダーじゃなくて、ボスの話。この男はあくまでこのグループのリーダーであって、私のボスとは何の関係も無いの」

言ってる事が今一つ理解出来ないが、少なくともこの女にとって今の男の存在は何ら重要ではないのだろう…。彼がゆっくり階段を上がつて側にたどり着くと、知花はナイフをしまつてリーダーだった男と彼を交互に見つめる。

知花「あの男を殺したのは、あの男よりもキミの方が面白そうだし好きだから。私の笑顔にあっさり騙されなかったのもキミが初めてだし、それに……このグループはもうどのみち終わりだろうからね。他の連中も真冬ちゃんにやられちゃってるだろうし、私もそろそろ自分の所に帰ろうかな」

「……………そうだ……真冬、探さない」と……

面倒な目に遭っていたせいで忘れかけていた……。

彼は真冬に会うべくまた下の階に降りようとするが――

「っ……………ぐ……………」

崩れ落ちたかのようにその場に膝をつき、息を乱す。

額にはじんわりと汗が浮かんでおり、何やら苦しげだ。

知花「……………キミ、もしかして……………」

知花は彼の右肩に手を伸ばし、服を軽く捲る。

この部分はやたらと血に濡れていたのだから気になっていたが、それも全部感染者の返り血だと思っていた。……………が、間違いだった。

知花「……………噛まれちゃってるね」

彼の右肩には……感染者にやられた深い噛み傷が存在していた。

「ぐっ……っ……」

右肩の噛み傷が痛むのか、彼は苦しげな声を漏らして額に汗を浮かばせる…。傷は思っているよりも深いらしく、真つ赤な血がドクドクと溢れ出しているが、彼はその箇所を左手で押さえて止血を試みていた。

知花「うん…そうですね。結構深く噛まれてるみたいだから、止血くらいはちゃんとしないと危ないかな」

「つつ……ああ、危ない…よね、これは……」

ギョツと強く押さえても、指の隙間から血が流れ出る…。

早く止めねば手遅れになりそうだ。

(…けど、もろどのみち……)

噛まれた段階でもう終わり…。

彼の脳裏にそんな言葉が過ぎる。

いくら止血をしたところで無駄だ…。仮に止血出来たとしても、“かれら”に噛まれた時点で感染してしまっているのだから意味がない。このままだと、どっちにしろ死んでしまう。

知花「……ほら、手を退けて」

彼が悩んでいると、知花はハンカチのような布を取り出して彼の傷へと押し当てる。そして彼の手を今一度そこへと添え直させると、不思議そうに尋ねた。

知花「感染者を二体同時に相手するのは大変でした？」

それとも、あの人の不意打ちが効いてたのかな？」

「不意打ちも効いてたけど……その、あの感染者達が…制服着てたから、やりづらくて…」

息を切らしながら答える…。知花はその答えを聞くと、少しの間だ

何かを考える様にしながら視線を泳がした。

知花「感染者が制服着てたらやりづらいの？」

「……僕にとって大切な娘らが、さっきの感染者と同じ制服を着ている……。だから、ほんの少しだけ……やりづらい。中身は違うと分かっている……。同じ制服を見るだけでみんなの顔が思い浮かぶ……」

知花「へえ……つまり、それを理由に躊躇っていたら噛まれちゃったと。お優しいですね」

知花はニヤニヤと笑い、彼の頭を撫でる。

何だか馬鹿にされてるみたいで嫌なので、彼はその手を振り払おうとしたが、それすらも面倒なくらいに体から力が抜けてきていた。これからどうするべきか……。彼が頭を悩ませていると、下の階から足音がした。誰かがこちらへやって来る……

真冬「っ……なっっ!!」

二人の前にやって来たのは真冬だった。

下の階の連中と争った際につけられたのか、その小さな体には幾つか傷がある。とは言っても、どれもかすり傷のようなものばかり。彼のそれと比べたら軽いものだろう。

知花「さすが、早かったですね」。

下のみんなは……もう全員殺しちゃいましたか？」

真冬「……殺してはいない。

けど、すぐには動けない程度に痛めつけた……」

真冬は知花の動きを警戒しつつ彼に寄り、そつと肩に手をかける……。そしてすぐ、そこに噛み傷がある事に気が付き、真冬はこれまで見た事無いくらいに鋭い視線を知花に向けた。

真冬「!!」

あんた、彼に何を……!!」

知花「見れば分かると思うけど、それは感染者にやられたんですよ。私がやった訳じゃない……。もし、私が何かしたせいで彼が噛まれたと思っているのなら、それも間違いです。彼を襲ったのは階段の下で死んでる男であって、私は何にもしてません」

しれつと答えたところで、真冬の目付きは変わらない…。

しかし直後、彼が真冬の手を掴みながら静かに首を横へと振って『本当に知花あの人のせいではない』と告げてきた為、真冬は知花への視線を少しずつ落ち着いたものにしていった。…が、彼をこんな目に遭わせたのが誰であれ、マズイ事になったのは変わらない。

真冬「どう…しようっ…どうしようっ…」

ボクっ、どうすれば…」

このままだと、彼が死んでしまう…。

”かれら”と同じになってしまう…。

真冬は何時になく慌て、瞳を潤ませながら彼の前に座り込んだ。

どうすれば良いのか分からない…。とりあえず、急いで柳に連絡するべきだろうか？連絡して、合流出来れば、まだ彼を助けられるかも知れない…。けど、もし間に合わなかったら？柳と合流したところで、助ける手段が無かったら？

考えれば考えるだけ焦ってしまい、真冬の呼吸も乱れ出す…。そんな中、知花は真冬の肩をポンと叩き、彼女が背負っていたカバンを指差した。

知花「ねえ、それ…：…その中、水があるでしょ？」

真冬「水…？あるけど、どうして…：…」

確かにこのカバンの中には、この学校の中で手に入れた水がある。何を隠そう、柳が渡してきたメモに記してあった「取ってきて欲しい物」というのはこの水の事だったから…。けど、知花は何故カバンの中に水がある事を知っているのだろう。

知花「考えてる時間が勿体ないです。

その水、彼に飲ませてあげて下さい」

真冬「えっ…？」

戸惑う真冬に対し、知花は人差し指で彼をツンツンと指して急かす様な動きをする。水なんかを飲ませたところでどうにかなるとは思えないが、他に頼る物もない…。真冬はすぐにカバンを

下ろしてペットボトルを取り出し、その中に入れていた水を彼に差し出す。

「別に……喉は渴いてないんだけどね……」

知花「グダグダ言わないで飲めば良いんですよ。」

まだ死にたくないでしょう?」

知花が真冬の手からそれを奪い、改めて彼の前に突き出す。

ここまで勧めてくるのには、何か理由があるのだろうか……。

彼は重く感じる腕を動かしてボトルを掴み、水を飲む。

ある程度飲んだところで苦しくなり咳き込んでしまったが、知花は満足したようにニコニコと微笑んでいた。

知花「ま、私がしてやれるのはここまでかな」

やるだけの事はやった……。

知花はそう言いたげにため息を放ち、その場を去ろうとする。

真冬「待って……!」

知花「何ですか?私と話してる暇があるなら、早いところ彼を連れて帰った方が良くと思いますけどねー。ええつと……柳さん、でしたっけ?真冬ちゃんのご主人様は」

真冬「なっ!!」

何故、知花がそれを知っている……?

この女とは前に一度会っているが、その時に知られたのは自分の名前だけ……。柳の事までは知られてはいない筈なのに……。

真冬「なんで……柳さんのこと……」

知花「ふふつ、私のボスが物知りで、何でも知ってるからですよ……。真冬ちゃん達が普通の人よりも強くて、感染者に噛まれても平気な体だって事も……。あなた達をそういう体にしたのが柳って人だって事も……。そこにいる彼のお友達の子達の事も、全部知ってます。」

知花は誇らしげに語る。

自分が仕える、その「ボス」の事を……。

知花「あなた達のご主人様である柳って人も大したものですが、私のボスと比べたらそこまでもありません。だって、私のボスは世界を救った人ですから……。あなた達が今、こうして生きているのだって

ボスのおかげなんですよ?」

真冬「はあ…?意味が分からない……」

知花「ええ、あなた達は何も知りません……」

けど、ボスが世界を救ったのは事実です。だから、これからは毎日ボスに感謝して生きてくださいいね?それと…今度会った時にはしっかりと“記念品”を貰いますから、その時はよろしく」

知花はそう言い残し、二人の前を去る…。彼女がいなくなった後、真冬はすぐ彼に肩を貸すと、そのままゆっくりと歩き出した。

真冬「とりあえず、一度屋敷に戻る…!」

柳さんに診てもらえば…きつと……!」

「ん、んん…」

彼は額に汗を浮かべつつ、真冬の肩から手を下ろそうとする。

ここまでしてもらわなくても自分で歩ける…という意思表示だったが、真冬は肩に乗せた彼の手を離そうとはしない。

真冬「無理しないで!!」

お願いだから……お願いだから……」

「……わかったよ」

真冬の放った声はやけに震えていた…。

こんな怪我をしたのは自分のせいだ…とも思っているのだろうか?

ただ、自分が勝手にミスをしただけなのに…。

彼はそんな事を思いつつ、真冬の肩を借りて歩いていく。

一人で歩けない程に弱ってきた訳ではないが、だんだんとツラくなってきたのも事実。こうして肩を貸してくれるのは正直ありがたい。

二人はゆっくりと、けれど可能なだけ早足で外へ出る…。

そして“かれら”の包囲網を上手く避け、停めていた車に乗り込んだ。

彼は助手席に、真冬は運転席に…。



真冬「すぐに帰るから！だから…もうちよつと頑張つて!!」  
辺りにいた”かれら”がノソノソと歩き、車を取り囲む…。

しかし真冬はそんなのお構い無しに車のエンジンを入れると、直ぐ様アクセルを踏んで急発進した。目の前まで来ていた”かれら”を数体弾き、轢き、車を進ませる。

「……安全…運転で——」

真冬「そんなのどうでも良いからっ!!」

「……はいはい」

大声で答える真冬を前に苦笑して、彼は傷口を押さえる。

強く押さえてはいるが、中々止血出来ない…。また、全身が少しずつ寒くなり、あらゆる所がズキズキと痛む。

「ぐっ……っツ!!」

時間が経てば経つだけ、苦しさが増す。

座席に座っているのにも関わらず、全力疾走後のように息が乱れる…。額に流れる汗が止まらない…。本当に苦しい…。

そんな時、彼がふと思ったのは胡桃の事だった。

彼女は以前、”かれら”と同じになった先生に噛まれたらしい…。

ならつまり、これと同じ苦しみを味わった事があるという事だ。…

いや、もしかしたら彼女の場合はもっと苦しかったかも知れない。

「っ……ぐっ……よく、耐えたよな……」

この苦しみを乗り越え、今はああして元気に過ごしているのだから、本当に凄い娘だ…。彼は『あはは』と笑いながら運転席の方を見て、真冬がハンドルを握ったまま片手に無線機のような物を手にしている事に今更気付く。どうやら、真冬はそれを使って柳に連絡をとっているらしい。

考えてみれば、胡桃だけではない…。

真冬もそうだ…。真冬も”かれら”に噛まれ、死にかけていたところを柳に救われたらしい。つまり、彼女もこの苦しみを味わっているという事だ。圭一や穂村兄のような男ならまだしも、真冬の小さな身体でよくこの苦しみを耐えたものだと感じする。

(もしかしたら、このまま死ぬかも知れないのか…)

このまま死んだら、もうみんなと会えなくなる…。

彼にとつて、それはある意味死よりも辛い事だった。

(みんなと別れるのは…嫌だなあ…)

はあ…とため息をつき、身体に感じる苦痛に顔を歪ませる。

その時、真冬がチラツとだけ彼の方を向き、不安そうに声を漏らす。

いつの間にか、柳への連絡を終えていたらしい。

真冬「本当に…頑張つて…！」

絶対死んじやダメだからっ！」

「……ああ、がんばるよ……」

真冬に心配かけてしまう…。

辛い声も、表情も、出来るだけ我慢だ。

彼は苦しいのを堪えてニコリと笑い、虚ろな目で前を向く。

真冬「……カナ…っ…」

真冬がポツリと呟く。

その小さな声は彼の耳には届いていない。

息を乱し、だんだんと弱つていく彼を見て、真冬はあの時の事を思

い出していた…。自分にとつて唯一の親友で、大切な存在だった紗巴すずは

果夏かな。彼女を失ったあの日の事を……。

もう、あんな思いをするのは嫌だ…。

真冬は瞳を潤ませながらもアクセルを踏み、ハンドルを切る。

穂村や圭一、そして自分を救った柳なら、どうにかしてくれるはず。

そう信じて、大急ぎで屋敷に向かった。

## 百五十五話 『このくらいしか』

真冬「着いたよ。動ける…？」

あの学校を大慌てで飛び出し、どのくらい経っただろう…。

二人を乗せた車は柳の屋敷へと戻り、その庭で動きを止めた。

真冬は車のエンジンを切り、助手席に座る彼に声をかける。

彼はコクリと頷き、自分の手でドアを開けて外へと出た。

真冬「…無理しないで」

心配そうな声でそう言って、真冬は再び彼に肩を貸す。

そしてゆつくりと歩きながら屋敷の中へと入り、広間を抜けて階段を上がる。弱ってきている彼が転ばぬよう、一段一段慎重に…。一階から二階、二階から三階へと上がり、柳の仕事部屋に彼を連れて行くと、真冬はその奥にあったベッドの上に彼を寝かせた。

真冬「柳さん達、すぐに戻ると思うから…。」

だから…それまで頑張つて…！」

彼は横になりながら微笑み、コクリと頷く。

けど、見たところかなり辛そうだ…。

真冬は側に立ちながら彼の傷口を押さえ、止血を試みる。

最初の頃と比べると出血は治まっているように思えたが、彼の顔色が悪くなっているように見えるのが心配だ…。

真冬（ボクには…このくらいしか出来ない…っ）

これまで色々な勉強をしてきたし、機械に関してならかなり強いが、医療の知識は殆ど無い…。だからこそ、真冬は祈った。早く、柳が帰ってくるようにと…。

先程連絡した時、柳は何やら忙しかったようで代わりに圭一が連絡に応じた。真冬が震え声で『彼が怪我をした。だから柳さんに診て欲しい。一度屋敷に戻るから、そっちもすぐに帰ってきて』と伝えると、圭一は慌てた様子もなく普段通りの調子で『分かった』とだけ答えてきた…。柳と直接話せなかったのは不安だが、きつとすぐに戻って来てくれるはず。そうでないと、彼がどうなるか分からない。

真冬「お願いだから…はやくっ…はやくっ…!」

ただひたすらに彼の無事を祈り、柳の帰宅を待つ…。

それから少しの時間が経ち、外が騒がしくなるのを感じた。

柳が帰ってきたらしい。外に感じる気配にほんの少しだけ安堵した真冬はそのまま彼のそばで待ち続け、やがて部屋の扉が開いた。

悠里「彼は…彼は無事?!」

扉を開けて真つ先に現れたのは悠里…。

それに続けて由紀と美紀、胡桃も現れた。

恐らく、彼女らは柳から連絡を受けて慌てて帰ってきたのだろう。全員、ベッドに横たわる彼を見て戸惑いや焦りの表情を浮かべている…。

美紀「先輩が怪我したって聞いて、急いで戻ってきたんだよ」

美紀は真冬の横に立ってそう告げる。

真冬は彼女と目が合うなり涙目になり、顔を俯けた。

自分がついていながら彼に怪我をさせてしまったという事実があまりにも申し訳なくて、もうどうすれば良いのか分からない…。

悠里は不安そうに彼を見つめ、由紀は汗を流し慌てている。胡桃はただじつと彼の顔を眺めてるだけだったが、その表情からは焦りが伝わってきた…。全員で彼を囲み立ち尽くしていると、少し遅れて穂村…：そして柳と圭一が部屋にやって来る。部屋に来るのが遅れただけで、柳と圭一は彼女らと同じタイミングで帰ってきたようだ。

真冬「柳さんっ…彼、噛まれて——」

柳「ああ、聞いたよ。」

どうにかしてみるから、みんな下がってくれ」

由紀達は言われた通り数歩下がり、柳は彼を診る。彼の首元には結構深い噛み傷があり、それを見た柳は小さくため息をついた…。今は大分マシになっているようだが、かなりの出血をした痕跡がある。ここに返るのがあと少し遅れていたらまず手遅れだっただろう。

柳「すぐに手当てしないといけないな…。」

と、それよりも先に感染を抑えるのが先か。

狭山君、頼んでいた物は持って帰ってきたかい？」

真冬「えっ？う、うんっ、持ってきた…」

真冬は部屋の隅に投げつけていたカバンを持ち、その中にしまっていたペットボトルを取り出す。ボトルの中に入っているのは、巡ヶ丘の高校から取ってきた水だ。柳は真冬からそれを受け取るとキャップを開き彼に飲ませようとするが、彼は既に意識を失っていて自分では飲めそうにない…。

柳「…：無理矢理飲ませるしかないか」

胡桃「それ、飲ませなきゃダメなのか？」

柳がポツリと呟いた瞬間、胡桃がボトルを指差す。

その問いに対して柳が頷くと胡桃は慌てた様子でボトルをひったくり、一口分を自分の口に含んで彼のそばに寄った。

胡桃「んん…：っ…：…」

そうして何の躊躇いもなく、自分の唇を彼の唇に重ねる…。

彼が動かぬように両手を頬に添えながら、口に含んだ水を彼の口へと少しずつ、少しずつ移していく。

胡桃「んっ…：…：飲んだぞ！これで良いのか!？」

柳「…：ああ、ありがとう」

柳は柔らかに微笑み、他の部屋にしまっていた医療道具を持ち出して治療を始める。他の者達は少し離れたところでそれを見守った。

悠里「その水、飲ませる必要があったんですか？」

近くのテーブルに置かれたペットボトルを見て、悠里が問う。

最初に口に出して尋ねたのが彼女だったというだけで、他の者もみんな同じ事を疑問に思っていた。

柳「その水は、君らが以前暮らしていた巡ヶ丘学院高等学校の浄水設備から取ってきた水だ。あの学校の水…：…：というか、あの学校に來ている水の水源の源流にはウイルスを抑える物質が含まれている。だから彼にこの水を飲ませ、細菌を抑える必要があった。この水が無きやいくら治療したって、すぐに外の感染者の仲間入りだからね」

慣れた手付きで治療を施しながら、柳は語る。

なんで自分らが通っていた学校の水には……その水源にはウイルスに対する抗体があると分かったのだろう。皆、柳の発言に対し幾らかの疑問を抱いたが、今は彼の事が心配でそれどころではなかった。柳「そういう訳だから、君らもその水を飲んでおいた方が良いよ。私もまた後で飲ませてもらう」

悠里「はい：分かりました」

テーブルに置かれた幾つかのボトル：一行はそれを手に取り、一口ずつ飲む。この水さえ飲んでおけば、感染には怯えなくて済むのだろうか？実際のところはよく分からない……。が、皆は柳の言葉を信じてそれを飲み、残った分をテーブルに戻した。しかし、その水を飲まない者もいた。圭一と穂村、そして真冬だ。

圭一「俺らは元々、お前の薬でウイルスを抑えてると言っていたよな？なら、わざわざこの水を飲まなくて大丈夫なんだろう？」

柳「まあ、そういう事になるね。」

喉が渴いてる訳でもないのなら、別に飲まなくて良いよ」

圭一はその言葉を聞くなり、部屋を出ていく。

少し疲れたので休ませてもらう……との事だ。態度や雰囲気を見るに、圭一は彼がどうなろうと知った事ではないという感じだった。

真冬「……穂村も先に休んでいいよ」

穂村「……いや、まだ残る。」

ところで、アイツは誰にやられた？」

彼がなんで傷を負ったのか、どうしてあんなったのか、穂村に問われて真冬は事情を説明する。今日、自分は彼と二人で巡ヶ丘学院高等学校へと向かった事。そしてその先で他の生存者や知花咲と出会い、気付いた時には彼が噛まれたという事……。大体の事を話した時、穂村は深いため息をつき、壁へと寄りかかった。

穂村「知花って……ああ、あの時の女か……」

美紀「知り合いなんですか？」

穂村「前に少し、やり合う機会があったただけだ。

：何考えてるか分からなくて、面倒くさいんだよな」

彼女が何を考えて行動しているのか、何であの学校に来ていたのか、分かる事は一つも無い…。ただ、彼女がああ学校の学校にやって来て彼や真冬と出会ったのはただの偶然ではないような気がしていた。

胡桃「……………」

が、その知花という女の事なんてどうでも良い…。

胡桃はただ不安げに柳の背中を見つめ、やがてそばへと歩み寄る。

胡桃「あの、あたしに出来る事とか……………ないですか…？」

柳「：特には無い。さっきのだけで充分だ」

待つてるだけなんて耐えられない…。

彼の為に何かしたい…。

そんな思いでそばに寄る胡桃だが、今はもう何も出来る事が無かった。柳からすると、先程彼に水を飲ませてくれただけで胡桃は充分に役立っているのだが、彼女自身はそう思っていないらしい。

胡桃（何も、出来ないのかよ…………）

とてつもない無力感に苛まれ、奥歯を噛み締める。胡桃は拗ねたように部屋の隅に位置取り、両膝を抱えながら座り込んだ…。

由紀「：大丈夫だよ。ぜったいぜったい、大丈夫」

由紀が隣にやって来て、胡桃の肩を抱く。

胡桃を慰めてあげようと思ったのだろう…。

そのぎこちない笑みを見るに由紀自身もかなりの不安を感じている筈なのに、彼女はそれを感じさせぬよう、精一杯の元気を振りまいていた。

胡桃「うん……………ありがとな、由紀」

由紀「えへへ……………」

気が付くと、美紀や悠里もそばへと寄っている…。

真冬と穂村は少し離れたところからそれを見守りつつ、治療が終わるのを待った…。そして幾らかの時間が経った時、柳は持ってきた医療品を片付けて一息つく。

柳「ふう…。とりあえずはこんなところだろう」

治療が終わり、首元に包帯を巻いた彼が皆の視界に映る。

由紀「もう大丈夫…:ですよね？」

柳「やるだけの事はやった。あとは彼の気力次第だな…:」

穂村君、彼をそっちのベッドに移しておいてくれ。慎重にね」

穂村は指示通り彼を運び、そばのベッドへと寝かせる。

『あとは彼の気力次第』…:それはつまり、彼の生きる気力が足りなかつたら、もうこのままお別れという事なのだろうか…:」

柳「さて、皆それぞれ報告もあるだろう。

一度、どこか他の部屋で話し合おうか」

柳が動く、穂村もそれに続いて動き出す…。しかし、由紀らは彼の事が心配でこの場を離れる決心がつかないらしい。そんな中、胡桃は部屋にあった椅子を引っ張り出して彼の眠るベッドの横へと置くと、それに腰掛けて弱々しく笑った。

胡桃「あたしが残るよ…:」

何かあつたらすぐに呼ぶからさ、みんなは先に行つてて」

悠里「…:分かった。何かあればすぐに言つてね？」

胡桃「ああ…:」

誰か一人残つていれば、万が一にも備えられる。

悠里らはこの場を胡桃に任せ、他の部屋へと移った…。その途中、廊下を移動してる時に真冬は柳の背中を軽く叩き、伝えそびれた言葉を告げる。

真冬「あの…:…:学校出会つた時、知花咲が気になる事を言つてた」

柳「うん？どんな事かな？」

真冬「えつと、自分にはボスがいて、そのボスはこの世界を救つた



人だつて……。あと、あの人は柳さんの事も知ってた」

柳「…私の事を？」

真冬「うん。前に会った時は知らなかったハズなのに……。ボスが物知りだからとか言ってたかな……。柳さんの事も、ボクらの体の事も、由紀達の事も知ってるみたいだった。…あと、次に会った時は「記念品」を貰うって…訳の分からない事も言ってたよ…」

柳「……………記念品……………」

真冬からの報告を聞き、柳の表情が固くなる…。

真冬「…何か心当たり、ある？」

柳「……………いや、さっぱり分からないね」

返答を聞いた真冬は『そっか…』と答え、ゆっくり歩く。

やはり、あの女の発言に大した意味なんて無いかも知れない…。こちらのペースを乱そうとして、嫌がらせ感覚で適当な事を言ってるだけかも知れないが…。

真冬「…そう言えばあの人が、彼にあの水を飲むようになって言ってた」

柳「本当かい？…で、彼は飲んだのか？」

真冬「うん…。苦しそうだったけど、ちゃんと飲んでた…」

先程、胡桃が彼に水を飲ませた時に伝えるべきだったが、あの時は半ば放心していたので思い出せなかった…。しかし、今はしっかりと思い出せている。あの女は…知花咲は、あの学校の水についても知っていたようだ。

柳「私の事はさておき、水の事まで知っていると…。」

知花が放った発言の一つ一つを真冬から聞き、柳は冷や汗をかく。思つたより、面倒な事になりそうだ…。

百五十六話 『つたえるから』

胡桃「……………はあっ…」

屋敷に戻って、どれくらい経っただろう…。

胡桃はそばに置いた椅子に座りながら、ベッドの上に横たわる彼の手を握っていた。柳と悠里らが話し合いをすると、言つてこの部屋を出た時から、ずっとこの手を握っていた…。

胡桃「はやく起きてくれよ…。

あまり心配かけんなって…。」

ギュツと強く手を握るが、彼の方から握り返してはこない…。手はほんのりと温かいがピクリとも動かず、不安になる。

このまま黙っているとその不安に押し潰されそうになるので、胡桃は彼に向かつて言葉を放ち続ける事にした。

胡桃「……………あの……………あたし…さ…:…実を言うと、覚悟してたんだよ。今は毎日みんなと楽しくやってるけど、いつかはお別れの時が来る。ある日急に、誰かがいなくなるっていうか…:…死ぬ…:…つていうかさ…:…そんな時が来るんじゃないかなって、覚悟してたんだ…:…また強く彼の手を握る…:…

やはり、握り返してはこない…。

胡桃「でも、その“誰か”はさ…:…あたしだと思つてたんだ…:…近い内に誰かが死ぬとしたら、それはあたしだろうって…:…。あたしがいなくなつて、由紀が泣いたりするのとか想像しててさ…:…。すっげえ辛かつたし、泣きそうになつた…:…つていうか少し泣いちゃつただけだし、それでも、覚悟だけはしてたんだ…:…」

指の一本一本を絡めてしっかり手を握り、小さく振る。

けれど彼の方からは何の動きもなくて、胡桃は顔を俯ける。

胡桃「あたしが死ぬなら…:…まだ良いよ…:…。けど、お前はいなくなるなって…:…お前とだけお別れする覚悟なんか、お前がいなくなるの

を見届ける覚悟なんかまだ出来てないんだよ……。まだそばにいらつて……。まだいなくなるなよ……。お前がいなくなつたら、由紀が泣くだろう。リーさんが落ち込むだろ。美紀が悲しむだろ……」

一方的に語る声がだんだんと震えてくる。  
視界が歪み、温かいものが頬を伝い流れた……。

胡桃「お前がいなくなつたら、あたしも寂しいよ……。お前とお別れなんてしたくない……。ずっとそばにいたいんだよ……。まだ、伝えてない事もあるんだ……。目を覚ましたら、今度こそ伝えるから……。もう、恥ずかしいとかそういうのは我慢して、しっかり伝えるから……。だから……。絶対にいなくなるなよ……」

握つた彼の手に額を寄せ、胡桃は一人啜り泣く……。

まだ彼と一緒にいたい。離れたくない。そばにいたい。

そんな思いで胸がいっぱいになり、苦しくなる。

彼がいなくなるなんて、考えるのも嫌だ……。

美紀「……胡桃先輩？」

ふと、部屋のドアが開いた。胡桃は溢れ出ていた涙を慌てて拭い、やって来た美紀に対して背を向けたまま応える。

胡桃「……話し合い、終わったのか？」

美紀「あ、はい……。それ自体はすぐに終わりました。

えっと、夕飯の準備が出来たので、一度キッチンに来ませんか？」

美紀はゆつくりと歩み寄り、そばに来て尋ねる。

いつの間にか夕飯の時間になっていたらしい……。

ついさつきまで泣いていた胡桃はその顔を見られぬように目を逸し続け、素っ気なく返事をする。

胡桃「……いらない。今日はずっとここにいるよ」

食欲なんて無い……。

それより、彼が心配で仕方ないんだ……。

彼の手を握つたまま離れようとしないう胡桃を前にして、美紀は少し考えてから言った。

美紀「そんな顔してると、この人もすぐに起きてくれませんよ。胡桃先輩が夕飯を食べてる間は私がここにいますから、しっかりと食べて元気になってきて下さい」

ポンツと背中を叩かれ、胡桃はハツとする。

美紀の言う通り、こんな沈んだ表情でそばにいられても彼は喜ばないだろうし、元気になってはくれないだろう。

胡桃「……あくあ！情けない先輩だなあ、あたし」

美紀「そんな事ないですよ。立派な先輩です」

ニツコリと微笑み、優しい言葉を告げてくれる美紀。胡桃は美紀の言葉を聞いて少しだけ元気が湧き、椅子から立ち上がった。

胡桃「お言葉に甘えさせてもらおうよ。すぐ戻ってくるから、それまでその事を頼んで良いか？」

美紀「ええ。何かあったらすぐに知らせるので、任せて下さい」

その場を美紀に任せ、胡桃は部屋を去る。

彼の事は心配だが、美紀がいれば大丈夫……。それに、あまり落ち込んでばかりいても仕方が無い。今はしっかり食事をとって、万全の状態で彼の無事を祈ろう。

胡桃が部屋を去った後、美紀は今まで胡桃が座っていた椅子に腰掛け、彼の寝顔を見つめた。

美紀「はやく元気になって下さいね……。胡桃先輩もですが、リーさんや由紀先輩や私、それに真冬だって心配してるんです。元気になって、みんなを安心させて下さい」

みんな、彼の事を心配している。

このままお別れするような事になる可能性だつてゼロではないと不安になり、表情を曇らせているのだ……。美紀だつて、今はどうか平静を装っているが内心不安でいっぱいだった。

その後、美紀は夕食を終えて戻ってきた胡桃と入れ替わる様に部屋を去り、自身も夕食をとる。それが済んだ後は由紀と悠里の二人も加えて一緒に彼のそばに行き、みんなで無事を祈りながら時間を過ごし

た……。が、流石に一晩中そばにいる訳にもいかない。彼女らにだって睡眠が必要だ。

柳「心配なのは分かるが、今日のところは各自部屋に戻って眠ると良い。彼の事は心配しなくて大丈夫だよ。夜が明けるまでの間は私が見ておく。朝になったらまた交代してくれば良い」

柳の言葉を聞き、皆は部屋をあとにする……。

柳に任せておけば安心だというのは分かっているが、彼女らはそれぞれが彼の方に心配そうな眼差しを向けていた。

胡桃「……柳さん、今日だけ、あたしがこいつを見てても良いかな？」  
悠里達がそれぞれの自室へ戻ったのを見計らい、胡桃はまた彼の元へと戻ってきた。彼女の言葉を聞いた柳は『うくん』と唸りながら頬を掻き、なんとも言えぬ表情を浮かべる。

柳「どうしても言うなら構わないが、君だって寝てないだろう？」

胡桃「あたしは平気。」

今のところは全然眠くないから、朝までは見てられると思う」

柳「……じゃあ任せるが、何かあったら言ってくれ。」

私はすぐ隣の部屋にいる」

胡桃はペコリと頭を下げ、部屋を去っていく柳を見送る。

その後はまたベッド横の椅子に座り、彼の手を握った。

胡桃「ってわけだから、そばにいてやるよ……」

ニコリと笑って語りかけるが、やはり彼は応えない……。

けれど決してめげず、その手をしっかりと握ったまま祈り続けた。少しでもはやく、彼が元気になりますように……。一緒に笑い合える日がまたやって来ますように……。ひたすら祈りながら、胡桃は彼の手をギュツと握り締めた。

## 百五十七話 『おはよう』

……彼女らと出会い、どれだけ経つたのだろう。

数週間か…数ヶ月か…ハッキリとは分からない。

けど、体感的にはもうかなり長い間一緒にいる気がする。

みんなそれぞれタイプは違うが、とてもいい人達だ…。

もし彼女らと出会っていなかったら、自分は今頃何をしていただろう。未だに一人でのんびりと生き続けていたのだろうか。それとも、“かれら”と同じ様な存在になっていたのだろうか…。何にせよ、つまらない日々を送り続けていたに違いない。

由紀、悠里、胡桃、美紀…。

彼女らと出会えたからこそ、こんな世界でも毎日楽しく過ごす事が出来たんだ…。彼女らのいない世界なんて面白くない。もう一人は嫌だ…。みんなと別れるなんて、絶対に……………。

「……………」

目は閉じていた…。

けど、まぶた瞼越しに光が入ってきて、その眩しさに目を開ける…。そばにあった窓はカーテンが開かれており、日差しが部屋の中を照らしていた。こんなふうに照らされては、眩しくて寝ていられない…。ベッドに寝そべったまま左手を伸ばし、窓のカーテンを軽く閉める。完全に閉めたわけでは無いが、少なくともこれで顔に日差しが当たる事は避けられた。

「……………ったく、まだ寝足りないってのに」

一人愚痴をこぼし、伸ばしていた左手を再びベッドにしまう。

カーテンを閉める前にチラツと外を見た感じ、時刻はまだ早朝と  
いった感じだった。…なら、慌てて起きる必要も無いだろう。このま  
ま寝直そうとして目を閉じた時、彼はようやく右手の違和感に気付い  
た…。

「……………おおっ」

自由に動かせる左手と違い、右手は何かを押さえられてるような感  
覚があった。押さえられてるといっても思い切り固定されてる訳で  
はなく、何か優しく添えられているような感覚…。それは柔らかで  
温かくて、安心する感触…。その正体を確かめべく視線を向けて、  
初めて気が付く。彼が眠っていたベッドのすぐ右側には椅子があり、  
胡桃がそこに座っていた。しかし彼女はベッドの上に顔を伏せるよ  
うにして眠っており、そのまま彼の右手を左手でギュツと握っていた  
のだ…。

(なんで、こんな状況に…?)

彼はほんの一瞬混乱したが、すぐに全てを思い出す。

あの時、自分はこの学校で感染者に噛まれた…。

その後は目の前にいた見知らぬ女や真冬といくらかやり取りをし  
て……………そこからの記憶が無い…。けど、大体の察しはつく。恐らく  
自分はこの後そのまま気を失い、ついさっきまで眠っていたのだろ  
う。よく見ると、首元や肩に包帯が巻かれている。怪我の治療をし  
てくれたのは柳だろうか…。ゆっくり身体を起こすと、ほんの少しだ  
け目眩がした。

「…ずっとそばにいてくれた…わけじゃないよな?」

胡桃はきつと、怪我した自分の事を心配して看病してくれていたの  
だろう…。けど、それはどのくらいだろうか?数十分か、数時間か…。  
そもそも、自分はこのくらいの間眠っていたのだろうか?別行動してい  
た筈の胡桃がこうして屋敷に戻っているという事は、それなりの時間  
が経っているのだろうか…。彼は色々と考えたが、とりあえず胡桃の  
手を握り返す。細い指がなんとも綺麗で、いつまでも握っていたくな

る手だ。

(…そういうえばあの時噛まれたんだけど、大丈夫なのかな?)

動こうとすると傷口が痛むし目眩もするが、大して気になるレベルではない。その他にこれといった違和感は無いし、もしかすると、柳は治療ついでに感染もどうかしてくれたのだろうか?

(だとしたら凄いな……あの人)

一体どんな手を使ったのだろうか…。

何か感染を抑える薬でも作り出し、それを使ったのだろうか。

彼は今、自分がこうして生きている事に感謝しつつ、左手を上げる。そしてその手をベッド上に伏せて眠る胡桃の頭へと伸ばし、そっと優しく撫でてみた。随分ぐっすり眠ってようだし、周りには誰もいない…。なら、少しくらい良いだろう。

ゆっくり手を乗せ、左右に撫でる…。数往復撫でていくと胡桃がモゾモゾと動いたので少し慌てたが、彼女は変わらず眠り続けていた。

「……………」

何故だか分からないが、こうして胡桃の頭を撫でていると心が安らぐ。これまでも何度か、彼女の頭を撫でた事があった…。彼女が落ち込んでいた時に撫でてみたり、冗談半分で撫でてみたりした事があったが、いつだってそう……。彼女の、胡桃の頭を撫でていると、とても落ち着く。

「…………可愛い寝顔だな」

思い返してみれば、悩んだ時や落ち込みかけた時、胡桃はいつもそばにいてくれた…。ただの偶然かも知れないが、『誰かそばにいて欲しい』と彼が願う時は決まって胡桃がそばにいてくれた。今だって、胡桃は目覚めた彼のそばにいて、眠ったまま手を握っているくらいだ。

彼はその手を握りながら、胡桃の寝顔を見て一人微笑む。

感染者に噛まれた時、『もしかするとこのまま死ぬかも知れない…』と思ったからだろう。今、こうして胡桃の寝顔を見ていられる事がた



まらなく幸せだ。

「……………胡桃」

そつと呟き、左手で彼女の肩を揺さぶる。

しかし、彼女は起きない。

「…胡桃ちゃん。おい、くるみちゃん」

今度のもっと大きな声で、揺さぶる力も強くする。すると胡桃は『んん…っ』と声をあげて起き上がり、眠たげな瞳で彼を見つめた。

胡桃「……………あ……………」

「…おはよう」

一言挨拶するが、胡桃は応えない…。

しかし、最初は眠たげだった瞳はだんだんと見開いていき、少しずつうるうるとし始める…。次の瞬間、胡桃は座っていた椅子を転がす勢いで立ち上がり、ベッド上の彼に勢いよく抱きついた。

「うおっ!」

突然の事に戸惑いながらも、彼はその身をしっかりと抱き返す。

胡桃は何も言わぬままギュツと身を寄せ、小さく肩を震わせていた…。あまりの出来事に、彼は自分は未だに眠っていて夢を見てるのでは…と錯覚しそうになる。が、やはりこれは現実だった。

「あ……………もしかして、心配してくれてたのかな?」

冗談っぽく尋ねると、胡桃は抱き付くのをやめて慌てたように彼から離れる。彼女は床に転がっていた椅子を立て直すと再度そこに座り顔を横へと背けたが、よく見ると頬が赤くなっているし、瞳からは涙が溢れかけていた。

胡桃「心配、したよ…。」

少し……………ほんとに少し、だけどな」

溢れかけていた涙をさり気無く拭い、胡桃は笑う。

彼がその笑みにつられて笑ったその時、部屋の扉が開いて柳がスタスタと入って来た。

柳「おや?目を覚ましたのか?」

「おかげ様で…」

柳「なら良かった。とりあえずは一安心だな」

柳は彼のそばへ歩み寄り、軽く微笑む。

直後、胡桃が椅子から立ち上がり言った。

胡桃「あたしっ、みんなにも知らせてくる!!」

柳「ああ、よろしく頼むよ」

彼が目を覚ましたのがよっぽど嬉しかったのだろう…。

胡桃は満面の笑みを浮かべて頷き、その場を走り去っていく。

あの様子なら、すぐに由紀達を連れてここへと戻ってくるだろう…。彼はその前に聞いておきたい事があり、柳の方を見た。

「怪我の治療は柳さんがやってくれたんですね？」

あと、感染に対する処置も…。」

柳「ああ、私が出た。怪我はまだ少し痛むだろうが、少なくとも感染に関する事は心配しなくて良い」

「もしかして、遂にワクチンでも完成させました？」

柳「いや、そういう訳じゃない。」

詳しい事はまた後で説明するよ」

「…そうですね。あつ、あともう一つだけ…。まさかとは思うけど、胡桃ちゃんは一晩中僕のそばに？」

もしそうだったら嬉しいが、実際のところはどうかだろう…。

ワクワクした表情で答えを待つ彼に対し、柳は言う。

柳「一晩中どころじゃない。君はあの日意識を失ってから丸二日以上眠ったままで、恵飛須沢君はその間殆ど君のそばにいた。勿論、若狭君達もかなりの時間、君のことは見守っていたが…：…君のもとを特に離れなかったのは恵飛須沢君だろうね。私が何て言っても何かと理由をつけて君のそばに付き、離れようとしなかった。多分、彼女は殆ど寝ずにいたんじゃないかな」

「!?…：…それ、ほんとですか？」

柳がコクリと頷くのを見た瞬間、彼は驚きの表情を浮かべる。

あの日から丸二日以上、胡桃はそばにいてくれた…。

しかもその間、自分は殆ど眠らずに…。

恐らく、彼が目覚める直前になってようやく限界が訪れ、眠りに落ちたところだったのだろう…。けど、彼女はその時までずっと寝ずに、見守っていてくれた…。

「……かなり心配させちゃったみたいだな」

柳「…まあ、無事に目を覚ましたのなら何よりだ」

そうこう話している内、廊下の方から力強い足音が聞こえてくる…。部屋の扉が勢いよく開き、由紀と美紀、悠里と真冬に胡桃がやって来た。

由紀「くくくっ!!!!すぐく心配したんだよっ!!」

由紀が大声をあげながらベッドに飛びつき、涙目でこちらを見る。彼はその目を真っ直ぐに見つめ返した後、そばに立つみんなの事を見回した。

「いやあ、随分と心配かけたみたいで……」

美紀「まったくです！

もう…どれだけ心配したと思ってるんですか…」

悠里「……けど、元気そうね。」

良かった…本当に良かった…」

美紀も悠里も、瞳が潤んでいる…。

彼が目を覚めたのが嬉しくてホッとしているのだろう。

二人はベッドに飛び乗った由紀を降ろしてから改めて彼を見つめると、どちらともなく『ふふっ』と笑い出した。

真冬「あの……怪我、痛む?ごめんね…ボクのせいだ…。ボクがもっと注意して、キミのそばにいれば良かったのに…」

みんなが微笑みを浮かべる中、真冬だけは暗い表情で頭を下げる。しかし、今回の出来事は真冬のせいなんかじゃない…。

「別に、真冬は何も悪くな——」

胡桃「ああ、真冬は悪くない。

一人でドジってミスしたこいつ自身の責任だ！」

彼が言い終わる前に胡桃が割り込み、ニヤニヤと笑う。

彼女の言う通り、真冬は何も悪くない……。誰かに責任があるとしたら、それはあの時に素早く正確な判断を出来なかった自分自身だと彼も分かっていたのだが、こうして他の人に責められると少しだけ悔しい。

「ま、まあ……そうっすね……」

胡桃「ふふっ、これからは気を付けるようにしろよ」

胡桃が言うと、由紀や悠里もそれに続いて彼を責める。

責めるといつても、半分おふぎけみたいいな雰囲気だ……

しかし、ちよつとした油断や判断ミスで今回の出来事が起きたのは事実。彼は胡桃らに責められてひたすら苦笑し、美紀はそれを見て楽しげに笑う……。そんな美紀の笑顔を見た真冬もあとからだんだんと表情が柔らかくなり、最後は彼女も微笑んでいた。

穂村「お〜！ほんとだ、目え覚ましたんだな！」

「ああ、おかげさまでね」

少し遅れて、穂村も部屋へとやって来る。

さつきまでの話の途中、真冬がこっそりと教えてくれたのだが、どうやら穂村も少なからず彼の事を心配していたらしい……。穂村は彼が寝そべるベッド付近の壁に背を預けると上機嫌な感じで話し始め、やがて柳の顔を見てから思い出したように言った。

穂村「あっ!!そういうえばあの時、お前の感染を抑えるのにどこだかの水が必要だって柳さんが言い出してさ。ま、その水自体は狭山が持ってきてたんだけど、お前、氣い失つてて水なんて飲んでくれそうになかったみたいだな。柳さんも少し困ってたみたいだけど、その時

胡桃がさ——」

胡桃「ツ!!バツ:!!やめろって!!

それ言ったらマジで怒るからな!!」

と言いつつ、胡桃はもう既に怒ってるように見える……

真っ赤な顔をして穂村を睨み付け、息を荒くしていた。

「……胡桃ちゃんが、何か？」

悠里「……ああ、思い出したっ。そうねえ……ふふっ♪ねえ胡桃。あの時の事、教えてあげても良いんじゃない？胡桃だって、彼を助けようとして——」

胡桃「よくないよくないっ!!!!

もし言ったら、あたしはここから出てくからな!!!」

赤面しながら慌てる胡桃と、それをからかう悠里と穂村。

彼はその光景を見ながらただ、頭に疑問符を浮かべ続けた…。

## クリスマス回（2020）（☆）

由紀「ねえリーさん、あと少しするとクリスマスだよね？」

ある日のこと、由紀がニコニコと微笑みながら尋ねてくる。確かに彼女の言う通り、クリスマスは一週間後にまで迫っていた。

悠里「そうね。せっかくだから何か少し、お祝いみたいなのを出来れば良いのだけど……」

簡単な飾り付けとかをしたり、食事を少し豪華な感じにしたりすれば、多少は雰囲気も出るだろうか……。悠里があれこれ考えていると、由紀は何か意味ありげに『ふふふ……』と笑う。

悠里「もしかして……何か計画でもあるの？」

由紀「うんっ♪……けど、その為には色々準備したりしないといけない……。わたし一人だと無理だと思うから、みんなも手伝ってくれるかな？」

悠里「由紀ちゃんのお願いならみんな断らないと思うけど……みんなって？」

由紀「ええつとね、わたしと、リーさんに……みーくと胡桃ちゃん！あと、真冬ちゃんにもお願いしたいなあ」

つまり、女性陣全員……ということか。

他の者はともかく、彼に力を借りない理由は何かあるのだろうか？ 気になった悠里がそれを尋ねると、由紀はほんの少しだけ照れたように頬を染める。

由紀「あの……ね。今年はさ、彼にいっぱいお世話になったから、わたし達でお礼がしたいな……って……そう思ったんだけど……」

悠里「……なるほどね。うんっ、良いんじゃないかしら♪」

悠里が笑顔で答えると、由紀も嬉しそうに笑う。

二人はその後、美紀と胡桃と真冬を呼んで共にあれこれと計画を練ったり、残りの期間で必要な物を集めに回った……。今回の計画を話した時、美紀と真冬はすぐに自分らも手伝うと言ってくれたし、胡桃

も何だかんだで了承してくれた。みんな、多かれ少なかれ彼に感謝しているのだろう。準備は順調に進み、そして一週間の時が流れた……。

由紀「メリークリスマス!!」

迎えたクリスマス当日、由紀はジュースの入ったグラス片手にパーティーを楽しんで騒ぐ。彼女のいる部屋は壁にクリスマスリースが掛けてあったり、机の上に小さなツリーの置物があったりして飾り付けもバツチリ。また、いつもより少し豪華に思える食事もテーブルに並んでいたりに結構ちゃんとしたパーティーっぽくなっているのだが、部屋にいるのは由紀と彼だけ……。しかし由紀は大して気にする様子もなく、真っ赤なサンタ風の衣装を身に着けて楽しげにはしゃいでいる。

「ええっと、他のみんなは?」

由紀「ふふふ…あとから来るよ♪」

多分、準備に時間がかかっているのかな?」

「……準備?」

見たところ飾り付けも、食事の用意も終わっている。

これ以上何の準備をするのだろうか?

彼がそんな事を思っていたその時、部屋のドアが開いた。

悠里「待たせてごめんなさい。」

どれが誰のか分からなくなっちゃって……」

そう言い放つ悠里は由紀と似たような衣装を…サンタ風の服を着ていた。ワンピースタイプのその衣装は鮮やかな赤と白のモフモフが可愛らしいが、悠里が着ると胸の谷間が強調されていてやたらとセクシーだ。

「おお……!」

魅惑的な谷間に見惚れていると、悠里に続いて胡桃、美紀、そして

真冬が部屋に入る。皆、サンタ風の衣装を着ていた。皆が着てる衣装はどれもほぼ同じデザイン：違いと言ったらサイズくらいなのだろうが、着てる女の子によってタイプがかなり違うものに見える。同じ衣装でも美紀や真冬のはどこかクールな感じに見えるし、胡桃は悠里程では無いにせよ谷間が見えていてセクシーな感じだ…。

「うん、素晴らしいな…」

由紀「ね！言ったでしょ？彼はこういうの好きだつて♪」

美紀「ですね。由紀先輩の言った通りでした」

会話から察するに、皆がサンタ服を着ているのは由紀の提案らしい。…もつとも、由紀はただこういう格好をすればパーティーっぽさ、クリスマスっぽさが増して彼も喜ぶのではと考えただけで、彼がそれぞれの胸元やミニスカートから伸びる太ももを見ている事には気付いていない。

真冬「なんか…目がやらしい…」

「失礼だな。そんな事はない」

と言いつつ、目の前を歩く胡桃を眺める…。

綺麗な肩や鎖骨の辺りを見て、胸元を見る…。彼女が歩く毎に小さく揺れる胸の谷間はとても魅力的で、少し触つてみたいな〜とか、あの服を下に引つ張つたら胸がポロリするのかな〜とか、どうしようもない事ばかりを考えてしまう。

由紀「えへへ、どうかな？みんなの服、かわいいでしょ♪」

「ああ、凄く可愛い…」

ほんの少し興奮気味に答え、彼は適当な料理を手取る。

こんな可愛い格好をした彼女らとパーティーが出来のなら、これからは毎日クリスマスになって欲しいと願う程だ。

悠里「今回のパーティーは由紀ちゃんが計画したの。

…でね、私達みんな、あなたにはこれまでお世話になってきたから、

このパーティーの最中に少しずつお返しをしようと思ってるのよ」

「お返し？…それって、どんな？」



正直言つて、期待せずにはいられない…。

彼は期待に胸を高鳴らせ、その隣に立つ悠里はニヤリと笑う。

彼女は数秒間何も言わずに微笑み続けると、やがて彼が手にしていた料理皿をひったくり、その上に乗っていたウインナーをフォークで刺してから彼の口の前へと運んだ。

悠里「はい、あ〜ん♪」

「…え？あ、ああ……………あ〜ん……………」

差し出されたウインナーをパクリと食べ、ゴクリと飲み込む。その後、悠里は皿とフォークを彼に返してからまたニヤニヤと微笑み、彼の顔を覗き込んだ。

「…お返しつて、今のですか？」

悠里「ええ、そうだけど……………不満だったかしら？」

「いや……………」

不満かどうかと聞かれれば、そんな事はない…。

悠里のような美少女に“あ〜ん”をしてもらえたのだから、むしろ嬉しいくらいだ。…しかし、お返しという響きがちよつぱり意味深に聞こえてしまい、彼はもう少しだけ過激なものを期待していたりもした…。

美紀「すいません。本当は何かプレゼントでも…と思つたのですが、先輩の欲しい物が分からなくて。……………はい先輩、あ〜ん」

美紀は事情を話しつつ、彼の前に食べ物を突き出す。彼はそれをありがたく頂戴した後、口をモグモグと動かしながら苦笑した。…まさか、全員がこの“あ〜ん”をやるつもりなのだろうか？一人一人が別のお返しをする訳ではなく、全員が同じ事を…“あ〜ん”をお返しとしてやるつもりなのだろうか？

(……………まあ、良いけどね。少しドキツとするし)

ただ、美紀の“あ〜ん”はあまりにも事務的というか、機械的というか、クールな感じだった…。もう少し感情を込めて、照れた感じでやってくれるとドキドキ出来るのだが、やってくれただけで充分なの

で贅沢は言えない。

真冬「じゃあ、次はボクが……………」

「あ、少しドキツとくる感じでやれる？」

贅沢は言えない……………そう思っていたのに、つい口に出してしまつた。真冬はフォークを持ったまま露骨に嫌そうな顔をして半歩下がっており、彼は冷や汗を流す。

「…調子に乗りました。申し訳無い…」

真冬「う、うん……………」

真冬は気にしないで…と言うように手を振っていたが、結局、*“あくん”*すらやらぬまま下がってしまう。彼はつい最近気付いたのだが、真冬は人一倍恥ずかしがり屋な娘のようだ。そんな彼女に対して『ドキツとくる感じであくんをして』なんて言ったら、まあ逃げられるのが当然だろう。そうして真冬が下がっていく一方、胡桃はため息混じりに彼へと近付き、呆れ顔を見せた。

胡桃「お前なあ、せつかく真冬が頑張つてんのに……………」

胡桃は言いながらフォークを持ち、皿に盛られていた肉を刺す。

自分で食べるのかと思つたが、彼女はそれを彼の方へと向けた。どうやら、今度は胡桃の番らしい…。けど、説教と一緒にこんな事をされてもドキドキなんて出来る訳がない。せめて説教のあとにやって欲しいと思つた彼は咄嗟に横を向いて顔を逸らしたのだが、その際、胡桃が持つフォークに刺さっていた肉がポトリと床へ落ちてしまつた。

胡桃「あちやく、勿体ないなあ…」

「あ、ごめんごめん」

彼がその場に屈んで肉を拾おうとするが、胡桃はそれを手で制して自分がしやがむ。物を食べさせてやるのは失敗したが、その代わりに片付けくらいはやってやろうと思つたのだろう…。

胡桃「カーペットにソースがついちやつたな…。

美紀わるい、ティッシュあるか？」

美紀「ええつと、はい、どうぞです」

胡桃「サンキュー。…つと、落ちるかな、これ」

カーペットに出来たシミが広がらぬよう、胡桃は丁寧にソースを拭く。彼は目の前でその様子を見守っていたのだが……………

「……………つ!!?」

その時、凄い事に気が付いた…。

胡桃はカーペットを拭くのに集中しているあまり気付いていないようだが、その場に足を曲げてしゃがんでいるせいで彼の方からはミニスカートの中が見ている…。カーペットをポンポンと叩くように拭く度に彼女の足と足の間に微かな隙間が開き、薄緑色のショーツがチラチラと見えていた。

「んーん……………」

申し訳無いと思っではいるが、目を離せない…。

もう少し足を開いてくれば、この部屋のライトがあともう一段階明るければ、あのショーツがよりハッキリと見れるのに…。彼が目を大きく開いてそこを見つめ続ける中、胡桃がカーペットを拭き終えそうになったその時…………

真冬「…胡桃、その…………足、閉じた方が良い」

胡桃「へっ?」

彼のそばにいた真冬もそれに気付いていたらしく、言いづらそうに注意する。それを聞いた胡桃は自分の下半身に目を向けると大慌てでスカートを押さえて足を閉じたが、次の瞬間、自分のすぐ目の前…………つまり、さつきまでスカートの中が見えていたであろう位置に彼が立っている事に改めて気が付き、顔を真っ赤にした。

胡桃「つつ…!!み、見てない…よな?」

「ん?あ、ああ。もちろん見てな——」

真冬「彼、ずっと見てたよ…。

だから胡桃に教えてあげようと思って注意したんだもん…」

「!?!」

咄嗟に嘘をつこうとしたが、真冬によって逃げ場が無くなる。

胡桃は赤面したままゆっくり立ち上がると微かに潤んだ瞳で彼を強く睨み付け、先端に肉の刺さったフォークを逆手に持った。

胡桃「ほら、口開けろよ……。あくん……してやるからさ……」  
「いや……。え、遠慮します……」

今の胡桃からは殺気が漏れている。

何の警戒もせずに『あくん』なんて口を開けたら、勢いよくフォークを突っ込まれて舌を刺されそうだ。彼は一步後ろに下がるが、胡桃はすかさず一步前に出る。

胡桃「食べさせてやるって言ってんだ……逃げんなよ……」

「……ほんつとにごめん。謝るんで許して……」

胡桃「謝るって……。何をだ？」

「その……パンツ見ちゃってごめんなさい……」

目を逸らし、恐る恐る謝る……。

まるで、親に怒られるのを恐れている子供のよう……。彼は苦笑し、冷や汗を流しながら謝罪したが、彼の言葉を聞いた胡桃はまた顔を一層に赤らめた。

胡桃「やっぱり見てたんじゃねえか!!!」

片手で彼の胸倉を掴み、片手でフォークを構える胡桃。

彼は困った表情を浮かべて周りの皆に助けを求めるが、由紀も美紀も悠里も真冬も、それぞれ料理を食べながら雑談を始めている。彼と胡桃の事など見えていないかのようだ。この調子だと、周りの助けは期待できない……。窮地に立った彼は半分開き直り、胡桃を見返す。  
「でも、警戒心なく足開いてる胡桃ちゃんもどうかと思うね！」

女の子なんだからさ、まずそういうところをキチンと——」

胡桃「なっつ!!?お前に女の子がどうか言われたくねえよ！」

それに、足だつてそんな思い切り開いてた訳じゃないだろ！ほ、ほんの少くし開いちゃってただけだ！それを覗く方が悪いに決まってるんだろ!!」

「そう言われても、目の前に女の子がいて、スカートの中が見えそうに

なつてたらついつい見ちやうのが男つてヤツで——」

胡桃「何開き直つてんだよ！変態っ!!」

言い合いは少しずつ白熱していくが、本気の喧嘩にはならない。胡桃も手に持ったフォークはあくまで構えるだけで、彼に振り下ろしたりはしそうにない。…まあ、もし本気で振り下ろしたらそこそこの事件になるのだが。

悠里「ふふふ、賑やかねえ」

美紀「大声で騒いでるのはあの二人だけですけどね……」

由紀「あつ、真冬ちゃん、このジュース飲んだ？」

すぐく美味しかったから飲んでみて！」

真冬「あ……うん。…ほんとだ、美味しい」

あの二人は喧嘩してるといふより、ただじやれてるだけ。

そう分かつているからこそ、由紀達は動じずにパーティーを楽しむ。少しすると彼と胡桃は何事も無かったかのようにパーティーに参加し、会話や食事を楽しんでいた。

由紀「また来年も、みんなでパーティーがしたいな……」

由紀はみんなの顔を見回してから、静かに呟く。また来年も、その翌年も、そのまた翌年も、みんな一緒に楽しい時間を過ごせますように……。

## 百五十八話 『これからのこと』

穂村「にしても本当に笑えるぜ。

コイツ、今になって感染者にやられて死にかけてんの！

いや、情けないね〜!!」

彼が目を覚ました次の日の事…。

穂村は彼が休むベッドの横にある椅子に腰掛けながら、あの日、巡ヶ丘の学校で感染者にやられて彼が倒れた日の事を大声で語り、そしてヘラヘラと笑う。ベッドの上で上半身を起こしている彼は嫌味な笑い方をする穂村を見て何か言いたげにしていたが、あの日、ちよつとした油断や不注意のせいでああなつたのは事実なので強く言い返せずにいた。…が、部屋にいた真冬がそんな彼に代わり、穂村に言う。

真冬「穂村…：感染者にやられた事を情けないと言うのなら、それはボクらも同じだよ。穂村だって、あれに噛まれて死にかけてたところを柳さんに助けてもらったんでしょ？」

穂村「むう…：それはまあ、確かにそうだけだよ…」

真冬「どちらかと言うと、これまで感染者にやられずに生き延びてきた彼よりもずっと早いタイミングで感染者にやられてる穂村やボクの方が情けない…：」

穂村「ぐうっ…：け、けどな、俺が噛まれたのには色々理由が…：

そりやもう、涙無しには語れないような理由があったな——」

真冬「へえ…：どんな理由？」

真冬がズイツと顔を寄せると、穂村は冷や汗を浮かべて顔を反らし、椅子から立ち上がって離れていく…。ああ言っではいたが、穂村も実際はちよつとした油断や不注意が切っ掛けで感染者に襲われ怪我したのである。

穂村「ま、まあ、何にせよ目を覚まして良かったぜ！」

正直な話、俺はわりとお前の事を気に入ってるからな」  
変わらぬ調子でヘラヘラと笑いながらそう言っ、穂村は部屋をあ  
とにする。残った真冬は穂村がいなくなった後で軽くため息を放ち、  
ベッドのそばにある椅子に座った。

真冬「…実際、穂村はキミの事を気に入ってるみたい。キミが目を  
覚ますまでの間、やたらと落ち着きなかったし…。柳さんや圭一さん  
と比べて、キミとは話が合うからかもね？」

「そう、かな…まあ、心配してくれてたのならありがたいけど…」  
柳も圭一も穂村とは今ひとつ相性が悪いというか、話が合わない  
…。けど、彼と穂村は時折話が合い、盛り上がる事がある。そういつ  
た点から、穂村は彼の事を気に入ってるようだ。

胡桃「おう、元気か？」

穂村と入れ替わるようにして、今度は胡桃が入室する。

いや、胡桃だけでなく、柳も一緒だった。

柳「調子はどうかな？」

「まだ少し気怠い感じはあるけど、全然元気です」

柳「そうか、なら良かった」

柳はベッド近くに立ち、そして胡桃はベッドの上に腰掛けてニコリ  
と微笑む。見たところ、今やって来たのはこの二人だけのようだが  
……………

「由紀ちゃん達は何してる？」

胡桃「勉強中。あたしも途中まで付き合ってたんだけど、ちよつと  
抜け出してきた」

柳「昨日目を覚ましたばかりで悪いんだが、これからの事を少しだ  
け話しておきたくてね」

「…（これからの事？）」

彼が尋ねると、柳はコクリと頷く。そしてベッド上に腰掛ける胡桃  
の事を一瞥し、改めて彼の方を見た。

柳「覚えていると思うが、君らをこの屋敷に住まわせるのは私が恵飛須沢君を治すまでの間……という話だった。そしてその恵飛須沢君を治療……というか、ウイルスへの対抗策は無事に見付けた訳だが……」

柳の手に握られていたのは、水の入ったペットボトル。

中身は巡ヶ丘の高校から持ってきたという水だろう。

彼も目を覚ました後でさらっと説明されたのだが、どうやらウイルスへの抗体となる水が由紀達が通っていたあの学校にあつたらしい……。彼もその水を飲んだからこそ無事に目を覚まし、胡桃もこうして元氣にいるのだろう。あの水さえ飲んでいれば、感染を恐れる事はないうのだ。

「ああ、確かにそういう話でしたね」

柳「勘違いしないで欲しいのだが、私は何も君らにここから出ていけと言っている訳ではない。もっとも、最初はやる事やっつと追いつきでいたが……気が変わった。外に出てまた自由に行動したいのなら止めないが、ここにいたいのならそれはそれで構わない」

家賃代わりにある程度働いてくれるのなら……と、柳が言う。

彼はその言葉にほんの少しだけ驚いたが、そばに座る胡桃は無反応だ。恐らく、彼女達は既にこの話を聞いていたのだろう。

「あ………んん……少し、悩むな……」

りーさん達は何て？」

胡桃「それなんだけど……その……」

自分の意見より、悠里らの意見を聞いてからそれに合わせよう。

そう考えた彼は胡桃に尋ねたが、彼女は視線を泳がせるばかりで答えない……。少しして、そんな胡桃の代わりに柳が口を開けた。

柳「若狭君はもう暫くここに残る事を選んだが、これからは少しずつこの世界の復興に繋がるような事をしていきたいそうさ……。ウイルスへの対抗策も得たし、先日行った大学以外にもまだ生存者がいるかも知れない……。そんな人達を出来るだけ多く助けて、この世をまた



平和な世界にしていきたいそうだよ」

「……マジですか」

前々から大人びた人だと、すっかりした人だとは思っていたが、そんな事まで考え始めているとは知らなかった……。ここまで悲惨な事になってる世界を復興させていきたいとか、少しでも平和な世の中にしたいという思いは……とても立派だ。

「ああ……そっか……そうですか……」

いくら大人びているとはいえ、悠里と自分は同い年。

それなのに悠里の方が自分よりもずっと立派で世の中の為になる様な事を考えていたと知り、彼は弱々しい笑みを浮かべながら頭を掻く。

「柳さんは……それを手伝ったりするつもりで？」

柳「いや、私は本来、意味も無く人と接するのは好きではない。だからもし若狭君が他の人物と協力して他の生存者らを見付けたとしてもこの屋敷に迎えるつもりはないし、彼女の活動に首を突っ込むような真似をするつもりも無い。……まあ、ちよつとした助言や些細な協力程度なら考えなくもないが」

柳は悠里の事を気に入っているようなので、彼女が本当に困った時は手を貸してくれるだろう……。それに、穂村なんかは柳以上に悠里の事を気に入っている。もしかしたら、穂村は自分も悠里の活動を手伝う！なんて言うのではないだろうか……。

柳「これはあくまでも若狭君個人の計画だ。恵飛須沢君や直樹君に丈槍君……そしてキミ。みんなは無理に付き合わなくて良いと、若狭君自身が言っていた。つまり、これからは自分達が進みたい道へ進めという事だろう……。実際、丈槍君も直樹君もそれぞれこれからの考えがあるそうだ。とは言え、まだ少し迷ってるようなので細かく教えてはくれなかったがね」

「……………」

今すぐ離れ離れになる訳ではない……。が、これからの流れによつては皆が別々の道に進み、離れ離れになる事も十分にあり得る。ずっと

一緒だと思っていた彼女らと、離れ離れに……。

「……胡桃ちゃんはどうする？」

胡桃「あ、あたしか？あたしは……えっと、考え中……かな？」

あはは、と笑いながら答える胡桃。

しかしその笑顔はどこかぎこちない……。

「考え中ね……。じゃあまあ、僕も少し考えてみるよ」

柳「別に慌てる必要は無い。のんびりと考えることだ……」

「ああ、そうさせてもらいます……」

真冬「お大事に」

柳と真冬が部屋を出て、胡桃と二人きりになる。

しかしお互い言葉が出ずに気まずい空気が流れ、それに耐え切れなくなつたのか……胡桃もまた、一言挨拶をして部屋を出ていった。

(自分が進みたい道……)

そんなの思い浮かばない……。

これまでだって、将来はどうなりたいとかどうありたいとか、そんなのも考えた事が無かつたんだ……。ただ、彼女らと出会ってからは毎日が楽しくて幸せで……。自分はこれから、彼女らを守る為に……。彼女らが幸せになれるように頑張っていこうという思いはあったのに……。そんな彼女らが別々の道を進むのなら、自分はどうすれば良いのだろう……。由紀が、悠里が、胡桃が、美紀が……。みんなが離れ離れになる日が来るのなら、自分はどうすれば良いのだろう……。

彼が考えてる未来には常に彼女らがいて、皆が一緒だった。

自分はこれからも彼女ら四人と一緒にいるのだろうと、そう思っていたから……。けど、皆が別々の道を進むのなら、自分は……。

(……何も……)

何も無い。自分が空っぽの存在になる……。

そんな感じがした……。

何の楽しみも幸せも無い、悲惨な世界。

そんな世界でも、彼女らと一緒になら楽しくいられる。

けど、皆が別々の道を行って離れ離れになるのなら……。

皆が進む中、自分だけは立ち止まる。

彼女ら無しでやりたい事、進みたい道……そんなのは無い。

みんながいなくては自分は……からっぽ、からっぽ、からっぽ。

(ああ、嫌になるね……)

彼女らの温かさに頼り過ぎている自分が情けない……。

彼はベッドの上に腰掛けながら近場の窓に視線を向け、外を眺めながらこれからの事を考えた……。みんな一緒じゃなくても、いつか離れ離れになったとしても、決して折れずに強くいられるような道のことを。

## 百五十九話 『なやみごと』

「んんん〜……」

リビングにあるソファに座り、彼は頭を悩ませる。

彼は先日、初めて感染者に嘔まれて大変な目に遭った。

苦しい思いをして意識を失い、もうダメかとも思ったが……巡ヶ丘の学校から取ってきた例の水のおかげで目を覚まし、“かれら”のよ  
うな存在にならずに済んだ。

自分はもちろん、もう胡桃の事も心配はいらない。

完璧なハッピーエンド……の筈なのだが……。

(やりたい事……なりたいたいもの……将来の夢……)

様々な事が一区切りした今、彼を悩ませる新たな問題がこれだ。

聞いた話だと、悠里や美紀、由紀はこれからの事を考え始めているらしい。胡桃はまだ悩んでいるようだが、彼女もきつとすぐにやりたい事を見つかるだろう……。

……が、彼は違った。

いくら考えてみても、将来の事が何も思い浮かばない。

強いて言うのなら由紀、胡桃、悠里、美紀……彼女ら四人の力になっていく事が自分の夢であり生き甲斐だと思っていたが、彼女らが別々の道を歩んでいくとなったらそれも難しい。

悠里「あらら……想像以上に悩んでるわね」

側にいた悠里が声をかける。

ソファに腰掛け、ため息ばかりついている彼の表情はかなり悩ま  
しげで、流石の悠里も心配そうだ。

「……りーさんは立派ですよね」

悠里「別に、そんな事ないわよ。ただ、こんな私でも生き残ってる人の助けになる事が出来るのなら力になりたいと思っただけ。大変かも知れないけど、少しずつでも良い世の中にしていかなきゃ……」

この世界にはあとどれだけの生存者がいるのだろうか……。  
全く予想もつかないが、悠里はその生存者らの為に……世の中の為に……頑張ろうとしている。やはり、彼女はとても立派な人だ。

「……」

悠里「そんなに悩むのなら、あなたも私と同じ道に行ってみる？あなたが協力してくれるのならとても心強いし」

ああ、もうそれでも良いかも知れない……。

どうせいくら考えたところで答えなんて出ないのだから。

「そうですね……そうしようかな……」

彼は悠里の事を見つめ、小さく頷きながら口を開く。しかし悠里はその言葉を聞いても喜びはせず、むしろ呆れた様にため息をついた。

悠里「もう、冗談よ……。あなたの人生なんだから、あなた自身がやりたい事をしっかりと見つけなきゃ。……もちろん、あなたが心から望んで私と同じ道に来るのなら大歓迎だけどね？」

冗談混じりな笑みでそう言って、悠里は彼の肩を叩く。

悠里と同じ道を進むのもそう悪くはない……けど、心から望んでそうなりたいかと言われたら、確かに少しだけ違う。

「ああ、本当に悩む……嫌になるくらい悩む……」

悠里「……焦らずゆっくり考えれば良いのよ。こういう事をした……こうなりた……って道があなたにも絶対にある筈なんだから」

「ある……のかなあ……」

『絶対に大丈夫』……そう言って悠里が慰めてくれる。

ポンと軽く背を押しながら笑顔を向けてくれるだけで少し気持ち楽になったが、実は……彼にはもう一つだけ悩みがあった……。

悠里「じゃ、庭に出て少し気分転換でもしない？

由紀ちゃん達もいると思うし……」

「……そうですね。少し運動でもするか」

のんびり日の光を浴びたり、少し走ってみたりすれば悩みも軽くな

るかも知れない。彼は悠里と共にリビングを出て廊下を進み、庭を指す…。その途中、向こうの方から体操着姿の胡桃がやって来た。

胡桃「……あっ」

庭で走り込みでもしていたのだろうか……彼女は額に流れる汗をタオルで拭い、彼と悠里の存在に気が付く。

悠里「私達はこれから庭に出るけど、胡桃は部屋に戻るの？」

胡桃「え……あ、うん……」

タオルを首にかけ、素っ気ない返事をする胡桃…。

視線も下に向けてしまい、こちらと目を合わせない。

「一緒に走ろうかと思ったんだけど少し遅かったか…。残念」

胡桃「……」

彼が話し掛けても視線を下げたまま、返事すらしない。

結構な時間走っていたのか、立ち止まる胡桃の額からはまた汗が溢れ出し、前髪や顎先から雫がポタポタと滴り落ちている…。頬も真っ赤に染まっており、呼吸も少しだけ荒い。

「…もしよかったら、また後でゲームでも——」

胡桃「い、いやっ……あたし、忙しいから…!!」

彼と悠里の間を通り抜け、胡桃はズカズカと歩いていく…。彼はそんな胡桃の背を見つめながらため息を放ち、悠里は驚いた様に目を丸くした。

悠里「胡桃、どうしたのかしら？」

さつき話した時はいつも通りだったんだけど…」

「さあ……よく分からないけど、この前からあんな調子で」

彼を苦悩させるもう一つの悩み事……それが胡桃だ。

彼女は彼が目を覚ました数日後くらいからやたらと素っ気なく、食事時は会話も無ければ目も合わせない…。廊下ですれ違えば無視されるし、酷い時には駆け足で逃げられる事もある…。悠里曰く、『みんなの前だといつも通り』らしいので、あの態度は彼の前でだけなのだろう。

悠里「あなた、胡桃に何かしたの？」

「いや、何も……」

ただでさえ悩み事の真つ最中なのに、この上胡桃に避けられたりするのはかなり辛い。何も悪い事をした覚えは無いのだが、自分でも無意識の内に彼女を傷付けるような事をしてしまったのだろうか……。嫌われる様な事をしてしまったのだろうか……。

「……………はあああ……」

彼は大きいため息をつく……。

せつかく目を覚ましたのに、ここ最近の良い事が全然無い……。

それどころか、悩み事の連続だ………。

百六十話『なかよくなりた』

胡桃「…はあああ…」

廊下で彼とすれ違った後、慌てた様に自室へと戻った胡桃はすぐにベッドの上へとダイブして丸くなり、大きなため息をつく。勢い良く飛び込んだせいでベッドが少し荒れてしまったが、それを気にしている余裕すら無い。

胡桃（なんか、まともに顔も見れなくなってる…）

口元にシーツを手繰り寄せながら思うのは彼についての事…。

先日、彼が怪我をしてしまった時はかなり慌てたし心配もした。もしこのまま目を覚まさずに死んでしまったらどうしようと不安になり、何度も胸を痛めた。その分、彼が無事に目を覚ました時はこの上なく嬉しかったし、心の底から安堵したのだが…ここ最近、胡桃は彼の近くへ寄る事はもちろん、顔を見る事すら出来ていない。

胡桃「つたく、なんだよこれ、もよもやするなあ…」

バタつかせた両足がベッドを叩き、埃が舞う。

誰に聞かせる訳でもなく一人で愚痴る胡桃だったが、彼女自身、このもよもやが何なのか…そして何で今になってこんな気持ちになっっているのか、全てを理解していた。

恐らくあの日…眠っている彼の手を握って看病しながら、意識の無い彼に向けて放った言葉が切っ掛けなんだ。あの時、胡桃は彼に向けてこう言った…『まだ伝えてない事がある…。目を覚ましたら今度こそ伝える…。もう、恥ずかしいとかそういうのは我慢してしっかり伝えるから…』と…。だから目を覚ましてくれと、彼に向けて言った…。

それから少しして、彼は無事に目を覚ました。

…が、胡桃はまだ“それ”を彼に伝えられてはいない。あの時、目を覚ましたら今度こそ伝えたと約束したのに、まだ伝えられていない…。それどころか、さつきみたく彼から逃げるようになってしまった



程だ。

胡桃「……………」

彼の元気な姿が再び見られるのなら何だって出来ると……どんな事だって出来ると思っていた。けど、いざその時が来るとまた勇気がどこかへと引っ込んで、代わりに恥ずかしさと不安がやって来る。自分はある日、あの時、確かに約束をした。けど、あの時彼は意識が無かったので、約束の存在を知っているのは自分だけ……。なら、このまま知らんぷりして逃げても良いのではないかと、そんな事を思ってしまう。

胡桃（うわ……情けない……カツコ悪い……）

逃げれば良い……なんて卑怯な事ばかりを考える自分が嫌で、イライラする……。よく、由紀や悠里は自分の事を『強い娘だ』と言ってくれる。美紀や真冬のような後輩達すら、自分の事を立派な先輩だと思ってくれているらしい。けど、そんな事はない……。本当の恵飛須沢胡桃は誰よりも弱くて、一人じゃ何も出来なくて、ダメな女だ。

色々考える内、胸がズキズキして涙が出てくる……

彼がまた元気になった。柳のおかげで自分もまた健康な身体に戻った。ウイルスへの対抗策も見付かった。由紀や悠里達は将来の事を考えて動き始めている。本当に良い事ばかりだ……。なのに、自分は今になってこんな事で悩み、ウジウジしている。

胡桃「ああもう……ああもう……」

声には出さず、心の中で自分に問う。

『何がそんなに怖いんだ？』と……

胡桃はその問いに対し、これまた心の中で答える。

『今の関係が壊れるのが嫌だ……。何かが悪い方向に変わるのが嫌だ……。嫌われるのが嫌だ……。』ほんと、嫌な事ばかりポンポンと浮かぶ……

胡桃「けど、しっかりと伝えたい……。もつと……仲良くなりたいたい……」

不安だけど、怖いけど、全てを打ち明けられたら気持ちが悪くなると思う。それに、場合によっては良い結果が待っているかも知れない。いつもの癖でつい悪い事ばかりを考えてしまうが、もしかしたら……とても良い結果になるかも知れない。いくじなしでいるのは、もう嫌だ…。

不安な事ばかりを思っても仕方ない。

もつとポジティブになって、幸せな未来を想像してみるべきだ。

胡桃はベッドの上でゆっくり起き上がると深呼吸一つして、両手で頬をペシツと叩き気合いを入れる。

胡桃「……よしつ、頑張ってみるか」

ここ最近、何もかもが良い方向へと向かっている。

この流れに乗って自分も一歩前へと前進したい。後日に後回しするとまた決意が揺らぐだろう。なので、行動は早めにした方が良さ…。

数時間後、みんなが夕飯の為にリビングへと集まった。

胡桃は少しだけソワソワした様子を見せながらも食事を終わると、他の者の視線が他に向いているタイミングを見計らって彼のそばへと歩み寄る。

胡桃「あ、あの……この後、ちよつとだけ邪魔しても平気か？」

「え？邪魔っていうのは………つまり？」

胡桃「だからその……お前の部屋、後で寄っても良いか……？」

「へ、部屋……？いや、別に良いけど………」

胡桃「……じゃあ、後で行くから。ちゃんと待ってるよ」

それだけを告げて、胡桃はリビングを去る。

後になって、部屋に行くと言ったのは変な誤解を招いたかも知れないと思ひ恥ずかしくなったが、こればかりは仕方ない。他の誰にも見られる事なく、確実に彼と二人きりで話せるのは………全てを打ち明けられるのは、彼の部屋か自分の部屋くらいなのだから。

胡桃は一度自分の部屋へと戻り、落ち着きなく歩き回る。

彼はまだリビングにいるだろうから、今から部屋に行っても意味はない。一時間くらい待ってから行くべきだろう…。胡桃は自室内を歩いては深呼吸をして、その時を待つ。あと一時間……………一時間後にはきつと自分は彼の部屋にいて、全てを打ち明けている。待っているのが良い結果であろうと悪い結果であろうと、何かが変わる…。

胡桃（やば……………めっちゃくちや緊張する……………）

胸がドキドキする…。胃が痛む…。

顔が熱くなってくる……………。

けど、今日こそ伝える。もう逃げない…絶対に伝える。

自室に戻ってから三十分…四十分…五十分……………そしてとうとう一時間経ち、胡桃は自室を出た。そして真っ直ぐ彼の部屋へ向かって扉の前に立ち、コンコンツ…と二度ノックをする。扉はすぐに内から開かれ、胡桃はそこに立っていた彼に招かれて中へと入っていった…。

百六十一話『これからも』

「で、いきなりどうしたの？」

胡桃を部屋に招き入れた後、彼は尋ねる。胡桃はそれにすぐ答えず部屋の奥へと進み、ベッドの端へ腰掛けてから顔を俯けた…。

胡桃「あの………さ………」

今日こそ、絶対に伝える…。

誤魔化したり、逃げたりしない。

自分の気持ちを…彼に真正面から伝えるんだ。

その為に、ここへやって来たのだから…。

胡桃（勇気を出せ………がんばれ、あたしっ………！）

俯けていた顔を上げ、胡桃は口を開こうとする。

しかし、その時ちょうど彼が目の前まで歩み寄ってきて不思議そうにこちらを見ていた為、胡桃はまた顔を俯けて目を泳がせた。

「…大丈夫？」

胡桃「う…ん………一応、大丈夫………」

目を合わさず、下を向いたまま答える。

ここまで来たのだから、もうやるしかない。

ここまで来て、今更逃げるなんてそんなのは無しだ。

頭ではそう分かっているのに、いざ彼を前にすると胸がドキドキとして苦しくなる…。喉の奥が一気に渴いていくかのようにキュウツとなり、視線がキョロキョロと動く…。

胡桃「あのさ………あ、あたし………あたし………っ………」

逃げ出したくなる気持ちを必死に抑えて頑張ってみるも、上手く言葉が出せない…。目の前では彼が心配そうにこちらを見ていて、何とも申し訳なくなる…。その気になればほんの数秒で事足りるくらい言葉なのに、それすら簡単に言えない自分が情けない。こんな事に

手間取って彼を心配させてる自分が、本当に情けない…。

胡桃「……………ごめん」

「ん？えつと……………何が…？」

彼が苦笑しながらそう聞いてくる…。

けど、自分でも何に對して謝っているのかよく分からない。

思う様に口が動かさなくて困った時、気付いたら『ごめん』と言っていた。もしかしたら、伝えたい言葉をすぐに伝えられず、無駄に時間が掛かってしまっている事に対して『ごめん』と言ったのかも知れない…。いや、特に意味などなく、ただ時間稼ぎにそう言っただけかも…。

あれこれ考える胡桃だったが、彼女はすぐに適当な返事をした。

胡桃「ここ最近、お前に冷たくしちやっってたから……………」

「あ、ああ…その事ね…」

悪意があつて冷たくしていた訳ではない。

せつかなのでその誤解も解いておこう…。

胡桃は恐る恐る顔を上げると、彼の顔を見つめながら自分の腰掛けているベッドを左手でポンポンと叩く。立ちっぱなしなのも疲れるだろうから、自分の隣に座ってくれという合図だ。

直後、彼もベッドの上に腰掛ける。

座った場所は胡桃の隣だが、あまり近過ぎても悪いと思つたのだろう…：数十センチほど離れた場所を選んでいた。

胡桃「えつと、最近お前と距離をとつたのは……………その、お前の事が嫌になつたとかそういうのじゃなくてさ…。あつと……………その……………なんて言えば良いのかな……………」

上手い言葉が出て来ない…。全てを正直に話してしまえたら一番なのだが、それが出来ないから困っているんだ。

胡桃「とにかく…ごめん……………」

嫌な思いさせたよな…？」

「う〜ん……まあ、少し複雑な気持ちにはなつてたけど、嫌われたわけじゃないっていうのなら一安心かな」

胡桃「……うん……嫌いになつては、いないから……」  
むしろ、その逆なんだ……。

嫌いになんて、絶対にならない…。

胡桃（ああ、口…動かないなあ……）

肝心な事を伝えようとした時に限つて、唇が震える。

思い切つて全てを明かし楽になりたいのに、全然口が動かない…。

なんなら、自分の気持ちを全て明かすとまではいかなくても良い。

たった一言だけでも伝えられたらそれで良いのに、それすら出来ない…。

「…本当に大丈夫？」

沈黙が長引いたせいかわ、彼が顔を覗き込んでくる…。

それに対して『大丈夫』と答える際には口も動くのに、何で肝心の時には動かなくなるのだろうか…。こちらを見つめる彼に向け、あつさり全てを伝えられたら楽なのに……なんて、考えていても仕方ない。

胡桃「あの……さ……えつと……あたしっ、お前が……」

伝えよう…伝えよう…伝えよう……。

胡桃は隣に座る彼と目を合わせ、口を開く。

あとは声を出すだけ…言葉にするだけ…。

胡桃「……お前が、無事に目を覚ましてくれて嬉しかった…。

一応、ちよこつと心配してたからさ、安心したよ…」

えへへと笑い、そう告げる…。

もちろん、こんな事を伝える為にここへ来たのではない。が、彼を前にすると胸が苦しくて、素直になりきれなかった…。あと少しなのに、もう少しなのに……。

「……そうか。心配してくれてありがとう」

胡桃「…おうっ。もう怪我とかすんなよ？」

あたしはともかく、由紀のやつが悲しむからさー」

胡桃はベッドから立ち上がり、彼に背を向けて歩き出す。

伝えかったのはそれだけだと……これだけを言いに来たのだと、そう思わせるように歩き出す。けど、本当は違う。本当に伝えたかったのはもっと別の事なのに、結局、胡桃は――

胡桃（言え…なかった……）。

ここまで来ておいて、言えなかった……っ……）

あと少しだったのに、寸前のところでまた誤魔化してしまった。逃げてしまった…。そんな自分が本当に情けなくて、胡桃は彼に背を向けてすぐ瞳に涙を溜める。今日こそ伝えると決心したはずなのに、やっぱり逃げた…。ほんと、自分はどうしようもないくらいに弱くてダメな女だ…。

胡桃（……くそっ……くそ……っ……！）

数秒前までは何ともなかった瞳に涙がぶわつと溜まる…。

一歩前に歩くだけでも、その振動で涙が零れ落ちそうだ…。

ここでダメならもう、自分は終わりだ……。このまま彼の部屋を出て、自室に戻って、ベッドの中で泣き崩れよう。シーツに包まって気が済むまで泣き、それで終わり。

もう、今日みたいな挑戦は二度としない…。

彼への気持ちは全部諦める…。

彼とはこれからも今まで通り、友達のままでもいいからいい。

結局自分には……恵飛須沢胡桃にはそれがお似合いなんだ…。

「……………胡桃ちゃん」

ふと、彼が後方から呼び止めてくる。

胡桃は瞳に溜まっていた涙を精一杯抑えるとほんの少しだけ首を曲げて振り返り、彼の方を見た。

胡桃「…ん？どうした…？」

泣きかけたせいで声が震えている…。

しかし、彼はそれに気付いてはいないようだ。

「あのさ、せっかくだから僕からも伝えておくよ。

今日、またじっくり考えてみた…。それで一つだけ見つかったんだ」

胡桃「見つかった…？何が？」

「これからやりたい事というか…：こうありたい！っていう未来のイメージ」

ニコツと微笑む彼を見て、胡桃も小さく微笑む。

けどこの時、胡桃は内心でドキツとしていた…。

彼に目標が出来たのは良い事だと思う…。けど、もしかしたら彼はその目標の為にここを出ていくかも知れない。みんなのもとから、自分のそばから、離れていってしまうかも知れない…。

胡桃「…そっか…：…よかつたじゃん」

彼がどんな道を選ぼうと、とやかに言う権利は無い…。

自分はただ、それを応援する事しか出来ない…。

彼がここを離れて一人でどこかへ向かうとしても、それを止める権利なんて自分には無い…。そばにいて、なんて言う権利は…無い。

胡桃「…で、どんな事がしたいんだ？」

自分には何の権利も無いが、彼がどんな未来をイメージしているのかは気になる。彼の夢を知り、それを応援するくらいの事はしてあげたい…。どこか弱々しい笑みを浮かべながら胡桃が尋ねると、彼は右手の指先で頬を掻きながら照れ笑いする。

「それが…：まだぼんやりとしかイメージ出来てないんだよね…。

とりあえず、もう暫くは柳の屋敷（やぶき）にいて適当に仕事して、柳さんにある程度の恩返しはしておきたいかな。あの人には世話になったし…。」



胡桃「なるほど、それもそうだな……」

柳には色々と恩がある。

それを返しつつやりたい事を探す、というのが彼の目標なのだろうか……。胡桃はそんな事を思ったが、次の瞬間、彼は続けてこう言った。

「それでさ、ここからが本番なんだけど……」

何か、少しだけ彼の様子がおかしい……。

視線を落ち着きなく泳がせていつになく慌てているというか、緊張したような雰囲気だ。その後、彼は少しの間だけ言葉を詰まらせたが咳払い一つして静かに深呼吸をする……。そして、ベッドから立ち上がり胡桃の前へと歩み寄り……。

「出来るなら、これからはずつと君と一緒にいたい」

と、真面目な声色で告げた……。

視線は真つ直ぐ胡桃に向けられ、ピクリとも動かない。

胡桃の方も突然の事に理解が追いつかず、ただボーツと彼の事を見つめ返していたが、すぐに変な汗が浮かびだす。

胡桃「……えっ……？えつと……それ、ど、どういう……」

「ここ最近、いつも考えてた。これから先、みんなはそれぞれの道に進んでいく……。離れ離れにだってなるかも知れない。それは仕方ない事だけど、少し寂しいというか……一人で生きていくのが不安になってきたというか……」

恥ずかしい事を言っているような気がしてしまい、彼は胡桃から視線を逸らす。しかしまたすぐに彼女の事を見つめ、言葉を放つ。

「で、思ったんだよ。由紀ちゃんと離れるのも、リーさんと離れるのも、美紀と離れるのも仕方ない。みんなの事は好きだけど、みんなが選んだ道なら仕方ない。けど、それでも……君とだけは……胡桃ちゃんとだけは絶対に離れたくないって、そう思った」

彼は胡桃と向かい合い、彼女の右手を静かに握る……。

両手で包み込むようにゆっくりと、優しく……。

胡桃はそれを振り解いたりなどせず、ただ受け入れていた。

「ワガママだつて分かつてるけど、胡桃ちゃんだけはそばにいて欲しい。この先、どれだけ辛いことや苦しいことがあつても胡桃ちゃんさえそばにいてくれたら、きつと大丈夫だから……」

落ち込んだ時や辛い時、いつも胡桃がいてくれた……

勿論、由紀や悠里、美紀も自分の事を支えてきてくれたのだが……一番そばで支えてくれていたのは胡桃だったのだと思う。

これまで、彼女の言動や笑顔にどれだけ助けられただろう……

男勝りな性格をしてるように思えて、実は繊細で乙女な胡桃……

彼女がたまに見せる、照れたような顔が好きだ……

辛い時、そばに寄り添つて来る時の綺麗な目が好きだ……

無邪気で愛らしい笑顔が好きだ……。優しく温かい声が好きだ……

少し前、彼は将来の事を考える中で漸く気付いた。

自分は胡桃の事が好きだったのだと……

彼女無しではもう、生きられないかも知れないと……

だから、彼は胡桃の手を握る。

その綺麗な瞳を真つ直ぐに見つめる。

胡桃「そばにいて欲しいって……それって……その……」

まさかと思ひ、胡桃は問う。声を震わせ、瞳を潤ませながら、目前にいる彼の事を真つ直ぐ見つめて……

「……胡桃ちゃんの事が好きだ。」

だから、これからもずつと一緒にいて欲しい」

両手で包んでいた胡桃の右手をギュツと握り、彼はそう告げた。

聞き間違ひなんかではない……。彼は今、ハッキリ言った。胡桃の事が好きだと……。一緒にいて欲しいと……

胡桃「つつ……う……あ、ははっ……」

驚きと喜びが一気に押し寄せ、思わず胡桃は笑つてしまう。その際に片方の目から涙が溢れたが、胡桃はそれをすぐに左手で拭い笑い続けた。

胡桃「ふっ、はははっ……あくもう、予想外過ぎるだろ……」  
拭ったばかりなのに、また涙が溢れてくる。

彼が自分の事を好きだと言ってくれたのが嬉しくて、本当に本当に嬉しくて、胸がいつぱいになる。少しでも気を緩めたらこの場で大泣きしてしまいそうなくらいに嬉しいが、それは自分のキャラに合わない。

胡桃「…けど、ありがとう…」。

ほんとに…ほんとに……ありがとう……」

顔を俯けてそう呟きながら、彼の胸に顔を埋める。

こうして彼に寄り添うのは初めてではないのに、これまで感じてきたどれよりも今この瞬間が一番温かくて心が安らぐ……。胡桃は足元に二、三粒だけ涙を零してからすぐに目元を拭い、そのままの状態で告げる。さつきは言えなかった言葉も今なら伝えられると確信していた……。

胡桃「あたしも、お前と一緒にいたい……」

短い言葉になってしまったが、それは彼にしっかりと伝わった。

胡桃の言葉を聞いた彼はその嬉しさにニコリと微笑みを浮かべ、彼女の頭をそつと撫でる。これから先、どんな毎日が待っているのかは分からない。もしかすると、これまで以上に大変な事が色々あるかも知れない。けど、それでも……一人じゃない。胡桃と一緒になら、全部を乗り越えていける気がした。

## 百六十二話『いびと』

『ずっと一緒にいてほしい…』

彼からそう言われた後、胡桃はベッドに腰掛けて彼の隣に座っていた。もう少し寄れば、互いの肩が触れ合うくらいの距離…。これまでだって、移動中の車内とか、ちよつとした時に今と同じくらいの距離感になった事は何度かあったかも知れない。けど、今の胡桃はそれらの時とは比べ物にならないくらいにドキドキとじていて、軽く顔を伏せながら穏やかな笑みを浮かべていた。

胡桃（あたしなんかのこと、好きでいてくれたんだ…）

嬉しくて、嬉しくて、つい口元が緩む。

少し前まで、自分は決して幸せになれないと思っていた…。

感染が進んできたせいで身体がだんだんと動かなくなってきた時はもう近い内に死んでしまうと、みんなとお別れする事になると思っていたのに…今の自分はすっかり元気な身体になった。その上、彼の方から告白してくれた。『ずっと一緒にいてほしい』と…こんな自分の事を『好き』だと言ってくれた。

心の中でこうなって欲しいと願っていた事がたくさん叶ってくれて、夢のように幸せだ…。けど、これは夢じゃない。現実だ。自分はこれからも彼と一緒にいて良いんだ…。そう思いながら、胡桃は彼の横顔を見つめる。

「……ん、どうした？」

胡桃「いや、何でもないよ」

ニコツと微笑みそう言つて、胡桃はベッドから垂らした両足を楽しげに揺らす。すると今度は彼の方が胡桃の横顔を見つめ、ふふつと笑う。

「何にせよ、上手く伝えられてよかった…。

これからもよろしく」

胡桃「…ああ、よろしく」

これからも今まで通り…いや、これからは恋人として、今まで以上にしっかりと支え合いたい…。そう思う胡桃だが、彼の言葉に笑顔で答えた後、ふと思った。自分は今さっき本当に彼に告白してもらったのだろうか？もしかすると先程の彼の言葉は恋人になって欲しいという意味での告白ではなく、これからも友達としてそばにいて欲しいとか、そんな意味での言葉だったのではないだろうか？

胡桃（いや、好きって言うてくれてたし、そんなハズは…）  
大丈夫だと分かっている、少し不安になる…。

彼の言葉は告白だったのだろうか…。

二人は今、恋人関係になっているのだろうか…。

胡桃「あ、あのさ…。

あたしらって…これからは恋人同士…って事で良いんだよね？」

一度気になったら落ち着かなくなってしまう、とうとう胡桃は彼に問う。すると彼はモジモジとした胡桃の目を見つめ、微笑んだ。

「んん、恋人同士だ」

胡桃「そっ…か…ふふっ、そっかあ」

「…嬉しい？」

胡桃「えつと、まあ…それなりに？」

やっぱり、自分と彼は恋人同士になれたんだ…。一安心した胡桃は彼の背中をパシッと叩き、イタズラな笑みを浮かべる。そしてそろそろ自室に戻ろうかと思ひ、そつとベッドから降りたのだが…。

「どっ行くの？」

胡桃「どこって…自分の部屋に帰るんだよ。

話す事は話したし、もう遅い時間だしな」

「あれ、一緒に寝たりとかそういうのは…。」

胡桃「は、はああっ!？」

驚き顔で声をあげる胡桃に対し、彼は平然とした様子で『いや、だって恋人同士なわけだし…』なんて言い出す。直後、胡桃はその場に足

を止めたまま頬を赤く染め、首を横に振りながら答えた。

胡桃「そうだけどっ、そういうのは付き合い始めてすぐじゃなくて……もつと色々段階を踏んでからだろ!？」

「へえ…キスもか?」

胡桃「き、キスも……今すぐには……ちよつと……」  
今すぐするのは、少し恥ずかしい…。

胡桃の頬はどんどん赤くなり、耳まで赤くなり始める。

彼はそんな胡桃の表情を見ると、楽しげな笑い声をあげた。

「あははっ、分かってるよ。冗談冗談。」

ほんと、胡桃ちゃんはからかい甲斐がある」

胡桃「つつ…!!む、ムカつく……」

ブツブツと呟きながら、胡桃は部屋を出ていこうとする。

恋人になったら何かが変わってしまうかもなんて思ったりもしていたが、案外、自分と彼はこれまで通りの雰囲気を保っていくのかも知れない。…そう思うと、また少しだけ安心出来た。

胡桃「…おやすみ」

「うん、おやすみ」

最後に一言交わして、胡桃は部屋を出る…。

彼の部屋から廊下に出て、そのまま自分の部屋へと戻った胡桃は髪を縛っていたリボンを解いてからベッドに潜り、ふんわりしたシーツを頭まで被って全身を覆う。そしてその中で身体を丸めると、やがてニヤニヤと笑い出した。

胡桃「はあああ……どうしよ、めちやくちや嬉しい……」

彼に告白してもらった事。そして自分と彼が恋人関係になれた事が嬉し過ぎて、ニヤニヤが止められない…。彼の前では出来るだけ平静を装っていたが、一人になった今はもう笑みを抑えられなかった。

胡桃「嬉しい……嬉しい嬉しいっ!」

両足をバタつかせてジタバタ悶えながら、一人ニヤつく。

幸せすぎて、頭がおかしくなりそうになる。

元々好きだった彼のことも、恋人同士になった途端更に愛おしくなってきたしまい、胸の高鳴りが激しさを増す。

胡桃（もう好き……好き……大好き……っ…。

ああ、部屋を出る前にハッキリ伝えればよかった…。けど、本人前にすると恥ずかしくて言えないんだよなあ…）

もし付き合う事が出来たらもつと素直になれると思っていたが、そうでもなかった。胡桃はシートから顔を出して仰向けになり、真つ暗な部屋の中でボーツと天井を見上げながら、左手の指先を自身の唇にそつと押し当てる。

また近い内、彼の唇がここに重ねられる時が来るのだろうか…。

それはいつ頃になるだろうか…。

胡桃「くくっつ!!ああもう、変なこと考えんのやめやめ!!!

今日はもう大人しく寝るぞっ!!」

自分で自分にツツコミを入れながら枕に頭を乗せる。

まだ少しドキドキしていたせいですがには寝付けなかったが、数十分経った頃にはしっぴかり眠りにつき、どこか幸せそうな顔をして寝息をたてていた…。

## 百六十三話 『たよらりたい』

真冬「……あつ、邪魔しちゃったかな？」

時刻は午前十時くらいだろうか、何気なく立ち寄ったりリビングの扉を開けた後、真冬は申し訳なきような表情をする。リビングの中では悠里、胡桃、由紀の三人が一つのテーブルを囲い勉強している最中だった。

悠里「いえ、全然平気よ」

ニコツと微笑む悠里を見て安堵した後、真冬は彼女らのそばに寄る。悠里は胡桃と由紀に勉強を教える側の立場らしく、参考書を手にして余裕のある表情をしていた。…が、胡桃と由紀は違う。二人は自分の参考書とノートを前に頭を抱え、のんびりペンを動かしながら時折呻いている…。

胡桃「ううう…わっかんね〜………」

悠里「胡桃、この前も同じところで躓つまずいてたわよ。一人の時とか全然勉強してないでしょ？」

胡桃「そんな事は無い……つて言いたいけど、最近はそうかもなあ」  
悠里「暇な時間が多いのなら、その時間を少しでも使って自主勉強しておきなさい」

胡桃「…へいへい」

この屋敷に来てから、平和な時間が増えた…。

前までは食料や生活用品などを求めて定期的に外へと行ったものだが、今住んでいるこの屋敷にはわざわざ探しに行かなくても良いくらいに十分な量の物資がある。なので無理に外に行く必要が無いうえ、電気もしっかりと通っていてゲームや映画などの娯楽もある…。なので、胡桃が以前よりだらけてしまうのも仕方が無いといえれば仕方が無い。

真冬「あれ、美紀は…?」



悠里「美紀さんなら、圭一さんと一緒に外へ行つたわ」

真冬「圭一さんと一緒に？…珍しい組み合わせだね」

圭一は基本、柳に命じられて仕事に行く時以外は一人で行動する事が多い。誰かと行動するにしても、それは穂村か真冬だった…。性格上、誰かと必要以上に組んだり足を引つ張られたりするのが嫌いなタイプのようなのだが、そんな圭一が美紀という普通の女の子を連れて外に行くなんて、随分珍しい事もあったものだ。

真冬「美紀がついていきたいって言ったのかな…？」

胡桃「いや、さつきまで美紀もここで勉強してただけだよ、圭一さんが急にここへやって来て、『俺は今から外へ出るが、美紀はどうする？』って声かけてきてさ…。美紀はもうある程度勉強終わってたから、どうせならって事でついていったみたいだ」

真冬「え…じゃあ圭一さんの方から美紀を誘ったの…？」

なにそれ…変なの…

胡桃「…引き止めた方が良かったか？」

真冬「うくん…圭一さんは冷たい人だけど、二人きりになったからって何かしたりするようなタイプじゃないから大丈夫だと思う…。これが圭一さんじゃなくて穂村だったら美紀のことが心配になるけど…」

それはそうだと、その場にいる全員が思う。

もし穂村が美紀と二人で出掛けたいなんて言い出したら胡桃も悠里も引き止めるし、それにそもそも美紀だつてついていけないハズだ…。

悠里「ほ、穂村さんも悪い人じゃないんだけどね…」

真冬「いや、アイツは悪い人だよ…。隙を見せたら何されるか…」  
などと話したところで、真冬は気が付く。

さつきから、由紀が大人しい…。これだけみんな話していても彼女だけは話に入っては来ず、苦い表情を浮かべながらも一生懸命ノートに筆を走らせていた。

真冬「由紀、勉強がんばってるね……」

由紀「えっ？あ、うんっ!!ちよつとね……がんばろっかなうって」  
ニコニコと笑う由紀……そんな彼女のことを、悠里と胡桃が優しい眼差しで見つめる。その後少しして、悠里が胡桃の方を向いた。

悠里「で、胡桃はこれからどうするつもり？まだ考え中？」

これから……というのはきつと、将来の事だろう。そう言えば、胡桃と彼だけはまだ将来について考え中だったらしい。

胡桃「あく……その、一応、こうなりたくないなうってのは考えたよ」  
悠里「……へえ、聞いても良いかしら？」

期待の眼差しを向ける悠里の前に、胡桃は微かに頬を赤くする。  
少し答えづらいのか、目線は落ち着き無く泳いでいた。

由紀「あつ！あれでしょ!!お嫁さん！可愛いお嫁さんっ!!」

悠里「あら……」

胡桃「ばっつ!!?ち、ちげえよっ!!」

ほんのり赤かった顔を一気に赤くして、胡桃は由紀の脳天にチョップを放つ。空を切る勢いで放たれた手刀は正確に命中し、由紀はその場にうずくまって叩かれたばかりの頭を押さえた。

由紀「うぐうう……り、りーさあん!!胡桃ちゃんがぶったく！」

涙目で抱きついてくる由紀を受け止めた悠里はその頭をよしよしと撫でながら、すぐそばで赤面している胡桃を見つめる。可愛いお嫁さん……というのも胡桃の夢ではあるそうだが、それとはまた別に何かあるようだ。

悠里「ヒミツ……ってことかしらね？」

胡桃「ん、ん……とりあえずは……」

悠里「そう、わかった。何にせよがんばってね」

言いづらいなら、無理に答えさせる必要もない……。

悠里がニコツと微笑んで話を区切ると、真冬がポツリと呟く。

真冬「にしても、圭一さんは何で美紀を誘ったんだろ……」

悠里「うくん、どうしてかしら……」

真冬「圭一さんが美紀のことをそういう目で見てるとは考えづらいけど、万が一の事があつたらヤダな……。自分と同じとこに住んでる知り合いと知り合いが恋人になるなんて、気まずくて仕方がないよ……」  
片方が見ず知らずの人間なら良いが、両方が自分の知り合い……それも同じ場所に暮らしている人間同士だなんて少し気まずい。真冬がそんな事を話していた時、胡桃はちようどテーブルに置かれていたお茶を飲んでいたところだったのだが――

胡桃「つつ!!?ぶつつ!!!ごほっ!げほっ!!!」

胡桃は口にしたお茶を吹き出し、激しく咳き込む。

テーブルに置かれていたノートや参考書の一部が彼女の吹き出したお茶に濡れ、悠里も由紀も真冬も驚いたような眼差しを向ける。

由紀「く、胡桃ちゃんばっちいよ!!」

胡桃「わ……わり……:……:げほっ!げほっ!!!」

悠里「ちよつと、大丈夫??」

胡桃「ごほごほっ!!だ、大丈夫……:……:」

小さく頭を下げながら立ち上がり、近場の棚からティッシュを取ると、胡桃はそれでテーブルを拭いていく。何だか様子がおかしい気がするが、本人が大丈夫だと言っているのなら大丈夫なのだろう……。悠里達もティッシュを手にテーブル拭きを手伝う中、胡桃は一人冷や汗を浮かべながら心臓をドキドキと高鳴らせた。

胡桃（あ、あたし……アイツと付き合い始めたんだよ……。けど、みんなにはどう説明したら良いんだ?いきなり、付き合い事になりましてたくなんて言ったらびっくりさせちゃうだろうし、かと言って黙りっぱなしなのも良くないよな……）

というかそもそも、みんなに打ち明けるのが恥ずかしい……。

これまで彼の事を好きだという素振りを見せてこなかったもので、今になって全てを打ち明けようものなら……へく、胡桃つて彼の事が好きだったんだ？というような目で見られるに違いない。それは……あまりにも恥ずかしい……。

胡桃（まあ……その辺はまたアイツと相談して、タイミングを見よう……）

発表した時のみんなの顔を想像すると恥ずかしくなってくるが、いずれは言わなきゃならない……。隠れてこそこそ恋愛を、なんて無理だろうし。

課題は山積みだが、少しずつ片付けていこう……。

その後、勉強を終えた胡桃はりビングを後にすると廊下へと出て、前方を歩いていた人物を呼び止めた。

胡桃「……柳さんっ!!」

ちようど良いタイミングだ……。

そう思った胡桃は柳のそばへと駆け寄っていく。

柳「ん？何か用かな？」

胡桃「用つていうか、あの……その……これからの事で、ちよつと相談が……」

柳「………とどうと？」

少し前、胡桃はこれからの事は『考え中』と答えていた。

きつとこれから進むべき道に悩んでいるのだろう。そう思った柳は足を止めて彼女と向き合い、相談に乗る事にしたのだが……

胡桃「柳さんつてさ、医学つて言うのかな………そういうの、詳しいんですよね？」

柳「まあ………そうだね。ある程度の知識はあるよ」

真冬達を感染から救うような薬を作っていたり、感染者にやられた彼の事を治療したりしたくらいだ。ちよつと応急処置の知識がある………なんてものではないだろう。柳が答えると胡桃はしっかりと視線

を合わせ、真剣な顔をする。

胡桃「なら、あたしにもそういう知識とか技術とか……少しずつ教えてくれませんか……。勉強とかあまり得意じゃないけど、精一杯頑張りますから……」

思いもよらぬ言葉を聞かされ、流石の柳も目を丸くする。

しかし、胡桃の表情を見るに冗談か何かを言ってる様子は無い。

柳「随分と急な話に思えるが……前からそういうのが夢だったのか？」

胡桃「いや、そういう訳じゃなくて……」

胡桃はほんの少しだけ顔を俯ける……

そして、その理由を震え声で語り始めた……

胡桃「この前……あいつが怪我して倒れた時、あたし、何も出来なかった……。あいつが苦しんでるのに、死ぬかも知れないのに、見てる事しか出来なくて……。それが凄く嫌で……苦しくて……だから……」

震えた声を少しずつ落ち着かせて、胡桃は再び顔を上げる……

胡桃「もしまたあいつが傷付いたら、その時はあたしが治してあげたい……。もちろん、そんな簡単な話じゃないって分かってる……。勉強だけでも時間かかりそうだけど、それでもいつか……。あたしがそばにいれば大丈夫だと思えるくらい、頼られる人間になりたいんだ……」

胡桃の瞳は決意に満ちていて、揺るぎない。

医療の知識なんてほとんど無い自分がそれを1から学んでいくのはとてもない努力が必要だという事は分かっているだろう……。とても、胡桃はその道を進みたいと言った。よほど彼の事が大切なのだろう。

柳「………わかった、教えられる範囲の事は教えよう。けど本当に良いのかい？二ヶ月三ヶ月で終わる話ではないよ？そもそも、私は人に物を教えるのが得意な方ではないし……」

胡桃「それでも、柳さんさえ良ければ教えて欲しい」

真っ直ぐな目を向ける胡桃……

柳はそんな彼女を見て軽く微笑み、何度か頷く。

柳「そうまで言われて断る理由も無し…。」

ちようど暇になってきたところだし、ちようど良い。のんびり少しづつ教えていくから、そのつもりで」

胡桃が嬉しそうな表情をして、頭を下げる。

彼女のような娘を教え子にするなんて予想外の事だったが、これはこれで悪くはないのではと………柳はそんな事を思っていた。

## 百六十四話 『いじわる』

胡桃「でき、あたしも暫くここに残って、柳さんから医学を習う事にしたから」

「は、はあ!? 医学? …… っていうと、何かの病気とか治したりとか、変な薬作ったりとか、そういうのを習うってこと?」

胡桃「いや、変な薬の作り方は流石に習わないだろ…。」

まあ、難病とかを治すまでは無理でもちよつとした病気とか怪我くらはいは治せるようになりたいな… って、そう思ってたさ」

屋敷の庭に出て、綺麗な緑の芝の上に腰を下ろしながら語り合う。よく晴れた空の下でのんびり語り合うのは何とも心地良くてだんだんと眠くなってきたが、そんな眠気も一気に吹き飛ぶくらい、胡桃の言葉は衝撃的だった。

「胡桃ちゃんが… 勉強…?」

いや… … 全然イメージに無いつていうか、予想外というか…」

彼の顔には『何で急にそんな事を?』という疑問がハッキリと表情に出ている。

胡桃「いやその… あたしがそういう知識を持つておけば、お前が怪我した時とか役立つだろ?」

「なるほど… … …… って、つまり僕の為ってこと?」

胡桃「そ、そういうわけじゃなくて… ……」

とりあえず覚えておけば損は無いだろ? ほ、ほら! まだ生き延びてる人とかの手助けになるかも知れないし!!!」

ここで素直に『うん、お前の為』と言えないのがダメなんだなあ…。と、胡桃はそんな事を思ってた。そりため息をつく… ……。せっかく恋人同士になれたのに、未だ素直になりきれないのは何故だろう。

胡桃（ここまでくると、もうこういう性格なんだな… としか…）

もつと素直に気持ち伝えられたら、こんなにモヤモヤする事も無いのに。横にいる彼からそつと目を逸した胡桃が一人苦笑していると、背後から寄って来た人物が二人に向けて声をかける。

美紀「家の中にいないなと思つたら、こんなところで話していませんね」

胡桃「ん……まあ、ちよつとな」

背後から現れた美紀の方へと顔を向けた胡桃は少しだけ気まずそうな笑みを浮かべると、またすぐに視線を前方へ戻す。もしかすると彼との会話を聞かれていたかも……と思つて少し冷や汗が出たが、美紀の態度を見るに彼女は何も聞いてはいなかったようだ。

美紀「二人で何の話をしてたんです？」

胡桃「いや、えつと……大した事は話してないよ」

美紀「……そうですか」

目を泳がせながらそう言う胡桃の様子はどこかおかしくて不自然だったが、美紀は深く探ろうとはしてこない……。ただ胡桃の隣に腰を下ろし、ぼんやり空を眺めている。

(……何か気まずいな)

何十秒か沈黙が続き、彼は眉間に皺を寄せた。

本当ならここで美紀にあのことを……胡桃と付き合う事になったのを打ち明けても良いのだが、少し前に胡桃の方から『みんなに言うのはもう少しだけ待ってくれ』と言われていた。多分、まだそれを明かすだけの心構えが出来ていないのだろう……。彼はそれに従う事にしたのだが、隠し事をしているという後ろめたさからだろうか……。美紀と何気ない会話を交わす事すら少し大変なものに感じてくる。

かと言つて、このまま沈黙を続けるのもどうかと思う……。

何か話題になりそうな事……話題になりそうな事……必死に考えた彼はある事を思い出し、美紀に尋ねる。

「そう言えば美紀、昨日は圭一さんと外に行つたつて？」



美紀「あつ：はい、行ってきました」

胡桃「あたし、あの人の事はまだちよつと苦手っていうか：：どうにも絡みづらい感じがすんだけど、美紀は平気なのか？」

彼が切り出した話題に胡桃も乗り、二人で美紀の顔を見る。

美紀は相変わらず空を見上げたまま『うくん』と声をあげ、人差し指で頬を掻きながら苦笑していた。

美紀「そうですね：正直、私もあの人は少し苦手ですよ」

胡桃「それなのによく一緒に出掛けたな？」

美紀「苦手には苦手ですけど、一緒にいるのが嫌だってわけでも、嫌いってわけでも無いですし：：」

あの圭一という男は真冬のように由紀達と仲良くする訳でもなければ、穂村のように明るい性格な訳でもない：。他の者と比べると無口で愛想もなく、彼や胡桃も圭一とはあまり話した事がないくらいだ。：が、そんな圭一が先日は美紀を外出に誘い、美紀もそれに乗っていた。これはどういう事なのだろう。気になった胡桃と彼がそれとなく尋ねていくと、美紀は二人の顔をチラリと見て口を開けた。

美紀「何日前：：：まだ先輩が寝込んでいた時の事です。」

あの時はここでじつとしてるだけっていうのが嫌で：：：ちよつどその時に圭一さんが外に行こうとしていたからワガママ言っつて一緒に行かせてもらって：。その時、ちよつとあの人の足を引っ張るような事をしてしまったんですが：：」

「それって、どんなこと？」

美紀「建物の中を調べていた時、足元をちゃんと見てなくて：。それで私転んじやって、足首を捻ったんです」

胡桃「あゝ：：そう言えば何日前、足痛そうにしてたもんな」

今はもう大丈夫なようだが、少し前まで美紀が片方の足を動かさずらそうにしていたのを思い出す。どうやらあれはその時に足を捻ったのが原因だったらしい。

美紀「怪我自体は大した事無かったのですが、その時の状況が状況だったので……もしかしたら私はもうダメなのかなって思いました……」

美紀は苦笑いしながら思い出す……。

あの日、圭一と共に外へ出て、建物の中を調べていた時の事を……。ちよつとした不注意で足を捻り、床に倒れた時の事を……。

圭一「……屋敷を出る前、俺が何て言ったか覚えてるな？」  
元々はデパートだったのであろう大きな建物の二階、様々な店が並んでいる通路の上、美紀はその通路に尻もちをついたまま今捻ったばかりの右足首を押さえ、目の前に立つ圭一を見上げて焦りの表情を浮かべる。屋敷を出る前、圭一は『私も一緒に行きたいです』と言ってきた美紀に対してある事を言った……。そして、美紀はそれをしっかりと覚えていた……。

美紀「何一つ口出ししない……それと、足を引つ張らない……」

圭一「……ああ、そうだ」

圭一がどこに向かおうとしているのか、何をしたいのか……ここに来るまでの道中、それらが少しは気になったが、美紀は無言でついていった。『無駄に喋らない』というのが、この外出に同行する為の条件だったから……。そして条件はもう一つ……それは『圭一の足は引つ張らない。何があっても自分で対処する』というものだったのだが

圭一「立つ事くらいは出来るだろう……何とか歩く事も出来るだろう……。けど、走るのは無理そうだな」

右足に力を入れる度痛みに震え、苦痛そうな声を小さく漏らす美紀

を見て圭一は言い放つ。圭一の言う通り、立つ事は出来るし頑張れば少しの間は歩く事も出来そうだ。…が、走ったり跳ねたり、何かを乗り越えたり…というのは難しい。

美紀は近場の壁を支えにしながらゆっくりと立ち上がり、吹き抜けになっっている所から一階を見る…。建物の一階…圭一と美紀はそこにある入口からここに入って来たのだが、建物内を小一時間探索する間にいつしかそこには大勢の”かれら”が集まっており、多くの影がゆらゆらと蠢きながら呻き声をあげていた。

美紀「…………ツ…」

”かれら”はこちらには気付いていない…。

が、美紀はその群れを上から見下ろすなり眉を寄せ、冷や汗を流す。あの群れの存在は今、自分にとって大きな脅威になっていると分かっているからだ。

圭一「散歩はもう終わりだ…。あとは帰るだけだが……………」

圭一の冷たい視線は美紀に向き、そして右足に移る…。

あとは帰るだけ…そう、入った時と同じ様にあの入口から出て帰るだけ…。けど、今の美紀ではそれは難しい。そばの階段を使って一階に降りた瞬間、群れの多くがこちらに気が付く。どれだけ静かに降りてもそれは避けられないだろう。しかし、”かれら”は遅い…。上手く走れば追いつかれる前に群れを避けて入口へと辿り着けるが、美紀の足では…。

圭一「自分でどうにか出来るよな？」

美紀「……………」

圭一の言い方は『自分だけでどうにか出来るか？』という確認ではなく、『自分だけでどうにかしろ』という様な言い方だ…。俺はお前を助けない。助けるつもりなんてない。だから自分だけでどうにかしろ、という気持ちでビシビシと伝わってくる…。

美紀「は…いつ……………」

返事をする美紀だったが、正直に言わせてもらおうとかなり厳しい。

この建物の出口はあの場所以外にも幾つかあるハズ……だから美紀だけは回り道をして、”かれら”のいない所からのんびり出て来ても良いのだが、その途中……もしくは屋敷に帰る途中で”かれら”に見つかったら……。今の美紀では、ほんの数体の”かれら”を避ける事も逃げる事も難しい。

なので本音を言うと圭一の助けが欲しいのだが……来る時に”足を引っ張らない”と約束した手前、言い出せない……。圭一の冷たい視線と声が、助けを求める事を許してくれない……。

圭一「じゃあ、俺はあそこから出て行く……。お前はまた他の出口でも見付けて、そこから出れば良い」

美紀「……あの……私……」

圭一「……何だ、まさか助けてとか言わないよな？足を引っ張らない、自分の事は自分でどうにかすると言ってたクセに、助けてくれなんて情けない事は言わないよな？」

圭一の言葉が耳を通る度、美紀は少しずつ呼吸を乱す……。

先輩が……彼が中々目覚めないのが辛くて、何もしないまま屋敷にいるのが辛くて、つい圭一に声をかけてしまった……。けど、それは間違いだっただ……。この男と二人で外に出るのは間違っていた……。この男は彼とは違う……。自分がどれだけ困っていても、助けてはくれない。平気で見殺しにしてくる、冷たい人間だ……。

美紀（どうしよう……どうしよう……っ……）

こんな足で、無事に屋敷まで帰れる気がしない……。

きつと自分は今日、”かれら”に襲われて死ぬ……。

目の前にいる人間は……圭一は助けてくれない……。そういう人間なんだ、そういう冷たい人間なんだ、酷い人間なんだ……。

美紀「………違うって、分かっている……のに……」

圭一「……？何を言っている……」

ポツリと呟いた言葉を聞き、圭一は美紀を見る。

美紀は額に緊張の汗を流しながら、圭一の事を見つめ返す。

美紀「あなたの事を酷い人だとか、冷たい人だとか……そういう事を思うのはお門違いだって分かってるんです……。今回の事は、私から言い出した事だから……。私がワガママ言っついてついてきただけなんだし、自分の事は自分で守るって事前に約束もしてただけだから、あなたの事を悪く思うのは間違ってるって……。分かってるんです……」

圭一の言動は確かに冷たいが、そんな圭一と約束をしてでも外に出たがったのは他でもない自分自身……。どんな目に遭おうと、圭一を責めるのは間違いだと分かっている。

美紀「けど……でもっ……。その……。圭一さんは……。意地悪です……」

自分はここで見捨てられる……。そして”かれら”に襲われる……。そう思っている美紀は瞳を潤ませながら圭一を睨み、意地悪だと言う……。この発言がどれだけ自分勝手な事なのかは分かっている……。ワガママな子供のような発言だと分かっている……。が、最近は色々あって心がボロボロになっていたため、これ以上余裕を保つ事が出来なかった……。

美紀「先輩だったら……私を助けてくれるのに……っ……」

ああ、自分は今とても情けない事を言っている……。圭一にこんな事を言っても仕方無いのに、八つ当たりするかのように言葉を放っている……。あまりの情けなさに胸がズキズキと痛み、美紀はほんの少しだけ涙を零したが、それをすぐに手で拭って更に圭一を睨んだ。

美紀「なんでそんなに冷たいんですか……？」

なんでそんなに……。意地悪なんですか……？」

圭一「……………」

圭一は何か言いたげに口を開き、どこか驚いたような目をしている。

圭一の性格だと、こんな事を言われたら冷たく『勝手にしろ』とも言っつてその場を去ってしまいそんなものだが……。圭一は半泣き

になる美紀を前にして目を丸くしていた。

圭一「意地悪って……俺がか？」

美紀「他に誰がいますか……」

圭一「……そうか……そう、だな……」

美紀の台詞に何度か頷き、圭一はその辺りを落ち着きなく歩き始める……。美紀に言われた言葉を……『意地悪』という言葉を自分でも小さな声で、呪文のように何度も呟きながら近場をぐるぐると歩き回り、少しして……美紀の前で立ち止まった。

圭一「……なか……てやる……から」

美紀「……え？」

聞こえた言葉が信じられなくて、美紀は今一度聞き返す。すると圭一は面倒そうに舌打ちをして彼女から視線を逸らし、背を向けてその場に座り込んでもう一度さっきの言葉を、今度はよりハッキリと告げた。

圭一「背中に乗せてやるから、早くしろ……。グズグズしてると本当に置いていくぞ」

美紀「えっ……？あ、あつ……はいっ」

さっきまでは置いていくつもりでいたようなのに、急にどうしたんだろう……。美紀は戸惑いの表情を浮かべながらも圭一の背に乗り、圭一は彼女の両足を抱えてゆっくりと立ち上がる。

圭一「回り道するのは面倒だ……このまま下に降りて、奴らの隙間をぐぐり抜ける。捕まらないように思い切り走るから、振り落とされないようしっかり掴まっというろ」

美紀「は……はい……」

圭一の肩をしっかりと掴み、振り落とされないようにと力を込める。

その後、圭一はそばにあった階段を静かに降りて一階に向かい、群れの数体がこちらに気付いた瞬間……素早く駆け出していく。

美紀「ッ：!!」

女の子一人背負っているとは思えない程に速く、素早く、それでいて正確に動き、圭一は「かれら」の群れを避けていく。そばにいた者がこちらに掴みかかろうと腕を伸ばしてきてもそれを上手く躲し、駆け出して十数秒が経過した頃にはもう出口を抜けて外へと出ていた。

美紀「あ、ありがとうございます……」

圭一「奴らはまだそばにいる、離れた場所に行くまでそのままでもいい」

建物から出てすぐに背中から降りようとする美紀だが、圭一は彼女を背に乗せたまま早歩きで進んでいく……。確かに、周囲には「かれら」の気配がある。まともに走ることが出来ない美紀が地面に降りるのはまだ早いだろう。軽い足取りで建物を離れ、そのまま屋敷へ向かうとする圭一の肩を掴んだまま、美紀は気になっている事を恐る恐る尋ねる……。

美紀「あの……何で私のことを助けてくれたんですか？少し前までは見捨てるつもりでいたみたいなのに……」

圭一「はすぐには答えず、無言のまま進んでいく……。が、やがて小さくため息をつき、歩を進めたまま語り出す。

圭一「……世の中がこうなる前、少しだけ……本当に少しだけ、親しくしていたヤツがいた。さっきお前に意地悪だって言われた時、急にそいつの事を思い出して……それで……まあつまり、ただの気まぐれだ。最初は本気でお前を見捨てるつもりでいたし、そのせいでお前が死んでも構わないと思っていた……けど、気が変わった」

この男が……圭一が誰かと親しくしているイメージがちつとも湧かない……。

「いったいどんな人だったんだろう……?というか、男の人だろうか?女の人だろうか?あれこれ気になってきてしまった美紀はそれについて尋ねようとしたが、彼女が口を開くよりも先に圭一の方から話し始めた。

圭一「今思うと、変な女だった……」

美紀「女の人なんですか？」

圭一「……変な勘違いをされる前に言っておくが、別に恋人だったとかじゃない。ただ何回か会って、何気ない話をしていただけ……といても話してるのはあいつばかりで、俺はそれを適当に聞き流していただけだった」

その女の人があんな人かは知らないが、圭一が適当に話を聞き流している様子はイメージ出来る。きっとその人がどんな話を話しても返事など殆どせず、たまに反応したと思っても軽く頷いたりする程度だったのだろう。

圭一「俺といっても会話なんて弾みやしないのに、あいつはしょっちゅう俺の所に来て一人であれこれと話し出す……。まあ、それでもこんな反応ばかりされていたらその内来なくなるだろうと思つてたんだが、あいつは懲りる事なく俺の所にやって来て、ある日……ついに逆ギレし始めた」

美紀「……何があつたんですか？」

圭一「ろくに会話に乗ってこない俺に対して『意地悪だ』とか『冷たい人だ』とか……失礼な事を言い始めたんだよ。さっきのお前みたいにな……」

美紀「つ……その、さっきはすいませんでした……。最近色々あつて心の整理が出来てなくて、少し混乱してて……その勢いでつい酷い事を言つてしまつて……。反省してます……本当にごめんなさい……」

圭一「お前は他のやつと比べると大人しいイメージがあつたから少し驚いた。まさかあんな……子供みたいな事を言うなんてな。俺にあれだけハッキリ意地悪だと言つたのはあいつとお前の二人だけだ」

冷静になつて思い返すと恥ずかしくて、美紀は一人俯きながら頬を染める。しかし、そんな中でも今の圭一の発言にまた気になるところを見付けてしまった。

美紀「意地悪だつて言つたの……本当に私とその人だけなんですか？」



本当はもつといると思う……。だって、優しいか意地悪かで言ったら圭一は間違いなく後者だ。二人だけ、というのは少し信じられないが

圭一「ああ、〃面と向かって言ってきた〃ヤツはな……」

美紀「あ……なるほど……」

つまり、心の内で圭一の事を意地悪だと思っていた人間は大勢いただろうが、それを本人に向けてハッキリと告げたのは二人だけ……という事らしい。圭一は雰囲気も顔付きも怖めなので、直接言葉を告げられるような者は殆どいなかったのだろう。

圭一「普段は穏やかで礼儀正しいヤツなんだが、それだけに怒ると面倒なヤツだった……。少しお前に似てるな」

美紀「……私、怒ると面倒ですか」

圭一「普段物静かなヤツ程、怒ると面倒くさい」

そう言った後、圭一は鼻で笑って話を止めた。

その女の人についての話をもう少しだけ聞きたいという気持ちもあつたが、それはまたその内、機会があつたらということにしよう……。

美紀「……………」

圭一「……という感じで、圭一さんに助けてもらったんです」

自分が圭一に『意地悪だ』と言った事や、圭一が話した女の人の話だけは隠し、美紀はあの日の事を彼と胡桃に話し終える。あの圭一が美紀を助けたというのはいやほいや意外だと思つたらしく、彼も胡桃も揃って目を丸くしていた。

「……結構良い人なのか？」

胡桃「う、うん……どうかな、分かんない……」

美紀「少なくとも、悪い人ではないと思いますよ」

あの日以降、圭一はほんの少しだけ甘くなつたように思える。もつとも、それは今のところ美紀に対してだけで、他の者への態度は殆ど変わっていないようだが……………。

胡桃「まさかとは思うけど、あの人の事好きになつてたりしないよな？」

危ないところを助けてもらったというのが切っ掛けで、恋愛感情が芽生えていてもおかしくはない…。ちよつとドキドキしつつ胡桃は尋ねる。しかし、それに対する美紀の目はジトーツとしていて呆れ顔だ。

美紀「ないですよ…どちらかというと苦手なタイプって言ったばかりじゃないですか。助けてもらった事を感謝はしてますし、悪い人じゃないとも思ってますが、恋愛となれば話は別です」

胡桃「そ、そつか…!!あはは、そうだよな〜」

美紀「大体、今は恋愛とかするつもりないですし…。

まあ、いずれ良い人と出会えたら良いなとは思ってますけど……………」

そう言つて美紀は立ち上がり、屋敷の方へと戻つていく…。

それに続くようにして彼と胡桃も立ち上がったのだが、その寸前、美紀は『胡桃先輩みたいに…』と小声で呟き、二人に背を向けたままニコリと笑つた。

## 百六十五話『すき』

「……平和だなく」

屋敷の屋上にあった座椅子に腰を下ろしながらよく晴れた空を見上げ、彼はポツリと呟く。暖かな陽射しを浴びながらのんびりしている彼の後方では悠里達が菜園場を集って作物の手入れをしながら、楽しげな雰囲気で騒いでいる……。その楽しげな声を聞きながら空に向けていた視線を前へと向け、屋敷の外側…住宅地の方を見ると遠目でも”かれら”の存在をチラホラと確認する事が出来た。外の世界は相変わらずあんな調子だが、少なくともこの屋敷の中は平和でほのぼのとした空間が広がっている……。今はそれだけで充分だ。

胡桃「お〜い、いつまで休憩してんだ？そろそろ手伝えよ」

「あ〜…はいはい」

椅子から離れて休憩を終え、彼も作物の手入れを手伝う。

屋敷屋上にある小さな菜園場の土の中には少し前に悠里が色々な野菜の種を植えたらしく、芽が出て順調に成長を始めているものが幾つもあった。

悠里「この辺は済んだから、あなたはあっちの方に水あげてきてくれる？」

「了解です」

水の入ったジョウロを受け取り、悠里に指示された通りの場所に水を撒く。今日はこうして彼や胡桃、由紀と美紀も一緒に作業をしているが、普段は悠里が一人でのんびり世話をしている事が多いようだ。

美紀「言ってくればいつでも手伝いますからね」

由紀「そうそう！お手伝いならまかせてよ!!」

悠里「ふふつ、ありがとう。けどこういう仕事は慣れてるし、結構楽しんでるから平気よ。……でも、たまにはこうしてみんなと一緒にやるのも楽しいわね」

巡ヶ丘の学校でもよくこうしてみんなと屋上菜園の手入れをしたなど、そんな事を思い出して悠里は笑う。また落ち着いてきたら、お

世話になったあの学校を綺麗にしに行ったりもしたいものだ。

悠里「……よし終わりっ！みんなお疲れ様♪」

軍手をしている両手をポンツと合わせ、作業を終える。

今日は陽射しが強いのもあつて皆結構疲れたらしく、額に流れる汗を拭いながらため息をついてニコニコと笑った。

胡桃「ほい、お疲れっ」

「ああどうも」

予め屋上の隅に用意していたクーラーボックスに手を伸ばした胡桃はその中から二つのボトルを手に取り、一つを彼へと渡す。保冷剤が詰められたボックスにしまわれていたボトルはよく冷えており、彼はそのボトルに入っていた水を一気に半分程飲んで一息つく……。その隣にいる胡桃も、そして他のみんなもそれぞれボトルを手に喉を潤していた。

胡桃「…あつ、あのさ……」

「ん？」

胡桃「作業始める前の事なんだけど……いや、やっぱいい、また後で話す」

由紀達に聞かれないようにしているのか、胡桃は彼女らの事を横目でチラチラと見つめながら小声で話し出す。しかし胡桃はその話を途中で止めると彼のそばを離れ、由紀達の方に歩み寄って彼女らと談笑を始めた。いったい、何を話そうとしていたのだろうか…。

胡桃が話そうとしていた事の内容が気になるが、後で聞けるのならそれまで待つだけだ。その後、彼は由紀らと共に屋敷の中へ戻り、約一時間後…外の探索から戻って来た圭一、穂村、真冬を談話室で迎えた。今日は珍しく、三人で出ていたらしい。

悠里「お帰りなさい。怪我とかしてないですか？」

真冬「うん、全員無事……。残念なことに穂村も無事…」

穂村「おい！なんで俺が無事だと残念なんだよ!?!」

帰ってきて早々に言い合う真冬と穂村だったが、この二人にとつてこれは挨拶みたいなもの…だと思ふ。二人があれこれ言い合い、他の者がそれを眺めながら苦笑する中、一人静かにソファへと座った圭一のそばに美紀が歩み寄る。

美紀「今日の外出、柳さんに頼まれたんですか？」

圭一「……いや、違う」

圭一、穂村、真冬…この三人は少し前まではよく三人で外出していたようだが、由紀達がこの屋敷に住むようになってからバラバラで行動する事が多かった。たまに三人で出掛ける時があるとしたらそれは柳に頼まれて何かを調べたり探したりする時だったのだが、今日は違つたらしい…。

穂村「ほら、ちよつと前にお前と狭山が巡ヶ丘の高校行った時、他の生存者に出会でくわしただろ？」

穂村が彼の事を見ながら言う。

その言葉を聞いた彼が無言で頷くと穂村は更に話を進めた。

穂村「そこで会った女…知花咲は前に俺らとも会つてる。

見た目は大人しそうなヤツだが、実際は………」

圭一「…実際はかなり面倒なタイプだ。普段は猫被つているみたいだが、ああいうヤツは放つておくと後で鬱陶しくなってくる。だから早い内に見つけ出して対処しておこうと思つたんだが……」

……結局、見つけられなかったのだろう。

どこにいるかも分からない人間一人を見付けるなんて大変な事なのだから、当然といえば当然だ。まず、あの知花という女がまだこの街にいるという保証もない。

悠里「あの、対処というのは………」

圭一「〃殺す〃…という意味だ」

美紀「!?そ、そこまでする必要あるんですか…?」

危ない雰囲気きふきの女だと聞いてはいるが、流石にそれはやり過ぎなの

ではと美紀が言う。しかし圭一はそんな美紀を一瞥し、ため息をついてから話を続けた。

圭一「どういいうわけか知らないが、あの女は俺達の事を知っている。初めて会った時はそんな素振りそぶりは見せなかつたが、この前の学校での一件では柳の事も知っている様な発言をしていたらしいからな…」

真冬「…うん、多分ボクと圭一さんと穂村の事も、柳さんの事も、それに由紀達全員の事も知っている。ほんと、どうやって調べたのかは分かんないけど…でも、イヤな感じがする」

圭一「と、そういうわけだ。ああいう得体の知れないヤツはとつと消しておいた方が良い」

美紀も悠里も、由紀も胡桃も重苦しい表情をして話を聞いていく。見たところ真冬も圭一の意見に賛成しているらしいが…。

穂村「何かあつてからじゃ遅い…って事だな。まああの女が何かしてきても俺がどうにかするんで、リーさん達は安心しててオツケー♪」

まだ細かな事は分からないが、その知花という女がもし本当に危険な人物だった場合、そのくらいの対処は仕方の無い事なのだろうか…。みんなを守る為なら、そのくらいの事は…。それぞれが様々な事を考える中で時は経ち、その日の夜――

胡桃「わりい、ちよつと邪魔するぞ」

体操着にジャージを羽織った姿で現れた胡桃は就寝前に彼の部屋へと寄り、室内にあつた椅子に座る。彼はその向かいにあるベッドの上を腰を下ろして胡桃と向かい合い、彼女の話を耳を傾けていた。どうやら胡桃は、今日の作業中に言いそびれた事を話に來たらしい。

「それで、何の話？」

胡桃「ええつと、その…：…んんんんく…：…」

胡桃は椅子に座ったまま片手で頭を抱え、苦い表情をして呻く。

言いづらい話なのだろうか……なんて思ってたっていると彼女は観念したかのように彼と視線を合せ、気まずそうに苦笑する。

胡桃「あたしらが付き合ってる事、美紀に気付かれてたっぽい……」  
「……ほんと？」

胡桃「うん……ほんと……。なんかさ、最近あたしらが前よりも仲良くしてるように見えたらしくて、今朝聞かれたんだ……先輩と何かあったんですか？つてさ……。その時の美紀の目、こっちの事なんて全部お見通しつて感じでき……誤魔化さず正直に話しちゃった……」

「そうか……まあ、良かったんじゃない？隠し続けるのも何か悪いし」

胡桃「そうだけど……そうだけどさ……」

美紀は結構鋭くて観察力もある。だからこそ、彼と胡桃の関係が変化した事にいち早く気が付いたのだろう。だがしかし、彼女にそれを見抜かれた胡桃はどこか納得がいていないらしく……

胡桃「あたし、これでもバレないように振る舞ってるつもりだったんだぞ？付き合い始めた次の日だって普段と変わらない様にお前と接してたし、最近だってそうだ……。お前と二人きりの時だって誰に見られてるか分かんないから気を抜かずにいたのに、美紀のやつどうして……」

『あたしは何時だって気を抜かなかった……となれば、美紀にバレたのはお前のせいじゃないか？』と、そう言いたげな目で胡桃は彼を見つめる。

「いや、こっちだってこれまで通りにしてきたよ。多分、美紀の観察力が凄いだけだつて」

胡桃「んん……そうなのかな……」

「そうそう。……で、美紀は何て？」

胡桃「やっぱりそうだったんですね。つて言って笑ってた……。んああ〜！もう少し黙ってられると思ってたんだけど、こうもあつさり見抜かれると何か余計にハズい!!美紀の事だから、勝手に言いふら

すような事はしないとと思うけどさ」

頭を抱えたまま両足をバタバタと揺らし、胡桃は軽く悶え出す。

いずれは皆にバレる…というか打ち明ける時が来るのだから、そう悩む事でもないのに…。と、彼はそんな事を思いながら胡桃を見つめる。けれど胡桃はその視線に気付かず、一人俯いてブツブツと呟き始めた。

胡桃「気付かれないようにしてたつもりなだけだな…」

予定よりも早く美紀にバレてしまった事が恥ずかしかったのか、頬がほんのり赤くなっている…。確かにここ最近の胡桃は皆のいるそばで彼と話す時、これまでと変わらない態度で接してきていた。そうまでしても二人の関係がバレたのはやはり、美紀の観察力が凄かったからとしか思えない。

(けど、胡桃ちゃんも変に気を使いすぎなんだよな…。みんなの前では仕方無いにしても、二人きりの時くらいはもう少し恋人らしくしても良いと思うんだけど)

というか、して欲しい…。もっと恋人らしくして欲しい。

付き合い始めてもう何日も経っているのに、胡桃と恋人らしい交流が出来た試しがない。冗談混じりにキスしようと言えばそういうのはまだ早いと言われて逃げられるし、手を繋ごうとしても上手くいかない。付き合ってみて分かったが、胡桃は想像以上に照れ屋で手強い…。

胡桃「ま、済んだ事をウジウジ言っても仕方無いか…。言いたかった事ってのはこれで終わりだから、とりあえず部屋に戻るよ。また明日な」

話す事だけ話して、胡桃は部屋を出ていこうとする。

椅子から腰を上げ、こちらに手を振りながら部屋の出口へと向かう彼女を見た彼は思った…。このまま見送って良いのか。このまま帰してしまつて良いのか…。せつかく彼女が自分の部屋に来ているの



だから、もつと色々あつても良いのではないだろうか。少しでも恋人らしい事をしたいのなら、今はチャンスではないだろうか。

「…ちよつと良い?」

胡桃「ん、何?……うおっ!!」

部屋から出ようとする胡桃を追った彼は彼女の左手を掴み、そのままベッドの前へと引つ張つていく。胡桃は戸惑いの表情を浮かべこちらを見ていたが、彼はそんな彼女を見つめ返してからベッドの上に押し倒し、すぐにその上へと覆い被さった。

胡桃「ちよつ…!!?ちよつ…:…何してっ…!!」

仰向けで倒れる胡桃の両手両足を自分の手足で押さえ込み、身動き取れないようにして彼女を見下ろす。数十センチと離れていない距離から見た彼女の顔はすぐ真つ赤に染まり、その表情を見ただけで思わず胸が高鳴る。胡桃は押さえつけられている手足を数回ジタバタと揺らしたが、振り解く事が出来ないと知って段々大人しくなり、最後は潤んだ目で彼を見つめる…。

「……………」

胡桃「っ……………う……………」

無言のまま見つめ合い、何秒か経つ…。

突然彼に押さえ込まれた事で胡桃は困惑していたが、同じ時、彼もまた困惑していた…。何故なら、これはちよつとしたじやれ合いのもりだったから。帰ろうとした彼女を押さえ込んだ後、『何してんだ! 離せっ!!』と一頻り怒られてから冗談だと言つて謝ろうとした。せつかく付き合う事になったのだから、たまにはこんな悪ふざけくらいしても良いだろうと思つたのだが……………想定していたよりもずつと、胡桃が大人しい。本当ならここでもつと強く抵抗してきたり、顔を赤らめつつも怒鳴つたりして怒ってくるハズなのに……………

(これは……………困った…)

胡桃はもう、抵抗する気配すら見せていない。

紫がかった綺麗な瞳を潤ませ、こちらをジッと見ている…。

本当に凄く綺麗で、宝石みたいな瞳…。唇もうつすらとピンク色でとても女の子らしい。化粧などしてないだろうに、とても可愛くて、整った顔をしている。可愛い女の子だという事は知っていたが、改めて見ると本当に可愛くて、胸がドキドキとしてくる…………。

次の一手に困った彼はとりあえず右手を伸ばし、胡桃の頬をそつと撫でてみた…。指の背で、軽く触れるように撫でていくと胡桃はピクツと震えたがやはり抵抗はしない。真っ赤な頬は柔らかく、温かい。その感触がクセになり、彼は数回そこを撫で続けた…。すると元より赤かった頬が、更にジワジワ赤くなっていく…。

「あの…胡桃ちゃんさ……………」

胡桃「……………」

頬を撫でながら彼女に語りかける。

彼女と付き合うことになって数日経ったが、彼には気になる事があつた…。そして、それを本人に確認するには今がチャンスだとそう思った。

「僕のこと好き？」

胡桃「えっ？な、なんでそんなこと……………」

「この前ふと思つてさ。そう言えばまだ、胡桃ちゃんの口からそういう言葉を聞いてないな…つて……………」

恋人になつたは良いが、まだそれらしき事は出来ていない。いや、それどころかまだ胡桃の口から直接「好き」という言葉を聞かされていない…。一度その事実気付いたらもう我慢が出来ず、彼は胡桃にその言葉を求めるが……………

胡桃「そ、そんなの言う必要ないだろ…!!」

キラいなヤツと付き合うわけないんだからっ……………」

「まあ、それはそうなんだけど……………」

ハツキリ伝えるのが恥ずかしいのか、胡桃は彼に押さえられたまま

顔を横へと背けてしまう。今の言葉から察するに胡桃は彼の事を嫌いではなく、好きという感情をしつかりと抱いだいているようだが、彼はまだ納得しない…。

「やっぱり、ちゃんと言葉で伝えて欲しい。」

僕は胡桃ちゃんの事が好きだ。もうどうしようもないくらい好きで好きで堪らないんだけど、胡桃ちゃんは僕のことをどう思ってる？」

手を頬に添え、横へ向いてしまった顔をこちらへ向けさせる。

好きという言葉の間近に聞かされたのが効いたのか、胡桃の顔はまた一段と赤くなっているように見える……。真っ赤な頬、潤んだ瞳、微かに荒くなる呼吸……。胡桃がかなり緊張してしまっているという事は容易に理解出来たが、彼は彼女を逃したりはせず、その顔を真っ直ぐに見つめて言葉を待った。

胡桃「っ……………く……………」

何十秒か経った頃、胡桃は押さえつけられた手足を微かに動かしつつそつと口を開く…。そして、彼の目をチラツツと見つめ返してからすぐに瞼を閉じ、耳まで真っ赤に染めて言い放つ。

胡桃「…好き…だよ……………大…好きっ……………」

小さな声だったが、彼は確かにそれを聞いた…。

本当はもつと大きな声で繰り返して欲しいと思っていたが、たとえ小さな声でも実際に言われてみるとそれは想像以上に響くものがあり、言いようの無い満足感が心を満たしていく…。

胡桃「言った……………ちゃんと言ったから…もう良いだろ…？」

「……………んん」

胡桃の口からその言葉を聞いた。今はそれだけで満足だ…。

彼は胡桃の上から離れ、彼女を自由にする。胡桃は少ししてから起き上がるとベッドの上に座ったまま何度かため息をつき、恥ずかしそうに頭をガシガシと搔かいていた。

胡桃「あくもう……………あくく!!もうっ!!!」

な、なにニヤニヤしてんだよ!!!」

彼女がこちらに向けて好きだと言ってきた際の事を思い出すだけで、自然と頬が緩んでしまう。なんて可愛くてイジリ甲斐のある娘なのだろう…。未だ微かに潤んでいる瞳でこちらをキッと睨み、肩をバシバシと叩いてくる彼女にそつと背を向けながら、彼はニヤニヤと笑い続けた。

## 百六十六話 『たんじょうび』

よく晴れたある日の事、彼は美紀、悠里、真冬、穂村と共に外へと出た。キャンピングカーに揺られながら街の方へ向かい、まだ調べてなくて何か良い物資がありそうは建物を見つけては車を降り、中を調べていく…。小さなコンビニから大きめのスーパーマーケットまで、色んな建物を調べて回った。中には当然、”かれら”のいる建物もあったが、”かれら”は相変わらず動きは遅い上に鈍感なので、大きな音を立てたり群れに出会さなければどうという事は無い…。それに方が一争いを避けられなくなるような場面になっても、余程の数を同時に相手にしない限りは楽に仕留められるくらい、彼や穂村達は感染者の相手に慣れてきていた。

悠里「結構遠くまで来ちゃったし、そろそろ戻りましょうか？」

美紀「そうですね。正直な話あまり期待してませんが、予想していたよりも多めに物資を確保出来ましたし、もう充分だと思えます」

ずっと屋敷にいても身体が鈍ってしまう…。そう思っただけだったが、入ってみた建物の幾つかは未だ殆ど手付かずだった為、保存食や医療品等、思っていた以上に色々確保出来た。美紀の言うとおり、これだけあればもう充分だ。

穂村「途中入ったあのスーパー、俺が見つけたんだからな？マジで感謝しろよ？」

真冬「ああもううるさい…。途中、そのスーパーで缶詰落として感染者引き寄せてたバカはどの誰だったっけ……………」

穂村「ちようど帰るところだったんだから良いだろっ!!少し油断しただけだって!それにリーさんと美紀の事はちやくんと守ったしよ!!」

真冬「二人は穂村に守られるまでもなく、自分らでちゃんと安全な所を進んでた…。どっかのバカと違ってしつかり気を付けてたから、

缶詰を落したりもししてない…。それに穂村なんかいなかったって、二人の事は彼が守ってた……」

穂村「二人の事は……ねえ。あれれ、狭山先生もリーさん達と同じ女の子なのに、アイツに守られてないんですか？ま、そうだよな。お前だって、狭山みたいにツンツンしてるペツタン娘なんて守る気にならないよなあ？」

二人だけで口喧嘩してると思ったら、急にこちらを巻き込みに来た…。会話を振られた彼はすぐそばに座る真冬の方をジッと見つめ、冷や汗を流す。ツンツンしてるとか、ペツタン娘とか、はたまた守られてないとか言われた事を気にしてるのか、真冬が目がほんの少しだけ潤んでいたから……

真冬「いざって時は……ボクの事も守ってくれるよね……？」  
「そりゃまあ……勿論……」

美紀や悠里と比べて争い事には慣れているようだが、真冬だって普通の女の子だ……。危ない時が来ればちゃんと守るし、見捨てる気なんて無い。

真冬「ほら、彼は優しいからこう言ってくれる……。世の中の女の子はこういう男の子の事を好きになるけど、穂村みたいにイジワルでどうしようもない男は誰も好きにならない……。かわいそうな穂村……一生独り身……」

穂村「なっつ!!?! 一生独り身なんて……そんな事は無い……はず……」  
真冬「いや、間違いなく一生独り身……。ただでさえ人間が減ったこの世界で、わざわざ穂村を好きになるような物好きはいない……」

穂村「い、いや……!!俺にはリーさんがいるし……」  
震え声で言う穂村だが、その悠里は車を運転するのに忙しい……とといった感じで何の返答もない。穂村の声は聞こえてる筈だが、悠里はハンドルを切りながら苦笑するだけだった……。

と、そんな感じで穂村と真冬が口喧嘩する中、一行を乗せたキャンピングカーは無事に屋敷へと戻る。屋敷の庭に車を止め、屋敷内へと入った悠里らは手に入れた物資の保管を穂村に任せるとそのまま談

話室へ足を踏み入れたが、そんな彼女らを元気いっぱいによ紀が出迎えた。

由紀「おつかえり〜!!どうだった?怪我とかしてない?」

悠里「ええ大丈夫。由紀ちゃんもしつかりお留守番出来た?」

由紀「うんっ!!胡桃ちゃんと二人で遊びながら待ってたよ」

部屋の中には由紀だけでなく胡桃もいて、彼女の座る椅子の前にある大きなテーブルにはボードゲームやらトランプやらが転がっている。これらを使つて、由紀と二人で遊んでいたのだろう。

胡桃「りーさんとか結構久々に外行つただろ?だからちよつと心配だったけど、無事だったなら良かったよ」

悠里「まあ、彼や穂村さんもいたからね。心配しなくて大丈夫よ」

胡桃「まったく、あたしもついてく〜つて言つたのに…」

悠里「それはダメ。今日は胡桃が主役の日なんだから、無茶な事はさせられないわ。今日一日くらい、のんびりまったりと過ごしてて」  
胡桃「今日一日くらいいつつーか、最近はわりと毎日まったりしてるけどな」

その場で伸びをしながらそう言つて、胡桃は椅子に腰掛ける彼の方を見る。そして真横に立つてからニヤニヤと笑い、右手のひらをスツと差し出した。

「……………えつと、握手か何かして欲しいの?」

胡桃「違う違う。ほら、分かつてるだろ?」

ふふんと鼻を鳴らし、また胡桃は笑う…。

つい先程、悠里が『今日は胡桃が主役』と言つたのを何気なく聞いてもしやとは思つていたが、胡桃のこの態度を見るに間違いない…。今日は胡桃の誕生日…。そして恐らく、彼女は何かプレゼントは無いのか、と催促している。

(マズい……………今日だったのか……………)

胡桃の誕生日自体は前に聞いて覚えていた。…が、それを聞いたの

は結構前の事だし、そもそも世界がこんなになってからは日付けの感覚が殆ど無い。確かに今日は悠里だけでなく美紀も由紀も何だかお祝いムードだったので変だなとは思っていたが、まさか胡桃の誕生日だったとは……。というか、悠里達も分かっていたのなら事前に教えてくれれば良かったのに……。彼はそんな事を思いながら胡桃から視線を逸らし、冷や汗を浮かべた。

胡桃「まさかとは思うけど、彼女の誕生日忘れてた〜とか言わないよな？あたし、この日の事を何日も前からずつとずつと楽しみにしてただけどなく〜」

「……………」

悠里達には聞こえないよう、胡桃は彼の耳もとで囁く…。

胡桃はこの日の事を心待ちにしていた……。だが、彼は今日が胡桃の誕生日とは知らなかったため、プレゼントなんて用意していない。そもそも、胡桃が何を欲しいのかが分からない……。いや、彼女が何を欲しているようと、どのみち何も用意してないのだからマズい…。これは、本当にマズい…。彼の額から溢れ出した冷や汗は額から頬へと伝い、やがて顎先からポタリと溢れる。

胡桃「…………つ、あははっ!!冗談冗談っ!!!今日があたしの誕生日だつて忘れてたんだろ?」

差し出していた右手で彼の肩をバシバシと叩き、胡桃は笑う。まさにその通り…今日が彼女の誕生日である事はすっかり忘れていたため、彼は変わらず気まずそうな表情をする。

「ほんと、ごめん……………」

胡桃「ん?いやいや、本当に冗談だから気にすんなって!なんて言ったって、あたし自身もつい昨日、りーさんに言われて気付いたくらいだからな」

「…………え、マジ?」

胡桃「うん、マジ。あたし、そもそも日付けの感覚無くしてたから今日が何日かも分かってなかったし…………」



美紀「胡桃先輩、明日誕生日じゃないの？つてりーさんに言われて  
凄くびつくりしてましたもんね」

胡桃「あはは……いや、言われなかったら確実に気付かなかったわ。  
危ない危ない。自分でも知らぬ間に歳をとるところだった」

悠里に指摘された時の事を思い出してるのか、胡桃も冷や汗を浮か  
べて苦笑している。どうやら、今の話は全て本当らしい。なら彼女の  
言うように、気にする必要は無いのかも知れない。その代わり、今日  
これから、しっかりと祝ってあげよう……。

「急にプレゼントとか言われて焦ったけど、とりあえず……誕生日おめ  
でよう」

胡桃「ん、んん……ありがと」

胡桃はほんのり頬を赤くして、照れたように笑う……。

この日は夕食も気持ち程度ながら豪華にして、皆で胡桃の誕生日を  
祝った。夕食の後も彼と胡桃、悠里と由紀、美紀と真冬とで集まって  
ゲームや雑談をして盛り上がり、そして就寝の時間……：……各自自分  
の部屋へと戻りベッドに潜ったのだが、胡桃は自分の部屋へは戻ら  
ず、彼の部屋へとやって来ていた。

「どうした？寝れない？」

胡桃「いや、その……：……えっと……：……」

黒のタンクトップと学校の体操着の短パン、その上にジャージを羽  
織った状態で胡桃はやって来た……。寝る準備は出来てる様だが、わざ  
わざ部屋にやって来たのを見るにまだ眠たくないのだろうか……。眠  
たくなるまで話に付き合っって欲しいとか、そんな事を言いに来たのだ  
ろうか……。

胡桃「今日はさ……：……一緒に寝ても……：……良いかな……：……」

「……：……えっ？」

後半の声は小さくて、上手く聞き取れなかった……。いや、彼はその  
言葉をちゃんと聞いていたが、信じられなくて聞き返した。しかし胡

桃は顔を俯けたまま、頬を真っ赤にしてまた同じ事を言う。

胡桃「だから、もし迷惑じゃなければ一緒に寝たいんだけど…だめ…？」

間違いない。胡桃は今、『一緒に寝たい』と言った…。

あまりに突然の事だったので彼はどう反応して良いのか分からず固まってしまいが、すぐに正気を取り戻してコクリと頷く。

「全然迷惑じゃない！どうぞどうぞ…！」

部屋のベッドは大きめなので、二人でも全然寝れる。彼は胡桃の為にスペースを空けると余分にあつた枕を置き、胡桃を招く。胡桃は少しだけ申し訳なさそうにちよこつと頭を下げてからベッドに乗ったが、直後、隣に寝そべろうとした彼を強く見つめて言い放つ。

胡桃「一応言うておくけど、普通に寝るだけだからな？それ以上の事は何もしないぞ」

「ん…わ、わかった。普通に寝るだけ…ね」

胡桃「そう、ふつゝに寝るだけ」

釘を刺すように言ってからリボンを解き、髪を下ろす。それはいつも寝る前にしてる何気ない動作だったが、同じベッドに寝そべる彼はすぐ真横からそれを見て、ほんの少しドキツとした…。髪を下ろした胡桃は何回か見た事があるが、その姿をこれだけ間近で見るとやけに女の子らしく見えてしまい、就寝前だというのに胸が高鳴る。

胡桃「ヘンなこと考えてないよな？」

「……………大丈夫!!」

胡桃「んん…何か変な間があるんだよなあ…」

ほんの少しだけ身の危険を感じたが、彼の言葉を信じて胡桃はベッドに潜る。彼もそれに続くようにしてベッドに潜り、部屋の明かりを消した。が、部屋が真っ暗になってからも二人は目を開けており、その目がだんだんと暗闇に慣れてきた頃、彼は天井を見上げながら呟く。

「なんで急に一緒に寝ようとか言い出したの？」

胡桃「ん…何ていうかさ、せっかくの誕生日だし、思い出作りとして…みたいな感じ。お前と付き合う事になってもうそこそこ経つけど、まだ恋人らしい事は何もさせてあげられてないし、このくらいなら大丈夫かなって…」

「…なるほど」

このくらい…とは言うが、好きな人と一つのベッドで眠るというのは想像以上にドキドキしてしまう。彼も胡桃も、ほんの少し前までは普通に眠気があったのだが、今の二人は揃いも揃って目が覚めきっていた。愛する人と一緒に寝てるという事実を妙に意識してしまい、どんどん目が覚めていく…。

「恋人らしい事と言えさ、幾つか困った事があつて…」

胡桃「ん、何…？」

「こんな世界だと、デートすらまともに出来ないなって…。本当なら胡桃ちゃんと一緒に遊園地に行ったり、水族館に行ったり、映画館に行ったりするようなデートをしたかったんだけど、難しいよなあ」

もし世界が平和なままなら、普通のカップルらしいデートもいっぱい出来ただろう…。だが、この世界ではそれすら出来ない。まともな人もいなくてアトラクションの動かない遊園地に行ったり、廃墟同然の水族館に行ったり、映画上映の無い映画館に行っても仕方が無い…。第一、どこに行ってもきつと”かれら”がいる。そんな状況でデートなんて出来っこない。

デートらしいデートが出来ない…。胡桃に人並みの幸せすら与えられない事が残念で、彼は悩んでいた。こんな世の中で付き合っても、彼女を楽しませたり幸せにしてあげる自信が無いと思い始めていたくらいだが、暗いトーンで話す彼とは違い胡桃はいつも通りのトーンで、しれっと返事をする。

胡桃「なんだ、そんな事…別に気にしなくて良いって」

「…残念だなあとか思わない？」

胡桃「そりやまあ…少しは思うよ。あたしだって普通に遊園地デートとかしたかったなあって思うけど、無理なもんは仕方無い」

彼と普通の世界で出会い、普通にデートをして楽しむ想像をした事だってある…。けど、無いものねだりは出来ない。だから胡桃は今、目の前にある幸せだけをしっかりと意識して、静かに微笑む。

胡桃「遊園地デートなんて出来なくても良いよ…。ただ、すぐそばにお前がいてくれれば良い。それだけで十分に幸せだから…」

恥ずかしい台詞になってしまったが、キチンと伝える…。

暗闇の中、横に寝そべる彼が驚いた様な表情でこちらを見ているという事が何となく分かってしまった胡桃は顔を背け、頬を赤くした。

「…：…そう言ってもらえると嬉しいな。よし！じゃあまともなデートが出来ないなりに精一杯、胡桃ちゃんを幸せにするよ。その為にもまずはまた何かプレゼントを用意したいところだけど、欲しいものとかある？」

何かあるようなら外に行つた際、それを見つけられる様に意識しよう…。彼はそう思つて尋ねたが、その問いを聞いた胡桃は顔を背けたまま口元までシーツを引っ張り、小声で答える。

胡桃「特に無いけど、強いて言うなら…：…来年も元気なままあたしのそばにいて、お誕生日おめでどうって言って欲しい…」

「…：…そんな事で良いの？」

胡桃「うん、そんな事で良い…。だからまあ、お互いまたもう一年、何事もなく元気に過ごしてこうな」

「…：…分かった。また来年もおめでどうって言うよ」

彼はそう言いながらベッドの内で手を動かし、胡桃の手を握る。手が触れ合つた瞬間、胡桃はまた恥ずかしげにビクツと震えたがすぐに自分からも手を握り返し、二人はそのまま静かに眠っていった…。

## 百六十七話 『こいばな』

「凄いでしょや降りだな」

学園生活部の皆が談話室でのんびり休んでいる中、彼は窓の外を眺めて呟く。時刻はまだ昼を少し過ぎた辺りなのに外は夕方のように薄暗く、風に流された横殴りの雨が窓をポツポツと叩いていた。

胡桃「今日は庭で軽い運動でもと思つてたのに、この雨じゃ無理だな」

悠里「…じゃあ仕方ないわね、このまま皆でお勉強でもする？」

胡桃「あつ…：いや待てよ。ほら由紀、前にキャッチボールした部屋覚えてるか？あの部屋かなり広かつたし、雨の日は庭じゃなくてあの部屋を運動場代わりにするのも良さそうだよな？」

胡桃は屋敷内のある部屋の事を言っていた。この談話室やリビングスペース、そしてそれぞれが就寝時に使わせてもらつてる部屋よりも更に一回り広いのに物は殆ど置いておらず、がらんとした部屋。彼女は何日か前、今日と同じ様な雨の日にそこで由紀とキャッチボールした事を思い出す。あそこは広くて無駄な物もないので、軽い運動くらいなら可能なはずだ。

由紀「ん〜、そうだね！りーさん、私も雨の日はあの部屋使えば大丈夫だと思うよ」

悠里「そう…？本当に大丈夫かしら…：…」

住まわせてもらつてる身でありながらあちこちの部屋を使うのはどうかと思う悠里だが、この屋敷の主である柳は以前、『殆どの部屋は自由に使つてくれて構わない』と言っていた。なら、変に遠慮はしなくて良いのかも知れない。悠里は多少悩んだが、その後も胡桃と由紀に説得されて最終的には折れ、今日はその部屋で軽い運動をする事にした。

幾ら広いといっても室内で走り回るのは気が引けるので少し腕立

て伏せしたり腹筋運動をしたり、後は由紀のリクエストに応えてキャッチボールをしたりといっただけの本当に軽い運動だったのだが、悠里はそれだけでも微かに息切れを起こしてしまう…。

悠里「はあ…はあ…体力、もつとつけなきやダメね…。美紀さんは大丈夫なの？」

美紀「少し疲れましたが、まだ平気ですよ」

悠里「そう…意外と体力あるのね…」

部屋の隅でそんなやり取りをする悠里と美紀をそばから眺めていた彼はふと思う…。悠里はただ体力が無いというだけでなく体の一部に…もつと言うと胸に大きな重り同然の立派な物が存在しているから、余計に体力を使うのではないかと…。当然、こんな事は心の中でしか言えない。直接口に出したら悠里にも…他のみんなにも怒られる可能性があるから。

その後、幾らかの時間が経過して室内での運動を終えた後は各自適当に自由時間を過ごす事となったのだが、ここで悠里がある事を提案した。それは悠里、美紀、胡桃、由紀…そして今は別室にいるであろう真冬も誘って女子だけでお喋りしよう、というものだった。

由紀「お〜!!いいね!女子トークってやつ?やりたいやりたい♪」

胡桃「じゃあ久々にやるか。残念だったな、男子は抜きだったよ」

胡桃はからかうようにニタニタと笑い、隣にいた彼の肩をツンツンと小突く。

「ま、ちょうど眠たくなってきてたし、僕は一人昼寝でもしてるよ」

女子限定の話…興味が無いわけではないが、混ざるわけにもいかない。

彼はあくび一つするとみんなと別れ、言った通り自室で昼寝をする事にした。

一方、悠里達はどうとちようど廊下を歩いてた真冬を捕まえてそのまま悠里の部屋へと向かっていく。道中、適当なお菓子と飲み物

も幾らか確保して部屋に入った彼女らは突然の事に戸惑っている真冬に事情を告げ、女子だけの時間を始めた…。

真冬「…事情は分かったけど、女の子だけで話す事って何…？」

美紀「わ、私に聞かれても……………」

真冬がそつと尋ねてくるが、美紀はどう答えるべきか分からない…。

困った美紀が向かいに腰を落としている悠里に視線で助けを求めると、悠里はニコツと微笑んだ。

悠里「そうね、女の子だけで話す事と言ったら……………定番なのは恋愛話よね？」

頬に手を添えながらニヤニヤと微笑む悠里…その視線は美紀と真冬に向けられた後にじつくりと移動し、やがて悠里の隣に座っていた胡桃の瞳へと向けられる。

胡桃「…なんであたしの方見ながら言うんだよ…？」

悠里「だって、胡桃もそういう話は好きでしょ？それに……………恋愛関係の話と聞いて何か報告する事とかない？」

胡桃「ほ、報告する事って……………」

笑顔の悠里がヌツと近付き、胡桃の心拍数が一気に上がる…。

報告する事……………それはつまり、彼と付き合い始めた事についてだろうか…？そうだとして、何故悠里がそれを知っている？胡桃は咄嗟に美紀へ視線を向けるが、美紀は慌てた様に首を横に振り『私は何も言ってません』というアピールをしていた。

悠里「あら？その様子だと美紀さんも気付いてたのかしら？」

由紀「…え？なにに？何のこと？」

美紀の反応を見た悠里は何かを察し、由紀が二人に視線を向ける。悠里の発言を聞いた美紀はだんだんと顔が赤くなっていく胡桃を目の当たりにして何だか気ままずくなってしまい、紙コップに注いだジュースを無言でちびちびと飲む…。

悠里「本人の口から言われるまで放っておこうと思っただけど、中々言ってくれないんだもの。ねえ胡桃、そろそろ良いんじゃない? こういうのって明るいニユースなんだから」

胡桃「そ…そんな事言われても、なんの事か……」

悠里「最近、彼という時間多くなってるでしょう? ふとした時の距離が近くなってるような気がするし、ここのところ胡桃の顔色がパアツと明るくなったから、もしかして……って思ってるんだけど」  
確信に近いものを感じているのだろう…悠里は微笑みを崩さぬまま胡桃を凝視し、追い詰める。彼との事を聞かれてもすぐに反論はせず、オドオドしながらただ顔を真っ赤にしてる胡桃のその反応が全てを物語っていた。

由紀「…どういう事かな?」

今一つ話について行けない由紀は真冬の横に移り、真冬に問う。

真冬はニヤニヤ状態の悠里、無言のままジュースを飲む美紀、赤面状態で狼狽する胡桃を順に観察した後でここまでの会話を思い出し、一つの答えを導き出す。

真冬「胡桃…?!?!…赤ちゃん出来た………?」

胡桃「なツ…?!?!」

尋ねた途端、胡桃は大口を開けたまま固まり、耳まで赤くする。

美紀は飲んでいたジュースを噴き出して咳き込み、悠里は下を向いてクスクスと笑い出す。

胡桃「そ、そんなわけねえだろっつ!!!!!!」

真冬「ああ、やっぱり違った…? ごめん! ごめん…」

美紀「げほげほっ!! げほっ!!! ごほっ!!!」

由紀「みーくん大丈夫??」

美紀は咳き込みながらも溢したジュースをタオルで拭い、由紀はそんな彼女の背を擦る。真冬も美紀の背を数回ポンポンと叩いた後、『冗談冗談』と呟いてニヤリと笑ったが胡桃は相変わらず真っ赤な顔だ。



その後少しして美紀の咳が落ち着いた頃になると胡桃も落ち着きを取り戻し、周りにいる全員の顔を一人ずつゆっくり見回すと、最後に悠里を見つめてため息をつく。

胡桃「で、リーさんはあたしに何を言わせたいんだよ」

悠里「ふふっ、最近、彼と何かあったのかな〜って♪」

胡桃「何かあったのかって……別に……」

そっぽ向いて呟いてみても、悠里はただニコニコと微笑みながらこちらを見ている……。彼女の視線が自分に向けられたまま動こうとしない事に気付いた胡桃はまたほんのり頬を赤く染め、微かに顔を俯ける。

胡桃「前より少しだけ……仲良くなった……それだけだよー」

みんなの前で打ち明けるのは恥ずかしくて“付き合う事になった”というふうには言えなかった……。が、その回りくどい答え方でも悠里達は察したらしく、胡桃を見ながら瞳をキラキラと輝かせる。

悠里「もつとハッキリ言っちゃえば良いのに、胡桃ったら照れてるの?」

胡桃「うるさいっ……」

悠里「あらあら、照れちやつて可愛い〜♪」

悪戯な笑みを浮かべる悠里に対し、胡桃はそつと右手を伸ばす。

彼女はそのまま悠里の頬をペシツと叩いて反撃したが、余程照れてしまっているのか……その手には殆ど力が入っておらず痛くも痒くもない。

悠里「けど、そんなに照れる事もないのに。わりとバレバレだったわよ?」

胡桃「なっ?!?ウソつけ!!」

悠里「嘘じゃないわ。だって胡桃、最近夕飯終わるとすぐ彼の部屋に遊びにいってるでしょ?朝だって二人一緒にいること多いし、話してる時もやたらと楽しそうな表情してるもの」

そう指摘された胡桃は大きく開いた目を丸くして悠里から視線を

逸らし、恥ずかしげに身を揺らす。胡桃と彼は以前からもわりと仲は良かったが、最近になってまた一層親しくなっているという事に気付いていた者は多かったようだ。

胡桃「真冬も気付いてたか……？」

真冬「えっ……？まあ……なんとなく……？」

胡桃「……由紀は？」

由紀「うくん、よく分かんないかな。だって彼と胡桃ちゃんっても結構前から仲良ささんだったでしょ？」

胡桃「そうか……？ああもう、何かすげえハズい……」

周りから見た際、自分はそんなにも彼と仲良くしてたのだろうか……。

付き合い始めてからはともかく、その前まではただの友人として普通に接してきたつもりだったのだが……。

由紀「え？という事はつまり……胡桃ちゃん、彼と付き合い合ってるの!？」  
とうとう由紀も会話に追い付き、目を輝かせる。胡桃は何も答えず無言で顔を背けたが由紀は真正面に回り込み、胡桃の両肩に手を乗せてピョンピョンと跳ねる。

由紀「すごいすごいっ!!青春って感じ!!ねえ、どっちから告白したのっ!?!胡桃ちゃんは彼のどういうところが好きなのっ!?!」

悠里「あ、それは私も気になるわ〜♪」

胡桃「なっっ……!!どうでも良いだろそんなことっ!!!」

付き合い合っているという事が明かされただけでもかなり恥ずかしいのに、これ以上は耐えられない。胡桃は由紀を払いのけるが完全に逃れる事は出来ず、その後も由紀と悠里にあれこれ質問責めされる事となった……。

《New!!》『未来』

悠里「このあとは勉強の時間だから、少ししたら集まってね」

昼食後、悠里が食器類を片付けながら笑顔で言う。

美紀はそれにコクリと頷いていたが彼と胡桃、そして由紀は少しだけ苦い表情を浮かべていた。やれる時にやっておいた方が良いと分かってはいるが、やはり勉強は苦手なのだろう。

由紀「でも……しつかりやらなきゃだね……」

まずは自室にある勉強道具を取ってこなければ……。

由紀はリビングをあとにする廊下を進み、自室を目指す。その途中、何やら大きな箱を抱えて歩く真冬とすれ違った。

由紀「真冬ちゃん、それなくに？」

真冬「え？ああ……少し作ってみたいのがあって……」

由紀はそばに寄って箱の中を覗いて見る。

その中には何かの部品のように見える金属の板やコード等が詰め込まれていた。

由紀「おー……これで何作るの？」

真冬「今この屋敷にある物以上に遠くの電波まで拾える無線機とか、そういうの作ってみたいなって……」

由紀「無線機……？真冬ちゃん、そんなの作れるの!？」

真冬「まあ……それなりには。必要なものが全部揃ってるわけじゃないし、ボクの知識もまだまだだから、失敗作も沢山ある。だから今回のも失敗するかもだけど……暇潰し感覚でやってみるよ」

箱を持って立ち去る真冬を見送り、由紀はふと思ひ出す。

そういえば以前、柳が言っていた……。真冬は機械に強く、故障した物を直したりする事はもちろん、自分でも何かを作ったりする事があるらしい。由紀は機械についての知識がさっぱりだった為、自分ですういう事が出来る真冬は凄い子なんだなあと感じた後、自室にある

勉強道具を手にして再度リビングに集まり、みんなと共に勉強を始めた…。

——それから数日後、みんなが運動の為に庭に出ていると、その隅で何やらそこそそとしている真冬を見かける。

「真冬、何してるの？」

広い庭の隅にある木の下…真冬はそこに身を屈め、何かをしている。不審に思った彼が背後から声をかけると、真冬は驚いたようにビクツと震えてゆっくり振り向く。

真冬「ああ…その、ちよつとしたテストを…」

「テスト？」

こちらに振り向く真冬…その前には妙な機械が置かれていた。

幾つかのボタン、ダイヤル、そして真上にピンと伸びた銀色のアンテナ…。最初はラジカセか何かかと思っただが、どうも違うらしい。みんなは真冬が置いていたそれを不思議そうに見つめ、やがて美紀が尋ねた。

美紀「テストって、これが動くかどうか試してるってこと？」

というか、これってそもそも何なの？」

真冬「えつと…ボクが作った無線機…。今屋敷にあるものよりもつと広範囲に使えるものがあつたら便利だなと思つて色々やってみるんだけど…」

胡桃「…なるほど、上手くいってないわけだな？」

胡桃の言葉に対し、真冬は苦笑して頷く。

遠くの電波を拾おうとしてみたり、逆に送信してみたり、色々やっているようだが、ちゃんと動作しないらしい。

由紀「あ！それってこの前作ろうとしてたやつだよな？」

真冬「そう…。ボクのイメージではこれで凄く遠くの人…海外の人とか、何なら宇宙人とだつてやり取りが出来たりするはずだったのに…」

悠里「もし宇宙人と話せたとしても、言葉が分からなきやどうしよ

うもない気がするけど……」

冗談なのか本気なのか分からない事を言いながら、真冬はそつと立ち上がる。作った機械がキッチンと動作せずに終わったのがほんの少しシヨックだったのか、彼女はそれを木の下に放置したまま屋敷へと戻ってしまった。

美紀「これ、どうします？電源ついてるみたいですけど」

悠里「まだ何かテストしてるのかしら……勝手に触っちゃ悪いし、そのままにしておきましょう。また後で狭山さんに確認すれば大丈夫でしょう」

みんなもそれを放置して、各自運動を始める。

あとで真冬本人に確認すれば大丈夫だと悠里は言ったが、運動を終えて屋敷に戻った後も、夕飯の時も……みんなはその確認をする事をすっかり忘れてしまい、例の機械は結局、電源の入ったまま一晩中放置される事に……。

その日の夜は突如として激しい雨が降り、風が吹き、雷が鳴るような荒れた天気だった。そんな中でもその機械は電源ランプをチカチカと点灯させていたが、やがてその点灯が激しくなる

---

翌朝、空は綺麗に晴れ渡っていた。

しかし昨晚は遅くまで大雨だったために外にはまだ水溜りが出来ており、庭はグシヨグシヨになっている。朝食前に日の光でも浴びようと外に出た彼は庭をぐるぐると歩き回っていたのだが、その途中……庭の隅の木の下、ちょうど昨日、真冬が変な機械を置いていた辺りに倒れている人影が視界に入り、慌ててそばへと駆け寄っていく。

水溜りを踏む事も躊躇わず真っ直ぐに駆け寄った彼はまず、その人が”かれら”ではないかという確認をした。そこに倒れていたのは一人の少女……。年齢は恐らく13〜14才くらいだろうか。紺色の

パーカー、茶色の短パンという格好をしているその少女は気を失っているらしく、首元まで伸びたほんのり青みがかかった黒髪も衣服も泥だらけにして倒れている。

「ねえ君、大丈夫？」

見たところ大きな怪我をしているようには見えないし、”かれら”に噛まれているようにも見えない……。彼は肩に手を置いて揺さぶるが、少女は目を覚まさない。何にせよ、ここに置いてはおけないだろう。彼は少女を背負うとそのまま屋敷に戻り、柳に事情を話す事にした。

柳「外にいた？外というのは……この家の敷地の外かい？」

「いや、庭にいました。庭の木の下に一人で……」

柳「庭に……それはそれは、どういう事だろうね」

ソファの上に横たわらせている少女を見つめ、柳は首を傾げる。

それから少しして彼は他のみんなにも事情を話し、気付けば由紀、美紀、悠里、胡桃、真冬も少女のそばにやって来て彼女を興味深そうに見つめ始めた。

悠里「怪我はしてないのよね？」

美紀「なら、すぐに目を覚ましそうですか……」

何故あんな場所にいたのか、何故気を失っているのか、どこから来たのか、気になる事が沢山ある。彼女が目を覚ましさえすれば色々分かるのだろうか……。

真冬「この子の荷物とかは？」

「特に無し。食料も持たず武器も持たず、手ぶらだった」

胡桃「一人で……それも手ぶらで生き延びてた？いくら何でもそれはあり得ないよな？」

美紀「多分、仲間の人とはぐれてしまったとかじゃないですかね」

こんな女の子が一人で生き延びてきたとは流石に考えづらい。

美紀の言うように、どこかにいる仲間とはぐれてしまったのだら

う。

だとしたら、その仲間を探してあげるべきだろうか……。みんなであれこれ考えていると少女は静かに呻き声をあげ、ゆっくり目を開いた…。

少女「ん、んんん……………」

由紀「あ！目が覚めた？大丈夫？」

由紀が心配そうに尋ねる。

少女はまず目の前の由紀、そしてそのそばにいる悠里、美紀、真冬、そして彼と胡桃を見つめ、驚いたように飛び起きる。

少女「あ…ああ……………まさか……………うそ…」

かなり動揺しているのか、大きく開いた口が一向に閉じない。

少女はソファから降りると逃げようにして部屋の隅で丸くなり、両手で頭を抱えながら額に汗を流していた。

少女「夢…じゃない…？まさかホントにあんなので……………」

悠里「ね、ねえ？大丈夫？どこか痛かったり……………」

少女「だっ、大丈夫です!!痛いところとかは特に無くて……………ただ、その…えつと……………」

悠里「とりあえず落ち着いて？まず……………名前、あなたの名前を教えてくださいるかしら？」

目が覚めた時、知らない場所において知らない人達に囲まれていたらそりや驚きもするだろう。悠里は少女をこれ以上不安にさせたりしないようにと優しい笑みを浮かべ、名前を尋ねる。すると少女は視線を左右に泳がせた後、そつと悠里の目を見つめ返した…。

未来「未来……………あたし、未来みくつていいいます…。未来みらい”つて書いて……………未来……………」

少女は……………未来は小さく頭を下げ、再び悠里と目を合わせる。そして悠里の背後にいる柳、由紀や美紀、胡桃と彼を見つめ、額に冷や汗を流し始めた…。

## 外伝

### 一話『動き出す者達』

”奴ら”は突如現れ次々と人々を襲っていった。

生存者の数は日に日に減り続け…それに比例するように奴らは数を増やし続けた…奴らに噛まれたり、引つ搔かれた人間はすぐに奴らと同じようになり…そしてまた生きた人間を探し、襲い、数を増やす。

その姿は俗に言う”ゾンビ”そのもの…外の世界は奴らで溢れかえっている。

もう生存者は数える程しか残っていないかも知れない…。

…だから感謝してくれ、私は君を奴らになる前に救ってあげただから。

両手を鎖に繋がれ、身動きが出来ない一人の男に、見慣れないスーツ姿の男が言った。

??? 「……あんたは？」

柳「私は柳恭介…君の命の恩人だよ。」

??? 「恩人？」

柳「ああそうだ…まさか覚えてないとは言わないよな？」

??? 「さあ…どうだろうな。」

柳「ふむ…まあ私の仲間が見付けた時、君は死にかけていたしな…、無理はないかもしれん。…では君は何故自分が死にかけていたかは覚えてるかな？」



??? 「…まあ見当くらしいは。」

柳「そうか、では一応私の方から説明してやろう。」

そう言つて、柳は男の前に椅子を引きずると、そこに腰かけ語りだした。

柳「街の外れ…その道路の真ん中で倒れていた君を私の仲間が見つけた。」

柳「どうやら奴らに噛まれ、逃げている途中で行き倒れたようだね。」

柳「倒れた付近に奴らがいなくて良かった、もし奴らの群れの中で倒れたら最悪の場合、治療不可能な程食い漁られていただろうさ。」

柳「そんなことにならずに良かったよ。私は君のファンだからね。  
神崎圭一君？」

圭一「…ファン？」

柳「ああそうだ。当時は多くのニュースで取り上げられていたし…どの交番にも必ずと言つていい程君の指名手配書が貼られている。仕事場で上司を殺し、更には駆け付けた警官を二人殺して逃亡…、凄いな…警官を殺すなんて、普通は出来やしないよ。」

圭一「逃げるのに邪魔だったからな。」

柳「ふふっ…そうか。…では上司は何故殺したんだい？詳しく知りたいな。」

圭一「べつに…ただアイツが無能のクセ俺の癩かんに触る事を言ってきたから、ムカついて殺した。…それだけだ、イヤなんだよ…俺より劣っている人間にあれこれ言われるのは。」

柳「なるほど…良く分かるよ、私も似たようなものだ。」

柳「…おっと、私の話は別にしないでいいか」

柳「…ともあれ、君を見つけたのが私達で良かったな、そのおかげでこの面白い世界を味わう事が出来たのだから。」

圭一「どうだろうな…。お前、さつき奴らに噛まれたりした人間は奴らと同じようになると言っていただろう？そして…俺は噛まれて

いる」

圭一「つまりじきに奴らの仲間入りって事になる。…残念だったな、あんたは命の恩人を気取りたかったみたいだが…ただ怪我の治療だけしても無駄なんだろう？」

圭一は腹部に巻かれた包帯を見ながら柳にそう言った。

柳「いや？私は完全に君の命の恩人だよ。私が君に施したのは只の治療ではないからね。」

柳がニヤリと笑う。

圭一「…どういうことだ？」

柳「…確かに君の言った通り、奴らに怪我を負わされたらただ治療したってその人間はじきに奴らと同じ…歩く死体になる。…だがそれに対するワクチンも存在するんだよ。」

圭一「なるほど…お前はそのワクチンを俺に使ったのか。」

柳「ああ、だがそのワクチンはどうやら完璧ではないみたいだ。奴らのウイルスの進行を一時的に止めるだけの物のようでね…。もしかしたら継続的な投与を前提として作られたのかもしれないが、生憎もうそこまで残っていない。」

圭一「何だど？だったらとつとと完全な物にしてほしいもんだな。」

柳「無茶を言うな。…いや、私なら完全な物に出来るかも知れないが。…もう少し時間が必要だ、いかんせんこのワクチンも拾い物で詳しい事は分かっていなくてね。」

圭一「拾い物かよ…。」

圭一はそう言っただけ息をつく。

柳「ああ、だが安心しろ。…君には完全なワクチンよりも更に素晴らしい物をプレゼントした。」

圭一「素晴らしい物って…何だっというんだ？」

柳「そのワクチンに少し手を加え、私が元々開発していた薬品を混合した物だ」

圭一「お前が開発していた薬…なんだよそれ…」

柳「まあ簡単に言えば超人的な力を得れる薬だな、詳しい事はその内話すよ」

圭一「超人的？」

その言葉が気になった圭一は柳に尋ねる。

柳「どんな人間も、この薬を使えばそれだけで身体能力が跳ね上がる。人によっては、ちよつとした格闘家くらいには勝てるかもな」

柳はそう自慢気に話した。

圭一「バカな…ただ薬を使っただけで、そこまで人間が強くなるのか？」

柳「ああ、強くなる。我ながら良い物を作ったと思っているよ…」

圭一「いやいや…あり得ないだろ。ドーピングにも程がある。」

柳「じゃあ聞くが…死体が歩くのとどっちがあり得ない？」

圭一「死体が歩く方がまだ分かる。」

圭一は即答した。

柳「…まあ良い、私の開発した薬がいかに素晴らしい物か…後で外で試すと良い。」

そう言つて、少し不満そうな顔をする柳。

圭一「んで、俺はそれを打たれて超人になった…以上か？」

柳「良く聞いてくれたな…、私の薬は人間の細胞を進化させてより強くするのだが…その進化させる対象は人間の細胞だけじゃなかつ

たんだ。」

柳が明るい表情になる。

圭一「…は？」

柳「人間の身体だけじゃなく、混合して使用する事で：ワクチンの効果も進化させる事が出来た。それにより進化したワクチンはウイルスの進行を完全に止める。」

圭一「へえ…そりや凄いな、だったらとっととその薬を量産して、世の中に配ってやればどうだ？」

柳「残念だがそれは出来ない。大きな理由が3つある。」

圭一「なんだ？」

柳「まず第一に、私の薬は拒絶反応が確実に起こる、力を手に入れる為にはこの拒絶反応を乗り越えなくてはならない。」

柳「君にこの薬品を試したのもかなりの賭けだった。今までにこの薬品を十五人程の生存者に試したが、生き残ったのは君を入れ三人だけ。…その君もこの数日間ずっと拒絶反応に苦しみながら眠っていたんだ。」

圭一「へえ、そうだったのか…で、その生き残った二人は今どこに？」

柳「今も元気に外部の偵察に行っている、彼等は今や私の忠実な犬だからね。」

圭一「…犬だと？なんだ、この薬にはお前に従うようになる成分でも入っているのか？」

柳「いやいや、彼等が望んでそうなったんだよ。」

柳はそう言って不気味に笑う…

圭一はその笑顔に嫌悪感を抱きつつ、次の理由を尋ねた。

圭一「…そうかい、…で、2つ目の理由は？」

柳「残念ながらベースとなるワクチンのストックがもう僅かしかない、今までに無駄遣いし過ぎたな」

柳が苦笑いする。

圭一「十五人もの人間に試し打ちしてたら、そりやそうなるか。…その残り少ないワクチンを複製したりとか出来ないのか？」

柳「難しいな…かなりの時間もかかる。」

圭一「それは残念…じゃあ三つ目は？」

柳「…ああ、これが一番重要なんだが。」

柳は椅子から立ち上がり、圭一に顔を近付けて言った。

柳「もし仮に、この薬がウイルスの進行を完全に止め…しかも拒絶反応も無く、大量に量産出来たとして…」

柳「何故見ず知らずの人間共に配らねばならない？せつかく面白い世の中になったんだ、私はこの薬で人は救わない。…私にとって有益な人間にだけこの薬を与えながら、この世界を楽しませてもらう。」

圭一「楽しむ？」

柳「ああそうだ、世界がこうなった以上、殺しも略奪も自由自在だぞ？…これを楽しまずにどうする？」

圭一「なるほどね…一理あるかもな。…ところで、今更だがお前は何かの研究者だったのか？」

柳「ああ、ある施設でちよつとした薬品の研究をしていた。…もつとも、世界がこうなる数日前に追い出されたが…」

柳「まあ役立たずに囲まれて研究するより、こちらの方が遥かに調子がいいし…必要な物は探し出せばタダで手に入る…良い事ばかりだ。」

圭一「…そうか。」

柳「…そういう訳でだ…。」

柳が近くのテーブルにあったナイフを手に取り、脅すような口調で圭一に言った。

柳「…君は勿論、私に協力してくれるよね？」

圭一「…そのナイフは何だ、脅しのつもりか？」

柳「まあそんなとこだ、早く返事をくれ、あの薬をの拒絶反応を乗り越えた者は目を覚ましてからおおよそ5分程で薬が完全に体に馴染む。」

柳「しかも君に投与したのは他の二人のより更に改良を加えた特別製だ…体に力が馴染んだら恐らく君は手を繋ぐその鎖さえ引きちぎる事が出来るだろう。」

柳「そうなれば私は君を止められない、だからその前に返事を聞くとよ…今は君が目を覚まして……おや？」

突如、柳がテーブルの上の置き時計をみて間抜けな声をあげる。

圭一「…何だ？どうかしたか？」

柳「…んー。」

柳は急に大人しくなり、持っていたナイフもテーブルに戻した。

圭一「？」

柳「7分も経っていた、君が目覚めてからね。」

圭一「…ということは俺はもうあんたの作った薬の力を得ていると？」

柳「そういう事だ。…あ！鎖はちぎるなよ？まだ使うかもしれない…」

圭一「じゃあ俺はもうお前に脅される事も無いわけだ。」

柳「そうだな。参った参った。……だがあえて、まだ交渉させてくれないか？」

柳が真面目な顔で言った。

圭一「…言ってみろ。」

柳「君はもう奴らのウィルスには悩まされたい、しかもその鎖もその気になれば外す事が出来る…私に従う義理は無い訳だが…それでも私の下につかないか？」

圭一「お前の犬になれと？」

柳を睨み付けて言う圭一。

柳「ああ、そうしてくれると嬉しいね。」

柳はそれに全く臆す事無く言い切った。

圭一「俺は無能なクセに偉そうなヤツが嫌いなんだが…」

柳「…？…私が無能だと思うか？」

圭一「……………」

柳「……………」

圭一「…まだその薬だかの力を信じた訳じゃないが、分かったよ…どうせ帰る場所もないし、暇潰しにあんたの犬になってやろう。だけでも飽きたらすぐに出ていくからな？」

柳「それで結構…では待ってくれ、今鎖を外す。」

柳はそう言うのとポケットから鍵を取り出し、その鍵で鎖を外した。

ジャラジャラジャラ！

圭一「ふう…さて、具体的に俺は何をすれば良いんだ？」

柳「簡単だ。外に出向き、出会った生存者やゾンビの奴らでも殺して回りながら体の調子を報告してくれば良い。たまに必要な物資を取ってきてもらったりもするが。」

その時部屋の扉が開き、二つの人影が部屋に入ってきた。

柳「ちようど良かった、穂村君、狭山君…お帰り。」

穂村「あれ？彼起きたんですか？」

茶色の髪を肩まで伸ばしたヤンキー風の穂村と呼ばれた男が言った。

柳「ああ、仲良くしてやってくれ。…圭一君、彼は穂村竜也<sup>ほむらたつや</sup>。さつき話した二人の内の一人だ。元々は大きな不良グループのリーダーだったらしい、世間一般的には中々の危険人物の部類だが…仲間に対しては友好的だから安心してくれて良い。」

穂村「よろしく！」

穂村が握手を求める。

圭一「…ああ、よろしく。」

そう言いながら圭一は手を差し出して握手を交わす。

柳「…さて、それでこちらが…」

狭山「……狭山真冬<sup>さやままふゆ</sup>……よろしく」

黒髪の、一見大人しそうな狭山という少女が、握手は求めず挨拶だけしてきた。

圭一「ん？ああ…よろしく。」

圭一「意外だ、こんな若い子もいたんだな？」

狭山を見ながら、柳に言った。

柳「ああ、17才だったかな？」

柳が狭山に尋ねる。

狭山「…うん。」



圭一「へえ…」

狭山を見つめる圭一。

穂村「…胸ないなあ、とか思うでしょ？」

穂村がニヤニヤと笑いながら言う、狭山がそれを無言で睨む。

圭一「俺は別にそんな下らない事は思っていないが…その様子だと気にしてるのか？」

狭山「…別に…胸の大きさとかどうでも良い。…いや、むしろ小さい方が良い…大きくても邪魔なだけ…」

狭山は俯きながら言った。

…が、それはどう見ても…

穂村「100%強がりだな…」

圭一「…まあ分かった。俺は神崎圭一…二人共、改めてよろしく頼む」

穂村「ああ！」

狭山「…うん」

柳「…それで、今日は何かあったかな？」

柳が狭山と穂村に尋ねる。

穂村「北にある工場の中に、生存者の集団がいるみたいだ。物資を探しに外を探索していたその仲間の連中から聞き出した。」

柳「ほう…何人いるのかな？」

穂村「全員で6人だったみたいだが、内3人は物資探索班…まあその3人は俺達がもう殺したから、残りは3人だな。…行ってきても良いだろ？」

穂村が恐ろしい事をさらっと…とても嬉しそうに言った。

柳「もちろんだ。…今度は圭一君も一緒に行くといい。」

圭一「了解。」

穂村「助かるぜ！その3人の物資が邪魔だったから一回ここに置きに戻ったんだけど、仲間が増えりや持って帰れる物資も増える！」

狭山「…今すぐ行っても？」

柳「ああ、かまわないよ。」

穂村「んじや行こうぜ！狭山！神崎さん！」

圭一「ああ…これがあんたの犬になっての初仕事って訳だな？」  
柳に向けて言った。

柳「そうだ、…だが君達はただの犬とは違うな」

圭一「なんだ…ナズイヌか？」

圭一が冗談として昔のアニメのマスコットキャラの名を出す。  
するとそれを聞いた穂村が爆笑し、狭山も少しだけ笑った。

穂村「あははははっ!!!」

狭山「…ふふっ」

柳「いやいや、君達はただ生易しいお使いをこなすだけではない

…これから生存者共を追い詰め、殺してまわろうと言うんだ…」

柳「…猟犬と言った方がそれっぽいな。」

柳が圭一達三人を見回して言った。

穂村「お？何それ、カツコいー！…じゃあこれから俺達は猟犬部隊と名乗ろうぜ!!」

圭一「ネーミングセンスが中学生レベル…しかも部隊なのにメンバーは三人かよ。」

狭山「……ボクはナマズイヌ部隊の方が良かったな。」

柳「ああそうだ……君達、これを首に着けておいてくれ。」

柳はそう言つて三人に黒い首輪のような物を渡す。

よく見れば細いコードがついていて、小さな端末のような物と繋がっていた。

圭一「おいおい……なんだこの首輪は、本格的に犬になれつて？」

柳「いや、それは無線機だ。昨日やつと完成してね、通信手段があると何かと便利だろう？」

穂村「うわあく超ハイテクじゃん！」

穂村がその無線機を前にテンションを上げる。

圭一「あんた……葉だけじゃなく、こんなのも作れるのか」

柳「それに関しては私は手伝っただけで、主な製作は狭山君がやってくれた。狭山君は機械に強いからね。」

圭一「これ……一から作ったのか？」

狭山「……ううん、既製品を解体して自分好みに改良した……足りない部品集めが大変だった」

圭一「……こいつは何者だ？」

柳「凄い娘だろ？……狭山君はうちの優秀な技術担当だ。」

圭一「若いのに……凄いんだな」

狭山「……どうも。」

穂村「てかさ……既製品を見付けてたなら、普通にそれを使った方が楽に済んだんじゃないか？」

手渡された無線機を見つめながら穂村が言う。

すると狭山はほんの一瞬ムツとしたような表情を見せ、穂村へと返

事を返した。

狭山「…自分で作り直した方がデザインも自由に出来る」

穂村「はあ…つまりこの真つ黒な首輪みたいなデザイン、お前が好きでこうしたって事か？」

狭山「…うん、シンプルで可愛い。…満足のいく出来」

そう言つて首輪(無線機)を見つめる狭山だが、満足していると言っているわりには無表情だ。恐らく、感じたことを表情に出さないタイプなのだろう。

穂村「ふうくん…まあ準備も済んだし、今度こそ行こうぜ！」

圭一「…腹が減つた、まずは食事にしたい。」

圭一の発言を聞いて、準備万端の穂村は肩を落とす。

穂村「のわあ〜！…まあ仕方ないか。柳さん、何か適当に食わせてから行くよ。」

柳「ああ、ご自由に…」

柳に見送られて部屋から出て階段を上がつて行くと、大きな廊下に出た…先程の部屋は地下にあつたようだ、赤い絨毯の敷かれた廊下を歩く穂村と狭山についていき一つの部屋に案内され、その部屋のテーブルの前に座り待たされる。

穂村「…へいお待ち」

そう言つて部屋の奥から現れた穂村がテーブルに置いたのは、数種類のパンだった。しかも温められている。

圭一「…なんでパン？」

狭山「…柳さんが趣味でよく作るから…」

圭一の疑問に隣の席の狭山が答えた。

圭一「薬作ったりパン作ったり…忙しいやつだな。」

狭山「…穂村、ボクも一個食べる…適当なの持ってきて。」

穂村「お前もかよ…ちよつと待ってる。」

穂村が文句を言いながらまた部屋の奥に戻る。

狭山「……………」

圭一「なあ？」

圭一は差し出されたパンを口に運びつつ、隣の狭山に声をかける。

狭山「…なに？」

圭一「柳が言ってたけど、俺達は本当に超人的な力を持っているのか？」

狭山「…うん、柳さんの薬は身体能力とかを進化させる物…でも元々その薬の効果は大したことはなく、投薬前の二倍程の力が発揮できるかどうか…その程度だった。」

圭一「十分スゴいけどな、お前…感覚マヒしてるぞ」

狭山「…かもね、でも二倍だよ？その程度の効果なのにあの拒絶反応…十五人に試して生き残ったのが三人だけって、少しリスク過ぎると思わない？」

圭一「あれは感染者共のウイルスで死にかけている人間に投与したからこそその死亡率じゃないのか？」

狭山「…違う、柳さんの薬は完全な健康時に投与してもあの死亡率の拒絶反応が起こる。本人がそう言ってた…」

圭一「そうなのか、俺はてつきりあいつの薬と感染者のウイルスが喧嘩して酷い拒絶反応を起こすのかと思ったよ。」

狭山「…あの薬とウイルスは喧嘩しない…むしろ逆…」

圭一「どういうことだ？」

狭山「…さつき言ったように…柳さんの薬はたとえ拒絶反応を乗り

越えてもその効果は低い：普通の人間に使った場合はね…」

狭山「…けどある条件を満たした人間に使えばその効果は凄まじくなる、それこそ超人的な力が手に入る程に。」

狭山の発言が理解できず、圭一は首を傾げる。

圭一「条件って?」

その問いに、狭山は少し間を開けてから答えた。

狭山「…感染者のウイルスを体内に含んでいる事。もっと分かりやすく言えば、奴らに噛まれている事」

圭一「は?」

狭山「…：奴らに噛まれた事で、ボク達は人間とあの化け物…：どちらの細胞も持っている存在になる…：そんなボク達が柳さんの薬を使うと…」

圭一「人間の細胞も化け物の細胞も…：どちらも強化されて並外れた身体能力を手に入れられると。そういう事か?」

狭山「…うん、でもそのままだと化け物の方の細胞が暴走してしまうから、薬と一緒に調整したワクチンを混ぜる。」

圭一「そうする事でワクチンの効果も進化して、ウイルスを永久に抑え込む事が出来ると…」

狭山「…柳さんは最初、自分の薬をワクチンと混ぜても…：進化したウイルスの力に負け、投与した人を一気にそのままゾンビ化させてしまうんじゃないかと思っていたみたい。」

狭山「…けど大丈夫だった。柳さんの薬はウイルスの有益な力だけを上手く引き出し、悪いところはワクチンが抑える…：そんな最高の結果を生んだ。まあ大抵の人間は拒絶反応で死ぬっていうリスクはあるけど…」

狭山「…でも結果として生き残り、薬の恩恵を最大限に受けたボク達は普通の人間では得られない身体能力を手に入れた…：他にも

色々便利な能力もあるし…」

圭一「便利な能力？」

狭山「…それは追々話すよ。」

狭山が話を終わるとちやうど穂村が戻ってきた。

穂村「待たせた…ほら。」

穂村はそう言つて狭山の前に一切れのトーストがのつた皿を置く。

狭山「…どうも」

穂村「台所から聞いてたけど…狭山珍しくたくさん喋つてたな？」

狭山とテーブルを挟んだ正面の席に穂村は座り、珍しそうに言つた。

狭山「…そう？」

トーストを両手で持ち、それを小さな口で食べながら狭山は答える。

穂村「基本一言ずつしか喋らないイメージだったから、少し驚いたわ。」

狭山「…そうかな？」

少しして圭一も狭山もパンを食べ終え、その部屋を後にした。

部屋を出た圭一は二人に案内され外に出る…  
外に出てその建物を振り返り…初めて気付く  
その家はとても大きな洋風の館だった。

圭一「…凄いな」

穂村「ん？…ああこの家か、元から柳さんの家みたいだぜ。あの人…メチャクチャ金持ちみたいだな。」

屋敷を眺める圭一に穂村が言う。

狭山「…ついでに言うところの屋敷には発電機とかもあるし、庭も広い上に塀も高いからわりと安全…こんな世界でも普通に暮らせるよ。」

圭一「発電機までねえ…こんな屋敷を持つてるなんて、何者なんだ…あいつは。」

柳が何者なのかと考えつつ…二人のパートナーと共に圭一は外へと飛び出す…

殺しも略奪も許される、力で支配出来る世界…圭一は表情には一切出していなかったが…内心では少し面白く感じ始めていた。



## 二話『初仕事』

圭一「…それで、目的地は？」

柳邸の庭の中…圭一は地図を手に持っている穂村に尋ねた。

穂村「ここから6km程の距離にある工場だね。」

穂村は地図をじっと眺めて場所を確認してから、その地図をウエストポーチにしまった。

圭一「分かった、案内しろ。」

三人は穂村を先頭にして歩き出す。

少し歩くと3m程の高さの門に道を阻まれたが、穂村がポケットから取り出した小さなリモコンのような物のスイッチを入れると…

その門はすぐ大きな音をたてて開いた。

穂村「どうかな？久しぶりの外は？」

外に出た直後、穂村が圭一の方を向いて尋ねる。

圭一「まあずっと眠っていた訳だから久しぶりって気はしない…、  
だが…随分と荒れたもんだ、とは思ったな。」

誰もいない住宅街を歩きながら…放置された車や窓の割れた民家  
所々に争ったような形跡を見つけ、圭一は呟いた。

圭一「…行くぞ。」

穂村「ほいほい」

歩き出して五分程たった時、穂村が言った。

穂村「神崎さんは…」

圭一「圭一で良い。」

穂村「わかった…圭一さんは柳さんの薬の力、もう実感してる？」

圭一「いや、まだ半分疑ってる…超人的な力とか言われてもな。」

穂村「そっか、じゃあちよつとストップ」

穂村の言葉を受けて三人は道路の真ん中で止まる。

穂村「圭一さん、あそこに感染者がいるだろ？」  
穂村が15m程離れた場所にいる感染者を指差す。

圭一「…ああ、いるな。」

穂村「何か気付かない？」

穂村にそう言われ、圭一はその感染者を観察する。  
ノロノロとうろつくその姿は何度見ても気味が悪い…。

圭一「…改めて見ると、見事なまでにゾンビって感じだよな。ホラー映画の世界に迷い混んだ気分だ」

穂村「まあそうだけども…今それはどうでもいいんだ」

圭一「…分からない。とつとと答えを言え」

狭山「…アレ…明らかにボクらが視界に入っているのに無視してるんだよ。」

もったいぶる穂村に代わり、狭山が答えた。

圭一「そういえば…襲い掛かってこないな。」

圭一は狭山に言われて気付く…

そのゾンビは確かに彼等を見ていたはずなのに、全く興味を示さずにふらふらとしていた。

狭山「…これも薬の力…ボク達はあの薬でウイルスを完全に抑え込

んではいるけど、抑え込んでいるだけで消した訳じゃない。…だから、奴らはそれを感じ取って、ボク達を仲間と勘違いする。」

圭一「便利だな…無駄に襲われずに済むわけだ。」

狭山「…そういうわけにはいかない、見てて」

そう言つて狭山は一人でゆっくりとゾンビのいる方に歩き出しつ、圭一に語りかける。

狭山「さつき言つたように…ボク達の中にあるウイルスを奴らは感じ取り、仲間だと勘違いする…けどそれは…。」

ゾンビに一歩ずつ近寄る狭山…

すると、ある一定の距離になった途端にそのゾンビは呻き声をあげて彼女を睨み付け…ゆっくりと近づいてきた。

狭山「…約10m以上離れている場合だけ、それよりも近寄ると…奴らはボク達を敵だと認識する」

近寄るゾンビに慌てる様子もなく語る狭山…

彼女はそつと自分の腰に手を伸ばし、棒のような物を取り出す。

その黒く細い棒は20cm程の長さだったが…先端部を狭山が引っ張ると内部に収納されていた分が引き出され、50cm程までの長さに変わった。

圭一「あれは…」

穂村「狭山の武器の一つ、特殊警棒みたいなもんだね。どつかから拾ったのか、自分で作ったのかは知らないけど…いつの間にか持ってた」

狭山「……………」

狭山は自らもそのゾンビに歩み寄っていく…

その距離が2 m程まで縮まるとゾンビが一際大きな声をあげて掴みかかろうと手を伸ばしてきたが、狭山は動じる事なくその手を払いのけ、そして…

狭山「……………」ブンツッ!

手を払いのけられてわずかにバランスを崩したゾンビの頭に、狭山はその棒を振り下ろす

頭を棒で殴られたゾンビは地面に叩きつけられるようにして倒れ…そのまま動く事はなかった。

圭一は穂村と共に狭山のもとに歩み寄り、倒れているゾンビが完全に死んでいるのを確認してから彼女に尋ねた。

圭一「改めて聞くが…10 m以上近寄ると奴らは俺達を敵と認識するんだな？」

狭山「…個体差はあるみたいだけど、大体そのくらいかな」

穂村「横やりを入れさせてもらうと、奴らは別に俺達を『敵』として認識してるわけじゃなくて、『餌』として認識してんじゃないかな

？」

ヘラヘラしながら穂村が言った

その発言を聞いた圭一はため息をつき、改めて狭山に話しかける。

圭一「：で、なんで奴らは離れている時は仲間だと勘違いするくせに、近寄ると『餌』だと認識するんだ？」

狭山「：ボクらは奴らのウイルスを体内に持っているとはいえ、半分はまだ人間。：だから奴らも、近くで見るとなんか違うなって思うんじゃない？」

圭一「そんなもんかね：」

狭山「うん：そんなもんだよ」

穂村「ま：10m離れてればバレないだけでもそこそこ便利でしょ？たま～に役に立つんだぜ？」

圭一「そうか：。ところで、俺達はもしかた感染者に噛まれたらどうなる？」

穂村「新しく噛まれてもウイルス自体はすぐに体の中のワクチンが抑えるから問題はないって柳さんが言ってたよ。」

圭一「：：そうか。」

狭山「…でも、噛まれたら痛いし。いくら身体を強化していても大勢に囲まれたらさすがに危ないから…そこは気を付けてね。」

圭一「大勢に囲まれたらウイルス関係なく普通に食い殺されるって事か…確かにそれは避けたいな。」

穂村「ま！中途半端な数じゃ俺達は殺れないけどね。」

圭一「……………」

狭山「…話が長くなった…先を急ごう？」

圭一「ああ。」

狭山の発言をきっかけに三人は再び歩き出す…

途中で穂村が道を間違えて遅れたりもしたが、なんとか目的の工場にたどり着いた。

圭一「ここか…」

穂村「うん。…じゃあ、お邪魔しようかね」

穂村はそう言って工場入口のシャッターを叩く。

バンバンバン!!

大きな音が辺りに鳴り響いた後、少ししてからシャッターの中から男の声が聞こえた。

「ほいほい、随分戻るのが遅かったな？」

中の男はそう言って内側からシャツターを上げていく。

ガラガラガラ：

十分に入れる程シャツターが上がったのを見計らって、三人はかがみながら中に入り：

中にいた男と顔を合わせた。

「！……お前ら誰だ!？」

壁際に付けられていたシャツターを上げる為のスイッチらしきもの：

男はそれから手を離して三人に言う。

穂村「…。」タツ：

「…!」

問いには答えずに、穂村は一瞬の間にして男に近付き…  
背後に回り込んでから両手でその首を絞めた。

穂村「俺らが誰とかは知らなくていいよ。…それよりも他の仲間は全員ここにいるかな？」



「ぐっ…っ！」

穂村「ああ…首を絞められてたら喋り辛いよな…、わるいわるい。」

そう言つて穂村は男の頭を捻り、首の骨を折る…

その際、辺りに鈍い音が鳴り響いた。

穂村「じゃ、喋らなくていいや。自分達で探すから。」

穂村が男から手を離すと、男はその場に崩れ落ちるように倒れ…  
二度と起き上がる事はなかった。

穂村「まず一人…あと二人いるハズだぜ？探そう探そう！」

圭一「容赦ないな。」

倒れた男を見ながら、圭一は穂村に言う。

穂村「ドン引きしたか？」

圭一「いや、別に…」

穂村「そりや良かった！」

満足そうに穂村はそう言つて、どんどん奥へ進んで行く。

圭一と狭山もそれに続いて奥に進み、残りの生存者を探す。

進んでいくと作業場らしき広いスペースや、休憩所と思われる個室を見て回ったが…

食料などの物資はあれど、生存者はいなかった。

因みに、見つけた物資は狭山が回収して持っている。

穂村「…見付からないな…どこだ？」

残りの二人を見付けられず、穂村が愚痴る。

圭一「中々広いからな、まあ…ゆっくり探せば」

穂村「やだよ！めんどくせー。」

食い気味に答えた穂村、そんな彼に…圭一は少しだけイラついた。

圭一「…じゃあ、物資は取ったし…もう帰るか？」

穂村「最終兵器だ…狭山先生!!」

穂村はそう言つて狭山の肩を叩く。

狭山「…わかったよ…少し静かに…」

狭山はそう言うと、そつとその目を閉じる…

何をしているのかは分からないが、集中しているようだ。

穂村「ほいほい……………」。

圭一「…………？」

狭山「……………」。

黙りこむ三人…

少しすると狭山は目を開き、そして言った。

狭山「…残りの二人、ちよつと外出していたのかな？…でもちよつど帰ってきたみたい。車の音がするよ」

圭一「車の音？俺には聞こえないが…」

狭山の真似をして耳を澄ますが、圭一には何も聞こえない。

穂村「狭山は力では俺に劣るけど、代わりにそういった感覚が鋭いんだよ、頭も良いし（まあ、それは元からだけど）…総合的なスペックはハッキリいって俺よりも上だろうね。」

圭一「へえ。普段から耳が良いのか？」

狭山「…普段はそれなり、集中するとすごく聞こえる。」

圭一「すごいな…」

圭一は狭山独自の力に驚きつつ、穂村と狭山を連れて歩き出し  
工場の外に出る

そこには二人、中年の男がいて、乗ってきたのであろう車のトランクから物資を運び出そうとしている途中だった。

穂村「あ！荷物乗せたままで良いよ。俺達が車ごと貰うからさ」

「!!」

二人の男は圭一達には気付いていなかったらしく

穂村に話しかけられた瞬間、驚いたのが見て取れた。

「お前ら…誰だよ?」

二人の一人、ニット帽を被った男が圭一達を見て尋ねる。

穂村「さて、誰でしょう?」

穂村がニヤつきながら答えると、それに対してイラついたのか…

その男は車の中からボールを取りだし、穂村を睨みながら改めて尋ねた。

「あまりイライラさせんなよ…なんだ?食料でも分けてもらいに来たのか?」

穂村「ははは…違う違う。分けてもらいに来たんじやなくて、全部もらいに来たの。」

穂村がそう答えると、男はボールを持つ手に力を入れた  
すると同時に今まで黙っていたもう一人の男も大きなナイフを手  
に持ち…

二人揃って穂村を睨み付ける。

「イライラさせるなって言っただろうが…、クソガキが…殺すぞ？」

ボールを持った男が穂村に向けて言う

穂村は相変わらずニヤついていたが…微かにその眉がしわを寄せ  
ていた。

「謝るなら今の内にしとけよ、こっちは本当に人を殺した事があるん  
だ。奴らとは違う…生きた人間をな？」

ナイフを持った男がそう言って穂村に近寄り、ナイフを向ける。  
すると…

パシッ！

「…あ？」

ナイフを持った男の右手を穂村は掴み

ニヤけ顔を引つ込め…強く睨み付けて呟いた。

穂村「大人しく物資だけ渡せば良かったのに…マジうぜえ」

ゴキッ!

「ツ!!がああッ!!」

男は呻き声をあげ、ナイフを落としてその場に膝をつき、自らの右手を見る。

「:!?ツ!ううッ!!」

その右手は手首の少し下から折られていて、動かすことも出来ずにプラプラとしていた。

「なっ…なんだよそれ!?!」

もう一人のボールを持った男がその男の手を見て、顔を青くしながら言う。

圭一「…どうやった?」

穂村「別に、掴んでから力を込めて捻っただけ。多分圭一さんにもできるよ。やってみたら?」

二人がそんな会話を交わしていると、ボール男が穂村に殴りかかってきた。

「てめえっ!!」

ゴッ!!

穂村に向けて振り下ろされたボールだが…

それは穂村に届くことなく、別の者に阻まれた。

穂村「…どうも」

穂村はそう言っつて自分を庇つた人物…

狭山真冬に笑顔を見せる。

狭山は穂村へ振り下ろされたボールを、右腕一本で受け止めていた。

「…っ!？」

圭一「お前…平気か？」

どうみても男は思いきりボールを振り下ろした。

そんなものを彼女のような少女が腕一本で受けたら無事な訳がない…

なのに彼女は表情一つ変えず呟いた。

狭山「…少しだけ」ボソツ

彼女はボールを振り払うと素早く奪い取り、そして…

狭山「……………」ブソツ!

ガツ!!

「が……はっ!!」

奪い取ったボールをくるつと右手のひらで回転させてから、凄まじい勢いで男の腹に振り抜いた。

狭山「…痛いでしょ？君はボクをこんなので殴ったんだよ？」

血を吐きながら地面にうずくまり震えるその男を、狭山は見下す。

圭一「いや、明らかにそいつの方がダメージが大きいんだが…」

穂村「気付いてる？狭山のやつ、殴られたハズの右手でボール振ったんだぜ？」

狭山「…普通の人なら腕折れてるよ。ボクだから少し痛いくらいで済んだけど」

圭一（少しは痛いんだな…）

圭一はそんな事を考えたが…

腕一本でボールを受け止める少女や、いとも容易く人の手を折る男を見て…本当に彼らは強靱な肉体を持っているのだと実感した。

そして、それは恐らく自分も…

穂村「さて…」



グイツ：

穂村は先程自分が手を折った男の前に屈むと、その男の髪を右手で掴んで無理やり顔を上げさせた。

「ううっ……」

穂村「ええつと…、あんたらは人間を殺した事があるんだっけね？」

「っ！クソ…離せっ!!」ブンッ！

男は動かせない右手の代わりに、左手で穂村の顔面めがけて拳を放つ。

ガッ！

穂村「……………」

「……………!?!」

その拳は穂村の顔面に直撃したが、穂村は全く動じずにその男を睨んでいた。

直後に穂村は男から手を離すと立ち上がり、ため息をついてから狭山に言った。

穂村「はあ……狭山、そのボール貸して？」

狭山「……」ポイツ

穂村「サンキュー……」パシッ！

穂村「さて……」

狭山が投げたボールを上手くキャッチすると、穂村は男の折れた方の腕を掴み、そのまま外の道路の方へと引きずっていった。

穂村「さあ、おいでー……」ガシッ

「っ!?!離せえっ!!」

ズルズル……

道路の真ん中まで男を引きずり終わると、穂村は手を離す。

「何を……」

穂村「俺の顔殴ったから、お仕置きだよ。」

ガッ!!

「がああッ……!!」

男の左足の太もみに穂村はボールを振り下ろし、満足そうに離れると…そばにあったフェンスの前でにつこりと笑った。

穂村「その腕と足で逃げ切れたら見逃してやるよ。がんばってね」

そう言つて穂村はフェンスにボールを何度も振り下ろし、辺り一面に大きな音を響かせた。

カンカンカンカンッ！

カンカンカンカンッ!!!

しばらく音を響かせると、周囲から呻き声が聞こえ始める。

『ウア……アア……』

「…嘘だろ?」

男はその呻き声から逃げようと立ち上がる。

しかし、先程殴られた左足が痛むせいでうまく立ち上がりきれず焦っていた。

穂村「がんばれ。」

「謝るっ！謝るから助けてくれ!!」

ちらほらと奴らが姿を現し、男を囲もうとする。

命の危険を感じた男は必死に叫び、穂村に助けを求めた。

穂村「はち、きゅー、じゅうぐ。ほんの10匹。…自分でどうにかしろ。」

離れた場所でのんきに指差しながらゾンビの数を数え、穂村は言った。

「頼むっ…頼むからっ!!」

穂村「さて狭山、そつちのは生きてる?」

くるっとターンして男から視線を外し、狭山の元へと駆け寄る。

狭山「…生きてるよ」

圭一「死にかけだけどな」

狭山に殴られたきり起き上がらないその男を見つめながら、圭一は言った。

穂村「じゃあいつか…ほっといて帰ろうぜ。車もあるし。」

狭山「…そうだね。どつかのバカな人が無駄に化け物呼んじやったし…」

穂村「辛辣!」

スタスタと男達が使っていた車に向けて歩く狭山、穂村は彼女の背

にそう呟いてから圭一を連れて車の運転席に乗り込む。

穂村「んじゃ、いくか…」

彼はゆつくりと車を発進させ…ゾンビの集団に囲まれている男の横を通り過ぎると、わざわざ窓を開けて男に別れを告げた。

穂村「じゃあなく！がんばれよう。」

「たっ、助け…」

そこまで聞こえたところで車は速度を上げ、道を進んでいく。

圭一「あの男絶対死んだな…」

狭山「…穂村は結構クズだから。」

穂村「聞こえてるけど？」

後部座席で話す圭一と狭山の会話に穂村は割り込む。

狭山「…聞こえるように言った。」

圭一「それより、お前…腕大丈夫か？見せてみる。」グイッ

狭山「……………」

圭一は狭山の手を掴み、袖を捲って殴られた箇所を見る：わずかに赤くはなっていたが、折れてはいないようだった。

圭一「痛むか？」

狭山「：殴られた時は少しだけ痛かったけど、今は全然平気。ボクらは頑丈だし、痛みにも強いから。」

穂村「圭一さんもわざわざ気にしなくても良いのに：狭山がただの人間じゃないって分かっているだろう？」

圭一「それはそうだが：まあ女の子だしな、多少心配はするさ。」

狭山「……………」

穂村「お優しい事で：」

鼻で笑い、バカにしたように言う穂村：そんな彼に狭山はため息混じりに言う。

狭山「：こういうのがモテる人の対応。穂村はこれが出来ないからモテない。」

穂村「なっ！そんなのか!?女はそういう優しい男が好きなのか!？」

狭山「：世の中の女子は好きだと思おうよ。」

穂村「お前も優しい人が好きなの?」

狭山「…少なくとも穂村みたいなクズよりはね。」

穂村「辛辣！」

狭山「…かわいそうな穂村。一生彼女なし…」

穂村「でっ、出来るさ！その内ひよつこりと俺好みの生き残りちゃんが…」

狭山「…そんな娘はいない。いたとしてもその娘は君が嫌い。」

穂村「辛辣!!」

狭山「…まず、どんな娘が好きなの？」

穂村「大人っぽくて…セクシーで、それでいて強いレディかなあ…」

狭山「…それボクの事？残念だけど…ボクは君が嫌いだよ。」

穂村「ちげえわ！セクシーさの欠片もないガキみたいな体しやがって!!」

狭山「これはこれで一部の人に需要が……」

穂村「どこの誰だよ!? 誰がお前みたいな無表情女に惚れるかっての!」

狭山「…車停めて。そしたら穂村の息の根も止めてあげる。」

穂村「わかった謝る!! 謝るからバックミラー越しにこっちを睨むな! お前のたまに見せるキレ顔こええんだよ!」

圭一（こいつら、うるさい…!!）  
柳の家につくまでの間、圭一は耳をふさいで過ごしていた。

圭一（というか…俺、何もしてないな。）  
二人についていったにも関わらず、自分の力を試す間もなく初めての仕事は終了。

神崎圭一はやりきれない気持ちでいた。



### 三話 『慣れ始めた世界で』

初仕事を特に何もせずに終えた神崎圭一：

彼は走る車の中、無言のままだった。

そして、奪った車を穂村が走らせて十数分ほど経った頃、ようやく柳の屋敷が見えてくる。

圭一（改めて外から見ると：随分と大きい、まさに豪邸だな。なにしたらここまで稼げるんだか…）

穂村「ええつと、ゲートの鍵は…：あったあった。ポチつとな」ピツ門の前で車を止め、ポケットから取り出したスイッチを穂村が押し門が十分に開いたのを見計らってから車を動かして中に入る。

車が屋敷の庭に入ってから穂村は振り返り、再びスイッチを押ししてその門を閉めた。

そして、車を屋敷のすぐ隣に隣接されたガレージに止め、全員で外に降りる。

ボタン！

圭一「ガレージまであるんだな…」

穂村「車はまだ今日奪ったのを含めても3台しかないけどね。前に俺が拾ったのが1台、それと柳さんが最初から持ってたのが1台だね。：もう1台くらいは止められるスペースがあるけど、車ばかりそんなにいらねえよな？」

ガレージに止められていた車は3台。

1台は先程まで彼らが乗っていたミニバン：

もう1台は所々へこみ傷のある汚いワゴン：

そしてもう1台：新品同様にピカピカのどうみても高級であろう外車：

圭一はその外車を指さして穂村に言った。

圭一「柳の車って…これだろ？」

穂村「せーかい！よく分かったね？」

圭一（そりや…分かるだろ…）

狭山「…荷物、運ぶの手伝って」

乗ってきた車に積んであった段ボールを運び出しながら狭山が二人に言った。

圭一はすぐに残った段ボールを持ち、狭山の後に続いて歩く。

穂村はというと…残った段ボールを圭一が取った事でもうやることは無く、上着のポケットに両手を入れ、スタスタと小走りして一番早く家の中に入っていった。

穂村「お先く♪」

狭山「……………」

圭一「いつもあんな感じか？」

狭山「…うん。もう慣れた…」

圭一「アイツ…戦い以外でなんか出来るか？」

狭山「…なんにも」

圭一「ああ…そう」

狭山は苦勞していたんだろうな…

圭一はふと、そんな事を思う。

そのまま圭一は狭山と共に家の中に入り、その荷物の置き場を彼女に尋ねた。

圭一「これ、どこに運ぶんだ？」

狭山「…後でボクと柳さんとで仕分けするから、もう置いといていいよ。」

狭山はそう言つて自ら荷物を壁に寄せて置く…

圭一もその場所の横に荷物を置くと、スタスタと歩き出す狭山の後に続いた。

圭一「これから何をする？」

狭山「…柳さんに報告をする。」

圭一「報告？」

狭山「…うん、出会った生存者の数…その武装…最終的にボクらが殺した人数と奪った物資の大まかな内容…それを報告する」

圭一「面倒だな…」

狭山「…そうでもないよ。細かくじゃなくて、簡単にで良いし…。なんなら特に特別な事がなく、気がのらない時はしなくてもいいって言ってた…」

狭山「…でも今日は圭一さんが仲間になって最初の仕事だったし、しておいた方が良いと思って」

圭一「へえ、その報告ってのがどんなものか、少し気になるな…。ついていっても構わないか？」

狭山「…うん。」

狭山は圭一を連れて階段を上がっていき、2階の奥にある部屋の扉を開ける。

その中は広めの洋風の部屋で…その隅では柳が椅子に座り、パソコンに向けて何かを打ち込んでいたところだった。

狭山「…もどった」

柳「ああ…お帰り。」

席から離れ、柳は部屋の中央にあるテーブルを挟むように置かれた二つのソファーに二人を招く。

そのソファーは大きく横長で、一つのソファーに四人は座れそうだった。

柳「とりあえずは座ってくれ。」

二人はそれに従い同じソファーに座る。

柳は二人の正面のソファーに座り、圭一を見て口を開いた。

柳「どうだった？久しぶりの外は…」

圭一「そうだな…ゾンビがいて、生存者はバールを振り回してた。」

ずいぶんと危ない世界だな…」

柳「はははっ！そうかそうか…」

圭一「あのパソコンで何を？」

柳が先ほどまで使っていたコンピュータを指さし、圭一は尋ねる。

柳「あれか？ちよつとしたデータをまとめていたんだ。君に使った薬とかな…」

圭一「薬の…」

柳「ああ、今日は君が起きた記念すべき日だし…色々まとめておきたいんだよ。」

柳「それで…どうだった？力は実感出来たかな？」

圭一「まあ、狭山達を見て凄い物だとは分かったけど…俺は今回何もしてないから、まだ自分の力はよく分からない。」

柳「なるほど…今回は狭山君と穂村君だけで終わらせたのか？」

狭山「…うん。ほとんど穂村がやった…」

柳「そうか…まあ、とりあえず報告を頼めるかい？」

柳がそう呟くと、狭山は今回の仕事をまとめて報告した。

狭山「…向かったのはここから約6kmの地点にある工場…道中、

圭一さんに力の特性を教える為に感染者を一体だけ処分…」

狭山「その後は極力感染者を避けて目的地に向かったから…戦闘は無し。工場に侵入して早々に穂村が一人の生存者を処分…」

狭山「その工場にいた生存者はその時点では穂村が仕留めた人だけだったようで、ボクらが物資を漁った後に残りの二人が車に乗って戻って来た…」

狭山「穂村がその二人を挑発して戦闘に…、相手二人の武装はナイフとボール」

狭山「なんだかんだでボクと穂村でその二人を倒して、車ごと物資を持って帰った。」

狭山「…おしまい、ハッピーエンド」

圭一「おいおい…最後だけやたらあいまいになったが、これで良いのか？」

柳「…了解。お疲れさま」

圭一「ああ…あれで問題ないのか…」

柳「まあ…ようするにいつも通りだったと。」

狭山「…そういう事」

柳「ああ、そういえば回収した物資は何かな？」

狭山「…食料がほとんど…要するに、いつも通り。」

柳「そうか…だろうな」

少しだけ残念そうな表情をした柳を見た圭一は不思議に思い、彼に尋ねた。

圭一「食料じゃ不満か？なんだ…医療品とか、他の生活用品が欲しいのか？」

柳「んん…確かに医療品はほんの少しだけ不足してるな、出来ればある程度確保しておきたい。だが私が何より欲しいのは、君にも話した…あのワクチンだな。」

圭一「ワクチン…お前が改造したやつか？」

柳「そう、君達に使った薬の元になる物だ。より確実な物にしようにも手持ちが無くてね…君に使ったのが最後のだったんだ」

圭一「それはそれは…そのワクチンつてのは、そもそもどこにあるんだ？」

柳「前のは外に放置されていた車両の中にあるのを狭山君が偶然見つけ出した。」

狭山「…既に何本か抜き取られてたから、少ししかなかったけどね」

柳「自分の身を守る為の兵士も君達三人で足りると思うが…何かあった時の為にいくつかあのワクチンを持っておきたい。それが中々難しいんだけどね…」

圭一「まあ…、俺は自分が生き延びられればそれで良い。」

狭山「…でも、ボクたちの手伝いはしてよ?」

圭一「ああ、分かっている。次はもう少しちゃんとやるよ…」

狭山「…今回は仕方ない。穂村が一人で終わらせたのが悪いから」

柳「なに…次のターゲットくらいすぐに見つかるさ。そこで活躍してくれば良い。」

圭一「実際、この街にはどのくらいの生存者がいるんだ?というか…この事件はどの規模で発生している?」

柳「生存者は決して多くない…だが、悲観する程少なくもない。この街だけでも何人かの生存者を狭山君は見かけているし、その生存者達による集団もいくつか確認している」

柳「そしてこの事件の規模だが…日本中なのは間違いないだろうな。問題は世界レベルなのかどうかだが…まあ十中八九そうだろうね」

圭一「そうか…まあ、辺りに生存者がそれなりにいるってだけマシンか。」

狭山「…殺せるから?」

圭一「人を殺人狂みたくいうな。」

狭山「…でも、圭一さんは殺人の罪を犯した指名手配犯…」

圭一「それはそうだけど、だからと言って人殺しが大好きな訳じゃない」

狭山「…そうなの?」

圭一「ムカつく奴を殺すのが好きなだけだ。だから、さすがに赤ん坊とかは殺せない」

狭山「…女の人は?」

圭一「相手によるが、理由があれば殺れる」

狭山「…子供は?」

圭一「その子供の態度次第だな。生意気な奴なら殺れる」

狭山「…圭一さん、わりとクレイジー」

圭一「お前達もだろ…」

狭山「…」

柳「ともかく今日は休むといい。…明日からは好きに外出してかまわないから、新しい世界に体を慣らしながらじっくり楽しむと良い。」

二人の掛け合いを見た後で柳は圭一にそう告げる。

圭一はそれに頷くと席を立ち、廊下に出てから自分用に与えられた部屋に行つてそこで休んだ。

大きなベッドに横たわり、天井を見つめて彼は考える。

圭一（かなり怪しい奴らだが、しばらくはアイツらと行動した方が  
良いだろうな。この屋敷も普通に居心地が良さそうだし…おまけに  
普通じゃない力も与えられた。ある意味、ラッキーだったのかもな。  
普通の生存者達は…かなりキツイ毎日を送っているハズ…）

圭一（そいつらと比べたら、安全快適な住み家…それとゾンビに噛  
まれても感染の心配の無い体つてのはかなり助かる。まあ…のんび  
りと暮らすか）

次の日から圭一は狭山や穂村と…、そして時には一人で屋敷の外に  
くり出し、自分の力を体に慣らしながら外の世界の現状を知ってい  
た。

こうして変わり果てた世界で感染者達を相手に戦い…、圭一は自身  
の力の真価を実感していく。

そして、数週間の時が経ち…

「くそっ…ふざけやがって！たかだか三人相手にどうしてここまで手

こずってるんだよっ!!」

とある場所にあるホームセンターの店内：空っぽの商品棚の陰に身を潜めているその男は、そばで自分と同じように息を潜めている三人の仲間達に言った。

リーダー格と思われる彼のその言葉をきっかけに、仲間達は次々と震えた声を漏らす。

「おかしい…！アイツら、絶対に人間じゃないだろ!!」

「ただでさえ死人が歩きまわるような異常な世界になったのに…また別の化け物かよ!?!」

「でも見た目は普通の人間だし、言葉も話してたぞ…ただの人間じゃないのか!?!」

「バカ言え!!ただの人間が…たった三人で、それも大した武器も使わずに…どうやって俺達をここまで追いつめるんだよ!?!」

彼等の内の一人が商品棚の陰からそっと顔を出し、辺りを見回す。

そばでは仲間の死体が転がり、少し遠くからは他の仲間の悲鳴と大きな物音が鳴り響いていた。

彼等はそれなりに大きな生存者の集団で、メンバー数は十四人…しかもほぼ全員が常にナイフやバットなどの様々な武器で武装、そして警戒していたにも関わらず、既に半数以上がその”三人”に殺されていた。

「仕方ない…奴らに気づかれる前に外へ逃げるぞ!」

リーダーの男は一時この拠点を捨て、あの”三人”から逃げる為に外へと出る決意をする。

だが、外は外で感染者がうろついている…その事実が仲間達の決断を遅らせた。

「外って…それだと今度はゾンビ共に襲われるじゃないか!」

「アイツらは動きも遅いしその気になれば殺す事も出来る!ただけどあの三人は違うっ!俺達じゃ相手にも…」

圭「ああ…、相手にもならない。」



男が言いきるのを待たずに、誰かが彼等に向かって声をかけてきた  
…  
全員がそれに驚き一斉に振り向くと、そこに立っていたのは彼等が  
恐れている三人の内の一人：神崎圭一だった

「くっ!？」

圭一「…」

彼等の背後：3 mほど先にたたずむ圭一は武器を構える彼等を気  
にもせず、ゆつくりとその場にいた全員の顔を見回した。

圭一「…四人だけか、最初は十人以上いたのにずいぶんと減った  
な。」

「お前らのせいだな…。せつかく化け物相手に立てこもれる良い場所  
を見つけたのに、全部台無しだ…!」

圭一「オイ、ふざけるなよ。元はといえばお前達が悪いんだ：俺達  
はただ探し物をしていただけなのに、『持ち物をよこせ』とか言うから  
…」

圭一「たかが三人の生存者：大した物なんて持っていないと分かっ  
ていただろうに欲を出したな。おかげで穂村が大激怒してる」

男達は愚痴をこぼす圭一を無視し、武器を構えて四人で囲いこむ。  
すっかり囲まれた圭一はため息をつき、呆れたような表情をして呟  
いた

圭一「まったく…どいつもこいつも、人の話を聞きやしない」

「いくらなんでも一人じゃ四人を相手には出来ないだろう…。こう  
なったら逃げるのは無しだ。お前を殺して、そしてその後で残ってる  
二人も殺す。真っ向から戦えばほぼ確実にこっちが殺されるだろう  
が…、物陰に隠れて隙をうかがい、背後から頭を突き刺せばさすがに  
どうしようも出来ないはずだ」

圭一「あの二人にそんな手は通用しないと思うがな。物陰に隠れた

だけじゃ穂村はともかく、狭山には確実にバレるだろうし…」

呟く圭一の背後に立つ二人の男、その二人はそれぞれがナイフを手に圭一の元へと駆け寄り、その首を背後から切り裂こうとした。

圭一はすかさず振り返ると迫る二人のナイフを持ったその手だけを掴み、以前穂村がやったように力任せに手を捻り、二人の手を折る…

「ぐっ!?!」という呻き声とともに男達は持っていたナイフを離し、二本のナイフが宙を舞う…

圭一はすぐに男達の手から自分の手を離すと宙を舞うその二本のナイフそれぞれを両手に収め、それぞれの持ち主の脳天へと突き刺した。

圭一「残念…、背後から襲われて簡単に殺されるような人間じゃないんだよ。」

そう言つて圭一がナイフから手を離すと、二人の男は頭にナイフを刺したままドサドサツと音をたてて倒れ、二度と起き上がらなくなつた。

四人の内の二人が瞬く間に殺され、残ったのはリーダーと彼の仲間が一人だけ…

圭一「四人同時にかかれば少しはマシだったのに…、これであと二人だな」

「…くっ!?!」

ニヤリと笑つて呟く圭一…そして彼の足元に転がる仲間の姿を見て、残った二人はただ恐怖する事しか出来なかった。

それから数分が経った頃…

狭山と穂村がその場に現れ、辺りを見回す。

そこにいたのはいくつもの死体に囲まれながらあくびをする圭一と、床にうずくまりながら呻き声をあげている一人の男だった。

穂村「おお…圭一さんも中々暴れましたなあ。もう死んでるのが二、三、四…。四人と、…それは誰？」

圭一「この集団の”リーダーだった”男だ。まあ生き残っているのはもうコイツだけだろうから、リーダーもなにもないが…」

圭一「さつき足を折っておいたから自由には動けない。質問があるなら今のうちにしとけ」

圭一がそう告げると狭山はその男の前にしやがみこみ、一つだけ質問をした。

狭山「…君達はたくさん物資を集めてたみたいだけど、ワクチンとかが見つけた事はある？」

「ワクチン…？な、なんだそれは…？聞いた事もないぞ…」

狭山「外にうろつく感染者達…奴らに噛まれた時にそのウイルスによる症状を軽くする特別な薬みたいなヤツなんだけど、ここに無いかな？」

「…以前仲間の何人かを奴らにやられて失ってる、そんなのがあれば使っていた！」

狭山「…ようするに、持っていないんだね」

男からそれだけを聞いた狭山は立ち上がり、背後に立つ穂村と圭一に振り向いてから言った。

狭山「…やっぱりここもハズレ。適当に必要な物だけもらって帰ろう」

穂村「ま、最初からこんなところには無いって思ってたからいいけどな」

圭一「柳も別に無理してまで見つける必要はないと言っていた。物資を漁るついでに見つけられたらラッキーくらいの気持ちでかまわ

ないだろ」

穂村「そういう事だね…。さて、この人はどうする？」

圭一「足を折られてちゃ何も出来ないし、ここまでされれば戦意も無いだろ。放っておけ…」

「ぐっ…うう…」

痛みに呻く男をその場に放置して三人はホームセンターの隅にまとめて置かれていた物資を漁り、それぞれが持っていたカバンへと詰めた。

穂村「食糧がほとんど…あとは気持ち程度の医療品か」

圭一「ワクチンは本当に持っていなかっただみたいだな。さて、あとはここから…」

ガシャ…ガシャガシャンツ!!!

突如、ホームセンターの入り口の方から何かが倒れるような音が鳴り響く…

圭一はそつと穂村の顔を覗きこみ、舌打ちをしてから呟いた。

圭一「ちっ…、だからあんなバリケードくらい飛び越えればいいと言ったんだ。それをどっかのバカがわざわざ壊したから、そこから感染者共が侵入してきたと…」

穂村「わ、わりい…」

狭山「…とりあえず、侵入してきた数が少ないうちにここから出よう。あんまり大勢に侵入されてからだと逃げるのが大変になる」

圭一「…だな」

入ってきた感染者が少ないうちに駆け出し、急いで入り口を目指す。

すぐに入り口付近にたどり着くと既に十数体の感染者が侵入し、入り口を塞いでいた

三人は感染者達から少しだけ離れた所にたちつくし、それから圭一が穂村の背中を叩く。

圭一「結構な数だな。ほら、責任を持って処理してこい。」

穂村「あはは…、またまた冗談キツいなあ。まあ、やってきてもいいけど…少しだけ時間かかるよ、それでもいいの?」

圭一「はあ…それは勘弁だな。狭山、あれ貸してくれ。」

狭山「…うん」

狭山は圭一に返事を返すと自分のカバンに手を入れ、一本の紐に赤く細い筒の束が繋がっている物を圭一に手渡した。

圭一「どうも」

穂村「おつ、それ爆竹? 良いもの持ってるじゃん!」

圭一「その貴重で良い物をお前の失態のせいで一つ失うんだがな…」

穂村に一つ嫌みを言ってから圭一はライターをポケットから取りだし、その爆竹に火をつける…

火がつけられたその紐が火薬の詰められた筒へと到達する前に、圭一はそれを入り口の向こう…外の方へと勢いよく放り投げた。

投げられたそれが感染者達の頭上を通過してからほんの数秒後、外から『パンパンツ!』という音が継続的に鳴り響き、感染者達はその音を目掛けて歩き出す。

圭一「…よし、入り口が空いた。急いで出るぞ」

穂村「りょーかいっ!」

狭山「……………」

三人は爆竹に夢中になる感染者達を尻目に入り口を抜けてそのホームセンターから脱出し、近くに停めていた車（以前穂村が生存者達から奪った物）へと乗り込んだ。

穂村「無事生還っ! お疲れ様でしたっ!」

運転席へと座った穂村がにやにやしなながら後部座席の二人へと言

い放つ：

圭一はそれに舌打ちを返し、狭山にいたっては完全な無視をした。

穂村「二人ともあんまり怒んなよ。確かに俺のせいで奴らが侵入してきた訳だけどさ…あのくらいの数じゃそこまで危なくもないでしょ？」

圭一「いいから…とつとと車をだせ」

穂村「…へいへい」

不機嫌な圭一の態度に穂村は渋々車のエンジンをかけ、ゆつくりと発進する

移動中も無言の三人によって作られた険悪なムードの車内…穂村は運転しながらボソツと心の声を呟いた。

穂村「前は不機嫌になるのが狭山だけだったからまだ良かったけど、たった一人でもそれが増えたとなるとさすがに少し気まずいな…」

穂村（かといつて…圭一さん相手じゃ争うのも面倒だしなあ。あれからたったの数週間で力を完璧に使いこなしてるし…元から何かスポーツでもやってたのか知らないがまず基本的に動きが良い。）

穂村（使った薬も俺や狭山とはまた違う改良型とかって柳さんが言ってたし、もしかして俺よりケンカ強いんじゃないか？）

穂村（また今度少しだけ勝負してもらおうかな。どのくらい強いのか気になるし…）

圭一「…おい、車停めろ」

穂村「へっ？あ、ああ…了解。」

考え事をする穂村に突然圭一は車を停めるように要求し、穂村はそれに従う

停車後すぐに圭一はドアを開けて外に出たので、穂村達もそれに続いた。

圭一に言われて車を停めた先…そこにあったのは一つの大きなデ

パートだった…

#### 四話 『新たな目標』

突然車を停めるようにと圭一に言われた穂村…

彼はそれに従い車を停める。

直後に外へと降りた圭一を追い、狭山と穂村も車を降りた…

そこにあつたのは一つの大きなデパート、圭一はそれを見つめていた。

圭一「……」

穂村「圭一さん、急にどうしたの？」

狭山「…あつ、ここか」

穂村「は？狭山はここに来たことあんの？」

目の前の大きなデパートを知ったように呟く狭山を見て、穂村は不思議そうに尋ねる。

狭山「…うん、一週間くらい前に圭一さんと二人で来た」

穂村「二人で？俺をおいて？どうしてまた…」

圭一「お前がいるとうるさいし、邪魔だからおいていこうって狭山が言ったんだよ。」

穂村「マジか…わりとショックだぞ」

狭山「……」

穂村「無視ツスカ…。まあもう慣れたからいいけど…、ん、ここには何しに来たの？」

圭一「以前柳に言われた…、『最近急に医療品が手に入りづらくなった。もしかしたら、この辺り一帯の医療品を独占しようとしている奴がいるかも知れない…』ってな。」

穂村「ほお…、そう言えばそうだね。薬局や病院に入っても見つからない事が何度かあったっけ…」

圭一「まあ仮にそんな生存者がいたとして…、いくらなんでもすぐに辺り一帯の医療品全てを完全に独占するのは不可能、どこか見落と



しがあるはず…。その見落としがここってわけだ」

目の前のデパートを指さし、圭一は穂村に告げる…

穂村はまだ今一つ話の要点が理解できていなかったが、とりあえず話を合わせた。

穂村「はあ、つまりここにはまだ医療品があったと？」

圭一「ああ、一週間前はな。」

穂村「せっかく見つけたのに回収しなかったの？」

圭一「とりあえず必要な分だけは回収して、いらぬ分をほんの少しだけ残しておいた。そいつをおびき寄せる為にな…」

穂村「おびき寄せるって…その独占してる奴を？」

圭一「ああ、万が一そいつがここに来たとき、中を調べやすいようにと思つて中をうろついていた感染者もわざわざ一ヶ所にまとめて閉じ込めてやったんだ。」

穂村「ふうくん…。でもさ、この一週間の間にそいつがここに来てたとしても、また医療品だけ取つてどっかに消えたでしょ。…あつ！狭山に発信器か何かを作らせて置いておいた医療品に取り付けたとか？」

狭山「…作ってないよ、そんなの」

穂村「むう…じゃあを何したの？」

圭一「そいつが来たなら仕留められるように罠を仕掛けておいた。最初は生け捕り用の罠にしようかとも思つたが、生け捕り用だと相手が複数人いた場合協力すれば逃げられるような罠しか用意出来なかつたからな…」

圭一「逃げられるくらいなら殺してやろうと思つてそれ用の罠に変更した。”あれ”なら相手が5〜6人なら普通に仕留められるはずだ」

穂村「ま…、仕留めさえすればとりあえず邪魔者の処分は出来るもんな」

圭一「そういう事…、とりあえず中に入ろう。罨にかかったか奴がいるかどうか確認しないといけないからな。」

穂村「自信はある？」

圭一「どうかかな…。まあ目当ての奴かどうかはともかく、一週間放置しておけば誰かしらかかっているかもな…」

穂村「かかっていた人、目当ての奴じゃなかったら完全にとぼっちりじゃん。気の毒だね〜」

圭一「その時はその時…そいつらの運がなかったって事で」

三人はそのデパートの入り口の前を塞ぐように乗り捨てられた邪魔な車を飛び越え、入り口の前に並んだ。

穂村「この車すげー邪魔なんだけど、誰だよこんなところに乗り捨てた奴は…」

狭山「…それ、中に感染者が入らないように圭一さんがそばにあつたのを押し込んだよ」

穂村「マジかよ…完全に人外のなせる技じゃん」

圭一「普通の人間でもある程度力があれば車くらいは押せるだろ。それに、人外なのはお前らも同じ…そうだろ？」

穂村「…だな」

狭山「…否定はしない」

そう言うってから三人は入り口から中へと入る

彼等が入ったデパート、その店名は『トータル』と記されていた…

その店内を歩いてまわる中、穂村は仕掛けた罨の事を圭一に尋ねる。

穂村「んでさ、罨ってのはどんなのを仕掛けたの？」

圭一「…人形だ」

穂村「は？人形…？」

圭一「ああ、医療品売り場から少し離れたところにある倉庫の中に

子供のような泣き声を出す人形を置いておいた。それを誰かが手に取るか何かして動かすと繋いでいたワイヤーが引つ張られ、それと連動して倉庫の入り口付近に作っておいた手製の檻が開く。」

圭一「檻の中には大量の感染者を閉じ込めておいたから、開放された瞬間にそいつらが倉庫内の逃げ道を塞ぎ、罠にかかった相手を食い殺すって仕組みだ。」

穂村「うわあ…えげつなく」

圭一「手製の檻が大きくて少し目立つのと、閉じ込められている間も感染者共が呻き声をあげないかが心配だったが、狭山に言われてその檻に布をかけておいたら解決した。布さえかければただの大きな四角い物体だから段ボールを重ねた物とかに見えるし、暗くしておけば中の感染者共も大人しくなる」

穂村「へえ、アイツら真っ暗にすると大人しくなるの?」

狭山「…ある程度はね、完全に大人しくはならないけど…罠に使う分にはあれで問題ない。もちろん…布をめぐったりして覗いたらいつもどおりうるさくウ〜ウ〜呻くけど」

狭山「…そう言えば人形だけど、一週間も経つてると途中で電池切れちゃったかもね。」

圭一「そうだな…。そうなっていて誰もかかってなかったら仕方ない、他の手を使う…」

今は誰もいないガランとした雰囲気の店をいくつか越えたところで裏手に入り、三人はスタッフ用の通路を進んでいく。

少し進んだところで一つのドアの前に立ち圭一はそれを開けた。

圭一「…ここだな」

穂村「誰かかかかってるかなあ…」

ガチャツツ

ドアを開いた先…

そこに待つのは地面に転がる人形

そして…感染者達の死体だった。

圭一「…!!？」

穂村「あらら？感染者の皆さんぶっ倒れてますけど…これは成功？」

圭一「チツ、失敗したかもな…！」

そう呟いてから圭一は死体の元に駆け寄り、その数を数え始める

圭一「…14、…15、16。16体…俺が閉じ込めたのと同じ数…増えていた死体は無し…、つまり完全に失敗か」

穂村「この狭い空間で16体も使って失敗したの!?!はえ、そりゃシヨックだね〜！」

穂村はそう言うってから感染者の死体を足で軽く小突き、狭山に尋ねた。

穂村「この数なら相手が数人いても一人くらいは殺せそうだけどね？」

狭山「…待って、確認する」

穂村「確認？」

狭山はその倉庫の隅に置かれたいくつかの段ボールの内、僅かな穴のあいている一つを開き、中からビデオカメラのような物を取り出す。

穂村「なにそれ？」

狭山「…ビデオカメラ。動作検知機能がついてるから何か動きがあった時だけ録画をしておいてくれる」

穂村「すげえ、さっそく見てみようぜ！」

狭山「…言われなくても見る」

ビデオカメラのモニター部分を開き、三人は録画されている映像の確認をする。

録画は二回に分けられており、まずは一つ目を再生…  
それに映っていたのは、一人の少年だった

狭山「……」

穂村「はあ!? たった一人かよ!? こいつがこの感染者共を!!」

圭一「よく見る、こいつは違う。ギリギリで罠に気づいて回避した。」

モニターの中：危ないところで人形に繋がるワイヤーと、感染者を閉じ込めた檻に気づいたその少年の映像を見て圭一が呟く。

穂村「あ、ほんとだ。：圭一さんの罠、バレバレじゃん! こんなガキにバレるなんてどうなの?」

圭一「自分でもショックだよ……。勘のいいヤツだな」

狭山「：次、再生するね」

カメラのボタンをいじくり、二つ目の映像を再生する狭山。

次の映像に映っていたのは、一人の少女だった：

その少女は先ほどの少年とは違って人形に付けられたワイヤーに気づかず、それを手に取って罠を作動させてしまう。

少女『きやああくっ!!』

穂村「うわあ：、こんな娘がアイツらに食われるのとか観たくないんだけど……。終わったら教えて：」

狭山「：この娘の死体はなかった。だから多分この娘は死なない」

青い顔をして目を背ける穂村に狭山が冷静に指摘する。

だが穂村は今一つそれを信じきれず、目を背け続けた。

穂村「わかんないじゃん! 後で仲間がきてその娘の死体だけ回収し

ていったのかも：、つてかもつと音小さくしろよ!!」

圭一「ん? 誰か来たな：」

モニターを見て圭一が呟く：

感染者に囲まれた彼女を助けようとしているのか、更に一人の少女と先ほどの少年が倉庫内に現れた。

狭山「…あ、さっきの人だ」

圭一「この女の仲間だったのか…」

映像に見入る狭山と圭一…

穂村はまだ目を背け続ける…

少しすると、その映像に新たに二人の少女が映り込む。

狭山「…ん、また二人増えた。」

圭一「これも仲間か、女達は全員同じ制服…これってどこの制服だ？」

狭山「…これ、確か『巡ヶ丘学院』の制服…」

圭一「高校か？」

狭山「…うん、高校だね」

穂村「現役女子高生のスプラッター…、そんなの見たくねえ…」

狭山「…可愛い娘いるよ？」

穂村「…マジ？」

狭山「…まじ」

狭山の発言を受け、穂村はようやくモニターに目を向けた。

モニター内では感染者達と戦う少女達が映っており、三人ともそれに釘付けになっていた。

狭山「……………」

穂村「この男はさっきのガキか…。動きは平均点…いや、それよりもちよい上くらいか」

圭一「最初は数に気圧されていたのか動きが鈍かったが、だんだんとマシになってきたな。そこそこの危機は乗り越えてきたんだろう」

穂村「だな…。でもそれより気になんのはこっちのシャベルっ娘だ、最初はシャベルかよってツツコミたくなかったが…、なるほど…かなりのもんだな」

圭一「あとの三人はほとんど戦っていない、つまり普段はこの二人

が戦闘を担当しているんだろう。」

狭山「：シヤベルの娘、本当にすごい。感染者達をほとんど一撃で仕留めてる…」

穂村「このまま二人だけで全部倒しそうだな…。まさか、この数を相手にノーダメージクリアか？」

そんな予想は的中し、少しするとモニター内の彼女達は全ての感染者を無傷で仕留める事に成功していた。

圭一「まさか本当に倒すとは…」

穂村「すげえな…。誰か一人くらいは噛まれると思ってたけど、多分全員無傷だよな？」

狭山「：うん、無傷。」

圭一「苦勞して作った罠が：まさか高校生に破られるなんて、キツイ冗談だな。」

穂村「まあ中々できる奴等だったししゃあないよ。あのシヤベルの娘とか、たぶん俺たちがここ最近で会った生存者よりも強いぜ？」

圭一「確かに：俺たちが戦ってきた生存者のほとんどは力にもの言わせてバットを振るような奴等ばかりだったが、こいつ等は違うな…多少の経験を積んでいる」

穂村「脳筋サバイバーとは違うわけだ…」

圭一「だな、若い分：必死に考えて生きてきたんだろう。」

穂村「ふうくん…」

そんな会話を交わしながら、三人はモニターを見つめる。ちようどモニター内の少年が彼女達に自らの名前を教えている…自己紹介をしあっているところだった。

美紀『直樹美紀です。』

胡桃『恵飛須沢胡桃』

悠里『若狭悠里です。』

由紀『丈槍由紀だよ』

『あなた達も物資を?』

圭一「ん…、この男は仲間だったわけじゃないみたいだ。」

穂村「初対面なのに命懸けで人助けしたのか、そりや感心だな。」

狭山「…全員倉庫から出ていった、ここで映像は終わり」

モニターを閉じ、三人は再び辺りを見回す。

穂村「これをあんな若い子達だけでねえ…」

圭一「罨は完全に失敗だ。感染者は皆殺しにされたし、恐らく奴等は本来のターゲットじゃない。」

穂村「だろうね、あんな娘達が薬の独占とか考えてたら引くわ」

狭山「…どうする?また違う罨仕掛ける?」

圭一「…いや、やめだ。ターゲットは直接見つけよう。」

穂村「それがいい。罨とかめんどくさいからね…、やっぱ直接仕留めるのが一番だよ。」

圭一「そうだな…。まあ今日はとりあえず帰るか。」

倉庫の入り口へ向けて圭一は歩き出し、狭山もそれに続く…

だが穂村だけは一人倉庫のまん中にたたずみ、考え事をしていた。

穂村「んんく……」

圭一「おい、何してる…帰るぞ?」

穂村「あつ…、わりいわりい…」

穂村は少し遅れてから圭一達の元に駆け寄り、そのデパートを後にする…

そして帰り道の車内、穂村は自らの思いつきを後部座席の二人へと話した。

穂村「あのさ……」

圭一「なんだ…?」



穂村「ぎつきのビデオに映ってた奴ら、面白そうじゃない?」

圭一「はあ?」

穂村「いやね…俺としてはかなり興味をひかれたんだけど、圭一さんはイマイチ?」

圭一「イマイチも何も…結局はただの学生達だ。大した物資も持っていないだろう、大した奴らだとは思うけどな…」

穂村「でしょ!?ちよつと探してみようよ!最近目標なくてヒマだったしさ〜!」

狭山「…目標ならある。医療品の独占を企む奴を見つけて、それから殺す事」

穂村「そんなん本当にいるかすらわからないじゃん!!そんなのよりあの娘達を追おうぜ〜!」

圭一「やけにこだわるな?」

狭山「…どうせ可愛い娘達だったからとかそんな理由」

穂村「あはは、それもあるけどさ…でも、それ以上に——」

穂村はニヤリと不気味な笑みを浮かべ…  
バツクミラー越しに二人の目を見て言った。

穂村「なんかさ…面白そうって思ったんだよ…。アイツ等なら、良い暇潰しになりそうな…そんな気がしてね」

圭一「もう一度言うが…ただの学生だぞ?そんなのを追うのか?」

穂村「ただの学生だからだよ。今までやたら武装したおっさんとか狂った人間とかは見てきたけど、アイツ等はまるで今も普通の世界にいるみたいだな”学生達”だった…。それでいてやる時はちゃんとやる適応力も備えてる…、俺は興味津々だね。」

圭一「…狭山はどう思う?アイツ等、追ってみたいか?」

狭山「…たしかに、同じ年くらいの娘を見たのは初めてだし…少し会ってみたい。」

圭一「…そうか、お前までそういうなら…俺は構わない。」  
穂村「マジっすか!?!じゃあ探そう探そう!!明日辺りから探そう!!」  
許可が出た事に穂村は喜び、車のハンドルをパシパシと叩く。

圭一「探すのは構わないが、俺達が追ってる内に感染者にでも殺られて、勝手に死んでるかもしれないぞ?」

穂村「あく大丈夫!アイツ等はそんな簡単には死なない…そんな気がする!」

圭一「…そうかい。で、見つけたらどうする?」

狭山「ボクも…それが気になってた…」

二人に尋ねられ、穂村は頭を悩ませる…

彼は少しだけ無言で考えてから、二人の質問に答えた。

穂村「まあ…、少し相手してみて…」

圭一「……………」

狭山「……………」

穂村「たぶん…最終的には…」

その台詞の先は言わずとも、圭一と狭山は理解する…

穂村の思考は理解していたから。

圭一「ただの学生達を相手にするのは…さすがに少し気が引けるな…」

穂村「何事も慣れだよ。平気平気!」

狭山「…それは気が進まない」

視線を下に向けて狭山が呟く…

こんな彼女を見たのは圭一・穂村ともに初めてだった。

穂村「珍しいな?なに、同世代の娘は襲いたくない?」

狭山「…違う。ただただめんどくさい…やる気がでない。」

穂村「一瞬だけ…狭山に人間味を感じかけたけど、やっぱり勘違いだったな」

圭一「まあやる気が出ないのは俺も同じだ、軽い暇潰し感覚で気楽にやろう。」

狭山「……………うん」

穂村「名前と顔の分かってる連中を追うのは初めての事だからな…、面白そうだ！」

…  
こうして三人は家に戻り、翌日から新たな目標を胸に外へと向かう…  
新しいターゲットは五人。

若狭悠里・恵飛須沢胡桃・直樹美紀・丈槍由紀・そして一人の少年  
だった…

## 五話『力試し』

バタンツ!

穂村「戦じや戦じやあゝつ!」

圭一「…つたく、騒がしいな…」

柳の屋敷の中、広々とした談話室へ入ってくるやいなや休んでいた圭一・柳へと穂村が大声で告げる。あまりのやかましさに圭一は少しばかり苛立っていたようだが、柳はもう慣れているからか冷静だった。

柳「戦? 誰と戦うのかな?」

狭山「…前に屋敷を渡せつて言つてきた、如月つて人」

柳「如月…」

祭りの前のようにはしやく穂村に代わり、狭山が答える。

すると柳は大きなソファア一人で腰かけたまま首を傾げ、狭山を見つめた。

柳「ああ…まだ生きていたのか。てつきり、とつくに仕留めたかと…」

狭山「…人数もちよつと多かつたし、めんどくさいから放置しといた。それにほら、今のボク達は彼女達を探すのに忙しいし」

狭山はそう答えながら柳の隣へと腰を下ろし、目の前にあるテーブルの上に置かれていたティーカップを手取る。中には黒い色をした飲み物が入っていて、狭山はそれをほんの少しだけ飲んだ。

狭山「…ニガイ」

柳「コーヒーだからね。砂糖を入れようか?」

狭山「…ううん、マズイから柳さんにあげる」

テーブルの上にカップを戻し、隣に座る柳の前の方へとずらしていく。

柳「まあ、もとより私のだったんだがね……」

狭山の手によってススツと音をたてながら目の前へと移動していくカップを見つめながら、柳はボソツと呟く。半分感染者のような彼女が口をつけたカップをそのまま使っても問題ないのか？それに關しては以前調べたので答えが出ている、問題はない……。しかし、そういうのは抜きにしても年頃の女の子が使った後のカップは少々使いづらかった。

柳（…まあ、彼女が触れたのとは別の所に口をつければいいか）  
くるつとカップを回転させ、狭山の唇が触れなかった部分からそれを飲む。柳はコーヒーが好きだったが、狭山はこれが嫌いらしい。

柳「…そういえば、例の女の子達は見つかりそうかい？」  
コーヒーを一口だけを飲み、カップをテーブルに戻してから尋ねる。

柳のいう『例の女の子達』とは、以前に穂村達が目をつけた四人の少女と一人の少年の事だ。

穂村「少し前に狭山が会ったつきりだな……。まあ、まだ生き延びてるとは思うけどさあ」

圭一「どうだろうな…狭山が会ったのだから、恵飛須沢胡桃と少年だけなんだろう？」

狭山「うん…でもあの二人は誰かの為に薬探してたみたいだったから…少なくともあと一人は生きてると思うよ」

穂村「あの段階で捕まえとけば良かったのに…狭山のせいだ…」

狭山「だから何度も言ってるでしょ…。ボロボロの二人に手を出すのは嫌だったの。手を出すならお互いに元気な状態の時じゃないと、不公平…」

以前にあの二人を見かけた時の事を思い返して狭山が告げる。

当時は彼も胡桃も疲れきっており、さすがに争う気にはなれなかった…。

柳「狭山君は優しいね…。でも、いざその時がきたら戦うんだろう？」

狭山「…そうだね。全員元気そうだったら、少し様子を見てみようかな…。あんな娘達がどうして生き延びてられるのか…：それほどに強いのか…：色々興味あるし」

柳「…なるほど」

圭一「…とところで、その如月つてのは誰だ？」

話を最初のものへと戻し、圭一が尋ねる。

柳や穂村は如月という人物の事を知っているようだったが、圭一にはまるで聞き覚えがない。

柳「そういえば、まだ君がいない時の話になってしまっか…」

穂村「結構前だけど、その如月つて人が仲間を二〜三人の連れてここに来たんだよ。『この屋敷を渡せ』とかふざけた事を言いにな」

圭一「ふうん…：それで、その時はどうした？」

穂村「渡せねえつて答えたら、大人しく帰っていった。こっちも疲れてたんでそのまま帰したけど、こんなことになるなら殺しといた方が良かったかもな…。前よりも仲間の人数増えてそうだし」

圭一「今日の為にずっと力を蓄えてたつて訳か…」

穂村「だなあ…。下手したら二十人越えてるかもね…：あははっ！」

穂村がケラケラと笑いながら圭一の背後に立ち、その肩をバシバシ叩く。圭一はそんな穂村を突き放した後、ソファーに腰かける狭山のそばへと歩み寄った。

圭一「二十人越えだとしたら、今までやり合った中でも最大の敵になるな…。まったく、面倒だ…」

狭山「…ごめんね。でも圭一さんと一緒なら負けなと思うから、がんばろうよ」

圭一「…わかったよ。…で、いつやるんだ？」

狭山「…今から一時間以内に向こうの隠れ家に行く約束しちゃう

た」

日時を尋ねられ、狭山は答える。

当然、柳と圭一は思っていたよりも急な話に驚いていた。

柳「随分と急な…」

圭一「まったくだ…」

狭山「だって、直接ここに来ようとしてたんだもん。それは嫌でしょ？屋敷の庭が死体だらけになっちゃう…」

柳「お気遣いどうも…。ところで、相手の隠れ家の場所は分かっているよね？」

狭山「もちろん…情報は集めてあるから大丈夫」

圭一「じゃあ聞かすが、その隠れ家とやらにはどのくらいでつく？」

狭山「車なら30分…くらいかな…」

圭一「んじや、早めに出向いて終わらせよう。面倒事は手早く済ませたいんでな…」

圭一は立ち上がり、狭山と穂村を急かす。

柳はというと、残ったコーヒーをのんびりと飲んでいた。

全く緊張感のない柳を見て、圭一は小さくため息をつく…。

圭一「とりあえず、全部終わるまでお前はどっかに隠れておけ。ここに敵がくる可能性もなくはないからな」

柳「…了解、地下にでも隠れておくよ。終わったら呼びに来てくれ。それまでは出ないようにしておく」

穂村「よし、んじやあ…」

狭山「…行ってきます」

柳「ああ、気をつけて」

柳に見送られ、三人は談話室を出ていく。

その後長い廊下を抜けて庭へと出てから、止めてあった車へと乗り込んだ。

穂村「狭山先生、俺は目的地しらねーんで、ナビ頼むわ」

狭山「…わかった」

運転席に穂村、助手席に狭山：そして圭一は後部座席。

それぞれが自分の配置についたところで、一行を乗せたボロボロのワゴン車は走り出した。

時おり現れる感染者を避けながら、狭山のナビ通りに車は進む…。思っていたよりも順調に進めた事もあり、車は20分弱でそこに到着した。

如月達の隠れ家：そこは元々図書館だった場所であり、広い駐車場には既に数名の男達が待ち構えていた。連中は彼等を見つめているが、何も言葉を発さない…。

…ボタン！

圭一「……」

穂村「おお、見られてる見られてる」

駐車場の中央、そこへと雑に車を止め、外に出る。

彼等の後方、先程入ってきた入口では待ち構えていた連中の内の一人がゆっくりと入口の門を閉めていた。

穂村「逃げ場はないってことかな？」

圭一「いや…見たところ鍵を閉めてないし、その気になれば飛び越えられる高さだ。あれはただ、外から感染者が入るのを防いでいるだけだろう」

門を閉め終え、男はこちらの様子を窺う…。

すると穂村達の前方にある図書館の扉が開き、そこから如月が現れた。

彼女は刃物や鉄パイプなどを持った仲間を数人連れており、余裕に



満ちた表情をしている…。

如月「あらあら…思っていたよりも早いわね？」

狭山「面倒事は早く済ませたいからって…圭一さんが…」

如月「圭一…？」

狭山と穂村のそばに立つ圭一を如月はじつと見つめる。

何故なら、如月は圭一とは初対面だったからだ。

如月「これまた予想外ね…あんた誰なの？」

圭一「神崎圭一…。一応、コイツらの仲間だ」

如月「柳って奴とは別人か…。新しい仲間を増やしたわけね…」  
ブツブツ呟きながら圭一を見つめる…。

少しすると、如月の背後から一人の男が現れた。

男の年齢は20代前半といったところだろうか…そこそこ若く見えるが、穂村と比べると落ち着いた雰囲気だ。

???「そいつがお前らみたいな化け物じゃない事を祈るよ…」

穂村「…あ？」

狭山「……………」

如月の横に立ったその男は穂村、そして狭山をジロジロと見つめ、ニヤリと微笑む…。その表情が気に入らなくて、穂村は舌打ちをした。

穂村「ちつ…なにジロジロ見てんだよ？」

???「やっぱり覚えてないか…」

穂村「?…どっかで会ったか？」

男を見ながら穂村が首を傾げていると、狭山がため息をつく。  
彼女はしっかりとその人物を覚えていたようだ。

狭山「…かなり前、穂村がボコボコにしてた人じゃない？ボクは見覚えあるよ」

穂村「…つてもな、何人もボコボコにしてきたから分からねえよ」  
穂村が頭をかきながら言うと、男はその場で軽く頭を下げる。  
そしてそのまま、自己紹介を始めた。

有馬「名前を言うのは初めてだな。俺は有馬一樹<sup>ありまかずき</sup>…。以前お前らに  
やられた者だが、今はこのグループのボスをやっている」

狭山「…お前ら」って…あの時ボクは何もしなかったと思うけど」

ぼそつと呟く狭山だが、それは目の前の男…有馬の耳には届かない。  
い。

察するに、有馬は穂村に対して恨みを抱いているらしい。

穂村「へえ、出世したじゃん！」

皮肉を言って笑いながら、穂村はパチパチと拍手を鳴らす。

だが有馬はそれに苛ついたりはずせ、笑顔のままだった。

そんな中、圭一は狭山に小さな声で尋ねる。

圭一「穂村はどうしてアイツを襲ったんだ？」

狭山「…あの当時、穂村は暴れたい盛り<sup>さか</sup>だったから誰でも良かったんだよ。…いや、それは今も変わらないか…」

有馬「あの時は死ぬかと思ったけど、こうして今日まで生き延びられた…。本当はお前らの事なんか忘れるつもりだったけど、俺のグループが思っていたよりも大きくなったんでね。力試しがしてみたくなったってわけだ」

有馬がそう言うと、門を閉めていた男を含めた辺りの連中が図書館の中へと戻って行く…。少しだけ嫌な予感がする中、有馬は三人に告げた。

有馬「あの屋敷をくれるなら手荒な真似はしない。でも断るってなら…」

穂村「なんだ、言ってみろよ？こっちは断る気満々だぜ？」

有馬「…じゃあ仕方ないな。そう答えた時の為にプレゼントを用意しておいたから、是非受け取ってくれ」

如月「じゃあね〜♪」

有馬と如月、そしてその仲間達は図書館の中へと戻り、そのまま扉を閉めてしまう。図書館の扉はガラスで出来ており、連中は向こうからこちらを眺めていた。

穂村「プレゼント…？なに訳のわからねえことを…」

10m程先のその扉…穂村はそこに歩み寄る。その扉を破り、中へと入る為だ。しかしその時、どこからともなくエンジン音が聞こえ、穂村は足を停めた。

よく見ると、駐車場の奥からこちらへと一台のトラックがやって来る…。最初はそれで自分達を轢ひこうという作戦なのかとも思ったが、そうではない…。大きなコンテナを乗せたそのトラックは穂村達から20m程離れたところで停まり、中から運転手の男が現れる…。

…ガチャツ

男はコンテナの鍵を外すとそれをほんの少しだけ開け、有馬達とは別の扉から図書館の中へと逃げてしまった…。

穂村「…マジで意味わかんねえ。何がしたいんだよ……」

圭一「付き合っただけ必要はない…とつとと終わらせるぞ」  
度重なる奇行に呆れ、穂村はため息をつく…。

圭一も連中の行動の意味が理解できていなかったが、狭山は違った…。

狭山「…待って」

穂村「どした？」

狭山「あのコンテナの中……」

遠くに停まるトラック、そのコンテナをじっと見つめた後、狭山は耳をすます……。そうする事で、中に潜む存在を確認出来た。

圭一「……何かあるのか？」

圭一が彼女の顔を横で見つめながら尋ねる。

コンテナの中に潜む者の正体に気付いた狭山は少しばかり面倒そうな表情をして、圭一に返事を返した。

狭山「……ワンワンだ」

ガタンッ!!

狭山が答えた時、コンテナの扉を勢いよく開きながら犬が現れる。

数は三匹……既に感染していた。

穂村「マジかよ……あれ、捕まえてきたのか……」

圭一「まあ、かなり距離があるから放っておけ。10mも離れていれば、感染者は俺達の事を敵として感知できないんだろ？」

以前に狭山から教わった事を思い返し、圭一は言う。

今のところ感染犬との距離は20m程あった為、こっちから手を出さなければ危険はないと思った。しかし……犬を見つめていた狭山の表情はじわじわと曇る。

狭山「うん、ただの感染者なら……。でもね、ワンワンは感覚が人間ベースの感染者よりも鋭いみたいで……」

『グルルルッ……』

唸り声が聞こえる……。どうやら、圭一達を見ながら唸っているようだ。

圭一「……まさか、犬には効かないのか？」

狭山「……うん、残念でした」

穂村「肝心な時に使えねえ能力だよ、これ」

『ガウツ!!ガウツ!!』

圭一がため息をつき、穂村が愚痴を溢した瞬間、犬達は彼等目掛けて駆け出す。その速度は凄まじく、もうすぐそこまで迫っていた…。

穂村「狭山先生っ!!」

狭山「…わかってる。ごめんね、ワンちゃん達…」

穂村が呼び掛けた直後、狭山は腰につけていたポーチから二本の小さなナイフを取り出し、それぞれを両手に持つ。狭山は迫る三匹の内、二匹に狙いをさだめ、持っていたナイフを素早く投げ飛ばした。

狭山「ふっ!!」シュツ!!

『ギャンツ!!』

狭山が投げたナイフはどちらも犬の頭に命中し、二匹の犬が走る勢いのままに地面を転がる。残ったもう一匹はその二匹の死体を飛び越え、狭山へと迫った。

狭山「穂村っ!!」

穂村「はいよっ!」

迫る犬を前にして狭山は下がり、代わりに穂村が前に出る。

穂村は自分目掛けて飛びかかる犬の首を右手で上手く掴み、そのまま頭を地面へと叩きつけた。

ドシャツ…という嫌な音と共に犬の頭は潰れ、死体がピクピクと痙攣する。穂村はそれから手を離し、図書館の中に潜む有馬達を睨んでいる…。苦勞して用意した感染犬がこうもあっさりと倒されるとは思っていなかったからだろう。

狭山「…ボク、ワンワン好きなのに…」

穂村「へえ、初めて知ったわ」

狭山は投げたナイフを二匹の犬から抜き、その死体を穂村が仕留めた犬のそばへと持っていく。そのまま三匹が寄り添うかのようにして寝かせると、狭山はそつと手を合わせて目をつむった。

狭山「…人間相手の方が…全然楽だな…」

圭一「…じゃ、早いところアイツらを片付けるか」

狭山の肩を叩き、圭一が告げる。

狭山は閉じていた目を開き、深く深呼吸をした。

狭山「…：…そうだね」

視線を図書館の扉へと向けると、いつの間にかこちらを覗いていた連中は消えていた。どうやら、中の方へと隠れたらしい。

~~~~~

有馬「相手は感染している犬ですらあっさりとは仕留める化け物達だ。ここは遮蔽物が多いから隠れて隙をうかがい、不意を突いて一気に仕留めろ」

図書館の内部へと戻りながら、辺りに潜む仲間達に有馬は告げる。男達はそれぞれ持ち場に帰り、穂村達を待ち構えた。

如月「私は私で好きにやってもいい？」

有馬の隣を歩いてきた如月が尋ねる。

どうしても、自分で狭山の相手をしたかったからだ。

有馬「自由に……。だが、真っ向からの接近戦は出来るだけ避ける。攻撃するなら遠距離からか背後からだ」

如月「了解っ！ほら、着いてきて！」

如月は境野から借りた仲間を連れ、どこかへと駆けていく。

ちょうどその時、入口の方から声がした……。どうやら、穂村達の中へと入ってきたらしい。

有馬「……必ず殺してやる。今回勝つのは俺達だ」

自分に言い聞かせるようにして呟き、有馬は彼等を迎え撃つ準備を始めた。

六話 『図書館の中へ』

穂村「…チツ、誰もいねえじゃん」

扉から内部へと入った穂村・狭山・圭一の三人だが、だだっ広いそのフロアにあるのは無人のカウンターとボロボロのソファアールだけで、あれだけの敵は一人もいなかった…。

狭山「…みんな奥の方に隠れたんだよ」

圭一「俺達と真っ向から戦う気はないってわけだな…」

穂村「なんだそりや…たかが三人相手にビビりすぎだろ」

狭山「有馬さんはボク達がただの人間じゃないって気づいてるのかもね…。前に戦った時、穂村に圧倒されたから」

穂村「あく…前の経験を活かしてる訳か…。賢いねえ」

感心しているのか馬鹿にしているのか分からない笑みを浮かべて、穂村は奥へと進む。何の迷いもなく正面の道を行く穂村だったが、そばには二階へ上がる為の階段など、いくつかの分岐路があった。

狭山「穂村待って、そっちでいいの？」

穂村「あ？何が？」

穂村は立ち止まり、背後に立つ狭山の方へと振り返る。

狭山はそばにある階段や他の通路…それらを順に指さした。

狭山「この図書館かなり広いみたいだけど…そっちからでいいの？」

穂村「そりや…まずは正面の道から攻めた方が良さだろ…」

穂村が進もうとした通路は入り口から真っ直ぐに進んでいくものであり、恐らくはこの図書館の中心部に続いている。ならば、そこを叩くのが妥当だと穂村は考えた。

穂村「てかさ…狭山先生、音で敵の場所分かんないの？」

狭山「どうだろ…やってみる。静かにしててね」

集中時に聴力が増すという狭山の特技を使えば敵の場所も分かるのでは…。そんな事を思い、穂村がそれを提案する。狭山はすぐそれに同意し、瞳を閉じて集中し始めた。

狭山「……………」

穂村・圭一は彼女の邪魔にならないように口を閉じ、静かに結果を待つ…。以前に彼女がこれをやった時、穂村が大きなくしゃみをしてしまい死ぬほど怒られた。普段からかなり耳の良い狭山だが集中時にはより人間離れた聴力になる為、そばで騒がれると激しい頭痛に襲われるらしい…。

狭山「…話し声は聞こえないね」

少しすると狭山はその瞳を開き、二人へと告げた。

穂村「そりや残念…」

圭一「話し声以外の音は？」

圭一が尋ねると狭山は一つの通路へと視線を向ける。それは穂村が進もうとしてた通路だった。

狭山「足音みたいな音なら聞こえたよ。そっちからね」

穂村「ほれみろ！やっぱしこっちじゃん！」

誇らしげな表情をしながらそっちへと進もうとする穂村だったが、今度は二階へ続く階段を見つめて狭山が呟いた。

狭山「でも、二階からも少しだけ物音がしてたんだよね…」

圭一「そこらじゅうに隠れてるってことかね…」

穂村「じゃあバラけて潰していこうぜ！その方が手っ取り早いし

！」

穂村がヘラヘラしながらそう提案する。

圭一と狭山はその提案に乗るべきか少しだけ考えた後、二人揃って静かに頷いた。

狭山「もう夜になるし、あまり時間もかけられない…。分かれて手早く済ませよっか」

圭一「だな…。じゃあ俺は二階で」

狭山「…ボクはあっち」

圭一は二階へ続く階段へ：狭山は穂村が選んでいたのとは違う、一つの細い通路を選んでそこへと歩いていく。

穂村「んじや、俺はこっちか…。二人とも、がんばれよ」

穂村は最初から向かう予定だった通路へと体を向け、それぞれの方へへと歩いていく二人へと一時の別れを告げた。すると二人は歩みを止め、穂村へと返事を返す。

圭一「ああ、そっちもな」

狭山「圭一さん、何かあったら連絡してね。出来るだけすぐ助けに行くから」

圭一「わかった、そっちもな」

狭山「…うん」

穂村「ピンチになったら連絡するから、助けに来てくれよ？」

狭山「嫌だ、穂村は助けない…」

穂村「なっ!？」

冷たく言い放ち、トコトコと進んでいく狭山…。

圭一は彼女の発言を聞いて少しおかしそうに鼻で笑い、階段を上っていく。少しすると二人の姿は見えなくなり、一人残された穂村は深いため息をついていた…。

穂村「はあ…。本当に冷たい女だよなあ…。くそつ…そつちがピ
ンチになっても助けてやんねえからな…」

ブツブツ言いながら穂村も奥へと進む。

狭山は圭一や柳にはそれとなく優しいが、穂村にだけはその優しさを
見せてくれない…。だが…

穂村「…あ、そういえば狭山先生…敵の男連中に危ない目で見られ
てたよな？…一人にしても大丈夫か？…心配になってきた……」

なんだかんだ、穂村の方は狭山に甘い。

それは彼女が自分の仲間だからだとか、唯一の女性メンバーだから
だとか、様々な理由があつた。

穂村「……………ま、本当に危なくなつたら連絡してくるか…。とりあ
えず、俺は俺でお仕事お仕事つと…」

狭山なら大丈夫だと信じ、穂村は進む。

そしてちようどその頃、一人屋敷に残っていた柳は地下室に身を潜
めつつ、一冊のノートに目を通していた。

くくく

柳「如月…如月…あつたあつた、狭山君は本当によく調べてくれ
ているなあ」

狭山は日々外に出て、物資の収集をしながら辺りを調べていた。

彼女は自分が立ち寄った場所、見かけた生存者などの事を探り、そ
れをノートに記録して柳に手渡していた。

柳が開いたそのページには『キサラギ』と書かれており、今狭山達

が戦っているあの『如月』という女性の情報が記されている…。

柳「どれどれ……」

自分の仲間達がどんな人間を相手にしているのか、一人残った柳は気になっていた。彼等が戻るまでの暇潰しも兼ねて、そのノートに記してある如月の情報に目を通す…。

くキサラギく（生存者）

『たぶん苗字。名前は知らない。年は二十代後半く三十代前半？ボクにやたらとつつかかる嫌な女の人。何人か仲間を引き連れていました』

柳「……ん？これだけか？」

情報量の無さに驚き、柳はページを捲る。

捲ったその次ページには如月についての情報が引き続き記されており、柳は一安心した。

『キサラギさんについて追加情報……。先日たまたま見かけたので、こっそりと追跡した。この人は今、図書館を隠れ家に行っているみたい。最初会ったときよりも仲間がふえてた。たぶん、十人以上いる』
柳（十人か…その程度なら負けないだろうが、これは結構前の情報…。今はもう少し増えているかもな。…ん？）

どれだけ増えたか分からない敵の数に少しばかりの不安を抱きながらノートを見ていると、今までの文字よりも一回り小さく書かれた文字を見つけた。

『図書館の名前を調べ忘れました…。ちゃんと場所は覚えてるから、怒らないで下さい』

柳「…まったく、別に怒らないよ」

ひっそりと書かれていたその文が面白くて、柳は一人で笑う。

結局如月の情報はそれのみだったので、暇潰しに他のページをペラペラと捲っていった。いくつかのページを見ると分かるのだが、情報が事細かに書かれているものもあれば、ほんの数行の文しかないものもある…。

柳（情報量が多いのと少ないものの差が激しいな…。まあ：気分任せで書いているって言ってたし、こんなもんだらう。どんな情報でも、無いよりはマシだ）

このノートは柳が頼んだ訳でなく、狭山が自分で書き始めた物…。日によつては気分が乗らなかったのか、内容が雑になっているページもあるが、外の状況を少しでも知ることが出来るので柳にとってはありがたかった。

柳（見よう見ようと思つて忘れてたからな…この機会に目を通しておこう）

記されているのは狭山が探索した建物やその周辺の状況が主だが、見かけた生存者などについても少なからず記されていた…。

〓〓〓教会〓（×月10日に探索）

『一人で辺りを少し見回った。中に入ろうかとも思つたけど、感染者が多かったので断念…。あの様子だと中に生存者はいないかな。』

〓〓〓警察署〓（□月5日に探索）

『ホムラ、圭一さんと一緒に探索。外にいた感染者を無視して中に入ると、中に四人の生存者を発見。こつちに対してやたらと敵意を向けてきたから、ホムラが三人を倒す。最後の一人には逃げられたけど、たぶん問題ナシ。警察署なら武器があるかと思つたけど、もう何も残っていないかった。（既に持ち出された後？）』

〓〓〓聖イシドロス大学〓（□月25日に探索）

『一人で出掛けた時に見つけた大きな大学。外にいた何体かの感染者

を片付けたあと、中に入ろうと思ったけど……人の気配がするので外から偵察。その結果、中に数人の生存者がいる事、そしてこの大学には電気等が生きていることを確認した。(必要ならまた後日、中に入ってみます)』

く□□病院く(□月30日に探索)

『今日も元気に一人で探索。中は感染者だらけ……。右手を少し怪我したけど、そのかいあっていくつかの医療品を手に入れた。使い道の分からない薬も多かつたけど、とりあえず持ち帰ることに……』

柳(んー……この中では『聖イシドロス大学』が少しだけ気になるな。電気が生きていて、生存者もいる……。みんな無事に帰ってきたら、また後日、調べに行つてきてもらおうかな……)

世の中がこんな状況になった今、電気の生きている建物はかなり珍しい。

だからこそ、如月達は柳の屋敷を狙っているのだろう。

圭一達が無事に戦いから戻ったらこの大学を調べてもらおうと思いつつ、柳はページを捲った。

く巡ヶ丘学院高校く(○月3日に探索)

『彼女たちの着ていた制服……たしかこの学校の制服だったから、気になって見に行つた。かなり荒れていて中には誰もいなかったけど……誰かが暮らしていた形跡が残っていた。やっぱり、彼女たちはここにいたのかも知れない。』

ノートにはそう書かれていたが、その文章の下方にはこれについての追記がしてあった。

『いたのかも……じゃない。彼女たちはここにいた。一つの教室の黒板にメッセージが残つてた。きつと、彼女たちが書いたものだと思う。彼女たちは……この学校を卒業したみたい』

柳（卒業？ いったい… どういうことだ？）

『巡ヶ丘学院高校』についての情報は一際多く、まだ色々書かれていた。今現在は荒れてしまっているものの、元はかなり設備が整っていたようだという事なども記されていたが、後半はほとんど狭山の記事のようになっていた…。

『この黒板を見てたら、ボクはまだ学校を卒業してないってことに気付いた。まあそれは別に良いんだけど、気になったのはここに書かれていた言葉…。「生きてて良いことあったよ」と言うメッセージが書かれていたんだけど、良いことってというのは何なんだろう…』

『そういうえば、彼女達のこととはまだ書いてなかった。今、改めて情報をまとめておこうと思う』

その文章のとおり、次のページには『彼女達』の名前などの情報が記されていた…。

くタケヤ ユキく（生存者）

『映像越しにしか見たことがない。子供っぽい印象が強かった』

くエビスザワ クルミく（生存者）

『声はかけなかったけど、前に一度だけ見かけた。シャベルを使って戦うみたいだけど、この人がこのチームの主力なのかな。彼女には少し注目しておいたほうがいいのかも…。普通の人間とは違う雰囲気を感じたから、もしかしたら…』

くワカサ ユウリく（生存者）

『映像越しにしか見たことがない。とりあえず言えることは、ホームラが好きそうな見た目してたってこと。（主に胸）』

くナオキ ミキく（生存者）

『映像越しにしか見たことがない。ボーイツシユな感じの人』

狭山の記した情報は更にあと一人、例の少年についても記されていた。

『彼とは直接顔を会わせ、少しだけ話もした。彼は辺りの薬を独占していた連中を一人で倒し、襲われていたクルミを助けたみたい。あの連中にはボクからも迷惑してたから、倒してくれたのはありがたかったね。…にしても、敵は三人…しかも大人の男の人だったのに、彼は一人で勝った。運動神経もある程度は良いんだろうけど、たぶん「躊躇いの無さ」が一番の武器になってるんだと思う。相手の首、普通に切ってたし…』

くまとめく

タケヤ ユキ

『猫耳帽子が可愛い』

エビスザワ クルミ

『ツインテール&シャベル。戦闘担当?』

ワカサ ユウリ

『胸が大きくてびっくりした。ボクとそんなに年は変わらないはずなんだけど…』

ナオキ ミキ

『ボーイツシユな見た目の人。これで一人称が「ボク」だったら面白いのに…』

柳「……このまとめにはなんの意味が…」

よく分からない狭山の一面を垣間見た後、ノートを閉じる。

狭山と出会ってそれなりに経ったが、彼女のこととは未だによく分か

らない。

柳（：今はとりあえず、無事に戻ってくることを祈ってしよう。もつとも、彼等なら何も問題ないとは思うが：）

地下室に置かれていた小さなテーブルにノートを置き、そばにあった椅子に座る：。圭一達がここを出て行って三十分は経っただろうか：。彼等がここに戻るのを、柳は静かに待っていた：。

七話 『開戦』

敵の潜む図書館内を別れて進む圭一達…。

最初はどこに敵がいるのかも分からないほどに静かだったが、館内はすぐに騒がしくなった…。

穂村「よっ…と!!」ブンツ!

大きな本棚に囲まれた部屋のちょうど真ん中辺り…。穂村は自分目掛けてバットを振り上げてきた男の首を掴み、そのままそばにあった本棚へと投げ飛ばす。男はかなりガツシリした体格をしていたが、穂村は片手だけでその男を投げ飛ばした。

「ぐツ!!」

勢いよく投げ飛ばされ、男は背中を激しく打ち付ける…。

ぶつかったその衝撃で本棚は倒れ、その向こうに配置されていたいくつかの本棚をドミノのように倒した…。大きな音が辺りに響き、たくさんの埃ほこりが舞う…。穂村は今、複数の敵に囲まれているのだがその内の一人はたった今投げ飛ばされ、衝撃で気を失った。残った他の敵はというと、辺りを舞う埃のせいで咳き込んでいる。

「ぐほっ…ぐほっ…なんて馬鹿力だよ…」

穂村「さて、一人ダウンさせたから…残り六人か。めんどくさいし、とつとと終わらせてもらうんで——」

言いながらゆっくりと敵の方へと歩く。

するとその途中に穂村が横切った一つの本棚…その陰から一人の男が飛び出し、持っていた大きなナイフを構えて背後から穂村に襲いかかった。

「っ!!」シュッ!

構えたナイフ、それを穂村の背に向け…勢いよく、躊躇いなく突く。穂村はその男の存在をギリギリの所で察知し、素早く横へと飛び退く。結果、男のナイフは穂村を貫く事なく何も無い空を突いていた…。

穂村「つぶねえなあ!!」

飛び退いた穂村は直後にその男を睨み、そのまますかさず間合いを詰める。男は寄ってきた穂村目掛けて再びナイフを振ったが、穂村は左手でその攻撃をそらした。攻撃をそらした直後に穂村は右手をグツと握り…その拳を男の腹部へと放つ。

ドゴツ!!

「ガあッ…!!」

穂村の放った拳が男に命中すると辺りに鈍い音が響き、男は口から血を垂らしながら地面に倒れる…。あまりの痛みに声すらあげられないらしく、男は小刻みに震えながら苦しんでいた。

穂村「俺は優しくないから遠慮なく殺していくけど、構わないよな？お前からケンカ売ってきたんだもんなあ？覚悟は出来てんだろ？」

倒れた男の背に片足を乗せ、先にいる六人の敵を威圧するようにして穂村は笑う。男達は多少焦っているような表情を見せたものの、戦う姿勢を崩しはしなかった。

「でかい口叩いていられるのも今の内だ。そっちはたった三人だけだろうが、こっちは三十人を越えてる。本気で勝てると思ってるのか？」

一人の男がニヤリと笑いながらそう告げ、仲間と共に穂村へ一歩迫る…。

敵の戦力が三十人越えという事を知った穂村は少しだけ顔をしかめ、ため息をついた。

穂村「さん…じゅっ?!…:…はあ…マジかよ。でもまあ、一人ずつ狩っていけばあつという間だろ。初っぱなから二人ダウンさせたしな。あと六人——」

「残念…、七人だ」

ガンツ!!

穂村「ぐツ!!」

『七人だ』：男がそう言って笑った直後、後頭部に強い衝撃を受けて穂村の視界がガクツと下に向く…。軽くふらつきかけたが、足に力を入れてそれに耐え、穂村は後ろに振り向いた。

「マジかよ…よく倒れねえな…」

背後にいたのは金属バットを両手で構えた男…先程の衝撃は、この男の不意打ちによるものだったのだろう。渾身の一撃を与えたのに倒れる事なく自分を睨む穂村を見て、男は驚愕している。

穂村「いつてえな…!」

穂村は背後にいた男のバットを素早く奪い、右手で振り上げる…。そしてそれを勢いよく振り払い、元の持ち主の頭を砕いた。

ズシャツ!!!

先程穂村の頭を打った時とはまるで違う音を発し、バットは振り払われる。穂村の振ったバットに打ち倒された男はもう言葉を発する事なく、ピクピクと痙攣しながら力なく地面に倒れた。

「なっ…!!?」

「化け物かよ…!」

不意打ちをまともに受けても倒れず、更に反撃までした穂村を前にしてさすがに焦る男達…。穂村の一撃を受けて倒れた仲間の頭が砕

けて血だまりを広げている光景が、穂村に対する恐怖心を強めていった。

穂村「いてて…：確かに七人”だった”な。油断したぜ…」

穂村はバットを肩にかけ、左手で自分の頭を撫でる。

受けた不意打ちの傷は決して浅くないらしく、頭を撫でた手のひらには血がべつとりとこべりついていた…。

穂村（くそつ…マジでいてえ…。『三十人』つて言葉に軽くビビっちゃまったのかもな…おかげで反応が遅れた…）

血のついた手をプルプルと振り、軽く血を払う。

既に三人の敵を倒し、残るは六人。

しかし…まだ付近に潜んでいる可能性や、増援が来る可能性等もある。最後の一人を仕留め、圭一・狭山と合流するまでは気を抜けない…。

穂村（少しふらつくけど、まあ…どうにかなるだろ…）

「倒せはしなかったが、全くダメージがないわけでもない…。全員で囲めばすぐにぶつ倒せるさ」

「だな…。動かなくなるまで叩いて、有馬さんに死体を見せてやるか」

六人は静かに動きだし、穂村を取り囲む…。

穂村はバットをギュツと握ると、どこか楽しげに微笑んだ。

穂村「やれるもんなら…ってやつだな」

くくくく

…ガチャツ

狭山「…外に出ちゃった…」

穂村が図書館内部で戦っている一方、狭山は自分が開けた扉が外に続いていた事に戸惑っていた。

狭山「裏口…かな…。まあ、別にここでもいいか…」

狭山が出た場所は図書館の裏口らしく、正面入口の方と比べると飾りつ気が無い。外へと出てしまった狭山だがあえて中には戻らず、そばにあった図書館と道路を隔てていた鉄柵へと寄りかかって裏口の扉を見つめていた。

狭山「……………」

…ガチャツ

鉄柵に寄りかかってすぐ、先程狭山が出てきた扉が開く…。

中から出てきた人物は外にいる狭山を見つけて嬉しそうに微笑み、彼女に声をかけた。

如月「あらあら…一人で外に出ちゃうなんて、迷子なのかしら？」

数人の男を引き連れた如月は一人きりの狭山へと語りかけ、扉を閉める…。狭山は寄りかかっていた柵から背を離し、如月とその連れを見つめた。

狭山「…扉、ちゃんと閉めといてね。逃げられると面倒だから」

如月「ふふつ、私達は逃げないわよ。だって、せつかく狭山ちゃん

を追い詰めたんだもの♪」

「途中から君をつけてたんだけど、気づかなかったのかな？」

「怖がって逃げたりしないでくれよ」

「ま、走って逃げる女の子を追っかけてつてのも中々に面白そうだけどな」

そばにいた男らは狭山を見ながらニタニタと微笑み、ジリジリと歩み寄る。しかし、狭山は表情一つ変えなかった。

狭山「つけられてるの…気付いてたけどね」

如月「あら、そうなの？…ああ、だから外に逃げたってわけ？」

狭山「いや…どつか鍵のかかる個室にでも誘き寄せて仕留めようと思つてたら外に出ちゃって…」

如月「誘き寄せる？なんでそんなことしようと思つたの？」

狭山「だから……さつき言つたでしょ…。逃げられると面倒だからだよ」

その言葉と同時に、恐ろしく冷たい視線を向ける狭山…。

如月とそのそばにいた男達の内の何人かはその視線に微かな恐怖を感じたが、相手は少女一人…そう思うと、一瞬でも怖がったのがバからしくなる。

如月「…この人数なら、万が一も無いわよね…。よし、じゃあ…作戦通りにいきましようか！」

「了解っ!!」

狭山を見つめていた如月の目がキツと鋭くなり、それと同時に彼女の仲間が狭山目掛けて駆け出す…。迫る敵は三人…。如月はというと、狭山に迫る三人の男らの後方で、残った他の仲間と共にたたずんでいる…。狭山の隙でも窺っているのか、向かわせた三人だけで勝てると思つているのか…今一つ如月の考えが読めない狭山だったが、一先ず目の前の三人を相手にすることとした。

「ほらっ！」ブンツッ！

三人の内の一人が狭山の体目掛けて拳を放つ…。

三人ともナイフを腰にさげていたが、狭山を殺す気はないのか…全員が素手で彼女に挑んだ。たった一人の少女相手なら、武器などいないと判断したのかも知れない。

狭山「…っ！」

狭山は放たれた男の拳をギリギリのところでかわすと、自分のポーチから警棒を取り出す。すぐさまそれを振り上げ、その男の頭に放とうとする狭山だったが…彼女はそれを止めて後ろへと跳んだ。二人の男が彼女目掛けて手を伸ばしてきたからだ。

狭山「よっ…とつと…。」

「へへっ、すばしっこい娘だなあ…。」

伸ばした手を的確にかわし、距離を空ける狭山を見て男が笑う…。

狭山（三人同時に攻撃されると、かわすがやつとだから面倒…。今度はボクから攻めていって、素早く…一人ずつ確実に倒していこうかな…）

警棒を持つ右手に力を入れ、目の前の三人を見つめる。

その三人の数メートル後方では、如月が四人の仲間と共にこちらをニヤニヤしながら見ていた。

余裕たっぷりと言わんばかりのその表情は狭山を挑発しているかのようにだったが、狭山はそれを大して気にもせず、冷静なままでいた。

狭山（目の前に三人…。更にその後ろには如月さんを含めた五人の敵…。合計八人…。かなりの人数だけど、このままなら問題なくいける）

敵は狭山の容姿に惑わされ、かなり油断している…。

あえて武器を使わず素手なのと、八人全員でかかってこないのがそ

の証拠だと狭山は考えた。

狭山（八人全員でかかってくればよかったのに、バカな人たちだな…）

頭の中でそんなことを思いながら、狭山は一気に駆け出す。

目の前にいる三人のそばへと駆け寄った狭山はその内の一人へと狙いをさだめ、持っていた警棒を振り抜いた。

一連の動作はとても素早く、狭山の放った攻撃は一人の男の腹部に命中し、ダメージを与える。

ドスツ!!

「がはッ…!!」

攻撃の後、狭山は間髪入れずに警棒を振り上げてその男にとどめを刺そうとする。

しかし、そばにいたもう一人の敵が彼女が仲間に警棒を振り下ろすよりも先に彼女の腕…そして首を掴んだ…。

狭山「っ!!」

「つかまえたっ!」

狭山の首を掴んだ男はニヤリと笑い、彼女を背後の鉄柵へと押し付ける。

武器を持っている右手も掴まれていた狭山はすぐに抵抗出来ず、ガシャン!と激しい音をたてながら鉄柵に背をぶつけてしまう。

狭山「…い…たい」

「そいつは悪かった…。でも、君に殴られたアイツの方が痛いと思うぜ?」

男は狭山の首、そして右手を掴み、彼女を鉄柵に押し付けながら先

程殴られた仲間の方に振り向く…。仲間は狭山に殴られた腹部を手で押さえながら、苦しそうにふらついていた。

狭山（まだ立ってられるんだ…。お腹じゃなくて、頭を狙えばよかった…）

ダメージを負いながらも立っている男を見た狭山がそんなことを思っていると、彼女の耳に妙な音が飛び込む…。

カシヤツ……

あまり聞き覚えのない、金属音のようなその音は狭山のすぐ左から聞こえた…。狭山は男に首を掴まれたまま、視線をそつとその方向……自分の左手へと向ける…。

狭山「……………」

狭山の左手にはいつの間にか手錠がつけられており、後ろの鉄柵と繋がってしまった…。狭山にそれをつけたのは、これまたいつの間にかそばに忍び寄ってきていた如月だった。

如月「あははっ！かわいく！似合ってるよ〜♪」

左手を鉄柵に繋がれた狭山を見た如月がケラケラ笑うのと同時に、狭山を掴んでいた男が自ら手を離して距離をあける。男の目的は、如月が手錠をつけるまで狭山を鉄柵に寄せる事だったからだ。

狭山「如月さん…さつきまであつちに立ってなかった？いつの間に近寄ってきたの？」

如月「狭山ちゃんが戦いに夢中になってる間にね、そ〜っと、それでいて素早く忍び寄ってそれをつけたの。いやあ…まさかこんな簡単に行くなんてね〜♪」

如月は手錠に繋がれた狭山の手が届かない距離ギリギリのところ
に立ち、彼女を挑発するかのように笑う。狭山は相変わらずそれを氣
にせず、ただじつと手錠を見つめていた。

狭山「……………」

ガチャツツ：ガチャツツ：

手錠の片方は自分の左手に：もう片方は鉄柵に：ガツシリと繋が
れていて外れない。狭山は周りに立つ敵の視線を気にせず左手を動
かすが、手錠はガチャガチャと耳障りな音を鳴らすだけだった。

狭山（…………結構頑丈なんだ。：うん、これは少しマズイかも）

力を入れても壊れない手錠を相手に狭山は困ったような表情をし、
如月へと視線を向ける。如月は狭山が焦っている事に気づいたのか、
益々ニヤニヤし始めた。よく見れば、如月の仲間の男らも狭山の手が
届かないギリギリの距離まで近寄ってニヤニヤと笑っている。

狭山「これ…………鍵は？」

如月「鍵？ここにがあるよ」

小さな鍵を人差し指と親指でつまみ、チラチラと振る如月…。

どうにかしてそれを手に入れたい狭山だが、鉄柵と繋がれている以
上どう頑張っても届きそうにない。

如月「狭山ちゃんが私達の仲間になって、更にあの屋敷くれるつて
ならこの鍵あげるよ？」

狭山「…………それは、ちよつと無理」

如月「ほんとに無理かな？ウチのグループつて女の子が私と、もう
一人の娘しかいなくてさ。しかもその娘は戦ったりも出来ない無能
だから：狭山ちゃんがいれば心強いわ。私、狭山ちゃんの事嫌いだけ
ど：無能なのに何故か有馬くんは氣に入られてるあの女はもつと嫌
いな」

狭山「モチない女の癖み……かな？そういうの、怖いね」

如月「ああ…そう。せつかく誘ってあげたのにそういう態度なら、仕方ないね…」

如月は持っていた鍵を上着のポケットにしまい、ニコツと笑う。

なにやら楽しげに微笑んだ如月は仲間の一人からバットを受け取ると、それを何の躊躇いもなく狭山の顔へと振り払った。

狭山「っ!？」

バシイツ!!!

如月「……うん?…ああ、防がれちゃったか」

勢いよく振ったバットは狭山の顔に命中せず、狭山がとつさに突き出した右手のひらに防がれていた…。

如月「まあ、一発目から終わったらつまんないもんね。これからこれからっ!」

そう言っつて狭山の手のひらからバットを離し、如月は満足げに笑う。

左手が使えず、その場から動くことも出来ない狭山が相手なら、勝つのは簡単だと思ったからだ。

「にしても…よく手で受けたなあ。いてえだろうに…」

如月「大丈夫よ。この娘たち、ただの人間じゃないらしいから。あのくらいじゃノーダメージでしょ」

狭山（…けっこう痛いよ。ビリビリするもん…）

如月の振ったバットを受けた右手を軽く振り、その痛みをまぎらわす。

一発だけならどうにかなるが、短い間隔で二発目…三発目とこられたら、いくら狭山といえど全てを防ぎきれはしないだろう。

如月「これから、ここにいる全員が武器を使ってアンタを殴ってくるから、せいぜい頑張って防いでいってね？」

狭山「……………」

バットや鉄パイプにバール…男らはそれぞれが様々な鈍器を持って狭山へと近寄る…。狭山は左手を手錠に封じられ、動かせるのは右手と両足…。しかも持っていた警棒は如月のバットを防ぐ際に落としてしまった……どうにかして拾おうにも、手が届かない。

「じゃあ、始めていいですか？」

如月「武器のリーチを活かして殴ってね。無駄に近寄り過ぎると反撃されちゃうかも知れないから」

「了解…。近寄り過ぎず、慎重に……って、こんな女の子を相手になりに情けない戦い方だな」

狭山「まったくだよ…。手錠をされて動けない女の子を数人で…それも武器を使って襲うなんて」

その場から動けない自分を取り囲む男らを見て、狭山は少し焦り始める。今のままの状態で、武器を持った数人の敵を相手にするのはかなりの難易度だからだ。

「んん…悪いね。こっちは絶対に負けれないんで、卑怯な手でも何でも使わなきゃいけないんだわ」

「そういうこと。でも大丈夫…君の態度次第ではこっちも殺しまではしないからさ」

男達は不気味に微笑み、武器を振り上げる…。攻撃も一人ずつなら右手で防げるが、複数人による同時攻撃だとそうはいかない…。

如月「じゃあ…いってみよつか♪」

少し後ろからその様子を眺めている如月のその言葉…それを合図に、男達は手にしていた武器を狭山へと振り下ろした…。

くくくくくくく

一方、図書館の二階へと上がった圭一は廊下を抜けて一つの部屋へと足を踏み入れていた。その部屋はここに住んでいる連中によつて物を片付けられたのか…はたまた元からなのか、部屋に置かれている物は奥にある大きなテーブルだけでなのだが…その上には一人の若い男が座っており、更にそのそばには六、七人の仲間がいた。

…ボタンツ

部屋に入った圭一は扉を閉め、その連中を見つめる。
テーブルの上に座っている若い男は圭一の服が血で汚れている事に気づき、ニヤリと微笑んだ。

「おつ、くくくくるまでに何人かに襲われたのかな？」

圭一「…まあな」

圭一は既にいくつかの部屋をまわっており、その際に何度か襲われていた。いずれも物陰や背後からの攻撃だったが…圭一はそれを受けける事なく、襲いかかってきた全員を返り討ちにしてきた。

「怪我とかしてる？」

圭一「残念ながら無傷だ。つまり、ほとんど全力の状態でお前らを殺せる」

言いながら圭一が一步前へと進むと、敵達は警戒してボールなどの武器を構え出す…。しかしテーブルに座るあの男だけは武器を構えることなく、相変わらず座ったままニヤニヤと微笑んで圭一へと尋ねた。

「ちよつと聞きたいんだけどさ、アンタら三人の中で一番強いのは誰？」

圭一「さあ…誰だろう。全員似たり寄ったりかな」

歩みを止めて圭一は答える。

誰が一番強いかなど考えた事はなかったし、わざわざ真剣に考えてまでこの男に答えを返してやる気もない。

強いて言うなら…狭山は若い女の子な分、単純な力は穂村や圭一よりいくらか劣るといふくらいだろう。とは言っても、柳の薬による強化を受けている以上十分に強いのだが…。

「俺からしたら、アンタが一番だと都合がいいなあ…」

圭一「へえ、そりやまたなんで？」

不思議に思った圭一が尋ねると男はテーブルから降り、その上に置かれていたナイフを手に持つ…。少し大きめの刀身をしたナイフを持った男はその先を圭一へと向け、その目をギラリと光らせた。

「このグループで感染者や人間を一番殺してるの、俺なんだよね。ようするに、俺はこのグループの主力つてやつ」

圭一「…なるほど、戦い馴れしてるってことか。立派な事で…」

どこかバカにしているように言葉を放つ圭一を見て、その男の周りにいた仲間達が次々と口を開き始める。仲間達はこの男の実力にかんりの信頼をおいているのか、それとも相手が圭一一人なのに対して自分達は大勢だからか……余裕たっぷりといった感じだ。

「あまりおだてたくないけど、コイツは本当に強いぞ」

「アンタみたいな奴が殺されるの、今まで何度見たことか…」

「まあまあ、俺を崇めるのはそれくらいにして……とつとと殺るぞ。コイツの他にも二人残ってるんだからさ」

「そんな慌てなくても、もう他の連中に殺られてるんじゃないか？」

「ははっ！それもそうか！」

男達はゲラゲラと品のない笑い声をあげる…。

圭一は連中のそんな笑い声を遮るように、少し大きめな声で言葉を発した。

圭一「はやく帰りたいんで、とつとと死んでくれるか？お前らを見てると戦う前から疲れる」

「へえ……ずいぶん自信あるんだな。んじゃ、お望み通り始めるか…」

男達は武器を構え直し、静かに圭一を取り囲んでいく…。

それに対する圭一は何一つ武器を持たず、素手のままで男達に視線を向けた。

八話 『狭山の戦い』

如月「……ほんと、よく頑張るわね」

図書館外の裏口……そこで如月は仲間達と共に狭山を相手に戦っていた。

”戦っている”とは言えば聞こえは良いが、実際は手錠により鉄柵と左手を繋がれてまともに動けない狭山を武器を用いて次から次へと殴っていくだけ……。最初の一、二分の間は動かせる右手などを使ってどうにかダメージを最小限に抑えていた狭山だったが、攻撃を受ける度に動きが鈍っていき、今では振り払われる武器をまともに受けてしまい始めていた……。

狭山「ぐ……う……！」

如月の仲間である男達は遊び感覚なのか多少手を抜いているようだし、狭山の身体は柳の薬の効果で普通の人間より頑丈になっている。しかし、それでもさすがに限度があり、攻撃を受け続けた狭山の両足に両腕……脇腹や肩……そこらじゅうがズキズキと痛み出していた。

「タフな娘だなあ。もうけっこう殴ってるぜ？」

如月「アンタらの殴り方が甘いからでしょ……。ほら、こうやって……力込めてっ!!!」ブンッ!

如月は持っていたバットを狭山の腹部目掛けて全力で振り払う。

受けてきたダメージにふらつき始めていた狭山はそれをまるで防げず、まともに受けてしまう……。

狭山「っぐ……!!」

「うわあ…かわいいそ〜」

如月の攻撃を受けた狭山は膝をついて倒れそうになるが、左手が鉄柵に繋がれているので完全には倒れられない…。狭山は苦しいながらも立ち上がり、如月達を睨み付けた。

狭山「…っ…う…！ほんとに…痛いんだけど…」

如月「そう？それはよかった♪効いてなかったらどうしようかと…」

倒れかけた狭山から二、三步離れ、如月はそのバットを肩にかけて笑う。今まで小馬鹿にされてきた狭山を自らの手で殴り、弱らせていくのは彼女にとつてとても愉快な事だった。

狭山「…っ…っ…まったく…もう…」

如月と戦いだして、まだ十分も経っていないだろう。狭山は目の前にいる八人の敵を未だ一人も倒せず、こうして苦しんでいる…。今の状況はかなり悪く、狭山はもつと早く如月を殺せばよかったと後悔していた。

狭山（身体中が痛い…でもまだ普通に立ってられるし、骨が折れたりはしてないはず…。どうにかして一人でも倒さないと…穂村に笑われる）

敵達が攻撃の手を休めてる間に腰のポーチに手を入れ、使える物を探す。入っていたのは暗闇を照らすライト、感染者を誘き出す為の爆竹、それと感染犬との戦いで使った二本のナイフのみ…。今回の戦い自体が急な話だったので、大した準備をしてこなかった…。

狭山（爆竹は…そばに感染者がないから使っても意味がない。このナイフは短いから今の状況じゃ振っても当たらないし、数も二本だけ…八人相手じゃ軽い気持ちで投げる事も出来ない。この状況で外したら最悪だし…）

今一つ使える物が無いポーチから手を抜き、狭山はため息をつく。

すると如月は持っていたバットを他の仲間へ渡し、素手の状態で彼女のそばにギリギリ手の届かない位置まで寄ってきた。

狭山「……なに？助けてくれるの？」

如月「いや、私も忙しいし、アンタにだけ時間かけてらんないのよね。だから……アンタにとってこれが最後のチャンス。あの屋敷を渡して、私達の仲間にならない？」

狭山「……待遇によるかな」

ふふつと可笑しそうに笑いながら、狭山は如月にそう告げる。

実際のところ、どんな良い待遇を与えられても如月の仲間になどなるつもりはない。これはただの時間稼ぎだった。

如月「待遇はあまり良くないかなあ……。ただ、ここでこの話を断つたら死んじゃうけどね。生きてバカみたく使われるか、このまま殺されるか……どっちがいい？」

狭山「待遇……よくないんだ……。残念……」

如月「まあね。アンタが仲間になるなら当然私の下についてもらおうし、それにこの男の人達ともいっぱい遊んでもらうから♪」

ニコツと笑いながら、如月は仲間である男達を見回す。

直後、狭山は自分を見る男達が不気味な笑みを浮かべるのを見て”遊んでもらおう”という言葉の意味を悟り、男達から目を逸らした。

「照れてんの？大丈夫だよ。そんな生活、すぐ慣れるから」

「ウチは女が少ないからなあ……キミみたいな可愛い娘がいてくれたらかなり嬉しいんだけど」

ただ目障りだから目を逸らしただけなのに、男達はそれを照れだと勘違いする。ゲラゲラと笑い合う男達にさすがの狭山も苛立ち始めてきたが、その内の一人が発した言葉に気になるものがあり顔を上げた。

「可愛い娘っていえば……境野さんのとこにいた娘達、まだ生きてるか

な？」

「さあ、どうだろうな。殺すのは勿体ないと思うけどね」

狭山「その娘達……どんな娘だった？」

「はっ？」

如月「なに？気になるの？」

狭山「……ちよつとだけ」

いきなり話に割り込んできた狭山を焦らすようにして答える。

狭山はただ話を広げて時間を稼ぐつもりなのかとも思う如月だったが、なんとなく……それは違う気もした。

如月「そう言えばあの娘達、狭山ちゃんと同じくらい年齢かしらね。どっかの学校の制服着てたから、女子高生かしら」

狭山「……それで、どんな娘？名前は？」

如月「やけに食いつくのね……。そんなに知りたい？」

狭山「……できれば」

そう呟く狭山を相手にどうするか悩む如月だったが、答えはすぐに
出た。

如月（もしかして……友達でも探してるのかしら？だとしたら、脅しのネタに出来るかもね……）

そんな事を思った如月はあの場にいた三人の少女の名前を思いだし、それを狭山に伝える。しかし、全員の名を一度に教えて全員が彼女の知り合いじゃなかったら勿体ない。ここは小出しにして答えることにした。

如月「三人いて、一人は確か……水無月未奈。……知り合い？」

狭山「いや……知らない人」

如月「……そう」

一人目はハズレ。これでもし二人目もハズレたら、三人目の名は隠したままにしようと如月は考える。もし狭山が離れ離れになった友達でも探してるのなら、その三人目が気になって如月に従う可能性もゼロではないからだ。

如月「あとは…えっと、なんていったかな…」

狭山「……………」

不覚にもあと二人いた少女の名前が思い出せず、如月は頭を悩ませる…。あの時、境野達の前で名前を名乗っていたハズなのだが…。

狭山「…忘れたならいい。たぶん、ボクの探してる人じゃ——」

ド忘れした如月に呆れた狭山が諦めかけたその時…如月は思い出した。あの時あの場にいた少女…その一人の名前を。

如月「あつ、ゆきだ…。丈槍由紀」

狭山「えっ?」

如月「おっ!こっちは知り合いなのかしら?」

丈槍由紀の名前を出した途端、狭山は明らかに反応した。

如月はそれを見逃さず、自分がより優位に立ったと確信する。

如月「友達なら助けてあげよつか?もちろん、狭山ちゃんが私に従うことが大前提だけど」

狭山「…ううん、友達じゃないから…どうにでもしていい」

如月「んん?」

意外にも、狭山の返事はあっさりとしていた。

もし丈槍由紀が彼女の友達なら、こんな返事は返さないだろう。

如月（強がっている……って訳でもなさそうね。なら、どうして丈

槍由紀の名前を聞いた時に反応したのかしら）

狭山「…その由紀って娘、まだ生きてるの?」

如月「ん?ああ…どうかしら。運が良ければまだ生きてるんじゃないな

い？」

狭山「運が良ければ……か」

如月「気になってるなら正直に言えば？どうしてもって言うなら、由紀ちゃんを助けに行つてあげるわよ」

丈槍由紀は狭山の友達ではないようだが、狭山は丈槍由紀を知っているようだ。二人がどんな関係なのかよく分からないまま、如月は狭山と交渉し続ける。

狭山「…横取りされるもイヤだけど…仕方ないか」ボソツ

狙っていた彼女を如月の仲間に取られたのは少しばかり気に入らないが、それも仕方のないことだ。そう思つて狭山が小さな声で呟くと、それを聞き取れなかった如月がもう一度聞き返した。

如月「ん？なに？」

狭山「…なんでもない。とりあえず、その由紀つて娘のことは好きにしているよ。友達でもなんでもないから、どんな目にあつても知つたことじゃない」

如月「ふうん…：冷たいのね」

狭山「知り合いでもないんだから、当然でしょ」

眉ひとつ動かさずに淡々と答えるところを見ると、本当に友達ではないらしい…。もつとも、如月は狭山に友達などいないと思つていたから驚きはしなかった。

如月「ふふつ、そうよね。狭山ちゃんに友達なんていないわよね…」
そうして何気なく思つた事を口に出す。

すると突然…狭山の左手を封じている手錠が辺りに音を響かせる。

ガシヤツ…！

狭山「……………」

狭山は左手を前に出そうとしたようだが、手錠のせいでそれが出来ないようだ。彼女は何故、このタイミングで前に出ようとしたのだろうか…。何か…如月の言葉に気に入らない事でもあったのだろうか…。

如月「…どうかしたの？」

狭山「…べつに」

特別おかしな事はないかのよう to 答えたつもり of 狭山だったが、如月は気づく。彼女は、今自分が言った言葉に反応したのだと。

如月「あつ！友達いないって言われたの、気に入らなかった？」

狭山「……平気」

また、あたかも冷静であるかのように答えた。

しかし、やはりいつもとは違う様子にも見える。

如月「可愛そうな狭山ちゃん……友達いないんだ？」

狭山「……」

如月「まあそれもそうだよね。無愛想で可愛げのないアンタみたいな娘…友達になってくれた人なんていないよね？」

ギリギリ手の届かない位置まで寄り、狭山を挑発する。

狭山は少し顔を俯けて黙っていたが、だんだんその目が鋭くなっている気がした。

如月「で、実際はどうなの？友達…いた？」

狭山「……」

狭山は答えない。

だが、彼女を少ししか知らない如月にでも分かる。狭山は見栄を張るようなタイプの人間ではない。もし本当に友達がいなかったなら、正直に『いない』と答えるだろう…。なのにそう答えなかったということは、つまり……

如月「ああ……いたんだ」

狭山「……………」

ピクツと狭山の眉が動く…。

それを見た如月はとても嬉しそうに、だが声を出さずにニヤツと笑う。

この無表情娘を苛めるための、良い弱点を見つけたと思ったからだ。

如月「狭山ちゃんなんかと友達でいてくれるなんて、優しいんだか…見る目が無いんだか…」

狭山「……………黙って」

狭山が顔を上げて如月を睨む…。その目は今まで見たことないくらいに鋭く、如月に怒り向けているのは明らかだった。

どんな事を言っても、どれだけ殴ってもずっと表情を変えなかった狭山。彼女のこんな顔を見るとなんだか勝った気分になり、如月の頬は緩んでいった。

この小娘の顔をもっと歪ませたい…。もっと勝った気分になりたい…。

如月はそんな衝動に駆られ、更に言葉を放った。

如月「まあ、見る目の無いバカな子だったんでしょね。んで、そのバカな子とは今も仲良くしてるの?」

狭山「黙れって…言ってるでしょ…」

更に狭山の目付きがキツくなる。

声もいつもより大きくなり、左手の手錠がなければ今にも如月を殺してしまいそうだった。

如月「…ああ、せっかくの大事なお友達…今はもういないんだ？」

ガシャンツ!!!

如月の言葉を聞いた狭山は無理に前に出ようとするが、相変わらず左手の手錠が邪魔をする。しかし今回の狭山は諦めが悪く、左手に強い力を込めて腕を引き続ける…。手錠はピンと伸びながら彼女の左手と鉄柵を繋ぎ止め、ガチガチと震えていた。

狭山「黙れって…黙れって言うてるのにつ…！」

如月「あははっ！怒った怒った♪」

ガチツ…ガチツ!!

狭山は手錠を引き千切らんばかりの勢いで手を引き続け、如月を睨む。

もしかしたら手錠が壊されるのでは…如月やその仲間がそう思い始める程、今の狭山は必死だった。

狭山「くそ…くそ…くそっ!!」

鉄柵でも…手錠でも…自分の左手でもいい…。

どれかが壊れさえすれば、今すぐに如月を殺せる…。

そんな考えで手錠を引く中、最初に異変が起きたのは狭山の左手だった。

ブシユツ…!

狭山「ぐ…ううっ!!」

左手首に激しく手錠が食い込み、皮膚が裂け始めた…。

地面にポタポタと血が滴り、手錠の一部が真つ赤に染まる。しかし、狭山はそれでも手錠を引き続けた……。

「おいおい……マジかよ！この娘、手え千切る気じゃねえの!？」

「き、如月さん……どうしますか?」

如月「ん……良い顔も見れたし、もういいかな。殺しちゃおう」

そう言つて如月は仲間が腰につけていたナイフを借り、狭山を見る。

狭山はまだ手錠を引いており、それによつて左手首が少しずつ裂けていった……。彼女の真つ白だった左手は自らの血に染まり、指先からポタポタと血を垂らす……。かなり痛むようで、狭山は苦痛そうな声を漏らしていた。

狭山「つぐう……!!ぐああっツ!!!」

如月「私一人だけだと防がれちゃうかも知れないから、三人くらいで同時に刺そつか」

「へいへい」

「了解、気は進まないけどね……」

如月のそばにいた仲間の内の二人がナイフを取りだし、狭山のそばに寄る。如月と二人の男はそれぞれが狭山の頭、首、胸へと狙いを定め、彼女を同時に刺す準備をした。

狭山「ぐ……ううっ!!」

如月「んじや、いくわよ。三……二……」

カウントダウンを始め、如月と二人の男はナイフを構える。

あとほんの少しで狭山を殺せると思ひ、如月がにやけたその時……異様な音が辺りに響いた。

バキインツ!!!

狭山「っ!!」

直後、今まで動けなかった狭山が前へと進む…。

彼女の左手は血まみれだがまだ壊れてはいないし、手錠の鎖も壊れてはない。

壊れたのは…繋いでいた鉄柵の方だった。

いくつも並んでいる鉄柵の内の一本…手錠をかけていた箇所だけが折れ、地面に転がっている。

如月「なっ!?!」

「嘘だろっ!?!」

彼女の左手と繋げていた鉄柵は僅かに腐食していたようだったが、それは本当に僅かな腐食…：簡単に折れてしまう程のものではないように見えた。にも関わらず折れたのは、狭山が必死に力を込めて引き続けたからなのだろう…。

狭山「つく…うっ!」

自由になった狭山は直ぐ様右手をポーチに入れ、ナイフを手に取り、

その様子をそばで見ていた二人の男はすかさず彼女目掛けてナイフを構え、その身体へと真っ直ぐに突いた。

「このっ!!」

狭山「っ!」

狭山の前方からほぼ同時に放たれた二人の攻撃。

いつもの彼女なら両手を使ってそれを受け止めたところだが、今は左手がボロボロで使えない…。狭山は伏せるように地面に身を倒してその攻撃を避け、そのまま持っていたナイフで素早く二人の足首を切った。

「いつ…!」

「くそっ!!」

狭山「くっ!」

目の前にいた二人の足首を切った直後、狭山はすかさず立ち上がった。敵達との距離を空ける。二人は切られた足を少し気にしてはいたものの、大したダメージは負っていなかった。狭山の持っていたナイフは小さかったので、切り傷が浅かったらしい。

如月「ちよつと!なに避けられてんの!?ちゃんと刺しなさいよ!!」
「んなこと言ったって、あの娘すばしっこくて…」

狭山を仕留められなかった二人を責める如月だが、この二人はまだ優秀な方だった。目の前で鉄柵を折った狭山を相手に戸惑いながらも、すぐに仕留めようと動いたのだから…。

狭山「自分は動けもしなかったクセに…人のことばかり責めるんだね」

如月「なっ!?アンタ…ほんとにムカつく…!」

人を小馬鹿にしたような態度の狭山に苛立つ如月だが、それでも一人では彼女の元に寄らない。いくら左手が壊れかけてるとはいえ、狭山は普通の少女とは明らかに違う…。どれだけ挑発されようと、今は堪えるしかない。人数では遥かに勝っているのだから、じっくり攻めれば勝てるハズだと如月は信じていた。

狭山「……とりあえず二人は終わり。これで…あと六人…」

如月「はっ?なに言ってるの?」

狭山の言葉はまるで二人仕留めたかのような言い方だったが、如月の仲間は全員無事だ。先ほど足を切られた二人の傷も浅く、死ぬほどではない…。なのに誰を仕留めた気ているのかと如月達が疑問に

思っていると、狭山はニコツと笑って持っていたナイフを構えた。

狭山「このナイフ…ついさつき感染したワンワンを刺すのに使ったんだ…。ろくに拭きもしなかったから、まだワンワンの血がついてたね…」

「……………」

「おい…………まさか…………」

切られた二人の顔がみるみる青ざめていく…。

感染した犬の血がついていたナイフで切られたという事…………それにはとても嫌な予感を感じた。

如月「…なるほど。そりゃ厄介な事してくれたわね」

「まさか…俺達は…!」

狭山「うん。感染者の血が体内に入った以上…じきに感染者の仲間入り。ごめん…………でも、責めるならボクじゃなくて如月さんを責めてね」

「なっ…………くそっ…………くそっ!!」

ハッキリとその事実を突き付けられた二人は激しく動揺し、辺りの仲間達を見回す…。しかし仲間達は誰もがその二人を避けるような仕草をした為、二人は如月の元へと寄った。

「きつ、如月さんっ!…どうにかしてくれよ!アンタの手伝いをしたせいでこうなつたんだからっ!!」

「ああ…!…どうにかしてくれっ!!」

二人はあたふたして如月に言い寄り、冷や汗を流す…。

そんな二人を相手にするのが面倒なのか、如月はため息をついてから他の仲間へと告げた。

如月「はあ…………ねえ、とりあえず”処理”しちゃって」

如月がだるそうな声でそう言うと、狭山に切られた二人の背後に他

の仲間が忍び寄る…。忍び寄った男らは仲間であった二人のその首を躊躇い無く、持っていたナイフで切り裂いた。

「う…がッ…!？」

如月「あくあ、境野に怒られるかなあ……」

「まあ、境野さんは感染疑惑のある仲間はすぐ切り捨てるタイプの人だし……大丈夫じゃないですか？」

今殺したのは仲間だったハズなのに…まるで気にしてないかのよううに会話が進む。その異様な光景にさすがの狭山も顔をしかめ、少しだけ気分を悪くした。

狭山「その二人をそんな状況に追いやったボクが言うのもあれだけど……君たち仲間でしょ？平気なの？」

「平気平気。感染した仲間殺すのなんざ、境野さんのところにいたら慣れたよ」

一人の男が狭山に返事を返しつつ、倒れた二人の頭をナイフで突き刺していく。死んだ二人が感染者のようになって起き上がらないようにする為なのだろう。かなり手慣れた様子だ。

如月「さっすが、頼もしい〜♪」

狭山「……………」

「さて、ナイフには注意してあの娘を殺らなきやな…」

「気になったんだけどさ、感染者の血のついたナイフで切られたら本当にアウトなのか？」

「さあ、アウトだろ？詳しくは知らねえけど…」

「詳しく知れねえのにあの二人殺したのかよ。もうちよつと待ってても良かったんじゃないか？」

「いや、だって如月さんに処理しろって言われたし……」

如月「ハイハイそこまで!!今はとりあえず、あの小娘を殺すことだ

「考えなさい！」

「だらだらと会話する仲間達にそう告げ、如月は狭山を睨む。そうして武器を構えた如月とその仲間がジリジリと距離をつめてくる中、狭山はナイフを構え直して口を開いた。」

狭山「死にたい人しか……ボクに近付いちやダメだよ」

左手は血まみれで……身体中ボロボロの少女……

そんな少女を殺すのなど容易なはずなのに、如月達は彼女に睨まれると何故か恐怖を感じてしまう。

「ほざいてろっ!!」

「死ねっ!!」

そんな恐怖をかき消すかのようにして声を張り上げ、如月の仲間らは狭山に襲いかかる……。だが、如月だけはその場から動くことなくたずんでいた。

それは狭山が恐ろしかったから動けないなどという訳ではなく、ただこうして立っていればすぐに終わると思っていたから。ここにいる五人の仲間……その全員が男で、なおかつ武器を持っている。たった一人の少女に負ける訳などない。なら……自分は見るだけでもいい。そんな事を思っていた……。

しかし、その考えは甘かったとすぐに気付かされる……。

狭山を襲う五人の攻撃は中々当たらず、全て空振りに終わっている。

それほどに狭山の動きは素早く、そして正確だった……。

中にはかわしようのないタイミングで放たれた攻撃もあったが、狭山はそうした攻撃を右手や肘や足……それらを使つて的確に逸らして

いく…。

それでも、かわされたり…逸らされたりするだけならまだ良い。如月達にとって最悪だったのは、狭山に隙を見つけられて反撃される時だ。

「ふっ!!」

一人の男が狭山にナイフを振り下ろすが、それはあっさりとかわされる。狭山はその男の背後にサッと回り込み、持っていたナイフを深く背に突き刺した。

「ぐっ…あっ!!」

狭山が突き刺したナイフを抜いた直後、男は倒れる。

男はまだ死んではいなかったが、受けた傷が深くてすぐに戦うのは無理だった。

「くそっ!!」

一人倒され、四人になった男達は焦る…。

だがそうして焦ったせいで動きが鈍った事…そして人数が一人減った事で狭山に与えてしまう隙も増え、すぐに一人…また一人と倒されていった。気づけば戦っている男は一人になっており、狭山は持っていたナイフを下げて一呼吸した。

狭山「…はあ、かなり疲れた。キミ、逃げるなら逃げて良いよ。ボクが本当に殺したいのは如月さんだけだし」

「なっ…!?!」

そんなことを言われ、残った男は戸惑う…。

自分一人ではもう勝てる気などしないし、後ろにいる如月もかなり焦っているようだからだ。

如月「ばっ、バカっ!!ちゃんと戦いなさいっ!!」

狭山「如月さん…ボクが手錠に繋がれてた時は何回も殴りに来たのに、今回は最後まで動かなかったね。なんで?ボクが怖いのか?」

如月「っ…違うっ!わざわざ私が動かなくても、コイツらがどうにかすると思っただからよ!!!」

狭山「…そう。じゃあ、失敗だったね…」

ゆっくり…ゆっくりと如月の元へ歩み寄っていく。

残った男は如月を置いて図書館の中へ逃げる事を決めたのか、裏口の扉をガチャガチャと鳴らしていた。

如月「ちよっ!?逃げるなっ!!」

「一人じゃ無理だつての!!仲間呼んでくるから…それまで——」

バタンツ!!!

「なっ!?」

男が開けようとしていた扉が突然開き、中から一人の人物が現れる。

現れたその人物はいきなり拳を振り上げ、それを男の顔面へと振り放った。

ドツ!!

「ツぐっ!!!」

拳を受けた男は勢いよく吹き飛び、たたずんでいた如月の前へと倒れる…。男はそのまま気絶してしまっただけ…起き上がってはこなかった。

如月「あ、あんたっ…!!」

扉の向こうから現れた人物はズカズカと歩き、狭山のそばに寄る。

狭山はその人物を見てどこか安堵したような顔をしたが、如月に

とってその人物が現れたのは最悪の展開だった。

穂村「ほくく…さつすが狭山先生。全員殺っちゃいましたか？」
現れたその男…穂村は辺りに倒れている男達を見ながら狭山の肩をバシツと叩く。いつもの狭山ならそれに迷惑そうな反応を見せるのだが、今回の彼女は無反応だった…。

狭山「わかんない…何人かは生きてるんじゃないかな…」

穂村「…ふくん」

そう言われ、今一度男達へ目を向ける…。

倒れている男達は全員どこかしら刺されたらしいが…人によって刺された箇所が違った。首を刺されて既に死んでいる者もいれば、脇腹を浅く刺されただけで済み、苦しみがいている者もいる…。

殺した者とかろうじて生かしてある者…それらの違いが気になり、

穂村は狭山に尋ねた。

穂村「殺したヤツと生かしてあるヤツの違いってなに？」

狭山「べつに…ボクはただ隙を見て刺しただけだからね。首を刺された人は首ががら空きだったから、足を刺された人は足ががら空きだったから…それだけの違いだよ。意識して殺したり、生かしたりした訳じゃない」

穂村「なるほど…じゃあ、まだ生きてるヤツに止め刺していい？」

狭山「感染者の血がついてるナイフ使ったから、ほつとも死ぬと思うよ。まあ…穂村の好きにすれば」

穂村「ほつとも死ぬのか…じゃあいいや、やめとく」

生き延びて反撃される可能性があるならこの場で仕留めようと思った穂村だが、狭山が使ったナイフには感染者の血がついていたという事を知り一安心する。あと気掛かりなのは…狭山の身体がやたらボロボロな事だった。

穂村「にしても…かなりやられたみたいだな。ボロボロじゃん」

狭山「…穂村だって」

横に立つ穂村を横目でチラツと見つめ、狭山は呟く。

穂村の額には自身のものとみられる血の痕が残っており、着ている服も所々破けていた。

穂村「ああ…まあね。ちよつとキツかったけど、問題ないさ」

狭山「……そう」

穂村「あれ？いつもならここで『死ねば良かったのに』とか言うのに…なんかあった？」

狭山「べつに……穂村を殺すのはボクの役目だって、改めて思い出しただけ」

穂村「まだ諦めてなかったんスカ…。前の狭山ならともかく、戦い慣れしてきた今の狭山に襲われたらマジで危ねえんだけど…」

圭一が仲間に加わる前…狭山に何度か本気で襲われた事があったのを思い出す穂村…。当時の彼女はまだ戦いに慣れていなかったのでもうどうにかなったが、今の彼女に襲われたら少々危ないかも知れない…。

狭山「少なくとも今日は殺さないから安心して…。今日は…如月さんで我慢する」

如月「ツ!!？」

ボロボロの身体で一步ずつ歩み寄る狭山…そんな彼女がいつも以上に恐ろしく見え、如月は背を向けての逃亡を試みる。

だが…ほんの三步ほど駆けたところで狭山に追い付かれ、背後から後ろ髪を鷲掴みにされた。あれだけボロボロなのに何故こうも素早く動けるのか…そんな事を思った瞬間、如月は狭山の力でその顔を地面へと押し付けられ、うつ伏せに倒された。

如月「ぐっ！く…そっ！離せっ!!」

狭山「やだ…離さない」

狭山はうつ伏せに倒した如月の頭を右手で強く地面へと押さえ付け、その背中の上に腰を下ろした。さつきまで右手に握っていたナイフは左手に持ち変えている。左手はかなり痛むが、物を持つくらいは出来るらしい。

一方で如月は自分の背に乗る彼女をどうにかしようともがくが、その度狭山に強く髪を引っ張られた。

如月「ぐあ…あっ！」

狭山「じゃあ…バイバイ…」

狭山は一言告げ、如月の頭を強く地面へと打ち付ける。

狭山は如月がその痛みに悶えている隙にナイフをまた右手へと戻し、背中から心臓を狙って深く…力強く、如月の身体に突き刺した。
ドスツ!!

如月「あ…っ…ツぐ…!!」

一度苦しそうな声をあげた後、少しして如月は動かなくなった…。そうして彼女が死んだ事を確認した狭山はそっと立ち上がり、ナイフをポーチにしまってから穂村の顔を見る。

狭山「…終わった」

穂村「みたいだな。…っていうか、如月さんになんかされたの？狭山、ちよつとキレてみたいだけだ」

如月を刺した際、狭山の雰囲気がいっもとは違って見えた。それがなんだか気になり、穂村は彼女に尋ねる。

狭山「べつに…なんでもないよ。」

穂村「…そっか？」

狭山「つて、そんな話してる場合じゃないよ…。残る敵も倒して、圭一さんと帰ろ」

狭山は動かなくなった如月のポケットから一つの鍵を取りだし、ただ自分の左手にぶら下がっていた手錠を外すと、再び図書館の中へと戻っていく。穂村もまたそんな彼女の後を追ひ、中へと戻っていった。

九話 『影に咲く花』

図書館の中…狭山と合流した穂村は彼女と共に有馬を探していた。そうして一階にあるいくつかの部屋を回ったが、有馬は未だに見つからない…。二人が一階の探索を止めて二階へと足を踏み入れたその時、穂村は隣を歩く狭山の左手を見ながら顔をしかめた。彼女の左手首…そこは激しく傷付いており、血まみれで痛々しかったからだ。

穂村「その左手、めっちゃ痛そうじゃん…。」

狭山「一応問題なく動かせるけど…ふざけて触ったりしないでよ？ほんとに痛いんだから…。」

穂村「しねえって…。帰ったら手当てしなきゃな。狭山も、俺も…。」
狭山「うん…。。にしても、なんでボクのいる場所に来てくれたの？」

穂村「いや、襲いかかってきた敵をぶっ倒した後、有馬を探して歩いてたらたまたま外に出ちまっただけ。偶然偶然」

狭山「ああ…そう」

穂村があの場合に現れたのは自分を助けに来てくれたからなのかと狭山は少しだけ思っていた。けれどやはり、そんなことはなかったよ。うだ…。

穂村「狭山もさあ…そんな怪我する前に助け呼べば良かったじゃん。なんで呼ばなかった？」

自分もそこそこ怪我をしている穂村だが、狭山の怪我は彼より酷い…。

彼女はこうして二人で歩いている今も時おりふらつくし、ようやく出血が止まってきた左手は指を動かすのがやっとというレベルだ。

狭山「ああ…如月さん達に殴られた時、無線機が壊れちゃって」

穂村「へえ…じゃあ、助け求めるのも無理だな」

狭山「うん、無理でした。まあ、一人でもどうにかなったけどね」

穂村「かなりギリギリに見えたけどな…。俺は…狭山が敵の男達にあんなことやこんなことをされてんじゃないかと思ったら心配で心配で…」

狭山「はいはい…わかったわかった」

泣くような演技をして語る穂村を軽く流し、狭山は奥へと進んでいく。相変わらぬ冷たさを彼女に見た穂村はため息をつき、その後を追った。

穂村「一階はあらかた探ったから、有馬がいるのはこの二階のどこかだろうな」

狭山「だろうね…。もしかしたら、もう圭一さんが終わらせて——」

ドンッ!!

二人が会話しながら歩いていると、強く壁を叩いたかのような音が響く…。音が聞こえたのは恐らく、二人のそばにある扉…その向こうの部屋からだ。

穂村「……………」

狭山「…入ってみよっか」

穂村「まで、俺が開ける……………」

念のために狭山を下げ、穂村は扉の前に立つ。

穂村はそのドアノブに手をかけ、ゆっくりそれを開けた…。

ガチャツ……

穂村「……………うわぁ」

部屋の中を見た穂村から、思わずそんな声が漏れる…。彼がみたもの…それは床に倒れる十数人の男達。

そして、その中央に立つ圭一の姿だった。

穂村「すっげえ…これ、一人でやったの？」

圭一「他に誰がやるんだよ…」

部屋に入った穂村が倒れている男達を見て驚いたような声を出す。
狭山もまた、目を丸くしてキョロキョロとしていた。

狭山「圭一さん…怪我は？」

圭一の服は血に汚れているが、それが返り血なのか、彼自身の血なのか分からない。これだけの人数を相手にしたのだから、まったくの無傷という事はないと思うが…。

圭一「ああ…それなりに」

やはり圭一も怪我を負っているらしく、どこか苦しそうな表情をしていた。そんな彼の足元には一人の男が倒れているのだが、この男はまだ生きているらしく、苦しそうに呻いている。だがよく見ればその腹部には大きなナイフが突き刺され血がドクドクと溢れていた為、息絶えるのは時間の問題だろう…。

「っ……そ……化け……もの……が」

圭一「化け物呼ばわりは酷いだろ」

穂村「まあ、この人数を一人で相手にして勝ったなら化け物でしょ。俺と狭山なんか、この場で倒れてる半分くらいの人数しか相手にしてないのにボロボロだぜ？」

圭一「ん？…狭山、大丈夫か？」

狭山「うん…なんとか」

穂村「俺は？俺の心配は？」

そんな事を言いながら圭一を見つめる穂村だが、それはあっさりとしてスルーされてしまう。しかし穂村もそれには慣れたもので、大して気にもしなかった。

圭一「雑魚はあらかじめ片付けたが、有馬とかいうあの男が見当たらないな……。お前ら、見掛けたか？」

穂村「俺は見えてない」

狭山「ボクも……見たのは如月さんと、そのお供だけ」

圭一「そうか……じゃあ、残る場所をしらみ潰しに探っていくぞ」

穂村「りょーかい」

敵の戦力をだいぶ削った事もあり、圭一達はこここのボス……有馬を探し始める。そうして三人が二階の通路を歩いていると……狭山が突如足を止めた。

狭山「……まって」

圭一「どうした？」

狭山「誰か……こっちに来る……」

通路の先……その曲がり角を見ながら狭山が呟く。
するとすぐ、圭一や穂村にもその足音が聞こえた。

穂村「おっ、マジだな」

圭一「ようやく見つかったか……」

三人が曲がり角の向こうに注目していると、その人物は姿を現す。
それは三人が探していたこのボス、有馬だった。

有馬「まったく……増援に向かった連中がいつまでも戻らないから来てみればこれか。まさかとは思うが、全滅か？」

穂村「だと思っぜ。リベンジマッチは失敗だな。ごくろーさん」

穂村にそう言われると、有馬は通路の壁に背中を寄せて力なく腰を床に下ろす……。これだけの戦力をもってしても三人に勝てないとは思っていないかつたらしく、深いため息をついていた。

有馬「やれると思ったんだが…失敗か。欲なんか出すもんじやないな…」

穂村「おや？意外と落ち着いてらっしやる。これから殺されるってのに」

有馬「あれだけいた仲間が全員やられたんだ…さすがに、また一から仲間集めする気にもならねえ。つまり、もうどうでもよくなった…」

全てを諦めた有馬はヘラヘラと笑い、三人を見つめる。

最初は彼を殺す気でいた穂村だったが、こんな反応を見せられたせいで殺意がどこかへ飛んでいってしまった。

穂村「なんか…つまんねえの」

有馬「ははっ、じゃあ…見逃してくれるか？」

穂村「それもそれでなんか違うしなあ…どうしたもんかなあ」

穂村は有馬をどうすべきか悩んでいた…。

前に彼を殺し損ねたせいで今回の戦いが起こったのだし、同じ事が起こらないように殺した方が良いのは分かっている。だが、ここまで諦めた目をされるとその気も失せてしまうのだ。

穂村「あ…：…あれだ、感染者の群れにでも投げ捨てるか？」

狭山「…そこまでするなら、今ここで殺してあげなよ。」

有馬「ああ、感染者に食われるのは勘弁だな。どうせなら楽に死にたい」

穂村「つつてもなあ…」

腕を組ながら頭を悩ませる穂村を見て、狭山と圭一がため息をつく。穂村はそうして悩むばかりでいつまでも動かないので、圭一が仕方なく動いた。

圭一「楽に死にたいっていうなら、俺がやってやる。穂村、それでいいか？」

穂村「ん？ん？…まあ、いつか」

有馬「…んじゃあ、さつと終わらせてくれよ」

圭一「ああ、任せとけ」

圭一は狭山から一本のナイフを受け取り、有馬の前へと屈む…。

有馬は本当に観念しているらしく、そつと目を閉じていた。

圭一は手にしたナイフを彼の頭へ向けると、一言だけ告げる。

圭一「…じゃあな」

手に力を込め、ナイフを突く。

だが、そのナイフが有馬の頭を突く寸前に…誰かの声が聞こえた。

「待って!!」

圭一「…?」

有馬「…お前っ」

通路の向こうから現れた一人の女…：年は十代後半か、二十代前半だろう。肩まで伸びた茶髪、そして眼鏡が印象的なその女は圭一と有馬の間に割って入り、涙を流しながら持っていたナイフを構えた。

「もう、勝負はついてます…！だから、有馬さんに手を出さないで！」

穂村「おつ、彼女さん？」

ナイフを向けられているのを気にもせず、穂村は有馬に尋ねる。

有馬は背後からその女の肩に手をあてると、小さな声で答えた。

有馬「彼女なんかじゃない…。ただ、俺になついでただけだ」

穂村「マジか。ちよつと羨ましいんだが…」

その女が中々に美人だったからか、穂村がニヤリと笑う。

すると狭山がそんな穂村の背後にまわり、彼の後頭部を右手でバ

シツと叩いた。

穂村「いてっ!!なにすんだよ!」

狭山「いや…笑った顔がキモかったから…っい」

二人がそんなやり取りをする中、圭一だけはその女から目を離さない…。女も圭一を特に警戒してるらしく、ナイフと目線は彼に向けていた。

圭一「この戦いを始めたのは有馬だ。だから、俺達もそいつを殺すまでは終われない」

「もう二度とあなた達に手は出しません!!私が彼をそばで見張ってま
すから…だから…お願いっ!!どうか助けて下さい…!」

彼女は涙をボロボロ流し、ナイフを持った手をガタガタ震わせてい
た…。

それでも圭一が引かないことに気付いた有馬は、彼女の震える手を
そつと握った。

有馬「知花ちばな…もういい。お前だけ逃げろ」

知花「いやです!絶対にいやっ…!」

”知花”と呼ばれたその女は有馬の顔を見るとまたいつそうの涙
を流し、彼に抱き付く。狭山と穂村はその様子を黙って見ていたが、
圭一は違った。

圭一「おい、その女を逃がしてやると言った覚えはないぞ?」

有馬「いや、お前は見逃してくれるさ…。こんな女まで殺すほど、ど
うしようもないクズじゃないだろ?」

圭一「……………」

圭一は返事を返さない…。

実際、彼女まで殺す気はなかった。狙っているのはあくまでも有馬
の命なのだから。

有馬「まったく…アンタら殺してあの屋敷奪って、コイツや仲間達に良い暮らしをさせてやる予定だったんだけどなあ…。やっぱり、そう思い通りにはいかないか…」

知花を軽く抱きしめながらボソツと呟く…。

その呟きを聞いた穂村はそれとなく負けた気分になり、ムスツとした表情をした。

穂村「やつすいメロドラマみたいな台詞吐きやがって…！よし、こんなモテ男は俺自らぶっ殺してやる!!」

狭山「さつきまでは殺す気失せてたクセに…」

穂村「美人にモテてるとなれば話は別だ!!今すぐ殺す!」

穂村はズカズカと歩き、有馬のそばに寄っていく。

そんな彼を見た知花が慌てふためく中、圭一がそれを止めさせた。

圭一「…少しまで」

穂村「なんで!?!もう殺そうぜ!!」

圭一「いいから…黙ってろって」

穂村「なんでなんで?!?!なんでえ?!?!」

狭山「……………」

圭一に邪魔された穂村は子供のように駄々をこねた後、回れ右して狭山のそばへと戻る…。そんな彼を見て、狭山は心の底から思う…：モテない男の僻^{ひが}みというのは、本当に醜いと。そしてそれを起こしているのが穂村なら、更に五割増しで醜いと…。

圭一「有馬…。この女を見逃してやると俺が約束したら、お前は大人しく殺されてくれるか?」

有馬「ああ、どのみち抵抗する気なんて無くしてるしな…」

知花「有馬さん?!?!なにを言って…!」

圭一「出来るだけ苦しめて殺すと…そう言われてもか？」

有馬「知花だけは見逃してくれるなら…もうそれで構わない」

圭一がした質問に即答し、有馬は立ち上がる。

知花は涙を流しながら彼を見つめ、肩を震わせていた。

有馬「絶対に…コイツだけは殺さないでくれ。時間をかけて集めた仲間だ、一人くらいは生かしておいてやりたい」

圭一「……………」

そう言われた圭一は有馬に背を向けると、持っていたナイフを狭山へと返す。狭山はそれを不思議そうな表情で受け取り、自らのポーチへと戻した。

圭一「穂村、狭山…帰るぞ」

狭山「…うん」

穂村「はあっ!?有馬殺さないのっ!?!」

その場から立ち去ろうとする圭一の肩を掴み、驚いた顔を見せる穂村。

だが驚いているのは彼だけでなく、有馬や知花も同じだった。

有馬「…見逃してくれるのか？」

圭一「もう二度と俺達に手を出すな。それが条件だ」

穂村「いやいや…『それが条件だ』…じゃねえよ!!何かツコつけてんすか!?意味わかんねえって!!圭一さん、殺しが好きなんだろう!?!」

圭一「正確には殺しが好きなんじゃなく、ムカつく奴を殺すのが好きなんだ」

穂村「有馬はっ!?ムカつかないの!?!女に好かれてるのに!?!」

圭一「俺のムカつく基準はお前と違うんだよ…」

狭山「穂村、落ちついて…。もうボクらに手を出さないなら、見逃してあげてもよくないかな？」

穂村「よくねえよ!!」

狭山「ボクもう疲れた…はやく帰りた。手も痛いし…」

穂村「ぐっ!?し、仕方ねえ…おい、有馬!もう俺達に関わるなよ!?!またなんかしたら絶対に殺すからな!!」

狭山も有馬を見逃す気にいるらしく、穂村は孤立しかけてしまう…。さすがにそれは嫌だったのか、穂村も仕方なく有馬を見逃してやる事にした。

有馬「ああ…約束するよ」

圭一「…じゃあ、帰るぞ」

狭山「んー…」

穂村「納得…納得いかねえく…」

三人は有馬と知花に背を向け、一歩ずつその場を去る。

有馬はそんな三人の背を見つめながら、自分に抱き付く知花の頭を撫でた。

有馬「悪いな…失敗しちゃった。仲間もみんな殺られちゃったから…これからは二人だけだな…」

知花「二人…だけ…」

有馬「また仲間を集めてもいいが…どうしたもんかな。知花、お前は どうしたい？」

知花「私は…自分を楽しませてくれる人さえそばにいてくれれば、それだけで十分なんです…」

自分の胸に顔を埋めながら語る知花を抱きしめ、有馬は微笑む。

あれだけいた仲間を失ってしまったのは痛かったが、彼女だけは助かってよかったと思った…。

有馬「まあ、こんな俺と一緒にいても楽しいかどうかは分らんがな……」

知花「……………あはっ、よかった。自覚あるんだあ？」

有馬「えっ？」

さつきまで泣いていた知花の声色が少し変わった……

有馬の知っている彼女は子供っぽく、甘えたような声を出すことが多かったが、今聞こえた彼女の声はそれとは違う……。どこか……人を見下しているような声だった。

知花「確かに、有馬さんといってももう楽しいことは無さそうですね……」

ズツ……

彼女を抱きしめていた有馬は、腹部に激しい違和感を感じた。

熱いような……気持ち悪いような、不思議な違和感。

それはすぐに激しい痛みへと変わり、彼は自分が知花に刺された気が付いた。

有馬「ぐ…うツ…!!?」

知花「えいつ…」

知花は有馬の腹部に突き刺したナイフを引き抜き、苦しむ彼を手で押し倒した。そうして有馬が倒れた際のドサツという音はその場を去ろうとしていた圭一達の耳にも届き、三人は振り向く。

圭一「なっ!?!」

穂村「っ!?!」

狭山「うそ…!?!」

振り向いた三人が見たのは床に倒れる有馬と、血のついたナイフを右手に持ってたたずむ知花…。その衝撃的な光景を前に、三人は動く事を忘れた。

有馬「ど…う…して…?」

知花「あれだけの人数揃えたクセに、たかが三人にやられるバカは
いらぬんです。じゃあ、さようなら♪」

知花は自分の上着の内側に左手を潜らせ、何かを取り出す…。

それは未だ穂村達もその目で見たことがなく、有馬も手にしたことのない…本物の拳銃だった。知花はその拳銃を倒れた有馬の頭へ向け、引き金を引いた。

穂村「おいっ! までっ!!」

穂村は彼女のもとに駆け寄ろうとするが、間に合わない。

ピカッとしたフラッシュと共に乾いた破裂音が通路に響き、有馬の頭はそれに撃ち抜かれた。

穂村「くっ!」

知花は有馬を撃つてからすぐにそれを穂村へと向け、ニツコリと微笑む。銃口を向けられた穂村はその場にピタツと止まり、冷や汗を流した。いくら自分達が普通の人間より強い身体を持っているとしても、銃弾まではさすがに受けられない…。

知花「あれ、来ないんですか？来てもいいですよ？銃弾を受ける覚悟があるなら…ですけど」

穂村「てめえ…！何を考えてやがる!？」

知花「べつづく。私はただ、楽しく生きていただけです。このチームにいたのもそれが理由だったんですけど…これがまた微妙で」

ヘラヘラ笑いながら知花は語る…。

その表情はさつきまで泣いていた彼女とは別人のようで、目を疑った。

圭一「驚いたな…さつきの涙は演技か？」

知花「ええ、わたし、演技得意なんです。そうやって普段から演技して有馬さんに甘い声で接してたんで、惚れられてしまったみたいですよね♪」

圭一「俺も騙された…大したヤツだ」

知花「もしかしたら豪華な屋敷で暮らせるかなあ…って期待したのに、有馬さんにはガツカリです…」

圭一「そんなに屋敷で暮らしたいなら…自分で奪ってみろよ」

知花「あは♡それもいーですねぇ…。ここであなた達を撃ち殺して、屋敷もらっちゃおうかなあ…?」

銃口を穂村、圭一、狭山の三人にチラチラと向け、知花はニヤニヤした表情をする。そんな彼女の顔を見た穂村は焦り、圭一に尋ねた。

穂村「あの…圭一さん？奪ってみろ、なんて言っちゃってますけ

ど、拳銃に対抗できるだけの作戦があたりで？」

圭一「……………」

圭一「あるわけないだろ…。もっと考えてからもの言え」

穂村「その台詞そっくりそのままアンタに返すわ!!バカじゃねえの!? 作戦も無しになんで相手を挑発したの!?!」

圭一「まあ…どうにかなる。そう信じてやまないからさ…」

穂村「やべえ!この人思ってたよりバカだ!!狭山!マジやべえぞ!」

穂村はこの状況にして始めて、圭一の少し間抜けな部分を知る…。
そうして穂村が大慌てする中、狭山は冷静に知花へと語りかけた。

狭山「知花さん…ボクらの屋敷の場所知ってるの?」

知花「あゝ…それが知らないですよねえ。私、チームの皆には戦える事隠してましたから…ここに來てからはあまり外にも出てないし。狭山真冬ちゃん…でしたっけ? 屋敷の場所、聞いたら教えてくれますか?」

銃口を狭山に向け、知花が尋ねる。

狭山はそれに少しだけ困ったような表情を見せ、静かに答えた。

狭山「残念…教えてあげない」

知花「それは…本当に残念です。じゃあ次の質問!あなた達三人は…いつたい何者ですか?」

穂村「何者…っていうと?」

知花「たった三人だけで三十の敵を倒したんです。こんなの普通じゃない。有馬さんも、あなた達は普通の人間とは違うって言ってま

したしね」

銃口をチラチラさせながら三人を見つめ、知花はニコツと笑う。

この女に自分達の事を全てを明かすのは面倒な気がしたので、圭一は適当な事を言っつて誤魔化すことにした。

圭一「しつかり鍛えてるからな…それだけだ」

知花「それだけですか？ほんとに？」

穂村「おう、本当本当…」

圭一と穂村が答えると、知花はその視線を狭山へと向け、彼女の体をジーツと眺めた…。男二人の体は確かにガツシリしているように見えるが、彼女の体…その手足は細く、お世辞にも鍛えているようには見えない。

知花「お二人はともかく、真冬ちゃんは見た目も華奢で鍛えてるようには見えないけどなあ」

狭山「……………」

知花「まあ、別にいつか♪そんなこと、気にしたって仕方ないもんね！」

穂村「こつちからすりや、アンタの方が謎だぜ…。その拳銃とか、どこで拾ったんだって話だ」

知花「これ？これは…まあ、拾い物つてことで♪それで納得して♡」

穂村「…へいへい」

知花「にしても、有馬さんのとこに来たのはなんだかんだで正解だったかなあ…。そのおかげであなた達に会えたんだもんねえ♡外にいるあのゾンビ達の他にも、面白いものはいっぱいあるんだなあ。飽きさせないねえ♪」

そう言っつて、知花は本当に嬉しそうに微笑んだ。

彼女のようなタイプの人間には今まで出会った事がなく、さすがの

圭一達もどこか引き気味になっていく。

知花「でも、私と有馬さんを見逃したのはちよつと期待外れだったなあ……。あそこで二人共殺そうとしてきたら、本当にゾクゾクしたのに……。圭一さんだっけ？あなた、20点減点ね」

圭一「なに？」

ナイフを持っている右手で圭一をビシツと指さし、知花は告げる。彼女が何を言っているのか少しも理解できず、三人は戸惑った。

知花「あなた達三人がもつと残酷で……もつと強ければ面白かったのになあ……。三人ともけつこうボロボロだし、銃なんかなくても勝てるかも……。私、結構強いんですよ？」

穂村「へえ？じゃあ……。やってみろよ？」

知花「……ふふつ、それはまた今度ね？今日のところは見逃してあげる。さつき私を見逃してくれたお返し♪」

狭山「じゃあ……。また会うのを楽しみにしとく」

知花「そうだね、私も楽しみにしとくよ♪ほんとは……。この場で一人くらい殺しておきたいけど……」

知花はそう言いながら銃口を穂村、圭一、狭山の順に向けていき、ニヤツと微笑んだ。

知花「今日は有馬さんに一発使っちゃったし、弾は節約しないと！つてわけで、また今度ね」

三人に銃口を向けながら、知花は後ずさりしていく……。

そうして曲がり角の向こうに消える寸前、彼女は思い出したかのよう
うに告げた。

知花「あつ、まだちゃんと名前言ってなかったよな？ 知花咲…それが私の名前だよ。ちゃんと覚えといてね♪」

自らの名を三人に名乗った後、知花は駆け足で曲がり角の向こうに消えていった…。穂村は彼女が去ったのを確認して一息つくど、横たわっている有馬の死体を見つめる。

穂村「結局…コイツはモテ男なんかじゃなかったんだな…」

狭山「そこはどうでもいいと思う…」

穂村「よくねえよ。あの知花つて女は、コイツやその仲間をいいように利用して自分が楽しむ事だけを考えてた。つまり、コイツはモテ男どころかただのピエロだったわけで…」

ただのモテ男だったら殺してやりたい程に気に入らないが、そうでもなかったとなると途端に同情してしまう…。穂村は有馬の死体を見つめ、切なそうな表情をした。

穂村「こんなふうに、信じた女に騙されて死ぬのは絶対に嫌だなあ…」

狭山「大丈夫大丈夫、穂村はボクが殺してあげるから」

穂村「それもそれで嫌なんだが…」

圭一「おい、いつまで話してる。帰るぞ」

穂村「あつ…わりいわりい」

敵を倒し終えた三人は図書館を出て、外に停めていた車へと向かう…。

少し早足で向かえば知花に追い付けるかとも思ったが、彼女はとっ

くここにここを出た後らしく、車を停めていた外の駐車スペースには大量の感染者が侵入していた。

圭一「あの女…門を開きっぱなしにして出ていきやがったな」

狭山「まあ、ボクらの事を気づかかって閉める理由はないもんね…」

穂村「なんて嫌な人でしょう!!」

外は既に日が暮れており、明かり無しでは停めた車がどこにあるかも分からない。狭山はポーチにしまっていたライトを右手に持ち、10mほど先に停めてある自分達の車を照らした。

狭山「さて…帰ろっか」

圭一「だな」

穂村「邪魔な感染者は出来るだけ俺がどけるから、狭山と圭一さんは先に乗ってよ」

車までの道には数体の感染者がおり、簡単には通れそうもない…。仕方なく、穂村は二人の先を走って道を阻む感染者の前へと駆け寄った。

「グア…アアツ…!!」

穂村「ほっ!」

穂村は目の前にいた感染者の手を引っ張り、二人の邪魔にならない場所に倒す。ただ投げ倒しただけだが、起き上がるまで遅いので十分だった。

その後もそうやって道を阻む数体の感染者をどかしていき、圭一と狭山は車へと乗り込む事に成功した。穂村は感染者の相手をする為、車に乗るのが二人よりも遅れている。

狭山「圭一さん、はやくエンジンかけて。穂村おいてつちやお…」
圭一「まあ待て。車の鍵が見あたらなくて…お、あつたあつた」
狭山「はやく。穂村が来た…」

バタンツ!!

穂村「いよしっ！帰ろーぜ！」

狭山「…ちっ」

どうにか車に入れた穂村は笑顔で助手席に座り、二人に告げる。
後部座席に座っている狭山は彼をここに置いていきたかったので、
小さく舌打ちをした。

くくく

柳「まあ、三人とも無事でなによりだ」

狭山「無事じゃない…。左手、痛い…」

その後、三人は車で屋敷へと戻り、地下に身を潜めていた柳を一階
の広間へと呼び出した。柳は三人が無事で良かったと喜んだが、狭山
はボロボロになった左手を上げてムスツとした表情を見せる。

柳「おおっ…：けっこうな怪我だね。見たところ…：狭山君が一番重傷かな。よし、とりあえず手当てしようか…：」

柳は彼女をそばにあった椅子に座らせ、医療品を取りに別室へと向かった。少しして彼は救急箱を手にしてそこに戻り、狭山の手当てをしながら三人の報告を聞く。

敵の人数がどれほどだったか…。

その連中とどんな戦いをしたか…。

報告は大体が柳の予想通りのものだったが、最後に三人が出会った『知花咲』という女…：その存在は予想外だった。

柳「なるほど…：その知花咲って女、かなり危ない人みたいだね」

圭「ああ、猫かぶるのが随分と上手いし…：拳銃まで持ってやがる」

狭山「ほんと、撃たれなくてよかったよ…：」

柳「いくら君達でも、拳銃と真っ向勝負は出来ないからね。」

穂村「見た目だけなら可愛い女だったのに、わかんねえもんだな…：」

穂村がそんな事を染々思っていると、柳が狭山の左手の手当てを終える。手当てを終えた狭山の左手首には包帯がしっかりと巻かれており、完全に治るのは少し時間がかかりそうだった。

柳「よし、とりあえず左手はこんなものだろう。他に痛むところは？」

狭山「あとは…：たぶん大丈夫。何日か寝ればその内治る」

柳「本当かい？無理してないね？」

狭山「してない…：大丈夫」

そう言つて狭山は立ち上がり、一人部屋を出ていった。

恐らく、自分の部屋で休むのだろう。
柳、圭一、穂村はそう考え、静かに彼女を見送った…。

…ボタン

自室に戻った狭山は血に汚れた服を脱ぎ、綺麗な服へと着替える。
本当はシャワーでも浴びに行きたかったが、思っていたよりも疲労して
いてそれすら面倒だった。

狭山「……………」

狭山はベッドに横たわり、そのまま眠りにつこうとするが、ふと…
あの時に如月とその仲間が言っていた言葉を思い出す。如月達は狭
山達がなんとなく追っている少女らの一人、”丈槍由紀”の事を知っ
ていた。話によれば、丈槍由紀は如月の知り合いに捕らえられている
らしいが…。

狭山（たしか…境野とかいったっけ。また…調べて…みよ…）
激しい睡魔に襲われ、これ以上目を開けていられない…。
狭山は重たいまぶたを閉じ、静かに眠りについた。

短編

まほうぐらし！

…注意…

この物語はフィクションです。

実在の人物・団体とは一切関係ありません。

もちろん『軌跡くひとりからみんなへ』の本編、及び外伝の登場人物との関係も皆無です。

??? 「——さん？——てくださいーい？」

誰かの声が頭に響く…ううう、うるさいなあ…

??? 「ほら…——ですから、——きやダメですよ…？——さくん？」

まだ呼んでる…呼ばれてる人も呼ばれてる人だよ！
すぐに返事すればいいのに！

おかげでわたしが迷惑してるよ！

??? 「—きさん？丈槍ゆきさくん？」

あはは…丈槍ゆきだって。わたしと同じ名前だ…

ほら、わたしと同じ名前のゆきちゃん！はやく返事を返してあげて！
じやなきやわたしが落ち着いて寝てられないよ…

??? 「ゆきさん！起きて下さいっ！」

だからはやく返事を…ってこの人、もしかして…わたしを呼んでるの？

??? 「起きて下さい！もう少しの辛抱だから、がんばって!!」

ヤバっ！いつの間にか寝ちゃってたんだ！起きないっ!!
わたしはどうか目を開き、目の前のその人を見上げた。

ゆき「お…おはよう。めぐねえ…」

めぐねえ「もうっ…めぐねえじゃなくて佐倉先生さくらでしょ！」

ゆき「ごめん…めぐねえ…」ウト…

めぐねえ「ああつダメダメっ！目を閉じたらまた寝ちやうでしょ!?
起きてゆきさん！」

また目を閉じようとしたらめぐねえに肩をゆさぶられて、無理やりに起こされた。

まだ眠い…どうしよ…

ゆき「眠いよお…あと5分だけ寝たらダメ？」

めぐねえ「なに言ってるの！今は授業中ですよっ!?!あと10分も耐えれば終わりますから、それまではがんばって起きていて下さい！」

授業中…?そっか、授業中に寝ちやったんだ…

ゆき「は…はい。がんばりまふ…」ウトウト…

めぐねえ「言いながら寝ようとしなっ!!」

『あははははっ…!』

ほら、大きな声ですからクラスのみんなが笑ってる…

めぐねえ、はずかしくないのかなあ…?

めぐねえ「ほら！みんなに笑われてますよっ！はずかしいでしょ！？」

ゆき「笑われてるのはわたしじゃないもん…。みんなめぐねえがおかしくて笑ってるんだよ。」

めぐねえ「違いますっ！ゆきさんがおかしくて笑ってるんですっ！！」

ゆき「ええ、違うよ。」

めぐねえ「違いますせん！ゆきさんがおかしな事ばかりするから――」

女子生徒「佐倉せんせい。はやくしないと授業の時間が…」

めぐねえ「あっ！そうですね！ゆきさんっ、ちゃんと起きてて下さいね!？」

ゆき「はあい…」

でも、わたしは1分もしない間にまた寝ちやった…

そしたら授業が終わった瞬間にめぐねえに叩き起こされて、そのまま職員室へ…

たくさんの先生に見られながら説教されていたらやっと思が覚めてきて、居眠りしたことを今更後悔した。

めぐねえ「まったく…ダメよ？授業中に居眠りなんてしたら…」

ゆき「ごめんなさい、すぐ眠くて…」

めぐねえ「昨日は何時に寝たの？」

ゆき「昨日は…みんなと遊んでたら遅くなっちゃって、結局夜中の12時くらいまで…」

めぐねえ「12時？まったく…あんまり夜ふかしばかりしてると」

学園生活部「は廃部にしちゃうからね？わかった？」

ゆき「わ、わかった！もうしないっ！だから廃部にしたらダメだよ!？」

めぐねえ「はいはい。じゃあこれからはちゃんと授業を受けてね？」

ゆき「らじや〜っ！」

めぐねえ「よし！じゃあもう教室にもどって——」

ガラガラッ!!

??「失礼しますっ!!」

急に職員室の扉が開いて、わたしのよく知るあの娘が大慌てでこっちに走ってきた。

??「はあっ…はあっ…先輩っ、見つけました…！」

ゆき「どしたの、みーくん？そんなに慌てて…」

めぐねえ「美紀さん、どうしましたか？あなたがそんなに慌てるなんて…珍しいですね？」

めぐねえ、わたしが走って職員室に入ると怒るのに…みーくんだと怒らないんだ。

どうしてだろ？やっぱり学園生活部の中でもみーくんは優等生だから少しヒイキにされてるのかなあ…

あっ!“学園生活部”っていうのはそのまんまの意味の部活で、学校で生活をする部活。

部活の顧問はめぐねえで、部員は四人と一匹…
わたしとみーくん、それからくるみちゃ——

みーくん「大変なんですっ！あの人…あの人…あの人…校庭にきましたっ!!」

まだ学園生活部の説明をしてる途中なのに、みーくん空気読めないなあ…

っていうか”あの人”って誰？なんでそんなに慌ててるの？

めぐねえ「うそっ!!あの人…!!どうしてっ!」

えっ?めぐねえも知ってるの？

しかもよく見れば周りの先生達も慌ててるみたい…そんなに有名な人なのかなあ

ゆき「ねえねえ、誰が来たの？」

みーくん「だからっ…あの人ですよ！あの人!!」

ゆき「えっ？わからないよ…誰？」

みーくん「っ!?まさか…先輩がここまで無知だったとは……」

みーくん「わかりました…ついてきて下さい！口で説明するよりも直接見に行った方がはやいです!!」

みーくんはそう言ってわたしの手を掴み、職員室から廊下に出た。

めぐねえ「あっ!?彼女がくるまではあんまり近づいちゃダメよ!!」

みーくん「ええ、わかっています!!」

みーくんはわたしを引つ張つたまま廊下を走って、校庭が見える場所を目指す。

めぐねえが言った”彼女”って誰かな？

”彼女”とか”あの人”とか…わかんないことばかりだよ…。

みーくん「つきました…、ほら、あそこです。」

ゆき「んんっ??」

1階の廊下、その校庭が見える場所についた時にみーくんが指さしながら言った。

わたしはその方向をじっと見てみる…

校庭のまん中には一人の女の子が立っていた。

その子の長い髪はとても綺麗で、表情も大人びている…

胸もわたしより全然大きい…、もしかして同い年だったりするのかな？

ゆき「……………」

うん、同い年だよ。

だってあれ”リーさん”だもん。

見間違いじゃないよね…？

同じ学校の制服着てるし、どう見てもリーさんだよ？

あ、リーさんっていうのはわたしと同じ三年生で学園生活部の部長なの！

同じ年とは思えないくらいしつかりしてお姉ちゃんみたいなのだけど、すごくやさしいから大好き!!

そう言えば、みーくんは学園生活部ではただ一人の二年生なんだけど、この娘も後輩とは思えないくらいしつかりしてるんだよ。

あと一人の部員はね…、くるみちゃ——

みーくん「どうですか？あの雰囲気…とても恐ろしいでしょう？」

また説明をしてる途中で話しかけてきた…

今日のみーくんはほんとに空気が読めないなあ。

ゆき「恐ろしいって…あれ、リーさんじゃない？」

みーくん「リーさん？誰ですか、それ？」

ゆき「えっ？…だから、あの校庭に立ってる人が…」

みーくん「なんの事を言ってるのかわかりませんが…、あれはリーさんなんて人ではありません。リー・サンです!!」

ゆき「…：リーさん？」

みーくん「違います！リー・サンです!!」

今日のみーくんはやっぱおかしい…

リーさんじゃなくてリーさんって、意味わからないよ…

ゆき「リー…さん？」

みーくん「違います！リー…サン…ですっ！」

ゆき「うん、リーさんでしょ？」

みーくん「だから…：リーさんじゃなくてリー・サンですって!!
リーさんじゃありません！リー・サンですっ!!リー…さんでもありま

せん！リー…サンです！いいですか!?!リーさんじゃなく——」

ゆき「みーくんうるさくいい!!」

みーくん「なっ!?!人がせつかく説明してあげてるのに…」

ゆき「あう…ごめんごめん！…で、そのリー・サンってなに？」

みーくん「リー・サン…彼女は凶暴な魔女です。実は千年の間生きているとも言われ、その膨大な魔力の量、そして大変立派なブラジャーのサイズで人々を恐怖に陥れてきました…。」

ゆき「ぶ、ぶらじやー…？それって、恐怖に関係あるのかな？」

みーくん「何人も…何人も彼女にやられてしまいました…。今や軍隊も彼女に怯えてしまっているのです…。」

ゆき「ブラジャーの質問無視した…。」

みーくん「でも…この学校には彼女と対等に戦える唯一の人間がいます!!彼女さえきてくれれば…。」

わたしの質問を無視しながらみーくんがそう呟いたすぐあと…

一人の女子生徒がリー・サン（リーさん）の前に走ってきた！

みーくん「あつ！来ましたつ!!彼女さえいれば安心です！私達も校庭に出てそばで戦いを見ましよう!!」

ゆき「そ、そばでつて…危なくないかなあ？それにあの娘ってたぶん…。」

みーくん「いいからはやくっ!!」

今日のみーくんは話を聞かない…

また無理やりにわたしを引っ張って校庭のまん中、リーさん（リー・サン？）…それと彼女と対等に戦えるその女子生徒のそばまできた。

ゆき「こんなそばまできて…絶対あぶないよ〜」

みーくん「大丈夫です！彼女が来てくれましたからっ!」

嬉しそうに女子生徒を指さすみーくん…

でもこの女子生徒、どっからどうみても…

ゆき「くるみちゃんだよね？」

くるみ「なっ!?!何を言うかつ!?!」

みーくん「そうですよ先輩！この人はくるみなんて人じゃありません!!」

ゆき「どうみてもくるみちゃんだけど…じゃあ誰なの？」

くるみ「よく聞いてくれたなピンク頭。あたしの名は…。」バツ！
みーくん「でっ、でた!!先輩っ！あれが魔法のステッキですよ!!」
大興奮のみーくん。

でもそのくるみちゃんのそっくりさんがどこからともなく出したそれはステッキじゃなくてどうみてもシャベルだった。

ゆき「ねえ、あれシャベルだよ。やっぱりキミくるみちゃんだよね？」

みーくん「ゆき先輩、またバカなことを…!？」

くるみ「シャベルだどっ？バカにするな!!これは魔法のステッキだ!!あたしは魔法少女だからなっ!!」

ゆき「ぷっ…!!」

いつものくるみちゃんなら絶対はずかしがるセリフなのに、この人は全く恥じらわないで言い切った！

もしかしたらほんとにくるみちゃんとは別の人なのかも…

ただあまりに似てるから魔法少女とか言われると笑っちゃう…

でも失礼だよな、しつかり堪えないと…!

くるみ？「おい、何がおかしい…?」

ゆき「うっ…うん！なんでもない!!」

くるみ？「そうか、じゃあ変身するか…。さすがに生身じゃリー・サンには勝てないからな」

リー・サン「ふふっ、まるで変身すれば勝てるみたいなの言い方ね？」

くるみ？「ああ、余裕で勝てるね…。変身っ!!」

くるみちゃんもどきは自称魔法のステッキのシャベルを振り回し、
自分もクルクルと回り始めた。

くるみ？「クルクルクルクルクルクル♪魔法のシャベルもクルクル♪」

ゆき「シャベルって言った…」

くるみん「魔法少女くるみん！ここに見参ッ!!」

くるみ（くるみん）ちゃんの制服はいつの間にかフリフリ衣装に変わり、カッコいい決めポーズをとっていた…

けれど衣装が変わってもシャベルだけはそのまま、何も変わっていないかった。

みーくん「おおっ！くるみんさんっ!!こっち向いて下さい!」

くるみん「あはっ♪」

ゆき「ぶっ:!!」

お願いだからくるみちゃんと同じ見た目でそういう事しないでほしい…

もう耐えられないよ…

くるみん「きさま…また笑ったな？何がおかしいっ!？」

ゆき「ご、ごめんなさいっ！思い出し笑いだから、気にしないでね…」

くるみん「ふむ…ならいいけどさ」

リー・サン「さて、可愛い変身も済んだみたいだし…」

くるみん「えっ？か…可愛かったか？」

リー・サン「ええ、とつても可愛かったわよ。その衣装もくるみに良く似合ってるわ」

くるみん「マジ？…へへ。ありがと、リーさん／／」

ゆき「今、普通に”くるみ”、”リーさん”って言ったよね？つて
うか敵同士じゃなかったのかな？」

わたしがそう言っすぐ、くるみんちゃんは顔を赤くするのをやめてシャベルをリー・サンに向けて構えた。

くるみん「もちろん、敵同士だ!!こいつがこの世に産まれてから十
数年…その間、人々はずっとコイツを恐れ続けてきた!!」

ゆき「あれ？…十数年？みーくんさっきリー・サンは千年生きてる

とか言っただけじゃなかったの？あれなんだったの？」

みーくん「リー・サン：彼女は昔にくるみんさんが封印したはずなのに、復活したんですね。」

また無視した：

今日のみーくんクライ：

リー・サン「あの程度の封印：簡単に解けたわよ？」

くるみん「へっ！あんなに時間がかけてよく言うぜ！！」

ゆき「ねえねえ、くるみんちゃん、いつリーさん：

リー・サンを封印したの？」

みーくん「かなり昔です：！私も伝説を聞いただけなので正確な時期までは：

くるみん「懐かしいぜ、あれは今から：！4日ほど前の事だった。」

ゆき「最近じゃん。」

くるみん「ああ、まるでつい最近のように感じるぜ：

ゆき「だってほんとに最近だもん」

リー・サン「まったく：あなたに封印されたせいで、私は見たかったドラマを二話も見逃したの。気づいたらヒロインが主人公とは別の男の人との間に子供を宿していたわ：どうやってこの責任をとるつもり？」

くるみん「なら：今度はそのドラマが終わるまで封印してやるさ！

覚悟しろっ！！」

そうして、くるみんとリー・サンの戦いが始まった。

今までのユルい会話とは裏腹に、その戦いはほんとにすごかった：

激しい砂ぼこりがたち：地面が割れ：空が暗くなる。

たくさんの人が校庭から離れようと逃げ出し、残った勇敢？な男子生徒達はくるみんとリー・サンのどっちが好みかとみんな話し合いをしていた。

途中、戦う二人のスカートを下から覗きこんで写真を撮ろうとする

男子生徒もいたけど…

くるみんのシャベルに殴られて灰に変わってしまった…かわいそう。

でも、それよりも…

ゆき「あ、あのさ！わたし達も逃げないと危なくない!」

あの二人のそばにいるのはやっぱり危ない気がして、わたしはみーくんに言った。

みーくん「大丈夫です。私達は守られていますから…」

ゆき「守られてる…?誰に?」

みーくん「この子にです…」

そう言いながらみーくんは自分の足元を見る…

わたしもそこを見てみると、そこには一匹の犬が…

この子って…

太郎丸「わんっ!!」

ゆき「太郎丸くっ!どうしたの?こんなところで…」

この子は太郎丸。

学園生活部の部員であり、マスコツト的存在の――

みーくん「太郎丸?ゆき先輩…なに言ってるんですか?」

ゆき「…それ絶対言うと思ったよ」

みーくん「その子は太郎丸ではなく、トウルーマルです。」

ゆき「たるくまる?」

みーくん「違います…トウルーマルです。」

ゆき「……………」

トウルーマル「くうくん…」

みーくん「……………」

ゆき「あっそう……………」

みーくん「そうです。トウルーマルは才能のある女の子を見つけては魔法少女にして回る、正義の犬なんです！」

ゆき「…なにそれ？」

みーくん「先輩、知らないんですか？魔法少女といえば、それについて回るマスコットキャラが必要不可欠…、トウルーマルはそんな存在なんですよ。」

もうだめだ…

みーくんの言ってることが全然わからない…

ゆき「じゃあ…もしかしてくるみちゃんはトウルーマルに魔法少女にしてもらったの？」

みーくん「くるみちゃんて…誰ですか？」

ああもうっ！めんどくさいなあ!!

ゆき「くるみんの事だよ！」

みーくん「ああ、くるみんさんは生まれながらにして魔法少女ですので、トウルーマルは無関係です。」

ゆき「無関係…。じゃあトウルーマル…お前は何しにここへ来たんだい？」

わたしはトウルーマルを膝にのせて、そつと頭を撫でた。

みーくん「トウルーマルは防御結界を張れますから、それで私達を守りに来てくれたんですよ。」

ゆき「へえ…すごいね。トウルーマルは…」

みーくん「トウルーマル唯一の弱点はまだ誰も魔法少女にした事が無いって事ですね。」

ゆき「えっ？さつきみーくんトウルーマルは才能のある女の子を見て魔法少女にするって教えてくれたじゃん!!」

みーくん「そんな設定だといいなあと思って…。」

ゆき「みーくん、テキト〜」

今日のみーくんは…、ううん…今日みんなは何かおかしい。

わたしがそんな風に思ったころ、たろ…トウルーマルがわたしを見て吠え出した。

トウルーマル「わんわんっ！」

ゆき「んん？なあに？」

みーくん「なんか、様子がおかしいですね…」

わたしはみーくん達も十分おかしいよって教えてあげたかったけど、かわいそうな気がしてやめた。

トウルーマル「わんわんっ!!」

(ゆきちゃん…このままじゃくるみんはリー・サンに負けてしまう！)

もう一人魔法少女がいれば、リー・サンを倒す事ができるよ!!)

ゆき「んん？」

トウルーマル「わん、わんわんわんっ!!」

(ゆきちゃん！君には魔法少女の素質がある!!君が望むならボクがその力をあげる!!)

ゆき「んん…」

みーくん「…」

何か必死なトウルーマルだったけど、わんわん言ってるだけで…当然言葉の意味までは分からなかった。

トウルーマル「どうだい？」

(わんわんっ?)

みーくん「うわっ!？」

ゆき「しゃべった!!？」

今、たしかにトウルーマルがきれいな日本語で『どうだい?』って言った気がした…

ううん、絶対に言ってた!!

ゆき「トウルーマルっ！もつかい！もう一回しやべってみて!?」
トウルーマル「わんわんわんっ!!」

(ごめんね、週に4文字しか喋れないんだ…)

結局、トウルーマルはもうしやべらなかつた…

聞き間違いだったのかなあ？

そしてふと気がつくとき、くるみちゃんがいつの間にかりーさんを倒したみたいで…嬉しそうにわたしたちのそばへと走ってきた。

くるみん「いやあ、手こぼった手こぼった!!強いなのって…」

りー・サン「ぐ…うう…」

二人の戦いで荒れ果てた校庭のまん中、そこでりーさんはボロボロ姿になって横たわってる…

それを見た男子生徒達は倒れているりーさんの元へと集まり、まわりを囲った。

男子生徒「今までの恨み…返すなら今だ!今しかない!!」

男子生徒2「ああ!りー・サンが弱っている今がチャンス!!」

ゆき「はっ?!りーさん…!」

わたしはもし別人だったとしても、りーさんに似た人が苦しむ姿を見てられなくて…そばへと駆け寄った。

ゆき「りーさんっ!!」

くるみん「ばっ、バカ!今、近寄ったらだめだ!!」

ゆき「えっ?」

りー・サン「…ふふっ」

男子生徒に囲まれた直後にりーさんは笑い、その後りーさんを中心にして辺り一面に眩しい光が広がった。

わたしたちはそれがすごく眩しくて、とても目を開けてられなかつた…

少ししてからその光が消え、ようやく目を開けられるようになった時…わたしは驚く。

ゆき「……っ!？」

リー・サン「ふふっ…バカな子たち」

さつきまでボロボロだったリーさんはいつの間にか傷が全て治って…

しかも服も変わってた。

学校の制服じゃなくて、胸元の大きく開いた黒いドレスに…

くるみん「くそっ！他の生徒の生命力を吸って回復したのか!?あのバカ男子ども…余計な事しやがって!!」

さつきまでリーさんを囲っていた生徒は気づけばリーさんの足元に転がり、みんな灰に変わってしまった。

くるみちゃんのいうとおり、何かを吸われちゃったのかな…

ゆき「………」

みーくん「くっ!?さすがのくるみさんもこれは…!」

くるみん「ああ…、リー・サンのこの魔力、さらにあんな露出度の高い服で胸の谷間を強調されちゃあ…さすがに大ピンチだぜ…」

みーくん「自分の魔力と胸の大きさを最大限に発揮するなんて…恐ろしい戦闘服ですね…。」

ゆき「………」

わたしは思った…

この世界は全部おかしい。

みーくんが変なことばっか言うし…くるみちゃんもリーさんもなんか変。

太郎丸はトゥルーマルになってるし…、強さの基準が魔力の量なのはともかく…それに胸の大きさまで関わる意味が分からない。

もう、わたしが一番まともな人間にすら思えてきた…

あ！まだめぐねえが――

めぐねえ「くるみんさん！この壺にリー・サンを封じ込めてっ！！これなら彼女を三週間は封印できるハズ！！」

くるみん「サンキューめぐねえっ！！めぐねえの壺は効くからな……これがあれば逆転を狙えるぜっ！！」

ゆき「……………」

めぐねえもだめだ：

なんか凄い壺投げてる。

はあ……とりあえず、戦いが終わるのをおとなしく待ってようかな……。

みんなが必死に戦う中、わたしは一人で少し離れたところに座って、みんなの戦いが終わるのを待った。

戦いは夜になっても終わらなくて、わたしは一人で学園生活部の部屋に戻った：

でも戦いの音がうるさくて眠れないから仕方なく家に戻り、そしてから寝た。

あれから一週間……みんなはまだ戦ってる。

はやく終わりにしてほしいなあ……

学園生活部がわたしだけになっちゃってるよ……

夢なら……はやく覚めないかなあ……。

由紀「わあああつ!!!?」

みんなが寝静まった夜中の車内…

由紀は叫び声をあげながら起き上がる。

「はあ…はあ…ゆ、夢…だよね?」

額をつたう大量の汗を拭い、それから由紀はみんなが眠るベッドの方を見てそれぞれの寝顔を確認した。

「……りー・サンとくるみんなが同じ車の中で寝てるよ…!それってスゴいことだよね!」

まだ半分寝ぼけている由紀は、悠里と胡桃の寝顔を見て謎の感動を覚える…

あの魔女と…あの魔法少女が同じ車内に…!!そんな事を思いながら、由紀は再び寝直した。

かぞく

朝が来たのだろうか……。辺りから小鳥のさえずる声が聞こえ始め、彼は重たいまぶたを開ける。そうしてそのまま横たわっている大きなベットの横、そこにある閉じたカーテンへ目を向けると、その隙間から微かに朝の日差しが射し込んでいた。

(…もう朝か。でも、たしか今日は日曜日だったはずだ。昨日は寝たのが遅かったからな…もう一眠りするか…)

もう朝なのだということとは理解したが、昨夜の疲れが残っているせいで寝足りない。彼は頭までベットに潜り、そのまま二度目の眠りにつく事を決めたのだった。

…ガチャツ

これから寝ようとしたそのタイミングで部屋の扉が開き、誰かがこちらへと寄る足音が聞こえる。その足音は彼の眠るベットの真横まで来てからピタリと止まり、そのまま身動きしなかった。

「……………」

だが、身動きしないのは彼も同じ…。これから二度寝をしようという大事な時なのだ。この時間だけは誰にも邪魔されたくない。今、目の前にいるであろう人物が誰なのかは知らないが、頭にかぶった布団をどけてまで確認するのは面倒だった為、彼はそのまま眠ろうとし

た。次の瞬間……

由紀「わああ〜っ!!」
バフンツ!!!

「うがっ!!?」

今、まさに二度目の眠りに入ろうとしたその瞬間、何者かが大声をあげて彼の眠るベットにのしかかる。それにのしかかられた彼は苦しそうな声をあげつつも布団を捲り、目視にてその正体を掴んだ。

「つぐ……ゆ、由紀? 何してるのかな……?」

いきなりのしかかってきた少女、由紀の目を見ながら彼は問う。すると由紀は微かに寝癖のついたピンクの髪を揺らしながら彼の方へと顔を寄せ、その頬をつねった。

「いたい……いたいから、やめなさいっての……」

由紀「目、覚めた?」

「覚めた覚めた。もうパツチリお目目ですから……」

頬をつねってくる彼女の手を掴み、彼は上半身を起こす。起き上がる彼を見た由紀は嬉しそうな笑みを浮かべ、自分がここに来た理由……そしていきなりのしかかった理由を告げた。

由紀「起こしてくるようになって、お母さんに頼まれたんだ〜♪」
「だからって、いきなり乗っからなくても……」

迷惑そうに呟きつつ、彼は目の前にいる由紀を見つめる。彼女は今もベット越しに両足へまたがっており、彼は足を動かさずにいた。

由紀「はやく起きないと怒られちゃうからね！二度寝はダメだよ？」

「分かったから、どいてくれるかな？由紀がまたがっているせいで足が動かさなくて…」

由紀「あっ！そうだった、ごめんねっ」

言われるまでそれに気づかなかったのか、由紀は慌てたようにそこをどく。水色のキャミソール、そしてピンクのショートパンツ…。彼女はそれらを身に付けた状態で彼の上へとまたがっていた訳だが、恥ずかしさを感じないのだろうか？

「由紀、今みたいなのをそこら辺の男にやったらダメだよ。100%勘違いするから…」

由紀「んん？勘違いって？」

「…いや、なんでもない」

(ほんと…いつまでも子供っぽい娘だな…)

高校生とは思えぬ程に純粹な彼女の面は可愛らしくもあるが、同時に少し心配でもある。由紀がこの先、悪い男に騙されない事を祈りつつ、彼は彼女と共に部屋を出て、リビングへと向かった。

~~~~~

「おはよう」

胡桃「んー、おはよう」

美紀「おはようございます」

悠里「おはようっ」

リビングに入った彼が椅子へ座ってから言葉を放つと、それに気づいた人物達が返事を返す。リビングに置かれたソファーに座りながらテレビを眺める胡桃：そしてその隣に座る美紀。二人もまだ起きたばかりらしく、パジャマ姿のまま：胡桃の方はまだその長い髪を縛ってもしなかった。

由紀「しつかり起こしてきたよ」

悠里「ええ、ありがとうね、由紀ちゃん♪」

彼を起こしてきた事を由紀が告げると、悠里は優しい笑顔を浮かべて彼女の頭を撫でる。どうやら、彼を起こすようにと由紀に頼んだのは悠里のようだ。悠里は由紀の頭を何度か撫でてから彼の方へと歩みより、そつと声をかけた。

悠里「昨日は…よく眠れた？」

「ん〜、それなりにね」

悠里「……そう」

悠里の方へ顔を向け、微かに微笑みながら答える。悠里はその笑顔を見てどこか照れたような表情を見せると、直後にニツコリと微笑んだ。

悠里「じゃあ朝ごはんにしましょうか。みんな、おいで」

悠里が告げると由紀、胡桃、美紀がテーブルの方へと集まる。だが悠里のその声に誘われたのは彼女達だけではなく、これまで部屋の隅に寝ていた一匹の小さな柴犬：太郎丸もだった。

太郎丸「わんっ！」

悠里「ええ、あなたのもちやんとあるからね」

悠里は先程自分が作った朝食を皿に並べ、それをテーブルに……。そしてドッグフードの入った小皿を床へと置き、朝食の準備を終えた。彼女達は手を合わせ『いただきます』と告げると、それぞれが目の前に置かれた料理に手をつけ始める。

今日が日曜日ということもあり、彼女達は朝食を済ませた後ものんびりとした時間をリビングで過ごしていた。

美紀「太郎丸、こっちおいで……」

太郎丸「……」プイツ

美紀「うぐ……」

ソファアーに腰を下ろした美紀は目の前を通り過ぎる太郎丸に声をかけるが、太郎丸は彼女の声を無視して由紀の足元へと向かっていく。それに気づいた由紀は笑顔で太郎丸を抱き上げていたが、それを見つめる美紀の目は悲しげだった……

胡桃「ははっ、相変わらず嫌われてんのな」

美紀「き、嫌われてる訳じゃ……ただ、太郎丸は私の事がちよつと苦手なだけなんですよ。きつと……」

胡桃（それを嫌われてるっていうんじや……）

あまり言う可可愛そうなので声には出さないが、胡桃は隣に座る美紀を見てそんな事を思った。何故かは分からないが、太郎丸は彼女にだけ素っ気ない態度をとる。他の皆に対してそんな事はなく、今も由紀の頬を舐めているというのに……



由紀「あはっ、くすぐったいよ♪」

美紀「……………」

胡桃「ゆきねえ、程々にしとけよ。美紀のやつがヤキモチ妬くからさ」

愛犬と姉由紀がじゃれ合うのを見た妹美紀の表情があまりにも悔しそうなものだったので、それを見た胡桃はニヤニヤとした笑みを浮かべる。美紀には悪いと思うが、彼女のガツカリとした表情を見たら笑わずにはいられない。恐らく、美紀のこんな顔は太郎丸が関わっていないと中々見られないだろう。

美紀「姉様あねさま、私はヤキモチなんて妬いてないです…」

胡桃の発言を聞いた後、美紀がボソツと呟く。彼女は口こそそう言っているが、今も由紀が太郎丸とじゃれ合うのを切なげに…そして羨ましそうに見つめていた。

胡桃（んー、どう見ても妬いてるようには見えねえ…………）

胡桃がそんな事を思った時、彼女達の父親である彼が由紀の元へと歩み寄る。彼は由紀と何やら話した後には彼女から太郎丸を受け取り、それを抱えたまま美紀の前へと立った。

美紀「…なんですか？」

「いや、美紀が太郎丸と遊びたそうな顔してたから…。ほら、お父様がチャンスを作つてあげたぞ」

彼は腕に抱えた太郎丸を美紀の前に寄せ、彼女の反応を待つ。美紀

やはり自分も太郎丸とじゃれ合いたかったらしく、目を大きく見開いてどこか嬉しそうに、そつと両手を伸ばす…。

美紀「お父様、ありがとう——」

太郎丸「…ツ!!」

ピョンツ!!

「あ……」

美紀「あ……」

美紀の手がもうすぐ太郎丸に届く、その瞬間だった。目前に迫る彼女の手を見た太郎丸は体を捻って彼の手から飛び降り、そのままそくさと悠里の足元に逃げ込んでしまったのだ。

悠里「あら、どうしたの？」

(な、なんと空気の読めないワンちゃんでしょう……)

逃げる太郎丸を見た美紀は両手を伸ばしたまま固まってしまい、何とも言えぬ顔をしている。それを間近で見っていた胡桃は必死に笑いを堪えているのか、顔を俯けたままの状態で肩をピクピクと震わせていた。

胡桃「つ……くく……う……ふふっ……!」

(ああ、やっぱりこちらの娘は笑ってらっしやるのか……。楽しそうで何よりだが、今は胡桃じゃなくて美紀の笑顔が見たかったなあ……)

彼の願い虚しく、美紀の目からだんだん光が消えていく……。彼女は伸ばしていた両手でまた自分の膝を抱えると、そこに顔を埋めてから深いため息をついた。

美紀「……………」

「まったく…どういふ訳だろうな。太郎丸は誰に対しても愛想の良い子なのに」

美紀「……………」

ただ単純に疑問に思ったただけであり、悪気があつた訳ではない。しかし彼が放つたその言葉は今の美紀にとってこの上無く耳に痛い言葉であり、彼女はまた一段と深いため息をついてしまった。

美紀「お父様なんか、大嫌いです……………」

「なっ!？」

胡桃「つく…!あははっ!!」

彼の事を嫌いと言げる美紀…。その言葉を聞いて激しくシヨツクを受ける彼…。そんな二人のやり取りを見ていた胡桃は遂に笑いを堪え切れなくなり、そのまま大声で笑い始めるが…………

美紀「あと、姉様のことも嫌いですから……………」

胡桃「はあっ!?!なんでだよっ!!?」

美紀「散々笑われたんですよ…当然じゃないですか…」

胡桃「う…ぐっ……………」

冷たい目を向けてくる美紀に対し、胡桃は言葉を返せない。

彼女が太郎丸と遊ぶ由紀を羨ましそうに見つめていた時…そして太郎丸に逃げられた時、胡桃は確かに笑ってしまったからだ。

由紀「みーくん、みんなの事が嫌いになっちゃったの?」

彼女にそう尋ねるのは先程まで太郎丸と遊んでいた長女・由紀。彼

女にそれを尋ねられた美紀は一瞬言葉を詰まらせたように見えたが、すぐにニツコリと微笑みを返した。

美紀「いいえ、姉上と…お母様の事は大好きです。あと…何だかんだで太郎丸のことも…」

今現在美紀が好きなのは姉上…つまり由紀と、母である悠里。そして太郎丸のみらしい…。それを聞いた由紀は嬉しそうな顔をして美紀に抱きつき、悠里もまたニツコリと笑っている。…が、彼と胡桃の表情は暗いものに変わっていた。

胡桃「完全に…嫌われた…」

「美紀からあれだけ逃げ続けている太郎丸ですら嫌われてないってのに…」

胡桃「あいつは犬だからだよ…パパも犬になってみれば…?」

「ああ、なれるもんならなりたいね…」

美紀に嫌われたショックからか、二人はバカげた会話を交わしつつ部屋の隅へと寄り、そして同時にため息をつく。そんな二人をよそに、由紀は美紀の顔をキラキラとした目で見つめていた。

由紀「ねえみーくん。ほんとにわたしの事が好きなら…『お姉ちゃん』って呼んでくれない?」

美紀「え…っ?ど…どうしようかな…」

悠里「そうね♪ついでに私の事もママか、お母さんって呼んでほしいかな?」

ニコニコと微笑む二人に対し、美紀はモジモジとしたリアクションを返す。何の映画…また本だろうか?それらの影響を受けたのかは分からないが、彼女は物心ついた頃からずっと家族の事を『姉上』やら『お母様』やらと呼んできた。彼も悠里も「これはこれで可愛いか

ら」と特に正しはしなかったが、たまに『お父さん・お母さん』と呼んでほしくなるのも事実だ。

美紀「その…じゃあ……………」

美紀は顔を赤く染めつつ、由紀…そして悠里の目を見つめる。普通の家族としては当たり前前の呼び方であるそれも美紀にとっては少々気恥ずかしいものがあつたのだが、この二人がそれを望むならと思つた…。

美紀「お、お母さん…：ゆきお姉ちゃん…：大好きです」

悠里「…ふふっ、ありがと♪」

由紀「おおっ!!みーくんっ！わたしもみーくんの事が好きだからねっ♡」

初めて聞く美紀のそれに満足そうに微笑む由紀と悠里。太郎丸はそんな二人に抱き締められる美紀の照れたような笑顔を見て尻尾をパタパタと振っていたが…少し離れた所からそれを見ていた彼と胡桃、二人の目は死んだように濁っていた。

胡桃「パパ…知ってる？あたし、美紀にお姉ちゃんって呼んでもらったこと無いんだぜ……………」

「奇遇だな…僕も、美紀にお父さんって呼んでもらったことが無いんだよ…」

胡桃「ははっ、あたしら…二人揃って嫌われものか……………」

「嫌われもの同士、一緒に風呂でも入るか？」

胡桃「いや…それは嫌だけどさ……………」

どさくさに紛れて胡桃を誘う彼だったが、それは呆気なく失敗に終わる。彼女と…というか娘と最後に風呂に入ったのは何時の事だろうか。もう、思い出せないくらい遠くな気がする。悠里は今も娘達と入る事があるというのに、やはり父親とは難儀なものだなあと…彼は一人思った。

悠里「…美紀ちゃん、ちよつと良い？」

美紀「っ?…なんですか？」

部屋の隅で肩を落とす二人を見た悠里は美紀の肩を叩き、その耳にある事を囁く。それを聞いた美紀は一瞬戸惑ったような表情を浮かべたが、悠里のすぐるような目を見たら従わずにいられない。

美紀「…わかりました」

悠里「ごめんね。でも、二人もきつと喜ぶはずだから」

美紀はソファーから静かに立ち上がり、部屋の隅…そこで固まる彼と胡桃の元に歩み寄る。美紀が寄ってきた事に二人が気が付き、その暗い顔を向けた瞬間…美紀は顔を赤く染めながら咳払いをした。

美紀「…ご、ごほんっ!!き、さっきのなら、ただの冗談ですからね…。私はお父さんの事も、くるみお姉ちゃんの事も…大好きですから…」

「っ…!？」

胡桃「み、美紀っ…!」

照れたように告げる美紀の表情…それを見た二人はこの上無く嬉しそうな笑みを浮かべ、彼女の事を抱き締める。美紀はそれを迷惑そうな顔で受けていたが、ほんの一瞬だけ幸せそうに笑っていたのを母

である悠里は見逃さなかった。

「一応言っておくと、僕も美紀の事が好きだからね」

胡桃「あたしも…美紀の事を大事な妹だと思ってるからな♪」

美紀「っ、はいはい…ちゃんと分かっています…。分かっていますから、もう少し離れてくれると…」

抱き締めた美紀が苦しげに呟いていたので、二人は苦笑いしつつ彼女から離れる。その時、美紀はいつの間にか足元にいたそれに気付いた。

太郎丸「わんっ!」

美紀「太郎丸…：うん、太郎丸のことも、すっごく好きだからね」  
静かに屈み、そつと両手を伸ばす…。今度の太郎丸はそれから逃げることはないまま、大人しく彼女の両手に抱かれた。もちろん、ようやく太郎丸を抱くことが出来た美紀は満面の笑みを浮かべている。

悠里「やつぱり、太郎丸も本当は美紀ちゃんの事が好きなのね」

由紀「えへへ、そうだね♪」

太郎丸を抱き上げた美紀はその首に顔を埋めてみたり、背中を撫でてみたりしてニヤニヤと微笑んでいた。いつもとは違う彼女の表情を見て由紀と笑い合う中、悠里は彼の肩をポンツと叩く。

悠里「可愛い子供達に囲まれて、私達は幸せね」

「更に奥さんも美人ときた。僕は本当に幸せものですよ」

悠里「ふふっ、ならよかった♡」

彼もまた悠里の肩を叩き、笑顔を見せる。ニコニコと笑い合う二人

の顔を横で見っていた由紀はその光景をジーツと見つめている内、あることが気になってしまった。

由紀「そう言えばさ、お父さんとお母さんってどうやって知り合つて、いつ結婚したの？」

悠里「あら、気になるの？」

由紀「気になるっ！今まで聞いたことないもん！」

瞳をキラキラと輝かせ、由紀は悠里と彼を交互に見つめる。よく見れば胡桃、そして美紀も二人の方へ視線を向けていた。やはり、親子がどんな出会いをして、どんな暮らしをしてきたのか気になるのだろう。

「そういや、あの頃はまだ悠里の事をりーさんって呼んでたな…」

悠里「懐かしいなあ…」

「懐かしいねえ…」

二人は同じように瞳を閉じ、そのまま黙りこむ。恐らく当時の事を思い返しているのだろうが、話の続きを聞きたい由紀達は大人しくそれを待つてはられない。

胡桃「…で、どうやって知り合つたのさ？」

美紀「たしか、高校は同じだったんですよね？」

「そうそう。…あれは確か、僕と悠里が三年生の時だったかな。あと数カ月で卒業だったという時、悠里が僕の家遊びに来て——」

悠里「あつ、その話はしちゃだめ」

悠里は彼の口に手のひらをあて、そこを無理やりに塞ぐ。二人の過去がいよいよ明らかになりそうだというタイミングで話を遮られた為、由紀達は揃って不満そうな顔を見せた。



由紀「ええ〜っ?!なんでダメなの〜?」

胡桃「そうだよ!気になるじゃんか!」

悠里「でも、ここから刺激の強い話になっちゃうから…みんなにはまだ早いかもね♪」

人差し指を口に当てながらニコツと微笑み、可愛らしく告げる悠里だが、その笑顔の奥には何かが隠されているようだ…。その後、由紀達は目線を悠里から彼へ移すが、彼も照れたように笑うだけで何も語ってくれなかった。

美紀「お母さん…お父さんの家に行って何をしたの…?」

悠里「ふふっ、ひーみーっ♡」

由紀「うう…気になる…。くるみちゃんも気になるよねっ?」

胡桃「まあ…ね。けど、これ以上聞かない方がいい気もする…」

由紀「え〜、わたしは普通に気になるけどなあ…」

結局二人の馴れ初め<sup>そ</sup>を聞き出す事が出来ず、由紀は残念そうな顔を見せる。…だが、目の前で楽しげに笑い合う彼と悠里を見ていたら、そんな事はどうでもよく思えた。確かに二人の話は気になるが、少なくとも今現在二人の仲は良く、毎日楽しそうだ…。由紀は自分がこんな両親を持ったこと…そして胡桃や美紀のような妹や、太郎丸のようなペットと毎日を過ごせること……それらを心からありがたく思った。

由紀（やつぱり、みんなと一緒にいるのが一番楽しいね…）

大好きな家族の顔を順に見回し、由紀はニコリと笑う。今日は日曜…そして、まだ一日は始まったばかり。さあ…今日はみんなと何をしようか?

## 体育祭をもう一度！くじゅんびく

見知らぬ高校のグラウンド、その隅に停まる一台のキャンピングカー。

由紀、胡桃、悠里、美紀、そして彼の五人はその車内にいた…

由紀「こうして学校にいるとき、なんか色々思い出すね」

窓の外に広がるグラウンド…そしてその奥の校舎や体育館を眺めて、由紀がはしやぎ出す。

胡桃「確かに…そうだなあ」

美紀「学校で暮らしていた時の事を思い出します。楽しいこと、辛いこと、色々ありました…」

悠里「ええ、本当に色々あったわよね。肝だめししたり…体育祭をしたり…」

「肝だめし？体育祭？…すみません…話についていけない男がここにいます」

彼女達の学校暮らし時代の事を深く知らない彼はそっと手をあげ、少しふてくされる。彼は彼女達がそういった行事を行っていた頃、一人で“かれら”と戦っていたのだ。

悠里「あつ、ごめんなさい。そういえばあなたとはまだ会ってない頃の話になっちゃうわね」

「みんな…僕がいない間に楽しい学校生活を謳歌していた訳ですか…」

胡桃「仕方ないだろ。あの時のあたし達はお前の事なんざこれっぽっちも知らない…他人同士だったんだからさ」

「わかってる…。わかっちゃいますが…少しさみしいですわ…。僕も

そんな素敵イベントに混ざりたかった…」

美紀「まったく…なにをそんなに落ち込んでるんですか」  
テーブルに顔を伏せ、深いため息をつく彼に美紀が冷たく言い放つ。

その直後、由紀が何かを思いついたらしく、突如車内で大きな声をあげた。

由紀「…いよしっ!!じゃあもう一回だ!!!」

胡桃「うわっ!?!びっくりした…。何がもう一回なんだよ?」

由紀「せっかく学校にいるんだし、今度は——くんも加えて体育祭をしようよ!!」

「……………」ピクッ

由紀のこの発言に、テーブルに伏せていた彼の耳がピクリと動く…

美紀「体育祭を…もう一回ですか?」

由紀「うんっ!?!りーさん、良いでしょ?」

悠里「うくん…そうね。——君もやりたいみたいだし、もう一回しましよるか。」

由紀「やった〜!良かったね——くん!今日はわたし達と体育祭しようね♪」

嬉しそうに彼の肩を叩く由紀…

彼は伏せていた顔をあげると由紀の顔を見つめてにつこりと微笑み、席から立ち上がって外へと出た。

「そうと決まればこうしちゃいられませんよ!体育館の方に行き、必要な物を集めましょう!!」

由紀「うん!みんなも行くこう?」

胡桃「はいはい…」

美紀「体育祭の準備ですか…。競技に合わせて必要な物を揃えなきゃですね」

悠里「ええ、競技の方は私と美紀さんで適当に決めましょうか？」  
由紀「パン食い競走っ！パン食い競走がやりたいっ!!」

美紀「パンがありません。普通の競走で我慢して下さい。」  
由紀「うう、やってみたかったなあ…」

彼女達はそんな会話を交わし、体育館の中へと向かう。

くくくく

一方、その頃…

学校の正門を越えた先にある駐車スペース  
そこに一台の外車が停まり、中から四人の人物が降り立った。

穂村「んで…なんでまたこんな所に？」

柳「連日働いて疲れているであろう君達を連れ、たまには一緒にのんびり外出するのもありだと思っただが…。偶然にも我が母校を見つけてしまったのでね、少し立ち寄っただよ」

圭一「心底興味が無いんだが…」

狭山「…ボクも」

外から一人懐かしそうに校内を覗く柳を見て、圭一達三人はブツブツと文句を言う。三人は柳を無視して車に寄りかかり、雲一つ無い空を見上げて会話を交わした。

圭一「良い天気だな…」

穂村「そうツスね…」

狭山「…せつかくの良い天気なのに、ボク達は知りもしない学校の

駐車場にいるんだね」

穂村「……………」

狭山「……………」

圭一「言うな…惨めになる」

穂村「柳さんの気がすむまで待たなきゃダメなのかねえ…」

狭山「…たぶん、そう…」

穂村「あと何分くらいで終わるかなあ…」

圭一「本人に聞けよ…」

圭一にそう言われた事で穂村は柳本人にいつまで待てば良いのか尋ねようとするが…懐かしそうに校舎を眺めていた柳はいつの間にか一人でズカズカと中へ入っていき、三人の前から姿を消していた。

穂村「うわ…中に行っちゃったんだけど……………」

圭一「……………」

穂村「てかさ、中に感染者とかいたらどうすんのかな?」

圭一「さあ…、まあアイツはそこらの感染者に簡単に殺られたりしないだろ。…たぶんな」

穂村「…それもそうだね。ほっとくか…」

圭一「ああ、ほっとけほっとけ…」

狭山「…ボクらは一応、あの人の護衛の役割も兼ねてるんだけど。恐ろしく無能だね…」

穂村「学校見てはしゃぐようなオッサンの護衛とか勘弁だわ…」

圭一「だな…」

校内に消えた柳に呆れ、ぼーっと辺りを見回す三人…

今日は本当に良い天気で、太陽の光が心地良い。

目を閉じればそのまま眠ってしまいそうだ…

そんな事を考えていた、その時……

ゴロゴロゴロゴロ……

圭一「おい……なんだ、あれは……」

学校の敷地内を転がる大きな赤い謎の球体……

それはゴロゴロと音をたて、三人の元へとももの凄い勢いで迫ってくる。

穂村「おいおいっ!? あんなんぶつかったら車に傷がつくぞ!」

狭山「……良いんじゃない。これは柳さんの車であって、ボク達の車じゃないし……」

圭一「まったくだ……。傷でもへこみでも、どんどんつけてくれて構わない」

そう言い放ち、圭一、狭山の二人は車から離れる……

ただ一人、車のそばに残った穂村はこの車に傷をつけたら後で柳に何を言われるか分かったもんじやないと思ひ、真正面からそれを受け止めようと構えた。

穂村「まったく、後でお前らが役立たずだったって柳さんに報告するかな!」

狭山「……ご自由に」

圭一「ああ、ご自由に……」

ゴロゴロツ!!

穂村「ぐうっ!!」

迫る球体に向けて穂村は両手を伸ばし、手のひらを広げて待ち構える……

その球体は勢い良く穂村の手にぶつかり、大きな音をたててその場に弾んだ。

パシインツ!!

穂村の手に弾かれたそれは始めはポヨンポヨンと大きく地面を跳ねていたが、少しすると勢いが衰え、落ち着いてゆく…

そして最終的にはその場に静止したその球体に穂村は手をつき、じっと見つめた。

穂村「…つたく。誰がこんなもんを…!」

そう言いながら穂村はその球体が転がってきた方向を見る…

するとそこには一人の少女が申し訳なきように立っていて、すたすたと穂村の元へと歩み寄ってきた。

由紀「ご、ごめんなさい…。大玉、車にぶつかったりとかしちやいましたか?」

穂村「いや…、ギリギリで止めたから大丈夫だけどさ。」

由紀「ふうく。良かったあく!ギリギリセーフっ!!」

穂村「セーフじゃねえって!俺が止めなきやぶつかったってたつての!!」

目の前で大玉を撫で、ニコニコとする少女を見た穂村は少々苛立ち、その娘の額を軽く小突く。

少女はそれを受けると痛そうな声を漏らし、フラフラとよろめいた。

由紀「ううつく!ご、ごめんなさあくい!」

穂村「分かれば良いけどな、ちゃんと反省しろよ?」

由紀「は、はいっ…」

狭山「…これ。何に使うの?」

二人のそばに駆け寄って、その大玉を指先でつつきながら少女に尋

ねる狭山…

その問いに対して少女はにつこりと微笑み、自慢気に答えた。

由紀「みんなで体育祭をやるんだよ！これは大玉転がしに使うのっ！」

狭山「…体育祭？」

穂村「大玉転がしい？」

圭一「何を言ってるんだコイツは…？」

感染者だらけの世界…

そんな世界で目の前の少女が放った言葉に彼等は首をかしげ、不思議そうな表情をする。

三人が不思議そうに少女を見つめていると更に四人の少年少女がその場に駆け寄ってきて、驚いたような声をあげた。

悠里「由紀ちゃん、大玉は…。えっ!？」

美紀「先輩っ！大丈夫ですか!？」

胡桃「あんたら…誰だ？」

「ちよつと待って…誰かいるんですか？」

由紀の前に立つ圭一達に警戒心を向けてくる三人の少女…

そしてその背後、ゆつくりと転がる白い大玉の後ろから少年の声が聞こえた。

どうやら玉が邪魔で前が見えていないらしい。

その少年はゆつくりと転がしていた大玉を止めるとその背後から顔を出し、目の前の三人を見回した。

「…あなた達は？」

圭一「あぁ…。俺達は仲間がここの卒業生だっていうから、久しぶりの母校見学に無理やり付き合わされてるだけだ。だから…そんな



なに警戒するな。今日のはのんびりしたいし、お前らみたいな若い連中に襲いかかったりはしないさ」

穂村「そゆこと。んで…君達は？」

悠里「えつと、私達は……」

尋ねる穂村に対して五人は名前を名乗って軽い自己紹介をし、更にこれから自分達だけの体育祭をするという事も告げた。

それを聞いた穂村・狭山の二人は興味を抱き、微かに表情を明るくする。

狭山「…ちよつと、楽しそう」

穂村「だな。…おい！それって俺んちも参加出来たりするか？」

圭一（いや待てよ、参加出来たらするつもりなのか…!?!）

悠里「え？えつと…由紀ちゃんに任せるわ」

由紀「うん！じゃあ、みんなで楽しもう!!えつと…」

なにかを言いたげに、じつと狭山達の顔を見つめる由紀…恐らく狭山の名前が分からないからなんて呼べば良いのか戸惑っているのだろう。

そんな彼女の手を狭山はギュツと握り、軽く頭を下げた。

狭山「…狭山真冬。よろしく、由紀」

由紀「うんっ！よろしく、真冬ちゃん♪」

体育祭をもう一度！〜いつしよに〜

30分後……

柳「ずいぶんと賑やかだから何かと思えば…、まさか他の生存者と体育祭をする事になっていたとは…」

悠里「あつ…無理して参加しなくても、応援だけでも結構ですよ？」

グラウンドの中央で色々と準備を進める由紀や真冬達…

柳はその場所から少し離れたところに広げられたカラフルなレジャーシートに腰を下ろし、悠里・美紀と共に彼女達を見つめていた。

柳「…そうだな。参加は遠慮するが…応援、というか…見物くらいはしていこう」

悠里「はい、ゆっくりして行って下さい」

柳「…ところで、君達は何を？」

柳の背後、レジャーシートの中央で悠里と美紀の二人はノートを広げ、何かを書き記していた。

美紀「体育祭の種目、それと順番を決めてるんです。」

柳「そのノート…少し見てもかまわないかな？」

美紀「これですか？はい、かまいませんよ」

美紀からそのノートを受け取り、柳はそれに目を通す。

そこには様々な種目の内容、そしてそれを開始する順番などが事細かに記されていた。

柳「……………」

悠里「なにか、おかしなところとかありますか？」

柳「この…パン食い競走のところに引かれた線は何かかな？」

美紀「ああ、それはやむを得ず断念した種目ですね。そのパン食い競走は由紀先輩が強くりクエストした種目なんです…あいにくパンが無くて。それで断念したんです」

柳「パン…か」

ノートの中、二本の線が上から引かれた『パン食い競走』の文字を見て柳は立ち上がり、脱いでいた靴を履き直す。

そうして立ち上がってどこかへ向かおうとする柳に、悠里が声をかけた。

悠里「どうかしました？」

柳「車に少しだけ忘れ物をした。すぐに戻る…」

それだけを言い残し、柳は一人駐車場へと向かう。

約束どおり、五分程で戻ってきた彼の右手には大きめのバスケットかごが握られていた。

彼はそのかごをレジヤシートの上に置き、自らも腰をおろす。

柳「…待たせたね」

美紀「えつと、忘れ物ってこれですか？」

柳「ああ、これの中身だよ」

悠里「…何が入っているんですか？」

尋ねる悠里の顔を見て柳はニヤリと笑い、そのかごの蓋を開ける…中に入っていたそれを見た悠里と美紀はそのあまりのタイミングの良さに驚き、思わず声をあげた。

美紀「これ、パンじゃないですか！」

悠里「凄くたくさん…これ、どうしたんです？」

柳「ああ…、作った」

悠里「つくつ…？や、柳さんがですか？」

柳「ああ。趣味の一環でね。おかしいかな？」

悠里「いえ…お店のみたいで驚いちやつて。本当にすごい…」

改めてバスケットに詰められたたくさんパンを悠里は見つめる。様々な形のパンはどれも綺麗に焼けており、市販の物と比べても全く問題の無い…いや、それ以上かも知れない物ばかりだった。

柳「中にはオーソドックスなあんパンなどもある。もし良ければだが…これでパン食い競走をやったらどうかな？」

美紀「…いいんですか？」

柳「ああ、かまわないよ…」

悠里「嬉しいですけど…、それだと少し悪い気がします。」

柳「ふむ…。じゃあこうしよう。これは本来私達四人で食べようと思っただけで作った物だ。パン食い競走に使ったりすると私達の食事が少なくなる。」

柳「だから良ければ、昼食を一緒にとうろう。その時に君達からも私達へ、何か食料を分けてくれればそれで良い、どうかな？」

悠里「そのくらいなら、私達は別にかまいませんけど…」

柳「じゃあ決まりだ、これでパン食い競走が出来るな。あの由紀とかいう子にも教えてやってくれ、喜ぶだろう」

美紀「…ありがとうございます！私、ちよつと先輩に教えてきますね？」

悠里「うん、お願いするわ」

シートのそばに脱いでおいた靴を履き直し、由紀の元へと駆け足で向かう…。楽しみにしていた種目が出る事を彼女に伝えられると思うと、思わず頬が緩んでしまう美紀だった。

柳「…やけに嬉しそうだったね」

悠里「美紀さんは…いえ、私達はみんな由紀ちゃんが大好きですから、彼女の笑顔を見れると思うと、自然と嬉しく思ってしまうのかもしれない」

悠里「あの子の笑顔は少し…特別ですから…」

柳「…：特別？」

首をかしげる柳の元へと、一人の少女が駆け寄ってくる…嬉しそうにニコニコと笑うその少女は、今ちょうど話題にしていた由紀だった。由紀は柳の前に立ち、ペコツと頭を下げてから両手を胸の前で合わせ、にっこりと嬉しそうに笑った。

由紀「柳さんっ！パンありがとうございませよ♪わたし、ほんとにパン食い競走がやりたかったから、すごくうれしいです!!」

柳「そうか、喜んでくれたよな、とても新鮮な気分だよ」  
ンでは喜んでくれないからな、とても新鮮な気分だよ」

由紀「ちよ…ちよつと見てもいいですか?…：うわあ♪すつごくおいしそ〜♡」

バスケットの中を覗きこみ、ぎつしりと詰まった様々なパンを見た由紀…。こんがりと焼けたパン達は顔を寄せると香ばしい香りが出て、思わずよだれを垂らしそうになる。

由紀「一個だけ…先に食べてもいいですかっ!？」

悠里「由紀ちゃん!我慢しなさい——」

柳「かまわないよ。ほら、どれか一つ…好きなのを取るといい」

悠里「そ…そうですか?すみません、ほんとに…」

由紀「ありがとうございますっ♪じゃ…これっ!」

由紀はバスケットの中へと手を伸ばし、やけに黒みの強いパンを手  
に取った。

彼女はそれを即座に口の中へと突っ込み程よい大きさに噛みちぎ  
ると、もぐもぐと口を動かしながら幸せそうな表情をした。

由紀「んっ…!?美味しいですっ!!」

柳「それはそれは…口にあったようでよかったよ」

悠里「ほんと、美味しそうね…」

由紀「りーさん、はい!はんぶんこだよ♪」

手にしていたパンを半分がちぎり、悠里に手渡す。

しかし手では上手くちぎれず、僅かに大ききの差が出ていたが…悠  
里には大きい方を手渡したのは、由紀の優しさだろう。

悠里は礼を言ってからそれを受け取り、口に頬張る。

悠里「っ…す、すごく美味しいです。柳さん、これ本当にただの趣  
味ですか?パン屋さんやっているとかではなくて?」

柳「ああ、完全にただの趣味だよ。しかしこんなに褒められるとは、  
嬉しいね…。世界が元に戻ったらパン屋を開こうかと思わず悩んで  
しまうよ」

由紀「開いた方がいいと思う!そしたらわたし、常連さんになりま  
すっ!!」

悠里「ふふっ、じゃあ…私も」

柳「んん…パン屋か。考えておこう…」

二人の客を獲得した柳はわりと本気で考えた…。もし世界が元に  
戻る事があるのなら、そんな店を開くのもありかも知れないと。

一方、準備を進めていた穂村達はその手を一時的に休め…、楽しそ  
うな雰囲気のレストラン組を見つめていた。

穂村「柳さん…若い娘達に囲まれて嬉しそうにしてねえか？あの人も所詮はオスだな…」

圭一「そこまで言うほどじゃないだろ…。確かにいつもよりは楽しそうだが、あくまでも娘を見ているような感覚なんじゃないか？」

穂村「柳さんに娘さんとかいんの？」

圭一「さあ…。そこまでは知らないが…」

狭山「…少なくとも、あの人は女の子を見て鼻の下を伸ばすような人じゃない。穂村とは違う…」

穂村「はあ!?誰とは違うって——」  
ドンツ!

美紀「あつ！すいません！ちよつとよそ見してて…」

穂村「いや、平気だ。だけどちよつと疲れてきたから…あそこの木陰で休憩でもしない？一緒にさ…」

美紀「へっ？あの…ちよつと!!？」

穂村は美紀の手首を掴み、半ば強引に遠くの木陰へと連れ込もうとする。

その手を振りほどこうともがくが、逃れる事が出来ずに美紀が焦り始めると、彼と胡桃がその場に駆け付け…穂村の前へと立ち塞がった。

「ちよつと…何してんですか？」

胡桃「離してもらえる？嫌がってるしさ…」

穂村「二人して…怖い目だなあ。俺の事はキライか？」

「あなたからは、何か嫌な雰囲気を感じるんで…」

胡桃「同じく…」

シャベルを構える胡桃と、ナイフに手を伸ばそうとする彼…。自らをギリツと睨みつける二人を目前にして、穂村は高らかに笑う…。まるで、RPGゲームの魔王かなんかのように…。

穂村「ふ…ふはははははっ!!バカな奴らめ…!ただの人間ごときが…この俺に勝てると思ってるのか!」

美紀「何ですかそのキャラは…」

胡桃「あんただって、ただの人間だろ…」

狭山「違う…穂村は…」

穂村「おい、言うつもりか?やめとけて、どうせ信じない」

意味深な穂村の発言を狭山は聞き流し…彼と胡桃の目を真っ直ぐに見つめると、一呼吸おいてから二人にそれを告げた。

狭山「穂村はただの人間じゃなく…凄まじい変態。だから注意した方がいい」

「…なるほど」

胡桃「確かに…かなり危なそうな人だもんな」

美紀「ちよつと!?はやく手を離してくださいよっ!!私に何をする気ですか!」

穂村「い、いや?ほんの冗談で——」

狭山「あんなことやこんなことを、穂村の気がすむまでたっぷりとやられる。全てが終わったあと…美紀はたぶん人格を壊してしまう」

美紀「いつ!?…いやあっ!!」

狭山の発言を聞いた美紀は顔を真っ青にして、より一層強く抵抗した。

思いの外本気で抵抗する彼女焦った穂村は必死に『冗談だって!落ちつけっ!!』などと言っていたが、これから襲われると思つて慌てている美紀の耳にその言葉は届かなかった。

圭一「バカが…、まず手を離せ」

穂村「あっ!そうか!!」



圭一に言われてからようやく美紀を解放する穂村……。美紀は手を離された瞬間に猛スピードで彼と胡桃の後ろに隠れ、顔を青くしながら震えていた。

穂村「ご、ごめんな……？」

美紀「……っ」ガタガタ

胡桃「大丈夫か？変なところ触られたりとかしてないか？」

美紀「と、とりあえずは……大丈夫です……」

狭山「女の子にトラウマを植えつけるなんて……ほんとに穂村ってヤツは……」

穂村「お前が話をややこしくしたんだろ……」

狭山「……でも、穂村が美紀の手を無理やりに引いていたのは事実……」

あのまま誰も止めなかったら、何する気でいたの？」

穂村「まあ、ちよいと木陰でお話でもして〜。あわよくばキスくらいは……」

狭山「……どこに？」

穂村「どこについて、おかしな事をおっしやる。口以外のどこにするってんだよ？……いや、確かに口以外にもしてみたい箇所はあるけど……まずは口だよな」

美紀「う……うう……」ガタガタ

胡桃「最低な男だな……」

「外道だ……」

狭山「……もつと言ってあげて。穂村は自分がクズな事を自覚できない病気だから」

穂村（ひでえ言われようだが……、状況が状況だから反論できねえ……）  
そのあと……穂村は胡桃達の約5分に渡る罵倒を受け続け、二度と軽い気持ちで女の子の手を引かないと誓った。胡桃達は改心した（？）

穂村と協力して体育祭に必要な道具をかき集め…瞬く間にその準備を終える事ができた。

悠里「さて…必要な物は揃ったし、だいたいの準備は終わったわね」

胡桃「じゃ、はじめる?」

悠里「ええ、はじめましょうか♪」

穂村「その前に聞きたいんだけどさ、これってチームって概念とか、優勝って概念はあんの?」

悠里「私達だけでやろうとしていた時は特に決めてませんでしたが、あなた達が参加する事になって人数が増えたので、チーム分けとかは必要だろうなって思っていましたけど…」

圭一「じゃあ、こっちのチームとお前達のチームとで競う感じか?」

胡桃「おっ!それおもしろそうだな。そうしようぜ!!」

「僕も賛成です。でも、人数が合わないか…」

圭一達を見回してから彼はそつと呟く…。

由紀達一行の人数は五人…一方、圭一達は四人。しかも、柳は見学するだけとの事なので、参加メンバーは実質三人だった。

狭山「…このままじゃ、5対3になっちゃうか…」

柳「…若狭くん、すまない。もう一度、さっきのノートを見せてもらえるかい?」

悠里「あつ、はい」

柳は今回の種目が書かれているノートを悠里から受けとると、それにじっくりと目を通す…。1分近くそのノートを見つめていた柳は頭の中で何かを確認していたらしく、それを終えてから悠里へとノートを返した。

柳「ありがとう。恐らく、これらの種目ならば彼らは3人だけで十分だ。ハンデだと思って、遠慮なく競うといい」

悠里「えっ?」

胡桃「いくらなんでも、二人足りないのは少しキツくないか?」

由紀「そうだよ!リレーの時、そっちのチームは誰かが二人分余計に走らなきゃいけないくなるし…綱引きだって…」

穂村「ま、大丈夫大丈夫!俺たちめっちゃめっちゃ鍛えてるから!なっ?」

狭山「……まあ、うん」

「鍛えてるのはこちらと同じですよ。僕だって、この世界をただのんびりと生きてきた訳じゃないですからね…。それに胡桃ちゃんだって…」

胡桃「えっ!?あつ、そうだな。うん…、こつちも負けじと鍛えてるぞ!」

穂村の放った鍛えてるという発言に対抗心を燃やす彼と胡桃。実際はもつと根本的な違いがあるので穂村達は強気だったのだが、胡桃達はそれを知る由よもなかった。

柳「とりあえず、今回はこちらのハンデを受けてくれないか?じゃないといつまでたつても始められなさそうだからね」

胡桃「ん、仕方ないか…」

「…そうだね。負けても人数のせいにはしないでくださいよ?」

穂村「もちろん。…あつさりとねじ伏せてやるよ!本当は俺一人でも楽勝なんだが、それだとお前らのプライドをズタズタにしちまうからなあ!!」

圭一(穂村のやつ、やたらと楽しそうだな…。まさか、本気でやるつもり…じゃあないよな?)

いくら穂村が負けず嫌いとはいえ、本気でやったりはしないだろう  
と思っていた圭一だが、さつきから見ているとどうも：本気でやりそ  
うな予感しかしない。そんな圭一の心配をよそに、体育祭の始まりは  
近づく…。

体育祭をもう一度！くはじまりく

由紀「あつ、リーさん。マジックある？」

体育祭スタート直前、大きな段ボール板を持った体操着姿の由紀が、同じく体操着に着替えた悠里へと尋ねる。

悠里「あるけど…なにをするの？」

由紀「えへへくこれをスコアボードにしようと思って」

悠里「へえ、手伝った方がいい？」

由紀「ううん、一人で出来るよ」

悠里からマジックを受けると由紀は段ボール板を地面に置いて、それに文字を書き始めた。

由紀「まず上に体育祭って書いてく、それから真冬ちゃん達と私達のチームとで得点分けを…あつ！」

悠里「なに？どうしたの？」

由紀「えつとね、どうせならチーム名とかも書きたいと思って」

まふゆちやくんっ!!」

地面にしゃがみながら大声で狭山を呼ぶ…。

それを聞いた彼女はすぐさま由紀の元に歩み寄り、首をかしげながら尋ねた。

狭山「由紀…なに？」

由紀「真冬ちゃん達のチーム名、何がいい？」

狭山「…チーム名…」

由紀「そ、チーム名！」

そう尋ねられた狭山は少し頭を悩ませた後、思い出したように一つの言葉をチーム名として発した。

狭山「…『猟犬』でいいよ」

由紀「りようけん？なにそれ？」

悠里「狩りに使われる犬のことかしら。でも、なんでまたそんなチーム名なの？」

不思議に思っただけで尋ねる悠里。狭山は離れたところで彼や胡桃と会話している穂村を見つめながら、静かにそれに答える。

狭山「…穂村がつけた、ボク達のチーム名だから。」

悠里「ずいぶんと物騒なチーム名ね…」

狭山「…そうだね。由紀達はなんてチーム名なの？」

狭山はそう尋ねながら由紀のとなりにしゃがみこむとマジックを受け取り、自分達のチーム名だけを板に記して、それを返す。

その後、由紀はニツコリと微笑み、自分達のチーム名を告げた。

由紀「学園生活部！それがわたしたちのチーム名だよ♪」

狭山「…学園…生活部…」

悠里「さらに新しく——君も加わったから、『新生・学園生活部』ね」  
やさしい笑顔を浮かべてそう呟く悠里。

すでに学園での生活はしていないからその名はおかしい気もするが、それは彼女達にとってはどうでもいい事なのかも知れない。

由紀は悠里の言葉を聞いてから、板にマジックをあて、キュツキュと音をたてながらチーム名を書いていった。

由紀「えっと…シン…セ……ガクエン…セイ…カツ…」

由紀「……………できたっ！」

由紀はそれを書き終えた板を持ったままグラウンドの一角に停めてあるキャンピングカーまで駆け寄ると、あらかじめ用意していたテープで車に貼り付けた。

由紀「こうすれば、みんなも見やすいよね！」

その様子を見ていた他の皆はそこへと集まり、由紀による手作りのそのスコアボードへと目を向ける……。まだ競技はスタートしてないので当然スコアは記されていないが、それよりも気になる事があった。

胡桃「…『獵犬チーム』ってのは、あんたらのチーム名か？」

胡桃はボードを見ながら、そばにたたずむ圭一へと声をかける。

圭一「一応…そうだな…。それで、お前達のチーム名は…」

美紀「……」

胡桃「……」

悠里「……」

穂村「『新鮮！学園生活部！』…なんだそりゃ？」

書かれたその文字を見て、穂村は首をかしげる。いや、穂村だけではなく…彼や胡桃すらも首をかしげていた。

「…どういう意味？」

胡桃「あたしに聞くな、書いたのは由紀だろ…」

由紀「えっ？だって…りーさんがこのチーム名を…」

悠里「由紀ちゃん…私はね、『新生』って言ったの…『新鮮』じゃないわ」

悠里は深くため息をつき、頭を抱えた。

さすがの悠里も、由紀がその言葉を聞き違えるとまでは思っていない。かつたらしい。

由紀「えっ…と…、まあ…これはこれで良い名前だよな？ピチピチって感じがするし…」

「ポジティブな……」

胡桃「あの由紀だしな…ポジティブなのはいつもの事だろ…」

由紀「ま、真冬ちゃんも…良いチーム名だと思っでしょ？」

彼や胡桃、そして美紀の冷たい視線を受けた由紀は逃げるようにして狭山の肩を掴み、涙目で尋ねる。正直言えば変なチーム名だと思っっていた狭山だったが、涙目の由紀にそれは言えないようで……

狭山「う…、うん。良いと思う……よ？」

由紀「だよな？だよなっ？…えへへ♪」

狭山「……」

狭山は苦笑いしながら冷や汗をかき、笑顔の由紀からそつと目を逸らす。狭山のそんな表情を初めて見た穂村は驚き、思わず圭一へと声をかけた。

穂村「すげえ…あの娘、狭山に気を使わせたぞ…」

圭一「さすがの狭山も、あの由紀って娘には敵わないと…そういう事かね…」

由紀にバタバタされる狭山を見つめながら、こそそと会話を交わす穂村と圭一。二人がその会話を終えた直後、狭山は由紀の手を振り払ってからツカツカとそこに歩み寄り、二人を鋭く睨みつけた。

狭山「全部聞こえてる…」

圭一「怒るなよ、お前のおんな顔を見たのは初めてだったから、少し驚いただけだ」

穂村「狭山って人に気をつかえたりすんのな？俺には全然なのに」

狭山「穂村の事はキラいなんだから気をつかわないのは当たり前…。でも由紀は…なんていうのかな、すごく子供っぽくて…あまりキツイ事は言えない」



そう告げて少し離れた所に視線を向ける狭山……。そこでは、由紀が仲間とふざけあいながらニコニコと笑っていた。

穂村「オイっ、由紀！ちよつとカモン！」

由紀「ん？はいはい！」

突然、穂村が手招きをしながら由紀を呼び寄せる。

そばにいた狭山と圭一は何故穂村が彼女を呼び寄せたのか分からず、ただ二人の会話を無言で見ている。

由紀「なんでしょ〜？」

穂村「ああ、あのさ……。お前らが着てるその体操着、まだ予備とかある？」

由紀「一応ありますよ♪でも、どうしてですか？」

狭山「まさか……。穂村も着るつもりじゃ……」

由紀「ええっ!?で、でもサイズが合わないんじゃない？」

冷たい視線で穂村を睨む狭山と、その狭山の発言に驚きを隠せない由紀。

穂村はすぐに手を軽く振ってそれを否定し、にやつきながら答えた。

穂村「俺が着てどうすんだっての、お前が着るんだよ！」

隣の狭山の肩をバシツと叩き、穂村は笑顔でそう告げる。

一方で狭山は少し意味が理解できなかったようで、僅かな間ピクリとも動かなかった。

狭山「……なんでボクが？」

穂村「だって、お前も一応この娘らと同じで元々は学生だろ？良いじゃん体操着！久し振りに着てみるって！」

狭山「バカ……。ボクは絶対に着な——」

由紀「良いね!!着ようよ真冬ちゃんっ!!ほらほら、こっち来て!わたしのだったら多分サイズも合うからっ♪」

狭山「え？ちよ…、由紀っ？」

そして狭山はそのまま由紀の手によって強引にキャンピングカーへと連れ込まれ、穂村達の視界から姿を消した。

穂村「上手くいった…、やっぱり狭山はあの由紀って娘に弱いな…」

圭一「なんでわざわざ狭山に体操着を着せるんだ？」

穂村「狭山さ、口悪いけど…顔はわりとレベル高いじゃん？そんなアイツに体操着とか着せたら興奮すると思ってる…」

圭一「お前…どうしようもない程の変態だな」

圭一はそう言ってかかってない程に強烈な軽蔑の視線を穂村へと向ける。だが穂村はそれに気づいていないらしく、キャンピングカーを見つめながら、狭山が戻るのを今か今かと待ち続けていた。

そして待つこと約5分……

由紀「お待たせしました♪」

由紀が満面の笑みを浮かべながら車から降り、穂村の前へと駆け寄る。狭山は由紀の背後に隠れて顔をうつ向けていたが…由紀に無理矢理背を押され、すぐに穂村の眼前へと突き出される。

由紀「どーですか、ほむさん！」

穂村「ほむさんって……お、おおっ!!」

”ほむさん”という妙なアダ名にツツコミを入れようとした穂村だったが、珍しい物が視界に入り、それを止めた。

穂村の視界に飛び込んだのは真っ白な体操着のシャツ…そして赤い短パンを履き、顔をうつ向けている狭山だった。

狭山「…う…うつ…／／／」

穂村「似合ってるじゃん!!なんだよ狭山先生、本当に学生だったんだなあ♪」

狭山「い、意味が分からない…。穂村は…ボクが学生だって信じて

なかったの?」

穂村「いやいや、そりゃあ信じてはいたけどさ…。制服とか、体操着とか着てるのは見たことなかったからさ、今一つ実感が無かったわけよ」

穂村「加えて普段は表情のバリエーションも全然無いし、自分を『ボク』って言う時点で女の子っぽさも皆無…そんな狭山が…そんな狭山が…」

穂村「今はほつぺた真っ赤にしながら体操着なんか着てるんだもんなあ♪まったく、なんだその真っ白な肌は!?短パンから顔を覗かせてる太ももがけしからんぞ!!」

穂村はそつと手を伸ばし、狭山の真っ白な太ももに触れようとする。当然、彼女がそれを許す訳もなく、即座に重たい拳が穂村の頬を直撃した。

狭山渾身の右ストレートはバキッ!という漫画の効果音のような音を鳴り響かせて穂村の体を吹き飛ばし、そのまま地面へと伏せさせた。

狭山「…調子にのらないで、本気で怒る…。」

穂村「い…っ…てて…」

『痛い』と言っているわりにはへらへらとした表情のまま、何事も無かったかのようにゆっくりと起きあがる穂村。彼は身についた砂を手でパンパンと払いながら、ニヤリと笑った。

穂村「まあまあ、そう怒るなよ…」真冬ちゃん”♡」

狭山「…。」イラッ

狭山「…わかった。そんなに死にたいなら殺してあげる」

由紀「ま、まあまあ!落ちついて真冬ちゃん!ほら、もう体育祭始まるから…。」ねっ?」

拳を固めて穂村に歩み寄る狭山の腕を握り、由紀は彼女を引き止める。本当はもう一発だけでも穂村を殴りたかった狭山だったが、由紀に言われたら止まるしか無かった。

狭山「…わかった」

由紀「ふふっ、体操着：似合ってるよ♡」

狭山「…：あり：：がとう」

由紀に『似合ってる』と言われ、思わず狭山は照れてしまう。穂村に言われるのとは違い、由紀にそう言われるのは何だか嬉しかったようだ。

そうして由紀と狭山の距離が縮まった中：…ついに体育祭が始まる。

第一種目：リレー

参加メンバー：『学園生活部』（チーム名修正） vs 『獵犬チーム』

悠里「先に走り終えたチームの勝ちにしますけど：…そちらはこつちより人数が二人少ないので、誰かが余分に走らなければいけません：大丈夫ですか？」

穂村「問題ない！俺が余分に走るからな!!」

胡桃「本当に大丈夫か？地味にキツイと思うけど：…」

穂村「一人が走る距離はこのグラウンド半周だろ？なら、俺はプラス二人分で一周多く：つまり、たった一周半だけの距離だ。楽勝楽勝!!しかも俺は誰かにバトンを渡す必要ないから、最後まで失速せずに突っ走れるしな♪」

目の前のグラウンドを指さしながら穂村は自信あり気に：…かつ楽しそうに笑う。たかが一周半といえど、後々の事も考えたらキツイ気もするが：…本人が乗り気なので誰も口を挟まなかった。

そしてスタート直前、美紀はその場にいた全員を集め、走る順番を確認する。

美紀「えつと…『学園生活部』は由紀先輩からスタートし、私・りーさん・——さん…そして最後は胡桃先輩がアンカーを務めるという順番になりましたが…そちらは…」

チラリと視線を狭山へと向ける美紀…。それに気づいた狭山はすぐに返事を返した。

狭山「こつちの順番はボク・圭一さん、穂村・穂村…そしてアンカーも、もちろん穂村」

美紀「あは…は…」

怒涛の穂村三連走…改めてこれを聞いた『学園生活部』は思わず苦笑いを浮かべた。本当にこれでいいのだろうか…

などと口を挟む時間は無く、狭山と由紀はそれぞれバトンを持って早々にスタート地点へと立つ。

由紀「真冬ちゃん！手加減したらダメだからねっ！お互い本気でだよ！」

狭山「…本当に本気でいいの？」

由紀「もちろんっ！わたしだって本気でやるもん！」

狭山「……そっか、わかったよ」

準備万端の二人のそばに悠里が立ち、左手を掲げる。スタート前の合図だ。あの手が降り下ろされた時、この試合が始まる…。

悠里「じゃあ…準備いい？」

悠里の問いかけに対し、二人は首を縦に振る。二人の立つグラウンドの半周先には、既に美紀や彼、圭一も準備を終えていた。

悠里「あっちももう大丈夫そうね…よし、じゃあ位置について…」  
由紀「……」

狭山「……」

悠里「スタートっ!!」

掲げていた左手を勢いよく降り下ろした瞬間、由紀と狭山は走り出す…。狭山はそこまで運動出来そうなタイプには見えなかった為、悠里達は彼女が由紀と互角の走りをみせると思っていた。

しかし……

悠里「…!?!」

胡桃「オイオイっ!?!なんだよあいつ…めちやくちや速いぞ!!?!」

見たところ、この学校のグラウンドの広さは一周で200m程、つまりその半周は約100m…。由紀はまだスタート地点から20m弱しか進んでいないのに、狭山は既に目標の半分、50m程は進んでいる。一見すると由紀が遅いようにも見えるが、そうではない…。どうみても狭山のスピードが異常だった。

狭山「……はい、圭一さん」

狭山はそのまま圭一の元にたどり着き、あっさりとそのバトンを手渡す。彼女は息一つ乱れておらず、涼しげな表情をしていた。そして彼女にバトンを手渡された圭一だが、彼は狭山ほど速くはなく、あくまでも普通…といった感じの走りだ。一方、由紀はようやく目標の半分を越えたところを駆けていた。

美紀「すごく速いですね…陸上部かなんかだったんですか?」

狭山「まあ…そんなところかな」

由紀「みーくうんっ!!」

美紀が走り終えた狭山に声をかけていると、遅れてそこに駆けつけた由紀がバトンを突きだしながら彼女の名を呼ぶ。それを見た美紀は後方に手を向け…由紀からそのバトンを受け取ると、勢い良く走り

出した。

由紀「はあっ…はあっ…はあっ…」

狭山「由紀…大丈夫？」

肩を揺らしながら息を切らす由紀の背に手をあて、狭山はその顔を覗きこむ。由紀は顔を真っ赤にし、じんわりと汗をかいていた。

由紀「ま…真冬ちゃん…スツゴいね！全然かなわなかった…」

狭山「…お疲れさま、終わるまで一緒に休んでいよう」

息を切らす由紀の手を引き、狭山はグラウンドの中央に腰を下ろす。そんな彼女の隣に由紀も腰を下ろし、共にリレーの経過を見ている。

由紀「みーくん速いなあ…少しずつ追いついてる」

狭山（…あれ？圭一さん、手加減してあげてるんだ…ボクもそうした方がよかったかな…）

ごく普通の速度で走る圭一を見て、そんな考えが狭山の頭をよぎる。しかしいくら圭一がのんびりと走っているといっても狭山が開いた差がありすぎた為、圭一は美紀よりも3秒ほど早く次の走者…穂村の待つ地点へとたどり着いた。

穂村「…いよしっ!!」

圭一からバトンを受け取った穂村は勢いよく駆け出す…。その走りは狭山と同じく凄まじいもので、『学園生活部』との差をみるみる開いていった。

「うわ…あの人も速いな…」

穂村の走りを見た彼が呟く。この時ちょうど悠里が美紀からバトンを受け取っていたが、穂村のスピードは凄まじく…悠里を待つ彼の横を走り抜けていく。この時点で一人分の差が開いてしまった。

胡桃「ヤバイ…負けるかも…」

どンドン開く差を目の当たりにし、胡桃は弱音を吐く。

途中で穂村が急激に失速するか、もしくはあのバトンを落とさぬ限り勝ち目は無さそうだった。

穂村（ははっ！楽勝だな！このまま一気に駆け抜けて——）

穂村（!?!:あれはっ?!?）

かなりの差が開き、余裕の穂村はもう少しで彼の元にたどり着きそうな悠里へと視線を向けた。その瞬間…今まで見過ごしていた一つの事実、それに気づいてしまう。

それは穂村にとつてあまりに強烈な事実で、思わず手元のバトンを足元へと落とし…そのまま蹴飛ばしてしまった。

穂村「っ!?!やっべ!!」

慌ててバトンを取りに向かう穂村…。バトンはグラウンドの向こうへと吹き飛び、奥の茂みへと姿を消した。

圭一「なにしてんだ…アイツ…」

穂村が茂みに飛び込んでバトンを探す光景を目の当たりにした圭一は首をかしげる。一方…悠里の持っていたバトンは彼へと渡り、開いた差をみるみる縮めていった。

胡桃「おおっ！よくわかんないけど…いい展開だ！勝てるかもだぞっ!!がんばれっ!!」

胡桃は彼へとエールを送り、自分も元へとたどり着くのを待つ。

穂村や狭山程ではないにせよ、彼も中々に足が速く…すぐに胡桃の元へと到着し、そのバトンを手渡した。

「胡桃ちゃんっ!!」

胡桃「任せろっ!!」



「彼と僅かな言葉を交わし、胡桃は駆ける。」

そのスピードは恐らく彼よりも速く、素晴らしい走りだった。

後は彼女さえゴールすれば、このリレーは『学園生活部』の勝利となる…

彼女はどんどんゴールへと近づき、すでに目標の半分を走り終えていた。一方：穂村は未だに茂みを漁っている…。

穂村「ちよいちよいつ！マジで見つかんねえんだって!!少しタンマッ!!」

当然、タンマなどは効かない。

叫ぶ穂村の声だけが空しく響き、胡桃はそのままゴールした。

笑顔でゴールラインを越す胡桃…それを歓声で迎える学園生活部

一方、圭…そして由紀の隣に座る狭山はほぼ同時に深いため息をつき、茂みを必死に掻き分ける一人の男…穂村竜也を、哀れむように見つめていた。

体育祭をもう一度！くつなひきく

胡桃「いよっしやく!!」

由紀「やったあ!! 胡桃ちゃんすごい♪」

走り終えた胡桃に抱きつき、由紀はニツコリと微笑んだ。胡桃もまたそんな由紀の頭を撫でながら嬉しそうに微笑むと、そつとグラウンドの奥：茂みを漁る穂村を見つめた。

胡桃「あの人がミスったおかげだな：あれがなきやヤバかった」

美紀「凄い速さでしたもんね：」

悠里「バトン：どうして落としちゃったのかしら？」

悠里達が不思議そうな目線を向ける中：狭山はその茂みに近寄り、ガサガサと音を経てながらバトンを探す穂村に声をかける。

狭山「：もう終わったから、探さなくてもいいよ」

穂村「終わった：？ 負けたのか!？」

狭山「穂村のせいだね：。なんで落とされたの？」

穂村はバトン探しを止めて茂みから抜け出し、体に貼り付いた葉っぱを手で払う。粗方それを払い終え、穂村は染々とした表情で口を開いた。

穂村「あの時：もう余裕だろうと思って相手チームに目を向けたんだ。その時に走っていたのは、あの悠里とかいうねーちゃんだった：」

狭山「……………」

穂村「今さら気づいたんだけどさ、あのねーちゃん：めちやくちやおっぱ——」

狭山「もういい…言いたい事は分かった」  
食い気味に言葉を挟み、狭山は穂村に背を向ける。変態だとは気付いていたが、ここまでとは思っていなかった。

狭山「つまり…穂村は悠里の胸に目がいつてバトンを落としたんだね…」

穂村「ああ…俺ともあろう人間が見逃してたぜ…。あれはすげえ…」

狭山「…：ヘンタイ」

軽蔑の視線を送りながら一言放ち、狭山は穂村をそこに残して由紀達の元へと戻っていく。もうじき始まる次の種目は綱引きだ。大きな縄を持ち出す狭山と由紀を遠くに見つめながら、柳は穂村のそばへと歩み寄る。

柳「見事に逆転されたね…」

穂村「あく…：すみません。色々と事情がありまして…」

柳「事情？」

穂村「ええ、そりやもう天災レベルの…絶対に避けられないヤツが…」

狭山はともかく、柳に『あの娘の胸に見とれてました』などと言うのは恥ずかしく、穂村は曖昧に答えた。しかし柳も穂村という人間の事は理解している為、言わずとも大体の事は把握していた。

柳「まあ、君も若いしね。少し見るだけなら構わないとも思うが…」  
穂村「…なにを…：ですかね…」

柳「君がバトンを落とした原因だよ。大方、若狭君の胸でも見ていたんだろう？」

穂村「おっ？…：全部お見通しですか？」

柳「君らの性格は理解しているからね」

穂村「…あの、柳さんの中での俺のイメージって…」

柳「ん？ああ…『騒がしい』『喧嘩好き』そして『女好き』かな？あ

ははっ」

柳は笑いながらそれだけを告げると穂村から離れ、もといたレジャーシートの上に腰を下ろす。一人残された穂村は綱引きの準備をする一行の元に歩み寄りながら、ブツブツと独り言を口にした。

穂村「俺は別にそこまで女好きじゃないと思うけどな…あくまでも一般的なレベルっつーか…平均的っつーか…。そもそも、柳さんと圭一さんが異常なんだつての。女の子に興味ねーのかよ…」

## 第二種目：綱引き

参加メンバー：『学園生活部』 vs 狭山真冬・穂村竜也

穂村「圭一さんは参加しねーの？」

圭一「ああ、これはお前らだけでいいだろ…」

圭一はどこから取り出した飲み物を飲みながらレジャーシートに腰を下ろし、一息つき始める。今回の種目には参加しないらしい。

「ナメられたものです…たった二人で僕らに挑もうとは」

悠里「あの…こちらのメンバーを誰か貸しましょうか？」

2対5での綱引きというのはさすがに不公平だ。しかも狭山はとても華奢な手足をしているので大した力は無いだろう…とあれば、これは実質穂村一人で挑むのと同じだ。そう考えた悠里は『学園生活部』のメンバーを一時的に穂村達のチームへ貸すことを提案したが、穂村はすぐにそれを却下した。

穂村「大丈夫、二人だけでやれる!!」

狭山「…そういう訳だから、遠慮しないでいいよ」

早くも縄を掴んで待機する二人…。そこまで言うならと悠里達も縄を掴み、スタートの準備をする。こんな試合、やるまでもなくこちらの勝ちだろうと思っていた悠里だったが、胡桃だけは僅かに不安を抱いていて…自分の後ろについた彼へ、それを打ち明けた。

胡桃「あの狭山って娘さ…さつきどういいう訳か穂村さんをぶん殴ってたんだけど、あの人それをくらってかなり吹っ飛んでたんだよね…。意外と力あるのかも…」

「マジですか…。ってか、力があるのかもってことよりも、人に普通に殴りかかれるって事の方が意外だな…」

狭山は見たところ大人しそうな雰囲気の子で、とても人に殴りかかるような娘には見えない。意外と荒っぽい性格なのか…それとも穂村の方がそれほどに彼女の神経を逆なでする事をしたのか…どちらにせよ、彼がそれを知るよしはなかった。

穂村「んじゃ…合図は圭一さんに任せるよ」

『学園生活部』一行も縄を掴んで待機しているのを確認し、穂村は圭一にそう告げる。

圭一「へっ？ああ…じゃあスタート…」

なんとも気だるそうなスタートコールを皮切りに、両チームは縄を引き合う。

由紀「ぐぐっ…!!うっ…!!」

美紀「っ！全然…引けないっ!？」

『学園生活部』が五人なのに対し、圭一の抜けた『獵犬チーム』は二人…。美紀はスタート直後すぐに自分達の勝利で片かたが付くと思っていたが、意外な事にその縄は五人がかりでもまったく引けなかった。

「胡桃ちゃんっ！本気でやってる!？」

胡桃「つたりまえだろ!!お前こそ、力抜いてないか!？」

「僕も本気でやってるんですがね…どうしてだろうな…全然引けないね」

穂村「さて、さっきは油断したからな。これはあつさり決めるか」

狭山「…うん。ごめんね、みんな」

彼と胡桃が引けない縄に戸惑う中、穂村と狭山はその手に力を込め、グイッと縄を引く。その瞬間『学園生活部』メンバーは全員前のめに体を傾け、縄を手離してしまった。

胡桃「…嘘だろ?」

由紀「あちやく…ま、負けちゃったね…」

悠里「そうね…残念…」

手離してしまった縄を見つめて悔しがる由紀達…一方で美紀はこの決着に違和感があったらしく、穂村の前へと歩み寄った。

美紀「…どうやったんです?」

穂村「何が?」

美紀「いくら大人の男性が相手とはいえ、あまりにも力の差があり過ぎるよう感じました。それも、こちらの方が人数は多いはずなのに…です」

穂村「どうしてあんなにあつさり勝ったのか…知りたい?」

掴んでいた縄を地面に放り投げ、穂村は焦らすように笑う。

美紀は穂村を苦手に思い始めていた事もあり、その場は問い詰めるのを止めて背を向けた。

美紀「そこまで気になってないので、教えてもらえなくても別に構いません!」

穂村「あらら…素直じゃないなあ」

半分怒ったような口調の美紀の背を眺めながら、穂村はボソツと呟く。

穂村「どういうわけか、俺はやたらと嫌われるよなあ…。あの美紀って娘もそうだし…狭山もそうだ。ん…悩ましいぜ…」

誰も自分と親しくしてくれないという事実…その事実のあまりの切なさで心を蝕まれ、穂村は一人…拗ねたようにうつむきながら地面を蹴って砂を巻き上げる。

それから5分後…。そんな孤独な穂村の背を、誰かが優しくポンツと叩いた。

穂村「…ん？」

それが誰かと思ひ、穂村は後ろに顔を向ける。

そこにはとても純粹そうな笑顔を見せる一人の少女…丈槍由紀がいた。

穂村「ああ、えつと…なんか用？」

由紀「あのですね、次の種目の準備するのちよつと大変で…手伝ってくださいますか？」

穂村「…圭一さんは？あの人は何してんの？」

由紀「圭一さんには他の仕事頼んだから手が貸せないって、あの人…柳さんに言われて…」

穂村「マジか…柳さんが頼んだ仕事ってなんだよ…」

穂村はキョロキョロと辺りを見回し、圭一の姿を探す。

グラウンドのコース上に目を向けるとそこでは由紀を除いた『学園生活部』の面々と狭山が棒やら紐やらを持ち出して何かの準備をしていたが、圭一の姿は無い。

圭一がいたのはその先…穂村と由紀のいる場所から随分離れたグラウンドの端で、何やら見覚えの無い人物の頭を棒状の鈍器で叩き

割っていた。

穂村「…ああ、入ってきた感染者の処理か。ご苦勞な事で」

由紀「それで、手伝ってくれますか？ほむさんの力が必要なんですっ！」

穂村「ほむさん…そういや、さつきも俺の事そんなふうに呼んでたよな？」

由紀「あだ名です！」穂村「だから、ほむさん♪…嫌ですか？」

嫌な訳が無い…こんな若い娘にあだ名なんて付けてもらえるなんて…。

その嬉しさからか、穂村の口元が微かにゆるむ。

穂村は今まであだ名などもらった事はなく、大抵の人間には名字か名前をそのまま呼ばれていた。強いて言うなら、狭山にはたまに『ヘンタイ』『クズ』などと呼ばれるが、あれはただの悪口…あだ名ではない。

穂村「…あははつ、全然嫌じゃねえよ…。よし、俺の力が必要なら貸してやる！他でもねえ由紀の頼みだからな!!」

由紀「わたしの頼みだから聞いてくれるんですか？」

ゆつくりと歩き出す穂村を追いかけ、由紀は横から顔を覗きこみながら尋ねる。

穂村「ああ！少なくとも、狭山のヤツに頼まれたら即却下してやる!!」

くくく

狭山「……」。ピクツ

穂村からは離れた所で胡桃達と次の種目の準備をしていた狭山だが、その耳は穂村の台詞を聞き逃さない。思わず眉間にシワが寄る狭山のその表情はちょうど目の前にいた胡桃の目に入り、彼女から声を



かけられる。

胡桃「どうした真冬？不機嫌そうな顔して…」

狭山「…いや、なんでもない」

文句の一つでも穂村へぶつけようかと思つた狭山だったが、ゆつくりとこちらに歩み寄ってくる穂村の隣…そこにいる笑顔の由紀を見て、それを思い止めた。楽しそうに笑う由紀の顔…それを見ていたら穂村の発言などどうでもよくなつたから。

狭山（ボク…ああいう笑顔見せる人にまだ弱いんだな…）

圭一「恵飛須沢、シヤベルありがとな」

校庭に侵入してきた全ての感染者を処理し終えた圭一が血に濡れたシヤベルを地面にそつと起き、胡桃へと話しかける。

胡桃「ああ、お疲れさんです。平気でした？」

圭一「シヤベルを武器にするのはどうかと思つたが、中々使いやすかつたよ」

胡桃「あく、そうじゃなくて…」

武器として貸したシヤベルの使い心地を答える圭一だったが、胡桃が心配したのはそれではなく、圭一自身の事だ。校庭に感染者が現れた時、彼と胡桃は自分達が対処しようとしたが…柳が二人を止め、代わりにと圭一を向かわせたのだった。

圭一「？…ああ。俺は平気だから、心配なんていらん」

悠里「…かれら」の数…多そうでしたが…」

圭一「それなりに数はいたが、武器があれば余裕だ。シヤベル…助かつたよ。素手でやると汚れるから…」

「普段は素手でやってるみたいな発言なんですけど…」

悠里と話す圭一の発言が引つ掛かり、思わず彼は横やりを入れる。

彼のその発言に対し、圭一は鼻で笑つた。

圭一「バカ言うな、普段から素手で戦ったりするかよ。素手でやるのは、あくまでも手頃な武器の無い場面でだけだ」

「手頃な武器が無かったら、普通は逃げようとしませんか？」

圭一「ああ、”普通”はな…」

「……………」

(まるで、自分が普通じゃないみたいな発言…)

彼はそれを心の中に止め、声には出さなかった。

わざわざ聞かずとも、身に纏う雰囲気などで圭一という人物は普通とは違うと分かり始めていたから…。

それから10分後：穂村の協力もあり、それは予定よりも早く完成した。

グラウンドのコース、そこを挟むようにして立てられている二本の棒：それらは電線のように一本の紐を繋げており、その紐には更に五本の紐が結ばれていた。

その五本の紐の先には、それぞれ形の違うパンがブラブラとぶら下がっている：そう、次の種目はパン食い競走だ。

体育祭をもう一度！くなかま

第三種目：パン食い競走

参加メンバー：丈槍由紀・若狭悠里・恵飛須沢胡桃・彼・狭山真冬

穂村「……………」

出来上がったパン食い競走用のそれを少し離れた場所から見つめ、穂村はその出来に満足した表情を浮かべる。そんな穂村の元へと彼はそつと忍び寄り、恐る恐る声をかけた。

「やたら嬉しそうな顔してますが…どうしたんですか？」

穂村「そりゃあ嬉しそうな顔の一つや二つするだろうよ…パン食い競走だぞ？」

満面の笑みを浮かべる穂村…。正直こんな男の笑顔を見てもしよ  
うがないと思つた彼だったが、パン食い競走開始直前の今…この穂村  
と同様にはしゃいでいる人物が身近に一人いたことを思い出す。

「そういえば由紀ちゃんも嬉しそうだったな…。穂村さんもパン食い  
競走がやりたかつたんですか？」

穂村「いや？俺は別にやりたかないぜ？」

「え？じゃあなんで嬉しそうな顔を…」

穂村「パン食い競走は」出る」ものじゃなく…見る」ものだろ  
？」

「はあ？ちよつと言つてる意味が——」

その瞬間…彼に脳内に電流が走る…。

『出る』ものではなく…見る』もの…穂村のその言葉に隠され  
た意味…、それはパン食い競走という種目の内容と、参加するメン  
バーをよく観察すれば…彼にも理解する事が出来た。

穂村の発言の真意に気づいた時、彼はあまりの衝撃に言葉を失う

…。

「……………」

穂村「その様子だと…気づいたみたいだな？」

目を丸くしたままマネキンのように立ち尽くす彼を見て、穂村はニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

穂村「…そうだ。『パン食い競走』つてのは、手を後ろで縛られた”

少女達”が…宙にぶら下がるパンを求め、ピョンピョンと跳ねながらその小さな口をはしたなく開く。この競技はな…そういうった”少女達”を眺めて、野郎共が楽しむ為にある物なんだよ！」

声を張り上げながら拳を振り上げ、穂村は力説する。

離れた所にいる彼女達を見つめ、キラキラと目を輝かせるその男を見て、彼は思う…

くなんてレベルの高い変態なんだ…!!パン食い競走する女の子を見て興奮するなんて!パン食い競走はあくまでただの運動競技…、女の子が手を縛られ…そのままパンを食べるだけの…普通の…普通の…

「……………」

「…よく考えると…結構やらしい種目ですね」

彼は穂村と同じ…”レベルの高い変態”の道へと堕ちた。

穂村「だろ!?よかったぜ、あれの良さが分かる人間がいて…」

彼が自分と同じタイプの”変態”だと知り、穂村は安堵する。

思いもよらぬ同属との遭遇を穂村は心から喜び、彼の背中を叩きな

がら大声で笑った。

穂村「次の種目がパン食い競走だつて聞いてマジで頑張ったんだぞ!? しつかりとこの場にいる”女子”の分…つまり五本の紐が垂らせるように上手く調整して——」

「…:…ん?」

「…:五本?…:女子の分?」

何か…何か失敗を犯してしまったような気分が彼を襲う…。

それはとても重大な…あつてはならない失敗…。

彼がそれに気づくまで、大して時間はかからなかった…。

「!!…:ヤバい!僕もパン食い競走参加メンバーに入ってしまった!!」

穂村「んなつ!? バカっ!! 男のお前が貴重な一枠使つてどうすんだよ!!」

「すいませんっ!パン食い競走がこんなに素晴らしい種目だつて知らなくて…!」

頭を深く下げ、彼は穂村に謝る。

彼が誰かにこんなにも深く頭を下げたのは初めてだった…。

穂村「…:誰だ。お前が参加者の枠を一つ埋めちまったなら、誰が参加しない?」

「…:美紀さんです。参加出来なくても構わないって…:自分から…」

穂村「美紀…:あのツンツンガールか。あの娘は雰囲気狭山に少し似てるから苦手なんだが、やっぱり面は良いよなあ…:。あの娘が手を縛られてピョンピョン跳ねるのは…:見てえなあ…:…」

服が汚れるのもお構い無しに膝を地面に落とし、穂村は頭を抱えた。

自分に冷たいあの美紀が…:パンを頬張ろうと必死に跳ねる…:。その光景をどうしても見たかった。

穂村「見てえ……見てえつ……つく……くそお……！見てえよお……」

く……泣いている？く

彼がそう思ったのはうつむいた穂村の肩が小刻みに震えていたから……。

自分がこの男の”夢”を……いや、自分達の”夢”を打ち砕いてしまったんだ……。もっと細かい所に気を回していれば、事前に気づけたはずなのに……。

「……穂村さん」

穂村「っ……！済んだ事は仕方ねえ……、四人の女の子が参加してくれるだけでも……俺は満足だから……」

「でも……あんたは五人の女の子が跳ねるのを見たくて、それを願って五本の紐を下げたんだろう!?諦めないで下さいよ!!」

穂村「じゃあ聞くが……今から参加メンバーの変更は可能なのかよ？」

そう言つて彼の目を睨む穂村の目は……微かに赤く腫れていた。やはり、泣いていたのだらう。五人の女子が揃わなかったその事実、穂村は耐えられなかったのだ。

「たぶん無理です。今さら参加を辞退したら怪しまれます。……よほどの理由が無い限りね」

穂村「よほどの……理由？」

「はい……それは……」

彼は穂村の前へと、静かにその右足をずらす。

その足は穂村の足の前でストレッチするかのようになり、三回足首を捻り、その後はピタッと動きを止めた。

「参加メンバーである僕が怪我をする事です……。そうすれば……美紀さんを強制的にメンバーとして参加させられます」

穂村「……本気か？」

「はい、本気です…。悪いですが、穂村さんには僕の足を壊す手伝いをしてもらいますよ?」

ニヤリと微笑む彼を見て、穂村もまた同じように微笑む。

柳に圭一…この世界で穂村が出会った男はどちらも性欲を捨てたような人間だった。しかし、今日こうして出会った彼という人間には…穂村と同等の性欲、そして信念がある。穂村はそれがただただ嬉しくて…この出会いを神に感謝した。

穂村「…手加減はする。けど…それでもかなり痛えぞ? 覚悟は良いか!？」

「答えるまでもない…全ては僕らの夢の為に…!!」

穂村「お前…マジでカッコいいぜ」

笑顔でそう告げてから穂村は右手を彼の右足…その爪先へと振り下ろす。するとゴツ!!という鈍い音が鳴り、彼は痛みに体を震わせた。

「うぐぐツツ!!」

振り下ろされたその拳は靴越しに彼の足へと確かなダメージを与え、役目を果たした。彼は爪先に走る痛みに悶えながらも穂村の肩を叩き、その健闘を讃える。そんな彼に対して穂村も右手の親指をグツと立て、その勇敢さを讃えた。

美紀「…さん、そろそろ始まりますよ。準備して下さい」

ちようど良いタイミングで美紀が彼を呼ぶためにそばへと歩み寄ってくる。彼はここぞとばかりに右足を引きずり、美紀に頭を下げた。

「す、すいません…。足捻っちゃいました…。参加は無理そうです…」

美紀「えっ!?だ、大丈夫ですか?」

「結構痛いですけど…少し休めばマシになると思います。美紀さん、

パン食い競走…僕の代わりに出てくれますか？出てくれますよね？」  
美紀「代わりにですか？…まあ、構いませんけど。しつかり休んで下さいよ？」

「は…い、もちろんですよ…」

穂村「……」ニヤツ

「……」ニヤツ

彼の代わりとして急遽参加する事になった美紀は慌てた様子で由紀達の元へと駆け寄り、支度を始める。彼と穂村はそれを遠くで眺めながら、お互いにニヤリと笑った。

「…あつ、やけに痛いと思ったら爪が真つ青になってますわ」

穂村「マジ？…うわ、悪いな…。もう少し手加減すりやよかった」「いえいえ。このくらいは平気です…。美紀さんの走りを見るためですから…」

靴と靴下を脱ぎ、真つ青に変色した自分のつま先を見つめる。

見ているだけでも痛々しい…いや、実際かなり痛いのだが、彼はこの痛みを誇りに思っていた。この怪我があるからこそ…彼女達の走りを眺めていられるのだから…。

彼と穂村…二人の変態はそこで笑い合いながら、それが始まるのを待つ。

くくく

狭山「…バカが二人に増えた」ボソツ

由紀達と共にパン食い競走の準備を進めながらも、狭山の耳は聞いていた…。遠方で座りながら仲良く話す、二人の変態の会話を…。



由紀「真冬ちゃん？どしたの？」

狭山「…なんでもない。さて、もう始められるね」

由紀「うんっ！じゃ、スタート位置につこう♪」

胡桃「真冬は足は速いみたいだけど…パン食い競走つてのはそれだけじゃ勝てないからな。覚悟しろよ？」

狭山「うん…やるからには勝つつもり。胡桃も覚悟しといた方がいい」

胡桃「言ってくれるな。こりやあ楽しみだ」

スタート位置へと向かいながら狭山と会話を交わし、胡桃はニヤリと微笑む。彼女の微笑みを見た狭山もまた、それに応えるように微笑んだ。

胡桃「そういえば、あいつは出ないの？エントリーはしてただろ？」  
穂村と共にグラウンドの隅で休む彼を胡桃は指さす。彼は木陰の中、やけに嬉しそうな顔をしながらこちらを見ていた。

美紀「ああ、あの人は足を捻っちゃったらしくて…代わりに私が出ることになりました」

由紀「ええっ!？」

胡桃「マジ!?なんだよ、この種目であいつを負かしてやろうと思つてたのに」

悠里「う〜ん…あまり酷い怪我じゃないと良いけど…」

狭山「元気そうだから、大丈夫でしょ…」

そんな言葉を交わしながら、彼女達はスタート位置へとたどり着く。

後はすぐ側で休んでいた圭一の合図で走り出すだけなのだが、何か文句があるのか…穂村が右足を負傷した彼に肩を貸しながら猛スピードでこちらへ駆け寄ってきた。

狭山「…なに？」

穂村「…なに？じゃねえよ!!何スタートする気満々で位置についてんだよ!!腕っ！腕を後ろで縛れよっ!!」

そう、穂村が慌ててここに来たのは彼女達が腕を縛らずにスタートしようとしていたからだ。後ろで腕を縛られているか否か…それは穂村と彼にとつては凄まじい違いだった。

胡桃「腕？ああ、そういや…そんな風ふうにして走るの見たことあるな」  
美紀「でも縛ってしまうと転んだ時とかに受け身がとれなくて危険なんです。だから今回は腕は縛らない事に——」

「甘いっ！そんな風ふうにリスクを恐れていては、いつまでも成長できません!!」

穂村に肩を貸してもらいながら彼が怒声を飛ばす…。いつになく必死…かつ熱血的な彼の瞳に驚き、美紀は言葉を失った。

悠里「で、でも…。やっぱり怪我は避けないと…、ねっ？」  
なだめるように悠里は言ったが、もちろん彼は止まらない。

「こ、これは訓練になりますっ！もし後ろで手を縛られたまま”かれら”に追われても…逃げられるのかどうかという大変重要な訓練につ!!」

穂村「そうだ！危険だらけの世の中…そんな状況があるかもしれない!!これはそんな事態を想定しての訓練なんだよ!!」

由紀「おおく!!」  
力説する二人に惑わされ、由紀は感動の眼差しを向ける。由紀自体、普通に走るよりも後ろで手を縛り、不自由な状態で走る方が面白そうだと思っていた。

由紀「やろう！手!!縛ろう!!」

美紀「…本気ですか？」

由紀「うんっ♪」

胡桃「…ま、いいんじゃないの？確かに面白そうだし」

由紀に続き、胡桃もその案に乗る。由紀と胡桃の二人がそう言うつてからは後の面々もすぐに崩れ、美紀・悠里・狭山も渋々それを受け入れた。その後、彼女達は柳から細い紐を貰い、それぞれの手を縛り始める。

胡桃「ほら、手：後ろで組んで」

由紀「はいはい♪」

胡桃は由紀の背後に立ち、紐をその手に巻き付けていく。あまりキツめにしないように気を付けながら、キュツとそれを結んだ。

胡桃「できた。先にスタート位置についていいぞ」

由紀「はい!!」

縛られた手を小さくピコピコと動かしながら、由紀は一足先にそこへ向かう。それを見送る胡桃の横では狭山が美紀の背後に立ち、その手を縛っている最中だった。

：キュツ

狭山「：美紀、キツくない？」

美紀「あ、大丈夫です。ありがとうございます」

狭山「そう、よかった」

手を縛られた美紀は振り返って狭山に軽く頭を下げ、由紀同様スタート位置に向かう。それと同時に胡桃が悠里の手を縛り終え、残るのは狭山と胡桃の二人だけとなった。その瞬間：またしてもあの二人がこちらへ駆け寄ってきて：

穂村「よし！狭山の手は俺が縛ってやるよ！ほら、紐を貸してくれ!!」

狭山「：いや：いいよ：」

とてつもなく嫌そうな顔をしながら、狭山はそっと目を背ける。穂村はそんな狭山から無理やりに紐を奪い取り、それを彼に分け与えた。

穂村「ほらっ！お前は胡桃ちゃんの手を縛ってやれ!!」

「穂村さん…あなただって人は…！感謝しますっ!!」

「怪我した足を引きずりながら一歩、また一歩と胡桃に近づく。そして遂に目前へと立った時、彼は胡桃の肩を叩いた。」

「後ろ向いてくれるかな？縛ってあげるから♪」

胡桃「お、おう…」

微笑む彼に言い様の無い不気味さを感じつつもクルッと振り返り、胡桃は背中を見せる。そうしてから後ろで手を組むとすぐに彼の手が自らの手に触れ、紐をクルクルと巻き始めた。

「……」

胡桃「……」

「…痛くない？」

胡桃「…うん。平気」

…キユツ!!

胡桃「っ！」

「あ…、ごめんキツかった？」

胡桃「ほんのちよつとな…。もう少しゆるめてくれるとありがたい」

「了解しました。…くふふっ♪」

彼が少し強く手を縛ると、胡桃は痛そうな声を漏らす。彼はすぐに謝罪しながら紐をゆるめ、それを巻き直したが、心の内では『なんかこれ、興奮するな…』などというとても邪な考えを抱いていた…。

狭山「…いたっ」

穂村「あ、わりい。痛かった？」

狭山「痛い。キツすぎ。ゆるめて。」

穂村「ほいほい。……でへへ♪」

「……」

(まさかとは思うけど、他の人から見たら僕もあんななのか?)

すぐ隣で狭山の手を、わざと、キツく縛り、彼女の痛がる声を堪能する穂村が視界に入る。その姿が今の自分と被り、彼は少しだけ切なくなつた……。

胡桃「……もういい?」

「もう少し待ってね……。あと少しだから」

隣でニタニタと不気味に笑う穂村を見て少しは冷静になつたハズなのに、胡桃の腕に紐を巻いているとそれだけで良くない考えが止めどなく溢れてきてしまう。例えば……

(今なら、胡桃ちゃんの太もも撫で放題なんじゃ……)

目の前にいるのは体操服の上にジャージを羽織つた胡桃……。上半身はジャージで隠されていても、下半身は短パンだけなので嫌でもその太ももが目に入る。

「……」ゴクリ……

今の彼女は両手を使えないし、完璧に背後を取っている。そつとそこに手を伸ばして撫でたところで胡桃は反撃出来ないし、少しくらいならば……。

彼は彼女の太ももへ、スツ……と手を伸ばす。ゆっくりと慎重に……気取られないように……。彼のその行動にいち早く気付いた穂村は心の中でエールを送り、血走つた目で見守つた。

穂村(がんばれ!!撫でろっ!!撫でまくれっ!!そしてもうアレだ……そのままアレしてアレしちまえっ!!)

「はあっ……はあっ……」

指先が太ももに触れるまであと1cm……。その距離を埋めるだけ

で、そこに触れる事が出来る！そう考えるだけで彼の頬は自然と緩むが、その時…不意に胡桃が声を発した。

胡桃「…おい」

「…はい？」

返事を返しながら彼は太ももに向けていた顔を上げる。するとそこには鬼の形相でこちらを睨む胡桃がいて、彼は彼女と目が合うと金縛りにでもあったかのように動けなくなった。

胡桃「なにしてんだ？」

「ひ…紐を結ぼうと…」

胡桃「へえ…。あたしは手だけじゃなくて、足にも紐を結ばれるのか？」

中腰になって両手を太ももの前にかざす彼を睨みながら、胡桃はニヤリと微笑む。もちろん、その笑顔の裏に恐ろしいまでの怒りが込められているのは言うまでもない。

「……………」

胡桃「どうした？何か言ってみろよ」

「…えっと…そのお……………」

「とても…とても綺麗な太ももですね♪」

それから数分後、全ての女子が手を縛り終えてスタート位置へとつく。

あと少しでパン食い競走が始まろうという中、穂村は隣に座る彼の顔を覗き込んだ。

穂村「…痛い？」

「ええ、そりゃあね」

覗き込んだ彼の顔は一部紫色に変色していて、ぷっくりと腫れている。この怪我はあの発言の直後胡桃に負わされた物なのだが、彼はそ

れを責めたりはしない。だって、完全な自業自得なのだから。

穂村「両手を縛られた状態であれだけ綺麗な後ろ回し蹴りを繰り出せるとはな…。胡桃ちゃん、空手でもやってたの？」

「僕の知る限りではそんな情報ないんで、たぶんやってないよ…」

穂村「そっか。どう見ても素人の蹴りじゃなかったけど…恐ろしい娘だ。怒らせると狭山よりヤバえかもな…。どうしても襲う時は寝込みだ、寝ている隙に両手両足縛って、それから襲え!!心配なら口もガムテで塞いで——」

彼の肩をバシツと叩き、胡桃を襲う際の手順を必死に伝える穂村だが、回し蹴りを受けた事で彼の戦意は無くなっていた。

「襲うって…そんな事したら絶対に殺されます。良くて追放でしようね」

穂村「ネガティブな発想は捨ててこう考えるんだ…『死と引き換えに、一夜だけ胡桃ちゃんの体を好きに出来る』ってな!!」

「……………」

そう言われると『死んでも構わないかも』と思ってしまう彼だったが、そんな事をして胡桃を失望させたくない…。彼は悪魔ほむらの囁きに打ち勝ち、自らの煩惱を払った。

「無理やりそんな事をして、彼女を悲しませたくはないです…」

穂村「痴漢の如く太ももに触ろうとしていた人間が何を今さら…」  
「ぐっ……!」

呆れた顔で穂村が告げたその言葉は中々に的を得ていた為、彼は冷や汗を流しながら聞こえないふりをした。

体育祭をもう一度！く。パンくいく

いよいよ始まる『パン食い競走』。

彼と穂村がワクワクした表情でそれを見つめる中、今回もまた…圭一の気だるそうなスタートコールでそれは開始した。

圭一「…スタート」

直後、彼女達は一斉に走り出す。

単純なスピードではやはり狭山がトップだったが、胡桃もそれに負けじと良い走りを見せていた。

柳「狭山君はともかく、恵飛須沢君もずいぶんと速いね」

「うちのエースですからー！」

レジャーシートに腰を落としながら、柳は側の彼へと声をかける。胡桃を褒められた彼は誇らしげに微笑み、親指をぐつと立てた。

一方：穂村はその後ろで荷物を漁り、何かを探す。あまりにガサガサとうるさいので圭一がそれに苛立ち、舌打ちを鳴らした。

圭一「…ちっ！さつきからうるさいな。何を探してる？」

穂村「カメラあゝ…。柳さん：カメラあつたよね？」

柳「ん？ちよつと貸してくれ…。…ほら、あつたよ」

漁っていたバックを柳に渡すと、カメラはあっさり見つかった。穂村は柳からデジタルカメラ、そして少し大きめのビデオカメラの二つを受け取ると意味ありげに微笑んでから立ち上がり、デジタルカメラの方を彼に手渡す。

「…ハレは？」



穂村「撮ろう…!!二人で…!!素敵な物を…!!」

「!!…了解っ!!」

その台詞だけで全てを察し、彼はそのカメラを手に取る。

そして二人はレジャーシートの上に立ち、走る彼女達をレンズ越しに見始めた。ニヤニヤしながら女子達が走る様子を記録する二人はどう見ても不審者そのもの…。これにはさすがの圭一と柳も少し引いたようで、無言でそれを見つめていた。

柳「……」

圭一「……」

穂村「狭山は速ええな…。もうパンにたどり着いてる。まあ、苦労してるみてえだけど…」

最速でそこにたどり着いた狭山はピョンピョンと跳ねながら宙のパンをくわえようとしているが、顔に当たって不規則に揺れだしたパンは中々捉えられない。

狭山「…っ!」ピョンツ!

胡桃「…よしっ!」

狭山が手こずっている間に胡桃もパンのぶら下がるその場所へとたどり着き、それ目掛けて勢いよく飛び跳ねた。

胡桃「ふあっ…!」ピョンツ!

だが、一発で捉える事には失敗してしまい…中途半端に触れてしまったパンはブラブラと激しく揺れだしてしまう。一発で決められなかった胡桃は舌打ちをして悔しがるが、横で跳ねる狭山…そしてすぐ後ろに迫る由紀達を見てそんな事をしている時間は無いと悟り、再びパン目掛けて飛び跳ねる。

そうしてパン目掛けて跳ねる度に彼女の胸は揺れ、二人の変態が興奮する。惜しい点を挙げるとするならば、彼女の羽織っているジャー

ジが邪魔して時折胸が隠れてしまう事だろうか。

穂村「おお…おお…!!おおっ…!!狭山は揺れる物が大きくてねえからあれだけど…、恵飛須沢ちゃんの良いなっ!!!胸が…胸が程よく揺れてっ…!!」

「良いっ…!!良いよ胡桃ちゃんっ!!!」パシヤ!パシヤ!

穂村「ちっ!ジャージが邪魔だな…!!今日はそんなに寒くねえだろ!脱げばいいのにつ!!」

跳ねる胡桃を動画と写真…それぞれに収める変態カメラマン二人がここにはいた。柳と圭一はもうこの二人には関わらないようにしようと思いを決めながら、静かに彼女達を見守る。

柳「…誰が勝つと思う?」

圭一「狭山…って言いたいところだけど、思ったより手こずってるからな。今回は恵飛須沢かもな…」

狭山が苦戦している以上、彼女に続き身体能力の高いであろう胡桃が妥当だろうと圭一は予想する。だがその胡桃も苦戦してしまい、美紀・悠里・由紀に追い付かれてしまった。誰一人パンを取れないまま横並びになり、勝負の行方が分からなくなる。

パンを求めて飛び跳ねる五人の少女…当然、あの二人はこの光景を前に大興奮した。二人の注目を特に集めたのは悠里だ…跳ねる度に揺れる彼女の大きな胸に、変態カメラマン達は釘付けだった。

穂村「ほお…っ!!悠里ちゃんっ!悠里ちゃんヤバいだろ!?!あんなの規格外過ぎるっ!!」

「うっ…ぐすっ…!」パシヤ!パシヤパシヤッ!

圭一「うわあ…、泣きながらシャツター切ってやがる」

柳「無視しなさい。気にしたら負けだよ…」

穂村は鼻血を垂らしながら悠里にズームインし…、その隣では彼がパシヤパシヤとシャッター音を鳴らしながら大粒の涙を流す。

地獄と見まごうその光景に柳と圭一はドン引きし、変態二人をなるべく視界に入れないように努力した。

穂村「由紀はまだ小さいからあれだけど…美紀も中々良いな！」

「いや…由紀ちゃんや真冬さんは確かに少し小さめの胸ですが、あれはあれで興奮しますよ…」パシヤパシヤッ！

シャツター音を響かせながら彼は語る。由紀や狭山のように控えめの胸、はたまた悠里のように破壊力のある胸。形や大きさは数あれど、どれもかけがえのない…大切な物なのだ…。

穂村「…哲学だな」

「ええ…」パシヤッ！パシヤパシヤパシヤッ！！

くくく

悠里「ふっ！」ピョンッ！

胡桃「ほっ…！」ピョンッ！

美紀「…っ！」ピョンッ！

由紀「あむっ！」パクッ！

周りの全員が手こずる中、由紀の口は宙に揺れるパンの一部を噛みちぎり、遂にパンを口にする事に成功した。まだ四度目のジャンプという比較的早いタイミングで成功し、彼女はパンを口にしながらすぐそば…20m程先のゴール地点へと駆けていく。

穂村「おっ!?!由紀がパン取ったぞ！他のやつはまだ苦戦してるし、こりや由紀の勝ちかな。」

「…ですね」パシヤッ！

穂村「由紀の跳ねる姿ももう少し眺めていたかったけど、まあ撮るものは撮れたから良しとするか」

そのまま由紀は危なげなく、あっさりゴールへたどり着き一位の称号を手にした。彼女はニコニコと微笑みながら口の中のパンを飲み込み、彼等の元へと歩み寄って圭一に紐を外してもらう。

由紀「一着!?一着ですよねっ!」

柳「もちろん。他の皆はまだ苦戦中だからね」

圭一「いや…恵飛須沢もパンを取ったな」

グラウンドに目を向けると、胡桃がパンを丸ごと加えながら全力疾走していた。どうやら噛みついた際に噛み切る事が出来ず、丸ごと取れてしまったようだ。

由紀「まさかスポーツで胡桃ちゃんに勝てる日が来るとはっ…!これは記念すべき日だよ!!」

手を縛っていた紐を外してもらい、由紀は一位を取れた事を大いに喜ぶ。彼女はニッコリと微笑むと側にいた彼の元へと歩み寄り、共に彼女達の試合を見守る事にした。

「おめでとうございます。あの胡桃ちゃんや真冬さんを抑えて一位なんてスゴいです!」

由紀「えへへ♪ありがとー!ほんつとに嬉しいよ!」

「さて…次は胡桃ちゃんか」パシヤッ!

そのシャッター音をきっかけに由紀は彼が見慣れぬカメラを手にしている事に気づく。よく見れば側に立つ穂村もまた、大きめのビデオカメラを手に撮影しているようだが…。

由紀「あれ?それ、どうしたの?」

「えっ?ああ…穂村さんが貸してくれて…」

由紀「へえ。二人とも、こんな熱心に撮って…子供の活躍を撮るお父さんみたいだね♪」

穂村「ええ…」

「まあ…」パシヤッ!

言えなかつた…。『自分達はそんな綺麗な者ではなく、どちらかと言えばただの変質者です』なんて…、由紀の純粋な笑顔を見たらとて

も言えない。彼は彼女達の誰かが跳ねる度にシャッターを切っているし、穂村はズームでそれぞれの胸元や太ももばかりを撮っているのだ。彼らが親のような気持ちでカメラを回す人間ならば、そんな変わった撮り方は絶対にしない…。

結局、その後は胡桃・悠里・美紀・狭山の順にゴールして、パン食い競走は幕を閉じる。由紀が一位…狭山がビリという結果は予想出来ず、誰もが驚いた。

悠里「由紀ちゃん、一位おめでとう」

由紀「ありがとう！いや、わたしもびっくりだよ…。まさか胡桃ちゃんを越える日が来るなんてね…」

胡桃「これ…ただのパン食い競走だからな？」

由紀「それでも勝ちも勝ちだもくん♪」

胡桃「つゝ!!あーもうっ!!あとちよつと早けりやあたしが勝ったのになく。悔しいぜ…」

少しの差で由紀に勝ちを譲ってしまった胡桃は悔しがり、ため息をつく。穂村はそんな彼女へと近寄り、肩を叩いてからニヤリと笑った。彼女以上に悔しがっている人間を知っていたからだ。

穂村「まあまあ。走るスピードは申し分無かったのに、揺れるパンに振り回され続けてぶっちぎりの最下位になった女もいるわけだからさ、二位なら十分スゴいって」

胡桃「あ…ああ、そう…だな」

胡桃は気まずそうに苦笑いしながらそつと横へと目を向ける。ここでは今回の種目で最下位になってしまった少女…狭山真冬が膝を抱えながら一人うつ向いていた。彼女は一番早くパンの元にたどり着いたものの、ゆらゆらと揺れるパンを中々捉えられず、皆がゴールする中一人で5分以上跳ね続け…ようやくゴールする事が出来ただ。

狭山「……………」

美紀「あの…大丈夫ですか？」

その淋しげな背中を見てられず、美紀は歩み寄って声をかける。狭山は前だけ見て美紀と目を合わせないまま、そつと口を開いた。

狭山「…美紀、たぶんね、ボクのパンだけ生きてたと思うんだ。じやなきや…あんなに動き回る訳がないもん…」

美紀「そ、そうですね…。生きてたのかも…知れませんか？」

狭山「…うん。絶対そう…」

返事は返すが、やはり目は合わせてくれない…。負けた事がショックなのか…はたまた一人だけ最後まで跳ね続けていたのが恥ずかしかったのか…。美紀に狭山の気持ちを知らすべはなかった。

「…ところで穂村さん。さっき撮った写真…現像する事は可能ですか？」

穂村「ああ、俺たちの暮らしている家には電気が通っているし…しっかりとプリンターもある」

「すばらしい。ではその写真…現像したら分けてもらえますかね？」

美紀や由紀が落ち込む狭山を慰める中、彼は穂村から写真を分けてもらおうと交渉を始める。家には自家発電機完備…かつプリンターも所持している穂村は、戦友である彼の提案にあっさりと頷いた。

穂村「もちろんだ。好きなショットを好きなだけ持っていけ！」

「っ…感謝の言葉しかありません…。では、この体育祭が終わったらそちらのお宅にお邪魔する形で…」

穂村「ああ、柳さん達には俺から伝えておくから安心しろ」

右手の親指を立て、穂村は彼に微笑む…。そんな穂村の笑顔を見て、ここまで頼りになる男がかつていただろうか…と彼は思っていた。変態同士の熱い友情である。

その後、思っていたよりも準備に時間を取られた事や彼が足を負傷してしまった事もあり、一行は予定よりも早めに体育祭を切り上げた。この短い時間ではたった三つの種目しか出来なかったが、由紀達は満足そうに笑っていた。

由紀「リレーじゃこっちの勝ち。綱引きはそっちの勝ちで、一勝一敗……」

胡桃「パン食い競走は得点関係なしのお遊び種目だったからな、結果的には引き分けだ」

美紀「そんな長い時間動いた訳じゃないのに、やたら疲れました……」

穂村「柳さん……ちよつと……」

柳「ん、なんだい……?」

話す女子達を尻目に、穂村はこつそりと柳に耳打ちをする。体育祭は終了したが、まだこの男にはやらねばならない事があった。彼を屋敷に招かないとならないのである。

穂村「あのさ、ちよつとあの少年に今回撮った写真を分けてやりたくて……。あいつら全員、少しの間だけ家に招待してやっても構わないかな?」

柳「写真?……ああ、まあ……構わないが……」

穂村「マジ?よしっ!どうもツス!!伝えてくるっ!」

嬉しそうに笑い、穂村はそれを伝えに彼の元へ駆ける。穂村からそれを聞いた彼は表情を明るくすると遠くから柳へと頭を下げた。本来、柳はあまり人を家へと招きたくはなかったが、あの穂村とここまですぐで親しくなれる人間なら構わないだろうと思いはじめた。

それに……

由紀「真冬ちゃんっ!わたしたち、少しだけ真冬ちゃん達のお家に行ってもいいって♪」

狭山「……え?ボク達の?」

悠里「穂村さんが――君に用があるみたいで招待してくれたの。あの…迷惑かしら？」

狭山「…ううん。そんなことないよ…」

胡桃「めちやめちやデカイ家で、しかも電気が通ってるみたいだぜ。穂村さんが自慢気に話してた」

美紀「電気が？あ、あの…：図々しい質問になっちゃいますけど、シャワーとか使えますか？」

狭山「…使えるよ。大きなお風呂もあるし、その…みんな入ってあげば良い…」

美紀「ほっ、ほんとですかっ!？」

狭山「うん。みんなが良ければ、だけど…」

うつ向いたまま、狭山はチラチラと彼女達を見る。気のせいか少し緊張して話しているようにも見えたが、それでも…どこか楽しそうに笑っていた。

圭一「…初めて見たな、あんな狭山は」

柳「んん、そうだね。やっぱり女の子同士の方が気が楽なのかな…」

圭一「まあ…普段は俺達みたいな男達としか接してないからな」

普段はとても冷たく、感情を見せたりしない彼女だが、それでも元々は普通の少女だったのだろう。柳と圭一は、狭山が微笑みながら由紀達と話す様を見てそう思った。

二人がそんな珍しく、貴重な光景を眺めていると、いち早く帰り支度を済ませた穂村が一同に告げる。

穂村「いよしっ!!じゃあボチボチ帰るかね!おい少年っ!俺たちは見るからに高級そうな外車で移動するから、ぶつけないように気を付けながらついてこいよ?」

「そんなこと言われても…こっちの車を運転するのは僕じゃないんで」



穂村「ん？じゃあ誰だ？」

穂村が首を傾げていると、悠里がグラウンドの隅に停めたキャンピングカーへと向かいながら軽く手を上げて微笑む。

悠里「今回は私です。私達はこのままグラウンドから出るの、柳さん達は学校の正門で待っていて下さい」

柳「分かった。合流したらそのまま私達が先導するから、君達は後ろからついてきてくれ。早ければ10分としない間に我が家につく」

悠里達は車に乗り込み、グラウンドから外へと出た。そのまま学校の外側を回って正門に向かうと既に真っ黒な高級外車が顔を出しており、その車は悠里の運転するキャンピングカーを確認してから走り出す。

悠里「あれがあの人達の車ね…。ほんとに高そう…」

胡桃「リーさん…ぶつけないように気を付けろよ。弁償とかできねえからな…」

悠里「わ、わかってるわよ…」

念のために走り出したその黒い車とは余分に距離をとり、間違ってもぶつけないよう慎重に悠里はハンドルをきった。

〃〃〃

穂村「…やけに車間距離を空けてるな。警戒されてんのかね？」

圭「あれだけ親しくしててそれは無いだろ。あいつら、人を疑うことを知らなそうだったしな」

背後をゆつくりとついてくるキャンピングカーを見つめながら、穂村達は会話を交わす。キャンピングカーはこちらの車と常に10m近い距離を空けており、それ以上近付く気配が無い。

狭山「…穂村がぶつけないようにしろとか言ったから、余計な氣を使つてゐるんだよ」

穂村「ああ、そういや言つたつけ。だってほら、ぶつけられたら柳さん怒るつしよ？この車、お氣に入りみたいだし…」

柳「わざとでもなければ、別に怒りはしないが？」

柳はバツクミラー越しに穂村と目を合わせると心外そうに呟く。その器の大きさに穂村が感心していると、柳は思い出したように口を開いた。

柳「さつき圭一君が言つていたが、彼女達…確かに疑うことを知らなそうだったな。丈槍君なんか特にだ…」

圭一「良く言えば純粹…悪く言えばお人好しだな。この世界じゃ危ない人間達だ…。もし危険な連中と出会つたら、あんな奴等はあつさりと殺される」

真剣な表情で圭一が語る中、突然穂村は笑い出す。圭一の言つたあの言葉がツボに入つたらしい。

穂村「あはははっ！俺らも十分危険な連中でしょ？」

狭山「……………」

圭一「確かにそうだが、出会つたタイミングが良かった。今日の俺達は日頃の疲れを取る為に外出してただけだから無意味な戦闘は避けていたし、それにあいつらの態度も良かったな。もしあいつらが氣に入らない連中だつたら、その場で殺してたさ」

穂村「まあ、由紀ちゃんとかやる氣が削がれる性格してるしなあ」

狭山「…でも、穂村が一番氣に入つたのは彼でしょ？随分と仲良くしてたし」

穂村「ああ！あれほど話の合う奴はそういねえ！なんつーか…真の男に会えた氣がする！」

狭山「真の変態の間違いでしょ」

柳「何はともあれ、中々面白い連中だ。体育祭の方は結局引き分けで終わってしまったな。君達なら圧勝すると思つていたのに穂村君

はバトンを落とすし…狭山君はパンを捉えられないし…」

柳は深いため息をついてから意地悪な言い方をする。実際はただの冗談で、別に気にしてはいなかったのだが…。穂村と狭山は項垂れて悔しがっていた。

狭山「…あれは…すごく悔しかった」

穂村「ああ…。あそこで悠里ちゃんのおっぱいを見さえしなきゃ、あつさりと勝てたのに…」

圭一「……………」

柳「……………」

穂村の発言で一瞬時が止まったが、全員すぐに気持ちを切り替える。その直後に柳が話題にあげたのは、足を負傷した彼の事だった。

柳「あの少年は足を怪我しているんだろう？少しの間泊めてやろうか？」

穂村「おつ！それいいな！よしつ、治ったらまた体育祭をやるように提案してみよう！今度は圧勝してやる!!」

圭一「俺はもういい…。お前と狭山だけでやれ」

穂村「ノリが悪いな…。まあいいや、狭山…今度は勝つぞ？」

狭山「穂村は邪魔だからいらない…。ボク一人で十分」

いつものように狭山が穂村を雑に扱う。彼女の素っ気ない態度に穂村は頭を抱えたが、柳だけはいつもとはそれとなく違う雰囲気を感じ取り、ひっそりと微笑んだ。

もし由紀達と出会ったのが今日でなかったら、こんな仲良くはなれなかったかもしれない。タイミングを間違っていたら敵になっていたかも知れないし、そもそも出会う事すらなかったのかも知れない。今回、由紀達は圭一達と体育祭で競う事になり、そして引き分けた。けれどもし、圭一達と体育祭ではなく本気の争いをする事になったとしたら…由紀達はどうなるのだろうか…。

この世界とは別の世界で彼女達はそれを経験する事になるのだが、それはまた別のお話…。

## 形あるモノ

『形あるモノはいつか壊れるっていう言葉を聞いた事がある…。まあ、実際そうなのだろう。その証拠に今朝、グラスを一つ割ってしまったし、これまで履いてきた靴もボロボロになってきたのでそろそろ替えが欲しい…。と、そんなわけで、どんな物だって壊れる時が来てしまう…。どれだけ大切な物だろうと、それは変わらないんだ……。』

~~~~~

「つて事だからさ、もう諦めなよ。寿命だったんだって」

胡桃「うう……。まあ、そうだよな……。」

キャンピングカーの中、胡桃はテーブル前の座席に座りながら『はあ』と深いため息をつく……。その腕には彼女がいつも使っているシャベルが抱かれていたが、それは持ち手と先端のさじ部を繋ぐ棒の部分が綺麗に折れてしまい、完全に壊れてしまっていた。

「…なんでこんな事に？」

二つに折れたそのシャベルを見つめつつ、彼はそうだった理由を問う。しかし胡桃がそれに答えぬまま顔を俯けていたので、彼女の向かいの席に座る由紀、そして美紀が代わりに口を開いた。

由紀「あのね、さつき行った建物の中におつきなロッカーがあったの。けど、鍵がかかって開かなくて……。わたしたちはあきらめようと思ったんだけど、胡桃ちゃんが……。」

美紀『コイツなら鍵を壊して開けられる!』と言って、そのまま思いきりシャベルを振り下ろしたんです。ただあの鍵も、ロッカー自体も思っていたより頑丈だったらしく…ポキッと…』

悠里「あらあら…』」

ついさつきまで胡桃と共に建物の探索に行っていた由紀と美紀の言葉を聞き、悠里と彼は苦い表情を浮かべる。この二人は車内で留守番をしていたのだが、戻ってきた時の胡桃の辛そうな表情は今でもハッキリと覚えていた。

胡桃「だつて…あんな大きなロッカーだぜ?何か良いのが入ってるかもって思うだろ!」

美紀「…どうでしょうね」

胡桃「ぐっ…開けられると思ってたのに…まさか折れるなんて…」
悠里「これまでずっと使ってきたから、傷んできてたのかもね…」
そもそも、胡桃が使ってきたのは園芸用のシャベルだ。本来はただ土を掘ったりする為だけに使う物だというのに、彼女はそれを武器として使ってきた…。激しい使い方をしてきた分、傷むのが早かったのだろう…。

「相棒を失ったとなると…胡桃ちゃんはしばらく戦えないか…」

胡桃「なっ?!大丈夫だつて!他のを代わりにするっ!!」

「他のっていうと…たとえば?」

胡桃「…うーん…』」

改めて尋ねられると言葉がでない…。このキャンピングカーの中には包丁や彼の持っているナイフの代えなど、幾つかの刃物はあるが…これまではリーチも長くて重いシャベルを使ってきたのだ。それにすっかり慣れてしまっていた胡桃は、これらの刃物を上手く扱える気がしなかった…。

胡桃「…………どうすっかな…」

「どうしようかね…………」

悠里「シャベル、綺麗に折れちゃってるものねえ…………」

美紀「ええ、直すのは難しいです…」

世の中がこんなふうになってしまった時からずっと、このシャベルを手にして生き延びてきたからだろう…。胡桃は折れてしまったそれを今も大事そうに腕に抱えており、顔を俯ける…………。

由紀「じゃあさ、明日、胡桃ちゃんのシャベルの代わりになる物をみんなで探してあげようよ！」

座席から勢いよくバツと立ち上がり、由紀は皆の顔を見回す。彼女の言葉を聞いた胡桃はそつと顔を上げ、驚いたように目を丸くした。

胡桃「えっ？あたしの…？」

由紀「うんっ！だって、何かないときみしいでしょ？」

胡桃「さみしくは…ないけど…………」

寂しい…とまではいかないが、落ち着かないような気はする。いつ、どんな時でもこのシャベルを手にしていた身としては、”かれらのいる外に手ぶらで出ていくのはムズムズとして何だか気分が悪い…。

胡桃「まあ…代わりは欲しいかな…」

由紀「よし、決まりっ！リーさん達も…それでいいでしょ？」

悠里「ええ、良いわよ。じゃあ、代わりが見つかるまでの間…胡桃はお休みね♪」

胡桃「お休みって…………別に平気だよ。なんなら素手でもがんばる」

胡桃はグツと拳を握り、まだまだ戦えると言わんばかりに悠里を見つめる。確かに彼女の運動神経なら素手でもある程度は”かれら”と渡り合えそうだが、だからと言ってそれを許すわけにはいかない。

美紀「ダメですよ。胡桃先輩は今日までずつとがんばってきたんですから、たまにはゆつくりと休んでください！」

悠里「そうよ！シャベルの代わりが見つかるまで……少なくとも、明日一日くらいはゆつくりと休みなさいっ！」

胡桃「……へーい……わかりましたよ……」

少しだけふてくされたように座席にもたれ、胡桃はため息をつく。ここは仕方なく悠里達の言葉に従い、明日は休ませてもらうとして……

胡桃「それまで、お前にはあたしの分もがんばってもらわなきゃな……」

ニコツと微笑みながら彼を見つめ、その体に気合いが入るようにバシツと叩く。胡桃に腰の辺りを叩かれた彼は彼女の目を見つめ、同じように微笑んだ。

「ああ、分かったよ。お姫様」

胡桃「そうそう……シャベルを無くしたあたしは何も出来ない無力なお姫さまだ……。ほんと、なんで壊しちやっただかなあ………はああくつ……」

いつもなら彼の冗談めいた言葉に顔を赤く染めたり、怒ったりするのに、今日の胡桃はその冗談に乗っかり、直後に深い深いため息をつく……。どうやら、シャベルを失った事がかなりショックらしい……。

(こりや重症だな……)

どうやら、一刻も早くシャベルの代わりとなる物を見つけてあげることがありそうだ。彼だけでなく由紀、悠里、美紀もまた、落ち込ん

だ様子の胡桃を見てそう考えた…。彼女がこれまでのように戦えるよう、何かしつくりくる物を…。今まで相棒として使ってきたシヤベルに代わる物を見付けなければ…。

くくくくくくく

翌日、彼女達は朝食を済ませてからすぐに車を走らせ、あまり”かれら”がいなさそうな場所：かつ、胡桃の武器になるような物がありそうな場所を回っていく。小さなコンビニ、もう持ち主のいないであろう空き倉庫など、様々な場所を半日かけて回っていった。そうして日が落ち始め、辺りが暗くなり始めた頃…。彼女達は走らせてきた車を町外れの路上に停め、今日の成果を胡桃へと発表する。

由紀「胡桃ちゃん、おまたせっ！きてきて、お待ちかねの発表タイムだよっ！さあつ、胡桃ちゃんが気に入るのはあるかな？」

胡桃「わざわざこんな形にしくなくても、あたしも連れていってくれれば良さそうなヤツを自分で選んだのに……」

彼女達は今日一日の間、胡桃の武器となりそうな物を探しに外へと出ていった。最初は胡桃も連れて行って彼女自身に選ばせるのが良いと思っただが、胡桃は車内に待たせておき、自分らが選んだ物を後で選んでもらう方が面白い！と、由紀が皆に提案してきたのだ。

由紀「だって、こつちの方が面白いじゃんっ！みんなの中で、誰が一番胡桃ちゃんの心を掴むものを選べたかっていうテストになるよ！」

胡桃「まあ……。なんでもいいけどさ。とりあえず、危ないところに

は行かなかつたんだろ？」

悠里「ええ。胡桃がない分、警戒しなきゃいけないもの」

美紀「かれら」が少なくて、比較的安全なところばかりを見回つていきました。ただ……それらの場所は選べる物の質があまり良くて、それが残念です」

胡桃が留守番している間、彼女達を守っていくのは彼一人……。大丈夫だとは思うが、万が一の事があるかも知れない。それを恐れた胡桃は「かれら」が少なく、安全な場所にしか行かないようにと、悠里に釘を刺しておいた。その結果、彼女達は安全な場所だけを巡ったわけだが：美紀曰くそれらの場所にはあまり良いものが無かつたらしい。

「さつき見かけたホームセンター、あそこなら良いものが見つけれらると思うんだけどな……」

胡桃「ダメだ。あそこは奴らがウヨウヨいただろ？あたしの武器なんぞ探すのに、あんな危険な場所にわざわざ行く必要はない……」

「……じゃ、今日持ってきたヤツで我慢してもらいますか」

彼がそう言つて車内の後方へ向かうと、由紀、悠里、美紀もそれに続く。胡桃の為にと選んできた物は彼女の目に止まらぬよう、今この時までには隠しておいたのだ。

美紀「じゃあ、まずは私から……。やはり似たような形状、長さの方が使いやすいだろうと思ひ、これを選びました」

美紀はまず、誰よりも先にそれを出す……。彼女は胡桃が腰かけている座席の前にあるテーブルの上にそれを置くと、少しだけ自信ありげな表情を浮かべた。

胡桃「あ……バットか……。まあ、確かに似たような長さではあるな。どっちも鈍器だし……」

悠里「正確に言うのとあのシャベルは園芸用…。そのバットはスポーツ用…。どちらも鈍器として使うのは正しい使い方じゃないわよ」

胡桃「はいはい…わかってますよ…。何はともあれ、まあまあ良い感じだ。暫定^{ざんてい}一位だな」

胡桃は席に座ったままの状態でその木製のバットを掴み、それを手のひらでペチペチと叩いていく。これなら「かれら」相手にもやっつけていけそうだと頷く胡桃だが、美紀はそんな胡桃の表情を見て申し訳なさそうに口を開いた。

美紀「でも、そのバットは木製ですし…元々かなり使い込まれたものみたいで所々傷んでいるんです…。あまり、長持ちはしないかも…。」

胡桃「言われれば…確かに傷があるな…。これ、どこで見つけた？」

美紀「途中立ち寄った空き倉庫の隅に捨てられてました」

胡桃「へ…。」

金属バットならまだしも、これは木製…。しかも新品ではないとくれば、あまり耐久性には期待できないかも知れない。ただ、それを踏まえた上でも悪くはない代物だ。胡桃はそれをテーブルの上に戻し、次が出るのを待つ…。すると、今度は悠里がそこへと寄ってきた。

悠里「私は…これなんだけど…」

胡桃「えつと、これはモップ…だよな？」

悠里「ええ、モップね」

胡桃「だよな…。」

悠里が差し出してきたのは水色の棒の先に紐状の繊維がまるで髪のようにつけられている、よくあるモップ…。洪々ながらも受け取ったそのベッド部分の繊維は元は白かったようだが、幾度となく掃除に使われてきたのだろう…。もはやそれは白ではなく、小汚ない灰色へ

と変わっていた。

胡桃「……………」

悠里「あら、不満そうな顔ね？」

胡桃「まあ…ちよつとな…」

渡されたモップは棒の部分プラスチックか何かで出来ているようにやたらと軽く、耐久性、殺傷能力、どちらも大した事が無さそう。こんな物で”かれら”を倒そうにも、上手くいって数体が限度。すぐに壊れてしまうだろう。

胡桃「んく……………まだ美紀が一位だな」

悠里「残念…。じゃ、それは掃除する時に使うわね♪」

悠里はそう言つて胡桃からモップを奪い、車内の隅に立て掛ける。彼女のニツコリとした表情を見るに、あれは最初から掃除用に使おうと思つて持つてきたのではないだろうか…。

胡桃（ま、正しい使い方されるんならあのモップも本望だろ…）

掃除用具が増えてご機嫌の悠里を尻目に、胡桃は次の物を待つ。次に彼女のそばへ寄つてきたのは、やたらとご機嫌な笑顔を浮かべている由紀だった。

由紀「ふっふっふく♪胡桃ちゃん、私が持つてきたやつを見たらきつと驚くよ！みーくんのバットなんか、すぐにポイツてしたくなっちゃうんだからっ！」

胡桃「マジか…自信たつぷりだな」

美紀「私は由紀先輩が持つてきた物を知ってますが…まあ、たしかに驚きはすると思いますよ…」

由紀は今、両手を背中に回してそれを隠しているが…悠里、そして彼は彼女の背後からそれを覗き込んでニヤニヤと微笑んでいる。二

人のその表情、そして美紀の発言から察するに、由紀が持ってきた物がまともな物ではないという事だけハッキリと分かった。

胡桃「ま、由紀だしな。大して期待もしてねえよ」

由紀「ムツ……その言い方はひどいよっ！わたしが取ってきたすっごいアイテム、欲しくないの!？」

胡桃「……見るだけ見てやる。出してみる」

何を持ってきたのかすら確認もせずに『いらない』などと言えば、由紀はヘソを曲げてしまう。仕方なく、彼女が背後に隠しているそれを出すように告げる胡桃だったが……

由紀「しつかりお願いしなきゃ見せてあげないもんね〜♪」

胡桃「ぐっ……!」

ニタニタと、まるで子供のような笑みを浮かべ、由紀は胡桃の言葉を守つ。しかし、由紀のその笑みは胡桃の眉間にシワを寄せただけだった。

胡桃「……よし、由紀のは終わりだ。次っ!!」

これ以上由紀の相手をしていても仕方がない。そう考えた胡桃は最後の一人、彼をビシツと指差す。すると、由紀は慌てたような表情を見せて彼と胡桃を遮るように間へ立った。

由紀「うわあつ?!うそっ!うそだよっ!!ちよつとした冗談っ!!まったく胡桃ちゃんったら、冗談も通じないんだから〜」

胡桃「……」

冷や汗を浮かべて告げる由紀に対し、胡桃は冷めたような目線を見る。しかし由紀はそんな目線を全く気に止めず、またニヤニヤと微笑みを浮かべてそれをテーブルの上へと置いた。

由紀「わたしのはこれっ!!どう?すごいでしょ〜♪」

胡桃「な…なんだよ、これ…」

由紀がテーブルの上に置いたそれを見て、胡桃は呆れたような表情を見せる。テーブルの上に置かれたのは長さ三十センチ程の白い棒だが、その先端にはキラキラと輝く大きなハートが付いており、また…ハートの下には天使の羽のようなパーツも付いていた…。

由紀「魔女っ子ステッキだよ！これさえあれば、今日から胡桃ちゃんも魔女っ子になれるの♪どうどう？すごいでしょ？かわいいでしょ？」

胡桃「ええつと…オモチャだよな？」

そのステッキはキラキラとしたハートから天使の羽まで、全てプラスチックで出来ているようだ。誰がどうみても玩具だろう…。当然、こんな物では”かれら”と戦う事など出来ないのだが、由紀はそれを手に持ってニコニコと微笑みながらその凄さを語った…。

由紀「これね、ここにあるスイッチを押すと音が鳴るんだよっ!!」
カチツ…!

胡桃「……………」

由紀「……あれ？」

ステッキに付いていたスイッチを押す由紀だが、いくら待ってもなんの音も鳴らない。彼や悠里、美紀が後ろで見守る中、由紀は引き続きスイッチを何度も押す…。しかしそれをいくら押した所で、車内に響くのは『カチツカチツ』という音だけだった…。

カチツ！カチツ！

胡桃「…鳴んないな」

由紀「あれっ？あれっ??なんでっ!？」

美紀「多分ですけど、電池が入ってないのでは？」

カチカチとスイッチを押す由紀を見兼ね、美紀はそつと口を出す。その後、由紀がそのステッキを確認したところ………確かに電池が入っていないかった。

由紀「リーさんつ、電池あるっ？」

悠里「ごめんね……。今はちよつと……」

由紀「そっか……。じゃあ仕方ない……音はもう少しの間我慢してね」

それだけを告げ、由紀はそのステッキをテーブルに戻す。しかし、胡桃がこれを受け取る訳もなく……

胡桃「いらねえっての！由紀が持つとけ!!」

由紀「えく？わたし、これを持つほどお子さまじゃないよっ!!」

胡桃「あたしもだよっ!!!……っーか、お前ふざけてるだろ……」

由紀「えへへ……わかっちゃった？ほんとはちゃんとしたのを見付けたかったんだけどね、良いのが無くて……。なら、胡桃ちゃんにはかわいいのを持たせてあげようと思ったの♪」

胡桃「余計なお世話だ……。ほら、これはお前が持つてろ」

ため息一つつき、胡桃はそのステッキを由紀の方へと投げる。由紀はそつと投げられたそれを上手くキャッチすると、どこか嬉しそうに微笑んだ。

由紀「これを振る胡桃ちゃんは見たかったけど……しかたないか。よしつ、また今度、外で電池さがそくっ♪」

受け取ったステッキを小さく振り、由紀はニコニコと笑う。この時、言葉こそ出さなかったが……このステッキは由紀にやたら似合うと……車内にいた全員が思った。

胡桃「さて、最後はお前だな？」

胡桃は由紀の相手を終え、残った最後の一人：彼の顔を見つめる。今のところ美紀が持ってきたバットが最有力候補となっているので、胡桃は彼にもそこそこの物を期待する。しかし、寄ってきた彼は申し訳なさそうに首を横へと振った。

「わるい。みんなの周辺をチェックするのにいっぱいばいで、物を探している余裕がなかった……」

胡桃「あく……そっか、なら仕方ないな。まっ、気にすんなよ。辺りへの注意を怠ってまで探すような物でもねーし……」

比較的安全そうな場所へ行っていたとはいえ、完全に油断など出来ない。万が一に備えてしっかりと警戒し、由紀達を守っていたからこそ、彼には余裕がなかったのだろう。それは仕方のない事なのだが……

胡桃（ちよつと、残念だな……）

彼は何を持ってきたのか……。心のどこかでそれを楽しみにしていたという気持ちがあったのも事実。しかし、シャベルの代わりになる物を無理して探し、由紀達や……彼自身が怪我などしたら大変だ。とりあえず、これから少しの間は美紀が持ってきてくれたバットでやっていけそうだし、自分も明日からは遠慮なく外へと出られるだろう……。そんな事を思いつつ、胡桃は皆と共に夜を迎えた……。

くくくくく

夕食、着替えを終え、就寝時間が訪れる。

明かりを消した車内：それぞれが寝床につき、目を閉じていった。このところ中々寝付けずにいた胡桃もいつしか眠りに落ちたのだが、それはほんの一時間ほどで覚めてしまう…。

胡桃（…ちよつとだけ眠れたな。シャベルが壊れたショックで気疲れしたおかげか？）

相手はシャベルとはいえ、これまで連れ添ってきた相棒だ。それが壊れてしまい、自分は思っていた以上にショックを受けていたらしい。シャベルが壊れてショックを受ける女の子など、自分くらいのものだろうか…。そう思うとなんだか可笑しくなり、胡桃は真つ暗な車内で笑い声を漏らした。

胡桃（まあ…シャベルが壊れてショックを受ける女子どころか、生き残ってる人間がいるのかどうかも怪しい世界だからな…）

小さく笑い声を漏らした後、不意にそんな事を思ってしまう。いや…生き残っている人達もどこかに大勢いて、いつか自分達を助けてくれるかも知れない。そう信じよう。ネガティブな考えを払うようにして首を振り、胡桃は車内にある狭い寝床から起き上がった。

胡桃（ノド渴いたな…）

確か、しまっておいたペットボトルに飲みかけの水があったはず。それを飲んでから寝直そうと考える胡桃だったが、次の瞬間…彼女は驚いたように目を見開く。いつも彼が座りながら寝ているハズの席…そこに彼の姿がなかったのだ。

胡桃「ッ!？」

トイレの中を確認してみたが、彼の姿はない…。こんな夜中にどこ

へ行ったのか…悠里達を起こすべきか…。一人、色々な事を考えてしまふ胡桃だが、とりあえずは落ち着いて外へ出てみる事にした。

…ガチャツ

悠里達を起こさぬよう、ゆつくりとドアを開け、車外へ降りる。彼は外の空気を吸いに行つたのかも…そう思つて外に出た胡桃だが、車の停めてある路上周辺にも彼の姿は無かつた…。

胡桃（つたく！どこ行きやがつた!!?）

今夜は空に雲がなく、星の明かりが良く届く。おかげでいつもより辺りを見回せるが、昼間と比べると当然ながら視界が悪い。やはり、悠里達を起こした方が良くも知れない…。そう思い始めたその時だつた。

トツトツトツ……

道の先…星明かりでも照らしきれぬ暗闇の向こうから、誰かがこちらへと駆け寄る足音のようなものが聞こえる…。”かれら”は走れないので、恐らく、生きている人間だろう。微かに身構えた状態で胡桃がそちらを見続けていると、現れたその人物は外に立つ彼女を見て驚いたような声をあげる。

「……っ!?そこで何してんの?」

暗闇の中で足音を鳴らしながら寄つてきた人物は、胡桃の探していた彼だつた。彼はどこか遠くから駆けてきたようで微かに息を乱していたが、胡桃はそんなのもお構いなしに彼のそばへズカズカと歩み寄り…

バシツ!!

「いたっ!」

振り上げた右手で、その頭を思いきり叩く。急に頭を叩かれた事に彼が戸惑う中、胡桃は真剣な表情を向けた。

胡桃「何してるってのはあたしのセリフだ！こんな夜中にどこ行ってた!?!」

「ごめんごめん…。夕方に見かけたホームセンター…。そこに行ってた」

胡桃「はあ?!?何の用があつて——」

こんな夜中に一人で出ていった彼の行動が信じられず、胡桃は怒声にも似た声を出す。すると、彼はそんな声を遮るようにして右手に持っていたそれを彼女の前へと差し出した。

「ほい、どうぞ」

胡桃「!?!?…これっ、取ってきたのか…?」

「まあね…。同じのがあつて良かったよ…」

彼が右手に持っていたのは、一本のシャベル…。しかも、それは胡桃が使っていたあのシャベルと全く同じ型。違いと言えば、このシャベルは新品らしく、先端のさじ部がキラキラと輝いている事くらいだろうか…。

胡桃「……………」

それをそつと受け取り、胡桃はその重さ、持った心地などを確認する。やはりこれはあのシャベルと同じ型らしく、持った感じもいつものそれとほぼ同じだった。

「やつぱり…胡桃ちゃんにはシャベルが一番似合うな。ああいう所ならシャベルくらいあるかなと思っただけど、大当りだった」

胡桃「お前が行った場所って、結構危ないところだっただろ…」

「まあ…そこそこ」

夕方、走る車の中から見たホームセンターの付近には結構な数の”

かれら”がうろついており、安全とは言えない場所だった。シヤベルを持っていく胡桃と一緒にだとしても、余程の事が無ければ入るのは避けたい場所だ。しかし、彼はただのシヤベル一本の為、夜間にそんな場所へ：一人で向かったのだ。

胡桃「……こんな危険なこと、もう二度とするな！」

「あゝ……怒つてらっしゃる……？」

胡桃「当たり前だっ!! あんな場所に一人で！こんな夜中につ!! シヤベルだけを取りに行ったんだぞ!! バカ丸出しだろっ!!」

「いや……夜になってからは夕方より、奴らの数も減ってた。だからそこまで危険な場所だったわけでも——」

胡桃「怪我でもしたらどうすんだよっ! このバカッ!!」

その浅はかな行動が許せず、受け取ったシヤベルを胡桃がそのまま振り上げると、彼は焦ったように冷や汗を流していく。彼が席から消えていたのを見た時、胡桃は本当に心配した。まさか、夜中にシヤベルこんな物を探しに行っていたなんて……。それがどれだけ危険な行動だったかを自覚していない彼を思いきり殴りたくなる胡桃だったが、彼女はシヤベルをそつと下ろして落ち着く事にした……。

胡桃「はあ……っ……まあ、無事だったならいいよ……」

「心配かけたのは……ごめん。悪かった。でも、胡桃ちゃんがシヤベルを持っていないとなんか落ち着かなくてね……」

胡桃「これは……ありがたく受け取っておくけどさ、ほんとに今回限りだぞ? また同じ様な事したら、本気でぶん殴るからな?」

「はいはい……仰おほせのままに……」

彼はニコニコと微笑み、反省したのかしていないのかよく分からない表情を見せる。そんな表情を見た胡桃はまた呆れたようにため息をつき、そばにあったガードレールの上へと腰を乗せた。

胡桃「でも…そうだよな。みんなもさ、代わりになる物とかじゃなくて、最初からシャベルを探してくれれば良かったのに……」

彼に貰ったシャベルを眺め、胡桃はボソツと呟く。由紀達が探してきた物は”シャベルの代わりになる物”というテーマだったが、そんな物ではなく、他の”シャベル自体”を探してくれれば済んだ話なのだ。

「まあ、胡桃ちゃんに色々な物を持たせてみたかったんだろうね……」

胡桃「…楽しんでた…ってことか？」

「そういうこと…。由紀ちゃんとか特にね」

そう言われて、胡桃もようやく気付く。思い返せば、シャベルの代用となる物をまともに探してきたのは美紀だけ…。悠里と由紀…特に由紀の方は、完全にあの状況を楽しんでいた。

胡桃「…ま、みんなが楽しめたなら良いや…」

「ああ…そうだね」

毎日を生き延びていくのすら大変な世界だ…。こうして、楽しめるところで楽しまないと心がダメになる。自分に持たせる物を探してくるという事がちよつとしたイベントのようなものになり、皆が楽しめたなら…シャベルを壊したのも無駄ではなかったのだと思い、胡桃は『ふふっ』と笑った。

胡桃「しかもっ！最後にはこうして新品をゲットしたしなっ!!」

「また、存分に使ってやって下さいませ」

胡桃「もちろんっ。ビシバシ使って手に馴染ませるさ」

新しいシャベルをギュツと握り直し、胡桃はガードレールから腰を下ろす。そうして彼と共に車へと歩み寄る中、彼女はピタツと立ち止まった…。

胡桃「くどいと思うかも知れないけどさ…あと一回だけ言っておく…もう、勝手にいなくならないでくれよ……」

「……ああ、分かったよ」

胡桃が振り向きながら真面目な表情で告げると、彼は首を縦に振る。そんな彼を見た胡桃はニコツと微笑み、車の中へと戻った…。

胡桃（シャベルなんかより…お前の方がずっと大事なんだから…）
この思いはまだ、恥ずかしくて口に出せない。
いつか、ハッキリと伝えられる日が来るのだろうか…。

彼と共に車内へ戻った胡桃はそんな事を考えつつ、また眠りについた…。

~~~~~

由紀「あゝっ!!?胡桃ちゃんのシャベルが直ってるっ!?!」

翌朝、目覚めた由紀は胡桃が当たり前前の顔をしながらシャベルを持っている事に驚き、騒がしい声をあげる。彼女だけでなく、美紀や悠里もまた、それに驚いていた。

悠里「それ、直したの…？」

美紀「シャベルの修理が出来るなんて…さすが胡桃先輩です」

胡桃「いくらあたしでも修理なんか出来ないって…。これはその…今朝、近くの道に落ちてたんだ」

本日の事を話せば彼が悠里に怒られてしまうと思い、胡桃は咄嗟に  
出任せを言う。由紀、悠里、美紀の三人は思いの外、その出任せを信  
じてくれたようだ。

美紀「同じやつが落ちてたなんて、運が良いですね」

悠里「やつぱり胡桃ぐらいになると、シャベルの方から寄ってくる  
のかしら？」

由紀「おおっ！胡桃ちゃんもシャベルにモテモテなんだねっ!!」

胡桃「シャベルにモテても、あまり嬉しくはないけどな…」

由紀の発言に対して苦笑いしながら、胡桃は彼の方へと視線を移  
す。窓際の席に座っていた彼は胡桃の視線に気付くと、騒ぐ由紀達を  
見て楽しそうに微笑んだ。

胡桃『形あるモノはいつか必ず壊れる…それはよく分かってる。で  
も、みんなとキミの笑顔だけはずっと…いつまでも、そのままです  
ほしい…。近い内、あたしが壊れてしまったとしても…ずっと変わら  
ずに』

さばくぐらし (1)

由紀「おかえりー!」

胡桃「おう、ただいま。本当に由紀が言ったとおり、人がいたな」  
洞窟の外：そこにある砂漠から戻ってきた胡桃へ、由紀は声をかける。胡桃はその背後に二人の少女：そして得体の知れない小さな生き物を引き連れていた。

悠里「お疲れ様。あなた達も、ね」

??「ありがとう」

由紀「わっ!?!しゃべった!?!えっ、どこかにボタンがあつたりするのかな?」

??「……驚かせてごめん」

二人の少女と共にいた得体の知れない生き物：それが声をあげたことに由紀は驚く。タヌキとも：ネコとも違うようなその生き物は、宙にプカプカと浮いたまま苦い表情を見せていた。

??「あはは、最初はしようがないよ。ありがとうございます、助かりました」

二人の少女の内、大きな杖のような物を持っていた茶髪の少女が悠里達へ向けぺこりと頭を下げる。それに続き、もう一人の小さな赤毛の少女も頭を下げた。

??「…ありがとうございます」

??「どうしたんだ、ランプ。やけに静かじゃないか。いつもならもつと——」

宙に浮く生物が赤毛の少女に寄り、不思議そうな顔を見せる。話を聞いた感じだと、赤毛の少女の名は『ランプ』というようだ。

ランプ「その…ちょっと驚いちゃって。ごめんなさい、皆様の方が



大変なのに…」

悠里「……まずは、お互いに自己紹介しましょうか。どう呼んだらいいか分からないでしょうし」

由紀「そうだった！まずは自己紹介からだよね！巡ヶ丘学院高校三年C組、丈檜由紀だよ！それから、胡桃ちゃんとりーさん！二人ともすごいんだよ？えっと——」

胡桃「はいはい、一旦ストップな。今度はそっちの番だ」

興奮してきた由紀をなだめ、胡桃は目の前の少女らを見つめる。すると、杖を持つ少女達はそれに応えるようにして自らの名を告げた。

きらら「あつ、うん。私はきらら」

ランプ「えっと…ランプです。よろしくお願いします」

マツチ「マツチだ。異世界から来た人達からはよく驚かれてるよ」

まあ、よく分からない生き物が宙に浮きながら喋るのだから、驚きもするだろう…。しかし悠里が反応したのはマツチの存在ではなく、今の言葉の中にある『異世界』というワードだった。

悠里「異世界…。やっぱり、ここは私達の世界とは違うのね」

マツチ「……君たちはあまり動揺していないんだね」

胡桃「まあ、色々と経験してきてるからな。…いきなり砂漠に放り出されたのには驚いたけど」

悠里「きららさん達はこの世界の人なのよね？色々と聞かせてもらえると嬉しいのだけど……良いかしら？」

きらら「そうですね…。まずは皆さんが、この世界に来てしまった理由からでしょうか…」

そうして、きららは自分の知っている事を悠里達へ告げる…。

女神と呼ばれる者の存在や、それを封じた『アルシーヴ』という者の存在。そしてそのアルシーヴが”オーダー”という禁呪を用いて悠里達…”クリエメイト”と呼ばれる者達をこの世界、”エトワリア”へ呼び寄せ、彼女達から”クリエ”と呼ばれる力を奪おうとしている事を…。

胡桃「世界を乱す魔法：オーダーか。本当に別の世界なんだな」  
きらら「はい。そしてクロモンや七賢者たちが皆さんを捕らえに来  
ると思います。クロモンは私の”コール”でなんとかできますが、今  
出てきた相手には対処が追いつかなくて…」  
マッチ「そうだね…。やつらは一体なんなんだ？胡桃の言いぶりだ  
と知ってるみたいだけど…」

きららの言う”コール”とは、彼女の使うことの出来る伝説の召喚  
魔法：というものらしい。そしてマッチのいう”やつら”とは、さつ  
き砂漠にいた際、彼女達を襲ってきた存在のことなのだが…その姿は  
悠里達のいた世界に蔓延る、”かれら”に酷似していた。

悠里「…由紀ちゃん、ちょっとお水を取ってきてもらっていい？」

由紀「お水？」

悠里「さつきまでランプちゃん達はお外にいたでしょ？だから、の  
どが渴いていると思うの」

由紀「そうだね！じゃあ、取ってくる！」

話の流れを読み取り、悠里は一度、由紀の事をこの場から離れさせ  
る。彼女が洞窟の奥へ水を取りに行ったのを見計らい、悠里は口を開  
いた。

悠里「やつらは…私達の世界にも似たのがいるわ。ここのも同じよ  
うな性質を持っているみたい」

胡桃「無茶さえしなければ、対処するのは問題ない。足も遅いし、光  
や音につられやすいし」

悠里「無茶さえしなければ…ね。胡桃がそれを言うのかしら」

胡桃「う…っ…」

過去の事を思い返し、悠里は責めるような目を胡桃へ向ける。それ  
に気付いた胡桃は気まずそうに顔を俯け、冷や汗を流していた。

マッチ「僕たちは今まで、”やつら”のような存在に出会ったことがなかった。オーダーによって、このエトワリアが君達の世界の影響を受けているのかも知れないね」

きらら「あくまでも、かもしれない…だけどね。この前とも全然違う形になっているから…」

胡桃「今までいなかったっていうなら、あたしたちのせいなんじゃない」

ランプ「違いますっ!!」

この世界に”やつら”が現れたのは自分達のせいかも…そう胡桃が思い始めた時、ランプが大きな声をあげた。その声は洞窟内に響き渡り、水を取りに行ってきた由紀が驚いたような反応を示す。

由紀「えっと、お水持ってきたけど…。ランプちゃん、大きな声だして何かあったの？」

ランプ「由紀様…。とにかく、悪いのはアルシーヴです。胡桃様達が気に病まれることなんてないです…」

悠里「…ありがとうね。ランプちゃん」

今にも泣き出しそうな顔をしているランプへそっと寄り、悠里は彼女の頭を撫でる。悠里もまた、胡桃と同じような事を考えていたのだ。：ランプの一言でいくらか気持ちが悪くなった。

胡桃「えっと、ともかくだ。さっきの話だと、あたし達が元の世界に帰ることは出来るんだろう？」

きらら「は、はい…。ただ、あと二人…由紀さん達と”パス”の繋がっている存在がこの世界にいます。その方達を見つけてからじゃないと…。でも、なんだろう…一方のパスが少し感じ取りにくい…。どうしてだろう？」

”パス”の繋がっている存在…。つまり、由紀達と同じ世界からやってきた人物があと二人いる。胡桃はすぐにその二人が誰なのかを察し、目を丸くした。

胡桃「二人つて…美紀とあいつか!? やつぱり、あいつらもこの世界に来てたのか!」

由紀「きららちゃん、みーくんがわかるの!」

きらら「みーくん…ですか?」

悠里「みーくん…美紀さんは、私達の後輩。そしてもう一人の人は、ある日私達が出会った、少し変わった男の人よ」

ランプ「えっ? お、男の人…? そ、その方つて…もしかして…」

悠里の口から出た予想外の言葉に驚くランプだが、彼女にはある心当たりがあつた…。しかし、それはあり得ない事だと思つていたのだが…。

きらら「美紀さんがどつちにいるのかは何となく分かるんだけど…ただ…」

由紀「ただ?」

きらら「…この洞窟の外、”やつら”が大勢いる方なんだよね」

胡桃「あく…なるほど」

悠里「さすがにあの中を抜けていくのは骨が折れそうね…由紀ちゃん?」

由紀「どうしたの、りーさん?」

悠里「一人で勝手に行つちやダメよ。ちゃんと準備して、しっかり休んでからにしましょうね?」

由紀「は〜い!」

一人でトコトコ歩き出した由紀を引きとめ、悠里は彼女を洞窟の中へと戻す。由紀は少し目を離すとフラフラといなくなってしまう為、油断などあつたものではない。

悠里「学園生活部心得第三条…夜間だけでなく、緊急時も適用させるべきかしら」

胡桃「まあ、そのへんは戻ってから考えればいいさ…」

『第三条・夜間の行動は単独を慎み常に複数で連帯すべし』…こういつた心得があるのは良いのだが、由紀を守る為には夜間だけの警戒では

足りぬかも知れない。由紀はそれだけ自由で、何をするか分からない娘だ。

由紀「そういえば、きららちゃんって何か部活入ってるの？コール部？」

きらら「えっと……まず、部活って何でしょう？」

由紀「ぶ、部活を知らないなんて……。えっと、じゃあ、学校はどこに通ってるの？」

きらら「学校……聞いた事はありませんけど、私の村にはなかったの？」

由紀「そ、そんな……」

この後にランプから聞いた話によると、この世界においての学校とは“神宮”というものを養成する施設らしく、才能を持つ選ばれた者のみしか入れないらしい。こちらの世界とは違い、悠里達の世界ではほとんどの人が学校に通えるという事を知ると、きらら達は目を輝かせていた。

きらら「ほとんどの子が……少し羨ましいですね」

由紀「よし！じゃあまずは、学園生活部について教えてあげる！こっちだよ！」

きらら「ゆ、由紀さんっ!？」

悠里「あまり遠くまで行っちゃダメよ？私達は、ここでランプちゃんとお話してるわね」

いきなり由紀に引っ張られ、きららは戸惑ったような表情を浮かべる。その一方、悠里はランプのそばに立ち、彼女を見つめてニツコリと微笑んだ。

マッチ「すごい勢いだっただな……。奥まで行っても平気なのかい？」

胡桃「一応、奥まで見回りは終えてるからな。それに、由紀が一人でふらつくよりはマシだ」

悠里「釘をさしたから大丈夫よ。ランプちゃんもそう思わない？」  
ランプ「わ、わたしですか？」

悠里「ええ。だってランプちゃんは元々、私達のことを知っているんでしょ？」

ランプ「!?……どうしてそれを」

悠里が放った言葉を聞き、ランプは驚いたように目を丸くする。悠里は彼女のそんな表情を間近に見つめると、今度は小さく口を開いた。

悠里「……やっぱりそうだったのね」

ランプ「か、かまをかけたんですかっ!?」

悠里「ごめんなさい。少しだけね……。ほとんど、確信には近かったのだけど……。私がランプちゃんだったら、きつと同じような態度になっちゃうもの」

ランプ「……悠里様」

ランプの目が次第に潤んでいき、小さな肩が震えていく……。悠里は彼女を安心させるようにニッコリと微笑み、もう一度その頭を撫でた。

悠里「リーさんでいいわよ。私達のこと、気にしていてくれたのね……。ありがとう」

ランプ「……ありがとうございます、リーさん。仰るとおりわたしは……わたし達は、皆様の事を存じ上げています。どんな世界で生き抜いて、どんな困難を乗り越えてきたのかも」

悠里が頭を撫でるとランプはとうとう涙を流し、それを手で拭う事もなく肩を震わせた……。それを見た胡桃は彼女と視線を合わせるようにかがみ、親指でその涙を拭っていった。

胡桃「もー、泣くなよ。別にランプのせいじゃないだろう？」

ランプ「それはそうですけど……でも、何もしてあげられないのが申し訳なくて……」

悠里「そう気に病まなくていいわ。私達だって、みんなを助けられ  
たわけじゃないもの」

胡桃「出来ることをやっていくしかないからな…」

仕方のない事だ…そう自分達の心に言い聞かせながら、悠里と胡桃  
はランプを泣き止ませる。そうしてランプが落ち着きを取り戻した  
時、洞窟の奥から由紀、そしてきららが慌てた様子で戻ってきた。

胡桃「っ!?!どうした!?!」

ランプ「由紀様!大丈夫ですか!?!」

由紀「う、うんっ。きららちゃんが助けてくれたから…。でも、さっ  
きのつて…」

きらら「ええ。洞窟の外にいるのと同じですね…」

胡桃「そんなばかな…!岩場の陰まできっちり見回ったんだぞ…。  
見落としなんてあるわけが…」

悠里「でも、こうして出てきた以上は見落としがあつたって可能性  
を考えなきゃいけないわ」

胡桃「…だな。わかった、もう一度行ってくる」

由紀達を危険な目にあわせてしまったのは自分の責任だ…。そう  
考えた胡桃は一人で洞窟の奥に向かおうとするが、悠里はそんな彼女  
の手をガシツと掴む。

悠里「ダメよ。今はきららちゃん達もいるんだから…みんなで、ね  
?」

胡桃「…：そっか。うん、そうだな。わかった、みんなで行こう」

明るい笑みを見せ、胡桃は皆と共に洞窟の奥…先程、由紀ときらら  
がやつらと出会った場所へ向かう。しかしそこには隠れられるよう  
な場所…見落とすような場所は存在していなかった。

悠里「たしかに…見落とすような場所には思えないわね」

胡桃「だよな…。じゃあ、いったいどこから…」

不自然なほど綺麗に整った洞窟の中：隠れられるような場所はない。にも関わらず、やつらはどこからともなく現れて由紀ときららを襲った。：。それぞれがやつらの出所に頭を悩ませる中、ランプがあることを閃く。

ランプ「もしかしたら：隠し通路のようなものがあるのかも知れませんが。胡桃様、物音を発して”やつら”を誘き出す事は可能ですか？」

胡桃「ああ、やれる。：よし、試してみるか」

皆を少し後方へと下げた後、胡桃は持っていたシャベルを振りかざす。そうしてそばにあった岩目掛け、何度も何度もそれを振り下ろした。

ガンツ！カンツ！ガンツ！！

由紀「そんなに八つ当たりして、胡桃ちゃん：シャベルにフラれたの？」

胡桃「ちげーよ！！音を発ててんの！！」

：ドサツ！

由紀へのツツコミを入れつつ音を発て続けていると突然、胡桃の背後に何かが落ちてくる。：。上から落ちてきたそれは砂漠の方にいた、”やつら”と同じ者だ。それはゆっくり起き上がると、目の前にいた胡桃を見て呻き声をあげた。

『うあ：アア：』

悠里「胡桃っ！！うしろ！！」

胡桃「こいつ：っ！どこからっ！！？」

ガシツ！！

胡桃「や：べえっ：！！」

まさか上から来るとは予期しておらず、反応が遅れる。それは胡桃の右手をガシツと掴みあげ、そつと口を開いたが、胡桃は上手く振り払うことが出来ない。



マッチ「まずいつ!!」

ランプ「胡桃様っ!!」

胡桃の危機を救うべく、きらら達は自分達が動こうとする。するとその時、きららはある反応をすぐ後方に感じ取り、慌てて振り向いた。

きらら「この反応は…!?!」

感じた反応は由紀達や、今はここにいない美紀と同じパス。しかし、何故か一つだけ上手く感じ取れない反応だった。ノイズがかかっているように曖昧なその反応はこれまでにその距離、位置を感じ取れなかったのだが…そばまで接近した今は、しっかりと感じ取れた。

ザシユツ!!

胡桃「…っ…!?!」

きららや由紀達の横を凄まじい速度で通りすぎたその人物は持っていた銀色の直剣を”やつら”目掛けて振り払い、胡桃の危機を救う。自らに掴みかかっていたそれが倒れた後、胡桃はその人物を見て驚いた。

胡桃「お前っ! どうしてここが…!?!」

「どうしてもなにも、砂漠が死ぬほど暑いから日影に…と思ってこの洞窟に入ったらみんなの声が聞こえたんで、慌てて駆けつけただけだ。でもまあ、タイミングよく皆と会えてよかった。おかげで迷子にならずに済んだ」

ヘラヘラした様子でそう告げるのは、元の世界で行動を共にしていた”彼”だった。彼は持っていた剣を肩にかけながら胡桃、由紀、悠里を順に見てニヤリと微笑むが、この瞬間ですら”やつら”がボタボタと天井から…いや、正確には天井に空いていた穴から降ってきている。それらを眺めた彼は笑みを引っ込めてため息をついた後、胡桃の肩をポンツと叩いてから剣を構えた。

「聞きたいこと、言いたいことは山ほどあるけど、今はこれの処理が先か」

胡桃「ああ、油断すんなよ!!」

落ちてきた”やつら”の数は十体近く…。しかし、胡桃と彼…そしてきさららとで迎え撃った結果、どうにかその全て倒し終え、場の安全を確保する事が出来た。

「はあ……いきなり砂漠に放り出されたかと思えば変な化け物に襲われるし、かと思えば”やつら”もいるし…。途中でこの剣を拾わなかったら危なかったかも」

由紀「それ、拾ったの？ かつこいいね！」

「わりと軽くて扱いやすいしね。ほんと、良いものを拾った」

剣を見て、彼が誇らしげに笑う。すると彼はワテンポ遅れて悠里やきさらら達の方を見つめ、不思議そうに首を傾げた。

「あく……君達はどなたさんかな？」

きさらら「あつ、私はきさららといいます。そしてこつちがランプで…こつちがマツチです」

丁寧に自己紹介するきさららと彼がある程度話した後、悠里は彼に自分達がおかれている状況の全てを語る。悠里が話した内容はあまりにも現実離れしたものだだったが、彼もまた思っていたよりあっさりそれを受け入れたようだ。

「…つまり、ここは異世界。そして、僕らは悪くい奴等に狙われていると…そういうことかい？」

胡桃「簡単にまとめるとそうなるな…。で、お前だけじゃなく美紀もこの世界に来てるみたいだから、早いとこ合流して元の世界に帰ろうって話だ」

「……了解。だいたい分かった。じゃあ早いところ美紀を見つけよう」

マツチ「彼も全く動揺しないね…。それだけ色々な事を、元の世界で経験してきたという事か……」

悠里達もだが、やはり彼も、ここが異世界と聞いても大した反応を見せない。むしろ、そんな彼等の反応を見たマツチの方が驚くほどだった…。

## さばくぐらし (2)

胡桃「にしても、まさか上に穴があったとはな…」

悠里「この暗さじゃ、気づけて方が大変よ」

きらら「マツチ、上の方はどうなってる?」

きららに尋ねられ、マツチは上にある穴の中へプカプカと浮かんでいく。マツチは少ししてから皆の元へ戻り、上の様子を報告した。

マツチ「上まで縦穴が続いているね。もう一階層、空間があるみたいだ。はしごとか、ロープがあれば上にひっかけて登る事ができるよ」

由紀「ロープなら、さつき見かけたよ」

悠里「あら、どこにあったの?」

由紀「あとでマツチちゃんと遊ぶときに使おうと思ってたから…：ほら、ここにあった!」

少し離れた場所に置かれていたロープを手に取り、由紀は皆のところへ戻る。胡桃はそのロープ、そしてマツチを交互に見つめて苦い表情を浮かべた。

胡桃「ロープで遊ぶって…：いったいなにを…」

マツチ「僕に聞かないでくれよ…：」

「…羨ましいヤツめ」

マツチ「う、羨ましい?ロープで遊ぶのがかい?」

「ああ、そうだよ。男ってのはみんな、可愛い女の子とロープで遊びたいもんなのさ」

彼がそんな事を言い、浮かぶマツチを指先でつつく。その後、由紀にロープを手渡されたマツチは彼の言葉に疑問を抱きながらも上昇し、上のフロアにあるひっかかりへロープを結んだ。

マッチ「よし、準備できたよ。一人ずつ登っていつてくれ」

「じゃあ、ここは僕が先にいく。マッチは安全だと言ってるけど、登った先に何がいるのか分からないし…念のためね」

胡桃「じゃあ、あたしかきさららが最後だな。まだ、辺りにやつらが潜んでいる可能性だってあるし」

きさら「じゃあ、私が最後までもいいですか？その…運動はあまり得意ではないので」

胡桃「オーケー。とりあえず、一番手はお前だったな…気を付けろよ」

「了解。マッチ、少しの間、剣を持っててくれるかな？」

マッチ「ああ、構わないよ。…むうっ！結構重いね…」

「手間かけて悪いね。それを持ちながら登るのはさすがに無理なんで…」

ゆっくりロープを登る彼と並走するようにしながらマッチも上昇し、そうして彼が上にたどり着いた後、持っていた剣を彼へ返す。彼は直後すぐ辺りを警戒するが、今のところ特に変わった様子はない。その後も胡桃、悠里、由紀、ランプ、きさらが順にロープを登っていき、全員が無事に上へと渡れた。

悠里「これで全員ね」

胡桃「それにしても…だ」

悠里「ええ。見た感じ、ここも下と同じようになってるわね」

一先ず無事にたどり着く事ができ、これから先へ進むとした時…洞窟の先からいくつかの呻き声が響く。聞き覚えのある声を前にした胡桃と彼は同時にため息をつき、由紀達を庇うようにして前へと立った。

胡桃「…まずは目の前の掃除だな」

「異世界だろうとどこだろうと、やることは変わらないな…」

胡桃はシャベル…そして彼は剣を構え、奥から現れた”やつら”の中へと突っ込む。一体ずつ、確実にそれらを仕留めていく中、見慣れない生物の影を捉えた。

悠里「今…二人の足元に小さな影が…」

クロモン「くー!!」

マツチ「なっ!?!クロモンまでいるのか!」

マツチがクロモンと呼ぶ、青い帽子を被った小さな生き物…それは彼と胡桃のそばを飛び回り、くーくーと鳴き声をあげていた。彼も胡桃も、それが視界を遮って邪魔なので追っ払おうとするが、やたらとすばしっこくて攻撃が当たらない。

きらら「二人とも、大丈夫ですか!?!」

胡桃「ああ!けど、このクロモンってのは中々面倒だな…!」

「可愛いからかい?」

胡桃「それもあ…:じゃなくて!動きが速いからだよ!!」

クロモンの動きに翻弄されながらも、彼は楽しげに笑う。胡桃がそんな彼にツッコミを入れながら立ち回る中、きららは由紀達よりも一歩前に歩み出る。

きらら「クロモン達は私が対処します!二人はやつらが皆に寄らないよう、気をつけて下さい!」

…タンッ!

由紀「…今、何か聞こえなかった?」

悠里「何かあって?」

由紀「えっ?うくと…何か跳ねるみたいな音?」

マツチ「今までに似たような音を聞いたことはあるかい?」

由紀「うくん…なかったとおもうけど」

ランプ「きららさん!気をつけて下さい!もしかしたら、何か紛れているのかも知れません!!」

きらら「な、何かって言われても……」

由紀が聞いた物音の正体に警戒するが、辺りには”やつら”やクロモンがいてまともな警戒が出来ない。しかし、そんな中でも胡桃はその気配を掴み取り、そばにいた彼へと呼び掛けた。

胡桃「っ!!?おいつ!!」

「ああーちよつと失礼っー!」

きらら「ひゃっ!!?」

胡桃に声をかけられた彼もまたその気配に気付いており、それからきららを守るため、彼女に飛び掛かって無理矢理地面へ体を伏せさせる。直後、これまで身を潜めていたその影が二人の体をギリギリかすめるようにして上を通り過ぎていった…。

??「…いい判断。今のところは悪くない」

影は彼女達から離れた所で立ち止まり、それぞれの顔を見回す。きららを襲った影の正体は、褐色の肌をした一人の少女だった。

ランプ「あなたは……」

??「ああ、ランプもいたの。邪魔しないでね、あたしは七賢者としてのお役目があるから」

由紀「七賢者……ってなんだっけ?」

悠里「復習が必要みたいね……。さっき、ランプちゃんが教えてくれたでしょう?」

ランプ「はい……。七賢者は皆様をこの世界に召喚したアルシーヴの直属の部下です」

きらら「けど、彼女がここにいるってことは……」

ランプ「はい……。カルダモン、一つ尋ねたい事があります」

その少女：カルダモンに尋ねる事がある。ランプが一步前に踏み出すと、カルダモンはセミロングの赤毛、そして身に付けていた緑色のスカーフをなびかせ、それに答えた。

カルダモン「ランプが尋ねたいこと……ああ、うん。美紀なら、あたしがもう捕まえたよ」

由紀「っ!?!みーくんを返してっ!!」

胡桃「ちっ!?!りーさん! 由紀を離すなっ! 絶対に飛び出していくぞ!」

悠里「ええ! わかつてる!! 胡桃もきららさんも…それにあなたも気をつけて!」

「大丈夫…こっちの心配はいりませんよ」

美紀を捕らえたのが彼女だと知り、由紀は考えもなしに飛び込もうとする。そんな由紀を悠里に任せ、胡桃ときらら…そして彼はカルダモンの前へと立った。

「さて…出来ればあまり手荒な事はしたくない。君、大人しく美紀を返してくれる?」

カルダモン「キミは…なるほど、こちらの手違いで余計なものまで召喚してしまったみたいだね。本来、ここに招くのは美紀たち四人だけのハズだったんだけど」

「飛び入り参加のあるイベントつてのも面白い…そう思わないかな?」

カルダモン「…ふふっ、そうだね。面白そうだ。よし、キミも正式に招待してあげるから、大人しくあたしに捕まってくれない?」

剣を構える彼を前にしても、カルダモンは余裕たつぷりの表情を見せる。彼女の底知れない実力を感じ取った彼は横目でそつと胡桃ときららの事を見つめると、直後に勢いよく、カルダモンの元へ飛びかかった。

「悪いけど、お断りだ」

カルダモン「そう…残念だな」

飛びかかる彼の剣をギリギリのところかわし、カルダモンはニヤリと笑う。彼女はその直後に二本のナイフを両手に構え、それを彼へ



振り払おうとした。

胡桃「おっと!!」

ブンツ!!

カルダモン「っ…」

…が、そのナイフが彼に届くよりも速く胡桃のシャベルが彼女目掛けて振り払われた為、カルダモンは一步、二歩と素早く後退してそれをかわす。するとその直後にまた彼が勢い良く地面を蹴り、カルダモンの前で剣を振り上げた。

カルダモン「…素早い」

「よっ!!」

ブンツ!!

振り下ろされた剣はまたギリギリのところでかわされ、カルダモンの体には当たらない。彼の攻撃が当たらなければ胡桃が…そしてその直後にまた彼が…交互に素早く攻撃を仕掛けていくが、カルダモンはその全てをかわしていった。

「彼女、さつき僕らを見て素早いって言ったよね…。あれって嫌みか?」

胡桃「かもな…。どう見ても、あたしらよりあいつの方が素早い…」  
連撃を続け過ぎた二人は一度距離を開き、乱れ始めた息を整える。  
しかし、そんな二人をじっと見つめるカルダモンは未だ息一つ乱れていない。

マッチ「…さすがにカルダモンの方が上手か<sup>うわて</sup>」

カルダモン「…ねえ、由紀たちもあたしの元に来ない? 今なら、美紀に会わせてやることも出来る。そして、あなたたちもここに残ればいい…。それが正しい選択」

胡桃「ここに…残る…?」

「……………」

カルダモン「そうすれば、今を生き抜く事だけを考えなくてよくなる。美紀とあなた達は、この世界でのんびりと…普通に生きていけばいい」

カルダモンの言葉を聞き、彼は構えていた剣を下げそうになる…。胡桃もまた、彼と同じく多少の迷いを抱いたが…

悠里「確かに、それも一つの考えかも知れないわね。けど、本当にそれでいいのかしら？」

悠里がそう言つて、カルダモンの目を見つめる。カルダモンには彼女の言葉の意味が理解できず、不思議そうに首を傾げた。

カルダモン「いって…何が？」

悠里「わたし達がここに残るといふ事は、オーダーが解けないまま残るといふ事よね？その時、”やつら”はどうなるのかしら？消えるのか…それともわたし達のように残り続けるのか」

カルダモン「…わからない。オーダーを見るのは初めてだから」

悠里「…きららさんが言っていたわ。オーダーは世界を乱してしまう魔法なんだって。乱してしまうのはわたし達の世界だけじゃなくてこの世界も、なんじやないかしら？だとすれば、あなたのいっている事が正しい選択だとは思えない」

キツパリ言い切り、悠里は鋭い視線を向ける。カルダモンは小さくため息をつく、彼女の事を見つめ返した。

カルダモン「そう……。あなたは悠里だね？」

悠里「ええ」

カルダモン「悠里にとって、この世界に残ることは良いことじゃないの？」

悠里「……………どうかしらね。けど、わたしは学園生活部の部長だから。…出来るだけしっかりした判断を下さなきゃ、みんなに示しがつかないのよね」

カルダモン「そう……ふふっ」

鋭い目線から一転、悠里はにつこりと微笑んで言葉を放つ。カルダモンは悠里のそんな表情に釘付けになっていたかと思うと、今度はおかしそうに笑いだした。

ランプ「何を笑っているんですか？」

カルダモン「いや……クリエメイトは本当に面白いな。美紀も悠里も胡桃も由紀も……そして飛び入りのキミも……本当に面白い。欲しくなったよ……力<sup>ちから</sup>尽くでもね」

「残念。たとえ力尽くだろうが、キミにくれてやるものはない。彼女達は……守らなきゃならない大切な人達だ。だから誰一人として渡すつもりはないし、美紀だつてすぐに返してもらおう」

カルダモン「……そうか。なら、キミとあたし……どちらが勝つのか、楽しみにしているよ」

胡桃「なっ……!?おいつ!!」

「本当に素早いヤツだな……」

カルダモンは最後に彼を見て微笑むと、これまで以上の速さを見せて一行の間をすり抜けていった。彼や胡桃すらもその動きを目で追うのがいっばいいいっばいで、結局取り逃がしてしまう……。

~~~~~

胡桃「まさか、あそこまで追いつめていて逃げられるとはな……」

美紀の元へ向かうべく、一行は洞窟の外……砂漠を進む。あの時にカルダモンを捕らえていればもつと楽に事が進んだと思うと、いくらか残念な気持ちにもなる。

由紀「最後、すつごく速かったよね……」

きらら「でもあれは……まだ余裕があったようにも見えて……」

マッチ「カルダモンが本気を出さない理由でもあるのかい？」

由紀「…わかった！出さなかったんじゃない、出せなかったんだよ！」

由紀は閃いたような表情を浮かべてきらら、マッチの会話に混ざり、二人にそう告げる。しかし彼女がそう告げた理由が分からなかった為、胡桃は首を傾げた。

胡桃「…どうしてだ？」

由紀「そ、それは…わからないけど、なんとなく！」

胡桃「なんとなくかよ……」

由紀のことだから、そんなことだろうと胡桃は思っていた。彼や悠里も同じことを思っていたらしく、横でニヤニヤと微笑んでいる。

ランプ「でも、由紀様の仰るとおり、出さないよりも出せなかった…という方が納得できます」

「…いずれにせよ、本気を出せなかったのはこっちも同じだ。この世界に来てからというもの、ろくに何も食べていないんでね……」

胡桃「はあつ？まだ何も食べてなかったのかよ？つたく…お前、あたしらと会えなかったらそのまま死んでたんじゃないか…」

呆れたように言いながら、胡桃は彼にあるものを手渡す。それは辺りに生えていたサボテンの一部であり、一応食べられるものだ。

「…嫌がらせかい？」

胡桃「違うって！これ、ちゃんと食べられるよ。毒見とかも終わてるから、そっちの心配もいらぬ。しっかり腹にいれておけ」

「ふむ…毒見つてのは？」

悠里「ここに来てばかりの頃、わたしが色々試してみたの。これでも一応、元園芸部だからね」

最近の園芸部というのは植物の毒見まで出来るのか…。などと感心しつつ、彼はそのサボテンの葉肉を口へと運ぶ。特別美味しいものではないが、いくらか食べていくとある程度の満腹感は得られた。

悠里「さて、彼の食事も終わったところだし…。きららさん、美紀さんの場所は分かる？」

きらら「うん、ここならハッキリ分かるよ。このまま東に真っ直ぐ行つたところにいる」

マツチ「洞窟を抜けたらまた砂漠だった時は正直、どうなることかと思つたけど…」

ランプ「きららさんがいてくれて、本当によかつたです」

由紀「よし！学園生活部、砂漠遠足の始まりだよ!!」

胡桃「いつの間にそんな名前を……」

砂漠においても、由紀が元氣いっぱいなのに変わりはないようだ。それを知った事で安心した胡桃たちはそつと微笑みつつ、砂の上を歩いて美紀の元に向かつていく…。

~~~~~

悠里「足元、気をつけてね」

由紀「うん……。はあ…はあ…」

胡桃「分かつちやいたけど、途中で休める場所がないのは辛いな」「ああ…まつたく…」

ひたすら広く、ひたすらに暑い砂漠…。行けども行けども見えるのは砂ばかりで、休める日陰など一つとして存在しない。それでいて砂の上というのは歩きづらく、彼女達の体力を徐々に奪つていった。

悠里「ふう…。ランプちゃんたちは平気？」

ランプ「はっ、はいっ！」

きらら「うん、大丈夫だよ」

「…強い娘たちだな」

結構歩いたが、きららもランプもまだ余裕がありそうだ。マツチも

：浮いている分、体力に余裕があるのだろう。彼はそんな彼女らをそつと見つめて微笑み、前へ歩いていく。

胡桃「お前も平気か？」

「ああ、ご心配なく……。胡桃ちゃんこそ、疲れたら言つてよ。背負つてやる余裕くらいはあるからさ」

胡桃「あたしも大丈夫だ。まあ、よっぽど危なくなったら由紀でも背負つてやれよ」

見た感じ、由紀はかなりの体力を消耗している。悠里も少し危ないだろう……。だが、胡桃の方はまだまだ元気だというような感じだ。

「今だから言うけど……。さっきあのカルダモンって娘の話を聞いた時、僕は本気で揺らいでしまったよ」

胡桃「ああ……。この世界に残ればいい……。つてやつだな」

彼の横に並んで歩き、胡桃はその話に相づちを打つ。確かに、あの言葉には胡桃自身も多少揺らぎもした。しかし、彼はそんな胡桃以上に揺らいでいたらしい。

「この世界なら……。みんなと穏やかに暮らせるんじゃないか……。もう、みんなを危険な目に遭わせたりすることはないんじゃないか……。たとえ”やつら”がこの世界に残つてしまおうとしても、それでも……。この世界に残つていれば……」

胡桃「……………」

「なんて、自分勝手な事ばかりを考えてしまった……。でも、リーさんは凄いな。あの人の答えを聞いた時、本当にかっこいいと思つたよ……。僕は、みんなと楽な方向に逃げることしか考えてなかったつてのに……」

自らの考えが情けないもののような気がして、彼は苦しそうに笑う……。しかし、彼はただ逃げようとしただけじゃない。全てはみんなが笑つて暮らせるようにと考えた結果だ。胡桃はそれを知っていたから、彼の肩を叩いて優しく微笑む。

胡桃「ま、お前の考えだつて間違つちやいないと思うぞ。けど、今回は元の世界に戻ろう…。戻ったら戻つたでお前は…あたしらのそばにいてくれるんだろ？」

「ああ、もちろん。みんなの事を守るのは僕の仕事だからね」

胡桃「…なら、あたしはそれでいい。由紀がいて、リーさんがいて、美紀がいて、そして…お前がいる…。そうやって大切な人たちに囲まれて笑えるなら、どんな世界だっていい」

「…：ははっ、今の台詞もかっこいいな。まったく、リーさんといい胡桃ちゃんといい、うちの女性陣は頼もしいよ」

胡桃「そりやまあ、あんなところで生き抜いてきた人間だしな？お前もあたしらに負けじと、頼もしい人間になってくれよ」

「ああ、努力するよ」

にっこりと微笑み、彼は空を見上げる。胡桃も口ではこう言っているが、既に十分なほど、彼の事を頼もしく思っていた…。確かに彼には弱い面もあるが、自分達を守ろうとしてくれるその背中はとても頼もしく、彼がそばにいただけでも…胡桃は安心できた。

胡桃「…よし！ちよつと先行して、敵がいなか見てくるよ」

由紀「なら、わたしもいく〜！」

胡桃「あく…なら、離れないようにしろよ？」

由紀「らじゃ!!」

胡桃「じゃ、お前はきらら達のをそばにいてくれ。すぐ戻るから」  
「ああ、気を付けて」

胡桃と由紀は砂に足をとられながらも数十メートル先にある砂丘の上へと駆け上がり、辺りを見渡す。すると何かを発見したのか、二人は慌てた様子で砂丘からこちらへと駆け出した。

ランプ「…：二人とも、慌てて戻ってきます」

マッチ「きらら、コールの準備を…。あの様子、クロモンでもやつらでもなさそうだ」

由紀「な、なんか…かつこよかったね！」

胡桃「あれを見ての反応がそれなのか!？」

ズザアツ!!と、二人は滑り込むようにして皆の場所へと戻る。直後、さつきまで二人がいた砂丘の上から一つの大きな影が飛び出した。

ドサアツ!!

悠里「あれは…サソリ!？」

「これはまた…大物だ」

飛び出ていたその生物はサソリに見えるが、明らかに大きさがおかしい。そこらの軽自動車くらいなら越えていそうな大きさだ。

由紀「ど、どうする?」

胡桃「どうするも何も…」

「向こうがやる気いっぱいなんだ…。付き合ってやるしかないっ!」  
彼は勢い良く飛び込み、砂煙をあげながらこちらへ来るサソリを迎えうつ。いいタイミングで剣を振り上げ、頭と思われる箇所へとそれを振り下ろすが…

ガキツ…ン…!

「おっと…!？」

振り返っていた尻尾にそれを防がれ、彼は体勢を崩す。サソリはそのまま尻尾をブンツ!と横に振り払い、彼の事を横へと弾き飛ばした。

ドサツ!!

「ぐっ…! ああつ、鬱陶しいな…!」

叩き付けられた事で辺りの砂が舞い、細かな粒が目や口に入る。彼



は直ぐ様起き上がって剣を構え直すが、口の中のジャリジャリとした感覚がつい気になってしまう。

胡桃「バカっ！一人で突っ込むからだ!!」

彼に続き、胡桃もサソリへと立ち向かう。サソリはそれを迎え撃とうとし、彼女の方へと尻尾を構えた…。

胡桃「っ!!」

由紀「胡桃ちゃんっ！気を付けて!!」

胡桃「わかってるっ!!」

ある程度のところまで距離を詰めると、サソリはその尻尾を胡桃目掛けて突き出す。この尻尾の先にある針…これに毒があるのかどうかは分からないが、これだけ大きな針だ。毒がないにしたって、まともを受ければかなりの深傷を負ってしまうだろう。

ブンツ！ブンツ!!

胡桃「ったく…!!はあっ!!」

ガンツ!!

突き出される尻尾の攻撃を二度、三度とかわし、隙を見てシヤベルをその頭へと振り下ろす。面で叩いた事により、サソリの頭を覆う甲殻に微かなヒビが入ったが、まだとても倒しきれない。

「ほっ!!」

ガキイン!!

彼もすかさず横から飛び込み、頭を狙う。しかしそれはまたしても尻尾に拒まれ、二人は真つ向からサソリと睨みあった。

胡桃「ヒビは入ったんだけど…あの程度じゃ足りないか」

「…いや、あれで十分だ。今度は僕が突っ込むから、胡桃ちゃんはアレが邪魔にならないようにしてくれると助かる」

胡桃「……そういうことか。わかった、任せておけ！」  
少し考えてから彼の作戦を読み取り、胡桃はニヤリ笑う。直後、彼はもう一度サソリの前へと立ち戻った。

「さて、今度は一発で決める。その頭、大切に守ってろよ」

ヒビの入った甲殻を見つめながら自分の額をツンツンと小突き、サソリ相手に挑発を試みる。その挑発が効いたのか、はたまた偶然かは分からないが、サソリはギギギツツ……というような鳴き声をあげて彼の事を真っ直ぐに見つめた。

「それでいい……。こっちだけ見てろ」

勢い良く駆け出し、サソリとの距離を一気に詰める……。そうして間合いに入ったところで剣を振り上げ、その先端を頭のヒビへ向けた。

シュツ!!

振り上げた剣で勢い良く、強力な突きを放つ。しかしその動きは直線的だった為、サソリはこれまで同様に尻尾でその剣を払いのけようとした。……が

…ガッツ!!

胡桃「動くなって!」

彼の剣目掛けて動いた尻尾……その先端を、横に潜んでいた胡桃がシャベルで勢い良く弾き返す。尻尾を守りに回せなかったサソリは彼の剣を防ぐことが出来ず、先ほど入れられたヒビの中へ、もろに突きをくらった。

ズシャツ!!

『ギギギイ……ツ……!!』

きらら「す、すごい……!二人だけで……」

マッチ「倒した…のか…？」

ランプ「さすがですっ!!やっぱりこのお二方は…わたしが思っていた通りのっ…!!」

きららもこれから手助けしようとしていたのだが、あの二人はそれよりも早くサソリを倒してしまった…。動かなくなつたサソリを前…そこでハイタッチする二人を見たランプは、顔を真っ赤にして大興奮している。

「いやあ、説明が足りてないんじゃないかと不安だったけど、どうにか上手く連携出来たね」

胡桃「尻尾が邪魔なのは分かりきってたからな。簡単な事だ」

「にしても、そのシャベルは異世界でも大活躍だな」

胡桃「ふふん、スゴいだろ？」

なんて事を話しながら、二人は楽しげに笑う。ランプはその光景を少し離れた所で、目を輝かせながら見つめていたのだが…。直後、その目に大きな焦りが宿った。笑い合う二人の背後で倒れていたサソリが…ゆっくりと動き出したのだ。

ランプ「っ…!?サソリが!!」

マッチ「二人とも!そこから離れるんだっ!!!」

「あっ?」

胡桃「えっ?」

マッチの声を聞いた二人はそつと振り向き、サソリが起き上がつていた事を知る…。サソリは長い尻尾を大きく振りかざすと、それを勢い良く横へと薙ぎ払った。

ブンツ!!!

胡桃「なっ!?!」

「ちっ!!」

彼は咄嗟に胡桃を抱き寄せ、自らが盾になるよう背中を向ける。そうしてサソリの尻尾をまともに受けた彼は胡桃を抱いたまま弾き飛ばされ、そのまま悠里やきらら…みんなのいた場所まで吹き飛んでしまう。

悠里「きゃっ!」

由紀「うわあっ!!」

きらら「ひっ!!」

吹き飛ばされた彼、そして胡桃は悠里達にぶつかり、一行はまるでボーリングのピンのように倒れる。全員が倒れた衝撃で辺りには激しい砂煙が立ち、それぞれの身を包んだ。

ランプ「み、みなさん!大丈夫ですか!」

いち早く起き上がったランプは辺りを見渡す…。すると次第に砂煙もなくなり、砂に埋もれかけていた悠里、由紀、そしてきららが起き上がった。

悠里「とりあえずは…ね」

由紀「いたたた…」

きらら「っ…さっきのサソリは…?」

きららは目線をそこへ向け、サソリの動きを警戒する。しかしサソリはさっきので完全に力を使い果たしたらしく、ぐったりとした様子で砂の上に伏していた。

胡桃「…おいっ!大丈夫か!」

「いてて…。ああ、何とか。それより、胡桃ちゃんは大丈夫?どっか怪我していない?」

胡桃「あたしは大丈夫だけど…お前が…」

彼は何でもないように起き上がったが、少しだけ辛そうな表情を見せている。恐らく、胡桃を庇った際にサソリの攻撃をまともに受けたせいで背中が痛むのだろう…。

胡桃「……ごめんな」

「んっ？なにが…？」

胡桃「きつき、あたしを庇ってくれただろ…。だからその…ありがとう」

「どういたしまして…。お嬢様」

満足そうに笑った後、彼は服についた砂を手でパンパンと払う。彼だけではない…砂の上に転がってしまったせいで全員の服が砂に汚れ、口の中にもジャリジャリとした嫌な感触がある。

胡桃「つたく、酷い目にあつたな…。ぺっぺっ！」

由紀「うええ…服の中まで砂が入ってる…」

悠里「この状況で脱ぐわけにもいかないし、もう少し進むまで我慢しましょうね」

由紀「は〜い」

一先ず袖に入っている砂だけを払い、一行は再び歩き出す。しかし、彼だけは歩きながらも何かを考えている様子だ。

マッチ「どうかしたのかい？」

「いや…ちよつと気になってね。…りーさん！この状況でも、少しくらいなら服を脱いで大丈夫だと思いますよ！」

悠里「…う…う〜ん」

「ほら、さすがに砂まみれの服で動くのは気持ち悪いでしょう？パッと脱いで、パパッと払っちゃった方がいいに決まってる！」

きらら「で、でもさすがにここでは…」

胡桃「きらら、そいつの相手はしなくていいぞ…。ほら、りーさんもランブも、早く行こうぜ。美紀が待ちくたびれちまう」

『砂が入っていると気持ち悪いから』…。彼は必死にそれを訴え続け、女性陣の服を脱がせようとする。これまで彼のように必死な異性を

見たことがなかったきららはこんな時どうすれば良いのかと反応に困ったが、胡桃達からしたらこれも慣れっこだった為、大したリアクションは見せなかった。

「…ちっ。だめか」

マツチ「キミは…そうまでして彼女らの服を脱がせたかったのかい？」

「そうだよ。…何か問題でも？」

マツチ「いや…。ただ、男のクリエメイトというのはみんなキミのような人間なのかなあと思ってたね。これまでに会ったクリエメイトはみんな女性だったから、キミのような人間を見ているのは新鮮な気分だよ」

「そうかい…。ま、好きならだけ観察すればいい。美紀を取り戻して、元の世界に帰るまでの間までは…」

マツチ「…ああ、そうさせてもらおうよ」

先を歩く女性陣から少し遅れ、彼とマツチも前へと進む。前に行く由紀やきらら達は何やら楽しげに話しているが、どんな会話をしているのだろうか…。そんな事を気にしつつしばらく歩いてくと、彼の脳内に一つの疑問が浮かぶ。

「そういえば…マツチって男？それともおん——」

きらら「二人ともっ！砂漠の終わりが見えてきたよ!!」

マツチ「ああ、すぐに行くよ！」

(…聞きそびれた)

出来ればマツチの性別を知りたかったのだが、そのタイミングを逃してしまふ。まあ仕方ないだろうと思いつつ彼はきらら達のそばへと駆け寄り、そのまま砂漠を抜け…。きららが反応を示した教会のような建物へと踏み込んだ。

さばくぐらし (3)

きらら「パスは間違いなく、ここから感じるんだけど…」

カルダモン「ここで合ってる。よく辿り着いたね」

そこへと入った一行が辺りを見渡すと、物陰からカルダモンが姿を現す。きらら、胡桃、そして彼は彼女を前にして身構え、悠里は由紀の肩を後ろから掴んだ。

胡桃「わざわざお出迎えか…。リーさん、由紀を離すなよ」

悠里「ええ、わかってるわ」

カルダモン「もうお互いの狙いは分かってる…。なら、隠す必要もない」

カルダモンは横にずれるようにして歩き、建物の奥…そこにあるものが由紀達に見えるようにする。そうして見つめた視線の先…そこには一つの大きな鳥かごのような物があり、中には彼女らの後輩、美紀の姿があった。

美紀「先輩っ！」

由紀「みーくんっ?!リーさん!離してっ!!」

悠里「ダメよ。離れたら美紀さんの所まで行っちゃうでしょ?」

由紀「当たり前だよ!だって…みーくんを助けないと!!わたし達は先輩だもんっ!!」

胡桃「まあ待て…。きららを信じろ」

興奮状態にある由紀をなだめ、胡桃はきららを見つめる。きららはそれに応えるようにして一歩前へと踏み込み、カルダモンの目を真っ直ぐに見つめた。

カルダモン「召喚士…:きららっていうんだね」

ランプ「覚えておいた方がいいですよ!なんてったって、きららさんはコールを使えるんですから!」

カルダモン「それは知ってる…。さつき何度も見たから…。でも、あれならあたしの方が上」

そう言ってから両手にナイフを構え、カルダモンは勢い良く地面を蹴る。彼女はそうして教会内を縦横無尽に飛び回り、そのスピードできらら達を翻弄した。

胡桃「お、おいっ…：…こんなに速かったっけ、あいつ」

「いや、ここまで速くはなかった。これは…：少し面倒か？」

悠里「やつぱり、さつきは本気を出してなかったみたいね…」

カルダモン「洞窟は狭すぎるから…。ここなら、あたしはもつと速く動ける」

そう告げる声は聞こえるが、彼女自身の姿をハッキリと目に捉える事が出来ない…。目の前でただ、赤い影が飛び交っているのが見えるだけだ。

マツチ「由紀の言ったとおりだったか…。さすがはカルダモンというべきかな…」

ランプ「でも、きららさん達だって負けてません！絶対に勝つてくれます！」

由紀「頑張つてきららちゃん！誰だって誰かのヒーローになれるって、ダリオマンも言ってたよ！」

きらら「ゆ、由紀さん!?ダリオマンってなんのこと!?!」

由紀「きららちゃん、ダリオマンも知らないの!?!」

胡桃「このタイミングでする話か!?!」

きらら、そして胡桃はカルダモンの動きを必死に追いつつ、由紀の言葉への反応も返す。一方、彼もまたカルダモンの動きを目で追いなから、きららの元へ駆け寄っていった。

「さて、僕らは何を手伝えばいい?」

きらら「カルダモンを建物の隅…狭いところへと追い込めば、動き



を鈍らせることが出来るかも知れません」

飛び回るカルダモンに聞こえぬよう、きららはそれを静かな声で告げる。その作戦を聞いた彼はカルダモンの事を目で追うが、やはり凄まじい速度だ…。

「あれを隅に…か。簡単に言ってくれる…」

胡桃「おいおいっ！無理だ、なんて弱音は吐くなよ!」

カルダモン目掛けて振り払われたシャベルは全て空振りに終わり、胡桃の表情に焦りが出始める…。彼はそんな胡桃の横へと立ち、右手に剣を構えてニヤリと笑った。

「ああ、大丈夫…。楽勝だ!」

彼は飛び回るカルダモンをいくらか観察した後に勢い良く駆け出すと、持っていた剣を大きく振り上げる。それを見守っていた由紀や悠里からすると、その方向は今カルダモンがいる場所とはまるで違う方向に見えたのだが…。

カルダモン「…ッ!!」

彼はカルダモンが動く先を予測していたらしく、カルダモンの方から彼の間合いへと向かっていくかのように飛んでしまう。気付いた時、カルダモンの目の先まで剣が振り下ろされていたが、彼女は身を捻ってどうにかそれをかわし、地面へと転がった。

ドサッ!!

カルダモン「っ!!今のは危なかった…」

「速さにものを言わせてむやみに跳ね回るのは止めた方がいい。今のはギリギリかわしたから良かったけど、下手したら当たってた。今度からスピードで翻弄するだけじゃなく、しっかりこっちの動きにも注意するんだね」

カルダモン「…ふふっ、本当に面白いな」

この状況でもまだ余裕のある笑みを浮かべ、カルダモンは再び辺り

を飛び回る。彼女は飛び回りながらもこちらの隙を窺い、そして攻撃を仕掛けてきたが、きららも胡桃も彼も…それを上手くかわし続ける。少しずつ、彼女の速度に目が慣れてきたようだ。

胡桃「ふ…っ!!」  
ガキンツ!!

カルダモン「くっ…!」

胡桃はカルダモンの攻撃をシヤベルで防ぎつつ、そのままシヤベルを振り払って彼女の体を弾き飛ばす。カルダモンは数メートル後ろの方へと飛ばされながらも体勢を整え再び飛び回ろうとするが、飛ばされた先が少し狭く、跳躍するまでの動きに隙が生じた。

「はい、ストップ。鬼ごっこなんてかなり久々だったけど、まあ楽しめたかな」

カルダモン「…いつの間に」

その地点で待ち構えていた彼が一瞬の隙をつき、カルダモンの背後で剣を向ける。するとききららもすぐにそこへと駆け寄り、彼女の目の前で杖を構えた。

カルダモン「ここまでです!」

胡桃「きららの作戦、上手くいったな」

きらら「いえ、お二人の協力があつたからですよ」

「どういたしまして」

カルダモン「…そう。あたしをここまで追いやるのは、きららの作戦だったんだ。きららも強いんだね…。ただ、力を借りてるだけじゃないんだ」

ようやく動きを止めたカルダモンをきらら、胡桃、彼で囲む。これで、彼女を完璧に追い込んだかと思つたが…。

カルダモン「でも、みんな揃って詰めが甘いかな」

「っ！」

胡桃「なっ!？」

きらら「き、消えた!？」

ランプ「皆さん!上です!!」

囲んでいたハズのカルダモンの姿が一瞬にしてなくなり、きららは目を丸くする。直後、ランプの声を聞いてから上を見上げると、教会の天井：そこに空いていた穴の上にカルダモンの姿があつた。天井までの距離は十メートル程あるが、彼女は一瞬にしてそこまで跳躍したらしい。

きらら「あんなところに：!！」

カルダモン「美紀!美紀ならきつと、どんな世界でも生きていけるよ：。じゃあね：」

美紀「：カルダモンさん」

天井の上から、下にある檻の中にいる美紀へ：どこか優しくも見える笑みを向け、彼女は一行の前から姿を消す。あのようなスピードで逃げられたら、追い付くのは難しいだろう。

「：ま、美紀は無事みたいだし。無理に追う必要もないか：」

由紀「みくくうんっ!!」

美紀「先輩：まだ檻が開いてないですから」

一刻も早く美紀を救うべく、由紀が檻を揺らす。しかしこの檻はどうみても由紀の力で開けられる物ではなく、美紀はガシヤンガシヤンと音を鳴らすその檻の中で呆れた表情を浮かべた。

由紀「胡桃ちゃん!早く開けてよ!!：こう、シャベルでズバーンて!!」

胡桃「いや：これはさすがに無理が：：：」

由紀「むううっ!!じゃあっ……!」

首を横に振る胡桃に対して頬を膨らませた由紀は、次に彼の事を見つめる。その目線に気が付いた彼はニヤリと微笑み、檻の前に立って剣を振り上げる。

「よし、やってみるか……!」

由紀「うんっ!!」

胡桃「いやいや……無理だろう?」

「……………だね」

胡桃に冷めた目を向けられ、彼は今一度考えた。今、自分が持っている剣……そして美紀を閉じ込めている檻……。どう見比べても、檻の方が頑丈そうだ。彼が苦笑いしながら剣を下げると由紀がため息をつき、そしてきららが言いづらそうに口を開く。

きらら「あ、あの……わたしが開けても平気ですか?」

「んっ?ああ……開けられるのなら、是非ともそうしてほしいかな」

悠里「お願いするわ」

きらら「では……開けますね」

きららが檻の前に歩み寄り、杖を構える。すると彼女の力に反応するかのようにして檻は消え去り、美紀が外へ出られるようになった。……のだが、そんな美紀を前にして由紀は何故か膨れっ面を見せている。

由紀「今、先輩は怒っています。何故だかわかりますか、みーくん」

美紀「えっ……と……」

由紀「離れちゃだめだよ。学園生活部は、みんなでないきやだめなの」

美紀「べ、別に私のせいじゃ……」

美紀がそう言うのも当然だ。彼女だって、離れたくて離れていた訳

ではないのだから。しかし、彼女は彼女なりに皆に心配をかけた事を申し訳無く思っているらしい…。

美紀「けど、そうですね…。心配かけてごめんなさい。胡桃先輩も、りーさんも…それに、先輩も」

胡桃「おう」

悠里「美紀さんが無事でよかったわ…」

「ですね。とりあえずは一安心だ…」

由紀、胡桃、悠里…そして彼へ声をかけた後、美紀は改めてほつとする。一時はどうなるかと思っただが、こうして自分の先輩達が助けに来てくれたからだ。

美紀「それから、えっと…召喚士の方ですよね？」

きらら「はい、初めまして美紀さん。きららっぺいいます」

ランプ「ランプといいます、美紀様！お見知りおきを！」

マツチ「マツチだ…。よろしく」

初対面だったきらら達への挨拶を済ませ、美紀はニツコリと微笑む。そうして皆で少しの間、談笑をしていると…突然、由紀達の体がボンヤリと発光した。

由紀「これって…」

ランプ「はい…。説明させていただいたとおり、皆様が元の世界に戻る予兆です」

胡桃「そっか…。お別れ、だな。もうちよい、こっちの世界でのんびりしていてもよかつたんだけど…」

由紀「うー。きららちゃんの家にも、異世界ホームステイしたかったのに…」

美紀「由紀先輩、異世界でも迷惑をかけちゃいけませんよ…」

悠里「大丈夫よ。みんなちゃんとしてたから。本当に助かったわ」

改めて感謝の気持ちを伝えるべく、悠里はきらら達に頭を下げる。彼女らと出会えなければ、美紀を助け出すことは出来なかったかもしれない…。

ランプ「わたし達こそ、皆様のおかげでいっぱい助けてもらいました！」

由紀「ランプちゃん達も、早く女神様を助けられるといいね」

「せっかくだし、もう少し手助けしてあげたかったけど…こっちは退場か」

胡桃「だな…。次に会う時があれば、その時はもうちよつと遊んだりもしたいな」

由紀「学校行事で、ゲーム大会があればいいのになく…」

美紀「……ゲーム大会？」

ため息混じりに放たれた由紀の言葉に首を傾げつつ、美紀はそっと微笑む。何にせよ、確かにきらら達とはまた会いたいし、遊んだりもしたい…。

由紀「その時はまた、きららちゃん達も学園生活部として助っ人参加だね！ランプちゃんもいいかな？」

ランプ「もちろんです！全力で助けになってみせます!!」

きらら「………お互い、がんばりましょう」

悠里「………そうね、また会いましょう」

由紀「じゃあね！ばいばいっ!!」

ランプ「皆様！お元気でっ!!」

それぞれから放たれる光が強くなり、次の瞬間…由紀達はもういなくなっていた…。彼女らとの別れに寂しさを抱くランプ達だが、どういう訳か…彼だけはまだそこいた。

「……どうなってる？…僕だけ置いてきぼりかい？」

彼の体も光ってはいるが、まだ消えてはいない……。きららやマツチはそれに首を傾げるが、ランプにはある心当たりがあった。彼女は彼の前へと歩み寄り、小さな声でその心当たりを告げる。

ランプ「あなたは……少し特別だからかも知れません。由紀様達はこの世界にある、”聖典”の登場人物ですが、あなたはそれとは違う……切れ端”と呼ばれる物の登場人物なのです”

「切れ端……？」

ランプ「はい。聖典と似たような物なのですが、あまりその存在を知られていません……。わたしも前に偶然、その一部を見ることが出来ただけです……。本来の聖典ではなく、切れ端の登場人物であるあなたがここに召喚された事は、アルシーヴにとっても誤算だったはず……」

「まさかとは思うけど……僕は帰れないのか？」

何となく嫌な予感がしてしまい、彼は冷や汗をかく。するとランプは慌てたように両手、そして首を横に激しく振った。

ランプ「そ、そんなことはありませんっ!!ただ、少しだけ元の世界に戻るまでの時間差が生じる……というだけかと！」

「ああ……ならよかった」

ほっと胸を撫で下ろし、彼は安堵する。この世界も悪くは無さそうだが、せつかく仲良くなれた由紀達と離れ離れになるのは少しばかり……いや、かなり寂しい。

ランプ「わたしは……切れ端の方のお話もいくらか見たことがあります。聖典の方とは、また別の物語……。由紀様達が……あなたと出会うお話を……」

「僕らの話……ね。ええっと、少し気になるんだけど、退屈な話だったりしてない？楽しんでもらってる？」

ランプ「……はい。あなたがいる事で、由紀様達の笑顔が増えました

から。それを見ているわたしも、自然と笑っちゃったりして……」  
「……………」

ランプ「あなた達の物語…わたしはその全てを見たわけではないですが、あなた達にはこの先、辛いこと…苦しいことがあると思います…。でもっ!!由紀様達と一緒になら、あなたがいてくれれば、それを乗り越えられるはずですよ!!だから…:がんばって下さいっ!!」

自分に出来るのは、こうして彼を応援する事だけ…それが悔しくて、ランプは半泣きになる。しかし彼女のそんな気持ちだけでも、彼は少しだけ強くなれた…。

「ああ、ありがとう…。これから頑張るよ」

ランプ「は、はいっ!!」

きらら「では、今度こそ…:さよならです」

マッチ「元気でね」

彼から放たれる光が強さを増し、別れの時が来たのだと知る。そんな中、ランプはどうしても最後に聞きたいことがあった。

ランプ「あ、あのっ!こんな事、今さら聞くのは申し訳ないのですが…」

「ん?なにかな?」

ランプ「あなたの…:お名前が聞きたいですよっ!!切れ端に記されているあなたの名前は何故か掠<sup>かす</sup>れ消えてしまっていて…:最後まで読めなくて……………」

「…それ、不良品じゃない?」

自分の名前のところだけが消えていたと知り、彼はため息を放つ。物語が記してあるというにはかなりの文字数だろうに、自分の名前の部分だけ消されているとは…:誰かの嫌がらせとしか思えない。

「……………よし!じゃあ教えてあげるけど、次に会った時にしよう。ま



たいつか、みんなと遊びに来るから」

ランプ「は、はいっ！約束ですよ!?絶対に、また皆様と遊びに来てください！そして…その時はお名前、教えて下さいね？」

「…うん。約束する。じゃあ…ランプちゃんもきららちゃんもマツチも…またね」

きらら「はい、また今度！」

マツチ「待ってるよ」

きらら達が返事を返すと、彼はこちらへそつと手を振り、先程の由紀達と同様に消えていく…。そうして僅かに残った光が辺りを舞う中、きらら達は『ふうっ』と一息ついた。

ランプ「ああ…また帰ってしまわれました…」

きらら「そうだね…。でも、今回は本当によく助けてもらったよ」

マツチ「…さて、彼等だつてがんばってるんだ。僕らもがんばらないとね。早く、アルシーヴをどうにかしないと」

きらら「うん…。そうだね…！」

今回の一件についてはどうにかなったが、まだ完全にアルシーヴを止められた訳ではない。これから旅を続け、クリエメイトを救っていかなくては…。きらら達は休む暇なく、また次の地へと向かっていった……。

いせかいぐらし！  
第一話『めざめ』

??? 『…起きて』

誰かの声が頭に響く。聞き覚えのある、女の子の声…。

”彼”はその呼びかけに応えるべく、重いまぶたを開いた。

「つ…………ぐ……………」

??? 「…おはよ」

彼はそのベットの所で体を起こし、すぐ横を向く。目線を向けた先にいた黒髪の少女はベットに両肘を乗せながら、起き上がった彼の事を上目づかいで見つめていた。彼女は見慣れない黒のローブのような物に身を包んでおり、まるで真っ黒なてるてる坊主のようだ。

「ええっと、おはよう…真冬」

彼女の名を呼び、それからまだ貸すかに眠気の残る両目を擦る。すると彼が”真冬”と呼んだその少女は深くため息をつき、立ち上がりながら答えた。

真冬「この世界だとボクの名前は真冬じゃなくて、ウィンターなんだけど…」

「ウィンター？……………はいはい、分かった分かった」

真冬「……………」

朝から何の冗談なのかと思いつつ、彼はベットから降りる。眠気覚ましに少し顔でも洗おう…。そう思って歩き出した時、彼は辺りを見てある事に気がついた。

「……………ねえ、( ) ( ) ( ) ?」

目覚めたその部屋は自分の知っている部屋ではなく、狭い空間にベット…そしてぼろぼろのタンスが置かれているだけの質素な部屋だった。こんな部屋に見覚えのないし、今自分が着ている鉄の胸当てがついた茶色のコートや黒のジーンズ…これらにも見覚えがない。何が起きたのかと戸惑う彼は辺りをキョロキョロと見回すが、一方で真冬は落ち着いていた。

真冬「ちゃんとした説明と簡単な説明…どっちがいい？」

「あ…ちゃんとした説明を頼む」

真冬「うん、わかった…」

参ったように頭をかきながら、彼は真冬に説明を頼む。すると真冬はさっきまで彼が眠っていたベットに腰掛け、一度だけコホンと咳払いをしてから口を開いた。

真冬「ここはボクらのいた世界とは別次元の世界。どういうわけか知らないけどボクらはここへ呼ばれて、ある目的を命じられた。今この世界では遠い昔に封印されたハズの焰ほむらの王おうってヤツが大暴れしているらしくて、この世界の王と姫は大慌おどろて…。王国の精鋭達を集めて焰の王を討とうとしたけど結局それも失敗に終わり、打つ手がなくて困っていたところにボクたちが——」

「待った。やっぱり簡単な説明で頼むよ…」

真冬「うん、わかった…」

真冬が告げた言葉はまるで日本語ではないかのように意味不明で、要点が掴めない。恐らく、彼女は自分をドッキリにでも嵌めようとしているのだろう。彼がそんな事を思っていると、彼女はそれを本当に簡単に説明した。

真冬「ファンタジーな世界に来ました。みんなで魔王を倒そう」

「……そういうドツキリか」

真冬「ボクも最初はそう思った…。きつと由紀、もしくは穂村のイタズラだって。でも二人の姿はないし、様子を撮影しているであろうカメラなんかも見当たらない」

そう言い放つ彼女の顔は真剣そのもので、彼の額に冷や汗が流れる。そもそも真冬はそんなドツキリをするような女ではない。その彼女がこのような真剣な顔で言うなら、ここは本当に……

「外、出てみた？」

真冬「出た。魔物も倒した」

「……魔物？」

あまりにさらつと言った発言が衝撃的で、彼は目を丸くする。しかし、落ち着いてみればこうも思えた。

(まあ……かれら”も魔物みたいなもんだしな……少しふざけただけだろう)

魔物というのはきつと、”かれら”の事をファンタジー風に言っただけだ。真冬もたまには面白い事を言うのだな。そんな風に思ったが、どうも違うようだった。

真冬「この世界に”かれら”はいないけど、その代わりに魔物という存在がいる。強さは種類によって異なるみたいだけど、この村のそばには比較的弱いものしかないみたいだね」

「……本気で言ってる？」

真冬「本気だよ。っていうか、はやく現実を受け入れてくれる？キミがこの話を信じてくれないと話が進まない」  
「って言われてもねえ……」

真冬「…わかった。百聞は一見にしかず」

「へっ?」

そんな事を言ってから真冬は立ち上がり、彼の手を掴む。彼女は彼が戸惑うのもお構いなしに部屋の扉を開けて外へと飛び出し、そこに広がる光景を彼に見せつけた。

「……………」

真冬に手を引かれ、外へと連れ出された彼は思わず言葉を失う。晴れた空の下で彼が見たものは井戸から水を汲んだり、畑を耕したりする人や、道ばたで楽しげに会話を交わす人々…。ここはどこかの農村のような場所であり、人々は何事もないかのように生活をしていた。

真冬「…これで信じたよね?」

目の前の光景に驚いていると、真冬が手を離して彼の反応を待つ。辺りにいる人々を見て、確かにここは自分達がいるいつもの世界と違うという事は分かったが、それでもまだ納得できないことがあった…。

「なんでこんなに平和な感じなの?」

真冬「えっ? いや…だから、この世界には”かれら”がいないんだよ」

「ああごめん、そういう事じゃない。この世界には”かれら”はいないけど、代わりに魔物だの魔王だのがいるんですよ?…そのわりには平和そうだなあと思ってた」

辺りを行き交う人達の表情は不安を感じているようなものではなく、どこか違和感がある。本当に魔王だのなんだのがいるのなら、不安で夜も眠れないのではないだろうか…。

真冬「そこはほら、ボク達が現れたから安心してるんだと思う…。まだ言つてなかったけど、ボクとキミ…そしてあと四人の少女がこの世界を救うとかなんとか予言されていたみたいで…」

誰が言つた予言なのかは知らないが、真冬は表情一つ変えずにそれを告げていた。彼女の言うあと四人の少女というのも大体察しがつく…。これが夢でないことを実感して彼が深くため息をついていると、辺りにいた村人が真冬…そして彼の方へと寄つてきた。

村の女「ウインター様、おはようございます！」

真冬「うん：おはよう」

彼はウインターという呼び名を疑問に思ったが、真冬はその呼びかけに答えていた。真冬の事をウインターと呼んだその若い女性は彼女の隣に立つ彼を見て、やたらと嬉しそうな笑みを浮かべる。

村の女「もしかして、こちらの方は…」

真冬「：予言にあつた救世主の一人。ボクの仲間だよ」

真冬がそう答えると、その女だけでなく辺りにいた村人全員がざわつく。彼のいた巡ヶ丘には生存者があまりいなかったもので、こうして大勢の人に囲まれるというのはかなり新鮮な体験だった。

村の男「なつ、名前はなんと言うんですか!？」

「んっ？あぁ、僕の名前は——」

真冬「ナナシだよ。みんな仲良くしてあげてね…」

かなりガタイの良い男に名前を聞かれ、彼はそれに答えようとするが…真冬がそれを遮って彼の代わりに答えてしまう。しかもその名は明らかかな偽名であり、彼は彼女の肩を引いた。

「おい、ナナシって何さ？」

真冬「キミの名前…。せっかく異世界に来たんだもん、それっぽい名前にしたいでしょ？」

「ああ、だから真冬はウインターと名乗ってる訳ね。…それにしたつてだ、ナナシのどこがそれっぽい名前なんだ？もっと良いのがあるだろうに…」

真冬「じゃあ訂正すれば…？この雰囲気の中でそれが出来ればただど…」

辺りの村人は彼の事を見て『ナナシ様く！』『ナナシさくん！』と騒いでおり、その名が間違いだとはとても言い出せない雰囲気だった…。彼は仕方なくその名を受け入れ、どこかへと歩く真冬のをついていく事にした。

「…で、僕らはこれから何をするの？」

真冬「えっと、王様たちはボクらに焰の王を倒してほしいって言うてたな…」

「焰の王…？ああ、魔王みたいな存在のヤツか。ところで、真冬ちゃんはその王様といつ話したの？」

真冬「三週間くらい前…」

「…はい？」

思わず彼女の顔を見つめ、その言葉は間違いではと疑う。何せ彼はさっきここに来たばかりで、昨日までは普通に柳の屋敷にいたのだ。その時あの屋敷には真冬も確かにいたのだから、彼女だけがここで三週間以上過ごしているなどあり得ない。

真冬「こつちと向こうだと時間の流れが違うのかな？まあよく分からないけど、とりあえずボクはかなり前からここに来てたよ。それで

今日、キミがここに現れる事を魔法で知ったの」

「その魔法つてのは誰が使ったの？どつかの魔法使い？」

真冬「ボクだよ。この世界では、大魔法使いウインター」って呼ばれてるんで…」

真冬は自慢げにニヤリと笑い、羽織っている真つ黒なローブのフードをかぶる。それは確かに魔法使いっぽい姿であり、彼女の雰囲気と合っていた。彼がそんな真冬の事を見つめていると、彼女は今かぶったばかりのフードをどかして目を見つめてきた。

真冬「あとの四人もキミと同じタイミングでこの世界に召喚されたみたい…。場所は大体わかるから、一緒に迎えにいこ？」

真冬は彼に手のひらを差しだし、にっこりと微笑む。だが彼はそれを握る事なく、彼女の横を通り過ぎた。辺りには村人の姿もあるので、手を繋ぎながら歩くのは照れ臭いのだ。

真冬「…異世界デートだよ？めったに出来ないよ？」

「やけに楽しそうだね」

真冬「そう？…ふふっ、ボクってこういう雰囲気ของเกมとか好きだったから、自分が魔法使いになれてはしゃいでるのかも」

そう言つて、真冬は彼の隣で鼻唄を歌いながらスキップをします。あちらの世界にいる時はクールな印象が強かったので、彼女のこんな無邪気な面を見たのは初めてだった。

「あとの四人つてのは、やっぱりあの娘たちだよな…」

元の世界で共に過ごしてきた彼女達の顔を思い浮かべ、ポツリと呟く。それは真冬に尋ねた訳ではなくただの一人言だったのだが、彼の



少し前をご機嫌な様子で進む真冬はその答えを教えてくれた。

真冬「うん、そうだと思うよ」

「因みに…何で分かるのかって聞いてもいい？」

真冬「魔法のおかげ…としか言えないかな。ごめん、一般人に口で説明するのは難しい。なんて言えばいいのか全然分からなくて」

説明するのが難しいのなら仕方ない。彼はこの事をそれ以上尋ねないようにしたが、真冬が何気なく言った“一般人”という言葉に笑いかける。どうやら、大魔法使い様は彼の遥か先の領域に達しているらしい。

真冬「魔法って本当に便利だよ…。何もないところでも火とか出せるし、ぬるい飲み物もキンキンに冷やせるし、明日の天気とかも分かるし…」

(天気が分かる魔法って…凄いだろうけど微妙だな)

楽しそうに魔法について語る真冬だが、そのあとに彼女の語った魔法は『濡れた服がすぐに乾く魔法』だの『針に餌がなくなるとも魚が釣れる魔法』だの…凄いいは凄いがどこか微妙な魔法ばかり。彼女は人々に『大魔法使い・ウインター』と呼ばれているらしいが、この世界ではそんな魔法しか使えない人間でも大魔法使いと呼ばれるのだろうか？

真冬「この小屋…」

魔法の話をしている最中、真冬は突然立ち止まって目の前にある小屋を見つめる。木材を簡単に合わせて作ったのであろうその小屋、普段は村人達が畑仕事をするための道具をしまう為に使っているものらしいが…。

「……が……なに？」

真冬にそう尋ねると、彼女は無言のままその小屋へと近付く。彼女はそのまま小屋の扉へ拳を寄せ、軽くノックをした。

コンコンツ…

直後、小屋の中から誰かがひっそりと喋るような声が聞こえる。それは一人のものではなく、数人の声…。その声、そして気配を感じ取った真冬はニヤリと笑い、一気に扉を開いた。

ガチャツ!!!

由紀「わっ!？」

胡桃「うおっ!!」

悠里「っ!」

美紀「あぶなっ……って、あれ?」

真冬が扉を開いた瞬間、見知った四人の少女が外へ崩れ込むようにして姿を現す。恐らく、狭い小屋の中で扉に寄り掛かるようにして身を寄せていたのだろう。それを真冬が急に開いた事により由紀、胡桃、悠里の三人が倒れる中、美紀だけはどうにか倒れることなく真冬と彼の事を見つめ、そして目を丸くしていた。

美紀「真冬?それに、先輩も…」

真冬「みんな思っていたより近くに出てきたんだね。すぐ合流できてよかった…」

美紀からワントンポ遅れ、由紀達も彼と真冬の実在に気づく。彼女達は地面から起き上がるなり辺りを見回し、驚いたような表情を浮かべた。彼女達は真冬がその小屋の扉を開けるまでは半分眠っていた

状態だったらしく、自分達がこんな場所にいるなんて知らなかったよ  
うだ。

由紀「ここどこ？」

悠里「全く見覚えがないけど…」

美紀「人もたくさんいますね…」

胡桃「…おい、どうなってる？」

自分達が出た先は青空の下、たくさんの人々が平和に暮らす村…。  
あの世界からやってきた彼女達にとってその光景は異様であり、それ  
ぞれが自分達の目を疑っていた。

真冬「じゃ、キミ達にも説明するね…」

彼女達に分かるよう、真冬は彼にしたのとほぼ同じ説明をする。話  
を聞いた彼女達はかなり驚いたようだったが、目の前の光景を見たら  
信じない訳にいかなかったらしい。

悠里「つまり…ここはあの世界とは別の世界なのね？」

真冬「うん」

胡桃「奴らがいなくて、代わりに魔物がいる世界か…」

由紀「でもすごく平和そうだよ？ほら、子どもが手ふってる♪」

少し先にいた幼い少女がこちらへ手を振ってきたので、由紀はそれ  
に応えるように手を振り返す。どうやら少女は真冬に手を振ってい  
たらしいが、由紀が振り返すと嬉しそうな顔をしていた。

美紀「確かに平和そうですね。それはさておき、私たちのこの格好  
は…」

美紀はそつと目線を下げ、今自分が着ている服を確認する。この世

界に来る前は普通のパジャマを着て眠ったはずなのに、今の美紀が着ているのは白のミニスカート、そして鉄の胸当て……。両の二の腕には緑色の肩当てのような物がついており、そこから延びた袖が肘までを覆い、肘から指先までを黒いグローブが覆っていた。

美紀「なんか、初めて見る格好になってるんですけど……」

見覚えのない格好に戸惑いながら首を捻って背面の方を確認してみるとミニスカートの後方部：腰の辺りに翡翠色マントのような物がついていて、自分が動く度にそれがヒラヒラと揺れる。ガーターベルトに止められ太ももまで上がっているソックスも普段履いている物と微妙に違うようだ。そこはまだ良いとしても、この格好は胸当てからスカートの間に何も無いため、外に晒された腹部がスースーして落ち着かない。

悠里「あら本当。何かしらね、この格好」

辺りの光景や異世界に来たという事実が衝撃的過ぎて気づくのが遅れたが、確かに全員の服装が見たことのないものになっている。それは悠里も例外ではなく、彼女は黒をベースとしたコルセットスカートを着用し、白のローブを羽織っていた。しかしそのコルセットスカートの胸で支えている為に彼女の谷間がかなり強調されており：加えて羽織っているローブも微妙に布面積が少ない。その白のローブは背中、両腕の肘から先こそ覆えているが、彼女の肩：そして胸元は惜しげなく晒されていた。

真冬「たぶん、この世界に来た瞬間それに合わせた格好をさせられるようだね。ボクもほら、魔法使いっぽい格好でしょ？」

真冬はその場で両手を広げながらクルリと回り、自らの姿を悠里たちに見せつける。大きなフードまでついている真っ黒なローブに身を包んだ真冬は確かにおとぎ話に出てくる魔法使いのような姿であ

り、それを見た悠里と美紀はクスツとおかしそうに笑った。

美紀「ほんと、魔法使いって感じだね」

悠里「ローブの下はどうなってるの？」

真冬「えっと…黒いミニスカートと、同じく真っ黒なシャツ着てる。でもこのシャツ真ん中辺りに下から上への切り込みがあって、おへそ見えちゃうから恥ずかしいんだよね」

真冬はローブを少しだけ捲り、その下に履いていた黒のミニスカートを悠里達に見せる。足元まで覆っていたそのローブが捲られて初めて分かったのだが、彼女も太ももまでを覆う黒のソックスを履いていた。しかし彼女が見せたのはそのスカートのみで、シャツまでは見せてくれなかった。どうやら、それを見せるのがよほど恥ずかしいようだ。

胡桃「いやいやっ！あたしらの方がよっぽどハズいだろっ!」

シャツを見せないのはへそが見えて恥ずかしいからだと言冬が語る中、それを聞いた胡桃が大声を出す。彼女が着ているのはかなり短めの黒いショートパンツであり、太ももやらへソやらが大胆に晒されていた。しかも彼女の上半身は胸を黒のチューブトップで覆っているだけで、他にこれといった物をまとっていない。強いて言うなら左手と両足、それぞれに肘当て、膝当てがついているという事と…四つに裂けている腰布をまとっているくらいだ。

胡桃「うう…なんだよこの格好…」

悠里「たしかに…かなり大胆というか」

美紀「露出多めですね…」

真冬「あ…腰布に可愛い尻尾がついてる。胡桃、にやーにやーみたいで可愛いよ」

顔を真つ赤にしてその格好を恥じる胡桃の背後にしれつと回り込み、真冬は彼女の腰布に尻尾のような物がついている事に気づく。真冬はそれを指先で突つつきながら可愛いと言いニヤニヤしていたが、当の本人はまだ顔を真つ赤にしていた。

胡桃「尻尾はいいから、羽織るものくれ…」

両手で胸元を隠しつつ、胡桃はガクツと肩を落とす。そう言えば、彼女は服装だけでなく髪型も変化したようだ。今の胡桃はいつものツインテールではなく、それを三つ編みにして短く纏め上げたもの。これなら、激しく動いても髪が邪魔になる事はなさそうだ。また、よく見ると彼女の頭には小さな二本の角が生えているが、これも装飾品だろうか？

真冬「…にしても」

由紀「ん？なにかな？」

羽織るものをと呟く胡桃を無視して、真冬は由紀へ視線を向ける。実を言うと、真冬は最初から彼女の格好が気になってしかたなかった。というのも、彼女の着ている真つ白な服は彼女の両腕…そして胸元をギリギリ隠している程度のものであり、明らかに布面積が少ないのだ。

美紀「由紀先輩の格好も凄いですね…」

由紀「えへへ、わりと気に入ったかも♪」

だぼつとした袖をパタパタと揺らし、由紀は楽しげにクルリと回る。そうして回る彼女を見て気づいたのだが彼女の背には赤白い大きな羽が生えており、彼女の無邪気な笑顔とそれがあいまって天使のように見えた。

真冬（まあ：天使にしては露出多いけどね）

上はギリギリ胸を隠せる程度の服…：そして下はモコモコとした柔らかなような素材の短パンを履いていたが、これも少しばかり小さいように見える…。上も下も、ギリギリ隠せてるとしか言い様のない服だった。しかしながら本人はわりと気に入っているようなので、特に言うこともないだろう…。真冬が笑顔の由紀を見て思う中、胡桃は未だ自分の格好を恥じらっていた。

胡桃「ま、真冬…これ、着替えちゃダメなのか？」

真冬「着替えると魔力が落ちて弱くなるから、就寝時とか以外は基本的にその格好でいてほしい」

胡桃「うわあ、そんなルールがあんのかよ…」

自らの経験に基づいた情報を真冬が告げると、胡桃はまたガクツと肩を落とす。胡桃の格好は確かに露出が多いと思うが、ここまで恥ずかしがるとは思わなかった。

真冬「意外と恥ずかしがり？」

胡桃「いや、あたしただけならこの格好でも構わないけどさ…。今はアイツもいるじゃんか…」

真冬「ああ、そういうことか…」

胡桃は小さく呟き、彼の事を覗き見る。彼にこの格好を見られるのが嫌で、これほどまでに恥ずかしがっていたらしい。

悠里「恥ずかしがる気持ちは分かるけど、どちらかと言うと由紀ちゃんの格好の方が…」

胡桃「…だな」

確かに、しつかり隠すべきところを隠せているだけ自分の格好はマシかもしれない。由紀のあの格好では、ちよつと前屈みになっただけ

で胸が丸見えになってしまいかもしれないのだから…。

胡桃（そーいや、アイツずっと由紀の方を見て動かねえな…）

由紀本人がああ格好を気に入っているとはいえ、あまり凝視されると見られたくないものを見られてしまうかも知れない。そうなる则由紀が少しかわいそうなので、胡桃は彼女の事を凝視する彼を注意することにした。

胡桃「おいつ、あんまりジロジロ見んなって」

「……………」

胡桃「…なあ、聞いてんのか？」

「……………」

正面に立つてから肩を揺さぶり声をかけるが、彼はまるで答ええない。それほど由紀の格好に見とれているのかと…そう思った胡桃は次第に腹を立てていく。

胡桃「お前…いい加減に——」

真冬「胡桃、ちよつと待って…!」

胡桃の声に答えない彼を見た真冬はもしかしてと思い、その場に歩み寄る。真冬は胡桃の隣に立つてから彼の頬をペシペシと叩き、予想していた通りの展開のため息をついた。

真冬「…気絶してるね」

胡桃「はあっ!? 立ったままで!」

真冬「うん。皆の格好がそれだけ刺激的だったみたい」

その場に立ったまま、もつというなら目も開けたまま…彼はピクリとも動かない。ある意味凄いやうな、それでいて情けないやうな…そ



んな彼の姿を前に胡桃達は深くため息をつき、呆れたような顔を見せた。

胡桃 「異世界での初顔合わせでこれかよ…」

悠里 「立ったまま気絶なんて、器用ねえ」

美紀 「器用だけど、情けないですよ…」

由紀 「…ほんとだ。起きないねえ」

立ったまま一点を見る彼の頬をペシペシ叩き、由紀は苦笑いする。一体、彼は誰の格好を見て気絶したのだろうか…。約二十分後、ハツと目を覚ました彼に真冬はそれを尋ねたのだが、彼は彼女達全員の格好が衝撃的過ぎて、その時に誰を見ていたとかは覚えてないと語った。

## 第二話 『ちから』

「わるい…皆の格好があまりに魅力的で……」

真冬「まあ、露出は多いよね…」

目覚めた彼は村の木陰に座り、改めて彼女達の格好を見回す。美紀や悠里の格好も中々に刺激的なのだが、やはり胡桃と由紀は別格だった。

「…由紀ちゃん、ちよつと前屈みになってみて」

由紀「えっ? ころかな?」

悠里「ちよつ!? ダメよ由紀ちゃんっ!!」

美紀「先輩っ! 何やらせてるんですかっ!!」

由紀は彼の前に立ち、前屈みになりかけるが、それは途中で悠里・美紀によって阻止された。彼が何故由紀にそんな事を命じたのか、その全てを讀んでいたからだ。

(ちっ…もう少しだったんだけどな…)

胡桃「お前、マジで最低だな…」

胡桃は一人だけ離れた場所に座り、彼の事を冷めた目で見つめボソッと呟く。彼に出来るだけ自分の格好を見せたくないから離れた場所に座っていた胡桃だが、彼は直後そのそばへと歩み寄ってきた。

胡桃「うわっ!? ストップ! もう来るなっ!!」

「そんなに嫌がらなくても…一応、着るもんは着てるんでしょ?」

胡桃「そうだけどっ…!」

いくら言っても彼は止まらず、遂に胡桃の隣へと腰を下ろす。思わ

ずサツと顔をうつむける胡桃だが、彼が自分の胸や腹や足…そのどこかをジロジロと見ている気がして、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になった。

胡桃「う…う…元の世界に帰りたい…」

「つってもねえ…帰り方も分からないしねえ…」

刺激的な衣装に身を包む胡桃を横目で眺めつつ、元の世界に戻る方法を考える。しかしながら、ここは“かれら”もいなくて、彼女達がこんなに素晴らしい格好を見せる世界だ。そもそも帰る必要がないのでは？彼がそんな事を思った時、真冬がしれっと凄い事を言った。

真冬「えっ？いつでも帰れるよ？」

「はっ…？」

胡桃「えっ？」

美紀「か、帰れるの…？」

全員がその言葉に驚き、真冬の事を見つめる。彼女がその首を縦に振るのを見た悠里は目を丸くして、自分が気になったいくつかの事を尋ねた。

悠里「いつでも…なの？」

真冬「うん、いつでも」

悠里「どうやれば帰れるの？」

真冬「この前、離れた空間と空間を繋ぐ魔法を覚えたの。だからボクがこれをパツと使えば…」

そう言っつて真冬は右手をかざし、それをさっと振る。すると目の前の空間がバチバチと激しい音を発して歪み、そこに二メートル四方の穴が開いた。その穴の向こうに見えたのは見慣れた部屋の風景であ

り、一行は驚きの声をあげる。

由紀「すつ、すごいっ！真冬ちゃん、魔法使いみたいだよ!!」

真冬「みたいじゃなく…魔法使いなの」

悠里「この穴の先って、あの屋敷の部屋よね？」

美紀「凄い…本当に向こうと繋がってるんだ」

「大魔法使いってのは伊達じゃなかったのか…」

それぞれがいい反応を見せていたので、真冬は自慢気にニヤリと笑う。そんな中、すぐに帰れると分かった胡桃は安堵のため息をついていた。

胡桃「はあ…よかった。じゃあ、さっそく帰ろうぜ」

真冬「ダメ…」

シュツと右手を振り、真冬が眩く。すると向こうの世界に続いていた穴は一瞬で消えてしまい、胡桃は驚きに目を見開いていた。

胡桃「今、わぎと消したのか？」

真冬「うん…」

胡桃「どうして？」

真冬「まだ帰りたくないもん…」

そつと眩き、真冬はそのまま木陰へと座りこむ。その子供のような行動に胡桃は苦笑いしつつ、自分も彼女の隣へと座った。

胡桃「…なんで帰りたくないんだ？」

真冬「せっかく来たんだし……どうせなら魔王倒して帰ろうよ……」

胡桃「そんな、美味しい店が近くにあるからちよつと寄つていこうみたいなノリで言われても……」

真冬から聞いた話では、この世界の魔王的存在である焔ほむらの王というのはかなり危険な存在だと言う。奴を倒さなければ帰れないとかならともかく、今すぐ帰れるのにわざわざそれとやり合いたいという真冬の考えが分からない。

胡桃「そいつ、危ないヤツなんだろう？」

真冬「ボクがいれば大丈夫だもん……」

胡桃「どうしてそう言い切れる？」

真冬「……大魔法使いだから」

胡桃（まいったな、ダメだこりや……）

はあ……とため息をつき、胡桃は立ち上がる。真冬はこの場にいる誰よりも長くこの世界にいたおかげで力を身に付けているようだが、かといって魔王などと戦うのは気が引けた。

胡桃「……どうする？真冬はやる気満々みたいだけど」

悠里「でも、その焔の王つてこの世界の王様達が止められなかったような人なんでしょう？いくら彼女が優れた魔法使いと言っても、私達は戦えないからねえ……」

「いや……胡桃ちゃんがシャベルを振り回せば、あるいは……」

胡桃「シャベルで倒せる魔王がいるかよ……。そもそも、シャベルはこの世界に持ってこれてないみたいだしな」

この世界に慣れている真冬とは違い、自分達はまだ話にもついていない。こんな状態では魔王はおろか、村の外にいないという魔物とすら戦いたくないのだが……。その時、由紀が口を開いた。

由紀「でもさ、この世界の人は困ってるんだよね？」

悠里「…みたいね」

由紀「なら助けてあげようよ。大丈夫っ！わたし達には真冬ちゃんがいるんだから！ねっ、そうでしょ？」

由紀は真冬のそばに歩みより、ニッコリと微笑みながら手を差し伸べる。真冬はその笑顔に応えるようにして微笑んでからその手を取り、そつと立ち上がった。

真冬「うん、皆の事はボクが守るし、それに戦っていればみんなもすぐに——」

立ち上がった真冬はそれぞれの顔を見回し、あることに気がつく。それは、この世界での経験を積んできた彼女だからこそ気付けた事だった…。しかしそれはどう考えてもあり得ない事であり、真冬は目を丸くしたまま立ち尽くす。

美紀「真冬、どうしたの？」

彼女の事を心配に思い、彼女の肩を揺さぶる美紀…。すると真冬はその口を静かに開き、自分が気付いた事を全員に告げた。

真冬「由紀も悠里も、胡桃も美紀も…ある程度の魔力が身に付いてる…。さつきこの世界に来たばかりなのに、どうして……」

美紀「?…それって凄いことなの？」

真冬「凄いことというか、あり得ないこと……」

次の瞬間、真冬は両手を彼女達四人の方へとかけ、少ししてからその両手を胸の前で合わせる。そうしてから一気にその両手を広げると…

ブンツ…!!

胡桃「うおっ!?!なんだこれっ!!?」

悠里「っ!?!」

突如、彼女達四人の足元に青白い魔方陣のような物が浮かび上がる。不思議に思った彼は真冬の方へ視線を向け、そして驚く。両手を広げながらその場に立つ彼女の目が真っ赤に光っていたのだ。

「真冬ちゃん、何を…」

真冬「…女神……聖典……?……そういうことか…」

ポツリと眩き、真冬は広げていた両手を下ろす。すると彼女達の足元にあった魔方陣がスッと消え、真冬の目の色も元の黒へと戻っていた。

由紀「今の…きれいだったね!」

美紀「綺麗には綺麗でしたけど…でも…」

いきなり出された魔方陣は確かに綺麗な光を放っていたが、何の為の物だったのだろうか…。美紀がそれを不安に思っていたのを表情から感じ取ったのか、真冬は申し訳なさそうに頭を下げた。

真冬「いきなりごめんね…。この世界に来たばかりの君達に何故これほどの魔力があるのか、少し調べてたの」

悠里「そんな事もできるの?」

真冬「うん、ボクは大魔法使いだからね…」

自慢気に微笑み、真冬は語る。この世界に来たばかりの彼女達に何故、ある程度の力が備わっているのか…その理由を…。

真冬「簡単に言うと、君達はこことは別の世界にも呼ばれた事があ  
るみたい」

由紀「こことは別の世界？」

胡桃「いやいやつ、こんな経験したのは今回が初だぞ？」

真冬「たぶん、元の世界に戻る時にその世界の記憶を失うようになっていたんだと思う。”エトワリア”っていう世界に聞き覚えは？」

美紀「…いや、知らない」

先程の魔法で彼女達の体を探った際に知ったその言葉を告げる真冬だが、彼女達は皆首を傾げていた。どうやら、そのエトワリアという世界に関する記憶を失っているらしい。

真冬「君達はみんなそのエトワリアって世界に召喚された事があつて、その時に身に付けた力をこの世界でも引き継いでいるみたい。エトワリアもここと似たような魔法のある世界だったのかもね…。因みに、衣装もその時に着てたやつを引き継いだみたいだよ」

悠里「それ確かなの？全然心当たりがないけど…」

真冬「うん。そうじゃなきや君達の力に説明がつかないもん…」

真冬はこう言っているが、彼女達は今一つ理解出来なかった。そもそも、彼女の言う”力”というものに対しての実感がないのだ。

胡桃「ええと…つまり、あたしらは今の真冬と同じくらい強いのか？」

真冬「そこまではない。分かりやすくゲームに例えるとボクがレベル50くらいで、胡桃達は20〜30前後」

胡桃「おおっ！分かりやすい例えだな！」

美紀「…それって凄いですか？」

悠里「さ、さあ…？」

胡桃や由紀、そして彼はその説明に納得したようだが、美紀と悠里はまだ良く分かっていない。真冬はそんな二人にも分かるよう、更に説明を続けた。



真冬「凄いことだよ。RPGゲームなんてのは大体レベル1から始まるのに、君達はいきなり二桁だもん。結構先の村まで負ける事なくサクサク進めると思う」

美紀「へえ……」

真冬「もつと喜びなよ。彼なんて一人だけレベル1からのスタートなんだから」

「……はっ？」

微妙な表情を見せる美紀を喜ばせるべく、しれつと告げられた真冬  
の言葉…それは彼にとつては結構重要な発言であり、彼は慌てた様子  
で真冬の肩を掴んだ。

「ちよつと待った。なんで僕だけレベル1スタートなんだ？」

真冬「えっ？だって、君はこういう世界が初めてだから…」

「いや…みんな記憶を失っているだけであつて、エトワリアつてここ  
に呼ばれた事があるってさっき言つてたでしょ？」

真冬「ああ…そこ、キミは呼ばれてないから」

「っ!?!なんでっ!?!」

真冬の肩をより強く掴み、真正面から声を大にして尋ねる。彼女達  
が呼ばれているなら自分だつて…彼はそう思っていたが、それは大  
きな間違いだった。

真冬「エトワリアに呼ばれたのは彼女達だけであつて、キミとボク  
は呼ばれてないよ」

「いや、だからなんでさ!?!」

真冬「あの世界に呼ばれるのはその世界の女神が記した”聖典”に  
登場するごく僅かな人間のみな…。…で、ボクとキミはその聖典に  
載つてない人物。だから呼ばれなかつた…。…どう?これで分かつた  
?」

肩を掴む彼の手を離しつつ、冷静な口調でそれを告げる。しかしそれでも、彼は納得しなかったようで…

「その…聖典だっけ？由紀ちゃん達はそれに載ってるんだとして、なんで僕らだけ載ってないんだろうな…。そこが納得出来ん」

真冬「正確に言うと、ボクとキミも載っているといえれば載っている。ただ、ボクらが載っているのは聖典の”切れ端”。女神様が聖典を記した際、同時に生まれた物で…今はどこぞへと封印されてるみたい」  
「…マジか」

美紀「どうして、そこまで分かるの？」

真冬「さつき皆の体に宿る力を探った時、そのエトワリアって世界についても魔法で調べ、瞬時にそれを把握した。…：すごいでしょ？」

悠里「ほんと、狭山さんの魔法は何でもありね…」

由紀達が他の世界へ呼ばれたことがあるということ…そしてその世界の細かな事情…それらをすぐに調べあげた真冬の魔法に驚く悠里の顔を見て、真冬はまたしても自慢げに笑った。

真冬「他にも色々出来るから…：この世界では、元の世界以上にみんなを守ってあげられると思うよ」

胡桃「元の世界でもかなり頑張ってくれてるけどな、お前は…」

「二人だけレベル1スタートか…キッツいな…」

真冬「レベル1っていうのはあくまでも例えだから、そこまで気にしなくても大丈夫だよ…。キミは元々運動能力が高いから、目に見えて足を引く張るような事はないと思う」

落ち込む彼の肩を叩き、真冬は笑顔を見せる。確かに魔法や魔力の上手い使い方をまるで知らないのは痛いかもしれないが、彼の事だ…きつとすぐに感覚を掴むだろう。

「じゃああれだ…魔王退治はともかく、先に魔物を見ておこう。この世界の魔法だの、魔力だのを知るには実戦するのが一番だったりするでしょ？」

真冬「うん、そうだね…。じゃあいこつか…」

ニコツと微笑む真冬に案内され、一行は自分らがいた村の外に向かう。

そうして入ったのは村の近くにあつた一つの森…。この森にある木はどれも元の世界のより大きなものばかりで、それらの隙間から漏れる木漏れ日はとても幻想的だ。

…が、それを見ている余裕があつたのは一時のみ。彼女達は森に入つてすぐ、何者かに辺りを包囲されてしまったのだ。彼女達を囲んで追いつめたそれは木の裏、茂みの中から次々と現れる…。その姿は一メートル程の、小さな……

「こいつら…鬼？」

真冬「せーかい。この世界の人々には”森の小人”と呼ばれているけど、種族としては鬼神族…つまり鬼に分類されてるね」

胡桃「鬼神って…もしかして、めちやくちや強いのか？」

真冬「個々の力は弱いけど…ちよつと数が多い」

辺りを囲む小さな者達の肌はどれも赤黒く染まっており、頭には真っ黒な角が生えている。その小鬼たちの数はざっと見た限りでも二十を越えており、胡桃と美紀、そして悠里の額を冷や汗が伝った。

悠里「私たちがいるのって…本当に魔物のいる世界なのね…」  
美紀「みたいですね、この生き物達を見て私も実感しましたよ…  
それより真冬、私達…まだ魔法の使い方も知らないし、武器と呼べる  
物も——」

『グア…ッ!!』

悠里「っ…!美紀さんっ!!」

美紀「あっ…!」

真冬に話しかけているのもお構い無しに一匹の小鬼が飛び上がり、  
美紀に狙いを定める。武器も持っておらず、ましてや魔法の使い方も  
知らぬ彼女はそれに驚き、両手で頭を守る事しか出来なかったが…

ヒュッ!!

美紀「っ!」

突如、美紀の後方から真っ赤に輝く光の玉が飛ぶ。それは彼女の頭  
上を通っていくと飛び掛かってきた小鬼へとぶつかり、ピカツと眩い  
閃光を放った。まほゆ

『…ッッ!!』

ドカツ!!

それをまともに受けた小鬼は勢いよく弾き飛ばされ、先にあった一  
本の木に激しく背を打つ。その小鬼はぶつかった木に身体をめり込  
ませたまま、ピクリとも動かなくなった…。

美紀「今の…なに…?」

後方から飛んできたその玉に助けられた美紀は冷や汗を流しつつ、  
そつと背後に振り返る。そこに立っていたのは、宙に右手をかざした  
ままニツコリと微笑む魔法使い…真冬だった。

真冬「鬼さんたち…女の子の会話を邪魔しちゃダメだよ?」

『グ…アアツ…!!』

一体とはいえ仲間がやられたからなのか…はたまた、底知れぬ力を  
感じ取ったのか…。笑顔の真冬を前に、辺りを囲んでいた小鬼達が少  
しずつ後ずさりしていく。

胡桃「すげえ…今のも魔法か？」

真冬「うん…すつごく低レベルなやつだけだね」

「それをくらったあの鬼は一発でダウンしたわけだけど…」

真冬「この子たち弱いからね…。あつ、美紀…それにみんなも聞い  
て。君たちの武器だけど、たぶん…頭で念じれば出てくるよ」

美紀「念じればって言われても…」

真冬は軽いノリで言っているが、そう簡単にいくとは思えない…。  
念じれば武器が出てくるなどと言われても、どのように念じれば良い  
かが分からないのだから…。

由紀「え、え〜つと…でろ〜…でろ〜」

まず、一番最初にそれを実践したのは由紀だった。右手を宙にかざ  
しながら眉をしかめ、彼女はブツブツと呟く……。それをそばで見  
ていた彼や胡桃、美紀と悠里は苦笑いしていたが…。

シュイン…ッ

由紀「わああっ!?すごいっ！杖がでたよっ!!」

何も無かったはずの空間から一本の杖が現れ、由紀の右手に収ま  
る。木で出来たその杖はRPGゲームなどで魔法使いが持っている  
ような物に良く似ていたが、そんな事はどうでも良い。重要なのは…  
本当に武器が現れたということだ。

胡桃「マジで出しやがった…」

真冬「だから言ったでしょ…念じるだけでいいって」

美紀「じゃ…じゃあ私も…」

皆、真冬言葉に対して半信半疑だったが、由紀が杖を出現させた

事で状況が変わった。彼女達は真冬の言葉が真実だったと知り、宙に手をかざしながら：強く念じる。すると先程の由紀と同様、何も無い空間に光が集まり、それぞれの手元に武器が現れた。

シユインツ：！

美紀「っ：!？」

「これは…」

美紀の右手に現れたのは由紀の持っているような杖ではなく、騎士が持つていそうな剣…。また、彼女の元に現れた装備はそれだけでなく：左腕には頑丈そうな銀の盾がついていた。

一方、彼の手に現れたのは美紀の物よりも一回り大きな大剣…。メートルと数十センチはあろう銀色の剣は片手で持つには重そうだが、意外にも彼はそれを片手で持ったままじっと見つめていた。

「…いいね、ゲームっぽい」

美紀「先輩：結構楽しんでませんか？」

現れた剣を見つめる彼の表情は楽しげで、美紀は呆れたようにため息をつく。確かに武器が現れた瞬間はテンションが上がりかけたが、それでも今、敵に囲まれているこの状況を楽しむ気にはなれない…。

胡桃「おっ!?!あたしの武器はこれかっ！」

「…こんな世界でもシャベルか」

彼がチラツと視線を向けると、横では元の世界と同じシャベルを手にニコニコと微笑む胡桃の姿が…。もしかしたらとは思っていたが、本当にシャベルを呼ぶとは…。異世界で相棒との再開を喜ぶ胡桃を見た彼が苦笑いする一方、悠里は真冬のそばに歩み寄って困ったような顔をしていた。

悠里「あの：私、武器を上手く出せないんだけど…」

真冬「えっ…？ああ…たぶんだけど、悠里はボクと同じで魔法をメインとするタイプなのかも。あとで魔法の使い方を教えてあげるから、今は一先ず下がってて」

悠里「あら、役に立てなくて残念…」

真冬が言うには、悠里も魔法を主とした戦い方をするタイプのように。どうやら魔法使いには剣などの目に見えた武器はないようで、悠里だけが武器を出せなかったのもそれが理由らしい。

胡桃「きてきてっ！真冬っ、これからは普通に暴ればいいのか？」  
シャベルをクルクルと回した後、胡桃はそれをパシッと手に収める。少しばかりテンションが上がったのか、彼女はどこか好戦的なように見えた。真冬はそんな胡桃、そして彼を順に見つめ、自らも一歩前が出る。

真冬「うん…胡桃とキミは魔法よりも物理攻撃が得意なタイプだから、前に出てあの子たちと直接やり合って構わない…。美紀は二人ほど攻めず、盾での防御も意識してバランスをとった戦い方をして。そして、由紀は杖の形状を見るに回復魔法を扱うタイプだから…」

由紀「回復っ？それってあれでしょ、痛いのを治す魔法だよね？」

真冬「あく…うん、簡単に言うそう。これについてもまたあとで教えるから、悠里と一緒にボクの後ろで見学してて」

由紀「う〜ん…まあ、いきなり戦うのもちよつとだけ怖いもんね…」  
持っていた杖をギュツと抱き、由紀は真冬の背後に回る。そうして真冬は由紀、悠里の二人を自分の背後に立たせたまま、目の前の光景を見てニヤリと微笑む。何故なら、向けた目線の先では彼と胡桃が武器を振り回し敵と楽しげに戦っていたからだ。

「ふんっ！」ズバツ！

胡桃「はあっ！」ブンツ！

『ギャアア…ッ!!』

由紀「うわあ…大暴れだね…」

悠里「そ…そうね…」

真冬「怖いっていう由紀の反応が普通なんだろうけど…あの二人を見てるとよく分からなくなるよ。あの二人、戦うの大好き人間なの??」

辺りを囲む小鬼達の数はかなりのものであり、今やそのほとんどが彼と胡桃…そして美紀へと襲いかかっている。しかし、彼と胡桃はそれを一体ずつ…確実に撃退していた。一方、二人とは少し離れた場所にいる美紀の戦いはどこか危なっかしく…

『グアッ…ッ!!』

美紀「わっ…!?!」

数体の小鬼に迫られた美紀は戸惑ったように後ずさりつつ、盾で守りを固める…。その盾は鬼の攻撃を全て弾いていたが、防戦一方の彼女を見た由紀、悠里はあたふたと慌て出す。

由紀「みーくんが危ないよ!助けないとっ!」

真冬「…いや、何だかんだで攻撃は全部防いでるし、大丈夫だよ。美紀くらいの魔力量なら、あの鬼たちの攻撃をまともに受けても問題ないし…」

悠里「そうなの?」

真冬「うん…せいぜいかすり傷程度の怪我までだと思う。言い忘れてたけど、魔力っていうのは何も魔法に使うだけじゃない。彼や胡桃…そして美紀のように魔法が使えない人間にとっても重要なもの…。身体を巡る魔力はそのまま力となり、身体能力の向上に繋がる…。だからほら、胡桃をよく見てて?」

由紀、そして悠里は真冬に言われるがまま、鬼達と戦う胡桃へ視線を向ける。複数の鬼に囲まれてもまるで動じず、背後からの攻撃すら



かわす彼女の動きは確かにいつもより凄いいもののように見える。

胡桃「そらっ!!」ブンッ!!

『グギッ…ッッ!!』

胡桃は鬼達の攻撃をかわし、反撃としてシャベルを振り払う…。その攻撃はギリギリのところでかわされてしまい、シャベルはそのまま鬼の背後にあった大木たいぼくへと当たるのだが……………

バキイツツ!!!ギギッ…ギギッ…!!

胡桃「なっ!?マジっ!!?」

振り払ったシャベルはその大木をあつさりと横に切り裂き、胡桃は目を丸くして驚く。木の高さは十メートルを越えており、幹回りも三メートルほどの物だ。まさか、それをシャベルの一振りで風ぎ払えるとは思ってなかったのだろうか…。

悠里「うそっ…!?!」

真冬「ね?体内の魔力を力に回せば、あんな事も容易い…。もつとも、胡桃はちよつとパワータイプ過ぎるみたいだけどね」

由紀「く、胡桃ちやくんっ!!木、倒れるよ〜っ!?!」

胡桃「言われなくてもわかってるっての!!!」

ギギッ…バキバキッ…!!

激しい音を発てて傾く木を前に、胡桃は大慌てで避難を始める。こんな木が倒れるのに巻き込まれては一溜まりもない。

バキッ…!!ドシインッ!!!!

木は大きな音を発てて倒れ、辺りに木の葉がヒラヒラと舞う…。胡桃はどうやら間一髪で助かったらしく、真冬達の前に焦った様子で駆け寄ってきた。

胡桃「なんだよあの木っ!!中が腐ってたのか…?」

真冬「ううん…そんなことないよ。ただ、胡桃の力が強すぎただけ」

胡桃「んなバカな…あたしにあそこまでの力はないって」

胡桃は肩にシヤベルをかけ、冷や汗を流しつつ苦笑いする…。しかしその後、魔力はそのまま力になる…ということを知らされ、彼女は深いため息をついた。

胡桃「じゃあ…さっきの木は腐ってたわけじゃないと…」

真冬「うん。そうだね…」

由紀「やったね!この世界だと胡桃ちゃんはパワー百倍だよ!!」

胡桃「百倍って…そこまでは…:…いや、そうかもなあ…」

倒れている大きな木を見つめ、もう一度ため息をつく。魔法があり、魔物のいるゲームのような世界…。最初はこの世界の雰囲気にはしやいだが、ここまで大きな力を持たされても困るような気がした。

胡桃（…うわ、鬼たちがめっちゃ下敷きになってるし）

胡桃はその木から逃れられたが、何体かの鬼は逃げ切れなかったようだ…。よく見ると、辺りにいた鬼がほとんどいなくなっている。

真冬「あの鬼たち、意外と小心者だからね…。木の倒れた音にビツクリして逃げていったみたい」

胡桃「……………」

悠里「美紀さんと彼も…:…どうにか無事みたいね」

辺りにいた鬼が逃げ去り、彼と美紀も真冬達の元へ歩み寄る。どうやら二人とも無事だったらしく、怪我をした様子もない。

美紀「いきなり木が倒れたから…驚きました」

「まったく、こっちまで巻き込まれかけた…。さてさて、あれは誰の仕

業だろうな？あんな大木たいぼくを切り倒すなんて、人間の仕業じゃない事だけは確かだろうけど」

肩に剣をかけ、彼は倒れた木…そして胡桃を交互に見つめてニヤニヤ微笑む。どうやら、彼は胡桃があの木を切り倒す瞬間を見ていたらしい。

胡桃「わ、わざとじゃないぞっ!!」

美紀「えっ…あの木、胡桃先輩が倒したんですか？」

彼とは違い美紀はそれに気付いていなかったらしく、少し引いたような目付きを胡桃へ向けた。彼女にすらそんな目をされた胡桃は顔を真っ赤に染め、申し訳なさそうに顔をうつむける。

胡桃「ま…まあな…えっと…ごめんな？」

美紀「いや…巻き込まれなかったから良いですけど…。でも、あんなに頑丈そうな木をどうやって…」

由紀「シャベルでズバツとやったんだよ!」

美紀「ははは…そんなバカな…」

真冬「ううん、本当にズバツとやった…」

美紀「ほ…本当ですか…?」

胡桃「うっ…」

由紀と真冬の言葉を聞き、美紀は何とも言えぬ表情を胡桃に向ける。その後、彼と美紀も真冬から魔力についての説明を受け、胡桃があれほどの力を見せた事についてある程度納得した。しかしその後、彼と美紀の二人が力試しとして大木たいぼくに剣を振っても胡桃のようにあっさり切り倒す事は出来ず、二人は…いや、一行は胡桃のずば抜けた力の強さを思い知った…。

### 第三話『あれから』

美紀『私達がこの世界にやって来てから、もう一ヶ月経とうとしてる…。目覚めたあの時…ここが異世界だと真冬に教えられ、最初は戸惑った。でも、今となつてはこの世界に存在している魔法や魔物に對しての驚きともなくなり、大分慣れてきたものだなあと、我ながらに思う…』

~~~~~

由紀「みーくん、なにしてるの〜?」

美紀「この世界での事を忘れないよう、日記を書くことにしたんです。ほんとはもっと早く書きたかったんですが…最近ゴタゴタしてましたからね」

ソファアに座る美紀は目の前のテーブルに白紙の本を開き、これまでの出来事をそれに記していく…。由紀はそんな美紀を横目に見ながら広々とした室内の隅にある冷蔵庫を開き、しまっておいた飲み物を美味しそうにゴクゴクと飲み始めた。

由紀「…ぷはあ〜っ!最初はビックリしたけど、なれちゃえばすぐく楽しいとこだよね〜♪食べ物はおいしいし、街の人はみんな優しいし♪」

美紀「ええ、そうですね」

由紀は飲み物の入った瓶を持ちながら部屋の中を歩き回り、ニコニコと楽しげに微笑んでいる。美紀はそんな由紀を見て自分も微笑んだ後、日記の続きを記していった…。

~~~~~

美紀『私達がこの世界にはやく馴染めたのは、一足先にこの世界に  
来ていた真冬のおかげだと思う。私達は真冬のおかげで戦い方や魔  
法の使い方を知れたし、この世界がどんな所なのかもある程度は知る  
ことができた。この世界の名前は『エテポロン』というらしく、やは  
り：元いた世界と比べると雰囲気が違う。私達は今、この世界で最も  
栄えていると言われている城下町に暮らしているのだけど、その街並  
みは前にテレビ等で見た外国のそれよりも綺麗だ。実際にこの目で  
見るから：というのもあるのかも知れないけど』

自分達がいる広めの部屋にある、大きな扉の向こう：そこに広がる  
街並みを思い返しつつ、美紀は筆を進める。この世界は元の世界と  
違つて”かれら”がいない上、生活にも苦勞はしていないのだが、い  
くつか不安な事もあつた：。

美紀『街はある程度平和に見えるけど、それがいつまで続くか分か  
らない。というのも、むかし封印したはずの『焰の王』と呼ばれてい  
る者が復活したらしいからだ。焰の王：真冬達は、これを分かりやす  
く『魔王』つて呼んでいる。真冬はこの魔王を倒すまでは元の世界に  
帰らないと言っているけど、そんなに容易く倒せるのだろうか？私  
もこの魔王の事を少し調べてはみたけど：：：かなり危険な存在らし  
い』

街の図書館で見た書物の内容を思い返し、美紀はため息をつく：。  
この世界の歴史を学びに行った時、図書館の広さ：本の多さ：それら  
に書かれている文章が問題なく読める事に驚いたものだが、例の魔王  
について記してある書物の内容はそれらの驚きをも上回つた：。

美紀（記録によると、焰の王はどんな魔物よりも狂暴だとか、いく  
つもの国が滅ぼされたとか書いてあつたけど：：本当なのかな：。だ  
としたら、私達はそれに勝てるのかな：：：）

出来ればそんな者と戦いたくはないが、そうもいかない：。この世

界に伝わる予言によれば、彼女達が世界を救うと言われているらしく、国の人々：更にはこの世界で一番の権力者だという王ですら、彼女達が真の平和をもたらせてくれると期待しているのだ。

美紀（焔の王が本格的に動いたら…戦わなきゃならないんだろうな）

今はまだ焔の王も大した動きを見せてはいないし、居場所も分かっていない。だからこそだろう…真冬はこの一ヶ月の間にそれを見て倒そうとはせず、彼女達を鍛える事だけに専念していた。その甲斐あって彼女達全員が強くなったのだが…その強さがまた、この世界の人々の期待値を上げてしまっている。

美紀（…あつ、そうだ。その辺についても書いておかないと…）  
ネガティブな事ばかりを考えても仕方ない。美紀は気持ちを切り替え、再び筆を進めていく。

美紀『真冬のトレーニングにより、私達は前よりもずっと強くなれた。胡桃先輩なんて、国の兵隊さん達が訓練を手伝ってくれてお願いしてくる程だ。兵隊さんの中には異様に屈強な人もいたりするのに、それでも胡桃先輩には敵わなかった…。一人の女の子が兵隊を圧倒する光景なんて、あの世界じゃ絶対に見られなかっただろう』

そう言えば…胡桃が兵隊と訓練しているのを皆で見学に行った時、彼が少し寂しそうな顔をしていた。ここ最近、胡桃は兵隊達の手伝い…：そして、彼は外で魔物退治ばかりをしている為、お互い話す機会が減ったからだろう。美紀は彼の寂しげな表情を思い返して『ふっ』と笑う。

美紀『由紀先輩は治療系の魔法を得意としているので、怪我をした

人が先輩に治してもらおうとやって来る事がある。着ている服がそれっぽいつていうのもあるのだろうけど、その優しさとかも影響しているのだろうか……。由紀先輩は時々、『天使さま』なんて呼ばれる事がある』

中には、由紀に治療してもらおう為にわざと怪我をしてくる者もいた。それほどに人々から愛されている『天使さま』は今、部屋の隅にあるもう一つのソファーに寝転び昼寝をしようとしている。

美紀『私とりーさんも困ってる人の手伝いをしたりして、少しずつ生活費を稼いでいる。思えばこれだけ広い街なのだから、それぞれが別々に暮らすことも出来るのだけど：私達はまだ、みんな一緒に同じ屋根の下で眠っている』

しかも、皆が同じ一つの部屋で眠っているのだ。まあ、さすがに彼だけは一人別室で眠ってもらっているのだが：それはわざわざ書くなくても良いだろう。そんな事を思いつつ、美紀は続きを記していく。

美紀『この世界に来てから、みんながより明るくなった。もし焔の王を倒すことが出来たなら、このままここに居座っていても良いかも知れない。そして、これは私の思い過ごしかも知れないが：……一つ、気になる事がある。真冬が元の世界に帰る事を拒むのも、それを考えているからなのかも：。何はともあれ、真冬や先輩達と一緒になら：私はどんな場所でもがんばれる。がんばっていけるハズだ』

~~~~~

まだまだ白紙のページばかりの日記……この白紙の部分には、出来るだけ良い出来事を記していきたい。そんな思いを込めつつ、美紀はそれをパタリと閉じた。

ボタンツ!!!

美紀「っ!?!」

由紀「うわっ!?!」

美紀がそれを閉じたのとほぼ同時、屋外に繋がる扉が勢いよく開かれる。部屋にいた美紀はもちろん、昼寝をしようとして寝転がっていた由紀も驚いたように起き上がり、現れたその人物：恵飛須沢胡桃を見つめた。

胡桃「っ…!?!おい!アイツは留守かつ!?!」

胡桃はツインテールを揺らしながら部屋の真ん中へ歩み寄り、室内を見回して彼の姿がない事を確認する。彼女はこの世界に来た当初に着ていたあの服ではなく、少しだけダボツとした紺のシャツ…そして黒の半ズボンを履いていた。

美紀「先輩なら…真冬と一緒に出掛けたつきり帰ってきてませんけど…!」

胡桃「はあっ!?!いつから!?!」

美紀「昨日の昼間からですね…。なんか、ちよつと遠くに出た魔物を倒してほしいって頼まれたみたいで…!」

胡桃「っ…!?!あのバカっ…!!」

昨日、彼が真冬を連れて出ていった頃、ちょうど胡桃も留守にしていた。何も知らなかった彼女へ自分が知っている限りの事を話すと、胡桃はズボンのポケットから一枚の紙切れを取り出して真っ青な顔色を見せた。

由紀「それなに?」

胡桃「聞いて驚け…あのバカ、あたしらに内緒でこの借家を買取りやがった…。しかも、ここを拠点として便利屋を開くとかワケの

分からねえ事まで言っただけだ……」

美紀「えっ？」

美紀が戸惑ったような表情を見せると、胡桃は手に持っていた紙切れを彼女の前のテーブルへと置く。その紙には彼の字で……『暮らしているこの借家を買収した事と……。そして、ここを拠点に便利屋を開く』という事が確かに記されていた。胡桃は、この手紙を街にいた配達人から渡されたらしい。

美紀「ここを買い取るのって結構な額のお金が必要だったでしょうに、リーさんがよく許可を出しましたね？」

この世界に来てからというもの、悠里は皆の財布すらも管理してくれている。彼女は出来るだけ無駄のない生活を心がけている為、彼の行動に許可を出したのが意外に思えるが……。

胡桃「いや……これを計画したのはアイツの独断らしくて、リーさんは何も知らないみたいだ……」

美紀「えっ？それって……まずくないですか……？」

胡桃「マズイって!!だからあたしも焦ってたんだ!!こんなのがリーさんに知れたら……アイツは……」

恐らく、無事では済まないだろう。元の世界ならともかく、こちらの世界の悠里は真冬のトレーニングを経たおかげで今や立派な魔法使いだ。そんな彼女を怒らせようものなら、本当に死人が出かねない。

胡桃「とにかくっ！リーさんにはこの事を内緒にしておいて、何か解決策を——」

悠里「ん？何が内緒なの……？」

胡桃「っ!??」

背後から聞こえたその声に驚き、胡桃は目を真ん丸にする。美紀は苦い表情をして顔を俯け、由紀も冷や汗を流していた。

由紀「お、おかえりなさいっ！買い物、はやかったね？」

悠里「ええ。今日は安いものがなくて、早めに切り上げてきちやっ
た」

胡桃「……………」

美紀「……………」

買い物から戻った悠里の注意を由紀が引いている中、美紀は手に持っていた紙切れを隠そうと然り気無く手を伏せる…。しかし、悠里はそれに気付いていたらしく、笑顔のまま美紀の手を掴み、その紙を奪い取った。

美紀「あ…っ!?そ、それはっ……………」

胡桃「……………やばっ」

由紀「あちやく……………」

悠里「……………」

それぞれが焦りの声を漏らす中、悠里はその紙に書かれている文章を無言で読んでいく…。すると彼女の顔からは少しずつ笑みが消えていき、胡桃達は益々焦り始めるが……………それを読み終えた直後、悠里は意外な言葉を放った。

悠里「…ふふっ、面白いことを考えたのね。便利屋さん…良いんじゃないかしら。これまでも結構な数の人達を手助けしてきたし、それを本格的な仕事にするってことね♪」

胡桃「り…りーさん…?」

由紀「おこつてない…の?」

悠里は彼の手紙を右手に握ったまま、ニコニコと微笑み始める…。しかしそれは純粹な笑顔ではなく、どこことなく恐怖を感じさせる笑顔

だった。

悠里「ふふっ…怒ってないわよ？まあ、ちよつとビックリはしちゃったけどね…。っ…ふふふっ…♪さてさて…彼が帰ってきたら、すこーしだけ魔法の特訓に付き合ってもらおうかしら…」

胡桃「と…特訓…」

美紀「つまり、それって…」

この一ヶ月、真冬と共に磨いてきた魔法…悠里はそれを彼へ放つ事を今から決意する。どうにか笑顔を保っているが、内心では大激怒しているのだろう…。

悠里「家を買取のって…いくらくらいかかったのかしらね…」

美紀「さあ…。この世界の相場がよく分かっているんでなんとも言えないですが…安くはないでしょうね…」

悠里「はあっ…そうよね…」

悠里は笑顔を崩して呆れたような表情をとり、右手で頭を抱えながらソファアーへともたれる。これまで節約を心掛けてきた悠里からすると、彼の書いたこの手紙は見ているだけでも頭痛がしてしまう内容のようだ。

悠里（借りてた家をわざわざ買うなんて…この世界に永住でもする気なのかしら？）

彼の真意がそこにあるなら、ここを買った気持ちも分からなくはない。この家はそこまで広くないが六人で住む分には困らないし、何より立地が良い。この世界で最も栄えている街の中にあるだけあって、買い物出来る場所もそばに幾つもあるし、十数分歩けば王様のいる城にだっていける…。もし、焰の王を倒した後もこの世界に居座るつもりなら…この家を買ったのは正しい判断かもしれない。

悠里（いや…彼のことだし、軽いノリで買っただけかもね…。何にせよ、相談もなくこんな事をしたんだから…帰ってきたらお説教しないよ）

魔法で痛めつける…とまではいかずとも、正座させて説教くらいはしてやろう。悠里がそう胸に決めたその瞬間、入り口の扉が開かれ…そこから国の兵士達三名が中へと入ってきた。兵士達はいずれも鉄の胸当てを付けており、一人は腰に剣を…あとの二人は手に槍を持っている。

兵士「いきなりの訪問、失礼します」

悠里「あら？本当に突然ね…。どうかしましたか？」

国の兵隊達がこの家に訪れる事はこれまでに何度かあったが、いずれも事前に許可を得ての訪問だった。しかし、今回はそれもなく…本当に突然の訪問。恐らく、それだけ急用なのだろう。

兵士「至急、お知らせしたいことがあるのですが…：…ウインター様、ナナシ様は？」

兵士は部屋の中を見回し、真冬と彼がいない事を確認する。ウインターというのはこの世界での真冬の名前…。そして、ナナシは彼の名だ。

胡桃「あく…アイツらなら、少し遠くに出てるぜ」

兵士「…：…そうですか。ならば先に、あなた方へ報告させていただきます。焔の王と思われる者の居場所が掴めました」

胡桃「…マジ？」

悠里「そう…ですか」

二人は困ったように返事を返し、由紀と美紀もどこか曇ったような

表情を浮かべる。彼女らがこんな反応を見せたその理由はただ一つ……。その居場所が分かったのなら、自分らはそこに向かわないといけないのではと思ったからだ。

美紀「今すぐ行った方がいいですか？」

兵士「いえ、確かに出来るだけ早い方が良いと思われませんが、ウインター様、ナナシ様が戻ってからで結構です。我々の方もまだ、出撃の準備に手間取っていますので」

この言い方から察するに、国の兵士達もついてきてくれるようだ。それならば自分達だけで向かうよりもいくらか気持ちが悪くなるので、かなり助かる。

悠里「では、また二人が戻って……こちらの準備が出来たらお知らせします。それまで、少しだけ待っていて下さい」

兵士「ええ、もちろん構いません。では、またその時に……」

伝える事を伝え終え、兵士達はその場を去っていく……。この世界に來てから一ヶ月……ついに來る時が來たのだなあと思うと、四人は少しだけ怖い気持ちになった。

胡桃「はあ……どうとう來た、って感じだな」

美紀「ですね……」

悠里「まったく、彼と狭山さん……こんな時に限って留守なんだから」
由紀「でも……みんなと一緒なら、きつと大丈夫だよ！」

無理をして明るく振るまい、由紀は皆の気力を取り戻そうとする。それはこの場にいた彼女達にとってかなりの効果があつたようで、暗くなりかけていたそれぞれの表情に余裕が戻つた。

胡桃「……だな。まああたしらだつてある程度の力は身に付けた訳だし、そう簡単にやられたりはしないだら」

悠里「ええ、そうね。きつと大丈夫：どうにかなるわよ」

美紀「ひよつとしたら、真冬が一人で倒しちゃう可能性もありますからね」

胡桃「確かにその可能性はあるな」

これまでに真冬が戦うのを何度か見てきたが、彼女はいつも遊んでいるかのように戦っていた。未だ誰も見たことがない本気の真冬なら、どれだけ強大な相手でも倒せるかもしれない。

由紀「よおし！じゃあ、二人が帰ってくるまではのんびりしてよつか！わたし、ちよつと外で遊んでくるね♪」

悠里「あつ、一人だと危ないから、街からは出ちゃだめよ？」

由紀「うん。わかってるよ」

パタパタと元気に手を振り、由紀は家を出る。その直後に美紀は席から立ち上がり、外出用のカバンを肩にかけた。

胡桃「あれ？美紀も出掛けんのか？」

美紀「はい。少しだけ気分転換しようかと。先輩達もどうですか？」

胡桃「あたしはいいや。今日はもう疲れたし、夕飯までのんびりしてるよ」

悠里「私はその夕飯の支度をしないといけないから、今回は遠慮しておくわ。誘ってくれてありがとうね」

美紀「いえ、じゃあ行つてきます」

残る二人にそう告げ、美紀は家を出る。心配な事はいくつもあるが、せつかく異世界にやってきたのだ。どうせなら楽しもう…。家から出た美紀は人々で賑わう街の中をのんびりと歩きつつ、今日は公園に行こうか：それとも図書館に行こうかと、そんな事に頭を悩ませた。

第四話 『しゅっぱつ』

『焔ほむらの王」……。これまでに確認したどんな人間や魔物よりも強大な力を持つ存在であり、ほんの数日の間に幾つもの国を滅ぼしたと言われている。あまりにも強すぎるその力に人類は希望を捨てかけていたが、焔の王はある日を境に姿を消した……。後々明らかになった事なのだが、勇気と力ある四名の人物が奴を封印したらしい。どのような方法で奴を封印したのかは不明だが、この四人によって世界が平和を取り戻したのは紛れもない事実である』

~~~~~

美紀「じゃあ、一回は封印出来たんだ」

真冬「そういうことだね……」

室内の中央に置かれている横長のソファーに真冬と座り、美紀は読んでいた本のページをペラペラと捲る。これは近くにあった図書館から借りてきた物なのだが、彼女達がこれから戦う事になるであろう”焔の王”についての情報がいくつか記されていた。

美紀「この四人がいれば、焔の王をもう一度封印出来るかも知れないけど……」

真冬「その本が出たのは今から四十年も前……。例の四人が生きているのかどうかも分からないし、仮に生きていたとしても、多分お爺ちゃんお婆ちゃんになってるよ……」

美紀「だとしても、封印のやり方くらい聞けるかも」

真冬「……かもね。でも、その四人についての詳しい情報は無いでしょう?」

美紀「うん……。四人の中には屈強な戦士や美しい大魔法使いがいた……としか書かれてない……。ところで、この大魔法使いと真冬ってどっちの方が凄いのかな?」

真冬「……………さあ」

真冬もこの世界では”大魔法使い”という異名を持っているため、この本の人物とどちらが上なのか気になる…。美紀は興味本意で尋ねてみたが、真冬は少しの間を空けた後に何でもない普通の答えを返すだけだ。

美紀「…けど、この人達が封印した焔の王は復活して、再びこの世に現れた…。でも、どこかの誰かが残した予言によると復活した焔の王は私達が倒すんだよね？」

真冬「うん…。予言に出ていたのは【五人の少女と一人の少年】だから、ボクと美紀…由紀と胡桃と悠里。そして彼を入れればピッタリ当てはまる」

美紀「確かに【五人の少女と一人の少年】ではあるよね…。けど、もし違ったらどうするの？ただ人数がピッタリ合ってるってだけで、予言に出ていたのは私達じゃないのかも…」

もしそうだったら、焔の王と戦っても勝てずに終わるかも知れない。

全員、その場で殺されてしまうかも知れない…。

こんな世界に来てまで、誰かを失うのだけは嫌だった…。

真冬「…いや、あの予言に出ているのはボク達だと思うよ。その証拠にボク達はこの世界にやって来てからみるみる強くなっていった…。きつと、この世界との相性が良いんだと思う」

美紀「強くなったっていう実感はある…。けど、少し狂暴な魔物が相手だと今でも結構苦労するよ」

真冬「ボクは全然平気だよ。ただの魔物じゃ物足りなくらいだもん」

美紀「それは真冬の成長速度が異常だからだよ」

由紀に美紀、胡桃と悠里も今となってはかなり強くなれたと思うが、それでも真冬の力には遠く及ばない…。彼女はこの世界にいち早く来ていたのでそれも少しは関係あるのかも知れないが、それにしたっておかしい成長速度だ。



真冬「でも、胡桃や彼もかなり強くなった……。焔の王がどれだけ強いか知らないけど、今のボク達なら絶対に大丈夫」

美紀「……だと良いんだけど」

読んでいた本をパタリと閉じ、美紀は数メートル先の床を見る。その上では彼が顔を俯けた状態で正座しており、目の前には両手を組んだまま彼の事を見下ろす悠里の姿が……。

悠里「さて、もう反省したかしら？」

「ええ……。この説教が始まった瞬間にしてみました……」

事の始まりは先日、彼が悠里達に何も言わぬままこの借家を買った事から始まった……。この家は国の中心地であり、買い物するにも何をするにもかなり便利だが、その立地の良さゆえ月に一度の支払額も高い……。そんな家を彼が丸々買い取ったとあればこれから財政難を迎えるのは必然であり、それに怒った悠里の説教はいつもより長めの二時間越えコースとなっている。

悠里「本当に反省しているの？」

「してまずとも……。でも、リーさん……一つ聞いてく——」

悠里「でも？でもって何？あなた、自分が何をしたのか分かってるの？」

「くっ……」

終わりにかけた説教が彼の『でも』という発言で再燃し、悠里の目付きがまた鋭くなる……。このやり取りももう三回は繰り返しているだろう。部屋の隅にいる由紀は気まずそうに笑っているし、胡桃に限ってはそれを見物するのにすら疲れて昼寝している。

真冬（……もういいかな）

これだけ説教されたら彼も懲りただろう……。

真冬はソファから腰を上げると悠里のそばへ立ち、その肩を叩く。

真冬「悠里、あのね、この家を買収した代金だけ…。それはこの国の王様が払ってくれたから、ボクらのお金は減ってないよ」

悠里「えっ？ どういう事…？」

真冬「まだ言っていなかったけど、この国の王様はボクらが言えば大抵の物は用意してくれるの。悠里、ここの家賃が高いって悩んでたでしょ？ それを見てた彼は王様に相談して、この家をタダで貰ったの」

悠里「タダ…？ 無料むりようって事…？」

真冬「うん、無料って事。これからは家賃の支払い無し。全部王様が肩代わりしてくれたから…」

この時、悠里は「タダ＝無料」という簡単な事すら分からなくなる程に混乱していた。自分達の生活資金が減っていなかったのは喜ばしい事だが、それを肩代わりしていたのがこの国の王だとは…。

悠里「その…王様は何でそんな事をしてくれたの？」

真冬「ボクらが焔の王を倒してくれると思ってるから、その為の援助というか…報酬の先払い、みたいな？」

悠里「…なるほど、それだけ期待されてるって事ね。じゃあ…もういいわ。余計なお説教しちゃってごめんなさい」

「…：…いえいえ、お気になさらず」

長かった説教からようやく解放された彼はゆっくりと立ち上がり、正座を続けていた事で痺れていた足をプルプルと振る。真冬はそんな彼を見つめると、おかしそうに『ふふっ』と笑った。

真冬「王様の事、悠里に早く伝えれば良かったのに…」

「伝えようとしてたさ…。けど、それを伝えようと口を開く度にりーさんが不機嫌になっ…」

真冬「それで伝えられなかったと…」

「そういうこと…。まったく、焔の王ってのがどれだけ恐ろしい奴なのか知らないが、りーさん程ではないだろうな」

悠里「…ねえ、それってどういう意味かしら？」

小さな声で呟かれたその言葉を聞き逃す事なく、悠里は彼の背後へと立つ。彼女はニコニコと微笑んでいたが、その裏に激しい怒りが込もっているのは言うまでも無い。彼は額に冷や汗を浮かべながら振り返り、咄嗟に出任せを言う事にした。

「いや……りーさんもかなり強くなってきた事だし、相手がどんな奴だろうと楽勝かなあ……って……」

悠里「へえ……今の言葉にはそんな意味が込められていたの？」

「まあ……はい」

悠里「……そう。ならいいわ」

上手く誤魔化した……ようにも思えるが、恐らく悠里はわざと見逃してくれたのだろう。彼女が向けた余裕ありげな笑みにはそう感じさせるような何かがあり、彼はただただ苦笑いした……。やはり、どんな世界に来ようと彼女には敵わない。

「……何にせよ、まずはその焔の王を倒す事から始めないと。ヤツの居所は分かってるんだろ？」

美紀「ええ、この街から北に行った場所にある古城で発見されたそうですが、少し前の情報なので今もいるかどうかは……」

「ま、とりあえず行ってみれば分かるだろう……。真冬！」

真冬「うん、もう準備は出来てる……」

彼の呼び掛けに答えた真冬は羽織っていた黒色のコートを揺らしながら側へと寄り、小さく頷く。彼はそんな真冬と共にゆつくりと歩き出し、今からその焔の王とやらを倒しに行こうとしたが……

悠里「ちよつと！今から行くつもりなの？」

「ええ、危ないヤツは出来るだけ早い内に倒しておきたいんでね」

真冬「悠里達は留守番しながらのんびりしていて良い。焔の王はボクと彼だけで倒す……」

美紀「いやいやっ、危険ですよ!?!真冬だって私と一緒に情報集めとかしたんだから分かってるでしょ?もしも焔の王が情報通りの強さ

だったとしたら、二人だけじゃとても——」

「大丈夫大丈夫、今の僕らはかなり強いから」

ヘラヘラと笑いながらそう告げるが、悠里達は決してそれを許そうとはしない。ここにいる全員がもうこの世界にある程度慣れ、戦う力も身に付けてきた。特に真冬、胡桃、そして彼の戦闘能力はかなりのものだが、それにしたってたったの二人で”焔の王”という強大な敵に挑むのは無謀でしかない。

悠里「こればかりは見過ごせないわ。倒しに向かうというのなら、私達全員で行かないと…。あなた達二人だけを戦いに向かわせて、もし帰って来なかったら私達はどうすればいいの…？こんな世界に来てまで誰かを失うなんて…絶対に嫌よ」

元いた世界は、あまりにも過酷な世界だった…。

この世界にも”魔物”という危険な存在がいるので決して安全とは言えないが、それでもこの世界には大勢の優しい人々がいるし、自分達も魔法などの力を使えるようになったので自衛がしやすい…。だからこそ今日まで楽しく暮らしてこれたが、ここで彼と真冬が死んでしまったら…：…明るさを取り戻していた皆の心がまた沈むだろう。

悠里「あなたと真冬さんがいなくなったら、みんなが悲しむ…。だから、危ない存在と戦う時はみんな一緒に行きましょう？もし、みんなで戦っても勝てないような敵だとしたら…：…その時はもう諦めるしかないけどね」

「…：…」

敵はどれだけ強大な存在か分からない…。

だからこそ、皆はここに残して自分と真冬だけで戦いを済ませたかったが、悠里はもちろん由紀も美紀も折れるつもりは無いようだ。

真冬「…：…ねえ、もうみんなで行こうか？」

「…ああ、そうだな…。よし、じゃあとつとと出発するか」

どれだけ恐ろしいヤツが相手でも、皆となら…彼女達とならどうに

かなりそうな気がする。彼は微かな笑みを浮かべると、部屋の隅にあるソファアの上で眠っていた胡桃の頬をペシツと叩き彼女を起こす。

「ほら、起きろお姫様」

胡桃 「んあ…っ？お、お姫さま…？…誰のことだ？」

「当然、胡桃ちゃんの事だよ」

しれつと囁くと、寝起きにも関わらず胡桃の顔が赤く染まる。

彼はここ何日かの間、真冬と二人だけで外へと出て行動していた。つまり胡桃達とこうして会うのも数日ぶりの事であり、久しぶりに見る彼女の赤面について頬が緩む…。やはり、胡桃をからかうのは面白い。

真冬 「さて、じゃあとつとと終わらせてこよう…」

真つ赤な顔で何かを叫ぶ胡桃と、それを見て楽しげに笑う彼…。真冬はその二人や由紀達を見回してそつと微笑んでからそう告げ、皆と共に出発の時を迎える。目的地はそう遠くもないそうなので、大した準備は必要無い…。必要なのは勇氣と覚悟だけだ。外へと出た一行は、由紀の元気な声を合図として歩き出す。

由紀 「よしっ！では、しゅっぱーっ!!」

## 第五話 『りゆう』

拠点としていた街を出た一行は、北の方角にある古城へと向かっていった。そこに行けば、この世界最大の脅威である“焔の王”がいる。それがどれ程に強大な存在なのか、今の自分達で勝てるのかは分からない。しかし、この世界に伝わる予言通りならば自分達がそれを倒すハズだ。これから先もみんなと笑顔でいたいのなら、絶対に負けは許されない。

胡桃 「っ!!美紀っ!そっち行つたぞ!!」

美紀 「はいっ!!分かっていきます!」

広々とした平原の上、まるで象のような大きさを持つ一体の魔物が美紀の方めがけて駆けていく。四本の足で強く地面を蹴りながら砂ぼこりを散らし、猛スピードで駆け抜けるその魔物の背は岩のような甲羅に覆われていたが、胡桃の攻撃を受けていた事で所々が欠けていた。

しかし未だ決定的な一撃は与えられておらず、魔物は額に生えた鋭い角を美紀の方へと向けながら突進する。美紀は左手に持っていた銀色の盾を構えると上手くその角を弾き、魔物の突進を横へと反らした。

美紀 「ぐうっ:!!」

これだけ巨大な魔物の突進を盾一つで反らせるのも、この世界にやって来てから身に付けた魔法の力のおかげだ。元の世界でこんな大きな生き物に突進されたら、盾一つではとても防ぎ切れずにいただろう。

美紀の盾によって攻撃を反らされた魔物はその勢いのままゆっくりとターンして再び美紀達に突進しようとして試みているようだったが、悠里がそっと左手を上げて狙いを定める。すると手のそばに幾つ

もの火の玉が現れ、それら全てが勢いよく魔物の頭へと命中して火花を散らす。それを受けた魔物は突進の勢いを無くすとフラフラとした足取りで平原を歩き、こちらの様子を窺い始めた…。

悠里「ほら、もうどつか行つてちようだい。私達だつて無駄にケンカするつもりはないんだから…。」

ムツとした表情で言いながら左手を上げ、またしても宙に火の玉を舞わせる…。すると魔物は唸り声をあげながらそつと背中を向け、一行から逃げるように駆け抜けていった。どうやら、悠里の放つ魔法に恐怖したらしい。

美紀「ふうっ…結構危険な魔物でしたね」

胡桃「けど、美紀もかなり頑張つてたじゃん。あんなデカイヤツの攻撃を防ぐなんてすげえよ」

美紀「まあ、沢山トレーニングしましたからね」

ニコツと笑つてから左手の盾、そして右手の剣を光にして散らす…。

この世界の魔法というのはこうして武具を自在に出現させる事が出来るので、かなり便利だ。胡桃も美紀と同様に右手に持っていたシャベルを消すと、悠里と合流して由紀達の元へと進む。

由紀「お疲れ。大丈夫？怪我してない？」

美紀「はい、私は大丈夫です」

悠里「私も平気よ。胡桃は大丈夫？」

胡桃「おう、平気」

『もし怪我しているようなら治してあげる』と、由紀は手にした杖を樂しげに振り回す。由紀はみんな程戦う力は無いものの、怪我や病気等を治す特殊な力を持っていた。一足先にこの世界に来ていた真冬曰く、こうした治療系の魔法を使える人間はかなり珍しいらしい。

胡桃「にしても、アイツと真冬はまだか？先の方を偵察に行つたっ

きり中々戻ってこないぞ？」

悠里「いくらなんでも、そろそろ戻ってくると思うけどね…」

悠里の予想は的中し、夕焼け色に染まり始めた平原の向こうから二つの影が現れる。それは見慣れた二人の友人、狭山真冬と彼の姿であり、二人は皆と合流するなり偵察先での事を報告した。

「目当ての古城は近い。この平原を抜けて、その先にある小さな森を抜ければすぐそこだった」

胡桃「マジ？じゃあ、その気になれば今日中に戦いを終わられるのか？」

真冬「うん…。少し探ってみた感じ、古城の中に一つだけ…大きな魔力の気配があった。もしかすると、それが焰の王なのかも」

このまま先へと進んで皆で突撃し、早々に決着をつけても良いのだが…見たところ胡桃達の体力は万全ではない。ここで急ぐのは危険だと判断した真冬は悠里と相談してここにテントを張ることを決め、支度を整えていく。

悠里「それで、どんな感じだったの？真冬さんなら感じ取った魔力で相手がどれだけ強いのか判断出来るでしょう？焰の王は、私達でも勝てそうな感じだった？」

大きなテントを平原の上に張りつつ、真冬に問う。

これで彼女の口から『楽勝だと思う』という言葉が聞ければ一安心なのだが、真冬はそう答えずに額に冷や汗を浮かべながら首を傾げた。

真冬「正直…よく分からない。魔力自体の大きさはボクの方がずっと上だったけど、なんかこう…嫌な感じの雰囲気があつて、ボクの苦手なタイプだった」

悠里「なるほど…。量では勝<sup>まき</sup>っているけど、質に関しては分からないという事ね…」

真冬はこのメンバーの中で一番の実力者なので、その彼女の口から



”苦手なタイプ”というフレーズが出ると一気に不安になる。テントを無事に張り終えた後、悠里は辺りに腰を下ろして楽しげに談笑する皆を見つめた…。もしも明日、焰の王と戦って負けるような事があれば、誰かを失うかも知れない…。それどころか、全滅する可能性だつて……。

悠里「…真冬さん、少し付き合ってくれる？」

真冬「えっ？うん、別に良いけど……」

皆には『薪になりそうな物を集めてくる』とだけ告げ、悠里は真冬と共に平原を進んで森へと入る…。そして完全に二人きりになれたのを確認すると、これまでずっと胸の内に秘めていた思いを打ち明けた。

悠里「真冬さん、もう…元の世界に戻らない？」

真冬「……………」

…いつかそれを言われると察していたのか、真冬は大して驚かない…。

彼女は以前、元の世界に空間を繋げる魔法を見せてくれた。あれを用いれば元の世界に戻るのは容易だが、彼女はそれをずっとそれを拒み続けていた。

悠里「確かにこの世界には沢山の人がいるし、みんなも楽しそうで嬉しいわ…。けど、焰の王なんて存在と戦わねばならないのなら話は別よ。予言がどうか言われてるけど、正直危険としか思えない…。魔法を覚えた今の私達なら、元の世界に戻っても何とかやっていけると思うの」

前はただ逃げる事しか出来なかったが、魔法を覚えて体を強くした今の自分達なら…「かれら」を相手にしても臆する事なく立ち向かえる。だからここで焰の王と戦うより、元の世界へ戻るべきだ。悠里はそう提案するが、真冬は首を横に振る。

真冬「それ、ボクもかなり前に思った…。けど、ダメなの。色々調べてみた結果、ボクらが魔法を使えるのはこの世界と上手く同調出来ているからだと分かった…。つまり、元の世界に戻ればその瞬間に魔力を失う。魔法も、魔力で強化された体も、全て失う。また一般人に逆戻り」

向こうの世界へ続く道を開いたとして、そこに一歩足を踏み入れた途端に魔法とはおさらばしなくてはならない…。そうならば自分達はまた、“かれら”を相手にサバイバル生活をしなくてはならないだろう。だからもう戻りたくない…。真冬はそう言つて話を切り上げようとするが、悠里はまだ話を終わらせない。

悠里「けど、私達は向こうの世界に色々な人達を置いてきてしまつたわ。お世話になつていた柳さん達だけを向こうに残して、私達だけがこんな暮らしをしていても良いの？真冬さんは…それで平気なの？」

真冬「…柳さん達なら、あの世界でも上手くやれる。そう簡単に死ぬような人達じゃない」

悠里「そうかも知れないけど、でもやっぱり……………」

このまま皆で焔の王と戦うのも危ない気がするし、お世話になつた人間達を元の世界に置いたままというのが心苦しい…。やはり元の世界へ戻るのが妥当な選択なのではと思う悠里だが、真冬にもキチンとした理由があつた。彼女の提案を断り、この世界に残り続けようとする理由が…。

真冬「もう、正直に言う…。悠里、君達がこの世界に来て、もう何日くらい経つたか分かる？」

悠里「えっ？たしか…一ヶ月と少しね…」

真冬「うん、もう悠里達は一ヶ月以上この世界にいる…。その間、皆は魔法や戦い方を覚えて強くなった。毎日毎日、ちよつとしたトレーニングをしつつ楽しく暮らしている…。悠里も由紀も美紀も、そして……………胡桃も」

そう、みんな毎日明るい日々を過ごしている…。

トレーニングや魔物との戦いで軽い怪我を負うことはあれど、元の世界で”かれら”に襲われる程の危険は今のところ無い。みんな病気一つせず、健康に日々を過ごして……

悠里「……やっぱり、そういうことね」

薄々ながら気付いていたが、真冬の言葉を聞いて確信した。

彼女がこの世界に留まろうとするその理由は、恐らく……

悠里「胡桃のこと…よね？」

真冬「…うん。胡桃はこの世界に来て、魔力を宿し体を強くした。その結果、奴らのウィルスを完全に抑え込んでいる。今はもう、普通の健康な人間と何ら変わりない」

胡桃の体調が良くなっている事は、悠里も気付いていた…。

前の世界での胡桃はたまに辛そうな表情をしていたり、体がやけに冷たかったりしていたが、今はそれが無い。真冬の言う通り、健康な人間そのものだ。

真冬「元の世界に戻ったら胡桃の体に宿る魔力が消え失せて、また元の状態に戻る…。そうなればまた、治療方を探すところから始めないとならない。…けど、この世界にいれば胡桃はいつまでも元気なままでいられる。少なくとも、感染症状に悩まされる事は無い」

悠里「だから…元の世界には戻れないってことね……」

真冬「…これは、ボクと彼で決めたこと。柳さん達には悪いことをしたと思ってるけど、胡桃が元気でいられるこの世界は捨てられない。そして、この世界での脅威となりえる焔の王も生かしてはおけない…」

彼も胡桃の変化に気付き、この世界に永住する事を決めたらしい…。

悠里は少し考えた後、静かに頷いて納得する。

焔の王という存在はかなり危険なようだが、逆に言えばそれさえど

うにかしてしまえば、この世界は平和になるという事だ。焔の王さえ倒せば、残るのは平和な世界……。由紀達が毎日明るく過ごさせて、胡桃も苦しめない世界……。それはとても魅力的だ。

悠里「……わかった、じゃあ、頑張つて倒さないとね」

真冬「うん、心配しなくても大丈夫だよ……。ボクもそうだけど、彼も焔の王を倒すために猛特訓してきた。平和な世界を手にする為にね……」

悠里「……あつ！そう言えば出発の時は声をかけるようにって国の兵隊さん達に言われていたのに、黙って出てきちゃったわ……」

真冬「まあ、良いんじゃないかな？多分、兵隊達は一緒についてきてくれようとしてたんだろうけど、必要ない……。ボクと、彼と、みんながいれば……」

どんな敵が相手であろうと、皆と一緒になら大丈夫。真冬はそう信じてニコリと微笑み、悠里もそれに応えてニコリと笑った……。話を終えた二人は森の中から乾いた木々の枝や葉を集め、皆の待つテント前で火を起こす。空はもうすっかり暗くなっていたが、皆で焚き火を囲みつつ夕食を取る。

「そう言えば最近、胡桃ちゃん達は普通の服を着てるな。この世界に來たばかりの時に着てたあの衣装の方が好みなんだけど……」

胡桃「あんなの、ずっと着てられないって。人の視線が気になって戦えたもんじゃない……。特にお前の視線がな……」

ここにやって來たばかりの時、一行は見たことも無い衣装に身を包んでいた。中でも胡桃の衣装は胸元だけを覆うチューブトップと小さな短パンという際どい物だった為、彼はその格好を見て興奮していたものだが、ここ最近の胡桃は元の世界にあるような普通のシャツやズボンを履いており、どうにも面白みがない。

が、真冬と由紀は元々の衣装をかなり気に入っているらしく、真冬はいかにも魔法使いらしいフード付きの黒マントを……。由紀は胸元がざつくりと開いたかなり際どい白服を未だに愛用している。

由紀「胡桃ちゃん！こういう世界にやつて来たからには雰囲気作りが大切なんだよ。その為にはまず、衣装から気合いを入れなきゃ！」  
真冬「そうそう。元々の衣装を着てると多少力が増すし、オススメ」

胡桃「多少」だろ？めちやくちやにパワーアップする訳でもないのに、あんな露出をするなんてごめんだ……」

何と言っても、彼の目がある中での衣装は着れない……。

確かに多少力は増すし、所々可愛いデザインなので一人の時はよくあの服を着ているが、男である彼の前だと恥ずかしくて無理だ……。

「残念だなあ……」

美紀「先輩、目がいやらしいです……。そういう目をするから、胡桃先輩が露出を控えるんですよ。由紀先輩も気を付けて下さいね」

由紀の胸元に手を添えて覆い隠し、美紀はジトーツとした眼差しを向ける。そう言えば美紀も悠里も最近では露出控え目な衣装ばかり着ている気がするが、これは警戒されているという事なのだろうか……。頭を抱えて深読みしはじめた彼を見た一行は楽しげに笑ったが、少しして美紀がハツとした表情をテントへと向ける。

美紀「あつ……。そう言えば先輩の寝床はどうしました？テント、一つしか持ってきませんでした」

悠里「あら、ほんとね……。うくん、テントの大ききさからすると余裕はあるけど、男の子と一緒に寝るのは流石にねえ……」

彼との付き合いは長いし、ある程度の信頼はしている。

しかし、だからと言って一緒に眠るのはマズイだろう……。

「いや、別に襲ったりしないけど……」

胡桃「……本当か？」

「ああ、我慢する」

胡桃「我慢って……。お前な……」

少しだけ呆れそうになったが、まあ彼だって年頃の男性だ。

同年代の少女らと狭い空間で肩を並べて眠るとあれば、多少の覚悟や我慢が必要になるのだろう…。

「ははっ、冗談だよ。外で寝るから大丈夫。寝袋か何かあるかな？」

真冬「それなら、ボクのがある…：はい」

「どうも。今日はこれに身を包んで眠る事にするよ」

一人だけ外で寝るというのも少し気の毒だが、仕方がない…。

彼女達は夕食後も少しだけ談笑を楽しんだ後、寝袋に潜った彼をテント前に残して中へと入っていく。

悠里「じゃあ、お休みなさい」

由紀「おやすみ。風邪とか引いたら治してあげるからねっ！」

美紀「お休みなさい。また明日」

胡桃「万が一、魔物とか出たらすぐに言えよ。お休み」

「ああ、お休み」

テントに入る四人を見送り、残るは真冬のみ…。

彼女は寝袋に入ったまま地面に転がる彼の前へ静かに屈むと、その目をジーツと見つめながら囁く。

真冬「明日、頑張ろうね…。ボクらなら絶対に大丈夫だから、みんなでこの世界を平和にしよう…」

「ああ、頑張ろう。頼りにしてるよ、大魔法使いウインター様」

真冬「…ふふっ、任せて」

真冬は彼の頬を軽く叩き、ニコツと微笑みを浮かべてテントの中へと入っていく…。明日、目的地である古城に着く。そこで待つ焔の王さえ倒せば、後はみんなと共に平和な世界を満喫するだけだ。彼は一人覚悟を決めると静かに目を閉じ、眠りに落ちていった…。

## 第六話 『とうちやく』

悠里「そこ、転ばないようにね」

胡桃「ああ…分かってる」

平原でテントを張ったその翌日、目を覚ました一行は朝食を済ませるとテントを片付け、再び歩を進めた…。平原を抜け、小さな森を通り抜けていく。途中、細い川が目の前を流れていたが、所々にある岩の上を渡ってそれを越えていく。まず先頭を進んでいた彼が渡り終え、続けて悠里が…。その次に由紀と胡桃が、最後は美紀と真冬が川を渡り終え、一息つく…。目当ての古城はまであと少しだ。

美紀「もうすぐ…ですね」

真冬「うん…」

この世界にやって来て、”焔の王”の存在を知ってからというもの…真冬は必死に魔法を学び、力を身に付けてきた。後々、大切な皆が…学園生活部がここにやって来ると知っていたから。皆を守るその為、力を身に付けてきたが、その皆も強くなった。今なら、どんな相手だろうと絶対に…。

「…胡桃ちゃん、体の具合は？」

胡桃「全く問題なし、絶対調だ！」

手元に出現させたシャベルをクルクルと回し、最後にパシッ！と掘り込んでから肩へと乗せて胡桃は笑う。どうやら本当に絶対調らしい…。元気な彼女を見ているとこちらまで元気になれる気がして、彼は同じ様に笑顔を浮かべる。

「元気なら良かった…。あとは、この世界を平和にするだけだな」

川を渡り終え、木々の間を進んで森を抜ける…。

辺りにある木の数もだんだんと減ってきて、いよいよ森を抜けられそうだという時、一行の前に女性が現れた。肩まで伸びた茶髪に白いワンピース：背中に小さなカバンを背負ったその人は見た感じ二十代半ばくらいであり、一行と目が合うなり慌てた様子で駆け寄ってくる。

「皆さん、この先は行かない方が良いでしょう！最近、怪しい人がこの先にある古城の中にいるのですが……その人物はどうもあの焔の王らしいと言われているので」

悠里「やつぱり、本当にいるのね……。私達、その焔の王を倒すためにここまで来たんです。あの、もし焔の王に関する情報があるのなら聞いても良いですか？」

この先の古城にいるのはやはり、焔の王らしい……。

現れたこの女性は近くの村に暮らしているらしく、今日はこの辺りにある山菜を取りに来ていたようだ。女性は悠里の言葉を聞いて彼女らが”予言の人”であると知り、安堵したように語りだす。

「あなたが予言の人達なら、焔の王を倒せるのかもですね……」

美紀「はい、絶対に倒します……。ですので、何か情報があれば是非「すいません……戦いの役に立ちそうな情報は無いのです……。しかし、ここ最近起きた事……焔の王がしてきた事についてなら、お話出来ません」

戦う上でのヒントにはなりそうにないが、どんな情報でも聞いておいて損は無い。一行は静かに口を閉ざし、女性の語りに聞きいる。

「焔の王がこの先の古城に現れたのは、今から二ヶ月くらい前でしようか……。奴は突如として現れ、たまたま辺りを見回りに来ていた王国の騎士達を蹴散らしました。幸いな事に、騎士達は誰一人として命を奪われなかったようですが……その際、奴は自分から名乗ったそうです。自分が”焔の王”だと……」

真冬「……騎士達は何人くらいいたの？」



「私も他の人からこの話を聞いたのでしつかり確認した訳では無いですが、恐らく10人はいたと思います…。王国の騎士とあれば、それなりの鍛練を積んだ方々でしょうに…。それがたった一人に負けてしまったのです」

ここにいる全員が王国の騎士や兵隊達とは少なからず交流があるため、彼等がただの雑魚でない事はよく理解している。定期的に城へと招かれ、兵隊達の訓練を手伝っていた胡桃は特にそうだ。

胡桃「10人か…。どんなヤツが来てたかにもよるけど、あたしの知る限り国の兵隊達はみんなある程度強い…。それが束になっても敵わなかったとあれば、相手は明らかに普通の人間じゃないな」

「ええ…。そう言えば奴はその騎士達を蹴散らして名乗った後、騎士の一人に目的を聞かれてこう答えたそうです…。『美しい女が欲しい』と…」

美紀「美しい女…ですか？なんか、思っていたよりも俗ぞくっぽい要求ですね…。もつとこう、世界を征服するのが望みだとか、全てを破壊するのが目的だとか、そういうのを想像していたのですが…」

由紀「みーくん的にはそっちの方が良かったの？」

美紀「別に、良かったって訳では…。ただ、少し期待外れな感じがして」

思っていたのとはどこか違う要求にがっかりしたのか、美紀は残念そうにため息を吐く。そんな彼女を横目に見て、彼は苦い笑みを浮かべた。

「魔王的ポジションのヤツに何を期待してるんだ…」

美紀「まあ、そうなんですけど…：…なんかがっかりしません？美しい女が欲しいくなんて、魔王っていうよりただの山賊じゃないですか」  
「…ま、言いたいことは分からないでもない。それより、マズイ事になったな…。焰の王の望みが美しい女だというのなら、少し危なくないか？」

美紀「えっ？何がですか？」

彼はゆっくり辺りを見回し、そばに立つ少女達を順に眺める…。

美紀、由紀、胡桃、真冬、そして悠里…皆、タイプは違えど美少女に入るであろう容姿をしている。焔の王の好みがどんな女性かは知らないが、これだけの女性がいれば一人くらい気に入られてしまうかも知れない。

「みんな、わりと可愛いからな…。もし戦いに負けたらそのまま焔の王に捕まって、あんな事やこんな事をされるかも…。」

由紀「あ、あんな事やこんな事…?」

由紀は今一つイメージ出来ていないのか、『うーん』と唸りながら首を傾げる。彼は敢えてぼやけた物言いをしたのだが、由紀に危機感を持たせるべく口を開けた。

「ああ、焔の王はきつと、気に入った娘を捕まえて服を引き裂き、そのまま魔王の子を孕ませ——」

悠里「なっ!?なんて事を言うのよっ!!!  
バシンツ!!!」

と激しい音を立てて悠里の平手打ちが炸裂し、彼はそのまま数メートル後方へと飛ぶ。宙を舞い、地面に背中から落下した彼はすぐに起き上がると、ジンジンと痛む頬を撫でながら元の位置へと戻る。

「いてて…可能性の一つを言っただけなのに…」

悠里「そんな可能性は絶対にありません!!」

美紀「け、けど…分からないですよ?綺麗な女の人を求めているくらいですから、先輩の言うような可能性もあるかも…。」

胡桃「ううっ…そんな訳の分からないヤツに襲われるのは嫌だなあ…」

今回の戦いで負けた場合、命を取られるだろうという事は覚悟していた…。しかし、彼の発言を聞いていたら何だか怖くなる。当然、命を取られるのだから怖いのだが、彼の言うような展開はもつと怖い…。

由紀「リーさんナイスボディーだから、狙われちゃうかも…」

悠里「もうっ!! 由紀ちゃんまでそんな事言って!」

真つ赤に染まる悠里の顔を見た由紀は楽しげに微笑み、それと同時に真冬も笑う…。しかし、彼女の微笑みは由紀のような楽しげなものではなく自虐的なものだ。

真冬「悠里みたいなナイスボディーが狙いなら、ボクは大丈夫そう…」

黒いコート越しに自身の胸を撫でてヘラヘラと笑う真冬は見ているだけで痛々しく、悠里や美紀達は何の言葉もかけられない…。しかし、彼は違った。

「大丈夫だよ。もしかしたら焔の王は貧乳好きかも知れないから、真冬みたいなペツタン娘にもチャンスはある」

真冬「……………」

美紀「せ、先輩っ…!」

彼が真冬の肩をバシバシ叩いて笑みを浮かべると、真冬の表情がだんだんと冷たくなっていく…。皆、彼のデリカシーの無さに呆れ、美紀は慌ててフオローしようとしたが、もう遅い…。

「ほら、真冬、元気だぞ——んぐっ!!?」

急に息苦しくなつて視線を後ろへ向けてみると、後方の地面から木の根つこのような物が伸び出てきて首へと巻き付いてきていた…。恐らく真冬の魔法だろう。ぐるりと巻き付いて首を絞め付けるその根を解こうとして右手を使う彼だが、根は予想以上に硬く中々解けない。

「ぐぐ…っ…い…く、苦しい…」

真冬「…ああ、そう」

”貧乳”とか”ペツタン娘”とか言われたのが悔しかったのか、真

冬の瞳には微かに涙が浮かんでいた…。根っこに首を絞められている彼を睨みながら真冬がそつと右手を捻っていくと、その根はより強く彼の首を絞めていく。

美紀「ま、真冬…そのくらいにしておかないと…。」

真冬「…：わかった」

これ以上やると、本当に彼を殺してしまうかも知れない。

美紀は涙ぐむ真冬をなだめ、魔法を止める。美紀に説得された真冬が右手をフツと軽く振るうと、木の根はシユルシユルツ！と勢いよく地面の中へと戻っていった。彼は少し苦しそうに咳き込んでいるが、まあ無事なようだ。

「ゲホッ！ゴホッ!!あゝ…死ぬかと思った」

真冬「うん…殺そうと思った…。」

相変わらず、真冬 of 言葉は冗談なのか本気なのか分からない…。

しかし何にせよ、これからは彼女の胸についての話題は出来るだけ避けようと彼は決めた。多種多様な魔法を使いこなすこの世界での彼女を敵に回したら、命が幾つあっても足りない。

「はあ…何はともあれ、焔の王はすぐそこか…。」

胡桃「気合いを入れていかないとな」

出会った女性に別れを告げ、一行は森を抜けていく…。

そしてとうとう目的地である古城の前へと立ち、その異様な雰囲気の前に気を引き締める…。その城は大きくて立派だが、かなりの間放置されてきたらしく外壁の所々に傷があつてボロボロだ。周囲には魔物らしき大きな鳥が飛び交い、『ガア！ガアツ!!』と耳障りな鳴き声をあげている。

悠里「あら…大きな鳥…。」

由紀「なんか、お化け屋敷みたいだね…。」

美紀「そうですか？結構良い雰囲気のお城だと思いますけど…。」

胡桃「いや、良い雰囲気ではないだろ……。いかにも何か出てきそうな感じがして、出来るなら入りたくない……」

動くヨロイとか、笑い声をあげる絵画とか、そんなのが出てきそうで少し怖い……。ようやくたどり着いた城の雰囲気があまりに異質だったので由紀と胡桃は臆しているようだったが、他の者はスタスタと歩を進める……。

「ほら、二人は来ないのか？」

真冬「嫌なら待つていても良いけど……」

胡桃「っ……ううっ……。い、行ってくて！」

由紀「もう、待つてよく！」

恐ろしい雰囲気の漂う城だが、ここまで来て帰る訳にはいかない。

胡桃と由紀は少し遅れて中へと入り、悠里達と合流する……。

倒すべき相手は……焔の王はすぐそこだ……。

## 第七話『ほむら』

胡桃「おい、待ってって！みんな歩くの速くないか？」

悠里「そうかしら？胡桃が遅いんじゃない？」

ようやく辿り着いた古城の中、一行は真冬の魔法によって明るく照らされた通路を歩きながら辺りを警戒する。いつ、何処から魔物が出てきてもおかしくないと用心していたが、どれだけ奥へと歩を進めても何も出てこない…。が、微かに埃の舞う通路はやけに不気味な雰囲気であり、胡桃の足取りは重くなる。

美紀「ええつと、本当にここであつてる？」

真冬「あつてる…。焔の王はこの先にいる」

皆で少しずつ奥へと進む度に石造りの通路とそれぞれの靴が触れ合い、コツンコツンと音が鳴る。その音や一行の話し声は綺麗に反響して奥の方まで届いているようだが、やはり何も現れない…。しかし、真冬はこの奥に一つの魔力を感じていた。それこそ、焔の王に違いないはずだ。

通路を進み、広々とした階段を上がる…。そうして更に奥へと進み、また階段を上がる。そうやって古城の上部へと進んだ時、これまでこの城内で見してきたどの扉よりも立派で、いかにも重要そうな部屋へと続いていそうな大きい扉が現れた。

「……真冬」

真冬「うん、たぶん、ここがそう……」

真冬もこの扉の先から魔力を感じているようだ。

この扉を開いた先に、倒すべき存在が…焔の王がいる…。

由紀「ちよつとだけ怖くなってきたかも…」

胡桃「…大丈夫だよ。何かあつてもあたしが守つてやる」

シャベルを手にした胡桃はニコツと微笑み、由紀の前へと立つ。

胡桃もついさつきまでは辺りの雰囲気には怯えていたのに、いざ大切な戦いの時が来るとその姿はとても頼もしくなっていてつい頼ってしまいそうになるが、由紀は自身の首をブンブンと横に振って杖をギュツと握りしめた。

由紀「守ってもらってばかりじゃ悪いから、わたしも胡桃ちゃんを守るね？もちろん、他のみんなの事も守るっ！だからもし戦ってる最中に怪我したらすぐに言ってよ？バーンと治しちゃうからっ！」

胡桃「…ふふっ、頼りになるな」

悠里「ええ、由紀ちゃんがいれば安心ね」

由紀「えへへ♪」

悠里に頭を撫でられた由紀は嬉しそうに微笑み、キリツとした目で扉を見つめる。ついさつきまではこれから始まる戦いに怯えていた由紀だが、悠里達と話す内に気が楽になってきたらしい…。一方で美紀はまだどこか不安げな顔をしていたが、真冬がその背をそっと叩いて安心させる。

真冬「まあ、ボクらなら大丈夫だよ。みんな一緒なら、どんなヤツにだって勝てる。だから美紀も安心してね…？」

美紀「…：うん、そうだね。先輩達となら…：絶対に大丈夫…：」

自分に言い聞かせるように呟いた美紀はゆっくり深呼吸すると、落ち着いたような表情を浮かべて頷く…。それを見た彼は安堵したように微笑むと、真冬と共にその扉へ手をかけた。

「やして…やるか」

真冬「…うん」

かつて、この世界の人々にとつともない恐怖を与えた存在”焔の王”…：それがこの先にいる…。彼と真冬は同時に力を込め、その重々しい扉を開く。ギギツ…：ギギギイツ…：…：という音と共に少しずつ開かれた扉の先にはかなり広い空間があり、一行は中へと足を踏み入れていく…。

「……いるな」

広々としたこの大広間には殆ど何も無く、天井ではボロボロのシャンデリアがゆらゆらと揺れている。しかし一行は誰一人としてそのシャンデリアには視線を移さず、ただ奥だけを見つめた…。大広間の奥……そこには一つの大きな椅子、まるで玉座のような物が背を向けた状態で置かれており、何者かの気配を強く感じる…。一行がその者の存在に気付いていように、そこに座していた者もまた既に一行の存在に気付いていたらしく、そこに座り背を向けたまま声を発した…。

『……また…バカな人間がやって来たか』

低い声でそう告げてから鼻で笑い、それはゆつくりと立ち上がる…。

そうして羽織っていた茶色のジャケットを揺らしながら勢いよくこちらへ振り向き、一行を真っ直ぐに見つめて大きな声を発した。

穂村「さあ!!今度はどこのバカがこの穂村様に……って、あれ?」

「あつ……」

悠里「あら……」

真冬「……嘘でしょ…勘弁してほしい……」

焔の王を倒すため、そのためにここへとやって来た…。

しかし一行の前に現れたのは茶色の髪を揺らしながら何とも気まぐずそうな表情を浮かべる男…穂村であり、その見慣れた顔を目の当たりにした真冬はその場でうずくまって頭を抱える。

穂村「どうなってるんだ…こりや……」

穂村の方もまた片手で頭を抱えており、今の状況に戸惑っているようだ。当然、悠里や胡桃、美紀や彼もこの状況には戸惑っていたが、由紀だけは嬉しそうな声をあげながら穂村の元へ歩み寄っていった。



由紀「ほむさくん！久しぶりっつ！！ほむさんもこの世界に来てたの？」

穂村「あ、ああ……まあそうなるな……。ってか、お前どうした？そんなにエロい格好して……」

久しぶりに会った由紀が胸元のザツクリと開いた白い服を身に纏っており、かなり際どい格好をしていたからだろう……。穂村はさつきまで戸惑いの表情をしていたクセに今度は一変して鼻息を荒げ、彼女の胸元を見つめる。そこをジロジロと見つめられた由紀はちよつとした危機感を感じてトコトコと立ち去り、真冬の後ろへと回った……。

真冬「……まあ、いいや。ここまで来たのならやつてやる……。

覚悟して、焰の王」

明らかに人違いだが、真冬は敢えて気付いていないフリをして右手のひらを上げる。今日の前にいるのは知り合いでも何でも無い……この世界に危険を及ぼす存在、焰の王だ……。そう思い込むようにして魔法を放つ準備をすると、穂村は途端に慌てふためく。

穂村「おいおいっ！待てっつて！！その”焰の王”ってのは何なんだよ？ここに来る奴はどいつもこいつもその”焰の王”が何たらかんたらっつて言っつて俺を殺そうとしてくんだけど……あれか、この世界は俺をイジめる為にある世界か何かか？」

真冬「そう……この世界の住民はみんな穂村を憎んでる」

穂村「憎まれるような事なんて何もしてねえぞ……？」

本人はああ言っつているが、せつかくの好機だ……。

穂村はここで仕留めておこう……。真冬は穂村の言葉を無視して魔力を集め、それを右手から放つて吹き飛ばそうとするが、ギリギリのところまで美紀の制止が入る。

美紀「ま、真冬は一旦落ち着いて……。ええつと、穂村さんは何時からここにいますか？それと、ここで何をしていたんですか？」

穂村「うゝむ、話せば長くなるなあ…」

胡桃「短めに纏めてくれるとありがたいんだけど…」

どこから話すべきか…何から話すべきか…。

穂村は暫し頭を悩ませて辺りをグルグル歩き回っていたが、遂にその口を開いて全てを語り出す。しかしその話は無駄に長く壮大で、5分程経った頃には彼と胡桃、そして真冬の三名は集中力を無くしていた。しかし美紀だけは最後までその話をキチンと聴いており、穂村の語りが終わった頃それを分かりやすくして皆へと伝える。

美紀「ええつと、穂村さんは今から二ヶ月くらい前にここへとやって来たらしく、目が覚めた時はこの古城の中にいたそうです」

真冬「へえ…で、外に出たりしなかったの？」

美紀「したそうですが、見慣れない生き物…つまり魔物の存在に驚き、また中へと戻ったようですね」

穂村「城から出たら森の中をすっげえデカイ生き物が外歩いててさ、いやゝ、さすがにドン引きしたな」

魔物を目の当たりにした穂村はまた城の中へと戻り、とりあえず一旦眠ったらしい…。『これはただの夢だ、寝て起きたら現実に戻っている』と考えたらしいが、目が覚めてもまだ城の中にいたのでこれが現実だと気付いたようだ。

美紀「…で、これが現実だと知った穂村さんはその後、この城の周辺の川や森で食料の確保をしては城内に戻り、どうにか生活していたようです。しかしつい先日、王国の兵隊さん達が見回りの為にここへと来て…」

穂村「ああ…いきなり人の城の中に来て、『お前は誰だ?』とか言ってきたやがってな。こっちが仕方なく適当に自己紹介したらしたで剣やら槍やら振り回して襲ってくるし、最低な奴らだぜ」

いや、そもそもこの城は穂村の物ではない…。

そうツツコミを入れたくなる真冬だが、彼女はそれをグツと堪えて考える…。王国の兵隊達は何故穂村を襲ったのか…。その答えはす

ぐに出た。

真冬「…穂村、兵隊達に自分の名前言ったでしょ？」

穂村「ああ、あの時、俺は外で仕留めた魔物の肉をどう調理すべきか悩んでいたところだな…。少し忙しかったから、素直に名前を教えちゃったんだよ。そうしたら次の瞬間、いきなり切りかかってきやがった…！ぶち殺してやろうかとも思ったが、適当にボコボコにするだけで勘弁してやった。優しいだろ？」

やはり、真冬の考えは当たっていた…。

王国の兵隊達は穂村の名前を聞いた瞬間、勘違いをしたのだ。

真冬「穂村の”穂村”<sup>ホムラ</sup>を：焰の王の”焰”<sup>ホムラ</sup>と間違えたんだ…。この世界だと、ホムラと言えば焰の王の事を指すようだから…兵隊達は穂村の事を焰の王だと勘違いしたんだと思う…」

穂村「いや、だからそのホムラの王って何だ？」

この世界の事を殆ど知らない穂村へ、美紀が分かりやすく説明をしていく…。この世界は自分達がいたのとはまた別の”エテポロン”と呼ばれる世界であり、魔法や魔物が存在しているという事…。そして、昔に焰の王と呼ばれる危険な者がいたという事…。全てを説明し終えた時、穂村は納得したように頷いていた。

穂村「あゝ、はいはい…：つまりは人違いされてたって事ね」

「というか、よく今まで無事だったな。話を聞いた感じだと王国の兵隊達やら何やらが来てたみたいだけど、全員追いついたんだろ？」

穂村「この城に…いや、この世界に来てからか…。やけに体が軽くてな。相手は何人いようが、どんな鎧や剣を身に付けていようが、全く負ける気しなかった。この前なんて、最初の時に見たバカデカイ魔物を素手で倒したんだぜ！」

ただの人間が王国の兵隊達を素手で追い払ったり、大型の魔物を倒すのなんてまず無理だ。どうやら、穂村もこの世界の影響を受けて体が更に強くなっているらしい…。嬉々として語る穂村の横、真冬は深

いたため息を放つ…。

真冬「さて……これからどうしよう…」

悠里「焰の王は復活しておらず、ただの人違いだった…。ここまでは良いけど、王国の人達への説明が大変ね。穂村さんの事、何て説明しようかしら」

あの古城にいたのは焰の王じゃなかった。

自分達の知り合いだった。

そう説明すれば、全て丸く収まるだろうか…。

真冬と悠里が頭を悩ませる一方、穂村は彼へと声をかける。

穂村「お前ら、今どこに暮らしてる？柳さん達は一緒か？」

「僕らは今、王国中心部の城下町に暮らしてる。柳さん達はいない。僕と真冬と、由紀ちゃん達だけだ」

穂村「へく……そっか…」

何度も小さく首を振り、穂村は顎に手を添えて何かを考え出す…。

この男の考える事は大概良くない事なのだが、今回も例外では無かった。

穂村「人違いで終わらせたりせず、このままその焰の王つてヤツとしての人生を満喫するのもありかもな…」

「…どういうことだ？」

穂村「なに、簡単な話だ。この世界での俺、めちやくちやに強いから：逆らう奴らは全員力でどうにかしちやって、そのまま魔王プレイを楽しむのもありかなって」

この男は…少し力を手にした途端にまたバカな事を言い出す…。

彼はその突拍子の無い発言に呆れてため息をつき、それをこっそりと聞いていた真冬も同じようにため息をついていた。

真冬「穂村も少しは強くなったようだけど、逆らう人達を全員…なんて無理。悪巧みをしてもらい必ずつか必ず止められるから、大人しくした

方が良い」

穂村「そんなの分からないだろ。ちようどここに良い手下もいるし！」

穂村はそう言って笑顔で右手を上げ、彼の肩をバシツと叩く。

前々から気の合っていた彼を手下にしたようだが、彼は穂村の事をあまり気に入っていない…。だからこそ、その手をパシツと払いのける。

「魔王の手下になるのは勘弁」

穂村「おいおい、本当に良いのか？魔王の手下になれば世界の半分が貰えるぞ。かなりお得な特典だぞ？」

「世界とか…別にいらない」

そもそも、それを渡す権利は穂村に無い。

大体、世界の半分を貰ってどうしろと言うのだろう…。

彼はその契約を断るが、穂村は簡単に諦めない…。

穂村「じゃああれだ、女の子を分けてやる。俺がこの世界を征服した暁には、お前好みの女の子を何人でもくれてやろう!!もちろん、そこにいる由紀、美紀、胡桃、狭山の事も好きにして良いぞ？」

悠里を候補に入れなかったのは、穂村自身が彼女の事を気に入っているからだろう。いくら彼が手下になったところで、悠里だけは渡さないつもりらしい…。が、候補として挙げられた四人を好きにして良いという言葉はかなり魅力的であり、彼の眉がピクリと動く…。

穂村「ほら、毎日好きな娘をそばに置いて、好きな事してもらえんだぞ？コスプレだってさせ放題だし、いつその事…何も着せないというのもありだ」

美紀「あなたって人は…本当に最低ですね…」

胡桃「ああ、呆れて物も言えねえ…」

冷めた視線を穂村へと浴びせるが、当の本人はまるで気にしていない。

執拗に彼を勧誘し、悪の道へ引きずり込もうとする…。  
様々な誘惑を彼へと突き付け、己の部下にしようとするが…

「…ふふっ、バカだよなあ、ほんと…」

少しして、彼は呆れたように笑った…。

その笑い声を聞いた穂村はムツとした表情を浮かべたが、胡桃や真冬は安心したように微笑む。やはり、彼は穂村の誘惑に負けるような男では無かった…。そう思っていたのだが…次の瞬間…

「この世界の王である穂村様に逆らうとは、バカな女達だ!!よろしい、まず手始めにお前達をこの場で倒し、抵抗出来ないように縛り上げてからその身体を味あわせてもらおう!」

と、高らかに宣言した…。

何時からか穂村の真横に陣取っていた彼は右手に構えた剣の切っ先を由紀達の方へと向け、見事悪役へと成り果てる。

穂村「おおっ!!!さすが俺が見込んだ男だっ!!」

胡桃「…おい、バカが二人に増えたぞ…」

穂村一人でも面倒なのに、彼まで悪の道に堕ちてしまった…。

一行は今日一番深いため息を放ち、戦闘の準備をする。

まさか、こんな所で穂村と…そして彼と戦うなんて…。

由紀「あ、あれっ…?彼やほむさんと戦うの?」

悠里「ええ、少しお仕置きしなきゃダメみたい」

美紀「どうしようも無い人達ですね…」

由紀だけはまだ戸惑っているようだが、それ以外の全員が臨戦体勢を取る。当然、彼と穂村も臨戦体勢を取って戦いに備えるが…寸前になってふと、彼は思う…。自分と穂村の二人だけで、彼女ら五人を相手に出来るだろうか…と。

「あ…少しマズイか…?」

穂村「あん？何がだ？」

純粹な戦闘能力で言えば女性陣最強は真冬であり、次に胡桃、悠里、美紀、由紀という順番になるだろう……。一方で彼の戦闘能力は胡桃と互角程度であり、真冬には勝てない。穂村がどの程度強いかわからないが、胡桃以外の全員を一人で相手に出来るだけの力があるだろうか……。そのくらいしてもらわねば、この勝負は負け確定なのだが……。

真冬「後悔しても、もう遅い……」

穂村「バカめ!!後悔するのはお前らの方だ!!」

ダンツツ!!と勢い良く地面を蹴り、穂村は凄まじい速度で真冬の前へと駆ける。この世界にやって来てから更に強くなったその身体を使い、接近戦を挑むつもりなのだろう。一瞬にして間合いを詰めた穂村は勝利を確信してニヤリと笑みを浮かべたが、真冬が指を一振りしただけでその身体は宙を舞い……。

穂村「んがつつツ!!」

そのまま横の壁へと勢い良く、虫のように叩きつけられた……。

元の世界でも高い身体能力を持っていた穂村はこの世界で更に強くなり、より一層の自信を身に付けていたようだが、中途半端な力では真冬には勝てない……。

石で出来た壁へとめり込む程に叩きつけられた穂村はもう、そこにハマったまま動かなかった……。いや、よく見てみるとピクピクと動いているので生きているようだが、気絶しているのは間違いないだろう。従うべき相手を失い一人になった彼は持っていた剣を地面へと置き、両手を上げて苦笑いする……。

「…………ええつと、その……降参で……」

気まずそうに呟くと呆れ顔をした胡桃が目の前に立ち、小さく振り上げたシャベルで頭を小突く。コツン…と良い音が響き、それと同時に鈍い痛みが脳天を走ったが、これくらいで済んだならまだ良い方だろう……。もし抵抗を続けていたら、穂村のように壁へめり込んでいた

のかも知れないのだから。

悠里「はああ…色々あったけど、とりあえず終わりかしら？」

真冬「そうだね…よし、そこで気絶してるバカを連れて街に戻ろう」

気絶状態にある穂村を壁から離し、念のために縄で縛り上げる。

そしてそれを彼に担がせ、一行は再び街へと戻っていった…。



## 第八話 『ようこそ』

真冬「…というわけで、例の古城にいたのは焰の王ではなく別の男だった。男の名前は穂村竜也。一応…ボクらの知り合い。ヤツは何というか少しバカな男で…それから…」

それから、とんでもない変態だ…。

真冬は皆と共に暮らしていた街の奥にある大きな城の、これまた大きくて立派な広間にて気まずそうに口を開く。広間には数人の関係者が集まり彼女の言葉に耳を傾けていたが、中でも真冬の視線の先にある椅子に座る一人の男性はこれを興味深そうに聞いていた…。

口周りに立派な茶色の髭を生やし、見るからに価値のありそうな紺色のローブを纏うこの男こそ、真冬達が訪れたこの世界”エテポロン”の王だ…。王は真冬の話がある程度聞いた後、『ふふっ』と鼻で笑いながら口を開く。

「そうか…焰の王ではなかったか…」

真冬「うん…人違い」

「まあ、それはそれで良い知らせだと言えるだろう」

封印されていたはずの焰の王が復活という話が流れた時、世の中に緊張が走った…。王は人々の不安を打ち消すべく兵隊達を集め焰の王を討とうとしたが、肝心の居場所が一向に掴めずに頭を悩ませてもいた…。しかしそんな矢先、真冬をはじめとする”予言の人物”達が現れ、焰の王の居場所を突き止める事も出来たのだが…そこにいたのは偽者というか…全くの別人。

色々と驚きもしたが、そこにいたのが穂村という偽者で良かった。

これまで探してきた者がただの偽者だったということとは、世に流れていた本物の焰の王の復活の噂自体がただの誤報だった…という可能性があるのだから。あんな化け物、復活していないのならそれが一

番良い。

「では、また改めて国民に報告しておこう。焔の王は復活などしていなかったとな……」

真冬「……うん、とりあえずはその方向でお願いする……。あと、例の偽者……穂村の事なんだけど……」

「うむ、その男がどうかしたのか?」

由紀達は家に待たせているから、ここにいるのは自分だけ……。

辺りにはこの国のお偉方が集まっており、真正面には王がいる……。そんな状況の中、真冬は額に冷や汗を浮かべて苦笑する。

真冬「穂村は……これまでに何度か兵隊達と戦ってきたと聞いたんだけど……その……死人とか出てる……?」

今、穂村は城の牢屋に捕らえられている。

もつとも、あの男を牢に放り込んだのは真冬なのだが、あくまでも一時的な措置として閉じ込めただけ……。しかし、もしもこれまでに何人かの兵隊が穂村の手によって殺されてきたというのなら、ヤツはそのまま処刑されるかも知れない。もし王がその決定を下したら、流石の真冬も口出しは出来ないだろう。

「死人か……いや、どうだったかな?」

王はそばにいた赤髪の女性を呼び、何かを尋ねる。

恐らく、穂村がこれまでにやってきた事を……その被害を確認しているのだろう。王のそばに立つ女性は腰まで伸びた赤髪と美しく知的そうな顔が印象的な人であり、この一件の資料と思われる物をペラペラと捲りながら真冬に視線を向けた。

「例の人物……穂村という男は我が国の兵士達と幾度かの戦闘を繰り広げていましたが、死者は出ていません。また、戦闘の全ては兵士達から仕掛けたものであり、穂村の方から手を出してきた事は無いようです。焔の王と一般人を間違えるなんて……兵士達は早とちりが酷いで

すね?」

「あははっー! まったくその通りだ。もう二度とこんな事が起きないよ  
う、よく注意しておかねば」

ケラケラと笑う王と、その横で呆れ顔をする赤髪の女性…。二人を  
見た真冬はまた苦笑すると、こっそり安堵のため息をつく。穂村は  
色々な意味でバカな男だが、この世界に来てから誰かを殺したりはし  
ていないらしい。

真冬「あ、あの…言いづらい事なんだけど、穂村を連れていっても  
良い? もう二度と誰かに迷惑かけたりしないよう、キチンと言ってお  
くから…」

穂村の事は大嫌いだが一応知り合いだし、少しは世話になってい  
る。

このまま処刑されるか、牢屋に閉じ込められっぱなし…という展開  
になるのは少し可哀想な気がしなくもない。真冬が申し訳なさそう  
に口を開くと、王は半笑いしたままあっさり言葉を返す。

「ああ、遠慮せず連れて帰ってくれ。元はといえば兵士達が早とちり  
した事が悪いんだ。その穂村という男には何の罪も無い」

真冬「…どうも、ありがとう。じゃああのバカはボクが連れ帰るか  
ら、また何か事件でもあったら遠慮せず言ってほしい」

「そうさせてもらおう。君達の助けがあれば大概の事は解決出来そう  
だからな」

真冬はもちろん、彼や由紀達も今やかなりの力を身に付けている。  
その力が人々の助けになれるのなら、みんな喜んで手を貸すだろう  
…。

王に対して小さくお辞儀をした後、真冬はそこを立ち去ろうとする  
が、王は突如ハツとしたような表情を見せる。どうやら何か伝え忘れ  
ていた事を思い出したらしい。

「そう言えば、君達と会いたがっている者がいてな。この後、時間は空

「いているか？」

真冬「あ…ごめん…この後、人と会う約束をしてるから…」

「そうか…なら良い。また幾らでも機会はあるだろう」

真冬「うん、また今度…。因みに聞いておくけど、ボクらと会いたがっているのはどういう人？」

「医師の一人だ。中々に優秀な男で…治療の困難な病も、一部の魔物が持つ厄介な毒も、すぐに治療法を見付けてそれに合う薬を作り上げてくれる。つい最近、ここで雇ったばかりなのだよ」

つまり、王様御抱えの医者という事か…。

そんな人物が何故、自分達に会いたがるのだろうか…。

ちよつとした疑問が残る中、この後とある場所である人との待ち合わせをしている真冬はその場をあとにして地下にある牢屋に寄り道するとそこにいた穂村を連れて城から出て、町の方へと向かっていく…。

そうして彼女が城を出た後、王の元に一人の男が現れた…。

男は辺りを見回してから小さく鼻で笑うと、王の前に立つ。王はその男と目が合うなり苦笑して、全てを伝えた。

「すまない、彼女は行ってしまった。何やらこの後、誰かと会う約束をしているらしく…無理に引き止めるのも悪いかと思つてな」

話を聞いた男はそつと頷き、微笑みを浮かべる。

真冬に会えなかったのは残念だが、正直そこまで急ぎでもない…。

ただ、彼女がこの城にやつて来ているのであれば”久しぶりに”顔を合わせておきたいと思つていただけ。これから先、彼女らと会う機会は幾らでもあるだろうから、慌てる必要もないだろう…。

くくくくくくくくくくく

真冬「…全く、どうしてこんな事に…」

城を出て、町へと戻つた真冬は待ち合わせ場所として選んでいたと

ある食堂の中、席について深々とため息を放つ。すぐ隣に座っているこの男：穂村がこの世界に存在していた、というのがこの悩ましげなため息の原因だ。

穂村「そう言うなつて。前の世界じゃ仲間だったんだからさ、この世界でも仲良くやろうぜ？」

真冬「絶対ムリ……………」

ちようど夕飯時だからか、食堂は多くの人で賑わっていた。

元の世界にもあつたような料理から、この世界に来て初めて見掛けのような料理まで、様々な注文が飛び交っては料理人がそれらを仕上げて店員がそれぞれの席へ運ぶ…。皆、その料理を食べたり酒を飲んだりして明るく騒いでいるが、隅の席に座る真冬の表情は暗い。

真冬（まさか、また穂村と会うなんて…………）

もう一度深いため息をつき、注文していたドリンクを飲む…。

出来る事ならここでやけ食いでもして気を紛らわしたいところだが、家では悠里が皆の分の夕飯を作って待っている。ここでは軽い飲み物を飲む程度に抑えておかなくては…。

真冬「さて、本題に入るけど良いかな？」

「ああ、大丈夫」

真冬の正面、テーブルを挟むようにして席についていた彼が返事を返す。本来、真冬はここで”彼と二人きり”で会い、ちよつとした話し合いをする予定だった。…が、どういう訳か穂村が牢屋からそのまま付いてきた為、仕方なく三人でテーブルを囲んでいる。真冬と彼は悠里の夕飯に備えてここでの食事は控えていたのだが、穂村だけは大量の料理を遠慮なく注文してはそれらにがつついていた…。

真冬「…………ええつと、とりあえずこれからの事を決めよう。ボクはまだ少し気になる事があるから、明日にでもこの街を離れる。キミはどうするの？」

「あゝ…同じく、ここを離れて色々な所に行ってみようかな」

真冬「でも、みんなはどうする?ここに置いていく?」

「まあ、それが一番良いでしょ…。みんな、ここでの暮らしには満足しているようだし、街の便利屋として色んな仕事をしていれば生活費にも困らない」

由紀達は皆から頼りにされているから、便利屋なんて開いた日には大繁盛間違い無しだろう。ちよつとした魔物の退治から、怪我の治療まで…。それらを仕事としてきちんと報酬を受け取れば、それなりに稼げるはずだ。もつとも、彼女達の事だからそこまで高額報酬は受け取ろうとせず、どれも安価で引き受けるだろうが…。

穂村「んん?なんだよ、お前も狭山も、ここ出てくのか?」

真冬「うん、穂村はどうする?」

穂村「そりやもちろん…リーさん家の世話になる!ほら、ボディーガードとか必要だろ?」

真冬「…それだけはダメ。穂村をあの家においておくと色々問題が起こりそうだから、どうしてもこの街に残ると言うのならどつか別の家に住んで」

彼はともかく、穂村をあの家…四人の少女が暮らす家に置いておくのは危険だ。大体、彼女達は皆とても強い娘達だからボディーガードなんて必要ない。どちらかと言うと、穂村のような変態を身近に置いておく事の方が彼女らにとっては危険だ。

穂村「なんだよ、つまらないな…。じゃ、俺もここを出てく。んで、何か面白いモンでも見付けるさ。この世界には色々面白い事が散らばっていきそうだしな」

真冬「うん、それが良い…」

結局、彼も真冬も穂村も、それぞれこの街を出ていく事を決めた。また後で悠里達に事情を説明し、明日にでも出発しよう…。

そう決めた時、穂村はテーブルに並んだ料理を口に運びながら首を傾げる。自分はこの世界で何か面白い事を探す為に旅立つのだが、真

冬達は何を目的に旅立つのだろう…。そう疑問に思った。

穂村「狭山とお前は何でここを離れるんだ？」

尋ねてみると二人が微かな間黙り、それから真冬の方が口を開く…。

真冬「今回は本物を倒そうと思って……」

穂村「本物？」

真冬「うん…今回、ボクらが見付けたのは穂村と言う偽者だった。だから次こそ、本物の焔の王を倒す」

本物の焔の王を倒す…。

真冬はそう告げたが、この国の王や関係者達の多くは“焔の王が復活した”という話自体が誤報だったと考えている。そして、その話は彼や穂村の耳にも届いていた。

穂村「いや、その焔の王つてのはそもそも復活してなかったんだろ？

なら、このままほっというて大丈夫じゃねえの？」

真冬「…ううん、ヤツはもう復活してる。間違いない」

穂村「随分と自信たっぷりな言うなあ……」

焔の王が既に復活しているというその証拠、確信をどこで得たのかは知らないが、真冬の顔は真剣そのもの…：単なる予想や思い込みで言っているようには見えない。また、彼も真冬と同じ事を考えていたらしく、似たような表情を見せていた。つまり、この二人はこれから、復活した焔の王に関する情報を集める為に旅立つつもりなのだろう。

穂村「…：よし！分かった。なら、俺もその焔の王つてヤツの情報を集めつつ、色んな所を回ってみようかね。俺が兵隊達に襲われたのだって、元はといえばその野郎のせいだからな？」

真冬「…ふふっ、仕返しでもするの？」

穂村「ああ、見付けたらただじゃおかねえ…：すぐにぶっ飛ばす。

：つてか、そいつに関して言えばただぶつ飛ばすだけじゃなく殺した方が良いのか？」

真冬「うん…もし穂村がどこかでそれっぽいヤツと出会って、それが焰の王だと確信出来る何かがあったら殺しても構わない。けど、たぶん穂村だけじゃ無理。だから万が一、何か手掛かりを掴んでも一人で戦わないで」

穂村「何だよ、一緒に戦ってくれるのか？」

真冬が自分に協力する筈はない…。

そう考えていた穂村はふざけた笑みを浮かべるが、意外にも真冬はその首を縦に振ってニコリと笑う。

真冬「うん、戦ってあげる…。そして、穂村に見せてあげるよ。ボクが何故、この世界で”大魔法使い”と呼ばれているのかを…。」

穂村「…ははっ、そりゃ頼もしい事で」

この世界には元の世界と同様、手紙や電話等に似た連絡手段が多数存在している。なので離れ離れになっていたとしても、何らかの方法で互いに連絡を取り合うことは可能だ。彼と真冬、そして穂村はそれぞれ別の道に進みつつも焰の王へ繋がる手掛かりを探す事を決め、悠里達の待つ家へと戻っていった。

その帰路、真冬が終始不機嫌そうな顔をして愚痴を溢していたのは、穂村が一切の金銭を持たぬまま大量の料理を胃に収め、その代金の全てを真冬に肩代わりさせたからだろう…。

~~~~~

家へと戻った彼等は悠里が作ってくれていた夕飯を食べた後、先程話し合っていた事を皆へ打ち明ける。

悠里「えっ!?!明日出ていくの!?!」

真冬「うん」

美紀「これはまた…急な話だね」

予想はしていたが、やはり皆驚き、戸惑っていた。

元の世界で出会ってからのというもの、こちらの世界でも共に暮らし、行動を共にしてきた彼や真冬がいなくなるというのだから驚きもするだろう…。悠里は何時になく目を見開いて困惑しているし、由紀もかなり焦っている。

由紀「ど、どうして出てくの？」

「うくん……せつかくやって来た異世界だし、少しくらい冒険しようかと思ってね」

今もどこかで身を潜めている焰の王を倒し、本当の平和を手にする…というのが真の目的だが、彼は敢えてそれを隠す。真の目的を話してしまえば、皆が心配すると分かっているからだ。

美紀「…真冬も…先輩と同じ考えなの？」

真冬「うん……まあ…そうかな…」

気まずそうに顔を背けながら、ポツリと答える…。

真冬との付き合いはそこまで長いものでもないが、それでも美紀は気付いていた。今、真冬は嘘をついた…。彼女達はただ冒険をする為に出ていくのではない。もっと、他に目的がある…。が、それを深く追及するのも悪いような気がして、美紀はそっと口を閉ざす。

「元の世界では状況が状況だったから行動を共にしていたけど、この世界は今のところかなり平和だ。なら、少しくらいの間は別行動したって構わないでしょ？」

悠里「それは……そうだけど…」

けど、やはり寂しい…。

確かにここにいる全員、元々はただの他人。

無理に行動を共にする必要は無い…。

…が、彼も真冬も今は大切な仲間であり友人だ。これまで苦楽を共にしてきた二人が遠いところに行くのは何だか寂しくて、少しツライ…。

胡桃「お前は…あたしらと離れたかったのかよ…？」

「いや、そういう訳じゃ——」

胡桃「ま、冒険したいって気持ちは分かるけどさ…なんか…話がいきなりすぎるだろ…」

せつかく、この世界でも一緒になれたのに…。

唯一の不安だった焔の王は復活していなくて、安心したのに…。

彼と目を合わさず、何もない壁を見つめながら胡桃はため息を放つ。

この世界は元の世界よりもずっと平和なのだから、彼がそこを冒険したいと言うのなら大人しく見送るべきなのだろうが…何故かそれが出来ない。

胡桃「はあ…」

悠里「……………」

重苦しいため息を放ち続ける胡桃の横顔を見て、悠里は頭を悩ませる。

彼も、真冬も、穂村も、もう旅立つ事を決めているらしい…。

悠里「…ふう、わかったわ…明日出ていくのね？」

「まあ…はい…」

悠里「どうせ言っても聞かないだろうから、これ以上止めはしないわ。けど、少しだけ心配なのよね…。真冬さんと穂村さんはともかく、あなた…一人で生活出来るの？」

真冬は皆よりも先にこの世界にいたようだが、その間問題なく一人で生活していた…。穂村もまた、例の古城で長い間一人暮らしをしていた…。しかし、彼はどうかだろう？こんな異世界の中、一人で生活出来るのだろうか？悠里はそこを指摘し、彼の額に冷や汗が浮かぶのを見てニヤリと微笑んでから一つ提案をする。

悠里「仕方ないわね…：…胡桃、付いて行ってあげたら？」

胡桃「なっ?!あ、あたしがっ!？」

「へっ？いや……りーさん、それは……」

突然の事に胡桃は戸惑い、彼もまた戸惑う…。

確かにこの世界ではまだまだ不慣れな事も多く、一人暮らしするのは少し不安だ。胡桃が付いてきてくれたら頼りになるだろうが、彼女が付いてきてくれる訳が無い。

「胡桃ちゃんだって、みんなと離れるのは嫌だろ？」

胡桃「そりやまあ…嫌だけど……でも、その…ええつと……」

チラチラと視線が合い、その度に胡桃は苦笑する…。

そして幾度か連続で視線が合った後、胡桃は彼の事を横目で見つめながら頬を微かに紅潮させた。

胡桃「もし、どうしてもって言うなら……付いてってやるよ…」

「……マジですか」

ただ気楽に冒険する訳ではなく、焰の王に繋がる手掛かりを探す事こそ真の目的。道中、危険な目に遭う事があるかも知れない。出来る事なら彼女達は巻き込みたくないが、胡桃なら…それらを共に乗り越えてくれるだけの強さがあるかも知れない…。彼は悩みに悩みに、そして…静かに口を開く。

「じゃあその…付いてきてくれるかな？」

胡桃「ん、ああ……仕方ないな……」

由紀「え〜！胡桃ちゃんも行っちゃうの!？」

『そんなの寂しいよ〜！』と叫びながら由紀は胡桃に抱き付き、離れようとしなない。中々離れない由紀に対して胡桃は困ったような表情を浮かべていたが、彼女の胸元に顔を埋める由紀の表情は先程よりも少しだけ明るくなっていた…。胡桃が一緒なら彼も大丈夫だと安心したのだろう。…もちろん、寂しいという気持ちはあるようだが…。

美紀「確認しておきますけど、お別れじゃないんですよね？」

「…ああ、お別れじゃない。ちよつとした旅行みたいなものだ。たま

には顔を見せに来るし、やる事やってある程度満足したらこの家に戻ってくる」

由紀「旅行かあ……じゃ、お土産も買ってきてね？」

「旅行っていうのはただの例えであって……いや、分かった、何か買って帰ってくるよ」

由紀の向けるキラキラした眼差しを前に彼は屈し、戻る時は土産を持ってくる事を約束する。自分一人で出ていくのならともかく、付き添いとして胡桃を預かったのだから、ここには定期的に戻ってくるようにしよう……。彼と胡桃、そして真冬と穂村は悠里達に手伝ってもらい支度を済ませた後、それぞれの部屋で就寝して朝を迎える……。いよいよ、旅立ちの時だ。彼と胡桃は大きなカバンを背負い、見送りに来ていた悠里達と向かい合う。

悠里「必要な物はちゃんと持った？」

胡桃「ああ、大丈夫」

悠里「彼のこと、頼むわね？」

胡桃「んん…分かった」

家の外へ出て朝日を浴びながら、悠里は笑顔で胡桃の背を押す。

続けて美紀、由紀も挨拶代わりに胡桃の肩を叩き、ニコリと笑った。

美紀「じゃ、お元気で」

由紀「何かあったら連絡してよ？待ってるからね？」

胡桃「分かってるって……お前らこそ、しっかり留守番してろよ？」

自分達がいなくなればこの家に残るのは悠里、由紀、美紀の三人だけになってしまいが、彼女達なら何の問題も無いだろう……。胡桃は何の不安も無さそうな笑顔を浮かべて二人の肩をポンと叩き、彼の横へと立ってその時を迎えた。

「んじゃ、行ってくる」

悠里「ええ、行ってらっしゃい」

美紀「二人とも、本当にお気をつけて」

由紀「出来るだけすぐ帰ってきてね〜！」
各々が言葉を放ちながら手を振り、早朝の道に行く彼と胡桃を見送る…。

二人は定期的にこちらに振り向いては手を振り返してくれたが、その姿はやがて道の奥に消えて見えなくなった。

穂村「…さて、じゃあ俺も行くか」

真冬「…ボクもそろそろ行く」

由紀「あ〜あ…寂しいなあ…」

本格的なお別れでは無い…。いつかまた、会える時が来る。

分かつてはいるのだが、寂しいという気持ちを抑えられない…。

悠里「暫くは三人でお留守番ね…」

穂村「何かヤバい事があつたらすぐに連絡を！リーさんの頼みとあらば、どこにいたってすぐに戻って来るんで!!」

悠里「ふふつ、分かりました。何かあれば遠慮なく呼ばせてもらいますね」

美少女には弱い穂村だが、中でも悠里はかなり好みらしく、他の人間に見せるのとはまるで違う態度をとる。彼女に呼ばれたとあれば、本当に地獄の果てからでもやって来そうだ…。

悠里、由紀、美紀の三人は彼と胡桃に続いて穂村と真冬を笑顔で見送り、その姿が見えなくなつてからため息を放つ。どれだけの期間になるかは分からないが、これから暫くは三人だけでの生活が始まる。

悠里「さて、じゃあ家に戻りましょうか」

美紀「…ですネ」

由紀「は〜い」

少し寂しいが、永遠のお別れではない。

また、その内会える…。

今はただ、その時を楽しみに生きていこう。

悠里は由紀と美紀の見ていないところで自身の頬を軽く叩き、気合

いを入れる。彼と胡桃、そして真冬がいなくなった分、これからはより一層頑張らねばならない。悠里が静かに気合いを入れ直した頃、彼と胡桃は町外れにある石橋の上を歩いていた…。

胡桃「これから、まずどこに向かうんだ？」

「ん、気の向くままにブラブラと…。」

彼はそう答えたが、そんな適当なノリで大丈夫なのだろうか…。

呆れた胡桃が小さなため息を放つと、向かいの方から大きな荷車を引いた男性が現れて彼へ声をかけてくる。大きくて立派な体をしたその男性は町の職人らしく、以前彼に頼まれていた仕事がちょうど終わったところらしい。

「おう！頼まれていたヤツ出来たぜ！」

「お疲れ様です。どれどれ…」

品物は荷車に積まれているようなので、出来を確認するべく荷車にかかっていたシートを捲る。彼はその出来に満足して微笑みを浮かべたが、背後からそれをこっさり覗きこんでいた胡桃は首を傾げて苦笑した。

胡桃「え…：…なんだよ、これ」

「リーさん達はこれから、この町で便利屋をやって稼いでいくからね。店を開くとあらば看板が必要でしょ？」

胡桃「便利屋？ああ、そう言えばそんな事言ってたな…」

この世界に来てからというものの、色々な人達の手助けをしてきた。思い返せば元から便利屋同然の暮らしをしてきていたのだが、これからはそれをより本格的なものとしていくわけだ…。つまり、この看板はその為の第一歩なのだろうか…。

胡桃「にしても、この名前はどうかなんだ？この状況でこの名前は少し意味が分からないぞ」

「確におかしいかも知れないけどさ…：…他に思い付かなかったんだ

よ。まあ、意味なんてどうでも良いだろ？大切なのはノリだよ。りーさん、由紀ちゃん、美紀、それに胡桃ちゃんといったら、やつぱりこれでしょ？」

胡桃「……………ま、そうだな。良いんじゃないか？」

看板に書かれていた文字……………つまり悠里達がこれから開く便利屋の名前は胡桃にとっても馴染み深いものであり、思わず笑みが溢れる。自分はこれから、彼と共に少しでも皆から離れて暮らす事になる…。しかしまた何時の日か皆のもとに戻って、共に活動する事が出来るはずだ。

胡桃「…よし！とつとと行こうぜ！」

「ああ。…じゃあ、その看板はあの家にかけておいてくれますかね？」
「おお、分かったよ！」

職人の男性に別れを告げ、彼と胡桃は歩き出す。

そしてその日から、悠里達が暮らしている家の扉の上にその大きな看板がしっかりと付けられた…。町の人々はその看板を目印に家へと入り、優しくて頼もしい少女らに数々の依頼をする。

便利屋を開いて数週間経った頃にはその名もかなり有名になり、彼女らを頼りに町の外から訪れる人も増えてきた。優しい少女らは今日もその町で多くの人々を助け、そして笑顔を振り撒く…。

魔法の存在する異世界…。エテポロン”。

微かな西洋感の漂う城下町の中で最も有名な存在となったその便利屋へ、また一人新たな客が訪れる。そして、桃色の髪を揺らす可愛らしい少女がそれを出迎えた。

由紀「…おおっ？お客様ですか？」

その人物が頷くと少女はニコニコと微笑み、今日も明るく声を張る…。

由紀「ようこそ！学園生活部へ!!」

《New!!》第九話 『ウィンター／狭山真冬』

真冬「…ここに来るのも久しぶりだな…」

由紀達と別れた数日後、真冬は城下町から遠く遠く離れた場所にある森の中へ足を踏み入れ、その奥を目指していた…。大小様々な種類の樹木や植物がズラリと並ぶ森は空から降り注ぐ日差しを傘のように遮っているが、所々で木漏れ日が射して草の生い茂る地面を照らしている…。辺り一面を緑に囲まれているからか、やはり空気も美味しい気がした。

狂暴な魔物の気配も殆どなく、木々の陰から顔を覗かせるのは可愛らしいリスや小鳥ばかり…。真冬はその小動物らに笑みを向けながら奥へ奥へと進み、そして目的の場所にたどり着く。

広大な森の中、開けた場所にポツリと建つ小さな家…。

おとぎ話に出てくる妖精や小人が住んでいそうなその家は一見すると綺麗に見えるが、そばに寄ると窓や扉についている埃が目立つ。また、屋根から伸びている細い煙突からは少しの煙も出ていない…。これだけ見ると誰も住んでいない空き家のようなだが、真冬はその扉を遠慮無く叩く。

…コンコン

数回ノックしたが、やはり返事は無い…。

ため息をつきながらドアノブに手をかけてみると、扉はあっさりと開いた…。鍵などかかかっていなかったようだ。

真冬（無用心にも程がある…）

なんて事を思ったりもしたが、こんな森の奥に来る人間などいないだろうから別に良いのかも知れない。真冬はそのまま扉を開き中へ足を踏み入れると、ふわっと舞い散る埃に咳き込みながら奥へと進む

…。

一步進む毎に床板がギシギシと音を立て、積もっていた埃が宙を舞う。かなり汚れているようだが、いったいどれだけの間掃除をしていなかったのだろうか…。身に纏っていた黒いローブの袖を口元に当てつつ呆れた表情を浮かべながら奥に進み、また一つの扉を開く…。

幾つかの本棚とクローゼット、そして一つのベッドがあるその部屋の隅には小窓があったがカーテンが閉められており、辺りがやたらと薄暗い。真冬はカーテンを開いて外の明かりを部屋に取り入れるとそばにあるベッドの膨らみを右手で叩き、その内に潜む人物の身を揺らす。

真冬「ねえ、起きて……………」

……………返事はない。

その後も引き続きその人物の身を揺らし、声をかけて起こそうとするが、聞こえるのは『すう…すう…』という心地よさそうな寝息だけ…。

真冬（まったくもう……………）

頭から爪先までをシートで覆ったまま起きる気配の無いその人物を見ている内に我慢の限界が訪れたので、真冬は強行手段をとる事にした…。ベッドシートをガシツと掴んで勢いよくガバツ！と捲りあげ、内にいた人物を晒し出す。そこには真冬と同じくらいの背丈をした、長い銀髪の少女がいた…。少女はシートを奪われた事で肌寒さを感じただけ眉をしかめたが、ベッドの上で身を丸めたまま起きようとしぬい…。

真冬「おっい、起きてく……………」

今度はさつきよりも強く身を揺さぶり、声をかける。

…が、少女は起きない。

かなり深い眠りにについているようだ。

真冬「この…っ……」

ここまでしても起きてこないと、さすがに腹が立つ。

真冬はベッドの端から垂れている少女の銀髪を右手に掴み、それをグイグイと引っ張りながら耳元で名前を呼ぶ。少し痛いかも知れないが、このくらいしないと何時までも起きないだろう…。

真冬「朝だよ……ルルカ…」

グイツ！グイツ！！

腰の辺りまで達するくらいはあろう長い髪の毛を遠慮なく引っ張り、何度も名前を呼ぶ。するとその少女…ルルカは『うく…ん…』と呻き声をあげながら右目だけを開き、相変わらずベッドに横たわったまま真冬を見つめる。

ルルカ「あの…：朝が来たことを教えてくれるのは…ありがたいのだけど…：あまり髪を引っ張らないでほしいわ…。少し…痛い…：から…」

真冬「だって、こうでもしないと起きそうになかったから…」

掴んでいた髪を離し、ベッドから降り立ったルルカと向かい合う。

何度も髪を引っ張ったからか、ルルカはうつすらと開いた瞳に涙を浮かべていた…。眠たげに開いている瞼から覗く紫色の瞳も、腰まで伸びている長い銀髪もキラキラとして美しく、人形のような容姿をしているルルカだが…一度寝たら簡単には起きなかったり、片付けが出来なかったり、何を考えているか分からなかったり、女性として残念な所が多々ある。

ルルカ「…そう言えば、少し…久しぶり…？」

真冬「うん、久しぶりに会うね…」

ルルカ「例のお友達とは…：会えたのかしら…？」

真冬「会えたよ。けどちょっと調べたい事が出来たから戻ってきた」

真冬がそう告げるとルルカは小さく首を傾げながら横を通り過ぎ、

部屋の扉を開けてどこかへ向けて歩き出す。真冬はそのあとに続き、そのままルルカとの会話を続ける。

ルルカ「調べたい事……？」

真冬「うん……。実はこの前、みんなと一緒に焔の王を倒しに行ったの……。けど、目撃情報があつた場所にヤツはいなかった。いたのは穂村っていう偽者。まあその偽者は……前の世界でボクと一緒に行動していた知り合いだったんだけど」

ルルカ「へえ……。そう……。で、調べたい事というのは……何かしら……？」

トコトコと歩く内にキッチンへとたどり着き、ルルカは棚に手を伸ばす。

そしてその中をゴソゴソと漁って小さなパンを取り出すとそれを口に咥え、またトコトコと歩き出してから近くにあったソファアへと腰を下ろした。このソファアもまたかなり掃除していなかったらしく、ルルカが座った途端に埃が舞う……。

真冬「国の人達は今、やはり焔の王は復活してなどいかなかったのではと考えている。けど、それは間違いだよね？」

ルルカ「……まあ……。そうね……。」

半分間違い……半分正解……。という感じ……？」

真冬「……どういう事？」

ルルカ「いえ……。少し適当な事を言ってみただけ……。少なくとも、焔の王は……。今もどこかに存在していると思うわよ……」

重たそうな^{まぶた}瞼もそうだが、ルルカは喋り方もものんびりとしていても眠たげだ……。彼女はいつもボンヤリしていて考えている事はよく分からないが、それでも一応信頼は出来る。彼女が言うのなら、やはり焔の王は復活している……。そう確信した真冬は彼女の隣へ腰を下ろし、その横顔を見つめた。

真冬「何でも良いから、焔の王について分かっている事とかない……？」

ルルカ「そう…ね……………何か、あつたかしら……………」

『うくん』と唸りながら顎に手を添え、ルルカはそつと目を閉じる…。そして数十秒の時間が経った頃にその目を再び開き、隣に座る真冬の方へと視線を向けて口を開く。

ルルカ「特に、無いわね……………」

真冬「……………役立たず」

ルルカ「あら……………酷い……………」

大して悲しくも無いだろうに、ルルカは両手の指を目元へ添えて『えくんえくん』とでも言うような泣きジエスチャーをとる。当然、瞳から涙なんて出ていないし、そもそも全く悲しそうな表情をしていない。いつも通り無表情なままだ。

彼女は少しの間泣き真似を続けたが、真冬の反応が薄いという事実気付いてからそれを止め、今度は意味なく左右に揺れ出す…。ほんの数センチだけ、メトロノームのように身体を揺らし始めたルルカは真冬の方を見つめながら不思議そうに尋ねた。

ルルカ「焔の王……………そんなに倒したいの……………？」

真冬「早い内に倒した方が国の人が喜ぶからね…。出来るのならルルカにも手伝って欲しいんだけど…」

ルルカ「嫌よ…。私…戦うの苦手なもの……………。戦いなんて、疲れるだけで良い事なんて何も無い……………。ベッドの上で寝てる方がよっぽど楽だし…幸せよ……………」

まったく、なんて無気力な女なのだろう…。少しでも多くの戦力が欲しかった真冬はルルカの発言を聞くなり、呆れたように頭を抱える。

ルルカ「……………それに、”あれ”とは出来るだけ関わりたくないのよね…。役に立てなくて悪いとは思っているのだけど……………真冬達だけはどうにかして欲しいかしら…」

真冬「……………分かった。まあ、みんなと一緒にならなんとかかな」

ルルカ「そうそう…なんとかなる…」

本気でそう思っているのか、それとも適当に返事をしてるだけなのか……ルルカとの付き合いはそれなりに長い真冬でも、彼女が何を考えてるのか理解出来ない。

真冬「ああ、そうだ。これからしばらくの間、ここに泊まってい？」

ルルカ「え……お友達のところ、戻らないの……？」

真冬「もちろんいつかは戻るよ。けど、今はしばらくここにいる。厄介なヤツと戦う前に色々準備しておきたいし、もつと戦えるようにもなりたい…」

ルルカ「…そう……じゃあ、好きなようにしたら良いわ……」

ここまではどうにかやってこれた…。

けど、この先どうなるかは分からない…。

これから先、どんな苦難が待っているようにと皆を守る為……皆と一緒に幸せな時を過ごす為、真冬は更に努力をする。大好きな友達と、いつまでも一緒にいたいから…。

《New!!》第十話 『彼・胡桃』

「よっ…と!!」

とある町から少し離れた場所にある森の中……自分目掛けて振り下ろされる大きな腕をギリギリのところまで避け、彼は目の前のそれへ剣を振る……。目の前にいるのは彼よりも一回り大きくて、絵本に出てくる鬼の様にガツシリとした体系の魔物。筋肉質な体と鋭い爪だけを見ればとてつもなく手強そうだが、この世界に来てから真冬と訓練し、経験を積んできた彼の敵ではない。

それにこの魔物は見た目ほどの強さは無いらしく、彼が一太刀浴びせただけで後方によるめき、そのまま倒れるとすぐに動かなくなつた。

胡桃 「んっ、終わったか？」

「ああ、とりあえず」

そばの木の陰から現れた胡桃は彼の前に倒れてる魔物をじーっと見つめ、持っていたシャベルでその体をツンツンと突く。魔物は彼の攻撃を受けて完全に倒されているのもう動かない。

胡桃 「なんていうか、やたらと怖い見た目したヤツだな……」

「見た目はね。けど、強さ自体は大した事なかった。動きは遅いし、知能も大したことない。この世界にやって来てばかりの頃の胡桃ちゃんでもあつさり倒せる相手だったと思う」

以前、真冬に教えてもらった事がある……。

この世界にいる魔物の中には人並み、もしくはそれ以上に知能のある者がいて、人間の言葉を話すような者もいるらしい……。真冬曰く、そういうタイプの魔物には手強いものが多いらしく、ある程度の注意が必要なようだ。……とは言え知能が低くて手強い魔物もいるにはいるらしいし、その逆……知能があつても戦闘能力の無い魔物も稀にいるようので一概には言えないが。

胡桃「…けど、普通の人からしたら十分危ないんだよね？」

「それはそうだね。実際、この魔物による被害とか結構出てみたいだし…。まあ何はともあれ無事に倒したんだから、とつと帰って報告して、報酬貰おう」

戦いの中で切り落とした魔物の角を証拠代わりに持ち、彼は胡桃と共に町へと戻る。城下町に住む由紀達と別れてから役半年……彼と胡桃は離れた場所にある小さな町を拠点に暮らし、そこに住む人々の害となる魔物を倒しては報酬を受け取って生活をしていた。

胡桃「ただいま」

森を出て町に戻り、倒した魔物の報酬を受け取ってから宿へと入る…。この町に来てからというもの、二人はこの二階建ての宿に泊まり続けていた。もう結構長い間泊まらせてもらってるだけあって、宿で働く人々ともかなり親しくしている。特に、受付で働く少年は二人が戻ってくる度にそばへと駆け寄り、笑顔で挨拶してくる程だった。すっかり聞いたわけではないが、少年の年齢は胡桃達より二つか三つ下くらいだろう。

「お二人とも、お疲れ様です！」

「ああ、そっちもお疲れさん」

彼は少年に対して笑顔で返事を返してから、二階にある部屋へと向かう。胡桃も少年に返事をして、そのまま彼のあとに続こうとしたが…。

「あつ、あの…くるみさん！

少し…良いでしょうか？」

胡桃「んっ？ああ、別に良いけど」

少年に呼ばれるがまま、受付所の隅へ行く…。

何事かと不思議そうにする胡桃に対し、少年は一度辺りをキョロキョロと見回すと、近くに誰もいない事を確認して彼女と向き合っ

た。

「あの……俺、くるみさんの事が前から気になってたっていうか……その……くるみさんの事を一人の女性として、好きになったみたいで……」

胡桃「え……!?あ、あたしを……っ!?」

覚悟を決めたような表情で告げる少年と、その言葉を聞いて大いに戸惑う胡桃。これまで、異性に告白なんてされた事なかったからか、胡桃の頬は一気に赤くなり、視線は落ち着きなくあつちへこつちへと泳ぎだす。

「くるみさん、俺なんかよりずっと強くて……それなのに可愛くて、髪とかも綺麗で……」

胡桃「つつっ!!そ、そんなことはっ……!」

「そんなことありますよ……この町で、くるみさん以上に素敵な女の人なんていない!!まるで、どこかの国のお姫様みたいで——」

胡桃「わっ、わかったわかった!!

ありがとう……!ほんとにありがとうっ!!」

異性から褒められる事に慣れてないのに、これ以上あれこれ言われたらパニックでおかしくなる……。胡桃は少年の言葉を遮るように手をバタつかせ、十数秒の時間をかけてゆっくり呼吸を整えて心を落ち着かせていく……。

胡桃「……ほんと、凄く嬉しいよ。

気持ちだけ、受け取っておくな?」

照れ笑いしながらそう答えると、少年の表情がほんの少し暗くなる。

自分は振られたのだと、理解したのだろう。

「好きな人とか……いるんですか?」

胡桃「え、ええつと……」

「……いや、こんな事を聞くのは悪いですね……。気にしないで下さいっ、

俺は気持ちを打ち明けられただけで満足なので！」

何かを察したのか、少年は頭を掻きながら笑う。

胡桃はまた恥ずかしげに照れ笑い一つ浮かべると少しの間だけ少年と何気ない会話を交わし、彼の待つ二階の部屋へと戻る事にした。

「遅かったね。下で何かしてた？」

部屋の奥、ソファに座って一休みしていた彼が尋ねる。胡桃は『うん』と言つて苦笑すると、その隣にゆっくりと腰を下ろした。

胡桃「ちよつとだけ話してたんだよ」

「話？何の？」

胡桃「おっ？なんだ、気になるのか？」

「……………いや、別に」

ニヤニヤと微笑んできた胡桃から顔を反らし、彼はつい先程買った新聞を読み始める。この世界の新聞にはその地方の店の特売がどうかつて情報の他、どこに危険な魔物が出たとか、どこぞの騎士が活躍してるとか、元いた世界では絶対に見れない様な情報が多く載せられている。最初は暇つぶし程度にそれを見るだけだったのだが、少ししてある一面が目にとまり、彼はニコツと微笑んだ。

「『学園生活部』、頑張ってるみたいだ」

胡桃「えっ、載ってんの？ちよつと見せろって」

新聞を奪った胡桃は彼が見ていた箇所を読み、同じ様にニコツと微笑む。そこに載っていたのはあの城下町で暮らす由紀・悠里・美紀の三人がやっている【学園生活部】という名の便利屋についてだった…。【学園生活部】の三人は日頃から町の人々のちよつとした仕事を手伝ったり、魔物退治を請け負ったり、色々と活躍して少しずつ有名になつてるらしい。その中でも、彼と胡桃が驚いたのは……………

胡桃「おい…由紀のやつ、『魔術学校の特別臨時教師に』…とか書いてあるんだけど…。な、なんだよ、魔術学校って？」

「えっと、確か若い子に魔法を教えてる学校じゃなかったかな。あの町にある学校は結構大きくて、卒業生には有名な魔法使いがいっぱいいる……みたいな事を真冬が言っていた気がする」

胡桃「そんな学校で由紀が教師をやるのか？あの由紀が??」

「ああ、そうみたいだね。」

ほら、ここにも書いてあるけど、由紀ちゃんって怪我を治す魔法とか使えるから……学校からすると是非とも欲しい人材だったのかも」
これまた真冬から聞いた話だが、魔物だの魔法使いだのが沢山いるこの世界でも、由紀のように怪我等を治す魔法を使える人間はかなり珍しいらしい。なので恐らく、あの学校は由紀を教師に迎えてその指導を受ける事で同じ様な魔法を覚える人材の発掘を目指しているのだろう。

胡桃「あいつが教師とか……想像つかない」

「……だね」

由紀が生徒らに向けて魔法を教える光景……少し見てみたい。

二人揃ってそんな事を思いつつ、新聞を置く。するとその後、少ししてから胡桃は彼の肩をポンと叩いた。

胡桃「なあなあ。あたしの髪って綺麗か？」

「へっ?なんでまた突然」

胡桃「いいからどう思う?綺麗……かな?」

「……そりゃまあ、綺麗だと思いますが」

突然聞かれると反応に困るというか、答えるのもちよつぴり恥ずかしいと言うか……。なんて事を思いつつ、彼は思っている事を正直に言う。胡桃の髪は長くて綺麗だし、近くを通ると良い匂いがある。綺麗かどうかと聞かれたら間違いなく『綺麗だ』と言える髪なのだが……

胡桃「へえ……そつか、綺麗……か……」

自分から聞いておいて照れ始める胡桃……

そんな反応をされると彼の方も何とも言えなくなり、少し気まぎれになる……。由紀達と別れ、二人だけでの暮らしをして半年……。同じ部屋に二人だけで住んでるといっても当然ながら寝室は別だし、特別親しい関係になった訳でもない。いつも通り……。いつも通りの二人だ。

どんな世界でも好きな人
第一話『であい』（前編）

「……………眠い」

今日は天気が良い。窓から入る日射しがとても暖かく、彼は眠気に誘われる。今はどのみち休み時間だ…ほんの少しだけ眠るのもありかも知れない。そんなことを思ったその時だった…。

??? 「…ねえねえ。転校生くん、眠いの？」

「……………まあ、少しだけ…」

彼の隣の席、そこに座る女子がこちらを見ながら話しかけてきた。彼がこの学校に来て数日経ったが、彼女はやけにグイグイと会話を振ってくる。

?? 「寝ちやだめだよ。次の授業まで、あと五分くらいしかないんだから」

「…日差しが暖かくて、どうしても眠気が…」

?? 「おおっ？それ、すごい分かるよ！わたしの席も少しだけ日が当たるから、暖かくてつい眠たくなっちゃうんだよね〜♪」

「じゃあ一緒に寝ましょ。残された時間はあと五分もない、急がないと…」

?? 「それも良いけどさ、お喋りしようよ？わたし、まだ君のことあんまり知らないんだ。今まで何回も話しかけたのに、いっつも無視したり、適当な返事を返したりするんだもん!!」

「…怒った？」

??「うくん…。また無視したらさすがに怒るけど、ちゃんとお喋りしてくれるなら許してあげる♪」

隣の席でにつこりと微笑みながら、こちらに期待の眼差しを向けてくるその人を見て、彼は仕方なくお喋りに付き合う事にする。さすがに、隣の席の人とくらは仲良くしておいた方が良さだろう。そうでもしなきゃ、彼の学園生活はかなり暗いものになってしまう。

「じゃあ五分だけお喋りしますかね。ええつと……」

言いかけたところで、彼は焦ったような表情を向ける。もう数日経ったというのに、隣の席にいるこの女子の名が分からなかったのだ。

「すいません、名前がわからない…」

??「えっ!? ここに来てもう一週間くらいたつよね? それなのに隣の席にいるわたしの名前も分からないの?」

「ええ、まあ……」

??「うそ…ちよつとがっかりだよ…」

彼女は名前も覚えてももらっていなかったという事実にはショックを受けたらしく、ガクツと肩を落とす。直後、彼女は少し潤んだ目で見つめ、自らの名を名乗った。

由紀「丈槍ゆき。よろしくね♪」

「…ゆき?」

由紀「うん、ゆき。…ちゃんと覚えてよ? もし明日になって忘れてたら、もう教えてあげないからね?」

「わかった、しっかり覚えておく。よろしく由紀ちゃん」

由紀「んん？ゆきちちゃん…ゆきちちゃん？」

「へっ？何かおかしかった？」

由紀「…ううん。ただ、男の子に名前をちゃん付けで呼ばれるの初めてだなくって思ったの。クラスの男の子はみんな、わたしのこと『丈槍』って呼ぶから…」

言われれば、確かに少し馴れ馴れしい呼び方かもしれない…。しかし彼女の名を聞いた時、こう呼ぶのが自然な気がしたのだ。彼はその時に感じた妙な違和感に戸惑いつつ、その呼び名を訂正すべきか彼女に尋ねる。

「すいません。丈槍って呼んだ方が良いですか？」

由紀「えっ？ううん、ゆきちちゃんって呼んでくれる方がいい。なんかしつくりくるっていうか…そっちの方が安心する」

「そう…う？じゃあ、呼ぶ時は『ゆきちちゃん』で良いですね？」

由紀「うんっ♪」

次の授業が始まるまで、彼は隣の席の由紀と会話を交わした。

彼女は少し子供っぽい感じがして、話しているだけでもなんとなく癒される…。たった五分会話しただけで、どうせならもつとはやく話しかければ良かったと彼は後悔した。

そして全ての授業が終わり、迎えた放課後…。

ノート等をカバンに詰め、帰る準備を進める。

彼がふと隣の席を見ると、そこには笑顔でこちらを見つめる由紀がいて…一歩ずつこちらへと歩み寄ってきた。

由紀「そういえば…お友達は何人くらいいるの？」

いきなりそんな事を尋ねてきた彼女に答えるべく、彼は無言で彼女を指さす。この学校に転校してきて、できた友達は彼女くらいだと

思っていたのだ。

由紀「えっ?もしかして、わたしだけ?転校初日の時、みんなにごく話しかけられてたじゃん!」

「そうなんですけどね…。あの時はまた一段と眠くて、不覚にも全員無視してしまった…。返事を返さなきゃとは思ってたんだけど…声が出なくて…」

由紀「あらら…印象悪いね?」

「自分で言うのもなんだけど、最低だと思う」

あの日を境に、クラスメートの殆どは彼と関わらないようにしている気がする。当たり前だ…。その初日のイメージが最悪なんだから。さすがの彼もこれは開き直って笑うしかない。

由紀「じゃあ…わたしのお友達紹介してあげるね♪みんなすごく優しいから、たぶん君とも仲良しになれるよ!今日も一緒に帰る約束してるから、たぶん校門あたりで待ってるかな?」

「…そうですか?じゃあせつかくだし、お言葉に甘えようかな…」

由紀「えへへ♪じゃあ行こっ!待たせちゃわるいし!」

由紀は彼の手を引き、嬉しそうに走り出す。思い返せば、この日から全てが始まったのだ。丈槍由紀というこの少女と友達になり、そうして彼女の友人である彼女達と出会った事で、彼の学園生活は大きく変わった。

?? 「…遅かったわね?」

??? 「まったたく、何してたんだよ?」

由紀に引かれるまま校門へたどり着くと、そこで待っていた二人の女子が由紀に言葉をかける。長い茶髪を揺らすスタイルの良い少女

と、長い黒髪を縛ってツインテールにしている少し目付きの鋭い少女……。どうやら、この二人が由紀の友達らしい。

由紀「リーさん、くるみちゃん！遅れてごめんねっ！新しいお友達を連れてきたんだ♪」

胡桃「新しい友達？……っておい！そいつかよ!？」

悠里「あら……意外な人を……」

二人が彼へ視線を向ける。そのあからさまに嫌そうな顔を見て、彼はもしかしたらと思う……。そう、この二人もまた、自分と同じクラスの生徒だった。

由紀「くるみちゃんとりーさんだよ。同じクラスだから名前くらい知ってる……よね？」

由紀がどこか心配そうな表情で彼の目を見る。やはり二人は同じクラスの生徒らしいが、となれば少々まずい……。転校初日から話し掛けてきた生徒を無視し続けた、彼の印象は間違いなく最悪だからだ。

「ま、まあ……ちよつとは聞いた事のある名前……ですけど」

胡桃「ちよつと？……ふんっ、やっぱりな。クラスメートの事なんて全然興味ないんだろ。だから無視したんだよな？あの時、あたしもちゃんと挨拶したのに……」

胡桃と呼ばれていた女生徒がムツとした表情を彼へと向ける。彼はどうか誤解を解こうと努力するが……

「いや……興味ない訳じゃ……あの時はただ、すぐく眠くて……」

胡桃「うわ……最低の言い訳だな」

「んん……自分でもそう思います」

誤解を解こうと思ったが、胡桃の目を見てそれがどれだけ大変な事かを悟る。『うわ』と言ったときの彼女の目は本当に冷たく、まるでゴミか何かを見るような目だった。

悠里「まあまあ、それが本当かどうかはおいといて…これからの話をしましょう？あなた、とりあえずゆきちゃんとは友達なのよね？」

「ええ、まあ…」

由紀「なりたてホヤホヤだよ」

胡桃「ホヤホヤってなんだよ…」

胡桃は少しだけ呆れたような表情を由紀に向け、深いため息をつく。彼女はそうしてから彼の方に視線を移し、あることを尋ねた。

胡桃「…名字」

「…はい？」

胡桃「あたしとりーさんの名字…どっちか一人でもいいからさ、わかる？」

「名字…ええつと…」

正直に言うともまるで分からなかった…。強いて言うなら、少し変わった名字の生徒が数人いた気がするが、それが彼女達だという確証はない。にも関わらず、彼の口は自然とその名を呼んでいた…。

「恵飛須沢…胡桃。それと、若狭悠里」

胡桃「おっ？」

悠里「あら、ちゃんと覚えてくれてるじゃない。」

どうやらそれは当たっていたらしく、彼もこれには驚いた。彼女達の事をまるで知らなかったハズなのに、胡桃と悠里…それぞれの名を頭の中で思い浮かべた途端、それぞれの名字が自然と浮かんだのだ。

由紀「ええっ!?わたしの名前は覚えてなかったのにく!どうして二人だけ!」

胡桃「もしかして…本当にわざと無視したわけじゃなかったのか?」

「…まあ、そうですね」

胡桃「人付き合いが嫌い…とか、周りの人間を見下してる…とかじゃなくて?」

「周りの人間を見下してるって…それじゃただのイヤなヤツじゃないですか」

胡桃「そのイヤなヤツってのがあたしの中でのお前の印象だった訳だけど…。まあ、違ったならいいや…」

彼女はそう呟いてから彼の方に手を伸ばし、改めてその名前を名乗った。

胡桃「恵飛須沢胡桃。よろしくな?」

「よろしく、胡桃ちゃん」

差し伸べられた彼女の手のひらを握り、握手を交わしながら彼女の名を呼ぶ。すると名を呼ばれた彼女は首をかしげ、なにやら不思議そうな表情をした。

胡桃「…胡桃ちゃん?なんかその呼び方…ムズムズするんだけど…」

「あつ…胡桃さん。とかの方がいいですか?」

胡桃「……ううん。別にいいよ、ちゃん付けでも」

悠里「胡桃…同級生の男子にちゃん付けで呼ばれるの初めてでしょ?」

胡桃「まあ…そうだね」

悠里「嬉しい?」

胡桃「いつ…いやっ!別に嬉しくはないけど…」

胡桃は頬を赤く染めてからその顔をそむける。彼は彼女の事を最初は怖い女かとも思っていたが、どうやら違うらしい。中々面白そうな人だ。

悠里「じゃあ、今度は私。…若狭悠里です。改めてよろしくね?」

「よろしくです。えっと…りーさん、でいいですか?」

悠里「ふふっ、ええ。それでいいわよ。」

優しく微笑む悠里と握手を交わしてから、彼等は学園の外へと歩き始める…。丈槍由紀、恵飛須沢胡桃、若狭悠里…。彼女達を始めとする様々な人達との出会いをきっかけに彼の学校生活は変わり、毎日が忘れられない物になった。

第二話『であい』（後編）

ガラガラッ！

「……………」

彼は教室の扉を開けると早足に自分の席へつき、そして荷物を置く。今日は少し早めについたせいかな、まだ他の生徒は数えるほどしかない。由紀達もまだだ。

悠里「…あら、今朝は早いよね？」

彼よりも五分ほど遅れて教室に入ってきた悠里。彼女は荷物を自分の席に置くやいなや彼の方に歩み寄り、優しく声をかけてくれた。

「りーさん…。おはようございます」

悠里「おはよう、元気がないみたいだけど…具合でも悪いの？」
「…いえ？元気ですよ。…一応は」

悠里「そう、ならよかった♪」

元気だと告げた直後、彼女は安心したようにニツコリと微笑む。その笑顔は見ているだけで癒されるような笑顔で、彼は思わずその顔をまじまじと見つめた。

悠里「…な、なに？私の顔…何か付いてるかしら？」

「いっ、いえっ!?!なんでもないです!!」

悠里「…そう？なんかじくつと見てたから、汚れでも付いちやつてるのかと思っちゃった」

「全然…すごく綺麗な顔ですよ」

悠里「えっ？」

「あっ……」

やらかした…。顔見ながら話してたから、つい心の声が漏れてしまった。しかし、どうなのだろう？悠里は本当に綺麗な顔をしているのだから、それを綺麗だと言った事をわざわざ恥じる必要は無いのではないだろうか？彼はそんな事を思い、彼女の顔を見つめ続けた。

悠里「き、綺麗っていうのは…汚れが無いからって事よね？あはは…もしかしたら顔立ちを褒めてくれてるのかと思って、ちよつと勘違いしそうになっちゃった…」

「……………」

恥じるな…。綺麗なものを綺麗だと言って何が悪い…。彼は頭の中で自分に言い聞かせ、ハッキリと…彼女に確実に聞こえるであろう声を出した。

「ええ、そうですよ。僕はリーさんの顔立ちを褒めたんです。だってすごく綺麗じゃないですか？」

悠里「…なっ!?!」

えっ？当たり前でしょ？なんかおかしな事言ってる？…そう言わんばかりの表情で、さらつと当然のように彼女へ向けて言い放つ。

悠里「…あり…がとう」

すると、彼女の顔が少しずつ赤く染まっていく。気がつけば、数人の生徒が二人の光景を盗み見ていた…。

女子生徒「なにあれ…若狭さんてあの人と仲良いの？」

男子生徒「まあ、若狭は面倒見が良いからな…」

女子生徒「わたし、女の人と相手なら誰にでも『綺麗だ』とか言う

男の人嫌いなんだけど…」

(…なに? いやいや、誰にでも言っている訳じゃなく、相手がりーさんだから言ったんだ。あんたに言う事は一生ないだろう)

彼は離れた所でこっそりと呟いている可もなく不可もない顔立ちのその女子生徒に対し、そんな事を思う。

悠里「そういえば、昨日は一緒に帰ってくれてありがとね。私達、邪魔だったりしなかったかしら?」

「いえ、全然邪魔なんかじゃありませんよ。帰り道があんなに楽しく感じたのは初めてです」

悠里「ふふっ♪そう言ってもらえると嬉しいわ。昨日あなたと別れた後、少しだけ気にしたの。『女の子に囲まれながら歩くのは恥ずかしいんじゃないか』ってね」

確かに…少しだけ恥ずかしい気持ちはあった。男1、女3の比率で歩くのは少なからず他の生徒達の注目を集めてしまおうし、変な噂をたてられるかも…。

「りーさん達は、僕と一緒にでも問題はありませんか?」

悠里「問題?ないわよ、そんなの」

「ほら…もしかしたら僕と一緒にいるせいで、あることないこと言われるかも知れませんよ?」

悠里「それって、あなたと付き合ったりしてるんじゃない?」
「?」

「…はっ」

悠里「ただ学校で話したり、帰り道を一緒に歩いてるだけでそんな事言われたりしないでしょう。みんな高校生よ?小、中学生じゃないんだから…そんな馬鹿げた事を言ったりは——」

ガラガラッ!

由紀「あつ! おはよく♪ねえ聞いて聞いて! さっきわたしね、君と付き合ってるのかって聞かれたよ!!」

勢いよく教室に入った由紀は彼を見るなり歩み寄ってきて、ヘラヘラしながら楽しそうに笑う。

悠里「……………」

「…………で、リーさん。さっきの言葉の続きは?」

悠里「馬鹿げた事を言ったりは…………しないと思ってたわ。さっきまではね…」

一緒に帰っただけなのに、付き合ってるのかと勘違いしている人間がいる…。悠里はその事実冷や汗を流し、苦笑いを浮かべた。

「リーさんが思っていたより、この学校の生徒は子供のようですね」

悠里「…そうね」

「さて、問題はそこじゃなく…由紀ちゃんがそれに対してなんと答えたかですが…」

由紀「ん〜? ふっーにお友達だよって答えただけ…ダメだった?」

いや、悪くはない。それで十分なのだが…少しだけ悔しいような思いを感じた彼は少々欲張りなのだろう。

「…いえ、それでいいと思います。すいませんね、僕なんかと一緒にいたせいで迷惑かけちゃって…」

由紀「んくん、ぜんぜん気にしてないし、迷惑なんかじゃないよ?

それより…今日も一緒に帰れるかな?」

由紀「もしよければね、今日もう一人お友達を紹介したいんだ♪」
「…もう一人？」

由紀「うん！二年の娘こなんだけどね、凄くいい娘なの！だから君とお友達になれると思うんだけど…」

悠里「それって、美紀さんのこと？」

由紀「そ！みーくんのこと」

「…女の子ですか？」

由紀「女の子だよ♪」

女の子…まあ、いいか。男子だろうが女子だろうが、仲良くしてくれる人とは仲良くしておきたいし、とりあえず会ってみよう。彼は由紀の顔を見つめ、その首を縦に振った。

「じゃ、その人とも会ってみようかな。また帰りに？」

由紀「うん！そうだね。昨日は時間が合わなかったけど、普段はみーくんもわたしたちと一緒に帰るんだ。たぶん今日は一緒に帰れると思うから、その時に紹介するね♡」

「はい、どうもです…」

そんな約束を交わしてから由紀と悠里は自分の席につき、迫る授業の準備を始めた。それから数分後に胡桃が教室に入ってきて、慌てた様子で席につく…。まだ遅刻という程の遅れでもないのだから、そこまで慌てる必要もないのだが。

「……………」

胡桃「……………」ジツ…

などと思つて見つめていたらちようど目が合ったので、彼は彼女に向けてパタパタと手を振ってみる。由紀のように近くの席なら、座つたまま直接声をかけるのだけど…。

胡桃「……………」パタパタ…

驚くことに、彼女はその手を振り返してくれた。表情こそ真顔だっ

だが、振り返してくれたなら十分だ。彼はそれが嬉しくて、少しだけニヤリと微笑む。

彼は胡桃が手を振り返してくれた事に満足し、穏やかな気持ちのまま授業を受けることが出来た。つい先日まではほぼ誰とも接する事なく授業までの時間を過ごしていたのに、今は共に喋りする相手も、手を振れば振り返してくれる相手もいる…。こんなに嬉しいことはない。

彼はその後…全ての休み時間を彼女達と会話などをして過ごし、更には昼食すらも共に済ませた。時おりその他の男子生徒達の妬むような目線を感じるのは、彼女達が密かに人気だという事を表しているのだろう…。彼はそんな目線に対しての強い優越感に浸りながら、今日一日、満足のいく学校生活を送った。

由紀に胡桃と悠里を紹介してもらったおかげで、彼の学校での時間は随分と楽しく、幸せなものへと変化した…。

そしてはやくも放課後…

彼は由紀達と共に校門に立ちつくし、ある一人の生徒を待ち構える。

由紀がその生徒とここで会う約束をしているようなので、そろそろ来るはずだが…

由紀「…おっ！きたきた！ほら、あの娘だよ」

「えっと…、あの娘ですか…」

彼は由紀の指さす方向を見つめた。そこにいたのは少し短めの髪をした、ボーイッシュな雰囲気の漂う一人の女子生徒…彼女が例の『みーくん』らしい。

美紀「すいません、少しだけ遅れました」

由紀「ううん、まだ全然待ってなかったからいいよ〜♪」
こちらに歩み寄ってきた『みーくん』は由紀達に軽く頭を下げ、遅れた事を謝った。そこまで待たされた訳ではないから、気にしなくてもいいのだが。どうやら彼女はしっかりした娘のようだ。

美紀「それで、この人が先輩の言ってた転校生の…」

由紀「そ！転校してきてばかりでまだあまり友達がいらないから、みーくんも仲良くしてあげてね！」

悠里「由紀ちゃん…」

胡桃「友達がいなくて、ハッキリ言ったらかわいそうだろ…」

由紀「あっ！ご、ごめんね？」

「いえ…平気ですが…」

美紀「えっと、友達…いないんですか？」

慌てて謝る由紀に気にしてない事を伝えると、『みーくん』が横から問いかけてきた。あまり初対面の人に聞ける質問ではないと思うが…まあ彼女に悪気はないのだろうと思ったので、彼はそれに対し真面目に答えた。

「ここにいる由紀ちゃん、リーさん、そして胡桃ちゃんが僕の友達です」

美紀「…他には？」

「…いませんよ？」

美紀「…まあ、友達なんて自然に増えてきますから、気にしなくても大丈夫ですよ」

美紀「…あつ、私二年の『直樹美紀』っていいいます。先輩、これからよろしくです」

彼女はそう言って丁寧に頭を下げると、こちらを見上げて軽く微笑んだ。

なんというか…彼女はすごく良くできた後輩なのではないだろうか？彼女の言動一つ一つから、そんな雰囲気かびしびしと伝わってくる。

「よ、よろしくです。美紀さん」

美紀「…美紀でいいですよ」

「いや、呼び捨てするのはなんかおこがましいっていうか…」

胡桃「後輩相手に、なに言ってるんだよ…」

「だ、だって…彼女すごく優等生感が…」

悠里「ふふつ、まあ言いたい事は分かるわ。美紀さん、丁寧なものね」

由紀「ほらほら、照れてないで、みーくんって呼んであげて？」

美紀「私をそう呼ぶのは、由紀先輩だけですよ」

由紀「今日からもう一人増えるよ！ほらっ、呼んでみて！」

彼の肩を背後からパシパシと叩きながら、由紀が催促する。

「みーくんって呼ぶのはちよつと…、とりあえずは美紀さんって呼びます」

由紀「ええ、それだとなんか距離感ない？」

美紀「だからと言って、男性である先輩にみーくんって呼ばれるのは逆に距離感が近すぎる気がしますけどね…」

「ですよ。僕もそう思います…」

由紀「二人ともつままないなあ…。ま、とりあえず——くんにみーくんを紹介できたわけだし、仕方ないから今日のところはこれで良しとしよっか！」

胡桃「なんでちよつとエラそうなんだ…こいつは」

悠里「さて、とりあえずは歩きながら話しましょうか？校門の前に

いつまでもいるわけにはいかないもの」

美紀「…ですね」

悠里の声をきっかけに彼女達はゆっくりと歩き出し、それぞれの家への帰路につく。だが全員、家が変わりと同じような位置にあるように、歩き出してもすぐに別れるような事はなかった。

胡桃「そういや、明日から休みだな。みんなはどっか出掛けたりするの？」

由紀「私は…その…リーさんと一緒に勉強会を…」

胡桃の問いに対して、暗い表情を見せながら答える由紀…。そんな表情をするのは勉強自体が嫌いだからなのか、それとも悠里が厳しいのか…。彼女らと交流して日の浅い彼には分からなかった。

胡桃「そ、そっか…」

悠里「由紀ちゃん、最近ちよつと勉強不足だから…。今日もめぐねえに注意され——」

由紀「りっ、リーさん!?それは内緒だよ!」

胡桃「内緒もなにも、同じクラスなんだから筒抜けだけどな」

由紀「みーくんバレるのがヤなの!!」

美紀「別に、由紀先輩が先生に注意されたくらいじゃなんとも思わないから安心してください。いつもの事ですもん…」

ああ、思い出した。たしかに今日、由紀ちゃんは先生に呼び出されてたっけ…。

由紀「い…いつものこと…。それはそれで…先輩としてはずかしいよ…」

悠里「だからこそ、ちゃんと勉強して胸を張れるような先輩になりましょ、」

由紀「…く、胡桃ちゃんも…あまり成績良くないよね…？」
ゆ、由紀ちゃん…胡桃ちゃんを巻き添えにしようとしてるのか…。
意外と…容赦ない人だな…。

悠里「あら、そうだったかしら？」

胡桃「ギクツ…」

悠里「じゃあ、胡桃も一緒にどう？みっちり教えてあげるわよ♡」
そう言つて、ニツコリと微笑む悠里…。胡桃はその笑顔から目を逸
らしタラタラと冷や汗を流していた。

胡桃「あ、あたしはその…もう予定あるから…」

悠里「へえ、なにをするの？」

胡桃「そ、その…家族と買い物にでも…」

悠里「…そう。なら仕方ないわね」

胡桃「う…うん…。わるいな…」

彼は心理学だのなんだのは全く勉強してないし、詳しいわけでもな
い。だが、それでも今、胡桃が嘘をついた事だけは分かった。何故な
ら、先ほどから目がキョロキョロしっぱなしだから…。

由紀「うう…キミはっ!?キミも一緒に勉強会を——」

「おっと、ゆきちゃんとりーさんはそっちの道でしょう？」

タイミングよく、由紀と悠里の家へ続く分岐点に差し掛かる。

胡桃「じゃあ、また学校でな」

美紀「りーさん、ゆき先輩、さようなら」

由紀「…うん、またね…」

「やっぴなっら〜」

悠里「さよなら、また学校でね。…ほら、行くわよ。ゆきちゃん」
由紀「う、うん…」

悠里に手を引かれ、とぼとぼ歩く由紀。彼女はたぶん、今から勉強会が憂鬱なのだろう。寂しげな背中がそれを物語っていた。胡桃と美紀：そして彼はそんな彼女を笑顔で見送ると、再び歩き出して三人で会話を交わす。

美紀「胡桃先輩も成績悪いんですか？」

胡桃「由紀ほどじゃないっ！だから大丈夫!!…だと思っう」

美紀「じゃあ…あなたは？」

「…学年トップですよ」

胡桃「見え透いた嘘をつくなよ…」

彼はちよつとした冗談のつもりで言ったのだが、あまりウケは良くなかった。それどころか、美紀の呆れたような顔を見て今の発言を即座に後悔した。

美紀「それで…実際は？」

「可もなく、不可もないレベルですね…」

美紀「へえ…そうですか」

「美紀さんはかなり頭良さそうですね。学年トップですか？」

美紀「まさか…、そこまでではないです。私もそれなりってとこですよ」

胡桃「お前のその”頭良い”学年トップ”みたいな考えはなんなの？」

「いや、美紀さんならもしかしてって思って…」

胡桃「そっういや、美紀は明日、暇だったりする？」

美紀「明日ですか？明日は…友達と近所に出かける約束を」

胡桃「ふうん…そっか」

美紀「先輩は家族と買い物でしたっけ、楽しんできてくださいいね」

胡桃「お、おう…」

「……………」

美紀「では、私はこっちなので、失礼します」

胡桃「ああ、じゃあな」

「さよならです。また今度…」

美紀「ええ、また今度」

分かれ道に差し掛かったところで、美紀はこちらに手を振りながら離れていく。結局、彼と最後まで帰路が被っているのは胡桃だった。ならちようどいいと思い、彼はあることを彼女に尋ねた。

「胡桃ちゃん、明日家族と買い物にいくつての嘘でしょ？」

胡桃「げっ…、なんでわかった…」

「目がものすごくキョロキョロしてたから」

胡桃「ま、マジ？…リーさんにバレてないかな…」

「…で、実際のぐい予定は？」

胡桃「特になし。だから美紀の予定によっては一緒に遊ぼうかと思っただけど、先約があるみたいだから…」

「じゃあ、僕と一緒に遊び行く？」

冗談半分、本気半分で尋ねてみた。でもまあ、会って間もない男子と二人きりで出掛けたりは…

胡桃「…うん、いいぜ？何時ごろに待ち合わせする？」

そう思っていたのだが、わりとあっさりとした承されてしまった。

「えっ…えっ…じゃあ…」

予想外の事態ではあったが、どうせ明日は暇だし、これはこれで面白そうだ。彼は待ち合わせ場所と時刻を適当に考えて、それを彼女に伝える。

胡桃「…おっけ。じゃあ明日な？遅れんなよ」

「うん…了解」

胡桃「んじゃ、あたしこっちだから…バイバイ」

「バイバイ…」

別れる彼女に向け手を振り、見送る。

彼は少ししてからそれを止めると自分の家へと歩みを進め、彼女と出かける明日の事を考えてみる。

ほんの数時間でも二人きりで過ごせば、彼女の事をより深く知れるかもしれないし、親睦を深めるチャンスにもなる。思っていたよりも、楽しい休日になりそうだ…。そんな事を思い、彼はにっこりと微笑んだ。

第三話 『デートではない。これは遊びだ!』 (くるみ)

時刻は午前10時…

天気はこれ以上ないくらいの快晴…。

そんな中で彼は一人、公園のベンチに座っていた。

辺りにいるのは幼い子供ばかりなので、ちよつとしたアウエー感を感じざるを得ない…。

しかしそれでも、ここにいなければならぬ理由が一つ…

ここで胡桃と待ち合わせをしてしまったからだ。

昨日、彼が軽い気持ちで遊びに誘ったらそれを了承した胡桃だったが、彼女はまだ現れない。

もつとも、それは彼が早めに来てしまったからというだけで、まだ指定した待ち合わせ時刻にはなっていないから当然なのかも知れないが。

「……………」

「……………」

(…はやく来すぎてしまった。約束の時間まであと一時間もある…)

公園の隅にたてられた大きな時計を眺めて、彼は思った…。

待たせては悪いと思ったからこそその行動だったが、それにしただって
はやく来すぎてしまったかも知れない。

(仕方ない…。なにかそばで暇を潰せる場所は…)

彼はこの近くであと30分ほど時間を潰そうと考え、ベンチから立ち上がろうとする…。

ガサガサツ：

だがしかし、ベンチのすぐ後ろの茂み…彼はそこに潜む何者かに声をかけられ、立ち上がることを止めた。

??? 「怪しいヤツめ…そこを動くな…」

その人物は背後から彼の後頭部に何かを突き付け、少し低めの声で警告する。彼はその人物に従い、前を向いたまま、背後に立つその人物に返事を返した。

「いやその…僕はただ人と待ち合わせしているだけなんです…」

??? 「ほう…それは本当か？」

「はい、本当に…」

??? 「信じられん、怪しいなあ…ほんとは目の前を駆け回る子供たちを誘拐して、犯罪に手を染める気だったんだろう？」

一体なにを言い出すんだ…。

ベンチに座っていただけの健全な少年にいきなり声をかけてきたあんなの方が、どうみても怪しいだろう…。彼は背後の人物に対して心の中でそんな事を言いながらも、視線を前に向け続けた。

「ほんとですって…あと一時間もしたら待ち合わせ相手が来ますから、なんなら一緒に待ちますか？」

??? 「…それはなんだ、デートかなんかなのかあ…？」
なぜそんな事を聞いてくるんだ…。

頭の中でそう思いつつ、彼はにやりと照れたような笑みを浮かべる。

「いや、もしかしたらそうなのかなあ…。…どう思います？」

??? 「絶対に違うぞお…ただ、暇だから遊んであげることにしただけ

だあ…」

「……………」

その発言を聞いた直後、彼はため息をついてその人物の名を呼んだ。

「…胡桃ちゃん、なにしてんの？」

そう言われてから、その人物は彼の前へと回り込む。

見たことのあるツインテールを揺らしながらニツコリと笑うその人物の正体は、予想どおり…『恵飛須沢胡桃』だった。

休日なのでいつもの制服ではなく、下は茶色の短パンを…上は白いシャツの上に紺色のパーカーを着として羽織っている。その格好はなんとも動きやすそうで、彼女の活発なイメージをそのまま表しているようだった。

胡桃「よくわかったな？ けっこう本気で声変えてたんだけど…」

「暇だから遊んであげることにしただけ…とか言われたら嫌でもわかるでしょ」

胡桃「事実だからな。そこはキチンと伝えてあげないと思って」

「んー…男女が二人きりで遊ぶのはデートなのでは…」

胡桃「違うって！ 遊びは遊びだ!!」

「…なるほど、僕とは遊びの関係ってわけか…」

胡桃「引つかかる言い方だけど…まあそうだな」

そんな事を呟いてから、胡桃は右手の腕時計を見つめる。

すると彼女はおかしそうに笑いながら、彼の顔を覗きこんだ。

胡桃「約束した時間は11時だけ？ あと一時間もあるじゃん、少し早く来すぎじゃないか？」

「あ、あの…待たせたら、悪いと思って…」

本人の顔を見ながら言うのは少し恥ずかしいものがあるが…、正直に告げることにする。やっぱり…一時間以上前に来るのはさすがに早すぎだったかも…。そんな事を考える彼に、突如一つの疑問が浮かぶ…。

(あれ?でも…胡桃ちゃんも…)

「胡桃ちゃんも、ずいぶん早いよね。…どうして?」

その問いを聞いた胡桃は少しだけ顔を赤くして、一瞬目をキョロキョロと泳がす…。だがすぐに落ち着いた態度を装い、軽い咳払いを一つしてから彼に答えた。

胡桃「あ、あたしは…このそばに用事があつたから、だから少し早く出てただけだっ!」

「…へえ、用事は済んだの?」

胡桃「あ、ああ…。用事済ませて…その帰りにお前を見かけたから、声をかけたんだよ…」

「…そう」

胡桃「うん…とりあえずそういうわけで…あつ、そうだ…これやるよ」

「えっ?これ…」

彼女は手に持っていた一本の缶ジュースを彼に渡し、照れくさそうに笑う。受け取ってみるとそれはとても冷たく、買つてばかりのようだった。缶には無数のオレンジが並んだ画像がプリントされている…ということは、これはオレンジジュースなのだろう。

胡桃「女性を待たせないようにって心配りがちゃんと出来てたお前にご褒美だ!さっき買っておいた。ほらその…今日、ちよつと暑いしな?」

「……………」ジッッ…

胡桃「……………なんだよ?」

じつくと顔を見つめてくる彼にそう尋ねる胡桃。

彼はジュースと胡桃の顔を交互に見てから、ボソツと呟く。

「…やっぱり、これはデートなのでは…」ボソツ…

胡桃「ちっ、違うって言ったろ!!…ああもうっ!めんどくせえっ!!」

胡桃は顔を真っ赤にしながら声をあげ、彼からジュースを取り上げた。

「うわっ!なにすんの!?!」

胡桃「下らないこと言ったから没収だ!これはあたしが飲むっ!!だからお前は一人で干からびてろ!」

「ああ、もう…悪かったよ!謝るから、謝るから許して!!喉、乾いてるんですっ!」

そう言って懇願する彼の顔を横目でチラツと見つめると、胡桃はそれを返してあげるための一つの条件を提示した。

胡桃「もう今日一日、これがデートとか言うなよ?」

「わ、わかりました…」

胡桃「いいか、これはあくまでも…友達同士の遊びでしかないからな?そこのあたり、変なふうに思い上がるなよ…」

「りよ、了解です…」

胡桃「…ふむ!」

彼の返事を聞いた胡桃は満足したようにうなずくと、持っていたジュースを彼の額にペシツと押し付け、ニッコリと微笑んだ。

胡桃「じゃあ、返してやろう♪」

「……………」

そう礼を言ってから彼は改めてそれを受け取り、それを開く。

まだ先程、缶を押し付けられた際の冷たさが額に残るなか、彼はそれを一口だけ飲み、そばに立つ彼女を見つめる。

彼女は彼が飲み物を一口飲むのを見届けてからゆっくりと歩き出し、笑顔で告げた。

胡桃 「じゃ…」遊び」に行こうぜ！」

「はい、行きますか」

彼は歩き出した胡桃の後に続き、その公園をあとにした。

これが”デート”ではなく”遊び”であることを…少しだけ残念に思いながら…。

第四話 『どこの世界に』(くるみ)

胡桃「でき、どこいく?」

待ち合わせをしていた公園から出て早々、胡桃は少しだけ前屈みになり隣を歩く彼の顔を覗きこむ。せっかくの休日…出来るだけ楽しく過ごしたいところだが、彼は細かい予定を立ててはいなかった。

「さあ…どこ行きたい?」

胡桃「決めてなかったのかよ!」

呆れたように言いながら、胡桃は顔をグイッと空に向ける。

そうして上を向いた胡桃だったが今日は見事に晴れている為日差しがキツいらしく、眩しそうに目を細めながらため息をついていた。胡桃も胡桃で彼が予定を立ててくると思い込んでいたため、何一つ考えてこなかったのだ。

胡桃「むくくく…」

上を向いたまま腕を組み、トコトコと歩く。

彼はそんな彼女の横を歩き、上を向いたままの彼女が何かにつづからぬように周囲を警戒していた。

胡桃「とりあえず…街の方に行くか?賑やかなところに行きやなにかしらあるだろ」

上げていた顔をスツと下げ、彼を見つめる。

彼はその提案に賛同し、二人で街の方へと向かうことにした。

「んじゃ、のんびり行きますか…」

胡桃「ちよいまち…目がチカチカする」

「日差し強いのにずっと上見てるからでしょ…」

日影に立ち止まってから両目に手をあて、苦笑いする胡桃。

彼は呆れた表情をしながら、彼女の目が治るのを待った。

その後二〜三分待ち、胡桃の目が元の調子に元に戻る。彼女はそばで待っていた彼に対して申し訳なきように笑いながら、共に街へと向かった。二人が待ち合わせをしていた場所から街の中心までは大して距離はないが、それでも徒歩だと二十分近くかかる…。

胡桃「そういや、腹減ってる？」

街の方へと歩く道中、胡桃が彼に尋ねる。

時刻は午前10時を少し過ぎたばかり…小腹はすいているが、昼食にするには少しだけ早い気もする…。

「微妙なところっすかね…。胡桃ちゃんは？」

胡桃「あたしはついさつき食べてきたばかりだ！」

「なっ!？」

ドヤ顔をして答える胡桃だが、彼は驚きを隠せない。

女の子と二人きりでの外出…昼食を共にしたかったという気持ちも少なからずある。だが、胡桃が先程食事を済ませたばかりだというならそれは叶わない。彼女がよほどの大食いだというなら話は別だが…。

胡桃「あれ…ショックだったか？」

「…べつに」

期待していた出来事が一つ潰れて、彼の表情が微かに曇る。

すると胡桃は彼の背をバシツと叩き、ニンマリと笑った。

胡桃「冗談だつて！食べてきてねえよ。せつかくお前と二人で出掛けるんだ、当然だろ♪」

嬉しそうに歩きながらそう告げる胡桃を見た彼は安堵すると共に、一つの疑問を抱く……。『二人で出掛けるなら当然だ』という彼女の言葉には、どんな意味が込められているのだろうか？ひよっとして：彼女も自分との外出を楽しみにしてくれていたのだろうか？そう思うと変に意識してしまい、笑顔の彼女を見ているだけでドキドキしてくる……。

「……………」

胡桃「当然、奢ってくれるんだもんな？」

「……………はあ？」

一瞬、耳を疑った…。

つまり彼女は彼との食事が楽しみだったとかそういう気持ちは一切なく、奢ってもらう事を期待していたのだ。ガツカリして肩を落とす彼だったが、まあ…これはこれで彼女らしい…そう思つて前を向く。不思議なもので、先程彼女に抱いていたドキドキはどこかへと消えていた。

「あまり高いのはダメ。てきとーなヤツなら…まあ奢つてあげるよ」

胡桃とのデート（胡桃はあくまでも遊びだと言っているが…）代だと思えば多少の消費は我慢できる。そう思つて胡桃に告げる彼だったが、直後に彼女は自らの顔の前で右手を左右に振り、焦ったような表情をした。

胡桃「いやいやっ?!これも冗談だぞ？そんなマジに答えるなつて。昼飯代くらい自分で出すよ」

『奢ってもらおう』と言つたのは冗談だったのに、彼はまさかのOKを出した。胡桃はそれに焦り、先程の言葉を慌てて撤回する。だがいくら冗談だったと言つても一度は言ってしまった事なので、彼も引き下が

らない。

「大丈夫。僕は金持ちではないけど、かといって貧乏人でもない。昼食代くらいなら全然出すよ」

胡桃「……………マジ？」

「うん。マジ。さっき貰ったジュースのお礼も兼ねてね」

胡桃「……………じゃあ、ごちそうになります……………」

ここまで言ってくれるなら断るのも悪いと思い、胡桃は歩きながらペコツと頭を下げる。彼はそれを見て満足そうに微笑み、二人で街へと向かった。

~~~~~

十五分後…二人はようやく街へと着く。

待ち合わせをしていた公園の付近と比べると人通りが多く、車も走っていた。周囲には大きめのビルやアパート、飲食店など様々な建物がある中、二人はある一つの建物の前で足を止めていた。

胡桃「昼飯にするには少しはやい…。とくれば、時間を潰さなきゃな」

「……………」

胡桃「あれ、不満か？暇潰しにはもってこいの場所だと思っただけ

どな…」

目の前にある建物を眺めながら胡桃が呟く。

まだ日が出ているからそれほどではないが、きつと暗くなった時には派手に光るのだろうか…。それほどに多くの電球がその建物の看板には付けられていた。並べられた電球は『GAME』という大きな文字になっており、彼はそこをゲームセンターなのだとして理解する。

胡桃「来たことない。とか言わないよな？」

彼が無言でゲームセンターを見つめていたので、もしやと胡桃は思う。

一般的な高校生…それも男子なら一度くらいは行ったことがあると思うが、彼は少し変わっている…。初ゲームセンターの可能性もなくはない。

「さすがに来たことくらいはあるけど、けつこう前の事だし…しかもその時も大して遊んでない」

胡桃「ふくん…ま、とりあえず入ってみようぜ。久しぶりだったなら、ゲームの進化っぷりに驚くかもな」

そんな事を言いながら二人で中へと入る。

入り口に寄った時から既に賑やかな音が耳に入っていたが、自動ドアが開いて中へと踏み込むとその音はより一層賑やかになる。まあ…悪く言えば騒がしくもあるが。

様々な筐体きょうたいが置かれている店内はそこそこ人も多く、自分達と同じ年くらいであろう若者から、中年の男性客までいる。皆それぞれが好きなゲームで遊ぶ中、彼と胡桃もプレイするゲームを決めるべく店内をぶらついた。

胡桃「なにしたい？」

「あゝ…任せろ」

アーケードゲーム・クレーンゲーム・コインゲーム…その他にも色々なゲームがあるが、こう種類が多いと決めるのも難しい…。なので仕方なく胡桃に選択を任せると、彼女はそばにあったクレーンゲームへと歩み寄った。

胡桃 「んじやあ…これかな」

彼もそばに歩み寄り、ガラス越しに置かれている景品を確認する。

中には動物を模した可愛らしいぬいぐるみ達が乱雑に置かれており、それを見る胡桃の目がキラキラと輝いていた。

少し男っぽいところもある彼女だが、それでも根は乙女。やはりこういうった可愛らしいグッズには惹かれるのだろう。彼女は自らの財布を取り出してゲームを始めようとしたが、彼がそれを手で制して言った。

「大丈夫…僕に任せて」

胡桃 「マジ？こういうの得意なの？」

自分の財布を取り出し、自信ありげな表情を見せる彼…。

胡桃はそんな彼を信じることにして、出していた財布をそつとしまった。

…チャリンツ

彼は自らの財布からコインを取りだし、それを投入する。

胡桃が無言で見つめる中、彼は集中してクレーンを操っていき、移動を終えたクレーンは下にあるぬいぐるみ目掛けゆつくりと下降していった…。

「……………」

胡桃「……………」

二人が無言で見守る中、クレーンが犬を横したぬいぐるみの腹部を掴む。

一見狙いは悪くないように見えたが、彼が思っていたよりもクレーンの力は強くなかった…。クレーンはぬいぐるみを撫でるようにして上がっていくだけで、掴みあげる気配など見せない。

「なっ!?!今のでダメなのか!?!」

胡桃「まあ、こんなもんだろ。意外とムズいんだよ…」

「ちっ…手強いヤツだな」

そう言いながらも、彼はまたコインを投入していく…。

彼の集中力を切らさないようにと黙ってそれを見ていた胡桃だったが…………。

…チャリンツ

「…………だめか。よし、もう一回」

…チャリンツ

「…くそっ。でも、コツは掴めてきた」

…チャリンツ

「…次だ、次で仕留める」

胡桃「お…おい…………」

彼女の表情は次第に曇っていった。幾度クレーンを操り、何度失敗

しても：彼がコインの投入を止めようとしなからだ。彼の使った金額は既に2000円を越えているだろう…。

胡桃「もう諦めた方がよくないか？これ、たぶん無理だよ」

「くっ!!次こそ…次こそ取れそうな気がするんだっ!」

彼が財布に手を伸ばすのを止める胡桃だが、彼の目は鋭いまま…。自分が負ける等とは微塵も思っていない表情だった。とりあえず警告はしたので、胡桃は呆れた表情をしながら離れる。

胡桃「あたしはちよつとトイレ行ってくるけど、あまり無理すんなよ?ただでさえ昼飯奢るって約束してんのに…」

「んん…わかった…」

店内のトイレに向かう胡桃に返事を返し、彼はまたコインを投入する。

だがその後も失敗が続き、さすがの彼も諦めてその場を離れた。

(厳しい…これがゲームセンターってやつか…)

ため息をつきながら店内を見回し、胡桃を待つ…。

すると先程のクレーンゲームのすぐそばに一つ、かなりサイズの小さなクレーンゲームがあることに気づく。彼はそのそばに寄り、そつと財布を取り出した。

こつちのクレーンゲームは先程のとは台の大きさからクレーンの大きさ：景品の大きさまでもかなりスケールダウンしている。中にある景品はよく分からない小さなキーホルダーばかりで可愛いとは言い難いが、一度くらい景品を掴みとつてみたかった。

(ぬいぐるみは無理でも、これくらいなら…)

取り出したコインに想いを込め、投入する…。

すると何とも言えないBGMが台から鳴り出し、手元のレバーを倒

すとそれに合わせてクレーンが動き出した。

(狙うのは……「アレ」でいいか)

一つの景品に狙いをさだめ、クレーンを降ろす。

狙いは悪くないが、どうせまたダメだろう……。そう諦めかける彼の予想に反し、クレーンのアームには狙った景品が引っかかっていた。

「…おっ!?!」

思わず声が漏れる……。アームに引っかかった景品は途中で落ちたりする事はなく、開口部の上までしつかりと運ばれていった。彼が期待の眼差しを向ける中でそのアームがゆっくりと開き、景品は見事に開口部へと落ちていく。彼はすかさず取り出し口に手を入れ、それを獲得した。

「ようやく……ようやくだ……!!」

手に入れたのは小さなキーホルダーだが、それでも喜びが大きい……。

彼が初めての勝利を噛み締めていると、トイレから戻った胡桃が彼の肩を背後から叩いた。

胡桃「さつきのは諦めたか？」

「うん」

胡桃「それがいい。あのままじゃお前、全財産使いそうだったし」  
否定できず、苦笑いする彼……。

確かにかんりの金額を使ってしまったが、それでも手ぶらで終わりはしなかっただけマシだろう。彼は目の前で笑う胡桃の手を掴み、たった今手に入れたばかりの景品を渡した。

胡桃「んっ、なに?」

「さつきのは諦めたけど、他のは取れた。それ、胡桃ちゃんにあげる

よ」

胡桃「へえ、ありが………つて、何これ？」

手渡されたキーホルダーを見つめながら、胡桃は眉を寄せる。

およそ10cmほどしかないそのキーホルダー……何を模した物なのかと気になったが、細長い棒の先に平らな金属の付けられたこれはどう見ても……。

「シャベルだね。シャベルのキーホルダー……」

胡桃「なんでシャベルなんだよ……。これ作ったやつマニアック過ぎだろ……」

「おや？嬉しくない？」

胡桃「どこの世界にシャベルのキーホルダー貰って喜ぶ女子高生がいるんだよ。お前のセンスを疑うぞ……」

言われてから気付いたが、それもそうだ……。普通の女子なら、シャベルのキーホルダーなど貰っても嬉しくはないだろう。だがこのキーホルダーを一目見たとき、彼は何故かこのキーホルダーを胡桃にプレゼントしたくなった……。

「ああ……ごめん。もっと良いのが取れば良かったんだけどね」

変な物を渡してしまったと思った彼は手を差し出し、それを返してもらおうと考える。だが胡桃は彼が手を出しているのには気づいておらず、自分の財布の端にそのキーホルダーを付けている最中だった。

胡桃「……よしっ♪」

「それ……付けるの？」

胡桃「うん。お前がせっかくなくれたんだし、ありがたく貰っておく



よ」

胡桃は財布を掲げると、その端で揺れるキーホルダーを見て嬉しそうに微笑む。その笑顔は無理しているようではなく、本当に嬉しそうな笑顔だった。

胡桃「さつきはああ言ったけど…あたし、シャベル好きだし」

「そうなの？変わってるね…」

シャベルが好きだと言う女子など聞いたことがなく、彼が苦笑いする。

だが胡桃は胡桃で自分でもなぜシャベルを気に入っているのかわかってないらしく、不思議そうな表情をしていた、

胡桃「変わってる…よな。好きな理由は特になんだけどさ…なんかこう…落ち着くっていうのかな。このキーホルダー見てたら、急にそんな気がしてきたんだ…」

「…そっか。まあ、喜んでもらえたなら何より」

胡桃「うん…ありがとな♪」

ポケットに財布をしまい、ニッコリと微笑む胡桃…。

また別のゲームを探しに向かう彼女はどこか上機嫌に思える歩き方をしており、ポケットからはみ出したキーホルダーのシャベルを揺らしていた。

## 第五話 『明るい未来』（くるみ）

公園で待ち合わせをしていた彼と胡桃は街へと出かけ、昼食までの暇潰しとしてゲームセンターへと足を踏み入れた。そこにあつたクレーンゲームで彼が手に入れた『シャベルのキーホルダー』を貰った胡桃はどこか少し上機嫌な気がして、それをプレゼントした彼も自然と笑顔になる。

その後も彼と胡桃は辺りにあつた幾つかのゲームで遊び、二時間近くの時間が経過…。そろそろお互い空腹になってきたのでどこかで昼食をとろうと考え出した時、胡桃が最後にコレをと一つのゲーム筐体を指差した。

「…あれやるの？ほんとに？」

胡桃 「いやーじゃん、せつかくだしやってこうぜ」

「んん、まあ良いけどさ…」

テンション高めの胡桃とは違い、彼のテンションは今一つ…。

何故ならば胡桃が最後に指定したゲームは大きなモニターの前に銃を模したりモコンの置かれている、いわゆるガンシューティングゲームだからだ。

（こういうのやったことないしなあ…。どうせなら一緒にプリクラでも撮った方がデートっぽいのに…）

そんな事を思う彼だが、これはただの遊びだという事をすぐに思い出す。そばにいる胡桃が楽しそうに笑っていたりと良い雰囲気だったので、つい勘違いしそうになってしまうのだ。

（まあ…一緒に遊べるなら何でも…）

『一緒に遊べるなら何でも良い』…そう前向きな考え方を始めた彼

が顔を上げ、そのゲームのモニターを見つめる……。モニターにはデムービーらしきものが流れており、ゲームの内容がそれとなく分かるのだが、その主人公達の戦っている敵は……。

『グア…アアツ…!!』

恐ろしい呻き声をあげながら主人公らに襲い掛かる人型の化け物。腐りかけているかのようにボロボロの手を伸ばし、人に噛み付こうとするそれはゾンビ映画に出てくるゾンビそのものであり、彼は言葉を失った…。

「……………」

胡桃「ここはあたしが奢るからさ、一緒にやろうぜ！」  
キラキラした目で彼を見つめる胡桃だが、肝心の彼の目は死んでい…。それこそ、ゲームに出ている化け物にも負けないくらいに暗い目をしていた。

胡桃「おい…どうした？」

心配になり、そつと声をかける。彼は顔を静かに胡桃の方へと向け、ゲームのモニターを指差しながら言った。

「これ、ホラーゲーム？」

胡桃「ん…まあ、ちよつとだけ？大丈夫大丈夫っ！あくまでシューティングゲームなんだし、適当に銃撃ってればなんとかなるから！」

笑顔で答えながらコインを入れ、銃の形をしたコントローラーを手にゲームをスタートさせる胡桃…。本当に二人分の料金を払ったらしいので、彼も渋々コントローラーを手にしてモニターを見た。

胡桃「一応言つとくけど、すぐに死んだりするなよ？せつかく二人分かったのに即ゲームオーバーとかシャレにならんからな」

「はいはい、がんばりますよ」

胡桃「まあ、あたしがカバーしてやるからある程度は大丈夫だと思うけどな。これ、二人で同じライフを共有してるから、死ぬときは一緒だ」

始まったゲーム画面の下の方を見ると、確かにライフゲージは一本しかない。つまり彼がいくら足を引っ張っても胡桃がどうにかしてくれたりもする訳だが：彼はそんな情けない展開を胡桃に見せる気はなかった。

「死なせないさ。絶対に君を守ってみせる」

少し気取った台詞を吐き、モニターに現れた最初の敵目掛けて銃を向ける。彼は敵に狙いを定めて引き金を引いたが、記念すべき初弾は見事に外れた：。その瞬間に彼は銃を下げ、恥ずかしそうに顔を俯ける。

胡桃「…不安しかねえ」

呆れたように呟きながら胡桃も銃を撃つ：。彼女の放った弾は見事に敵の頭を撃ち抜き、画面に記載されている得点が微かに増えた。

胡桃「こりゃ、あたしがお前を守つてく感じになりそうだな……」  
「……お世話になります」

彼は開幕早々にこのゲームの難しさを悟り、諦めモードになる。気持ちで負けてるのがいけないのか、彼はその後ミスを重ねていき、胡桃の足をこれでもかという程に引っ張っていった：。

だが胡桃はこのゲームをやり込んでいるのか、はたまた才能の違いなのか：彼という足枷をつけながらも次々と難関をクリアしていく。二人でプレイしているにも関わらず、実質胡桃の一人プレイだった

…。

胡桃「くっ…！うわっ!!」

そんな胡桃も終盤に差し掛かると苦戦を強いられ、遂にゲームオーバーに…。画面にはこれまでの結果が大きくが表示され、1P・2Pの個別撃破数が明らかになる。

『1P…撃破数85体』

『2P…撃破数5体』

言うまでもないが、胡桃が1Pで彼が2P…。

彼はそつと銃を元の位置に戻し、深くため息をつく…。

胡桃も彼がここまでとは思わなかったらしく、気まずそうに苦笑いをしながら手元の銃を弄っていた。

胡桃「あはは…：ドンマイ」

「…んん」

気にしてないと言わんばかりに答える彼だが、明らかにテンションが下がっている…。このままでは気まずい展開になってしまうので、胡桃は銃を置いてここをあとにしようとした。

その時…ゲームのモニターがピカピカと光り、ある文字が大きく表示される。それを見た胡桃は置いた銃をもう一度手に取り、嬉しそうな表情を見せた。

胡桃「おおっ！見てよこれ！ランキング入ったぜ!!」

彼もそつと画面に目を向ける…。

画面には大きく『5』の数字が表示され、その下にある空欄への名前入力を待っていた。つまり、彼と胡桃はこのゲームのランキングにて五位になったのだ。…まあ、実質胡桃が一人で取ったようなものだが。

胡桃「この店舗内だけのランキングだけど、それでも五位はスゴいだろ！これが全国ランキングだったらもつとテンション上がったんだけどな♪」

「んん…そだね」

胡桃「暗い顔すんなって！ほら、名前どうする？」

キラキラした顔を彼に向けながら胡桃が尋ねるが、今回の功績はほとんど胡桃一人によるもの…なので彼は彼女に全てを任せた。

「なんでもいいけど…普通に『くるみ』とかじゃダメなの？」

胡桃「いや…一応二人でやったんだし、それは味気ないっていうか…」

「…任せるよ」

胡桃「うくん…：りよーかい」

少し考えた後に胡桃は銃を構え、モニター上のキーボードを撃ち抜いて文字を入力していく。何発かの銃声が響いた後に入力されたその名前を見て、彼は首を傾げた。

『くるみん & シャベルマン』

「…どづいとうとなのっ？」

胡桃「いや、キーホルダープレゼントしてくれたから…」

「それはそうだけど……」

入力を終え、表示された名前……。これが彼と胡桃のユーザーネームとしてこのゲームのランキングに載る訳だが……。シヤベルマンは恥ずかしい……。出来れば直して欲しかったが、胡桃の足を引っ張り続けた彼はそれを言えなかった。

「つてか、くるみんって何さ」

胡桃「本名書くのもアレだし……なんか可愛いじゃん」

「……ふむ」

『可愛いのだろうか？しかもほとんど本名のままじゃないか……』そんな言葉が口から出そうになる彼だったが、グツとこらえて頷く。モニターには今入力してばかりの二人の名前を含めた、五組のプレイヤーの名前が表示されていた。

くくく

1. 『まふー & カナン』（総撃破数300体）
2. 『家賃滞納者』（総撃破数230体）
3. 『対ゾンビ精鋭部隊』（総撃破数136体）
4. 『りー & ー』（総撃破数112体）
5. 『くるみん & シヤベルマン』（総撃破数90体）

くくく

胡桃「三位の人の名前がめっちゃ本気っぽいのに一位と二位がゆるゆるで笑っちゃうな。対ゾンビ精鋭部隊がただの家賃滞納者に負けんよ……」

「二位は僕らの三倍以上のスコア…やっぱり上には上がいますな」

胡桃「これ、100体越すのも難しいみたいに言われてたのに…すげえ人はいるもんだなあ。勝てる気しねえ」

他のプレイヤーとの実力差を痛感した二人はその場をあとにする…。

ゲームセンターの外に出た二人は昼食をとる場所を決めるべく、街中をぶらぶらと歩くことにした。

胡桃「いやあく結構楽しめたなあ♪」

歩道を歩きながら胡桃が笑う。暇潰しに立ち寄ったわりには充実した時間を過ごせたので、彼も満足だった。強いていうなら、最後のゲームで胡桃の足を引っ張ってしまった事は心残りだが…。

(まあ、次までに練習しておこう…。次があるかどうかは知らんけど…)

またあそこに胡桃と来れるのかは分からないが、とにかく練習する事は決めた。心の中で彼がそう決意すると、不意に胡桃が話しかけてくる。

胡桃「…なあ？」

「ん？」

胡桃「もしも…もしもだぞ？あのゲームみたいな化け物だらけの世界に生まれたら、お前は どうする？」

突拍子のない質問をぶつける胡桃…。

あんな化け物だらけの世界など想像するだけで恐ろしいが、彼は彼なりに自分がどう動くかを想像してみた。

「たぶん…どうにも出来ないかな。適当に逃げ回って…何日かした後



に殺されて終わりだと思っ」

胡桃「諦めるの早いな…。もうちよつと明るい未来を見ようぜ？」  
「つて言われてもねえ…。」

あんな化け物を前にしてずっと生き延びる自信などない。

現実的な言葉を放つ彼だったが、胡桃はそれをつまらなそうに見ていた。

胡桃「あたしは…あんな世界でも出来るだけ明るく生きていたいな。確かに毎日生き抜くことで精一杯になっちゃうだろうけど…それでも、可能なだけ楽しく生きていたい」

「…じゃあ、僕はそれに手を貸す。君が毎日笑って過ごせるよう、全力を尽くしてあげよう！」

拳を握りしめながら彼が言う…。それを見た胡桃はおかしそうに笑い、彼の頬をペシペシ叩いた。

胡桃「よしっ！じゃあ、あたしの為に犠牲になってくれ!!」

「んゝ。捨て駒こまになるのは嫌なんだが、まあ…胡桃ちゃんの為ならそれも良いかな…。」

胡桃「従順な部下を持つことが出来てあたしは幸せだよ…。もしもこの時の対策はこれでバッチリだな♪」

胡桃がニコニコと微笑みながら彼の背を叩く。『あたしの為に犠牲に…』それが本気なのか冗談で言っているのか、彼には分からない。だが、今はこうしてふざけあうのが楽しいので良しとした。

二人じゃれ合いながら歩いていると、小さな喫茶店の横を通り過ぎる。

すると胡桃はピタツと足を止め、その店の方へと振り向いた。

胡桃「あつ…昼はあそこにしようぜ。オススメだつて教えてもらつたんだ」

「へえ…誰に？」

まさか男ではあるまいな…。

胡桃の彼氏でもなんでもないので、彼はそれを気にして尋ねる。

問われた胡桃は彼の顔を見つめ、それに答えた。

胡桃「リーさんだけど？」

「…そう。じゃあ、入ろっか」

胡桃を連れてそこに向かい、茶色の扉を引く…。すると扉の上には付けられていたベルが揺れ、チリンチリンという音を響かせた。店内はそこまで広くない感じだが、どうやら二階にも席があるらしい…。だが一階の席がいくつか空いていたので、彼と胡桃は一階…その隅の方にある席へと座った。

第六話 『また一緒に…』（くるみ）

胡桃「ふう：外暑かったから、涼しくて気持ちいいな」

木製の丸いテーブルをはきみ、彼と向かい合うようにして座る胡桃。

彼女の言う通り店内は冷房が効いているらしく、日差しの強い外からやって来た身としてはかなり涼しかった。

胡桃「えっと、お前は何にする？」

テーブルに置かれていたメニユーを二人一緒に見えるようにして開き、胡桃が尋ねる。彼はそれに目を通したが、思っていたよりもメニユーが豊富だ…。このままではかなり長時間悩むことになるかも知れない…。

「…オススメってなんだろうね？」

胡桃「リーさんはケーキが美味しいって言ってたけど、それはデザートだしなあ…。んく…：あたしはオムライスにする」

メニユーの一部を指差しながら胡桃が告げる。

載せられていたそのオムライスの写真はかなり美味しそうで、彼もそれにしようかと頭を悩ませた。

「…同じのにしようかな」

胡桃「ええっ?!二人で来てるんだし、別のにしようぜ？」

そっと呟くと胡桃に文句を言われたので、彼はオムライスとは別の目ぼしい品を探す…。だが真面目に考えてると日が暮れそうなので、彼はたまたま目についたカレーライスを指差した。

「…これ」

胡桃「おお、良いんじゃない？オムカレーに出来るし♪」

『するのによ』と彼はツツコミかける。

…というか、彼女は二人で互いのメニューを分け合う気なのだろうか？そんな事を始めたらいよいよただのデートになるが…。

(まあ…大歓迎だけどね)

ふふつと笑い、彼は店員が出してくれた水を飲む。

ヒンヤリとした水は外から来た彼にとってやたらと美味しく感じ、思わず一気に飲み干してしまう。瞬く間にグラスを空にした彼はそばにあつたピッチャーを手に取り、二杯目を注いだ。

胡桃「あたしも〜」

飲み干してしまったのは胡桃も同じらしく、空のグラスを彼に向ける…。彼は自分のグラスを満たしてから胡桃のグラスに水を注ぎ、軽くなったピッチャーを置いた。彼に水を注いでもらった胡桃は直ぐ様二杯目を飲み始め、それを飲み干す。そうしてから彼女は立ち上がり、どこかへ歩いていった。

「どいこの？」

胡桃「…トイレ」

「ゲームセンターでも行ってたでしょ？水飲みすぎじゃない？」

胡桃「うるさいっ！」

微かに赤く染まった顔を彼に向けてから怒鳴り、胡桃は奥にあったトイレの方へと消える。一人残った彼は別に頼むわけでもないが、暇潰しにともう一度メニューを見ていた。

(…ほんとに品数が多いな。リーさんのオススメはケーキなんだっけ…。もし食べられそうなら、あとで胡桃ちゃんの分とセットで頼んでみるか)

所持金にもまだいくらか余裕がある…。

せっかくだし、このままケーキも奢ってしまおう。

そう思ってから視線を前に向けると、二階へと続く階段から一人の少女が降りてきた。

見たところ10才前後だろうか…。薄いベージュ色の髪をした、たれ目の少女。頭には茶色い髪留めを動物の耳のようにつけており、とても可愛らしかった。

少女「つ…：…う…：…」

少女は一階に降りてきてからというもの、辺りをキョロキョロと見回している。その様子はどこか焦っているかのようにも見えたので、彼は心配になり、そばに寄って声をかけた。

「大丈夫？…どうかしたの？」

少女「えつ…：と…：…」

突然話しかけられた事に驚いたのか、少女があたふたとする。

その様子を見た彼は自分がいけない事をしている気になって焦るが、その時少女が声を震わせながら答えた。

少女「トイレ…：探してて…。一階にしか、ないみたいだから…」

彼に怯えているのか、単純に人見知りなのかは分からない。

ただ少女はあまり長く彼と話している事は出来なさそうだったので、彼は先程胡桃が向かった方を指差して言った。

「トイレならあっちだよ」

少女「あ……ありがとうございます」  
ペコツと頭を下げ、少女はトコトコと駆けていく。  
それを見届けた彼は静かに席に戻り、胡桃の帰りを待った。

胡桃「……ただいま」

「おかえり」

少しして、胡桃が席に戻る。

その顔はどこか青ざめているようにも見え、彼は心配そうに聞いた。  
た。

「顔色悪いけど大丈夫？調子悪い？」

胡桃「いや……違うけど……その……」

席についた胡桃は辺りを見回してからそつと顔を伏せ、気配を殺す。

まるで何かを警戒しているかのような彼女を見て、彼は苦笑いした。  
た。

「……どうしたの？」

気になつて尋ねる……。すると胡桃はテーブルに頭を伏せたまま上目遣いで彼を見つめ、小さな声で答えた。

胡桃「トイレで……りーさんの妹に会った……」

「りーさんの妹？」

胡桃「うん……今、りーさんもここにいるらしい。きつと二階の席だ」

怯えた様子で胡桃が言う……。だが、何故悠里がここにいただけでそんなになるのかと思ひ、彼は首を傾げた。

「…何か問題があるの？」

胡桃「あるよ…！あたし、今日は家族と買い物に行くつて言つてりーさんの勉強会を断つたんだぜ!?それなのに、お前なんかとこんなところでランチタイムを…なんてのがバレたら………」

タラタラと冷や汗を流す胡桃……。ちょうどその時、先程彼と話していたあの少女がトイレから出てきて胡桃の元へと歩み寄つてきた。胡桃はそつと顔を上げ、少女の方を見る。

少女「くるみ、話つてなに？」

少女の第一声はそれだった。恐らく、トイレで会つた時に『後で話がある』とでも言つて呼んでおいたのだろう。

(つていうか、この子がりーさんの妹なのか……。)

先程トイレの場所を教えてあげた少女が悠里の妹だと知り、彼はそつと微笑む。この街は広いように見えるが、意外とそんなことはないのかも知れない。

胡桃「るー、あたしがここにいるのはりーさんに内緒だぞ？」

るー「うん、わかつた。でもどうして？」

『るー』と呼ばれたその少女は小さく頷き、不思議そうな顔をする。胡桃は相変わらず冷や汗を流しながら目を細め、向かいに座る彼の事をそつと見つめた。

胡桃「勉強会サボつてコイツと一緒に出掛けるなんてことがバレ

たら：あたしはりーさんに怒られる。怒った時の姉ちゃんの怖さはお前も知ってるだろ？」

るー「りーねー怖くないよ。優しいもん」

胡桃「ああ…妹には激甘だったな…。とにかくっ！お前は何も見なかった!!あたしがここにいるのも、コイツの存在も、全部忘れろっ！」  
ビシツと彼を指差し、るーに告げる。

るーは胡桃に指差された彼をじっと見つめ、胡桃に尋ねた。

るー「…かれし？」

るーが両手を合わせ、ニコツと笑う。

当然、胡桃はそれを即否定した。

胡桃「違うっ!!ただの友達っ！けど二人だけであるこの状況を見られたら誤解されそうだから秘密にしたいんだよ！」

るー「そっか、わかった。じゃあくるみ、お兄ちゃん、またね♪」

胡桃「今度お菓子持って行ってやるから、内緒だぞ〜？」  
「またね」

二階に戻る少女をお菓子で買収する胡桃と、手を振る彼…。るーは二人の方に振り向いてニッコリ微笑み、手をパタパタと振り返した。

胡桃「くそ…予想外の出来事に出くわしたせいで疲労が…」  
バタツとテーブルに倒れ、胡桃が呻く。

一方、彼はグラスに注いだ水を飲みながら呑気に笑っていた。

「妹さん、可愛い子だね」

胡桃「……犯罪に手を染めるなよ？」

ただ思ったままの感想を言っただけなのに、胡桃はまるで彼がいかがわしい事を考えているかのような言い方をする。思わず飲んでい



た水を吹き出しそうになるが、彼は堪えて咳をした。

「ゴホッ！ゴホッ!!し、失礼なことを…」

胡桃「いや、てつきりロリコンの気があるのかと思って……」

「そこまでヤバイ男じゃないっての。まあ、るーちゃんがあと五く六年分成長したら考えるけど……」

胡桃「五く六年ねえ……。その頃にはお前も二十を越えてるってことを考えると、やっぱり危ないよな……」

呟く胡桃の発言を聞き、彼も苦笑いする。

五く六年というのは冗談のつもりだったのだが、胡桃はそれに気づいてくれたのだろうか？いや……。この様子だと気づいてないだろう。

その後一人の女性店員が二人のそばに歩みより、注文していた二つの料理を順にテーブルへと置いていく。どちらもメニューの写真で見るとより美味しそうに見えたが、今の胡桃はそれどころではない……。

女性店員「ごゆっくりどうぞ」

料理をテーブルに置いてから軽く頭を下げ、女性店員は二人から離れていく。彼はテーブルにあったスプーンをさっそく手に取り、注文したカレーライスを食べる……。真っ白なライスにかけてあるルーは少しピリツとするが、ただ辛いだけでなく深みがあつてとても美味しかった。

「……………」

胡桃「そう…よかったな」

死んだ目をしながら胡桃が言う……。

彼女もスプーンを片手にオムライスを食べているが表情は曇ったまま……。

美味しくなかったのだろうか？

「マズイの？」

胡桃「へっ？いや…うまいよ。凄くうまいけど…味に集中できない」

スプーンで取ったオムライスを口に運ぶと、それをモグモグ噛みながら胡桃は振り向く。どうやら、二階から悠里が来るのではと不安らしい…。

「内緒にしてくれってるーちゃんに言ったんだから、そこまで警戒しなくても…。」

胡桃「っ!?!静かにつ！頭を下げろっ!!」

胡桃が彼の頭をガシツと掴み、無理やり下げさせる。

勢いあまつて顔をカレーライスに突っ込みそうになるが、彼が首に力を入れる事でそれはギリギリ避けられた。

彼と胡桃が出来るだけテーブルに顔を伏せて気配を殺していると、聞き覚えのある声が二階から一階へと降りてくる…。

くくく

悠里「ふう…美味しかったわね♪」

由紀「ほんとにご馳走になって良かったの？」

悠里「これくらいいいわよ。その代わり、午後からの勉強も頑張るましようね？」

由紀「うっ…：…らじゃく…：…」

くくく

胡桃「くっ！ゆきのヤツもいんのかよ!!」

「そう言えば、一緒に勉強会するって言ってたもんな…」

頭を胡桃に押さえられながら彼が呟く…。

鼻にカレーがつきかけているのもう少し力を緩めてほしいと願う彼だが、胡桃は決して力を緩めない。

くく

女性店員「では、お会計の方が——」

悠里達がレジの前に立ち、店員が会計を始める…。

ーが由紀とじやれる中、悠里は財布を取りだして会計を済ませ、二人を連れていった。

悠里「ゆきちちゃん、るーちゃん、いくわよ」

由紀&るー「はくい」

…チリリンツ

扉についていたベルの音が店内に響く…。

どうやら、三人は行ったらしい…。胡桃はそつと顔を上げてそれを確認すると、安堵のため息をついた。

胡桃「ふう…これで一安心」

言いながらスプーンを手に取り、当たり前のように彼のカレーライスを一口食べる胡桃…。あまりに自然な流れだったのでツツコミ忘れたが、カレーを食べる彼女の笑顔がとても幸せそうでツツコミ気も失せる。

胡桃「おっ、本当にうまいな♪」

「でいよっ?」

悠里達を警戒する必要もなくなったところで、彼も改めてカレーを食べ進めていく。すると胡桃がスプーンをくわえながら、食べていたオムライスの皿を彼の方へと寄せる。

胡桃「こつちも食べる？」

「…いこの？」

胡桃「お前の一口もらっちゃったし、別にいいよ」

それは彼にとって、とてもありがたい申し出だった…。

と言つても、別にオムライスが食べたかった訳ではない。ただ、胡桃の方からそう言ったことを提案してくれたのが嬉しかった。

その喜びを噛み締めながら、彼は自分が使っていたスプーンを胡桃に渡し、あるお願いをする。ハッキリ言つて断られると思つているが、ダメで元々だった。

「あーんしてもらつて良いですか？」

胡桃「……はあ？」

蔑むような目を向ける胡桃…。

まあ当然の結果だなど思い、彼はスプーンを引つ込める。

だが意外な事に胡桃はそのスプーンを彼から奪い取り、目の前のオムライスを一口分すくつた。

胡桃「今回は奢ってもらつたからな…特別だぞ？」

オムライスの乗ったスプーンを持ち、胡桃が言う。

彼女は頬を赤く染めながらチラチラと彼の事を見つめており、恥じらっているのが伝わってきた。

「ありがとうございますっ！」

胡桃「そういうのはいいからっ！ほら、あくん」

その言葉を合図に彼が口を開ける…。

胡桃は周りの視線を警戒しながらもそれを彼の口に運び、オムライスを頬張らせてからスプーンを引き抜いた。

胡桃「はい終わりっ！もうやんないからな…」

引き抜いたスプーンを彼の皿に戻し、胡桃は自分の食事を再開する。

一方、彼は胡桃にもらったそれをニコニコしながら噛み締めていた。

「ヤバい…今までで一番美味しいオムライスですよ、これ」

胡桃「はいはい…そりやよかつたな〜」

~~~~~

それから約30分後…食事を済ませ、更に食後のデザートにケーキを食べた二人はその店をあとにし、再び街中をぶらついていた。

胡桃「わるかったな、ケーキまで奢ってもらっちゃって」

「別にいいよ。せつかくの機会なんだし…」

彼は胡桃と並びながら気の向くままに街を歩き、気になった店に立ち寄っていく。書店や雑貨屋…更には女性向けの衣服店も見て回ったが、彼も胡桃も特別気に入ったものはなかったらしく、何かを買うことはなかった。

気に入った物がないんじゃないや胡桃も退屈だろうと思う時もあったが彼女は終始ニコニコしており、彼との外出を楽しんでいるようだった。彼もまた胡桃との外出が楽しかったため、何時もより笑顔でいる事が多かった。

そうして二人が遊んでいると、次第に日が暮れ始める…。

もうそろそろ帰らなくてはいけないので、二人は街の中心から自分達の家の方向へと歩き出した。

くくく

胡桃 「んく、思ってたよりは楽しめたな！」

「それはよかった。なら後日、またご一緒してくれますか？」

胡桃 「うむ、考えておいてやろう」

会話を交わしながら歩いていると、行きに入ったゲームセンターの前を通り過ぎる。胡桃はそのゲームセンターをチラチラと見つめ、前を歩く彼の手をガシツと掴んだ。

「ん？なに？」

胡桃 「最後にあと一個だけやりたいのがあってさ…いいかな？」

「うん、別にいいよ」

特に断る理由もなかったので、彼はそれを了承する。

胡桃は嬉しそうに笑いながら彼の手を引いてゲームセンターの中へと入り、その奥にある一つの機械の前に足を止めた。

「…これ？」

胡桃「そう、これ。いいでしょ？」

胡桃が彼を招いたのは大きなプリクラ機…。

彼も心の中で胡桃と撮れたらなあ、とは思っていたが、まさか本人から誘われるとは思ってもみなかった。

「胡桃ちゃんがいいなら…構わないけど」

胡桃「よしっ、じゃあ入ろう！」

彼の背を押しながら胡桃もその中へと入る。

プリクラ機の中は軽い個室のようになっており、狭い空間に胡桃と二人きりになった彼は緊張を隠せないものの、意識を強く持ってコインを入れた。

チャリンツッ！

胡桃「あつ！あたしが払うからよかったのに」

「いえ…ここは払わせて下さい…」

胡桃と二人きりでの撮影など願ってもない機会。

たかだか数百円の出費など痛くも痒くもない。

胡桃「…ありがとう。んじゃ、まずは背景だけ…」

撮影前にまずは背景を決めるらしく、胡桃がタッチパネルを操作します。彼はそれを横から見ていたが背景の種類は中々多く、胡桃も悩んでいるようだった。

胡桃「…一応聞くけど、どれがいいとかある？」

彼の方に視線を向ける胡桃……。尋ねられた彼は迷うことなくハート型の背景を選択し、満足そうな表情をした。

ピッ：

胡桃「そうだろうなと思ったよ。今日一日でお前の行動もだいぶ読めるようになってきたな……」

背景選択を終え、胡桃が小さく呟きながら残りの設定を終わらせにかかる。すると彼女はタッチパネルを弄りながらチラツと彼を見て、真剣な表情をしながら言った。

胡桃「あたしたちさ、どっかで会ったことある？」

「……なにそれ、口説いてる？」

胡桃「んなわけないだろ……。なんかお前のことさ、けっこう前から知ってるような気がして……」

言いながら胡桃はタッチパネルから離れ、彼の横に立つ。どうやら設定が終わったらしい。あとは撮影を待つばかりだ。

『ゴー………ヨン………サン………ニイ………』

撮影までのカウントダウンが始まり、二人はモニターに映るように肩を並べる。いよいよカウントが終わりかけ撮影だというその刹那、『どこかで会ったことあるか』という胡桃の問いに彼は答えた。

「僕もそんな気がしてた」

胡桃「…そっか」

パシャツ!!

シャッター音が鳴り、一枚目の撮影が終わる。

その後、二枚目・三枚目と撮影は続き、全てを撮り終えた二人はプリクラ機の外へと出た。どうやら撮影の後、外にあるパネルを用いて写真に好きなように落書きが出来るらしい。

胡桃「さて…落書きはあたしがやっておくからさ、飲み物頼んでいい?」

「了解、何がいい?」

胡桃「あく…お茶とかそんなのでいいや」

「…わかった」

胡桃に差し出された小銭を受け取り、彼は自動販売機を探しにく。

それを見届けた胡桃は一人残って写真に落書きを始め、写真が完成するのを待つ…。そうして出来上がった写真を取り出した胡桃はその出来に満足し、にっこりと微笑んだ。

~~~~~

胡桃「さて、ここまででいいよ」

「うん、お疲れさん」

ゲームセンターから出た彼と胡桃は夕暮れの中を並んで歩き、遂に胡桃の家の前へとたどり着く。送ってもらった胡桃はポケットからあるものを取り出し、それを彼に手渡した。

「これって…」

渡されたのはさっきゲームセンターのプリクラ機で撮った写真のようだが、裏返しにされていてどんな具合に撮れたかが確認出来ない…。彼はそれを裏返してみようとしたが、胡桃がそれを慌てた様子で止めてきた。

胡桃「うわあっ!? まってまってっ! 確認はあたしが家に入ってからにしろ!」

「?…?…? わかった」

何故そんな事を言うのかは分からないが、とりあえず領しておく。胡桃は彼の返事を聞いてから自らの家の扉を開け、パタパタと手を振った。

胡桃「今日はありがと! わりと楽しかったぜ♪」

「いえいえ、こちらこそ」

胡桃「…またな!」

バタンツ

家の扉が閉まり、彼は道路に一人たたずむ…。

辺りが次第に暗くなつてゆく中、彼は自分の家に向けてのんびり歩きながら受け取った写真を裏返し、どんな感じかを確認した。

「……ははっ」

一枚の紙に分割するかのようになり、小さな数枚の写真が載っている。そのどれにも胡桃の落書きが施されており、色々な言葉が書かれていた。

一枚目：星形の背景に写る二人の内、彼にのみ矢印が伸ばされている。その矢印の根本には『変なヤツ！』と、ただ一言だけ大きく書かれていた。

二枚目：写真の額縁のようなフレームに写る笑顔の二人の上の方、そこには今日の日付が書かれており、その下に『なんだかんだで楽しかったり？』という文字がある。

そして次の三枚目が最後になるのだが、この写真は彼が選んだハート型の背景のやつだった。大きなハートの中に収まるように肩を寄せた二人の下：そこに書かれていた真っ赤な文字を見た瞬間、彼の表情が固まる…。

『もうデートでいいや♪』

胡桃の文字でハッキリと書かれており、シャベルの落書きも添えられていた。あれだけデートではないと言っていた彼女がこんな事を書いていたと思うと胸が無性に高鳴り、テンションが上がる。

彼は軽い足取りで自分の家に戻り、すぐさまベッドに倒れ込んだ。

「ただいま〜」

ベッドに顔を埋めながら、遅めの挨拶をする。

今現在、彼は一人で暮らしているので返事を返す人間はいないのだが、その声を聞いてからそばに寄ってくる者はいた。

「今日は楽しい一日だった…。どう楽しかったか聞きたいか？」

茶色い毛を纏ったその子はベッドに寝そべる彼の頭にのし掛かり、短い尻尾をパタパタと振る。彼とこの家で暮らすもう一人…。いや、一匹の住人。茶色い毛が大体を占めていながらも口周りや腹部などの毛は白いその犬の犬種は柴犬であり、彼はこの犬の事をこう呼んでいた。

「よし、じゃあそこに座りな。太郎丸」

太郎丸「わんっ！」

太郎丸と呼ばれたその犬は小さな体で跳ね回り、今日一日の思い出話をする彼の前へと座った…。

〜

一方その頃：胡桃は自らが帰宅した事を家族に知らせた後、自室へと戻ってベッドに倒れ込んでいた。ベッドに横たわった胡桃は着替えるのも後回しにして財布を取り出し、その端に付いているシャベルのキーホルダーを見つめる…。

胡桃（変なキーホルダーなのに…なんか落ち着くんだよな…）  
揺れるキーホルダーを指先でつつき、にっこりと微笑む。

彼に渡されたその瞬間では微妙な表情をした胡桃だが、時間が経つにつれてこのキーホルダーを気に入ってきた。そして、このキーホルダー同様に気に入っている物がもう一つ…。胡桃は財布をベッドの上に置いてから上着のポケットに手を入れ、中にしまっていたそれを取る。

胡桃（結局、一緒に撮っちゃったなあ…）

手に取った一枚の写真…それは彼と共に取ったプリクラの物であり、彼に渡したのと同様の物だった。自分用にもと思い二枚印刷したのだが、改めてそれを眺めているとなんだか気恥ずかしくなってしまう。

胡桃（デートでいい…ってのは書かなくてもよかったかも…。ああ…なんであたしはこんなことを書いてしまったのか…）

自分の文字で書かれたそれを見て胡桃は一人顔を赤く染める…。今回の外出はデートじゃないとあれだけ自分で言っていたのに、最終的に認めてしまった…。それほどに彼との時間が楽しかったから…。

胡桃（知り合ってばっかなのに…ちよつと一緒に出かけただけなのに……なんで、こんなにドキドキすんだろ…）

そばにあった枕を胸に抱え、その写真を…そこに写っている彼を見つめる。本人にも言った事なのだが、やはり彼とは会ってばかりの気がしない。たとえ写真越しとはいえっても彼を見ていると胸がギュツと痛くなり、顔が熱くなる…。

胡桃（やば……もしかして……あたし……）

胡桃「…はああ」

深くため息をつき、ゴロンと寝返って写真から目を逸らす。

写真にあんな言葉を書いてしまい、彼と次に会った時にどんな顔をしようかとか色々と考えてる事はあったが…それでも今日は楽しかった。

胡桃「また……一緒に行きたいな」

## 第七話 『互いを知るために』（ゆうり）

胡桃とのデートから数日経ち、休みが明けまた学校へと通う日がやってきた。よく晴れた朝、今日も彼は一人通学路を歩いていく……。学校へと近付くにつれ他の生徒もチラホラと見かけるようになっていくが、由紀たちの姿は見かけなかった。彼よりも早く、もしくは少し遅れて登校してくるのだろう。

学校にたどり着いた彼は無言のまま教室を目指し、廊下を歩いていく……。

その道中、見知った顔を見かけたので彼は声をかけた。

「おはようです」

短い茶髪をしたその少女に背後から声をかけ、反応を待つ。

その少女：直樹美紀はすぐに振り向き、彼にペコツと頭を下げた。

美紀「あつ、おはようございます」

「いきなり声かけてすみませんね。せつかく見かけたんで……」

美紀「いえ、私は構いませ——」

ドンツ！

「うおっ!?!」

美紀の言葉を聞いていた時、彼がグラツとバランスを崩す……。

何者かが彼の背中に勢い良くぶつかったのだ。

彼が崩れかけた体勢を整えてから前を向くと、見知らぬ女子生徒が美紀の肩に手をあてながら立っていた。

???「あつ、ごめんなさい。ちよつと前見てなくて」

肩にかかるくらい茶髪…その後髪を結び上げてハーフアップにし、少しだけ長めの前髪を左右に分けて額を出しているその少女…。今彼にぶつかったのは彼女らしく、ニッコリと微笑みながら謝罪しているが…どこかわざとらしい様子だ。

美紀「ちよつと圭…。わざとぶつかったでしょ？」

美紀はその少女のことを『圭』と呼び、彼にわざとぶつかったのではと疑う。すると圭は首を横に振り、笑顔で答えた。

圭「そんなわけないじゃん。勘違いだよ」

美紀「言っておくけどこの人は先輩で、私の知り合いの人だからね？」

そばでたたく指を指差して美紀が告げる。

すると圭は少し焦ったような表情をして、気まずそうに彼の顔を見た。

圭「……知り合い？」

美紀「うん。ゆき先輩たちの知り合いで、私もこの前紹介されたの」

圭「なあんだ…。私はてつきり、美紀ちゃんが見知らぬ人に言い寄られてるのかと思ったよ」

圭がホツとしたように微笑む。どうやら彼女は美紀と仲が良いらしく、先程彼にぶつかったのも美紀を助けようとしての行動だったらしい。

圭「先輩、さつきはごめんなさい。私、ちよつと勘違いしちゃって…」

申し訳なさそうに頭を下げる圭…。



わざとぶつかられたといってもそれが美紀の為だったと分かった  
ので、彼も彼女を責める気はなかった。

「いや、美紀さんに悪い虫が寄ったら大変だからね…。そのくらい警  
戒しておいた方がいい。これからその調子で彼女を守ってあげて」

圭「はい、お任せをつ！」

美紀「いやいや……」

圭と美紀…二人は彼に軽く頭を下げてその場をあとにし、自分達の  
教室へと向かう。そうして美紀と並んで廊下を歩くなか、圭は笑顔で  
言った。

圭「あの先輩、良い人だね♪」

美紀「それは否定しないけど…なんで二人して私を守る感じに…」

圭「美紀ちゃん是我的大切な友達だからね。守りたくもなるよ」

美紀「……はいはい」

少し過保護に感じる圭のそれに呆れながらも、美紀はにこつと微笑  
んだ。美紀にとっても、圭は大切な友達だからだ…。

~~~~~

ガララツ…

一方、美紀達と別れた彼も教室にたどり着き、その扉を開ける。

最初の授業までまだ多少の時間があつたが、既に半数以上の生徒が
集まっていた。その中には由紀・悠里の姿もあり、由紀は彼が自分の

席へ座るとそのそばに歩み寄る。

由紀「おはようっ！今日も良い天気だね♪」

「ですねえ…」

授業の支度を始めながら彼が呟く。

由紀は彼の机に両肘をつけ、その顔を間近で見上げていた。

由紀「お休みの日って何してた？」

「くる…：…：…ゴロゴロしてました」

尋ねられた彼は胡桃と出掛けた事を話してしまいそうになるが、胡桃は嘘について悠里との勉強会をサボったのだ…。本当の事を言ったら彼女が悠里に何を言われるか分からないので、彼は咄嗟に出任せを言った。（実際、胡桃と出かけた日以外はゴロゴロしてたのだが）

由紀「ゴロゴロねえ。わたしもそんなふうにまったりとした休日を過ごしたかったけど…」

嫌な事を思い出しているのか、由紀の表情がみるみる曇っていく…。

恐らく悠里との勉強会を思い出しているのだろうが、この表情から察するにかなり苦労したようだ。

「…お疲れ様」

由紀「うん…。今度はキミとくるみちゃんも一緒にね…」

今回は彼と胡桃の二人も巻き添えにしたいらしく、悪巧みするかのようにして微笑む由紀…。その後方…少し離れたところにある席では悠里がこちらを見つめながらニツコリと微笑みながらこちらに手を振っており、彼は苦笑いした。

「まあ…考えとくよ…」

由紀から逃げるようにして視線を逸らすと、ちょうど胡桃が教室に入ってきていた…。彼女は彼と目があつたその瞬間に立ち止まり、落ち着きなく目線を動かす…。だがすぐに彼の目をじっと見つめ返し、笑顔でそばに歩み寄った。

胡桃「おっはよう！」

「おはよう」

由紀「おはよう、くるみちゃん♪朝から元気だね〜！」

胡桃「ま、お前ほどじゃねえけどな」

胡桃が言いながら由紀の前に顔を寄せ、その額を指でつつく。

それを受けた由紀は微かに後ろにのけ反るが、楽しそうに笑っていた。

由紀「元気ならくるみちゃんにも負けないもんね〜♪」

胡桃「ああ、”元気だけは”……な？」

由紀「ううっ、ひっど〜い!!」

目の前でじゃれ合う由紀と胡桃…。

彼はその光景を見て、ニツコリと微笑んだ。

ただただ平和なだけで、何でもないような光景…。それを見ているのが心地よくて、とても幸せな気持ちになる。

………が。

「人の席のそばでいつまでもイチャつかれるのはちよつとね…。そろそろ授業も始まるし、準備したらどうかかな？」

長々とじやれる二人を相手に彼が告げる…。

先に教室へやってきていた由紀はともかく、胡桃はまだ一切の支度

をしてなかったようで焦った表情を見せていた。

胡桃「やばっ！準備しないとっ！」

彼の席から離れ、自らの席へと向かう胡桃…。

それを見た由紀も笑顔で自らの席へ向かうが、彼女の席は彼の隣…。由紀が席に戻ろうと戻らなかりうと、彼との距離はさほど変わらない。

その後も彼は由紀と雑談を交わしながら時間を潰し、授業が始まる。

授業中…彼がそつと隣の席に座る由紀を覗くと彼女は『うくん』と唸りながら苦い表情を見せていた。いくら悠里との勉強会を済ませってきたとはいえ、難しいものは難しい…苦手なものは苦手なようだ。

そんな風にして授業の一つ一つに苦戦する由紀を横目に見て楽しみながら時間を過ごしてゆき、午前…そして午後の授業の全てが終わる。全ての時間を終え、あとは家に帰るのみとなった由紀は机に突っ伏して安堵のため息をついていた。

由紀「はああ〜っ…：…疲れたよ〜」

悠里「お疲れ様。どう？前よりは授業の内容を理解できた？」

既にほとんどの生徒が去った教室内…。帰り支度を済ませた悠里が由紀のそばに寄り、笑顔で尋ねる。聞かれた由紀は少しだけ難しそうな表情をしたが、その頭を縦に振った。

由紀「ん〜、この前よりは…：分かったかなあ」

悠里「そう？ならよかった♪」

悠里が優しく由紀の頭を撫で、満足そうに笑う。

彼は横で帰り支度を進めながらそれを見ていたのだが、教室を見回して気づく……。今の教室にいるのは彼と由紀と悠里……。その他数名の生徒のみ。胡桃の姿がなかった。

「あれ、胡桃ちゃんがない……。先に帰ったのかな……」

由紀「ほんとだ……。なんだ、帰りにどっか寄ろうと思ったのに……」

由紀は胡桃と共にどこかに寄り道したかったらしく、残念そうな表情をする……。彼女のそんな顔を見た悠里はその背をそつと叩き、笑顔で告げた。

悠里「まだそんなに時間経ってないから、急げば追い付けると思うわよ。今日は少し早めに終わったんだし、せっかくだから遊んできなさい」

由紀「……うんっ！りーさんとキミもくる？」

悠里と彼の顔を覗きながら由紀が尋ねる。

一緒についていくのも面白そうだと思う彼だったが、残念な事に授業終わりで少しばかり疲れてきていて、これから遊ぶのは厳しかった。

「せっかくだけど……遠慮しておこうかな」

悠里「私も大丈夫。二人で遊んでらっしゃい」

由紀「そっか、わかった！じゃあまた明日ね♪」

「はい、また明日」

悠里「じゃあね」

悠里と彼に笑顔で別れを告げると、由紀はカバンを背負って足早に駆けていく。彼女を見送った彼は途中だった帰り支度を終わらせるべく、カバンに荷物を詰めていく。その間、悠里はそばでその様子を見つめていた。

「……なにか？」

悠里は帰り支度を終えているにも関わらずそばにとどまり、ニコニコと微笑んでいる。その様子はまるで彼を待っているかのようなが…。

悠里「その…次の休みだけど、何か用事があるか聞きたかったの」「用事？いや、特には…」

悠里「じゃあ、もしよかったら私の家に遊びにこない？」

両手を合わせ、笑顔を見せる悠里…。

単純に彼女の家に遊びに行くだけならば問題は無い。むしろ彼の方からお願ひしたいくらいだった。…だが、悠里がただ遊ぶためだけに自分を誘わない事くらい彼にも分かっていた。

「まさか……また勉強会じゃ…」

悠里「ふふっ、正解♪あなた、あまり授業についていけないでしょ？」

「……まあ」

悠里「友達の成績が伸び悩むのを見ているだけっていうのは出来なくて…。お節介かも知れないけど、力になれるならなつてあげたいのよ」

隠すことなく本音を告げる悠里だが、彼女の目的はそれだけでは無い。悠里はそれを伝えるべく、少し照れたように笑いながら彼を見つめる。

悠里「それと……もつとあなたの事を知りたくて…。勉強もそうだけど、お互いの事を知り合いたって気持ちの方が大きいかもね。だ

から勉強が終わったなら……いえ、勉強しながらでもいい。一緒にお喋りでもしましょう?」

「……はっ」

そこまで言われたら断る理由もない……。

彼が微笑みながら頷くと、悠里はニツコリと笑った。

悠里「じゃあ、次の休みの日ね。約束よ?」

「ええ、了解です」

返事を聞いた悠里は自分のカバンを手に取り、彼に手を振ってから教室をあとにする……。彼は悠里に手を振り返して見送った後でのんびりと帰り支度を済ませ、自らも教室を出た。

すると、少し廊下を歩いた所で二人の人物が何やら話しているのを目撃する。一人は彼もよく知る女性教師……佐倉慈^{さくらめぐみ}だ。しかし彼女が話している少女……そちらは見覚えがない。少女は何やら苦い表情をしているので、説教でもされているのだろうか……。

(あの先生が説教するなんて珍しいな……。それだけ問題児なのか?)

慈は教員の中では比較的若く、優しい性格もあって生徒からも好かれていた。そんな彼女がわざわざ一人の生徒を廊下呼び出して説教をする光景が珍しかったので、彼は思わず立ち止まる。

慈「もう、今月だけで何度目ですか? いい加減、授業中の居眠りはやめて下さいっ!」

目の前にいる女生徒に向けて言い放つ慈だが、説教にしては今一つ迫力がない……。それどころか、眉をしかめてムツとする表情がどこか愛らしくすら見えてしまう程だ。相手の女生徒も廊下で説教されているというこの状況はともかく、慈自体に恐怖は感じていないようである。微かにヘラヘラとした表情を浮かべ始める。

??「ご、ごめんなさいっ!いや、あの……めぐみ先生の声って心地よくてですねえ……。聞いてるとつい寝ちゃうわけですわ……」

あくまで悪気はないと言うかのようにして答えるその女生徒は二本のヘアピンで前髪を額の左側にとめており、茶色いポニーテールを揺らしていた……。彼女の言葉を聞いた慈は呆れたようにため息をつき、肩を落とす。

慈「他の先生に聞いたら、あなたが居眠りしてるのなんて見たことないって言われたけど……。そう、私の時だけだったのね……」

??「申し訳ないっ!めぐみ先生の声を聞くとどーしても眠くなっちゃうの!!わざとじゃないですよっ!?!」

慈「はあ……。じゃあ、あなたに授業を受けさせるにはどうすればいいの?」

??「無言のまま、黒板に必要な内容だけを書けばいいと思います!そうすればさすがの私も寝たりしませんっ!」

えっへんと言わんばかりに胸を張る女生徒……。

それを見た慈はまた一層に肩を落とし、暗い表情になる。

慈「無言のまま授業なんて、できっこないんだけど……」

??「あつ、先生……。申し訳ないですけど、もう行っても良いですか?友達待たせちゃって……」

慈「……。うん、じゃあまた明日ね。もう、居眠りしないでよ?」
??「はあくいつ♪約束いたしまあくす!」

女生徒は嬉しそうに両手を広げ、廊下の向こうにトコトコ歩いていく。一人残された慈の背中があまりにも切なかったので、彼は思わず声をかけた。

「……先生？」

慈「あら、どうかしましたか？」

背後から不意に話しかけられた慈は先程までの暗いオーラをすぐに振り払い、彼に向けて笑顔を見せる。直後、彼は先程の女生徒について尋ねた。

「…さっきの娘は？」

慈「ああ…あの娘ね…。二年の娘なんだけど、いつも授業が始まって10分しない間に寝ちゃうのよ。その回数があまりに多いから注意したら、私の声の原因みたいな事言われちゃったけど……」

「ま、佐倉先生の声が心地良いつて思う気持ちは分からなくもないです」

慈「うう…聞いてたのね？」

「そんなに落ち込む事でもないでしょう？良い声だつて褒められているようなもんですよ？喜んでもいいのに……」

慈「聞いているだけで眠くなる声なんて、教師としては致命的です！」

慈がムツとした表情を見せる。だが教師というには幼い顔付きをしている事もあってか、やはり今一つ迫力がない……。

「んー…でも、佐倉先生の授業で寝るのなんて今のところはさっきの娘だけですよね？」

慈「…たまにだけど、丈檜さんも寝てるわ……」

「大丈夫。あの人は誰の授業でも寝る時は寝ますから」

落ち込みだした慈を慰めるように言うが、彼は気づいていない……。

思えば由紀も、慈の授業くらいでしか居眠りしていない。

だがそれを落ち込んでいる慈本人に言える訳もなく、彼はあたかも

他の教師の授業でも由紀が居眠りしているかのように答えた。

慈「はあ……これからは誰も居眠りしないように、少し声を張り上げていこうかしら？効果があるかは分からないけど……何事も挑戦よね？」

「そう……ですね。まあ、頑張ってください」

慈に向けて手を振ってから歩きだし、彼はその場をあとにする。

少し歩いてから振り向くと、慈が彼に向けて笑顔で手を振っていた。

（先生も色々大変なんだな……）

彼女を見つめてそんな事を思いながら、もう一度手を振り返す。

慈は教師にしてはどこか子供っぽいところがあるが、彼女のそんな部分が好きだという生徒は多い……。彼もその内の一人だった。

第八話 『どこか無防備な勉強会』（ゆうり）

「たしか……ここだっけ」

休みの日、彼はある家の前にたたずんでいた。

確認の為に目を向けた表札には『若狭』という文字……間違いない、ここが悠里の家だ。そう確信した彼はそばにあつたチャイムを鳴らし、反応を待つ。

「……………」

時刻は午前10時……。約束ちようどの時間に訪れたので悠里は家にいるはずだが中々現れない……。チャイムを鳴らして数分後、彼はもう一度そのチャイムに手を伸ばす……。

ボタンッ！

悠里「遅くなってごめんなさいっ！き、遠慮しないで入って？」

もう一度チャイムを鳴らすギリギリのところまで悠里がドアの向こうから現れ、申し訳なさそうに謝りながら彼を家の中へと招く。家へと上がった彼を二階にある自室へと案内するべく先導する彼女の髪は少し濡れており、その後ろを歩くだけで良い香りがした……。

「シャワーでも浴びてました？」

二階へと続く階段を歩きながら尋ねる。すると悠里はまた申し訳なさそうに微笑み、彼の方へと振り向いた。

悠里「ええ、ちよつとね……。もつと早く済ませておけば良かったのに、おかげであなたを待たせちゃったわね。本当にごめんなさい」「いえ……全然」

チャイムを聞いて出来るだけ速く出てきたのだろう…。こうして見ると髪どころか体も拭き残しがあるようで、彼女の着ている白い薄手のシャツがぺったりとその体に張り付いている…。モコモコとした緑色の短パンから出ている太ももも微かに濡れており、背後を歩く彼は少しばかり目のやり場に困った…。

…ガチャツ

二階に上がった二人は一つの部屋の前へとたどり着き、悠里がそのドアを開く。ドアの先の部屋の真ん中には茶色の四角いテーブルが置かれており、悠里はその前に膝をついて彼を待つ。

「…お邪魔します」

悠里「はい、どうぞ♪」

部屋に入る際に改めてそう告げる彼に対し、悠里はニコツと微笑んで言葉を返した。いくら勉強会をしにきたとは言え、やはり女性の部屋に入るのは緊張する…。

悠里「必要な物は全部持ってきた？」

「ええ、もちろん」

部屋一面に敷かれている絨毯じゅうたんの上に腰をおろし、持ってきていたカバンの中身を目の前のテーブルの上へと置いていく。彼がカバンから取り出していったのは数冊の教科書とノート、そして筆記用具だった。

悠里「よしっ、ちよつと待ってね。私もノートとか取ってくるから」彼の準備が調っているのを確認してから悠里は立ち上がり、部屋の隅にある大きな勉強机へと向かった。普段一人の時はあの机で勉強しているのだろう…。悠里はそこから教科書やノート等を取り出し

ているようだったが、教科書の一つが机の奥の方にあるらしく、身体を前屈みにして必死に手を伸ばしていた…。

悠里「んっ……」

左手を勉強机の上につけ、右手を伸ばす悠里…。彼は絨毯の上に座り背後からその様子を見ていたのだが、ある事に気が付く…。彼女の履いている短パンはかなり短いので背後から見ていると彼女が前屈みになる度、短パンの隙間から太ももと尻との境目が見えかけていた…。

「……………」

目を逸らしてあげるべきなのだろうが、ついジツと見つめてしまうのはやはり男としての性さがなのか…。もう少しだけ前屈みになってくれれば短パンの隙間から履いている下着すら覗けそうだったのだが、悠里は遂に目当ての教科書を手にしてクルツと振り向いた。

悠里「ふうっ、お待ちせ」

「っ!?!は、はいっ!」

振り向いた悠里と目があつた途端、彼は慌てて目を逸らす。

尻を見ていた事に気付かれただろうか…。彼はそれを不安に思いながら冷や汗を流したが悠里は全く気付いていないらしく、勉強道具一式を持って彼と向かい合うようにしてテーブルについた。

「…………可愛い服ですね」

教科書を広げながらボソツと呟く…。すると悠里は頬を微かに染め、少しだけ恥ずかしそうな表情を見せていた。

悠里「これ、パジャマなの…。こんな格好でごめんなさいね?あとでちゃんとしたのに着替えるから…」

「いや、そのままでも全然構いませんけど…」

少しだけダボツとした白い半袖のシャツ……。そしてモコモコとした素材で出来ている緑色の短パン……。確かに寝る際には楽そうな格好だ。そしてもう一つ、普段の悠里は髪の一部を左側で纏めていたが、シャワーからあがってばかりだからなのかそれすらもしていない……。纏めていたのは本当にごく一部なのでそれが無かつたとしてもそこまで普段との差は出ないハズなのだが、何故かかなり雰囲気が違つて見えた……。

悠里「じゃあ、とりあえずここから……この辺りまで進めてみましょうか。分からない事があつたら聞いてね？」

教科書のページをパラパラと捲り、いくつかのページを指さして彼に見せる。あまり勉強が得意ではない彼からしたら少々骨の折れるページ数だったが、ここまで来たら仕方ないと思つて観念した。

悠里「……………」

「……………」

それからは二人がノートにペンを当てていく音だけが部屋に響き、無言の時間が続く……。ふと、彼はある事が気になつてそれを尋ねた。

「そういえば……家族の人は？」

悠里「んっ？ああ、両親は今出掛けてるからいないわ。妹は隣の部屋にいるけど……そういえば、あなたは私の妹に会つたことなかつたわね？」

言われてギクツと思う……。悠里は知らないが、彼は彼女の妹と会つ

たことがあるのだ……。あの時胡桃と行ったあの喫茶店で：『るー』という少女と彼は一度顔を合わせている。だが悠里にそれを知られると色々と問題がある為、彼はそれを黙っていた。

「あ、ああ……会ったこと……ないですね」

悠里「もしよければ、あとで挨拶してあげてね♪」

悠里を相手に嘘をつこうとすると少し不自然な表情になってしま
うが、特に不信心は抱かれていないようなので彼は一安心した。ただ
後でるーに挨拶するとなると、また少し心配になる……。

（挨拶か……。るーちゃん、上手く話を合わせてくれるかな……）

微かに不安になるが、全てを流れに任せて今は勉強に専念する……。

教科書に記されていた問題をいくつか解いていきながらチラツと
悠里を見つめると、彼女はいつの間にか彼よりも数ページ先に進んで
いた。

（さすがに早いな……。僕とは頭の出来が違うか……）

悠里は彼ならかなり時間がかかるであろう問題をスラスラと解き、
またページを捲っていく……。その早さに感心していると、彼女は彼の
目線に気づいてムツとした表情を向けた。

悠里「ちよつと、カンニングしちやダメよ？分からないなら解き方
を教えてあげるけど、答えを覗くのはだめっ！」

悠里はそう言ってテーブルに手をつけて身体を乗り出し、彼の額を
人指し指でツンツと小突く……。彼女の問題を解く早さに感心してい
ただけで答えは覗いていなかったのだが、紛らわしい事をした自分が
悪いのだと彼は頭を下げる。

「あゝ…すみません。じゃあさつそくですけど、ここ教えてもらって良いですか？どうしても時間がかかっちゃって…」

彼は教科書を悠里の方へと向けて尋ねたが、悠里はわざわざ立ち上がったから彼の隣へ来てくれた。まさか隣に座るとは思っていなかったなので、彼はほんの少しだけ戸惑う。

「……………」

悠里「…で、どこが分からないの？」

隣へ腰をおろし、彼の顔を覗き込んで悠里は尋ねる。

彼がそれに答えながら教科書のある箇所を指さすと、悠里は彼に分かるようにその問いの解き方を丁寧に教えてくれた。

悠里「えつと…これは今みたいな解き方だと効率が悪いの。だから私はここをこうしてあげた方が楽だと思ってる——」

「……………」

一つ一つ、悠里は丁寧にそれを教えてくれるのだが、彼は今一つ集中しきれずにいた…。彼と共に一つの教科書を見つめるべくして身を寄せてきているので互いの肩が密着し、それにドキドキしてしまっていたからだ。

(むう…………リーさんには悪いけど、全く頭に入ってこない…。もう少し離れてくれ…なんて言うのは失礼だしな)

失礼だし、わりとこの状況を満喫しているのでわざわざ言うつもりもない…。ただ、悠里の肩がギュツと触れる度に頬がゆるみかけてしまっているのがバレていないかが心配だ…。

悠里「だからね、こうしてやった方がずっと効率的に——」

(…というか、リーさんはいいのか？二人きりの空間でこんなに寄ってくるなんて、少し勘違いしてしまいそうになるぞ…)

彼は教科書に向けていた視線を隣の悠里へそつと向ける…。

教科書に指をあてながら彼にその解き方を教える悠里はその身体を微かに前のめりにしていたので、首もとがたるんだシャツの隙間からその大きな胸の谷間がハッキリと見えてしまっていた…。

「…っ……………」

先程同様、見てはいけないと分かっているのだが…つい視線を向けてしまう。彼女が動く度に微かに揺れるその胸を見続けていたら頭がボーっとしてきてしまい、もう勉強どころではなくなってしまううだった…。

(りーさん…ちよつと無防備過ぎでしょ…。ヤバい…もうこれ以上は…)

触れる肩…無防備な胸元…そしてシャワーあがりだからなのかやたらと良い香りが鼻につき、さすがの彼も少々焦る…。こうして間近で見る彼女は自分と同じ年とは思えない程に大人びた雰囲気纏っており、頭が少しクラクラしてきた…。

「……………りーさん」

ボソツと呟く…。それに気づいた悠里が彼を見つめるとその顔は思っていたよりもそばにあり、悠里は驚いたような声をあげた。

悠里「いつ…!?ごめんなさいっ…!」

必要以上に身を寄せてしまっていた事に気づいた悠里は咄嗟に身を退くが、そんな彼女の肩を彼はガシツと掴み…再びそばに引き寄せ…。互いの身体がだんだん寄っていく事に悠里は戸惑い、顔を真っ赤にしていた…。

悠里「その…っ……………勉強…しないと……………ねっ?」

「……………」

彼自身、自分で何をしているのか分からなくなっていた…。身体が勝手に動き、目の前の少女の肩を引いてしまう……。頬を

真っ赤に染めている悠里の表情を見ているとまた一段と理性が飛びそうになり、抑えるのが難しくなっていく…。

悠里「えつと…わたしっ…。」

悠里が彼から目を背け、瞳をギュツと閉じる…。止めなければダメなのに、彼女のそんな仕草…長く綺麗な髪…スタイル抜群な身体を二人きりの部屋で前にしてしまうと、どうしても抑えが効かなかった…。

「ごっち…見てください」

悠里「なっ…なに…？」

閉じていた目を開き、彼のことを真っ直ぐに見つめる悠里…。彼女の瞳は微かに涙ぐんでいるようにも感じられ、彼の鼓動がまた速まっていく…。彼は悠里の肩に伸ばしていた手をそつと下げていき…彼女の手首を静かに握った。

悠里「…っ…んん…／＼」

悠里は抵抗する事なく、彼に自分の手を握らせる…。

このまま抵抗しないのは明らかに危険なのだが彼が相手だと何故か嫌な気がせず…この状況を受け入れてしまっていた。

悠里（どう…しよう…。凄くドキドキして…熱い…。）

自分の手首を握っていた彼の手は少しずつ下がっていき、手のひらをそつと掴む…。互いの指が一本ずつ絡んでいき、悠里の身体が少し震え始めた…。

その時、部屋の扉がギギツ…と少しずつ開く…。

「っ!？」

悠里「ひっ…!？」

二人は握りあっていた手を咄嗟に離し、ずっと勉強してましたと言わんばかりに教科書を凝視して意味なくペンを弄る。扉をあけたその人物はそんな二人を後方からじっ…と見つめた後、トコトコと部屋の中に足を踏み入れる。

るー「りーねー、おなかへった…」

現れた幼い少女：『るー』は悠里のシャツを背後からクイツと引つ張った。悠里はそつと振り向くと部屋の壁にかけられていた時計を見つめ、いつの間にか昼になっていた事を知る…。

悠里「あ、ああ…もうこんな時間だったのね…。じゃあ、お昼ごはんにしましょうか？」

るー「……………」

るーは悠里のシャツを掴んだまま、その隣にいる彼の顔をやたらと凝視していた…。彼は、るーが胡桃との事を話してしまわないかと心配に…。悠里は先程の彼との事を見られてしまっていないかと心配になって冷や汗を流していた。

るー「……………」ジーツ…

「ど…どうも…」

穴が空きそうになる程こちらを見つめる彼女に彼が挨拶をすると、ペコツと頭を下げてそれに応えてくれた。あとはすっかり彼と初対面という体で話を進められるかだが…。

悠里「るーちゃん？どうかした？なんか…ずつとこの人を見つめてるけど…」

思いもよらぬタイミングで現れたるーに彼は焦っていたが、悠里もまた焦っていた…。もしかしたら、手を握りあっていたのを見られたかもしれない…。そう考えてしまうと悠里の顔はみるみる赤く染まっていた。

るー「…りーねー、顔真っ赤」

悠里「えっ？あ、あのっ…：…：…：そうかしら？」

そつと覗き見た悠里の顔色が真っ赤だったのでそう告げると、悠里は顔を俯けて隠してしまう。じゃあ今度はと彼を見つめると、彼も彼で目を逸らしていた…。どこか様子のおかしい二人を前にして、るーはクイツと首を傾げる。

悠里「あつ、るーちゃん！この人ね、私の学校の友達でね…！」

「そ、そうそうっ！ははじめましてだね、るーちゃんっ！」

彼はわざとらしく『はじめまして』の部分強調して挨拶をする。すると、るーは傾げていた首をまた逆の方へと傾げ、不思議そうな顔を見せた。

るー「あれ…？はじめまして…？」

「ぐっ…!!？」

彼の言葉の意味を察する事が出来なかったらしく、るーは彼の顔をじつと見つめてむうくと唸る。その反応を見た彼は焦り、悠里は二人を交互に見回した。

悠里「えっ？初めてじゃないの？」

「いや…はじめましてですよ…。ねっ？…るーちゃん？」

るー「……!!う、うんっ！はじめて会った…!!」

彼の顔を見ていたらそれを思い出したのか、るーはハツとした表情を浮かべて悠里に告げる。ただその演技があまりに白々しいものだったので怪しまれないか不安だったが、どうやら大丈夫なようだ。

悠里「これからはたまにこのお兄ちゃんも遊びに来ると思うから、るーちゃんも仲良くしてあげてね？」

るー「うん、わかった…。お兄ちゃん、よろしく…」

「よ、よろしく………」

初対面の演技をしているせいもあり、二人はぎこちない握手を交わす…。肝心の悠里が微笑みながらそれを見ていたので問題はないが、やはり隠し事をするのは楽じゃない。

悠里「お姉ちゃん、お昼にする前にちよつと着替えてくるね？お兄ちゃんと待ってられる？」

るー「大丈夫。まってられるよ」

悠里「そう♪じゃあ、あなたもるーちゃんの事を見てあげてね？」

「了解です…」

悠里は二人を部屋に残し、着替えをするべくどこかへと向かっていった。扉がボタンと閉まり悠里の姿が見えなくなったその瞬間…彼はるーに頭を下げる。

「ふう……ありがとね。あのときの事黙っててくれて」

るー「ううん、くるみと約束したから」

「悪いけど、このあともその調子で内緒にしておいてね…」

るーは首を縦に振り、にっこりと笑う。

すると彼も機嫌良く笑っていたので、るーは一つの質問を試してみる

事にした。それは以前彼に会った時から気になっていた事で、ずっと聞いてみたい質問だった。

るー「ねえ。お兄ちゃんはりーねーとくるみ…どっちが好き？」

「えっ？あゝ…どっちが好きって聞かれるとあれだけど…。二人きりになった時に色々とヤバいのはりーさんかな…。」

るー「んん？やばい…？やばいってどういうこと？」

るーにはその言葉の意味が理解できず、不思議そうな顔をしていった。

彼はその言葉の持つ意味を尋ねられたが、こんな子供に変な事を教えるわけにもいかない…。

「ええっと…つまり…ごめん、これも忘れてくれるかな？」

るー「??」

大人の言葉は難しい…。

るーは結局彼の言葉の意味を理解できず、また首を傾げた。

第九話 『おままごと』（ゆうり）

勉強会をする為に悠里の家へとやってきた彼…。

狭い部屋に二人きり…そして悠里の格好がどこか無防備だったことから危うく手を出してしまいそうになったものの、悠里の妹…るーが部屋へとやって来たことでそれは避けられた。

そして時刻は昼を少し過ぎた辺り…。

悠里はお腹がすいたと告げてきた妹と彼に昼食を振る舞うべく、三人で一階のキッチンへと集まる。

悠里「さて…：パパと作っちゃうちよつと待っててね？」

持ってきていたエプロンを身に纏い、悠里が彼と妹に笑顔を向けた。二人はそばの席について大人しくそれを見守りながら、じつと料理の完成を待つ…。

悠里「えつと…：残ってる材料はそこまで多くないから…。」

冷蔵庫を開けてその中身を確認しながら頭を悩ませる悠里…。

彼はその光景から決して目を離さなかった。

（エプロンつけてキッチンに立つりーさん…。なんていうか、お嫁さんオーラが半端じゃない…!!）

由紀や胡桃と比べてもそうだが、クラス全体を見回しても悠里ほど大人びた女の子はそういない…。そんな彼女がキッチンに立つ様子

はやたらと絵になる。

(お姉さんっぽさももあるし…母性も感じるんだよな。こんな人をお嫁さんに貰える男はどれだけ幸せだろう…)

悠里に彼氏がいるだとか、そんな話は聞いたことがない。だがもし仮にいたとしたら…その男が羨ましいと彼は思った。

「ねえ、るーちゃん。りーさんって彼氏いる？」

思わず、るーに尋ねる。るーはうくと唸りながら首を傾げた後、キツチンに立つ悠里を見つめた。るー自身も姉に彼氏がいるのかどうか知らなかったのだ。

るー「ねえ、りーねーって彼氏いるの？」

悠里「えっ？」

るーがストレートな問いをぶつけた瞬間、彼の胸がドキツとする。このままだと、るーは彼がそう聞いてきたから質問したなどと言いかねない雰囲気だった。

悠里「か、彼氏…？今は…いないけど…」

るー「そっか」

るーが「だって」と言わんばかりの表情を彼に向ける。しかし彼はそんな事はまるで気にしてないかのように、るーから目を逸らした。

(でも…今はって言ったな…。前はいたのか…?)

一度気になると頭から離れない…。

彼は隣に座るるーの肩をちよんちよんと小突き、小さな声で囁く。

「前はいたの？…って聞いてみて…」

彼が言うと、るーはコクリと頷いた。

るー「ねえねえ、前は彼氏いたの？」

悠里「なっ!? さっきから何を聞くのよっ!？」

妹からの思わぬ質問攻めに戸惑い、顔を赤くする悠里。
料理の途中だからか、その手には包丁が握られていた。

るー「りーねーおしえて。彼氏いた？」

悠里「つぐ……いませんっ! 今も昔も、そんな人いたことないですっ!」

プイツと顔を逸らし、拗ねるよう^すにして答える。

少し意外な反応にも見えたが、これは自分に彼氏がいないのを気にしての反応ではなく、彼の前で自分のそういつた事を語るのが恥ずかしいからだ^すった。

(りーさん、彼氏いたことないのか……。意外だな)

悠里はルックス、性格ともかなりレベルが高い。彼女に好意を持っている男子は間違いなくいると思うが、それでも彼氏を持たないのはまだ恋愛ごとに興味がないからなのだろうか……。

るー「ねえ、お兄ちゃんは彼女いるの？」

「へっ?」

味方だと思っていたるーから不意打ちをくらい、彼は言葉を詰まらせる。よく見れば、キッチンの向こうから悠里がこちらの様子をじつくりと観察していた。

悠里「私も気になるなあ♪」

聞かれる側から聞く側になった事で、悠里はニヤニヤと微笑む。

彼は深くため息をつき、仕方なくそれに答えた。

「えつと…いません…」

るー「へえ…」

悠里「ふくん…」

るーは真顔で…悠里はニヤニヤしながら彼を見つめる。その視線を浴びるのは何故かやたらと恥ずかしくて、彼は先程同じ質問をされた悠里が顔を逸らした意味を理解した。

その後、悠里は三人分のスパゲティを作ってそれをテーブルに並べる。真っ赤なミートソースのかかったそれはかなり良くできており、三人はあつという間にそれを平らげた。

「ふう…」馳走さまでした」

悠里「はい。味、変じゃなかった？」

「いやいや…スゴく美味しかったです」

そう答えると悠里は嬉しそうに微笑む…。

実際その料理はとても美味しくて、彼は悠里の万能さに驚いていた。

(勉強出来て、料理も出来て、見た目も良くて中身も良い…。こうして見ると、りーさんってダメなところが全然がないな…)

これだけ色々出来る上に、更にあの胸だ…。よく見れば左目の下には泣きボクロがあり、それがまた彼女の魅力を引き立てている…。

「ん…」

悠里「な、なにかしら…？ずっとこっちを見てるけど…」

「ああ、いや…なんでも…」

るー「りーねー、もう勉強は終わったの？」

テーブルの上で手をパタパタと動かしながらるーが尋ねる。そう言えばまだ勉強会は途中までしか進んでおらず、それを思い出した彼は顔を俯けた。正直に言うと、もう止めたいと思っていたからだ。

悠里「えつと…あとちよつとかな？」

るー「終わったら遊んでくれる？わたし、一人でつまんない…」

るーが頬を膨らませながら告げる。それを見た悠里は顎に手をあてて何やら考え込み、少ししてからるーの頭を優しく撫でた。

悠里「じゃあ予定していたよりも短くするわね。そうすればすぐに終わるから、私と彼の勉強が済んだら一緒に遊びましょう♪」

るー「うんっ♡」

悠里がそう答えたのは、妹がつまらない思いをしないという優しさからなのだろう…。その後、三人はまた二階の部屋に戻り、るーは彼と悠里の勉強が済むのをそばで静かに待っていた。

~~~~~

悠里「はい終わりっ！お疲れ様でした」

ノートと教科書を閉じ、悠里が告げる。

当初の予定よりも数ページ短い勉強量に終わったが、それでも彼の体力は限界に近付いており…バタツとテーブルの上に顔を伏せていた。

「つ…疲れた……」

呟きながらテーブルの上の勉強道具を少しずつ自らのカバンにしまっていく…。あとはこのまま帰るだけだと思えば良かったが、それは間違いだった。

るー「りーねー、もう一緒に遊べる？」

悠里「うん。いいわよ♪」

るー「えへへ…お兄ちゃんも遊ぶよね？」

勉強道具を片付け終えたばかりの彼にるーが尋ねる。正直に言う  
と彼はもうこのまま帰るつもりだったのだが、るーのキラキラした期  
待の眼差しを見てしまったら断ることなど出来ない…。悠里も悠里  
で、出来ることなら彼にもう少しだけ付き合っただけ欲しいような表情を向  
けている。

「そうだね、わかった…。遊んでくよ」

悠里「だって。良かったわね、るーちゃん」

るー「うん！ちよつと待っててね？準備してくる！」

嬉しそうな表情を見せながら、るーはその部屋を出ていく。

直後、悠里はそつと彼に頭を下げた。

悠里「ありがとう。わざわざ付き合ってくれて」

「いえいえ、ちよつと遊ぶくらい構いませんよ」

悠里「るーちゃんって結構人見知りしたりする子なんだけど、あな  
たにはしてないわね？今日初めて会った人なのに……」

「え、ええ……」

悠里が不思議そうに首を傾げる…。本当の事を言うと、るーに会っ  
たのは今日が初めてではないのだが、彼はそれを言わずにいた。

「…にしても、準備って何ですかね？トランプとかかな…」

悠里「かもね。家には由紀ちゃんがよく来てくれるんだけど、その  
時はよく皆でトランプをしてるから…」

二人が話していると部屋の扉が開き、るーが戻ってきた。ただその  
手に抱えられていたのはトランプなどではなく大きなプラスチック  
の箱のような物…。

るー「ただいま」

悠里「るーちゃん、それなに？」

箱を指差して悠里が尋ねる。彼もその答えが気になっていたのだからちよいど良いタイミングだ。るーはにっこりと微笑んでからその箱を床に置くと、少しだけ恥ずかしそうに二人へ告げた。

るー「あの…三人でね…おままごとしたいの…」

悠里「お、おままごと…？」

「おお………」

るーが持つてきた箱の中にはおもちゃの食器や調理器具など、いかにもおままごと用といった感じの物が沢山詰められていた。二人だけならともかく、男の彼を加えてのおままごととなると色々大変だろうと思う、悠里は苦い表情をする。

悠里「るーちゃん、あのね…おままごととこのお兄ちゃんが楽しめないと思うから、もっと別の遊びにしない？」

るー「ええ………」

露骨に嫌そうな顔のるー…。

彼女には悪いが、同い年の男子と共におままごとというのはさすがの悠里も少し恥ずかしい。きつと彼も同じ気持ちだろうと思って視線を向けると、彼は予想外の反応をしていた。

「おままごとねえ…。るーちゃん、配役するのはどうなってるのかな？」

るー「わたしが子供で、りーねーがママ。お兄ちゃんがパパ」

「!!………やろっか」

悠里「なっ!?!」

配役を聞いた途端、彼の目の色が変わる。るーもまたそれを見て嬉しそうにしていたから問題はないのだが、悠里はどこか嫌な予感を感じていた…。

悠里「ほ、ほんとにいいの…?」

「当たり前じゃないですか。他でもない、るーちゃんの頼みですからね。断る理由がないです」

るー「えへへっ♪ありがとっ♪」

るーがせっせと準備を始める…。少しずつ周りに置かれていくおもちゃの食器などを見て、彼はこれから始まるそのおままごとへの期待を膨らませていた。なぜ彼はおままごとに関心するまで期待をするのか…その理由は配役にあった。

(いくら遊びとはいえ、りーさんと夫婦の間柄になれるんだ。これは全力で楽しませてもらわないと損だろう…)

今日一日で、悠里の魅力的なポイントが分かってきた。それを真っ向から夫として味わえるというのなら、これはもはや遊びではない…。彼にとつてこのおままごとは…完全なるご褒美だ。

そうして準備が済み、三人は数々のおもちゃが置かれた床へと座る。るーと彼は楽しげに微笑んでいたが、悠里だけはどこかぎこちない笑顔だった…。そんな中、るーの言葉をきっかけにしてついにおままごとが始まる…。

るー「あのね、わたし昨日学校のテストで100点とったんだよ」  
悠里「そうなの？ 凄いじゃない！ お母さんに教えたら喜ぶわよ♪」  
おままごとが始まっている事に気づいていないのか、悠里が素のり

アクションを見せる。それを見た彼は思わず笑いそうになり、るーは不満そうな顔をしていた…。

るー「……………」

「……………」

悠里「あれ？二人とも、どうしたの…？」

るー「ねえ聞いて。わたし、昨日テストで100点とったの！  
今度は悠里でなく、彼の方に告げる。

彼は既におままごどが始まっている事を理解していたので、それに対して完璧な受け答えをした。

「そっかそっか。るーちゃんは凄いなあ！パパは嬉しいよ」

るー「えへへ♡」

悠里「あつ、そういう事だったの……」

少し遅れておままごとの始まりに気づき、悠里は苦笑いする。るーは父親役の彼に頭を撫でてもらいながらそんな彼女をじっ…と見つめた。

るー「りーねー…おままごど下手…」

悠里「ご、ごめんね？まだ始まってないと思ってて…」

るー「ちなみに本当のテストはちよつと悪い点だったから…ママには内緒にしててね…？」

ボソツと呟いて悠里から目をそむける…。100点というのはあくまでも設定上だけの話であり、現実には厳しかったようだ。

悠里「あら…ちゃんと勉強しないとダメよ？」

るー「…っ!!」

その言葉から逃れるようにして、るーは彼の胸に顔をうずめる。一

瞬それに戸惑いはしたものの、彼はすぐに父親という役を利用して言葉を放った。

「まあまあ、るーちゃんのはびのびと育ててくれればそれだけで良いんだよ。勉強なんてちよつと出来るだけで良いんだから」

るー「…パパすきっ♡」

「おおぅ…／＼」

るーは彼の胸に顔をうずめるだけでなく、両手を腰にまわしてギョツと抱きつく。その仕草…そしてパパと呼ばれた事で、彼の心が壊れかける…。

(つぐ…!!あぶないあぶない…。危うくおかしな扉を開くところだ…)

悠里「…あなた。実の娘を抱いてニヤニヤしないでくれる？」

「すつ、すみませんっ!!」

るーを慌てて離し、悠里に謝る。

この瞬間、このおままごと上での立場の優劣が決定した…。

悠里「それと、あなたはもう少し家のことを手伝ってもらえるかしら？私一人で全部やるっていうのは無理よ」

「は、はい…。善処いたします…」

悠里「分かってくれたならいいわ…」

頭を下げる彼と、それを見て満足そうに微笑む悠里…。このおままごとにおいて、彼は完全に悠里の尻に敷かれている設定になってしまった…。

「るーちゃん…ママは怖いね…」

るー「でも、ママはパパがお仕事でいない時いつも寂しそうにして



るよ」

「…マジか」

ここで、るーが新たな設定を付け足す。

このおままごとにおいて彼女はルールそのものなので、悠里は渋々ながらもそれに付き合った。

悠里「るーちゃんっ、それは内緒でしょ?」

るー「ママ、パパのこと大好きなんだもんね?」

悠里「え…つと……そ、そうね…」

いくら遊びとはいえ、やはりこういったのは照れる…。悠里の頬は真っ赤に染まっていたが、それでも設定を忠実に守る辺りは凄と思う。

「じゃあ、僕は仕事に行ってくるよ」

このまま悠里の顔が赤くなっていくのを見ているのも楽しいが、少しかわいそうな気もする…。るーから注意を逸らすべく彼は立ち上がって告げたが、結果それは悠里を更に追い詰める事になった…。

るー「じゃあママ…いつもみたく行ってらっしゃいのチューをパパに…」

悠里「なっ…／＼」

立ち上がった彼を指差しながらるーが言うと、悠里の顔が更に赤くなっていく…。彼はというと、『行ってらっしゃいのチュー』という魔法のフレーズに心を奪われていた。

(りーさんが行ってらっしゃいのチュー……りーさんが行ってらっしゃいのチュー……りーさんが行ってらっしゃいのチュー……りーさんが行ってらっしゃいのチュー……りーさんが…)

彼の思考回路が壊れていく…。

ここまで来たら、しつかりそれをしてもらうべきだと彼は考えた。

「じゃあママ…今日も一つ頼むよ」

悠里「ほ、本気で言ってるの!？」

「本気もなにも…いつもの日課だし…:ね?」

目を閉じて、悠里を待つ…。少しすると悠里は立ち上がって彼の前へと歩みより、それからそばにいる妹へと視線を向ける…。

悠里「るーちゃん…チューするフリ、でいいのよね?」

るー「……………」

さすがに本当にする事はないだろうと思って尋ねる悠里だったが、るーは無情にもその首を横に振った。その瞬間、悠里の胸の鼓動はどんどん速くなっていき…おかしな汗が額を伝う…。

悠里（わかったわよ…。すれば…いいのよね…）

覚悟を決めた悠里は彼の肩に手をあて、彼の顔にそつと唇を寄せる…。るーはその様子を興味深く観察しており、彼は彼で本当にキスをしてもらえるのかと胸を弾ませていた。

悠里「……………んっ」

「……………」

目を閉じた彼の頬に柔らかな感触が伝わる。さすがに口にするわけにはいかなかったので、悠里は彼の頬にキスをした…。彼がドキドキしながら目を開けると、真っ赤な顔をしながら微笑む悠里がすぐ目の前にいた…。

悠里「……いつてらっしやい♡」  
小さな声で囁く。

その囁きの破壊力は凄まじく、さすがの彼も頬を真っ赤に染めた。彼はぎこちない様子で悠里にそつと頭を下げると、そばの扉を開けてそのまま部屋を出ていく……。彼は一人廊下に出て、悠里の『いつてらっしやい』という言葉を噛みしめるように思い返していた。

(うわあ〜…!!おままごと最高すぎるっ!!)

悠里と夫婦を演じられたのも、行つてらっしやいのキスをしてもらつたのも、全てはこのおままごとのおかげ……。彼はこのおままごとという遊び自体に感謝をし、更にそれを提案してきたるーにも心で深く感謝した。

るー「ママ、そういえばこの前ね…パパが浮気してるのみたよ」  
「えっ……っ？」

扉の向こう…部屋の中であるーがそう言っているのが聞こえる…。また新たな設定を付け足したのか。そう思う彼だったが、その設定はどこか身に覚えがあつた。

悠里「浮気？パパが…？」  
るー「うん。ママの好きなあの喫茶店で、くるみと仲良くデートしてた」

「……………」

聞いた瞬間、彼の額に冷や汗が流れる…。

直後部屋の扉がバタンと開き、中から現れた悠里は廊下にたたずむ

彼をじっと見つめて尋ねた…。

悠里「さて………どういふことか説明してくれるかしら？」

「そ、その………えっと………」

楽しいおままごとだと思っていたのに、それは一転して修羅場と化す…。

## 第十話 『大人っぽい同級生』（ゆうり）

るーが退屈だという事で、勉強会は予定よりも早く終わった。

その後、彼は悠里・るーと共におままごとをする事になったのだが…事件はその途中で起きた。

るー「ママの好きなあの喫茶店で、くるみと仲良くデートしてた」  
るーのこの一言をきっかけに楽しかったおままごとは一転…。悠里の表情に怒りが混じり、彼は修羅場に立たされる…。

悠里「さて…：…どういふことか説明してくれるかしら？」

廊下に立っていた彼を部屋へと連れ戻し、悠里は睨むようにしてじつとその顔を見つめる…。彼はどう答えればいいか分からず、るーの方へチラチラと視線を向けていた。

（ここにきてその秘密を暴露するとは…!!恐ろしい子だな…!）

悠里「ねえ、はやく答えてくれる？くるみとデート…：…したの？」

「いや…その…：…」

鋭い視線を向け、それを問いたただす悠里…。やはりどう答えるべきか分からないので、彼は黙っている事しか出来ない。

悠里「黙ってるってことは…：…そういう事なのね？」

「…：…ぐっ」

完全に追い詰められたと思った彼は顔を俯け、悠里に怒られる覚悟を決める。彼のそんな様子を見た悠里はくるっと回って背を向けると、腕を組んでため息をついた。

悠里「はあ……これは離婚もあり得るわね……」

「……………んっ?」

悠里の呟きを聞いた瞬間、彼は思った。もしかしたら、悠里は先ほどのるーの言葉をおままごとの設定の一つとして受け取っているのかも知れないと……。だから『離婚』などというワードが出てきたのではないだろうか。

悠里「もういい……あなたなんて知らないからっ!」

彼が黙っていると、悠里は両手で顔を覆って泣き顔を隠す演技をしながら勢いよく部屋を出て行ってしまった……。やはりこの様子だと、るーの言葉を本気で受け取った訳ではないらしい。

「りーさん……さっきのるーちゃんという言葉もおままごとの設定の一つだと思っただけなのかな?」

悠里が出ていった直後、るーに尋ねる。

るー「うん、たぶん……。りーねー、けっこうそういうところある……」「そういうところって言うのは……一度役に入り込むと中々止まらない、みたいなことかな?」

るー「うん。今のりーねーなら、わたしがお兄ちゃんとくるみのこと話しても絶対本気にしないと思っただ。どう?びっくりした?」

「……かなりね。出来ることなら、もうやらないでほしいよ……」

るー「えへへ、ごめんね?」

るーがイタズラに笑う……。本当にかなり焦ったのだが、この子の楽

しげな表情を見ていたら強くは言えなかった。

そうして部屋に残った二人だけで会話をすること数分後……。ニコニコとした表情を浮かべながら、悠里が部屋へと戻ってきた。戻ってきた彼女は一枚のトレーを手にしており、その上にはジュースの入れられた三つのグラスが乗っていた。部屋から出ていったついでに下の階に行ってきたらしい。

悠里「さあ、おままごとは一旦休憩！一息つきましよう。あなたも慣れない遊びで疲れたでしょ？」

「えつと……まあ………」

おままごつという遊び自体ではそこまで疲労していない……。ただ、悠里に胡桃との事がバレたと思った事による精神的な疲労はあった。

るー「じゃ、ちよつとトイレいつてくる」

悠里がグラスの乗ったトレーをテーブルに置くと同時にるーは立ち上がり、部屋を出ていく。悠里は彼女を笑顔で見送ると、床に座ってグラスを一つ手に取った。

悠里「付き合ってくれてありがとね。あの子も喜んでるみたい」

「いえいえ、このくらいは別に……」

グラスに注いであったジュースを一口飲み、悠里は微笑む。彼もちよつと喉が渇き始めていたので、悠里が用意してくれたグラスを手にとった。

「もらいますね」

悠里「ええ、どうぞ♪」

よく冷えていたそのジュースを飲み、彼も一息つく…。悠里はそんな彼を見て微笑むと、その表情のまま…あることを尋ねた。

悠里「……で、くるみとのデートは楽しかった？」

「……………へ？」

突然の問い掛けに、彼はそんな間の抜けた返事しか返せない…。涼しげな部屋の中…冷たいジュースを飲んでいるにも関わらず嫌な汗が額に溢れる…。

「デート……ですか……？」

悠里「うん。くるみと…したんでしょ？るーちゃんがあのお店に行った時っていうと…ちようどくるみに勉強会を断られた日の事になるのかしら？」

ニコニコした表情で言葉を放つ悠里…。一見すると優しげな表情なのだが、それがかえって恐ろしくも見えた…。しかし、キョロキョロ目を泳がせる彼の様子を見て悠里はそれを察したらしい。

悠里「あつ、違うのよ？怒ってる訳じゃないの。ただ、くるみとあなたが仲良く出来る間柄になっていたのが嬉しくて…」

彼女が焦ったようにして告げるのを目の当たりにして、彼も一安心する。あまり隠し事は得意ではないので、正直に話せるなら話しておきたかった。

「あはは…すいません。胡桃ちゃんに口止めされてて…」



悠里「勉強会だつて強制参加じゃないんだから、そこまで気を使わなくてもいいのに…。くるみつたら、あなたに口止めしてまで何をそんなに――」

そこまで言つて悠里の口が止まる…。『デート』『口止め』…その二つのワードを関連付けた時、一つの答えを見いだしてしまつたからだ。悠里の顔はだんだんと赤くなつていき、彼の顔からそつと目線をずらす…。

悠里「もしかして…：…くるみと付き合つてるの？」

「いや、そこまでの間柄じゃ…。ちよつと一緒に出掛けただけですよ」

悠里「あら…：ごめんなさい。早とちりしちゃつた…」

悠里は照れたようにわらいながら、ジュースをもう一口飲む。

少しして、るーも部屋へと戻り、三人は遊びを再開した。

~~~~~

おままごとの続きからランプ…：ビデオゲームまで、様々な事をし
て遊んでいると気づけば外が夕焼けに染まり始めていた…。さすが
にそろそろ帰らねばならないので彼は勉強道具を詰めてきたバッグ
を手に取り、そつと立ち上がる。

「じゃあ…：そろそろ」

悠里「あつ…：もうこんな時間だつたのね。じゃあるーちゃん、お姉
ちゃんはこの人を外まで送つてくるわ」

るー「うん…。お兄ちゃん、またね」

パタパタと手を振るるーに手を振り返して、彼は悠里と共に部屋を出ていく。悠里はそのまま、家の前まで彼を送りとどけに来てくれた。

悠里「結局勉強は予定よりも短くなっちゃったけど、どう？少しは頭に入ったかしら？」

「ええっと…はい、おかげさまで」

口ではそう答えたが、実際はそこまで内容を覚えていない…。あの時はどこか無防備な格好の悠里にばかりに気を取られてしまったのだから…。

(思い出すのは教科書の内容じゃなく…りーさんの際どい姿ばかりだ…)

悠里「それでね、次は勉強会じゃなく…普通に遊びましょ？るーちゃんも喜ぶだろうし、私もあなたと遊びたいから。くるみとだけデートなんて、なんだかズルいもの…」

「じゃあ、僕がデートに誘ったら受けてくれますか？」

あえて少し意地悪な聞き方をする。これを言った相手が胡桃なら、きつと怒られるだろう…。しかし、悠里はその胡桃とはまた違った反応を返した…。

悠里「うん、喜んで♪誘いにくるの楽しみにしてるわね♡」

「ツぐ…。」

満面の笑みを浮かべながら答えてくるとは予想しておらず、彼は戸惑う。悠里を照れさせてやろうと思って言った台詞なのに、見事返り討ちにあってしまった…。彼は照れている顔を見られぬよう悠里

に背を向け、そこを足早に立ち去る。

「じゃ、じゃあ…またその内に……」

悠里「ええ、また学校でね〜」

立ち去る途中でそつと振り向くと、悠里がこちらに手を振っていた。やはり、夕焼け空の下に立つ彼女も大人っぽく見える…。先程彼が放った『デート』という単語にも動じなかった辺り、彼女は内面的にも大人なのだろう。

同い年なお姉さんのような彼女へ、彼はそつと手を振り返した。

第十一話『ぐうぜん』（ゆき）

（……やっぱり、大して身に付いてなかったか）

巡ヶ丘学院高校…その中にある三年生の教室にて、彼は授業を受けながらそんな事を思う…。先日悠里と勉強会をしたのだが、その時の彼女の姿があまりにも無防備…かつ魅力的で、勉強内容が微塵も頭に入らなかった…。

（多分この問題も、あの時リーさんとやったんだけどな…。ええつと……なんだこれは…まるで意味がわからん…）

あの時、煩惱に打ち勝つていれば、今手こずっているこの問いもあっさりと解けたのだろうか…。いや…そんな事を考えても仕方ない。彼ではどのみち、あの時の悠里を目の当たりにして動じずにいる事など無理だったのだから…。

（勉強会の成果がまるで出てないって分かったら、リーさんに怒られるだろうな…）

辺りをそつと見回す…。すると分かるのだが、教室内の生徒の殆どがペンを止めずにいる。あの由紀ですら、のんびりとながらも頑張っているようだ…。

（…やばいな。ここにきて一気に授業の難度が上がった気がするぞ。ついていけない気がしない…）

問いの答えは分からないし、その解き方を説明している教師の言葉の意味も今一つ分からない…。先日までは普通についていたのだが、ここ最近勉強をサボって遊び呆けていたのが響いたのか…今日

の授業にはついていけない。

それでもどうにか食らい付こうと必死にノートをとっていくと、更に恐ろしい事に気づいた……。もう……。ノートのページが残っていなかったのだ……。

(……あらら、全然気づかなかった。明日はちょうど休みだし、また買いに行かないとな)

まだ授業は半ば……。それにも関わらず、ノートを失った彼がここまですで冷静なのにはある理由があった。それは……。

(ノートとろうが、とらなからうが……。どのみち授業の意味を理解できてないからね。ノートなんて、あってもなくてもどっちでもよし……) 半分自棄になった彼はページの埋ったノートの隅……。微かに隙間があるそこに落書きをしながら、長い長い授業が終わるのを待った。ノートが無いなら無いなりに授業内容に耳を傾ければ良いのにそれすらしない……。彼の成績が落ちていった原因は、この集中力の無さにあるのだろうか……。

~~~~~

その翌日……。休日を迎えた彼は一人町にやってきた。

主な目的は新しいノートの購入。また……。古くなってきたいくつか

の筆記用具もせっかくなので新調しようと思っている。彼は町の中心部にある大きなデパートの一階、その入口付近に貼られた店内マップを眺めて目当ての店の位置を確認していた…。

(文房具店は…二階か)

マップに記された数十の店の中からその文房具店の位置だけを記憶し、そばにあったエレベーターへと乗り込む。そうして二階のボタンを押してからエレベーターのドアを閉め、彼は壁に背中を寄りかけた。

「勉強…さすがに少し頑張った方が良さそうだな…」

エレベーターの中にいるのは自分だけなので、声を出してみる。こうして声に出せば、自ずとやる気も出てくるのではと思ったのだろう。もちろん、やる気なんてものはそう簡単には湧いてこないのだが…。

…チンツ

エレベーターが止まり、ベルに似た小さな音が鳴る。どうやら二階についたららしい…。静かに開いていくドアを通り抜けて彼は文房具店へと向かい、目当ての物だけを手早く買って目的を達した。

~~~~~

(新しいノート…それとペンをいくつか…。これで十分だろう)

文具店から出て、たった今買ったばかりの物を確認する。
その文具店の名前が印刷されているビニール袋の中には一冊の
ノートの他、数本のペンが入っていた。

(……さて、これからどうしようか)

ガサガサと音をたてながら袋を閉じ、人の邪魔にならないよう通路
の隅によってから考える……。目的は達したが、せっかく町に……しかも
デパートに来たのだ。ただ文具だけを買って帰るのはあまりに味
気ない……。

(せっかくだ、少し時間潰して……どっかでランチでも——)

そんな風に考え、ゆっくりと歩き出したその瞬間だった……。

??? 「わあ〜っ♪」

ドンツ!!!

「のわっ!?!」

何者かが大声をあげながら彼の背に激しくぶつかる。その衝撃は
結構なもので、彼は体勢を崩して前屈みになるが……背後からぶつかつ
たその人物が両手を彼の腰に回し、支えてくれたおかげでなんとか倒
れずに済んだ。

「ちよつと……しっかり前みて歩——」

多分、どっかの子供がはしゃいでぶつかったのだろう……。

ならば注意だけはしておこうと思いき振り向くと、目に入ったのは見
慣れたピンク色の髪を揺らす少女……丈槍由紀だった。

由紀「こんなところで会うなんて、すっごく偶然だね〜♪」
たまたま一人で出掛けていた由紀は彼と出会えた事が嬉しかったのか、頬をゆるめてニツコリと微笑む。相手が由紀だと分かった以上、とりあえず挨拶でもと思う彼だったが……体が固まって動けない。背後に立つ由紀が未だ彼の腰に手を回し、ギュツと抱きついているからだ。

「ゆ、由紀ちゃん……？とりあえず離れてもらえると……」

由紀「ん？なあに？」

彼が首を捻って後ろを見ると、すぐそばに由紀がいる……。彼女は彼の腰に両手を回したまま自らの体を寄せ、顔だけ振り向けた彼の事を上目づかいで見つめていた。

由紀「一人？お買い物に来たの？」

抱きついたままの状態で見回し、彼に連れはいないのかと尋ねる由紀。しかし彼はそばを通りすぎる買い物客達の視線が気になっていたので、その問いに答える余裕すらない。

「だから……一旦離れてもらえると……」

隅の方に寄ってはいたものの、ここはデパートの通路……。かなり人も多い。そんな中で若い男女が体を密着させているのは如何いかなものか……。そんな事を思い彼が慌てる一方で、由紀はいつも通りの雰囲気だ。どうやら彼女は、今の状況をそこまで気にしてないらしい。

（確かに偶然には偶然だけど……だからといっていきなり抱きつくか？
相手は同級生の男だぞ……）

自分が異性として意識されていないのか……はたまた由紀自身の内面が子供なだけなのか……。どちらかと言えば後者のような気がする。

しかし、いくら内面が子供っぽい彼女でも身体は大人になってきているのだろう…。その証拠に…彼の背には彼女のふつくらとした両胸の感触が伝わっていた。

「……由紀さん由紀さん。もうハッキリ言いますけど…あなたのお胸が私の背中に当たってるんですが……」

由紀「えっ？むね…胸……うわっ！ご、ごめんっ！」

チラツと目線を下げると、自身の胸が彼の背にピツタリと密着していた。さすがの由紀もそれは恥ずかしかつたらしく、慌てて彼から離れる。離れた事で二人はようやく、向き合って会話が出来る状況になった…。

由紀「え、えへへ……ほんとごめんね？知ってる人に会えたのがうれしくて、ついギョツてしちゃった……」

由紀は照れたように笑いながら、自らの頭を撫でる。

それを見て、彼はある事に気づいた…。

今日の由紀はいつものあの…猫耳帽子を被っていない。

「今日はあの帽子してないんだ？」

由紀「えっ？ああ、今日はナシっ！」

赤と黒のストライプ模様のパーカーを羽織っている由紀。そのパーカーは前を開けているので、中に着込んでいるピンク色のキャミソールが見えている。下には青っぽい色のフリフリしたミニスカートを履いており、全体的に涼しげな格好だった。

(まあ、今日暑いしなあ…)

そんな事を思いつつ、由紀をじつと見つめる…。思えば制服姿以外の彼女はあまり見たことが無かったので、こうした格好はやたらと新

鮮…かつどこか魅力的に見えた。

由紀「えつと…あまり見られるとはずかしいかな…なんて」

「ああ……ごめんごめん」

見つめ続けていたら由紀が照れ始めたので、彼はそつと目を逸らす。

由紀「やつぱり、お買い物途中だったのかな？」

彼が右手に持っていたビニール袋、それを見ながら由紀が尋ねる。彼はガサガサと音をたてながらその袋を揺らし、首を縦に振った。

「目当てはノートとか…文具品だけですけどね。…由紀ちゃんは？」

由紀「わたし？わたしもお買い物だよ」

「へえ、何を買いに？」

由紀「あつ！それなんだけどね…もしよかったら、わたしの買い物に付き合ってくれるかな？他の人の感想とか…そういうのが必要になるかもしれない…」

てへへと笑い、由紀は彼の目を見つめる。

彼自身の買い物は既に済んでいたし、ちやうど暇していたところだったので、答えはもう決まっていた。

「いいでしょう…。お付き合いします」

由紀「やったあ♡じゃあ、いきましょ〜」

満面の笑みを浮かべながら、由紀はトコトコと歩き出す。彼女がどこを目指しているか知らない彼はとりあえずその隣を歩く事にして、どこか知らぬ目的地を目指した。

「……そういえば、いくら嬉しくても抱きつくのは止めた方が良いと思うよ。由紀ちゃんみたいな娘に抱きつかれたら、勘違いする男とか絶対にいるから」

隣を歩きながら、先程の行いの注意をする。いきなり異性に抱きつくというその行動にはいくら危険があるからだ。今回は抱きついた相手が彼だったからまだ良いが、これが由紀に対して強い好意を抱いているような男だった場合……場所によってはそのまま襲われてしまうかも知れない…。

かくいう彼もここが人通りが多いところだった事もあって理性を保っていたが、胸の感触が背に伝わった時はかなり危なかった…。

由紀「勘違いって……なにを？」

「……………」

どこまでお子さまなのだろうか……由紀が不思議そうに首を傾げる。彼は歩きながらため息をつき、彼女にも分かるように言った。

「ええつと……つまり『いきなり抱きついてきたって事は……丈槍って俺のこと好きなんじゃない？』……みたいな勘違いをする奴がいるかもってハナシ」

由紀「わたしだって誰にでも抱きつくわけじゃないもん！相手がキミだったから抱きついたんだよ！」

(うつ……この娘はまた勘違いしてしまいそうな言葉をつ……！)

片手で頭を抱えながら、もう一度『はあくつ』とため息をつく……。由紀が自然に放つ言動の一つ一つは……彼すらも勘違いという闇に落とそうとしていた。

「……由紀ちゃん。そういう台詞は好きな人だけに——」

由紀「わたし、キミのこと好きだよ？」
「……………」

彼の脳内が真っ白になり、思わず歩みすら止めてしまう…。
目の前にいるこの少女は今…彼の顔を見ながら『好き』だと言ったのだ…。

由紀「あとリーさんも好きだし、くるみちゃんできょく…みーくん
でしよく…あと、めぐねえ……るーちゃんも好きだし、けいちゃん
も好き♡」

指を折って数えながら、由紀がニツコリと笑う。

そのあまりに純粋な笑顔を目の当たりにして、彼はすぐに理解した。彼女が自分のことを好きだと言ったのはあくまで友情としての好意であり、恋愛的な意味ではないのだ。

「んん…ちよつとがっかりだな…」

由紀「えつ、なにが？…あれ？なんか怒ってる？」

「いや…別に…」

歩き出した彼はどこか不機嫌そうに見えたので心配になる由紀だったが、彼はすぐいつもの雰囲気に戻った。

(くそ…一瞬、本気で告白されたかと思った…)

由紀が先程言った言葉を思い返ししながら、彼は彼女と共に歩く…。
彼はこれまで、彼女の子供っぽい面は可愛らしくて魅力的だと思っていたが…その子供っぽさも度を越すと魔性の女に近いものになってしまうという事を自らの身をもって知った。

第十二話『けいかく』（ゆき）

由紀「ふんふんふくん♪」

目の前を歩く由紀がご機嫌そうに鼻歌を歌う。彼はそんな由紀の背中を眺めながらデパート内をトコトコと歩いていたのだが、由紀はどこを指して歩いているのだろうか…。

「由紀ちゃん、あんたはいったいどこに——」

由紀「あっ！」

彼が尋ねようとした瞬間だった。由紀が前方に見えてきた一つの店をじっと見つめ、ニコニコと微笑む。どうやら、あれが目当ての店のようだ。

（あれは書店か…。由紀ちゃんはここに何を買いに来たんだろう…）

由紀がその書店の中へと駆けていく…。彼はのんびり歩きながら彼女のあとを追ひ、その中へと入った。

（…………見失った）

書店に一步入って辺りを見回すが、のんびり歩いていたせいで由紀の姿を見失ってしまう。辺りにはいくつもの本棚が並べられており…彼女は恐らくこのどれかの裏にいるのだろうか…

「はあ…………」

彼はため息をつきながらも、由紀を探す事にした。この書店は中々に広く本棚の数も多いが、由紀は女の子だ…いるとすれば、少女漫画などのコーナーだろう。彼はそう考え、店の中を進んでいく…。

(……あれ?いなそうだな)

少女漫画のコーナー自体は見つかったのだが、肝心の由紀がそこにいない…。念のためその近辺の棚の裏なども覗いてみたが、いるのはその他の一般客だけだった。

(他に由紀ちゃんのいな場所……)

彼女はこの書店内のどこへ向かったのかと考える…。しかし少女漫画のコーナーにいなかった段階で、彼の頭にはもう一つの候補が浮かんでいた。

(まさか……ね)

苦笑いしながらスタスタと歩き、彼はそこに向かう…。少しして彼がたどり着いた場所、そこには『えほん』と書かれたプレートが天井に吊るされており、彼はその近辺を見回す。

(………いないか!)

いくら子供っぽい由紀とはいえ、絵本を買いにくるほどではなかったらしい。もともと、絵本という物の中には大人が見ても色々と考えさせられる作品も少なからずあったりするのだが……。

(じゃあ少年誌のコーナーか?小説……とかは読まないだろうし……)

この書店は広い。なので当然、売っているラインナップは漫画以外にも色々……それこそ高校生用の参考書などもあるのだが、彼が探しているのはあの『丈槍由紀』……。それらの書物を求めている可能性は最初からゼロだと考えていた。

(…仕方ない。端から見てまわるか)

出来るなら彼女の居場所を推理してビシツと見つけ出したかったのだが、もう面倒だ。そう思って彼がくると振り返ると、さっきまで姿を消していた由紀がすぐそばで彼の事を不思議そうに見つめていた。

由紀「……絵本買うの？」

「買いません」

由紀「えっ？じゃあなにを見てたの？」

彼が何故絵本コーナーにいたのか：由紀はそれが気になっていた。彼は自分の目の前で首を傾げている彼女の顔をじっと見つめた後、深くため息をつく。

「はあ………由紀ちゃんを探してただけなんですけど」

由紀「あつ！ごめんね？そっかそっか：わたしが一人で走ってっちゃったから、どこにいるのか分からなくなっちゃってたんだ：」

「…由紀ちゃんは僕がいなくなってる事に気づかなかったのかな？」

由紀「えへへ……目当てのマンガを探すのに夢中で気づかなかった…」

「………子供ってのはこうやって迷子になるんだな」

由紀「なにか言った？」

「いや…なにも…」

照れながら笑う由紀を見て彼がボソツと呟くと、彼女がそれを聞き返す。だが面と向かって『あなたは子供っぽい』などとは言いにくいで、彼は目線を逸らしてごまかす事にした。

「…で、目当ての物はありましたか？」

由紀「うんっ、あつたよ♪ちよつと買ってくるね！」

そう言つて由紀はレジへと駆けていく。よく見れば、彼女は右手に一冊の単行本とみられるものを持っていた。彼は一足先に書店の出口に立ち、彼女の会計が終わるのを待つ……。

（つていうか…ここが目当ての店だったとして僕がついて来た意味は？他の人の感想が必要になるかも…とか言つてたよな）

由紀は一人きりで買い物を済ませたので、彼の意見が求められた場面など無かつた。ならば何故自分についてきてほしいと言つてきたのか…：そんな事を考える彼のもとに、会計を終えた由紀が駆け寄ってくる。

由紀「おまたせ〜！」

「はいはい。ところで由紀ちゃん、ちよつと聞きたいことが…」

由紀「んっ？なにかな？」

「僕がここに来た意味は？」

自分で考えても答えを出せそうにないので、彼は由紀本人に尋ねてみることにする。しかし、由紀は何故か首を傾げていた…。

由紀「えつと…：意味つてどうゆう意味？」

「いや…だから僕がここまでついてきた意味だよ。他の人の感想が必要になるとか言つてたのに、結局何も聞かれてないからさ」

由紀「あく！違う違う！ここにはただ、ぶらつと寄っただけだよ。ちよつと欲しい本があつたんだ〜♪」

先程買った本の入ったビニール袋を右手に持ち、由紀は嬉しそうに微笑む。どうもこの書店はついでに寄っただけだったようだ。

「…そう。…で、目当ての店には行かないの?」

由紀「目当てのお店?それってどこのこと?」

「知らないよ…。まだ何も聞いてないからね…」

彼が言うのと由紀は腕を組み『むむっく』と唸り声をあげる。どうやら、書店に寄った間に自分がどこに行こうとしていたのか忘れてらしい…。

由紀「ちよ、ちよっと待ってね……。えっと…どこに行こうとしてたっけ…」

「……………」

由紀「…あっ!そうだった!!この前りーさんたちと一緒に話してたらまたみんなでどっか遊びにいこうってなつて…:よしっ!思い出したよ♪」

そうして由紀は再び歩き出す…。今回もまた何も言わぬまま歩き出したので彼は少し不安だったが、もう一度目的地を忘れるような事はさすがに無いだろうと信じて彼女についていった…。

(まあ…不安には不安なんだけどね)

特に会話もないまま、彼は鼻歌を歌う由紀の背後をついていく…。そして約五分ほど歩いた時、由紀が一つの店を指さして彼に笑顔を見せた。

「…この店ですかい？」

由紀「そうだよ♪」

にっこりと微笑み答える由紀だが、彼は少し気が進まない…。何故かと言うと、由紀が指さしたその店は外から見ても明らかに女性向けのファッション店だと分かるくらいに可愛らしい服ばかりが並んでいたからだ。

「僕が入るの？ここに？由紀ちゃんど？」

由紀「そうしてくれると嬉しいけど…いや？」

由紀が上目づかいして彼に尋ねる。そんな風に言われたら断れる訳もなく、彼は渋々ながらもその店内へと足を踏み入れた。

由紀「えへへっ♪でね、わたしのみたいやつなんだけどね」

『店のラインナップから察するに普通に服を選ぶだけだろう…』そう考えながら彼ははしゃぐ由紀のあとをつける。周りにいる客はほとんどが女性…もしくはカップルとみられる者達ばかりで少し居心地が悪いが…

（でも…周りから見たら僕らもカップルだと思われてたりするのかな）

そう思うと少し気持ちが楽になる。由紀は確かに子供っぽい容姿や性格をしているが、よく見ればかなり可愛い部類に入る見た目をしているからだ。こんな彼女とカップルだと思われるならば、誇らしい気持ちすら湧く。

由紀「ねえねえ、こつちとこつち…どつちが良いかな？」

そばにかけてあった二つの商品をそれぞれ両手に取り、由紀はそれらを交互に自分の体へと重ねて彼に尋ねる。しかしその二つは彼が思っていたような普通の衣服ではなく…もつと面積の少ない…。

「……水着？」

由紀「うん、そうだよ♪」

青色のビキニとピンク色のビキニ…それらを揺らしながら微笑む由紀…。それらはどちらも上下ともに小さなりボンとフリルがついており、違うのは色だけのようだ。あまり大人っぽい水着でもないが、かといって子供っぽい訳でもない…。きつとどつちも由紀に似合うだろうと思ったが…。

(まさか…水着選びに付き合わされるとは…)

辺りを見回せば、いつの間にか水着に囲まれていた。この店は普通の衣服だけでなく、水着も置いてあるらしい…。

由紀「でね、どつちが似合うと思う？」

突然の事にまだ戸惑っているが、ニコニコとした表情を浮かべている由紀をこれ以上待たせるのも悪い…。どうせなら彼女が満足する買い物をさせてあげようと思い、彼は気持ちを切り替えた。

「どちらかと言えばピンクの方…。というか、その二つしか気に入ったのがなかったの？他にも色々あるけど…」

由紀「んん…水着とかあまり選んだことなく、結局シンプルなのが一番かなって」

「なるほどなるほど……」

彼は顎に手を当てながら、辺りの水着を見回す…。そんな中から一

つ、真っ黒な色をしたビキニを手に取り、それを由紀に手渡した。

由紀「これわたしに？」

「…似合うと思うよ？」

由紀「黒かあ…どうかな…：…ってかこれ、下の部分がヒモみたいに…！」

渡されたビキニ、そのボトムを見て由紀は驚いたような表情を浮かべる。そのボトムは前こそ隠せはするだろうが、横の部分の面積が異様に少ない…というか紐だった。

由紀「ちよつと布も狭いし…お尻とかけっこう見えちやいそう…」

「ん？似合うと思うよ？」

由紀「そうかなあ…？なんかこれ、せくしー系な水着だけど…」

「大丈夫大丈夫、由紀ちゃん結構スタイル良いから…」

由紀「…：…本気でいつてる？」

水着を抱えながら疑いの目を向ける由紀…。由紀のスタイルは悪くはないが、正直に言えばやはり悠里や胡桃には劣る…。ただ彼は由紀がこんな水着を着たらギャップがあつて良いなあ…：…とは思つていた。

「…似合うと思う。絶対大丈夫」

由紀「かなあ…：…こうゆーのはりーさんが着た方が良いと思うんだよね」

(それは一理ある…)

水着を見ながら呟く由紀の言葉を聞いて、彼は思わず想像する…。今由紀が持っている黒色の際どい水着…それを着た悠里が目の前にいたら…：…。

(……ヤバいな。きつと男達の目線を独り占めだろう)

悠里はただでさえ強烈なスタイルの持ち主……。そんな彼女が刺激的な水着を着ようものなら、ビーチにいる男達は一同にその目線を彼女へ向けるだろう。その光景は想像に難く^{かた}なかった。

「……そういえば、なんで急に水着を？」

由紀「あのね、この前リーさん達とみんなで遊んだんだけど……その時またどこか遠くに遊びに行きたいね〜って話になったの。で、もうすぐ夏休みでしょ？だからみんな海に行こうって約束したの♪」

嬉しそうにその話をする由紀。当然、彼はそんな素敵イベントが計画されていた事など微塵も知らなかった。

「リーさん達って事は……何人かと行くの？」

由紀「うんっ！リーさん・くるみちゃん・みーくん、あとみーくんの友達のけいちゃんって娘も一緒に行くかも♪」

(圭ってのは……この前会ったあの娘か……)

つい先日、美紀と一緒にいた少女の顔を思い浮かべる。あの時美紀は彼女の事を『圭』と呼んでいたので、恐らく由紀のいう少女と彼女は同一人物だろう。

由紀「せっかくの海だし新しい水着が欲しくて。それで買い物にきたんだけど、その途中でキミに会ったでしょ？これはもうついてきてもらうしかないと思って！」

「なるほど……大体理解しましたよ……。よしっ！じゃあやっぱりその水着を——」

由紀「これは恥ずかしいからナシかな……。ごめんね、せっかく選ん

でくれたのに……」

由紀は苦笑いしながら、彼の渡した水着を元の場所へと戻す。セクシーな水着を選ぶ由紀が見れないのは少し残念だったが、本人が気に入らないなら仕方ない……。

由紀「やっぱ最初の二つのどっちかが良いかなあ……。えっと、キミはピンクのやつの方が良いと思うんだっけ？」

「まあ……由紀ちゃんと言えばピンク色のイメージがあるので……」

由紀「そっか、じゃあこれにしようかなあ……」

青色とピンクのビキニ……その青色の方を元の場所へと戻し、由紀は残ったピンク色のビキニをジロジロと見つめ直す。

(あとは会計だけか……意外とすぐに済んだな)

そんなことを思う彼だったが、次の瞬間由紀が放った言葉を聞き……
一瞬思考が停止するのだった……。

由紀「ちよっと試着してみるから待っててね♪」

「……………へっ?」

第十三話『いっしょ』（ゆき）

『ワクワク…ドキドキ…』

デパートの中にある一つのファッション店…その店内にいる彼の今の心境を簡単に表すとしたら、この言葉が相応しいだろう。彼は今、店内奥にある試着室の前に立っている。そこにかけられたカーテン…その向こうではあの由紀が水着に着替えており、それを自分に見せてくれると言うのだ。ならばワクワクもするし、ドキドキもするだろう。

（試着していくとは…さすがに驚いたね。彼女とはたまたま会っただけなのに…まさか水着姿を見られるなんて…）

店の壁にもたれながら、二メートルと離れていないその試着室をじっと見つめる…。カーテンの向こうから聞こえるゴソゴソと言う音…それが由紀が服を脱いでいる音だと思うと、胸がドキドキと高鳴る。

「……………」

（今、カーテンをガツ!!ってやったら怒られるかな…）

彼女が着替えている最中だとは分かっている…。分かっているが、だからこそ、視界を遮るこの布を思いきって捲りたくなってしまう。

(……まあ、やらないけどね)

怒られるだけならまだいいが、下手すれば捕まるので止めておく。

(でも相手はあの由紀ちゃんだし……少しくらいの事じゃ怒らないんじゃないか?)

今、辺りには人影も無い……。『ほんの少し覗くだけならば……』由紀が着替え終えるまでの数分間、彼はそんな事を幾度となく考えていたが……

シャツ……!

遂にカーテンが開き、由紀が姿を現した。

由紀「ちよつと時間かかちつた……。どうかな?ヘンじゃない?」
「……………」

ピンク色のビキニを身につけた由紀……。こうして見ると分かるが、彼女は思っていたよりも胸が大きい……。もちろん悠里ほど立派ではないのだが、少なくとも彼の想像は上回っていた。

(子供っぽいからもつとペタンコかと思ってた……。由紀ちゃん、良い意味で着痩せするんだな……)

思いもよらぬ発見を前にして彼は唖る。ピンクの布をまとった由紀の胸……その綺麗な谷間を見ているだけで、彼の頭は次第にクラクラしていった。

由紀「あれ……ちよつとヘンだったかな?似合っていない?」

彼が無言でたたずんでいると、由紀は不安げに自分の体を見回す。やはりビキニは背伸びし過ぎただろうか……そんな事を考えてしまい

不安になる由紀だが、目の前にいる彼の言葉でその不安は消えた。

「想像の十倍似合ってる！全然オツケー！」

告げる彼がほんの少し興奮気味に見えるが、あまり気にしないでおう……。何はともあれ、男性の貴重な意見を聞いた由紀はパアツと笑顔になった。

由紀「ほんとっ?!ほんとに似合ってる?ヘンじゃない?」

「ヘンじゃないヘンじゃない!」

由紀「おおっ!じゃあやつぱりコレかなあ♡」

先ほどの不安そうな表情から一変……。由紀はキラキラとした目で自分の体の水着を見回す。彼女がひよこひよこ動く度にボトムフリルが揺れてるが、彼はそのそばの太ももに視線がいつていた。

(んん……ヤバイ。普通に可愛いな……)

由紀は確かに子供っぽいが、かといって彼女を女性として見れないかと言われるとそんなことはない。目の前でニコニコと微笑むビキニ姿の彼女は十分に魅力的な女の子だった。

由紀「よし!これにしよう♪じゃ、もうちょっとだけ待っててね?」

「了解」

彼が答えると、由紀は笑顔を見せてからまたカーテンを閉める。

それから少しして現れた彼女は元の服装に戻っており、先ほどまで着ていた水着を手に満面の笑みを浮かべながら彼を連れてレジへと向かい、買い物済ませた。

由紀「えへへ…キミがいてよかったあ♡一人だと悩んじゃって、結局何も買わないまま終わっちゃうんだよね〜」

デパート内の休憩スペースの一角に置かれていたベンチに二人で座り、由紀は今買ったばかりの水着が入った紙袋を嬉しそうに抱える。あまり大した意見は言えなかったような気もするが、彼女が笑顔ならそれでいいと…そう思える彼だった。

「でも…一人だと悩むなら、りーさんとかについてきてもらえば良かったんじゃない？僕なんかよりよっぽど参考になる意見言ってくれるでしょ？」

由紀「だめっ！りーさんやくるみちゃんたちには内緒にして、海に行く当日に見せびらかすんだから！」

「へえ…そうですか…」

由紀「だから今日、わたしと一緒に買い物したのもナイショだよ？絶対絶対ナイショだからね？」

「はいはい、わかったわかった…。分かりましたよー」

買い物も終わってしまい、これから何をするか…。そんな事を考えていたのも、彼の返事は雑なものになっていた。由紀はそれを不満に思ったのか、軽く頬を膨らませながら彼の前に左手をつき出す。

「…なに？」

由紀「…あやしいから指切りするっ！ほら、指出してっ！」

つき出した左手の小指だけを立てると、由紀はそれを振って早く手を出すようにと彼に催促する。こういうところが子供っぽい…など

と思いつながら彼はそつと右手を動かす、由紀の左手の小指と自らの小指を絡めた。

由紀「ゆ〜びきりげ〜んま〜ん——」

(……なんだ、この可愛い生き物は)

二人きり…という状況のせいなのか、指を絡めた手をゆっくり振りながら歌い出す由紀がやたらと可愛く見える。彼女は自分や胡桃、そして悠里と同じ年とは思えないほどに幼くも見えるのだが、それもまた彼女の魅力だった。

由紀「う〜そついたら、くるみちゃんとバ〜トルっ！」

「!？」

由紀「ゆびきった♪」

「ゆびきった…じゃなくてっ！なに？胡桃ちゃんとバトルって!？」
彼と指を離してやりきったような表情をする由紀だが、彼は彼女が歌っていた歌の歌詞が気になって仕方ない…。少なくとも、自分の知っている指切りの歌とは少しばかり違う点があった。

由紀「もし嘘をついたら、くるみちゃんと短距離走をしてもらいますっ！」

「短距離走？」

由紀「うんっ。五十メートルくらいが良いかなあ……。キミがくるみちゃんと走って、くるみちゃんに勝つまでそれを続けるの！」
「なんだ、そんなことか…。てつきり本気の殺し合いをさせられるのかと…。」

もしそうだったら胡桃に勝てる気がしない…。理由は彼自身が女の子を傷つけられない性格だから…とかではなく、ただ単に実力で

胡桃に勝てる気がしていないだけだ。

由紀「そんなことって言うけど…くるみちゃん速いよ？」
「…そうなの？」

由紀「うん。だって陸上部だもん。ほんとに速いよ」

「陸上部か…：知らなかった」

そういえば…放課後のグラウンドで胡桃を見かけた事が何度かあった。彼はその度に『なにをしてるんだ？』と首を傾げたが、考えれば簡単な事だ。放課後に体操服姿でグラウンドを駆け回る人間など、運動系の部にいる者だけだ。

由紀「たしか陸上部の中でも速い方だって言ってたから…：キミじゃ勝てないかも」

「おいおい由紀さん…あまり僕を舐めないで下さいよ」

由紀「…：キミって何部に入ってるっけ？」

かなり自信がありそうだ…もしかしたら彼も運動系の部に所属していたのかも知れない。由紀がそう思い尋ねると、彼はすぐさま答えを返した。

「…帰宅部ですが」

由紀「おおっ、わたしと一緒に♪」

イエーイ！と言い合って二人はハイタッチする。

なんともものほほんとした光景だが、彼は帰宅部なのに何故あんなに自信満々だったのだろうか…。

由紀「走るの得意？」

「……………そっそっ」

由紀「じゃあ、くるみちゃんに勝てる?」

「……………どうかな」

そればかりは分からない…。だが、彼が胡桃と短距離走で勝負するのはあくまでも由紀との約束を破った場合のみ。ならば……………

「そもそも今日のことを誰にも言わなきゃ、胡桃ちゃんと勝負しなくても良いんだよね?」

由紀「うん、そだね。ちゃんとナイショにしててよ?」

「了解了解。僕も無駄に走るとか面倒だし…」

言いながら彼はベンチからそっと立ち上がる。まだ休憩してばかりなのにもう動くのかと思ひ、由紀は彼を不思議そうに見つめた。

由紀「どっか行くの?」

「ああ、ちよつと飲み物買ってくるだけ…」

よく見ると、二人のいる休憩スペースの隅に自動販売機が置かれている。由紀がベンチに座ったままそこに向かう彼を見送ると、戻ってきた彼はペットボトルを二本持っていた。

「はい。好きな方をどうぞ」

由紀「えっ? いいの?」

「ああ、一本は当たったヤツなんで気になさらず」

由紀「当たったの?すごいね! わたし、販売機で当たったこと一回もないよ」

彼が差し出した二本のボトル…。その内の一本を受け取り、由紀はペコッと頭を下げる。実を言うと由紀はずっと喉が渴いていたのだが、先ほどの買い物で小銭を使い果たしてしまっていた。由紀は貰ったそのキャップをすぐに開けると、ゴクゴクと喉を鳴らして一気に飲んでいく。

由紀「……ぷはっ！おいしい♪ほんとにありがとう♡」

「自動販売機で当たりを引ける僕の強運を崇めても良いよ」

ニヤツと怪しげに笑い、彼も自分の飲み物をゴクゴクと飲んでいく……。

由紀「……………」

彼が飲んでいるのは由紀が貰ったのと同じメーカー：同じタイプの飲料のようだが、パッケージが微妙に違う……。彼の方のやつにはフルーツのフレーバーがおまけ程度に追加されているらしく、あれはあれで美味しそうだ……。

「…………ふう。さて、これからどうしようかな…………」

一息つきながら、彼はそのボトルをベンチの中央に置く。貰った物を飲み、十分喉の潤った由紀だったが、彼の方の飲料の味が気になつて仕方なかった……。

由紀「…ね？そつちのもちよつと飲んでいい？」

「へっっ？」

由紀「お願いっ、一口だけだから！」

由紀は両手を合わせ、すぐるような目を彼へと向ける。彼は返事をすぐに返せずにはいたが、それは彼女に自分の飲み物を分けるのが嫌だとかではなく……

(いつ、いや…………それって間接ナンタラってやつになるんじゃないや…………)

自分が飲んだ物を彼女に渡すとは……つまりそういう事だ。しかも彼女はそれを飲みきる事なく、残った状態で彼に返すハズ……。彼は由

紀との間接キスだったら構わない（むしろ望むところ）と思っているが、由紀の方は平気なのだろうか…？

由紀「ほんとにちよつとだけだからっ！お願いっ!!」

「は…はあ…別に良いですケド…」

彼が答えると由紀は笑顔を浮かべ、彼の横に置いてあったそのボトルを手に取る。本当に飲むつもりなのか？彼はそう思いながらじつと由紀の横顔を見つめるが、彼女は思っていたよりもあっさりとその口に口をつけた。

由紀「ん…っ…んっ…」

（っ?!ふっーに飲みましたよ、この娘はっ!!）

思わず目が丸くなる…。その後、由紀から満足げな表情で返されたそのボトルはかなり中身が減っていたが、もうそんな事はどうでもよかった。

由紀「んゝ、そつちのもおいしーね♪」

「…それは良かったですけど」

由紀「…あつ、ごめんっ！飲みすぎちゃったよね!」

由紀が慌てた様子で謝るが、彼が気にしていたのはボトルの中身ではない…。ボトルの飲み口だ。

「いや、別に——」

由紀「代わりにわたしの飲んでみる？こつちもおいしいよ」

彼の前に自分のボトルを差し出す由紀だが、彼は固まってしまっていて動かない…。色々な事が起こりすぎて、脳内が少しばかりパニックになっているからだ。

(いやいや…だからそれは間接キスにつ…)

由紀「…飲まないの？おいしいーよ？」

丁寧な事に、由紀はボトルのキャップを開けて彼がそれを受けとるのを待っている。ここまででされて受け取らないのも悪い気がする…。それに、由紀との間接キスなど願ってもない良いイベントだ。彼はそのボトルを由紀から受け取り…

「……………」

由紀「んっ？どしたの？」

「いや…なんでも…。いただきます…。」

そっと飲み口に口をつけ、その飲料を飲んだ…。

(っ…味に集中できない…)

今、自分が飲んでいるボトルはついさつき由紀が口をつけたもの…。それを思うと頭がジリジリと痺れ、味など分からなくなってしまうが…

(…………ちよつと、甘い気がする)

この飲料は今までも何度か飲んだことあるが、ここまで甘いものはなかったような…。それは絶対に気のせいだと分かっているが、不思議とそんな気がした。

「……………どうも」

由紀「ねっ？おいしかったでしょ？」

「…うん」

ボトルを返すと、由紀が嬉しそうに微笑む。間接キスしてばかりだからか彼女の顔を見ていると照れくさくなってしまうので、彼はそれをごまかすように立ち上がった。

「ええっと……お昼でも食べよつか？僕が奢るから」

由紀「えっ!?ほんとにっ?」

「本当本当。まあ……お礼って事で……」

由紀「お礼って……なんの?」

「……なんでもない。こっちの話ですのでお気になさらず」

まだ唇が甘い気がする……。彼はそれに戸惑いながら、由紀を連れてランチ出来そうな場所を探しに向かうことにした。

「…行きますか」

由紀「うんっ!」

歩く彼の後ろをくつつくようにして、由紀はトコトコと歩く。その際、彼が先ほど買った物をした自動販売機が目に入った。

由紀（………あつ）

ふと視界に入った販売機……。そこで売っているラインナップの中には彼が飲んでいた物も、由紀が貰った物もある。しかし、良く見ればその自動販売機に当たり機能などついてはいなかった…。

由紀（わたしが気を使わないように…当たったってウソ言ったんだ…）

「由紀ちゃん、何か食べたいものとかありますか?」

由紀「………キミと……」

「…ん？」

飲み物を受け取る際に気を使わせないように、当たったからタダだとウソをつく。本当にちよつとした気配りだったが、由紀はそれに感心した。彼の事は元より気に入っていた由紀だが、それがより強い想いになっていく…。

由紀「…キミと一緒になら、何でもいいよ」

今は深い理由など何もない…。ただ何となくこうしたかったから、由紀は彼の左手を両手で掴み、そのまま彼の肩に頭を寄りかけた。

「っ…!!？」

自分の左手を掴み、体を寄せてくる由紀…。

それは今日一番に彼を驚かせた行為だったが彼も彼でそれを受け入れ、そのまま二人並んでのんびりと歩いていく。相手は由紀だ、この行為にも大した意味などない。彼はそう思っていた。

第十四話『かくにん』（ゆき）

由紀「ん〜っ！美味しいっ♡」

デパート内のあるレストラン。

彼と向かい合うように座っている由紀が細長いスプーンを片手にニコニコと微笑む。今、彼女は食後のデザートとして頼んだストロベリーサンデーを満喫している真っ最中だ。

由紀「あの…ほんとにわたしは払わなくていいの？デザートまで頼んじゃったけど…」

「ああ、大丈夫。気にしない気にしない」

彼は空いた皿をテーブルの隅に寄せながら由紀に笑顔を見せ、彼女がそのデザートを食べ終わるのを待つ。このレストランに入ってから何度か『自分も代金を払う』と由紀は言ったが、彼はその度に首を横に振った。

（可愛い水着姿を見せてもらったから…。このくらいの出費は痛くない）

ピンクの水着：意外と大きめに見えた由紀の胸：ヒラヒラと揺れる可愛いらしいフリル…。目を閉じればまだ、あの光景が思い浮かぶ。思いもよらぬところで彼女の水着姿を見れたのだ、これはそのお礼のようなもの…。彼はそう考えて彼女に昼食を奢っていた。

由紀「買い物に付き合ってもらって…ご飯までご馳走になるなんて

……。やっぱり、なんかわるいよ…」

「……じゃあ、今度また一緒に出掛けたりとかしようか。その時になんかお返ししてくれればそれでオツケー」

このまま話を続けていても由紀の気が晴れそうにないので、彼はそう提案した。こう言っておけば、とりあえずこの場は大人しくなるだろう。

由紀「…あつ!!じゃあさ、キミも一緒に海いこうよ!」

「それはかなり魅力的な話だけど、皆の邪魔になるでしょ」

由紀「そんなことないよ!みんなもきつとよろこぶって!」

「……ん〜…」

共に行けば由紀だけでなく胡桃や悠里…更には後輩二人の水着姿も見れるかも知れない。行けるものなら是非とも行ってみたいものだが、そう簡単にはいかないだろう…。

「まあ、リーさん達の許可が出たら行こうかな」

由紀「うんっ!絶対大丈夫だよ♪」

(いや…絶対無理でしょ)

悠里はともかく、胡桃や美紀が許可をしないハズ…。そう考えていた彼は由紀の笑顔を直視出来ず、静かに視線を逸らして水を飲んだ。

(由紀ちゃんと胡桃ちゃんとりーさんと美紀さん…それに圭ちゃん。五人の女子が揃って海に行こうってのに、男なんて混ぜないだろう…)

由紀「……………」

ちらつと由紀の方を見る…。彼女は軽く顔を俯けながら、右手に

持ったスプーンで目の前のサンデーを少しずつ食べていた。

(でも、リーさんはついてきても良いって言いそうだな。わりと寛大な人だってイメージあるし…)

彼は先日勉強会の事を思い出す…。年は自分と同じハズなのが、悠里の雰囲気や喋り方…様々なところが自分よりも大人…というかお姉さんっぽい気がした。彼女なら彼が共に海に行くとっても『あら、別にいいわよ♪』とか言うかも知れない…。

(胡桃ちゃんはどうかだろう…。この前のデートはそこそこ楽しんでくれたみたいけど…)

自分の財布をそつと開く。中には硬貨や紙幣とは別に一枚の紙がしまつてある。それはあの時ゲームセンターで胡桃と撮った写真…。そこに書かれている『もうデートでいいや♪』という文字を見るたびに彼の頬が緩む。

(…あの娘もあの娘でけっこう優しいからな。もしかしたら……いや、期待しすぎか)

所々に多少キツイ言動はあれど、基本的に胡桃は優しい。だが、一緒に海に…というのはやはり厳しいだろう。となればあとは美紀・圭の後輩コンビだが…。

(美紀さんは読めないな…。良いって言ってくれそうな気もするし、凄く嫌がりそうな気もする…。圭ちゃんに限っては…まだ全然知らないからなあ)

これまで美紀とは何度か会話した事があるが、圭とはほとんど話していない…。明るく活発そうな娘ではあったが、ほぼ他人同然の男と

海になど行きたがるだろうか…。

由紀「…おっ、キミが一緒でもいいって！」

「はっ？」

満面の笑みで告げる由紀だったが、彼はその言葉の意味を理解出来ない。一つ思ったのは、さつきまで半分以上残っていたサンデーを由紀がいつの間にか食べ終えていて驚いたなあ…といったことくらいだ。

由紀「ほら、みんないいって言ってるよ」

由紀は左手に持っていた物を彼に見せる。

それは由紀の携帯らしく、その画面には胡桃・悠里・美紀たちとメツセージでやり取りした履歴が残っていた。どうやら、サンデーを食べながら密かにやり取りしていたらしい。彼は由紀に許可をもらってからその携帯を手に取り、画面をじっと見つめる…。

由紀『ね〜ね〜。今度海に行くときのメンバー、もう一人誘ってもいい?』

胡桃『ええ…だれ誘うの?』

由紀『も〜っ。わかってるでしょ〜?』

胡桃『……………アイツかよ』

由紀『せーかいつ!!ねっ、いいでしょ?』

胡桃『まあ荷物持ちくらいにはなるかもだし…あたしは別にいいけどさ……。りーさんとか美紀にもしつかり確認とつとけよ?』

由紀『らじゃ〜』

由紀『りーさんりーさんっ!今度の海、もう一人誘ってもいい?』

悠里『もう一人?誰を誘うの?』

由紀『当ててみて』

悠里『……………めぐねえ?』

由紀『ハズレ〜。でもそれも良いねっ!めぐねえも誘ったらきてくれるかな?』

悠里『どうかしら。先生も色々あるから、あまり期待は出来ないかもね。ともあれめぐねえじゃないってことは……………彼かしら?』

由紀『おおっ!せいかいつ!!くるみちゃんもりーさんもよくわかる

ね?』

悠里『由紀ちゃんが急に誘いたいって言うくらい親しい人っていったらまず彼の顔が浮かんじゃって…。最近、よくみんな仲良くしてるから。…というか、胡桃にも聞いたのよね?彼が来るって聞いて、胡桃はなんて答えたの?』

由紀『別にいいよだっ♪』

悠里『なら、私も別に構わないわよ♡あとは美紀さんと圭ちゃんにだけ確認しておいてあげて。当日、急に彼が来たらビックリしちゃうだろうから』

由紀『らじゃくく!!』

悠里『そういえば由紀ちゃん、しっかり勉強してる?』

悠里『お休みの日だからって遊んでばかりいちやダメよ?』

悠里『…返事は?』

悠里『由紀ちゃん?メッセージ見てるでしょ?』

由紀『みーくんこんにちは！今なにしてる？』

美紀『今ですか？今は圭と一緒に隣町の方へと遊びに行ってます。』

由紀『あいかわらず仲よしだね〜♪』

美紀『で、用件は何ですか？』

由紀『あうつ……。えつとね、また今度海にいこうつてみんなで約束したでしょ？そのときにもう一人だけ誘ってもへいき？』

美紀『ああ…あの先輩ですか？』

由紀『そうそう！どう？誘ってもいい？』

美紀『由紀先輩が誘いたいなら構いません。ご自由にどうぞ』

由紀『あつ、圭ちゃんは大丈夫？ついでに聞いてみて』

美紀『圭なら大丈夫です。この前ちよつと会話しただけであの人の

事気に入ったようで、是非呼べと言ってます』

由紀『あはは♪じゃあそうするね。ばいばーい♡』

美紀『はい。また学校で』

由紀「ってことで！みんなキミが来てもいいって♪」

「…みたいですな」

改めてそれぞれのメッセージ履歴を確認するが、やはり全員が彼の参加を許可しているようだ。思っていたよりもあっさり許可された事に彼は少々戸惑ったが、同時に嬉しくもある。

「じゃあ…一緒に行こうかな」

由紀「うん、そうしよっ♪」

「…携帯返すよ。リーさんから連続でメッセージが送られてきてるけど平気？」

由紀「…た…たぶんね」

由紀が彼から携帯を受けとるその間も悠里から新たなメッセージが…。しかし由紀はもうそれを確認すらせず、冷や汗をたらしながらそっと携帯をしまった。

その後、二人はレストランをあとにするとデパート内をぶらぶらと出歩き、共に時間をつぶす…。彼も由紀も本来の目的を達していたの

でもうデパートに用は無かったのだが二人一緒だと何を見ても楽しく、適当に出歩いているだけでもあつという間に時間が過ぎていった…。

くくくくくくくく

由紀「…さてつ、今日は付き合ってくれてありがとう♪キミのおかげで水着も選べたし、お昼もごちそうになったし…ほんとに楽しかった♡」

夕暮れ時…彼と共に帰路につきながら由紀が微笑む。彼自身も由紀に会えた事で良い時間を過ごせたため、満足そうに笑顔を返した。

「ごちらうこそ。今日は由紀ちゃんに会えてよかった」

由紀「えへへ…照れちゃうよ?」

買った水着の入った袋を抱きしめながらニコニコ微笑み、彼の横を歩く。そうしてたどり着いた一つの別れ道…気づけば由紀の自宅も近くなっていたが、彼の家と由紀の家とはここから進む方向が違う…。

由紀「あつ…ここでお別れだね」

「家の前まで送ってく。一人じゃ危ないし」

由紀「大丈夫だよ。わたしの家、もうすぐそこだから」

「でも——」

由紀「平気平気っ！わたし子供じゃないんだよ？」

一步、二歩、三歩とバックステップして彼との距離をひらく。それを見た彼は少し不安そうな顔をしていたが、その手を静かに由紀へ振った。

「じゃ、また学校で……」

由紀「うんっ！またね♪」

由紀は笑顔で手を振り返し、少しだけ駆け足でその場を去る。水着を買えた事が嬉しくて足取りが軽くなっているのかも知れない。

由紀（えへへ……。今日、会えてよかったなあ♪）

一人では悩んでしまったかも知れない水着も彼がいたからすぐに選べた……。昼食も彼と一緒に食べたし……。なんだかとても美味しいものを感じた……。

由紀（やっぱり一緒だと楽しいよね。水着も似合うって言うってもらえたし、ご飯も一緒に食べたし……）

今日一日、彼と過ごした時間を思い返す中……由紀はふと思う。もしあの時見掛けたのが彼ではなく他の男子生徒だったら、自分はどうしたのかと……。

由紀（声はかけるかも知れないけど、水着選びを手伝ってもらったりはしないかな……。ちよっと恥ずかしいもんね……）

……恥ずかしい？なら、何故彼には手伝ってもらったのだろうか……？彼も同級生の男子であり、本当なら由紀も水着姿を見せるのに多少の気

恥ずかしさがあったはずなのに…。

由紀（いやっ！恥ずかしいには恥ずかしかったよ!?でもなんていうか…あの人になら見せて良いって思えて…）

頭の中でブツブツと一人言を呟き続けていて気づく…。いきなり背後から抱きついたり、腕を両手で掴んだり…。彼を相手には普通に出来た事だが、他の男子には出来そうにない…。

由紀（あの人が…。本当に大切な友達だから？それとも…。もつと別に理由があるのかな…）

少しだけ頭が熱くなる…。これ以上彼の事を考えるとますます頭が熱くなってしまいそうだったので、由紀は無理やりに他の事を考えながら家へと帰った…。

第十五話 『止まない雨』（みき）

「……………」

ある休日の日…。彼は自宅の窓から外の景色を眺めていた。…と
いっても家は住宅街にあるので窓からの景色といっても見えるのは
他の家だけ…。しかも今日の天気は悪く、室内にいても雨音が聞こえる
ほどに激しい雨が降り注いでいた。

（雨…だいぶ強くなってきたな）

雨はつい一時間ほど前から降り始めたのだが、その時はまだポツポ
ツとした小雨だった。しかし雨はみるみる勢いが増し、今は傘を持っ
ていても外に出たくないレベルになっている。

（これ、今日中に止むのか…？）

少し不安を感じながら窓辺のカーテンを閉め、彼はくるつと振り向
く。天気が悪いのもあり、まだ昼過ぎだというのに外は薄暗い…。な
のでもう室内の明かりをつけてあるのだが、明かりに照らされている
自分の部屋を彼はいつもよりほんの少し狭く感じた…。何故なら、今
この部屋にいるのは彼だけではないからだ…。

美紀「……………」

彼は部屋にあるベットのの上に腰かけ、室内を見回す…。普段は自分

とその飼いだである太郎丸しかいない空間に、今日は後輩の女子がいた。その後輩：直樹美紀はカーペットの上に正座しながら、目の前の小さなテーブルに三冊の本を置いて読書している…。

(…あの本を全部読み終えるのが先か、雨が止むのが先か)

もしかしたら、本を読み終えるのが先かも知れない…。それほどに雨の止む気配が無い。もしこのまま止まなかった場合はどうするかと頭を悩ませていると、美紀と共にこの部屋へ上がり込んで来たもう一人の後輩が彼に声をかける。

圭「あつ、先輩っ！このマンガ読んでも良いですか？」

もう一人の後輩：祠堂圭しどうけいが部屋にある本棚を眺めながら彼に尋ねる。彼が無言のまま首を縦に振ると彼女は一冊の漫画を手にしてニコニコと微笑み、美紀の隣へと座って読書を始めた。

(この雨、このまま止まなかったらどうするかな…)

二人に気付かれないよう小さくため息をつき、ベットに横たわる。

何故こんな状況になったのか。それは今から四十分ほど前の事だった…。

~~~~~

四十分前…。暇をもて余した彼は飼いだである太郎丸を連れて近

所を散歩していた。そしてその散歩も終盤に差し掛かりもうじき家につく…その時だった。突如雲行きが怪しくなり、ポツポツと雨が降り始める。

（雨？天気予報見てなかったから降るなんて知らなかった…。まあ、もう少しで家だし構わないか）

太郎丸の首輪に繋いだリードを引きながら少しだけ歩くペースを上げる。雨は今のところ大した勢いではないが、のんびり歩いていたらすすがに濡れてしまうからだ。

「もう少しだから、がんばろう」

家まであとほんの二百メートルほど…。小さな四本足で自分の隣をトコトコと歩く太郎丸に声をかけ彼は進む。彼が歩くペースを上げると、太郎丸もそれに合わせて自分のペースを上げた。

そうして二人（正確には一人と一匹）は無事家へとたどり着く。ペースを上げたおかげか、体も大して濡れずに済んだ。

「よし、お疲れさん…」

太郎丸に一言告げ、家の中へ入ろうとしたその時だった。何故か太郎丸がリードを引いてもその場から動かない…。彼は負けじとリードを引くが、太郎丸は足に力を入れたまま道路の先をじっと見つめていた。

「おい…急にどうし——」

言いながら太郎丸の目線の先をしてみる…。するとそこには見覚えのある女の子が二人いて、彼の方へ駆け足で向かってきていた。



(あの二人……)

二人の格好が制服じゃなかったので一瞬判断が遅れる……。しかし徐々にこちらに寄ってくる二人の顔はよく知ったものであり、二人が目の前に来る頃には彼もそれぞれの名を呼んでいた。

「おっ、美紀さんと圭ちゃんじゃないですか」

美紀「先輩、こんにちは」

圭「こんにちは……って、なんで美紀ちゃんだけさん付けなんですか？」

「後輩とは思えないくらい落ち着いてて優等生感があるから」

美紀「……意味がわかりません」

圭「はあく、なんとなく分かります」

美紀「いやいや……なんで分かるの？」

彼の発言にうんうんと頷く圭と、それを呆れた目で見つめる美紀。彼が聞くとどうやら二人は一緒に遊びに出掛けていたらしく、その途中で彼を見かけたからついてきたとの事だった。

美紀「ところで、その子は先輩の飼犬ですか？」

「ええ、一応」

美紀「へえ……名前はなんですか？」

「……太郎丸です」

美紀「太郎丸……？太郎丸……太郎丸……」

美紀はブツブツと呟きながら彼の隣にいる太郎丸を興味ありげに見つめる。美紀は少しの間太郎丸と見つめあった後にそつとその場にしゃがみ、太郎丸の頭へ手を伸ばした。

美紀「ほら、おいで…」

太郎丸「…ツ!!」

太郎丸は美紀の手を避けるようにして後ろに飛び退き、少し離れたところから彼女の事を見つめる。その様はどう見ても警戒しているようで、美紀は悲しげな顔をしながら立ち上がった。

美紀「つぐ…。どうしてだろ…」

圭「あらら…美紀ちゃん嫌われてる?」

美紀「違うよっ! たぶん、この子は人見知りしやすい子で——」  
そう言つて自分の気持ちを落ち着かせようとする美紀だったが、どうやら太郎丸は人見知りするタイプの犬ではないらしい…。何故なら、圭が先程の美紀のように手を伸ばすと太郎丸はそこへトコトコと歩み寄つて彼女の手に顔をすり付けていたからだ。

美紀「な…っ…」

圭「あははっ、可愛いっ♪」

寄つてきた太郎丸の頭を撫でながら満足げに微笑む圭と、それを横から妬ましそうな目で見つめる美紀…。彼は美紀のそんな表情を見て、自らの飼う犬の空気の読めなさっぷりに引いた…。

(頭くらい撫でさせてやれば良いのに…。うわ…また避けた…)

圭が太郎丸の頭を撫でる中、美紀もしれっと再チャレンジする。しかし太郎丸は何故か美紀の手だけをサッと避け、それからまた圭の方へと寄つていった。

美紀「……………そう言えば、ここって先輩の家ですか?」

避けられた事など気付いていない……そう言わんばかりに美紀はそばの家へと目線を移し彼に尋ねる。彼は美紀のそんな行動に苦笑いすると、圭のそばに寄る太郎丸を見つめながら答えた。

「はい。ちょうどコイツとの散歩から帰ってきたところですよ」

美紀「そういえば、先輩って一人暮らしでしたっけ……」

圭「へえ、じゃあ、もしよかったらお邪魔して良いですか？」

美紀「ちよっ……!?なに言ってるの!?!」

足元にいた太郎丸を両手でひよいと抱き上げ、目をキラキラさせる圭……。しかしその一方、美紀は彼女を呆れた目で見つめていた。

圭「だって雨降ってきちゃったじゃん。私達傘とか持ってきてないし、雨が止むまでの間くらいならと思っただけ……」

「まあ、こっちは別に構わないけど」

圭「ほら美紀ちゃんっ！先輩はこう言ってくれてるよ！」

美紀「って言ってもまだ雨宿りするほどの勢いじゃないし……だいたい、この雨すぐに止むの？」

圭「天気予報は今日雨が降るなんて言ってなかったから、今のこれも間違いで降ってるような雨でしょ？だからきつとすぐに止むって……！」

美紀「間違いで降ってるような雨っていうのが意味不明なんだけど……まあ、先輩が良いって言うなら……」

圭の言っている事はよく分からないが、確かにこの雨はすぐに止みそう。美紀はそう思っていたし、彼もそう思っていた。だからこそ彼は美紀達を家へと上げ、美紀達もそれに甘えたのだが……。

~~~~~

二十分後……。

美紀「……圭はさつき何て言ったっけ？」

圭「えつと……この雨はすぐに止む……とか言ったかな……」

美紀「……うん、言ってたね。じゃあほら、もう一度外を見て……」

圭「は、はい……」

言い様のない美紀の圧力に気圧され、圭は彼の部屋の窓のカーテンをそつと開ける。実はこのカーテン……ついさつきも一度開けていたのだがその際にみた光景が信じられなくて、圭は現実から逃れるようにそのカーテンを閉めたのだ。

圭（もう一回見たら……外の光景が変わってたりしないかなあ……）
あり得ないと分かりつつ、そんな事を願ってしまふ。

次の瞬間にサツと開けたカーテンの向こう……その光景はやはりさつきと変わっておらず、圭は深いため息をつきながら恐る恐る美紀の方を見た。

圭「ど……どしや降りの大雨です……」

美紀「……うん。私からも見えてるから言わなくてもわかるよ」

圭「あはは……だよね」

その光景から目を逸らすようにカーテンを閉め、圭は美紀のそばへと寄る……。美紀は無表情のままカーペットの上に座り、何もない虚空を見て圭と視線を合わせなかった。

圭「最悪の場合はほら、先輩から傘借りよつ？先輩、傘借りていつでも良いですか？」

「へっ……うあ、ああ！全然良いよ！」

急に話を振られ一瞬戸惑ったものの、彼は圭にそう答える。雨が強

くなっていた事に気付いてからは美紀の表情が険しくなっており、彼も慌て始めていた。

圭「ありがとうございます！ほら美紀ちゃんっ、いざとなればこれで帰れるよ!!」

美紀「圭……こんなに勢いのある雨の中、傘なんて意味がないって分かるでしょ……」

圭「……………はい」
「……………」

外に降る雨の勢いはかなり凄まじく、台風でも来ているのかと言わんばかりの風も出てきている。確かに美紀の言う通り、外がこんな状態では傘なんて役にたたないだろう…。

圭「たぶんその内止むってどうか、勢いが弱くなるってどうか………要するになんとかなるだろうから！ねっ？元気だそうよ？」

美紀「…まあ、私もこの家にかかる事に賛成しちやった訳だし、これ以上圭を責めたり出来ないよね……」

圭「私、やっぱりさっきまで責められてたんだ……？」
美紀「今お昼をちよつと過ぎた辺り………運が良ければ夕方までには帰れるかな……」

部屋の壁にかけられた時計を眺め、美紀は持っていたバックから紙袋を取り出す。美紀はそこからいくつかの本を取り出した。どうやら今日買ってきたばかりのものらしい。

美紀「とりあえず、読書でもして時間潰す……」

圭「あく、その本早く読みたいって言ってたもんね？良かったじゃん、読むタイミングが思っていたより早く出来て……」

美紀「……………」

元気よく告げる圭だがその言葉は美紀の心を少しだけ苛立てたら

しく、美紀の目付きが鋭くなる……。圭はペコツと頭を下げて彼女の怒りを静めた後、部屋の隅で寝ていた太郎丸とじゃれあっていた。

圭「ほんとに可愛い……。癒されるなあ……」

圭がよると太郎丸は尻尾を振り、腹を見せながらゴロゴロと寝転ぶ。圭がその腹を撫でると太郎丸は嬉しそうにし、しゃがんでいる彼女の太ももへと顔をすり付けた。

圭「えへへっ♪なんだコイツはく♪」

ニコニコした表情で犬の腹部を撫でる少女と、それを嬉しそうに受ける犬……。一見すると微笑ましい光景だが、これを少し違った目で見ている彼の心は純粹とは言い難いものだった……。

(アイツ……圭ちゃんの太ももに顔すり付け過ぎだろ……)

太郎丸は腹を撫でられる度に体をくねらせ、尻尾をパタパタ振りながら頭を彼女の太ももへと寄せる。当然、太郎丸はただじゃれあっているだけなのだが……彼はそれをこの上なく羨ましく思っていた……。というのも圭は中々に整った顔の少女であり、そんな彼女は今わりと短めのスカートを履いている。彼はそこから伸びるスラツとした彼女の足に興味があった……。

(僕もあの太ももに顔をすり付けたい……。とか一瞬思ってしまった。これはだいたい末期だな……。少し気持ちを落ち着けて……。……っ！あいつ今スカートの中覗いただろ!?)

当然そんな事はないし、覗いたとしてもそれは偶然だ。太郎丸は彼と違い、人間の女子のスカートの中身など気にしない。彼がそうして太郎丸の事を羨ましく思いながら時は更に二十分過ぎ、現在へと戻る……。

~~~~~

彼は未だベツトの上に腰掛け、激しい雨の降る窓の外と室内を交互に見回す…。ついさつきまで圭とじゃれていた太郎丸も今はまた部屋の隅で寝ており、美紀と圭はそれぞれ読書をしていた。

圭「……………」

美紀「……………」

部屋の中央に置かれた小さなテーブルの前に隣り合って座る二人の後輩をじっと見つめてみる…。先程は雨のせいで少し距離のあった二人だが、今はこうして隣あわせに座っているのだ。元々の仲はかなり良いのだろう。彼は二人の可愛い後輩を見つめた後にまた窓から外を見つめ、ある事を思った……。

(生まれ変わるなら……犬になりたい)

## 第十六話 『大切な友達』（みき）

散歩中の彼と偶然に出会い、降っていた小雨が止むまでの暇潰しにその家へあがり込んだ美紀と圭。しかし雨は止むどころか勢いを増し、美紀と圭は彼の家から出るに連れられなくなってしまった…。そうして一時間ほど過ぎた頃、圭がため息をつきながら呟く。

圭「はあ……雨、全然止まないね」

美紀「…うん。むしろ強くなってる」

読んでいた本をパタンと閉じ、美紀は窓の外の様子を覗く。雨は猛烈な勢いで降り注いでおり、激しい風も吹いていた。この調子だともだもうしばらく止みそうにない…。

圭「お昼早めに食べるとして良かった。じゃなきや今頃、お腹がすいて困ってたはずだよ」

美紀「だね…。そう言えば、先輩はお昼食べました？」

「ああ、食べました。ご心配なさらず」

美紀「そうですか…ならよかったです」

時刻は既に昼を過ぎて……。外があんな状況な以上外食などには行けないため、三人は自分達が早めに昼食をとって正解だったと心から思った。



圭「美紀ちゃん、読書は終わったの？」

美紀「ううん。一旦休憩しようと思っただけ。圭こそさつきまで漫画読んでなかった？」

圭「んん、もう読み終わっちゃった…」

圭は退屈そうな表情をしながら美紀に答える。漫画を読み終えた直後はテレビを見たりもしたようだが、気に入った番組が無かったらしくすぐに消してしまっていた。

圭「太郎丸と遊びたいけどぐっすり寝てるし、起こさない方が良いやね」

美紀「…そうだね」

部屋の隅…そこで丸くなって眠る太郎丸を見て美紀が微笑む。太郎丸は彼女に対してやたらと素っ気ないのに、彼女はそれでも愛情を向けているようだった。よほど動物が好きなのか、はたまた太郎丸を気に入っただけなのか…彼女の笑顔を見ていた彼はそれが気になり、彼女のそばへと寄った。

「美紀さんは動物が好きなんですか？」

美紀「嫌いではないです。見ていて癒されますから…」

「美紀さんに対してあんなに素っ気ないヤツなのには？」

彼がそう言うと、笑顔だった美紀の表情がどんよりと重苦しそうなものへと変わる…。どうやら、太郎丸に避けられた瞬間の事を思い出しているらしい。彼女はそのまま十秒ほど俯うつむいた後、そっと顔を上げて彼の事を睨むように見つめた。

美紀「っ……………」

「…ああ、すみません。気にしてました？」

美紀「…平気です。太郎丸だって、何度か顔を見せに来ればきつと

なついてくれるはずですから！」

彼女はそう言つてプイツと顔をそむける。不機嫌そうな彼女を見て彼はやつてしまったと焦るが、圭は何故かニヤニヤと笑つて美紀の事を見つめていた。美紀はそんな彼女の表情に気が付くと、これまた不機嫌そうに口を開く。

美紀「圭…なにニヤニヤしてるの？」

圭「えへへっ！いやあ…なんでもないよ〜♪」

やけに楽しそうに笑う圭を見て、美紀はあることを思う…。

美紀（もしかして…自分が太郎丸になつかれてるからつて私の事をバカにしてるのかな…。だからこんなにニヤニヤして…）

美紀「圭、バカにしてられるのも今の内だから…。次に二人でこの家に来る頃、太郎丸は圭じゃなく私を——」

ニヤニヤと笑う彼女に少しムカツとしてしまい、次回までに太郎丸をなつかせておく宣言をする美紀。しかし圭がニヤニヤしていた理由は太郎丸が美紀になつていない事をバカにしていたからではなく、もっと別の事が理由だった。

圭「バカになんてしてないよ。…ただ、美紀ちゃんはこれから何度も先輩の家（じい）に来るつもりなんだなあ〜つて思つて♪」

美紀「っ!?! いっ…いやっ！違うからっ!! そういう意味で言つたんじゃないよ〜!」

そういう意味で言つたわけではないが、確かにそうも聞こえる言い方をしてしまった…。太郎丸との信頼を築く為とはいえ、先輩である彼の家にこれからも訪れるという宣言をしてしまったのだ。自らの

発言を思い返し頬を真っ赤に染める美紀と、それを見て益々ニヤける圭……。二人が騒ぐ一方で、彼はそれを静かに見守っている。

圭「美紀ちゃんに変な虫が寄らないようにと見守ってきたけど、美紀ちゃんの方から相手に寄ってっっちゃうんじゃないの私止められないなあ〜」

美紀「だから違うって言ってるでしょ!!私<sup>めい</sup>がまた後日ここに来たとしてもっ、それは太郎丸に会いに来ただけであって——」

圭「はいはい。そういう名目めいもくだよね♪」

美紀「くくっ!!圭っ!本気で怒るよっ!!?」

顔を真っ赤に染めながら怒鳴る美紀……。既に本気で怒っているようにも見えるが、圭はそれを気にもしないと云わんばかりにニヤけていた。

圭「ごめんごめんっ。美紀ちゃんからかうの楽しくて!」

満足そうに微笑み、圭は美紀の頭を撫でる。美紀は膨れっ面を見せてはいたものの、圭のその手を避けたりはしなかった……。

圭「さて…先輩、ちよつとトイレ借りてもいいですか?」

「んん、っ自由どうぞ」

彼の許可を得た圭は立ち上がり、トイレの位置を聞いてから部屋をあとにする。圭が出ていき彼と二人きりになった瞬間、美紀は彼のことをチラチラと横目で覗いた。

美紀「…すいません。変なこと言っちゃって…」

「別にそこまで変なことじゃないでしょう…。ただ、これからも家に遊びにくるって宣言しただけなんですから」

美紀「いや…まずいですよ。だって先輩は一人暮らしの男性なのに、私はそこに一人で訪れようとしてたんですから…」

自らの発言を思い返すだけでまた頬が熱くなる…。一刻も早く太郎丸になつて欲しいが故の発言だったとはいえ、一人暮らしの先輩男性の元に訪れようとするなど自分らしくなかった。

「心配ご無用。いくら二人きりになろうと、いきなり美紀さんに襲いかかったりしませんから」

美紀「その心配はしてません…。これでも一応、先輩のこと信頼してますから」

「ふふっ、それは嬉しい言葉ですな」

信頼してると言われ、思わず彼の口元が緩む。彼は多少変わっているようにも思える人物だったが、それでもいきなり襲いかかってくるような人ではないと美紀は信じていた。

美紀「でも…やっぱり遊びにくるのはまずいというか、ちよつとアレですよ…。付き合ってるわけでもないのに…」

「付き合つてなきや家に来てはならないなんてルールは無い。美紀さんはあくまでも太郎丸に会いたいだけなんですから、変に気を使わないで気楽に来てください」

彼にそう言われた途端、美紀は変に意識してしまっていた自分が馬鹿馬鹿しく思えた。彼の言う通りだ…。変に気を使わず、気楽に訪れてみるのも良いかも知れない。美紀は彼の顔を見つめ、ニツコリと微笑んだ。

美紀「…では、また遊びに来るかもしれません。一日でもはやく太郎丸と仲良くなりたいですから」

「はい。そのついでで良いんで、その犬の飼い主であるこの先輩とも

少しずつ仲良くなつてあげて下さい」

美紀「私は先輩と結構親しく接していたつもりでしたが……無愛想な後輩ですいませんね」

「いや、無愛想だなんて思つてないですから！」

自分から目を逸らす美紀を見て彼は慌てるが、彼女は冗談のつもりだったらしく慌てる彼を横目にニコニコと笑う。彼女に遊ばれていくようになんとも言えぬ気分になるが、こんなふうには冗談を言える間柄なのだと思つたと嬉しくもあつた。

美紀「そういえば、圭も先輩のこと気に入つていますよ。あの娘は人と関わるのが私より得意なタイプなので友達も多いですが、上級生の男性の中ではあなたが一番気に入つていてみたいですね。さつきから圭のテンションがやたらと高いのも、あなたがいるからなのかも……」

「そうなんですか？まだそんなに会つてもないのになんでだろう……」

美紀「もしかしたら波長が合うんじゃないでしょうか。思い返せば、圭つてゆき先輩ともすぐに仲良くなつたんですよね」

「まあ由紀ちゃんも人なつっこいタイプの娘ですからね」

美紀「ふふっ……そうですね。ほんと、ゆき先輩と圭のそういうところ尊敬します。私は二人ほど人と接するのが得意ではないから」

いや、むしろあの二人はそれが得意すぎる気もする……。圭はともかく、由紀なんて相手が誰であろうと笑顔で接する事が出来るのだ。もちろん、それが彼女の魅力の一つであつたりもするのだが……。

圭「たっだいま〜」

二人が会話を交わしていると、トイレに行つていた圭が部屋へと戻つてきた。彼女は美紀と彼の会話に混ざるべく笑顔でそのそばへと寄る。

圭「二人でなに話してたの？」

美紀「…圭には内緒」

圭「ええ〜っ！教えてよ美紀ちゃんっ！」

美紀「だーめ。先輩と私だけの秘密だよ」

圭「なっ!?!美紀ちゃんが本当に先輩と親密な仲につ!?!」

美紀「はいはい。そうかもね…」

今度の美紀は先程のように頬を赤くしたりせず、落ち着いた様子で圭に対応する。彼女のそんな反応をつまらなく思ったのか、圭は背後から彼女に抱きついてその首に顔を埋めた。

美紀「ちよつと圭っ、くつつかないですよ。まったく…子供じゃないんだから」

圭「あゝ…そうだね。もうこのまま美紀ちゃんの子になるのも良いかも」

美紀「こんな大きい子はいらぬ」

圭「冷たいなく。もつと優しくしてよ〜」

背後から抱きついたまま、圭は美紀の頬に自分の頬を擦り付ける。その光景は見ているだけで彼が恥ずかしくなる程だったが、美紀はちっとも気にしていないようだった。

「えつと……二人は本当に仲がよろしいことで」

圭「はいっ♡美紀ちゃんも私の事好きでしょ?」

美紀「んん…どうかな…」

圭「嫌いとか言ったら本気でへこむからね…」

至近距離で彼女の横顔を見つめ、圭が呟く。美紀は少しだけめんどくさそうにため息をついた後、その顔をチラッと横目で見つめた。

美紀「嫌いだったら、今日も一緒に出掛けたりしてないよ…」

圭「…ふふふっ♡ どうですか先輩っ！美紀ちゃんは普段クールな娘ですけど、こうしてたまに見せてくれる優しさが良いでしょ？」

「まあ…うん…」

確かに、彼女が時たま見せる優しい笑顔には思わず見とれてしまう。圭は既にその虜になっているのか、彼女にべったりくっついたまま笑っていた。

その後、美紀もトイレに向かい…今度は圭と彼が一人きりになる。その時彼は圭に向かい『圭ちゃんにとって美紀さんはどんな人？』と、先程から少し気になっていた事を尋ねた。すると圭は直ぐ様彼に答えたが、その時の彼女は珍しく真面目な顔をしていた…。

圭「美紀ちゃんは…本当に大切な友達です…。私はあの娘が大好きで、あの娘と一緒に過ごす学園生活が大好きなんです。最近やたらそう思うようになって…なんででしょうね？」

言い終えた後、圭は照れたように笑う。彼女は彼と共に美紀が戻るのを待ちつつ、静かに窓の外を見た…。少しだけ、雨の勢いが弱まっていた。

## 第十七話 『またいつか』（みき）

圭「雨、少しだけ弱まってきたね」

彼の家に訪れて2時間近く経った時、圭が窓の外を見て呟く。それに続いて彼や美紀も窓の外を見てみると、雨の勢いは確かに弱まっていた。風もあまり吹いていないようだし、傘さえあれば普通に帰れるだろう。

「じゃあお二人さん。傘貸すんで、今日はこの辺で帰りますか？」

美紀「…圭、どうする？傘あれば帰れると思うし、今日はもう帰ろうか？」

圭「ん〜…まだ二時ちよつと過ぎか…」

部屋の壁にかかっている時計を見て圭は頭を悩ませる…。確かに今の天気なら家まで帰れるだろうが、まだ遊び足りないという思いもある。出来ることならもう少しだけこの家にいたい。

圭「せつかくだし…もうちよつとだけいてもいいですか？また天気が悪そうになったらすぐ帰るんで」

「んん、構わないけど…」

美紀「私は帰れる内に帰った方がいいと思うけどな…」

弱まった雨の勢いがまたいつ激しくなるとも分からない…。美紀が外を眺めつつボソツと呟くと、圭はニヤリと微笑んでからそばで寝転ぶ太郎丸の柔らかな腹を撫でた。

圭「じゃあ美紀ちゃんはここでお別れだね。この隙に私は太郎丸：



そして先輩との仲を深めるよ♡」

「おお…マジか…」

圭の言い方はふざけていて、冗談でしかないと分かるものだった。しかし冗談だと分かっているにもかかわらず自分との仲を深めると言われて悪い気はしない。彼が思わずにやけると、美紀がムスツと不満そうな表情を圭に向けた。

美紀「…わかった、私ももう少しだけ残るから」

圭「おつ、美紀ちゃんも先輩と仲良くなりたいの？」

美紀「違う。太郎丸と仲良くなりたいたいだけ」

「ぐっ…」

期待していた訳ではないが、きつぱり『違う』と言われるとさすがの彼も精神的ダメージを受ける。放たれた言葉に苦い顔をする彼だったが、美紀は慰めてなどくれなかった。

美紀「圭の言葉にデレデレするなんて…まったく…」

「いや…可愛い先輩に『仲を深めたい』と言われて喜ばない男はいないと思うんですけど」

圭「ですよね〜♪」

「ね〜」

美紀（…頭の悪いカップルを見てるみたい）

美紀は仲良く笑い合う二人を前にため息をつく…。ここ最近の圭は以前よりもテンションが高くなった気がするが、彼がそばにいとそのテンションが更に高まる。やはり波長が合うのだろうか…。

圭「そういえば、先輩って彼女います?」

突如、思い出したように圭が尋ねる。彼は少し間をあけた後に首を横に振ったが、その顔は少し悲しげにも見えた。

「残念ながないんだよね」

圭「へえ、じゃあ好きな娘とかはいますか？」

美紀「ちよつと圭っ……！」

やけにグイグイ尋ねる圭を止めに入ろうとする美紀だが、それを見た彼は大丈夫だと言わんばかりに軽く手を振る。そうして美紀を止めた後、彼は圭の目を見つめながらニヤリと笑った。

「……んと思っ……」

圭「うくん……先輩が普段から特に仲良くしてる娘、美紀ちゃん知ってる？」

美紀「普段から仲良くしてる人？ええつと……」

美紀は二年生で彼は三年生……そもそも学年が違うので普段の彼の事をよく知っているわけでもない。ただ、彼と美紀には共通の友人達があった。

美紀「とりあえず……ゆき先輩とくるみ先輩、それからりーさんとは仲がいいよね。私と先輩を含めた五人で会うことも何度かあったし……」

何度かと言っても、放課後に待ち合わせして共に帰った事が数回あるだけ……。美紀は普段は圭と二人で帰るが、圭が用事などで一緒に帰れなくなってしまう際には彼女らと共に帰ることがあった。

圭「私もゆき先輩とは仲良くしてるけど、くるみ先輩とりーさんとはまだまともに顔合わせた事ないんだよね。今度一緒に海へ行く仲だし、それまでに挨拶しとこうかなあ」

美紀「二人ともいい人だから、圭ならすぐに仲良くなれると思うよ」

圭「うん、また学校で話しかけてみるよ。今までも一応何度か見か

けてはいるんだけど……あれでしょ、くるみ先輩って陸上部にいる……ツインテールの人だよな？」

圭は自らの髪……その両端を指でつまみ、ツインテールを示すジェスチャーをする。美紀が知る限りでは陸上部・ツインテールの女子は胡桃のみだった為、美紀は首を縦に振った。

美紀「たぶんそう、その人がくるみ先輩」

圭「ふむふむ……。前にチラツと見て思ったんだけど、くるみ先輩ってスタイル良いよね。陸上部だからなのかは分かんないけど……ほら、引つ込むところは引つ込んで出るとこは出てる！みたいな？」

美紀「みたいなの？とか言われても……。でも、確かにスタイルはいいと思うよ」

圭「スタイルと言えば！リーさんってあのリーさんだよな!? 胸がおっきい事で有名な……」

圭がその目を大きく見開き、顔を寄せて美紀に尋ねる。

美紀「たぶんそのリーさんだと思うけど、えっ……リーさんって胸が大きい事で有名なの？」

圭「うん、有名だよ。学年……っていうか学校の中でもトップクラスのものだろうからね。そーゆーのが好きな男子の中で高い人気を誇っているのかなんとか……」

美紀「へえ……知らなかった……」

知りはずなかつたが納得は出来る話だ。確かに悠里の胸はかなり大きい……それこそ、美紀ですら初対面の時は一瞬あの胸に視線がいつてしまった。更にあれだけ整った顔だ……。男子からの人気が高いと言われれば納得せざるを得ない。

圭「あつ、ゆき先輩も人気があるって話を聞いた事あるな」

美紀「ゆき先輩が？」

圭「うん。ゆき先輩って三年生なのに子供っぽいところあってさ、なんか可愛いでしょ？相手が誰でもずっとニコニコしてるし、もしかしたらファンクラブとかあるかも…」

「あははっ、それは確かにあるかもね」

彼が楽しげに笑いながら言う。思えば、彼が最初に仲良くなったのも由紀だった。分け隔てる事なく、誰とでも笑顔で接する事の出来る由紀……彼女に癒された人間は校内に多いかも知れない。そんな話をしてしていると、美紀が思い出したように口を開いた。

美紀「そういえば前……くるみ先輩をじっと見てた娘がいたなあ」

圭「じっと見てた？それってどういうこと？」

美紀「私にも分かんないけど、前にちよつとだけ陸上部の練習を見に行ったの。その時にね……二階の窓からじつと、くるみ先輩だけを見てる娘がいて」

「……それって」

圭「怖い話……とかじゃないよね……？」

もしかして、美紀には見えてはいけけないものが見えていたのでは……。そんな事を思った圭、そして彼の顔がひきつる……。二人のその表情に気付いた美紀は首を横に振り、その少女の話を続けた。

美紀「怖い話じゃないよ。その娘二年の娘だし……。クラスが違うから名前までは分からないけど、たまに見かける娘だった」

圭「ふうん……どんな娘？私なら分かるかも」

別のクラスの生徒とも交流が深い自分ならその女子の名前が分かるかも知れない。そう思って美紀に尋ねる圭だったが……。

美紀「うくん……髪が長くて、茶髪で……お嬢様っぽい感じの娘……」

圭「髪の長い……お嬢様っぽい娘……。二年の娘なんだよね？」

美紀「うん」

圭「クラスは？」

美紀「…分からない」

圭「ちよつと情報が少ないなあ…。私にも分かんないや」

他のクラスにも少なからず友達にいる圭だったが、美紀から知らされた情報のみではその人物が誰なのか分からなかった。だがいくら圭といえど同学年の生徒全員を知っている訳ではないので、もしかしたら最初から知らない娘なのかも知れない。

「…で、その娘はずつと胡桃ちゃんを見てたんですか？」

美紀「最初は私の勘違いかと思ったんですけど、やっぱりくるみ先輩を見ているようでした」

圭「ファンとかじゃない？くるみ先輩、同姓から好かれそうだし」

美紀「…そうかもね」

彼に『好きな女子はいるか？』と尋ねた事で始まった会話はいつの間にか別の方向へ向かっていったが、誰一人としてそれに気付いていない。三人は、今ここにいない友達や知り合いの話をする事に夢中になっていた。

圭「先輩、佐倉先生のことどう思います？」

知人達の話をしている内、圭が学校の教師…佐倉慈の印象を彼に尋ねる。

「んん…。可愛い人だね。教師なのに教師っぽくないっていうか…年上なのに年上っぽくないっていうか…。年上の女の人をどう思うった事ってあまりないんだけど、あの人は特別だな…」

圭「もし佐倉先生と付き合わなきゃいけないようになったらどうします？付き合いますか？」

「余裕で付き合う」

教師と生徒：そんな関係にありながら彼女と恋する様を想像し、彼はニツと微笑む。そんな彼の即答を聞いた圭はあははと笑い、この話を続けた。(一方、美紀は彼に冷やかな目線を向けていた…)

圭「でもまあ私が本当に聞きたかったのはそういう話じゃなくて…」

「違ったのか…」

圭「先生としてどう思うか…って事ですネ」

笑顔から一転…真面目な表情で圭が言う。突然の問いに彼、そして美紀も不思議そうな表情をしていたが、圭がこんな事を尋ねたのには理由があつた。

圭「いや…この前、佐倉先生が教頭先生に注意されてるの見ちゃつて…。佐倉先生は生徒との距離が近すぎる…とか、友達感覚で接するのは…とか、色々言われて…ちよつと可愛そうだなって…。佐倉先生はああいうところが魅力的なのに」

美紀「なるほどね…。確かに他の先生と比べるとそう見えるかも知れないけど、それって悪いことかな…。私はそう思えないけど…先輩はどう思います?」

「…同じく。あの親しみやすさが佐倉先生の魅力だから、それをわざわざ無くす事はないと思う。先生が変に変わると由紀ちゃんが嫌がるだろうし…」

由紀と慈…。二人が話しているのは校内でよく見かける。それは慈が由紀に勉強等の注意をしていたりというものもあるが、何気ない会話を楽しいに交わしている事がほとんどだった。二人で話すその様はまるで姉妹のように見える事もある。思い返せば、慈と最も親しくしているのは由紀かも知れない。

圭「…ま、大丈夫だとは思うけど、やっぱりちよつと心配なんだよね。落ち込んだりしてないかな〜って」

美紀「…そうだね」

圭と美紀…そして彼。ここにいるこの三人の他、由紀に悠里に胡桃も佐倉慈の事は気に入っている。他の生徒達の中にも彼女の事が好きだという人は多いだろう…。確かに友達感覚で接している点はあるが、それでも皆は教師としての彼女も信頼していた。

(もし気にしてそうだったら、少し慰めてあげようかね…。余計なお世話かもだけど…)

ふうつとため息をつき、窓の外を見る…。雨はあれだけの勢いで降っていたのが嘘のような小雨に変わっており、美紀達はいつでも帰れる状態になっていた。しかし三人はその後も身の回りの事で話し込み、美紀と圭がようやく立ち上がったのは二時間後だった…。

美紀「じゃあ、また学校で」

家の玄関にて、彼から傘を借りた美紀はニコツと微笑みペコリと頭を下げる。圭もまた彼から傘を借り、玄関に置いていた自分の靴を履き直していた。

圭「傘はどうやって返す？学校で？それともまたここに来る？」

美紀「あつ、そうか……。学校で渡されても困るだろうし…。じゃ、

近い内にまたここに来ますね」

「わざわざどうも。その時はついでに太郎丸とも遊びますか?」

美紀「ええ、もちろんです」

リベンジに燃える美紀の目がキラリと光ったような気がする…。その様を横で見ている圭は『あはは』と笑い声をあげた後、玄関の戸を開いて外へと出た。美紀もそれに続き外に出るとパラパラ降る小雨に体が濡れないよう借りた傘を開き、圭と二人して彼に頭を下げた。

美紀「お邪魔しました。今日は…楽しかったです」

圭「また来ますね♪」

「んん、いつでもどうぞ」

手を振りながら二人の事を見送り、そして家の中へと戻る。これで部屋の中は彼と太郎丸のみの空間になった訳だが、美紀と圭がいなくなった途端…今度はこの空間がやけに広く感じた。



## 第十八話 『見ているだけで…』

休みが明け、初日の校舎…。丈槍由紀が彼にそれを渡したのは長かった授業が全て終わり、辺りが夕焼けに染まり始めた放課後の事だった…。

由紀「この前、お買い物もの付き合ってくれたでしょ。だからそのお礼！わたし、ほんとにがんばったんだよ♪」

「へえ…それはそれは…」

突如由紀から手渡されたそれを見回しながら、彼はそれが何なのかを必死に考える。手のひらに収まる程度のサイズのぬいぐるみ…頭頂部にチェーンが付いている事、そして市販の物より遥かに不格好な事から手作りのキーホルダーだということは分かる。だが、逆に言えばそれしか分からない…。それほどにこのぬいぐるみの顔は歪いびつで、何をモデルにした物なのか分からなかった…。

（丸っこい角…いや、耳？…それが頭の上に二つ…。鼻っぽいものも一つ…。目は二つ…。うん、一応動物みたいだな…）

全身茶色のぬいぐるみ、その顔部分をじつと見て、これがなんらかの動物である事には気付く。しかし分かったのはそれだけ。これが何の動物なのかまでは、いくら観察しても分からない。

由紀「えへへ、良くできてるでしょ？」

満面の笑みで由紀が尋ねる…。

彼女のこの笑顔をぶち壊したくない彼は必死にこのぬいぐるみの正体を探るが、それを探るにはあまりに時間が不足していた。ぬいぐるみの口と思われる部位は歪んでいて何だか怖いし、目も失敗した福笑いのようにずれている…。一体、何を模した物なのだろう…。

(はやく答えなくては…由紀ちゃん表情がだんだん曇りだしてる。よし…勘で答えよう。ええっと…見た目的には恐竜か何かに見えないことも無いけど、この人が作ったんだからたぶん、犬とか猫とか…その辺だよな…。いや、これが何なのかにはあえて触れないでおこう…)

「本当に良くできてる。あ、ありがとう…」

ぬいぐるみの正体は分からないが、こう答えておけば由紀も満足するだろう。直後、由紀がパアツと笑顔になるのを見てこれが完璧な返答だったのだと思いきや安堵する彼だったが、話はここで終わらなかった…。

由紀「喜んでもらえてよかった♪…ところで、これ何か分かるよね？」

「ツ…!!?」

彼の手におさまっているそのぬいぐるみをツンと指先でつつき、由紀はまたニツコリと微笑む。とても可愛らしい笑顔のだが、この時の彼にはそれを眺めて楽しむ余裕など無かった。

「えっと…これね…うん、わかってるよ…あれだよね…ほら…」

このぬいぐるみが何を模した物なのか…。そんなの分かるわけではない。それが分かる人間など、作り手である由紀以外にはいないだろう。

う…この歪なぬいぐるみを見つめていると、どうしてもそう思ってしまう。

由紀「……あれ？もしかして…分からない…？」

笑顔から一転、由紀の表情が曇りだす。それを見た彼の鼓動は焦りによって高まり、ぬいぐるみを握る手からは嫌な汗が吹き出す。彼は仕方なく全てを運に任せ、小声で呟いた。

「い、犬…でしょ…？」

由紀「…犬？」

由紀が首を傾げている…。この反応からして、彼の答えは外れたのだろう。由紀は彼の手からそつとぬいぐるみを奪い、深いため息と共に近場の机へ顔を伏せた。

由紀「うう…これクマなのに………」

(クマっ!!?)

彼は思わず、由紀からぬいぐるみを奪い返してしまう。由紀はそれに少し驚いていたがそれどころではない。これが『クマ』だと知った上で、もう一度その姿を見ておかなくては。

(たしかに…色はクマっぽいな……。でも、逆に言えば色しかクマ要素がない。あとは…目が二つ、耳二つ、口一つ…ここもクマと同じだな…)

色は茶色、目は二つ、耳も二つ、口は一つ…そして顔とほぼ同じくらいの大きさの体には四本の手足が。これらの特徴を聞くとクマだと分かりそうだが…見た目のインパクトがそれらの特徴を打ち消す。口は異様に小さいし、目なんて左右で大きさが二倍近く違うのだ。

由紀「一生懸命つくったのに…犬と間違われた…。絶対クマだって分かると思っただのに…」

「あ…いや、分かるよ…？ただ、犬にも見えるなあ…と思って…。ほら、そもそもクマ自体が犬と似てるでしょ？」

言うほど似てるだろうか？いや、似てるはずだ。彼は心のなかで自問自答してしまう…。そんな彼の発言を聞いた由紀はそれに納得したのか、少しだけ笑顔を取り戻して顔を上げた。

由紀「そう…だね。似てるよね！クマと犬！わたし、どっちも可愛いから好きだよ♪」

「あは…は…」

もう愛想笑いしかできない…。しかし由紀の機嫌は直ったのでよしとしよう。そう思いながら彼がもらったそのぬいぐるみをカバンにしまった直後、由紀はパンっ！と両手を叩いた。

由紀「よしっ！あとはりーさんとくるみちゃん、それからみーくと圭ちゃんにもあげないと！」

「…えっ？」

真顔になる彼をよそに、由紀は自分の席へと戻ってカバンを手に取り。由紀は笑顔で彼のもとに戻るやいなやそのカバンを開け、奥に眠るそれを見せた…。

由紀「お世話になってるみんなに配ろうと思って、いっぱい作ったんだ♪」

「……………」

開かれたカバン…………そこに詰められた教科書や筆箱の更に奥…………

そこには彼が先程もらったのとほぼ同じ見た目をした異形の者が四体も眠っていた…。

(うわあ……見れば見るほどクマには見えない……)

由紀「えつとく、リーさんはさつき出ていったばかりだから追いかければ間に合うかな？くるみちゃんは部活だからまだ余裕あるし……みーくと圭ちゃんには待っててもらってる……。よし、どうにか今日渡せそうだね！」

(出来れば渡さないほうが……)

お世話になってる者への感謝の心はありがたいが、その気持ちだけで十分な気もする。他の皆にはこのまま渡さなくても良いのでは……一瞬そう思ってしまう彼だったが、すぐにその考えを改めた。

「……よし。僕もついてくんで、渡すところ見てもいい？」

由紀「うんっ、別にいいよ♪」

笑顔の由紀と共に教室を出て、まずは悠里を探す。彼が何故由紀に同行したのかというと、ぬいぐるみを渡された際のそれぞれの反応に興味を湧いたからだ。もしかすると、中にはこれがクマだと見抜く人間もいるかも知れない。

くくく

由紀「おっ！リーさあん！」

第一ターゲット、若狭悠里を廊下の先で発見する。

彼女はそのまま帰るつもりだったようで、真っ直ぐ下駄箱に向かっているところだった。

悠里「あら。ゆきちゃん、どうかした？」

由紀「あのね、ええつと……どこかな……あつた、はい！これ！」カバンに手を入れた由紀はゴソゴソと中を探り、手に取ったそれを悠里へと手渡す。悠里はその頭頂部についたチェーンをつまみ、不思議そうな顔をしていた。

悠里「……これは？」

由紀「普段お世話になってるりーさんへ、わたしからプレゼントだよ♡手作りのキーホルダーなの！」

悠里「ゆきちゃんの手作り……。ふふっ、ありがとう♡」

手作りという事が嬉しかったのか、悠里はニコニコと笑いながらそれを自分のカバンにしまう。もちろん話はここで終らず、由紀は悠里にあの問いをぶつけた。

由紀「それでね…その子、何の動物かわかる？」

悠里「ええ、クマでしょう？」

(なっ!?)

さらっと正解を告げる悠里……。あれのどこを見てクマだと思ったのかは分からないが、彼女は確かにそう答えた。その答えを聞いた由紀は満面の笑みを浮かべ、そのまま彼女に抱きつく。

由紀「あたりく♪上手にできてた？」

悠里「ええ、とても可愛らしいクマさんね♪」

由紀は悠里に抱きついたまま、その胸元に顔を埋める。そんな由紀の頭を優しく撫でる悠里を見て、彼は心底彼女の事を尊敬した。あれ

をクマだと見抜けるなんて、悠里は本当に凄い人だと…。

(…というか、りーさんの胸に顔を埋めてる由紀ちゃんが羨ましい。頼んだら位置交換してくれたり…：…するわけないよな)

悠里の大きな胸に顔を埋める由紀を見てこんなどうしようもない事を思ってしまう自分を少し情けなく思ってしまうが、男なので仕方のない事だろう…。そう自分に言い聞かせた後、彼は由紀と共に次のターゲット…直樹美紀・祠堂圭の元へと向かった。

~~~~~

由紀「あの二人には今日のお昼に一回会ってね、放課後に校門のそばで待ってて言って言っておいたの」

「なるほど…。というか、昼に会ったその時に渡せば良かったのでは？」

由紀「えへへ…わたしも最初はそうしようと思って二人に会いに行ったんだけど、ぬいぐるみ教室に忘れちゃって…」

照れたようにして笑う由紀を引き連れ、下駄箱で靴を履き替える。そうして外へと出て歩いていくと、校門のそばにいた美紀と圭の二人が由紀達の方へ手を振っていた。

圭「ゆきせんぱーい…と、もう一人の先輩もご一緒じゃないですか！」

「まあ、色々あって…面白そうなんできてきたわけで…」

彼が圭とそんな会話を交わす中、由紀はさっそく美紀にアレを手渡していた。直後に圭がその様子を横から不思議そうに眺めていると、由紀は彼女にもアレを手渡す…。

美紀「んっ？なんですか…これ」

圭「ぬいぐるみ…？あつ、チェーンがついてるからキーホルダーなのかな？」

由紀「うんっ！わたしが作ったキーホルダーだよ。二人にプレゼントね♪」

圭「うわあ♪ありがとうございますっ！ほんと、ゆき先輩はこーいうところが可愛いんだよな〜♡」

美紀「…ありがとうございます…」

由紀「えへへ〜♪」

それを受け取った圭は嬉しそうな笑顔を浮かべながら由紀の方に体を寄せ、子犬でも撫でるかのようにして彼女の頭を撫でる。由紀はニコニコと笑っていて幸せそうであり、そんな二人の様子を見た彼も思わず笑顔になった。

（圭ちゃんと由紀ちゃんって…いつもこんな感じなのかな。これは良い光景なんだけど、アレだな…：由紀ちゃんが圭ちゃんの先輩に見える…）

どちらかと言うと、先輩が可愛い後輩の頭を撫でているように見える。しかし実際は頭を撫でられている由紀が先輩で圭が後輩なのだ。ここまで距離が近い先輩・後輩というのも珍しいのではないだろうか…。

美紀「……………ん…ん…？」

(美紀さんは確実にアレの正体が分かってないな…)

圭が由紀と触れあう一方、美紀はキーホルダーを手に険しい表情をしている。どうやら、彼女は先程の彼と同様にアレの正体を探っている最中らしい。

由紀「…でねっ、今渡したそれ、何の動物か分かる?」

またしても飛びてた質問…。それを聞いた圭は由紀を撫でるのを止め、そのキーホルダーを改めて見直していた。

圭「んっ? ええつと…これは…:…あつ! イノシシですよね!?!」

由紀「うっ!?! ちがうよ圭ちゃんっ! もつとよく見てっ!」

圭「すっ、すいませんっ! …:…えつと…:…わかった! マンモスですか!?!」

由紀「ちがうっ! 全然ちがうっ!!」

圭は瞬く間に二度答えを間違え、由紀の機嫌が悪くなっていく…。圭は由紀の様子を見て慌てはじめており、先程同じ道を通った彼にはそんな圭の気持ちがいほど理解できた。

(やっぱり、クマって分からないよなあ…:…)

美紀「…:…:…」

由紀「…みーくんは分かるよね?」

圭ではダメだと悟ったのか、由紀はターゲットを美紀に変更する。美紀は手に持ったキーホルダーを顔のそばまで寄せて眺めていたが、由紀に尋ねられた瞬間にそれをそつと下げ、ニコツと微笑んだ。

美紀「ふふっ…:…当たり前じゃないですか…。ほんと、良くできてい

ます。先輩、がんばって作ってくれたんですね…。嬉しいです」

由紀「ほんと？うれしい？…えへへ♪ならよかつた♡」

笑顔で告げる美紀だったが、その表情はどこかぎこちなくも見える。恐らく、彼女は適当な言葉だけを述べてこの場をやり過ごすつもりなのだろう…。実際、由紀はまだ美紀が自分の問いに答えていない事に気付かぬまま、その場をあとにしようとしている。

(美紀さん…なんて人だ…。これが頭脳プレイってやつか…)

上手くその場をやり過ごした美紀を見た彼は微かに身震いすら覚えるが、話はここで終わらない…。圭が美紀の手をガシツ！と掴みある事を呟いた直後、由紀がまた美紀の前へと戻っていったのだ。

圭「美紀ちゃん…：…そういうのは良くないと思うな…」

美紀「ちよっ…!?!圭っ！」

由紀「ん？そういうのって…?？」

圭「美紀ちゃん、本当にこれが何か分かってるの…?わたしには適当にごまかしただけみたく見えただけ…」

美紀「わ、わかってるって！」

圭に手を掴まれ、由紀に迫られた美紀の目がやたらと泳ぐ…。やはり、本当は答えなど分かっていないようだ。

由紀「圭ちゃん、友だちを疑っちゃダメだよっ！みーくんは本当にこの子は何なのか分かってるんだから！ねっ、みーくん？」

美紀「え、ええ…。もちろん…」

圭「じゃあ答えてみなよ！ほら早くっ！」

自分だけ良い顔をしようとした美紀が許せないのか、圭がグイグイと攻めていく。とうとう観念した美紀は深いため息をついた後、その

キーホルダーをじっと見つめて呟いた。

美紀「え……と……こまいぬ 狒犬……ですかね？」

由紀「……………こまいぬ??」

由紀がぐくつと首を傾げる。どうやら狒犬が何なのか分からないらしい。

「狒犬ってあれだよ……ほら、神社とかにいますよ」

由紀「神社……あつ、シーサーみたいなやつ？」

「シーサー……うん、そうだね……似てるね」

由紀「ああ、あれか……」

狒犬が何かを理解し、由紀が首を縦に振る。

美紀はそんな彼女の元に歩みより、恐る恐る尋ねた。

美紀「せ、正解ですか……?」

由紀「全然ちがうよっ!!」

ムツとした表情を美紀へ向け、由紀は怒声をとばす。普通先輩に怒鳴られたら多少の恐怖を感じるだろうが、美紀がまるで恐怖を感じていないのは相手があのだからだろう。

美紀「すいません……全然分からなくて……」

圭「ちなみに正解は……?」

由紀「……クマだよ」

美紀「…クマ…クマ…クマ…クマ…？」

圭「それは…わからないなあ…」

やっぱりというか、当然というか…答えを聞いた二人の後輩は苦い顔をしてそのクマのキーホルダーを見つめる。二人はその後、色々と言いつて由紀の機嫌を直し、学校をあとにした。

~~~~~

由紀「最後はくるみちゃんだけど…わかってくれるかな…」

「大丈夫だよ。自信を持つて!!」

由紀「…ありがとう。でも、キミもこの子がクマだって分からなかったよね…」

「……………」

そう言われると、彼は言葉を返せなくなる…。

肝心の胡桃は現在陸上部の練習をしている真っ最中なので、彼と由紀はグラウンドの隅で無言のままそれが終わるのを待っていた。

(やっぱり、リーさんは凄い人だったな…)

自分と美紀と圭、三人が分からなかったそれを唯一クマだと見抜いた悠里…。彼女の偉大さを染々実感しながら顔をあげると、陸上部のメンバーがグラウンドを一生懸命に走っていた。その中には胡桃の姿もあり、彼と由紀はそつと手を振る。

胡桃「……!!?」

グラウンドの隅で待つ二人に気付いた途端、胡桃は恥ずかしそうな顔をして二人から目を逸らす。部活の見学に知人が来たというのが恥ずかしいのだろうか？彼と由紀が同時にそんな事を思うと、胡桃は他の部員の目を盗んでそっと手を振り返してくれた。

由紀「あはは、くるみちゃん照れてるみたい♪」

「中々良いリアクション……。これから毎日通おうかな」

由紀「たぶん……。毎日だと怒られるよ?」

「……だろうね」

彼氏でも何でもない人間が毎日毎日部活を見学していたら、それはかなり恥ずかしいだろう。いや、仮に彼氏だったとしても恥ずかしいに違いない……。そんな事を考えながら陸上部員の向こう……。そこに立つ校舎を何気なく見つめると、二階の窓に一人の少女の姿が……。彼女はどうかやら、陸上部の練習を眺めているらしい。

(そういえば、美紀さんが言ってたな……)

先日、美紀から聞いた話を思い出す。練習中の陸上部員を見つめていた二年の少女がいて、恐らく彼女は胡桃の事を見つめていた……。という話を。

「……由紀ちゃん。ちよつとここで待ってて」

由紀「えっ?どこいくの?」

二階にいるあの少女が気になり、彼は由紀を置いて校舎へと戻る。グラウンドから下駄箱へ……。下駄箱から二階へと上がるまでに数分しかかってしまったが、少女はまだ窓際において下の様子を眺めていた。

「…あの、ちよつといい？」

??? 「えっ？な、なんでしよう？」

突如声をかけられ、少女は驚いたように振り返る。

その時に揺れた少女の薄茶色の髪は腰元まで届く程に長く、微かにカーブがかかっていた。

（なんていうか、お嬢様っぽい娘だな…。あつ、そういえば美紀さんも同じような事言ってたか）

長く綺麗な茶髪の似合う整った顔付き…。美紀が言うには二年の娘らしいが、それにしても幼くもみえる…。制服から覗く手足も細く、運動などはあまり得意では無さそうな印象だ。そんな華奢な手足をしている童顔な彼女だが…よく見ると胸は悠里に引けを取らないほど立派な物を持っていた。

??? 「あの…それで、私になにか？」

「あ、ああ…ごめんね。君、陸上部の練習見てたでしょ？陸上部に入りたいの？」

??? 「いつ、いえっ！そんな事は…。そもそも運動とか苦手ですし…」

ここまででは彼も予想できていた答えだ。問題は次の質問…。彼はいきなり、核心を突いてみる事にした。

「もしかして、胡桃ちゃんのファン？」

??? 「な…っ…!?ふ…わ…ああ…!!」

軽い気持ちで聞いてみたが、彼女の顔はみるみる真っ赤に染まっていった。どうやら当たりらしいが、ただのファンとはどこか違うような気もしないでもない…。

??? 「え、恵飛須沢先輩には内緒にして下さいっ！私みたいな奴が  
コソコソ覗いてたって知ったら…絶対に気分を悪くしちゃいますっ  
！」

「内緒にしてて言うならしとくけど、覗いてた人が君みたいな女  
の子なら気分を悪くしたりはしないと思うよ？そりや男にジロジロ  
見られてたってなら多少気分を悪くするかもだけど…」

??? 「いや…ここは秘密にしておいて下さい！あなたと私だけの秘密  
に…えつと、あなた…お名前は…？」

少女は恐る恐る彼に名前を尋ねる。彼が少女に自らの名前、そして  
学年を告げると、少女はぺこっとお辞儀をしながら自己紹介を始め  
た。

歌衣 「私は歌衣…。那珂歌衣と言います。クラスは二年A組です。  
先輩は三年C組…ということは、恵飛須沢先輩と同じクラス…。良  
いなあ…」

彼のクラスが胡桃と同じだと知り、歌衣はため息をつく。  
どうやら本当に胡桃の事が好きなようだ…。

「ええつと…歌衣ちゃんは本当に胡桃ちゃんのファンなの？」

歌衣 「ファン…といえばそうですし…。違うといえば違いますし  
…」

歌衣は両手の人差し指を突き合わせながら、分かりやすくモジモジ  
とした反応を見せる。ファンといえばファン…違うと言えば違う…。  
彼はこの言葉の意味が分からず、頭を悩ませた。

「んん…う…とりあえず、歌衣ちゃんが見てたのは胡桃ちゃんなんだよ

ね? どうして見てたの?」

歌衣「その…恵飛須沢先輩を見てるこの時間が好きなんです。あの人を見てると胸が温かくなってきた…かっこいいなあ…素敵だなあ…って色々考えてる内に…最近は何をしてても先輩の事ばかり思うようになって…」

(…ん? それって…いや、女の子同士だし…違うか…)

窓から胡桃を見つめ、頬を赤く染めながら歌衣は語る…。その様子を見た彼は一瞬ある可能性を思い浮かべたが、女性同士でそれはあり得ないと考えた。

歌衣「遠くでもいい…こうして眺めているだけで良いんです。それだけで…私は幸せだから…。だからその、改めて言いますが恵飛須沢先輩には内緒にしてももらえますか? 見てるだけで、邪魔とかはしませんから…」

彼にすぎるような目を向け、歌衣は頭を下げる。彼女は本当に胡桃を心の支えにしているのだろう…。必死な声や深々と下げられた頭から、それを察する事が出来た。

「さっきも言ったけど、内緒にして欲しいなら黙ってるよ。…でも、遠くから見ただけってのも何かつまらないでしょ。せつかくだし会って話してみない?」

歌衣「いつ?! いえ…無理ですっ…! あの人と…恵飛須沢先輩と話すなんて…」

「大丈夫。歌衣ちゃんは僕の知り合いつて事にして紹介するから」

彼は右手をそっと歌衣の方へと差し伸べる…。これまで遠くから見ていただけの胡桃と話せる…それは歌衣にとってとつともなく幸せな事だが、同時に怖くもあった。万が一拒絶でもされたら…そう思うと彼の手を取れない…。



歌衣「もしかしたら、今まで私が見てたのも気付かれてて…会った  
ら気持ち悪い女だと思われるかも……」

不安でしようがなくて彼に言う…。それを聞いた彼はおかしそう  
に鼻で笑った後、差し伸べた手を更に彼女へと寄せた。

「歌衣ちゃんがこれから会うのは、あの恵飛須沢胡桃だよ。あの娘が  
そんな事を思う訳はない。歌衣ちゃんも…あの娘を見てきたなら分  
かるでしょ？」

歌衣「……………」

歌衣は今一度、これまで見てきた胡桃の事を思い返す…。ずっと遠  
くで見てただけの彼女だが、それでも胡桃がどんな人物かは見当がつ  
いていた…。

歌衣（いつも明るくて元気なあの人…。こんな私でも…あの方は笑  
顔で接してくれるかな…）

きっと笑顔で迎えてくれる…。自分が好きになった恵飛須沢胡桃  
という人物はそういう人のハズだから。歌衣はしばらく考えた後に  
勇気を振り絞り、彼の手を握った。

歌衣「私…あの人に会いたいです…。会って、お話してみたいです  
…」

「…よし、じゃあ行こう」

小さな歌衣の手を握り返し、それを引いて彼は胡桃の元へと向か  
う。初めて胡桃と話す事が出来る…そう思うだけで歌衣の胸の鼓動  
は高まり、自然と笑顔になった。

歌衣（あの人と話せるんだ…。大好きな…。あの人と…。）

## 第十九話 『色々な人たち』

歌衣「あ、あの…私は本当に恵飛須沢先輩と会って良いんでしょうか？」

「会いたいでしょ？なら会えば良い。自分を好いてくれる後輩がいると知れば胡桃ちゃんだつて喜ぶだろうし」

胡桃の事を二階から見っていた少女…『那珂歌衣』の手を引いて彼は歩いていく。二人はすぐに胡桃らがいるグラウンドへとたどり着いたが、歌衣はやはり緊張するらしく顔を俯けていた。そんな二人のもとへ、一人グラウンドに残らせていた由紀が駆けつける。

由紀「おそいよ！どこに行つてたの？…つて、その娘は？」

歌衣「……………」

彼と手を繋ぐその少女に見覚えのない由紀は首をかしげ、そのそばに寄る。すると歌衣は俯けていた顔を静かに上げ、そばにたたずむ由紀の事を見つめ返した。

歌衣「私は二年の…那珂歌衣つていいいます…」

由紀「ういちゃんだね？わたしは三年の丈槍ゆき！よろしくね♪」

歌衣「……はい」

につこりと微笑む由紀を見て安心したのか、緊張が解れたのか…歌衣も少しだけ笑顔を見せる。彼と由紀…そして歌衣の三人はそのままグラウンドの隅へと移り、陸上部の練習が終わるのを待った。

由紀「…で、ういちゃんはキミとどういう関係なの？」  
横に座る彼の顔を覗いて由紀が尋ねる。彼は遠くで走る胡桃を見つめつつ、歌衣の事を由紀に説明した。

~~~~~

由紀「へえ、つまり、ういちゃんはくるみちゃんファンなんだね！いいなあ…わたしも自分のファンが欲しいよお…」

「…探せばいるかもよ」

由紀「ほんとっ!?よし…また今度探してみよう…。出来るなら可愛い後輩の女の子とかがいいなあ♪ういちゃんみたいなの！」

歌衣「ふふっ…丈槍先輩なら、きっと沢山のファンが見つかりますよ」

由紀「そうかな？そうかなっ!?!…えへへ」

まだ見ぬ自分のファン達に囲まれる様を想像したのか、由紀がニタニタとだらしなく笑う。どうやら歌衣も由紀には慣れたようで、二人は普通に会話をしていた。

…しかしそれから約二十分後。

陸上部の練習が終わり、胡桃が三人のそばへと駆けつけてきた瞬間…これまで由紀や彼と普通に喋っていた歌衣の様子が少し変わった。

くくくく

胡桃「おいっ！何でお前らはずっとここにいるんだよっ！」

由紀「胡桃ちゃんに渡したい物があった」

胡桃「なら校門で待ってれば良いだろ！」

由紀「えく！…あ、わかった！くるみちゃん、わたしたちに練習見られるのが恥ずかしかったんでしょ」

胡桃「ぐ…う…」

少し顔を赤く染めた後、胡桃はそつと頭を抱える。どうやら、ずっと練習を見守られていたのが本当に恥ずかしかったらしい。まあそれもそうだろう…。今この学校のグラウンドには陸上系の部員達しかいないのに、胡桃にだけは帰りを待つ人間がいたのだから。しかも、由紀に限っては練習中の胡桃の名を呼びながら手を振ることすらあった。

胡桃「ゆきが手を振る度、何度も何度も部員のみんなにからかわれたんだぞ…」

恥ずかしそうに顔を俯けて胡桃が呟く。由紀はそんな様子の彼女を気にもせず、黙っていた歌衣の肩を押した。直後、歌衣は由紀に押しされた事で胡桃と目が合ってしまった、慌てたようにパタパタと手を動かす。

歌衣「わ…わっ………」

胡桃「ん？…そういえば、あんたは………」

歌衣「わっ…わたしは……その………」

胡桃「……………」

胡桃を前にした歌衣は激しく緊張してしまっているようで、このま

までは埒が明かない。なので彼は二人の間に割って入り、歌衣の事を胡桃へ簡単に紹介した。

「この娘は那珂歌衣ちゃん。二年の娘なんだけど…まあ仲良くしてあげて」

胡桃「…那珂うい、ね。わかった、あたしは恵飛須沢胡桃だ。よろしくな？」

胡桃はニコツと微笑み、歌衣に手を差し出す。歌衣はそれに戸惑っていたようだが、彼女もすぐにニコツと笑い、差し出された胡桃の手を両手で握りしめた。

ギユ…ツ…

歌衣「よろしく…お願いします…」

胡桃「…ああ、よろしくっ！」

憧れの胡桃と会話をかわし、こうして握手まで出来た歌衣は幸せそうに微笑む。握手した事で少し緊張も解れてきたようだったが…。

由紀「ういちゃんはね、くるみちゃんのファンなんだって！」

歌衣「っ…!!」

胡桃「…ファン？あたしの？」

由紀がそう発言した事をきっかけに、歌衣はまた顔を俯けてしまう。ファンだと言われ、自分の事をどう思われただろうか…。嫌われたりしたらどうしようか…。歌衣はそんなネガティブな事ばかりを考えてしまう。

胡桃「そういえば、たまに校舎から見てたよな？あれって、まさかあたしの事を…？」

歌衣「えっ!?えっと、それはっ…!」

歌衣（どうしよう、気づかれてたんだ…。うわあ…もう死にたい…）

きつと気持ち悪いと思われたに違いない。そう思った途端に泣きそうになってしまう歌衣だったが、直後…胡桃は照れくさそうに笑った。

胡桃「フアン…かあ。なんか照れるけど、まあ悪い気はしないな」

歌衣「えっ…?ほんとですか…?」

胡桃「ああ。もし良ければこれからも見学に来いよ。グラウンドの隅の方なら邪魔にならないから」

歌衣「……………」

あの胡桃が『悪い気はしない』と言い、そして笑顔を見せてくれた…。歌衣はそれに驚き、目をまん丸にする。一方、二人の話を聞いていた由紀は不満そうな表情を浮かべ胡桃に抗議した。

由紀「おかしいよっ!わたしだってグラウンドの隅で見てたのに、くるみちゃん怒ったじゃん!」

胡桃「お前はうるさいの!!走ってる最中に名前呼ばれたり、ブンブン手を振られるあたしの気持ちを考えろ!授業参観で親がはしゃぐのと同じくらいハズかったぞ!!」

由紀「ういちゃんは良いのにわたしはダメなんて…」

由紀がガクツと肩を落とす。そんな彼女に追い打ちをかけるようにして、胡桃はそばに立つ歌衣と彼を交互に指さした。

胡桃「ういとコイツは静かくに見てたから良いんだよ。ゆき、お前はちよっとうるさいっ!だからだめっ!」

「じゃあ僕はこれから毎日見学しにきてもオーケー？」

胡桃「いや：毎日はちよつと：。つてかお前は一人でくるなよ!!」
「どうして?」

彼が軽く首を傾げる。それを見た胡桃は小さくため息をつき、また微かに顔を赤く染めた。

胡桃「だって……彼氏だと思われるかも知れないじゃん……」

「ああ、思わせてしまえばいい」

胡桃「なっ!!?」

彼が冗談混じりに言うのと、胡桃の顔の赤みはみるみる強くなっていく。その直後だった：彼の隣に立っていた歌衣が彼の袖を掴み、その顔を真っ直ぐに見つめていた。

歌衣「あ、あなたと恵飛須沢先輩は：ただの友達ですよね……?」

「えっ?」

歌衣「恵飛須沢先輩っ! そうですよね!?! 友達ですよね!?!」

胡桃「えつと……まあ……：友達だけど……」

これまで物静かな雰囲気を纏っていた歌衣だったが、その瞬間だけは異様に覇気があった。その様子に彼や由紀：胡桃も圧倒される。

歌衣「で、ですよね……!……ふう」

深くため息をつき、安堵の笑みを浮かべる歌衣……。そんな彼女を見た胡桃はあることを思い出し、彼の顔を見つめた。

胡桃「：そういえばお前、ういと手を繋ぎながら来ただろ? まさかとは思うけど……ういはお前の彼女だったりしないよな?」

「さて、それはどう——」

歌衣「違うに決まってるじゃないですか……」

せつかなので『それはどうかな?』と冗談を言おうとしたのに、歌衣の声がそれを遮る。しかも、歌衣の声は明らかに不機嫌そうだった。

「あの…歌衣ちゃん? 怒ってる?」

恐る恐る声をかける…。歌衣はそれに答えることなく、一人俯けて何やらブツブツと呟いていた。

歌衣「…そうだよ、ただここに来るだけなら手を繋ぐ必要なんてなかったのに…。なんで手を繋いじやっただらう…。だいたい、初めて会った後輩と手を繋ごうとするなんてどんな神経して…。こんな人…くるみ先輩のそばにいさせちゃダメな気が…。いやいや、私を先輩に会わせてくれたのはこの人だし、一応いい人なのかも…。…」

「……………」

胡桃「あは…は…」

由紀「とにかくっ! これからはういちちゃんも一緒に見学だね!」

胡桃「だから…ういは良いけどお前はダメだっ」

由紀「ええ〜! ずるいよ〜!!」

そんな会話をかわしながら彼女達は学校を出てそれぞれの家を目指し、途中まで帰路を共にする。誰かと一緒に帰る事が少なかった歌衣はこうして誰かと一緒に帰り道を歩くこと…そしてその中にあの胡桃がいることが嬉しくて、誰にも見られるよううひっそりと微笑んだ。

くくくく

その翌日の放課後…。彼が帰り支度をしていると、机に顔を伏せながら深いため息をつく由紀が視界に入った。

由紀「はああ〜っ…」

「…どうしたの?」

彼がそつと尋ねる。すると由紀は顔をこちらへと向け、ムスツとした表情をする。どうしてそんなに不満げなのか…その答えはすぐに由紀の口から告げられた。

由紀「昨日くるみちゃんにぬいぐるみあげるの忘れちゃって…だからついさっき渡したの。そしたらね…『なにこれ?』って言われて、私が『クマだよ〜』って教えたら、ビックリした顔されちゃった…」

「は、はあ…それはそれは…」

由紀「んん〜…上手くできたつもりだったけどなあ…。またもうちよつと練習して、一発でクマだって分かるの作ってみんなを見返したいよ…」

「…がんばって」

由紀「うん…ばいばい…」

思っているより落ち込んでいる様子の由紀になんと言って良いかわからず、彼は苦笑いしながらその場をあとにする。由紀は彼に手を

振った後にまた机に顔を伏せていたが、帰らないのだろうか…。

(でも、あれはクマって分からないから…。由紀ちゃん、練習あるのみだよ…！)

心のなかで彼女を激励しつつ教室を出ていき、下駄箱を目指して廊下を歩く。そうして三年生の教室のある三階から二階へと下りたその時、聞き覚えのある声が二階の廊下…その奥から聞こえてきた。

慈「あの…何で呼び出されたかはちゃんと分かってる？」

声の主は彼もよく知る教師、『佐倉慈』のものだ。何をしてるのか気になって廊下の奥へと進むと、彼女は一人の女子生徒を相手に説教をしているようだった。相手はヘアピンで前髪を左右にとめている茶髪のポニーテール少女…そういうえば、慈が彼女を説教しているのを以前も見たことがある…。

???'「呼び出された理由ですか…。わたしはあまり頭のいい方じゃありませんが…さすがに分かってます…」

慈「ええ、今日もまた私の授業中に居眠りをしたからです！今週だけでももう三回ですよ！紗巴果夏さんっ!!」

果夏「あっ？ああ…居眠りの方でしたか…。」

『紗巴果夏』と呼ばれたその少女は慈に呼び出された理由が居眠りによるものと聞くと驚いたような表情を見せ、その大きな目を丸くした。そして慈は慈で、そんな彼女を見て驚いている。

慈「まさか、居眠り以外にもやましい事があるの…？」

果夏「…へっ？いやいや！何をおっしゃりますか！私に限ってそんな…」

慈「あまりこういう事は言いたくないし、言っちゃダメだって分かっているんだけど…相手があなただからこそ警戒しちゃう自分がいるわ…」

果夏「みやっ?!失礼な…！私がかれまで何かしましたかっ?!」

慈「何かって、今日も居眠りしたでしょう…。まあ、他にどんなやましい事があるにせよ、今回私が注意するのは居眠りです。頼むから、最後まで起きて授業を聞いてて?」

果夏「前も言ったと思いますが、佐倉先生の声が悪いんですよ！先生の声は心地よすぎて…授業が子守唄にしか聞こえませんっ!」

慈「はう…」

悪びれない少女に呆れているのか、はたまた自分の声に責任があるというとんでもない事を言われて戸惑っているのか…慈がガクツと肩を落としてため息をつく。そんな慈の背中があまりに悲しげで可愛そうに思えたため、彼はその場に歩み寄った。

「自分が居眠りする理由を先生に押し付けるのはダメでしょ…」

果夏「へっ?」

慈「あら…どうしました?」

歩み寄ってきた彼に驚き、慈は顔を上げる。一方で果夏は彼の事を知らぬため、突如現れた彼の事を不思議そうに眺めていた。

「いや、このままだと先生が言い負かされそうな気がしたんで」

慈「うう…心配かけてごめんなさい…」

果夏「えと…あなたはどちらさまで?」

尋ねてきた果夏へ向け、彼は自分の名前や学年を告げる。果夏はそれに答えなくてはいけないと思ったのか、すぐに自らも自己紹介を始めた。

果夏「先輩、はじめまして！私は紗巴果夏^{すずはかな}。二年B組の『ムードメーカー・カナ』とは私のことです!!」

「ムードメーカー・カナ?なにそれ…」

慈「あまり気にしないで…。こういう娘なの…。」
ニコツと満面の笑みを浮かべる果夏に対し、また深いため息をつく慈…。この反応を見るだけで、慈が日頃から果夏に振り回されているのが分かった。

果夏「佐倉先生、そんな哀れみの目を私に向けないで…」

慈「……………はあ」

果夏「うぐつ…。ま、まあ…。これからは居眠りしないように心がけるゆえっ！今回のところはお許しをっ!!」

慈の表情を見た果夏はさすがにまずいと思ったのか、ペコツと頭を下げながら両手を合わせる。彼女の謝罪をうけた慈は仕方ないと思いつつも、いながらも笑みを浮かべ、彼女の肩にそっと手をおいた。

慈「今回だけですからね?次また居眠りしたら、本気で怒りますから」

果夏「ねへへ♪わわかりましたあ〜!」

下げていた頭を上げ、満面の笑みを浮かべる少女…。彼女のそんな笑顔を間近で見た彼はこう思った…『この女、絶対に反省してない』と…。慈に許された果夏はカバンを背中に背負いそのままそこを離れようとしたが、直後に教室からまた別の少女が現れ、果夏の事を呼び止めた。

??? 「…終わった?」

果夏「おう!終わったよ!待っててくれたんだね♪」

教室から現れた黒髪中髪の少女を見た果夏は嬉しそうに微笑み、その娘の背後に回ってから思いきり抱きつく。果夏は特別身長の高い娘ではないが、抱きつかれたその少女はそんな果夏よりももう少しだけ小さな娘だった。

??? 「鬱陶しい…離れて」

背後から抱きつく果夏を肘で押し、迷惑そうな表情を浮かべる少女。少女の目はやたらと冷たく、元気いっぱい果夏とは正反対のクールな娘といった印象だ。

慈「あら、紗巴すずはさんを待ってたの?」

??? 「いや…まあ…:はい…」

果夏「先に帰ってて良いと言ったのに!まったく!!真冬まふゆちゃんはほんとーに可愛い娘だよ!!」

真冬「ちっ…:…やっぱ先に帰ればよかった。本当に鬱陶うっとりしい…」

真冬と呼ばれた少女は抱きつく果夏を肘で必死に押し退けようとするが、果夏は笑顔のまま抱きついて離れない。

果夏「待たせてごめんね!もう終わったから、一緒に帰ろーね♡」

真冬「はあ…:とりあえず、この前割った花瓶の事はちゃんと謝れたんだね」

慈「えっ?花瓶…?」

真冬が放った言葉に慈が反応する…。花瓶の事など、果夏の口からは一度も話されていなかったからだ。慈が果夏へと目線を向ける中、当の本人は人指し指を自分の口に当てながら真冬を見つめる。

果夏「…真冬ちゃん、しくだよ」

真冬「カナ……謝ってなかったんだね……」

慈「そういえば……この前教室の花瓶が割れてたけど……あれって……」

果夏「先生っ！また明日!!!行くぞ真冬ちゃん!!」

慈「ちよっ……!?紗巴すずはさんっ!!」

この場にとどまるのはマズイと思つた果夏は全力で疾走し、その場をあとにする。このまま走って彼女を追う訳にもいかない慈はまたしても深いため息をつき、廊下の壁に背中を預けた。

慈「まったく……あの娘は……」

「すごい娘だな……」

嵐のように去っていった少女が消えた先を見つめ、彼は苦笑いする。こうして果夏はその場から逃げるようにして消えたわけだが、寸前まで彼女が抱きしめていた少女……真冬は未だその場にとどまっていた。

真冬「佐倉先生、いつもカナが迷惑かけてすみません……」

慈「いえ、狭山さんが謝ることじゃないから気にしないで。紗巴すずはさんにはまた明日説教しますけど……」

真冬「……先生にこんな事言うのは申し訳ないけど、あまりキツく怒らないであげてね?カナって普段はあんなんだけど、本気で怒られると元氣なくしてかなり落ち込んだじゃうから……」

慈「ふふっ……ええ、わかつてる。ちよこつと注意するだけにしておきますね?」

言いつらそうに言葉を放つ真冬に対し、慈は優しく笑顔で答える。慈のそんな笑顔を見て安心したのか、真冬も微かに頬を緩めて微笑ん

だ。

真冬「ありがとう…。佐倉先生ならボクも安心出来る。先生、本当に優しいから…」

慈「でも、私だって怒るときは怒るわよ?」

真冬「本当?想像できないよ」

彼女をよく知る生徒ですら、彼女が本気で怒っている様を想像できない…。それほど慈は優しく、そして信頼もされているようだ。真冬は背中のカバンを背負いなおし、慈…そしてその横に立つ彼へと小さく手を振った。

真冬「じゃあ、先生…。それとキミも…。またね」

慈「はい、また明日」

「ああ…それじゃまた…」

彼女とまた会う機会があるかは分からないが、彼はとりあえずその言葉を返すことにする。そうして彼女が姿を消したあと、慈が彼へ言った。

慈「さつき逃げた茶髪の娘、紗巴果夏さんは今回みたくちよつとした問題ばかり起こす娘なんだけど…あんな性格だからかしら、友達はずつごく多くてね…。ほんと、ムードメーカーって感じの娘なの」「へえ…」

慈「それで今別れた娘…狭山真冬さんは勉強も出来て、授業態度とかも申し分ない。ただ彼女は人付き合いが苦手みたいで…紗巴さん以外の生徒とはあまり話さないの。紗巴さんと狭山さん…タイプは正反対なのに、二人はああして仲良くしてる。人間って不思議ね」
慈が廊下の窓から外を見下ろす…。そこから見える校門の前では

果夏が遅れて現れた真冬と合流しており、また笑顔で抱きついていった。真冬は嫌そうな顔でそれを振りほどこうとしているようだったが…。

慈「あんなでも、狭山さんは紗巴さんの事を大事にしてるんだと思う…。いつも一緒にいるもの♪」

嬉しそうな笑顔でそう言って、慈は彼の事を見つめた。

慈「さて！紗巴さんの次は丈檜さんね！彼女も今日居眠りしてたから、教室に残るようにって言っておいたの！」

「ああ…どうりで…」

放課後だというのに由紀が教室から出る気配がなかったのはそういう事だったのか…。彼は一人納得し、慈へ別れの挨拶をした。

「まあそちらもほどほどに…。じゃあ先生、また明日」

慈「ええ、また明日♪」

慈は笑顔のまま、由紀の待つ教室へ向かうべく階段を上る…。丈檜由紀や紗巴果夏…二人以外にも色々と変わった人間のいる学校で教師をするのは大変だろうが、彼女はそれすらも楽しんでいるかのよう
に笑っていた。

第二十話『プール（前編）』

胡桃「突然だが明日…あたしの用事に付き合っしてほしい」

放課後の校内…下駄箱を指して一人廊下を歩いていた彼は胡桃に捕まり、いきなりこんな事を告げられた。明日は学校も休みで彼自身も用事は特に無いのだが、あまりに急な話だったので彼は目を丸くした。

「付き合っしてほしいって…デート？」

胡桃「はあ、今回は違うって…。ちよつと街のプールに行く用事が出来ただけどき、休日でも多いだろうし、女だけで行くつてのはちよつとアレかな〜とか思っつて」

「プール？プールなんか何しに行くのさ？」

胡桃「プールなんだから泳ぎに行くに決まっつてんだろ。…で、どう？行ける？行けない？無理だっつてんならいいけど…」

…つまり、胡桃は明日プールに行くわけだが、休日のプールには人が多い。そんな中に女だけでいようものならあまり良くない輩に絡まれたりするかも…といった事を懸念^{けねん}しているのだろう。確かに彼女を一人でそんな所へ行かせるのは少し不安だし、自分がそんな彼女のボディガードになれるなら断る理由もない。彼はすぐに頷いた。

「ああ、わかつた。ついてくよ」

胡桃「マジ？サンキュー！んじゃ、明日の十時に待ち合わせるとして…場所だけど——」

胡桃は彼に待ち合わせ時間…そして場所の指定をする。二人が待ち合わせる場所は市内にある目的のプール施設…つまり現地集合という事になった。明日そこで会う約束を終えた彼は胡桃と別れ、速や

かに帰宅。明日の準備を始めるが…

くくくくく

ガサゴソ…ガサゴソ…

(プールって…何を持ってけば良いんだ?)

自宅の中、彼はタンスを漁りながら頭を悩ませていた…。プールなんて学校のものくらいしか使った事がなく、そういつた施設に何を持っていけば良いのか分からないのだ。胡桃は別れ際に『とりあえず水着だけ持ってこいよ』とは言っていたが、本当にそれだけで良いのだろうか……。

(…いや、もう少し色々と持っていっていった方が良いな。ずっとプールにいる訳でもないだろうから、そのあとの事とかも考えて……)

胡桃には『違う』と言われたが、二人でプールなどデート以外の何物でもない。彼はバッグに水着の他、タオルやサンダル等を詰め、更にそのプール施設周辺にある良さげなスポーツを携帯でリサーチした。彼の思う良さげなスポーツとは…もちろんデートに使えそうな場所の事だ。

(中々広い公園がそばにあるな…二人でここを散歩するもの悪くない。近くにレストランもあるし、帰りが少し遅くなりそうならここで早めの夕飯をとるのもアリだ…。いや…早く帰さないと胡桃ちゃんの家族が心配するか。……つ、いかがわしいホテルもあるけど…胡桃ちゃんがここに入りたいて言ったら?…入るでしょう!!そりやも

う入るでしようっ!!!)

携帯の地図を見て妙な妄想をしながら、明日に備えて彼は眠る。
おかしな妄想をしたせいで少し寝付くのが遅くなってしまったものの、翌朝はどうにか起きられた。

~~~~~

そうして彼は今、胡桃と待ち合わせているプール施設：その前の道路をフラフラ歩き回っていた訳だが、その胡桃が中々現れない…。彼がここにたどり着いたのも約束ギリギリの時間だったが、彼女は完全に遅刻している。

(遅い…。先に中に入ってる、って事もないだろうしな…)

これから彼や胡桃が入るプール施設：ここはつい最近出来たばかりらしく、この辺りでは一番広い屋内プール施設のようだ。休日という事もあって訪れる人も多く、彼が外で待っている間も家族連れや友達同士と見られる女性達：そしてカップルが大勢中に入っていた。

胡桃「…わりい、待たせた」

プールに訪れる人の多さに驚く彼の背後、そこに忍び寄った一人の少女がポツリと呟く。聞きなれたその声の主が胡桃だとすぐに分かった彼はクルリと振り向くが、そこにいたのは彼女だけではなかった…。

「…んん？」

振り向いた彼が最初に見たのは笑顔で立つ胡桃…。今日は比較的暑い日だからだろう、彼女は半袖のシャツに薄手の白いパーカーを羽

織っており、下は水色の短パンをといつた涼しげな格好だ。そんな彼女の右肩からは少し大きめのバッグが下がっている。恐らく、水着等が入っているのだろう。

「……………」

問題はその胡桃の隣、そこにいた少女だ。真つ白く、フリフリとしたワンピースを着たその少女もまた大きなバッグを両手で持ち、彼の事をジツと見つめている…。長い茶髪を風に揺らしながらこちらを見つめる少女の目がどこか迷惑そうなものにも見えた彼は悩ましげに髪をかきあげ、ボソツと呟いた。

「ええつと…お嬢さんはなんのご用で？」

歌衣「なんのご用って、それ私のセリフなんですけど…」

彼の呟きを聞いた少女、那珂歌衣は直ぐ様そう言い返す。彼は今日、胡桃と二人きりで出掛けられると思っていたのだが…態度から察するに歌衣も同じ事を思っていたらしい。彼と歌衣…二人は少し間を空けてからその視線を同時に胡桃へと移した。

歌衣「…どういふことですか？くるみ先輩、今日は私に泳ぎを教えてください。約束したじゃないですか」

胡桃「もちろん教えるつて！でもほら、あたしだけだと色々心配じゃない？もう一人くらいいた方が何かと便利かな〜と思って、それでコイツを呼んだわけだけど…」

歌衣「そんなのは初耳です」

「……………」

彼と歌衣はどちらも胡桃と二人きりの時間を過ごせると勘違いしていたため、今のこの状況に少々戸惑っていた。歌衣は彼が来るとは聞いてなかったし、彼も歌衣に泳ぎを教えるなんて事は微塵も聞いて

いない…。

胡桃「ごめん、言いそびれちゃって…。でもさ、お前らも仲悪くはないだろ？せつかくのプールなんだし、三人仲良く楽しもうぜ？」

「まあ…こっちは構わないけど」

歌衣「…ですね。くるみ先輩がそう言うなら」

胡桃「よしっ！ならさっそく入ろうぜ！ういには今日一日で泳げるようになってもらうからな!!」

彼と歌衣が微笑み合うのを見た胡桃は安心したように微笑み、二人を連れてその施設の中へと入る。かなりの人がここに訪れているようだったが、中が広い事もあって特別混んでいるようには感じなかった。三人は中に入って早々に更衣室へと向かい水着に着替え、ロッカーに荷物を預ける。素早く着替えを済ませた彼はプールの前へと足を運んだが、まだ胡桃と歌衣の姿がなかった…。

(二人はまだ着替えてるのか…。ま、こういうのは女の子の方が時間かかりそうだし仕方ないだろう)

二人を待ちながら辺りを見回し、改めてこの室内プールの広さに驚く。室内プールと知った時はもつとごちゃごちゃした物を想像していたがこの空間は思った以上に広く、プールの種類も普通の物から流れるタイプの物…更には小型のウォーターライダーまであった。彼がそのスライダーを眺めて『まるで遊園地みたいだなあ』などと考えていると、誰かの手がその背にそつと触れた…。

ピトツ…

「うおっ!？」

胡桃「うわっ!?!ごめんっ、そんな驚くと思わなくて……!」

突然の感触に驚き振り向くと、そんな彼に驚いている胡桃の姿がそこにあつた。彼女は驚かせてしまった事を彼に謝っていたが、彼は驚きの表情を固めたままブーツとたたずむ。背中を触られた事に対して驚き振り向いたのはいいが、その先にいたのが水着姿の胡桃だったからだ。

(そうだ……ここはプールなんだから、胡桃ちゃんだって水着になる! 思えば当たり前の事なのに……!)

プールに誘われたという事実だけで浮かれてしまい『プール⇨水着』という点を忘れていた。しかし、そうして驚いたのも一瞬だけ。彼の目は直ぐ様胡桃の水着姿を視界に収めることに……。

胡桃「だ、大丈夫か……?」

青をメインとした色合いのビキニには小さなフリルが付いていて、彼女が彼の事を心配そうに見つめる度にそれがフリフリと揺れる……。一見すると可愛い系のビキニにも見えるが布面積はそこまで広い訳でもなく……彼女の胸の谷間や太もも……それらが惜し気もなく晒されていた。

(胡桃ちゃん……やっぱりスタイル良いな……。そりやリーさんには負けるけど、それでもかなり大きい方なんじゃ……。うわ、足も綺麗で目のやり場に困る)

普段は見ることもない胡桃の水着姿……。恐らく、クラスの男子でこ

れを見たのは自分が最初なのだろう。彼はそんな優越感に浸りつつ、胡桃の身体を眺め続けた。目のやり場に困るなどと考えてはいるがそんなのは建前だ。美人の部類に入る同級生の水着姿を前にして目を逸らすなど、そんな勿体ない事はしない。

「……………」ジーツ

胡桃「…あ、あんま見んなよ…！照れんじゃん……」

上から下まで舐め回すような彼の視線を感じ、胡桃は頬を赤くする。水着姿とはいえ、同級生の男子である彼に肌を晒す…。プールに誘った以上こうなる事は分かっていたが、いざこうして視線を向けられると恥ずかしくなってしまう。

「…………あの」

胡桃「んっ？なに…?」

「…似合っとなります」

胡桃「あ…………りがと…」

軽く頭を下げ、似合うと言われた事に対しての礼をする。こんな姿を見られるのは少し恥ずかしいが、似合うと言われると嬉しい気持ちがジワジワと湧く…。その後、胡桃は彼を連れて隅の方にあつたベンチへと座り、改めて本日の計画を説明することにした。

胡桃「最近、ういの奴とよく遊んだりして仲良くなってきた…。ほら、今度みんなで海に行くじゃん？…どうせだからういも誘ってやろうと思って声をかけたんだけど、アイツ泳げないんだって。せつかく海



に行くつてのに泳げないとつまらないだろ？だからあたしが泳ぎを教えてやるつて話になつてさ……」

「なるほど……。僕はその付き添いとして呼ばれた訳だ」

胡桃「そゆこと。…わるいな、昨日しつかり説明しておけばよかつた」

「大丈夫。気にしないで」

申し訳なさそうに顔を俯ける胡桃だが、彼はそこまで気にしてなかつた。胡桃が歌衣と仲良くしているのは良い事だと思ふし、自分が少しでも手助けを出来るなら力を貸したい。そして正直に言つと、彼は胡桃の水着姿が見れただけで満足なのだ。

胡桃「…あはは、サンキューな。また今度、何か埋め合わせすつから」

「そんなそんな…」

『その水着姿が見れただけで十分』…思わずそう言つてしまいそうになるが、ギリギリのところ堪えて口を閉ざす。そうして微かに慌てる彼を胡桃が不思議そうに見つめてみると、少し遅れて着替えを終えた歌衣が二人の元へと歩み寄つてきた。

歌衣「お待ちせす」

胡桃「おう！…つておい、お前つ……」

「これは……」

現れた水着姿の歌衣…彼女は白いワンピースタイプの水着を着用していた。その水着は下の方がスカートのようになつており、太ももがかなり隠れていて胡桃の水着と比べたら露出は少ない。しかし露出が少ないのは下半身だけであり、胸元は大きくV字に開いている…。歌衣の胸はあの悠里にも劣らない程の物なのに、そんな胸元の開いた水着を着てるのだ…。彼だけでなく、胡桃すらそれを見た瞬間に目を丸くした。

胡桃「ん…んん…」

「……………」

歌衣「あの…なにか？」

歌衣が首を傾げて二人に寄る…。その際軽く前屈みになった為、彼女の谷間は更にその存在を強調をした。

胡桃「いや…水着似合ってるなあって……………」

「うん、本当にね…」

歌衣「あつ…そうですか…？ふふつ、嬉しいです♪」

二人にそう言われて歌衣は嬉しそうに笑うが、彼も胡桃も本当は歌衣の胸の谷間ばかりが気になって水着のデザインが頭に入らない…。大丈夫だとは思うが…歌衣が少しでも跳び跳ねようものなら胸が水着からポロつといてしまいたいような気がして心配だった。

胡桃「じゃあ、あつちのあまり人がいないプールで泳ぎの練習するけど…：…うい、お前もうちよつとゆっくり歩け」

歌衣「えっ？どうしてですか？」

胡桃「いや…心配で…。お前、水着のサイズ合ってるのか？」

歌衣「ええ、この水着は去年買った物ですからそこまでサイズも変わってないと思います。少なくとも身長は去年と大差ないハズですから」

胡桃「ええつと、身長じゃなくてさ…：…一年の間でもつと別の部分が成長したんじゃないかなって……………」

「ああ、立派にスクスクとね……………」

胡桃「っ、なに言ってるんだよ…！」ガッ！

「いてっ…」

歌衣の水着は胸元だけが少しキツそうに見え、不安で仕方ない胡桃はボソツと呟く。それを聞いていた彼が相づちを打つが、胡桃はその彼の身体を肘で小突き黙らせた。

## 第二十一話 『プール（後編）』

胡桃「ん、まあまあいけるようになってきたな。お前、結構運動神経良いんじゃないの？」

歌衣「…え、ええ？そんなことないと思いますけど…」

訪れた室内プール…彼と胡桃は中でも人の少ないポイントを選び、歌衣の泳ぎの練習に付き合った。…とは言っても彼は特にすることがなく、胡桃が歌衣の両手を引きながら泳ぎ方を教える様をプールサイドに腰掛けて眺めていた。

胡桃「まだ教え始めて二時間とちょっとだけど…。あとは息継ぎのタイミングさえ気を付ければ基本はオーケーだろ。お前は思ったよりのみ込みが早い。今日中にどうにかかなりそうだ…」

歌衣「あ、ありがとうございます。全部…胡桃先輩のおかげです」

胡桃「へへっ、そりやどうも。あとでアイツにもお礼言つていてやれよ。退屈してるみたいなのに、文句も言わずに付き合ってくれてるからな…」

胡桃はそっと視線を移し、プールサイドに座る彼の事を見つめる。歌衣に泳ぎを教えるのは胡桃だけで十分だったので彼はこの二時間ああして座っていたわけだが、文句すら吐かなかった。

歌衣「そうですね…わかりました。あとでお礼言っておきます」

胡桃「ああ、そうしてやってくれ。きつと喜ぶから」

歌衣「…そういうば、胡桃先輩は何であの人を呼んだんですか？」

胡桃「えっ？ほら、女二人だけだと変な輩やからに絡まれたりするかもじゃん？だからボディガードにと思つて…」

歌衣「あの人なら、私達を守ってくれると？」

胡桃「…うん、少なくともあたしはそう思つてるよ」

歌衣（返事を返すのがはやい。胡桃先輩、そんなにあの人の事を信頼してるのかな…？）

歌衣の問いに対し、胡桃は直ぐ様答える。迷いないその返事を聞いた歌衣は彼女が彼の事をどれだけ信頼してるのか…それが気になった。そして答えた彼女が少しだけ照れたように笑っていた、その理由も…。

胡桃「……さて！一旦休憩〜っ！続きは昼飯食ったあとにしようぜ！」

歌衣「あつ、はいっ！」

胡桃が彼にどんな思いを抱いているのか…それを気にしつつ、歌衣は彼女のあとに続いて彼の元へと向かう。戻った直後、彼と会話する胡桃の表情がどこか楽しげに見えたのは歌衣の気のせいだろうか…。

胡桃「おまたせっ。うい、かなり泳げるようになってきたぞ。見たか？」

「んん、見てた見てた…。お疲れさん」

胡桃「昼飯食べたらまた再開するつもりだけど、まだ付き合ってくれるか？まあ、どうしてもってなら帰つてもいいけど…。」

「逆に聞くけど僕は必要かい？この二時間、役にたった気がしないのだけど…。」

胡桃「あたし的には、いてくれるだけで違うんだけど…。」

「…そう。じゃあ午後も付き合うよ」

胡桃「わるいな。頼むわ」

歌衣「ん、んくく……………」

彼が午後も付き合うと答えた瞬間、胡桃が嬉しそうに微笑むのを歌衣は見逃さなかった。胡桃は彼の事をボディガードとして呼んだと答えたが、それにしてもやけに距離が近い気もする…。彼女は今、プールサイドに腰掛ける彼のその隣へ”当たり前前のように”座っていて、あと少しで互いの手の先が触れそうな程だ。

歌衣（二人は付き合っていない……………んだよね？）

思わずそんな事を思ってしまう。

前に聞いた時、彼と胡桃はただの友人同士だと聞いた歌衣だったが…今のこの様子を見てると何とも言えなくなる。

胡桃「待つてるだけだと退屈だったろ？」

「いや、水着美女はいくら眺めてても飽きないから大丈夫」

胡桃「…誰の事だ？」

「もちろん、胡桃ちゃんと歌衣ちゃんの事だけど」

胡桃「…まったく、お前ってやつは…。いや、見てんのがあたしなら良いや…。ただ、他の女の人の事はあまりジロジロ見るなよ？」  
「どうして？」

胡桃「そりやお前…見知らぬ女の人をジロジロ見るのはいくらなんでもまずいだろ。ちよつとしたセクハラになるかも…」

「…見られるのが嫌なら、公共のプールになんぞ来なければ良い」

胡桃「まあ…それもそうだけどさ……………」

彼の台詞を聞いた胡桃は言葉につまり、小さくため息をつく。しかし、彼は何だかんだで真面目な面もある……………きっと他人の水着姿をジロジロ眺めたりはしないだろう。胡桃はそう思っていたのだが……………

「…あの人、スタイル良いな」

その矢先に彼がボソツと呟いた。思わずハツとした表情を彼に向ける胡桃だが、彼女はそちらを見てもつと驚く事になる。あろうことか、彼はその女性の事を指さしていたのだ。

胡桃「なっ!!?おいっ!指さすのはやめろっ!!」

「えっ?いや、胡桃ちゃんと歌衣ちゃんにも教えてやろうと思つて」

胡桃「教える必要ねえからっ!!」

目にとまったその女性を指さす彼…。本人に悪気はなかったのだが、だからといって放置も出来ず、胡桃は彼のその手を両手掴んで下げさせる。

胡桃「手え下げろつて!」グイッ!

「うおっ!」

胡桃「まったく…マジで油断できないな…」

呆れたように言つたため息をつき、胡桃は彼の右手を両手でガシツと掴む。女性を指さす行為は止められたのでそのまますぐに手を離しても良かったのだが、胡桃はそうせずに彼の右手を掴み続けた…。

胡桃「いきなり指さすなんて、本人に気づかれたら迷惑だろ?」

「あ、ああ…すいませんね…。でもさ、いきなり手を掴まれるつてのも中々に…:いや、これは全然迷惑ではないし、むしろありがたくもあるんだけどね…」

胡桃「はあ?」

すぐには彼の言葉を理解出来なかつた胡桃だが、スツと目線を下げた事でその意味が分かつた。咄嗟に彼の右手を掴んだまでは良かったのだが、胡桃はその手が再び女性の事を指さすのを無意識に怖れたのか…彼の右手を自らの両手で強く、ギュツと…:自分の太ももへと押しつけていたのだ。胡桃はその手を放して顔を真っ赤にし、彼を力強く睨む。

胡桃「のわっ!!?どこ触つてんだよ!!?」

「なっ!? 触らされたんだよ!!」

胡桃「べつに触らせたわけじゃ…!! っ…ごめん…」

思いもよらぬ事で驚いてしまったが、今のは自分がした事であって彼に罪はない。静かに頭を下げ、大声をあげた事を謝る胡桃だが、彼はちつとも気にしていない様子だった。

「いや…こつちこそごめんね。悪気はないとはいえ、触れた胡桃ちゃんのためがスベスベしてるとか…柔らかいとか…ずっと触ってたとか、色んな事を思ってしまった。ほんと、悪気はないんだけどね……」

胡桃「ぐ…うっ…そこまで思ったなら、もう悪気あるだろ…。ごめん、やっぱり一発殴ってもいい?」

「冗談だよ!? 実際は何とも思ってたから!!」

胡桃「…それはそれでムカつく」

拳を固める胡桃を見て慌てた彼は言い逃れようとするが、胡桃は依然としてその拳を固めたままだった。

「くそっ、逃げ道がない…!」

胡桃「…はあ、もういい。今回はあたしに非があるし、許してやる」

「ど、どうも……」

そつと拳を解く胡桃を見た彼は一安心し、ふうつと安堵の息を吐く。その時、二人の後ろにいた歌衣はあることに気が付き、彼と胡桃へそれを告げた。

歌衣「先輩が指さしてた人…こつちに来ますけど…あれって」

「…えっ?」

胡桃「指さしてたのバレてたんだ。お前、自分で謝れよ…」

胡桃はそつと立ち上がり、彼を残して歌衣と共にその場を去ろうと



する。しかしその場に歩み寄ってきた女性…その声はその場にいた三人全員が聞き覚えのあるものだった。

??? 「あら？ やっぱり恵飛須沢さん達だ。みんな遊びに来たの？」  
「まあそんなところです。佐倉先生は何しにここへ？」

慈 「私も同じよ。最近暑い日が続いてるから、たまには良いかな〜と思って。ほら、運動にもなるしね♪」

胡桃 「はっ？ お前が指さしてたのって…」

歌衣 「佐倉先生だったんですね…」

去ろうとしていた二人も慈の声を聞いた途端に振り返り、その会話に交ざる。不意に教師と会った二人は驚きの表情を浮かべたが、指さしていた張本人である彼は落ち着いた様子だった。

胡桃 「お前、めぐねえだって気づいてたのか？」

「気づいてたよ。だから二人に教えようと思ったけど、普通に教えてもつまらないと思ってね。ただスタイルの良い人がいる、とだけ言って指さしたんだけど…」

歌衣 「結果、胡桃先輩が大慌てしちゃったと…」

胡桃 「っ…！普通に教えろよ!!」

指さした相手が慈だと分かっていたら彼の手を掴む事もなかったし、太ももを触られる事もなかった。胡桃は彼の無駄な遊び心と、そして彼が指さした相手を冷静に確認しなかった自分を恨んだ。

慈 「あら、私のスタイルが良いなんて言ってくれたの？」

「…まあ、はい」

慈 「ふふっ、そんなこと言われたの初めてだから少し照れるなあ。

…ありがとね♪」

彼の言葉が素直に嬉しかったのか、ニッコリと微笑む慈。

薄いピンク色のビキニが包むその胸はかなり大きく、下に目を向け

れば紺色のウオーターデニムからは細く、綺麗な足がスラツと伸びている……。慈のスタイルはお世辞を抜きにかなりのものであり、思わず胡桃ですら頬を赤くした。

胡桃「服の上からでも分かってたけどさ、やっぱり……めぐねえって……」

慈「ん？なあに？」

胡桃「……んくん、なんでもない」

後ろを通りすぎていった三々四人の若い男性グループがこちらを見て、何かボソボソと言っていた気がする……。あの連中が話題にあげたのは歌衣なのか、慈なのか……どちらだろう？胡桃はそんな事を思っていた。

「先生、お一人？それとも彼氏と一緒に？」

胡桃「えっ？めぐねえって彼氏いんの!？」

慈「あはは……私は彼氏とかいないから、今日は一人で来たの。残念ながら……ね」

少し苦い笑みを浮かべ、慈はプールサイドに座る。立ち上がっていた胡桃、歌衣もその隣へと座り、休日にも関わらず不意に出会った教師との会話を楽しんだ。

胡桃「でもさ、めぐねえなら彼氏くらい簡単に出来そうだけどね」  
慈「そう簡単にはいかないものよ……。あと、めぐねえじゃなくて佐倉先生……でしょ？」

胡桃「今日は休みの日だし、ここは学校じゃないんだよ？なのに佐倉先生って……なんか固くない？」

慈「それもそうだけど……って、あなたは学校でも私の事をめぐねえって呼ぶじゃない！」

胡桃「あはは、バレたか……」

歌衣「……………」

慈「あなたは…二年の那珂さんね？」

慈の隣に座る胡桃の更に隣…そこにそつと座っている長い茶髪の少女、歌衣へと慈は声をかける。歌衣は急に声をかけられて驚いたようだったが、すぐに顔を覗かせて答えた。

歌衣「よく分かりましたね…。私、影が薄いつてよく言われるのに」  
慈「これでも教師だもの。生徒の名前くらい覚えていて当然でしょ？」

歌衣「そんな教師の人でも、私の名前忘れる人が結構いて…」

慈「えつ、そうなの…？うくん、那珂さんは名前も変わってるし、見た目も可愛らしいから結構覚えやすいと思うんだけど…」

歌衣「そう…でしょうか？まあ、変わった名前だ…とはよく言われますけど。見た目は言うほど大したものじゃ…」

慈「ううん、那珂さんの目つて凄く綺麗だし、髪も長くて綺麗よ。まるで外国のお人形みたい♪」

歌衣「お、お人形……………」

胡桃「あ…それあたしも思った！人形みたいに綺麗なやつだなあ  
…つて」

歌衣「う…うう…そんなことないと思いますが」

(いや、こんなに胸の大きな人形は見たことがない。…とか一瞬でも思ってしまった僕は心が穢けがれているのだろうか)

照れたようにして俯く歌衣…そんな彼女が恥じらい、両手を寄せる度に自然とその大きな胸も寄る…。先ほどまで胡桃と共にプールの中にいたからだろう…彼女の体は濡れており、その水滴が彼女の首から胸へと伝っていき、最後にはその谷間の内側へスツと消えていく…。それを見ていた彼は水滴の流れたその先を一人想像し、ゴクリと喉を鳴らした。

胡桃「あたしらは今日、ういに泳ぎを教えに来たんだ」

慈「へえ、そうだったの」

歌衣「お恥ずかしながら…この年になってもろくに泳げなくて」

「でも、もうだいぶ泳げるようになってきたよね?」

歌衣「はい…胡桃先輩の教え方が上手かったから…」

胡桃「あたしの教え方どうこうじゃなく、お前がちゃんと頑張ったからだ」

歌衣は自分ではあまり運動が得意ではないと言っていたが、それでもこの二時間は弱音を吐かずに頑張っていた。胡桃はそんな歌衣の頑張りを褒め、彼女の頭を優しく撫でる。

胡桃「あと少し、午後からも頑張れるか?」

歌衣「は、はいっ!先輩となら…」

慈「ふふっ、仲良しね。…よし、みんなお昼は食べたかしら?まだなら私が何かご馳走してあげるっ」

胡桃「マジっ?!あたしら、ちょうどこれからだったんだ!」

「じゃ、お言葉に甘えますか…」

歌衣「…ありがとうございます」

慈「じゃ、行きましようか?」

一同は立ち上がり、施設内にあつた売店へと足を運ぶ。休日に慈と出会えた事だけでも嬉しいのに、更に食事まで奢ってもらえる…。胡桃、歌衣、そして彼は足取りを軽くして慈の後に続いたが…その途中、通りがかつたプールの中から聞き覚えのある声が聞こえ、慈は足を止めた。

直後に彼や胡桃、歌衣も足を止めてそちらの方を見てみる。そこにいたのは二人の少女で、一人はフルーツ柄の派手なビキニを着たポニーテールの少女。胡桃は彼女の事を知らなかったが、慈・歌衣・そして彼はその少女を知っていた。

「あの娘、この前の……名前何て言ったっけな……」

慈「紗巴すずはさんよ。紗巴果夏すずはかなさん。……で、もう一人が——」

慈は目線の先にいる少女、紗巴果夏と共にいるもう一人の少女の名を彼に教えようとするが、果夏が大声でその少女の名を呼んだのでそれは必要なくなつた。

くくく

果夏「まったく！いつまで浅いところで遊んでるのっ!!そんなだからずつと泳げないんだよ、真冬ちゃんっ!!」

真冬「いいの、泳げたって良いことなんかないもん……」

果夏「なっ!私らはまた今度海に行くんだよ?その時泳げないでどうすんの!?!」

真冬「いい……ボクは一人で釣りする」

果夏「かっつ!!可愛いけどバカだねこの子は……!海は海でも、私らの行くのは人の多いビーチなの!!そんなところで釣りしたって釣れるのは男の人の海パンくらいだよ!!」

真冬「ちゃんと人のいないところまで歩くもん……。そうすれば、海パンじゃなくてちゃんとした魚が釣れるハズ」

果夏「そしたら私が一人になっちゃうでしょう!!……いや、私が一人になるのはまだ良いよ。人気のない場所で一人釣りをする真冬ちゃんが心配だよっ!」

真冬「……どうして?」

果夏「どうしてって……真冬ちゃんのような美少女が水着姿のまま一人でいたら悪い男の人が来てだね、イヤ々な事をされちゃうかもしれないわけだよ!!しかもあんた……まさか海にまでその水着で来るわけじゃないよね?」

真冬「うん、よく分かったね……。……ダメなの?」

果夏「海でもそのスク水みずを着る気なのっ!?本気っ!?!」

真冬「えっ?だって……他の水着持って無いし……」

果夏「真冬ちゃんみたいな娘がスクール水着なんてマニアックなも

ん着てたら良くない連中がホイホイ寄ってくるでしょうが!!水着なら私がいくらでも買ってやるから、早いところ泳ぎを覚えちゃいなさいっ!!」

真冬「いくらでもって…一つで良いんだけど…。いや、そもそもこのスクール水着のままでも…」

果夏「それだけはダメっ!!なんか分かんないけど…とにかくダメっ!!」

〃〃〃

胡桃「お前…あの変な奴らを知ってるのか？」

プールの中で言い合う二人の少女を見た胡桃は何とも言えぬ表情を彼に向ける。通っている学校自体は同じなのでもしかしたら胡桃も知っているかと思っただが、そんな事はなかったようだ。

「二年の娘たちだね…。この前見かけて、少しだけ喋った」

慈「あの二人、休みの日も一緒にいるのね」

胡桃「二年って事は…ういと同学年か」

歌衣「ええ、紗巴すずはさんとは何度か話したことがあります。すつごく明るいというか…テンションの高い人っていう印象で…」

胡桃「…たしかにやたらと元気なヤツだな。ゆきみたいだ…」

プールの中で騒ぐ果夏を自分の友人と重ね、胡桃はふふつと笑う。一方、そんな果夏に手を引かれて無理矢理にプールの奥へと引きずり込まれる黒髪の少女…そんな彼女も胡桃のある友人と重なって見えた。

胡桃「あっちは…美紀みたいだ」

「確かにちよつと似てるけど、美紀さんは海にスク水着てったり、釣りしようとしたりしないでしょ…」

胡桃「まあ…な…」

果夏に手を引かれるスク水少女、狭山真冬を見て苦笑いする彼と胡桃…。このプールのような場所ならまだ良いが、海にまであれを着ていく勇氣は美紀にはないだろう。

くくく

真冬「カナ…やっぱりやめようよ…。ボク、ビーチで砂遊びしてるから…」

果夏「えくっ！一緒に泳ごうよ！！」

真冬「だって…カナ教えるの下手だから…」

果夏「そんなことないよっ！！ほら、もっかい！」

真冬「…どうやればいいの？」

果夏「体が沈まないように手足をバタバタつとして、息が出来なくなったら首をひねってプハーツと…ここまで出来ればあとは流れで出来るようになるから！」

真冬「やっぱり無理そうだから…海には浮き輪持っていくよ」

果夏「ああ、その手があったか…！よしっ！浮き輪も私が買ったげる！！カワイーやつ！！」

真冬「はあ…ほんと、浮き輪を発明した人に感謝したい…。偉大な発明ありがとうって…」

果夏「そうと決まればパパッと行動っ！！真冬ちゃんっ、浮き輪と水着を買いに行くぞ！！」

くくく

果夏…そして真冬はプールからあがると、そのままどこかへと消えていった…。恐らくは水着と浮き輪を買いに出掛けたのだろう。嵐

のようについでついで二人を見た慈、胡桃、歌衣、そして彼はそれぞれが苦笑いを浮かべ、近くにあった売店で昼食をとった。



## 第二十二話『おそうじ』（ゆき）

由紀「え〜っ!!そんなのやだよ〜!」  
放課後の教室：教師である佐倉慈にある事を言われた由紀は机に力なく顔を伏せる。既に二人以外いない教室：そこに嫌がる由紀の呻き声のようなものだけが虚しく響く。

慈「だって丈檜さん、また私の授業中に居眠りしたでしょ!それに今回のテストの点数も悪かったですし…これはもう仕方ありませんっ!ちよつとした罰みたいなものよ」

由紀「うう〜…でも、明日はせつかくのお休みなんだよ?そんな日にわざわざ学校に来て、プール掃除しなきゃならないなんて…」

ここ最近の由紀は慈の授業中に居眠りすることが多く、更にテストの点数も悪くなっていった…。慈はこれまで彼女にその事を幾度となく注意してきたのだが、改善している様子が見られなかった為…慈は由紀にある罰を命じた。それは『明日、学校のプールを掃除する』というものだ。

慈「私だって何度も注意してきたでしょ?それなのに…丈檜さんつたらまた居眠りするんだもの。少し心が痛みますが…仕方ないですっ!今回ばかりは私も心を鬼にします!!」

由紀「せつかくのお休みが…いやだなあ…」

慈「もしかして…何か用事があったりするの?それだったら—

「  
あまりに嫌がる由紀を見て彼女には明日、何か重要な用事があるのではと慈は考える。『それだったら仕方ない…今回は見逃してやっても良いか』ついさつき心を鬼にすると云ったばかりにも関わらず、慈

はそんな事を言いかけるが…

由紀「用事は特にないけどさ…お家でゴロゴロしながら、マンガでも読んでようかなあつて計画が…」

慈「……………」

席についたままの状態で手足をバタバタと動かし、あからさまにめんどくさそうな表情をする由紀…。そんな彼女を見て、慈は一瞬見せかけてしまった自らの甘さを引つ込めた。

慈「明日ですからねっ！私も午後ちよつと過ぎまでは校内にいますから、それまでに来て…しっかりと掃除を終わらせること!!」

由紀「へーい……………」

…バタン

全てを言い終えた慈は由紀をその場に残し、教室をあとにする…。一人残された由紀は深いため息をついてから帰り支度を済ませると、自分のカバンを背負って教室から廊下へと出た。

由紀（居眠りしちゃったのはたしかにわたしが悪いと思うけど…だからってプール掃除なんてやらせなくてもいいのに…。だいたい、あんな広いのをわたし一人で掃除なんてムリだよ。めぐねえも手伝ってくれるのかなあ？）

由紀「……………はあああ」

しかめっ面をして廊下を進みながら、明日の事を思つてまたしても深いため息をつく。せつかくの休日、出来るならのんびりしていたかった…。トボトボした足どりで廊下を進む由紀がガツクリと顔を俯けたその時…誰かが彼女の横をすれ違う。

スタスタスタ：

由紀「……？」

その気配に気付いた由紀は顔を上げて振り向くが、その人物はちょうど教室の中に入ってしまった、姿までは見えなかった。しかし、その人物が入っていったのは今由紀が出てきたばかりの教室だ。

由紀（…めぐねえかな？）

今の人物がもし慈なら、明日の掃除を手伝ってくれる気があるのかという事だけ確認しておきたい。由紀はその場でクルリとターンすると、教室の中へと足を運んだ。

由紀「……めぐねえ？」

教室に入り、小さな声で呼び掛ける。しかし中にいた人物は慈ではなく、その人は呼び掛けてきた由紀の事をじっと見つめ返した。

「先生ならさつき下に向かってたんで、職員室とかじゃないかな？」

由紀「あつ、キミだったんだ。どしたの？」

教室にいたのは慈ではなく、由紀もよく知る彼だった。何故こんな放課後に教室へ戻ってきたのか…不思議に思った由紀が尋ねると彼は持っていたカバンを背負い直し、ヘラヘラと苦笑いしていた。

「忘れ物しちゃってね…まいったまいった」

由紀「ふうん……あつ！」

その時、由紀はある事を思い付き彼の事をじっと見つめる…。彼女が何か悪巧みを考えているかのような裏のある笑みを浮かべていたため、そばにいた彼は嫌な予感を感じた。

「じゃあ……また休み明けに……」

ニタニタと微笑む由紀と出来るだけ目を合わせないようにしつつ、彼はせつせつとその横を通り過ぎる。しかしその直後、彼は由紀にその右手を掴まれてしまう。

…ガシツ！

「……なに？」

由紀「…えへへ♪ねえ、明日ヒマかな？」

「明日？まあ…特に用事はないけども…」

彼がそう答えると、由紀は嬉しそうな顔をしてニツコリと笑った。不思議な事に、由紀のこの笑顔を見た直後から彼の記憶はぼんやりとしてしまっている。うつすらと記憶している事と言えば、彼女が必死に何かを懇願こんがんしてきたこと…。そして自分はそれを断りきれず、首を縦に振ってしまった…という事くらいだ。

~~~~~

「…なんてこった」

翌日の昼前、彼は綺麗に晴れた空を見上げてポツリと呟く…。

”今日は休みだというのに、何故自分は学校にいるのか…”

”何故、体操服に身を包んでいるのか…”

”何故、デッキブラシを片手に立っているのか…”

全ては由紀のあの顔を見て、ハッキリ『NO』と言えなかった自分

の甘さのせいなのだろう…。あの時に彼女の頼みを断れなかったから、休日にも関わらず自分はこうして学校のプール…その隅に立ち尽くしているのだ。

由紀「いい天気だねえ…」

彼が水の抜かれたプールの中…その隅に立っていると、由紀がそばのプールサイドに腰かけたまま声をかける。たしかに、今日は本当にいい天気なのだが…。

「こんなにもいい天気だったのに、僕らはプール掃除をして一日を潰すんだ。貴重な休日の…その内の一日を…」

由紀「お、怒ってる…?…」

「…いや、たまにはこんなのも良いかなって思うことにする」

彼はプールサイドへと上がり、由紀の横に立つ。由紀もまた体操服に身を包み、デツキブラシを持っていた。あとは用意した二本のホースをそばにある蛇口へと繋ぎ、掃除を始めるだけだ。

…ガチャツ

由紀「…お?…」

その時、プール入り口の扉が開く。こちらを覗き込むようにしながら現れたのは…佐倉慈だった。彼女はその視線をプールサイドに座る由紀から水道のそばに立つ彼へと移し、驚いたような表情を見せる。

慈「あれっ?なんであなたがここに…?…」

「由紀ちゃんの手伝いをするためにというか…巻き込まれたというか」

由紀「うつ…!…」

慈「……………丈槍さん？」

慈の目線が彼から由紀へと移り、慈はそのまま彼女の方へと歩み寄る。由紀は迫る慈から目を逸らし、冷や汗を流していた。

由紀「だ、だって…わたし一人じゃ大変だし……………」

慈「だからって何の関係も無い彼を巻き込んじゃいけませんっ！」

由紀「……………ううう…」

気まずそうに顔を俯け、由紀はそのまま黙りこむ…。直後、慈はホースを手にしている彼の事を見つめて申し訳なさそうに口を開いた。

慈「ごめんなさいね。これは丈槍さんへ頼んだ事であってあなたは関係ないから、もう帰っていいわよ」

由紀「……………ごめんね…」

由紀もチラツと彼の事を見つめ、申し訳なさそうに謝る。しかし彼は持つていたホースを手離す事なく、それをそのままそばにあった蛇口へと繋いだ。

「もう体操服に着替えちゃったし…すぐに帰るのも面倒なんで、このまま由紀ちゃんの手伝いしてっても良いですか？」

由紀「えっ!？」

慈「それは構わないけど…ほんとにいいの？」

「ええ、暇潰しになるんで」

その言葉を聞いた由紀は目をキラキラと輝かせ、デツキブラシを抱えたまま彼のそばへと駆け寄る。慈に許可をもらった以上、彼はこのまま帰ってしまうと思っていたので、残ると言ってくれた事がとても嬉しかった。

由紀「うわあ…♡ありがとうっ♪じゃあめぐねえっ、わたしとこの

人と…二人で掃除がんばるねっ！」

慈「はいはい…。じゃあまたもう少ししたら様子を見に来るから、二人ともよろしくね？」

「了解…」

由紀「らじやく！」

二人の返事を聞き、慈は職員室へ戻ろうとする。その間際、彼女はこっそりと彼にだけ…微笑みながら言葉を伝えた。

慈「丈檜さんのこと…よろしく頼むわね♪」

その言葉に対し、彼は首を縦に振る。すると慈は満足したようにニツコリと微笑み、扉の向こうへと消えていった。

バタンっ…

由紀「めぐねえ、今なんて言ったの？」

「んん、別に…。さて、とっとと終わらせようか！」

由紀「おおーっ!!」

二人はデッキブラシを構え、プールの中へ足を踏み入れる。そうしてから由紀はプールサイドに垂らしておいたホースを手に取り、まず辺り一面を水に濡らした。

由紀「えへへ、涼しくなるね♪」

「…だね」

ホースから水を撒き散らし、渴ききっていたプールの底を濡らしていく。今日の日射しはとても強い…。そのせいか先程までプールの底は素足で踏むと熱く感じたのだが、由紀が水を撒き終える頃には大分冷えてきていた。

由紀「つと…こんなもんかな？」

辺り一面を水に濡らした事を確認し、由紀はホースを再びプールサイドに置く。あとはデッキブラシを使って辺りを磨いていくのだが、このプールの広さを二人だけで……そう思うと目眩めまいがする。

「やるしかないか……」

由紀「でもこのプールもこの前使ったばかりみたいでね、そこまで汚れてないだろうから掃除は適当でも良いってめぐねえが言っていたよ」

「それ、いつ聞いたの？」

由紀「今朝、ここの鍵借りる時にね」

由紀は答えながら自らの体操服のポケットにしまつてある鍵を手で叩いて鳴らす。直後に彼は辺りを見回して見たが、確かに目立つた汚れはなさそうだった。つまり今回のプール掃除の目的はあくまでも由紀を罰する事にあつて、プール自体の汚れを落とす事は二の次なのだろう。

「適当と言われても……って感じだな」

由紀「適当は適当だよっ！パパッと終わらせて二人でどっか遊びにいくよ♪」

反省してるのかしてないのか……。由紀は嬉しそうな顔を彼に向け、デッキブラシでプールを磨き始める。今回は完全に巻き添えをくらってしまった彼だったが、たまにはこんな休日も悪くない……。彼はデッキブラシを構え、由紀に負けじと掃除を始めた。

由紀「ふんふんふん♪」ゴシゴシ……

「……………」ゴシゴシ……

由紀「たらららく♪」ゴシゴシ…

「……………」ゴシゴシ…

由紀「るるるくん♪」ゴシゴシ…

デッキブラシを持つその細い手を動かしながら、由紀は楽しげに鼻唄を歌っている…。何がそんなに楽しいのか分からないが、そんな由紀を見ているだけで彼も自然と微笑んでしまう。

「……機嫌だね？」

由紀「ん？…そだね、ちよつと楽しくなってきた♪」

そう答えると由紀はブラシをプールの底へとつけ、そのまま端から端へと駆け出す。ジリジリと暑い日射しの中、ブラシの擦れる音や由紀が素足で駆けるペタペタという足音……そしてセミの鳴き声を聞きつつ、彼はのんびりとした動きでプールを掃除した…。

~~~~~

数十分の時が経ち、二人はプールの中を半分ほど磨き終える…。しかし気付くと撒いたはずの水も日射しによつて渴いており、またしても足元が熱くなり始めていた。彼と由紀…二人の額にも、じんわりと汗が浮かぶ。

由紀「ふいい〜…もう一回水撒こつか？」

「…頼みます」

一先ず水撒きを由紀に任せ、彼はプールサイドへ上がって右手の袖で額を流れる汗を拭う。こうして落ち着くと分かるのだが、やはり今日の日射しは強い…。動きを止めた途端に一層汗が出てきてしまい、彼は思わず口走る。

「くそ…暑いな…」

バシヤアアツ!!

「なっ…!!?」

雲一つない空を見上げる彼の方へ、突如冷たい水が襲いかかる。慌てて手を突きだし身を防ぐ彼だったが、服がかなり濡れてしまった…。

由紀「あははっ♪」

彼に水をかけたのは言うまでもなく丈槍由紀だった。彼女は今でこそホースを下げているが、ついさっきはその先を彼に向けていたのだろう。びっしりと濡れた彼を見て、彼女は子供のようにはしゃいでいる。

「…おい、何をする…」

由紀「えへへ♪暑いって言ってたから、涼しくさせてあげよーと思っ♡」

「ああそう…そうですか…」

由紀は水の出ているホースを手を持ち、イタズラな笑みを浮かべて

いた。彼はそれに応えるかのようにしてニヤリと笑うと、自分もそばにあつたホースを手に取り…それが繋がる蛇口を捻る。

(…よし)

そうしてホースの先から水が出たのを確認し、彼はその水を空へと放つ。放たれた水は勢いよく空へと吹き上がるも途中で勢いがなくなり、彼の狙い通り…由紀のいる場所へと降り注いだ。

由紀「ひゃっ…?!冷たいよ〜!!」

「んん…?通り雨みたいだね。そこのお嬢さん、傘は持ってるかな?」

由紀「持ってないっ!持ってないですっ!!」

彼の手によつて降り注ぐ大量の水…。由紀はそれから頭を庇うようにして左手をかけた、そのままニコニコと笑いながら右手に持つホースを彼の方へと向ける。彼と由紀…どちらも相手の放つ水をあまり避けようとしなないでいるのは、今日の暑さにまいていたから。自分達にかかる水は冷たく…心地よかつたのだ。

由紀「あははっ♪ねえ、ビショビショだよ〜?着替え持ってきてるの?」

口でそう言いながらも、由紀は負けじと彼に水をかけ続ける。彼はホースを由紀の上へと向けたまま、自信たつぷりといった様子で頷いた。

「一応持ってきておいたよ。よかつたよかつた…。いや、僕の心配してる場合じゃないでしょ?由紀ちゃんもずいぶんビショビショに――」

……ピタッ

由紀「……あれっ?どしたの?」

突如、彼がホースを下げて由紀への放水を止める。不思議に思った由紀もホースを下げてそちらへと歩み寄ると、彼は気まずそうな表情をしていた。

「いや……なんていうか……やり過ぎたかなって……」

由紀「……？」

言葉の意味が分からず、由紀は首を傾げる。

彼が何故急に大人しくなったの……。その理由は彼女……丈槍由紀の体にあつた。彼の放水によってびっしょりと濡れた由紀の体には体操服がピッタリと張り付き……紫色の下着がうっすらと透けていた。

「悪気はなかった……ただ、じゃれあつていただけで……」

由紀「……ああ、わかった!! なくんだ、気にしなくてもいいのに♪」

由紀は彼が自分の体を見て戸惑っている事に気付き、ヘラヘラと笑う。『彼女は異性に下着を見られても動じないほど大胆な娘になつてしまったのだろうか?』由紀の笑顔を見た彼がそんな事を思っていると、由紀は自分の体操服を左手で捲ろうとしながら言った。

由紀「下にはちゃんと水着を着てるから、気にしなくても大丈夫だよ」

「っ? 水着……?」

由紀「そ! 濡れちゃうかもって思ってたからしつかりと——」

そう言いながら、由紀は自分の体操服を捲り上げていく……。服はかなり捲り上がり、由紀の白い腹部……そして綺麗なへそが見えてしまっているが、彼女は気にしてなさそうに笑っていた。

「ちよ……ちよつとストップ!!」

ガシッ!

何かがおかしい気がして、彼は体操服を捲り上げていく由紀の左手を掴む。突然手を掴まれた由紀が不思議そうな顔をしていたので彼は念のため…由紀にある事を確認した。

「由紀ちゃん…君は本当に水着を着てきてるのかな？」

由紀「えっ？ちゃんと着てるよ？…あっ…」

彼に言われて視線を下げたその時に初めて、由紀は自分が水着を着てなどいないこと…そして胸元の下着が透けてしまっている事に気が付いた。

由紀「わわ…っ…!!？」

由紀は慌てて彼の手を振り払うと、透けた胸元を両手で隠しながら彼に背を向ける。自分では体操服の下に水着を着たつもりだったが、それは由紀の勘違いだった。

由紀「い、今から…着替えてくるね…？」

「あ…ああ、わかった…」

彼はなんと言葉をかけたら良いのかわからず、恥ずかしそうに背中を丸めて扉の向こうの更衣室へ消えていく由紀を見送る…。数分後、戻ってきた彼女は相変わらず濡れた体操服を身に纏っていたが、今度下着ではなく、黒のスクール水着が透けていた。

由紀「ほんとはこうなる予定だったの。だから濡れてもいいやつて思ってたんだけど…えへへ、失敗失敗…」

由紀は透けた体操服をツンツンと指差しながら照れくさそうに笑う。そんな彼女の顔がいつになく真っ赤に染まっていたため、彼は益々気まづくなった。

由紀「……………えへ……………へ……………」

「……………」

由紀の濁いたような笑い声だけが響き、二人の間の気まずい空気はどんどん濃いものとなっていく…。由紀も今回身に付けていた紫色の下着は周りに子供っぽいと馬鹿にされないようにと思いい背伸びして買ったものの為、普段身に付けている下着を見られるよりも五割増しで恥ずかしい思いをしていた…。

「……………とりあえず、掃除を再開しようか？」

由紀「うっ、うんっ!!そうだねっ!」

彼が掃除の再開に触れてくれたことで、気まずい空気が多少軽くなる…。そうしてまた残りの箇所をブラシで磨いていく中、由紀は彼をチラッと見ただけでさっきの事を思い出してしまい顔を赤く染めるが…同時にこうも思った…。

由紀（はずかしいけど、でも…見られたのがこの人でよかつたかな…）

## 第二十三話『むじやき』（ゆき）

由紀「わああ〜♪」スタスタツ！

「……………」

昼を少し過ぎた頃だろうか…。由紀はびつしよりと濡れた体操服の袖を肩まで捲つてからデッキブラシを構えると、それをプールの底に擦りながら一気に駆け出した。その姿がやたらと楽しげに見えた彼は大人しくその様子を見守っていたのだが…。

由紀「うわああ〜♪」スタスタスタツ！

（あ、またこっちに来た…………）

元気な声を発しながら駆けていった由紀はプールの端にたどり着くと直ぐ様ターンして、また彼の方へと駆け寄ってくる。『なんだかんだでこの掃除を楽しんでいるのだろう…』彼がそんな事を思ったときだった。

由紀「もう疲れたっ!!」

由紀は彼の前で立ち止まると持っていたブラシを放り投げ、力なくその場に座り込む。楽しそうに掃除していたと思えば急にこうだ…。彼は苦笑いしつつ由紀の隣に屈かがんで目線を落とし、彼女を励ました。

「もう半分以上は終わってる。あと少しだから頑張ろう」

由紀「うう…………せつかくのプール、泳いだりしてふつーに遊びたかった…」

「それは確かに…。まあ、由紀ちゃんと一緒なら掃除でも楽しいけどね」

由紀「…………ほんと？」

膝を抱えて座り込んでいた由紀がその顔を少しだけ上げ、彼の事を覗きこむようにして見つめてくる。彼はそんな彼女に笑顔を返し、その肩をポンと叩いた。

「うん、いい暇潰しになってるよ…」

由紀「…えへへ、そっか」

由紀は照れたように笑い、両足のつま先をモジモジと擦り合わせている。このままずっと由紀の事を眺めていても良かったのだが、彼は一つ気になる事があった。

「あのさ、普通に座ってるけど大丈夫？そこ凄く濡れてるけど…」

由紀の座っているところは先ほど撒いた水がまだ渴いておらず、軽い水溜まりのようになっていた。にも関わらずそこに体操座りしていた由紀の短パンはグツシヨリと濡れてしまい、由紀はほんの少し気持ち悪そうにしていた。

由紀「うわあ…もつとびしょびしょになっちゃった…。あつ！一応言っておくけど、おもらししちゃったわけじゃないよっ!!」  
「そんなこと、言われなくたって分かってるよ」

体操服の裾を両手で引っ張り、濡れた短パンを隠しながら顔を赤く染める由紀。短パンからポタポタと水滴が滴り、それが太ももを伝う様は確かに漏らしてしまったかのようにも見える。ただ、実際は違うことくらい彼にも分かっていた。

由紀「なんかお尻のところが濡れてて気持ち悪いなあ…。よし…！」

さすがにここまで濡れてしまった服をそのまま着ているのは少し動きづらいし、何となく気持ち悪い…。由紀は短パンに両手をそっ



とかけ、ゆつくりとそれを下ろした…。

(っ!?)びっくりした…そうか、今は下に水着を着てるのか…)

目の前で急に短パンを下ろす由紀を見た彼は一瞬ドキツとしたが、脱いだ短パンの先にあつたのが黒いスクール水着なのを確認して少し落ち着く。由紀は脱いだ短パンをプールサイドへと投げると、今度は上の体操服にも手をかけた。

由紀「もう両方脱いじやお。水着の方が楽だもんね」

「……………」

ポツリと呟いてから服を脱ぐ由紀…。彼は彼女が少しずつ服を脱ぐ様をじつと見つめていた。いくらその下に水着を着ていると理解していても、同級生の女子が目の前で服を脱いでいると少なからず胸が高鳴ってしまう。

由紀「…よ…つと!」

脱ぎ終えた体操服も先ほどの短パンと同じ場所へと投げ、由紀は微かに乱れた髪を右手で整える。上下の体操着を脱ぎスクール水着姿になった彼女は眩しそうに空の太陽を見上げた後、そばに転がっていたブラシを手にとった。

由紀「さっ!じゃあもうひとがんばりしよつか!!」

「んっ?あ、ああ…そうだね」

彼はスクール水着姿の由紀に見とれてしまい、返事が一瞬遅れる。彼等の学校は水泳時男女別に分けられていた為、こうしてスクール水着を身に纏う由紀を見たのは初めての事だった。

(この前ビキニ買うのに付き合った時もあったけど、由紀ちゃんって意外と胸あるんだよね……)

由紀の身体にピッチリと張り付くスクール水着…その胸にあたる部分は決して平らではなく、程よい大きさの膨らみがある。そして由紀が彼に背中を見せ、微かに前屈みになってプールの掃除を始めた時、彼は思わず自分の口を手で押さえた…。

由紀「あとちよつと〜♪あとちよつと〜♪」ゴシゴシ  
「…ッ!!」

この学校のスクール水着は下の方が結構なV字になっているため、由紀の太ももが惜しげなく晒されている。それ自体もかなりの破壊力なのだが、彼が今見ているのはそこだけではない…。彼が今見ているのは…目の前に突きつけられた由紀のヒップだった。

由紀「ふんふんふくん♪」ゴシゴシ  
「ツぐ…う…う…う…」

不意にこちらへと背を向けた由紀…そんな彼女が少し体を前屈みにしながらブラシを擦るものだから、その小ぶりなヒップが自然と彼の方へと向く…。平均的な物よりもやや際どい気のあるスクール水着は由紀の太ももどころか微かにそのヒップもはみ出しているようにも見えてしまい、彼は視線を外せなくなる。

(あれは太ももか…!?それともギリギリのところか…!?いや、もうそんな事はどうでもいい!一つ確かな事は…このままじやまずいって事だ!!)

ブラシを擦る動きに合わせて揺れる由紀のヒップ。それが手を伸ばせば触れられる距離にあるものだから、彼の心は大きく揺れていた。目の前にいるのはあの由紀で、今も楽しげに鼻唄を歌っている

……そんな彼女に手を出してはいけないと分かってはいるのだが…。

由紀「るったったく♪らんたったく♪」ゴシゴシ

「んん…んん…んん…!!」

(相手はあの由紀ちゃんだぞ…いくら二人きりとは言え、手を出すのはマズイだろ…。いや、誰が相手でもマズイんだけどさ…)

頭では思っけていても目はそちらに向いてしまい、右手もふらふらと彼女の方へ伸ばしてしまいそうになる…。『少し触ってしまった也由紀ちゃんなら謝れば許してくれる…。少しだけなら問題ない…。』頭の片隅でそんな事を考えてしまい、どうにも落ち着かない…。彼はこのどうしようもない気持ちを抑えるべく、ある行動ととった。

由紀「ふんふんふくん♪」ゴシゴシ

ガッ!!ガッ!!!

由紀「わっ!?!なんの音!?!」

掃除を進める由紀の背後から突如鳴る音。それはまるで何かを壁に叩き付けたような、打ち付けたような…そんな音だった。由紀が驚き振り返るとそこにはプール端の壁際に手をついたまま立ち、顔を俯ける彼の背中があった。

由紀「ど…どしたの?」

由紀は手に持っていたデッキブラシを壁にかけ、彼の背に向けて声をかける。彼はすぐこちらに振り向いて笑顔を見せていたが、その額が真っ赤になっているような気がするのは由紀の勘違いだろうか…。

「なんでもない…。ちよつとだけ疲れたから、少し休憩するよ」

由紀「うん…。ねえ、おでこ赤いよ？大丈夫？」

「ん？ああ、大丈夫大丈夫」

正直いうとあまり大丈夫ではなかった。彼の額が真っ赤に染まっているのは、自らの邪念を打ち消すべくプールの壁にその頭を打ち付けた事によるもの…。彼はズキズキと痛むその額を隠すようにして手をあて、プールサイドへと上がる。由紀も彼とともに休憩しようかと思つたが、気が乗っているうちにもう少しだけ働くことにした。

由紀「じゃあ、ゆっくり休んでね！」

「…は〜い」

プールの中からこちらへパタパタと手を振る由紀…。彼女のその純粹な笑顔を見て、彼は激しい後ろめたさに襲われた。こんなにも眩しい彼女の笑顔…それを曇らせてしまうかもしれない行動を先程の自分はどうしてしてしまったのだから。

(由紀ちゃんごめん。もう二度と、君に対して邪な気持ちよこしまを抱いたりしないから…。にしても、巡ヶ丘学院高校のスク水はこだわりを感じる逸品だな)

由紀「あつ、ごめんっ！さっきそこに投げた私の体操着、どつか日の当たる場所にかけていてくれるかな？できるだけ乾かしておきたいんだ〜」

「ああ、はいはい……」

言われた彼はそばに落ちていた彼女の体操着を上下ともに拾い上

げ、いい感じに日の当たる場所を探す…。少しの間辺りをキョロキョロ見回した結果、彼はそばにあったフェンスの方へと歩み寄った。

(日も当たってるし、ここにかけておけば良いだろ……)

プールと外を隔てる2mあるかないかくらいフェンス。日の当たりも申し分ない。濡れた由紀の服もこの上にかけておけばある程度は乾くだろう。彼はそこへ服をかけようとするがその前に、この服が少しでも早く乾くよう工夫した。

(…けっこう水吸っちゃってるから、軽く絞っておくか。そうすれば乾くのも多少早くなるだろうし)

ギユツ……………

ボタボタバタツ…!

体操シャツの濡れている箇所を雑巾ぞうきんのように絞り、フェンスの上能干す前にある程度の水気を払っておく。持っている時に重いと感じたそのシャツはやはりかなり濡れていたようで、絞る度にボタバタと水滴が落ちた。

「……………」

ギユツ……………

ボタバタバタ…ボタバツ…

体操シャツの方はかなり水気を払えたらしく、落ちる水滴が減ってきた。彼はそのシャツをフェンスの上にかけて干した後、今度は一旦地面に置いていた短パンの方を手を持つ。実を言うと、由紀の体操シャツを絞っていた段階で彼の中にある気持ち芽生えかけていたのだが……それは彼女の短パンを手を持った事によって完全に目覚めた。

(ええっと、この濡れている由紀ちゃんの短パンをこうして絞って……)

ギョツ…!!

ボタボタツ……

(こうして絞って出る水は…果たしてただの水なのだろうか?この水、一度は由紀ちゃんの身体にかかり、そうしてこの短パンまで伝ってきたものだろう。だとすれば……これはもうただの水ではなく”由紀エキス”とでも言った方が……)

ガンツ！ガンツ！ガンツ！！

由紀「うわっ?!?!」

先程聞いた音と同じ様な音が再びプールサイドの方から聞こえ、由紀は驚きの表情を見せる。今度のは三度、しかもさっきのより音の質が激しい気がした。音の聞こえた方へ視線を向けた由紀が見たのはフェンスの上に干された自分の体操シャツと短パン……そして、そのそばの地面に額をつけたままうずくまる彼の姿だった。

「ぐう……うっ……い……」

由紀「なっ!?!ど、どうしたのっ!?!」

うつ向けになつたまま苦しそうな声をあげている彼の身を心配した由紀は直ぐ様掃除を中断し、急いでプールサイドへと上がる。何があつたかは知らないが、こんな苦しそうな声をあげて倒れている彼をほうってはおけなかった。

由紀「大丈夫っ!?!どっか痛いのか!?!」

「だ……大丈夫……」

心配そうな顔をしてそばに駆け寄り、背中を撫でてくれた由紀へ彼はそう答える。本当の事を言うと地面に打ち付けた額が痛くて仕方ないのだが、由紀にそれを打ち明けられる訳もない。自分は彼女に抱いてしまった邪な<sup>よこしま</sup>気持ちを痛みで打ち消すべく、この額を打ち付けたのだから……。

(もう二度と由紀ちゃんに邪な気持ちは抱かないと決意したばかりな

のに、ものの数分であつさりといけない事を思ってしまった…。それもこれも、全てスクール水着のせいだ…)

彼はスツと立ち上がり、由紀に背を向けてプールの中へと戻る。彼女に背を向けたのは赤く染まった額を隠すためでもあるが、何より彼女の水着姿を見ないようにする為だった。

由紀「ねえ、ほんとーに大丈夫？保健室いく？あつ…お休みの日でも保健の先生つているのかなあ…？」

「あく…本当に大丈夫なんで、お気になさらず…。ほら、とつと掃除を終わらせよう…」

由紀「でも、休憩はもういいの？キミ、全然休んでないじゃん」  
「うん、もう大丈夫…」

休憩していてもいいのだが、何かしていないとつい由紀の方へ目を向けてしまいそうになる。ならこうして掃除でもしていた方が邪念も払えそうだし、早いところこの仕事を終わらせたい。

(まさか由紀ちゃん相手にこんな苦勞をするなんて…二人きりだからか？それとも、これがスクール水着の魔力チカラつてやつか)

二人きりという状況…そして少し際どくも見えるスクール水着。この二つが合わさり、彼を惑わせているのだろう。二人きりじゃなかったら…もしくははこの学校のスクール水着がもう少し露出控えめだったら…彼も由紀にこんな気持ちを抱かなかったはず。

(この前までは由紀ちゃんの事を子供っぽい子供っぽいと思っていたけど、侮あなっていたな…。こうして見ると、由紀ちゃんも立派な女の人で……)

スクール水着越しにも分かる程よい大きさの胸…そしてスラツと伸びた細く綺麗な足。それらを見ていても彼女の女性らしさは分か



るのだが、掃除中の彼女が時おりみせる、濡れた前髪を指先でかきわけける仕草……それがやけに大人っぽく見えてしまい、胸がドキツとする。

由紀「……ん？どうかした？」

「あ、いや……別に……」

彼女を見ていたら不意に目があってしまい、彼は咄嗟に目を逸らす。

なるべく彼女を見ないようにと決めたのに……気づけば見てしまうから恐ろしい。

由紀「……えへへ、あとすこしだよっ！がんばろーね♪」

邪魔な前髪をかきあげ、にこりと微笑む由紀……。所々は大人っぽく見える彼女だが、この曇りのない大きな目やその笑顔は本当に子供っぽく、純粋なものだった。

「……うん、がんばろうか」

こんな顔で笑う女の子を相手に邪な気持ちを抱いていた自分が情けなくなり、彼は今度こそは真面目にやろうと決意する。

そうなってからは早かった。二人はプールの中、まだ手のつけていなかった箇所をどんどん磨いていき、数十分後にはあらかた磨き終え、二人はデツキブラシを置いた。

くくく

「よし、こんなもんだろ」

由紀「おわった〜っ！よし、お疲れさまっ♪」

由紀は嬉しそうに微笑み、彼に右手の平を彼へ向ける。彼はその意味をすぐに理解すると自らも右手を上げ、彼女とハイタッチをした。

パァンツ！

気持ちの良いくらいに見事な音が鳴り、彼は満足して手を下げる。しかし隣を見ると由紀は自らの右手の平をふーふーと吹きながら、彼の方を涙目で見ていた。

由紀「いたいよ！もう少し優しくやってほしかった!!」

「ああ、ごめんごめん」

由紀「…えへへ、じゃあ特別に許してあげよう♪」

えっへんと胸を張りながら、由紀は掃除を終えたプールの中へと戻る。今さら何をしようとしているのか…彼がそんな事を思いたたずんでいると、由紀は彼の事を手招きして誘い込んだ。

(ん？……まあ、とりあえず行くか)

訳のわからぬままプールの中へと下り、由紀の隣に立つ。すると由紀はプールの隅の日陰になっている場所に背中をつけながら座り込み、小さくため息をついた。

由紀「めぐねえもう少しで来るだろうから、ここで休みながら待ってようよ。ここ涼しいよ〜」

辺りは強い日差しが降り注いでいるためかなり暑いが、由紀のいる場所は日陰になっているし、先程も付近に水を撒いておいたので確か

に涼しい。彼は短パンが少し濡れるくらいは仕方ないと覚悟を決め、彼女の隣に腰をおろした。

「…涼しい」

由紀「でしょっ？それにほら、目の前の水たまりをね…こうして足でパシャパシャくってやると気持ちいいよ」

二人の前にある水溜まり…由紀はそこに足を伸ばし、つま先でパシャパシャと音をたてる。その際に跳ねた水はたまに彼の足へとかかってきたが、暑さにまいつっていた身体にはそれも心地よかった。

(どれ、やってみるか…)

彼も足を伸ばし、つま先を水溜まりにつける。水溜まりもギリギリの所で日陰に入っていたのでまだ冷たく、つま先で触れるだけでも心地良い。ただ、欲を言うならもう少し範囲が欲しかった。この水溜まりはあまり大きくない為、由紀とつま先がぶつかってしまう。

「…あ、ごめん」

自分のつま先が由紀のつま先に触れてしまい、彼は咄嗟に謝る。しかし由紀はまるで気にしていないようで、ヘラヘラと楽しそうに笑っていた。

由紀「んくん、だいじょーぶだよ♪」

「そっか、ならよかつ——」

ピトッ…

「っ？」

彼女の笑顔を見て安堵した時、彼のつま先に何かが触れる。何かと悪い視線をそこへ向けると、由紀が彼のつま先に自分のつま先を重ね、その足裏をイタズラに擦ってきていた。

由紀「えへへ♪どう？つめたい？」

「まあ…冷たいっっちゃ冷たいかな…」

由紀「むー、なんかビミョーなりアクションだね…つまんないなあ」

彼のなんとも言えぬ反応に満足のいかなかった由紀はもう一方の足も彼のつま先に重ね、その顔色うかがを窺った。

由紀「両足でやったら冷たい？」

「いや、その…冷たいというか…」

正直に言う…また良くない気持ちだが彼の心に宿りかけていた。同級生の女子…その中でも可愛い方にあたる由紀が水着姿のまま、自分のつま先に自らのつま先を重ね、擦ってくるのだ…。これはさすがに我慢するのが難しい。

（狙ってやってる……訳ないか。由紀ちゃんはただじゃれあつてい  
るだけのつもりなんだろうが、つま先とはいえここまで密着されると  
さすがにマズイ…。このままじゃ、また彼女に邪な気持ちをつ…  
！）

水溜まりに触れて濡れた自分の足を彼のつま先に擦り付け、由紀は  
楽しそうに微笑む。この曇りない笑顔を見るに彼女はただ遊んでい  
るだけのつもりなのだろうが、これだけ肌をくつつけられると彼の方  
が我慢出来なくなってくる…。あと数秒これが続いてしまえば、どう  
かなってしまいかも知れない…彼がそう思った時だった。

由紀「…ねえ？」

由紀はつま先を擦るのをやめて自らの膝を抱え、体操座りの姿勢をとる。彼女がつま先を離した事でどうにか理性を保てた彼がホツとしていると、由紀は空を見上げながらポツリと呟いた。

由紀「今日…ほんとにありがとね」

「えっ？」

ポスツ…

言い終えた直後、由紀は隣に座る彼の肩にその頭を寄りかける。綺麗に晴れている雲一つない空の下、辺りではセミがミンミンとうるさく鳴く中…彼は自分に寄り添う彼女の事を横目で見つめた。

由紀「キミと一緒にいてくれてよかった…一人だったら絶対つまんなかったもん…」

「そう…かもね」

由紀「…キミは、本当によかったの？せつかくのお休みなのに、一日ムダになっちゃったんだよ？」  
「ムダにはなっていない。由紀ちゃんと一緒に掃除するのも楽しかったし」

由紀「……………」

答える彼に対し、由紀の返事が戻ってこない…。彼が青い空を見上げながらセミ達の声…そして休日にも活動をしている運動部のものであろう遠くの掛け声に耳を澄ませていると……。

…ぎゅっ

由紀が無言のまま、そつと彼の左手を握ってきた。彼は何故急に手を握られたのかと戸惑いつつ、しつかりとそれを握り返す。小さな手、そしてその細い指の感触を確かめるようにしつかりと…。

由紀「わたしもね…すつごく楽しかったよ…」

由紀がこちらを見てにつこりと微笑むが、その表情はいつもと違う…。どこか照れたようにして微かに目を細めながら頬を赤く染めたその顔は子供っぽさなどまるで感じさせず、彼は目を丸くした。

「……………」

由紀（あれ…？わたしの胸、どきどきって…してるみたい）

手を握りあつたまま彼に寄り添っているだけで、由紀は経験したことのない胸の高鳴りに襲われる。この気持ちは何なのか…それが分からぬまま、由紀は彼の手を一層強く握り、その顔と真つ正面から向かい合った。

由紀「あつ、あのねっ…わたしね…その…ね…」

「…なに？」

彼が小さな声で尋ねるが、由紀自身…自分が何を言おうとしているのか分からずにいた。ただ気がつけば彼の手を強く握り、何かを告げようとしていたのだ。

由紀「つ…とね…その…な、なんだっけな…」

言い出したのは自分なのに言葉が出ない。出そうとしている言葉が何なのかも分からない。由紀は目をキョロキョロと泳がす事しか出来ず、軽いパニックに陥りかけた。

…ガチャツ

由紀「あつ！」

「…お」

危うい所でプールの入り口の扉が開く音が聞こえ、由紀は思わずホツとする。扉の向こうから現れた一人の女性：『佐倉慈』は辺りを少し見回した後、プールの中で休む二人を発見してプールサイドから声をかけた。

慈「いたいた。その様子だと掃除は終わったのかしら？」

由紀「うっ、うんっ！終わったよ！」

慈に気づかれるより先に彼の手を離し、由紀はスツと立ち上がる。いつもの由紀ならこのまま手を繋いでいたところだが何故か今この時は慈に…他の人にそれを見られてはいけない気がした。

慈「そう、お疲れさまっ!!…あれ？丈檜さん、水着に着替えたの？」

由紀「うん！濡れちゃうからね」

慈「用意が良いわね。あら、あなたは体操服のままね…。濡れちゃったでしょ？」

「ええ、まあ。でも着替え持つてきてるんで平気です」

慈「ならよかったわ。じゃあ今日のところはこのくらいにして…二人とも、お腹って空いてる？私も仕事が終わったから、お昼くらいならご馳走してあげるけど」

由紀「ほんと？わ〜い♪めぐねえ大好き〜♡」

慈「めぐねえじゃなくて佐倉先生ですっ!!ほら、支度しちやってね」

慈に言われて彼と由紀はプールをあとにし、着替えを済ませてから

学校を出た。その後、慈が約束通りに近所のレストランへと連れて  
いってくれたので三人は昼食をそこで済ませ、そのまま解散したの  
だった…。



## 外伝 『夏と冬の戯れ』

教師「…よし、じゃあ今日はここまで！」

少し体格の良い、パツと見では体育教師にも見える（実際は数学教師なのだが）その男性教師がクラス全員へ授業の終わりを告げる。するとクラスのほぼ全員が教科書やノートを片付け、次の授業が始まるまでの時間潰しを始めた。

教室内で友人と話す者…。

トイレへ向かう者…。

他の場所へ時間を潰しに向かう者…。

時間の潰し方は人それぞれだが、この二年B組の一員である少女…狭山真冬は授業が終わっても席を立つことなく、さつきとつたばかりのノートを見直していた。

真冬（うん…：肝心な所は全部押さえたかな）

彼女は授業が終わる度、何か書き漏らしはないかと確認をする。たったの一度でもそんな事があった訳ではないのだが、これをやらないと落ち着かなかった。いや…次の授業が始まるまで、これぐらいしかやる事が無かったのかもしれない。

女子生徒「ねえ狭山ちゃん、さつきの授業で分からないところがあつてさ…ちよつと教えてくれないかな？」

一人の女子生徒がノートを手にしたまま真冬へと近寄り、ニコニコとした笑みを浮かべる。彼女は真冬がある程度良い成績なのを知っているのだろう。真冬にとつても、他人にそれを教えるのは難しい事ではないのだが…。

真冬「めんどくさい…なんでボクが教えなきゃならないの…？ただでさえ授業が終わったばかりなのに、他人の面倒まで見たくないんだけど…」

女子生徒「なっ…！その言い方、感じ悪くない？」

真冬「知ったことじゃない…。ほら、とつとと席に戻りなよ…」

女子生徒「なにそれ…ムカつくんだけど…！」

真冬は女子生徒と目を合わせる事すらせず、せつせとノートをしまい始める。そんな真冬の一連の行動に腹をたてた女子生徒が彼女の事を睨み付けたその時、一人の少女が割り込んできた。

果夏「うわああつ!!ええつと、ちよつと待ってね!?!どこ?どこが分からなかった?」

女子生徒「え?えつと…ここなんだけど…」

茶色のポニーテールを揺らして現れたのは同じくB組の一員である、紗<sup>すず</sup>巴<sup>は</sup>果<sup>か</sup>夏<sup>な</sup>だった。彼女は慌てた様子で真冬と女子生徒の間に割り入り、真冬の代わりに女子生徒の手助けを始めた。

真冬(……めんどくさい)

ガタツ…

真冬はこの場を果夏に任せ、あてもなく廊下へ出ることにする。

果夏「ああ!ここねっ!私も分からなかった!!」

女子生徒「はあっ?役立たずじゃんっ!!」

どうやら果夏の学力では助けになれなかったようだが、女子生徒は特に苛立った様子も見せずに笑っていた。きつと、果夏の性格を知っていたからだろう…。果夏は誰にでも好かれ、場を明るくする力が

あつた…。

真冬（ほんと、ボクとは正反対の人間だな…）

さつきもそうだ…。あの女子生徒とも普通に接してやれば良かったのに、あんな態度をとってしまった。小さい頃から他人と関わるのが苦手で、気づけば嫌われものになっている。

真冬（ま…別にいいけどさ…）

他人と関わるのは疲れる…。だから一人でいるのが楽だ。真冬はそう考えた上で行動していたのだが…。

果夏「真冬たん!!待ちたまえ!」

真冬「……………」スタスタ…

果夏「止まりたまえっ!!」

真冬「……………」スタスタ…

果夏「…おいっ!そのペタン娘!!止まらないと友達やめちゃうぞ!!」

真冬「友達にそんな事を言う最低なヤツ、こつちから友達をやめてやる…」

言いながらも真冬は足を止め、振り向いて後方にいた果夏の方へと歩み寄る。真冬自身、胸があまり無いことを気にしていた為、これ以上果夏に廊下で大声を出させる訳にはいかなかった。

果夏「うわああつ!ごめんごめんっ!もう二度と言わないから!!だ

からこれからも私とお友達のままです…!!」

真冬「二度と言っちゃダメだからね…？次言ったら本気で友達やめるからね？」

果夏「誓いますっ！必要な誓約書を書きましょうか…!?」

果夏はどこからともなく一枚の紙切れを取り出し、真冬の顔を窺う。果夏が取り出したその紙切れは誓約書などではなく彼女の答案用紙のようで、救いようの無い点数が記されていた…。

真冬「カナ…もう少し勉強しなよ」

果夏「ええっ！勉強ってツマンナイからなく…」

真冬「…じゃ、そのままでもいいんじゃない。カナがそれでいいなら…ね」

恐ろしいほど冷たい目を向けてから、真冬はくるつと身を回して果夏に背を向ける。すると果夏はようやく危機感を抱いたのか、答案用紙を持つその手を震わせ始めた。

果夏「も、もしかして…わたしってかなり馬鹿な娘？いやいや…下には下がいるハズだし、まだ大丈夫…だよな？」

真冬「そうやって怠<sup>なま</sup>けている内に…いつしか下に誰もいなくなるんだね」

果夏「うぐっ!!わ、わかった…！これからは少しでも勉強するっ!!」  
彼女がそう答えたのを聞いてから、真冬はどこへ向かう訳でもなく廊下を進む。すると果夏も持っていた答案用紙をポケットへ雑にしまい、真冬の横について歩いた。

果夏「どこいくの？トイレなら一緒にいこっ♡」

真冬「違う…っていうかトイレくらい一人で行ってよ」

果夏「じゃあどこいくの？」

真冬「別に：次の授業が始まるまで時間潰すだけ」

果夏「そう言えば圭ちゃんから聞いたんだけどさ、近所に美味しいケーキ屋さんが出来たんだって!!真冬ちゃん知ってた?」

真冬「知らない：そもそも圭って誰?」

果夏「あつ、真冬ちゃんはまだ会ったことなかったっけ?祠堂圭ちゃん。C組の娘でね、最近仲良くしてるの!」

嬉しそうに笑いながら、果夏は新しく増えた友達のことを語る。果夏は同じクラスの中かなりの人数友達がいるのに、他のクラスまでその友好関係を広めているらしい。

真冬（ほんと：ボクとは大違い）

果夏「でねっ、そのケーキ屋さん、また今度一緒に行かない?圭ちゃんも仲の良い娘を連れてくるって言ってたから、わたしも真冬ちゃんと一緒に行きたいなあ〜って思ってた:」

真冬「わざわざボクなんかを誘わなくても、カナなら他にも仲の良い人がたくさんいるでしょ:。それとも、もう何人かに断られたあとなの?」

歩みを止め、果夏の目を見つめながら尋ねる。果夏の友人の多さはかなりのものだ。そんな彼女が、自分のような者を誘うなんて:。真冬がそう考える中、果夏はいつになく真剣な表情で答えた。

果夏「誘ったのは真冬ちゃんが最初だよ。だって、一番の親友だもんっ!!」

真冬「ああ:そう:」

果夏「これマジだからねっ!わたしは他の誰よりも真冬ちゃんが好きっ!真冬ちゃんの為なら:全ての友を捨ててもっ:!!」

真冬「ダメだよ。友達は大事にしなきゃ:」

果夏の発言は決して冗談ではない。彼女は真冬の事を強く思っ

いて、誰よりも仲良くしたいと願っていた。真冬も彼女のスキンシップがあまりにしつこい事から、それには気付いていたのだが…。

果夏「もしかして、真冬ちゃんはわたしの事が嫌い…？どうしてっ!? やっぱりしつこくし過ぎた!？」

真冬「そこまでは思っていない…。っていうか、しつこくしてる自覚あつたんだ」

果夏「まあ…多少？ごめん、あまりしつこいのは疲れちゃうよね？」

真冬「…疲れはしないよ。ま、鬱陶うつとうしくはあるけどね」

果夏「みやつ!? は、反省します…」

真冬の言葉を聞き、果夏はがっくりと肩を落とす。すると果夏は直後にハッと顔を上げ、不安そうな顔を真冬へと向けた。

果夏「も、もしかして真冬ちゃん…そもそもわたしを友達だと思っ  
てなかったり…」

真冬「……どーだろーね」

真冬は歩くペースを上げ、果夏との距離を開く。チラツと振り向くと果夏がやたらと真っ青な顔をしていて、それがとても愉快だった。

果夏「ヤバいって!! 真冬ちゃんが友達だつて言ってくれないと、わたし淋しくて死んじゃうんだからっ!!」

真冬「あらら…それはそれは…」

果夏「今の意味深な笑顔は何っ!? 何を意味してるのっ!?」

果夏は慌てた様子で真冬の元へと駆け寄ろうとする。…が、その途中すれ違った教師に果夏は捕まり、廊下の真ん中で説教が始まってしまった。

慈「紗巴すずはさんっ！廊下は走っちゃだめって前も言ったでしょう!?」  
果夏「佐倉先生っ、今はそれどころじゃないんですっ!!その手を離して下さいっ!!」

慈「離しませんっ!!離したらまた走るでしょ!?!」

果夏「走りますけど…走りますけどっ…!!でもおっ…!!」

真冬「……ふふっ」

廊下の真ん中で慈に説教される果夏を見て、真冬は満足そうに笑う。他人と関わるのは苦手だが、こうして彼女をからかうのは中々に面白い。そしてそれとは別にもう一つだけ、真冬的笑顔には理由があった。

果夏『も、もしかして真冬ちゃん…そもそもわたしを友達だと思っ  
てなかったり…』

真冬が笑うもう一つの理由。それは彼女が言ったこの言葉だ…。

真冬（カナ…気付いてないんだね…）

果夏『…おいっ！そのペタン娘!!止まらないと友達やめちゃうぞ

!!』

真冬（ああ言われた後、ボクはキミに何て答えたかな…?）

あの時の彼女の言葉、そして直後に放った自分の言葉を思いだし、真冬はふふっと笑う。こんな簡単な事にすら、果夏は気付いていないのだから。

真冬『そんな事を言う最低なヤツ、こつちから友達をやめてやる…』

真冬（…ね？元から友達だと思っただけなら、そもそも『友達やめる』なんて言葉を使わないよ…。カナはうるさくて鬱陶しいけど、それでも…ボクの大切な…）

果夏「佐倉せんせ〜っ!! 離してっ! お願いだからっ!!」

慈「だからっ! 離れたらまた走るつもりでしょうっ!!? そんなのだからからねっ!! 廊下は走っちゃだめなの!!」

果夏「でもっ、走ってでも掴まなきやいけない真実がそこにあつて…!!」

慈「訳が分からないこと言わないのっ!!」

真冬「…ふふっ、カナは本当にバカだなあ♪」



第二十四話 『あなたの慌てた顔が好き』（みき）

巡ヶ丘学院高校の一階：その下駄箱付近、全ての授業が終わり、何人も生徒がそこへと集う。靴を履き替え、真っ直ぐ家に帰る者。はたまた体操着のまま外に出て、これから部活をするべく屋外へ向かう者：今この下駄箱にいる生徒はそのどちらかに当てはまるだろう。

ガタツ：

何人かの生徒に紛れ、彼も下駄箱から靴を取りだす。彼はそれを上履きと履き替えると、そのまま校舎を出ようとした。彼は部活動をやっていない為、このまま真っ直ぐ家へと帰るつもりだ。

「はあ……疲れた」

ボソツと呟き外へと進む。するとその後方：そこにある下駄箱でたった今靴に履き替えたばかりの生徒が彼の肩をバシツと叩き、彼の体をよろめかせた。

バシツ!!

「いたっ……！まったく、どこの誰だ？馬鹿力だなあ！」

胡桃「馬鹿力で悪かったな!!」

体勢を立て直し、それから振り返った先にいたのは胡桃だった。彼女は彼が放った『馬鹿力』という台詞に苛立ったのか、やたらと不機嫌そうな顔だ。

「…なんだ胡桃ちゃんか。まあちようどいい、一緒に帰ろう」

長かった授業によつて疲れきつた体のまま、一人帰るのは心細い。出来るなら話し相手の一人でも…そう思った彼は遠慮なく胡桃の事を誘つたが、彼女は呆れたような顔をして答える。

胡桃「お前、あたしが体操服着てるの見えてないのか？あたしはこれから部活だから、一緒に帰かえんのはムリ。まあ…どうしてもつてなら終わるまで待つてよ。ジューズでも奢おごつてくれるなら一緒に帰つてやるからさ♪」

「あ…じゃあいいや、一人で帰る。このまま待つのもしんどいし、もう小銭も無いし…」

胡桃「なんだ、つまんないヤツだな。んじゃ、また明日な」

パタパタと手を振る胡桃に別れを告げ、彼は校門へ歩く…。胡桃、そして悠里も部活動。由紀は気づいた時にはもういなくなつていた…。一緒に帰る相手がいないのはつまらないが、まあこんな日もあるだろう。そんな事を思いながら校門にたどり着いた時、一人の少女が声をかけてきた。

美紀「あつ、先輩…」

「お、美紀さんじゃないですか？」

こちらへと歩み寄つて来た後輩、直樹美紀と並び、彼は校門の前へと立つ。彼女は一人ここで待つていたようだが、何をしていたのであるか…。

「今日は圭ちゃんと一緒じゃないんですね」

美紀「いつも一緒にいるつてわけじゃないです。先輩こそ、今日は一人じゃないですか？」

「まあ、みんなそれぞれ部活だのなんだの色々あるみたいで」

美紀「そうでしたか…。じゃあ、よければですが…私と帰りませんか？」

ほんの少しだけ言いづらそうに目線をキョロキョロと泳がし、美紀はそう言い放つ。一人寂しく帰路につこうと思っていた彼からすれば、その提案はかなりありがたかった。

「おつ、いいですね。んじゃ、一緒に帰りますか」

美紀「はいっ、帰りましょ」

彼がゆっくりと歩き出すと、美紀もそれにペースを合わせて隣を歩く。隣を歩く彼女が少し嬉しそうな顔をしているような気がするのは、そうであって欲しいと願う彼の勘違いだろうか。

(…いや、やっぱり少し機嫌が良いように見える。どうしたんだ?)

こっそり隣から覗き込む美紀はニコニコと微笑んでおり、いつもより上機嫌に見える。彼はゆっくりと歩いたまま、思いきってその理由を尋ねてみた。

「なんか良いことでもありました?やけにニヤニヤしてますけど…」

美紀「えっ?…してますか?」

「…少しだけね」

美紀「そう…でしたか」

どうやら本人は微笑んでいる自覚がなかったらしく、照れたようにして彼から顔をそむける。彼女はその後、顔をそむけたままの状態でこう言った。

美紀「実は、少し寄りたい場所があるんです…。いつもは圭と一緒に  
行っていた場所なんですが、彼女も今日は用事があるみたいで…。  
誰か代わりになる人がいないかと悩んでいたら先輩が来たもんで、思  
わず笑っちゃったみたいですね…」

そむけていた顔をチラツとこちらへ向け、彼女はまたにつこりと笑  
う。落ち着いて考えると彼女の笑顔をこれほど間近に見たのは初め  
ての事であり、彼の胸が微かに高鳴る。

「じゃ、これからそこへ向かうと？」

美紀「あつ、先輩の都合も考えないでごめんなさい…。真っ直ぐ帰  
りたかったりしますか？それなら無理にとは……」

「いや、別に急いでる訳でもないし…：それほど遠くでもないですよね  
？」

美紀「はいっ！ちょっと回り道になりますが、それほど遠くではな  
いです」

なら、断る理由もない。今日は授業についていくのがやたらと大変  
に感じて頭こそかなり疲労しているが、体力的にはまだ余裕がある。  
彼は美紀に案内を頼み、彼女の”寄りたい場所”へと向かった。

~~~~~

そうして彼女と十分弱歩き、たどり着いたその場所…。彼はそこに
立ち止まると辺りをキョロキョロと見回して、最後に美紀の顔を覗き
込んだ。

「……………ですか？」

美紀「はい、ここですよ」

「そうですね…」

少し納得のいつていないような、何か言いたいような…そんな思いを乗せながら彼はもう一度辺りを見回す。彼女に案内され着いたこの場所は学校から離れた場所にある一つの公園…。しかし公園といてもかなり広いもので、入口に立つ二人の前方には大きな噴水…そしてもう少し離れたところには池もあった。

(この人、ここに何の用があるんだ?)

彼の記憶が確かなら、彼女は普段、圭と共にここへ来ていると言っていたはず。放課後の散歩にしてはやけに回り道になるし、何か目ぼしい物があるようにも思えない。強いて言うなら、夕焼けに反射してキラキラと光る噴水の水が綺麗だというくらいだ。

美紀「とりあえず、ちよつと座りましょうか」

「えっ? あ、ああ…」

彼女に案内されるまま、彼はそばにあったベンチへ…彼女と共に座る。彼女はベンチに腰かけると直ぐ様自分のカバンの中をゴソゴソと探り始め、何かを確認しているようだった。

美紀「よし…ちゃんとある」

「…何がですか?」

美紀「あつ、いやっ…何でもありませんっ!」

彼が尋ねると彼女はカバンをしめ、それを抱くように両手で抱える。やはり彼女の行動にはどこか違和感があるが、何か内緒にしておきたい事があるなら無理に詮索するせんさくのも悪いと思った。

(まあ…気にはなるけどね)

彼女から視線をそつと離し、目の前の噴水や遠方の池など、辺りの風景を眺める…。そうする事で気付いたのだが、この公園……やけに二人組が多い。それもただの二人組ではなく、若い男女の二人組だ。中には彼と美紀のように制服姿の者もいる。恐らくだが、あれらはカップルではないだろうか…。

(…カップルだろうね。手とか繋いでるし、仲良さそうだし)

よく見ると彼と美紀のようにベンチに腰かけたまま、彼女であろう女子の肩を抱く者までいる。そんなものを見てしまうと今、ここにこうして腰かけている自分と美紀もカップルだと思われてしまいそうな気がして、彼は少しだけ気まずい思いを感じ始めた。

「……………」

美紀「…どうしました？」

そんな彼の異変に気付いたのか、不意に美紀が声をかける。ただそうして声をかけられたところで彼女に『周りにはカップルだらけだね』などと言える訳もなく、彼はただ気まずそうに目を泳がせていた…。胡桃や由紀になら言えるかも知れないが、美紀に言うとなると難易度が高く感じる。

「いやあ……その……ね？」

美紀「？」

謎の反応を返す彼を見て、美紀は不思議そうに首を傾げる。しかしその直後、彼女はじつと辺りを見回し…彼が何故こんな状態なのか、その原因に気が付いた。

美紀「…ああ、そういうことですか」

「まあ…そういうことですね」

辺りのカップルを見て彼女がそれを察した事を知り、彼は静かに頷く。すると美紀は突如頬を緩め、ニコニコと微笑み始めた。

美紀「だからってそんな顔しなくても良いじゃないですか。ほんと、ヘンな先輩ですね」

「中々に失礼な事を言う後輩だな…」

ムツとした表情を向け、美紀の事を見つめる。口ではこんな事を言っている彼だったがそれは冗談のようなものであり、本当はなんとも思っていないかった。放たれた美紀の言葉もまた、冗談だと分かっていたからだ。

美紀「ふふっ、すいません」

「…で、ここでのんびりとお話することが美紀さんの目的ですか？」
こんなカップルだらけの公園で自分と話すことが目的の訳がない。彼がそう考え尋ねると、美紀は案あんの定じょうその首を横に振った。

美紀「違いますよ」

「じゃあとつととその目的を——」

美紀「いえ…カップルだらけの空間に戸惑う先輩を見ているのは面白いので、もう少しだけこうしてたいです」

美紀はイタズラな笑みを浮かべてそう告げると、微かに腰を上げてからベンチの隅にいる彼の方へと寄る。彼女はそうして肩が触れあう程の距離まで彼に寄り添い、またにっこりと笑った。

「なんか…今日は意地悪ですね」

美紀「…そうですか？」

「んん、少しばかり扱いに困ってますよ…」

肩が触れる程に密着してベンチに座る彼と美紀。こんな公園でこ

うしている自分達までカップルに見られてしまう気がして、どこもなく落ち着かない。

美紀「私は楽しいですけど、先輩は迷惑ですか？」

「まあ、美紀さんとなら……」

美紀「私となら……何ですか？私が相手だと迷惑ってことですか？」
曖昧あいまいな返事を返す彼に対し、美紀は積極的に言葉を放つ。今日の彼女は本当にいつもと様子が違って、彼にとっては中々の強敵だった……。

「はあ……美紀さんとなら、カップルに思われても良いって事ですよ。
美紀さんしつかりしてるし、可愛いし……」

美紀「……かわいい……ですか」

彼が”可愛い”と告げると美紀は積極的だった態度を一変させ、恥ずかしそうに彼との距離を開く……。そうしてベンチの端と端に離れて座る二人……これはこれで少しだけ気まずいが……。

「……………」

美紀「……行きましようか」

「えっ、どこへ？」

美紀「だから……当初の目的の場所です。戸惑う先輩の姿も、もう十分堪能しましたから」

美紀は静かにベンチから立ち上がり、振り向いてから彼にそう告げた。後輩にそんな姿をいだけ見られた彼は少し複雑な気持ちを抱きながら……自分もベンチから立ち上がる。

美紀「目的の場所はこの近くですけど、先輩も一緒に来ますか？なんならここで待っていてくれるのも良いですよっ……」
「せっかくだし、ついていきます」

美紀「…はい、わかりました」

ここまで来たのだから、彼女の目的が何なのかを知りたい。そう考
える彼の言葉を聞いた美紀は微かに微笑み、先程まで二人が座ってい
たベンチ…そのすぐ裏にある深い茂みへと足を踏み入れた。

「ちよっ、目的の場所ってそこなんですか？」

躊躇いなく茂みに足を入れた彼女に戸惑い、彼は咄嗟にその手を掴
む。すると美紀はなに食わぬ顔で彼の事を見つめ返し、その首を縦に
振った。

美紀「そうですよ。どうしますか？やっぱり待ってますか？」

「いや……行きますけどね…」

仕方なく美紀の手を離し、前に行く彼女の背を追うようにして彼も
その茂みを進む。狭い公園の茂みなら大した事ないのだが、この公園
は広い…。だからか二人が入ったその茂みもやたらと深く、もはや荒
れた森を進んでいるかのようだ。

ガサツ…ガサツ…

奥へ進むごとに茂みが深くなり、葉や枝が彼の行く手を阻む。^{はば}尖つ
た枝が時おり頬や足に触れて危うく怪我しそうになるが、彼はどうに
かそれを避けていく。目の前の美紀は彼に比べ手慣れた様子で進ん
でいるので、やはり何度かここへ来たことがあるのだろう。

美紀「…ここですね。あれっ？」

「なにっ…どうしました？」

茂みを進むとこれまでに比べ少しだけ枝や葉の少ない、余裕のある
空間へと出た。美紀はそこに足を止めたが、何やら辺りを忙しそうに
見回し始める。

美紀「あれ……おかしいな…ここだったはずなのに…」

そばの木の下の茂みの中まで、彼女は何かを探すかのようちよろと辺りを回る。そんな彼女のそばに寄ってから彼が声をかけると、彼女はそつと口を開いた…。

「何を探してるんです？」

美紀「ここに犬がいたんです。箱に入れられた捨て犬が…」

「捨て犬？」

言われて辺りを見回すが、それらしき箱すら見当たらない。しかし彼女も何度かここに来ているようなので、場所を間違えた訳でもないだろう。

美紀「一昨日、圭とここに来た時に鳴き声を聞いて…それで見つけたんです。昨日までここにいたのに…どこ行っちゃったんだろ…」

「……………」

少し移動したのかも…そう考えた彼は姿勢を低くして辺りを探り始める。それを見た美紀もまた探すのを再開したが、結局…二十分ほどかけてもその犬は見つからなかった。

「ん…いないなあ」

美紀「先輩、もう良いです…。もしかしたら、誰かに拾われたのかも…」

地面に膝をつけて探す彼の肩を叩き、美紀は笑顔を見せる。言われて彼も諦めてその場に立ち上がるが、彼女の笑顔が少し強がっているように見えて仕方ない…。

「…本当に良いんですか？」

美紀「はい…だって、このまま探してもきつと見つからないですし…」

美紀は彼の返事も待たずに茂みへと入り、元の場所へと戻っていきつと、誰かに拾われたんだ……。心ではそう信じたいのだが、不安もある。もしかして、心無い人間に見つかり何かされてしまったのではないか……。もしそうなら、家族に無理を言っても自分が飼ってあげればよかった……。色んな事を考えてしまい、茂みを抜けた頃、美紀は微かに涙ぐんでいた……。

美紀「……………」

「……美紀さん」

少し遅れて彼も茂みを抜ける。その時に彼が見たのは先程のベンチに一人腰かける美紀だったが、その彼女の顔が悲しげで……何と声をかければ良いのか分からない。彼は一先ずその隣へと座り、茂みに潜った際についた服の汚れを手で払った。

美紀「大丈夫……だといいなあ……」

「……犬、好きなんですわね？」

美紀「ふふっ、先輩のところで太郎丸に会ってから……私の中でちよつとしたワンコブームが来たんですよ」

につこりと笑いながら答える美紀だが、その笑顔はまだぎこちない。思えば今日の彼女がやたらと楽しげに見えたのは、それだけここにいた犬と会うのを楽しみにしていたからなのかも知れない。

(どうにかしてあげたいけど……こればかりはな……)

ここに来たばかりの頃のようにはどうすれば良いか、いくら考えたところで答えなど出ない……。彼が深いため息をつきながら下を向いたその時、一人の女性が美紀へ声をかけてきた。

女性「あら、あなた…昨日もここに来てたでしよう?」

美紀「あつ…はい。一昨日から来てました…」

ベンチに腰かけたまま、美紀はその女性に言葉を返す。美紀の目の前にいたのは見たところ50代半ばの女性で、買い物帰りなのか大きなスーパー袋を手を下げていた。

女性「ここにいたワンちゃんに会いに来たの?」

美紀「はい、でも今見たらもういなくて…どこに行っただか知ってますか!？」

女性もその犬の事を知っているらしく、美紀はそれに反応する。彼女が慌てた様子で立ち上がるのを見た女性は落ち着いた様子のまま、につこりと優しく微笑んだ。

女性「あのワンちゃんなら昨日、あなたがいなくなった少し後に拾われていったよ。事故にあっちゃったとか、悪い人に連れていかれたって訳じゃないから安心して」

美紀「拾われていった…そうですか…」

女性「あつ、本当に心配しないで大丈夫よ?拾っていったその子、おばちゃんの知り合いだから!」

美紀の表情が今一つ固いを見て、女性は付け足すように答える。拾っていったならある程度は安心だが、美紀は念押しして尋ねた。

美紀「いい人…ですよね?」

女性「うん!少し誤解されやすい子だけどね、動物は大好きなはずだし…優しい子だから!」

美紀「なら…よかった。あつ!じゃあ、その人に会ったらこれ渡してくださいますか?本当は今日、あの子にあげるつもりだったんだけど…」

美紀は思い出したようにカバンを開き、一つの袋を女性へと手渡

す。彼が覗いてみると、それは犬用の菓子のようなだった。女性はそれを受け取ると美紀の顔を覗き込み、笑顔で返事を返す。

女性「わかった、渡しておくね!…でも、あと少し待ってれば本人来ると思うよ?あの子、いつも少し遅れてここに来るから」

美紀「いえ、他人の私に渡されても困るだろうし…」

女性「ふうん…じゃあまあ、ちゃんと渡しておくから!気を付けて帰んなよ?あんたも彼女の事、しっかり家まで送ってやるんだよ!」

美紀の隣に立つ彼へ、女性が強めに言葉をかける。そもそも美紀は彼女ではなく、ただの友達なのだが…:そんな事を考えたせいで彼の返事が遅れると、美紀がその女性へ、代わりに返事を返した。

美紀「大丈夫です…。私の彼は優しく、頼りになる人ですから」
「!?!」

女性「あははっ、仲が良くて幸せそうだね。じゃ、またね」

美紀「はい、また…」

美紀はペコリと頭を下げると、彼の手を掴んでスタスタと歩き出す。彼は無抵抗のまま彼女についていったが、その手は公園から出た瞬間に離された。

美紀「すいません、またイジワルしちゃいました…」

彼の手を離してから、美紀は楽しげににっこりと微笑む。その笑顔はとてもキラキラとしたもので、さっきのような強がりの笑顔ではなかった。どうやら犬を拾っていったのが優しい人だと聞き、一安心したらしい。

「むう…今も胸がドキドキするんですけど」

美紀「ふふっ、ならよかったです♪」

イタズラな笑みを浮かべながら、彼女はトコトコと歩き出す。彼女が元気になってよかったと彼も一安心し、その後が続くが、背後から彼女の足を見た時…そこに血が垂れている事に気が付いた。

「美紀さん、ちよつと止まって。足…血が出てる」

美紀「えっ？あつ…本当だ…切っちゃったのかな」

美紀は立ち止まり壁に背を預けると、スカートを軽く捲ってその傷口を確認する。怪我していたのは左足の太もも…。どうやらさつき茂みに潜った際、枝で切ってしまったらしい。彼女自身が怪我を自覚していなかったあたり、傷口はそこまで深くないのだろうが…タラタラと溢れ、太ももを伝う血が痛々しかった。

「あらら、痛みますか？」

美紀「いえ、そんなには……」

「…ちよいとお待ちを」

本人はこう言っているが、だからといってほうっておく事も出来ない。彼は一枚のハンカチを取り出すとまた公園へと戻り、水道の水でそれを濡らしてから彼女の元へと戻った。

「痛かったら言ってくださいね」

美紀「あ…はい…」

濡れたハンカチを彼女の傷口にあて、垂れた血をそつと拭く。美紀はそのハンカチが傷口に触れた瞬間だけビクツと体を震わせたが、その後はもう平気そうな顔をしていた。

美紀「もう大丈夫です。すいません、ハンカチ汚しちゃいましたね」
「ああ、お気になさらず…」

美紀「いえ、気にしますから…そのハンカチ貸して下さい。家で

洗って返します」

自分の血に汚れたハンカチを持ち帰られるのはどことなく気恥ずかしい…。美紀は半ば無理矢理に彼のハンカチを奪い取ると、有無を言わずそれをスカートのポケットへしまった。

「…まあ、そこまで言うなら」

美紀「じゃあ、帰りましょうか」

目当ての犬には会えなかったが、良い人間に拾われたと知り安心した。なら、あとは家に帰るのみ。そう思い歩き出そうとする美紀だったが、そんな彼女の前で彼が姿勢を低くして何かを待ち始めた…。

美紀「…：何してるんですか？」

「足、怪我してるでしょ？だから遠慮せず、先輩の背中に…」

美紀「それ…：本気で言ってます？」

こちらへ背を向けたまま、彼は手をピコピコと動かしている。確かに美紀は足を怪我しているが、歩けない訳ではない。だということに、どうやら彼は本気らしい…。

「さあ、はやくっ！」

美紀「…ほんと、ヘンな人ですね」

ふふつと笑ってから、美紀はそつと彼の背に身体を預ける。すると彼は両手を美紀の太ももにまわしてから立ち上がり、ゆっくりと歩き始めた。

美紀「…重くないですか？」

「平気です。美紀さん軽いから」

美紀「そうですか…」

やはり美紀も年頃の女の子だからなのだろう。軽いと言われると、

少しだけ嬉しく感じてしまう…。しかしながら今日は彼と共に公園のベンチへ座ったり、かと思えばこうして背中におぶらせてもらったり…。これではまるで、本当に……

美紀「私達、カップルみたいですわね」

「あく…ですね。こればかりはさすがに…」

ただの友達をこうして背中に乗せることなど、あまりない事だろう。少なくとも、自分がこんな二人組を見かけたら『あれは確実にカップルだな』と思う。彼が気恥ずかしそうに答えると、耳元で美紀の笑う声が聞こえた。

美紀「ふふっ、先輩の背中…意外と乗り心地いいですよ？」

「それはそれは…気に入ってもらえたようで何より」

ゆっくりと歩きながら、二人は何気ない会話を交わす。そうして少し歩いた時、美紀が彼の背をバシッと叩いた。

美紀「先輩、もう降ろしてくださいっ！」

「んっ？…どうして？」

美紀「どうしてって…分かってるでしょう!？」

慌てた様子で美紀が言う。正直に言くと、彼も彼女の慌てる理由は分かっていた。二人の進む先…そこに自分達と同じ制服を着た数人の女子生徒が立ちつくしていたからだ。

「大丈夫大丈夫。見たところ一年の娘みたいだし、顔見知りとかいないでしょう？」

美紀「あの中にはいないと思いますけど…でもっ…!？」

ブツブツ呟く美紀を無視して、彼は彼女を背負ったままその女子グループの横を通り過ぎる。その間、美紀はなるべく顔を見られぬよう

に彼の背へと頭を埋め、そして両手は彼の肩をギュツと握ったまま……そこを通り過ぎるのを待った。

美紀「……………」

瞳を閉じ、ただあの女子グループから離れるのを待つ……。耳を澄ますと彼女達がこちらを見つめて何かを言っているような気がして、美紀は彼の背に埋めた顔をこれ以上なく真っ赤にした。

美紀「はずかしいっ……………はず……………あしいっ……………!」

「……………ふふん」

背中から聞こえる美紀の恥ずかしさに悶えるような声……それを聞いた彼は勝ち誇るかのように笑う。あの公園では彼女に攻められっぱなしだったが、こうして一泡吹かせる事が出来たからだ。

「……………もう通り過ぎましたよ」

美紀「今度同じような事があつたら、ちゃんと降ろして下さいよ!」

「はいはい、わかつたわかつた…」

美紀「その適当な返事はなんですか?!もういい……今降ろして下さいっ!!」

これ以上彼の背に乗っているのは色々マズいと判断し、美紀はジタジタと暴れる。しかし彼はそんな彼女を気にもせず、スタスタと歩き進めていった。

美紀「もう……知らないっ……………」

暴れても意味がないと感じた美紀は呆れたように呟き、その背に顔を埋める。家まではもう少しだ……あと少しだけ我慢すれば、彼も降ろしてくれるだろう。そう思いながら、彼女は両手を彼にまわした。

「…怒りました?」

美紀「少しだけ……」

「あはは…だつてほら、公園のおばさんに言われちゃいましたから。彼女の事、しっかり家まで送るようになって」

美紀「だからって、背負いっぱなしじゃなくてもいいと思います…。私、恥ずかしすぎて死ぬかと思いましたよ…」

美紀は彼の肩からヒョッコリと顔を覗かせ言い放つ。すると彼は申し訳なさそうに微笑みながら、チラツと彼女の方へその顔を振り向けた。

「家に送るまでの間だけ…美紀さんは僕の彼女ですから。このくらいは当然かと!」

美紀「それ…いつ決まっただんですか…」

「美紀さんが公園のおばさんに、僕の事を彼氏だと言った時かな」

美紀「…そうですか」

ニヤリと笑うその顔を見て、彼は自分の事をとことん辱しめる気なのだと思いは感じとる。こんな事になるならあのおばさんに適当な事を言うんじゃないか。そう後悔しかける美紀だが、ふと…こんな彼に恥を感じさせる作戦が頭に浮かんだ。

美紀「なら私の事…呼び捨てにしてくださいよ」

「…えっ?」

美紀「あなたは先輩で、今だけは私の彼氏なんですよね?なら私の事、『美紀』って呼んで下さい…」

「……………」

彼は中々返事を返さない…。この反応から、彼が照れている事は容易に理解できた。しかし、さつきあの女子グループの横を通り過ぎた

時に美紀が感じた恥ずかしさはこんなものではない。もう一度、美紀が呼び捨てで呼ぶように催促しようとしたその時だった：

「…美紀」

美紀「っ……」

小さな声ではあったものの、彼は確かにそう言った。冗談混じりに呼ばれるならともかく、こんなふうには呼ばれると言いだした美紀の方も何だか恥ずかしくなってしまう。

「…これでいい？」

美紀「あっ…はい…」

それ以上は何も言えず、美紀はただ彼の背に顔を埋めた…。呼び捨てにしてくれと言いだしたのは自分なのに、いざ本当に呼び捨てにされると胸がざわつく。彼に恥をかかせるつもりが、逆効果だった…。

「…着きましたよっ」と

少しして、彼が足を止める。美紀が埋めた顔を上げると、そこにはすぐそばに自分の家があった。以前、由紀達と帰った時に彼も一度だけこの家の前に来た事があったのだが、まだ場所を覚えていてくれたらしい。

美紀「えっと…ありがとうございます」

美紀は彼の肩から顔を覗き込んで礼を言うが、まだその背中からは降りない…。というか、彼が自分から美紀の足に回した手を離してく

れないと上手く降りられないのだ。

「じゃ、降ろすね」

美紀「あつ、少し待って下さい…」

彼がそつと手を退かし、美紀を降ろそうとする。しかし美紀は彼に声をかけ、それを一時中断させた。

「？」

彼が不思議そうな顔をして、美紀の事を横目で見つめる。美紀はそんな彼と目を合わせ、あることを一つだけ確認した。

美紀「私…今もまだ、先輩の彼女ですか？」

「んん、この背中から降りるまでは…ってことにしますか」

美紀「そうですか…なら……」

その事実だけを確認すると、美紀はその顔を彼の首に埋める。今の自分が彼の彼女なら、このくらいの言葉は問題ないだろう。最後の最後にもう一度だけ、彼の慌てる顔が見たい。それが美紀の望みだった…。

美紀「先輩…大好きです…」

耳元で囁き、美紀はにっこりと微笑む。目の前には彼の驚いたような顔があつたので、美紀はとても満足だった。あとはこの背中から降り、いつもの友人関係に戻ればいい。それだけだったのだが……。

バタツ!!

「…?」

美紀「っ?」

そばで何かの落ちる音がして、彼と美紀はそちらへ目を向ける。そこには美紀や彼が持っているのと同様の学生カバンが落ちていたが、その事に関してはどうでもいい。問題はそばにいた、そのカバンの持ち主だった…。

圭「美紀ちゃんと先輩って…そうだったの…!?!」

「いやっ!その…!!」

美紀「圭っ!?!ちっ、違うのっ!!これはっ…!」

圭「と、とりあえずこれっ!!美紀ちゃんの教科書!学校に忘れてたから…!そ、それじゃあ…また学校で…」

圭は落ちていたカバンを拾い上げると学校に忘れていたという美紀の教科書を本人へと手渡し、そつと静かに後退りをする。その目は美紀の事を直視してはおらず、終始キョロキョロとしていた。まあそうもなるだろう。忘れ物を届けに友人の家へ行った圭が見たのはその友人がとある先輩の背中に乗りながら、その人物の耳元で『大好き』だと囁いている瞬間だったのだから…。

美紀「圭っ!!ちよつと待って!!」

ドカツ!

「うおっ!?!」

美紀は彼の背を強く押し、無理矢理にそこから降りる。彼女はそのまま逃げていく圭を追い、道の先へと駆けていった…。

「……まあ、どうにかなるでしょ」

最悪の場面を見られはしたが、美紀なら無事に圭に追い付き、その

誤解を解いてくれるだろう。一人残された彼はそれを願いつつ、自分の家へ帰ることにする。誤解の原因となった、美紀のあの言葉を思い返しながら…。

美紀『先輩…大好きです…』

(…あれはヤバかったな。もし圭ちゃんがいなければ、どうにかなっただかも知れない)

第二十五話 『分かつて欲しい気持ち』（ゆうり）

「っ……暑っっ……」

とある休日の午後……。彼は歩道を歩きながら一人呟く。せつかくの休日、ダラダラ過ごそうかとも思ったのだが、たまには少し運動を兼ねて出歩いてみよう……。そう思い外に出たのが間違いだった。今日の日差しは何時にも増して強く、額を流れる汗が止まらない。

（まだ外に出て一時間と経ってないけど、もういいだろ……帰ろう）

額の汗を服の袖で拭い、息を整えてから空を見上げる。見上げた空には雲一つないが、そのせいで太陽の陽が眩しく、目を開けていられない。彼はすぐに顔をうつむけ、来た道を引き返そうとしたのだが……道の先に一台の軽トラックのような物、それに群がる数人の人影があり、彼も自然とそこに向かってしまう。

（こんなところで、なにしてるんだ……？）

不思議に思う彼だったが、そばによつて人が群れていた理由を知る。人々が群れていたその車はアイスクリームの移動販売車であり、カウンターのように開かれた車の側面からは若い女性の店員が顔を覗かせていた。

（ああ、アイスね……。今日は暑いし売れるだろうな……）

今日のような暑い日に食べるアイスクリームは普段よりいくらか美味しく感じるだろう。そんな事を思いながらじつと立ちつくしている、気付いた時には客の列が減っていた。あまり混んでいるよう

なら待つのも面倒だと思ったが、ほんの数人待ちとなった今なら…。

(…並んどくか)

このまま帰ろうと思ったが、せつかくの機会なのだから食べていこう。彼はあと二〜三人になった客の列に並び、財布の準備をした。

(小銭あつたかな……。ん、大丈夫そうだ)

ポケットから取り出した財布の中にはかなりの数の小銭が入っていた。これだけあれば、アイスクリームが一つどころか二つや三つ買う事も可能だ。そんな事を思いながら財布のチェックをしていると、前方から何か良い香りがした…。と言つても、アイスクリームの香りではなさそうだ。

(なんだ…この匂いはどこから…)

財布のチェックをしながら、そつと顔を上げて香りの元を探る。下げていた目線を上げて分かったのだが、その香りはどうやら彼の前に並んでいる女性からきていたものらしい。後ろ姿なので女性の顔までは分からないが、ポニーテールのように後ろで結ばれたその茶色い髪が揺れる度、良い香りがした。

(…良いシャンプー使ってるんだろうな。…つと、ヤバいやバい。他人の髪の匂いばかり嗅いでたら危ない奴だと思われる)

上げていた目線を下げ、己に芽生えた邪念を払う。しかしその目線を下げたら下げたでその女性のミニスカートからのぞく太ももに目がいつてしまい、彼はそつとため息をついた。

(ああ…ダメだな。暑さに頭がやられてる…)

目の前の女性は確かに良い香りはするし、後ろ姿だけでもどこか色気がある。とは言つても、結局は顔も知らぬ他人なのだ。そんな人間

に対して邪なよこしま気持ちを抱いてしまうなど、暑さにおかしくなっている
としか思えない。彼はそう思いその女性から目を逸らしたのだが、そ
の目線はまたすぐその女性の方へと戻された。ようやく順番が来て
注文を頼むその女性の声：それに聞き覚えがあったからだ。

??? 「ええつと：：バナラ一つお願いします」

どこかおっとりとした、優しさのある声：。彼にとっては聞き覚え
のあるその声で彼女が注文をすると店員はニコリと微笑み、カウ
ンター奥にある機械でそれを作り出す。

(この声：：もしかして：：)

後ろから声をかけようかとも思ったが、もし人違いだったら恥をか
く。彼はその場で声をかけるのをやめ、彼女が注文したアイスを受け
取り、振り向くのを待った：。

店員 「はい、お待たせしました」

??? 「ありがとうございます」

彼女はアイスクリームの代金をカウンターに置くと、引き換えに店
員からそれを受け取る。そうして振り向いた彼女はやはり彼の知っ
ているあの女性であり、彼：：そしてこちらを振り向いた彼女も、互い
に驚いたような表情を見せた。

悠里 「あ、あら：：？」

「やっぱり、リーさんだった：：」

受け取ったバナラアイスを手にしたまま、悠里は彼の顔を見て固ま
る。しかし、彼の後ろにまた新たな客達が並んでいる事に気付いた彼
女は一旦その場を去り、そばの木陰にあるベンチへと腰かけた。

店員「次の方、ご注文はお決まりですか？」

「んっ？あぁ…そうだった」

悠里に目がいつて忘れかけていたが、次は自分が注文をする番だった。彼はチョコレートの味のアイス注文してそれが出来るのを待ち、完成したそれを受け取るとすぐ悠里の元へと向かった。

「…どうも」

悠里「ふふっ、偶然ね」

ベンチに腰かけていた悠里はその場に寄ってきた彼を見てニコツと微笑み、自分の隣のスペースを空いている手でトントンと叩く。彼は軽く頭を下げてからそこへと座り、コーンの上に乗っているアイスを食べた。

悠里「今日は一人？」

「ええ、ちよつと散歩に…。リーさんは？」

悠里「私も同じよ。ちよつとした運動になればと思って外に出ただけど、こんなに暑いと思わなくて…」

買ったばかりのアイスを右手に持ったまま、悠里は左手の甲で額の汗を拭う。彼女も外の暑さにある程度対応できるよう、上はノースリーブのシャツ、下はミニスカートと涼しい格好を選んできたようだが、それでもこの暑さには参っているらしい。

悠里「…………ふう」

「……………」

そういえば今日の彼女は長い髪を後ろで纏めてポニーテールにし

ている。その見慣れない髪型もそうだが、彼女は暑さからシャツのボタンの上二つを開けており、微かに汗ばんでいる鎖骨が妙に色つぽく、つい色々な所に目線がいつてしまう。すると悠里はその目線に気付いたのか、首を傾げながら彼の事を見つめた。

悠里「…どうかした？」

「えっ？いや…珍しい髪型してるなあと思って…」

そう思っていたのも事実なので、彼はアイスを舐めながら答える。すると悠里は後ろで纏めた自分の毛先に触れながら、少し照れたように微笑んだ。

悠里「今日は暑いから…髪型もちよつと工夫してみたの。少しでも涼しくなればなあと思って。…変じゃないかしら？」

「んん、凄く似合ってます」

悠里「そう、よかった♪」

彼に髪型を褒められた悠里は嬉しそうに微笑み、自分のアイスを一舐めする。直後、彼女は思い付いたように彼の持っているアイスを見つめ、瞳をキラキラと輝かせた。

悠里「そういえば、あなたのはチョコレート？美味しい？」

「ええ、まあ。ふふつ、食べますか？」

半ば…と言うよりは完全に…冗談のつもりで彼はそれを悠里の方へと差し出す。悠里はそれに戸惑ったような顔を見せたもののそれは一瞬の事で、彼女は結局それを空いている方の手で受け取った。

悠里「…ありがと。はい、ちよつと交換ね♪」

「へ…っ？」

悠里は彼のアイスを受け取ると、引き換えに自分のアイスを差し出す。元から冗談のつもりだった彼がその行動に戸惑っていると、彼女

は不思議そうに首を傾げた。

悠里「私のはバニラだけど…嫌いだった？」

「いや…平気ですけど…」

「なら良かったと言わんばかりの笑顔を見せ、悠里はそのアイスを彼に差し出す。彼が戸惑いながらもそれを受け取ると、悠里はにっこりと微笑んでから彼にもらったチョコレートのアイスを舐め始めた。ついさっきまで自分の舐めていたそのアイスが彼女の柔らかかそうな舌に舐められるのを見て、彼は目を丸くする。」

悠里「…：うん、こつちも美味しいわね♪」

嬉しそうな顔をしながら、悠里はそれを舐め続ける。彼がそれを見たまま固まっていると、悠里はそれに気付いて声をかけた。

悠里「あつ…私が口をつけたのだと嫌だった？」

「いえっ、そんな事は…：じゃあ、本当にもらいますよ？」

悠里「ええ、どうぞっ♪」

「……………」

彼女の目線を感じながら、彼はそれを一舐めする…。冷たいアイスを食べているハズなのに体が暑く感じるのは…：ついさっきまで彼女がそれを舐めていたという事実混乱しているからだろうか。

（甘い…。いや、バニラアイスは甘いもんなんだけど…：それとは別に甘い気が…。ああ、ダメだ…：深く考えると頭がくらくらする…）

隣の悠里は特に気にした様子を見せずにそれを舐めているので、彼も同じようにそれを舐める…。そうして渡された時よりも半分ほどの大きさになった時、悠里は持っていたアイスを彼へと返した。

悠里「このままだと全部食べちゃいそうだから、交換終わりっ」

「…はっ」

彼も自分の持っていたアイスを彼女に返し、互いに元々注文した自分のアイスを手にする。しかしこれもこれで今さつきまで悠里が舐めていた物なので少しばかり舌をつけるのを躊躇ってしまおうが、やはり悠里は気にしていないようにそれを舐めていた。

(まあ…りーさんが良いなら構わないけど…)

間接キス…よりももう一段上のステージな気がする。なにせこのアイスには、悠里の口だけでなく舌が触れていたのだから。悶々とした気持ちになり邪念が浮かぶ中、彼は出来るだけ無心でそれを食べ、遂にはコーンまで完食した。

悠里「ごちそうさまっ…」

悠里もそれと同時に食べ終えたらしく、小さな声でそう言ったのが聞こえる。彼がそつとそちらへ顔を向けると、彼女は少し照れたようなその顔をうつむけていた。

「…りーさんは、僕のやつに口をつけるの嫌じゃなかったですか？」

悠里「えっ…？あっ…うん…大丈夫っ」

につこりと笑って答えていたが、少しだけ頬が赤い…。やはり彼女も何も思わなかった訳ではなく、少なからず意識していたのだろう。彼女は彼の目線から逃げるようにして立ち上がり、そつと背中を向けた。

悠里「えつと…じゃあ、また学校でね」

「はい、また…」

彼はベンチに腰かけたまま別れを告げ、彼女を見送ろうとする。しかし彼女は何かを考えているのか少しの間そこに立ち止まり、そして彼の方へと振り向いた。

悠里「……っ」

「どうかしました？」

振り向いた彼女にそう尋ねると、悠里は彼の方へ一歩迫る。彼女はそうしてから前屈みになり、彼の耳元に顔を寄せ……静かに囁いた。

悠里「アイス……相手があなただから交換出来たの……。この意味、少しでも分かってくれたら嬉しいわ……」

「……………」

悠里「……また、家にも遊びに来てね？……るーちゃんも待ってるから♪」
顔を離してにっこりと微笑み、彼女はその場を去っていく……。ベンチに一人残った彼は彼女の言葉の意味を考えたが、すぐに答えは出なかった。きつと自分をからかっているだけだ……。そうも思えるが、もしかしたら彼女は……。

「…………いや、どうだろうな」

ふふつと笑いながら立ち上がり、彼もゆつくりと歩き出す。今日は本当に暑い日なので、出来るだけ木陰を歩いて行く事にした。

第二十六話 『先生として』（めぐみ）

（……まいったね）

学校の教室内……。彼は席につき、そつと静かに窓の外を見つめる。窓から眺める空は少しずつ、夕焼け色に染まっていった。恐らく、部活中の生徒もそろそろ帰る時間なのではないだろうか。

（僕もそろそろ帰りたいたいところだけど……まだ無理だろうか）

窓の外に向けていた視線を教室の奥にある教壇……。というよりはそこに立つ女性へと向ける。女性の長い髪は開いた窓から入る風によって微かに揺れており、それによって乱れた前髪をその人は整えていた。

慈 「はあ……また余所見よそみした……。これでもう三回目よ？」

その女性……佐倉慈はため息をつけてから彼の方へと歩み寄り、呆れたような表情を見せる。慈のそんな表情を見た彼は持っていたペンを手の上でクルクルと回し、そつと目をそむけた。

「先生……本当にごめん。もうこちらの集中力はカラツカラでして……」

慈 「もうも何も、その集中力は最初から切れていたように見えませんでしたけど？」

「……そうですね」

慈は教科書を胸の前で持ちつつ、彼に出来るだけ厳しげな視線を向ける。その視線を受けてさすがの彼も危機感を抱き始めたのか、冷や汗を流しながらため息をついていた。

「はあ…どうも勉強は得意な方じゃないみたいだね」

慈「まあ、得意ならこうして補習を受けたりはしないでしょね…」
言いながら教室内を見回し、慈はもう一度ため息をつく。今日、ここ最近の成績の落ち方があまりに酷い生徒はこうして補習をすることになった。ただ補習とは言っても、ある程度授業範囲を復習し、それを改めて理解させるだけ。補習を受ける事になった生徒の数も少数だったのできつとすぐに終わるだろう…。慈はそう思っていたのだが…。

慈「思いもよらぬ所で、問題児発見…」

「んっ？それって僕の事じゃないですよね？」

小さく呟いたその声に反応し、彼は慈の事を見つめる。慈はその目を力なく見つめ返しながら、他に誰もいなくなった教室内を指さした。

慈「他に誰かいる？丈檜さんですらしっかり補習を終わらせて帰っていったというのに、まさかあなたが残るなんて…」

「…日を改めましょう。今日の僕は一味違う。たぶん、このままやっていたら夜になりますよ」

慈「その時はその時っ！家には送ってあげるから、そこは安心して」
「ぐっ……」

このままやってもキリがない事を教えれば慈も諦め、解放してくれると思った。しかし今日の彼にやる気がない事以上に、今日の彼女にはやる気が宿っていたのだ。

慈「ほら、あと少しっ！このページだけやっちゃえば終わりだから、

ねっ？頑張ってみましょうか？」

「……はいはい」

慈は教科書を開き、残りの問いを彼に見えるよう指さす。その際の表情が彼に元気を分けようとしているような明るい笑顔だったので、彼も彼なりに頭を働かせる事にした。

慈「よしっ、がんばれがんばれっ♪分からない事あったら聞いてね？」

「全部です…。答えを教えてください…」

慈「それはダメっ！少しは自分で考えないと!!」

(やっぱりダメだったか…)

彼は心の中でため息をつき、目の前の問いと向かい合う。慈はこの学校の教師の中で一番若いだけでなく、どこか抜けているところがあるので：上手くいけばそのままあっさり答えを教えてくださいるのではと思っていた。

(さすがにそこまで抜けてはいないと…)

作戦が通じなかった事を残念に思いつつ、どこか安心もする。こんな穴だらけの作戦が通じるような人間が教師だと、色々マズイ気がしたからだ。

「……………」

(とは言ったものの、今日は本当に頭が働かないな…。くそっ、問題文が暗号にしか見えない)

確かに彼の成績はあまり良くはないが、今この時ほど集中出来ない場面はかつて無かった。恐らく原因としては、昨日夜遅くまで起きて

いた事にあるのだろう。

（ああ、なんでこのタイミングで夜更かしをしたのかね…。昨日の自分を殴ってやりたい）

午前中に感じていた眠気は一周回って感じなくなったものの、代わりに集中力が持っていかれた。目の前の問いを解こうと思っても、すぐに別の事を考えてしまう……。例えば…

「先生、彼氏とかできました?」

慈「えっ?そ、それっ…今関係ないでしょっ!!」

頭の中で考えるだけのつもりが勢いあまり、本人に尋ねてしまう。前に尋ねた時は『まだいない』と答えていたが、慈なら少し目を離した間にそうした関係の人間が出来ていてもおかしくはない。幼い顔立ちに抜群のスタイル…その上優しいとくれば、いくらでも寄ってくる男がいるだろう。

「良くない男に騙されていたらと思うと不安で不安で…そのせいで集中出来んのですよ」

慈「つぐ…:はいはいっ!いませんいませんっ!!だから変な人に騙されたりもしてませんっ!これで集中できますか?」

半ば自棄になったような答え方だが、彼氏がいらないという事は分かった。しかしそれを知ったら知ったで別の疑問を抱いてしまい、彼は一向に集中出来ない。

「佐倉先生、見た目も性格も良い感じなのに…どうして彼氏が出来ないんだろうか…?」

慈「余計なお世話。いいから勉強しなさいっ」

慈はムツとした顔をして彼の額を教科書でぺしつと叩く。しかしそれでも彼の疑問は尽きず、一人首を傾げていた。

「何か問題があるんじゃないですか？ほら、部屋の片付けが出来ないとか…料理が下手とか…」

慈「えっ？いや…部屋だってそこまで汚れてはいないし、料理もそんなに下手ではないと思うんだけど……」

言われると不安になってしまい、慈は自分の部屋の様子や料理作りした際の手際など、細かな事を見つめ直す。いずれもそこまで悪くないと思うのだが…。

慈「うくん……って、この話は関係ないでしょっ！ちゃんと勉強の方を進めてっ!!」

「すいません、気になっちゃって…」

慈「はあ…。私に彼氏が出来ない理由より目の前の問いに集中してほしいわ…。まったく、どうやったら集中してくれるのかしらね…」
「そうですね…佐倉先生が僕の事を彼氏だと思って勉強を教えてくださいな、ある程度は集中出来るかと」

慈「……へっ?」

寝不足というのもあり、テンションがおかしくなっていたのかも知れない。彼自身その自覚はあり、この提案も半分は冗談のつもりだった。

慈「…言ったからね?」

「っ…ん?」

冗談のつもりだったのだが…慈はそれに気付かなかっただけ。彼女は彼の隣にある由紀の席から椅子を引き、そこに座って彼の事をすぐ隣から見つめた。

慈「じゃ……始めよつか……」

窓から射し込む夕陽が当たり、微かに赤く染まった慈の顔……。それは彼の顔のすぐそばに迫っており、彼女の息づかいや髪から香る甘い匂いまで感じられる。また、彼女のその表情はいつもより大人びたものになっており、彼は思わず目を見開いた。

「えっと、良いんですか……？」

慈「こうしないと集中してくれないでしょ……。なら、これが終わるまでの間だけ付き合っただけあげる。もちろん、みんなには内緒に……ね？」

照れたような表情を浮かべ、慈は教科書にある問いを指先でつつく。肩が触れ合う程の距離まで寄ってきた彼女を前にして、彼は遂に集中することを決めた。

(約束は約束だし、とっとと片付けるか……)

ノートにペンを向け、残った問いを一つずつ解いていく。最初からこうしていれば大した時間もかからなかったのだろうが、慈がこうして付き合ってくれたのだから結果オーライだろう。

慈「おっ？やれば出来るじゃないっ♪良い子良い子っ♡」

「……………」

突如、問いを片付ける彼の頭に何かが触れる。不思議に思った彼が目線だけを上へ向けると、慈の手が自分の頭を優しく撫でているのが分かった。

「先生……これは？」

慈「こうしてあげたら恋人っぽいかなあ〜と思って♪」
尋ねる彼にそう答え、慈は楽しげに笑う。これはどちらかという
恋人よりも宿題を見られる近所のお姉さんと言った感じなのだが、
これはこれで心が満たされた。

「でもやっぱり、ちよつとズレてるかな…」

慈「ん？なにが？」

「…いいえ、なんでも」

想像していたのとどこか違う行動を起こす慈を見てニヤリと笑い、
彼は次の問いへと移る。これが最後の問いなのだが、まるで解き方が
分からない…。

(ええつと…つ、ダメだな。まるで意味が分からない)

もつと真面目に授業を受けていれば良かったのだが、今さら後悔し
ても仕方ない。どのみち残りはこの一問だけだ。彼は必死に頭を働
かせるが、答えは一向に出なかった。

慈「……………わからない？」

その問いに困り果てていると、隣から慈が声をかけてくる。彼は少
し間を開けてから首を縦に振り、慈の大きな目を見つめた。

「これで最後なんだけど、参りましたね…」

慈「でも、ここまですく頑張ったよ…。解き方のヒント教えてあげ
るから、もう少しだけ頑張ろうね？」

そう言つて慈は椅子を動かし、更に彼の方へと寄る。元より近かつ
た距離が更に縮まり彼の胸が高鳴る中、慈は教科書の上に手を置い
た。

慈「ちよつとだけノート貸して?…えつと、ここをこうしてもすぐには解けないから、少し工夫をして…」

慈は彼のノートを借りると持っていたペンでその問いの解き方、そのヒントとなる物を順に書いていく。赤色のボールペンで書かれたその文字は最後の問いに悩んでいた彼のヒントとなり、彼は遂にその問いも終わらせる事が出来た。

「…よしつ、これでオーケーですかね?」

慈「うんっ! 正解っ!!これで補習も終了、お疲れさまっ♪」

教科書をパタツと閉じ、もう一度彼の頭を撫でる。やはりこれは恋人にするそれとは違うような気がしたが、彼も慈の嬉しそうな笑顔を見たら何も言えなかった。

「…さて、長いこと付き合わせて悪かったですね」

慈「まあ、確かに予想していたより苦労はしたけど…それでも私はあなたの先生だもん。しつかり面倒見るから、いつでも頼ってね?」

「そうさせてもらいます。先生も、何かあったら僕を頼って下さい」

慈「……………」

彼はノートや筆記用具をカバンにしまい、帰り支度を済ませる。それを済ませた彼は席から立ち上がり教室を出ようと歩き出すが、慈はまだ席に座ったままだった。

「それじゃあ、また明日」

席に座る慈に手を振り、教室の扉を開こうと手を伸ばす。その時、背後から大きめの音が聞こえた。

ガタツ!!

音に驚き、彼は振り向く。そこには席を立つた慈がいて、彼女はこちらを落ち着かない眼差しで見つめていた。どうやら先程の音は彼女が立ち上がる際、椅子が鳴った音らしい。

「ああ、先生も帰ります?」

慈「あつ……そうじゃなくて……ね……」

モジモジとした様子を見せ、慈は大して乱れてもいないその髪を整える。彼女はそうしてから意を決したように強い視線を彼へと向けると、スタスタとそばに寄った。

慈「……少しだけ、私の相談にのってくれる?」

小さく、弱々しい声……。それを聞いた彼は首を縦に振り、また元の席へと戻った。

「急ぎの用事もないですからね。もう少しここにいます」

慈「……ありがとう」

そつと頭を下げてから慈も元の席へ戻り、隣に座る彼の顔を見る。改めて見るとかなり近いその距離に少し照れつつ、慈は口を開いた。

慈「あの、私……教師に向いてないのかな……?」

「えっ?」

俯きながら尋ねる慈の言葉。それが思いも寄らなかつたものなので一瞬戸惑う彼だったが、落ち着いて考えろと思ひあたる節はあつた。以前、圭が言っていた言葉だ。

(そういえば、生徒との距離が近いことを教頭に注意されて落ち込んでただっけ…。もしかして、まだそれを気にしてるのか?)

過去にその光景を見た圭の言葉通りなら、その事がきっかけで悩んでいる可能性がある。確かに彼女は他の教師と比べ、生徒が友達のように接してくる事が多い。しかしそれは彼女の接しやすい人柄を表したものであり、悪いことではないと思っていた。

「…つまらない事で悩まなくても大丈夫」

慈「え…っ?」

そつと声をかけると、慈が顔を上げる。

驚いたような、戸惑っているような…そんな顔をする彼女へ向け、彼は更に言葉を放った。

「誰に何を言われたのか知りませんが、佐倉先生は僕がこの学校で一番好きな教師です。それに由紀ちゃんや胡桃ちゃん、あの辺りもみんな…佐倉先生の事を凄く気に入っていますよ」

慈「……………」

慈は言葉を返さず、また顔を俯けてしまう。しかし、彼は気にせず言葉を放ち続けた。大好きな先生の心を少しでも救えれば思っていたからだ。

「僕個人の思い込みかと思いますが、やっぱり教師っていうのは生徒に信頼されてる、好かれてるっていうのが一番大事だと思うんです。そういった点では、佐倉先生は誰よりも良い先生だと…僕はそう思います」

慈「ほん…と…?…」

慈はそつと顔を上げ、不安そうに尋ねる…。その目は微かに潤っていて、彼女がどれほど悩んでいたのかを彼に知らしめた。

「嘘じゃない、本当の事です。だから自分に自信を持って、みんなの大好きな“めぐねえ”でいて欲しい」

慈「っ……………ありがとう…。少し、元気になれた」

溢れかけていた涙を右手で拭い、慈はにっこりと微笑む。その笑顔は強がりなどではなく、自分に本当の自信が持てたような眩しい笑顔だった。

「立ち直れたならよかった…。っと、これで相談は終わりですかね？」

慈「ええ、本当にありがと。……………あつ、それと…もう一つだけ」

何かを思い出したようなハツとした表情を浮かべ、慈は彼の目をじっと見つめる。『もう一つ』というのは相談の事だろうか？彼はそう思っていたのだが、それは間違いだった。

慈「もう一つ……………これは、やり残したこと……………」

「ん？……………っ!？」

ギユ…ツ……………

慈は隣に座る彼の方へ自分の体を一気に寄せ、その背中に両手を回して彼の事を優しく抱きしめる。突然の行動に彼が戸惑っていると、慈は彼を抱きしめたまま耳元でボソツと呟いた…。

慈「本当に恋人らしいこと、まだしてあげてなかったもんね……………。頭撫でられただけじゃ、ちよつと物足りなかったよね…」

耳元で囁かれる慈の声はいつも聴く声よりも落ち着いていて、色気のようなものがある。頭を撫でられただけだと物足りなかったのは事実だが、それを慈が自覚していたという事に彼は驚いた。

「ああ…その…先生？」

慈「もうちよつと…もうちよつとだけしてあげるから……」
ギユツ…

「っ…」

更に強く抱きしめられ、慈の体温が体で感じられる程になる。それ
だけならまだ良いのだが、体に押し付けられる彼女の胸…その感触が
ハッキリと伝わっており、彼の頭がクラクラし始めた。

(良い匂いだし…温かいし…柔らかい……もう、ヤバイ…)

抱きしめられた事で強く押し付けるようになった彼女の胸は平均
的な女性のものよりも一回り程大きく、体を感じたその感触に彼の鼓
動が高まる。彼はそれを感じたまま彼女の首に顔を埋め、そつと目を
閉じた…。

「佐倉…先生…」

慈「ん…っ…!」

埋めた首に口を当てつつ、そつと彼女の事を呼ぶ。すると彼女は微
かにビクツと体を震えさせ、直ぐ様彼の事を両手で離れた。

慈「は、はいっ!終わりっ!!」

「……え?…これからでは…」

慈「こつ、これからっ!?そ、そんなのはありませんっ!!これつきり
です!!…というか、これもかなりダメな事をやってしまったかも…」

慈は顔を真っ赤に染めながら席を立ち、汗をダラダラと流し始め
る。教室内は特に暑くないので、彼女のそれは焦りによるものだろ
う。

慈「あああ……やつぱり私はダメな先生なんだ……。いくらなんでも、今のは距離が近いとかそういうレベルの話じゃないもの……」
彼に背中を向け、何やらブツブツと一人言を言い出す慈。彼はその後ろ姿を見てふふっと笑ってから自分のカバンを手にして席を立ち、教室の扉に手をかけてから慈の方へと振り向いた。

「とりあえず、これから頑張ろう。分かりましたか、めぐねえ？」
扉に手をかけ、意地悪な笑みを浮かべながら彼女の反応を窺う。彼に『めぐねえ』と呼ばれた慈は頬を赤くしながらムツとした表情を浮かべ、大きな声で言った……。

慈「もうっ！佐倉先生じゃなくて、めぐねえでしょっ？」
「……………」

慈「…あ、間違えちゃった……」
「……………あははっ」

真面目な顔で言う慈がおかしくて、彼は笑いながらその場を去っていく。残された慈は今自分が放った言葉を思い返し、一人顔を真っ赤に染めた。

第二十七話 『おみまい』（めぐみ）

いつもと変わらない学校……。いつもと変わらない教室……。そんな場所で時間を過ごす中、彼はある異変を感じた。これから午後の授業が始まるかという時、辺りにいた生徒達が何かコソコソと話し出したのだ。

（なんかあったのか……？）

話し合う生徒達は誰もが驚きの表情を見せており、彼も少なからずその内容が気になり始める。ちょうどその時、由紀と胡桃……。そして悠里が彼の席へと歩みより、他の生徒から聞いたのであろうそれを告げた。

由紀「めぐねえが……。倒れちゃったって……」

「……えっ？」

言葉を放つ由紀の表情はいつになく暗いものであり、彼は驚いたような顔を見せる。そんな彼が余計な心配をしないようにと気を使ったのか、悠里は自分が知りうる限りの事を話した。

悠里「ただの過労みたいだから、そこまで心配はいらないと思うけど……」

胡桃「けど、心配になっちゃまうよな……」

悠里「ええ、そうね…。今日はもう休むよう家に戻ったみたいだけど：明日は来られるのかしら…」

胡桃「どうだろう：まあ、無理して学校に来られるより、しっかりと休んでいて欲しいけどさ」

胡桃の発言に対し、悠里はそつと頷く。慈の性格を考えると多少の無理をしても学校に来そうな気もするが、こんな時くらいはゆつくりして欲しい。

由紀「はあ：心配だよ…」

普段から交流が深いからだろう：由紀は一際心配そうな表情を浮かべ、トボトボした足取りで席につく。午後の授業を受け持っていた慈が帰宅したために彼のクラスは自習となったが：彼も彼で慈の事が心配になってしまい、勉強が^{はかど}捗らなかつた…。

くくくく

そうして午後の自習を終え、学校での一日が終わる…。

今日は悠里も胡桃も部活動が無かつたので、久々に彼と由紀を含めた四人で帰る事になったのだが：

由紀「そうだっ！お見舞いにいこうっ!!」

校門から出て帰路へとついている最中、由紀が思い付いたように声を張る。彼女は歩く三人の前へ回り込みそれを提案したが、胡桃は深くため息をつき、彼女の額を小突く。

ペシッ

由紀「な、なにすんのっ!？」

胡桃「ついさつき倒れて、それで家に戻ったんだぞ。見舞いなんか行っても邪魔になるだけだろ?」

由紀「うっ…!で、でも…めぐねえが大丈夫かどうか、心配になっちゃって…」

悠里「確かに心配だけど…今日はゆっくり休ませてあげましょう?」

「それがいい。大体、お見舞いに行こうにも先生の家がどこなのか知らないしね」

胡桃、そして悠里も彼の言葉に頷く。本当の事を言えば自分達も慈の事が心配だし、見舞いに行けるなら行きたいとも思う。ただ彼も悠里も胡桃も、彼女の家を知らないのだ…。結局のところ、由紀の意見を抑えた一番の理由はそれだった。彼女達は見舞いに行かないのではなく、行けないのだ。

家の場所を知らないのなら仕方ない。こう言っておけばさすがの由紀も諦めると思ったが、由紀は三人の顔を見回して不思議そうな表情を見せる。

由紀「わたし、めぐねえの家の場所知ってるよ?」

「…えっ?」

胡桃「…は?」

悠里「えっと、何で知ってるの?」

由紀「前、めぐねえに聞いておいたんだよ。またそのうち、遊びにいかこうと思ってたから♪」

ニコニコとした表情で語り、彼女はカバンから一枚の紙切れを取り出す。紙切れは慈の家の住所を記したメモであり、彼と胡桃、そして悠里はそれをじつと見つめた。

「この住所だと…」

胡桃 「ここから近いな…」

悠里 「…そうね」

メモに書かれていた住所が今自分達のいる場所から思いの外近かったため、三人はそつと顔を見合わせる。さっきは由紀にああ言っただが、慈の家の場所が分かり、更にはそれが近くだと知った今…三人の心はグラグラと揺れていた。

胡桃 「ど…どうする?」

「ちよつとだけ、顔を見に行ってみようか…?」

悠里 「そ、そうね…ちよつとだけ、ほんとにちよつとだけお邪魔して、そのあとすぐに帰ればそこまで邪魔にはならないわよね?」

由紀 「うんっ!ちよつとなら大丈夫だよっ!!」

悠里 「…そうね。じゃあ、ちよつとだけ」

由紀は三人の心が見舞いに行く方へ揺れた事に気が付き、笑顔を浮かべている。その笑顔を見た三人はふふつと笑い合い、そのメモに書かれている住所を目指す事にした。

胡桃 「あつ、何か買っていたりした方が良いのかな?」

悠里 「うくん、もしかしたら、めぐねえはもう寝てて家の中に入れない可能性もあるわよね。そうになったら買った物も無駄になっちゃうし、必要なものは後で本人に聞けばいいんじゃない?」

胡桃 「ああ、それもそうだな」

「まあ、佐倉先生のことだ…僕らに遠慮して何も頼まないかもだけど」

悠里「それは……ありえるわね」

そんな話をしながら歩いていくと、早くも慈の住むマンションと思わしき建物が視界に入る。四人はそのマンション内へ足を踏み入れ、由紀の持つメモで慈の部屋番号を確認してからそこへ向かった。

由紀「おっ！みんな、ここだよっ！」

胡桃「騒ぐなって。近所迷惑になるだろ」

メモに書かれていたのと同じ部屋番号を見て騒ぐ由紀の口を塞ぎ、胡桃は悠里と目を合わせる。彼女と目を合わせた悠里はそつと頷き、その扉の横にあるインターフォンを鳴らした。

ピンポーン

悠里「……………」

由紀「……………」

「……………反応ないね」

チャイム音が鳴り三十秒ほど経ったがインターフォンから返事が帰ってくる事も、その扉が開く事もない。ここが慈の家で、本人が中にいるのは間違いないと思うのだが…。

胡桃「あく…寝てんのかもな」

「…かもね」

悠里「なら仕方ないか…。みんな、今日は帰りましょう」

二度、三度とチャイムを鳴らすことも出来るが、もし寝ているとしたらそれは迷惑になる。せっかく来たのにと残念がる由紀をなだめ、一行は来た道を引き返そう振り向いた。

…ガチャツ

その時、これまで反応がなかった部屋の扉がそつと開く…。それに気付いた四人がまたそちらへ振り向き視線を向けると、そこには驚きに目を丸くした慈の姿があった。

慈「み、みんな？どう…したんですか？」

由紀「めぐねえっ！調子はどう？大丈夫なの？」

慈「もしかして、私のことを心配して来てくれたの？」

由紀はその問いに対して首を縦に振り、そつと静かに慈の手を握る。由紀に手を握られた慈はどこか嬉しそうに微笑み、由紀もその笑顔を見て微笑む。自室で休んでいた慈は淡いピンク色のパジャマを着ており、こうして見ると由紀とは姉妹に見えた。

悠里「心配だったのでお見舞いに来たんですけど、お邪魔でしたか？」

慈「いいえ、一人でちよつと心細い思いをしてたところだから、ちよつと良かったかな♪」

胡桃「なら良かった。でき、もしよければ少しあがつていきたいんだけど、構わないかな？」

慈「それは良いけど…大したおもてなしは出来ないわよ？」

胡桃「あたしらはめぐねえのお見舞いに来たんだから、もてなしてくれなくても良いって」

慈の許可を得た四人は部屋の中へ入り、辺りをキョロキョロと見回

す。室内はわりと綺麗に整えてあるように見えたが、良く見ると部屋の隅に学校で着ていたと思われる服が雑に放置されていた。

悠里「服、脱ぎっぱなしじゃないですか…」

慈「あはは…いつもはちゃんと片付けるんだけどね？今日は…ちよつとだけ具合悪かったから」

照れたような慈の顔を見た悠里はふふつと笑い、その服を綺麗に畳む。体調の悪い彼女の為にいくらか役に立ってあげたいと願う一行だったが、見た感じこれ以上の仕事はなさそうだ…。

「なんか必要な物とかありますか？もしあるなら、近くの店に行つて買つてきますけど…」

慈「そこまでお世話になったら悪いわよ…。私、先生なのに…」

由紀「めぐねえっ！そんなこと気にしちゃダメだよ？」

胡桃「そうそう。あたしらは普段からめぐねえの世話になってんだから、こんくらいのは事はさせてよ」

目の前でにつこりと微笑む自分の教え子達を見て、慈は思わず涙ぐむ。自分は本当に良い生徒達と出会えたのだなという思いを実感しつつ、慈も彼女達に笑顔を見せた。

慈「……………ありがとね」

悠里「いえいえ♪で、何か必要な物とかつて…」

慈「じゃあ、ゼリーが食べたいかなあ…」

いつになく甘えたような…それでいてどこか申し訳なさそうな声を出す慈。それを聞いた悠里達はニコリと微笑み、外へ出る準備をした。

由紀「他には？他には何もいらないの？」

慈「うん。とりあえず大丈夫♪…あつ、机の上に私の財布があるから、お金はそこから——」

胡桃「そんなん気にするなって。今回はコイツがお金を出してくれるってさ」

胡桃はイタズラな笑みを浮かべて彼を指差す。そんな事は一言も言ってなかったために彼は少し驚いたような表情を見せたが、これも慈の為ならと思い、その首を縦に振った。

「まあ…そうだね。任せておいて」

慈「いや、本当に悪いから…お金くらいは私が……」

胡桃「本人が任せろって言ってるんだから、ここは甘えちゃいなくて。…ついでに言うと、あたしもアイスが食べたい！お前の金で買っているか？」

「はいはい…ご自由にどうぞ」

胡桃「へへっ、サンキュー♪」

彼は胡桃に答えながら財布を取りだし、その中を覗く。所持金は特別多くもなかったが、慈にゼリーを買ったり、胡桃にアイスを買うくらいに余裕はある。しかし、胡桃の言葉を聞いた由紀もまた、キラキラと輝く目線を彼に向けていた。

由紀「アイス、わたしも買っていていいかな？自分で買おうと思ったけど、今日はお財布忘れちゃって…」

「…別にいいよ」

由紀「わあ…ありがとう♪お金はまた明日返すからね？」

「いや、大丈夫だよ。今日は奢おごってあげる」

由紀「ほんとに？じゃあ、お言葉に甘えて…」

悠里「たしか、近くにコンビニがあったわよね…。そこで買ってきちゃいましょうか」

ここに来る途中にコンビニがあったのを思い出した悠里はみんなと共にそこへ向かうことを決め、玄関の方へと歩いていく。由紀も胡桃も、そして彼もそれに続いたのだが…彼だけが突如その足を止めた。

「……………」

由紀「どうしたの？一緒にいかないの？」

「…いや、僕は先生と待ってる。悪いけど、買い出しはみんなで行ってきて」

戸惑う由紀にそう告げ、彼は自分の財布を彼女に手渡す。彼の言葉を聞いた慈はどこか嬉しそうな顔をしていたが、その一方で胡桃は彼と慈の顔を交互に見回して苦い表情を浮かべた。

胡桃「え〜…めぐねえ、コイツと二人きりで大丈夫？」

慈「えっ？うん…大丈夫、だけど…」

彼を横目で見たまま慈が答えると、胡桃はまた何とも言えぬ表情を浮かべる。次の瞬間、胡桃はパジャマ姿の慈をビシツと指さして彼に注意した。

胡桃「めぐねえが弱ってるからって、襲っちゃダメだからな？」

「っ…失礼な奴だな！」

胡桃「ははっ、わりいわりい…冗談だよ。じゃあゆき、リーさんとつとと行こうぜ」

悠里「ええ。すぐ戻るから、それまでめぐねえの事をお願いね？」

「はい、お任せを〜…」

由紀「じゃあね〜♪」

ガチャヤ……バタン！

三人が買い出しに出掛け、部屋には彼と慈の二人だけになる。女性の部屋に二人きりとなると、相手が教師であつても少々気まずい。にも関わらず彼がここに残つたのは、彼が出ていこうとした時に慈が寂しげな顔をしていた気がしたからだ。

慈「残つてくれて、ありがと……」

「いえ……。僕なんかで良かったですか？」

自分が部屋に残るよりも由紀とかに残つてもらつた方が慈も気兼ねなく過ごせたのでは……そんな事を思い、少し不安になる。

慈「うん……。あなたで良かったよ……」

照れたように笑う慈の笑顔を見て、彼の感じていた不安は消えていく。彼女はそのままゆっくり、ゆっくりとベットへ向かつていくと、そこに横たわつて口元まで布団をかける。やはり、まだ調子が悪いようだ。

慈「はあ……」

布団をかけた彼女は一呼吸つき、横たわつたままその視線を彼の方へと向ける。そんな慈と目が合い、彼がおかしそうに微笑むと、慈は布団の隙間から右手を伸ばした。

慈「……手……に……つて……」

「……は……？」

慈の放った言葉があまりに小さな声だったため、彼はそれを聞き逃す。次は聞き逃さぬように慈のいるベットの方へ寄り耳を澄ますと、彼女はその右手をもう一度伸ばした。

慈「私が寝るまで、手を……握ってて……」
布団の隙間から右手を伸ばす慈の顔は真つ赤に染まっており、彼が驚いたようにそこを凝視すると彼女は真つ赤な顔を布団で隠してしまふ。彼女は自分の顔を布団で隠したまま、その中で更に言葉を放つた。

慈「一人だと寂しくて……しつかり休むことも出来ないの……。だからお願い……手、握って……？」

顔を覆っていた布団を微かにずらし、潤んだ目だけを覗かせて彼に告げる。体調が悪いからなのか分からないが、今日の慈は……彼がいつも学校で見ている”佐倉慈”とは様子が違っていた。

「手……ですか」

慈「うん……握ってほしい……」

「……分かりましたよ」

本人の為ならと思ひ、彼は布団の隙間から伸びていた慈の手を握る。……と言っても、彼は添える程度に握っただけなのだが、すぐに慈の方からその手を強く握り返してきた。

「……う」

慈「あなたの手……冷たいね……気持ちいい」

握った慈の手は思っていたよりも小さく、そして柔らかかった。慈がそつと指の一本一本を彼の手に絡めていくと、彼は照れたようにして笑う。

「先生、思っていたより甘えんぼうですね」

慈「…………うん、そうだね……………」

ニコツと微笑み、慈は目を閉じる。彼が手を握ってくれた事に安心したのか、はたまた疲れていただけなのかは分からないが、彼女は数分と経たぬ間に眠ってしまった。

慈「……………」

彼は彼女が眠ってもまだその手を握り続け、すうすうと寝息をつくその顔を見つめる。そろそろ由紀達が戻ってきてもいい頃だが…………。

(やっぱり、先生も可愛らしい顔してるよな…………)

彼は、間近にある慈の寝顔を前にしてそんな事を思ってしまう。教師に対してこんな事を思うのはどうなのかという自覚はあるが、慈の場合はその幼い顔立ちや接しやすい雰囲気もあり、つい…教師ではなく一人の女性として見てしまう。

慈「ん……………」

(っ…………くそ、可愛いな)

眠る前は顔近くまで布団を被っていた慈だが、その布団も彼女の寝相によって胸元まで下がっている。慈の寝息しか聞こえない静かな部屋の中…………初めて見るパジャマ姿の慈…その寝顔を前にして、彼はゴクリと喉を鳴らした。

「先生、寝てる…?」

慈「……………」

慈は寝息をたてるだけで、彼の言葉に答えない…。

彼は慈が眠っている事を確認すると彼女の手を握ったまま、自分の

顔をそつと…彼女の顔へと寄せていった…。

「……………」

いけない事だと理解しているが、一度でも顔を寄せてしまうと止まれなくなる。そばに寄れば寄るほど、どうしても慈の唇に目線がいつてしまうのだ。

互いの顔の距離が30センチ…20センチ…10センチと縮まり、遂には慈の寝息が肌で感じられる程の距離になる。あと少し、ほんの少し顔を寄せるだけでうっすらと赤い慈の唇に自らの唇を重ねる事が出来るが…：そんな時、彼の頭にある言葉がよぎる。

胡桃『めぐねえが弱ってるからって、襲っちゃダメだからな？』

「ッ…!!」

ギリギリまで寄っていた顔をバツと離し、彼は深いため息をつく。胡桃の言葉が無ければ眠っている慈にキスしてしまい、退けぬところまでいってしまったかも知れない…。寸前の所で正気に戻った彼がホツと一息ついた時、玄関の開く音がした。

…ガチャツ

悠里「ただいま。…あれ、めぐねえは寝ちやった？」

部屋に戻った悠里達が見たのはベットに潜り、すうすうと寝息をた

てる慈…そして、そんな彼女の右手を握る彼の姿だった。

胡桃「な、なんで手え握ってんの…？」

「いや…先生に頼まれて…」

胡桃「めぐねえが、お前に…？目に見えた嘘を…」

「はあ…嘘じゃないって」

冷やかな目を向けてきた胡桃に対し彼は必死に弁明するが、胡桃はもちろん、悠里もそれを信じていないようだ。彼は二人に対しての弁明を続け、由紀はそれを横から見て微笑む。すると、少し騒がしくし過ぎたのか…慈がゆっくりと目を開いて起き上がった。

慈「あ…おかえりなさい」

胡桃「ほら、お前が騒ぐからめぐねえが起きちまっただろ！」

「なっ！僕のせいなのか!？」

悠里「いいから！二人とも静かに…ね？」

囁く悠里は笑顔を見せていたが、彼と胡桃はその笑顔にどこことない恐怖を感じて黙りこむ。

由紀「めぐねえ、手を握るようについてお願いしたの？」

慈「あっ…うん…情けない先生でごめんなさい…」

ずっと握っていた彼の手を静かに離し、慈は恥ずかしそうな表情を浮かべる。彼が言っていた事は本当だった知った胡桃、悠里は驚いたように彼女を見つめ、そしてニヤニヤと笑う。

胡桃「めぐねえ、可愛いところあるんだなあ…」

悠里「ふふっ、ほんとねえ〜♪」

そうして二人がからかうと、慈は頬を真っ赤にして顔を俯ける。由紀はそんな彼女の隣へ座ると、コンビニで買ってきた物の入ったビニール袋を広げた。

由紀「はい、めぐねえ！一番おいしそうなやつ買ってきたからね♪」
慈「ええ、ありがとう」

買ってきたゼリーを慈に手渡し、由紀はニコニコと微笑む。その後、四人は少しの間慈との時間を過ごした後、彼女の部屋をあとにした。

由紀「めぐねえ、これからは無理しちゃだめだからね」

慈「はい、気を付けますね。みんな…今日は本当にありがとう♪少し元気になりました！」

胡桃「明日も無理しなくて良いからな？ゆっくり休んでくれよ」
悠里「じゃあ、お邪魔しました」

一行はペコリと頭を下げ、玄関で慈と別れる。

慈「また…来てね」

玄関の扉が閉まる刹那、慈がそつと囁く…。その声は彼にしか届いていなかったが、それに頷く彼を見た慈は嬉しそうに笑った。

第二十八話 『近づく夏…』 『新しい友達』

「あ〜…なんでこんなに暑いんだろうなあ…」

巡ヶ丘学院高校の校内…彼は次の授業で使う教科書をパタパタと揺らし、自分の顔を扇ぐ。もう夏だから当然といえは当然なのだが、それにしたってここ最近の暑さはおかしい…。彼がそんな愚痴を空に放っていると、隣の席に座っていた由紀もダルそうな声を発した。

由紀「だよねえ…暑いよねえ…」

彼女もこの暑さにはまいっているらしく、机にベタツと顔を伏せたまま『ううっ…』と呻いている…。由紀のそんな姿を見た彼はふふつと微笑み、自分に向けていた教科書を彼女の方へ向けて少し扇いでやる事にした。

パタパタ…

由紀「おお…ちよつとすずしー」

「でしょ？でも問題が一つあってね、これ…結構疲れるんだ」

少しだけなら問題ないが、長時間扇ぐのは体力を使う。ついさつきまでずっと自分を扇いでいた彼には引き続き由紀を扇ぐだけの力がなく、彼はその手をピタリと止めて教科書を机の上に戻した。

由紀「え〜っ？もうちよつとだけ…もうちよつとだけ扇いでよお…」

「悪い…無理です。こういうのは体力自慢の胡桃ちゃんにでも頼んで」

由紀「ああ、それいいかも。…よしっ！ちよつとくるみちゃんに頼んでくる!!」

ガタツと音を鳴らして席を立ち、由紀はそのまま教科書を手にして胡桃の元へと向かっていった。由紀は胡桃の前に立つと直ぐ様その教科書を差し出し、必死にそれを頼んでいるようだ…。離れているのでギリギリ声は聞こえないが、彼女のジェスチャーや表情からそれを読み取る事が出来る。

（『これで扇いで〜』とか言ってるんだろ。あつ…今、胡桃ちゃんが凄く嫌そうな顔した…。ああ…ありや断られたかな…）

そんな予想は当たったらしく、由紀は教科書を持ったままトボトボとした足取りで席に戻ってきた。彼女は教科書を机の隅に置くと、またそこに顔を伏せて呻き始める。

由紀「めんどくさいからヤダって言われた…」
「…そっか」

その後、由紀は置いた教科書を手にとって自分を扇ぎ始めたが、すぐにそれを止めてしまう。やはり、自分で扇ぎ続けるのは体力を使うようだ。

由紀「こんな暑い日はアイスでも食べてのんびりするか、プールにでも行って泳いだり…あつ」
「…どうしたの？」

話している途中で何かを思い出したのか、由紀は伏せていた顔を上げて彼を見つめる。由紀は不思議そうにこちらを見返す彼に笑顔を見せ、それを告げた。

由紀「そういえばさ、また今度みんなで海に行くって言ったでしょ？いつにするか、皆でまた相談しないとね！だって、もう——」
「ああ、そうか。じゃあまた細かい日程を決めないかね」

由紀に言われて思い出す…。彼女達と海に行く約束をしていたが、まだそれをいつにするかなどの細かな予定を立てていなかった事を

…。夏休みのどこか一日を使うという事だけは決めていたが、まだどこの海に行くのかも決めていない。そんな状況なのに、来週からはもう………

ガラガラッ！

慈「…皆さん、席についてますか？」

扉を開き、そこから現れた慈は教室内を見回す。彼女は先日過労で倒れたばかりだが、今ではすっかり元気になったようだ。彼女は生徒達が教科書や筆記用具を机に出して授業の準備を進める中、ゆっくりと教壇につく。

慈「来週から夏休みが始まりますね。皆さんも既にいろいろと予定があるかもしれません。でも、あまり羽目^{はめ}を外したりはしないよう気を付けて下さいね？では、授業を始めます！」

そう：夏休みはもうそこまで迫ってきているのだ。

予定していた海にはいつ行くべきか：今日の授業が終わったら、由紀達とそれを相談しながら帰ることにしよう。そんなふうに考えた後、彼は教科書を開いた。

〳〳〳〳

美紀「…本当にこつちであつてるんだよね？」

圭「うん、そのはずなんだけどね…えっと、この道を曲がるんだっけな？」

これはつい先日の日曜の出来事だ。巡ヶ丘の町外れに新しく出来たケーキ屋の評判が良いとの事を噂に聞き、圭は友人である美紀とそこを目指していた。しかしその場所はぼんやりとしか記憶していなかった為、二人はこの強い日差しの下をかれこれ一時間以上彷徨さまよっている…。

圭「ん、んんゝつ…!?おつかしいなあ、確かこの辺だと思つたけど…」

美紀「圭、もう今日は諦めない？私、暑くて倒れそうで…」

圭「あつ、ごめんね？私がつっかり場所を覚えてればよかつたのに…」

美紀の肩を押して日陰へ潜り、圭は『はあくつ』と深いため息をつく。せつかくの休日…美味しいケーキを大切な友達と味わいたい。その思いを胸に日差しの下を歩き続けていたのに、全て無駄になつてしまつた。

圭（美紀ちゃん、汗かいてる…：そうだよね、暑いもんね…。はあ…私がちやんと調べておけば、今頃涼しいお店の中にいたはずなのに…）

日陰に置かれていたベンチに座る美紀の額は汗に濡れており、表情に疲れが出ているようにも見える…。その隣に腰を下ろして座る圭だが、申し訳ないという思いが強くて美紀の顔を直視出来ない。

圭「美紀ちゃん、ほんとにごめんね…」

美紀「別に平気だよ。次はしっかり場所調べて、また今度のお休みにでも一緒に行きこう？」

力なく顔を伏せる圭の顔を覗き込み、美紀はにっこりと微笑む。彼女がそうやって笑ってくれるだけで、落ち込んでいた圭の気持ちもいくらか晴れていった。

圭「うん…じゃあ、また次の休みに——」

言いかけた瞬間、圭の心のどこかで何かが引つ掛かる…。

このままケーキ屋を探すことを諦め、美紀と一緒にどこかへ遊びに行っても良いのだが…それをしたら誰かに迷惑がかかるような…そんな気が…

圭「…あつ！ダメだ!!私、他の友達とケーキ屋さんで待ち合わせしちやってる！」

美紀「えっ？誰と？」

圭「他のクラスの娘でね、果夏^{かな}つて娘なんだけど…。まずいなあ…アイツをこのままほっといたら、次に学校で会ったとき絶対文句言われるよ…」

二人だけで行くつもりだったならともかく、他にも人を待たせてるとあつてはこのまま諦める訳にもいかない…。

美紀「はあ…じゃあ早く見つけないとね…」

美紀はそつと立ち上がり、圭の手を引いてスタスタと歩き出す。店がどこにあるのかは分からないが、とりあえず適当に歩いてみよう…。そんな事を思つて目の前の曲がり角を曲がつたその先…そこには一件のケーキ屋があり、圭がおおつ！と声をあげた。

圭「あつ！あそこだつ!!美紀ちゃん、お店の場所知ってたの!?!」

美紀「い、いや…私は適当に歩いただけで…」

圭「曲がり角の一步手前だなんて、私も惜しい所まで来てたんだなあ…。さてっ、じゃあ入ろっか？」

美紀「あっ…うん」

ついさつきまでは美紀に手を引かれていたのに、今度は圭が彼女の手を引いて歩き出す。その表情があまりに嬉しそうだったため、美紀は圭に気づかれないようにふふっと笑った。

ガチャツ…チリンチリンツ…

圭がケーキ屋の扉を押すと、その上に付いていたベルが音を鳴らす。その音を聞いた店員が二人に挨拶するのとほぼ同時だろう…。店内の隅にある席についていた一人の少女が目の前に立ちほだかり、圭は気まずそうな表情を浮かべた。

果夏「おっそくいつ!!何をタラタラしてたのっ!!」

圭「ご、ごめんごめんっ…。ちよーつと道に迷っちゃって…」

果夏「約束の時間をとくに過ぎてるよ！私も真冬ちゃんも圭を待ってたから、まだケーキ食べてないんだよ!!」

圭「だから…ごめんって言うてるじゃん!!果夏しつこい!」

茶色のポニーテールを揺らす少女…果夏に対し、圭は苛立ったような表情を見せる。彼女もそこまで怒りっぽくはないハズだが、暑い中を歩き続けていた事により気が短くなっているようだ。

果夏「しつこいって…!?アンタねえ!見てみなよっ!!アンタがいつまでも来ないから、ウチの真冬ちゃんが溶けちゃったでしょうが!!」

圭「はあ!?何言って——」

果夏がビシツと指さす方向…そこにはいくつかのテーブルと椅子が置かれているイートスペースがあるのだが、隅のテーブルの上…そ

ここにぐったりと顔を伏せている黒髪の少女がいた。

圭「あの娘生きてる？ピクリともしないけど……」

果夏「いつまで待っても圭が来ないから、先にケーキ食べてよう？って私は何度も言ったのにつ……！真冬ちゃんは優しいから……ボクは飲み物だけ飲んで待つてるって……そう言って聞かなくて……！」

美紀（ほんとだ、溶けてるみたいに見える……）

顔をうつ伏せにした事により四方にペタツと広がった黒髪や、力なくブラ〜ツとしている両手……。その様は確かに溶けているかのようにも見えてしまい、美紀は思わず苦笑いする。

圭「まあ……待たせたのは悪かった……ほんとにごめん……。果夏にも、あそこで溶けてる娘にも、ケーキ一個奢おごるから……許して？」

果夏「ケーキ一個っ!?!そ、そうまで言うなら許してやろう……!!」

美紀（結構あっさり許してくれるんだ……）

さつきまであれだけ怒っていたのに、もう上機嫌な笑みを浮かべている果夏……。美紀はさっそくケーキを選び出す彼女の横を通り過ぎ、真冬のいる席へと向かった。

圭「あれ？ケーキ選ばないの？」

美紀「圭のセンスに任せるよ。私はあつちで休んでるから、あとお願いね？」

圭「そう？じゃあ分かった。任せといてね♪」

美紀「うん、美味しいのを期待してるからね」

圭は自信あり気に微笑み、席に向かう美紀を見送る。一方で果夏はケーキの並べられているケースにピツタリと張り付き、中を凝視しながら鼻息をフンフンと荒くしていた。

果夏「奢ってもらえるのは一個……でも、あれもこれも食べたいし……ぐうっ！悩み続けるあまり、閉店までここに居座ることになるかも……！」

美紀（…変わった人だなあ）

果夏とは初対面の美紀だが、挨拶はまた後でも良いだろう。少なくとも、今は彼女に声をかけてはいけない気がした。

…スツ

店内隅の席につき、ふうつと一息つく。真正面にいる黒髪の少女……真冬は美紀がそこに座ってもまだ顔を伏せたままだが……

美紀「あの……こんにちは……？」

真冬「……こんにちは」ボソツ

顔を伏せたままだし、声もかなり小さいが、彼女は返事を返してくれた。美紀はそれに一安心し、につこりと微笑む。これで返事を返してこなければ、彼女は死んでいるのでは？と思ってしまうだろう。そう思わせる程、彼女はグツタリとしていた。

美紀「私、C組の直樹美紀って言います。あなたは……？」

真冬「……B組……狭山真冬……」

彼女は自分の名前を名乗ると、伏せていた顔を少しだけ上げる。彼女はそうして目の前にいる美紀の事を上目づかいで見つめ、小さな声で呟いた。

真冬「えっ……と……よろしく……美紀、だっけ？」

美紀「はい、美紀です」

真冬「はあ……さっそく愚痴みたくなくて悪いけど、キミ達が遅れた

せいでボクは苦勞した。一時間…一時間だよ？その間ずっと…ずっと、カナのお喋りに付き合ってたの。もう……ほんとに疲れたよ……」

美紀「えっ？果夏さんとは友達なんじゃ…？」

真冬「友達だけど、それでも限界って物がある…。ボクはお喋りが苦手なのに、カナのやつ……すぐに『聞いている？』とか『眠たいの？』とか言って相づちを求めてくるから……」

真冬はテーブルに置かれていたオレンジジュースの入ったグラスを手に取り、それを一気に飲み干す。彼女は空になったグラスを振って氷をカラカラと鳴らし、深いため息をついた。

真冬「…なんで遅れたの？」

美紀「えつと…このお店の場所を調べたのは圭なんだけど、その調べ方が甘かったみたいで、道に迷っちゃって……」

真冬「圭…？ああ、あつちにいる娘か……お互い、友達には苦勞するね」

真冬はグラスを置き、圭を見て呟く。確かに、圭がしつかりしてればもつと早くここに来れたし、今回の事以外にも何度か圭に困らされた事はある。美紀はそれを思い返して苦笑いするが、それでも…彼女との思い出は楽しい事の方が多かった。

美紀「ふふつ、確かに苦勞する事もあるけど…一緒にいて楽しい人なんです。圭って娘は……」

真冬「それを言ったら…カナだってそうだもん……うるさくて、騒がしい娘だけど……良いところだってある…例えば…」

美紀「例えば…？」

真冬「…雰囲気があったかくて…そばにしていると安心できる……。これ、本人には内緒だよ…？」

美紀が尋ねると、真冬は真っ赤に染まった顔をテーブルに伏せる。

文句を言っていた時は彼女と果夏は友達ではないのかと思っていたが、そんな事なかったようだ。美紀と真冬：二人は互いの友人が戻るまでの間、その友人についての話で盛り上がった。

美紀「美味しそうなやつ、選んできたよ！」

果夏「真冬ちゃんっ！私も真冬ちゃんにオススメを選んできましたっ!!」

少し話し込んだ後、圭と果夏がケーキを持ってそこに現れる。美紀と真冬は盛り上がった話を一旦止め、二人の顔を見つめた。

美紀「ありがと、圭」

真冬「カナも：あり、がと：」

果夏「おおっ!!真冬ちゃんがデレた!!」

圭「デレ：って、何それ？」

果夏「教えてやろうっ！普段の真冬ちゃんは、友達である私にすら”ありがとう”が言えない娘なのだよ!!」

真冬の頭をバシバシと叩き、興奮する果夏…。真冬はそんな彼女の手をバシツと払いのけ、正面に座る美紀の事を見つめた。

真冬「ほらね？うるさい娘でしょ…？」

美紀「ふふっ、真冬も大変なんだね♪」

真冬「うん：美紀には分かってもらえて嬉しい…」

互いの友人を見つめた後、につこりと笑い合う美紀と真冬。二人はついさつき会ったばかりであり、それまでは初対面のハズ…。なのにもう仲が良さそうな雰囲気になっており、圭…というより、果夏は

驚いたような表情を浮かべた。

果夏「なっ?!?真冬ちゃんが私以外の人と話してるっ?!?美紀ちゃんっ!
!あなたはいったいっ…!?!」

真冬が自分以外の学生と親しげに話すのを初めて目撃し、果夏は震えだす。真冬はそんな果夏を見てため息をつき、美紀もそれを見て苦笑いしていた…。狭山真冬には果夏以外の友達がいらない。しかし、今日：新しい友達が出来た。彼女の名前は直樹美紀：友達の苦労を話し合える、同じ年の女の子だ。

第二十九話『ゆめ』（みき）

ミンミンミ〜ン！

外では元気にセミ達が鳴いている…。

そんなセミ達とは正反対にダラダラと、家で転がる人間がここに一人。

「ったく…今日も暑いなあ…。いくら夏だって言っても限度があるだろ…。太郎丸、ちよつとエアコンのリモコン取ってくれ…」

ベッドの上にとだら〜つと寝転び、彼は額の汗を右手で拭う。今日も今日とて外は暑い…。いや、外だけでなく家の中ですら暑い。冷房をつけようにもそのリモコンはベッドから二メートルほど離れたテーブルの上であり、手が届かない。彼はそれを取るようと太郎丸に告げるが、太郎丸はそれに応えなかった…。――

太郎丸「……」プイッ

「おい、無視はヒドイだろ…。リモコンを取ってくれただけでいいんだよ…そうすれば僕がエアコンをつけてやるから。お前だって暑いだろ？我慢するなって」

ベッドに横たわったままそちらへ顔を向け、太郎丸への説得を続ける。しかし必死の説得をもつても太郎丸の心を動かす事は出来なかったようで、太郎丸はその小さな身体を起こすとスタスタと歩いて部屋の奥へ消えてしまった…。

「…ったく、わかったよ。自分で取ればいいんだろ」

ため息一つついてから起き上がり、テーブルに置かれていたりモコンに手を伸ばす。彼がそのリモコンを手に取り、ボタンを押して冷房

をつけたその直後…

ピンポーン

「っ？…誰だ？」

聞こえたチャイムに反応し、玄関へ視線を向ける。彼は持っていたリモコンをテーブルへ置いてからそこへ向かい、そつと扉を開けた…。

ガチャツ…

少しずつ扉を開き、その向こうにいる人物を確認する。開かれた扉の先…そこに一人で立っていたのは彼もよく知る後輩だった。

美紀「先輩、こんにちは」

「美紀…さん？急に来るなんて、どうしました？」

美紀「すみません…やつぱり、急に来られるのは迷惑でしたよね？」
そつと顔をうつむけ、申し訳なさそうな声を漏らす美紀…。確かに急に訪れてきた事には驚いたが、別に迷惑という事はない…。彼は半分くらいまで開けていた扉を全て開き、彼女を家の中へ招き入れることにした。

「特に何をしてた訳でもないし、別に迷惑じゃないです。…つていうわけで、なんなら中に入りますか？」

美紀「あつ、はいっ。お邪魔します」

中に入る前にペコリと頭を下げる辺り、美紀は本当に礼儀正しい娘だ。その後、彼女は彼の家の中に入るや否や、辺りをキョロキョロと見回し始める。どうやら、太郎丸を探しているようだ。

「あいつなら……ほら、そこに」

部屋の隅、そこに置かれていたダンスの陰かげに隠れるように丸まっている太郎丸を指差し、彼はニヤリと笑う。美紀と目が合った太郎丸はビクツと身を震わせており、その様が面白かった。

(さっき無視した仕返しだ。美紀さんと思う存分遊ぶといい……！)

太郎丸「ツ……!? ウウ……ワンワンツ!!」

美紀「つ!? な、なんで吠えるの?」

スツと起き上がり、身を構えながら吠える太郎丸を見た美紀は自分が寄っただけで吠えられたと思い、ガクツと肩を落とす。しかし、太郎丸が吠えていた相手は彼女ではない。

「いや、こいつは美紀さんに吠えてるんじゃない、僕に吠えてるんですよ」

美紀「先輩に……ですか? どうしてです?」

「まあ……ちよつとケンカ中でした」

美紀「ケンカ? ……犬と、ですか?」

『あはは』と苦笑いして尋ねる美紀に対し、彼は頷きを返して応える。彼は先程、太郎丸が自分の事を無視したことを根に持ち、その仕返しとして美紀を差し向けた。その一方で太郎丸は自分に美紀を差し向けた彼の事が気に入らず、『ワンワン!』と吠えていたのだ。

(……にしても、そこまで美紀さんを嫌らう理由はなんだ?)

太郎丸の吠えは彼に向けられていたものだが、吠えている理由に美紀が入っているのは違いない……。この犬……太郎丸は何故か、必要以上に美紀の事を避けている。

美紀「まあ…太郎丸が不機嫌なら、遊ぶのは後にしようかな…。それより先輩、ちよつと時間をとらせてもらつてもいいですか？」

目線を太郎丸から彼へと移して尋ねる美紀…。今日は特に予定もないし、むしろ暇してたくらいだ。彼は返事を待つ美紀の目を見つめ返し、そつと頷く。

「はいはい、構いませんよ」

美紀「よかった…じゃあ、テーブル借りますね？」

頷く彼を見た美紀はカーペットに腰を下ろし、持っていたカバンの中身を目の前のテーブルの上に並べていく。彼女がカバンから取り出したのは一冊のノート、そして筆記用具だった。

「勉強するんですか？」

美紀「いえ…勉強ではなく、ちよつと…その…」

テーブルを挟み、彼女と向かい合うようにして座る。そうしてから見つめた彼女の顔は微かに頬が赤くなつていて照れているような、恥ずかしがっているような、そんな表情だ。

美紀「わたし、自分で小説とか…書いていて…」

「小説？」

彼が尋ねると美紀は恥ずかしそうに頷き、持っていたノートを開く。彼女はその中を自分で見直しているだけで彼に見せてはくれなかったが、反応を見るに彼女の言う小説はこのノートに書かれているようだ。

美紀「元々、本は好きなので…。もし可能なら、将来はそういった仕事につければとも思っています…」

「…へえ」

美紀「先輩には…将来の夢、とかありますか？」

「いや…特には…」

将来の夢…。彼はそれを考えた事がなかった。もう高校三年生…確かにそういった事を考えてみる時期なのだが…。

「なりたいもの、やりたいこと、特にないなあ…」

美紀「ふふっ、先輩らしい答えですね」

肩を揺らし、楽しげに笑う美紀。その笑顔を見た彼は少し馬鹿にされていような感覚を覚えたが、相手が美紀だと怒りが湧かない。むしろ、その笑顔を見て自分も笑ってしまうほどだ。

「これからのんびりと考えますよ…」

美紀「ええ、慌てずのんびりと…先輩はいつまでもそんな、マイペースな先輩でいてくださいね♪」

「お望みなら、いつまでも…」

美紀「まあ、さすがにほんのちよつとは危機感を持つべきとも思いますが…」

先の事をこれっぽっちも考えていない先輩に対し、美紀はそれをビシッと告げる。彼はその言葉に苦笑いしか出来ずにいたが、これはこれで楽しい時間だ。

「さて、話を戻しますか…。美紀さんが書いている小説ってのは、それですよね？ちよつと見せてもらってもオツケーですかい？」

美紀「えつと、そのつ…ま、まだ…書いている途中ですし…」

「美紀さん…たった一人の人間に見せる事を恥じらっているようじゃ、小説家なんて夢のまた夢で——」

美紀「そっ、そこまで言うならっ…！ど…どうぞ、最初の方だけなら…見ても良いです…」

ノートを見せる事を恥じらっていた美紀だが、彼の煽るあおような言葉を聞いて吹っ切れたらしい。彼は手渡されたノートをパラパラと捲り、それらのページに書かれていた文章に目を通した…。

「……………」

美紀「その…あまり明るい話じゃないですけど…大丈夫ですか？」

「まあ…確かに明るい話ではないけども……………」

ノートに書かれていた小説…その内容を簡単に説明するところなる。

『世界に突如として何かが現れ、大勢の人々はそれの手にかかり消えてしまった。当たり前前の日常が崩れ、徐々に朽ちていく世界…。その世界に暮らす四人の少女は一人の少年と出会い、様々な困難、苦労と直面しながらも一日一日を笑顔で生き抜いていく』

ほとんどの人が消えてしまい、毎日を生き延びることすら大変な世界…。全体的に見ればかなり重たい話に見えるが、読み進めていくと少女達と少年がふざけ合う展開も多くあり、彼はふふつと声を漏らした。

「なんか…身に覚えのある話だな…」

美紀「その男の人、先輩がモデルなんですよ？他に出ている四人の女性も由紀先輩、胡桃先輩、リーさん、そして私がモデルなんです」

言われて見ればこの小説の主人公の言動、その一つ一つがどこか自分に似ているようにも思えるし、他の四人の少女も由紀や胡桃、悠里や美紀に似ている…。彼がそんな事を思いながらページを見直していると、美紀がポツリと呟いた。

美紀「実はその小説、最近私が見る夢をベースにしてるんです」

「…夢？」

美紀「はい…。ガラツと変わった世界で、先輩達と一緒に暮らして生きていく…。そんな夢を週に一度は見るようになって…」

そつと顔を俯け、その夢の事を思い出す…。ろくに生き残った人もいない悪夢のような世界の中、彼等と共に毎日を過ごしていく夢。それは夢にしてはやけにリアルで、美紀はその夢で見た事は細かい部分まで覚えていた。

「んん…これ、主人公は誰になるんです？」

美紀「一応、先輩をモデルとした男の人が主人公…って事にしてます」

「それはそれは何とも嬉しい限りで…。けどこの主人公、僕をモデルにしたってわりには所々間抜けな匂いがするんですけど…」

美紀の小説の主人公は基本的に明るい性格だが、この短時間で彼がパツと見ただけでも、その主人公が間抜けな事をする場面が何度か確認できた。これでは自分が間抜けだと言われているように思えてしまい、彼は心外だと言わんばかりの表情を見せるが…美紀は首を傾げてこちらを見返していた。

美紀「先輩をモデルにしてるんですから、もちろん多少はそんな描写が…」

「おおう…よくもまあ面と向かってそんな失礼な言葉を…」

美紀「あはは、ごめんなさい…」

気まずそうに謝る美紀を見た彼はため息をつき、そのノートを返す。彼にそれを手渡された美紀はまた自分でそれをパラパラと捲り、にっこりと微笑みながら口を開いた。

美紀「でも、この主人公にも良いところがいっぱいあるんです…。確かに普段はふざけてばかりで、幾度となく他の四人を困らせてますが…真面目な場面ではしっかりと頑張ってくれます。自分の命に代

えてでも彼女達を守ろうとする場合とか、そういうのもあるんですよ？」

「おお、そりゃ格好いいですね」

美紀「ええ、かつこいいです♡」

ニコツと微笑む美紀の言葉を聞き、彼の胸がドキツと高鳴る…。美紀は今、彼をモデルにした主人公の事を格好いいと言ったのだ。つまり、これは間接的に自分の事を格好いいと言ってくれたのでは…？そんな思いが彼の頭を過よぎってからワテンポ遅れ、美紀の顔が真っ赤に染まる。

美紀「…あつ！今のはそういう意味ではなくっ…！」

「ははっ、分かってますよ。美紀さんが褒めたのはあくまでも小説の主人公であって、僕じゃない」

少しからかってやろうとも思ったが、美紀の顔があまりにも真っ赤だったのでそれすら止め、彼はニヤニヤと笑う。彼女に格好いいと言われたのはあくまでも小説の主人公だ…。そう割り切ろうとするが、その主人公のモデルは自分だと思うとニヤニヤが止められない。

美紀「…なんでにやついてるんですか」

「へへ…なんででしょうかねえ」

美紀「っ…ふふっ、ほんと…先輩はどこまでも先輩ですね」

ニヤニヤ微笑む彼を見ている内、美紀まで頬を緩めていく。『先輩はどこまでも先輩』…彼女の放った言葉の意味が分からずに彼が不思議そうな顔をしている中、美紀はノートをテーブルの上に置いてペンを取った。

美紀「今日、先輩の家に来たのには理由があります…。先輩には、この小説を書くのを手伝ってもらおうと思ったんです」

「小説作りの手伝いを…僕が？いやいや、無理ですって。小説とか書いた事ないし…」

美紀「手伝うといっても、何かを書いてもらいたい訳じゃありません。ただ、この小説に足りないもの、必要だと思うシーン、そういったものを客観的に見て教えてもらいたいです」

そう告げる美紀だが、彼ははずれにしても自信が湧かない。美紀の小説はパツと見た感じでは良くできており、自分のような人間が口出しするポイントなど無いように思えた。

(悪いけど、断るか…)

少し悩んでから視線を上げ、彼女の頼みを断ろうとする。しかし、こちらを見つめる美紀の真っ直ぐな視線…それを受けていたら何だか断りづらくなってしまい……

「まあ…簡単なアドバイスくらいなら……」

気付いた時、彼は首を縦に振っていた。それを見た美紀は表情をばあつと明るくさせ、そこに座ったまま深々と頭を下げる。

美紀「ありがとうございますっ！頼んでみてよかった…」

安心したように呟き、美紀は『ふうっ…』とため息をつく。彼女はそうしてから持っていたペンをノートの上でトントンと鳴らし、彼の事を見つめ直した。

美紀「さっそくですが、私のこの小説…何か足りないところって—
—」

「恋愛要素っ!」

美紀「……………はい?」

さつきまではあまり乗り気では無さそうだった彼が食い気味に答えるのを聞き、美紀は目を丸くする。もしかしたら聞き間違いかな？ そう思った美紀は彼に答えを聞き返すが…彼の返事を聞き、やはり聞き間違いなどでは無かったと思い知る。

「だから、恋愛要素ですよ！この主人公の周りには女の子が四人もいるってのに、誰とも恋愛に発展しないなんて…そんなのおかしいでしょう？」

美紀「おかしい…？そ、そう…ですかね…」

「絶対におかしい！この少年も頑張ってるんだから、彼女の一人や二人与えてやるべきだ!!」

美紀（ああ…まったく、この人は…）

彼がここまで熱く語るのは、この小説の主人公と自分を重ねているからなのだろう…。美紀は直ぐ様それに気が付き、呆れたような表情を浮かべた。

美紀（まあ…私からお願いしちゃった事だし、悪いようには言えないよね…。仕方ない、少し…本当に少しだけ、恋愛要素を足してみるかな…）

彼の思いに折れた美紀がため息をついてからペンを動かすと、彼は満足そうに微笑んでそれを見守る。このあとも彼の要望通りに書いていったら、この小説はどうなるのだろう…。もしかしたら、女性全員が彼を求めて争うハーレム物にされてしまうかも知れない。それだけは避けようと思いつつ、美紀は筆を進めた。

第三十話 『三度目のときめき』（みき）

この小説に足りないもの……それは恋愛要素だと言い張る彼の言葉に従い、美紀は筆を進めていった。とはいえ、いきなり恋愛要素を足して欲しいと言われて簡単にいくわけも無い。美紀が普段から読んでいる小説に恋愛小説はないし、本人も恋愛経験が無かったからだ……。

美紀「……………よし。こんな感じでしょうか？」

「んん…どれどれ」

それでもどうにか、三十分ほどかけてそれを足してみる。美紀は今書き上げたばかりのそれを彼に手渡し、自信薄ながらも感想を待つ……。

「……………」

パタンツ…

数分が経った頃、彼はそれが書かれていたノートを閉じる。思い付きで適当に書いたような恋愛要素だが、気に入ってもらえただろうか……？美紀が不安そうな目で見つめる中、彼はそのノートを美紀へと返す。

「恋愛要素……足したんですね？」

美紀「えっ……？足しました……けど……？」

ノートを受け取ってから、美紀は彼の言葉に首を傾げる。確かにあまり自信は無いが、それでも恋愛要素は足したはずだ……。

パラパラパラッ：

美紀「ええつと：ほら、ここにあるじゃないですか」

ノートを捲つて確認してみると、そこには美紀が足した恋愛要素が描写されていた。ちゃんと書いてあるじゃないか……美紀はそう言わんばかりの目で彼を見つめ、そのページを見せつける。

「いやいや！ちよつと手を握っただけじゃないですか!？」

美紀「えっ？これも十分な恋愛要素では？」

美紀の開いたページ：そこでは彼をモデルとした主人公が由紀をモデルとした少女と手を握り合い、楽しげに笑い合う様子が描写されていた。美紀にとってこれは十分な恋愛要素だったのだが、彼は今一つ納得がいかないようで…。

「手を握るのが恋愛要素って……小学生じゃないんだから」

美紀「むっ……そこまで言うなら、先輩が書いてみて下さいよ！」
「別に良いけど……僕の才能に嫉妬しないで下さい？」

ハツと鼻で笑い、彼は美紀からノート：そして筆記用具を受け取る。自分の書いた恋愛要素が”小学生レベル”と馬鹿にされた美紀は不機嫌そうな表情のまま、彼が筆を進める様を正面から見守っていた。

美紀「書けるものなら書いてみて下さい……。大人の恋愛ってやつを」

「ふん……とびつきりのを書いてやりますよ……」

意味深な笑みを浮かべて約十五分後、彼は持っていたペンをテーブルへと置く。それに気付いた美紀は暇潰しに読んでいた小説をカバンへとしまい、カーペットに膝を擦りながらノソノソと彼のそばに寄った。

美紀「出来ましたか？…速いですね」

「この速筆もまた才能です。ほら、ご覧なさい。そして驚愕しなさい」
美紀「なんですか、そのキャラ……」

やたらと偉そうな顔を見せる彼にツツコミを入れつつ、そのノートを受け取る。そうして彼が文章を記したページをペラペラと捲り、少しずつ読み進めていく……。

ペラ……ペラツ……

美紀「せ、先輩……あの……これ……」

「読み終わりましたか？」

美紀「いや、まだ途中……ですけど……」

「じゃあ最後まで読んで下さい？ほんの数ページくらいですから」

美紀「は……はい……」

ほんの数ページというが、文章はページの上から下まで余す事なく書かれている。たったの十数分でよくここまで沢山の文字を書いたなあという点に関しては感心するが、その内容が問題だった……。

美紀（もう……読みたくない……）

彼の書いた文章の内容……それは読んだ美紀は確かに驚愕した。彼がここまでの物を書く予想してなかった彼女は顔を真っ赤に染め、今すぐノートを閉じたいと考えたが、最後まで読んでからじゃないと正当な評価も出せないだろう。仕方なく、最後の一行までそれを読み終え、美紀はノートを置いた。

パタンツ……

美紀「………はあ」

「あまりの名作っぷりにため息しか出ないか？」

頬を染めたままため息をつく美紀を見て、彼は満足そうに笑う。確

かに：美紀は今ため息をついた。しかしこれは彼の作品に心を奪われたからではなく、ようやくこの作品から解放されたと思つての：安堵のため息だつた。

美紀「名作……？冗談も大概にしてくださいっ!!なんですかこれっ!?!」

「いや：美紀さんの小説に恋愛要素を足してみたのですが…」

美紀「れっ、恋愛要素っ：??:」

「あつたでしょう?ほら、このページで：主人公である”彼”が、美紀さんに似た少女と裸で抱き合うシーンとか——」

美紀「やり過ぎですっ!!なんか描写も生々しいし：これじゃただの官能小説じゃないですかっ!!」

彼がそのページを開いて見せるが、美紀はそれから目を逸らして怒鳴り声をあげる。開かれたページでは主人公が美紀をモデルとした少女と裸で抱き合い、口にするのも恥ずかしい事をするシーンが描写されていた。

「大人の純愛ストーリーを書いたつもりだつたんだけど……」

美紀「こんなに酷い小説は初めて見ました!だいたいっ：なんで先輩の相手が私なんですかつ!?!」

「イヤですか?」

美紀「イヤですっ!!」

即座の否定……。彼は美紀ならそう答えるだろうと分かつていて意地悪したのだが、その破壊力を少しばかり侮つていた……。真正面、向き合つたままの状態で自分を否定されるのは、中々心にくる……。

「は、はつきりと言つてくれますね……」

美紀「あっ……ごめんなさい……。別に先輩が嫌いとか、そういう事じゃなくて……まあ、今のでちよつと嫌いにはなりかけましたけど……」

ズキツ!!!

然り気無く呟かれたその言葉にはトゲがあり、彼の心をより一層抉えぐつていく。一・二年生の後輩とあまり交流の無い彼にとつて、美紀はとても大切かつ、貴重な存在だ……こんな事で失いたくはない。

「ぐっ……これからマジメにやりますから、どうかチャンスをつ……!!」
美紀「チャンスですか?んく……わかりました。では、ちゃんとした……真面目なアドバイスを私にしてくれると嬉しいです」

彼の焦ったような表情を見た美紀は『ふふっ』と笑い、もう一度ペンを取る。美紀は何だかんだで彼の事を信頼しているため、その真面目な意見を聞きたいと思っていた。

「じゃあ……その、恋愛要素についてですけど」

美紀「まだそれを語るんですね……」

正直に言うと、美紀はこの小説に恋愛要素はいらないと考えていた。しかし、彼は退く事なくそれが必要だと言い張る。恐らく、自分の分身とも言えるこの小説の主人公に良い思いをさせてあげたい一心なのだろう。

「って言っても、今度は真面目な意見を言っていくつもりです。美紀さんに聞きたいんですけど、異性に対してドキドキした瞬間ってありますか?」

美紀「ドキドキ……ですか?そうですね……」

彼は恐らく、美紀の答えを小説に反映しようとしているのだろう。美紀はすぐにそれを察し、深く考え込む……。自分の経験なんかが小説の役に立つか分からないが、まあ……さっきのような官能小説になつてしまうよりはマシだ。

美紀（ドキドキか……。そういえば、最近ドキドキした事があったな……あれは、たしか……）

つい最近、胸の鼓動が高鳴り、身体が熱くなった出来事があった。それが何時の事か、どんな時だったかを思い出そうと記憶を遡り、直後、美紀は顔を真つ赤に染めて目線を彼に移す…。

美紀（思い…だした…：…先輩の背中に乗せてもらった時だ…：）
数日前、彼と一緒に帰ったあの時…。美紀は足を怪我してしまい、彼に背負ってもらった。足の怪我はほんの擦り傷なのに、わざわざ背中を貸してくれる優しさ、そして…顔を寄せた背中の温かな感触などにドキドキしたのを思い出す…。

「…なんかありました？」

美紀「いやっ…ちよつと待ってくださいね…。まだ、思い返している途中で…」

プイツと目を逸らし、記憶を思い返しているふりをする。実際はもう思い出せているのだが、彼には…彼にだけは言えない。自分がドキドキした事のある相手が、彼だったなんて…。

美紀（ほ、他にもっ…まだあるはず！ええつと…：…ええつと…）
彼との話だけは使えない…。そういえば、異性にドキドキした経験は他にもあった。この記憶なら使えるはずだと思った美紀はまた記憶を遡り、それが何時の事だったか思い返すが…：…。

美紀（ああ…思い出した…：…先輩に…『美紀』って呼び捨てにされた時だ…）

思い出したドキドキの相手はまたしても彼であり、美紀はため息をつく…。他にはもう、異性にドキドキした瞬間などない。異性に対する二回のと きめき…そのどちらも彼が相手だったとは…。

美紀（うそ…これじゃ…まるで先輩の事が…）
一度それを意識してしまうと、もう抑えられない…。さつきまでは彼の事を”仲の良い先輩”というようにしか見てなかったのに、今はもう、彼の顔を見るだけで胸の鼓動が高鳴る…。

「…美紀さん？」

美紀「は、はい…なんですか…？」

顔を俯けたまま、上目づかいで彼の事を見つめる。チラツと見つめているだけで直視している訳じゃないのに、それだけで胸がドキドキとした。

美紀（まだ…分からない…。ただの思い込みかも…）

もしかしたらと、心で思ってしまったているから…だから彼を見るだけで意識してしまうのだろう。どちらにせよ、こんな中途半端な気持ちを抱えたままの状態では彼と目を合わせる事すら出来ない。せめて、気持ちをハッキリさせよう…。

美紀「先輩…ちよつと…手を出して下さい」

「手を…えつと…はい」

美紀の目の前、彼の右手がそこに伸びる。美紀は顔を俯けたまま深呼吸し、彼の手を両手で包むように握った…。

ギュツ…

「つ…と…美紀さん？」

自分の右手が美紀の両手に包まれ、彼は照れたように微笑む。彼女の手は小さく、少しだけ冷たくて…やたらと心地よかった。

美紀「違います…美紀って、呼んで下さい…」

「…はっ…」

言った直後、美紀は彼の手をより強く握る。美紀は未だ顔を俯けており、その表情は垂れ下がった前髪に隠されていた。いつもと様子の違う後輩…それに戸惑った彼が困惑していると……

美紀「お願いっ……呼んで……」

「っ……」

小さく、震えた声で美紀が呟いた……。初めて聞く彼女の弱気な声や、握られた両手に込められた力……。それに応えるべく、彼はそつと口を開く。

「…美紀」

美紀「………はいっ」

返事を返し、美紀は顔を上げる。少し恥ずかしそうにこちらを見つめる彼女の目は微かに潤んでおり、頬も真っ赤に染まっていた。美紀の女の子としての表情……。そういったものを見ているような気がして、彼の鼓動も高鳴る。

美紀「やっぱり…美紀って呼ばれるのが良いです……」

「そう…ですか」

美紀「敬語もやめていいですよ…。私はあなたの後輩で、あなたは私の先輩なんですから……」

「………わかった」

手を握り合い、互いに照れ笑いしていく。これからもずっと先輩・後輩という、それだけの関係のままにいるはずだったのに、場の雰囲気流され…異性として見つめ合ってしまう。

美紀「これまで、異性の方にドキドキした事が二回だけあって…その二回は、どちらも同じ方でした…」

「………そうっ」

美紀「はい…。そして今…私は三回目のドキドキを経験しています
……………」

彼の手を握る美紀の力が、更に強くなる…。最初は冷たかった彼女の手だが、今はかなり熱くなっていた。きつと、彼の手を握ってドキドキしているからなのだろう。

美紀「三回とも同じ人にドキドキしちゃうなんて…変ですよね？」

美紀は彼の目を見つめながら照れたように微笑み、首を傾けていた。そんな仕草の可愛らしさ…そして『三回とも同じ人にドキドキした』と言う彼女の台詞…彼はそれらに胸をときめかせ、嬉しそうに微笑んだ。

「僕も…今は結構ドキドキしてるかな」

美紀「ほんとですか？…なら、よかったです…」

自分の気持ちに気が付いた瞬間、美紀は彼にそれを伝えたいという衝動にかられる…。さっきまではただの先輩としか見ていなかった彼がやけに愛しく見えてきて、彼女は頬を真っ赤に染めながら…考えるよりも先に口を動かした。

美紀「先輩…私、もしかしたら……………」

「……………」

彼の手を強く握りながら潤んだ瞳を向け、美紀は一言ずつ言葉を放つ。それらの言葉は彼を見つめていたら自然と出てきてしまい、止められなかった。しかし、このまま勢いに任せて気持ちを伝えてしまうのも良いだろう…。少しでも間隔が空いてしまったら、きつともう言い出せないから……………。

美紀「あなたの…ことが……………」

胸の鼓動が速くなり、微かに手が震える…。激しい緊張感と恥ずかしさに似た気持ちを感じながら、美紀が彼にそれを告げようとした瞬間だった。

『~~~~~♪~~~~~♪』

美紀「あ…っ…」

横に置いていたカバンの中から軽快なメロディが鳴り出し、美紀はハツとした表情を見せる。その音に慌てた美紀は彼から手を離し、そのカバンの中で音を鳴らしていた自分の携帯電話を手を取った。

美紀「ちよ…ちよつと失礼しますね…?」

「…どうぞ」

彼の許可を得て、美紀は携帯の呼び出しに応える。いったい誰からの着信だろう…。携帯を耳へあてる美紀を見つめてそんな事を思う彼だが、その答えはすぐに分かった。

ピッ……

美紀「…圭?なに?どうしたの?」

(ああ…また圭ちゃんか…)

美紀の言葉からその相手が圭だと知り、彼は『ふふっ』と笑う。この二人は本当に仲が良いのだなと実感したからだ。

美紀「…今いる場所?えつと…外…だけど…どうして?」

圭に自分のいる場所を聞かれたのか…美紀は然り気無く嘘をつく。一人で彼の家に来ている事を告げれば、彼女に勘違いされてしまうと

でも思ったのだろう。

美紀「あ……うんっ、近く……かな。……わかった、すぐ行くよ……」
ピッ……

携帯のボタンを押して通話を終えた直後、美紀はスツと立ち上がる。彼がその様を不思議そうに見つめていると、彼女はテーブルの上に並べていたノート、筆記用具をカバンへとしまいだした。

美紀「あの……ごめんなさい。前から探してた本を圭が見つけてくれたようなので、ちよつと買いに行つてきます……」

「はあ……なるほど……。じゃ、今日はもうサヨナラですか？」

美紀「そう……ですね……」

そのままスタスタと駆け出し、美紀は玄関へ向かう。さつきまでの事があるせいで気まずくなってしまったのか、彼女の態度が急によよしくなった気がする。そんな感覚を感じながらも、美紀を玄関まで送る彼だったが……。

美紀「しっ……失礼しましたっ……!」

「じゃあ、また学校で会いま——」

ガチャツッ! バタンツ!!

別れの挨拶を述べている途中なのに、美紀はそれを聞かぬまま外へと出ていってしまった……。彼女がああ調子だと、学校でも顔を合わせにくくなってしまいかも知れない。

「……はあ……まったく」

彼は一人ため息をつきながら、部屋へ戻ろうとして玄関に背を向ける。その時、彼の背後からガチャツと音が鳴り、閉じていた扉がゆっくりと開く……。その音を聞いた彼が顔を振り向けると、微かに開いた扉の隙間から美紀がこちらを覗いているのが確認できた。

「…忘れ物？」

美紀「いえ…ただ言い忘れてた事が…。またそのうち…遊びに来ますから、待っていてくださいいね？」

美紀は照れたように微笑みつつそれだけを告げ、そつと扉を閉める。彼女の『また遊びに来る』という言葉が聞けただけでも互いの間にあった気まずい空気が消えたような気がして、彼はホツと一安心した……。

第三十一話 『みんなで』

「はあ…今日も今日とて暑いなあ…。太郎丸もそう思うだろう？」

太郎丸「クウ…ン」

床にベタリと腹をつけ、気だるそうにする愛犬を横目に見ながら咳く。先日から夏休みに入った訳だが、夏休みがやって来たという事は…すなわち夏が訪れた事も意味する訳で…彼は毎日毎日、その暑さに苦勞していた。

「…もう我慢の限界だ。よし、クーラーつけよう。このままじゃ死んでしまう」

節約にと思い控えていたが、ここまで暑いなら仕方ない。彼はテーブルの上に置いていたリモコンを手に取り、スイッチを押して冷房をつけることにした。

…ピッ

彼がそのスイッチを押すと、蒸し風呂のようだった部屋が少しずつ冷えていく…。さっきまで暑さに参って息を荒げていた太郎丸も少しずつ、落ち着きを取り戻していった。

「ふふっ、少しは…いや、かなりマシになったな。やっぱ、クーラー無しに夏は越せない。本当の事を言うとな僕はまだ我慢出来たけど…太郎丸はもう限界だったろう？だから仕方なくつけてやったんだ。感謝してくれ」

太郎丸「!?……ウウッ！」

「……冗談だよ。僕も限界だった。ちゃんと認めるから怒るなって……」
冗談の通じぬ愛犬から目を逸らし、テーブル前の席につく。そうしてから彼が見つめたのは壁にかけてある時計……。その時計が示していた時刻は午後1時10分だった。

「さて、そろそろかな……」

冷房をつけたのは彼自身がその暑さに参ってきたから……というのもあるが、他にも理由があった。今日、これから客が来る予定があるのだ。しかも、それは複数人……。それらの来客に備えて部屋を少しでも快適にしておかねばと思い、彼は部屋を涼めた。

ピンポーン！

部屋が大分涼しくなってきたその時、玄関のチャイムが鳴る……。彼は寝転ぶ太郎丸を残したまま玄関へと向かい、扉の鍵を開けてからその客人達に挨拶をした。

ガチャツツ……

「こんにちは。……って、こりやまた随分と大勢で……」

玄関の外に立っていた客はそれぞれがノースリーブのシャツやミニスカート、短パンなど、夏らしい涼しげな格好をした少女達。その先頭に立っていたのは彼もよく知る同級生、丈槍由紀だったが、中にはあまり面識の無い娘もいた。

由紀「こんにちはは〜！いやあ……ほんとに暑いね〜……」

「まあ……そうだね」

薄手の白いシャツの襟元を指先でパタパタと揺らし、由紀はテヘ

と苦笑いを浮かべる。頭が蒸れるからか、今日はあの猫耳帽子を被ってはおらず、その額はジーンワリ汗をかいていた。

胡桃「まったく、ここに来るまでに暑さで死ぬかと思ったぜ……」
「胡桃ちゃんが？ただ暑いだけで？」

胡桃「……おい……何が言いたいんだ？」
さつきまでは膝に手をつきながら息を整えていた胡桃だが、彼の言葉を聞くや否や鋭い目付きを見せる。暑さにやられていてもその鋭さは衰えておらず、彼は苦笑いする事しか出来ないが……その時、胡桃の隣にいた一人の小さな少女が彼女のシャツの裾をクイクイツと引いた。

胡桃「……ん？なんだ？」
るー「ケンカ、またあとでにできる……わたし……もうたおれそう……」
頭に被っていた麦わら帽子をそつと外し、るーは胡桃に上目づかいでそう告げる。るーの着ていた服は真っ白いワンピースでこれまた涼しげな格好だが、それでも外の暑さには敵わなかったらしい。

胡桃「ああ、わりいわりい。さて、お邪魔するぞ」
「おっ……遠慮の無い人だな……」

由紀「わ、わたしも……」
胡桃は彼の横を通り抜け、そのまま冷房の効いている室内へと足早に向かう。するとそれに続き、由紀も室内へと向かっていった。この二人はかなり暑さに参っていたらしいが、るーも同じくらい辛そうだし。るーの横に立っていた悠里は彼女の背をポンと押し、優しく声をかける。

悠里「さあ、るーちゃんもこの人にお邪魔しますだけ言って、中に

入りませうか」

るー「うん……おじやまします」

悠里「大勢でごめんなさいね？じや、お邪魔します」

「ええ、どうぞで……」

彼は返事を返し、るーと悠里を中へと招き入れる。皆と同じように額に汗かく悠里……彼女もるーと同じようなワンピースを着ていたが、彼女のは薄い茶色のもので少し大人っぽく見える。また、髪も綺麗に結んでポニーテールにしており……横を通す際、彼はそのうなじを凝視してしまつた。

(なんか……やけに色っぽいな)

圭「先輩、なんかやらしく目してませんか？」

「えっ？いやっ……そんなことは……」

彼がビクツと反応してしまうような言葉を不意に放つたのは後輩である祠堂圭^{しどうけい}。赤と黒のチェックシャツと紺色の短パンを身に纏つた彼女はニヤニヤした表情を浮かべており、彼が焦っているのに気付いているようだった。

圭「先輩も男の人なんですなあ……。なんか、ちよつとガツカリだなあ〜」

「い、いや……だから……別にいやらしい目なんか……」

圭「ええ〜っ？してたよねっ？」

果夏「してたしてたっ！そりやもう……やらしく目をっ！」

「してないって……ってか、あんたは確か……」

圭の言葉に相づちを打つたその少女にどこか見覚えがあり、彼は記憶を辿る。今はゆつたりとした黒のシャツと紺色のデニムを着ているが、前に見た時は制服姿だったはず。二本のピンで前髪を横に留めており、ポニーテールを揺らす茶髪の少女……。彼女の事を思い出そ

うとしていると、圭の隣に立っていた美紀…そしてもう一人の少女が口を開いた。

美紀「あつ、この娘はこの前友達になった娘で……」

真冬「カナ…自己紹介くらい自分でしなよ…。美紀が困ってる」

水色のシャツと白いミニスカートを履いた美紀が彼に新たな友人…果夏かなを紹介しようとするが、飾りつけの無い白のTシャツ、黒の短パン姿の少女がそれを手で制する。少女は目にかかるくらいの黒い前髪…その隙間から鋭い目付きを見せ、圭の横に立つ果夏の肩を小突いた。

果夏「うぐつ…わかったよ。ええつと、私…この度圭ちゃん、そして美紀ちゃんの友人となりました！紗巴果夏すずはかなと言いますっ!!……つて、先輩とは前にちよつとだけお話したような…」

「……ああ、思い出した。佐倉先生を困らせた娘か」

果夏「佐倉先生は年がら年中困ってますーわたしに非は無いつ！」
えっへんと胸を張り、果夏は言い切る。さすがにその台詞はおかしいと思っただのか、彼女の横に立つ圭は愛想笑いに似た笑みを浮かべていた。一方、美紀…そしてもう一人の黒髪少女は完全に呆れ顔である。

真冬「はあ…先生は年がら年中困ってる訳じゃない。カナがそばにいる時以外はいたって普通。つまり…カナが先生を困らせ続けているだけ……」

果夏「そ、そんなことないもんねっ!!」

真冬「…まあ、このバカは無視して……えつと、ボクは狭山真冬さやままふゆ。キミと会うのは二度目かな？」

顔を真っ赤にしてだっ子のように暴れる果夏を尻目に自己紹介を進め、真冬は彼の顔を覗き込む。彼がこうして真冬と話すのは確か

に二度目だが、前に一度…果夏と二人でプールにいたのを目撃した事もあった。もつとも、彼はそれを忘れているが…。

「あく…そうだね、前に一度会ってたか…。ま、とりあえず皆中に入ってよ。外は暑いから」

美紀「はい、お邪魔しますね」

圭「お邪魔します」

果夏「お邪魔しますっ！ほら、真冬ちゃんもちやんと挨拶っ!!」

真冬「言われなくてもする…。えっと、お邪魔…します…」

後輩四人を中へと入れた後、彼はガチャツと扉を閉める。室内へ戻ると既に胡桃と由紀はカーペットの上にごつたりと倒れながら涼んでおり、悠里とその妹、るーは太郎丸を相手に戯れていた。

るー「うわあ、かわいく♪」

悠里「あら、人懐ひとなつっこい子ね」

るーが屈みながら手を伸ばすと太郎丸は尻尾をパタパタと振り、腹を撫でてもらって気持ち良さそうにゴロゴロと寝転ぶ。その光景を真横で見っていた悠里は太郎丸の事を『人懐ひとなつっこい』と言ったが、その言葉に反応を示す少女が一人…。

美紀「人懐ひとなつっこい…？そ、そうなのかな…」

圭「美紀ちゃん、まだあの子と仲良くなれてないの？」

美紀「……………」

圭の言葉にはあえて応えず、美紀はそつとテーブルの前に腰を下ろす。彼女はそこに腰かけてからしばらくの間、太郎丸と戯れる悠里とるーを羨ましそうに眺めていた。

美紀（私…あの子に嫌われるようなことしたかな…）
いくら考えてみても答えは出ない。悠里も言っていたとおり、太郎丸はわりと人懐っこい犬のようだが、どういうわけか美紀にだけ…素っ気ない態度を見せるのだ。

果夏「うおおっ！見てよ真冬ちゃんっ！わんこだよっ！！」

真冬「うん…：…かわいい…」

果夏、そして真冬の二人も太郎丸の元に歩み寄り、そこへ屈む。るー、悠里、果夏、真冬…太郎丸はこの四人に交互に撫でられ、より一層嬉しそうに尻尾を振っていた。

圭「……………」

美紀「…何？」

圭「いや、なにも…………」

太郎丸が他の人間と触れ合うほど、美紀の目に悔しさのような、切なさのような感情が浮かび上がる。そんな彼女が気の毒に思えてきたが、圭は慰めの言葉をかける事すら出来なかった。

圭（下手な言葉かけても、かえって傷付けちゃいそうだしね）

言葉はかけず、圭は無言のまま美紀の肩をポンと叩く…。それを受けた美紀は何か言いたそうに圭の顔を見つめていたが、結局無言のままため息だけをついていた。

美紀「はあ…………」

るー「りーねー、この子かわいいね」

悠里「ええ、そうね。そういえば、この子の名前は？」

「ああ…太郎丸です」

飼い犬の名を告げ、彼もそこへと寄る。すると部屋の真ん中で倒れていた由紀、胡桃もそこへと集まり、気づけば太郎丸はハーレムを作り上げていた。

由紀「わあ…お腹柔らかいっ♡」

胡桃「おっ、ほんとだな。へへっ、なんだコイツ〜♪」

真冬「もふもふ…ぷにぷに…」

果夏「真冬ちゃんがニヤニヤしてる。わたしもわんこ飼おっかな〜」

太郎丸の手足や、そこにある肉球…そして腹などを代わる代わる撫で回し、少女達は笑みを浮かべる。しかし、その光景に嫉妬心を抱く者もいた…。それは未だ太郎丸になつかれていない美紀と、飼い主である彼だ。

（寝てるだけで女の子に撫で回されるとは……犬つてのは得な生き物だな。次に生まれ変わるなら、僕も犬になってみたいもんだ。…つて、前もこんな事を思ったな）

由紀、胡桃、悠里もそうだが、果夏と真冬…この二人もタイプは違えど、中々に整った顔付きをしている。るーもそうだ。彼女はまだ子供だが、それでも大人になったら美人になるであろう可愛い娘だ。そんな美少女六人に囲まれる飼い犬が羨ましくて、彼は悔しげな表情を浮かべた。

「はあ…羨ましいなあ」

その場をそつと離れ、テーブルについてから呟く。その呟きを聞いた美紀は顔を上げ、不思議そうに彼の顔を見つめた。

美紀「羨ましいって…先輩もあの子に触れないんですか？」

「えっ？…いや、そうじゃなくて……」

美紀「??」

彼の『羨ましい』という言葉聞いた美紀は彼もまた自分と同じ悩みを抱えているのかと思ひ込むが、実際はそうじゃない。彼はただ、あの人数の美少女に囲まれて身体を撫で回されている愛犬が羨ましくて仕方ないだけだ。

圭「…つと、そうだ。さっそく本題に入らないと！」

太郎丸を撫でる六人と、やけにテンションの低い彼と美紀…。これらを眺めるのに夢中になってしまっていた圭は本来の目的を思い出し、彼の目を見る。今日、これだけの人数を集めて彼の家に訪れたのは、数日後に控えたある計画…。彼もそれに参加するかどうかを聞きたかったからなのだ。

圭「えつとですね、今週末、ここにいる皆…それからあと二人加えたメンバーでちよつと遠出する予定があるんですが…：先輩もいかがですか？」

「遠出？…ああ、前に言ってた海の話？」

圭「いや。それとはまた別に、ちよつとした肩慣らしみたいなの…」
「…肩慣らし？」

遠出と聞き、前に話していた海へ行く計画の事かと思うのだが、どうやらそれとは違うらしい。じゃあどこへ、何しに向かうのか…：彼が不思議そうに首を傾げると、圭は得意気に『ふふっ』と笑みを浮かべた。

圭「せっかくの夏休み、遊ばなきゃ勿体ないというわけで…山にで

も遊びに行きましよう！」

「山……？」

海ではなく山に行く話を持ち出され、彼は何とも言えぬ表情を見せる。しかし、彼の目の前にいる圭……そしてそこにトコトコと駆け寄ってきた由紀、果夏はニコニコと満面の笑みを浮かべ、続けざまに口を開いた。

果夏「山ですよっ！自然ですよっ!!」

由紀「第三回！わくわくキャンプの旅！だよっ!!」

圭「はいっ！そういうことですね♪」

由紀と果夏の台詞に拍手で相づちを打ち、圭は彼の顔色を窺う。しかし、急にキャンプと言われた事。果夏、由紀、圭のテンションがやたらと高いこと。そして、由紀が放った『第三回』という言葉の意味が理解できない事。彼は様々な点に混乱し、悩ましげに首を捻った。

美紀「第三回って……一回目、二回目があつたんですか？」

美紀も彼と似たような事を思ったらしく、由紀に尋ねる。すると由紀は腰に手をあてて胸を張り、ハッキリと答えた。

由紀「ないけど、こういうのは雰囲気からだよっ!!」

果夏「あっ！それ分かります！やっぱり、大事なのは雰囲気ですよえ♪」

由紀「ね〜♪」

仲良く笑い合い、由紀と果夏は彼の返事を聞かぬまま太郎丸の元へと戻る。気の赴くま^{おもむ}まに生きているような二人を前に彼が呆気にとられていると、美紀は苦い笑みを浮かべて彼の顔を見つめた。

美紀「まあ……そういうことです。どうします？先輩も一緒に行きますか？」

「う〜ん……………」

美紀「私としては、先輩も一緒に来てくれると嬉しいのですが」
ポツリと告げられたその言葉に反応し、彼は目を丸くする。しかし、彼女の言葉に込められていた意味は彼が思っていたのとは違った
ようで……

美紀「ゆき先輩と果夏……。私やりーさん、真冬だけでは、あの二人をずっと見張っていられる自信がありません」

「ああ…そういうことね……」

底無しに明るく、無邪気で子供っぽいあの二人を見張り続けるのは確かに大変だろう。しかし、そんな彼女達とだからこそ作れる面白い経験もありそうだ。

(山か……。海に行く前に、そんなところに行くのもありかな)

断るほどの予定も無いし、これも良い思いで作りになるだろう。彼は静かに頷き、美紀達と共にその：『第三回・わくわくキャンプの旅』に行く事を決めた。

第三十二話『あつい』

夏休みの、とある週末の日。一台のバスが山道を走っていた。車内の中は冷房が聞いていてわりと涼しいが、その一方で外は今日も日射しが強く、かなり暑そうだ…。出来ることなら、この涼しい車内になんかいたい…。そう思う者も少なくなかった。

だが、そんな訳にもいかない。彼女達の乗るバスは多くの木々に囲まれた山道の中にある一つのバス停に停まり、プシューツ…と音を発しながら扉を開いた。ようやく目的地に着いた事を嬉しく思う者、暑い外に出るのが嫌な者、それぞれゆっくり席を立ち、バスを降りてから各々が声を発した。

由紀「とくちやくつ！さあ、あとはすこし歩いてただけだね！」

胡桃「あつ…ええつと、どのくらい歩くんだけ…？」

由紀「すこしだよ！」

胡桃「うん…だから、どのくらい…？」

由紀「少し、だよ!!」

胡桃「だあつ！うっさい!!だからその少しがどれくらいかって聞いてんの！」

由紀「うわっ!?な、なんでそんなに怒ってるの？」

胡桃「この暑い中、お前のテンションに付き合うのはキツいんだよ…」

着ていたシャツの襟元を指でパタパタと揺らし、胡桃は由紀に背を向ける。降り立った地は想像していたよりもずっと暑く、由紀が何故こんなにも元気なままなのか不思議なくらいだった。

歌衣「えつと、ここからなら十分くらいで着くはずですよ。少しだけ、坂道を進むことになっちゃいます…」

白いワンピースの上に紺のデニムジャケットを羽織っている、長く綺麗な茶髪が印象的なその少女、那珂歌衣は背中のリュックサックから取り出した一枚の地図を広げ、目的地までの距離を胡桃達へと告げる。彼女からそれを聞いた胡桃は深いため息をつき、ギラギラ輝く太陽を目を細めて見上げた。

胡桃「はあ……まあ、十分くらいなら大丈夫か」

歌衣「はいっ！くるみ先輩は体力がありますから、きつと大丈夫ですっ」

胡桃「…だな。それよりお前の方が心配だ。キツくなったらすぐ言えよ？」

歌衣「あ……は、はいっ……！」

胡桃は歌衣の頭に乗っていた大きな麦わら帽子に手を伸ばし、それをしっかりと被らせる。歌衣は少し戸惑ったような顔をしながらも、最後は嬉しそうに笑っていた…。

歌衣「でも……私の他にも心配な人が……」

胡桃「ん？……ああ、そうだな」

二人はそつと目線を横へ向け、そこに立っていた二人の少女を見つめる。そこにいた少女の内、一人は空に輝く太陽に負けじと力に溢れていたが、もう一人は額から汗をダラダラと流して今にも倒れそうだ。

果夏「やつと着いたね、真冬ちゃんっ！長い間バスに揺られっぱなしで疲れたでしょ？大丈夫？何か欲しいものとかある??」

真冬「……静寂。…平穏。…あとはカナのいない世界」

果夏「またまたあく♪ついて早々ジョークなんて、真冬ちゃんもこの大自然を前にハシャギざるを得ないというわけですね！そういうえば、心なしか何時もよりもテンション高く見えるもんね♪」

真冬「100%勘違い……。今のボクがハイテンションに見えるな

ら、眼科に行くことを強くオススメする……」

由紀と同様、紗^{すずは}巴^は果^{かな}夏もこの暑さを気にしていないようだ。彼女はニコニコと満面の笑みを浮かべながら狭^{きやま}山^ま真^ま冬^{ふゆ}の肩を抱き、一人でケタケタと笑い声をあげている。真冬はそんな果夏に絡まれていること、そしてこの暑さに早くもダメージを受け、顔を真つ青に染めているた。

美紀「ちよつ……！果夏つ、あまりくつつかないであげて。真冬、顔色が悪くなつちやつてるから」

果夏「みやつ？……そうですかねえ？いつもより元気に見えるけど……」

美紀「どう見ても真つ青な顔してるよ。これがいつもより元気に見えるって……果夏はこれまで真冬の何を見てきたの……」

真冬「そうだそうだと……もつと言つてやれ……」

美紀の言葉に紛れつつ、真冬は肩にかけられていた果夏の腕から抜け出す。彼女はそうして美紀の方へと逃げ込むが、フラフラとしていてかなり危なっかしい足取りだ。

美紀「真冬、大丈夫？」

真冬「……ぎりぎり」

美紀の背後に回り込んだ真冬はその向こうに木陰を見つけ、その下へともぐり込む。木陰に入り、日射しが直に当たらなくなっただけでもかなり楽になったようで、真冬は心地よさそうな表情だ。

るー「まふゆ、ジュースのむ？」

木陰に潜る真冬が少し苦しそうな表情をしていたのを心配し、るーは彼女の元へと歩み寄る。るーはバスに乗る前に悠里に買ってもらったペットボトルを前へと差し出し、真冬がそれを受け取るのを待った。

真冬「えっ……でも、それはるーちゃんのだよ?」

るー「うん。まふゆに分けてあげる。ちよつとだけぬるくなっ
ちやっただけ」

真冬「……………」

悠里「るーちゃんもこう言ってるし、遠慮せず分けてもらってもいいのよ?水分はこまめに取らなきゃいけないもの」

真冬が受け取りずらそうにしていると、悠里がその場に歩み寄ってそれを受け取りやすいように言葉で後押しする。るーの姉である悠里の言葉のおかげで真冬も気が楽になり、遠慮なくそれを受け取る事が出来た。

真冬「じゃ、ちよつとだけもらうね?」

るー「うんっ。半分までならのんでもいいよ」

ペットボトルを受け取った真冬が笑顔を見せると、るーも同じように微笑む。彼女は半分までなら飲んでも良いと言っているが、これはるーが悠里に買ってもらった物だ。殆ど中身が減っていないこれを一気に半分も飲むのはさすがに心が痛むので、真冬はほんの一口だけもらうことにした。

真冬「ん………ありがとう。おいしかったよ」

るー「……もつとのんでもいいよ?」

真冬「ふふっ……るーちゃんは優しいね」

一口でも飲み物を口に出来た真冬は少しだけ元気になり、青かった顔色も少しずつ良くなっていく。彼女は木陰の中で一度だけ深呼吸をすると、目の前にたたずむるーの頭をぽんぽんと優しく撫でていた。

真冬「元気になれた。本当にありがとう……」

るー「えへへ、よかった♪」

真冬 of 笑顔を見たるるーは嬉しそうに微笑み、ペットボトルを手にし

たまま長い髪を揺らし、今度は由紀の方へと駆けていく。彼女はどうかやら由紀になつているらしく、バスの中でも楽しそうに会話をしていた。

悠里「ごめんなさい。妹はあなたの事が心配だったんだと思うけど、ちよつとお節介せっかいだったかしら？」

木陰の中、じつとるーを見つめている真冬の隣へと寄り、悠里は尋ねる。もしかしたら妹の行動が彼女に迷惑をかけてしまったか不安になったが、真冬は笑顔のままその首を横に振っていた。

真冬「…ううん。お節介なんかじゃない…。すごく嬉しかった…」

悠里「そう、ならよかったわ♪」

真冬「ほんと、良くできた妹さんだね。カナより気が利く…」

思ったままの事を真冬がボソツと口に出すと、そこに寄ってくる影が一つ…。出来るだけ小さな声で呟いたにもかかわらず、彼女はそれを聴き逃さなかったらしい…。

果夏「はっはっは！またまたあ〜♪」

真冬「……………」

果夏「確かにるーちゃんは良くできた子だけど、わたしには劣るって！わたし、もう高校二年生だよ？立派な大人だよ？それがあんな子供に氣遣いで負けるわけが——」

真冬「いや…負けてる。完敗。カナごときが、るーちゃんを語らないで…。キミとるーちゃんと同じや、住む世界が違いすぎる…」

果夏「そ、そんなに言うっ!!? ひどくない!?!」

さすがにそこまで言われると思っていなかったのか、果夏の瞳がうるうると涙ぐんでいく。それを横で見っていた悠里は少し慌てたが、真冬は攻めの手を緩めない。

真冬「もしカナとるーちゃん…二人が崖から落ちそうになつてたら、ボクは迷わずるーちゃんを先に助ける」

果夏「わたしはっ…？助けて…くんないのっ…？」

悠里「だ、大丈夫よっ…！狭山さんは二人を順に助けるつもりなのっ！だからほら、『先に』って言つてたでしよっ？」

果夏「…ぐすっ！い、言われてみれば…」

溢れる涙を手の甲で拭い、果夏は真冬の目を見つめる。遂に涙まで流してしまつた果夏を見た悠里は一人慌てたが、彼女のそんな気苦労もお構いなしに真冬は言葉の刃を果夏へと突き付けていった…。

真冬「先になるーちゃんを助けて、崖にしがみつくカナの手を踏んでいく…。せめて、一思いに殺つてあげるのが友達としての役目だと思ふから…」

悠里「さ、狭山さんっ！そんなこと言つちや…！！」

果夏「う…ううっ！！ひぐっ…！！うわああんっ！！」

真冬「カナ、うるさいよ…」

果夏「ひっ…!!?うううっ…!!ぎぐらぜんぜえくっ!!まふゆちゃんがいじめるうくっ!!」

真冬の心無い言葉を聞いた果夏は子供のように泣き出し、歌衣と共に地図の確認をしていた佐倉慈の元へと駆けていく…。今日の慈は白と黒が交互に重なっているノースリーブのブラウス、そして灰色の短パンを身に纏つており、いつもよりどこか色っぽく見える…。ただ、そんな慈は目的地の場所を確認するので手いっぱいなようで…

慈「ええつと、ごめんなさい。今は紗巴すずはさんの相手してられないから…少し待つてくれる…？」

果夏「でもっ…!!ぐすっ…でも…っ！」

慈「あと…泣くときは静かに泣いてね？今、地図に集中してるから…」

果夏と一切目を合わせる事もなく、慈は真剣な表情で地図と睨めっこしている…。慈も悪気はないのだろうが、彼女は今日、ここにいる彼女達の親代わりにとやって来たのだ。彼女達の為、更には彼女達の親達の為、今日一日みんなを守らねばならない。その為にも、まずは無事に目的地へたどり着かなくては…。その思いを胸に地図を見つめるあまり、果夏の事まで手が回らなかつた…。

果夏「なっ、なかまがっ…！いないよおっ…!!」

圭「あゝ…よしよし。わかつたから泣き止もうね？ほら、ハンカチ貸してあげるから、涙拭きなつて…」

果夏「ううっ…!!ひぐっ!…:ちくんっ!!」

圭「あっ!!?こらっ!鼻までかむなっ!!」

果夏「つぐ!?だ、だつてえ…:」

圭「まったく!ハンカチが鼻水まみれじゃんっ!」

果夏「あ、あどで洗うがらあ…:っ…!」

あくまで涙を拭くためにと貸してやったハンカチを鼻水で汚され、圭はムツとした表情を果夏へと向ける。真冬にいじめられ、慈に無視され、圭にも怒られ…:そんな果夏が最後に向かうのはもう、由紀の元しかなかった。

果夏「ゆぎっ…:せんぱいっ…:!!」

由紀「うわっ!?か、カナちゃんっ!どうしたのっ!!?」

果夏「みんながっ…:みんながわだしをっ…:いじめるんですっ…:!!」

由紀「そ、そんなことないと思うよ?みんなやさしい人ばかりだもん。カナちゃんの勘違いとかじゃない?」

果夏「だ、だつてえ…:!わだしっ…:!崖の下でハンカチ洗いなながら静かに泣いてっ…:手を踏まれるんですうっ…:!!」

由紀「……………ん？うん？うくくん??？」

胡桃「はあ…厄介なヤツを連れて来ちまったな……」
るー「かな、鼻水たれてる……」

由紀は訳の分からぬ言葉を放つ果夏を前に首をかしげ、どうすれば良いのか分からずに困っている。由紀も胡桃もるーも、彼女が何故泣いているのかは知らないが、恐らくそこまで大事では無いだろうと思っていた。

悠里「果夏さん泣いちゃったけど…大丈夫なの？」

由紀に泣き付く果夏を木陰の下から見つめつつ、悠里は真冬に声をかける。あれだけ泣いている友達を見たら真冬も慌てるのではと思っていたが、彼女は涼しげな表情のままだった。

真冬「もう見慣れた光景だから、平気」

悠里「…そう？ならいいけど…。でも、崖にしがみつく手を踏みつける…っていうのはちよつと可愛そうじゃないかしら？」

真冬「…ちよつと高いくらい崖から落ちても、カナなら死なないと信じてる。だから踏める。もちろん、死んじやうかも知れない高さの崖だったらそんな事はしない…」

悠里「死んじやうかも知れないくらい崖だったら、助けてあげるの？」

真冬「……………ご想像にお任せする」

そう言ってから木陰を離れる真冬は少し照れているかのように見え、悠里はクスツと笑う…。どうやら、彼女はただ素直になれない性格なだけのようなのだ。その証拠に、木陰を出た彼女は一目散に果夏の元へと向かっていった。

真冬「カナ、コテージについたら…外でバーベキューできるね」

果夏「…ぐすつ！…うん、できる…ね…っ…」

真冬「ボク、ちよつと良いお肉持ってきたから…一緒に食べようね」

果夏「……っん……うん……うんっ！食べるっ♪一緒に食べるっ♪」

さつきまでの涙は何だったのか…。果夏は真冬の言葉ですぐに笑顔を取り戻し、茶色のポニーテールをピョコピョコと揺らしながら跳ねている。そんな彼女に抱きつかれる真冬は迷惑そうな顔をしていたが、ほんの一瞬…嬉しそうな顔を見せた気がしたのは悠里の見間違いだろうか…。

悠里（何だかんだで仲良しさんなのね。バスの中でも、隣あつて座っていたし…）

その時の光景を思い返し、悠里はまた静かに微笑む。先程乗っていたバスの中、悠里は妹である、るーと隣あつて座っていたのだが、その一つ前の席に座っていたのが果夏、真冬の二人だった。そして、そんな果夏&真冬コンビの横の座席に座っていたのが美紀と圭…。悠里&るーの横の座席には由紀と慈が座っていて、その後ろの座席に歌衣と胡桃がいた。そして、歌衣&胡桃の更に後ろの座席に一人で座っていたのが…。

「まったく…すごい暑さですね。倒れそうです」

木陰の下に立つ悠里の元に、彼が歩み寄る。思い返せば、彼だけは一人で座席に座っていた。

悠里「ええ、暑いわね…。バスの中、一人で退屈じゃなかった？」「前の席にいた胡桃ちゃんや歌衣ちゃんと話してたんで、そこまで退屈じゃなかったです。まあ…たまたまに歌衣ちゃんに睨まれてるような気がしましたけど、思い過ごしだらうな…」

そんな事を言いながら木に寄りかかり、彼はふうつと一息つく。

第三十三話 『さかみち』

「はあ……暑つい……」

ゆつくり、一歩ずつ……山中さんちゆうの森の中……そこにある坂道を一同は上がっていく。辺りに生えている木々達によって日差しを直に浴びる事だけは避けられているが、それでも辺りは蒸し暑い……。また、辺りで『ミンミン』と鳴くセミ達の声を聞いていると余計に暑さが増す気もする……。

由紀「め、めぐねえ……おんぶして……」

慈「あと少しっ……あと少しですから、もう少し頑張りましょう……」

由紀「えくっ……し、死んじゃうよ……」

由紀は一歩進む毎に額から汗をポタポタと溢しており、足取りもおぼつかない。進む坂道はそこまで急ではないながらも、この暑さが加わったとなれば話は別……。かなりの重労働だ。あまり体力のない由紀は既にフラフラとしていて心配だが、それは慈も同じ……。彼女も顎先からポタポタと汗を流しており、今にも倒れてしまいそうだ。

胡桃「つたく……わりい、ちよつとこれ持っててくれ」

「ん？あ、ああ……わかった」

フラフラ歩く由紀を見兼ねた胡桃は背負っていたバックを彼へ渡すと、由紀の前へと駆け寄る。彼女はそうして由紀の前に立つと、その場にしゃがんでから背を向けた。

胡桃「仕方ないから……背負ってやるよ」

由紀「えっ……？いいの……？」

胡桃「目的地につく前に倒れたらシャレにならんだろ……。あたしの背中で休んどけ」

由紀「あ、ありがと……」
申し訳なさそうに頭をペコリと下げた後、由紀は胡桃の背中へと乗る。胡桃は彼女をしっかりと背負うと、静かに立ち上がって歩き出した。

慈「恵飛須沢さん……無理しちゃだめよ……？」

胡桃「してないよ。鍛えてるから平気っ！」

ニツコリと微笑んで答える胡桃だが、彼女もかなり汗を流している……。いくら陸上部で体力をつけているとはいえ、この暑さの中で由紀を背負っていくのは大変だろう。

るー「……………」

悠里「ほら……るーちゃんもおいで」

胡桃が由紀を背負うのを見て、悠里もるーの前にしゃがみこむ。るーも由紀と同様にかなり辛そうな顔を見せており、悠里の背へと静かに乗っていった。

悠里「よいしょつ……と！」

るー「りーねー……ごめんね……」

悠里「お姉ちゃんは大丈夫だから、気にしないでね♪」

るー「……………うん」

るーはそう呟くと、被っていた麦わら帽子を悠里の頭へと乗せる。るーの手でそれを被らせてもらった悠里は嬉しそうに微笑み、ゆっくりと進んでいった。

美紀「みんな……辛そうだね……」

圭「そりやそうだよ……メチャクチャ暑いもん……。ねえ歌衣ちゃん、これから行くコテージってクーラーとかある？」

歌衣「ど、どうだったかな…？すいません、私も結構前に行ったきりなので、記憶が曖昧あいまいで…」

目的地であるコテージは彼女…那珂歌衣なかういの家族の物らしいが、彼女自身がそこへ行ったのはかなり昔らしく、クーラーの存在までは把握していないようで…歌衣は申し訳なさそうに顔を俯ける。

圭「まあ、多分あるでしょ…。もし無ければ、みんなでそのまま川に行こう。コテージの近くにあるんだよね？」

歌衣「ええ、それは間違いないです。川に行けば…ある程度は涼めますね」

圭「…よし、泳ごう。クーラー無かったら、私は川で泳ぐっ!!」

圭は決意したかのように口を開くが、横でそれを見ていた美紀は一つの疑問を抱き、彼女にそれを尋ねる。

美紀「圭…着替えとか持ってきたの？」

圭「持ってきてないけど…濡れても外で干せばすぐに乾くでしょ」

美紀「干してる間の服は…？」

圭「え、他には女の子しかいないし、乾くまで下着でいるよ…」
前や後ろを歩く皆を見回し、圭は当たり前のように呟く。しかし、彼女は明らかに一人の人物を見逃していた。

美紀「男の人、一人いるでしょ…」

圭「あ…そつか…。ま、先輩相手なら下着姿くらい見られてもいいや…。この暑さには敵わないもん…」

真つ赤な顔で汗を流す圭の言葉は冗談なのか、本気なのか分からない…。しかし、美紀から見ても圭はわりと彼の事を気に入っているようだし、もしかしたら本気なのかも知れない…。

美紀「ダメだよ。大体、圭が下着のままでしたら先輩だって困っちゃうよ」

圭「そっかあ…なら、仕方ないねえ…」

圭の喋り方がなんだかフワフワしており、美紀は心配になる…。どうやら、圭もこの暑さにかなりやられていようだ。そして、それは彼女達の数メートル後ろを歩く黒髪の少女も同じで…

真冬「はあっ…はあっ…はあ…っ…!!」

果夏「真冬ちゃん、かなり参ってるね？大丈夫？」

真冬「大丈夫に…見える…？死にかけ…だよ…」

途切れ途切れに言葉を発し、真冬は少し長めの前髪の間から瞳を覗かせて果夏をギロリと睨む。全身に汗をかき、髪すらも汗でベトベトにしている真冬はどう見ても体力の限界を迎えていた。

果夏「ふふっ、おもしろいねっ♪」

真冬「…何が？」

隣を歩く果夏が、突如笑い出す。何が可笑しいのかと思いきや真冬が首を傾げると、果夏は全身に汗をかく彼女を指差してニコニコと微笑んだ。

果夏「真冬」つて名前なのに、全然涼しそうじゃないだもんっ♪
♪もうおかしくしておかしくてっ…！真冬ちゃん、名前負けしてるね♪

真冬「…カナは…名前負けしてないね…。ほんと、」夏「みたいに暑苦しくて…そしてうるさい…」

暑い中を倒れそうになって歩いているのに、果夏は下らない事でケラケラと笑い出す…。真冬はそのせいで余計に目眩を感じてしまい、フラフラとした足取りになる。

果夏「真冬ちゃん、それだと私の名前は”夏”になっちゃうよ。”果”の方もちゃんと説明してくれないと！」

目眩が酷いというのに、果夏はそんなどうでもいい事を真冬に尋ね

てくる。暑さで思考が鈍ってきた真冬に彼女を無視するという選択肢は無く、自然と口が動いていた。

真冬「えつと……果物が腐るくらい……暑苦しい夏のような……そんな子に育つようになって……カナのパパとママは……その名前をつけたんじゃない……?」

果夏「へく、そうなのかなあ?家に帰ったら聞いてみよつと……」

美紀（絶対違う!!）

圭（真冬つ、適当なこと言い過ぎでしょー!）

歌衣（果物が腐るほどの暑苦しい夏のような子に育つようになって……どういう事ですかっ?!）

真冬達の前方、そこにいた美紀達はその会話を聞いており、心の中で一斉にツツコミを入れる。列の後方で二年生達がそんなやり取りをしている中、列の前方では彼が胡桃の隣を歩きつつ、話し相手となっていた。

胡桃「昼飯、楽しみだな」

「そうだね……」

由紀を背負う胡桃の横を歩き、相づちを打つ。彼は先ほど胡桃に渡されたバックを背中に背負いつつ、右手に持っているクーラーボックスへ目線を移した。この中には各自で持ち込んだ食料が入っており、これをバーベキューで調理していく事こそが、今日一番の楽しみだ。

慈「それ、持たせちゃってごめんなさい……」

「全然大丈夫です。お気になさらず」

胡桃「そうだよめぐねえ。こういうのは、男に持たせておけばいい

の！」

彼にボックスを持たせてしまっている事を謝る慈だが、彼は気にするなど言って笑顔を見せる。その直後：ようやく坂道が終わり、平坦な道に変わった。すると、胡桃の背に乗っていた由紀が道の先を指差して声をあげる。

由紀「あつ！あそこじゃないっ？」

胡桃「ほんとだ、建物があるな…。歌衣ういっ！あそこでいいのか？」
坂道を上り終えてすぐ、森の中に開かれた土地を見つめる。そこには木造の建物が一つ建てられていた。胡桃が後方を歩いていた歌衣を呼び、それを確認すると、彼女はその建物を見て首を縦に振った。

歌衣「はい、あそこがそうですっ！」

胡桃「よしっ！なら、とつとと行こうぜ!!」

るー「りーねー、もういいよ。自分であるく」

悠里「うん、わかったわよ♪」

コテージを見てテンションが上がったのか、るーは悠里の肩をトンと叩いて彼女の背中から降りる。それは由紀も同じであり、彼女も胡桃の背中から降りると、るーと手を繋いでそのコテージへ嬉しそうに駆けていった。

慈「丈檜さんも、若狭さんの妹さんも、まだ体力が残ってたみたいね…。よかった♪」

美紀「あの：佐倉先生。こっちに体力が残ってない人が…」

るーと由紀が元気に駆けていくのを見てひと安心する慈の背後：そこに現れた美紀は、果夏と力を合わせて真冬を肩に担いでいた。二人に担がれた真冬は力無く顔を俯けており、その前髪から汗がポタポタと滴っていく…。

慈「さ、狭山さん…大丈夫っ？」

真冬「大丈夫に…見えますか…?」

慈「えつと…見えませんね…つ。直樹さん、紗巴さん、あと祠堂さんもっ！私が狭山さんを運びますから、三人は那珂さんとコテージに行つて、水に濡らしたタオルを用意しておいてくれる？」

美紀「はい」

圭「分かりましたっ！」

果夏「らじやーでありますっ！」

美紀と果夏は真冬を慈へと預け…圭、歌衣と共に一足早くコテージの中へと向かう。真冬は慈の背中に乗せてもらうと、横を歩く彼や胡桃、悠里を見て恥ずかしそうに顔を埋めた。

真冬「この年になってだっこされるなんて…恥ずかしい…」

胡桃「ゆきはお前より年上だけど、あたしに抱っこされて何の恥じらいも見せなかつたぞ…」

「まあ、由紀ちゃんだし…」

悠里「ええ、ゆきちゃんだもの」

彼女達はそんな事を言い合つて笑い、真冬を背負う慈の横を歩く。彼女らもあと少しでコテージに入れるという時、少し強めの風が吹き、慈の髪の毛が背中に背負っている真冬の鼻先へとなびいた。

真冬「佐倉先生の髪、いい匂いする…」

慈「えっ?そうっ?」

真冬「うん…」

「それは…是非とも嗅いでみたいな…」

真冬が慈の後頭部に顔を埋めてその甘い香りを嗅いでいると、彼がそのそばへと寄つて笑顔を見せる。慈が彼の発言に戸惑つて頬を赤く染める中、胡桃と悠里は呆れた表情を浮かべながら彼を慈から引き

離そうとするがそれよりも速く、慈の背に乗る真冬が寄ってくる彼の顔目掛けて右手を勢い良く振り、威嚇のような素振りを見せた。

ブンツ！ブンツ！！

「つと…！危ないな…」

真冬「男の人は嗅いじゃダメ…。キミがこれを嗅いだら、佐倉先生のフェロモンに飲み込まれて後戻りが出来なくなる…」

「マジですかっ…!?!」

胡桃「フェロ…っ…!?!」

悠里「めぐねえの髪からは…そんなものが…」

慈「出てませんっ!!出てないからっ…狭山さんもあまり嗅がないで!!」

慈は顔を真っ赤に染めて声を張り上げるが、真冬は動じる事なくクンクンと鼻先を動かし続ける…。髪の毛の匂いを嗅がれて嫌がる慈というのは何だかいやらしく見えてしまい、彼はもちろん…胡桃と悠里すらも頬を赤く染めながら少しの間それを眺めていた。

第三十四話『ひとやすみ』

暑い中、山中の坂道を上り、遂にコテージへとたどり着いた一行。彼女達はコテージ内がどんなものなのかを一通り確認した後、室内でのんびり身体を休ませていた。

由紀「……みんな、お疲れさま〜」

悠里「お疲れさま。由紀ちゃんも、るーちゃんも、よく頑張ったわね」

るー「うん……。りーねーもお疲れさま」

三人は広めの部屋に置かれていたソファアークに仲良く腰を並べ、歌衣が出してくれた水を飲みながら一息つく。本来ならコテージについてすぐに食事：バーベキューをする予定だったが、皆の疲れが思いのほか溜まっていた為、それを後回しにする事とした。

胡桃「えつと……じゃあ、準備ももう少し後からでいいか？」

慈「そうね……。少なくとも、狭山さんが回復してからにしましょうか」

胡桃と慈は部屋の隅に立ち、由紀達が使っているソファアークの真横に置かれていたもう一つのソファアーク……そこに一人で寝転ぶ狭山真冬を見つめる。彼女は外の暑さにやられてしまったらしく、濡れたタオルを額に乗せたままグツタリとしていた。

果夏「真冬ちゃん……わたしがついてるから、死んじやだめだよ」

果夏はソファアークに横たわる真冬の前に膝をつき、彼女の右手のひらを両手でギュツと握りしめる。すると真冬は果夏の事を横目で見つ

め、どこかブーツとしたような表情で弱々しく声を漏らした。

真冬「カナが……憑^ついてる……? ああ……だから具合が悪いのか……」
果夏「んっ? 違うよっ! わたしがついてるから、きつと良い感じに回復するハズなの!!」

真冬「なんで……? カナがついてると、なんで回復するの……?」

果夏「そりやもう……愛のパワーだよ! ラブだね!!」

果夏は両手で握っていた真冬の手から右手だけを離し、グツと親指を立てる。その表情はやたらと自信に満ちているような表情だった為、真冬は『はあ……』とため息をつく。具合の悪い時に見る果夏のドヤ顔は、いつにも増して鬱陶しいなあと思ったからだ。

真冬「……歌衣^{うい}さん、この近くに買い物出来る場所ってある?」

果夏に右手を握られたまま天井を見つめ、部屋のどこかにいるであろう歌衣へと声をかける。歌衣はすぐに真冬のいるソファアへと歩み寄り、横たわる彼女を見つめながら笑顔で返事を返した。

歌衣「はい。少し歩いた所にスーパーがあつたと思います。何か必要な物があるんですか?」

真冬「……カナ。ボク、ノドが渴^{かわ}いちゃった。何か飲み物買ってきてくれる?」

果夏「んっ? いいよっ、行ってきてあげる♪」

果夏は快い返事を返し、真冬の手を離して立ち上がる。どうやらコテージ裏の森を少し越えていけば歩道に出るらしく、スーパーはその先にあるらしい。果夏は歌衣から道のりを聞き、それをしっかりと記憶すると、部屋の隅であぐらをかいていた圭の腕を掴みあげた。

果夏「お嬢さん、お嬢さん」

圭「へっ? なに?」

果夏「お暇なようですし、一緒にお買い物に行きませんか?」

果夏はよく分からないキャラを作り、圭を買い物に誘う。やはり、見知らぬ土地を一人で歩くのは心細いのだろう。そんな果夏の気持ち察したのか、はたまた本当に暇していたからなのか…圭はサツと立ち上がり、伸び一つしてから果夏の顔を見つめた。

圭「んくっ…ま、いいよ。じゃあ行こっか」

果夏「いこいこいこ♪」

悠里「気を付けて行ってきてね」

慈「私も…ついていきましようか？」

ニコニコと笑い合う果夏と圭の身を案じ、慈が不安そうな表情を見せる。しかし、二人はほぼ同時にその首を横に振った。

果夏「大丈夫ですっ！」

圭「そんなに遠くでもないみたいですしね、ちよつとした散歩みたいなもんですよ」

慈「そ、そう…？何かあったら、ちゃんと連絡して下さいね？寄り道もしちゃダメですよ？」

そう言つて二人の元に駆け寄り、入り口の扉まで見送りに出る慈は教師というより…まるで母親のようだ。悠里はそんな事を思つて『ふふっ』と笑うが、どうやら胡桃も同じことを考えていたらしく、彼女もニヤニヤと微笑んでいた。

胡桃「過保護…だな」

悠里「ふふっ。それだけあの二人の事を心配してるのよ」

胡桃「ま、確かにちよつとだけ不安だよな。あたしもまだ、アイツらの事をよく知つてはいないけど…何となく不安な組み合わせだなあとは思ふ」

そんな事を呟き、胡桃は真冬の横たわるソファアの横へと立つ。横たわっていた真冬は額に乗っていたタオルを左手でどかし、果夏達が

出ていった方角をじっと見つめていた。

真冬「よし……上手くいった」

胡桃「ん？何がだ？」

真冬が入り口の方を見つめながらポツリと呟いたその言葉の意味が理解出来ずに胡桃は尋ねる。すると真冬は彼女の事をチラツと横目で見つめ、微かに微笑んでからそれに答えた。

真冬「カナがそばにいたら満足に休むことも出来ないから……それっぽい理由を作って追っ払ったの……。これで……ようやく一休み出来る」

胡桃「お前、アイツの事が嫌いなのか？」

真冬「嫌い……とは違う。ただ、想像してみてもほしい。もし、胡桃が熱で倒れた時、十人の由紀が看病に来たらどう思う？しつかりと休める？」

胡桃「ゆきが……十人……」

嫌な予感しかしないが、物は試しだ。胡桃はそつと目を閉じ、それを想像してみる事にした……。

~~~~~

ゆき1『くるみちゃん！大丈夫っ!？』

ゆき2『熱があるんだよ？大丈夫じゃないよ!』

ゆき3『じゃあ、とりあえず熱を計らないと!』

ゆき4『この体温計……どうやって使うの？わかんないよ!』

ゆき5『口に入れておけば大丈夫だよ!ほら、くるみちゃんっ。あ  
んして』

くるみ『あ…むっ……』

ゆき4『違うよっ！計り方じゃなくて電源の入れ方がわかんなかったの！』

ゆき5『えっ？電源が入れられなきや口に入れてても熱が計れないじゃんっ！』

ガシャンッ!!

ゆき3『くるみちゃん…ごめん…。何かごはんつくつてあげようとしたら、お皿割っちゃった…わ、わざとじゃないんだよっ!』

ゆき2『いいからはやく片付けないと!』

ゆき1『チリトリとホウキってどこにあるのかな?』

ゆき5『くるみちゃん、ホウキってどこにあるの?わかんないから教えてもらっていい?』

ゆき4『あれっ……体温計も壊れちゃったみたい……』

くるみ『…っ…う…くん……』

~~~~~

胡桃「…：十人どころか、五人でも無理だ。休める気がしねえ…」
閉じていた瞳をそっと開き、胡桃は苦い表情を浮かべる。せめて十人揃うところまで想像力を働かせたかったが、五人だけでもかなりキツイという事が分かった。

真冬「でしよ…?ボクにとって、カナって人間は十人の由紀と同等の騒がしさを持っている娘なの。だから、休むときくらいは離れていてほしいわけ……」

胡桃「なるほど…。お前も苦勞してんだな」

真冬「まあ…それなりにね」

胡桃に同情してもらったところで、真冬はそっと目を閉じる。彼女

はこのまま数十分ほど寝ようと思ったようだが、部屋の隅にある二階に続く階段から髪を微かに濡らした美紀が現れ、寝転ぶ彼女の肩をポンと叩いた。

美紀「シャワー、空いたよ。真冬も入ってくるでしょう？」

真冬「ああ……そっか……。じゃあ行ってこようかな……」

ここに来るまでの間、かなりの汗をかいてしまった真冬。彼女はその汗を流すべくソファアールからゆっくりと起き上がり、シャワーのある二階へ向かおうとする。

真冬「：そう言えば、さつきから彼がいないね。もしかして、美紀と一緒にシャワーに入ってた？」

美紀「なっ……そんなわけないでしょ……。先輩なら、二階にある寝室で休んでるよ」

彼と共にシャワーを浴びるのをほんの一瞬だけ想像してしまい、美紀は顔を真っ赤に染める。学校にいる他の男子達と比べても彼の事は気に入っている方だが、だからといって一緒にシャワーなど浴びられる訳などない。

由紀「二階で休んでるんだ？じゃあ、るーちゃんっ！一緒に起こしにいこ〜♪」

るー「うんっ」

二人はそう言って笑顔を見せ合うと、シャワーを浴びに向かう真冬のとあとに続いて二階へと上がっていく……。この二人に絡まれたら、休む間などないだろう。一階に残った他のメンバーは彼に同情の思いを寄せた後、それぞれも休憩を取ることにした。

~~~~~  
バタンツ!!

由紀「お昼寝してる人はどこかな〜っ♪」

二階に上がった由紀は寝室と思われる部屋の扉を勢いよく開き、そこにあつた大きなベッドへと視線を向ける。そのベッドのシーツはよく見ると盛り上がっており、誰かが中に潜んでいることが分かった。

由紀「…むっつ。返事くらいしてよっ!」

彼はそこにいるはずなのに、返事を返してくれない。恐らく、無視すればすぐにいなくなると思っていたのだろう。しかし、由紀はそんなに甘くはない。彼女は無視された事に対して『ぶくっつ』と頬を膨らませると、直後にニヤリと笑って隣に立つる一の肩を叩いた。

由紀「るーちゃん…こうなったら最後の手段だよ」

るー「うん?なにをするの?」

由紀「ふっふっふ…ちよつと耳かして」

由紀は腰を屈め、るーの耳に口を寄せる。そうしてこっそりと作戦の内容を伝えた後、二人はベッドの横へと忍び足で寄っていく…。

由紀「じゃ、るーちゃんはそっちなね?わたしはこっちから…」  
るー「わかった…」

ゴソゴソ…

二人はヒソヒソと会話を交わし、ベッドを左右から挟むようにして立つ。そうして二人はそのままベッドの上に腕をつき、身体を乗せ、シーツの中に潜った。もちろん、そこにいた先客は戸惑いの声をあげ

る。

「……お二人さん、何か用かな？」

ベッドの中央…シーツを頭まで被るようにして横たわっていた彼は両サイドから潜ってきた二人に驚き、シーツから顔を出す。すると彼の右側にいた由紀も、左側にいたるーも、同じ様にニコニコと笑い出した。

由紀「ここで休んでるって、みーくんに教えてもらったんだ。だから、るーちゃんと一緒に遊びにきたの♪」

るー「ごはんはもう少しあとでだって…。だから、それまであそぼう？。」

「まあ、構わないけども…。何するの？」

由紀「ん…キミは何がしたい？」

由紀は右側に寝そべりながら、彼の肩にそつと手をあてる。思えば、同級生の女の子と同じベッドに寝そべり、これだけ身体を寄せているのは危ない気がする。

(相手が由紀ちゃんで、まだ良かった…)

もし横に寝そべってきたのが悠里のような女の子だったら、理性を保っていられたのだろうか…。いや、恐らく無理だろう。つい今『相手が由紀で良かった』などと思っただけなのに、真横にいる彼女の笑顔を間近に見てしまったその瞬間…彼はほんの少し胸を高鳴らせてしまったのだ。

(ああ…ダメだ。やっぱり由紀ちゃん相手でも色々マズイ…)

それでも、隣にるーの目線があるおかげでどうにか正気を保ってられる…。もしこの場にるーがいなくて、由紀と二人きりだったら…。そんなもしもの事を彼が考えていると、るーが彼の左肩をグイグ



いと引いてきた。

るー「ねえ、なにしてあそぶ?」

「あ、ああ…そっか、そういう話をしてる最中だったね…。さて、何をしようか…。」

由紀「トランプとか持つてくればよかつたなく。そうすれば、ベッドでゴロゴロしながら遊べたのに…。」

由紀は寝転んだまま部屋の天井を見つめ、惜しそうに呟く。どうやら、一度ベッドに寝転んだら起きるのが面倒になってしまったようだ。

「ん〜…ゴロゴロしながら出来る遊び、トランプ以外に何かあったかな…。」

るー「…寝ながらあそびたいの?」

「そうだね…。外で遊ぶのは昼食の後の方が良いだろうから、今はゴロゴロしながら出来る、楽な遊びを…。」

そんな遊びが何かあったらどうか…。ベッドに寝転ぶ彼が由紀と同じく天井を見上げて考えていると、るーは一人モゾモゾと動き、ベッドから降りていった。

るー「りーねーたちにきいてくる」

由紀「おつ、ありがと〜!何か良いのがあるか、聞いてきてね♪」

るー「うんっ!ふたりはそこでまってるね」

ニコツと微笑み、るーは部屋の扉を開けてスタスタと一階へ向かう。このコテージの中は吹き抜けになっており、二階にいても一階の話し声が微かに聞こえる。また、るーは部屋の扉を開けっぱなしで出ていった為、その話し声はよりハッキリと聞こえた。

るー「りーねー、ちよつといい?」

悠里「あら、どうしたの？」

るー「おにいちやんがね、わたしやゆきと遊んでくれるって言ってくれたの。でもね、おにいちやんはわたしたちとおふとんの中で遊びたいんだって。りーねー、おふとんの中でできる遊びって何かしってる？」

(……………その言い方は……ちよつと……………)

開いた扉の向こうから聞こえたその発言を聞き、彼は冷や汗を流す……。るーの言葉は聞き方によっては誤解を招くものであり、案の定……………ドタドタと勢いよく階段を駆け上がってくる足音が聞こえてきた……。

悠里「ちよつと!!るーちゃんになにをっ——」

階段を上がった直後、開きっぱなしになっていた扉の中へと足を踏み入れる悠里だったが、彼女は部屋の中の光景を見て言葉を失う……。彼女が見たのは、部屋にあるベッドの上で上半身だけ起こし、冷や汗をかきながらこちらを見つめる彼……。そして、そんな彼に身を寄せながら寝そべる由紀の姿だった。

胡桃「マジか……………」

悠里と一緒に上がってきた胡桃もまた、そんな言葉を漏らす。このあと、更に慈や美紀達まで二階に上がってきて大騒ぎになりかけたが、由紀……そして、るーの証言があった為、彼はどうか誤解を解くことが出来た。

## 第三十五話 『つり』

一行がコテージに着いてから約一時間と三十分ほど経った頃。

たどり着いた当初は暑さに参ってしまっていたので食事どころではなかったが、しつかりと休んでいる内、徐々に食欲が沸いてくる。時刻は昼を少し過ぎた頃：コテージ内にしまつてあつたバーベキューコンロを胡桃や慈が協力して外へと運びだし、他のメンバーもそれぞれ準備を整えていった。

「で、僕は何をすればいい？」

胡桃「あゝ、食材の下準備かな……………」

コテージのすぐ外、胡桃はバーベキューコンロを運び出しながら彼に返事を返す。このコンロを運んでいくのは自分と慈だけで出来るので、彼には他の下準備を任せようとしたのだが…。

「それは、リーさん達がやるってさ」

胡桃「あつ……………そう」

彼はコテージ内をそつと指差し、そこに居場所がない事を告げる。胡桃はまだ知らなかったようだったが、食材の下準備は既に悠里、るー、歌衣の三名が担当していたのだ。

慈「じゃあ紙皿とか、お箸の準備を…」

「それは由紀ちゃんと美紀が……………」

慈の言葉に答えながら彼が同じくコテージの方を指差そうとした時……………ちょうど由紀と美紀が三人の横を通り過ぎる。二人はそれぞれがビニール袋を持ち、その中に入れてある割り箸や紙皿を運び出そ

うとしていた。つまり、彼の出る幕はここにもない。

胡桃「飲み物の買い出しも、さつき圭と果夏に連絡して頼んだしなあ…。となると、お前の仕事はないかな？まあ、ゆっくり休んでろよ」

胡桃はニツコリと笑ってそう言ってくれたが、唯一の男である自分が女性陣を働かせて休んでいるのは何となく居心地が悪い…。何か役に立てる事はないか…。彼がそう考え出した時、誰かがその背中をチヨンチヨンツと突ついた。

「んっ?」

その感触に彼は振り向く…。そこに立っていたのは、後輩である狭山真冬だった。白い半袖のシャツと紺色の短パンに身を包んでいる彼女はついさつきまでシャワーを浴びていたからなのか、髪の毛がまだ微かに濡れている。

真冬「…ひま?」

「見ての通り、かなり忙しい」

本当はこの上無く暇だが、あえて冗談を言ってみる。すると真冬は彼の事を上から下までジロジロと見回し、また同じ様に呟く。

真冬「……………ひま?」

「…ああ、暇だよ」

どうやら、真冬には冗談が通じないらしい…。観念した彼がため息をついてから『暇だ』と答えると、彼女はほんの少しだけ嬉しそうな笑顔を浮かべた。と言っても、ほんの少しだけ口角が上がっただけの分かりにくい笑顔だ。

真冬「なら、ボクと一緒に来てほしい」

「一緒にって…どこへ?」

彼が尋ねると、真冬はそばにいた胡桃と慈へ目線を移す。彼女はそのまま、二人のそばへスタスタと歩み寄っていった。

真冬「…佐倉先生、そのバーベキューコンロ…川辺まで持っていくんだよね?」

慈「ええ。川辺の方が涼しいし、景色的にも良いかと思って」

真冬「どの辺に持つてくの?すぐそばのところ?」

慈「そうね。あまり遠くまでは運べないから、すぐそばの川辺に運ぶつもりよ」

慈がそう答えると、真冬はペコリと頭を下げてまた彼の方へと戻る。そうして彼の前まで戻った時、彼女は微かに顔をうつむけた。

真冬「やつぱり…キミについてきてほしい」

「ええっと…だからどこへ?」

真冬「川…」

「川なら、今から皆で行くけど…」

わざわざ誘われなくとも、これから皆で川辺に行きバーベキューをする。なのに真冬は何故、こんなふうに分の事を誘ってくるのか…。彼が不思議に思っていると、真冬が首をブンブンツ!と横に振った。

真冬「ボクが行きたいのは、さらに下流の方…」

「下流?そこに何かあるの?」

真冬「この川、下流の方だと結構簡単に魚が釣れるらしいって歌衣さんが言ってた。バーベキューの支度もまだもうちよつとだけ時間がかかるし、暇潰しに行ってみたい」

目をまん丸にして迫り、真冬は彼の答えを待つ…。どうせ暇だったし、こんなふうに頼まれたら断ることも出来ない。彼は真冬の間を見つめ返し、そつと頷いた。

「…いいよ、行こうか。でも、釣りの道具とかはどうする？」

真冬「それもコテージの中にあつた。歌衣さんのパパが置いてつたやつみたいで、使っても構わないってさ…」

「へえ、そっか…」

つまり、準備は万全のようだ。胡桃や慈に確認をしたところ、まだ果夏や圭も帰ってきていないし、バーベキューを始めるにはもうしばらく時間がかかるらしい。なのでその間の暇潰しとして釣りをするべく、彼は真冬と共に森へと入り…川の下流へと向かった。

~~~~~

森の中を少し歩いていくと、小石や砂利だらけの不安定な足場の地に出る。その目の前に流れていた一本の川…ここが真冬が目指していた場所らしい。彼女は森を抜けて川辺へと駆け寄ると、コテージから持ってきた釣り道具一式を組み立て始める。するとその途中で何かに気付いたらしく、彼女は気まずそうに彼の方を見つめた。

真冬「…ごめん。釣竿、一本しかなかった…」

「ま、いいよ。ここで見てるから」

真冬「途中でやりたくなったら…言ってね？代わってあげるから…」

申し訳なさそうにそう告げてから、真冬は釣糸を川へと垂らす。川辺にあつた大きめの岩に腰かけて竿を構える彼女の目はいつも以上に鋭いものに見えるが、釣りが趣味だったりするのだろうか？

(…のどかだなあ)

坂道を上っていた時よりか日差しの強さも落ち着いてきたようだし、川辺にいと更に涼しく感じる…。サラサラと流れていく川は日差しに反射して所々がキラキラ輝いており、とても美しかった。

「綺麗な川だね」

真冬「うん……そうだね」

真冬は返事を返し、少しだけ口角をあげる。真つ直ぐに川を……というよりは糸の先を見つめているのだろうが、彼女の真剣な顔はお世辞抜きに綺麗なものだった。眠たげなように見えるが、どこか鋭くも見える瞳……ほんのりと赤い唇……風になびく黒い髪……それらを、彼は真横からまじまじと見つめてしまう……。

「……………」

真冬「……な、なに……？そんなに見られると、集中できない……」

彼の視線に気が付き、さすがの真冬も落ち着きがなくなる。彼女は川に垂らした釣糸……そして横にいる彼の顔を交互に見回した。

「真冬ちゃん、彼氏いる？」

真冬「いないけど……なんで急にそんな事を？」

「いや、なんとなく気になって」

『可愛いからいると思った』などとはさすがに言えず、彼は言葉を濁す。そう言えば以前、由紀や悠里には隠れファンが多くいるとの情報を圭から聞いた……。恐らく、そういった存在は胡桃や美紀達にもいるだろう。タイプは違えど、全員お世辞抜きに美少女だからだ。

「…………告白とかされた事は？」

この狭山真冬という娘も美少女の部類に入る。付き合っている人間などはいなくとも、告白くらいされたことがあるのでは……そう思い尋ねる彼だったが、真冬は少しだけ暗い声で返事を返した。

真冬「ないよ……。ボク、そもそもクラスの人達からもあまり好かれてないもん……。無愛想だし、人付き合いも悪いから……仕方ないんだけどね……」

「でも……あの果夏って娘とは仲良いよね？」

真冬「カナは……少し変なコだから。他の人はボクの状態を見てすぐに機嫌を悪くするのに、あの娘だけは……ボクから離れようとしなかったの。初めて会ったのは中学に入った時だけど、その頃から『真冬ちゃん、真冬ちゃん』って……。ほんと、しつこくて参っちゃうなあ……」

真冬は右手で釣竿を構えたまま、左手で頭を抱える。口では『参った』と言っているが、この時の彼女は優しさの感じられる笑顔をしていた……。

真冬「……そう言えば、キミらも変わった人達ばかりだよ。『先輩には敬語を使え』……とか言わないもん」

「ああ、言われると確かに……真冬ちゃん、普通にタメ口で話してるね」
美紀も圭も、歌衣も果夏も……二年組はみんな敬語を使ってくる。しかし、言われてみると真冬だけは違った。彼女は三年生である皆に対してずっとタメ口のままだし、容赦なく呼び捨てで名前を呼ぶこともあった。

真冬「これまで何人の三年生に怒られたことか……。『生意気なヤツだ』とか……『根暗女』とか言われたし……」
「根暗女ってのは少し酷いな。それ言ったやつに文句言ってやろうか？」

確かに真冬は少し影があるし、冷たい感じで話す娘だが、こちらが普通に接していれば何も問題はない。現に今だって、彼とこうして話をしているのだ。

真冬「……ふふつ、大丈夫だよ。生意気なもの……根暗なもの……本当の事だもん。ボクがもう少しだけ、人に対して優しく接することが出来れば良いんだけど……。昔からこういう性格だからね……」

こればかりはどうしようもないと思い、真冬は開き直ったかのよう
にニツコリと微笑む……。ちょうどその時だった……彼女の持ってい

る釣竿がピクピクと反応し、直後に強い引きが来たのだ。

真冬「!!……きた」
グツ…ググツ…!!

「おつ…結構な引きだね」

釣竿はグイグイとしなり、ピンと伸びた糸は川の中をあちこちへと移動する…。ただ横から見ているだけの彼ですら、それが大物であるとすぐに分かった。真冬は腰かけていた岩から離れ、立ち上がった状態でそれと対決する。

真冬「む…!ほんとに大きいやつかも……。少し手伝って…!」

「ああ、任せておけっ!」

先輩らしくビシツと決めて立ち上がり、真冬の援護に回る。…ただ手伝うと言つても実際はどうすれば良いのかが分からず、困った彼はとりあえず真冬の背後に回って彼女の手にも手を添えた。

真冬「なっ、なにしてるのっ!?!」

「いや…どう手伝えれば良いのか分からなくて…。一先ず、竿を引くの協力しようかと…」

言いながら彼女の手を上から握ると、背後に向けていた真冬の顔がみるみる真っ赤に染まっていく…。彼はあくまでも協力の為にその手を握った訳なのだが、こんな顔をされると何故か悪いことをしているような気持ちになる。

(あつ、手じゃなくて…竿を握ればいいのか)

何もわざわざ、彼女の手を握る事はない。そう考えた彼はそつと手をずらし、真冬と共にその釣竿を握った。

「…で、どうすればいい?」

真冬「あ………えっと、一気に引くと糸が切れちゃうから……」
真冬はそう言って視線を前へと戻し、釣糸の先を見つめる。しかし、彼が真後ろから身を寄せている事に戸惑っているのか、彼女は時おりその肩を小さく震わせた。

真冬「その………少しずつ……慎重につ……」

「……わかった」

返事を返して、釣竿を持つ手に力が入りすぎないように気を付けていく。ただ……真冬の背後に立ってから手を回したのが悪かったのか、力加減が少々難しい。何より、この姿勢だと彼女を背後から抱きしめているようにも見えてしまい、やはり悪いことをしているような気持ちになる。

(後ろからじゃなくて、横から支えれば良かったな……)

今さらそんな事を考えてしまい、彼はため息をつく。何故後ろに回ってしまったのだろうか……今からでも横に移れるだろうか……そんな余計な事ばかり考えていたら、つい手に力が入ってしまい……

……ブチツ!!

真冬「あつ……」

「なっ……!」

強く引きすぎたせいで釣糸が切れ、竿を握っていた二人は後方へとよろける。辺りは小石だらけで足場も悪く、上手く体勢を整える事すら出来ない。糸が切れた反動で二人は後ろに一歩、二歩と後ずさり……そのままドサツ!と尻餅をついてしまった。

「つて……!真冬ちゃん、怪我はない?」

倒れる際、彼は真冬を庇うようにして背後から手を回し、その身体を支えていた。その甲斐あって真冬に怪我はなかったようだが、彼女の背中にはビクビクと震えている……。

真冬「う……うつ……！」

「大丈夫……？どつか痛む？」

小石だらけの川辺に腰を落とした状態のまま、彼は目の前の真冬へ尋ねる。彼女は体操座りのような姿勢のまま……釣竿を持つ両手を胸の前にギュツと寄せた。彼女はそうして身体を丸めるようにした後、背後に座る彼の方へ顔を向けたのだが……その顔はさつきよりも真っ赤に染まっていた。

真冬「む、胸……触ってる……」

「……はい？」

そう言われた後、彼は自分が真冬のどこに手を回していたのか……改めて見直す。左手はしっかりと彼女の左肩に添えられているが、右手は彼女の腹部……それよりも上の方へ添えてしまっているような……

（確かに……ちよつとだけ、ぷにぷにしてる……？）

右手で触れているその場所には小さな膨らみがあり、シャツ越しでも微かに柔らかい……。まるで生八ツ橋なまやっはしに触っているかのようだ。言われてみると、これは胸に触ってしまったているのかも知れない……。それを実感した彼は冷や汗をタラリと流しつつ、彼女からそつと両手を離した……。

スツ……

「え、えつと……ごめんね？」

真冬「つ……うう……つ……」

真冬は胸を触られた恥ずかしさに震え、何とも言えぬ声を漏らす。本当なら今すぐにでも釣竿を投げ捨て、この場を去りたいくらいの恥ずかしさだったのだが……。

真冬「…別に、キミだつてわざとやった訳じゃない…。怒ったりしないから…安心して」

ここはグツと堪え、大人な対応を見せる事にした。真冬が精一杯の強がりとして微笑むと彼も安心したらしく、ホツとしたような表情を見せる。

「はあ…よかった…。ほんと、わざとじゃないからさ…」

真冬「…うん。わかつてるよ…」

そう…わざとじゃないから仕方ない…。真冬は心の中で自分に言い聞かせつつ、改めてもう一度釣りをしようと考えた。釣糸が切れてしまったのでまた準備をし直していく中、彼が真冬の横でボソツと呟く……。

「でも…触ったかどうかは微妙なところかな…。よく、分からなかったし」

真冬「……………」

その言葉を聞いた瞬間、釣りの再開準備を整える真冬の手がピタリと止まる…。こう言つて『触つてなかった』事にすれば真冬も気にしなくなるのではと、彼なりに気を使つたつもりだったのだが……。

真冬「…なに？小さいから分からなかつたつて…そう言つてるの…？」

「えっ？い、いや…そんなつもりじゃ…！」

確かに真冬の胸はかなり控え目だが、触つても分からない程…とまではいかない。手を添えたそこは確かに柔らかく、その感触は今も彼の手に残っている。もちろん、そんな事を真冬に言えるわけもないが…。

真冬「さつき、怒ったりしないって言ったけど…やっぱそれ無し…。イライラしてきちゃったから…：ちよつとだけ怒るね…：」

「真冬ちゃん…落ち着いて、落ち着いて話そう？」

真冬は持っていた釣竿をそつと置き、彼の目を真っ直ぐに睨む…。彼女の目には恥ずかしさ、悔しさ、そして怒り…様々な感情が含まれており、微かに涙ぐんでもいた。

真冬「出来るだけ…楽に死なせてあげる…」

(…まいったな。完全に怒らせてしまった…：)

彼女の目を見て、彼はそれを悟る。その後、彼は川辺に転がる石の数々を真冬に投げ付けられるも、それらを全て回避することに成功した。真冬も最後には諦めて釣りを再開したが、結局一匹も釣ることが出来なかった…。二人はその後、胡桃からの連絡を受けて彼女達の元へと合流したのだが…真冬は彼と一言たりとも口を聞いてくれなかった…。

第三十六話 『みんなと』

胡桃「…最後に網を乗せて…：よしっ！準備オツケー！」

皆が川辺に集まった後、胡桃は美紀と協力してバーベキューコンロの準備を済ませる。並べられた炭がパチパチと音を発てながら所々を真つ赤に光らせ、微かな火柱をあげる中、胡桃は最後の仕上げにと銀色の焼き網を乗せた。

慈「お疲れさまでした。熱かったでしょう？少し休んでて」

胡桃「気持ちありがたいけど…：そういう訳にはいかないんだよな」

準備を済ませたコンロのそば、慈はトングを手にして用意した食材をその網の上に乗せていこうとする。彼女は少しの間胡桃を休ませようとしたが、胡桃は川辺に広がる小石の上をスタスタと歩き、三メートル程離れた所に用意しておいたもう一つのバーベキューコンロの前に立つ。その中にある炭もまた火をつけておいたのだが、これには網ではなく、真つ黒い鉄板が乗せられている。

胡桃「ふふん…：おい、お前っ！あたしに対して、料理の出来る女子っていうイメージはあるか？」

「…へっ？いや、まったたく…」

川辺にあった大きな岩の上に腰かけつつ、彼はあっさりとその答えた。『料理の出来る、家庭的な女子』…。悠里ならともかく、胡桃には全くそんなイメージがない…。

胡桃「ぐっ…：待ってる。お前の中でのあたしのイメージを一新してやるっ！」

胡桃は少しだけ悔しそうな表情を浮かべた後、そばにあったクレープボックスからあれやこれやと様々な物を取り出していく。どう

やら、とびきりの自信作を彼に…いや、皆にだろうか…とにかく、彼女は何かを作ってくれるようだ。しかし、胡桃が美味しい料理を作ってくれるイメージがどうしても思い浮かばない為、彼のテンションは上がりも下がりもしない。

「まあ……がんばって」

胡桃「なんだよその目っ!?ちよつとは期待しろって!!」

胡桃のそんな言葉を聞き流しつつ、彼は岩から腰を下ろす。そうして慈達がいる方のバーベキューコンロへと歩み寄ると、その上には肉はもちろん…ピーマン、ニンジンや椎茸などの野菜が綺麗に並べられており、ジュージューと音を鳴らしていた。

慈「まだ乗せたばかりで焼けてないから、もう少しだけ待つてね」

由紀「らじゃ〜!」

と言いながら、用意していた肉をトングで更に並べていく由紀…。気づけば焼き網の上は大混雑しており、食材がギュウギュウ詰めだ。

慈「丈槍さん、乗せすぎっ!少しずつ焼いていかないと!」

由紀「え〜っ!だつてみんな食べるんだよ?いっぱい焼かないとすぐに無くなっちゃうよ!」

慈「大丈夫よ。そんなすぐには無くならないから」

由紀が雑に並べた肉達の位置を整え、慈は『ふうっ』とため息をつく。最初の頃と比べると日差しも落ち着いてきたし、川辺にいるおかげでいくらか涼しいが、やはりコンロのそばは暑い…。慈が額に流れた汗を手の甲で拭っていると、その背後から美紀と真冬が顔をピョコつと覗かせた。

美紀「私達がやっておきます。なので、佐倉先生にはおにぎり作りを任せても良いですか?本当は私達でやろうと思ったんですが…真冬がおにぎり握れなくて…」

真冬「何度やっても、何故か寿司みたいなカタチになる…。全然上手く出来なくて、もう泣きたい…」

慈「そんなことで泣いちやダメよ…。？じゃあ、おにぎり作りは私がやってくるから、ここは狭山さんと直樹さんに任せるわね」

その場を美紀、真冬に任せ、慈は少し離れた所に置かれていた折り畳み式のテーブルへ寄る。これもコテージにあった物で、美紀がここまで運んできてくれた。そしてそのテーブルの上には、電源コードが抜かれた状態の炊飯器が…。中には炊きあげて間もない白米が入っており、慈はそばにあったラップを手のひらに広げてから、しゃもじですくったその米を握っていく。

慈（…あれ？　そういえばこの炊飯器、コテージにあったやつだよね？　何でここにあるんだろ？）

握っている内、ふとそんな事を思う…。元々おにぎりはコテージの中で作る予定だったのだが色々と準備している間に忘れてしまい、気付けば今、慈は屋外でそれを握っている…。疑問を抱きながらせつせと手を動かしていると、その答えを知っている人物が後ろから現れた。

由紀「それ、わたしがここまで運んできたんだよ。外でつくった方が、おにぎりもおいしくなると思って♪」

慈「あつ…そうだったのね」
まるで心を読んだかのようなタイミングでそれを告げられ、慈は苦い笑みを浮かべる。ただ、由紀の言ってる事も分からなくはない。こうして、川のせせらぎや炭のパチパチという音を聴きながら握るおにぎりは、やたらと美味しそうな出来に仕上がった。

慈「よし、まず一個…。もしよければ、丈檜さんも手伝ってくれる？」

由紀「うん！　いいよ♪」

笑顔で答える由紀を見て、慈もニツコリと微笑む。由紀は慈と同じようにラップを手に広げ、その上へ白米をドサリと乗せていった。

由紀「うわっ！あちちっ：!!」

慈「わっ?!?い、一気に乗せすぎっ!!どれだけ大きなおにぎりを作る気なのっ!?!」

慈はしゃもじを手に取り、由紀の手に乗っている白米の山を削り取る。彼女がそうして削った白米を炊飯器の中へ戻す一方、由紀はラップ越しに触れている白米の熱さに震える。

由紀「あちっ：!あちっ：!!め、めぐねえ：熱くないの：?!」

慈「丈檜さんはたくさん乗せたから熱かったの！少しずつ乗せていけば平気です！」

由紀「う、うくん：たしかに、めぐねえが減らしてくれたら少し楽になったかも」

少量になった白米をゆつくりと手で包み、ギュツ、ギュツと握っていく。しかしそれは慈のおにぎりとは違ってどこか不格好に見え、由紀は『むくっ』と唸り声をあげる。

由紀「む、むつかしい……」

慈「私の手、よく見てて？お米をこうやって持って……」

由紀「……こう？」

慈「うんっ。そうしたら次は：そのまま握って形を整えて……」

由紀に見やすいように手を動かし、慈はおにぎりの作り方を彼女に教えていく。作り方と言っても本当に簡単なもののだが、それでも由紀は一生懸命に頑張って、目を輝かせていた。

由紀「……おおっ!?!見てっ！うまくないっ!?!」

慈「うんっ！上手っ!?!良くなりました♪」

綺麗に握られたおにぎりを見せた直後慈に褒められ、由紀は満面の笑みを浮かべる。その光景はまるで、仲の良い母娘おやこが並んで楽しんで料理をしている様のようなのだ。

由紀「りーさんっ！見て見てっ！わたしが握ったんだよ！」

由紀はそばに置かれていたもう一つのテーブルへと駆け寄り、そこにいた悠里に自分が握ったおにぎりを見せる。悠里はテーブルの上にまな板を置き、食材を程よい大きさに切つているところだった。

悠里「あら、上手く出来てるわね。すごいじゃない」

由紀「えへへっ、そうでしょう！るーちゃんも見て見て〜」

るー「おいしそう。食べてもいい？」

由紀「もっちりんだよ!!はい、どーぞ♪」

「……微笑ましい」

それを離れた所で見つめていた彼はポツリと眩き、ニコリと微笑む。一方、食材の焼き加減を見るのに夢中だった美紀は彼が何の事を言っているのか分かっていない。

美紀「何がですか??」

真冬「由紀達の事ですよ…。確かに、のほほんとする光景だよね…」

「まあ……のほほんとしてるのは、こっちも同じだけ…」

数メートル先の慈、由紀から視線を外し、そばにあるバーベキューコンロ…その前にいる美紀、真冬を見つめる。二人は焼けた肉や野菜を然り気無く食べていき、空いたスペースにトウモロコシを置いていた…。

美紀「……………」

真冬「…美紀、醤油とって」

美紀「はい、どうぞ……………」

真冬「どうも……………」

二人は互いの前にトウモロコシを丸々一本ずつ置き、それをトングで転がしていく…。少し焼けた表面に醤油をたらすとそれが網の下へと落ちて『ジューッ！』という音が響いた。トングにつつかれて転がるトウモロコシを真顔で見つめつつ、美紀と真冬は焼けた物をつまみ食いついてリスのように口を動かしている…。その光景はやたらとシニールだが、どこかほのぼのもする。

(このトウモロコシ…どっちが用意したんだ？…というか、普通にいい匂いだな)

祭りなどで売られている焼きトウモロコシと同じような香ばしい匂いが辺りに広がり、余計に空腹感が増す。するとそんな彼の思いを察したのか、美紀が一枚の紙皿の上に焼けた肉や野菜を乗せ、それを手渡してきた。

美紀「はい。どうぞ」

「あ、ああ…ありがとうございます」

同時に手渡された割りばしを使ってそれを口へと運び、モグモグと噛みしめる。持ってきた肉や野菜は高級な物などではなくどれも一般的な値段の物だが、炭火で焼いた事、外で食べているということが重なり、かなり美味しく感じた。

真冬「歌衣さんも…はい。こっちは胡桃に持っていてあげて」

歌衣「わあ…ありがとうございます。じゃ、いただきますね」

焼き上がった食材の乗った二つの紙皿を手に、歌衣は胡桃の方へと向かう。胡桃も胡桃で何かを作っている最中だったのであまり手は離せないようだったが、それでも合間合間に紙皿の上の食べ物に手を

つけて笑顔を見せていた。

胡桃「やっぱり外だと違うな」

歌衣「はいっ、そうですね♪」

大好きな胡桃が一緒だからなのだろう…。歌衣はこれまで見せたことのない、子供のような笑みを浮かべる。今まで遠くから見ただけの彼女とこうして一緒に出掛け、バーベキューを出来るなんて……少し前の自分は夢にも思っただけだった。

胡桃「……よしっ！できたっ！」

少しして、胡桃がそう告げる。彼女は鉄板の上で焼き上げていたそれを紙皿へと盛ると、何よりも先に彼の元へ向かっていった。

胡桃「ほい、食ってみろ！絶対に美味しいから♪」

「何を作ったのかと思えば…焼きそばか…」

小さな紙皿からはみ出る程に盛られた麺。彼はそばにあつた岩の上に腰掛け、割り箸でそれを口に運ぶ…。

胡桃「…どう？美味しいだろ？」

「まあ……美味しいけども」

キラキラとした期待の眼差しと共に尋ねられたら、そう答えることしか出来ない…。とは言え、この焼きそばは確かに美味しい。ソースの濃さ、焼き具合、色々なバランスが上手く取れている。

(ただ、自信満々に作ってくる料理が焼きそばとはね……)

そのチョイスがまた胡桃らしくて、彼はそつと微笑む。けど、もしかしたらこの焼きそばというチョイスもバーベキューに合わせた結果そうなってしまっただけで、彼女は元々料理が得意な娘だったのかも知れない。

「胡桃ちゃん、他にも得意な料理とかあるの？」

胡桃「えっ？……あははっ。ま、まあ……その辺は……また今度……
……というわけで、彼女が得意な料理は“焼きそば”のみだったよ
うだ。彼は彼女の反応からそれを察し、深くは追及しないようにし
た。あまりしつこく言えば怒られるかも知れないし、少なくともこの
焼きそばは美味しい。今はそれだけで良いと思った……。

その後、慈と由紀が作っていたおにぎりも出来上がり、皆はそれや
胡桃が作った焼きそば……そして焼き網の上の食材を食べていく。少
しすると買い出しに行っていたあの二人も到着し、また一層賑やかな
雰囲気になっていった。

圭「ただいま〜」

美紀「おかえり。長かったね？」

圭「つい色々見てきちゃってね。少し時間かかっちゃった。あつ、
飲み物もたくさん買ってきたから、好きなもの取ってね」

圭が地面へと置いたビニール袋の中には、様々な種類のドリンク缶
が転がっている。美紀はまだ冷えているその缶を一つ手に取り、喉を
潤してからため息をつく。

美紀「ふう……。おいしい……」

果夏「ほら、真冬ちゃんの分もあるからね♪」

真冬「ああ……。うん……。ありがと……」

手渡されたジュースを受け取り、真冬はそのお返しにと焼けた肉の
乗った紙皿を果夏に渡す。圭、果夏も合流して勢揃いとなり、皆で外
での食事を楽しむ……。すると突如、おにぎりを食べていた美紀が妙な
声を発した。

美紀「む…んっ!?むえっ…：…な、なにこれ…?」

おにぎりを食べていた最中、おかしな食感を感じる…。ブニブニとした、甘い物体…。おにぎりに対してこんな庵治を初めて感じた美紀は舌を出し、少しだけ噛んでしまったそれを手の上へと出した。

美紀「…な、なんだろ…。おかしな物が混じっちゃったのかな…」

真冬「うわ…なにそれ…」

果夏「なんか、気持ちわるいね…」

美紀の手に乗る、半透明の物体…。おにぎりの中にいたそれには今もいくらか米粒がついているが、こんな具は見たことがない。もしかしたら米に不純物が混じっていたのかも…。少しだけそれを食べてしまった美紀の顔が、みるみる真っ青になっていく…。

由紀「あっ！みーくん当たりだ！」

美紀「へ…っ…?あたり…?」

由紀はその場に歩み寄り、彼女の手に乗っていた半透明の物体を見つめる。直後、由紀はニツコリと微笑んでその正体を告げた。

由紀「それは、わたしの作った『グミおにぎり』だよ!こういうのも意外とおいしいかなと思うって、作ってみたの♪」

美紀「グ、グミ…?…?おにぎりに…:…グミ?」

果夏「なるほど…。本当に”お菓子な物”が混じってたわけですか!!」

と、どうしようもない事を言う果夏…。彼女は凄いのを決めてやった!と言わんばかりに得意気な顔を見せているが、今の美紀にそれを見ている余裕はない。

美紀「おにぎりにグミなんて、絶対に合わないって分かるじゃないですか…」

由紀「…やつぱりおいしくなかった?わたしもね、薄々気づいては

いたんだけど……くるみちゃんとかが食べたなら面白いなって思っ

果夏「ねえねえ美紀ちゃん、わたしの言ったこと聞いてた？ほら、美紀ちゃんさつき『おかしな物が混じっちゃったのか』って言ってたでしょ？わたし、その『おかしな』と『お菓子』をかけた超高度な言葉遊びを決めたんだけど…」

美紀「ごめん、少し黙ってて…。今、ゆき先輩と話してるから」
視界にチラチラと現れる果夏を手で退かし、美紀は由紀の目を真っ直ぐに見つめる。この『グミおにぎり』のような恐ろしい物が、他にも存在するのか聞き出す為だ。

美紀「…一個だけですか？こういうおにぎりは…」

由紀「うん。一個だけだよ。もっと食べたいの？」

美紀「……いえ、もういりません。残った分はとりあえず、くるみ先輩に渡してこようかな」

由紀「おっつ!!みーくんもワルモノだね!」

由紀の言葉にニヤリと微笑み、美紀は食べかけのおにぎりを胡桃の元へと運ぶ。食べかけていた断面からは小粒のグミ群が顔を覗かせていたので、それを塞ぐように握り直したのは言うまでもない。

美紀「先輩、これ…ゆき先輩がくるみ先輩につて」

胡桃「ゆきが？ふうくん……中身つて何？」

美紀「さ、さあ…？イクラ…とかじゃないですかね？」

グミとイクラ…形だけなら似ていると、そんな事を思いながら答える。しかしその美紀のどこかぎこちない様子や、これが由紀からの贈り物だと言う点…。それらに畏めた何かを感じ取り、おにぎりを受け取った胡桃はスタスタと移動する…。

胡桃「これ、ゆきがお前に食べて欲しいんだってよ」

「由紀ちゃんが？僕に…？」

聞き返す彼に対し、胡桃は頷く。胡桃は彼を毒味役として使う気なのだろう。彼女の勘の良さに驚いた美紀と由紀はただ唾然とした表情を浮かべ、冷や汗を流した。

「じゃあ、いただきますか…」

胡桃「ああ。ゆきがせっかく作ってくれたんだから、残さずに――」

「うえっ!!? な、なんだこれっ!!? ブニブニしたのが入ってるっ!!」

胡桃「あく…：…やっぱりそういうのだったか…」

一口食べた後、彼はすぐ異様な具の存在に気が付く。本来のおにぎりにはないブニブニとしたその食感に怯える彼を見た胡桃は静かにこちらの様子を窺っている由紀に冷めた目線を向け、スタスタと歩み寄る。

由紀「わ、わあっ!!」

胡桃「ゆ〜〜き〜〜!! あたしに何を食わせようとしたっ!!」

由紀「お菓子っ！お菓子だよっ!! グミだよっ！くるみちゃん、グミとか好きでしょっ!!」

胡桃「おにぎりの中にあるグミなんか好きじゃないっ!!」

由紀は小石の上を駆けて必死に逃げるが、胡桃の足には敵わない。胡桃はすぐに彼女を捕まえ、右腕でそつと首を絞めながら髪の毛を左手でガシガシと雑に掻き回していった。

由紀「うわあっ!!? ボサボサになるっ！ボサボサになっちゃうっ!!」

胡桃「ああ、ボサボサにしてやるっ！食いもんを遊びに使った罰だ!!」

由紀「うぐう〜っ！も、もうしないっ！もうしないから〜っ!!」

髪を掻き回す胡桃も、掻き回されている由紀も、どちらも楽しそうに笑っている…。悠里は流れる川を背景にふざけ合う二人を眺めつ

つ、るーの頭を優しく撫でていった。

悠里「お姉ちゃんたち、楽しそうね。るーちゃんも楽しい？」

るー「うんっ！たのしいよ♪りーねーもたのしい？」

悠里「…うん。るーちゃんや、みんなと一緒にだもの…楽しいわよ♪」
騒ぐ由紀と胡桃…。並んで食事を楽しむ美紀と慈…。美紀に冷たくされたと落ち込む果夏を慰める圭と歌衣…。落ち込む果夏を哀れな目で見つめながら、トウモロコシをかじる真冬…。そして、恐る恐る『グミおにぎり』を食べ進めていく彼…。悠里はそれらを眺めながら妹の頭を撫で、ニッコリと微笑んだ。

第三十七話 『いつしよにいたい』

買い出しに出ていた圭、果夏も戻り、より一層賑やかになった川辺でのバーベキュー。焼き上がった肉や野菜…慈と由紀が作ったおにぎり…胡桃が作った焼きそば…それらはだんだんと減っていき、一同が満腹感を感じ始めた頃…。

圭「そう言えば、デザートになりそうなのやつも買ってきたからね！」と、圭が皆に告げる。彼女は先程クーラーボックスにしまっておいたビニール袋をガサガサと漁り、その中からカットフルーツの盛り合わせを取り出した。

圭「これと、あと白玉を買ってきたから…全部サイダーに沈めてフルーツポンチにしようと思って♪」

果夏「わたしが考えたんだよっ！真冬ちゃん、褒めて褒めてっ!!」

真冬「いや…ボク、もうお腹いっぱいだからそんなのいらぬい…」

果夏「えくっ?! 食べようよ!! わたしたち女の子にとって、デザートは別腹でしょ?」

由紀「うん! そのとおりだよ!!」

真冬「デザートは別腹とか言う女の子って、ほんとにいるんだ…。ただの都市伝説かと」

パックに詰められているカットされたイチゴやパイナップル、オレンジやキウイといったフルーツを見て果夏と由紀…そして然り気無く、るーも目を輝かせるが、真冬は苦い表情を浮かべている。デザートすらいらぬいとは、よっぽど満腹なのだろう…。

悠里「デザートがあるのは嬉しいわね。それ、どうやって作るの？
ボウル使う？」

圭「あつ、お願いします」

少し大きめの容器：銀色のボウルを悠里から受け取り、圭はカットフルーツやサイダーを用意する。フルーツポンチはこれらを混ぜ合わせるだけですぐに出来るのだが、彼女はピタリと手を止めた。

圭「：あつ！スプーンが無いっ!!」

果夏「えっ!?無かったっけ？」

美紀「使う予定は無いと思ってたから、持ってたよなかつたよ…」

美紀が告げると、圭と果夏は目に見えて落ち込み出す。スプーンはコテージ内にあつたと思うが、使う予定が無かつたので誰も持つてこなかつたのだ。

慈「じゃあ、我慢して割り箸で食べる？」

果夏「フルーツを割り箸で？なんかイヤだなあ」

胡桃「結構ワガママなヤツだな……」

真冬「うん。カナはワガママばかり言うから気を付けた方がいい
…」

ここには割り箸しかないのだが、果夏はどうしてもデザートのスプーンで食べたいらしい。そんな彼女を見かねた胡桃は仕方ないと思つたため息をつき、彼の肩にトントンと触れる。

胡桃「コテージまで取りに行つてやろうと思うんだけど、ついてきてくれるか？」

「ああ、別にいいよ」

コテージまでの距離はそう遠くもないが、一人で行くのは心細い。なので彼を誘うことにしたところ、彼はあっさりとそれを了承してく

れた。胡桃、そして彼はスプーンを取りに向かう事を皆へ告げた後、川辺から、木々に囲まれた道へ足を進める。

胡桃 「付き合わせちゃって悪いな」

「いや、大丈夫だよ。腹ごなしの散歩だと思えば気にならない」

胡桃 「ははっ、そうだな」

川辺から離れていくにつれ、ジリジリとした日差し暑さが増す。やはり、川辺は比較的涼しかったようだ。二人は身をもってそれを思い知り、額に汗を流す。

胡桃 「やつぱ暑いなあ…。飲み物持ってくればよかつたぜ」

「まあ…我慢だね。パパッと取って、すぐに戻ろう」

言いながら歩いていると、左右に分岐している道へたどり着く。彼はこことは別の道を使つて真冬と共に川の下流へと向かい、その後川沿いに歩いて皆と合流した為、この道のどちらがコテージに向かう道なのか分からない…。

「…どっちに行けばいい？」

胡桃 「どっちからでも行けるけど、確か…歌衣が右の道は遠回りになるって言ってたな。というわけで、左の道だ」

そう告げて進む胡桃に続き、彼も左の道を通る。コテージまでの距離が近いのは良いのだが、その道は少し広めになっており、日差しをモロに受けてしまう…。一方、見たところ右の道は狭く…高く伸びた木々の葉が日陰を作っていて涼しそうだった…。

そうして日差し暑さを直に感じながらも二人は道を進み、数分後

にはコテージへたどり着く事が出来た。彼はコテージのすぐ外で待つ事にし、スプーンの回収を胡桃に任せる。中へと入っていった胡桃はものの数分で、スプーンの入ったビニール袋を手に戻ってきたのだが……。

胡桃「おまたせっ！」

彼女は外で待っていた彼にそう告げてから、コテージ外の階段をひとつ飛びで降りる。玄関から出てすぐのところにあるその階段はほんの三段だけで、一度で降りるのは難しくないのだが…飛んだ先の足場が悪かった。

グキッ！

胡桃「いッ…!!!」

勢い良く飛んだ胡桃が降りたところには中くらいの石が転がっており、それに躓いた彼女は右足首を捻る…。そのまま座り込んで足首を擦る胡桃だったがその痛みは中々にキツいらしく、目に涙を浮かべていた。

「お、おいおい…大丈夫?」

胡桃「だ…大丈夫っ…。…ッ…ぐ…!」

立ち上がって歩こうとしても、足首が痛んで歩きづらい…。それでもどうにかその痛みを我慢し、右足を引きずるようにして胡桃が進もうとすると、彼が彼女の前へと回り込んで腰を屈めた。

胡桃「…なに?」

「なに?…じゃないでしょ…。無理して歩いたらダメだって。背負ってやるから乗って」

胡桃「い、いや…さすがにそれは悪いだろ…。川までの距離、結構あるぞ?」

「10分かかるか、かからないかくらいの距離だよ。問題ないから乗って下さいって」

少し悪い気もするが、せつかくこう言ってくれてるのだ。胡桃は目の前で屈む彼の背中にそっと身を寄せ、肩に両手を回す…。すると彼は静かに立ち上がり、胡桃の太ももに手を回してしつかりと背負い直した。

「よし…。じゃあ出発だ」

胡桃「…うん。ありがと…」

彼が一步一步進む度に胡桃が手に持つビニール袋が揺れ、中にある幾つものスプーンがガチャガチャと鳴る。その音や、辺りで騒がしく鳴くセミの声を聴きつつ、胡桃は照れたように微笑む。彼の背中に乗っていると何だか安心するような、心地よいような、そんな気分になった…。

胡桃「…なあ」

「ん？なに？」

胡桃「重く…ない？」

「ああ、大丈夫だよ」

胡桃「…そっか」

その言葉を聞いて一安心し、そっと目を閉じる。自分の足で歩いている時はやたら暑かったこの日差しすら心地よい暖かさに見え、何だかウトウトしてきた…。

胡桃（気持ちいい…。けど、寝ちゃ悪いよな…。もう少し、がんばろ…）

閉じていた目を開き、道の先を見つめる。ちょうど、左右に分岐している道に差し掛かっている所だった。右はさつき通った…日差しをモロに受けるが、近道となる道。左はまだ通った事のない…涼しげな日陰が続くが、遠回りになる道。彼は迷うことなく、右の道を選ぶ…。

胡桃「あ、あのさつ……！」

「うん？どうした？」

背後から胡桃に顔を覗きこまれ、彼は歩みを止めた。すると、胡桃は申し訳なさそうに目を伏せていく。

胡桃「左の道……いかない？」

「でも、そっちは遠回りなんでしょ？」

胡桃「そう……だけど……」

胡桃は小さく呟き、覗かせていた顔を引っ込める。自分は背中に乗っているだけ……。そんな自分を背負って歩くのは彼なのだから、近道を選ぶのは当然だ。頭では分かっているのだが、今だけはワガママが言いたかった……。

胡桃「もう少し……二人でいたい……」

彼の背中に額をつけ、消えてしまいそうな程に小さな声を出す。それが彼の耳に届いたかどうかは分からないが、胡桃自身、恥ずかしさで顔が真っ赤になるのを感じていた。

胡桃（うわ……なに言っちゃってるんだろ……。今の……聞こえてたかな……）

咄嗟に出してしまった言葉を悔いながら、胡桃はその背に顔を埋める。すると、右の道を選びかけていた彼が進行方向を変えた。

「じゃ……今度はこっちに行ってみようか」

彼はそう言って右の道ではなく、左の道を進んでいく……。胡桃は目を丸くしながらその選択に喜んだが、同時に言い様のない恥ずかしさに襲われた。

胡桃（聞かれてた…ってことだよな。ううっ…はずかし…）

こちらの道は伸びている木々の葉が屋根のように日陰を作っており、先程の道と比べるとかなり涼しい。にも関わらず胡桃が汗を流しているのは、彼にさっきの言葉を聞かれたという、その恥ずかしさからだろう…。

胡桃「…ごめん。歩くのはお前なのに、ワガママ言っちゃって…」
「平気だよ。こっちの道は涼しいし」

彼は明るい声で答えてくれたが、やはり申し訳ないような思いを感じてしまう。出来るなら彼の背中を降り、自分の足で歩いていきたいと考える胡桃だったが、足首の痛みはまだズキズキと響く…。

「うーん…」

胡桃「…どした？」

「いや…胡桃ちゃんの足、スベスベしてるなあ…と」

背中に乗る胡桃の太ももに当てられていた彼の手が、その感触を確かめるようにそこを擦りだす。かなり短めの短パンを履いてきた胡桃の足は太ももまで露出しており、彼はその感触を直に味わっていた。自らの太ももを撫でられた胡桃は一瞬身体をビクツと震わせた後、顔を真っ赤にする。

胡桃「やっ…!? やめろって！ 手つきがいやらしいっ!!」

「ああ、すいませんね…。ついつい」

怒声一つ飛ばすと彼の手は動かなくなり、太ももに添えられただけになる。しかしいくら動かなくなっただけとはいえ、彼の手が太ももに触れていると思うと何だかムズムズしてしまう。別に彼に触られるのが嫌だという訳ではない。しかし嫌ではないからこそ…胡桃は妙に意識してしまった。

胡桃（…こんな思いすんなら、もうちよい長めのを履いてくればよ

かったかな)

そんな事を思いつつ、彼の背にムスツとした表情を向ける胡桃だが

胡桃(けど、あたしのワガママに応えてわざわざ遠回りしてくれてる訳だし……ちよつと触られるぐらい、別にいつか……)

すぐにそう思い直し、ムスツとしていたその表情を笑顔に変える。彼がゆつくりと、少しずつ進んでいくこの道は大きく曲がりくねっていて、予想していたよりも遠回りになりそうだ。

「足、まだ痛む?」

こちらの道を進んで十分ほど経った時、彼が後ろに顔を向けて尋ねた。胡桃は彼の背に乗ったまま右足首を動かしてみるが、やはりズキズキとした痛みは消えていない……

胡桃「つぐ……!まだ痛いかな……。ほんとごめん……疲れたよな」
「別に疲れてはいないけど……。胡桃ちゃんが心配だね」

背負ってもらったり、遠回りして欲しいというワガママに付き合わせたり……色々やっちゃってしまってるのに彼はそんな事を気にせず、足を捻った自分の心配をしている。彼の言葉を聞いた瞬間、胡桃は顔が熱くなり……胸がドキドキと高鳴るのを感じた。

胡桃(少しくらい、疲れたって言えば……。あんまり優しくされると、あたし……もう……)

ドキドキと、胸の鼓動が高まっていく……。彼の身体にかけた両手には知らず知らず力が入ってしまい、暑いわけでもないのに目眩めまいがする。胡桃自身、既に自分でもこの感情が何なのかに気付いていたのだが……どうにも素直になれずにいた。

「……胡桃ちゃん」

胡桃「なっ、なにっ……？」

突然呼びかけられ、思わず変な声を出してしまう。そんな胡桃の返事を聞き、彼はおかしそうに笑った後、ゆつくりと歩を進めながら静かに言った…。

「みんなと一緒にだと、やっぱり楽しいね」

静かだが、真面目な声色で彼が告げる。確かに、今日はかなり楽しい時間を過ごさせている。中でも真冬や圭、果夏とは今日までほとんど面識が無かったが、それでもすぐに仲良くなれた。本当に…楽しい一日だ。胡桃はそつと頷き、そのまま彼の肩に顔を埋める。

胡桃「……うん」

彼の言葉を聞き、早くみんなの顔が見たくなってきた。そんな事を思う胡桃だが、『もう少しだけ彼と二人きりでいたい』と、心のどこかで、ほんの少しだけ願ってもいた…。

第三十八話 『楽しい一日』

果夏「二人とも、遅いですよ!!…って、くるみ先輩、なんで背負ってもらってるの?」

胡桃「いや…足挫くじいちやって…。それよりこれ、スプーンな」

二人が川辺に戻って早々、彼の背に乗る胡桃をじつと見つめる果夏。胡桃は何故こうなったかの経緯けいゐを簡単に告げ、スプーンの入ったビニール袋を手渡す。

果夏「あら。平気ですか?」

胡桃「ん。まだちよつと痛むけど、大丈夫」

ニコリと微笑み答えると、果夏以外の面々もそこへ集まりだす。彼の背に乗っているのを皆に見られるのが少しだけ恥ずかしくて、胡桃はそつと顔を俯けた。

慈「とりあえずここに座って。捻ひねったところ、しつかり冷やさないと…」

悠里「私、タオルを濡らしてきますね」

慈はそばに置かれていた折り畳み式の椅子を胡桃の前へと運び、そこへ座るようにと指示をだす。すると、彼はその場に屈んで背中から降りやすいようにしてくれた。

胡桃「…ありがとな」

「どういたしまして。お姫さま」

彼の両肩に回していた手をそつと離し、その背中から降りる。用意されていた椅子の座り心地は悪くないが、ほんの少しだけ…彼の背中を離れてしまったのが残念に思えた。

由紀「くるみちゃん、ちよつとガツカリしてるでしょ？」

胡桃「なっ!？」

そこまで露骨な表情はしていなかったはずだが、由紀は胡桃の内面を見抜いているようだ。由紀は一見するとただのお子さまに見えるが、時おり鋭い面を見せる事がある…。

胡桃「してねーよっ！ワケわかんないこと言うなつての…」

由紀「ほうほう…ほうほう…！ふくん、そうだよね〜♪」

胡桃（な、なんかムカつく……!）

慈が胡桃の足首に冷えた濡れタオルを当てる中、由紀はニタニタとした笑みを浮かべてその周りをグルグル回る。出来るなら今すぐに取っ捕まえ、それを止めさせたい…。そう思う胡桃だが、足を怪我しているせいでそれは叶わない。

由紀「えへへ〜。くるみちゃんは乙女だなく♪」

胡桃「…ゆき。あたしが動けるようになったら…その時は覚悟しろよ」

足は無理に動かせないが、そちらに顔を向けることは出来る。胡桃がギロリと鋭い目付きで睨みを利かせると、由紀はビクツと肩を震わせて笑みを引っ込めた。

由紀「ほ、ほんの冗談だよ……。お、怒ってないよね…?」

胡桃「さあ…どうだろうなく…」

由紀「うぐっ!?!ご、ごめんなさいっ!!」

胡桃は笑顔を見せてくれたが、目だけが笑っていない…。それに底知れぬ恐怖を感じた由紀は彼女の横でペコペコと頭を下げ続け、どうか許してもらおうことに成功した。

その後、圭と果夏が皆の為にと考えてきたデザート：フルーツポンチを作り出す。美紀や悠里達もそれに手を貸そうとしたのだが、二人は何故かそれを拒み、自分達だけでそれを作っていた。圭と果夏は二人だけで作ったそれをコソコソとテーブルに運び、人数分用意したプラスチックの容器へと移していく。

圭「お待たせ〜！テーブルに並べておいたから、好きなのを取ってね♪」

美紀「器うつわに移すのくらい、手伝ったのに…」

圭「いやいや、美紀ちゃん達の手をわずらわせるまでもないよ！わたしと果夏だけで十分っ！ほら、早く好きなのを取って〜！」

圭はニツコリと微笑み、テーブルに並べられた内のどれかを選ぶようにと美紀を急かす。なんだか様子がおかしいような気もするが、気のせいだろうか…。

由紀「わたしは…少しでも量の多いやつがいいなあ…」

胡桃「じゃあ、これだろ。ま、あたしは適当に…」

少量の多かったものを由紀に教え、胡桃自身は椅子に座ったまま適当なものを手に取る。圭と果夏が作ったデザートは白玉やフルーツなどにサイダーをかけただけの簡単な物だが、十分な出来に仕上がっていた。

果夏「るーちゃんには、いっぱいフルーツが入ってるやつをあげるね♪」

るー「いいの？ありがとうっ」

果夏「いやいや、良いつてことよ〜」

るーがテーブルに並べられていたフルーツポンチを選び出すと、果夏は別に用意していた物を彼女へと渡す。他のと比べて少しカラフルなその容器には、フルーツも白玉も他のより多く入っていた。沢山のフルーツを見て嬉しそうに目を輝かせる妹を見た悠里は果夏に笑顔を見せ、その礼を告げる。

悠里「果夏さん、ありがとうね」

果夏「いえいえ！お気になさらずっ！」

ーはテーブルに置いてあったスプーンを使い、一足先にそのデザートを食べ始めた。満足そうなその笑顔を見た感じだと、どうやら味に問題はないようだ。

果夏「まあ…るーちゃんを巻き込んだかわいそうだもんね」

悠里「んっ？なにか言った？」

果夏「あっ…いい、いえっ！なんでもございませんよ」

と、口ではそう言っているものの、果夏の様子はどこかおかしい…。みんなにデザートが行き渡った事を目でじつくりと確認しているかと思えば、自分はそのデザートを恐る恐る口へと運んでいるのだ…。

果夏「ん…みんな、今のところは大丈夫っぼいね。圭ちゃんは？」

圭「私も、今のところはセーフっぼい…」

果夏と圭…二人はそれぞれ、手に持っている容器の中の白玉だけをじつと見つめる。他の皆には言っていないが、この白玉にはちよつとした物が仕込まれているのだ。

くくくくくくくく

時間を少しだけ巻き戻し、果夏と圭が買い出しに行っていた時へと移る…。

二人は飲み物などを買う為、地元のスーパーを訪れていたのだが、そこであるものを見付けてしまった…。

果夏「…っ?!圭ちゃん圭ちゃんっ！見てこれっ!!」

圭「うん？それ…白玉？」

果夏が嬉しそうに持ってきたパックには完成済みの白玉がいくつも入っており、更に値引き対象というシールも貼られている。せっかく来たのだし、これを使ってデザート作りも良いかも知れない。そんな事を思う圭だったが…。

圭「あれ、何これ…『ロシアン白玉』？」

よく見ると、パッケージにそんな文字が記されている。その名前だけで大体の察しはついたが、果夏がそれを嬉しそうに説明を始めた。

果夏「これね、中に一個だけ激辛白玉が入ってるんだって！スゴくない!?!めっちゃくちゃ面白そうじゃないっ!?!」

圭「うーん…どうだろう？」

果夏「絶対に楽しいって!!やろ?ねえやろっ!?!ほら、フルーツポンチ的な感じにして混ぜちゃえば良いじゃんっ!」

圭「じゃあ…やる?」

正直に言うと、圭もそれに面白そうな気配を感じていた。彼女がニヤリと微笑むと果夏もニヤリと笑い、二人はそのロシアン白玉やカッツトフルーツ…そして、るーだけには普通の白玉を別に買って用意する事にしたのだ。

~~~~~

そして現在、個別に普通の白玉を入れてあげた、るー以外の人間にはいつその激辛白玉が当たってもおかしくないのだが、それを食べた感じのリアクションを見せる者は現れていない…。

果夏（こ、これでわたしのヤツが当たりだったらヤダな…）

自分の持つ容器の中には、あと一つだけ白玉が残っている。果夏はそれを恐る恐る口へと運ぶが、最後のこれも普通に美味しいものだった…。では圭はどうだろう？果夏は隣にいる彼女を見てこっそりと

確認するが、彼女の持つ容器にはもう白玉が無かった…。

果夏「…全部セーフだった？」

圭「うん。果夏も…？」

果夏「うん…。ということは、わたしら以外の誰かに当たりが…」  
見たところ、既に由紀、美紀、慈は白玉を食べ終え、残ったフルーツに手をつけている。つまり、彼女達には当たらなかったのだろう…。残るは胡桃、悠里、真冬、そして歌衣だが…。

胡桃「ごちそうさん」

歌衣「ごちそうさまでした」

胡桃と歌衣はそれを全て食べ終え、空の容器をテーブルに置く。見た感じ、激辛白玉には当たっていない。

悠里「ふう、ごちそうさまっ」

胡桃と歌衣に続き、悠里もまた空の容器をテーブルに置く。その表情は涼しげなものだったので、彼女も当たり…激辛白玉は引いていないだろう。ということとは…

圭「これ、真冬に当たりがいつてるよね？」

果夏「う…うん…。そうっぽいね…」

満腹だと言っていた真冬は他の皆がそれを食べ終えた今も未だのんびりとしており、残った最後の白玉をスプーンでつついていた…。察するに、その白玉こそが激辛白玉なのだろう。

果夏（すまんな真冬ちゃん…。恨まないでね…）

満腹だからいらないと言っていた彼女へ無理にデザートを振舞った上、激辛白玉なんてふざけた物を食べさせてしまう事に…さすがの果夏も少しだけ申し訳なさを感じた。誰にも気付かれぬよう、果夏がその頭を真冬に向けこっそりと下げた時…真冬は驚くべき行動に出



る。

真冬「……由紀、残ったやつ食べる？ボク、もう限界……」

果夏（なっ…!?!）

圭（最後の最後でっ…!?!）

最後の白玉が入っているその容器を、スプーンごと差し出す真冬…。それを差し出された由紀は満面の笑みを浮かべ、両手を伸ばした。

由紀「いいの？わ〜い♪ありがと〜!!」

由紀はそれを受け取った直後、すぐにスプーンで白玉をすくい上げ、口へと運ぶ。口内に転がった白玉をモグモグと噛みしめる彼女の幸せそうな表情を見ていたら今さら罪悪感を感じてしまい、果夏と圭はそつと目を逸らした…。

圭「ゆき先輩、すいません…」

果夏「先輩にだけは、当たってほしくなかった…」

二人は目を逸らしたままボソツと呟き、来るであろう由紀の悲鳴に備える…。彼女の事だ、激辛白玉なんぞ食べたなら泣きながら叫ぶに違いない。そう思い、覚悟を決めた二人だが…

由紀「おいしかった〜♪真冬ちゃん、ありがとね!」

真冬「ううん。気にしないで…」

由紀は空になった容器をテーブルに置き、満足そうにお腹を擦りだす。今のは最後の白玉だったハズなのに、辛くなかったのだろうか…。果夏と圭はお互いに顔を見合わせ、戸惑い始める。

圭「ど、どういうことっ?」

果夏「わかんない…。もしかしたら言うほど激辛じゃなくて、当た

りを引いた人が気づかなかったのかも…」

圭「ああ…なるほど。それはありそうだね…。じゃ、失敗？」

果夏「失敗だね。さっ、片付けしよ」

つまらない結果になってしまったが、仕方ない。二人は気持ちを切り替え、容器やスプーンの片付けを始めることにした。

悠里「二人とも、私も手伝うわ」

果夏「あつ、大丈夫ですよ。わたしと圭だけでやれますから」

片付けを始めてすぐ、悠里が二人を手伝おうと歩み寄ってくる。片付けといっても容器やスプーンを回収し、そばの川でさっさと洗うだけだった為、悠里の手を借りる程では無かったのだが。

悠里「だーめ。二人はあのデザートを作るのも自分達だけでやってくれたんですもの。片付けくらい手伝わせて？」

果夏「…じゃあ、お願いしちゃおっかな♪」

圭「じゃ、スプーンの方を任せて良いですか？私と果夏は容器を洗っちゃうんで」

悠里「ええ、任せてちょうだい」

果夏と圭で空になった容器を、悠里はスプーンを運んで、川へと向かう。緩やかに流れているその川の水は綺麗に透き通っており、手を入れてみるとその冷たさをハッキリと体感できた。

圭「うお、冷たいなく。ちよつと果夏、飛び込んでみなよ」

果夏「うくん。飛び込むにはちよつと冷たすぎるかな？凍えちゃうよ」

圭「あはは、それもそっか」

他愛ない会話を交わしながら川に容器をつけ、汚れをさつと落とす。果夏と圭のすぐ隣には悠里がいて、彼女はスプーンを一本ずつ丁寧に洗っていた。

悠里「デザート、本当にありがとうね。るーちゃんも喜んでたわ」  
圭「いえいえ、気にしないで下さいっ」

果夏「適当に。パパと作ったヤツですけど、美味しかったですか？」  
容器をジャブジャブと洗いつつ、悠里に感想を尋ねる。るーには気に入ってもらえたようだが、姉である彼女の口にあっただかどうかも気になった。

悠里「ええ、美味しかったわよ。少しだけ…ピリツとしてて…ね？」

果夏「……………みやつ？」

圭「……………えっ？」

悠里がポツリと放ったその言葉に戸惑い、洗っていた容器を川へと落としてそうになる…。二人がそつと視線を横へ向けると、そこにはこちらを見つめながらニコニコと、どこか影のあるような笑みを浮かべる悠里がいた。

悠里「あれ、やったのはどっち？」

圭「あ、あれ…というのは…？」

悠里「一個だけ、すっごく辛い白玉があつたの。さすがの私も少しだけビツクリしちゃった…♪」

悠里は自分の頬に手を当てながらニコニコと微笑み、スツ…スツ…と二人のそばへにじり寄る。笑っているのに、何故か怖い…。これまで生きてきた中でこんな表情に出会ったことが無い圭は横にいた果夏の肩をガシツと掴み、悠里の前へと突き出す。

圭「か、果夏が言い出したんです！私は反対しましたよっ!!？」

果夏「わわっ!?ウソだよっ！反対なんかしてなかったじゃんっ!？」

圭「心の中でしてたんだよ!!」

果夏「なにそれっ!? 反則でしょっ!!」

悠里「いいから、二人ともそこに座りなさい?」

圭「で、でもっ…!」

果夏「りーさんっ! わたしの言い分も聞いて——」

悠里「座りなさい?」

特別大きな声量ではないが、とてつもない圧が込められている声だった。さすがの二人もこれには従わないとダメな気がして、その場に渋々正座する。足元にはたくさんの小石がゴロゴロしていて、正座すると足が痛かった…。

~~~~~

それから十数分経ち、容器等を洗い終えた悠里達は皆の元へと戻る。戻ってきた三人の様子はどこかおかしく、全員が違和感を感じた。

慈「ごくろうさま。あれっ…? 何かあったの?」

悠里「ふふっ。大丈夫ですよ♪」

悠里はそう言って慈の横を通りすぎ、待っていた妹の元へ戻る。彼女はこう言っているが、あとの二人はとも大丈夫なように見えない。

真冬「カナ、泣いてるの?」

果夏「ひぐっ…! こわ…! かった…! こわかったよお…!」

圭「そんなに泣かないでよ…。私だって怖かったんだから…」

美紀「な、何があったの?」

果夏は何かに怯えているかのように身体を震わせており、圭もまた

虚ろな目をしている。彼女達と悠里の間に何があつたのか…細かな事までは分からないが、何かがあつたのは明白だ。

圭「いや、元はと言えば私達のせいだからね…。何も言い返せないんだけどさ…。ただ、リーさんがいる時に変な悪ふざけはしちやダメだつて知つたよ…」

果夏「笑つてるのに、すつごく怖かつた…」

悠里のあの笑顔を思い出す度、果夏の背筋がゾクツとする。二人が悠里の怖さを知つた所でバーベキューは終わり、使つた道具類を皆で片付けていった。それぞれが自分の運ぶ物を決めてコテージに戻ろうとする中、胡桃は苦い表情を浮かべる。

胡桃「…くそつ。まだ痛いな…」

捻つた足はまだ痛み、歩くのがやっとだ。しかし皆が荷物を運ぶ中、自分だけ何もしない訳にはいかない。胡桃はそばにあつた折り畳み式の椅子を運ぼうとするが、由紀がそれを奪い取つた。

由紀「くるみちゃんは休んで！足、いたいでしょ？」

胡桃「こんくらい平気だつて。ほら、それ貸せよ」

由紀「だーめ！どうしても欲しいならわたしに追いついてね〜！」
由紀は椅子を持ったまま駆けていってしまい、胡桃との距離を一気に開く。悔しいが、今の足では追いかけられない。胡桃は『はあっ』とため息をつき、離れていく由紀を見つめた。

胡桃「じゃあ、あたしは何を運べばいいんだよ…」

圭「とりあえず、これでも持つてて下さい♪」

不意に現れた圭は彼女にビニール袋を手渡し、ニッコリと微笑む。その袋の中には使い終えた割り箸や紙皿など、軽めのゴミが入れられていた。こんな軽い物で良いのか…。胡桃がそんな事を思っているのと、いつの間にか目の前に彼がいて、また腰を屈めていた。

胡桃「なっ?! 帰りはいいって!! 自分で歩くっ!」

「まあまあ。こつちも仕事がなくてね。運ぶ物が胡桃ちゃんくらいしか…」

胡桃「つたく…あたしは物かよ」

圭「良いんじゃないですか? 甘えちゃいましょうっ!」

圭は胡桃の背中をトンと押し、無理矢理に彼の背中へ寄せる。よろめいた胡桃はそこにポストと身体を寄せ、仕方なく、そのまま彼の肩へと腕を回した。

胡桃「…ごめんな。また頼めるか?」

「ああ。任せといて」

彼は再び胡桃を背負い、コテージに続く道を歩く。先程とは違い辺りには皆がいた為、胡桃は少し恥ずかしそうだ。

果夏「いいですね〜♪」

胡桃「…何がだよ」

彼に背負われる胡桃を見た果夏は多くを語らず、ただニヤニヤと微笑む。しかし、それは彼女だけではない。よく見れば、真冬や美紀：歌衣を除くほとんどの人間がこちらを見てニヤニヤと微笑んでいる。胡桃はその目線に耐えながら彼の背中へと顔を埋め、コテージにたどり着くまでの時間を過ごした…。

そうしてコテージにたどり着き、皆は一〜二時間、ダラダラと休んだ身体を休ませる。夕暮れが近づき、いよいよ家に帰るという時にはもう、胡桃の足もいくらかまともに動かせるようになっていた。色々大変な事はあったものの、全体的に見れば、とても楽しい一日となった。

第三十九話 『うみ』

つい先日、彼はみんなとキャンプに出掛けた。

暑い山道を進んでコテージに向かうのは大変だったし、苦勞もした。しかし、その苦勞を越えた先にあつたバーベキュー…これはとても楽しいものだった。川辺で食べた物はどれも美味しく…と言つても、由紀の作つてくれたグミおにぎりは少しアレな味だったが…それも含めて良い思い出だ。

そしてそれから数日が経つた今、彼は電車の中いる。向かい合うようにして設置されている二人がけの座席…彼は車内の通路から見つてその左奥に座り、その向かい、右奥には胡桃が。そして、彼女の隣には悠里が座っている。彼の隣はというと、今日も人一倍元気な少女、丈槍由紀が座っていた。

また、丁度良い席が空いていなかったのでも今はそばにはいないが、少し離れた場所にある席には美紀、圭、真冬、歌衣たち二年生組もいる。

由紀「もうそろそろかな♪楽しみだなく♪」

胡桃「たしか、次の駅だろ？」

悠里「ええ。もう降りる準備しないとね」

足元などに忘れ物はないか…しっかりと確認しながら、駅への到着を待つ。彼女達はの荷物は色々多かったので確認も大変だったが、軽めの装備でやってきた彼は大した確認をせず、未だに窓の外を眺めていた。走る電車の外に流れる風景…その先には、青い海がどこまでも広がっていた…。

胡桃「おい、起きてるか？もう着くぞ？」

「んっ？ああ…起きてるよ」

真向かいに座る胡桃に返事を返し、彼は唯一持つてきた茶色のカバンを背負う。中に入っているのは着替えとか、水着とか、そんなものだ。彼は今日、彼女達と共に海へとやって来た。しかも、付近にある民宿で一泊…というオマケ付きで。

悠里「着いたらまず宿の場所を確認して、チェックインだけ済ませちゃいましょうか」

胡桃「そだな…。荷物もちよつと多いから、置いていきたいし」

由紀「今日泊まるどころって遠いの？それとも駅のそば？」

悠里「地図を見た感じだと、わりと近くだったわよ。少し歩けばすぐに着くと思うわ」

悠里は持つていた携帯電話を取り出し、念のためにその民宿の位置を確認する。そこはやはり近くにあるらしく、彼女はニコツと微笑んで携帯をしまった。少しすると走っていた電車もゆっくりと止まり、目当ての駅へと着く。彼女達は電車が止まってから席を立ち、開いた扉の外へと降り立った。

由紀「おおっ！くるみちゃん！海が近いよっ!!」

胡桃「おう！ちよつとテンション上がるな！」

広がっている海は駅のホームからも確認する事ができ、自然と心はずむ。彼や由紀達から少し遅れて降りてきた美紀、圭、果夏、真冬、歌衣達二年生組も、その光景に目を丸くしていた。

美紀「うわあ、潮の香りがすごい…」

圭「ほんとだね。海くってかんじ」

果夏「ヤバイっ！海だよ真冬ちゃんっ!!」

真冬「うん、分かってるよ…」

果夏のテンションはやたらと高いが、真冬はそれを避けるようにして悠里の元へ…。そして、歌衣は胡桃の元へと歩み寄る。

悠里「乗車時間は長かったけど、疲れたりしてない？」

真冬「うくん…：まあ、海が見えだした頃からカナのテンションがあんな感じだったから、少し疲れたかな」

悠里「あら、それはそれは…」

電車の中から海が見えたのは結構前からだが、果夏のテンションはそれからずっとああだったらしい。それを相手にしていた労をねぎらうように悠里がそつと頭を撫でると、真冬は照れたようにして顔を俯けた。

歌衣「くるみ先輩は、海とか来たことありますか？」

胡桃「うくん…：数えられるほどしか来たことないかな…」

歌衣「そうですか。因みに私、海自体を目的に遊びへ…というのは初めてです！なので、ちよつとワクワクしています」

胡桃「そつか。じゃ、思いきり楽しもうな♪」

歌衣「はいっ♪」

憧れていた胡桃とまた出掛ける事ができ、歌衣の表情も晴れやかだ。彼はそんな歌衣と胡桃が親しげにしているのを見て微かに微笑むと、悠里へ声をかける。

「じゃ、さつそく宿に向かいますか？」

悠里「そうね。よし、じゃあ行きましようか♪」

悠里の言葉にそれぞれが返事を返し、歩を進めていく。今回、一行が訪れた場所は落ち着いている風景の町であり、どちらかと言えば都会よりも田舎寄りだ。駅のホームもかなり小さく、外に出ても車などの通りが少ない。しかし、日差しだけは相変わらずの強さだ。

悠里「ふう…：今日も暑いわね…」

「そうですね。荷物、持ちましようか？」

悠里「あら、ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えて…」

彼は周りの娘たちと比べて荷物量が少なかった為、まだ余裕がある。渡された悠里のバック一つくらいなら、持っけていてもさほど疲れはしない。

美紀「静かな町ですね…」

胡桃「そうだな…。この様子なら海も空すいてそうだ」

辺りには小さな民宿や釣具屋…そしてただの民家などがあるがそのどれもが物静かな雰囲気、人混みの気配はない。今回の旅を企画した悠里と美紀はこの落ち着いた様子が気に入り、この町を選んだようだ。

悠里「夏の海はどこも人がいっぱいかと思っただけど、ここは比較的空すいているようだったのよね」

美紀「ええ。宿も簡単に取れましたし、穴場を見つけたかも知れませんがね」

協力して計画を練った二人が、誇らしげに微笑む。そうこうしている内、一行は一つの民家の前へとたどり着いた。和風な造りをしたその民宿は辺りにある物と比べても一回りだけ大きく、悠里はその建物の引き戸をガラガラツ！と横に開いていく。

悠里「すいません。今日、九人で泊まる予約をした若狭ですが…」
戸を開けた先にある玄関で靴を脱ぎつつ、悠里は大きめな声を出す。するとその呼び掛けに応じて入口奥にあった戸が開き、一人の少女が慌てた様子でこちらの方へと歩み寄ってきた。

??「ああ、すいませんっ!!ええつと、若狭さん…ですね?お待ちしておりました!」

どこかあたふたとしながらもニコニコと愛想よく、その少女は微笑

む。受け付けには大人が出てくるとばかり思っていたが、目の前に現れた少女は悠里達と同一年くらいに見える。

果夏「おお、真冬ちゃん！これが若女将わかおかみってヤツだね!!」

真冬「そう…なの？」

真冬の問いに、少女は首を横へ振っていく。腰元まで伸びた黒髪を揺らすその娘は着物を着てはいたが全体的に弱々しい雰囲気があり、女将的な風格はない。

??「私は女将なんて凄いものじゃないです…！夏休みの間、少しだけおばさんのお手伝いをしに来ただけで…：まあ、そのおばさんは今、買い出しに行っちゃってますが…」

悠里「それは大変ですね…。一先ず、お部屋にだけ案内してもらって良いですか？荷物を置いていきたいので」

??「あつ…：了解ですっ！お〜い！ヒメちゃん!!」

少女が大声を出すと、奥の方からまたもう一人の少女が現れてこちらへと歩み寄ってくる。その少女はまた一段と幼く、るーと同一年くらいに見えた。

由紀「うわあ、可愛いね♪キミもお手伝いしてるの？」

現れた少女もまた同じような着物を着ており、銀色の髪をポニーテールにして纏めている。かなり幼い娘に見えるが、その受け答えはしつかりとしていた。

白雪「はい。未奈と一緒にお手伝いをしている、八島白雪やしましらゆきです」

胡桃「未奈つてのは…：あんたか？」

未奈「あつ、はい！私は水無月未奈みなつきみななといいますっ!!自己紹介が遅れて申し訳ないです…」

何も怒ってはいないのだが、未奈は怯えたような目線を胡桃に向ける。その目線を受けた胡桃が気まずさを感じ始めた時、その空気を払

うようにして白雪が口を開いた。

白雪「では、お部屋に案内しますね？」

悠里「はい。お願いします♪」

未奈「ヒメちゃん、あとはお願いね〜…」

白雪はコクリと頷き、彼女達を連れて二階へと向かう。上っている階段の横幅は少しだけ狭く、人一人と擦れ違うのがやつとくらしいのだ。

真冬「白雪なのに、なんでヒメちゃんなの？」

白雪「それは……わたしの名前、お姫さまみただから…」

白雪は頬を真っ赤に染めて恥ずかしそうに顔を俯ける。どうやら、本人はあまりその呼び名に触れてほしくないらしい。白雪の様子を見て、真冬達はそれを察したのだが…。

由紀「かわいいね〜♪じゃ、わたしもヒメちゃんって呼んでいいっ？」

果夏「わたしもわたしもっ！ヒメちゃん…うん！ピッタリの呼び名だね♪」

白雪「う…うう…やだよお……」

白雪は顔を真っ赤にして咳くが、由紀と果夏だけはそれに気が付かない。白雪はその後、一行を二階にあった大きめの部屋へと案内して直ぐ様帰ろうとするが、由紀と果夏に捕まってしまつて帰れずいた。

果夏「その着物、自分で着たの？」

白雪「い、いや……未奈に着せてもらいました…」

部屋の隅へ追い込まれ、ぺたつと座り込んだまま胸の前で両手を固

める白雪……。果夏はそんな彼女のポニーテールに右手でそつと触れたと思うと、左手の方で自分のポニーテールに触れてまたニヤニヤと笑いだす。

果夏「ポニーテール……わたしとお揃いだねえ♪」

白雪「そ、そうですね……」

由紀「小さいのにすぐくしっかりしてるよね？えらいえらいっ♪」

白雪「ど、どうもです……」

ポニーテールを果夏に触られ、由紀に頭を撫でられ、白雪はひたすらに困った表情だ。彼女は辺りの人間に『助けてほしい』と目で訴えるが、悠里や胡桃達は荷物を置いている最中でこちらに気づいていないし、彼に限ってはもうダラダラと寝転がっている…。

結局、悠里がその目線に気付いて由紀と果夏を注意するまでの数分間……白雪は二人のオモチャと化してしまっていた…。

第四十話 『みずぎ』(☆)

これでもかという程見事に晴れた空からはジリジリと暑い日が差し、今が夏だという事を思い知らされる。しかし、その暑さとは他に夏を実感する事の出来るような…そんな光景が彼の前に広がっていた。よく知る彼女達が、水着姿で浜辺にいたのでから。

由紀「うわあ〜っ！ひつろ〜い♪」

由紀が着ているのは以前、彼と一緒に選んだビキニだ。

上下ともに綺麗なピンク色をしたそのビキニには小さなフリルが付いており、彼女が動く度にそれは揺れる。色だけで見れば少し子供っぽい気がするが露出はわりと多く、意外と女性的だ。

胡桃「いや〜。遂に来たなあ…」

胡桃が着ているのは青…というよりは紫色に近い、濃い色のビキニ。

シンプルな作りであり、由紀のビキニのようなフリルは付いていないが、それでも見栄えするのは彼女のスタイルが良いからだろう。いつものツインテールも短く纏め上げており、動きやすそうだ。

悠里「走るのもいいけど、足元には気を付けてね」

悠里が着ているのは、緑色のビキニ。

ボトムの方は胡桃の物と同じくシンプルな作りだが、上のビキニのちょうど中央…そこには真っ白なリボンが付いており、可愛いデザインだ。ただ、彼女の大きな胸の谷間のインパクトがあまりにも凄くて、リボンの存在が薄れているような気も…。

由紀「ほら、みんなもはやく♪」

晴れた空の下、彼女達は目の前に広がる海を見て表情を明るくする。前々から来たいと思っていた場所へ、ついにやって来れたのだ。テンションの一つも上がるだろう。彼女達はこの日の為に選んできた水着を見に纏い、砂浜の上を歩く。

美紀「予想してたよりも更に空いてたね」

水色のビキニに身を包んだ美紀が、辺りを見回す。彼女の水着は他の娘らのような三角ビキニではなく、大きなフリルタイプの物だ。上下共にフリルの揺れるその水着は胸や尻の形が出にくく、美紀はそこを気に入ったらしい。その横に立つ圭も上は美紀と同じような紺色のビキニを着ていたが、彼女の方のボトムにはフリルが無く、美紀よりも少しだけ色っぽい雰囲気だ。

圭「ほんと。これじゃ貸し切り同然じゃんっ♪」

広い浜辺には彼女達以外の人がおらず、圭の言う通り貸し切りのようになっている。悠里が言うには隣町に有名な海水浴場があるらしく、多くの人はそっちへと行っているらしい。しかし、今日訪れているこの場所もそう悪くはない。確かに、人気のある場所と比べると家の数が遥かに少ない……というか一軒だけだが、砂浜や海自体はとても綺麗だ。

果夏「おおうっ！……うくん？」

フルーツ柄の、カラフルなビキニを纏った果夏が茶色のポニーテールを揺らしながら遠くを見つめる。その格好はわりと露出が多く、スタイルも悪くはないのにあまり色っぽく見えないのは、彼女の活発すぎる性格のせいだろう……。そんな果夏の隣に立つ真冬は、少し大きな

紺色のパーカーを羽織っている。前面のチャックが閉じてあつて完全防御の状態だが、パーカーの裾からは真つ白い太もが見えていた。一応、パーカーの下に水着を着ているらしいが、見せるのが恥ずかしいようだ。

果夏「すくつく遠くの方に人がいるね。行ってみる？」

真冬「なんで…？」

果夏「いやあ、ナンパとかされるかなって…」

テヘへと笑う果夏を見て、真冬は深いため息をつく。こんな事を言っているが、果夏の事だ…別にナンパされて彼氏を手にしたとか考えている訳ではなく、ただナンパされることが格好いいとか、大人の女みたいだとか思っているだけなのだろう。

真冬（ナンパなんて、ほんとにされたら困るクセに…）

しかも、よく見てみれば彼女が見ていた遠くにいる人というのは散歩中の老人だ。それも男性ではなく、女性の…

真冬「カナは、おばあちゃんにナンパされたいの？」

果夏「へっ？あれお婆さんなの？真冬ちゃん、目が良いなあ…」
じっと目を凝らして見るが、果夏の目にはその人が小さな粒程度にしか見えない。彼女の視力は特別悪い方でもないと思うが、真冬には劣るようだ。

歌衣「お、お待たせしました…」

果夏が目を凝らして遠方の老婆を見つめる中、遅れてやって来た歌衣が彼女と真冬の後ろに立つ。水着を着るのに少し手間取っていたらしく、遅れてしまったらしい。

彼女が着てきたのは、ワンピースタイプの白い水着。下の方がスカートのようになっていて、そこだけ見れば清楚なデザインだが…問題は上の方だ。胸元にはV字の切れ込みが入っていて、彼女の大きな

胸の谷間が惜しげなく晒されている。胸の大きさだけなら、悠里と彼女はほとんど同等の物かも知れない。

果夏「おく。歌衣ちゃん、ヤバいね……！」

歌衣「や、やばいつ!?何がですかっ!?!」

もしかして、間違った着方をしてしまったのだろうか?そう思った歌衣は慌てて自分の水着を見直すが、おかしなところは無い。なら、果夏の言葉は何を意味しているのだろう……。その答えは、隣に立っていた真冬が教えてくれた。

真冬「胸が大きすぎてヤバい。カナはそう言ってるんだよ……」

歌衣「胸……ですか?大きいと、何がやばいんでしょう?」

真冬「……………ちっ」

歌衣も悪気があって言ったわけではない。そうだと分かっているが、彼女の大きな胸を……そのとぼけたような表情を見ると、無性^{むしやう}に腹が立つ。真冬は彼女の前をスタスタと歩き、その通り際……

バシツ!!

歌衣の胸目掛け、手のひらを振った。真冬のビンタをまともに受けたその胸はプルリと揺れ、歌衣は戸惑ったような表情を真冬へと向ける。

歌衣「ひゃっ!?な、なにするんですかっ!?!」

真冬「……………べつに。蚊がとまってたから……」

もちろん嘘だ。本当は蚊など止まってはいない。ただ、苛立ってしまったから彼女の胸をビンタした。真冬は彼女の横を通り過ぎ、言い知れぬ劣等感に頭を抱える。

真冬（…すっごく柔らかかった…！胸って、大きいとあんなに…!!）
歌衣の胸をビンタした際の感触は、まるで大きな水風船を叩いたかと錯覚するような物だった。真冬はその感触を思い出して赤面しながらこっさり、パーカー越しに自分の胸を触ってみる…。

真冬（ボクのだって柔らかい…よね？う、うくん……那珂^なさんの胸に触った後だと、ほとんど分からない…）

同じ女性だというのに、胸というのはこうも違いが出るものなのか…。真冬は自分と歌衣…更には悠里とのレベルの差を実感し、トボトボと歩く。そうして訪れたのは、砂浜の上に敷かれた一枚の大きなレジャーシートの上。そこには彼が一人で座っていたので、真冬はその隣に腰を下ろす。

真冬「キミは…みんなと遊ばないの？」

「ん？ああ、遊ぶよ。ただ、今はこの光景を目に焼き付けておこうと思ってるね…」

由紀の太もも…胡桃のうなじ…圭や果夏の可愛らしい水着姿…少し恥じらうような雰囲気を見せる美紀…そして、悠里と歌衣の胸…。そのどれもがとても魅力的であり、どれだけ見ても飽きない。

真冬「なるほど…やっぱキミは変態だったか…」

「これだけの光景…。目を奪われない男の方がどうかしてると思うよ」

真冬「…ボクには全く興味なし？」

人差し指で彼の腕をちょんつと突つつき、真冬は首を傾げる。彼も彼女に興味がない訳ではないのだが、露出の関係上…どうしても水着姿の皆に視線がいく。

「せめて、そのパーカーを脱いでくれればね…。水着はちゃんと着てるんでしょ？」

真冬「…うん。じゃあ…ちよつと見てみる…？」

「おお、いいの?」

真冬「恥ずかしいけど、ちよつとだけなら…。笑ったりしたら殺すからね?」

「いや…笑いはしないと思うけどさ…」

真冬はそれだけを告げるとパーカーに手を伸ばし、首もとのチャックをつまむ。ジジジツ…と音を鳴らしながらそのチャックが徐々に下へと開かれていくのだが、恥ずかしさからだろうか…真冬は微かに顔を俯け、頬を赤く染めている。

ジジジ…ツ…

真冬「……………う……」

(なんか、気まずい時間だな……………)

チャックは胸元まで下げられ、綺麗な鎖骨が見えている。胸の谷間は未だ見えていないが、彼女の胸の大きさの都合上それは仕方ないだろう。というか、まだ水着も見えていない。

真冬「み、見すぎじゃない…?そんな目で見られると余計に恥ずかしい…」

「いや、見せてくれるって言ったのは真冬ちゃんでしょうに…」

真冬「まあ…そうだけど……」

といったやり取りをした後、彼女はまた少しずつチャックを下ろしていく。胸元からへそ辺り…そして遂に一番下へとチャックを下ろし、彼女はそつとパーカーを開く。

真冬「へん…じゃない?」

パーカーを開いて恥じらいながら尋ねる彼女が着ていたのは、黒のビキニ。そして下には短く、半透明なパレオを着用しており、その隙間からは上のビキニと同じデザインの黒いボトムがチラリと見える。ビキニに覆われているその胸は確かに大きくはないが、真っ白な肌がとても綺麗でつい目を奪われる。

「…全然変じやない。可愛いよ」

真冬「かつ…かわ…っ…？」

(ああ……しまった…)

彼女は恥ずかしがっていたが、普通に可愛らしい格好だった。だからつい口走ってしまった言葉なのだが、彼はそれを後悔する。真冬が顔を真っ赤に染め、無言のまま口をパクパクと動かしているからだ。

真冬(お、落ちつけ…。落ちつけ狭山真冬…。彼が可愛いって言ったのは水着の事であって、ボクのことじゃない…。水着は可愛い…ボクは可愛くない…。水着は可愛い…ボクは可愛くない…)

心の中で自己暗示のように呟き続け、真冬は心を落ちつける。今まで男の人に『可愛い』などと言われてこなかった為、少し取り乱してしまった。しかし自己暗示の甲斐もあり、真冬はいつも通りの…涼しげな表情を取り戻す事に成功する。

真冬「……ふう」

「……？」

真冬「キミは…少し言動に注意したほうがいい。今みたいなことばかり言っていると、遊び人だと思われる」

「は、はあ……気を付けます…」

思わぬタイミングで説教され、彼は戸惑いながらも頭を下げる。しかし彼だって、相手が女なら誰かれ構わず『可愛い』と言っている訳ではない。ただ、彼の周りに集まる女性達は総じて可愛らしかったり、綺麗な娘が多く、お世辞抜きに褒めたくなる時があるだけだ。

真冬「でも…せつかくの可愛い水着、隠してたらもったいないか…。やっぱり…これは脱いでおこう」

彼に見せた事である程度の自信がついたのか、真冬は羽織っていた

パーカーをシートの上に脱ぎ捨てる。パーカーを脱いだ彼女は少しだけ恥ずかしそうに自分の胸元を確認した後、そっと立ち上がってから彼の方を向く。

真冬「みんなのどこ…いこ？」

「んん、そうだね」

シートの上にはそれぞれの荷物が置いてあるが、そんなに離れた場所に行くわけでもないし、辺りには人もいない。盗まれたりする心配はないだろう。彼は真冬に続いて立ち上がり、彼女と共にみんなの元へ向かう。

胡桃「真冬。そいつに変な目で見られたりしなかったか？」

真冬「うん…大丈夫だよ」

「いきなり失礼な事を言ってくれる…」

水着姿の真冬が彼と一緒に歩いてきたのを見て、胡桃がイタズラに笑う。しかし彼がここであまり強く言い返さなかったのは、真冬はおろか…ここにいる全員を多少ながらそういう目で見てしまっていたからだ。

真冬「果夏と由紀…もう海に入ってる」

胡桃「ははっ、大はしやぎだなあ。どれ、あたしも行くか」

圭「美紀ちゃん、私らも行こっ」

美紀「あつ、うん」

海に足をつけ、バシヤバシヤとはしやぎ合う由紀と果夏に続くようにして胡桃、圭、美紀の三人がそこに向かう。彼や悠里、そして歌衣もそれに続こうとしたが、真冬だけはUターンして荷物の置いてあるシートの方へと歩き出す。

悠里「狭山さん、泳がないの？」

狭山「泳がないんじゃない、泳げない…。だから、浮き輪を取ってくる…。みんなは先に行ってて」

バッグにしまっていた、水玉模様の描かれている浮き輪。それは真冬に息を吹き込まれ、少しずつ膨らんでいく。彼女を待っていても良いが少し時間がかかりそうだった為、悠里達は由紀達の待つ浅瀬へと向かった。

第四十一話『すなはま』

胡桃「とりやくつ!!」

由紀「うわっ!くるみちゃん、冷たいよ♪」

浅瀬に立つ由紀は目の前にいた胡桃の手によつて海水を浴びせられ、楽しげに笑う。由紀はともかく、胡桃もいつもよりテンションが
高く見えるのは、やはり海効果だろうか。

(どれ…僕もやってみるか)

由紀と胡桃のやり取りがあまりにも楽しそうだったので、それに触
発された彼も海へ両手をつける。あとはこの両手で勢いよく振り上
げ、誰かに海水をかけてやれば良いのだが、この相手を決めるのが結
構悩む。

(…よし、リーさんにしよう)

自分のすぐそば…そこに立っていた悠里を見て彼は決意する。悠
里は今、まるで娘を見守る母のような眼差しを由紀と胡桃へ向けてい
る…。いきなり水をかけられようものなら、さすがの彼女も驚くハズ
だ。

「ほっ!」

バシヤツ!!!

悠里「ひゃうっ!!?」

彼の両手によつて巻き上げられた海水は勢いよく悠里の顔、そして
身体を濡らす。長く、綺麗な茶髪も微かに濡れて頬へ張り付き、胸の
谷間や腹部を海水が伝ってキラキラと光る…。同い年とは思えない
程に大人びたその色気とは真逆に、不意に水をかけられた事に驚いた
その声は可愛らしいものだった。

(あのリーさんが…『ひやうっ!』って…!)

悠里「もうっ!冷たいでしょう!」

頬に張り付いた毛先を指で退かしつつ、悠里はぶくぶくと頬を膨らます。さっきの声といい、今の表情といい、今日は悠里もいつになく子供っぽい。

「…すいません、ついやりたくなっちゃって」

悠里「じゃあ…私も仕返ししちゃおうかな?」

悠里はニコリと笑ってから前屈みになり、両手を海水につける。直後、彼女はその両手を使い、彼目掛けてバシヤツと勢いよく海水を浴びせた。

「おおっ!」

悠里「えいっ♪えいっ♪」

バシヤツ!バシヤツ!と…連続で海水を浴びせにかかる悠里。やはり、今日は彼女もテンションが高いらしい。彼は自分目掛けて飛んで来る海水が目に入らぬように腕でガードしつつ、海水をかけてくる際、一瞬だけ前屈みになる悠里の胸の谷間を凝視した。

(ヤバイ…!やっぱ、リーさんは凄いつ!)

緑色のビキニから溢れてしまいそうな程に大きな彼女の胸は前屈みになる度…そして彼に海水を浴びせる為両手を振る度にぶるんと揺れる。これを間近に見れただけでも海に来た価値があったなあと…彼はしみじみ思う。

由紀「あたくつく!!」

「うおっ!」

突如、由紀が真横から飛びかかってくる。こちらに水をかけてくる悠里の谷間にばかり視線がいった彼はそれをかわすどころか、体勢を保つ事すら出来ない。由紀のタツクルをまともに受けた彼は由

紀共々、浅瀬に倒れてバシヤンツ！と水しぶきをあげる。

「ぐ……う……っ」

由紀「えへへ♪」

倒れた彼の上に身を重ねながら、由紀はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。彼はすぐに上半身を起こし、そんな彼女を見つめるのだが……その顔が思ったよりもずっと近かった事……更には、身体を重ねている事で彼女の太ももが自分の足に触れていたり、柔らかな胸の感触が自分の胸板に伝わっている事に気が付き、驚きやら嬉しさやらに目を丸くした。

(胸がぶにぶにしてる……太もももぶにぶにしてる……!!)

互いに水着という面積の少ない物を纏っている事で、その感触がよりハッキリと分かる。全身が海水に濡れているのにも関わらず、由紀の体温がほんのりと分かる程だ。

悠里「ゆきちゃんっ！いきなり飛びかかったら危ないでしょ？」

由紀「あっ、ごめんごめんっ！大丈夫？怪我してない？」

「……ああ、大丈夫……」

由紀はそつと起き上がり、心配そうに彼を見つめる。彼はすぐに自身も起き上がり、怪我していないことを伝えるが……その内心では由紀の身体が離れた事を惜しんでいた。もう少しだけ、彼女の温もりや感触を感じていたかったのだ。

(ヤバイ……海って最高だな……)

悠里の谷間を凝視出来たり、由紀と身体を重ねられたり……この短時間でかなり興奮したので、もしかしたら鼻血が出ているかも知れない……。彼はそんな事を思っって鼻を拭うが、それは思い過ごしで済む。拭った手についていたのは鼻血ではなく、海水だけだった。

胡桃「…なにニヤニヤしてんだよ。気持ちわりいな……」

「胡桃ちゃん、僕はこの短時間で海というものが大好きになった…」

胡桃「ふくん？そりゃよかったな」

「ああ……本当によかった……」

胡桃は彼の発言を不思議に思っているらしく、目の前で微かに首を傾げている。そんな彼女も、当然ながら水着姿だ。彼はいつもは服に隠れていて見ることに出来ない彼女の胸の谷間や太もも…引き締まった腹部にある綺麗なへそなどを見て、また一層に海を愛する。

(もう、死んでもいい……)

そう思わせる程、この数分の間にくつもの良い思いをした。もしこの経験を同級生の男子らに話でもしたら、彼はさぞかし羨ましながら、妬まれる事だろう…。

「少し…休憩する」

胡桃「おう。わかった」

このまま彼女達と戯れていたら、興奮のあまりすぐに体力が切れてしまう。彼は一旦海から上がり、砂浜へと足を運んでいった。

美紀「…あれ？どうかしました？」

「いや、少し休憩しようと思って…」

砂浜にいた美紀の横へと座り、彼は一息つく。美紀もさつきまで海に入っていたのだが、今は砂浜にペタンと腰を下ろして休んでいたようだ。

「…他の皆は？」

美紀「圭たちなら、飲み物を買に行きました。たぶん…もう少しで帰ってくると思いますよ」

「そう…」

さつきから圭、真冬、果夏、歌衣の姿が見えないのはそういう事だったらしい。彼女達が向かったのはこの浜辺に一軒だけある海の家かと思ひ、彼は数十メートル先のそこへ視線を向けるが……そこに人の気配はなかった。ならば恐らく、彼女達はどこかにある自動販売機でも探しに行つたのだらう。

「……ところで、さつきから何やってるの？」

美紀「私ですか？ なんとなく、砂のトンネルを作ろうかと……」

ついきつき彼がここに来た時から美紀は砂浜に腰を下ろし、一人両手で砂をかき集めていた。どうやら砂のトンネルを作りたいらしく、彼女は慎重に手を動かしている……。

……ドサツ

美紀「また失敗……。意外と難しいな……」

崩れたトンネルを見て悔しそうにボソツと呟き、一から砂を整えていく。美紀も結構大人びた娘かと思つていたが、こんな子供っぽい一面もあるようだ。

美紀「……なんです？」

「いや、なにも……」

一生懸命に砂をかき集め、整える美紀が可愛らしくて彼はつい見つめてしまつていたが、美紀がそれに気付いてしまったので慌てて目を逸らす。本当は、じつくりと観察してきたいのだが……。

美紀「……先輩も、少し手伝つてくれますか？」

「えっ？ あ、ああ……」

目を逸らした直後にそんな事を言われるもんだから、彼は少しだけ戸惑つた。しかし美紀自身が手伝つてほしいと言うのなら協力してやろうと思ひ、そちらを向いて一緒に砂をかき集めた。砂は微かに海水で湿つており、山のような形を作るのはさほど難しくない。問題は

ここからだ。

美紀「…よし。じゃああとは二人で少しずつ、慎重に穴を開けていきましよう。慎重に…ですよ？勢いよくやったりするとすぐに崩れちゃいますから」

「了解」

彼は手前から…美紀は奥から…挟むようにして少しずつ、その砂山の下部にトンネルを掘っていく。美紀の言った通り、少しでも余計に力を込めると山の天辺がポロポロと崩れかけた。

(…結構難しいな)

崩れかけた天辺を軽く叩き、静かに形を整える。それを終えてからまたトンネルを掘り、どこかが崩れかけたらそこを直し、そんな地味な作業を少しずつ繰り返していく。

美紀「もう少しですね…」

「ああ、そうだね」

あと少し…あと少しでトンネルが開通するだろうというその時、砂を掘り進めていた彼の手…その指先が何かに触れた。彼も最初は砂に小枝か何かか混じっていたのだろうと思ったのだが、どうも違う気がする。指先で撫でたそれは微かにしっとりとしているが柔らかく、少し温かいのだ。

(なんだ、これ…)

美紀「あ…っ…せ、先輩っ…」

「ん？なに？」

その感触を確かめると、美紀が小さな声で彼を呼ぶ。見つめたその顔は頬が真っ赤に染まっており、照れているようにも見えた。

美紀「それ…私の手…ですよ？」

「……………」

言われてみると、確かにそんな感じの感触だ。彼は夢中になって忘れていたが、美紀も向かい側からトンネルを掘り進めていたのだ。それが開通した時、手が触れてしまう可能性があるのは当然だろう。

「ほんとごめん…」

美紀「いえ…大丈夫です…」

本人に言われるまでの僅かな間、その手のひらを隅々まで撫でてしまった…。美紀の恥ずかしそうな顔を見た彼は申し訳なさそうに頭を下げ、開通した砂のトンネルから手を抜こうとする。

美紀「……っ」

「…っ？み、美紀…？」

抜こうとした手が、美紀の手にガシツと掴まれた。どうしたのかと思っただけはその顔を覗くが、彼女は彼の右手を左手で掴んだまま俯くだけ…。その際、どちらかの手がトンネルの壁を抉えぐってしまったのか。砂の山は二人の手を包むようにして崩れてしまった。

「崩れ…たけど？」

美紀「……そうですね」

応えながら、美紀は彼の手をギュツと握る。それもただ握るだけではなく、互いの手のひらと手のひらが重なるよう、わざわざ握り直してから一本一本の指を絡めていったのだ。

美紀「砂に埋もれてるから…誰にも気づかれません…。だから先輩さえ良ければ、もう少し…もう少しだけ、手を握っていてもいいですか？」

赤く染まった顔を彼の方へ向け、美紀は砂の中に埋もれた手を握る。手を握る事自体は別に構わないのだが、彼は不思議に思う。何故このタイミングで、しかも相手が自分なのだろうと…。

「なんで、僕の手を？」

美紀「……だめなら……いいです……」

恥ずかしかつていているような、困ったかのような……そんな力ない声で美紀が呟く。彼女は彼の顔から照れたように目を逸らすとそつと手を離そうとしたが、彼は離れかけたその手を今度は自分から握り返した。

美紀「あ……っ……」

「美紀がそうしたいなら構わないよ……。恋人みたいでドキドキだ」

美紀「恋人……ですか……」

彼はそんな冗談を放ち、場を和ませようとする。てつきり、呆れた声で『なに言ってるんですか……』などと言うようなツツコミがくると思っていたのだが、美紀は彼の手を握ったまま俯いている。その表情を確かめる事は難しいが、髪の間から顔を出しているその小さな耳が先まで真っ赤なのは分かった。

(なんか……可愛いな)

恋人みたいと言われた事に照れているかのような、そんな美紀がいつも以上に可愛く思えてしまう。他にも冗談を言っただけでイジメたいという気持ちもあるが、今はただ、手を握り合っただけ……。そう考えた時、彼はふと思ひ出す。

美紀『先輩……私、もしかしたら……』

以前、自宅に遊びにきた美紀が今ののように自分の手を握り、そんな事を言っていた……。あの言葉の続きは結局聞けなかったが、彼女はあの時……何を伝えようとしたのだろう。今、その答えを本人に聞くことも出来るのだが……。

(まあ……また今度でいいか)

と思っただけで、彼は無言のまま……砂の中で彼女の手を握る。ギラ

ギラと輝く太陽の下、海ではしやぐ由紀達を眺めながら美紀と手を繋ぐのは、少しだけ複雑な気持ちだった。

第四十二話 『うみのいえ』

少し泳いでみたり、浅瀬で水をかけ合ってみたり、浜で砂遊びしてみたり、そうして海で遊ぶこと約二時間……。時刻は昼を過ぎ、遊びっぱなしだった一同は空腹になり始めた。

悠里「少し遅くなっちゃったけど、そろそろお昼にしましょうか?」

由紀「さんせくっ!」

美紀「動いてばかりいると、やっぱりお腹が空きますね……」

「んじゃ、あそこにも行くっ?」

みんなが水着姿のまま荷物をまとめた後、彼は浜辺にある一つのこじんまりとした海の家を指さす。薄っぺらな屋根に覆われたそこには壁が無かったので遠目からでも中の様子が窺えるのだが、従業員と思われる二人以外の人影がない……。

胡桃「ガラガラだぞ……。あんなところに行くのか?」

「見た目だけで判断しちゃいけない。意外と美味しい料理を出してくれるかも知れないよ?……何より、近いし」

正直に言うと、彼もあの店に行くのはあまり気が進まないと思っていた。しかし、パツと見た限りだとこの海に出ている店はあるところだけ……。海辺から離れて町に行き、それから他の店を探しても良いが、それは少々めんどうだ。

果夏「あれ?あそこ、さつき飲み物買いに行つた時は誰もいなかったよね?それだから、私達はわざわざ遠くの自動販売機まで行つたわけだし……」

歌衣「ええ。てつきり空き家なのかと思いましたが……お買い物にでも行つてただけなんですかね?」

圭「なんでもいいよ。本当にお腹すいたから、とりあえず行ってみよう。先輩たちもそれで良いですよね？」

悠里「ええ。じゃあ行ってみましようか」

真冬「……………」

荷物の入ったカバンを持ち、一行は水着姿のままそこへ足を踏み入れる。歩くだけでデッキはやたらギシギシと軋むし、屋根に覆われた室内には明かりがない…。あるのは四角いテーブルが三つと、それぞれを囲むように置かれたパイプ椅子。そして、薄汚れた厨房のスペースで腰を下ろして休む二人の男の姿だ。

由紀「ボロボロだね」

悠里「こら、そういうこと言っちゃだめ！」

咄嗟に由紀の口を塞ぐ悠里だが、彼女自身も由紀と同意見だった。テーブルは汚いし、パイプ椅子はボロボロだし、部屋の隅でノロノロと回る扇風機の羽根も茶色く変色している…。

悠里「あ、あの…：今って営業中ですか？」

？「ん…う…ああ、客かよ…：面倒だな。へいへい、営業中ですよ、と」
中の様子を見て、出来るなら営業中じゃないと良いな…：などと願う悠里だが、気だるそうに立ち上がった従業員が言うには、ここは一応営業中らしい…。

悠里（なんか…：店員さんの態度もあまり良くないわね…：）

長めの茶髪…：ダルそうな目…：そして客を見て『面倒だ』と言っているその態度。出てきた男はわりと若く、恐らくは彼女達より一回り年上だという程度なのだろうが、あまり印象は良くない。

？「…で、何にするか決めたの？」

悠里「あつ、すみません…：まだです」

？「ああそう…。じゃ、決まったらまた——」

男はめんどくさそうに頭を掻いていたが、こちらを向く悠里…：そし

て他の女性陣をチラツと見て、ポカンと間抜けそうに口を開く…。

悠里「…？な、なにか？」

？「いや…：レベル高い娘が多いなと思って…。ってというか、お姉さんのおっぱい大きいね…」

悠里「なっ!？」

両手をバツ！と胸に寄せ、悠里はそこを隠しながら頬を染める。男はそんな彼女の反応を見てニヤニヤと不気味に微笑むと、悠里の後方にいた歌衣の前へ立った。

？「こつちも凄いな…。いや、最近の若い娘つてのは良いもの持ってたんだなあ」

歌衣「へっ…？あ、あのっ…」

胡桃「おい、あたしの後輩を変な目で見ると。ていうか、あたしらを変な目で見ると。いくらなんでも怒るぜ」

男が歌衣の肩に触れようとしたので、隣にいた胡桃がその手を掴む。右手を掴まれたその男は胡桃の睨みに全く動じず、まだニヤニヤと笑っている。

？「わるいわるい。最近全く客が来なくてさ…。そんな中、久々に来た客がこんなにも可愛い娘ばかりだったんで、ついテンションが上がっちゃったわけよ。まあ許してくれや」

「客が来ないのは店が汚ないのと、店員の態度が原因なんじゃ…」

？「全くその通りだ。返す言葉もない。いくら俺がカッコいい、かつ紳士的でパーフェクトな接客態度を見せていても、店がこんなに汚ないと意味がない。おまけに、もう一人の店員は寝てばかりいて俺の足を引っ張ってるし…」

彼はこの男に向け、嫌みの言葉を放ったつもりだったが、どうやら伝わらなかつたらしい。一同がこの男の前向きさに少しばかり引いていると、男は厨房の方へ向かい、そこに置かれていた椅子に腰掛けながら寝ていたもう一人の店員を睨む。

？「おい、圭一さん！起きろつての！客だぞ!!」

圭一「…起きてるよ。ただ、めんどくさいから無視してたんだ。ついでだから教えてやると、さつきあの男が言っていた言葉は…穂村、お前に対する嫌みだぞ」

穂村「はあつ?!おい少年つ！それはマジなのか?!態度が悪いつてのは…この俺に言つてやがったのか!？」

「少なくとも、やつて来た客を見ておっぱいがどうか言う店員はかなりヤバいでしょ…。あんたみたいなやつは今まで見たことがない」

圭一と呼ばれた男はめんどくさそうに椅子から起き上がり、一瞬だけ悠里達を見回してからアクビする。一方、その悠里達にやたらと絡んできた店員：穂村はさつき彼に言われた言葉が自身への嫌みだと知り、苛立ちの表情を浮かべた。

穂村「こ、こいつ…言つてくれるじゃねえの…!!」

真冬「…みんな、やつぱりここはやめよう。こんな変な店員がいるような店の食べ物なんて、ボクは食べたくない」

穂村が彼に突つかかろうと歩み寄ってきた瞬間、真冬は二人の間に入って穂村の胸をポンつと押し退ける。確かに、この店はあまり居心地がよくない。

穂村「っ…!ここから出ていきたくやテメエだけ出てけ!このペチャパイ女が!そうしてどつか別の店で、胸が大きくなるような食いもんでも探してから出直してこい!」

自分の事を押し退けた少女、真冬の平坦な胸を見つめ、穂村は鼻で笑う。すると真冬は悲しげな表情をしながら自らの胸をビキニ越しに撫で、ギツ…と鋭く、冷たい目線を穂村へと向けた。

真冬「……………殺す」

圭「ちよつ!?ま、真冬つ！怒つちやだめだよ?そりやまあ…今の言葉はかなりキツかっただろうけどさ…」

最も触れてほしくない自身の身体的特徴を挑発に使われ、真冬はこれまでに見せたことのないような冷たい目を穂村へと向ける。その目があまりに冷たく、恐ろしいものだった為に周りの人間が固まる中、圭は必死に彼女を押さええた。

真冬「圭…どいて。今、わりと本気で怒ってる…」

圭「それはよくわかってるよ？でもさ、ここは一旦落ち着いて—

—」

果夏「このおっつ!!」

穂村「なっ!?!うぎいっ!!」

圭が真冬を落ち着けようとしている最中、果夏が突如大きな声をあげながら穂村へと突進し、勢い良く穂村を押し倒す。果夏は押し倒した穂村の上に馬乗りになると左手で髪を…右手で頬を掴んで穂村を痛め付けた。

果夏「真冬ちゃんに酷いこと言ったな!?!謝れっ!謝れこのヤンキー!」

穂村「いてっ!いてっ!!誰がヤンキーだ!!」

果夏「あんたしかいないでしょう!!こんなに汚い茶髪して!!」

悠里「ちよっ、ちよっと…!!」

美紀「果夏っ!!やめなっつて!」

相手の茶髪をグイグイと引っ張る果夏を止めるべく、悠里と美紀はそこへ駆け寄る。彼や胡桃もそれに手を貸そうとしたのだが、圭一が二人の肩を指先でちよんちよんつと叩いた。

圭一「注文は?」

胡桃「今、それを聞くのか?」

「とんでもなくマイペースな人だな…」

果夏「焼きそばでお願いしますっ!!」

悠里「頼んでる場合じゃないでしょっ!」

美紀「もう離してあげなっ!」

穂村「ぐうっ!!マジで痛いっの!!」

穂村に馬乗りで襲いかかったまま、果夏は大声で注文する。これだけ大騒ぎで争っていても、注文をとる圭一の声聞き逃さなかったようだ。

圭一「焼きそば一つ…。あとは?」

由紀「じゃあ、わたしはカレーで!」

歌衣「私も同じので」

圭一「カレー二つ…:と」

由紀、歌衣も注文を済ませ、席へとつく。この二人も大概にマイペースな性格のようだ…。圭一はそれらの注文を紙に記していきながら辺りを歩いて周り、他の注文をとっていく。

圭一「…お前らは?」

「…:ラーメンで」

胡桃「注文すんのかよ!」

「いや、だってもう三人は注文してるし…:ここまで来たら仕方ないでしょ」

胡桃「はあ…:。じゃあ、あたしもラーメンで」

もう仕方ない。ここは諦めようと思い、胡桃も注文を済ませる。その後、何だかんだで真冬に圭、悠里と美紀も注文をしたのだが…。圭一が厨房でそれらの支度をしてる時ですら、穂村は果夏の手により痛め付けられていた。

果夏「どうっ!?!もう酷いこと言わない!?!」

穂村「い、言わねえっ!だからもう降りろっ!」

果夏「よろし！じゃあ降りてあげるけど、ちゃんと真冬ちゃんに謝るんだよ？分かったね、お兄さん？」

穂村「わかったわかった…。ったく、散々な目に遭ったぜ…」

ようやく果夏から解放された穂村は参ったようにため息をつき、席についていた真冬の前へと歩み寄る。

穂村「あく…：…さつきは悪かった。許してくれ」

真冬「…：…仕方ないから許してあげる。これに懲りたらもう二度と、女の子の体をバカにはいけない」

穂村「はいはい…。すみませんでした」

果夏につねられていたせいで真っ赤になってしまっている頬を撫でながら、穂村は厨房へ戻って圭一の手伝いをしていく。二人は少ししてから出来上がった料理をそれぞれの元へと運んだのだが…

圭「…：…」

果夏（…：まずそう）

テーブルに乗せられた物を見つめ、皆が言葉を失う。ラーメンは麺が伸びきっているし、カレーはほとんど具が無い上に何か粉っぽい…。焼きそばに関しても同じで、麺がゴムのようになっていた…。

美紀「…：个性化的な味ですね」

胡桃「ん…：んん…：…そうだな…：…」

「はあ…：…」

それぞれ直接的な言葉を避け、苦しげな表情のままそれらを口に運ぶ。圭と果夏に限っては一口目以降、全く手が動いていない。

由紀「…：おいしくないね」

悠里「ゆきちちゃんっ！しく！」

ハッキリ言っただけの由紀の口を塞ぎ、悠里は恐る恐る振り返る。彼女が振り返った先…：そこにいた穂村、圭一の二人は由紀の言葉を聞

いていたらしいが、気にしている様子はない。

穂村「まあ、マズイだろうな。俺ら、料理とかろくに出来んし…」
胡桃「おいおい…なんでそんな人達がこんな店やってんだよ…」

持っていた割り箸を置き、胡桃はコップに注がれていた水を飲み干す。こんなにもマズイラーメンで腹を満たすくらいなら、水だけ飲んでいた方がマシだ。

圭一「俺達だつてやりたくてやってるわけじゃない。ただ、知り合
いの手伝いをやらされているだけだ…」

穂村「正直言えばもうやめたいけど、結構な額を前払いで貰っ
ちまったからな…。やめるにやめれないわけだ…」

悠里「へ、へえ…大変なんですね…」

圭一「一番大変なのは、こんな店に入ってしまったお前らだと思
うがな…」

いくつかの皿に残っている食べ残しを見つめ、圭一は鼻で笑う。結
局、出された料理を全て食べたのは悠里、美紀、胡桃、歌衣…そして
彼だけだった。悠里達は席から離れ、会計の準備をするが…。

圭一「ああ、代金はいらさない。全部タダだ」

悠里「えっ!?! どうしてですか?」

財布を出した瞬間、圭一が言った言葉に皆が驚く。もう一人の店員
である穂村もその言葉には驚いているらしく、目を丸くしていた。

圭一「こんなマズイ料理に金を払うのは嫌だろ?俺だったら間違
いなくお断りだ。だからタダにした。それに、穂村にちよつかいを出さ
れて不快な思いもしただろうからな…」

穂村「…俺のせい?」

圭一「ああ、お前せいだ。反省しとけ」

真冬「まあ、確かに不快な思いはした…。料理も死にたくなるくら

い不味かった…」

圭一「だろ？だからタダにしてやるよ。それに、お前らここの値段見たのか？お前らが頼んだ料理、どれも1500円だぞ…。こんなポツタクリだろ…」

言われてから、壁に張られているメニュー…その下に小さく書かれた値段を見つめる。そこには確かに、圭一の言ったままの値段が記してあった。

果夏「たつか…!!」

真冬「あんなゴミが…1500円…?」

圭「ゴミって…まあ、確かに不味かったけどさ」

確かに、あの料理のレベルでこの値段は少しばかり割りに合わない…。というか、値段の表示がやたらと小さいのが卑怯な気がする。そばに寄り、よく目を凝らさないと確認できないほどだ。

悠里「えつと…本当にタダでいいんですか？」

圭一「ああ。ここで使うくらいなら、別の場所でもつと旨いもんを食ってこい。どんな店でもここよりはマシだろ」

悠里「…じゃあ、お言葉に甘えます。ありがとうございます」

料理はかなり不味かったが、それでもタダならありがたい。一同は二人（主に圭一）に頭を下げ、その店をあとにした…。

穂村「タダなんかにして、本当に良かったのかねえ…。この夏の間、結局大した稼ぎはあげられなかったけど…」

圭一「まあ、俺達の知ったことじゃないさ。損するのは柳のヤツだしな」

穂村「…それもそうか」

もう給料も貰っているし、あとはどうにでもなれば良い。そんな歪んだ考えを浮かべつつ二人はニヤリと微笑み、海辺へと戻る彼女達の背中を眺めた。

「…酷い店だったな」

美紀「でも、タダにしてもらえたから良かったじゃないですか」

「まあね…。あれで1500円はちよつとな…。」

浜辺を歩きながら、それぞれが今の店の愚痴をこぼす。しかし、あの店に行った事で学べたことも三つあった。まず一つ目…どんな店でも値段はしっかり確認しようということ。そして二つ目…胸の事を言うと、真冬は本気で怒るということ…。そして三つ目…

歌衣「えつと…あの店の料理、そんなに変な味でしたか…？私
は、とても美味しい料理だなあと思つて食べていたんですが…。」

胡桃「はっ…？」

圭「え…。」

悠里「う、うくん…。」

歌衣の舌が、他の人間と比べて少し特殊…という事だ。

第四十三話『にゆうよく』

思う存分、海での遊びを満喫した由紀達一行…。

気づけば日も暮れ始めており、宿へ戻った彼女達だったが…。その宿のお手伝い少女、未奈が言うにはまだ夕食の仕度が出来ていないらしい。それならば仕方ないと、彼女らは夕食よりも先に湯浴みをすることにした。

由紀「ふう〜っ…きもちいいね〜♪」

悠里「ええ、ほんとね…」

宿内にあつた浴場にみんなで浸かり、心地よさそうなため息をつく。しかしみんなと言っても約二名…ここにいない者もいた。男である彼と、何故か皆との入浴を拒んだ狭山真冬だ。

悠里「狭山さん、自分は『後で入るからいい』なんて言ってたけど、どうしたのかしら？」

果夏「あ〜…あの娘はですね、あのクールな態度に似合わず、結構恥ずかしがり屋さんなんです。わたしも何度かあの娘の家に泊まりに行ったり、逆に私の家へ招いたりしてるんですけど、お風呂だけは一緒に入ってくれないんですよ〜」

悠里「へえ、そうだったの」
果夏「女の子同士なんだから、気にしなくてもいいのに…。ツマンナイですよね〜」

果夏は不満そうに頬をぷくぷくと膨らませ、そのまま悠里の横へと移動する。そうして彼女は湯に浮かぶ悠里の胸をじゅつと見つめ、直後にそれを指先で突ついた。

ツンツンっ

果夏「ほ〜っ…」

悠里「な、なにかしら…？」

果夏「おつきな浮き袋が二つ…。りーさん、この胸があれば絶対に溺れないんじゃないですか？」

悠里「そんなことあるわけないでしょ！もうっ！あまり触らないで！」

悠里はザバツ！と音を発てながら勢い良く振り向き、果夏に背を向ける。ついでに胸も両手で隠しながら、目線だけをそつと背後に向けて果夏のことを警戒した。

果夏「……じゃあ歌衣ちゃんでもいいや。ね、胸突つつかせて？」

歌衣「え……嫌ですよ…。果夏さん、なんか目が怖いですし…」

果夏「ちえつ、ノリが悪いなあ…。女の子達がお風呂でじゃれあうという貴重な音声を、男湯にいるあの先輩に届けてあげようと思ったのに…」

胡桃「おいおい…」

美紀「はあ…果夏はほんとに……」

呆れたように、というか実際に呆れているのだが、美紀がやたらと深いため息をつく。ため息をつきながら前髪を整える彼女を見た果夏はムツとした表情を浮かべ、今度はそっちへと寄っていった。

果夏「ほんとに……何？」

美紀「ほんとに……だなんて思って…」

果夏「…聞こえないよ」

美紀「……間抜けだな…と思ったの」

本当は『バカだな』と言ってやりたかったが、そこまで言うのはさすがに悪い気がしたのでほんの少しだけ柔らかな言い回しにする。しかし果夏にとってはバカも間抜けも大差なかったらしく、眉間にシワを寄せていた…。

果夏「なんか、美紀ちゃんも真冬ちゃんみたいになってきたね。最

初は優しい娘かと思ったのに、わたしに対して容赦がない！」

美紀「あ……ごめん……」

さすがに傷付けてしまっただろうか……。少しずつ顔を俯ける果夏を見た美紀は不安になり、彼女の肩にそっと手をあてる。すると、果夏はその手を静かに掴んで顔を上げた。

果夏「んく……やつぱり、雰囲気もほんの少しだけ似てるよね。美紀ちゃん、もう少しだけ目を細めてくれる？」

美紀「えっ？目を……？」

果夏「うん。なんかこう……眠たそうというか、感情が死んでるかどうか……というか……人を殺したことがあるような冷たい目とか……そんな感じに細めてほしいかな」

美紀「そ、それ……真冬のこと？」

果夏「うん、そだよ」

満面の笑みを浮かべて告げる果夏だが、それを聞いた美紀は苦笑いしか出来ない……。また、そんな二人のすぐ後ろにいた胡桃、圭もまた、なんとも言えぬ苦い表情をしている……。

胡桃「感情が死んでるような目って……」

圭「ひど……あんた、本当に真冬のこと好きなの？」

果夏「そりやもう！やばいくらいに大好きだよ！」

……見た感じ、嘘を言っているようには思えない。つまり、果夏は真冬の目を見てただ純粹にそう感じていただけなのだろうか……。

圭「確かにちよつと冷たい目はしてるけど……」

胡桃「さすがに、そこまで酷くはないよな……」

果夏に悪気はないのだろうか、真冬本人がこれを聞いたらどう思うのだろうか。そんな事を思いつつ、美紀は風呂から上がろうとしたが……。

果夏「だめくっ！あとちよつとだけ先輩にサービスをしよう！」

美紀「なっ!?果夏っ!!どこ触つて——」

果夏「せんぱーい!聞こえますかあ?美紀ちゃんの胸、ぷにぷに
でっせ〜!!」

逃げようとする美紀を背後から捕らえ、再び湯の中へと引きずり込む。果夏は暴れる美紀の肩を左手で押さえつけつつ、右手で彼女の胸を驚掴みにした。

美紀「かつ、カナっ!!ほんとにやめ…!ん…っ!!」

果夏「真冬ちゃんより大きいけど、美紀ちゃんの胸も可愛い…。先輩っ!これはかなり可愛いですよ!!」

美紀の胸を撫で回すように揉みつつ、果夏は壁の向こうにある男湯目掛けて声を張る。これだけの声なら、隣の空間にいるであろう彼にも丸聞こえだろう。

美紀「カナ…っ…ほんとにやめっ…:う…ん♡」ビクッ!

果夏「ふああっ!?先輩っ!今の聞きましたか!?あの美紀ちゃんが、あのみーくんが!!体をビクッてさせながらとても可愛い声を一

果夏がこんなにも興奮しているのは、美紀の雰囲気少しだけ真冬に似ているからなのかも知れない…。果夏は目を大きく見開いたまま、まるで変質者かのように鼻息を荒げ、美紀の胸を揉み続けたのだ。ふと、背後にゾツとするものを感じた…。

悠里「…果夏さん。もう、いいかげんにしなさい…?」

果夏「っ…!で、でも…:でもっ…!」

悠里「でも…じゃないでしょ?ほり、早く美紀さんから手を離して、こつちを向きなさい?」

果夏「…は…はい…」

そつと手を離すと、美紀は赤く染まった顔で果夏の事を睨みながら離れていく。果夏はそんな彼女にペコツと頭を下げた後、背後にいる悠里の方へと身を向けた…。

悠里「……………」

果夏「お、怒ってますか…?」

悠里「さあ…どう思う?」

果夏「り、りーさんは優しいから…怒ってない…かな?」

へへへ…と弱々しい笑い声をあげ、果夏は悠里の目を見る。その目は冗談など通じないだろうと思わせる程に鋭く、果夏はすぐに顔を俯けた。そうして向けた視線の先、そこでは悠里の大きな胸がぷかぷかと湯に浮いていた。

悠里「私は優しい……。ふふつ、ちよつと買いかぶりすぎよ♪」

果夏「……………」

由紀「わ、わたしは出よつと……………」

胡桃「あ…じゃあ、あたしも……………」

悠里を包む空気がガラツと変わり、完全なる説教モードに入る。その恐ろしさを知っている由紀と胡桃はいち早く浴場から立ち去り、美紀と圭、そして歌衣もそれに続いた。

「ああ、お帰り」

胡桃「…あれ?もうあがったのか?」

宿から借りた浴衣に身を包み、浴場から近い休憩スペースに寄ると、彼と真冬がそこにいた。二人は、皆が戻るまでここで時間を潰していたらしい。

「男湯の方は今、清掃中みたいだね。入れるのは一時間後だよ」

圭「じゃあ、果夏は誰もいない空間に向かって大声を出してたのか…。ちよつとバカみたいじゃん」

美紀「バカみたいなんじゃなくて、バカそのものだよ…」

珍しく、美紀がかなり怒っているように見える。彼女が何故怒っているのか…その事情を知らぬ彼と真冬は一瞬間を見合わせた後、美紀の口から全てを聞いた…。

真冬「なるほど…バカだバカだとは思っていたけど、そこまでのバカだとは思わなかった…。美紀、バカが面倒かけてごめんね…。でも、出来るなら許してあげてほしい。カナはただのバカだから、悪気とかはないと思うから…」

美紀「…うん」

圭「先輩。今、真冬は何回『バカ』って言ったのでしょうか？」

「何回だろうな…。少なくとも三回は越えていた…」

由紀「なにに、なぜなぞやってるの?」

とても純粹な笑顔で彼と圭のそばへと寄る由紀だったが、二人の会話の内容は”なぜなぞ”とはまた違うものだ…。由紀の笑顔を見て二人が気まずそうにしていると、ようやく悠里と果夏もそこへと現れる。

悠里「みんな、お待たせ」

果夏「……………」

真冬「泣きながら帰ってくると思ったのに…意外と余裕?」

果夏の事だ。てつきりボロボロと泣きながら真冬に抱きついてくるものかと思っただが、彼女は一滴の涙も流していない。まあ…顔色はかなり悪いが…。

果夏「余裕じゃないよ…。リーさんは怖いし…みんなは出ていっちゃうし…。わたし…もうあのまま死んじゃうんじゃないかと思っただ…。人間って、本当に怖いときは涙すら出ないんだね…」

力無い声で言いながら美紀の方へと歩みより、果夏は頭を下げる。

果夏「美紀ちゃん、さつきはごめんなさい…」

美紀「う、うん…。もうしないですよ？」

果夏がしっかりと反省したその時、通路の方から着物に身を包んでいるこの宿のお手伝い少女…未奈がひよこつと顔を出す。彼女は休憩スペースで話す由紀達を見てニッコリと微笑んだ後、彼の前へ歩み寄った。

未奈「男湯の方の掃除が終わりましたので、もう入っていいですよ

♪

「ああ、ありがとうございます。聞いていたより早く終わりましたね？」

未奈「ええ。早く入りたいんじゃないかと思つて頑張りました！…にしても、みんな仲が良いんですね♪」

ニコニコと満面の笑みを浮かべ、未奈は美紀や果夏の事を見つめていく…。一瞬、彼女が何故こんな事を言ってきたのかと不思議に思つたのだが…。美紀はすぐにそれを理解して顔を真っ赤に染める。果夏が自分の胸に触れ、その感想を男湯へ向け言っていた時…未奈はこの清掃をしている真っ最中。つまり、彼女は全てを聞いていたのだ。

美紀（な、なんか恥ずかしい…）

「……………」

顔を真っ赤に染める美紀を見て、彼は首を傾げる。しかし、聞かれたのが未奈でまだ良かっただろう。あの時、美紀は果夏に触れられた事で一瞬、甘い声を漏らしてしまった…。あれを彼に聞かれなかった事だけは不幸中の幸いだったと、美紀は少しだけ安堵した…。

第四十四話 『おやすみ』

未奈「お待たせしました〜」

由紀達が入浴を終えた後、真冬…そして彼も互いに入浴を終え、浴衣に着替えて部屋へと戻る。室内にある窓の外はもうすっかり暗くなり始めているが、昼間に遊んだ海もうつすらとそこから眺めることが出来た。そんな時、この宿のお手伝いをしている少女、未奈と白雪が部屋の戸を開く。

未奈「お食事をお持ちしました。遅くなっちゃってすみません」

悠里「いえ、平気ですよ。これ、テーブルに運んでいいですか？」

未奈「あつ、大丈夫ですっ！私達でやるので…！」

未奈が持ってきた料理の乗っているプレート運びを手伝おうとする悠里だが、未奈から見れば彼女達は客…。わざわざ手を煩わせるのも悪いと思っているのだろう。未奈はどこか危なっかしい雰囲気です歩き出し、料理を持ったまま部屋へと踏み込んだ。

未奈「うう…：…わわわっ…!?!」 グラグラッ！

歌衣「ひっ!?!」

胡桃「あぶなっ!?!」

バランスを崩しかけた未奈の元へサツと駆け寄り、胡桃は彼女が両手に持っていたプレートを支える。もし今、胡桃がこうしなかったら、彼女はこの料理を部屋中にばらまいてしまっただろう…。

未奈「ご、ごめんなさいい…！」

胡桃「も、もういいよ。あたしが運ぶからさ」

少し悪い気もするが、このまま見守っていて料理が台無しになるのは避けたい。胡桃は仕方なく彼女からプレートを奪い、危なげない足取りでそれを部屋の真ん中にあるテーブルの上へと運んだ。

胡桃「まだあるよな？」

未奈「は、はい…。もうちよつとあります…」

由紀、胡桃、悠里、美紀、圭、真冬、果夏、歌衣、そして彼…。総勢九名分の料理はさすがに多く、今胡桃がテーブルに乗せたのと同じくプレートに乗せられた料理がまだ、廊下の方に行くつか置かれていた。

白雪「…よいしょ」

美紀（白雪ちゃんの方がしつかり運べてる…）

未奈はあれだけグラグラと揺れながら歩いていたのに、彼女よりも一回り幼い白雪の歩みはとても安定している。見ていて感心する程だ。

「さて、僕も手伝うか…」

未奈に運ばせるのは少し不安…。かといって、白雪と胡桃にだけ任せておくのも悪い。彼は自分も廊下へ出て、そこに置かれていた料理を運ぼうと手を伸ばすが…

??「ああ、大丈夫ですよ。こつちでやるんで」

そこにいた一人の少年に言われ、彼は伸ばしかけていた手をそつと引っ込める。見たところ、その少年も彼や由紀達と同年くらいだろうか…。未奈や白雪同様に着物を着たその少年は残っていた料理を手早く運び、それから未奈を見つめて深いため息をついた。

??「お嬢にはまだ…料理を運ぶことすら…」

未奈「そつ、そんな事ない！…ここまではしつかり運べたもん！失礼なこと言わないでよ!!」

バシツ!!

??「いてっ！」

未奈は顔を真っ赤にしながら手を振りかざし、その少年の頭を叩く。それらを見つめていた悠里達はなんとも言えぬ表情で苦笑いし、白雪はその少年の袖をクイクイツと引く。

白雪「ゲンジ…自己紹介」

弦次「ああ、そうだな。えつと、俺は丈槍弦次^{げんじ}。おじよ…じゃなくて、未奈と同じくこの手伝いをしている者です。どうぞよろしく」少年は丁寧に頭を下げ、客である一同に自己紹介をする。それを見た白雪が真似するようにして頭を下げると未奈も頭を下げたのだが、その様子があたふたとしていて面白い。

由紀「わたしの名字も丈槍だよ。偶然だねえ♪」

弦次「そうですね」

弦次が自分と同じ名字だと知り、由紀はニコニコと微笑む。弦次がそんな彼女に対して笑顔のまま礼儀正しい素振りを見せると、横に立つ未奈もニヤニヤと微笑み出す。

未奈「ゲンくん、凄く礼儀正しいね。ちゃんと接客出来てえらいえらい♪」

弦次「おじよつ…！じゃなかった…。未奈っ！頭を撫でるなっ!!」『ふふっ』と微笑みながら頭を撫でてくる未奈の手を払いのけ、弦次は彼女との距離を開く。ここだけ見ると二人はとても親しい間柄のように見えるが、実際はどうなのだろう。

圭「ええつと、お二人はお友達？それとも——」

果夏「カップルですかっ!？」

弦次「あはは…」

未奈「どうでしょうねえ♪」

白雪「でしようね〜」

鼻息を荒くして尋ねる果夏の問いに対し、弦次と未奈は曖昧な返事

を返す。この様子だと、少なくとも友達以上の関係なのは間違いなさそうだ。

真冬「…これ、おいしい」

美紀「ま、真冬…もう食べ始めてたの？」

真冬「うん。お腹すいてたから…」

みんなが話している最中にも関わらず、真冬はマイペースに食事を始める。未奈達が出てきてくれた料理は煮物、てんぷら等の和食だが、一足先に食べ始めていた真冬が言うにはそのどれもが美味しいらしい。

未奈「じゃ、長居しても悪いので私達はこれで…。食事の方、どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいね」

白雪「食器はあとで取りにくるので、そのままです」

悠里「はい。じゃあ、いただきますね♪」

未奈達が部屋から出ていった後、悠里達はそれぞれがテーブル前の座布団へと腰を下ろす。そうして全員が食事を始めた訳だが、確かに真冬が言っていたとおり、この料理は中々のものだった。昼間、あの海の家でとった食事が酷かったので、余計に美味しく感じるのかも知れない…。

彼女らが食事を終えた頃、ちょうど良いタイミングで未奈達が現れ、空いた食器をさげていった。食事を済ませた一同は少しの間、暇潰しに談笑した後、布団を敷いて就寝の準備を始めていく…。

悠里「ゆきちちゃん、そっち引つ張ってくれる？」

由紀「は〜い」

美紀「圭、こっちにも枕かして」

圭「はいはい、分かったよー」

それぞれが協力し合った甲斐もあり、布団は思ったよりも早く準備出来た。びっしりと横並びに敷かれた布団……。誰がどこに眠るのかと一同は悩んでいたようだが、最終的に手前から悠里、由紀、胡桃、歌衣、圭、美紀、果夏、真冬くという順に決まったようだ。一方、彼も彼女らと同じ部屋の中で寝るには寝るのだが……

胡桃「じゃあ、お前は明日の朝までそっちな。ま、何か用があったら言えよ」

「あく……はい。わかったよ」

悠里「ごめんなさいね。さすがに仕切りも無く……って訳にはいかなから」

彼の寢床は彼女らと同じ部屋……。しかし、部屋の中央にあつた襖ふすまを完全に閉め切る事で簡易的ながらも隔離された場所だった。申し訳なさそうな顔をする悠里がパタツとそれを閉めると、彼は二分された部屋の片方に一人きりになってしまった……

「むう……」

襖の向こうは八人……こっちは一人……。人数が少ない分、空間を広々と使えるという点においてはこちらの方が優れているのだが、話し相手がいなのが何とも物悲しい……

(まあ、もう眠いし……別にいいか)

今日は朝から移動したり、昼は海で遊んだり……結構な体力を使った。おかげで彼はもう眠たいらしく、明かりを消してから一人静かに布団へ潜る。目を閉じると襖の向こう……そこから女性陣の楽しげな話し声が聞こえてきたので、彼はそれを子守唄代わりにして眠りについた……

くくくくく

彼が眠りについたのと同時刻……。巡ヶ丘市内にあるマンションのとある一室では、一人の女性が一匹の犬を前にして深く頭を悩ませていた……。

慈「ご飯はちゃんと食べたし、お風呂も入ったし……あとは寝るだけなんだけど、あなた……どこで寝たい？」

風呂からあがったばかりのその女性……佐倉慈は自分の髪を乾かすよりも先に目の前の犬、その濡れた体をタオルで拭いていき、互いに真っ直ぐ見つめ合う。しかしその犬……太郎丸は彼女に身を拭かれながら首を傾げるだけで、ちゃんとした答えなど返さない。

慈「うくん、聞いても分かるわけないわよね……。にしても、あなたのご主人さまは今頃何してるのかしらね……。もう夕食は済ませただろうから、みんなとお話したりして楽しんでるのか、それとも……もう寝たのかな？」

太郎丸「クウン？」

慈「宿のお料理……美味しかったのかなあ……。羨ましいなあ……。よし！私もまたお休みとって、どこかへ旅に行ってみようかな！」

太郎丸「……」

慈「でも、相手がないから一人旅になっちゃう……。はあ……寂しいねえ……。誰かいいい人がいればいいんだけど……あなた、一緒に来る？」

太郎丸「??」

ニツコリとした満面の笑みを向ける慈だったが、太郎丸は首を傾げるだけだった……。一人で犬に話しかけ、その犬を旅行に誘い、そして首を傾げられる……。直後に慈が感じたのは何とも言えぬ、底知れない寂しさだった……。

慈「はあ…なにをやってるんだろう…私。はい、拭き終ったよ」
慈は太郎丸をタオルから解放した後、今度は自分の髪をドライヤーで乾かしていく。大きな音と共にドライヤーから放たれる熱風を濡れた髪へあてていくと、いつの間にかベッドの上に乗っていた太郎丸がそこから不思議そうにこちらを覗いていた。どうやらドライヤーの音が気になるらしい。

慈「あなた…結局そこで寝るの？そこだと私と一緒になっちゃうから、少し狭いわよ？それでもいい？」

太郎丸「わんっ!!」

慈「…ふふっ、わかった。じゃ、今日は一緒に寝よっか♪」

ある程度髪を乾かし終え、慈はドライヤーの電源を切る。そうしてそのまま部屋の明かりを消すと一足先にベッドで待っていた太郎丸の横へと寝そべり、一つの掛け布団に二人で…いや、一人と一匹でくるまった。

慈「わんちゃんやんと寝るのなんて初めて…。かわいいなあ…」

掛け布団を体にかけても、そのまま横に寝そべって頭を撫でてでも、太郎丸は変に動いたりせず大人しくしている。先日、彼にこの子を一日だけ預かってほしいと言われた時は慈も驚いたものだが…こうして癒されるのなら、犬と一緒にいるのも悪くないと感じ始めていた…。

第四十五話 『はなし』

美紀「……………」
…パタン

美紀「もう寝てるみたいです。疲れたんですね」

ほんの少しだけ開いた襖ふすまをそつと閉じ、美紀は隣の空間にいる彼がもう眠っていた事をみんなに報告する。彼を一人にしてまだ十数分しか経っていないが、もう寝ているところを見るにかなり疲れていたのだろう。

真冬「よい子は寝る時間だから……」

果夏「じゃあ、今起きてる私らは悪い子って事だね!」

真冬「まあ、カナはそうかもね……」

果夏「なんで私だけ? みんな同罪じゃないのっ!?!」

真冬の言葉を聞いた果夏が驚いたように声を張るが、その声が少しだけ大き過ぎる…。彼女のすぐ隣にいた真冬もその声の大きさに両目をギュツと閉じながら耳を塞いでいるし、もちろん、悠里がそれを注意しない訳がなかった。

悠里「果夏さん、もう夜なんだから静かにね。彼だつてさつき寝たばかりなんだから、起こしたりしないように気を付けないと……」

果夏「あう…: すいません」

由紀「まーまー、次から気を付ければいいよ♪」

果夏「ゆき先輩…: ありがとうございますっ」

隣に腰を下ろしてきた由紀は果夏の頭を撫で、ニコニコと微笑む。果夏はその性格上、同学年はもちろん下級生や先輩達との交流も深い。だが、そんな彼女ですら由紀ほど可愛らしく、純粋な笑みを持つ生徒を他に知らなかった。

果夏「えへへ、ゆき先輩は可愛いなあ…♡」
由紀「そ、そうかな？なんか照れちゃうよ」

圭「…で、これからどうする？私らももう寝る？」

美紀「私は…まだあまり眠くないかな」

歌衣「わ、私もです…。枕とか布団が変わるとどうにも…」

既に布団は敷き終えているのだが、みんなその上に座っているだけで寝ようとはしていない。何故かというと、まだ眠気が訪れないからだ。唯一布団の中に身を置いている歌衣ですら、全く眠くなっていないらしい。

果夏「じゃあ、こんな時はアレですよね…」

真冬「アレ？」

果夏「うん…。女の子が夜、友達と集まってベッドの上でする話…」

胡桃「あ、ああ…。コイバ——」

果夏「そう！怪談っ!!」

胡桃「……………」

女の子が夜、友達とベッドの上で語り合う話…。そう聞いた時、胡桃の頭に一つの答えが浮かんだのだが、それは果夏が考えていたものとは大きく異なっていた…。

果夏「…あれ？今、くるみ先輩はなんと？」

胡桃「いや…なんでも…」

由紀「たぶん、くるみちゃんはみんなとコイバナが——」

胡桃「なっ、なんでもないって言ってるだろっ！余計な事を言うなっ!!」

由紀「むがつ!?むごご…!!」

胡桃は慌てた様子で由紀に覆い被さり、その口を手で塞ぐ。由紀は息するのも苦しそうに胡桃の手をバシバシと叩くが、胡桃は顔を真っ赤にしたままその口を塞ぎ続けた。

悠里「くるみ、ゆきちゃんが苦しそうよ」

胡桃「あっ…。わ、わりい…」

由紀「ゲホツ…！ゴホツ…！！もうっ！くるみちゃんったらバカ力なんだから!!このまま死んじやうかと思つたよ！」

胡桃「悪かつたつて…ごめんごめん」

胡桃が申し訳なきように謝る中、由紀は頬をプクーツと膨らませ、乱れた浴衣を整える。そうして場が落ち着きを取り戻し始めた時、果夏は再び口を開いた…。

果夏「で、怪談ですよ怪談!!みんなでやりましょ！」

悠里「怪談…ねえ。でも、私は何の話も用意してないわよ？」

果夏「むう、それは困つた…。実をいうと、私も特に持ちネタが…」

圭「言い出したのは果夏なのに、話のひとつも用意してないの？」

果夏「してないよ！やるつもりなかつたんだもん！」

なんと無責任な娘なのか…。果夏はただノリで『怪談だ!』と言つただけで、自分はそういう話を一つも知らないらしい。圭や美紀が果夏の言葉に呆れる中、胡桃と由紀は少しだけ安堵していた…。出来るなら、怖い話など聞きたくなかつたから。

由紀「お話がないなら仕方ないよね！じゃあ好きな漫画の話でも—

真冬「いや、大丈夫だよ…。ボク、一つだけ知ってるから…」

ポツリと放たれた真冬の言葉に、由紀は顔を真っ青に染める。由紀だけでなく、胡桃の表情もまた複雑そうなものだ。真冬に悪気はないと分かつてはいるのだが、正直に言う和一瞬『余計な事を…』と思つてしまつたりもした。

果夏「さすが真冬ちゃん!!じゃあ、明かりを弱めまして…。」

由紀「う…うう…」

胡桃「はあ……」

まるで由紀と胡桃の心境を表しているかのように、部屋の明かりがスウツ…と弱くなっていく…。果夏は部屋の明かりを消える寸前まで弱めると嬉しそうに真冬を見つめ、その話の始まりを待った。

真冬「これは、ある一家の話……」

それっぽい導入で話は始まり、皆がそれに耳を傾ける…。美紀、圭、悠里、そして果夏と歌衣は興味深そうにそれを聞いていたが、由紀と胡桃だけは真冬のみから視線を逸らし続けていた……。

真冬「…で、その一家の娘さんだけが生き残っていたんだけど、その娘も後日行方不明になって——」

由紀「……」

話が進むにつれ、由紀の視線が少しずつ真冬の方へ向く…。怖い話は嫌だが、真冬の話し方が上手くてついつい引き込まれてしまうのだ。そしてそれは胡桃も同じらしく、彼女は膝に布団をかけて真冬のみをじつ…と見つめていた。

真冬「あとからそこに引越してきた家族も何人が殺されちゃったんだけどね…。でも、相変わらず犯人は捕まらないまま…。面白半分でそこに訪れた人も何人かいたみたいだけど、みんな殺されたか、行方不明になってるんだって……」

果夏「おお……」

圭「お、おわり?」

真冬「うん、終わりだよ」

美紀「意外と…本気で怖い話だったね」

ちよつとした怪談を聞く気であったのだが、真冬が話したのはわりとハードな…強い恐怖感を感じる話だった。話が終わった今、この場に居る全員が冷や汗を流しながら真顔…もしくは苦い笑みを浮かべるほどに…。

果夏「じゃ、じゃあ…明かりつけよつか…！」

一刻も早く明かりの強さを戻し、この場の雰囲気明るくしよう。そう考えた果夏はそつと立ち上がるが……

真冬「…あ、言い忘れてたけど、これ本当にあったお話だからね」

果夏「なっ…！」

美紀「ほ、本当に？」

真冬「うん…。というかこの話に出てきた家があるのって……巡ヶ丘だし」

真冬がそう言った瞬間、場の空気が一気に冷たくなる…。ただでさえ怖い話だったのに、それが実話だと…そしてその舞台が近所だと知った今、パニックは避けられなかった。

圭「うわああっ…!!鳥肌立ったんだけどっ!!?」

胡桃「そういう情報はいらねえだろうっ!!なんで最後の最後でとんでもない事を言うんだ!!?」

真冬「え…?サプライズ…的なの？」

果夏「真冬ちゃんっ、そのサプライズはいらなかった…!!私、もう巡ヶ丘に帰りたくないっ！」

由紀「り、りーさん…:わたしも、帰りたくないかも…:」

悠里「だ、大丈夫よ。今のはあくまでもお話なんだし…:少しは誇張こちようされていると思うから」

というか、誇張されていないと困る。今にも泣き出しそうな由紀の頭を撫でる悠里ですら、この話が実話だと知らされた際には肩を震わせた。

歌衣「へえ、大変なお話があったんですね…。私も巡ヶ丘に住んでいるのに、ちつとも知りませんでした。そのお家、近所ですかね?」
胡桃「そりゃ同じ町にあるんだから、ある程度は近所だろうよ…:。つてか、近くにその家があったとして、お前はどうすんだ…:」

歌衣「一回この目で見てみたいかな〜とか思ってたり」

両手の指を合わせ、歌衣は穢れの無い笑みを浮かべる。お嬢様とい
うのは少し神経がずれているのか、彼女だけは今の話を聞いても怖
がっている素振りを見せていない。

胡桃「お前つ、今の話聞いてたか!?この家には行っちゃダメだつて
！」

由紀「そ、そうだよっ！呪われちゃうよっ!」

真冬「まあ、今はもう取り壊されるとかいないとか…そんな話も
聞くから、そこまで心配しなくても大丈夫だと思っただけね」

美紀「いるとかいないとかって、そんな曖昧あいまいな…」

そもそも、真冬はこの話を知った時に怖いとは思わなかったのだろ
うか？思えば、真冬が表情を崩すところを見たことがない…。そう思
うと彼女を怖がらせてみたいような、そんな気もするが…。

美紀（さつき真冬が話したよりも怖い話なんて、知らないしな…）
知っていれば話してやったのに…などと思いつつ、美紀は真冬の
事を見つめる。すると不意に目が合ってしまった、真冬は不思議そうに
首を傾げた。

真冬「…なに？」

美紀「いや、別に……」

果夏「よしよし。怪談はもう止めにするとして、今度はまた別のお
話でもしよつか！真冬ちゃんの話、ちよつと怖すぎたからね…明るい
話でもない」と

胡桃「そ、そうだな……」

弱めていた明かりを元の強さまで戻し、雰囲気を一変していく。今
度はどんな話をしようか…。彼女らがいくらか話し合っていると、そ
の賑やかな声が襖の向こう…そこで眠っていた彼の耳に届く…。

「う…うん…みんなは、まだ起きてるのか…楽しそうで何より…」
ボソツと呟きながら寝返りをうち、そのまま寝直そうとする。まだハッキリと目が覚めた訳でもないし、このままならまたすぐ眠りにつけるだろう…。

由紀「…るみちゃん…は…」

胡桃「べつに…じゃない…から…」

隣の空間から響く由紀、そして胡桃の声。ハッキリとは聞き取れないが、由紀が胡桃に何かを言い、それを聞いた他の娘らが笑っているようだ。

(…気になるな)

寝直そうと思っていたが、中途半端に聞こえてしまった会話の内容が気になりだす。彼はかかっていた布団をそつと払いのけると身を起こし、少しずつ…少しずつ…物音を発てないよう注意して襖の前へ寄り、静かに耳を澄ませる…。

胡桃「あたしがあいつと仲良くしてるのは、ただ気が合うからってだけだよ！だから別に好きとか…そういうのじゃなくて…」

果夏「えくつ、ほんとですか？怪しいなあ…」

胡桃「ぐつ…！ほんとだって！だいたいあいつだって、他に好きな娘とかいるだろうし…」

悠里「あら、今は彼が誰を好きなのかじゃなく…くるみが誰を好きなのか、っていう話をしているんだけど？」

果夏「そうだそうだった！」

胡桃「うっ…いや、だから…あたしは…そのっ…」

圭「くるみ先輩、顔真っ赤だ！かわいくっ♡」

胡桃「圭までそんなことっ…！」

皆にからかわれ、胡桃は顔を真っ赤に染める…。彼は会話を盗み聞いているだけなのでそれを目視したわけではないが、その様子は何となく想像出来た。

胡桃「お前らはどうなんだよ？好きな人…いるのか？」

圭「私は…：…悩み中つてとこですかね」

胡桃「悩み中つて、なんだよその答えは…」

圭に答えをはぐらかされ、呆れる胡桃の様子も容易く目に浮かぶ。話の流れから察するに、彼女達は恋愛話をしているようだ。彼女達のことな話題を盗み聞きするのは悪い気もするが、興味が無いと言えは嘘になる。

(もう少しだけ聞いてみよう…)

圭「あつ、美紀ちゃんはどう？好きな人とかいる？」

美紀「えっ？私？」

圭「あく…：やつばいいや。前から美紀ちゃんの友達である私はね、なんとなく…：本当になんとかなくだけど、それっぽい人を知ってるから」

美紀「なつ…、嘘言わないで。分かるわけないよ…」

圭「…：じゃあ、言つていい？」

圭はニヤリと微笑み、美紀の事を見つめる…。その意味深な笑みを見た美紀は少しずつ顔を赤くしていき、顔をそつと俯けた。

美紀「い、言っちゃだめ…。なんか、嫌な予感する…」

圭「あはは…。うん、分かったよ♪」

由紀「うくん。みんな青春してるんだねえ…」

由紀は両手を組み、うんうんと首を振る。あの怪談から数時間…：みんなと様々な話をしている内に話題が恋愛へ移ったわけのだが、どうやら皆それぞれ、気になつていいる異性がいるらしい。もつとも…：歌衣だけは異性ではなく、とある同性の先輩に好意を向けているようだが…。

歌衣「くるみ先輩は…：本当にあの人のこと好きじゃないんですか

？」

胡桃「好きじゃないっていうとアレだけど…まあ…その…」

果夏「まあまあ歌衣ちゃん、そんな怖い目で先輩をいじめちゃダメだよ。…けど、皆があ先輩をどう思っているのかっていうのは興味があるかも…」

あの先輩…つまり彼の事だろう。彼女達の話題が自分に移った事を知った途端、彼の眠気は完全に消え去る。彼女達が自分の事を良く思っているのか、はたまた悪く思っているのか…それを知る絶好の機会が訪れた。

果夏「まず、ゆき先輩はどうです？あの先輩のこと、どう思ってますか？」

由紀「わたしは好きだよ♪優しいし、面白いし！」

圭「たしかに、なんか変わってるけど面白い人ですよ。美紀ちゃんもそう思うでしょ？」

美紀「まあ…そうだね…」

彼は確かにちよつと変わった人ではあるが、一緒にいて面白い人だというのに間違いはない。この場にいた全員が、同じことを思っていた…。

果夏「そう言えばあの人って、彼女とかいるんですか？」

悠里「うくん、いないんじゃないかしら？」

胡桃「あいつの彼女とか、色々大変だろうな…」

(……どうい意味だよ)

心の中で胡桃の言葉にツツコミを入れ、彼は表情をムツとさせる。しかしながら、今のところ自分に対しての悪口らしい発言が特に無いのは救いだ。

胡桃「でもさ、あいつも意外と優しいところとかあつたりするし…自分からちよこつと努力すりゃ、彼女くらい簡単に出来ると思うんだ

よな…」

果夏「あら、やはりくるみ先輩はあの人の事を高く評価しているようですね？」

胡桃「ぐっ…！うるさいっ！」

悠里「でも、くるみが言っている事も分かるわね。私だって、彼を高く評価しているからこそ今回の旅を共にしているんですもの…。彼の事を信頼してなかったり、ましてや嫌いだったりしたら、同じ宿に泊まるなんて出来ないわ」

圭「ああ、言われてみればそうだ…。私も他の男子と同じ宿に泊まるのなんて嫌だけど、先輩と一緒になのは全然平気だったな…」

美紀「他の人が相手だと、水着姿とか見られるのも恥ずかしいし…。相手が彼だからこそ同じ宿に泊まれたり、水着姿を見せられたりした。しかしこれを他の男子生徒相手に…となるとハードルが高く思える。彼だって他の男子と同じ男なのに、何故か安心できるような…そんな気がするのだ。」

果夏「そう言えば、真冬ちゃんも普段は他の男の人と話したりしないのに…あの人は普通に話してるなあ…。どうしてだろ…」

いつの間にか眠ってしまった真冬の頬をつつき、果夏は不思議に思う。真冬は本来、果夏以外の人間とあまり話したりはしなかった。しかしそれが最近になって美紀や圭と仲良くなり、由紀達と仲良くなり、そして彼とも仲良くなった。

果夏「この前行ったキャンプの時、真冬ちゃんは自分からあの先輩を誘って二人で釣りに行ったって聞いたけど…」

胡桃「ああ、何も釣れなかったって愚痴^{ぐち}ってたな…」

果夏「あの真冬ちゃんが男の人を誘うなんて…びっくりだ。でもこの前、その時の事を楽しそうに話してくれたなあ…。何も釣れなかったけど…面白かったって…」

圭「そっか…なら良かったじゃん」

果夏「うん…。真冬ちゃんが楽しい時間を過ごせたなら、それでいい」

静かな声でそう呟く果夏の顔はいつになく穏やかで、落ち着いたものだった。彼女にとって真冬という娘は、とても大切な存在なのだろう…。

圭「そう言えばさ、真冬は好きな人とかいるのかな？果夏はこの娘の親友なんですよ？なんか聞いてないの？」

果夏「そもそも、真冬ちゃんは人付き合いがあまり得意な娘じゃないからねえ…。クラスの男子と話したりしてるのも見たことないし、たぶん…誰かに恋してる、っていうのはないんじゃないかなあ」

圭「ふうん…。まあ、そんな事だろうと思っただけどさ…。」

歌衣「にしても…変わった寝方をしてますね？」

横を向いたまま眠る真冬は両手を胸の前で固め、両膝もそこまで上げて身を丸めている。掛け布団が剥がれてしまっているからなのか、やたらと寒そうに眠るその姿はまるで…。

由紀「ねこみただねえ…」

悠里「ええ、そうね」

胡桃「寝顔は可愛らしいやつだな…」

果夏「失礼な！真冬ちゃんは起きてても可愛いですよ！」

などと果夏が騒いだ後、みんなは『ふふっ』と笑いだす。彼女らはその後、真冬の寝顔やその寝姿を見て楽しげに笑っており、その声だけを聞いていた彼は…自分もその場に加わりたい!!という強い衝動に襲われた。もちろん、加われるハズもないので諦めたのだが…。

第四十六話『さんぽ』

夜中にふと目が覚めてしまうと、中々寝付けなかったりする人というのは少なくないだろう…。彼もまた、そんなタイプの人間の一人だ。

「はあ………ったく………」

真つ暗な部屋の中、布団の中で何度も何度も寝返りをうちながら体制を変えるが、眠気は一向に訪れない…。目が覚めた際に襖ふすまの向こうから聞こえた由紀達の会話…それが自分の事をどう思っているか？という内容だった為、夢中で盗み聞いていた結果…彼の中にあつた眠気は全てどこかへ行つてしまったというわけだ。

(このままじゃ朝まで寝付けないかもな…)

襖の向こうで楽しそうに話していた由紀達の声すら、もう一時間以上前に聞こえなくなった。恐らく、みんなはもう眠りについたのでろう。

(せめて…寝顔でも拝おがんでやろうか…)

もし全員寝ているのなら、そのくらいの事をするのは容易かも知れない。そつと襖を開いて、忍び込むだけで良いのだから。…と思つたが、ふと気が付く。彼女達のいる空間もここと同様、明かりが消えて真つ暗なハズ。だとすれば、寝顔をまともに拝見するのは難しいかも…。

(明かりをつけるのは…さすがに無理か)

いや、部屋の明かりとまではいかずとも、せめて携帯のライトなら可能か…。なんて事も考えたが、まあ無理だろう。そんな事をしてもし誰かが目を覚ましたらその瞬間ゲームオーバーであり、彼は確実に悠里の説教…そして他のメンバーからの冷めた視線を受ける事になる。

「はあ……」

もう、このまま眠れなかったとしても仕方ない……。朝まで大人しくしてよう。彼がそんな事を思い、もう一度寝返りをうった時だった……。

…スーツ

彼と由紀達がいる空間を隔てる襖…それが突如、ゆっくり開きだした。彼はその物音に気が付き、布団に横たわったままの状態で顔だけをそこへ向ける。辺りが薄暗くてそこに立っている人物の顔はハッキリとは分からないが、全体的なシルエツトで何となく予測は出来た。

「……美紀？」

美紀「あつ、先輩もまだ起きてたんですね…」

美紀は彼のいる空間へ足を踏み入れると襖を閉めなおし、そのまま布団の横へと寄る。こんな夜中にどうしたのだろうか…？彼は布団から起き上がり、近くにあつた明かりを灯した。明かりの強さは最弱にしたがそれでも辺りはある程度照らせるし、やって来た美紀の顔もハッキリと見ることが出来る。

「どうした？眠れない？」

美紀「ええ…まあ…。先輩ですか？」

「んん、そうだね」

返事を返しながら布団に戻り、その上に腰を下ろす。美紀もまた、彼のいる布団の横に腰を下ろして膝を抱えていた。

美紀「みんなはもう寝ちやつたのに、私はいつまでも眠れなくて…。もしかしたら、先輩は起きてるかな？と思って来てみましたが、正解でしたね」

両手に抱えた膝をモゾモゾと動かし、美紀はニツコリと微笑む。宿

から借りた質素な浴衣に身を包んでいる彼女はいつもとどこか違う雰囲気纏っており、捲れた裾から見えている足や、乱れかけている髪が少し色つぼくも見える…。

「……………」

美紀「な、なんですか？そんなにジロジロと……………」

全身をなめ回してくるかのような彼の視線に美紀は身構え、浴衣を整え直していく。それにより捲れていた裾も、胸元のたるみも直されてしまい、隙のない形となってしまった…。

「…残念」

美紀「聞こえましたよ……………何が残念なんです？」

「いや、何も……………」

彼が静かに目を反らすと、美紀は楽しげに『ふふっ』と笑う。それを見た彼もまた、視線を彼女の方へと戻してそつと微笑んだ。眠れない夜：一人だと心細かったりもするが、こうして話し相手がいると気持ちもかなり明るくなる。

美紀「あの、少しだけ外に出ませんか？」

「…今から？」

美紀「はい。せっかくこういう所に来たんですし、夜の散歩というのも悪くないかなって……………。ダメなら構いませんけど……………」

美紀は少しだけ申し訳なさそうに顔を俯けながら、彼の目をチラリと見つめる。突然の提案に少し戸惑いもしたが、彼の答えはすぐに決まった。

「よし、じゃあ行くか。いくらか出歩いてみれば、少しは眠たくもなるだろうし……………」

美紀「…はいっ。行きましようか」

返事を聞いた美紀はニコツと微笑み、そつと静かに立ち上がる。彼

もまた布団から完全に起き上がり、二人は互いに浴衣姿のまま、宿の外へと出ていった…。

くくくくくくくくくく

「寒くない？」

美紀「平気ですよ。先輩こそ、寒くないですか？」

「あゝ…ほんの少しだけ寒いかな」

二人がやって来たのは、昼間遊んだ浜辺。昼間もそうだったが、夜間も人の影はない…。強い月明かりの下、二人で歩く夜の浜辺は少しだけ肌寒いのだが…美紀は平気なようだ。

美紀「せめて上着くらいは羽織ってくるべきでしたね」

「まったくだ…」

美紀「取りに戻ります？」

「…いや、面倒だからいい」

と言つても、ここから宿へはそう遠くない。ゆっくり歩いてもほんの数分で戻る距離なのだが、『戻る』か『寒さを我慢する』かという選択を考えた結果…彼はこの寒さを耐える方を選択した。

「にしても、夜の海つても中々いいね…」

美紀「そうですね…」

辺りはとても静かで、耳をすませば波の音すら聴こえてくる…。また、海には空に浮かぶ月の明かりが反射して輝いており、とても綺麗な光景だった。

美紀「…来てよかった」

「ああ、そうだね」

美紀は浜辺に立ったまま、じつと海を見つめている。そんな彼女の横顔を彼がじつと見つめていると、美紀はスツと顔を横に向け、隣に

立つ彼と視線を合わせて微笑んだ。

美紀「そうだ、先輩……手でも繋ぎませんか？」

「…手？」

美紀「はい。寒いですよ？手でも繋げば、少しは温かくなるかも知れないですよ？」

美紀はそう言って右手を差し出し、それが彼に握られるのを待つ。しかし、彼は今一つ悩んでいるようで……

「手……手か……うん……」

美紀「どうしましたか？私とじゃ嫌ですか？」

「いや、そんな事はないけども……逆に、美紀はいいの？」

美紀「手を繋ぐだけで何をそんな……。私は別に構いませんよ」

「あ、ああ……」

彼が何とも言えぬ返事を返す間に、美紀は自分からその手を掴む。そうして彼女は自分の右手と彼の左手を繋ぎ、少しだけ照れたように笑った。

美紀「はい、少しは温かくなったんじゃないですか？」

「……そうだね。少しはマシになったかも」

繋いでしまったものは仕方ない……彼は美紀の手をしっかりと握り返すと、そのまま並んで浜辺を歩いていく。触れ合っているのは互いの手だけなのだが、さつきよりも寒くなくなった気がした。

「二人で、手を繋ぎながら夜の浜辺を歩く……。こんなの、普通はカップルしかやらないだろうな」

美紀「あ……そう、ですね……」

言われてようやく今の状況に気付いたのか、美紀の顔が少しずつ赤く染まっていく。しかし、彼女はそれでも繋いだ手を離そうとはしなかった。

美紀「…先輩に彼女が出来たら、またその人と、こうして夜の浜辺を一緒に歩きたいですか？」

「ん〜…どうだろうな…。美紀はどう？これから彼氏とか出来たら、こんな散歩とかしてみたい？」

美紀「う〜ん…ふふつ、どうでしょうね？」

繋いでいる手を樂しげに振り、美紀は歩きながら海を見つめる。普段はともしつかりしていて、後輩だというのにどこか頼りになる…そんな美紀の彼氏になる男というのは、いったいどんな人間だろう…。彼女の横顔を見つめる内、彼はふとそんな事を思った。

「なんでもいいけど…変な男には捕まらないようにね」

美紀「それって、先輩みたいな男の人ですか？」

チラツと視線を向け、美紀はイタズラな笑みを浮かべる。その笑み…そして言葉を受けた彼の表情は、少しずつ苦いものへと変わっていった。

「おお…何気に傷付く言葉を…」

美紀「ふふつ、冗談ですよ。確かに先輩は変な男の人ですが、悪い人じゃありません。私だってそんな人が相手だったら、こうして手を繋ぐなんて出来ませんから」

握っている手にギュツと力を込め、美紀はまた微笑む。『変な男の人』だという認識があるのは少し心外だが『悪い人じゃない』という認識もされているらしい…。彼はそれを知り、安心したように息をつく。

美紀「……………そろそろ戻りますか」

「ああ、そうだね」

来た道を振り返って見れば、ここまで並んで歩いてきた二人の足跡が浜辺に伸びている…。こうして見ると、結構な距離を歩いてきたものだ。なんて事を思いながら、二人はその足跡をなぞるようにして、

来た道に戻っていく。

美紀「先輩の彼女になる人って、どんな人なんでしょうね」

「あゝ、どんな人でしょうねえ〜」

美紀「…先輩の方こそ、変な女の人に捕まらないで下さいよ？」

「大丈夫大丈夫。人を見る目だけはあはる…ハズなんで」

美紀「……………ならいいですけど」

本当に大丈夫なのだろうか…。彼の頼りない返事を聞き、美紀は少し不安になる。由紀や胡桃など、良い人だと分かっている女性と付き合うなら問題ない。しかし、美紀がちっとも知らない…それでいて見るからに怪しい女を、彼が彼女として迎えたりしたら……

美紀（なんか…嫌だな…）

考えるだけで、繋ぐ手に自然と力が入る…。彼はただの先輩…ただの友達なのに、何故こんな気持ちになるのだろう…。美紀自身、本当はその答えに気付いていた。

美紀「……………はあ」

「どうした？ため息なんかついて…」

美紀「…いいえ、別になんでもないですよ。ただ、先輩のこれからが心配なだけです」

「どういうこと…？」

美紀はピイツと顔を背け、歩きの速度を上げる。彼と手を繋いだまま、なに食わぬ表情で、浜辺の上をスタスタと…。

美紀「海、本当に綺麗だなあ……」

月明かりに照らされ、キラキラと輝く海…。それを見て、美紀は思った…。またこの光景を、大切な人と一緒に眺めながら歩きたい。そしてその時、自分の隣に立つ大切な人は…出来ることなら……

美紀「……先輩」

「はいはい、何ですか？」

美紀「……いえ、呼んでみただけです」

「ああ、そう？」

自分がもっと素直になれば、いつかそんな日も来るのだろうか……。いや、来たら来たで、何だか照れくさい……。だから今はまだ、この距離感を保ったままで……。隣で不思議そうに首を傾げる一人の先輩見つめ、美紀はニツコリと微笑んだ……。

第四十七話 『おみやげ』(☆)

悠里「さて、今の内に荷物をまとめておきましようか」

圭「あれ？もうですか？」

悠里「ええ。午後には帰り始めるんだし、そろそろ支度しないとね」
持つてきていたバッグに荷物を詰めていき、悠里は帰り支度を整えていく。今の時刻は午前10時過ぎ…。皆もう布団を片付け追え、服を着替え、朝食も済ませた。あとは午後過ぎに出る電車に乗り、巡ヶ丘へと帰るだけだ。

圭「あゝ…まだ遊び足りない気もするなあ…」

由紀「わかる…わかるよその気持ちっ!!わたしもまだ遊び足りないもん!ねえりーさん、もう一泊してっちゃだめなの?」

悠里「だめ。予定していたとおり帰らないと家族の人が心配するでしょうし、それにもう一日泊まっていく分のお金なんて用意してないもの」

由紀「うー、それもそっか…残念」

由紀はガクツと肩を落とす、その場に寝転ぶ。遊び足りないという彼女らの気持ちは悠里も理解しているが、こればかりは仕方がない。

悠里「また、みんなで旅行しましよ。次は二泊か、三泊にして…ね?」

由紀「うんっ!わたしは丸々一週間くらいでもいいよ!」

悠里「そんなに長いのは…ちよつとねえ」

由紀はスタツと起き上がり、目を輝かせる。悠里はそんな彼女の発言に苦い笑みを浮かべつつ、その頭を優しく撫でていった。その時、彼女らのいる部屋の戸が開かれ、トイレに行っていた彼と…少し前から一階の方に行っていた美紀が同時に入ってくる。

パタンツ

圭「おかえり〜。美紀ちゃん、何してたの?」

美紀「えっ？ああ、少し散歩してきただけだよ」

圭「散歩？私も行きたかったから、声かけてくれればよかったのに…」

美紀「ごめんごめん。じゃ、またあとで一緒に行く？」

圭「うん、そうしてくれると嬉しいかな」

美紀が自分の隣に腰を下ろしながら言うと、圭は嬉しそうに微笑んだ。午後にはここを出ていく予定だが、まだ辺りを見て回る時間も少しくらいは残されているだろう。

「あれ？何人かいなくなってるな…」

彼は室内を見回し、人数が足りないことに気が付く。今ここにいるのは悠里と由紀、美紀と圭、そして自分の五人だけだ。

悠里「くるみは歌衣さんと、狭山さんは果夏さんと、それぞれお土産を買いに行ったわよ」

「あ、お土産ねえ…なるほどなるほど」

そう言えば昨日は自分達が遊ぶのに夢中で、土産物を買うのを忘れていた。と言っても彼は今一人暮らしで、土産を与えるような人間がないと思っていたのだが…ふと、思い当たる人物が一人だけ思い浮かぶ。

(…いや、そう言えば佐倉先生に太郎丸の世話をしてもらっていたっけな。なら、あの人にだけは何か買っておくべきかも…)

「僕もちよいと見てきますかね…」

悠里「なら私も行くわ。るーちゃん用に良いのがあればいいけど…」

由紀「わたしも行くー！」

圭「じゃあ、美紀ちゃんも私と行くーよ。散歩兼お土産探しの旅だよ」

美紀「わかった。じゃあ行こっか」

帰りの電車が来るまでの時間はあと三時間ほど…。駅まではそう遠くないので、ギリギリまで出歩いていても大丈夫だろう。彼、由紀、悠里。そして美紀と圭の五人は一緒に宿を出ていくと、町の方へと向かい土産を探し始めた。

悠里「じゃ、また何かあったら連絡してね？」

美紀「はい、わかりました。圭、行こう」

圭「では、またあとで〜！」

五人一緒に行動していても良いが、せっかくの旅…気の知れた友達と二人で出歩くのも良いだろう。何かあった際は連絡する事だけを約束し、悠里達は美紀、圭のコンビと別れることにした。圭に手を引かれて連れられていく美紀の顔は少し困っているようにも見えるが、圭自身はとても楽しそうだ。

由紀「仲いいねえ」

悠里「ええ、そうね♪じゃあ、私達もお土産探しましょうか？」

「ですな」

一行が訪れた町は巡ヶ丘ほど都会ではなく、海沿いの田舎といったような雰囲気だ…。しかしそれでも探せば色々あるもので、立ち寄った店にはここにしか無さそうな物も売っていた。

由紀「……………」

「由紀ちゃん、それは…？」

由紀「これ？このご当地キャラなんだって」

由紀の手に握られているキーホルダー…それには全身にフジツボを纏った妙なぬいぐるみが付いていた。人なのか、獣なのか、それともフジツボそのものなのか…。何にしろ、お世辞にも可愛いとは言えない。しかし、由紀はそれを随分と気に入ったようである。

由紀「…買ってこうかなあ」

「え……本気？」

由紀「本気だよ。だって可愛いじゃん」

「……………どうぞ(自由に)」

目の前にある棚には同じ物体がズラリと並べられていて、見た感じあまり売れているように見えない……。まあそれもそうだろう。こんなに可愛くないご当地キャラのキーホルダーなど、買う人はそういないはず。しかし、決めるのは由紀自身だ。彼女は満面の笑みを浮かべながらそれを二つ手に取り、レジへと向かっていく……。

(……………あれ、今二つ持っていったか?)

見間違いかと思ったが、由紀はやはりそれを二つ持っている。レジに行った彼女はすぐに会計を済ませて戻り、一つの小さな紙袋を悠里へ手渡した。

悠里「ん？何、これ？」

由紀「わたしから、るーちゃんへのお土産！わたしとお揃いだよって教えてあげてね♪」

悠里「…わかったわ。あ、ありがとね……」

とても良い笑顔を浮かべる由紀の右手……そこにはフジツボだらけの奇妙なマスコットキャラがいて、悠里は苦笑する。『お揃い』という言葉から察するに、今受け取った紙袋の中にもアレがいるのだろう……。

「…るーちゃん、泣いたりしないかな」

悠里「どうかしら……。あの子、ゆきちゃんと結構気が合うから……意外と喜ぶかもね」

由紀に聞こえぬよう、小声で会話していく二人。せつかくのお土産、悪いように言いたくないが、やはりこのキャラだけは可愛いと思えない……。

悠里「あなたは何か買った？」

「いや、まだです。佐倉先生に何か良いものを…と思ったんですけど」

悠里「たしか、ワンちゃんを預かってもらってるんだっけ？」

「ええ、まあ」

立ち寄った店には由紀が買ったようなキーホルダーの他、ご当地感のある菓子や食品なども多く置かれていた。しかし、それらを見れば見るほど悩んでしまう…。慈はいつたい、どういうものを喜んでくれるのかと…。

「……………むう」

悠里「ふふっ、お土産選び、私も手伝いましょうか？」

「…頼みます」

自分だけではいつまで経っても決められそうにない…。そう考えた彼は悠里の手を借りる事にして、共に辺りを見て回る。その結果、いくつかの良さそうな土産物を購入することが出来た。

「とりあえずはこんなところかな。リーさん、ありがとうございます」

悠里「いえいえ。めぐねえ、喜んでくれるといいわね」

「そうですなあ…。あ、これ…僕からるーちゃんに」

悠里「あら、そんな気をつかわなくていいのに…」

土産物の入った紙袋から一つの箱を取りだし、それを悠里へと手渡す。彼女に渡したのはちよっとしたお菓子で、るーに贈るには無難な物だと思われた。

「リーさんには土産選び手伝ってもらったし、そのお礼ってことで」

悠里「じゃあ…ありがたくもらっておくわね。ふふっ、るーちゃん、きつと喜ぶわ♪本当にありがとう」

「いえいえ」

一先ず慈、るーへの土産を買い終え、三人はその店をあとにする。空は今日も綺麗に晴れていて少し暑いが、雨に降られるよりは全然良い。

由紀「お母さんとかお父さん用にも、何か良いお土産ないかなあ〜」
悠里「そうね。私も買っていかないよ〜」

先ほどの店で、るー用のお土産は買ったが、両親らに渡す物がまだ。どこかに良い店はないか…。そんな事を思い道を進んでいくと、聞き覚えのある声が三人の耳へと入る。

果夏「いや！可愛いよ!!絶対に可愛いっ!!」

由紀「あつ、カナちゃんの声だ」

「その店の中か…?」

悠里「…行ってみましょうか」

声の方へ進んでみると、こじんまりとした一つの店が目に入る。店の扉は開けっ放しになっていた為、三人はその中へ足を踏み入れた。

真冬「こんな変なの、魔除けくらいにしか使えない…」

?「まあ、これ自体が”魔”みたいなモンだけだな…」

果夏「え〜?そんなことないと思うけどなあ…」

店の奥では真冬と果夏がいて、カウンター前の椅子に腰かける一人の男性と話していた。恐らくこの店の店主だろう。微かに乱れた髪：顎に伸びた無精髭：良く言えばワイルドな雰囲気漂うその男の手には、由紀が買ったのと同じあのキーホルダーが握られていた。

由紀「やつぱりカナちゃん達だ。どうしたの?」

悠里「声が外まで響いてたわよ」

果夏「おつ、りーさん達じゃないですか。ちよつとこつちへ!」

果夏は目が合うなり悠里の手を掴み、カウンターの方へと引き寄せた。悠里は突然の事に戸惑いつつ、果夏が止まるのを待った。

悠里「いったい何事？」

果夏「りーさんも見てくださいっ!!」

悠里「見てつて：なにを？」

ワケが分からぬまま、悠里は果夏の目を見つめる。すると果夏は目の前にいた店主であろう男が持っていた例のキーホルダーをサツと奪い取り、悠里の前に突きだした。

果夏「この子！可愛くないですか!?!」

悠里「：えっ？」

真冬「カナ：悠里を巻き込むのは悪いと思う」

目の前に突き出されたのは、フジツボだらけの奇妙なマスコットキャラ：。つい先ほど、由紀が買ったのと同じ物だ。

悠里「え、えつと：：可愛いんじゃ：ないかしら？」

果夏「ほれ見たことか！やつぱり可愛いじゃん！」

真冬「いや：悠里は気をつかって嘘をついただけ」

悠里「：：：：」

確かに真冬の言ったとおり、悠里は今嘘をついた。正直に言わせてもらえばこのマスコットキャラは奇妙以外の何者でもないが、るーへの土産としてこれを買ってくれた由紀の手前、そんなことを言うわけにはいかない：：：。

果夏「真冬ちゃんにはこの良さが分からないんだね」

真冬「ボクだけじゃなく、このおじさんも分かってないけどね：」

？「おじさんって呼ぶのはやめてくれ：。そこまで歳じゃない」

真冬「じゃあ何て呼べばいい？店員さん？」

誠「俺は誠って名前なんで、普通に”マコトさん”：でいいかな。理想的な呼ばれ方は”お兄さん”だが：贅沢は言わないさ」

座っていた椅子の背もたれに寄りかかりつつその男：誠は果夏の手からキーホルダーを奪い返す。誠はそのままキーホルダーをじつ

と見つめると、直後に苦い表情を浮かべた。

誠「ほんつとに気持ち悪いキャラだな……」

果夏「自分の店にある商品に向かってその言い方は酷いよ！」

由紀「そうだよ！この子、すつごく可愛いのに!!」

果夏「おお！やっぱりゆき先輩は私の味方だ！」

このキャラの可愛さに気付いたのが自分だけじゃないと知り、果夏は満面の笑みを浮かべる。由紀もそれに応えるようにしてニツコリと微笑み、二人は謎のハイタッチを交わした。

誠「こんなキャラ、俺だって置きたくて置いてる訳じゃないんだ。愚痴くらい言わせろ」

真冬「ほんとは置きたくないの？」

誠「まあな。けどこれを考えたのがウチの従業員なもんで…置かざるを得ない状況というかなんというか…」

？「またそんな事言つて…私、本当に落ち込みますよ？」

誠がキーホルダーを見ながらブツブツ言っていると、彼等が話していた場所よりも更に奥…店の裏の方から段ボールを抱えた一人の女性が現れる。肩よりも少し先まで伸びた黒髪を揺らす、わりと綺麗な人だ。恐らく、由紀達よりも少しだけ年上だろう。

誠「すまん宮野。悪気はないんだ」

宮野「嘘ですね。もうマコトさんの言葉は信じられません」

誠「あ…：ありやかなり怒ってるな……」

女性は誠の事を一瞬睨みつけた後にプイツと目を逸らし、持っていた段ボールの中にあつた物を店内にある商品棚へと並べていく。どうやら、彼女はここの従業員らしい。

果夏「彼女さんですか？」

誠「いや、アイツは宮野っていつて、ここの従業員…。そして、前がやたらと気に入ってるこのフジツボ怪人を生み出した張本人だ」
果夏「へえくっ！あの人が！」

誠からその事を聞いた果夏、そして由紀はキラキラと目を輝かせて宮野の元へ歩み寄る。どうやら、自分達があのキャラをどれだけ気に入っているのかを語りに行ったらしい。彼女らに話しかけられた宮野の目は先程誠に向けていたような冷たいものではなく、とても温かなものだった。

悠里「あの人がこのキャラを生み出したのは分かりましたけど、それってどういった経緯で…？」

誠「…今から半年程前の事だ。町おこしの一環いっかんとして、ご当地キャラを生み出そう…この町に住む誰かがそんな事を言い出した。しかし、その計画はすぐさま壁にぶち当たった。この町にはキャラクターデザインの出来る人間がいなかったんだ」
「……………」

誠「誰一人としてキャラのデザイン案を出せずにいる中『なら私がやってみよう』と、一人の女が名乗りをあげた。それがウチの従業員…宮野だ」

誠は語りながら携帯を取り、画面に文字を打ち込んでいく。どうやら何か調べているようだ。

誠『どんな案だろうと無いよりは良い』：町の人間はそんな風に考え、宮野に全てを任せた。俺的には、こんなキャラクター案なら無い方がマシだったと思ってる」

などと言いながら鼻で笑い、誠は携帯の画面を彼や悠里、そして真冬へ見せる。その画面にはとある記事が映っていたのだが…。

悠里「…………これは」

「なにになに…『気持ち悪すぎると話題の〆〆当地キャラ…フジツボン』」

真冬「フジツボンって…このキャラの名前？」

誠「ああ、そうだ」

単純な名前…そして気持ち悪い容姿…見れば見るほど、このキャラの魅力が分からなくなる。これを生み出したあの宮野という女性や、これを可愛いと言い張る由紀達の精神状態が心配になるほどだ。

誠「不気味なキャラだが、その不気味さがウケたのかもな…。グツズが出てすぐにこんな記事が出来たりして話題にもなり、信じられないことに一部の層にはウケているらしい…。世も末だな」

真冬「…だね」

第四十八話 『ただいま』

「さてと…忘れ物はないかな？」

由紀「うん、たぶん大丈夫！」

胡桃「たぶんじゃなくて、しっかりと確認しろよ」

宿泊していた宿の室内…そこで胡桃に言われ、由紀は今一度自分の荷物を確認する。着替えや水着の入っているバッグと、携帯や財布などの入っているカバン…そして、家族などの為に購入した土産物…全て揃っていた。

由紀「…：うん！やっぱり大丈夫！忘れ物はないよ！」

胡桃「そっか、なら行くぞ。そろそろ電車が来る頃だ」

真冬「カナも忘れ物はない？しっかりと確認した？」

果夏「うん！大丈夫だよ♪」

忘れ物はない。あとはこの宿をあとにして、近くにある駅で帰りの電車が来るのを待っただけだ。果夏は部屋を出ていく由紀達の後ろを笑顔でついていくが、真冬は深いため息をつく…。

真冬「カナ、ちよつと待って…。このバッグ、カナのでしょ…」

果夏「えっ？おおっ！ほんとだ!!」

真冬「まったく、これでよく『大丈夫』なんて言えたね…」

果夏「えへへ…ごめんね♪」

ヘラヘラした笑顔を見せる果夏にバッグを手渡し、真冬は彼女らと共に宿を出ていこうとする。部屋を出て階段を下り、一階の方へたどり着くと、この宿の手伝いをしている少女…未奈の姿があった。

未奈「お帰りですか？」

悠里「ええ。帰りの電車がもうすぐなので…」

未奈「そうですね…。もし良かったら、また遊びに来てくださいね。ゲンくんとヒメちゃんは買い出しに行っていて不在ですが、二人の分まで、この私がきつちりとお見送り致します！」

胡桃「ははっ、わざわざ悪いな。まあ海も綺麗だったし、この宿も悪くなかったし、またその内来ると思うぜ」

未奈「気に入ってもらえたのなら、とても嬉しいです。その言葉、二人にも伝えておきますね♪」

未奈はそう言つてニコリと微笑み、彼女ら全員顔を見回す…。少ししてそれが済むと、未奈はその頭を深々と下げたお辞儀をした。

未奈「是非、また皆さんでお越し下さい！お待ちしております！」

由紀「うんっ！また来るね♪」

由紀が笑顔で告げたのを皮切りにして胡桃と悠里、美紀と圭、真冬と果夏、歌衣と彼が未奈に向けて手を振つていく。一同はそうして笑顔の未奈に見送られ、今回宿泊した宿をあとにした…。

美紀「電車、そろそろですね」

圭「あゝ…楽しい時間つていうのはあつという間だなあ…」

美紀「…うん、そうだね」

たどり着いた駅のホーム…圭はそこから見える海を眺めてため息をつく。時を丸一日巻き戻し、皆ともう一度あの海で遊びたい…ついで、そんな事を思つてしまったようだ。

美紀「本当に楽しかった…。圭…また一緒に来ようね…」

圭「…うん！そうだね。また、一緒に来よう♪」

水着やら荷物やらが詰まっているカバンを手に持ったまま、圭は美紀に肩を寄せる。いつもの美紀なら、こうして急に身を寄せられると

少し困ったような表情を浮かべるのだが…今この時は、圭に対してとても優しい笑みを見せていた。

圭「あつ、その時はまた、先輩も一緒に来ますよね？」

「ん？ああ、そうだね…邪魔じゃないのなら是非」

圭「全然邪魔じゃないですっ！ねっ、美紀ちゃん？」

美紀「…：うん、邪魔なんかじゃないですよ、先輩」

美紀は笑顔のまま答えていて、嘘をついたり、気を使ったりしているようではない。自分のような人間にも、こうしてなついてくれる可愛い後輩が出来た…。そう思うとなんだか嬉しくて、彼は静かに微笑む。

「…：そうか。なら、また…」一緒にさせてもらおうかね」

悠里「ふふっ。いいわね、後輩たちに人気で♪」

「んん、嬉しい限りですよ」

圭や美紀だけじゃない…。真冬や果夏…そして歌衣も自分とは仲良くしてくれている。同年代の人間だけでなく、後輩達とこうして遊べるのは中々に喜ばしい事だ。

胡桃「何デレデレしてんだか…。美紀、圭、あまりコイツをおだてるなよ。すぐ調子にのるからさ」

上機嫌に微笑む彼の横…そこに立っていた胡桃が呆れ顔を見せ、ため息混じりにそう告げる。

圭「そうですねえ…：くるみ先輩がそう言うのなら、少し控えます！」「いやあ…別に控えなくてもいいんだけどな…」

胡桃「ダメだ。あまり甘やかされると、お前はすぐに変な勘違いをしそうだからな。しっかり注意しとかねーと」

胡桃は鋭い視線を向けたまま、彼の額を右手の人差し指で小突く。正直言うと、後輩達の発言よりも胡桃のこの行動の方が勘違いしてしまいそうになるのだが…彼はそれを口には出さず胸へとしまった。

こんな事を言えば、また胡桃に怒られると思ったから…。

その数分後には電車が到着し、一同はそれに乗り込む。乗り込んだ電車の座席は窓を背にしている横長のものだったが、幸いな事にかなり空いていた。彼がその端の方へと腰を下ろすと、由紀が隣へと腰かけてニツコリと笑う。

由紀「隣いい？」

「もちろん」

由紀「ありがと。……ふう、今回はほんとに楽しかったねー」

電車がゆつくりと動き出し、一同は背後にある窓から外を見つめる。窓からは昨日みんなで遊んだあの海が見えていたが、電車が速度を上げて進んでいくにつれて徐々に離れていき、とうとう見えなくなってしまうた……。

悠里「ちよつとだけ、寂しいわね…」

胡桃「ああ。なんつーか、楽しかった旅行ももう終わっちゃったんだなあって感じだ…」

美紀「ほんと、楽しい時間って過ぎるのが早いです…」

「……………」

電車はトンネルに入り、窓の外は暗闇しか映らない…。一泊だけの旅なんてすぐに終わってしまうだろうとは思っていたのだが、こんなにもあつという間だとは思わなかった。

由紀「みんな気が早いよ！このまま電車に乗って、わたし達のお家のある街に着いて、それで…家で待っていてくれるお母さんやお父さん達にしつかりたたいまうって言うまで、わたし達の旅行は終わりにゃないんだから!!」

旅の終わりの寂しさに空気が重くなりかけた時、由紀が声を張る。

彼女の元気で力強い声を聞いた事により、場の空気はガラリと変わった。

胡桃「ああ、それもそうだな！」

悠里「…ゆきちちゃんの言うとおりね。最後まで気を抜かずにつかりと家へ帰って、るーちゃんにお土産を渡してあげないと…。あの子、きつと楽しみに待っているから」

美紀「にしても意外ですね。旅行が終わりに近付いて、一番悲しんでいるのはゆき先輩かと思っていました」

由紀「うう…そりやまあ、わたしだって少しさみしいよ？でもね…わたしはこうも思うんだ…。今回の旅行はもうすぐ終わっちゃうけど、もう二度とこういう事が出来ないってわけじゃない。わたし達にはまだいっぱい時間があるから、また今回みたいな…：ううん、今回よりも楽しい時間だって、絶対にある。楽しいことは…これから先にいくつもあるんだよ！」

座席に座ったまま両足を静かに揺らし、由紀は皆に語っていく…。ガタゴトと揺れる電車の中、彼女がその口をそつと閉じて微笑んだ時、悠里達も…そして美紀達も目を丸くしていた。

果夏「今…ゆき先輩の事を初めて先輩らしいと思いました」

由紀「ええっ!?!それはひどいよ！」

果夏「あははっ、ごめんなさいです」

歌衣「でも、今のゆき先輩の言葉は素敵でした。ちよつと勇気づけられたかも知れないです」

由紀「ほ、ほんと…?すつごく適当に言った言葉なんだけど…」

悠里「それでも良いじゃない。素敵な言葉だなあって、私もそう思ったわよ。ゆきちちゃんもすっかり成長しているんだって思えたわ」

由紀「おおうっ！くるみちゃん、今の聞いた!?わたし、このままだとくるみちゃんよりも先にオトナの女の人になっちゃうよ!!オトナの階段を上のぼっちゃうよ!!」

胡桃「ちよっ…!?バカっ!!そういう事を大声で言うな!!」

胡桃は由紀の口を慌てて塞ぎ、彼女を黙らせる。しかし落ち着いて辺りを見た結果この車両には自分達しかいないと気が付き、胡桃は由紀の口からそつと手を離れた。

胡桃「よかった…誰もいなかったか…」

由紀「よくないっ！わたしは苦しかったよ!!」

胡桃「ああもう…うるさいっ！ゆきはもう少し大人になれ!!」

由紀「ふふん、少なくともくるみちゃんよりはオトナだもんね♪」
先ほど悠里達に評価された事で浮かれているのか、由紀は胡桃に対して余裕の表情を見せる。その表情、発言に少しイラツときた胡桃だったが、ここで怒れば由紀の言う通りになってしまうような気がして…彼女はそつと静かに深呼吸をし、怒りを鎮めることにした。

胡桃「すくっ…はあくっ…」

真冬（…胡桃の方が大人だ）

ルンルンとご機嫌な由紀の横、そこで一人深呼吸する胡桃を見て真冬は確信する。もつとも、由紀は自分の方が彼女よりも大人だと思っているようだが…。

「…そう言えば、僕はみんなと違って一人暮らしだから…家に帰ったところで、ただいまと言えるような人がいないな」

『家で待つ人にただいまと言うまで、旅行は終わりではない』つい先程由紀が言ったその言葉を思い返し、彼は呟く。みんなの家ではそれぞれ両親等の家族が待っているのだろうが、彼は今一人暮らしだ…。

由紀「そっか…。あつ！でも大丈夫っ！キミ、たしか街に戻ったあ

と、家に帰るよりも先に寄っていかなきやいけない所があるんだよね？」

「寄っていく所？確かにあるけどそれが……ああ、そういうことか」

由紀「うん！そういうこと♪」

由紀の言葉の意味に気が付き、彼は微笑む。

それから数十分後：一同を乗せた電車は巡ヶ丘へとたどり着き、扉が静かに開く。忘れ物は無いか、それだけをしっかりと確認した後、彼女達は電車を降りて駅のホームに出た。

圭「ふっつ、見慣れた街に戻ってきたね…」

歌衣「ですねえ…。さて、じゃあ…こちら辺でお別れですか」

駅のホームから出た後、全員ピタリと足を止める。みんな家の位置がバラバラな為、そろそろ別れねばならない。

胡桃「だな…。みんな、本当にお疲れさん」

悠里「ええ、お疲れ様。」

果夏「またその内、みんな一緒に旅行しましょうね。真冬ちゃんも先輩達とならまた旅行したいでしょ？」

真冬「まあ…うん…機会があれば…」

悠里「そうね。また計画をたてて、みんなで出掛けましょう♪」

美紀「はい。楽しみにしています」

由紀「えへへ、次が楽しみだなあ」

次はいつ、今回のような旅に出られるのだろうか…。一同はそれを楽しみにしつつ、今はここでみんなと別れ、家族の待つ家へ帰ることにした。

「じゃあ、また…」

由紀「うん！ばいばい♪」

手を振りながら別れの挨拶を交わし、それぞれが帰路につく。しかし、彼には家へ帰るよりも先に寄らねばならない場所があつた。だんだんと日が暮れ始め、辺りが夕焼けに染まり出した頃にたどり着いたのは、とあるマンションの一室：彼はその扉の横にあるチャイムを鳴らし、その人を待つ…。

…ガチャツ

慈「あつ、そろそろ来る頃だなんて思ってたのよ。ちよつと待ってね〜」

「ああ、どうもです…」

開いた扉から顔を覗かせた人物：佐倉慈は玄関前に立つ彼を見てニツコリと微笑んだ後、また部屋の中へと戻っていく。彼女はまたすぐにそこへと戻ってきたが、今度はその腕に太郎丸を抱いていた。

慈「はいっ♪しつかりお留守番出来てたわよ」

「こいつ、迷惑かけませんでしたか?」

慈「全然!ずつといい子にしてたわよ♪」

「なら良いけど…あつ、これお土産です」

慈「えっ…?そんな気を使わなくていいのに…」

「太郎丸を預かってもらってたんだし、このくらいは当然ですって。リーさんを選ぶのを手伝ってもらった物なんで、そう悪い物じゃないと思いますよ」

抱えていた太郎丸を受け取るのと引き換えにして、彼は持っていた土産物を手渡す。慈はなんだか申し訳なきような顔をしていたが、彼がそれを無理矢理胸へ突き出すと微笑みを見せながら受け取ってくれた。

慈「そう…?じゃあ…ありがたく貰っておくわね」

「んん、そうして下さい。それと…」

慈「んっ？なあに？」

慈は不思議そうに首を傾げ、彼の事をじつと見つめる。彼女の大きな瞳で見つめられた彼は太郎丸を抱えながら少し照れたようにしていたが、それでもしつかりその瞳を見つめ返し……

「……ただいま」

慈「……はいっ！お帰りなさい♪」

彼の帰るべきはこのマンションではなく、少し離れた場所にある家なのだが……住み慣れた街に”帰ってきた”という意味でなら、この発言もおかしくもないだろう。『お帰りなさい』と答えてくれた慈の笑顔はとても優しく温かなものだったので、彼も何だか嬉しくなる。

「ありがとうございます。じゃ、僕はこのまま家に向かいますかね」

慈「ええ、気を付けて帰ってね。太郎丸もまたね♪」

言葉の意味を理解したのか、それとも偶然か、太郎丸はまるで返事するかのように『わんっ！』と吠える。それを見た彼と慈はおかしそうに笑いながら、互いに手を振り合って別れていった。

「さてさて、留守番ご苦労さんだったね」

太郎丸「……………」

マンションの外に出た後、彼は太郎丸に声をかける。しかしリードに繋がれた太郎丸はご機嫌そうにスタスタと歩くだけで、彼の方を見向きもしない。

「なんだよ……佐倉先生には返事したくせに……」

悔しげに舌打ちを挟みつつ、彼は太郎丸と共に自宅を目指す。そして十数分歩いていった頃、二人（一人と一匹）は無事に自宅前の道路へとたどり着いた。自分達の住む家を目視した彼は地面を歩く太郎丸をそっと抱え、そのまま家の中へ入っていきこうと歩を進める。

「さて、そろそろ到着だ」

太郎丸「わんっ!!」

「おっ?今度はいい返事をしてくれたな。これからもその調子で頼むよ」

言いながら自宅の扉に手をかけ、それと同時に抱えていた太郎丸の首筋に鼻を埋める…。直後、彼はあることに気が付き、キツ…と冷たい目を太郎丸へと向けた。

「お前…家のシャンプーとは違う匂いがするな…?まさかと思うが、佐倉先生と……………」

太郎丸「ツ…!!」

彼の言葉を理解したのか…それともただその目線に怯えたのか…太郎丸は彼からピイツと目を逸らし、小刻みに震え始める。

「…なるほどな。そりゃ、いい子にしてるハズだ…。あんな綺麗な人と、優雅な入浴タイムを過ごしてたってんだから……………」

太郎丸「……………」プルプル

「お前、いつも僕が風呂に入れようとするど嫌がるくせに……………佐倉先生とは…めぐねえとは普通に入ったのか?意外にスケベな奴だな…誰に似たんだか……………」

太郎丸だつて、スケベだから彼女と大人しく風呂に入った訳ではないと思うが…それを考える程の余裕は今の彼には無い。今、彼の中にあるのは『あんな人と一緒に入浴したなんて、羨ましい!!』という嫉妬心だけだった……………。

第四十九話 『ひるやすみ』

「あくあ…ほんつとに疲れた…」

胡桃「疲れたってお前…まだ午後の授業が残ってんだぞ？大丈夫かよ」

「どうだろう…無理かもしれんね」

悠里「ここらこら、弱音吐かないの」

午前の授業が終わり、ようやく迎えた昼休み…彼は由紀、胡桃、悠里の三名と共に学校の中庭へと出て、緑の上に腰を下ろしながら昼食をとっていた。仲のよい四人での昼食…それはもちろん楽しい事なのだが、彼は眠たげな目をしたままため息をつくばかりだ。

「はあ…：午後の授業はサボってしまおうか」

悠里「だくめ！」

「はいはい、冗談ですって…：。半分くらいね…」

胡桃「半分は本気だったのか…」

購買で買ったパンを食べ終え、彼は空になつたその包みからをクシヤリと丸める。どうやら今回の昼食はそのパン一つだけのようなのだ。

由紀「あれ？他のは無いの？お腹空いちやわない？」

「んー…あまり食欲がなくてね」

胡桃「おいおい、体調悪いのか？」

「いや…多分大丈夫だと思う…」

ただ食欲がなく、午後の授業がめんどくさいだけ…。その他、体に異常はない。彼は目の前で弁当を食べていく由紀らをじつと見つめつつ、自分に起きているこの不調…その原因が何なのかを考えた。

「きつと、体がまだ夏休み気分なんだな…：」

胡桃「あゝ、なるほどな。その気持ちは分からんでもない……」

胡桃に共感され、彼は満足そうに微笑みながら後ろに倒れ込む。自分達がいる場所はわりと大きめの木の下であり、その木陰にある芝の上へと寝転ぶのは気持ちが良い。

由紀「夏休み……楽しかったね」

悠里「ええ、楽しかったわね。でも、だからといって気を抜いてばかりいちゃダメよ。もう学校は始まっているんだから、気持ちをしっかり切り替えていかないと」

「そう……ですわね……」

胡桃「こりや重症かもな……。ま、もう二三日すりゃ元気になるだろう」

寝転んだ芝の上で体を動かし、視線を由紀達の方へと向ける……。彼女達の食べている弁当はそれぞれが手作りしてきた物なのだろうか……。それとも、家族が作ってくれた物なのだろうか……。そんな事を思う内、彼女達の手元に向けていた視線は徐々に下がり……

（……見えそうだな）

膝を折って座る彼女らの足と足の間……スカートの奥を覗いてみる。三人は会話に夢中で彼がそこを見ている事に気付いていないようだが、ここは木陰の下……どうにも暗い。

（……ダメか）

彼を含めた四人は芝の上、輪になって腰を下ろしている。左前にいる由紀……右前にいる胡桃……真正面にいる悠里……。位置的に一番可能性があるのは悠里だが、そんな彼女のスカートの奥は真っ暗だ。もし今ここにライトがあつて、それを点けたとすれば簡単に中を覗けるのだろう。もっとも、そんな事したら覗きをしている事がバレてしまうが。

「はああ…何か良いことないかねえ…」

授業はめんどくさいし、チャンスがあつたのに女子のスカートの中は覗けないし…。なんて事を思つて彼が愚痴る。今回は本当に重症だ。

悠里「あら、こうして私達と一緒に昼食をとるのは良いことの内に入らない?」

「いや、そんなことは…」

胡桃「なんだ、せつかく一緒につて思つて誘つたのに、嫌だつたか…。じゃ、明日からは声をかけないでおくよ」

悠里がイタズラに微笑みながら言つたので、胡桃もそれに乗つて彼を追い詰める。すると少しばかり焦つたのか、彼は倒していたその体をゆつくりと起こした。

「良いことだよ…こうして皆と一緒にランチタイムを過ごせるなんて、本つ当に最高だ!…というわけで、明日からも引き続き一緒にしたいのですが…」

悠里「ふふっ、くるみ、どうする?」

胡桃「さて、どうしよつかなく♪」

由紀「二人とも、あまりイジワルしちゃだめだよ?」

ふざけた会話を交わす内、彼は気付かされる。思えば、こうして由紀達と昼食を共にする事自体かなり幸せな事だ。女子の中でも比較的可愛いこの三人を、こうして独り占め出来ているのだから…。

(…ありがたく思わないとな)

そう言えば、近くを通り過ぎる男子がこちらをジロジロ見つめてくる事がたまにある。思えば、あれは彼のこの状況を羨ましく思つての眼差しだったのかも知れない…。今更ながら、それに気が付く彼であつた。

くくくくくく

所変わって、校舎一階の廊下…。

そこでは昼食を終えた美紀、そして圭の二人が空になった弁当箱を抱え、自分らの教室へ戻ろうとしている途中だった。

圭「今日は良い天気だね」

美紀「うん、よく晴れてる」

圭「…せっかくだし、帰りにどこか寄ってかない？」

美紀「うん？…：…：そうだね、たまには良いか」

ちようど買いたい本があったし、今日は帰りに寄り道をしていこう…。美紀は圭と約束を交わし、そのまま廊下を進んでいく。すると廊下の先…：そこに見覚えのある人影を捉えた。

圭「果夏達だ。お〜い」

果夏「おっ、美紀ちゃんと圭ちゃんじゃないですか。お〜い♪」

圭と果夏は互いに小走りで駆け寄り、小さくハイタッチする。前々から思っていたのだが、この二人もわりと気が合うようだ。美紀がそんな事を思いながらそちらへ歩み寄ると、果夏の後ろにいた真冬…：そして歌衣がペコリとお辞儀する。

歌衣「美紀さん、こんにちは」

美紀「こんにちは。今日は歌衣も一緒だったんだね」

歌衣「はい。夏休みが明けてからはお二人と一緒にお昼を過ごすことが多くなりました。おかげで毎日楽しいです♪」

美紀「そうなんだ。ふっ、よかったね」

会ってばかりの頃は人見知りしていたのか、歌衣は美紀達に対してあまり表情を変えてくれなかった。しかし夏休み中に山や海へ行つてからだろうか、この頃は彼女もよく笑うようになった。

圭「どうせなら、私と美紀ちゃんも果夏達と一緒にお昼を過ごせばよかったね。明日からそうしてもいい？」

果夏「うん、別にいいよ♪みんなもいいよね？」

真冬「うん：ボクは平気」

歌衣「私も大丈夫です。美紀さんと圭さんなら大歓迎ですよ」

美紀「ありがとう。じゃあ、明日からは一緒にお昼しようか？」

約束を取りつけ、美紀は彼女らと共に二年生の教室がある二階を目指す。そうして一階から二階への階段を上がろうとしたその時、圭が一階の窓から中庭を見て声をあげた。

圭「あつ、先輩達だ…」

美紀「：ほんとだ」

覗いて見ると、由紀・悠里・胡桃：そして彼の四人が中庭にある木の下で昼食をとっているのが確認できた。といってももう食べ終わったあとらしく、教室に戻る準備を少しずつ始めているようだ。

果夏「仲良しだねえ」

圭「だね。っていうか先輩、男一人で気まずくないのかな？」

女子三人に囲まれて昼を過ごす彼を見て圭が不思議そうに言うが、それを聞いた美紀はすぐに思った…。

美紀「今さらなに言ってるの…。あの先輩がそんな事で気まずさを感じるはずないでしょ。この前、私達と旅行した時だってそんな素振そぶり見せなかったし」

圭「ああ、それもそっか…。女の子に囲まれて気まずくなるなら、旅行なんて出来ないよね」

真冬「むしろ、女の子に囲まれる事を喜んでいるような気がする…。」

真冬がポツリと呟き、一同は彼の事を窓から見つめてみる…。たしかにその表情は気まずさなどに悩んでいるようなものではなく、どちらかと言うと…彼女らと共に過ごせる事を喜んでいるような表情だ。

果夏「ほんとだ。先輩は健全な男の子って事だね！」

圭「リーさんもゆき先輩もくるみ先輩も、みんな可愛いもんね…。そりゃ先輩だってデレデレしちゃうよ」

美紀「デレデレは言い過ぎでしょ」

改めて彼の顔を見つめて見るが、微かに微笑んでいるだけ…。デレデレしている、とまでいう程ではないと思う…。

圭「ま、覗きはこのくらいにして、教室に戻りますか。次の授業の準備もしなきゃだし」

歌衣「ですね」

先輩達の観察をやめ、二年生組はそれぞれの教室へと戻る。

歌衣はA組に…美紀と圭はC組に…。そして、B組に戻った真冬と果夏は次の授業の準備を進めている最中、同クラスの女生徒に声をかけられていた。

「あの、狭山ちゃん…？もしよかつたらだけど、ここ教えてくれないかな？自分でもいくらか考えたんだけど、どうしてもよく分からなくて…」

果夏（あつ…この娘は…！！）

開かれた教科書を手に歩み寄るその少女を見て、果夏は冷や汗を流す。この少女は以前もこうして真冬を頼りに寄ってきた事があったが、あまり人付き合いが得意でない真冬はその際、彼女を冷たく突き放して険悪な雰囲気になっってしまったのだ…。

果夏（こ、ここはまた私がフォローをつ…！！）

真冬と彼女がまた険悪な雰囲気になる前に、自分が二人の間へ割って入ろう。彼女の開いている教科書のページに書かれている問いは

自分もさっぱり分からないが、それでも仕方ない。果夏がそう考え、咄嗟に身を動かそうとした、その時だった。

真冬「うん、いいよ…。えっと、ここを解くにはね……」

「……………あゝ、なるほど。やっぱり狭山ちゃんって頭良いね。先生に教えてもらうよりも分かりやすい説明だったよ」

真冬からの手ほどきを受けたその生徒は教科書を胸に抱えてニッコリと微笑み、まるで小動物と触れ合うかのように真冬の頭を撫でる。真冬は少し恥ずかしそうに顔を俯けてはいたものの、特に抵抗したりはしなかった。

果夏「あ、あれっ？二人は…いつからそんなに仲良く…？」

「ついこの前からだよ。夏休み明けてからかな、狭山ちゃんの雰囲気の前と比べて柔らかくなった気がしてね。思いきって声かけてみたら、やっぱり前よりも優しい感じになってて、それからちまちま交流してるってわけ」

真冬「前のボク…そんなに嫌な雰囲気の前だった…？」

「あんまり言いたくないけど…それなりにね。感じ悪いヤツだなあゝって思ってたもん」

真冬「つ…ご、ごめん」

ハッキリと言われ、真冬は苦い表情を浮かべる。しかし女子生徒はそんな彼女の頭をもう一度ポンポンと撫で、優しく微笑んだ。

「まあ前の事だし、気にしないでいいよ。それより、今回は教えてくれてありがとね♪また今度、お礼に何か甘い物でもご馳走するよ」

真冬「うん…ありがと」

果夏「おお、私の真冬ちゃんに次から次へと友達が増えていく…」

前までは自分としか付き合えない娘だった…そんな真冬にどんどん友達が増えていく。それは果夏にとって嬉しいことであり、同時に…ほんの少しだけ寂しくもあった。

「友達だけじゃないかもよ？夏休みが明けてからというもの、男子達の間で狭山ちゃん人気が高まつてるみたいだって話だから…近い内に彼氏とか——」

果夏「なッ?!?!だめだよ!!そんなの絶対にだめっ!!!」
ガシッ!

真冬「わ…っ!」

果夏は大慌てで真冬を抱きしめ、そのまま辺りを見回す…。今この時ですら、真冬の事を狙っている男子がいるのかも知れない。そう思うと気が気ではない。

「あはは、じゃあ果夏がしつかり見張ってなよ。狭山ちゃんに悪い虫が付かないようにね」

果夏「もちろんっ!!変な男子に真冬ちゃんを渡すなんて絶対にヤダ!」

ギユウウツ…!

真冬「カ、カナ…苦しいんだけど…」

「あつ、狭山ちゃんの雰囲気は夏休み明けて変わったのって、もしかして彼氏が出来たから?」

果夏「なっ?!?そうなの真冬ちゃんっ?!?」

ギユウウツ!!

真冬を抱く果夏の腕に、自然と力が入る。真冬はそんな彼女の腕をペシペシと叩いて力を弱めるように催促しつつ、苦しそうな声で答えた。

真冬「彼氏なんて出来てないよ…」

果夏「そ、そうか…良かった…。果夏ちゃん、ホッと一安心…」

果夏の腕から少しずつつ力が抜かれていき、真冬もホッと一息つく。

「じゃあアレだ、好きな人出来たでしょ？だから雰囲気変わったんじゃない？」

真冬「なっ…!？」

次の瞬間、緩みかけていた果夏の腕がまた強く真冬を抱く。女子生徒が余計な事を言ったせいだ。

ギユウウツ!!

果夏「そ、そうなの真冬ちゃんっ!?!私の知らぬ間に、ついに恋心を抱いてしまったの!?!誰っ!?!誰が好きなのっ!?!」

真冬「別に…好きな人なんて…!？」

そんな人はいない。だから、早いところこの腕をほどいて自由にしてほしい。真冬の脳内はそんな思考でいっぱいだったが、果夏は何やらハツとした表情を浮かべていた…。

果夏「なっ…!もしかして…あの先輩が好きだったり？」

真冬「またバカなことを…!？」

彼はあくまでただの先輩であり、ただの友達だ。

そこに恋愛的感情なんて一切ない。

果夏「でも真冬ちゃん、あの先輩と一緒にの時はいつもより楽しそうだよ!それに前山に出掛けた時だって、自分から誘って先輩と釣りに行ったって…!」

真冬「行っただけど…あれはただ何となく誘っただけで…!」

と、言っている時にふと思う…。前の自分なら、あんな人気のない場所に男の人と二人だけにいるなんて絶対に出来なかった。しかし彼が相手だと何故だかあまり人見知りするような事もなく、普通に接する事が出来たのだ…。

真冬（そう言えば、彼が竿を引くの手伝う為に後ろに立って手を握ってきた時…すぐくドキドキしたような気が…)

ただ、男の人に触られたからドキドキしたのだと思っていた。しか

し、今思うとそれも違う気がする。もし彼以外の男に手を触られた場合
合はきつと、嫌悪感しか感じられないハズだ。だとするなら…自分は
本当に彼の事が……

真冬（いや…そんなわけないか…）

異性を好きになるような事なんて、これまで一度も無かった。だか
らきつと、この感情だつて勘違いに決まっている。真冬は自分にそう
言い聞かせてから果夏の腕を振り払い、そつと席についた。

第五十話『あめのなか』

「ふあ…ああ…」

由紀「おく、おつきなあくびだねえ。眠いの？」

「まあ…それなりに」

もうすぐ午後の授業が始まるという時、彼は次の授業で使う教科書等の準備をしながら眠たげにあくびをする。昨夜遅くまで起きていた…というわけでもないのだが、今日の彼はやたらと睡魔に襲われていた。

由紀「うんうん、その気持ちはよくわかるよ。お昼終わって最初の授業って、すっごく眠たくなっちゃうんだよね」

隣の席にいる由紀は一人頷き、ニコリと微笑む。そう言えば、彼女はよく午後一の授業中に居眠りをして教師に怒られていた…。

(このままだと、今日は僕がその役になりそうだ…)

見たところ、今の由紀はまだ目が冴えているように思える。しかしその一方で彼は激しい睡魔に襲われており、少しでも気を抜くと今すぐにでも眠ってしまいそうだ…。

(どうにか…眠気を…)

試しに足をつねってみるが、痛みに目が覚めるのはつねっているその瞬間のみ。手を離せばまたすぐに睡魔がやって来る…。窓の外に目を向けるとわりと強めに雨が降っており、その雨粒が窓に当たるポツポツという音すらも子守唄のように思えた…。

ガラガラッ！

慈「さて、みんな席について下さい。授業始めますよ」

「……これはヤバいな」

眠気混じりに準備をしていて気付くのが遅れたが、これから始まる授業は国語…担当教師は佐倉慈。彼女が教壇に立った瞬間、彼は静かに顔を伏せる。彼女は他のどんな教師よりも優しく、おっとりとした声質のため、眠気が増幅されるのだ。

(いやいや、しつかり気合いを入れとけば大丈夫…どうにか乗り切れるはずだ…。出来るだけ目を開けて…先生と黒板の事を見ていれば…)

慈「今回は前の続きですから、教科書の45ページを——」

「……………」
みんな、そのページを開いているのだろう…辺りからペラペラという音が聞こえ、彼もそのページを探す。睡魔に襲われている彼にとっては目当てのページを開く事すらも難関であり、多少の時間がかかってしまう…。

(……………か)

ようやく目当てのページを開く事ができ、彼は一安心する。しかし、ほつとする事が出来たのも一瞬だけ…。次の瞬間、彼の耳には慈の声…そして彼女が黒板に文字を書く度にチヨークが鳴らすコツコツというリズムカルな音が飛び込み、より一層に眠気が増幅されていった…。

慈「で、ここの文章が——」

「……………」

慈「つまり、少し難しいんですけど——」

「……………」

慈「というわけですから——」

窓の外から聞こえる雨音…。他の生徒がノートにペンを走らせる

音……。黒板とチョークが触れあう音……。そして何より、慈の声……。それら全てが子守唄と化し、彼を襲う。

(もう……だめだ……)

手にしていたペンが落ち、机の上を転がる……。そう言えば以前、彼の後輩である果夏が言っていた。『先生の声は心地よくて、子守唄にしか聞こえない』と……。あの時、果夏に向かって『自分が居眠りする理由を先生に押し付けるな』と言った彼だが、今なら分かる。確かに、慈の声は子守唄を聴いているかのように心地よい……。

慈「次は……ページの……を……」

眠気がピークに達し、意識が薄れたせいで慈の声すらも途切れ途切れになっていく……。次の瞬間、彼はついに力尽き、机の上へそつと静かに顔を伏せた……。

(ああ……これで楽になれる……)

薄れゆく意識の中、そんな事を思って微笑む。

しかしそんな安息の時も決して長続きはせず……

ぺしっ！

「っ……ん……」

ビリッと痺れるような感覚が頬に走り、彼は重たい目蓋まぶたを開く……。すると席の真横……そこにいつの間にか慈が立っており、ムツとした表情をして彼の頬をペチペチと叩いていた。

慈「授業、まだ始まったばかりよ？」

「……失礼しました」

伏せていた顔をぐぐつ…と上げ、落としていたペンを持つ。慈はそんな彼を見てため息をついており、周りの生徒達はクスクスと笑っていた。

由紀「えへへっ」

(いや、君にだけは笑われたくないんだが……)

いつもは居眠りしている側の人間である由紀が、片手で口を押さえつつ笑っている…。これにはさすがの彼も苛立ちかけたが、由紀の笑顔はこんな時でも愛らしくどうにも憎めない。

その後も睡魔はやってきたのだが、彼はそれをどうにかこうにか凌しのぎぎり、無事…とは言えないかも知れないが、なんとか授業の終わりを迎えることが出来た。

「く…っ…本当にツラかった…。とつとと帰ろう…」

授業は全て終わった、ようやく家へ帰れる…。そう思つて安堵すると眠気もいくらかマシになり、帰り支度もスムーズに行えた。あとは教室を出て下駄箱に向かい、そのまま真っ直ぐ帰るだけ…。

と、思ったのだが……

「これは…まいったね…」

教室を出て、下駄箱にたどり着き、靴を履き替えて帰る準備万全な彼に新たな壁が立ちはだかる。それは、外に降り注ぐどしや降りの雨…。今でこそかなりの勢いで降っているこの雨だが、降り始めたのは

ほんの数時間前…。今朝はとてもよく晴れていたため、彼は傘を持ってきていなかった…。

(ミスった…。誰か、頼れる人は…)。

自宅にたどり着くまでの十数分間、雨に打たれていくのは辛い。誰か、傘を二本持つている人物はいないだろうか…。彼は下駄箱周辺にいる生徒の中から比較的親しい生徒を数人見つけだし、それを尋ねてみるが…。

女子生徒「えっ？いや、一本しか持ってないかな。ごめんね？」

「そ、そうか…ならいい…。ありがと…」

やはり、傘を二本持つている者などそうはいない。しかし、彼もそう簡単には諦めなかった。

男子生徒「そんなの一本しか持ってないって。ってか、今朝の天気予報でも今日は午後辺りから雨だって言ってたべや。チエツクしなかったの？」

「あいにく、朝はテレビを見たりしないでそのまま登校するんで…」

男子生徒「へく。ま、もう諦めるしかないんじゃないの？猛ダツシュして帰るしかないって」

「…：やっぱりそうか」

男子生徒「ははっ！まあ、頑張れ!!じゃっ！」

男子生徒はこれ見よがしに傘を開き、雨の中へと消えていく…。親しい生徒数人を頼りにしてみた彼だったが、結果は全滅…。下駄箱にいる生徒の数はかなり減ってきた上、彼が親しくしているような人はもういなかった。

(いや、まだ由紀ちゃん達がいる…：！)

まだ希望はある!!と、自分に言い聞かせる彼だが…念のため、彼女らがこの校舎に残っているのかを確認する。確認の方法は簡単だ。

それぞれの下駄箱を覗き、靴が残っている事を確認すれば良い。

(よしよし、まずは胡桃ちゃんだ……)

最初に目に入ったのは胡桃の下駄箱だった。彼はそこに靴が残っている事を強く祈りつつ、そつと手を伸ばす。

パカッ…

(……無い)

開いた先にはもう靴はなく、代わりに上履きだけが入っていた…。胡桃は陸上部に所属しているが、この雨ではその活動も休みだろう。となれば、彼女は既に帰っている可能性が高い。彼は深くため息をつき、次に悠里の下駄箱…そして由紀の下駄箱を開けていくが、どちらも入っていたのは上履きだけだった…。

(ああ……こりやもうダメだな)

由紀達を含め、親しい生徒はほとんど帰ってしまったらしい…。こうなればもう打つ手などなく、彼はとうとう諦めることにした。

「はあ…本当にまいったな」

ため息混じりに呟き、外へ出る。冷たい雨が全身を打ち、瞬く間に体が冷えるのを感じた。雨は思っていたよりも勢いがあり、下駄箱から校門につくまでのほんの僅かな間に彼は全身を濡らしてしまう。

(つたく、最悪だ…)

ここまで小走りでやって来た彼だが、ほんの僅かな間にこれだけ濡れてしまう程の雨なら無駄に急ぐ意味も無いと思いは始める。そうして速度を落とす、校門から外へと出たその時だった。

圭「あれっ？先輩じゃないですか？」

「おつ、圭ちゃんか。今日は一人？」

校門を出た先にいた圭はずぶ濡れ状態の彼を見るとすぐに歩み寄り、差していた薄緑色の傘をそっと寄せる。どうやら中に入れてくれるようだ。見たところ、彼女は一人でいるらしい。

圭「美紀ちゃん、今日は学校休んでて…。歌衣も体調悪いらしくて早退しちゃったみたいだし、果夏と真冬は先に帰っちゃったし…。というわけで、今日の私は一人身なのです！」

「へえ…」

圭「というか先輩！びしょびしょじゃないですか!?傘忘れたんですか!？」

「まあ、お恥ずかしながら…」

目線を横にずらしながら答えると、圭はクスクスと笑う。年齢よりも少し幼く感じる、イタズラな笑みだ。思えば、こうして圭と二人きりになるのは初めての事かも知れない。

圭「じゃあ…仕方ないですね。雨の中、一人で帰るの心細いですから…。一緒に帰りましょ？」

「えっ?いや、でも傘は一本しか…」

圭「ええ。だから、相合い傘して帰るんです！」

「う、うーん…いいの？」

圭「はい！先輩さえ良ければ、どうぞ一緒に♪」
笑顔でこうも言われたら断る理由などない。幸い、圭の持っていた傘は大きめで、なんとか二人並んで入る事が出来た。

「じゃあ、途中まで頼むよ」

圭「家の前まで送りますよ。先輩には前に雨宿りさせてもらった恩がありますからね。ここで借りを返します！」

「いや、さすがに家まで送ってもらうのは悪い気が…」

圭「もう！いいから送らせて下さいっ！私が、先輩を家まで送りた
いんですっ!!わかりましたか!？」

「……分かりました」

圭のムツとした表情、そして声に気押しされ、彼は渋々ながら首を縦
に振る。すると圭は満足したようにニツコリ微笑み、二人はそのまま
静かに歩き出した。

圭「そう言えば、先輩も今日は一人なんですね？」

「ああ、由紀ちゃん達が知らぬ間に帰っちゃってね、気付いたら一人
になってた」

圭「もし私があそこにいなかったらどうするつもりだったんです？
まさか、雨に打たれながら帰るつもりでした？」

「正解」

圭「だめじゃないですか！風邪ひいちゃいますよ！まったく、ちよ
うど良いタイミングで、私という可愛い可愛い後輩がいたからどうに
かなりましたけど…」

ニツコリと自慢気に微笑み、圭は胸を張る。横目でチラチラこちら
を見つめてくるその様子から察するに、彼女は今の発言に対するツツ
コミを待っているのだろう。しかし、彼はそんな彼女に対して少し意
地悪したくなってしまう……

「ああ、本当に助かった。圭ちゃんみたいな可愛い娘がいてくれなけ
れば、僕は今頃一人で雨の中を駆けていたよ」

圭「む…っ…せ、先輩、よく恥ずかしげもなく女の子に可愛いと
か言えますね…。そう言えば、前に真冬も言っていましたよ。先輩はた
まに言動が軽くなるから、遊び人だと思われても仕方ないって」

「いや…そう言われても…」

彼だって誰彼構わずそんな事を言っているわけではない。ただ、可
愛いと感じた娘に可愛いと言っているだけだ。ただそれだけの事で
遊び人だなんて思われたくないのだが…。

(まあ、確かに物言いがストレート過ぎたかも…。少し反省だな)

冗談であれ、本気であれ、女の子に可愛いと言い過ぎるのは良くないのかも知れない。彼が今更ながらにそう思い、これまでの態度を改めようとする中…隣に立つ圭は嬉しそうに笑っていた。

圭「ふふつ、でも、先輩に可愛いって言われるのは悪い気しません。もつとも、冗談じゃなく本気で可愛いと思ってくれているのなら…ですけどね?」

「……………」

圭「そのところどうなんです?先輩は私のこと、本気で可愛いと思ってくれていますか?」

圭は道端にピタツと立ち止まり、彼の顔をニヤケながら見つめる…。こう見つめられながらだと答えづらいが、彼は覚悟を決めてその目を見つめ返した。

「…ああ、圭ちゃんは可愛い娘だと思うよ」

そつと静かに答えると圭の顔から笑顔が消え、その頬が一気に赤くなっていく…。そうして僅かな間、二人は互いに黙ってしまい、彼女の持つ傘に雨粒が当たる音だけが響いた。

圭「……………ありがとうございます。私も、先輩の事はカッコいいと思ってますよ♪」

「おお、本当に?」

圭「本当です。さあ、行きましょ」

圭は再び笑顔を浮かべ、ゆつくりと歩き出す。

彼も彼女の歩くペースに合わせて歩いていき、傘の中から出てしまわないよう気を付けた。しかし彼女の持つ傘がいくら大きめの物とはいえ、二人で入るとなると結構身を寄せていかねばならない…。

(やっぱり、何か悪いよな…)

彼はほんの少しだけ横にずれ、圭のスペースが多めになるよう気がつかう。そのせいで彼の肩は傘から出てしまい雨に打たれているが、このくらいなら全然我慢できる。

圭「…あ、先輩、肩濡れてます。もつとこつち寄って」

グイッ！

「えっ？あ、ああ……」

気をつかってわざと距離を開いたのだが、圭はそんな彼の肩が雨に打たれていることに気付くとすぐに腕を引つ張り、彼を傘の中央部へと引き戻す。おかげで雨に打たれる危険は減ったが、自分と圭の距離が先程以上に近くなってしまった。

(ほ、本当に近いな……)

出来るだけ傘の守備範囲に収まるようにと、身を寄せている二人の距離はかなり近い。肩が強く触れ合い、そつと横を見れば圭の横顔を間近に見つめる事が出来る程だ。これほどに近い距離での相合い傘など、普通はカップルしかないだろう…。

圭「……………」

無言のまま歩く圭の横顔をそつと覗き見る内、改めてその可愛らしさを実感する。前々から可愛い娘だとは思っていたが、これほどに近い距離で見つめるとまた印象が変わってくる。雨の中、一つの傘に二人並んで歩く内、彼の鼓動が微かに高鳴る。

圭「…ふふっ、どうしました？さつきからじゅつとこつち見えますけど？」

「いや…別に…」

圭「あっ、もしかして後輩との相合い傘に緊張してます？先輩、意外と可愛いところもあるんですね♪」

と、ニヤケながら言われてしまい、彼は照れかけたその顔を横へと

逸らす。この圭という少女は由紀や胡桃、悠里ともまたタイプが違い、どうにもこちらのペースが乱される。

圭「でも、それならおあいこですね。私も、先輩と相合い傘が出来て緊張しちゃってますから…」

「ん、んん……」

さつきまでニヤニヤしていたかと思えば、今度は顔を赤く染めてこういう可愛い事を言ってくる…。こうした読めない行動が、彼の心をより乱していった。

圭「……はい、着きましたよ」

色々なやり取りをしている内にようやく彼の家へとたどり着き、圭は彼を玄関先まで送る。そうして雨を凌げる場に立った圭は手にしていた傘を一旦閉じ、肩にかけていたカバンに手を入れ始めた。

「悪かったね、わざわざ家まで送ってもらっちゃって」

圭「いえいえ。先輩、ちよつと失礼しますね」

「んっ?」

次の瞬間、彼の視界が白く、柔らかな布に覆われる。圭が持っていたカバンからタオルを取りだし、彼の髪を拭き始めたからだ。

「こ、こんな事まで…」

圭「これも、私がやりたいからやってるんです。ちよつと我慢してて下さいね♪すぐに拭き終わりますから」

「……………」

ガシガシ…ガシガシ……。

彼は圭に髪を拭かれ、ただ大人しく身を委ねていた。彼女は彼のすぐ目の前で両腕を上げ髪を拭いており、時折タオルの隙間から目が合

う。彼女はその度にニツコリと笑うのだが…その笑顔がまた彼の胸を高鳴らせる。

圭「……………」

「……………」

…数分経っただろうか。圭が拭き続けてくれた甲斐があり、最初はびっしより濡れていた彼の髪もだいぶ乾いてきた。圭もそれに気付いて満足そうに頷くと、最後にタオルを退けて彼の前髪を右手でかきあげ……………」

……………チュツ

と、その額へ静かに唇を寄せた。

これには彼もかなり驚き、目を丸くする。

「圭ちゃん、今のは……………」

圭「えつ、えつと……………今のはその…髪が拭き終わりましたの合図です！」

じゃあ…そのつ……………私はこの辺でっ……………!!」

今の行動の意味を尋ねられ、圭は顔を真っ赤に染めて慌て出す。彼女は持っていたタオルを素早くカバンに収めるとまた傘を開き、雨の中へと大慌てで消えていった…。

「何だったんだ……………」

最初から最後まで圭の行動が読めず、彼は玄関に立ち尽くしたままそつと額を撫でる。彼女は何故、最後にキスをして帰ったのだろうか…。色々な事を考えてしまう彼だったが、一先ず風呂に入り、濡れた体を温める事にした。

第五十一話『おくりもの』

「あ、さっぱりした…」

時刻は午後7時過ぎ…。自宅にある風呂場から出た彼は寝間着を纏い、濡れた髪をタオルで拭きながら部屋へ戻る。床に敷いてあるカーペットの上では太郎丸が寝転んでおり、気持ち良さそうに眠っていた。

(…ん？連絡入ってるな)

髪を拭きながらベッドに腰掛け、置いてあった携帯電話を手にする。彼が風呂に入っていた時間は十数分だったがその間に誰かが連絡をよこしたらしく、1件の着信履歴が残っていた。

(ええっと、誰だ…)

携帯を操作していくと、画面上に『リーさん』という文字が表示される。どうやら、悠里からの連絡だったらしい。彼はタオルを頭に乘せたまま、彼女へ電話をかけ直す。

プルルル…プルルル…

悠里『……はい、もしもし?』

呼び出し音が数回鳴った後、携帯の向こうから悠里の声がした。

「ああ、もしもし。さっき連絡してもらったみたいなんですけど、ちよっと風呂に入ってたて出られなくて、すみません」

悠里『あら、そうだったの。こっちこそごめんなさい、急に電話なんかしちやって…』

「いや、構いませんよ。で、どうしました?」

右手で携帯を耳に当てたまま、左手で髪を拭いていく……。一体、彼女は何の用があつてかけてきたのだろうか？電話の向こうにいる悠里はすぐ答えてくれたのだが、それは予想外のものだった。

悠里『ええつと、なんか、るーちゃんがあなたに用事があるみたいで……。それで、電話をかけてくれて言われたのよ』

「るーちゃんが？」

悠里『ええ。何の用かは私も知らないんだけど……。ちよつと待つて、今代わるわね？』

悠里がそう言ったので待つこと数秒……。今度は悠里とはまた違う、幼い声が聞こえた。彼女の妹である、るーの声だ。

るー『もしもし：お兄ちゃん？』

「ああ、そうだよ。元気かい？」

るー『うん、元気……。お兄ちゃん、明日ひま？』

「明日？まあ、特に用事は無かったかな……」

明日は学校も休みであり：特にこれといった用事もない。彼がそう答えると、電話越しに届くるーの声が明るくなった気がした。

るー『じゃあつ、明日：わたしと一緒に買い物してほしいな』

「買い物？それって、りーさんも一緒に？」

るー『ううん。お兄ちゃんと、わたしと：二人だけで行きたい。だめ？』

「ダメじゃないけど……。りーさんには言った？」

るー『りーねーには友だちと遊びにいくとしか言っていない……。今も隣の部屋に行ってもらってる』

つまり、電話の内容も聞かれていないと言いたいのだろう。

彼女は何故、姉である悠里に内緒で行動しようとしているのだろうか……。

るー「りーねー、来週誕生日なの…。だから、ナイショでプレゼントを…」

「ああ…そういう事か…」

るーのヒソヒソとした声を聞き、彼は微笑む。姉に内緒で誕生日プレゼントを買いに行きたいとは、何とも微笑ましい話だ。

「…わかった。そういう事ならついていくよ」

るー『!!……ありがとう…！じゃあ明日の10時頃、わたしのお家までむかえに来てくれる？その頃なら、りーねーもいないと思う。明日、くるみと出かけるって行ってたから…』

「10時頃に迎えに行けばいいんだね？わかった、じゃあ待ってて」
るー『うんっ、待ってる…！』

嬉しそうな声が聞こえた後、プツン…と通話が切れる。どうやら、るーの方からそれを切ったらしい。彼は通話の途切れた携帯を見つめながら微笑み、そのままベッドに横たわった…。

くくくくくくくくくく

そして翌朝…。

目を覚ました彼は洗面所で顔を洗ったり、朝食を食べたりと、すべき事をしながら時間を過ごす。そうこうしている間に時刻は午前9時過ぎ……るーと約束した時間まであと少しだ。

「さて、じゃあそろそろ出掛けるか…。太郎丸、留守番は任せた」

太郎丸「わんっ!!」

「…良い返事だ」

彼はパパッと着替えて支度を済ませ、太郎丸の頭を撫でてから外へ

と出ていく。彼の家から悠里とるーが暮らす家まではそう遠くなく、ものの十数分程度で辿り着く事が出来た。

るー「あつ、お兄ちゃん！」

るーは既に家の前で待っており、彼を見るなりニツコリと微笑みながら駆け寄ってくる。彼女と顔を会わせるのは数回目だが、最初の頃と比べるとかなり懐いてくれたらしい。

「こんにちは。リーさんはもう出掛けた？」

るー「うん。たぶん夕方まで帰らないとおもう」

「そうか…じゃあ、それまでに済ませよう」

るー「うんっ♪」

笑顔のるーと共に街へ向かい、そこにあるデパートへ入っていく。デパートの中には様々な店舗が入っているが、二人が最初に向かったのは洋服売り場だった。

るー「うーん…どうしよう…」

「どれとどれで悩んでるの？」

並ぶ洋服の数々を見て悩んでいるようだったので、るーに声をかけてみる。もし、数着の服で悩んでいるだけなら力になれるかもと思っただのだが……

るー「…全部」

「なっ？ぜ、全部…？」

るー「うん、全部。リーねーはすごくきれいでスタイルも良いから、どの服も似合いそう…」

店舗内にある服を見回し、るーは悩ましげに唸っていた。彼女は姉の容姿をかなり評価しているらしい。

「まあ、本当に綺麗だもんな…あの人」

るー「うん、すつごくきれい…」

るーはニツコリ微笑み、また辺りの服を見て回る。そうして店舗内を一周、二週と回った後、彼女はハツとした表情を見せた。

るー「あつ…」

「ん?どうした?」

るー「わたし…お洋服買えるだけのお金もってなかった」

「あく…そっか」

るー「…よし、次のお店にいこう」

自分が持ってきた予算が少なかった事を思い出したるーは気持ちを切り替え、足早にそこを去る。彼はただ、彼女が迷子にならぬよう気を張りながらあとをついていった。

るー「ここがいい」

「分かった。じゃあ行こっか」

るーが次に選んだのは雑貨店…。外からパツと見ただけでも、可愛らしいぬいぐるみや多くの小物を確認出来た。るーの予算がいくらのかは分からないが、ここなら低予算でも良いものが見つかりそうだ。

るー「うーん…うーん…」

店内に入ったるーは早歩きで辺りを見て回り、たまに気になった商品を手に取る。小さなキーホルダーや簡単な作りのネックレスなど…様々な物を確認していくが、どうにもしっくり来ないようだ。

「…どっ?…決まりそっ?」

るー「う、ううん…なんかもう、どれを選べばいいのかもわかん

なくなつてきちやつた……」

るーはそう言つて悩ましげにため息をつき、瞳を涙で潤ませる。お姉ちゃんが喜ぶ物を……お姉ちゃんが喜ぶ物を……そう思えば思うほど、プレゼント選びは難しくなつていった。

るー「どうしよう……。せつかく……せつかく来たのに……」

「……ま、そう悩まなくても大丈夫だよ」

るー「……………でも……………」

「りーさんはね、るーちゃんが想いを込めてくれたプレゼントなら何だつて喜ぶと思うよ。あの人、妹が大好きみたいだから」

るー「そう……かな？」

不安そうに尋ねつつ、るーは彼の事を上目遣いで見つめる。彼はそんな彼女の小さな頭をポンと撫で、ニッコリと優しく微笑んだ。

「うん、絶対に大丈夫だよ」

るー「……うんっ！じゃあね、わたし、さつきちよつとだけ気になつたやつがあつたの。りーねーへのプレゼント、それにするね♪」

「ああ、因みにどんなのかな？」

るー「こつち、ついてきて」

彼女が気になった物、それがどんな物であれ、悠里は間違いなく喜ぶはずだ。大好きな妹からのプレゼントなのだから、喜ばないわけがない。

るー「えつと、これっ！」

「ん？おおつ、良さそうじゃん」

るーが手に取つた物……それは白いシユシユだった。

しかもただの真っ白いシユシユというわけでもなく、よく目を凝らして見ると可愛らしいクマの絵がプリントされていた。

るー「これ、わたしは可愛いと思ったけど…りーねーもよろこぶかな？」

「んん、絶対に大丈夫だと思うよ。りーさん髪の毛長いから、こういうのも使うだろうしね」

るー「…よし！じゃあわたし、これ買ってくる！お兄ちゃんはそこで待っててね？すぐもどるから！」

「ああ、待ってるね」

とは言ったものの少しだけ心配になり、彼はこっそり彼女のあとをつける。しかしそんな心配は必要なかったのか、彼女はあっさりレジにたどり着き、一人でしつかり会計を進めていった。

(さすが、りーさんの妹だな。しつかりした子だ)

代金を払い終えた後、彼女は店員から可愛い小包を受け取る。離れた所で見ているので声は聞こえなかったが、恐らくプレゼント用にラッピングも頼んだのだろう。会計を終えたるーはその小包を手にしたまま彼の元へ歩み寄り、嬉しそうにニツコリと笑った。

るー「買ってきた！ほらみて、きれいな袋にいれてもらったの…！」

「りーさん、こりや間違いなく喜ぶよ。僕が保証してあげよう」

るー「えへへ…うん、りーねーがよろんでくれたら、すごくうれしい♪」

るーは肩にかけていたバッグを開き、その小包を大切にしまう。するとその際、何かがポトツと床に落ちた…。どうやら、彼女の財布がバッグから落ちたらしい。

「おっ？るーちゃん、財布が落ち……っ?!」

ピンク色の可愛い財布を拾い、それを彼女に手渡そうとした時だった…。財布についていた一つのキーホルダーが視界に入り、彼は言葉を失う。つい先日、それを見かけたばかりだったからだ。

「ん、んいつは……」

るー「あつ、お兄ちゃんもフジツボンが好きなの？」

財布についているキーホルダー……フジツボンを指先で撫で、るーは微笑む。フジツボンとは、先日みんなで行った海のある町のご当地キャラなのだが、フジツボをベースにしたその見た目はただの怪人。お世辞にも可愛いとは言いつらい……。が、るーはこれを気に入っているようで……

るー「えへへ♪これね、この前ゆきがおみやげでくれたの！そう言ええば、お兄ちゃんもみんなと一緒に海行つたんだよね？なら、お兄ちゃんもこれ買った？」

「い、いや……僕は買わなかったかな……」

というか、それを買ったのは由紀と果夏だけだ。

後に美紀や圭、胡桃や歌衣もフジツボンを目にしたが、その感想はやはり『気持ち悪い』という一言だけ……。結局、フジツボンを可愛いと評価したのはあの二人以外にいなかった……。

るー「また、ゆきにありがとうつて言わないと。こんな可愛いプレゼント、なかなか見つからないよね♪」

「うん……そうだね」

すっかりしている所は姉に似ているが、センスは由紀に似てしまつたらしい。由紀と彼女は以前からよく遊んでいるとの事なので、そのせいもあるのかも知れない……。フジツボンを手にニヤニヤ微笑む彼女を見て彼が苦笑みを浮かべていると、背後から聞き覚えのある声が届いた。

由紀「おっ？偶然だね♪」

るー「あ……っ！ゆきだ！」

何という偶然か……。思いがけぬタイミングで本人が登場し、彼は戸

惑う。

「お、おお……」

由紀「ん〜っ？何かおかしな顔してるね？」

「そう……かな……」

るーは由紀と出会って嬉しそうにハシヤギ、彼女の目の前で頭を撫でられながら微笑んでいる。前々から交流していた事もあり、二人は本当に仲が良いのだろう。なんて事を思いながら由紀の背後を見て気づいたのだが、現れたのは彼女一人だけではなかった…。

果夏「先輩、るーちゃん、こんにちは♪」

「果夏ちゃんもいたのか。珍しい組み合わせだね」

るーを撫でる由紀の背後、そこには後輩である果夏がいた。いつもは真冬と組んでいる彼女が由紀と二人きりで行動しているなんて、珍しい事だ。

果夏「あれれ？先輩はご存知なかったのかな？私と由紀先輩は何気に仲良しで、二人で一緒に出掛けたりすることも少なくないのですよ！」

「へえ〜……」

果夏「もうちよい興味示してくれても……まあいいや。ところで、先輩はるーちゃんとデートですか？カップルというには結構な年の差がありますけど……」

「まあ、愛があれば年の差なんて関係ないから」

出会うなりとんでもない事を言ってきた果夏に対し、これまたとんでもない答えを返してみる。ただかなり冗談っぽい言い方をし、真に受けたりはしないだろう…。そう思う彼だが、そこには大きな誤算があった。目の前にいるのが、由紀と果夏だということだ…。

由紀「えっ!?!ほんとに付き合ってるの!?!」

果夏「まっ、マジかつ!?!いやあ、さすがにヤバいと思いますよ!!りー

さんは知ってるんですか!？」

「へっ? いや、ちよつと落ち着きなさいって…。冗談だから…」

この二人は少し特殊な思考の持ち主というか、変わった頭脳の持ち主なため、このように冗談が通じない事がある…。彼は二人の事を呆れた目で見つめながら誤解を解きつつ、るーとここにやって来たその理由を明かした。

第五十二話 『たからもの』

由紀「いやあ、りーさんはいいなあ。るーちゃんみたいな可愛い妹がいて。わたしも妹ほしく」

果夏「その気持ち、よく分かりますよ。私も欲しいもん、るーちゃんみたいな妹♡」

るーの右側には由紀が、左側には果夏がいて、るーはその二人と手を繋ぎながら歩いている。どちらもデレデレとした笑みを浮かべているのである。りーは少しばかり恥ずかしそうに顔を俯けていたが、同時に嬉しそうな顔も見せていた。

るー「なんか、お姉ちゃんが増えたみたい…」

果夏「そう？えへ♪じゃあるーちゃんに質問ね？悠里お姉ちゃん、果夏お姉ちゃん…どっちが好き？」

るー「…りーねー」

果夏「ぐうつ!?や、やっぱり本物には勝てないのか…」

由紀と果夏…偶然出会ったこの二人と行動を共にして数時間の時が過ぎた。あれから彼や由紀、果夏も悠里へのプレゼントを選んでいたり、そのまま昼食をとったりしてやるべき事は大体終わらせたが、一行は未だデパート内にいる…。せっかく集まる事が出来たのに、すぐに別れるのがもったいない気がしたからだ。

「さて、このあとはどうしようか？」

由紀「わたしはもうちよつとだけ一緒に遊んでいきたいと思ってるけど、るーちゃんは大丈夫？」

るー「りーねーが帰ってくるのが夕方頃だと思うから、それまでに帰れるなら平気…だと思っ」

今の時刻は午後1時過ぎ…。悠里が帰ってくるのは恐らく5時辺

りだろう。つまり、その時間までになるーを帰せば問題ないはず…。由紀と果夏はニツコリと微笑み、彼女の手を引いたまま歩き出した。

果夏 「じゃあ、あとちよつとだけ遊んでこっか♪」

るー 「うんっ」

由紀 「よし！しゅっぱっつ!!」

「ちよつ…置いていかないでくれよ?」

彼は足早に駆けていく三人のあとを追いつながら、少しだけ苦い表情を浮かべる。この数時間の間に結構動き回ったため、少しばかり疲れきていたからだ。しかしその一方、彼女らはまだまだ元気いっばいというようにニコニコと笑い合っていて、疲れている気配が全くない。

(本当に元気な人達だな…)

るーはともかく、由紀と果夏は元気の塊みたいな娘だ。悠里や真冬というそれぞれの監視役がない今、一人で彼女らの面倒を見ていくのは体力を使うが、それでも…彼女らの笑顔を見ると少し元気になる気がした。

るー 「……………」

果夏 「んっ?るーちゃん、どうしたの?」

るー 「…ううん、なんでもない」

るーは顔を後ろへ向けて振り向き、そこに彼がいる事だけを確認して再び前を向く…。どうやら、彼がすっかりついてきているのかどうか気がなかったらしい。果夏はそれに気付かなかったようで不思議そうな顔をしていたが、由紀は気付いたらしく、るーの事を見つめてニツコリと優しく微笑んだ。

由紀「…ふふっ、るーちゃんは優しいね〜♪」

るー「う、ううん…別にそんなことない…」

優しいと言われて照れたのか、るーは由紀から目を逸らす。

すると直後、由紀は後方…そこに立つ彼の方を向いて微笑んだ。

由紀「ほら、一緒に行こ。お兄ちゃん♪」

「…あ、ああ。わかってるよ」

『お兄ちゃん』…。るーからそう呼ばれるのには慣れているのに、由紀に呼ばれると何故だか胸がドキツとしてしまう。思わず一瞬だけ反応が遅れてしまったものの、彼は彼女らの横をしっかりと歩いていった。

くくくくくくくくくく

果夏「あ、わたし、ちよっとお手洗い行ってきますね」

由紀「じゃあ、わたしも行こつかない」

デパート内の色々な店を見て回ったり、ゲームセンターで遊んだりしてまた小一時間経った時、二人が呟く。

果夏「じゃ、先輩はるーちゃんと待ってて下さいね。すぐ戻りますから」

「了解」

仲良く並んだまま歩いていく由紀と果夏を見送り、るーと彼はその場に立ちつくす。よく見ればそばにベンチがあった為、二人はそこに腰掛けたのだが、その後、るーがある一点をジーツと見つめている事に気が付いた。

るー「……………」

(…ん?)

気になってその目線の先を見ると、そこにはアイスクリーム店

が…。他に目ぼしい物はない…。恐らく、彼女が見つめていたのはそこで間違いないだろう。

「アイス、食べる?」

るー「あつ…。でも、もうおこづかい残ってない…」

「大丈夫、買ってあげるよ」

ポケットから財布を取り出し、微笑みを見せる。すると、るーの表情がパアツと明るくなっていった。

るー「いいの?」

「ああ、今日は僕も楽しかったからね。そのお礼だよ」

るー「お兄ちゃん…。ありがとうっ♪」

笑顔のるーを連れてそこへ向かい、彼女が食べたがったアイス…。そして、自分用にも一つだけアイスを買う。それらを持ってまたベンチへ戻り、二人並んでそれを食べていった。

「…美味しい?」

るー「うん、おいしい」

「それは良かった」

ニコニコと嬉しそうに笑うるーを前に彼も微笑み、冷たいアイスを食べていく。そうしているとトイレに行っていた由紀と果夏がその場に戻ってきて、その目を真ん丸にした。

由紀「あゝっ!アイス食べてるっ!!いいなあゝ!」

果夏「二人だけズルいっ!!」

るー「…お兄ちゃんに買ってもらった」

果夏「へえ…。よし、せくんぱいっ♡」

るーの言葉を聞いた果夏は急にニツコリと笑い、ベンチに座る彼の前へ歩み寄る。彼女が何を言いたいのかは大体予想がついていた為、彼はそっと目を逸らした。

「店なら目の前にある。自分で買ってきな」

果夏「え〜っ！〜るーちゃんには買ってあげたのに、可愛い後輩である私には買ってくれないんですかっ!?!」

「……………」

まるでその言葉が聞こえていないかのように目を逸らしたまま、彼は無言でアイスを食べ進める…。すると果夏は不満げに頬を膨らませ、カバンから自分の財布を取り出した。

果夏「仕方ないなあ、自分で買うか…」

由紀「あはは、そうだね。…………あつ、わたし、もう小銭が無いや…」
「んっ?じゃあ…………はい」

由紀の言葉を聞いた彼は素早く財布を取り出し、アイスが買えるくらいの小銭を差し出す。由紀はそれに対して驚いたような表情を浮かべ…そして、果夏は怒りの表情を浮かべていた。

由紀「い、いいの?」

「まあ、由紀ちゃんにはりーさんへのプレゼント選びを手伝ってもらったからね。このくらいは構わないよ」

由紀「そう…かな?じゃあ、もらうね。ありがと♪」

果夏「おかしいっ!!こんな不公平だ!!先輩、わたしにはお金くれなかったのに、なんでゆき先輩にはあげるのっ!?!」

「いや、だから由紀ちゃんにはりーさんへのプレゼント選びを——」

果夏「わたしだって手伝ったもん!!」

「そ、そうだったかな…………」

彼女はこう言っているが、実際はそうでもない。彼が悠里へのプレゼントを選んでいる時、由紀は付きつきりで彼にアドバイスをしてくれたが、果夏はずっと、るーと遊んでいた…。

果夏「ヒイキだ…！同級生ビイキだ…！！」

「別にそんなつもりは……」

果夏「なら、先輩は私の事がキライなんだ…！だからこうやって、露骨に突き放すような真似を……！」

「…はあ、わかった。じゃあ本当の事を言うけどね…」

ため息一つつき、彼は自分の携帯を取り出す。実を言うと彼女にもアイスの一つくらいならご馳走してあげても良いのだが、それを出来ない理由が彼にはあった。彼は取り出した携帯を操作してメッセーリアアプリを開き、とある人物とのやり取りを果夏へと見せる。

果夏「……うん？えつと…これは……？」

「さつき、真冬から連絡があつてね。『今日は何してるの？』って聞かれたから『果夏ちゃん達と一緒に買い物してる』って答えた。で、その後に真冬から返ってきたメッセージがこれ」

ハッキリ見えるよう、画面を果夏の顔に寄せる。画面には真冬からのメッセージとして『一応言っておくけど、カナを甘やかしたりしないでね』と書かれており、それを見た果夏は苦い表情になった。

果夏「む、むうう……」

「というわけで、甘やかし禁止令が出てるからアイスは買ってやれません。食べたきや自分で買いなさい」

果夏「ぐうっ！先輩っ、それちよつと貸してっ！！」

パシッ！

「はあ…まったく」

果夏は彼の手に握られていた携帯を奪い取り、素早く文字を打ち込んでいく。彼女が打ち込んだ文章はこうだ。

『今日、カナちゃんはとてもよくがんばってくれた。だからお礼にアイスを買ってあげたいんだけどいい？いいよね？』

というような文章を打ち込んだ果夏は彼の許可もなくそれを真冬へと送り、満足げにニツコリと微笑む。二人がそうこうしている間にーはアイスを食べ終え、由紀も店へと並んでいた。

果夏「これで真冬ちゃんの許可が出たら、アイス買ってくれますか!?!」

「……許可が出たらね」

必死な果夏を前に彼はため息をつき、返事をする。そうして真冬の返信を待つこと数分…もう彼もアイスを食べ終え、由紀も自分で買ってきたアイスをそばのベンチで美味しそうに食べ進めていた。

…ピロリンツ

果夏「お、返事が来たっ!!!」

彼の携帯から音が鳴り、果夏は急いでそれを確認する。やはり、真冬からの返事が来ていた。これでようやくアイスを買ってもらえる…そう思った果夏は笑顔のままそのメッセージを確認するが……

『カナ、それは彼の携帯だから、早く返してあげな。』

とだけ、画面に表示されていた…。どうやら真冬はさっきの文章を打ったのが彼ではなく、果夏自身だと気付いたようだ。

「おお、あれだけのメッセージで気付くなんて凄いな」

果夏「ぐっ！わかりましたっ！自分で買えばいいんでしょー！」

持っていた携帯を彼へ返し、果夏はふて腐れたような態度でアイスを買いに向かう。彼女はすぐにアイスを持って帰ってきたが、目当ての物を手に入れたその表情は一変して子供のような笑みになっていた。

果夏「ねへへ〜♪ちよつと贅沢して二個にしちやったく♪」

由紀「甘いものっていくらでも食べられるよね♪」

果夏「はいっ、いくらでもいけますっ!!」

無邪気に笑いながらアイスを食べ歩いていく中、果夏は思い出したように彼を見つめる。また絡まれるのは嫌だった彼はすかさず目を逸らしたが、既に遅かった…。

果夏「そう言えば、先輩はいつから真冬ちゃんの連絡先を…?」

カップに入った二つのアイスをスプーンで突つきながら彼のすぐ目の前へと立ち、果夏はそれを尋ねる。その際の目は少し冷たさを含んでいて、どこか恐怖すら感じさせた。

「ついこの前からだよ。真冬の方から聞いてきたから、教えてあげた」

果夏「…あの、二人のこれまでのやり取り、見てもいいですか?」
「…どうしてかな?」

果夏「決まってるでしょ!先輩が真冬ちゃん相手にエッチなメッセージを送ったりしてないか、確認するためですよ!!ほら、見せなさいって!!」

果夏は彼から携帯を奪い取り、真冬と彼のやり取りの履歴を少しずつ確認していく。といっても彼が言った通り二人がやり取りするようになったのはつい最近の事らしく、メッセージ履歴はまだほんの少ししか残っていないかった。

果夏「…健全なやり取りしかしてないですね…。よし、ならオツケーです♪携帯、お返ししますね!」

「はい、どうも」

きつと、恋人に浮気を疑われた男というのも似たような事をされたりするのだろうか…。彼はそんな事を思いつつ、果夏から携帯を受け取る。

(まあ、この娘の場合は真冬の事が好きすぎるだけで、僕の事は全く興味ないんだろうが…)

果夏は普段、由紀と同じくらい子供っぽい娘なのだが、真冬の事になると目の色が変わる。きつと、それだけ真冬の事を大切に想っているのだろう。

「じゃ、そろそろ帰ろうか？」

るー「うん、そうだね。リーねーが戻る前に帰りたい」

由紀「プレゼントを持つてるのに気付かれちゃったら大変だもんね」

るー「うんっ」

果夏「えっと、じゃあ由紀先輩、私らも帰りますか？」

由紀「うん。……あつ！わたし、買ってかなきやいけないやつがまだ残ってた！みんなと遊ぶのが楽しくてすっかり忘れてたよ」

果夏「ほうほう。じゃ、私もお供しますか！先輩は、るーちゃんを送ってあげて下さい」

「ああ、任せて。じゃあ、今日はありがとうね」

由紀「こっちこそ！るーちゃん、また今度ね」

果夏「また今度」

るー「うん、バイバイ」

るーの横に立ち、由紀と果夏に手を振る。二人も出来ればるーと一緒に帰りたいが、買い忘れがあったのなら仕方ない。彼はるーと共にデパートを去り、彼女の家を目指してゆつくりと歩いていった。

るー「今日、たのしかった…。プレゼント買いに來ただけだったのに、ゆきとカナに会えてうれしかったな…」

「…ああ、そうだね」

るー「……りーねー、プレゼントよろこんでくれるといいなあ」

「それは絶対大丈夫。るーちゃんが一生懸命選んだプレゼントだから、喜ばない訳がないよ」

るー「…うんっ！そうならうれしい…！」

るーは肩にかけていたカバンをそつと開け、悠里の為に買ってきたシユシユの入った紙袋がある事を確認する。これを渡した時、悠里が笑顔になってくれたらどれだけ嬉しいだろうか…。

「…あ、そうだ。りーさんの誕生日が来たら、これも渡してくれるかな？」

彼はラッピングされている小さな包みをるーの前へ差し出し、そう告げた。これは由紀のアドバイスを聞きながら彼が選んだ、悠里への誕生日プレゼントだ。しかし、るーはそれを受け取ろうとはしなかった。

るー「あのっ…できるなら、お兄ちゃんが自分でりーねーに渡してあげてほしい。その方が、りーねーもきつとよろこぶから…」

「…そう？じゃあ、そうするけど…」

るー「うん、そうしてあげて。りーねー、お兄ちゃんのことを好きみたいだから、絶対によろこぶ」

「そうかねえ…そうならいいけど…っつて、今なんて…？」

何気なく聞いていたが、今、るーが結構な事を言った気がする…。彼は慌てて聞き返すが、るーはクスクスと笑うばかりでもう一度その台詞を言ったりはしてくれなかった。その後、二人は手を繋いだまま何でもない会話だけ交わし、るーの家へ無事にたどり着く。

るー「…よかった、りーねーはまだ帰ってないみたい」

「じゃあ、プレゼントは誕生日当日まで隠しておくといい。僕も誕生日…には無理かも知れないけど、その次の日にでもプレゼントを渡すよ」

るー「うんっ！じゃあまたね♪」

「うん、バイバイ」

悠里の誕生日当日に特別用事がある訳でもないが、彼はあえて当日を外し、その翌日にプレゼントを渡すことにした。誕生日は家族と過ごすのが一番良いだろうと、そう思ったからだ。

~~~~~

そして時は過ぎ、悠里の誕生日…その翌日。

彼は悠里の家へと遊びに…というのは建前で、プレゼントを渡しに訪れる。扉の横にあったチャイムを鳴らすとすぐに扉が開き、中から悠里が出迎えてくれた。

悠里「いらっしやい。予定より早かったわね？」

「まあ、渡したい物とかもあったんで」

小さく呟きながら彼女の事を見つめていく内、彼は気が付く…。出迎えに来てくれた悠里は上下共にラフな部屋着を着ており、長い髪を後ろで縛ってポニーテールにしていたのだが…その髪を縛っていたシユシユには見覚えがあった。

「……そのシユシユ、可愛いですね」

悠里「これ？…ふふっ。ええ、私の宝物なの」

うつすらとクマの絵がプリントされた、白いシユシユ…悠里はそれを手で撫でると、ニッコリと微笑む。やはり、心配など必要なかった。そのプレゼントは、彼女をこの上なく喜ばせる事に成功したらしい。それは彼にとっても喜ばしい事だったが、愛する妹からのプレゼントを受け取った次の日に、自分なんかのプレゼントを喜んでもらえるかどうか…彼はそんな不安を感じ始めた。

## 特別編 『みんなと過ごすクリスマス』

今日は12月25日…クリスマス。

彼はこの日も一人でのんびり過ごそうと思っていたのだが、前日に由紀から連絡が入った事で、その予定は大きく変わった。クリスマス当日の昼辺りから午後過ぎまでの間、皆で集まってクリスマスパーティーをする事になったのだ。

~~~~~

(と、まあ…クリスマスパーティーをやる事自体は良いんだけど…。まさか会場が僕の家になるとは…)

当日の昼頃、彼は部屋に敷かれているカーペットの上に腰を下ろしたまま辺りをぐるりと見回す。特別広いわけでもないこの部屋に今は由紀と胡桃、悠里とその妹、るー…更に真冬や果夏、美紀と圭、歌衣ら後輩組まで集っていた。普段は自分と太郎丸だけで暮らしているため静かな部屋なのだが、これだけの人数が集まるとさすがに賑やかだ。

由紀「よし！みんな集まったことだし、さっそく始めようか♪」

胡桃「だなぁ！」

テーブルの上にはそれぞれが持ち込んだ料理が並べられており、由紀と胡桃がそれらを率先して開けていく。料理は近くにあった店で買ってきた物がほとんどであり、彼が前もって頼んでおいた宅配ピザ等も並んでいたのだが、中には手作りらしい物もあった。

胡桃「おっ、これは手作りだよな？誰が持ってきたやつだ？」

悠里「ああ、それなら私よ。るーちゃんと一緒に準備したの」

由紀「へー！るーちゃんも一緒に作ったんだ！美味しそうだねえ

♪

るー「うん！りーねーと一緒にがんばったから、きつとおいしいはず」

平たい容器にはオムライスがビツシリと詰められてあり、それとはまた別の容器にはフライドチキンが並べられていた。その他にも細々とした料理がいくつもあり、これら全てを若狭姉妹だけで作ったというのだから驚きだ。

圭「うわー！すごいですね！」

悠里「るーちゃんがいっぱい手伝ってくれたから、つい作り過ぎちゃって。まだ少しだけ温かいと思うから、急いで食べてね♪」

果夏「了解でありますっ!!」

果夏は悠里達を作ったフライドチキンを真っ先に手に取り、瞳をキラキラと輝かせる。真冬から聞いた話によると、果夏はこのパーティーをかなり楽しみにしていた為、朝食を抜いてきたらしい。そんな果夏はそれを一口食べると、この上なく幸せそうな表情を浮かべた。

果夏「あむっ………おいしい…幸せだよおお♡」

悠里「ふふっ、お口に合ったようでよかったわ♪」

真冬「…美紀、ティッシュ取ってきてくれる？」

美紀「あっ、はいどうぞ」

真冬「ありがと。カナ、こっち向いて。口の周り汚れてる」

美紀から数枚のティッシュペーパーを受け取り、真冬は隣にいる果夏の口周りをゴシゴシと拭いていく。フライドチキンという油ものを食べている以上ある程度の汚れは仕方ないが、果夏の場合はあまりにそれが酷かった。

真冬「っ……頬っぺたまで汚れてる……子供みたいな食べ方しない！」

果夏「ご、ごめんっ！リーさんとるーちゃんが作ってくれた料理があまりにも美味しくて、つついっ…」

圭「あははっ。さてさて、じゃあ私らも食べ始めよっか？」

美紀「うん、そうだね。では、いただきます」

果夏に続き、皆がテーブルに並べられている料理へ手をつけていく。それぞれが持ち込んできたおかげで料理の量はかなり多く、この人数でもその全てを食べきれるか分からない。

歌衣「先輩、少し冷蔵庫をお借りしてもいいですか？」

「んっ？別にいいけど、どうして？」

歌衣「来る途中でケーキを買ってきたので、それをしまっておきたくて…。皆さん、あとで食べますよね？」

由紀「おおっ！食べるっ！歌衣ちゃんありがとう♪」

ケーキがあると知り、由紀の笑顔がより輝く。彼女は嬉しそうな顔をしたまま歌衣の元へ駆け寄ると、その身をギョツと抱き締めた。突然抱き締められた歌衣は一瞬だけ戸惑った顔を見せたものの、自分に抱きつく由紀の頭を優しく撫でながら微笑んでいた。

くくく

美紀「先輩、今日はお邪魔しちゃってすみません」

「大丈夫。太郎丸も楽しそうだし」

部屋の隅、太郎丸はそこであるーに腹を撫でられ、嬉しそうにゴロゴロと寝転んでいる。太郎丸のような犬と、るーのような子が触れ合っているのは何とも微笑ましい光景だ。

由紀「そう言えば、るーちゃんの所にはサンタさん来た？」

るー「うん、来てたみたい。プレゼントがあった」

由紀「おく♪よかったね♪」

由紀はるーのそばに寄り、その頭を撫でていく。太郎丸の腹をるー

が撫で、るーの頭を由紀が撫でる…。彼がそんな光景を見て楽しげに笑うと、胡桃が静かに呟いた。

胡桃「ゆき達、楽しそうだな」

「おや、胡桃ちゃんは楽しんでないのかな？」

胡桃「楽しんでるよ。こうしてみんなで集まってクリスマススを過ごすなんて、初めての事だからな。お前こそどうなんだ？楽しんでるか？」

「もちろん楽しんでる。このパーティーがなきや、一人で寂しいクリスマススを過ごすハメになっていただろうからね」

胡桃「…今回はこうしてパーティー出来たから良かったけどさ、もしまた似たように寂しい日を迎えそうになったら、あたしに声をかけろよ。その…一日くらいなら、また遊んでやってもいいから…」
ポツリと呟き、胡桃は顔を俯ける。その顔は微かに赤く染まっ
て、見ている彼の方まで照れくさくなってしまふ。

「まあ、じゃあまた似たような日が来たら…声をかけるよ」

胡桃「…ふふっ、仕方ないな。彼女も出来ずに一人でいるかわいそうなお前の為だ。その時は、このあたしが一日だけ付き合つてやるよ」

「…ありがたく思っておく」

胡桃「けど、変な勘違いはするなよ？あくまでもお前がかわいそうだから手を貸してやるっただけで、それ以外の理由は——」

真冬「おお…完璧なツンデレだ。漫画では見たことあるけど、現実で見るのは初めて……」

胡桃の横からヒョイツと顔を出し、真冬は目を輝かせる。皆それぞれ料理を食べながら騒いでいるので、彼との会話は誰にも聞かれないと思っていたのだが、それは胡桃の勘違いだったようだ。

胡桃「真冬、お前…いつから見えた？」

真冬「いつから？たぶん、わりと最初からだと思うけど…」

「全然気付かなかった…」

真冬は『ふふっ』と微笑み、誇らしげな表情を見せる。

その一方、会話を盗み聞かれた胡桃はまいったようにため息をついていた。

「ははっ、本当に賑やかだな」

胡桃や真冬…そしてその他の皆を見回し、彼はテーブルに置いていたグラスへ手を伸ばす。料理を食べたり、会話をしたりしていく内、ノドが渴いたからだ。グラスにはジュースと一緒に氷が入っていて、とても良く冷えていた。

「…はあ」

ノドを潤し、グラスをテーブルに戻す。するとその直後、悠里が申し訳なさそうな…それでいて照れたような表情で告げた。

悠里「あ、あの…今のグラス、私のだったんだけど…」

「なっ!?マジか…すいません、わざとじゃ——」

悠里「ええ、分かってるわよ。わざとじゃないなら別にいいの。次から気を付けてね？」

「本当にすいません…それ、洗ってきましようか？」

悠里「ん？ふふっ、いいのよ、そんなに気をつかわなくても」

悠里はニツコリと微笑みながらそのグラスを手に取り、まるで気にしていないかのように口をつける。それがついさっき彼が口をつけた箇所かどうかは分からないが、それにしたってこうした行動はドキドキしてしまうのだろう…。彼は目を丸くしたまま、彼女が飲み物を飲んでいく様を見つめていた。

悠里「…そんなに見つめて、どうしたの？」

「いや…りーさんは大人だなあと…」

悠里の悠然とした態度を見ていると、ついさつきあれが彼女のグラスだと知った際、『間接キスをしてしまったのかも』と胸を高鳴らせた自分が情けなくなってくる。やはり、悠里ほどの女性なら間接キスなどに動じないのだろうか…。彼はそう考えて顔を背けた為、悠里の頬が真っ赤に染まっている事に気が付かなかった。

美紀「…果夏、さつきから大人しいね」

圭「ああ、そう言えばそうだね。どうかしたの？」

果夏「……………」

美紀と圭の二人が尋ねるが、果夏は顔を俯けたまま料理をチビチビと食べていてそれに答えない。最初の頃は口周りどころか頬まで汚れる程がつついていたのに、今の彼女はやけに大人しい…。

果夏「……………」

真冬「カナ、どうかしたの…？」

真冬も彼女を心配し声をかける。果夏は大人しいどころか、少しだけ顔が青ざめているようにも見える。調子でも悪いのだろうか…。そう言えば、彼女が大人しくなったのは由紀がるーにサンタの話をしてからにも思える。

悠里「大丈夫？」

胡桃「どうした？具合悪いのか？」

真冬に続いて他の皆も彼女の異変に気が付き、心配そうに声をかける。すると果夏は青ざめているその顔で皆の事を順に見回し、小さな声で呟いた…。

果夏「わ、私…昨日の夜、凄いことを知ってしまったんです…」

真冬「…凄いこと？」

果夏「うん：私ね、昨日の夜にふと目が覚めて、ベッドの横を見たの…。目が覚めたその時、ちょうど誰かが私の枕元にプレゼントを置くところだったんだけど…」

果夏はそこまで言って、また顔を俯ける。彼女が次に何を言おうとしているのか：悠里や真冬、美紀は一足早くそれを察し、何とも言えぬ表情を見せた。そんな中で彼女が放った言葉は、やはり思っていた通りのもので…

果夏「それ：お母さんだったんだ…」

真冬「あ、ああ：そう…」

「ん…：…何て言えばいいか…」

様子から察するに、彼女はこの年になってもサンタを信じているらしい。しかし昨夜、母親がプレゼントを置く瞬間を見て現実を知った…という事なのだろう。

歌衣「あつ、るーちゃんの方は…」

悠里「大丈夫よ。耳を塞いでるから」

果夏はともかく、るーがその現実を知るのはまだ早い。歌衣はるーが果夏の言葉を聞いてしまったのではと心配するが、既に悠里が彼女の両耳を塞いでいた。るーは耳を塞がれて不思議そうな顔をしているので、果夏の言葉は聞こえていないのだろう。しかし、耳を塞いでやるべき人間はもう一人いた…。

由紀「そ、それってどういうこと…?」

胡桃「どういうことも何も、そういうことだろ」

由紀「えっと…：ごめん、分かんないんだけど…?」

由紀は首を傾げ、胡桃や彼、そして最後に果夏の顔を見つめる。そんな由紀を見て、皆はすぐさまそれに気が付いた。

(ああ、つまり由紀ちゃんも……)

美紀(サンタを信じてるってことか……)

圭(純粹な人だなあ……)

由紀「えっ? その目は何っ? どういうことなのっ?」

悠里「そう……ゆきちゃんも知らなかったのね……」

由紀は高校三年生にしては幼い見た目をしているが、幼いのは見た目だけではなかったようだ。出来るのなら、その純粹な心はいつまでも大事にしてほしい。そう願いつつ、胡桃は彼女の頭を優しく撫でる。

胡桃「……よしよし」

由紀「な、なんで頭撫でるの? もうっ! ワケわかんないよ!」

果夏「さつきの口振りから察するに、リーさんは知ってたんですか?」

悠里「え、ええ……一応ね」

果夏「どこで知ったんです!? そ、そんなに有名な事なんですか!」

悠里「まあ……大人になっていけば、その内気づく事ではあると思うけど」

るーの耳を塞いだまま悠里が告げると、果夏はギリツと歯をくいしばる。彼女はそのまま深いため息をつき、覇気のない声を出していた。

果夏「まさか、私のお母さんがサンタだったなんて……」

由紀「えっ? サンタさんって、お母さんだったの!」

果夏「はい……そうだったみたいです……。ビックリですよ……」

果夏は由紀の目を見つめ、自分が知った事実を語る……。

これにより果夏と由紀……二人の少女がサンタクロースの真実を知

る事になると思い、胡桃らはその様子をただじっと見つめていたのだが……

果夏「まさか、私がサンタクロースの一族だったなんて……」

「…はっ?」

胡桃「お、おいおいっ!!なんでそうなる!?!」

サンタクロースの正体が親だと知った果夏だが、彼女はその解釈を間違った方向に持って行ってしまったらしい。どうやら、自分が本物のサンタクロースの家系にあると思い込んでいるようだ。

果夏「だってそうでしょ!!夜中にプレゼントを置いてた人、絶対に私のお母さんだったもんっ!!しかも次の日の朝、お母さんもお父さんも意味深に笑いながら『今年もサンタさん来てくれてよかったね〜♪ やっぱり、カナちゃんがすご〜く良い子だからだね〜♡』って言うてごまかすだけだった!怪しきマックスだ!!」

胡桃「お前、両親にめちゃくちゃ愛されてるな……」

真冬「うん、ボクはよくカナの家に遊びに行くから知ってるけど、カナのパパとママはカナの事を異常な程に愛してる…。胡桃も一度遊びに行ってみれば分かると思う…」

胡桃「いや、遠慮しとく…。自分がその場にいる事を想像するだけで恥ずかしい…」

両親が娘を愛する事は良いことだと思いが、真冬の言い方、表情から察するに果夏の両親のそれはかなりのようだ。仮に果夏の家へ遊びに行ったとして、彼女の両親が自分の目の前で彼女にデレデレし始めたら…。胡桃はその様を想像し、ため息をついた。

果夏「私のお母さんはサンタクロース…たぶん、お父さんもそうだし。ってことは、ゆくゆくは私も二人の仕事を継いで、サンタクロースにならなきゃいけないのかも…」

美紀「その解釈は間違つてはないけど間違つてるといふか……うん、説明するのが難しいな」

圭「…もういいんじゃない？面白そうだからこのままほつとこよう」

美紀「……そう、だね」

まあ、彼女のような解釈の仕方夢があつて良いだろう。

美紀が説明を諦めて再び料理を食べ進めていくと、由紀が目をキラキラと輝かせながら果夏に尋ねた。

由紀「じゃ、じゃあつ……！昨日の夜、わたしの家やるーちゃんの家に来てプレゼントをくれたのも、果夏ちゃんのお母さんつてこと……!？」

果夏「……たぶん、そうだと思います」

由紀「おおおつ!!果夏ちゃんつてすごい家の娘だったんだね!!!」

果夏「ええ…私自身もビックリしてますよ……」

真冬「…ボクはカナの頭の悪さにビックリしてる」

圭「ふふつ……!真冬、笑わせないでよっ」

由紀の問いに真剣な面持ちで答える果夏を見て、真冬が呟く。その呟きはあまりに辛辣な言葉であつたが、自分がサンタクロースの家系にあると勘違いしている果夏を見ていると否定は出来ない。圭は真冬の呟きを聞いた後にまた果夏の顔を見つめ、必死に笑い声を抑えた。

胡桃「りーさん、もうるーの耳から手を離していいんじゃないか？

あの会話なら、聞いちゃつても問題ないだろ…」

悠里「う、うん…それもそうね…」

悠里はそつと手を離し、るーを自由にする。その後、皆で時間をかけながら料理を食べ進めていき、どうにかそれらを完食する事が出来た。あれだけあつた食べ物全て平らげた事により、皆はもう満腹状

態だったのだが…最後に出てきたケーキ、これは何の問題もなく食べていけたのだから面白い。

由紀「やっぱり、甘いものは別バラだよね♪」

胡桃「んん、そうだな！」

「……………」

歌衣「先輩？どうかしました？さつきからずっとイチゴを見えますけど…」

皆はとつくにケーキを食べ終え、食後の余韻に浸っている。しかし彼だけは最後に残った手元のイチゴを見つめ、何やら考え込んでいた。

「いや、凄く楽しかったなーって、そんな事を思ってたただけだ。みんな、改めて今日はありがとう。おかげで良いクリスマスになった」

胡桃「何だよ急に…。でも、まあ…どういたしまして…でいいの？」

悠里「私達もすつごく楽しめたから、お礼なんていいわよ♪」

美紀「そうですね。むしろ、部屋を貸してもらった私達こそ、先輩にありがとうって言いたいです」

圭「そういうこと！先輩、ありがとね♪」

彼が礼を言うと、皆それに応えるように言葉を返していく。

歌衣「私も、今年は楽しいクリスマスを過ごせました！過去最高だったかも知れませんか！」

果夏「真冬ちゃんも楽しかったでしょ？」

真冬「あ…：うん、楽しかったよ」

るー「また来年も、みんなと一緒にパーティーしたい」

悠里「そうね、また来年もやりましょうか♪」

悠里がそう言ってるーの頭を撫でる中、由紀が彼の横へと移動する。彼女は彼が持っていたフォークを奪うと、目の前にあった最後のイチゴを突き刺してニツコリと笑った。

由紀「じゃ、これはわたしからのクリスマスプレゼントだよ♪はい！あくんして♡」

イチゴの刺さったフォークの先を、こちらへと差し出す由紀…。彼は彼女のその行動に戸惑い、反応が遅れる。しかし、彼女がこう言うてくれる以上断るのは悪い。何より、由紀からイチゴを食べさせてもらうなんていうのはかなり嬉しい事だ。となれば、ここで口を開けない理由は無い。

「あ、あくん……」

由紀「はいっ、どうぞ♪」

目の前にあったフォークがゆっくりと動き、それについていたイチゴが口の中へと運ばれる。彼はそれを大事そうに噛みしめつつ、由紀の目を見つめた。

由紀「えへへ、おいしい？」

「んん、凄く美味しい」

由紀に食べさせてもらったイチゴは一際甘いような気がしたが、それは勘違いなのだろうか…。そんな事を思っただけがニヤニヤしていると、辺りから刺すような視線を感じた。

圭「先輩、デレデレし過ぎ!!」

胡桃「まったくだ。だらしなくニヤニヤと…」

「言いがかりだな。僕はデレデレもニヤニヤもしてない」

美紀「してましたよ。デレデレニヤニヤ」

真冬「うん…デレデレニヤニヤしてたね…」

「…だとしたら無意識だな」

向けられる罵声をかわし、彼はニヤリと微笑む。

それを見た彼女らは呆れたような表情を浮かべていたものの、一連の流れは冗談だったらしく、すぐに全員が笑顔を見せてくれた。

「みんなが良ければ、来年もここでクリスマスパーティーをするか」

由紀「うんっ！しようしようっ♪」

胡桃「その頃には、彼女が出来てるといいな〜?」

彼の肩を人差し指で突つき、胡桃がイタズラな笑みを浮かべる。彼女の嫌みに対して彼がムツとした顔を向けた時、るーがポツリと呟いた。

るー「お兄ちゃんは誰と付き合いたいのか? やっぱ、リーねー?」

「あ…っ?」

胡桃「る、るーっ…!」

悠里「っ!?!ごほっ!ごほっ!!」

るーが少し呟いただけで場が凍り付き、悠里に限っては顔を真っ赤にして咳き込んでいる。どうやら、飲み物がノドの変な所に入ってしまったらしい。悠里はそばにいた歌衣に背中を擦ってもらった事でどうにか咳を落ち着かせ、その顔を上げた。

悠里「る、るーちゃん…変な事言ってお兄ちゃんを困らせちゃダメでしょ? お兄ちゃんとお姉ちゃんはただのお友達なんだから、ね?」

るー「…ごめんなさい。でも……」

「…ん?」

一言だけ謝罪の言葉を述べた後、るーは彼の目を見つめる。彼もキラキラと輝く純粋なその目を見つめ返し、彼女が何を言うのかと待つ

ていたのだが……るーが直後に放った言葉は先程の言葉よりも衝撃的なものだった。

るー「りーねーがお兄ちゃんのこと好きじゃないなら、わたしがお兄ちゃんの彼女に……お嫁さんになりたい」

「なっツ!?!」

悠里「ちよっ?!?!ちよつと!るーちゃんっ!?!」

辺りがさつき以上にざわつく中、るーの言葉を聞いた悠里は大慌てで彼女の元に寄り、その両肩に手を当てて真正面から目を見つめる。これほどに慌てる悠里など滅多に見られないだろう。

悠里「変な事言って困らせちゃダメって、さつき言っただでしょ?ねっ?分かってるわよね?」

るー「ダメ……なの?お兄ちゃん、わたしに優しくしてくれるから好きなんだけど……」

悠里「るーちゃんがお兄ちゃんに感じてる好きって気持ちはね、お嫁さんになりたいっていうのとは少しだけ違うと思うの」

るー「……そう?」

悠里「ええ!そうっ!少なくとも、あと五年くらいは待ちましょう!それだけ経ってもまだ彼の事が好きなら、お姉ちゃんも一緒に考えてあげるから!」

るー「でも、五年も待ってたらりーねーにお兄ちゃんをとられる……」

悠里「とらないわよっ!!!」

顔を真っ赤に染め、悠里はいつになく大声を出す。思わず、るーの肩がビクツと震える程の声だった。滅多に聞かない姉の大声を聞いた事でもーも驚いたのか、彼女はそつと悠里から目を逸らし、その先にたまたまいた胡桃の事をじつと見つめる。

るー「じゃあ……くるみにとられる……」

胡桃「な…ッ…!!？」

不意に矛先を向けられ、激しい戸惑いを見せる胡桃…。彼女は顔を真っ赤に染めながら、るーと彼を交互に見つめていった。彼はそんな彼女にどう反応していいものか分からず、ただただ苦笑いしている…。

胡桃「とっ…とらないっ！あたしもとらないっ!!こんなのいらなからなっ!!？」

「こんなの!!？」

圭「あく…先輩かわいそく…」

胡桃が放った言葉にシヨックを受ける彼を見て、圭が楽しげに微笑む。しかし、由紀や歌衣、真冬や美紀は圭のように笑うことなく、何とも言えぬ表情を浮かべていた。

歌衣「先輩、るーちゃんに催眠術でもかけたんですか…？」

「いやいや、かけてないって！」

美紀「じゃあ、何で先輩のお嫁さんになりたいなんてことを…」

「そりゃまあ、優しいところが気に入られたとしか…」

真冬「……………ロリコン」

「ぐっ…!!」

ボソツと呟かれた真冬の言葉は彼の心を突き刺し、ダメージを与えた。るーが彼のお嫁さんになりたいと言った事で始まったこの騒ぎはもう少しだけ続いたのだが、最終的には『子供の言ったことだから深い意味はない』という結論で幕を閉じた…。

~~~~~

「じゃあ、みんな気をつけて帰るようね」



由紀「うんっ！またね〜♪」

胡桃「またな」

悠里「お邪魔しました。今日はありがとうね」

るー「ばいばい」

夕方になり、自分の家へ戻っていく彼女らを玄関先で見送つていく。最後ら辺では色々あったが、何だかんだでも楽しいパーティーだった。これまでに過ごしてきたクリスマスの中に、今日程幸せなものは無かつただろう。皆を見送つた後、彼は一人微笑みながら部屋へと戻つていった。

~~~~~

果夏「いやあく、パーティー楽しかったね〜♪」

真冬「うん…そうだね」

彼の家を出た後、果夏と真冬はそばにあつた公園のベンチで肩を並べていた。最初は真つ直ぐ家へと帰る予定だったが、真冬がここで少しだけ休みたいと言い出したのだ。もちろん果夏がそれを断るわけもなく、二人は今、人気の無い夕方の公園でまったりとした時を過ごしていた…。

果夏「……疲れちゃった？」

真冬「えっ？いや、そういうわけじゃないんだけど…その……」

果夏「……??」

果夏の言葉を聞いて目を泳がせたと思うと、真冬はそのまま、自身のカバンへ手を入れる。その中をガサガサ漁る彼女を果夏が不思議そうに見つめていると、真冬は顔を横へ向けたまま手を差し出した。

真冬「こ、これ……あげる」

果夏「えっ？何かな？」

真冬「いいから、はやく受け取ってほしい……」

真冬は未だに顔を横へ向けてしまっており、表情が窺うかがえない。果夏は不思議に思いながらも彼女の手に握られていた小さな小包を受け取り、そして目を輝かせる。受け取った小包は小さいながらもしつかりとりボンでラッピングされており、見ただけでプレゼントだと分かったからだ。

果夏「これっ…私にくれるの!!?ほんとにつ!!」

真冬「……うん…あげる。ボクからカナへ…クリスマスプレゼント」

果夏「わああつ！あ…ありがとうっ!!」

果夏は隣に座る真冬をギュツと抱き締めた後、その包みを開いていく。中に入っていたのは、真っ赤なシユシユだった。新品だからなのか、手に取ってみると触り心地が良く、果夏が普段使っている物よりも少しだけ高級そうに思える。

真冬「贈り物を考えた時、カナといえばシユシユだっと思って…。その…好みのデザインかどうか、分かんないけど……」

果夏「ううん、すっごく可愛いっ♡真冬ちゃんっ、ありがとね！」

果夏は元々付けていたシユシユをその場で解いて髪を下ろすと、真冬から貰ったばかりの新しいシユシユで後ろ髪を纏めていく。そうして出来たポニーテールを真冬へ見せると、果夏は子供のような微笑みを浮かべた。

果夏「どう？似合ってる？」

真冬「うん、似合ってる……」

果夏「ありがと♪……けど、どうしよう…っ！私、真冬ちゃんへのプレゼントを用意してなかったよ…。真冬ちゃんは何が欲しいのっ!?!何でも買ってあげるから、遠慮せずっ!!」

素早く財布を取り出し、果夏は鼻息を荒くする。大好きな真冬の為なら、どんな物でも手に入れてみせよう……。そんな覚悟を胸に質問をした果夏なのだが、真冬の答えは思いも寄らぬものだった。

真冬「じゃあ…カナがさつきまで使ってたシユシユが欲しい」

果夏「えっ？でもこれ、結構古いやつだよ？もっと良いの買ってあげるから、遠慮しないで私に——」

真冬「うん、遠慮なんてしてない。本当にそれが欲しい…」

果夏「……ほんとに？こんなのでいいの??」

真冬「うん、それがいい…」

真冬の表情は真剣そのものだが、本当にこんな物でお返しになるだろうか……。どうにも申し訳ない気持ちになるが、真冬がそう言うのなら断ることなど出来ない……。果夏はこれまで使ってきた白いシユシユを、真冬の手握らせた。

果夏「じゃあ…はい、どうぞ」

真冬「うん、ありがとう」

果夏「……………」

真冬は嬉しそうに微笑んでいるが、お古のシユシユをプレゼントにするのはやはり申し訳ない気持ちになる。果夏が少しずつ暗くなつていく空を見上げ頭を悩ませていると、真冬が小さな声で呟いた。

真冬「カナ…ボクなんかと友達になってくれて、ありがとう」

果夏「えっ？」

真冬「……何でもないよ。ほら、もう帰ろ？」

ベンチからスツと立ち上がり、真冬は果夏の事を見つめる。しかし果夏は目をまん丸にしたまま固まっており、一向に立ち上がるとうしない。

真冬「…もう、はやくしてー!」

果夏「あっ…う、うんっ！」

いつまでも動かない果夏の手を掴み、無理やりにベンチから起こして立ち上がらせる。すると真冬はニツコリと微笑み、果夏の手を握ったままゆっくりと歩き出した。そう言えば、真冬の方から手を握ってきたのはこれが初めてかも知れない。

果夏「ま、真冬ちゃん…手、繋いだままだよ？」

真冬「うん。たまには手を繋いだまま帰ろうよ…。ボクらは友達なんだから、そのくらい良いでしょ？」

果夏「…うんっ！そうだねっ♡」

果夏の方からも強く手を握り返し、横を歩く真冬に肩を寄せる。普段の真冬はこういう事をするうっとうと鬱陶しそうな表情を浮かべるのだが、今日は果夏を見つめ、優しく微笑んだままだった…。

くくくくくくく

悠里「るーちゃん、本当にあのお兄ちゃんが好きなの？」

るー「うん、ゆきと同じくらい好き」

悠里「そう…。ふふっ」

帰り道、るーの言葉を聞いた悠里は安心したように微笑む。この言い方から察するに、るーは彼の事をただ気に入っているというだけ…。本物の恋愛感情とは違うようだ。

悠里「あ、そう言えば…：はい、お姉ちゃんからのクリスマスプレゼント」

悠里はカバンから小さな小包を取り出し、それを手渡す。綺麗にリボンでラッピングされている包みの中に入っていたのは、小さな銀色のハートが飾られているネックレスだった。るーは光に反射してキ

ラキラと輝くそのハートを見つめ、目を丸くしたまま驚く。

るー「これ、わたしにくれるの？」

悠里「うんっ。何を贈ろうかずっと悩んでたんだけど…結局こんな
のになっちゃった…。気に入ってくれたら、嬉しいんだけど…。」

悠里はそのネックレスを持つてるーの前へと屈み、彼女の首にネッ
クレスをかける。それは想像以上に良く似合っていたが、本人が気に
入ってくれたかどうか…。悠里は不安そうに顔を俯けたが、自分の首
に下がっているネックレスを見たるーの表情はとても明るいもの
だった。

るー「すごくキレイ…。りーねー、ありがとうっ！」

満面の笑みを浮かべ、るーは悠里の胸に飛び込む。それによって悠
里の不安は綺麗に無くなり、彼女自身も満面の笑みを浮かべてるーの
事を抱き締めた。

悠里「よかった…。それ、るーちゃんに良く似合ってるわよ」

るー「そう…？えへへ、うれしい♪お兄ちゃんやゆきの事は大好き
だけど、やっぱりりーねーが一番好き♡」

悠里「ふふっ♪私も、るーちゃんが一番好きっ♡」

二人は笑顔を見せ合い、そのままゆつくりと…手を繋いで帰路を歩
く。ふと空を見上げると、ハラリと白いものが降ってきた…。どうや
ら雪が降り始めたらしい。

くくくくくくくくく

由紀「おっつ!!雪だあっつ♪」

いち早く自宅へと帰っていた由紀は自室の窓からそれを見つめ、瞳

をキラキラと輝かせる。この雪はいつまで降り続けるだろうか：明日の朝には積もるだろうか：そんな事を考えるだけでもワクワクしてしまふ。

由紀「：また来年も、みんなと楽しいクリスマスが過ごせますように」

降る雪を見つめながら、小さな声で呟く：。もうサンタクロースからのプレゼントは受け取ってしまったが、もし余分にプレゼントをくれるのなら、この願いを叶えて欲しい。由紀はそっと瞳を閉じてそれを祈った後、閉じていた瞳を開いてニッコリと笑った。

特別編 『今年もずっと…』 (☆)

果夏 「うわあ、人がいっぱいだ…」

真冬 「そりやまあ…初詣なんて大体そんなもんでしょ…」

一月一日の昼過ぎ…。真冬は果夏を連れ、近所の神社に訪れていた。

予想はしていたもののそこはかなり混んでおり、辺りがガヤガヤと騒がしくて隣にいる果夏の声すらも聞き取りづらい。

果夏 「振り袖着てる人、結構いるね」

真冬 「うん、そうだね…」

辺りを歩く人々のほとんど…とまではいかないが、それでも振り袖を着ている人は結構な割合でいる。真冬と果夏もまたその内の一人だ。真冬は青を基調とした振り袖を…果夏は桃色を基調とした振り袖を…それぞれ、家を出る際に家族から着せてもらっていた。

果夏 「おおっ！見て見てっ！屋台が出てるっ!!」

真冬 「屋台も良いけど、先に参拝してきた方が…」

果夏 「ぐっ…それもそっか…。仕方ないっ！とっとお参りを済ませて、早く屋台めぐりをしよう!!」

真冬 「とっとなとっとな…カナ、そんな態度だとバチが当たる」

呆れた表情でボソツと呟くが、果夏には聞こえていないらしい。彼女は目を輝かせながら辺りを見回し、参拝の後でどの屋台に行こうかと悩んでいるようだ。恐らく、彼女の目的は参拝ではなくこれにあつたのだろう…。

真冬 「ほら、早く行こうよ。もっと混んできちやうよ?」

果夏 「そうだね、ごめんごめんっ。じゃ、迷子にならないようにしっかりと手を繋いで…」

真冬「ちやんと気を付けてれば迷子にはならないから、手を繋ぐ必要はない。カナは余所見せず、ボクについてくればいいの…」

果夏「うぐう…新年早々冷たいなあ」

果夏が『はあ…』とため息をつくとき、それが白いモヤのようになって視界に映る。今日はかなり冷え込んでいる為、屋台で売っている温かな食べ物やたらと美味しそうに見える。が、まずは参拝を済ませよう…。真冬は果夏の背中をポンと押し、人混みの中を進んでいた。

果夏「そういえば、先輩達も来てるのかな？」

真冬「さあ、どうだろうね？」

果夏「メッセージ送って聞いてみよ〜と♪」

真冬「カナ、携帯いじりながら歩いちゃダメだよ」

真冬が注意すると果夏は道の横へと逸れてピタッと止まり、携帯でメッセージを送り出す。その相手は恐らく、彼や由紀達…三年生組だろう。真冬は果夏の隣へ寄ってから自身も携帯を取り出し、いつの間にか来ていたメッセージを確認した。真冬の携帯に来ていたのは、美紀達二年生組からのメッセージだった。

真冬「……美紀と圭、それに歌衣さんは家族と出掛けてるって。たぶん、今日ここで会うことはないかな」

果夏「そりや残念…。おつ？りーさんから返事が来た！えつとね…りーさんとくるみ先輩、それにゆき先輩は今から来るって！るーちゃん、あの先輩も一緒に来るみたい♪」

真冬「へえ…じゃあ、あとで会えるかもね」

果夏「うんっ！今はみんな先輩の家に行つて、迎えに行つてる途中みたい」

果夏の言う“先輩”とは“彼”の事だろう…。新年早々みんなと一緒に初詣に来る辺り、相変わらず仲が良いようだ。悠里から送られ

たメツセージからそれを実感した後、二人はゆつくりと歩き出して参拝に向かう。

そうして拝殿はいでんにたどり着いた後、真冬は二礼二拍手一礼をして、お祈りを済ませる。今年一年、自分がどうありたいのか……。真冬は瞳を閉じ、それを祈っていく。この際、果夏がたどたどしい様子で参拝のやり方を真似してきた為、真冬はほんの少しだけ笑ってしまった。

果夏「いやあ……すつごく緊張した……。因みに、真冬ちゃんは何をお願いしたの？」

真冬「……内緒」

参拝後、二人並びながら屋台の方へ歩いていくと果夏がそんな事を聞いてきた為、真冬はその顔を横へ逸らす。すると、果夏は真冬の肩に身を寄せながらニツコリと微笑んだ。

果夏「因みに私はね……『今年も真冬ちゃんと一緒にいられますように』って、そうお願いしちゃった♡」

真冬「……カナ、知ってる？ 願い事ってね、人に話すと叶いにくくなるって話があるみたいだよ」

果夏「なっ!?! そ、そうなのっ!?! それは嫌だよ!! 真冬ちゃん、今のは聞かなかった事にしてくっ!!」

少しイジワルすると、果夏は瞳を潤ませながら肩にしがみつく。ついさつきまでニヤニヤしていたかと思えば、今度は泣きそうな顔を見せる……このように、表情豊かなのは果夏の魅力の一つだ。

真冬「……ふふっ、どうしようかなあ……」

しがみつく果夏の額を指で突つき、真冬はイタズラな笑みを浮かべる。指で突つく度に果夏が『あうっ!』と声をあげる為、おかしくて仕方ない。

果夏「真冬ちゃんと一緒にいれなくなるのは嫌だっ…！か、神様…
さつきのはノーカウントでお願いしますううう…!!」

真冬「いや、あくまでそういう話もあるってただだから…そこまで
気にしなくても大丈夫だと思うよ」

果夏「ほ、ほんとにっ…?」

真冬「…まあ、叶う時は叶う…叶わない時は叶わない…。結局は運
だね」

果夏「運…運か…運なのかあ…」

真冬「あとは…ボクの気持ち次第だよ…。ボクがもうカナのそば
にいたくないって思えば、カナの願いは潰えるわけで…」

果夏「う…っ！うわああんっ!!!」

ほんの冗談なのに、果夏は子供のように泣き出した。

真冬が果夏のそばにいたくないなんて思うことは、絶対がないのに
…。

真冬「ほらほら、泣かないの。冗談だよ」

果夏「うぐっ…ううう…もわああ…」

真冬「ふふっ、変な泣き声…」

そばにあつたベンチに二人で腰掛け、真冬は果夏が泣き止むまでそ
の頭を撫でていく。すると果夏が鼻をすすりながら、震えた声で呟い
た。

果夏「わ、私の願い事がダメでも…それでもっ…真冬ちゃんのお
願いだけは…ちゃんと叶って欲しい…」

真冬「…ボクのお願い事なんてどうでもいいんだよ。だから、カ
ナのお願い事くらいは叶うと良いね」

果夏「たしかに…叶って欲しいけど…。でもっ、真冬ちゃんのお願
い事も…」

真冬「ボクのはいいの。どうせ、下らない事だから…」

果夏「く、下らない事?そんなのを神様にお願ひしたの?」

真冬「うん：お願いしちやった」

そう言つて、真冬はニツコリと微笑む。

せっかく参拝に来ておいて言うのも何だが、今回は自分の願い事が聞き届けられなくても良いと：真冬はそう思った。その代わりに、果夏の願い事さえ叶えばそれで良いと：。何故なら、果夏の願い事と自分の願い事の内容が、ほとんど同じだったから……。

『今年もずっと、カナと幸せな時間を過ごせますように……』

拝殿の前でそんな事を願った自分を思い返し、真冬は再び微笑む。神様は自分の願いと果夏の願い：そのどちらを聞き届けてくれるだろうか：。まあ、どちらでも良い：。どちらか一方が叶えば、自分は今年もこの娘と一緒にいられるのだから……。

真冬「：さて、何か食べに行こうか？」

果夏「あつ：うんっ♪」

食べに行こうと言った途端、果夏の表情が明るくなる。やはり、この娘は表情が豊かで面白い。真冬は果夏と共にベンチから離れた後、そつと右手を差し出した。

真冬「さつきより、混んできたね：。これだとかかなり気を付けてないと迷子になっちゃうから、手：繋ご？」

果夏「うんっ、そうだね♡」

ギュツと握った果夏の手は温かく、何だかホツとする……。

初めて会った時はただ騒がしくてうるさい娘だと思っていたのに、今はその騒がしさが無いとどうにも落ち着かない。

真冬「：カナ、今年もよろしくね？」

果夏「うんっ！こちらこそ：だよ♪」

特別編 『ばれんたいん (前編)』

「はあ……今日も疲れた」

一日の授業が全て終わり、彼は今日もため息をつく……。
帰り支度も終え、あとはのんびりと家へ帰るのみなのだが……

(……ん?)

カバンを手に取って席から離れた時、辺りを見回してふと気付く。
教室に残っている生徒の中に由紀や胡桃、そして悠里の姿がない。それぞれ
の席を見てもう荷物等も置かれていないので、皆一足先に帰ったようだ。
いつもなら誰かしら残っているので、こんな状況は中々珍しいように思える。

(……ま、いいか)

少し寂しい気持ちもあるが、こんな日もあるだろう。彼は特に気に
する事なく、今日は一人で帰路についていった……。

~~~~~

と、彼が一人で校舎を出ていったのと同じ時……。

住宅街を並んで歩く三人の少女の内の一人……丈槍由紀は横にいる  
少女、恵飛須沢胡桃の肩をツンツンと小突き、ニヤニヤとした微笑み  
を浮かべた。

由紀「で、どうする? 明日、くるみちゃんも私達と一緒に来る?」

胡桃「え……いや、あたしは……その……」

由紀に尋ねられた胡桃は照れたように顔を背け、隣を歩く悠里の顔

を見つめる。彼女もまた由紀と同じようにニヤニヤと微笑んでおり、逃げ場を無くした胡桃は『うつ…』と声を漏らしてため息をついた…。

胡桃「…わかったよ。あたしも行く…」

由紀「やったあ〜♪」

悠里「ふつつ、決まりね」

明日と明後日は休日であり、再び学校に行く事になるのは3日後…。

その3日後に来る日は彼女らにとって、ある意味では重要な日だ。その重要な日に失敗をしないようにと思いい、由紀は胡桃を誘ったのだが…彼女はまだ恥ずかしそうに頬を赤く染めている。

由紀「ねえ、そんなに恥ずかしい？」

胡桃「まあ…そこそこ…」

悠里「あらあら、もつと気楽に楽しめば良いのに」

胡桃「気楽に…ねえ」

そもそも、由紀と悠里は平気なのだろうか？この二人は大して緊張している様子も無ければ、照れている様子も無い…。まるで自分の反応が過敏すぎるかのような感覚を抱いて胡桃が再びため息をつくとき、そんな彼女の顔を由紀がじっと見つめてくる…。

由紀「ダメだよ、くるみちゃんっ！せつかくの『バレンタイン』なんだから、もつと明るくならないと！そんな顔してたら失敗しちゃうよ!!」

胡桃「ま、当日までには表情作っておくよ…」

由紀「もうっ!!作るの表情じゃなくてチョコレートだよ!」

胡桃「ああ、分かってるって…」

由紀が眉をしかめ、呆れたような表情を向けてきたため、胡桃は彼女の頭をポンッと撫でて落ち着かせていく…。先程から彼女達が話題にしているのは3日後…2月14日の『バレンタインデー』につい

てだ。事の始まりは今日の昼休み、由紀が『明日、バレンタインの日に渡すチョコレート』の材料を買いに行こう!』と言い出した事からだった…。

悠里「じゃあ明日はみんなでお買い物に行つて、その後は私の家でチョコレート作りしましょうか♪」

由紀「うんっ! そうしよう!」

胡桃「で、作ったそのチョコレートは……………」

悠里「もちろん誰かに渡すのよ。ほら…好きな人とか」

胡桃「っ…! うう……………」

当たり前のように告げる悠里を前にした胡桃は目を丸くして驚き、またしても顔を赤く染める…。分かりきっていた事だが、みんなで作ったチョコレートを自分達で食べようという話では無いようだ。

胡桃「で、でもさ…別に好きなヤツじゃなくても良いんだよね? ほんらっ、義理チョコってヤツ? ああいうのでも良いんだろっ??」

悠里「ええ。お世話になった人あげるなら、義理チョコっていうのもアリだと思うわよ」

胡桃「だ、だよなっ?」

この瞬間、悠里は全てを理解してニヤリと微笑む…。

思うに、胡桃は彼にチョコレートを渡したいのだろうが、それが本命だと思われる事を恐れて…いや、恥ずかしがっているのだろう。だから『これは義理チョコだ』と自分に言い聞かせ、それを彼に贈ろうとしているのだろうが…

悠里「でも、くるみの場合は義理じゃなくて本命で良いんじゃない?」

胡桃「はあっ!? な、なんでそんな…っ!」

悠里「だって、大好きなんでしょ?」

胡桃「いやっ…!? 確かにアイツとは一緒に山だの海だのに行ったり

したけど、別に好きとかそういうのじゃなくてっ……!」

悠里「あら、私は一度も『彼』についての話はしていないのだけど……」

胡桃「な…っ?!?」

意地悪な微笑みを浮かべる悠里を前にした胡桃は額に嫌な汗を浮かべ、言葉を失う…。確かに悠里は『胡桃が誰かに贈ろうとしているチョコが義理なのか本命なのか』という話をしていただけで『彼』の事は話題に上げていなかった…。

悠里「…うふふっ、冗談よ♪」

胡桃「う、ううっ……」

悠里はそう言っつて胡桃の肩を叩いたが、どこまでが冗談なのか分からない。ニヤニヤと意味深な笑みを見せる悠里を前にして、胡桃は思った…。『もしかしたら、リーさんには全て見抜かれているのかも知れない』と…。

悠里「そう言えば、ゆきちゃんは誰に渡すの?」

由紀「えへへ、ナイシヨ〜♪」

悠里「じゃあ、私も内緒〜♪」

胡桃「……………っ」

『内緒』の一言で済むのなら自分もそうすれば良かった…。目の前で仲良く笑い合う悠里と由紀を見つめる内、胡桃はそんな事を思っつて苦い笑みを浮かべた…。

くくくくくくく

翌日、三人は事前に約束していた通りチョコレートの材料を買いに行つた後、悠里の家へと訪れる。彼女らはさっそくキッチンへ向かつてビニール袋に詰められていたその材料を並べていったのだが、その

量が思っていたよりも多くなってしまった為に冷や汗を浮かべた…。

悠里「ちよつと買い過ぎたかしらね…」

胡桃「だな…」

由紀「まあ、これはこれで良いんじゃない？こんだけ沢山の材料があれば、すつごく大きなチョコレートが出来るよ!!」

胡桃「無理して大きなチョコを作らなくても良いと思うけど、確かに材料は余りそうだな…」

由紀と胡桃と悠里…：仮にそれぞれが二人分ずつ、合計で六人分のチョコを作るとしても材料はまだまだ残っているだろう。バレンタインが近いという事で店にも色々な材料があった為、つい色々と買いすぎてしまった…。

悠里「…じゃ、必要な分だけ作って残りは私達で食べちゃう？」

由紀「おおっ、そうだね！しつかり味見しないとだもん！」

胡桃「ま、味見は大切だよな。せつかく作ったチョコレートが不味かったらそりやもう悲惨な事になるから、しつかりチェックしとかねーと…」

どうせ渡すのなら、やはり美味しく食べてもらいたい。

その為にも、事前に味見しておくという選択は間違っていないはずだ。まあ、ただ単に甘い物が食べたいだけ…という気持ちもあるが…。

胡桃「えつと、じゃあさつそくやっていこうと思うけどさ…キッチン使って大丈夫だよな？」

悠里「後片付けさえしつかりやってくれればね」

胡桃「ああ、そこはちゃんとやるよ」

こうして自宅のキッチンを貸してもらっている以上、それは当然だ。

そう言えば、悠里の家はやけに静かで人の気配が殆ど無い…。不思議



議に思った胡桃は悠里にそれを尋ね、彼女の両親が今は出掛けているという事を知った。

悠里「たぶん、夕方頃には帰ってくると思うわよ」

胡桃「そつか…。じゃ、それまでには終わらせたいな」

今の時刻は午前11時を少し過ぎた辺り…。順調に進めば、夕方までには十分間に合うだろう。三人は買ってきた材料の中からベースとなるチョコレートを取り出すとそれを容器に移してから湯煎し、少しずつ溶かしていった…。すると辺りに甘い香りが漂いだし、三人の表情が緩んでいく…。

由紀「いい匂いだね♪」

胡桃「…ちよつとだけ味見しとくか」

胡桃は溶けていくチョコを持っていたヘラで掬い、それを指先につける。溶け始めたばかりのチョコはほんの温かく、それをペロリと舐めた瞬間、胡桃はとても幸せそうに微笑んだ。

胡桃「やば…このままでも美味しいな…」

由紀「あつ！くるみちゃんだけズルいつ!!」

彼女の表情を見た後、由紀も直ぐ様ヘラでチョコを掬い、それを舐めとる…。これは市販のチョコレートを溶かしたただけでまだ手は加えていないのだが、半溶けのチョコは感動的なまでに美味しく感じた…。

由紀「ん〜っ！おいしいっ!!もうこのままでも十分贈り物に出来るレベルだよっ！」

悠里「お湯から離したらすぐに固まっちゃうから、このまま贈り物にするのはちよつと無理じゃないかしら…」

胡桃「あははっ。だな…」

それに、ただ溶かしただけのチョコを贈り物にするのは少し味気な

い……。どうせならもつと可愛らしく、バレンタインっぽい形に固めた  
いものだ。胡桃は湯煎しているチョコレートをヘラで混ぜつつ、買っ  
てきた型抜きを道具を眺めていく……。丸い物、星型の物……。更にはハ  
ートの形をした物……。どれにしようか悩むところだ。

悠里「……くるみ、さつき舐めたチョコが口についてるわよ」

胡桃「んっ？ああ、ほんとだ……」

口の端に付いていたチョコを親指で拭い、最後にその親指を舐め  
る。付いていたチョコはほんのちよつとだけだったがそれでも甘く、  
美味しかった。

由紀「っ！そうだっ!!」

胡桃「おおっ、急に何だよ!？」

真横にいた由紀が急に大きな声を出した為、胡桃はその肩をビクッ  
と震わせる。由紀は胡桃の唇、そして湯煎されて溶けていくチョコ  
レートを交互に見つめ、目をキラキラと輝かせた。

由紀「くるみちゃん、この溶けたチョコを唇に塗って『私の唇がバ  
レンタインの贈り物だよ』って相手の人にやってみたらどうかかな？」

胡桃「なっ!?!バカかっ!?!そんな事できるわけねえだろっ!!」

由紀「やっぱダメ？この前読んだマンガでやってただけだなあ  
……」

胡桃「な、なんてマンガ読んでんだよ……」

自分の唇に塗ったチョコをそのまま相手への贈り物にする……。そ  
んなにも大胆で恥ずかしい事なんか出来る訳がない……。が、由紀の残  
念そうな表情を見るに彼女はわりと本気で提案していたようだから  
恐ろしい……。

悠里「二人とも、少しここを任せていい?」

胡桃「ん？大丈夫だけど……どうした?」

悠里「ちよつと二階に行つて、応援を呼んで来ようかなあつて」

胡桃「応援？……ああ、そういうことか」

悠里の言葉の意味を察し、胡桃は微笑む。悠里はほんの少しの間だけその場を離れると、すぐに二階から戻つてその”応援”を連れてきた。

るー「わあ……いい匂い……」

由紀「おっつ！るーちゃんは家にいたんだね♪」

悠里「ええ、せつかくだからるーちゃんにも手伝ってもらいましょ」  
悠里は二階の部屋から連れてきた妹……るーの背中を押してキツチンに立たせると、彼女と並んでチョコレート作りを始めていく。姉と一緒にチョコ作りをしていくるーは楽しげに笑つており、悠里もまた、嬉しそうに微笑んでいた。前々から思つていた事だが、この姉妹は本当に仲が良い……。

るー「作つたチョコ、りーねーは誰にあげるの？」

悠里「うふふ、内緒っ」

るー「……わたしの分もある？」

微かな間を空け、るーは上目遣いで尋ねる。

悠里が誰にチョコを贈るのかはさておき、自分がそれを貰えるかどうか気になってしまったようだ……。その問いを聞いた悠里はニッコリとした微笑みを浮かべると、るーの頭をそつと優しく撫でていた。

悠里「もちろん、るーちゃんの分もあるわよ」

るー「えへへ……ありがとうっ。りーねー好き♡」

るーは本当に嬉しそうな笑みを浮かべながら、悠里にギュツと抱き付く。その光景はとても微笑ましいものであり『自分にもこんな妹がいたらなあ』と……由紀と胡桃は二人して同じような事を思つた……。

特別編 『ばれんたいん（後編）』

2月14日……。この日は生徒らの様子がそれとなく慌ただしくなる。

女子は普段と比べるとソワソワしている事が多いような気がするし、男子も落ち着きなくロッカーや下駄箱、机の中を確認したりしている……。それらは間違いなく、今日が『バレンタインデー』という日なの原因だろう。

（まったく、何度確認しても無い物は無いだろうに……）

一時間目の授業が始まる数分前、離れた席にいる一人の男子生徒が頻りに机の中を確認していたが、いくら確認してもそこにチョコなんて物は無い。一度確認して無かったのだ。潔く諦めれば良いのに。彼はその生徒を見つめながらそんな事を思い、授業の準備を始めた。因みに：彼の下駄箱やロッカー、机の中にもチョコは無かった……。

（まあ、そうだろうな……）

正直に言うとも多少の期待はしていたが、これが現実ならばそれを受け入れよう……。などと思いつつも『まだ一日は始まったばかりなのだから、まるつきりチャンスが無い訳ではない』というような事を考えてしまうから不思議だ。

~~~~~

実際、一時間目の授業を終え、休み時間を迎えた彼に好機が訪れた。一人の女子生徒が彼のいる席へと歩み寄り、小さな包みを手渡したのだ。

女子生徒 「はい、これっ」

「おおっ？？くれるの？」

女子生徒「うん！まあ、義理だけどね♪」

女子生徒はニツコリとした笑顔を見せた後、彼のそばから離れていく…。

よく観察してみると、彼女はクラスの男子全員に手作りのお菓子を配っているようだった。彼女のような存在がいてくれると、本来ならチョコを一つも貰えなかったであろう人の傷もいくらかマシになるだろう。

(…菓子作りが趣味なのかね)

ビニール包みに入っているクッキーを眺め、彼はそんな事を思う。

いくらお菓子作りが好きなのだとしても、クラスの男子全員分を作るのはかなりの手間になりそうだが…それを配って歩く彼女はそんな苦労など微塵も感じさせぬ笑顔を浮かべていた。

(まあ、ありがたく貰っておこう)

いくら義理とはいえ、女の子から贈り物をされて悪い気はしない。受け取ったそれを机の中へと静かにしまっただけは微かに微笑んでいたが、由紀・胡桃・悠里の三名は…いや、主に胡桃と悠里はそれぞれの席から彼の事を見つめ、何とも言えぬ表情を浮かべた。

胡桃 (くそ…いざ当日になると渡すタイミングが…)

悠里 (全く掴めないわね…)

先程の女子生徒のようにクラス全員分を用意しているのなら堂々と動けるが、胡桃も悠里も男子の為に用意してきたチョコは一つだけ…。そんな物を手渡しで彼に贈っているのを他の生徒に見られたら、冷やかされる可能性も大いにあるだろう。二人はそれを恐れて動けずにいたが、ただ一人…丈槍由紀だけは違った。

由紀「ねえねえ、わたしからもこれあげるっ」

彼の隣に席を持つ由紀は自身の机の中から小さな箱を取り出すと、

物怖じする様子も見せずに彼へそれを手渡す…。無邪気に微笑む由紀からチョコを受け取った彼は一瞬だけ目を丸くして驚いていたが、すぐ様彼女にペコリと頭を下げ、その贈り物を机の中へとしまった。

「わざわざ悪いね。因みに、これは本命だったりする？」

由紀「えへへ、どうだろうね♪」

子供のように穢れの無い笑みで答えを誤魔化す由紀を見て、胡桃と悠里は尊敬にも似た感情を抱く。彼とのやり取りはそばにいる生徒ら複数人に見られているのに、由紀はそれを全く気にしていないのだ。

胡桃（ゆき、お前スゴいよ…。あたしには絶対ムリだ…）

悠里（でも、これってゆきちやんだから出来る技よね…）

由紀はその子供っぽさや無邪気な笑みが理由でクラスの人気者であり、ある種のマスコットキャラのような存在だ。だからこそ、由紀が彼に堂々とチョコ渡したところでそれを冷やかすような生徒は一人として出なかった…。当然、彼の事を羨む男子生徒は数名いたが…。

由紀「あまり美味しくないかもだけど…それでも一生懸命作ったから、喜んでくれるとうれしいな…」

「ああ、凄く嬉しいよ。本当にありがとう」

彼がそう答えると、由紀は顔を俯けて照れたように微笑む…。

しかし由紀がこうしてチョコをくれたのなら、同じくらいに交流がある胡桃や悠里もそれをくれる可能性がある。それを期待して二人へ視線を向ける彼だったが、その頃には胡桃も悠里も顔を背けていた…。

~~~~~

そして数時間の時が過ぎ、昼を迎えた頃……。彼はこの日も由紀や胡桃、悠里といういつものメンバーと校庭辺りで昼食を共にする事となり四人で廊下を移動していたのだが、その途中……見慣れた後輩である祠堂圭、直樹美紀、狭山真冬、紗巴果夏、那珂歌衣達五人が前へと現れた。

圭「いたいた。先輩、今からお昼です?」

「ん?そうだけど……圭ちゃん達は何しに来たの?」

今、一行がいるここは三年生の教室前の廊下……。ここに二年生である彼女らがいるのはおかしいとまでは言わないが、特別な用事でも無ければバツタリ会ったりしない場所だ。彼がそれを問うと圭はニコリと微笑み、小さな紙袋を手渡す。

圭「これ、私と美紀ちゃんからです♪」

美紀「一応言っておきますが、義理チョコですからね?」

圭が満面の笑みで告げる中、その隣に立つ美紀がクールな表情で言葉を付け足す。しかしそれが義理であろうと何だろうと、こうしてわざわざ手渡しに来てくれたのは嬉しい。彼は圭からそれを受け取ると、二人へ向けて礼を言った。

「ありがとう。ありがたく貰っておくよ」

圭「美紀ちゃん、今はこんな事を言ってますけど、私と二人でこれを作ってた時は凄く一生懸命だったんですよ?ちよつとでもおかしな所があると『こんなのは先輩に贈れない』って言って最初から作りなお——」

美紀「ちよつ?!圭つ!!!」

圭「あはは、ごめんごめん。ま、そういうわけです♪」

放たれかけたその言葉に対して美紀は顔を真っ赤に染めて怒っていたが、圭はそんな事などお構い無しにヘラヘラと笑う。二人がそんなやり取りを始める中、そばにいた果夏達も彼へ向けて小さな包みを手渡していった。

「まさか後輩達からも貰えるなんて…」

果夏「ま、私はお菓子作りとか苦手なんで…結局既製品になっちゃいましたけどね。すいません…先輩だって『カナちゃん特製手作りチョコ』が食べたかったでしょうに…」

「まあ…それはまた来年にでも頼むよ。とりあえずありがとう」

確かに果夏から貰ったチョコだけ手作り感の無いパッケージに包まれており、いかにも既製品といった感じがする…。ただ、手作りであろうが無かろうが、贈り物をしてくれたその気持ちがありがたい。

真冬「因みにボクのは手作りだけど、あまり自信は無い…。だからもし不味かったら、そのまま捨てても良い」

「いやいや、さすがに捨てはしないって…」

歌衣「私のも手作りですが、義理チョコですからね？先輩にはお世話になりましたから、これはあくまでもそのお礼です」

腰まで伸びた茶髪を揺らしてツンとしたような表情を浮かべる歌衣だが、その表情は少しだけ照れているようにも見える。義理だろうと何だろうと、男の人に贈り物をするのは彼女にとって初めての試みだったからだ。その後、歌衣は彼の横に立つ胡桃を見てニッコリ微笑むと、もう一つ用意していた大きめの包みを手渡した。

歌衣「くるみ先輩の分も用意したので、良かったら食べて下さいね」  
♪

胡桃「えっ？あたしの分まで？なんかわりいな…。お返しはキツチリと用意するから、少しだけ待っててくれ」

歌衣「そんな、お返しなんて良いんですっ！」

歌衣は慌てた様子で両手をパタパタと振った後、胡桃へ向けて笑顔を見せる。彼女が胡桃に渡した包みは彼が受け取った物よりも一回り大きいように見え、彼は複雑そうに苦笑した。

慈「あらあら、みんな揃って楽しそうね」



一行が廊下で騒いでいると教師である慈がその場に歩み寄り、全員の事を見回していく…。少し離れた所からでも分かるくらい楽しい騒いでいた理由は何なのかと思う慈だったが、彼がその腕に幾つかの包みを抱えているのを見て全てを察した。

慈「なるほど：今日はバレンタインデーだものね：」

どうりで生徒達がいつもより騒がしい訳だと思いつつ、慈はため息を漏らす。この学校は購買でも菓子類が売っているくらいなのでそういった物の持ち込みは禁止していかないのだが：独り身の慈からすると、若い子らがチョコを貰ったり渡されたりして青春を送っている様を見ているのがいくらか心苦しい…。

由紀「めぐねえは誰かにチョコ渡した？」

慈「えっ？いや：私はそういう人いないから…」

圭「へえ、意外ですね」

慈「え、ええ…：まあ、うん…」

こんなにも若くて可愛い見えた目ならモテそうなのに、何で彼氏の一人もいないのだろう…。そんな事を思う教え子達からの不思議そうな目線を受けた慈はそつと目を逸らすと、ポケットに手を入れて小さな小箱を取り出す。慈は可愛らしいリボンでラッピングされていたその小箱を眺めて悩ましげに唸った後：覚悟したように瞳を開いてそれを彼の腕の中へ納めた。

「んっ？これは…っ」

慈「その、今朝コンビニで買ったチョコなんだけど：食べるタイミングが無いからあげるわ。一応、私からのバレンタインプレゼントでこと…」

「はあ…：ありがとうございます」

彼は渡されたそれを手に取ると、真剣な眼差しでそれを観察している…。彼もよくコンビニには行くが、こんな風にラッピングされたチョコは見たことが無いような気がした…。それもその筈：これは

完全なる慈の手作りチョコであり、コンビニには売っていない物なのだから。

慈（とりあえず、渡せてよかった……）

最初は何も言わず彼の机の中にでも入れておこうかと思っただけが、やはり手渡ししたいという思いが強かった。さすがにかなりの勇気がある行動だったが、どうにかそれを実行出来た慈はホツとしたような笑みを浮かべてその場を去っていった……。

~~~~~

その後、慈や後輩達と別れた彼等は校庭の木の下で円を作るようにして腰を下ろし、昼食をとっていく。何時ものように他愛ない会話を交わしながら昼食を進める中、悠里は用意していた包みをスツと取り出し、それを何気ない様子で彼に手渡した。

悠里「はい、これ：私とるーちゃんからね」

「おおっ？ーりーさん達まで用意してくれてたんですか。ありがとうございます。ございます。るーちゃんにもお礼言っついて下さい」

悠里「ええ、分かったわ♪」

昼食をとりながら然り気無くチョコを渡す悠里を前にして、胡桃は目を丸くする……。確かに今は辺りに他の生徒の影も無く、渡すには絶好のタイミングだった。胡桃はそれに気付くのが遅れたが、悠里はすぐ様それに気付いて彼へチョコを贈ったのだ……。

胡桃（うわあ……あたしも今渡せばよかった……）

いや、今から彼に手渡しても遅くは無いだろうか……。しかし、いざ彼へチョコを渡そうとするとやたらとドキドキして動けなくなってしまう……。胡桃がそうして悩む中、悠里はニツコリとした表情で昼食を食べ進めていた。彼にチョコを渡せたので、気持ちも軽くなったのだろう。

胡桃「……………」

悠里「…さて、少し喉が渴いたわね。ゆきちゃん、一緒に飲み物買いにいかない？」

由紀「うん、行く〜！」

昼食を食べている途中で立ち上がり、悠里は由紀と共に自動販売機へ向かおうとする。その際、悠里がこちらを見てニツコリと意味深な笑みを向けた事を胡桃は見逃さず、ハツとした表情を浮かべた。

胡桃（リーさん…もしかして…）

彼女はきつと、彼と胡桃が二人きりになる状況を作ろうとしてくれているのだろう…。確かに由紀と悠里に見守られながらチョコを渡すのは少し照れくさいので、彼女の気遣いはあるがたいものだった。

悠里「じゃ、行ってくるわね。すぐ戻ると思うわ」

胡桃「ん、んん…！行ってらっしゃい…」

その場を離れる悠里と由紀を見送り、胡桃は彼と二人きりになる…。

チャンスは今しかない…。胡桃は辺りに人影がない事を確認すると、隠し持っていた小包を彼の前へと差し出した。

胡桃「その…ここ、これ…あたしから…」

「…マジか」

彼は食べていたパンをゴクリと飲み込み、目を真ん丸にして驚く…。

彼のそんな表情を見た胡桃は頬を真っ赤に染めると、自身の恥ずかしさを隠すように声を張った。

胡桃「な、なんだよその顔っ！いらなら無理して受け取んなくてもいいからなっ!!」

「いやいやっ、いる！凄くいるけど…：胡桃ちゃんから貰えるとは思ってなかったもんで、少し驚いたんだよ」

なんて事を言いながらも彼はそれを受け取り、嬉しそうに微笑む。

「今年のバレンタインは大収穫だ」

胡桃「…そりやよかったな」

後輩や悠里達から貰ったチョコを手にして満足そうな表情の彼を見て胡桃も微笑み、再び昼食を食べ進める。するとその目の前で『カサカサ』と、何かを開いていくような音が…。胡桃が音の方へ視線を向けると、彼が今胡桃から渡されたばかりの小包を嬉々とした表情で開けているのが目に映った…。

胡桃「おいっ!?!な、なんで今開けるんだっ!?!」

「へっ?ダメかい?」

胡桃「ダメじゃないけど、ダメっていうか…と、とにかく今はっ…!!」

胡桃が真つ赤な顔でそれを止めたのには理由があったのだが、時すでに遅し…。小包はそのラッピングを剥がされて蓋を開けており、中に眠るチョコレートが彼の視界に晒された。わりと大きめな一つのチョコ…それは『ハート』を象かたどっていた…。

「おおっ」

胡桃「あ…う…ううっ…」

綺麗なハート型のチョコをじっと眺め、彼は瞳を輝かせる。

その一方、胡桃は顔を真つ赤に染めながら視線をキョロキョロと泳がせ、額から汗をダラダラと流していった…。

胡桃「ち、ちが…!か、型かたが…型かたがそれしか無くてっ…!」

焦ったように告げる胡桃だが、それは嘘だった…。由紀、悠里と一緒に買ってきた型はいくつも種類があったのだが、悩みに悩んだあげく勇気を振り絞ってこのハート型チョコを作ったのだ。しかし彼がそれを目の前で開けるとは予想しておらず、胡桃は軽いパニック状態おちいに陥るが…彼は彼女の発言を信じてくれたようだった。

「まあ、バレンタインっぽい形ではあるね…」

胡桃「だ…だろっ？せつかくのバレンタインなんだから、ハート型の方が雰囲気出るかなあと思ってた…」

「…ありがとう。本当に嬉しいよ」

ただ一つのチョコを渡すのにかなり時間をかけてしまったが、こうして彼の嬉しそうな顔が見れた…。彼が嬉しそうにしているだけで胡桃も幸せな気持ちになり、頑張つて渡して良かったと…心からそう思えた。

第五十三話 『おさそい』

時刻は昼頃：巡ヶ丘学院高校の中庭にて。

彼はいつものようにクラスメートの由紀、胡桃、悠里たちと昼食を食べ進めていたのだが、それが終わろうかというとき……女子生徒が三名、そこへと現れる。現れた女子生徒はどれも顔見知りであったが、昼時にこんな所で会うのは珍しい事だった。

圭「あつ、先輩達、やっぱり今日もここにいたんですね」

胡桃「ん？ああ、お前らか……」

目の前に現れた女子生徒……圭、美紀、そして歌衣を順に見つめつつ、空になった弁当箱を片付ける。もうすぐ昼休みも終わろうかというタイミングで現れたあたり、昼食を一緒に……という用事ではなさそうだ。

美紀「あの……先輩達、次の土曜日とか予定空いてますか？」

由紀「土曜日？ううん、何の用事もないよ。くるみちゃんは？」

胡桃「あたしも特には……」

由紀、胡桃が答えた後、美紀達は無言のまま彼と悠里を見つめる。それに気が付いた二人は由紀達からワントンポだけ遅れた後、土曜日に予定があるか無いかを答えていった。

「こちらも同じく……暇だね」

悠里「私もこれといった用事は無いけれど、どうしてそんな事を聞くの？」

圭「ふふふつ……よし！歌衣ちゃんっ!!」

歌衣「はいっ！」

圭の声を合図にして、歌衣は胡桃達の前へと寄る。彼女はやたらと嬉しそうにニコニコとした表情を浮かべながら制服のポケットに手を入れ、そこから数枚の紙切れを取り出した。胡桃達は取り出された

その紙切れが何なのかと注目するが、彼女らがその正体に気付くよりも先に歌衣が言葉を発する。

歌衣「これ、この前出来た遊園地のチケットなんです。私のお母さんが知り合いの方から貰った物なんですけど、枚数が多くて…」

その手に握られているチケットを改めて見てみると、確かに結構な枚数がある。歌衣が言うには、これだけの数のチケットを使わないでおくのももったいないので、友達でも誘って遊びに行くと良いと母親に言われたらしい。

圭「そういうわけで、次の土曜日にみんなで行ってみませんか!」

由紀「おおうっ! いいのっ!?! 行きたい行きたいっ♪」

胡桃「確かに行つてはみたいけど…でも、本当にいいのか?」

歌衣「もちろんですっ! くるみ先輩達が来てくれたら私もすっごく嬉しいので♪何の遠慮もありませんよ」

歌衣はニコニコとした表情のまま胡桃にチケットを手渡すと、悠里と由紀にもそれを一枚ずつ手渡していく…。そして最後は彼にそれを手渡した後、彼女はニコニコ顔のまま何かを催促するかのよう右手をスツと差し出した。

歌衣「先輩にはお世話になってますから…千円で良いですよ」

「なっ!?! 僕だけ有料なのか!?!」

胡桃達にはタダで手渡していたのに、なんで自分だけ…。歌衣の行動に驚いた彼が目を丸くしていると、彼女は差し出していた右手をパタパタと振ってイタズラな笑みを浮かべる。

歌衣「ふふっ、冗談ですよお♪先輩もタダでご招待しますね〜」
「あ、ああ……そりやどうも…」

歌衣にからかわれるというレアな経験をし、彼は苦い笑みを浮かべる。前まではこんな風に冗談を言うような子じゃなかった気がするのだが、それは勘違いだろうか…。

(それだけ懐なつかれた…ってことなら良いんだけどね)

そう言えば、歌衣はこの頃よく笑うようになった。最初の頃はいかにも人見知りって感じの子だったのに、最近は同学年の美紀達や三年生の胡桃達とも楽しげに接している…。雰囲気もかなり明るいものへと変わってきているようだ。

美紀「どう？これで全部配り終えた？」

歌衣「いえ…あと一枚だけ余ってるんですよねえ…」

胡桃達に配り終えた今ですら、彼女の手元にはチケットが余っている…。歌衣は自分の分とは別に持っているそのチケットを両手で握ると、今度は悠里の事をチラチラと見つめ出した。

歌衣「あ、あの…：…るーちゃん、誘ったら来てくれますか？」

悠里「えっ？ええ、あの子も土曜日は暇だと思うから、誘ったら喜んでついて来ると思うけど…：…」

歌衣「じゃ、じゃあっ…！これもあげるので誘って下さいっ!!」

歌衣は余っていた最後の一枚を悠里へ突き出すと、それを手の中へと無理矢理に握らせる。悠里はその行動に少し困惑していたが、最後は笑顔で受け取ってくれた。

悠里「…じゃあ、誘ってみるわね。本当にありがとう。るーちゃんも喜ぶと思うわ」

歌衣「は、はい…喜んでくれたら嬉しいです…。前、一緒に山へ行った時はあまりお話出来なかったの…：…今回はもう少しだけ仲良くなれたらなあ」と

悠里「ええ、仲良くしてあげてね♪るーちゃんに友達が増えるのは、私にとっても嬉しい事だから」

微笑みながら言葉を返し、悠里は今受け取ったばかりのチケットを見つめる…。全てを説明してこのチケットを渡したら、るーは絶対に喜ぶだろう。愛する妹が嬉しそうに微笑むその光景を一人想像し、悠

里はそのチケットをポケットへとしまった。

悠里「ええつと、当日はどうしたら良いのかしら?」

歌衣「街からこの遊園地までは直通のバスがあるようなので、それに乗っていかうかと思っっています。当日の詳しい集合場所とかはまた後で連絡しますね」

彼女の話聞いた限りだと、移動手段に関しての心配はいらないようだ。悠里達は昼休みが終わるギリギリまで話を続け、この外出には真冬、果夏の二人も誘っているという情報を得た後、そのまま二年生組と別れて教室へと戻っていった…。

くくくくくくくくく

由紀「ふふふくん♪遊園地、楽しみだなあ♪」

教室へ戻った由紀は自分の席につくなりご機嫌に足を揺らし、鼻唄を歌い出す。どうやら皆揃って遊園地へ遊びに行くのがかなり楽しみなようだ。

「そう言えば、遊園地なんかに行くのは久々だな…」

ご機嫌な由紀の隣に席を持つ彼は自らの記憶を辿り、ボソツと呟く。そういつた場所に行った事がないわけでは無いが、少なくともここ最近の話ではなかった。

由紀「わたしは…そこまで久々ってわけでもないかな。前もくるみちやんと二人で遊園地に行ったんだけどね、すっごく面白かったよ！ねえ知ってる?くるみちやんってあんなでも意外と怖がりさんでね、お化け屋敷とか行くとすぐに…」

胡桃「余計なこと言うなっ!!」

という怒声と共に一つの消しゴムが宙を飛び、由紀の頭を直撃する。頭へ直撃した消しゴムは床へ落ちた後に何度か弾み、少ししてか

らその動きを止めた。

由紀「い、痛いよ〜…」

胡桃「ゆきがお喋りだから悪いんだ！」

落ちた消しゴムを拾いあげ、胡桃はその場を去っていく…。彼女はついさっきまで自分の席にいたため、由紀達とはそここの距離を空けていたのだが、それでも由紀と彼の会話を聴き逃さなかったあたり耳は良いようだ。

「……で、さっきは何て言おうとしたの？」

由紀「ん〜……言いたいけど、言ったらまた消しゴムが飛んできそう〜…」

「……だろ〜うね」

離れた場所に位置する胡桃の席を見つめると、彼女が今もこちらを監視しているのがハッキリと分かる…。胡桃から放たれる鋭い視線に気付いた由紀は額に汗を浮かべ、机の上へ『ペタツ』と顔を伏せた。

(まあ、わざわざ最後まで聞かなくても大体は分かったけど…)

途中で遮られたとはいえ、由紀の言葉から大体の事は予想できる。

恐らく胡桃は怖がりな子で、お化け屋敷等が苦手なのだろう…。彼はそれを知り、一つの決意をした。次の土曜…みんなと一緒に遊園地へ行ったら、胡桃をお化け屋敷に誘ってみよう…。

(…やばい、楽しみだな)

もし誘ってみたら、彼女はどんな反応を見せるだろう…。ハッキリ『嫌だ』と断るのか、それとも…強がって了承するのか…。いずれにせよ、土曜になれば答えが出る。由紀程ではないが、彼もまた少しご機嫌になった。

第五十四話 『しゅっぱつ』

『これ、この前出来た遊園地のチケットなんです。次の土曜日にみんなで行ってみませんか?』

と、歌衣に告げられて早数日の時が経った…。

約束していた土曜日はあつという間に訪れ、彼女らは事前に約束していた通り、街中にあるバス停前へと少しづつ集合していった…。

~~~~~

由紀「おはよう!」

胡桃「ああ、おはよう」

歌衣「ゆき先輩、おはようございます」

胡桃、歌衣の両名は現れた由紀へ向け挨拶を済ませると、これから向かう遊園地の情報を携帯で調べて大雑把な予定を組み立てる。そうして歌衣の携帯画面を横から覗きこみながら楽しげに会話する胡桃を見て、由紀は目を丸くした…。今日は頑張って早起きしたので自分が一番乗りだと思っていたのに、歌衣どころか…胡桃にまで先を越されていたからだ。

由紀「くるみちゃん、今日は珍しく早起きだね?」

胡桃「珍しく」つて…:…:…:そもそも、あたしはお前ほど寝坊するタイプじゃないぞ。今日だって朝早くから起きて歌衣の家まで行き、ここまで二人一緒に歩いて来たんだ」

由紀「歌衣ちゃんをお迎えに行つてあげたの?お〜っ!くるみちゃんつて意外と優しいんだね!」

胡桃「意外で悪かったな…:…」

小さな声でボヤきつつ、そばに立つ歌衣の横顔を見つめる。今回わざわざ歌衣の事だけを迎えに行ったのは、彼女の家が偶然、このバス停に行くまでの通り道にあったからだ。『今、家の前まで来てるから、

バス停まで一緒に行くか?』とメールを送った後、直ぐ様家から出て来た歌衣の表情は忘れられない…。本当に嬉しそうで、子供のような笑顔だった…。

胡桃(約束の時間よりちよい早いタイミングだったし：歌衣にも自分のペースがあるだろうから迷惑かかって思ったけど、あんなふうに喜ばれると、メールしてみても良かったって思えるな…)

可愛い後輩の可愛い笑顔を思い出し、胡桃は頬を緩める…。しかしここに来るまでの通り道にあったのは歌衣の家だけでなく、胡桃はそこにも寄っていたのだが…。

胡桃(あいつはほんと：ダメダメだな…)

歌衣の家に寄る少し前、通り道にあった彼の家へ立ち寄った事を思い出し、深いため息をつく。彼にも歌衣にやったのと同様のメールを送り、家の前で待機していたのだが：彼はそこから出ては来なかったし、メールに対しての返事すら寄越さなかった。

胡桃(ま、たぶん寝ただけなんだろうけど…)

あまり早起きが得意なタイプではないようだし、きつと集合時間間に合うギリギリのタイミングまで寝ているつもりなのだろう。それが彼のペースならとやかく言うつもりも無いが、ほんの一瞬…ここに来るまでの道のりを彼と歩めるのではと想像してしまっただけに、残念な気持ちがあった…。

胡桃がそんな気持ちを胸の隅に抱きながら歌衣、由紀と共に会話をしていると十数分経った頃に悠里と妹のるーが現れ、その後美紀と圭、真冬と果夏達二年生組が現れる。約束していた時間まではまだ余裕があるのだが、皆少しだけ早めに行動してきたらしい。ただ一人、彼だけを除いて…。

圭「先輩、来ませんね。どうしたのかな」

美紀「そろそろバスが来ちゃいますけど…」

約束していた時間すらも過ぎ、遊園地へ向かう為のバスが到着する時間が近づく。しかし彼は未だ現れず、一同はソワソワし始めた。

悠里「彼の事だから寝坊してるのかも知れないわね…。はあ…やっぱり、途中で家へ寄って起こしていくべきだったかしら」

胡桃「まったく、仕方ないヤツだな…」

呆れたように頭を掻き、胡桃は自分の携帯で時間を確認する。バスが来るまであと十数分…。ここから彼の家までは十分はかかるが、走れば五分程で行けるかも知れない。仕方ないので彼を迎えに行く事を胡桃が決めた矢先…

「いやあ、遅れてしまった…。本当に申し訳ない」

ギリギリのところ、本人が現れた。

どうして遅れたのかと事情を聞いたところ、彼は『目覚まし時計のセットを忘れた』と言って苦い笑みを浮かべ、辺りにいた女子達を呆れさせる…。しかし、これで全員が無事に集まった。その後、一行はほぼ予定通りの時刻に現れたバスへ乗り込むと、到着までの間、席に座りながら会話をして時間を潰していく事にした。

真冬「ふあ…あ…」

果夏「随分と眠そうだね？夜更かししてたの？」

隣の席に座る真冬が大きく開いた口へと手を添えながら欠伸あくびするのを見て、果夏は尋ねる。よく見ると真冬の目の下にはうつすらとクマが出来ていて、かなり眠たげな目をしていた。

真冬「うん…買ったばかりのゲームをしてたら止めるタイミングが見つからなくて、結局夜中までやってた…」

果夏「ほく、ゲームがやめられずに夜更かししてしまうとは…真冬ちゃんもまだまだ若いすなあ」

真冬「うん…若い若い…」

果夏の言葉を適当に流しつつ、真冬は座席横の窓へ頭を寄せる…。目的地である遊園地まではそれなりの時間がかかるようだし、一眠りしようと考えたようだ。

果夏「真冬ちゃん寝ちやうの？えく、そんなのつまんないよく！」  
プクッと頬を膨らませ、果夏は不満げな表情を浮かべる。しかし真冬はそんな事など全くお構い無しに瞳を閉じ、すぐに寝息をあげ始めた…。

歌衣「るーちゃん、これ食べる？」

るー「あつ…うん、ありがとう」

歌衣「えへへ…どういたしまして♪」

果夏が不満な表情を浮かべ続ける一方、その後方の座席にいた歌衣は更にもう一つ後方の座席に悠里と並び座るるーへとお菓子を手渡す。以前山へ行った時にはあまり喋らなかつた為るーは微かに緊張していたようだが、お菓子を貰った事によりニッコリとした笑みを浮かべてくれた。

歌衣「悠里先輩もどうですか？」

悠里「いえ、私は大丈夫よ。それよりも改めてお礼を言わせて。今日は誘ってくれてありがとう。見ての通り、るーちゃんも喜んでるわ」

歌衣「ふふつ、なら良かったです♪」

るーはもちろん、悠里もまた嬉しそうに微笑みを見せる。大好きな妹が嬉しそうだと、姉である彼女も自ずと笑顔になってしまうのだから…。仲良く微笑み合う二人を見て、本当に仲の良い姉妹だなあと…歌衣はそう思った。

胡桃「…真冬は寝たのか？まあ、確かに眠そうな顔してたもんな…」

歌衣が後方の座席にいる若狭姉妹と話す一方、歌衣の隣に座っていた胡桃は前の座席にいる真冬がやけに大人しい事に気が付き、彼女が

眠りについていてる事を知る。と、前の席へ向けていた視線をそのまま自分の右方向：バス内の細い通路を挟んだ先にある席へ向けると、そこにいる由紀もまた眠たげな目をしている事に気が付いた。

胡桃「つて、よく見るとお前もクマが酷いなっ！」

由紀「えっ？そうかな？」

さっきは気が付かなかったが由紀の目は真っ赤に充血しており、うつすらとクマが出来ている…。少し目を閉じたらあつという間に寝てしまうのではないだろうかと思わせる程に酷い有り様だが、由紀はそんな状態でもニヤニヤと微笑んでおり……

由紀「えへへ、今日のお出かけが楽しみで楽しみで…全然眠れなかった!!」

『ふんふん！』と鼻息を荒げ、興奮した様子でそう告げる…。

本当はかなりの眠気に襲われているようだが、これから皆と一緒に遊園地へ行くという事実による興奮がその眠気を打ち消しているのだろう。

胡桃「楽しみで眠れなかったって…子供みたいな事を言うヤツだな…。とにかく、到着するまではまだ時間があるから、それまでに少しでも寝て休んどけ」

由紀「くるみちゃんには分かってないな。こういう移動中のお喋りも、お出かけの醍醐味だいごみなんだよっ！」

胡桃「だとしてもだ。このまま無理し続けて、いざ遊園地に着いてから倒れでもしたら台無しだろう？」

由紀「う〜くん…それもそうだけど…」

「大丈夫、着いたら起こしてあげるから」

由紀「じゃあ、ちよつとだけ寝ようかな。すぐに寝られるかどうか分かんないけど…」

隣の席に座っていた彼にそう告げられ、由紀は渋々目を閉じる…。口では『すぐに寝られるか分からない』と言っていたものの、目を閉

じてから一分としない間に彼女は寝息をたてていった…。

「……………」

彼はそんな由紀の寝顔を見つめていくと何となく……ただ何となく、彼女の目元や口元を観察していく。すうすうという寝息と共に小さく動く唇は綺麗なピンク色をしており、ぷるりと柔らかそうだ……。閉じた<sup>まぶた</sup>瞼のふちに生えているまつ毛も長くて綺麗だし、微かに赤みを帯びている頬もふっくらと柔らかそうでつい触れたくなる……。本人が眠っている今なら、この頬を指先で突ついてもバレないかも知れない……。

胡桃 「…おい、ゆきに変な事すんなよ」

「っ……。ふふっ……。失礼な……。変な事なんてする訳がないだろうに……」

隣に眠る由紀へ伸ばしかけていた右手を慌てて引っ込めると、出来るだけ平静を装いながら答える。気付かれてしまうくらいに不審な動きをしたつもりはないが、胡桃には見抜かれていたらしい……。

(勘の鋭い子だな……)

通路を挟んで左側にある席に座っている胡桃は彼の事をじつと見つめており、彼が由紀に手を出さぬよう警戒している様だ。彼女の視線がある限り、こっそりとも由紀に触れるのは無理だろう……。彼は諦めたようにため息をつくと座席にもたれ、胡桃の目を見つめ返す。

「胡桃ちゃんは…遊園地に行ったら何したい？」

胡桃 「えっ？うくん、そうだなあ……ジェットコースターとかに乗ってみたいなー」

「ほう…ジェットコースターねえ……………」

確かに、胡桃はそういった乗り物…所謂<sup>いわゆる</sup>絶叫マシンが好きそうないメージがある……。ただ、そんな彼女でも苦手な物があるはずだ……。この前、由紀が言いかけた言葉から察するに、彼女はきつと……………



「…胡桃ちゃん、遊園地に着いたら、ちよつといいかな？」

胡桃「ん？なんだ？」

「いやその…大事な話があるんだよ。君に伝えたい、大事な話が…」

神妙な面持ちおもでそう告げ、彼女の目を真つ直ぐに見つめる。すると胡桃の顔はみるみる真つ赤に染まっていき、瞳もだんだんと大きく開かれていった。胡桃の隣にいる歌衣は悠里達と喋っていたので二人の会話には気付いていないし、美紀達も気付いていない…。

胡桃「だつ、大事な…話つ…？」

「ああ…大事な話。出来るなら、この話を聞いた後には良い返事を返してもらいたい…。どうしても嫌だと言うのなら無理にとは言わないけど、僕的には…首を縦に振る君が見たい…」

胡桃「つ…：…わ、わかったよ…：…」

小さく返事を返し、胡桃はそのまま下を向く。座席に座ったまま、ぴつたりとくっ付けた膝に両手を置き、彼の事をチラチラと見つめて…。

胡桃（大事な話つて…：そういう…事だよな…：？）

遊園地に着いた時に彼が言おうとしている言葉…：それを想像した胡桃は耳まで真つ赤にして小さく震え、瞳を潤ませる。彼が自分の事をそんな風ふうに思っていたなんて予想していなかった…。いつたい、どういう風にそれを告げられるのだろう…。そして自分は、それにどう答えれば良いのだろうか…。考えれば考えるだけ頭が熱くなり、そうこうしている内に目的の遊園地へと到着してしまった…。

## 第五十五話 『つよがり』

巡ヶ丘からほんの少しだけ離れた所に位置する街…。

ここには一つの遊園地がある。…といっても、出来たのはつい最近の事だ。オープンから一ヶ月と数日しか経っていないその遊園地は今日が土曜日という事もあってゲート前ですら結構混雑していたが、由紀達は歌衣から貰っていたチケットを使って足早に園内へと入っていく。

由紀「よーし！とーちやくつ!!」

果夏「いえーい!」

ゲートを越え、中に入って早々に由紀と果夏が騒ぐ。園内の華やかな雰囲気や、遠方に見えるアトラクションの数々にテンションが上がっているのだろう。

美紀「……………」

圭「美紀ちゃん、どうかしたの?」

由紀達が騒ぎ、悠里と歌衣が園内の地図をチェックしていく中…美紀は辺りを見回して無言のまま佇たたずんでいた。乗ってきたバス…もしくはこの人混みに酔ってしまったのだろうか…。圭が心配そうに声をかけると、美紀はハツとしたような表現を浮かべる。

美紀「あつ、いや…大丈夫だよ。ただ、最近の遊園地ってこんな感じなんだなあと思って」

圭「えっ?もしかして美紀ちゃん、あまりこういう所に来たことない?」

美紀「うーん…そうだね。あんまりないかな?」

まるつきりという訳では無いが、少なくとも高校生になってから来たことはない。久しぶりに経験した遊園地は記憶に残っているもの

よりも賑やかな雰囲気かと思えて、普段はどちらかと言えば物静かな部類に入る美紀ですらワクワクとした気持ちを感じ始めていた。

圭「よし！じゃあ今日はいっぱい楽しもうね♪」

美紀「ふふっ、うん！そうだね」

と、二人が仲良く笑みを浮かべ合うその一方…。

彼と胡桃だけはグループからほんの少しだけ離れた場所にいた…。

「で、さっきバスの中で言った事だけど…。」

胡桃「う、うん…。」

由紀達から離れてはいるが、決してはぐれはしない距離に位置する物陰へと身を移し、胡桃は顔を俯ける。先程バスに乗っていた際、彼に言われていた『大事な話』という物を聞くときが来たからだ。

「あのさ、もし良かったら…僕と——」

胡桃「っ…!!」

彼が放ち始めた言葉を聞き、胡桃の鼓動がドキッと強くなる…。ここまで来たらもう間違いない。彼は自分に告白するつもりなんだ…。彼の事は決して嫌いではないが、あまりにも突然すぎて心の準備が出来ていない。どんか返事を返そう…。もし『付き合ってくれ』と言われた場合は一旦断った方が良いのか、それとも、この場で了承しても良いのだろうか…。胡桃がほんの僅かな間にあれこれと考える中、彼は自分のペースで言葉を放っていく。

「僕と…お化け屋敷に入ってくれない？」

胡桃「…あ？」

放たれた言葉…その最後はまるで予期していなかった物であり、胡桃は俯けていた顔を上げて彼の事を見つめる。すると彼はニヤニヤと微笑みを浮かべ、ご機嫌な様子で言った。

「いやあ、ここのお化け屋敷って結構怖いらしくてさ、この間から気になつてたんだよね。けど、そんな所に一人で入るのも何か味気ないでしょ？というわけで、よろしければご一緒にどうかなくと」

胡桃「…お化け屋敷に？あたしが？お前と一緒に？」

「そう、お化け屋敷に…胡桃ちゃんが、僕と一緒に」

胡桃が疑問符を付けて尋ねた全てに答え、彼はまたニヤニヤと笑う。微かに得た由紀からの情報によると、胡桃はお化け屋敷が苦手らしい…。という事は、お化け屋敷に入れば気弱な女の子らしく泣いたり、叫んだりする胡桃が見られるのかも…。そう思うとニヤニヤが止まらないのだが、胡桃はその笑みを見て深い苛立ちを覚えた。

胡桃「大事な話って…そんな事だったのか？」

「ええ、まあ」

胡桃「…ああ、そう。お化け屋敷かよ。はいはい、そんなに気になるなら一人で行つてくりや良いだろ…。わざわざあたしを誘うなつての」

背中を向けてピイツとそっぽを向き、不機嫌そうに…というか半分怒っているかのように言い放つ。胡桃自身、自分でも何をこんなに怒っているのか分かっていない。ただ、彼の言う大事な話というのが自分の予想していた物とは違うんだと分かった瞬間に全身の力が抜け落ち、かと思えば今度はだんだんと腹が立ってきたのだ。

「いや、だから一人で入るのはちよつと味気ないかなつて思つてて…。  
というか、胡桃ちゃん怒ってる？」

胡桃「はあ？怒つてないけど？」

と言いつつも眉間にはシワが寄っているし、彼を見つめるその目はとても冷たい眼差しだ。二人があだこうだと言っていると異変に気付いた由紀達がそばへと寄ってきて、二人の間にある何とも言い難い雰囲気察する。

由紀「ケンカしてるの？」

胡桃「別に、ケンカなんてしてねえよ」

悠里「って言うわりには不機嫌そうな顔してるわよ？」

悠里に指摘され、胡桃は顔を背けていく。

今の自分はそのなにも不機嫌な顔をしているのだろうか？

胡桃はそばにあった土産物売り場の窓を見つめ、そこに反射して映る自分の顔を確認する。が…その顔が不機嫌そうなものなのかどうか、自分ではよく分からない。

真冬「ええつと、とりあえず…二人はお化け屋敷に行きたいの？」

胡桃「えっ？」

これまで大人しくしていた真冬がポツリと呟き、胡桃は目を丸くする。どうやら真冬は、先程まで彼と胡桃が交わっていた会話の内容をこっそりと聞いていたらしい。

果夏「おおー！お化け屋敷っ!!良いですな〜♪」

「いや、けど胡桃ちゃんは行かないらしいから……」

胡桃「ああ、あたしはちよつと……」

お化け屋敷と聞いた果夏がテンションを上げているが、さっきの様子を見るに胡桃は同行してくれないだろう。半分諦めたように口を開く彼に続き、胡桃も苦笑いを浮かべるが……

真冬「胡桃…怖いのか？」

と、真冬が呟く…。

その言葉を聞いた瞬間、胡桃の眉がピクリと動いた。

胡桃「ち、違うって！あたしはそういうの全然平気だけど、るーとか歌衣は苦手かなって思ってた……!」

るー、そして歌衣の事を思っているからこそだと言わんばかりに告げる胡桃だが、それはお化け屋敷を避ける為の言い訳に過ぎない…。

正直言うと、胡桃はお化け屋敷のような場所が苦手だ。しかし皆の前で『お化け屋敷は怖いから嫌だ』などというのは子供っぽく見られる上に自分のキャラじゃない気がして、つい強がってしまふ。だからこそ、るーや歌衣を盾にして避けようとしたのだが…

歌衣「ええつと…私は大丈夫ですけど、るーちゃんはどうかかな？」  
るー「ちよつと怖いけど、りーねーと一緒になら平気」

胡桃「…えつ？」

歌衣どころか、まだまだ幼いるーですらそれに乗り気だった…。

その他のメンバーにもお化け屋敷を避けようとする人間は現れず、その結果…胡桃は皆と共にそのお化け屋敷の前へ立つ事となってしまった。

胡桃（マジかよ…）

前方にそびえ立つそれはボロボロの屋敷を模していて、中からは他の客が発しているのであろう悲鳴が微かに聞こえる…。ちよつとしたお化け屋敷ですら勘弁なのに、こんなにも気合いが入っているものなどに耐えられる訳がない。胡桃は慌てた様子で由紀を見つめると、その肩をガシツと掴む。

胡桃「えつと…ゆきはこういうの苦手だよな？無理すんなよ？どうしてもって言うなら、あたしも一緒に外で待っててやるから…」

頼むから『苦手だ』と…『怖いから嫌だ』と言ってくれ…。

胡桃は藁わらにもすがる思いで由紀を見つめるが、由紀は小刻みにガクガクと震えながら一目で強がりだと分かる笑みを浮かべ、その首を横に振った…。

由紀「だ、大丈夫だよ…！わたしががんばるっ！！くるみちゃんこそ、本当はすつごく怖いんじゃないの…？」

胡桃「……………」

もはや強がつて否定する事すら出来ず、胡桃は顔を俯ける…。するとその時、そばに立っていた圭が驚くべき事を提案した。

圭「いくら怖いお化け屋敷だつて言つても、こんだけ大人数で入つたら怖さ半減ですよね…。せつかくだし、二人一組に分かれて入りませんか？」

悠里「ええ、そうしましょうか。じゃ、るーちゃんは私と一緒にね」  
るー「うんっ」

悠里の言葉を聞いたるーはニツコリと微笑み、姉である彼女の手をガシツと掴む。皆、既に圭の提案を受け入れて二人一組に分かれる雰囲気となつているが、胡桃だけはあたふたと慌てていた…。大人数でなら多少は…。ほんの少しくらいは怖さも紛れたかも知れないが、二人一組となればまた話が変わってくる。しかし、どうしても二人一組にならなくてはならないと言うのなら、相手に選びたい人物が一人だけいた…。

胡桃「ゆきっ！お前はあたしと行くぞっ！」

由紀とは以前に二人きりで他の遊園地へ遊びに行った事があり、胡桃はその際、彼女と共に入つたお化け屋敷で怯える様を見られている…。あんな醜態しゆうたいを二度も晒すのは恥ずかしいが、一度見られている分、由紀とペアになるのが一番楽だと考えて彼女の方へ手を伸ばしたのだが…。

圭「ペアの組み合わせは、じゃんけんでもして決めましょうか」

果夏「おおっ、たまにはそういうのも良いね♪」

圭が再び提案してしまった為、皆がその案に乗る方向へと流れていく…。

皆が皆それを受け入れているのに一人だけ逆らう訳にもいかず、胡桃もそれに従つていった。圭はじゃんけんで組分けすると言つていたが、このじゃんけんで重要なのは勝ち負けではない。皆それぞれがグー・チョキ・パーの三種から好きな手を選び、誰か一人と手が被かぶつ

たらその人とペアになる…というものだ。

妹と共に入る事が決定している悠里を除き、他の者達は一ヶ所に集まってじゃんけんしていく…。最初は何度となくあいこが続いたものの、すぐに一組…また一組とペアが決まり、胡桃は最終的に彼とペアを組む事となった。

「というわけで、よろしく」

胡桃「あ…ああ…」

色々あつたが、どうにか胡桃と一緒にお化け屋敷へ入る事が可能となり、彼はどこか嬉しそうに笑う。しかしその一方で胡桃は肩を落とし、深いため息を放っていた…。

胡桃（中で何を見ても、何をされても…出来るだけ驚かせないようにしよう…）

心の中で覚悟を決め、最初のペア…悠里とるーが屋敷の中へ入っていくのを見届ける…。そしてその少し後…今度は由紀と果夏のペアが中へと入り、そのまた次に真冬と美紀のペアが中へと入っていく…。

歌衣「次はくるみ先輩達の番ですね」

圭「楽しんできて下さいっ！」

胡桃「あ…うん……」

まるで死刑執行の時がやって来たかのような緊張感が襲いかかり、胡桃の足が微かに震えだす。しかし自分のペア…つまり彼に情けないところを見せたくないという気持ちもまた強く、胡桃は彼を先導していくかのように歩みを進めていった…。



## 第五十六話 『きょうふ』

「随分と早足だね」

胡桃「そ、そうか？別に普通だろ……」

彼と共にお化け屋敷の入り口へと立った胡桃はそこに入場するや否いなやスタスタと歩き出し、結構な勢いで中へと突き進んでいく。しかし、それはまだ入場口付近だから出来た事だ……。海外にでもありそうな洋館を横したその屋敷は係員のいる入口付近こそ明るく照らされていたものの、奥へ進めば進むだけ薄暗くなり、胡桃の足取りも重くなっていく。

胡桃「う……うう………」

エントランスホールのような場所を抜けていくと細い廊下へと出たが、やはり薄暗くて視界が悪い……。廊下の壁にはロウソク（を横しただけの電球）の灯るウォールランプがいくつか付けられていたものの、それらは周囲をボンヤリ赤く灯すだけでほとんど役に立っていない……。

（さて、どうしようか……）

ここまで前を進んでいた胡桃がピタリと足を止めたのを見て、彼は考える……。よく見ると小さく震えているその背中をバシッと押して前を歩かせ、強がりながらも怯えていくその反応を楽しむべきか……。はたまた、彼女の前を率先して歩き、男らしいところの一つでも見せておくべきか……。

胡桃「っ……ほ、ほらっ！とつと進むぞっ!!」

「ん？ああ……」

どちらにしようか考えている内に胡桃の方から動き出してしまった……。しかし前を歩くその速度は最初とは比べ物にならないくらい

に遅く、明らかに周囲を警戒しながら怯えている。

胡桃「こ、ここ…絶対何かあるよな…」

「さあ、どうだろう」

ゆっくり、のっそり廊下を歩いていくと、左側に大きな姿見が置かれている事に気が付く。所々割れていて小汚ないそれは最早姿見としての役割を果たしていないが、だからこそ何かあると思ったのだろう…。胡桃はそれから目を離さず事なく、ビクビクとした様子でその前を通っていった…。

胡桃「…：…：…」

その前を通った瞬間、胡桃は然り気無く彼の事を盾にしていく。しかしその姿見の前を通り過ぎても特に何か起こる訳でもなく、胡桃は安心したようにため息をついた…。

胡桃「ふう…。なんだ、何も起こらなかったな…」

「何か起きて欲しかった?」

胡桃「そ、そりやまあ…お化け屋敷に来てるわけだし? テンポ良く色んな事が起きてくれないと、客としては拍子抜けといふかなんと言うか…」

細めた目を左右へキョロキョロ泳がし、胡桃は見るからに強がりだと分かる素振りを見せる。するとその次の瞬間、胡桃の口から放たれた『拍子抜け』という言葉に応えるかのようにして怪奇現象が起きた。

バンバンバンツ!!!

胡桃「ひゃああつ!!!?」

廊下の左側に置かれていた姿見の向かい…右側にあった扉が凄まじい音を響かせる。その扉は中に得体の知れない化け物でも閉じ込めているかのように何度も音を響かせ、ドアノブもガチャガチャと鳴っていたが、見たところ開く様子は無い…。ただ音で驚かせただけ

のようだ。

胡桃「う…ううっ！」

「お〜」

しかし胡桃を怖がらせるにはそれで十分だったらしく、彼女はこれまで聞いたことの無い悲鳴をあげながら彼の腕へと抱き付く。彼にこんな姿を見せてみつともないとか、腕に抱き付くなんて恥ずかしいとか…そんな事を思う余裕は今の胡桃には無い。あるのは純粹な恐怖心だけだった。

(これは…中々に良いものだな…！)

普段はツンツンとしていて素っ気ない胡桃がか弱い女の子のように怯え、まるで彼氏に抱き付くかのように腕へとくっついて…腕に抱き付き、肩へ顔を埋めながら小刻みに震える胡桃を前にした彼は目を真ん丸にし、満足そうに微笑んだ。

「よしっ…このまま先に進もう」

胡桃「う、うん…」

彼が前へ歩き出すと、胡桃もその腕に抱き付いたままのっそりと…半歩遅れて歩き出す。抱き付かれたままの状態だと少し歩きづらかったが、ほんの少し…ほんの少しだけ胡桃の胸の感触が伝わってきた為、多少の歩きづらさなんてどうでも良く思える。

(欲を言えば、もう少しだけくっついて欲しい…)

そうすれば微かに触れているその胸の感触もより確かなものになるだろうが、贅沢はいけない。あの胡桃がこうして抱き付けてくれているだけでもかなり贅沢な事なのだから…。彼はすぐ隣で震える彼女を見てニヤリと微笑み、廊下の奥にあった一つの扉を開いた。

『ギィイツ』と不気味な音を鳴らしながらその扉を開いていくと、今度はダイニングルームと思われる場所へと出る。さっきの廊下と比べるとかなり広々とした空間だったが、よく見ると横長のテーブルや椅

子が乱雑に：障害物のように置かれていた。それらを避けながら進む事の出来る道がこのアトラクションを楽しむ本来の進行方向という事なのだろう。

「…行ける？」

胡桃「あ、ああ：全然大丈夫…」

その身は未だしつかりと彼の腕に寄せられているが、口で強がるくらいに余裕は出てきたようだ。彼は腕に抱き付く胡桃を見てもう一度微笑み、目の前に置かれていたテーブルの横を沿うようにして進んでいく。

胡桃「おいつ、そ、そつちに行くのか？」

「えっ？そりやまあ、こつちがルートっぽいし」

クイツと袖を引かれた彼はその場に立ち止まってから辺りを見回すが、やはりこの方向こそが正規のルートだと思える。しかし、胡桃は納得がいていないようだ。

胡桃「このテーブルの上を通っていった方が早いんじゃないか…」  
乱雑に置かれていたそのテーブルを見つめ、胡桃が呟く。二人のいる位置からは既に次の部屋へ出る為の扉が部屋の奥に見えているのだが、彼の言う正規ルートを通るとかなり遠回りとなる。：が、このテーブルやその向こうにある障害物達をピヨンと飛び越えていけば、ものの十数秒とかならないであろう距離だ…。

「いやいや、それって反則でしょ…」

胡桃「反則…？誰かが言ったのか？ここの上を通るなって：障害物を飛び越えるなって！ほらっ、別に言われて無いだろっ!?なら、あたしはこつちの道をつ…！」

ついさつき、何も起こらない姿見を見て『拍子抜けだ』と言っていた彼女はどこへ行ったのか…。今の胡桃はかなり焦っているらしく、自ら”拍子抜けコース”を歩もうとしている。しかし彼女が歩もう

と(正確には飛び越えようと)しているルートはどう見ても非正規のものであり、係員に見られたら怒られるかも知れないルートだ。

「ほら、ワガママ言わない。大人しくこつちから進もう」

胡桃「うっ……で、でもっ……」

「…何？怖いのか？」

正規ルートを拒むように抵抗する胡桃を見つめた彼は小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、煽るように尋ねる。胡桃の事だ…こうすればまたある程度は強がってくれるだろう。

胡桃「こっ、怖いとかじゃなく…！喉が渴いたから早く外へ出て、飲み物でも飲みたくてっ…!!」

「ああ、はいはい。最後まで頑張れたら買ってやるよ」

胡桃「頑張れたらだどっ…!?このっ…バカにしゃがって!」

あえて怒らせるかのような言い方をすると胡桃は彼の思惑通り顔を赤くして怒り出し、今度はしっかりと正規ルートを進み出す。しかし、怒っていてもまだ恐怖心が残っているのだろう…。その左手の人差し指と親指は彼の服の袖を掴んでいた…。

胡桃(来るなら来いっ!今のあたしはどんな脅しにも決して…)

胡桃が覚悟を決めた、その時だった…。

二人が進むルートの先にあった暖炉から『ガタツ!!』という音が響き、その中から何かが這いずり出て来る…。薄暗い空間の中で目を凝らして見ると、それはボロボロの洋服を着た髪の毛の長い女性だった…。

『ア…アアツ……!』

女性が呻き声をあげながらペタペタと這いずり、二人の前へと寄る。その見た目もそうだが、動き方が常人のそれとは違ってかなり怖い…。胡桃の反応ばかり気にしていた彼ですら、思わず肩を震わせた。

「おおっ！これはビックリし——」

胡桃「きゃああっ!!!」

彼がリアクションしようとしたその瞬間、胡桃が先程のものよりももうワンランク上の大きな叫び声をあげる……。目の前の暖炉から出てきた女の人にもそれなりに驚いた彼だったが……正直、胡桃のこの叫び声を真横で聞かされる方が心臓に悪い。

胡桃「つぐう……!!うう……ッ!!!」

大きな叫び声をあげた胡桃は再び彼の腕へ抱き付き、目の前の女性が視界に入らないように肩へ顔を埋めだす……。彼女がこうしている間も目の前の女性は少しづつ……少しづつ這い寄って来ているのだが、視界を封じた胡桃はそれに気付いていない。

「むう……胡桃ちゃんも『きゃくー!』とか言うんだな……」

本人に聞こえるくらいの声で呟くが、胡桃は顔を埋めたままガクガクと震えるだけで返事を返さない。恐らく、彼の声が耳へ入らないくらいに恐怖しているのだろう……。

『アア……ウアア……ッ……』

脅かし役であろうその女性はゆっくりと這い寄り、とうとう二人の前までたどり着いてしまう……。多分、本来はここまで近寄るられよりも先に逃げるのが正解なのだろう。目の前まで来てしまった女性は地面に伏せたまま、何をするわけでもなく呻き声をあげていた……。

「……すいません、この子の足首を掴んでもらって良いですか?」

『ア……アアッ……』

彼が小さな声で頼むと女性は少しの間を空けた後にゆっくり右腕を上げ、胡桃の右足首を掴む……。その瞬間、胡桃は体をビクッ!と大きく震わせて反応したが、さっきのような叫び声はあげずに無言のまま怯えていた……。

胡桃「ひぐつ!?ぐ…うう…っ!!」

胡桃は彼の腕をより強く抱き締め、精一杯恐怖から逃れようとする。あまりにも強く、ピツタリと身を寄せ過ぎたせいで彼の腕は両胸の間へと埋まってその感触を味あわせてしまっているが、やはり今の胡桃はそんな事など気付いていない…。

(うわ…凄く柔らかかつ……!ああ…これはヤバいなあ…)

同年代の女子と比べても大きめであろうその胸に腕を挟まれ、彼の顔が赤らむ。彼はその柔らかな感触を味わうべくわざと腕を左右に揺すってみたりしたが、胡桃は目の前の女性やら辺りの雰囲気には怯えるだけ…。胸に擦りつけられるその腕には動じる事なく震えていた。

『ア…グアア…ッ』

「…すいません。あと少し…あと少しだけこの感触を…」

”次の客が来る、そろそろ先へ進め”と言わんばかりに呻き声をあげる女性を空いている方の手で制し、胡桃に抱かれている方の腕に全神経を集中させる…。きつと後にも先にも、彼女の胸の感触をこれだけハッキリと味わえる事は無いだろう…。彼はその腕を動かして胡桃の胸の感触を満喫しながらゆっくり、のっそり進んでいった…。

~~~~~

由紀「お疲れ様っ!その…結構怖かったねえ…」

薄暗い空間を抜けて出口から外へと出ると彼&胡桃ペアよりも先に中へと入っていったメンバーがベンチに腰掛けて待っており、その内の一人である由紀が彼の方へ歩み寄る。由紀もまたこのお化け屋敷には結構な恐怖心を覚えたらしく、ほんの少しだけ顔が青ざめていた。

胡桃「あ、ああ…結構ヤバかったな…」

由紀と同じくらい…いや、由紀以上に青ざめた顔で胡桃が呟く。

これだけ気分悪そうな顔をしているのに、外へ出れると分かった瞬間に彼の腕を離す辺りはしっかりしていた。彼の腕に抱き付く様をみんなに見られてしまう事を無意識の内に回避したのだろう。

由紀「あれっ、君は平気そうな顔だね？怖くなかったの？」

「まあ…凄くドキドキしてはいたかな…」

由紀「うんうん…。すっごく怖くてドキドキしたよねっ！」

彼の言うドキドキは怯える胡桃が可愛いとか、胸が凄く柔らかいとか…そういう意味のドキドキであり由紀の感じたドキドキとは違うのだが、彼は何も言わずにスタスタと歩を進め、悠里達の方へと寄る。

「るーちゃん、平気だった？」

るー「うん。ちよつと怖かったけど…りーねーがギョツてしてくれてたから平気」

このお化け屋敷はかなり刺激的な驚かしもかなりあったのだが、頼りになる姉がそばにいてくれたおかげでるーは平気だったらしい。

「りーさんはこういうの平気なんです？」

悠里「うん…少しは怖いわよ？けど、大きな音がしたり、お化けが出てきたりする度に震えるるーちゃんを見ていたらついニヤニヤしちゃって…怖さなんて飛んでっちゃったわ。この子、本当に可愛いだよ」

「あ…分かる気がする」

怯える少女を見てニヤニヤとしてしまうその気持ちは痛いほど良く分かる。何故なら彼もついさっきまで、腕に抱き付いたまま震える胡桃を横目に見てニヤニヤと微笑んでいたのだから…。

第五十七話『しやしん』

お化け屋敷から出た一行はその後、遊園地内をのんびりと歩き回り、次はどのアトラクションに乗ろうかと頭を悩ませていく。そんな中、悠里と手を繋ぎながら歩いていたるーがある事に気が付いた。

るー「まふゆ、なに見てるの？」

真冬「ああ、これ？さっきのお化け屋敷で撮ってもらった写真…」
るーのすぐそば、そこを歩いていた真冬の手には数枚の写真があった。どうやら先程のお化け屋敷の中には幾つかのカメラが仕掛けてあったらしく、そこで撮影された写真の数々は記念として購入する事が出来るらしい。

果夏「へえ、そんなのあったんだ」

真冬「あった…。だから全部一枚ずつ買っておいた…。けど…」
圭「けど？」

悠里とるー、そして果夏と圭が真冬のそばへ寄り、その手に握られていた写真の数々を眺めていく…。屋敷内へ最初に入った悠里&るーのペアから、最後に入った圭&歌衣のペアまで、真冬が言っていた通り全ペアの写真があるようなのだが……

真冬「これ、見て良いやつだったのかな…」

写真の中でも彼&胡桃のペアが写っている物をじっと眺め、真冬は冷や汗を浮かべた。写真は各ペア三枚ずつ撮影されていたのだが、このペアの写真はどれを見ても胡桃が真っ青な顔をしたまま彼の腕に抱き付いている物ばかりだ…。

圭「うわ、胡桃先輩って意外と積極的なんだねえ」

悠里「うくん、ただ怖がっているだけのようにも見えるけど…」

二人きりになると積極的になるタイプなのか：それともただの怖がりで彼に抱き付いていたのか：。胡桃という人物がどちらのタイプなのかという事を悠里と圭が話し合っていると、その写真を眺めていた果夏が呟く。

果夏「ていうか先輩：腕でめっちゃおっぱい触ってない？」

真冬「あ、ほんとだ……最悪だね」

悠里「ええ、最悪ね……」

その青ざめた表情から察するに胡桃はただの怖がり屋であり、恐怖心を紛らわす為に彼へ抱き付いていたのだろう。そんな胡桃にばかり目がいつて気付いていなかったが、よく見ると彼はどの写真でも微かにニヤケている……。また、その右腕は抱き付く胡桃の胸元へしつかりと、必要以上に押し当てられているように見えた。

るー「わたしも見たい」

圭「るーちゃんにはちよつと見せられないなあ……。ほら、代わりに果夏とゆき先輩ペアの写真を見せてあげようね」

圭は真冬の手にあった写真から数枚を抜き取り、果夏&由紀ペアの写真をるーへ手渡す。それらの写真にはこちらまで叫び声が聞こえてきそうなくらいに良い絶叫顔をしている果夏と、目をまん丸にしながら真っ青な顔をする由紀が写っていた。

るー「えへへ、二人とも面白い顔してる。りーねーも見てみて」

お手本のような驚きを見せている二人の写真を見たるーは楽しげに笑い、その写真を姉にも見せていく。るーからその写真を手渡された悠里もまた楽しげに微笑み、笑い声を漏らす。

悠里「あらほんと。二人とも面白い」

果夏「そ、そういうるーちゃんだったってかなり怯えてたって聞いたよ!!なら、私に負けず劣らず良い顔してるハズっ:!!」

果夏は子供相手にムキになり、真冬の手に収められていた写真から

悠里&るーペアの写真を撮る。るーもかなり怖がっていたようだから、自分や由紀に引けを取らない絶叫顔をしているハズだ。…と、思ったのだが

果夏「…う、うう…可愛い…」

眺めた写真に写るのは如何なる時でもニコニコ微笑んでいる悠里と、その腕に抱き付いて小さくなっているるーの姿だった。ギュツと閉じているその瞳からは微かに涙が溢れているようであり、その状態のまま姉の腕にしがみつくと彼女は明らかに怯えてはいるものの果夏達とはまた違うタイプ…アイドル的な可愛いらしい怯え方だった。

圭「ほんとだ、凄く可愛いっ」

小さくて幼いながらも整った顔立ちをした少女の怯え顔…

果夏と圭はそれに見惚れだらない笑みを浮かべており、悠里は誇らしげな表情を見せていく。

悠里「ねっ、るーちゃんって凄く可愛いでしょうっ!?私はこの二枚目の写真が特にお気に入りです…!」

胡桃「さつきから何見てんだ?…あつ、さつきのお化け屋敷での写真か」

興奮のあまり悠里の声が大きくなり、少し先を進んでいた胡桃達が寄ってくる。彼女らの注目は真冬達が持っていた写真へと向けられ、そこに写っていたるーの怯え顔が主な話題となった。

由紀「るーちゃん可愛い♡りーさんにべったりだねえ♪」

るー「だ、だって…あの中怖くて…」

歌衣「ふふっ、るーちゃんは本当にお姉ちゃんが好きなんだね」

るー「…うん、大好きっ」

るーは照れる様も見せず『当たり前だ』と言わんばかりにあっさりそれを告げる。すると悠里はまた嬉しそうにニコニコと微笑みなが

ら彼女の頭を撫でていき、姉妹の愛を辺りへと見せつけていく。

由紀「みーくんと真冬ちゃんは…どの写真でも真顔だね」

美紀「ゆき先輩、よく見て下さい。ほら、この写真の私は少しだけビツクリしてます。ずっと真顔なのは真冬だけです」

胡桃「ビツクリしてるか？あたしにはどの写真でも大した反応をしてないように見えるんだけど…」

美紀が指差した写真を、そこに写る美紀の表情を見てみるが、さほど驚いているようには見えなかった…。強いて言うなら、他の写真と比べるとほんの少し目が大きく開かれているだけ…。由紀や果夏の絶叫顔には遠く及ばない。

真冬「思ったより怖くなかったから、どんなリアクションをすれば良いのか分からなかった…。写真を見た感じ、歌衣さんと圭もそこまですで怖がってないよね？」

圭「ん、まあ、それなりに怖かったけど…確かに期待していた程では無かったかな？」

歌衣「すっごく面白かったですけどね♪」

『面白かった』という言葉はお化け屋敷の感想として適切なものなのだろうか…。両手を合わせながらニツコリと微笑む歌衣の言葉を聞き、胡桃は首を傾げていく。

美紀「これは…くるみ先輩達の写真ですね」

胡桃「っ!？」

「あ……………」

真冬の手に取りめられていたその写真を何気なく手に取る美紀を見た瞬間、彼と胡桃は小さな声を漏らす。胡桃は怯えている自分の姿を人に見られなくなかったから…。彼は胡桃の胸に腕を押し付けていた事を本人に知られなくなかったから…。声を漏らした理由は各自違うものだ。

由紀「どれどれ。おおつ、くるみちゃんってばやつぱり怖がりさ
んだね。♪こんなにギュツと抱き付いちやって」

胡桃「だ、抱きっ…!!」

胡桃は慌てたように写真を奪い取り、その隅々まで視線を這わせて
いく…。あまりの恐怖に中での記憶はほとんど無くしていた胡桃だ
が、それらの写真を見て初めて、自分が彼の腕に抱き付いていた事を
知った。

胡桃「なっ…!!?なあっ…!!?」

歌衣「く、くるみ先輩って…先輩とはそういう仲で…」

彼の腕に身を寄せている自分を見た胡桃は顔を真っ赤に染め、瞳を
ウルウルとさせていく。彼女のそんな表情と写真とを交互に見つめ
た歌衣は信じられない物を見てしまったというような苦い表情を浮
かべ、今にも泣き出しそうだ…。

胡桃「そ、そんな顔をするなっ！あたしとコイツは何でもないっ!!
ただの友達っただけで、別に付き合ったりしてる訳じゃっ…!!」

美紀「と言うわりには随分と密着してますよね?」

胡桃「ちがっ…違っ…!」

美紀はわざと意地悪に微笑み、胡桃の事をからかっっていく。そう
やってからかえばからかうだけ胡桃の顔は赤くなり、歌衣の顔は青ざ
めていった…。

真冬「ねえ、あれもみんなに教えて良い?」

真冬はこっそりと彼の横へ移動していき、ニツコリと…しかし意味
深にも見える笑みを浮かべる。一体何の事を言っているのかと疑問
に思い彼が首を傾げていくと、真冬は彼にだけ聞こえるよう小声で囁
く。

真冬「胡桃のおっぱい触ってニヤニヤしてたでしょ…?」

「へっ…うな、何をバカな…。真冬の勘違いだろ」

真冬「…：うん、そうかもね」

彼がそっぽ向いて答えると、真冬はあっさりその場を去っていった。

少し慌ててしまったが、どうにか誤魔化せたらしい…。

彼はホッと一息つき、そのまま空を見上げた…。

真冬「ねえ、気付いてないみたいだから教えてあげるけど、胡桃：彼におっぱい触られちゃってるよ。ほら、この写真も…それからこの写真も。全部おっぱいに腕を押し当ててる」

胡桃「なっ!?!お…おいつ!!!」

「…：…：…」

それを暴露する真冬の声が聞こえ、次に胡桃の怒声が聞こえる…。彼は空を見上げたままなので彼女がどんな表情をしているのかは分からなかったが、とてつもなく怒っている事くらいは声で分かった…。

そしてそんな彼女の足音は一步、また一步と近付いてきており、彼は空を見上げたまま『ふふっ』と笑う…。この空に羽ばたく事が出来れば彼女の怒りから逃げる事も容易いだろう。しかし彼は人間であり、空を飛ぶための羽など持っていない…。よって、接近する彼女から逃げる術も無い…。

彼はそつと静かに目を瞑り、抗う事なく全てを受け入れた…。

~~~~~

「…で、真冬は何がしたかったんだ?」

真冬「別に…：君が胡桃に怒られるところを見たくなかっただけ」

「…：意外と意地悪なんだな」

あれから一時間と少しが経過し、彼は遊園地内にある屋外フードコーナーの席に真冬と向かい合うようにして腰掛ける。他の者達は軽食を買いに行っており、今は真冬と二人きり…。彼は真冬に対して『何故、あの時胡桃に全てを暴露したのか』と尋ねてみたのだが、特に深い意味は無いようだった。

真冬「にしても、凄く痛そうだね…」

「痛そう…じゃなくて痛いんだよ。まだヒリヒリする…」

彼の頬には胡桃の手形が未だ綺麗に残っており、あの時食らわされたビンタの威力がどれだけ凄まじいものだったかを物語っている。あの時、彼は凄まじい勢いで振り払われた胡桃のビンタを受け、一瞬首が吹っ飛んだと錯覚したらしい。

真冬「胡桃を怒らせちゃダメって事だね…」

「ああ、そういう事」

真冬「…おっぱいの触り心地はどうだった？」

「それに関しては文句なし…最高に柔らかかった。真冬もあのくらい大きさを目指してがんば——」

と、そこまで言ったところで彼は口を閉ざす…。

胸の大きさに関する話をした瞬間、真冬が目が一気に冷たくなつていくのを感じたからだ…。

真冬「…うん、それでいい。それ以上言ったら今度はボクが君にビンタするところだった…」

「…すいません」

真冬は深いため息をつき、彼に冷ややかな眼差しを向けていく…。そうしてどことなく気まずい時間を過ごしていると軽食を買いに行っていた由紀達に戻り、一同は小休憩を終えていった。

その後、彼は皆と共に幾つかのアトラクションを回った…。

のんびり走るトロツコのような乗り物に乗って園内を眺めて回る物、園内に流れている川をこれまたのんびりと進む小舟のような物

…。比較的低刺激のアトラクションが続いているのは由紀の要望に合わせているからなのだが、結局の所みんな楽しんでいた。

胡桃「よしっ！じゃあゆき、今度は一緒にアレに乗るか？」

園内を歩いていた胡桃が一つのアトラクションを指差してニヤリと笑う。その指の先にあったのはこの遊園地が目玉アトラクションとしてあるジェットコースターであり、遠目に見てもレールがえげつない高低差を作っているのが分かる。

由紀「わ、わたしはいいよ…！あんなの乗れないもんっ」

胡桃「なんだ、つまらないヤツだな…。リーさんはどうだ？」

悠里「私はるーちゃんを見てないとだから…」

由紀に誘いを断られ今度は悠里を誘う胡桃だが、悠里もまたそれを断った。悠里自身はジェットコースターだろうと別に問題なく乗れるのだが、るーの方は身長制限などに引っかけられてしまいかも知れない。…いや、るーの怯えた表情を見るに身長制限に引っかけたといううがいまいがジェットコースターには乗れなさそうだ。ならばと今度は歌衣に声をかける胡桃だったが、彼女もまたジェットコースターは苦手らしい…。

るー「リーねー、行きたいなら行ってきていいよ…。せっかく来たんだし、色々乗らないともったいないから…」

悠里「うーん…でも…」

歌衣「もしよければ、るーちゃんは私が見ています。だから先輩達は心配せず楽しんできて下さい」

悠里「あら、本当に？じゃあ…そうさせてもらおうかな♪」

るー「うん、いつてらっしやい」

るーは悠里の腕から離れるとトコトコと歩き出し、今度は歌衣の腕へと抱き付く。その際、歌衣の顔がパアツと明るくなったのが分かった。



圭「私も行きますっ！美紀ちゃんも一緒に行こー！」

美紀「え〜：私もこういうのはあまり得意じゃ……」

圭「大丈夫だよ。一度乗っちゃえば楽しいもんだからー！」

美紀「…はあ、しようがないなあ」

美紀もまたジェットコースターはあまり得意ではないようだったが、圭の誘いを受けて渋々ながら同行を決める。そんな二人のやり取りを横目で見ていた果夏はニヤリと微笑み、真冬のそばへ歩み寄っていく…。

果夏「真冬ちゃん♪私達も一緒に行こ〜♡」

真冬「え…：やだ…：行きたければ美紀達と一緒に行ってきなよ」

果夏「も〜っ！ノリが悪いなあ」

どうやら真冬もジェットコースターは苦手らしく、果夏の誘いを適当に流す。結果、ジェットコースターに向かったのは悠里と胡桃、そして美紀と圭の四人だったのだが、彼は自分が胡桃から誘われなかった事に嫌な予感を感じていた。

「胡桃ちゃん、まださっきの事を怒っているのだろうか…」

由紀「ん〜、そんな事ないと思うよ？くるみちゃん、何だかんだでキミには甘いから、きつとすぐに機嫌直してくれるよ♪」

「だといいいけどな…」

だが、彼女の胸にあれだけ腕を密着させたのは少しやり過ぎだったかも知れない…。ほんの少し反省の色を見せる彼だったが、あの時腕に感じた感触を思い返していくとついつい頬が緩む…。

由紀「それよりっ！くるみちゃん達を待ってる間にわたし達も遊ぼうよ！わたし、アレに乗ってみたいっ♪」

歌衣「アレ…：というと…」

果夏「おっ、コーヒーカップですかっ！」

由紀の指差す方にはクルクルと回転する大きなカップが幾つも並んでいるアトラクション…：コーヒーカップがあり、由紀はそれを見つ

めながら瞳をキラキラと輝かせていた。いや、よく見ると由紀だけではない……

るー「わあぁっ……！わ、わたしも乗りたいっ！」

由紀「よおし！じゃあみんなで行こ〜♪」

るーの瞳もまた由紀のようにキラキラとしており、期待に満ちた目をしていた。胡桃達が戻るまでの間、ただ立ち尽くしているのも退屈だ……。彼と由紀、歌衣とるー、そして果夏と真冬はそのコーヒーカップの列へと並び、自分達の順番が来るのを待っていく事とした……。

## 第五十八話 『かつぷ』

胡桃と悠里、そして美紀と圭がジェットコースターを楽しんでいる間、彼は由紀達と共にコーヒーカップに乗って時間を潰す事とした。歌衣はるーと、真冬は果夏と、そして彼は由紀とペアになってそれぞれのカップに乗り込んだのだが……

由紀「おっ……！動き出したね！」

それぞれが乗り込んだ後、カップの乗っている床自体がゆつくりと回りだす。由紀の目はとてもワクワクしているかのようにキラキラと輝いており、彼女と向かい合うようにして座っていた彼は微かに微笑む。やはり由紀のこういう純粹なところ……子供っぽいところは魅力であり、とても愛らしいと思える。

由紀「えへへ、少しだけ速くなってきた♪」

「そうだね」

ゆつくりと回りだしたその床はある程度のスピードまで加速し、目の前にいる由紀の髪の毛が小さく揺れる。彼女は他のカップに乗っている歌衣とるー、そして真冬と果夏の事をチラリと見つめた後、自身の乗るカップの中央にあるハンドルに手を添えた。

由紀「こ、これっ……回して良いんだよね!？」

期待たつぷりな眼差しを向け、由紀は鼻息を荒くしながら目の前にいる彼へ問う。彼女はコーヒーカップに乗り初めた時から、このハンドルの事を落ち着き無くチラチラと見つめていた……。きつと、これを回したくてウズウズしていたのだろう。

「ああ、好きにやっつていいよ。由紀ちゃんに任せ——」

由紀「らじゃくっ!!」

彼が言い切るのを待たずして由紀は満面の笑みを浮かべ、そのハンドルを両手でグルグルと回す。まるで子供のように楽しげな笑い声をあげながら、一生懸命にその手を動かしている。

由紀「えへへっ、えへへっ♪」

(凄く楽しそうだな…。そんなにハンドルを回したかったのか)

由紀の手がハンドルを回していくと二人の乗るカップ自体もクルクルと回転を始め、その勢いはハンドルを回す由紀の手の勢いに合わせて徐々に加速していく…。由紀は変わらず笑顔のまま必死に両手を動かし、ハンドルを回し続けていた。

「…楽しい?」

由紀「うんっ!!すっごく楽しいっ♡」

何となく気になって尋ねてみると、由紀は彼が思っていた通りの答えを返す。こんなにもニコニコと笑いながら手を動かしているのだから、本当に心から楽しんでいるのだろう…。カップの回転に合わせて髪を揺らがせていく由紀の笑顔は何時にも増して愛らしく、それを見た彼も楽しそうに笑う。

(こんな時間がずっと続いていけば良いのにな…)

このままずっと由紀の笑顔をそばで見たいられたらどれだけ良いだろう…。いや、由紀だけじゃない…。悠里や胡桃…。それに美紀達後輩組や、るーの笑顔…。それらを見つめながらずっと過ごしていけたらどれだけ良いことか…。

(…ま、そんな事ばかり思ってもいられないか)

この遊園地から出ていくのが少し嫌になりかけたが、そうも言っていられない。夜になるまでに家へ帰らねば留守番している太郎丸がかわいそうだし、休みが明ければまた学校にも行かねばならない…。

由紀「えへへっ♪」

あまり勉強が得意ではない彼からすると、学校というのは中々に辛い場所だ。この休みが明けたらまたあの場所に通い、授業を受けていかねばならないと思うと頭がクラクラとし始める…。

(ああ…本当にクラクラする…。少し気分も悪くなってきた…)

目眩にも似たようなその感覚に顔が青くなり、遂には吐き気すら催もよおして来る。…にしても、少し考えただけでここまで気分が悪くなる程に自分は学校が嫌いだったのだろうか。確かに勉強は苦手だが、休み時間等の時間に由紀達と交流出来るという事を考えれば学校もそこまで悪い場所ではない。

(なら、何でこんなに気分が悪く…)

伏せかけていたその顔を上げ、彼はその理由に気が付く…。

コーヒーカップの中央…そこにあるハンドルは今も由紀の手によって激しく回されており、それによって二人の乗るカップがグルングルンと猛スピードで回転していた…。そのせいで辺りの景色は何が何だか分からないくらいに流れていき、彼は回転するカップの遠心力に身を傾けながら由紀に言う。

「ゆっ、由紀ちゃんっ！これは少し速すぎだと…！」

由紀「えっ？そうかなあ？」

「速いっ！絶対速いっ!!だから少しだけっ…少しだけスピードを落としてくれると助かるんだがっ…！」

真っ青になっていく彼の顔を見た由紀は慌てたようにハンドルから手を離し、その回転が自然に衰えていくのを待つ…。グルングルンと回っていたカップは少しずつ落ち着きを取り戻していき、それと同時に彼の顔色も少しずつ落ち着いていく…。

由紀「だ、大丈夫？」

「あ…ああ、どうにか………」

出来るのなら今すぐこのカップから降りて休みたい……が、回転が緩やかなものになっただけでもかなり楽だ。徐々に落ち着きを取り戻してきた彼が再び辺りを見回してみると、視線の先で一つのカップがグルングルンと回転していた。

果夏「あははっ♪あははっ♪」

真冬「カナ……一旦っ……とめっ……」

そのカップに乗っているのは果夏と真冬であり、ハンドルは果夏の手握られているようだった。二人の乗るカップは先程の由紀と彼のカップのように猛スピードで回転しており、真冬の顔がみるみると青ざめていく……。

「あつちも大変だな……」

真冬に同情しつつ視線を動かし、今度は歌衣とるーの乗るカップを見つめる。こちらのカップでハンドルを握っていたのはるーだったが、彼女は由紀や果夏と比べてのんびりと、常識的な速度でそれを回し、楽しみにニコニコと微笑んでいた。彼女の向かいに座っている歌衣も彼や真冬のように青ざめた顔はしておらず、ニコニコとしていて楽しそうだ。

由紀「えっと……じゃあ、今度はもう少しゆっくり回していくね？」

「……うん、頼むよ」

由紀は気分の悪そうな彼に遠慮し、今度はのんびりとハンドルを回していく。本当に遠慮しているのならここはもうハンドルを回さないのでベストだと思うが、せっかく乗っているのならやはり回したいと思うってしまうのだろうか……。

由紀「えへ……えへへっ……♪」

のんびりとはいえハンドルを回していくのは楽しいらしく、由紀はまたニヤニヤと笑う。興奮のあまりその速度はまた少しずつ速くなっているようにも思えるが、まあこの程度なら我慢しよう……。彼は

視線の先でグルングルンと勢い良く回転している果夏と真冬の乗るカップを見て、こっちのカップはあれよりはマシだと苦笑した。

~~~~~

由紀「あははっ、楽しかった♪」

歌衣「そうですね。るーちゃんも楽しかった？」

るー「うんっ！楽しかった♪」

歌衣「ふふっ、なら良かった♪」

カップから降りた一行は口々に感想を言い合い、それぞれ満面の笑みを浮かべる。…しかし、彼は今もほんの少し青い顔をしたまま園内のベンチに腰掛けて深呼吸しており、激しい回転によつて引き起こされた目眩を抑えようとしていた。

「ふう……………そう言えば真冬はどこに行つた？」

果夏「真冬ちゃんならコーヒーカップを降りてすぐに『トイレ行つてくる…』とか言つて走つてつちやいました」

「ああ、そう…。そりやお気の毒に…」

彼の乗るカップも中々の勢いで回転していたが、果夏の手によつて回されていたカップはそれ以上の勢いで回転していた。しかも最初の方から終わりまでほぼ休むことなくその勢いを保っていたのだから、そりや真冬の具合も悪くなるだろう。

「にしても、果夏は気持ち悪くなつてないみたいだね。三半規管が強い方なのか…」

果夏「は？サンハン……………なんです?？」

「…………いや、何でもない。真冬、早く戻つてくるといいけどな」

そう言えば由紀の方もコーヒーカップに酔ってしまったような様子は無い。彼女もまた、果夏と同様こういうのには強い方なのだろうか。

るー「ねえ、うい、わたし…次はメリーゴーランド乗ってみたい」
歌衣「ほんと？じゃあ乗ってみようか！」

ジエツトコースターへ乗りに行った悠里達が戻ってくる様子はまだ無い。歌衣はるーと繋いだ手を振りながらニコニコと微笑み、園内の地図を見てメリーゴーランドの位置を確認していく。

由紀「メリーゴーランド乗るのっ？わたしも乗りたいっ！」

果夏「わたしもわたしも♪」

るーの口から出た『メリーゴーランド』という言葉聞き、由紀と果夏がまた一層元気になる。そうこうしているとトイレに行っていた真冬がノソノソとした足取りでそこへと戻り、賑やかに騒ぐ由紀達を見て首を傾げた。

真冬「……どうしたの？」

「次はメリーゴーランドに乗りに行くんだってさ」

真冬「え……またクルクル回るの？ボク、もう限界……」

真冬の顔は未だに青ざめており、かなりキツそうだ。彼女はベンチにいる彼の隣に腰掛けていくと、参ったように深いため息をつく……。彼女程では無いが、彼の方もまだほんの少しだけ目眩を感じており、回転系のアトラクションは厳しかった。

「じゃ、僕らは少しの間だけ休んでようか？」

真冬「…うん、そうしよう」

彼と真冬はベンチに背中を預け、由紀達には『ここで休んでいる』と伝えていく。それを聞いた由紀達は少し残念そうにしていたが、二人の顔が青ざめているのに気付いた歌衣が大体の事情を察してくれた。

果夏「真冬ちゃんも行こうよー！」

真冬「ごめん……ほんとムリ……」

歌衣「果夏さん、二人の事は少しだけ休ませてあげましょう？ほら、真冬さんとはまた後で別のアトラクションを一緒に楽しめますから」

果夏「うーん……わかった」

真冬を置いていく事に抵抗する果夏を無事に説得し終わると、歌衣はニツコリとした笑みを浮かべる。

歌衣「じゃあ、私達は行ってきますね？二人はしつかり休んで下さい」

真冬「うん……そうする」

「じゃ、楽しんでおいで」

ルンルンと歩いていく歌衣達を見送り、彼と真冬はベンチにもたれた。

第五十九話 『めまい』

真冬 「ぐ……うっ……」
「…何か飲み物とかいる？」

園内に置かれていた横長のベンチに腰かけていた彼は隣に座る真冬の青い顔を覗き見て、心配そうな視線を向ける。彼の方は少しして落ち着いてきたが、真冬の方は未だに果夏と乗ったコーヒーカープの酔いが消えていないらしい…。

真冬 「た、頼める…？ボクはまだ動けない…から…」
「ああ、別に構わないけど…一人で平気？吐いたりしない？」

真冬 「…それは分からない。けど、ボクとしてもこんなに沢山の人が行き交う遊園地で吐いたりしたくない…。もしもここで吐いたら、ボクはこうなつた原因であるカナを殺してそのあとに自殺する…」

…恐らく冗談だとは思うが、不気味な程に真つ青な顔で言われると冗談に聞こえない…。しかし、ここで吐いてしまった瞬間に今日という日が真冬にとって最悪の日となるのは間違いないだろう。

「あく…じゃあ飲み物買ってくるけど、どうしても我慢出来なそうだったらトイレに行くんだよ？分かった？」

真冬 「…分かつてる。出来るだけがんばる…」
「ほ、本当に頑張れよ…。戻った時に人混みが出来たら嫌だからね…」

真冬の顔色は本当に酷く、あまり長い間一人にしておくのは心配だ。彼は最寄りの売店へ駆け足で向かい、彼女に渡す為の飲み物を探しに行った…。

真冬 「…つぐ………うっ…」

その場を去っていく彼を見送った後、真冬はベンチの中央で背中を丸くしながら顔を俯ける…。今はこの姿勢が最も楽であり、こうしている吐き気もいくらかマシになる。

真冬「カナの…せいだ…」

いや、もつと言えば果夏と共にコーヒーカップに乗り込んだ自分のせいだ…。果夏という人間の性格を考えればあなる事は分かりきっていたのだから、この事態は避けようと思えば避けられた出来事の本末…。真冬はそこまで考えられなかった自身の浅はかさを悔いながらため息をつき、彼の事を待つ。

「よいしょつと…」

一人の男が真冬のそばへ寄り、隣へと腰掛ける。

少し早いように思えるが、彼が戻ったのだろうか…。真冬はボンヤリとした目をそちらへ向けて確認するが、隣に座っていたのは彼ではなく、微塵も知らない青年だった。

真冬（なんだ…彼じゃなかったのか…）

隣に座るその青年と一瞬だけ目を合わせた後、真冬はさつきと同じ様に顔を俯けて彼を待つ…。それにしても今隣に座ったこの青年…やたらと距離が近い。真冬はこの青年から離れるようにして横へ移動しようとするが、逆サイドの方にももう一人…全く知らない青年がドスンと腰を下ろしていた。

真冬（…：嫌な予感）

見知らぬ男に左右を陣取られ、真冬の額に汗が浮かぶ…。

いや、この男達だつてこんなにも人通りの多い遊園地で変な真似はしないだろう。何も言わずに顔を俯けていれば、すぐにいなくなるはずだ…。

…と、そう思っていたのだが…この男達は中々その場を離れてはくれず、むしろ両サイドから挟むようにして真冬の横顔を見つめてい

た。

「ねえ、君…一人で来たの？」

あろうことか、左側にいた男がとうとう話し掛けてきた…。

右側にいる男もじわじわと近寄って来ながら真冬の横顔を見つめ、ニヤニヤと笑う。二人の青年は一見すると爽やかなタイプに見えるが、いくら上辺うわべを飾ったところで真冬はそれに誤魔化ごまかされない…。この男達は嫌なタイプの人間だ。

「家族と来たの？それとも友達？あつ…彼氏と一緒に？」

真冬「キミたちには…：関係…ない」

今度は右側の男が尋ねてきたが真冬はその顔を見る事すらなく、下を向いたままの状態で言葉を返す。本当はその目を見てもつとハツキリ言つてやるつもりだったのだが、気分が悪くて顔を上げられない…。

「あはは。そう言わないで、ほんの少しだけ話を聞いてくんないかな？俺達も今日、友達に約束をすっぱかされちゃってさ…：男二人で遊園地回っても仕方無いから帰ろうとしてたところなんだけど、もしよかったら一緒にデートしない？」

真冬「し…ない…」

「二人で遊園地回ってもつままないよ？それよりもほら、俺達と美味い物でも食べに行こうよ。好きなもの奢つてあげるからさ」

真冬「…：イヤ…行かない…」

男達は交互に話し掛けてくるが、真冬は下を向いたままの状態を崩さない…。只でさえ気分が悪かったのにこの男達と会話していたら益々気持ち悪くなってしまい、まともな声すら出せなくなってきた…。

「ところでさ、キミって何歳？見た感じ高校生くらいだよね？可愛らしい顔してるから男子にモテモテでしょ？どこの高校に通ってるん

？」

男は下を向いたまま動かない真冬へ向けてペラペラと喋り、幾つもの質問を同時にぶつけていく。こんな一度に質問されては答えきれない…。いや、一つずつ質問されたところでどのみち、真冬は答える気など無いのだが…。

「ほら、もっとお話ししようよ」

真冬「……………」

真冬が無言のまましていると右側にいた男が彼女の肩へ馴れ馴れしく腕を回し、そつと身を寄せてくる。もう限界だ…。真冬はこれまで保ってきた冷静な表情を崩して眉をしかめると、静かに顔を上げてその男を睨む。『友達と一緒に来てるからもうほつといってくれ』とハッキリ言っただけ。真冬はそう決意したのだが…。

真冬「…っ…！きも…ちわるい…っ」

顔を上げた途端、また大きな吐き気の波に襲われてしまった…。

目の前がグラグラと揺れるような目眩を感じ、真冬は顔を青くする。

一方、男の方もやつと目が合うなり『気持ち悪い』と言われた事を良く思っていないらしく、苦い表情を浮かべていた。真冬が言った『気持ち悪い』という言葉は、吐き気に対しての台詞だったのだが…。

「いきなり気持ち悪いってのは少しショックだなあ…」

真冬「あつ…ち、違う…。確かにお兄さん達も気持ち悪いけど、今言った気持ち悪いって言葉はそれとはまた別で…」

フォローしてやろうかとも思ったが、つい本音が漏れてしまった。男達はどちらも真冬を見つめながら冷めた目をしており、不機嫌そうな表情を見せる。

これではまるで自分が悪いことをしたみたいだ…。

被害者はこっちだというのに…。

真冬はこの上無い居心地の悪さを感じ、ベンチから立ちあがる。視

界がグラグラとするような目眩も、吐き気も、そしてこの男達も…全てが気持ち悪い。

「おっ、どこ行くの？」

真冬「つ…ぐ…」

こんな連中からは一刻も早く離れたいのには、男達は真冬に続いて立ち上がる…。どうやら真冬が顔を青くしているのを見て『この子は弱気なタイプの女だ。しつこく迫ればどうにかなる』とでも思っているらしい。真冬が顔を青くしているのはただ、吐き気が酷いからなの…。

真冬（もう、大声でも出してやりたい…）

が、あまり騒ぎを大きくしてしまうと後で由紀達にいらぬ心配をかけてしまうかも知れない。ここは出来るだけ静かにこの男達をあしらいたい…。

そんな事を思いつつ吐き気を堪える真冬は視線の先に一人の人物を捉え、そこにトコトコと駆け寄っていく。男達は未だしつこくついてきていたが、この作戦が上手くいけばすぐに諦めるはずだ。

真冬「…どこ行つてたの？」

視線の先に捉えた人物の元と寄った真冬は静かな声でそう尋ねつつ、その人物…彼”の腕にガシツと抱き付く。彼は近くの売店で買ってきた二つの飲み物を両手に持つており、それらを溢さないように気を張りながら真冬の事を見た。

「どこ行つてたのって…飲み物買ってくるって言ったでしょ？」

真冬「ボク、そんなの聞いてない…。急に一人にされて凄く寂しかったんだよ？飲み物なら、ボクも一緒に買いに行きたかった…。せっかく遊園地デートに来たんだから一秒でも長く、大好きなキミと一緒にいたいし…」

彼の腕に抱き付いてそう言いながらチラツと後ろを見て、ついてき

ていた男達の様子を窺う…。二人とも真冬が彼に抱き付いているのと、今のやり取りを聞いてそそくさと立ち去っていた。真冬の作戦通り、もう彼氏がいると思わせる事に成功したようだ。

真冬「ふう：やつと消えてくれた」

安堵のため息をつき、そのまま彼の事を見つめる…。

彼からすると飲み物を買って行って戻ったら真冬が急に甘えてきただけに思えるため、かなり混乱しているようだ。

「真冬…僕のことをそんな風に思っていたのか…」

真冬「うん：？ああ、飲み物ありがとう…」

混乱する彼を尻目に真冬はその腕に抱き付くのをやめ、飲み物だけを奪い取る。真冬はそれをゴクゴクと飲んでからホツと一息ついていくが、彼はまだ混乱している…。

「まさか真冬が…：うくん…：どうする…：…こんなにも突然告白されるとは思っていなかった…」

真冬「…：あの、さっきのはただの演技だよ？ボク、さっきまで変な男達に言い寄られてたから、キミがボクの彼氏だって思わせれば諦めてくれると思って」

「…：はっ？男？…そんなのどこにいるの？…」

真冬「もう諦めて行っちゃった…：作戦成功」

小さく掲げた右手でVサインを作り、真冬はニコリと笑う。真実を知った彼は少し残念そうな顔をしたが、納得したような顔もしていた。

「だよなあ…：おかしいと思ったんだよ。真冬が僕の事をそんな風に…：好きだなんて思ってる感じはこれまで無かったし…」

自分用に買ってきた飲み物を一口飲み、彼は元いたベンチの方へ向かっていく。真冬は少し遅れてからそんな彼の事をパツと追い越し、

そつと静かに振り向いた。

真冬「でも、キミの事は男の子の中で一番気に入っている……。だから、好きっていうのは結構本当だったりするかも知れないよ。……先輩」

何時になく可愛らしい笑顔でニコツと微笑み、真冬はスタスタと先を行く……。しかしまたすぐ気分が悪くなってしまったらしく、数歩進んだところで背中を丸めて立ち止まりながら俯いていた。

彼はそんな真冬に追いつくと、片方の手を握って静かにベンチまで誘導していく……。そんな中で覗き見た真冬の顔は青ではなく、何故か真っ赤に染まっていた。

第六十話 『おもいで』

体調が悪くなった彼と真冬は遊園地内のベンチで休憩していたが、ある程度休んだところでそれもだんだんと良くなり、とうとう元の調子まで回復した。その頃にはメリーゴーランドに行っていた歌衣達：そしてジェットコースターに行っていた悠里達もそこに集合し、それぞれが体験してきたアトラクションの感想を笑顔で語り合う。

悠里「るーちゃんは何に乗ったの？」

るー「コーヒーカープとメリーゴーランドに乗った。あと、歌衣が途中でアイス買ってくれた」

悠里「あらあら、それはよかったわね♪ちゃんと歌衣さんにお礼言った？」

るー「うんっ、言った」

るーは隣に立っていた歌衣の手を握り、ニッコリと微笑む。歌衣はそれに応えるかのようにしてニッコリ微笑むと、目の前にいた悠里にキラキラとした眼差しを向ける。

歌衣「るーちゃん、すっごく良い子ですね♪こんなに可愛い妹さんがいたら、私は毎日甘やかしてしまうかも……」

悠里「ふふっ、毎日……とまでいくと少しあれだけど、これからもちよくちよくるーちゃんと遊んでくれたら嬉しいわ。るーちゃんも歌衣さんの事、気に入ったみたいだし」

悠里の言葉を聞いた歌衣はその目を更に輝かせ、るーの頭を優しく撫でる。歌衣は一人っ子なので妹というものに多少の憧れがあったのだが、るーと遊んでいたらその憧れが益々大きなものへと変わった。

歌衣「そう言えば、先輩達はどうでした？ジェットコースター…楽

しかったですか？」

悠里「ええ、結構楽しかったわよね？」

胡桃「だな。やっぱり、あたしはお化け屋敷よりこっちの方がいい…」

あの時、胡桃は彼がそばにいるのも忘れて叫び、泣き…あげく彼の腕に抱き付いてしまった。彼がその腕に意識を集中して胸の感触を味わっていた事すら知らず、ビクビクと震えながら…。

その点、悠里や美紀、圭と乗ってきたジェットコースターは本当に楽しかった。こちらのアトラクションでもある程度叫びはしたが、こっちは楽しさ、心地よさから出た叫びであり、彼と入ったお化け屋敷での恐怖からくる本物の絶叫とは違う…。

圭「本当に楽しかったね！美紀ちゃん、もう一回だけ一緒に乗ってこよっか？」

美紀「うーん…見たところさつきより混んできたみたいだから、順番待ちの時間も長くなってると思うよ。あのジェットコースター、この目玉アトラクションみたいだし…」

圭「じゃ、他のを回ってきた方が良いかな？」

美紀「うん、それが良いと思うよ」

この遊園地にやって来て数時間経ち、辺りにいる人の多さも増してきた気がする。一行はとりあえず宛てなく歩き、すぐに乗ることが出来るようなアトラクションを探した。

圭「果夏はどうだった？コーヒーカップ楽しかった？」

果夏「うんっ！すっごく楽しかった♡もう一生の思い出だよ」

満面の笑みを浮かべる果夏だが、その隣を歩く真冬は下を向いてため息をついていた…。きつと、真冬はここでも果夏に振り回されたのだろう。圭は二人の表情を交互に見てそれを察し、楽しげに微笑んだ。

圭「真冬、お疲れ様」

真冬「…うん」

美紀「そう言えば、先輩は何に乗ったんですか？」

「コーヒーカップ…あとベンチ」

近くを歩いていた美紀に問われ、彼はそう答える。

美紀は不思議そうな顔をしていたが、一応間違った事は言っていない。

美紀「…ベンチって…あのベンチですか？」

「ああ、あのベンチ…」

美紀「コーヒーカップの後、ゆき先輩達はメリーゴーランドに行っ
たんですよね？先輩だけ行かなかったんですか？」

真冬「いや…ボクも行かなかった…」

真冬がそつと言いつつと美紀は益々不思議そうに二人を見回し、首を傾げる。ひよつとすると、この二人はメリーゴーランドに乗るのを
恥ずかしがったのかな…とも思ったが、実際の理由は他にあつたらしい。
美紀は二人の口からそれを伝えられ、苦い笑みを浮かべた。

美紀「なるほど…色々大変だったんですね」

「まあね…けど、休憩してたおかげでだいぶ良くなった」

真冬「そうだね。まあ、ボクとしてはもう目の回るようなアトラク
ションは嫌だけど…」

などと愚痴る真冬だが、果夏がハンドルを握っているコーヒーカッ
プよりも目が回るようなアトラクション等そうは無く、彼女はこの後
も様々なアトラクションを由紀達と共にしていく…。

そうこうしている間に辺りは薄暗くなり、帰りの時間を考えると次
のアトラクションが最後…というところまで来てしまった。

悠里「時間もいいとこだし、次で最後かしらね」

胡桃「そうだな…あと一つだけ乗って帰るか」

由紀「はあ…もう最後かあ…」

由紀はガツクリと肩を落とし、深いため息をつく。もう結構な時間をここで過ごしてきたハズなのだがその時間があまりに楽しかった為、体感ではまだ一〜二時間しか経っていないように思えていた。

由紀「…あのさ、最後のは…わたしが選んでいいかな？」

悠里「ええ、何か気になっているのがあるなら良いわよ」

由紀の提案に悠里は笑顔で応え、他の者達もそれに賛同する。

すると由紀は嬉しそうな笑顔を浮かべ、目的のアトラクションがあるところまでスタスタと歩いていった。

そうして数分歩いていくと、由紀が目指していた最後のアトラクションの前に辿り着く…。彼女が選んだアトラクションは、とても大きな観覧車だった。

由紀「最後はこれに乗って、この遊園地を上から見て終わろうっ！」
歌衣「はい、そうしましょう。これ、私も乗って見たかったんです！」

目の前にそびえ立つ観覧車はこの遊園地内のどこにいても確認できるくらい大きな物であり、一つ一つのゴンドラに付けられている電球がカラフルに光って薄暗くなってきた空を背景にぼんやりと輝いている…。

これを最後のアトラクションとして楽しむことには何の文句も無いが、一つのゴンドラに全員で乗る事は当然不可能だ。一行は少し考えた後、二人ずつに分かれてそれに乗る事を決めていく。

悠里「るーちゃんは私と一緒に良い？」

るー「うん、一緒に乗ろうっ♪」

若狭姉妹はここでも仲良く手を繋ぎ、やって来たゴンドラへ乗り込む。

それを見ていた歌衣は少し慌てたように胡桃の元へ駆け寄り、照れたように顔を伏せながら呟いていく。

歌衣「そ、その…くるみ先輩さえ良ければなんですけど…」

胡桃「あははっ、なんだ？一緒に乗りたいのか？」

照れた様子を浮かべる後輩を前に少し意地悪な笑みを浮かべ、胡桃は問う。歌衣はそれに対して無言のまま首を縦に振り、最後に胡桃の目を見つめた。

胡桃「わかったよ。じゃ、一緒に乗るか」

歌衣「は、はいっ！」

胡桃は歌衣の手を掴んでゴンドラに乗り込み、外にいる彼や由紀、真冬達に小さく手を振っていく。真冬は彼女に対して手を振り返した後、次のゴンドラを真っ直ぐに見つめたまま呟いた。

真冬「よし、ボクは圭と一緒に……」

圭「はっ!?わ、私っ!？」

真冬「…なんでそんなに驚くの」

目を丸くして戸惑う圭の答えを待たず、真冬は彼女の手を掴む。圭はそれに対して少しだけ抵抗した後、真冬の耳元に口を寄せていく。

圭「ちよつと！あなたの相手は他にいるでしょ？ほら、後ろを見てみなよ」

真冬「……………」

果夏「うう…っ…………ぐすっ…………」

圭の言うまま後ろを振り向いて見ると、今にも泣き出しそうなくらいに瞳を潤ませている果夏がこちらを真っ直ぐに見つめていた…。きつと、最後のアトラクションは真冬と一緒に良いと思っていたのだろう…。

一緒に乗ったコーヒーカップが地獄だったのでつい彼女と二人きりになるのを避けていた真冬だが、あんな目を見せられたらこれ以上冷たくも出来ない…………。

真冬「はあ…………わかったよ。カナ、こっちおいで」

果夏「っ!!! うんっ♡」

真冬が呆れ顔で手招きすると果夏は溢れていた涙を引っ込めて嬉しそうに微笑み、彼女の元まで駆けていく。それを見ていた圭や美紀、そして彼と由紀は何とも言えぬ表情を浮かべた…。

由紀「果夏ちゃん、ご主人様に呼ばれて喜ぶワンちゃんみたいだねえ」

「ああ、確かに…」

三つのペアを見送り、残ったのは四人…。結局、圭は美紀と…：彼是由紀とペアになり、それぞれがゴンドラへと乗り込んだ。

由紀「あの…わたしなんかと一緒によかったの？」

乗り込んだゴンドラの扉が閉まり、少しずつ地面から離れた時に由紀が呟く。彼と向かい合うようにして座っている由紀はほんの少しだけ、気まずそうに顔を伏せていた。

「ああ、全然良いよ。由紀ちゃんこそ、僕なんかと一緒に良かった？」

由紀「えへへ…：うんっ、キミと一緒に良かったよ」

由紀は伏せていた顔を上げ、ニッコリと笑う…。

その顔はほんのり赤く染まっっていて、いつになく大人びたものに見える。

「むう…：…」

普段の由紀は常に明るく、子供っぽい表情でいる事が多い。

しかし、今の由紀はどこか雰囲気が違う…。

大きな瞳を微かに細めているからだろうか…：頬がほんのり赤く染まっているからだろうか…：それとも、狭いゴンドラ内に二人という状況だからそう錯覚しているだけなのだろうか…。

由紀「…どうかしたの？わたしの顔、何か付いてる？」

「いや、何も……」

あまりマジマジと見つめていたらおかしく思われるだろうし、由紀も気まづくなってしまうだろう……。彼は由紀の顔から視線を外し、ゴンドラの外を眺める。二人の乗るゴンドラは少しずつ上昇していき、あと少して頂上というところまで来た。

由紀「うわあ……すつごく綺麗だね！」

「んん、そうだね」

夜が近付いている事もあり、上から見下ろす遊園地はそれぞれのアトラクションやショップの明かりがキラキラと輝いている。それらはまるでイルミネーションかのように美しく、由紀はゴンドラの窓に両手をつけながらそれを眺めていた。

由紀「んん、わたしの家はあの辺かな？」

「えっ？…さあ…どうかな…」

ゴンドラが頂上まで達すると遊園地の外すら見渡せるようになり、由紀の視線がそっちへ向く。この遊園地から由紀の家がある巡ヶ丘まではかなりの距離があるのでいくら頑張っても自宅は見えないと思うが、由紀もそれを分かった上で大体の位置だけを予測しているのだろう。

由紀「…あつーねえ見て見てっ!!ほらあそこ、すつごく綺麗だよー」

由紀は窓の外を指差し、感動したように身を跳ねさせる。

一体何が綺麗なのだろう……。彼はすぐに由紀の指差している方を確認してみたが、彼女が見ている物がどこら辺にあるのか今一つ分からない。

「……………」

由紀「ほら、あそこだよっ！分かんないの？」

「ええつと……………」

再び目を凝らし、由紀の指差す方を見る…。

しかし、いくら眺めてみても周囲にある他のアトラクションや人混みしか見当たらない。

由紀「そつちからだと見にくいのかな…？ちよつと隣に来てみて？」

「え…あ、ああ…」

隣の席をポンポンと叩く由紀の言葉に従い、彼はそこに身を移す。すると由紀はまた嬉しそうに笑って窓の外を指差したが、隣にいる状態から窓の外を眺めようとするとうとうしても互いの身が寄つてしまふ…。

由紀「ほら、あつちだよ。今度は分かるかな？」

彼は少し戸惑いながらも窓の外：由紀が指す方を見つめていく。

その際に彼女の肩と自身の肩が強く触れあつてしまふが、このくらい身を寄せないと窓の外が見られない…。

その状態のまま少しして、彼は由紀が見ていた物をようやくその目に捉える事が出来た。由紀が見ていたのは恐らく、園内にあるメリーゴーランドだろう。上から見下ろしたメリーゴーランドは綺麗な明かりがクルクルと回転してまるで万華鏡のようになっており、確かに目を奪われるものがあつた…。

由紀「あれ、さつきわたし達が乗つたやつかな？」

「ああ、そうかもね」

由紀達がそれに乗っていた頃、彼は真冬と共にベンチで休んでいた。

だから彼女がメリーゴーランドに乗ってどんなリアクションをしたのか知らないが、由紀の事だ…きっと子供のようにはしゃいだのだろう。

その様を見られなかった事を少し惜しく思い、彼はすぐそばにある彼女の横顔へ視線を移す…。と、その時だった…

由紀「キミと真冬ちゃんも一緒に乗れたらよかつ——」

由紀が急に顔をこちらへと向け、それと同時にほんの少しだけゴンドラが揺れる。それによって彼は微かに姿勢を崩してしまい、由紀の方へと身が傾いた…。彼は慌てて窓へと手をついたのだが、それでもギリギリ間に合わない…。

気付いた時、彼と由紀の唇は重なっていた…。

由紀「……………」

かつてない程に近い距離から見た由紀は驚いたように目を見開いており、その顔がみるみる赤くなっていくのが分かる…。彼は由紀のそんな表情、そして唇に伝わる柔らかな感触を前にして一気に冷や汗をかき、彼女から身を離れた。

「つ…ごめんっ!!」

咄嗟に謝り、彼女の隣から向かいの方へと身を移す。

わざとでは無かったとはいえ、由紀とキスしてしまった…。

彼はその事実には激しく焦り、心臓がドクンドクンと激しく鼓動する。

向かいに座る由紀はついさっきまで外の景色を見てはしゃいでいたのに、今はその顔を下へ向けてしまっており、どうにも気まずい時間が流れ始めた…。

由紀「つ……………」

「…大丈夫…?」

不安になって尋ねてみると由紀は下を向いたままの状態です。右手を動かして、その指先で自身の唇をそっと撫でる…。そうした後、彼女は俯けていた顔を彼の方へと上げていったが、その顔は未だ真っ赤に染まっていた。

由紀「え…と…な、なんかごめんね?わたしみたいな子が相手だ

と、キミも困っちゃうよね…」

「いや、そんな事は全然…」

由紀は照れたような、それでいて自虐的な笑みを浮かべて謝っているが、彼女が謝る事など何一つ無い。由紀は子供っぽいところもあるが、とても可愛らしくて魅力的な子だ…。なので彼からすると由紀とのキスは嬉しいアクセントであり、彼女から謝られる必要など微塵も無かった。むしろ、謝るのはこっちの方だ…。

「謝るのはこっちなんだけども…何と言えればいいか…」

由紀「う、うくん…あまり気にしないでいいんだよ？」

由紀は席に座ったまま両足をパタパタと揺らし、笑顔で答える。

彼がその言葉に驚き、目を丸くしてそちらを見つめていると、由紀は笑顔のままこう言った…。

由紀「えへへ…：…今は二人だけの思い出にしようね♪」

ただ嬉しそうにニツコリと微笑み、由紀は両足を揺らす…。

そうして楽しげに足を揺らしたまま外を眺める由紀の横顔を眺めていたらいつしかゴンドラは地面へと戻っており、彼は由紀と共にそれを降りて皆と合流していった。

第六十一話『ひざびざ』

「……………はあ」

屋内にあるベンチの隅へ腰掛け、側に設置されていた自動販売機から買ったばかりの缶ジュースをゴクゴクと飲んでから彼はため息をつく…。一息つきながら見回した空間には大きな音を響かせながら眩い光を放つアーケードゲームの筐体や、可愛らしいぬいぐるみが景品になっているクレイニングゲーム…。そして聞き覚えのある曲を流しているリズムゲーム機等が周囲を賑やかにしている。今の時刻は昼を少し過ぎた辺りだが、物事の始まりは今朝早くの事だった…。

休日の今日、当初は特に予定など無かったのだが今朝起きたら携帯にメッセージが入っており、彼は渋々ながらそこへとやって来る事になる…。携帯に入っていたメッセージはこうだ。

『たぶん今日も暇であろうかわいそうなああなたに朗報！可愛い可愛い女の子と遊ぶチャンスがやって来ましたよ！！ピチピチお肌の女の子と遊びたい？楽しい時を過ごしたい？むへへ…。仕方ないなあ！その夢、叶えてあげましょ！！ピチピチのかわいくかわいく年下の女の子があなたをお待ちしておりますですよ♡絶対に来てね♡来なかつたら泣く』

……………という色々と怪しいメッセージに続き、巡ヶ丘市内にあるゲームセンターの位置が記されていた。このメッセージの送り主が予想していた通り特に予定など無く退屈していた彼はそのゲームセンターへとやって来たわけなのだが、そこで待っていた人物…。つまり例のメッセージの送り主はやはり”彼女”だった。

メッセージ越しでも伝わる”騒がしさ”…。

いきなりこんなメッセージを送ってくる”年下”の知り合いなんて、”彼女”しかないだろう。

果夏「お〜っ!!来てくれたっ!来てくれたっ!!せんぱ〜い!お久しぶりですねえ♪」

「んん……久しぶり?」

つい数日前、普通に校内で会った気がするが、まあ良いだろう…。
彼はその少女、紗巴果夏すずはかなに手を引かれながらゲームセンター内へと足を踏み入れていく。

果夏「ぬへへ…もうっ!あんなメッセージに釣られて来ちやうなんて、先輩も男の子ですね〜♪あのメッセージを送ってきたのが悪い人だったらどうするんです?もつと気を付けないとダメですよ〜」

…果夏は得意気な表情でこう言っているが、彼はあのメッセージを送ってきたのが果夏だと確信していた。何故なら、メッセージの送り主は【紗巴果夏】と表記されていたから…。彼と友人登録しているメッセージアプリを使ってメッセージを送信したら名前が表記されるのは当たり前前の事なのだが、果夏はそんな簡単な事すら見落としているようだ。

果夏「むふふっ、でも、今回は助かりましたね!?先輩を待っていたのは悪〜い人ではなく、可愛い可愛い…ピッチピチの後輩ちゃんでしたよ〜♡うれしくでしょ〜!!」

「…はいはい、嬉しい嬉しい…」

あのメッセージを匿名のまま送りつけたと勘違いしている辺り本当に残念な娘だが、確かに可愛いには可愛い。ピヨコピヨコと揺れる茶色のポニーテールに、真っ赤なシュシュ。クリクリとした大きな目や明るい表情もそうだが、こうして元気いっぱいの笑顔を振り撒きながらはしゃぐ様はまるで妹か何かのように思えて素直に可愛いと思える。

果夏「遊ぶの久しぶり…!遊ぶの久しぶりっ…!!ほんっ…:…:とうに久しぶりっ!!!わたしっ、今日は一生分騒ぐんで!!先輩もついてきて

下さいよ!!!」

……いや、少し元気過ぎるかも知れない…。

彼女は大きく開いた目をキラキラと輝かせながら騒ぎ、周囲にいた人々がチラホラとこちらを見る…。大きめの音を鳴らすゲーム機達よりも更に大きな声を出す彼女に手を引かれていた彼は辺りから向けられる視線から逃れるように顔を俯け、彼女の望むまま遊びに付き合っていた…。

「そう言えば何で僕を呼んだんだ？真冬を呼べば良かっただろ」

果夏「もちろん、真冬ちゃんも呼んでますよ。他にも由紀先輩、りーさん、胡桃先輩に美紀ちゃんに圭ちゃん…歌衣ちゃんにも呼び出しのメッセージを送りましたっ！遊ぶなら大勢で遊びたいですからね〜♪」

それを聞き、彼は一安心する。

まだ遊び始めて数十分しか経っていないが、このまま果夏と二人きりで遊び続けるのは…：彼女のテンションに一人でついていくのはかなりキツイと感じていた。しかし、もう少し待っていれば他の皆もやって来る。そうなったら彼女の扱いに慣れている真冬辺りと交代し、自分はこのんびりと遊ぶことが出来るだろう。思わず、安堵のため息が出る。

「ふう……で、皆はいつ頃来る？」

果夏「さあ？みんな、『行けたら行く』…としか返事してくれなかつたんですよね〜。たぶん、そろそろ来てくれると思うけどな〜」

「行けたら行く…ねえ」

果夏の携帯を見せてもらったが、確かに皆が同じようなメッセージを返してきた。細かな言い回しこそ違えど、皆が皆『行けたら行く』と返事している…。いや、よく見てみると由紀と歌衣だけは違うメッセージを返していた。この二人はもうじき来てくれそうだ…。

(けど、他の皆はどうかな…)

出来るだけ多くの人数が集まってくれた方が楽になるし楽しいと思うのだが、どうなる事やら…。少しだけ不安を感じる彼だったが、その後、数十分程経ってから由紀と歌衣が現れ、そして更に数分が経った頃…悠里と胡桃、圭と美紀と真冬が続けてやって来た。一時はどうなるかと思っただが、無事に全員集合だ。

「よし、果夏のごことは真冬に任せた」

真冬「え…?」

まず最初に真冬の肩を叩き、そのまま果夏の横へと立たせる。

彼女なら、果夏を相手にしても上手くやっていけるだろう。

隣へとやって来た真冬を見た果夏はニタニタと嬉しそうな笑みを浮かべながらその手を掴み、そのままゲームセンターの奥の方へと消えていった…。

胡桃「ゆき達も来てんだよな?」

「ああ、由紀ちゃんなら歌衣ちゃんを連れて先に遊んでるよ」

胡桃達よりも一足先にやって来たあの二人は今、仲良く肩を並べてクレーンゲームを楽しんでいるようだ。胡桃と悠里は楽しげに遊んでいる二人を確認するとその場へと歩み寄り、二人が狙っていたぬいぐるみを獲得するべく協力していく。

彼もその輪に加わろうかと考えたようだが、まずは果夏のテンションに付き合い続けてきた事で溜まり始めていた疲れを少しでも癒すのが先だろう。

美紀「あれ?先輩、どこに行くんですか?」

「…ちよいと休憩。ノド渴いたし…」

圭「あつ、私も飲み物買ってこく。美紀ちゃんも何か飲む?」

美紀「ううん、まだ平気。また後で買うよ」

圭、美紀の二人とゲームセンター隅にある自動販売機へ寄り、彼は圭に続いて一本の缶ジュースを買う。彼はそのジュースをベンチの上で…圭はその側に立ったまま飲んでいき、そして互いに一息つく。

「……………ふう」

圭「…さて先輩っ、せっかくなんで私達と一緒に遊びませんか？」

圭は彼の事を誘うと、ニッコリと可愛いらしい笑みを浮かべる。

本当はもう少しだけ休んでいようと思っただが、圭と美紀は果夏ほどテンションが高い娘ではないので一緒に遊んでいても疲れはしないだろう。彼はゆっくりと立ち上がり、静かに頷く。

「よし、じゃあお供させてもらうかな」

圭「やった〜！えへへ、美紀ちゃんは何で遊びたい？選択は任せるよ！」

美紀「えっ？いや、私はこういう所にはあまり来たことないから、任せると言われてもどうすれば良いか……」

圭「なるほど…。じゃあ面白そうなヤツを適当に回ってこうか？」

美紀はコクリと頷き、彼もそれに賛同する。

そして三人はゲームセンター内をスタスタと歩き出し、これからどれで遊ぼうか…と頭を悩ませていった。

第六十二話 『なかよく』

さて、何をして遊んでいこうか…。

美紀と圭、二人の後輩と共にゲームセンターの中をウロウロしながら楽しめそうなものを見定めていると、圭がとあるものを見付けて彼の服の袖を引く。

圭「あつ！先輩っ、私あれが欲しいですっ！」

キラキラと輝くその瞳が見つめていたのは、横一列にズラリと並んでいたクレーンゲームの一つ…。その中にはイヌとネコを模した二種類のぬいぐるみが並んでいたが、彼女が欲しいのは恐らく可愛らしいイヌのぬいぐるみの方だろう。

美紀「圭、こういうのやるの？」

圭「まあね。けど、景品を取れたこと自体はあまり無いなあ…。というわけで先輩っ！ここは一つ、カッコいいところを見せて下さい！」
圭は肩から下げていたカバンから財布を取り出すと、五百円玉を手にしてそれをクレーンゲームに投入する。見たところ五百円で六回プレイ出来るようだが、圭自身は挑戦する気が無いようだ。彼に全てを任せるといふ事だろう。

「…ま、やれるだけやってみるよ」

圭「はいっ！期待してますよっ!!」

正直、彼もあまりクレーンゲームが得意では無い…。

圭が望む景品をたったの六回で獲得出来るのか怪しいところなのだが、可愛い後輩のキラキラとした期待の眼差しを向けられて断る訳にもいかないだろう。…彼は筐体の前に立つとボタンに手を添え、中にあるクレーンやぬいぐるみの位置を確認する。

「ええつと…圭ちゃんが欲しいのはあのイヌのぬいぐるみだよね？」
圭「えつ？いや、違います！私が欲しいのは、その横にいるネコのぬいぐるみです。すっごく可愛いなあとと思って、一目惚れしちゃいました♪」

「ああ、そう…」

事前に確認しておいて良かった…。

彼は一安心しつつ、そのネコのぬいぐるみを眺める。

圭はこのぬいぐるみが欲しいそうだが、彼にはその魅力がよく分かっていなかった。茶色と白の中間のような毛色をしたそのネコは確かに可愛いすが、少し冷めたような目をしている気がする…。このぬいぐるみより、もう一方の茶色いイヌのぬいぐるみの方が愛嬌のある目をしていて可愛いと思うのだが…。

「さて…やってみますかね」

まあ、その辺は好みの違いだろう…。

圭がこつちを欲しがっているのなら、その望み通りにするだけだ。

彼は狙いを定めてから筐体のボタンを押し、クレーンを横へ…そして奥の方へと移動させる。

圭「おつ？おおつ!？」

クレーンはネコの真上でピタリと止まり、ゆっくり下降していく…。

思っていたよりズレてしまったりという事もない、狙い通りの動きだ。

クレーンは両サイドに付いていた二本のアームを開いて下降すると、目当てのネコの頭をガツシリと掴む…。景品の獲得を確信したのか、圭も嬉しそうな声をあげていた。

しかし、一回目から全て上手くいったら何の苦労もない…。

クレーンのアームはネコの頭をしっかり掴んでいるように見えたが、力が足りなかったらしく上昇時にスルリと離してしまった。

圭「ああ〜っ！今のは惜しかったなあ…。けど、一回目からこれな
らかなり期待出来ますよっ！ね、美紀ちゃんもそう思うでしょ？」

美紀「ん？あ…うん…そうだね」

「…では、二回目…」

今の調子でいけば、六回以内には取れるはず…！

彼と圭が興奮した様子でクレーンと向かい合う中、美紀だけはどこ
か冷めたような視線でそれを見守っていた。

「ぐ…っ…！」

圭「ううう〜っ！中々取れませんねえ…」

二回目…三回目…四回目…五回目…ここまで全てが失敗に終
わったが、何度も何度もアームをぶつけた事でネコのぬいぐるみは少
ずつ落とし口に近付いている。あと一回で取ることだって、不可能
ではないだろう。

「…ラスト、六回目っ！」

圭「先輩っ！がんばって！」

すぐ隣で圭が見守る中、彼は最後の挑戦をしていく…。

これで取ることが出来なかったら、可愛い後輩の期待を裏切ってし
まう…それだけは避けねばならない。彼はクレーンとぬいぐるみの
位置をまたじつくりと見直し、ボタンを押していく…。

「いけ…いけっ…」

クレーンが狙い通りの場所へと移動し、ゆっくりと下降する…。

これが最後のチャンスだと思おうと緊張してしまい、彼も…そして圭
も額に汗を浮かべていた。二人は緊張した面持ちでクレーンの動き
を見守っていくが、クレーンのアームはまたしても大事なところをぬ
いぐるみを離してしまい…。

「っ…っ!!」

圭「あ〜っ…残念っ…。ま、仕方ないですよ。先輩、気にしない

で下さいね」

圭は笑顔でそう言ってくれたが、ここで退くなど出来ない……出来るはずもない……。彼は自身の財布を素早く取り出すと、何の躊躇いも無く五百円玉を投入する。

圭「せ、先輩っ?」

「あと少し……あと少しでやれる……。やれるはずっ……!」

圭「いや、でも……あまり長引いちやうと悪いですし……」

筐体の中にあるネコを真っ直ぐに見つめる彼の目を横から見て、圭は思った……。この人はきつと、もうあのぬいぐるみを取るまで諦めない”と……。その気持ちはありがたいのだが、幾ら経っても獲得出来ずに千円、二千円とお金を使わせてしまったら申し訳ない。

圭は冷や汗を浮かべながら、暴走しかけている彼を止めようとしたが……彼は決して止まらない。一回……二回……三回……四回……またしても失敗を重ねていき、次の五百円玉を取り出した……。その時だった。筐体の中から”ガコンツ!!”と、何かが落ちるような音がして……

「っ?!よしっ!!」

彼はすぐその場に屈むと、筐体の景品取り出し口に手を潜らせる。そして凄まじい達成感を感じているのであろう笑みを浮かべながら、手にしたそのぬいぐるみを圭の胸元へと差し出した。

圭「えっ?!取れたんですかっ?!落ちるとこ見逃しちやった……」

景品が取り出し口へ落ちていくのはクレールンゲーム最大の見せ場といっても過言では無いので、少し残念な気もする……。しかし、何はともあれお目当てのぬいぐるみを手に入れた。圭はそのネコのぬいぐるみを両手で掲げると真正面からジーツと見つめ、ニコニコと嬉しそうに微笑む。

美紀「ふふっ、よかったね」

圭「うんっ♪先輩、ありがとうございますっ!」

「いや、喜んでもらえたなら本当に良かった。正直、もつと長引くと思ってたんだよな…」

可愛い後輩の為、ある程度の散財は惜しまないつもりでいたが、思っていたよりもずっと早く景品を獲得する事が出来た。圭も喜んでくれているようだし、一応良い結果で終わったのだが……

美紀「あと一回分、残っちゃいましたね…」

美紀の指摘通り、あと一回分のクレジットが残っている。

五百円を投入して得た六回分のクレジットの五回目でお目当ての景品を取ってしまったので、一回分余ってしまった。

美紀「……ちよつとやってみて良いですか？」

「ああ、自由どうぞ」

たった一回のプレイでは何も出来ないだろう…。

彼はそんな事を思いながら、次は何で遊ぼうかと辺りを見回す。するとその直後、ついさつき聴いた覚えのある音がして…。

…ガコンッ!!!

美紀「あつ、取れた…」

「なっ!?!」

思わず振り向くと、美紀が取り出し口から茶色いイヌのぬいぐるみを取り出していた…。たった一回では取れるはずもないと思っていたが、彼女の手握られているそのぬいぐるみは間違いなくクレーンゲームの景品だ。彼は目を丸くしたまま驚き、圭は彼女の隣でピョンピョンと跳ねる。

圭「美紀ちゃんすごいすごいっ!!クレーンゲーム得意だったの!?!」

美紀「ううん、あまりやったこと無い……今のは偶然だよ。このぬいぐるみも圭にあげようか？」

圭「いや、それは美紀ちゃんが持って帰ってあげなよ!先輩もそれ

が良いと思いますよね？」

「あ…ああ、うん…：良いんじゃないの」

偶然とはいえ、美紀が一回でそれを取った事が未だに信じられない。

圭に先輩として良いところを見せようと頑張ったつもりだったが、彼女の注目は彼ではなく美紀に向いていた…。

圭「もつと喜びなつて。一回でぬいぐるみ取れるなんて中々無いよ？」

美紀「うん…：そうだね」

クレーンゲームが一段落したので、三人は側にあつたベンチに座りながらそのぬいぐるみを眺める。圭はネコのぬいぐるみを見て嬉しそうにニコニコとしていたが、美紀はイヌのぬいぐるみを見てもそこまで表情を変えない。

圭「…ネコの方が良い？交換してあげようか？」

美紀「ううん、大丈夫だよ。ただ、私にはこういう可愛いぬいぐるみは似合わないんじゃないかなって…。」

圭「そんな事ないよ！美紀ちゃんは可愛いんだから、ぬいぐるみだつてよく似合う!!ほらほら、もつと笑つて欲しいにゃ〜♪」

圭はネコのぬいぐるみを美紀の頬へと擦り付け、楽しそうに微笑む。

自分には、可愛いものなど似合わない…。

美紀はそう思っていたようだが、そんな事は無い。確かに彼女は他の娘と比べると少し大人びた見た目、雰囲気をしているが、圭にネコのぬいぐるみを押し付けられ、自身もイヌのぬいぐるみを持って微笑む彼女はとても可愛らしかった…。

圭「さて、先輩っ！次は何で遊びましょうか？」

「ん〜、そうだなあ…。」

三人は再び店内を歩き回り、次に遊ぶものを探す…。

と、そんな時、圭は手にしていたネコのぬいぐるみを見つめながらハツとしたような表情を浮かべ、横を歩いていった美紀とそのぬいぐるみを交互に見比べる。

圭「あつ！分かった！このネコちゃんどつかで見たことあるな〜と思つてたけど、美紀ちゃんに似てない？ほら、目の感じとかっ！」

美紀「えっ？そう…？」

圭「うん、絶対に似てるって！よく見るとこの子、美紀ちゃんの髪の毛とほとんど同じ色してるし…あははっ、何から何まで美紀ちゃんみたい♪先輩もそう思いませんか？」

「ああ、似てるかも…」

確かに圭の言う通り、そのネコのぬいぐるみの目はどことなく美紀に似ている…。毛色も美紀の髪の毛とほとんど同じ色だし、圭がこのネコを美紀に似ていると思うのも納得だ。このぬいぐるみを最初に見た時は冷たくて可愛いげの無い目をしてると思つたが、美紀と似たような目だと言われるとこの目も少しだけ可愛く見えてしまうから不思議だ。

美紀「う〜ん…似てるかなあ…。それよりまさ、このワンコのぬいぐるみの方は圭に似てると思わない？こつちも毛色が同じだよ？目がクリクリしてて大きいところも圭にそっくり」

圭「そうかな？…へへ、こんなに可愛いぬいぐるみと似てるなんて言われるとなんか照れちゃうね」

二人は手にしたぬいぐるみをお互いの顔と見比べては楽しげに笑い、歩きながら仲良く肩を寄せる。彼はその微笑ましい光景を数歩下がった所で見つめていたが、そんな中でふと、圭がああネコのぬいぐるみを見て言っていた言葉を思い出す。

(…そう言えば、圭ちゃんはあのぬいぐるみを見て”凄く可愛い”とか”一目惚れした”とか言っていたな)

そして、そのぬいぐるみは美紀によく似ている…。

圭は本当に美紀の事が好きなようだし、美紀もまた、圭という友人の事を気に入っているように思えた。

第六十三話 『しんちょうに』

美紀、圭とクレインゲームを楽しんだ後、彼は引き続き二人と行動をともにしていく。まだまだ色々なゲームがあるようだが、何を楽しもう……。いくらか悩んだ結果、今度はメダルゲームをプレイする事に決めた。

圭「先輩、メダルゲームの経験はありますか？」

「まあ、少しくらいは……」

メダルゲームとは専用のメダルを用いて遊ぶゲームの事だが、このゲームセンター内には結構な種類のゲーム機があるようだ。とりあえず、五百円分くらい交換すれば良いだろう……。彼は専用の交換機に硬貨を入れ、取り出し口からジャラジャラと出てきたメダルをカップへと入れる。

美紀「で、何をやるんですか？」

「んん、そうだな……」

圭「ま、こういうのは気楽にやってみましょうよ！ほら、目に入ってたヤツを手当たり次第にやっちゃえば良いんです！」

美紀「えっ、そんな適当で大丈夫？すぐにメダル無くなっちゃいそうだけど……」

美紀と圭も彼と同様、五百円分のメダルを交換した。

しかし、五百円分のメダルというのはそれほど多くも無い……。慎重にやればある程度遊べはするだろうが、油断したらあつという間に無くなる枚数だ。

圭「美紀ちゃん、ゲームというのは思い切りが肝心なの！じっくりあれこれ考えながらやってても上手くないよ。ね、先輩っ！」
「確かにそうかも……。こういうゲームは直感に任せて立ち回れば意外と上手くいったりするもんだ」

美紀「……何か不安だなあ」

圭と彼はやる気に満ち溢れており、言葉通り視界に入ったゲームを手当たり次第にプレイし始める。美紀は二人の雰囲気にとれない不安を感じたものの、仕方なくそれに付き合っていた…。

投入したメダルでフィールド内のメダルを押し出す、”メダル落とし”と呼ばれるオーソドックスなゲームから、ルーレットのようなゲーム。じゃんけんに勝てばメダルが貰えるゲーム等、色々な物をプレイしていった結果…：彼と圭のメダルはものの十数分でほとんど無くなってしまった。

「くそっ、何で勝てないっ…」

圭「運が無かったんですかね…」

数枚だけ残ったメダルをカップの中でコロコロと転がしながら、二人は暗い表情を浮かべる。ついさっきまでは「負ける気しない!」とでも言いたげなくらい自信に満ちた表情をしていたのに…。

美紀「二人とも雑にプレイしすぎなんだよ。いくら直感に任せるっていつても限度があるでしょ…」

「むう…」

圭「そうだね…反省してるよ」

美紀は二人と比べると慎重にプレイしていたので、そこまでメダルは減っていない…。いや…むしろ交換した当初よりも1.5倍くらい増えているようだ。彼女は圭と彼からカップを取り上げると全てのメダルを一つのカップに纏め、それを圭へと手渡す。

美紀「はい、今度はもつと慎重にね?」

圭「えっ?くれるの?」

美紀「というより、三人で共有した方が良いと思って…。圭も先輩も、無茶な遊び方ばかりするから…」

「申し訳ない…」

ということと今度は三人で一つのカップを共有し、美紀の助言を受けつつゲームを楽しんでいく事にした。無茶な賭け方はせず、じつ

りと慎重に……。圭と彼は時折暴走しかけたが、その都度美紀が止めに入る。そのおかげで今度はかなり長い間ゲームを楽しむことが出来たが、とうとう運が尽きてしまったのか、全てのメダルが無くなってしまった……。

美紀「今ので最後ですね」

「んん、全然ダメだったな」

圭「ですね……。一度で良いから、沢山のメダルを並べたかったなあ」
美紀「まあ、長く遊べたから良いでしょ。あまり増えすぎちゃつても処理に困るし……」

プレイしながら確認したが、このゲームセンターはメダルを預けておけない……。つまりその日に使いきる必要があるようだ。なのでもし仮に沢山のメダルを獲得したとしても、それらを全て使いきるのは大変だろう。

圭「確かにそうだけどき、たまにはドカーンと勝つてみたいなあ……。ほら、あそこにいる人とかもうカップに収まらないくらいメダルを持つてるじゃない？ゲームセンターで遊んでいるとああいうのに憧れちゃうよ」

圭が指差した方角にはルーレットゲームをプレイしている人がいて、その人物のそばに置かれているカップには溢れんばかりのメダルが見える……。余程運が良いのか知らないが、確かにああいうのは羨ましい……。

美紀「……あれ、ちよつと待って……あの入って……」

大量のメダルが入っているカップの持ち主……。その背中はどこかで見覚えがある。腰まで伸びた、微かにカールのかかっている薄茶色の髪……。そして、いかにもお嬢様風といった感じのフリフリとした白いワンピース……。よく見ると、その隣には可愛らしいミニスカートとシャツに身を包み、猫耳を模した帽子を被る桃色の髪の少女もいた。

「由紀ちゃんど…歌衣ちゃん？」

恐る恐る近付いてみると、気配に気付いたその二人は同時に振り向く。

そこにいたのはやはり、那珂歌衣と丈槍由紀だった。

二人は仲良くメダルゲームで遊んでいたようだが…一つ気になる事がある。由紀は彼等と会った瞬間にキラキラと輝くような笑みを浮かべていたのに、歌衣の方はどこか引きつったような笑みを浮かべているのだ。

圭「おっ、歌衣ちゃんとゆき先輩もメダルゲームやってたんだ」

歌衣「え、ええ…：…けどこれ、どうやっててもメダルが減らないんです…。そろそろ切り上げようかと思ってたのに、賭ければ賭けるだけ増えるんです…」

歌衣が困ったように言った瞬間、隣にいた由紀が複数のカップを彼等の前へと置いて得意気に微笑む。それらのカップは全て、溢れんばかりのメダルで満ちていた。

由紀「ふっふっふ、すごいでしょ♪これ、全部歌衣ちゃんがやってくれたんだよ♪」

圭「なっ?!?嘘でしょ?!?」

「メダルの詰まったカップが…全部で四つも…」

美紀「これ、何枚あるんだろ…」

カップはそこまで小さな物でもないのに、数百枚はメダルが入るはず…。それが四つとなると、恐らく千枚は軽く超えているだろう。このメダルの全てを歌衣が一人で獲得したというのだから驚きだ。

歌衣「ま、また当たった…。うう…全然減らないっ…：…どうしよう…」

プレイしていたルーレットゲームから大きなファンファーレが鳴り響き、大量のメダルが吐き出される…。ジャラジャラと音を立てながら出てくるメダルはかなりの量であり、五つ目のカップを満たそうとしていた。由紀はそれを見て子供のようにはしゃいでいるが、歌衣

はもう苦笑いしか出来ない…。

圭「もしかして歌衣ちゃん、必勝法でも知ってるの?」

歌衣「いえ、すっごく適当にやってるだけです…。軽い気持ちでやってるだけなのに、何故か毎回当たってしまった…。最初の方は嬉しかったですけど、これだけ増えてきちゃうと逆に焦りが…」

美紀「…圭と先輩で使ってあげたら?」

そうすればこのメダルを全て処理出来るかも…と美紀が言う。

しかし彼と圭はその言葉を聞くなり、同じ様に鼻で笑った。

圭「いくら私達でもこれだけのメダルを使いきるなんて無理だよ。

ねっ、先輩」

「ああ、流石に無理だ」

美紀「そうかな?けど、ゆき先輩も入れて三人で遊び回ればすぐに…」

由紀「おおっ!!じゃあ歌衣ちゃん、このメダル借りてもいい?」

歌衣「貸すどころか差し上げますよ。残さず全て使ってくれるのなら、その方が良いですから」

それに、自分が得たメダルでみんなが楽しく遊べるのならこれ以上の喜びはない。歌衣はニッコリと微笑むと持っていたメダルの全てを彼と圭、そして由紀へと分け与え、美紀と共にそばのベンチで一息つく事にした。

由紀「えへへ、今度は何して遊ぼうかな」

圭「もしかしたら更にメダルを増やしちゃうかもね」

「ふふっ、そうだったら面倒だな」

圭と彼はそんな未来を想像してニヤニヤと笑い合っていたが、美紀はそんな二人を冷ややかな目で見送る…。歌衣が稼いだメダルはかなりの量であり、余程のヘマをしない限りは失えないだろうが……

美紀(あの二人の事だから、調子にのった遊び方ばかりするだろう

な。ゆき先輩もあまりこういうの得意じゃなさそうだし…）
きつと、すぐにメダルを無くして戻ってくるだろう…。

美紀は意気揚々と旅立った三人を見送ると、クレインゲームで手に入れたイヌのぬいぐるみを手に持ってそのつぶらな瞳と見つめ合う。

歌衣「可愛いワンちゃんですねぇ♪」

美紀「うん、可愛いっ」

同じベンチに腰掛けながら、歌衣は隣に座る美紀の顔を覗き込む。イヌのぬいぐるみと見つめ合う彼女は微かに頬を緩めており、とても優しい表情をしていた。

歌衣「ワンちゃん好きなんですか？」

美紀「えっ？あ、ああ…そうだね、わりと好きかな…」

そう、犬はもちろん、可愛らしい生き物は好きな方なのだが…彼の家に暮らしている犬、太郎丸との距離感が今一つ縮まらないのが密かな悩みだ。時折遊びに行くことによつて少しずつ懐なついてきてくれるような気はするものの、まだまだ物足りない…。

歌衣「私の家にはワンちゃんが三匹と、ネコちゃんとウサギちゃん
が二匹ずつ暮らしているんです。みんな可愛くていい子ですから、もし良かったら遊びに来てくださいね♪」

美紀「へえ、そんなにいっぱいいるんだ？…じゃあ、また今度遊びに行かせてもらおうかな」

それだけ沢山いるのなら、一匹くらいは懐いてくれるだろう。

歌衣の話を聞いた美紀はいつ彼女の家に遊びにいこうかと悩みつつ、その動物達との交流に胸を踊らせる。歌衣の飼っている犬はどんな子だろうか…。猫はこちらへ寄ってきてくれるだろうか…。ウサギはもふもふとしているのだろうか…。

色々な事を思いながら歌衣との会話を楽しみ、気付けば数十分の時
が経つ。その頃には彼と圭、そして由紀も戻ってきたのだが…：やは
りと言うべきか、三人の持つカップの中にはもうメダルなど残ってい

な
か
っ
た。
。

第六十四話 『たいけつ』

賑やかな音が飛び交うゲームセンターへと遊びに来て数時間…。

美紀や圭といくらか遊んだ後に由紀、歌衣と合流した彼は彼女らと共に当てもなく歩き回り、そして更に二人の人物と合流する。

「お二人さん、何してんの？」

そう言つて声をかけた相手は、恵飛須沢胡桃と若狭悠里だ。

二人は目の前にあったクレインゲームに熱中していたらしく、声をかけられるまで彼や由紀達が近寄ってきている事に気付いてなかったらしい。

胡桃「ああ、いや〜…このぬいぐるみが全っ然取れなくてさ」

呼び掛けに応じて振り向いた胡桃はクレインゲームを指差し、まいったように苦笑する。ぬいぐるみと聞き、ついさつき美紀や圭と共に手に入れたイヌとネコが頭に浮かんだが、胡桃が指差すクレインゲームの中にいたのは真っ赤な蝶ネクタイをしたウサギのようなキャラクターのぬいぐるみだった。それらを一見した感じラインナップはどれも同じかと思つたが、よく見ると表情に違いがある…。満面の笑みを浮かべてるもの、不敵な笑みを浮かべてるもの、何かに恐怖しているかのように青ざめた顔をしているもの…。色々な表情があるが、どれも胡桃の好みには思えない…。

美紀「くるみ先輩…こういうのが好きなんですか？」

由紀「へえ…くるみちゃんつて意外と可愛いところあるよね♪」

胡桃「いや、別にあたしはこのぬいぐるみに興味無いんだけどさ…：…つておい！」意外と”とか言うなっ!!」

ワンテンポ遅れてから頭をひっぱたかれ、涙目になった由紀は『む〜つ』と唸りながら悠里の背後へと隠れる。胡桃が暴れそうになった時は、悠里の後ろに隠れるのが最も安全だからだ。

悠里「ふふつ、実を言うとするーちゃんが前からこのぬいぐるみを欲しがっててね…。私はあまりこういうゲームは得意じゃないから、くるみに取ってもらおうと思ってお願ひしていたの」

圭「なるほど、るーちゃんへのお土産って事ですね?」

悠里「ええ、そういうこと」

今日は都合が悪くて一緒に来れなかったが、もしもこのぬいぐるみを持ち帰ったらきつと喜んでくれるだろう…。そう考えた悠里は胡桃にクレーンゲームの代行プレイを頼んだようだが、かなり苦戦しているらしい。

圭「美紀ちゃん、取ってあげたら?」

美紀「さっきのは偶然取れただけだつてば。下手に私が出すより、くるみ先輩がこのまま続けてた方が早く取れると思うよ」

実際、もうかなり惜しい所まで来ている。

ぬいぐるみの一つは既に落下口に半身を乗り出しており、いつ落ちてもおかしくない状態だ。クレーンゲームにはあと一回分のクレジットが残っており、胡桃が動かしたクレーンはとどめだと言わんばかりにそのぬいぐるみを上から押していく…。

「おっ…!」

胡桃「おっ…!?!おっ?!」

下降したクレーンのアーム部分が落下口に乗り出していた半身へと突き刺さり、ぬいぐるみはそのままクルッと一回転。綺麗に落下して取り出し口へと身を落とす。しかもこれはただの偶然に過ぎないのだろうが、そのぬいぐるみが回転した際にそばにあったぬいぐるみもグラツと倒れ、そのまま取り出し口へと落ちていった。つまり、胡桃は最後の最後で二体のぬいぐるみを確保したのだ。

胡桃「よっしやつ!!なあ、今の見たかつ!!?」

「ああ、見た見た」

余程嬉しかったか、胡桃はぬいぐるみを取るよりも先に彼の肩をバシバシと叩く。その顔はとても嬉しそうな笑みを浮かべており、彼も自然と笑顔になる。

由紀「くるみちゃんすごくいいっ！」

胡桃「へへっ、そうだろそうだろ♪」

得意気に微笑みながらその場に屈み、取り出し口から二体のぬいぐるみを取り出すと、胡桃はそれを悠里へと手渡す。妹への土産が出来た悠里はニコニコと笑って胡桃に感謝の言葉を述べたが、ここで一つ困った事が……

悠里「るーちゃん喜んでくれると思うけど、二体もいるかしら？」

胡桃「んー、大丈夫だろ。こういうのつて多ければ多いだけ嬉しいもんじゃないのか？」

確かに胡桃の言うことも一理あるのだが、悠里は手にした二体を交互に眺めて苦笑する……。せめて表情が違えば良かったかも知れないが、手に入れたのは二体とも満面の笑みを浮かべている物であり、どちらも全く同じ表情だ。

悠里「うーん……まあ、これはこれで良いのかもね」

せっかくなら違う表情のが欲しかった気もするが、贅沢は言えない。

家に帰ったらこの二体をまとめて妹に渡そう……と、考えた時の事だった。ふと見上げた視線の先、隣にあるクレーンゲームで同じぬいぐるみを狙っている一人の少女が視界に映る。

悠里（あの子、さつきからずつというわね……）

恐らく、妹である”るー”と同じくらいか、それよりも少し上くらいの年齢だろう。綺麗に伸びた銀髪を揺らすその少女の目は半分開きで眠たげなものにも見えるが、目の前の獲物を確実に捕らえてやるという闘志を感じた。

悠里「ねえ、そのぬいぐるみが欲しいの？」

一人でクレーンゲームをプレイし続けるその子が妹と同じくらいの年齢に見えたからか、居ても立ってもいられずに悠里は声をかける。少女はいきなり声をかけられた事に多少戸惑っていたが、悠里の優しい微笑みを見てすぐに警戒を解き応える。

「あ…はい…。僕、うさぎさんが好きだから……」

悠里「ふふつ、そうなんだ。じゃあ…はい、お姉さんのを一つあげる」

「えっ？で、でもっ……」

少女はその言葉に戸惑いを見せるが、悠里はニコニコと微笑みながら二体の内の一体を手渡す。るーに二体あげるのも良いが、ここでこの子に一体分けてあげるのも良いと思えた。それに…この子は結構前からクレーンゲームをやっていた気がする。もうそれなりのお金を使っってしまったているだろうから、ここらで終わりにしてあげた方が良いでしょう。

悠里「くるみ、一つあげても構わないわよね？」

胡桃「んっ？ああ、そのぬいぐるみはもうりーさんのだし、好きにしたら良いんじゃないか？」

悠里「という事だから…遠慮なく受け取ってね？」

もう一度ニコツと微笑み、少女の頭を撫でる。

少女は本当にこのぬいぐるみを受け取って良いのかとギリギリまで悩んでいたようだったが、最後は悠里に向けて可愛らしい笑顔を見けると、ペコリとお辞儀をしてその場を立ち去っていった…。受け取ったウサギのぬいぐるみを、大切そうに胸へと抱えて。

由紀「ねえ、今の子、自分の事を”僕”って言ってなかった!？」

胡桃「そういう子なんだろ。ほら、真冬だって自分を”ボク”って言うだろ？それと同じだ。女の子でも、私とかじゃなくボクを使う子

「がいるんだよ」

歌衣「真冬さんを見て前から思っていました。女の子が”ボク”っていうのは何だかドキドキしちゃいますね〜♪私もそういう女の子になれば良かったなあ」

ボクっ娘に憧れを抱く歌衣だが、彼女はもうすつかり”私”という一人称に慣れてしまっていたので今更方向転換は難しいだろう…。なんて話をしている内、一行はある事に気付く。

「ところで真冬は？」

悠里「そう言えば…確かに見かけないわね？」

胡桃「まだ一人で果夏のヤツの面倒をみてんだろ…。アイツの相手を一人でするのが結構大変そうだし、そろそろ手伝ってやるか？」
久しぶりに遊びに来たからか何か知らないが、今日の果夏は何時にも増してテンションが高かった…。真冬がいくら果夏の扱いに慣れているといっても、あのテンションに付き合わされ続けるのは一苦労だろう。そろそろ合流して真冬に手を貸してやろうと考えた一行はゲームセンター内を歩き、彼女達の居場所を探っていく…。そして、様々なリズムゲームが並ぶ一際賑やかなエリアに差し掛かった時だった……

果夏「んがあああつっ!!なんでさくつ!!もくくつ!!」

エリアの一角、そこでは数人のギャラリーが何かを見てザワついており、その人壁の向こうからは果夏の咆哮が聞こえた…。そこそこ騒がしいゲームセンターでもハッキリと聞こえたその声は苛立ちに満ちているのが分かり、一行は額に汗を浮かべながらそこへと寄る…。

「あ〜…すいません、何かあつたんですか？」

このギャラリーの量…今はまだ分からないが、もしかすると何らかの事情により激しく苛立った果夏がゲーム機を壊して暴れているのかも知れない…。彼はそばにいた一人の女性店員へ恐る恐る声をかけた。するとその店員はゆるいカーブのかかった金髪を揺らし、ニコ

ニコとした表情で答える。

「あはは、何かリズムゲームが得意な女の子が来てましてね。最初はその娘が一人でゲームしてて、その腕前に感動した子供達が集まって騒いでただけなんですけど、そこへあのポニーテールの女の子がやって来て……」

店員は彼等を引き連れてギャラリーの横へと回り、一人の少女を指差す……。そこにいたのは茶色のポニーテールをゆらゆらと揺らしながら、両手にバチのような物をもって太鼓型のリズムゲームに熱中する果夏だった。店員は彼女を指差したまま、今度は苦笑いして言葉を放つ。

「あの娘が来て、最初にゲームをやっていた娘に言ったんです。『私の方がもっと上手く出来る！だから今すぐ勝負しろく!!』……って。たぶん、小さな子供達の人気者になっていた彼女が羨ましかったんでしょね」

果夏の叩く太鼓の横にはもう一つ同じ物があり、それを叩いているのは肩まで伸びた黒髪を揺らす一人の小柄な少女だった。少女は黒を基調としたゴスロリ系のドレス衣装をフリフリと揺らし、鮮やかな手付きで太鼓を叩いている。恐らく果夏と同じ年か、それよりも下の年齢だろう。

圭「見ず知らずの娘いきなり勝負を挑むなんて……果夏のヤツ何考えてんだか……」

美紀「まあ、普段から何考えてるのか全く読めないのが果夏だからね……今更驚きはしないけど、それよりもあの娘の衣装が気になる……」

胡桃「ああ、確かに気になるな……。つてかアイツ、あんなフリフリしたの着てたら動きにくいだろうに、さつきから全然ミスしてねえ……。ありや相当やり込んでるな」

その少女はドレスを揺らし微かに笑みを浮かべながらも手慣れた様子でバチを振るっているが、対する果夏は歯を食いしばりながら鬼

のような形相でバチを振るっている…。かなり連続で負けているのか、その瞳にはうつすらと涙が浮かんでいるようだ。

真冬「…もういい加減諦めたら良いのに」

ドカドカドンドン！と乱暴にバチを振るう果夏を眺めていると、真冬が一行のもとへと歩み寄って呆れたように呟く。この数十分、彼女は果夏があの子を相手に惨敗するのを見続けていたらしい。

「止めてやったらどうだ？あれ、絶対に勝ち目無いって」

真冬「うん、もう何度も止めようとした…。けど、カナは何気に負けず嫌いだから…。ボクが何を言っても聞かないの」

悠里「薄々分かつてはいたけど、果夏さんの面倒を見るのって大変なのね…」

真冬「…うん、ほんとに大変」

『はあ……。』と深いため息をつく真冬のそば、そこにはもう一人の見慣れぬ少女が立っていた。彼女が見つめているのは果夏と戦っているあの少女のようなので、恐らく友人か何かなのだろう。果夏よりも一回り濃い茶髪を後ろでおだんご結びにしているその娘は口の横に両手を添えると、おっとりした口調で二人を応援しはじめた。

「恋ヶ窪こいがくぼさんも…。えくつと……。…」

真冬「……カナ」

「ああ、そうでした。恋ヶ窪さんもカナさんも、がんばって下さいね。一生懸命応援させてもらいます」

恋ヶ窪…というのが果夏の対戦相手の名前なのだろうか。少女はどこかのんびりとした声で言うが、なんと無情な事か…。その応援は辺りのゲーム機から鳴る音に掻き消されていく。それでも必死に応援するその少女を手伝ってあげたいと思ったのか、歌衣が隣へと立って同じように声を発した。

歌衣「お二人とも、頑張ってください」

「はい、がんばってください〜」

歌衣もそうだが、この少女も少しお嬢様らしい雰囲気がある…。

どこか似た雰囲気を持つ二人が必死に応援する光景は中々微笑ましく、由紀達はそれを見守りながらニコニコと微笑む。

…その後、果夏ともう一人の少女がバチを下ろし、ゲームが終了した。

結果はまたしても果夏の惨敗に終わっており、少女は涙ぐむ果夏の肩をポンポンと叩いて誇らしげな笑みを浮かべる。

「あなたも結構がんばってましたが、まだまだ修行が足りませんね！今回もボクの勝ちですっ！さて、どうしますか？もう一回やりますか？」

果夏「ううっ…：うううっ…！！まふゆちやく〜んっ！！」

真冬「わっ…！？なにになに…？」

果夏は瞳から大粒の涙を流し、まるでケンカに負けた子供のように真冬へとすがる。そんな悔しい思いをするなら最初から挑まなきゃよかったのに…：なんて思う真冬だったが、それでも渋々その頭を撫でて果夏をあやしていく。

果夏「あ、あいつがイジメたっ…：！わたしっ…：何も悪いことしてないのにつ…：！それなのにつ…：！！」

真冬「はいはい…：別にイジメられてはいないよね？カナはあの娘に真っ向から勝負を挑んで、清々しいくらいに惨敗しただけだよ。ちよつと得意なゲームだからって、調子に乗ったのがいけなかったね…：」

果夏「うっ…：ううっ…：！！リベンジっ…：リベンジしてっ…：！私の仇かたきをとつてえ…：！！」

とんでもない事を言い出す果夏を見て、その場にいた全員が呆れた表情…：もしくは苦笑みを浮かべる。それは真冬も例外ではなく、彼女はまた呆れたようにため息をついていたが、果夏をその場に置いて離れるとまだ太鼓の前にいるあの少女の横へと立った。

真冬「ごめん…あと一回だけ付き合ってもらってもいい？」
そうすれば果夏の気が晴れるから…と真冬は申し訳なさそうに言う。

少女はそれを快く了承したが、今度の対戦相手である真冬が両手に持ったバチを不思議そうに眺めているのを見て尋ねる。

「あの、あなたはこのゲームやった事あるんですか？」

真冬「……ない。初めてやる」

「えっ!?!そ、それは流石に……。ボク、手加減とかした方が良いでしょう?」

相手がこのゲームをプレイした事のない初心者だと分かったから、少女は善意でそう尋ねる。しかし次の瞬間、真冬は手にしたバチをクルクルと回しながら真っ直ぐにゲームのモニターを見つめ…。

真冬「必要ない…。キミとカナがやっているのを見て、もう大体の事は理解した…」

そう呟いてから太鼓を一叩きし、ゲームが開始されていく…。

軽快な曲が流れだし画面に太鼓を叩くタイミングが次々と表示されていく中、真冬は静かに動き出した…。

第六十五話 『けつちやく』

ドンドンカッカツ!! ドンドンカッカツ!!

ゲームセンター内の一角にあるリズムゲームのコーナーにて、激しい太鼓の音が絶え間なく響く。それらを鳴らしているのは二人の少女であり：一人はゴスロリ系のドレスを身に纏う黒髪の少女。肩まで伸びたその髪を揺らしながら手慣れた様子で太鼓を叩くその少女と対峙しているのはこれまた同じような髪型をした少女：狭山真冬であり、そのバチ捌きはドレスの少女に引けを取らない。

果夏「真冬ちゃんっ! がんばれっ!!」

真冬「っ……気が散るっ……!」

目の前にあるモニターから聴こえる軽快な曲、そして辺りにある様々なゲームの音すらもかき消すような果夏の声援を聞いて真冬は小さく舌打ちするが、それでも両手は正確にリズムを刻む。モニター内で右から左へと流れるアイコンは曲に合わせてズラズラと現れるが、真冬目はそれを一つとして見逃さない。

ドンドンカッカツ!! ドンカッカツ!

曲に合わせて太鼓の面、そしてフチを正確に叩き、得点を積み重ねる。

そして一瞬の隙を見てから隣に立つドレス少女の得点を覗いたが、彼女の得点は真冬よりも微かに上をいつていた。

真冬（…所々でミスをしたのがダメだったか。次から気を付けよう）

この少女と果夏の対決を何度か見てこのゲームの内容を理解はしたものの、いざモニターの前に立つと想像以上の難易度だったためにタイミングが数回ズレた…。この少女に勝つにはこれから先は一回

のミスすらしないどころか、完璧なタイミングで太鼓を叩く必要があるだろう。

そう考えた真冬が気合いを入れ直したその時、隣に立つその少女もまた数回連続でタイミングを誤っていた…。少女の目には微かな焦りと、戸惑いのようなものが浮かんでいる。少女の心に焦りを与えていたのは、真冬がこのゲームをプレイしたのが初という事実だった。

（こ、この曲っ…結構難しいんですよっ!!?ボクだって、何回も何回も練習してようやくここまでやれるようになったのにつ!!なのにこの人は…初めてのプレイでここまでっ…!!）

自分達が遊ぶ様をたった数十分後ろから見ただけで、真冬は自分とほぼ同等の域に達している…。その事実があまりにも衝撃的過ぎてつい手元が狂ってしまったが、ドレスの少女は気を取り直してバチを握り直すと、流れる曲に合わせて全身を揺らしながらニコツと微笑む。

「悪いですが、ボクはあなたにも勝ちますよっ!」

真冬「…うん、勝てるよ良いね」

こちらへ向けられた真冬の笑みは初心者とは思えないくらい余裕のあるものであり、少女はゾクゾクするような感覚を覚える。真冬の勝負はとても大きな試合をしているかのような緊張感があって、普段の練習では得られないようなものが得られそうな気がした。

その後…ドレス少女も真冬も目立ったミスをせず、両者ともに正確なプレイを続けてゲームが終わる…。二人は手に持っていたバチを静かに下げるとモニターに表示される得点を見比べ、そして…ドレスの少女は満面の笑みで跳び上がった。

「くっっ!!やったく!!勝ったっ!勝ちましたあくっ!!」

よほど嬉しかったのか、少女はドレスのスカート部分が捲れ上がってしまいそうなくらいにピョンピョンと大きく跳ねる。するとその少女の友人だと思われるお団子ヘアの少女がそばへと駆け寄り、苦笑

いしながら『あまり跳ぶと見えちやいます』と言ってスカートを押しさえていく。

「っ……し、失礼……」

子供のようにはしゃいでいたかと思えば、今度はとても恥ずかしそうに顔を赤らめて跳ぶのを止め、捲れかけていたスカートを押さえる……。ドレスの少女があまりにも表情豊かだったので周りに出来ていたギャラリイも、由紀達も笑顔を浮かべていたが、真冬だけは額に汗を浮かべたままモニターを見て動かない……。

真冬「……………」

「あ、あの……………」

もしかすると、はしゃぎ過ぎてしまったのだろうか……。

ピクリとも動かない真冬の横顔を見た少女は恐る恐る声をかけるが、次の瞬間、真冬はバチを元あった場所へと戻して『ふうっ……』とため息をつく。

真冬「やっぱり勝てなかったか……。そこそこ上手く出来たと思っただけど、残念だなあ……………」

「そこそこなんてものじゃないですっ！凄く上手かったですよっ!!」
毎週毎週このゲームを練習して、ようやくここまでの域になった自分とここまで接戦したのだ。少女は真冬に称賛の言葉を送ると、キラキラした眼差しを向ける……。このゲームをやって、ここまでドキドキしたのは初めての事だった。そして、真冬もまた彼女との一時を楽しめたらしく……………」

真冬「……ふっ、楽しかった。またやろうね」

と、笑顔を浮かべながらそう告げる。最初はただ、果夏の仇を取る為にバチを取っただけだったが、思いの外楽しめたようだ。真冬は少女と握手をしてから幾らか会話すると、その場を離れて皆の所へと戻る。真冬まで勝負に負けた事で果夏は膨れっ面をしていたが、他の皆

は笑顔だ。

胡桃「惜しかったな？」

歌衣「本当にあと少しでしたね〜」

真冬「うん、あとちよつとだった…。カナ、仇取れなくてゴメンね？」

果夏「んく〜っ！むううく〜っ!!!」

フグのように頬を膨らませ、果夏はプイツと横を向く。

あの少女に負けて、余程悔しい思いをしたようだ。こうなると中々機嫌が良くならないのが果夏なのだが、真冬だけは彼女の扱いを心得ている。

真冬「……カナ、一緒に写真でも撮ろうか？」

果夏「えっ!?!と、撮るっ！撮る撮るく〜っ♡」

と、このように真冬が少し本気を出せば果夏の機嫌はあっさりと直る。

果夏はだらしない笑みを浮かべながら真冬の手を引くと身近にあったプリントシール機へと入り、中で撮影した写真を手に笑顔のまま舞い戻った。

果夏「でへへ〜♡圭ちゃん、みてみて〜♡真冬ちゃんと撮ったあ〜♡」

圭「はいはい、分かったから……」

果夏「でへへっ……美紀ちゃん、みてみて〜♡」

美紀「えっ?う、うん……よく撮れてるね……」

写っていたのはだらしない笑みのまま抱き付く果夏と、それを嫌そうに受け止める真冬…。これが良い写真かどうかと聞かれると少し戸惑うが、少なくとも果夏にとっては最高の写真なのだろう。果夏はニタニタと微笑みながら辺りを歩き回り、その写真に頬擦りしだす…。

由紀「果夏ちゃんは本当に真冬ちゃんが好きなんだね」

悠里「ええ、仲良しで羨ましいわね」

真冬「…じゃあ、悠里にカナをあげる」

真冬が小声で言った途端、悠里は笑顔のまま額に汗を浮かばせる…。

”羨ましい”と言ってはみたが、果夏くらい元気な娘に付き合う体力は悠里には無いのだろう。無言のまま立つ悠里を真冬がジーツと見つめる一方、由紀はそばにあるプリントシール機を見てある事を思いつく。

由紀「あつ!! そう言えば前にチラツと見たんだけどね、くるみちゃんのお財布の中にも——」

胡桃「つつ!!?!」

胡桃は咄嗟に身を動かし、目にも止まらぬ速さで由紀の口を塞ぐ。その口から語られたのはまだまだ断片的なものだったが、彼女が何を言おうとしているのか…。財布の中で何を見たのか…。だいたい予想は出来る。

胡桃「ゆき…それダメだ…! 絶対に誰にも言うな…!!」

由紀「ん…んんつ…! んん!!」

まるで鬼に迫られているかのような気迫を受け、由紀は首を縦に振る。

以前、ジュースを買ってきて欲しいと胡桃に頼まれた時、彼女から渡された財布の中身をチラツと見て一枚の写真を見付けた。それはゲームセンターにあるようなプリントシール機で撮ったものであり、胡桃と彼のツーショット写真だったのだが…。…それを見たという記憶は消し去った方が良さそうだ。

胡桃「いいか、絶対…絶対っ…! 誰にも言うなよ…!!」

由紀「わ、わかり…ましたっ…」

思わず敬語で答え、肩を震わせる…。

最初は『彼との写真があったけど、あれはいつ撮ったのかな？』的な事を言って彼女をからかうつもりでいたが、由紀は怯える子犬の目をしながらそつと身を縮めて悠里の背へと隠れていく。

悠里「あら、どうしたの？」

由紀「な、なんでもないっ……なんでもない……」

ガタガタと震えるその様は何か怖いものでも見たかのようにであり、悠里はもちろん彼も心配そうな表情をする。察するに、寸前まで彼女と話していた胡桃が何かを知っていそうだ……。そう考えた彼は胡桃のそばへと歩み寄り、由紀の方を見つめながら問う。

「あの……由紀ちゃんに何か言った？」

胡桃「な……何も……」

「……そう。なら良いけど」

胡桃の目はキョロキョロと泳いでいて正直怪しいが、本人が何でもないと言っているのなら無理に追及も出来ない……。まあ、少なくとも喧嘩したりしたわけではないはずだ。

胡桃「……なあ、前にここで撮った写真、どうしてる？」

「えっ？ああ、あれなら……」

そう言えば、前に胡桃と二人で来たのもこのゲームセンターだった。

彼は当時の事を思い返して微笑みつつ、その時に彼女と撮った写真が今はどこにあるのかを語る。

「あれなら、今は家にある」

胡桃「そ、そうか……。なら、引き続き家の中で保管しててくれ……」

自分と同じく財布にしまっているとか、携帯に貼ってあるとか言われたらかなり焦るところだった……。胡桃は安堵のため息をつき、俯けていた顔をそつとあげる。すると、そのすぐ目前では歌衣がニコニコと可愛らしい笑みを浮かべており……

歌衣「くるみ先輩、何の話をしてるんですか…？」
と、笑顔のまま尋ねてきた…。

その問いかけ自体はなんてことない普通のものだが、彼女の笑顔がどこか怖い…。ニコニコとされていて愛らしくもあるのだが、その裏に黒いオーラのようなものが見え隠れしている。

「あ、ああ…今のはその…」

歌衣「私は今、くるみ先輩に聞いてるんですよ？あなたには何も聞いてませんから、ほんのちよ〜とだけ黙ってて下さいね〜？」

穏やかな声だが、やはり怖い…。

彼は思わず口を閉じ、そして思い出した…。最近は大人数しくしていたが、歌衣は胡桃に対して強い憧れを抱いており、胡桃関係の話になると人が変わったようになる…。そんな彼女に対して馬鹿正直に『いやあ、実は以前、胡桃ちゃんと一緒にこのゲームセンターに来ていてね。その時、一緒に写真を撮ったんだよ〜』なんて言えば、この場で首を絞められるかも知れない…。

彼がそんな事を思う一方で胡桃も同じような事を思ったらしく、額に汗を浮かべながらぎこちない笑みを浮かべていた…。

胡桃「え、えつと…その…その…そうだつ！歌衣、一緒に写真撮るかっ!？」

苦し紛れにそう言って、歌衣の両肩を掴む。これはついさつき、真冬が果夏に使っていた手だが、歌衣にも通用するだろうか…。

歌衣「…うふふつ、良いんですかっ？じゃあ、撮りたいですっ♪」

胡桃「お、おうっ！撮ろう撮ろうっ!!」

少々強引な手ではあったが、どうにか誤魔化せた…。

胡桃が歌衣を連れてプリントシール機へと向かう中、彼は小さくため息を放つが…その時、チラツとこちらを見つめていた歌衣の目がとても冷たく、恐ろしいものだったのは一生忘れないだろう…。

その後、一行は引き続き色々なゲームをプレイして楽しみ、とうとう夕方となった。ゲームセンターから出た時にはもう街中がすっかり夕陽に染められており、少しだけ寂しくなる。

果夏「はああ…楽しい時つてのはあつという間だよ……」

真冬「んー…そうだね……」

果夏の言葉にそう相槌を打つ真冬は携帯を弄り、誰かにメッセージを送っていた。果夏はその画面をチラツと覗いたが、そこにあった名前に覚えは無い。

果夏「それ、誰とやり取りしてるの〜?」

真冬「…さっき太鼓のゲームで戦ったあの娘だよ。あのゲーム、思ってたよりもずっと面白かったから、また定期的に会って遊んでもらおうと思って…連絡先を交換しておいたの」

果夏「へ〜、そうなんだあ……」

人付き合いが苦手だった真冬に、また一人友人が増えた。

それは大変喜ばしい事だが、果夏は少くしだけヤキモチを妬く。

彼女に友達が増えれば増えるだけ、自分と遊ぶ時間が少なくなってしまうような気がしたからだ。

果夏（ま……真冬ちゃんが好きならそれでいいか……）

夕陽を眺めながら静かにため息をつく、誰かがポンと背を叩く…。振り返ってみると、そこにはニヤニヤとした笑みを浮かべる圭の姿があった。

圭「果夏、大人になったね〜」

果夏「おっ、分かるっ? そうなの、大人になったの〜♪」

美紀「いやいや、どこが…?」

美紀の冷たいツツコミが飛ぶが、果夏は自分の耳を両手で塞いでそれが聞こえないようにする。そんな果夏を見た彼や由紀、そして悠里や胡桃は楽しげに笑い、歌衣や真冬も遅れて笑った。こうして皆と笑

い合う時間はとても楽しく、幸せだ…。

果夏「ふふっ♪……あっ！そう言えばあと少しですね!!」
「え？何が？」

突如、ハツとした表情で何かを思い出したかのように告げる果夏だが、彼はその言葉が何を意味しているのか分かっていない…。あと少し…。あと少しで何なのだろうか…。

果夏「もう！先輩つたらやだなあ…。ほら、もう少ししたら学校で…楽しい楽しい行事が始まるじゃないですか」

「……………んん？」

胡桃「楽しい行事？」

悠里「ええつと…何だったかしら？」

彼はもちろん、悠里や胡桃もまだ今一つピンと来ていないようだが、由紀は違う。彼女だけは果夏言葉を聞いてパアツと笑顔になり、その始まりが近いことを思い出してピョンピョンと跳ねた。

由紀「おおっ！そうだっ!!文化祭だよっ!!!」

悠里「そう言えば、もうそろそろね」

すっかり忘れていたが、その日は確かに近づいていた。

当日がどんな感じとなるか、今はまるっきり想像もつかない。

今日と同じくらいか、それ以上に楽しい日になれば良いなと思いつつ、彼は夕焼け色に染まる街中を彼女らと歩いて帰路についた…。

第六十六話 『だしもの』(☆)

空は綺麗に晴れており、熱い日差しが降り注いでいる…。

時刻は昼前、巡ヶ丘学院高校のとある教室ではそのクラスの担任である佐倉慈が明るい表情をしてからパンツ！と両手を合わせ、クラスの全員にこう告げた。

慈「もうすぐ文化祭が始まります。クラスごとに様々な出し物とかをやっていく訳だけど…皆さん、何かやりたいものはありますか？」

教壇に立っている慈がニコリと微笑むとクラス中の生徒がざわめき、前や隣の席にいる友人とあれこれ相談しだす。中には他の生徒と相談するまでもなくやりたい事を決めていた生徒もいて、そういう者は勢いよく挙手しながら宣言する。

「俺、お化け屋敷やりたい！」

慈「お化け屋敷かあ…た、楽しそうねえー…」

一人の男子生徒が告げた途端、慈の顔が少しだけ引きつったように見えた…。そういうのは苦手なのだろうか？彼が机の上で頬杖をつきながらそんな事を思っていると、隣の席に座る由紀がツンツンと肩を小突く。

由紀「ねえ、キミは何かやりたいの無いの？」

「やりたい事…なんだろ、特に無いかな…」

幾らか考えてはみたものの、特に思い浮かばない…。

この学校、巡ヶ丘学院高校の文化祭は結構自由なものであり、こうしてクラス毎に出し物を考えても良いが、特定のグループだけでちよつとした出店をやっても良い。また、どうしても言うのなら特に何もせず、客として自由に一日を過ごしたりする事も許されてい

た。もつとも、準備期間中に他グループの手伝いがある程度こなす事が条件だが……特にやりたい事の無い彼はその道を選ぼうとしていた。しかし、それを告げると由紀があからさまに不満そうな顔を見せてくる。

由紀「むくつ！そういうのはダメだよ！せっかくの文化祭、これほど大切な青春のページになるんだから、積極的に参加していかないよ！」

「んく……じゃあ聞くけど、由紀ちゃんは何かやりたい事ある？」

由紀「わたし？わたしは……えへへ、ネコカフェとかやりたいなあ」
デヘへ……とだらしない笑みを浮かべながら机に伏せる由紀だが、学校の文化祭でネコカフェは難しいのではないだろうか……。大体、やるにしたってその猫はどこから連れてくるというのか……。

猫に囲まれる様を想像した由紀はその後一人て笑い声を漏らし続け、彼はため息を放つ。そんな中、他の生徒達は次から次へと案を出していった。

「私はちよつとした喫茶店みたいなのをやりたいです」

「おおつ、メイド喫茶か!？」

一人の男子が即座に反応する。

案を出した女子は『違う！普通の喫茶店！』と答えていたが、辺りを見るとそのメイド喫茶というものに興味を示している者がチラホラと確認出来た。その大半はやはり男子生徒であったが、女子にも少なからず興味を示している者がいるようだ。由紀もまたその一人であり、彼の方を見ながら『ちよつと面白そうだね』と言って笑っている。

「メイド喫茶にするなら準備頑張るぞ！」

「えく……まあ、最悪の場合メイド喫茶でも良いけど、メイド服って誰が着るの？男子が着るの？」

「バカ。男がそんなの着たってしょうがないし、男性メイドばかりの

喫茶店なんて客も来ないだろ。当然、女子がメインになって着るんだよ！」

クラスメイトのメイド姿が見れると考えている男子達は、興奮した様子でメイド喫茶を推していく。女子達はその勢いに圧倒され、このクラスの主な出し物はメイド喫茶になっていった。当初、普通の喫茶店を推していた女子生徒は呆れたようにため息をついていたものの、女子の中にも乗り気になっていいる者がいるのを見て『仕方ないか…』と覚悟を決める。

「ま、メイド姿になるのが恥ずかしかったりする娘は裏方に回ってもらえれば良いよね…。私もそうしよ〜と。ところで、メイド服が着たい!! って娘ってどのくらいいるの?」

彼女が尋ねると一人、また一人と手を挙げ、数人の女生徒が名乗りをあげる。彼の隣の席にいる由紀もまた、元気よく手を挙げていた。

由紀「はいは〜いっ! わたしもやりたいっ!」

由紀が名乗りをあげると何人かの男子…いや、女子すらもざわめく。

クラスの中でも一際幼い雰囲気を持つ由紀は結構な人気者である為、そのメイド姿を見たいと考えている者は少なくないようだ。

にこやかな笑みを浮かべながら挙手した由紀を遠方の席から見ていた悠里は『ふふっ』と笑い、胡桃は苦笑する。

胡桃「マジかよ…。ゆきのヤツ、積極的だな」

悠里「くるみもやってみたら?」

メイド服とか似合いそうだし、人気出ると思うわよ」

胡桃「冗談よせて…あたしはやらない。リーさんこそどうなんだ?」

悠里「う〜ん…私も遠慮しておこうかな。当日はのんびり、裏で料理のお手伝いでもやっていく事にするわ」

喫茶最大の売りになるのは何と言ってもメイド姿の生徒達だろう

が、そこで出す料理等も大切なはず。メイド姿になるのに抵抗のある悠里と胡桃は裏方に回り、そちらをサポートしていく事を決めた。

胡桃（ま……正直、全く興味が無いわけでもないけどな……）

アニメや漫画に出てくるようなメイド服……それと同じ様な可愛らしい衣装を着れるのなら着てみたい気もするがその姿を色々な人に見られるのは恥ずかしいし、それに……メイドなんて柄がらじゃない。胡桃は微かに存在していたメイド服への興味を押し殺し、そつとため息を吐く。

慈「あれっ？メイド喫茶で決まりなの？思ったよりも早く決まったわね」

その後、慈は改めて生徒全員に意見を聞くが、皆はもうすつかりメイド喫茶をやっていく気になっているようだった。生徒の中には『当日、佐倉先生もメイド服着たら？』等と言ってくる者もいたが、慈は頬を紅潮させて照れながらもそれを断っていく。

慈「よし、分かりました。じゃあC組の主な出し物は”メイド喫茶”に決定ね。飾り付けや衣装をどうするか……。また、お店で出すメニュー等は文化祭が始まるまでの間、皆でしつかり相談しあつて決めていって下さい」

そこまで言ったところでちょうどチャイムが鳴り響き、昼休みの時間となる。チャイムを聞いた慈が授業の終わりを告げると皆ゆつくり席を立ち、昼食の時を迎えた。持ってきていた弁当を用意する者……購買へと向かう者……今日の彼は前者であり、用意していた弁当箱を手にして席を離れると、由紀・胡桃・悠里といういつものメンバーと共に中庭へと向かった。

~~~~~

由紀「えへへ、メイド服楽しみだな」

悠里「ゆきちゃんかメイドさんをやってくれるなら、うちのクラス

は大繁盛しそうね♪」

中庭の木の下で弁当を食べ進めつつ、悠里は横に座る由紀の頭を撫でてニコニコと笑う。確かに由紀がメイドとして参加するのなら、他のクラスの生徒達も多くやって来そうだ。ニコニコと微笑みながら由紀の頭を撫でていく悠里の姿はまるで”愛娘を甘やかしている母親”のようであり、二人の前に座っていた彼と胡桃は苦笑する。

胡桃 「りーさんみたいな人を”親バカ”って言うんだな」

「だね…」

のんびりと弁当をつつきながら雑談を交わし、昼食の時を終える。空になった弁当箱を手に持ち、四人は中庭から教室へと戻っていったのだが……戻ってすぐ、教室の前の廊下で数名の生徒が騒いでいる事に気が付いた。

「くっそ…マジでムカつくー！」

「まあまあ、そんな気にしちやダメだって」

男子と女子が入り混じってガヤガヤと騒いでいるようだが、その内の何人かはイライラしているようだ…。一体、何があったのだろうか？彼は由紀達と共にその場へと歩み寄り、詳しい話を尋ねていく。すると一人の男子生徒が眉をしかめつつ、苛立った様子で口を開いた。

「ついさつき、A組のヤツと文化祭の話をしてさ…。んで、うちのクラスはメイド喫茶をやる事になったって言ったら、煽られたんだよ。『そんな下らないヤツじゃ相手にならない』ってさ…」

思い出すのも腹立たしいのか、その生徒は右手で髪の毛を掻きむしりながら落ち着きなく歩き回りだす…。それを見た彼は苦笑しながらその生徒を落ち着かせると、更に尋ねる。

「ええっと、相手にならないっていうのは、つまり……」

「売上金の事だろ。アイツ、俺達のクラスに売上金で圧勝するつもりでいるんだよ」

「なるほど、売上金ねえ……」

クラスで決めた出し物をバカにされるのは確かに悔しいだろうが、下らない事で煽ってくる相手など無視すれば良い。彼がそう言うのと、辺りにいた他の生徒も口を開く。

「俺もそう思ったけどさ、けど…ムカつくだろ？アイツ、去年の文化祭の時に自分の出した案で結構良い売上を出したっぼくてさ、今年も自分のクラスがどのクラスよりも良い売上を出せるって思い込んでイ気になってんだよ」

胡桃「へく。…で、そいつのクラスは何をやるんだ？」

「流行りのスイーツを幾つか売る……とか言ってたかな？まあ、つまりはうちのクラスと同じ喫茶店みたいなもんだろ。ただ、あつちの方はメイド喫茶じゃなくて普通の喫茶店で、メニューに力を入れていくんだと」

聞いた話によると、その生徒は自分の提案した演出・企画に絶対の自信を持っているらしい。店で出すメニューにもかなり気合いを入れた物を用意してくるつもりらしく、早くも圧勝した気であるようだ。

…が、やはりそんなヤツは放<sup>ほう</sup>っておけば良いと思う。

彼は呆れたようにため息を吐き、辺りの生徒に言葉を放つ。

「…まあ、好きに言わせておけば良いんじゃないか？」

文化祭の売上で勝とうが負けようが、どうという事は無い。

ただ皆と共に楽しむれば、それだけで充分ではないだろうか。

彼がそう告げていくと、一人の男子生徒がポツリと呟く。

「アイツ、こうも言ってたんだぜ…。『素人がメイド喫茶なんかやったって、大して客は集まらない。どうせ、中途半端な衣装を着た中途半端なルックスの女子が出てきて終わりだろう？』ってよ……」

静かに呟かれたその言葉を聞いた途端、彼の中で何かが切れた…。

「……………は？」

中途半端な衣装を着た…中途半端なルックスの女子…？

それはつまり、うちのクラスの女子の事を言っているのだろうか？

「そいつ…このクラスの女子にどんな人がいるか知ってるのか…？」

「いや、どうかな？…ってか、多分うちのクラスの女子がどうこうって話じゃないぜ。アイツ、女子自体を見下してんだよ。だからこそ、そんな女子のメイド姿を売りにしてるうちのクラスをバカにしてんさ。コスプレした素人なんか出てきても仕方ないってな」

悠里「あらら…」

胡桃「そりや…少しムカつくなあ」

最初は何故イライラしているのか分からなかったが、話を聞いていく内にその生徒達の怒りが理解出来ていく…。悠里も、胡桃も、ほんの少しだけ苛立ちの表情を浮かべていたが、中でも彼の怒りは大きい。我がクラスには…この巡ヶ丘学院高校には魅力的な女子が多くいるのに、その全てを軽視された。ここまでコケにされて苛立たない訳が無い。

「…よし、分かった。よく分かった…。じゃあ見せてやろう。コスプレした素人が売りである我がクラスの出し物が、どれだけ集客出来るのかを…」

「おっ!? 珍しく乗り気だな？」

こんなにもやる気に満ちた彼を見るのは初めての事であり、辺りに立つクラスメイトがざわつく。しかし、彼との交流が深い胡桃や悠里、由紀は彼のこういう面をある程度知っていた為、そつと静かに微笑んでいた。

## 第六十七話『さくせん』

胡桃「んで、何か作戦はあるのか？」

「んん…そうだなあ…」

自分達の出し物を他クラスの生徒に煽られ、C組の生徒数名は今も怒りを露にしている…。あそこまでコケにされたら、もう引く訳にはいかない。その日の放課後、C組の生徒は教室に残り、彼を中心として作戦会議を開いていた。

「まず、メイドをやりたい娘はどの程度いたかな？」

席についたまま問うと集まっていた生徒の内、数名が手を挙げだす。

立候補している女生徒は由紀を含めて5人…。

悪くは無い人数だが、少し物足りない気もする。

彼が眉をしかめながら天井を見上げて『ん〜』と唸ると、そばにいた男子生徒が不安そうな表情で口を開いた。

男子生徒「お、おい、何だよその顔は…。5人もいりや十分じゅうぶんだろ？」

「まあ…ある程度はやれると思う。けどさ、メイド喫茶って言ったらほら…メイドはそれぞれ客の席につき、色々なサービスをする訳だろ？ケチャップ使ってオムライスにハート描いたり、美味しくなくれのおまじないをかけてみたり…」

それらはテレビや漫画で見たメイド喫茶のイメージだが、どうせならこのクラスのメイド喫茶でもそれらのサービスをやっていきたい。…となると、メイド達はそれぞれの客にある程度の時間を費やさねばならない。

「5人でも十分かも知れないけど、回転率を考えたらもう少し人数が欲しい。いくら客が集まってきてくれても、それらに対応出来るくら



いの人員がいなきや無駄に列が出来てしまう…。あまりに長い列が出来ると客も並ぶ気失せるだろうし、少人数のメイドでのんびりし過ぎていると売上も伸びない…」

悠里「あら、結構真剣に考えてるのね？」

「そりやもちろん。我がクラスのメイド喫茶をバカにしたヤツに痛い目を見せるつもりでいるんで…」

彼の事だからもつと適当な考えで突っ走るのでは…と思っていたが、意外にも真面目だ。悠里が『ふふっ』と笑って肩を揺らすと、彼は彼女の方を見つめながら申し訳なさそうに言葉を放つ…。

「という訳なんで、その…りーさんもメイドやってくれませんか？」

悠里「えっ？私？」

「色々考えてみた結果、やっぱメイド足りないと思うんですよね…。りーさん綺麗だし、スタイル良いし、変な客が来ても上手くあしらっていくだけの対応力もありそうなんで、メイドやってくれればかなり頼りになるんですけど…」

当日、悠里は裏方に回りたいたと言っていたが、正直それは惜しい…。

悠里程のルックスの持ち主なら、多くの客を獲得出来るはずだ。

彼がそう告げると周りにいた生徒達もそのメイド姿を想像し、賛成の言葉を放っていく。

女子生徒「うん！若狭さんならメイド服も似合うと思うから、やってみなよ♪」

男子生徒「俺も若狭のメイド姿には結構興味がある!! やってくれ！」

悠里「え、ええ…ど、どうしようかしら…」

付近にいた男子、女子に迫られ、流石の悠里も困惑の表情を見せる。彼女はかなり悩んでいたようだが、最後の最後で由紀に『わたしも、りーさんのメイド姿見たいなく♪』と言われ、苦笑しながらも首を縦に振った。

悠里「じゃあ…うん、やってみようかな。あまり期待しないでね？」  
こうして悠里がメイド組に加入し、辺りの生徒達は歓声を送る。  
これでメイドは6人…。悠里という人材が加わってくれたのはとても嬉しい事だが、正直に言うともう少しだけ人員が欲しい…。彼は辺りをキョロキョロと見回すと、更にもう一人の女子生徒を見てニヤリと笑った。

「あと、胡桃ちゃんも協力を…」  
笑みを浮かべながらそう告げると胡桃はカバンを背負い、そのまま帰宅しようと背を向ける…。が、由紀がその前へと回り込んでそれを阻止した。

胡桃「ゆきっ！どけって!!」

由紀「だめっっ！ほらほら、戻って戻って〜♪」

胡桃「ぐっ！この…っ！」

あと少しで教室から逃れられた胡桃だが、由紀に背を押されて彼の席のそばまでやって来る。微かに腕をバタつかせて抵抗してはいるようだが、由紀は笑顔のまま動じない…。結局、胡桃は彼のそばまで運ばれてしまい、何か言いたげに眉をしかめた。

「さて、さっきの続きだけど…胡桃ちゃんもメ——」

胡桃「嫌だっ!!」

食い気味に断られたが、こんな事で諦める彼ではない。

小さく『コホン』と咳を出し、再チャレンジしていく…。

「胡桃ちゃんもメイ——」

胡桃「嫌っ!!」

「……………胡桃ちゃんもメイド——」

胡桃「イヤだっ!!」

早くも三回断られたが、まだまだ諦めない…。

これはクラスの皆の為…仕方の無い事なのだ。

「頼むよ。胡桃ちゃん凄く可愛いからさ、メイド服とか絶対に似合うと思う。ツインテールのメイドとか本当に最高だし……」

胡桃「なっ…!? なっ…!!?」

「辺りには大勢の生徒がいるのに、『可愛い』とか『最高』とか、彼は何を言っているのだろうか…。何時からかそばに立つ生徒達が自分を見てニヤニヤしている事に気付いてしまい、胡桃は口をパクパクと動かしながら顔を赤らめていく。

胡桃「あ、あたしなんかメイドやったって…誰も……」

皆の視線を浴びていたらどう答えれば良いのか分からなくなってしまう、咄嗟に自分を卑下する。『あたしはメイドなんて柄じゃない』『多分、客も来ない』…そう言葉を放っていく胡桃だが、対する彼は首を横に振りながらニコツと微笑む。

「そんな事ないって。絶対に人気者になるから!」

悠里「ええ、くるみなら大丈夫よ」

由紀「うんっ!くるみちゃんも一緒にやろうっ」

胡桃「う…うう……」

彼にそんな事を言われるだけでも恥ずかしいのに、由紀や悠里もそれを後押ししてくる…。更に、辺りにいる生徒達すらも胡桃の事を笑顔で見つめ、言葉で後押しをしてみた。

女子生徒「くるみさん、絶対にメイド服似合うよ♪」

男子生徒「ああ、似合う似合うっ!!」

女子生徒「絶対に可愛いと思うな〜♡」

胡桃「わ、分かった分かった!!」

やるから!やってみるからもうやめろって!」

複数の生徒から『メイド服が似合うと思う』だの『可愛い』だのと言われた胡桃の顔は驚く程に赤くなり、両手を落ち着きなくバタつか

せる。このまま皆に『可愛い』とか言われていると恥ずかしさのあまり頭が変になりそうだった為、胡桃は渋々ながらもメイド組への加入を決意した。

「よし…これで7人」

男子生徒「流石にもう十分だろ？」

そばにいた生徒に問われるが、彼は首を横に振る。

「もう少し、もう少しだけ欲しいな…」

もう少しだけ人員がいれば、時折メイド達数名を交代させて休憩させたりする事も出来る。常に最高の回転効率で客を満足させつつ、メイド達の体力を維持していく為にはもう数名欲しいところなのだが…。

「やってくれる人、他にいる？」

尋ねてみるが、誰も手を挙げない。

もう、C組にはメイド希望者は残っていないようだった…。

そもそも、これ以上の人員をメイドに移すと今度は裏方がいなくなる。メニューである料理やら何やらを提供するのが遅ければ、どのみち効率は悪くなってしまいうだろう。

悩みに悩んだ結果、彼はある一つの策を思い付いた。

しかしそれを皆に語るにはまだ早い…。まず、”確認”が必要だ。

彼はその場にいた皆を解散させると今度は一人で職員室へと向かい、担任である佐倉慈に声をかけていく。慈はその呼び掛けに応じ、職員室前の廊下へと来て彼と向かい合った。

慈「まだいたの？もう下校の時間よ？」

「それは分かっているけど、少し聞きたい事がありましたよ」

慈「聞きたい事？」

小首を傾げる慈に対し、彼は尋ねる。

「今度の文化祭で、うちのクラスはメイド喫茶をやるっていう事はめぐね……佐倉先生も知っていると思うけど、メイドとして他の学年の生徒を雇うのってありですか？」

慈「えっ？他の学年の生徒を……？ええっと、どうかしら……少し待ってね？確認してくるから」

慈はそう言うってから職員室の中へと戻り、他の教員達と話し始める。恐らく、彼が尋ねてきた事が可能かどうかの確認をしているのだろう……。慈は少ししてから再び廊下へ戻ると、彼の前へと立って告げた。

慈「メイドを手伝ってもらいたいその生徒と、その生徒のクラスの担任からしつかり許可を取れば構わないそうよ」

「おお、そうですか！なら、どうにかなるかな……」

他学年の生徒をメイドとして雇っても構わないのなら、幾らでもやりようはある。あとは目星を付けている生徒達に声をかけていくだけだが、勧誘を断られたりしないかどうかだけは心配なところだ。

彼は慈に礼を言ってからその場を去り、下校していく……。

そしてその次の日、授業後の休み時間を利用してはお目当ての学年、クラスに出掛け、目星を付けていた複数の生徒らを勧誘して回った……。

## 第六十八話 『めいど』(☆)

慈『メイドを手伝ってもらいたいその生徒と、その生徒のクラスの担任からしつかり許可を取れば構わないそうよ』

慈からその言葉を聞いた翌日、彼は授業の合間にある休み時間を利用して二年生の教室がある階へと移る。休み時間が訪れては二年の教室へと向かって目星を付けていた生徒を呼び出し、次の文化祭で協力してくれないかと交渉していく…。交渉が進まぬまま授業の時間となれば慌てて自分の教室へと戻り、また休み時間が来た時に交渉を再開する。

そんな事を数日かけて何度も繰り返していく内に一人、また一人とメイドの勧誘に成功し、とうとう彼の満足のいく人数が集まった。

(これなら大丈夫だ。この娘らと一緒になら…絶対にやれる！)

C組の生徒だけでは少し不十分だったかも知れない…。

だが、この後輩達が味方についてくれたのならもう心配は無いだろう。メイド喫茶という出し物を小馬鹿にしてきたA組の生徒をこれでもかと言うくらいに見返してやれるはずだ。

必要な人員を確保したその日の放課後、彼はC組のほぼ全員を教室に呼び止めた。新たにメイド組へと加入した、頼りになる後輩達を紹介する為に……。

「わざわざ残ってもらって悪いね。今回は皆に、新しいメイド達を紹介しようかと思って…」

胡桃「新しいメイドって……どこから連れてきたんだよ？」

教壇に立つ彼の発言に対し、胡桃は首を傾げる。

少なくともこのクラスの女子にはもう、メイド候補は存在しない…。だというのに、どこからメイドを連れてきたのだろうか。

彼は胡桃に対し……いや、クラスメイドの全員に対して全てを明かした。

慈から許可をもらい、先日から他の学年の生徒を勧誘していた事…。

そして今日、理想的なメンバーが揃ったという事…。それらを明かした瞬間、クラスメイトのテンションが目に見えて上がるのを感じた。

男子生徒「おおっ！お前、今回は本当にやる気だなっ!!」

女子生徒「それで、どんな娘達が集まったの？」

『何人集まったのか』『可愛い娘たちなのか』…クラスの男子や女子は彼に対して次から次へと質問を投げ掛ける。…が、彼はニヤニヤと微笑んだままそれらの質問を受け流し、教壇から教室の入り口へと立つ。

「ま、その辺は見てもらった方が早い…。じゃ、入って」

ガラガラッ！

教室の扉を開き、廊下に待機させていた彼女らを招き入れる…。

次から次へと入ってくる女子生徒はどの娘もタイプは違えど皆かなり良い感じのルックスであり、C組の生徒…主に男子達はキラキラと目を輝かせた。

「はい、今回集まってもらったのはこの五人！

ではみんな、軽い自己紹介を頼めるかな？」

集ったその生徒らは彼に呼ばれて教壇へと上がると、綺麗に横一列に並ぶ。クラス全員の視線が集中する中、まずはその右端に立っていたショートカットの少女が口を開いた。

美紀「はじめまして。二年C組、直樹美紀です。今回はこの人が…先輩が困っていたようなので、仕方なく力を貸す事になりました…。当然ながら、メイドなんて経験した事がないのでどこまでやれるか不安ですが、精一杯頑張ろうと思います」

簡潔な自己紹介を終えた美紀は礼儀正しくお辞儀をして、こちらを

見つめる生徒達から少し気まずそうに目を逸らす。この僅かな自己紹介でも、彼女の礼儀正しき、真面目さは充分に伝わっただろう…。

圭「はいっ！同じく二年C組、祠堂圭しどうです！日頃からお世話になっている先輩方に少しでも恩返しをするため、メイドになる覚悟を決めました！一生懸命頑張るので、どうぞよろしくお願いします〜」

美紀の自己紹介の直後、その隣にいた圭が動く…。

圭は美紀と比べると明るくて人付き合いも得意なタイプに思える為、メイドになってくれたら大きな戦力になるだろう。ただ明るいだけでなく、何気にしつかり者な面があるのも高印象だ。

真冬「えつと…：狭山真冬。彼がどうしてもって言うから、嫌々ながらもメイドになる事にした…：。こういうのはあまり得意じゃないから、ボクには期待しないで欲しい…：。」

と、圭の隣に立つ真冬が伏し目がちに告げていく…。

圭はおろか、美紀よりも遥かに人付き合いが苦手な彼女にとってはメイドという仕事はもちろん、こうして人前で自己紹介するのも一苦労だろう。…が、彼女だけが持つ独特の雰囲気というのは良い武器になる。メイドとして、ある一定の客を稼いでくれる…：ハズだ。

果夏「はいはい！二年B組、紗巴果夏すずはで〜す♪私が来たからにはもう大丈夫っ！先輩方、共に最高のメイド喫茶を開いて、巡ヶ丘学院高校をメイド養成学校にしましょう♪」

真冬「意味が分からない…：。メイド喫茶はあくまでも文化祭の出し物として開くだけであって、期間を過ぎればすぐに終わる…：。巡ヶ丘高校はメイド養成学校になんてならないよ…：。」

果夏「もうっ！そんなの分かってるけど、ノリで言ってみたの〜！ほらほら、やっぱり気持ち作りって大切でしょ？あっ！さっき言い忘れてましたけど、真冬ちゃんも私と同じく二年B組の生徒です〜」

♡  
└

真冬の自己紹介に補足を入れた果夏は彼女の肩を抱いてニコニコ



と微笑み、あつという間に周囲の人間を笑顔にする。圭以上に明るくて人付き合いの得意な彼女なら、どんな客であろうと相手に出来るだろう…。もつとも、少し元気過ぎる気もするが…。

歌衣「……あつ、最後は私ですね。皆さんどうもはじめまして。二年A組、那珂歌衣です。私なんかメイドとして役に立てるかどうかは怪しいですが、出来るだけ迷惑をかけないように、頑張らせてもらいます」

最後は歌衣がペコリとお辞儀をして長く緩やかな茶髪を揺らし、三年C組の生徒達は拍手を送る。元々人付き合いが得意な圭・果夏の事を知っていた生徒は彼や由紀達以外にも何人かいたようだが、この少女：那珂歌衣を知っている生徒は彼等以外に一人として存在していなかった。

男子生徒「あ、あんなに可愛い娘が二年にいたのか…」

一人の生徒が呟いたのを皮切りに、数名の生徒がざわめく。

歌衣は元々影が薄く、目立たないタイプの娘だったのだが、改めて見るとそのルックスは大したものだ。腰まで伸びた綺麗な髪の毛と、どこか幼さの残る顔…。更に胸は悠里に引けを取らないくらいに立派であり、男子達の目に興奮の色が宿る。

男子生徒「おい、あんな可愛い娘をどうやって見付けた？」

「どうやってって言われても……自然に出会ったとしか……」

今回協力を頼んだ五人の後輩……彼女らは全員彼の知り合いであり、それと同時に由紀達の知り合いでもある。自己紹介が終わると由紀や悠里、胡桃は彼女らのもとへ歩み寄って挨拶したり、協力に感謝したりしていた。また、その他の生徒らも彼女達と交流を深めるべく、そばへと歩み寄って声をかけていく…。

(よし、一先ず人員は確保出来た…)

あと心配なのは衣装だけど、それもまあ…どうにかなる)

その辺の事に関してはもう、すっかりと考えてある…。

次の日、彼は休日を利用して由紀達メイド組に召集をかけると、巡ヶ丘の街に存在するとある家を訪れた…。

住宅街から少しだけ外れた場所にあるその家はただの一軒家と言うにはあまりにも大きく、そして広い…。入り口には立派な門があり、それを越えれば綺麗な芝から鯉の泳ぐ池まで存在する広大な庭が…。それらを見た一行はゴクリと喉を鳴らしながら奥へ奥へと進み、ちよつとした旅館くらいの大きさを誇る家の門を叩く。するとすぐにその扉が開き、中から現れた少女が見慣れた笑顔で出迎えた。

歌衣「皆さん、ようこそおいで下さいました！さあ、中へどうぞ」

「あ、ああ…」

胡桃「お…お邪魔します…」

前々から、歌衣はお嬢様っぽい雰囲気のある娘だなあとはいっていた…。が、一行はこの家や庭を見てその考えを改める。彼女は”お嬢様っぽい”のではなく、”お嬢様”なのだ…と。

歌衣「そう言えば、先輩のクラスにはゆき先輩と悠里先輩、くるみ先輩以外にもメイドになる方がいるんですね？その人達はどうかたんですか？」

「ああ、その娘達とは都合が合わなかった…」

そもそも彼女達の連絡先を知らなかったので由紀達しか召集する事が出来なかったのだが、後に胡桃や悠里に確認してもらったところ、他の女子達にはそれぞれ予定が出来てしまっていたらしい…。なので結局はいつものメンバーが歌衣の家に集まっただけとなってしまったが、まあその方が歌衣も気が楽だろう。

歌衣「…では、その方達のはまた後々用意するとして、今回は先輩方にだけ渡しておきましょう！」

ニコニコと微笑む歌衣に続いて家の中を進み、広い部屋へと出る…。

赤くて綺麗なカーペットが敷かれているその部屋には丸いテーブルと椅子が数セット置かれており、よく見ると一つのテーブルの上にはすでに”それ”が用意されていた…。

由紀「おっつ！それってメイド服?！」

そこに置かれていた物体は丁寧に折り畳まれていたものの、可愛らしい服だと言う事は分かる。由紀がそれを見て目を輝かせると歌衣は『ふふっ』と笑い声をあげ、それらを由紀と悠里、そして胡桃に手渡していく。

歌衣「すぐに用意できたのはこの三着だけでした。また後々、美紀さん達の分もご用意しますね」

美紀「うん、ありがとね」

美紀は笑顔で礼を告げ、果夏は持っていた携帯である画像を開きながら『もし出来るなら、真冬ちゃんにはこういう衣装を用意して欲しいんだけど』と耳打ちしている。歌衣はそれに対して『はいっ、任せして下さい♪』と答えると、ニッコリと優しい笑みを浮かべた。

「歌衣ちゃん、今回は本当に助かったよ。メイド役だけでなく、衣装の用意までやってくれるなんてね…」

歌衣「いえいえ、気にしないで下さい。うちにはそういう衣装が結構ありますし、それに…くるみ先輩には出来るだけ、可愛い服を着て欲しいですから…」

ポツ…と顔を赤らめる歌衣を見て、彼は苦笑する。

彼女は本当に…本当に胡桃の事が好きらしい…。

まあ何にせよ、彼女のように多くの衣装を用意出来る人が味方についてくれたのはかなりありがたい事だ。

由紀「ねえねえっ、早速着てみてもいいっ?」

歌衣「はい、もちろんですっ！隣の部屋が空いてるので、そこで着替えてきて下さい。サイズが完璧に合うかどうかも不安ですからね

…」

悠里「じゃあ、少し借りるわね」

由紀と悠里、そして胡桃はこの部屋を出ていき、隣にある部屋で着替えを始める。由紀以外の二人：特に胡桃の方は自分がメイドとなる事に抵抗を示していたが、いざメイド服を見ると少しだけ嬉しそうな表情をしているようにも思えた。

彼と歌衣達二年生組が元の部屋で待つ事数分…。

部屋の扉がノックされ、由紀達が部屋へと戻ってくる。

皆、無事に着替えを終えたようであり、可愛らしいメイド服を身に纏った状態となっていた。この娘らがメイド服を着たら似合うだろうとは思っていたが、これは想像以上だ…。彼はもちろんの事、美紀や果夏、歌衣達もその愛らしさにため息を漏らす。

三人はそれぞれが白と黒が基調となっている衣装に身を包んでおり、スカートフリフリと揺らしていた。また、由紀はいつもの猫耳帽子を脱いでいたり、悠里は髪の毛を後ろで纏めてポニーテールにしていたり、胡桃は前髪をヘアピンで留めていたりと…それとなくイメージチェンジしているのが絶妙なアクセントとなっている。

由紀「どうどう？ 似合ってるかなっ？」

圭「おうっ！ ゆき先輩、可愛いですっ！」

由紀「えへへ♪ありがと〜」

真冬「悠里も…凄く可愛い」

悠里「あら、ありがとうね♪」

由紀は笑顔のままその場でクルクルと回り、スカートをふわふわとさせながら楽しげに舞う。悠里も結構乗り気になってきたらしく、衣装を見つめながら笑みを浮かべていたが…胡桃だけは部屋の隅でかしくまっていた。

美紀「くるみ先輩、どうしたんです？」

胡桃「いや…その…：…やっぱりあたしがこういうの着るのは変じや

ないか？」

美紀「そんな事ないです。似合ってますよ」

美紀が笑顔で告げると胡桃は顔を俯け、耳の先まで真っ赤になる…。

それに追い打ちをかけるかのようにして果夏と歌衣、そして彼も側に寄り、皆その姿を前にしてニヤニヤと微笑む。

果夏「あら〜！くるみ先輩、意外と似合うじゃないですかっ！」

胡桃「意外とって…お前な…」

歌衣「そうですねよ果夏さんっ！意外なんかじゃないですっ！くるみ先輩はどんな服であろうと完璧に着こなせるんですっ!!それだけの愛らしさ、そしてカツコ良さがあるんですから〜♡」

胡桃「っ…：…ううう…」

人から褒められる事にはあまり慣れていない胡桃にとって、歌衣の言葉は辱しめにも似ているのだろう…。歌衣が笑顔になればなるだけ、称賛の言葉を放てば放つだけ顔が真っ赤になり、よく分からない呻き声をあげていく。

歌衣「わっ、わたし…カメラ取ってきますっ!!!」

胡桃「カメラって…おい、そんなの何に使うつもりで——」  
ドタドタ！バタンツ!!

胡桃が言い切るよりも先に、歌衣は部屋を出て行ってしまった…。恐らく、胡桃のメイド姿を何枚、何十枚と撮影するつもりなのだろう。

「…さて、じゃあ早速、レッスンをスタートするか」

コホン…と咳払いした彼は目の前に立つ胡桃と向かい合い、真剣な表情を見せる。これから始めるレッスンはメイド組全員にやっつけてくつもりだが、歌衣のいない内に少しだけ胡桃の相手をするのも面白そうだ。

「じゃあまずは胡桃ちゃんからだ。はい、『お帰りなさいませ、ご主人様』って言ってみてくれるかな？」

胡桃「なつつ?!?なあつつ!!?」

あからさまに驚き、戸惑いの表情を浮かべる胡桃…。

だが、この言葉はメイドの基本だ。

これが出来ぬのなら、メイドとしての道を歩むのは厳しい。

彼が真剣な表情のままそう伝えると、胡桃は真っ赤な顔のまま口を開く。

胡桃「お、おかえりなさい…ませ…。ご、ごしゅ…じんさま…。」

…声は震えてしまっているし、目線もこちらに向いていない。

それにポリウムも小さくて、殆ど言葉を聞き取れない。

だが、何故だろう…。胡桃のような娘が顔を真っ赤にしながらそう言っている様はかなりドキドキ出来るものであり、これはこれでありな気がしてくる。

「で、では次…! 『ご主人様、大好きです』と言ってみて…」

胡桃「ん…ううう…つつ…!」

さっきの台詞はともかくとして、この台詞はただの趣味だ…。

顔を真っ赤にしながら恥じらうメイド姿の胡桃を見ていたら何とも言えぬ気持ちになってしまい、自然とリクエストしていた…。まあこればかりは流石に断られるかと思っただが、今の胡桃は正常な判断が出来ていないらしく、また震え声で言葉を紡ぐ…。

胡桃「ご、ご主人さま…だ…大好き…です…。」

…小さな声でそう言った後、胡桃は『しっかり出来たか?』と言いたげに上目遣いでこちらをチラチラと見つめ、不安げな表情をする…。そんな彼女の表情を見た瞬間、彼は確信した。このメイド喫茶は絶対に成功する…。間違いなく、大繁盛すると…。

## 第六十九話 『れんしゅう』

自分達のクラスであるC組が文化祭で開くメイド喫茶：これをどのクラスの出し物よりも素晴らしい物にするべく、彼は歌衣の家にてメイド姿の胡桃・由紀・悠里らにメイドとしての立ち振舞いを指導していた。

彼女達がこう言えば客が喜ぶ……。こう動けば客が喜ぶ……。

そういった事を考えながら様々な指導をしていった訳だが、やはり由紀や悠里と比べると胡桃には少なからず恥じらいのようなものが見える。

「うくん、もっと笑顔で出来るかな？」

胡桃「ん、んん……分かりました、ご主人……さま……」

彼の前で……いや、皆の前でこんなフリフリした服を着て、メイド口調で対応しなくてはいけない。胡桃にとってそれは抵抗のある事であり、どうしても落ち着かなくなってしまう……。しっかりとやらねばと思っても口が上手く回らなくなり、目線が泳ぐ……。

胡桃「うう……やっぱり無理かも……」

由紀「そんな事ないよっ！くるみちゃんなら大丈夫っ！」

悠里「ええ、一緒に頑張りましょ。ね？」

すっかり諦め状態に入った胡桃を慰め、元気付けるのは由紀と悠里だった。彼女らも出来ることなら、胡桃と一緒にメイドを楽しみたいと思っているのだろう。しかし胡桃は俯いたまま首を横に振り、弱々しくため息をつくだけだった。

胡桃「けど、このままじゃ皆の足を引つ張るだけになりそうなんだよなあ……。もう十分に人手は足りてるように思えるし、あたし一人くらい抜けたって良いんじゃないか？下手な足手まといなら、いない方

がマシだろ？」

かなり自信が無いのか、いつになく弱気な台詞ばかりを吐く…。  
なにもメイドをやるのが嫌だという訳ではなく、自分が皆の足を  
引っ張る可能性を気にしているようだが……。

歌衣「大丈夫です！今のくるみ先輩なら完璧ですよっ!!」

と、横から現れた歌衣が満面の笑みで告げる。

彼女はお世辞で言っているのではなく本心でそう告げながら、苦笑  
する胡桃の事を手元のカメラで撮影し続けていた。

胡桃「いやいや、とても完璧とは言えないって…。コイツの前に  
……客の前に出るとまともに対応出来なくなるんだぞ？そんなのメ  
イド失格だろ……」

歌衣「いえいえ！そういうところが良いんですっ!!普段は凜として  
いてカッコいいくるみ先輩が、こんなにも可愛い服を着てモジモジし  
てる様子を見れるなんて……もう最高じゃないですかっ!!」

パシヤリ！パシヤリ!!  
続けて撮影しながらピョンピョンと飛び跳ね、歌衣は顔を赤らめ  
る。

どちらかと言うと物静かな性格である歌衣がこんなにも興奮して  
いるのを見たのはこれが初めてかも知れない…。胡桃はもちろんの  
こと、由紀や悠里、そして美紀達二年生組もその様子を眺めてただ苦  
笑する。

胡桃「ん、んん…:…本当に大丈夫だと思うか？」

歌衣の意見だけでは少し不安だと感じたのだろう…。

胡桃はクルリと振り向いてから彼へと尋ねる。

勿論、彼の返事は決まっていた。

「ああ、僕も歌衣ちゃんと同意見だ。全力のスマイルを浮かべる胡桃  
ちゃんは見てみたいけど…:さつきみたいなきこちない笑みも悪くな





から良かったけど、当日になって注文された物を全部間違われたら大変……」

美紀や胡桃はぎこちないなりに笑っていたが、真冬はそもそも笑っていない……。ただ、冷たい目で客を見つめるだけ。不慣れな感じがして可愛いとか、そういう次元ではない……。

果夏の方は笑顔や対応こそ問題無いが、客からの注文を覚えるだけの記憶力が無い……。さっきなんて、たった二つのメニューをもの数十秒後には忘れていた。

「むう……分かってはいたけど、この二人は扱いが難しいな」

悠里「けど、果夏さんの方はどうにかなるんじゃない？ほら、当日はメモ帳とか渡しておいて、それで注文をとっていけば良いと思うわ。流石の果夏さんも、注文を紙に書くくらいは出来るわよね？」

果夏「ええ！もっちりんです!!」

悠里は手のひらに何かを書くようなジェスチャーをして、ニコリと微笑む。確かに彼女の言う通りだ……。今は練習中だから純粹な記憶力のみで注文をとっていたが、当日になればそれぞれのメイドに伝票代わりのメモ帳を渡す予定だ。頼まれた注文を直ぐ様それに記していけば、いくら果夏といえど間違えようが無いだろう。

真冬「どうかな……カナはとんでもない娘だから、きつとどこかでミスをする。例えば……伝票に書いた文字が下手すぎて読めなくなるとか」

果夏「もうっ！私のことをバカにし過ぎだよ」

果夏はヘラヘラと笑いながら、真冬の肩に抱きつく。

本人はこう言っているが、真冬の発言を聞いた途端、彼と悠里の中に微かな不安が生まれた……。

悠里「大丈夫……よね？いくらなんでも、伝票さえ取っておけば間違えようが無いと思うのだけ……」

「……まあ、今は成功を祈るしかないかと。そんな事より、真冬の方が

問題だ。ほら、美紀や胡桃ちゃんみたいなぎこちないので良いからさ、少しでも笑えないか？」

真冬「えく……知らない人に笑顔見せるのとか嫌だなあ……」

元々人付き合いが苦手なタイプである真冬にとつて、メイド姿での接客……いや、そもそも接客自体が難題だった。彼女は『もう帰りたい』と言いたげな表情をしながらため息をつき、彼や悠里達に背を向けてしまう……。

圭「こくら、ワガママ言わないのっ！美紀ちゃんだつて頑張ってるんだから、真冬も頑張らないと!!」

真冬「そんな事言われても……嫌なものは嫌なんだもん……」

胡桃「まあ……気持ちは分からんでもないけど……」

胡桃は『あはは……』と苦笑しながら、指先で頬を搔く。

当日に訪れてくる客の中には知人や他のクラスの人間は勿論、自分が知らない人も少なからずいるだろう……。真冬にとつて、そんな人達に笑顔を見せるといふのは恥ずかしくて仕方がない事なんだ……。

悠里「大変かも知れないけど、きつと楽しい時間になるはずよ。だからほら、一緒に頑張ってみない？」

真冬「……………」

由紀「大丈夫っ、何かあれば私がバッチリとカバーしてあげるからっ！」

歌衣から借りたメイド服に身を包み、由紀は自信たっぷりな表情で胸を張る。その様子を側で見ていた悠里は小さく微笑み、改めて真冬の顔色を窺っていく。

真冬「ボクが何かミスをしたとして……由紀にカバー出来るの……？」

由紀「もちろんっ!!私、先輩だもんっ♪」

またしても胸を張り、『えっへん!』と笑う由紀……。

彼女の言動や見た目はとても”先輩”とは呼べないくらい幼いものに見えるが、何故だろう……。彼女にこう言われると不思議と安心す

るような……頼りに出来るような何かがあった。

真冬「……じゃ、頑張ってみる……」

出来るだけ、由紀達には迷惑かけないようにする……」

由紀「ふふつ。大丈夫、迷惑かけても良いんだよ。可愛い可愛い後輩の面倒を見るのは先輩の役目だからね〜!」

由紀はそう言つて真冬に抱き付き、頭をガシガシと撫で回す。

その様はまるで、嫌がる猫や犬等の動物を無理矢理に掴まえて愛でる子供ようにも見えた……。

ガシガシ：ガシガシ……!

可愛い後輩の髪の毛を撫で回しながら、満悦の表情を浮かべる由紀と、それを真顔で受け続ける真冬……。一行がその様子を何とも言えぬ表情で見守つて何秒か経つた時、真冬は目線を下へと向け、そつと静かに口を開いた……。

真冬「……ゆ……き……せんぱ……」

由紀「んつつ!!?んんんつつ!!」

放たれた言葉はあまりにも小さかったが、真冬の事を抱き締めていた由紀の耳はそれを聞き取っていた。いつか真冬に言わせたい……言つてもらいたいと思つていた、”目標”にも似た言葉。それをもう一度、ハッキリこの耳で聞きたくて、由紀は大きく目を見開きながら真冬の両肩を掴む。

由紀「いつ、今のもつかい!!もう一回つつ!!」

真冬「……ふふつ、だめ……」

由紀「うぐつ!!?お願いっ!お願いいっ!!」

由紀の願いも虚しく、真冬は肩にかけられていた両手を振りほどいて離れてしまう……。その時、真冬が少しだけ楽しそうに笑つていた理由と、由紀が何度も言つていた『もう一回!』という言葉の意味……それら知るべく、果夏が動く。

果夏「由紀先輩、今、真冬ちゃんになんて言ってもらったんです!？」

由紀「あつ、えつ…えつとね…!!」

真冬「ほらほら、早く練習しよう…?」

由紀が全てを明かそうとした瞬間、真冬がその間に割って入って話を遮る。こういう風に中断されると何だか気になってしまい、果夏はおろか彼や胡桃、圭も由紀に話を聞こうとしたが、その度に真冬が話を遮ってきて…結局分らず終しまいのままメイドとしての立ち振舞い練習が進んでいった。

## 第七十話 『ぶんかさい』

”メイド喫茶”という出し物をバカにしてきた他クラスの生徒をあつと言わせるべく、彼はとっておきのメンバーを揃えた…。数日かけてそのメンバー達にメイドとしての基本を叩き込み、衣装を用意し、とうとう文化祭の日がやって来た。

どの学年、どのクラスも様々な出し物を用意しており、巡ヶ丘学院高校はいつも以上に賑わいを見せる。良く晴れたこの日：校内には生徒や教師はもちろんの事、その家族や卒業生など、様々な人が訪れて辺りを見て回っていた…。

「…よし、準備はバッチリだな」

3年C組の出し物である”メイド喫茶”がいよいよ開店するとう時、彼は全ての準備が終わっている事を確認する。客が座る為の席、メニュー、そして部屋の飾り付け…：見たところ全て問題ないようだが、一人の女子生徒が苦笑しながら彼の方を叩く。

女子生徒 「あの…：メイドちゃん達は？」

この喫茶最大の売りであるメイド達はまだここには現れていない…。  
彼女らがいなくてここはメイド喫茶ではなく、ただの喫茶店になってしまうが…：彼は心配無用とばかりに首を振る。

「少し着替えに手こずってるだけだと思う。もうそろそろ来ると思うから、心配しないで大丈夫だよ」

女子生徒 「なら良いけど…：って、どこ行くのっ？」

「少しだけ他のクラスを見て回ってくる。

敵を知ること大切だからね」

由紀達はいきつき、制服からメイド服へ着替えるべく空き教室へと向かった。恐らく、もうそろそろ戻ってくる頃だろう…。彼女らさえ戻ってくればすぐにでも店を開き、客を迎える事が出来る。

だが彼はそれを待たずに教室から出て、既に開き始めている他クラスの出し物を遠目に偵察していく事とした…。

お化け屋敷や占い屋敷、メイドのいないただの喫茶店など、様々な出し物が目に入る…。中でも彼が注目したのはやはり、C組の出し物をバカにした生徒がいる3年A組の出し物だ。他の生徒から聞いた話通り、このクラスは流行りのスイーツなんかを提供する店を開いているらしく、早くも多くの客で賑わいを見せていた。結構な盛況ぶりだが、当然負けるつもりはない。

(あれだけのメンバーを揃えたんだ…負けるはずがない)

胡桃や悠里に無理を言っただけでなく、後輩である美紀達の手すら借りているのだ。彼女らのような美少女がいる店なら、間違いなくこの店よりも盛り上がる。彼はのんびりとした足取りで学園を一週した後に自分のクラスへと戻り、そして頬を緩めた…。驚く程では無いにせよ、廊下の方に待機する客の列が伸びていたからだ。

待機している客の数は…：ざっと見た感じ10人程だろうか。他クラス・他学年の男子生徒や女子生徒の他、一般参加の客も確認出来る。まだ開店したばかりでこの様子なら、後半はもっと伸びてくるだろう…。彼は意気揚々と中に戻り、メイド達の活躍ぶりを眺めていく事にした。まず、最初に目に入ったのは悠里だ…。

悠里「はい、ご注文は以上で良いですか？ふふっ、ありがとうございます。すぐに来ると思いますから、それまでお喋りでもしましょうか？

ご主人様♡」

彼女は慣れた様子で注文を取るとそれを他の生徒へと伝え、それが出来上がるまでの時間を笑顔やトークで繋ぐ…。可愛らしいメイド服に身を包んだ悠里は何時も以上に綺麗…：というか、可愛らしく思える。彼女と席を挟んで向かい合う男性客もその可愛いさにはかなり

やられているらしく、ニヤニヤが抑えられていない。

(りーさん…流石だな)

練習の時から抜群の安定感を持っていた悠里だが、実践においてもその強さは変わらないようだ…。その仕事っぷりを暫く眺めていると悠里は彼の視線に気付き、目が合うなりパチツとウイंकをする。全て順調…という事だろう。

そのウイंकにすらドキツとしつつ、彼は次のメンバーを確認した…。

悠里の担当する席の隣は…由紀だ。

由紀「お待ちせしました〜！ご注文のケーキと紅茶ですっ！」

太陽のように明るく笑顔の由紀は準備係の生徒から渡されたケーキと紅茶を席に置くと、その向かいに座って担当している客をじっと見つめる。由紀が担当していたのは二年の女子生徒らしいが、向かいに座るメイド姿の由紀を見て顔を真っ赤にしながら足をバタつかせており、かなり興奮しているのが伝わってくる…。

女性客「きやくっ！やっぱりゆき先輩は可愛いですっ！私、前からゆき先輩の大ファンで…！あっ!?ケーキ、一緒に食べませんか？半分こしましょうよっ♪」

由紀「ほんとっ?!?!いいのっ?!?!…と、思ったけど、お客様のヤツをあまり食べちゃうと後で皆に怒られちゃうかもだから…！一口だけね?」

女性客「そうですか?なら、一口だけ…はい、あくんして下さい  
♪」

由紀「あ〜くんっ♪」

由紀はテーブルの上に身を乗り出すと大きく口を開け、フォークに刺さったケーキの欠片を客に食べさせてもらう…。どちらかと言うと、そういうのはメイドが客にやってあげるものだと思うが…。まあ、客も由紀も幸せそうなので良いだろう。



由紀が美味しそうにケーキを頬張り、それを眺める客が笑みを浮かべる中：彼は更にその隣の席へと視線を向ける。由紀の隣の席にいたのは胡桃…。ちょうど今、注文されていたオムライスが到着したらしく、それを目の前の男性客…。…同学年の男子生徒に出している最中だった。

男性客「なあ、どうせならケチャップでハートとか描いてよ。んで、最後は可愛いポーズしながら『美味しくなれ♡』とかやってくれない？」

あの男子生徒はA組の生徒だろうか？それともB組の生徒だろうか？

…どっちでも良いのだが、この客がそんな事を言い出した瞬間、彼は緊張の面持ちで胡桃を見守る。練習の時ですら、散々に緊張して顔を赤らめていた胡桃の事だ…。今の要求にも上手く応えられないに違いない。…と、そう思っていたのだが……

胡桃「そんなのやらないって…。ま、ケチャップかけるくらいはしてやるよ。あっ！そうだ、何か動物でも描いてやろうか？よしよし、じゃあ、何の動物を描いたか当ててみるよ〜？」

胡桃は用意されていたケチャップを手にとると、それでオムライスの上に絵を描いていく。そうして完成した絵を客に見せると得意気に笑いながら、楽しみに談笑していた…。意外にも、上手く接客出来ているように見える。

「あれ？胡桃ちゃん…。結構上手くやってるな」

意外な光景に驚いた彼はそばにいた男子生徒を掴まえると、これまでの胡桃の仕事っぷりを尋ねる。その男子生徒は訪れた客の案内等を担当する傍らかたわメイド達の様子を確認していたらしいが、『恵飛須沢は最初からしっかりと接客していた』…。との事だ。練習の時はあんなにも緊張しっぱなしだったのに…。何故今は平気なのだろうか？

ちよつとした疑問を抱きつつ、他の席を確認していく…。

部屋の隅、窓際の方では美紀が圭と共に二人の女性客を相手しているのが見えた。女性客はどちらも二十代前半くらいだろうか……。やたらと明るい人達であり、向かいに座る美紀の頭を撫でながらケーキを食べている。

女性客A「あははっ、顔真つ赤で可愛い♪」

美紀「ちよっ……！あまり触られると困りますっ！」

女性客B「ねーねー、美紀ちゃんって彼氏いるの？」

美紀「いつ、いませんよっ！」

女性客B「こんなに可愛いのにいないの？」

へへ、じゃあ好きな人とかは？」

美紀「い……いませんっ！もうっ！早くケーキ食べて下さいっ！」

女性客A「あはは、怒られちゃった〜」

まるで酔っぱらっているかのようにテンションの高い女性客二人に振り回される美紀……。彼女の大人しそうな雰囲気は女性客達の心を掴んだようだが、そのすぐ隣に座る圭はムツとした表情で美紀を庇うかのように口を開く。

圭「お客さん達！美紀ちゃんはそういう話題に慣れてないんですから、あまりしつこくしちやダメですっ！」

女性客B「ふふっ、ごめんね？美紀ちゃんの反応が可愛くてつい……」

あつ、もちろん圭ちゃんも可愛いよ〜♡」

賑やかな雰囲気は慣れない美紀の反応も良いが、しつかりと受け答えしてくれる圭もまた彼女らの心を掴んでいたらしい……。美紀がモジモジと身を揺らすだけで特に何も言わない中、圭は二人の客を相手に上手く談笑していた。少しばかりクセの強い客だが、問題なくやれている……。

そうやって離れた場所からそれぞれのメイド達の様子を確認していると、ふと横の方から肩を叩かれた。何かと思いい目を向けるとそこには、他の者達と同様のメイド服を身に纏った歌衣が笑顔で立っ

た。

歌衣「皆さんの仕事ぶりが心配ですか？

大丈夫ですよ、みんな上手くやっていますから」

「…みたいだね。歌衣ちゃんも大丈夫？」

歌衣「ええ、問題ありません。楽しくやれていますよ♪

これから少しだけ休憩に入るところです」

ずっと働きっぱなし…という訳にもいかない。

歌衣はこれから別室にて少しの間休憩するらしく、その代わりとして新たなメイドが教室へと入ってきた。彼と歌衣は教室の入口で、そのメイドを迎えていく。

真冬「…えつと、来た…けど…」

歌衣の代わりに現れたのは真冬だった…。

彼女もまた、可愛い服に着替えていたもの…：少しだけ他のメイドとは違うデザインに思える。他のメイド達よりも少しだけスカートの短いのはまだ気にならないにしても、そのスカートの内側からピョンツと伸びている黒い尻尾と、頭に付けられている猫耳がどうしても気になった…。

「んん？真冬だけ服が違う？」

歌衣「はい。果夏さんからリクエストされて…：真冬さんのだけ少しスカート短め、プラス猫耳と尻尾を付けさせて頂きました」

真冬「…ほんと、カナは余計な事かしらない」

真冬は短めのスカートを手で引っ張り、黒いニーソックスに覆われた太ももを恥ずかしげに隠す…。本人は嫌そうだが、ニーソックスが生み出す絶対領域や猫耳・尻尾は真冬のキャラにどこことなく合っている。

果夏「うおおっ!!真冬ちゃんっ!可愛いよおおっ!!!」

歌衣と二人で真冬と話していると、どこからともなく果夏が現れ

た。

果夏はメイド服に着替えた真冬を見てフンフンと鼻息を荒げており、瞳をキラキラと輝かせている…。

真冬「カナ：お客さんは…？」

果夏「放置してきたっ!!真冬ちゃんの相手が先く♡」

どうやら果夏は接客の途中だったらしく、部屋の奥には席で苦笑しながら一人待つ男性客が確認出来た…。担当している客をほったらかしてまで真冬に寄ってくる辺り、果夏は相変わらずだ。

歌衣「果夏さんっ!真冬さんとは後でいっぱいお話出来ますから、今はしっかりと接客して下さい!!ほら、お客さんが待ってますよっ!」

果夏「はくくい……はあ、仕方ないか…。

じゃあ私は一旦お客さんの所に戻るけど……真冬ちゃんっ!もしも変なお客さんに変な事されそうになったら、すぐに大声出すんだよっ!私が助けてあげるから!!」

真冬「はいはい……ほら、早く戻りなっ……」

正直、客よりも果夏に変な事をされそうな気がする…。

真冬はそんな事を思いつつ果夏：そして休憩に向かった歌衣を見送ると、目の前に立つ彼がこちらをジーツと見つめている事に気が付いて小首を傾げる。

真冬「……なに？」

「えっ?……いや、この尻尾ってどうやって付いてるのかなあと…」

真つ黒い尻尾：それは真冬のスカートの内側からUの字に伸びており、先端がピンと上を向いていた。真冬が少し動くだけでヒョコヒョコと揺れるその尻尾がどう付けられているのか気になり、彼は彼女の背後に立ちながらそれを眺めていく。

真冬「根元の部分がベルトみたくなっ……それを腰に巻いてるだ

け……。あと、尻尾の中には針金が入ってて自由に形を変えられる……」  
真冬はその尻尾の先端を掴み、微かに横へと折り曲げる。  
すると尻尾は彼女が掴んだ先端部だけが横へと曲がり、手が離れてもその形を維持し続けていた。中に針金が入っているからこそ、綺麗なUの字に伸びていたのだろう……。真冬は折り曲げた先端部を元通りの形に直すと、少しだけ誇らしげに笑う。

真冬「こんな格好するのは恥ずかしいけど、でも……少し楽しい」  
「……そりゃ良かった。じゃ、頑張つて店を盛り上げてくれ」

彼女の性格を考えると、メイド喫茶の店員なんてものはかなりハードルの高いものだろうと心配していたが……思っていたよりも楽しんでるようだ。きつと、すぐそばに果夏や由紀達がいるからだろう。  
彼は背後から真冬の背中をポンと叩いた後、こちらを向いていた尻尾を掴んでグイッと引っ張る……。特に意味があつて引っ張った訳ではなく、ただ何となく……。目の前でゆらゆらと動く尻尾が気になつて、そんな事をしてしまった訳なのだが――

真冬「んぐつつ!!」

「……あ……」

引っ張つてすぐ、マズイ事をしてしまったと思ひ知る……。

勢い良く上へと引っ張った尾は根元から一直線に上を向き、まるで怒っている猫……警戒している猫の尾のような形となる。Uの字だった物を一直線に上へ伸ばした事で真冬のスカートは後方が捲れ上がり色白の太ももが惜しげなく晒されるどころか……水色のショーツに包まれている柔らかそうな尻が思い切り彼の視界に映った……。

「……おお……おお……」

真冬「つ……ぐ……!!? バツ……バカッ!!」

真冬のショーツや尻を見てしまった彼は気まずそうに手を離すが、それだけではどうしようもない……。突然の事に慌てて忘れてしまっているが、この尻尾の中には針金が入っていてその形を維持するの

だ。

彼の手が離れてもなお尻尾は上に伸び、スカートを捲れたままにする…。

真冬は大慌てでその尻尾に手を伸ばすと元通りのUの字になるようそれを直し、捲れ上がっていたスカートも丁寧に整えてから顔を真っ赤に染めた。

真冬「み、見た…っ?」

「…いえ…見てません…」

ガツツリと見てしまったが、それを言ったら真冬に怒られそうなので嘘をつく…。が、スカートが思い切り捲れ、結構な範囲が晒されていたのが感覚で分かっていたからだろう…。真冬は彼の言葉を信じる事なく、”見られた”という設定で話を進めだす。

真冬「男の子にパンツ見られるなんて…もう、最悪…っ…。」

ほ、他の人達には見られてない…よね…?」

真っ赤な顔をしたまま、瞳を潤ませて尋ねてくる。

もし今の出来事が辺りの客やら男子生徒に見られていたとしたら、真冬は今すぐに泣き出してその場を去ってしまうだろう…。彼は恐る恐る辺りを見回して確認するが、こちらを見ている者はいないようだった。

「とりあえずは大丈夫かと…。そ、その…ごめん」

真冬「…わざとじゃないなら、別に良い…。けど、死ぬほど恥ずかしいから、今見たのは全部忘れること…分かった?」

コクリと頷き、メイドとしての仕事を始めた真冬を見送っていく…。

彼女にはああ言ったが、正直忘れられる気がしない。

スカートを捲ってしまった当初は興奮とかよりも焦りが大きかったが、落ち着いてくると改めてその光景が脳内に思い浮かび、胸がドキドキとする…。可愛がっている後輩のショーツを見てしまったの

だ……それが事故だろうと故意だろうと、ドキドキするのは当然だろう。

彼は時折その光景を思い返しては邪念を払うように咳払いしつつ、メイド喫茶の裏方を手伝っていた……。文化祭がスタートして数時間……思っていたよりも順調な滑り出しだ。

## 第七十一話 『ぶんかさい―2』

女子生徒「いらつしやいませ〜♪お一人様ですね？

少々お待ち下さいっ！」

すっかりメイド喫茶と化した教室の入り口では受付役の生徒が列に並ぶ客の対応をし、メイドに空きが出来ればそこへと案内する。開店から約三時間……中にはこのメイド喫茶に二回、三回とやって来ている客もいて、お気に入りのメイドを指名したりもする者も現れるくらいになってきた。

真冬「いらつしやいませ……ご主人様。……って、君、さつきもここに来てたよね？他のクラスでも色々な出し物をやってるんだから、そういうのも見てきたら？」

男子生徒「そんなのどうでも良い。俺はただ……真冬ちゃんと一緒に楽しい時間を過ごしたいだけなのさ」

『ふふっ』と声を漏らしながらキザな表情を見せるその男子生徒は二年の生徒のようだが、真冬とは違うクラスらしい……。前々から彼女に微かな好意を抱いていたらしいが今回このメイド喫茶に来店し、猫耳メイド姿の彼女と会って話をした事でその好意が確固たるものへと変貌したようだ。……もつとも、真冬の態度はかなり素っ気ないが……。

真冬「ボクは君と過ごしてても楽しくないんだけど……。それどころか、こう何度も来られると少し気持ち悪いとか思ってる……」

男子生徒「んん……！そういうクールなところが堪らなく好きだ」

真冬「うわ……ほんつとに気持ち悪い……」

男子生徒「もつと言つて。なんかゾクゾクしてきたから……」

氷のように冷めたい視線を向けながら罵声を吐く真冬……それを真っ正面から浴びつつも笑顔を崩さない男子生徒……。それは明らかに異様な光景であり、周囲のテーブルについている他のメイドや客達



はその様子を横目でチラチラと眺めながら苦笑する…。軽い休憩を挟んでいた由紀・悠里もまた、彼と共にその様子を眺めながら苦笑していた。

「真冬のどこに来る客はああいいうのが多いな……」

悠里「そう言われるとそんな気がするわね…。

ま、まあ…人には色んな趣味があるから……」

由紀「ほく…なるほどなるほど…。ねえねえ、真冬ちゃんみたくクールな接客をしたら、私の所にももつとお客さんが来るかな？」

いや…それはどうだろう…。

真冬の所にやって来る客は皆、真冬の冷たい態度・言葉に満足して店を出ていくが、由紀の元にやって来る客はもつと別のものを求めているハズだ。

悠里「ゆきちゃんは今のままで良いのよ」

由紀「えく、そうかな？」

悠里「もちろんっ！みんな、ゆきちゃんの可愛い笑顔や優しい言葉に癒されに来てるんだから、ゆきちゃんがいきなり冷たい子になったらビククリしちゃうわ」

悠里はニコニコと微笑みながら彼女の頭を撫で、そう告げる。

あれは真冬のみ許された接客技術のようなものであり、他の者が真似した所で何にもならない…いや、むしろマイナスになるかも知れない。

そんなものを真似するより、由紀は由紀の良さを…その眩しい笑顔や温かい雰囲気による癒しを客に提供してあげるべきだ。

「大体、由紀ちゃんは今のままでも十分すぎるくらいに人気がある。これ以上忙しくなったら大変でしょ？」

由紀「そ、それもそっか…：…メイドさんをやるのは楽しいけど、流石に休憩無しだと疲れちゃうもんね」

悠里「そういうこと」

ありがたい事に、メイド喫茶は想像していた以上に繁盛している。やはり、可愛い女の子を集めたのは間違いでは無かった…。

純粹な笑顔・癒しの時間を味わいたい者は由紀を指名し、冷めた視線・蔑みさげすの言葉でゾクゾクした時間を味わいたい者は真冬を指名する…。客によって好みはバラバラだろうが、大抵の要望に応えられるくらい様々なタイプのメイド達がここにはいる。どんな趣味を持つ者であろうと、一人くらい自分好みのメイドを見付けられるはずだ。

悠里「さて、また呼ばれてるみたいだし…小休止は終わりにしましょうか。ゆきちちゃん、行きましよう？」

由紀「らじやくー！」

「では、引き続き頑張つて」

再び指名を受けた悠里・由紀を見送り、彼はそのまま裏方の雑務を手伝う。その時、チラツとだけ悠里の様子を覗き見たのだが、悠里が相手にしている長めの茶髪が印象的な男性客に少しだけ見覚えがあるような気がした…。

（ああ、前に海の家へ行った時、あんな男がいたような…。まあ、別人かも知れないけど）

何にせよ結構前の事なので、記憶が定かではない。しかし聞いたところによるとあの客は悠里の事をかなり気に入っているらしく、既に数回彼女を指名しているらしい。

流石に悠里も人気だなあ…なんて事を思いながら雑務をこなして数十分の時が経った頃、彼は少しだけ休憩するべく別室へと向かう。そこでは同じく休憩中だった数名のクラスメートに紛れ、胡桃と美紀が仲良く肩を並べながら席についていた。

胡桃「おう、お疲れ〜」

美紀「お疲れ様です」

「お疲れ様。いやあ、順調だね」

二人がいるすぐそばの席に腰を下ろし、満足げな笑みを浮かべる。

すると美紀は小さな微笑みを返し、胡桃は『ふふん』と声をあげながら自信に満ちたような笑みを浮かべて答える。

胡桃「たくさん練習したからな、もう余裕だ」

美紀「そう言えば、練習の時と比べるとかなり落ち着いて接客出来ていましたね？正直、あんな調子でやっていけるのかと不安でしたが……流石くるみ先輩、本番に強いですね」

胡桃「ふっふっ♪」

練習時の胡桃は終始顔を真っ赤に染めてモジモジとしているわ言葉を噛みまくるわで散々だった……。が、客によつてはそういう不慣れな感じが好みだと言う人もいるかも知れないので、これはこれでよしとしておいたのだが……。本番を迎えた今日、胡桃はあの時のような緊張した様子を一切見せずに頑張っている。

練習時、客の役をしていた彼からすると胡桃の成長には喜ばしいものがあり、自然と頬が緩む。

「…そうだ、せっかくだから記念写真を一枚——」

今、こうして楽しげに微笑んでいるメイド姿の胡桃を忘れたくない。

この姿は是非とも写真に収めておきたい…。

彼は携帯を取り出してカメラを起動するとそれを身近にいた一人の女子生徒へと渡し、撮影を頼んでから胡桃の隣へ身を移すが——

胡桃「うわあっ!?ス、ストップっ!!ちよつと待てっ!」

いざ撮影…というタイミングになって胡桃は慌てだし、彼からゆっくりと離れる…。写真を撮られるのが嫌なのだろうかとも思ったが、恐らく違う。メイドとして仕事をしている時にも記念撮影をお願いしてくる客は何人もいたし、胡桃はその全てに笑顔で応じていた筈だ。

「何、どうしたの？」

胡桃 「いやっ……その……えっと……！」

「少し写真を撮るだけだよ。構わないでしょ？」

胡桃 「っ……ああ……そう、だな……」

まだ少しだけ様子がおかしい気もするが、胡桃はゆっくり彼の横へ戻ると、携帯を構えている女子生徒の方へ視線を向ける。

女子生徒 「じゃあ撮るね〜」

カシャッ！

携帯からシャッター音が鳴り、女子生徒はニコニコと微笑みながらその携帯を彼へと返す。彼は女子生徒に『ありがとう』と礼を告げると直ぐ様写真を確認し、そして小首を傾げる……。そこに写っている胡桃は顔を真っ赤に染めており、何だか様子がおかしい。まるで、練習時の胡桃に逆戻りしたかのようだ。

「ええっと、こういうのにはもう慣れたはずじゃ……？」

隣に立つ胡桃にそう尋ねてみるが、彼女は顔を俯けたままそそくさと歩きだし、離れた所にある椅子へと腰を下ろしてしまふ……。客との記念撮影には笑顔で応じていた筈だが、今の写真に写る彼女の笑顔はかなりぎこちない。

ひよっとして、嫌われているのか？

無理にメイドをやらせたのが悪かっただろうか？

彼がそんな事を考え始めて額に冷や汗を浮かべると、美紀がその気持を読み取ったかのように言葉を放つ。

美紀 「変に心配しなくて大丈夫ですよ。

少し照れているだけだと思いますから」

「照れてる？」

美紀 「はい、多分……ですけどね」

客と撮影するのは平気なのに、何故自分との撮影では照れるのだろう？色々と疑問は残るが、彼は敢えてそれらに触れないようにして時間をごまかして行く……。

すると少しして、一人の女性が休憩室へと現れた。  
C組の担任である佐倉慈だ。

慈「みんなお疲れ様。さつきチラツと見てきたけど、メイド喫茶は大人気みたいね。廊下に列が出来ててビックリしちゃった」

「佐倉先生もメイドをやってくれたら、もつと繁盛するだろうなあ」

慈「そ、それはちよつとねえ……」

慈は由紀達に負けぬくらい可愛い顔立ちをしているし、スタイルも良い。もしメイドになつてくれていたら、確実に人気者になつていただろう……。教師という立場どうこう以前に、本人にその気が全く無いのが残念だが、メイド服を着た慈はかなり魅力的な姿となつていた筈だ。

胡桃「メイド服を着ためぐねえ、見てみたかったな」

胡桃も彼と同じことを思っていたらしく、慈の元へ歩み寄つてニコニコと笑う。

慈「こういう服は恵飛須沢さん達みたいな若い女の子が着るから似合うのであつて、私みたいな人が着ても全然——」

美紀「そんな事ないですよ。佐倉先生だつて十分若いんですから、絶対に似合うと思います」

それはお世辞とかではなく、素直な本音といった感じの言葉だつた。

美紀の言葉を聞いた慈はハツとしたように目を見開いた後、その瞳を涙で潤ませていく……。

慈「うう…直樹さんつて凄く優しい子なのね…。嬉しくて涙が出そう」

美紀「そんな、優しいだなんて…」

慈の手にポンポンと頭を撫でられた美紀は少しだけ照れ笑いを浮かべ、その横では胡桃が悪戯な笑みを見せる。

胡桃「ふふっ、美紀はお世辞が上手いな」

美紀「なっ!? お世辞なんかじゃないですよっ」

もちろん、胡桃だってそれくらい分かっている。

分かっているながら、わざとそう言っただけで慈の反応を窺っているのだ。

慈「もうっ！ 恵飛須沢さんったら酷いわ！」

慈は小さく頬を膨らませ、ムスツとした表情を見せる。

それは胡桃が望んでいた通りのリアクションだったらしく、彼女は  
その表情を見ながら楽しげに笑って頭を下げた。

胡桃「あははっ！ 悪い悪い。冗談だよ冗談っ」

よく見ると、周囲にいる数名の生徒達もそのやり取りを見て笑っ  
ているのが分かる。それに気付いた慈は『みんな、先生をからかわない  
のっ！』と言っただけで不満げな表情を浮かべたが、その場の空気につられ  
てすぐに自分も笑い出す。

(…ほんと、人気者だな)

この学校には色々な教師がいるが、慈ほど人気のある教師はいない  
のではないだろうか…。他の教師と比べるとどこか頼りなかったり  
もするが、その分親しみやすいし、話していて楽しい。

辺りにいる生徒らと楽しげに交流する慈を見た彼はそっと微笑み、  
壁にかけられていた時計を確認する…。時刻は昼を過ぎた辺り……。  
あともう一踏ん張りだ。

## 番外編『ピツキーデー』

CASE 1 ” 狭山真冬の場合

真冬「ねえ、今日って何の日か知ってる…？」  
自宅でのお家デートを楽しんでいた時、不意に真冬がそう尋ねてきた。

彼はすぐに携帯を取り出し、ホーム画面に映る日付を確認してから考える…。最初に考えたのはバレンタインデー・ハロウィン・クリスマス等のメジャーなイベントだが、どれも違う。では彼女の誕生日かとも思ったが、やはりそれも違う。

「……分からない、降参」

真冬「えつとね…」ピツキーの日” なんだって」

そう言つて真冬がバッグから取り出したのは、”ピツキー”と呼ばれるチョコレート菓子…。細長いビスケットのような物にチョコレートがコーティングされたこの菓子の存在自体は彼もよく知っていたが、今日が”ピツキーの日”…なんて全く知らなかった。

「へえ……よく知ってるね」

真冬「駅前でイベントみたいなのやってて、このお菓子をタダで配つてただけど…ボクもその時に初めて知った」

そのイベントというのは、今日が”ピツキーの日”だという事をより多くの人に知ってもらう為のキャンペーンか何かだったのだろう。何にせよ、無料でお菓子を配るなんて随分と気前の良いことだ。

彼がそんな事を考えていると、真冬はその菓子のパッケージを開けて中から一本だけ取り出し、チョコレートでコーティングされている先端部分を唇で挟んでから彼の事を横目でジーツと見つめだす…。

「…どうかした？」

彼女は口に啜えたそれを食べるわけでもなく、ただ唇に挟んだままこちらを見ている…。そして膝立ちの状態でゆつくりとこちらへ寄り、無言のまま顔を赤くした。

真冬「……………んっ…！」

そばまで寄ってきた真冬は菓子を啜えたまま顔を上げ、自分が啜えているのとは逆の方を彼へと突き出す。まるで、『君はそつちを啜えて』とでも言っているかのようだが……………。

「ええつと……………真冬…？」

目の前に突き出された菓子の端……………これを啜えるという事はつまり、一本の菓子を真冬と共有するという事になる。二人が口を離さぬままそれを食べ進めたら、すぐにでも唇が触れてしまうだろう…。

もしかするとこれは真冬なりにキスをねだっているのかも知れないが、恥ずかしがり屋な彼女がこんな誘い方をしてくるものだろうか？

真冬「っ……………いいから……………そのまま…っ……………」

誘いに乗ってこない事に痺れを切らしたのか、真冬は菓子を啜えたまま小声でそう言ってから顔を動かして菓子の端を彼の口内へと器用に押し込む。彼は戸惑いつつもそれを啜えたが————

(うつわ……………近っ……………)

ほんの10数センチしかないであろう菓子を二人で共有しているのだ…当然、互いの顔が接近する。間近に見る真冬の顔はまた一段と紅潮しており、細めている瞳は涙で潤んでいた。

しかし、どれだけ顔が紅潮しようとも真冬は離れない。

彼が戸惑い、動けずにいる間も彼女は小さく唇を動かしては菓子をかじり、彼との距離を少しずつ詰めていく。

「ま、まっ……………」



10センチ……8センチ……5センチ……

真冬との距離がみるみる近くなり、彼は菓子を啜えながら声をあげる。

だが真冬にはその声が聞こえていないのか、もしくは聞こえているが無視しているのか……。どちらなのかは分からないが、彼女はリングゴのように赤くなった顔で菓子をかじっては彼に顔を寄せていき、そして――

真冬「ん……っ……」

――とうとう、ゼロ距離にまで顔が寄る。

寄るところまで顔を寄せた真冬は彼が啜っていた部分の菓子すらも自分の口内に運んで数回噛み飲み込み込むと、うつすらと開けていた瞳を完全に閉じて唇を動かし、彼とキスを交わす。

真冬「ん……むっ……ちゅ……っ……」

今さつき、チョコ菓子を食べたからだろうか。

真冬の唇はほんのりと甘く、キスするだけでチョコの味がする。

真冬「んっ……！んん……んんっ……！」

その味や唇の感触をもっとハッキリ感じるべく彼からも唇を動かしていくと、真冬は肩を震わせながら何ともいえぬ声を漏らす。真っ赤な顔をしながら小さく悶える彼女は小動物のように愛らしくて、彼はキスをしたまま彼女の頭を右手で撫でていく。

サラサラとしていて柔らかな髪を手のひらや指先で撫でながら、そつと静かに舌を突き出して真冬の唇を舐めるとまた一段に甘い味がして、目の前の小さな身体がビクンと跳ねた。

真冬「ま……っ……そ、それはダメっ……!!」

「ん？ダメって、何が？」

真冬「だ、だから……舌とか入れるのは、ダメ……」

キスを中断した真冬は両手の人差し指を重ねてバツを作り、

少しだけムツとした顔をする。  
彼女とのキスがあまりにも心地よくて暴走しそうになったが、  
恥ずかしがり屋な真冬はこれ以上の進展を拒んだ。

まあ、ここで中断してくれなかつたらどこまでも暴走していただろうし、この辺でストップしておくのが正解かも知れない。付き合っていればまた幾らでも機会がやって来るのだから、のんびりと進んでいこう…。

彼は最後にもう一度だけ真冬の頭を撫でると、残っていたチョコ菓子を彼女と二人で食べていく。先程のように一本の菓子を二人で共有するのではなく、一人一本ずつ、普通に食べ進めながら他愛のない雑談をして、その日のお家デートは終了した。

~~~~~

CASE—2 ” 若狭悠里の場合

「リーさん、今日は何の日でしたっけ？」

彼の自宅でお家デートを約束していたこの日、ガールフレンドである悠里を自室へと招いた彼は不意に尋ねる。

悠里「えっ？うん…何の日だったかしら…」

「ほら、何日か前に学校でも話題になつてたでしょ」

悠里「そう言えば、そうだったかも知れないわねえ…」

数日前、学校で何人かの女子達が話題にしていた。

コンビニやスーパーでも売られているチョコ菓子、“ピッキー”には“ピッキーの日”という記念日のようなものがあり、最近はその日にこのお菓子で“ピッキーゲーム”という遊びをするのが流行って

いるとか…そんな内容の話だ。

ピッキーゲームというのはこの菓子の両端を二人で啜え、そのままギリギリまで顔の距離を詰めていくというものらしいが、仲の良いカップルはそのまま唇を触れ合わせてキスをするというのがお決まりのようらしい。

女子達はその話をしながら、いつか素敵な彼氏を見付けてそんな事をしてみたい！と言ってキヤーカー騒いでいた。彼はもちろん、同じクラスに通う悠里もその話を盗み聞きしていたのだが…。

悠里「うくん、何の話をしてたかしらね？忘れちゃったわ」

悠里はニッコリと微笑み、そう告げる。

しかし彼女の笑みにはどこか白々しいような雰囲気があり、『忘れちゃった』という言葉が嘘である事が容易に見抜けた。

「……りーさん、本当は覚えてるでしょ？」

悠里「ふふっ、どうかしらね〜♪」

楽しそうに微笑んで目を反らす悠里が本当の事を言うまで問い詰めてやろうかとも思ったが、結局、彼は観念したようにため息をついてから部屋の隅に置いていた自分のカバンを漁り、その中から例のチョコ菓子を取り出した。

「今日はピッキーの日…らしいですよ」

悠里「あら、それって今日だったの？」

「んん、今日です。…ってわけなんで〜——」

チョコ菓子…ピッキーの箱を開いた彼は中に入っていた包装袋を破るとそれを一本だけを取り出し、ニッコリと笑う。その笑顔を前にした悠里もまた、丁寧に膝を並べて座りながらニコニコと微笑みを浮かべていく。

「せっかくだし、ピッキーゲームとやらをやってみますか…？」

彼は一本だけ取り出したそれを指先に摘まんだまま揺らすと、ニコ

ニコとした笑みを崩さない悠里に向けて言い放つ。自宅に二人きりというこの状況でピッキーゲームという遊びをする事により、自然な流れでキスが出来るのではと思っっているからだ。

悠里「…あまり気は進まないけど、しようがないわね…。」

一回だけよ？」

悠里は渋々といった感じで菓子を受け取り、その端を唇に挟む。そして両手を床につけると彼の方に身を突き出し……

悠里「んっ」

もう片方の端を啜えるよう、声で催促して瞳を閉じた。

ステイツクタイプのチョコ菓子を挟んでいる、ピンクの唇…。

閉じた瞼に伸びている、長くて綺麗な睫毛…。

肩から下がる長い茶髪…。

床につけられた両腕に挟まれ、自然と寄せられている大きな胸…。

紺色のカーディガンの下に着ている白のワンピースは胸元がほんの少しだけ緩く開いており、魅力的な谷間が視界に映る…。

同年代の女子の誰よりも大人っぽくて艶やかで、それでいて年相応な可愛らしさもある悠里がチョコ菓子を突き出して待つ姿はかなりの魅力的であり彼は少しの間見惚れてしまうが、彼女が待ちくたびれるよりも先に顔を寄せ、突き出されていたもう片方の端をそつと啜えた。

(さて、このあとは……)

啜えた菓子を少しずつかじり、彼女との距離を詰めてキスをするだけだ…。彼は自身の鼓動が高鳴るのを感じながら心の中でニヤリと笑い、菓子をかじる。

するとすぐ、自分の右頬に温かい物が触れてきた。

頬に触れていたのは悠里の左手…。

彼女は彼の頬に左手を添えながらうつすら瞳を開き、静かに唇を動かして菓子をかじっていく…。

悠里「っ……んっ……」

カリカリッ……カリッ……

音をたててかじられていく菓子と、だんだんと近くなる悠里との距離。
彼女とピッキーゲームをして、そのままキスをするという事が彼の

目的。

だからこの状況は嬉しくて興奮出来るもののだが、頬に手を添えながら寄せられてくる悠里の表情や息遣いは予想以上に艶やかで、つい身体が固くなる。

また、菓子をかじっていく彼女には一切の迷いが無い……。

何の躊躇いもなくどんどん菓子をかじっては彼との距離を縮め、視線を合わせながらニコニコと微笑むくらいに積極的だ。

10数センチあった菓子はあっという間に短くなり、悠里の吐息が肌で感じられる程の距離になる。そしていよいよ、互いの唇が重なるという時――

悠里「……ふふっ、はいっ、おしまいっ♡」

悠里は軽く首を捻り、啜っていた菓子を折る。

パキッ！と音をたてて折れた菓子をモグモグと食べた悠里はイタズラな笑みを浮かべると、折れた菓子の端を啜えながら呆然とする彼を見つめた。

悠里「もう、そんな顔しないで？これってキスしちゃうギリギリで止めるゲームなんでしょ？だから私はそのルール通りにやっただけよ。まあ、私の方から先に逃げちゃったから、ゲーム的には私の負けなのかもしれないわね……残念」

「……………」

正直、このゲームの正しいルールなんて知らない。

悠里が言うようにキスしてしまうギリギリを見極めるのが正しい遊び方なのかも知れないが、少なくとも彼は悠里とキスをするつもり

でいた。

なので、こんな終わり方では納得がいかない…。

これではただ、悠里にからかわれただけだ。

「……………りーさん……………」

悠里「んっ？何？」

まだ終わらない…終われない…。

啜っていた分の菓子を飲み込んだ彼は悠里の肩に両手を乗せると、完全に油断していた彼女の唇を奪い、その身を強く抱き締めた。

悠里「んっ?!んっ!んん…っ……………ん……………うっ……………」

悠里は突然の事に戸惑い、大きく目を見開いて手足をバタつかせる。

しかし、彼は彼女の事を強く抱いたまま離さない。

その豊満な胸がこちらの胸板にギュツと押し付けられて柔らかな感触がハッキリ感じられるくらいに彼女を抱きしめ、望んでいたキスをする。

自然な流れではなく強引な方法となってしまったが、キスはキスだ。

悠里の背中に手を回して身体を抱き、押し付けられる胸の感触を感じながら頭を撫でる。そのままゆっくり唇を動かしてキスをしていくと悠里の顔から余裕が消え去り、遂には耳まで真っ赤に染まった。

(こういう顔も可愛いな…)

笑顔のままこちらをからかってくる余裕たっぷりな悠里も魅力的だが、こうして戸惑い、顔を赤らめている余裕の無い悠里も可愛くて魅力的だ。

彼は悠里の頭を撫でていた手を移動させ、今度は頬を撫でていく。

何時になく真っ赤に染まっている柔らかな頬を指先で撫でながら繰り返しキスをしていくこと数十秒…悠里は首を捻って唇を離すと、乱れかけていた呼吸を必死になって整える。

悠里「つつ！はあつ…はあつ…！も、もうつつ！！
急にこんなつ…！！…！つつ！！もうつつ！！もうつつ！！」
かなり混乱しているのか、ただひたすらに『もう！』を連呼してジ
タバタする悠里。彼女は背中に回されていた彼の手から逃れた後も
落ち着きなく視線を泳がし、暫くしてから彼の方を向くが、またすぐ
に視線を逸らしてモゾモゾと身を揺らす。

悠里「…ツ…：…う…：…つつ…：…」

「あ…：…：…その、怒ってます…？」

悠里「…別に、怒ってません！ただ少し、ビックリしただけよ」

そう言つてこちらを向いた悠里の顔はまだ微かに赤みを帯びてい
て、瞳も潤んでいる。口では怒っていないと言っているが、実際のと
ころはどうなのだろう…。

苦笑する彼を見つめた悠里は膝立ちをして静かにそばへと寄り、両
肩に手を添えてから耳元に唇を寄せる。

悠里「今度ああいう事したら、お仕置きだからね…？」

ポツリと囁き、悠里はニコリと笑う。

彼女の言う”お仕置き”がどんなものなのか全く想像がつかない
が、

彼女にならお仕置きされても良い…と、心の中でそう思ってしまった
彼は少しばかり重症なのかも知れない…。

~~~~~

それは突然始まった…。

この日、彼は胡桃を自宅へと招いてお家デートを楽しんでいたのだが、突如として胡桃がおかしな事を始めた。

二人で一緒ゲームをして楽しんでたその時、彼女はピッキーというチョコ菓子を片手でつまんでカリカリと音をたてて美味しそうに食べていたのだが、急にその先端を唇で挟んで啜え、もう片方の端を彼の方へと向けて笑い始めた。

「あの…何やってんの？」

最初は触れない方向でいこうかとも考えたのだが、彼女は口に啜えたその一本を食べる事なくただニヤニヤと笑っていた為、我慢出来ずに尋ねる。

胡桃「何って…分かるだろ。」

ほら、一本の菓子を二人で啜えて、両端から食べていくヤツ？

あれを一緒にやってみようぜ」

苦笑気味の彼に尋ねられた胡桃は菓子を啜えたままにも関わらず器用に言葉を放ち、彼がもう片方の先端を啜えるのを待つ。

彼女が突然こんな事を始めたのには、ある理由があった。

きっかけは数日前、校内で女生徒達の会話を盗み聞きしていた際の事…。

一人の女生徒が最近になって新しい彼氏と付き合い始めたらしく、惚気話を友人と思われる数名の女子に話していたのだが、その内容が胡桃の中で引っ掛かり続けていた。

先日、その女子は新しい彼氏とのデート中にピッキーゲームをしたらしいのだが、結局はそのままキスをして甘々な時を過ごしたらしい…。それを聞いた他の女子はキャーキャー騒いだかと思えば、『——ちゃん達ほどラブラブなカップルは他にいない』とか『私もそんなドキドキ味わってみたい』とか、そんな事を言い始める。

まるで自分達が世界で一番のベストカップルだとも思っている



かのような女子生徒の話を盗み聞いていた胡桃は、その時からずっと思っていた。

あたしだって、あんたらに負けないくらい彼とラブラブだ。<sup>コイツ</sup>

ピッキーゲームをしてそのままキスするくらい、なんて事無い。

そこらのカップルなんかより、あたしの方がずっと仲良しなんだから…。

胡桃「ほらっ、早くそっち啜えろって」

「…はいはい、分かったよ」

胡桃を奮い立たせているのは、他のカップルに対する対抗心。

自分達くらい仲が良ければ、ピッキーゲームをした流れでキスを交わすくらい朝飯前。

そう信じてやまない胡桃は自信たっぷりな笑みを浮かべながらゲームの開始を待っていたが、突き出していた菓子先端部分を彼が啜えて顔と顔が向き合った瞬間――

胡桃（や、やばっ…。これ、思ってたよりハズいかも…）

胸の内で燃えていた他のカップル達への対抗心が少しづつ薄らぎ、麻痺しかけていた羞恥心が顔を出す。落ち着いて考えてみると、自分は今かなり恥ずかしい事をしているのではないだろうか？

大体、これまで彼とキスした数だってほんの数回程度…。

まだ全然慣れておらず、恥ずかしいという気持ちやドキドキが抑えられていないというのに、ピッキーゲームをしてそのままキス…なんて出来る訳がない。

今の今まで余裕を保っていた胡桃だが、その表情から一気に余裕が無くなっていく。微かに浮かべていた笑みは消え去り、大きく見開いた瞳は目の前にある彼の顔を直視しないようにと落ち着きなく視線を泳がす。頬はじわじわと紅潮してすぐに赤く染まるが、どれだけ恥じらったところでゲームを始めてしまったという事実は覆らない。

胡桃「っ…く、ちよ…ちよつと……ストップ…」

菓子から口を離さないようにして言葉を放ち、彼から目を逸らす。何てゲームを始めてしまったんだ……。どうしよう……。

ここで口を離し、『やっぱりやめよう』と言ったら彼は素直に止めてくれるだろうか？…いや、自分からやってみようと言いだした手前、ここで中止は提案しづらい。

なら、どうするべきか…。

胡桃（…そうだ、何もキスまでする必要は無いよな？

ギリギリのところまでいったらそのまま菓子を折って、キスするのを避けるのもこのゲームの醍醐味…みたいなもんだよな？）

ピッキーゲームⅡキス…。

そんな考え方をしているから混乱するんだ。

確かにタイミングを逃せばそのままキスをしてしまうかも知れないが、上手いタイミングで菓子を折れば逃れる事も可能。それにもかすると、彼の方から菓子を折ってキスから逃れるという可能性もある。

……と、そんな事を考える胡桃だが、その考えは甘かった。

（なんか……今日の胡桃ちゃんは何時にも増して可愛いような……）

一本の菓子の端と端を咥えた事で至近距離まで接近している胡桃の顔は真っ赤に染まっており、瞳も潤んでいるように見える。菓子の端を挟んでいる唇は綺麗なピンク色をしていて愛らしく、隙間から漏れている吐息はほんのり熱を帯びているようだ…。

彼とのピッキーゲームがスタートした事で困惑している胡桃の表情は意図せず彼の興奮を煽ってしまったのだが、胡桃はそれに気付いていない。ただ、どのタイミングで菓子を折ろうか…という事ばかりを考えていた。

胡桃（…よし。あんまりすぐに折ると逃げたみたいになって悔しいから、ギリギリまで粘ってみよう。それでもし、コイツが逃げなかつたら仕方ない……あたしの方から菓子を折って、負けを認め――

と、考えている時：もうゲームはスタートしていた。

胡桃が目線を右下に落として逃げのタイミングを考えている時、彼は既に口を動かして菓子をかじり、胡桃との距離を詰め始める。

カリカリツ：カリカリツ：

10センチ以上あつた菓子はどんどん短くなって二人の距離は5センチ程まで縮まり、その時になって漸く胡桃は気が付いた。

胡桃「っ!？」

少し目を離れた間に彼の顔がさつきより近くなっていて、今にもキスしてしまいそうな近さになっている…。ギリギリを見極めるならもう少し粘つても良いが、不意を突かれた今の胡桃にそんな余裕は無い。

啜えていた菓子をすぐに折り、そのまま負けを覚悟で逃れようとする胡桃だが、何故か菓子を折った後も首が横に動かない…。

いつの間にか、彼の手が両頬に添えられていたからだ。

胡桃「つつ!?!ちよっ、ストップっ…!!!」

咄嗟にそう告げるが、彼は止まらない。

添えた両手で胡桃の顔を押しさえたまま残りの菓子を一気に食い尽くし、そのまま顔を寄せていく。彼にとってはもう、こんなピツキーゲームなんてどうでも良かった。今はただ：胡桃とキスがしたい。

その思いで頭がいっぱいになった彼は口内に残っていた菓子をゴクリと飲み込んでから、勢いのままに胡桃の唇を奪った。

胡桃「んっ!!んんっ…：…!ん…：…!ん…：…っ…：…」

唇が触れ合う柔らかな感触と温もり…。

そして胡桃の吐息を感じた彼は彼女の頭、髪を撫でながら唇を動かして、キスに没頭する。胡桃はこちらの胸板を弱々しく押しつけてキスに抵抗しているようだが、もう少しだけキスを続けていたい…。

この甘い時間をもっと長くて濃いものにならなうと考えた彼はその

まま胡桃を床に押し倒すと再度唇を奪い、続けて舌をねじ込んだ。

胡桃「んんっ!!んあ…………ちゅ…っ…………ん…んんっ…ツ…」

ねじ込んだ舌はすぐに胡桃の舌を捉え、クネクネと纏わり付く。

熱く潤っている舌と舌を絡ませて唾液を啜るようにしていくと胡桃はビクビクと肩を震わせ、細めていた瞳を潤ませた。

胡桃「ん…っ…!んっ…………んん…っ…………っ♡」

ゲームの延長で唇を奪われただけでなく、床に押し倒されて、舌まで絡まるくらい濃厚なキスをしてしまっている…。凄く恥ずかしくて、心臓なんて破裂しそうなくらいに激しく鼓動しているというのに、胡桃はそれを受け入れていた。

彼を押し退けようとして胸元に当てていた手をだらりと床に落とし、脱力させたまま彼と唇を重ねる…。絡んでくる舌からも逃れようとはせず、自分からも率先して絡ませては甘い声を発した。

彼はそんな彼女の声から感触、全てに興奮しながら唇と舌を動かし、唾液を啜ってその甘さを堪能する。口内に運ばれてくる胡桃の唾液がやけに甘いのは、さっきまで食べていたチョコレート菓子のせいだろうか。

仰向けに倒れている胡桃に覆い被さり、キスを続けて数十秒後…。

どちらの物とも分からない唾液の橋を伸ばしながらゆっくり唇を離した彼が乱れかけていた呼吸を整えるようにしていくと、彼以上に呼吸を乱していた胡桃がそつと床から起き上がり…………

胡桃「っ……………う…っ…!!」

口元に垂れていた唾液を服の袖で拭って、真っ赤な顔をしながら彼の肩をバシバシと叩き始める。特に何を言うわけでもなく、無言のまま肩を叩き続ける胡桃…。

彼は胡桃の打撃を肩に浴び続けながら、やはり彼女はとても面白い娘だなあと、そんな事を思っただけでニコニコと微笑んだ。

## ゆきアフター

### 第一話『たのしい』

由紀「ねえ、誰かと二人きりの時…ドキドキしてたことある？」

悠里「えっ？いや…どうかしら…。なんで急にそんなことを？」

由紀「ええつと…それは…：…な、内緒っ！」

学校から帰宅する道中、由紀が突然そんなことを尋ねた。それがあまりに突拍子の無い物だったので悠里は戸惑ったが、由紀の為、その質問と真剣に向き合う事にする。

悠里「無くはない…：…かなあ」

由紀「じゃあさ、その相手って誰なのか聞いてもいい？」

悠里「それはだめっ、内緒よ♪」

由紀「むう…：…そっか」

出来ればその人物が誰なのか知りたかったのだろう。由紀は少しだけ残念そうな顔を見せたが、少なくとも…：悠里がそのドキドキを経験したことがあると知れただけでも満足だった。

由紀「その相手の人ってさ、男の人…：…だよな？」

悠里「さて、どうかしらね？」

由紀「うう…：…りーさんイジワルだよお」

悠里「ふふっ、ごめんなさいね」

答えをはぐらかされ、由紀は拗ねたように頬を膨らます。悠里にとって、彼女をこうしてからかうのは日常的な事だった。しかし、そんな悠里だから分かる…。今日の由紀は少し、いつもと様子が違っていた…。

由紀「……………」

悠里「ゆきちゃん、どうかしたの…?」

そう尋ねたのは由紀が何時もより元気がなく、まるで何かに悩んでいるかのようなことから。そしてやはり悠里のその予想は当たっていたようで、そつとこちらへと向いた由紀の顔はどこか悩ましかった。

由紀「りーさん…わたしね、もしかしたら…もしかしたらだよ?」

悠里「…うん?」

由紀「もしかしたら…わたしっ…………」

由紀は歩道の上に立ち止まり、少し顔を俯ける。俯けたその顔はみるみる真っ赤に染まっていき、それを見た悠里は全てを察した。

悠里「あら…あらあらっ。ゆきちゃんも少し大人になったみたいね」  
♪

由紀「わ、わたしはとづくに大人だもんっ!!」

悠里「ふふっ、そうね…。で、ゆきちゃんの気になる相手は誰なの?」

由紀「え…えつとね…………」

悠里が尋ねると、由紀は少しずつそれを語り出す…。話によると、彼女が気になっているのは悠里も良く知るあの”彼”らしい。彼女は顔を真っ赤に染めながら、悠里にそうなるまでの経緯を話した。

由紀「この前、あの人と一緒にプール掃除したんだ…。その時はわりと二人きりの時間が多くて…お喋りしたり、ふざけあったりしながら、一緒に掃除してたの…………」

悠里「へえ、そうだったの」

あの時の事を悠里へと話しつつ、由紀はゆつくりと歩き出す。悠里は初めて聞くその話に興味を向けながら、彼女の隣を歩いていった。

由紀「でね…その掃除って元々はわたし一人でやる予定だったのに、あの人は最後まで付き合ってくれたんだ。文句も言わずに…ずっと…ずっと…」

悠里「……………」

由紀「それでね、プール掃除が終わった後、二人で少し休憩したの。その時、ちよつとあの人の手を握ったら…なんかこう、体がすっごく熱くなつてね…。頭もくらくらつてして、胸もドキドキつてして…わたし、訳が分からなくなつちやつて…」

当時の事を思い返しているのか、由紀の頬は真っ赤に染まり、瞳もそれとなく潤み始めていく。それを見た悠里は彼女の気持ちが何なのかをハッキリと確信し、その頭を彼女のトレードマークである猫耳帽子の上からそつと撫でた。

由紀「つ…：…りーさん」

悠里「そこまでいったら、もう間違いなさそうね。…で、ゆきちゃんはこれからどうしたいの？」

由紀「どう…つて？」

悠里の目をじつと見つめ、由紀はその首を傾げる。彼女自身もその気持ちに向き合いたいと思っっているようだが、初めての気持ちなのでまだ戸惑いが大きいのだろう。悠里はそんな彼女の手をそつと握り、前を見て歩きながらそれを告げた。

悠里「これから、彼とどうなりたいたいのかって事よ。これまでみたく友達のままでもいいのか、それとも…自分の気持ちと向き合つて一歩

進むのか…」

由紀「…っ、一步…進む…」

悠里に握られた手をぎゅっと握り返し、由紀は彼女のあとをゆつくりとついていく。自分が彼と友達以上の関係になるなど、これまで想像もしたことが無かったので由紀は激しく戸惑った。

由紀「…どっちが良いのかな？」

悠里「う〜ん…ごめん、こればかりは私が決めることじゃないわ。ゆきちちゃんが自分でしつかりと考えて、悩んで、それから答えを出すべきだと思うの」

由紀「……………」

由紀は黙りこんでしまい、握ったその手から徐々に力が抜けていくのが分かった。少しばかり厳しい言い方をしてしまったかと悠里は不安になるが、こうする事が彼女の為だと思った。しかし、それでも彼女の事が心配で仕方がない悠里は少し過保護なのかも知れない…。

悠里「ゆきちちゃん…大丈夫？」

不安なあまり立ち止まり、彼女の顔を覗き込む…。そうして覗いた彼女は目をぎゅっと閉じたまま深呼吸をしており、息を吸い…そして吐く…。一連の行動を三回程繰り返してから彼女は瞳をパチツと開き、にっこりと微笑んだ。

由紀「うんっ！わたし…すっごく考えてみる…。すっごく考えて、すっごく悩んで…それから、やるべき事をやるっ！」

悠里「……………うん、がんばってね♪」

由紀の眩しい笑顔を見て安心した悠里は自分も笑顔を返してから彼女の頭をもう一度撫で、手を繋ぎなおしてから再び帰り道を歩く。由紀は自分が思っていたよりもずっと強い娘だった…。さっきの笑



顔を見た悠里はそう思うが、直後にポツリと発した彼女の言葉を聞き、それは間違いだったと知る…。

由紀「リーさん…わたしがあのひとと一歩進む事を選んで、その結果失敗しちゃったら…：出来るだけ慰めてくれる？わたし、あのひとにフラれたら…きつと凄く泣いちゃうから…：だからっ…：…」

悠里「ゆきちちゃん…：…」

由紀ならどんな結果も受け入れ、きつとすぐに笑える強さがある。そう思っていたが、それは大きな間違いだった…。彼女は今も不安で潰れそうなのに、それを笑顔で必死に堪えているのだ。

悠里「…うん。いっぱい、いっぱい慰めてあげる。私は大丈夫だと思うけど、もしそうなっちゃったら…：ゆきちちゃんのお家に泊まりに行こうかな？」

由紀「ほんとっ？えへへ…：じゃあフラレても良いかなあ〜♪」

悠里の肩にポスツと身を寄せ、由紀はニヤニヤと微笑む。これから彼女がどんな行動を取るのか、そしてその結果がどうなるのか…：悠里には分からない。ただ、彼女がどんな道を選び、結果どうなるかと…：自分だけはそばにいよう…。悠里はそう思い、彼女の手を強く握った。

~~~~~

数日後…。

放課後の校舎……。由紀は一人、屋上へと続く階段の途中に立っていた。ただでさえここに来る生徒などいないが、放課後という事もあり周囲からはまるで人の気配がしない。聞こえる音と言えば、外で降る雨の音くらいだろう。由紀は階段の手すりに手をかけながら、雨降る窓の外の風景を眺めていた。

由紀「……………はあ」

雨が降っているからだろう。窓から眺めたグラウンドには運動系部員達の姿もない。まるで今の学校に自分一人しかいないような気がして心細くなるが、由紀は頬を軽く叩いてしつかりと気を引き締めた。

由紀（リーさん…わたし、決めたよ。ちゃんとがんばるから、もしダメだったら…優しく慰めてね…）

少し前、由紀は彼にあることを伝えた。それは放課後、自分がこの場に待っているから来てほしいということ…。それを聞いた彼は不思議そうな顔をしていたが、それでもここに来る事を約束してくれた。

由紀「……………あっ」

外を眺めて待っていると、下の階からこちらへ向かってくる足音が由紀の耳に入る。今のこの時間は生徒も少ないし、何よりここに来る

人間などそういない。となれば、この足音が誰のものなのかは考えるまでもなかった。

由紀『一歩ずつ、その足音が近寄ってくる……。近付く度にドキドキして、少し不安にもなるけど、それでも……がんばるって約束したから……』

一歩、また一歩と迫る足音……。その足音の正体である人物はそこで待っていた由紀を見るなりにつこりと微笑み、窓際に立つ彼女のそばへと寄った。

「お待ちせ」

由紀「ううん、そんなに長く待ってないから平気だよ」

由紀の言葉を聞いて安心したような表情を浮かべ、彼はそばにある階段の段差へと腰掛ける。直後、彼はカバンを横に置いて由紀に尋ねた。

「……で、何の用かな?」

由紀「……えへへ、いきなりだなあ」

「っ?何か問題が?」

ここへ呼び出した用を尋ねると、由紀は照れたように笑い出す。その笑顔はいつもの彼女のものと比べるとどこかぎこちなく、違和感のような物があった。

由紀「ううん、そんなことないよ。ただ、ちよつと勇気のいる事だ

から…」

言いながら由紀は彼の前に立ち、その視線を落ち着きなく泳がせる。彼女はそのまま彼の肩にそっと右手を置くと、ゆっくりと深呼吸を始めた。

由紀「すう…：…はあ…：…ちよつとだけ待ってね…：。すぐ、伝えるから…」

二度、三度、四度と深呼吸を続け、そうして彼女はキリツとした視線を彼へと向ける。深呼吸を終えた彼女の顔はいつもより強気なようにも見えるが、やたらと頬が赤かった。

由紀「よしっ!!もう大丈夫っ!じゃ…：…よく聞いててよ?あとで聞こえなかったらとか言われても知らないからねっ!?!」

「う、うん…：…まあ、分かったよ」

何を言うつもりなのかと少し戸惑いつつ、彼は目の前にいる少女：丈槍由紀の声に耳を澄ます。直後、由紀は彼と真正面から向き合いそれを伝えた…。

由紀「わたし、キミの事が好きだよ…」

ハッキリとしているが、どこか震えている声で由紀がそれを告げる。好きというそれはきつと友達としてのものだ：彼は一瞬そうも思ったが、どうにも違うらしい。

「わたしはいつも迷惑ばかりかけてるのに、それでも呆れることなく付き合ってくれる…：優しいキミが本当に大好き。因みに言っておくと…：友達としてっただけじゃなく、男の子としてのキミが好きって意

味だからねっ?」

「…マジですか?」

由紀「まっ、マジですっ!!わたしって子供っぽくて、誰かを好きになったのもキミが初めてだけど、こんなわたしが彼女で恥ずかしくないなら、付き合ってほしい…かな…」

言っついて恥ずかしくなってきたのか、由紀は徐々に視線を下げていく…。彼はそんな彼女の顎を右手で掴んで無理矢理にその目を見つめると、確認するかのよう尋ねた。

由紀「っ…う…」

「付き合ったら僕とデートしたり、キスしたりするんだよ?そういうの平気なの?」

由紀「で、デートはいっぱいしたいっ!!でも、チューはちよっと待ってくれる…?けっこう…はずかしいので…」

照れたように笑いながら、由紀は顎に当てられた彼の右手を自身の両手で掴む。そうしてからまたにっこりと笑う彼女が何時にも増して可愛らしく見えてしまい、彼は今度は自分から目を逸らした。こんなにも可愛らしい笑顔を見せる娘が自分のそばにいてくれるなら、それはどれだけ嬉しいことだろう。彼は今一度彼女の目を見つめ直し、彼女の告白に対する返事をポツリと呟いた。

「じゃあ…付き合いますか」

由紀「っ…うんっ!!」

彼が小さく呟くと、由紀は掴んだ彼の右手を嬉しそうに振る。子供のように無邪気な笑顔にも見えるが、それは告白が成功して本当に安心したからこそその笑顔なのだろう。二人はそのまま下駄箱まで歩き、靴を履き替えるタイミングで彼が困ったような表情を向けた。

「その…由紀さん？一旦、手を離そうか…？」

由紀「あつ、ごめん…。嬉しくて離すの忘れてたよ♪」

こうして見ると、やはり由紀は他の生徒と比べて子供っぽい。しかし、そんな娘が勇気を振り絞って自分なんかを好きだと言ってくれた…。そう考えるとなんだか照れくさいが、嬉しいという気持ちの方がそれを大きく上回っていた。

「…じゃ、帰ろうか」

靴を履き、彼は由紀を見つめる。由紀はまた嬉しそうに笑いながらスタスタと迫り、かと思えば外の様子を見て焦ったような顔を始めた。

由紀「あつ!!傘忘れたっ…」

「はあ…仕方ない。それほど大きいんじゃないけど、一緒に入っとうか？」

持っていた傘を広げ、彼は由紀がそばに寄るのを待つ。彼の持つ傘は確かに大きくはなかったが、由紀はそれに甘えることにした。何故なら……

由紀「今のキミはわたしの彼氏なんだもんね？なら、これくらい良いよね？」

「んん、良いのではないでしょうか。さて…じゃあ行きますかね」

由紀「うんっ♪」

開いた傘を出来るだけ由紀の方へと傾け、彼は雨の中をゆっくり進む。記念すべき日には少々天気が悪いが、それでも隣にいる由紀

の笑顔はいつも通りキラキラと輝いていた。

由紀「そう言えば確認なんだけど、キミはわたしのこと好き？」

「えっ、さあ…どうだろう…」

由紀「つぐ!?好きでもないのに付き合ったの…?」

彼の言葉に驚き、由紀が一步後ろへ下がる…。それによって傘の守備範囲から離れた彼女を見て彼は慌てたように傘を動かし、深いため息をついた。

「つ…:…はあ、嫌いだったら付き合わないって…」

由紀「じゃあ、つまり…:…好きなの…?」

(…やけにグイグイくるな)

恐らく、由紀は彼がそれを口に出す瞬間を待っているのだろう。彼もようやくそれに気づいたのだが、こうして待たれると中々言い出せない。

由紀「えへへっ…:…照れ屋さんだ〜♪」

躊躇う彼を見て由紀はイタズラな笑みを浮かべ、彼の頬を指先で小突く。その子供のような態度や仕草に少しばかりムツとした彼は、頬を小突いてきたその細い手を強く掴んだ。

ガシッ!

由紀「いつ…:…!?ご、ごみんっ!お…:…怒った…?」

腕を掴む彼の目が少し怖く見えてしまい、由紀は冷や汗を流す。彼はそんな由紀の慌てたような目を真っ直ぐに見つめながら、ハッキリとそれを告げた。自分が彼女に抱いている、嘘偽りのない気持ちを…

「…怒ってない。愛してるよ、由紀」

由紀「っ!!…ふああっ!」

次の瞬間、由紀はよく分からない声をあげながら目をキラキラと輝かせる。その顔は耳まで真っ赤に染まっており、彼はおかしそうに笑った。

「さて、これで満足だね?」

由紀「まっ…満足です…!す、スゴかった…!りーさんに報告しないと…!」

由紀はカバンに手を伸ばし、取り出した携帯をいじり始める。どうやら今のやり取りをメールで悠里に伝えるらしいが、それは彼にとつてたまったものではない。

「ちよっ…:ストップ!!まったく、何をするか分かったもんじやないな…:この娘はっ!」

由紀「うわっ!?!むうっ…:携帯返してよっ!」

「返したらろくでもない事をりーさんに言うでしょう!?!」

由紀「いつ、言わない言わないっ!…:さっきのは冗談だったの!!」

「本当にっ?」

由紀「ほんとっ!」

ならばと思いい、彼は由紀から奪ったその携帯を彼女に返す。由紀はため息をつきながらその携帯をカバンへとしまい、また嬉しそうに笑った。

由紀「へへへ…:♪キミに呼び捨てにされたの初めてで、すっごくド

キドキした♡これからは…ずっとそうやって呼んでくれるの？」

「あく……まあ、たまには…」

由紀「たまにかあ……そっかあく♪」

それならそれで嬉しい……。由紀はヘラヘラと笑い、彼の肩にそっと身を寄せる……。以前にもこんな事をしたことが何度かあったが、あれは友達としてのスキンシップだった。でも、今のこれは恋人としてのスキンシップ……。そう思うと自分が大人になったような気がして、少し嬉しかった。

由紀『晴れの日も雨の日も、毎日がキラキラとしていてとても楽しい』

このような雨の中でも、二人でいるだけで幸せを感じる。これが恋なのだ実感しつつ、由紀は彼と共に歩いていった。心残りがあるとすれば、告白が成功したので悠里が泊まりに来る事は無くなったということだろう。それを惜しく思いながらも、由紀は笑う。隣を歩く彼の横顔を覗きながら、幸せそうに……。

由紀『わたしは最近、学校と……彼の事が好きだ』

第二話 『いろんなこと』

由紀「ふんふんふくん♪」

るるんとした足取りで歩く一人の少女……。水色のパーカー、そしてピンクのミニスカートを身に纏った彼女……。丈槍由紀は何やら楽しげに微笑みながら歩を進めていた。今日は彼女にとって特別な日……。もつとも、彼女自身ですらつい先日までは今日が特別な日になるとは思ってもいなかったのだが……。

由紀「おっ？……えへへっ♪」

住宅街の曲がり角を曲がった先……。そこである人物と待ち合わせをしていた由紀は、たどり着いたそこにその人がいたのを見てまた嬉しそうに微笑む。彼女はニコニコと子供のような笑みを浮かべながら、これまた子供のようにその人へと抱きついた。

ギョツ……！

由紀「おまたせっ！」

「いや、こっちも今ついたばかりだから気にしないで」

由紀が抱きついた人物……。彼は背後から誰かに抱きつかれた事に一瞬驚いてはいたものの、それが由紀だとすぐに気が付く。彼の知っている人物でいきなりこんな事をしてくる人間は、由紀くらいしかないからだ。

由紀「えへへ……。わたしね、今日、キミとお出かけするのが楽しみで仕方なかったんだっ♪」

抱きつくの止め、嬉しそうに微笑む由紀……。よく見れば、彼女の

目の下には少しだけくまが出来ている。恐らく、今日の事を楽しみにしていたあまり昨夜はあまり寝られなかったのだろう。

「楽しみにされてたのは嬉しいけど、はたしてその期待に応えられる程のものになるかどうか…。今日は適当に街をブラブラするだけだし…」

由紀「別にそれでもいいよ。わたしはただ、キミとデート出来ることが楽しみだったんだから♪」

その言葉を聞き、彼はホッと一安心する。ただ街中をブラブラするだけのデートなど楽しんでもらえるかどうか…。少し不安だったからだ。

由紀「楽しみすぎて…あまり寝られなかったもん！」

「…そっか」

微かに赤く充血している瞳や、その下にあるくまがそれを物語っている。これだけ楽しみにしていてくれたんだ…。出来るだけ楽しい思いをさせてあげたい。彼は由紀の笑顔を見てそんな事を思い、ゆっくりと歩き出した。

「じゃあ、今日は楽しもうか」

由紀「うんっ！」

コクリと頷き、由紀は彼の隣を歩く。彼と付き合って二週間ほど経ち…。今日は念願の初デートだ。どこに行こうと、何をしようと、彼と一緒に楽しい思い出が作れるに違いない。こうしてただ二人並んで道を歩いているだけの事ですら嬉しくて、由紀はニヤニヤが止められなかった。

~~~~~

二人はその後、バスに乗って街へと向かった。街までの距離はそう遠くないのでバスに乗っている時間も大した事はないのだが、昨夜あまり寝られなかった事が今になって響いたのか…由紀は隣に座る彼の肩に頭を傾けて眠ってしまった。

由紀「すう……すう……」

(完全に寝ちやってるな…)

寝息をたてる由紀の寝顔はとても心地よさそうで、見ていただけで微笑ましい気持ちになる。普段からどこか幼い彼女は寝顔すらも子供のようだが、長く伸びたまつげや、花のような甘い香りをさせるサラサラとした髪…。それらはしっかりと女性らしさを帯びていて、彼はほんの少しだけドキドキした。

(…可愛い寝顔)

由紀の寝顔を間近で見つめている内、ふとその唇に視線がいつてしまふ…。付き合ってから二週間経ったが、二人はまだキスなんてしていない。もつとも、由紀が恥ずかしがるだろうと思っただけであって、彼自身はしたいという気持ちを持っていた。

由紀「…すう……すう……」

ほんのり赤く、柔らかそうな由紀の唇…。寝てる間にキスをしてみたい気もするが、もしもバレてしまったら由紀は怒るだろうか。それとも、ただ恥ずかしがるだけで許してくれるのだろうか。幸い、車内の乗客は彼ら以外にはいない。そっとしてしまえば、運転手に気付かれる事もないだろう…。

(……………ま、いっか)

チャンスを前にして少し悩んだが、やはり初めてのキスは彼女が起

きている時にしたい。彼は寝ている由紀の髪を優しく撫でながら時間を過ごし、目的地に着く少し前に彼女を起こした。

「由紀ちゃん、起きて」

由紀「んく……ふあ……あつ……ごめん、ねちゃった」

ゴシゴシ目を擦り、由紀はアクビをする。ほんの十分弱しか眠れなかったと思うが、これで少しは眠気が取れただろうか…。

由紀「…ねえねえっ」

「ん？なに？」

由紀「わたしが寝てるとき、チューしようとした？」

「なっ……！」

もしかして寝たフリをして、ずっと様子を窺っていたのだろうか…。そう思わせるくらいに鋭い言葉を聞き、彼が慌てた反応を返すと、由紀はニヤニヤとイタズラに笑う。

由紀「えへへ、冗談だよ。こういう会話、カップルって感じがしていいね〜♪」

「は、はあ……そうっすね……」

どうやら寝たフリをしていた訳ではなく、ただの冗談だったらしい。しかし先ほど、本当にキスをしようかと悩んでいた彼は額に冷や汗をかき、由紀からそつと目を逸らした。

~~~~~

そうして目的地である街の中心部へとたどり着き、二人はバスを降りる。大した計画を立てていなかった彼はこれからどう動くべきかと頭を悩ませたが、その結果……まずは少し早めの昼食を取ることにし

た。二人はたまたま目に入ったレストランへと入ってそれぞれが好みの物を注文し、その待ち時間に会話を楽しむ。

由紀「おなかすいた〜。はやくこないかな〜」

「…そういえば、僕らの事って誰かに言った？」

ふとそんな事が気になってしまい、彼は尋ねる。付き合ってから学校で接する時間も少しだけ増えたが、基本的には以前とそこまで変わっていない。自分達から『付き合い合っている』と言わない限り、悠里や胡桃達も二人がカップルだとは気付かないだろう。

由紀「えつと…リーさんには少し相談にのってもらったりしてたから、キミと付き合うことになった次の日に言ったよ。でも、くるみちゃんとか…みーくんにはまだ言っていない。なんか…照れちゃって…」

「まあ…そうだね」

友達に話すのは照れてしまう…。その気持ちはよく分かるが、少しだけ意外だった。由紀の性格から考えるに、次の日辺りにはニコニコしながら友達全員に話しているかと…彼はそう思っていたのだ。

由紀「い、言ったほうがいいよね…？くるみちゃんも、みーくんも…大切な友だちだし…。驚かれちゃう…かもだけど…」

「因みに…リーさんは何て言ってた？」

由紀『おめでどう』って言ってくれたよ♪」

「おお、そっか」

言われてみればここ最近、学校で目が合う度に悠里はニヤニヤと意味深な笑みを浮かべていた気がする…。あれは彼が由紀と付き合い合っている事を知っていたからこそその笑みだったのだなど、彼は一人納得

した。

由紀「また今度、くるみちゃん達にも言おうか？少し恥ずかしいけど…黙ってるのもなんかわるいもんね」

「…そうだね。隠しておくような事でもないし」

彼が言うのと由紀はニツコリと微笑み、静かに頷く。直後に注文していた料理がきた為、二人はそれを食べながら何気無い会話をかわし、食事を済ませていった。

~~~~~

食事を終えた二人はその後街の中を宛もなく歩き回り、様々な店を見て回る…。由紀が喜ぶかと思ひ、可愛らしい服の売っている店に行ったりもした。さすがに年頃の女の子というだけあり彼女は楽しそうに服を見ていたが…その店の後に行った雑貨屋にある、クマのぬいぐるみを見付けた時の笑顔はよりキラキラとしていた。

由紀「うわあ〜♪かわいく〜っ♡」

抱えたそれはテイベアにも似た、クマのぬいぐるみ。しかし、そのクマの口元には立派な髭が生えていた。

「気に入ったの？」

由紀「うんっ！かわいいじゃんっ！すっごいかわいいじゃんっ!!」  
ぬいぐるみをギュツと抱きしめ、由紀は興奮した様子だ。よく見ればそれほど高価な物という訳ではないようだし、何より由紀の喜ぶ顔が見たい…。

「それ、買ってあげるよ」

由紀「えっ？いいのっ？ほんとにいいのっ!？」

「いいよ。せっかくの初デートだし」

彼が頷き返事を返すと、由紀の目がキラキラとしていく。彼女はとても嬉しそうな顔で微笑むと、彼と共にレジへと向かい、そのぬいぐるみを購入した。

由紀「えへへ…えへへっ…かわいいなあ…♡」

買ってから店から出ると、由紀はそのぬいぐるみが入っている袋を覗いてニヤニヤする。彼女がこれだけ喜んでくれたなら買って良かったと、彼も嬉しそうに微笑んだ。

~~~~~

そして時間はあっという間に過ぎていき、辺りが夕焼け色に染まり出す…。二人は再びバスに乗り、帰路についていった。

由紀「今日は楽しかった…また、デートしようね？」

バスから降り、家まであともう少しという頃。由紀は隣を歩く彼の顔を覗きこむ。今日一日彼とデートしてみて、やはり自分は彼の事が好きなのだと再認識した。

「次は何時にしようか？また…次の休みの日にでもする？」

由紀「うん、そうだね♪えへへ、楽しみだな」

そう呟き、由紀は手に持っている袋の中を覗く。袋の中にあるのは、彼に買ってもらったクマのぬいぐるみ。何度見ても、その愛らしさについニヤけてしまう。

由紀「……ねえ？」

「うん？どうした？」

由紀はぬいぐるみを見ていたかと思うと、急に彼の目を見つめ出

す。その顔が何時になく真面目そうな物だったので、彼は立ち止まっ
てから聞き返した。

由紀「あ、あのねっ…今日、ほんとにすっごく楽しかったんだけど
…その…えっと…」

ぬいぐるみの入った袋を揺らしながら、由紀は顔を少しだけうつむ
ける。彼女はモジモジとした様子を見せると、直後再び彼の目を真っ
直ぐに見つめた。

由紀「わたし…キミにお子さまだっと思われてるかも知れない…
でもね、わたしも一応、ちよつとは大人の女の子だから…。だから…
ほんとはね…キミともつと手を繋いだり、他にもいろいろ……したい
んだよ…?」

「…由紀ちゃん」
由紀の顔が、みるみる真っ赤に染まっていく…。正直に言えば、彼
は由紀の言う通りの事を思っていた。由紀は子供っぽいから、まだ普
通のカップルがするような事は出来ない…。しかし、彼女は思っ
ていたよりも大人だった。彼の事をしっかりと愛していて、もつと触れ
合いたいと思っていたのだ…。

由紀「今日は…今から手を繋いだまま、おうちまで送ってくれるだ
けでいいの…。でも、次のデートの時は…わたしももつと頑張るから
…」
「……………」

由紀「こ、これからは…いろんなこと…しようね…?」
真っ赤な顔でとても恥ずかしそうに、しかし真剣に…由紀はその言
葉を伝える。彼女がこんな事を言ってくれるなんて思ってもいな
かったが、彼にとってその言葉は嬉しいものだった。

「これは…次のデートが楽しみだな」

由紀「そう…だね…」

彼が手を握ると、由紀は照れたように顔をうつむける。子供っぽいところもあるが、それも含めて彼女の魅力だ。他の娘と比べると幼く見えるが、大人な面もちゃんとある。こんな彼女をこれから大切にしていこうと胸に決め、彼はその小さな手を強く握った。

第三話 『もう子供じゃない』

夕陽に照らされる校舎：一日の授業が終わり、部活のあるものはそれぞれの活動場所へ。帰宅部のもはそのまま家へ帰る準備を進める。三年の教室にいる彼もまた帰宅部であり、今まさに教室を出ようとしているところだ。

「…さて」

由紀「支度終わった？じゃあ一緒に帰ろよ」

「ああ、お待たせ」

彼がカバンを手にしたのを見計らい、由紀は笑顔で歩み寄る。付き合いだしてからというもの、こうして二人だけで帰る事も多くなってきた。とはいえ、人目につくので校舎からある程度離れるまでは多少お互いの距離を空けているが…。

「……………」

由紀「…ねえ、もういい…よね？」

校舎を出てある程度歩き、辺りに他の生徒が見えなくなってきた頃、由紀が目を泳がせる。照れたようにチラリと目線を向ける由紀を見て彼は微笑み、そっと手を差し出した。

「はい、どうぞ」

由紀「えへへ…ありがとう」

ギョツ…

由紀は少しだけ恥ずかしそうな…それでいて嬉しそうな微笑みを浮かべ、隣に立つ彼の手を握りしめる。彼女の手は微かに熱をもっている、緊張しているようだ。

「手繋ぐの、恥ずかしい?」

由紀「す、少しだけ…。でも、うれしいって気持ちもあるから…平気だよ」

「そっか…ならよかった」

ギユツ……

由紀「あ…う……」

道を進みながら手に力を込め、由紀の手をより強く、しっかりと握る。すると由紀は恥ずかしそうに顔を俯け、普段とは別人のように大人しくなってしまった…。

由紀「……ん……」

(……ああ、可愛いな)

付き合う前の由紀なら、手を握ったくらいではこうも動じなかっただろう…。しかし今の由紀は彼に強く手を握られ、顔を真っ赤に染めながら黙り込んでいる。彼の事をそれだけ意識しているのだろう。いつになくしおらしい彼女はやたらと可愛らしく見えてしまい、彼は手に一層の力を込めた。

ギユ…ツ…

由紀「あのっ…手…ちよつと痛いかな…?」

「えっ?あ、ああ…ごめん」

つい込めすぎてしまった力を緩め、今度は優しく彼女の手を握る。由紀も今度の力加減には満足したようで、ニツコリと嬉しそうに微笑む。

由紀「もう、女の子は大事にしなきゃだめだよ?わたしはキミの彼女なんだから、特に大事にしてね!」

「…わかったよ」

由紀「えへへ、よろしいっ！」

握っている手を揺らし、由紀は鼻歌を歌いだす。どうやら、今のがきつかけでさつきまでの照れがある程度は消えたらしい。

由紀「ふんふんふん♪」

「……………」

ご機嫌な由紀に手を揺られながら歩くのも良いが、どちらかというとききまでのしおらしい彼女と歩いている方がよりカップルらしい雰囲気です。鼻歌混じりに歩く彼女を見ているとまるで妹と手を繋ぎながら歩く兄のような心境になってしまいい、なんとも複雑な気持ちになる…。

(これはこれで良いんだけど、何か違うような…)

やはり、これは違う気がする。カップル揃っての帰路というのはもつと…もつとドキドキするはずだ。

「…その公園、ちょっと寄っていい？」

由紀「ん？別にいいよ」

通り道にあった公園が視界に入り、彼は何となく歩を進める。夕方の園内には人がおらず、滑り台やブランコなどの遊具も夕陽に照らされて影を伸ばすだけだった。

由紀「で、何するの？遊ぶの？」

「いや…ちょっと休憩に來ただけだよ」

遊具を見つめる由紀の腕を引き、彼はそのまま園内の隅にあるベンチへ腰かける。由紀もまた彼の隣に腰かけ、二人で夕焼け空を見上げた…。

由紀「空、真っ赤だね」

「…そうだね」

今日はいつもより日が暮れるのが早く、空は真っ赤に染まっている。まだそれほど遅い時間でもないのに、もう少して夜になってしまっている。

由紀「……ねえ、ちよつと聞いていいかな？」

「なに？」

由紀「えつとね…キミは、わたしみたいな娘が彼女でよかったの…？」

ベンチの上にあつた彼の手に自分の手のひらをそつと重ね、由紀は呟くような声で尋ねる。付き合ってから数週間…デートは何度か経験したが、それでもまだ少し不安があるらしい…。

「…ああ、よかったと思ってるよ」

由紀「う、嘘ついてない…？」

「ついてない…。急にどうした？」

さつきまで楽しげに微笑んでいた顔が暗いものになっていたため、彼も不安になる。しおらしい雰囲気由紀は好きだが、今の由紀はただ元気がないだけ…しおらしいとは違う。

由紀「わたし子供っぽいから、デートしてもつまらないんじゃないかなって不安で…。キミだって、ほんとはリーさんみたいな大人っぽい女の子がよかったりするでしょ…？」

「そんな事ないって。たしかに、リーさんは大人っぽくて魅力的だけど、由紀ちゃんだって負けてない」

由紀「ま、負けてるよっ！わたしとリーさんじゃ、全然違うもん…」
「違っても良いんだよ。大人っぽさが魅力のリーさん…明るくて元気なところが魅力の由紀ちゃん…。僕は明るい娘が好きだから、由紀ちゃんと付き合うことにした。由紀ちゃんみたいな娘と付き合えて、本当によかったと思ってる」

由紀「ん、んん…」

出来るだけ分かりやすいように気持ちを伝えたつもりだが、由紀は

まだ、自分では彼に釣り合わないと思んでいるようだ。彼女は顔を俯けたまま、彼の手を弱々しく握っている…。

(難しいもんだな、気持ち伝えるってというのは…)

ため息をつき、どうするべきか頭を悩ませる。彼女は何故こんなにも悩んでいるのだろう…。どうすれば、しっかり気持ちが伝えられるのだろう…。そうこう悩む内、由紀が初デートの時に言った言葉を思い出した…。

由紀『わたし…キミにお子さまだって思われてるかも知れない…。でもね、わたしも一応、ちよつとは大人の女の子だから…。だから…ほんとはね…キミともつと手を繋いだり、他にもいろいろ……したいんだよ…?』

初めてのデートがあと少しで終わるという時、彼女は顔を真っ赤にしながらそう言った…。思えば、この言葉がヒントだったのかも知れない。由紀が子供っぽいから中々手を出せずにいたが、その気遣いがかえって彼女を不安にしていたのかも知れない…。

(そうか、もう少し積極的になってやるべきだったな…)

あれからも何度かデートをしたが、手を繋ぐ以上の進展は無かった。恐らく、由紀はもう少しだけ彼に踏み込んできて欲しかったのだろう。自分からは恥ずかしくて、動けそうにないから…。

「…由紀、こっち向いて」

由紀「えっ?」

不意に呼び捨てで呼ばれ、由紀は思わずそちらへと顔を向ける。次の瞬間、彼は由紀の顎に手を添えて一気に顔を寄せると…そのまま静かに唇を重ねた。

由紀「んっ…!!?んんくっ…!!」

突然の事に驚いた由紀は目を見開き、ベンチに座ったまま手足をバタつかせる。が、彼はそれでも唇を離さない。柔らかく、温かな由紀の唇の感触…それを一秒でも長く味わっていたかった…。

由紀「ん…っ…んん…っ…」

キスをして十数秒経っただろうか…。最初は手足をバタつかせていた由紀も次第に落ち着きだし、今は瞳も閉じて大人しくしていた。

(一か八かだったけど、これでよかったみたいだ…。にしても、由紀の唇が柔らかくて、離すに離せない…!)

うつすらピンク色の唇はぷるりと柔らかく、こちらの唇に吸い付くような感触だ。彼はそんな感触に夢中になってしまい、中々唇を離せない。そんな時、由紀が息継ぎをするべく唇を離しかけたが…。

由紀「っ…ぷは…っ!…うん…!!?ん…んっ…」

彼は由紀の後頭部に手を添え、離れかけた唇を再び重ねた。由紀はそんな状況でも息継ぎをしようと唇を動かしており、その度に彼女の甘い吐息が彼の口へとかかる。

由紀「ん…あっ…!う…ん…うう…!」

パクパクと動く彼女の唇を追うようにして唇を動かす内、キスが自然と激しくなる…。口内では互いの唾液が混じり合うが、由紀のが含まれていると思うとその唾液すらも甘いような気がして、彼は夢中でキスを続けた…。

由紀「うう…んっ…!く、苦しい…っ!!」

「っ…は…っ…ごめん」

息に限界がきた由紀は堪らず彼を押し退け、キスを無理矢理に中断する。彼女は乱れた息を『はあはあ』と整えつつ、口元に垂れていた

ヨダレを手の甲で拭った。

由紀「はあっ…はあっ…」

「……大丈夫?」

由紀「大丈夫じゃないよ!キミがいつまで経ってもチューを終わらせてくれないから、すっごく苦しかったんだよ!」

そう言っただけで怒る由紀はやはり子供のようで、迫力がまるでない。しかし、こういう子供っぽいところも由紀の良いところだ。

「悪かったよ…。でも息くらい鼻ですればよかったんじゃ…」

由紀「鼻…?あつ、そっか!!」

「…気づいてなかったのか」

驚いたように目を丸くする由紀を見て、彼は苦い笑みを浮かべる。そう言えば、キスをしている時の彼女は確かに口だけで呼吸をしようとしていた。突然の事だったので鼻呼吸というものを忘れていたらしい。

由紀「で、でも…ほんとに驚いちゃった…」

「急にごめん…。由紀の事を愛してるって伝える方法が他になくて…」

由紀「…ゆき…ゆき…ゆき…かあ…えへへっ♡」

彼が先程のキスを謝る中、由紀はデレデレと微笑む。どうやら名前を呼び捨てにされた事が嬉しいようだ。

由紀「あの…これからはずっと…そう呼んでくれる?」

「えっ?」

由紀「わたしのこと、由紀って…呼び捨てで呼んでくれる?」

「……わかったよ、由紀」

彼が目を見つめながら言うと、由紀がまた微笑む。そのデレデレとした表情はやはり幼く、子供っぽい。だが、彼は由紀のそんな笑顔が大好きだった。

由紀「えへへ…。ゆき、ゆき、ゆきっ！うくん、いよいよカップルらしくなってきたね!!」

「まあ、カップルですし…」

由紀「うふふ♪ねえねえ、わたしのこと、ほんとに好き？」

ずいっと顔を寄せ、瞳をキラキラと輝かせる由紀…。こう改めて聞かれると少し照れくさいが、ここで答えをはぐらかせたら彼女はまた不安になってしまうかも知れない。

「……好きだよ。愛してる」

由紀「……………そっか……………そっ…か……………」

「…由紀？」

キラキラと輝いていたその瞳が徐々に光を失い、代わりに涙が溢れます。由紀が喜ぶと思つて気持ち伝えたつもりだが、困惑させてしまったのだろうか…。彼は不安になり、由紀の肩に手をあてる。

由紀「あ…っ…！ご、ごめんっ！違うよ!?別に嫌だったわけじゃないの。ただ、ずっと不安だったから……………」

「……………」

由紀「もしかして嫌われたんじゃないかなあつて…ずっと不安だったの…。でもキミは今、わたしのことを好きって言ってくれた…。愛してるって言ってくれた…。それが嬉しくて、ついつい泣きそうになっちゃった…」

零れかけていた涙を拭い、由紀はまた『えへへ』と笑う。こんなにも可愛い顔で笑う、この由紀という少女を彼が嫌いになるはずなどなかった。

「僕は…由紀が思っている以上に由紀のことが好きだ。どれだけ愛しているのかを語ったら、きっと由紀も引くと思うよ」

由紀「引かないよ。だって、わたしもキミが思っている以上にキミのことが好きだもん！ほんとに、ほんとに大好きで…他のことなんか考えられないよ」

由紀はそう告げてから頬を赤く染め、目を細める。彼女はそのまま、隣に座っている彼へすがるように身を寄せると、その細い腕を彼の肩へ回した。

「どうした…？」

由紀「わ、わたしから…キミにチューしたい…でも、いい？」
肩に回した腕に力を込め、由紀は彼の顔を自分の方へと寄せる。間近に見つめる由紀の目は恥ずかしさから溢れる涙に潤んでいたが、それでもしっかりと彼の目を見つめている。そんな彼女の問いに対して彼が無言のまま頷くと、彼女は静かに呟いてから瞳を閉じた…。

由紀「わたし、もう子供じゃないからね…。ん…っ…」
「…っ…」

自分に言い聞かせるようにして呟いた後、由紀は彼の唇に自分の唇を重ねていく。あの由紀が、自分から進んでキスをした…。彼はその事実胸をときめかせ、ただじっと、彼女のキスを受け入れていく。

由紀「んん…っ…ちゅっ…ちゅ…っ…」
「ん…んっ…」

由紀「っ…ん…ちゅっ…」
きつとすぐに終わると思っていた…。しかし由紀のキスは意外にも長く、終わる気配を見せない。由紀は今も瞳をギュツと閉じたまま、彼の唇に自分の唇を重ねていた。ただ触れるように重ねたり、かと思えば、まるで小鳥が餌をつつくようにして唇を重ねてきたり…

由紀「っ…ん…っ…う…」

由紀はきつと、自分なりにキスのやり方を試行錯誤しているのだろう。ぎこちなく、何度も唇を重ねてくる由紀がたまらなく愛しい。彼はもう我慢できず、自分からも唇を動かしていくことにした。

由紀「う…んっ…！ん…んっ…」

すぼめていた唇を微かに開き、由紀の唇を味わう。彼の唇が動いた瞬間こそ驚いていた由紀だが、彼女はすぐにそれを受け入れ、甘い声を漏らした…。人に聞かせた事どころか、自分でも聞いた事のないような声を…。

由紀「ん…あっ…あ…んっ……ん…ん…♡」

彼のキスに押され、ほんの少しだけ口が開く。するとその僅かな隙間から彼の舌が侵入し、それが由紀の舌尖に触れた。彼の舌が自分の口に入り、そのまま自分の舌へ触れている…。由紀は頬どころか耳の先までも真っ赤に染め、小さな身を震わせる。

由紀（はずかし…いつ…！はずかしいっ……!!）

頭でそう思う由紀だが、それでも彼を押し退ける気にはなれない。それどころか彼とキスを続ける事によって体は熱く…そして頭はぼんやり心地よくなってきた。由紀は彼の舌から逃れるように引つ込めていた舌をそつと動かし、それを自分の方から彼の舌に重ねていく…

…ガサツ!!

由紀「ん……ぷはっ…!?」

「あっ…う…」

キスが更に激しくなりかけた時、二人が腰かけているベンチ横…数メートル先にあった茂みが音を鳴らす。ある程度人影には注意していたつもりだが、キスに夢中で警戒心がなくなっていたようだ。

由紀「だ、だれかいるの…?」

茂みの方にそつと声を放ち、返事を待つ。そこにある茂みはわりと深く、その気になれば数人くらいは身を潜める事が可能だろう。だとすれば、誰かがそこからこちらを見ていた可能性がある…。が、返ってきた返事は人間のものではなかった。

『…………二ヤ…二』 ヤ……………』

由紀「ふう…なんだ、ネコだったんだね」

安心したように呟き、由紀は笑う。

「ならよかった。…にしても、変な声で鳴くネコだ」

聞こえた鳴き声は普通のネコと比べるといくらか低く、どこかおかしい。一体どんなネコがこんな声を出すのかと気になる彼だったが、ネコはいくら待っても姿を現さない。

由紀「中を覗いたら出てきてくれるかな?」

「さあ、どうだろうね」

と答えつつ、彼は辺りを見回す。すると公園の隅に立てられていた時計が視界に入り、思っていた以上に長居してしまった事を知る。

「由紀、そろそろ帰ろう」

由紀「あつ、もうこんな時間だったんだ」

彼がベンチから立ち上がると、由紀も腰を上げて彼の横に並ぶ。二人はそのまま手を繋ぎ、互いの家へと戻っていく…。付き合いだして数週間…ようやく、カップルらしさが出てきた。

~~~~~

由紀「おっはよう〜！」

「んん、おはよう、由紀」

由紀「ねへ〜♪」

翌朝、登校した由紀は教室の中でニヤニヤと笑う。日を跨いでも、彼が自分の事を呼び捨てにしてくれた事が嬉しいらしい。すると、そんな由紀と彼のそばへ悠里が歩み寄った。

悠里「あらあら、今日の二人は何時にも増して仲良しね」

由紀「ふふ〜♪そう見える？そう見えるっ？」

ハシヤグ由紀を見て大体の事を察したのか、悠里は優しく微笑む。彼女は由紀の頭を静かに撫で、席についている彼のことを見つめた。

悠里「彼氏らしいこと、ちゃんとしてあげてる？」

「ええ、バッチリと」

悠里「そう。ならいいわ♪ゆきちゃんは私にとっても大切な娘だから、大事にしてあげてね？」

「もちろん」

微笑みながら答えると、悠里は満足そうに微笑む。彼女は既に彼と由紀の仲を知っているため、友達として二人のことを見守るつもりなのだろう。

ガラガラッ…

胡桃「お、おはよう……………」

由紀「おはようっ〜！」

「おはようさん」

悠里「おはよう、くるみ。今日は遅かったわね？」

授業が始まる数分前：胡桃がようやく教室に現れる。彼女は普段からわりと早めに登校していた気がするが、今日は由紀よりも遅かった。

胡桃 「その…ちよつと寝不足で……」

「また、徹夜でゲームでもやってたのか？」

胡桃 「い、いや…そうじゃないけど……」

胡桃は彼と由紀を交互に見つめ、顔を真っ赤に染める。今日の彼女は どうにも様子がおかしい…。

悠里 「顔が真っ赤よ。どうかしたの？」

胡桃 「えつと…その…そのっ……！」

悠里に尋ねられると胡桃は目を泳がせ、また彼と由紀の事を交互に見つめる。その反応を見た彼が嫌な予感を感じた瞬間、胡桃は決心したかのように口を開いた。

胡桃 「お前ら…付き合ってるの…？」

「……」応聞くけど、なんでそう思う？」

周りの生徒に聞こえぬよう、胡桃は声を抑えてくれた。彼はそんな胡桃の目をじっと見つめつつ、なぜそう思ったのかを問う。そう言えば胡桃にはまだ由紀との関係を打ち明けていなかった…。今ここで素直に答えても良いのだが、彼女は どうして二人の関係に気付いたのか…そのきっかけを知っておきたかった。

胡桃 「昨日、いつもより早く部活が終わってさ…。で、帰り道を歩いてたらその…お前らが公園でしてるの…見ちゃって……」

と、恥ずかしそうに言う胡桃を見て、彼は後悔する…。やっぱり、聞かなきゃよかったと……。そばにいた由紀も似たような事を思ったのか、顔が赤くなり始めていた。

由紀「えつと、ど、どこで見てたの…?」

胡桃「…茂みの陰。途中バレそうになったけど、ネコのふりしてごまかした…」

「あれがそうだったのか…」

ネコにしては変な声だと思っただが、まさか胡桃だなんて思わなかった…。由紀とのキスを見られた彼は少しだけ恥ずかしそうに顔を俯け、由紀も似たような反応を示す。その一方、悠里が冷めた目で彼の事を見つめだした。

悠里「あなた、公園で何をしたの?公園で…公園なんかで、ゆきぢやんに変な事をしたわけじゃ…」

「いやっ、変な事なんて…!!」

由紀「そ、そうだよりーさんっ!わたしはただ、この人と…:…:…:」  
言い出した由紀が口ごもり、昨日の事を思い出しながら顔を真っ赤にする。それがまた余計な誤解を生み、悠里の目がみるみる冷たくなっていく。

悠里「あ、あなたっ…!まさか、ゆきぢやんと…っ…!!?」

この様子から察するに、悠里は彼が由紀とキス以上の事をしたのだと誤解している。しかもその場所が公園…人目につくような場所とあっては、由紀の親友である彼女が怒るのも無理はない。

「りーさん、たぶんあなたは誤解を…」

慈「はい、授業始めますよ。みんな席について下さいね」

肝心な所で慈の声が響き、悠里達はそれぞれの席へと戻る。彼はその後の授業中、誤解を続けている悠里の冷たい目線に耐え続ける事となったわけだが…その誤解も次の休憩時間中に胡桃、由紀の証言のおかげで無事に解くことが出来たのだった。



## 第四話 『うつしていいよ』

その日はとても良く晴れた日だった…。

朝から強い日差しが窓より差し込み、外では鳥達が機嫌良く鳴き声をあげているのが分かる。こんな日は何時もより早く起きて、余裕を持った状態で登校しよう…。そう考えた彼は目を覚ましてすぐにベッドから起き上がり、まずは洗面台へ向かおうとしたのだが…。

…グラッ

「おっ…と…。」

ベッドから起き、床へ足をつけた瞬間だった…。視界がボンヤリと霞み、目眩を感じて彼は再びベッドへ倒れる。

(あゝ…これは、ちよつと厳しいか…)

落ち着いてみると頭もズキズキと痛むような気がするし、喉も痛いような気がする…。最初こそ『気がする』程度の痛みだったが、それらはほんの10分程で確信的なものへと変わっていった…。

~~~~~

慈「ええつと、今日はお休みが一人ね…」

巡ヶ丘学院高校。三年生の教室内で慈は一つだけ空いている席をチラッと見つめ、一時限目を始める為の準備を整える。空席は丈檜由紀の隣にある物であり、本来、そこには彼がいるはずなのだが…。

悠里「彼はお休みなんですか？」

慈「ええ、少し風邪を引いてしまったみたいだね。ついさつき、本人から連絡があったわ」

悠里「あら…大変ね…」

思い返してみると、彼が体調を崩して学校を休んだのは初めての事だ。ただの風邪なら余計な心配などいらないうが、いつも間近にいた彼がいなくなる何となく落ち着かない…。それは悠里だけでなく胡桃も同じよう、授業中に空席へ視線を向ける事が何度もあった…。

胡桃「ん、何かあれだな…。いないといかないで落ち着かないな…」
悠里「そうね…。何かモヤモヤするわね…」

一時限目、そして二時限目が終わり、二人は休憩時間中に彼の席へ歩み寄る。いつもならここに彼がいて、休憩時間の度に雑談を交わしたりしたのだが、今日はここに誰もいない…。それだけでもかなり場の雰囲気が変わるのだが、それとは別にもう一つ…いつもと違う雰囲気のものがあった…。

悠里「…ゆきちちゃん、大丈夫？」

由紀「えっ…？う、うんっ！大丈夫だよ！」

胡桃「嘘つけ。お前、授業中もずっとため息ばっかついてただろ？」

由紀「そ、そうかな？」
誤魔化すように微笑む由紀の笑顔にはいつものような眩しさは無く、どこか無理しているようで痛々しい。彼が風邪で休みと分かったその瞬間から由紀も一気に元気が無くなってしまい、悠里と胡桃はそれを気にしていた…。

胡桃「まったく、何でお前まで弱るんだよ…」

由紀「…だって、わたしは彼の彼女なんだもん…。ただの風邪だって分かってても、やっぱり心配になっちゃうよ…」

胡桃「ん、ん…そういうモンなのか…」

胡桃も彼の事を心配に思っただけだが、由紀のようにガクツと落ち込む程の物では無かった。やはり、恋人関係になると違いが出てくる物なのだろうか…。自身の机に顔を伏せてため息をつく由紀を見て、胡桃は何とも言えぬ苦い表情を浮かべた。

胡桃「あいつは…ゆきが学校休んでもそこまで落ち込まないと思うぞ？」

由紀「そんな事ない！絶対落ち込むよっ！彼、わたしの事が大好きだって言ってくれたもん！」

胡桃「お、おお…そうなのか……」

伏せていた顔をこちらへ向けた由紀は今日一番の声を出し、頬を満げに『ぷくぷく』と膨らませる。子供っぽいヤツだと思っていた由紀が今や彼氏持ちという事実には未だに違和感があり、どうにも慣れない…。

胡桃（あのゆきが誰かと恋をして、こんなになるなんて予想してなかったな…。万が一誰かと付き合ったとしてもゆきは子供っぽいから、手を繋ぐまでしかいかないと思っただけ…：もうキスは済ませてるし…）

先日、公園で偶然に見掛けた彼と由紀のキスシーンを思い返してしまい、胡桃の頬が段々と赤くなる…。あの由紀が男とキスする日が来るとは…。いや、もしかしたらキスより先も済ませていたりするのだろうか…。そんな事を考えてしまうと、彼女の顔を直視する事すら難しくなる。

悠里「くるみ、顔真っ赤よ？あなたまで熱があるわけじゃないわよね？」

胡桃「あ、ああ…。あたしは大丈夫…」

悠里に声をかけられた胡桃は慌てて顔を逸らし、落ち込む由紀の背中を叩く。彼女が彼と付き合っただけを経験したにせよ、大事な友達で

ある事に変わりは無いのだ。

胡桃「そんなに心配なら、見舞いにでも行ったらどうだ？あいつだってゆきが……大好きな彼女が来てくれたら喜ぶだろう？」

由紀「あつ……そ、そだねっ！じゃあ、帰りに少し寄っていいかな？」

胡桃「ああ、そうしてやれ……。けどあいつは病人なんだから、あんまり騒いで迷惑かけんなよ？」

由紀「うん、そうする！くるみちゃん、ありがとね♪」

ニツコリと微笑む由紀の顔にはいつもの輝きが戻っており、胡桃はホッと一安心する。色々と世話のかかる娘だが、やはり由紀には無理のない笑顔が良く似合っていた。

胡桃「……あいつもこの笑顔にやられたのかもな」

由紀「んっ？なにか言った？」

胡桃「……いや、何も！それより、あいつが浮気とかしたらあたしに言えよ？ゆきを悲しませるようなヤツは、あたしがぶっ飛ばしてやるっ！」

由紀「えへへっ、ありがと♪でも、彼はそういう事しないって信じてるから大丈夫だよ」

胡桃「いやいや、そういうヤツに限ってだな……」

悠里「ふふっ……くるみと浮気したりして」

胡桃「な……っ……!!？」

由紀と胡桃のやり取りを聞いていた悠里はボソッと呟き、イタズラな笑みを溢す……。次の瞬間、胡桃は顔を真っ赤にして悠里の肩を揺さぶった。

胡桃「す、するワケないじゃんっ!!!もしあいつにその気があっても、あたしが断るしっ……!!」

悠里「ふふふっ♪そうよね〜♪」

胡桃「つぐ…!!な、何でニヤニヤしてんだよっ!？」

ブンブン揺さぶられているにも関わらず、悠里は余裕の笑みを保ち続ける。少しすると胡桃の方が疲れてきてしまい手を離れたが、悠里はまだ微笑みを保っていた。

由紀「でも、浮気相手がくるみちゃんとかリーさんだったら仕方ないやって思っちゃうなあ…。二人ともわたしより可愛くて綺麗だし、スタイルも良いし…」

悠里「もう…ゆきちゃんだつてすつごく可愛いんだから、もつと自信を持つていいのよ。ねっ、くるみもそう思うでしょ?」

胡桃「ん…んん…:…:ゆきは可愛い…:と思うぞ?」

お世辞ではなく、本心からそう思う…。

悠里も胡桃も自分の容姿に特別自信が無い訳でも無いのだが、由紀の可愛らしい笑顔を見て、女子としての羨ましさを感じた事も少なくない。

由紀「可愛い…:?ほんとにつ?えへ…:えへへく♪」

親友である二人に『可愛い』と言われた由紀は口元を緩め、ニタニタと嬉しそうな笑みを浮かべる。やっぱり、由紀の笑顔は凄く可愛い…。彼女の笑顔を見た悠里と胡桃はそんな事を思い、ニツコリと微笑んだ。

~~~~~

由紀「というわけで、お邪魔しま〜す!」

「いやいや、どういわけだ…」

夕方になった頃、彼は部屋に響いたチャイム音を聞いて起き上がり、玄関を開けた。そこに立っていたのは満面の笑みを浮かべる由紀だったのだが、彼女はこれといった説明もないまま部屋の中へと一直

線に上がり込む。

由紀「おうつ、太郎丸は元気みたいだねえ♪」

部屋に上がって早々、由紀はこちらを見つめて尻尾を振る太郎丸の頭を優しく撫で、ニコニコと微笑む。今のところ彼女自身の口からは何の説明もないが、きつとお見舞いに来てくれたのだろう…。彼はそれを察すると、背後から彼女の頭をポンと一撫でしてからベッドに腰を下ろした。

由紀「まだ具合悪い?」

「まあ…少しね」

由紀「…ちよつとごめんね?」

太郎丸の頭から手を離し、由紀はベッドに座っていた彼の隣へと腰掛ける。柔らかなベッドの上、少し乱暴に腰を下ろした彼女は何の躊躇ちゆうちゆうも無く自身の顔を彼の顔へズイツと寄せると、互いの前髪をかき上げながら額をピタリとくっつけた…。

「ん……………」

由紀「うくん…まだ少し熱いね…。何か食べたいものとかある?」

「いや、大丈夫だよ。お気遣いどうも…」

ほんのり熱い彼の額から自身の額を離し、由紀は悩ましげに眉をかめる…。彼はこう言っているが、彼女として…彼の辛つらさを少しでも楽にしてあげたいと考えていた。

由紀「じゃあその、欲しいものは!？」

「あ…特に無し」

由紀「むくつ!じゃあじゃあつ、読みたいマンガとかは!？」

「特に無し…。っていうかそれ、風邪引いてる人間にする質問?」

軽い目眩や頭痛に襲われながらもツツコミを入れるが、由紀は『むくつ!!』と唸るだけで話を聞いていない…。風邪を引いている中彼女

の相手をするのは少しばかり疲れるが、どこか癒されるような気もした…。

(何だろいな…落ち着く)

然り気無く彼女の手を握ると、由紀は悩ましげに唸り声をあげたままの状態でもそれを握り返してくれた…。意識しているのか、無意識なのか分からないが、強く、ギュツと握り返してくれた…。ふにふにと柔らかく、ほんのり冷たい由紀の手を握っているだけで、頭痛がほんの少しだけ楽になっていく。

由紀「むむっ！っ！どうすればいいかなあ。せつかくお見舞いに来たのに、これじゃ何の役にも立てないね…。」

「…そんな事ない。こうして由紀の顔を見ただけで少し楽になったよ」

由紀「へっ？顔を見ただけでいいの？」

「ああ、それだけで十分。だからほら、そろそろ家に帰るといい…。あまり長く寄り道していると、家の人が心配するでしょ？」

由紀「う、うん…そうだね…。じゃ、また何かあったら連絡して？」

「了解」

あまり長居させて風邪を移してしまっても悪い…。彼は隣に座る由紀の背を叩き、早めに帰るように促していく。由紀の方も渋々ながらそれを了承したようだが、彼女はベッドから中々立ち上がらず、まだ何か言いたげな顔をしていた。

「…どうした？」

由紀「えっ…とね…？やっぱ何もしないで帰るのは悪いと思うから、最後に…ちよつとだけ…。」

少し恥ずかしそうに頬を染め、由紀は彼に身を寄せる…。そうして彼の肩へ両手を添えた後、由紀は瞳をギュツと閉じてから静かにキスをした…。

由紀「ん…っ…」

「っ…いゆ、由紀っ、さすがに今こういう事すると風邪が移るかも知れないから、今日のところは……」

彼女からキスされるのはとても嬉しい事だが、風邪を引いている状態のままでは彼女に移してしまう可能性がある。彼は由紀と重ねた唇を名残惜しそうに離し、彼女の事を見つめた…。ゆつくりと開かれていく由紀の瞳はほんの少しだけ潤んでおり、風邪さえ引いていなければ、自分からキスしてやりたいくらいに愛らしかった。

由紀「大丈夫…。わたしに移したらキミが楽になるかもしれないもん…。だから、移していいよ」

ニコツ…と頬を緩め、由紀はまた唇を寄せる…。

彼はもう一度由紀を離そうとも思ったが、二度も連続で唇を寄せられては中々拒みきれず、結局は流れに身を任せる事にした…。由紀の柔らかな唇の感触…桃色の髪から漂う甘い匂い…。それらを感じている内、頭痛など微塵も気にならなくなった。

由紀「ん…っ…もしわたしに風邪が移ったら、今度はキミがわたしの家までお見舞いに来てくれる？」

「んん…もちろん」

キスを終えてから答えると由紀は嬉しそうに微笑み、ベッドから立ち上がる。彼女は床へ置いていたカバンを背負うと最後にもう一度だけ太郎丸の頭を撫で、それから彼の事を見つめて手をパタパタと振った。

由紀「じゃ、またね♪」

「ああ、また。気をつけて帰るんだよ」

玄関先まで彼女を見送った後、彼は部屋の中へ戻る…。

不思議なもので、由紀がいなくなった途端にまた頭痛がしてきた。



(けど、随分と楽になったな……)

頭やノドに感じる痛みも今朝ほど酷くはなく、かなりマシになっている。

もしかすると、由紀が見舞いに来てくれたおかげなのかも知れない……。

(にしても、本当に可愛い子だよな……)

由紀の事は前々から可愛いと思っていたが、付き合うようになってからその思いが更に強くなった。あんなにも可愛い子に心配され、見舞いにまで来てもらった自分は本当に幸せ者なのだろうと実感しつつ、彼は再びベッドへ寝転ぶ……。

次の日の朝…彼の体調はすっかり良くなり、楽に登校出来るレベルまで回復した。しかし、昨日のキスのせいで今度は由紀が風邪を引いたかも知れない……。彼は教室に入る瞬間までそれを心配していたのだが、由紀は今日も元気に…眩しい笑顔をみんなへ見せながら席に就いていた。

くるミアフター

第一話『気づいたキモチ』

ある休みの日…彼は以前胡桃と待ち合わせをしたのと同じ公園、同じベンチに座っていた。今の時刻は午前9時…。彼は今日もある人物と待ち合わせしていたのだが、前回同様…約束の時刻よりも早く来てしまった。その人物と待ち合わせしていた時刻は午前10時…一時間も早い。

(…ま、ボーっとしてれば一時間くらいあつという間だろう)

良く晴れた空を見上げ、深く息を吸う…。すると彼の横から誰かの足音が聞こえ、こちらへだんだん近寄って来る…。彼が空に向けていた視線をその方向へと向けると、目の合ったその人物はどこか照れたようにして微笑んだ。

胡桃「お、お待ちせ…」

彼と待ち合わせしていたのはまたしても恵飛須沢胡桃だった。

彼女はベンチに一人で座る彼と目を合わせたかと思えば、キョロキョロと落ち着きなく視線を逸らす。

「ごつちも今来たばかりだし、全然待つてないよ」

胡桃「…そっか。にしても、ずいぶん早いな？」

「そつちもね」

彼がこんなに早くここに来た理由は二つ…。一つは万が一にも胡桃を待たせない為…。もう一つは…彼女との外出が楽しみだったか

ら。彼がこんな時間にここにいたのはそれらの理由があるからなのだが：胡桃が早く来たのは何故だろう。前回の時のように、またこの付近での用事でもあったのだろうか…。彼はそんな風に思ったが、胡桃の言葉は彼の予想を裏切ることになる。

胡桃「その：楽しみだったから…。だから、少しだけ早く来ちゃった：」

ベンチに座る彼の隣へと腰かけ、胡桃が微笑む…。

まさか胡桃の方から『楽しみだった』などと言うとは思ってもよらず、彼は少しばかり照れてしまう。

「ははっ……そっか……」

胡桃「うん…。前のデートも楽しかったし……」

「……」

胡桃「……」

あの胡桃に前回のデートだったと言われるとなんだか恥ずかしくなり、彼の口数が減る…。だが胡桃自身も今の発言は恥ずかしくなかったように、顔を下に俯けていた。

(おかしい…今日の胡桃ちゃんは何かがおかしい…！)

彼がそんな事を思うのも当然だろう…。今日の彼女はいつもよりもどこかしおらしく、彼を横目でチラチラと見つめてくる…。その頬は微かに赤く染まっており、思わず彼の胸の鼓動が高まっていく。

「とりあえず…歩こうか？」

胡桃「あつ、うんっ！そうだな！」

いつまでも公園にいても仕方ない…。二人はベンチから立ち上がり、前回同様に街へと向かった。彼は歩きながら隣にいる胡桃の様子を窺うが、やはり今日の彼女はどこか雰囲気が違う……。

今回一緒に出掛けようと言ったのも彼女自身…。

数日前、学校で授業を終えた後に胡桃が彼を誘ったのだ。

何故今日、彼を誘ったのか…。

それにはある理由があった。事の始まりは学校で彼を誘うよりもさらに一日前…。同じくあの学校：『巡ヶ丘学院高校』にて、胡桃がある人物にある相談をした事から始まった。

くくく

一日の授業が終わり、夕焼けに照らされる校舎の中…。

恵飛須沢胡桃：彼女はある人物を廊下の隅へと呼び出していた。近頃自分が悩んでいる、あることの相談にのってもらおうのだ…。

胡桃「忙しいのにごめんね…」

慈「いいえ、大丈夫ですよ。それより、どうしました？」

彼女に呼び出された女性教師、佐倉慈がいつもとはどこか様子の違

う胡桃の顔を見つめる……。普段の彼女は元気な娘だが、今の彼女は何かに悩んでいるようで表情に力がない……。

胡桃「あの……ね……。この前転校してきたアイツいるじゃん……？あたしね、この前……アイツと一緒に遊びに行っただ……」

慈「あら、仲良しね♪彼はあまりクラスの子と馴染めていなかったようで心配してただけ、恵飛須沢さんが面倒見てくれてるなら心配いらなかしら？」

以前は彼がクラスで独りになっているのでは心配していた慈だが、胡桃の言葉を聞いて安心したように微笑む……。だが、正直に言うならもう彼を心配する必要など無いことはとつくに分かっていた。ここ最近の彼は由紀や悠里、そして他の生徒と話しているのも見掛ける。もちろん、胡桃と仲が良いのも知っていた。

胡桃「それで……なんだけどさ……。もう……どうしよう……」

胡桃が顔を俯けながら髪を掻き回し、弱気な声を出す。

慈は彼女の肩にそっと手をあて、安心させるように声をかけた。

慈「落ちついて。彼が……どうしたの？」

胡桃「あのっ……あたしさ、実を言うところの前からめぐねえに相談したい事があったんだ……。その……部活の……先輩の事で……」

慈「先輩……？ああ、OBの……」

少し潤んだ瞳を慈に向け、胡桃が告げる。

彼女の言う部活の先輩とは……彼女自身も所属する陸上部のOBの少年の事……。以前からその少年の事が気になっていた胡桃だったが……あの『彼』と出会ってからはその心境に変化があった。

胡桃「先輩を見てると変な気持ちになったのに……アイツと出掛けて

からはアイツを見てると…アイツの事を思うと、あの先輩を見る時よりもずっと強く変な気持ちになるっていうか……。なんか胸が痛くなって…頭がジリジリするんだ…。ねえ……。どうしたらいいのかな…。？」

胡桃が潤んだ瞳を慈に向ける…。

彼女にそこまで聞いた事で導きだされた慈の答えは一つだった…。

慈「へえ……。つまり、恵飛須沢さんは彼の事が好きなのね？」

答えはそれしかないと思い、慈が両手をパンツと合わせながらニヤリと笑う。それを見た胡桃は顔を真っ赤にして目を見開き、慈の事を真っ直ぐに見つめた。

胡桃「ちがつ…!!……………くない、のかな…。ほんと…最近ずっとアイツの事ばかり考えちゃってるし……」

慈の発言を一瞬だけ否定しかけた胡桃だが、それは自分の気持ちをごまかしているだけだと気付く…。彼と二人で出掛けたあの日から毎日、ずっと彼の事を考えているのだ…。これはきつと、特別な感情なのだろう。

胡桃「でっ、でも！じゃああの先輩の時はなんでドキドキしたんだろ…？」

慈「先輩くんの方は…憧れとかだったのかもね。それも分かるよ。走ってる先輩とか、ちよつとドキドキしちゃうよね」

胡桃「うん、ほんとにカツコよく見えた…。憧れか……。んん、そうかもしれない…」

照れたように笑って答えると、胡桃はゆつくり歩き出して窓に寄り…。そこから空を見上げ、彼への思いを慈に告げる。

胡桃「あの先輩は雰囲気とかもあんなにカツコいいのに…アイツは

全然なんだよなあ…。なんか変なヤツだし…」

彼の悪口を言つていく胡桃だが、その顔は嬉しそうな笑顔を浮かべていた…。慈はそんな彼女の隣に歩み寄ると、共に窓の外の景色を眺める。

慈「でも、見た目だけなら彼もカッコいいと思うよ？」

胡桃「うん、見た目だけなら…。ね。本人に言ったら調子にのるから内緒だけど…。あたし、アイツの目とか結構好きなんだ…」

慈「ほら、好きって言つた」

胡桃が放つた言葉を聞き逃さず、慈はニヤニヤと笑う。それを指摘された胡桃は恥ずかしさに悶もたえて顔を真っ赤にしながらも、相変わらず嬉しそうに笑つていた…。

胡桃「…うん。好きなんだと思う…。もちろん見た目だけじゃなくて、アイツのバカなことか…。意外と優しいところか…。…もう、全部が…。…」

慈「ふふっ…。本当に好きなのね？」

胡桃「…認めるのはちよつとはずかしいけど…。…うん、好き」

胡桃は窓から離れると頭を抱え、真っ赤に染まった顔を隠す…。だが彼女は直後にその手を少し動かし、手と手の隙間から慈の方を見つめた。

胡桃「でもさ…。言えないよ…。…」

慈「んっ？何が？」

胡桃「アイツと一緒にいると思うんだ…。たぶん、アイツはあたしの事を女の子として見てくれてない…。…。それに、あたしもアイツの前じゃ強がってばかりだから…。…急に告白なんて出来ないよ…。…」

廊下の壁に背を預けていた胡桃はズルズルと腰を下ろし、そのまま座り込んでしまう……。慈は彼女のそばに歩み寄ると膝について目線を合わせ、彼女の頭をそつと撫でた。

慈「大丈夫だよ……。私も何度か二人の事を見てたけど、あなたたちと一緒にいる時はいつも楽しそうに笑ってるもの。絶対……絶対大丈夫……。彼もきつと、恵飛須沢さんの事が好きだから」

胡桃「……そう……かな……」

慈「うんっ、先生はそうだと思うてるよ」

胡桃「……でも、それでも……本人に言うのは怖いよ……」

廊下に座り込んだ胡桃は膝をかかえ、そこに頭を埋める。それでも慈は彼女の頭を撫で続け、優しく声をかけ続けた。

慈「無理しなくても良い……。でも、後悔だけはしないようにね……」

胡桃「……後悔？」

慈「そう、後悔……。例えばだけど、もし彼が他の娘と付き合っちゃったりしたら、恵飛須沢さん平気？」

少しだけ意地悪な質問だと分かってはいたが、彼女の為だと思って慈は尋ねる。胡桃は少し頭を悩ませたのち、静かに口を開いた……。

胡桃「……たぶん、もうアイツの顔見れないと思う……。忘れよう……。忘れようって気持ちだけが先走って、無意識の内に……。アイツとの距離をあけちゃうかも……」

慈「かもね……。どう？そんなの嫌じゃない？」

胡桃「……嫌だ。もしフラれても……。友達として出来るだけアイツのそ



ばにいたい……。気持ちを伝えないでいる内に誰かに負けるなんて……絶対に嫌だ……」

胡桃はゆつくりと立ち上がり、気合いを入れる為に両手で自らの頬をパシツと叩く。慈は彼女の背中に手をあてると、その顔を覗きながらニコツと笑った。

慈「恵飛須沢さんなら絶対大丈夫!!先生も応援してるからね♪」

胡桃「……うん……うんっ!ありがとう、めぐねえ!!めぐねえに相談して、ほんとに良かった!おかげで……自分の気持ちを整理できた」

慈「いいえ、どういたしまして♪」

胡桃「んじゃ、また明日っ♡」

満面の笑みを浮かべながら、胡桃は慈の元を離れていった。

その笑みは先程までの彼女と比べると大分明るいものになっていた。慈は教師としての自分に今一つ自信を持っていなかったのだが、それでも……彼女の笑顔を見て、自分ももう少しだけ頑張ってみようと思った。

慈「がんばれ、恵飛須沢さん……。そしてわたしっ!」

~~~~~

「……で、どっか行きたいところでもっ」

胡桃「あっ……ごめん、特に決めてない……」

「ああ、そっか……。じゃあ街についてから適当に考えるか……」
あてもなく道を進む彼の隣を歩く胡桃だが、その顔は地面の方へと俯けていた。こうして二人だけしていると、彼の顔を真っ直ぐに見つめられない……。

胡桃（コイツといると頭が熱くて……。胸が苦しい……。せつかく一緒なんだから楽しい話でもしたいのに、何も喋れない……。やっぱり、コイツに抱いている気持ちはあの先輩に抱いている気持ちはまた別のものなんだ……）

慈に相談して以降、胡桃は例の先輩とも部活で何度か顔を合わせていた。相談後、改めて先輩を前にして気づいた……。やはり、あの先輩に抱いている気持ちは彼とは別物。例の先輩とは少し緊張してしまっているが、今の胡桃は隣にいる彼とまともに会話が出来ない……。何か話そうにも、開きかけた口が勝手に閉じてしまうのだ。

胡桃（でも……。せつかく、めぐねえに背中を押してもらったんだ）
街へと向かう道中、胡桃は隣を歩く彼の横顔をそつと覗く。

相談にのってくれた慈の好意を無駄にしない為……。彼女は自分に言い聞かせるように何度も何度も心で呟いた。

胡桃（失敗してもいい……。それでもいいから絶対に……。あたしの気持ちをごいつに打ち明ける）

胡桃（あたしの気持ち…しっかり伝えよう）

第二話 『追いつきたいのはその背中で…』

『あたしの気持ち…しっかりと伝えよう』

胡桃はそう決意し、自ら彼をデートへと誘った。ここまでは良かったのだが、いざ約束の場所で彼と会うと胸の鼓動が高まり、口が思うように動かない…。特に行き先を決めていなかった胡桃は彼にそれを任せて隣を歩いていき、二人は気づけば街の中心部にたどり着いていた。

「…お腹すいてる？」

胡桃「あつ……そんなに……」

「そうか……。じゃ、どっか見たい場所ある？」

胡桃「ん……特にないかな……」

「………そっか」

何を聞いても胡桃は顔をうつむけて答えるばかりで、彼もどこか困っているように見える。胡桃自身も彼が困り始めている事に気付いてはいたが、どうしても上手く言葉を返せなかった。

胡桃（どうしよ……まったく会話がはずまない……。こんなんじやダメだつてわかってんのに……）

今日、自分はこのデートのどこかで彼に気持ちを伝えねばならない…。なのでこんなところでただの会話に困っているようじゃいけないと分かってはいるのだが…。

胡桃（こいつの顔……まっすぐ見れない……。この前まで普通に目を見て話せてたのに……）

つい先日まで彼と学校で会っても普通に話せていたのに、あの日…慈に相談にのってもらい自分の気持ちに気付いてしまったからだろ

うか……。彼と目が合う度、無意識の内にその目線を逸らしてしまう。

胡桃（ううう…顔が熱い…胸が痛い…）

ただ彼といるだけで…胸がズキズキと痛む。前回一緒に出掛けた時は楽しい気持ちでいっぱいだったのに、今の胡桃にあるのはこの痛みと焦る気持ちだけだった。

胡桃（いつ伝えればいいんだ……。つてか、このままの感じでちゃんと伝えんのかな…あたし…）

少なくとも今の状態が続くようなら、自分の気持ちを彼に伝えるのは厳しいだろう…。もう少し気持ちが落ちつけばどうにかなるかも知れないが、彼のそばにいればいるほど…心がぐらぐらと揺れて胸が痛む。

胡桃（もし他に好きな娘がいたりしたらどうしよ…。フラれたら立ち直れるかな…！うう…！頭ん中ぐちゃぐちゃになってきた…）

「なんだか顔赤いけど、熱とかないよね？」

胡桃「へっ？あ、ああ…大丈夫だよ」

色んな事を思う内、顔が赤くなってしまうていたらしい。胡桃はそんな自分を心配そうに見つめる彼へぎこちない笑顔を返し、ゆっくりその隣を歩いた。

「…大丈夫なら良いけど、調子悪かったら言ってよ？」

胡桃「んん、ほんとに大丈夫…。心配かけてごめんな」

いつもと少し様子が違うだけで、彼は胡桃の事を心配そうに見つめる…。二人はあてもなく街の中を歩いていったのだが、彼は定期的に

胡桃の方を覗き見ていた。まだ彼女の体調を心配しているようだ。

「なんかいつもと様子違うけど、本当に大丈夫なんだよね？」

胡桃「様子が違う…？どんなふうに？」

尋ね返しながら彼の目をそつと見つめる胡桃だが、そうしていると胸がズキツとしてきて長くは見つめてられない。胡桃が堪らず目を逸らすと、彼は立ち止まってからこう言った。

「今日の胡桃ちゃんは何ていうか…：…やたら大人しい。いつもはもつと元気な人なのに…：どうしたの？」

胡桃「…別に。ふつーだよ…：」

顔を見せないままそう答えた胡桃は彼の横を通り過ぎ、スタスタとその先を歩く。出来る限り自然に振る舞っていたのに、全ての行動が裏目に出ている気がしてしまう。

胡桃（あたしのこと心配してくれてなのに冷たくしちやった…：。ほんと、今日のあたしはどうしようもないな…：）

自分の態度を反省しつつ一歩一歩前へと進んでいく。彼女が然り気無く背後を振り向くと彼はしっかりとついてきていたが、あれ以上は特に何も言っただけだったので少し気まづくなる…：。

胡桃（…このままじゃダメだよな）

胡桃「なあ…：またゲームセンターにでも行く？」

せっかく二人きりなのにこのままではダメだ。そう思った胡桃は体ごとくるつと振り返り、微かに微笑みながら彼にそう提案した。出

来る限り彼の目を見つめながら言ったつもりだが、少しばかり目が泳いでしまったかも知れない。そう考えてしまい少々不安になる胡桃だったが、彼は嬉しそうに笑っていたので余計な心配だったらしい。

「ああ、じゃあ行こうか」

胡桃「…うんっ！」

彼が嬉しそうに笑ってくれると、胡桃自身も自然と笑顔になる…。彼と以前に行ったゲームセンターへと向かう道中、ふと目に入ったファッション用品店のショーウィンドウ…そこに反射していた自分の顔が笑っているのを見て、胡桃はまたふふつと笑う。

胡桃（せっかくのデート…だもんな。楽しまないと！）

彼に気持ちを伝えるのは確かに恥ずかしいし、とてつもない勇気がいる…。しかし、だからといって今日の外出を楽しめなかったら何の意味もない。胡桃は気持ちを切り替え、とりあえずは今この時を楽しむことにした。

くくくくく

その後、彼と胡桃は以前来たのと同じゲームセンターへと立ち寄る。二人は前回同様にクレーンゲームやシューティングゲームをやったりしたが、前とは違う事が二つあった…。一つは…彼のシューティングゲームの腕前が上達していた事。

前回とは明らかに違う彼の腕前に驚いた胡桃がその理由を尋ねると、彼はあれから定期的にこのゲームの練習に来ていた事を告げた。

彼にとって、前回の経験はかなり恥ずかしかったらしい。

胡桃「あははっ、一人で練習に来るとかよっぽどだなあ」

「いやはや、前はかなり赤っ恥をかけたからね…。あんな思いはもう二度とごめんだ」

シューティングゲームを終えた後、彼は胡桃と並んで歩きながら他になにか面白そうなゲームはないかと辺りを物色する。すると、一つのクレイニングゲームが視界に入った。そのクレイニングゲームの台は他のより小さいものだったが…彼はそれに馴染みがある。前回来た際、胡桃へプレゼントしたシャベルのキーホルダー…あれはこの台で獲得した物だったからだ。

「いやあ、なつかし…：…っておいつ!? シャベルのキーホルダー無くなってるじゃん!」

胡桃「えっ、マジっ?」

懐かしいと言ってもそこまで昔の事ではないが…。胡桃はそんな事を思いつつ、彼の横からそのクレイニングゲームの中を覗く。中にはあのシャベルのキーホルダーと同じくらいのサイズの景品はいくつかあるものの、シャベル型のキーホルダーは確かに一つも無かった。

「…なんだよ。なんで無くなってるんだよ…」

胡桃「いや…たぶん人気のない景品だったから無くなったんだろ。よっぽどの人じゃないとあんなの欲しがらないし」

「よっぽどの人って…胡桃ちゃんはそこそこ喜んでくれたでしょ?」

胡桃「ん…まあな」

言いながら胡桃は自分の財布を取りだし、その端に付けてあるシャベルのキーホルダーを揺らす。何故か分からないがシャベルを見て

いると落ち着くし、何より彼がくれた物だということ、胡桃はこのキーホルダーを気に入っていた。

「まだ付けてくれてたのか…」

胡桃「…うん、せっかくのプレゼントだし」

「…くそっ、これだけ喜んでもらえるならもう一個同じのをあげたかったな」

胡桃「いや…こんなの二つもいらねえぞ。一個で十分だから…」

目当てのキーホルダーが無くなり嘆く彼を見て、胡桃は呆れた顔で呟いた。プレゼント自体は確かに嬉しかったが、このキーホルダーは二個もいらぬ。正直に言う和一个だけでも結構な存在感を放つのだ…。二個も財布にぶら下がるとさすがに他人の目線が気になってしまう。

「まあ本人がそう言うなら一個でいいか。…さて、ちよつとトイレ行ってくる」

胡桃「んん、わかった」

少しだけ未練のありそうな顔をしながらもそのクレーンゲームから離れ、彼は店内奥にあるトイレへと向かう。胡桃はそんな彼を見送った後、壁にもたれながら自分の財布…そこにぶら下がるキーホルダーを見つめた。

胡桃「…ふふっ、ほんとーに変なヤツだよなあ♪」

こんなシャベルのキーホルダーをプレゼントするなんて、彼は本当に変わった人間だ。一人残った胡桃は今さらになってそんな事を思い、ニヤニヤと微笑んだ。

胡桃（変なヤツだけど…でもあたしは…）

そんな彼といる時間が楽しくて、心地よくて仕方がない。これが前ここに来た際とは違う二つ目の点……。彼に対して抱く気持ちに…胡桃自身が気付いたという事だ。

胡桃（…どうやって伝えようかな。早い内に終らせた方が楽だっかわかってるけど、本人を前にすると恥ずかしくて言えないんだよね…）

財布を上着のポケットにしまい、一度深くため息をつく…。彼と知り合ってそこその日数が経過したが、これまで胡桃は彼に対して好意を持っているような素振りは見せなかつたつもりだった。そんな彼女が急に告白などとして上手くいくのだろうか…。

胡桃（さりげなく…ほんとさりげなく、あたしの事をどう思ってるか聞いてみようかな…。それで良い反応が返ってきたら、告白するタイミングになるかもだし…）

なんでも良いからきっかけがほしい…。今のままではいつまで経っても伝えられず、結局遊んだだけで終わってしまう。それを避けたい胡桃は自分の事をどう思っているか彼に尋ねようとしたが彼がトイレから戻って来てもそれを聞けず…時間だけが過ぎていった。

~~~~~

「さて、もう十分遊んだよね。ランチでも食べに行こうか？」

胡桃「あつ……うん。そうだな……」

ゲームセンターに入つてそれなりの時間が経ち、時刻は微かに昼を過ぎている。小腹の空いてきた彼は胡桃を連れてゲームセンターをあとにしたが、そんな彼の横を歩く胡桃は浮かない表情をしている。自身の印象を聞くことすら、恥ずかしくて実行出来ずにいたからだ。

胡桃（うう……なんて聞けばいいかわかんない……。シンプルに『あなたのこと好き?』って聞けたら良いんだけど……）

「胡桃ちゃん……なんか顔色悪いけど大丈夫?」

胡桃「だ……大丈夫っ!全然元気だからっ!!」

悩んでいる最中に声をかけられた胡桃は軽く慌ててしまいつながりも、彼に笑顔を見せて体調が悪くない事を伝える。胡桃の笑顔を見た彼は一応安心したようだったが、胡桃の精神力はギリギリだった。

胡桃（『あたしのこと好き?』とか絶対に言えないっ!どんな罰ゲームだよっ!!）

自分がそんな事を聞く光景を想像し、胡桃は顔を真っ赤にする。ついさつきまでは告白するタイミングが分からず困つてしまい顔を青くしていたのだが、その顔も今は真っ赤に……。胡桃が落ち着きその赤みが引くまで、彼に顔を見られなかったことはせめてもの救いだつた。

しかし、その後のランチタイム……更にその後の何気ないシヨツピ

ングが終わろうとも胡桃は告白はおろか……自分の印象すら聞くことが出来なかった。もつと積極的になれば……あと少しでも勇気があれば……そんなふうに後悔したのは辺りが夕焼けに染まり始め、彼と別れる時がきた瞬間だった。

~~~~~

「えっと、家まで送っていいこうか？」

街から離れ、夕焼けに染まる住宅地をのんびりと歩きながら彼は尋ねる。それに対し、胡桃はどこか強がっているような笑みを浮かべて答えた。

胡桃「ううん、一人で帰れるから大丈夫っ！ありがとな」

「…そう。わかった」

答える彼の顔が少し残念そうに見えたのは胡桃の勘違いだろうか……。二人がそのまま無言で歩いていると分かれ道にさしかかり、彼が胡桃の方へ顔を向ける。彼の家と胡桃の家……それらへ向かう共通の道はここまでだ。

「じゃあ、ここでお別れだ…」

胡桃「うん…そうだな」

胡桃はそつと手を振り、そのままその場を去ろうとする……。結局、彼に気持ちを伝えられる事は出来なかった。それを心残りに思う胡桃が顔を曇らせかけた時……

「あの、最後に「っだけ聞いていい？」

胡桃「…えっ？」

思わぬタイミングで彼がそう声をかけてくる。もう背を向けていた胡桃がくるっと振り向き静かに頷くと、彼はニヤリと笑って口を開いた。

「今日はデートだと言われてやって来た訳ですが、これってつまり…
僕らは友達以上の関係になったって事でオーケーかな？」

胡桃「…!？」

胡桃の胸の鼓動が一気に高まる。これは今日一番のチャンスであり、ベストなタイミングだ。彼からこう言ってきたのだ、あとは胡桃自身が頷き、気持ちを伝えれば良い。

ただ…それだけで良いのに……

胡桃「…バカ、調子にのるなっつての」

尋ねてきた彼が笑っていたので、胡桃はその問いが冗談だと決めつけてしまった。せつかくのチャンスだと分かっているのに…やはり、どうしても言えなかった。

「そりゃ残念」

やはり冗談で尋ねていたのか、彼はそこまで落ち込んでいる様子はない。こう返されると分かっていたかのような表情だ。しかし冗談だったとしても良いタイミングだった……。ここで頷く事さえ出来ればと思う胡桃だが、彼を前にすると素直になれない。

胡桃「まったく、すぐ調子にのる」

胡桃（違う…そうじゃないのに…）

胡桃「デートって言ってもあたしは本気じゃなかったし…」

胡桃（違うって…本気だろ…）

胡桃「だいたい、あたしがお前と友達以上の関係になるのとか想像も出来ないし…」

胡桃（嘘だ、何度もしただろ…。何度も想像して、本当にそうなれたらって…そう思ったから今日、こいつを誘ったんだろ…）

胡桃「…ってわけで、今回ののはあくまで友達としてのデートだ！」

ここで言わなきゃだめだと分かっている、裏腹な言葉ばかりが出てきてしまう。自身が放つ言葉の一つ一つが情けなく思った胡桃は次第に泣きそうになってしまい、彼にまた背を向けて足を動かした。

胡桃「また暇があつたら遊んでやるから、それまで良い子にしとけよ」

「ははっ、分かったよ。そっちも良い子にね」

胡桃「…うん、じゃあね」

彼と一緒に外に出かけ、遊べた事は嬉しかった。今日、自身が抱いていた目的がただ楽しむことだったなら間違はなく満点だと言えるくらいに良い日だったのに…。胡桃は自身が抱いていた真の目的が達成できなかった事を悔やみながら彼と別れ、一人帰路を歩いていた。

くくくく

胡桃（結局言えなかった……あたしは……なんのために……）

今日一日で、伝えられそうな機会は何度あっただろう？一度も無かったのなら、今日は運がなかった、次回こそ頑張ろうと自分に言い訳出来る……。しかし、胡桃は分かっていた……。実際は伝えられる機会が何度もあったこと……。そして、その度に自分は唇を震わせる事しか出来ていなかったこと……。要するに、足りないのは自分の勇気だけだったのだ……。

胡桃（なんのためにあいつを誘ったんだよ……。結局、普通に遊んで終わっちゃったじゃん……。うわ……。ばかみたい……）

伝える事が容易だと思っていた訳じゃない。だが、ここまで大変な事だとも思っていなかった……。

胡桃（バカみたい……バカみたいバカみたい……！）

夕焼けに染まる道を、胡桃は一人トボトボと歩く……。今歩いている道は合っているのか……。家に向かう道とは違う方へと向かっていつているのではないか……。辺りを見回してそんな事を考える余裕すら、今の彼女には無い。彼女はただ顔を俯けたまま……。瞳を涙で潤ませていた。

胡桃（言い……たかったのにつ……。今日……伝えたかったのにつ……！）

”今日がダメなら、また後日挑戦すればいい” そんな甘い考えが浮かぶ自分の頭すら嫌になる。今日がダメだったのに…後日挑戦したところで上手くいく訳がない。いつ、いかなる状況だろうと…彼を前にすると素直になれないのだから…。

「…もう…いいや…」

自分では彼に思いを伝えられない…。ならいつそこの気持ちから逃げ、彼とはこれからも友達のままでもいい。そうすれば、自分はいくら以上悩まずにいられる…。

慈 『無理しなくても良い…。でも、後悔だけはしないようにね…』
一人歩く胡桃の脳内にふと、慈が言ってくれた言葉が思い浮かぶ…。彼女は自分の相談にのってくれて、自分が彼に抱いている気持ちの正体に気付かせてくれた。それだけでなく、後押しすらしてくれた…。『彼もきっと、恵飛須沢さんの事が好きだから』と…嬉しい言葉を言ってくれた。

胡桃 (このまま帰って…あたしは後悔しないかな…)
ピタリと足を止め、そんな事を考える…。が、そんな事は考えるまでもなかった。こんな簡単な答えなど、わざわざ立ち止まって考えなくとも…。

胡桃（するに決まってる…。絶対に後悔して、ベットの中で：バカみたいに泣くに決まってるっ!!）

：ダツ!!

胡桃は伏せていた顔を上げ、歩くスピードを上げる。トボトボとしていた歩みはすぐに早歩きとなり、小走りとなり、胡桃は最終的に道の真ん中を駆けていた。家に帰る為に走る訳ではない：彼女はクルリと振り向き、来た道を引き返した。全ては彼に会うため…。絶対に：”後悔”をしないため。

胡桃（めぐねえに相談までしたんだ：こんな情けない終わり方出来ないっ!!）

彼と別れて五分ほどしか経っていない：全力で走ればまだまだ追い付けるはずだ。胡桃は一つの決意を胸に駆けながら来た道を引き返していく。住宅街の道を真っ直ぐに走っていき、さしかかった曲がり角を曲がる…。すれ違った人が全力で走る胡桃を不思議そうに見ていたが、今の彼女にとってそんなのはどうでもよかった。

胡桃「はあっ…!はあっ…!はあっ…!!」

ペースも何もあつたものじゃなく、ただがむしやりに走っているからなのか：息が切れるのがいつもよりも早い。苦しきのあまり胸がジンジンと痛み出してきたが、この足を止めるわけにはいかない…。彼に会うまで、その背中に触れるまで…。

胡桃「ううっ……！はあっ……！はあっ……！！」

休むことなく、スピードを落とすこともなく、息を切らして胡桃は駆ける。そうしていくらかたった頃、夕焼けの光に目をクラクラとさせながらも必死に走る胡桃の目に……見慣れた背中が映った。

胡桃「っ……！！間に……あった……！！」

ようやく追い付いたその背中……。ここまで来たのなら、もう普通に声をかければ良かったのかも知れない。しかし、今の胡桃はその背中へと駆ける足を自分で止める事が出来ず……。

胡桃「うっ……んっ！！」

ガシツ！！

「のわっ!!？」

駆けてきた勢いそのままにその背中……彼の背中に抱きついた。彼は突然の衝撃を受けて三〜四歩ほどよろめいたがすぐに体勢を立て直し、顔だけを振り向けて背中に抱きついたそれが胡桃だと気が付く。胡桃は彼が驚くのもお構いなしに、自らの頭をその背に埋めていた。

胡桃「はあっ……はあっ……はあっ……」

「く、胡桃ちゃんか……。どうした？何か忘れ物でも……？」

何故彼女が戻ってきたのか、それが分からない彼はその顔を後ろに振り向け、背中に抱きついていて彼女に声をかける。彼女の息が切れている事……そして自分の体に回された手がぎゅつと絞まっている事

から何かあったことは明白だが、直後に胡桃の放った台詞…それは彼も全く予期していなかったものだった……。

胡桃「……大好きだよ……」

夕焼けに染まっているからそう見えただけかも知れないが、振り向いた彼と目を合わせて告げる胡桃の顔が何時にも増して真っ赤に見えた…。彼女はそれを告げてから数秒間は彼と目を合わせたままにしていたが、すぐにそれを逸らして彼の背に顔を埋めると…乱れた息を必至に整えようと肩を揺らした。

胡桃「ふう…っ…はあっ…はあっ…」

「…胡桃ちゃん、今のつて……」

胡桃「分かるだろ…告白だよ…。あたしはお前が好きで好きで仕方ないから……だからっ……」

息を乱したまま、それでも胡桃は言葉をつむぐ。彼女は彼の体に回した両手をそつと離すと…彼が完全にこちらを向くのを待った。

「……………」

体ごと胡桃の方を向いた彼は突然の事に驚いているのか、無言のまま

ま目を丸くしている。胡桃は最後の勇気を振り絞って顔を上げると、彼の目を真っ直ぐに見つめた。

胡桃「お前の彼女になるチャンス……あたしに……ある……？」
「っ……」

真っ赤に染まった顔……潤んだ瞳……不安そうに震える肩……。彼はこれまで、こんな胡桃を見たことがなかった。いつもは元気いっぱい、男勝りな性格をしている彼女が……今はこうして、とても女の子らしい顔をしている……。

胡桃「あたしって普段ガサツだし、お前の好みの女の子じゃないかも知れない……それでも……きつと誰よりも……お前のこと……」

真っ赤だった顔が、更に赤く染まっていく……。今から口に出す発言を思うと彼から目を背けたくなるが、胡桃はそれでも勇気を振り絞り、彼の目をじつと……強く見つめ続けた。

胡桃「あたしは他の誰よりも……お前のことを愛してるよ」

第三話 『がんばってよかった』

「ん〜……………」

夏休みの、とある日…。彼は自宅でクーラーもつけずに一人悩んでいた。その悩みの種は学校でのクラスメート…恵飛須沢胡桃。先日、彼は思わぬタイミングで彼女に告白された。彼自身も胡桃に対して好意はあったのでそれに良い返事を返し、二人はカップルとなった訳なのだが…。

(学校で会っても少し会話するだけ…。二人で遊びに行っても特に何も無し…。結局、付き合う前と何一つ変わらないまま夏休みになってしまった…)

付き合ったからには何かしらの変化があるかとも思ったが、今のところそれは実感できていない。何度か二人で出掛けはしたが、どこかでキスをしたりする事もなければ…手を繋いで歩いたりする事すらもない。本当に、付き合う前と何一つ変わっていないのだ。

(カップルってのは…こんな感じで良いのかね?)

せっかく付き合えたのだから、手ぐらいは繋いでデートしたいと…彼は思っている。しかし、胡桃は嫌がらないだろうか? 思い返してみれば、胡桃は告白してきたあの日以来、彼に一度も『好きだ』と言っていない。

(もはや、あの告白が幻だったんじゃないかと思うレベルだな…)

「ここは一つ、何か行動を起こしてみるかね…」

部屋の中で一人呟き、どうするべきかと作戦を練る…。デートしに街へ出掛けても良いが、これは何度も行った手だ。胡桃を誘ってただ街に行くだけじゃ、また『デート』ではなく『遊び』になるのが目に

見えている。

「…くそ。こういう時、相談できる人が身近にいればな」

そう思ったところで、今現在そばにいるのはペットである太郎丸だけ。誰かに携帯で連絡しても良いのだが、誰を頼れば良いのか分からない。そもそも、胡桃と付き合っている事は由紀達にも明かしていないのだ。そこから説明するとなると長くなってしまふ…。

「太郎丸…何か良い案はあるか？ご主人様はかなりお困りだぞ…」

言ってみても太郎丸は横になったまま不思議そうにこちらを見つめて首を傾げるだけで、答えてはくれない。まあ、当然の反応だ。仕方ない…ここは一度クーラーをつけて部屋を冷やし、落ち着いて考えてみよう。そう思い、クーラーのリモコンを探した時の事だった。横になっていた太郎丸が起き上がり、その小さな体の下敷きになっていた一枚の紙切れが彼の視界に入る。

（ん？これは…確か今朝、玄関に届けられてたやつか）

どうせ近所に出来た飲食店の広告とか、そんなものだろう。そう決め付けて読んでいなかったその紙切れを手に取り、目を通してみる。それには大きな文字で『巡ヶ丘夏祭り』と書かれており、開催日は今日から三日間だった。

（祭り…ねえ。人も多いだろうし、誘うような人もいないからな）

特別興味がある訳でもないし、行くことはないだろう。そう思つてその紙をゴミ箱へと投げかける彼だが、その時ふと気が付く。実感がわいていないせいで忘れかけていたが、今の自分には祭りに誘える人間がいるという事を。

（……よし…これだな！）

それに気付いた瞬間、この『夏祭り』というのがやたらと魅力的なワードに見える。彼は直ぐ様携帯を手に取り、ある人物に連絡を入れ

た。その人物というのはもちろん、彼女である胡桃だ。

プルルル…プルルル…プルルル…

胡桃『…おう。どした？お前からかけてくるの珍しいじゃん』

二度、三度と呼び出し音が鳴り、四度目が鳴る前に胡桃が応える。彼女に言われた通り、彼の方から連絡を入れるのはかなり珍しい事だが、今日はそれだけの用事があるのだ。

「えっとさ、今日の夕方…暇？」

胡桃『夕方？暇だけど、なんで？』

「今日、祭りがあるって知ってさ…。どうせなら、胡桃ちゃん行ってみたいかなあと…。」

右手で携帯を持ちながら、その祭りの広告を左手に持つ。屋台などは昼過ぎから出ているようだが、夕方から夜までを狙って行った方が雰囲気良くなる気がした。

胡桃『祭り…？あたしと…？…ん、仕方ないなあ♪うんっ！行ってやるよ！支度して待ってるから、家まで迎えに来てくれるか？面倒なら現地集合でも良いけど…』

「いや、そっちまで迎えに行くよ。その方が…。」

胡桃『その方が…？』

「…いや、何でもない。とりあえず、夕方になったら迎えに行く」

一瞬、『その方がデートっぽいから』と言いかけてしまいそうになりながらも、彼はどうか胡桃との約束を取りつける。彼に誘われた胡桃の声も、どこか嬉しそうだ。

胡桃『じゃあ待ってる。約束だからな？遅れんなよ』

「ああ、わかってるよ。じゃ、また後で…。」

胡桃『うん。後でな…』

彼女の返事を聞いてから携帯のボタンを押し、通話を終える。もしかしたら、今日は初めてデートらしいデートが出来るかもしれない。そう思うと自然と胸が高鳴り、彼は微笑んだ。

~~~~~

軽い昼寝や支度：それらをしている内、外が夕焼けに染まりだす。そろそろ胡桃を迎えに行く時間だ。彼は太郎丸に留守番を任せ、彼女の家へと向かう。彼自身、今回のデートはとても楽しみなのだが、もしかしたらそれは胡桃も同じだったのかも知れない…。彼が胡桃の家に辿り着いた時、彼女はもう家の外で待機していたのだ。しかも、可愛い浴衣を着て…。

「お待ちせ。おつ…：浴衣着たの？」

胡桃「まあ、せっかくの祭りだしなあと思つて…。へ、ヘンだったりする？似合つてないなら、脱いでくるけど…」

青を基調としたその浴衣には、所々に綺麗な花模様が描かれている。一見するとシンプルなデザインだがとても夏らしく、彼女によく似合っている。いつものツイントールを短く纏めている事で、うなじが見えているのもポイントが高い。

「いや、よく似合ってる。可愛いよ」

胡桃「かわっ…!?あ、ありが…と…:…:…」

彼の言葉に照れてしまい、胡桃は顔を俯ける。彼女は手に持っていた水色の中着袋を揺らしながら彼の隣へと立ち、横目でチラッと視線を向けた。

胡桃「じゃあ…：行こっか？」

「ああ、そうだね」



祭りの会場まではさほど遠くもない為、二人は徒歩のままそこへと向かう。歩きながら軽い会話こそ交わすが、手を繋いだりする事はない…。もう付き合っているのだから手を繋ぐ事くらいは普通かも知れないのだが、何となく照れくさい。

胡桃「……………」

「……………」

祭りの会場に近付くにつれ、少しずつ人通りが多くなる。辺りを歩く人々もほとんどが彼や胡桃と同じく、祭りが目当てなのだろう。浴衣を着ている人も思いの外多い。そうして人波に紛れながら5分ほど歩き、二人は祭りの会場へと辿り着いた。会場として使われている場所は普段は広いだけで特に何も無い自然公園なのだが、今日は沢山の屋台が並び、かなり賑やかだ。

「さて、どこを見ていこうか？」

胡桃「ん〜…………とりあえず、何か食べないか？少しだけお腹空いちやって」

「了解。そうしようか」

歩く人々にぶつからないよう注意しつつ辺りを見回し、道の端々にズラリと並んだ屋台を覗いていく。

「ええつと、どこにしようか…」

たこ焼き・焼きそば・お好み焼き…。この他にも色々な食べ物の屋台がある。ワタアメだのかき氷などもあるが、甘いものは後回しだろう。

「とりあえずたこ焼きで良い？」

胡桃「おう、全然オツケーだ」

ニッコリと微笑む胡桃を連れてその屋台へと向かい、二人分のたこ焼きを買う。購入の際に胡桃は持っていた巾着から財布を取り出す。

うとしたが、彼はそれをおさえさせて彼女の分の代金も支払った。少しでも彼氏っぽい事をしたかったからだ。

胡桃「こんくらいあたしが払うのに」

「いやいや、お気になさらず」

その後、二人は購入したたこ焼きを道の隅にあるベンチに腰掛けながら食べていき、また他の屋台を見て回るべく立ち上がり、人波の中を歩いた。そうしていくらかの時間、祭りを楽しんでいくと…

胡桃「あつ、ちょっと待ってて」

「うん？」

その途中、胡桃はある屋台を見つけて一人でそこへと駆け寄る。人波の間を進む彼が胡桃に追い付いた時、彼女は既に商品を買って終わった。手が汚れぬよう、割り箸の先端に刺してある丸くて真っ赤なそれを…

「…りんごアメってやつ？」

胡桃「そ。あたし、これが地味に好きでさ〜♪」

「へ〜…」

胡桃「あれ、もしかして食べたことないのか？」

「ない」

今まで祭りで見かけた事こそあったが、味わった事はない。彼が頷きながら答えると、胡桃はそれを持つ手を彼の方へと傾ける。

胡桃「ほい。一口食べてみる？」

「ああ、また後で頼むよ。少し喉が渴いてて…」

胡桃「あつそう。早くしないと全部食べちゃうからな？」

どこかで飲み物を買ってからにしよう。彼がそう考えて辺りを見回すと、胡桃はりんごアメを舌先で舐めながらニヤリと笑う。一方で

彼の方も、こうして一つの物を一緒に食べるなんてカップルっぽいなあと思ひ頬をゆるめた。

その後、飲み物売り場がすぐに見つかり、彼は一つの缶ジュースを飲みほして喉を潤わせる。するとまた別の問題が浮上してきてしまい、彼はりんごアメを舐める胡桃をベンチに待たせて立ち上がる。

胡桃「どうした？」

「…ちよつとトイレ行つてくる。一人で待つてられる？」

胡桃「子供じゃないんだから大丈夫に決まつてるだろ。早く行つてこいよ」

「じゃあ、すぐ戻るから…。変な人についていたらダメだよ」

胡桃「ん〜。お前もな〜」

胡桃は左手に持ったりんごアメを舐めつつ、右手を彼へ向けてパタパタと振る。彼はベンチに座る彼女に手を振り返すと、近場にある公衆トイレへと向かった。

(うわ、混んでるな…)

祭りの最中という事で公衆トイレも少しばかり混雑しており、彼は用を足してそこを去るまでに数分の時間を使つてしまう。この間も胡桃は一人で待つている訳だが怒つたりしてはいないだろうか…。

「お待ちせ」

胡桃「遅かったな。混んでたか？」

「ああ、ほんとに混んでた。待たせて悪かったね」

胡桃「いや、大丈夫だよ」

機嫌が悪くなつたりはしてないようで、胡桃はニツコリと微笑んでいる。彼はそんな彼女の隣へと腰掛け、視線の先で行き交う人々を眺めた。

胡桃「あのく……わりい……。全部食べちゃった……」

彼の隣、胡桃が申し訳なさそうな声を出しながら、何もついていない割り箸を揺らす。彼女が買ったりんごアメはあまり大きな物ではなかった為、すぐに食べ終えてしまったようだ。

胡桃「ちよつとブーツとしててさ……気付いたら全部食べちゃった」

「んん、別に良いよ。また今度食べてみるさ」

胡桃「でも……その……」

何なら、今から自分の分を買ってくるという手だつてある。まあ、彼女との間接キスを逃したのは残念だが……食べてしまったものは仕方ない。彼はベンチから腰を起こし、引き続き祭りを楽しもうとした。

「さて、次は何を——」

胡桃「あのつ……！ちよつと……ついてきて……」

「えっ？あ、ああ……」

りんごアメのついていた割り箸をそばにあつたゴミ箱に投げ捨てると、胡桃は彼の右手をガシツと掴んで歩き出す。彼女が少し小走りで向かったのは、ベンチの裏手にある木々に囲まれた場所……。屋台どころか、ひとけ人気も全くない場所だ。

「……どうした？」

胡桃「いや……そのつ……」

辺りはすっかり暗くなってきたが、二人が立つこの場所には電灯すらない。しかしそれでも、暗闇にぼんやりと浮かぶ胡桃の顔が真っ赤になっている事は分かった。彼女はその顔を微かに俯けながら真正面に立ち、彼の右手首を握るその手にギュツと力を入れる。

胡桃「……とじ……て」

「……あ……」

胡桃「だからっ…目だよっ！少し閉じてろっ！」

真っ赤に染まった顔…潤んだ大きな瞳…それらを彼へ向けながら、胡桃はまた一段と強く右手を握る。その圧に負けた彼は大人しく目を閉じたのだが…薄々ながらも、胡桃が何をする気なのか分かっていた。だからこそ、彼の胸の鼓動がドンドン高鳴る。

胡桃「途中で開けたら…ほんとに怒るからな…」

「ああ、わかっ——」

と、言い切るよりも先だった。チュツ…と音を発しながら、彼の唇に柔らかなものが触れ、その口を塞ぐ…。柔らかく、暖かさのあるそれは微かに甘みを帯びていた。

胡桃「ん…っ…」

彼の唇を塞いでいるそこから、これまで聞いた事のないような胡桃の甘い声が漏れる。いつの間にか肩には彼女の手が回されているようだし、彼女の前髪が鼻先に擦れている…。彼はそれらの感触を、目を閉じたまま感じていた。

胡桃「っ…っ…っ…はい。もう…開けていいよ…」

唇に重なっていた感触がなくなり、彼は瞳を開けた。目の前にいた胡桃の顔は相変わらず真っ赤だが、どこか嬉しそうに微笑んでいる。

胡桃「味、した？」

「…味？」

胡桃「だからその…りんごアメの味…」

「あ…っ…どうだろう…」

今、胡桃は自分にキスをしてくれたのだろう…。その事実が衝撃過ぎて、感じた甘味がりんごアメのものなのかどうかなんて分からない。

「…もう一回するっ…」

胡桃「うっ…。だ、だめっ！もう終わりっ!!サービスは一回きりだ！」

「ははっ、そりゃ残念」

かなり照れているのか…胡桃は彼から距離をとり、真っ赤な顔をしまったま額に汗を浮かべている。一回きりというのは残念だが、その一回があっただけでも良かった…。そう考えた彼は胡桃に寄ると自らの左手で彼女の右手を握り、祭りの中心部へ、ゆっくりと戻っていく事にした。

胡桃「あっ……」

彼に手を握られた胡桃は一瞬驚いたような声をあげるが、すぐにその手を握り返し、ひっそりと微笑む。こうして手を繋いでると彼が自分の恋人なのだ実感できて、心から幸せな気持ちになる。

「胡桃ちゃんは…僕の事、好き？」

胡桃「えっ…?」

あと少しで木々の間を抜け、また人通りの多い場所に出るという時…彼はピタッと立ち止まる。胡桃はそれに合わせて立ち止まると、戻りかけていた顔を再び赤く染めた。

胡桃「そんなの、わざわざ聞かなくてもいいだろっ!!」

「いや、胡桃ちゃんの口から、ハッキリとした言葉で聞きたい」

胡桃「っ……わ、わかった…よ」

彼に真面目な表情を見せられて観念したのか、胡桃は潤んだ瞳を向ける。彼女の言った通り、ついさつきキスされた彼は彼女が自分にとんな感情を抱いているのか分かっていっているつもりだ。しかし、やはりそれは彼女自身の言葉で聞きたかった。

胡桃「え…っと…。大好き………だけど」

「……」

モジモジと、恥ずかしそうに体を揺らして胡桃は答える。その真っ

赤な顔がやたらと可愛いくて彼はついニヤケそうになるが…彼女の放った言葉が嬉しくてそれどころではなかった。

「…ありがとう。僕も、胡桃ちゃんのことを大好きだ」

胡桃「あつ…あ、ありがと…。つたく、なんかハズイな…」

互いの気持ちを言葉で確かめ合い、祭りへと戻る。そのあと更に一時間近く祭りを堪能した後、二人は手を繋いだままの状態で帰路へとついで。

胡桃「今日はすごく楽しかった…。誘ってくれてありがとうな」

「どういたしまして。こっちこそ誘ってよかったよ。ようやく、カツプルらしいデートが出来た気がする。もうコツは掴んだから、次も楽しみにしてる」といい

胡桃「あははっ、コツって何だよ、変なヤツだなあ」

手に持つ巾着を揺らし、胡桃がおかしそうに笑う。これから先も…この笑顔をそばで見えていけたら良いなど、彼はそんな事を思っただけで微笑む。

「とりあえず次のデートでは、僕の方から君にキスをしようかと…。まあそういうわけなんで、その辺もお楽しみに…」

胡桃「…はい、楽しみにしています…」

こんな事を言ったらまた笑われてしまうのではと思っていたが、意外にも…胡桃は照れたように微笑む。初めて見る、彼女のしおらしい表情…そして敬語で放たれた言葉は、彼の胸をこの上なくときめかせた。

「…君と付き合うことになれて良かった」

胡桃「へへへ……。あたしもさ、あの時、お前に告白するのがんばつて良かったって、心からそう思ってる……。お前に気持ちを伝えるのは恥ずかしかったし、怖かったけど……。勇氣だしてみて、本当に良かった」付き合った直後の数日はまだカップルとしての実感が湧かなかつたが、今日の祭りに行った事でそれは変わった。お互いがお互いの事を愛しているのだと、しっかりと確認できたからだ。胡桃、そして彼……。二人は幸せそうに微笑みながら帰り道を進み、今回のデートを終えた。



#### 第四話 『今なら素直に…』

ある日曜の昼前、彼と胡桃は巡ヶ丘にあるデパートの三階…そこにある映画館へやって来ていた。前に二人で夏祭りに行つてからというものちゃんとしたデートが出来ていなかった為、彼の方から胡桃を誘つたのだ。

胡桃「んく、ちよつと混んでるな」

「ま、日曜だしね」

映画館のチケット売り場は家族連れやら小さな子供達やらで賑わつていて、少々騒がしい…。だが、見たところ同じ学校の生徒はいなそうなのが救いだ。もし二人で映画を観に来ているところをクラスメートにでも見られたら、学校でネタにされてしまうかも知れない…。

「…ちよつとトイレ行つてきていいかな？」

胡桃「仕方ないな…早く済ませてこいよ。チケットは買つておいてやるから」

「わるい、任せたよ」

トイレへ向かう彼を見送り、胡桃はチケット売り場の列に並ぶ。列は少し長めだが、それを捌く店員の人数はわりと多い。列はみるみる消化されていき、あつという間に胡桃の番となった。

店員「いらつしやいませ。本日はどれをご覧になりますか？」

胡桃「えつと、この映画で頼みます」

メニュー表にあつた一つの映画を指差すと、相手の女性店員はニツコリと頷く。今日観に来た映画はアクション映画であり、上映開始時間は20分後だ。後に胡桃がその映画を見る座席の位置を二つ決めると、店員が尋ねる。

店員「チケットは二人分ですね？」

胡桃「あつ、はい……」

店員「失礼ですが、お相手の方は男性でしょうか？」

胡桃「えっ？」

いきなり何を言うんだと思い、胡桃は目を丸くする。すると店員は申し訳なきように苦笑いしながらメニュー表をカウンターへ置き、何やら説明を始めた。

店員「本日はイベント日となっていて、男女二人……なおかつカップルの方にはカップルチケットというものをお売りしています。もしお相手の方が彼氏さんなら、こちらを買った方がお得ですよ♪」

胡桃「あ……じゃあ……その……カップルチケットでお願いします……」

店員「はい、かしこまりました！」

元気な返事を返す店員を前に、胡桃は顔を俯け恥ずかしそうな表情を浮かべる。自分と彼は付き合っている……だからこのカップルチケットを買うことは何もおかしくないのだが『カップルチケット』という響きを口にするのが何故かやたらと恥ずかしかった……。

胡桃（あたしとあいつは……カップル……なんだよな……？うわ、改めて実感するとやたらとハズい……）

そんな事を思いながら顔を真っ赤に染めていると、目の前にいた店員が用意したチケットをカウンターのの上に置く。それに気付いた胡桃は慌てたようにして財布を取り出してその代金を支払うと、チケットを手にしてその場を離れる。そうして近場にあったベンチに腰かけて時間を潰していると、トイレに行っていた彼がスタスタと戻ってきた。

胡桃「遅かったな？ほい、チケット」

「ああ、やたらと混んでてね……。ええつと、カップルチケット？」

渡されたチケットに書いてあった文字を読み、彼は首を傾げる。そ

のチケットが普通の物よりお買い得な事、そして名前の通りカップルしか買えない事を胡桃が説明すると、彼はニヤニヤと笑った。

「なるほどなるほど、カップルねえ…」

胡桃「なつ、なんだよその顔っ！何かおかしいか!？」

「全然、何もおかしくないよ」

イタズラに笑いながら彼女の隣に腰を下ろし、ベンチに置かれていた左手にそつと右手を重ねる。それが恥ずかしかつたのか…胡桃は彼に見えぬよう顔を横へ逸らしたが、髪の間隙から覗く耳が真っ赤に染まっていくのはハッキリと分かった。

「手繋ぐの、恥ずかしい?」

そつと尋ねると、胡桃は横を向いたままコクリと頷く。恥ずかしいのなら、嫌なら離してあげよう…。そう思って彼が手を離そうとする時、胡桃は慌てたようにその手を掴み、真っ赤な顔をこちらへと向けた。

胡桃「い、今はさ…：…ほら、周りに人がいっぱいいるから…。人<sup>ひと</sup>気<sup>け</sup>の無いところに移ったら…：…また繋ごうぜ?」

「…わかったよ」

そう答えると、胡桃は嬉しそうに微笑んで彼の手を離す。確かに、今は辺りの人影が多い…。どうやら人目につく場所で手を繋ぐのが恥ずかしいだけで、手を繋ぐということ自体が嫌なわけではないようだ。

「飲み物とか買ってこようか?」

胡桃「あつ、そうだな」

映画が始まるまで、まだ時間がある。二人は映画館に備え付けられているフード売り場へ行くと、ポップコーンと飲み物を買って、映画の上映を待った。

「そう言えば、チケツト代を立て替えてもらってたな…。ちよつと待ってて、今払うから」

胡桃「別にいいよ。カップル料金にしたおかげで安く済んだし」

「いやいや、そういうわけには…」

チケツト代を胡桃に払おうとする彼だが、ポップコーンや飲み物を抱えているせいで財布が取り出せない。少しの間だけこれらを置いておける場所がないかと辺りを見回していくと、胡桃がため息をついて肩を小突く。

胡桃「じゃ、後で払ってくればいいよ。今はひとまず、映画を楽しもうぜ」

「…そうだね。じゃあ、後で払うよ」

胡桃「んん、それでよし！」

なんてやり取りをしていると、いつの間にか映画の上映時間が迫っていた。二人は入場口へ向かい、そこにいた店員へチケツトを見せる。まず最初に彼がチケツトを見せ、次は胡桃の番だったのだが…

胡桃「あ、あれっ…？」

「ん？どした？」

手に抱えていたポップコーンと飲み物の乗ったケースの中を探っていた胡桃の表情が徐々に青ざめていく…。次の瞬間、彼女はまいったように苦い笑みを浮かべた。

胡桃「チケツト…落とした…」

「なっ…マジか」

胡桃「マジ…。どうしよう…」

彼と映画を観る事を楽しみにしていたのに、こんな事になってしまふとは…。辺りを探せばチケツトが見つかるだろうか…。それとも、買い直した方が早いだろうか…。胡桃が色々な事を考えながら顔を

俯けていると、二人の後ろに並んでいた少女が胡桃の肩をトントンと叩いた。

??「あの、これ落としましたよ？」

胡桃「えっ？」

そつと振り向いて確認すると、少女の手にはさっきまで胡桃が持っていたチケットが握られていた。この少女は胡桃がそれを落とす瞬間を見ていて、わざわざ届けてくれたようだ。

胡桃「っ！ありがとうございます——」

チケットを受け取り、そこまで言ったところで胡桃は固まる……。彼女が落としたチケットを拾ったその少女に、見覚えがあつたからだ……。

腰辺りまで伸びた茶髪……。そして、服の上からでも分かる大きな胸……。人違いであつてくれと思つたが、間違いない……。胡桃の前に立つその少女は……若狭悠里だつた……。

胡桃「……………」

悠里「あら、やっぱりくるみだつた。声を聞いた時からそうかなあつて思つてたの♪」

悠里はニコニコと微笑んでいるが、胡桃はそれを無視するかのようにしてチケットを店員へと見せる。突然の事で焦つたが、今は入場口の向こうへ逃げてしまおう……。そう思つたのだが……。悠里もまた、持っていたチケットを店員へと見せて入場口を通つてきていた。

胡桃「り、りーさんも映画観に来たんだ……？」

悠里「ええ、せつかくのお休みだから、ゆきちゃんと一緒に映画でもと思つてね」

胡桃「……………えっ？」

悠里の言葉に驚き、改めて目線を上げる……。すると悠里の後ろ、そ

こから猫耳帽子がピョコツと顔を覗かせている事に気が付き、胡桃は益々焦った。

由紀「むふふく・く・る・み・ちゃくんっ♪」

焦る胡桃を小馬鹿にするかのようにして、猫耳帽子を被った少女：丈槍由紀が前に立つ。彼女はポップコーンの乗ったケースを手に抱えたまま胡桃の横へ立つと、意味深な笑みを浮かべたまま胡桃：そして彼の事を交互に見つめた。

由紀「えへへ…えへへ…♡」

「……………」

胡桃「な、なんだよっ!!？」

焦ったり、照れたりして顔を逸らしたら由紀のペースになる…。胡桃は開き直ったようにして彼女と向き合い声を張り上げるが、由紀は未だにニヤニヤとしていた…。いや、よく見ると、悠里もやたらとニヤニヤしている……。

悠里「『カップルチケット』…ねえ♪」

胡桃「な…っっ!？」

悠里が片手を口に添えながら『ふふっ』と笑うと、由紀もまたニヤニヤと微笑む…。やはり、この二人は知っている…。いや、知ってしまったのだ…。ついさつき、胡桃が落としたチケットを見て…：そして、胡桃の横に彼がいるのを見て……。

由紀「ねえねえっ！いつから？いつからなのっ!？」

由紀はターゲットを胡桃から彼に変更し、グイグイと肩を寄せながら尋ねる。どう答えるべきか…：彼は胡桃の様子を窺うが、彼女は顔をゆでダコのように赤く染めたまま動かない。まあ、嘘をついたりごまかしたりする必要も特に無い…。彼は由紀の顔をそっと見つめ、正直に答えることにした。

「ええっと、わりと最近からだよ」

由紀「おおくっ！どっちから告白したのっ!!？」

「…胡桃ちゃんの方から……」

由紀「わああっ♪」

悠里「あら、くるみみて積極的なのね♪」

胡桃「……………」

悠里が顔を覗き込むが、胡桃はピクリとも動かない…。

少しからかい過ぎてしまっただろうか…。悠里は由紀の肩をつつくと、その場をそそくさと離れていくことにした。これ以上追及し続けたら、胡桃が気絶してしまいかねない…。

悠里「私とゆきちちゃんが観るのはあなた達と別の映画だから、またね」

「ああ…また」

由紀「またねっ！」

二人はニヤニヤしながらその場を離れ、目当ての映画が上映するシアターへ入っていく…。しかし、胡桃はまだ固まったままだ…。

「…おい、胡桃ちゃん。二人はもう行ったよ？」

胡桃「……………うん…」

胡桃はようやく反応を返し、ゆっくりと歩き出す…。だがその顔は未だに真っ赤で、湯気があがっていきそうな程だった。

胡桃「二人に…バレた……。死ぬほど恥ずかしい…っ…」

「でも、いつかはバレる事だったんだし、良かったんじゃないの？仲の良い友達にずっと隠してるのも何か嫌でしょ？」

胡桃「それは…そうだけど…」

由紀に悠里…どちらも大切な友達だ。

なので彼との関係を近い内に明かす気でいたのだが、まさか今日…

こんなタイミングでそれを明かすことになるとは思ってなかった…。

胡桃「はあっ……ま、いつか……」

ずっと恥ずかしがっていても仕方がない…。胡桃は気持ちを切り替え、彼と映画を楽しむことにした……。

~~~~~

そして時間が経ち、すっかり夕方となった頃…。胡桃は彼と共に住宅街を歩き、自宅を目指す。二人で観た映画は思っていたよりもずっと面白く、それを観終えた後に食べた昼食もとても美味しかった…。

胡桃「今日はありがとな。本当に楽しかったぜ」

「いや、こちらこそありがとう。胡桃ちゃんとのデートは楽しくて、時間が経つのが早い気がするよ…」

胡桃「……あははっ」

実は…胡桃も彼と同じ様な事を思っていた。一人ダラダラ過ごす休日はやたらと長く感じるのに、今日のデートはあつという間に終わってしまったような気がしていた。

「あ…胡桃ちゃん、ちょっとこっち来てくれる？」

胡桃「ん？ああ、分かった」

あと少しで胡桃の家に着くという時、彼は人気の無い路地裏へ向かって歩き出す。家への方角とも違うし、完全に寄り道だ。しかし彼も訳があつてそちらに行つたのだと思い、胡桃はそのあとに続いた。

「よし、ここなら良いか…」

少し行つた所で立ち止まり、辺りを見回して自分達意外に人の気配が無い事を確認する。家と家の塀に挟まれたこの路地裏は夕焼けの光すらも建物で遮っており、やたらと薄暗い…。

胡桃「なあ、どうした？」

「…前にデートした時、言ったよね。『次のデートでは、僕の方からキスする』って……」

胡桃「あ……っ……」

瞳を細めて驚いたような反応を見せる胡桃を扉の方へ追い込み、その肩へ両手を添える……。胡桃は頬を真っ赤に染めて瞳を潤ませていたが、すぐにその瞳をそつと閉じると、自分から唇を突き出してキスを待ち始めた……。

(ほんと……可愛いやつ……)

目を閉じてキスを待つ胡桃がいつも以上に愛しく見えてしまい、彼の気持ちも高まる……。彼は彼女の肩に両手を添えたまま唇を寄せると、それを彼女の唇と重ねていった……。

胡桃「ん……っ……」

互いの唇が『ぴとっ』と重なった瞬間、胡桃が甘い声を漏らす。声が漏れたのはその一瞬だけでなく、彼が唇を動かす度……肩に添えていた手の内の一方を彼女の後頭部に移して柔らかな髪を撫でる度……何度も漏れていった……。

胡桃「っ……ん……ん……ん……んっ」

男勝りな性格だと思っていた胡桃が今は自分の彼女であり、こうしてキスすると顔を真っ赤にしながらいきなり甘い声を出す……。キスされてこんな声を出すこと……こんなにも柔らかく、熱い唇を持つていること……自分しか知らないであろう彼女の一面を知ったらまた一層に気持ちが高まり、彼は自身の舌を彼女の唇と唇の間へ伸ばしていった。

胡桃「んあ……っ!?ま、まっ……て……っ……っ……!」

自分の唇に彼の舌が触れ、胡桃は戸惑う……。しかし彼は気持ちを抑えきれず、その舌を彼女の唇の隙間へと無理やりにねじ込んだ。

胡桃「ふあ…っ…んむっ…ん…♡」

唇を押し退け、胡桃の口内に舌を入れる…。彼女の口内は自分のとは比べ物にならない程に熱く、そこにあつた舌はとても柔らかかな物だった。彼はただ本能のまま舌を動かし、それを彼女の舌に絡めていく…。熱くヌメヌメとした舌同士を絡ませる度、胡桃は声を漏らしながら肩を震わせた。

胡桃「あっ…んあ…♡あ…あむ…っ♡」

気付けば胡桃の方からも舌を動かし、彼の舌に絡んでくる…。もはや口内にあるのが自分の唾液なのか相手の唾液なのか分からなくなる程キスした後、彼はそつと唇を離した…。

「ん…はっ…」

胡桃「っ…はあ…っ…はあっ…はあっ…」

キスで乱れた息を整えようとする胡桃の表情は、今まで見たこと無い程に色気のあるものになっていた…。うつすらと開いた瞳からは一筋の涙が…そして、真つ赤な唇の端からは唾液が垂れていて、顎先にまでそれが伝っている…。胡桃は顎に垂れていた唾液を服の袖口で拭うと、彼の事をそつと静かに見つめた…。

胡桃「今の、もいつかい…したい…」

顔を真つ赤に染めたまま、とろんとした目で胡桃が言う…。

彼女にそんな表情で、そんな事を言われたら断る事など出来る訳もなく、彼は再び唇を寄せたのだが…

『ピロリンッ♪』

「っ？」

胡桃「あっ…」

あと少しで唇が重なるという時、胡桃の携帯が鳴る。彼女はぼんやりした目付きをしたままそれを取り出すと、届いていたメッセージを読み上げた。

胡桃「ゆきからだ……。『彼とのデート、楽しかった？』…だつてさ…」

「あはは…何て返す？」

胡桃「…『すぐく楽しくて、ドキドキした』って返す…」

冗談なのかと思つたが、胡桃は本当にその文字を打ち込み、由紀に返信していた。もしかしたら、キスしたばかりで頭がぼんやりしているのかも知れない。そんな胡桃の髪を撫でていく内、彼は忘れかけていた事を思い出して声を上げた。

「あつ、そう言えばチケット代払うの忘れてた。ええつと…はい」

財布からチケット代を取り出し、それを胡桃へと手渡す。胡桃は渡された紙幣を眺めてぼんやりした後、何ともいえない苦い表情を浮かべていく。

胡桃「人気ひとけのない路地裏でキスして…そのあとにお金もらつて…：なんか、いけない事してる気分になつて嫌なんだけど…」

「いやいや、これはあくまでもチケット代であつて、そういうお金を払ったわけじゃないぞ？」

胡桃「わかつてるつて…ありがとな」

胡桃は受け取つたチケット代を自分の財布へしまい、彼と共に路地裏をあとにする…。由紀からメッセージが来たせいで二度目のキスのタイミングを逃してしまつたが、これで良かったのかも知れない。あのままキスを続けていたら、きつと止め時が分からなくなつていた…。

くくくくくくくく

胡桃「…じゃ、今日は本当にありがとな。楽しかったよ」

自宅前まで送ってもらい、胡桃は改めて礼を言う。彼はそんな彼女を見て嬉しそうに微笑むと、静かに手を振った。

「じゃあまた明日…学校で」

胡桃「うん…また明日」

胡桃は手を振り返し、家の前で彼の事を見送る。自宅へ帰っていく彼と自分の距離が10メートル程開いた時、このまま家の中へ入ろうとも思ったが……

胡桃「おいっ！」

最後にもう一言だけ、彼に伝えたい言葉がある…。

前の自分なら恥ずかし過ぎて絶対に言えなかつたと思うが、今の自分なら…正直にそれを伝えられる。呼ばれた事によつて彼がこちらへと振り向いたその瞬間、胡桃はニツコリと…子供のよう微笑み、大きな声でそれを伝えた…。

胡桃「だくいすきっ♡」

第五話 『お前のために』

胡桃「んくく………」

狭い一室の中央、そこに置かれていた小さなテーブルの上で頬杖をついたまま退屈そうに唸り声をあげた後、胡桃はチラリと横を向く……。そこにはこの部屋の主であり彼女の恋人でもある彼がいたが、彼は雑誌をパラパラと捲るばかりでその視線に気付かない……。

胡桃「はくつ……あくあく……」

もう一度……今度はさつきよりも大きく声をあげ、また彼の方を見る。すると今度は流石の彼も胡桃の様子に気が付き、持っていた雑誌をテーブルの上へと置いてから視線を向けた。

「……退屈？」

胡桃「ま、そうだな。わりと退屈だ」

本当ならこれから外へ出て久しぶりのデートをする予定だったのだが、胡桃がこの家に来た瞬間に雨が降り始めてしまった。雨の中出掛けても楽しさ半減なので今日はお家デートをすることにしよう……という事になったのだが、いざ始めてみると何をしたら良いのか分からずに退屈な時だけが過ぎていく。これなら、傘を持って外に出た方がマシだったかも知れない。

「大切な彼女を退屈させちゃ悪いな……」

胡桃「ああ、悪い。だからどうにかして楽しませてみる」

イタズラな表情をして『ふふん』と笑っている胡桃をどうにか楽しませたいところだが、いくら考えてみても良い案が思い浮かばない。胡桃もここに来はじめた当初は彼の飼った犬である太郎丸を相手にしてニコニコと楽しんでいたが、その太郎丸も今はぐっすりと眠ってしまっているようだ。

「どうしたもんかね…家の中で出来る事なんてそう多くないしな…」
そう呟いた後、彼はとある事を思い浮かべて胡桃を見つめる。
恋人関係にある彼女となら、家の中でもあんな事やこんな事を…。

胡桃「待て、お前の考えてる事は大体分かる。あれだろ…ちよつとエロい事考えたろ？」

「ちよつとというか、凄くというか…まあエロい事には変わりないか」

胡桃「っ…ダメっ!!そういうのはその…もうちよい後つていうか、あたしが覚悟出来てからというか…」

胡桃はそつと静かに俯き、真つ赤に染まった顔を隠す。

その行動があまりにも予想通りのものだった為、彼は小さく微笑んだ。恥ずかしがりやの彼女なら、こうして顔を俯けると思っていた。

「ふふっ、まあエロい事つていうのは冗談だよ」

胡桃「…本当か？なんだか怪しいとこだけだな…」

彼女から疑いの目を向けられ、彼の額に冷や汗が浮かぶ…。

”冗談だ”とは言ったものの、もし胡桃が乗り気になつてくれたのならそのままやる事をやってしまったらどうだろうか…。疑いの視線を向けてくる彼女から逃れるように顔を横へと向けた彼は部屋にある時計が昼過ぎを指している事に気が付き、話題を逸らしていく。

「もう昼過ぎか…どうりで腹が空いてきたわけだ」

胡桃「確かに腹へってきたな…。何か作ろうか？」

「おっ、じゃあ頼むかな…。冷蔵庫の中身は適当に使つていいよ」

胡桃はニコツと微笑んでから立ち上がるとキッチンの方へと向かい、冷蔵庫の中身を物色します。この時、彼は彼女の背を見つめながらある事を思っていた…。胡桃は…料理なんて出来るのか？…と。

胡桃「え〜つと…この辺は使えそうだな…。よし、これも使うか。

あとはこの辺のヤツを適当に〜……」

「……………」
食材選びに躊躇いが無いようだが、それがかえって不安を煽る…。正直に言わせてもらおうと胡桃に料理が出来るようなイメージは無いし、本人の口からそれに関する話題を聞いたことも無い。彼の抱いている不安はだんだんと大きくなっていったが、胡桃はそんなのお構い無しに食材選びを終えた。

胡桃「…よし！じゃあやってみるか!!」

とても良い笑顔でキッチンに立ち、選んだ食材の数々を並べていく。

彼女のように可愛い女の子がキッチンに立って自分の為に昼食作りをしてくれるなんて夢のような事だと思うのだが、どうにも不安が消えてくれない…。右手に握っている包丁も、彼女が手にするとただの武器にしか見えないのは何故だろう…。

(大丈夫……だと思っけどな)

少し心配になり、彼は胡桃の横へと移動していく。

大丈夫だとは思っが念のため、彼女が指を切ったりしないように見守っていようと思った。

胡桃「ん？なんだ、手伝ってくれるのか？」

「まあ……そうだね」

胡桃「へへっ、ありがとな。けど大丈夫！そんなに手間のかかるもん作るわけじゃないから、あたし一人でパパッと終わらせるよ」

「…そう」

手伝いは不要…。

胡桃はそう言った後、数々の食材を切り始めていく…。

料理するイメージの無い彼女に包丁を握らせるのは結構不安だっただが、始まっしてみると比較的安定感のある手つきで包丁を扱っっていた。

「……………」
鼻歌混じりにリズム良く食材を切っていくその手つきは特別凄いものでもなかったが、かといって不安になるようなものでもない。平均か、それよりも少し料理の出来る娘…といった感じだ。胡桃がここまで出来る娘だとは思っていなかった…。彼がその様子を真横から眺めて目を丸くしていると、胡桃は包丁を握る手をピタリと止めて自慢気な笑みを浮かべる。

胡桃「…ふふん、意外そうな目だな？」

「そうだね、正直意外だった」

胡桃「あたしだって女の子だからな。このくらいの事はあつさりと
――」
自慢気に、そして誇らしげな笑みを向けて語る胡桃だったが、少ししてその口を閉じて苦い笑みを浮かべていく。彼女は苦笑したまま彼の事を横目で見つめ、ほんの少しだけ恥ずかしそうに口を開いた。

胡桃「ま、本当の事言おうと、ついこの前までは料理なんて全然出来なかった…。でもさ、やっぱり男って料理出来る娘が好きだったりするだろ？だからその…：少しずつ、練習してたんだけだ」

彼女はそう言った後、『お前の為にな…』と呟く…。

あまりに小さな声だったので危うく聞き逃しそうになったものの、彼はその言葉をしっかりと聞いていた。

胡桃「えつと…だからさ、ここはあたしに任せてよ。その…：出来るだけがんばるから、お前はゆつくり休んで待っていてくれ」

「…ああ、分かったよ」

彼は胡桃の横を離れ、料理の完成を待つ。

彼女はこの日の為にコツコツと練習を重ねてきたのだろう…。

料理が上手かろうと下手だろうと胡桃を愛しているという気持ちに変わりはないのでそこまで気を使ってくれなくても良かったのだ

が、自分の家のキッチンに彼女が立っているというこの光景は確かにドキドキする。

胡桃「よし、お待たせ！」

少しして、彼女が料理を完成させた。

出来上がった料理は比較的簡単な物ばかりだったが、冷蔵庫の中にあつた有り合わせの食材からこれが出来上がったと考えれば十分に良い出来だろう。それらの料理は見た目はもちろん味の方も悪くは無く、彼が『美味しい』と言うと胡桃は照れたようにニコニコと笑いながら箸を進めた。

胡桃「え、へへっ……。まあ、お前がどうしてもって言うなら、これからも定期的に作ってやるよ」

「んん、楽しみにしてる」

二人はそのまま何気ない会話をしつつ昼食を食べ終え、片付けをしていく。それからの時間というのはなんともまったりとした時間だったが、ふと…胡桃が笑い声をあげた。これまた小さな笑い声だったが、彼女の横に座っていた彼はそれを聞き逃さない。

「どうかした？」

胡桃「えっ？いや、そのさ……。こうしてお前の家で、お前のために料理を作ったりしてて思ったんだけど…」

真横から見ていると、胡桃の頬が段々と赤くなっていくのが分かる。

彼女は彼の事をチラチラと見つめながら赤くなった頬を指先で掻き、照れたようにして言った……。

胡桃「あたし、お嫁さん……。みたいだなあって……」

彼女の口からそんな言葉が出てくるとは思っていなかった為、彼の胸がドキッと高鳴る。胡桃はもっとガサツで男らしい娘かと思っていたが、付き合ってから日が経つにつれてそのイメージが少しずつ変

わっていく…。こうして見ると彼女はとても女の子らしいというか……乙女なタイプの娘のようだ。

胡桃「…なんてな、冗談だ」

とんでもない事を言ってしまったと思ったのか、胡桃は真つ赤な顔のまま慌てたように視線を泳がす。あたふたとした様子で手をバタつかせながら額に浮かんだ汗を拭っていく胡桃はとても可愛らしくて、つい意地悪したくなる。

「胡桃ちゃんみたいに可愛い娘がお嫁さんになってくれたら、かなり嬉しいな。毎日幸せな時を過ごせそうだ」

余裕たつぷりの笑みを浮かべながら胡桃の肩に手を回し、ゆっくり顔を寄せていく…。すると予想通り、胡桃は赤かった顔を更に赤くして慌てだす。

胡桃「か、可愛いとか…そういうこと言わなくていいから！」

回した手で肩をギュツと掴み、胡桃の唇へと顔を寄せる…。

胡桃は相変わらず手をバタつかせながら小さく暴れていたが、互いの唇が触れ合うまであと数センチくらいの距離になった途端、一気に大人しくなつて瞳を閉じていった…。

胡桃「ん…っ」

そつと唇を寄せ、軽いキスを交わす。

本当はもつと激しいキスを交わしたかったのだが、自宅に二人きりという状況でそんな事をしてしまったら抑えが利かなくなりそうだし…。だから彼は軽いキスだけで我慢して胡桃の頬を撫で、赤く染まつたその顔をじつと眺める。静かに目を開いた胡桃は彼と視線を合わせるなり顔を俯け、微かに照れ笑いしていた…。

ゆうりアフター

第一話『仲良くなりたい』

「……はあ」

頭がふらふらする程に強い日差しの下、彼はある家の前に立ちため息をつく。自宅から十数分歩いてやって来たこの場所、そこにある表札には『若狭』の文字。つまりここは悠里の家なのだが…その前に立つ彼が一人憂鬱そうな顔をしていたのにはある理由があった。

(せつかくなら普通に遊んだりしたいもんだけどな…)

心の中で愚痴をこぼす彼だが、そういう訳にはいかない。今日、ここには悠里の招待を受けて来たわけだが、その目的は一緒に遊ぼうだとか、そんな微笑ましい物ではなく、彼の学力を上げるべく勉強をする為…。暗い顔をして立つ彼の右手にはカバンが握られており、その中には教科書やらノートやら筆記用具やら、勉強道具一式が入っていた。

「はあ……」

女の子の家に呼ばれたのに、その目的が勉強とは…。勉強があまり好きではない彼はここに来るまでにもう何度ため息をついたかわからない。だが、来てしまったものは仕方ないだろう…。彼は左手をそっと上げ、インターホンのボタンを押した。

ピンポーン

ボタンを押すと、家の中からチャイム音が聞こえる。その音に反応して外へと現れた少女、若狭悠里は部屋着であろう半袖のシャツ、そ

して短パン姿のまま彼の前へと歩みより、ニツコリと笑みを浮かべた。

悠里「いらつしやい、暑い中ご苦労様つ。さあ、あがってちようだい」

「ああ…はい…」

言われるままに中へと入り、玄関で靴を脱ぐ。彼はそのまま悠里の背後をついていき二階へと上がって彼女の部屋へ足を踏み入れたのだが、その間彼女の親や妹…その誰とも会うことがなかった。

「今日、家にいるのはリーさんだけですか？」

悠里「両親は少し出掛けてて、るーちゃんは隣の部屋にいるわ。また後で挨拶してあげてね？」

その言葉に対し、彼は首を縦に振る。彼女の妹である『るー』とは多少交流があるし、帰るまでに一度くらいは顔を見せておくべきだろう。

悠里「…さて、じゃあさつそく始めましょうか」

「……………」

悠里は彼の返事を待たずして、普段使っているであろう勉強机の上から教科書やノート、筆記用具を持ち出す。彼女はそれを部屋の中央にある小さなテーブルの上へと置き、そのそばに腰を下ろしてニコニコと微笑みながら彼の方を見た。

悠里「どうしたの？もう始められるわよ？」

「あつ……………はい」

出来るなら始めたくないのだが、そんな事を口に出せばきつと怒られるだろう…。彼は渋々ながらカバンを開き、テーブルの上に勉強道

具を並べてからそばへと腰を下ろした。

悠里「この前、めぐねえの補習を受けたんでしよう？ 大変だった？」
「まあ、それなりに大変でしたね…」

悠里「もうそんな思いをしない為にも、勉強はきちんとしなきゃね。
…ああ、今嫌そうな顔したでしょう？」

悠里はムツとしたような表情を浮かべ、彼の目を見つめる。彼自身その自覚はなかったのだが、やはり勉強と聞くと無意識の内に苦い表情をしてしまうようだ。

「正直…どこかへ遊びにでも行きたいです…」

悠里「正直なところは評価するけど、でも遊んでばかりいちやだめよ？ ほらっ、分からないところがあれば教えてあげるから、一緒にがんばりましょう」

「…はいはい」

彼は教科書、ノートを開き、勉強の準備をする。やはり勉強は嫌いだし、出来ることなら避けたいのも事実だが…目の前で微笑む悠里の顔を見ていると、たまにはこんなのも良いだろうと思えるから不思議だった。

その後、彼は教科書を見つめ、どうにか理解できるところは自分で進めていく。しかし中にはまるで理解できぬ物も少なからずあり、その時には悠里の力を借りた。

「リーさん、ちよつとすいません」

悠里「んっ？ 今度はどこ？」

分からない所がある度悠里に声をかける彼だったが、彼女はそれを何度重ねようと嫌な顔ひとつしない…。それどころかニコニコと優しい笑みを浮かべながら彼の隣へと腰を下ろし、問題の箇所を分かりやすく解説してくれるのだ。

悠里「…こんな感じになるわけだけど、理解できたかしら？」

「ああ、ばっちりです。何度もすいません」

悠里「ふふつ、どういたしまして♪」

顔の前に垂れかけた前髪を左手を使って耳へとかけ直し、彼女はまた優しく微笑む。その可愛らしい笑顔や、長い髪が揺れる度に香る甘い匂い…。それらにより何度か集中力を欠きそうになったものの、彼はどうにか持ちこたえ続けていった。

~~~~~

悠里「…あつ、もうこんな時間ね」

部屋にかけられた時計の針が示していた時間は午後の二時。彼がやって来たのはちょうど昼頃だったので、約二時間ばかり勉強をしていた事になる。

悠里「今さらになつて悪いけど、お昼とか食べてきた？」

「ええ、来る前に食べてきました」

悠里「そう、なら良かった」

悠里も彼が来る直前にーと昼食を済ませていた為、空腹に悩まされたりといった事はない。なのでもう少しばかり勉強を続けていても良いのだが、二時間休まずに勉強を続けてきた彼の顔には微かな疲

れが見えた。

悠里「…少し休憩しましょうか」

「それはありがたいですね」

悠里（やっぱり疲れてたんだ…。もう少し早く気づいてあげたかったな）

休憩という言葉聞いた彼はホツとしたような笑みを浮かべ、部屋に敷かれていたカーペットの上にゴロンと寝転がる。彼はこの二時間言葉には出さなかったが、苦手な勉強を続けて疲れてきていたのだろう。

悠里「じゃあ、ゆっくりしててね」

横になる彼へとそう告げ、悠里は静かに立ち上がる。そのままスタスタと歩きだし、部屋の扉へ手をかける彼女を見て、彼はひよいつと体を起こした。

「あれ、どこに行くんですか？」

悠里「ちよつと飲み物とか、お菓子とか…色々持ってくるわ。だからそれまでのんびりとしていて構わないわよ」

ニツコリと笑顔を見せ、悠里は部屋を出ていく。一人部屋に残された彼は彼女の言葉に甘えてのんびりするべく、再び体を横にしたが、一人になるとどうにも落ち着かない。

（リーさんの部屋…なんだよな…）

今、自分の寝転がっている綺麗なカーペットや窓際につけられている緑のカーテン…部屋の隅にある白いタンスや小さなぬいぐるみな

ど、それらを見めてふと思う。今、自分はその悠里の部屋にいるのだと……。ここに来たのは初めてではないのだが、こうして一人残されると妙に辺りが気になってしまう。

「…つと」

そつと体を起こし、何気なく辺りを見回す……。パツと見た感じだと落ち着いている雰囲気に見える悠里の部屋だったが、カーテンに可愛らしいレースがついていたり、ベットのの上にぬいぐるみが置かれていたり、所々に女の子らしさが感じられた。

(…ベット、良い匂いとかするのかな?)

ふと、彼女が使っているであろうベットを見てそんな事を考えてしまう。しかし彼もそればかりはマズイ考えだと自覚したらしく、邪念を振り払う為に大きく深呼吸をした。

「すう……はあ……」

(…というか、部屋自体が良い匂いだな…)

邪念を振り払うべく深呼吸をしたのに、鼻から息を吸った空気がやけに甘い匂いだったのでまた余計な邪念が芽生えてしまう。これではいけないと思った彼は自分の頬をペシペシと叩き、悠里の様子を見に行こうと立ち上がった。

「……ん？」

その時、悠里の勉強机の上に置かれていた一冊のノートに目線がい



く。彼女の勉強机は綺麗に整理されており、ノートや教科書等も綺麗にしまつてあつたのだが、だからこそ…一冊だけ雑に置かれていたそのノートが気になった。

(何のノートだ?)

手にとって見るが、ノートの表面には何も書かれていない。それこそ名前すら書かれていなかった為、もしかして新品のノートなのかとも思つたが…。

(悪いけど、ちよつと覗いてみるか…)

確認するにはそれが一番手っ取り早いだろう。彼は静かにそのノートをパラリと捲るが、最初のページには何も書かれていなかった。やはり、このノートは新品なのかも知れない。そんな事を思いつつパラパラとページを捲っていくと、ちよつと真ん中辺りのページだろうか…そこには文字が書かれており、彼の手が止まる。黒いペンで書かれた綺麗な文字、彼はそれを読んでいった…。

『×月15日…最近、彼が由紀ちゃんや胡桃…美紀さんと仲が良い。最初はあまり良いイメージの無かつた彼だけど、話してみたら優しい人だつて分かつた。私もみんなと同様に彼の事は気に入っているから、あの人とはこれから良い関係でいたい』

『×月25日…この前、彼を家に招いた。彼があまり授業についていけないようだつたから誘つただけけど、もしかしたら迷惑に思われたかもしれない…。でも、るーちゃんも彼の事が気に入つたようだから、そこは嬉しかった』

(これ、日記か…?)

ノートに書かれていた内容は学校の授業などの内容ではなく、日記か何かのようだ。彼は無意識の内にページを捲り、その後も続きを読み進めていく。

『△月5日……ひよつとしたら、彼は私達以外と付き合いがないのかな?そんなふうに思う時もあったけど、勘違いみたい。最近、彼がクラスメートの人達と親しげに話しているのをよく見る。話せば面白い人だっていうのが、みんなにも伝わったようで安心した』

その文章を読み、彼はふふつと笑う。思い返せばこの日記に書かれているのは悠里から見た彼の話が多く、まるで子を心配する親が書いた日記のように思えたからだ。

(前回も、それに今日もそうだもんな。僕の成績が下がるのを心配して勉強に誘ってくれたんだ…ほんと、面倒見のいい人だよ)

自分と同じ年のはずなのに、何故か彼女と話していると年上の女性と話しているような気分になる。見た目の大人っぽさもあるが、やはり一番の理由はこの面倒見の良さだろう。彼は自分のような人間の面倒を見てくれる彼女の優しさに改めて感謝しつつ、ノートのページを捲った。

『△月10日……最近、彼の事を気にしてばかりいる気がする。学校でも、家に帰ってからでも、彼の事が頭から離れない…。出会う前から彼の事を前から知っていたような、そんな勘違いすらしてしまうほどだ』

「っ…」

この文章を見た瞬間、彼の鼓動が高鳴る…。あの悠里が自分の事を意識していたなど、全く予想していなかったからだ。しかし、次のページ…そこに書かれていた内容は彼を更に驚かせる事になる。

『△月15日…私だって、子供じゃない…。彼に対して抱いている自分の気持ちがなんなのか、もう分かっているつもりだ。私はきつと…彼の事が好きなんだと思う。もっとも、彼はそれに気づいてくれないようだけど…』

思わず、ノートを持つ手に力が入る…。あの悠里が自分の事を好きでいてくれたなど、彼女が綴ったこの文章を見ても信じられない。

『このままだと彼はいつまでも気づいてくれなそうだから、思いきつて告白してみようと思う…。といっても、真正面から告白するのは恥ずかしい…。けど一つだけ、運任せになるかもだけど、良い方法を思い付いた。彼を家に誘って、それから——』

文章がそこで途切れていた為、彼はページを捲る。このノートには彼女の気持ちが込められているのだから、それを勝手に読むのは申し訳ないと思う…。しかし、ここまで読んだらもう止められなかった。

『私がない時、彼がこのノートを読んでくれる事を祈ろう…。文字でなら私の気持ちを伝えられるから…。だから、このノートは出来る

だけ目立つ場所に置いておこうと思う』

「……えっ?」

その文章を見て、思わず声が漏れる。つまり、ここにノートが置かれていたのはわざとであり、彼がこうして覗き見る事すらも悠里の計算の内：ということなのだろうか。

…ガチャツ

「っ!」

直後、部屋の扉がゆっくりと開く。その向こうには真っ赤に染まった顔をほんの少しだけ俯けた悠里が立っており、彼女は彼がそのノートを手にしている事を目で確認していた。

悠里「もう、見た…わよね……」

「え、えっと……まあ……ちよつとだけ」

ノートを元の場所に置き、彼は先程まで勉強していた場所に戻って腰を下ろす。悠里はそれを無言のまま見つめていたが、その無言が何を意味しているのか分からず、彼は冷や汗を流した。

悠里「……っ」

悠里はそんな彼の隣へ勢いよく腰を下ろし、瞳をキョロキョロ落ちて着きなく泳がせる。突然隣に座ってきた彼女になんと言葉をかければ良いか分からずに彼が戸惑っていると、悠里はムツとしたような表情を見せた。

悠里「人のノート、勝手に見るなんて…」

「す、すいません……っい……」

悠里「…だめ、許さないから」

彼女はそう言ってから彼の頬に右手をあて、赤い顔を俯ける…。彼女はそのまま手に力を入れて彼の顔を自分の方へ向けると、消えてしまいそうなほど小さく、弱々しい声で呟いた。

悠里「変な伝え方になっちゃって……ごめんね…」

気まずそうな笑みを浮かべてそう呟いたかと思うと、悠里は真っ赤に染まったその顔をグツと彼の方へ寄せていく。互いの顔がある程度迫った所で彼女はギュツと瞳を閉じ、次の瞬間：彼は唇に温かい感触を感じた…。

「ん…っ…」

悠里「っ…う…」

かつてない程間近に見える悠里の顔を見て、彼は自分と彼女の唇が重なっている事に気が付く。柔らかく、温かい悠里の唇…：その感触を確かめるようにして唇を動かすと、これ以上赤くはならないと思っていた悠里の顔がまたみるみる赤くなっていった。

悠里「んっ…あ…うっ…」

唇を重ねて十秒ほど経ってから、彼女の肩が震えていた事に気が付く。彼はその肩にそっと手をあて、彼女が安心出来るようにゆっくりと撫でた。

悠里「っ…ごめんなさい…私っ、いきなりこんな事しちゃって…」

重なっていた唇を離し、悠里は彼に頭を下げる。その目は今にも泣き出してしまうように潤んでおり、声も震えていたが、彼は彼女の肩を撫で続けた。

「…いや、全然大丈夫ですよ」

悠里「……本当に…？」

不安そうな、怯えたような、そんな視線を向ける悠里。きつと、いきなりキスをしたせいで嫌われたのではとか、そんな事を思っているのだろう。だが、そんなの心配は無用だった。何故なら、悠里が彼を愛していたように…彼もまた…

「僕も、リーさんの事が好きですし…」

悠里「っ…！ん、ん…っ!？」

笑顔で呟き、撫でていた彼女の肩を掴む。彼はそのまま彼女の顔へと唇を寄せると、悠里が戸惑うのもお構いなしにもう一度キスをした。

悠里「んっ…！う…っん………」

彼の方からキスしてくる事を想定していなかった悠里は一時それに戸惑い、両手に微かな力を込めて彼の体を引き離そうとした。しかし、これこそが自分の望んでいた展開なのだと気づき、彼の体を押ししていた両手から力を抜く。悠里はその手を静かに彼の肩へ回すと、再び目をギュツと閉じて唇を動かした…。

悠里「っん……う………」

彼は悠里の唇の感触を確かめるべく唇を動かしていたが、悠里もま

た同じように唇を動かしている。その事実や、唇を動かす度に漏れる悠里の甘い声：それらに理性を奪われた彼は、悠里の口の中へ自分の舌をねじ込もうとした。

悠里「っ…む…：…っ?!ちよっ、ちよっと待って…?!」

自らの口の中へ彼の舌が入り込み、それが自身の舌へと触れた…。その瞬間、悠里は体をビクツと震わせて慌てたように唇を離すが、その際に彼と悠里、二人の唾液が交わった物が互いの唇の間でツ…っとなを引き、悠里は恥ずかしそうに自分の唇を押さえた。

悠里「っ…：…！」

「ええっと、嫌…：でした?」

気持ちが高まって舌を入れてしまったが、さすがにやり過ぎただろうか。耳まで赤くなっていた悠里の顔を見てそんな事を思う彼だったが、悠里はその首を横に振る。

悠里「そ、そうじゃないのっ…：！ただ、恥ずかしくてっ…：…。それに、あまりキスしてたら…：その…：止められなく、なっちやうでしよ…：?」

「…：まあ、そうかもですね」

悠里の唇の感触はやたらと柔らかく、そこから漏れる甘い声はいつまでも聞いていたい程だ。もし、あのまま舌を入れられても悠里が抵抗しなかったら彼はしばらくキスを続けていただろうし、彼女もその気になってくれるならばもっと凄い事もしていただろう…。

悠里「今日は…：隣の部屋にるーちゃんもいるし、また今度…：ね?」  
ぷるんとした唇に人指し指をあて、悠里は照れたような笑みを浮かべる。その顔は今まで見てきたどんな表情よりも可愛らしく、そして

艶やかで…彼は目を丸くしながらゴクリと喉を鳴らす。

(つぐ…!!ま、まあ…るーちゃんが隣にいるんじや、仕方ない…よな)

「分かりました…また、今度…」

悠里「ええ、それまで我慢…」

いつになるかは分からないが、また後日、るーのいない日にこの家に来れば…。もしくは、自分の家に悠里を誘えば…。その先に待つ展開を想像して彼が胸を高鳴らせていると、悠里は釘を指すようにそれを告げた。

悠里「あの、言っておくけど…キスまでだからね？」

「えっ…？」

悠里「あ、当たり前でしょう!?キスより先は、もっと仲良くなつてからですっ!」

彼の反応を見て驚いたように告げる悠里だが、その言葉を聞いた彼の驚きはそれ以上だった。今は隣の部屋にるーがいるから拒絶されただけで、もし家に誰もいなかったらそのままキスの先へ行けると思っていたのだ。

「そう…ですよね…」

悠里「まったく、露骨にがっかりしないでちょうだい!」

呆れたように言う悠里だがその顔は明るく、にっこりと微笑んでいた。彼に自分思いを伝えられた事、そしてそれを知った彼が自分の事を好きだと言ってくれた事が嬉しかったから。



悠里「…改めて聞きたいんだけど、私と付き合ってくれる？」

「もちろん。キスマでしといて、今さら嫌だとか言ったら最低な男じゃないですか…」

悠里「ふふっ、そうね♪」

良い返事をもらった悠里は嬉しそうに微笑み、彼の手をギュツと握る。こうして彼の手を握ることも、キスをしたことも、全てが嬉しい…。一緒にいてこんな嬉しい気持ちになるのなら、やはり自分は彼の事が好きなのだろう。悠里は改めてその気持ちを実感し、目を閉じてから彼の肩へもたれるように頭を寄せた。

悠里「今思えば、ラブレターでも下駄箱に入れた方が良かったかもね…」

今回、彼が自分の狙い通りあのノートを覗き見てくれたから良かったものの、かなり回りくどい告白になってしまったのは言うまでもない。こんな形で自分の思いを伝えるくらいならオーソドックスにラブレターでも送れば良かったと、今さらながらに思った。

「…まあ、これはこれでありじゃないですか。ドキドキしましたよ」

悠里「ほんと？なら良かった♪」

「というか、リーさんもよく分からない人ですね。正面から告白するのは恥ずかしがるのに、キスは出来るなんて」

悠里「んん…確かにそうね」

彼の腕を抱きながら肩に頭を寄せ、幸せな気分になる。そう言えば彼が前回この家に来た際、次は勉強会ではなく普通に遊ぼうと言ったのに、結局今回も勉強会になってしまった。まあ勉強会というのは彼を家に招く為の口実で、告白する事こそが真の目的だった訳だが…。

悠里「これからは二人でいっぱい遊んだり、デートしたりして、いっぱい仲良くしましょうね……」

「……はぐ」

”仲良く”というのは、どこまでを指すのだろうか？彼女が放つ言葉に対してそんな事を思ってドキドキしつつ、彼は自分に寄りそう悠里の頭を撫でる……。目の前にあるテーブルの上、そこには二人の勉強道具が並べられていたが、今日はもう勉強をする気になれなかった……。

## 第二話『ぎ』ほうび』

「はあ……」

というように憂鬱ゆううつそうなため息をつきながら、彼は教科書…そしてノートを交互に見つめていく。目線を横に逸らせばそこにある窓から校舎の外を見ることが出来るのだが、今の彼の心は綺麗に晴れている外の風景とは違い、いくらかどんよりとしてた…。

(毎日学校で勉強勉強また勉強…。しかし、これだけ勉強しても一向に成績が上がらないのはどういうわけだ…)

次の授業までまだ時間はある…。にも関わらず彼が教科書と睨めっこしているのは、ここ最近の成績がさすがに笑えないレベルまで落ちてきたからだ。

悠里「あら。あなたが休み時間に教科書を見るなんて、どういう風の吹き回し?」

「別に大した事じゃないですよ。たまにはそういう日もあるってね」

悠里「へえ…そう…」

背後から現れた悠里は両肩に手をあて、机の上に開かれていた教科書を覗きこむが、彼はそれをパタツと閉じる。正直に『成績が落ちてきてる』などと言えばまた、彼女との過酷な勉強会が始まってしま…。それは少し遠慮したい。

悠里「まさかとは思うけど、また成績が落ちてる…なんて事はない?」

「あ、ああ……ないない。大丈夫ですよ…」

悠里の言葉に驚いた彼は次の授業の支度をしてごまかそうとするが、微かに声が震える。それがいけなかったのか、はたまた声とは別に怪しい点があったのか…悠里はニヤリと微笑み、彼の耳元に背後から口を寄せた…。

悠里「じゃあ、次の土曜日とか…空いてる？」

唇が触れそうな程近くから囁かれ、彼は恐怖にも似た感情に肩を震わせる。限りなく耳に近いところで聞く彼女の声はとても色っぽく、囁かれたそのワード自体もある意味ではニヤニヤしてしまいそうになる言葉なのだが…どうにも素直に喜べない。

「…空いてたとして、何をするんです？…ああ、デートかな？ならオツケーですよ。じゃあ僕はその日までにどっか良いデートスポットでも調べてお——」

悠里「大丈夫よ。当日行くのは私の家になるだろうから♪」

「りーさんの家…ですか。彼氏が彼女の家に行つてやることなんて、一つしかないと思うけど……」

悠里「あら、そうかしら？色々あると思うわよ。例えばほら…」  
”から始まる事とか、ね？”

顔だけをそつと振り返らせると、そこには満面の笑みを浮かべる悠里が…。どうやら彼女は、彼が自分の成績に悩んでいることに気付いているようだ。しかし、せっかくの休日を勉強会で潰すのは嫌だ。まあ、こんな事を言っているから、彼は成績が上がらないのかも知れないが……。

”べ”…から始まる事ねえ…。”ベッドイン”…とか？”

悠里「残念、はずれ。正解は…”勉強会”でした♪」

「……でしようね。知ってたよ…」

動じるかと思ひ、ちよつとした下ネタを挟んだのに……さすがは悠里といったところか…。彼女はニコニコとした笑みを浮かべたまま、ちつとも表情を崩さない。どうやら付き合いだした事で彼という人間をより深く知り、こうした発言が来るであろう事も予期していたようだ。

悠里「で、その日は空いてる？」

「……空いてますよ」

もう仕方ない、観念しよう……。彼はため息混じりに返事を返し、彼女との勉強会を約束する。ダラダラ出来る休日が消えるのは惜しいが、彼女の教えを受ければある程度の成績アップは期待できるだろう。

悠里「じゃあ約束よ。お茶とかも用意しておくから、楽しみにね♪」  
「はいはい……」

なんてダルそうな返事になってしまったが、悠里は嬉しそうにニコニコと笑っていた。綺麗な顔立ちながらも、どこか可愛らしい笑顔……。それを見た彼は改めて、こんな娘が自分の彼女なんだと思い、優越感に浸った。

~~~~~

そして時は過ぎ、放課後……。彼が帰路につくべく下駄箱で靴を履き替えていると、辺りにいる生徒達に紛れて悠里がこちらへと歩み寄る。長く綺麗な髪を揺らす彼女は道を塞いでいた生徒らの間をくぐるようにして進んでいるが、その際、擦れ違った男子生徒にその大きな胸が触れたりしないだろうかと……彼氏ながら心配になる。

「部活は？」

悠里「今日はお休み。だから一緒に帰りましょう♪」

「あく、はい。そうですね……」

彼女はさも当たり前前のように言ったが、辺りには他の生徒達がいるのだ。別に秘密にしていなくてはいけない事でもないのだが……この会話を聞かれると付き合っていることがバレてしまうのではと、そんな事を考えてしまう。

(……ま、誰も聞いてなかったみたいだけど)

一安心してから靴を履き替えた後、下駄箱を出て校舎をあとにする

る。悠里はその間、ニコニコと微笑んだまま彼の数歩後ろを歩いていた。校門の外に出たが、当然、辺りにはまだまだ生徒達の影がある。

圭「あつ、先輩たちも今帰りですか？」

悠里「あら、圭さん。それに美紀さんも。ええ、私達も今帰るところよ」

バツタリ出会した二人の後輩と言葉を交わし、二人はその場に立ち止まる。このまま何気ない世間話をするだけで済めば良かったのだが、圭の目は彼と悠里、二人を交互に見つめ続けていた…。

圭「今日は二人だけなんですね？」

美紀「そりや、先輩達だつていつもゆき先輩やくるみ先輩と一緒にいるわけじゃないでしょ…」

圭「それはそうなんだけどね。なんか、先輩達の距離感が微妙に近い気が…」

「ん？」

悠里「そう…かしら？」

意識していた訳ではないが、やはりカップルという関係上、自然と距離を詰めてしまったらしい。確かに互いの距離を改めて見てみると、あと少しで肩が触れあう程に近い。

圭「もしかして、付き合うことにもしたんですか!？」

なんて事を言っているが、そのイタズラな笑みを見るに圭自身も冗談で言っているのだろう。それが分かっているながら、美紀はため息をつくが……。

美紀「ちよつと圭、変なこと言つて二人を困らせちゃ——」

目の前にいる二人の何とも言えぬ表情を見て、美紀は言葉を詰まらせる。この二人がそんな仲になる事などないと思つていたのだが、彼は顔をそつと背けているし、悠里も頬を赤くしながら苦笑いしている

のだ…。

美紀「え、えっ……と…」

圭「あ、あれっ…？まさか…ほんとに？」

悠里「あは…は……。じゃあ…二人とも、またね」

「では、そういう事で……」

悠里は照れたように微笑みながら小さく手を振り、彼を連れて二人の前から足早に去っていく。残された二人…美紀と圭は目を丸くしながら互いの顔を見つめ、暫し無言のままだった。

くくくくくくくくく

悠里「…なにも、隠すことなかったわね」

「まあ、そうですね」

二人の前から去った後、悠里は隣を歩く彼へ語りかける。いつも通っている通学路だが、こうして二人だけで歩いた事はあまりなかったかもしれない。辺りにはまだ、他の生徒達の影がある。

悠里「やつぱり、付き合っている事を打ち明けるのは恥ずかしいわね…。ゆきちちゃんとするみの時だって、どれだけ恥ずかしかったか…」

当時の事を思い出すだけで、悠里の顔は赤くなる。同じクラス…かつ親交の深い二人には話しておこうと悠里が言った為、彼は一緒にそれを打ち明けたのだが、あの時の二人の顔はまだハッキリ覚えていいる。由紀も胡桃も、思わず笑ってしまいそうになるくらい目をまん丸にしていた。しかし二人とも、すぐに笑顔で祝福してくれた為、それだけでも打ち明けた甲斐はあったのだが…。

「まあ、美紀達にはまた次の機会に伝えれば良いでしょう」

悠里「…ええ、そうですね」

後輩達に伝えるのは、もう少し先になりそうだ。彼は悠里と共に歩きながら辺りを見回し、自分らと同じ様に帰路についている生徒達を見つめる。一人で歩く者、友達同士で歩く者…そして、カップルで歩く者。自分と悠里も今となってはカップルなのだと思うと、ついつい頬がゆるむ。

悠里「なんでニヤニヤしてるの？」

「いや…別に」

悠里「？」

悠里が不思議そうな表情で顔を覗き込むと、彼は楽しげに微笑んで歩を進める。悠里は少し遅れてからその後が続くと、背後から肩を突っついた。

悠里「ねえ、こっちから行かない？」

「え？そっちだと遠回りでは？」

悠里「遠回りだと…だめなの？」

悠里が指差したのは、彼がいつも通っている歩道から逸れた裏路地。こちらの方からでも帰れるには帰れるのだが、結構な遠回りになってしまうので普段は使わなかった。しかし、悠里の甘えるような目を見たらダメだとは言えず…

「いや、別に大丈夫。じゃあ行きますか…」

悠里「ふふっ、ありがとう♪」

満足そうに微笑み、悠里は彼と共に進む。こちらの方の道はあまり人通りがなく、さつきまでと比べ周りを歩く生徒達の数が目に見えて減っていた。十数メートル前方辺りにチラホラと見えるだけだ。

悠里「さて…じゃあ、手でも繋ぎましようか？」

両手で持っていたカバンを右手に移し、悠里は空いた左手をこちら

へと伸ばす…。恐らく、これがやりたかったから人通りのないこの道を進みたがったのだろう。今なら誰に見られる訳でもないし、付き合っているのだから遠慮もいらぬ。彼はそつと右手を伸ばし、彼女の細い手を握った。

悠里「あなたの手、温かくて好きよ」

「それは光栄ですな」

ふざけたように笑いつつ、彼女の手をしっかりと握り直していく。ただ手のひらを重ねるのではなく、指の一本一本が絡まるように…。そうして恋人繋ぎをしてから悠里の顔を覗き込むと、彼女は頬をゆるめてニツコリと優しく微笑んだ。

悠里「…ふふっ」

「さてさて、行きますかね」

彼女の手をギュツと握ったまま歩いていくと、近所の住人であろう女性と擦れ違う。気のせいかも知れないが、その女性は擦れ違い様にこちらを見ていたような気がして…二人は少しだけ恥ずかしくなった。もつとも、同じ学校の生徒に見られるよりはずっとマシだが。

「手、嫌だったら離しますけど…」

悠里「ううん…恥ずかしいけど、嫌じゃない。だから私が離しているって言うまで、勝手に離しちやだめよ？」

「了解です…」

手を繋ぐのも離すのも、全ては悠里の気分次第らしい。もしも今、同じ学校の生徒が前からこちらへと向かって来たら彼女はどのようなだろう？恥ずかしさに堪えきれずそつと手を離すのか、それとも彼に『離していい』と言うのか…はたまた、手を握ったまま離そうとせずに彼の慌てる様を楽しむのか…。

(りーさんなら、離さないでこっちの反応を楽しみそうな気もするな…)

この悠里という少女は彼と同一年ながらも一つ上の落ち着きというか、余裕めいた大人の雰囲気を持っている。彼は彼女のこんな面も好きだからこそ付き合うことにしたのだが…もう少しだけ、こちらが主導権を握りたいような、そんな気もしてしまう。

(…ちよつと驚かせてみるか)

ピタツと立ち止まり、手を繋いだまま悠里の事を見つめる。突然立ち止まった事により、不思議そうに首を傾げる悠里の顔…。彼は少しの間それを見つめた後、左手を彼女の後頭部へ添えた…。

悠里「え…っ?」

突然どうしたのかと驚いているのか、悠里は目を丸くしている。今、近くに人影はない。彼女の目を間近に見た彼は勝ち誇ったかのように微笑んだ後、そつと顔を寄せ…

チュツ…

悠里「っん…!」

悠里の唇を、そのまま奪う…。

ぷるりとした柔らかな唇に触れながら間近に悠里を見つめると、顔を真っ赤にしているのが分かる。繋いだままの手にもギュツと力が入っており、彼女の驚きや緊張が伝わった。

悠里「ん…んっ…」

(やば…可愛いな…)

悠里に対しては『綺麗だ』という思いが強かったのだが、今こうして突然にキスされ、戸惑っている彼女を見ると『可愛い』という気持ちを抱いてしまう。普段から大人っぽい彼女を相手にリードしていると感じた彼は、言い様のない満足感を得ていく。

悠里「んあ…っ…だ、だめっ…」

そつと目を閉じ、彼のキスを受け入れかけていた悠里だが、彼女は顔を横へと逸らして無理矢理にそれを終える。はあはあと息を乱す彼女は落ち着きなく辺りを見回した後、ムツとした表情を浮かべて彼の頬を軽く叩いた。

ペチツ！

「いっっ」

悠里「もう！急にこんなことして、誰かに見られちゃったらどうするの？」

「…恥ずかしいんですかい？」

悠里「当たり前でしょっ!!」

微かに瞳を潤ませ、悠里はまたしても辺りを見回している。近くに誰もいないことは確認済みなのに…。

「いや、リーさんの顔見てたらっつい…」

悠里「あなたは本当につ…どうしようもないんだからー!」

普通に怒る悠里ならともかく、顔を真っ赤にしながら怒る悠里というのは中々見られない。というか、こうして怒っている今ですらまだ手を繋いだままだから可愛らしい…。

悠里「罰として、次の勉強会は厳しくいくわ…」

「まっ、マジですかっ!?!」

悠里「ええ。あなたが悪いのよ？外でいきなり、あんな事するから…」

彼女とキスした数秒間…これはかなり幸せな時間だったが、その対価として数時間に及ぶ苦痛が確定した。彼はゆっくり歩き出しながらも肩を落とし、ため息をつく。結局のところ、やはり悠里には敵わないのだ。

悠里「でも…そう落ち込まないで。がんばって勉強したら、私からあなたにご褒美あげるから…ね？」

「なっ!？」

『ご褒美』と聞き、彼の目に生気が戻る。なんて分かりやすい男なのだろう…彼を見た悠里はそんな事を思い、イタズラな笑い声を漏らす。

悠里「ふふつ。もし勉強をがんばって、次のテストで80点以上出せたら…」

「だ、出せたら…?」

ゴクリと唾を飲み、悠里の言葉を待つ…。彼女は繋いでいる彼の右手を樂しげに振りつつ、ニッコリと微笑み…

悠里「キスより凄いこと…してあげようかな…」

と、彼の顔を見て呟く。冗談なのか、それとも本気なのか…彼女の表情はどちらともとれるようなものだが、そんなのは関係ない。彼は驚いたようにして目を見開き、そしてグツと拳を握る。

「それなら…勉強にも全力を出さないと…!」

そんなご褒美があるのなら是非とも味わってみたい。悠里の笑みを見た彼は、これからは勉強も頑張ろうと固く決意した。そうして家へと戻った彼はさっそく自習に取り組み、その後日に行われた悠里との勉強会も必至に頑張った。こんなにも勉強を頑張ったのは、産まれて初めてかも知れない…。

そうして迎えたテストの日、彼は自分が持っている全ての力をそこへぶつけた。80点を越えさえすれば、悠里からご褒美がある…。後日、戻ってきた答案用紙を確認する彼の手は…緊張に震えている。

ペラツと捲り、確認する答案の点数…。

そこに記されていた点数は……『75点』だった…。

「うあ…あ……い…あ…あつ……!!」

たった5点…:されど5点…。彼は言葉にならない声をあげながらその点数を見つめ続け、自分の実力の無さを呪った。そんな彼を遠くの席から見つめる悠里はというと、今日もまたニツコリと楽しげに微笑んでいる。彼では80点など無理だと思っていたからこそ、彼女はあんな約束をしたのか…。どちらにせよ、その答えを知るのは悠里だけである…。

第三話 『次こそは…』

巡ヶ丘の街にあるショッピングモール内——
休日である今日、彼は悠里とここに訪れていた。

悠里「はい、じゃあ次はこれを持ってね」

「ああ、はいはい」

モール内にある洋服売り場：悠里は気に入った服を手に取ると、付き添うようにして隣に立っていた彼へとそれを手渡す。その腕には既に服が五着ばかり積まれていたが、彼は何の文句も言わない…。いくら恋人関係になったとはいえ、悠里に文句を言うのは何となく怖いからだ…。

「あの…：まだ買うつもりで？」

悠里「うーん、さすがにそろそろやめておきましょうかね…。いくらセールだとはいえ、これ以上買ったら結構な出費になっちゃうもの」

顎に手を当てながら悩ましげな表情を見せる悠里の言葉を聞き、今日がセールの日だった事を知る。言われてみると、辺りに置かれている服のそばには「く%オフ!」といったような札がいくつも貼られていた。

悠里「じゃあお会計しようかしら。それ、レジまで運べる？」

「ええ、お任せを」

彼が抱えていた服をレジまで運ぶと、悠里は財布を取り出して会計を済ませる。そうして買った服を大きめの袋に詰めてもらうと、悠里は彼と共にその店をあとにした…。そんな二人のそば…というよりは悠里のそばをちよこちよここと付いていた少女は二人と一緒に店を出した後、悠里の手をギュツと握る。

るー「りーねー、次はどこに行く?」

悠里「そうね…そろそろお腹が空いてきたし、お昼にしましょうか」
手を握ってきた妹…るーにそう告げた後、悠里はニツコリと微笑む。

今日は彼とのデートだったが、るーも暇そうにしていたので連れてきてあげたのだ。ただ、せつかくのデートに妹を連れてきたら彼が嫌がるかとも思ったが……

るー「お兄ちゃん、わたし、あとでアイス食べたい」

「おお、いいね。じゃあ後で買ってあげるよ」

るー「えへへ…ありがとう」

見たところ、彼はるーが来たことを嫌がってはいないようだ。

るーの方も彼にはよく懐なついているようだった為ひと安心する悠里だったが、念のため…そつと彼へと耳打ちする。

悠里「あの…今日、妹を連れてきちゃってごめんなさいね…?」

「んっ? いやいや、全然かまいませんよ。るーちゃんだって、家で留守番してるのはつまないだろうし」

悠里「…そう言ってもらえると助かるわ。ありがとう」

小さく頭を下げて礼を言い、悠里はるーの手を引きながら昼食が食べられそうなところを求めてモール内を歩き回る。そうしてたどり着いたフードコートで昼食を済ませた後、先ほどの約束通りるーにアイスを買ってくれている彼を見て悠里は『ふふっ』と笑みを溢した。

るー「りーねー、みてみて。お兄ちゃんに買ってもらった」

悠里「良かったわね♪ちゃんとお礼言った?」

るー「うん、言った」

悠里「よしよし、るーちゃんは良い子ね」

モール内のベンチに腰かけていた悠里はアイスを手に見せ、笑顔を見せるるーを自分の隣に招き、頭をポンポンと撫でていく。そしてアイス

の会計を済ませていた彼も少し遅れてそこへと現れると、彼女らが腰にかけているベンチの隅に腰を下ろした。

悠里「なんか、三人でこうしていると…」

「…こうしているの？」

悠里「……………いえ、何でもないわ」

一つのベンチの上…そこであるーを挟むようにして座っている自分と彼がまるで家族のようだと思ったのだが、何だか気恥ずかしいので口に出すのは止めておく…。しかし三人並ぶこの状況を見れば見るだけ自分が母親…彼が父親…そして、るーがその子供のように見えて仕方がない…。悠里が一人そんな事を考えて微かに頬を染めていると、るーがアイスを舐めながら彼女の事を見つめた。

るー「りーねー、ちよつと聞いてもいい？」

悠里「うん？どうしたの？」

るー「あの…りーねーとお兄ちゃんは付き合ってるの？」

悠里「えっ？あ…うん、一応ね」

実際そうなのだし、実の妹に隠す必要など無い。

そばにいる彼を見つめた後、悠里がほんの少しだけ恥ずかしそうにそれを告げると、るーは口元を緩めてニヤリと笑った。

るー「じゃあ、これからはもつといっぱいお兄ちゃんと遊べる？」

悠里「まあ、前よりは家に来る機会も多くなるかも知れないわね」

るー「へえ…」

悠里の口からそれだけを聞くと、るーはニツコリと微笑んでから再びアイスを食べることに専念していく…。るー自身も彼の事を気に入っている為、彼と遊べる機会が増したという事が嬉しいのだろう。

「りーさんの家か…。勉強会のイメージが強いな…」

悠里「あら、勉強会は嫌なの？」

「少なくとも、あまり好きな方ではないですかね…」

半分笑いながら答える彼を見て、悠里は呆れたようにため息を放つ。彼の成績に関しては前々から気にしていたが、今は自分の彼氏である人間なのだから、前にも増して放ほうつてはおけない。余計なお世話かも知れないが、悠里は彼の将来の事を思っおもって勉強会を開いていたのだ。

るー「わたしもお勉強はキライ…」

「おお、じゃあるーちゃんは仲間だ」

悠里「それってつまり…私は敵って事かしら？」

「いや…何もそこまでは…」

うつすらと開かれていた悠里の瞳には光が映っておらず、何やら禍々まがまがしいオーラのような物をその身に纏まとっているようにも見える…。彼女は時折こういったオーラを纏まとい、彼はその度に肩を震わせてきた。

悠里「…ちよつと耳貸して？」

「は、はい…」

ベンチの真ん中に座っていたるーに少しだけ前屈みになつてもらい、悠里は彼の方へと身を傾ける。直後、こちらへ向けられた彼の耳へそつと口を寄せると、悠里は手を添えながら囁ささいた…。

悠里「前に言ったわよね？もしテストで80点以上出せたら、キス以上の事してあげるって…。前のテストは結局ダメだったけど、また次のテストで頑張ったら…しっかりと約束を守ってあげる」

「なっ…!?本当ですか…？」

悠里「ええ。そうね…次は85点以上を条件にしようかな？」

それだけを告げてからそつと身を離し、悠里はニコニコと笑う。

85点…いつもの彼なら中々に厳しい点数だが、必死に勉強すればどうにかなりそうな点数だ。

「じゃあ…またりーさんの家で勉強会やってもらって良いですか？」

悠里「ええ、喜んで♪」

例の約束を話題に出された瞬間、彼は自分から勉強会の催促をする…。たとえばこれが悠里の作戦通りだと分かっている…。彼女の手のひらの上で転がされているのだと分かっている…。頑張れば『キス以上の事』をしてもらえるというその誘惑には勝てない。

(今度こそ…今度こそっ…！)

次のテストが始まるまでに死ぬ気で勉強する事を心に決め、彼は拳にグツと力を込める…。するとその隣…彼と悠里に挟まれるようにして座っていたるーが二人の顔を交互に見つめて不思議そうな表情を浮かべた。

るー「お兄ちゃん、りーねーと付き合ってるのに、まだ”りーさん”って呼んでるの？」

「ああ、そうだけど…ダメ？」

るー「普通に名前で呼んだ方がカップルっぽいと思うなあ…」

「ふむ…そういうもんかね」

悠里「えっ…？」

るーがそう言うのならと思い、彼は悠里の事を見つめる…。しかし悠里の方はあまりに突然な事なので心の準備一つ整っておらず、どこか慌てているようだ。

「じゃあ…ゆう——」

悠里「さ、さてっ!!るーちゃん、次はどこを見に行こうかしらねっ!?!」

彼に名前を呼ばれるよりも先にベンチから立ち、るーの手を引いてその場を離れる。これまで後輩はおろか、同級生にすら『りーさん』と呼ばれ続けてきた…。だからだろうか…今更名前を呼び捨てにされると思うと妙に恥ずかしくなってしまう…。恋人である彼が相手となれば尚更だ。

(…まあ、もう少しの間は“リーさん”でいいか…)

逃げるようにその場を離れた悠里の後を追いつつ、彼は安堵したように微笑む。正直言うと、彼の方も悠里を呼び捨てで呼ぶ事にほんの少しだけ気恥ずかしさがあったからだ…。しかし、呼び捨てにしようとする度に悠里が今のような反応を見せてくれるのなら、これは良い武器になるかも知れない。無敵かと思っていた彼女の弱点を一つ知れたような気がして、彼はニヤリと笑った…。

みきアフター

第一話『ただ…伝えたかったただけです』

ある日曜日のこと…。

彼は午前の中に太郎丸の散歩を済ませ、少し早めの昼食をとり、そしてそのままゴロゴロとだらけていたのだが……

ピンポーン

と、いきなり鳴り響いたチャイム音に仕方なく起き上がる。

いったいどこの誰がやって来たのだろうか？そんな事を思いつつドアを開けると、外には見慣れた後輩の姿があった。

美紀「先輩、こんにちは」

玄関先にてペコリとお辞儀する美紀を見て、彼は少しの間黙りこむ。今日、彼女と会う約束をしていただろうか？そんな事を考えたが、やはり身に覚えはない。

「こんにちは。急にどうしたの？」

美紀「ちよつと暇だったんで、つい遊びに来ちゃいました。太郎丸にも会いたかったし、それに出来るなら、また小説の方の手伝いを頼みたくて…」

美紀は肩にかけていたカバンから一冊のノートを取り出し、彼の顔を窺う。このノートには確か、彼女が最近見る夢を話のベースとした小説が書かれていたはずだ。

「まあ、こつちも暇だったし…。オツケー、じゃあ上がって」

美紀「ありがとうございます。じゃ、お邪魔します」

彼に招かれた美紀はどこか嬉しそうにも思える声を出し、靴を脱いで中へと上がる。そうして彼の部屋へ入るとさっそく太郎丸と目が

合い、美紀はピタツと立ち止まる。

美紀「こ、こんにちは…」

右手を小さく振って挨拶するが、太郎丸は床に敷いてあった座布団の上で寝転んだまま起き上がらない。ただ、それでも目線だけしつかりと美紀の方に向いている。

「おいおい、もうちよつと愛想よく出来ないのかね、こいつは…」

美紀「あはは、大丈夫です。私は…別に気にしてませんから」

「この部屋には数回訪れているが、太郎丸はいつまでも懐^{なつ}いてくれない…。言葉では強がる美紀だが、内心では少しだけガツカリしていた。

美紀「で、さつそくですが手伝ってもらっていいですか?」

「もちろん。ま、僕じゃ大して役に立たんと思うがね」

美紀「そんな事ないです。手伝いといっても、読んでみておかしなところが無いかチェックして欲しいだけですから。どうぞ気軽にやって下さい」

部屋にあるテーブルを彼と挟むようにして座り、美紀はそのノートを手渡す。前にここを訪れた時から数週間…彼女はあれからも似たような世界の夢を見ており、それをベースに話を書いていた。

「じゃあま、見させてもらおうかな…」

彼はペラリとページを捲り、以前見た続きからそれを読み進めていく…。新たに書き足されていたページはほんの数ページ。文字数はそこまで多くないのだが、5分…10分と時間が過ぎても彼はまだノートから目を離さない。

「……………」

美紀「…あ、あの、どこか変なところがありました?」

「えっ? いや、今のところは特に…」

美紀「なんか、時間かかってますね？」

「ああ、ちよつと読むスピード遅くて。時間とらせて悪いね」

美紀「いえ、全然大丈夫ですよ。私こそ、付き合わせちゃってすいません」

時間がかかっている理由は、ただ単に文字を読む速度が遅いからのようだ。美紀はホツと胸をなでおろし、彼がそれを読み終えるのを待つ。どれだけ時間がかかろうと、しつかり読んでくれさえすれば良い。

……パタン

「んん、特におかしなところは無かったよ」

更に数分経過し、彼がとうとうそれを読み終える。美紀は彼からノートを返してもらおうと、不安そうな顔を見せながら尋ねる。

美紀「つまらなかった…ですか？」

「面白かったよ。ただ、胡桃ちゃんがこれからどうなるのかが心配だな」

ここで彼が言った胡桃とは、美紀の書いている小説中での登場人物の事であり、現実世界の彼女の事ではない。この小説中での胡桃は肩に傷を負っており、それによって謎のウイルスに感染してしまっていた…。

「あくまでも小説の中の話、胡桃ちゃん本人じゃなく彼女をモデルにしただけの娘だっというのは分かっているんだけど、だとしてもこれからが心配だ…」

美紀「…先輩は優しいですね」

「ふふっ、どうかね」

いくら胡桃をモデルにしたキャラとはいえ、これはあくまでも小説…にも関わらず彼女の事を心配をする彼を見つめ、美紀は微笑む。そうしている内、ふとあることが気になった…。

美紀「先輩は、くるみ先輩の事が好きなんですか…?」
何故こんな事を聞いてしまったのか、自分でも分からない。

ただ彼が小説の中の人物…胡桃の身を案じているのを見ていたら、自然と口が動いていた。

「えっ? い、いや…別にそんなことは…」

美紀「…冗談です。そんなに慌てないで下さいよ」

慌て出した彼にそう告げ、美紀は微笑む。

この発言は慌て出した彼を落ち着けるために…そして、咄嗟に出してしまった自分の発言をただの冗談にするために出したものだ。

美紀（私、なんでこんなこと聞いちやっただろ…）

さっきの言葉が冗談だと知って安心する彼の向かい、テーブルを挟んだ先に座る美紀は顔を俯け、一人顔を真っ赤に染める。彼と一緒にいるといつもそうだ。不意にドキドキと胸が高鳴り、どうにも落ち着かなくなってしまう。

美紀（やっぱり、自分の気持ちに素直になった方がいいのかな…）
この落ち着かなくなる気持ちは何なのか、正直言えば気付いていた…。けど、もしこの気持ちを彼に打ち明けたらどうなるだろう? 彼が受け入れてくれたら、きつと嬉しいと思う。だが、もしも拒絶されてしまったら…? そう思うと、怖くて素直になれない…。

「美紀、どうした?」

美紀「あ…っ…。何でもないです…」

声に反応して顔を上げると、彼が不安そうにこちらを見ていた。美紀は直ぐ様笑顔を作り、彼を安心させようとする。

「…何か悩み事？」

美紀「…いえ、大丈夫ですよ」

「ふむ…ならいいけど」

この場はどうかごまかせたらしく、彼が安心したように微笑む。するとその直後、彼は美紀の目を見つめたままニヤリと笑った。

「そう言えば美紀はどうなの？」

美紀「??…何がですか？」

「好きな人。美紀にはそういう人がいたりするのか気になってね」

美紀「あ、ああ…そういう事ですか」

話の内容を理解し、美紀は考える…。

ハッキリ言つて良いのなら、好きな人はいる。しかし、それを本人へ伝えるのは恥ずかしくもあり、怖くもある。どう答えれば良いのかと暫し考えた結果、美紀は一つの答えを思い付いた。

美紀「…まあ、こういう人が良いなあってタイプはあります」

「へえ、どんな人？」

美紀「えっと、その…普段から明るくて、それでいてちよつと抜けていて、一緒にいると呆れる事ばかりだけど、優しくてかつこい…付き合うなら、そんな先輩がいいです」

と答えた後、美紀は慌てた様子で顔を俯ける。彼の特徴を口に出すことで自分の気持ちを間接的に伝えようとしたのだが、いざ口を開いたら思いの外ストレートな物言いになってしまった。

美紀（これじゃ、さすがに気付かれ——）

「先輩ってことは、年上が良いの？」

美紀「えっ…？あ、はい……」

「ふうん…。明るくて、ちよつと抜けていて、それでいて優しい先輩ね

…」

美紀「……………」

彼はボーっとした様子で天井を見上げ、そのまま黙りこむ。彼は少しの間そうした後に美紀の方へと顔を向け、優しい笑みを浮かべた。

「…見つかるといいね」

美紀「は、はい……………」

先程美紀が言った好みのタイプ…それは彼を指すものだったのだが、様子から察するに彼はそれに気付いていないらしい。美紀は安堵すると同時に、ほんの少しだけガツカリする。

美紀「はあ……………難しいものですね…」

「何が？」

美紀「いえ、こつちの話です。私、ちよつと飲み物買ってきますね。先輩も何かいらいますか？」

「いや、いらないよ。一緒に行こうか？」

美紀「大丈夫です。すぐ戻りますから待ってて下さい」

この家に来る途中、自動販売機を見掛けた。そう遠くなかったはずだし、外の空気を吸いながら気持ち落ち着けよう…。美紀はそんな事を思い、一人外へと出ていった。

「…今の美紀、ちよつと不機嫌だったか？」

太郎丸「クウン？」

「ああ、お前にも分からないか…。女心っていうのは難しいな」

座布団の上に寝転ぶ太郎丸と会話を交わしつつ、ベッドの上へ腰を下ろす。ベッド横にある窓からは日が差し込んでおり、心地よい暖かさだ。

「これは、眠くなるな……」
目蓋まぶたがあつという間に重たくなり、気付けば横になっていた。ふかふかしたベッドの上で横になりつつ、窓から差し込む日を浴びるのはとても気持ちが良い。ほんの少しだけ休むつもりが、彼はいつしか深い眠りについていた…。

~~~~~

美紀「……何で寝てるんですか、この人は」  
約10分後、部屋に戻ってきた美紀はジューズを片手にため息をつく。彼がいつの間にかベッドの上に寝そべっており、そのまま眠っていたからだ。

美紀「はあ……私はどうすればいいんですか」  
カーペットの上に腰を下ろし、もう一度ため息をつく。起こすのも悪い気がするし、このまま帰ってしまおうか……。そんな事を思った時、美紀はすぐ隣で寝転んでいた太郎丸と目が合う。

美紀「……ねえ、どうしよつか？」  
ペタリと座り込んだまま、太郎丸に尋ねる。ただ、こんな事を尋ねたって太郎丸は返事をしてくれないに決まっている。自分はただでさえ嫌われているようだし、きつとそっぽ向かれて終わりだろう……。そう思う美紀だったが…。

トットトットツ……

美紀「あ…っ」

太郎丸は寝転んでいた座布団から起き上がり、そのままこちらへ歩

み寄る。美紀はこれだけでもかなり驚いたのだが、直後、太郎丸は彼女の膝の上へと乗って尻尾を振り始めた。

太郎丸「わんっ！」

美紀「あ、あれ：どうしたの？」

初めての事に戸惑い、美紀は静かに慌てる。ようやく懐いてくれたのだろうか？それとも寝ぼけているだけだろうか？色々な事を思ってしまうが、とりあえず、美紀は太郎丸の頭を撫でてみようと思っばした。

美紀「……………嫌：じゃないの？」

小さな頭に手を置き、静かに撫でる…。太郎丸の毛は思っていたよりもサラサラとしていて触り心地が良く、思わず頬が緩む。調子にのって頭なんか撫でたら逃げられてしまうと思っただが、太郎丸は逃げることなくそれを受け入れてくれていた。

美紀「もしかして、慰めてくれてる？ふふっ、お前は優しいね…。彼が眠ってしまったから、太郎丸が代わりに相手をしてくれるつもりなのかも知れない。実際どうなのかは分からないが、こうして太郎丸が来てくれたおかげで美紀の気持ちもいくらか明るくなった。

美紀「ねえ、ちょっとだけ：抱っこしていいかな？」

太郎丸は尻尾を振ったまま、彼女の事を見つめる。それを返事と解釈した美紀は太郎丸の脇に手を潜らせ、その身をそっと持ち上げた。

美紀「…なんか、懐かしい気がするなあ」

太郎丸「わんっ！」

相変わらず尻尾を振ったまま、返事のように声を出す。その声を聞いた瞬間：何故かは分からないが、瞳の奥がジリジリと熱くなっていった…。太郎丸の声を聞くと、その小さな身を抱えていると、何故か涙が溢れ出す…。

美紀「あ…っ…私、どうしたんだろ…」

優しく抱きしめるように胸へ寄せ、その存在を確かめる。これまで自分にだけ懐いてくれなかったから、こうして来てくれた事が嬉しかったというのもある。だが、溢れ出す涙の理由はそれとは別にある気がした…。

美紀「ごめんね…ありがとう…」

何に対して謝っているのかも、何に対しての礼なのかも分からない…。ただ、太郎丸を抱いている内に自然と言葉が出てしまう。美紀はそうして太郎丸を抱いたまま、数分間涙を流し続けた…。

美紀「ふうっ…やっと落ち着いた…。付き合ってくれてありがとうね」

太郎丸「わんっ」

応える太郎丸を見てニッコリと微笑み、その身を元いた位置、座布団の上へと戻していく。再びそこへと置かれた太郎丸は美紀の事をじつと見つめたまま、そつと静かに寝転んだ。

美紀「…にしても、お前のご主人様は困った人だね。ちよつと留守にした間に寝ちやうなんて」

こちらに向いている彼の寝顔を見つめつつ、太郎丸に愚痴を溢す。太郎丸は吠えたりする事もなく無言だったが、彼と美紀の事を交互に見つめていた。

美紀「ねえ、もし私が思いきった事をしたいって言ったら、応援してくれる？」

太郎丸「わんっ！」

と、これには太郎丸も返事を返す。それを聞いた美紀は『ふふっ』と笑い、そのまま彼の眠るベッドの横へとついた。

美紀「じゃ、がんばってみるね…」

カーペットの上に腰を下ろしつつ、彼の寝顔を見つめる。彼の眠るベッドはわりと高く、床に座り込んでいる美紀のほぼ正面に寝顔があった。美紀はベッドの上にほんの少しだけ身を乗り出し……

美紀「先輩…ちよつとだけ、失礼します…」

と、一人呟いてから彼の寝顔へ顔を寄せ、その唇に自分の唇を重ねた…。

美紀「ん…っ……」

あまり声を出すと彼が起きてしまう…。いや、そもそもこうしてキスしてしまった事で起きてしまってもおかしくない。分かってはいるのだが、重なった唇を離せない…。寝ているとはいえ、一方的なものとはいえ、好きな人とのキスだ。もう少しだけ…もう少しだけこうしていたい…。

美紀「っ…ん…先輩…先輩っ…」

何度も何度も繰り返しキスしてしまい、顔が熱くなっていく。こんな事をしたら起きてしまうと分かっているのに、美紀はキスをしながら彼の事を呼び続けた。

美紀（私、こんなに先輩のことが…大好きだったんだ）

改めて気付いたその気持ちと向き合い、美紀はキスを続ける…。寝ている彼としているだけでも全身が熱くなっていくのに、起きている彼としたら…彼にしてもらったら、どうなってしまうだろう。最早眠

りについていている彼とのキスでは物足りないような、そんな気持ちを美紀が抱きかけた時だった…

「美紀、何してるの…？」

美紀「っ…!？」

彼の瞳がパチリと開き、美紀は驚きに目を丸くする。長くキスし過ぎたせいでさすがに起きてしまったようだ。彼は横になったまま美紀の手を掴み、彼女の事をじっと見つめている…。

美紀「そ、そのっ…！ご、ごめんなさい…。」

「…なんでこんな事を？」

掴んでいた手を離し、彼は上半身を起こす。寝てる間にあんな事をして、嫌われてしまったかも知れない…。おかしな女だと思われたかも知れない…。思わず泣きそうになる美紀だが、彼女はそれでも彼の目を見つめ返した。

美紀「先輩のこと…好きなんです…。大好きなんですっ！だから…その気持ちを抑えられなくて…ごめんなさい…。」

「……………」

彼は返事を返さない…。

やはり、嫌われてしまったのだろうか。こうなるかも知れないと分かっていたのに、何故あんな事をしてしまったんだろう…。後悔した美紀の目に涙が溢れ出す。

美紀「嫌いに…になりましたよね…。ごめんなさいっ…私、なんでこんなことをっ——」

と、半泣きしそうになった瞬間だった…。

彼が美紀の頭に手をポンと置き、そこを優しく撫でていく…。

美紀「…先輩っ?」

「嫌いになんてならない。可愛い可愛い後輩が、自分の事を想ってくれている…むしろ嬉しいくらいだ。それにその…僕も美紀の事が…。」

美紀「な…なんです…?」

頭を優しく撫でたまま、彼は照れたように目を逸らす。

美紀はそんな彼を真っ直ぐ見つめ、決して目を離さない。彼が自分の事をどう思ってくれているのか、それを聞きたくて仕方がなかった。

「ええっとだね…僕も美紀の事…好きだから…」

彼は照れつつ、しっかりとそう言った。こちらを見つめる美紀の目をチラリと見つめ返し、確かにそう言った…。その言葉を聞いた美紀は一瞬ハツとしたような表情を浮かべるとすぐに顔を真っ赤に染め、ベッド上にいる彼へと抱きつく。

ガバツ!

「うおっ!」

美紀「本当…なんですすよね…?嘘じゃない…ですよね?」

自らも完全にベッドの上へ乗り、そのまま彼を抱きしめる…。

彼の言った言葉が嬉し過ぎて、我慢なんて出来なかった。

「…ああ、嘘じゃない。好きだよ」

美紀「つつ…!先輩っ…」

彼は改めて答えつつ、自分からも彼女を抱きしめる。

しかし次の瞬間、美紀が思っていたよりも強い力で身を寄せてきたため、彼は再びベッド上に横たわってしまう。

「うわっ…と」

バフツ!!

「あ、あの…美紀…?」

美紀「……」

彼が倒れても尚、美紀はその身を離さず胸元に顔を埋めている。まるで甘えん坊の猫のように自分の上にいる美紀…。彼はそんな美紀の頭を優しく撫でていった。

美紀「私のどこが…どこが好きですか…?」

「可愛いところとか、後輩なのにしっかりしてるところとか…」

胸に顔を埋めてくる彼女の頭を撫でつつ、その問いに答えていく。その答えを聞いた直後、美紀は更に強く顔を埋めていった。

美紀「なら先輩…きつとガツカリします…」

「…どうして?」

美紀「私、もし先輩と付き合う事になったら…いっぱい甘えます…。先輩にずっとベタベタして、たくさん甘えちゃいます…。きつと、これまでみたくしっかりしている余裕なんて無いです…それでも、そんな私でもいいんですか?」

「うん…それはそれで良いね。ギャップにやられそうだ」

甘えてくる美紀を想像し、満足そうに笑う。すると美紀は埋めていた顔を上げ、また改めて彼に抱きつく。

美紀「先輩っ…大好きですっ…!大好きですっ!!」

「んん、僕もだよ」

今にも泣き出しそうな顔を肩へ埋める美紀を抱きしめ、その背中を



撫でる。美紀は横たわる彼の上に覆い被さるようにしてその顔を真正面：至近距離から見つめた。

美紀「愛して…ますか？私のこと、愛してますか？」

「ああ…愛してる」

美紀「っ…：…よかった…：嬉しいです」

一筋の涙を溢し、美紀は彼を抱きしめる。彼も彼でそんな彼女をギュッと抱きしめ、二人はしばらくの間その場所で…ベッドの上で身を寄せ合った。

くくくくくくくく

美紀「あっ…：もうこんな時間なんですね」

部屋にある時計を見つめ、美紀は驚く。時計の針は午後5時を少し過ぎた辺りを指していた。ふと窓の外を見てみれば、空もすっかり夕焼け色に染まっている。気付かぬ間に結構な時間が経っていたらしい。

「家の人が心配するだろ。そろそろ帰るといい」

美紀「はい…：にしても、先輩と二人だと時間過ぎるのもあつという間ですね。もう少し一緒にいたかったな…：」

「そうだね。僕ももう少しだけ、美紀が甘える様を見ていたかったよ」  
互いの気持ちを伝え合った後に過ぎた彼女との時間を思い返し、彼は満足そうに微笑む。そんな表情を見た美紀は赤く染まった頬を膨らませ、彼の額にペシツと手を当てた。

美紀「あまり恥ずかしいこと、言わないで下さい…：」

「わるいわるい。色々と新鮮だったもので」

美紀「もう…：先輩ったら…：」

呆れたようにため息をつきつつ、美紀はニッコリと微笑む。

この数時間、彼には恥ずかしいところばかり見せてしまったが、それでも確かに幸せな時を過ごせた。これから先もこんな時間を共に過ごせると思うだけで、思わずニヤケてしまう程だ。

美紀「じゃあ、私は帰りますね。太郎丸も今日はありがとう。なんか：色々ごめんね？」

「いやいや、謝るのはむしろこいつの方だ。今まで散々、美紀に冷たくしてきたんだから。そういえば、いつの間にか仲良くなったみたいだね？」

美紀「ええ、先輩が寝ている間に色々あつたんですよ。ねっ」

太郎丸「わんっ！」

別れる前にもう一度その頭を撫で、美紀は笑う。太郎丸も彼女にすっかり懐いたらしく、逃げるような素振りは見せない。

美紀「さて、私はもう帰りますが：先輩、何か言うことは？」

「ああ、気を付けて帰るんだよ」

美紀「もう……違います、ハズレです。こういう時、ちゃんとした彼氏なら『送っていいこうか？』って言うんですよ。：たぶん」

プイツと目線を横に逸らし、少し不満げな顔をする美紀……。いじけたようなその顔を見た彼はおかしそうに笑いつつ、一枚の上着を羽織った。

「わかってる、冗談だよ。しっかり送っていく」

美紀「：本当ですか？」

「ああ。美紀みたいな可愛い娘がこんな時間に一人でいたら、悪い奴らに襲われかねないからね」

彼女と共に外へと出て、夕焼け色に染まる空を見上げる。真っ赤に染まっている空は少しずつ暗くなってきており、あと数十分もすれば夜になってしまいそうだ。

美紀「自分で送ってほしいと言っておいてアレですが、私みたいな娘を襲おうとする人なんていますかね…」

「そりやいるでしょ。美紀、可愛いし。少なくとも僕は襲いたいね」

美紀「はいはい。もう遅いですから我慢して下さいね。次の休みまで良い子にしてたら、また襲わせてあげてもいいですよ？」

その言葉は冗談なのか本気なのか…。美紀はイタズラな笑みを浮かべ、自分から彼の手を握る。外は少し肌寒かったが、こうやって手を繋ぐだけで結構温かくなつた気がした。

美紀「せーんぱい」

「はいはい、何でしょう」

美紀「いいえ、特に用はありません。ただ、大好きですって伝えただけです。それだけですよ」

そう言つて、美紀は彼と繋いだ手をご機嫌そうに振る。彼女と付き合い合う事になつてまだ数時間しか経っていないが、それでもいくらか分かつた事がある。彼女は好きな人の前だとよく笑い、そして甘えてくるタイプのようだ。

美紀「浮気とかしたら怒りますからね？」

「しないよ…。美紀の方こそ——」

美紀「私は絶対に大丈夫です。先輩の事が大好きで大好きで仕方ないですから。あなた以外の男の人に夢中になるなんて、絶対にありえません。だから安心して下さいね」

「分かつた。いや…本当に嬉しいな」

あの美紀がそれ程に自分を愛してくれているのだと思うと、何だか異様に照れくさくなる。どちらかといえばクールでしつかりした娘だと思つていたあの美紀が、今や自分の彼女…。彼はその存在を確かめるようにしてより強く手を握り、その温かさに安心した。

## 第二話 『大切な先輩』

圭「美紀ちゃん、今日も一緒にお昼食べよ」

長かった午前の授業が全て終わり、ようやく訪れた昼…。圭は弁当箱を手に持ってスタスタと歩き、友人である美紀のいる席へ寄る。ここ最近、美紀はもちろん他のクラスの友人である真冬や果夏、そして歌衣らと昼食をとるのが日課になっていたのだが…。

美紀「あつ、その…ごめん、今日は私抜きで行ってきてくれる？」

圭「ん？別にいいけど…どうしたの？何か用事？」

美紀「いや…その…えつと…うん、ちよつと用事があつて…かなり待たせちゃうと思うから…」

圭「へえ…そうなんだ…。じゃあ仕方ないね」

美紀「うん…ごめんね？」

圭が笑顔で『気にしないで』と告げると、美紀は安心したように微笑む。今日の彼女は忙しいようなので、昼食を共にするのは無理そう…。圭は仕方なく教室を出て、他クラスの真冬達を誘いに行った。

美紀（圭、本当にごめんね…。今日はダメなんだ）

圭が教室を出た後、美紀は自分のカバンを探って弁当箱を取り出す。小さな黄色い箱と、少し大きな赤い箱…。二つの弁当箱を手に持って、美紀もまた教室をあとにした。

くくくくくくくく

由紀「ふああ…やつとお昼だよお…」

教室の中、由紀は弁当箱を取り出して安堵のため息をつく。辛く長

い授業を越えた先にあるこの時間は、由紀にとって至福の時だ。

胡桃「どうする？今日も庭で食べるか？」

悠里「天気も良いことだし…そうしましょうか♪」

胡桃「よし、じゃあ早いところ動こうぜ」

胡桃、悠里はそれぞれ弁当箱を手にして由紀の席へ歩み寄り、由紀…そしてその隣の席にいる彼を昼食に誘う。この四人で共に昼食を食べるのは最早恒例だ。

「じゃ、皆は先に行つて。僕は購買で食べ物を買わないとならんで…」

胡桃「また購買かよ…。たまには弁当持参したらどうだ？」

「ムチャを言う…。僕には料理技術なんて無いし、代わりに作つてくれるような人もいないんだぞ？」

ため息混じりに言うと、胡桃が小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。彼はその笑みを見て一瞬だけムツとしたが…直後にあることを思い出す。代わりに弁当を”作ってくれそう”な人が、今の自分にはいるという事を……。

女子生徒「ねえ、ちよつといい？」

「ん？どうした？」

突如、一人の女子生徒が彼に声をかける。由紀や胡桃達と比べるとそこまで交流のない娘だが、それでもわりと親しくしている彼のクラスメイトだ。彼女は彼が返事を返すと、右手をスツと上げて教室の入り口を指差した。

女子生徒「あのね、君を呼んで欲しいって娘が来てるよ？二年の娘みたいけど…知り合い？」

「…あ」

女子生徒が指差した方…教室の入り口に目を向けると、そこには美

紀が立っていた。教室の外に出る生徒の邪魔にならぬよう身を縮めていた美紀は彼と目が合うと微かに微笑み、小さく手を振った…。

女子生徒「お〜…可愛い…。もしかして彼女？」

胡桃「ははっ、違う違う。アイツは二年の美紀ってヤツで、あたしらの知り合い。後輩とは思えないくらいしつかりしたヤツだから、間違ってもこんなヤツを彼氏にしたりしないって」

「こんなヤツって…酷い言われようだな」

悠里「でも、一人で来るなんて珍しいわね？どうしたのかしら…」  
「……………」

そう言えば、胡桃達にはまだ美紀との関係を言っていなかった…。というより、言うタイミングが無かったのだ。美紀と付き合うことになったのが日曜日で、今は火曜日…。まだたった二日しか経っておらず、伝えるタイミングなどあったものではない。

由紀「ねえ、行ってあげないの？みーくん待ってるよ？」

「あ、ああ…行ってくるよ…」

由紀達の視線を浴びながら、そこへとゆっくり歩いていく…。

そうして教室の入り口へとたどり着くと、美紀はモジモジした様子を見せながらもニッコリと笑った。彼女の笑顔はこれまでに何度か見ているが、これまでのとはまた違うタイプの笑顔にも見える。

美紀「こんにちは。あの、もし良ければ…お昼を一緒にどうですか？」

「ああ、ちょうどこれから由紀ちゃん達と一緒に行くところだったよ。じゃあ、美紀も一緒に来る？」

美紀「いや…あの…私は…先輩と二人きりが良いんですけど……………」

小さく呟いた直後に美紀は顔を俯け、耳の先を真っ赤にする。付き合うことになった時、彼女は彼に『いっぱい甘える』と言っていたが…それは本当だったようだ。

「……分かった。じゃあ、ちよつと待ってて」

美紀「あつ……は、はいっ……!」

彼は教室の中へと戻り、今日是由紀達と一緒にいけない事を告げる。それを聞いた由紀達は揃って不思議そうな顔をしていたが、深く追及しないまま、彼と美紀の事を見送った。

女子生徒「くるみちゃん、さっきあの後輩ちゃんと彼は付き合っていないって言ってたよね?ほんとなの?あの二人、なんか怪しいけど……」

胡桃「う、うくん……そうだな……なんか、少し怪しかったな……」

悠里「これは……もしかしたらもしかするかもね……」

由紀「……青春だねえ」

結局、今日は三人で昼食をとることに成り、由紀達は校庭へと向かう。しかし、彼が寄ってきた瞬間に美紀が見せたあの笑顔……やたらと嬉しそうなあの表情が気になってしまい、三人は上の空のまま昼食を進める事になった……。

~~~~~

美紀「……この辺で良いですか?」

「ああ、良いよ」

二人が昼食をとる場所を選んだのは校舎裏。あまり……というか全くひとけ人氣が無い、閑散とした場所だ。二人は学校の敷地と外の道路を隔てる塀のそば……そこにある木陰の下に進み、ヒンヤリとした芝に腰を下ろす。

「あつ……ちよつと待ってて、購買行ってくるの忘れた」

場所を移したのは良いが、肝心の昼食を買い忘れていた……。彼が慌

てて立ち上がると、その手が美紀に掴まれる。彼女は芝の上に腰を下ろしたまま彼の目を見つめ、自身の膝上に置かれていた弁当箱をポンと叩いた。

美紀「大丈夫です。一応…先輩の分も作ってきましたよ？お口に合うかどうか分かりませんが…それなりに頑張りました」

「おおっ、わざわざ作ってきてくれたの？」

彼が再び芝の上へ腰を下ろすと、美紀は二つあった弁当箱の内、微かに大きな赤の弁当箱を手渡して顔を俯ける。

美紀「私は…先輩の彼女、ですから…」

それは紛れもない事実だが、口に出すのは恥ずかしかったのだろう。美紀の頬がみるみる真っ赤に染まっていく…。彼は弁当箱を受け取ってから彼女の頭をそつと撫でると、ニツコリと笑った。

「じゃあ、彼氏として美味しくいただくよ。ありがとね」

美紀「…はい。ま、不味かったら…残して良いですからね？」

弁当箱を開く彼に不安げな顔を向ける美紀だが、そんなのは余計な心配だろう…。開いた弁当箱の中に入っていた物は唐揚げ、玉子焼き等のオーソドックスな物だったがどれも綺麗な見た目をしており、決して不味そうには見えない。

「見た感じ美味しそうだけど…美紀、料理は得意？」

美紀「苦手じゃないですが、得意でもないって感じですかね…」

「へえ…」

弁当と一緒に渡された割り箸を手に取り、箱の中に詰められていたおかずをパクリと食べていく…。それらは見た目通り悪くない味…いや、むしろ美味しいくらいだった。

「…んん、美味しい。料理上手じゃん」

美紀「お、お世辞はいいですよ？だから本当の事を——」

「本当に美味しいよ。ほら、あくん」

疑う美紀を信じさせる為に箸で玉子焼きをつまみ、彼女の口元まで運ぶ。急にそんな事をされた美紀は目を丸くしていたが、辺りに人影が無い事を再確認してゆっくり口を開けた。

美紀「あ、あくん……」

「ほっ」

開かれた口に箸を運び、玉子焼きを食べさせる。

美紀「んぐっ……ん……」

「ほら、美味しいでしょ？」

美紀「まあ……はい……わりと……」

美紀の返事は少し中途半端だが、彼は満足したように微笑む。

彼女が少しでも自分の料理の腕に自信を持てたのなら、それで良いと思った。

美紀「美味しいといえば、美味しかったですけど……でも……」

「でもっ……」

美紀「先輩に……好きな人に食べさせてもらったら……何でも美味しいに決まってるじゃないですか……」

彼の胸が一気に高鳴り、次のおかずに伸ばそうとしていた箸の動きが止まる……。彼女とは恋人関係なのでイチイチ反応していたらキリがないと分かっているが、やはりこの女の子に……直樹美紀に真っ向から『好き』と言われると動揺を隠せない……。

「美紀……」

美紀「……ふっ、先輩、顔真っ赤ですよ？可愛いですっ♡」

「かわっ……!?!」

イタズラに微笑む美紀を見て、また一層に胸が高鳴る。

付き合う前は彼女に対して『クール』『しっかり者』というような印

象を持っていたが、付き合ってから二日でその印象が変わり始めた。彼女には『甘えたがり』な面…そしてどこか『小悪魔的』な面もあるようだ。

美紀「お弁当、早く食べちゃいませうか。あつ、飲み物とかもあるんで欲しい時は言ってください？」

「わ、分かった…」

美紀は自分用に持ってきた黄色い弁当箱を開き、昼食をとり始める。膝の横には水筒も置いてあり、必要ならその中身を彼に分けてくれるらしい。

美紀「こうして先輩と二人きりでお昼を過ごせるなんて、嬉しいです…」

「そう？まあ、僕も美紀みたいな可愛い後輩と…彼女と一緒にいられて嬉しいし、幸せだよ」

少し照れくさいが、思っていたままの事を伝える。すると美紀は弁当をつまみながら楽しげに微笑み、隣に座る彼の事を見つめた。

美紀「そう言えば…この前みんなで海に行った時、私に言った事覚えてますか？ほら、夜の浜辺を二人きりで散歩した時の…」

「えつと…」

皆で海に行った事…そしてその夜に美紀と二人で浜辺を散歩した事自体は覚えている。だが、その際言った台詞というのはどうにも思い出せない。

美紀「先輩、恋愛に関する話をしながら私に言ったじゃないですか…『変な男には捕まらないように』って」

「ああ、それか…。確かに言ったね。で、それを聞いた美紀は『それって先輩みたいな男の人って事ですか？』なんて失礼な事を言ったんだよな…」

美紀「ふふつ。はいっ、言いましたね」

その時の事を思い出しながら楽しげに笑い合い、彼は弁当を食べ進める。するとその直後、美紀は彼の肩にポンツと顔を埋め『変な男には捕まらないように』という言葉を思い返ししながら小さな声で囁いた…。

美紀「結局：捕まっちゃいました…」

「いや、だから僕は変な男じゃないって…」

美紀「先輩は変な人ですよ…。変な人ですけど…とても優しくて、かつこいい…。私の…大切な彼氏です…」

肩に埋めた顔をすりすりとおかし、美紀は微笑む。

彼の肩に寄り添うその様はまるで甘えん坊の猫か何かのようだ。

「美紀、本当に変わったね」

美紀「ええ、言っただけですよ。『先輩と付き合うことになったらいっぱい甘えます』って。やっぱり…嫌でしたか?」

「いや全然。美紀みたいな可愛い娘に甘えられるのなら光栄だよ」

美紀「…よかった。私、先輩に甘えている時が一番安心出来るんです。こうして先輩の肩に顔を寄せながら、先輩の匂いを嗅いでいると…すっごく落ち着きます…」

彼の肩に顔を埋め、美紀はゆっくりと息を吸う…。そうする事で感じられる彼の香りが気に入っているらしく、美紀は嬉しそうに微笑んでいた。

「甘えるのも良いけど、早くしないと昼の時間が終わるよ?」

美紀「あつ、そうですね…」

ハツとした表情を浮かべ、美紀は彼の肩から離れる。

二人はその後、楽しげに談笑を交わしながら昼食を食べ進め、弁当箱の中身を空にした。

「ごちそうさま。本当に美味しかったよ」

美紀「先輩さえ良ければ、また作ってきます。日によっては作れな

い日もあると思いますし、それに…圭たちとお昼に行っちゃう時もあると思いますが…」

「ああ。弁当を作ってくるのも、昼と一緒に過ごすのも、出来る時だけで良いよ。友達は大切にしないとだからね」

彼と恋人関係になったからといって、圭達の事を雑に扱うのも嫌だ。今日は彼の分の弁当を作ってきたので昼を共にしたが、それと引き換えに圭との昼食を断ってしまった事を美紀は心のどこかで気にし続けていたのだ。

美紀「すみません…。先輩とお昼は凄く幸せでしたが、圭達と過ごすお昼も好きなんです…」

「んん、良いことだと思うよ。僕の事はあまり気にしないで良いから、圭ちゃん達を優先してやって。こつちも美紀が来なかったら来なかったで、いつも通り由紀ちゃん達と昼食をとるから」

美紀「本当にすみません…」
空になった二つの弁当箱を手に持ち、美紀は頭を下げる。

彼女が謝る必要など何一つないのだから、あまり気にしないで欲しいが…。

美紀「でも…あまりゆき先輩達にベタベタしちゃダメですよ？」
「ベタベタ？…そんなのしないって」

美紀「ならいいですけど、もしも先輩がゆき先輩達に…というより、他の女の子にベタベタしてるところを見掛けたら、お仕置きですからね？」

ニコツとした良い笑顔を浮かべる美紀だが、言っている事は少し怖い…。

いや、笑顔で言っているのだから冗談半分なのかも知れないが、何となく油断はならないような気もする…。

「因みに、お仕置きってのは具体的には何を？」

美紀「うーん……何でしょう？また考えておきますね」

「いや、考えなくていいよ……」

苦い表情を浮かべつつ、彼は美紀と共に校舎の中へと戻る。

最後はこんな感じになってしまったが……可愛い後輩であり、彼女でもある美紀と二人きりで過ごす初めての昼は思っていたよりも楽しく、そして幸せな時間だった。

第三話 『一緒ならどこでも…』

美紀「…静かですね」

「んん、そうだねえ…」

校舎裏にある木陰の下…。彼は美紀と並んで芝の上へと腰を下ろし、空になった弁当箱の片付けをしていく。少し大きなこの箱は美紀が持つてきてくれた物であり、中には彼女の手作り弁当が入っていたのだが、それらはもう彼の胃に収まっていた。美紀と付き合う事になって数週間…。こうして昼休みに彼女の手作り弁当を、彼女とともに食べる事はすっかり恒例行事のようになっていた。

美紀「あつ、そうだ。今の内に伝えておきますが、明日のお昼は友達と過ごす約束をしているのでよろしくです」

「ああ、はいはい」

美紀「なんならお弁当だけ作ってきましようか?」

「あゝ…いいよ、余分に作るのも大変でしょ」

美紀「…そうですか、わかりました」

共に昼休みを過ごす事が恒例になったとはいえ、彼女はこうして週に二〜三回は友達との昼休みを優先する事がある。彼自身それを気にしてはいないし、むしろ良い事だと思っていた。彼女がもし、付き合い始めた途端に友達の事を無下むげにするような娘だったのなら、少し嫌いになっていたかも知れないからだ。

「じゃあ明日はゆきちちゃん達とお昼にするかね…」

美紀「はい、そうしてください。けど、あまりデデ——」

「ああ、デレデレしない。ゆきちちゃん達はあくまでも友達だからね」

放たれた言葉に被せるようにして答えると、美紀は『ならばよろしい』と言わんばかりにニッコリと笑って頷く。こうして昼を一緒に過ごしてくれたり、手作り弁当を作ってきてくれるのはとてもありがた

いし幸せだ。ただ、美紀は彼が他の女子と親しげにしているのを見たりすると少しだけムツとした表情になる…。

『もしも先輩がゆき先輩達に…というより、他の女の子にベタベタしてるとところを見掛けたら、お仕置きですからね?』

…前に彼女が言った発言を思い出し、彼は悩ましげに眉を寄せる。

美紀は全体的に見ると良い彼女なのだが、何となく不穏な雰囲気を漂わせる時があるような気もしなくもない…。

「…美紀はさ、僕が浮気したらどうする?」

美紀「……………したんですか?」

彼が試しにと思い尋ねた途端、これまで楽しげだった場の空気が一変していく…。美紀は微かに俯けていた顔を彼の方へ向け、冷たく、鋭い眼差しを浴びせた。

「い、いや…してないよ?」

美紀「…本当ですか?嘘ついてませんか?」

「ついてないって…。ただ、美紀って意外と甘えんぼうな所があるから、浮気とかしたらそれに対するお仕置きが怖いなあと…」

美紀「お仕置きが怖いのなら、浮気しなきゃいいんですよ」

「まあ、それはごもつとも…………」

美紀は呆れたような顔で言いながら水筒を傾け、一杯のお茶を彼へ手渡す。彼はペコリと頭を下げてからそれを受け取り、喉を潤していった。

美紀「先輩は、私がお仕置きとしてどんな事をすると思ってるんです?」

「ん、ん…そうだな…監禁とか?」

美紀「は?誰をです…?」

「…僕を?」

美紀「先輩を監禁してどうするんですか?」

「いや、細かい事は分かんないけど…。もしも浮気したら薄暗い地下室とかに閉じ込められて、鎖とかに繋がれそうな気がする…。」

彼は視線をそっと上へ向け、静かにその光景を想像する…。

本当の事を言うところには冗談半分で言っただつもりだったのだが、薄暗い地下室の中…浮気した自分を監禁する美紀というのは思っていたよりもしつくりきた。

「先輩が…先輩が悪いんですからね…」とか言っつて鞭むちでも打つてきそうだ…」

美紀「せ、先輩の中での私のイメージって何なんですか…。もし先輩が誰かと浮気したとしても私は先輩の事を監禁なんてしませんし、鞭で打つたりもしません！監禁しようにも、地下室とかありませんし…。」

「…あつたらやるの？」

美紀「やりませんよ。…たぶん」

ボソツと呟かれた言葉に彼は肩を震わせたが、美紀がニコニコと愛らしい笑みを浮かべていたのでそれは冗談なのだと気付く。美紀は彼のキョトンとした顔を見ながらクスクス笑うと、互いの肩が触れる程の距離まで身を寄せた…。

美紀「もし本当に浮気されたら…私はきつと何も出来ません…。先輩に裏切られた事がただただショックで、家でずっと泣いてると思いますよ…」

「むう…美紀をそんな目に遭わせるのはかわいそうだな。浮気はしないようにするよ」

美紀「はい…。出来るだけ長く…可能ならずと…私の事を好きでいて下さい…。私も、先輩の事をずっと好きでいますから…」

優しい声でそう言っつて、美紀は彼の肩に頭を寄せる…。

自らの肩に頭を預けてくる彼女の幸せそうな顔を見ていたらつい胸の鼓動が高鳴り、彼は彼女の顎に手を添えた…。

美紀「っ……」

彼の手によつて顎をクイツと引かれ、美紀は声を漏らす…。校舎裏は比較的人気が無い場所だが、万が一という事もある。顎に手を添えたまま辺りをキョロキョロ見回す彼を見て、美紀は彼がこれから何をしようとしているのかを察し、そつと目を閉じた…。

「……美紀」

自分達以外、辺りに誰もいない事を確認した彼は静かに美紀の名前を呼び、そつと唇を寄せる…。付き合い始めて数週間経つたが、彼とこういう事をするのは何度目だろう…。美紀は瞳を閉じたままそんな事を考え、心の中で『ふふっ』と笑つた。自分と彼がこんな間柄になるなんて考えていなかったからだ…。

美紀「…先輩」

「ん…？」

唇と唇が重なる寸前、美紀は彼の唇に人差し指を当てて動きを止める。あと一步のところでお預けをくらつた彼は驚いたような目をしており、美紀はそれを見てニヤリと笑つた。

美紀「まったく…。誰がいつ、キスしていいって言いました？」

「…ダメなの？」

美紀「はい、今は気が乗らないのでダメです。彼女の許可なくキスしようとした悪い先輩には罰として、私にジュースを買うことを命じます」

「いや、飲み物なら水筒に…」

美紀「さつき先輩にあげた分で終わっちゃいました」

美紀は持つてきていた水筒を下に傾け、中身が無いことを告げる。芝の上に腰を下ろしたまま、小さく水筒を振る彼女を目の当たりにした彼はそつと立ち上がり、美紀を連れてそばにあった自動販売機へ向かった。

「…はい、好きなの買いな」

美紀「ふふっ、ありがとうございます」

飲み物が一つ買えるだけの硬貨を手渡された美紀はニッコリと微笑み、飲み物を一つ購入する。彼女は自動販売機の取り出し口から今買ったばかりのペットボトル飲料を取り出すとすぐにキャップを開き、ゴクゴクと美味しそうにそれを飲み始めた。

美紀「…………ふはっ。あの、そう言えば先輩に言いたい事があって…」

「ん？なに？」

美紀はボトルのキャップを閉め直しながら彼の事を見つめると、今度はどこか恥ずかしがっているかのように…緊張しているかのように目を逸らす…。何か言いたい事があるようだが、中々口に出せないようだ。

美紀「あの…その…………」

「…………どうした？」

彼は美紀のすぐそばまで寄り、安心させるかのように頭を撫でる。さらっとした髪の毛を何度か撫でていくと美紀の緊張もだんだんと解れていき、後に互いの目線が合った。

美紀「今度の土曜日、私ヒマなんです…。だからそのつ、先輩とデート…………してみたいです…。ダメ…ですか？」

頬をほんのり赤く染め、美紀は上目遣いの状態で彼に問う…。付き合いだして数週間…。カップルらしくデートの一つでもしたかったのだが二人揃って中々予定が合わず、未だ一度のデートも経験していなかった。しかし次の土曜日、美紀はこれといった予定が無い。あとは彼の予定さえ合えばデートが出来るのだが…………

「土曜ね…。うん、その日なら大丈夫。では、初デートといきますか？彼もまた土曜日は暇だった為、ニッコリと微笑みを返す。

彼の返事を聞いた美紀は微かに顔を俯け照れたように微笑んでい

だが、とても嬉しそうにしていた。

美紀「よかった…凄く楽しみですっ！」

「ええっと、どっか行きたいところとかある？」

美紀「そうですね…えっと、その…特に無い…かな」

「そ、そっか…」

苦笑いしながら答える美紀を見て、彼も同じように苦笑いする…。
せつかくの初デート、美紀の行きたいところに行こうと思ったのだ
が…彼女はただ、デートが出来ればそれだけで良いらしい。

美紀「私は先輩と一緒にならどこでも良いんです…。それこそ、お家
デートとかでも良いくらいで…」

「お家デートって言っても…家で出来る事なんてそう多くないしな
…。ちよっとゲームでもして、あとはちよっとエッチな事して…」

美紀「私は…それでも良いですけどね」

「っ…!? よしっ！ お家デートにしようか！」

本当は軽い冗談のつもりだったが、意外にも美紀の反応は悪く
ない…。彼女の返事を聞いた彼は初デート先を家に決めようとした
が、そんな彼の制服の裾を美紀がクイツと引いた。

美紀「先輩、冗談ですよ…」

「…冗談ですか。まあそうでしょうね」

彼も薄々ながら美紀の冗談に気付いていた為、そこまでのシヨツク
はない。彼はその後も頭を悩ませたが、やはり初デートの場所が家と
いうのは味気ない気がした…。

「じゃ、適当に街中まちなかでもぶらぶらする事にしようか？」

美紀「はいっ、それで良いですっ！ 楽しみにしてますね♪」

大好きな彼との初デート…その予定を立てられた事が嬉しくて、美
紀は自分でも無意識の内に彼の手を握る。後輩とは思えぬくらい

しっかり者だが、どこか甘えん坊な女の子…。彼はそんな美紀の手を強く握り返し、ニツコリと微笑んだ…。

校舎裏付近…。

偶然そこへとやって来ていた圭に、それを見られていたとも知らずに…。

第四話 『初デート』（前編）

（…そろそろ来る頃だと思うけどな）

美紀とのデートを約束していた土曜日が遂に訪れ、彼は街中で彼女の事を待つ…。家まで迎えに行くと言ったのだが、彼女の方がそれを遠慮してきた為、結局現地集合となった。しかし、約束の時間になっても美紀は中々現れず、数分の時間が経過していく……

（ちよいと心配になってきたけど大丈夫かね…。美紀は時間にルーズなイメージがないんだけど…。もしかして、悪い男にでも捕まったか？）

少し遅れているだけで変な想像をし過ぎな気もするが、美紀は鼻^{ひいきめ}根目^め抜きに見ても美人な子だし、休日の街は人もかなり多い…。一人で歩いていたところを変な奴に絡まれた、という可能性も無くはないだろう。彼はポケットから携帯を取り出し、彼女に連絡を入れる事にした…。

…スツ

「うおっ!？」

??? 「だ〜れだ?」

美紀へ連絡を入れようと携帯電話の画面を覗いた瞬間、背後からやって来た人物の手によって視界が遮られる。その人物は柔らかなで微かに冷たい手のひらで彼の両目を塞ぎ、クスクスと笑う。

「……美紀でしょ」

美紀 「へえ、よく分かりましたね?」

背後にいた人物：美紀はそつと手を離してから彼の前へと回り込み、驚いたような眼差しを向ける。先ほどの彼女は声色を変えていた

ようだが、美紀だと分からなくなるレベルの物では無かった。

美紀「とにかく、遅れてすみません。待たせちゃいましたよね？」
「無事だったならいいよ。にしても、美紀が約束の時間に遅れるなんて結構意外だな。何かあったの？」

美紀「その……先輩との初デート、せっかくだからおしゃれしたいなあとあれこれ悩んでしまいました……。そうこうしてたら思ったよりも時間がかかり、少し遅れてしまいました……」

申し訳なさそうに……それでいてどこか照れたようにして、美紀は履いていたスカートを指先でギュツと握る。彼女は半袖の白いシャツの上に紺色の上着を羽織り、そして下には上着よりも更に少しだけ暗い紺色をしたミニスカートを履いていた。こうして見ると、確かに何時もよりおしやれしているように思える……。また、スカートと膝上まで上げられた黒のニーソックスの間からのぞく太ももがやけに眩しく、そして魅力的だ……。

美紀「少しでも先輩によく見られようと思つて気を使つたんですよ。ええつと……おかしくくないですか？先輩、是非とも感想をどうぞです」

「あー……うん、いいね」

美紀がニコニコと微笑みながら尋ねてきたので、彼はその全身をパツと見つめ直した後、最後に太ももを眺めてコクリと満足げに微笑む。今日の美紀は何時にも増して可愛いが、なんと言つても太ももが良い……。少し気を抜くと、ついそこを見つめてしまう程だ。

「いや、本当にすごく良い……」

美紀「ど、どこ見ながら言つてるんですか……」

「にしても短いスカートだ……。少し動いたら見えそうなくらい……」

美紀「そこまで短くはないですよっ！確かに強い風が吹いたら危ないかもですが、その時はしっかりと手で押さええますから……」

口ではそう言う美紀だが、咄嗟にそんな反応が取れるのか気になる

ところだ。出来るなら今すぐにも突風が吹き、そのスカートを捲つて欲しい…。なんて事を思う彼だったが、辺りにいる男性達が通り際に美紀の事をチラチラと見ているような気がして考えを改めた。自分だけならまだしも、他の男に美紀のスカートの下を見せたくはない。

「風、気を付けなよ。しつかり押さえないと、辺りにいるやらしい男にスカートの中を見られちゃうからね」

美紀「はい、気を付けます…。でも、この辺にいる男性の中で一番いやらしいのは先輩だと思いますよ？私が思うに、先輩以上の変態は中々いないかと…」

「なっ…失礼なヤツだな」

彼がムツとした表情を浮かべると、美紀は楽しそうに微笑みを浮かべて歩き出す…。それからほんのワテンポだけ遅れて彼もその隣に立ち、二人並んで歩いていった。

美紀「けど私も先輩ならともかく、他の男の人にスカートの中を覗かれるのは嫌なので、本当に気を付けないと…」

「つまり、僕に見られる分には構わないと？」

美紀「恥ずかしいというのは変わりませんが、先輩は私の彼氏ですからね。…て、何ですかその顔…。まさか『見たい』とか言いませんよね？…こんな街中まちなかで…」

「美紀が見せてくれると言うのなら是非とも…」

美紀「なっ…!?せ、先輩は…本当にどうしようもない変態ですっ！はあっ…：はいはい、今日のデートで私を満足させてくれたらまた後日見せてあげてもいいですが、見せるにしたって先輩の家の中とか、人目のつかない所でですよ？」

「……………」

かなり呆れていたようだが、美紀はそれでも了承してくれた…。それがほんの少し意外だった為には彼は目を丸くして驚き、彼女の事を見つめる。

美紀「そ、そんな目で見ないで下さいよ！先輩の方から言い出したんじゃないですか……！」

「あ、ああ……そうだね」

見つめられた事で自分の発言を後悔したのか、美紀は顔を俯けたままトボトボと歩く。短い茶髪からのぞく耳は真っ赤に染まっており、とてつもない恥ずかしさを感じているのが分かる。

美紀「今の言葉、冗談ですからねっ！今回のデートがいくら楽しくて満足のいくものだったとしても、私はそういう事をしませんから……！」

「……そりゃ残念」

恥ずかしいという気持ちを隠すように声を張る美紀の頭をポンと撫で、彼はこれからの予定を考える。街にやって来たのは良いが、ほとんど予定を立てていなかったのだ。

美紀「……先輩？どうかしました？」

「美紀、どっか見たい場所ある？」

美紀「見たい場所？いえ、特に無いですけど……」

「そっか……。昼食にはまだ早いし、どうするかね……」

美紀「……ふふっ、適当に出歩きながら考えましょ？」

「ああ、そうするか……」

もつとしつかり予定を立てて来るべきだったと反省する彼だったが、美紀はその事を全く気にしていないかのようにニコニコと笑っていた。

美紀「そうだ、手だけ繋いでも良いですか？今日は思っていたよりも寒いので、先輩の手に温めてもらいたいです」

「んん、いいよ」

そつと手を寄せると美紀は嬉しそうにそれを掴み、しっかりと手を繋ぐ……。彼女の手は確かに冷えていたため、彼はそれが少しでも早く

温まるようにギュツと力を込めていった。

~~~~~

圭「み、美紀ちゃんが先輩と手を繋いで……っ！やっぱり……やっぱりそういう関係なのっ!？」

二人が手を繋いだまま仲良く歩く後方……約10メートル程の距離。人混みに紛れながらそれを見ていた圭は顔を真っ赤に染めていく……。

先日、美紀と彼がデートの約束を交わしたのを偶然にも目撃した彼女は二人の関係が気になってしまい、今日は朝から美紀の自宅前に姿を潜ませ、出掛けていく美紀の事をそのまま尾行してきたのだ。

圭「ああ、やっぱり付き合ってるんだ……。じゃなきや、美紀ちゃんがあんなふうに手を繋ぐなんてあり得ないもん……」

あまり離れると前方を歩いている二人を見失ってしまうが、かといって近付き過ぎても尾行がバレてしまう……。圭は人混みに紛れたまま絶妙な距離をとりつつ、今回の助っ人を選んだ人の手を引いていく。

歌衣「あの……あまり引つ張られると痛いんですが……」

圭「ご、ごめんっ！けど、もう少しだけ早く歩かないと二人を見失っちゃうから……」

前方の二人と後方の歌衣……それらを交互に見つめ、圭は少し後悔する。大切な友人と先輩の関係を確かめるのにも自分一人だと心細いので、たまたま予定の空いていた歌衣に協力を頼んだのだが、歌衣はどうにもものんびりしていて尾行がより大変になっていくのだ……。

歌衣「にしても、本当に仲が良さそうですねえ」

圭「うん……すごく怪しいっ!」

歌衣「……あの、協力しておいてなんですが、二人の関係がそんなにも気になるなら美紀さんに直接聞けば良いんじゃないですかね？」  
圭「そ、それはそうだけどっ……！なんか……なんか聞きづらいのっ!!」  
実際、今日という日がやって来るまでの数日間に何度かそれにチャレンジしてみた。しかしいざ美紀を前にしてしまおうと肝心の事を聞き出す勇気が持てず、結局は尾行するという形になってしまった……。

圭（…ほんと、楽しそう）

人の多い街中でここまで距離を開けていると会話の内容までは聞こえないが、彼と出会ってから美紀が楽しそうに微笑み続けているのは分かる。繋いだままの手やその距離感から察するに、付き合っているというの間違いはないだろう……。だが、それが分かったところでこの尾行を止める気はない。二人が付き合っているのなら、彼が美紀に相応しい男なのかどうか……それを美紀の親友として見極めようと思った。

~~~~~

「で、どうにも眠気が取れなくて……。やっぱり授業つてのは退屈だよな」

美紀「勉強はちゃんとしないとですよ？授業中に居眠りばかりしてたらダメな人になっちゃいます。私、そんなダメな人が彼氏なんて嫌です」

「…わかった。勉強も頑張るよ。美紀に嫌われるのだけは勘弁だからね」

美紀「はい、そうして下さいー！」

他愛のない会話を交わす中、美紀は彼の背中をそっと叩いて励ましていく。デートが始まり、行くあてなく歩き続けて数十分の時が流れた。今のところただ散歩しているだけのデートだが、これはこれで結構楽しい。

美紀「面白いですよ。クラスの男子と話していても何とも思わないのに、先輩とだどどんな会話も楽しく思えます」

「それは嬉しいけど……美紀もクラスの男子と話したりするんだね」

美紀「まあ、本当にちよつとだけですけどね」

同じクラスにいる以上、会話をしたりするのは当たり前前の事だ。それは分かっているが、美紀が他の男子と話している様を想像するとはんの少しだけモヤツとした気持ちになる…。

美紀「あつ、ひよつとして先輩…嫉妬しつとしてますか？」

「嫉妬？いや、少し話したくらいでそんな……」

美紀「ふふつ、素直になつて良いんですよ？今一瞬、私が他の男子と会話してるのを想像して嫌な気持ちになりましたよね？」

目の前に回り込んだ美紀は歩みを止めると、微かに身を屈めてから彼の顔を上目遣いで覗きこむ。彼女の予想は見事に当たっていて、彼はほんの少しだけ嫉妬していた…。

美紀「まったく、そんな気持ちにならなくても大丈夫なのに……。私が好きなのは先輩だけなんですから、安心して良いんですよ」

「…分かったよ」

これだけ気持ちを見透かされていると気恥ずかしくなり、彼はプイツと顔を背ける。しかし美紀は彼が顔を背けた先々へと回り込み、ニヤニヤと微笑んだ。

美紀「顔、赤いですよ。照れてるんですか？」

「つ……そ、そろそろ昼にしよう……。あそこの店とか良さそうだ」

前へ回り込んできた美紀の肩を叩き、彼はたまたま視界に入ったレストランへと足早に歩を進める。その行動がただの照れ隠しだと見抜いていた美紀はまた嬉しそうに微笑み、彼のあとをついていった…。

そうして訪れたレストランは思っていたよりも空いていたが、全体的な雰囲気は悪くない。二人は店員に案内されるまま席へ座ると、テーブルに置かれていたメニューを開いていく。

美紀「結構色々な物がありますね。先輩、どれにします？」

「えつと…ちよつと待ってて。一回トイレ行ってくる」

美紀「じゃ、私は先に決めて待ってますね」

トイレへ向かう彼を見送り、美紀はもう一度そのメニューに目を通す。そんな彼女が座る席のすぐ真横…ちよつとした仕切りで遮られた先にあるスペースには圭と歌衣が座っていた。二人は美紀にバレないようにメニューで顔を隠しつつ、彼女の様子を窺い続ける…。

美紀「…ふふつ、先輩の照れた顔、可愛かったなあ」

などという美紀の独り言が耳に届き、圭と歌衣は二人揃ってその顔を真っ赤に染めた。美紀は今回の初デートにかなり浮かれているようであり、その後も一人で『ふふつ』と笑い声をあげる事が何度も続いた…。

歌衣「み、美紀さん、すつごくご機嫌です…」

圭「こんな美紀ちゃん、今まで見たことない…」

聞こえてくる笑い声は本当に美紀のものなのかと疑わしくなつてそつと立ち上がり、圭は仕切りの隙間から向こうを覗く。隙間の向こうにある席にいるのは紛れもなく美紀であったが、やはりいつもの彼女とは別人のような雰囲気だった…。

第五話『初デート（後編）』

これまでの事を思い返し、一人楽しげに微笑む美紀。

彼女は彼が席へ戻ってきた後も楽しそうに笑っていて、とても幸せそうだった…。圭達は二人がレストランを後にしてからも気付かぬように尾行を続けていき、気付いた頃には空も街も、すっかり夕焼け色に染まり出していた……………。

圭「おっ…歩き出した…。歌衣ちゃん、私らも二人を追って……つて、あの子はまたあんな所でっ!!」

動きを止めて雑談をしていた二人がまた歩き出したので追おうとする圭だったが、振り向いた時、歌衣がそばからいなくなっていた。彼女は少し離れた所にあつた移動販売の車の前に立ち、クレープを買って一人でニコニコと微笑んでいる

圭「歌衣ちゃんっ!二人が移動したから、私らも動くよ!」

歌衣「はいはい、分かってますよお。あつ、圭さんもうです?このクレープって美味しいんですよ♪」

圭「もうっ!今はそんなのいいからっ!」

二人の事を尾行してかなり経ったが、歌衣が足を引つ張ったのはこれが初めてではない。あのレストランを出て以降、彼女は定期的に圭のそばを離れ、一人でふらふらと出歩いてばかりいた。

圭「ええつと…よしつ、追い付いたっ!!」

歌衣を呼んでいる間に一度は美紀達の事を見失ってしまったものの、圭は直ぐ様二人を見つけ出す事に成功する。二人は帰る前にもう

少しだけ寄り道をと考えたらしく、街外れにある小さな公園へと寄っていた……。夕方の公園には全く人がおらず、紛れる人混みが無くなった圭の尾行も益々慎重になる。

圭「身を屈めて、静かにしてなきや……」

公園内の茂みに身を潜め、10メートル程先にあるベンチに仲良く腰掛けて二人を見張る……。ひとけ人気の無い園内、少しでも声を張つたらすぐにバレてしまふだろう。と、圭が必死に気配を殺している時だった……。すぐ後ろにいた歌衣が服の裾をクイツと引いていたのだ。

圭「んっ？なに？」

歌衣「圭さん、もう良くないですか？」

圭「良いって……何が？」

歌衣「この尾行ですよ。もう必要ないと思います。美紀さんと先輩は付き合っているようだと分かりましたし、それに……美紀さんも先輩も幸せそうです。これ以上邪魔しちや悪いですから、最後くらいは二人だけにしてあげましょう？」

圭「あ……うう……」

この尾行の目的は二つ：『彼と美紀が付き合っているかどうかを確認する事』と『彼が美紀に相応しい男なのかを見極める事』だ。そしてもう、そのどちらの答えも分かっていた……。彼と美紀は付き合っているし、美紀は彼といて幸せそうだ……。

圭（先輩なら、美紀ちゃんを幸せにしてくれるよね……）

一日見ていて分かったが、美紀が彼の事を大切に思っているように、彼の方も美紀の事を大切に思っているようだ。彼が優しい人だというのは圭もよく知っていたのだが、万が一の可能性を考えて今回の尾行を計画した。が、そんなのは余計なお世話だったらしい……。歌衣はいち早くそれに気付いていたからこそ、二人の邪魔をしない為にわざと圭の足を引っ張っていたのだろう。

圭「…よし、じゃあさっきのクレープ屋に寄って帰ろっか！」
歌衣「はい、そうしましょ♪」

今日一日無理やり付き合わせてしまい、歌衣には悪い事をした。

もしもまだ胃に余裕があるのなら、もう一個クレープを奢おごってあげよう。圭がそんな事を思いつつ歌衣の手を引いて立ち上がった瞬間…

美紀「…：…どこのクレープ屋に行くの？」

と、背後から尋ねる声がした…。

圭「うわあっ!!？」

歌衣「あら、美紀さんじゃないですか。偶然ですねえ♪」

美紀「いや…偶然じゃないでしょ。二人がついてきてきた事には気付いてたよ…。まあ気付いたのはついさっきだから、いつからつけられていたのかは分からないけど…」

咄嗟しじらに白を切る歌衣だったが、美紀に尾行がバレていたと知り笑顔のまま冷や汗を浮かべる。圭の方はもっと酷く、目をまん丸にしたまま驚いた表情を浮かべ、汗をダラダラと流していた。

圭「み、美紀ちゃん…：…せ、先輩は…：…？」

美紀「先輩なら飲み物を買に行った。で、二人はいつから…何の為に尾行してたの？」

両手を組んだまま尋ねる美紀にこれ以上の誤魔化ごまかしは効かないだろう…。二人は…：…というより圭は美紀に全てを打ち明けた後、申し訳なきように頭を下げた…。

圭「ごめんね…。美紀ちゃんは先輩と付き合ってるのかなあとか…先輩は美紀ちゃんの事を大切に思っているのかなあとか…色々気に

なっちやつて…」

美紀「…ううん、私こそごめんね。圭にはもつと早く教えておけば良かったね。本当はすぐに伝える予定だったんだけど、その…：恥ずかしくて…」

圭「まあ、その気持ちもなんとなく分かるよ」

真つ赤な顔を俯ける美紀を前にして圭はヘラヘラと微笑み、彼女の肩を叩く。何はともあれ、今日の尾行で美紀が彼の事を愛しているという事はよく分かった。彼の方もまた美紀の事を愛しているようだし、余計な心配はいらないだろう。

歌衣「では、私達はこの辺で失礼しますね」

圭「先輩つて何気にモテるから、美紀ちゃんのもとから離れていかないようにしつかりとメロメロにしておきなよ〜!」

美紀「メロメロに…：まあ、うん…：頑張るよ」

公園を去っていく二人を見送り、美紀は再びベンチへ腰かける…。圭の言う通り、彼は意外と女性人気があるようだ。他の女性に気が向かないよう、しつかり魅了しておいて損は無いだらう…。

「お待たせ」

美紀「あつ…：はい…」

二本のジュースを手に戻ってきた彼はその内の一本を美紀へ手渡すと、隣へ腰かけて一息つく。美紀は彼から貰ったジュースをベンチの隅へ置くとそつと身を動かし、自分の肩を彼の肩と密着させた。

「…どうした?」

美紀「いえ…。先輩、今日のデートですが…：思っていたよりもずつと楽しかったですよ。先輩も楽しめましたか?」

「美紀と一緒にだったからね。すごく楽しかったよ」

美紀「…：そうですか」

自分だけでなく、彼も楽しんでくれていたのならとても嬉しい。

美紀はスツと顔を上げると夕陽を見つめ、小さな声で呟く…。

美紀「先輩……褒美です」

「んっ?」

眩かれた声を聞き取れずに美紀の方を見つめる。しかし美紀は今の言葉を言い直したりはせず、無言のまま額へとキスした……。突然の事に驚く彼の肩へ両手を回し、離れないように力を込めながら……。

美紀「…はい、終わりですっ」

美紀は額へ寄せていた唇を離し、突然の”ご褒美”に戸惑っていた彼の顔を見つめて楽しげに笑う。普段の美紀とは少しだけ違う、子供のように無邪気なだった。

「んっ……」褒美は嬉しいけど、どうせキスしてくれるなら口にしてくれれば良かったのに」

美紀「それはダメです」

「……どうして?」

キツパリ答えた美紀に尋ねると、彼女は空に浮かぶ夕陽を眺めながら照れたように顔を背ける。

美紀「…先輩の口にするのは気持ちいいから……。今こんな所でしたら、家に帰るのも忘れて夢中になっちゃいます」

ギリギリ聞き取れるくらい小さな声だったが、彼女は確かにそう言った。あの美紀にこんな事を言われて冷静でいられる訳もなく、彼は頭を抱えながら顔を俯けていく……。

「気持ちいいとか言われると……なんか違う事を想像する……」

美紀「もうっ!先輩はすぐにそういう事を……!!」

などと怒ってはみたが、確かに『気持ちいい』というのは少し過激な表現だったかも知れない……。深く考えずにそんな言葉を放ってし

まった自分が恥ずかしくて、美紀は真つ赤に染まったその顔を横へと背ける。

「わるいわるい。けど、いくらご褒美とはいえ何で急にキスを？」

美紀「…私達は付き合ってるんです。キスするのにいちいち理由がいるんですか？」

「…いらなかもね」

何となく尋ねてしまったが、彼と美紀は今や恋人関係にある。なら、何となく”したかったから”というだけでキスしても構わないだろう。額とはいえ、彼女である美紀にキスしてもらえた事に喜びを感じていた彼は嬉しそうに微笑む。実を言うと、デート中に一度もそういう機会が無かった事にほんの少しだけがっかりしていたから…。すると、美紀はそんな彼の気持ちを見抜いたかのようにニヤリと微笑む。

美紀「まあ…それでもあえて理由を付けるのとするのなら、先輩がキスして欲しそうだったからですかね」

「おおっ！よく分かったね？」

美紀に心の内を見透かされた事に驚き、彼は感心したような眼差しを見せる。彼のそんな表情を見てると何だか嬉しくなり、美紀は自慢気に微笑んだ。

美紀「これでも彼女ですからね。先輩の考えてる事とかほとんど分かっているつもりですよ」

「へえ。僕もそれを見習って、美紀の事が何でも分かるようにならないとな…」

美紀「ええ、頑張ってくださいね」

二人揃ってベンチから立ち上がると、美紀はすかさず彼の手を握る…。付き合い初めて幾らかの時が経ち、自分は彼の事を分かってきたつもりだ。しかし、まだまだ足りない…。もつと深くまで彼の事を知りたいと思っているし、逆に自分の事を隅々まで彼に知って欲しいと

も思う……。繋いだ彼の手をギュツと握り直し、美紀は笑った。

美紀「今日は……。本当に楽しかったです。また今度、お家の方にもお邪魔して良いですか？」

「もちろん、好きな時に来て良いよ」

美紀「……はい、そうさせてもらいますね」

相変わらず辺りに人気は無い……。美紀は彼と手を繋ぐだけでは飽き足らず、その腕に抱きつくように身を寄せた。こうしていると彼の温もりをより感じられて、とても幸せな気持ちになれるから……。

第六話 『友達』

まだ午後になつてばかりだというのに、外はすっかり薄暗い…。それもこれも全て、空にかかつている黒い雨雲のせいだろう。

空を覆い尽くしているその雲からは激しい雨が降り注ぎ、この巡ヶ丘という町を濡らしていく。この空もほんの数十分前までは綺麗に晴れていたし、今朝やっていた天気予報でも雨の降る確率は低いと言っていたのだが…。

「…案外、当てにならないもんだな」

ザーザーと激しい音を立てながら降り注ぐその雨を窓から見つめ、彼はポツリと呟く。学校も休みである今日、午後からどこかへ遊びに行こうかとも考えていたのだが…この雨のせいで予定が狂ってしまった。

「ま、出掛けた先で降られるよりはマシか…」

窓から何気なく外を見てみると、両手やカバンを頭の上へと掲げて大急ぎで駆けていく人の姿をチラホラと確認出来る。あれらの人々は全て、今日は雨が降る事は無いと信じたまま傘も持たずに外出してきた人達なのだろう。

もし午前中から出掛けていたら自分もあなっていたか、もしくは外出先で仕方なく傘を買って無駄な出費をしてしまう事になっていたかも知れない。それらの可能性を考えると、家にいる内に雨が降ってくれたのは不幸中の幸いだと思えた。

（仕方ない…今日は一日、家でのんびりしよう）

カーペットの上で眠っていた太郎丸の頭を一撫でし、彼はベッドの上に倒れる。このまま昼寝でもしようか…そう考えた時、玄関のチャイムが『ピンポン』と鳴り、彼は倒してばかりのその体を面倒

そうに起こしていく。

「はあ……はいはい、どちら様ですか」

どこの誰か知らないが、どうせ来るなら横になる前に来て欲しいものだ……。彼は心の中でそんな風に文句を言いつつ玄関へと向かい、鍵を開けてからその扉を開いた。

ガチャツツ：

ゆっくり外側へと開いていったその扉の向こう……そこに立っていた人物を見て、彼は目を丸くした。すぐ目の前に立っていたその人物……その正体は彼の恋人である直樹美紀だったのだが、彼女は力なく顔を俯けたまま髪の前から雨水をポタポタと垂らし、特に何を言うわけでもなく上目でこちらを見つめていた……。

彼女はこの大雨の中で傘すら差さずに歩いて来たらしく、全身びしょ濡れだった……。羽織っている紺色のジャケットの下、そこに着ている白いシャツは彼女の身にピッチリと張り付いており、履いているミニスカートも太ももに張り付いてその形を露にしている……。

「なっ………言いたい事は色々あるけど、とりあえずは中に入ってからで……。タオル貸すから、風邪引く前に体を拭くと良い」

有無を言わさず彼女の腕を掴み、家の中へと連れていく。

彼は部屋へ戻るとすぐにタオルを手に取り、それを美紀の頭へ乗せた。

しかし美紀は頭に乗せられたそのタオルに手を伸ばしたりはせず、そのままカーペットの上にペタリと座り込む。

美紀「……………」

「……ポーっとしてないで、早く拭きなさいって」

いつまでも動かない彼女に代わり、彼はその頭を……髪の毛をタオルで拭いていく。美紀の髪はかなり濡れていたが、髪の毛自体が短いおかげで大した時間をかける事なくすぐに粗方拭き終える事が出来た。

胡桃や悠里のようなロングヘアの子が相手なら、こんなに簡単では無かっただろう。

「よし終わり。ほら、後は自分でやれるでしょ？」

さすがに体まで拭くのは躊躇ってしまっているのでタオルを手渡そうとしたが、美紀はここでも動かない…。彼は困ったようにため息をつくと、そのタオルを彼女の頭にそっと乗せた。すると美紀はそのタオルを手に掴み、顔を俯けたままの状態でポツリと呟く…。

美紀「急にお邪魔しちゃってすいません…。迷惑…ですよね」

「いや、そんな事は無いけど…」

彼女が急にやって来た事自体は迷惑でも何でもない。しかし雨に全身を濡らしていた事と、何でそんなにも浮かない表情をしているのかという事についてはかなり気になっていたので、ハッキリと尋ねてみる事にした。

「やたら暗い顔してるけど、何かあった？」

美紀「その…大した事じゃないんですけど…」

美紀はようやく顔を上げ、ここにやって来た理由を語っていく…。

美紀「実は今日、圭と一緒に遊びに出掛けてたんです…。でもその途中、ちよつとした事でケンカしちゃって…。もうこれ以上一緒にいるのも嫌だったから、別れてきちゃいました…」

自棄になったかのように弱々しい笑い声をあげ、美紀は雨に濡れていた腕や足などを拭く。美紀と圭は普段からとても仲の良いイメージがあったので、こうして本気のケンカをしたりするというのは少し意外だった。

彼女の話によると、圭と別れた後で自分がいる場所が彼の家の近くだったと気付いたらしく、そのままトボトボと歩いて来たらしい…。

美紀「ほんと、嫌になっちゃいます…」

その言葉が具体的には何を指しているのかは分からないが、美紀はそのまま膝を抱えて丸くなってしまい酷く落ち込んだ様子だ……。どう言葉をかけるべきだろう……。彼は少しだけ頭を悩ませたが、とりあえず彼女の隣へと寄る事にした。

「そんなに落ち込むくらいならとつと仲直りすれば？」

美紀「それは…難しいですね…。もうどうでも良いんですよ、圭なんて…。向こうだって、私の事を大嫌いになったでしょうから…」

「けど、仲直りしないと学校で顔を合わせる時に気まずいでしょ」

美紀「…確かにそうかも知れないですけど、今さら『ごめん』なんて言えないです…。だからもう良いんです。私には先輩がいますから、それで良いんです…。それだけで良いですよ…」

美紀はコテツと身を傾け、隣にいた彼の肩へ甘えるように顔を埋める。

彼女のような子にこうして甘えられる事はとても光栄で嬉しい事だが、その弱々しい笑顔を見てしまうとどうにも素直に喜べない…。

美紀「先輩…大好きです…。」

美紀は肩に埋めていた顔をそつと上げ、瞳を閉じた状態でこちらに顔を寄せる…。この雰囲気から察するに彼女はキスを待っているようだ、彼はそれに応える事なく顔を背けた。

美紀「……しないんですか？」

「ああ、少し気が乗らなくて」

美紀「そうですね…。先輩でも、そういう時があるんですね」

彼女は可笑しそうに微笑み、傾けていた身を起こす。

彼だつて本音を言えばその柔らかかそうな唇にキスしたくて仕方なかったのだが、圭とケンカしたばかりで落ち込んでいる彼女と…。と…。というのは少し違う気がした。

どうせキスをするのならこんな弱々しい笑みを浮かべる彼女とではなく、いつものように愛らしい笑みを浮かべる彼女としたい。その

為にも、早く圭と仲直りして欲しいところだが……

(そう簡単にはいかないか……)

美紀の話やその雰囲気から察するに、二人は結構な勢いでケンカしてしまつたらしい……。どちらか一方が素直に謝ればあつさりと仲直り出来るのかも知れないが、その”素直に謝まる”というのが難しうだ……。

これまでゴロゴロと眠っていた太郎丸もこの空気に気まづくなつたのか、美紀の事を慰めるかのようにその身をスリスリと寄せている……が、美紀はニコリと微笑むだけで大したリアクションは見せない……。太郎丸もこれには驚いたらしく、慌てたように彼を見る。

(そんな目で見るな……。こつちだつて困つてるんだ)

どうしたら良いのかと目で訴えてくる愛犬に心の声で返事を返し、彼はもう一度ため息をつく……。太郎丸ですらその心の傷を癒せないのなら、もう打つ手が無いように思える。

……と、彼が本気で焦り始めた時、玄関のチャイムが鳴った。

「ちよつと待つてて、見てくるよ」

美紀「はい……」

美紀の事は太郎丸に任せ、彼は玄関へと向かう。

先ほど美紀を家の中へ上げた際に鍵を掛けなおすのを忘れていたらしく、鍵は開けっ放しだった。次からはこういう事が無いように気を付けようと反省しつつ、彼はその扉を開いていく……。

「はいはい、どちら様で——」

圭「美紀ちゃん来てませんかつ!？」

扉の向こうにいた少女、祠堂圭は彼が扉を開けるなりすぐに身を乗り出し、大きな声で尋ねる。奥にいた美紀もその声を聞いて驚いたが、わざと聞こえないフリをして太郎丸の背中を撫でた。

彼は奥の部屋から美紀が出て来ない事を確認すると気まづそうに

りも先にやって来ていた。

美紀「傘、圭だつて持つてないじゃない…」

圭「っ！美紀ちゃんっ…!!」

圭は瞳から溢れていた涙をゴシゴシと拭い、彼の背後に立っていた美紀の姿を確認する。美紀は少し気まずそうに目線を逸らしていたが、すぐに圭の手を掴んで彼の方を見た。

美紀「先輩、もう一枚だけタオル貸してもらっても良いですか？」

「ああ、もちろん」

彼が答えると美紀はニコツと微笑んでから圭を部屋の奥へと連れ込み、彼から手渡されたタオルで彼女の髪の毛を丁寧に、ゆっくりと拭いていった。圭は驚いたように目を真ん丸にしつつ、黙ってそれを受け入れている…。

美紀「まったくもう、人の事の前に自分の事を心配しなよ。こんなびしょびしょになっちゃって…」

圭「あ…はは…ごめん…」

美紀はため息をつきながらも微笑みを浮かべ、圭の髪の毛や肩、腕等を拭いていく。そうして数分経過し、圭の身を出来るだけ拭き終える事が出来た頃、美紀は申し訳なさそうに顔を俯けた。

美紀「圭、ごめんね…。せつかく遊びに誘ってくれたのにつまらない事でケンカして、気分悪くしちゃったよね…」

圭「ううん…私の方こそごめん…。美紀ちゃんの気持ちも考えずに色々言っちゃって…ほんと、バカだったなあって反省してるよ…」

圭はニコリと微笑むが、その瞳はまた涙に潤んでいた。

美紀は彼女の瞳を見た途端に自身の瞳も涙に潤ませて泣きそうな顔をしたが、どうにかギリギリのところで堪えていた。

美紀「…ふふっ、じゃあその…もし良ければだけど…これから圭

の家に遊びに行ってもいいかな？」

圭「もちろんっ！全然オツケーだよ」

圭が笑顔で返事を返すと、美紀は瞳に溜まっていた涙を拭って嬉しそうに微笑む。彼はその様子を部屋の隅からじっと眺め、二人が仲直りした事にホッと一安心した。やはり、この二人にはいつまでも仲の良いままでいてもらいたい。

圭「じゃあ先輩、美紀ちゃんはお借りしていきますね」

「ああ、分かったよ」

彼はゆっくりと歩き出し、二人を玄関まで送っていく…。

外は未だに激しい雨が降っており、圭は一步外へ出た途端に苦笑いした。これから自分の家へ向かうのは良いが、傘を持っていなかったからだ。

圭「せ、先輩…美紀ちゃん借りるついでに傘も借りてって良いですか？」

「…どうぞ自由」

美紀と圭、それぞれに適当な傘を持たせた彼は二人に向け手を振り、見送っていく。圭は開いた傘を上に向けながら外へと歩き、数歩行ったところでこちらへと振り向いて手を振り返したが、美紀は未だに彼のそばにいた。

「どうした？」

彼が一言尋ねると、美紀は手渡されていた傘を横に傾けて開く。

彼女は開いた傘を上手く遮蔽物にして数メートル先にいる圭からこちらが見えないようにすると彼の事をじっと見つめ、そのまま爪先立ちをして唇にキスをした…。

美紀「んっ…」

互いの唇が重なって数秒間経過した頃、美紀は小さな声を漏らしながら唇を離し、ニコリと微笑む。圭と仲直り出来た事で心のモヤモヤ

が晴れたらしく、その微笑みもさつきまでのものとはまるで違う可愛らしい笑顔になっていた。

美紀「今日はいきなりお邪魔してすいませんでした。今度また、一緒にデートしましょうね」

「ああ、そうだね。楽しみにしてるよ」

美紀「ふふっ、じゃあまた…」

傾けていた傘を上に向け、美紀は圭の元へと駆け寄る…。

彼は仲良く並んで歩く二人の姿と未だ唇に残っている柔らかな感触にニヤニヤとしつつ、玄関の扉をしっかりと閉めて部屋へと戻った。

そう言えば、美紀と圭は何が原因でケンカしたのだろうか…。

気になった彼は後日、それを本人達に尋ねたのだが、二人ともその原因についてはすっかりと忘れていた…。案外、どうでも良い事でケンカしていたのかも知れない。

めぐみアフター

第一話『二人だけの秘密』

慈「さて、じゃあ今日はここまでにします」

夕方、一日最後の授業が終わる。

その国語の授業を担当していた教師、佐倉慈は授業終了のチャイムが響くのとほぼ同時に教科書を閉じ、生徒達の方を見つめた。

「ふう…今日もどうにかやりきったな…」

学校での長かった一日が終わり、彼は帰り支度を進めながら一息つく。今日は特に寄り道することも無く、真つ直ぐ家へ帰ろう…。そんな事を思っていた彼の肩を、誰かがポンポンツと叩いた。

由紀「ねえ、めぐねえがキミを呼んでるよ？」

「えっ？」

肩を叩いてきた由紀に言われ、彼は教壇へ視線を向ける。

そこにいたのは教科書を片手で抱えたまま、もう一方の手でこちらを手招きをする慈だった。

由紀「何の用だろうね？」

「…さあ、なんだろう」

さっきの授業は真面目に受けていたし、何か問題を起こしたりもしていない。にもかかわらず、彼女は何故自分の事を呼んでいるのだろう…。不思議に思いながらも、彼は彼女の元へ歩み寄った。

「先生、何か用です？」

一言尋ねると、慈はニツコリと微笑む。彼はその笑顔を見て、悪いことで呼び出された訳では無さそうだと安心した。

慈「あの…また明日の授業で使う資料を用意しておきたいんだけど、手伝ってくれない？」

「ああ、そういう事ですか…。別に良いですよ」

慈「ありがとう。ごめんなさいね、これから帰るところだったのに…」

「いえいえ、お気になさらず」

彼が笑顔で答えると、慈もまたニツコリと微笑む。そうして二人は教室をあとにして、廊下の奥へと進んでいった。他の生徒は家へ帰るか、もしくは部活に向かうかしているのだろう…。二人並んで廊下を進むと、結構な数の生徒とすれ違う。

(また次の授業で使う資料って、何なんだろうな…)

そもそもそれはどこにあって、彼女はどこに向かっているのだろう…。無言のまま歩く慈のあとに続いていくと、時間が経つにつれ他の生徒の影が段々と減っていく。そんな中、慈は一つの部屋の前でピタッと立ち止まり、彼の事を見つめた。

慈「じゃ、一緒に来てくれる？」

「ええ」

扉をガラガラツと開き、慈はその部屋の中へと入る。彼はその部屋に入る前に扉の上を見上げ室名札を確認したが、そこには何も書かれていなかった。ここは空き部屋なのだろうか…。思いながら中へ入ると、やはり中にはほとんど物が無かった。

「()でいいんですか？」

慈「あつ、うんっ！ここで……いいの……」

一瞬だけ、慈が慌てたように見えた。彼女はあたふたした様子で周りを見回すと、部屋の隅にポツンと置かれていた棚の中を漁りだす。彼女の求める資料というのは、この中にあるのだろうか……。

慈「えつと……どこかな……」

「……………」

慈「う……うう……」

「……手伝いましょうか？」

慈「だ、大丈夫っ！だからちよつと待っててね？」

本人がそう言うので、彼は仕方なくその場に立ち尽くす。しかしこう見ていると、慈が漁っている棚の中には物がほとんど無いようだ。にも関わらず、彼女は忙しそうにそこを探っている。まるで、ただ時間を稼ぐかのように……。

慈「そう言えば……前はありがとうね……」

「ん？何の事ですか？」

慈「ほら、私が学校休んだ時、丈檜さん達とお見舞いに来てくれたでしょう？」

「……ああ、そんな事もありましたね」

以前、慈は過労で倒れてしまい、学校を休んだ。彼はその際に由紀達と彼女の家へ出向き、ほんの僅かな時間だけお見舞いに行ったのだ。

慈「あの日、本当はすつごく心細かったの……。誰の声も聞こえず、たった一人で布団にくるまって……。今、この世にいるのは私だけなんじゃないかって……そんな馬鹿な事を考えちゃって……。あはは……弱ってる時ってダメね……。気持ちまで後ろ向きになっちゃう」

まいったように自分の頭を撫で、慈は苦い笑みを浮かべる。彼女はその後引き続き棚の中を探りつつ、横に立つ彼の顔をチラッと見つめ

た。

慈「だからね…あの日、あの時…みんなが来てくれたのは本当に嬉しかった…。丈檜さんや恵飛須沢さん、若狭さんの声を聞いていると、それだけでこっちまで元気になったような気がして…」

「……………」

慈「でね、何より嬉しかったのがあのあと…。みんながお買い物に出掛けた時、あなただけ残ってくれたでしょう？あなたは私が眠るまで…ううん、眠ったあと手も握っていてくれた…。あれが何より安心出来たの…。ああ、私は今、一人じゃないんだなあって……………」

棚を探る慈の手がピタツと止まり、彼女は彼の事をじつと見つめる…。彼を見るその瞳は微かに潤んでいて、頬も赤い…。慈のそんな表情を見た瞬間、彼の胸は少しづつ高鳴っていった。

慈「あなたには助けられてばかりな気がする…。ありがとね…」

「…いや、大したことは…」

夕方の空き部屋に二人きり…。辺りに人の気配は無い…。

このままじゃ危ない気がして、彼は慈から目を逸らす。前々から慈の事を教師としてはもちろん、一人の女性としても魅力的な人だと思っていた。そんな彼女とこんな所にいると、どうにも気持ちが悪くわつく。

慈「そう言えば、彼女は出来た？」

さつきまでのどこか艶やかな表情を一変させ、今度は子供っぽい笑顔で慈が尋ねてくる。残念ながら、今の彼に彼女と呼べるような娘はいない…。彼は鼻で小さなため息をつくと、首を横に振った。

「…全然です」

慈「へえ、そうなんだ？あなたってモテてるイメージあったから、少し意外かも…。ほら、いつも丈檜さんとかと仲良くしてるじゃない？」

「まあ、そうですね」

慈「てつきり、あの中の誰かと付き合ってるものかと思ってた…」
「そんな事は……」

正直に言うと、確かに彼女らを女性として魅力的だと思いかけた事は何度かあった。しかし、今の彼が誰よりも気になっっているのは慈の事であり…二人でこんな会話をする時間が何とも気まずい。

慈「あなたってどんな娘が好きなの？丈槍さんみたいな娘か…恵飛須沢さんみたいな娘か…若狭さんみたいな娘か…。そう言えば、最近の後輩さん達とも仲良しよね？直樹さんとか、狭山さんとか…その辺が好みだったり…？」

「あはは…どうでしょう」

「ごまかすように笑い、答えをはぐらかす。すると慈はイタズラに微笑み、彼と向かい合って首を傾げた。

慈「因みに…年上の女の人とか好き？」

「あく…その……」

『ふふっ』と笑いながらそんな事を聞く慈だが、その頬は恥ずかしそうに赤く染まっている…。彼女が何のつもりでこんな事を聞いているのかは分からないが、仕返しとして少し困らせてやろうと思い、彼女に向かい合った。

「そうですね、年上の人も良いと思います。先生みたいな人ならね」

半分冗談…半分本気…。そんな言葉を放ち、慈を困らせてみたくなった。彼女はきつと、顔を真っ赤にして照れるか、もしくは呆れたような表情を向けてくるだろう。そう思っていたのだが……

慈「っ……う……」

彼女は自分の口を右手で覆いながら、目を真ん丸にしていた…。顔を真っ赤に染めながら、ただじつと彼を見つめるその大きな瞳は潤んでいて、照れている…というよりはただ驚いているようだった。

のだろう…。慈はその後、数分間は無言を貫き、しばらくしてようやく応えた。

慈「先生と生徒が…なんて、周りにバレたら大変だよ…」

「ええ、だからバレないように上手くやりましょう。二人だけの秘密って事で」

慈「私…キミが思っているほど魅力的な女の人じゃないよ……」

「僕の方こそ、めぐねえが思っている程良い男じゃないかと…」

慈「……………あはは」

力無い笑い声をあげ、慈は彼の手を握り返す…。

思えば、自分は彼に甘えっぱなしだ…。前も幾度となく甘えてきたのに、今もまた、彼の優しさに甘えようとしている。彼の事を想うなら、自分がどれだけ辛くとも彼を拒絶するべきなのに…。彼の一番そばにいれる未来を想像したら、慈も気持ちを抑えきれなかった。

慈「じゃあ…これからよろしく願います…。私も、あなたの事が大好きです…。これから先もずっと、そばにいたいです…」

頬に伝った涙を拭い、笑顔を浮かべながら彼の胸に顔を埋める。すると、彼は慈の頭を優しく撫でていつてくれた。

慈（ああ、本当に…安心するなあ……）

彼の胸に頭を埋めるのが、撫でられるのが、全てが心地よくて仕方がない…。このまま彼と共に倒れ込み、そのまま眠ってしまいたくなる程だ。

「……………めぐねえ、ちよつと…」

慈「うん…?」

彼は辺りを見回して気がない事を確認すると、慈の事を呼ぶ。直後、呼ばれた慈がそつと顔を上げると、彼は何も言わずに彼女のあご先に手を添えた。

慈「あ……つ……」

添えられた手にクイツと顔を上げられ、慈は彼が何をしようとしているのか理解する。理解した上で、慈はそつと目を閉じた……。次の瞬間、唇に伝わってきた熱はかつてない程心地よいもので……。慈はかつてない程幸せな気持ちになった……。

第二話 『特別な呼び方』

よく晴れた土曜日、時刻は昼を少し過ぎた辺りだろうか……。彼はとあるマンションへ訪れており、そのとある一室の部屋番号をしつかりと確認してからチャイムを鳴らした。

(……ここで合ってるよな?)

チャイムを響かせた後、ふと不安になる……。以前、由紀達と”彼女”の見舞いに来た時に訪れたのはこの部屋で合っているとは思いますが、その記憶が正確かと聞かれると今一つ自信が持てない。

(……遅いな)

不安にな気持ちを感じながらそこに佇む事約1分、いや……2分は経ったと思うが誰からの返事も無い。”彼女”は今日ここにいるはずなので、留守ではないと思う。なら、やはり部屋を間違えてしまったのかも知れない。そう考えた彼が一旦そこを離れようとした時、玄関の向こうからバタバタと騒がしい音が聞こえ、そのドアが『ガチャツ』という音を鳴らしながらゆっくりと開いていった。

慈「ご、ごめんなさいっ！待たせちゃったわね？」

「ああ、大丈夫ですよ」

ドアの向こうから顔を覗かせた”彼女”……佐倉慈を見て、部屋を間違えてはいなかったのだと一安心する。彼はニコツと微笑む慈に案内されて部屋の中へと足を踏み入れ、一足先に部屋の奥へ向かっていった彼女に代わり玄関のドア……そしてその鍵を『ガチャリ』と閉めた。

慈「外、暑くなかった？何か飲む？」

「じゃあお願いします」

彼が言うとは慈はキッチンの方へ向かい、冷蔵庫を開いて飲み物を探す。彼はリビングに敷かれていたカーペットの上に腰を下ろしてその様を見守っていたのだが、こうして休日中に…それも部屋着姿の慈を見ているのは何だかドキドキとした。紫色の長髪を揺らす彼女は、その髪色よりも明るいピンク色のモコモコした部屋着を着ているのだが、肘辺りまで袖のある上はともかく下の短パンはかなり短めであり、普段学校にいる時は見ることに出来ないムツチリとした太ももが晒されていた…。

「……………」

慈「えっと、お茶でも良い？今はこれくらいしかなくて…」

「えっ？あ、ああ…全然大丈夫ですよ」

慈「わかった。じゃあ、コップ用意するから待っててね」

慈は冷蔵庫からよく冷えた茶の入っている容器を取り出すと、今度はそばの戸棚を漁って二人分のコップを探す。彼はその様子を…というより、その太ももをじつと見つめ続けていた…。

慈「はいっ、どうぞ」

「…ありがとうございます」

茶の注がれたコップを受け取った彼はそれを一口飲むと、そばにあつた小さなテーブルの上に置く。真正面に座る慈もまた彼と同じようにそれを一口だけ飲んでからテーブルの上に置き、ニツコリと笑った。

慈「じゃあ…さっそく始めよっか…？」

「…いきなりですね」

慈の言葉を聞き、彼はため息を放つ…。そんな彼の憂鬱そうな表情を見た慈は軽い四つん這い状態になってカーペットの上を移動すると、彼の真横に腰を下ろしてまたニツコリと笑った。

慈「だって、やれる時にやつとかないと…後が大変でしょ？」

「いや…別にそんな事は…」

慈「大丈夫…。今日は私とあなたただだから、もし分からない事とかあっても、すぐに教えてあげる…。だから…ね？ほら、変に緊張しなくても平気よ…？」

そばで言葉を放つ慈の言葉を耳に受け、彼は再びため息をつく。もう、逃げ場は無さそうだ…。彼は覚悟を決めると、持ってきていたカバンの中にしまっていたそれらをテーブルの上へと置いた…。

バサツ…！

テーブルの上に置かれたのは学校で使っている教科書、ノート、そして筆記用具…。休日にこれらと向き合う事になった彼はまた一段と深いため息をつき、横に座る慈の顔を覗き見た。

「せつかくの休日なのに、勉強なんかしなくても…」

慈「けど、私の家にも他にやる事なんてないし…。それに、ここ最近のあなたはまた成績を悪くしているから、ちようど良いと思わない？」

「…：…思わないなあ」

ボソツと呟くと、慈が苦い表情を浮かべながら気まずそうに笑う…。今日は彼と慈が付き合う事になってから初のデート…：…といって、慈の家を使つての”お家デート”なのだが、その内容はほとんど個別授業…：補習とかに近い。せつかくの初デートがただの勉強会と化した事にガツカリしつつ、彼は教科書とノートを開いていった。

（まあ『教科書とノートを持ってくるように！』って言われた段階で、こうなる事は薄々読めていたがね…）

先日慈と交わした電話の内容を思い返し、もう一度深いため息をつく。自分と慈は”生徒と教師”という関係にあるので、付き合ってい

る事が辺りに知れたら大変だというのは分かっている。だから大つ
ぴらに外でデート出来ないのは仕方がないとは思うのだが、だからと
いって初のお家デートが勉強だけで終わるのは何とも物悲しい…。

「思ってたんですけど、家の中で出来ることって勉強以外にも結構…つ
ていうかたくさんありません?」

慈「えっ、そう…? 例えば何かしら?」

「例えば…:…:…:ほら、その…:…」

冗談半分、期待半分の眼差しで慈を見つめた後、彼は辺りをキョロ
キョロと見回す。落ち着きなく視線を動かす彼を見た慈は不思議に
思い、首を傾げた。

慈「何か探してるの?」

「ええっと、寝室ってどこですか?」

慈「寝室? 寝室なら、そこにある扉のむこ——」

そばにあった扉の一つを指差した瞬間、慈の眉がピクリと動く…。
恋人同士が家の中で…寝室で…ベットのの上でする事を思い浮かべて
しまい、それこそが彼の言っている”家の中でも出来ること”の一つ
だと察してしまったのだ。

慈「くくくっ!!」

慈は一気に顔を赤く染めると、テーブルの上にあった教科書を手に
取る。彼女は両手で持ったそれを振り上げると、彼の頭を何度もバシ
バシと叩いた。

慈「もうっ! もうっ!!」

「んなっ?! い、痛いんですけど…:…」

慈「変な事は考えないっ!! い、今は勉強に集中ですっ!!」

その顔を未だ真っ赤にしたまま脅しのように教科書を振り上げる
慈の前に、彼は仕方なくノートを開いてペンを取る…。せっかくのお
家デートが勉強で潰れるのは嫌だと思ったが、恥ずかしがりながら怒

る慈を見られたのは中々貴重な経験だった為、これはこれでアリだと思っただけだ。

~~~~~

慈「さて、とりあえずはこんなところかな？お疲れさまっ」

1時間半〜2時間ほど経った頃、慈が教科書をパタリと閉じながら終わりを告げる。教師と一対一という状況での勉強に緊張していた彼は何時にも増して疲労しており、持っていたペンをテーブルの上に落としながら深く息を吐いた。

「はああっ……やつと終わった……」

慈「でも、思っていた以上にしっかりと集中出来たわね。学校でも、自分の家でも、このくらい勉強に集中すること！分かった？」

「はいはい……分かりました」

テーブル上に置いていたノートや筆記道具等をカバンの中にし、まっすぐにいきつつ、慈へ返事を返していく。彼はそうしてから部屋の壁にかけてられていた時計を見つめて今の時刻を確認したのだが……

(……まだ余裕があるな)

今の時刻は午後3時前……

仮に5時まで家に帰るとしても、まだ2時間の余裕がある。

「……もう少しだけ、ここにいてもいいですか？」

慈「別に構わないけど……ここにいても退屈じゃない？」

「大好きな佐倉先生のそばにいられるなら、それだけで幸せなんで……」  
つい冗談っぽくニヤケた顔で言ってしまう彼だったが、その言葉自体に嘘はない……。特に何をやる訳でなくとも、彼女のそばにいてその顔を見ているだけで……その声を聞いているだけで、とても幸せな気持ちになれるのだ。

慈「…あの、しつこいようだけど、本当に私が恋人で良いの？」

「はい、佐倉先生が良いです」

即答すると、慈は照れたように微笑みを浮かべる…。

彼が”生徒と教師”という関係を乗り越えてまで、自分なんかの事を選んでくれたのがとても嬉しかった…。

慈「…じゃあ、まずは呼び方をどうにかしないとね！学校ならともかく、二人きりの時くらいはその『佐倉先生』って呼び方はやめて欲しいわ。私達は恋人なんだから、もつと…それっぽい呼び方を…」

「それっぽい呼び方っていうと…『めぐねえ』とか？」

慈「うん…出来るなら、もう少しだけ恋人っぽい呼び方が…」  
彼氏に『めぐねえ』と呼ばれるのはどうにもしっくり来ないらしく、慈は悩ましげな表情を見せる。可能なら、彼には自分の事を『慈』と呼んで欲しい…。そう思う慈だが、年下であり生徒である彼に呼び捨てで呼ばれたら、激しく動揺してしまうような気もしていた。

慈「じゃあ…『めぐみさん』って呼んでくれる？」

これなら恋人っぽい呼び方だし、呼び捨て程の破壊力もないから正気を保っていられる。慈はそう思っていたのだが…。

「ええつと、めぐみさん？」

慈「は、はいっ…!？」

いざ彼にそう呼ばれると、自分と彼が恋人になった事を実感してしまい胸の鼓動が一気に高鳴ってしまふ…。いくら”さん付け”されているといっても、慈をドキドキさせるには十分過ぎる破壊力だった。

「おお…顔真っ赤ですけど、本当にこの呼び方で良いんですか？」

慈「大…丈夫…だと思っ！ええ、絶対に大丈夫っ！すぐに慣れる

と思うからっ……！」

「へえ……。じゃあ改めて……。これからよろしく。めぐみさん」

慈「は、はいっ……。よろしくお願ひしますっ……!!」

どうにか返事を返す慈だが、その顔はとてつもなく真つ赤だ。ただ名前を呼ばれるのがそんなに恥ずかしい事なのだろうか……。彼がおかしそうに笑うと、慈もつられるようにしてクスクスと微笑んだ。

結局、この日は本当に何をするわけでもなく彼女とのんびりした時間を過ごした彼だったが、それから数日後……。事件は巡ヶ丘学院高校で起きた。

~~~~~

慈「はいっ。じゃあ、今日の授業はここまでにします」

夕方：何時ものように終業を告げるベルが鳴り、慈はそれに合わせて授業を終える……。ここまでは本当にいつも通り、見慣れた光景だ。また、このあとも帰り支度を終えた生徒がカバンを持って教室から出ていくという見慣れた光景が続いたのだが……

悠里「先生、また明日」

由紀「めぐねえバイバイ♪」

胡桃「めぐねえ、また明日な〜」

慈「はい、また明日……。つて、めぐねえじゃなくて佐倉先生でしょ！」

と、由紀達にそんなツツコミを入れるのもまたいつもの光景。しかし、その直後の事だった……。由紀達と一緒にあって教室を出ようとした彼が慈の目を見て口を開いた瞬間、事件は起きた……。

「めぐみさん、また明日」

慈「うんっ！また明日ね♪」

彼に挨拶された慈は無意識の内に笑顔を浮かべ、その手をパタパタ

と振る…。彼もまた小さく手を振り返しながら微笑んだのだが、それを間近で見っていた悠里と胡桃は目を見開いたまま二人の事を見つめていた…。

悠里「あら？」

胡桃「めぐみ…さん？」

慈も、そして彼も…悠里と胡桃が何故こんなにも不思議そうに自分達を見つめてくるのかがすぐに理解出来ない…。しかし次の瞬間には二人ともその違和感…やらかしてしまった事に気が付き、ハツとした表情を浮かべた。

(ツ…!!?し、しまった…!!)

ここが学校だという事を忘れてつい、彼女を『めぐみさん』と呼んでしまった…。それに気付いた瞬間、彼の額に汗がダラリと流れる…。しかし焦っているのは慈も同じようで、彼女の額にも嫌な汗が流れだしていた。

慈「も、もうっ!!あなたまでそんな悪ふざけして…!めぐみさんでもなくて、佐倉先生でしょっ!!」

「あはは…佐倉先生をからかうのが楽しくて、ついつい…」

二人は咄嗟にごまかし合わせ、悠里と胡桃の様子をチラリと窺う…。

悠里「なんだ、悪ふざけだったのね？」

胡桃「あははっ。一瞬、お前とめぐねえが付き合ってたんじゃないかって勘違いしかけたぜ」

慈「え、恵飛須沢さんっ!!」

胡桃「冗談だよ、冗談っ」

悠里と胡桃、そして由紀も『あはは』と楽しげに笑っていたが、そのそばに立つ彼と慈は苦笑いしか出来ない…。ほんの一瞬気を緩め

ただけで、自分達の関係が露呈ろていしそうになったからだ…。

生徒と教師の禁断の愛…。

これを辺りの人間達に隠し通していくのがいかに大変で難しい事なのかという事を思い知ったこの日以降、彼は人前でまた間違えることのないよう…二人きりの時であろうが慈の事を『めぐみさん』ではなく『めぐねえ』と呼ぶ事にした…。

第三話 『幸せな気持ち』

よく晴れた日曜日…。

こんな日は外へ出て家族や友人と遊びに出掛けたり、大切な人とデートをしたりする人も多いのだろう。彼もそんな人々と同様、付き合っている人物の家へと遊びに行っていたのだが…

(やつぱり、デートするために外へ…つてのは無理だよな)

自分が今付き合っている彼女…佐倉慈の横顔を見つめつつそんな事を思う…。今日はせっかくの休日なので彼女の家へと遊びにやっ来て来た訳だが、やはり家で出来る事など限られている。こうして彼女の顔を見ながら話しているだけでも充分といえは充分なのだが、せっかく付き合っているのだし、どこかに出掛けたいという気持ちも無くはない。が、互いの関係上やはり人目の付く場所でデートというのは難しいだろう。

慈「ん？どうかしたの？」

「いや…何も…」

慈が視線に気付いて顔を向けたが、彼は特に何かを言うわけでもなくそのまま横を向く。すると慈は不思議そうな顔をして『ふーん』と呟き、目の前にあるテーブルの上へ視線を戻した。慈は彼が家にやって来た時からずっとテーブルの前に座り込み、何らかの用紙らしき物に文字を書き込んでいるようだが、何をやっているのだろう…。

「……それ、何してんですか？」

慈「ああ、これ？少し残ってたお仕事を片付けてたの」

慈はニツコリと微笑みながら答え、その用紙やペンを部屋の隅にある棚の上へと置く。どうやら、その”仕事”というのがちやうど終わってしまったらしい。

「仕事ね……。あつ、もしかしてテストの採点とか？」

慈「いいえ、それはもう終わりました。また明日になったらその答案用紙を返すから、楽しみにしててね♪」

またしてもニツコリとした笑みを浮かべる慈だが、今度の笑みはついさつきまでの物と比べるとどこか影があるように見える……。彼はその笑みから嫌な気配を感じ取ると、額に冷や汗を浮かべながら苦笑いした。

「もしかして……。僕の点数ヤバかったですか？」

慈「うふふつ、明日になれば分かる事よ。……。けど、やっぱりあなたはもう少し頑張って勉強した方が良いかも知れないわね」

「……。まあ、そこそこ頑張ります」

勉強はあまり得意ではないが、慈が言うのなら頑張ってみよう。そう決意しかけた時、彼の脳内に良くない考えが浮かび出す……。

「そうだ。次からはテストに出てくる問題を教えておいてくれませんか？そうすれば、さすがの僕もそれなりの点数を……」

慈「もうっ！そんなのダメに決まってるでしょ！」

「あゝ、やっぱりダメ？」

慈「ダメです!!テストで良い点を取りたいのなら、一生懸命頑張って勉強しなさいっ」

慈はムツとしたような表情を浮かべると右手を伸ばし、その人差し指で彼の額を小突く。教師が恋人だとテストの点数を反則技で上げたり出来るのでは……。なんて事を彼は思っていたが、現実はそのままで甘くないようだ。

「……じゃあ、また来週の日曜にでも勉強に付き合ってくださいませんか？一人でやってるとどうしても途中で投げ出しちゃうし、効率良くないんで」

慈「えっ？別に構わないけど……」

どちらかと言えば勉強嫌いであろうハズの彼が自分から『勉強に付

き合って欲しい』と言うなんて…思ってもみなかった。慈は思わず目を丸くしてしまい、そのまま彼の事をじゅつと見つめる。

「何か言いたげな目ですな……」

慈「う、ううんっ！何でもないので、気にしないで。…あつ、勉強なら今からでも付き合ってあげられるけど、どうする？」

「今から？そ、それはちよつと…こっちにも心の準備ってヤツが…」

慈「勉強するのに心の準備がいるの？」

「まあ、少しだけ……いや、かなり……」

彼は右の手で頭を抱え、苦い表情を浮かべていく…。その額には僅かに冷や汗が流れており、彼がどれだけ勉強が苦手なのか慈にも伝わった。

慈「じゃあ今日、今すぐについていうのは止めておくとして…来週は私と一緒に勉強するって事で良いかしら？」

「…んん、来週までに覚悟決めときます」

慈「あの…思っただけけど、相手は私で良いの？ほら、あなたって若狭さんとも仲良いでしょう？あの子はクラスの中でもかなり良い成績の持ち主だし、彼女に頼んでみるっていうのも悪くないと思うけど」

慈の言う通り、悠里は成績も良く面倒見も良い。慈ではなく、彼女に頼んで勉強に付き合ってもらおうというのも悪くはない手だろうか…

「りーさんにも予定があるかも知れないし、今回は遠慮しておこうかと」

慈「…それもそうね」

本人に聞いて確認した訳ではないので何とも言えないが悠里にも何かと用事があるかも知れないし、せっかくの休日を勉強の手伝いで潰してしまうのも気が引ける…。慈は彼の言葉を聞いて納得したように頷くと、自らの口元に右手を添えてくすりと笑った。

慈「それに…若狭さんみたいな綺麗な子と二人きりで勉強なんかしたら浮気しそうになっちゃうものね？」

「なっ…!?失礼な…浮気なんてしませんって」

彼が驚いたように口を開けると慈はまたクスクスと笑い、肩を揺らす。冗談を言っただけの子供のように笑う彼女は何時にも増して愛らしく、それを見つめていた彼の頬も自然に緩んだ。

「まあ、確かにリーさんは綺麗だし胸も大きいしでかなり魅力的な女の子だけど、今の僕にはリーさんに負けず劣らず綺麗で胸もある彼女が——」

慈「?!変なこと言わないでっ!もうっ、これだから男の子は…!」
慈は顔を真っ赤に染めながらプイツと背中を向け、一人ブツブツと呟き出す。今、彼が言ったように慈は悠里に負けず劣らずの容姿をしているが、ちよつとした事で赤面してしまうのを見ると内面的な大人っぽさは悠里に劣るのかも知れない…。しかし、そこが慈の魅力でもあった。

彼はその後も慈の事をからかいながら時間を潰していったのだが、そうこうしている間に眠気に襲われてしまい、いつしか部屋に敷かれている絨毯の上で横たわりながら眠りについていた…。

慈「…ふざけてたら眠くなっちゃったのかな」

静かに寝息をたてる彼のそばへ身を寄せ、慈はニツコリと微笑む。
付き合い始めてそれなりの日時が過ぎたが今でもふと、彼の事を教え子として見るべきか、異性として見るべきかで悩む時がある…。しかしどちらにせよ、彼の事が好きだという気持ちだけはハッキリしていた。

慈「こんな私でよければ、そばにいてね…。浮気とかしたら泣いちゃうんだから…」

眠っている彼に向けて冗談のように囁き、慈はその額にキスをする

…。

彼とどこかに行ってデートしたりしたいという気持ちもあったが、
こうして部屋の中で寝顔を眺めているだけでも結構幸せな気持ちに
なれて、慈は一人照れ笑いした。

まふゆアフター

第一話『気付いた気持ちと一つの不安…』

一日の授業が全て終わり、生徒達は教室をあとにしていく…。

部活のある者はそれぞれが部室等に向かい、部活をやっていない者はそのまま帰路につくのだが、“彼女”は後者だった。

なので彼女は教室を出てから廊下に立ち窓辺から外を眺めながら、帰り支度に手間取っている一人の友達を待っていたのだが…：外へと向けていた視線の先にとある人物を見つけ出して目を丸くする。彼女は二階の廊下にある窓から外を…：ちょうど校門の辺りを見ていたのだが、そこを歩く生徒達の中に見慣れた四人の先輩がいた。

一人は赤いリボンで結んだツインテールが印象的な少女…。

一人は猫耳…のような帽子を被った子供っぽい少女…。

一人は長い茶髪と…大きな胸が特徴的な、どこか大人っぽい少女…。

そして最後の一人は…

真冬「…また…みんなと一緒に歩いてる…」

いつもの四人が楽しそうに歩いているのをそこから見つめ、彼女は…：狭山真冬はニコリと微笑む。四人の内の二人…：悠里と胡桃はそれぞれが園芸部と陸上部に所属していたハズだが、ああして帰っているのを見るに今日は休みなのだろうか…。

真冬「ほんと、楽しそうでいいね…」

由紀、胡桃、悠里ではなく、彼女らと歩いているもう一人の人物を見ながら呟く。“彼”はいつもあの三人と仲良くしており、皆が一緒に帰っているのを見るのだった。今日が初めてではない。こうやって

毎日仲良くしている様を見せ付けられると、もしかしてあの三人の内の誰かは……いや、ひよつとしたら三人とも彼の事が好きであり、彼も三人の内の誰かに恋をしているのかも……なんて事を考えてしまう時もあるが……

真冬「まあ、どうでもいいか……」

くるりと振り返り、窓に背を向ける。

他人の色恋なんて興味無い……というか色恋そのものに興味が無い。

真冬はこれまで誰かを好きになった事も、なりかけた事も無かった。

そもそも人付き合いが苦手だったので恋人どころか友人だつてまともに出来なかつたのだが、恐ろしいくらいに明るくて騒がしい果夏という少女と出会い、彼女と接していく内に人との接し方を学んでいったのか、友人は少しずつ増えていった……。

同学年だと美紀や圭、歌衣……。

あとは……先ほどまで見ていたあの四人の先輩達が主な友人だが、最近はその他にも少しずつ友人が増えている。同じクラスに通うある少女曰く『最近の真冬ちゃんの前よりも優しい雰囲気になってきたから付き合いやすい』との事だが、真冬にはその実感が無かった。

真冬（優しい雰囲気……か）

もう一度くるりと振り返り、窓の前に立つ。

その窓に反射してうつすらと映る自分の顔はいつも通りの仏頂面ぶつどうめんにしか見えないが……

真冬（優しく……なれたのかな？）

指をピンと揃えた両手を頬に当て、無理やりに口角を上げてみる……。

こうすれば自分の笑顔を……優しい雰囲気のある顔を見られると思つたが、いくら口角を上げたところで目の方が笑っておらず、真冬

の試みは失敗に終わった。

果夏「お待たせ〜!!…って、何してるの？」

真冬「あつ…いや、何でもない…」

帰り支度を終えた果夏がそばへと現れ、真冬は頬に添えていた両手を下ろす。果夏は何やら不思議そうに彼女の事を見つめていたが、すぐにコロツと笑顔になった。

果夏「かくえろっ♪」

真冬「うん…」

果夏は満面の笑みを浮かべると、手に持っているカバンを大きく揺らしながら歩き出す。一緒に帰るのなんてもう数えきれないくらい経験してきたのに、果夏は毎回毎回嬉しそうに笑っていた…。

果夏「ふんふんふん♪」

楽しげな様子で鼻歌を歌い出す果夏を真横から見つめている内、真冬は不思議に思う…。果夏はとても明るくて元から友人も多く、自分とは正反対の人間だ。なのに彼女はその友人達を差し置いてでも毎回自分のような人間と帰る事を選び、こうして楽しそうにしている…。

真冬からすると、それが不思議で仕方なかった。

真冬「ねえ、カナは…何で毎日毎日ボクと帰りたがるの？」

果夏「そりやもちろん、真冬ちゃんの事が大好きだからだよ♡」

真冬「…そう…」

何の恥じらいも無く告げてくる果夏を見ているとこちらの方が恥ずかしくなってしまう、真冬は赤くなりかけた顔を横へと逸らす…。よくよく考えてみれば、真冬の方にも不思議な事があった。

真冬は元々人付き合いが苦手であり、中でも騒がしいタイプの人間は大嫌いだった…。それから考えると”騒がしさの化身”のような果夏という少女なんかは天敵同然であり、近寄るだけでアレルギー反

応が起こりそうなもののだが……不思議な事に、果夏とだけは最初から普通に接する事が出来た。

真冬（すごく騒がしくて、うるさいのに変わりは無いんだけど……）
しかし、果夏の騒がしさは何故か心が落ち着く……。

彼女が騒げば眉をしかめるし、耳を塞ぎたくなる時も多々あるが、それでもそばに置いておきたいと思う何か果夏にはあった。

果夏「そう言えば、真冬ちゃんの方からわたしの事を好きって言うてくれた事ってあまり無いよね？」

真冬「あまり……じゃない。一回も無いよ」

果夏「むううっ……！これは少くし不公平じゃないかな？」

何かを催促するかのようニヤニヤと微笑み、果夏はズイツと顔を寄せる。そのニヤケ顔が何を催促しているのかは分かっているが、ここでその催促に答えてやるのは何となく負けた気分になるので……

真冬「ボクなんか好きって言うてもらわなくても、カナは色んな人から言ってもらってるでしょ。”自称”人気者……なんだから」

果夏「自称じゃないよっ！普通に……それなりに……？そこそこ……？まずまず人気者だよっ！けど、真冬ちゃんからの”好き”が欲しいの！！」

果夏が大声で叫ぶと、廊下を歩いていた数人の生徒が驚いたような視線を二人の方へと向ける……。しかし騒ぎの元が果夏、そして真冬のコンビだと分かるとその生徒達は『ああ、またコイツらか……』と言わんばかりの表情で笑い、そのまま歩を進めていった。

真冬「は、はずかしい……」

果夏「真冬ちゃんがわたしの事を好きくって言うてくれないからだよ!!ほら、恥ずかしがらずに言うてみよっか?『カナちゃん好きくっ♡』って!!その言葉さえ聞けるのなら、わたしはそのまま死んだって良いっ!!」

ニタニタとだらしのない笑みを浮かべる果夏を見て少しだけ引いた後、真冬は手近な所にいた男子生徒の肩をツンツンと叩く。

真冬「あの…いきなりごめんね？カナが愛に飢えてるみたいだから、出来るなら付き合ってあげてくれないかな？」

「は、はあ？」

男子生徒は驚いたような視線を果夏へと向けるが、当の本人…果夏は頬をぷくぷくと膨らませていた。

果夏「アンタみたいな男の子は嫌っ!!ほらっ、シツシツ!!」

「ぐっ…なんだよ急にっ!!」

果夏は男子生徒の事を突き飛ばしてから右手を払い、その生徒の事を追っ払う。初対面の人間ならかなり驚いただろうが、あの生徒はこの二人と同じクラスに通う者だ。なら、果夏がこういう生き物だという事もキチンと理解しているだろう。

真冬「あくあ…かわいそうに…」

果夏「他人事ひとごとみたく言ってるけど、今のは真冬ちゃんがあいつを巻き込んだんだからね!わたしは悪くないもん!!」

プイツとそっぽ向き、果夏は再び歩き出す。

真冬もそれに続いてスタスタと歩き出し、二人はそのまま校舎を出て町の中を歩いていった…。

果夏「そう言えば、真冬ちゃんの方こそ最近人気者になってきてるよね。この前だって、変な男子に……………」

真冬「ああ、うん……………」

果夏に言われ、真冬はそれを思い出す…。

あれは数日前の昼休みに起きた事だった。果夏や美紀達と共に昼食を食べ終えた後、真冬はある男子生徒に呼び出されて校舎裏へと向かった。因みに言っておくと、果夏はその人物の事を”変な男子”と言ったがその生徒は至って普通の人だ。

ともかくにも真冬はその生徒に呼び出されて校舎裏へと向かい、そして告白をされた……。初めての事だったので少し戸惑いはしたが、真冬はそれをキツパリと断った。相手の男子には悪いが、やはり色恋には興味が無かったから……。

真冬「……あれ？けど、なんでカナがそれを知って——」

果夏「わたしはね……真冬ちゃんの事なら何だって知ってるんだよ」

呼び出された事はもちろん、告白された事だって誰にも言っていなかったのだが、果夏はそれに気付いていたらしい……。ニヤリと微笑む果夏の表情が少し怖く見えたが、あまり深く考えないようにする……。

果夏「真冬ちゃんが誰かと付き合う事になったら、わたしはかなりパニックになっちゃう……」

真冬「……うん、何となく想像がつく」

果夏「相手の人を殺しちゃうかも……」

真冬「……そこまでは想像してなかった」

果夏の言葉が冗談なのか本気なのか分からず、真冬の額に冷や汗が浮かぶ……。いや、いくら果夏でもそこまではしないだろう。今のは冗談に決まっている……と、思いたい。

果夏「私はとことん真冬ちゃんしか見えてないんだけど、真冬ちゃんの方はどうなの？クラスの男子とか見て、気になるなくってヤツいる？」

真冬「いや……特には……」

というか、ここでもし『いる』なんて答えようものならその生徒が謎の失踪……もしくは転校しそうな気がする……。果夏の目が笑っていないのを見て、真冬は苦い笑みを浮かべた。

果夏「あつ！あの先輩とかどうなの？真冬ちゃん、あの人とは積極

的に接してる気がするけど」

果夏の言う”あの先輩”というのは、由紀達のクラスメートである”彼”の事だろう。確かに真冬自身、彼が相手だと何の遠慮もなく接する事が出来ているという実感があつた。彼はどことなく果夏に似た柔らかな雰囲気を持つているので、それが原因なのかも知れないが：

真冬「別に…彼の事だつてどうとも思つてないよ」

果夏「ふくん…そっか」

そう…どうとも思つてない…。

由紀達と共に帰っている彼を見つけるとつい目で追つてしまふし、たまに廊下で擦れ違つたりすると何となくラッキーだつたなど思つたりもするが……

真冬「……………ん!？」

果夏「ふえつ?どしたの?」

真冬「い、いや……………何でもない……………」

少しだけ嫌な予感がしてしまい、真冬は自分がどんな目で彼を見てきたのかを振り返つていく…。

バレンタインの前日、これまで一度たりとも作つた事のない手作りチョコを彼に渡した。普段からお世話になつてお礼だというのなら市販のチョコを渡すだけで良かったのに、お菓子作りの本を何冊も買つてまで…。しかもそれを彼に渡す際、さも適当に作つた物を手渡すかのような素振^{そぶ}りを見せてはいたが、あのチョコだつて何回も何回も失敗を重ねてようやく完成させる事が出来た奇跡の一品だ。あんなにも簡単なチョコ一つ作るまでの間に何回もつまらない失敗をしてしまい、途中で挫けそうになつて泣いてしまった事は今も覚えてる…。

それにこの前、歌衣に誘われて皆と行つた遊園地…。

この日だつて本当なら予定があつたのだが、参加メンバーの中に彼

ががいるという事を知ってその予定をキャンセルしたし、コーヒーカット
プに酔って二人だけで休憩した時間はどんなアトラクションに乗る
よりも楽しかったような…そんな気がした。

真冬（これは…少しマズイかも…）

思い返せば思い返すだけ、自分が彼に対して普通とは少し違う好意
を抱いているように思えてくる…。彼の事をただの友人や先輩とし
てではなく、一人の男の人として見てしまっているような、そんな気
が…。

果夏「真冬ちゃん？顔色悪いよ？」

そう言えばこの前、珍しく一人で服を買いに行ってしまった…。

しかも服を選ぶ際、頭の奥底で『彼はどういうのが好きなんだろう
…』なんてどうしようも無い事を考えていた気がする…。

様々な事を思い返した結果、真冬は一つの可能性を見出だす。
もしかすると、あれだけ色恋には興味無いと思っていた自分が…
彼に恋をしてしまっているかも知れないという可能性だ。

真冬（けど、それだとっ…）

かなり恥ずかしいが、ここは仮にその恋心を素直に認めるとしよ
う。

認めたとして、かなりマズイ事がある…。

真冬は青い顔をしたまま横を向き、隣にいる果夏の事を見つめた。

真冬（彼の事が好きって言ったら…カナ、彼の事を殺しちゃう…？）

真冬が苦笑いしたまま不安そうな眼差しを向ける一方、果夏は相変
わらずニコニコと微笑んでいた…。

第二話 『あなたの事なら何だって…』

”ねえ知ってる？ウチのクラスのあの娘、B組の男子と付き合ってるんだって…”…みたいな話を何度か聞いた事がある…。高校生活を送っているとそういった色恋沙汰の話も多く耳に入ってきたが、真冬はそういう事にまるで興味が無かった。誰かと付き合ったりデートしたりする事なんて自分には無縁だと思っていたし、何より気になる男子がいなかったから…。しかし、そんな真冬の心にも変化が訪れる。

友人である果夏と話している内にふと気付いた事なのだが、自分はどうも先輩である”彼”の事が好きらしい…。少し恥ずかしいが、彼となら手を繋いだり、そのままデートしたりするのも良さそうだと思うってしまう程だ。

しかし、真冬は自らが抱いている恋心に気付いたところで特に何の行動も起こさずにいた…。もちろん、可能なら彼と付き合ってみたいとは思っているのだが、こんな自分が男の人に告白するなんて恥ずかしいし、それに何より…。自分と彼の間には大きな”壁”がある。その壁は恐ろしい程に高くて強固であり、打ち崩すのは難しい…。だからこそ真冬は何の行動も起こさずに数週間の時を過ごし、そして今日もまたため息をついた。

真冬「はああ……」

自分自身の恋心に気付いたあの日も今と同じく、この廊下から校門の方を眺めていた…。真冬は何とも言えぬ表情のままその廊下の窓から校門の方を眺め、家へ帰っていく他の生徒達を見下ろしていく。

真冬（彼は…まだ教室にいるのかな……）

帰っていく生徒達を全て確認した訳ではないので見逃したただけかも知れないが、校門から出ていく生徒達の中に彼の姿は無かった。もしかしたらまだ校内にいるのだろうか……。ふとそんな事を思った後、真冬はもう一度ため息をつく。自らの恋心に気付いたあの日からずっと、何をしても彼の事ばかり考えてしまう……。

真冬（もう、やだなあ……）

彼に告白すればこのモヤモヤも晴れるかも知れない。

……が、それは出来ない。告白なんて恥ずかしいし、それに何より……

果夏「まつふゆちやくん♪お待たせだよ〜！」

帰り支度を終えて教室から飛び出てきたこの親友……果夏は真冬の事をとても気にかけてくれている愛が凄まじいから……。果夏は真冬の事をとても気に入っており、”もしも真冬ちゃんが誰かと付き合う事になったら自分はパニックになる。相手の男を殺しちゃうかも”というような事を言い放つ事もあった。

あれは彼女流のジョークだったのだと思いたいが、万が一にも本気だった場合は大変な事になる。だからこそ、真冬は彼に告白が出来ずにいた……。もしも自分が彼に告白して運良く付き合う事になったとしても、その彼は果夏に殺されてしまうかも知れない……。

果夏「んん？どうしたの？顔色悪いよ？」

真冬「……何でもない」

あれは果夏のジョークだ。本気で気にする事なんて無い。

何度も自分にそう言い聞かせたが、やはり不安が残る……。

真冬はこの日もまた彼に対して何の行動も起こさぬまま家へと帰り夜を迎えたのだが、寝る前に少しでも考え事をしてみる事にした。まず最初に考えたのは”自分は本当に彼の事が好きなのか”という事について……。これについてはすぐに答えが出た。恐らく間違いない……彼の事が好きだ。

真冬（出来るのなら、彼ともっとお話したい…もつと一緒にいたい…。凄く恥ずかしいけど、これが恋をするって事なんだよね…）
パジャマ姿でベッドに横たわり、枕を抱えて頬を赤くする。

考えれば考えるだけ自分は彼の事が好きなんだと実感してしまい恥ずかしくなるが、真冬はその気持ちを素直に認めてニコリと笑った。

真冬（じゃあ…次は…）

次に考えたのは自分の友達…果夏について。

彼女が何故、自分のような愛想の無い人間の事を好きだと言ってくるのかについてだ…。

果夏と出会ったのは中学に入った頃であり、それからはずっと一緒にいる。最初の頃は今以上に冷たくして突き放していたのだが、果夏はいくら冷たくされようと全くへこたれなかった。いつもニコニコと微笑んだままそばへと寄り、決して離れない…。なので気付いた時には真冬の方から折れて彼女の事を友達として認め、いつも一緒にいたのだが……………

真冬（カナは…なんでボクの事なんか…）

思えば思うだけ不思議になる…。

真冬は今でも彼女に向けて『鬱陶うっとうしい』とか『邪魔』だとか言う事があるが、最早もはやそれは冗談のようなもの…。しかし、果夏と出会ったばかりの時は違った。あの時は今よりももつと冷たい目で…冷たい声で…本気で彼女の事を拒絶し続けた。しかし、果夏はそれでも自分から離れる事なくそばに居続けた。

あの子はどうして自分なんかのそばにいてくれるのだろう…。

一度気になると止まらなくなり、真冬は携帯を手取る。

今の時刻は夜の11時を越えた辺りだが、果夏はまだ起きているだろうか…。いくら果夏でもこんな遅くに電話されたら迷惑だろうか…。色々考えている内、手にしていた電話が鳴り出した。

真冬「あつ…」

鳴り響く着信音に驚いてから画面を見つめ、真冬は更に驚く。

果夏から連絡だった…。

このタイミングで彼女から連絡が来るとは驚きだが、都合が良いといえば都合が良い。真冬は通話ボタンを押すと携帯を耳へと当て、静かに口を開く…。

真冬「…………カナ？」

果夏『うん、そうだよ♪』

電話の向こうから元気な声が聴こえ、真冬はニコリと微笑む。

彼女の声は電話越しでも元気いっぱいだ。

真冬「えっと…どうしたの？こんな時間に…………」

果夏『そのね、何か今日はやたらと眠れなくて…』

真冬「なるほど…………だから暇潰しにかけてきたの？」

少し意地悪な口調で言う果夏は『えへへ』と笑い、そのあと元気な声で『うんっ!』と答えた。何時もの真冬ならここで『今日はもう眠いから』と言って電話を切るのだろうが今は眠気など無いし、ちょうど果夏に聞きたい事だつてある。真冬は少しだけ沈黙した後、口を開き、ずっと気になっていた事を本人に…………果夏に尋ねた。

真冬「カナはさ…普段、どうしてボクと一緒にいてくれるの？」

果夏『うふふ、そりやもちろん、真冬ちゃんの事が好きだからだよ』

その答えが返ってきた瞬間、真冬は深いため息を放つ…。

そうだった…相手はあの果夏だ。もっとハッキリ、分かりやすく聞かないとこういう答えが返ってくる。真冬は気を取り直して前を向き、今度はまた違う言い方をしていく。

真冬「そうじゃなくてね……その、カナはボクの何がそんなにお気に入りに入るの？ボクは他の人達とは違って無愛想で、一緒にいてもつまらないのに……。カナは友達が多いんだから、わざわざボクみたいなヤツと一緒にいなくても……」

果夏『……………迷惑？』

果夏の声から明るさが消え、真冬はハツとしたように目を開く。

そんなつもりでは無かったのだが、勘違いさせてしまっただろうか……。

真冬「迷惑じゃないよ……。ただ、気になっただけ。なんでこんな人間のそばにいてくれるのかなあって……」

そう告げると電話の向こうから安堵のため息が聴こえ、果夏の声がまた元気なものへと戻る。果夏はおどけたように『ビツクリしたあく』と言い放つとそのままヘラヘラと笑い続け、そして……………静かに答えた。

果夏『私が真冬ちゃんのそばにいるのは……………真冬ちゃんが、私を変えてくれたからだよ』

真冬「……………えっ？」

何の事か分からず、真冬は一人首を傾げる……。

果夏は出会った時から何一つ変わっていない……以前からずっと騒がしくて、うるさくて、元気いっぱい……太陽みたいで……自分とは真逆の子だ。

そんな自分が果夏を変えたと言われても、何の事か分からない……。

真冬「ボクは何もしてない……。カナを変えてなんか……」

果夏『真冬ちゃん自身がそう思っても、私はハツキリそう思ってるの。真冬ちゃんと会えて変わったって……真冬ちゃんと会えたから、今の私があるんだって……』

放たれていく言葉の一つ一つはやけに落ち着いていて、普段の果夏とは少し違う雰囲気だった……。きつとそれだけ真剣に……真面目に

なっているのだろう。

真冬「ボクが…カナを……」

むしろ逆な気がする…。

どちらかと言えば、果夏が自分を変えてくれた…という方が正しい。

果夏がいなきや自分はいつまでも一人のまままで友達など出来ず、つまらない学校生活を送っていただろう…。美紀や由紀達と友達になる事だつて無く、彼に恋をする事だつて無かつたかも知れないのだが…：果夏は更に言い続けた。

果夏『真冬ちゃんと出会えたから…真冬ちゃんがいてくれたから…私は今日も明日も元気いつぱいでいられるの。だから私は…真冬ちゃんのそばにいる。だから私は…真冬ちゃんの事が大好きっ』
真冬「……………」

果夏の口から”好き”という単語を聞いたのは何回目か分からない。しかし、この時のそれはいつものとは雰囲気違っており、簡単に聞き流したりしちやいけないと思った…。

しかし何と言われても、どう言われても、”自分が果夏の事を変えた”という言葉の意味が分からない…。その後、真冬はより詳しい事を果夏に尋ねてみたが、彼女は誤魔化すように笑うだけで答えてはくれなかつた。

果夏『ふふつ、まあつまり、私はほんつとーに真冬ちゃんの事が好きで好きで仕方がないってことーだから真冬ちゃんが欲しい物なら何でもあげちゃうし、真冬ちゃんがして欲しい事ならなんだつてしてあげるし…：それに…………』

いつものと同じように騒がしくなる果夏だったが、その声が次第に落ち着いていく…。果夏は電話の向こうで何やら呻き声をあげ始めたかと思うとそれをピタリと止め、深呼吸をしてから言った。

果夏『先輩の事が好きなら……応援してあげる…』

真冬「つつ!!?」

静かに放たれたその言葉を聴き、真冬の顔がじわじわと赤くなる…。

彼の事は確かに好きだが、それは誰にも気取られないように装よそおってきた。なのに何故、果夏がそれを……。

真冬「何でっ……ボ、ボクっ……あの人の事が好きなんて一回も……！」

果夏『言わなくたって分かるよ……。前に言ったでしょ? 私は真冬ちゃんの事なら何でも知ってる』って……。真冬ちゃん、最近ずっと元気がなかったし……たまにあの先輩の事をジーツと眺めてたから……』

果夏はそう言うが、真冬は納得がいかに足をジタバタと揺らす。元気が無かったと言われても学校では普段通りに過ごしていたつもりだったし、彼の事だつてそんなに分かりやすく眺めてはいなかったハズだ。

真冬「ボク……ボクっ……! 学校では普段通りにしてたのにつ……!」

果夏『そうなの? 私から見ると、ここ最近の真冬ちゃんは違和感が凄かったんだけど……』

真冬がどれだけ上手く誤魔化ごまかしてきたつもりでも、常日頃から真冬の事を見つめ続けてきた果夏の目は誤魔化せなかった……という事なのだろう。自分が誰かを好きになった事を親友に知られ、真冬はとてつもない恥ずかしさを感じたが、それ以上に焦りを感じた。

真冬「カ、カナッ! これはまだ……ボクの片思いだから……彼の事は殺さないでくれると助かるんだけど………」

果夏『……どうしようかな……』

電話の向こうからくるその声を聴き、これまで真つ赤だった真冬の顔が一気に青くなる……。このままだと自分は初恋の相手を失い、更に

親友が人殺しになってしまう…。真冬が一人で焦っていると、電話の向こうから笑い声が響いた。

果夏『ふふつ、冗談だよ。あの先輩なら真冬ちゃんの事を任せても良いかなって思えるから、しっかりと応援してあげる。さつきも言ったでしょ?』

真冬「あっ……………うん…」

果夏『確かにそんじよそこの男子に真冬ちゃんをあげるのはイヤだけど、あの先輩ならまあ……………いくらか我慢出来るから』

果夏自身も彼の事はよく知っているし、悪くない人だという事も分かる。だからこそ、彼が相手なら真冬を任せられると思ったのだが……………

果夏（やっぱ、少し悔しい……………）

彼と真冬が付き合う事になり、デートする様を想像してみる…。するとそれだけの事で頬が膨らんでしまい、分かりやすく『ぐぬぬ…』と言つてしまいそうになるが、果夏はその気持ちをグツと堪えた。

果夏『そ、そういうわけだから…がんばってね！手伝える事があれば何だつてするからっ!』

真冬「……………うん、本当にありがとう」

真冬は笑顔を浮かべながら応え、果夏はその言葉を聴いてニヤニヤと笑う。どんな状況であれ、真冬に感謝されるというのは果夏にとつてとても喜ばしい事だった。

果夏『じゃ、また明日ね』

真冬「うん…また明日」

真冬は携帯を耳から離し、通話を止めようとする…。

しかしその直前、彼女は離しかけた携帯を再び耳元へ戻した。

真冬「……………カナ」

果夏『うんっ？なくに？』

呼び掛けてみると果夏はまだそこにおり、真冬は『ふふっ』と笑う。これまでに幾度となく果夏と電話して気付いた事なのだが、彼女は決して自分から通話を止めない。こちらが切るのをずっと待っているのだ…。

真冬「……大好きだよ、おやすみなさい」

こちらの言葉を待つ果夏へと向け、ポツリと呟く…。

今日、話してみてもよく分かった。自分は彼の事が好きだが、それに負けないくらい…果夏の事も大好きなんだ。

果夏『ふあああっ?!?!ぴゃ…ぴゃくあああっツ!!!』

電話の向こうからよく分からない奇声が聴こえ始めたので、真冬は慌てて通話を切る。思い返してみれば、自分の方から果夏の事を”好きだ”と言ったのはこれが初めてか…。

果夏は今頃、ベッドの上でニコニコしながら身を悶えさせているのかも知れない。真冬はそんな彼女の様を想像してニッコリ微笑むと部屋の明かりを消し、眠りについた…。

第三話 『しつかり伝わるように…』

彼という人間を好きだという事に気が付き、そしてそれを『応援する』と一番の友人に言ってもらえた。となれば、後は行動するのみなのだが……

真冬「…えっと、どうしたら良いと思う？」

昼休みの途中、真冬は具体的な行動案が浮かばずに頭を悩ませる。校庭の片隅で彼女と共に昼食を食べていた果夏は空になった弁当箱を片付けながら眉をしかめて『うくん』と唸ると、真冬の目をじつと見つめた。

果夏「普通の告白だとインパクト無いよね。……よし！じゃあこうしよう！とりあえず、今から先輩のところに行つて——」

自分一人だと何も思い浮かばない…。

なので真冬は果夏から細かな案を聞き、それに従う事にした。

あの果夏の考えた作戦だというのが少し不安だが、それを告げる果夏の表情は自信に満ちていたので大丈夫だろう。……多分。

真冬は果夏から伝えられた作戦を実行すべく三年生の教室へと向かい、彼がそこにいる事を確認する。彼はもう昼食を食べ終えたらしく、午後から始まる授業の準備をしているようだった…。そんな彼を近くへと呼ぶべく、真冬は教室の入り口付近に立っていた一人の女子生徒へ声をかける。

真冬「あの…ちよつといい？あそこにいる彼、呼んでくれるかな？」

恐る恐る頼んでみると、女生徒は真冬の事をじつと見つめてからニコリと笑って頷く。その生徒は軽い足取りで彼のいる方へ向かうとその肩を叩き、真冬の待つ教室の入り口までしつかりと呼んでくれた。

「お待たせ。一人でこんな所に来るなんて珍しいね」

真冬「あ…………うん…………」

実は果夏が廊下の隅から見守っているので、正確に言えば一人ではない。

しかし、そんなのはどうでも良い事だ…。真冬は彼の目をじつと見つめると勇気を奮い起こし、果夏から伝えられた作戦を早速実行に移す。

真冬「キ、キミってさ…由紀達に囲まれていつもニヤニヤしてるよね…」

「いや、別にニヤニヤなんて…」

真冬「してるよ…ボク、いつも見てるもん…。まったく、可愛い娘に囲まれてニヤニヤニヤニヤしちゃって、本当にいやらしい…」

「なっ!？」

偶然後ろを通りがかった他のクラスの女子生徒がその会話を聞き、彼の方を見てクスクスと笑う…。他の生徒に笑われた事や急にやって来た後輩に謎の説教をされた事で彼は言い様のない恥を感じてしまい、額に嫌な汗を浮かばせる。

「え、えつと…………そんな事を言う為にわざわざここまで?…」

これ以上誰かに聞かれぬように辺りを警戒し、声を抑えながら彼が問う…。しかし、真冬はまるで聞こえていないかのようにその問いを無視していく。

真冬「由紀や胡桃や悠里を見てキョロキョロしてないで、キミはボクだけを見ていればいいの…。そうすれば、ボクもキミだけを見ていてあげるから…」

「……………うん?…」

真冬「いや、うん?じゃなくて…その…………」

ポカンとした表情の彼を見て、真冬は少し慌て出す…。こんな反応

は想定外だ。真冬は慌てて廊下の隅へと視線を向け、果夏に助けを求め…。果夏は何かを伝えようと口をパクパクと動かしており、真冬はその唇の動きを見て自分が最後の決め手を彼へ伝え忘れていた事に気が付いた。

真冬「あつ、そうだった…。えつと…：か、勘違いしないでね？ボクはキミの事なんて、全然好きじゃないから…」

「は、はあ……………」

真冬「……………じゃあ、そういう事で」

果夏から教えられた事は全て実行したが、これは何かが違う気がする…。

真冬は冷や汗を浮かべながら気まずそうに頭を下げると彼の前から立ち去り、廊下の隅に待っていた果夏のそばへと立つ。

真冬「カナ、やっぱり今の作戦は間違っていたと思う…。全部伝えても彼は困ったような顔するだけだったし、ボクもなんとなく恥ずかしかった…」

果夏「あれっ？成功しなかったの!？」

真冬「うん…：多分失敗した」

果夏「むうう…：男の人はツンデレに弱いつて聞いたことがあるから、それを元に告白していけば絶対に成功すると思ったんだけど」

果夏は納得いかないように眉をしかめていたが、実際に告白は失敗した。というか、恐らく彼は自分が告白された事にすら気付いていないと思う…。真冬がそれを伝えると、果夏はこれまた驚いたように目を丸くした。

果夏「え〜!?!告白された事にすら気付いてないの!?!あの先輩、予想以上に鈍感だなあ」

真冬「たしかに彼はある程度鈍感かも知れないけど、今回はボク達に非があったと思う…。ツンデレ告白は少し回りくどくて分かりにくかった…」

果夏「そっか、じゃあ次の作戦っ!!今度はもう少し直接的なヤツ!」
今度は失敗しない、絶対に成功する良い案を出さなくては…。
彼はどんな風に告白されたらその心を射止めさせてくれるのか…。
台詞だけでなく、告白を行う場所も重要だ。学校ではなくてもっと良い場所でもっと良いシチュエーションの下で実行に移すべきか…。
大好きな親友の為にと必死にあれこれ考える果夏だが、今一つピンとくるのが思い浮かばない。

果夏「こうして考えてみると、告白って難しいねえ…」
もっと簡単にいくものとはばかり思っていたが…現実には厳しい。

無駄な事は何も考えず、ただ相手に”好き”と伝えられたら楽なのだが。

それこそ、果夏自身がいつも真冬にやっているように……。

果夏「……あっ!」

真冬「うん?」

そうだ…難しく考える必要など無かった。

”告白”だという事でシチュエーションやら台詞の言い回しやらを少し考え過ぎてしまったが、要は相手に…彼に”好き”という気持ちを伝えられれば良いのだ。

果夏「真冬ちゃん、次の作戦が思い付いたよ!」

これなら絶対に上手くいく…。

果夏はその作戦を真冬へ告げ、真冬はそれに従って彼の携帯にメッセージを送った。ただ、『放課後、校舎裏に来てほしい』と…。

そして放課後になり、真冬は人目を避けるように歩きながら校舎裏へと向かう。果夏もそれに付き合ってくれたが、彼女はあと少しで校舎裏にたどり着くというところで足を止めた。

果夏「その…私はここで待ってるけど、一人でも平気?」

真冬「た、たぶん大丈夫…だと思っ」

果夏を待たせて一人歩き出し、待ち合わせを約束した校舎裏に向かう。

放課後のそこは全くと言っていいくらいに人の気配がしなかったが、ただ一人、真冬の事を待っている人物である彼がいた。

「おお、やっと来た」

真冬「…お、お待たせ」

ここに来るまでの間に何度か緊張して足を止めてしまったからか、彼を待たせてしまっていたらしい…。ただ一人の人間に会う事が…気持ちを打ち明けに行く事がこんなにも勇気のいる事だとは知らなかった。

「で、どうした?」

真冬「…えっ…と」

どうしてこんな所に呼び出したのかを尋ねるが、真冬は顔を俯けてしまい答えない…。彼はそれを見て確信した。昼休みの時もそうだが、今日の真冬は何かがおかしい…。

「……………真冬?」

何だか心配になり、そばへと寄る…。

すると黒髪の間隙から出ていた彼女の耳がみるみる真っ赤になり、肩が小さく震えだした。

「大丈夫? 具合でも悪いんじゃない?」

真冬「つ…………」

真冬は無言のまま”ブンブンツ!”と首を振り、それを否定する。

具合は悪くない。全く悪くない…。

ただ、緊張が酷くて上手く前を向けないし喋れないだけだ。

真冬（けど、カナがせっかく応援してくれているんだから…）

自分一人だけだったらもう諦めていたが、あの果夏に応援してもらったのならそう簡単には諦められない…。だから真冬は覚悟を決め、精一杯の勇気を出した。

真冬「す……き……」

聞こえるかどうか分からないくらい小さな声で告げ、恐る恐る顔を上げる……。すると目の前には不思議そうな顔をしてこちらを見ている彼がいた為、真冬はもう一度声をあげた。

真冬「キミのことが……好き……。大好きなの……。キミはボクの事を可愛いげの無い後輩だとか、無愛想な女の子だって思ってるかも知れないけど……でも、それでもボクはっ……」

今度はハツキリとした声で、彼の顔を見ながら言う……。

今度こそ確実に聞こえただろう……。彼は自分の想いを知ってくれただろう……。そう思うと少しだけ気持ちが悪くなったが、全てを伝えたら伝えたでとてつもない恥ずかしさに襲われた。

真冬「あ……う……急にごめんなさいっ……！ボクみたいな娘にこんな事言われても迷惑だっつて分かってたんだけど……そのっ……」

顔がじわじわと熱くなり、鏡で見ずとも真っ赤に染まっているのが分かる。とうとう本人に”好きだ”と言ってしまった……。恥ずかしい……恥ずかしい……。真冬は最早彼の顔を直視する事すら出来ずその場を去ろうとしたが、右の手を彼に掴まれて動きを止めた。

真冬「な、なに……？ボク、もう帰るところで……」

「帰るって……告白だけして帰るつもり？」

真冬「うん……そのつもり……です」

本当はしっかり返事を聴くつもりでいたが、実際に告白してみても分かった。これ以上はここにいられない……。真冬は彼に掴まれた腕を静かに振って抵抗したが……

「あの、こちらとしては是非とも付き合っただけ……」

真冬「……えっ？」

彼は今、何と言ったのだろうか……？

思わず抵抗を止め、少しずつ顔を上げて彼の目を見る…。

真冬「今、なんて……」

「だからその…真冬と付き合いたい…」

彼は真剣な眼差しを向けたまま告げ、真冬の腕をそつと離す。

腕も離してもらえたのでこのまま立ち去ろうと思えば立ち去れたのだが、真冬は微動だにせず彼の目を見つめ続けた。

真冬「ボクで…良いの？だってボクつ、由紀達みたく可愛い女の子じゃないし…愛想も悪いし、雰囲気も暗いし……」

考えれば考えるだけ自分の悪いところが出て、口が止まらなくなる。

彼に告白してみても良い返事が貰えたのは嬉しい事だが、いざ良い返事が返ってきたらきたで申し訳ない気がしてしまう…。

真冬は自らの悪い点を挙げながらあたふたと慌てるが、彼はそんな彼女の事をまじまじと見て微笑んだ。

「確かに由紀ちゃん達と比べると少し暗いところもあるけど、僕は真冬の事を可愛い女の子だと思っている…。だから告白してもらえたのは凄く嬉しかったし、真冬さえ良いなら付き合いたいと思っているんだけど…」

真冬はやたらと自分の事を卑下するが、そんなに悪いところばかりの女の子じゃない…。彼自身、前から真冬に興味を持っていたのだが、先程…彼女が告白後に見せた真つ赤な顔を見てその興味が膨れ上がる。

彼女はどちらかといえば表情の乏しいタイプだと思っていたが、そうでも無いのかも知れない…。なら、彼女のそばにいてもつと色々な表情を…まだ誰も見たことの無い”狭山真冬”を見たいと思った。

真冬「……後悔、しない？」

「ああ、しない」

彼は即答し、真冬は顔を赤らめる…。

大好きだった彼が自分のような女の子と付き合ってくれるのだと思うととても嬉しいが、少し恥ずかしくもある。

その時、真冬は果夏が考えてくれた今回の作戦内容を思い出した…。

作戦の内容は『普段、私が真冬ちゃんにやっているように”好き”と伝えれば良い』という簡単なものだったが、いざ好きな人の前に立つとそれがどれだけ難しいのかがよく分かる…。が、どうせなら勇気を出して頑張ってみよう。

真冬は彼の顔をじっと見つめてからニツコリ微笑むと両手を広げてその胸に飛び込み、背中へ腕を回して彼の身を抱き締める。そして果夏が普段から自分に言ってくれるのと同じように、その言葉を彼へと放った。

真冬「…キミのこと、大好きだよ」

少し照れてしまい、果夏のように明るくは言えなかった。

声も思っていたより小さくなってしまい、本人に届いたかどうか微妙なところだ…。だから真冬はその代わりになればと思つて更に強く彼の身を抱き、その胸に顔を埋める。この気持ち…大好きだというこの想いがしつかり伝わるようにと願いながら…。

第四話 『もう、お嫁に行けない…』 (☆)

「ふう…きつぱりした」

夕食を済ませてから入浴を終え、彼は自室へと戻る。

もう寝間着には着替えたので、あとは髪の毛を拭いてから少しのんびりとしてベッドに潜るだけ…。大きなバスタオルを用いて髪の毛をゴシゴシと拭っていく彼だったが、次の瞬間――

「あっ!?!おい、返せってー!」

彼と共にこの家で暮らしている唯一の存在…太郎丸がピョンと跳ねながらそのバスタオルを口に咥えて奪い去り、部屋の隅へと隠れていく。小さな尻尾を左右に揺らしながらバスタオルをガシガシと噛んでいく太郎丸を見た彼は諦めたようにため息をつき、そばの柵からまた違うタオルを取り出して髪の毛を拭う。

「お前、本当にそのタオル好きだな…」

どういう訳か、太郎丸はあのバスタオルだけをやたらと気に入っている。初めてあれを取られた時、彼は『どうせ噛むならこっちにしる』と古いタオルを渡したが、見向きもされなかった…。あれは比較的新しくて結構良いタオルなので、あまりボロボロにはして欲しくないのだが…一度ああなってしまうたら太郎丸が飽きるのを待つしかない。

(まあ、いつも二〜三分で終わるし、別に良いか…)

『飽きたらそこに置いておけよ』とだけ太郎丸に告げて、彼は髪の毛を拭いつつ携帯をチェックする…。すると一件、メッセージが届いている事に気が付いた。

(おっ…真冬からだ)

メッセージの送り主は狭山真冬…。

二年生の女の子であり、彼の恋人でもある少女…。

つい先日、彼は彼女に告白されてそのまま付き合う事になった。

初めて会った時は凄くクールであり笑ったりしない女の子だと思っていたが最近の彼女はどことなく雰囲気柔らかくなったような気がして、とても可愛らしい。

そんな彼女からのメッセージは…【明後日、キミの家に行っても良い?】という短い内容だった。明後日は学校も休みで特に用事も無い…。彼が【良いよ】とだけ返信すると、またすぐにメッセージが届く…。今度の内容は【よかった…。じゃあ、お昼前には着くようにするね】…。というものだった。

(これは…お家デートってヤツか…?)

真冬とはまだデート出来ていなかったもので、これが実質”初デート”となるのだろうか…。お家デートというのは何をしたら良いのだろうか?真冬が楽しめるような物がこの家にあっただろうか?それとも、途中からは二人一緒に外出してどこかに繰り出した方が良いのだろうか?

彼はあれこれと悩みながらベッドに潜り、そして二日後…。

「これは…マズくないか…?」

朝、目を覚ました彼は外から聞こえるその音に反応して飛び起き、窓の外を見て冷や汗を流す…。朝だというのに外は真つ暗…。大きな雨雲が空を覆い、驚くくらいに激しい雨が降り注いでいた。

部屋の中においてもその雨音が聞こえてくるくらいの豪雨…。これはもう、デートどころではない。彼は携帯を手に取り、真冬にデート中止のメッセージを送ろうとするが――

ピンポン…

…と、家のチャイムが鳴り響く…。

もしやと思った彼は大慌てで玄関へと駆け寄り、扉を開けてため息をついた。玄関前に立っていたのは、やはり真冬だ…。彼女は右手に青い傘を持っていたが、この豪雨の中では傘なんて役に立たなかったのだろう…。彼女は髪の毛から爪先まで全身ずぶ濡れ：真つ白なシャツが肌にピツチリと張り付き、黒い短パンからもポタポタと水滴を垂らしていた。

「びしょ濡れじゃん…！まさかこんな雨の中を歩いてくるなんて…」

真冬「この前、キミの家に行くって約束した…。だから絶対に行かないとって思ってたし、それに…。」

雨に濡れた傘を畳んで傘立てへと収め、真冬は気まずそうに前髪を弄る…。シャワーでも浴びたばかりなのかと思うくらいに濡れきった前髪を指先でクルクルと弄った真冬はそつと顔を俯けると彼の事を上目遣いで見つめ、頬を真つ赤に染めた…。

真冬「せつかくの初デートだから…すぐく楽しみで…。こんな雨なんかで…中止にしたくなくて…それで…っ…」

身体が冷えたからなのか、はたまた照れているのか…その声は微妙に震えており、彼は胸を高鳴らせる…。クール系だと思っていた真冬にこんな事を言われたら、ドキドキせずにはいられない。

「と、とりあえず入りなよ…」

真冬「…うん…お邪魔…します…」

玄関に入った真冬はそのまま立ち尽くし、何やら申し訳なさそうにオロオロとする…。どうやら、雨に濡れた身体で家に上がり、床を濡らしてしまう事を悪く思っているらしい。そんな事、気にする必要は無いのに…。

「ほら、気にしなくて良いから」

真冬「あつ……うん……」

靴を脱いだ真冬が一步步く度に水滴が落ち、床に足跡が付く……。だが、こんなのは後で拭けば良いだけだ。それより、このままだと真冬の身体が凍えきってしまう。

「そのままだと風邪引くから、お風呂入ってきなよ。」

ちやうど沸いたみたいだし……」

真冬「えっ……？い、いいの……？」

「ああ、当たり前でしょ」

こんなにもずぶ濡れなまま放つてはおけないし、それに真冬は大切な恋人だ。この家の風呂で良いのならゆつくりと浸かって、身体の芯まで温まって欲しい……。

真冬は彼の言葉に甘える事にして、風呂場へと案内されていく。

案内を終えた彼は真冬に『こゆつくり』とだけ告げてその場を去り、残った真冬は静かに衣服を脱ぎ進めた。

真冬（彼の家で……お風呂に入るなんて……）

彼氏の家でお風呂……これは何となくドキドキしてしまう……。

彼とは付き合ったばかりだし、キスだってまだしてない……。

にも関わらずお風呂を使わせてもらうなんて、少し恥ずかしい……。

雨に濡れきったシャツと短パン……続けて下着を脱いだ真冬はそれらの衣服をそばのカゴへと入れ、浴室へ足を踏み入れる。そして手早くシャワーを浴びて髪や身体を洗い、しっかりと湯を張っている浴槽へと肩まで浸かって『ふう……』とため息をつく……。

真冬（彼も……いつもはこのお風呂に……）

彼も幾度となく、この浴槽に浸かってきたのだろう……。

ついさつき自分が使ったのと同じシャワーヘッドを使い、温かな湯を浴びてきたのだろう……。湯に浸かりながらそんな事ばかりを考えてしまい、真冬は頬を上気させる。

真冬（…ダメだ、変な事ばかり想像しちゃう…っ…）

これ以上おかしな事を考えるのは止めやにしよう…。

自分は大人しく彼の厚意を受け入れ、凍えた身体を温めれば良い。

真冬は出来るだけ何も考えないようにしながら湯に浸かり、充分に身体が温まった頃、浴槽を出て脱衣所へと戻る。

真冬「はあ…：：：気持ちよかった…：：：」

脱衣所に置かれていた棚の上に重なっていた大きなバスタオルを一枚借り、それで身体を拭いていく…。髪の毛から胸元、腕や足までをしっかりと拭いた後…真冬はふと思った。

真冬（服…：：：どうしよう…）

脱衣所にあるのは、ついさつき自分で脱いだ服と下着だけ…。だが、これらの衣服は雨でびしょ濡れになってしまっており、とても着られる状態ではない。乾かすにしたらってそれなりに時間がかかるだろうし、どうすれば良いのだろうか…。

少し考えた結果、真冬は一つの答えを見出だした。

恥ずかしいが、彼に服を貸してもらえば良い…。適当なシャツと短パンくらいならきつとあるハズ…：：：だから、それを貸してもらえるかどうか頼んでみよう。

真冬（今はとりあえず、このバスタオルで…：：：）

ここから大声を出して頼んでも良いが、それだと悪い気がする…。やはり、直接顔を見ながらお願いするべきだろう。

真冬は今使ったばかりの大きなバスタオルを身体に巻き、そつと深呼吸して彼のいる部屋へと向かう…。このバスタオルの下には何も身に付けていない状態だが、簡単にずり落ちたり捲れたりしないハズだから大丈夫…：：。無理やり引っ張られたりしない限りは、しっかりと身体を隠せるハズだ…。

脱衣所から出た真冬はそのバスタオル一枚だけを身に付けてゆつくりとした足取りで廊下を進み、彼のもとへと辿り着くなりすぐに声

を放った…。

真冬「あ、あの……………」

バスタオルを胸の上で押さえながら顔を背け、静かに声をあげる真冬…。

彼はカーペット上で座り込みつつ太郎丸と遊んでいたようだが、突然現れたバスタオル姿の真冬を前にして呆然とした様子だ…。

「えつと…どうしたの？」

真冬「その…服、濡れちゃって……………だから、何か代わりのを…」

そこまで聞いた所で、彼は慌てたようにタンスを漁る。

真冬はあれだけびしょ濡れだったのだから代えの服が必要なのに、それに気付けなかった…。女の子にはどういう服を貸せば良いのだろうか？下着はどうすれば良いのだろうか？

真冬「あつ……………て、適当なので良いよ……………」

慌てる彼に向けて優しい声でそう言っ、真冬は部屋の隅で待つ…。その時、先ほどまで彼と遊んでいた太郎丸が真冬の事をジーツと見つめ始めた。

真冬「…ふふっ、どうしたの？ボクと遊びたい…？」

そう尋ねると太郎丸は尻尾を振り、トコトコと歩み寄る…。

凄く甘えん坊で人懐っこい子だなあ…と思った真冬はその小さな身を撫でようと手を伸ばすが…。

(あれ…う…真冬が巻いてるタオルって……………)

彼はふと真冬の事を…その身体を覆っているバスタオルを見て、全てを察してしまう…。太郎丸は、真冬と遊びたくて歩み寄っているのではない…。太郎丸の目的は…彼女の身体を覆っているその――

「太郎丸っ！待てっ…!!」

咄嗟に”待て”と命ずるが、太郎丸はそれを聞かずに真冬に飛びつく。

そして彼女が身体に巻いていたバスタオルの端をガブリと啜え、そのまま勢い良く走り出した…。

真冬「ッ!?や…っ…!!!」

バスタオルはハラリと捲れ、真冬の身体を露にしていく…。

まずは胸元が露となったが真冬はすぐにそれを右手で覆い隠し、離れていくバスタオルに左手を伸ばす…。が、太郎丸は想像以上の速度で部屋の隅へと去っていき、真冬は身体を覆い隠す物を失って立ち尽くした…。

「っ……………あ……………」

彼は真冬の身体を見つめ、ただ唾然とする…。

真冬はあまりにも突然の事で混乱してしまっただらしく胸元に添えていた右手すらも動かしてしまっており、上も下も…全てが露になっていたが――

真冬「つつっ…!!?やっ、やだっ…っ…!!」

少ししてハッと我にかえり、その場を立ち去って脱衣所へと戻っていった…。部屋に残された彼は今見た光景を思い返しては胸をドキドキと高鳴らせ、部屋の隅でお気に入りのバスタオルを噛んでいる太郎丸に視線を向ける。

「太郎丸…一応、お礼を言っておくよ…」

真冬には悪いが、今のはとても魅力的な光景だった…。彼は太郎丸に礼を告げてから適当な服を持ち、それを脱衣所の前へと置く。

「服、ここに置いておくからね？」

真冬「……ボク……もうお嫁に行けない……っ……」

扉の向こうで、真冬が震えた声を放つ……。

人一倍恥ずかしがりやな真冬のことだ……彼氏とはいえ、異性に裸を見られてしまったのはかなりの大事おおごとなだろう。

その後、真冬は彼から借りた服を着て部屋へと戻ってきたがかなりの時間赤面しっぱなしだった為、二人の間に気まずい時が流れていった……。が、昼を過ぎた頃には真冬もどうか立ち直れたらしく笑顔を見せるようになり、結局はそれなりに楽しく、充実したお家デートとなった……。